HAKAGI ROYALE

ハカギ・ロワイアル

①

HAKAGI
ハカギ・ロワイアル
ROYALE

❶

葉鍵ロワイアルに関わった全ての人に捧ぐ

葉鍵ロワイアル参加者名簿

一　　番　相沢　祐一　（あいざわ・ゆういち）
二　　番　藍原　瑞穂　（あいはら・みずほ）
三　　番　天沢　郁未　（あまさわ・いくみ）
四　　番　天沢　未夜子　（あまさわ・みよこ）
五　　番　天野　美汐　（あまの・みしお）
六　　番　石原　麗子　（いしはら・れいこ）
七　　番　猪名川　由宇　（いながわ・ゆう）
八　　番　岩切　花枝　（いわきり・はなえ）
九　　番　江藤　結花　（えとう・ゆか）
十　　番　太田　香奈子　（おおた・かなこ）
十 一 番　大庭　詠美　（おおば・えいみ）
十 二 番　緒方　英二　（おがた・えいじ）
十 三 番　緒方　理奈　（おがた・りな）
十 四 番　折原　浩平　（おりはら・こうへい）
十 五 番　杜若　きよみ〈原身〉（かきつばた・きよみ）
十 六 番　杜若　きよみ〈複製身〉（かきつばた・きよみ）
十 七 番　柏木　梓　（かしわぎ・あずさ）
十 八 番　柏木　楓　（かしわぎ・かえで）
十 九 番　柏木　耕一　（かしわぎ・こういち）
二 十 番　柏木　千鶴　（かしわぎ・ちづる）
二十一番　柏木　初音　（かしわぎ・はつね）
二十二番　鹿沼　葉子　（かぬま・ようこ）
二十三番　神尾　晴子　（かみお・はるこ）
二十四番　神尾　観鈴　（かみお・みすず）
二十五番　神岸　あかり　（かみぎし・あかり）
二十六番　河島　はるか　（かわしま・はるか）
二十七番　川澄　舞　（かわすみ・まい）
二十八番　川名　みさき　（かわな・みさき）
二十九番　北川　潤　（きたがわ・じゅん）
三 十 番　砧　夕霧　（きぬた・ゆうき）
三十一番　霧島　佳乃　（きりしま・かの）
三十二番　霧島　聖　（きりしま・ひじり）
三十三番　国崎　往人　（くにさき・ゆきと）
三十四番　九品仏　大志　（くほんぶつ・たいし）
三十五番　倉田　佐祐理　（くらた・さゆり）
三十六番　来栖川　綾香　（くるすがわ・あやか）
三十七番　来栖川　芹香　（くるすがわ・せりか）
三十八番　桑嶋　高子　（くわしま・たかこ）
三十九番　上月　澪　（こうづき・みお）
四 十 番　坂神　蝉丸　（さかがみ・せみまる）
四十一番　桜井　あさひ　（さくらい・あさひ）
四十二番　佐藤　雅史　（さとう・まさし）
四十三番　里村　茜　（さとむら・あかね）
四十四番　澤倉　美咲　（さわくら・みさき）
四十五番　沢渡　真琴　（さわたり・まこと）
四十六番　椎名　繭　（しいな・まゆ）
四十七番　篠塚　弥生　（しのづか・やよい）
四十八番　少年　（しょうねん）
四十九番　新城　沙織　（しんじょう・さおり）
五 十 番　スフィー　（すふぃー）
五十一番　住井　護　（すみい・まもる）
五十二番　ＨＭＸ－13型セリオ　（せりお）
五十三番　千堂　和樹　（せんどう・かずき）
五十四番　高倉　みどり　（たかくら・みどり）
五十五番　高瀬　瑞希　（たかせ・みずき）
五十六番　立川　郁美　（たちかわ・いくみ）
五十七番　橘　敬介　（たちばな・けいすけ）
五十八番　塚本　千紗　（つかもと・ちさ）
五十九番　月島　拓也　（つきしま・たくや）
六 十 番　月島　瑠璃子　（つきしま・るりこ）
六十一番　月宮　あゆ　（つきみや・あゆ）
六十二番　遠野　美凪　（とおの・みなぎ）
六十三番　長岡　志保　（ながおか・しほ）
六十四番　長瀬　祐介　（ながせ・ゆうすけ）
六十五番　長森　瑞佳　（ながもり・みずか）
六十六番　名倉　由依　（なくら・ゆい）
六十七番　名倉　友里　（なくら・ゆり）
六十八番　七瀬　彰　（ななせ・あきら）
六十九番　七瀬　留美　（ななせ・るみ）
七 十 番　芳賀　玲子　（はが・れいこ）
七十一番　長谷部　彩　（はせべ・あや）
七十二番　氷上　シュン　（ひかみ・しゅん）
七十三番　雛山　理緒　（ひなやま・りお）
七十四番　姫川　琴音　（ひめかわ・ことね）
七十五番　広瀬　真希　（ひろせ・まき）
七十六番　藤井　冬弥　（ふじい・とうや）
七十七番　藤田　浩之　（ふじた・ひろゆき）
七十八番　保科　智子　（ほしな・ともこ）
七十九番　牧部　なつみ　（まきべ・なつみ）
八 十 番　牧村　南　（まきむら・みなみ）
八十一番　松原　葵　（まつばら・あおい）
八十二番　ＨＭＸ－12型マルチ　（まるち）
八十三番　三井寺　月代　（みいでら・つくよ）
八十四番　御影　すばる　（みかげ・すばる）
八十五番　美坂　香里　（みさか・かおり）
八十六番　美坂　栞　（みさか・しおり）
八十七番　みちる　（みちる）
八十八番　観月　マナ　（みづき・まな）
八十九番　御堂　（みどう）
九 十 番　水瀬　秋子　（みなせ・あきこ）
九十一番　水瀬　名雪　（みなせ・なゆき）
九十二番　巳間　晴香　（みま・はるか）
九十三番　巳間　良祐　（みま・りょうすけ）
九十四番　宮内　レミィ　（みやうち・れみぃ）
九十五番　宮田　健太郎　（みやた・けんたろう）
九十六番　深山　雪見　（みやま・ゆきみ）
九十七番　森川　由綺　（もりかわ・ゆき）
九十八番　柳川　祐也　（やながわ・ゆうや）
九十九番　柚木　詩子　（ゆずき・しいこ）
百　　番　リアン　（りあん）

葉鍵ロワイアル
舞台　地形図

地図制作：JOYH-TV

カバー、挿し絵：秋★枝

葉鍵ロワイアル

※この物語は巨大掲示板２ちゃんねるの葉鍵板 (Leaf&Key) において創作されたリレー小説です。

※今回の単行本化にあたり、著者自身の手によって本文の表現やタイトルが改められた個所があります。
※ Web ページの原文を縦書きの単行本として出版するにあたり、最低限必要な改行等の改変を編集側で行わせていただきました。

000　ゲームスタート

絶海の孤島に建てられた巨大なホール。ここから、史上最悪のサバイバル・ゲームの幕が今、開かれようとしていた。
「えぇ、これからお前達には、殺し合いをしてもらう」
マシンガンを持った男二人を横に連れ、ゲームの管理人、高槻は言った。突然発せられたその言葉を殆どの人間が理解できなかった。ただ一人だけ、瞬時に理解し、叫んだ者がいた。御影すばる（八十四番）。
「ちょっと、どういうことですの!?　ころし……」
パンッ！
軽い音が響く。言葉を続けることなく、すばるはその場に崩れ落ちた。誰よりも理解が早かった結果、誰よりも早くゲームから脱落した。
「どういうことって、こういうことだよ！　わかったかい？」
ホール内を緊張が走り抜けた。
「ルールは簡単。ただこの孤島の中で殺し合いをするだけだ。最後に残った人間だけが、唯一助かることができる。脱出しようなんて考えないほうがいいぞ？　船は用意されてないから無駄だ。これから読み上げた順に、鞄を持ってホールを出てもらう。鞄の中には食料、水、島の地図、それに武器が入ってる。武器には当たり外れがあるから、使えないのに当たったら運の悪さを恨むんだな。我々に刃向かったら即刻殺すので、そのつもりで。戦闘のプロばかりだから、勝とうなんて思わない方がいいぞ。何か質問は？」
静かに手を上げる者がいた。水瀬秋子（九十番）である。
「よろしいですか？」
「なんだい、かわいらしいお嬢さん。いや、奥さん

だったか……クックッ……」
「お母さん！」
水瀬名雪（九十一番）が隣で声を上げる。
秋子は「大丈夫」と目で言い、高槻に訊ねた。
「何の為にこんなことをするんでしょう？　どうして私達が選ばれたのでしょうか？」
「何の為？　金持ちの道楽さ。深い意味はない。選ばれたのも、コンピューターが勝手にはじき出しただけだ」
「そうですか、ありがとうございます」
まだ緊張した面持ちで、席に座る。
「それじゃあ、ゲームスタートだ。せいぜい楽しませてくれよ！」

八十四番　御影すばる　死亡
【残り99人】

001　開戦前夜

ゲーム開始前日の深夜、高槻スタートポイントの藤井冬弥はだれもいない食堂で物思いに耽っていた。
少し前まで同じ場所にいた人が死んだのだ。
現実を直視して生き残るために、戦うしかないのか……。
由綺や美咲さんにまた逢えるのだろうかと、そこへ英二さんが入ってきた。
「ん、冬弥くんか。向かい側、いいか？」
冬弥は、断る理由も無いので快く頷いた。
「大変な事になりましたね」
「大変も無いだろう。そんな暇があったら現実を直視してどうするかを考えた方がよっぽどためになるだろう」
食堂の外から、
「はっはっはっ、この島の露としてあげるわ、温泉

パンダ～」
　と威勢のいい声がする、
「……何なんですか、あれ？　という冬弥の問いに、
あまり間を置かずに英二は、
「向こうは仲の悪い者同士を同じスタート位置に配置しているんだろう。理奈、弥生姉さんと由綺ちゃん、冬弥くんの友達も他の四箇所から、ばらばらにスタートだろうな」
　英二の考えに納得しながら冬弥は、
「英二さん、スタートしたら、由綺を探すんですか？」
　長い沈黙の後、
「ん～まずそうするだろうね。冬弥くんも、そうするつもりだろうが、俺を信用してくれてないなら一緒に行くつもりはないよ。でも、ここを出るまでに声を掛けてくれれば、いつでも一緒に行く気はあるけど」
「……考えさせてください」
　冬弥はそう言って食堂を後にした。

002　冷たい雨の少女（1）

三十九番、上月澪は森の中を走っていた。
わけがわからなかった。
ついこの前までは、通いなれたあの学校で、仲の良い友達に囲まれていた。
笑って、怒って、悲しんで、
そんな平凡な暮らしを送っていたはずなのに。
どうして自分はこんなところで、こんなことに巻き込まれているんだろう。
木の根に足をとられ、転ぶ。
だがすぐに起き上がり、走り出す。
誰かに狙われているかもしれない。足を止めるわけにはいかなかった。
『こわいの。嫌なの……』
瞳に大粒の涙を浮かべながら、走る。

足が遅いのは知っていながら、走る。
「澪」
誰かに呼ばれ、振り返る。
視線の先、そこには見慣れた三つ編みの少女。四十三番、里村茜だった。
『先輩なの！』
彼女は澪にとって、知らない人間ばかりのこの場所では折原浩平と並んで信頼のおける人だった。
冷たい態度に隠された、心の優しい少女。
気付いた時には、茜の胸に飛びこんでいた。
「……怖かった？」
うんっ。
首を縦に振る。
「そう。もう大丈夫……」
先輩の声が聞こえる。
よかった、こんなに早く会えてよかった。
信頼できる人に。

その時だった。
首筋に痛みが走る。
全身から力が抜け、地面に倒れた。
何が起きたのかわからない。
澪が最後に見たものは、
血の滴るナイフを持った茜の姿。

——え？——

「これで、何も考えずにすみます」

その声が澪の耳に届くことは、なかった。

三十九番　上月澪　死亡
【残り98人】

003　冷たい雨の少女（2）

殺した。
可愛い後輩を、あっさりと。
罪悪感は感じなかった。
私は、絶対に帰らないといけないから。
あの空き地で、彼をずっと待ち続けなければいけないから。
私がいなかったら、彼は帰って来ることができなくなるだろうから。
私は彼を奪われた。
この世界から奪われた。
だから、もう……私も、
「私も、奪う側に回ってもいいですよね？」
呟いた。

澪の背負っていた、今や血にまみれている鞄に手をのばした。
武器を探す。だが見つかったのは、多少太い木の棒だけだった。
(外れ……)
はぁ、と溜息をつき木の棒を投げ捨てる。
そして、次の獲物を探しに、走り出した。

自分はこんなに早く走れただろうか。
こんなに体力があるのだろうか。
人間、極限状態まで陥れば、普段は眠っているような力が発揮できるとか。
そんなことはどうでもいい、絶対に、私は生き残る。
澪も殺した、もう迷わない。
ただ……
「私は……詩子まで殺せるの？」
その問いに答える者は、誰もいなかった。

004　閉ざされた教室

隣にあるのは、あかいカタマリ。
見も知らぬ少女。
頭の半分を吹き飛ばされ、きれいだったろう顔がただの歪んだ物体になっている。
「――ッ」
吐き気がした。
目をどんなにそらしても、あのうつろな片眼だけは私を追いかけてくる。
これは夢じゃない。
これは、ゆめじゃない。

「四十九番、新城沙織。行け」
また、知らない子が教室を出ていく。
扉を開ける間際、その怯えた視線がちらりと少年に向けられるのが見えた。

……知り合い、なんだろうか。
だけど、彼と彼女が生きて会える保証なんか何処にもない。
この他人ばかりの群の中で、「次」の機会が来ると無邪気に信じられるはずがない。
ぎらついた眼をした年かさの男。涙をこらえていた緑の髪の小柄な少女。
何度もしゃくりあげ、追い立てられるように教室を飛び出した眼鏡の子。
スタート直後、毅然とした眼で教壇の男を睨んで出ていった、大人びて風変わりなひと。
――誰も彼もが、今日にもあたしを殺すかもしれない。

振り返った先には、秋子さんにしがみついて泣いている名雪の姿があった。
あの娘とイチゴサンデーを食べることは、もうできないんだろうか。

名雪。名雪もあたしを、殺せるんだろうか。

「お姉ちゃん……」

か細い声にはっとさせられて、私は隣に座ってい
た栞を見た。

「置いて、いかないで」

喉から押し出すように発された言葉。滲み出る
恐怖と闘っているのがわかる、必死さの含有された、
「ひとりは、いや…」

今にも泣き出しそうな、頼りない声。

……ああ、そうだ。あたしのできることは。あた
しにしかできないことは。

無言でふるえる栞の手を握りしめ、あたしはなん
とか笑おうとした。

「大丈夫、よ」

姉妹でよかった、ほんとうに。

苗字が共通ならば、出発するのもほとんど同じ時
間だ。

そして栞の姉であれるのは、この島であたし一人
きりなんだから。

名雪、北川くん、相沢くん、ごめん。

もう家族を見捨てる後悔は――したくない、から。

それならあたしは、誰よりも先にまず、生まれた
ときから一緒にいた大切な妹を守りたいと思う。

だからこのちいさな手の体温だけは決して忘れま
いと、あたしは密かに誓った。

この、希望の閉ざされた教室の中で。

005　封印

ゲームがスタートして数時間ほど経過した頃、柳
川祐也（九十八番）は森の奥に人影を見た。

（誰だ……）

自らの気配を殺して近づく、向こうはこちらにまだ気づいてはいないようだった。だが近づくにつれ柳川は奇妙な違和感を感じていた。
(気配がしない……？)
対象まで数メートルに近づいたところで柳川はようやくその違和感の正体に気づいた。その人物の耳についている奇妙な突起。
(メイドロボ──あの耳の形状はＨＭ─13型セリオか、道理で気配がしないわけだ。だが、いったい何をしているんだ？)
柳川がそう思うのも当然だった。彼が発見したときから彼女は天を仰ぎずっとその場に立っていた。
微動だにしないのはロボットだから当然ともいえたが休んでいるようにも見えない。
その時、不意にセリオの頭が動いた。どうやら活動を再開したらしい。
「やはりサテライトサービスは利用出来ないようですね」
セリオはそんなことをつぶやくと、柳川の方に歩いてくる。
(気づかれた？ いや、まさかな)
そう考える。だが柳川はいつ襲い掛かられても良い様に臨戦体制を整える。セリオは正確にこちらのほうに向かってくる。
彼女の唇が動いた。
「なぜでしょう？ なぜサテライトサービスが利用できないのでしょう？ 柳川さん」
(何!?)
名前を呼ばれ、柳川は一瞬だけ反応が遅れた。その一瞬でセリオは柳川の目の前まで接近する。

衝撃。

腹部に受けた一撃で彼は吹き飛んだ。そして立ちあがった時、彼の目には殺意が宿っていた。
「……もういい、キサマは死ね」

そうつぶやき、柳川は全身に意識を集中させた。自らの血に、遺伝子に組み込まれた力を開放しようとする。だが――
（力が発動しない？）
目の前に迫ったセリオの振り下ろす手刀をとっさに左手でガードする。
（いや、力が発動しないいんじゃない、何かの理由で力が制限されている）
今の自分はせいぜい一般人に毛が生えたレベルだと判断した柳川は空いた右手で腰のナイフを引き抜き、横に凪いだ。セリオはそれをバックジャンプで回避し、安全圏まで後退する。
だがそれに合わせて柳川も跳躍していた。次々に繰り出されるナイフ、セリオはその攻撃の一つ一つを冷静に、そして確実にかわしていく。
しかし、柳川の攻撃は止まらない。激しい攻防の末、ついに柳川の突きがセリオの眉間を捕らえた。
「！」
眉間まであと数センチのところで柳川のナイフは静止している。彼の右手首はセリオの両手が完全に固定していた。
（どうやら私の力の方が優勢のようですね）
そう考え、セリオは徐々に眉間からナイフを離して行く。
だが次の瞬間、柳川の指が何かのスイッチのようなものに触れた。そして――
「……どうやら鬼の力には何かの制限がかけられているようだな」
そう呟きながら柳川はセリオの頭に刺さったナイフの刃を引き抜いた。
彼に支給された武器、それは旧ソ連軍の使用していた発射式ナイフ「スペッツナズ・ナイフ」だった。
セリオのバッグを拾い、柳川は立ち去る。そしてそこには機械の塊だけが残された。

五十二番　セリオ　死亡
【残り97人】

006　親子

　神尾晴子（二十三番）は、急いでいた。森の中の道なき道を、木の根につまずきながら、葉を顔に受けながら、ただひたすら地図に『Ⅳ』と示されている場所を目指して。
「頼む、無事に、無事にしててや……」
　参加者達はホールでゲームの説明を受けた後、五つのグループに分けられ、それぞれ移動させられた。そのとき、晴子は自分の娘、神尾観鈴（二十四番）と離ればなれになってしまったのである。側面に『Ⅲ』と書かれたトラックに乗せられ、着いた先は小さな小屋だった。壁にも大きく『Ⅲ』の文字。彼女らは一度その小屋に移され、順に荷物を渡されて出発させられたのである。
　晴子は、出発するなり、手近な物陰に隠れて支給された地図を広げた。円で囲まれた『Ⅰ』『Ⅱ』『Ⅲ』『Ⅳ』『Ⅴ』という印が、赤色で目立つように描かれていた。これがそれぞれのスタートポイントなのだろう。『Ⅲ』の印は、島の南東側にあった。
　トラックに乗せられるときに確認した、観鈴の乗せられたトラックの番号。
「『Ⅳ』……」
　晴子は、そこへ向けて一目散に駆けだした。晴子のグループ『Ⅲ』には、彼女の家の居候の国崎往人（三十三番）もいたが、それを待つことはしなかった。
　番号が近いから、ほぼ同時に出発しているはず。居場所のある程度わかる時期に動かないとわからなくなると考えたからだ。
　観鈴は仲間を作ることが出来ない。それが何よりも心配だった。自分が付いていてやらねばならない。『Ⅳ』は島の南西側にあり、比較的『Ⅲ』に近かっ

たが、それでもかなりの距離があるように感じられたのは、島が思いの外大きいのか、それとも焦りのためか。
　もうたっぷり十分は走っただろうか。そのとき、
「あっ！」
　そのとき、木の陰に見えた人影、それはまさしく彼女の娘、観鈴であった。大急ぎで駆け寄る。
「よかった……もう会えへんかと思ったわ。一緒に……」
「来ないで！」
「え？」
　意外な返事に驚く晴子。
「何言ってるんや。一人より二人の方が絶対安全やし……」
「いや、ダメ、ダメ！　お母さんと一緒にいたら、わたし、泣き出しちゃう。目立っちゃうよ！　わたしは誰とも一緒にいちゃいけないの。だからダメ！」
「そんな……そんなんうちはかまわへん！　せっかく会えたんや！　一緒に行こうや！」
「ダメえっ！」
「うわっ！」
　晴子が足下に投げられたナイフにひるんでいる間に、観鈴は一目散に駆けだし、見えなくなってしまった。
「ちょ、観鈴、観鈴ー！」

007　別地点での始まり

　自分にも聞こえないほど小さく呟いてみる。なんともおかしな状況だ。
　折原浩平（十四番）は、頭をぽりぽり掻きながら薄暗い森の中で一人ぽけっとしていた。配られたデイバックの中身も確かめないまま、自分が置かれた状況に首を傾げるばかり。溜息を吐いてみたが、果たしてその溜息が、時期の割には白いという程度し

か判らぬくらい働かない頭。こんなにも動揺したのは、あの時――自分が消えていく事を悟った瞬間のあれ以来であろうか。いや、あの時よりひどいだろう。今度は自分が消えるだけではない。

――煙草、あったっけ、と小さく呟いて持ってきた鞄の中を探ると、幸運にも数本入っている潰れた煙草箱を見つけた。早速しゃぶりつこうと思ったのだが、浩平は少しばかり躊躇する。

――仮に運良く生き残っていったとしたら、まあ、戦いはなかなか終わらんだろう。と思う。その上で、果たしてこんなところで無駄に貴重な煙草を吸うのが懸命な考え方であると言えるか。

生き残る、という言葉を反芻してみて、少しぞっとした。

そういう状況に放り込まれたんだなあ、と、暢気に呟いてみる。呟いても何も変わらない、夜は夜のままだし闇は闇のままだ。

「つーか、長森がうるさいしな、煙草吸うと……」

そうだ、仮にも長森を待ってるわけだから、煙草を吸ってるのはまずいだろう。

浩平は、十年来の友人である長森瑞佳（六十五番）を待っていた。出入り口が見渡せ、且つ森の中で上手く死角に入っている、割と安全な場所で。最初集められたホールからだいぶ離れた場所に、自分たち十数人は移された。その中には長森と七瀬の姿もあったので多少なりは安心したが、後は知らぬ人ばかり。その中で一番最初に名前を呼ばれた「お」の折原浩平は、こうして一人草の上に座っているのである。ちょうど今、小柄な少女――変な羽根のついた鞄を背負った娘が、とことこと駆けていくのが見えた。確か月宮なんとかという娘の筈だ。記憶していたのはたまたまであるが、珍しい名前だからだろう。

うむ。「つ」だから、もうすぐだろう。七瀬も同じ「な」だから近い。

――そう。自分は、長森と、七瀬と、二人のクラ

スメイトを待っている。取り敢えず、三人で行動をする為に。

茜やみさき先輩、澪や繭などの知り合いみんなで集まって、団体で行動した場合、少数で行動した時にはないメリットは確かに多くあるものの、代わりに与えられる仲間割れなどのデメリットが非常に大きい。自分は皆を信頼しているが、皆が他の女の子を信頼しきれるとは限らない。こんな状況の中で無闇に集まったなら、彼女たちがふとしたことで混乱し、皆で殺し合いに至る、という――そんな可能性だって考えられなくはないのだ。

しかし、そんな考えは吐き気がした。なんてくそったれな考えだ。浩平の魂がそんなくだらない言葉を否定する。

そんなの自分のやり方次第でなんとか出来る。自分が上手く彼女達をまとめあげ、護る事が出来るなら、それ以上にいい判断なんてなかった。無理をしてでも、大切な友達と皆で、行動するべきだ。浩平はこうして待っている今だってそう思っている。

けれど、一番の問題は、別のところにあった。

――彼女たちと、どうやって合流するのか、という問題だった。そう、自分達と彼女達はばらばらにされてしまったのだ。

まったく別の場所に送られた彼女達とこの島の中で合流するためには、果たしてどれほどの運が必要とされるのだろう。

だから、長森、七瀬と、取り敢えずは三人で行動する。それが浩平の至った結論だった。長森と七瀬はそこそこ仲が良かったから、大きな喧嘩も仲間割れもないだろうとも思う。三人で行動して、余裕が持てたら他の皆を捜そう。浩平は、そういう風に考えていた。

七瀬に背中を預けて行動する事の安心感、それもあった。――いや、半分くらいは冗談であるが。

長森や七瀬が足手まといになる可能性は高いが、

こんな状況じゃ自分だって似たようなもんである。
運動神経こそ浩平の方が遥かに上だが、長森の方がずっと頭が良いし、七瀬の強い決断力も頼りになる。一人で行動するよりずっと効率が良い。
――本音を言えば、瑞佳を、七瀬を、二人を護ってやらなければいけないという、そんな責任感は、確かにあっただろう。
大体、戦闘に関していえば、武器を持てばハンディなんて無くて、皆同じようなもんだと思う、
「っと」
思いついてデイバックを開けてみた。男女が同じ条件で殺し合いをするというのは、明らかに力に劣る女子にとって不利である。自分と長森が格闘して自分が負ける道理はない。だから、武器には差がある。言っていたじゃないか、あの嫌みったらしい顔をしたおっさんが。ならば、俺に割り当てられた武器は何なのだろう。それを確かめなければならない。女子供にも負けてしまうかもしれないヘボヘボな武器だとしたら、二人を護る事すらもままならない。
ごそごそと音を立てて鞄の中から出てきたものには、重量感があった。
「――拳銃」
心臓の音が少し高くなる。
アタリ武器といえるかも知れない。震える手でその黒い金属を握った。
「割と、軽いんだな」
初めて持った漆黒の鋼は、浩平の手に収まる程度の小さなものだった。そう、手のひらで回せてしまうくらい。小型拳銃を持って、手のひらの上でくるくると回してみた。アホだった。
こんな事してる内に引き金が誤って引かれちゃったら、どきゅううん。どきゅううん、ぶしゃー。
「そんな風に暴発して死んだら面白いかも知れん」
面白くない。
浩平は自覚していなかったのだが――こうやって

武器を手に取る事で、浩平を含めた多くの参加者は、確実に昂ぶっていた。
拳銃を――アタリの武器を手に取った参加者は、これで生き残れる可能性が増えた、と、少なからず思っていたのだ。生き残るというのが相手を殺す事なのだという事を、明瞭には理解しないまま。

「しかし、実際オレに拳銃なんて使えるのかしら」
浩平は銃をベルトに引っかけると、そんな事をつぶやきながら草の上に横たわった。長森はまだだろうか、とのんきに寝転がりながら浩平は独り言をつぶやく。たれぱんだのように転がる様はアホみたいである。煙草も勿体なくて吸えないから、独り言でも言っている他はないのである。それでも、もう少しまともな格好で待つべきであろう。
「拳銃ねえ……使いこなせなければ打楽器にもならん」
打楽器になって何の意味があるというのかね、ナンデモ折原クン。浩平は自分に突っ込みながら溜息を吐く。
「いや、というか、オレは人を殺せるのかしらねえ」
結構あっさり殺してしまえそうだが、逆に引き金なんか引ける気がしない。知り合いならともかく、面識もない奴なら、こんな状況でも殺してしまえそうではあるのだが、自分は案外臆病である。無理っぽい気がする。
「まあ、出来る限り逃げ回った方が安全だろうしなあ」
拳銃対拳銃とか、拳銃対ナイフならともかく、拳銃対マシンガンとかだったら勝てる見込みはない。
それに、
「あの七瀬なら、素手でもオレの拳銃に勝つような気がする」
「んなわけあるかっ、どあほうっ!!」
「うわっ!」

目を瞑って考え事をしていた為、上から声が聞こえた瞬間驚きで心臓が止まりそうになった。聞いた事のある声で本気で良かった。もし誰か知らない人がサブマシンガンを構えていて、その手で容赦無くたればんだスタイルのまま殺されることにでもなったら、それは男として最悪の死に様の一つに数えられるだろう。

しかし、その声にはいつもの張りがなかった。

いつもよりずっと不安そうな、弱そうな、

——か弱い女の子の顔をした七瀬留美（六十九番）が。いつものように黄色の制服を纏いながら、弱々しく身体を震わせていた。

「七瀬か……びっくりさせるな、アホっ」

浩平はだらけた身体を起こし、鞄を抱えて立っている七瀬に文句を言うと、

「ご、ごめん」

本当にらしくない表情をする。いや、七瀬が本当はこういう娘である事くらいは知っているし、本当はか弱いただの女の子である、とは判ってはいるのだが、それでも、

「拳で熊だって殺せると思うんだよな、七瀬は」

「そんなわけあるかっ、どアホっ！」

また口に出してしまった。——まったく、口は災いの元である。勿論わざとやっているんであるけれど、って、

——待て。「ながもり」「ななせ」……が、な。

「長森は？」

「——あれ？　……一緒じゃないの？　あたしのすぐ前に出てったはずだけど」

「——……マジか？」

七瀬は怪訝な顔をして、——瑞佳は？　と呟く。

浩平は答えられない。重い沈黙、浩平は歯軋りしな

がら頬を歪める。
……オレはバカか――？

008 （無題）

「きゃ～～～!?　わわわ！　助けて～！」
「おとなしくしなさい、このアリ女！」
広瀬真希（七十五番）が、倒れた雛山理緒（七十三番）の上にのしかかる。
「私が死んだら良太が～！　ひよこが～！　お母さんが～！　お願い、見逃して～！」
「あきらめなさい。どうせあんたみたいなのじゃ、最後まで生き残れないわ」
真希が、逆手に構えたスタンガンを首筋に当てる。
「やだ～！　えいえい、このっ！」
「ちょ、このっ、暴れないでっ！　きゃっ！」
真希が大きくバランスを崩し、横に倒れる。その隙に理緒が転がり、不器用に立ち上がる。支給品である大口径のマグナムを取り出し、片手で顔をかばう真希に向ける。
「こ、来ないで！　来なければ殺したりしないから！　来ないで！」
がくがくと膝が震え、腰は完全に引けている。真希は鋭い目つきで理緒を睨み据え、威圧するように一歩踏み出した。
「撃ってみなさいよ。バッカみたい。あんたみたいのが撃てるわけないじゃん」
「お、お願いだから……！」
理緒が、左手で銃の腰を押さえる。
「いいわよ。こんなとこで死ぬようじゃ、アタシも最後まで生き残れない。ホラ、撃ちなさいよッ！」
「わ、私、やだっ！　イヤだ！」
理緒の目に、涙が浮かんだ。腰が完全に引けきって、逆に姿勢が安定されている。真希が、さらに一歩踏み出した。スタンガンをこれみよがしに見せつけ、バシッと火花を散らす。

「じゃあ、くたばるしかないわ。そうやって泣いてなさい」
一歩。
「な、何で……」
一歩。
「こんな事になっちゃったの……」
一歩。
「何で！　何で！　何でぇぇぇ!!」
轟音が、深い大空に鳴り響いた。
後に残ったのは、くずおれて号泣する理緒と、原型を留めないほど顔を吹き飛ばされた真希だった。

七十五番　広瀬真希　死亡
【残り96人】

009　母と娘と

森の中で、観鈴は立ち止まる。
「もう、嫌だよ。私がいると、おかあさんや往人さんに迷惑かけちゃう。私なんかといると、死んじゃうよ。もう……ゴールしてもいいよね」
自分の手元には、投げナイフがあと二つ。
だが観鈴には自ら命を断つという選択は出来なかった。
今まで生きてきた人生の中で、どんなことにも耐えきるという『強さ』がついてしまっていた。
このままどこかに行こう、おかあさんにも、往人さんにも見つからないところへ。
そう思い一歩踏み出す。
「何を思っていたんだい？」
声が響いた。
声の主は、今まさに観鈴が歩こうとしていた方からやってきた。
「誰……ですか？」
「大丈夫、危害を加えるつもりはないよ。もっとも、

信用はできないだろうけどね。で、君は今、何を考えていたんだい。よければ教えてくれるかな」
喋ってもいい気がした、この少年の雰囲気がそうさせたのだろうか。
「おかあさんが探してるの。でも、私といたら、私泣いちゃうから。目立っちゃうから、危ないの。だから、一緒にはいられないの」
「そう。だけど君のおかあさんは、それでも君と一緒にいたいんじゃないかな。こんな中で、全てを受け入れて最後まで、君と一緒にいたいんじゃないかな。君のことが好きだったら、そうしたいはずだよ」
「私もおかあさん大好き。だから、一緒にいちゃいけないの……」
泣き出したかった。
本当は一緒にいたかった。
自分の中のどこかが、頑にそれを拒んでいた。
「そう。でも、人にはそれぞれに幸せがある。自分の本当の気持ちと、おかあさんの気持ちが一緒なら、それでいいじゃないか」
少年の言葉が心に染みる。
いいのだろうか。本当にいいのだろうか。
「一度眠るといい。目が覚めたらきっと、君にとっていいことが待っている」
どうしてだろう、眠くなってきた。
力を失い倒れかけた観鈴を、彼は支えた。
そのまま木にもたれかけてやる。
そして自分もその横に座り、その人の到着を待っていた。

「観鈴っ！」
「来たみたいですね。大丈夫、眠っているだけです」
「あんた何者や。観鈴に何かしたんか？　もし何かやってたら、あんたのこと絶対に許さへん！」
言って少年を睨み付ける。
少年は全く動じなかった。

「この子は人との愛情に餓えています。あなたが優しく包み込んで、声をかけてあげて下さい。そうすれば、全てがうまくいくはずです」
　そう言い、少年は立ち上がり、歩いて行こうとした。
　晴子はぽかんとしながらも、訊ねた。
「あんたは誰や。名前ぐらい、教えんかい」
「――氷上シュンといいます。それでは」
　それだけを言い、氷上シュンは姿を消した。

　目を覚ます、誰かに抱かれていた。
「おかあさん……」
「もう大丈夫や、観鈴。うちはずっと、あんたと一緒や……」

010　つかのまの、やみ

　もう、なにもかもがいやになっていた。
　今日はネームを終わらせようと思って、一生懸命かんがえてたのに。
　夏こみの当落発表前に入稿をすませて、新刊は当然二冊以上で、それでしたぼくたちをおどろかせてやろうって、そう思ってたのに。
　だけどしたぼくはいない。みんないない。
　こんな場所、こんなしんきくさくて気味の悪い場所、いたくない。
　それに――あの、吹き飛んだ顔。真っ赤なほんものの。ぬるついた、血のにおいをむちゃくちゃに頭を振って追い出す。
「詠美っ……止まり！！」
　聞き慣れた叫びも、いまはこわいだけだ。
　目を合わせたら、おしまいだ。
　ぎゅっと目をつぶって、あたしは夜の住宅街の中を走り抜けた。
　絶対に追いつかれないように、せいいっぱい急いで。

そう、あいつは、あたしのことがきらいに決まってるんだから。
いつもわがままいって、困らせてたから。
面倒ばかりかけるおおばかだって思ってるんだ。
だからあたしも、あんたなんてしんようしない。
すこし悲しくなったけど、それはしかたのないことだった。
何よりも、あんたにだけは殺されたくないと思うから。
――すぐそばでひゅおん、と風をきるような、音がした。
「な……っ」
植え込みに突き刺さっていたのは、本物の鏃（やじり）だった。
あんまり突然で呼吸ができない。やだ。やだ。やだよ。
振り返れば、そこには街灯の中に浮かび上がる白衣のひと。眼鏡のおくがつめたくみえた。こっちにくる。
「どうも腕が鈍ってるようね、調子が出ないわ」
きりり、と音がして、その手の中の――たぶんシヨートボウガンの――照準が合わされた。
やだ。ちょっと、あたし、なにしてるんだろ。
やだ、ほんと、なんで、はしれないんだろう。
なんで足がこんなに、うごいてくれないのよ。
「ごめんなさいね。痛くないようにするから、我慢して」
「う、そっ」
そのひとは笑っていた。きっと楽しんで、いた。
きりきりという音が聞こえそうなほど、ゆっくりと腕を引く。
「や、」
もうだめ、ぜったいにあたしは――――

目をつぶったと同時に、ぱぁん、と、何かが弾けた。
「何さらしてんねん、この人殺しがァッ！！！」
温泉——パンダ。
ぱん、ぱん、とまた続けて音がして、植え込みを、街灯を割った。無数のガラスの破片がきらきらひかって、まっくらな中を舞い上がる。
はっと見れば、白衣のひとの腕と腹が、あかかった。
その手には何も持っていない。なにも……え？
ぱぁん。
もう一度その音を聞いた瞬間、あたしは腕をひっつかまれていた。こげくさい。
「早う逃げ！　同人女は夏こみまでは死ねんのや！」
「え、え、」
わけがわからない。手を引かれるままにいくつも角をまがって、足がついていくのもやっとだ。
だけど今走らないと、今は、早く、それだけはまちがいなくって。
「ええか、向うの山まで行くで。うちらの前に出たんはあの女しかおらん、充分撒ける」
「あ——」
何かいわなくちゃって思うのに、声がぜんぜん出てくれない。
だって——こいつは、あたしをきらいなはずで。
だって——
『この島の露としてあげるわ、温泉パンダ！』
平気だって思いこみたくて、なんてこと言ったんだろう。
誰だってあんなふうに目の前で友達が死んで、こわくないわけないのに。

でも、来てくれた。本物の銃なんか使って、こんなあたしのことをマンガのヒーローみたいに、ほんとに必死で助けてくれた。
なら――あたしは。

「さ、行くで、詠美！」

とんでもなく、ばかだった。

011　やみを追いながら

「またね、お嬢ちゃんたち」
独りごちるなり、ちっ、と舌打ちをして、石原麗子は逃げ行く少女たちを見送った。
わざわざ追うことはしない。まだまだ先は長いのだ。体力は温存しなければ。それにどうも――力が巧く発現してくれない。
「粋な真似してくれるじゃない」
深く溜息を吐きながら、由宇の銃弾が掠めた腕の血をペロリと舐め取る。
由宇の選択はベストでないものの、ベターではあった。
あのような場面ならば、怖気づくことが一番死に近い行動になる。例えば足が完全に竦みきっていた詠美のように。そこで慣れないながらも果敢に牽制を仕掛けてきたのは正しい。勿論それは麗子にとっての誤算ではあったのだが。
「……嫌な空気」
明らかに感じ取れるナニカの強い波動に、麗子はあからさまに表情をしかめた。
おそらく、島全体になんらかの呪術結界式が敷かれている。そしてあの下衆な男に逆らえる万能たり得る仙命樹には、相当強い制限が設定されていると推測できる。でなければあの二人とも、あっという間に殺せていたはずだ。それに加えて、素人の娘が我武者羅に撃った弾を複数受けるなどという失態。

回復力が著しく落ちている今は相当に手痛い。コツを掴みきれば多少の力の行使は出来るかもしれないが……直接仙命樹の効果を利用して死に至らしめるような真似は無理だろう。勿論それは、あの場に居た強化兵を始めとする異能のモノたち全員にも適用されるのだが。

全員の能力は、人としての経験と生来の運だけに平均化されている、というわけか。それならばやはり、人に溶け込みながら本質を違える自分には多少は有利である、のかもしれない。

ならば、まずするべきことは。

……答えは、あっさりと見つかった。

少女たちの強運を嘲笑って、麗子は由宇と詠美が向かった山とは反対方向へと歩き出した。

闇の中を悠然と進む女の纏う白衣には、消えない赤い血がこびりついている。

012　風にさらわれて

川名みさき（二十八番）は絶望していた。

彼女の目は、光を感じることができない。

これではゲームが始まる前から、既に脱落を宣言されているようなものである。

彼女は、ゲームに乗った人間の存在を疑うほど楽観的な考えは持たなかった。

そのような存在の前では自分は無力だということを、彼女は理解していた。

彼女にとってのせめてもの幸いは、連れて来られたこの場所が学校だったということ。

学校の構造なんてどこも似たようなものである。

階段を登っていけば、その先はきっと屋上だ。

最後に屋上の風を感じたい。

それが、ささやかな願い。

武器の支給を辞退し、教室を出る。
壁を伝って、一歩一歩、ゆっくりと歩いた。
階段を見つけ、上がっていく。
これはきっと、人生で最後に上る階段だ。
一段一段、ゆっくりと、踏みしめるように。
そして、彼女には見えないドアが現れた。
カチャ……キィ……。
そこに鍵はかかっていなかった。
（よかった、よ）
みさきはドアを開け、屋上に出る。
（こんな場所じゃなければ、九十五点の風だね）
表情が歪む。瞳の端からは涙が溢れそうだった。
上を向いて歩きながら、涙が零れないように、

ふと、風向きが変わる。
長い黒髪が風に揺れ、頬を掠める。
（あ……）
風が瞳から、雫の欠片をさらっていった。

振り向いても、見ることはできない。
手にすることはできない。
腕を大きく広げて、全身で風を受けてみる。
ただそれだけで、楽しかった日々を想い出せた。
それなのに、
風にさらわれた涙のような、
儚く消えた、日々の欠片を、
振り向いても、帰ることはできない。
手にすることはできない。
だけど、確かにそこに、感じられたから。
そう、全ては自分の中に、しっかりと……、
刻まれていた。
（もう、いいよね）
（ゴメンね、ゴメンね、雪ちゃん……）
（そうだ。ねえ、浩平君？）

（夕焼け、きれい？）

十分後、何かの音が風に運ばれてきた。
そして同時に、みさきの意識も、閉じていった。

「一体何をやってたんだろうな」
藤田浩之（七十七番）は、屋上の縁で手を広げる少女を見つけ、支給武器であるオートボウガンの引き金を引いた。
矢は綺麗に少女の胸を貫き、バランスを崩した少女はまっ逆さまに落ちていった。
人を殺した。だが、何の感情も涌きはしない。
それよりも……、
「かったりぃ、さっさと終わらせて帰るぜ、俺は」

二十八番　川名みさき　死亡
【残り95人】

013　血

長森瑞佳（六十五番）は駆けた。駆けた。駆けた――。
暗い森の中を、建物が見えなくなる位まで走り抜けると、ようやく瑞佳は一息吐いて、柔らかい草の上に座り込んだ。
殺されるのが、あまりに怖かった。何もしないまま、誰かに胸を撃ち抜かれるのが、頭を潰されるのが、首を絞められるのが――ずっと遠くまで離れないと、すぐにでも殺されてしまうような気がしたから。
長森瑞佳は、走った。走った、走った、走った――。
――浩平に逢いたい。浩平。こうへい、こうへいっ……。

息が切れて立ち止まる。服の裏側から瑞佳の体温

を奪っていく冷えた汗。身体が凍るように冷たい。
瑞佳は振り向く、ああ、よかった、自分はまだ殺されなかった。
次に思い浮かべたのは勿論、折原浩平の事だった。
浩平は何処だろう、世界中で誰よりも信頼できる幼なじみ、自分のことをいつもとぼけた顔をして見ていてくれた幼なじみは。
そう、そうだ。自分は浩平と同じところから出発して、それで、
自分より三十分近く先に出ていってしまった浩平が、自分を待っていてくれるとは思いもしなかった。
この瞬間まで。
ここで、ようやく、その可能性に至る。
「——待っててくれてた、なんてことは……」
もしもそうだとしたら、自分は、浩平と行動できるかも知れない最後の機会を逃した事になるのかもしれない。自分は誰よりも信頼出来る人に会えないまま、殺されてしまうという事になるのかもしれない。顔から熱が奪われていく、全身が凍るように震えているのがわかる。
「——そんなわけ、ないよね。浩平は、いじわるだから、わたしのことなんて、置いていっちゃうもん」
瑞佳は出来る限り楽観的に考える事にした。——正確には、楽観的に考える事しか出来なかった。もし浩平が待っていてくれたのなら、わたしが建物から出てきた時に声を掛けてくれた筈だ。そしてもし声を掛けられていたなら、瑞佳は絶対にそれを聞き逃さない自信はあった。そうに決まっていた。
それなら、まず殺されないために走っていった事はあながち間違いでも無かったと言えるかもしれない。ぺたり、とへたり込む。切れた息を整えながら、瑞佳は乾ききった唇を薄く舐めて、少しでも落ちつこうと考える。
「浩平は、いじわるだよ、わたしや、七瀬さんくらい、待っててくれてても、いいのに」

ああ、しまった。七瀬さんを置いてきてしまった。せめて七瀬さんだけでも待っていれば良かった。ごめんなさい、七瀬さん。そんな事を考えながら、とにかく瑞佳は待つ事にした。誰かが通りかかるのを待つ。知り合いが――浩平が通りかかるのを待つ。それが、一番安全。受け身過ぎるとは判っているが、それでも怖いから――怖いから。瞼を閉じて、顔を膝に埋めた、

――その刹那。

ぱらぱら……という、軽い音が、すぐ自分の裏で聞こえたような気がした。そしてもう一度同じ音が聞こえたとき、瑞佳はそれが空耳でないということを理解する。理解はしてもなかなか身体は反応してくれない。恐怖が震えとなって闇を一層深くする。

振り返ると見えたのは、二人の人間が殺しあっている図、

――いや、正確には、嬲り殺しの構図だった。

「やめろっ、何処の誰だか知らないけどっ」

七瀬彰（六十八番）は必死で逃げ回りながら、目の前の見知らぬ、眼鏡を掛けた一見大人しそうな少女を説得しようとしていた、死にそうになりながら。だが、まるで聞く様子もなくマシンガンの引き金を引く少女。当然のことだが、扱いに慣れていないためだろう、狙いはまるでバラバラだが、もし偶然に一撃でも食らってしまえば、自分は間違いなく、絶望的な確率で、容赦無く、死ぬ。息切れしてきた

――くそっ、もっと運動しておくべきだった。ミステリーばっか読んでごろごろしてるから体力つかないんだよっ、という、友人である藤井冬弥の言葉が思い出される。

「ほんとだよ、冬弥っ！」

目の前の少女を止める方法は、取り敢えず今の自

分にはない。どう説得しても止むまい。どっかがおかしくなってやがる。
せめてもう少しでもまともな武器を持っていれば、なんとか——なんとか出来たかもしれんのに。彰は思う。

右手に握るフォークがきらり。

闇の中でも銀色は目立つのだと思う、彰の手にある三叉のフォークは勇ましく輝いていた。これが七瀬彰の武器であり、七瀬彰の命綱であり、七瀬彰そのものであった。泣ける。泣いている場合ではなかった。判決が下される瞬間が彰の全身に痛みとなって襲いかかる。
ぱらららららっんッ！
そんな派手な音を立て、弾丸が彰の右足、鍛えられていない細い太股に食い込んだ。生半可な痛みではなかった。煙をあげる熱いフライパンを叩きつけられたような痛みで、こんなものに文学少年が耐えられるわけが無かった。断末魔のような叫び声をあげ、彰は土の上に崩れ落ちる。だが動かないと、動かないと今度こそ本当に死ぬわけで、そう考えると痛みなんてなんのそので、
しかし、「なんのその」だったら、もう少しはマシだった。ちょっと「なんのその」どころではない耐えられない苦痛が全身に襲い掛かる。起こした身体が再び地面に崩れ落ちる、土の味がする、口の中のざらついた砂が意識を取り戻させる。
「畜生っ、ちくしょう、ちくしょうっ！」
美咲さんにも逢えないで、こんなところで死ねるかっ！
——こういうとき、人は無駄な抵抗をするものである。彰は力を振り絞り、フォークを女の子に向かって投げた。そう、ちょうどダーツのように。だが、漫画やミステリーで投げられるダーツのように上手く飛ぶはずもなく、ただ女の子の胸に柄の部分がこ

ろんと当たっただけに過ぎなかった。これを人は無駄な抵抗という。銃口にフォークを突き刺すなんてかっこいい真似が素人に出来るわけが無かった。
（駄目だっ、殺されるっ！）
走馬灯を見る暇も無かった。思い浮かぶのは真っ赤な真っ赤な真っ赤な痛みだけであった。取り敢えず目を瞑る。目を瞑ったら痛みがなくなるかもしれないというわけでもないのに。執行を待つ死刑囚の気分だった。
——しかし、執行は行われない。
響くのはカチャン、カチャンという音だけである。
弾丸が切れたのかっ！　しめた、とばかりに彰は足を引きずりながら森の闇に向けて歩き出す、土の匂いが鼻腔を衝く、早く動けと身体を急かす。早く彼女の目の届かないところに行かなければ。予備の弾がある事は充分に考えられるから、早く逃げないと、
混乱する神経が身体の痛みと相まって、彰の心は恐怖に侵されていく。痛み。痛み。痛み。血が——血が——、死ぬ、死ぬ——、眩暈を覚えて、彰は再び土に突っ伏し、そのまま意識を失った。
だが、少女の追撃をかわすには十分な距離を、彰は稼いだようだった。

藍原瑞穂（二番）は、試行錯誤しながら、なんとか弾丸を補充した。ぱららら、と試し撃ちをしてみて、自分の過程が正しかったことを知る。ちゃんと銃弾が補充できた。これでだいじょうぶ。
生き残るんだ、生き残るんだ——マシンガンが当たったんだ。香奈子ちゃんと一緒に逃げられるかも知れない。みんなころして、わたしたちがいきのこるんだいきのこるんだいきのこるんだ。さっきの男の人は遠くに行ってしまった。殺し損ねた。だがまあ、しかたない。香奈子ちゃんは何処だろう。何処に行っちゃったんだろう。逢いたいよ香奈子ちゃん香奈子ちゃん香奈子ちゃん

がさり、という音。
「誰っ！」
瑞穂はマシンガンを音が聞こえた方向に向け、弾丸を雨のように降らせる、ぱららららららららららららららららららららららららららららららら。
カチャン。カチャンカチャン。
弾が切れるまで瑞穂は弾丸を放ち続ける、恐慌状態で撃ち続け、弾丸を撃ち尽くして、ようやく安息を得る。
「死んだよねえ」
確かめるために茂みに近付く。その声と足音に反応するように茂みが震える。茂みを覗く、
――意外な事に、死んでいなかった。
「やめてぇ！　近付かないで！」
けれど、その様子を見て瑞穂は一層安息を増した。何故なら目の前にへたり込んでいるのは、怯えに怯えた少女であったからだ。綺麗な少女。傷一つない綺麗な顔。自分よりずっとずっと綺麗。ぶるぶると震えている。そんなに怖いの？　あはは、そんなに綺麗なのに怖いんだ。あはははははははははははは、殺してあげるよ殺してあげる、香奈子ちゃんと逃げ出すんだからみんなじゃまなのじゃまなのじゃまなのよ
その瞬間、瑞穂の背中に走ったのは、壮絶な違和感だった。
背中に走る鋭い痛み。何度も何度も何度も何度も何度も、痛み。
痛い。　香奈子ちゃん。かなこちゃんいたいかなこちゃんいたいかなこちゃん痛いよう。痛いよう。痛いよう――。
そしてマシンガンを取り落とした。
ああ、だめ、だめだめだめ、だめ、マシンガンがないと、香奈子ちゃんと帰れない。必死でマシンガンを取ろうとして、地面に突っ伏して、立ち上がれ

なくて、背中が痛くて、香奈子ちゃんがそばにいなくて、それじゃあわたしは駄目で、そのまま意識が途切れた。

殺される。わたしは、ここで殺されるんだ。瑞佳は震えながら、死を覚悟して目を閉じた。

死ぬってどんなに痛いんだろう。どんなに苦しいんだろう。怖い、怖いよ浩平。浩平、浩平、浩平、浩平。

——だが、何も起きなかった。

女の子の叫び声が何度も聞こえた。悲鳴、断末魔の叫び、叫び、叫び。

頬に暖かなものがふれた。何だろう。

何が私に降ってきた？

——誰かがどすり、と倒れた音がした。

「長森、さん？」

震える子猫を抱くような、優しい、聞き覚えがある声がした。ああ、自分の事を知っている人、ああ、助けが来てくれたんだ、

助けて、誰、ああ、この声は、

「住井、くん？」

——返事をすると、へたり込んだ自分を上から見下ろして、住井護（五十一番）は、

右手に血染めのバタフライナイフを持って、

「危ないところ、だったね」

と、血塗れの顔で、安堵の表情を見せた。いつもみたいに優しい顔。優しい顔なのに。そして、身体中から血を流して倒れている娘の姿が見えて、そして自分の制服に真っ赤な血が付いているのが見えて。自分の頬にも真っ赤な生命がこびり付いている事を知って、

頬を一撫でして、

瑞佳は卒倒した。

二番　藍原瑞穂　死亡
【残り94人】

014　（無題）

「おお、まいしすたー瑞希ではないか」
「あ、大志じゃない」
高瀬瑞希（五十五番）は、巨木にもたれかかった九品仏大志（三十四番）に声をかけられ、振り返った。
「全く、冗談じゃないわよ。質の悪い悪戯に違いないわ。さっさと和樹を見つけて帰りましょ」
瑞希は、ぶつぶつと洩らしながら辺りを見回した。
「しかし、馬鹿みたいに広いわね。誰か、ここらへんに住んでる人とかいないのかしら」
「さあな」
大志が、ゆったりとした動きで身体を起こす。
「ときにまいしすたー。誰かと会わなかったかね？」
「え？　全然会わなかったわよ？」
「そうか……」
大志が、明後日の方向を眺めながら、ポツリとつぶやいた。
「やれ、先行者」
「え？」
閃光が、瑞希と周囲の下草を灼いた。
「すまんな、まいしすたー。抗議は地獄で聞こう」
わずかに残った燃えカスを睨め下ろしながら、大志はボソリとつぶやいた。右上腕部に、小さな切り傷がある。肌がそこを中心に、赤黒く染まっていた。
「あの女……岩切といったか。毒を仕込んだ刃とはな……吾輩の命、永くはあるまい」
大志が、うろん気な目つきで空を眺める。
「わが女神……あさひちゃんだけは守らなくてはいかん。そのためには、吾輩が修羅となるしかない……吾輩に支給された、この先行者……有効活用さ

せてもらおう」

五十五番　高瀬瑞希　死亡
【残り93人】

015　選択

「ふぅ……」
千堂和樹（五十三番）は見つかりにくい場所に着いた安堵感からか溜息をついた。まさかこんなことに巻き込まれるとは。
だが、いつまでも悲観してはいられない。そう考えた彼は自分に出来ることをやろうと考え、支給されたバッグを開いた。
バッグの中から出てきたものはペットボトルに入った水、その辺のコンビニで売ってそうなパン、島の地図、コンパス、そして機関銃だった。
こんなところまで原作と同じ様にしないでもいいだろうにと彼は思った。
そして機関銃に備え付けてあった説明書には目を通さずに、彼は機関銃のセットアップを始めた。
「まさかバトロワ本を描くときに調べた資料が役に立つとはな、なんつー皮肉だよ」
そうつぶやきながらセットアップを完了する。そのころには彼の頭の中にひとつの選択肢が浮かんでいた。
[あなたはこの殺人ゲームに乗りますか？
ＹＥＳ／ＮＯ]
(別に俺はどっちだっていいと思っている)
それはあたかもこの殺人ゲームの元ネタである小説の一シーン――原作における殺人鬼役の少年がつぶやいた言葉――のように彼の頭の中に現れた。
ほんの少し悩んだ後、和樹はひとつの結論を出した。ポケットの中から十円玉を取り出す。
「表が出たら奴等と戦う、裏が出たらこのゲームに乗る」

和樹は十円玉を天高く放り上げる。力を加えられた十円玉は次第に勢いを失い、重力にしたがって地面へと落下する。自分の足元に落ちた十円玉に写っていたのは……建物、すなわち表だった。
「そうか」
和樹はそうつぶやくと足元の十円玉を拾い、歩き始めた。
「まずは仲間を集めるか……瑞希や大志あたりだな」

016　出会いと別れの一幕

目の前の光景。
血のついた制服姿で倒れている瑞佳。
血まみれの姿でナイフを持っている住井。
この状況から、浩平が想像したのは、一つの可能性。
「住井ぃ！」
叫ぶと同時に発砲。
「!?」
当たらなかった。さらに続けて叫ぶ。
「お前！　長森を……っ！」
「お、折原!?　違う、オレじゃないぞ、落ち着け！」
そう言って持っていたナイフを投げ捨てる。
だが、浩平は止まらなかった。
「黙れ！　お前は馬鹿な奴だと知ってたけど、そこまで馬鹿だったのかよ！」
「おい、本当に落ち着けって！」
住井の言う事も聞かず、発砲を繰り返す。
そして遂に、銃口が住井を捕らえ……
「死ねやコラぁ！」
「やめんか、どアホッ!!」
七瀬のツッコミを食らい、そのまま地面に倒れ、意識を失った。

「悪い、本当に済まない!!」
「まったく……冗談じゃないぞ……」
落ち着きを取り戻し、一部始終を聞いた浩平は素直に謝った。
「ま、あの状況なら、疑われるのも無理はないけど……それにしてもいきなりか」
「だから、悪かったって言ってるだろ。お前も心が狭い奴だな」
「態度がでかいわっ！」
七瀬からまたもツッコミが入る。
浩平はこれ以上この件について話すのは止め、真剣な声で住井に訊ねた。
ひょっとしたら、こいつも……という恐れを秘めて。
「で、住井。長森が襲われてることを知らなかったんだろ。お前、このゲームに……」
「違うね。離れた所から見てたが、あの女の子は見境がなくなってた。無抵抗の女の子が助けを求めてるのに、殺そうとしたんだ。気がついたら、体が動いてた。助けの声が長森さんに似てると思ったけど、本当に長森さんだったなんてな。血まみれの俺を見て、気を失ったんだ……」
浩平の言葉を遮り、言った。
「住井君……」
「そうか……悪かった。結果的に長森を助けてくれたんだ、ありがとう。これからどうするんだ？　お前」
「そうだなぁ」
少しの間考え、そして言った。
「とりあえず、従兄弟がいたから、そいつと連絡取りたい。北川潤って言うんだが、オレの従兄弟とは思えないくらい、馬鹿な奴だ」
その北川も同じことを住井に対して思っており、実際は二人とも殆ど同じ性格である。
だからこそ昔から、この二人は仲が良かった。
何かにつけて気が合い、馬鹿な悪さをして、よく

怒られていた。
　高校になってから会ってなかったが、こんな所で再会するとは。
　人生なんてわからないものだ。
「じゃあそろそろ行くよ。そうだ折原。長森さんと七瀬さんを守ってやれよ。二度と目を離すんじゃないぞ」
「あぁ……」
「そうよ、あたしは乙女なんだから」
「そういうことだ、じゃあな、三人とも」
　住井は立ち上がり、まだ気絶している長森の方にも目を向け、歩き出した。
　そしてふと立ち止まり、つぶやく。
「あんなことは言ったが、無意識で人を殺したんだ。折原、オレ、狂ってるか？」
　浩平には答えられなかった。
　自分も勘違いし、逆上し、親友である住井を殺そうとしたのだ。
　普段はわからない心の闇が、姿を覗かせているのかもしれない。
　そしていつか、俺も見境なく――
　浮かんだ馬鹿馬鹿しい考えを否定し、住井に向かい言った。
「またな」
「あぁ」
　住井は、今度は走り出した。

017　（無題）

　宮田健太郎（九十五番）は、走っていた。スタート地点から、出来るだけ遠く離れるために。
「はぁ……はぁ……ふぅ。とりあえず、これだけ離れておけば大丈夫だろ」
　ある程度行ったところで森の中に分け入り身を潜めた。デイパックを地面に下ろし、一息吐く。
「後ろは、いかにもやる気満々って顔の人だからな。

柳川さんだっけ。とても協力しようなんて言い出せないよ。しかし……」
今、自分の置かれている立場を把握しようと考えを巡らす。
「いつも、こんなのだよなぁ。人の意見聞きもせず勝手に何か決められたりさ。デスゲームって……俺一度死んでるのに」
溜め息混じりに、愚痴をこぼした。
「……愚痴を言っってても始まらないか。まず、どうにかみんなと合流しないと……スフィー達が居れば、随分と生き残れる確率も……」
考えは、そこで中断せざるを得なかった。丸い物体が放物線を描き、コロコロと自分の方に向かってきたのだ。
「なんだ？　――クソッ！」
反射的に、デイパックを持ち上げその場を離れた。そのすぐ後、
ドンッ！

木の根本で炸裂し、木が粉々になって砕け散った。
「んふふー。やったかしら？」
長岡志保（六十三番）は、手榴弾片手に爆散した木の根本を伺っていた。
「しかし、いきなり一人見つけちゃうなんて調子良いわね。武器も当たりだし。このまま頑張って、このデスゲームをネタに東○ポに入社してやるんだから！」
ひょんな事から将来設計もバッチリ整った長岡志保。
「もう、誰もわたしを止められないわ！　アハハハッ！」
パンパンパンパンッ！
銃声が鳴り響いた。まるでそれは……
「ぐふぉっ！」
鉛弾を大量に食らい、吹き飛ぶ。
「危なかったな……でも、大声で笑ってくれたお陰で分かりやすかったよ」

「や……やるわね。わたしに土を付けた男はあなたで二人目よ……」
息も絶え絶え、近づいてきた宮田健太郎に言葉を返す。
「しかし、拳銃とか使うのは初めてなんだけど……」
コルトガバメントを右手に携え、話を続ける。
「使いやすいんだよな。まるで、俺の為にあるような……撃つ度に気持ち良くなるし。人を殺したい欲求でもあったのかな……」
「安心して。撃つ度にそう感じるのは、人を殺したい欲求のせいじゃないわ。それはね、椎は……うっ！　ガクッ……」
元気にペラペラ喋っていた筈なのに、突然事切れる長岡志保。
「死んだか……まぁ、人が死ぬ時ってこんなものだろうしな。さて、手榴弾貰っていくか。ん？　なんだこりゃ？『志保ちゃんレーダー』？　ああ、これで俺の事を見つけたのか……これは役に立ちそうだな。他にはと……」

六十三番　長岡志保　死亡
【残り92人】

018　覚醒

深い茂みの中を、かれこれ十分ほど掻き分けながら進んでいた柏木耕一（十九番）は、前方の大きく開けた場所に辿り着くと、殺していた息を慎重に、すべて吐き出した。
そこは一面、湖だった。
「水も比較的、綺麗だな。これなら使えそうだ」
耕一は、辺りに人の気配が無いことをもう一度確認すると、左手に持っていたディパックを足下に降ろし、自分も草むらに腰掛けた。耕一は当初、当然ながら従姉妹の四姉妹と行動を共にするつもりであ

った。
――スタート地点がバラバラになるまでは。
耕一は「Ⅱ」とペイントされたトラックに押し込まれ、他の四姉妹は……わからない。苗字が同じだから合流も簡単だ、というささやかな希望もあっさりと絶たれたわけだ。
「千鶴さん、梓、楓ちゃん、初音ちゃん……」
みんなは大丈夫だろうか。ホールに全員が集められていたとき、近くにいた千鶴さんが耕一に囁いた言葉――
「力が……使えません」
現に、耕一も何度か試していたことだった。もしも力が――鬼の力が封じられていなければ、生理的悪寒しか引き出さない、下卑た笑い声を発する高槻も、周りにいた同じような顔をした連中も、十秒後にはタンパク質の塊になっていただろう。
「きっとみんな、不安で怯えている。俺が……俺が守らなきゃ」
自分を奮い立たせるように、何度も何度も呟く耕一の耳に、ふと、ぽちゃん、という音が微かだが届いた。
「……？」
音は湖からだ。
顔を上げると、水面がゆらゆらと揺れている。魚でもいるのか、そう思った耕一は、それが貴重な食料になることに気付いて水辺に歩み寄った。
まず視界に入ったのは、水底を漂う黒い塊。それが何であるか、を耕一が思考するよりも早く、それは猛然と耕一に襲いかかった。
「っ!?」
声を上げる暇もなく、次の瞬間には耕一は頭から湖に突っ込んでいた。
なんだ……なにが起きた!?
思っていたよりも深い湖の底、周囲の状況も把握しきれていない。だが、それよりもまず第一に優先すべき事があった。

空気だ。
　水泳の選手が入念な心構えの元、湖に飛び込んだなら話は別だが、今はあまりに唐突だった。耕一は僅かな、本当に僅かばかりの空気を、肺から逃さぬように口と鼻を手で覆った。
　上だ。
　上に行かなければ、俺は死ぬ。
　生き物の本能に突き動かされ、耕一は必死にもう片方の腕と両足を動かした。しかし、湖面から進入する陽の光を求めるように昇る耕一の眼前に、突如、絶望が立ち塞がった。
　黒い塊──違う、それは人だった。
　顔面蒼白になって昇ってくる耕一を見下ろす形で、岩切花枝（八番）は腰の短刀をすらりと抜いた。彼女もまた、封印の力によってその戦闘力は著しく落ちていたが、もともと水中は自分にとって庭のようなものだ。呼吸というハンデを背負った相手なら、赤子にデコピンするよりも楽に始末できる。耕一が昇ってくるのを悠然と待ちかまえながら、岩切は射程距離でその短刀を横に払った。瞬間、耕一は身を捻ったものの、所詮、水の中では大した動きもできなかった。短刀は耕一の胸を真一文字に切り裂き、続いて両者の間の水が驚くべき速度で赤く変色した。
　それでも耕一は、極めて鈍い速度で岩切に手を伸ばしたが──
　どすっ、と左手に握られた二本目の短刀に手の甲を貫かれ、耕一は深い湖の底へと再び沈んでいった。
　俺……。
　自分の身体が湖の底に着いたのを静かに感じ取りながら、耕一は僅かに残った思考を巡らせた。
　俺は死ぬんだな……。
　耕一はその事実に恐怖したが、それよりももっと強い感情が耕一を支配した。
　千鶴さん、梓、楓ちゃん、初音ちゃん……。
　自分は彼女たちを守らなくてはならない。
　なのにこの有様は何だ！　不甲斐ない！

柏木耕一っ！　お前も男なら、大切な女ぐらい守って見せろ！
どくん……、身体が脈打った。
力だ、力だ、力だ、力だ、力だ、力だ、力が必要だ。
どくん……、鼓動がリズムを刻み出す。
鬼の血よ、俺はお前が必要だ。
どくん……どくん……
身体の周りの水が、熱で揺らめきだす。
アアアアアアアアアァァァァアッ!!
一分ほど水底の様子を見ていた岩切は、男が再び昇ってこないのを確認すると、水面へと身を翻した。あと二メートル、という所で、岩切は突如、自分に向かって凄まじい勢いで突っ込んでくる存在を湖底から感じ、振り向いた。
振り向いたときには、それは目の前にあった。圧倒的質量で岩切を飲み込むと、そのままの勢いでそれは湖面から飛び出した。

車にはね飛ばされたような衝撃を受けた岩切は、湖近くの巨木に身体を強く打ち付け、停止した。
「う……はっ……」
折れた肋骨が何本か、内臓に達したようだ。口からは空気と共に、血も吐き出された。それでも懸命に状況を把握しようと見開いたその目が、さらに大きく開かれる。
それは……人ではなかった。
もちろん、岩切が見たのは柏木耕一、その人であった。姿形も、普段のそれと変わらない、あえて言うなら全身びしょ濡れで上着が横一文字切り裂かれているぐらいで、あとは只の人間だ。
しかし、それに対峙した岩切には判ってしまった。それがヒトの皮を被ったバケモノであることを。
「ガあアぁ゛ァ……」
〝それ〟が声を発した、ヒトではない声を。岩切は恐怖した。自分に迫る、絶対的な『死』に。
「くっ、来るなぁぁぁっッ!!」

懐に仕舞っておいた支給品のソーコムピストルを素早く抜き出し、相手の眉間にポインティングする。
　間髪入れずに引き金を引――
　引いたときには、耕一は岩切の頭上に跳んでいた。岩切の手元から発射された弾丸が、耕一の背後の木に命中するまでの軌跡を視認した後、耕一は岩切がもたれ掛かっている木の側面に〝着地〟した。
　岩切は耕一を完全に見失っている。
　その岩切めがけて、耕一は自由落下するよりも速く、木の表面を駆けた。岩切が上に気付いて頭を上げることは……最後までなかった。
　がくん、と岩切が頭を揺らし、そのまま横に倒れた。
　首の骨を折られ……即死だった。
　耕一はその作業を終えると、しばらく辺りの気配を探り――
　そのまま力尽きたように前のめりに倒れ、深い眠りに落ちた。

八番　岩切花枝　死亡
【残り91人】

019　音

ザクッ。

背中に何かが刺さった。
足音は聞こえなかった、が、誰かいたのか？
健太郎は考えるより早く振り向き、ガバメントを撃つ。

パンパンパンパンパンッ！

気持ちいい。痛みが和らいでゆく。
自分はこの音を聞く為に生まれてきたのではないかと、そんなことを思う。
だが、弾丸は襲撃者に当たらなかった。

襲撃者は撃たれるのを見越し、ナイフを刺した後にすぐ場所を移動していた。
そして、背後からもう一刺。
健太郎にとって、それが致命傷となった。
(はは、あっけないもんだったな。最後にもう一度、あの音が聞きたかった)

パンパンッ！

(そう、パンパ……)
それが最後の思考となった。
「笑い声で場所を特定できたのは、あなただけじゃなかったんですよ」
健太郎の手から奪い取ったガバメントを構え、里村茜は言い捨てた。
ナイフについた血を、鞄の中にあったタオルで拭き取る。
(手榴弾に、この銃、ナイフ……これでかなり有利になった)
二つの死体から武器と水を奪い、茜は早々にその場所を去っていった。

九十五番　宮田健太郎　死亡
【残り90人】

020　黒の交差

静かな森を行く影が一つ。黒を基調とした、どこと無く変な服装の男。いや……少年といったほうがふさわしいだろう。
(やれやれ、高槻もつまらないことをしてくれたな)
少年（四十八番）は心の中で一人ごちる。森を突き抜けて移動している。足取りはいささかも重くない。彼の様子は至って平静で、いつもどおりだった。

支給されたものには手をつけず、袋ごと肩に背負っている。まるで、どこかにピクニックにでも行くかのように……。

がさり。

物音がした。敵かもしれない。

いや、この状態では味方を探すほうが難しい。それなのに、少しも警戒しない。確信でもあるような、余裕で満ちた笑顔。

「僕はまだ死なない」

その言葉に反応したかのごとく、人影が木々の隙間から現れる。長身に銀髪を備えた男――

三十三番、国崎往人。

少年はその男を見据えていた。

往人の表情に変化は無い。

「ほら、死ななかった」

笑顔で言う少年。既に歩みはとまっており、二人は対峙する格好になっていた。

「どうして、そう思う」

往人は問う。少年のセリフを裏打ちする、不気味な確信のようなものをいぶかしんで。

「俺がいまから殺そうとするとは思わないのか？」

「思わないね」

「みんなとりあえず生きる目的で殺すんだけどね。そのうち見失うよ、その目的を」

「……そんな話を」

往人が口を開く。

「そんな話を俺にしてどうなる、殺さなければ殺される。なら殺すしかないだろう？」

「じゃあ君はなぜ僕を殺さなかったの？」

笑顔でたずねる少年。

「……」

沈黙する往人。

「ほら、そういうものさ」

予想していた通りの反応。少年は当たり前だと言わんばかりにそう言った。

「君はほかの人とは違う。むしろ僕よりなんじゃな

いかな？」
「意味が……分からないな」
「じゃあ聞き流してもいいよ、でもここで僕と会ったことを、単なる偶然と思ってもらいたくないな。殺しあうために殺しあうようになったらもう取り返しがつかなくなるよ」
「お前は違うとでも言うのか？」
往人は静かに問い掛ける。
「この狂った環境で、そんな理想を貫けると思っているのか？」
「思ってないよ」
あっさりとした回答。だが不思議と軽薄な印象を受けない。
「殺すことも否定しない、でもそれをやるべき相手は既に決まっているんだ、君もそうだろ？」
「……」
往人は答えない。変わりに懐から何かを取り出す。薄く黒光りする、見た目に重量がありそうな物体。
デザート・イーグル。
「目的はある……。そして、それをなすために躊躇するつもりも無い」
スチャッと音を立てて往人はそれを構える。目標は――少年に向かってか。
ドギュウウウン!!
銃声が一発。
そしてそのあとにがさりという物音。
何かが茂みに倒れる。
銃弾を受けたのは……少年ではない。
六十七番名倉友里だった。
一撃で眉間を貫通されている。即死だ。
「ほら、まだ死なないでしょ」
笑顔、崩すことの無い笑顔で彼は言った。往人は少年に近づき、そのまま通り過ぎてその後ろの友里の死骸を調べた。
そして、彼女の体につぶされていた何かを取り出す。それは、安全装置の外されていないピストルだ

った。
「彼女か、僕を追ってきたのかな」
死人に対する言、死体を目の前にしても彼の口調は変わらない。拾い上げたピストルを、往人は少年に投げ渡す。
「やるならやれ、大方支給された武器が下らんものだったんだろう」
少年は右手でピストルを受け取る。
「武器を装備している風には見えんからな」
「いいのかい？」
「お前の目的と俺の目的は交差しない。なら、お前の行動は俺の知るところではない」
「そう。なら遠慮なくもらっておくよ」
少年はピストルを懐にしまう。
「それと人を探しているんだ。もし敵として現れなかったら伝えて欲しいことがある」
少年は往人に向かっていった。往人は返事をしない、だが少年はかまわずに言い続ける。
「名前は天沢郁未。僕のことは……黒い変な格好をしたやつとでも説明してくれればいい。僕が高槻だけは始末するってさ」
「ゲームの管理人……それが目的か」
「うん、ちょっと私怨もあってね。君たちにとっても利益になることじゃないかな」
あはは、と少年は無邪気に笑った。
「下らん時間を過ごした、俺はもう行く」
往人は少年に背を向けた。
「悪かったね、引きとめた形になって」
既に歩き出していた往人に言った。
「そうだ、君の名前を教えてくれないかな？　せっかくあったことだし」
馴れ合う趣味は無い、往人はそう思っていた。しかし、なぜだか自分の口は勝手にその名前を発していた。
「国崎、国崎往人だ」
「僕のことは、黒い変な名無しとでも憶えてくれて

いればいいよ。じゃあまたどこかで会えるといいね」
住人は後ろを振り返ることをしなかった。しかしその言葉はしっかりと耳に刻まれていた。そして少年も、再び自分の進路へと向き直る。
何事も無かったような軽い足取り。少年が笑顔を崩すことは、とうとう無かった。

六十七番　名倉有里　死亡
【残り89人】

021　残酷 your way

「相沢君！」
住宅街の路地裏を走っていた相沢祐一（一番）は、聞き覚えのある声に足を止めた。
「香里……栞……」
振り向いた先には美坂香里（八十五番）、美坂栞（八十六番）姉妹が寄り添うように立っていた。
「祐一さん、会いたかったです」
涙声で栞が言う。
「二人とも無事だったみたいだな。よかった……」
祐一は先程既に刃物で刺された死体を見てきたところだった。
ひょっとしたら、自分の知り合いも既に殺されているかもしれない。
そんな気がしていたので、二人の姿を見られたことは喜ばしいことだった。
「相沢君、私達、どうなっちゃうのかしらね」
聞いたことがなかった。
この少女が、こんなに弱々しい声で喋るところなんか。
だが、こんな状況で、裏打ちもなしに元気づけることもまたできなかった。
無力な自分が悔しくて、
「そんなの、わからない……」

それでも、こんなことしか言えなかった。
「そうね。ごめんなさい」
「いや、俺の方こそ、悪い……」
沈黙が支配する。
口を開いたのは栞だった。
「祐一さん、一緒にいてくれますよね？　一人でも味方が多ければ、なんとか逃げ出すことも、出来ますよね？」
栞の頼みに、しかし祐一は、悲痛な顔しか見せなかった。
できるものなら、一緒にいてやりたい。
一緒にいるだけで、二人の気が楽になるなら。
だけど――
「すまない。それは、出来ない。探さないといけない人がいるんだ。探さないといけない人が。だから、一緒にいられない」
栞は何を言われたのかわからなかった。

きっと「あぁ、俺でよければ」なんて、いつもの調子で言ってくれると思っていた。
隣にいる香里も同じように思っていたのだろう。
「そんな……そんなこと言うひと……」
「嫌われてもいい。それでも、一緒に行けない」
「……どうしてですか、誰なんですか、その人って！　あゆさんですか⁉　名雪さんですか⁉　答えて下さい‼　答えて‼」
「……っ、栞、落ち着きなさい‼」
完全に取り乱していた栞を、なんとかなだめようとする香里。
だが栞は構いもせず、泣きわめくだけだった。
「……昔の知り合いがいたんだ。もう会うこともないと思ってたのに、こんな所で。今度こそ最後になるから。言っておきたいことがあるから」
そうだ、その人に会うためなら、例え誰を哀しませても、止まるわけにはいかない。
いとこの少女も。

身元不明で記憶喪失の少女も。
夜の学校で会った不思議な先輩も。
日溜まりの街で会った子供っぽい女の子も。
哀しませることになっても、止まれなかった。
「そんな……嫌、祐一さんっ！　どうして……どうしてっ!!」
「栞っ！」
パンッ！
香里は栞の頬を叩いた。
今までそんなことをしたのは、一度もなかった。
手も、心も、痛かった。
栞はしばし呆然として、
「う……うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
香里の胸に飛びつき、泣きじゃくった。
香里は優しく抱きとめ、そして、まだ突っ立っていた祐一に言った。
「ごめんなさい。辛い思いをさせて……行っていいよ、もう……」

あの少女に会うためなら、どんなことにも耐える。
決意はあったが、実際は、想像よりも辛かった。
目の前の光景に、心が押しつぶされそうだった。
「……ごめん」
早く離れたかった。
それだけ言い、走る。
栞の泣き声と、「……バカ」と呟いた香里の声が、いつまでも耳から離れなかった。
祐一がその少女に出会ったのは、中学校の入学式。
その日は朝から雨が降っていた。
そして、雨の空き地に、少女はいた。
学校で少女が同じクラスであることを知った。
朝の光景も頭にあったので、思わず声をかけていた。
(君、朝、あの空き地で、何をしてたんだ？)
(…………)

（こんな雨の中で、ラジオ体操でもしてたわけじゃないだろ）
（ラジオ体操です）
それが出会いだった。
あゆとの記憶をなくした祐一の、初恋だった。

その後、祐一と少女はある程度は話すようになった。
だが一年後、祐一は親の転勤で遠くへ引っ越すこととなった。
臆病なまま、少女に気持ちを伝えられず。
だから、祐一は走る。
今度こそ、伝えたいから。
手持ちの武器は、見た目は昔遊んだエアーウォーターガン。
だが中に入っているのは水じゃない、濃硫酸だ。
化学反応を起こさないよう、材質も特殊なものを使用しているらしい。
替えのボトルは大量にある。
どこまでこの武器で乗り切れるかわからないが、とにかく、会わなければいけなかった。

茜……どこにいるんだ。

022　（無題）

「浩之ちゃん……たすけ……てっ」
少女の悲痛な叫びが森の中に響く。その少女を組み敷いた少年が、何かうわごとのようにしゃべりながら、少女の体をまさぐっている。
「ひろゆき？　ひろゆきならいないよ、こないよ。ひろゆきはすごいよねもう人殺ししてたよ、無抵抗な女の子を殺してたよぅ」
「いやっ！」

「ぼくみちゃったんだ殺してるのを。だからさぼくもすきにやっていいよね」
「……や、いやぁ……」
まさぐる手をはねのけようともがいても、どうしても少女の力ではとめられない。すでに上着ははだけ、下着に手を掛けられるところだった。
ブチッ！
「やだっ」
まだ未熟な少女の胸を力まかせにもみしだきながら、さらに少年は言う。
「かっこよかったよひろゆき女の子を一発で仕留めて……ねえぼくもああなるのかなあんなふうに殺されるのかな」
……そんな。ひろゆきちゃんがそんな事をするはず……ない。
「知ってるだろひろゆきってどんなやつなのか。こっていうときには他人にできないことでも平気でやれちゃうんだ、すごいよねやっぱりひろゆきは」
すでに少女には抵抗する体力も尽きかけていた。半ばなすがままにされながら、思考の闇に落ちていく。
どうしてこんなことになったんだろう。
どうして浩之ちゃんは助けに来てくれないんだろう……
待っていたのに。出発地点から程近いこの森で。
でも、出会ったのは雅史ちゃんだけで、その雅史ちゃんは……
少年は少女の下半身を持ち上げ、自分のモノを彼女にあてがう。
「好きだよあかりちゃんだからいいよね、もう準備はいいよね」
ぐっ！
下半身に走る激痛。
「やだぁぁぁぁっつ！」
ゆらゆらと、ゆらゆらと少女の体が揺すられる。
よだれを垂らしながら、憑かれたかのように少年は

少女を凌辱する。痛みのために時折意識が飛ぶ。しかしまた痛みのために現実に引き戻される。
……いやだ、いやだよ……誰かたすけて……
おねがいっ……
「助けてぇ！」
「そこまでにしなさい！」
そんな声が聞こえた。
次の瞬間
ビシャッツ！
生暖かい液体が少女の体に飛び散る。
微かに開いた瞼の向こう。
その光景が信じられなくて。
「いやぁぁぁぁっつ！」
少女の意識は深い闇の中へと墜ちていった。
片腕を失った少年が「ゆらり」と立ち上がる。
「じゃまをするなよいいところなのに」
……こいつ、狂ってる。
巳間晴香（九十二番）は、彼女の支給武器である日本刀を構えながら、異様な目をした少年と対峙する。
痛みを感じないの？　もしかしたら薬でも使ってるのかもしれない。となれば、説得は無意味……ね。
構えを解き、薄く目を閉じる。自分の中に植え付けられたもう一つの存在を呼び覚ます。ふわり、と彼女の青みがかった長い髪が広がる。体にみなぎる力。痛みと共に、もう一人の自分が覚醒して……そして……
「っつ！」
激しい痛みが全身を駆け抜け、力の収束が途切れる。
「何……今のは」
「どうしたのさ何をしようっていうのさ邪魔しやがって！」
まるで体術の達人のような素早い動作で少年が飛びかかってくる。突然の攻撃だが、晴香はそれと同等の動きでそれをかわす。

「この程度の力しか出せないなんて！」
　彼女の力、『不可視の力』は、手をかけずとも容易に人を殺せるだけの能力。だが、いまはその力の数％も出せてはいない。
　……まるで、リミッターでも掛かっているみたいだわ。
　それでも、鍛え抜かれた者でなければ不可能な動きで、少年のするどい手刀をかわす。片腕を失っているにも関わらず、躊躇ない攻撃を見せる少年、攻防は長引くかに思えた。
「神岸さん！　どないしたんやっ、しっかりしぃ！」
　その声に、少年が先ほどの少女の方に視線を泳がす。
「ぼくのあかりちゃんにさわるなよぉ！」
　晴香との闘いを放り出し、声のした方へと駆け出す少年。その先には、先ほどの少女と、それを抱き起こそうとしている眼鏡をかけた少女がいた。

「なんや、佐藤くん、どないしたんやあんたっ！」
　怯えた目をした少女。
「あかりちゃんを犯していいのはぼくだけなんださわるなようぅ」
　このままじゃ危ない。再度力を呼び起こし、己の武器を槍のように構える。強い痛みが走り、力が霧散する。
　……やっぱり、『力』はほとんど使えないか……
　しかし、構わずに振り抜く。
「いけぇぇぇぇっつ！」
　放り投げた刀が、真直ぐに彼の体を捕える。
「ぐあっつ！」
　正確に少年を捕えるはずのそれはわずかに逸れ、彼の頬を傷つけたに過ぎなかった。
「きさまよくもこんなめにあわせたな！」
　武器を手放した晴香に、憤怒の表情で歩み寄る少年。
　パパパパパパパン！

「佐藤君！　あんた、もうどっかに行きぃや！　やないと撃ちぬくでぇ！」
眼鏡の少女が、震えながら銃を構えていた。

023　誰も死にません

さて。未だ目を覚まさぬ長森瑞佳を背負い、折原浩平は七瀬と共に森の中を歩いていた。
流石に始まったばかりだ、まだまだ体力はある筈だし、たかが女一人背負うくらいの負担、大の男たる浩平にとって、大したものであったとは思えない。しかし不思議に息が乱れる、身体が重い。
「ここらへんで良いいんじゃない？」
そんな浩平を余所目に七瀬が指さした先には、ちろちろと音を立てて流れる川が見えた。浩平は頷くと、茂みの裏に長森を寝かせる。そして七瀬と顔を見合わせ小さく息を吐いた。
「取り敢えず長森が目覚めるまでここで休むか」
——たかが女一人を背負うくらいでこんなに消耗するわけがなかった。結局はこの雰囲気のせいなのだと思う。長森を捜し回るために体力を消費していたとはいえ、それがここまでに至るとは思わなかった。まだ戦いは始まったばかりだ。休める時に身体を休めておかなければ、生き残れる可能性は、ただでさえやばいのに、さらに低くなろう。
しかし——どうやって最後まで生き残るというのだろう。
浩平は草むらに腰を下ろしながら、ふとそう考える。最後の一人まで殺し合わなければならないのだとしたら、——自分は、目の前で暢気に休んでいる二人をも殺さなければいけないのだから。
——いや、何か方法があるはずだ。浩平は思い直す。その為に二人と行動する事に決めたのだから。二人だけじゃない、自分の友達全てを死なせるわけにはいかないし、そして自分以外の参加者だって皆生き残らなければならないのだ。自分達は殺しあう

ために生まれてきたのではないのだから。
殺しあう気なんてないんだ。噛みしめるように呟いた。きっと他の参加者だってそうに決まっている、——住井の言葉。耳元で友人の声が反芻される。

無意識で人を殺したんだ。

オレは、二人を護るために、人を殺してしまうかも知れない。
その時、浩平は自分の心の底で燻る熱を思う。
護るためにならば、殺す。やる気になっている奴がいて、自分の守るべき二人を、守るべき友達を殺そうとしている奴がいたならば、絶対二人を護ってやる。それが浩平のこの戦いに於ける最初の「意志」だったのだと思う。

「ところでさ、折原」
「何だ？」

自分の側方から声。ここは草むらで、物音と言ったら風が草を撫で付ける耳障りな声だけだ。だからその声は無闇矢鱈によく響く。声の主など膝を抱えて座る七瀬に決まっている。何事かと返事をすると、
「その、腰に挿さってるの、ってさ、その、何？」
と、恐る恐る、浩平の腰の辺りに指を指しながら問うのである。何かあったっけ、ああそうだ。
「ん、ああ、拳銃だがそれがどうしたっ」
と言うと、
「な、何でそんな物騒なもの持ってるのよっ！」
と、すごい剣幕で七瀬はツッコミを入れてきた。
「流石だな、七瀬。やはり本場のツッコミは違う」
「本場ってなによ、このばかっ!!」
七瀬は唇を尖らせながら喚く。本場は本場に決まっている。大阪だ。
「あたしは大阪人じゃないわよっ!!」
「って、お前、オレの心の声を読んだのかっ!?」
「あんたの顔みてりゃ大体分かるわよっ」

そいつはすごい。七瀬留美は読心術師だったのか。
ともかく。浩平は小さく伸びをすると拳銃を腰から引き抜く。七瀬にその真っ黒な銃身を見せると、
「オレは拳銃なんぞに詳しくないから名前とかはしらんけど、まあそれなりに立派な拳銃だ。まあ人は殺せるだろうな」
　七瀬は少し脅えたような目でそれを見る。そりゃそうだ、七瀬にとって、いや、誰に取ったって、人殺しの為だけに存在する道具を見ることなど、初めてのことなのだろうから。
「……というかオレさっきお前に見せなかったか？　だからお前オレに突っ込んだんじゃないのか？」
「そんな憶えないわよ、ばかっ。っていうか突っ込むって何の話よ？」
　憶えていないのか。つまり七瀬さんにとってはこう、突っ込みとは日常、日常なのか。
「ほら、お前の拳なら拳銃にだって勝てるって独り言言ってた時だよ」
　子供に教えるようにそう言うと、七瀬は「あー、あー、あの時」と、納得したように手を叩く。
「って、あれはそういう意味だったの！」
「知らずに突っ込んだのか、お前は」
　さすが本場である。日常的に突っ込みのある街出身め。知らんけど。
「で、これがオレの武器らしい。……まあ、七瀬の、その天下一武道会を制した拳には、とっつってもかなわないだろうがな」
「そうねえ、ってんなわけあるかどあほうっ！」
　同じネタに三度も突っ込んでくれた。しかもノリツッコミ。いやはやボケ甲斐がある漢だなあ。三村君よりすごいツッコミかも知れないと浩平は思う。いや、それは流石に言いすぎか。
「冗談だよ、半分は」
「半分……」
「……で、お前の支給品は何なんだ？」
　きょとん、とする。ああすっかり忘れてましたー

いっけねー、そんな顔である。全く七瀬さんらしいボケだ。
「まだ見てなかったのかよ。さすが七瀬だ、武器なしでも生き残れますよーだ、という自信で満ち満ちてるな」
　うーっ、といった感じの顔で浩平を睨みながら、七瀬は慌ててバックを引き寄せる。そして変わらず慌ただしい動作でそれを開けた。
「……なんだ、それ」
　銀色。金属。やけに重そうな質感。きっと銃弾だって防げるくらいの大きさである。我慢できるわけがなかった。浩平は呆然とした七瀬を見て、腹の底から爆笑してしまった。そうやって笑うことは、こういう状況ではあまり安全とはいえないのだけど。
「タライ……？」
　七瀬は眉を顰めた。肩をぷるぷるっと震わせて、「タライ」と、もう一度呟いた。
「わははは」
「わ、笑うな折原っ！」
「わははは」
「くっ……う」
「わはははははははははははははははははははははははははははははははははひいいいおかしいっ」
「や、やめて、折原っ……あたしが、あたしがっ、み、みじめになってくるのっ、お願い、やめてっ」
「わははは」
　七瀬が悔し涙を流している。それに気づいた浩平は、自分の腹もまた痙攣のし過ぎでイカレかかっているのに気づき、ようやく笑うのをやめた。酷い男だ。
「そ、そんなに笑わなくても……あ、あたし、あたしだって、こんな、……」

涙をぽろぽろと零(こぼ)しながら七瀬は呟く。もう悔しさだけで胸が焼けそうな感じである。
「わ、悪かった、悪かったってばわはははは」
いや、確かに笑い事じゃないのかもしれない、と浩平は腹を捩じらせて転げ回りながらそう思う。七瀬は、もし自分と出会うことが出来なかったら、このタライと共に命を削りあうことになっていたのかも知れないのだから。悔し涙の底にはきっと死への恐怖が渦巻いていたに決まっているのだ。ああ七瀬、笑って本当に悪かったわはははははははは。
しかしこれはあまりに笑える。笑えすぎて七瀬が可哀想だ。まったく、これで銃弾なんかを避けろとでもいうのか？　それとも、
ふと浩平は思いつく。呆然とした七瀬からタライを奪い取る、半泣きの七瀬は、目を腫らしたまま怪訝な顔をして、真剣な顔をした浩平の顔を覗き込む。
「七瀬っ」
「え？」
何があったか、という顔である。
七瀬といえども、こんなところにいては頭の回転が良くないのも然るべきだ。浩平はにこりと笑い、川に向けて指を指す。
「ほら、水場が近いだろ。ちょうど良かった」
「あ。……そっか」
慰めにもならないような気がしたが、七瀬はその言葉で少し落ち着いたようである。どんな支給品も可と不可がある。拳銃じゃ水は汲めないだろう。拳銃じゃ銃弾は防げないだろう。多分。
「長森を見ててくれ。ちょっと水汲んでくるわ」
と、タライを手に浩平は駆けだす。
綺麗な水だった。透き通った川面を見て浩平は笑う。
うん、多分飲めるだろう。身体を拭いたりも出来るだろうし、傷口を消毒したり、汚れた衣服を洗濯したり、他にも色々用途は考えられる。支給された

水だけで乗り切れるかは判らないから、こういう水場の位置を憶えておけば結構役立つだろう。ふと誘惑に駆られる。静かな流れの川に足をさらしてみた。
おお、気持ちいい冷たさだなあ。
そうやってしばらく足を浸して、満足した浩平は陸に上がる。
そして顔をじゃばじゃばと音を立てて洗って、そのままごくりと水を飲む。支給されたものよりずっと冷たく、美味しい水だった。しばらくこの辺で待機しとくのも良いかも知れないな。タライいっぱいに水を入れて、浩平が立ち上がった時、

ガァンッ！

川の真ん中辺り、流れがさほど強くないところで、水が激しい音を立てて撥ねた。水しぶきが浩平にかかる。
誰かが対岸にいるっ！
未確認の人物の登場と、その明らかな敵意とを一瞬で浩平は察知する。タライの水を投げ捨てる、軽くなったそれを持って顔を身体を隠す。攻撃が命中したら事だ、本能的に身体を低くし、砂利の転がる地面に身体を投げ出す。
砂が目に入る微かな痛み、皮膚が大地に擦る鋭い痛み。けれど、そんなの知ったことではない。我慢して草むらの中に身体を放り投げる。茂みの中、浩平は腰の銃を手に取ると、弾丸が来た方向に向けて引き金を引いた。
耳に、重、と残る反響の音。まともに耳が働かなくなるかも、そんな恐怖を一瞬感じたが、大丈夫だった。もう一度水が撥ねる音が確かに聞こえた。何だ、銃くらい使えるじゃないか。命中するかはともかく撃てることは撃てる。
しかし、浩平のその僅かな安心など何のその、ただその銃声に呼応するように、また水面が撥ねる。一度、二度、三度。撥ねた水が草むらまで届き飛沫

で頬が濡れる。まずい。襲撃者の姿は確認できないが近くにいる事くらい判る。だがまだ対岸にいる筈だ、敵が川を渡る音は聞こえない。まだ時間は稼げる。

浩平は拳銃とタライを片手に駆け出す、二人のところに戻らなければ。転がるように浩平は走る。

「どうしたの、折原っ」

殆ど倒れるように浩平が駆け込んできたので、七瀬は怪訝な顔をして問う。

「七瀬っ、長森はまだ起きないか!?」

「う、うん。ね、ねえどしたの?」

「誰か知らないけど攻撃してくれる人が来たんだ。ここは危ないから逃げなくちゃいけないんだが……しゃあねえ、無理やりにでも起こさないと」

浩平は眠っている長森に近付くと耳をつかみ大声で、起きろっ！　と叫ぶ。だが、いっこうに目覚める気配がない。なんだこいつは、寝起きの悪さは俺並なのじゃないか。

ならば……

むにゅり。むにゅり。

「うわぁ！　……、……浩、平？　七瀬さん？　え、え、えと、ここは……」

一瞬で目を覚ました。ううむ、なかなか敏感な乳である。流石女の子である、自分なら乳首舐められたくらいでは死んでも起きないね。

しかし。女の子の乳を揉むと言うのは男が思う以上に酷いことらしい。

右から「な、何おっぱい揉んでるのよ、ばかっ！」という七瀬の怒りの声を聞き、左から「おっぱい揉んだの、浩平っ」長森は泣きそうな声を出す。

というか、乳揉むだけで目覚めるならもっと早く揉んでおけば良かった。そしたらオレだってそんなに疲れることはなかったのだ。

「今はそれどころじゃないっ！　敵が来た、逃げるぞっ！」

ガァン！　と、もう一度水が撥ねる音が聞こえる。七瀬も長森も確かにそれを聞いたのだろう、瞬間的に青ざめる。
「浩平、」「折原っ、」
襲撃者はこちらからの反応がないことに疑問を抱いたのだろう、とうとう川を渡ってくるようだ。じゃぶじゃぶという音を立ててこちらに近づいてくる。
不安げな二人に叱咤するように、浩平は無理に笑顔を作って二人に言う。
「大丈夫だ！　とにかく逃げるぞ！　早く、荷物持って、走るぞ！」

ざぶざぶと川を抜けてやってきた長身の美丈夫、月島拓也（五十九番）は、仕留め損なったかとばかりに右手に構えた巨大拳銃——44マグナムを見ながら、「まあ、どうにでもなるだろうな」と、薄く笑う。
その目には諦めのような、敗北者のような、そんな色が確かにあった。
瑠璃子……るりこるりこるりこ。るりこ。るりこ
ああ、逢いたい。お前と一緒に帰るためなら全部こわしてやるこわしてやるこわしてやる。

024　奇妙なコンビ

長瀬祐介（六十四番）は身を隠すように森の中の茂みに座りこんでいた。彼は何事か一心に念じている様子だったが、やがて深いため息を吐きながらゆっくりと目を開ける。
「……だめだ。やっぱり出来ない」
彼が持つ、普通の人間が持ち得ない能力。
——毒電波を操る能力。
その能力を行使することが現在、全く出来なくなっているのだ。
「この島、電波を妨害する何らかの力が働いてるのかな」

事実あのホールで説明を受けているときも、高槻とかいうあの男を『壊して』やろうと悪意ある電波を送りつづけたのだが、まるで手応えが無かった。
「殺し合い……か」
殺し合いをして、最後に勝ち残った者だけが生きて帰れる。それは、自分が妄想の世界で生み出した『全てを破壊し尽くす爆弾』と酷く似ている気がした。自分の意思で好きなように殺戮と破戒を繰り返すあの妄想の爆弾と。
「つまりは、狂ってるってわけだ……アイツも、昔の僕も」
普通であると思っていた自分。その自分がかつて持っていた、そして今も心の奥底に眠っているであろう歪んだ一面を、こんな島に来て再認識させられてしまう。祐介は苦笑いを浮かべて——瞬間、その自虐的な笑みが強張る。
物音が、聞こえた。
明らかに普段聞くことの無い異常な物音に、祐介は思考を一時中断させて素早く身を伏せる。身を隠しながら『こっちへ来ないように』と電波を飛ばすが、やはり効果は無い。一定のリズムを刻みながらそれは近づいてくるそれに、祐介は息を殺して気づかれないように願った。
「ぴこ♪」
果たして物陰から現れたのは、ぴこぴこと奇妙な物音を立てながら呑気に移動している白い毛糸玉のような物体だった。
「……な……？」
「ぴこ？」
思わずうめいた祐介に気付いたのか、毛糸玉はこちらを向いたままぴこぴこと尻尾（らしきもの）を振った。どうやら喜んでいるらしい。
「犬……なのかな？」
「ぴこ！」
元気よく、毛糸玉が吠えた。どうやら肯定の意味らしい。祐介はその毛糸玉が何なのか考えようとし

――思い出した。ホールの中にいた女の子の中に、この白い毛糸玉を持ってた娘がいたような気がする。ぬいぐるみかと思い、さして気にはしていなかったのだが。
「ふぅ……全く、世の中には奇妙な生き物もいるもんだなぁ」
　とりあえず、危険は無さそうだと判断して祐介は警戒を緩めた。毛糸玉の元へ歩み寄って、話しかけてみる。
「君、飼い主とはぐれたの？」
「ぴこ」
「その娘の匂いを、今辿ってるとか？」
「ぴこ！」
　会話が成立してしまうところに若干恐怖を覚えながらも、祐介は毛糸玉との問答を続ける。
「その娘は近くにいるの？」
「……ぴこぴこ～」
　近くにはいない、という意味らしい。尻尾を伏せてしょんぼりしてる毛糸玉を見ながら、ふと祐介は思い付く。
　犬の鼻は瑠璃子さんたちを見付けるのに役に立たないだろうか？
　まずはこの毛糸玉の飼い主を見つけて、その人と一緒にみんなを探す。うん、悪くない考えだ。祐介はそのアイデアを、毛糸玉に提案してみる。
「ねぇ。よかったら、僕と一緒に行かないかい？一緒に君の飼い主を探そうよ」
　毛糸玉はしばし沈黙したが、顔を上げると、
「ぴこ！」
　とつぶらな瞳を潤ませOKしてくれた。その吸い込まれそうな瞳に祐介はひるむ。
「……よ、よし。じゃあ、早速出発しよう」
「ぴこ」
　祐介は支給されたデイパックを背負い直す。運が良い。これなら早くみんなと合流できそうだ。
「ところで、名前はなんて言うの？」

「ぴこ」
「ぴこ、か。僕は祐介。宜しくね、ぴこ」
「ぴこ～」
毛糸玉――ポテトは違うと首を振ったが、もちろん祐介にわかるはずもなかった。

025　刹那

「美凪ぃ、国崎往人も、どこにいるんだろ」
ゲーム開始からずっとこの調子である。
彼女には頼れる人間がこの二人しかいないのだ。
そしてその二人は、今、隣にいない。
自分はひとりぼっちだ。
寂しさで心がいっぱいだった。
だから――
「みちるっ！」

往人に声をかけられ、嬉しさのあまりに、

ガスッ！

往人のみぞおちに頭突きをたたきこんでいた。
「――っ!!」
「にゃはは」
ボコッ！
「ぬにょめりゃ」
「まったくお前は……心配かけやがって」
頭をかきながら言った。
「へへへ。心配してくれたんだ」
「……一応な」
「ん、ありがと」
今度はゆっくりと、往人にしがみつく。
その顔は往人から見えなかったが、小さな肩が震えていた。
何も言わずにその頭を撫でてやる。

次の瞬間――

「……っ！」
しがみついていたみちると共に、その場を飛び退く。
一瞬遅れて二人のいた空間を、包丁を構えた少女が切り裂いていた。
「にょわわっ！」
「みちるっ、目と耳を閉じてろ！　絶対に目を開くな！」
「にょえ⁉」
「大丈夫だから、早くしろ」
――大丈夫。国崎往人が守ってくれる。
みちるは素直に目を閉じ、耳を塞いだ。
往人はそれを確認した後デザートイーグルを取り出し。
人影に向けて発砲した。
それで充分だった。
弾丸は相手のこめかみをうちぬき、少女――砧夕霧（三十番）は即死した。

「もういいぞ」
「うに……」
その場を急いで離れ、みちるはようやく目を開いた。
そして問いかける。
「ねぇ、国崎往人？」
「なんだ」
「その……殺しちゃったの？」
「……俺は、お人好しの兄ちゃんじゃないんだぞ」
「うん、わかってるよ……」
そう言ってやった。
できればこの少女の口からは「死ぬ」「殺す」なんて言葉、聞きたくはなかったのに。
黒い少年の言葉が響く――殺しあうために――
だが、自分は違う。
この小さな少女を守るため、そして、どこにいる

かわからない深い母性をたたえた瞳を持つ少女を守るため。
　とりあえずはその為に、殺す。
「大丈夫だ。行くぞ、美凪を探しにいかないと」
「うん……」
　みちるの顔は、まだ、晴れなかった。
「そういえば、みちる。お前の支給武器って何なんだ？」
「あ、まだ見てない」
「ちょっと見せてみろ」
「うに」
　鞄を往人に手渡す。
　往人はそれを開け、
「どわっ!!」
　思わず鞄を取り落とした。
「……マジか？」
　中から、一匹の小さな白い蛇が這い出てきた。
「にょわーっ、蛇だーっ。この程度で驚くなんて、国崎往人もまだまだだねー」
　ボコッ！
「にょべりゅ」
「突然でてきたら驚くだろうが！」
「うぅー、やったなー！」
　ガスッ！
「ぐわっ」
　みちるキックが炸裂する。
　うずくまる往人をよそに、みちるは蛇に話し掛けた。
「ねぇねぇ、一緒に行く？——そう、一緒に来るんだ。にゃはは、いいよいいよ。みちるの頭の上に乗っていいよ」

しゅるしゅるしゅる。
「にゃははっ！」
「……マジか」
蛇と意思疎通をするみちるを見て、改めて「こいつは一体？」という思いが込み上げる。
でも、まぁ、何にしろ。
（笑ってくれて、よかった）
そんなことを思い、次の瞬間には自分の考えに照れていた。

三十番　砧夕霧　死亡
【残り88人】

026　交叉

七瀬彰（六十八番）は暗闇の中で目を覚ました。
同時に太股に走る感覚。半端じゃなかった、銃と言うのはかくも恐ろしい力を秘めているものか。目が覚めなければいっそ良かった、不謹慎にも一瞬そう思う。
「痛ぅ……」
しかし本音はやはり安堵。無事目覚めることが出来て本当に良かった。ああ奇跡だ、死んでなかった。そりゃそうさ、足撃たれたくらいで人は死ぬもんじゃないと思う。それに、弾丸自体がそれほど大きくなく、当たった弾の数も多くはなかったから、死ぬほど痛い、という程度で済んだのかも知れない。
しかし、ただの「死ぬほど痛い」は、「死に至る痛い」に繋がることが往々にしてある。未だに流れ続けている血を止めなくば、痛みは死に変わる。失血死の恐れがあるのだ。
ふと気づく。武器がない。武器は何処だ自分の武器は何処だ。ああそうだ、さっきあの女の子に投げつけたんだった。どうせ僕の武器はフォークだけどそれでも今はあれが必要だ。苦痛の息を吐きつつも、彰はなんとか立ち上がる。

ここはさっき女の子が襲いかかってきた場所から そう遠くには離れていない筈だ。足を引きずりながら闇の中を行く。痛い。死ぬほど痛い。ああ、赤が転々と僕の進んできた路に道標のように。ああ、誰かがこの流れ出ている血を見たら後をつけるに決まってる。早く止めないとマジで死ぬ。殺されるし死ぬ。

——あった、僕のフォークだ！　闇の中で銀色を輝かせるそれを見つけて、一瞬だけ、ほんの一瞬だけ痛みを忘れ、彰はその金属の三叉に飛びつく。

こんなものを、わっざわざ戦闘に使う目的で探しに来たのなら、彰は相当な馬鹿である。馬鹿と言うか駄目な人である。

「弾丸、抜かなくちゃ」

その為にわざわざ血を流して歩いてきたのである。三つ又の先を突き刺すのは無謀なので、柄の部分で摘出を試みる。苦痛とともにある時間は少しだけなのだ。恐ろしいことに、何にも恐れることなく彰は自身の足にその異物を突っ込んだ。

——九発。身体にめり込んだ小さな弾丸をすべて抜き終えて、彰は息を吐いた。こんな気が狂いそうな島の中でなければ、自分の身体の中に、雑菌に汚れているかもしれない金属を突っ込む気にはなれなかっただろう。下着の裾を破り、血が流れている場所をきつく結ぶ。途端に白い生地は赤く染まっていく。気が狂いそうな痛みである、だが取り敢えず一番危険な因子は体内から取り除いたのだ。消毒もしなくちゃいけないな、薬も欲しいな。

——そんな事を考えている内に。

沈黙と暗闇しか自分の周りにはないことに気付く。自分以外に九十九人の人間がいる、いる筈なのに、今ここには誰もいない。

恐怖が襲いかかってきた。

それは、誰かが襲いかかってくる恐怖だとかでは

なくて、むしろ、誰もいない恐怖だったのかも知れない。冬弥、美咲さん、はるか、由綺。友人達もこの島に集められている、きっと自分と同じように震えているに決まっていた。美咲さんを守らなければいけないのだ。なのに今自分にあるのは恐怖の声だ。誰かに会いたいのに誰にも会いたくない、そんなジレンマが彰の心を貘（ばく）のように食い荒らす。
「――僕、死ぬんだろうな」
　こんなフォークで、どうやって生き残れっていうんだ。好きな人だって守れない守れるわけがない。この武器で僕は美咲さんに襲い掛かる銃弾を弾き返せっていうのか？　それとも身を呈して彼女の盾に？　馬鹿げてる、馬鹿げてる、馬鹿げてる。
　死ぬんだ。……怖い、怖い、怖い。
　その彰の恐怖に連動するように、
がさり、と震える音がした。
「だ……誰だっ」
　恐怖に塗りつぶされていた彰の思考を更に揺さぶる地震が訪れる。風が揺らした音でも、小動物が駆け抜けた音でもない。数メートルの距離があるのに、その心臓の音まで聞こえるような、そんな錯覚を覚える。人がいる、人がいる、人がいる。フォークを構える（フォークだって？　それで人が殺せるのか？　自分の喉を突いて自殺するのが精一杯だろ？）、彰は茂みの中に震えた声を投げた（誰だ？誰だって関係ない、そいつはお前を殺そうと、お前がぽつぽつ流した血の跡を辿ってきた狩人だよ）。
　他者。知り合いであるわけがない、知り合いであるなら隠れている意味がないから。
「出て来い……っ」
　自分に叱咤を掛けるように、相手に恐怖を悟られてはいけない、精一杯の虚勢を張りながら。一歩、歩みを進める。草むらの奥にいる筈の、自分の命を狙っているに決まっている狩人の姿を、彰は覗き込んだ。

「あ、あのっ」
　そこにいたのは。
　亜麻色の、長い、癖のある髪。細い肩、低い背、小さな顔。ひどく小柄な、おそらく小学生高学年くらいかと思われる、可愛らしい少女だった。
「ご、ごめんなさい、殺さないでくださいっ！」
　その少女は、大きなハリセン（そう、ツッコミ用のハリセンだ）を持ったまま腰を抜かしている。何も見ない、何も聞かない、とばかりに顔を伏せ、耳を塞いで震えている。
　彰はふとこうやってがたがた震えている少女の姿が、何かに重なっているように見えた。決まっていた、先ほどまでの自分の姿だ。先程までの自分も、この小学生と似たような感じだったのだろうか。
　そう思うと、何だか無性に笑い出したくなる気分だった。卑怯と罵るなら罵るがいい、七瀬彰は自分より明らかに弱そうな少女を見て、ようやく冷静さを取り戻したのである。

「大丈夫、僕だってやる気はないよ……」
　努めて明るい声で、無理にでも、笑顔を作って。
彰はにこりとして少女に語りかける。
「え？」
　少女は、震えたまま、怯えた表情を消さぬまま、こちらをちらりと見た。小動物のように大きな、ただの子供の瞳だった。
「え、あの」
　戸惑いを隠せない少女の為にどうすべきか、一瞬逡巡した挙句、
「ほら、僕だってこんな武器だから」
　フォークを見せる。
　少女は、明らかに安堵の表情を見せた。
　フォークだもんな。
「へえ、初音ちゃんはお姉さん達を捜してるんだ」
「うん」
　少女――柏木初音（二十一番）は、先程とはうっ

てかわって明るい表情になって、元気に頷く。笑うとやばいくらいに可愛かった。茂みの裏で二人は並んで座り、彰が初音の声に耳を傾ける形になっている。安堵したのだろう、僅かに頬が上気しているようだった。

闇の遠くで風の音が聞こえる。けれどそこに沈黙はなかった。彰は然程闇を怖いと思わなくなった。

「お姉ちゃんが三人いて、あと、耕一お兄ちゃんっていう人を捜してるの」

話を聞いていて彰は呆れを覚える。——まったく。なんでこんな幼い小学生までが殺し合いをしなければならないのか。彰は胸の底でふつふつと熱を持って暴れ出す何かを思いながら、僅かに顔を顰める。

「でも、みんなばらばらになっちゃったから……」

七瀬のお兄ちゃんの声を聞いた時は、もう、駄目かと思ったんだよ。初音は、そう言って微笑んだ。僅かなりとも、相手に対して安堵を覚えていなければ見せることが出来ない顔だったと思う。

まあ彰は人を殴ることも出来なさそうな顔をしているし、そのせいであったのだろうとは思う。

「よし、決めたっ」

彰は出来るだけ大きな声で、そう言った。それは勿論、明るさを振舞いながらも震えている筈の初音の心を、僅かなりにも暖めるための声だった。

「え？」

呆、と初音は彰の顔を見る。

「君の捜している人を、一緒に捜してあげる」

多分そう言ったとき、彰は、少しだけ勇気のかけらを持ったのだと思う。自分よりずっと脆弱な少女に彰は恐怖を僅かなりとも拭って貰った。そして彰の底に、このか弱い少女を守らなければならないという、そんな勇気をも与えたのだ。

それは彰が持つ一番の武器だったのかも知れない。フォークよりは余程強い。きっとハリセンよりも。

027　なにがなんだか

柏木梓（十七番）は頭を抱えていた。
いきなり島に連れてこられ、耕一やほかの三姉妹とは別のトラックに乗せられ、そうこうしているうちに自分の出発順になり、わけのわからぬままバッグを渡されて出発した。おまけに姉の言うことにゃ鬼の力は使えないらしい。
この時点で梓の頭は混乱状態だった。どうすればいいんだ。
だがさらにそれに追い討ちをかけたのはバッグの中から出てきた支給品。

某ファミレスの制服

しかも三着

制服にはそれぞれ『メイドタイプ』『アイドルタイプ』『スクールタイプ』と書かれた札がついていた。もう完全に訳がわからない。
ほかに何か入ってないかとバッグの中を調べると一枚の紙が出てきた。それにはこう書かれていた。

『防弾チョッキ（某ファミレス仕様）』

頭が痛かった。
そんな混乱状態の中、気づいたらなぜかメイド服を着ていた。

028　（無題）

「……」
「……」
運命の悪戯――
そんな言葉で片づけてもいいかもしれない。

河島はるか（二十六番）
遠野美凪（六十二番）

「……こんにちは」
「……どうも」
お互いに、何気ない挨拶を交わす。
「えと……殺し合いしなきゃダメかな」
「それは残念です……」
「じゃ、やめよっか」
「それがいいと思います」
あっさり合意し、二人はまた沈黙した。
「……」
「……あの、一緒に行く人、いる？」
「……いえ……残念ながら……」
「じゃ、行こっか」
「そうしましょう」
「良かったね」
「ぱちぱちぱちぱち……」

並んで歩くはるか、美凪それぞれのデイパックからは、明らかに業物と見て取れるうりふたつの刀が、その豪奢な柄頭を覗かせていた。

029 （無題）

「巳間晴香。晴香でいいわ」
「私は保科智子、智子でええよ。そしてこの娘は……」
そう言って、彼女は膝の上にのせた少女の頭をなでながらつぶやく。
「神岸……あかり」
私たちはあの後、森の中で見つけた洞窟に避難した。あの少年は、すぐに姿を消した。深手のはずだが、また再び私達を襲う可能性もある。なによりも意識を失ったままの少女……あかりを放ってはおけない。智子と二人で肩を抱え、ここまで運んできた。
「かわいそうになぁ……神岸さん、こんな目に遭お

て」
「……」
私達がどんなに哀れんでみても、それは同情でしかない。自らの過去を振り返りながら、思う。辛かったあの日々を。そして、その思い出を汚す根源たる、忌むべき名を。
「高槻……」
「え、なんて？」
「このゲームの管理者。そして、私の目的……あいつを殺すことが」
そう、あいつだ。あいつさえいなければ、あかりもこんな目に……私も、あんな目には遭わなかっただろうに。
「怖いことを考えるんやね」
「殺さなければ、生き残れないわ。違う？」
「……じゃあ、私達も殺すん？」
「いや……私が殺したいのは高槻だけ。他に殺したくはないわ。それじゃあ、あいつの手の上で踊っているようなものだから」
「どちらにしろ物騒やね。でも、それだけでいいん？」
何が？　……智子の質問がわからなかった。
「私達、このゲームの参加者の中には、来須川財閥の令嬢達もおるんよ。つまり、それと同等もしくはそれ以上の組織が裏で動いとる。人一人殺せば済むもんと違うし、第一、その高槻言うんかて相当な人数に守られとるんとちがうん？」
「……」
郁未がいれば、心強いのだけど。出発地点には、彼女はいなかった。それと良祐。でも、高槻を追っていれば、いつかは出会えるだろう。そんな気がする。
「私には別に目的はない。ただみんなで生きて帰りたいだけや。せやから、いいよ」
智子が私を見つめる。眼鏡の向こうにある、意志を持った目で。

「仲間がいるやろ、あいつら倒すんには。私はアンタについて行く。そしてもっと仲間を増やそ。大勢おれば、あいつらに立ち向かえるかもしれん」
……正直、ありがたかった。孤独な戦いを強いられることを覚悟していたから。
「ありがとう」素直に、言うことができた。
「ただ……」そう言って、あかりを見つめる智子。
「この娘には、会わせてやりたい奴がおるんよ。そいつにこの娘を預けんと、安心できへん」
「その人は、信用できるの？」
「私の知ってる中では、一番信用できるし、頼りになる奴や。お調子者やけどな。私達にも協力してくれると思う……なにより、この子にはあいつが必要やから」
「そう……その人の名前は」
「藤田浩之、この子の幼馴染や」
……浩之ちゃん、どうして。

闇の中から、銃を握った浩之が近づいてくる。皮肉そうな笑みを浮かべながら。銃口は、確実にあかりの身体を狙っている。
やだ、いやだよ。なんで、どうして。
カチリ、と撃鉄に指をかける。
「じゃあな、あかり」
パン！
音と共に、意識がはじけ飛ぶ。
「いやぁぁぁぁぁっ！」
双眸に光があふれる。
そして、熱い、涙。
頭が真っ白になる。
そして、今見た光景は意識から消えていく。
かわりに、自分の身に起きたこと……思い出したくない、イヤなことが意識に流れ込んできた。もう、声も出なかった。ただ、涙があふれた。止まらなかった。

「神岸さん……」
　聞き覚えのある声が、側から聞こえた。そして、別のほうから差し出された腕に、私は頭を抱きかかえられた。暖かかった。誰だかわからないその人は、なぜだか、私の悲しみをわかってくれているように感じた。
「辛くても、全てを受け止めなさい。そして自分で整理して、心の奥にしまってしまうの」
「わたしも、そうだったから」
　そんな声が、心の中で響いた。

030　（無題）

「さて、これからどうしたものかしら」
　出発して海岸を歩いていた来栖川綾香（三十六番）はつぶやいた。
「姉さん、魔法が使えないって言ってたから私が守らなくちゃ」
　綾香は事前に姉と海岸で落ち合う事にしていた。魔法の使えない芹香は赤子同然である。芹香を守れるのは綾香だけだった。
「それにしても、妙に重いわね……私のバッグ」
　綾香はまだ開けていなかったバッグの中身を確認した。
「何これ……ミサイルかしら？」
『小型爆導索』と書かれた兵器が綾香のバッグに入っていた。グループ行動をしている相手なら一網打尽に出来る強力な兵器である。しかし兵器に関する知識などない綾香にとってそれは自滅しかねない武器でしかなかった。しかも、説明書らしきものは何処にも見当たらない。
「まいったわね、使い方もわからないのに、邪魔になるだけだわ」
　綾香は武器を置いて行く事に決めた。格闘技者らしい選択である。ミサイルの他には水と食料、そして照準用レーザーポインタだった。

「これは何かの役にたつかもしれないわね。持っていきましょう」
荷物整理が終わった所で姉、来栖川芹香（三十七番）がやってきた。
「来たわね、姉さん」
「……（魔法が使えないから、足手まといになっちゃうけど……）」
「なーに言ってるのよ。全然そんな事無いわ。それより姉さん、バッグはもう見た？」
「……（ふるふる）」
二人で、芹香のバッグの中身を調べた。
「どれどれ……消毒液に包帯、虫除けスプレー、ジッポ――何？　この箱」
開けてみると、注射器と粉が入った小袋が入っていた。
「これは不用意に使わないほうがいいわね」
綾香は箱を閉めるとバッグの底に詰めた。
「さあ、行きましょ、姉さん」
「……（こくり）」
二人は海岸線を歩み始めた。

031　（無題）

「なんだか面倒なことになってきやがったぜ……」
藪の暗がりの中で気だるそうに御堂（八十九番）が呟く。本来強化兵である御堂にとって、こんな企画は問題ではなかった。その気になれば、あの場にいる全員を相手にしても負けない自信もあった。
（といっても、蝉丸ら他の強化兵もいたので一筋縄ではいかなそうだが）
だが、ここに来てから何故か強化兵としての超感覚が上手く働かない。そう、あの最初の犠牲者――御影すばるとかいう女――が殺されるずっと前から。恐らくは他の強化兵にもそれは及んでいるのだろう。
（正義感の強い蝉丸あたりがあの場を黙って見過ごすはずがないからな……）

「正義感……反吐が出る言葉だぜ」
御堂は自分に支給されたバッグを忌々しそうに眺めた。本来、人間であった頃から銃の名手として名を馳せた御堂。いや、銃だけでない。御堂の生きていた大戦中に考えられたであろう武器のすべてに精通し、使いこなしてきたといっても過言ではない。
支給された武器が銃に越したことはない。しかし、たとえ鉛筆が武器であったとしても常人には負ける気はしなかった。
そう、強化兵としての力が使えなくてもだ。
御堂に支給された武器……いや、武器であろう物体は人懐っこそうにこちらを窺っては大きなあくびを繰り返していた。
「な〜ご〜」
猫の声。御堂は再び舌を鳴らした。
口のまわりや耳などは茶毛ではあるが、白い猫。
「俺ぁ黒い猫が好きなんだよ……」
おまけに支給されていた水や簡易食も既に食い散らかされていた。
「武器にもなりゃしねぇ……どこぞでは既にドンパチやらかしてるってのによ……情けねぇにもほどがあるぜ……」
割と遠くない位置で銃声が響いたのはまだ少し前のこと。少なくとも銃火器を手にした参加者がいるということだ。
「にゃあ」
「にゃあじゃねぇよ……殺すぞこのくそ猫」
御堂はこれからのことを考えていた。武器がなくとも白兵戦なら身一つでできる。倒した奴から武器を奪い取って戦う……
これが御堂のシナリオだった。
「このクソ猫はどうするか……」
いつの間にかそのクソ猫は御堂の頭の上へと移動していた。猫を連れては隠密行動もできない。百害あって一利無しだ。
「殺すか……」

御堂の目が殺気を放つ。普通、動物は相手の気に敏感なものだが、この猫は少したりとも動揺しなかった。それどころか頭の上で丸くなってうにゃぁとか鳴いてる始末だ。
「お前飼い猫か？　そんなことじゃどの道長生きはできねぇなぁ……いや、お前にも使い道はあるか」
「それこそ囮や偵察（偵察は無理だろ……）に活躍してもらうとするか。武器にされるぐらいだ、それなりの訓練はされてんだろ？」
　脅すような御堂の口調にも猫は間の抜けた声をあげるだけだった。
「ちっ、もう行動するぞ……自分の足で歩けよな」
「なぁ〜ご」
「……けっ好きにしやがれ！　コキ使ってやるからな……聞いてんのかおいっ!!」
　一人と一匹は緑の生い茂る林道の奥へと消えた。殺戮という名のゲームへと参加するために……。

032　天沢郁未包囲網

島の空に高槻の顔が映し出された。
「この時間までの死者を発表するぞ。

二番　　藍原瑞穂
八番　　岩切花枝
二十八番　川名みさき
三十番　　砧夕霧
三十九番　上月澪
五十二番　セリオ
五十五番　高瀬瑞希
六十三番　長岡志保
六十七番　名倉友里
七十五番　広瀬真希
九十五番　宮田健太郎

以上十一人だ」
「多分能力者の諸君は、気づいているだろうが、この島には能力者の能力を弱める結界を張らせてもらっている」
「付け加えてだが、俺を殺せば全て終わると思う奴らは何時でも俺を殺しに来ればいい。だが、俺を殺せば、ミサイルが発射されて島ごと木っ端微塵だがな。能力を制限している結界装置を壊しても同様だ……だが、そうだな。これから上げる五人を殺せば解除を考えてやってもいい。死にたくなければ、まずこの五人を殺すことだなハッハッハッ――」
　高らかな笑い声の後、五人の名前と写真が大空のモニターに映し出された。

三番　天沢郁未
二十二番　鹿沼葉子
九十二番　巳間晴香
九十三番　巳間良祐
六十六番　名倉由依

033　守ることと、殺すこと

放送が切れ、周囲に静けさが戻る。
その内容は、浩平、瑞佳、七瀬の三人に大きな衝撃を与えていた。
「……うそだろ、おい」
死んだ人間の中には、自分の知り合いが既に三人も入っている。
ゲーム開始から、多分まだ、そんなに時間はたっていない。
それなのに、三人。
誰だかわからぬ殺人者に強い怒りが沸き上がる。
先輩は目が見えないんだぞ？　なんで殺されなきゃいけないんだ。
澪だってあんな性格の女の子だ。他人に危害を加えたりするはずないじゃないか。

それなのに……それなのに……っ！
だが次に広瀬のことを思う。
あいつはあの性格だ、多分誰かとやりあったんだろう。
仕方ないかもしれない。
そして、誤解から住井をも殺そうとした、自分。
そうだ、これはデス・ゲームだ。
殺人者のやっていることは、ゲーム内では「正しい」。
結構じゃないか……だったら俺も……やってやる。
先輩や澪を殺した奴をぶっ殺し、障害になる奴全員、ぶっ殺してやる！
強く握った拳からは、爪が肌に食い込み、血が流れていた。
強く噛んだ唇も、歯が食い込んで、やはり血が流れる。
黒い思いに取り憑かれた浩平を、
「ダメだよ、浩平……」

そんな浩平を、瑞佳は後ろから、優しく抱き締めた。
「長森――」
「ダメだよ。確かに、誰かを――殺さないと」
自分の口から出た「殺す」という言葉の大きさに、瑞佳は一瞬言葉を切る。
気持ちをおちつかせ、続けた。
「殺さないといけないかもしれないけど。それでも、怒りにまかせてそんなことしちゃ、だめだよ。浩平には、そんな風になって欲しくないよ。そんな浩平、嫌だよ……」
殺されたくなかった。
それ以上に、殺したくなかった。
どうして簡単に人を殺せるんだろう。
わたしを助けてくれた住井君は、人を殺したのに、笑っていた。
怖かった。

どうして、あんな風に笑えるのだろう。
それがわからなかった。
綺麗事だとわかっていても、人間らしくありたかった。
そんな浩平でいてほしかった。

冷たい空気の中で、浩平は瑞佳の暖かさを背中に感じていた。
瑞佳の思いが伝わってくる。黒い思いが、消え去っていく。
(そうだ。オレがそんなことでどうする。オレが殺すときは、誰かを守るためだ。どうしても殺さざる得ない時だけ、その時だけ、どこまでも冷徹になればいい。そうだ。笑って人を殺すような奴に、なっちゃいけない)
「悪い、ごめんな、長森？」
腕をほどき、振り向く。
「うんっ」
瑞佳は、泣いていた。

034 (無題)

(ちがう、放送は嘘を言っている)
リアン(百番)は放送を聞いてから考え込んでいた。制限はされているけど簡単な魔法なら使えると知った後まず彼女は結界の基盤を探した、魔力の乱れを感知して彼女が知った事は、

・結界はある社に施されているという事
・何か邪悪で大きな力によって結界に傷がついた事
・結界は複数の能力を封じているという事
・ミサイルのような機械的な設備によって結界を保護するようなものはないという事

だった。しかし彼女が知り得たのはそこまでだった、突然大きな意識の塊が彼女を襲ったのだ。無防

備な状態で精神に直接打撃を加えられた彼女は、大きなダメージを受けていた。
（なんだろう、大きいけどとても悲しい力。これが防御装置なの？）
（……翼のある女の子……神……無？）
結界を壊せば元通りに力が使えるようになるはずだ。けど、しばらくは動けそうにない。大好きな姉さんとここから脱出するために、今は少し眠ろう。
起きたらまずは結界に行ってみよう。
濁り行く意識の中でリアンは小さな声で姉の名を呼んだ。

035　決別

「……月……澪、五十二番セリオ、五十五番高瀬瑞希、六十三番長岡志保、六十七番名倉……」
その放送を聞いたとき、千堂和樹（五十三番）は目の前が真っ暗になるのを感じた。
（瑞希が……死んだ……）
一瞬にして全身の力が抜ける、自らの体重を支えきれなくなった足は折れ、地面に膝をつく。
（嘘だ……嘘だ……）
うわごとのように繰り返す。
「嘘だ……嘘だ……嘘だ……」
次第に声は大きくなる、
「嘘だ……嘘だ嘘だ嘘だ嘘だアァアァッ！」
絶叫が辺りにこだまする。
「どうしてだよ……なんでだよ……」
いつも一緒にいた存在、
助けようと思ってた仲間、
かけがえのない人、
世界で一番好きだった人、
自分の半身。
「みんな……みんなそろって助かろうと……誰一人欠けることなくまたあのこみパに戻ろうって……そう思ってたのに」

「なんでお前が逝っちまうんだよ！　瑞希ぃッ！」
最初に掲げたみんなで助かろうという決意、もうかなわない願い。
いなくなってはじめてわかる。
最初に無くしたものは、一番大切なもの。
一歩も前に進むことが出来ない。
もうどうでもよくなった。
すべてを投げ出したくなった。
すでに肉体は自らを支えることを放棄し、地面に突っ伏していた。
「みんながいても……瑞希がいないなら……」
そうつぶやくと、和樹はすべてを投げ出し意識を闇に閉した。
だが、その闇から開放されたのはすぐだった。
「こんなところでなにをしておる、まいぶらざー」
聞き覚えのある声、身を起こすとそこには九品仏大志（三十四番）がいた。
「大志か……」
力の無い声で返事をする和樹。
「どうしたのだマイ同志、なにがあった？」
「瑞希が……瑞希が……」
和樹はそう応えるのが精一杯だった、そこから先は言えなかった、涙をこらえるので精一杯だったから。
だが、大志はいともあっさりと返した。
「ああ、知っている。我輩がやったのだからな」
和樹の時が止まる。
大志の言葉はやけにあっさりとしたものだった、それが当然だといわんばかりに。
「おい、大志……いまなんつった」
「我輩が殺したのだよ、まいしすたー瑞希を」
大志がそう言いおわる前に和樹の身体が動いていた。全力で大志を殴りつける。
「大志……てめェ、なぜだ！　なんで殺した！」
「邪魔だったからな」
「き……貴様ぁッ！」

もう一発、和樹は大志の顔面を殴りつける。
「仕方あるまい、ここはそういう世界だ。殺らなければこちらが殺られる。我輩は死ぬわけにはいかんのだ！」
その言葉を聞くと同時に和樹は腹部に鈍い衝撃を受け、崩れ落ちた。
「和樹よ、一時とはいえ貴様と我輩は同じ目的のために戦った同志だ。よって今回は命は助けてやろう」
「ぐっ……待ちやが、れ……」
「もう二度と我輩の前に姿をあらわすな。我輩は貴様を殺したくはない」
先ほどとは違う感覚で意識が闇に包まれていく。
「……すまない、あさひちゃんの為、我輩は修羅に落ちるしかないのだ」
薄れゆく意識の中、和樹はそんな言葉を聞いた気がした。

036　（無題）

先程の放送の内容はさして驚くほどのことでもなかった。高槻だから。その一言で説明がつく。
天沢郁未（三番）は、慎重に辺りを探りながら歩く。割と開けた場所、そこは湖のほとり。そこで人が二人、倒れている。
既に戦闘は終わっている。だが、血の匂いだけが数刻前までの凄惨な光景を物語っていた。
「一人は……絶命してるわね」
首の骨が折れては即死だろう。わずかに目を閉じて心で弔う。そしてもう一人の男、息はあるようだ。この男がやったのかもしれない。だが、常人にあんな骨の折り方ができるだろうか。
どちらにしても先程の放送が事実ならば先ず自分の命が危ない。自分を殺せば生きて帰れる可能性が増えるのだから。

もちろん高槻がそんなことするはずがないのは百も承知だ。高槻のことだ、これも余興のひとつとしか考えてないのだろう。
少なくとも私や晴香は生きて帰すつもりはないだろうから。
先程の放送を聞いた人と行動するのは危ないだろう。いつ殺されるか分かったものじゃない。もしかしたらその中に高槻の刺客がまぎれてるかもしれないのだから。
だが、この男は気絶していた。放送を聞いていない。今は少しでも多く仲間が欲しい。郁未はこの男を助ける決心を固めた。裏切られてもリスクが少ないように、男の武器の入っているであろうデイパックは一時奪っておく。
(もちろんボディチェックも含めてだ)
助かるために他人を利用しようとしている、そんな自分が昔から嫌いだった。
「やだな……お母さん、私イヤな女になっちゃったよ……」
私は少し、泣いた。

037　⅕の脅威

「私をのけものにして、いちゃいちゃしないでくれる？」
冷めた七瀬の声が聞こえ、浩平と瑞佳は我に帰り、間を開けた。
「わぁっ！　なんてこと言うんだよっ！」
「そ、そうだぞ。仲間に入りたかったらお前も抱きついてくれれば……」
「んなことするかいっ！　どアホっ！」
ゴインッ！
タライを使ったツッコミが炸裂する。
「ぐあっ……痛いじゃないか！」
「『浩平が』『あんたが』悪いっ！」
二人そろってさらにツッコミが入る。

「で、バカはこのくらいにして。これからどうするの？」
それでもタライを持ったまま、七瀬が言った。
「そうだな。気になるのは、さっきの放送の五人だ」
「あぁ、まずはこの五人を……ってやつね。それがどうかしたの？」
「わからないか？　だから七瀬なんだ」
真顔で言う浩平に無言でタライを構える。
「わぁ、ダメだよっ！　浩平も変なこと言わないの。で、どうして気になるの？」
「つまりだ――高槻とかいう野郎がわざわざあんな放送で皆を煽ってあの五人を殺すように仕向けただろ。高槻を殺したらこの島にミサイルがっていうのは、実はあまり重要じゃない。嘘かもしれない。あの五人があいつの思惑通りに死んだら、次は自分の命が危ういんだ。それでも皆を煽った。これには何かあると思う。彼等は高槻にとって、絶対な脅威であるはずなんだ」
「へぇ……」
「折原、あんた凄いのね……」
感心する二人。
「わからない。そこまで特別扱いされるということは、逆に彼等がそう簡単に殺されることはないはずだ。返り打ちを狙って一気にゲームの参加者を減らそうとしているのかもしれない。ただの連中の遊びかもしれない。何にせよ、彼等が話せる立場の人間だったら会ってみたいが」
そこまで言ったときだった。
「私に何か御用ですか？」
浩平の背後から声が聞こえた。
驚き、銃をとるのも忘れ、振り返る。
そこには今まさに話題になっていた人物、鹿沼葉子（二十二番）が立っていた。

038　森の出会い

少年は、往人と分かれたあともなお森を闊歩していた。
先ほど流れた放送は、何名かの死を告げていた。郁未はまだ生き残っているようだ。
それだけを確認して、少年は前に進んだ。
右肩にずっしりとした重み。
まだ一回も開いていないこのバッグだったが、これをあけずにすむならどんなにいいか、そんなことをつい考えてしまった。
北上しているつもりだったが、磁石があるわけでもないので確証はもてない。
しかし、スタート地点の位置を考えれば、おそらくこの方向であっているはずだった。
あたりは静かだった。
静かだが、確実な歩み。
そう思うと、この狂った環境でも不思議とやる気が沸いてくるものだ。
そんなことを考えつつ、十分ほどの時が過ぎる。
先ほどから視界に入るものといえば、鬱蒼と生い茂る木々だけであった。耳に入るものといえば、微風にざわめく葉の摩擦音だけであった。
だが、その中に混じる不和、違和感。
荒い吐息だった。
誰かが近くにいるようだ。
これはどうすべきかな……
少年は少し迷った。
手負いの人間を相手にするのは避けたかった。特に、一般人であればあるほど錯乱しやすいものだ。
そしてそれ以前に、無駄な戦闘は極力避けたかった。
歩みを止めてはいなかったので、とうぜんその声の主へとどんどん接近していた。当然呼吸音もより精密に聞こえてくる。
……おや？

どうも違う。
錯乱状態や極度の緊張から来るものかと思ったが、それにしては呼吸が激しすぎる。あからさまに痛みと苦しみを訴えている。そしてそれに混じったかすかな声……女の子だ。
少年は身を隠すこともせず、自然体で進んでいく。そのうちに、呼吸の主が視界に入ってきた。道端にうずくまっている女の子——立川郁美（五十六番）の姿であった。
その様子を一目見て、少年は彼女が心臓を患っているのが分かった。
「……これはほっとけないね」
郁美に接近する少年。だがよほど苦しいのか、彼女はそれに反応できない。
「大丈夫……じゃないね、とりあえずここにいてもしょうがない。移動させてもらうよ」
そういうと彼は鞄を肩に引っ掛けたまま、器用に郁美を抱き上げた。
「ちょっと揺れるかもしれないけど我慢してね。といってもそんなこと考えている余裕無いか……」
見た目に似合わない腕力だった。郁美のバッグごと抱き上げているというのに、少年はまったく重たそうなそぶりを見せなかった。そして、それまで向かっていた方向ではなく、横道にそれて歩き出した。
ざっざっざっざっ……
それまで聞こえなかった彼の足音が、今は水を打ったような静けさの森の中に響いていた。
郁美の荒すぎた呼吸も、その様子を少しずつ穏やかにしていった。
「少しは収まってきたか……発作だったのかな」
「……ハイ」
か細い声で、郁美は彼の独り言に返事をした。
「……大丈夫なのかい？」
「いつもの……ことですから」
儚げな微笑を浮かべる郁美。少年はいつもの通りの笑顔で返した。

「薬はあるかな？　調合しようかとも思ったけど発作なんでしょ？　だったら常備薬みたいなのがあるよね」
「ハイ……たしか、私のバッグの中に……」
言いかけて郁美ははっとしたような表情をした。
「私、バッグを忘れてきたかもしれません……」
「それならここさ」
少年は腕下に下がるバッグを示して見せた。
「よかった……」
郁美は安堵した表情になった。
「こっちの方に、たしか学校があったはずなんだ」
「そうなんですか？」
「うん。そこに行けば保健室が使えるし、水道も確保できる。ガスが生きていればお湯も沸かせるかもしれない。少なくとも、森の中よりはいいかと思ってね」
まあうろ覚えなんだけどね、と少年は屈託なく笑った。
「ふふっ」
郁美もつられて笑ってしまった。この島にきて、はじめて安心感を感じられる瞬間だった。
「外傷が無かったのは幸いだったけど、何でそんなに走ったんだい？」
少年が問う。
郁美は、分かりますか？　と少し不思議な顔をした。
「心臓を病んでる人がそんなに無理しちゃいけないな。それとも、誰かに追われていたのかな？」
郁美は横に首を振った。
「バッグを渡されて、それで放り出されて……気付いたら一人だったんです。そう思ったら、なんだか怖くなっちゃって。がむしゃらに走り出しちゃったんです。おかしいですよね？　こんな体じゃあそんなに遠くまで行けるわけ無いのに……」
幼い様相に似つかわしくない、ひどく自虐的な笑みだと少年は思った。

「そんなことは無いさ」
えっ、
と驚いた表情で郁美は少年を見た。
「誰にだってできないことはある。確かに傷つけば、前へ進むことが怖くなる。でも、傷ついた翼だって、傷がいえればまた飛べる。今できないからといって投げ出すものじゃない。それは君が一生付き合っていくものなんだから」
終始一貫した笑顔を少年は保ち続ける。
だがその言葉の重みは、郁美にとって彼の表情など忘れさせてしまうほどのものだった。
「そう……ですよね。ダメですよね、そんなこと言ってちゃ」
郁美は吹っ切ったような表情で彼に言った。少年はいつもの笑顔でそれに答えた。だが、そんな一瞬の感傷で癒されるような傷でもなければ、気持ちだけで治るほど郁美の病が軽くないことも少年には分かっていた。

……
…………
………………
無言の時間が続く。
だがそれにも終わりが来る。
「……見えてきたよ」
「……わぁ」
森の終わりは海岸線へと続いていた。今二人の前には、穏やかに波打つ海が広がっている。
「あるね、学校」
気のせいか、彼の口調はいかにもほっとしたような感じだった。彼は海岸からややずれた方向に目を向けていた。そちらの方角には森が広がっておらず、整備された道と学校が隣接しているのが見て取れた。
「あ、私もう大丈夫です。ここからなら歩けると思います」
郁美はそう主張した。しかし、
「無理することはないよ。それにせっかく自分の足

で歩かずにすむんだ。楽はできるときにしておいたほうがいい」
　結局少年は、その申し出を却下した。
「特別サービスさ」
　そんなことを言って、彼はなんとその状態から走り出した。森の出口から学校の入り口まで、あっという間だった。郁美は、風を切る気持ちよさを久しぶりに感じた。

039　転機

「大体保健室なんていうのは、一階にあると相場が決まっているものだよ」
「そうなんでしょうか……」
　どんな根拠で少年がそんなことを断言しているのか、郁美にはよく分からなかった。校舎の中に入って、とりあえず少年はそこらをうろうろし始める。
「お、あった」
　幾分もしないうちにそれは見つかった。視線の先には、保健室とかかれた表札がある。
「じゃあここで待っているといい。僕は電気系統とかをちょっと見てくるよ」
　部屋の中に入って荷物を置き、郁美をベッドに座らせた少年はそういって立ち上がった。
「あと薬は飲んでおくんだ。多分ここの水道は生きて……ほらほら」
　室内に備え付けられた流し台を見つけた少年は、きゅっと蛇口をひねって見せた。
　さーーーーっ
　水道は無事通っていた。
「それから食料も確保しないといけないからね。このバッグの中身だけではちょっと不安だから」
　少年はバッグを肩に背負いなおした。
「じゃあ行ってくるよ」
　彼はそう言って保健室を後にしようとした。
「あっ、あの……!?」

郁美は彼に声をかけた。幾ばくか、切羽詰まったような感じで。
「……なんだい？」
「えっと、その……ほ、本当にありがとうございました！」
　座りながら郁美はぺこりと頭を下げる。
「いいんだよ、困ったときはお互い様って言うじゃないか」
「そ、それと……」
　そういって、少年は出て行こうとする。
　郁美はまだ追いすがった。
「えっと、し、死なないで下さい！」
「…………」
　さすがの少年も、ちょっと目を丸くした。
「大丈夫、まだ僕は死なないよ」
　諭すように、やさしい口調で彼は言った。
「じゃあ、行くよ。大丈夫、すぐ戻ってくるからそんなに心配しなくていいよ」

　三度、少年は部屋を出ようとする。
「あ、あの！」
「……なんだい？」
　笑顔で振り返る。なんとなくもう一回ぐらい呼ばれるような気がしないでもなかったのだ。
「そ、そのっ、あのっ」
　しどろもどろになりながら、それでも何かを郁美は言おうとしていた。
「えと、えと、……なまえ！　そう名前を教えてください‼」
　少年は意表を衝かれたような、そんな感じの笑みを浮かべた。
「わ、私は立川郁美って言いますっ」
　郁美ちゃんか。
　そうつぶやいたあと、少年は嘆息していった。
「……変な格好をした黒尽くめのお人良し。そう、覚えてくれればいいよ」
　少年は部屋を出た。

とりあえず屋上から調べてみよう。電気系統なら、屋上に中枢がある可能性が高い。少年はそういう思惑で屋上に向かった。
ここは四階建ての校舎だったので、屋上には四階から上がることになる。少年は一目散に四階を目指す。
しかし、三階に入ったところで立ち止まった。
意味不明の不和感、とでも言えばいいのだろうか？　だが少年は確実にそのようなものを感じていた。言葉に表しにくいが、それでも端的に表現するなら……
ここに人がいたのではないか？
無人のはずの校舎に人がいたかも知れない事実、意味不明の不和感、それらは少年にほんの少し危険を感じさせるのに十分足りるものだった。
少年は急いで屋上を目指した。
階段を一気に駆け上る。
そして屋上と中を隔てるドアの前に立つ。
鍵は……掛かっていない。
ぎぃぃぃぃぃぃぃ……
屋上には誰もいなかった。
配電室を調べようと、少年は歩みを進めた。配電室は鍵が掛かっており、簡単には開けられそうに無かった。
「仕方ないな……」
懐から拳銃を取り出す。往人から渡された、ベレッタ92Fを。安全装置をはずして、鍵を銃で破壊しようとしたその時、視線の先に何か引っかかるものがあった。屋上の淵、なのだがそこだけ何かがこすれたような跡が見えた気がしたのだ。
不審に思い、鍵を破壊するのをやめ、そこへ接近してみる。するとそこにあったのは何かの跡などという生ぬるいものではなかった。
血。
血がこすれついた跡だった。
少年はその下を確かめようとする。しかし、

ドクン!!
直感とでも言えるその鼓動は、彼の命を助けた。
彼は一気に体勢を崩して転がった。
そしてその一瞬後、
ひゅっっ！
ボウガンの矢が彼の体の上を通り過ぎていった。
「チッッ！」
舌打ちが聞こえる。撃ったのは……
七十七番、藤田浩之！
「くっ！」
少年はそのまま反対方向へと転がった。安全装置を外していた幸運に感謝しつつ、撃鉄を起こしトリガーに指をかける。
ダンンッッッッ！
一発だけ発砲する。しかしそれは浩之にはあたらない。装填の遅いボウガンでは、拳銃に対抗できない。浩之も、そして少年もその事実に気付いていた。
「ちきしょう！」
捨てゼリフを残し逃げる浩之。少年はそれを見て、一瞬気を吐く。だが次の瞬間、
「まずいっ！」
下には何も知らない郁美が待っているのだ！
もしあいつと鉢合わせにでもなったら……少年は駆けた。疾く速く駆けた。保健室まで全力で駆けた。
そしてそこに辿り着く。
「郁美ちゃんっっ!?」

沈黙。
郁美はベッドに横たわっていた。
腹部から大量に出血し、白いシーツを赤く染めて。
「い、郁美ちゃん……」
呼びかけると、かすかな反応があった。
「あ……黒い……お兄さん」
「あ……ああ、そうだよ。黒い兄さんだよ」
「……ごめんな……さい、わたしっ……やっぱり、どじです……ね」

「そんなことないっ！　……そんなこと絶対に無いよ！」
「私っ、わた……し」
「もうしゃべらなくていい！　いいんだ……」
「気持ちよかったです……よ。あなたに抱っこしてもらって、風を……感じられて……」
「何度でも抱っこしてあげるよ！　だから……だから……」
ぎりっ。
奥歯を強くかみ締める。
けして泣き出さないように。
けして叫ばないように。
「ごめんなさい……もう……むり……みたい……」
少年は郁美の手を握り締めた。
郁美も、ほんのわずかな力でその手を握り返した。
「和樹さんの新刊……読みたかったな……」
郁美はてへっと、笑うそぶりを見せた。とても小さい、とても小さいものではあったが……
「ありがとう……わたし、最後に……あなたみたいな人に――」
どさっ
かろうじてこちらに傾いていた首が、反対へ倒れた。手を握るわずかな力も消えていた。
少年は、郁美の手――もう握り返してくることの無い――を両手で握り、ほんの少しの時間、震えていた。
高槻の他に、もうひとり殺さなければならない奴が出来てしまったな。
彼は思った。少年は押入れから布団を引っ張り出してきた。そしてそれを郁美を覆うようにかけた。
「……これで、もう寒くない」
置き去りになった郁美の荷物を彼は手にした。
「郁美ちゃん、君の代わりに持っていくよ」
少年は彼女にそう言った。彼は学校を後にした。
あの男はどこへ行ったのだろうか。どこまででも追う、既にその覚悟はできていた。郁美が残した鞄を

持って、再び、少年は歩き出した。
——最後に、あなたみたいな人に会えて、良かった。

五十六番　立川郁美　死亡
【残り87人】

040　（無題）

「ひぃ〜〜〜……千紗、死にたくないです。お父さんとお母さんが悲しむです。お兄さんも助けてあげて欲しいです。お兄さんも助けてあげて欲しいです。大庭さんも、猪名川さんも、長谷部さんも、みんなみんな助けてあげて欲しいです。誰かが痛い思いをするのは嫌です。嫌です。間違ってるです……」
「あの……もしかして千紗ちゃん？」
「にゃ!?」
理緒に声をかけられ、茂みの奥で震えていた塚本千紗（五十八番）が、びくっと身体を硬直させた。
「待って下さいです！　千紗は何もしないです！　殺し合いなんて絶対絶対ダメですぅ！」
「落ち着いて、千紗ちゃん——」
「にゃあ、身体を差し上げて許してもらえるならそうしますです。お金も、うちはとっても貧乏ですけど頑張って払いますです。だから、だから……」
「聞いてッ！　千紗ちゃん！」
理緒が、珍しく凛とした声で怒鳴った。
「は、はいですぅ……」
千紗は怯えるよりもその大声に驚いたらしく、目を丸くして縮こまった。
「あれ？　理緒ちゃんじゃないですか」
「やっと気づいてくれた……」
理緒は、小さく嘆息した。そして、表情を引き締め、
「千紗ちゃん、こんな所に隠れててもきっと見つか

っちゃうよ。私も頼りないと思うけど、一緒に、助けてくれそうな人をさがそ？」
「は、はいです。千紗、とっても不安でしたよ。理緒ちゃんが来てくれて、とっても嬉しいです」
　まるでもう助かったかのように表情を明るくし、千紗がごそごそと茂みから這い出た。
「千紗ちゃん、何か武器持ってる？」
「いいえです。そのかわり、変なCDをもらいましたです」
　そう言って、デイパックから簡素なつくりのケースを取り出す。
「こんなの、何の役にも立ちませんです。きっと、千紗は意地悪されたのですね」
「ちょっと、見ていいかな？」
　理緒はCDケースのフタを開け、真っ白なレーベルのCDをしげしげと眺めた。よく見るとレーベルの一角に『1/4』と書いてある。
「……わけわかんないね」
「ですです。捨てるのはもったいないから持ってましたけど、理緒ちゃんが欲しいならあげますです」
「じゃ、持っておくね。そのかわり……」
　理緒は、ポケットからスタンガンを取り出した。
「これ。千紗ちゃん、もしも何か危ない目に遭った時は、これで身を守って」
「にゃあ〜、ちょっと怖いですけど頂きますです」
　理緒は、内心複雑な心境だった。正当防衛と言えるのかも知れないが、結果的に他人を殺して奪ったようなものだ。それで身を守れというのは、何だかすごく汚れた行為のような気がした。
（私、人を殺しちゃったんだもんね……だから、何かあったら汚れるのは私でいい。何でもいい。償いたいよ……）
「理緒ちゃん？　大丈夫ですか？」
「あ、うん、ごめんね。じゃ、行こう」
「はいですぅ」
　理緒と千紗は、島の道ぞいに歩き出した。

041　（無題）

「晴香、今の」
「ええ」
高槻の放送。確かに、私の名を告げていた。
「智子。あなたはどうするの」
『ただし、俺を殺せば……』
「なに言うてんの。水臭い。私はあんたに命を預けるって言うたんよ。いまさら、はいサイナラ、って言うわけないやろ」
「……あんた、馬鹿でしょ。馬鹿じゃないと、そんな考え方なんてできないもの」
あの放送で、明らかに晴香の立場は危うくなった。仲間を集める……智子の言っていたそれは、もしかするともう絶望的なのかもしれない。
「もう、辛気臭い顔せんの。高槻って奴があんたの言う通りの奴やったら、今のが本当のこと言うとるとは思えへんし、それにアンタの名前を出したゆうことは、そんだけアンタを怖がってるってことやろ？　何とかなる、きっとなる。なぁ、神岸さん」
「……うん」
「それに、藤田君がおる。あいつなら、きっと仲間になってくれる！」
「……」
その名に、なぜか俯くあかり。
「……んー、大丈夫や神岸さん、あいつなら無事やて。さっきの放送でも名前呼ばれんかったやろ？」
「……そう、だね」
「せや、それに他にも晴香の仲間はおる。さっき呼ばれてた四人、そうやろ？」
……そう。由依、郁未、そして良祐。みんな、生きている。
由依……あいつは多分大丈夫、貧乳だから。
郁未……そう、彼女も高槻を狙っているのかもしれない。もうさっさと行動して、もしかしたらもう

高槻に近づいているのかも。
そして、良祐……
「行こう」
そう、行こう。無意味なゲームを終わらせるため。
全てに決着をつけるために。

042　休息

湖から一望できる木陰まで男を運ぶと、郁未は一息つく。
高槻……
郁未が知る限りでは最もゲスな人間。そんな人間がＦＡＲＧＯには大勢いるのかと思うと反吐が出そうだった。あくまで推測でしかないが、不可視の力を持った人間を消すのも一つの目的なのかもしれない。
殺人ゲームが余興で、むしろそれが本当の目的……？
考えられることはいくつかあった。
「でも、由依は……普通の女の子なのよ!?」
――郁未さん！
――わわっ、酷いですよ郁未さん～！
無邪気な笑顔が郁未の頭をよぎる。
「助けなきゃ。由依を、晴香を……みんなを」
そしてお母さんを。
高槻の意図がどうであれ、郁未にできること、そしてしたいことはそれしかない。
みんなと合流する。
その後は……その時考える！
残酷かもしれないが、横で寝ている男を起こすことにした。時間は、あまりない。
「起きて……ねぇ」
怪我人にあまり乱暴にするのはためらわれたので、軽くゆさゆさと腕を揺する。
「う～ん、むにゃむにゃ……由美子さ～ん、そんなとこだめだって……」

「……」
「俺には既に激ラブな従姉妹の彼女がっ……て、ああ、そんな積極的に!?」
「……」
パーーン!!
湖に肌を鳴らす音が景気良く響いた。

043 **「舞と……」**

舞はこのゲームが始まった時にこう言った。
「私が絶対佐祐理を守るから」
と。
ここで私を守るということ。
それは、舞が人を殺す、ということになるかもしれない。私は舞に人を殺しては欲しくなかった。人を殺すことによって、舞が昔の舞に戻ってしまうような気がしてならなかった。それに、舞には人を殺すというコトをどうしてもやってほしくなかったから。
ここに来てからの舞は、ここに来る以前の舞とは豹変していた。私と祐一さんの三人で、学校の昼食を食べていたときのような、そんな時の穏やかな舞とは全然違っていた。表情もキリっとして、硬いまま。それになにか体中から殺気が感じられた。
私はこんな舞があまり好きではなかった。
だから私は、
「ねぇ舞? 佐祐理を守ってくれるのは嬉しい。だけど、誰も殺さないで欲しい」
そう舞に懇願した。舞はきょとんとしたけど、すぐに、
「わかった、佐祐理がそう言うなら私は殺さない……」
そう言ってくれた。私は素直に嬉しかった。自然と涙が溢れてきた瞳を右手で私は拭って、
「ありがと、舞」
と私は言った。

私の武器は、デザートイーグル。
もしもの時は、これで舞を守れる。私はそう思った。
もう人を殺しているから。
一人殺したということは二人殺しても同じだから。
だから、舞が危なくなったら……
私が、やる。
私はそう心に決めていた。
舞は、森の中にあった小さな空き地で竹やりを振り回していた。
「これなら、なんとか使える」
舞はそう言って、地面に座り込んでいる私のところに来て、となりに座った。
「ねぇ、舞？　防空頭巾はどうしたの？」
私は舞に聞いた。
「ポケットにはいってる……」
舞はポケットから防空頭巾を取り出し、私に見せた。
「ほら、舞。せっかくもらったんだからつけてみようよ」
私は、舞の手から防空頭巾を取って、舞の後ろに回りこみ舞の頭に防空頭巾をつけ始めた。
「はい、できた」
私は舞の前に回りこんで、舞をみた。
「あははー、舞かわいいー」
ずっと硬い表情をしていた舞が表情を少し崩し、ポケットに手を突っ込んだ。そして、防空頭巾をもう一枚ポケットから取り出し、
「二枚あった。佐祐理にもつける」
舞は立ち上がり私の頭に防空頭巾をつけた。
「あははは、戦時中みたいですねー」
「……ある意味そうかもしれない」
舞はそういったけど、少しクスリ、と笑ったような気がした。私は舞の表情が少し柔らかくなったのが嬉しくて仕方がなかった。

044　姉妹

「落ち付いた？」
ぐすぐすと泣き続けていた栞が落ち着くのを待ってから、香里はハンカチを差し出した。
「うん。ごめんね、お姉ちゃん」
「じゃあ、急いでこの場を離れるわよ。安全な場所に身を隠さないと」
栞に優しく話しかけながら、香里はふと視線を祐一の去った方向へ向ける。
『それにしても、相沢君の協力を仰げなかったのは痛かったわね……』
こちらは女性二人。しかも、内一人は病み上がりの身体なのだ。もし今襲われたら、恐らく二人とも助からないだろう。
「……お姉ちゃん」
「あ、何？　栞」
そんな香里の心中を察したのか、栞が不安げな顔で尋ねる。
「祐一さん、一緒に来てくれませんでしたね」
「そうね。相沢君にも都合があるんでしょ」
不安にさせないようにと努めて冷静に返答する。
だが、栞はふぅ、と息をついて力無く笑った。
「困ったなぁ。ちょっと疲れてたんで、祐一さんにおんぶしてもらおうと思ってたのに」
「栞……あなた……」
「やっぱり、楽をしようと思うとバチが当たるのかな……」
そう言って、ぺたんと地面に座りこむ栞。抱き起こす香里の手を、ぎゅっ、と栞は握る。火照った栞の手は小刻みに震えていた。
強張る香里の顔を見つめながら、栞は大丈夫、と笑顔を浮かべて言った。
「ねぇお姉ちゃん。お願いがあるんだけど……聞いてくれる、よね？」

『ちょっと動くのがつらいから……私、落ち着くまでここで休んでるね。だから、お姉ちゃんはその間に助けを呼んで来てくれないかな……？』
それが栞のお願い。当然のことながら、香里には賛同しかねるものだった。誰が襲ってくるかわからない場所に無防備な栞を置いて行け、と言ってるのだから。
「嫌よ。さ、少し休みましょう。しばらくすれば歩けるようになるわね？」
そんなこと出来るわけがない。香里はそんな栞のお願いには耳を貸さないことに決めた。引きずってでも連れていく。そう決意すると、栞の横に腰を下ろす。
「わ。ひどい。一生のお願いなんだから、お姉ちゃん、ちゃんと聞いてよ」
「……自己犠牲なんて、流行らないわよ」
おどけて言う栞に対して、香里は彼女の方を見ずに冷たく言い放つ。
「それは私が足手まといだから、って言いたいの？　お姉ちゃんだけでも逃がそうとしてる、って言いたいの？」
「言葉どおりよ。違うとでも言うの？」
「違うよ。私、そんな良い子じゃないよ。やっぱり頼りになる男の人がいないと、これから先大変だから助けを呼んで来て、って言ってるの」
「そうかしら？」
栞の方を向く。目が合った。
「わ。疑い深い人、嫌いです｜」
隙を見せぬよう、あくまで無表情な香里に対し、苦しいそぶりを見せぬよう、栞は明るい調子で答えていく。
そのまま訪れる長い沈黙。香里は無言で最善の方法を再検討している。その横には、彼女の決断をじっと見つめて待つ栞がいた。数十秒の後、香里は意を決して口を開いた。
「わかったわ。三十分……いや、二十分待ってて。助けを連れて必ず戻って来るから」

そうだ。
例え栞が足手まといになるのを恐れて自分だけ逃そうとしているとしても。
それが栞の――美坂香里の妹の願いならば、あたしは、それを叶えなければいけない。
あるいはそれは。
拒絶し続けてきた妹を図々しくも姉として迎えた自分に課せられた罰なのかもしれない。
――だったら、甘んじて受けてやろう。だが、栞は守り抜いてやる。栞の身に危険が及ぶ前に、協力者を見つけて帰ってくる。そうすれば全てが上手くいくのだ。いや、上手く行かせる。絶対に、だ。
それが、美坂香里の出した結論だった。
香里は疾走する。協力者を求めて。まずは、祐一の消えた方向へ向かっていた。
「相沢君にも、事情があるかもしれないけど」
香里は走る。出来るだけ早く。栞の元に帰るために。

「こっちにも事情があるんだから、無理にでも来てもらうわ」
しばらく走り続けた後、息を整えるために立ち止まる。まだ祐一の姿は見えない。焦りが、考えまいとした思考を形にする。
『もし、帰ったとき、栞が居なくなっていたら？』
『もし、帰ったとき、栞が物言わぬ骸になっていたら？』
『もし――』
……。
「……そんなの。今は考える必要は無いわ」
香里は制服のポケットに忍ばせていた、支給武器のメリケンサックをきつく握る。その時、島の空には高槻の顔が映し出されていたが、香里の目にはそれは映らなかった。
そう。――上手く行く。絶対に。

045　僕たちの失敗

鬱蒼と茂る森の中で、北川潤（二十九番）は独り、己の幸運を噛みしめていた。彼に支給されたデイバックは他の人間のそれに比べると遥かに巨大で重いものであった。

自発的であってもそうでなくても、この茶番に乗った瞬間から、得物は豊富であるにこしたことはない。当然の事ながら最後まで生き残る事を希望している北川にとって、これが僥倖でなくてなんであろうか。

中にぎっしりと詰め込まれた何かに、あれこれと想像を張り巡らしているうちに、この尋常ならざるゲームに参加して、自分がわずかながらでも興奮しているのがわかった。とはいえ安全な場所を求め、背中に巨大なバッグを担いで森を駆け抜ける彼の様は、端からは躁病の疑いのある富山の薬売りにしか見えなかったのだが。

「まずは護だ。これが先決だな。後はアイツに任せて動いていりゃいいさ」

周りに誰もいないことを確認し、腰を落ち着けると北川はひとりごちた。

住井護。頼もしい従兄弟。いつもシニカルな笑みを浮かべて世渡りしてるあいつ。あいつに任せておけば、どういう状況になっても生き残れる確信はあったし、また北川自身も住井の足を引っ張ることなくサポートしてやれる自負もあった。それに何よりも、彼と一緒に何かやらかす事が北川にとっては楽しくて楽しくてしょうがなかった。

住井と北川は愚仲であり、中学二年の時に北川が家庭の事情で北国に転校するまで、よく一緒に脳を減らしあったものだ。コンビニでパンスト買って頭にかぶらせて『お散歩』と称し、街を練り歩いた。お互いのトランクスをかぶって街を練り歩いたりもした。母親のブラジャーをかぶって街を練り歩いた

りもした。なんだかかぶって練り歩いてばっかりだった。どれもこれも警察に捕まった時にどう説明してよいかわからないので十分位でやめてしまったが楽しかった。

ともあれ脊髄だけで会話が成り立つ人材は中々いないので、すぐさま人間国宝に認定して月とかに打ち上げていいくらいだった。

「護に会うまで、俺だってヘマできんからね」

キツキツになったジッパーを、壊さないように慎重に開ける。ぎしっ、ぎしっと少しずつ軋ませながら少しずつバックは開きはじめた。

「そら、ご開帳だ」

ある程度ジッパーが緩んだのを見て、北川はニヤっと微笑んで一気にバッグを開いた。しかし、中からどさどさどさっと地面に落ちてきた物が何であるか理解したとき、彼の微笑みはそのまま瞬時に凍り付いた。

もずく。

もずく。もずくもずく。もずくもずくもずくもずく。小さなチューブに詰められた黒いもずくパックの山。彼のバッグの中に納められていた物はマーベラスな武器ではなく、ファンタスティックな防具でもなく、スーパーで投げ売りにされている一パック五十八円のドメスティックな雰囲気漂うもずくであった。

ディバック一杯に入ってるもずくチューブが地面に力無くこぼれおちる様を見て、北川は未来のルーレットの先は貧乏農場行きでしかないのだという事を薄ぼんやりと予感した。

046　妹のココロ――置き去りの選択――

(まず、あの五人。あんな放送がかけられるということは、全員手強そうです)

住宅街に入った茜は、そこで放送を聞いた。

その五人を殺せば、高槻を殺すチャンスが生まれ

るらしい。
実のところ、茜にとってはどうでもよかった。
死人は少ないに越したことはない、が、別に全員殺して助かってもいい。
帰れれば、あの空き地に戻れれば、それでいいのだ。
異様なほど静かな住宅街を注意深く歩く。
そして、ある路地裏で、
「見つけた……」
五人の中の一人だ。
名前は忘れた、どうでもいい。顔さえ覚えていれば。
だが様子がおかしかった。
虚ろな表情でずっと空中を眺めていた。
（隙だらけ……どうしてこんな人が放送で？）
まぁ考えても仕方がない。
とりあえず、殺そう。
懐から銃を出し、発砲。

それだけで事足りた。
動かないのを確認して、そっと近付く。
遠目にはわからなかったが、少女にはかすかに息があった。
そして、気付く。別人だったということに。
「ごめんなさい。別人だったみたいです」
声をかける。
「……そんな、勘違いで殺されるなんて……浮かばれませんよ……そ、そんなこと、言う人、嫌いです……」
少女は笑顔だった
涙を流して、笑っていた。
「どうして笑っているんですか？」
「……私がいなくなれば、お姉ちゃんの足手纏いにならなくて、すみます」
悲しい笑顔。ある種の強さを身に付けてしまった者の、そんな笑顔だと思った。

「……そんなのは、ただの自己満足に過ぎません。……置いていかれる人の気持ち、考えたことがありますか？」
この子を撃った自分が何を言ってるのだろう。
だが今も続いている過去の苦い記憶から、どうしても言わずにはいられなかった。
「わかって、ますよ……だけ、ど……しょうがないじゃ、ないですか。私という足枷が……なくなった方が、お姉ちゃんに、有利……だか、ら…………あは、は……お姉ちゃんに、おこられちゃ……くっ、かはっ」
違う。
あの人が自分を置いていったのとは違う。
この少女は、残された姉のことも自分なりに考えて。
「……おいていかれるきもち、も、わかります。……私も、ゆういちさんに、おいていか、れた……ばかり。ふぅ……さいご、に、あ、あいたかった……ゆういちさん……」
目を閉じ、もう喋らなかった。
(ゆういち……祐一？)
栞が口にした人名が、茜の心を揺さぶった。
中学一年生のころ親しくしていた友達だ。
どことなく浩平に似ている気がする。
一年間だけ過ごし、そして転校してしまったが。
(まさか。「ゆういち」なんて名前の人、いくらでもいます)
思い直し、栞の鞄を手にとる。
中には目覚まし時計が入っていた。
「？」
針を合わせてみる。
『朝～、朝だよ～』
「……なんですか、これは？」

多少引きながら、説明書を見る。
『目覚ましの針を六時にセットし作動させると大爆発！　油断大敵だネ！』
「……不用意に触るものじゃないですね」
スイッチを切って、鞄に入れる。
「使わせてもらいます」
物言わぬ栞に向かい声をかけ、何事もなかったように歩き出す。
静寂に包まれた住宅街には、安らかな笑顔を浮かべた栞だけが残された。
笑顔の向こう側に何があったのか、それは誰にもわからなかった。

八十六番　美坂栞　死亡
【残り86人】

047　Only One

ひとつ、肩を叩かれた。
「……諦めたらそこでゲームオーバーだぞ、青年」
不敵に口の端をつり上げて、いつものように彼は言う。
唯一違うのは、彼がレミントンM31RS――ショットガンだ――を脇に抱えていることか。
「……はい。英二さんも……気をつけて」
返した言葉は、震えていなかっただろうか。
振り返らず毅然と去りゆく後ろ姿を見送って、藤井冬弥（七十六番）は緒方英二（十二番）とは逆方向にあたるブロックへと駆けだした。
忘れない。森川由綺（九十七番）が乗せられたトラックの番号は、間違いなくⅢだった。
――要するに、二人は探す人間の分担を決めるこ

とにしたのだ。
英二は理奈と、弥生。冬弥は由綺。出来ることならば、はるかや美咲、マナ、彰も助けたかった。
離れて行動するリスクは高いが、バラバラに彷徨っている彼女たちの生存確率を上げるためにはその方が有効だ、と話し合って判断した。
『十二時間後、B棟三階三号室で落ち合おう』
Vブロックスタート地点近くの住宅街。
初期段階ならば展望台や灯台、山頂ほどには目立たない、五階立てのマンション群。
ある意味盲点とも言えるそこが、彼らの前線基地となる。

何時間走ったか、冬弥は覚えていない。道中、放送が入ったけれど、そんなことは関係なかった。
自分はただの大学生だ。妙な力なんて持ち合わせちゃいないし、見も知らない人間——まして女の子を、殺せるはずがない。
そんなことより大切なのは、まだ自分の友人たちが生きているということだ。
……鬱蒼とした茂みを抜けると、一気に視界が開けた。
大きなキャンプ場だ。少し離れたところにはテニスコートも見える。その緑に、一瞬はるかを思い出した。
だが、それが命取りだったのかも知れない。
「ぁ、はは、あはは、あははははははははは！」
突如瞳にうつったのは、およそ信じ難い光景。
だってそうだろ、まさか血塗れで笑う少年が、自分に向かって飛びかかってくるなんて——
がつっ、と、鈍い音が響いた。
苦悶の呻きを短くあげ、バランスを崩した佐藤雅史（四十二番）は地面へと這いつくばる。
冬弥の支給武器、伸縮式特殊警棒が、間一髪で雅

史の顎を捕らえていた。
なんだ、なんなんだよ、こいつ……⁉
「あはは、いたいな、もう、しょうがないなあ、ひろゆきは、あはははは」
「だ、誰だよひろゆきって……！」
後ずさる。
「ひろゆきは、ひろ、ゆきじゃ、ないか……はは、あは」
常軌を逸した目の色に、不可解な言動、千切れた腕。明らかな異常。逃げなければ。でなければ――殺される。
咄嗟に身を翻し、冬弥は元来た山岳の方向へと走った。無我夢中で、振り切ることだけを考えて、ひたすらジグザグに曲がる。
ひとつ、もうひとつ、またひとつ。
足が自分のものじゃあないみたいだ。だけど動かなければ。動かさなければ。

「遅いよ、ひろゆきぃ」
恐ろしく近くで聞こえた、ぞっとする声と共に、ごきり、と。関節が外れたいやな音が耳に届くと同時に、冬弥は大木に叩きつけられた。
いや、違う。むしろ――蹴り飛ばされた。
嘘だ。大の男がこんなに簡単に吹っ飛ぶか……
「やだなひろゆきあかりちゃんをさがしてたの？でもだめだよあかりちゃんはぼくだけのものになったんだきもちよかったよいっぱいないてたからきつかったよすごくかわいかったすごくすごく」
……わからない。何のことなのか、まるで意味がわからない。がっ、がっ、と、続けざまに容赦のない蹴りが浴びせられる。
例えるなら鉄球で全身を殴られているような。まるでボールを足で弄ぶような、だけどそんなものとは比にならないこの痛み。
「かなしかったんだよ、ひろゆきはぼくのたいせつ

なものばかりとるんだ、わかる？　おぼえてる？
なにもしたがらないくせにほしがるんだよねひろゆきは？　たにんのことなんかどうでもよくてじぶんだけかわいいんだよね？　おまえはいつだってかんたんにふみにじるんだそうだあかりちゃんもしほもみんなみんなみんなひろゆきのせいでひろゆきが、ねえ」
ばきっ。ばきっ。ばきっ。規則的なほどに響く不快さ。胃液が零れて、上着を汚す。視界はとうにあやふやだ。草むらがざわめく音がやたら鮮明にきこえる。土と血の匂いだけがたしかなものになる。
あぁもぅ、なに、やってんだ……おれ。苦しい。くるしぃ。
「――や、――………！」
何も見えない。ユキ。ゆき。由綺。
いやだよ。こわい。怖いよ由綺。俺まだ死にたくなんか――

とかかかかかか。
――その軽い音と共に、衝撃は途切れた。

はぁ、はぁ、と。
乱れた呼吸を整える。
震える手を下ろす。
できるだけ静かに、ゆっくり、足を前に動かして、歩く。
そして。
「冬弥君…だい、じょうぶ…？」
声を。
「ぁ……ゆ、ぃ」

最後まで言えずにげほげほ、と咳き込むその姿を見て、私は横たわる死体にもかまわず駆け寄った。
「大丈夫、息できる…？」
「なん、とか」
とても苦しそうだった。傷に響かないよう慎重に背中をさすって、手を貸して立ち上がるのを手伝う。
……目を見開いたまま息絶えた男の子と目があったのは、忘れようと思った。
「ごめん……ひどいもの、見せた」
「ううん、冬弥君のせいじゃないよ」
撃ったのは、私だから。
手の中のニードルガン。高速で針を撃ち出すそれで、私は自分の意志で人を死なせたから。
「本当、ごめん」
何度も何度も、冬弥君は謝る。
そんな彼を見て、優しい人だと今さらながらに思う。
私たちは道を戻り、キャンプ場の外れにあったログハウスでおぼつかないながらも何とか冬弥君の応急処置をした。
幸い、骨までは折れていなかった……はずだ。
「私もね…ずっと冬弥君のこと、探してた。美咲さんは私より前に出ちゃったから追いつけなくて、マナちゃんは、出口で待っててくれたんだけど……」
思い出すのもつらかった。
Ⅲブロック出発地点の建物の周りを囲む広い林の中で、男の人が女の子を撃ち殺す現場を。そしてその男の人が、別の三つ編みの女の子に殺されるところを。私とマナちゃん、二人ともが目の当たりにしてしまったのだ。
「見つからなかっただけ、よかったと思う。だけどマナちゃんは怯え切っちゃって、もう誰ともいたくないのって、私を突き飛ばして一人で」
「……いいよ、言わなくて」
ああ、こんな時も、彼の声は魔法みたいに。

「マナちゃんもはるかも彰も美咲さんも、見つける。必ず英二さんが理奈ちゃんと弥生さんも連れてきてくれるから」
みんな一緒に生きて帰れるなんて、そんな気休めでもいい。
柔らかすぎる嘘でもいい。
「大丈夫、だから」
ぎゅっと慰めるように抱き寄せられて、涙が出そうになった。
だけど泣かない。
前と同じに弱いままじゃ、冬弥君の足手まといになる。護られるだけの彼女になんか、なりたくない。
「でも、冬弥君が死ななくて、本当に良かった」
あと少し遅ければ。この腕の温かさも、感じることが出来なかったなんて。その恐怖に比べたらずっとましだ。
……こらえるように、目を閉じた。
降ってきたのは、彼のキスだった。

四十二番　佐藤雅史　死亡
【残り85人】

048　涙

「うわー、なんで俺裸なんだっ……!!」
耕一は自分の姿を見て赤面する。
「さあ、それは私に言われても――あ、私じゃないわよ?」
郁未が早口で言いきる。耕一がある衝撃で目を覚ましてから約五分。本当はすぐにでも行動に移したかった郁未だが、状況整理のためにもお互いのことを確認しておく必要があった。自己紹介を済ませ、敵意がないことを伝え、それぞれの経緯を――というところで、耕一はようやく自分の置かれている立場に気がついた、

……体の。
微量とはいえ、鬼の力を解放したのだ。
「ううっ、見たな、俺の赤裸々な部分をっ……」
「見てない、見てないよ、うん」
その前にそれを隠してくれ、という言葉を郁未はなんとか飲みこんだ。
「うう、せめて下着くらいは残ってくれよ……俺の服」
漫画やアニメじゃないんだから仕方ないけどさ……。
お互い背中越しに会話を進める。
「そういえば、支給された武器ってなんだろう？……確認してねえや」
「見てないの？　はい、これ」
すでに気を許してる（というか、許してしまった）郁未は、バッグを背中越しに耕一に放る。
「……をい」
「どったの？」

その反応に思わず覗きこむ。
「い、いや、これは……」
慌ててそれを遠ざけるが、もう遅い。
「ぷっ……あははっ!!」
「バ、バカッ、違うぞ。俺はだな……」
何も違わない。
今日二度目の涙。
それは、そこだけありふれた日常として切り取ったように滑稽で。
「ふふ、よかったじゃない。下着が見つかって……ぷっ」
「わ！　……笑うなよ」
耕一は膝小僧を抱えこむ。その姿はひどく小さく見えた……別のイミで。
「これは……さすがに……武器か、オイ？」
黒い三角形。ブルマともよぶ。割と高性能のようで、局部には鉄板が内側から貼りつけられている。
確かにこれを装備することで急所は守られそうだ。

「しかも、男用……ぷぷっ」
「いや、上半身裸で、下は……コレか…？　イヤすぎ」
郁未はすでに腹部に相当のダメージを負っていた。幸い外傷はない。
「も、もうダメかも……」
「それよりお前はどうなんだよ！」
郁未の体が固まる。
「え？　……私のは別にいいよ」
「いや、ダメだ。見る」
「ちょっ、待っ……！」
「……」
「……」
「……コレは？」
「……のこ……」
「えっ？」
「キノコよっ！　悪かったわね！　きっと毒入りかなんかだと、思う……かな？」
その声はだんだんとしおれていく。
「そっか、キノコか……」
耕一は遠い目をして空を見上げた。
「ど、どうしたの……？」
「使いようによってはさ……武器になるんだぜ、きっと」
「……？」
「夢を見てたんだ……」
「えっ？」
「湖のほとりで……初めて人を殺した」
震える両手を呆然と眺める。
「……」
「何も聞かないんだな」
「……そうね」
「……」
「……」
静寂が二人を包む。

「俺……うなされてたか？」
「ううん、むしろ……いや、なんでもない。忘れて」
「……そうか」
本当の寝言は違ったけど、この場を茶化すことなんて出来ない。雰囲気がそう言っていた。
「そろそろ行きましょう。みんなを助けに」
「ああ……」
男を信用し、先程の放送の件をありのままに郁未は伝えた。
耕一は護りたい人がいると言った。それだけで充分だったから。出来る限りの人を救って、そして高槻をギャフンと言わせる。
綺麗事かもしれないけど。
「でも、ホントにこの格好でいくのか……」
黒い三角形。
「安心して、もう少しマシな方法があるから」
歩きながら呟く。
「……あのー、下がスースーするんすけど」
「私だって恥ずかしいんだから我慢して」
郁未は従来の制服を上だけ着ていた。下には黒い下着…もとい、貞操帯。
「せめてパンツだけでも……」
「ぜったいにイヤ。スカートだけで我慢してよね！」
「うう、間違ってもハイキックなんてできやしないぞ」
精神的にもダメージを与えられるかもしれないが。
本当はもう一つ選択肢があった。だが、それは二人には考え付いても口には出せなかった。死者への冒涜、こんなときでもそれだけはしたくなかった。
そう思った瞬間、耕一は自分の汚した手の重さを感じ、心で泣いた。

049　姉のキモチ――あやまちの選択――

銃声が聞こえた。
まさか――
栞と別れたのは、今さっきだ。
人の気配なんてなかったはずなのに。
まさか――
まさか……
まさかっ……!?

世界は色を失っていた。
最愛の妹が、笑顔で横たわっていた。

「うそ……でしょ……、ねぇ、しおりぃ、うそだよね？　ねぇ？　ねぇってば？　どうしてへんじをしてくれないの？　ねぇ、しおり……しおりぃ……」
栞の死体に向かって叫ぶ。

反応はない。当然だ、死んでいるのだから。
理解はしていた、こんなことしても無駄だと。
だけど、とてもじゃないが、納得はできそうになかった。
「大声出すと、近所迷惑ですよ？」
「――っ!?」
目の前に三つ編みの女が立っていた。
その女は血のついた制服を着て、右手には銃を持っていて、
「あなたなの？　栞を殺したの……」
「はい」
「……あなたが……あなたがぁっ!!」
ばっと立ち上がり、メリケンサックをはめた右手で殴り掛かる。
女はその動きを読み、無理のない最低限の動きでかわしてみせた。
すれ違いざまに足をかけられる。
「!?」

そしてそのまま、バランスを崩して地面に倒れ伏したあたしの背中に、何度もナイフを突き刺した。
あたしは全身の力を失い、立ち上がることさえできなかった。
立って、栞の仇を……
この女を、殺してやりたいのに。
痛みと悔しさに、涙がこぼれる。
「……どうして……どうして栞が……」
「あなたの妹さんですか。あなたが側にいてやれば、こんなことにはならなかったと思います」
自分が間違っていたのだろうか。
協力者なんか探さずに、ずっとあの子の傍にいてあげるべきだったのか。
そうだ……きっとその方が良かったのだろう。
事実ほら、あたしが目を離した隙に、こうしてあの子は殺された。
結果論ではない。
あたしが栞の為にやらなきゃいけないことは、栞の意図を汲むことじゃなくて、
(栞を確実に守り通すこと……)
こんなことを思い違えていたなんて、取り返しがつかなくなって、はじめて気付く。
どうして『栞が物言わぬ骸になっていた』可能性を、考えることをやめたんだ。
あたしはどこまで、愚かで残酷な姉なんだ。
「妹さんの伝言です。私が死ねば、お姉ちゃんの足手纏いにならなくてすむと。妹さんの思い、無駄になりましたね」
もう痛みすらわからない背中に冷酷な声が降りかかる。
どんなに鋭いナイフよりも、その言葉はあたしの心を、深く深く抉り取った。
言葉で人を殺せるのなら、あたしの致命傷は、きっと「それ」だ。
(馬鹿……栞も、あたしもっ！)

馬鹿、そう、馬鹿な姉妹だ。
どうしてこんなことになったのかな。
相沢君、一緒に来てくれたら、よかったな……。
「相沢君の……バカ……」

茜は、香里に同情するつもりはさらさらなかった。
わずかな時間とはいえ、大切な人の側から離れたのだ。
（自業自得……）
本当に大切なら、何があっても一緒にいるべきだ。
妹は姉のためにベストの選択をし、姉は選択を間違えた。
それよりも茜は、栞と香里の残した言葉を気にしていた。
（相沢……ゆういち。相沢祐一……まさか、本当に？）
香里の死体からメリケンサックを回収しながら、茜は思う。
このゲームで、絶対に自分には殺せないだろう人がいる。
それは当然、柚木詩子。
もし本当に、相沢祐一がここにいるのなら。
（――殺せる？　私は……）

八十五番　美坂香里　死亡

【残り84人】

050　（無題）

屋根に大きく『Ⅳ』の数字の描かれた建物が、目の前にある。
「○○○公民館」
出発地点の一つだ。
「かなり歩いたけど、ここまで誰にもあわんかったなぁ。ま、しゃあない」
……気楽な物言いね。初めて出会った時は、震え

ながら銃を構えていたくせに……
「さ、行こか」
いつのまにか、私よりも先を歩いている。
……いい仲間ができたものだわ。
そして、もう一人に視線を合わせる。
「あかり」
「……はい」
両肩に手をのせて、言い聞かせる。
「あなたはここに残って。いい、動いちゃだめ」
「だけど……」
「晴香の言うとおりや。後詰も立派な仕事。神岸さんが後ろについてるから、私らも安心して動けるんよ」
そう、彼女の武器は強力だ。私や、智子のものよりも。
小型特殊爆弾……クマ型の。
説明書によれば、目の前の建物くらい簡単に吹き飛ばせる。いや、それ以上の威力の。
だけど、本当はそんな物を期待してなんかいない。智子も同じだろう。
……中に入れば、この手を血で汚すことになる。別にそんなことはどうでもいい。ただ、そんな姿をあかりには見せたくない。
まだ、彼女の心は不安定なんだから。
これ以上の負担は、かけたくない。
安心させるため、出来るだけの笑顔を向ける。
「じゃあ、行って来る」
「……二手に分かれた方がええなぁ」
「私はいいけど、智子、危険じゃない？」
「大丈夫。十分練習はした。うまく使えると思うし、弾もぎょうさんある」
私達は建物の裏に回りこんだ。裏には入り口が一つあったが、そこは使わず、窓から侵入することにした。目的は、高槻の居場所を探ること。たぶんここに高槻はいない。こんな建物でなく、奴ならもっと安全な所にいるだろう。ただ、手がかりはあるは

ずだ。それを見つけるため、あえて危険を冒すことにした。
「先、行くな」
窓に、智子が手をかける。幸い、カギはかかっていない。するり、と中に忍び込む。
……意外と、身軽なのね。
別の窓に駆け寄り、窓を開ける。
……ここもカギがかかっていない。
鞘から刀を抜き、注意しながら中に飛び込んだ。

「なんや……これは」
智子が見たのは、真っ赤に染まったカーペット。
その中に、野戦服の男が一人、倒れていた。
「晴香……やない、なぁ」
そのはずはない。自分の方が先に、中に入ったのだから。
「誰が、こんなん……」
注意を払いながら、廊下へと出る。

ここにも。
やはり、そこにあるのは死体。
周囲に、人気はなかった。
脇の階段を上る。踊り場にも死体が。
「いったい、何人死んでるんや」
「八人だよ、委員長」
聞きなれた声。聞きたかった声。振り向く。
――そこには、気だるそうに銃を構えた、藤田浩之がいた。
「久しぶりだな」
構えを崩さず、声をかけてくる。
「藤田君、無事やったんやね」
「ああ。おかげさまで」
そう言いながら、カチリ、と親指を引く。
「でも、もうお別れだ」
「な、なに言うてんの。冗談はやめとき！」
「冗談なんかじゃないさ……生き残るのは、この俺だけでいい」

……うそや、うそや、そんなん。
一番信頼していた。会えさえすれば、きっと全てうまくいく。そう思てたのに。
こんなん、こんなん嫌や……
「智子おっ！」
銃を構えた男が、階段の上にいる智子を狙っていた。晴香は、わずかながらの力を開放しながら、薙ぐようにして男に切りつける。
キン！
男は、いつのまにかもう一方の手にナイフを持ち、彼女の一撃をかわした。
速い。
「ちっ！」
そう舌打ちすると、男は奥の部屋へと姿を消した。
「智子、大丈夫？」
「……あ、うん」
おぼつかない足どりで、階段を下りる。
「奥の部屋へ入ったわ。さあ、早く」
……行きたくない。現実を直視できない。晴香に手を引かれるようにして、部屋の前へ来る。
「行くわよ」
ドアを開ける。その部屋の中は……
燃えさかる炎につつまれて、
「委員長！」
炎の向こう……多分、窓の外からだろう。声が聞こえる。
「次に会うときには、この決着をつけようぜ」
そういい残して。あのひとは私達のもとから姿を消した。

051 胸中@柏木耕一

よ、親父……あの世でも元気にやってるか？
俺は元気……と言いたいところだけど、あまり元

気じゃない。
初めて人をこの手にかけた。
これも正当防衛っていうのかな？　……でも、そんな考えは偽善でしかないよな。今ここでは理不尽な殺戮ゲームが行われてる。そう、本当に理不尽さ。
誰も死んで欲しくない。みんな助かって欲しいと心の底から思ってる。それは本音だ。だけど、すでに俺の罪も含めて何人もの犠牲者がでてしまっていた。
護りたい大切な人達がいる。俺はその人達を護るため、この先また他人に手をかけてしまうかもしれない。そうしていくうちに、いつか俺が俺で無くなってしまうんじゃないか——それが恐かった。
なあ、こんな俺にも笑いかけてくれるかい？　親父……
今、一人の女の子と一緒に行動してる。今日、こんなところで初めて会った女性だけど、信頼できる娘だ。今回の件では、いろいろワケ有りらしいんだけど、俺は人を見る目はあると思うんだ。その子は自分を犠牲にしてまで俺を救ってくれた。衣服がなかった俺に、服を貸してくれたんだ。おかげで彼女は萌え……いや、痛々しい格好で歩いてる。まあ、俺はもっと痛々しいかもしれないけどな。
裸に短めのスカート一枚、
……はは、参るぜ。
梓に笑われちまう……次から変態確定だな。
初音ちゃんなんか『お兄ちゃんのH～』とかいいながら手で顔を押さえて逃げちゃいそうだし、当然顔は真っ赤だ。
楓ちゃんもきっと……いや、あの娘はあの娘で意外性に富んでるから、手で顔を覆い隠しながらも。微妙にその指が開いてて……ゲフンゲフン
千鶴さんなんかは……
『耕一さん、あなたを……殺します！』
…………………………。
まあ、きっとシャレで収まるよ。

うん、ははは……
スカートが風にまくれる事で、こんなにドキドキしたの何年振りだろう。なあ、こんな俺にも笑いかけてくれるかい？　親父……

052　（無題）

薄暗い森の中。
坂神蝉丸（四十番）はそこにいた。
蝉丸は考えていた。
自分がどうするべきかを。
その軍人としての冷静さで。
――考える、きよみの事を、
――考える、月代の事を、
――考える、夕霧の事を、
――考える、高子の事を、
そしてあの診療所の医師、石原麗子や他の強化兵のことを。

……考えに対する答え。
きよみ……何とかして生きて帰したい。
彼女を想う祐二や、命を捨ててまできよみを託した光岡にかけて。それにできれば、複製身のきよみも。
月代――守らねばならない。もう二度と月代の悲しむ顔など見たくは、ない。
夕霧――心の優しい娘。だが、先程の放送が確かなら、夕霧はもういない。俺は夕霧を殺した奴を許しはしない。
高子――聡明で賢い女。彼女を夕霧の二の舞にすることはできない。
石原麗子――いまいちよくわからない。保護したいとは思うが、何か信用できない部分がある。
岩切や御堂――遭遇すればまずこの島の誰よりも強敵になるだろう。仙命樹が働かないとはいえ、戦場に誰よりも慣れているのだ。しかし、その岩切は何者かの手によって殺された。水戦試眺体として水

辺、水中においては敵のいない岩切だ。彼女の得意なフィールドでの戦いに持ち込めなかった、そう考えるのが自然だろう。だが、彼の直感はそうではないと告げていた。そうなると、岩切は水中戦で敗北したことになる。
もしかして油断したのだろうか？
奴の性格から考えて、おおよそ思いつかないわけではないが、この状況では考えづらい。ならば一体どういうことか。
いくらか前、この殺し合いの管理者の高槻とかいう奴が言っていた台詞。
『多分能力者の諸君は、気づいてるだろうが――』
……他にも、いる。
一体どのような力を持つ者がいるかはわからないが、いるのだ。俺達強化兵のような、あるいはそれをも上回る力を持った者が。加えてこれも高槻が言っていたが、能力者の力は弱められているらしい。
それなのに岩切を殺せる者がいる。

とにかくわかった事は、脅威は残る強化兵の御堂だけではないということだ。ならばなおさら、きよみ達を早く探さねばならなかった。
改めて出発するときに手渡された布袋の中身を見る。水や食料、島の地図等に混じって入っているのは、何か四角い物。衝撃吸収の布の中に入れられていたのは薄っぺらい箱のようなものだった。
「……確か『ぱそこん』とかいったか。情報処理が可能な電子計算機らしいが。しかしなにか説明書のようなものでもあればいいが……どうやらそういうものは無いようだな」
蝉丸はパソコンを取り出し、蓋を押し上げて観察する。モニターに入力装置、そして電源らしき物を確認できたが、下手に触って壊してしまってもいけないので、とりあえず袋の中に戻した。
それから蝉丸は辺りを見回し、太い木の枝を折ると、枝をざっと払って構えた。
「今の俺は仙命樹の無い普通の兵士と同じだ、強化

兵としての戦い方はできないだろう。頼りになるのは経験と勘だけだ。不用意な戦いは避け、かつ、もしもの時は容赦しない……待っていろ、きよみ、月代、高子……俺が守ってやる！」
蝉丸はまるで自分に言い聞かせるかのように低く静かに、だが力強くそう呟くと、陰形を保ちつつ走り始めた。

053　拾い物

柳川祐也（九十八番）は海岸にいた。海沿いに歩いて島を詳しく知る為である。左回りに島の北から、南へ六時間ほど歩いてきた。
「南北は八キロ半といった所か。東西は……十四キロ」
柳川は歩行してきた道のりを綿密に計算して大きさを計った。計算しながら海岸を歩いていると、明らかに流れ着いた物とは違う物を発見した。

綾香が放置した小型爆導索である。
「どこかの馬鹿が忘れて置いていったのか？　まあいい、貰っておくか」
柳川は小型爆導索を自分のバッグに詰めた。力が制限されているとはいえ、柳川にとってはたいして苦にならない重量だった。
「あのロボットから奪ったリモコン爆弾といい、本当にツイている」
セリオのバッグの中身はリモコン式Ｃ４プラスチック爆弾（一ダース）であった。
「後は潜伏拠点が必要だな。集落でも探すか」
柳川は再び海岸を歩き出した。周りの空が明るくなり始めていた。

054　叶い

うっわ。
浩平は目の前の、恐ろしく綺麗な少女を前に、あ

んぐりと口を開けたまま、「私が、鹿沼葉子です」という、落ち着いた声を聞くに至る。綺麗な声で、それだけで恋に落ちてしまいそうな響きを持っていた。

はぁ、と、浩平が溜息とも返事ともつかぬ声を出すと、その少女は、ええ、と返事を返す。ええ、と言われてもオレはなんと反応したら良いのだろう。

――無言である。長森も七瀬も、口をあんぐりとしたままなのである。少女は仮面のような氷のような茜のような表情を崩さぬまま、そこに突っ立っているばかり。いや、というか、何を話せば良いんだろうか？　目の前に件の人物が現れても、自分達にとってはただ訳の分からない数学の問題に直面したようなものであり。

――というか、この少女の雰囲気は何処か茜に通じるものがあるなあ。ああそうだ、茜を探し出して一緒に行動しなくちゃ。浩平はふとそんなことを思っている。

そんな場合ではなかった。

「……私を殺せば、取り敢えずミサイルで吹き飛ぶという事は無いですよ」

少女が出し抜けに言った。そして、浩平の腰を指差す。そこにあるものなど決まっている、真っ黒な鉄の塊で人を殺すための武器だ。浩平はびくりと身体を震わせた。この少女は何を、浩平はそこで気付く。なんて冷たい瞳をする。自分を人間だと思っていないかのようなロボットのような響きを持った眼差しだった。かつての茜に、ひどく似ている。

「アホかっ」

だから思わず浩平は叫んでいた。長森や七瀬に言うように、ただ二文字、アホ、と。

「アホ――ですか」

彼女はきょとんとした。生まれて初めてアホと言われたような顔。なかなか新鮮だった。

「アホだっ。何でオレがあんたを殺さなくちゃいかんのだっ」

その鹿沼葉子は、首を傾げて言う。
「私は、高槻を殺しにいきます。――そうしたら、あなた達は吹き飛ぶんですよ？　分かってます？」
「……そんな事が嘘だという位オレにだって判る」
鹿沼葉子は、目を丸くして浩平の顔を覗く。その表情もまたなかなか新鮮だった。
「あんなの高槻とかいう奴が抜かしたでたらめに決まっている。あんな鬼畜エロゲの悪役みたいな輩が死んだくらいで、このゲームは終わらないだろう。あの男がそんなに重要な配役を任されているようには思えない。もっと裏に大きな組織や意図が隠されているはずだ。こんな馬鹿げたことをしでかすくらいなんだから」
それが何かはまだ判らないが、それでも戯言を否定できるくらいの知性は浩平に充分あった。
「だからオレにあんたを殺す理由なんてないし、だから、自分を殺せなんてあんたが言う必要もない」
「――あなたはすごく賢い人のようですね」
そうです、多分、あれは嘘です。鹿沼葉子は――柔らかく微笑んで、そう言った。
きちくえろげの悪役、とはまたよくわからない比喩ですね――葉子さんは首を傾げながら、しかしおかしそうな顔をする。
「このゲームが企画された意図は知りませんが、郁未さんや私が巻き込まれている事を考えると、ＦＡＲＧＯがこのゲームの企画者だとは考えにくいです」
「あのっ、ふぁーごって」
長森が訊ねると、やはり葉子さんは微笑って、宗教団体です、と答えた。何の気負いもなく彼女が吐いた言葉は、しかしひどく強い響きを持っていた。
「大体、本当にミサイルが撃ち込まれたとしてもさほど問題ではないですね。私や郁未さんの力が解放されれば、そんなもの大した驚異でもないから」
マジですか。浩平は呟いてみた。

「マジです」
葉子さんは真顔でVサイン。なかなかノリのいい人だ。
「だから、高槻は私達が怖い。私達が武器を持って攻めてくるのが恐ろしい。あいつが死ねば、きっと私達の力は解放される。そうすればこの殺し合いはすぐに終わります。だから、私はあいつを殺しに行くんですよ」
七瀬と長森が殆ど同時に唾を飲み込む音が聞こえたし、多分浩平も同じように息を呑んでいた。この人は滅茶苦茶なことを言っている。だが、そのどれもが嘘に思えない。
「ち、力……出てないんですよね今は。力って、その、よく判らないんですけど」
長森は、恐る恐るそう訊ねる。これにも葉子さんはにこりと笑って返事をする。
「その通り。良く原因はわからないんですけど、何やら力を抑制する結界が働いているんです」
葉子さんは小さく溜息を吐いたが、
「しかし、あいつを殺すだけならこれで充分です」
と、バッグの中に入っていた――
「槍？」
七瀬が呟くと、折り畳み式の槍を展開しながら、そうです、と笑った。彼女の身の丈近くの長さがある。
「そ、そんな槍一本で、銃火器に立ち向かうんですかっ」
長森のその疑問ももっともだ。高槻は多くの護衛に守られているのに決まっているのだから。
「――ええ。でも心配は要りません、これで充分なんです。力が解放されていない、といっても」
言うと、葉子は跳ねた。驚き、目を丸くする長森や七瀬の、その身長くらいまで飛んだ。
「このくらいの運動神経は、残っています」
くるくると前方宙返りをしながら、たん、と着地すると、葉子さんはまた笑う。浩平も二人と同様に

その運動神経に驚いたが、それより先に目に入ってしまうものがある、これが男の性（サガ）である。許して欲しい。
「白、か」
自分のボケに如何に早く反応するか、これが自分の漫才パートナーを選ぶポイントとしよう。今勝手に決めた。しかし見事見事、
「浩平のアホっ！　すけべっ！　へんたいだよっ！」
「折原のアホっ！　死ねっ！　一回地獄に行けっ！」
という、なんとも息のあったツッコミを受ける事になった。これは三人で漫才コンビを作れと言う事なのか。しかし突っ込みが二人もいるお笑いトリオなんて聞いたこともない。
そこでようやく意味を理解したのだろう、ぽっ、と、葉子さんは恥ずかしそうに顔を赤らめる。
「――次の放送が流れたら、私は高槻を殺しにいきます。それまでに、天沢郁未さんという方を見かけたら、鹿沼葉子が、高槻を殺しにいきます――と言っていたと、そう告げてください」
一頻り笑った後、葉子さんは少し肩を竦めてそう言った。
「ああ、判った。伝えておくよ」
浩平が笑いながらそう言うと、葉子さんはにこりと笑う。そして立ち去ろうとして、後ろ髪を引かれたようにもう一度振り返った。
「あなた達のように、希望を持っていてくれる人が居てくれて良かった。――高槻を殺す甲斐があるってものです。おかげで私もだいぶ救われました」
そう微笑い、槍を片手に森の陰に消えていった。
「不思議な人だったたね――あんな綺麗な人、初めて見たよー」
長森はそう呟いた。浩平は頷いて、
「すごくスタイルのいい美人だった……」
「アホっ！　あんたの頭は蛆虫の巣窟かっ」

案の定七瀬のツッコミを再び受けた。
「そういえばっ！」
長森が顔を赤くして声を上げる。何事か。
「浩平、さっきわたしのおっぱい揉んだでしょっ」
「ば、ばかっ、ああしなけりゃお前も俺たちも危なかったんだよっ」
「他に手はなかったのっ？　……もう、顔から火が出るほど恥ずかしいよおっ」
「っ……。オレだってお前の貧乳なんか揉んだって何にも嬉しくないんだよっ」
「貧乳は関係ないでしょっ」
「大体お前の貧乳なんか小さい頃から何度も揉んできてるわこのばかやろうっ」
「うう……最悪だよ、浩平っ」
「お前の駄乳なんか揉んだオレの気持ちにもなれ！　さっきの葉子さんの乳だったらともかく」
「浩平のばかっ！　ばかばか星人っ！」
「お前の方がばかじゃないか！　駄乳〜、駄乳星人っ〜！」
……言い過ぎである。自覚はしているものの長森を苛めることは自分の日課なのである。こんな場所でもそれは同じだ。
「ひどいよ、浩平なんて嫌いだよっ」
「おー、嫌えよ嫌えよ、長森の駄乳なんて揉まされたオレの手が可哀想だ〜ああ可哀想なオレの手」
「……ばかぁっ」
……どうやら怒らせてしまった。というか、少し泣いているではないか。オレはひどい奴だなあ。わざとだが。
「最低ね、折原。女の子の胸揉むってどーゆーことか解ってんのばかっ」
ちょっと罪悪感。漢・七瀬にそんなこと言われるのもなんだか癪だが、
「ご、ごめん、長森」
無視。
……一人前に拗ねやがってる。むかつく。

「ちょっと折原、漢って何よ!?　聞いてんのあんたっ」

無視。

浩平はとにかく下手に出る。長森を怒らせると後々面倒だ。

「長森、ごめんってば」

「ふんっ、どうせわたしは駄乳だもんっ」

「い、いや、そんなん冗談に決まってるだろっ。お前の乳は町内一、いや日本一、いや世界一だっ」

「そんな事言われても全然全然嬉しくないよっ」

「じゃ、じゃあ長森の乳は宇宙一だっ」

「そういう問題じゃないよっ！」

055　約束

スタート地点からどれだけ歩いたのだろうか。およそ五、六時間は経っているはずだ。海が近いのだろう。潮風が吹きぬける廃工場——というにはあまりにも寂れた——へとたどり着く。

「ここで休憩しよっか。でも、困ったものねぇ……ねぇ、これからどうする？」

不安げに芳賀玲子（七十番）が柏木楓（十八番）を見やる。特に面識があったわけでもない。ただ、スタート直後からなんとなく一緒に行動していた。見も知らぬ他人だけど、一人でいるよりはずっとマシに思える。先の放送——死亡者の名前に知り合いの名前があった。動揺、混乱……だが、それ以上に非現実的な今の状況をリアルと感じられない。

「これから、ですか……生き残ります」

淡々と楓が呟く。

「うーん、それはそうなんだけどね」

玲子は支給された武器——釘バット（特注）で地面をこする。確かに見てくれはよくないが、結構殺傷力がありそうだ。木製なんだろうが、見た目よりずっと軽い。銃には劣るかもしれないが、自分に銃が操れるとは思えないし、自分の身を護るのには割

楓は、自らのウェポンである一冊の本を差し出す。
それは広辞苑やコミケカタログのように厚い。
『民明書房』（角が結構痛い）
「なんか、その釘バットより重いんですけど」
「んー……あっ、それがあればいい解説者にはなれそうかもっ！」
「……額に大往生なんて、嫌です」

056　高槻の電話

はい長瀬さん。
ええ、こっちは順調ですよ。スタート地点『Ⅳ』の管理連中が皆殺しにされたみたいですけどね。
どうせちっぽけな命でしょ、はっはっは。
結託して刃向かわれると面倒なんで、あの五人ははめときましたよ。ゲームに乗った連中に殺されるのもすぐでしょう。
ええ、『黒い悪魔』は除外してありますよ。『殺さ

と、いや、かなり適していた。
「一つ聞いていいですか？」
「……うん？」
「玲子さんは、私が恐くないんですか？」
「へっ？」
「なんでもありません……」
「……」
「……」
「ねぇ、私達、もう友達だよね？」
「え、は、はい」
「だったら、一緒にココを出ようね。約束だよ☆」
「……はい」
玲子さんは、ずっと強い人だ。私の不安や疑念をすっと消してくれる。
（この人でよかった）
本当にそう思う。
「でも、足手まといじゃないですか？　私コレだから」

せるわけにはいかない』でしょう？
　え？　はっはっ、わかりますよ。
『あれ』の調子ですか？　快調ですが。『あれ』は解放したくないでしょう？　捕まえるのに金かかってるんだしねぇ。ＦＡＲＧＯも大きな犠牲を払ってるんですから、はい。
　奴の動向？　それもばっちりですよ。
　――水瀬秋子――前々回のゲームの生存者ね。そんなに危険な奴には見えませんけど、まぁ気をつけるに越したことはないですか？　えぇ、じゃあ、そういうことで。大丈夫ですって、最後の一人まで、ゲームを続行させてやりますよ。――俺を誰だと思ってるんですか、くっくっ。

057　（無題）

「ねぇ、国崎往人？」
「……なんだ」
「うに、つまんないね」
「あぁ」
　往人とみちるは商店街を歩いていた。商店街とは言っても、あの田舎町とはわけが違う。孤島の割に大きくて、状況が状況じゃなければ、沢山の人で賑わっていただろう。そんなところを、たった二人で歩いている。むなしさも感じるというものだ。
「ねぇ、国崎往人？」
「……なんだ」
「うに、つまんないね」
　ボカッ！
「にょめりゅ」
「同じことを繰り返すな」
「うぅー」
　こんなやりとりも、あの町で、美凪とみちると三人で過ごした日々なら。こんなにつまらないものではなかったのに。ずっと、変わらないまま、どこまでも暖かく過ごしていたかったのに。自分の使命も

忘れて、三人でいたかったのに。
「みちるチョーップ」
物思いにふけっていた隙をねらい、みちるが攻撃をしかけてきた。
「待て」
普段なら食らってやったところだが、今回は顔を押さえ付けて防ぐ。
「うにゃ、なにすんだー」
「……人がいる。一人じゃない、複数だ」
「え？」
気配がした。あの曲り角にある家の中からだ。
いや、家じゃない、喫茶店？
「様子を見てくる、ここに隠れてろ」
「……うん。国崎往人？」
「……なんだ」
「気をつけてね」
「……あぁ」
みちるの声に後押しされ、店の前へと移動した。

デザート・イーグルを構える。曇りガラスになっていて、中は見えない。
誰がいるのか。
話がわかる奴か、そうでない奴か。
前者の可能性もありうる。外からいきなり銃撃するのも気がひけた。
(正面から、あくまで慎重に)
入口に立つ。そして、思いっきりドアを蹴り開け、その場に伏せて銃を構える。
「あら、いらっしゃい」
なんとも緊張感のない声が聞こえ、往人は唖然とした。
「一休みしていきませんか？」
今だ伏せている往人に向けて、カウンターの奥から声がかかる。
「わ、またお客さんだよー」
「そうみたいですね」
「……」

とりあえず危害を与えるつもりはないらしい。ゆっくり立ち上がって、訊ねた。
「あんたら、こんな所で何やってるんだ？」
「コーヒー飲んでるんだよ」
「飲んでるんです」
沈黙。
「……マジか？」
「マジです」
カウンターの奥の女性が答える。
「あなたも飲んでいきますか？」
「……毒を盛る可能性だってあるだろ」
のほほんとした空気に包まれながらも、とりあえずそう口に出す。すぐに非難の声があがった。
「わ。この人酷いこと言ってるよ～。お母さんのいれたコーヒー美味しいのに～」
お母さん？　テーブルに腰掛けてるカウンターの女性が、この女の子の母親か。そういえば、よく似ている。
「本当にそう思いますか？」
「いや……」
思わずそう答えていた。とても、そんなことをするように思えなかった。雰囲気だけで判断するのは危険だが、もっと深いところで無条件に信用していた。
「おいしいご飯も作れますけど」
きゅぴーん。
「マジか」
「はい」
実はさっきから腹が減っていた。鞄の中の食料でも腹は膨れないこともないが、まずいのだ。
「じゃあ、遠慮なく御馳走になるぞ」
「偉そうだよ～」
また非難の声が上がる。カウンターの女性は「了承」と笑うだけだった。
そして店内に足を踏み入れ、
「みちるを無視するなー！」

背後からみちるキックを食らい、その場にうずくまった。
自己紹介が始まった。カウンターに立っている女性が、水瀬秋子。テーブルについている娘の名は水瀬名雪。もう一人髪の長い女の子は、姫川琴音といった。
「国崎往人だ」
「みちるはみちるだよっ」
これ以上ないくらい簡潔だった。秋子に食事を作ってもらい、食べる。
「うまい……」
「ありがとうございます」
他人の手料理を食べることなど稀にしかなかったが、今まで食べたどの食事よりも美味しかった。みちるは向こうのテーブルで、名雪と琴音と一緒に遊んでいる。
「蛇さんだよー」
「そうですね」
「にゃははは、ぽちって言うのだ」
最近の女の子は、蛇くらいじゃ驚かないらしい。
頭を抱えながら秋子と話す。
「あんた達はこれからどうするんだ。ずっとここにいるわけじゃないだろ。やる気になった連中がここを見つけたら……」
「大丈夫です」
何が大丈夫なのかわからなかった。
「大丈夫って。俺が急に態度を変えて、銃を向けるかもしれないんだぞ」
「そんなことはしないでしょう？」
笑って言う。
「そうかな。俺はこれでも、二人殺してるんだ」
すると秋子は少し真面目な顔になり、
「でも、無闇矢鱈に殺すことはしないでしょう」
と言う。
「どうかな……」

W.C

そう言うのが精一杯だった。
「私は、ここで静かに過ごすつもりです。最後には、あの子だけには助かって欲しい」
言って、名雪の方に目を向ける。連られて往人も目を向けた。こんな状況なのに、笑いあっている女の子達。心の奥には恐怖もあるのだろうが、それでも笑っていた。
笑顔は良いものだと思う。
出来る事なら、このゲームに巻き込まれてなお笑顔を失わない人達を助けたかった。以前の自分は、こんなことを思っただろうか。それもこれも、あの町で過ごした影響だと、心底思う。
「俺は探してる人がいるからな。少したったら失礼するよ」
「そうですか、お気をつけて……」
そこで声を切り、一転真剣な表情になる。その理由は往人にもわかった。
「戦闘か？」
「そうですね」
「様子を見てくる。みちるを頼む」
小声で告げる。
「わかりました。私が絶対に守ります」
それだけ聞き、店の出入口へと足を向ける。
「あれ、国崎往人、どこ行くの？」
近くで起きている戦闘に気付いていないみちるが言った。
「散歩だ」
言って、往人は店を出た。

058　少女と医者

「はッ……はッ……はぁッ……！」
観月マナ（八十八番）は森の中を一人、ひた走っていた。
『あの光景』を見た瞬間、マナの中で機能していた理性の箍は外れてしまった。

代わりに湧き上がってきたのは恐怖――どうしようもない恐怖だった。
気がついた時には、せっかく出会えた従姉を突き飛ばし、どこともわからない場所を全力で駆けていた。
（なんで……なんでヒト殺してるのよ！　バカじゃないの……!?）
足がズキズキと痛む。が、彼女の意思で歩を止めることはできなかった。
周囲は薄暗く、道も悪い。鋭く硬い下草や枯れ枝が、マナの腕や足を傷つけていた。
「キャッ！」
落ち葉に隠れるように張っていた太い根につまずき、マナは派手に転倒した。
「痛……いたい……よぉ……」
緊張の糸が切れてしまったのだろうか。涙が後から後から溢れてきた。
擦り傷や切り傷で身体中が痛かったし、何より精神的なショックが大きすぎた。
（あの女の人……なんだって人なんか殺せるのよ……他の人もみんなそうなの？　わかんない……私も人を殺すの？　殺せるの……？　お姉ちゃん……藤井さん）
パキッと、どこかで枝を踏む音がした。
胎児のような姿勢で、木にもたれかかって座り込んでいたマナははっと顔を上げる。
「誰!?　誰かいるの!?」
その言葉に答えるものはいなかった。
どころか、サクサクと足音は徐々に近づいてくる。
「き……来たら」
一瞬言葉に詰まったが、すぐに続ける。
「来たら殺すわよ！　わ、私のレーザーで焼き殺してやるんだから……！」
「そうか。……よっと」
邪魔な枝を手で払いながら、足音の主が姿を現した。

暗い森のなかに浮かび上がる、ともすれば場違いに感じられる白。
白衣に身を包んだ長髪の女——霧島聖（三十二番）だった。
「来ないで！　殺すって言ったでしょ⁉」
「ありもしない武器でそう簡単に人は殺せない」
「え……」
ジャカッ！
聖が大きく右腕を振ると、握り締めた指の間に一本ずつ、計四本のメスが現れた。
「ひっ！」
「私は医者だ。しかも腕のいい医者だ。患者の嘘くらい見抜けないようではな」
聖は目を細めて笑うと、マナの方に一歩踏み出した。
「こ、来ない——」
ガカカカッ！
聖の放ったメスはマナの頭を紙一重で外し、正確に頭部を固定する形で後ろの木に刺さった。
「……ッ！」
「診察中は黙って医者の言う通りにするものだ。動くと可愛い顔に傷がつくぞ」
「え……」
問い掛けるようなマナの視線には応えず、聖は目の前で膝をついた。
「おーおー、随分と傷を作ったじゃないか。染みるぞ、これは」
抵抗できないマナの靴と靴下を脱がせ、白衣のポケットから消毒液を取り出すと、その中身を豪快に腕や足の患部に注ぐ。
「〜〜〜〜！」
「おお、耐えるか。見かけによらず気丈だな、君は」
「あ、当たり前でしょっ……！　動いたらメスで切れちゃうじゃない……！」
「おっと、すっかり忘れていた。それは気の毒なこ

とを」
　聖は悪びれずに言うと、刺さったメスを引っこ抜いた。
　それをポケットに突っ込むと、出した手には今度は救急バンドの箱が握られていた。
（あのポケット、一体どれだけものが入ってるのよ……）
　激痛に耐えながら、マナはずっとそれが気になっていた。

059　かっこつけ

　それで、ちゃっかり藍原瑞穂のマシンガンを拾っていたのは、
「夏といえば海っ、海といえば住井護っ」
　であった。海に特別な思い出がある訳ではないし、水中戦なら無敵という戦闘技能がある訳でもない。なんとなくのフィーリングである。夏の陽気は日が落ちてもなお人を浮つかせるのかもしれない。
　マシンガンはバックの中に放り込んでいた。いつでも取り出せるよう持ち手を手前側にしてある。願わくばそんな危険な武器を使いたくはないものだが。
　安全を守るだけならばこれだけで十分だ、とばかりにバタフライナイフを右手に持ち、住井護は森の中を散策している。闇の中での散策と言うのも相当に危険度が高いように住井自身も思うのだが、それでも日中に目立つ行動をするよりはマシだと思う。
住井は心の拠り所たるひとつの目的を胸に、音を立てないように慎重に、しかし、機敏に歩き回る。
　要は、従兄弟である北川潤と逢うためである。

　先程の放送で、聞いた事のある名前が呼ばれた。広瀬真希――クラスの女番長である。しかしまたスケバンとは古い言い方だなあ、と思いながらも。
「始まっちゃってるんだよ、な」
　言うまでもなく、言われるまでもなく、問い詰め

られるまでもなく、その呼ばれた名前の中に、自分が殺した少女の名前もあった筈だった。名前だって知らなかった。あの娘だってただ怖かっただけで、人を殺すつもりなんてなかったのかも知れない。なのに、オレは殺してしまったんだ。住井は腕が微かに震えている事を自覚する。

いや、自分が何もしなければ長森瑞佳が死んでいただろう。自分の判断は決して間違っていた訳ではない筈だ。

違う、違うだろう。

間違っているに決まっている。人を殺した時点で俺はゲームに乗ってしまったことになるのだから。

がさり、というやけに不用心な音がした。

どろどろになっていた思考が停止する。足を止めていつでも動けるように筋肉を緊張させた。踏みしめた落ち葉の音がやたら大きく感じる。早鐘を打つ心臓の鼓動が周りに聞こえているのではないか、気が気じゃない。

前方に感じる気配。相手の息遣いすら聞こえてきそうな程の濃密な質量に引き込まれそうになる。万有引力の法則はあらゆる場所で働く。自分とその草間の影で音を立てたものとの間にも、地球と月が引き合うような引力があるのだ。

住井はナイフを強く握った。汗が掌に滲む感触、焦りが心の湖を掻き立てる。落ち着け。落ち着け落ち着け落ち着け。落ち着かなければ、冷静にだ。

目を閉じて、心の湖の遥か奥深く、穏やかな湖中で思考する。自分が求めている北川潤の訳がない。それは解る。それでは北川潤以外の自分の知り合いか。否。折原浩平でも長森瑞佳でも七瀬留美でも、そのうちのだれの筈もなかった。

鞄の中にゆっくりと手を突っ込む。マシンガンの冷たい黒が湖の揺らめきを次第に和らげていく。

敵か敵じゃないか、実はそんなこと、どちらにしろ関係がない。敵でなければこれで脅して利用する

まで、敵ならばこれで殺すまで。そのような囁き声が確かに住井の耳元でする。
一歩踏み込む。相手がどんなであれ、マシンガンに勝てるような化け物などいるわけがないのだから。その時の住井には、唇の端に僅かに笑みを浮かべる余裕すらあった。

人生は面白いものである、と住井は思う。敵でも敵じゃない奴でもない人がそんな叢の中にいたなんて、誰が想像できるだろう。

「ひぃっ！」
声の主を見て、思わず住井護は感嘆の溜息を吐いた。
そんな、マシンガンに打ち勝つ化け物より余っ程稀有な存在が、そんなところにいるなんて驚きではないか。
草の上に腰を抜かし、割り箸（それが彼女の、見るも無残な支給品なのだろう）を片手に、がくがくと震える女性だった。
自分よりいくらか年上の人のようだが、幼さの残る顔立ち。僅かに色の抜けたショートカットの髪、嘘のように細い身体、清潔な色合いのツナギ、おっとりした目元。がくがくと震える薄桃色の唇。
ああ、なんて綺麗な人だろう。あんぐりと口を開けて、その身体全部を注視する。
住井護はその瞬間、この女性に恋をしまっていた。完全に一目惚れである。
「やめてっ、殺さないで、殺さないでっ」
涙を浮かべ嘆願する女性。その涙までもが美しい。
心の海が喜びで大津波を起こす。住井護は無抵抗のまま押し寄せる波に身を委ねる。
ああ、このような場所でこんな出会いが！
この人に抱かれて殺されるならそれは本望も本望、むしろそれこそが人生の目的だ。
「――バカな！　僕はあなたを護るために生まれて

きたんです」
住井は親指をこう、ぐっ！　と立てて言った。
イイ顔だった。
「僕が、この住井護が、必ずあなたを護ります」
その女性——澤倉美咲（四十四番）は、唖然とした顔で、マシンガンを持って笑う住井護の笑顔を見つめた。

060（無題）

「……はっ！　……ふっ！」
しゅっしゅっと風を切るワンツー。素人には出来ない身のこなし。
「……はぁ……でりゃあっっ！」
そして必殺の回し蹴りを放つ。技のキレは落ちていない。いや、むしろこの島の状況が脳をより集中状態にしていた。
八十一番、松原葵は住宅街の少しはずれ、小高い丘の神社にいた。
「…っふぅ、少し、休もうかな」
そういってつくため息は、決して特訓からくるものではなかった。
『殺し合い』
その事実はあまりにも葵にとって重すぎた。ヒトが実際に殺し合う、非日常的空間。
あきらかに、おかしい。
だからこそ葵は逃げる事も戦う事も考えずに、自分のいた日常、つまり浩之との放課後の特訓を思い出して、似たような神社に行ってシャドーをしていた。
「お水、飲も」
バッグからペットボトルを取り出して、喉を鳴らす。冷たくはなかったものの、ほどよく汗をかいた葵にはそれでもまぁ、満足のいくものだった。ペットボトルを戻そうとバッグの口を開けたとき、意識的に見ないようにしていた、黒い鉄の塊が視界に入

った。
……じわ
にわかに手に汗がにじむ。葵は良く考えてから、それを取り出してみることにした。ずしり、と重たい感触。やはり見るのをやめようとも思ったが、とりあえず見てみることにした。自分の厭な考えが的中しないように願いながら。
意を決して塊を取り上げた葵は奇妙な感覚にとらわれていた。砂漠の鷲の名を持つ大口径銃。ぽっかりと空いた銃口は自分の理性が吸い込まれてしまうかのようだった。
葵は、自分の事はそれなりによくわかっている。試合では相手を倒すことが出来るが、きっと戦いでは相手を殺せないだろうという事を。
それが当たり前。
それが日常。
でも、今ここに非日常への扉を開く鍵がある。葵が一番恐れた事。自分が生き残るために相手を殺めてしまうかもしれないという可能性。だから武器が使い物にならないものだったらどんなに良いかと思っていた。
しかし現実には、葵ほどの力があって撃ち方さえ誤らなければ、人に命中しなくても十分脅威となるモノが自分の手にあった。
いっそ、気狂いにでもなってしまったほうがどんなに楽だったろうか。あたまをくるわせて、ただひたすらにあいてをころすけものになれたら——
そこまで考えて葵はぶるんぶるんと頭を振ると、手の中の銃を地面に叩きつけた。
「……はっ……はあっ……そんなの……そんなの良いわけないですっ」
肩で息をし、奇妙な感覚にとらわれていた脳を正気に戻す。自分の見知った人たちが、自分とほぼ同年代の人たちが、傷つけ、殺しあう。
明らかな歪み。
どう考えても、良い筈が無い。

そう、良い筈が無いんだ。
自分は気狂いになれないんだから、正気な行動をするだけだ。先輩や綾香さんなら、きっと力になってくれる。みんなで、帰るんだ。
「……みんなで、帰るんだ」
そして葵はデザートイーグルを神社の軒下に捨て、丘を降りはじめた。非日常から偽りの日常へ逃げた少女は、彼女のほんとうの日常を取り戻すため、動き出す。

061　矜持

数分後。
「さて、以上をもって治療は完了だ。何か言うことは？」
「……ありがとう」
治療といっても消毒して絆創膏を貼っただけだったが、マナは素直に礼を言った。
「うむ。ところで君、まだ名前を聞いていなかったな。名前は？」
「観月よ。観月マナ」
普段であれば「人に名前を尋ねる時はまず自分から名乗るのが普通じゃない？」くらいのことは言うのだが、なぜだかこの女性に対してはそういう口をきく気になれなかった。
「観月くんか。私は霧島聖、医者だ。『霧島センセイ』と呼んでくれて構わないぞ」
見た目よりもひょうきんな口の利き方をする人だ、とマナは思った。
「さて観月くん、君はどうしてこの島までやって来たんだ？」
「好きで来たわけじゃないわよ。学校の帰りに妙な男の人に話し掛けられて、急に眠くなって……気がついたらこの島だったわ。何が目的か知らないけど、誘拐の手口としちゃ月並みね」
「ふむ、似たようなものか……それで、これからど

うするつもりかな」
「――『ゲーム』に乗って殺している人を見たわ……私が言えたことじゃないけど、迂闊に動くのはもう危険ね。とは言え、死んでも人殺しになんかなれないし……まずはお姉ちゃんや藤井さんに合流して、それから考えるわ」
「探すべき人がいる、というわけか。武器は何を貰った？」
「これよ」
マナは服の胸ポケットから小さなキーホルダーを取り出すと、チャラチャラと揺らした。
一回百円のガシャポンに入っていそうな、いかにも安っぽいレーザーポインターだ。
「なるほど、それでレーザーか」
「バカみたい。こんなんじゃ身を守るのもできないじゃない」
マナは自嘲気味に呟いた。
ふん、と聖は腕を組んで言った。
「わかった。なら私の助手になるといい」
「……どういうこと？」
「さっき、君は『死んでも人殺しにはなれない』と言ったろう。私もそうだ。私は医者だ。先ほどの観月くんのように怪我をして、あるいは戦闘で傷ついた人間を見つけたら治療する義務がある。誰かが私に襲い掛かってきたとしたら、殴り倒してでも説得する。例え、その行動が命取りになっても、だ」
聖は一旦言葉を切って、
「この島で動くにあたって、同行する人間の数は多いに越したことはない。が、人殺しが医者の看板を上げるわけにはいかない。連れにも人を殺してもらうことはできない。だから、君のようなタイプの人間が一緒に来てくれると非常に助かるわけだよ」
「……私に何かメリットは？」
「ここで私と別れて、一人で行動するよりは多分死ににくくなるんじゃないかな。私は意外と強いぞ。その上、怪我をしても即治療可だ。超お得だと言っ

ても過言ではあるまい」
「わかったわよ……」
マナはスカートについた土をパンパンと払って立ち上がった。
確かにそうだ。自分には人は殺せないし、襲ってくる人間に対抗する手段もない。
信頼できる誰かに出会う前に、殺されてしまう可能性は十分にある。
正解の選択肢は全くわからない。ならば、霧島聖という女性に賭けてみてもいい。
そう思わせる何かが、彼女にはあった。
「モタモタしている時間はない。行くぞ」
「はいはい」
マナは、薄闇の中に浮かび上がる白衣の背中を小走りで追いかけて行った。

062　理性

僅かに危機感のようなものは抱いていたものの、結局七瀬彰は柏木初音と共に森を抜けることにした。
僅かに暗闇が薄れかかっているような時間に至っている。空を見上げるとほぼ同時に穏やかな風が吹き付けてきて、夏の熱気を一瞬忘れてしまうような気持ち良さが泥に汚れかかった心を洗濯する。
ううん、と大きく伸びをしてこちらを見ると、小柄な少女――初音は微笑みを漏らした。疲れが節々に見えるものの、自分と繋がった手に多少は安心を覚えているような雰囲気だった。
「ありがとう、七瀬のお兄ちゃん」
愛らしい笑みを見せて微笑む姿に多少なりどきんとする。いやいや、自分には美咲先輩がいるじゃないか、馬鹿野郎だな僕は。というかそれ以前に十は年下と思われる少女だろ相手は。ロリコンかい僕は。

違うやろ、ちゃんとおっぱい大きい娘が好きだろ？
　自分にツッコミを入れる。どうにも空しい。
「まだお礼は良いよ。お姉さんかお兄さんを見つけなくちゃいけないんだろ？　それまでありがとうは言わなくて良いよ」
　お兄さんぶって諭すように言うと、少しだけ初音は迷ったような顔をする。きっと自分の優しい言葉を真っ向から受け止める事に不安を覚えているのだろう、戸惑った表情がどこか痛々しい。少しの間をおき、初音は決心したように言う。
「あ、あのね、七瀬のお兄ちゃん。これ以上迷惑かけられないから、わたし、」
　勿論そんな言葉は遮るに決まっている。彰は優しく、ちょんちょんと初音の頭を撫でるように叩くと、
「バカだなあ、君がそんな事を気に病む必要はないんだよ。どうせ僕も人を捜してるわけだし。ついでだと思ってくれれば良いからさ」
　と、照れ隠しみたいにそう言う。すると、初音は胸のつっかえが少し楽になったのだろう、
「七瀬のお兄ちゃんも？　恋人さん？　そうだよねっ、お兄ちゃんすっごくかっこいいもんね」
　天使のような微笑みを見せて初音は訊ねてくる。ああ、有難う。二十年生きてきて生まれて初めて女の子にカッコイイって言われたよ。
　だからこそ、その質問に即答できない自分が情けない。なんなんだ畜生。
「いや、その、別に、恋人っていうか、うん、まあ、その、まあ、似たようなもんなんだけどさ、」
　小学生の前で見栄張らんでもいいだろ。心の中のもう一人の自分が冷ややかな目で自身を見つめてくる。言葉を発さない冷酷な自分自身の目に彰は胸を突き刺されるような痛みを覚える。ああ解ってるよ僕と美咲さんが恋人関係なんて戯言もいいとこさ！
「へえ……綺麗な人なんだろうなあ。どんな人？」
　興味津々という感じの笑顔。彰はその笑顔につられて、今まで友人の藤井冬弥以外に暴露した事のな

い、自身の想い人、澤倉美咲への気持ちを吐く。
「うん、僕には本当に勿体ないくらい綺麗な人でさ、頭も良いし、優しいし、脚本書く才能とかもあってさ」
うう、言っててなんかみじめになってきた。自分なんかに勿体無いとか言ってるけど、そもそも自分のものじゃないし、美咲さん。
「でもお兄ちゃんもすごく優しくてかっこいいよ！ほんとうに羨ましいなあ、その人」
彰の自嘲気味な感情を慰めようとしてくれているのだろう、少し顔を赤くしながら、聞き心地の良い優しい声で、すごく一生懸命な感じで初音はそう言う。
思う。本当に天使のようである。
「わたしもその、お兄ちゃんの恋人さんみたいな人になりたいなあ」
天使の笑顔。本物の天使がいるならその娘の名前は柏木初音と言うに決まっている。

——やばい。本気で可愛い。待て、待て七瀬彰。いくら美咲さんが振り向いてくれないからってそれはないだろう。ちゃんとお前はおっぱいが大きな人が好きだろう、
駄目だった。黒い精神がとぐろを巻いて、自分の胃の中で居を構える。
「そ、そういえばさ、初音ちゃんはボーイフレンドとかいないの？　好きな人とかさ」
胃の中の化け物を誤魔化すように、別に何の気も持たずにそう言ってみたのだが、初音は途端に顔を真っ赤にする。
「い、い、い、いいいいいいないよ、別にっ」
いるのか。
その瞬間、少し落胆した自分に愕然とした。
マジか。

「そっか……」
話題がちょいと途切れたのでちょうどいいと思い、

彰は訊かなければならなかった事を尋ねる事にする。
「そういえば初音ちゃん、初音ちゃんのお姉さんってどんな人なの？」
人を探しているのだという状況だというのに、ちょっと頭が冷静に働いていなかったようだ。彼女の姉たちの外見的な要素を聞いてもいなかった。話題変更の意図も込めてそう訊ねると、初音は赤くなっていた顔を元の真っ白に塗り替え、はしゃいだような声で答える。
「うんとね、千鶴お姉ちゃんはすごく優しくて、」
上手く伝わらなかったようだった。無闇に嬉しそうな初音を横目に彰は苦笑いしながら、
「いや、そうじゃなくて外見。君のお姉さん捜すのにさ、一応そういうこと知っておいた方がいいかな、って思って」
自分の勘違いに気づいたのか、初音はまた顔を真っ赤にする。こほん、と小さく咳。
「あ、うん。うんとね、千鶴お姉ちゃんは長い黒髪のすごく綺麗な人で、梓お姉ちゃんはショートカットのすごくスタイルのいい人。それで、楓お姉ちゃんはセーラー服を着たおかっぱのすごく可愛い人なの。で、耕一お兄ちゃんが、髪が短くて背が高くて、すごく優しい人」
嬉しそうに語る。その様子を見て、本当に、姉たちに逢わせてやらなくちゃ、と彰は心底思った。こんな子供が死んで良い筈がねえだろう。姉に逢わせたところで状況がどう変わるかは判らないが、それでもたかがフォーク持ちの手負いの貧弱とともにいるよりはずっとマシに決まっている。
ふと気付く。
耕一、という男の名前を出した時、初音は不自然なほど明るい声になったように思う。
初音ちゃんが好きなのはその耕一という男なのだろうか。
多分そうだろう。まあ多分、恋愛感情というには届かない憧れのようなものだとは思う。というか推

定十歳の少女に恋する推定成人男性などいたら彰はきっと愕然とする。
　こんな可愛い幼けな小学生に手ぇ出したら、本気でぶっ殺すからな。耕一。誰か知らんけど。
　本気の殺意を覚えている自分に愕然とした。
　マジかよ。

　海が見えてきた。未だに薄暗いままだが、
　——遠くに、光のようなものが見えたような気がした。
　陸の光か、そうでなければ船の光に決まっていた。粒のような光の点は、ここと日常世界が然程離れていない事を示している。だからこそ、ここと日常は死ぬほど遠いのだと思う。無意識のうちに彰は唇を噛む。
　考えなくちゃいけないのだ、なんとかしてここから逃げ出す方法を。そう、なんとかして、道を見つけなければならないのだ。だが、どうやって？
　このゲームの企画者。彰の脳裏に、焼くような記憶が甦ろうとして、しかしそれを理性が拒否する。
　あれがそうだったとして、自分には何が出来る。心が震える。このままでは心の震えは身体を伝わり、そしてこうして添えられた初音の手にも伝わってしまう。けれど思ってしまう、あの船の光に、どうして自分は手を伸ばす事が出来ないのだろう。
　その震えを身体に出してはいけなかった。それは勇気ではないと思う。彰は自分の横を歩く初音に、出来る限りの明るい声で、
「海だね」
「うん、——すごく気持ちいい風だね」
　初音は風を全身で受けながら、明るい声で言う。
「わたし、朝の海って初めてみた。本当に綺麗な海だね。今日は暑いし、泳ぎたいなあ」
　笑みをも漏らす。
「こんな状況じゃなければ、きっと、」

——笑みは崩れた。声も涙で途切れた。
涙声が漏れる、静かな海岸にさえも響かない海鳴りのような嗚咽。
当たり前だ。船の光は朝影のように眩しかった。彼女も見たに決まっているのだ、日常の火を。
「どうして殺し合わなくちゃいけないいんだろう。どうしてなんだろう」
初音の震えは、彰の手から伝わってきた。彼女の心は自分なんかよりずっと敏感で、自分なんかのよりずっと脆い。
そこに座り込み、初音は、声をあげて、泣いた。脆弱な海鳴りは脆弱な海鳴りでしかなく、その涙も泣き声も、冷たい海に吸い込まれていく。
こんな少女が、こんな過酷な状況に、真っ向から対峙して、耐えられるはずがないのだ。
もう、一応は大人の身体と、子供を卒業した心を持っている彰だって、絶望の海に沈みかかっていたのだ。たとえ誰かに出会い、それが知り合いで、束の間の喜びを得たとして。
余程の事がない限り、——皆死ぬのだ。
「嫌だよ。助けてよ。何でわたし達が、こんなっ」
叫びは海鳴りのように。涙は雨のように。
彰は、ただ、自分の太腿を襲う痛みが、次第に薄れているような錯覚を感じている。しかし当たり前だが、痛みがそんな簡単に薄れるわけがない。
だから、自分が強くなっているのだろう。
どうしてこんな事になったんだろうな。彰は確かに初音に出会う前、彼女と同じ疑問を抱いていた。今だって胸の底に、どうしようもない状況への憤りや憂鬱は眠っている。彰も、そこに座り、泣き出せたら良かった。
だが、そんなこと選択するつもりはない。
「大丈夫」
彰はいつも思う、大丈夫という言葉はひどく無責任だと。けれど、無責任なその言葉が、いつだって人を救っている事を彰は知っている。

「——お兄ちゃん」
彰は、背後からその細い肩を抱きしめる、震えていて、けれど、どうしようもなく暖かな身体。生きていたいと願う小さな命。
「僕が護るよ。初音ちゃんは僕が護る」
自分にこの島からの脱出法なんて思いつかない。けれど、彰は確信する。この島には、鮮やかな脱出法を考え付くだけの知能を持った人が確実にいる。ならやるべきことは決まっているのだ。無知で無力な自分が、それでもしなければならないことは、今、目の前で震えている少女を、護る事だけだ。
勇気を出せ、七瀬彰。こんな娘一人守れないで、美咲さんが守れるはずもないだろう。勇気は武器だ、それだけで知恵や力に対抗できるだけの、立派な。心の震えなんて忘れてしまえ。身体の震えなんてくそくらえだ。
柔らかな身体。甘い匂いがする。細い肩から力が抜ける。初音は頭を垂れ、自分の腕の下で、それでもまだ少し泣いたけれど、その震えがだんだん治まっていくのは、彰の手にも判った。
「そろそろ行こう。君のお兄ちゃんたちを捜そう」
「——うん」
顔を赤らめて、初音は立ち上がる。
彰は、当然のようにその手を取る。
彰の力はこの時生まれた。本当の意味での勇気は、得てして誰かのために力を振るおうとした時得られるものだ。右手にはフォーク、右肩には鞄、そして左手には、護るべき少女。
背後で初音が呟く声がする、
「ありがとう、お兄ちゃん」
彰はなんだか照れくさくなったけれど、同時に自分の胸で、暖かな何かが生まれているのを感じる。

それが勿論、勇気だった。

063　修羅

一人の足音と、それに僅かに遅れて機械の駆動音。
先を行く人物の足取りはおぼつかない。眼差しは既に虚ろ、顔面は蒼白だ。恐らく、この男の命、そう長くはないだろう。だが、それでも……九品仏大志は歩みを止めない。
「吾輩の命は……あさひちゃんの物……あさひちゃんを狙う輩は……吾輩が、排除する……」
すでに意識も朦朧としているのだろう、大志は先ほどからこの言葉をうわ言の様にぶつぶつと呟くだけだ。その心に残るのは、あさひへの愛と、それを狙う輩への殺意のみ。
修羅が、歩く。獲物を求めて。
そして、修羅は、修羅を呼んだ。
「………」
気がつくと、目の前に一人の影。暗がりの中で、それがにやりと口の端を吊り上げたのを見えた。
大志は本能で察知した。
奴は危険な存在だ、と。
「ゆけッ！　先行者」
今の状態での精一杯の声を絞り出し、大志が攻撃を指示する。しかし、聞こえたのは中華キャノンの発射音では無く、爆発音だった。
「なッ……！」
大志は驚愕の表情で先行者だったものを見る。その機体からは火の手が上がり、ばらばらと部品が溶け、崩れ落ちて行く。
相手の男――柳川裕也は余裕の表情を浮かべ、得意げに語り始めた。
「気付かなかったのか？　俺がこれを仕掛けていた事に」
と、掌にプラスチック爆弾をぽん、ぽんと跳ねさせている。
「……くッ」

大志は歯軋りした。柳川は続ける。
「そのロボットには大層な武器がついていたようだが、そうなってはただの鉄屑だな。これで貴様の勝てる見込みは、万に一つも無くなったと言う事だ……ククク」
それを聞き、大志の表情が緩む。
「フン、覚悟を決めたか？」
柳川が一歩一歩、歩み寄ってくる。大志はきっ、と柳川を睨み付け、笑みさえ浮かべ言い放った。
「……ならば、それを覆して見せれば、良いのだろう？」
その刹那、大志は跳んだ。
満身創痍のこの体のどこにそんな力が残っていたのか、本人にも分からなかったが、大志は絶叫する。
「あさひちゃんに牙を向ける不届き者は、吾輩が全員始末してみせぇぇぇぇるッ!!」
しかし。
柳川の読みは、残酷なまでに大志の行動を予測しきっていた。柳川の袖元から覗くスペツナズ・ナイフの存在に大志が気付いたときには、もう遅かった。
「ぐ…………ッ」
密着した状態となった二人。
大志の胸には、ナイフが突き刺さっている。
冷徹な笑みを浮かべる柳川。
「誰を守るのかは知らんが、相手が悪かったようだな……」
柳川の高笑いを聞きながら、闇に落ちて行く大志の意識。
(死ぬのか、吾輩は……愛する者に牙を剥く者一人始末できずに……)
腕に力が入らない。足ががくがくと震える。目が霞む。意識が切れそうになる。
だが……
(…………いや！)
「吾輩はッ！　まだ死ぬわけには……いかんッ!!」
正真正銘、最後の力を両腕にこめる。胸の出血が

一層激しくなる。柳川が一瞬怯む。その一瞬の隙に、大志はプラスチック爆弾のリモコンを柳川から奪い取る。
「グッ……しまった！」
　柳川の表情から余裕が消え、見る間に焦りと怯えに変わって行く。
「フッ、プラスチック爆弾をわざわざ見せびらかす為に一個持っていたのが命取りになった様だな」
　大志は血を吐き出して、真っ赤になった唇をニヤリ、と吊り上げた。
「……くッ、良いザマだな。何十人も居るであろうあさひとやらに牙を向ける者の一人でしかない俺と心中とはな」
　精一杯の虚勢を張って、柳川もまた笑う。が、怯えの色は隠しきれなかった。
　大志は顔を上げ、柳川を睨み付ける。
「……違うな、あさひちゃんに牙を向ける内の一人であるお前だからこそ、吾輩の死にも意味がある！」
「ひ……ッ！」
　柳川は慌ててプラスチック爆弾を投げ捨てようとするが、もう遅い。カチリ、と渇いた音が響き、そして辺り一帯が閃光に包まれた。
（勝手な頼みかもしれんが……あさひちゃんの事は頼んだぞ、同志和樹よ……）
　自分の肉の焦げる匂いを感じつつ、大志は思ったが、それもすぐに出来なくなった。
　後に残ったのは二つの消し炭のみだった。
　表情など確認出来ようもないが、それでも片方……九品仏大志だったものの顔は笑っている様に見えた。

三十四番　九品仏大志　死亡
九十八番　柳川裕也　死亡
【残り82人】

064　殺害者

歩道を行く影が一つ。
氷上シュンである。
彼は観鈴を晴子に預けたあと、ただあても無く歩いていた。
意味も無く殺し合いに参加することだけはしない、そう、心に誓っていた。
この状況に順応できず、愚かにもゲームのってしまった人間に、わけもわからないうちに殺されていく人間も多いのではないか。
そう思った。
恐い。
確かに恐い。
でもそれ以上に痛い。
心が痛い。
それはつい昨日まで笑いあっていたような友達が、次の瞬間どこにもいなくなってしまう恐怖。
そして、そのような友達と呼べる人間が、殺す側に回ってしまうという恐怖。
違う。
絶対にそんなことは間違っている。
シュンは思った。
みんなで生き残る方法がどこかにあるはずなんだ。
そのためには、みんなで協力しなくてはならない。
殺しあうなんていけない。本当の敵は、このゲームを仕組んだ連中なのだから。
既に幾人もの命が奪われている。本来なら一刻の猶予もならない。
しかしシュンには策が無かった。
一人で首謀者のところに乗り込んでいっても、あっさり殺されるだけだろう。
死にたくない。
いや、もともと余命幾ばくも無かったこの体だ。
もうそれはいい。せめて、無駄死にはしたくない。

おそらく僕はここで死ぬだろう。誰かに殺されるかもしれない、その前に体が限界に来るかもしれない。だけど、僕がそうなっても、まだたくさんの人間が『ここ』に残される。

彼らに何か残しておきたい。

特に、浩平君には。

考える。

何度も頭を悩ませる。

しかし総じてそれは、何もできないという結論に落ち着いてしまう。せむかたもなく、シュンは歩いていた。

「永遠の世界ですら、ここよりは近い場所だったと思うよ」

シュンは一人ごちた。肩にずっしり重い荷物。中身を見ても、シュンには良く分からなかった。

「貧乏くじだったのかな」

苦笑する。

でも逆に拳銃とか、刃物でなくて良かったとも思う。そんなものを扱いたくはないし、扱えるとも思わなかったから。

整備された歩道を歩く。

森の中や、島の中心近く……いわゆる山を行くより、よほど楽に行ける。だがそれに反して足取りはひどく重い。気持ちというのはこういうところに現れるものなんだな。シュンは改めて理解した。

百人という人数――もうその数ではなくなったが――がいたというのに、なかなかほかの人間と会わないものだ、と思う。

「……いや、殺しあうくらいなら顔をあわせないほうがいいか」

彼は立ち止まった。視界に商店街が入ったからだ。

「これは……静かだな」

本来ならもっと活気があってしかるべき場所だった。それだけに、シュンの目にはそこがさびしく映る。

入るべきか？　そうしないべきか？

シュンは迷う。誰かいるのかもしれないが、それが悪意ない人間だとは限らない。
そのとき、
キ――――――ン
辺りに巨大な爆音が響く。その影響で、耳の機能が一時的に麻痺した。
「何だ……一体？」
……近い。
シュンはその音の残滓を便りに、爆発の中心へと向かった。
「これは――」
そこはひどいことになっていた。
整備されていたはずの道が粉々に飛び散り、まるで原型の分からないことになっている。その規模、半径八、九メートルといったところか。中心には黒い消し炭のようなものが残っていた。
……そして、それがかつて人であったものだということに気付くまで、少しの時間を要した。

「こんな……馬鹿な」
絶句するシュン。
こんな、こんなことって無い、
人間の尊厳を完全に無視している……
この人たちにとって、死すらも満足に与えられなかったようなものだ。だって……
この人たちは、人間らしい死ではなく、単なるものとしての最後を迎えさせられてしまったのだから。
同じ死、だけど……こんなにひどい死もない。
「あなたたちは馬鹿だよ……」
「馬鹿はあなたです」
「!?」
ダアン！
一発、響く銃声。
「が……」
銃弾を受け、倒れるシュン。爆発地をまたいだ、ちょうどシュンの反対側から、発砲した者が姿を現した。

――里村茜。
茜は倒れたシュンに近づいて言った。
「しょせん、死んでしまえばただの肉塊に過ぎませんん」
「ふふ……君か……まさか君にやられるとはなぁ……」
倒れたままで、彼は小さくつぶやいた。幸運にも銃弾はシュンの急所を外れていたのだ。
「まだ、息があったんですね。でもここまでです。一人で永遠へ行ってください」
「……永遠は、死が、その入り口足り得るばかりでは……無いよ」
「…………」
顔をしかめる茜。そして彼女は再び、コルト・ガバメントをシュンに向ける。
「そこまでだ」
「!?」
驚愕の表情をあらわにする茜。そのセリフはシュンが言ったものではなかった。
商店街のほうから現れた三人目――国崎往人は、静かにデザート・イーグルを構えていた。

065　すれ違い

橘敬介（五十七番）は、観鈴を探し彷徨っていた。自分の娘が殺戮ゲームに参加して生き残れるはずがない。
(観鈴……お前だけは助けてやるからな)
そう考えながら歩き続けていた。
その時だった。
「！　……何の臭いだ？」
敬介は異臭を感じた。と、同時に腹の中から胃液がこみ上げてきた。
(ウゥ……ウェエ……)
口を押さえながら臭いのする方向に歩いてゆくと、そこには何者かが争った痕があった。

「死体の焼けた臭いか……」
敬介は誰かもわからない二人の死体を見つめていた。体がほとんど原型をとどめていない死体、敬介はこれが現実だと改めて実感した。
「こんな場所には用はないな……」
敬介がその場を立ち去ろうとした瞬間、すぐ近くでで女の悲鳴が聞こえた。
「キャアアアアアア！！！！」
敬介が振り返ると、そこには恐怖で顔をこわばらせた桜井あさひ（四十一番）がいた。
「あ、ああ……あぁぁ……」
「大丈夫かキミ、しっかりしろ」
「イヤァ！　来ないで人殺し!!」
あさひは敬介を人殺しと勘違いしていた。
「違う、私じゃない」
「お願い！　殺さないで!!」
あさひは無惨な現場を目にして混乱していた。
「落ち着くんだ！」
敬介は大声で叫んだ。その声にあさひは我に返った。
「大丈夫だ、何もしない。キミは何の心配もしなくていい」
「……ごめんなさい」
「別に謝らなくてもいいよ。こんな状況じゃ仕方がないさ」
「……殺し合って、死んじゃったんですか。あの人達……」
あさひは誰だかわからない二人の焼死体の方を見ながらそう言った。
「そうらしい。ああいう風にはなりたくないな」
「なんで、こんなことしなきゃいけないんでしょうか……」
「誰もこんなことはしたくないさ。でも、今は……」
敬介は口を濁した。それ以上は口で言いたくはなかった。

（殺らなければ、殺られるんだ）
敬介は辺りを見回した。何か使える物はないか……現場から少し離れた所に二つのバッグが落ちていた。一つは小型爆導索。もう一つはC４プラスチック爆弾が十個、しかしリモコンはない。
「接近戦向きじゃないが、何かの役に立つだろう」
敬介はそれらを自分とあさひのバッグに詰め替えた。彼らはハズレのバッグを引いていたのである。
「さあ、行こう。誰かがここにやってくるかもしれない」
「あ、はい……」
敬介達はその場を離れた。
あさひは大志の死を知らずに……。

066　それは、現実……

既に誰もいない、住宅街の中の一つの民家……そのある一室で深山雪見（九十六番）は塞ぎこんでいた。
「みさき……澪ちゃん……」
その声に、二人が笑いかけてくれることはもう二度とない。
……嘘よ……悪い冗談でしょ!?
みさき……澪ちゃん！
雪見はその放送を聞いたとき、狂いそうに取り乱しながら、あてもなく駆け出していた。そのとき、すでに狂気にとり憑かれた人間に会わなかったのは幸い……もしかしたらそれは不幸だったのかもしれない。
（みさきなら、きっとここにいる！）
そんなとき見つけたひとつの学校。母校と比べてもそれほど造りの違いない場所。いい風が吹いていた。みさきの好きそうな風。
「みさ……き……」
そこで目にしたもの、それは……
それからどうなったかは覚えてない。

誰かを殺した……もしかしたらもう私は殺されたのかもしれない。そんな混濁した精神状態のまま手に握られたものを見る。
コルトマシンガン。
予備のマガジンは五つあった。
（私は多分ここで死ぬんだろう）
色を失った瞳でその銃をみやる。
（だけど、みさき、あなたの敵だけは、絶対に許さない……！）
絶望の中で唯一雪見い出せた結論はそれだけだった。
もうすぐ、またみさきに会える。
だけど、やらなきゃならないことがあるから。

067　あぅーっ！

「あうーっ！　おなかすいたーっ！」
声をあげながら歩いていたのは沢渡真琴だった。
なんで私はいつもこう一人なんだろう、そう思いながら食事を探して歩いていた。
支給品の袋に入っていた食料はすでに全部なくなっていた。それは全部、自分のせいだったのだが。
私はスタートしてから、ずっと一人だった。
なにもわからないまま歩いていると、池のほとりについた。ちょっとそこで休憩しよう。そう思って近くにあった切り株に腰をかけ、支給品として渡されていた袋を開いた。そこに入っていたものは、パチンコと、鉛玉がたくさん入った箱、それに食料と水だった。
私は、その中からパンを手にとって口にした。あまり、おいしくなかったけど、少しはおなかの足しにはなった。
立ちあがってふと、池を眺めた。
そこには数匹の、青く光った魚がいた。
きれい、と私は心の底から思った。
そして私は、もう一度支給品の袋を開け、パンを

手にとった。
　それを小さく千切って、池に投げる。すると魚たちがたくさんそこに集まってきた。
　うれしくなって私はもう一度、パンを千切って投げた。すると魚はもっとたくさん集まってきた。
　そんなことを繰り返していると、パンはいつの間にかになくなっていた。
　そして、私は食料を探すことを目的として森を歩いていた。なんとなく、動物を狩るのは躊躇われたので、食べられそうなきのこや木の実を探しては、バッグにつめていった。木の実をとるのにはパチンコが役に立った。ちょっと高いところにある木の実もパチンコでパン、と枝を折れば落ちてきた。それをキャッチする。
　それを繰り返してる最中だった。
　私はおいしそうな赤い木の実を見つけた。そこにめがけて、私はパチンコを打った。
「Ah! What's!?」
　そこから落ちてきたのは金色の髪をした女だった。

068　糾弾者

「そんなに殺すのが好きか？」
　往人は静かに問う。
「お前、血のにおいが強いな。何人殺してきたんだ？」
　本当に匂いがかげるわけが無い、往人は彼女の物腰からそれを判断した。
　茜は答えない。
「見境無く殺してきたようだな、やはりいると思ったさ。お前のようにこのゲームにのった殺人者が」
「それは、あなたも同じでしょう」
　自嘲だろうか……軽い笑みを浮かべて茜は言った。
「……そうだな。だから、俺にはためらい無くお前が撃てる」
　チャキッ、と音が立つ。往人がデザート・イーグ

ルを構えなおした音だ。彼の言葉どおり、既に撃鉄は起こされている。そして茜もそれに気が付いていた。この男は本当に言葉どおりに私を撃つだろう、と。

膠着状態が出来上がっていた。

茜は撃てない。

撃った瞬間に自分も撃たれるのは必至だったから。

往人は撃たない。

一発で即死させることができれば問題は無い。

しかしこの中途半端な距離でそれをやるのは、やや成しがたく思えた。失敗すれば、死ぬのは自分ではなく、そこに傷ついて倒れている少年なのだ。

だが、この状況は決して往人に有利であるばかりとは限らなかった。膠着が続けば、その間少年はどんどん弱っていく。そうすればいずれにしろ彼に訪れるのは死しかない。

彼を見殺しにして茜を殺す。それはとても魅力的な選択に思えた。

だが……

『でも、無闇矢鱈に殺すことはしないでしょう』

『その……殺しちゃったの？』

『じゃあ君はなぜ僕を殺さなかったの？』

頭によぎる言葉……それが俺を呵責する。

何で警告した？　気付かれる前に撃てばよかったのに。ひと時の感傷が、俺を甘くさせたというのか……いや違う、あの距離では一撃で当てられない。あの女の発砲を止めるために、あえて姿を現したんだ。

往人はあえてそう思い込むことにした。

「お前、今は見逃してやる。殺されたくなかったらさっさと消えろ」

往人は言った。

「……いいんですか、私を生かしておいて」

「お前を殺すより、そっちの奴を助けるほうが大事だ」

往人はチャキッと銃を鳴らす。

「……別にいいんだぜ、お前を殺しても」
ほんの少し、声のトーンが下がる。往人の瞳が、わずかに曇る。
「…………くっ」
茜は少年に向けた銃を返し、往人を牽制しながら後退する。
「私を生かしておいたことを、後で後悔しても知りませんよ……」
「知るかそんなこと」
往人はそれを見てシュンのそばに近寄った。
「！」
その瞬間を狙って、茜は往人を撃ち殺そうと拳銃を構える。だが、
ギャインッ！
往人は自分の腕ごしに発砲した、
——茜の左肩へと。
「アグッ!?」
肩を劈く痛みに、茜はうめいた。

「警告はしたはずだ……俺がその気にならない内にさっさと消えろ！」
何事も無かったようにシュンを起こす往人。だが、その姿勢はいつでも発砲できるものとなっている。
「……あなたは必ず殺します、この私が」
右手で肩を抑えた状態で、茜はそうつぶやいた。
「そのときは、多分お前が死ぬときになるな」
彼女のつぶやきに、往人はそう応えた。少し息が荒い少年を抱え上げ、大丈夫かとたずねてみる。
「……なんとか、まだ生きていられるみたいです」
「それなら大丈夫だ、町に着けば少しはまともな処置が受けられる。少し、我慢しろ」
シュンはうなずいた。彼に肩を貸して歩き出す往人。そしてその頃には、既に茜の姿は見えなくなっていた。

069　格闘少女

「お姉ちゃん。どこぉ？」
　霧島佳乃（三十一番）は、閑静な住宅街を駆けながら叫ぶ。姉である霧島聖（三十二番）を探しているのだ。
「おかしいなぁ。さっき、白衣を着た人がこっちに走って行くのが見えたのに」
　先程、この住宅街で聞こえた銃声。恐怖よりも好奇心が勝った佳乃は現場へ赴き、そして白衣の女性が遠くへ去るのを見付けたのだ。
『きっとお姉ちゃんは誰かに追われてるんだ。助けてあげないと！』
　佳乃には、姉を助ける手段があった。
　右手のバンダナ。これを外せば、魔法が使える。大人になるまで外してはいけない約束だが、緊急事態だ。きっと大丈夫だろう。
　佳乃は一人頷くと、走るスピードを上げる。
　――純粋な彼女の想いは、他人が見たら、馬鹿げた御伽噺だと笑うだろうか？
　視界の端にちらりと白い服が映る。
「あ、お姉ちゃん？」
　ひゅん。
「!?」
　右腕を何かがかすめた。
　驚いて見やると、黄色いバンダナを突き刺し、ぶらぶらと揺れている――矢。
「な、何？」
「やはり、腕が鈍ってるようね。頭部よりも、その黄色いバンダナの方に狙いが行ってしまったわ」
　冷たい声がした。その声に佳乃が振り向くと、そこには白衣を着た女性がショートボウガンを構えて立っていた。
「……お姉ちゃんじゃ、無い」
「そうね。人違いでごめんなさい」

「そ、そういう危険なものを人に向けて撃っちゃダメなんだよ」
「そうなの？」
白衣の女性、石原麗子（六番）は佳乃に狙いをつけたまま淡々と語る。
「私も、無駄に狩りをするつもりは無かったの。でも、あなたが馬鹿みたいに『お姉ちゃん、お姉ちゃん』とうるさいから黙ってもらうことにしたのよ。……それじゃあね」
ひっ、と佳乃は息を呑んで身をすくめる。それを見た麗子は、満足げに笑みを浮かべた。
その時——宙をメイド服が舞った。
「でええええいっ‼」
メイド服の少女——柏木梓（十七番）は、麗子に向かって跳びかかる。狩りの現場を見つけて、なりふり構わずの突進だった。だが、麗子は慌てるでなく、すっと梓の方にボウガンを構え直すと笑う。
「まるで猪ね。空中の標的は狙い易いのよ……じゃあね、猪さん」
ひゅん、と風を切る音がして、矢が梓の左胸に突き刺さった。苦痛に顔を歪めながら、梓は麗子との距離をわずかに開けた所にもんどりうって倒れる。
「楽に死ねるように心臓を狙ってあげたわ……さて、ごめんなさいね。待った？」
麗子は佳乃の方に向き直ると、再度ボウガンを構える。佳乃はその場にへたり込んで動けない。逃げようとするが、手はいたずらに地面を掻くだけだった。その様子に麗子は笑う。
と、その表情が凍り付いた。そのまま、ぐらりとバランスを崩す。
「え？」
そのまま視線を落とすと、ニヤリ、と笑みを浮かべている梓と目が合う。梓の足払いが、麗子のバランスを崩したのだ。麗子は察した。こいつ、防弾チョッキを身につけている！
「く……このおっ！」

「遅いっ！」
梓を殴りつけようと麗子は拳を振り下ろすが、梓はそれを軽々と右手で弾くと、左の拳を麗子のボディーに沈める。
「……!!」
かは、と麗子が前のめりになったところに、梓は躊躇せず右の拳を麗子の顔面へと叩き込む。鈍い音がして、吹っ飛ぶ麗子。それを見送りながら、梓はふん、と鼻をならす。
「猪とはなんだ。猪とは」
麗子は地面に倒れたまま、動き出す気配がない。制限されているとはいえ、鬼の全力攻撃を食らったのだ。しばらくは気絶しているだろう。ぽんぽんとメイド服の土埃を払うと、梓は佳乃の方へ向き直り聞いた。
「ふぅ……えっと、あんた、大丈夫？」
「……ゆ」
「ゆ？」
「ゆー、うぃん」
「……ありがと」

「なるほど。お姉ちゃんを探してたのか。あたしも、『お姉ちゃん～』って声が聞こえたから、初音――あ、妹ね。妹が探してるんじゃないか、って思ったの。そしたら、あんたたちを見つけたわけ」
「なるほどー」
あんまりわかってない様子で、佳乃は頷いた。一人は危険だから、と一緒に行くことを提案したところ、佳乃はあっさりと承諾した。
その際、『よし、君はボディーガードメイド一号さんだよぉ』などと不名誉な愛称をつけられたのだが、とりあえず梓は無視しておいた。
「ところで……」
「何？」
ぴく、と梓の眉が跳ね上がる。佳乃は口に手を当てて、ぼそりと呟く。

「メイド服にネコミミなんて、狙ってるとしか思えないよぉ」
「あんたがくれたんでしょうがっ!!」
佳乃の支給武器、それはネコミミヘアバンドだった。助けてくれたお礼に、と差し出す佳乃も佳乃だが、つける梓も梓である。
『うう……こんな格好、耕一や千鶴姉には見せられないよ……』
はぁ、とため息を吐いて、梓は空を見上げた。
そして。
そんな騒ぎの中で、麗子の姿が忽然と消えていたことに、佳乃は勿論、梓も気付かなかった。

070 割とのんびり

「ちっ……」
御堂は思ったよりもイラついていた。
「勘がにぶったのかもしれねぇな」
戦場でのそれは、死を意味する。強化兵としてのそれに頼りすぎていたのかもしれない。
御堂は神社へと足を運んでいた。もちろん気配は殺してだ。並の人間には御堂の姿は恐らく見つけられないだろう。
「にゃ～ご」
いや、見つけるのはたやすい。
「騒ぐなクソ猫」
ごろごろごろ
「ちっ!!」

御堂のイラつき。それは道具の調達がままならないことにあった。誰との遭遇もない……いくつかの死体は目撃したが、すでに持ち去られた後なのだろう、何もない。手元にある道具は、『げるるん』という名のジュースのみ。
「喉が潤わねぇぞ、ゴルァ(ﾟДﾟ)」
というか、この液体……いや、物体は喉を通らな

い。
「てめぇ、こんなモノだけ器用に残しやがってっ……！」
「にゃー」

「ツイてるぜぇ……」
御堂がこの島にきて、一番の微笑。
「にゃっ⁉」
ぴろが猫なりに顔をひきつらせる——可愛くない
——
「みろよ相棒、俺の得意武器だぜぇ……！」
軒下に一丁の拳銃。
「デザートイーグルだな。口径は五十、へぇ、結構でけぇじゃねぇか」
上機嫌でベルトにそれを忍ばせる。
「よぉ、相棒、今から行動を開始するぜぇ」
「にゃあ」

岩切が殺られた。それは当然御堂の耳にも入っていた。相手は蝉丸か、それとも……
「まあ、行動しようぜ、慎重によ……ククク」
そして御堂の気配は山中へと消えていく。ただ猫の気配だけがあたりに漂っていた。

071　狩るものと、狩られるもの。

金色の髪をした女は動かなかった。私は、その場からとりあえず立ち去ろうと思った。生きていても、生きていなくても、この場にいるのはどっちにしろ危険だと思ったからだ。
逃げようとした瞬間、その金髪の髪をした女はこっちを向いて、
「ハンターチャーンスッ！」
と叫んだ。
私は、その声を聞いた瞬間逃げ出していた。
殺される。

そんな気がした。
だから全力で走って逃げた。
どれくらい走っただろう。
もう、大丈夫？　そう思って後ろを振り返った。
そこに、彼女はいた。
手には、銃を持っているようだった。
「Hey You!　覚悟するネーッ！」
彼女は私に向かって引き金を、引いた。
ぴゅー
勢いよく、水が飛び出て、私の体にかかった。
「あうーっ！　水嫌いーー！」
「なんで、ハンティングできないノ？　なんで？」
　レミィは、木から落ちたせいもあって、錯乱していた。
発射される水、水、水。
逃げまわる真琴。
森の中で、そんな子供の遊びのような、ほほえましい光景が繰り返されていた。しかし、どっちも真剣だった。
　それの終焉の時、それは唐突にやってきた。脚をすべらせたレミィが、崖から転落したのだった。
「な、キャアアアアアアアアアッ！」
　私、沢渡真琴はなんとか助かったみたいだ。しかし、いままで溜めた食料は逃げていた途中で半分以上落してしまった。また、集めなおそう。そう思って私は再び森の中へ食料を求めて探し回ることにした。

072　思わぬ落とし穴

「何……爆発？」
遠くの方で爆発音がしたのを牧村南（八十番）は聞いていた。
「物騒ね、離れましょう」

そう言うと南は爆発音とは反対方向に歩き出した。
（なるべく戦闘は避けたい、不用意に人と接触するのは避けるべきね）
彼女は平和主義者だった。
「でも、いざとなったら私はこれを使えるのでしょうか」
そう言って彼女がバッグから取り出した物は十字手裏剣だった。しかも、理論上銃弾をもはじく超硬鋼鉄で作られた手裏剣だ。
「……っと、練習してみようかしら」
南は一本の杉の木の前に立った。そして、木の幹目掛けて手裏剣を投げた。
カッ、カッ！
二枚投げて二枚ヒットした。
「あら、以外と簡単ね」
カッ、カッ、カッ！
三枚連続ヒット。
カッ、カッ、カッ、カッ、カッ！
五枚連続ヒット。
「使えるわ、これ。よおし、今度は……」
カッ、カッ、カッ、カッ、カッ！
カッ、カッ、カッ、カッ、カッ！
十枚連続ヒット。
「これでいざという時も安心ね」
そう言うと、幹から手裏剣を引き抜き始めた。
「!?」
南は鼻に感じる香ばしい臭いに気がついた。
「あら、アーモンドの香り……気を付けないと」
南は悟った、手裏剣に青酸カリが塗られている事を。慎重に二十枚すべてを引き抜き終わると、再び人気のない方向に歩きだした。

073　無知

「へえ、美咲さんっていうんだ。あなたのような美しい人に相応しい、すっっごく素敵な名前だなあ」

「あ、の」
「もう、ほら、そんな顔しないで！　僕があなたのナイトになるっていったでしょ、だから安心して」
「あ、あの、」
「僕は見かけよりずっと頼りになる男です！　だからそんな不安そうな顔をしないでくださいよっ！」
……そうじゃなくて。
澤倉美咲は、自分の手を強引に引いて森の中を、ナイトというよりは人攫いが如くに突き進む元気溢るる高校生に逆らえぬまま、心の内で溜息を吐いた。

藤井くんか七瀬くん、由綺ちゃん、はるかちゃん。せめて、そのうちの誰かと行動できたら自分はまだ救われていたに違いない。しかし神様はけちんぼだった。その誰とも違うグループという、残酷な仕打ちを受けてしまっていた。
同じグループに森川由綺のマネージャーであった篠塚弥生さん（四十七番）はいたが、由綺の知り合いとはいえ、流石に殆ど話した事もない人と行動できる勇気は、美咲にはなかった。自分の多分次かそれくらいに彼女は呼ばれる筈であったが、結局美咲は、一人で行動する事を選んだ。
不安に躍らされるように、取り敢えずは見つからない場所にまで駆けてようやく一息つくと、支給品を確認する事にする。
支給品は割り箸とまな板であった。
――割り箸。豆でもつまめというの？　それともお食事をする時に便利ですから、とかそんな用途だったりするんだろうか。馬鹿げた話だ。
そして、黒いまな板。これも調理用？　林檎のマークが描かれている、なかなかお洒落なまな板だ。しかしお洒落だからどうという訳でもない。これが金属の板で、お腹に入れていたら銃弾を防げるとか、そういうことでもなさそうである。
まあ、銃が当たったとして、引き金を引ける自信はなかったし、人を怪我させるなんてとても考えら

れない。殺し合いなんてそもそも自分にはとんでもない話なのだ。
だから、何であれ、そうは変わらないのだ。
自分はこの島で殺されるのだ、そういう事なのだ。
色々やりたい事があった。たくさん、したい事があった。なのに、なんでこんな戦いに巻き込まれてしまったのだろう。死にたくない。けれど、殺せない、殺したくない。誰もが生きているのだ、私には同胞を刺せる勇気も撃ち抜ける冷酷もない。
だから、美咲は——皆が殺し合って、最後まで誰にも見つからぬまま、生き残れたら、と思った。
それはきっと死ぬほどずるいことだと思う。
この殺し合いを止める為に、皆で協力してここから逃げ出す為に、何かをしなければならない筈なのだから。
そんな折。
自己嫌悪と恐怖心で震え、森の中で踞っている時、今自分の手を引く少年——住井護に見つかったのである。殺されると思った。終わりなのだと思った。自分の考えは甘かったのだ。最後まで見つからないでいられる筈がなかった。何もしないでいようと考えていたのが間違いだったのだ。
藤井くんに逢えないまま——ここで、終わりなのだと。
それが、実際には、これである。
自分の視線に気付いたのだろう、住井護は振り向いて、再び、ぐっ！　と親指を立てた。
不思議な少年だった。
「僕を信じて付いて来てください」
なんてことを真顔で笑顔で言う少年の雰囲気は、誰かに似ているような気がする。すぐ気付く、彼の見せる笑顔が、何処となく、後輩の七瀬彰が本当に刹那的に見せる笑顔に似ているのだ。
結局美咲は観念して、この少年に付いていくことにした。彼が手に持つマシンガンも怖かったし、確かに一人でいることも怖かった。それに、知り合い

に会えるかどうかも判らない状況で、よく理由は判らないが、自分を守ってくれると囁く少年は、何故だか無闇に頼もしく見えた。

「あの、……住井くん？」
「護でいいよっ、美咲さんっ」
なんて明るい笑顔だろう。若いっていうのは素晴らしきかな。
なんていうその言い草が何だか小母さんみたいで、自分も歳をとったなー、などと思う。……割とどうでもいいことを考える余裕があるなあ、私。
男の人のことを名前で呼ぶことには慣れていないが、しかし美咲は、割とあっさりと、
「……うん、じゃ、護くん」
そう呼んだ。もしも七瀬彰が聞いたら嫉妬で怒り狂うかも知れないが、そんなことは今や問題ではない。無事に七瀬彰に会えるかもわからない現状で、そんなことを心配しても野暮というものだ。

それを聞き、ぱあ、っと更に明るくなった顔で、
「何っ？　どしたの、美咲さんっ」
住井は返事をする。ああ、若い。じゃなくて、美咲は気を取りなおし尋ねることにする。
「えと、君は何処へ向かってるの？」
最初に浮かんだ疑問だった。彼が誰であるとかそういうことより、まず、彼が何処に自分を連れて行き、そして何をしようとしているのか、そちらの方が遥かに重要だった。
「ああ、僕の従兄弟の北川って奴を捜してるんだ」
すさまじく頼りになる奴でね。笑いながら住井は言う。美咲は未だ見ぬ北川の姿を想像する。
「後は――ちょいと作戦を考えてなんとかするんだ。今はまだ作戦の見当も付かないけど、なんとかする」
何の作戦を、そんなの聞くまでもなかった。
勿論、脱出作戦だ。
そんなこと出来るの？　多分自分の不安げな色が

そう叫び声をあげていたのだろう、住井は、大丈夫、そんな不安そうな顔をしないで、と、そう言った。
美咲は心から仰天していた。あまり顔に出ないからそうは見えないが、実は心底からびっくりしている。
自分よりもずっと若い子が、こんな強い行動力を持っているということ。若さゆえの暴走と取れなくもない。それでも、自分はこんなところで終わりたくないという確固たる意思を持って走っている、ということに。
それに比べて、自分は高校生のその暴走力に逆らえず、自分では自分を守る事も出来ず、彼のエネルギーについて回るばかり。情けなくなる。
自分はもっと強いと思っていた。物語の中のヒロインのように、切羽詰った状況に追いやられたら、何でも出来てしまうスーパーマンになれると、二十一になった今でも、時折思うことがあった。けれど結局そんなの幻で、何も出来はしなかったのだ。

「そういえば、美咲さんの支給品ってその割り箸だけなん？」
ふと立ち止まり、住井が美咲に尋ねる。
思考の渦潮で溺れていた美咲は、無意識のうちに、自分を渦から助け出したその手を強く握る。その感触に驚いたのか、住井は一瞬びくっと腕を震わせたが、しかし何やら嬉しそうな顔で握り返してきた。
うう。何やってるんだろう私。顔が紅潮しているのが判る。ちょっとぼけっとし過ぎていたようだ。
とにかく返事しなくちゃ、美咲はあわてて住井の問いに答える。
「あ、その、割り箸と、まな板」
「何それ。訳わからんね」
住井は苦笑しながら、まあ、一応見せて、と右手を差し出してきた。美咲はごそごそとジッパーを開け、バッグから黒いまな板を取り出すと、何だか不思議に申し訳ない気分になりながら、それを渡す。
「ごめんね、私の支給品、おかしなので」

「いいって、オレが守ってあげるっていってるじゃん。って、……え？　これ、……まな板か？」
住井は手に取ったその重量感に思わず怪訝な顔をする。真っ黒なまな板の横にはＰＣカードを突き刺すポートがあり、住井が知る限りでは、インターネットに接続できるまな板が存在するということは無いと思う。
だからこれはまな板の訳が無かった。
「あ、もしかしたら防弾チョッキみたいなのかも、お腹にいれて使う、とか」
美咲は訳もわからず、立ち止まった住井にそう言う。それは最早滑稽談にしかならないけれど。
美咲が使っていたノート型のワープロとはまるで勝手が違うのである。今のノーパソは、昔とは違った開き方をするのである。彼女が無知だったのは、彼女が物を大事にする人だから、旧型のワープロを捨てられなかった人だからだ。そういうことなのだから、あまり責めるべきではないと思う。
ぱかり、とまな板が二つに割れた。
「美咲さん、これ、まな板じゃないよ」
「え？」
まな板の中から、キーボードのボタンと液晶の画面が現れる。わ、こんなまな板があるんだ。スーパーまな板。
――そこまで美咲も無知ではない。
「これ――ノートパソコンだよ」
「！」
「――上手くすれば、もしかしたらっ」
住井は心底嬉しそうな顔をする。希望と勇気と生命に満ち溢れた笑顔で、美咲はただ、きょとん、と住井の嬉しそうな拳に胸を高鳴らせるばかりである。
「早く潤を捜そう！　上手くすれば、脱出できるかも知れないっ！」

074　僕たちの失敗——北風と太陽

拝啓おふくろ様、三日とろろ美味しゅうございました。潤です。

護との合流も果たせず、また知人達の安否も杳としてしれない事に、僕自身も苛立ちを覚えるばかりでありますが、武器と思った支給品がもずくパックという悲運に見舞われ、他に手の打ちようもなく、独り森の中、賽の河原で積む石の如くもずくでピラミッドを造っておりました。

ところが。

突然、空からどさりと女の子が振ってきたのであります。一瞬天使か、と見間違えるほどの綺麗な人でありましたが、よくよく見れば外国産のヤンキーでありました。さすがに天使は腫らしきった乳をセーラー服に包むことはありますまい。やんぬるかな、僕の目の前にいる物件は日がな一日スペアリブを貪り、ドクターペッパーを浴びるように飲み干す事に生き甲斐を感じているというあのヤンキーであります。崖から足を踏み外したのか、ヤンキーは躯をしたたかに打って気絶しておりましたが、無粋を承知で確かめてみると特に骨を折ったような形跡も見られませんでした。おそらくは木の枝に引っかかりながら落ちたことと、下が草地ということが幸いしたのかもしれません。

そうこうしている内に、ヤンキーは軽くうめき声を上げ、目を覚ましました。僕は早速この目覚ましヤンキーに、一体どうしたのか、なにが君に起こったのであるか、と尋ねたところ、ヤンキーは突然くわっと眦を開いて僕の肩をつかんだかと思うと、わっしわっしと僕を揺さぶりながら訳の分からぬ事をわめき散らしてくるのでありました。

「おでん種おでん種おでん種がいたのヨでもねハントできなかったのおでん種シューティングして朕が美味しく召し上がろうとおもったのにできなかった

ノせっかくぶっ殺してぶっ殺して殺して殺し抜いてあげようと思ったのニワタシのガンでチャカでハジキで死に至らしめようとしたノニ見つけ次第ぶっ殺すノなにげにぶっ殺すノ射殺いいよネ素敵よネことほど左様な塩梅にて幽玄かつ趣深い情緒がたまらないよネ」

と、この様にまるで要領をえない答申が返って来るだけで、ただただ面食らうばかりであります。つうか、貴様はハジキ言うてる暇があったらアグネスと一緒に日本語を勉強しろ。

こうしてヤンキーは今、僕の隣でネジの緩んだ白痴の様にもずくをもりもり喰ろうているわけなのですが、おふくろ様はお加減如何でありましょうか？　嗚呼おふくろさま、どうかどうか風邪などひかぬようご自愛下さいませ。

潤はまだまだ死ぬつもりはありませぬ。

075　暗殺～深山雪見～

「ひぃぃっ！　殺さないで!!」

恐らくはこのゲームを企てたほうの人間だろう。何故こんなところにいるのかは分からない。進行状況の諜報、あるいは何かのイレギュラー。考えられることはいくつかあった。だが、それは今の彼女には関係ない。どの道下っ端なのだろう。

アホ面かまして歩いてた所を背後から忍び寄り、押さえつける。そして男の腰から、備え付けられたサバイバルナイフを一気に引き抜き、首筋に当てがう。男はどうしようもないほど取り乱していた。無理もない。いきなり背後からナイフをつきつけられては為す術もない。

「答えなさい……参加者に、川名みさき、上月澪の二名がいたはずよ……殺したのは誰!?」

「しししし、し、知らないっ！　ほ、本当だ！　ボ

クは下っ端だからその辺のことは知らないんだ。た、頼む、命だけはっ！」
「そう……」
男を押さえつける腕が若干緩む。男は少し身体を弛緩させた。
「でもね、あなたたちはっ……!!」
プシッ！！！
一閃、ナイフを横に凪ぐ。
「がっ!!」
男はヒューヒューという音を立てながら力無く崩れ落ちる。
「なんでみさきなの……なんで澪ちゃんなの…!?」
かすれた声でそれだけをやっと言い放つ。
(あの娘達は、たとえハンデを背負っていても、誰よりも光ってた。精一杯今を生きてたのにっ！)
ナイフから血を拭い、男の羽織っていた防弾チョッキを剥ぎ取る。探知レーダーがないかと期待もしたが、そこまでは持たされてはいないようだ。あったのは先のナイフと防弾チョッキ、そしてライフルだけであった。
ライフルの弾を肩からタスキのように下げると、丸腰の物言わぬ男を一瞥した。
「悪く思わないでね」
もう後戻りはできない。無論、無差別殺人などする気はなかった。それではみさきを殺った犯人と一緒になってしまう。それが彼女に残された最後の理性。
ターゲットは三種類。
この狂ったゲームを企てた連中。
みさき、澪ちゃんの敵(かたき)。
そして、それを邪魔する……そう、このゲームに乗った奴らだ。もう私もこのゲームに乗ってしまったのかもしれない……それでもかまわない、親友の、そして可愛い後輩の敵を討つことが今の私のすべてだから。

076　牙

「咄嗟の一言というのは極めて大事だ。特にこういう状況ではそれが生死を左右しかねない」
マナと並んで歩きながら、聖は上機嫌で喋っていた。
「先ほど観月くんが飛ばしたハッタリ、あれはいけない。実際に人を殺せるような規模のレーザー砲となると、とても人ひとりで持ち運べるようなサイズじゃないからな。ハッタリが嘘だとバレてしまうと、相手に無駄な精神的余裕を与えてしまうぞ」
「べーっ、だ。どうせ私は嘘つくのがヘタですよー。……じゃ、あの時はどういうこと言えばよかったのよ」
「そうだなぁ……」
唇を尖らせるマナに、聖はしばし考え込むようにして、
「まぁ、なんにせよ無駄だろうな。多分、何を言われようと私は同じことをしただろうから」
「……何よそれ」
マナはだらしなく両手を首の後ろで組んだ。
（逃げてきちゃったけど、今、お姉ちゃんどこでどうしてるんだろう……藤井さんにはもう会えたのかな、それとも……ううん、まだ生きてる、きっと生きてるよね、お姉ちゃん）
フッと小さく息をつくと、隣を歩く聖に声をかける。
「ねぇ、霧島さん」
「『霧島先生』」
「……霧島センセー」
マナはジト目でひと睨みして、続けた。
「霧島センセーは誰か探してる人、いないの？」
「妹がいる」
即答だった。
聖の表情が、少しだけ硬いものに変わる。

「あの子――佳乃を死なせるわけにはいかない。佳乃は私が必ず守る。そのためにも、一刻も早く見つけなければならない」
聖は様々な感情の入り混じった、複雑な笑みを浮かべた。
「私も医者でなかったら、『この中の誰かが佳乃を殺すかもしれない』とか思って、出会った人間を片っ端から殺していたんだろうな。例えそのことで後で佳乃が私を責めたとしても、だ。やれやれ……職業意識というのは厄介で、なんとも有り難いものだな。私は佳乃を泣かせずに済んだぞ」
どこか遠くの方を見つめながら悟ったように言う聖の横顔を、マナはびっくりしたように見上げた。
「……霧島さんは」
「うん？」
マナの声に潜む真剣な響きに、今度は呼び名を訂正することもしなかった。
「仮に……もしも、そのせいでその、妹さんが――」
「さて、雑談タイムは一時休憩としようか」
聖はいきなりマナの後頭部に手をかけると、グイッと前に押し倒した。
「ちょっ！　ちょっと、何す……！」
ビィーーーン！
つい今までマナの頭があった空間を貫き、ボウガンの矢が側の木に突き刺さった。
「えっ……!?　まさか」
「急患みたいだな。……出て来てもいいぞ」
「チッ……当たっとけよ、めんどくせー」
オートボウガンを片手に、頭をかきながら現れたのは藤田浩之（七十七番）だった。
「最初に一つ聞かせてもらおうか。この場を平和的に解決する気はあるのかな？」
浩之はその問いかけには答えず、黙ってボウガンに次弾を装填している。
「面倒な相手だな……あれはもう何人か殺してると

見た」
「ど、どうするのよ⁉」
「倒すしかないだろう、死にたくなかったら」
「さ、さっきと言ってることと違うじゃない！」
「殺すとは言っていない。抵抗できない程度にして後で手当てしておけばよかろう」
「そういう問題じゃ――」
最後まで言わせず、聖は素早く足払いをかけてマナを倒し、自分も地に伏せた。
ヒュン！　ヒュン！
続けざまに矢が頭の上を掠めていく。
（間違いない……あの人、私たちを殺す気だ……）
落ち葉や枯草の濃密な匂いに包まれながら、奇妙に静かな実感が頭の中を通り抜けて行った。
が、次の瞬間には聖の見た目よりはるかに力強い腕によって引き起こされていた。
「観月くん、ボケッとしていると死ぬので注意したまえ」
「そ、そんなこと言ったって……」
「いいか、よく聞け」
聖の瞳がスッと細くなった。
「今からどこでもいい、あの男と反対の方向に三十秒間全力で走るんだ。三十秒走ったら、振り返って来た方向に向かって三十秒間走れ。行け！」
「え、ちょっと、どういう……」
「いいから走れ！」
凄まじい剣幕に押され、ついでに聖の手に背中を押され、マナは浩之に背を向けて走り出した。
「し、死なないでよね！」
「努力しよう」
マナからは見えなかったが、また聖もマナの方は見ていなかったが、聖はヒラヒラと手を振って応えた。
そして手を下ろした時には、聖の手には数本のメスが輝いていた。
改めて浩之と正面から睨み合う。ボウガンの照準

が、聖にピタリと合わせられていた。
「あんた、医者か？　にしちゃ、医者っぽくないな」
「かく言うお主は高校生かな？　それにしては高校生らしくない」
二人は同時に口の端を歪め、笑った。
浩之がトリガーを引いた。

077　定時放送

ハハハハハ、諸君、元気にやっているかな。
この時間までの死者を発表するぞ。

三十四番　九品仏大志
四十二番　佐藤雅史
五十六番　立川郁美
八十五番　美坂香里
八十六番　美坂栞
九十八番　柳川祐也

以上六人だ。
最近あんまり死んでないようだから、ここで一つ面白い話をしてやろう。君たちが眠っている間に、胃の中に爆弾を仕込ませてもらった。カプセル型の小型の奴だがね。そしてそれは遠隔操作で自由に爆発できるようになっている。要するに俺を殺そうとすれば、その瞬間ドカンってわけさ。
ハハハハハ。
それからな、あんまり人が死なないようなら、つまらないからお前ら全員消させてもらう。そうだな……六時間。六時間の間、一人も死ななかったら、そこでゲームオーバー。全員死ね。
もたもたしてる暇があったら、その辺の奴をぶっ殺して時間を稼いだ方がいいぞ。俺様からのささやかな忠告だ。
あ、吐き出そうなんて考えるなよ。吐いたらその

瞬間即ドカンだ。吐き気には注意することだな。
ハハハハハ。
じゃあな。せいぜい楽しませてくれよ。

078　臨時放送

——先の放送から数分後。

ブッ

えー、皆やってるか？
俺様もこんなを放送入れる予定はなかったんだがなぁ。お前らの記録が悪いのがいけないんだぞぉ？
ペースが悪いと思ってたら、なんだぁ、この記録は？　まだ八十人も残ってるじゃないか。
これじゃあ面白くないよなぁ？　それに企画側にも都合があって、いつまでもゲーム続けさせるわけにはいかないんだよなぁ。
そこでだ。
さっきのに加えてもう一つ、ルールを付けて足すことにした。
今から三十六時間以内に、生存者が二十五人以下になってないと、ゲームは終了だ。決定した。
あぁ、といっても、助かるわけじゃないぞ？
核ミサイルがこの島に飛んで来るんだ、面白いだろう？　嘘じゃないぞ。こっちには巨大な権力と財閥がついているんだ、可能なんだよ。
それじゃ、せいぜい頑張ってくれ。
はっはっはっは……

ブツッ

079　メッサー

「ぐぁっ……！」
聖の回避動作は紙一重で間に合わず、放たれた矢

は聖の左腕を貫通した。
続けて飛んでくる矢は地面を転がって避ける。聖は回転の勢いを殺さず立ち上がった。
「つ……意外と速いものだな、ボウガンの矢というものは」
「ちっ、当たらないもんじゃないだろーがよ」
矢の補充をしようとした浩之だったが、その瞬間、聖が浩之に向かって行った。
「なに……!?」
初めに持っていたメスは矢を避ける時に落としたのか既に消えていたが、
聖が走りつつ右腕を振ると、その手にはまたメスが一本、光っているのだった。
「なんなんだこの女……ドクタージャッカルかよっ」
今から装填して撃ち出す時間はない。
そう判断した浩之はオートボウガンを投げ出し、腰に提げていた大ぶりのナイフ――先ほど公民館の職員から奪ったもの――を抜いた。
「はっ！」
聖がメスを横に振るった。
が、身体を動かすまでもなく、その刃は浩之に触れることはなかった。抜き身のナイフを意識してか、完全に腰が引けていた。
(なんだよ、この女――ビビってんのか？)
浩之はナイフを握り締めた。そう、所詮相手は女で、しかも手負いだ。
(さっさと殺して、戻ってきたチビも殺したら他の奴探さないとな……)
ナイフを逆手に持ち替え、斬りかかる。聖は慌てて身を捻ってかわすが、その動きについ今までのキレはない。
「ケガ、痛ぇんだろ。おとなしくしてな」
再びナイフを振るう。正面からの突きに聖が思わずのけぞると、バランスを崩して尻餅をついてしまった。

浩之が一歩ずつ近づいていく。聖は必死で後ずさるが、すぐに後ろの木にぶつかってしまった。
「じゃ、死ねよ」
高々と振りかぶった手の先で、ナイフが光る。と、その時、聖が不意に口を開いた。
「お主、知っているか？」
「あん？　命乞いなら言うだけ無駄だぜ」
「気づいていないか？　敢えてお前がそこに立つように仕向けたのを」
「何を――」
ドドドドッ！
言いかけた浩之に、銀色の光が降り注いだ。
メス。
「赤い雨（ブラッディレイン）とか言ったかな、これは」
「て、テメェ……医者のクセして……マンガなんか読んでんじゃねーよ……」
「佳乃が昔貸してくれてな。一度やってみたかったのだよ」
「ゆ…悪夢（ユメ）は見れたかよ……」
降って来たメスに全身を貫かれた浩之は、ごぶっと嫌な重い音をたてて盛大に吐血し、倒れた。
聖は大きく溜め息をついて、血の流れている自らの左腕を押さえた。
「ケガの度合いから言って、先にこの男の治療をするのが妥当なんだろうな……つくづく医者の鑑だな、私は」
背中の方で、小さな足音が聞こえた。マナが戻ってきたようだ。
「さっそく手伝ってもらうことにするか……手先は器用な方なのかな」
聖は白衣のポケットに手を突っ込んだ。

080　遭遇

「私、これからどうすれば……」
鬱蒼と茂る森の中、周囲よりもひときわ幹の太い

木の根元で、長谷部彩（七十一番）は一人うずくまっていた。彼女の手には、鞄の中に入っていた武器、Gペンが握られていた。
（このGペンは普通の物と違いエッジがナイフのように鋭く研がれているのだが、この時点では気づいていない）
もう何時間こうしているのだろう。早く動かないと誰かに見つかってしまう……
そう思い、そろりと立ち上がろうとしたとき、遠くから銃声が響いた。
「きゃっ……」
その場にへたり込んでしまう。
「早く動かなくちゃ……」
震える足を勇気づけて、ようやく立ち上がったその時、木の陰から何かの気配がした。
「きゃっ！」
咄嗟に、手にしたGペンを振りかざす。
カチン！
彼女の唯一の武器は、呆気なく弾き飛ばされた。
「ごめんなさい、ごめんなさい……」
かすれるような声で彩がつぶやく。
「ごめんなさい、ごめんなさい……」
森の中を、一瞬静寂が支配する。
彩が恐る恐る顔を起こすと、しゃがみこんだ女の人が居て、彼女に笑顔を向けていた。その手には凶器である出刃包丁が握られていたが、膝の上で横倒しにされていて、害意は感じられない。
「あ、あの……」
「あ、気にしないで。あなたを見てると、何でだか知らないけど放っとけなくって」
「あ……」
彩は、崩れ落ちるようにその場にしゃがみ込みながら、すすり泣いていた。
「ありがとうございます、ありが……、ひっく……」
「も、もう、何泣いてるのよ。気にしない気にしな

い」
「あ……はい」
ねえ、名前は何ていうの？　あ、私は江藤結花」
女の人――江藤結花（九番）はそう名乗った。
「長谷部……彩です……」
「そう。じゃあ、彩ちゃん、でいいかな？　良かったら一緒に行動しない？」
「あ……はい」
「うん、それじゃあ行きましょ！」
「あ……待ってください。私のペンが……」
彩はおもむろに、地面をまさぐりだす。
「もう、そんなのどうでもいいじゃない」
「いえ……私の大切なペンですから……」
先ほどの位置から二、三メートルほど離れた位置に、ペンは転がっていた。そのペンを拾い上げて、
「ごめんなさい……」
「うん、行こう！」
二人はゆっくりと歩き出した。

081　（無題）

「うっ……あっ……」
新城沙織（四十九番）が、肩口を押さえながら呻く。
「る、瑠璃子ちゃん……どうしてっ……一緒に生き延びようってっ……」
くすくす笑う少女、月島瑠璃子（六十番）。
「私はね、ジョーカーなんだよ」
そう言いながら、肩口に刺しこんだハサミをぐりぐりかき回す。
「いぎぃ！」
「沙織ちゃんみたいに、すぐ他人と仲良くなろうとする人がいるからね。監視者が必要でしょ。それが、私なの」
瑠璃子が、勢いよくハサミを引き抜く。沙織は肩を押さえながら転がり、悶えた。

「沙織ちゃんの支給品、白いＣＤだよね。いい機会だから教えてあげるけど、これは同じものを四枚集めて初めて意味があるんだって。ミサイルを止める事ができるそうだよ。これは秘密なんだけど、どうせ沙織ちゃんはもう生き延びれないから意味ないよね。じゃ、いってらっしゃい」
「ひく、ひっく……は、はい、いってきます……」
沙織は泣きながらハサミを握り、力無い足取りで歩き出した。
「どうせ、あの毒は一度侵されたら助からないんだけどね。私は苦しまなくなるお薬をあげるだけ。でも仕方ないよね。ゲームなんだから」
そう一人ごちて、瑠璃子はくすくす笑った。

082　覚悟

闇。
深い闇。

「ううっ……そんなのないよ……そんなのぉ……」
「そうそう。このハサミはね、毒が塗ってあるんだよ。遅効性のやつだから、すぐには死なないけどね。あと三十分くらいかなぁ。毒って苦しみながらのたうち回って死ぬんだよ……嫌？　嫌かな？　だったら、誰かを殺して？　証拠としてその人に支給された武器を持ってきてくれたら、交換でお薬をあげる」
「そ、そんなの無理……」
沙織が、すがるように呻く。
「ナメた事言ってちゃダメだよ」
瑠璃子が、そっと沙織の肩を足で地面に押しつけ、傷口に体重をかける。
「いぎああああああ！　やめて！　やめてぇ！」
「じゃあ、やってくれる？」
「やります！　なんでもやるからぁ！　やめてよぉ！」
瑠璃子はにこりと笑い、足をどけた。沙織の頭の側にハサミを落とし、告げる。

高く高く聳え立った木々は空を覆い隠し、今が昼間なのかどうかもわからない。とにかく、ここは暗い。

――まるで、この島に連れて来られた人達の心のよう……

足を止め、天野美汐（五番）は想い耽る。なんで、こんな事になってしまったのか。自分はこれから、どうすればいいのか。

そんな呟きも闇に吸い込まれ、答えが戻ってくることは無かった。美汐は歩きつづける事にした。足を止めたら、後ろから襲われそうで。

怖い。

怖い怖い怖い怖い。

だから、止まらなかった。止まれなかった。

「真琴……相沢さん……」

口を突いて出るのは、懐かしい人達の名前。だけど、その名を口にしたのは間違いだったかもしれない。涙が溢れ出て、止まらない。視界がぼやける。

いけない、こんな時に誰か現れたら……

袖口で目を擦る。

それでも、涙は止まらない。

遂に美汐は、力無く地面にへたり込んでしまった。

恐怖。

孤独。

それから逃げるためなら……

(死んだって……いいのかも)

目を閉じる。

物音。

(これで……楽になれる)

安堵。

「……ぴこ？」

(……？)

だが、聞こえてきたのは変な声。

薄く、目を開ける。

白い……毛玉のような犬（？）が、美汐を見上げていた。

「……どうしたの？　何処から来たの？」
笑みを浮かべ、美汐は優しく語り掛ける。
「ぴこぴこ☆」
如何な美汐と言えども、分かるわけも無かった。
美汐はこの妙な犬の頭を撫でる。犬は気持ちよさそうに、目を細めた。
しかし、そこで美汐の思考は中断される。
物音。
今度は大きい……恐らくは、人。
「……お逃げ」
美汐は犬から手を放し、逃がそうとする。死ぬのは自分だけで、十分。何も、何の罪も無いこの犬を巻き込むわけにはいかない。
「……ぴこ？」
だが、犬はその場を動こうとしない。
「……お逃げったら」
必死で逃がそうとする美汐だったが、犬は一向に動こうとしない。そうこうしているうちに、茂みの奥から一人の人物が姿を現した。
「……どうしたんですか？」
優しい笑みを称えたその少年は、長瀬祐介（六十四番）だった。聞けば、何でもこの犬（ぴこ、と名づけたらしい）は飼い主とはぐれたらしく、犬は飼い主を探すため、そして長瀬さんは知り合いを探すためにこの犬の鼻を利用しているつもり……らしい。
「それで、天野さんも知り合いを探している、と」
「……はい」
それを聞き、祐介は笑顔で言った。
「それなら、僕たちと一緒に行こう。一人より二人、二人より三人の方が安全な筈だ」
三人？　と美汐が聞くと、祐介はぴこを指差した。どうやら数に入っているらしい。
「……でも」
美汐が重く口を開く。
「ん？」
「貴方も……殺すんでしょう？」

美汐のその質問に、祐介の動きが止まる。暫く思案するが、やがて語り出した。
「……そうだね。僕はそんなにお人好しじゃない。生きる為には、殺さなきゃならない。だから僕は、殺さなきゃいけないと思ったときには迷わず、殺すよ。苦しませずに」
淡々と、途切れ途切れながらも祐介は語る。
「それに……殺しつづけていけば、奴らに眼をつけてもらえば、もしかしたら叔父さんに会えるかもしれない……どうやら、このゲームには、僕の叔父さん達が絡んでるみたいなんだ。叔父さん達に会えれば、もしかしたら説得出来るかもしれない。もし出来なくても、叔父さん達に近づけるなら、それは絶好のチャンスになる……殺さなければ、この島じゃ道は開けない……だから僕は、殺すよ」
美汐は、祐介の覚悟に返す言葉を持たなかった。どう答えれば良いのかも分からなかった。なので、
「……なら、どうしてわたしを殺さないのですか？」
こんな言葉ぐらいしか、出てこなかった。
祐介はう〜ん、と困った様に頭をぼりぼりと掻いて答える。
「……そう、だね。君が……僕の知っている女の子にちょっとだけ似ていたから……かな？　無口で、ちょっと不思議な雰囲気で……」
そこまで言って、祐介は顔を真っ赤に染める。
「……ふふっ」
思わず、美汐の口からも笑いがこぼれる。それは、この島に来てから、初めての笑み。
「……あ〜、笑わないでよ、恥ずかしいな」
そっぽを向いて祐介が言った。
「好きなんですね、その人のこと」
「……」
残念だが、祐介にはそれを否定できなかった。
「……分かりました。なら、わたしも覚悟を……決めることにします」

そう言うと美汐は、バッグの中の配給品をごそごそと漁る。中から出てきたのは、デリンジャー。
「長瀬さん、貴方に協力させてもらいます」
祐介は真剣な目で美汐を見つめる。
「……辛いよ？　いいのかい？」
美汐もまた、祐介を見つめ、言った。
「殺せば……道が開けるのでしょう？　なら、手を汚すのは私達だけでいいでしょう」
決意の篭ったその眼差しに、祐介もそれを了解するしかなかった。
「……それじゃ行こうか」
よっ、と祐介がその場を立つ。
ぴこがその後に続く。
一呼吸置いて、
「……はい」
美汐も続いた。
（真琴や相沢さんが助かるのなら、私が汚れ役になっても……構わない）
強い決意を込め、美汐は一歩を踏み出した。

083　（無題）

「嘘……だろ？」
祐一は、呆然とつぶやく。
香里と栞が……死んだ。死ん……だ⁉
せめて、もうしばらく一緒にいてやるべきだったのか。自分が居れば助けることができたかもしれないのに。……俺は。
どれくらいぼぅっとしていたのか。
突然、赤い光が目を焼いた。夕日だ。だいぶ傾いてきている。もうすぐ夜になってしまうだろう。
赤い雲。赤い空。流れる夕焼け。
今の祐一にとってそれは、このゲームの象徴のように写った。
——あの時、白い雪を染めた鮮血よりも、禍々しい。

「……え？」
何だ、今のは？
思い出そうとするが、うまく思いだせない。だが、とても……哀しいことだったような気がする。もう、二度と味わいたくないような……
そうだ、自失している時間はない。
あゆ。名雪。真琴。美汐。舞。佐祐理さん。
——茜。
もう誰も死なせるわけにはいかない。どこだ？　どこにいる？　焦りが心を支配していた。エアーウォーターガンを構えなおし、祐一は目的地もわからないまま走り出した。

084　茜色の空

油断した。こんなところで撃たれるとは。
幸い、肩の傷はそれほど致命傷にはなっていないようだった。
口ではあんなことを言いつつ、あの男の人は、自分が甘いということに気付いていないようだった。
氷上を助けたいなら、何も言わず私を撃てばよかったのに。
（少し、疲れました）
水を取り出そうと、鞄の中を探る。
——ナイフ……

最初に人を殺したときを思い出す。
上月、澪。
言葉が喋れないハンデを負いつつも、無邪気な笑顔を絶やさなかった。
こんなに冷たい自分にとって、本当に愛すべき後輩だった。
「澪……」
自分を見つけて、あの子は安心していた。
私に泣きついてきた。
だからこそ、私は——殺した。

生き残るには二つの方法があると思った。
言うまでもなく、参加者の皆殺し。
そしてもう一つ、主催者の裏をかく、脱出。
どう考えても、皆殺しのほうが現実的だ。
仲間を集めて、共通の敵を倒す？
綺麗事だ、裏切られたらどうする？
敵を追い詰めて、ヤケになって何らかの手段で私達を皆殺しにするかも。
いや、その手段を敵は持っていたのだ、さっきの放送で。
絶対に生きて帰る。その為には、確実性の高い方を、選ぶ。
皆殺し――こんな言葉が自分の人生に深くかかわるなんて、思いもしなかった。
あそこで澪を殺さなかったら、その後誰も、私は殺せなかっただろう。
だから、選んだ。
たとえそれが、『人間』として最低な行動であってもだ。
「涙もない……我ながら大したものです」
自分の中の譲れないもののために、人を捨てる。
いいことじゃないか？

氷上の言葉を思い出す。
あなた達は馬鹿だ……馬鹿だって？
誰かはわからないが、彼らは彼らで最後まで懸命に生きたはずだ。
彼はそれがわからなかったのか。
気がついたら撃っていた。
自分の行動が全否定されているようで。
あの人のことを諦めず、雨が降るたびに空き地へ足を向ける。
形は違えど、自分の思いに懸命だという点では同じだ。
その――あの人への思いを否定されたようで。

名前も覚えていない姉妹を思い出す。
姉の為に、自らの死も厭わなかった妹。
本当に姉の為になっているのか。
それは誰にもわからないけど、あの子の中では確かだった。
それはそれでいいと思う。
残された者はつらいけど。
あの子もまた、自分の想いに精一杯だった。
そして、姉。
向かってきたから、刺した。
どうして妹が死ななければいけないのか？　と言っていた気がする。
それを言い出したら、人間皆、どうして死ななければいけない？
それにあの人は、自業自得だったと思う。
危険を承知で離れ、その結果が出てしまった。
殺したのは私でも、選んだのは自分だ。
その辺をわかっていたのだろうか？

でも、今にして思う。
(手、繋がせてあげればよかった……)
それは感傷だ。
そんなことはわかっている。

自分の想いに忠実に生きている人がいる。
それがもし自分の道と衝突したら、全力で排除しなければいけない。
私を撃った男は、だからこそ私を撃てると言った。
同じだ、だからこそ、私も戦う。
譲れない、絶対に。
あの人のことを想いながら過ごす、終わりのない日々に帰るために。
ずっとずっと、あの人を待つ為に。

詩子……。
こんな私を見たら、絶対悲しむ。
だから、詩子にだけは会いたくない。

詩子に会ったら、私はどうすればいいのかわからない。
それに――
「祐一……」
彼に会ったら、私はどうすればいいんだろう。
詩子と祐一と私で過ごした一年間。
それは、詩子とあの人とで過ごした時間に似ていた。
祐一が転校しなかったら、私は――
浮かんだ考えを否定する。
「……矛盾だらけですね、私」
頬のあたりに、何か走った。
「……あれ？」
そして私は、あの人を失って以来始めて。
声を上げて、泣いた。
「とにかく……私は生き残って帰ります。絶対に、あの雨の空き地へ」
空を見上げる。
自分と同じ名前の色を持つ空に、そう誓った。
風が吹いてきた。
風は、風の向かう場所へ。
私は、私の向かう場所へ。

085　（無題）

美凪の前を歩いていたはるかが、唐突に足を止めた。
「遠野さん、そっちの刀、貸してくれる？」
「……はい、どうぞ」
ずしりと重い刀を受け取り、さらに自分の刀をもう一方の手で構える。
「よっと」
刀を振り、鞘を適当に落とす。

「……どうしたのですか？　一体」
「ん。何か、良くない事が起きる気がするの」
そう言って、前方の闇を不透明な瞳で見据える。
「遠野さん、退がってた方がいいかも」
「……はい。お気をつけて」
「ん」
少し目を細めて笑い、はるかは向き直った。
果たして、確かに危険はやってきた。

086　（無題）

「人だ……」
沙織は、ハサミを強く握りしめながら呻いた。
「殺さなきゃ死ぬ……殺さなきゃ死ぬ……」
何度も自分に言い聞かせる。人を殺す恐怖よりも、自分が死ぬかもしれない恐怖の方が勝っていた。
暗くて良く見えないが、相手は何か剣のような武器を二本持っているようだ。だが、もう他の人間を捜す時間は無い。躊躇は死に繋がる。沙織は、一気に走り込んだ。
「やあああああっ！」
刀を構えた相手に、一気にハサミを突き出す。
「うわわ」
相手は、緊張感の無い声をあげながら、刀の根本でそれを弾いた。一呼吸後に迫ってきた刀を何とかかわしながら、何とか体勢を整える。
「行くよ」
やる気のない声と共に、白刃が閃く。沙織は持ち前の運動神経でそれをかわしながら、身体を思い切り低くして水面蹴りを放った。
「あっ！」
初めて相手が大声を出した。転ばす事は出来なかったが、確かに大きく体勢が崩れた。
「死んで！　お願い！」
目をつむりながら、沙織はハサミを相手に突き刺した。

「うっ」
くぐもった悲鳴。しかし同時に、自分の肩にも灼けるような痛みを感じた。
「……つっ！」
相手が手放した刀が、自分の肩にぶつかったらしい。深くは無いが、鋭利な痛みだった。沙織は素早く刀を奪い、飛び退いた。相手が倒れた事を確認し、反転した。
「やった、これで助かる……」
暗い喜びを感じながら、沙織は言葉とは逆に泣いていた。
人を、殺した。自分が、助かる。
涙の理由は、考えるまでも無かった。

087 眠り

「指すま、３！　あーくそぅ」
「指すま、２。あ、わたし抜けっ！」
「指すま、１、ああ、もう、あげてよ折原」
「うるさいわ馬鹿野郎、勝負にあげてもあげないでもあるか!!　指すま、０！　よっしゃー、オレも抜けっ！　という訳で、七瀬見張りな」
「……くそう、あたしこーゆうの弱いのよう」
「言い訳は止めたまえ七瀬女史」

まったく、本気で暢気だなあ自分ら、そんなことを思いながら、七瀬は見張りに立つことになった。殆どキャンプみたいなもんじゃん。
指すまなんかで生命のかかった見張りを決めていいものか？　というツッコミをいれたくなったが、
「七瀬は漢らしい奴だと思っていたのにああ思っていたのに、勝負に負けたら今のは無効と言い張るのか！　なんて最低な奴なんだ、七瀬の名もそこまで落ちたか、ああ知らなかった、くわばらくわばら」
「へえええ七瀬さんってそんな不正行為をするような人だったんだ知らなかったよー。無事に帰ること

が出来たらクラスの皆に七瀬さんはすごく不正な漢です、って宣伝して歩くことにするよそうするよ」
とか落胆されるのが非常に腹立たしかった。いや、瑞佳がそんなことを言う訳ないのは判ってるけど。
「って、あたしは乙女よ！　漢なんて比喩はあまりに似合わないわっ！　そうよあたしは乙女！　あたし　ｉｓ　乙女!!」
――いけない。思わず大声で喚いてしまった。下手をしたら横で眠っている二人が目を覚ましてしまうかもしれない。こんな凄惨な状況かつこんな真夜中だ。折原はともかく、瑞佳は体力を使い果たしているはずだ。あたし？　あたしですか、あたしは無敵よ、徹夜なんて屁でもないわ。なめないでよ、あたし七瀬よ？
誰に言ってるんだろ、あたしは。
独り言は闇の中。七瀬は無闇に哀しくなる。

さて、七瀬は浩平に、一応銃を持たされていた。モデルガンのように軽いものだと思っていたのに、さすがは鉄の塊だ、女の手には重い。だがしかし、この島にいる参加者の大半は女だった。つまり、確率論的に、銃を持たされている人の大半は女だ。
引き金を引けば、ぱんって音が鳴るのかしら。至極当たり前の事なのだが、七瀬はまだ僅かに信じられない、こんな不恰好な鉄の塊が人を殺せるとは。
音は流石に映画みたいなものだろうと思う。腹の底から重みを感じる、焼けるような音。
連想的に思い出す。大好きなハード・ボイルド・アクション映画、見たいなあ……ニコラス・ケイジは次の映画でどんな刑事を演じるのかしら。
――ギャグよ、しんとしない！　もっと笑いなさいよ！
誰に言ってるんだ、あたしは。
まあ、ともかく。もう一度ハードボイルドな映画が見たいという気持ちは確かであり。
って、あたしは乙女よ！　ローマの休日で感動し

てもレイモンド・チャンドラーの小説で感動しちゃいかんだろう……

いや、大好きよ、大好きなんだけどね、愛すべきフィリップ・マーロウ。

あああああもう読みたいなあ、長いお別れ。死ぬまでにもう一回でも……この島の何処かに長いお別れ落ちてないかなー……落ちてる訳がないわよね。あははは。はあ。

また独り言である。

一人で過ごす夜とは果てしなく長い。

疲れが七瀬の思考を襲う。金属の重量感が七瀬の感覚を狂わせる。その僅かな闇が囁く、

もし、この果てしなく暗い銃口を、この馬鹿面して眠ってる二人に向けたら。そして、引き金を引いたらどうだ。

そんな途方も無い考えが、闇にやられた七瀬の思考で暴れ回る。七瀬はぞっとした、――いつかは、この二人も殺さなければならないのかも知れない。今は一緒に行動しているけど、いつかは。そう、あたしは、もしかしたら、レイモンド・チャンドラーの為に人を殺せるような、そんな人間なのかもしれない。そうでない保証が何処にある。

――けれど、所詮は脳髄に巣食った寄生虫だった。七瀬は殺虫剤で脳を焼き払い、闇という闇を駆逐しようと拳銃を握り締める。汗で僅かにぬめっているリボルバーは、人肌と同じ温度を持っていた。

くすり、と七瀬は笑った。焼き払った後にある意識はただ一つ。

殺せるわけがない。

自分がもし糞虫のような存在でも、こんな風に、自分に信頼を預けて眠ることのできる友達は、こいつらだけは、殺せるわけが無い。

七瀬は思う。大好きでたまらない長いお別れをもう一度読むために、心底から生き残りたい、と。
こいつらともう一度、いっしょの机でお弁当をつつき合うために、心底から生きて帰りたい、と。
繭のことが思考に現れる。今、自分はあの子を見殺しにしている状況な訳だ。まだあの子の名前は呼ばれていない、あの子はしっかりと生きている。目覚めたら二人に提案しよう。あの子を探しに行こう、って。きっと瑞佳も折原も、同じことを考えているに決まっていた。

——てゆうか。
七瀬の思考は未来から現実へ引き戻される。
「普通は一人が寝て二人で見張りするものじゃ？」
七瀬が不満げに呟く。すると驚くべき事に、
「そりゃあそうさ。いくら七瀬が世界最強の漢でも、一人で見張りはさせられないよ」
と、浩平が片目を開けて笑いやがるではないか。
「ず、ずっと起きてたのっ⁉」
あうあう、独り言聞かれたかも知れないっ、七瀬が焦って言うと、浩平は心底で馬鹿みたいに大笑いしながら、
「当たり前だろ、なめないでよ、あたし折原よ？」
などと抜かしやがった。くそ、くそう、弱み一つ握られたっ。七瀬は悔しさで瞬間紅潮するも、しかし怒るのもなんだかアホらしくなってしまう。怒りを通り過ぎて呆れに変わったところで止まった、そんな感じ。
「まあいいか……折原、お話していいよ」
「おう、暇だしな。また指すますするか？」
「しない」

——こうして、夜は淡々と過ぎていった。

088　ビバ！　眼鏡っ子

　気がつくとリアンは堅い木の床の上に寝かせられていた。どうやらどこか民家の納屋の中らしい、自分の下にはビニールシートが引かれていた。
「ここは？」
「あら、気がついたんですね」
　リアンが声のするほうに振り向くとそこにいたのは眼鏡をかけた女性だった。女性はこんな状況にふさわしくない、のほほんとした感じで納屋の中を物色していた。ほんわかしているがどこか芯の強そうな顔、その顔にちょっとずれた眼鏡が似合っている。
「路地裏なんかで寝ていては風邪を引きますよ」
「運んでくださったんですか、ありがとうございます」
　そうだ、自分は結界の防御装置にやられて動けなくなっていたのだ、放送を聞いていたはずだが内容も所々しか思い出せない。
「よっぽど眠かったんですか？　そういえば私もこの前……」
「あの、よっぽど眠かったとしても路地裏で寝る人はいませんよ（汗）」
　二人は互いに自己紹介をした。こののんきな女性は牧村南（八十番）と名乗った。自分は結界を壊すために社へ行かなければならないという事を告げると彼女は協力すると言ってくれた。それはありがたかったのだが協力する理由を聞いたときに、
「眼鏡っ子に悪い人はいません」
　と言われたときにはちょっと目眩がした。
　彼女が自分を助けてくれた理由も自分が眼鏡をかけていたから？
　リアンはその事についてあまり深く考えない事にした。
「リアンちゃん、協力しましょう、握手」
「あ、はい、こちらこそよろしくお願いします、あ

れ？　この傷は？」
　南の手のひらには一本の切傷があった。
「これはですね、さっき武器の練習をしていたときに自分でやっちちゃったんです。ちょっとしびれましたが今は大丈夫ですよ」
　と、彼女は自分の武器だと言う手裏剣とビンに入った液体を見せてくれた。
「‼　これって！」
　ビンの中身は猛毒だった、手裏剣に塗ってあるものと同じで血液から全身に回るタイプのものだ。痺れるなんていうものじゃない、少量が体内に入っただけで即死もありえるほどの強力なものなのに……
「牧村さん、本当に大丈夫なんですか？」
「南でいいですよ。私は昔から結構体は丈夫でしたから」
「ええっと……これは本当に強力な毒なんですよ」
「さあ、そういうことはよくわからないですから」
「……（汗）」
　わからないというだけで、どうこうできるものじゃないと言いかけたがやめた。多分無駄だろう。とにかく協力者が出来たのは心強かった、なにせ自分の武器は、
「リアンちゃんの支給品も面白いわね。これなんか限定非売品のレアカードなのよ」
　武器ではなかった。支給されたのは、桜井あさひトレーディングカード（全一〇八種、バインダー付き）だったのだから。

089　ちりちりと痛む鋭く古い切り傷のように

　第一回目の定時放送を聞いた後、太田香奈子（十番）は幽鬼のごとく彷徨していた。
　枝葉によるものだろうか、顔や手足に無数の擦過傷が出来ていたが、香奈子は何の痛みも感じていなかった。
　ただ、からっぽだった。

瑞穂が死んだ。あんなおとなしい子が。しっかりしていて芯の強い子が。
誰に殺されたかも分からない。
誰を恨めばいいのか分からない。
こんなくだらない企画の主催を憎もうにも、自分はどうせ何にも出来やしない女子高生だ。
月島さんに会えることも……もう、期待していない。
あの人はきっと妹の瑠璃子さんだけを護ろうとすると思う。いや、そうであることを絶対的に知っている。
だから太田香奈子は、邪魔だ。
「もう……終わりにしちゃおっかな……」
無力感に全身を支配されながら、香奈子は独り呟く。

支給された道具は赤旗だった。馬鹿馬鹿しい冗談。銃や毒が当たればすぐにでもゲームを降りられたのに。
こんなものじゃ瑞穂のところへ逝くことも出来ない。
かと言って、殺してもらいに突っ込んでいくほど狂えもしない。
皆が皆銃やナイフを巧く使えるもんか。都合良く急所に当たるはずがない。つまりは苦痛が長引くということだ。首を吊ろうが舌を噛もうが枝で胸を突こうが、上手くできる自信はない。
そんなのはごめんだった。
だって……紙で指を切っただけで、あんなにも痛い。
書類をコピーしていたとき。参考書の上質紙をめくるとき。古本屋で見つけてきた文庫を読むとき。
あれさえも全て月島さんとの想い出。決して帰ってこない想い出。

遠すぎて、今までの自分の十七年が夢だったようにすら感じられる。
まっしろだ。
そして瑞穂のはにかんだ笑顔。
涙も零れない。
ねえ、大事なこころを抉られ過ぎて、とっくに使い物にならないよ。

死にたいのに、死ねない。

どうしようもない矛盾を抱えたまま、香奈子は潮の薫りのする方へ歩いていった。
たぶん崖から飛び降りれば、楽に死ねるかもしれないから。

090 （無題）

美凪が物陰から出てきた時、すでにはるかは胸を押さえて倒れていた。
「河島さん……」
「失敗、しちゃったみたい」
溢れ出す血を手ですくいながら、はるかがにっこり笑った。
「運動神経、自信あったんだけどな」
口の端から零れる血を舌で舐めながら、言う。
「すみません、河島さん……私は、自分だけ……」
「気にすることないよ」
はるかは、温度を失い始めた手で美凪の手をとった。
「私はもうダメみたいだけど、頑張ってね」
「何か……何か、できる事は無いんでしょうか」
「ん」
はるかが、自分の胸元をはだけた。
「傷口、けっこう痛いんだ。舐めてくれたら、痛くなくなるかも」
瞳が、だんだんと透明な黒へと変わっていく。美

凪は、無言で頷いて、はるかの胸元に舌をつけた。
そっと、なぞるように舐める。
「ん」
はるかが、静かに目を閉じた。その表情は、眠る赤子のように穏やかだった。
「……痛くなくなってきたよ」
美凪の手を握っていたはるかの手が、力無くほどけ、地に落ちる。
「河島、さん？」
美凪は、そっと手を握り直しながら声をかけた。
だが、その穏やかな寝顔が崩れる事は、もう、無かった。

二十六番　河島はるか　死亡
【残り81人】

091　嘘と真実

二回目の放送が終わって少しの頃。
島の沖七百メートル付近、潜水艦『ＥＬＰＯＤ』の司令室に高槻はいた。乗っている人間は高槻一人のみ、操舵する乗員にはＨＭ―13が配備されている。
今の所は結束している奴らが多いようだが、まあいい。あの爆弾でいつでも殺すことは出来るからな。
とはいっても、いきなり自分に向かってきて爆殺したのでは芸が無い。
確かにあの島に俺はいる、もっとも俺自身のクローンが五人だがな。ミサイルは俺自身の心停止か脳死、もしくは、この艦の沈没とともに発射される手筈になってる。
一部の奴らは、最初の放送をハッタリと思っているようだから、そいつらがクローンの所に来た時には、俺が言ったことを嘘だったことにしてやるか。

そして、それが伝聞した後、一網打尽だ。まあ、さっきの放送を機に殺しあってくれれば何も苦労はしないがな。
と、呟く間に潜水艦は、再び海底へと潜行していった。

その頃、海岸線を歩いていた来栖川姉妹は、
くいっ
「なに、姉さん？」
「……（沖合いに、何かいる）」
「はあっ？　……なにも見えないわよ、イルカでも泳いでいたんじゃないの？　もたもたしていないで行きましょう」

092　（無題）

七十九番、牧部なつみは途方に暮れていた。
一回目の放送で告げられた事実。
「……店長さん」
そう、宮田健太郎は死んだ。
このとてつもなく不条理な島で。
もう五月雨堂に、あの笑顔が戻る事は無い。
いっしょに浜辺で語らう事も無い。
思い出になったことをまた現実の今として感じることはもう、できない。
これで、二度目。
居場所が無くなったのは。
なんで？
わからない。
こんなのはわからない。
いつもみたいに学校帰りに商店街に立ち寄って、おしゃべりする。五月雨堂に行くと元気が出て、それはきっとマナだけじゃなくて店長さんのおかげ。
――――それも、もう、終わった。
「……絶対に、許さない……」
あの高槻っていう厭な感じの人を。

あの人がいなければ、少なくとも魔法が使えるのなら、私はきっと死んだっていいから店長さんを生き返らせてた。

でも、そんな高等な魔法、今はつかえない。それに、店長さんを殺した、私の居場所を奪った人も。

他の人も、ぜんぶぜんぶぜんぶぜんぶぜんぶ……

もう、こんな世界、いたってしょうがない。

場所が無いのに、暮らせるわけが無い。

だったら、いなくなろう。

ここから。

だけどすぐにはいなくならない。

みんな、殺してから。

スフィー達はどうしよう。

殺したくはないけど、よく考えられない。

殺したくはないけど、それ以上に殺したい。

本当、よく考えられない。

よく考えられなくて、よくわからないけど、ひとつだけ、わかること。

「……私の居場所を、店長さんを奪った人たちを……私は絶対に許さない！」

そしてなつみは今まで一度もあけていなかったバッグをあける。その中にあったどうやら武器らしいもの。普通の者ならば、どっちかというと『はずれ』の部類に入るそれは、ひどく錆び付き、まるで使い物にならなそうな、全長三十センチほどの短刀だった。それを見てなつみは、きゅうっと唇の端を吊り上げる。

「もし使い方のわからないモノだったりしたらどうしよう、とか思ってたけど」

なつみは健太郎の過ごした日々の、何気ない言葉を思い出す。

「古い物には『魔』が宿る……」

事実、相当量の魔力がなつみに宿っていくのが、なつみ自身よくわかっていた。これなら、あのときの夢とまではいかなくても、それの簡易版。ある程度の自分の支配空間を作れる。

罠を。
罠を張るんだ。
ただひたすらに耐えて獲物が引っかかるのを。
魔力が尽きるまで。
生命が尽きるまで。
「私のココロ……一人でも多く、店長さんを殺した人を殺そうね。ココロも協力してくれるよね」

093　わたし。

金色の髪をした女と別れた後、私は木の実をとってそれをたらふく食べた。そして、その後少し眠った。起きると、辺りはもう暗くなっていた。
夜はできるだけ動かないほうがいい。
そう思った。
だけど、何故か私は歩かずにいられなくなってきた。私はすっと立ち上がり、暗闇の中を歩き出す。
一歩、一歩、歩くごとに、心臓がドクン、ドクンと高鳴った。
近づいてる――
何に近づいているかは判らない、だけど、何故かそう思えた。
どんどん近くなっていってる――
ドクン、と大きく心臓が又、高鳴る。
ドクン、ドクン、ドクン。
帰ろう、そう思ったけど、何故か体がいうことをきかなくなっていた。
また一歩、また一歩と脚は前に踏み出す。
――帰りたい。
その気持ちとは裏腹に、私の足はまた一歩、と前に進んだ。
目に映ったのは、相沢祐一の姿。
ドクン――
心臓が大きく高鳴った。
その瞬間、ぐらり、と世界が揺れたような気がした。意識が遠のいていく。気が付いた時、私は祐一

に向かってパチンコを発射していた後だった。

094　闇の中の出逢い

夜の帳が落ちる頃。月宮あゆ（六十一番）は、草むらの中で震えていた。
「うぐぅ……暗いよう怖いよう……」
暗いところが何より苦手なあゆにとって、この緊迫した状況の中、屋外で夜を過ごさなければならないこと、それ自体が拷問そのものだった。
「ううっ、うぐっ……」
彼女に出来るのは、こうして夜が明けるのをただじっと待つこと、それだけだった。
こんなときに、
「にゃ～」
「うぐぅっ!?」
突然、目の前から猫の顔が現れたのだからたまらない。あゆはその場で腰を抜かしてへたり込んでしまった。
「うぐっ……うぐあぅぅあぐあぐあうああぐぅぁあぁぁあ……」
「おい、どうしたんだよ、まったくよ……って」
急に駆けだしたぴろを追ってきた御堂の目に飛び込んできたのは、顔は涙と鼻水にまみれ、うぐぅうぐぅと訳の分からない声をあげ続ける少女の姿だった。
「あぐうあぁ……たすたすたすけたすけたすけうぐあぐうあうあぅ……」
完全に怯えきっている。殺すのは簡単だったが、いくら御堂でもここまで無抵抗に怯えきった子供をあっさりと殺すのはためらわれた。
「ったく……ちょっと落ち着けよ。怖がりにもほどがねえか、お前」
「うぐぅ……だってだって暗かったし、怖かったし、びっくりしたんだもん……」
「はぁ……じゃあ俺は行くぞ。じゃあな」

御堂が立ち去ろうとしたとき、服の裾が引っ張られた。
「何だ、まだなにか用か？」
あゆはぶるぶると首を振る。
「……離せ」
ぶるぶる。
「離せっての」
ぶるぶるぶる。
困った。こんなガキを連れていったら、間違いなく足手まといになるが、離してくれそうにない。無理矢理引き剥がしても、この調子だと強引に後を付けてきそうだ。
「……いい。好きにしろ」
そういって、御堂（とぴろ）は歩き出した。あゆは御堂の背中にピッタリ付いてくる。
「はぁ……強化兵がガキのおもりかよ。情けなさすぎるぜ……」

095　不実

夜が空を覆う。木々にさえぎられて月も見えないところ。一人ぽつんとたたずむ影。柏木千鶴（二十番）は悩んでいた。
いやな男……それがもっともふさわしい呼称だったあの男。確か、高槻と言った。高槻が持ちかけてきた提案は、私を揺らがせるのに十分な内容だった。
「こちら側に回って、平和ボケしている連中を一緒に殺しませんか？」
誰がそんなことを！　もちろん私はそんなことはできない、そう言った。
だが、高槻の話には続きがあった。
あの男の態度は、口調こそ慇懃だったが、あからさまな私たちに対する卑下が伺って取れた。
「鬼の血というやつですねぇ〜。ええ、調べさせてもらいましたよ。ニンゲンの命を欲し、それを達成

するための力を備えている。狩猟者でしたっけ？

いやー、非常にぴったりだ〜。そんなのが動いてると思うとぞくぞくしますよ。それでですねぇ〜、やっていただけるんでしたら、せめてあなたの縁者の方々だけでも命を救って差し上げましょう」

助かる……

なんという魅力的な取引だろう。

しかしそのために私は……

「あ、そうそう。勘違いしてもらっちゃ困るんですがねぇ。別にあなたの鬼の力自体に期待してるんじゃないですよぉ？　むしろその性質のほうですねぇ私が期待してるのは」

「……なぜって？　あなたたちの力は島の中では制限されるんですすよ。武器を持った人間を相手にしたら十分脅威でしょう。でもそういう役の人間がいないとゲームが盛り上がりませんからねぇ、われわれのささやかな演出ですよ」

私が……手を汚せばいいの？

「まあ、ありていに言えばそういうことです。妹思いのあなたのことです、まさか断るなんてありませんよねぇ？」

にたっと笑う高槻。

この男……本当の下衆ね……

「もちろんあなただけじゃないですよぉ？　百人もいるんですからねぇ、こちらも、それなりの人数をそろえさせてもらっています」

そんなこと……そうハイハイと返事できるわけ無いじゃない……

「おや、思ったより博愛主義者だ。自分の家族より見ず知らずの人間の命のほうが大事だと？」

…………

「まあいいでしょう。あなたが殺さなくても状況は自然に〝死〟を求めることになるでしょう。まあ結末は一緒になりそうですねぇ。ああ、もちろん途中で気が変わってやる気になったというなら大歓迎ですよ？　きっと派手に殺してくれるでしょうからね

ぇ。もちろん、それでもご家族の命は保障しますよ。でもまあ、あんまり決断が遅いと誰か亡くなってているかも知れませんがねぇ。はっはっはっはっはっ……」

…………

最低の男だった。

でもあいつは切れる男なのかもしれない。

同じ鬼の血を引く姉妹の中で、私にだけ声をかけたのだから。あの男の嗅覚だろうか。たぶん高槻は分かっていて私に話を持ちかけた。

……私が、躊躇無く人を殺せることに。

あまり思いたくは無いが、まさか、えこひいきでもされているのだろうか？　皮肉にも私に支給された武器は私が最も馴染むもの。何かの金属でできた『爪』だった。

まだ、妹たちや耕一さんの死は放送されていない。だが柳川は死んだ。もっとも戦闘に長けていたはずのあの男でさえ死んだ。

死は、皆に平等にやってくる。

いまなら……今ならまだ間に合うかもしれない。

今からでも、始めれば……

ザワザワザワザワザワ……

急に風が吹いた。

枝がしなり葉がさざめく。

千鶴の意識は一瞬飛んでいた。

「――――え？」

動揺したような声。それは決して千鶴の放ったものでは無い。戻った意識、そしてその視界の真ん中に、さっきまでいなかったはずの女性、高倉みどり(五十四番)が立っていた。

千鶴は黙って彼女を見つめた。大方、わき道からはみだしてきたんだろう。そんなに距離が開いていない。

「え、えーとこんばんわ？」

同じ年くらいの女性だと思って安心したのか、彼女は挨拶をしてきた。

千鶴は応えない。

ただ、まっすぐみどりを見るだけ。
笑うわけでもなく、怒るわけでもなく。
「あのー……」
千鶴が返事をしないことに少しみどりは戸惑っていた。
ほんの刹那の沈黙。そして、
「……こんばんわ」
それを聞いてみどりはほんの少し安堵した。この人は人殺しじゃない、とでも思ったのか。そして千鶴はゆっくりと表情を笑顔に変えた。瞳がかすみ、口元が乾いた、やや危うげな笑みに。
「えっ？」
気付く間もなかった。
その瞬間、一気にみどりに走りよった千鶴は、両手に装備した爪で彼女を十文字に引き裂いていた。
「そん……な」
みどりは懇願するようにつぶやいた。そしてまもなくその命は尽きた。
高槻が鬼畜なら……私も鬼畜ね。
木々の狭間からこぼれる月明かりが、千鶴の両手に装着された爪を照らす。白銀に光る爪の上で、滴る血は鮮やかな紅に映えていた。

五十四番　高倉みどり　死亡

【残り80人】

096　疑心暗鬼

夜。手頃な民家の窓ガラスを割って中へ侵入した柏木梓（十八番）は、がたがたという物音で目を覚ました。寝ぼけながらも辺りを見まわすと、隣で見張りをしているはずの霧島佳乃（三十一番）が見当たらない。
「トイレでも行ってるのかな？　……ったく。順番で見張りやろうって言ったのに」
無断拝借している毛布をかぶりなおしながら、そ

んなことを考える。
　がたん。ぎぃ……。
「え？」
　がば、と起きあがる。今の音は……玄関のドアを開けた音ではないか？
「あの子、何を考えてるんだか……夜は危ないから、ここに身を隠そうと言ったのに」
　眠気を追い払い、梓は立ちあがる。急いで玄関に向かうと、果たしてドアは開いていた。
「……」
　どうしようか、と梓はしばし考える。自分で出ていったんだ。追いかける義理もない。
　無いのだが。
「……ああ、もうっ。あの我侭娘は！」
　梓はメイド服のスカートをひらひらとさせながら夜の住宅街を駆けだす。危険な目に遭いそうな人を放ってはおけない。柏木梓は、そういう女だった。
　数分の捜索で、佳乃はすぐに見つかった。街灯がさすだけの暗い道を、とぼとぼとどこかへ向かっているようだ。
「佳乃っ！」
　梓は叫ぶ。その声はひんやりとした夜気に吸い込まれていった。その声に反応してか、佳乃は立ち止まる。
「……」
「佳乃っ！」
　もう一度、梓は叫ぶと佳乃の元へ駆け寄る。佳乃は何を見据えるでもない、虚ろな瞳を梓に向けた。
「……」
「全く、こんな勝手なことして。さ、戻るよ。ここで別れたいって言うなら、一言あたしに断ってからにしな」
　梓が佳乃の腕を掴んだ瞬間。佳乃の唇が動いた。
「ならばいっそ、わたくしの手で……」
「え？」
　佳乃の両腕が持ちあがり、その指が梓の首に廻さ

れる。
「ちょ……あぐっ!?」
指に力がこめられた。その瞬間、梓の首筋を灼けるような激痛が襲った。
「……」
首の皮膚が熱い。まるで熱した鉄棒を押し当てられているようだった。梓は振りほどこうともがくが、その細い腕をどうしても振りほどけない。
「く。この……おっ！」
苦し紛れに膝蹴りを放つ。が、びくともしない。
呼吸が出来ない、意識が遠くなる。
「……く」
きぃん。
ふいに、手に込められた力が抜けた。梓は渾身の力でその腕を振り払うと、その場に崩れ落ち、貪欲に空気を吸いこむ。
「げほっ、げほっ……はあっ……はぁっ……は」
呼吸を整えながら、梓は殺気を帯びた目を佳乃に向ける。と、そこにはある方向をぼんやりと見つめている佳乃の姿があった。梓も釣られて視線の先を追う。
小高い丘が見えた。
そして、すっ、と音も無く佳乃はまた動き出す。恐らく、その小高い丘を目指して。
「ちょ……ちょっと！　う、げほっ」
呼びとめようとして、梓が咳き込む。首筋を触ってみると、ひりひりと痛む。
その隙に、佳乃の姿は見えなくなった。
梓はその場に座りこむ。そして、再認識する。これは『殺し合い』なのだということを。
「……相手の正体を知りもしないで、ホイホイ招き入れたあたしが馬鹿だってことか」
勿論、佳乃にも何か理由があってあのようなことをしたのかも知れない。だが、実際襲われた身にしてみれば、どんな理由があろうと、簡単には信じれなくなってしまう。

「はは……ははははは」
梓はおかしくなって、笑った。そうだ、これは殺し合いなんだ。相手を信用すれば――、裏をかかれて殺される。
「……こんなものぉっ！」
梓は頭につけていたネコミミを地面に叩きつけようとして……できなかった。
佳乃の贈り物。それを壊したら、自分はもう誰も信じれなくなりそうで。
「……疲れた。寝る。後の事は起きてから考えよ」
梓は拳で目の辺りを拭うと、力無く民家へと戻っていった。

097 （無題）

ビュッっと音がしたと思えば、右肩を何かが掠めた。
「な、なんだっ!?」
「祐一っ、覚悟っ！」
目の前にいたのは沢渡真琴だった。
「な、真琴っ!?」
真琴に出会えた。それは正直いって嬉しかった。だけど――こんな状況になるなんて思ってもみなかった。
「なぁ、真琴。冗談だろ？」
真琴は有無を言わず、玉をパチンコにセットして、また、撃った。ヒュンと、玉は相沢祐一の顔の横をかすめた。くっ、と相沢祐一は唇をかみ締め思った。
誰も殺させないと思ってた。みんなを守ろうと思ってた。しかし俺が狙われるとは……しくじった。
予想外の展開だ。
「真琴、落ち着け、とりあえず落ち着くんだ！」
「うるさい、祐一っ！」
真琴は話を聞く気などない。しかし、真琴をとめないとどうしようもない。俺が死ぬだけだ。だけど、俺はここで死ぬわけにはいかない――茜に逢うまで

はっ。しかし、真琴を撃つ訳には……
真琴はまた、パチンコに玉をセットした。
「祐一っ！　かくごーーーっ！」

098　背中合わせのさよなら

「もうすぐだ。もうすぐ信頼できる人のいるところに着く」
背中にシュンを背負い走りながら、往人は言った。
「すいません……もう、もたないようです……」
「おい、何を言って」
「僕は……心臓の病気で入院中だったんですよ……もう限界みたいだ……自分のことは、よく、わかります」
「なんだと……」
その内容は、往人の足を止まらせるのに充分だった。
「じゃあ連中は、入院中のお前まで……」
「病院を変わると言われて、車に乗せられ……気付いたら」
「……くそっ」
ここまで強い殺意を抱いたのは始めてかもしれない。
今までは、あの呑気な田舎町の人間と一緒に帰れたらいい。
そう思っていた。
だが……
「このままじゃ、寝覚めが悪い」
「……戦うんですか？」
「……」
「そうですか……僕を撃ったあの女の子、里村茜と言います。彼女を、できれば、助けて欲しい」
思ってもない申し出だった。
「彼女は、誰よりも深い思いに縛られている。だから、彼女には殺すしかないんです。彼女を……」
「……考えておこう……」

嘘だ。許すつもりは、毛頭ない。
強い目的があって動いているのは誰も同じだ。
その目的が衝突し、殺しあうことになるなら、躊躇はしない。
だが、とりあえずこの少年の前では、こう答えておいた。
「……ありがとう、嘘でも嬉しい……僕は、氷上シュンと言います。名前、教えてくれますか？」
「国崎往人」
「……ありがとう……いい名前です」
「礼を言ってばかりだな？」
「はは、そうですね……」
それきり、喋らなくなる。
少し遅れて、背中越しの鼓動が、停止した。

七十二番　氷上シュン　死亡
【残り79人】

099　矛盾の上に咲く花

「佳い夜だ」
北川潤（二十九番）は樹木に体を預けてじっと空の月を眺めていた。今夜は満月であり、月明かりはこんもりと茂る森の中にもわけへだてなく差し込んでくる。冴え冴えとした月光を浴びながら、北川は久々に野外で過ごす夜の雰囲気と気分に浸っていた。
「こんな夜はやっぱりポン酒だな。あとはホッケとたこわさ、蟹ミソもんじゃ」
「ジュン。ほら、モズクだよ」
北川の傍らに座っていた宮内レミィ（九十四番）が彼にもずくのチューブを差し出した。
「ふわふわとりめん鮭茶漬け、砂肝ザーサイマグロの山掛け」
彼女も初めて出会ったときの錯乱状態はすっかり影を潜め、今では普通のレミィに戻っている。

「おいしいよ、サンバイズがよくきいてマスヨ」
「鳥皮を串に刺して炙ったヤツに塩をふったら」
「早く食べないとワタシが全部たべちゃうヨ」
「軽く最後に七味唐辛子をまぶして…」
「なくなっちゃうヨ、いいんデスカ？」
「ふぅ、たまらんねぇ」
「ジュン！」
　さすがに腹に据えかねたらしく、レミィが語気を強めて北川ににじり寄った。
「腹が減っては戦はできぬっていうヨ？　なんでもいいからお腹に入れておかなきゃだめダヨ」
「はいはいはいはいはい」
　レミィの言うことはいちいちもっともな事だったが、右から左へぞるぞるぞるぞるもずくを啜る彼女を見てるだけで己の食欲がどんどん減退していくのも確かなことだった。
「うむ」
　それにしても、本当によく食う。
　腹に全米も震撼する超弩級のサナダムシでも飼っているのだろうか。あるいはもずくにそこまでの魅力があるのだろうか。しかしミネラルやカルシウムはありそうだが、思想とか道徳はなさそうだ。
「もずくねぇ」
　北川はうんうんと何度も頷いた。
「ジュン、どうしたの？」
　じっと考え込んだまま固まってる北川をみかねたのか、レミィがぐいっと、心配そうに彼の顔をのぞき込んだ。
「いや、なんでもない」
　再び北川はうんうんとうなづく。
「モズク？　モズクがどーかしたんですカ？　ねぇ、ジュン。モズクがどーしたノ？　モズク食べたくなったの？　教えて欲しいデス」
「あ、いや、うん、なんでもないんだって。何でもないから。まぁ、なんだ、もずくはいいんだ、もずくは」

あわてた北川はしどろもどろになって取り繕う。正直に「君のアニサキスはヨーロッパのシーンを席巻する勢いだね」と陳述してもよかったが、妙齢の女性にもずくやぎょう虫を織り交えたフランクな会話を吹きかける事ができるほど北川は無神経ではない。不謹慎な事を考えながらもレミィの天真爛漫さに触れるにつけ、北川の心に落ち着きや安らぎにも似たものが舞い戻ってくるのも確かだった。

ただ、この場において「やれんのか」と問われたとき、「やれますよ」と答えられる覚悟も欲しかった。ここはキャンプ場ではない。殺戮の場、人殺しや騙し合いが認められたキリングフィールドなのだ。

確かに強制収容所のような極限的な状況下で生き延びることができるかどうか、それはまずもって、体力及び気力で決定されるに違いない。しかし、頑健な身体と強い精神力の持ち主であれば必ず生き残れるというわけではないのだ。生き延びるためには、ある種の狡猾さが必要なのだ。ありったけの「才能」をはたいて、自分が味方にとって何らかの意味で有用な存在であることを必死になって示さなければならない。そしてそのためには、その他人を裏切ることに何ら痛痒を感じないかもしれない。むしろ、裏切られる人間の方を「愚鈍なヤツ」と読んで、何の良心の呵責もなくすましてしまうのかもしれない。

「寝るか」

そういってごろっと横になった。土や砂が体にまとわりついたが彼は気にしなかった。ただ今は少しだけでいいから眠りたい、考えることは彼にとって非常に疲れることなのだ。

特にこういう事は。

「ウン、いいヨ。ジュンが寝てるときはワタシが見張りしてるネ」

グッナイ。微笑みながらレミィが言う。

白いリボンをといたレミィの髪が月明かりに照らされて、金粉を蒔いたかのように夜風にそよそよとなびいていた。

微睡みからゆるやかに夢を結びゆく中で、北川はレミィに薄ぼんやりとマリアの姿を見た気がした。

100 （無題）

「……人が近づいてきます」
姫川琴音（七十四番）は、そう皆に告げた。
「国崎往人が帰ってきたのかな？」
みちる（八十七番）の疑問に琴音は首を振る。
「いえ……彼ではありません」
「分かるのね」
水瀬秋子（九十番）が尋ねる。
「はい。……力が弱まってるので正確には分かりませんが……国崎さんでない事は確かです」
「やっぱりこのゲームじゃ、静かに過ごす事なんて出来ないのかしら……」
水瀬秋子は、椅子から立ち上がり机の上に置いておいた支給武器——木の棒を手に取った。

「あなた達は、カウンターの後ろに隠れていなさい。絶対に出て来ちゃ駄目よ」
「でも、お母さん……」
水瀬名雪（九十一番）は不安そうに声をかける。
「安心して。あなた達は大丈夫。そして、私もこんな所で……」
ドンッ！
低い火薬の爆発音が、辺り一帯に響き渡ると同時に曇りガラスが粉々に砕け散った。
「キャーーー！！」
悲鳴が響き渡る。
（かなり大口径の銃ね……）
すっかり見通しの良くなった窓枠から冷静に外を伺う。
そこには、一人の男。
「瑠璃子は此処には居ない……此処に居るのは、瑠璃子と一緒に帰ることを邪魔するヤツら……邪魔はさせない。瑠璃子と一緒に帰るんだ。邪魔するヤツ

は皆殺す皆殺すミナコロスゥゥゥ！」

疾走。

（速い。この付近で戦えばあの子達も巻き込む事になる……）

窓から飛び出し、月島拓也（五十九番）を喫茶店から引き離しにかかる。

「貴様か、貴様が邪魔をするのか。生かしておけない。邪魔をするなぁ！」

（よし……国崎さん。帰ってきたらあの子達をよろしくね）

101　星霜

少年は二人分の荷物を背負って歩いていた。

一つは自分の。

一つはもういない人の。

まだ開始からそんなに大した時間も経っていないが、なんだかどっと疲れた気がする。

「苦労性なのかな……」

自分に向けられた軽口に、少し疲れたような笑顔。

見るものが見れば、それが何を示しているか分かったのかもしれない。

森を通るのは避けていた。折角海岸まで出たのに、わざわざまた森に入る気がしなかった。それにもう夜だというのに、見通しの悪い森の中を歩いて、誰かに襲撃されるのはごめんだった。

死ねない、死ぬわけには行かない。

予感のような『死なない』ということではなく、意志をもった、生きようとする思い。

たった一瞬だった出会いが、ずいぶんと自分を変えたものだった。海面を撫でるように吹く風は、なぜだかやさしく自分を包んでいてくれるような気がした。

「……ふぅ」

少し疲れたかな？　少年は座って休むことにした。

思えば、日中は歩き通しだった。

……ここはどの辺かな。学校を海岸線に沿って北上していったんだから、スタート地点『Ⅱ』の辺りかな。

ふぅ……

やっと一息ついたって感じだ。こんなに疲れていたのかな、僕は。

星が天上で瞬いているのが見えた。こんな状況だっていうのに、あせることなく、輝きを保っている。

……なんだろう

少し……眠い……や…………

記憶。

少年の記憶。

そこには二人の人間がいる。

一人は無論少年。

そしてもう一人は……

「確かに『これ』を使えば、ほとんどの銃火器を無効化することができる。歩兵を主軸にした高槻の布陣なら、単体でも突き崩せないことは無いかもしれない。だが……」

白衣を着た男――巳間良祐――は苦虫をつぶすような口調で言った。

「お前も入れられてしまっているだろう？　端から僕たちに選択肢は無いのさ」

少年はあっさりと言った。もちろんいつもどおりに笑って。

「爆薬系……手榴弾から単純な炸薬、それからバズーカなどのボムを発射する物についてはまずい。それ以外なら……たとえレーザーが来ても大丈夫だ」

良祐はそれを軽く撫でながら言った。

「逆にいえばそれらがアウトだ。爆風を根こそぎシャットアウトできるほどの面積は確保できない」

「十分強力さ。それにそういうときのために、お前のそれがあるんだろう？」

少年はくいっと首で示した。良祐の持っている『鍵』であった。

「……これは最後の手段だ。これを使えば、たくさ

んの人間が死ぬ。もしかしたら俺も……君も」
よどみない話し方の割に緊張した面持ち。いや、もしかしたらその声はわずかに震えていたのかもしれない。
「そのくらいの前提で無いと逆に困るよ。いかさまをするのに躊躇してどうなる？　絶対勝てる賭けで大きく張らないでいつ張るのさ。どうせ張るなら大きな罠を、ね」
少年は軽くウィンクした。だが、良祐の顔は晴れない。
「そんな顔するなよ？　もしかしたら、死人を最小限に抑えることができるかもしれない。それは、必ずしも僕たちの目的ではないけれど、そうできたらいいだろう？」
少年は良祐を促す。
「……ああ、そうだな」
憂いばかりだった良祐の表情に、ほんの少し笑いが浮かんだ。少年も、それに合わせたかのように、また改めて微笑んだ。少し埃にまみれた、小さな沢山の部屋の、その一室での出来事。
「……ん」
目が覚める。少しだけ眠ったようだ。まだ辺りは暗い……目をそっとこする。
夢を見ていた。僕と、そして巳間良祐の。あいつもおそらく動いていることだろう。僕と同じ、唯一つの目的のために。
さあ、行こう。こうしてる間にも、また一人また一人と人が死んでいるのかもしれないのだから。

102　賽は投げられた

目覚めは最悪だった。
非常灯の明かりだけを頼りに雪見はあたりの様子を探る。あまり寝つけなかった。多分床についてから二時間と経ってはいないんだろう。
誰もいないデパートの三階、玩具売り場。喜ばせ

る主もなく動きつづける兵隊の玩具が実に滑稽だ。
誰もいない建物。なのに出入り自由なこの状況は連中が作り出したものだろうか。
「何から何まで用意周到ね……」
ここの地下一階で盗った食料品を口に含む。そして、一気にミネラルウォーターで流し込んだ。味なんてしなかった。どんなことをしても辿り着きたい。そんな憎悪は、目が覚めても薄れはしない。
「まだ時間は有る……」
正確な時間はわからないが、なんとなくそう思う(ちなみに、デパートの時計はすべて破壊し尽くされていた)。雪見は新たな道具を手にとった。使えそうなものを自分でかき集めたのだ。百円ライター、自分で作成したジッポオイル入り水風船(三個が限界だった)ドラゴン花火三十連発、いずれもココで手に入れたものだった。
武器として使えそうなものはほとんど撤去されていて、彼女は調理用の包丁の一本すら見つけることができなかった。
「絶対に死なないわ。すべてを終えるまで」
悪魔達には死を。それを邪魔するものはすべて排除する。のそりと影が動き出した。復讐という名の殺戮ゲームへ。

103　医師⇔意志

「くっ……！」
「気付いたようだな、少年」
痛みによって目が覚めた。目の前には先程の医者。もう一人の少女はいない。続いて自分の体を見る。
「これは……あんたがやったのか？」
「怪我人を手当てするのは医者の務めだ。どんな者でもな」
「頭悪いんじゃねぇのか？　俺がもう一度あんたらを襲ったらどうする？」
「ぬかりはない。君の武器はマナ君が捨てに行って

いる」
「……」
「どうだ？」
「……ちっ」
言い捨て、目を逸らした。
「君は何故人を殺す？」
「決まってるじゃねーか、生きて帰りたいからだよ」
めんどくさそうに答える。
「後に楽できるんなら、苦労はとっととやっておくもんだぜ。めんどくせーけどな」
「そうか。ならばこのまま野放しにしておくわけにはいかないな」
聖はそう言って、またどこからかメスを取り出した。
「殺すのか？」
「馬鹿を言うな。医者が人を殺しちゃいかん。このメスにはちょっとした薬が塗ってある。速効性だから、すぐ眠くなるはずだ。マナ君が戻ってきたら、眠ってもらう。そうした後に、そこらの木にくくりつけさせてもらうよ。その間に、トンズラだ」
その言葉に浩之は苦笑した。
「おいおい、結局は見殺しじゃねぇか。だったらとっとと殺せよ、めんどくせぇ」
「私は医者だ、人は殺せない。しかし出来ることにも限りがあるのでな。……君が改心するつもりがないなら仕方がないさ。精神科は私の範疇ではないのでな」
その声には、今までのような張りはなかった。見殺しという事実に苦悩しているのだろう。
「けっ……かったりぃこと言ってやがる」
「性分だ。仕方あるまい」
もう浩之は喋らなかった。この医者が自分を殺すつもりがないのはわかった。ならば後は待てばいい。罠にかかる瞬間を。これは賭けでもあるが、実際のところ負けてもよかった。

――かったるいから。
「何か隠しているな？」
「さぁな？」
「患者の嘘を見抜くのは得意だ、何を隠している」
メスを持ち浩之に責めよる。
次の瞬間。
「きゃぁぁっ！」
森に、マナの悲鳴がこだました。
「マナ君⁉」
その一瞬だけ、注意が逸れる。
「だから甘いんだよ！」
隙を狙い、浩之は声のした方へ駆け出した。
「くっ、しまった！」
急いで後を追う。だが夜の森の中だ、走り辛いことこの上ない。運動神経のよい浩之に、差は離されていくばかりだ。
（あの少年……何故あんなに早く走れる？　迂闊だった……マナ君が戻ってくるまで眠らせておくべきだった！）
自分の迂闊さを呪うも、既に遅かった。破れかぶれでメスを投げるも、ことごとく当たらない。
（腕も鈍ったものだ……くそっ）
「霧島先生！」
辿り着いた先に見た光景は、倒れているマナに向かい、ナイフを突き付けている浩之の姿だった。マナの足には矢が数本刺さっている。早く手当てしないと、傷口が化膿して大変なことになるのは明白だった。
「わかってるよな、動くなよ。動いたら、即、こいつを殺す」
「先生……」
マナは怯える視線を送るだけだ。『助けて！』と、自分の身だけを考える発言はできなかった。『私のことは構わないで！』と、自分の命を投げ出すこともできなかった。
ただ怯え、震えるだけ。

「陳腐な脅し文句だな……何をした、少年？」
その声は震えている。
「教える必要もないが、いいか。ちょっとした罠さ。糸を張っておき、引っ掛かったら矢が発射される──これを四つだけ森に仕掛けておいた。運がよかったよ、用心するに越したことはない。で──」
落ちていた銃に手を延ばす。
「まだどっかに捨てられてなかったみたいだ。こいつも、運がよかったよ」
銃を構え、聖に向ける。
「……私の命はやる。だが、マナ君は見逃せ」
「先生──」
「あんたの言葉も陳腐だよ。じゃあな──」
そう言ったときだった。
「このっ」
マナが浩之の腕に噛み付いた。
「っ!?」
怯え切ったマナに、こんなことをする度胸はないと踏んでいたが、どうやらこちらも甘かったみたいだ。
「マナ君、逃げろっ」
言いながら、浩之が隙を見せた瞬間、聖はメスを持って間をつめる。
が、遅かった。
ダンッ、ダンッ！
二発。弾丸が聖の体に叩き込まれる。
崩れ落ちる聖の体。
次に浩之はマナへと銃を向け──
足に痛みが走る。
──しくじった、さっきのメスだ。
「……速効性は伊達じゃない」
聖の声が遠くに聞こえる。その時にはもう、浩之の意識は闇に落ちるところだった。
「先生！　先生！」
「……ははっ、油断したよ……」
聖に駆け寄るマナ。聖の体は既に、冷たくなりつ

つあった。
「私が……私が……」
「気に、するな……生きていてくれれば、それでいい。そんなことより、早く逃げろ。私は、もう、ダメだから」
「そんなっ！」
「私は医者だぞ？　医者の言うことは聞け……」
「先生……」
マナの目には涙が浮かんでいる。
「いいから早く……その足じゃ満足に動けないだろうが、私にはもう、治療できない。こいつが目を覚ます前に早く……」
「どうして！　殺せばいいじゃないですか!!」
マナの声が響く。
「……私は医者なんだ。君も医者の助手だ……やはり甘いな、私は……」
「……せんせぇ……」
「早く……行くんだ……元気でな……」

僅かの沈黙の後、涙を拭い、言う。
「はい、先生。ありがとうございます……さよなら……」
静かだ……。
もう、死ぬな……。
佳乃……。
すまないな、こんなお姉ちゃんで……。

三十二番　霧島聖　死亡
【残り78人】

104　面影

――月影。
みあげるとそこに、しろいかげのひかり。
面影。
「瑠璃子さん……」
僕の思いはその一言で、宙に浮かんで消えた。

天

「それが、探している人の名前ですか？」
　隣で天野さんが訊ねる。
「うん」
　僕は短く答えた。彼女もそれっきり、何も言わない。
……ぼくも、だれかをころすことになるのだろうか。そう仮定してみて、僕の思考は停止寸前になった。
　さっきは、天野さんにああは答えたが、まだ、心の整理はつかない。つい、ほんのつい昔までの僕なら、他の選択肢さえ思いつかなかっただろう。
(でも、今の僕の望みは、瑠璃子さんに会うだけで、ただそれだけで)
　それだけで、いい。
「手段と目的は」
　唐突に天野さんが語りだす。
「……必ずしも、いつもうまい具合に折り合いがつくとは限りません」
「……」
「でも……」
　ここで、僕は初めて、天野さんの顔を間近に見ることになった。少し瑠璃子さんに似た、面影。
「私は信じています。貴方ならきっと目的を優先してくれるでしょう」
「少し、疲れました」
　そう言うと、彼女はその華奢な頭を、そっと僕の肩に寄せた。
「わ……」
　あまりそういうことに慣れていない僕は、少しうろたえてしまう。
「すこし、お喋りが過ぎましたね」
　彼女は、ノドの奥でくすくすと笑った。
「ちょっと……あの、天野さん」
「なんでしょう？」
　僕に体を預けた姿勢のまま、天野さんは顔だけをこちらに向ける。

「こ……この状況で、寝ちゃうのは、ちょっと都合が悪いと思うんだけど……」
「どうしてですか？」
「僕だってほら……見ず知らずの他人な訳だし」
「大丈夫ですよ」
彼女は眼を閉じた。
「今私たちがいる木の洞というものは、あまり人目につかない場所なんですよ」
「いや、そうじゃなくて……」
「それに、昔、隠れんぼした時、あのこがここに隠れると、私はいつもあのこを探し出せないでいたものです」
「——そういう話じゃなくて、その、僕に裏切られるとか、そういうことは考えないの？」
「考えません」
彼女はきっぱりと答えた。
「そんなこと、別に根拠も何もないよ」
「根拠なら……少しは、あるんです」
彼女の声が少しずつ小さくなっていく。聞いている僕のほうも眠くなっていくような、そんな声だ。
「……あのこの面影が、少しだけ、あなたの中に見えるんです」
「あの子って、もしかして天野さんが探している人のこと？」
「いえ……その子とはまた別のこです。また会いたいとは、ずっと前から思ってましたけど……」
一瞬天野さんの表情が何かをとても懐かしむものに変わり、その名残を惜しむ暇もなく、ひどく切ないものになった。
「では、私は少し仮眠をとります。どこかで、ツインテールの騒がしい女の子が暴れていたら、起こしてくださいね？」
今度は本当に、天野さんは眠ったようだ。穏やかで規則正しい寝息が、洞の中に響き渡る。僕は、その寝顔を見て、半ば安心したような心持ちになった。
そして、ふと、何を思ったか、僕はずっと開けてい

なかったバッグを開いた。中のものを乱暴に取り出す。黒い皮製の手袋と、ピアノ線。
（これで、縊り殺せってことか）
その際、掌が傷つかないようにとの配慮から、手袋があるらしい。
（まったく、これほど不要な思いやりなんて、ないよ）
手袋をつける。レザーの擦れるぎりぎりと言う音が、そこから奏でられるだろうピアノ線の悲鳴を連想させる。
ピアノ線を手にとる。
そして――
伸ばしたピアノ線を再び丸め、取り出しやすいように胸ポケットにしまった。

105 （無題）

「高槻殿」
「なんだ？」
報告に来た兵士に背を向けたまま。不遜な言葉使いで答える高槻。
「……じつは、部隊の一部が我々の指示を離れて、一部の参加者に対して攻撃を行っているという情報が入りました。……申し訳ありません」
「こまるんだよなぁ、勝手なことをされちゃあ」
チャリ……
振り向きざま、兵士に対して何の躊躇もなく銃を向ける。
「た、高槻どのっ！」
「で、誰を攻撃しているんだ？　返答によっては、このまま引き金を引くが」
うすい笑みをたたえながら、回答をせまる。
「はい、あ、あの。保科智子、巳間晴香の二名です」
「そうか」
うれしそうな表情をうかべ、銃をおろす。

……そうか、おもしろい。
さあ、どうする巳間の妹。この難関をくぐりぬけて、俺の元まで辿り着くことができるのかな。
「クッ、クックックッ…」
笑いを押し殺しながら、彼の脳裏に浮かんでいたのは。かつて自らが貫いた、晴香の瑞々しい裸体だった。

「どないなっとんねんー」
隣の木の陰に身を隠した智子が、その手にした「S&W　M586」の引き金を引く。
……私達は公民館が炎に包まれる中、出来る限りの手がかりを探した。だけど見つかったのは、残されていたいくつかの武器だけ。その中から私と智子、そしてあかりの為に三丁の銃を持ち出したのだけど。
燃え落ちる建物を後にしようとしたその時、ジープに乗った四人の兵士がやって来たのだ。
「わたしたちが放火魔だとでも思っているんでしょ」
拳銃——ベレッタ92Fに装弾しながら返事を返す。私達を見るなり、彼らは発砲してきた。体勢を立て直す間もないまま、私達は西側の林に逃げ込んだ。
本当は、さっきの出来事について智子に問い直したかった。あの少年は何者なのか、と。
だが、そんな暇さえありはしなかったし、それよりも心配なことがあるのだ。
……あかりを置いてきてしまった。
彼女がいるのはここより北側の林の中だ。敵に見つかることはないと思うけど、彼女には有効な武器がない。あんな爆弾じゃあ、至近距離の敵は倒せない。不安がるあかりの顔が脳裏に浮かんだ。無性に切なくなった。そんなことを考えている間でも、戦闘は続いているのだ……
「ちぃっ！　あーもう面倒や！」
そう言うと智子は、自動小銃（六四式）に持ち替え、木の陰から踊り出た。

「みぃんな、いてまえ！」
タタタタタタタタン！
射撃時の反動に負けないように両足を広げ、脇を締め、銃を両手で持ちながら、ジープの陰に隠れた兵士たちを撃つ。
……かっこいいじゃない。
負けられないわね、これじゃあ。
わたしは意を決して、自分の持つ『力』を発動させながら、もはや使い慣れた日本刀を手に、敵の中に斬り込んでいった。

106 （無題）

喫茶店から飛び出した秋子を見失った月島拓也は小さな藪に足を踏み入れた。
（ここに誰かいる……）
電波使いとしての感覚が敵はここにいると告げている。
さくっ、さくっ、さくっ
膝まで生えた雑草を踏みしめて標的に向かう拓也。所詮相手は棒っ切れを持った女、自分の優位は動かない。
「瑠璃子、瑠璃子……僕等以外は皆殺しにしてやるよ……」
どろりと濁った笑みを浮かべ右手のマグナムに目をやる。弾も充分ある。
（あいつを殺したら喫茶店内の奴らも……ククク）
慢心が足元への注意を怠らせた。
「ガチィィーーーーーーーン！！」
「っーーーーーー！！」
骨をも砕く鈍い音と苦悶の声が響きわたる。拓也の右足に食らいつく大きな鉄の爪――それは熊狩り用の罠だった。
「うぁぁぉぉぉ……」
マグナムを捨て両手で懸命に鉄の爪を外そうと試みる拓也。しかし襲いかかる激痛にそれもままなら

ず、くぐもった悲鳴だけが口から漏れる。爪は脛の骨も砕きそうだ。
「痛いんだ、瑠璃子……兄さんを助けて瑠璃子、るりこ、ルリコ……」
ビキッ
脛が爪に砕かれた瞬間、拓也の意識は途絶えた。間もなくしてハンチング帽をかぶった長身の女が失神状態の拓也に近づく。
ズドン！
右手に持った散弾銃で拓也の頭を吹き飛ばした。その女は亡骸から銃と弾を奪い、改めて胸に向け駄目押しの一撃を放った。
外した罠を拓也の服で拭い終わり、バッグに仕舞いながら篠塚弥生は呟いた。
「喫茶店ですか、由綺さんも居るかもしれませんね……道案内を頼みますよ」
その呟きは少し先の藪に身を潜めている秋子に向けたものでもあった。

「聞こえてらっしゃるんでしょ？　喫茶店までの道案内、よろしいですね？」
拓也から奪った銃に安全装置をかけて、ベルトに挿し予備弾丸はポケットへ。熊用の罠、拓也の食料と水は自分のバッグへと全てのアイテムを仕舞い終えた弥生は、改めて秋子の居る空間に言葉をかける。もちろん散弾銃への弾の装填も怠らない。
……幾ら藪の中とはいえこの距離で散弾銃を相手するのは危険だ。また、彼女からは剥き出しの敵意は感じられない。それに、喫茶店に残した名雪達の事を考えると時間は取れない。
数瞬の後、秋子は両手を挙げて姿を見せた。
ぐずぐずしてはいられない。敵対する意思の無い事、また武器もこんな物しかない等最低限の会話を交わした後、喫茶店に残してきた者に殆ど戦闘能力が無い事を告げ、弥生の手を取って秋子は走り出した。

五十九番　月島拓也　死亡
【残り77人】

107　謎

街道（といってしまうのもはばかられるような粗末な道）から山へと入ったところにある洞穴。そこで休息をとる二人がいた。柏木耕一（十九番）と天沢郁未（三番）である。
未だ耕一はまるで変態のような（というか変態）格好ですごしている。対する郁未は未だ下半身を露出させたままのえちぃ格好だ。
「寄り添いあって眠る姿は、まったく知らない人がみたら二人は仲のいい恋人（しかも進んでる）に見えなくもない」
ボカッ!!
「誤解されるような解説をしないで」
「あ、わりぃ、つい声に出てたか」
（声に出さなきゃいいってもんでもないでしょ……）
耕一は郁未の姿を確認する。
「少しは寝てろよ……俺が周囲に気を配ってるからさ」
「私は眠くないのよ……あなたこそ寝たら？」
嘘だった。思っていた以上に精神的な衰弱が激しい。そんな郁未を見かねて耕一が休もうと無理やり言い出したのだ。
「俺はさ、ほら、戦闘のあとしばらく寝てたから……」
あれは気絶だ。
「……あなたは不安じゃないの？　こうしてる間にもみんなが、大切な人の命が危険にさらされてるかもしれないのよっ!!」
「……」
郁未は声を潜めながらも、叫ぶ。
「俺はさ……」

一瞬の静寂。それはすごく長く感じられた。耕一が先にそれを破る。
「確かに心配だ……今すぐにでも行動したいという思いももちろんある」
「だったらっ……！」
「だけど、俺が……俺達が死んだら残されたみんなはなんて思う？」
「えっ……？」
「きっとすごく悲しむと思うんだ。俺や、従姉妹のみんながそうだった」
親父が死んだあの事件、今も忘れられない。耕一も、千鶴達も。
「だから、休むときは休む！　万全な体勢で臨まないとな！」
「……」
（お母さん……）
お母さんの、晴香達みんなの悲しむ顔……見たくない。

「確かにそうね……」
「みんなも、俺達も笑って帰ろうぜ。だから今は休め……」
「うん、ありがと……」
郁未は少し安心した顔を見せ、そのまま意識は闇へと進んでいった。
（だけど……どう行動するべきなんだろう）
移動中、郁未が言った言葉……
「高槻……あいつはバカで高慢ちきだし、髪の毛だってハートチップルよりくさいけど、決して無能じゃない……そんなやつがなにも企んでないと思う？」
最悪の場合、私達の手の届かないところに黒幕が存在してるかもしれない……
「真の……黒幕ね……」
誰に言うでもなく、耕一の声が洞穴に通った。

108　吊り橋の死闘

「ほれ、もう元気だしぃや！」
　猪名川由宇（七番）が横にいる少女に声をかける。
「……ん……」
　大庭詠美（十一番）は力無くそう答えた。先刻からこの繰り返しだ。
（まあ、無理も無いか。詠美にはちょっと刺激が強すぎたかもなぁ……）
　由宇が顔をしかめる。もちろん由宇だって恐くないわけじゃない。白衣の女（石原麗子）との戦いのときは無我夢中だった。今も詠美が横にいなければへたり込んでしまうくらい足が震えそうだ。
（まあウチが弱音吐いたらこのコ、もっとおびえてしまうしなぁ）
　おもわず苦笑する。いつもよりはちょっと硬い由宇の笑い。
「どうしたの……？」
　普段なら悪態のひとつでもつきそうな詠美だが、素直に由宇を覗き込む。
「ん？　ああ……まあ、いろいろな……」
（いつもこんだけ素直なら可愛いんやけどなぁ）
「ふみゅ……」
「えーい、女々しいわ！　いつまでもグズっとらんと、しゃんとしぃ！」
　思わず一喝。詠美は脅えた子猫のように身体を縮こめる。
（あ、しもた……ついいつもみたいに怒鳴ってもうた。いかんなぁ）
　だが、いつもみたいな台詞が吐ける分、由宇の緊張は和らいだようで……
「さあ、帰る準備するで」
「えっ……帰れるの……？」
「いや、すぐには無理やろうけどな」
「ふみゅ〜」

「まずは和樹達を探そか？　あいつはああ見えて肝が座っとる。あいつはウチが認めた男や。きっと何とかしてくれるはずや」
「ほんとに……？」
（あかん、こいつおとなしいとめっちゃかわいいな……）
女同士なのに――火照っていく顔を隠せない。
「そうや。おっ、見てみぃ！　吊り橋やで！」
由宇の視線の先、大きな谷があった。下には轟々と音を立てる激しい流れの川。
「絶景やなぁ……ていうか、この島なんでもそろっとるな……」
そんな場所だからこそ、敵はこの島を指定したのかもしれない。
「とりあえず渡ってしまおか」
「な、なんか落ちそうなつり橋よね……」
「まあ、落ちても多分死なんやろ。運が良ければ無傷かもしれんで」
川の流れは速いが、深さはそれほどなさそうだ。
「運が良ければばって……パンダぁ～」
「冗談やっての……」
二人は慎重に歩を進める。歩くたびに吊り橋が揺れて、結構スリリングだ。
「ふみゅ～ん！」
「ええい、騒ぐな！　うっとおしぃ！」
「そこまでよ……」
突如聞こえた声。川の流れにかき消されそうではあったが、幻聴じゃない。
「ひっ！」
詠美が息を飲む――
「動かないで。動くと――撃つわよ」
前方から姿を現したのは深山雪見（九十六番）であった。すでに手にはマシンガンが握られている。
（なんや、なんでこんな時に！）
由宇が詠美よりわずかに一歩前で静止した。感覚

で銃の位置を確かめる。
――ある！
お尻に感じる異物感。すぐに取り出せる。問題はすでに臨戦体勢の相手側である。もはや指をクイッとひねるだけで、二人ともタンパク質の塊になってしまうだろう。とても銃なんて抜いている暇はない。
ぎゅっ!!
詠美は由宇の上着の裾をつかんで震えている。
(あかん、絶体絶命や！)
雪見は徐々に間合いを詰めていき、つり橋の上までやってくる。確実に仕留められる、かつ反撃をくらいにくい位置まで間合いを詰める。雪見は銃の扱いに関しては素人だが、マシンガンではずすなんてことはそうそうないだろう。
「……」
そしてちょうど橋の付け根の位置で止まった。
「もう一度言うわ。動いたら……殺す」
なんて殺気や……！　由宇の背筋を冷や汗が伝う。
「聞きたいことがあるのよ……」
そう言いながらも二人を狙うマシンガンはそのまだ。
「ひっ!!」
恐怖に耐えきれなかったのか、詠美が後ろへとしりもちをついた。あまり丈夫ではないであろうつり橋が大きく揺れる……!!
「くっ！」
(あかん!!)
雪見はいったんバランスを崩しかけたが、すぐにこちらにマシンガンを向けなおした。そのとき由宇が総毛立つほどの殺気を感じた。イヤな予感といったほうが正しかったのかもしれない。
「スマン……詠美っ！」
由宇は思いっきり詠美を蹴り飛ばした。
「……あうっ！」
詠美が弾き飛ばされ、川へと転落していくのと、マシンガンが火を吹いたのは、ほとんど同時だった。

ドルルルルルルッ!!
由宇の眼前を赤い光が通りすぎる――――!!
「……くっ!!」
慣れない重火器、揺れる足場、再度大きくバランスを崩す雪見。
「つぅ!!」
由宇の左腕を弾がかすめる。だがそれだけで済んだ。そして、由宇は拳銃を取り出し雪見へと狙いを定める。
「……！」
ギシギシギシ……
つり橋の揺れる音がやけに耳に響いた。
「形成逆転やな……」
別に逆転はしていない。だが、ほぼ互角の状況まで持ちこめたのは奇跡なものだ。由宇は精神的に優位に立っていた。
「へへ、お姫様を守ってつり橋の上で決闘……漫画の主役になったみたいやな」
自嘲気味に吐き捨てる。――自己犠牲なんてまっぴらだった。詠美も自分も和樹達も、またみんなでこみパで騒ぐんやってそう思っとったのにな……
「……私はまだここで死ねないのよっ！」
雪見がそう叫ぶ。二人の指がトリガーを引くその刹那……
バキバキッ！
つり橋が音を立てて崩れ落ちた。
「なっ！」
すでにもろくなっていたロープに、先程の雪見のマシンガンの弾が当たった、その結果だった。
……ゴボゴボゴボッ！
水の中で由宇がもがく。思った以上に流れがはやい。なんとか体勢をたてなおして岸に……背後に黒い影がよぎった。
ざしゅっ！
背中に挿入される異物感。

ゴボッ！
大量の息が泡となって水面へとのぼっていく。その中に血が混じっていた。
ザバァッ！
気力を振り絞って岸へとあがる。
「ごぼっ！　げぼっ！」
由宇の口から水と、大量の血が溢れ出す。
「なんやこれ？　……なんやこれはっ!!」
ごふっ。叫んだ拍子にまた血が口から溢れる。背中が熱い。やけるように熱い。それなのに、自分の背中の感覚が感じられなかった。
「そっか、ウチ……やられたんか……」
なんとなく自分の置かれている状況を理解する。
「えいみ……アカン、ウチじゃ漫画の主役にはなれんかったわ。主役はこんなところでやられたりせえへんもんな」
（パンダのクセにでしゃばるからよ！）
詠美の幻聴が聞こえる。
（大きなお世話や、大バカ……）
そして由宇の意識は闇の底へと消えていった――
ザパァッ！
ほどなくしてまた水面に顔が上がる。
雪見だった。
「……」
ライフルは肩に下がっていたが、サブマシンガンは捨てていた。今頃は水の底だろう。銃と共に心中するのは当然雪見の本意ではない。由宇の姿を確認してからゆっくりと歩み寄る。そして、彼女の背中のサバイバルナイフを引きぬくと、
「私はまだ……やることが残ってるのよ……！」
ゆっくりと崖上へと歩きはじめた。

七番　猪名川由宇　死亡
【残り76人】

109　（無題）

朕深く世界の大勢と帝国の現状とに鑑み、非常の措置を以て時局を収拾せむと欲し、茲に忠良なる爾臣民に告ぐ。

――――

朕は時運の趨く所、堪へ難きを堪へ、忍ひ難きを忍ひ、以て万世の為に太平を開かむと欲す。

――――

宜しく挙国。

一家子孫相伝へ、確く神州の不滅を信じ、任重くして道遠きを念ひ、総力を将来の建設に傾け、道義を篤くし志操を鞏くし誓って国体の精華を発揚し、世界の進運に後れざらむことを期すべし。爾臣民其れ克く朕が意を体せよ。

…………。

「これ、もしかして伝説の魔術書!?」

Sphie=rim=Atwaria=Crier ことスフィー（五十番）は、支給品である紙切れと睨めっこしていた。

110　継ぐ者

「つ……」

応急処置――と言っても、傷口を消毒して包帯を見様見真似で巻いただけだが――を終えたマナは、浩之の武器を積めこんで重くなったバッグに聖の応急処置セットをしまい込むと、よろよろと立ちあがる。つま先を地面に二、三度打ちつけて感触を確かめる。

――よし、大丈夫。これなら歩ける。

「じゃ、霧島センセイ、私行くね。もし、妹さんに会えたらここに連れて来るから。約束する」

マナは、冷たくなった聖の方を振り向かずにそう語りかける。聖の姿を再び見たら、また泣いてしまいそうだったから。

「それと、センセイの応急処置セットとメスは借りていくね」
　声が震えるのを必死で抑えて、マナはそこまで言うと、未だ意識を取り戻さない浩之の方へ歩み寄った。
「……すっごく憎いけど、私は医者の助手だから、あんたを殺したりはしないわ」
　意識を失ってる浩之を見下しながら、マナは冷たく言い放つ。
「その代わり、しばらく大人しくしていてもらうけどね」
　ふん、とマナは鼻をならす。見れば浩之は、両手両足を縛り付けられてる。武器没収と身動きを封じること。それが、医者の助手であるマナに出来る、精一杯の報復だった。
「じゃあね。しばらくそこで自分のやったことを反省しなさい。……改心したって、許してあげないけど」
　そういうと、マナはまだ痛む足を引きずるように歩き出す。
　――さぁ、行こう。
　お姉ちゃんや、藤井さんと会うために。霧島センセイの妹さんと会うために。
　風が、マナを後押しするかのように優しく吹きぬけた。

111　coda di gemello

「ハァ、ハァ、ハァ…」
沢渡真琴（四十五番）は近くの木に寄りかかった。ほんのつい先ほど相沢祐一と遭遇したのはいいが、パチンコ玉を彼目掛けて撃ち、そのまま全速力で逃げてきたのだった。
「あうー、何であんなことしたんだろぅ？」
　そう自問自答する言葉とは裏腹に彼女の心は先ほどの行動の理由を大体理解していた。それはそう、

怖れ。もしも祐一が私に敵意を向けたら？　という怖れ。ただ恐かったのだ。また誰かに裏切られるのが。
「そりゃあ、祐一なんて大嫌いだけど……」
その恐怖に反抗するかのように強がりとも思える言葉を口にした。そして唯一の友人である天野美汐のことを思い浮かべた。こんな気持ちのままじゃ美汐にも会えないな、等と考えていたら泣きそうになってきた。
「ぴろもいっしょにここに来たと思ったけど気付いたらいなくなってるし、これからどうし…って、ぎゃー!!」
突然、真琴の髪の毛がすごい勢いで後ろに引っ張られた。
「イタイイタイ！　なにすんのよー！」
「みゅ〜」
その髪の毛を引っ張った人物は椎名繭（四十六番）であった。
「何!?　なんなのよあんたはいったい！」
「みゅ〜」
「『みゅ〜』じゃないわよ！　それにしても痛いわねー。髪の毛抜けるかと思ったじゃない！」
半泣きになりながらも真琴は文句を言った。
「みゅ〜みゅ〜」
それに対して、何も悪ぶれずに繭はうれしそうな顔をしていた。知人と似た髪形の人を見つけて、ただいつものようにしてしまっただけなのだった。
「何よ、私とやる気なの？」
「みゅ？」
はたしてこの少女は今回のこのゲームの趣旨を理解しているのだろうか。なんともいえない表情で、真琴を見つめ返していた。
「まぁいいわ。見逃してあげるから、さっさとどっかに行きなさいよ」
「みゅ〜」
まったく移動しようという気配のない繭。

「……いいわよ、私が他のところに行けばいいんだから」
そして振り向き、その少女から離れようと十歩ほど歩き、後ろを振り返ってみると、ぴったりとくっついてきている少女の姿があった。それどころかまた後ろになびく二つの尻尾を捕まえようとしていた。
「なによ、ついてこないでよ」
「みゅ～」
「そ、そんな声出したって知らないんだから」
ふんとそっぽを向いた後、横目でちらりと繭の顔を見ると眼にじわりと涙が溜まりつつあった。
「あ、あうぅ……わかったわよ！　ついてきたければついてくれれば！」
「みゅ～！」
とたんに繭がうれしそうに飛び跳ねた。
「その代わり、もう髪の毛引っ張ったら駄目なんだからね」
繭は真琴のツインテールを引っ張ってそれに応えた。

112　（無題）

まさか民間人が、戦闘のプロに向かって白兵戦をうって出るとは思わなかったのだろう。晴香の大胆な行動に、兵士たちが浮き足立つ。
「ぐあっ！」
「ぎゃっ！」
不用意に立ち上がった二人が、まず、智子の銃弾の餌食になる。
「ぐはっ！」
そしてもう一人、晴香の白刃の露となる。
「ちっ！」
残った兵士が、晴香に対して銃で牽制しながら逃げていく。
「待ちなさい！」
……その先には、あかりが身を潜めている防風林

があった。
あかりは突然の人の気配に、体をすくめる。
「……誰?」
晴香さんだろうか。それとも保科さんだろうか、それとも……
ガササッ!
「ひっ!」
果たして、そこに現れたのは、銃を構えたいかつい『男』だった。
「いやぁぁぁぁぁっ!」

対峙する、晴香たちと兵士。
その兵士の腕には、
「ううぅ、いやぁ……やだぁ……」
言葉にならないうめき声をあげながら、もがいているあかりの姿があった。
「これ以上近づけば、この女を殺す!」

……最悪の展開だ。これではうかつに手が出せない。それに、いまのあかりの不安定な心に、乱暴な『男』という存在は、とてつもないダメージを与えかねない。
晴香も、智子も、身動きがとれなかった。
しかし。その緊張を破るものは突然現れた。
「あかりさんをいじめる人は、ゆるしません!」
そんな台詞のわりにはノンキな声が、あさっての方から聞こえた。
「とうりゃ〜っ」
ひでぶりゃ!
もんどりうって倒れる兵士。晴香と智子は、目の前の出来事にしばし言葉を失った。

113 結界

「たしかこっちです、南さん」
「魔法の力ってすごいわね、私は何も感じないわ」

リアンと牧村南は人目を避けながら結界の拠点である社を目指していた。社さえ壊せば魔力が戻る、そうすればいくらでも脱出方法は考えられる。
「ところでリアンちゃん、あなたのほかに魔法を使える人っているのかしら？」
「えっと、スフィーっていう私の姉さんと、牧部なつみさんは使えます。後、こっちの世界の人でもごくまれに魔法を使える人がいるようです」
「そういえば、最初に全員が集められたときに魔法使いっぽい格好をした子がいたわね、マントに三角帽子の子……コスプレだと思ってたんだけど」
「あの人は魔法が使えるはずです、魔力を感じましたから……あ、そろそろ社に着きますよ」
この強い結界の力は社のすぐ近くにまで来ているという事だろう、もうすぐだ。
「ちょっと待ってください、南さん」
リアンは南を小声で制した。向かう先に人がいたのだ、しかも二人。様子を確認するためリアンは、南を残し先行する。
敵意を持つ人とは出来るだけ接したくない。相手に敵意がなければよいのだが、何しろ一人は竹槍を持っている、危険かもしれない。
リアンはしばらく様子を見ることにした。二人はどうやらリアン達と同じ社に向かっているようだった。
……ところで何で二人とも防空頭巾をかぶっているのだろう？
「舞、こっちでいいの？」
「大丈夫、悲しそうな力を感じる」
「ふえ～、舞はすごいですね～」
二人の声はどうやら友人同士の会話のものだった。防空頭巾を少し脱いでいる女の子は、のんきそうな声をあげているが、それは、もう片方の女の子を信用しているためだろう。
だけど、もう一人はわからない。魔力を感じるので結界を感じているのだと思うが、手作りらしい武

器を持っているという事は、やる気になっているという事かもしれない。感情のない少女の顔からは、それを窺い知ることはできなかった。
もしかして、のんきそうな声はもう一人の緊張をほぐそうとしてのことなのかもしれない。それにしても場違いなほどのんびりした声だ。
だけど、のんきな人はもう一人いた。
「リアンちゃん、あの二人は大丈夫と思うわ」
「！　……南さん、どうして⁉」
「いいじゃないですか、そんな事。向かうところも一緒みたいだし、協力してくれる人は多い方がいいんじゃないかしら？　あの〜、ちょっとよろしいですか？」
後ろに待たせていたはずの南は、気付かないうちにリアンを追い越して二人に声をかけていた。
「本物の魔女さんに会えるなんて佐祐理感激です！」
「……まほうつかいさん」
二人の名前は川澄舞と倉田佐祐理と言った。
舞が結界の力を感じていたこともあり、二人はリアンが魔法使いであると言う事もあっさり納得してくれた。やはりこの少女は魔法使いの資質があるらしい。
「リアンさんは、ほうきにのってお空を飛べるんですか？」
「……見てみたい」
「私も聞きたかったの、変身用のステッキはどこにあるの？」
「あの、空を飛ぶのはちょっと今は無理ですし、変身は高度な魔法なんで私にはまだ……」
リアンは夢見る少女（？）たちに質問攻めにあっていた、みんなの目が輝いている。
ドンッ！！！
しかし突然の大音響と閃光に質問会は中断させられた。

「きゃっ！」
「どうしたの？」
「向うのほうからです、社のほう！」
「また同じ、悲しい力……」
リアンは慌てて走り出した。何が起こったかわからないが急いだほうが良い、直感がそう告げている。少し走ると開けた場所に出た。目の前には古びた社があった。そしてその前には、
「姉さんしっかりして！」
三角帽子とマントを身に着けてぐったりしている黒髪の少女と、それをかかえる同じ顔の少女がいた。

114　目覚め

「どこなんだよ、ここは……」
目の前に広がるのは果てしない闇。いや、前だけじゃなかった。右も、左も、後ろも、足元や頭上を見てもそこは闇しか広がってなかった。前に……いや、前に進んでいるのかどうかもわからなかったけど、俺は歩いた。
どれくらい歩いただろうか、ふと周りを見渡してみると、そこは見なれたこみパ会場だった。
（そうか……早くスペースにもどらないと…）
急がないと。開場まで時間が無い。サークルの位置は覚えている。間違うはずが無かった。そこにいるのはいつもの赤い髪の売り子。
「悪ぃ、遅れた」
俺は後ろを向いて作業をしている瑞希に向かって声をかける。
「もー、遅い！　何やってたのよ」
こちらには向き直らず、作業を続けながら瑞希は返事をした。
「いや、ちょっと寝坊してさ。まあ、まにあったからいいだろ、手伝うよ」
そう言って俺は瑞希の肩に手を置く。
だが瑞希は何の反応もしない。

「おい、瑞希、怒ってるのか？」
動きを止めた瑞希に問い掛けた。
何の反応も無い。
「おい、瑞希ったら！」
俺は瑞希の肩を揺さぶった。瑞希は抵抗することなく力の流れに身を任せ、あお向けに倒れた。
「瑞希……？」
俺は瑞希の顔を覗き込む、その目には生気が無かった。
「おい！　瑞希！　瑞希！」
やばい、はやく医者に見せないと……
「ふむ、どうしたのだ、まいぶらざー」
「大志か。いいところに来た、医者だ、医者を呼んでくれ！」
俺は大志のほうに向きなおる。
「無駄だ、もう死んでいる。我輩が殺したのだよ」
すでにそこには大志の姿は無く、ただ声だけが響いていた。

「おい、どう言うことだ!?　何で殺したんだよ、大志！」

目が覚めたとき、俺は一人だった。何かとても嫌な夢を見ていたようだ。気分が悪い。
ほんの少し痛みが残る腹を気にしつつも、時計で現在時刻を確認した。
(かなり眠ってたな……)
俺が眠っていた時間。それはこの殺人ゲームの最中においてどれくらいの意味を持つのだろうか？
多分、俺が寝ている間にたくさんの人が死んだのだろう、俺がその中に加わっていないことはものすごく運の良いことだと思った。
俺はよろよろと体を起こすと、バッグを拾い歩き始めた。とりあえず顔を洗いたかった。
少し歩くとすぐ川についた。顔を洗った俺は、近くに奇妙なものが落ちているのを見つけた。支給品のバッグだ。誰かが川に落としたのだろうか？

「パンダ……待って……」
そのバッグを拾い上げたとき、近くの茂みから声が聞こえた。俺は注意して茂みを覗き込む。
「詠美！」
その中にいたのは大庭詠美（十一番）だった。
「ん……」
詠美が目を覚ましたとき、目の前に広がる光景は屋根だった。
（あれ？　私、橋から落とされて……どうなったんだっけ……）
「気づいたか、よかった……」
横で和樹が安堵の息をついた。詠美は和樹の姿を確認したとたん、和樹に抱きつき、大声で泣き始めた。
「うわぁぁぁぁぁん、和樹、和樹ぃっ！」
いつもの気丈な態度はそこに無く、ただ自分の胸に顔をうずめて泣く詠美を見て和樹は、よほどつらい思いをしたんだろうと思った。
数分後、ようやく泣き止んだ詠美は、自分に起こった出来事を和樹に話していた。
スタートしてすぐの白衣の女に襲われたこと。それを由宇が助けてくれたこと。二人がつり橋で襲われたこと。……そして、由宇が詠美をつり橋から落としたこと。
（そうか、由宇は詠美を守ったんだな）
そう考えたとき、涙が出てきた。自らの身を呈して詠美を助けようとした由宇。それに比べ自分はたいそうな理想を掲げたくせに何も出来なかった。
それどころかすべてを投げ捨てようとしていた。それが悔しかった。
（俺は無力なのか？　誰も助けられないのか？）
そう考えたとき、和樹はふと聞かなければならないことがあるのを思い出した。
「詠美、放送は無かったか？」
「あったよ、パンダがメモってた」

詠美はそう言うと自分のバッグの中から紙を取り出し和樹に渡した。そこにはこう書かれていた。
『胃の中に爆弾』
それを見た和樹は詠美に問い掛ける。
「これ、どういう意味だ？」
「たしか放送でそう言ってた。胃の中に爆弾があって、何時間かの間に誰も死なないと爆発するって」
和樹は内心舌打ちした。言われてみればその通りだ、相手を殺さなくても生きていけるのなら当然大多数の人間が手を組むだろう。最初は小さなグループだろうが、それが大きくなればなるほど管理者側には不利になる。手を組ませない方法、それは強制だ。
だれも死なないと自分が死にます。だからどんどん他人を殺して寿命を延ばしましょう。
十分考えられる事態だった。だが、眠っていた自分は死んでいない、ならば誰かが死んだのだ。
そんな反吐を吐きそうな思いで、和樹は続きを見る。死者の名前だった。その中に見なれた名前があることに気づく。
『三十四番九品仏大志、五十六番立川郁美』
「大志……郁美ちゃん……」
さまざまな思いが和樹の胸を過ぎる。
九品仏大志。悪友だった男。最後の最後であいつは裏切った。だが、今思うとあいつにも何か理由があったのかもしれない。だけど瑞希を殺したことを許せるかというとそうじゃない。そこにあるのは複雑な思いだった。
立川さん、いや郁美ちゃん。彼女は昔から俺を支えてくれた。苦しいときや辛いとき、彼女からの手紙やメールに励まされたことは何度もあった。
心臓病の体を押して俺に会いに来てくれたこともあった。そんな彼女を見たとき、俺は強い人だと感じた。どんなに苦しくても目的を持ち、希望を捨てない人。それは俺の思い過ごしかもしれない。でも俺は彼女にそういうものを感じていた。

――何かを決意した顔。
　顔を上げた和樹を見たとき、詠美はそう感じた。
「もう迷わない」
　その台詞を聞いたとき、詠美は由宇の言葉を思い出した。
『あいつはああ見えて肝の座った男や。ウチが認めた男や。きっと何とかしてくれるはずや』
　その通りだと思った。パンダ、あんたの見る目は正しかったわよ。
「さあ、行くぞ。きっと仲間はいるはずだ」
　和樹はすでに歩き始めていた。
「あ、ちょっと待ちなさいよ！」
　詠美はバッグをつかむと、和樹に追いつくために走り始めた。

115　邂逅、訪れ

「……単独行動は、こういう時に困ります」
　手元にある時計型時限爆弾を見ると、もう十一時を過ぎていて、日付が変わろうとしていた。
　茜の疲労は限界だった。もともと運動は得意な方ではなかったし、極度の緊張が強いられる殺し合いは、茜から気力も体力も無慈悲に奪っていた。
　睡眠を含む休憩を体が欲している。だが、不用意な場所で眠ることはできない。仲間が居れば交代で休憩できたのだが、今更それを嘆いても仕方ない。
「……仕方のないことです」
　答える者は当然なく、漏らした声は闇にすいこまれるだけ。溜息一つついて、茜は移動を開始した。
「……ここにしましょう」
　辿り着いたのは、この島に唯一あるだろう百貨店。入口も開いており、中は広くそれでいて月や星の明

かりも届かない。
(広い空間。月や星の明かりが届かない。ここにいれば、見つかり辛いはずです。……同じ考えでここにいる人もいるかもしれませんけど、気にしたら負けです)
　中に入り、寝場所を探す。ひとしきり歩いて、目も慣れてくる。次第に茜はおかしなことに気付いた。
(……百貨店なのに、人が『使っていた』気配がありません……どういうことなのでしょう?)
　食品売り場には食料はなかったが、それ以外のフロア――洋服売り場等――には商品がしっかり置いてある。しかし、どこか綺麗すぎた。かつて人々が賑わっていた名残りが、まったく感じられなかった。
(……まさか)
　一つの可能性に気付く。
(全部、このゲームの為だけに作られたのでしょうか?　……そういえば、少しくらい大きくても、ここは孤島です。あんなに広い住宅街や、こんな百貨店があるはずありません)
　茜は目眩を覚えた。
(……どれだけの資産が、このゲームのために動いているのでしょうか?)
　結局茜は、洋服売り場の一画に陣取ることにした。フロアの中心と思われる場所よりも、わずかにずれた所のカウンター。エスカレーターと階段は、フロアの壁沿いに設置されていた。壁沿いを周回される恐れもあったので、中に入ったこの場所を選んだ。もちろん通路側でもない、歩かれる恐れがある。よくよく考えれば無意味なことのような気もしていたが、言い出せばきりがなかった。
(……シャワーを浴びたいですけど、贅沢は言えませんね……眠いです)
　手元には目覚まし時計もあった。いつもの習慣で六時にセットする。
「……おやすみなさい」
　そういって、目を閉じる。

かすかに感じた違和感を、無視しながら。
……、…………。
――ガバッ！
（……馬鹿ですか、私は）
時限爆弾なのだからセットした時間に爆発して永眠するところだった。そもそも普通の目覚ましでも、鳴ったときに周囲に人が居たら自分の位置をわざわざ教えるようなものだ。自分自身の行動に呆れながら、茜は目覚ましを止めて、今度こそ眠りについた。目が覚めた時、この悪夢が終わっていることを願いながら、本当の夢の世界に入っていった。

116 邂逅

夜の中を祐一は歩いていた。先程真琴に出くわしたがよほど錯乱してたらしく、祐一に攻撃をしかけ、逃げていった。
（真琴の奴……大丈夫か……？）
あの状態では下手に後を追うと逆効果だと思われたため、こうして一人歩いている。
（疲れたな。どこか寝る所があればいいが……）
祐一もまた、単独行動の問題点に悩まされていた。
（単独行動してる奴は皆、同じ事を思ってるんだろうな）
その場に立ち止まり、夜空を見上げる。
どこまでも広い空には、幾千もの星がきらめいていた。その輝きの一つ一つが美しく、夜空全体でもまた、見ている者を引き込むような勢いがあった。
（あの星達から見たら、俺達はどう写っているんだろうな。生き残る為に、人を殺してる。そんな俺達を見て……）
そこまで考えて「馬鹿馬鹿しい」と首を振った。
とりあえず、祐一のなすべきことは決まっていた。それまでには絶対に死ねない、そう、誓っていた。
（茜……どこにいるんだよ……生きていてくれ……）

放送で聞いた、美坂姉妹の顔が浮かぶ。あそこで一緒にいてやれたなら――何度目にもなる思いがよぎる。目的の為とはいえ、間接的にでも人を殺したという事実は、彼を縛り苦しめていた。

だからせめて、

(茜だけは、死なせない……)

彼は知る由もなかった。その美坂姉妹を殺したのが、他ならぬ茜だという事実を。

一つの建物を通り過ぎようとした瞬間。

――

(……なんだ?)

建物の中から、誰かに呼ばれたような気がした。いや、それは正確ではない。『建物』が、彼を呼んだ気がした。不思議な感覚に捕われつつ、気がつけば祐一は、建物の中へと入っていった。

(暗い。光が届かない……少し目が慣れるまで、動かないほうがいいかもな)

何も見えない闇の中、しばらく祐一は立ち止まっていた。やがて、目が暗闇に慣れてくる。改めて見回してみると、まずエスカレーターが目に入った。

(ここは、百貨店か何かか？　こんな孤島に……)

それでも、そこは確かに百貨店だった。何が自分を呼んだのかはわからぬまま、一階を見て回ることもせず、止まったエスカレーターを登っていった。

夜の建物に入るのは、何も初めてじゃない。

(学校の校舎で、魔物と遭遇したこともあるんだからな……)

だがこの建物の空気は、夜の校舎のそれとは全く質が違った。神秘性など欠片も存在しない。そこにあるのは、闇と、不快なだけの非日常の空気。魔物の現れる予兆に似ていた。

(違うな、夜の建物なんてこんなものだ。あの校舎には舞がいたから、こんな不快感はなかったんだ)

背中に汗が滲む。右手に持ったエアーウォーターガンにも自然に力がこもる。引き返そうと思わない

こともなかったが、それを許さない何かがあった。
二階も通り過ぎ、三階へ。
何かは、確実に近付いていている。
そう感じた。
『三階婦人服売り場』
それは、今にして思えば予感だったのかもしれない。建物が祐一を呼んだのではなかった。それも違った。祐一がこの建物に強い何かを感じたのも、必然だったのだ。
(空気が違う？)
三階についた途端、今までの重苦しい空気が一気に消え去った。あるのは、ただ、懐かしい感覚。
(俺はこんな場所は知らない……なのに、なんだ？この感覚は)
ここには何かがある。それだけははっきりとわかった。エアーウォーターガンのトリガーには指をかけたまま、周りを見ながら、一歩一歩、確実に。

ずっと、会いたかった。
一日たりとも、忘れたことはなかった。
初恋だった。
今も、忘れられなかった。
ずっと探していた。

「……あかね？」
床で静かに寝息をたてる少女を見つけ、呆然と呟く。
それは、予感だったのだ。

「……誰っ⁉」
突然の気配と声に茜は飛び起き、近くに置いておいた銃を構える。そして、気付いた。声は、昔に、聞いたことがある。目が慣れない、姿がわからない。だけどこの声は……
「忘れたのか？　元同じクラスの、相沢だ」

「……祐一」
「覚えていてくれたか、久しぶり」
嬉しかった。相手がまだ、自分のことを覚えてくれていたことが、嬉しかった。
「……本当に、祐一もこのゲームに参加してたんですね」
「あぁ、嫌な偶然だな」
「……詩子も、どこかにいるはずです」
「本当、嫌な偶然だ」
詩子。懐かしい名前だった。茜の親友で、祐一とも仲良くなって、三人でよく話していた。憎まれ口も多かったが……詩子までこのゲームに参加していたと聞き、祐一は自分の運命を呪った。
「話したいこと、いっぱいあるんだぜ」
「……私もです。だけど……」
言って、静かに銃を、祐一の方に向けた。
「……私の前から、消えて下さい」

祐一は、何を言われているのかわからなかった。
「茜？」
茜は、こんなことをするような子だったのか？と思う。
「……消えてください、早く」
もう一度言った。
「……どうして？」
祐一には、それが精一杯だった。
「私は、祐一が思っているような人間じゃありません。……もう違います」
静かに……それでも悲痛に言った。普通の人には、ただ淡々と喋っているように聞こえるだろう。だが祐一は違った。その裏にある感情をはっきりと読み取っていた。
「……どういう、ことだ？」
訊いてはいけない、だが、訊かずにはいられない。
「……私は人を殺しました。もう四人も。ある姉妹を殺して、その人達から、祐一のことを知ったんで

す」
　闇が、深くなった。

117　闇の中の二人

「……おい」
「うぐ？」
「いい加減、離れろっての」
「……うぐ～～」
　御堂（八十九番）の服の裾をはっしと掴んだまま、月宮あゆ（六十一番）はふるふると首を振る。
「……ちっ」
「にゃぁ～」
　今は夜。自分の能力に制限がかかってしまうと判断した御堂は、身を潜めて夜を明かす事に決めた。それに、明らかに荷物になっている目の前のガキを連れてうろちょろするのは賢明でない。
　勿論、こんなガキは殺してやっても良かったが、うぐぅうぐぅ怯えるあゆを見ていると、手にかけることは何故か躊躇われた。
「うぐぅうぐぅわめくな。いいか、朝までだ。とりあえず朝までは一緒にいてやる」
　こくこくとあゆは頷く。
「ちっ。ヤキがまわっちまったぜ……」
　悪態を吐きながら、御堂は怯えるあゆの姿を改めて観察する。と、背中に背負っているリュックに目が行った。
「……おい。お前、武器をよこせ」
「うぐぅ？」
「その背負ってる鞄だ。その中に武器が入ってるんだろう？」
「うぐぅ……でも……」
　煮え切らないあゆに、痺れを切らした御堂はドスの聞いた声で唸る。
「いいからよこせ。……それとも、ここで死にたいか？」

「うぐっ！　あわわわわ……!?」
　あゆは慌ててリュックを下ろすと、ごそごそと中を漁り始めた。
　あゆから差し出したものを受け取ると、御堂はしげしげと眺める。武器の類では無いようだ。
「で、こりゃ何だ？」
「うぐぅ……マイク……」
「まいく？」
「こ、こうやって歌うんだよっ」
　と、あゆは御堂の手からマイクを奪い返すと、口元に寄せて歌い出す。
「会いたいあいあいあいあいあい……♪」
　狂ったように髪を振り乱しながら歌うあゆの姿に、御堂は無言ですっとデザートイーグルの銃口を向けた。
「うぐっ！」
「……もういい。やめろ。そいつはお前が持っていて良い」
「つ、使い方を教えてあげただけなのに……」
「にゃあ～」
　うぐうぐと泣き出したあゆを、ぴろが慰める。そんな姿を見つつ、御堂は早く夜が明けることを願うばかりだった。

118　黒い女

　マナは途中に何回か小休止を挟みながら歩き続けた。
　一所に留まっているわけにもいかないし、眠るわけにもいかない。
　矢に貫かれた足が、包帯の下でズキズキと痛んでいたが、それでも止まることはできなかった。
(お姉ちゃん、藤井さん、それに佳乃って子、絶対生きててよねっ……！　死んでたら……蹴り殺してやるんだから)

それでなくても小柄な女子高生である。体力的にはとうに限界を超えていた。
今、マナを動かしているのはただ邂逅への欲求のみだった。会って……それから……
（……会ってから考えればいっか……）
歩いて、歩いて、夜が明ける頃、不意に視界が開けた。森を抜けたのだ。
そこは林道のようなところだった。道を挟んでまた森があり、道は左右に長く続いていて、ここから終わりは見えない。
（また森に入ったんじゃバカよね……取り合えずこの道に沿って……どっちに行こう？）
マナが左右をキョロキョロと見回すと——そこに人がいた。早朝の日差しに美しい黒髪が映える、杜若きよみ〈複製身〉（十六番）。
森から出て来た時から既に見つかっていたのだろう。目が合った。
「……あのー」
「消えなさい」
きよみは忌々しげに吐き捨てた。
「朝っぱらから血の匂いなんて嗅ぎたくないわ。今すぐ視界から消えてくれれば、撃たずに見逃してあげるから」
「……あなた」
「聞こえなかったの？　あたしは消えろ、と言ったの。日本語、わかるでしょ？」
そう言って腰に手を当て、睨みつける。
きよみは背の高い方ではないが、相手がその年頃の平均身長よりかなり低いマナだったため、相対的に見下ろす格好になっていた。
悔しいけど私よりは巧いな、とマナは思った。
「どうせ銃なんて持ってないんでしょ」
「…………」
きよみがその姿勢のままで固まる。
実際よりもいくらか長く感じられる数秒が、その状態で経過した。

「持ってるんなら、ろくに構えもしないでペラペラ喋るなんてこと、しないわよね」
「……今すぐ絞め殺したいわ、あなた」
「好きにすれば」
　もし聖が生きていて、この言葉を聞いていたら間違いなく後で注意されていただろう。
　有効な武器を持っていないとは言え、相手の戦闘能力がはっきりしない以上、このように挑発するのは明らかに得策とは言えなかった。
が、きよみは幸運にも何の能力があるわけでもない一般人の複製身であり、特に戦闘訓練を受けているわけでもない。
　結局、マナに手を出すことはできなかった。できたのは悪態をつくくらいのものである。
「生意気なガキ……」
「そのガキにつまんない嘘、見抜かれたのは誰だったかしらね」
「黙りなさいよ、チビっ子」
「……蹴るわよ」
　二人の女の瞳の間で、目に見えない火花が一瞬、散った。

119　デジャヴ？

「さて、もう暗くなったことだし、この辺で一休みでもしよっか？」
　沢渡真琴はつい先ほど同伴者となったばかりの椎名繭にたずねた。
「みゅ！」
　おそらく肯定しただろうと思われる返事が返ってきた。その言葉を聞き真琴は地面にぺたんと座り込み、それに習い繭も座り込んだ。
「あ、ところでカバンの中には何が入ってたの？　私は見ての通り、このパチンコよ！」
　繭は何の警戒心も抱かずに素直に差し出した。もちろん真琴の方もそれでなにかをしようとは微塵も

考えていない。
「どれどれ、なんかすごいのが入ってたらいいんだけどね」
カバンをごそごそと探りながら一つずつ物を出していく。
「え～と、爆竹、ねずみ花火、ロケット花火、あ、これ音が鳴るタイプのだ！　ん？　なんか大きめのもある。なんだろ？　……バルサン。あう～、どっかで見たことあるようなものばっかり……」
「みゅ～♪」
繭にとっては大当たりだったのであろう、非常に喜んでいるようだった。
「ほかのみんなはどんなの貰ってるんだろう？　変な金髪の人も祐一も水鉄砲みたいなの持ってたから、みんなこんなものなのかなぁ？」
確かに真琴が今まで出会った人間と二人の荷物を見る限りとても殺し合いができるものではなかった。
しかし、この島には強力な武器を持った殺人鬼が確実に潜んでいた。そして夜はふけていった。

120　殺人者

「苦しい……」
御堂は闇の中で苦しそうにうめく。酸素が足りない……俺は首でも絞められてるのか？　相手は蝉丸か岩切か、別の誰かか――？
「やめろっ、いきなりこんなっ……！」
御堂は混乱していた。気がついたらいきなりこの状況だ。
「バカな、俺様がこんな……」
油断だったぜ、情けねぇ……
意識が遠のいていく。
……そういえば俺は今どこにいたんだ？
不鮮明な記憶をたぐりよせる――
「げはっ！」

そこで意識が覚醒する。
「夢か――？」
だが、視界に映るものは何一つ無い。
そして――
「あったけぇぞ、この毛玉！」
頭の上に乗っていた物体を手で払いのける。
「ふぎゃっ！」
猫は一度衝撃に目を覚ますが、再び目を閉じてすやすやと眠りはじめる。
「てめぇのせいかよ……十分くらい、気持ち良く寝かせろよ……」
御堂が猫を睨み付ける。御堂を恐怖に陥れたものに反応は無い。
「くそっ！」
いわゆるひとつのレム睡眠というやつだった。まだ寝ついてから五分と経っていない。御堂の胸中は穏やかではなかった。
（まあ、戦場でぐっすりってワケにはいかねぇがよ……）
このゲームが始まって何故か――御堂にとって非常に不本意ではあったが――同行者に、猫に続いて子供が加わっていた。
「孤独を愛する俺様がまさかパーティーを組むなんてよ……」
しかもただのお荷物だ。横でそのお荷物の少女がぐっすりと寝ていた。頬には未だ涙の筋が残っている。緊張の糸が切れたのだろう。御堂の服の裾をつかんだままだが、どこか安心した表情。
「けっ！」
誰にでもなく悪態をつく。
………ガサッ……
「……!!」
御堂の目に戦闘マシーンとしての殺気が宿る。かすかに……だがはっきりと聞こえたかすかな音を御堂は見逃さなかった。意外に近い位置。
（距離は……およそ三十メートルほどか……？）

まっすぐこちらへと向かっている。遭遇は必至だろう。強化兵としての感覚が薄れた今、それに頼り切っていた自分に腹を立てる。
（ここまで接近を許すとはな……）
得物……デザートイーグルを片手に、立ちあがる。その拍子、ふと引っ張られる感触。あゆの指が服の裾を掴んだままだった。
（……起きるなよ、ただの足手まといなんだからよ……）
起こさないようにあゆの指をほどくと、気配を殺して目標に近づく――
（こっちから出向いてやるよ）
深山雪見は、少し疲れた足取りで歩を進めていた。目標――親友の敵――をとるために。あたりに注意しながら歩く……。気配はない。
（女か……血の気配がするぜ……殺戮者だな）
御堂がそっと女の前方へと回りこむ。御堂にとって人の命を手にかけた者＝殺人者である。そこにどんな理由があろうとも関係ない。御堂は敵を撃つ、それだけだった。
（しかも素人だ、歩き方がなっちゃいねぇぜ……）
慎重に気配を殺して歩いているつもりだろうが、御堂にはその行動が筒抜けだった。銃の射程圏内へと迅速に移動する。
「嬢ちゃん、夜道の一人歩きは危険だぜぇ」
「……誰⁉」
突如聞こえた声に雪見の足が止まる。
刹那、赤い光！
ズギューン‼
音が聞こえたと思ったときはもう雪見の身体は後方に弾け飛んでいた。
（手応えありだな……）
胸の中心にヒットする。致命傷だ。雪見の身体は後方に倒れ、そのままピクリとも……
「……ああぁっ！」

雪見の叫びと共にライフルが火を吹く！
「……なんだと⁉」
御堂は木の陰に身を潜め銃弾をやり過ごす――
（命中はした……けど、死なねぇってこたぁ防弾具の類い！）
雪見の気配がすっと後方へ遠ざかる。
（賢い判断だ。素人にしてはな……だが……）
雪見は死に物狂いで走った。御堂の銃の射程距離を外れる。
（逃がすかっ！）
御堂が物陰から物陰へ、闇と化して疾走した。
二つの影の疾走劇は続く――
だが、傍目には女が一人道無き道を駆け抜けているようにしか見えなかっただろう。
（死ね！）
御堂の銃が再び火を吹く！
それは障害物の木に当たって消える。
（ちっ！　この位置からじゃ射線が通らねえぜ）
だがそれは相手も同じこと。絶えず移動しつつも膠着状態が続いた。やがて御堂は最初に交戦した場所へと戻ってきていた。最初に雪見が倒れた辺りを調べる。血――ほんの微量だが、土に付着したそれを御堂は確かめた。
「防弾具とはいえ、まともに当たったんだ。肋骨は何本かイってるだろうな……」
あまりすぐれない顔で御堂が呟く。当然だ。素人相手（しかも女）に逃げられたのだから。まあ、最終的には御堂が追跡をあきらめた形で幕をとじたのだが。
「まあ、深追いは禁物だからな……」
功をあせりすぎて命を落としてきた戦友達を自分は何人も知ってる。御堂は再び女と猫の待つねぐらへと戻っていった。
「うぐぅ……」
御堂の顔をみると、あゆがそう口を開く。
「なんだおめぇ、起きてたのか（うぐぅってなん

だ)」
　あゆが再び目に涙を湛えて、
「うぐっ、おじさんがいつのまにかいない気がして……起きてみたらやっぱりいなくて……うぐぅ、恐かったんだよ」
「分かったから泣くなぅっとおしぃ！　(だからうぐぅって言うな)」
「うぐっ、えうっ、あうぅ……!!」
　御堂の腹に顔をうずめ、声を押し殺す。
「ちっ、うっとおしいから離れろ……　(いや、マジで)」
　あゆは落ち着いたのか、再び横になる。御堂の服の裾をつかんで。
「だから、触るなって……もう寝てやがるこの野郎……！」
　頬の涙の筋も乾かないうちに再びあゆは眠りにつく。
「だったら最初から起きるんじゃねぇよ……オロすぞ」
　起きると面倒だ、気付かれないようにあゆの手を服から引き剥がそうとする。
「……おじさん……ムニャムニャ……うぐぅ」
「……」
(寝てすぐに寝言言う奴初めてみたぜ……ホントは起きてんじゃねぇのか？)
　御堂はそのままあゆの手の上に自分の手を重ねた。
「けっ、これだからガキのお守りはイヤなんだよ……」
　御堂はそれから一睡もできなかった。

121　邂逅、別れ

「どうして……？　どうして、そんなことを？」
　だが茜は答えない。
「……だから、祐一も早く消えて下さい。……でないと私は、祐一を撃ってしまいます」

それだけ、静かに告げる。
その言葉は嘘だった。
茜は祐一を撃つことはできない。口から出た言葉に秘められた感情を悟り、祐一は一歩踏み出す。
「……例え変わっても、茜は茜じゃないか。なぁ、話したいことがあるんだ、聞いてくれるか？」
茜は一歩下がる。
「……嫌です。お願いだから……」
「俺もいやだ。茜に会うために、ずっと島中走り回ってきたんだ。あの頃言えなかった想いを伝えるために、探してきたんだ。茜……俺は、お前のことが……」
「……嫌……言わないで……」
「……好きだ」
「嫌ぁぁぁっ！」
夜の建物の少女の悲鳴が響く。それは、ゲーム開始以来、最も悲痛な叫びだったかもしれない。
走り出す。

これ以上祐一の側にいたら、今までやってきたこと全てが無駄になりそうな気がしたから。
(どうして私にそんなことが言えるんですか？　もう私は、あの頃の私じゃないのに……どうして、そんなことが言えるんですか？)
「茜！」
追ってくる気配がする。
「来ないで下さいっ！」
手持ちの手榴弾を投げ付けた。
「なっ……！」
反射的に後ろに下がり、避ける。
バァァァアン！
爆発。
そしてそれは、目覚まし時限爆弾を巻き込み。
ドガァァァアン！
大爆発を引き起こした。
瓦礫の中から、祐一は立ち上がる。体は痛むが、

まだ動くようだ。武器も無事である。しかし……
「茜……」
茜の姿は、もう見えなかった。

夜の町を、ただ走る。
目には大粒の涙をたたえて。
「……どうして、あんなこと言うんですか……」
動揺していた。
相手が例え変わってしまっても、信じる。それは茜が幼馴染みに抱いていた感情と、全く同種のものだった。それに気付いたからこそ、茜は逃げた。そう思った。本当の理由を茜は知らない。
自分でも気付かないうちに、あの一年間で祐一に惹かれていたことに。それは、幼馴染みを想う自分を、正面から崩してしまうことだった。幼馴染みを想う心と、祐一を想う心。それ故、祐一の前から逃げ出したことに。茜は気付いていなかった。
夜の闇はさらに濃くなってゆく。自分は、何処に行こうとしているのか……

122　高槻の電話　2

はい長瀬さん。
えっ、ペースが遅い、もっと早くしろ？　何人かみせしめのために爆発させろ？　長瀬さん、それじゃ面白くないじゃありませんか。やつらが自らすんで殺し合わせなければ。
具体案？　ありますよ、詳しくはＦＡＲＧＯの機密事項ですから言えませんが、ドッペルとだけ言っておきましょう。えっ、不可視の力は使えないはずだ？　今回の場合は元々の意味なんですよ、これ以上は言えませんがね。俺にまかせてください、では。

……自分達の友人、家族、恋人に殺されかければもう奴ら何も信じられまい。疑心暗鬼に陥って殺し合いを始めるだろうさ、まさにドッペルゲンガーを

見た者はみんな死ぬんだ、くっくっくっ。
さあ、クローン体の出番といこうか、いや待てクローンの事が解れば長瀬達に俺の秘密がばれるかもしれんな。使うべきではないか？　この俺が悩むなんてらしくないなぁ、あまりに変で笑ってしまうな。はっはっはっ。

123　突き動かす力

枯葉のじゅうたんをすりながら、林をとぼとぼと歩いているのは、三井寺月代（八十三番）であった。
彼女は誰も殺したくない……自分も死にたくない。
開始当初、彼女は誰も殺めず、夕霧、蝉丸、高子と我が家へ帰りたいと思っていた。しかし、月代はこの山林に迷い込んでから数々の銃声、悲鳴、爆発音を聞いてきた。その度、木々を縫い、逃げ回った。
（危ないところへ近づかなければ安全なんだ）
走りには自信がある。何度か他の参加者に追われたが、皆撒くことができた。だが、ここは何かが違う……うまく走れない……一昼夜走り回ったためか、彼女の足はおぼつかない。親友の夕霧を殺されたせいもあり、精神的にも追いこまれている。
（夕ちゃん、もうあの岩場で遊べないね……。私も死んじゃうのかな……ううん、そんなことない！
蝉丸が助けてくれる！）
それでも、彼女には希望があった、坂神蝉丸……彼ならきっと何とかしてくれる。その希望が彼女の背中を押していた。
（まずは、蝉丸と高子さんを探さなきゃ！）

124　お姉さん

「……おなかすいた」
「……さっき食べたじゃない」
服のすそを引っ張る繭に真琴は答える。合流してから二人は、たびたびの休憩を取りながら神社のほ

うへ移動していた。本来ならこんな見晴らしのいい場所にいるべきではないが、この状況で暗い森の中にいる度胸は二人にはなかったのだ。
「みゅ～」
「こ、これは真琴のだからね！」
ものほしそうに見つめる繭から、食べかけの木の実を隠す。
「みゅ～！　みゅ～！」
「あぅーっ、いたい、いたいってば！」
髪を引っ張る繭に、真琴は声を荒げてしまう。
「うぐっ、うぅっ、うぅ……」
途端に崩れだす繭の顔。慌てて真琴はなだめようとするがもう遅い。
「うわぁぁぁんっ」
「な、なによぅ。泣かないでよ。これ真琴のなんだから……」
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁんっ」
「あぅー……」
次第に大きくなる泣き声に、真琴の顔も崩れていく。目が潤んでくる。
私だってこわいのに、心細いのに……
『泣きたいのはあんただけじゃないんだからぁ！』
そう怒鳴りつけようと思って、思いっきり泣きじゃくろうとして、でも、
『だからお前はガキなんだよ』
そんなからかう声を思い出した。
『私、ガキじゃない！』
真琴はそんな時いつもそいつにそういっていた。そう、私はガキじゃない。私はお姉さんだ。お姉さんだったら、どんなにこわくたって、どんなに心細かったからって……
『泣かない、泣けない、泣けるかっ！』
「しょうがないなぁ、ほら半分こしよ」
だから、真琴はぐっとこらえて繭に言う。ちょっと涙目なのは愛嬌だ。
「みゅ～？」

「ほら半分こ！」
そういって木の実を渡すと、繭はうれしそうにもそもそと木の実を食べ始める。
「あはは、ピロみたい」
「ぴろ？」
「うん、真琴の猫だよ」
「猫……」
「うん、猫。繭にもだっこさせてあげる。特別だよ」
「みゅ〜、みゅ〜」
すっかり泣き止んで嬉しそうな繭に、
「朝になったら探しにいこ！」
真琴も笑顔でこたえた。

125 眠りの森

「彰お兄ちゃん、わたし、少し眠くなってきたよ」
わがまま言ってごめん、と申し訳なさそうに言う柏木初音を、少し前を歩いていた七瀬彰はゆっくり振り返る。確かに見上げれば空が白くなってきている。小学生が起きているにはあまりに遅い時間だった。自分の体力も少々不安があるし、何処か、少しでも安全な場所で身体を休めたい。
「そうだね、少し休もうか」
歩いている方向は、数時間前爆発音が聞こえてきた方だった。何があったかは解らないけれど、何があったかを知るのは無意味ではないだろう、そう思い、爆発があってから何時間か後を見計らって、そちらへ向かう事にしたのである。危険は危険な事件が起こったすぐ傍には、すぐにはないんじゃないかな、という彰の楽観的な考えである。
森を抜けた。そこには一見すると普通の商店街が広がっていた。民家も節々に見えて、これで人が歩いていれば商店街以外の何に見えただろう。残念な事に、今眼前に広がるこれは、まともな商店街のようには見えなかったけれど。

この民家のうちのいずれかで休ませて貰えばいいだろうと彰は考える。幸い人の気配はまるでない。
「そうだね、あの、赤い屋根の家で少し休ませて貰おっか」
とはいっても、いつ人がやってくるかも判らない。出来る限り目立たない位置にある家を選ぶのがいいだろう。森の中から、商店街の彼方に見える赤い屋根を指差し、彰はそう提案した。
「うん」
二も無く初音は頷いた。眠そうな顔だった。初音の手を引きながら、彰は商店街に足を踏み入れる。
幸いなことに、商店街を歩く間、誰にも遭遇することはなかった。
代わりに、
途中、何かの燃えた後を見つけた。
それが先ほどの爆発音の正体であるなんて彰にも初音にも一秒で解ったし、彰に至ってはそれが、何が爆発したものかまで、よく、解った。
初音だって気づいたかもしれない。肉の焼ける臭いが馬鹿みたいに道の真ん中で暴れ狂っている。彰は早足で初音の手を引く。彼女はそんなものを見てはいけないと思う。ただの傷になるだけだ。
自分だって、今のそれを見て、傷が抉り込んだ。
本当に自分らは殺し合いをしているのだ。

商店街の端にあった小さな家に入り、二人はようやく息を吐けるに至る。小さな静かな家で、生活臭がまったくしないことを除けば充分に快適そうな空間であると思う。
「うん、ベッドもあるな。なかなか良い家だね」
言うと、初音は眠そうな顔で頷いた。もう多分限界だと思う。突いたら破裂するかもしれない。
「僕が見張りしてる、初音ちゃんは眠ればいいよ」
彰は肩を竦めて言う。自分も多少は眠いが、それでも毎晩遅くまでミステリーを読んでいたおかげだろう、初音が感じているそれよりは余程軽いものだ

った。
「彰お兄ちゃんは？」
「僕は大丈夫。さっき、初音ちゃんに会う前に少し寝てたし、徹夜するくらい慣れてるよ」
「……でも、大変だよ。わたし、少し寝たら見張り替わるよ」
「気にしなくて良いよ。今の内にたっぷり寝ておかないと、あとからつらいからね」
言うと、少しだけ気まずい顔をして、初音は少し俯いたが、ありがとう、と言って、ベッドの中に潜り込む。素直でよろしい。子供はしっかり大人に甘えておくのが吉なのだ。
――取り敢えず少し前の放送では、美咲さんの名前も、冬弥や由綺、はるかの名前も、初音ちゃんの姉たちの名前も呼ばれなかった。それはまあ、幸運といえるだろうか。その一方で他の誰かが死んでいるのが胸に痛かった。

何故彼らは殺すのだろう。彰はぼんやりと人を殺すことを考えて身体を震わせる。
例え生き残れても、人を殺したことは一生忘れられない傷になるだろうに。
横で寝息を立てる可愛らしい少女。必ず姉たちに会わせてやらなければいけないと思う。
――しかし、護るとは誓ったものの。
こんなフォーク一本じゃ自分の身だって守れる筈がないと思う。これで拳銃に勝てるのはジャッキーチェンだけで充分だ。
「何かないか捜してみようかな」
決めたらすぐ行動に移すが吉だ。彰は立ち上がって、その小さな家の中を調べることにした。
本棚には割と色々な本があった。ハードカバーならその角が武器になるかも知れないのだが、そこにあるのは大体が薄い文庫ばかりで、武器になりそう

なものはない。まあ、たとえハードカバーの本があっても、そんなの武器にしたくはない。読書家としての誇りである。

——ああ、あんまりミステリーは無いか。残念だ。本棚にはチャンドラーの「長いお別れ」があったが、もう何十回も読み返して、原書でも読んで、科白を暗誦出来るまでにオタクぶりを発揮している彰は、もう一度それを読もうとは思わなかった。というか、先週読み返したばかりだったのである。

だが、そこに一冊の、無駄に分厚い新書サイズのミステリーを見つけた。彰は顔をしかめてそれを手に取る。

「……清涼院流水かよ」

チャンドラーと並べて置くなよ、と思う。

流水。解説しよう、その本は、彰が、生涯、何があっても、金を積まれても、二度と手を出さないでおこうと思った作者の本であった。第一作を読了後、壁に投げつけて壁に穴を開けた事が微笑ましくない思い出として残っている。

しかし、彰はそれを手に取った。勿論読む為ではない。

異常に分厚いその本は、人を撲殺できるほどの重さなのである。彰の唇の端に笑みが浮かぶ。かつて自分の家の壁に穴を開けた重量がこんなところで役に立つとは。また、これを胸に入れておけば弾丸だって貫通しない。一〇〇〇ページは伊達ではない。

「良いじゃん、使えるじゃん」

彰は喜んでそれを鞄にしまう。先の言葉を借りるなら、本を武器にするなんて読書家としての誇りがあるのか、七瀬彰。

その自問に対する自答はこれだ。清涼院だぞ。

さて、台所にも何か無いかと思って捜すが、包丁やなんやの類はない。不自然なほどにそれらは抜き取られていた。生活臭の薄さは彰の心を喰らおうとする闇を僅かに大きくしたような気がする。彰は無理に声を出し、静かな空間をせめて破壊する。

「結局、収穫はこの本一冊か」
残念な結果だった。

彰は微妙に重くなった鞄を肩に寝室に戻る。部屋の隅のベッドに寄り、初音の寝顔を眺める。眺めているだけでは飽きたらず、真っ白な綺麗な頬を撫でまでする。
本当に天使のようだ、と彰は思う。
眠りの底にありながらも疲れ切った顔で、多分心の底から眠れているわけではないのだろう。それでも、きっと、自分が傍に居るということだけで眠れてしまう、そんな無邪気さも備えている。彼女を作るすべての要素が、あまりにも愛らしいと思う。
その柔らかな頬を無意識のうちに撫でている自分に気づくと、どうしようもなく泣きそうになる。自分はもう駄目なのじゃないかと思う。いやいやロリコンちゃうねん自分、自分はきっと真っ当な筈で。
そんな彰の様子に気づいたのだろうか、

「彰、お兄ちゃん？」
という、初音の掠れ声が聞こえる。しまった、起こしてしまった。
というか自分の指は未だ初音の頬にある。しどろもどろな様子を隠すように、彰はわざとゆっくりと指を頬から離し、わざと気障ったらしい声で、
「……ごめん。起こしちゃったね」
などと言う。初音は申し訳なさそうな顔。
可愛かった。
な、何で僕は小学生の顔見て赤くなってんだよマジで。無意識のうちに頬撫でたりしてるしさ。僕には美咲さんがいるんだぞばか。
「……やっぱり、彰お兄ちゃんも眠そうだよ。大丈夫、多分誰も来ないよ、お兄ちゃんも寝よ？」
「大丈夫だよ、僕は」
笑いかけると、初音はそれでもやはり心配そうな顔でこちらを見る。なんとも優しい子であることよ。
ああ僕はその優しさだけで充分癒されるのだ。

小さくあくびを噛み殺す。あくびしてるところなど見られたら初音はきっと気に病んでしまう。
「ほら、彰お兄ちゃんだって眠そうじゃない！」
見られた。不覚である。
「いや、大丈夫だって、」
しかし初音はしつこかった。
「ほら、ベッドだって、わたし一人じゃ大きすぎるよ。……毛布、半分ずつ使って一緒に寝ようよ」
少し恥ずかしそうな顔で初音は言う。
残念な事に彰の脳みそは、その言葉の意味を一秒で理解出来るだけの働きを持っていなかった。きっと十二時間眠った後の、すっきりした脳みそに同じことを言われても、理解出来なかったに違いない。
……え？　何、ねえ、それって何？　僕は、え、あれ？　あれ？　え？　な、ど、どゆ
「え？」
疑問は息のように口から漏れる。
「一緒に寝よう、彰お兄ちゃん。でも、変なことはしないでね」
柔らかく微笑みながら初音は繰り返す。
彰の脳は働かない。

……おかしい。
何で僕は女の子と、しかもすごく可愛いからとはいえ、小学生と同じベッドで眠っているんだ。初音はまたすぐに寝息を立てて眠り始めた。愛らしい寝息が、耳の裏にまで届く。
おかしいよ、おかしいですよ、何で？　彰は心底混乱している。無理もない。女の子と同じ布団で寝るなど、小学校四年生のとき、テレビの怪談特集が怖くて、姉と一緒な布団で震えた、あの日以来なのだから。血の繋がりのない相手だと生まれて初めてなのだ。
マジ？　何で？　何で？　何が起こってるんですか誰か教えて誰でもいいから誰でも！
ちらりと横を見る。幻ではない、背中を向けて初

音は眠っている。この距離からでも甘い匂いがする。レモンのような匂いだと思う。爽やかな匂いは彰の鼻腔に鮮明に届く。微かに息が漏れる。天使の歌声のように彰の耳に届く初音の呼吸は、今まで聞いてきたどんな歌より迫力があった。

　彰お兄ちゃんだけに無理はさせられないよ。

　初音は笑顔でそういって、自分に毛布をかぶせた。その笑顔が本気で可愛かった。

　どうしよう、どうしよう、どうしよう？　ねえ、冬弥、はるか、美咲さん、僕、なんだかおかしいよおかしいよおかしいよおかしいんですよ、おかしい。

「うう、ん」

　初音が小さく寝返りを打って、彰の側を向いた。

　可愛らしい寝顔が手を伸ばさなくても届く位置にある。天使の寝息が頬にかかる、天使の呼吸は一層明瞭に響き、彰の耳と心臓を支配する。

　ま、まままま、マジ？　僕は真性なのか？　む、胸がどきどきする！　この高鳴りはなに？　ち、違う！　これはただ、女の子と一緒なベッドで眠るなんて初めてだから、そうだ、そうに決まってる。小学生に欲情しているわけじゃないんです！　駄目だ、指一本動かせない、少しでも動いたら自分の心臓は破裂する、そうに決まっている。こういう時は目を閉じろ、耳には何も聞こえないと思え、頬に届く息はただの風だ、布団越しに伝わる熱は自分自身の熱に決まっている。

　すぅすぅ。すぅすぅ。寝息を立てるフリ。無様。

　……眠れん、眠れませんって、た、頼むよ……

　こうなると彰はドツボにはまってしまったようなものである。関係のないことに思考がやられだす。考えていないと壊れそうになる。

　そ、そういえば、初音ちゃん、最初は「七瀬のお兄ちゃん」って僕のこと呼んでたのに、なんか気付くと「彰お兄ちゃん」て呼んでたよな？　どういうことだろう僕に対して初音ちゃんは何かこう思うところがあるのか、い、いや、それは、初音ちゃんが

僕に親しみを抱いてくれた証拠で、僕に、頼れるお兄さんとしての信頼を抱いたってだけのことで、他に意味はない筈だ！　……だが、思い返してみろよ七瀬彰。初音ちゃんが自分を見る目を思い返せ！　は、なあ、ほのかに赤らんだ顔じゃなかったか？　そ、そうさ、好いていない人と一緒なベッドにはいるなんて女の子は嫌に決まってる、嫌の筈だ、つまり初音ちゃんは僕のことがちょっと好きなわけで、僕も初音ちゃんが好きで、違う、僕は初音ちゃんの事を護ってあげなくちゃ、って思ってるだけで、ああもう、訳わからん！　つまり僕は初音ちゃんを抱きしめても良いのか？　この柔らかそうな唇にキスしても良いのか？　ああ、そんな事していいわけないだろ、ああ、もう、訳わかんねえよ！

どうでもいいことから始まった妄想は、彰の不安を黒焦げにするまで焼き尽くした代わりに、残酷なまでに睡眠時間を奪っていきやがった。

さて。

結局、彰は一睡も出来なかったのだが、二時間後目覚めた時、

「お早う、彰お兄ちゃん！」

と言う初音の爽やかな声に、

「お早う、初音ちゃん」

と、微塵もそんな様子も見せず笑いかけたのは、まあ、ある意味、称賛に値すると思う。

126　面影

――どうして助かったんだろう

雪見が苦しそうに呻く。銃弾がヒットした所が熱い。さらには身体中に高熱を帯び始めていた。

「骨でも折れたのかな……？」

医術的知識はなかったが、漠然とそんな気がした。

「でも、ヘコんでなんていられないわ……」

夢遊病者のように。だけど、目だけはしっかりと

前を見据えて歩く。みさきや澪ちゃんはもういない。
でも、私はまだ生きている。運がいいといってしま
えばそれまでなのだろう。だけど……
「見ててね、みさき……絶対に拾ったこの命、無駄
にしないからね」
『雪ちゃん……』
傍らでみさきがそう言った気がした。熱のせいか
もしれないが。そこへゆっくり微笑みかける。もう
思い出したくもない、みさきの最後の姿。矢が刺さ
っていた。これがひとつの手がかり。
ワサワサッ
近くの草が生き物のように蠢いた。
(また誰かいるっ……!!)
緊張が辺りを包みこむ。今度しくじったら……命
がない!
バサッ!
ライフルで草を押し分ける。指はトリガーにかか
ったままだ。そこから出てきたのは——身体に無数
のダイナマイトがとりつけられた腹巻き(?)を装
備した女のコだった。
『えぐえぐ……』
「み……!」
もう思い出したくも無いみさきの最期の姿。だけ
ど、澪ちゃんは私は確認していない。
——生きてた……生きてたっ!
雪見の顔が少しだけ綻ぶ。
だが……
「わ、私を撃ったら爆発するんですよ! このダイ
ナマイト本物なんです! う、嘘じゃないですよ。
だから、ゆ、許してください〜!」
澪が錯乱したように叫ぶ。
「違……澪ちゃ……」
そこで雪見の表情が再び凍りついた。
澪ちゃんじゃない……だってあのコは……
「こんなのおかしいですよ! お姉ちゃんも巻きこ
まれて……一体どうなっちゃったんですか! みん

「そうね……」
笑えない。今、雪見は死へと特攻しているのだから。
「それに、私や郁未さんや晴香さん……なんで狙われなきゃならないんでしょうか……」
「……！」
雪見は思い出す。あの下卑た笑みの下から発せられた放送の言葉を。
――六十六番　名倉由依
由依も言ってからしまったという感じで雪見を見上げた。雪見は物言わず由依を見下ろしている。おさまりかけた殺意の衝動が全身にこみ上げた。
（このコを殺せば……結果的に私の、私の目的が果たしやすくなる……そして、もしかしたらこんな狂気じみたゲームの黒幕をもこの手で……！
「あ、あの……」
由依が恐る恐る口を開く。
「ごめんね、出会ったばかりで悪いけど……さようなら、みんな……」
「お、落ち着いて……」
澪に似ている……ただそれだけだったが、雪見の殺意は薄れていた。
「私はこんなこと好きじゃないんです。だって、殺し合いなんて！　……そんなの、悲しいですよ」
誰だってそうだろう。異常な精神の持ち主でなければ。ややあって、落ち着きを取り戻した少女――名倉由依（六十六番）――は、雪見にそう言った。
警戒されていて、表情はこわばったままで、銃口こそ向けられてはいないが、ずっと雪見の手にはライフルが握られていた。
「……」
「それに、私に支給された武器ってコレですよ……死ねって言われてるようなもんですよね」
ダイナマイト付の衣装……
「私にカタパルト弾にでもなれというんでしょうか……神風特攻隊じゃないんですよ」

なら……」
　雪見は由依の足を思いきり踏みつけると、ライフルを由依の頭に押し付けた。
「え、そ、そんな…っ！」
　あまりの恐怖と驚愕で、由依は逃げることも、抵抗することも忘れ、呆けていた。
「さようなら、由依ちゃん……」
　引き金を握る指に力が込められた。由依を見る。悲しい顔。そしてあの娘の面影──
『あのね』
『はじめましてなの』
『今日から入部するの』
『よろしくなの』
　出会ってからの毎日が一瞬走馬灯のように駆け抜けた。
「っ───!!」
　そして引き金を引いた。

　由依の真後ろの草むらから硝煙の匂いが立ち昇る。
「……」
（あれ……？）
　生きている。由依の頭の真横にはライフルの銃身。あまりの爆音の衝撃に耳からの情報が何も入ってこない。
「もう、二度と私の前に姿を現さないで」
　そう言うと、雪見は由依を置いてその場を立ち去っていった。

　どうして、殺せなかったんだろう？
　分かりきっていること。
　私にはあの娘は殺せない。
　だって……
「本当に好きだったんだよ」
　物言わぬ後輩を、その頑張っている姿を。

「……」

由依はその場で放心していた。最後にあの人が言った言葉は聞こえなかったけど、その表情がとても悲しく感じられた。

127　永劫回帰

合流する相手を探して歩いている二人の目に映った黒焦げた二つの物体。数時間前の爆発の結果だと一目でわかる。しかし、少女はそれ以外の物——壊れた先行者に目を止めた。
「これ、中華キャノンのロボット！」
駆け寄った少女に少年が呼びかける。
「初音ちゃん、それ、どうする気だい？」
「これ、見た事あるんだ。確かここに……ほら、ちゃんとあった。内蔵型修理キット。もしかしたら直せるかと思って」
「へぇ……意外だね。機械いじりが好きなの？」
「うん。……昔から機械の操作とかもしてたしね」
そう……五百年以上昔から、と心の中で付け足す。
少女が先行者を分解している姿に少年はふと、
（この娘、もしかしてマッドサイエンティスト？）
と思ってしまう。
「えーと、ロボットの復元は辛そうだけど、武装の再生くらいなら大丈夫かな？」
その呟きとほぼ同時に、一人の殺人鬼が隙だらけの少年に向っていた。その女性は少年に向って走り出した。
「お姉ちゃん!?」
初音は分解された先行者を見たまま言う。その声に、千鶴は動きを止める。その直後に怯えた声で言う。
「どうしてここに初音が？」
しゃがみこんで先行者の分解をしていた初音に千鶴は気付いていなかった。
「お姉ちゃん。……また、人を狩るんだね」
その言葉に千鶴は右手の爪を取り落とす。続けて、

初音が言っているとは思えない冷たい言葉が発せられる。
「本当は、私の方が偽善者なんだよね……」
「はつ……ね？」
「エルクゥを皆殺しにしたのは私……大切だった人を殺され、その人の思いを叶えるために同じくらい大切な人たちを殺シタ」
初音の様子がおかしい。
「……ダカラ。今回モ『狩猟者』ヲ裁クノ……リズエル！」
振り向きざまに中華キャノンが火を吹く。しかし、その弾道は逸れ、千鶴の左肩を軽く抉っただけだった。
「千鶴お姉ちゃん、今の私から逃げて！」
千鶴は力なく左肩を押さえながら、去って行った。
その直後、再び冷たい声で初音は呟く。
「ソシテマタ、ツライ、ヘイワナヒビヲ、ジローエモントスゴスノ……」

128　孤影

「もうっ、やってらんないわよ！　何が『君たちには殺し合いをしてもらう』よっ！」
理奈は半泣きで毒づいた。
――冬弥くんが居ない、兄さんも居ない。
みんな別の場所に運ばれてしまった……。
私一人放り出されて、どうすればいいっていうの？――
「殺し合うってどういうことよ……」
理奈はもう一度、力無く毒づいた。
彼女がいるのはスタート地点から程良く離れた所にある林の中だった。状況が掴めぬままに、とりあえず落ち着けそうなところを探した結果だった。
「きっと、こんなのドッキリに決まってるわ。由綺や兄さん、それに私の同窓生から全く知らないエキストラまで人数集めてくれちゃって。騙そうったっ

て、そうはいかないんだから……そもそも、ドッキリなんて三流の芸能人が出るもので――」
理奈はぶつぶつと呟くように言ったが、自分でその言葉を信じてはいなかった。もし、これが現実だったら、どっきりだと思って無防備でいて、そのまま殺されてしまったら……。そんなことは考えたくはなかったが、あり得ぬことでもなかった。
悲しいほどに今の彼女は無力だった。
何せ、理奈に与えられた武器は、どう見てもハンディーカラオケのマイクにしか見えなかったのだから。
「これで相手を魅了して、見逃してもらえというわけ？　それとも何か非科学的なしくみで音波兵器にでもなっているというの？　ちゃんちゃらおかしわよ……」
これが本当に武器であるというわずかな希望にすがりついてもみたかったが、本当にこれが武器であった場合、下手な取り扱いをすれば自分にも危害が及ぶかも知れない。結局理奈は自分の武器が何であるのかを確認できないでいた。
「……私、どうなっちゃうのかな？　……兄さん、冬弥くん……どこにいるの？　あいたい。逢いたいよ……一人はイヤ……」
理奈は呟きながら、草むらの中にうずくまった。体を小さく丸めながら、これが夢であることを願った。
――明日から次のシングルの収録なんだから。これはその緊張で見てる悪夢に過ぎない。起きたらいつもの自分の部屋で、むずがる兄さんを布団から引きずり出すように起こして……――
「そうよ、そうに決まってるんだから……」
理奈は頬を濡らしながら眠りについた。

129　正義

安らかな寝息を立てて眠る霧島佳乃（三十一番）

の横で、松原葵（八十一番）は周囲を注意深く窺いながらじっと蹲っていた。
　小高い丘にある神社。そこを離れた葵は、途中で夢遊病のように歩いてくる佳乃を発見したのだ。葵がふらふらと歩く佳乃に声をかけると、ぷつん、と操り人形の釣り糸が切れたかのように佳乃は倒れこんだ。慌てて葵が駆け寄ると、佳乃は深い眠りに入っているのか、ぴくりとも動かない。
　とりあえず、この子が起きるまでここにいようと決めた葵は気を張りつつ、佳乃の様子を見守っていた。
「ふぅ。外傷も無いようですし……なんで気絶してるのか不思議です……」
　と、ゆらりと大気の流れが変わった。――誰かが来る。察知した葵は立ちあがると、暗闇に向かって叫んだ。
「誰か、いるんですか？　こっちは戦う意志はありません。お願いです、出てきてください」
　しばしの沈黙の後、一人の少女が姿を表した。
――太田香奈子（十番）だった。
　その姿に警戒を解いた葵は笑顔で話しかける。
「こんばんわ。お一人ですか？」
「うん」
「こっち、来ませんか？　こんな状況ですし、助け合いましょう」
　そうね、と香奈子はゆっくり葵の方へ歩み寄る。と、横の佳乃の姿を見つけて足を止めた。
「コイツは、何？」
　佳乃の姿に、露骨に顔を歪めて香奈子は葵に問いただす。
「あ、道で倒れてて、介抱してるんです。でも、なかなか目を覚まさなくて……」
「ふぅん……じゃ、殺しちゃおう」
「え？」
　まるで挨拶でもするように、香奈子は殺人の協力を葵に求めた。あまりの事に、葵は開いた口が塞が

らない。
「だから、殺そうって言ったの。……もういい、私一人でやるから」
「ま、待ってくださいっ！」
慌てて葵は香奈子の腕を掴んで制止する。
「どうして、殺そうだなんて考えるんですか。今はみんなで協力し合って、帰る方法を見つけるべきでしょう？」
「こんな時に呑気に寝てるだけのやつなんて、足手まといなだけ。邪魔にならないうちに殺しちゃおうよ」
寝ている佳乃を足蹴にしようとする香奈子を、葵は必死に止める。
「ど、どうしてそんなこと言うんですか!?　誰かが危険なときには助けてあげるのが普通じゃ無いですか。それを、邪魔だなんて……」
「――だって」
ついと香奈子は葵を見つめて言う。
「瑞穂は死んだのよ？　危険なときに、誰にも助けられずに、たった一人で。それなのに、何でコイツは生きてるの？　不公平じゃない」
淡々と語る香奈子を、葵は沈痛な面持ちで見つめるだけだった。
「私、死のうと思ってたの。でも、死ねなくて。崖から飛び降りたら死ねるかと思ったけど、怖くて出来なかった」
そこで一旦言葉を区切ると、暗い炎を宿した瞳で、葵をじっ、と見つめる。その狂気を孕んだ視線に、思わず葵は顔を伏せてしまう。
「どうしようもなくなって、途方に暮れていたの。そうしたらある娘がね、どうすれば良いか教えてくれたのよ。役立たずを殺して行こう、って。瑞穂が殺されたように、私が殺してあげなさいって」
「……」
「弱肉強食。簡単な自然の摂理よね」
けらけらと香奈子は笑い出す。

「……わかりました」
葵は、顔を伏せたまま静かに返す。香奈子は笑いをやめた。
「あなたがあの人を殺そうというのなら」
ぐ、と両の拳に力を込めると、すっと流れるような仕草で構えた。
「この私が、お相手します」
顔を上げる。そこには、強い意志が宿っていた。
「……ふ。ふふふふ……」
突如、香奈子は笑い出す。怪訝な顔をしつつも、葵は構えを崩さない。
「？」
「いいわね。あなた、格闘家？　……格闘家の拳って、人を殺せるのかな」
「私は未熟ですから、そこまでの威力はありません。でも、当たると痛いと思いますよ」
やめるなら今のうちだ、と言うニュアンスを込めて言い返すが、それを聞いて香奈子はけらけらと笑うだけだった。
「ふふふ……それじゃ困るわ」
「えっ？」
「殺してって言ってるのよぉ！　コイツをおおおおっ！」
がむしゃらな香奈子の攻撃を、葵はひたすら防御する。
「どうしたの？　相手してくれるんじゃ……」
「……ふっ！」
その瞬間、葵の動きがが静から動へと転じる。
剛拳一撃。ずんという鈍い音がして香奈子はよろよろと身を崩す。
「……もう、やめましょう。私たちは助け合わないといけないんです」
「くっ……」
香奈子は苦痛に顔を歪めながら、葵の腕を掴もうとする。それを避けようとした刹那にきらりと何かが光って、葵の腕に鋭い痛みが走った。

「つっ……!?」
「ふふふふ……油断大敵ね、格闘家さん」
「かすっただけです。大した事ありません。残念ですけど、あなたがどんなに頑張っても、この程度の傷をつけるのが精一杯だと思います。……だから、やめましょう？　こんなの、無意味ですよ」
葵は必死で香奈子を諭そうとする。が、香奈子はくっくっと笑うだけだ。
「ふふ。良いこと教えてあげる。これ、毒が塗ってあるの。普通の人は三十分で死ぬんだって」
ぶらぶらと鋏を揺らしながら、香奈子は楽しそうに言う。月に照らされて鈍く光るそれは、香奈子に殺人をほのめかした少女、月島瑠璃子（六十番）からのプレゼントだった。
「さ、コイツを殺そう？　そうすれば解毒剤が貰えるわ、ね？」
顔を真っ青にした葵に、優しく香奈子は言う。少しずつ、葵の腕は感覚が無くなっていく。
「……お断りします。私は、人殺しはしません。みんなで助け合って、この島を脱出しましょう」
それでも、葵の意見は変わらなかった。真っ直ぐな瞳を、香奈子に向ける。
「あ、そう。じゃ、そこで死んでて。私はコイツを殺していくから」
「そうは行きません」
葵はたっ、と瞬時に間合いを詰める。それに反応して、すぐさま身構えて香奈子は鋏を突き刺そうとする。
『葵ちゃんは強いっ！』
ふと、懐かしい声が聞こえた気がして。緊張でがちがちだった自分を勇気付けてくれた、あの声が聞こえた気がして。
『そうだ。先輩に、綾香さんに、みんなに励まされて私は強くなっているんだ。やっぱり、助け合わなきゃ……だめですっ！』
渾身の一撃をカウンターにして香奈子に見舞う。

ぐっと足に力を入れて踏ん張った――葵の必殺技、崩拳。スローモーションのように、香奈子は宙を舞い、そして地面に叩きつけられる。
「……はぁっ」
荒い息を吐いて、葵は座りこむと、制服のポケットに入れていたハンカチで、傷つけられた腕をぎゅっと縛る。これでしばらくは毒が回らないはずだ。ただし、このまま放っておけば腕が壊死する危険もあるが。
葵はもう一度気力を振り絞って立ちあがると、佳乃の方を見てぺこりと頭を下げた。
「ごめんなさい、ここに置いていくことになってしまって。お願いですから、生き延びてくださいね」
そのまま倒れた香奈子の元へ寄ると、鋏を奪い取って、気絶した香奈子に喝を入れ目覚めさせる。まだぼんやりしている香奈子に、葵は荒い息を吐きながらも凛とした表情で言った。
「あなたに、殺人をやろうって言った人のところに案内してください。
――その人は、間違ってます」

130　突き動かす力　2

「……なんだろう？　なにかが……聞こえる」
月代は『なにか』の音を感じ取り、足を止めた。
「……人……じゃないよね」
月代は神経を研ぎ澄ませる。蝉丸や御堂ほどではないが、月代の体内にも仙命樹が息づいているのだ。
(チョロ……チョロチョロ……)
確かに聞こえた。
「……湧き水だ！」
水源は近くにあった。だが、音に気付かなければ通り過ぎていたろう。月代に支給された水は既に底をついていた。彼女にとってはこの清水は嬉しい発見である。
一休みした後、彼女はふと思った。

「そういえば、私の武器って何だろう？」
月代は支給された武器をまだ確認していない。いや、確認したくなかった。理由は簡単である。
（武器だったら嫌だなぁ……）
しかし、彼女の脳裏に『もうひとつの可能性』がよぎった。
（防弾チョッキとかだったらいいなぁ……）
月代は決心した。大きく深呼吸し、支給物資の入っているバッグに手を突っ込んだ。中に入っていたのは拳銃でも、刃物でも、防弾服でもなかった。
「お面……だよね、これ」
もうひとつ、一枚の紙切れがお面に貼りつけてあった。紙には何か書いてあった……
「……い、イイ？」
その刹那！　月代の顔に何かかが覆い被さった。
「(･∀･)ふわっ!?　ちょっ……何これ～」
彼女の顔には間の抜けた顔のお面が吸い付いていた。
「(･∀･)と、取れないよぉ～、歯医者さんくさいよぉ～」
「(･∀･)せみまるぅ～～～、たかこさぁ～～ん……誰でもいいからこれ取って～～～」
彼女は薄れた視界を頼りにおぼつかない足取りで森の奥深くへ消えていった。

131　朝餉

住井護は愛しの澤倉美咲の手を牽きながら、僅かに闇の失せかかっている森の中を全速力で駆けていた。息切れする、もう少し走り込んでおけば良かった。運動嫌いで大酒呑みなんて属性の高校生をやってたツケが回ってきたのだろう、脚がもつれて転びそうになる。愛しの美咲さんが小さな悲鳴をあげる、自分がずっこけたら彼女まで怪我をする、住井は小さく唾を飲みこみ、悲鳴を掻き消し、全力でバランスを立て直す、よし、大丈夫だ、なんとかみっとも

なく転ばずには済んだ。
　早く北川潤を見つけて合流しなければ。住井の心の中はその一色だけに染め上げられていた。
「ま、護くん、速すぎ、」
　――愛しの美咲さんがそう叫ぶのを聞いて、ようやく住井は自分が夥しい汗を掻いていることに気が付いた。心臓が馬鹿みたいに高鳴る、多分今走ったせいで寿命が三日は縮んだと思う。掌までぐっしょりしていて、女の子である愛しの美咲さんは、きっともっとひどいことになっているだろう。
　住井は足を止める、そして少し申し訳なさそうに振り返ると、謝罪の言葉を吐く。
「ご、ごめん、美咲さん」
　愛しの美咲さんの声を聞くまで、自分の焦りに気付かなかったのか、と思うと、自分はまだまだだな、と思う。そう、焦って走ったところで北川潤を見つけられる訳でもないのだ。
「だ、駄目だな、お、お姫様を疲れさせるような、ま、真似をする、ナイト、なんて」
　冗談めかして言わなければとてもこっ恥ずかしくて言える台詞では無い。自分の台詞に、愛しの美咲さんは顔を赤くして俯く。自分のキザったらしい言い方が聞いてて恥ずかしくなったのに決まっている。
　恥ずかしがってるというのは、脈が多少なりある証拠に決まっている。住井はそういう考え方をする男であった。
　年上の人を口説くには、自分はいっそ道化のようにに馬鹿な男を演じれば良い。そんな手段がえらく有効なのだと、住井は長年の経験で知っていた。というか、住井はそれ以外に女性の口説き方を知らない。元々恋愛に関しては単純な住井護十七歳だ。
「少し、や、休もうか」
　息切れが止まらないのがもどかしい。掠れた声でそう言って、住井は愛しの美咲さんの手を牽く。
「う、海でも、見に行こう、か、海岸、近いし」
　返事はしなかったが、きっと愛しの美咲さんだっ

て海が見たいに決まっている。住井は相変らず勝手に思う。
森を抜け、傍に広がっていた海に二人は向かう。美咲が乱れた息を整え、自分が服の袖で汗を拭って歩く内に、砂浜は自分らの足元を包んでいた。
闇は殆ど枯れていた。

「良い風だねえ、素敵な海じゃない？　ほら、遠くの空が白んできてる。うっわあ渡り鳥」
住井が指差すのを、美咲は呆然と見る。
自分の吐く息が、まるで目に見えるよう。
朝陽。
「美咲さん、どうしたの？」
と訊ねる住井の言葉も入らない。なんて素敵な風景なのだろう。自分は寝坊屋だから、朝陽がこれほどまでに素敵なことなど知りもしなかった。こんな美しいかけらが、この世界には散りばめられている。
涙が流れるのを止めることが出来なかった。

こんなきれいな風景を、明日は見ることが出来ないのかも知れない。
この美しい世界に留まる事ができる時間はもうないのかも知れない。
誰かと手を繋いでいる時間は、もう私に許されないのかも知れない。

涙を流す自分の顔を見て、住井は戸惑った表情をする。当然だ、住井はガキで、突然泣き出した女性を慰める術など知らないのだから。
けれど、次の瞬間には、
「……泣かないで」
と、住井は微笑んで、濡れた美咲の頬を指で拭っていた。殆どそれは反射的なものだった。
住井は泣いているひとを見るのは苦手なのだ。
本当に不思議な事だけど、美咲は初めて、その少年を、優しい子だと思った。つらそうにある人の、

そのつらさまでも包み込むような優しさだと思った。
涙は止まっていた。優しさと強さをしっかりと持つこの子の傍にいれば、自分はもう一度この景色が見られるかもしれない。
いや、きっと見られるだろう。
自分も、この子がやろうとしていることの力になりたいと思った。
「ありがとう」
と微笑むと、住井は少し赤い顔をして、
「どういたしまして」
と目を逸らす。その鼻を掻く仕草がすごく優しげだと思った。
美咲はその所在なげに身体の横で遊んでいる右手に手を伸ばし、ぎゅっと握り締めた。
住井が慌てたような顔で美咲を見た、
その瞬間だった。

砂を踏む音がした。あまりに堂々とした音だったので、美咲は逆にそれに気付かなかった。しかし住井は神経質なくらい瞬時に振り返り、足音の主を探す。気配がする、間違いなく人の気配で、この近くにいる、
「誰だっ！」
住井は無意識のうちに鞄からマシンガンを取り出す。住井の声と表情で美咲もようやく事態を飲みこみ、住井と同じように視線をさ迷わせる。
美咲は気付いた。住井も一瞬遅れて気付いた。いっそ堂々とこちらに向かってくる、手には何も持たない、薄ら笑いさえ浮かべている。
——美咲の知った顔だった。
白の髪と小さな眼鏡に鋭い眼差し。
大人の男だった。
「——緒方、英二さん」
美咲は、思わず呟いていた。生で見るのは初めてだった。彼もこの島に連れて来られていたのか、美

咲の思考には混乱が巻き起こる。
住井は、しかし割かし冷静に、まっすぐ、その男を睨みつける。
彼こそ、世間を賑わす若き天才プロデューサーである――緒方英二（十二番）だった。

132　結界・神奈

「ちょっとそこの人達、助けてちょうだい」
来栖川綾香はこの数分の展開を、なんとか頭の中で整理しようとした。
気になる所があるのでついてきてほしい。という姉の提案に従いこの社にやって来た。姉がやってきたこの社はどうやらいろいろな結界の役目を果たしているらしい。そこで、結界を解くというので自分も魔方陣を書いたり儀式の手伝いをしていたのだが、最後に姉が魔方陣の中に入り呪文を唱えていたところで突然の衝撃が起こったのだった。
ほんの数瞬の後、彼女の目に映ったのは石畳の床ごと破壊された魔方陣とその中に倒れている自分の姉、来栖川芹香だった。わけもわからず、気を失っている自分の姉の怪我を確かめる。
外傷はないのでひとまずほっとしたが、今度は突然目の前に四人もの人が現れたのだ。
（思わず助けを求めたんだけど正解だったかな？）
なにせ四人のうち二人は防空頭巾をかぶっているし、そのうち一人は竹やりまでもっていたのだ。
そして、もう一人の防空頭巾は、
「あれ？　倉田さん？」
「あ～綾香さんだったんですね～」
よかった。この子は信頼できる。
財界の（面白くもない）パーティーで退屈をしてぶらぶらしていたときに、偶然出会ったこの娘は倉田財閥のご令嬢だったのだ。自分と同じように、こんな堅苦しい席は苦手だと言う彼女と綾香はすぐに打ち解け、その後も時々連絡を取り合っていた。

くだらないデスゲームの中でも平常心を失わない所を見ると顔に似合わず意思の強い女性であったらしい。
「そちらは、以前お話頂いたお姉さまですか？」
「そうなの、この場所にあるっていう結界を解こうとしたらこんな事になって」
「あらあら、大変ですね。ちょっと見せてもらえます？」
「え？」
「私、牧村南と言います。イベントで色々具合が悪くなった人達を見ているので多少は看護が出来ます」
攻撃的な人達ではなかったので綾香は安心した。南は色々倒れている芹香の顔色を見たりしていたがただ気絶しているだけなので大丈夫だと言った。そしてこのやり取りがされている間残りの二人は古びた社をじっと見つめていた。
なんだろう、この社は。
全体に古びてはいるが基礎の部分は割と新しい木材で出来ている。まるでどこか他のところからこの社を移動させてきたようだ。それにこの感じ、
「舞さん、これが結界の基盤ですね」
「はちみつくまさん」
「？」
同意の言葉なのだろうか？　舞は緊張した顔つきにもかかわらず、かわいい言葉を返してきた。結界にはさらに少しヒビが入ってるようだったが、自分ともうひとりで壊す事が出来るだろうか。さっきから悲しい気が充満していることも気になる。
「姉さんなら笑って『大丈夫だよ』っていうだろうけど私には自信ないな」
「……あわせてあげる、お姉さんに」
「舞さん？」
「みんなで帰る。そして、佐祐理と祐一と一緒にお弁当を食べる……リアンやリアンのお姉さんも一緒に。それから、魔法も見たい……お空を飛びたい」

「ええ、一緒に帰りましょう」
少しこの気に圧されて弱気になっていたときに舞の言葉はうれしかった。
「いきます」
と、魔力を引き出そうとしたリアンを突然光の塊が襲った。
「あぶない！」
とっさに舞が体当たりしたことで、直撃は避けられたが、リアンは光の余波だけで多少のダメージを負った。光は『あの』力と同じ悲しみに満ちていた。光は徐々になにかの形を取ろうとしていた。
「あなた、誰？」
「……我が、名は……かん……な、立ち去……れ」
光が作り出す人の形は少女のものだった。翼を持つ少女の。

133　強さの価値は（前編）

あの、郁未さんと晴香さんを足して二で割ったような人が姿を消して——それでも私、名倉由依は呆けてそこに座り込んだままだった。
「似てたなぁ、あの人」
容姿や物言いだけじゃなくて、その目。強いけど、どこかせっぱ詰まった、余裕のない目。ＦＡＲＧＯで出会った郁未さんと晴香さんも同じような目をしていた。
そして、私は知っている。ああいう目をした人を決して一人にしてはいけないという事を。自分が一人だと思わせてはいけないという事を。
「だけど、どうしよう」
次は殺す。あの人のその言葉にうそはないだろう。あの人にはそういう『強さ』がある。それは、かつて行動を共にした二人の少女が持っていたものと同

じ物だ。そう、同じ『強さ』を持つあの二人ならば……

会いたい。あの二人に会いたかった。

あの人達ほど頼りになる人はいない。

「郁未さんなら木の板でビームを防いだり、相手のはらわたをくわえて、にやりと笑ったりしそうだもん」

まぁ、たまに壁に五千ほどダメージを与えそうな気もするが。

「あ、でも晴香さんはちょっとやだな。なんか、私の事盾にしたり飛び道具にしたりしそう」

なんとなくおかしくなってクスクス笑う。頼りになる仲間の事を考えると、それだけで元気がわいてくる。それが、私の『強さ』なのかもしれない。

『そういうのをただの能天気って言うのよ』

晴香さんあたりにはそう言われそうだが。かまうもんか、元気が一番。

「郁未さんって結構むっつりスケベだから、今ごろ男の人と仲良くやってるかも」

そんな事を大声で言ってみて、景気をつけようとして、

「あの……」

という背後からの郁未さんの声に腰を抜かした。

「い、郁未さん!?」

慌てて振り向いた先にいたのは、しかし郁未さんではなかった。ちょっとお年を召している、でも結構きれいな人。そして、うん、似てる。郁未さんを大人っぽくしたような感じ。って郁未さん十分大人っぽいけど。なんとなくスリーサイズとか身長とかそういうのを思い浮かべる。

「いえ、私は母の未夜子です」

私の方に向かいながらその人は自己紹介した。

って、えぇっ!? い、い、郁未さんの……

「お母さん!?」

「はい、天沢未夜子と申します」

うわ、似てる。この人の方がちょっと穏やかなよ

うだけど。
「あ、あ、あの、私はゆ、由依です、名倉由依です。ああ、あの郁未さんにはつ、常々……！」
　え、ええい、落ち着け私。ああでも緊張しちゃうよぅ。
「落ち着いて、由依ちゃんね」
　その人、ええと、未夜子さんは相変わらず穏やかな顔。
「郁未がいつもお世話になっているわ」
「い、いえお世話になっているのは私の方で……！」
　って、あれ？　なんで未夜子さん私の事知ってるんだろう？
「それで、由依ちゃん。あなた今一人かしら？」
「あ、はい」
　今浮かんだ疑問とか、そういえばこの人の右手はずっと背に回されてるなぁとか、そんなことが頭の中にあったんだけど。私は返答していた。
　……ばか正直に。
「そう、じゃ、突然だけど……」
　もう既に目の前に来ている未夜子さん、右手があらわになって。ありゃ、手斧——って、嘘？
「さようなら」
　耳元を何かかがかすめて、左肩がものすごく熱くなって、視界が、崩れて赤く、黒くなって。そんな中で今度こそ郁未さんの声を聞いた様な気がした。
「おかあさん!?」って。

134　活動再開

「だから甘いんだよ」
　マナがその場を去った直後、浩之は目を開き、そうつぶやいた。聖のメスに塗られていた薬は即効性ではあったが絶対量の少なさから浩之を長時間にわたって眠らせるには至らなかった。後ろ手に縛られたロープを木の幹にこすりつけて切断し足のロープ

をほどく。
「武器はあのマナとかいうやつがもっていきやがったのか」
――どこからか調達するしかねえな。
そこまで考えたとき足音が聞こえてきた。仕方なく浩之は近くの茂みに身を隠した。数分後、そこに現れたのは新城沙織（四十九番）だった。日本刀を抱え苦しそうに息をしている。体のあちこちが血にぬれているのは出血のせいだろうか？
――あいつをやろう。
そう思った浩之は石ころを拳に握り込むと沙織の背後にそっと回り込んだ。
「ああこれでこれでたすかるんだかるんだるりこちゃんにこのかたなわたせばしなくてすむんだだだ」
既に出血と全身にまわった毒の影響で沙織の精神は崩壊の一歩手前であった。にもかかわらず彼女が死に至ってないのはその出血により体内の毒が流れ出していたためであった。河島はるかとの乱闘で負った傷が沙織を生きながらえさせる結果となったのは皮肉な結果であった。浩之はそんな彼女の後頭部を石を握り込んだ拳で思い切り殴りつけた。
いたいだれかがなぐった
だだれだれれてるるりこちゃんなぐったのるりこるりこるりこあまたなぐった
なぐたまたまたたなぐたいたい
いたいいたいやだいやだしぬのいや
いたいやいたいいたい…………
「なに言ってたんだ。こいつ」
そう言って浩之は日本刀を腰のベルトにさすと毒の塗られた鋏を拾い上げた。
「次は銃だな」
浩之は数分前まで沙織であった肉塊には目もくれずその場を後にした。

四十九番　新城沙織　死亡
【残り75人】

135　no pain no gain

牧部なつみ（七十九番）は錆付いた短刀を鞘に収め、呟く。
「何処に罠を仕掛けよう……」
相手を確実に戦闘不能にする。そうでないと罠を仕掛ける意味が無い。誰がどんな武器を所有しているか分からないが、銃器系なら一瞬にして相手を屠る事が可能なのだ。それに……殺すことが最初の目的ではない。
〝贄〟
生き残るため。店長さんの敵を取るため。餌を撒くため。味方につけるため。捨て駒にするため。そして……試喰するため。
それがどれほど人道的でないかは分かっている。分かってはいるが……そもそも、こんなことをする方が人道的でないのだ。
そして……店長さんを殺した人も。

136　新婚さん

普段の日は、この眠りこけている馬鹿は誰よりも早く起きる筈なのだが、今日は長森はなかなか目を覚ます様子がない。寝てばかりいるような気がする。自分がまったく眠らなかったのとは対照的だ。ずっと眠ったまま、目を覚ますことがないかとも思えるほど、その寝顔は静かすぎた。浩平は苦笑する。まあ、今の内に好きなだけ眠っておくといいと思う。
次はオレが寝るからお前が見張りだぞわかってんな一日寝ずに見張りだぞー！　とでも言ってやろうと思う。
七瀬もついに限界が来たのか、二時間ほど前から横で寝息を立てている。浩平は結局一人で、敵が訪れないかを見張っている事になったのだった。
元々、そのつもりだったけれど。

夜は、やがて、駆逐されていく。
――運良く、襲撃者は一度として現れることなく夜は過ぎていった。僅かに白んできた空を、深い森の中で眺めながら、浩平は大きな溜息を吐いた。
鳥の声も聞こえない、静かな明けだった。思索に耽るには十分な余裕があった。
――この殺し合いは、終わるんだろうか。
永遠に終わる気さえしない悪夢のようにも思える。どれだけの数の人間がやる気になっているのか。見当もつかない、百人もの数が、殺され尽くすのに、どれだけの時間がかかるのだろう。あるいは、この島を脱出する手段が見つかるまでにどれだけの時間がかかるというのだ。
あの少女――鹿沼葉子が高槻を殺したなら、そこでゲームは終わるのかも知れない。だが、浩平の胸から、最悪の事態が訪れるかもしれないという悪い予感が消える事はなかった。
考えても考えても袋小路に行き詰まる。自分が何をするべきかはよく分かっている、
この二人を守る事だけを今は考えていればいいのだ。そして、行動に余裕が出来たら、他の皆を救うことをを考えればいいのだ。
繭や茜、深山先輩、詩子、
そして、澪と、みさき先輩のことを思う。
思ってただ心に浮かぶのは、首を絞めるような、罪悪感。彼女達を守れなかった自分は一体なんなのだろう。なんて力が無いのだろう。気に病むなと長森も七瀬も言う。けれど、彼女達を失った苦しみは胸を焼く。オレは死んだらきっと地獄行きだ。
ごめん。許してくれないことは、判っているけど。せめて、他の皆は、守れるだけ守ってみせるから。
もう、涙は流れなかった。
ふと、長森の顔を見る。暢気に眠り呆けるその幼馴染の顔を見て、浩平は少しだけ、微笑った。その

柔らかな唇に触れてみる。湿ったその唇に、己が唇を重ねたい衝動に駆られたが、なんとか堪える。
「にしても、――お前、綺麗になったよな」
と、冗談交じりに呟いてみた。頬をつんつんと突いてみる。ぷにぷにだ。
しかし、今の台詞を聞かれていたらオレはもう恥ずかしくて一週間は近所を歩けないというか、長森と話す時、必ず笑い話の種となってしまうだろう。
「護ってやるからな、必ず」
――それでも、言った。
「一生守ってやるからな、長森」
必ず、この命が終わらせても。
お前がいなかったら、オレは、今こうして、ここにいるなんて、考えられもしなかったんだ。

「こうへい」
と、長森が何やら寝言を言っている。
「ばか、だよ、こうへい」

寝言でも馬鹿にしやがるか、このばかは――
「わたし、なんか」
違った。寝言ではなかった。
崩れ落ちるように、
浩平の胸にもたれ掛かるように。
「ほうっておいても、良かったのに」
ゆっくりと、目を開けて。
真っ赤な目で、自分を見上げる。
「馬鹿だよ、浩平」
「起きてたのか」
「少し前から」
「そうか」
ああ、恥ずかしいものである。七瀬の気持ちが良くわかる、独り言は自粛しようそうしよう。ああ恥ずかしい、こりゃあ一生の笑い種か。やってられんな。ああごめん七瀬笑ってごめん馬鹿にしてごめん。

長森の泣き顔がすぐ傍にある。

「ね、浩平——ぎゅって、して」
「……長森」
——すごく、怯えたまなざしだった。
「嫌だよ。怖いよ。すごく、怖いよ。もう、浩平と一緒に学校にも行けない、浩平と通学路を走れない、もう、一緒にいられない」
「——ばか、絶対、絶対帰れるよ。またお前はオレがメチャクチャなところで寝てるのを必死になって探して、オレが必死で抱える布団を取っ払って、遅刻寸前になって、また遅刻だよ、とか騒いで、」
そう言うと、微笑ったように見えた。
「ずっと一緒にいるんだ」
見えただけだった。一瞬で表情が崩れる。等身大の女の子が感情を爆発させる。
「浩平、好き、大好きだよ。大好きだよ。大好き」
「ばか、」
「浩平、好きって言って欲しいよ。すごく、わがままだけど、言って欲しいよ。そうじゃないと、わたしは、だめだよ、だめなんだよ」
「——好きだよ、ばか。大好きだよ」
そう言って、浩平はその肩を抱きしめた。
強く強く、離さないように。離さないように。
たとえオレが死んでも、お前を、必ず護るから。
長森は浩平の胸に顔を埋めると、腕を浩平の背中に回してくる。暖かなぬくもりを、長森は、浩平に分け与えてくれる。浩平は己が頬にも涙が零れている事を自覚する。
お前がいるから、オレは今、ここにいるんだ。
それは、
——ずっと昔にも感じた、優しいぬくもりで。

起きるに起きられないのである。
(か、勘弁して欲しいわっ)
ぶっちゃけた話をしよう。乙女、七瀬留美、長森瑞佳が目を覚ました頃からずっと目を覚ましていたりしたのである。ちょうど、好き好き大好き！　な

んて言ってる辺りからである。

　乙女というのは大変だ。実際の話、ここで、
「わはは！　お早う二人とも！　世界の乙女、七瀬留美のお目覚めよ！　あら、二人ともラブラブね！」
なんていうことが出来たらどれだけ素晴らしいことか。自分はそれほどに恥知らずではないのである。
いや、一瞬甘美な誘惑に誘われた、起きてしまえよ、二人をからかってやれよ。それくらいの権利はあるわよ、乙女の七瀬さん。
　冗談ではなかった。
ラブラブな二人の邪魔をするなんて、そんなの乙女がする事じゃないわ！

　そのような無意味かつ無駄な葛藤が、二人の涙の抱擁の裏に展開されていたのである。
　っていうか、——なんだか、不公平な気がする。
七瀬は思考を無理矢理停止させて思う。
　折原はあまりに瑞佳贔屓過ぎない？　いや、別に良いのよ。いや、あたしも抱きしめて欲しいとか、そんな甘ったるいこと言うわけじゃないけど、いや、抱きしめてほしいけどこの際わがままは言わないほうが良いし、って話がずれてるな、とにかく、なんだかあたしがいないみたいに扱われるのはすごく癪ってことなのよ！　ああ、もう、もどかしいな、なんていうか、あたし、すごく可哀想よ、とにかく、ああ、もう、要約するわ！　目を覚ましたいのよ、早く！　くそっ、いつまで抱き合ってるのよあんたら！　あたしが見てると知ったら、こいつらどんな顔するのよ、まったく！
　二人はもう、これ以上無い、ってくらい温かな雰囲気で、神様が雷か雪を降らすまではずっと抱き合ってるに違いない、それほど強く抱きしめあっていた。天気は良いし今は夏だ、雷も雪も降らない、つまりそれでは自分は一生起きられない。
「ううぅん」

一計を講じる。自分はもうすぐ起きますよー、そんな風な演技をすればいいのだ。というわけで七瀬はわざと声を出してみた。うう、我ながらなんて姑息な手段なのかしら。だが仕方ないでしょ、こんな雰囲気の中に颯爽と起きることができるもんか！

まったく聞こえないようだった。

——聞こえてないの？　結構大きな声だったのに。くそっ、いつまで抱き合ってるのよまったく。ねえ、あたしの声が届かない世界にいっちゃってるんですか、あんたたち二人。

——か、覚悟を決めて、起きちゃおうかしら。しかし、でも、やっぱり、そう、そうよ、世界一の乙女になるためには……

「——ん。じゃあ、長森、ちょっと、水汲みに行くわ——ちょっと遠いけどさ」

「あ、うん、いってらっしゃい、気を付けてね」

あ、やっと離れやがった。これで起きられるわ。つーか今の台詞、新婚夫婦みたいに聞こえるではないか。まったくなんたることだ。

「ふぁぁぁ、よく寝た。あ、早いのね、二人とも」

ああ、なんて長い朝なのかしら。あたしの気持ちも知らないで長々とお目覚めの挨拶してやがって。

「あ、お早う、七瀬さん」「おう、七瀬」

二人して顔やら目やらを赤くしやがって、あたしはそんなに鈍感じゃないってば。判ってんのかしらこいつら？

——まあ、いいけどね。あんたらがそうやって幸せそうにしてるうちは、きっと大丈夫。あたしも笑っていられるからね。ませいぜいラブラブしてるといいや。

——そんな風な気を遣いながら行動する七瀬は、自分って乙女！　と思いながら満足を覚えると共に、

——やけに虚しくなった。

やってられんわ！

137　黒い予感

「やっぱり翔様×いおりゅんが一番よ！」

場の雰囲気に合わないくらい明るい声が響く。

「そうでしょうか、私はいおりゅん×翔さんのほうがスキです」

「くぅっ！　やるわね、だけどそれは間違いよ」

険悪な空気が二人を包みこむ。決して相容れぬ存在。二人の間には見えない大きな溝があった……。

「見かけより強情なコね～。……ま、いいわ。その勝負はお預けといきましょう！　それよりもさぁ……」

※オタクはよく喋ります、しばらくお待ち下さい。

・
・
・
・

「……でね。今度東京で開かれるイベント、あっ、こみっくパーティー、略してこみパって言うんだけどね？　今度一緒に行こうよ！」

「恐そうです。それに、まだ東京って行ったことないので……」

「大丈夫よ！　いろいろなお店とか～そう、楓ちゃんに似合いそうな服とか……だけど、これは自前のほうがいいわね～。うん、私も手伝ってあげるから自分で作っちゃいなよ☆」

「え、えと……はい……」

よく喋る玲子の勢いに、楓は半ば強制的にうなずいてしまう。

「大丈夫、楓ちゃん素質あるよ！　こみパにだってす～ぐになじめちゃうって」

玲子の話はまだ終わらない。まだ二人は血生ぐさい争いとは無縁の処にいた。偶然……そういってしまえばそれまでだ。だが、楓は常に勘を働かせながら安全なほう安全なほうへと玲子を導いていた。

もちろん、エルクゥの——鬼の力ではない。長年の（前世の記憶からの）生き残るための勘。ただの勘だが、姉妹達からよく『楓の勘は当たるからな〜』と言われるほど鋭敏だ。
だが、それも限界に近づいていた。
黒い感触。
もう……この島には安全な場所は皆無ということなのだろうか。
（お姉ちゃん……初音……耕一さん……！）
楓はブルッと身を震わせた。まだ彼女は千鶴や梓、初音……そして耕一の身に何が起きているのか全然知らない。
玲子の話はまだ、終わらない。
「でね……——————♪」

138　綺麗事

「……不毛ね」
先に視線を逸らしたのはきよみの方だった。
「で？　一体何がしたいの？　あたしを殺す？」
「はぁ？」
マナは一瞬、面食らったが、きよみの視線が腰に提げていたナイフにチラチラと注がれているのにすぐ気がついた。
確かに、こんなものをぶら提げていてはそう思われても不思議ではない。小さく苦笑した。
「あなた、バカ？」
「……なによ」
「あなたが私を狙ってるとかならともかく、なんでガキ呼ばわりされたぐらいで殺さなきゃいけないのよ。そんなことでいちいち殺し合いなんかしてたら命なんていくつあっても足りないわ。もし本気でそんなこと考えてるんだったら、ハッキリ言ってそれ、キチガイよ」
「そうじゃなくって」
きよみは苛立たしげに言った。

「今、自分がどういう状態に置かれてるかわかってるの？　今度会う時にあたしがあなたを殺さない保証は何もないのよ？」
「死にたいの？」
その瞬間、きよみにはマナの目が強い光を帯びたように見えた。
小さいはずのマナが、なぜだか自分より大きく見える。マナはギュッと拳を握り締め、続けた。
「ビョーキね、それ。そんなに被害妄想撒き散らして楽しいわけ？　後で殺しに来るなら来ればいいじゃない。拳銃でも突きつけてくれたらあなたの望むようにしてあげるわよ」
一息にまくしたてると、マナはフーッと大きく息をついた。
頭で考えるよりも先に口からポンポンと言葉が出てくる。きよみの言動はなぜだか妙に引っかかった。
「そんな……そんな甘いこと言ってて、他の人に通用するとでも思ってるの？」
「キレイ事かもしれないけど、疑って人殺しになるくらいなら疑われて殺された方が百倍マシだわ」
マナはそれだけ淡々と言うと、きよみに背を向けた。
「じゃ。お望み通り、もう行くわ」
これ以上きよみと会話するつもりはなかった。
いきなり歩き始めるマナに、きよみは慌てて声をかける。
「ちょ、ちょっと待ちなさいよ」
「まだ何か――」
不機嫌そうにマナが振り返るのと、向かいの森の木々の合間から人影が姿を見せたのが同時だった。

139　往人出立

国崎往人（三十三番）は氷上シュンの亡骸を抱きかかえながらみちるをあずけた店の前に来て愕然とした。入口は無惨に破壊され、建物は今にも崩れ落

ちそうだ。
「みちる！」
往人は氷上の亡骸を地面に置くと大急ぎで店の中に走り込んだ。
「みちる！　いるなら返事しろ。みちる！！」
カウンターの影からゴキブリの触覚のようなものがニョキッと生える。
「ね、国崎往人だったでしょ」
「そうですね。微弱ながら普通でない気配を感じましたし」
姫宮琴音もカウンターからひょっこりと顔を出す。往人は思いっきり走り込んでみちるを抱きしめる。
「国崎往人。いたいいたい」
みちるはそう言いながらも嬉しそうに頭突きを決めようと隙をうかがっている。そのチャンスを物にしようとした瞬間、玄関に人の気配がした。
往人はみちるを庇うように振り返る。
「だれだ！」
「あら、国崎さんお帰りなさい」
左手を頬に添えながら、月明かりに照らされたその人は、まぶしくも美しかった。
「でもね往人さん、いくら能力を制御されているからといっても、一度会った人の気配くらい、ちゃんと察せないようでは生き残るのは大変ですよ」
「お母さん！」
今までカウンターの後ろでブルブル震えていた水瀬名雪（九十一番）は、やっと帰ってきた母の元へ一気に駆け出した。
「お母さん、お母さん、お母さん――」
泣きじゃくりながら現れた人に抱きつく名雪の頭を優しそうに撫でるその人の表情を見た時、往人はなぜかこの人にはどうやってもかなわないと感じていた。
――水瀬秋子
前々回大会の生き残りと言われている彼女は、ただ穏やかに微笑んでいた。この殺戮の宴の中でさえ

変わらぬ微笑みを――
「往人さん。高槻という人の後ろには、とある人がいるのよ。私はその人達と争いたくないから、最後はこの子を生き残らせるために辛い選択をする時が来るとおもうの」
秋子は往人に優しく語り続ける。
「今、昔の友人達が高槻をどうにかしようと必死で動き回っているわ。もし、あのアナウンスにあった五人に会ったら、秋子の名前を言って助けてあげなさい。本当は私が行ってあげるのがいいのだけど、私か祐一さんでないとこの子が落ち着かないから」
名雪の頭を撫でながら、秋子は往人に微笑みかける。
「さぁ、往人さん。あなたが仕留め損なった人の側に行きなさい。私と名雪にはいらないこれをあなたに差し上げます」
そういって、秋子は携帯電話を往人に差し出した。
「この携帯電話は電話ではなくて、人物探知機です。名雪への支給品だったのですが、この子が持っていても宝の持ち腐れだから。番号を指定すれば、その人がどの人だか解るから便利よ。ちなみに、私の番号は九十番みたい。さっき調べたらそうだったから」
「良いのか？　こんな大事な物を俺に渡してしまって？」
「構わないわ、私はそれが無くても困りませんから。自分の力が足りないと思ったらここに帰っていらっしゃい。――それと、ここでみちるちゃんと約束しなさい」
往人は秋子にうなずいた後、みちるの前でかがみ込んだ。
「みちる。このお姉さん方と一緒にいるんだぞ。俺はちょっと出かけてくるけど、必ず帰ってくるから」
「帰ってくるって約束だぞ、国崎往人！」
そう言ってみちるは右手の小指を差し出した。往

人はその小指に自分の小指を絡め三度手を軽く振る。
「指切った、な。約束だ」
「おぅ、国崎往人。美凪をつれてきてくれよな」
「わかった。約束だ」
往人は、そう言って月光が照らす夜道を見る。
「行ってきます」
そう言って、往人は走り出した。

140　走る！　少女

日が昇る。朝日が昇り、また一日が始まる。
つらく、苦しい、とても長い一日が。
少年（四十三番）はなぜか岸壁の淵にいた。
「誤算……だったかなぁ」
遥か下で音を立てて波打つ海を尻目に、ぼそっとつぶやいた。海岸線に沿うように移動していたはずだったのだが、どんどん道が高くなっていってしまったのだ。二、三十メートルは確実にある。落ちたら死ぬことは必至だ。
「……う〜ん」
少し困ったようにうめく。
「よし」
少年はくるっと向き直る。
「もう少し内陸の道に戻ることにしよう」
彼はそういって岸壁の淵を後にした。夜の時間、自分は無心で歩き続けていたか、と言えば、いささか嘘が混じっているかもしれない。
いろんなことを考えた。
ゲームのこと、高槻のこと、死んだ女の子のこと、そして彼女を殺した男のこと、そして自分と同じように高槻を討つために動いている——あるいは、同志と呼べたかもしれない——人たちのこと。
そして……自分のこと。
「僕が、人並みの感情を持つなんていうのは、きっとおこがましい事なんだろうな」
所詮、自分は楔でしかない。『力』を発現させる

ための道具だ。そして道具には感情なんて必要ない。ただ、機能すればそれでいいのだ。最初からそのつもりだった。たとえこのゲームに巻き込まれなかったとしても、自分がやっていくことは変わらないはずだった。

心の隙間を穿つ……

その行為の咎を誰が受けるというのか？

自分か？

それともＦＡＲＧＯか？

……今まで、興味も無かったことだった。

よく、感情の起伏の少ない人間を人間らしくない、といったものだ。特にＦＡＲＧＯでは、精錬やら修行だとかと騙って、さまざまな女性をそのような状態に壊していった。あれは今思えば酷いものだった。無理やりにも……たとえ崩壊し、ロスト体を生む危険性を冒すことになっても、力を見出そうとする。そもそも、この『不可視の力』は、人間という器に収まりきるものじゃない。完成した個体に侵入したいわば『異物』だ。これは人間に人間以上のものを求める。たとえ制御できたとしても、その存在が、水面に浮かぶ枯葉のように危ういものであることに変わりは無い……。

少年は、近くにあった中くらいの岩に目をとめた。さっと手をかざし、凍るように冷たい視線をそれに向ける。

「……割れろ」

一言、そうつぶやく。だがその岩が割れることは無かった。彼はそれに接近して表面を撫でてみた。中心に近い部分に、目新しい小さなひびが見受けられた。

「分かっていたことだけど……やっぱりダメか」

力の『祖』たる自分がこうなのだから、完全に力を制御しているとはいえ、郁未や葉子も同じ状況にあって当然なのだろう。高槻にこんな技術があったとは思えないが、現状は完全に近いほど力を封じられている。たとえ『月』がこの場に在ったとしても、

この縛鎖を破れるとは思えなかった。

「……とすると、ＦＡＲＧＯの技術では無い、ということか」

　高槻に程近い位置にいた自分や良祐でも、奴に力を貸しているらしき存在の正体は掴めなかった。そもそも奴程度の小者に従う羽目になった強制力、それ自体が謎だった。

　――こちらに切り札があるのと同様に、奴にもまだ見せていない手札がある、ということか。

　この状況において、恐いのは不測の事態、いわゆる未知の恐怖だ。それは敵の予想外の強さや人数だったり、突然の奇襲だったり、また知り合った人間の裏切りだったりする。焦る……でも事は慎重に運ばなくてはいけない。失敗は即ち死につながるのだから。

　もう一つ思うこと……それが殺意。

　いろいろなそれを見てきた僕にとって、あまりにもそれが不毛なものであることは分かっていた。憎しみは憎しみを呼ぶ。誰かにぶつければ、それはいずれ自分に返ってくる。でも、僕はその感情を覚えた……。自分以外の誰かが傷つけられたという事実……ＦＡＲＧＯでは当たり前だった筈のそれが今は重くのしかかる。

　心無い戦いに救いなんて無い。それはかつての僕と同じ、機械が殺しあっているようなものだから。だけど、もっと大きな目的のためでもなく、原始的な生き残るというため、でもなく、ただ一人のためにただ一人を討とうとすること。それは果たして尊いものと言えるのだろうか。たとえ、表面的に悲しみを語っていても、結局やることは同じだというのに……。

　グァシャッッ！

　少年は目の前の岩を正面から殴りつけた。少しのひびしか入っていなかったはずの岩は、その一撃で、中心に大きな穴が穿たれていた。

　ずいぶんと人間らしい考えを持つ様になったな、

と少年は自嘲した。
——高槻を下衆と罵るなら、自分は人間ですらないというのに。
がささっ。
「あ……」
近くの茂みから声が聞こえた。思わず、少年は拳を岩に打ちつけた状態で固まる。
「はは……あはは……」
ちょうどそこから姿を現したのは女の子だった。なぜか微妙にひきつり笑いを浮かべているが。
「さっ、さよなら！」
ダダダダダダッ！
ダッシュで僕を避けて走り去る彼女……
ずいぶん足が速いなぁ。
「……僕、何かまずいことした？」
思わずつぶやいてみたりしてしまった。
……、
あ、そうか。
素手で岩砕いちゃったら普通は恐がるか。
合点がいったのもつかの間。
「あの方向は……」
少女が走っていった方向に目をやる。それは丁度少年が迂回して戻ってきた岸壁の淵へと向かっていた。
「あの速度で走っていったら……」
まさか落ちるなんてことは無いだろう、と思いつつもそのまさかがありえたら恐いので、少年は彼女を追いかけてみた。
たったたったたったたっ……
「健足だぁ、これはまずいかな……」
思わぬ少女の足の速さに驚く少年。一応背中は捉えたものの、この分だと崖に行き着くまでに彼女を止められそうに無い。
少年は大声で呼びかけてみた。
「おーーい！　そっちはがけだよぉー！」
だが、高速で走っていると人の声など耳に入らな

いもので……
「な…、な…、何で追っかけてくるのよぉ～!?」
彼女は思いっきり狼狽していた。
「折角逃げられたと思ったのにぃ～、いやーたすけてー犯されるー！」
「おーい！　だからそっちは崖なんだってー！　頼むから聞いてくれ～～！」
なかなか彼女との距離はつまらない。だがこのまま行けば……
くそっ、どうしようもないのか？
一向に少女は止まる気配を見せない。
「こっ、こっ、こんなことなら通信教育の合気道習っておけばよかったぁ。あー、もー来ないでよぉ～！」
……さらにスピードアップ。
どうする……どうする……？
だが、もう悩んでいる時間は無かった。こちら側からでは、あそこから道が途切れていることが分からない。おそらく彼女が自分で止まることは……無い。
「止まれ――――――！」
最後の呼びかけ。正に絶叫といって差し支えないほどの。しかしそれすらも今の彼女には届かない。
「な、なんか叫んでるよぉ。そんなに私のことが欲しいのぉ!?」
……かなり暴走気味の思考だった。全力疾走と追跡されているという思い込みは、十分彼女をハイ・テンションにさせていた。
そして――――
「え……」
十分な助走を得て、高々と空中にダイブした。
転瞬。
少年も彼女を追うようにジャンプした。無駄に速く走ってくれたおかげで、滞空時間が長くなってくれている。
間に合う、絶対に間に合う！

自分にそう言い聞かせた。
ぱしっ。
彼女の右腕を掴む！
だが、このままでは二人とも落ちるだけだ。なんとしてでもひっかからなければ。
「グ……、オオオオオオオオォ！」
ヴン！
全身のばねを総動員させ、空中でもう一度飛び上がる！　本来なら、それで崖の上に戻ってこれたのだろう。しかし、彼の卓越した運動能力をもってしても、三人分の荷物と二人分の重さを押し上げることはできなかった。
だが、それでも彼は左腕一本で岸壁にしがみついた。高空の強い横風が、彼らを岸壁に押し付けたのだ。状況はかなりきつい。だが、自分と彼女の命をつなぐことができたことに少年は安堵していた。一方少女は、落下のショックで軽く気を失っていた。
「た、頼むから早く起きてくれ……」
少し苦しい口調で、彼は言った。
「ん、……ううん」
彼女もすぐに目を覚ました。
「あ……あれ、私……って、きゃあーー！」
意識を取り戻してすぐ突きつけられた状況に、少女はやはり絶叫した。
「お、落ちるーーー!?」
「い……いいから、とりあえず僕の腰辺りにしがみついてくれないかな……？　このまま左一本だと……ほんとに落ちちゃう」
「あ……うん」
彼女は素直に従い、少年の体にしがみついた。両腕が開いた少年は、そのまま岸壁をロッククライミングした。両腕が使えるおかげで、何とかその重さをフォローすることができた。
「くっ……、くっ」
少し苦しそうに、でも確実に岸壁を登っていく少年。そしてその姿を背中から見つめる少女。その瞳

は、既に何か恐ろしいものを見るような……そのようなものでなくなっていた。
「ん……、はぁっ」
崖の先までとうとう登り切った少年は、そのままはいずるように地面にうつ伏せになった。
彼につかまっていた少女も、一緒にそこに寝転んでいた。
「ねぇ……」
「はぁ、はぁ……なんだい？」
「どうして助けてくれたの？」
「それは、落ちるところだったからね」
「なんで？　私を狙ってたんじゃないの？」
「そんなことは無いさ」
「だって絶叫しながら追っかけてきたじゃない。私、あれすごく恐かったんだけど」
「君がいきなり走り去るからだよ……それに僕が叫んでたのは、そっちは道が途切れてるよって教えるためだったんだけどなぁ」
「そ、そうだったんだ……。だって、森を出たら人がいて、見てたらいきなり岩をぶん殴って割っちゃうんだもん。恐くなっちゃって……」
「ああ、やっぱり……」
ほんの少しの沈黙。
「あの……さあ？」
「なんだい？」
「助けてくれて、ありがとね」
「どういたしまして。助かってよかったよ」
少年はふっと笑った。少女もそれにつられる様に笑った。
「私の名前は柚木詩子。あなたは？」
初めて少女――柚木詩子（九十九番）が名乗った。
少年はその問いに少し複雑そうな表情を浮かべ、
「名無しでいいよ」
とだけ答えた。
「え～っ、なんでぇ？　私には名前も教えられないって言うの？」

「いろいろあるのさ」
不満げな詩子の横で、少年は意味ありげに笑っていた。一日の始まりにしては、なかなかハードだな。
少年は苦笑した。

141　作戦

「……（うぅん）」
「あ、姉さん、気がついたのね」
来栖川芹香が目を覚まして最初に見たものは自分を介抱する妹と見知らぬ二人の女性だった。
「……」
「あ、この二人は　倉田佐祐理さんと牧村南さん、味方よ。倉田さんのほうは前に話した事があったわよね」
綾香が手短に事情を話してくれる。どうやら儀式を邪魔されて気絶していたらしい。多少結界にダメージを与える事は出来たが、まだ魔力は回復していないのは残念だった。この二人にも敵意はないようだ、綾香が味方だというのなら間違いはない。
「……」
「そうよ、姉さん。この二人も同行者が魔力を感知できるのでここに来たってわけ」
「……」
「あ、その二人はね……」
『あぶない！』
二人の会話はそこで中断させられた、社から飛び出した光の塊が社を見ていた青い髪の少女を襲ったのだった。幸い、もう一人社に注意を向けていた黒髪の少女に突き飛ばされたおかげで直撃を免れたようだがどこかにダメージを負ったのか、すぐに立ちあがれないようだった。
芹香は無言で立ちあがろうとしたが、よろけて綾香にすがるような格好になってしまった。光はなおも二人に襲い掛かるかのように不気味に動きつづけている。

「……」
「姉さん、無茶よ。姉さんだって見た目は平気そうだけど結構なダメージを受けているはずよ。足が震えているじゃない」
「……」
「『私だけじっとしているわけにはいかない』って？　そんな体で満足に戦えるの？」
「……！」
「……昔から姉さんは結構頑固なところがあったわね、でもそんな姉さんが好きだったわ」
「……」
「姉がピンチのときに助けてやらない妹がどこにいるっていうの？　私もサポートするわよ」
「あ、あれは！」
佐祐理がそう言って指差した先の光はもはやただの球状ではなく少女の形を取っていた。背中から生える翼は幼さの残る少女の顔を照らす太陽のように左右に大きく広げられていた。
「姉さん、あれは何なの？」
「……」
「そう、あれが結界の守護者なのね」
先ほど青い髪の少女リアンを突き飛ばした黒髪の少女、川澄舞が少女に何か尋ねていた。
「あなた、誰？」
「……我が、名は……かん……な、立ち去……れ」
「だめ、私はみんなと一緒に帰る。絶対に逃げない」
「……さも、ないと」
「さもないと？」
「排除……する」
その言葉が終わらないうちに翼を持つ少女、神奈のまわりに現れた光の塊が舞を襲う。
「！」
舞の卓越した運動神経にとって、光の塊の速度は脅威ではなかったが、当たればどうなるかわからないという恐怖は大きなものだった。

「……立ち去、れ」
先ほどと同じ言葉を繰り返す神奈に対して舞は無言で手にした竹槍を向けた。
「え、姉さん、何？」
「……」
「ちょっと、舞さん聞いて！　その子はとっても苦しんでるって！」
「……」
「何かに操られているだけ、その子はほんとは悪くないって！」
綾香の言葉を聞いた舞はほんの一瞬躊躇した、確かに力には悲しみが感じられたからだ。その刹那、また別の塊が舞を襲う。
「!!」
少し掠っただけだが体の内側を少しもっていかれたような奇妙な感触、よろける舞に新しい別の塊が襲いかかる。
「バリアー！」
舞の前に立ちはだかったリアンは両手を前に突き出した、手のひらに淡い光の膜が広がる。薄い氷同士がぶつかり合うような音がして舞に襲いかかった光の塊ははじけ飛んだ。
「やっぱり結界の力が少し弱ってる、今ならあれが出来るかも」
「何をするの？」
「舞さん、私を守ってください」
「？」
「今からあの女の子の心と接触します。説得してみようと思いますが、その間無防備になるので、私を守って頂けませんか？」
「……」
「姉さんもやる気よ、もちろん私もだけどね。その案に乗るわ」
近づいてきたうりふたつな少女達はリアンに向かってそう言った。どうやら先ほど倒れていた三角帽子の女性は無事だったようだ、静かだが深い海のよ

うな魔力を感じる。
「佐祐理と南さんは危ないから離れていて」
「わかりました……いっしょに帰ろうね、舞」
舞、綾香、芹香はリアンを囲むように正三角形の位置に身を置いた。舞の竹槍と綾香のグローブには青白い光がともる。
「……」
「わかったわ、姉さん。これでさっきのバリアと同じことが出来るのね」
「(こくん)」
「ではいきます！」

142　強さの価値は（後編）

わからない、なにがおこっているのかわからない。
「おかあさん……」
今の声は私が発したもの？
「お、おかあさんって！　どういうことなんだ!?」

隣の男とこの人の声が良く聞き取れない。だけど、
「久しぶりね、郁未。やだ、何その格好？」
その声は記憶にある通りで。なんどもなんども聞いた声で。そう、私はこの格好を何とかしたいから
って町に向かおうとして。
「郁未は進んでる子だと思ってたけど、もう少し方向性は考えたほうがいいんじゃない？」
その声は相変わらず穏やかなものだったから。お母さんの下にうずくまっているものだけが違う世界にあるようで。だけど、それはそこに間違いなくあって。
「あ、あああああああああああ!!」
どこかで誰かが叫んでいて、うるさいなぁって、あ、いやわたししか。
「どうしたの郁未？　あなたもっと強い子でしょう？」
そんな事を言いながらお母さんはかすめただけの手斧を振り上げて——気絶した由依がその下にいる。

ああ、お母さん、それはちょっと悪趣味なんじゃないかな、なんてぼんやりとそれをみていると。
「っつ、やめろ！」
隣にいた耕一さんが前に駆け出した。お母さんは、耕一さんのスピードにちょっと驚いた顔で、後ろに飛ぶ。うん、お母さん気を付けたほうがいいよ。その人ちょっと普通じゃないから。なんかその人、鬼らしい。力は制限されてるって言ってたけどね。でも、普通じゃないのはお母さんもそうで、耕一さんの突進に合わせて手斧を横に振る。
「……！　このっ！」
耕一さんは間一髪でその手斧をかわすと、その重さをもてあましぎみなお母さんの隙を突いて、
「はっ！」
気合の声とともにお母さんの右手を蹴り飛ばした。
耕一さん、キックは使わない方がいいと思うけどね。まぁ、とにかく手斧はお母さんの手から離れて、これで耕一さん有利かなっておもったんだけど。

「まいったわね、不可視の力だけで十分だと思ったのに」
母さんは余裕たっぷりで、懐から何か茶色いものが飛び出して、耕一さんをぶっ飛ばした。
「ぐぅ……なんだよ、そりゃ」
「ああ、これ？　プチ主よ」
お母さんの肩に乗ったそれはハムスターみたい。
「ＦＡＲＧＯの地下迷宮に生息している生物でね、今回特別に貸してもらえたの」
「ＦＡＲＧＯって!?　どういうことだ！」
「つまりね」
お母さんは、聞き分けのない子にいいきかせるように。
「私はジョーカーなの」
「ジョーカーだと？」
「そう。なるべく殺し合いが加速するように主催者側から仕組まれた何枚かのカード」
だからなにを言っているのか分からないよ。

「なんだってあなたが！　郁未ちゃんのお母さんが！」
「強さが欲しいから……いいかげん叫ぶのを止めなさい、郁未!!」
　怒鳴りつけられてわたしは叫ぶのをやめた。
「そう、あなたはもっと強い子でしょう？　私があこがれる冷淡な強さ。不可視の力を制御するための、強さ。それをあなたは持っている」
　分からない、お母さん、分からないよ。
「この大会で私が生き残れば、私もきっとそれを手に入れられる。そう、傷つけても傷つけられても、それら全てを克服する強さが。この大会の優勝者はね、郁未。みんなそんな強さを手に入れて、そしてそれにふさわしい地位を手に入れるわ。例外なんて、水瀬秋子ぐらいよ。もったいない事ね」
　よくしゃべるなぁ、お母さん。
　分からない事をべらべらと。
　でも、分かった事もあるよ、お母さん。
　例えば、お父さんと別れた時の泣いていたお母さんのこと。
　その傷がお母さんを弱くしてしまった事。
　目の前に由依と、耕一さんが倒れている事。
　それと、これが一番大切なんだけど……
　私は強い子なんだって事。
　私は全身にばねをためると、前に駆け出した。
　不可視の力を使ったその速さは、それなりに速いんだろうけど、
「……そうね、来なさい郁未」
　冗談じゃない。この程度の力でプチ主と戦うほど私は馬鹿じゃない。私は、お母さんの方には向かわずに由依の方に向かった。そして、
「下がってお母さん。由依のダイナマイトを起爆させるわ」
　由依の胸に手を当てて静かに告げた。
「な、郁未ちゃん！」
　耕一さんは驚きの声を上げるが、私はそれを無視

する。
「今の私の力でも起爆ぐらいは出来るわよ」
声は、震えなかったと思う。体は知らないが。
「郁未にそれが出来るかしら？」
「当然でしょ、お母さん。あなたの娘は――」
そう、お母さんがそう言うのならば。
「とても、強い子よ」
「……本気なの？」
「お母さんに今殺されるわけにはいかない。お母さんを止める人がいなくなるから。お母さんに殺されるぐらいなら、今ここで一緒に死んでもらうわ。手詰まりよお母さん、さっさと目の前から消えて」
しばしの沈黙の後、おかあさんはふぅ、とため息を吐いて、
「そのようね、ここは引き下がるわ」
そういってその場から立ち去った。
「郁未ちゃん……」
耕一さんはよろけながらこっちにやってくる。その声に含まれた気遣いは今の私には不快なものだ。
「町に降りよう、耕一さん。由依の手当てをしないと」
だから、私はそっけなくそういった。
なんでこんなに私は平静なんだろう。
この平静はいつまで続くのだろう。
この次の一瞬まで？　それとも一生？
どっちだっていい。
大事なのは今平静でいられるという事。
だから、私はお母さんが残した、
いくつかのキーワードの意味を考える。
何人か居るというジョーカー。
そして、大会の生き残りという水瀬秋子。
そして、この大会の黒幕。
今は、考えなくてはいけない事が多すぎるのだ。

143　対峙

　暗闇に包まれた森の中を、江藤結花（九番）と長谷部彩（七十一番）はお互いについての話をしながら歩いていた。お互いの境遇、思いを寄せていた人の生死、そしてこれからの事。
「彩さん、そのペン……」
　結花は彩の持っていたGペンを手に取ると、夜空にかざした。僅かに差す月の光に、ペン先が鋭く光る。
「これって、ただのペンじゃない……ナイフみたいね」
「そうなんですか……そこまで気が付きませんでした」
「うん。これって意外に使え……って、遠くから銃で狙われたらひとたまりもないけど」
　どれくらい歩いただろうか。果てしなく続くと思われた森の中から、水の流れる音が聞こえてきた。
「あ……」
「川？」
　二人は、重くなりつつあった脚を励まし、その音の方に向かった。
　ガリッ、ガリッ……
　あれから川沿いの河原にたどり着いた二人は、川の水で喉を潤した後、河原に沿って歩き続けていた。両岸は次第に高くそびえ立ち、小一時間も歩いた頃には、もはや谷間としかいえない状態になっていた。
「結花さん、あれ……」
　彩に指摘されて結花が崖を見ると、何かが崖に沿って垂れ下がっていた。おもむろに崖に近づく。
「橋ね……吊り橋かしら」
　古ぼけたロープ、黒光りする木の板、それは紛れもなく吊り橋であった。振り返れば、反対側の崖にも同じような吊り橋の残骸が見える。

再び歩き出そうと向き直って、結花は視線の先に、何か黒光りする物を見つけた。吊り橋の木の板と違って、金属質の鋭い光り方だ。よく目を凝らすと、どうやら銃のようだ。
「彩さん、ここで待ってて。ちょっとあっちの方見てくるから」
彩にその場にとどまるよう告げると、結花はその光の方へ歩き出した。踏み出してから数歩進んだとき、向こうから不意に声が響いた。
「止まりなさい！」

ちょうどその頃河原では、深山雪見（九十六番）が休んでいた。少し前の銃撃戦で受けた衝撃で、胸が痛い。さっき名倉由依を撃てなかったのはそのせい？　それとも……
雪見は、弾切れしたライフルのマガジンを換えようとしていた。だがいかんせん銃には素人、マガジンの外しかたがわからない。仕方なく周囲の枯れ草をかき集め、百円ライターで少しばかりの火を灯した。その明かりを頼りに、どうにかマガジンを外す。そして鞄の中をまさぐり、新しいマガジンを取り出そうとしたその刹那……
近くに人の気配を感じた。
雪見は咄嗟にサバイバルナイフを手に取り身構える。何メートル先だろうか、人影が見えた。
雪見は思わず口走った。

「止まりなさい！」
いきなり聞こえた声に、結花は身をすくめた。視線を左に向けると、人影が見えた。脇に灯されていた小さなたき火で縁取られている。女性？　結花も、出刃包丁を持つ手に力を入れる。
「あなた、誰？」
「そんな事どうでもいいわ」
雪見は一歩づつ結花に歩み寄る。
「私を邪魔する人は、許さない……」

その場の勢いに押された結花は、一歩も動けない。
「待って！　私の話も聞いて！」
「許さない……」
二人の間隔は、少しずつ狭まっていく。もう少しで相手に手が届くという間合いまで来たその時、
ヒュン！
雪見の脇を何かが駆け抜けた。
結花の身に危険が迫ったことを察知した彩が、自らの武器であるＧペンを投げたのだ。しかし、ペンは雪見の脇十数センチをかすめ、奥の方に消えていった。
「……！」
雪見は立ち止まった。
「他に誰かいるの？」
彩は彩で、二人の対峙を目の前にして何もしゃべれずにいた。ほんの数秒、時間が止まったような感じがした。しかし、揮発油のにおいがその場を崩す。
そしてその直後、

ボウッ！
すぐ後方で火の手が上がった。
彩が放ったペンの先は、雪見が河原においていた荷物の一つ、ジッポオイル入り水風船を突き破った。そして流れ出したオイルが、明かり取りの火に引火したのだ。
「……！」
雪見は咄嗟にきびすを返し、火の方へ駆けだした。結花は一瞬たじろいていたが、遅れて後を追う。ようやく荷物のある所まできた雪見は、置いてあったライフルを取り、銃口を結花に向けた。
「来ないで！」
(本当ならこのまま引き金を引いてしまいたい。でも、今このライフルには弾が入っていない。相手を脅すくらいなら……)
雪見はそんな気持ちで、銃口を結花に向けていた。そして銃口を向けたまま、散らばっていた荷物をかき集め終わると、

「いつか、いつか必ず……」
そう口走りつつ、川上に向かって走り出した。
全てが終わった……
足音が聞こえなくなってから、張りつめていた緊張の糸が切れたかのように、結花はその場に座り込んだ。
「結花さん……！」
ようやく状況を理解したのか、彩が結花の元へ駆け寄る。
「あ、彩さん、だめじゃない……じっとしてて、って言ったのに」
「ごめんなさい……」
彩の声も、心なしか震えていた。
「でも、私に出来るのは、これくらいしか……」
「あ……でも、ありがとう」
「こちらこそ……」
「ところで彩さん、その手に持ってる銃、どこで手に入れたの？」
「そこの河原に落ちてました……」
「あっ、そうなんだ……」
結花は、ようやく本来の目的を思い出した。
「ペン、投げちゃったんでしょ？　それ使ったら？」
「あの……私、銃なんて使ったことないんですけど……」
「私もよ。よかった、これで何とかなりそうね」
「結花さん、怪我はないですか？」
「大丈夫。でも、ちょっと緊張したわ」
オイルの炎が少しずつ静まり、辺りはまた暗くなった。

144　人間

終わらない夜は無い筈だ。だけど、この島には本当の朝は来ないのかもしれない。
「……ん」

射し込んでくる眩しい朝陽を目に受け、長瀬祐介は瞼を開く。
「……あれ、寝ちゃってたのか……」
ごしごしと目を擦り、脳が働き出すと、祐介は何かが足りない事に気がついた。
「……天野さん？」
自分を信用して、無防備にも肩を寄せてくれた少女——天野美汐の姿が無いのだ。慌てて荷物を纏めると、祐介は木の洞から飛び出した。
「……おはようございます」
朝陽の中に、彼女はいた。何処かで見たような、そして誰かが何処かで失ってしまったような、優しい笑みを浮かべて。無事を確認し、ほっと胸を撫で下ろす祐介。
「あ、ゴメン。僕も寝ちゃってたみたいで」
それだけの言葉なのに、なんだか照れ臭くて、祐介は思わず視線を逸らした。美汐は一瞬破顔したが、すぐにまたくすっ、と笑う。
「いいんですよ。長瀬さんも疲れていたのでしょう？　それに……一緒に眠る事が出来たと言うのは、お互いがお互いを信頼している証にもなります」
凄く嬉しい事を言ってもらった筈なのだが、「一緒に眠る」と言う台詞に、多少なりとも悶々としたものを感じてしまった自分が恥ずかしくなって、祐介は顔を伏せた。
（……最低だ、僕）
「それじゃあ、行こうか」
「はい」
それぞれ、自分の荷物を背負い込み、出発しようとしたその時。
「ぴこ？」
ポテト（祐介達は「ぴこ」と呼んでいるが）が、何かに気付いた。
緊張が走る。
「ぴこ、誰かいるのかい？」

木の洞に戻り、息を潜めて、祐介は話し掛ける。
「ぴこ、ぴこぴこぴこっ」
「……誰かが、いるんですね」
美汐の顔が僅かに強張る。
(話の通じる相手ならいいけど……僕に、殺せるのか……?)
その言葉を口に出しかけて、祐介は我慢した。それを口にしたが最後、自分の覚悟が全て崩壊してしまいそうだったから。
殺すしかない場合は、躊躇無く、殺す。
そう決めた筈だ。
それを守れないようでは、自分を信用してくれた美汐にも申し訳が立たない。胸のピアノ線を手袋越しに指でなぞる。そしてそれを、戸惑う事無くぎゅっと掴むと祐介は、
「覚悟は出来たかい?」
と、美汐に問うた。
「一度は死んだようなものです……覚悟は出来ていますよ」
デリンジャーを握り締め、美汐は笑った。
「せーの、で行くよ」
洞穴のような形になっているここは防衛戦に適している様に見えるが、反面手榴弾など、範囲が広域に渡る武器には滅法弱い。だから、多少危険を犯してでも、二人は森で戦う事に決めた。
「君も上手く逃げるんだよ」
祐介は優しく、ポテトの頭を撫でた。
息を殺す。
足音が近づいてくる。
(…………いくよ)
(……はい)
「せーのっ!」
それを合図に、飛び出し、散る。
視界の隅には、二人のニンゲンの姿。
男と女。一人ずつだ。
(話し合いは……)

出来るか？　と思考しかけた祐介だったが、それは中断される。というより、無理と悟ったのだ。何故なら、
――プラスチック爆弾が、こっちの方向へ飛んできたからだ。
「くっ！」
紙一重で、それを交わす。
背後から轟音。
祐介は身を隠しつつも、ぞっとした。
もし、あのまま木の洞に居たら……

「くそッ！」
橘敬介は、交渉のチャンスを自ら潰してしまった事に歯噛みした。迂闊だった。突然飛び出して来た二つの人影に動転して、思わずプラスチック爆弾を投げてしまうとは……自分の後ろでは、声も出せずに怯える一人の少女が居る。
仕方ない、か――
敬介は茂みの中に身を隠し、少女――桜井あさひの方に向き直る。そして、強く見つめて、ただ一言言った。
「君は逃げるんだ。ここは僕が食い止める」
「でも……でも……」
あさひはただ、うろたえるばかりだ。敬介は堪え切れず、声を張り上げた。
「死にたいのかッ！　こうしている間にも敵は近づいてきてるんだ！　早く行けッ！」
「ひッ……！」
あさひが怯えた表情で敬介を仰ぎ見る。敬介はもう、あさひとは視線を合わせない。だが、最後に、今度は優しい口調で言った。
「……さぁ、行くんだ。それと、もし神尾晴子って人物に会ったら、こう伝えて欲しい。『すまなかった』って」
その言葉を聞いて、あさひはよろよろと、歩き出す。

「そうだ……早く逃げろよ」
敬介の頭上を、弾丸が掠めていった。
（これで、あのあさひって子を巻き込んだ責任は取れたかな…？　いや、結局彼女をまた一人にしてしまった……全然ダメだな……。全く、どうして僕はこうも……）
敬介は薄く自嘲気味の笑いを浮かべると、バッグからもうひとつプラスチック爆弾を取り出して、投げた。
その瞬間。
目の前が、カッ、と明るくなった。
美汐の撃ったデリンジャーの弾丸が、プラスチック爆弾に当たったのだ。膨大な熱量を浴び、最後の一言を発する事も出来ず、敬介は絶命した。
死体は、すでに原型を留めてはいない。今となっては誰だったかも分からないモノを見つめて、美汐が呟く。
「……私が、殺したん……ですね」
「……仕方ないさ……殺さなきゃ……僕らが……」
祐介は、その言葉だけ押し出して、天を仰いだ。
「……所詮、ヒトなんて、弱い生き物なんですね」
美汐の呟きは、誰に向けられたものだったか。
「……そうさ……だから僕らは、殺すんだ」
祐介も、誰にともなく言った。

五十七番　橘敬介　死亡
【残り74人】

145　第三回定時発表

おはよう諸君、元気に殺し合ってるかな？
この時間までの死者を発表するぞ。
七番　　猪名川由宇
二十六番　河島はるか

三十二番　霧島聖
四十九番　新城沙織
五十四番　高倉みどり
五十七番　橘敬介
五十九番　月島拓也
七十二番　氷上シュン

前回より増えたとはいえ、たった七人だ。
こんなペースじゃ企画側の予定が狂うんだ。
核ミサイルで島ごと焼き払うのも、爆弾を爆発させるのも簡単だが、それでは俺様が面白くないんだなぁ。俺様はおまえらが殺し合う姿をみて楽しみたいんだ。
俺様は我慢強い、だが忍耐も今日限りだ。もし明日もこんな数の死者なら文字通りの爆弾発表をせざるをえない。だが慈悲深い俺様はそんなことは言いたくないんだ、わかるなハハハハ。
では諸君。俺様にそんなことを言わせなくても済むよう頑張って殺しあってくれたまえ。ハハハハ

146　紹介

お待たせしてごめんなさいね。秋子はそう言って、外で待たせていた人を喫茶店に招き入れる。
「えっと、急いでいたものでお名前も聞かずに失礼いたしました。私は水瀬秋子と申します。この子は私の子で名雪と言います」
そういって、秋子に抱きかかえられている名雪が会釈をする。
「あっちのちっちゃな子がみちるちゃんで、もうひとりの物静かな子が姫川琴音さん」
秋子に紹介されてみちると琴音は頭を下げる。
「うにょ。みちるだよ〜〜〜」
「はじめまして。姫川といいます」
弥生はこの殺伐とした状況のなかでの、あまりにアットホームさに面食らってしまい――

「はじめまして。篠塚弥生です」
そう答えるのが精一杯だった。
「それでは自己紹介も済んだ事ですし、名雪達は一度寝ておきなさい。明日もあるんだから」
「くーーーー」
「うにゅ。みちるねむぃ——」
既に寝入っている名雪と寝る場所を探しているみちるに、喫茶店の奥にしまってあった毛布を出し二人を寝かせ付ける
「琴音さんはどうしますか？」
秋子は、いまだ寝ようとしないでいる琴音に問いかける。
「私も弥生さんのお話をお聞かせ頂けませんか？」
「弥生さん——よろしいですか？」
秋子は左手を頬に当て、弥生に微笑みかける。弥生は、秋子に探している人物——森川由綺の情報を聞き出そうとしはじめた。
心の思いを悟られないようにして————

147　高槻の電話　3

ええ、やはり展開が遅いと
……まあ、そうでしょうね。
え、ヤケに余裕じゃないかって？
まあ、いくつかのカードも切ってありますから。
あいつらは狡猾ですよ。
未だに皮を被った奴らもいますし。
まあ、そこら辺はどうでもいいんですよ。
堪えられますかねぇ、彼等は。
……そりゃあもちろん精神ですよ。
あるものは肉親、あるものは親友、
そして信頼できる志を持った仲間。
いつどこからでもやってくる、
恐怖、裏切り、別離、殺害……
人間なんてそんなもんですよ。
いつしか残り少ないエサを奪い合う……

――狂気はね……伝染するんですよ。

148　手のひらの円舞曲

三回目の放送後、海底へ潜航中の潜水艦「ＥＬＰＯＤ」艦内。モニター越しに、結界を壊そうとする面々を見ながら。

あの結界を壊そうとしているのか、無駄なあがきを……結界の核である刀はミサイルで島が消えても無くならんよ。

その刀をもって切った傷はふさがることなく、前回それを持った者は全体の四割方を殺して勝者となったが、そいつは刀に体をボロボロにされて死んださ。何故、刀から悲しみとかいう思念が出るのかは解からずじまいだったがな。

ピーピー

「どうした？」

ケッカイホウメンへ　サラニ１メイ　セッキンシテイマス

「誰だ？」

四十三番サトムラアカネ　デス

ふっ、面白くなりそうだな。

149　Double Cast

太田香奈子と松原葵の激突。時間はそんなところまで遡る。

「……」

（人が――歩いてるね）

月島瑠璃子（六十番）が視線を向けた先に、一人夢遊病者のようにさまよう少女がいた。

（確か……美凪ちゃんだったっけな？）

遠野美凪（六十二番）、あれからどれだけたったのか分からない。

傷口、けっこう痛いんだ。

舐めてくれたら、痛くなくなるかも。
ん
……痛くなくなってきたよ
河島、さん？

ほんのわずかな間行動を共にした人。その人はまるで眠っているようだった。
（私もまた、夢を見ているんですか？　まだ覚めない……夢）
景色が上下に揺れる。夢、美凪の夢。どうしようもなく悲しい夢。
（みちる……）
あどけない少女の顔が脳裏に浮かぶ。その笑い声が彼女の胸に深く突きささる。
瑠璃子は物陰（といってもあたりは雑木林だったので、身を隠すには困らなかった）から彼女を観察しつづけた。

今、瑠璃子の手元には凶器である鋏はない。生きていれば、恐らく新城沙織と太田香奈子が持っているはずだ。だが暫くして、躊躇せずに瑠璃子が歩を進める。
（次の…ターゲットは…あのコだね）
瑠璃子の口元だけが笑った。

「あの……」
少女の背後から声。
「……」
返事はない。だがややあってゆっくりと振り向く。
「今一人だよね……？　よかったら、私とお話しないかな？」
「そう…大変だったんだね」
瑠璃子が美凪の背中をそっと撫でて励ます。瑠璃子が刀に布を通す。丹念に刀身に刷り込むように走らせる。

「刀……綺麗だよね」
「刀フェチ…？」
美凪らしい台詞。だが、彼女を知っているものが見たら、それはただの違和感としか感じられないほどくぐもった低い声。
「うーん、違うと思うよ。多分、この光が好きなんだよ」
「光……」
鈍い光が強さを増す。瑠璃子の人形のような瞳に光沢が映し出される。
――鋏はしょせん付属品に過ぎない。最初はただの鋏だったんだから。この毒の染み込んだ布こそが瑠璃子に支給された本当の武器であった。この布に毒がしこまれてるなんて誰が想像できようか。警戒心が強い人には怪しまれるかもしれないが。すでに殺戮者として動いている人には怪しまれるどころか有無を言わせず殺されてしまうかもしれない。
だから、瑠璃子にとってもまた他人とのコミュニケーションは命をさらす危険な賭け。
「たぶん……私は人を探してるんだと思います」
刀を手に、瑠璃子は耳を傾ける。
「危険だよ――」
刀から視線を外し、瑠璃子が驚いたように口をはさむ。
「ダメだよ。そんな、命を粗末にするような……」
「ただ……みちるに会いたい……」
瑠璃子の声はかき消された。小さい、だけど凛とした意思のこもる声。そこだけ、美凪が美凪らしく言えた久しぶりの言葉。
「……みち……る？」
「……知ってるんですか？」
「うん……」
瑠璃子の反応に美凪の感情がさらにこもった。
瑠璃子もまたゲームの参加者。今の詳しい状況は何も分からない。だが一つの例外。それだけに関し

ては瑠璃子の耳に常に入ってくる。それだけに関してはその人の一挙一動、すべてを手に取るように。
(一緒に行動してた罪だね……ここでは、強いものに巻かれては生きてはいけないんだよ)

――水瀬　秋子。
頭の中でその言葉を反芻させる。
(その人は、笑って人を殺せるんだよ……恐いんだ、本当に……)
瑠璃子さんの悲しそうな、そして恐怖した声。
(私も本当は行きたい。だけど、香奈子ちゃんや沙織ちゃん、友達が帰ってくるから、私には行けない……)
その気持ちだけで充分。待っててくれる人。それが力になるから。
(今はなにもできないけど……このあなたの刀。無事に帰って来れるようにおまじない)
瑠璃子さんが心配そうに、だけど強くそう言ってくれた。
(ちょっと恐怖……でも大丈夫)
少し朦朧とする意識を震わせるように小さくガッツポーズ。瑠璃子さんの思いがこもった刀と私の勇気。そして見てて下さいね、河島さん――
まっててね、みちる。
その人を倒して、一緒に帰ろう？

美凪の靴下に赤い染みが広がっていた。
ふくらはぎのあたりの小さな刀傷。
美凪が気付かないほど薄く、浅い傷だった。

150　いんたーみっしょん

監視役側の兵を屠った後、晴香たちは再び森の中に身を隠した。
「……結局、これだけ苦労したのに。何の手がかりも無し……ね」

自嘲ともとれる言葉を吐く。
……何が『不可視の力』よ。肝心な時にまるで役に立たない。高槻の居場所はつかめないまま。そして私達を襲った少年も取り逃がした……。
……そういえば。
「智子。あなた、あの男と知り合いなの？」
「……男って、だれや……」
膝を抱え、うずくまったままの智子。
「あなたを拳銃で襲った奴よ。あなたを委員長って呼んでた」
「……っつ！」
智子、そしてあかりが表情を曇らす。
「……ああ、あいつね。あいつは昔、神戸におった頃のクラスメイトなんや」
「そう。元クラスメイトに狙われるなんて、智子って、よっぽどのワルだったんだ」
「んなわけないやろ」
つっこむ仕草には、いつもの覇気はなかった。そんな智子をじっとみつめているあかり。その視線に智子も気づき、瞬間、目が合ったが……つい、とそらしてしまった。
……ダメや。いまは神岸さんの顔なんてよう見れん。
「……あのー。皆さん無視しないでくださいー」
あら、いたんだ。ってな風で二人が振り向く。
「ねえ、こいつ、誰？」
窮地を救われていながらひどい言い草だ。
「ああ。この子、うちらのクラスのメイドロボなんや」
「メイドロボ……これが？」
「はいっ。はじめまして、わたくし、マルチと申します。今後とも、よろしくお願いします」
……メイドロボっていうのは、もっと怜悧で有能そうな外見をしているものと思ってたけど……
今一つ納得のいかない晴香。
「………」

むにーっと、ほっぺたを引っ張ってみる。
「はうー、いらいれすー」
今度は、スカートを『ぴらっ』ってな感じでめくってみる。
「そこはダメですぅ」
ほっぺたを赤く染めたりしながら恥じらったりしている。
「……智子、これって役に立つの？」
……これ、なんて言うのはひどいですー――とかなんとか言っているのは無視する。
「うーん。保証はできへんなぁ」
……あうーっ――という感じでうなだれる。が、これも無視。
「あんた、何か役に立ちそうな特技はないの？」
ちょっと頭に「?」を浮かべながら考えている。
数瞬して、「ああっ」てな感じてポンッと手をたたく。
「じつはわたし、すごい力をもってるんです」
……こんな奴でもロボットの端くれだ。最先端の科学兵器がつまっていてもおかしくはない。
「……見せてくれる？」
つい、期待に胸を膨らませてしまう晴香。
「はい。これはですね、犬さん召喚っていう魔術なんです」
……召喚？　犬？
今、なにかとても非科学的な言葉を聞いた気がする。
「それでは、披露します」
えっへん、とでもいうかのように（ぺったんこな）胸をそらし、スカートのポケットの中から、ごそごそと何やら取り出した。
「……ただの紙と鉛筆やないか」
ノンノンノンと、指をふってみせた後、（ってゆうか、そんな仕種どこで覚えたんや……）おもむろに地べたに座り込み、なにやら紙に書き始めた。
「うらぁ、とりゃぁ」

……なにやら気合いを入れる必要があるらしい。
「……うまく書けましたー」
そう言うなり、すっくと立ちあがった。晴香に手のひらを見せる。
「……何？」
「十円玉貸してもらえませんか？」
どげしっ！
「それはコックリさんやないかー！」
晴香よりも先に、智子のするどいツッコミ（&張り手）がとんだ。
「あうーひどいですー」
頭をさすりながら、智子に非難の涙目を向ける。
「ここからがいいところなんですよぅ」
しょうがないので、晴香が十円玉を渡す。その十円玉をポケットに入れ、両手を合わせてこう唱えた。
「なうまくさんまん、ばさらだんかん」
ぱこーん！
「流儀が違うわ！」
意外と濃ゆい知識を持っていた晴香が張り倒す。
……だめだ、役立たずだ、こりゃ。
ってな感じで晴香と智子は目を合わせ、「はぁーっ」とため息をつく。
「ふふふっ。ふふふふふっ」
笑い声。
見ると、あかりが涙を流しながら笑っていた。ツボにはまったのだろう。
「あははっ、おかしい。おなかが痛いよ。あははっ」
再び見つめあい、智子がつぶやく。
「……お姫様を笑わせたんや。こりゃ、連れてくしかないな」
「そうね」
……はぁ、と二人もう一度ため息をついた。

151　エンカウント

「こんな島に、なんでこんな施設があるのかしら」
桑嶋高子（三十八番）はひとりごちた。
歩いているうちに、気がつくとキャンプ場のような施設に辿り着いていた。
横目に無人のテニスコートを見ながら、高子はふぅっと肩を落とした。
（蝉丸さん、それに月代ちゃん、無事かしら……夕霧ちゃん、本当に死んじゃったの……？）
快晴。
冴え渡った空から降ってくる爽やかな日差しも、高子にはまるで自分をせせら笑っているように思えた。
（ダメね、こんなことじゃ。さぁ、シャキッとして、皆さんを探さないと……）
気合を入れるため、高子は手にした木刀を強く地面に突き立てた。
武器として支給されたものだったが、高子はこれを杖として以外に使うつもりはなかった。
（誰が考えたのかわからないけど、こんなのって絶対間違ってると思うわ……私に、乗り気になってる人たちを説得する力でもあればいいんだけど）
そんなことを考えながらテニスコートの角を曲がると、炊事施設のある、やや広い場所に出た。
そして、そこには人がいた。
（あら、何かあったみたいね……でも、お邪魔……なのかしら）
高子から見えたのは三人。背中から血を流し、うつ伏せに倒れている少年。
そして、地面に座り込んだ男女はまさに熱烈に口付けを交わしている最中だった。
（覗くのも悪趣味だし、戻りましょうか。……それにしても、妬けるわね）
高子はこの状況でそんな冗談が出てくる自分をお

かしく思い、クスクスと笑う。
が、それがいけなかった。
視線を戻した時、笑い声に気がついたのだろうか、女の方が驚きの視線で高子を見ていた。
「誰……誰なのッ!?」

152 (無題)

空気のような存在――
咄嗟に形容を求められたら、そうとしか言えない人物だった。
「にゃあ、お人形さんみたいな人ですね」
千紗ちゃんが、悪意無しに言う。
「初めまして、だね」
その少女は、その瑠璃色の瞳をこちらに向けて微笑んだ。
「月島瑠璃子っていうの」
唐突な自己紹介に、私は慌てて答えた。
「あ、私は雛山理緒って言います」
「私は塚本千紗と申しますです」
少女は、静かで乱れの無い空気を漂わせていた。
そう、能動的な意志がゼロとでもいうか――何か、ロボットのような感触だ。
「理緒ちゃんに、千紗ちゃんだね」
言葉にも、感情が無い。いや、無いと言うより、見えない。私は、何ともいえず嫌な感じがした。
「じゃ、私たち、行くね」
そう言って、千紗ちゃんの手を引いて、さっさと瑠璃子さんの横を通り過ぎた。
「にゃ、理緒ちゃん?」
千紗ちゃんが驚いたような声をあげるが、関係ない。
「……理緒ちゃん、殺した」
「!?」
私は、胸を撃ち抜かれた。なぜ、それを――
「理緒ちゃん、人を殺したね。心が、返り血で濡れ

てる」
そう言って、くすくす笑う。
「にゃ、にゃあ……理緒ちゃん？」
千紗ちゃんが怯えたように、私の手から離れる。
私は、殺人の事実を千紗ちゃんに伝えていない。恐らく千紗ちゃんは、私が隠していたと受け取ったのだろう。怯えた目線が、私を刺す。
「ち、千紗の事も、殺すつもりだったですか……？」
「そ、そんな訳――」
千紗ちゃんが、一歩ずつ遠ざかっていく。私の視線に耐えかねたのか、そっと瑠璃子さんの方を向いた。
「……！」
私は、心底ぞっとした。
瑠璃子さんの目が、恐ろしいほど安らぎに満ちていたからだ。安堵を引きずりだす、母性を超越した何かが滲み出ていた。見ているだけで、全てを委ねたくなるほどに。
「にゃ、にゃあ、瑠璃子さん……」
千紗ちゃんが、すがるような声を出して瑠璃子さんにすり寄る。
「いい子、だね」
そう言って、千紗ちゃんの頭をなでる。私はどうする事もできず、ただ見ていた。
が――
「にゃ……！」
千紗ちゃんが急に悲鳴をあげ、くずおれた。
「千紗ちゃん!?」
「来ない方がいいよ」
瑠璃子が、冷静な口調で理緒を制した。手に握られた、小さなコンパス。その針の先が、わずかに赤く染まっていた。
「遅効性の猛毒だからね。変に刺激したり介抱したりすると、却って死ぬのが早くなっちゃう」
「そ、そのコンパスで刺したの……？　毒を塗って

「……」
「そうだよ。お薬があるんだけどね」
「早く千紗ちゃんを助けてあげてッ！」
理緒が、激昂して叫んだ。
「条件、あるけどね。いい？」
瑠璃子が、くすくす笑った。
「人を、殺して。誰でもいいよ」
「ふざけないでッ！」
「ふざけてなんかないよ」
理緒は、唇を噛んで怒りに震えた。そして、ふと感情を整えるように息を吐いた。
少しでも優位に立つように、薄笑いを浮かべて、
「も、もし私が千紗ちゃんを見捨てて、あなたを殺すと言ったらどうする？」
瑠璃子は、少しも動じなかった。そっと膝をついて、千紗に話しかける。
「千紗ちゃん。理緒ちゃんは、あなたの事を見捨てるって」
千紗の頭をそっと抱いて、顔を理緒の方へ向ける。
「り、理緒ちゃん……千紗なら構いません。死にたくないけど、理緒ちゃんにそんな事させられませんです。私の事なんか放っておいて、に、逃げて下さい……」
「……！」
理緒の中で、相反する感情が同時に沸騰する。
健気すぎる千紗。非道きわまりない瑠璃子。両者に対する感情が、猛烈に渦巻いた。
「や、やればいいんでしょ……」
理緒が、うなだれた姿勢から瑠璃子をにらみつけて呻いた。
「絶対に千紗ちゃんを助けてよ！　殺してくるから！」
倫理観だとか、そんなものは消えていた。千紗の命と引き替えに殺される人間の事など、もはや念頭に無い。
勢い良く反転し、理緒は猛然と走り出した。

「だ、ダメです！　理緒ちゃん――」
そんな声が聞こえたが、理緒は止まらなかった。

153　失楽園

由綺は幸せだった。
こうして今、冬弥の体温を感じていられることがたまらなく幸せだった。
彼が側にいてくれれば、彼が包んでいてくれれば、彼を感じていられれば、それだけで他に何も必要なかった。
だから、とうとう出会えた冬弥の唇を積極的に求めたのは、ごく自然なことだった。そして、冬弥もそれに応えてくれた。
それ故に、ふと目を開けた時、物陰に隠れるようにして立っていた女を発見すると、激しい怒りが込み上げてきた。
二人の時間を邪魔されたことに対する怒り。
極限状態における、恋人との甘すぎるひとときは、由綺の中の何かを確実に変えていた。
――身体が、熱い。
「誰……誰なのッ⁉」
由綺が突然発した声に驚き、冬弥も由綺の視線の先を振り返る。そして、そこに居たのが女性だと判ると、先程まで二人で耽っていた行為を思い出して顔を赤くした。
「す、すいません……お邪魔するつもりはなかったのですが」
高子がおずおずと、申し訳なさそうに姿を現した。だがこの時、高子は自分がどういういでたちをしているのかをすっかり失念していた。
フェンスの陰に隠れていた半身が現れ、由綺の位置からも右手に握られていた木刀が見えた。
「……！」
由綺は素早くニードルガンの照準を高子に合わせる。

「よ、寄らないで！　冬弥くんに近づかないで……！」
由綺は目の前が真っ白になった。高子が木刀を振りかざし、冬弥に襲い掛かるヴィジョンが頭の中を駆け巡る。
ようやく自分の失敗に気づいた高子は、慌てて木刀を投げ捨てた。
「ご、ごめんなさい！　お、驚かそうと思ったわけではありませんので……あの、お邪魔ならすぐに退散しますので……もしよかったらお話、しませんか？」
「構いませんよ。そこ、座りましょうか。ほら、由綺」
冬弥は最後の言葉に続け、ありがと、と由綺の耳に囁いて、それから二人を側のベンチに促した。
確かに由綺の反応は行き過ぎだったが、それも冬弥を心配してのことだ。特に、こういう状況では無理もないことかもしれない。
（前から思ってたことだけど、由綺は俺の彼女にはもったいないくらいの女性だよな……）
冬弥は苦笑すると、まだ強張った表情で武器を向けたままの由綺にウインクしてみせる。
由綺はハッとしたように銃を下ろすと、うんっ、と頷き、高子に詫びるために一歩踏み出した。
その時、冬弥の横を通り過ぎようとしている高子の手に、何かキラリと光るものが見えた、気がした。
実際、それは気のせいでしかなかったのだが、一度入りかけた由綺のスイッチを入れ直すにはそれで十分だった。
躊躇なくニードルガンを構え直し、トリガーを引く。
ジャッ！
高圧力で放たれた細かい何万本もの針が高子の上半身左半分を吹き飛ばし、高子は由綺の方に視線を動かして——
——倒れた。

「ゆ……き……？」
「私ね」
由綺は頬を紅潮させながら、言った。
「私、強くなるよ。誰にも負けないくらい強引に、わがままに、乱暴に、冬弥くんを護るよ」
「由綺……由綺ッ！」
無邪気に微笑んで、歌うように言う由綺の肩を掴んで、揺さぶる。
由綺は待ち構えていたように冬弥の背にしがみつき、抱きしめた。
「冬弥くんが何て言ったって、私、やっちゃうんだから……」
楽園の向こう側と、こちら側と。
ブラウン管を隔てた世界よりもさらに遠い場所に、由綺はいた。

三十八番　桑嶋高子　死亡
【残り73人】

154　戦闘準備

「……あった」
浩之は住宅地の一角にある資材置き場から武器になる物を見つけだした。
ダイナマイトが二十本。本当は銃器の類が欲しいところだったがここに来るまでの間に銃をもった者と遭遇することはなかった（代わりに雅史の死体からドラッグを入手していた）。
（誰から殺すべきか）
そう浩之は考えて何人かの知り合いの顔を脳裏に浮かべた。
（委員長は銃を持っていたな。だがあの知らない女と二人掛かりでこられると厄介だ。さっきの放送でもあかりの名前はなかった。今の武器で抵抗なく殺れるのはあかりかあるいは、理緒ちゃんかだな）
浩之は殺し合いということの状況下で誰をどう切り

捨てるかを単純かつ冷静に分析していた。
　普段の俺が今の俺を見たらなんと言うだろうか？
　そんなことを考えながら浩之は他の工具箱を漁っていた。
「これ、使えるな」
　そう言って浩之は電動釘打ち器と大量の五寸釘を取り出した。
　使えそうなのはこれぐらいか。
　そう思って資材置き場を出ようとした浩之は人の来る気配を感じて再び身を隠した。其処にやってきたのは標的の一人、雛山理緒だった。
　銃を手に誰かをさがすようなそぶりをしている。
　好機とみた浩之は理緒の頭に向けて死角から電動釘打ち器を構えそして発射した。

155　おすそわけ

「はい、これ。おじさんにもあげる」
　そう言って差し出されたあゆの右手の上の物体を見て、御堂は眉を寄せた。
「ああ？　なんなんだ、コイツは」
　御堂は、あゆの手のひらの上に鎮座する魚型の物体を訝しげに睨み付けた。魚型の物体は、そのつぶらな瞳で御堂を見つめ返している。
「たいやきだよっ。ずっとポケットに入れたまんまだったから、冷たくなっちゃったけど……」
　にっこり笑って、御堂に物体を手渡す。
「朝ご飯、いっしょに食べよ」
「……食いモン……なのか？」
「しっぽまでアンコがいっぱいだよ」
　それを聞いた途端、御堂は手の中の物体を脇に放り投げた。
「わっ、わっ、捨てちゃうダメ～」
　慌ててあゆが拾い上げるが、たいやきの右半身に砂がついてしまっていた。
「うぐぅ……食べ物を粗末にしちゃダメだよ……」

表情を曇らせながらも、懸命に砂のついた面を削り取るあゆ。
「俺は甘いモンは嫌いなんだよ」
御堂は、そんなあゆにはまるで頓着する様子もなく、面倒くさそうに仰向けに寝転がった。
やがて、あゆも作業を終えると、
「はい。今度はちゃんと食べてね」
と、アンバランスな面持ちになったたいやきを紙袋の上に置いて、立ち上がった。そのまま立ち去っていくあゆを、片目で追っていた御堂は、少し離れたところから、
「はい、キミにもあげるね」
「にゃ～」
というやり取りが聞こえてくるのを確認した後、上体を起こした。
「……よくよく考えてみりゃあ、コレでも一応、非常食だしな」
戦場では、食えるときに食っておくのが鉄則だ。
非常時に食い物の好き嫌いを語る兵士なんざ、家に帰ってママのオッパイでも吸ってる方がお似合いだ。
不細工な魚型の物体を眺めていた御堂の目前に、ぽん、とあゆの笑顔が浮かび上がった。慌てて首を振る。
「けっ……馬鹿馬鹿しい。なんだってあんなガキなんか……いいか、俺はあんなクソガキのためにコイツを食うんじゃねえんだ。ただ……ただ、プロとして必要時の栄養価の摂取を行うだけだからな」
誰かに言い訳するように独り呟いた後、魚型物体を口に放り込み、ゆっくりと咀嚼し――
「おっ、うめえ」
思わず本音が出た。

156　美凪とみちる

歩いて、歩いて、歩いた。
ただ、みちると帰りたかった。

国崎さんも、一緒に。
また、三人で、変わらぬ時を過ごしたかった。
体中の力が抜ける。
もう、歩けない。
瑠璃子さんと別れてから、体の調子が悪かった。
なんだろ、どうしちゃったんだろ。
——倒れる
目が見えない。
もう朝のはずなのに、まっくら。
——死んじゃうのかな。
みちると出会った日を、思い出す。
みちると過ごした日々を思い出す。
妹と同じ名前を持った女の子。
私の救い。私の拠り所。私の夢のかけら。
——私の、おともだち。
また、シャボン玉飛ばしたかったな。
くるくる、くるくる。
「わぷっ」

ふふ、声が聞こえるよ。
「みちる——」

「あっ……」
半壊している喫茶店。
名雪と琴音と喋っていたみちるは、突然悲しい声を上げた。
「みちるさん、どうしたんですか？」
不思議に思い、琴音が尋ねる。
「うに……もう、行かなきゃ」
「みちるちゃん？　どこへ行くの？」
カウンターの秋子も、みちるの様子がおかしいことに気付いた。
「みちるは美凪の夢なんだよ。だから、美凪がいなくなったら、みちるも消えるの。悲しいけど、残念だけど」
「みちるちゃん、どういう意味？」
秋子の問いかけに、みちるは答えない。

「国崎往人に会ったら、ありがとうって。美凪もみちるも、楽しかったたって。おねえちゃん達も、ありがとう。ぽちをよろしくね……ばいばい」
「みちるちゃん！」
名雪が叫ぶ。その声は届かない。
「消え……た……？」
後には、ぽちと名付けられた白ヘビが残るだけだった。

ありがとう、美凪
どうしたの？　みちる
美凪が美凪だったから、みちるはみちるだった
私もよ
みちる、楽しかったよ
うん
美凪も、楽しかったよね？
……うん
にゃはは、よかった

国崎さんにお礼を言わないとね
にゃはは、そうだね

――ありがとう

六十二番　遠野美凪　死亡
八十七番　みちる　消失
【残り71人】

157　殺戮の序章

バスバスッ！　という音と共に背中に強い痛みを感じた理緒はもんどり打って倒れた。
「う……な、何……」
何が起こったの？　と言葉にする前に再びバスバスッと言う音と共に五寸釘が飛んでくる。何とか飛んできた釘を避けた理緒は体勢を立て直し釘の飛んできた方向に向けて大口径マグナムを発砲した。し

かし、浩之は建築資材を盾に理緒の背後に回り込んだあとであった。そして再び電動釘打ち器のトリガーを引く。
バスッ！
「うあっ！」
再び背中に激しい痛みが走り理緒はその場にしゃがみ込む。
早く誰かを殺して戻らないと千紗ちゃんが死んでしまうのに。こんな所で死ねないのに。その気持ちが焦りを生み、その焦りがマグナムの照準を狂わせる。
バスバスバスッ
「ううあああぁっ！！」
非情にも飛んできた三本の五寸釘は側面から理緒の右腕を貫いた。
「あ、あ、あ、ああああ……」
右腕をみた理緒は言葉がなくなった。五寸釘が刺さった時に動脈を切断したのだろう傷口から大量の鮮血が吹き出している。
脈打つ度にビューッと吹き出す血を目にした理緒は完全にパニック状態になって五寸釘を引き抜こうとした。もはやマグナムは手放していた。
「はっ、は、は、早く抜かないと、し、し、死んじゃう、千紗ちゃんも私もしんじゃうよおお!!」
「ちさちゃん？　何言ってるんだ？」
その様子を見て笑うでもなく浩之は背後から心臓めがけて釘を四発発射した。
バスバスバスバスッ！！！
「あがぁっ！！！」
四本の五寸釘が次々と心臓に突き刺さったその直後、理緒は口から大量の鮮血を吐き出しうつぶせに地面に倒れた。
「悪く思うなよ。こっちは見つけたらすぐに殺すつもりだったんだ」
理緒の大口径マグナムと予備の弾丸を回収しながら浩之は理緒の死体にむかってつぶやいたが、そこ

に死者を悼むあたたかみはなかった。
建築資材置き場のコンテナに理緒の死体を放り込むと浩之は次の獲物を求めてその場を後にした。殺戮はまだ始まりにすぎない。

七十三番　雛山理緒　死亡
【残り70人】

158　この孤島、脱出不可能

もうすぐ夜が明ける……
「うーん、だ〜めだぁ、ここもコンクリで固定されちゃってるよ……」
芳賀玲子が地面に身体を擦りつけながらぼやく。
「みたいですね」
誰も通らないような細い路地。アスファルト舗装された地面のマンホールを見つけては、それを開封しようと奔走していた。
柏木楓があきらめたように息を吐き出す。
「別の方法を考えたほうがよさそうですね」
「うーん、地下道からなら脱出経路が確保できると思ったんだけどなぁ〜」
「仕方ないです。目の付け所は悪くないと思いますし」
「え、そぉ？　照れるわよ、にゃはは」
得意げに玲子。
「伊達に滋養強壮漫画は読んでないわよ☆」
(どんなマンガですか…)
「そうだ、漫画といえば……本よ！　楓ちゃん、さっきの本、見せてくれない？」
「本……武器支給のですか？　……民明書房ですよ？」
「いや、ほら、もしかしたらどこかにアンダーラインとか引っ張られてたり……」
「……？」
「あー、だからぁ、何の意味も無いような本にあえ

て何かのヒントが隠されてたりするかもしれないでしょ？　もしかしたらあいつらがわざと何かを仕込んでるかもしれないし！」
「なるほど、そういうことなら……」
ガサゴソ……かばんの中身を漁りはじめる。
「ありました」
楓からその本を受け取ると、適当にページを開いて目を通す。
「暗くて読みにくいわ……えーと、なになに……？
……撲針具……」
玲子は真剣に内容と睨めっこしはじめる。
（……私、忘れられてませんか？）
朝日が昇り始めるまで、玲子は本を読むことをやめることはなかった。

159　君の知らない出来事

「くすくす……ダメだったね」
既に肉片となった理緒の傍らで、瑠璃子は微笑んだ。その微笑みは、どこまでも残酷に穏やかで。このゲームを司る、滅びの聖女のようだった。
もしくは、残酷な天使——
「もっとも、手後れだったんだけどね。千紗ちゃん、殺しちゃったから」
くすくす……と笑う。
それから理緒の鞄を漁り、あるものを取り出した。
「沙織ちゃんのと合わせて、これでＣＤ二枚だね。残る二枚、誰が持ってるんだろう」
もう一度くすくすと笑い、歩いてゆく。
死者はすでに物でしかなく、手向けなぞ必要はなかった。

五十八番　塚本千紗　死亡
【残り69人】

160　幕間

小鳥のさえずる声がする。
坂神蝉丸は軽く息をついて立ち止まった。
朝が来てしまったのだ。
昨晩までに、かなりの距離をきよみや月代を探して歩いていた。何度か近くに人や動物の気配を感じはしたが、見知ったものの気配には出会えなかった。
できれば、まだ感覚の鋭い夜のうちに見つけたかったのだが――
先刻の放送は、高子の名を告げていた。
――間に合わなかったのだ。
「…………」
無念の思いが浮かぶ。
聡明で優しい娘だったのだが……
月代と、きよみの顔を思い出す。
次が彼女達でないという保証はどこにもないのだ。
誰が夕霧や高子を殺したかは分からないが、自らが少しでも生き残るためならば、か弱い婦女子の殺害すら辞さぬ者がこの島には確実にいる。さしたる戦闘能力を持たない月代やきよみ達の命は、まさに風前の灯火だといえた。
夕霧に続き、高子までもが殺されたことで、月代などは悲嘆の余り平常心を失うかもしれない。そんなことになれば、ますます危険な者に見つかる可能性が増えてしまう。
急がねばならない。
本来の蝉丸なら月代達を見つけるのもさして難しくはなかっただろう。しかし、この島に来てから力の大半を封じられているうえに、只でさえ彼の血に潜む仙命樹どもは日の光を嫌う。夜の間はまだ多少感じられたその息吹も、日が昇った今となっては殆ど消えてしまっていた。このまま手をこまねいていても、衰えた今の感覚では彼女達を見つけられまい。

今までよりもっと広い範囲を探す必要がある。
昨夜、銃声や多くの気配を感じた方向に向かってみることにした。危険ではあるが、元々強化兵となる以前より影花藤幻流の剣士として心眼の修行を積んできた身である。異能を抜きにしてなお、参加者の大多数より遥かに優れた能力と経験を蝉丸は有していた。油断さえしなければ大丈夫のはずだ。
（……!?）
視界にかすかに人影のようなものが写った。地面に倒れている。周囲に注意しながら、慎重に近づく。
——倒れていたのはまだ年端もいかぬ娘だった。
月代よりはいくらか年上だろうか。
特に外傷は見あたらないが、これは——
（……事切れているな……）
————。
既に躯は冷たくなり始めていた。見ると、ふくらはぎのあたりに小さな傷口がある。傷口の周囲が変色しているところをみると……。
「毒か……」
改めて静かな怒りが、蝉丸の中で燃え上がっていく。涙の後がかすかに残る娘の瞳を閉じ、近くの木陰に横たえさせる。残念だが、今の状況では弔っている時間はない。
「……すまん、許せ」
戦場で失った戦友達のことを思い出した。死そのものは今まで何度となく見てきた光景だが、このような若い娘となると、何か苦いものを感じる。
そしてこの『げーむ』に参加させられている者の多くは、同じような若き少女なのだ。
蝉丸は娘が大事そうに抱えていた刀を手に取った。慎重に鞘から引き抜く。愛刀である跋扈の剣ほどではないにしろ、かなりの業物だ。得物としては非常に心強い。——だが。
「……む？」
——普通の人間には分からぬ程の、かすかな異臭。

蝉丸は顔をしかめた。
光岡との最後の戦いが脳裏をよぎったのだ。
――だが、きよみを助けるためにも、力は必要だ。殺したくない相手ならば峰打ちですますという手もある。雑念を振り払って刀を背負い、蝉丸は進み始めた。
その先に待っているものを、まだ彼は知らない。

161 喫茶店で

「森川由綺という少女を捜しています。あの子は普通の娘なんです。だから誰かが守ってあげないと――」
弥生は目の前にいる女性――水瀬秋子を仲間にしようと必死に哀願していた。
「そう言われても――私はここから動く意志は残念ながら無いのよ」
秋子にしては珍しく頼まれごとに了承と即答しなかった。
「私は、見ず知らずのあなたよりも、ここにいる娘達のほうが大切なんです。これが、普通に生活している時だったら、いくらでも協力するのですけど。けれど、今、私達がいるのは殺し合いの舞台。私はここで狂気に取り憑かれた人を何人も見てきました。だから、私はこの娘達を守らなければいけない、ここから離れるわけにはいけないのです」
秋子の意見は当然の正論だった。弥生も秋子の言葉に異を唱えることなど出来なかった。
自分の大切な人を守りたいから私はこの人に手伝ってもらいたい。でも、この人は大切な人を守るために動けないと言っている。
どちらも同じ思いである、弥生は説得することを諦めた。
「分かりました。では、もし森川由綺という少女が現れたら保護していただけませんか？」
「えぇ、それは分かりましたわ。でも、その際に大

人数であったときまでは保証できません。私にも限界は有りますから」
「分かりました。その際は連絡を――」
と、携帯電話の番号を書こうとして思いとどまった。それがこの島で使えないのは彼女自身確認済みのことだった。
「ふふふ、そうですね。そういう物が使えるはずがありませんでした」
「――私が一緒に行きます。そうすれば私の力で秋子さんに連絡できると思います」
　いままで黙っていた琴音が、それが当然であるかのごとく発言した。
「だめよ琴音ちゃん。あなたは今、能力を無理矢理押さえ込まれているの。普段はその能力を定期的に発散する事で暴発を押さえているのに、今はそれが出来ていないのだから、弥生さんにいつ迷惑かけるかも分からないでしょう？　あらあら、琴音ちゃんったらそんな『なんで知っているの』って顔をしないの」
　秋子は左手を頬に当てながら微笑を浮かべている。
琴音は、浩之と雅史しか知らないはずの秘密をなんで秋子さんが知っているのかと、自分の耳を疑った。
「弥生さん。あなたの大切な人はどこかの建物に向かっています……一人では無いようです。あと、『Ⅲ』という文字が見えました。能力を制御されている今はこれが精一杯です。お役に立てなくてごめんなさいね」
　秋子は弥生に深々と頭を下げた。
「それで十分です。いえ、十分すぎます。由綺さんが誰かに守られているとしたら、それに越したことは無いですから。私もすぐに向かわないと――」
「それと、今のあなたが主宰の高槻さんに挑むのはやめたほうがいいですよ、あの人は本当に危険ですから」
　弥生は秋子に言われた事を心に刻み、壊れた扉の方へ向かった。

「水瀬さん、本当にありがとう」
弥生はそう言うと荷物を持って走り出した。
「さてさて、これで高槻さんに私の居場所がバレてしまいました……これから大変になりそうね」
秋子はそう言って席を立ち、散らかった喫茶店を片付け始めた。琴音もそれを見て秋子の手伝いをするべく椅子や机を元通りの位置に戻していく。
一通りそれがすんで、カウンターの内側でコーヒーを入れる秋子に、琴音はさっき飲み込んだ言葉をもう一度言うことにした。
「秋子さん、どうして私の力のこと知っているのですか?」
秋子は煎れたコーヒーを琴音に渡すと、もう一杯煎れ始める。
「あら、そのこと? 私は、私の側にいる人のプロフィールがおぼろげながら分かるの。どういう物を持っていて、どういう風に行動をするかが見えるの。でもその能力も押さえられているから、見える範囲と見える内容はあくまで微弱な物だけど。ほら、琴音ちゃんとは長く一緒にいたから少しずつ流れ込んで来たのよ」
琴音は秋子の言葉にコクンと頷いた。
秋子はコーヒーをすすりながらさらに琴音へ語り始める。
「良くわからない力に能力を押さえ込まれているから、能力者はみんな苦労しているみたいね。もっとも、そうで無ければ、今頃高槻さん達は皆殺しにされてると思いますけど」
「ここから生きて帰るには、どれだけ能力を封印されている人が結界が解放されるまでに亡くなっているか、そして能力者がVS高槻に意思を統一できるかが重要です。逆に能力保有者がいなくなる、もしくは味方に付けることが高槻さん側の勝利条件ね」
秋子はコーヒーを一口すすって、琴音に微笑みかける。
「私は当分ここから動かずに、能力が解放されるま

で待つ事にしました。能力が解放されれば、あなたに名雪を任せて、私は名雪を生きて帰すための行動に出られますから」
「今、結界には魔力的な物を持っている能力者が数人で当たっています。その結界を解いた際にでる影響を彼女達は知らないみたいですけど」
秋子はサラッと言った事は、これから起きるかもしれない環境変化において極めて重要な事柄だった。琴音はただでさえ悪い顔色を青ざめさせ、秋子に問いかけた。
「その封印が解かれると、どれくらいの能力者が覚醒し始めるのですか？」
「だいたい三分の一くらいかしら。そのなかには琴音ちゃんも入っているわ」
秋子はそう言って、琴音の手を握りしめた。
「往人さん、間に合うかしら？　あの娘、封印を解かれたら生きて居られないでしょうに――」
「あの子って、みちるちゃんが捜していた人ですか？」
秋子は首を横に振った。
「美凪さんを見つけても、往人さんはここを教えるだけだと思うわ。彼が探しているのは観鈴っていう娘。結界に封印されている力は、その娘を母体としているの。だけど、その力は強大すぎて人の器で全ては受けきれない。だから、母体となる運命を背負った魂は延々と輪廻し続ける……それが、観鈴っていう娘なの。往人さんの宿命は、その娘を見つけて導くこと。だけど、封印が解かれればその娘の命はないでしょう。往人さんがそのことに気づいたら、今結界を解こうとしている人達を必死で止めようとするはずよ。でも、私やあなたの様な能力者にとっては、往人さんが止めないでくれる方が助かるの……」
「もし、結界が解かれれば殺人鬼が二、三人増えるかもしれないけど、往人さんがそうならないことを、祈りましょうね。もしそうなれば……私は往人さん

「あらあら、動揺したのがバレちゃいましたね。琴音ちゃんさすがね」
それを察知出来なければ良かったと琴音は正直の思い返した。そして、禁断の扉を開けてしまったことを琴音はここで判断した。
「それは、あのとき私は主催者側に付いたからです。あのときの大会は、主催者の言いなりになった人達だけが最後まで生き残って、主宰者が最後の一人を決めるアナウンスをしようとした際、私達は提案したの。『ここにいる人全員生きて帰さないと、後であなた方全員が死ぬことになるわよ』ってね」
秋子の表情がだんだん暗い物に変わっていき、それにつれ声のトーンも徐々に低くなっていった。琴音はそれを見ないように顔をうつむけたが、恐怖はどんどん増すばかりだ。
「あのとき主催側に付いた人は、柏木耕一さんのお父様だったり、遠野家の御当主だったりと、明らかに人外という方々ばかりでしたわ。まぁ、相手も確を殺さなければならなくなりますから」
「高槻さんは今回能力保持者を集めすぎたわ。そして、その殆どの人はこの馬鹿げた殺し合いにピリオドをうちたがってる。今回はゲームに乗ってしまった人が少なすぎて、彼らも必死ね」
琴音は、秋子の話したことは全然理解出来なかった。だけど、封印されている超能力が使えるようになるかもしれないという事と、それによって回りに多大な影響が出そうだと言うことは理解できた。
「秋子さん。質問いいですか？」
琴音は今にも震えそうな声をどうにか平静に保ちながら語りかける。秋子はいつもの微笑を絶やさない。
「前回秋子さんが生き残った方法って、何なのですか？」
秋子の表情が一瞬だけ固まった。琴音はそれを見ていぶかしんだ表情を出してしまった。秋子はそんな琴音を見やり、微笑を浮かべながら語りはじめた。

かに人外が数人居ましたけど」
　淡々と語る秋子から琴音は完全に視線を逸らし、震える足をどうにか押さえ込む。
（ここで震えちゃだめ、震えちゃだめ。恐怖に負けたら生き残れない――）
「大丈夫よ琴音ちゃん。私を裏切っても、名雪を裏切らない限り、あなたは私が守るから。そのかわり――」
　秋子がいままで押し殺していた殺気をいきなり解放する。琴音は無理矢理押さえていた震えを止めるどころか、椅子から落ちて腰を抜かしてしまった。失禁しなかったのは、琴音の恐怖感が麻痺寸前だったからであろう。
「名雪を手に掛けたときは、本当の恐怖を教えてあげます」
　琴音は秋子の言葉にただ頷くことしか出来なかった。秋子はすでに殺気を押さえて、いつもの平静さといつもの表情に戻っている。
「高槻さんも粋な計らいをしてくださる物ね。私に鞘の付いている長刀を渡して下さるのだから――」
　秋子の言葉を耳にしながら琴音はその場で失神してしまった。

162 （無題）

御堂（と、あゆとぴろ）は、湖を発見した。
　一般人ならまずこう考えるだろう「水を飲もう」と。
だが、御堂は警戒していた。
死亡者の発表で、確かに（八番）岩切花枝の名が呼ばれていた……戦場では情報の錯乱はよくあることだ。もし、あの放送が嘘……あるいは誤報であったとしたら……
「おじさん、湖だよ……水浴びしてきていいかな？」

「駄目だ」
「え？　だって……」
「駄目だって言ってんだろ！」
「うぐぅ……ひどいよぉ……」
御堂は湖畔をつたって迂回することにした。

「おい、ガキ」
「うぐぅ……ガキじゃないもん、あゆだもん」
「……ったく、あゆ」
「なに？」
「水浴び……してきてもいいぞ」
「えっ、ホントに？」
あゆの顔に華が咲く。
「あぁ、その邪魔くさい猫も連れて行け、のどが渇いてるみたいだからな」
「うん！」
何故、御堂はあゆが水辺に近付くことを許したのか。それは、あの放送が真実であるという『確証』が得られたからである。
「岩切……」
御堂は正直驚いていた。
『一体、どんなバケモンがいやがるんだ？』
水中では鬼神の如き強さを誇る岩切が……湖から引きずり出され、殺された。信じ難い事実であった。彼女は、肋骨を数本折られ、首を折られて絶命していた。顔は恐怖で目をカッと見開いていた。
御堂は亡骸を埋葬し、黙とうを捧げた。
「……同じ時代を生きてきた奴が、また一人減ったな……」
その言葉は、彼の孤独感を現していた。
御堂は何者かが近づいてくる気配を感じていた。
『殺気はない……この気配……強化兵か!?』
彼の身が震えた、武者震いだ。
――――坂神!!
「残念ね、坂神蝉丸じゃなくって」
声の主は（六番）石原麗子だった。

「貴様は、安宅みや！」
「誰なの？　私はそんな名前じゃないわよ」
　御堂は一度、彼女と一戦交えた事があった。結果は惨敗。手も足も出ず、片腕を切り落とされた。
「俺を殺すのか？」
「あなたには興味無いわ、あなたが私の邪魔さえしなければ見逃してあげる」
「このアマ～、ふざけるな！　何が目的だ！」
「そうね……私の目的は主催者を殺し、この島から脱出すること。あなたは？」
「俺か？　俺は坂神蝉丸を消す、これが最大の目標だ」
　麗子が素直に問に答えたので、彼もめずらしく正直に答えた。
「ふふっ、あなた、坂神蝉丸を殺してどうするの？」
「完全体と崇められてきたあいつを殺し、俺こそが完全体であることを証明してやるのさ」
「へぇ、誰に証明するの？」
「俺を、不要だと言いやがった奴らにだ！」
　ややあって、麗子は……ふぅ、とため息をついて言った。
「軍部は滅んだわ、そんなことしても誰もあなたを評価しないわよ？」
「うるさいっ！　黙れ！」
　御堂は銃を麗子へ突きつけた。……が、麗子は眉ひとつ動かさない。
「軍部はあなたを必要としなかった……でも今はあなたを必要としてくれる人がいるじゃない」
　そう言い残すと、彼女は御堂の前から立ち去った。
「俺を必要としてくれる人？　……誰だ？」
　御堂は先程の麗子の言葉の意味がよく分からなかった。
　彼はあゆが水浴びをしている方へ歩み寄った。
「おい、あゆ！　水浴びはもうお終いだ！」
「おじさん、のぞかないでよぉ！」

「わっ！　こ、こら！　水はやめろ！」
「あ、あとね、こんなの拾ったんだよ」
「……な、何を拾ったんだ？」
「だから見ちゃ駄目だよぉ！」
「わわっ！　見なけりゃ確認できねぇだろ!?」
あゆの『女性らしい』一面を見てしまい、動揺を隠せない御堂であった。

163　そして死闘のはじまり

――私は、見知らぬあなたより、ここにいる我が子のほうが大切なの……
水瀬秋子という女を思い出す。
当然のことだ。私も見ず知らずの誰かなんて知ったことじゃない。
「あの人は由綺さんを護ると言ってくれましたが……」
ゲームの終わりは見えない……由綺さんの生をおびやかす敵である限り、いずれ闘うことになるのだろうか。
先の放送でも由綺さんの名前はみられなかった。
あの時、もし由綺さんの名前が出ていたら私はどうしたのだろう。
――決まっている、皆殺し。命尽きるまで。
それこそ私がボロクズのように殺したあの男のように。由綺さんは私の生きがい。由綺さんこそが私のすべて。
「嫌ですわ。そんなこと……」
必ず由綺さんを保護する、その時からが私の戦いの始まりだから。
調子が出ないわね……まだ一人も殺していない。相手を追い詰める。そこからが上手く進まない。このボウガンが狂ってるのかしら？　……そんなことは無い。明らかに腕がなまっている。こんなんじゃいつ殺されてもしかたないわね……。

御堂を見逃したのは失敗だったかしら……あの距離なら仕留められたのに。
そろそろ次の目標といきたいところね。まだ充分人数は残ってるのだから。

私の敵……弓……あるいはボウガンを持つ奴……。情報量は決して多くない。だけど、こうして一人ずつ追い詰めていけばいつか必ず会えるはずよ。
もしそいつが既に別の奴に殺られていたら——どうするのかしら。
その時は潔く私も死ねばいい。
……私は嘘を言ってるわね。私もしょせん人殺し。この憎悪と、私の罪は消えることは無い。だって私はこのゲームにもう乗ってしまったのだから……。
濡れた朝露が弥生の靴を濡らす。
うっそうと茂る森の中はどこか気味悪く感じられる。

「由綺さんにはこのような所を歩いて欲しくはないものですね」
さらに奥に進む。

まだ暗い森を、すべるように進む。その動きに無駄は感じられない。石原麗子は、暗殺者さながらの今の境遇を楽しんでいた。
(この辺で一人殺しておかないとシャクね……)
眼鏡の奥がキラリと光る。だが、麗子は油断していた。とりもどせない勘のせいかもしれない。肉眼で確認できるまで、目標達の気配を感じとれなかったのだから。

チャキッ……
雪見は常にライフルを構え、臨戦体勢を整えながら森の中を進んでいく。
「さっきから登ったり降りたりばっかりね……」
うんざりしたように雪見がひとりごちる。平坦な

森の中、だが、いつしか急な斜面を登らされるはめになっていた。今更引き返すのもばかばかしい。
「先に進むわよ」
額の汗を拭う。弱音なんて吐いてはいられない状況だ。

少しだけ斜面がなだらかになった森……いや、山の中腹。そこへ自然と足が運ぶのは偶然でなく、人間の本能としてはそれほどめずらしくはなかったのかもしれない。
一瞬の時が流れた。
「――――！」
「――――！」
「……!?」
二人、同時に口を開く。
「まさか、ここまで気付かないとは……ダメね」
「見つけた……ボウガン……あなたが……」
ジリッ……地面をする音。
（……ここでやる気――!?）
わずかに遅れて弥生。その場の空気が変わるまでそれほど時間はかからなかった。
武器を持つ手はまだあがらない。それぞれ距離は七、八メートル……正三角形型にお互いの位置。同時に二人を相手にするには誰もが厳しすぎた。
バッ!!
なにがきっかけだったのだろうか。恐怖がのそりと首をもたげた。刹那、三人はほぼ同時に三方向へと散った。お互いの姿が木々の裏にかすむ。
そして銃声。風を切る音。
硝煙の匂いが戦いの始まりの合図だった。

164　似たもの同士？

「……」
「……」
「……」

その人影は青年だった。顔は憔悴しきっていたが、瞳には明らかな意志を持っていた。そして、右手には……水鉄砲？
「誰、あなた。取込み中なんだけど？」
突然の闖入者にマナは冷たく言い放った。
「すまない。三つ編みで大人しそうな女の子を探している。姿、見かけなかったか？」
「随分と礼儀がなってないじゃない。ともかく見かけなかったわよ。あなたは？」
きよみに向かい、話を振った。
「知らないわ。あなたの女？」
こちらもさらっと言い捨てる。
「いや……ありがとう、邪魔したな」
青年――祐一はそれだけ確認すると、二人の前からすぐに姿を消した。
しばしの沈黙。
『何、今の』
二人同時に口を開いた。

「……」
「……」
『ふぅ』
溜息まで同時だった。
「……」
「……」
「変なの」
先にマナが口を開く。その顔には微笑みが浮かんでいた。
「そうね……」
きよみもつられて表情を崩す。
「私はもう行くわ。せいぜい死なないように気をつけるのね」
マナは振り返り歩き出した。
「あなたもね」
きよみは逆の方向へ。始めはいがみ合っていたのに、今はもう悪い気はしなかった。

165　朝陽

「な、何なんだよ、てめえ」
　住井は突然の、男――緒方英二の登場に戸惑いを隠せないまま、右手のマシンガンを向ける。しかし銃口が震えていては、向けられた側だって恐ろしくも何ともないに決まっている。それでも住井はそうせずにはいられなかった。それが意地と呼ぶべきものだとは、住井だって解っている。
　美咲さんは、こいつのことを知っている。
　そのことが、何故かたまらなく悔しく感じられる。自分が知らない場所で笑っている美咲さんを想像する。知らない男と、知らない友達と、知らない場所で。
　そんなモヤモヤが銃となり、弾丸となる。
　男、緒方英二は、そんな住井の表情には勿論見向きもせず、その横で呆然としている美咲を見て、無表情のままに、機械が糸を紡ぐような適当さで、
「確認する。君は澤倉美咲さんだね」
「あ、――は、はい」
　そんな風に言う。突然質問をされて、美咲は訳が判らない。結局ただ意味も意図も意志もない空の返事をしただけだが、しかし英二にとってはそれだけで充分だった。確認作業なのであるから。
「――ここ、島の端から丁度反対側の方の丘にあるマンション群で、知り合い数人を集めて行動している。藤井冬弥君、七瀬彰君、森川由綺、河島はるかさん、――それに、俺と緒方理奈、篠塚弥生さんといった、まあ、ある程度面識がある人間でね」
　何とかこのゲームを乗り切るために、な。
　住井の、美咲の、突き刺すような直視をかわしながら、英二は真っ直ぐにそう言った。美咲の盾はそれだけで貫かれたし、住井には英二の言葉に現れた名前に、ただ苛立たしげにいるばかり。
「皆心配している。理奈と君だけが未だに集まって

いなかったからな。だがまあ、これで後はうちの妹だけだ」
英二は笑いながらそう言う。小憎らしいくらいに落ち着いた物腰が、ひたすらに住井を苛立たせる。
理奈と君だけが。
その言葉に、確かにびくりと美咲が震えるのが住井の目には見えた。そして当然それは錯覚でもなんでもない。美咲の心の中には迷いと安堵と解放、様々なものがひしめいていた。坩堝のように混ざり合ったそれは、しかし太陽の光より遥かに眩いものだった。自分以外はいるのだ。藤井冬弥も、森川由綺も、河島はるかも、七瀬彰も。
住井は唖然として、そんな美咲の様子と緒方英二の表情とを見つめていたが、やがて事態の向いている地平に気づく。自分が完全に蚊帳の外に追いやられ、今の自分の心の平衡を保つ唯一の存在である美咲が遠くにしか見えなくなる地平に、今は事態が向いている。

「ふ、ふざけんなっ！　何言ってんだ、てめえっ」
声を荒げる。血に飢えた狼のように、こちらに意識を向けろ、と吠える。しかし、そうするまで、緒方英二は自分の存在に気付いていなかったかのようにさえ見えた。
英二はゆっくりと住井に視線を遣る。その鋭い眼差しは、住井の攻撃を挫くのに充分な効果を発揮する。止めは、無関心な言葉一つ。
「――君は誰だ？　少年」
この澤倉美咲さんの恋人か？　含み笑いを浮かべながらそう続ける。本心から言っている訳ではない、ただからかう為にそう言ってるに決まっている。そのこちらを見遣る視線には、不快感しか感じない。
その不快感に抗うように、
「……ふざけんな」
かちゃり、と、もう一度銃口を男の顔面に向けた。それでも、腕の震えは隠せなかった。だからこそ住井は全力で虚勢を張る。未だ薄ら笑いを浮かべる緒

方英二、そして、自分の横で、自分のやっている事が信じられない、とばかりに大きく目を見開いている澤倉美咲。
「オレが、この人を護るんだよ。大体、いきなりこんな、しゃしゃり出てきて、どこそこに人が集まっている、なんて信じられるかよ！　あんたが敵じゃないなんて言い切れない。その余裕かまして突っ込んだポケットん中に、あんたが武器を持ってないとはいえねえだろうが！」
苛立ちのままそう言い放つ。
美咲は呆然と、そう言い放った少年の顔を眺めることしか出来ない。彼の決意の質量が、ここまで大きなものだとは思っていなかったのだ。美咲は自分の手を引いて歩いていたこの陽気な少年が、いかに大きな重圧に潰されそうだったか、それを、ここにきてようやく理解するに至った。
それでも英二はくつくつと笑う。
「若いな、少年」
苛立たしい。住井は深層からの叫びを声にする。
「バカにするなっ！　もう一回言うぞ、――オレは、あんたが、信頼できないんだよっ！」
「なら、これでどうだ？」
住井の言葉で、英二から笑みが消えた。
住井の虚勢はそれで、やっとすべて砕かれた。
自分とこの男の歳の差は、恐らく十くらいなのだと思う。その十が圧倒的な差なのだ。住井は己が手の震えをようやく受け入れ、ぎゅう、とそれを握り潰す。
英二が上着のポケットから手を出すと、そこには小さな刃のナイフがあった。あれが英二の支給品なのだろうか、それともあれは単なる私物か、
どちらでも関係がない。
緒方英二はとにかく、壊れた玩具を捨てるようにその武器を海に放った。
何をやったかよく解らなかった。
「何、考えてんだ、あんた」

住井は、唖然とした目で、その金属の刃物がぽちゃり、と音を立てて、海深くに沈んでいくのを追った。美咲も同じように追う、ただナイフを放った英二だけが遠くを見ている。
「これで、信じてもらえるか？」
にこりと笑う。けれど、目は欠片ほども笑っていない。真剣そのものの眼差しで住井の心のバランスを崩す。もう一突きすればきっと彼は落ちていくだろう。
「――そんな事で、信じられるかっ！　まだ、他に、武器を持ってないとは限らないだろうが！」
住井は崩れたバランスで、それでも必死に反論する。けれど明らかに語調は弱くなっていた。英二は真っ直ぐに朝陽を見ている。
住井の負けだった。
負け犬が言葉を吐く。
「――たとえ、あんたが敵じゃないとしてもだ。今、武器、捨てたんだろう？　武器も無しに、美咲さんを護る事は出来ないだろうが」
住井は、少し開き直った目をしてそう言う。全く矛盾した発言だと自分でも気づいている、けれども虚勢とはそういうものだろう、住井は思う。
そうさ、オレが美咲さんを護るんだ。考えなしに武器を放るような奴に美咲さんを預けられるものか。
「君はいったいオレがどうしたら満足なのかな？」
英二は苦笑する。しかし、苦笑しながら。歯を食いしばって見つめてくる住井の視線に対し、真剣な顔をする。それは男が男を見るときの顔だった。必死になった男を、必死になっている男が、真っ向から認めたということなのだろう。
「良い顔だ。良い目をしているな、少年」
英二は、子供を諭すように、あるいは、一国の王様を説得するかのように、ぽつぽつと話し出す。
「――だが、一つ聞きたい。君にも訊きたい。こうやって彼女を連れ回している事が、彼女にとって本当に安全と言えるのか？　二人で行動していても目

は四つしかない。背後から、あるいは側方から攻撃があって、それに咄嗟に反応できるか？　たかだかマシンガン一丁で、彼女が絶対に傷つかないと言えるのか？」
英二から住井への、実質初めての言葉は、だからひどくずしりと腹に沈む。
――それは、そうなのだ。
絶対に守り切れる保証はない。美咲さんを傷つけないために、自分が全力を尽くしても、高々十七のガキである自分が全力を尽くしても。
彼女は傷ついてしまうかもしれない。
彼女は死んでしまうのかもしれない。
彼女を死なせてしまうかもしれない。
だけど、それでも、
「それは、あんただって、一緒だろう」
一緒な訳がない。住井にだって解る。自分は無力で、きっと緒方英二はマシンガンを持つ自分よりずっとずっと賢くて、強い。賢さはそれだけで武器だ、判断力はそれだけで盾だ。
「その問いに答えようか？　多人数で行動すれば、間違いなく、二人で行動するよりは安全だ。更に言えば、集合場所には他に多く武器がある」
一つの言葉だって返せなかった。
「別に君に単独行動をしろと言っているんじゃない。君もなかなか勇敢そうで、見どころがある少年だ。良ければ一緒に行動しようとも思う」
一つの言葉だって返せない住井は、それでも目を閉じながら必死に反論を考える。しかし、その必死の思考はやがて諦めに変わっていく。
判ってる、判ってるんだ。
美咲さんの安全を考えるなら、そうして多くの人間で行動した方がいいんだってことくらい。そうさ。二人っきりで行動しようなんて言うのはエゴじゃないか。二人きりでいる意味なんて、俺が彼女を口説くため、それ以外にないだろう？
しかし、それでも住井の意地は、

「その瞬間」まで、
けして美咲を離そうとしなかったのだと思う。
「自分の知らないところにいた」美咲さんの姿なんて、自分は見たくなかったのだから。
けれど、その瞬間は来た。
——住井はふと、横目で、美咲を見た。
美咲はどんな顔をしているだろう、こうやって言葉を交し合うオレと緒方英二の姿をどんな顔をしてみつめているだろう。
ああ、見なければ良かった。
美咲さんがまた泣いている顔が見えた。
決まった。
美咲さん。——住井は、そう呟いた。

「——判ったよ」
「護君？」
「うん。この人と行動しよう。本当に信頼できるかは、オレには判らないけどさ」
住井は笑う。腹痛を抱えているかのように、怪我の痛みを我慢しているかのように、上級生に苛められても負けない男の子のように。
それは比喩でもなんでもなく、悲しい事を我慢する、強い子供の笑顔だった。
「そう、ね」
思う。意地っ張りで無鉄砲な彼がこのような判断を下すのは、きっとすごくつらいだったろう、と。
自分を守ると呟いて、必死に自分の手を引いて走ってきた彼が、大人の圧力に負けたくないと、そう強く願っていた彼が。
頬が濡れていた。自分はいつから泣いていたのだろう。濡れた自分の頬を拭う。多分真っ赤になっている目もごしごしと拭うと、住井に優しく微笑みかけ、頷いた。住井はもう一度笑う。

英二はそんな自分たちの様子を満足そうに見ながら小さく溜息を吐いている。

住井は思う。この人も自分と同じように、必死だったに決まっているのだ。こんな大人だって死にたくないに決まっていて、自分が向けた銃口に小便を漏らすほどビビっていた筈なのに、それでも生き残りたくて、だから武器を捨て、白旗をあげた。プライドなど何の足しにもならない。泥にまみれた必死の説得こそが、高々高校生のガキと同じ高さまで目線を落として、ガキを諭すことこそが、この島で生き残るための一番の手段だと認めて。

本当に強いというのはこういうことなのだろう。

英二が明るい声で言う。

「よし、なら決まりだ。早速行こう、皆待ってる」

美咲は頷いて英二の方を向く。英二も森の側を向き、隠れ家のある方に向けて歩き出す。

けれど、

「オレは行かないよ」

住井は砂浜の上に凛と立ち、殆ど堂々と、そう言った。英二は住井を見る。何も言わない。何も言うつもりが無いのかもしれない。自分の迷いの無い目を見れば、聡明な英二のことだ、事情を知らなくたって解ってくれるだろう。

だから疑問の声を投げかけたのは美咲さんだった。

「護、君？」

「正確には、後から行く、か」

住井は黙りこくった美咲を尻目に話を続ける。真っ直ぐ、緒方英二に向けて。

「――オレの知り合いに、北川潤っていうのがいる。そいつはコンピューターをかなり触れるんだ。で、実はオレは、違法の携帯電話を持ってる。衛星経由の電話で、こんな島でも使えるような、改造型のね。そして、この鞄の中には美咲さんの支給品のノーパソが入ってる。なあ、緒方さん。解るよな？」

「ああ、解る」

「上手くすれば、――この島の脱出のための切り札になるかもしれないんだ。だから、オレはそいつを探して、連れてくる」

意地ではなかった。
生き残る為に。彼らと、美咲さんと生き残って、平和な場所で一緒に手を繋いで歩くために。
これが、住井護という十七のガキに出来る最善なのだ。
そう認めて。

美咲は何も言わない。言えなかった。住井はわがままでそういう事を言っているんじゃないと解っているからだ。
美咲の代わりに、英二はゆっくりと頷く。
「判った。——君はマシンガンも持ってるし、大丈夫だろう。この娘は俺が責任もって連れて行く」
その言葉に美咲は慌てる、住井は直情的な性格だ、無茶をして怪我をしてしまうかも。こうと決めたら真っ直ぐ突き進んでしまう、その性質は、場合によっては貴重かも知れないが、今は危険なだけだった。
「待って、それならわたしも護君に付いて——」

だから美咲は言おうとした、自分も付いていくと。
——が、住井はその言葉を遮って。
「大丈夫だよ美咲さん。どうせすぐ逢えるんだからさ。そいつは、正直まだ完全には信頼できないけど、きっと美咲さん一人くらい守れるだろうと思うよ。その隠れ家は、きっと今よりずっと安全な筈だし」
「護君、そうじゃなくて、わたしは」
住井は美咲の意図を理解したのだろう。薄く微笑んで、美咲の不安げな眼差しを受け止める。
「大丈夫だって。オレにはマシンガンがあるんだ」
「でも」
「大丈夫だよ」
住井は笑って、もう一度言った。
大丈夫だよ。
美咲は、今度こそ何も言えなくなってしまった。
「それじゃあ隠れ家の場所は判ったな、少年」
英二の説明を受けて、大体の位置を頭に叩き込ん

だ住井は頷く。森の中を突っ切っていっても外回りで行っても、意外とすぐに到達できる距離だった。
「責任もって送り届けるから、君も気をつけてな」
「ああ」
住井はぶっきらぼうに答え、英二はそれに笑顔で返す。すらりと自分の前に差し出された英二の右手を、しかし住井は笑って無視、代わりに小さな声で、頼むぜ、そう言った。
「任せろ、少年」
住井は満足そうに頷く。
どうせすぐ逢えるのだ。今生の別れというわけでもないのだから、何を大袈裟にやる必要があろう。
住井が潔く背を向けて、歩き出そうとした、
その時。
「護君」
砂の上、歩み寄る音が聞こえる。
「え?」
——その瞬間、頬に、柔らかなものが触れた。甘い匂いが、住井の鼻腔を衝いた。柔らかな髪が頬に触れる。今、自分と美咲さんの距離は無い。世界中の誰よりも近いところにある。
それは、自分にとってあまりに新鮮な感覚だった。
実は住井護十七歳、生まれて初めてのキスである。
瞬間的なキスで、時間にしても一秒にも満たなかっただろう。それでもその柔らかさはきっと、住井の一生の誇りとなるに違いない。
頬から顔を離した美咲は、可哀想な位真っ赤な顔をしていた。真っ赤な顔から声が出る。
ささやかな、
ひどくささやかな、言葉だった。
「また、朝陽、一緒に見ようね。約束だよ」
ささやかすぎて、笑いが零(こぼ)れた。
そんなの、幾らでも見られるに決まっているのに。
朝なんて毎日やってくるのに。
「わたしも、あなたの力になるから」
だけど、

すごく、嬉しかった。
——勇気出たよ。
住井は小さくガッツポーズを作り、こちらもまた死にそうなくらい真っ赤な顔をして、
「おう！」
と返事をする。
二人はまったくの正反対に歩みを進め始める。距離が離れてゆく。それが僅かに名残惜しい。

森の中を英二と二人で歩きながら、美咲は先程の行為を思い出した。勢いに乗っていたとはいえ、恥ずかしいことをしてしまったなあ、という、そんな思いでいっぱいだった。本当に、僅か数時間しか一緒に行動していないのだけど——自分は、あの少年に少し惹かれているのかも知れない、と思う。
放っておけない弟のよう。彼を思うと少し胸が締め付けられるような気がする。藤井冬弥や七瀬彰に向ける感情とは違う、優しい気持ちが胸に溢れている。
「なかなか大胆なことをやる子だね、君も。人前で」
自分の前を歩く緒方英二は、笑いながらそう言った。美咲は顔を赤くするしかできない。
森の中は薄暗く、多少歩きにくかったものの、それでも足元が見えるくらいには光が空から降ってきている。殆ど会話はない。藤井君や由綺ちゃんがどうしているか訊きたかったが、まあもう少しの辛抱だ、我慢しよう。
そうして結構な距離を歩いた。目的のマンション群まではあと一キロといったところだろうか。森の中は案外安全で、ここまで誰にも出会わないで来る事が出来た。きっとこのまま抜けることが出来るだろうと思う。住井に持たされたバタフライナイフも、多分使うことはないだろう。
ふと視界に光の道が開けた。もうすぐだろう。

――その時だった。

　確かに運命が壊れる音がした。

　北川を捜しながら島を外回りに歩いていた住井は、その音を市街地が見えかかったところで聞いた。
　そこは不運な事に、マンション群から一番遠く離れた場所であるといって良かった。
　つまり、美咲と一番離れたトコロにいた。

「おはよう諸君、元気に殺し合ってるかな。この時間までの死者を発表するぞ。二十六番河島はるか、五十四番高倉みどり、七十二番氷上シュン、三十二番霧島聖、五十九番月島拓也、七番猪名川由宇、四十九番新城沙織――」

　ごくり、と唾を飲む音が、前を歩く英二の方から聞こえたような気がした。美咲は状況がわからない。
薄暗い森の中、自分の姿さえも見えない。今の放送は何だったのだろう、一体、何だったのだろう？
　意味が浸透するまでに、相当の時間が必要だった。
　まさか、間違いのわけがないだろう。
　だとしたら、
「はるか、ちゃん？」
――後輩。いつものんびり屋で、どこか不安定だったけれど、いつも自分のことを慕ってくれた、可愛い後輩の名前が、今、確かに、呼ばれた。
　この時間までの、死者。
「嘘、でしょ？」
　嘘だ。嘘だ、はるかちゃんが。はるかちゃんが、どうして――皆で集まっていたんじゃなかったの？
解らない、今自分の目の前を歩くひとは、嘘を吐いたのか？
　英二は振り返らない。腹から搾り出すような声で、どうしようもない絶望に満ちた声で、そう言った。
美咲にはそれでもまだ解らない。

「――すまない。俺は、少し嘘を吐いていた。まだ、マンションには全員集まっていなかった」
美咲は、振り返った英二の、あまりにも悲痛そうな顔を見た。こんな筈じゃなかったのだという、冷静な仮面の下に隠れた、ただの必死な一人の男の顔が、そこにあった。
「――ずっと、彼女のことも捜していた。だが、全然見つからなかったんだ。藤井君と由綺ちゃんはいる、それは本当だ。だけど、他の皆が見つからなかった。――そんな中で君を見つけたんだ。君を安心させるために、ああ言うしかなかったんだ――」
歯を食いしばるような音が聞こえたような気がする。眩暈がした。倒れこみそうになるのに必死に耐える。解っている、彼だって嘘など吐きたくはなかったのだろう。
だが、それとこれとは話が別だ！
「どうして！　どうして……皆、元気なんじゃなかったの？　どうして嘘なんてっ！」

疑惑が胸を支配する。黒い感情は美咲の不安を完全に塗りつぶした。不安は黒の排他へと変わる。
実は誰もいないんじゃないか？　誰も。もともと隠れ家なんてなくて、わたしはあなたに騙されて、それで誘き出されて殺されれ

重い音が聞こえた。腹の底から湧き上がる、狂気の声だった。

足は止まらない。
北川を捜し続けながら、しかし重たいものが住井の頭をもたげる。今の放送を聞いた住井の胸で、何か黒いものが暴れ狂う。
何だ、この胸を焼く不安は。冷たい汗が全身から溢れる。何か取り返しのつかないものが胸へ向けて垂れ落ちていく。
今の死者発表に、何か問題があったのか？
歩みを止めないまま、住井は考える。

思い至る。
河島、はるか？

赤が弾けた。
美咲の胸の辺りから、真っ赤なものが弾ける。騙されたことからきた怒りと眩暈は一瞬で消えた。代わりに、無力感が全身を包む。立っていられなかった。肌の感覚だけが敏感で、それ以外の器官はすべて壊れてしまったかのようだった。
ゆっくりと、ゆっくりと、
前のめりに、美咲は倒れた。
拳銃で撃たれた。赤くなった思考がそう無理やり理解させる。
——やっぱり、わたしは、騙されてたんだ。
美咲の、痛みでおかしくなった思考の中で、その理解だけが燦燦と眩しかった。他にはもう、何も考えられなかった。胸から溢れる熱が自分の体温で、どろりとした感覚で零(こぼ)れ出すものが自分の血液で、頬をぐちゃぐちゃ濡らしているのは、自分の涙で。
誰かと、緒方英二は手を組んで、わたしたちを、殺そうと、してたんだ。
ああ、わたしは、すごく、馬鹿だった。護君、わたしたち、馬鹿だったね。
ずっと、手をつないで、一緒にいれば良かったね。
「だ、誰だ、貴様っ！　やめろっ！」
いいよ、緒方さん、もう、そんな演技しなくても。
わたしは、騙されたんだ。もう、判ってる。
突然の襲撃者に驚く、そんな演技なんて、いらないです。無様な、だけです。
耳の遠くでもう一度音が聞こえた。腹の底から焼き尽くされるような燻った煙の匂いがした。
「くっ！　貴様っ」
美咲は重い頭を上げて、英二の方を見た。
たぶんそれが最後の力だった。
英二は足から血を流している。なんて痛そうなんだろう。苦痛に顔を歪め、自分が見えない場所をあ

の強い眼差しで睨み付ける。
おかしなことに、演技には見えなかった。
ああ、本当に、誰かに襲撃されたのかも、そうだとしたら、自分は、なんて、運が悪いのだろう。
緒方英二は足を引きずりながら、血を流しながら、倒れるように森の影に消える。
ああ。
わたしは、置いて行かれた。

そうだ、
住井はようやく思い至る。自分が抱いた違和感の正体はその名前だ。
確か河島はるかという人は、緒方英二らと共に行動しているはずではなかったか？ そう、確かに緒方英二はそう言った筈だ。なのに、河島はるかは今、確かに死んだと宣告された。
ならば、そもそもの前提が崩れ去る。
隠れ家などないのかも知れない。

「――ッ！」
住井の心は破裂しそうになる。自分は今最悪の手を打ってしまったのかも知れない。大逆転に至るまでは死んでも悪手は打てなかったのに。
騙されたかも知れない。
あの男の懸命の演技に自分はあっさりと心を許して、結果として、敵であるあいつに、美咲さんの身を委ねてしまったのかも知れない。

男――巳間良祐（九十三番）は、苦虫を潰したような顔をして、目の前の娘を見た。だが、潰したものは苦虫どころではない。口の中に酸っぱい罪悪感が広がる。俺は、この娘の心臓を打ち抜いて、そう、殺してしまった。
殺さなければ殺されるのだ。そう言い聞かせても、罪悪感は消える様子はまるでない。これほどまでに酷いとは思わなかった。
あの最初の放送で、高槻の声により、殺すべき五

人の名前が呼ばれた。そして、自分もまたその中に入っていた。自分には他の四人と違い、特別な力など無い。ただ、与えられたこの銃だけが命綱なのだ。自分の命を狙う人間は少なからずいる筈だ、そう、殺さなければ自分たちは脱出も何も無く殺される、そう思っている人間は多くいるに決まっているのだから。更に自分は弱い。他の四人に比べて圧倒的に。
　だから今、下手をしたら、自分こそが島の中で最も狙われるべき存在なのだ。
　俺は、誰かを殺して生き残らなければならないのだ。この銃で、容赦なく、無慈悲に。こんなところで死にたくはない。
　だからといって、こんな小さなナイフしか持たなかった女を殺すなど、それこそ狂気の沙汰だった。
　高槻。――お前は、俺を狂わせたいのか。
　何故こんなことをさせるんだ！
　俺は、このような女を――妹と然程変わらない年齢の女を殺したのだ。ぼんやりとした思考のままに近付いて顔を覗く、本当にまだ若い娘だった。胸から夥しい血を流し、殆ど即死だろう。
　ああ、罪悪感で、胸が、壊れる。
　畜生――高槻、これ以上俺を狂わせるな！
　必ず、貴様を殺してやる！
「ぁ…、ひ、………った、ね」
　声が、した。焼けるような罪悪感の地獄の釜で震える良祐をこちらに引き戻したのは、女の、蚊が飛ぶような掠れ声だった。
　彼女はまだ死んでいなかった。
　何事か、言葉にならない言葉を発している。良祐の耳にはそれが意味をなした言葉には聞こえない。苦しんでいる。本気で、多分彼女の人生の中で一番の苦しみに違いなかった。
　思う、自分のせいで苦しんでいる。自分が彼女の脳髄を撃ち抜かなかったせいで。急所を撃ち抜いてやれなかったせいで。
　――せめて、楽にしてやらなければ。

良祐の狂気は僅かに加速し始める。
先からの手の震えは止まり、照準が安定する。
良祐はもう一度、引き金を引いた。
もう一度、その白い肌に弾丸を撃ち込んだ。
身体が波打って、女は今度こそ完全に弾けた。

考えろ考えろ考えろ！　住井の足は完全に止まり、本当なら今頃対岸のマンションに到着していた筈の美咲を思う。だが、事態はそんなに悠長な訳が無い。
最悪の場合。それはあの緒方英二という男が、知り合いを一人一人おびき寄せて、殺している、という場合。
まともなように見えた彼の神経はいかれていて、緒方英二は隠れ家という名目で女を誘き出し、二人きりになったところを犯して殺す、そんな殺人鬼で、河島はるか、という女性も、同じように彼におびき寄せられて殺されたのだとしたら。
それならば、美咲は、
それ以上は考えられなかった。
「畜生っ！　オレはバカかっ？」
止まっていた足は、今まで向かっていたのと全く違う方向を向く。住井は反転し、森の中に身体を投げつける。転びそうになりながら、倒れそうになりながら、それでも駆ける。走りながら思考、思考というよりはただ思念。
美咲さん、無事でいてっ！

意識が朦朧としてきているのに、こころで言葉だけが紡がれる。
それが、死ぬっていうことなんだろうな。
死ぬんだな、もう。
結構、あっさり、やってくるんだな。
藤井君や七瀬君、由綺ちゃんに、もう一度逢いたかったな、
残念だったけど、
だけど、

色々あったな、
二十年しか生きてないけど、
忘れられないことばかりだった、
忘れられないことばかりだった。
家族にも、逢えなかったな、
ごめんね、お父さん、お母さん、
死んでしまって、ごめんね。
ああ、
もう一度、逢えたら、よかったな、
――護くん。
もう一度。
もう一度、逢いたかった。
逢いたかった。
ああ、涙が、こぼれている。
「ぁ…、ひ、………っ、た、ね」
言葉にならない。かすれた声。
あいたかったね。
そういう意味ではなかった。

そんな言葉を口にしたいんじゃなかった。
もう一度力を振り絞って、美咲は呟いた。
――朝陽、もう一度、見たかったね。
そう呟いた声は、
どうしようもない大きな音で掻き消され、
澤倉美咲は今度こそ途切れた。

森の中を駆ける。思念はようやく思考になる。そうだ、最悪の事態が起こったという訳ではないのかもしれない。隠れ家は本当にあるけれど、しかし河島はるかだけが死んでしまうような事態が起こって。
どんな事態だ、そんな事態が起こる訳がないだろう。美咲さんはお前のドジのせいでもう死んだよ。
幾らだって考えられるさ、河島さんが情緒不安定になって、他のメンツを殺そうとして返り討ちにあったとか、敵が来襲してきて河島さんだけがやられたが他のメンツはなんとか生き残ったとか、
本当にそう思うのかよ。

当たり前だ、そうに決まってるんだ。
心からの不安が苛む声は押し潰した。当たり前だ、美咲さんが死んでいてたまるか。
――本当にそんな状況が起こっているとは住井だって心から信じているわけではない。ポジティブな思考を抱いていなければ、とても耐えられる状況ではなかったのだ。
しかし、思考は再び思念になる。
約束したんだ、
もう一度美咲さんと逢うんだって。
朝陽を見るんだって！
必ず守るんだって！
島の反対側への最短距離を、真っ暗な森の中を、住井は駆けた。
住井の耳には何も聞こえない。美咲を殺した銃声も、勿論その音でかき消された美咲の最期の言葉がどんなものだったのかも。あまりに二人の距離は離れすぎていた。あの時はあんなに近くにいたのに。
煙草一本分の距離も無いところにいたのに。
ずっと、距離の無い世界にいればよかったんだ。
間に合うわけがなかった。

四十四番　澤倉美咲　死亡

【残り68人】

《葉鍵ロワイアル　第一巻　了》

「また、朝陽、一緒に見ようね」

端書

私が葉鍵ロワイアル（以下ハカロワ）のことを知ったのは二〇〇一年の春のことでした。きっかけはもうあまり思い出せませんが、それはどこかの日記サイトか何かでした。今でもはっきりと思い出せることは、ハカロワを読み始めてから二日間ぶっつづけでディスプレイの前に座りつづけたこと。私は百人を超える登場人物たちが織り成す壮大な物語にすっかり虜になってしまいました。

私はハカロワのおもしろさを人と共感したいと思い、幾人かの友人にハカロワを読むことを薦めました。この作品はおもしろい、是非読んでみてくれと。ですが、反応は芳しくないものでした。それは、ハカロワがあまりに長編であったため。原稿用紙にして三千枚を超える量があるハカロワをパソコンのディスプレイで読み続けるのは結構骨が折れることであり、その長さを前にして読むのを断念してしまう人が多かったのです。読んだ人からの反応はわたしの期待したどおりのものだったため、ハカロワが読まれないことに対する残念感はいっそう強いものでした。

そんなある日のこと。ふと立ち寄った街の同人誌ショップにて、本格的な装丁の小説が委託販売されているのを見かけました。それを見たとき「これだっ！」と思ったのがすべての始まりです。こんな風にハカロ

ワを出版できないかな、そして今までハカロワの面白さを知らなかった人達にハカロワのことを知ってもらうことはできないかな、そう考えて当時の「ハカロワを懐かしむスレ」に書きこみをしたのが今年の夏。

それからもう三ヶ月が経ちました。いろいろ紆余曲折があったりしたものの、セルゲイ氏、三浦氏をはじめとする多数の協力者に恵まれたことや、この企画を応援してくださった方々のおかげでこうして無事第一巻目を発刊することができました。皆様にはいくら感謝してもし足りません。ほんとうにありがとうございます。

最後に、この本を手に取りご購入したいただいた皆様にお礼申し上げます。無事完結した原作のハカロワとは異なり、この紙媒体化の企画は始まったばかりですが、これからもご応援いただければ幸いです。

平成十四年十一月某日
瀬戸こうへい

電子書籍化に添えて

思い返せばハカロワに出会ったのは二十年も前のこと——というのは、端書に書かれている通りです。当時はＷＥＢ小説の書籍化というのは殆どありませんでした。なにせ、ＳＡＯも発表されてない頃です。そんな中、二〇〇一年の冬コミに竹箒さんから出たのが空の境界の同人書籍版。それを読んで、ハカロワもこんな風に紙の本で読んでみたいと思ったことが全ての始まりでした。

思いつきから始まったこの企画は、私の無計画さで開始早々に空中分解しそうになりますが、それを支えてくれたのがセルゲイ氏と三浦氏を始めとした当時のハカロワを支えてこられた方々でした。皆様方の協力を仰ぐことができて、なんとかハカロワ出版企画として軌道に乗ることができ、二〇〇二年一二月三〇日に第一巻を発行。そして、二〇〇四年八月一五日に最終巻である七巻の発行で書籍版が完結しました。

今ではネット小説の書籍化は普通のことになりました。小説家になろう（私も作品を置かせていただいてます）からは、毎月のように書籍化された作品が本棚の少なくないスペースを占有しています。アニメ化ですら珍しい事ではなくなりました。ハカロワ出版企画はＷＥＢ小説書籍化の歴史にも残らないくらいの小さな活動でしたが、ハカロワを書籍で残せて一人でも多くの人にハカロワの魅力を伝えることができたことは、私の中で大きな喜びとなりました。今でもときどきＴｗｉｔｔｅｒでハカロワを懐かしむつぶやきを見るとハカロワのいちファンとして嬉しくなります。ですが、その中でハカロワを読み返したいけど難しいという

声も見られました。出版から二十年近く経ち、書籍を手に入れるのは難しくなっています。本編のまとめサイトは残していただいていますが、これだけの分量をＷＥＢで読むのが大変なのは端書にも書いた通りです。
　そこでこの度、ハカロワ出版企画最後の活動として電子書籍版を無償配布する事にしました。昨今『かぎなど』が新規アニメ化されたり『ＯＮＥ』がリニューアル告知されたりと新しい供給によって往年の葉鍵ファンが盛り上がっているように思います。今回のハカロワの電子書籍化がその盛り上がりの一助になれば嬉しいです。
　最後に、ハカロワ関係者の皆様方、そしてこの本をダウンロードして下さったあなたに感謝の意を表します。本当にありがとうございました。

令和四年七月某日
瀬戸こうへい

葉鍵ロワイアル　第一巻　著者一覧

奇跡の企画を作り上げた皆様に
この場を借りて、お礼を申し上げます。

000　ゲームスタート　……　L.A.R. さん
001　開戦前夜　……　zin さん
002　冷たい雨の少女（１）……　L.A.R. さん
003　冷たい雨の少女（２）……　L.A.R. さん
004　閉ざされた教室　……　ナナツさんだよもんさん
005　封印　……　名無しさん
006　親子　……　名無しさん
007　別地点での始まり　……　。さん
008　（無題）　……　シイ原さん
009　母と娘と　……　L.A.R. さん
010　つかのまの、やみ　……　ナナツさんだよもんさん
011　やみを追いながら　……　ナナツさんだよもんさん
012　風にさらわれて　……　L.A.R. さん
013　血　……　。さん
014　（無題）　……　シイ原さん
015　選択　……　真空パックさん
016　出会いと別れの一幕　……　L.A.R. さん
017　（無題）　……　名無しさん
018　覚醒　……　quit さん
019　音　……　L.A.R. さん
020　黒の交差　……　111 さん
021　残酷 your way　……　L.A.R. さん
022　（無題）　……　名無しさん
023　誰も死にません　……　。さん
024　奇妙なコンビ　……　いつかの書き手さん
025　刹那　……　L.A.R. さん
026　交叉　……　。さん
027　なにがなんだか　……　真空パックさん
028　（無題）　……　シイ原さん
029　（無題）　……　名無しさん
030　（無題）　……　訳あり名無しさんだよもんさん
031　（無題）　……　命さん
032　天沢郁未包囲網　……　名無しさん
033　守ることと、殺すこと　……　L.A.R. さん
034　（無題）　……　名無しさん
035　決別　……　名無しさん
036　（無題）　……　命さん
037　１／５の脅威　……　L.A.R. さん
038　森の出会い　……　111 さん
039　転機　……　111 さん
040　（無題）　……　シイ原さん
041　（無題）　……　名無しさん
042　休息　……　命さん
043　「舞と……」　……　名無しさん
044　姉妹　……　いつかの書き手さん
045　僕たちの失敗　……　YELLOW さん
046　妹のココロ――置き去りの選択――　……　L.A.R. さん
047　Only One　……　ナナツさんだよもんさん
048　涙　……　命さん
049　姉のキモチ――あやまちの選択――　……　L.A.R. さん

◎制作者一覧
制作協力：
Alfo、JOYH-TV、L.A.R、Yellow 、#3-174、いつかの書き手、
独活大樹、静かなる中条、真空パック、駄っ文だ、ないしょ、
名無しさんだよもん＠誤植指摘、ナナツさんだよもん、
観月、『 。』、名無しさんだよもん

制作協賛：
111、 5 、Kyaz、MIU、NBC、命、感想スレ R の 142、
葵原てぃー、久々野　彰、シイ原、名無し達の挽歌、
遥か昔の書き手、七連装ビッグマグナム、暇人、日向葵、
箕崎、祐一＆浩平、林檎、名無しさんだよもん

スペシャルサンクス：
189、quit、River. 、zin、#4-6、#7-76、荒門、彗夜、
ダンディ、名無し cd、名無しさんなんだよ、
にいむらたくみ、花と名無したん、ヘタ霊、赤目、
名剣らっちー、訳あり名無しさんだよもん、
旧データサイト管理人各氏、
　　そして全ての名無しさんと読者の皆様

（アルファベット～アイウエオ順、敬称略）

葉鍵ロワイアル　（1）
二〇〇二年　一二月三〇日　初刷発行
二〇二二年　一二月三〇日　電子書籍版　初刷発行

著　　者：（別頁に記載）
発 行 者：瀬戸こうへい
発　　行：ハカロワ出版企画
初　　出：２ちゃんねる、葉鍵（Leaf&Key）板
編集事務：セルゲイ＠D　三浦　闌
挿　　絵：秋★枝
印　　刷：株式会社ポプルス
連 絡 先：kohei19800310@yahoo.co.jp

巻末付録
登場人物紹介

掲載した紹介文の内容は、原典にあたるゲームにおいてのものです

ＭＯＯＮ.

三番　天沢　郁未：主人公。常に冷静沈着。謎の死を遂げた母の真相を探るため宗教団体ＦＡＲＧＯに潜入する。

九十二番　巳間　晴香：施設に潜入した時、郁未と出会う。冷静ではっきりした性格だが、時として感情的になることも。

六十六番　名倉　由依：姉の消息を追って施設に潜入し、郁未たちと出会う。まだ幼さも残るが強い意志を秘めた少女。

二十二番　鹿沼　葉子：敬虔なＦＡＲＧＯ信者。長期間施設にいるので世間の事情にとことん疎い。

六十七番　名倉　友里：由依の姉。不可視の力を手に入れるためＦＡＲＧＯに入信した。

四番　天沢　未夜子：郁未の実母。ＦＡＲＧＯに入信していた。娘を想い施設から帰ってくるが謎の死を遂げる。

九十三番　巳間　良祐：晴香の兄。頑なな性格で自分の信じている道を突き進む。晴香の安否を気遣うなど妹想いの性格。

四十三番　少年：名も無き少年。いつも飄々としていて、時折人を見透かした言動をすることがある。不可視の力に関係している。

高槻
ＦＡＲＧＯ研究員。しかし信仰心は皆無である。人道に外れた行為でも平気で行なえる外道者。

ＯＮＥ～輝く季節へ～

十四番　折原　浩平：主人公。くだらないことに一生懸命になる性格。幼い日の盟約から永遠の世界の扉を開く。

六十五番　長森　瑞佳：浩平の幼馴染。妹を亡くし心を閉ざしていた彼を救う。お節介焼きでいつも浩平のことを心配している。

六十九番　七瀬　留美：『乙女』を目指すことを決意した少女。だが、浩平の前ではつい地が出てしまいその道は前途多難。

四十六番　椎名　繭：年の割に幼い。何かあると死んだフェレットの名前である「みゅー」と言いながら泣いてしまう。

二十八番　川名　みさき：盲目だが、それを感じさせない明るさを持つ先輩。その笑顔の裏には悲しみを乗り越えた強さがある。

三十九番　上月　澪：言葉の喋れない少女。スケッチブックに文字を書いて会話する。健気な性格で少々ドジなところも。

四十三番　里村　茜：浩平のクラスメート。過去に幼馴染が永遠の世界に行って以来、雨の日の公園で彼を待ち続ける。

九十九番　柚木　詩子：活発な性格で、初対面の相手でも物怖じしない。時々奇抜な行動に走る時がある。茜の親友。

七十五番　広瀬　真希：転校してきた七瀬が猫を被りつづけることに苛立ちを覚え、いじめの対象にする。

九十六番　深山　雪見：しっかりした性格で、親友であるみさきをいつもフォローをしている。澪が所属する演劇部の部長。

五十一番　住井　護：浩平の同級生で悪友。非常にノリの良い性格で、よく浩平とつるんでくだらないことをする。

七十二番　氷上　シュン：浩平と同じく永遠の世界に囚われている少年。軽音部の部室で浩平と出会い興味を持つ。

Ｋａｎｏｎ

一番　相沢　祐一：主人公。７年前に訪れたきりだった雪の町に転校してきたことにより、様々な出会いを経験する。水瀬家に居候中。

六十一番　月宮　あゆ：７年前に祐一が街角で出会った少女。たいやきを食い逃げしていたところ、偶然祐一と再会する。

九十一番　水瀬　名雪：祐一のいとこ。７年ぶりに祐一と再会する。いつでも眠たそうにしているマイペースな性格。

四十五番　沢渡　真琴：街でいきなり祐一に襲い掛かってきた記憶喪失の少女。祐一に嫌がらせをすることを日課としている。

八十六番　美坂　栞：原因不明の病気で、長期間学校を病欠している少女。無邪気な性格だが、その笑顔はどこか儚い。

二十七番　川澄　舞：夜の学校で『まもの』と呼ばれる存在を退治する少女。無口な性格で人に誤解されやすい。

三十五番　倉田　佐祐理：舞のことを何よりも大切に思っている少女。誰に対しても笑顔で接する。倉田財閥の令嬢。

九十番　水瀬　秋子：名雪の母で祐一のおばさん。寛容な性格で殆ど怒ったりしない。水瀬家を支える人物である。

八十五番　美坂　香里：栞の姉。はっきりした性格で少々キツい所もある。名雪とは無二の親友。

五番　天野　美汐：過去に辛い別れを経験した少女。真琴のことを大切に思う。寡黙な性格で少々おばさんくさい。

二十九番　北川　潤：祐一のクラスメート。いつも祐一とふざけたことばかりしているが、どこか憎めない性格をしている。

ＡＩＲ

三十三番　国崎　往人：主人公。ある夏の日に観鈴と出会い、彼女の家に居候することになる。人形を動かすことしかできない法術を使う。

二十四番　神尾　観鈴：往人が旅の途中に出会った少女。人と仲良くなると突然ひきつけを起こしてしまうため、友達を作ることができない。

三十一番　霧島　佳乃：いつも無邪気な少女。腕のバンダナを外すと魔法を使えると信じている。謎の夢遊病の症状を持つ。

六十二番　遠野　美凪：温和で内に深い母性を湛えた少女。みちるとはいつも一緒で、実の妹のように接する。

二十三番　神尾　晴子：観鈴の義母。いつか来る別れを恐れるあまり、観鈴との距離を置いていた。不器用な性格。

三十二番　霧島　聖：佳乃の姉。いつも冷静な医者だが、妹のことになると見境がなくなりとっぴな行動に出ることがある。

八十七番　みちる：いつも美凪と一緒にいる。無邪気な性格ですぐ国崎を蹴ったりする。シャボン玉を飛ばすことが好き。

五十七番　橘　敬介：観鈴の実父。晴子は妻の妹に当たる。誠実な性格だが、とある理由で観鈴を預かってもらっている。

雫 -しずく-

六十四番　長瀬　祐介：主人公。自らの世界に引きこもりがちな少年。瑠璃子と出会ったことにより毒電波の存在を知る。

六十番　月島　瑠璃子：実兄の凶状に依って狂気の世界への扉を開いた美少女。不思議な言動によって祐介を困惑させる。

四十九番　新城　沙織：祐介の同級生。非常に活発で行動的な少女で、表情が猫の目のようにくるくると変わる。バレー部所属。

二番　藍原　瑞穂：香奈子の親友で、彼女のためならどんなことでもする。内気で控えめな性格。生徒会所属。

十番　太田　香奈子：生徒会長の月島に想いを寄せるものの、彼の毒電波によって発狂させられる。生徒会所属。

五十九番　月島　拓也：毒電波に囚われた少年。祐介の学校の生徒会長。瑠璃子に対して兄妹を超えた愛情を抱く。

痕 -きずあと-

十九番　柏木　耕一：主人公。一見ぐうたらな大学生だが、いざという時には頼りになる存在。鬼の血を引く。

二十番　柏木　千鶴：四姉妹の長女。大切なものを守るためなら、他の全てのものを切る冷徹な判断力を持つ。家事が苦手。

十七番　柏木　梓：次女。男勝りの性格だが、その実、姉妹の中で一番家庭的でもある。考えるより先に行動するタイプ。

十八番　柏木　楓：三女。大人しい性格であまり言葉を喋らず、人との交流を持とうとしない。前世の記憶を持つ。

二十一番　柏木　初音：四女。控えめで優しい性格。甘えん坊だがしっかりしている。耕一をお兄ちゃんと呼んで慕う。

九十八番　柳川　祐也：県警の刑事。鬼の力を引いており、その狩猟者としての本能に身を任せる。

ToHeart

七十七番　藤田　浩之：主人公。めんどくさがりでぶっきらぼうな性格だが、何事もやれば出来るという才能を持つ。

二十五番　神岸　あかり：浩之の幼馴染。幼いころから浩之に想いを寄せている。何事にも控えめな性格である。

六十三番　長岡　志保：おしゃべりかつ行動的で、常に誰かのゴシップ情報を握っているが、大概はデマというお騒がせ娘。

七十八番　保科　智子：浩之のクラスの委員長。関西からの転校生。新しい環境に馴染めずクラスに溶け込めないでいた。

三十七番　来栖川　芹香：来栖川グループの令嬢で、趣味はオカルト研究。おそろしく無口で、独特の雰囲気を持つ。

三十六番　来栖川　綾香：芹香の妹。姉とは対照的に、活発でさっぱりした性格。異種格闘技のチャンピオン。

七十四番　姫川　琴音：超能力者。自分の能力は不幸を呼ぶものと信じていたため、周りから疎外されていた。内気な性格。

九十四番　宮内　レミィ：日系ハーフ。天真爛漫でハイテンションの持ち主。弓矢を持つと人が変わる。

八十二番　ＨＭＸ－12型マルチ：メイドロボ。可能な限り人間に近いように、と作られ、ロボットなのにおっちょこちょいである。

五十二番　ＨＭＸ－13型セリオ：マルチと同時期に開発された。サテライトシステム等も備え、純粋なメイドロボとしての性能は最高。

四十二番　佐藤　雅史：浩之とあかりの幼馴染。サッカー部のエースで、女生徒からの人気は高い。

八十一番　松原　葵：綾香に憧れ修行する格闘家。何事にも一生懸命な性格で、常に努力を惜しまない。

七十三番　雛山　理緒：いつも一生懸命だが、大抵は失敗してしまう。家の都合のためバイトをして家計を支えている。

WHITE　ALBUM

七十六番　藤井　冬弥：主人公。夕凪大学在籍の普通な学生。由綺と高校（蛍ヶ崎学園）時代から付き合っている。

九十七番　森川　由綺：新鋭人気アイドル。街中で会っても判らないくらいの普通の少女だが、その庶民的な感じが受けている。

十三番　緒方　理奈：実力と実績のあるトップアイドル。だが、その人気を鼻にかける風でもないさっぱりとした性格。

四十四番　澤倉　美咲：冬弥の先輩。控えめな性格で、皆の優しいお姉さん的な存在である。読書をするのが趣味。

二十六番　河島　はるか：きまぐれな性格。冬弥とは幼稚園以来の仲。アウトドア派だが、兄の死以来テニスをやめている。

八十八番　観月　マナ：冬弥が家庭教師のバイトで出会った少女。攻撃的で生意気な性格だが、寂しがりや。蛍ヶ崎学園在籍。

四十七番　篠塚　弥生：由綺のマネージャー。冷徹な性格で、恐ろしく正確な仕事ぶりである。常に由綺のことを気遣う。

十二番　緒方　英二：理奈の兄。敏腕プロデューサー。いわゆる天才で、掴み所のない性格をしている。

六十八番　七瀬　彰：冬弥の友達。のんびりした性格で、恋愛も少々奥手。美咲にあこがれている。

こみっくパーティー

五十三番　千堂　和樹：主人公。第一志望の美大に落ち無気力になっていたところ、こみパに出会い同人活動を始める。

五十五番　高瀬　瑞希：和樹とは高校からの付き合いで、言わば親友。腐れ縁と言いつつもなにかとお節介を焼きたがる。

十一番　大庭　詠美：同人界きっての大手作家。ものすごい自信家。でも漫画以外のこととなると全くダメな高校生。

七番　猪名川　由宇：関西出身の同人漫画家。詠美とはいつも衝突している犬猿の仲。人情派。実家は温泉旅館。

八十番　牧村　南：心優しいお姉さん的な性格。こみっくパーティーのスタッフで、ルール違反にはとても厳しい。

七十一番　長谷部　彩：とても物静かな性格。漫画自体は上手いが、テーマがマイナーなため売り上げは良くない。

七十番　芳賀　玲子：とても元気な性格の女子高生。大の格ゲー好きで、即売会では友人達とコスプレをしている。

五十八番　塚本　千紗：印刷所の娘。明るく元気な性格。あわてん坊でよくドジをする。両親の事をとても大切にしている。

五十六番　立川　郁美：自分の正体を隠して和樹を応援していた少女。和樹の絵に才能を見出す。重い心臓病を患っている。

四十一番　桜井　あさひ：今をときめく人気声優。だが、本当の彼女はものすごい上がり症で、台本のままに自分を演じている。

八十四番　御影　すばる：和樹と同時期に同人活動を始める。「正義

の味方」が自己の理想の姿。大影流合気術免許皆伝の腕前。

三十四番　九品仏　大志：和樹を同人誌の世界に引きずりこんだ悪友。名前の通りの志とそれを実現するための行動力を持つ。

まじかる☆アンティーク

九十五番　宮田　健太郎：主人公。突然海外に放浪の旅に出た両親の代わりに、家業の骨董屋を経営することになる。

五十番　スフィー：魔法の国グエンディーナからやってきた女性。魔力を消耗すると体が小さくなる。マイペース。

百番　リアン：スフィーの妹。姉を追ってグエンディーナからやってきた。姉と違い落ち着いた性格。メガネっ娘。

九番　江藤　結花：健太郎とは古くからの幼馴染。実家の喫茶店の手伝いをする。さっぱりとした性格。

五十四番　高倉　みどり：骨董に興味を持つ、健太郎の店のお得意様。控えめでおしとやかな性格のお嬢様。

七十九番　牧部　なつみ：あまり感情を顔に出さない、不思議な性格。魔女のハーフで「ココロ」という人格を所有している。

誰彼

四十番　坂神　蝉丸：旧日本軍の強化兵。五十年の時を経て目覚めた。寡黙で淡白な性格。身体に「仙命樹」を宿す。

八十三番　三井寺　月代：天真爛漫な性格。夏の日に海の洞窟で蝉丸と出会う。若干ながら仙命樹を保持する。

三十番　砧　夕霧：変わり者の少女。妙な嗜好の持ち主で南米ツノガエルがお気に入り。月代は昔からの遊び友達。

三十八番　桑嶋　高子：利発で物静かな性格。麗子の診療所で看護婦見習をしつつ、月代の家に泊り込みで家事を引き受けている。

六番　石原　麗子：診療所の女医。外見年齢の割に博識で、常に落ち着いている。謎めいた過去を持つ。

十五番　杜若　きよみ〈原身〉：五十年の間植物状態で眠り続けてきた少女。そのためか、どこか現実離れした印象を受ける。

十六番　杜若　きよみ〈複製身〉：きよみのクローンとして造られた。代替品としての自分に疑問を抱き、自己の存在意義に執着する。

八番　岩切　花枝：強化兵の一人。他の強化兵と違って水中での戦闘に特化している。御堂と共に蝉丸を襲う。

八十九番　御堂：強化兵。より完全体に近いとされる蝉丸に劣等感を持ち、自らの価値を証明しようと蝉丸を付け狙う。

9784193453045

1920031841813

ISBN4-07415-340-3

C0510

ハカロワ出版企画

HAKAGI ROYALE Ⅰ

もし、○○がバトルロワイアルの様な状況に追い込まれたなら……？

『あの作品』が一世を風靡したとき、
幾多の人間が様々に、そのシチュエーションを想像した。
しかし、その大半は定まった形を得ぬままに消えていった。
本作はその中でも、無事完結を見ることのできた奇跡的な例の一つである。

ゲームに巻き込まれるのは、Leaf&KEYの作品に登場する人物達。
その参加者数は本家バトルロワイアルの2.5倍、実に100人以上。
生き残るにはお互い殺し合わなければならないという絶望的な状況の中、
ゲームの参加者達は様々な思いを胸に、一人また一人と倒れていく……。

果たして、あなたはこの物語を最後まで見届けることができるか？

ネット上で多大なる反響を呼んだあのリレー小説が、
満を持してついに発刊！！

『これからお前達には、殺し合いをしてもらう――』

HAKAGI
ハカギ・ロワイアル
ROYALE
2

HAKAGI ROYALE

ハカギ・ロワイアル

❷

――――――【残り68人】

葉鍵ロワイアル参加者名簿

一　　番　相沢　祐一　（あいざわ・ゆういち）

~~二　　番　藍原　瑞穂　（あいはら・みずほ）~~

三　　番　天沢　郁未　（あまさわ・いくみ）

四　　番　天沢　未夜子　（あまさわ・みよこ）

五　　番　天野　美汐　（あまの・みしお）

六　　番　石原　麗子　（いしはら・れいこ）

~~七　　番　猪名川　由宇　（いながわ・ゆう）~~

~~八　　番　岩切　花枝　（いわきり・はなえ）~~

九　　番　江藤　結花　（えとう・ゆか）

十　　番　太田　香奈子　（おおた・かなこ）

十 一 番　大庭　詠美　（おおば・えいみ）

十 二 番　緒方　英二　（おがた・えいじ）

十 三 番　緒方　理奈　（おがた・りな）

十 四 番　折原　浩平　（おりはら・こうへい）

十 五 番　杜若　きよみ〈原身〉（かきつばた・きよみ）

十 六 番　杜若　きよみ〈複製身〉（かきつばた・きよみ）

十 七 番　柏木　梓　（かしわぎ・あずさ）

十 八 番　柏木　楓　（かしわぎ・かえで）

十 九 番　柏木　耕一　（かしわぎ・こういち）

二 十 番　柏木　千鶴　（かしわぎ・ちづる）

二十一番　柏木　初音　（かしわぎ・はつね）

二十二番　鹿沼　葉子　（かぬま・ようこ）

二十三番　神尾　晴子　（かみお・はるこ）

二十四番　神尾　観鈴　（かみお・みすず）

二十五番　神岸　あかり　（かみぎし・あかり）

~~二十六番　河島　はるか　（かわしま・はるか）~~

二十七番　川澄　舞　（かわすみ・まい）

~~二十八番　川名　みさき　（かわな・みさき）~~

二十九番　北川　潤　（きたがわ・じゅん）

~~三 十 番　砧　夕霧　（きぬた・ゆうき）~~

三十一番　霧島　佳乃　（きりしま・かの）

~~三十二番　霧島　聖　（きりしま・ひじり）~~

三十三番　国崎　往人　（くにさき・ゆきと）

~~三十四番　九品仏　大志　（くほんぶつ・たいし）~~

三十五番　倉田　佐祐理　（くらた・さゆり）

三十六番　来栖川　綾香　（くるすがわ・あやか）

三十七番　来栖川　芹香　（くるすがわ・せりか）

~~三十八番　桑嶋　高子　（くわしま・たかこ）~~

~~三十九番　上月　澪　（こうづき・みお）~~

四 十 番　坂神　蝉丸　（さかがみ・せみまる）

四十一番　桜井　あさひ　（さくらい・あさひ）

~~四十二番　佐藤　雅史　（さとう・まさし）~~

四十三番　里村　茜　（さとむら・あかね）

~~四十四番　澤倉　美咲　（さわくら・みさき）~~

四十五番　沢渡　真琴　（さわたり・まこと）

四十六番　椎名　繭　（しいな・まゆ）

四十七番　篠塚　弥生　（しのづか・やよい）

四十八番　少年　（しょうねん）

~~四十九番　新城　沙織　（しんじょう・さおり）~~

五 十 番　スフィー　（すふぃー）

五十一番　住井　護　（すみい・まもる）

~~五十二番　ＨＭＸ－13型セリオ　（せりお）~~

五十三番　千堂　和樹　（せんどう・かずき）

~~五十四番　高倉　みどり　（たかくら・みどり）~~

~~五十五番　高瀬　瑞希　（たかせ・みずき）~~

~~五十六番　立川　郁美　（たちかわ・いくみ）~~

~~五十七番　橘　敬介　（たちばな・けいすけ）~~

~~五十八番　塚本　千紗　（つかもと・ちさ）~~

~~五十九番　月島　拓也　（つきしま・たくや）~~

六 十 番　月島　瑠璃子　（つきしま・るりこ）

六十一番　月宮　あゆ　（つきみや・あゆ）

~~六十二番　遠野　美凪　（とおの・みなぎ）~~

~~六十三番　長岡　志保　（ながおか・しほ）~~

六十四番　長瀬　祐介　（ながせ・ゆうすけ）

六十五番　長森　瑞佳　（ながもり・みずか）

六十六番　名倉　由依　（なくら・ゆい）

~~六十七番　名倉　友里　（なくら・ゆり）~~

六十八番　七瀬　彰　（ななせ・あきら）

六十九番　七瀬　留美　（ななせ・るみ）

七 十 番　芳賀　玲子　（はが・れいこ）

七十一番　長谷部　彩　（はせべ・あや）

~~七十二番　氷上　シュン　（ひかみ・しゅん）~~

~~七十三番　雛山　理緒　（ひなやま・りお）~~

七十四番　姫川　琴音　（ひめかわ・ことね）

~~七十五番　広瀬　真希　（ひろせ・まき）~~

七十六番　藤井　冬弥　（ふじい・とうや）

七十七番　藤田　浩之　（ふじた・ひろゆき）

七十八番　保科　智子　（ほしな・ともこ）

七十九番　牧部　なつみ　（まきべ・なつみ）

八 十 番　牧村　南　（まきむら・みなみ）

八十一番　松原　葵　（まつばら・あおい）

八十二番　ＨＭＸ－12型マルチ　（まるち）

八十三番　三井寺　月代　（みいでら・つくよ）

~~八十四番　御影　すばる　（みかげ・すばる）~~

~~八十五番　美坂　香里　（みさか・かおり）~~

~~八十六番　美坂　栞　（みさか・しおり）~~

~~八十七番　みちる　（みちる）~~

八十八番　観月　マナ　（みづき・まな）

八十九番　御堂　（みどう）

九 十 番　水瀬　秋子　（みなせ・あきこ）

九十一番　水瀬　名雪　（みなせ・なゆき）

九十二番　巳間　晴香　（みま・はるか）

九十三番　巳間　良祐　（みま・りょうすけ）

九十四番　宮内　レミィ　（みやうち・れみぃ）

~~九十五番　宮田　健太郎　（みやた・けんたろう）~~

九十六番　深山　雪見　（みやま・ゆきみ）

九十七番　森川　由綺　（もりかわ・ゆき）

~~九十八番　柳川　祐也　（やながわ・ゆうや）~~

九十九番　柚木　詩子　（ゆずき・しいこ）

百　　番　リアン　（りあん）

葉鍵ロワイアル
舞台　地形図

葉鍵ロワイアル

※この物語は巨大掲示板２ちゃんねるの葉鍵（Leaf&Key）
板において創作されたリレー小説です。

※今回の単行本化にあたり、著者自身の手によって本文の
表現やタイトルが改められた個所があります。
※ Web ページの原文を縦書きの単行本として出版するに
あたり、最低限必要な改行等の改変を編集側で行わせて
いただきました。

166　汝、何を望むか

（ボウガン持ちに、ライフル持ち！）
山腹、森の中での遭遇に、弥生は元来た方へと飛びすさる。
他の二者――石原麗子（六番）と深山雪見（九十六番）だ――との間合いを取りつつ、その手に持つ散弾銃をしっかりと構え直す。
意外なほど自然に戦闘へと順応していく自らの身体に、軽い驚きを覚える弥生。
しかし思考は未だ、しばし前の時間を旅していた。
この森の中での、ある出会いの記憶が弥生を縛っていた。別れてからも何度か他のことを思考の波に浮かべてはみたが、それは、弥生の脳裏から離れようとしない。
……今すぐ思考を切り換えねばまずい。
そう思いながらも、弥生の記憶はフラッシュバックをやめなかった――。

弥生は喫茶店を後にし、森の中を歩いていた。
（由綺さん、一体何処に……）
結局のところ、大した手がかりはつかめていなかった。気ばかりが焦っていた。明確な手がかりのないまま彷徨う以上、あまり目立つ平地は歩きたくなかった。相手を発見するのも難しいが、逆もまた真だ。秋子の言った、それらしい建物を見つけるまではこのような行動をとるのが得策だろう。
由綺達に会うまで、死ぬわけにはいかない。
その思いのみが弥生を縛りつけていた。
（しかし、由綺さんと共に居るという大切な人とは？　……やはり藤井さんだろうか。彼と一緒なのだろうか……）
音楽祭の開催と共に終わるはずだった弥生と冬弥との契約。毎週水曜の密会。それが未だに続いてい

ることが問題だった。弥生は冬弥をコマとしてみることが出来なくなっていた。それどころか……。とにかく、三人で一所にはあまり居たくなかった。いつまで平静でいられるものか、正直自信がなかった。

……そして。

もしもこの島を脱出する方法が、本当に最後の一人まで殺し合うこと以外に無かったとき、どうすればいいのか。それも弥生には分からなかった。

(藤井さんと由綺さん以外の人間を殺しつくし、その上で自らの命を絶つ？　……そして、あの二人に殺し合いをさせるというの？)

頭を振る弥生。

(それとも、私自身の手でどちらかを殺すのか。……果たして、どちらを？)

再び頭を振る弥生。

自分が二人のうちどちらかを手にかけるなど、想像でさえもしたくもなかった。

不意に、弥生は思索を止めざるを得なくなった。

前方に何かが見えた。

「由綺さん！　……ではありませんね」

森の奥に一瞬だけ見えた長い黒髪にその背丈。後ろ姿とはいえ、あまりに由綺に似たシルエットだったため、弥生は呼びかけてしまっていた。

しかし、記憶を冷静にたどれば、身につけているものが異なっている。それはつまり、由綺が誰かの衣服を奪うなどしていなければ、別人ということだ。

錯覚で声をかけてしまったことに舌打ちしたい気分だったが、弥生は次の瞬間には、気持ちを切り換え終える。

そして、つい一瞬前の動揺などおくびにも出さず言ってのけた。

「こちらの得物は散弾銃です。妙な動きをしたら躊躇いなく撃ちます。しかし、おとなしく手を挙げ、出てきてさえいただければ、こちらも撃つ気はありません。聞きたいことがあります」

弥生は慎重かつ足早に間を詰めながら、森の奥に

声を放る。走り出した様子はない。まだ付近に相手はいるはずだった。

間もなく、正面の木の陰から、一人の白い女が両手を挙げて現れた。

（似てはいるが、やはり由綺さんではない……）

分かっていたことながら、内心落胆する。

しかも……。

白い薄絹を身につけた女はひどく儚げで、由綺の醸し出す雰囲気とは大きく異なっていた。肌も病的に白い。髪もまた、その若さに似合わぬ白だった。

……黒髪に見えたのは、森の木々が落した影だったのだろうか。

とにかく、今にも消え入りそうな浮世離れした外見だったが、それらに長く気を取られるような弥生ではない。慎重に散弾銃を構えたまま、さらに間合いを詰める。

女はこの状況にも関わらず、脅えた様子を見せてはいなかった。

「私は篠塚弥生と申します」

弥生は女の様子をいぶかりつつも、つとめて冷静に名乗った。

「質問に答えていただけますね？」

コクリ。

女は静かにうなずいた。日本人形のような、と例えようか。

（年は自分よりも下だろうか？）

少女と大人の女との微妙なバランスが、今にも消え入りそうな弱々しい雰囲気をさらに危うく感じさせる。

しかし、その表情は変わらずに怯えがないのだった。

弥生は相手の様子を不思議に思いつつも、現実を優先させた。

「伺いたいのは……」

由綺の、そして冬弥の消息を知りたかった。由綺の名を出し、相手がそれを知らないと分かれば、二

人の外見を詳細に話し、改めて出会わなかったかと尋ねる。
「申し訳ありませんが、私（わたくし）……まだ、どなたともお会いしておりませんので……」
（またしても、迂闊だった）
　島に来てからの自分はどうかしている、と弥生は内心思う。
　最初から誰かに会わなかったかを尋ねれば、時間を無駄にすることなどなかったのだ。
「その二人を、愛していらっしゃるんですね……」
　気ばかり急っている弥生に、女が初めて自分から話しかけた。
「な、なにを……」
　声がわずかに上ずる。
「そんな、そんなことは……」
（確かに二人のことを説明する声には力が入っていたかも知れない。けれども、初対面の人間にそれを読まれるなんて……）
　自分の感情を読みとられて動揺する弥生に、女は言葉を続けた。
「二つのものを追っては何も手に入れることは出来ませんよ？　私が悟さんと蝉丸さんを同じく大切に思ったときの様に……。ましてや――」
「それ以上は言わないで下さい」
　あくまで弥生は冷静なふりで女の言葉を遮った。
「それ以上は言わなくていい……」
　その弥生の表情には、しかし隠しきれぬ動揺が映し出されていた。
　滅多に崩れぬ弥生のビスクドールのような容貌は今、脆くも崩れ去っていた。弥生のそれは、いわゆる人間的な苦悩に塗り固められていた。
「繰（く）り言（ごと）になりますが……一度に多くのものは望み得ないものです。どうか、私と同じ過ちを繰り返さぬよう……」
（一度に多くのものを望む？　私が？　私の望みは由綺さんを必ずやトップアイドルにして差し上げる、

ということ。それが私の至上目的。
だから、由綺さんには必ずこの遊戯に生き延びて貰わなければならない。それさえ叶うのであれば利用できるものは何でも利用する。緒方プロの人間を始め、藤井さん……そう、藤井さんだって。
でも……藤井さんの由綺さんを思う気持ちは本物だ。自分の身を捨ててでも彼女を守ろうとするに違いない。だから、ギリギリまで彼の存在は認めるべきで……。
いや、そんな彼の存在は諸刃の剣でもある。彼が由綺さんにしようとすることは、逆に由綺さんが彼にしようとしかねない……。
ならば、二人の間はやはり裂くべきなのだろうか。例えば、藤井さんを殺す？　私が？　……愛しているのに？）
再びねじ曲がり始めた弥生の思考は止まるところを知らず、本来整った顔のその眉間に苦悩のしわを寄せて彼女は何かを呟き続けていた。ずっと長い間、一人で。
……一人で？
そう、一人で。
弥生が自我を取り戻したとき、そこに白い女はもういなかった。
女は、弥生の迷いが生んだ幻想だったのか？
……いや。
女は確かにいたのだ。弥生が知るのはまたしばらく後のことだが、名は杜若きよみ（十五番）という。
そのきよみは、苦悩する弥生を尻目に歩き去った。
一度は死んだような身とはいえ、あたら命を捨てるつもりもないということか。
ただ、去り際に一度だけ振り返り、憂いを込めた視線を弥生へと投げかけた。哀れむように、慈しむように……。

醒めても、弥生の頭からはきよみとの出会いが離れることはなかった。
忘れえぬ記憶と格闘しつつ、そして由綺達の身を案じながら森を彷徨っていた、そんな弥生の目前に現れたのは、既に幾人かをその手にかけてきたと思われる殺人者達であった。
(ふふ……)
心のどこかで、自嘲。
(殺人者達?)
彼女等と自分、何処が違うというのか。
既に自分とて、一人の命を奪っているではないか?
自分は正しくて、彼女達は悪だとでもいうのか?
いや、この際、善悪などどうでも良い。
……分かった。
今、一番大事なのは目の前の事実だけだ。
あとのことは今を切り抜けてから考えれば良い。
今はこの、目の前の障害を切り抜けることこそが最優先事項だ。
弥生の頭脳は再び現在(いま)を走り始めた。
自らのダメージを最少に抑えつつ愛する二人と合流する、その為に……。

167 Lost Joker

資材置き場で理緒を殺害した浩之は、住宅街の民家の一つで食料を探していた。
というのも彼が出発時に支給された食料はここまでの戦闘で痛んでしまい食べられる状態ではなかったからだ。
民家に侵入して冷蔵庫を漁ってみたもののめぼしいものはなく、ここではペットボトルの水と何種類かの生野菜を口にしただけだった(料理をしなかったのは匂いで居場所を知られないためだ)。
——殺した奴から奪うか。

浩之はそう考えた。
あのとき理緒のバッグを回収しなかったことが悔やまれる。
——今から資材置き場に戻るか。
一瞬そう考えて浩之は頭を振った。あの時の銃声で誰か来ているかもしれない、危険だ。今の自分は武器があっても、まだ体力が完全に回復していない。あそこに戻るより他の場所で奪うほうがいい。
そうと決まれば移動しよう、と思ったとき浩之はこちらに近づいてくる足音に気づいた。他の音がしない分よく響く。
——早速獲物が来た。
浩之は電動釘打ち器を構えると玄関の隙間から様子をうかがった。そこに現れたのは理緒のバッグからCDを回収した月島瑠璃子（六十番）であった。
——知らない顔だ。
浩之はそう思った。しかし存在感を感じさせないその少女はまるで人形の様だ。
——そういえば先輩に感じが似ている。いや、先輩よりセリオか……
そこまで考えて浩之は本来の目的を思い出した。
——玄関前を通り過ぎたら背後から撃つ！
CDの回収と理緒と千紗を殺したことで浮かれていたのか、瑠璃子は浩之の気配には気づくことなく民家の前を通り過ぎた。
——今だ!!
浩之は玄関を飛び出すと瑠璃子の背に五寸釘を発射した。
バスバスバスバスバスッ！！！
その音に瑠璃子が振り向くのと五寸釘が彼女の両の眼窩と額を貫いたのはほぼ同時であった。浩之はまるでこうなることがわかっていたかの様に表情一つ変えず、断末魔の痙攣をつづける瑠璃子の心臓に五寸釘を発射した。
バスッ！
見る見るうちに血溜まりが拡がっていく。

『ジョーカー』は任務を果たすことなく狩られた。
浩之は瑠璃子の死体とバッグを民家に運び込むと中身の確認を始めた。
——これじゃまるで盗賊だな。
浩之は自分の行動に苦笑しながらバッグの中から目当ての食料を手に入れた。
——まだ何かないか？
そう思って浩之がバッグを探ると中からＣＤを見つけた。
「なんだこりゃ？　まあいいか持っていよう」
浩之はＣＤを自分のバッグに放り込むと今度は瑠璃子の身ぐるみをはがし始めた。
「大したものは持っていないな。ん、これは？」
浩之は液体の入った小瓶を瑠璃子の服から見つけた。
「これも持っておこう」
その後、釘打ち器に五寸釘を装填した浩之は民家を後にした。

六十番　月島瑠璃子　死亡
【残り67人】

168　やわらかい月

「二十六番河島はるか。三十二番霧島聖、五十四番高倉みどり。七十二番氷上シュン——」
赤い屋根の下、彰の頭からすればこの瞬間の情報処理は驚くほどに高く、その放送の意味を理解するのにも時間を要さない。
「はるか、」
声が漏れる。自分の声だとは信じられないくらい掠れた声が、確かに自分の喉の奥から漏れ出している。暗闇にも似た気持ちが胸を覆い隠す。感情の波をコントロール出来ない。
——河島はるかは親友だった。
親友だった、と堂々と恥ずかしげもなく断言する事が出来るともだちだったのだ。やる気がなさそう

な顔で毎日を過ごしているけれど、時折見せる優しい笑顔は眩しかった。落ち込んでばかりだった自分をいつも励ましてくれた。無理矢理外に連れ出しては一緒に運動をしたり日向ぼっこをしたりした。女を感じさせず自分を引っ張りまわした、ともだち。
「はるかぁ……っ」
良い奴だった。優しくて、可愛い奴だった。死ななければならない理由なんて一匙の砂糖ほどもなかったんだ。自分はどうしてはるかにさよならさえも言わせてもらえなかったのだ。こんなところで死んでしまってはいけなかったのに。
壁に拳を叩きつける。鈍い音と皮の擦れる嫌な音がして、拳の先に小さな痛みが走る。血が壁を伝ってゆく。ふと痛みが失せてゆく。黒いものが痛みも悲しみも苦しみも奪ってゆく。
「彰お兄ちゃんっ!?」
——外から戻ってきて、怪訝な顔をして自分に不安の視線を向ける初音にさえ彰は一瞬怒りを抱く。
黙っていてくれ、一人にしてくれ、頼むから、
「……ごめんね、初音ちゃん。驚かせちゃったね」
彰の理性は、しかし、それでもまだ、正常だった。
ううん、と初音は慌てて首を横に振る。自分が世界で一番悪い人間なのだ、とでも思っているかのような悲壮な顔で、何度も何度も首を振る。
「——ごめんなさい」
それ以上は初音は何も言わない。自分の顔を見て、何が起こったのかを理解する事が出来たのだろう。
「初音ちゃん、僕の方こそ、ごめんね」
その黒いものを吐き出すように、出来うる限りのしっかりとした口調で、彰はそう言う。冷静になろうとする意志が、黒い怒りの熱を冷ましてゆく。
——彰は初音を軽く抱き寄せる。
「うん、もう大丈夫だ」
「大丈夫じゃないよ、お兄ちゃん……っ」
初音が自分の胸の中で何か言っている。
「無理しないでよ……っ、彰、お兄ちゃん、ねえ、」

「大丈夫だって言ったら大丈夫なんだ」
それ以上は何も言えない。彰は初音を必死に抱きしめて、人の温もりをしっかりと感じながら、目から溢れそうになる激情を必死に抑え付ける。
「お兄ちゃん、」
「大丈夫なんだから」

――未来なんてどうなるか解らない。だけど、君と冬弥と僕は、何十年経っても、きっとともだちでいられたに違いない。僕は君のことが最後まで解らなかったし、君もきっと僕のことが解ってなかったと思う。でも、それでよかったんだよね。僕には君の笑顔があった。声のない場所で通じ合う事が出来た。
――こんな言い方は、すごく身勝手かもしれないけど、必ず生き残るから。君が好きだった藤井冬弥も一緒に、君が好きだった由綺も、美咲さんも、みんな一緒に、

彰の心が挫ける。初音の温もりに耐え切れず、唸り声のような慟哭が部屋に満ちる。大好きだったはるかはもういないのだという耐えようのない喪失感に七瀬彰は哭いた。

「みっともないとこ、見せちゃったね」
彰は初音から離れると苦笑いしながらそう言う。申し訳なさそうな顔で彰の顔を見つめる初音の頭をくしゃくしゃと撫でる。
「大丈夫。へいきだよ」
そう言ってもまだ心配そうな表情を浮かべる初音に、彰は、真っ赤に腫らした目じゃ無理か、などと思って苦笑するしかなかった。
「――それで、機械の修理は終わったの？」
話題を変えるつもりで言ったが、初音の悲しい顔は失せない。どうしたら良いんだろうか。この子の笑顔を曇らせていたくはないのに。
「――うん。ロボット自体はもう動かないけど、武

器だけはなんとか」
「そっか。護身にはなりそうかな。流石にフォークとかハリセンとか本とかだけじゃ大変だろうしね」
冗談めかして言っても初音の顔は晴れない。彰は途方に暮れて、弱い姿を見せてしまった自分に後悔の念を抱く。どうすればこの娘の悲しい顔を晴れやかにすることが出来るだろう。
「あのね、」
初音が小さな声で囁く、
「わたしは、お兄ちゃんのために、何も、してあげられないけど、」
「初音ちゃん？」
俯いたままの顔から、声が聞こえる。
「お兄ちゃんが、悲しんでいるのだけは、わかる」
「──」
「一緒に悲しむなんてこと、できないけど、」
心からの自責に駆られた声だ、彼女には何にも責任がないのに。そんな風な台詞を搾り出すように吐く彼女に、堪らない苦しさを覚えた彰は思わず叫ぶ。
「初音ちゃん、君に出来る事はあるよ」
「え？」
「お願いだから、笑っていて。君が笑顔なら、まだ少しは気が晴れるんだ」
彰は、初音の肩を抱いて、心からの声を吐く。
安らかな沈黙が二人のわずかな距離を包む。
「────うん」
小さく頷く初音を優しく抱きしめて、二人は温かな力を分かち合う。

簡単に食事をすると、二人は出発の準備を始める。
持ち物は清涼院の小説型鈍器と、──その後、洗面所の裏で見つけたジッポライター。何の役に立つかも判らないが、一応持っていく事にする。
「取り敢えず、君のお姉さんを見つけなくちゃね」
頷く初音の手を取って、彰は家の外に出て、二人は再び森の中へと足を踏み入れる。はるかのことを

考えると美咲さんも危険なことになっているのかもしれない。無性に気にかかるが、だからと言って何か出来るかといわれれば何も出来ないと答えるしかない。取り敢えずこの娘を早くお姉さんに逢わせてやろう。美咲さんを探すのはそれから後でも充分だと思うし、その間に美咲さんに会う事もある。

そう考えて森の中をしばらく歩いていたが、しかしまるで誰とも遭遇する様子がない。なかなか大きな島だし、他人と遭遇する確率なんてひどく低いに決まっている。気長にいかなければいけないだろう。美咲さんは大丈夫だろうか。大丈夫。美咲さんは頭が良いから、簡単に人に殺されたりなんてするものか。彰はあくまで気楽に考える。

——そうしてもう一時間ばかりは歩いているのだが、しかしまったく遭遇する様子がない。町を中心に歩き回っていると行動範囲が交わらないのだろうか。少し遠出してみるべきなのかもしれない。

「この辺にはどうもいないみたいだ……少し遠出、」

初音の方に振り返り、初音の顔を見て、あまりに自分の注意力がいかれていたことを実感する。

「え、？　なに、お兄ちゃん？」

漸く彰はひどい顔をしている初音に気づく。天使の顔が形無しだ。汗が額からだらだらと溢れている。尋常ではない様子に彰は狼狽する。

「どうしたの、初音ちゃんっ⁉」

ううん、だいじょうぶ、へいき、初音は言いながら辛そうに首を振る。無理な笑顔が痛々しい。

「町に戻ろっか？」

「だいじょうぶ、へいき！　本当に少し頭痛いだけだから。過保護にしないで」

「でも、」

初音はもう彰の話など聞いてない。作り笑顔を見せて、彰の手を取ってずんずん前に行く。

だが、先を行っていた初音の歩む速度はみるみる遅くなり、いつの間にか最初のように彰が初音の手を引く形に戻っている。その細い身体を曲げながら、

慌ただしい息を休みなく吐き続ける。お腹を抱え、冷や汗をだらだらと流す。真っ青になった顔には苦しみが充ちている。
「大丈夫？　お腹も痛いの⁉」
「大丈夫、大丈夫だよ……っ、……少しだけ休めば、大丈夫、だから、」
青を遥か昔に通り越して、真っ白な顔だった。血の気がないというのはこのような顔をいうのか。彰は考える。さっきまで元気だった人間がこのようにひどい顔つきになるような状況など存在するのだろうか。……まさか、初音は熱病か何かにでもかかったのだろうか。ここがどんな島だかも知らないが、もしかしたら悪い熱病のウイルスがいるのかも。
「大丈夫なもんか！　一旦、街に戻ろう‼」
「でも、」
初音の話など聞かない。無理矢理背中に乗せると、全速力で彰は街に再び戻る。勿論町はすぐ近くにあった、さっきまで休んでいたあの赤い屋根の家に駆け込み、さっきまで一緒に眠っていたベッドに寝かせる。水道から水を汲み、洗面器一杯に入った水を枕元におくと、初音の鞄の中からタオルを拝借する。冷たい水に浸して絞り、ベッドの上で息を荒くしている初音の頭の上に置く。
「大丈夫？」
「うん、ごめん。お兄ちゃん、足手まといで、」
「黙って寝てた方がいい」
冷たいタオルが初音の身体から熱を奪い、多少は楽になったのだろう。乱れた息は次第に治まって、顔色も少しずつ戻ってくる。しかしそれでも顔は青い。
「薬があればいいんだけどな。ちょっと町の中に薬局がないか探してくるよ」
彰は家を飛び出す。先のキッチンを見れば解るが生活に必要な品はあまり無い。果たして薬局を見つけたとしてそこに初音を救う薬が充分にあるかは解らない。だが、それでも立ち止まって何もしていな

いよりは余程マシだ。
彰は走る。初音の苦しみが生理によるものなんてことは、当然彰にわかるはずもない。

もし、に意味がないことを認めた上で言う。
もし、彰が初音を助けることなく最初から美咲を探していたならば、彰は美咲と合流できた可能性はあった。そうでなくても、せめて最期の言葉を聞くことくらいできたかもしれない。
けれど、彰は初音を助けた。大切な人を探すよりも、目の前の女の子と一緒に居ることを選んだ。
その選択で失われてしまった物を、まだ彰は知らない。彰の恋は終わってしまっていた。別れの言葉も、ずっと心に秘めていた言葉も、どちらも伝えられないまま。

169 接触

気が付くとリアンは上下の感覚もない空間を漂っていた。
(何とか接触には成功したみたいですね、まずは神奈さんの本体を探さなきゃ。前になつみさんのココロを探したときのように集中して……)
空間にはいろいろな感情が満ちていた、小さな想い、憎悪、苦しみ、そして大きな悲しみ。想いに直接晒されているリアンは魔力だけでなく精神そのものも打ち砕かれるように感じた。想いに押し流されないようにしながら必死に集中を続ける、そしてようやく数多くの負の感情の中に一筋の切れ目を見つけたリアンはその中に飛び込んでいった。
切れ目の中にいたのは小さな女の子だった。リアンから離れたところでうずくまっている。
(あなたが神奈ちゃん?)

（近づかないで。もういや、誰も傷つけたくない、こないで）
（どうしたの、私は何もしないよ、大丈夫。あなたは何故ここにいるの？）
（……私は大きな私から切り離されてここに連れてこられたの、そのときに少しだけ私は変えられてしまった。空に帰りたい、誰も傷つけたくない。悲しい記憶を増やしたくない）
（帰りたいの？）
（帰りたい、鳥たちといっしょにどこまでも空を飛び回りたい）
　何か大きな力の一部を分離させてここの結界の礎としているのだろう、切り離された人格の一部にこれだけの自我があるということは本体はすさまじい力があるに違いない。
　だが、人格があるということは協力を仰ぐことができるということだ。彼女の人格と変化された力を切り離すことができれば、結界は力を失うだろう。
（私も空を飛ぶのは大好き、こっちの世界に来てからはあまり出来ないけどグエンディーナにいた頃はよくホウキに乗って空を飛んでた）
（お姉ちゃんも空を飛べるの？）
（飛べるよ、風が頬にあたる感じが気持ちよくっていつまでも飛んでいたいくらいだった）
（でももう私は飛べない、私の一部がここから私を出してくれない）
（私が協力するよ、大好きなお空に帰ろう）
（ほんと？　本当に帰れるの？）
（約束する、私もがんばるから神奈ちゃんもがんばって）
（ありがとう、じゃあいやな私のところに案内するね）

170　惑い

硝煙が燻った。俺が放った二発目の弾丸によるも

のだ。それで彼女——澤倉美咲——は完全に事切れた。
　喉が痛かった。無性に渇いてしょうがなかった。引き金を引く時には感じていなかった感覚だった。それがほんの少し時間を置いたことで、まるで金縛りを解いたかのように現れた。
　着弾したのは心臓の付近だった。二発目はそのさらに外側だった。一瞬でも苦しみを取り除いてやりたかった。だが、そんなことは偽善でしかない。それは、俺が一番良くわかっている。俺は早く殺したかったんだ。生と死の狭間でもがいているその人間の姿が、まるで俺を襲ってくるような……。違う、それだけじゃない。その姿はまるで今の俺……そして未来の俺の死に様のような気がしたからだ。だから早く殺してしまいたかったに違いない。
　せめて楽にしてやろう。なんと都合の良いセリフだろうか。その思考のおかげで、俺は自分を冷酷な殺人者だと偽りながら、自分の恐怖を拭うことが出来たのだ。そうでなければ、二発目の引き金を引けるわけがなかった。
　……なんだ。楽になりたかったのは、俺自身じゃないか。
　二発目の銃弾が放たれた。どこを撃たれたか判別の付かないような銃弾の貫通の仕方だったが、……ほんの少し自分の服に飛び散った。……撃ち込んだ拍子に、口からあふれた血の飛沫だ。
　いっそ顔面を砕いてしまえばよかっただろうか。
どくどくと、まだかすかに血が流れつつある。
思ったよりは、胸の弾痕は派手なものではなかった。
——綺麗な顔だ。だが、それは人間らしすぎて不快だった。死体は単なる肉塊だ、もはや人間ではない。
だというのに、未だその物体は俺のことを見つめてくる。
　……彼女の目は開いていた。
まだ、完全に事切れていないうちに銃撃したから

だ。そのときのショックで、瞼は落ちることを忘れていた。
それは色を失った瞳だった。まるで、さも自分は生きているとでも訴えかけてくるような。

――俺は、もう一度彼女に銃を向けた。

俺は苦悩していた。人を殺す、そのこと自体に対しての惰性的な慣れが生じることを恐れていた。そもそもFARGO自体がそういう組織なのだから、いまさら、『僕は人を殺すのが嫌いです、どうしてみんな仲良くできない？』などというような偽善を吐くことはできない。……いや、もはや自分の行動など、その全てが偽善と嘲られてもしかるべきものだった。だが、その殺人という行為によって、俺が今ここに生者の側でいられることもまた紛れも無い事実。それを否定することも出来ない。
だから、狩るものと狩られるものがいるのだとしたら、俺は狩る側に回らなければいけない。そうしなければ生きていけない。この上なくエゴイスティックな思考回路だが、果たして誰が、この判断を責めることが出来ようか。
……あるいは、晴香なら。
俺を連れ出すだけのために、単身でFARGOに乗り込んできた、あの娘なら。
今この瞬間も、俺と同じ戦場で戦っている、あのたった一人の妹なら。
この俺の体たらくを見て、嘆き、そして恫喝するのかもしれない。
だが妹よ。
俺はお前以外の人間なら、護るために、自分のために、きっと殺すことができるだろう。
……だから、生きる。泥を啜ってでも、這い蹲ってでも、まず生き残る。
それが、俺の復讐の始まり。
晴香は……まだ生き残っているようだ。だが俺に

は、表立ってあいつを守ることは出来ない。
もう、このゲームが始まった瞬間どころか、その遥か昔に俺は妹を捨てたのだから……。
「…………あ」
――意識が、復帰する。
目の前に広がる惨状。胸からおびただしい量の血を流し事切れている女性の亡骸。色を失いながらもまごうことなくこちらを見つめてくる瞳。

――俺が、殺した。

その事実が、胸に鋭く突き刺さった。黒い銃身。ワルサーＰ38。銃は俺を癒してはくれない。
だがその刻印の入った銃に、俺は今自分の命を託さなければならない。銃は諸刃の剣だ。今は目の前の哀れな彼女の命を、この世界から消し去った。だが、その次の狙いが、果たして自分ではないなどという保障は無い。それでも、俺はこれにすがらなければならない。それは俺の弱さではあったかもしれないが、……決意でもあった。

――結局、三発目を撃つことはなかった。

高槻を殺す。そうしければ、ゲームは終わらない。それまで……俺は生き残らなければならない。
辺りを見回す。そこには誰の気配も無い。先ほどの銀髪の男には手傷を負わせた。だが深追いは避けたほうがいいだろう。追い詰められた人間は、最後に全力の報復をする。今のように虚を突かねば……俺の命と取引するようなものだ。
あるいは、心の隙を突く。このゲーム、他人を信じたものが敗北する。俺はもう覚悟を決めた。この銃、そして俺自身。それだけあれば十分だ。闘える。ああ、闘える。
そうして良祐は立ち去った。苦い思いは、それを無かったことに……あるいは乗り越えたことにして。

良祐は走る……、次なるところへと走る。誰にも平等に訪れる死。それに抗うかのように……。今は、まだ何も見えない。状況はどこまでも、まるで深い霧に包まれたように混沌として、頑としてその先を見通すことを許さなかった。

残されたのは、物言わぬ一人の女性の影。
その瞳は、既に閉じられていた。

――そして、住井護がそこに再び辿りつくのは、それからたったの数分後のことである。

171　惑い

……ミズアビデスカ？　……ふぐ。こんなとこで水浴びしてんのかあの人。うわ。漫画みたいだぞこの展開、ありえねえ、ごくり、こんなに熱い唾を飲むのは初めてだ。な、なんて無防備なんだうひょう。つーか今見えた見えた見えたっ見えたあっ!!　薄くて控え目な綺麗なピンク色だったぞちくしょう!!　あうう、すげえ、半端じゃねえ長森とか七瀬とかの比じゃねえ!!　あんな人がいていいのかっ!?

俗な言い方をすると覗きである。
単身水汲みに向かった筈の折原浩平は、その目的も果たせぬまま、女性が水浴びをしているのを覗き見ている。結果として覗き魔ちっくになっているだけだと自分の心の中で浩平は飽くまで主張しているが、鼻を伸ばした顔ではどうにも説得力に欠けている。だが、断言するがそんな事実はないのだ。
――こんないやらしい顔をしているが、浩平だってまともな知性の持ち主だ。置いてきた二人の元に早く帰るべきだと解っている。二人を危険に晒している場合じゃあないと思う。それではなんで浩平が全く動けない（動かないではない）でいるのかと言うと。

問いたい。浩平の立場に置かれたまともな感覚の成年男子が、果たして覗きを続けるのをきっぱり止めて帰れるか。女の子が警戒心なく水浴びをしているその様を最後まで見届けないで帰れるか。無理に決まってる。たとえそれが七瀬の裸でも、自分は最後まで覗きたいと思ってしまう。ましてあんな素敵な人だ、最後まで見届けないで帰れるか。

うわ!! 今ちらっとだけど見えた見えた見えた絶対見えた! ひゃっほう!! 生きてて良かったぜこんちくしょう!! 覗きばんざい!! 覗きばんざい!!

ばんざいしたら手が木の枝に当たる。ちょいと自然発生するには不自然過ぎる音が自分の腕で奏でられる。がさがさがさ、木の葉と枝と我が腕ののアルペシオ。しまった。アホかオレは、

「誰っ!?」

案の定だ。裸の女の人は気付いてこちらを見遣る。ってめっちゃ可愛い! あんな身体にアンバランスだ! ってそんな場合ではない。まずい、隠れなければいかん。覗きの醍醐味は如何に見つからないで覗き続けるかってとこにもあるのだ。

そんな浩平の気配消去の開始と殆ど同時に、男の太い大きな声が遠くから聞こえてくる。

「郁未ちゃん、どうしたっ!」

「だ、誰かが覗いてたの……っ」

浩平はその太い声の主と川の中に肩まで浸かってしまったお姉さんの顔を見る。ああ畜生、なんて不注意なんだオレ。もうあの人の裸は一生見ることが出来ないのか!! ばかなオレ、ってそんな場合ではない。男が現れている。えらく逞しい。貧弱な自分とは大違いだ。優しそうな顔もしているし、きっと女にもモテモテだろう。あんな恰好じゃなければ。

「おいっ、覗き魔っ!! 出てこいっ!!」

何なんだあれ。恰好やばすぎないか? 男だろ? あんな短いスカートって何なんだ。いやオレだって差別主義者じゃない、そういう趣味もあるんだなあって認めてるさ。だがミニスカに上半身裸、みたい

な恰好は有り得ない。ありゃただの変態だ、
——そこで、ふと浩平は、その女性の名前であろう三文字に気を取られる。
いくみ？
——それは、確か、鹿沼葉子が捜していた女の名前ではなかっただろうか？

172　静かなる格闘

夜明け。
スフィー（五十番）の格闘はまだ続いていた。たかが魔術書かもしれないが、スフィーが必死になるのには訳があった。
魔力の流出が止まらないのだ。
スフィーの腕にはリングがはまっている。これと同じリングを宮田健太郎（九十五番、既に死亡）もはめている。このリングは本来、スフィーから健太郎に魔力を供給する役目を持っている。健太郎が死んだ今となってはもう役立たずになるはずなのに、今でも少しずつ魔力が流出しているのだ。
そこで、失われる魔力を補給しなければならないのだが、かつて健太郎と共に過ごした五月雨堂の中のような『気』が、この島には全く感じられなかった。魔力の流出の結果、スフィーの体は少しずつ縮んでいく。現に今着ている服も肩周りがゆるくなってきている。
「こんな状態で、マジカルサンダーなんて使おうものなら……とにかく、魔力の補充が最優先ね」
スフィーの格闘は、まだ終わりそうにない。

173　死ぬまでセイギ？

(体が……。熱い……)
太田香奈子（十番）に道案内をさせ始めてからしばらくして、松原葵（八十一番）の体に変調が現れ

た。
（胸が苦しい……）
毒はこんなにも強力だったのか。
彼女は腕をしばることである程度処置したつもりだったが、それはほんの少し……。そう、ほんの少し寿命をのばすにとどまった。

「うう……、あ……」
ひざが折れ、その場に座り込んでしまう。
前を歩いていた香奈子がゆっくりと振り返る。
「あはは、やっぱりだめよね？」
歩み寄ってくる香奈子に、葵は視線を向けることしかできない。
「さっきの女を殺せば、解毒剤をもらえるのよ？　ちょっと胸に鋏を突き立てるだけ。簡単よオ」
「『殺す』なんて駄目です……。みんなで協力し合って帰る……ん……です……」

——ガッ！——
葵が仰向けに押し倒される。
「それがあなたの正義？　正義せいぎセイギセイギセイギ!!??　そんなものここじゃ意味無いのよ!!　そんなものがあるなら瑞穂は殺されなかったはずでしょぉオ!!」
「うあ……あ……あ……」
葵の体の中を恐怖が走りぬけた。
——ビリビリビリッ!!!——
制服が無残に裂かれ、白い肌が露になる。
体を重ねてくる香奈子。
抵抗したい。なんとか跳ね除けたいという葵の心とは裏腹に、身体は動こうとはしない。
「可愛いわね。うふふふふ……。でもね、瑞穂はもっと可愛かったワ……」
香奈子の舌が葵の首筋をなぞる。
死の恐怖による戦慄が恍惚感に化けつつある。

「ひゃ、あ……ふあっ……やめ……て……」
舌が這うたびに無意識に体が跳ねた。
押しのけたいけど力が入らない。
(毒のせい……だ)
「たのしイよ？　人を襲うの」
葵の肌の上に香奈子の爪がたてられる。
力をこめ、引いた。
「うあぁぁあぁぁあぁあぁぁあぁぁっ!!!!」
白とは対照の赤が散る。
「あははハハ……。イイ声。気持ちイぃよ。どうしてあなたはガマンできるの？　殺してもいいんだよ。ココでは。聞けるヨ。声。たくさん」

香奈子は自分の頬に両手の爪を当てる。
同じように、引いた。
六つの爪あとが頬に刻印される。
――ポタポタ……――
(狂ってるよ。狂ってるよ。怖い怖い怖い怖い怖い怖い!!!!)
無意識に動かしていた手に硬いものが当たった。
『鋏』

174　サイコメトラー楓

爆発の跡地。
「何があったんだろう、ここで……」
楓は複雑な思いでそこを見つめていた。
一箇所だけ寂れた荒野となったそこは、一人の人間の悲しみ――だけど、それでも何かをやりとげた男の最後の場所だった。
「……」
玲子もまた何も言えず視線をそらす。
「……あれ、あれは何？」
黒く光る金属片。
玲子の目に何故か異質に映るそれは、
「鉄の――爪？」

玲子がそれを拾い上げた。
形状からして右手用……
「爪――ですか」
楓が何時の間にか背後までやってきていた。
「う、うん」
「……」
複雑な思いでそれを玲子から受け取る。
鬼の爪。否が応にも千鶴を連想させる。
(姉さん……)
「無事で……いて」
「楓ちゃん、なにか分かったの？」
「いえ、何も……」
「ずっと爪とにらめっこしてたから。サイコメトリーみたいな能力を持ってるのかと思っちゃった」
「……違います」

175　Rose Bus

牧部なつみ（七十九番）は支配空間を作り『贄』を狩るための場所を探すため歩き回っていた。幸いなことに動いている人間に遭遇することは無かった。
ふとなつみが足を止める。
「人の……死体ね」
背丈はそれほど高くない、黒い制服を着た男子。
なつみは知らないが、それは佐藤雅史（四十二番）だった。雅史は目を見開いて事切れていた。片腕が切断されて背中には無数の針が刺さっている。
余りにも酷い殺され方に、なつみは戦慄を覚えた。
いくらなんでも、こんなことって……
店長さんも……この人のように殺されたの？
憎い……憎い……
店長さんを、この人を殺した人が……

このゲームを楽しんでいる人が……

なつみは中に錠剤が入った瓶をみつけた。ラベルは無くて何の効果があるのかはわからない。どうやら、幾らか中身は減っているようだ。
（何の薬か分からないけど、贄に試してみよう）
他に役に立ちそうな物が無いと分かると、なつみは静かに立ち去った。
時間も大分過ぎ、日が暮れかかった頃にようやくアジトにするべき場所についた。孤島にある割には大きめの、四階建てで鉄筋で出来た……学校。
此処も矢張り人の気配は無かった。とはいえ用心するに越したことは無い。外回り、各教室、屋上などを調べまわることにした。
（……!!）
一番最初に目に付いたのが黒髪の少女。腕や腰がへしゃげ、胸に矢が刺さり、大量出血していることからも彼女もまた誰かにやられたのだ。故意か偶然か、高い所……屋上からだろうか、から転落させて。
又一方で。
今度は大量出血した跡を見た。場所は保健室のベッド。寝ている無防備な人を攻撃したのだろう。その少女は殺された後誰かに供養してもらったのか、布団がかぶせてあった。
（参加者に優しい人もいたんだね……私には、この人のように供養することは出来ないよ。この人たちをこんな目に合わせた人と同じようなことを、これからするのだから……）
二人の死者を看取るうちに完全に日は暮れてしまった。電気はスイッチを入れてもつかない。仕方なく月明かりを頼りに行動する。罠を張る場所を『1―A』との標札が出ている教室に決めた。正面玄関から入って直ぐ右にある場所。直感的に最初に入りそうな所だ。教室の中にあるのは教壇、黒板、数十個の机など……ごく一般的な教室だった。
なつみはどの椅子、机にも座らず教室の隅で膝を

抱える。丸一日歩き、三人もの死体を見て、肉体、精神共にかなり疲れているのだろう。
「怖い、やっぱり怖いよ。いつ襲ってくるか分からない相手なんて……。もし、目の前に武器を向けられたりなんかしたら、店長さん——健太郎さんの敵なんて……」
『ふふっ、だいじょうぶよ』
　突然声をかけられた。自分の中のもう一人の私……ココロに。
『健太郎さんに会えなくても……心の中に健太郎さんはいる。それに、一度きりとはいえスフィーの魔法を打ち消したこともある。……ここに自分だけの支配領域を作れば負けるようなことは無いよ』
「でも……鉄砲なんかを撃ってくるのよ」
『鉄砲なんてバリアを張れば防げるわ。支配領域内なら……あなたは、いや私達はそれが出来る筈よ』
「……身も知らぬ人を贄にするなんて……」
『じゃあ、知ってる人なら殺してもいいの？　健太郎さんは殺された。今日三人も死体を見つけた。余りにも残酷じゃない？』
「でも……」
『いい、健太郎さんは死んだの。復活させるのも無理。健太郎さんを探して下手に動き回っていては逆に殺されるだけよ。だったら、せめて健太郎さんの敵を……そう決めたじゃない』
「……うん……」
『結界が張ってあると、これだけでも疲れるわね……じゃあ寝るわ。おやすみ、なつみ……』
「おやすみ、ココロ」
　こうして夜がふけてゆく……。

176　目覚め

『おはよう諸君、元気に殺し合ってるかな？』
　江藤結花と長谷部彩の浅い眠りを打ち砕いたのは、どこか遠くから聞こえてくる声だった。

そして次の瞬間、二人の眠気は吹っ飛んでしまった。
『七番　猪名川由宇』
『五十四番　高倉みどり』
二人はただうつむいたまま、放送を聞いていた。
『では諸君。俺様にそんなことを言わせなくても済むよう頑張って殺しあってくれたまえハハハハ』
辺りに静寂が訪れてから数分後、ようやく結花が重い口を開いた。
「また、またひとり死んじゃった」
「結花さんも……ですか」
「えっ？　……そうね。でもなんというか、感じ方が違うんだ。健太郎が死んだと知った時は、悲しくてたまらなかったのに」
「……」
「でも、でもね……」
結花の口調が激しさを増す。
「どうして、みんな殺し合うの？　そんな事しても、何にもならないじゃない」
「ゲームって、言ってました……」
「こんなゲームってある？　殺して、殺されて、それから、それから……！」
「結花さん……落ち着いて下さい」
「……あっ、ご、ごめんね」
体にまとわりつくような悲しみを払いのけるように、結花が言う。
「さ、とにかく行こう。そうしなきゃ何も始まらないわ」
「はい……」
彩は立ち上がると、脇に置いてあった銃を拾い上げた。夜中、雪見との戦いの時に拾ったあの銃を。
「トカレフ……ですね」
「彩さん、解るの？」
「はい。……以前、同人誌の題材に使ったんです。その時に、図書館とかでいろいろ調べて……」
「トカレフって……あっ、ニュースで見たことある。

確か暴力団とかが使ってる銃でしょ？」
「そうです。……あと、この銃は他の人が使った物なので、弾丸はそんなに残っていないと思います」
二人はパタパタと、お互いの服に付いた砂をはたき合った。
「で、どうする？　この先に進むとかなりキツそうだけど」
結花が指さした先、川上の方からは激しい水の音が聞こえてくる。
「……戻りましょう」
彩の声に結花はきびすを返し、元来た道、いや河原を歩き出した。

177　四人目

（リアンちゃんは疲労が濃くなっている。舞さんは大丈夫そうだけど、姉さんは体力がないからそろそろキツイわね）

リアンが祈るような格好で神奈とのリンクをはじめてから、数分、綾香は状況を把握しようと周囲を観察する。だが、決して目の前にいる翼を持つ少女からは視線を外さなかった。
と、少女のフォルムが変化をはじめる。まるで、苦痛に歪み、自分の中からなにかを押し出すように。
「あの子の中で二つのものが戦ってる」
「そろそろクライマックスみたいね」
もはや少女の面影など見えず、禍禍しい輝きをたたえ始めた光はいくつかに分裂し怒り狂ったように辺りを飛びまわり始めた。
『きゃあっ！』
佐祐理と南の悲鳴が重なり、二人は吹き飛ばされる。自分たちだけが狙われていると思っていた三人の心に戸惑いが浮かぶ。
「佐祐理！」
「だめよ、飛び出しちゃ！　リアンちゃんが何とかしてくれるまで耐えるのよ」

しかし、舞の動揺は押さえきれないようだ、今までのような動きが出来ていない。その隙を縫うように荒れ狂う光は舞に襲いかかる。舞が崩れ落ちるように倒れる。直撃を受けた舞は起きあがれないだろう。

一気に防御が薄くなったリアンへ向けて光が狙いを向けた。綾香と芹香は二人でリアンと光との間に身を割り込ませ、襲い来る光をなんとか防いだが二人とも弾き飛ばされてしまった。もうリアンを守る壁はない。光が一斉にリアンに牙を向ける！

その場にいた誰もが、光に飲み込まれるリアンを想像したその瞬間、薄い赤色の壁がリアンの前に現れ、牙をむく光をはじいた。

「妹がピンチのときに駆けつけない姉なんていないのよ」

地面から吹き飛ばされ、天地が逆になった綾香の視界が捕らえたものは鮮やかなピンクの髪と触覚のように飛び出た癖っ毛をもつ女性だった。

178　闇に踊る狂気、光に舞う天使。

怖い怖い怖いこわいこわいこわいこわいこわい……！

毒がその身体を蝕み、更には意識までをも喰らい尽くそうという中で、松原葵は眼前に迫る狂気と、じわじわと忍び寄る死への恐怖から必死に逃れようと足掻いていた。

ふと、その手が硬いものにぶつかる。彼女はそれを掴むと、無我夢中で目の前に突き出した。

『鋏』。

それは、香奈子から奪った毒付きの鋏だった。

危機を回避するための本能からか、葵はその鋏を香奈子の方へ向けようとする。

「……あ……くぅ……」

――が、葵の手に力は入らない。ぶるぶると震えた指先に掴まれた鋏は、力無く地面に落ちた。

「……うふふ、残念」

それを見ていた香奈子は、けらけらと笑いながらその鋏を拾い上げる。
「せっかくの武器を落としちゃったね。これはね、こうやって使うのよ？」
ひゅん。
香奈子は鋏を葵の首筋へ薙ぐ。すれすれを掠める鋏に、葵はひゅ、と思わず息を呑む。
「うふ。いい顔。……それじゃあ、今度は」
どん。
「……！」
びくん、と葵の身体が跳ねる。その右手には鋏が突き立っていた。
「……次はぁ」
恍惚の表情を浮かべ、香奈子は鋏を引き抜いた。
——月明かりに照らされた舞台にはふたつの影。
赤く染まった鋏を振り回し踊り続ける少女と。
赤い衣装に身を包み、ぴくりとも動かぬ少女。

二人は近づき、絡み合い、離れてを繰り返す。
その度に聞こえてくるのは、肉を断つ鈍い音と、弱々しい悲鳴と、笑い声。
観客のいない滑稽な劇は悲鳴が消えるまで続き、ようやく幕を下ろす。
「……」
徹底的に嬲られ、葵の五感は失われつつあった。
悲鳴を上げる力も残ってない彼女は、為すが侭にその状況を虚ろな目で見るしかない。
香奈子はその様子を見て、不満気に顔を歪める。
「つまんないな」
ぽつりとそう呟くと、いきなり鋏を振り下ろす。
「もっと泣きなよ。もっと叫びなよ。もっと怯えなよ。もっと怒りなよ。もっと、もっともっともっともっともっともっともっともっともっとぉ……っ!!」
二度、三度。ざくざくと葵を切り刻む。
——が、葵はもう反応しなかった。
「つまんないよ」

香奈子はもう一度そう言うと、全身を血に濡らす葵にそっと身を寄せて囁く。
「他の人を探すわ。――じゃあね」
そして身を離そうとして――留まり、再び彼女の耳元に香奈子は微笑みを浮かべてそっと囁いた。
「人殺しはいけないなんて言ってたけど、あなたは私に鋏を向けて、刺そうとしてたでしょ？
殺そうとしてたでしょ？
殺そうとしてたよねぇ？
――セイギノミカタ、さん？」
微笑みは爆笑となり、狂ったように笑い声を上げながら、香奈子はどこへともなく去っていった。
残ったのは、まるで人形のように動かない葵。
その口を開いて何か言おうとしたが、唇は動いてくれなかった。
その手を伸ばそうとしたが、ぴくりとも動かせず何も掴めなかった。
ただ頬を伝う涙だけが、彼女がまだ生きてることを教えてくれた。
……もっと強くなりたかった。
……どこかの学校にいる、電話帳を手で引き裂く格闘家と戦ってみたかった。
……綾香さんともう一度手合わせをしたかった。
……先輩にもう一度励まして欲しかった。
『大丈夫、葵ちゃんは間違ってねぇよ』って。
……もっと強くなりたかった。
自分の正義を、貫けるぐらいに。
――でもそれは、もう無理。
遠くの方で音が聞こえる。朝の定時放送だ。
だが、その内容はもう葵の耳には届かない。
朝日が昇り、暖かな光が彼女を照らす。
だが、その温もりも彼女にはもう感じられない。
五感が、急速に失われていく。

混濁する意識をそのままにまかせ、葵はぼんやりと親しかった人たちのことを考える。
綾香さん。先輩。そして皆さん。どうか、生きて帰ってください。
私はここで、皆さんの無事を願ってます。
……ねぇ、先輩。
私は、一人も、殺しませんでしたよ。
――誉めて、くれますか？

でも。
しぬのはこわい。しぬのはいたい。
しにたくないしにたくないしにたくない。
たすけて。
たすけてあやかさん。
たすけてせんぱい。
たすけてだれか。
だれか……たすけて。

意識が恐怖に飲みこまれていく中で、その濁った瞳が何かを捉えた気がした。
――朝日の中から、黄金色の髪の少女がゆっくりと舞い降りてくる。
その背中に、純白の翼を生やした少女が。
――それはあるいは死の間際の幻覚だったのかもしれない。
だが葵には、確かにそう見えた。

てんしみたい。ああ、ないてる。
わたしのためにないてくれてるのかな。
だったらちょっとだけ、うれしいな。

――そして、松原葵の思考は閉じられた。

八十一番　松原葵　死亡

【残り66人】

179　一つの終焉

めきめきっ……！
また一つの木がなぎ倒され、麗子の姿が露になる。
弥生が再び散弾銃を麗子に向ける。
ドン！
別方向からライフルが火を吹く。そして同時に鋭い風の音――弥生は木の陰から顔を出すことすらできなかった。
「……」
弥生は短時間の激闘にてかなり疲弊していた。まだ、生死をやりとりした戦闘は二回目。さらに今度は本格的、しかも相手は二人だ。
幸い相手も素人なのか、未だに被弾はない。次弾装填しながら、深呼吸。クールだった彼女の顔にはいつもでは考えられないほどの感情が浮かんでいた。それは由綺でさえも知ることはない。

「なんでこんなっ……！」
ボウガンに次の矢を装填。ストック残り一本。今のを入れて二本だ。麗子には信じられなかった。そう、最初に眼鏡の女を仕留められなかったときから感じていた小さな違和感。
(狙ったはずの矢が…当たらない！)
再び向こうの木々の暗い闇からライフルの光――。
「――っう」
柔らかい斜面を転がる。今の衝撃で、木の破片が麗子の横腹の柔らかいところに突き刺さる。
「この私が、なんてこと…」
最初に気付くべきだった。この島の結界とやらは、麗子の身体を確実に蝕んでいた。
(私の身体に干渉してくるなんて……バカだわ)
舌打ちしながら深山雪見がいるであろう方向に身体を回転させる。斜面を転がりながら、そのまま、一連の動作を一呼吸で終える。
(ラスト……一発！)

再び横から爆音の嵐――
（やばっ！）
散弾銃が麗子の足をかすめ、あたりに血を撒き散らした。

180　後戻り

俺は何故ここまできたのだろう。昔はこんな奴じゃなかったと思う……。どこで俺は変わった？　屋上で初めて人を殺したとき？　人を殺せる武器を手にしたとき?
……違う、『ゲーム』が始まったときから俺は変わり、狂っていったんだ。絶対俺が生き残る、手段は選ばない……はははっ、あかりはどう思うだろうな、俺はもう殺したんだ、人を何人も。
そして……俺自身も……。
「よし、いくか……」
浩之は立ち上がり歩き出した、次の獲物を求めて……もう後戻りはできない。

181　再会

死亡者報告に確かに彼女の名はあった。月代はどうしても聞きたくなかった。聞こえないように耳をふさいでいたが、はっきりと聞こえてしまった。
――桑島高子
月代はその場で突っ伏してしまった。
「(･∀･)高子さんも……死んじゃったのか」
ふいに、夕霧や高子と過ごした楽しかった思い出がフラッシュバックする。目頭が熱くなる。
「(･∀･)寂しいよぉ……夕ちゃん……高子さん……」
孤独感で胸がつぶれそうになる。少女には酷な環境であった。
味方がいない……
命を狙われる……
死んでいく大切な人達……

涙がこぼれそうになる……

しかし、涙はこぼれない。お面があるからだ。ふいに月代は今の自分の顔を想像してしまった。

「(·∀·)ぷっ！　……フフ、ははは」

笑みがもれる。

「(·∀·)こんなヘンテコなお面つけて何で泣いてるんだろ、私……おっかしい～」

何故か元気がわいてきた。これがお面の効果なのか？

「(·∀·)蝉丸なら何とかしてくれる！　だって、いつもそうだったもん！」

彼女の心の支えになっているのはただ一人の男……坂神蝉丸であった。

月代は再び歩き出した。

蝉丸は焦っていた。

先程の高子死亡の放送以来、ずっと走りっぱなしだ。

『……月代も聞いていたに違いない。一刻も早く月代の元へ……』

「無事でいてくれ、月代！」

彼の願いが天に届いたのだろうか。見慣れた後姿……間違い無い。三井寺月代だ。

「月代！　無事だったか!?」

「(·∀·)!!　……蝉丸！」

「む」

無事ではなかった。

182　死者と、罪、罰、誤解

どのくらいの時間、こうしていたのだろう？

緒方英二の命の灯火は、今まさに、消えようとしていた。襲撃者の銃弾を全身に浴びて、もう動くことさえできない。

(目がかすんで、よく見えない……)

滲む視界の中、ただ女の子が一人、自分を見下ろ

しているのがわかった。
「……痛いんだ……殺してくれないかな、俺を」
途切れ途切れではあるが、それでもはっきりとした声だった。
「……自分から命を捨てるんですか？」
少女が問いかける。
「もう助からないよ。だったら、早く楽になりたい」
笑う。自嘲の笑みだ。
少女は何も言わず、英二に向けて何かをつきつけた。それは銃だったのだが、英二にはわからなかった。
「人一人助けることが出来なかったなぁ……約束破って、すまなかったな……少年」
本当に申し訳なく思う。
「……誰かを守ると、約束してたんですか？」
「……そうだよ……でも、出来なかった」
言うと、少女は銃を下げ、言った。

「……それはあなたの罪です。苦しみ続けて、死んで下さい。……それが、あなたに与えられた罰です」
少女の言葉に英二は驚き、やがて微笑みに変わる。
「そうだな……君の言う通りだよ……」
そして時間が流れる。
「帰りたかったなぁ……理奈？」
「……誰かを助けられなかった罪は重いです」
英二の死を看取り、茜は言った。
自分の姿を、英二に重ねて。
祐一に会い混乱していた心も、今はもう、落ち着いている。
少なくとも、自分ではそう思った。
気を取り直し、歩き出す。
「あなたが、お兄ちゃんを殺したの!?」

誰かの叫び声が、その場に響いた。
その声は余韻を残し、やがて森の中に消えていく。
「……誰？」

十二番　緒方英二　死亡
【残り65人】

183　一つの終焉（中編）

隙をついて、一気に間合いを詰める影。
「――――！」
弥生が体を向けた時にはもう遅かった。もはや銃を構える暇すらない。雪見が手にしていたのはサバイバルナイフ。遮蔽物が多く、命中率が低いことを考慮して出た行動はこれだった。そしてそのまま脳天に弧を描いて振り下ろされる――――！
シュンッ!!

ほぼ同じ速度で割りこんでくる風を切る物体。
「――――!!」
幾らかの恐怖と死線を乗り越えてきただけでこんな動きができるのだろうか。むりやり体をよじってひねる。
「ぐっ！」
刹那、傷ついた胸に走る鈍い衝撃。そして先程まで雪見の頭があった空間を音速で通りすぎる白い光――弧を描いたナイフはわずかに狙いをそれ、柔らかい地面に突き刺さった。その間、弥生は腰に下げていた凶器をそのまま雪見に叩きつける。
ガシャーン!!
思わず差し出した雪見の左腕が見る間に赤く染まっていく。
「うああっ！」
押し付けた反動で、そのまま後ろに転がり、森の闇へと消えていく弥生――。今、散弾銃は押そうが引こうが弾を撃てる状態になかったからだ。

184　エンジン始動

瑠璃子の殺害後、浩之は再び資材置き場に戻っていた。まだなにかあるのではと思ったのだ。幸い資材置き場には人影はなかった。浩之はそのプレハブ小屋に入ると今後の作戦を考えていた。

――生き残るために他者は全て殺す。

これは絶対条件であった。では誰から殺すか。そう考えた時浩之は今まで殺した人間の共通項を思い出した。そして思った。

――あいつらはみんな女だった。ならばこれからも女を狙えばいい。

男と行動している奴はまとめてダイナマイトで吹き飛ばせばいいんだ。そうと決まれば行動開始だ。

「その前にやらなきゃならないことがあるな」

浩之はそう言うと資材置き場の各所に罠を張った。

資材置き場入り口には、扉を開くと立て掛けてある鉄パイプが倒れてくるように。コンテナ入り口には、やはり扉を開くと上からペンキが降ってくる仕掛けを。そして、各所に落とし穴（底に鉄パイプ付き）を。

これで自分と同じ事を考える奴が来ても得られるものはない。……命を失うだけだ。

罠を張り終わった浩之は体が痛まない事に気がついた。

――体力が戻ってきているんだ。

浩之は資材置き場を後にして再び走り出した。

殺戮者による真の恐怖が始まる――――

185　決別

探し物は、本当に、どうしても必要なときは見つからずに、忘れたころに見つかる、と聞いたことがある。

だとすれば、僕が一瞬でも彼女のことを忘れたか

ら見つけることが出来たのだろうか？
　酷い皮肉だ、と思った。

　不意打ちを受けたのだろうか。一見すると普段と変わらないように見える表情のなかに見える、驚愕と、怯えの影。
　僕はそんな瑠璃子さんの表情を見ているのがとてもつらくて、そっと手で、表情を穏やかなものにしてあげた。
「……長瀬さん」
　声。
　穏やかで、優しさに満ちた、そんな声に僕は呼ばれた。
　僕は、その声の主を知っている。自分の手が穢れるのも構わず、僕と共に歩んでくれる人。
　ゆっくりと、そしてはっきりと、僕はそのひとの名前を呼ぶ。
「……天野さん」

　沙織ちゃんも、瑞穂ちゃんも、月島さんも、そして瑠璃子さんも、みんな死んでしまった。僕のそばに残ったのは、この島に来るまで一度も会った事も無かった彼女だけ。
　無理をして笑顔を作り、彼女のほうに向き直る。無理をしているのはありありだし、結局のところ彼女はそんな僕の心境も全てお見通しなんだろう。
　土を払い、立ち上がる。
「うん、大丈夫……大丈夫。あまりここに、留まるとまずい。そろそろ……行こうか」
　改めて言うまでもなく全然大丈夫じゃない。でも、天野さんは何も言わない。
　正直この場面で慰められても、鬱陶しいだけだ。思いやりに感謝する。
　そして、ゆっくりと、天野さんに近づいて、ぎゅっ、と、その肩を抱いてみた。
　あぁ、我ながらぎこちない動作だ。でも、天野さんはすんなりと、それを受け入れてくれた。

彼女は僕を支えてくれる。心の面でも、カラダの面でも。
最後に、もう一度だけ、後ろを振り返る。
死んだ人間が動くなんてこと、ある筈もないわけで、先ほどと変わらない姿の瑠璃子さんが、横たわっていた。
その目は、こちらを見ているような気がする。勿論それは、気のせいで。
『助けて、長瀬ちゃん』って言ってる気がする。勿論それも、気のせいで。
死んだ人間は、もう二度と、戻ってくることはないし、助けを乞うことも出来るはずはない。
それが、この世のルールだ。
僕が後ろを振り向いたら、瑠璃子さんがいつもの儚げな笑みを浮かべて佇んでいるなんて、そんな事あるわけない。
それでも僕は、振り向いた。それは未練だ。そんなこと、もうこれっきりにしよう。

僕は瑠璃子さんの事を忘れることなんて出来ない。だけど、もう戻ってこない瑠璃子さんの幻を追いかけるようなことをしてはいけない。
だから、さようなら、瑠璃子さん。

「……いこう」
僕らは歩き出す。
その道は、間違いなく、現実。
僕は大切な人を守れなかった。口にした『覚悟』の意味だって薄っぺらいものだった。
だけど、せめて今、僕の隣にいる人だけは。
出来る限りの事をして、守ってやろうと、思った。

186 宝刀、一閃

きよみと別れてから、再びマナは林道を歩き始めていた。こんな時でなければ、この静かな道は散歩

するにも気持ちいいのだろうが、そうでなくても、昨日まで歩いていた森の中に比べればよほど歩きよいと言えた。
（デートコースにもアリっちゃアリよね……一人歩きにはちょっと色気がなさすぎるけど）
まだ痛む足をかばいつつ、何回か休憩を入れながら数時間ゆっくりと歩くと、遠くに大きな建物が見えた。マンション、だろうか——無機質な、四角い建物がいくつか並んでいるようだ。
（住宅街、みたいなトコかしら……会いたい人か会いたくない人かは別として、誰かしらいそうね）
意識せず歩調が速くなるのは、やはり何らかの期待のためか。ほどなく、道の終わりが見えてきた。
林道からマンション街に差し掛かる、やや開けた場所で。
——マナがその姿を認めた時には、既に黒光りするマシンガンの銃口がマナを狙っていた。
（ずっと見られてた……？　だとすればとんだ抜け作っぷりだわ……）
取りあえず両手を上げ、敵意のないことを示してみる。しかし、そんなことをしたところで、相手がゲームの『参加者』であったなら、何の効果もないことをマナは知っていた。
（でも、あんなご立派な武器なんか持ってて、殺す気ならわざわざ姿を見せる理由なんてある？　そうね、殺す前に脅して慰み者にするとか……私を？　む……笑っちゃうわよ）
著しく起伏に欠けた胸元に一瞬視線を落とし、自嘲する。相手に殺意がないことは本能的に感じ取っていたのかもしれない。マナは、思ったよりも自分が落ち着いているのに気づいた。
手を上げたままで、こちらに銃を向ける男——住井護を観察する。全身に葉や折れた枝がくっついているのは、ずっと森に潜んでいたためだろうか。銃口の向こうの強張った表情は、凶器を向けている人間のものと言うよりは何故か向けられている側のそ

れのようにマナには思われた。
（この人も、何かしらドラマを体験してきてるんでしょうね……）
それも、決して愉快なドラマでは有り得ない。マナは目の前の見知らぬ少年に悲しい同情を感じた。
と、住井がゆっくりと口を開いた。
「人を、探している」
声が上ずっていた。自分でもそれに気づいたのだろう、少し呼吸を整えてから、再び言う。
「人を探している。女の人だ。美人で優しい。髪の毛はそれほど長くなくて、背は普通くらいだ。デニムの服を着ている」
それだけ一気にまくし立て、返答を促すような素振りを見せる住井に、マナは内心で呆れていた。
（この人、かなりキテるわね……そんな説明で本気で人が探せると思ってんのかしら）
そんなことを思われているとはつゆ知らず、住井はあくまで必死だった。
「似た人を見かけたとかでもいい。何か知ってたら教えてくれ。俺が、絶対に護らなきゃいけないんだ……美咲さんは」
最後の言葉はほとんど自分に言い聞かせているような調子だったが、その小さな声はマナの耳にも届いた。
「美咲さん？」
「知ってるのか!?」
思わず繰り返した言葉に、住井は掴みかからんばかりの勢いで詰め寄ってくる。眼前にアップで迫る銃口が、怖い。
「あなたの知ってる人がどうかは知らないけど……澤倉美咲って人なら先輩にいるわよ。ちょうどあなたが言ったような感じの人」
「さわ……っ！　澤倉だな!?　澤倉の美咲さんなんだな!?」
「ちょっと、唾が飛ぶわ……そうよ」
住井の顔がみるみる喜色に染まっていく。マシン

ガンを取り落とし、パキッと指を鳴らした。
「お嬢ちゃん、君に逢えて本当によかった！　それで⁉　美咲さんはどこにいるんだ⁉」
「落ち着きなさいよ」
小躍りして全身で喜びを表現する住井に、マナは冷めた口調で言った。
「あなたが知ってるその美咲さんは、多分私の知ってる澤倉先輩だと思う。でも、ここに来てからは見てないし、どこにいるかなんて知らないわよ。だいいち先輩がここに連れて来られてたなんて今の今まで知らなかったんだから――」
「んなっ……！」
住井は素早い動作でマシンガンを拾い上げた。
一度掌のなかに捕まえた希望の感触は、消えてしまうことでより激しい感情の渦に住井を投げ込むことになった。
「畜生、知らないなら知らないと最初から言え！　この――」
激昂した住井が吼えた。ただの勢いか脅しか、それともパニック状態に陥っていたのか、拾い上げたマシンガンの銃口をマナに突きつける。マナの背筋に冷たいものが走った。
殺人者とその被害者にもなり得た二人の関係は、その瞬間に住井が発した一言で大きく転換した。
「この――クソチビ！」
殺されるかも、とかそういうことを一切抜きにして、先に身体が動いていた。条件反射だった。
突きつけられた銃身にすっと手を伸ばすと、住井があれっ、という顔をしている隙に、思い切り九十度左に捻る。ごきっ、と嫌な音がした。
「ぐえっ！　ゆ、指がぁ！」
「誰がクソチビよ……」
――どいつもこいつも、さっきの女だってそう、どうしてこうも人を馬鹿にした口を叩くんですか。
そりゃあ確かに私は背も低いし胸も小さいし全体的に女性として魅力的な身体の持ち主だとは思ってま

せんよ。だから、まぁ、私自身スタイルのいい女性に憧れる気持ちがないわけでもないし、百歩譲ってあの女に言われるのは許すとしても……許さないけど、ともかくこんな軽そうな割にモテなさそうみたいな、しかも初対面の奴にチビ呼ばわりされる筋合いは全くないと思うんです――
　以上の思考を瞬時に回転させた結果、しなる鞭のようなマナの細い足はほとばしる怒りのままに唸りをあげた。
「このっ……三枚目！」
「――――ッ！」
　伝家の宝刀、必殺のローキックが指を押さえて悶える住井の脛に見事クリーンヒットした。鋭い痛みに言葉を発することもできず、住井はその場に倒れ込む。
「きょうびの男は女の子にマトモな口もきけないわけ？　世も末ね」
　激痛にのたうち回る住井を見下ろしながら、マナは地面をつま先で軽くトントン、と叩いた。

187　一つの終焉（後編）

「楽しめたかしら？」
　石原麗子は余裕の表情で雪見を見上げた。すでに傍らのボウガンに矢はついてはいない。彼女の足は先の被弾で立ちあがれない程のダメージを負っていた。
「――そうね。どうして生きてるのか不思議なぐらいよ」
　雪見が片腕でライフルを構え、一歩一歩、麗子に歩み寄る。彼女の左腕は先が真っ赤に染まり、血が地面にまで滴っていた。罠はまだ左手に噛みついたままだ。取るまでもない。感覚がないのだから。胸の傷もじくじくと雪見を蝕む。まさしく満身創痍という言葉がぴったりだった。
「最後に一つ聞かせて」

雪見は、麗子の胸の真上からライフルを押し当てる。
「川名みさき、上月澪……この両名に聞き覚えは？」
まるでそれは日常会話のように。
「放送で流れたコ達ね……知らないわ。それに、私はまだ一人も殺してないもの」
当たるはずの矢が当たらない。かろうじて最後の一発の矢が狙い通りだったぐらいだ。結局よけられてしまったが。
「そう」
短い答え。麗子は余裕の表情を崩さない。
「あなたは、なぜ戦っているのかしら？」
「……」

五十年前……この孤島で殺戮ゲームが行われた。
それがたぶん第一回目の狂気。
誰もいない無人の廃屋でぶるぶると震える少女。
『いたぞ。へへへ、上玉じゃねぇか……殺す前にいただいちまうか……』
『いや、いやぁっ！』
悲鳴をいくらあげようともやむことの無い凌辱の宴――気がついたら、拳銃を片手に、血まみれで立ち尽くしていた。それがたぶん最初の殺人。狂気の始まり。

「せいぜいがんばるのね。お嬢ちゃん」
「言われなくても……ね」
ライフルを地面に放ると同時に、サバイバルナイフをふり上げた。
(まあ、死ぬときはあっけないものよね)
麗子が薄く笑う。そして――
石原麗子、何が望みで何が目的で……それはもう、おそらく誰にも分からない。

六番　石原麗子　死亡

【残り64人】

188　結界の攻防

　スフィーは到着と同時に、流れ出る魔力をかき集めながら芹香の背中を叩く。
「三分耐えて。リアンを連れ戻すから」
　芹香はコクンとうなずくと、結界の強度を増した。
「何で連れ戻すのよ！」
　綾香がスフィーにくってかかるが、スフィーはそれを相手する時間も面倒だと言わんばかりに怒鳴りつける。
「結界内の力が強すぎるからよ！　リアンじゃ無理だし、今の私でも無理！　この子に対するにはそれなりの準備と時間が必要なの！」
　そう言いながら呪文詠唱に入ったリアンを南が眺め見る。
「――なるほど。そういう事」
　南の呟いた言葉を聞き取れたのは、すぐ側にいた佐祐理だけだった。
「三分で戻るわ。戻らなかったら私達二人は見捨てて、ここから待避して」
　そういうと、スフィーはリアンに寄りかかるように倒れ込んだ。みるみるうちにスフィーの体がしぼんでいく。魔力＝体力と言わんばかりに。
「芹香姉さん大丈夫？」
　綾香の問いかけに対して芹香は汗を流しながらコクンとうなずくだけだ。その瞬間も神奈備命からの攻撃は一向に止まない。
　約束の三分が経過しても、リアンとスフィーは未だ意識を取り戻さなかった。
「舞!!!!」
　バリーーーン
　佐祐理の悲痛な叫び声と同時に――状況は一変した。牧村南が懐から手裏剣を投げつけるのと、芹香が保っていた結界がはじけるのはほぼ同時だった。
　南の投げた手裏剣は舞の体に向かい突き刺さったか

に見えた。
「ぽんぽこタヌキさん！」
舞はそう呟くと南に向かって一気に詰め寄る。
「あれを捌ききれるの!?」
南は捨て台詞を吐きながら一気に後ろへ飛びすさりながら手裏剣を投げつける。狙いはリアン。同時に四枚投げつける。そのうち二枚を舞が弾き落とし、一枚を綾香が踵ではじき返すが、最後の一枚がリアンの腕にグサリと突き刺さる。だが、リアンはピクリともせず、ただ刺さった部分から紅い血が流れ出す。
「あなた！　どういう了見なの!?」
怪我をしたリアンを抱きかかえながら、綾香は南に向かって怒鳴りつける。
「ふふ。内緒です……よっと」
舞の繰り出す竹槍を身軽にかわしながら南は綾香の問いかけに答えを返す。そして、そんな最中、暴走した神奈の光弾が、あたり一面に降り注ぎ始めた。

芹香は必死に断片的な防壁を形成してスフィーを守り続ける。
「うわったったったった！　舞さん。姉さん！　これ以上ここにいるのは無理よ、早く逃げて！」
綾香の問いかけに首を振る芹香。しかし、そんな芹香を捕まえて一気に走り出したのは芹香が守ろうとしたスフィーだった。
元の身長から比べると三分の二程度になってしまったろうか、見た目すでに小学生という状態までスフィーはしぼんでいたが、それでも芹香と自分を守る結界をかろうじて張りながら、一気に山を下る方向へ走り始めた。
「遅れてゴメン！　この山を下った所に小屋があったからそこで落ち合おう！」
綾香はスフィーの言葉にうなずき、スフィーとは別の方向へ下っていった。綾香の腕に抱きかかえられていたリアンは苦しげな息をもらしながら、未だ気を失っている様だ。

他の人も気になるけど、今の優先順位はこの子を安全な場所で診ること。綾香は自分で自分に言い聞かせ、一気に山を下る方へ走っていった。

「あとで山を降りたところで落ち合いましょう！　絶対来るのよ！」

気を失ったリアン（九十番）を抱えて駆け去る来栖川綾香（三十六番）の声に、川澄舞（二十七番）は頷くことで答えた。

言葉を返す余裕はない。

「舞さん、すみません。せめてあなただけでも片付けないと……運営スタッフって、意外と大変なんですよ」

その呑気な口調とは裏腹に、牧村南（八十番）の手から繰り出される手裏剣は、正確な狙いで確実に舞を追い詰めていく。

ひとつ、ふたつ、みっつ。

飛ぶ虫を払うかのようにそれらを打ち落とすも、竹槍ではやはり分が悪い。

あと幾つだろう。向こうの手持ちが尽きれば、まだ勝算はあるのに――

「佐祐理、早く逃げて！　私は死なないから。必ず会いに行くから！」

後方に取り残された佐祐理へ叫んで、舞は一気に間合いを詰めた。攻撃を引きつけるためだ。

――自分が囮になる。

これしか全員を逃がす方法はないと判断した結果の、捨て身の戦法。

向かってくる無数の手裏剣をぎりぎりのところで叩き落とし、なんとか時間を稼ぐ。

辛うじて、と評するのがふさわしい、そんな戦い方だった。

「皆の所へは、行かせない……！」

呼吸を乱しもせず、毅然と言い放つ舞。

「あらあら、美しい友情」

竹槍一本でお見事ですね。微笑んで、南が懐から

脇差を取りだす。
「だけどね、こういうふうにも——使えたりもして」
気づいたときには、遅かった。
竹槍が右手の脇差しを弾くより早く、それは投げ放たれていた。
……倉田佐祐理の居る、方向へ。

ざっ、と。
嫌な音がした。肌を裂く音がした。
「誰でも良いんです……ただ、数を減らせばいいだけ」
「佐祐理ッ!!」
南の呟きと舞の叫びは、ほぼ同時だった。
だが、舞は振り返れない。振り返れない。
倒れ込む佐祐理の姿がありありと想像できるのに。
今すぐにでも駆け寄りたいのに。
だけどこの女性が——そうさせてくれない。

「よそ見したらいけませんよ、舞さん？」
二本めの短刀を片手に携えた南は、逆に攻勢を激しくしていく。
動揺した舞が社の壁際に追い詰められるのに、そう時間はかからなかった。
「く……！」
刃を無理に受け止めようとした竹槍がすぱり、と切れ、半分以下の長さになる。
絶対的に不利だ。ここはなんとか退くしかない、だけど佐祐理を置いてなんていけない……！
必死で刃の軌道から身をかわしながらも、舞は逡巡していた。
この女性が豹変したとき、初めに無理にでも遠ざけるべきだった。
私のミスで、佐祐理が傷ついた——
その後悔は焦りを呼び、手元を狂わせる。
にこやかな表情を崩さぬまま斬りかかってくる南の刃が、舞の胸を軌道上にとらえた、

まさに、その時。
「武器、捨ててくださいね」
「……っ……」
舞の身体から、血液は吹き出してはいない。
がさり、と草に何かが擦れる音。
今度は逆に完全に不意を突かれ、南が短刀を取り落としたのだ。
そして舞がその瞳にうつしたものは。
南の胸に、銃口を合わせた佐祐理だった。
「舞に、ひどいことしましたね？　しましたよねーっ？」
腹に。続いてふたたび胸に。今にも火を噴きそうなデザートイーグルの銃口が、向けられている。まるで確認するように。
その右足は血に染まっているのに、微塵も痛みを感じていないかのように、笑みさえ浮かべながら。
学校で魔物と対峙していた自分と同じ、冷たい瞳で。
「佐祐理は、許しませんよ」
「やめて……やめて、佐祐理」
「どうして？　このひとは皆を殺そうとしたんですよ？　……何より、舞のことを」
「分かってる、分かってるけど……佐祐理、」
怖い、とは言えなかった。きっと佐祐理が傷つくから。
だけど佐祐理の目は尋常ではない。
何の色も見えないような、凍えそうな目は、今までに見たことがない――――
そう口に出しかけて、寸前で言葉を飲み込んだ。
だめだ。
それを言ってしまえば、たぶん佐祐理は壊れてしまう。
「いいですか？　三つ数えるうちに、武器を捨ててくださいね。でないと全弾撃ち込みますから」

確信に近い直感で、舞は声を喉で殺した。
「ひとつ」
引き金にかかった指に力が込められるのが見えた。
「ふたっつ」
すう、と佐祐理の目が細まる。
「みっつ」

「……バカにしないでください」

ほぼ同じ瞬間、銃声が響き渡り、南が隠し持っていた手裏剣が佐祐理の肩を掠めた。
「もう、私は行きますね。色々調達しなくちゃいけないものが増えたみたいです」
真っ赤な血。佐祐理の血。また怪我をさせた。混乱が止まらない、止まってくれない。
そして涼しい声で笑う南は、無傷だった。
この人はプロだ。動きが違う、速い。だからきっと佐祐理が銃を撃つ予備動作でバレた。

だって佐祐理は普通の女の子だ。自分とは違う。やさしくて料理上手でおしとやかでずっとうらやましくて、こんな、こんなに重そうな銃なんかまともに使えるはずがない。
「行かせません……あなたは、舞を傷つけた罰を受けるんです……っ！」
「駄目、駄目だ佐祐理！　動かないで！」
これ以上動くと、傷口がどんどん広がってしまう。半ば怒鳴るようになった舞の叫びに、佐祐理はびくりと顔を向けた。
その隙を見逃すはずもなく、南が森の奥へと姿を消してゆく。
スフィーたちが逃げていったのとは逆の方向だったが、油断は出来なかった。
だが。
「……手当が、先だと思う」
「そうだね……でも、佐祐理は大丈夫だから」
「大丈夫なわけない。右足の傷、血を止めないと」

言って、舞は自分のデイパックからタオルを取りだす。包帯替わりにするつもりなのだろう。
「ごめんね舞、足手まといになっちゃったね……」
「謝らなくていい。いいから、動かないで。私は佐祐理に無理をされるのが一番悲しい」
「舞……」
「佐祐理の、ばか……っ!」
血と土で汚れた制服を掴んで、舞は嗚咽を繰り返した。
「うん……佐祐理は、ばかだよ」
「……ばか……」
「だけど、守ってくれてありがとう……」

だがしかし、彼女たちはまだ気づくはずもない。
南の手裏剣に遅効性の毒が仕込まれていたことに、経験の差はあれど女子高生が気づけるはずもない。

処置が終わる。舞が顔を上げる。佐祐理も気丈に痛みを押し隠しながら、その視線を追う。
——空が白み始めていた。

189　カナシミの深さ

それは、住井がマナと会う少し前の出来事。
叶わなかった約束。結果。

＊

嘘だ…………
嘘だ、嘘だ…………
「嘘だあぁぁぁぁぁぁ!!」
美咲さんが死んでいる。
美咲さんが……
ミサキサン……

そんなこと……
あっていいはずないじゃないか……
だがそれは自分のせいで。
自分が別れたから、結果的に美咲さんを見殺しにしてしまった。
その事実が、俺には耐え切れなくて。

そうだ……。
こんなバカなこと、あるわけないじゃないか。
……はっ、俺も疲れてるんだ。
そうだよ、あれは幻覚だ。幻覚なんだ。
ほら見ろ、目の前には何も、何もないじゃないか。
昏い昏い、『何か』があるだけだ。
どこにいるんだ、美咲さん。
待ってろ、絶対、探し出してやる！
そしてあの男……見つけたら……殺す。

間違っていることはわかってても、事実の前には、理性はあまりにもちっぽけで。
俺は、心を閉ざした。
それが、俺の最後の思考。

＊

それは、住井がマナと会う少し前の出来事。
自分を、殺人者を、何もかも認めたくなくて、
精一杯の強がりを放棄して、
記憶からなかったことにした出来事。

そして今、住井はこうして、観月マナに捕らえられている。

190　哀に時間を

何処から、私はこうなってしまったのだろう？

――死のうとしたときだっただろうか？
「死にたいのに……」
太田香奈子は、死ねなかった。
これで終わってしまうと考えると、どうしても足が竦んでしまい、断崖絶壁からの最後の一歩を踏み出すことが出来なかった。
「瑞穂……ごめんね……」
からっぽになったはずの心がきりきりと痛み、涙が何故か溢れた。
ここにはもう瑞穂はいないのに。
あの人はきっと振り向いてくれないのに。
どうして、私は生きようとするんだろう？
何処から、私はこうなってしまったのだろう？
――あの娘を襲ったときからだろうか？
「弱肉強食。簡単な自然の摂理よね」
そう言って、けらけらと香奈子は笑う。
「……わかりました」
名も知らぬ少女は顔を伏せたまま静かに返す。
「あなたがあの人を殺そうというのなら」
少女はぐ、と両の拳に力を込め、すっと流れるような動作で構える。
「この私が、お相手します」
「……ふ。ふふふふふ……」
笑いがこみ上げた。
――さぁ、ここからは狂気の領域。
理性の鎖を断ち切って踏み込もう。
瑞穂の居ない現実を捨てて。
あの人に愛されない現実を捨てて。
目の前の少女を生贄に。
つまらない現実を離れ、そのすぐ裏側にある別の世界の扉を開こう。
「……格闘家の拳って、人を殺せるのかな？」
出来るなら、手伝って？

私が幸せになるために。

何処から、私はこうなってしまったのだろう？
——月島瑠璃子。彼女との再会からだろうか？

「瑠璃子……さん？」
生くことも、逝くことも出来ずに、膝を抱えて蹲っていた香奈子に声をかけたのは、恋焦がれるあの人の妹——月島瑠璃子だった。
「久し振り、だね」
そう言ってくすくす笑う彼女は、この島に来る前と何ら変わりがなかった。
——それが少しだけ、怖かった。
「香奈子ちゃんは、ひとり？」
「う、うん。……瑠璃子さんは？　月島さんと一緒じゃないの？」
香奈子の問いに、瑠璃子は首を振る。
「じゃ、じゃあ、月島さんを探さないと。ほら、月島さん、きっと瑠璃子さんのこと心配してるよ？」
言ってて、香奈子は自己嫌悪に陥る。
私はあの人の何なんだろう？　……心の奥底で、何やらどろりとしたものが渦巻いた気がした。
だが、香奈子の呼びかけに瑠璃子は首を振る。
「だめだよ。……だって私は、〝お仕事〟しないといけないから」
「……お仕事……？」
呆けたように呟く香奈子に、くすくすと瑠璃子は笑いながらこう言った。
「そう。香奈子ちゃんを、助けてあげる」

何処から、私は演じてきたのだろう？
——殺人を犯す異常者に、いつから？

切り刻む。切り刻む。切り刻む。切り刻む切り刻む切り刻む切り刻む切り刻む切り刻む切り刻む。
弱いモノを切り刻む。

自分の心を切り刻む。
それはとても、ぞくぞくした……！
ざくざくと音を立てて目の前の彼女が壊れてく。
がしゃがしゃんと音を立てて私の心が壊れてく。
壊れてしまえ。何もかも。
反応を示さなくなった彼女の身体。それでも私は
破壊衝動が抑えきれず、彼女の心も砕いてしまう。
「人殺しはいけないなんて言ってたけど、あなたは
私に鋏を向けて、刺そうとしてたでしょ？
殺そうとしてたでしょ？
殺そうとしてたよねぇ？
そうなんだよね？
――セイギノミカタ、さん？」
モノに成り果てた彼女にそう囁いたときに、私は
何て酷い人間なんだろう、なんて思ってしまった。
何処まで、私は救われるのだろう？
――月島瑠璃子。彼女は私を救ったのか？

「さっき香奈子ちゃんは言ってたよね。もう、死に
たいって」
「……いや、それは……」
「言ってたよね？」
その静かな迫力に、香奈子は思わず頷く。
「……う、うん」
「……だったら、殺せばいいんだよ？」
「え？」
「香奈子ちゃんが死ぬのと、他の人が死ぬのって、
ひとりぼっちになるって意味では一緒だと思うんだ。
……違う？」
「……」
「ここから誰もいなくなれば、香奈子ちゃんは死ぬ
必要はなくなるよ。だって、孤独に死んでいくのと
孤独に生き続けるのって同じなんだよ。違う？」
違う――と、思う。自分の倫理観やら何やらが総
動員で警鐘を鳴らしている。
――でも。

「そう……かも、しれないね」
香奈子のその言葉に、瑠璃子は微笑んだ。

何処まで、私は幸せだったのだろう？
——いや、そもそも全ては不幸だったのでは？

「幸せになる？」
「そうだよ。それが、香奈子ちゃんの幸せ」
彼女の話を聞きながら、私はねっとりとした夢の中へ落ちていく。
今日も学校へ行く。
今日も学校へ行く。
……。
今日は学校には行けない。
人を殺さないといけないから。
弱い奴を殺さないといけないから。
だから、今日は人を殺す。
苦痛が支配するのか、快楽が支配するのか。

永久に形の定まらない混沌の世界かも知れないし、ただ果てしない虚無だけが広がる闇なのかも知れない。
——そんな、狂った精神の世界。
今日は、私はそこへ行く。
……。
親友を失い、恋人をも失いかけて。現実に絶望し死を選ぼうとした太田香奈子をそこへ導くために、月島瑠璃子はそっと囁いた。
「そう……これが、香奈子ちゃんの幸せ」

何処まで、私は演じていたのだろう？
——いや、そもそも私は演じたのか？

「人殺しはいけないなんて言ってたけど、あなたは私に鋏を向けて、刺そうとしてたでしょ？
殺そうとしてたでしょ？
殺そうとしてたよねぇ？

そうなんだよね？
――セイギノミカタ、さん？」
モノに成り果てた彼女にそう囁いたときに、私は何て酷い人間なんだろう、なんて思ってしまった。
嘘だ。
そんなことは思いはしなかった。
本当に？　――本当に。
本当に、人を殺す快感に、酔いしれてました。
何処まで、私は現実を見ていたのだろう？
――これは、何時の、何処のお話？

「香奈子ちゃんが死ぬのと、他の人が死ぬのって、ひとりぼっちになるって意味では一緒だと思うんだ。……違う？」
「……」
「ここから誰もいなくなれば、香奈子ちゃんは死ぬ必要はなくなるよ。だって、孤独に死んでいくのと孤独に生き続けるのって同じなんだよ。違う？」
「違う……と、思う」
その言葉に瑠璃子は、残念そうにぽつりと呟く。
「そう。……じゃ、瑞穂ちゃんはのたれ死にだね」
「……なんですって？」
香奈子が思わず気色ばむ。
「瑞穂ちゃんは、親友の香奈子ちゃんに捨てられて惨めな一生を終えてしまったんだね。何の意味も無い、無様な死に様だったね？」
「やめて！　幾らあなたでも、瑞穂を侮辱することは許さない！」
「だったら、香奈子ちゃんがやるんだよ？」

何処まで、私は現実にいたのだろう？
――狂っているの、私の過去と現在と未来が？
「でも、私には人を殺せるだけの力が、無い」
持っている武器といえば赤旗だけだ。これで相手

を殴り殺す？　馬鹿らしい。
　香奈子の言葉に、くすくすと瑠璃子は笑う。
「じゃあ、自分より弱い人を殺そうよ」
「え？」
「強い人を殺そうとするからだめなんだよ。香奈子ちゃん、弱肉強食、って言葉知ってる？」
　うん、と香奈子は頷く。
「それと一緒だよ。私たちは強くないから、強い人に殺される。だったら、私たちより弱い人を殺していけばいいよね？」
　——ああ、そうだ。
　そんな簡単なことに気付かなかったなんて。
　何処から、私は殺人者になったのだろう？
　——何処で、引き返せなくなったんだろう？
　瑠璃子はデイパックをごそごそと探ると、中から布に包まれていた鋏を取り出した。
「これは？」
　受け取りながら、香奈子はそれをちょきちょきと切る真似をする。
「気をつけてね。その鋏、毒が塗ってあるんだ」
「毒？」
　ぴたりと、持つ手が止まる。
「そう。傷口に入れれば、三十分で死んでしまうよ」
　毒と聞いて躊躇する香奈子。
「大丈夫だよ。私が解毒剤を持ってるから」
　瑠璃子の言葉に、香奈子はほっと安堵する。
なんだ。解毒剤があるのなら大丈夫だ。
「あの……その解毒剤、私に渡してくれない？」
　しかし瑠璃子はその願いを拒否する。
「他にも毒を塗った武器を渡した人がいるんだよ。だから、私が持ってないと。ごめんね」
　何処まで、私は私だったんだろう？
　——私は、幸せになるんだよ……ね？

「でも……どんなに足掻いたって、香奈子ちゃんは幸せにはなれないんだけどね」
そう呟くと、瑠璃子はくすくすと笑った。
その視線の先には、頼りない足取りで進んで行く香奈子の背中があった。

何処まで、本当ですか？
——私は、どうなったのですか？

やがて。いつの頃からか私は、世界から音と色彩が失われてしまっていることに気付く。

何処かに、私はいますか？
——おかしいんです。私が私で無いようで。

どれが真実で、どれが虚構で。
どれが私で、どれが他人で。
どれを殺して、どれを生かして。
何をどうすればいいのかがわからない。
ああ、わたしは、なにを、どうすれば——？
教えてもらおう。
月島瑠璃子に。
殺してしまおう。
月島瑠璃子を。
あれ？
わたしは、なにを、どうすれば？
なには、どうなって、わたしを？
セイギノミカタをころして、そして？
だれをどうすれば？　なにをどうすれば？
よかったんだっけ？

何処かに、私はいますか？
——私は、私を探しています。

私が死ねないんで、殺してあげないと。

月島瑠璃子を探さなきゃ。
殺さないと。
太田香奈子を探さなきゃ。
殺さないと。
次の獲物を探さなきゃ。
殺さないと。
弱いやつを探しに行こう。
殺さないと。
自分を、瑠璃子を、弱い奴を、誰を？
殺さないと。
月島瑠璃子を――。
殺さないと。

何処かで、私は――。
――死なないといけないのでしょうか？

「いひぃいひぃいひぃ……」
ほら、おかしいでしょ？

だから、殺さないと。
「ころしたころしたころした……」
ああ、もうダメですね。
死んだほうがマシです。
早く殺してください。
早く死んでください。
転がり落ちるんですよ。
このまま、ごろごろとどこまでも。
――ああ、もう見てらんない。
どうせ、ロクな死に方しませんから。
もう、目を背けていいですか？
私は。
私は、こんな私が――嫌なんです。
だからどうか見ないで。
だからどうか見せないで。
私を私と思わせないで。
こんなの違う。
信じてください。

私は、狂ってなんかいない普通の──。
「コロシタノコロシタノヒフフヒヘ……！」
違う！
違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う！
こんなの、私じゃない！
私は普通の、普通の……っ！
殺さなきゃ！
こんなの、私だなんて思われたくない！
早く、早く殺さなきゃ！
違うんです！
こんなの私じゃない！
信じて！　信じてください！
殺さなきゃ！
早くこいつを殺さなきゃ！
早く私を殺さなきゃ！
──こんな私は、きっと嫌われる！
何処かで、私を──。

私を、見ませんでしたか？
きっといると思うんです。
こんな狂人じゃない、太田香奈子が。
──ああ、そうだ。
瑠璃子さんに聞けばいいのか。
彼女なら、きっと教えてくれる。
私が、どこにいるのかを。
──。
きっかけは、相原瑞穂の死だったのか。
それとも、月島瑠璃子との接触だったのか。
いや、松原葵を襲った時か。
──きっと、全てが原因なのだろう。
暗闇の中、刃をどす黒く染めた鋏を握り締めて少女が歩いて行く。
──崩壊へ。

191　崩壊、そして死

「いひぃいひぃいひぃ……」

香奈子は彷徨いながらどこをどう歩いたのか住宅地に来ていた。右手には毒の塗られた鍬を持ち足取りはおぼつかない。時々口から奇声を発しその場でケタケタと笑い出す。

「ころしたころしたセイギノミカタタタタコロシタノコロシタノヒフフヒヘ」

香奈子の精神は松原葵（八十一番）を殺害したのを境に崩壊の下り坂を転がり続けていた。月島瑠璃子（六十番）と再会できなかった事もその崩壊に拍車をかけていた。

やがて角を曲がりそこで見た血溜まり、そして導かれるようにフラフラと入っていった民家の一室に転がる瑠璃子の死体――

「イヒィイィーッ瑠璃子瑠璃子瑠璃子瑠璃子るりこルリこーッ!!」

それが彼女の口にした最後の言葉だった。

……しばしの沈黙。そして……

あとには瑠璃子の死体に重なるようにのどに鍬を突き立てた香奈子の死体が転がっているだけであった。

十番　太田香奈子　死亡（自殺）
【残り63人】

192　何も変わりません

時間は遡る……

金だらいネタ爆笑後、かなり移動した三人は巡り巡って水場の上の高台まで登ってきていた。周辺に人の気配はなく、見晴らしがいい。こんな情況でなければ風流と縁のない彼らであっても、景観に酔いしれたかもしれない。

しかし、ここにいる約一名だけは何か違うものに酔っていた。いや、むやみに興奮してるというのが適切かもしれない。
「七瀬！　七瀬ッ！」
浩平が喚き、手招きする。
「なによっ、少しは休ませなさいよ！」
七瀬がいつものように肩を怒らせて応じる。見張りのはずの浩平は水場ばかり熱心に見つめていたのである。
そこには、小さな女の子がいた。頭頂部にぴょこんと立ったクセ毛が愛らしい。でもそれだけで、特に不思議はないし——知り合いでもない。
凶暴そうでもないし、味方になってもらってどうこうというガラでも、なさそうだった。
「……あのコが、どうしたってのよ？」
拍子抜けた不満を隠さず七瀬は尋ねる。
「チッチッチッ……甘いな、甘いぞ七瀬」
浩平はご満悦の様子だ。
（どうせまたヘンなこと考えてるんだよ）と遠くに瑞佳の声援（？）を受けて、七瀬は腕を腰に当て少しだけ首を捻り浩平の言葉を待つ。
「あれを見ろ」
視線の先には先の女の子が——その手にハリセンを持って——立っていた。
「ﾊｧ(ﾟДﾟ)？」
情けなさそうな顔をして首の角度を更に横倒しにする七瀬。
「ハリセン？　……が、どうしたのよ？」
「あれこそ七瀬、お前の為にある武器じゃないか！」
こぁん☆
「バッカじゃないの！　あんたは！　ハリセンでなにしようってのよ！」
「いや、だからツッコミはハリセンで……」
浩平の発言は金だらい連打によりキャンセルされまくった。そんな中でも「少なくともあの娘よりもお

前に相応しいぞ」という発言のみ明瞭に響き渡り、怒りに火を注ぎまくった。
「はぁ、はぁ……」
肩で息をする七瀬。
「ぜぇえ、ぜぇえ……」
頭部が歪んで見える浩平。
（自業自得だよ、浩平……）
背中が煤けて見える瑞佳。
「わ、わかった七瀬。ハリセンは諦めるから作戦第二弾だ」
「……めげないわね。言うだけ言ってみなさいよ」
「その金だらいを投下して、あのコを攻撃しろ。古来より金だらいは天から降ってくるツッコミグッズであってな――」
こぁん☆
勿論、浩平の提案は最後まで口にされることなく却下されたのだった。

193　お姉さんなんだよもん

「ぴろー、ぴろー！」
最大限にまで振り絞った声が島中に響き渡る。沢渡真琴と椎名繭はぴろを探しながら歩いていた。自分達のやってる行為が、どれほど危険なことかも理解してはいない。
「あうー、全然見つからないよー、何処行ったんだろう？」
真琴はふぅと溜め息をついた。
「みゅ～」
繭も探し疲れたのか、へたれ気味である。
「もう、疲れちゃったよ～」
泣き言を吐きながら、そのまま近くの木に寄りかかった。そのとき、『カカカッ』と聞きなれない音が耳元で聞こえた。振り返ってみると、その寄りかかった木に釘が数本刺さっているのが見えた。

「何これ？」
　真琴は最初はわけが分からなかった。どうしてこんなとこに釘が刺さっているのだろうと不思議に思うだけだった。するとまたすぐに『カカカッ』と同じ音がして釘の数がさらに増えた。そうなってから始めて、自分達が狙われてることに気付いた。
「うわっ！　あぶないじゃない!!」
　と叫んだとき、真琴の右手には釘が刺さっていた。
「って、いったーい！」
　なおもまだ釘は飛んでくる。その狙いはだんだんと真琴の体の中心に近づいてきている。
「うわわっ、えーっとこうゆう時は漫画で見たように……逃げるのよっ！」
　そう言うが早いか繭の手を握り森の中へと走りこんでいった。
「ちっ、もう少し近づかないとこいつは命中率も殺傷率も悪いな」
　目標が遠ざかっていく方向を確認するために、茂みから姿をあらわしたのは藤田浩之であった。
「何も反撃してこないってことは、あいつらたいした武器は持ってないってことか？　まあせっかく見つけた獲物だ。逃がすわけにはいかないな」
　武器を持ち替え、弾が装填されていることをきちんと確認する。
「さて、行くか！」
　そう呟いて繭と真琴の跡を手負いとは思えぬ動きで追いかけ始めた。
「な、なんなのよ、あいつ！　包帯ぐるぐる巻きのくせに全然元気じゃない」
「みゅ～♪」
　必死で逃げる真琴に対して、繭は鬼ごっこでもしているのかと思われるぐらい、無邪気に走っているだけだった。そんな繭の顔を見ながら真琴は心を決める。
「そうだ、真琴はお姉さんなんだもん！　絶対守っ

てあげるんだから！」
　そう叫んでから引っ張っている繭の手をいっそう強く、ぐっと握り締める。
「みゅぅ、いたい」
「そんなことよりもっと速く走りなさいよ！　あいつに捕まったらおしまいなんだから」
　しばらく走りつづけると周りを木で囲まれた森は終わり、深い谷が二人の行く手を遮った。後ろを振り返ると包帯に巻かれた男が確実に近付いてきている。
「ど、どうしよう……あっ！」
　おろおろとあたりを見まわしていると吊り橋らしきものが真琴の視界に飛びこんできた。
「あれを渡ってから落としちゃえば、あいつは追ってこれないじゃない。わたしってばてんさーい！」
　これで逃げ切れると思い嬉々として吊り橋に近づいてみると、それはもうすでに橋としての機能をなくしていた。そこは雪見VS由宇＆詠美戦によって崩された後だったのだが、無論そんな事を真琴達は知る由もない。
「うそ……」
　一気にテンションの下がる真琴。追っ手を引き離すどころか、逆に追い詰められたことに気づき愕然とした。周りを見渡してみても、まともに人が隠れるような場所はない。たとえ、隠れたとしても少し探せばすぐに見つかるようなところばかりである。
　真琴は覚悟を決め、突然繭の手を引いて木の陰に隠れるように座らせる。
「いい、ここから動いちゃ駄目だからね♪」
「みゅーっ♪」
　真琴はとびきりの笑顔を見せながらそれだけを言うと、近くにあったそれなりに大きな石を持ち上げ、崖の下に放り投げた。
　それと同時に浩之が森を抜け出てくる。
『ザップーン』
　水に何かが飛び込む音。

「はー、はー、どうも、まだ体が本調子とはいえねえなぁ」
まだ息を乱しながら、浩之が銃を構える。
「だったら追いかけてこなけりゃいいじゃない！」
「まったく、そのとおりだな。だけどな、俺はこんなことさっさと終わらせて家に帰りたいからな。さっさと俺以外の奴に消え去って欲しいわけだ。で、もう一人のほうはどうした？　まさか、川に飛びこんだのかよ？　なかなか勇気のある奴だな」
真琴は黙って浩之を見つめている。
「おまえはどうするんだよ？　撃たれて死ぬか、飛び降りて死ぬか。どっちかは選ばせてやるよ」
「あんたなんかに殺されてたまるもんですかっ！」
そう言い放ちながら、パチンコを浩之目掛けて撃つ。体は崖に向かってジャンプしている。
放たれたパチンコ玉は浩之の左眼に命中する。
「痛っ！　てめっ！」
左眼をおさえながら真琴の落ちていく崖下に銃を乱射する。
『ザッパーン』
そして再び水に大きな物が落ちる音。
「くそっ！　どこだ？」
しかし、真琴が飛びこんだことによって出来た大きな波紋は、すぐにその急な流れにかき消され、見えなくなってしまう。
そして真琴が水面に顔を出すこともなかった。
「ちっ！　狐の最後っ屁って奴かよ……あれ？　狸だったかな？　まあ、この流れじゃ助かるのは難しいだろ」
拳銃を懐にしまいながら、崖から離れる。
「それにしても、これで何人目だ？　意外とやれるもんだな。あかりが知ったらどんな顔するかな？」
フンッと今の感傷を吹き飛ばすかのように、また自分を嘲笑するかのように鼻で笑う。なんと今更のことだろうか。自虐めいた笑みをこぼしながら、先ほどやられた左目に触れる。

「いてぇ、腫れてるな。眼球に当たらなかっただけよしとするか。でもこれじゃ、しばらくは遠近感が掴めねえ……ついてねえなぁ」
何かを確認するように、もう一度崖の下を覗き見る。
「ふぅ、あの医者の次に強敵だったぜ、お姉さん」
それだけを言って、そのままその場を離れていった。
そして木の陰に隠れていた繭はというと、すやすやとハンバーガーを食べる夢を見ていた。

194　夏への追憶、夜への帰還

「――やっぱり」
幾分か歩き、茂みを掻き分け、そして私はその忘れ物を見つけた。
鞄だ。
食糧も水筒も、鞄から出して携帯できるからつい放り出してしまう。
配布元としては、別々に与えられる武器を隠すというのが一番の目的なんだろうけど。
それにしたって迂闊だった。私は地図を持っていなかった。それもあって、わざわざここまで引き返してきた。
少々長い道のりだったが、致し方ない。
……だけど、私、柏木千鶴が辿ってきたのは、実際に歩いたよりも……ずっと長い思考の迷路――
折角の決意も、台無しだった。それとも、最初からこうなることは決まっていたというのか。
初めから……始まる前から……神様はこんな過酷な分岐へと、私という駒を進めることを決めていたのか。
初音。……私のかわいい初音。
どうして、こんなことになってしまったんだろう。
「くはぁっ、はぁっ、はぁっ……」

どれくらい走っただろうか。随分と疲れた気がする。私は空を見上げてみる。月の明かりも、星の瞬きも、ほんのついさっきのそれとなんら変わっていない。時間はそんなには経っていない様だ。それなのにこののしかかるような疲労感……。
「精神に……キてるみたいね……」
ぼそっと、私はそんなことを呟いた。正直、さっきまでのことはよく覚えていない。どういうわけだろうか……。あの子のあんな様態を見てしまったことによって、私の思考は狼狽で埋め尽くされてしまったらしい。
唯々、真っ白に。
「っ……！」
思い出したように左肩が疼いた。先ほど受けた傷だ。……愛する自らの妹によって。
「……」
私は、無言で唇を噛む。それは、自らが受けた傷の痛みに耐えるためか。それとも、残酷な事実による痛みに耐えるためか。
私は近くの少し太めの木に近づくと、そこに回り込んで腰を下ろす。その後、そっと上着を脱いで上半身を露出させる。肌に直接当る風が、少々冷たい。
「つっ……」
私はそっと傷痕を上からなぞった。……なるほど、火裂傷は確かにひりついて痛みを釣り上げるが、しかし思ったよりもその傷は深くないようだった。
だが、左肩に穴の開いた上着を見つめていると、自然と気分が落ち込んでくる自分がいた。
そりゃあ、確かに見た目はちょっとアレだし、今流行のファッションというわけでも無いけれど、選ぶ時は素材にこだわってみたり、またこのタイプで白いものは見つけるのに苦労したものだったから、白が好きだった私としては満足でもあったし、何より普段着としての着心地がよかったから選んだ服だっていうのに、こんなところでこんなことになってしまうなんて……。

「はぁ……」
自然と、ため息が出た。
いつまでもこんな姿ではいられないので、私はとりあえず傷の応急処置を試みた。私は鞄の側面に入れていた水筒を外すと、入れ物の口をあけて左肩にかけた。
……そんなに冷たくはなかった。
冷却する目的においては期待はずれだったが、それでも体温よりは低い温度だし、洗浄だって必要だった。火傷の痕が残るのはまっぴらごめんだ。
元々、そんなに量があるわけではなかったこともあり、あっさりと水は切れた。
「まぁ……無いよりはマシよね」
座ったままで、私は一人呟いた。水が肩を伝って地面に落ちる。私は、自分の肩を拭う布切れなど持っていなかった。上着で拭く？　まさか！
仕方が無いので、私はそのまま肩の水気が飛ぶまで、この場に座っていることにした。

「……」
視線が泳ぐ。それは何もしていない瞬間だったが故に、何も考えられない時間だった。私は、何を見ているのか。
沈黙だけが、あたりに蔓延していた。でもそれで良かった。もし今、誰かから話しかけられていたら、もしそれが耕一さんのような人だったら……。
……私はきっと、泣きだしてしまっていただろう。
覚悟はしていたはずじゃなかったの、千鶴？
私はそっと心の中の自分に問いかけた。私は、決めたはずだった。家族を守るために鬼になる。そのために、自らの姉妹たちからの信頼すら失ってしまうことなど、もうとっくに予期できていたはずなのに。覚悟していたはずなのに。
「ホントに……ダメね、私」
星空は明るく瞬いている。私がこんなに落ち込んでいるというのに、まるで当てつけるように。
「私の両手は、もう紅く、血にまみれてしまったの

ね……」

――ねえ、耕一さん。耕一さんは昔、初音の笑っているのを見て、まるで『天使の微笑み』だって、言ってたことがありましたよね。ううん、私もそう思います。私は、あんな風に笑うことが出来る子を他に知りません。もちろん、楓も、梓にとってもきっとそうだと思います。いいえ……私にとっては、楓の笑顔も、梓の笑顔も、どれもかけがえの無い大切なもの……。絶対に失いたくない……失わせたくない……。私にはもう……そんな笑顔を作ることが出来ないかもしれませんけど。

　でも、それでもあの子達の笑顔を守れるなら私、なんだってやれると思ってきたんです。今まで、ずっと。それは、今こんな状況に追い込まれてしまったからではなくて、もうずっと前から……それこそ、お父さんやお母さんが死んだときから。いいえ、もしかしたら、柏木の血のことを知らされた瞬間から。勝手に独りで背負い込んで、勝手に独りで苦しんで、ひょっとしたら単なる被害妄想なのかもしれない。でも、そうやって気を張っている間は不思議と安心できた……。耕一さんなら、……きっと私の気持ちを分かってくれますよね。守られるのではなく、守ろうとする方の気持ちが。

　もしかしたら、それはあの子達にとっては迷惑なことであったのかもしれないけど……、でも、私の立ち位置は結局そんなところにしかなくて。おかしいですよね、私、こんなにも弱いのに。ううん、もしかしたらだからなのかもしれない。ただ立っていることに不安だったから、だから自分自身の存在をそういうところに求めたのかもしれない。でも、初めて人を殺して、その血に染まった両手で初音に会って……、だから拒絶されて。もうそのときには、私にはあの子の前に立つ資格はなくなっていたのかもしれませんね、あの子に会うまでも無く。……心のどこかでは、もうとっくに諦めていたはずの希望、

私はそれでもその拒絶を受け止めようとしていたのに、結局そうできなくて……。それで、目の前にいないあなたに縋っているんですよ。おかしいですよね。笑ってくださいな耕一さん。でもそれで、あなたの笑顔で、……ほんの少しだけ、元気になれます。

ひょっとしたら怒られるかもしれませんけど、私、この戦いでもし命を落とすことになっても、それで妹達を守れるなら悔いは無いと思っています。たとえ、私があの子たちを守るのにふさわしくないとしても、でも、泥を啜ってでも、それだけはやり遂げて見せます。耕一さんなら、何でそんなこと言うんだ、皆で生き残らなくちゃダメじゃないかって、きっとそういうと思うんです。うふふ、目に浮かぶようです、その時の耕一さんの姿が。

でもね、私の染まってしまった両手は、表面上は拭うことが出来ますけど、でもその奥深いところにある事実までを拭うことはできません。だから、私が自分の手を汚すことはもういいんです。でも、あの子にそれを肩代わりさせることは絶対に出来ない。もし、私があの子たちの前からいなくなったとしても、耕一さんがいれば、誰か姉妹がいれば、笑顔を失わずに済むかもしれません。でももし、仮にリネットに体と意識を操られていた結果であったにしろ、あの子が誰かの命を奪うようなことになれば、あの子の笑顔は永遠に失われてしまいます。私なら、その重責を背負って生きていくことが出来る。でもあの子の小さな肩では、人の命はひどく重過ぎるんです。それは楓も、……そして梓にしても同じこと。私だって……本当は……。私、不安なんです。もし楓や梓と会ったら、そのときまた、初音のときのようなことを繰り返してしまいそうで。そう……、見ず知らずの人の命を奪うことより、誰かから命を狙われることより、私は、妹達からの拒絶の方が怖い――。

もしかしたら、ゲームが終わるまでに、私は他のどの妹とも再会しないかもしれません。でも、それ

ならそれでいいのかも知れません。私があの子たちに会うことより、あの子たちに及ぶかもしれない危害の種を取り除くことの方が、私には大事なんです。でも、耕一さん。もし叶うなら……、死ぬ前に、もう一度あなたに会いたい。こう願うことは罪深いでしょうか？

耕一さん……。

――そして私は、我慢しきれずにほんの少し、涙を流した。

……浅く、短い転寝だった。今の意識が何処かへ行った代わりに、ほんの少し、昔の気持ちが色鮮やかだった。良くは覚えていない、けれど、不思議な懐かしさが胸を埋めている。

焼け付くような日差しの、名残が残る夜更けのこと。どこか儚い……ため息と、花火の記憶。

過ぎ去った夏の思い出。あの時、私はノースリーブのワンピースを着て、今と同じように、肩で直接風を感じていた。

いくらやっても慣れる気がしない経営事務で、体の芯までくたくたになって私は帰宅する。家に帰ると、一番最初に出迎えるのは梓だった。

『千鶴姉、今日遅かったね。御飯すぐに暖めるよ』

私はこくりとうなずいて、自分の部屋に戻る前にまず居間へ向かう。するとそこには、初音と楓の姿がある。

『お帰りなさい、千鶴お姉ちゃん』

『お帰りなさい、千鶴姉さん』

同じ内容の言葉を、全く違った風に私に伝えてくる妹達。私はあの子たちに一言、ただいま、と挨拶を返す。あの子たちは、梓の切ってくれただろうスイカを齧りながら、縁側からそっと片足を放り出してぶらぶらとさせていた。既に日は沈みきっていて、辺りは真っ暗でしかない。するとそこらに点滅する

光点がある。……蛍だ。
『わっ、また光ったよ』
　初音は嬉しそうにそんなことを言う。楓は何も喋らないが、それが光る様子を、興味深そうにじっと眺めている。りんりんと虫が鳴く。途切れることなく、歌を継ぎながら。
『何だ千鶴姉、まだいたの』
　そんな言葉が後ろから聞こえてくる。御飯とお味噌汁を持ってきた梓だった。温かな湯気が、ぼーっと白く立ち上っているように見えた。
『早く着替えてきなよ、大丈夫、蛍やこおろぎはそう簡単に逃げないって』
　梓はそんなことを言ってきた。いつのまにか楓や初音たちと一緒になって、虫達の戯れに夢中になっていたらしい。そうね、と私は相槌をうって立ち上がる。
　夏はまだ完全に過ぎ去っていたわけではなかった。残り香のような蒸し暑さは、私にその存在を必死に伝えているようでこそばゆい。仕事で来ているタイトなスーツは、当たり前だが窮屈でしょうがない。特に、今時期のような気候では。私はクローゼットから水色のワンピースを取り出す。なんとなく今日はこれを着ていたい気分だった。肩をむき出しにしてくれることが、たまらなく自由である気がしたのだ。
　そうして居間へ戻る。私は、折角温めてもらった御飯が冷めないうちに頂くことにした。梓の加減はいつだって絶妙だ。お味噌汁の熱さや塩加減も、その時々の私の体調に合わせてくる。疲れている時は薄味に、といったように。本当に細やかな気配りだと、私は常日頃から感心していた。
『ねえねえ、これ見つけちゃった』
　いつのまにか姿を消していた初音が戻ってきた。その手には何か袋が握られている。それは――
『――線香花火？』
　私の思考に先んじて、楓がそう呟いた。

『うん、耕一お兄ちゃんが来ていたときに一緒に遊んだんだけど、そのときのが余ってたみたいなの。残してしけちゃうのも勿体無いから、今日やっちゃおうよ』

初音は満面の笑みでそういった。……確かに、今日は静かで、そしてどことなく空気が乾燥していて。風もなく、線香花火にはうってつけであったかも知れない。

いいんじゃない、火の扱いに気をつけさえすれば。私はそう言った。楓は、千鶴姉さんがそういうのなら……、とでも言いた気な様子だったが、初音から線香花火を渡されるに、まんざらでも無い様子だった。

初音が私の方を見た。

私はいいわ、まだ御飯を食べているし。そう言って花火を受け取ることを拒否した。別に自分で点けなくても、ここから見ているだけで十分に線香花火なら楽しめる。

初音は、花火の袋とは別なところからマッチを取り出した。なんとなく危なっかしげにも見えたが、特に私は行動を起こさなかった。初音だって、もう子供ではないのだから。

ぼしゅっ、と小気味いい音を立てて火がつく。初音は火を焚くと、それを楓に与えた。楓はそっと線香花火の先端を火に翳す。火が、転火した。初音はすぐにマッチ棒を振って火を消すと、自分の線香花火を取り出した。楓の持っている線香花火は、既にパチパチとその花を開いていた。

綺麗な輝きね……。私はお味噌汁をすすりながら、その花火の燃え盛る様に心を奪われていた。本当に小さな輝きでしかないのに、激しく、艶やかに燃え続ける線香花火に、何か懐かしいような気持ちを抱いていた。

『お、線香花火か。風流だね』

台所から帰ってきた梓が、楓と初音の様子を見てそう呟いた。梓はやらないのと聞くと、そうだねぇ、

と少し悩んだ様子を見せた。だが、梓の存在に気が付いた初音と梓が、梓姉さんもいっしょにやろうと言ってきたのを聞いて、花火の輪に混じることにしたようだ。私は、自分の三人の妹が花火を燃やしている様を、ただじっと見ていた。御飯を食べ終わって箸が止まったあとも、ずっとそうしていた。

それから少し時間が経って、線香花火が残り一本になったときのことだ。最後の一本を掴んだ楓が、とことこと私の傍へ歩み寄ってきてそれを差し出した。

『はい、千鶴姉さん』

私は思わずきょとんとしてしまった。私は、いいのよ、楓がやれば、と言った。

だが楓は聞かなかった。

「私たちはもう、いっぱいやったから」

……ふと目をやると、縁側に出ていた初音も梓も、いつの間にか私の方を見つめている。

『やろうよ』

『千鶴姉もさ』

そんな風に、楽しげな瞳で私を見てくるのだ。

私は楓に視線を戻す。線香花火が一本、差し出されている。

……ええ。私は、それだけ口にして花火を受け取った。ほんの少し、楓が笑ったような気がした。

縁側に出ると、少し風が出てきたことに気付く。むき出しの肩に風がぶつかって、涼しいようなくすぐったいような、変な気分だった。

ボッ、とマッチが燃え上がる。初音が、私のためにつけてくれたのだ。

私はそっとそこに線香花火を翳した。幾分もしないうちに、火は無事に燃え移った。

私は中腰になって線香花火を垂らした。すると、まるでそれを囲むかのように、初音と、楓と、梓が近づいてきた。

……そして、今年の夏の、最後の花が咲いた。

あまりにも小さい音でしかないはずの、線香花火

のパチパチと言う弾けが、私たち四人の心の奥深いところに響いていた。
花びらを散らし尽くして、先端に朱い結晶が出来上がる。でもそれは、十秒もしないうちに、ぽとっ、と地面に落ちた。
私たちは、その最後の輝きを名残惜しむかのように、火が消えた後も、少しの間黙ってその場に立っていた。
『さって……と！』
梓がうーん、と伸びをしながら言った。
『そろそろ中に戻ろうか、風も冷たくなってきたことだし』
そうね、と私は頷いた。楓も初音も、同じように頷いた。
私は中へ入ると、食卓へ放置していた自分の食器を、梓と一緒に台所へ運んだ。
居間へ戻ってくると、戸越しに外を見つめている初音がいた。
どうしたの、と聞くと、ううん、なんでもない、と返事があった。そうして初音はその場を立ち去った。
……私は分かっていた。初音は、さっきの瞬間に過ぎ去ってしまった夏の匂いに、別れを告げていたと言うことを。
夏がずっと続いて欲しいとは思わないけれど、それでもこうやって分かれ目を体験しては、寂しげな気持ちになる。
……だからこそ、堪らなくいとおしいのかもしれない。
時刻は既に九時を回っている。
隆山の夜は明るい。それは文明の灯火ではなく、頭上に瞬く宇宙の煌きだ。
遠い空に光る星を見つめて、私はその孤独に思いを馳せる。
こんなにも平和なのに。
こんなにも幸せなのに。

……そしてまた、私はため息をついた。

……どうして、今更こんな過去の記憶にすがっているのか。傷ついた自分自身への慰みなのだろうか。だったら、この程度でいい。この仄かな感触だけで……大丈夫、私はやっていける。

右手で左肩をさすって見た。まだ瘡蓋にもなっていないが、少なくとも先ほどかけた筈の水気は取れたようである。

このまま放置しておくのは格好が悪いし、大体妙齢の女性が上半身をブラジャーだけしか着ないで肌を晒しているというのは公衆道徳上にも教育上にも好ましくないことこの上ない。……もう、そんなことは気にしなくても良いのかもしれないけれど。

肩に少し大きな穴の開いたブラウスに、私は袖を通す。見た目ほど肩に喪失感はなかったが、それでもやはり目に入れたくは無い様態だった。

しかし、どうして私はそんなことにこうまで執着しているのだろう。そんなことが気にかかる。

いずれ、泥を啜り、大地を転がるような戦闘を経験することは間違いが無いだろう。そうなれば、肩がちょっと破ける程度の話ではなくなる。大体にして白いものは汚れが目立つ。案外、肩口に穴が開いたことよりも、土にまみれ泥に汚れた状態の方がダメージが大きいんじゃないかと想像した。そもそも、命のやり取りをするような現場でたかだか服装のことを気にしている方が異常なのだ。

……とは言え、常に外見を気にするのは女の性だ。万が一、突然耕一さんに遭遇することを考えると、そんなひどい格好をしている自分を想像したくないのである。たかが服装、されど服装。

そうでなければ、服装という文化的な側面に敢えて執心することで、普通であることを強調したかったのだろうか。人を殺しておきながら、私は狂っていないと自分に言い聞かせたかったのか。

……出来れば、後者を理由に選ぶのは遠慮したかった。
カタン。
立ち上がった拍子につまずいてしまった。先ほど使い切ってしまった水筒のボトルだった。
「そういえば、もう空なのよね……」
それは少し困ることだった。砂漠が戦場というわけでは無いから、民家や建物に入れば水道はあるだろう。だが、水が止められていない保障は無い。まさか日本国外とも思えないので、沢の水を汲めれば飲み水にはできるだろうが、そこに辿り着くことが出来る保障も無い。
唯々生き延びるためならば、一日やそこら食糧や水分を補給しなくてもどうにかなるかもしれない。
――忘れてはならない。ここは狩り場なのだ。いずれ嫌でも自分の意思ではない物事に突き動かされるときが来る。そのとき、空腹や脱水症状で動けないなんていうのは話にもならない。
そのためには安心して飲める水が必要だ。流石に、さっき使った水を温存しておけば良かったなどとは思わないが。
「配給された水筒が、一番確実ではあるのよね……」
私は、空になった水筒を持ち上げるとそう呟いた。
タイムリミットは無い。少なくとも表向きには。
だが高槻の話し振りを聞くにそうではなさそうだ。確かに、武装で勝る主催者側の兵隊が一挙に参加者の掃討にかかれば、私たちなどひとたまりも無いだろう。
しかしそれは……そう近い話ではなさそうだ。高槻は私たち自身による殺し合いを求めていた。だから……きっとぎりぎりまで、私たちのことを苦しめるつもりに違いない。
そう考えると、この一個の水筒で命を繋げというのも不自然な話だ。餓死で全滅なんていうのは、あの男の話で言うところの最も興ざめな展開だろう。

水はある。多分大丈夫だろう。
私は空っぽの水筒を鞄の脇に入れると、一先ずそこを離れることにした。
――映像が、頭をよぎる。
私は立ちくらみがしたかのように、思わず地面にしゃがみこんだ。
……ああ、そうね。それがあったわね。
感傷にばかり浸っていたせいですっかり忘れていた。大事なことではないか。
私は、右手で額を押さえながら立ち上がった。丁度木々に覆われる形になったので、綺麗に輝いていたはずの月明かりが見えなかった。
私は額から右手を離す。……鏡があれば、そのときの表情を、自分でも確認できたのだろうに。
そして私は踵を返した。そこに留まっていた時間を取り返そうとするかのように勢いをつけた。闇雲に歩くのではない。場所は、私自身が知っている。
程なくしてそこに辿り着いた。今のところ、私がこの島に解放されてから、最も長い時間を過ごした場所だ。
「やっぱり……」
私は思わず嘆息した。予想通りであった。私はすっかり鞄を背負うのを忘れて、置きっぱなしにしていたのだ。
「全く、おっちょこちょいよね……」
私は二度目のため息をした。こんなことだから、いつも梓に『千鶴姉はどんくさい』と言われてしまうのだ。
そりゃあ私だって要領よくやりたいとは思ってるけど、思うだけでできるんだったら苦労しないじゃない！　……いつも思うことであった。
「……っしょっと」
鞄を背負い直す。少し重いがまあそうは気にならない。
ここまで戻ってくるのは随分長い道のりだという印象があったが、実際に早足で歩いてみるとそうで

もなかった。考えてみれば当たり前だ。歩いているよりは、立ち止まっている時間のほうが長かった。
さて……、実はもう一箇所、立ち寄らなくてはいけないところがある。ここに無いのだから、あそこに違いない。私はまたも踵を返した。
……そうして、十分ほど歩いた頃に、そこに辿り着いた。正直に言おうと言うまいと、そこが私にとっては嫌な場所であることには変わりが無い。
――初音に撃たれた場所だ。
あの時は焦っていて気にも留めなかったが、此処は私が撃たれる以前のあの砲撃か何かの爆発で荒れ果てていた。ざっと見て、半径四、五メートルではきかなそうだ。熱源はもう無いが、焼け焦げた土の感触がひどく……気持ち悪い。
私はなぞる様にそこを歩く。……初音から逃げ出したときの道筋を。あのときの様に走る必要は無い。もう、此処に初音はいないのだから。
そして、それはすぐに見つかった。大事なものだ。けして疎かにしてはいけない。それに――
「いくらなんでも、今の私がこれ無しになんて無理だものね」
そうだ、無理だ。これじゃないとしっくり来ない。初音が……妹達が誰かを殺す前に、私が全てをなぎ払う。そんな決意も、やはりこれ無しでは味気ない。
私はいとおしい物を見るように、片面に血の痕がこびりついた爪を拾い上げて、左手に嵌めた。
焦って、外れ落ちていたのに気付かなかったのは一生の不覚だった。まかりまちがって持っていかれでもしていたら、私は早々から武器を失ったことになってしまう。
だが、こうして爪は私の手元に戻った。神様がいるのだとすれば、私の道行きを少し援護してくれたのに違いない。
私は空を見上げ、月を睨む。私は、月にある人物を投影した。他でも無い、私に血を味わわせる原因を作り、その私にこのようなうってつけの武器を与

え、そして今この瞬間も悠々とゲームを鑑賞している男。
高槻……あなたは一つ失敗を犯した。
爪を渡したことは何かの余興だったのかも知れないけれど、あなたは知っていたんじゃなかったの？
今この瞬間も、私の中に渦巻いている鬼の本能のことを。ええ、鬼の能力は何一つ解放されていない代わりに、殺意がいつもより増大しているわ。
……そうね、あなたを殺さずにはいられないくらい。
結局、血の味を知った鬼の血族を甘く見ていたことを、いずれ思い知らせてあげる。
ところで……多分、あなたの誤算がもう一つあるわ。分かるかしら？　鬼の本能が思考を奪う以前から、人間としての私の思考もあなたを殺したくってたまらないんですって。どうかしら、これ。もう止まれないかもしれない。だって誓ってしまったんですもの。あなたを殺すって。それって、その瞬間に心が凶器を握ったようなことじゃありません？　そう思うと不思議、死ぬ不安が希薄になるわ。だって殺すことしか考えていないから。
心が握った凶器……私は、そこから一つの言葉を想起した。
――狂気。
「……そうね。既に私は狂っているのかも知れないわね」
正常であることを強調したい私、狂っていることを認めたい私。……一体、どれが本当の私なんだろう。考えることは、もう疲れた。
一人でも多く殺そう。苦しみを与えないように、一瞬で運命の糸を断ち切ろう。
そうすれば……、誰も苦しまずにすむ。誰も悲しまずにすむ。

死者は何も語らない。
死者は何も思わない。
死者は何も苦しまない。
何も、何も――。
……私は、いつの間にか思考を真っ白にしながら月を見つめていた。
「綺麗な月ね。――吐き気がするくらい」
いつまでもここに留まる気はなかった。一度辿ったルートをもう一度歩み直す真似をしていたのだ。要するに、前進していない。
ぐずぐずしてはいられない。こんなに視界がいいところでは、容易に狙われてしまう。自覚しなさい千鶴、私は狩る側なんだということを。
高槻への殺意、初音への恐怖、……未だ定まっていない殺人者の自覚。私は、どこへ向かえばいいのだろう。一見、一つの目的に集中しているようで、実際はこんなにも乱れたままの心で。単なる狂気なんかじゃない。私の心は混沌なんだ。だから、こんなにも分裂する……。
森へ戻ろう。そして、あと一度踵を返せばいい。それで今度は反対の道へ行ける。
……今度は、進める。
鞄の中には、コンパスと地図、それと未だ口をつけられていない食糧に、波々と水の入ったボトル。これで爪が新品だったら、本当に再出発を果たしたかのようだったのに、と思った。
――選択肢は二つ。
一つは、耕一が選んだ道。
一つは、千鶴が選んだ道。
いずれが正しいのか、知るものは無く――。

……何のことは無い、私は死者を犠牲にしたのだ。
あの時よぎった映像は、私が殺した女性の断末魔。
この鞄は、元は彼女のものだったものだ。武器らしきものは入っていなかった。恐らく彼女が身につけるか何かしたのだろう。それを探る気には流石になれなかった。だが、食糧と水は生者のためのものだ。死者には必要が無い。だから奪った。
それの何が悪い？　生きることは奪うことなのだ。たとえそれが、死者への冒涜だと罵られようとも。
私は、まだ死ぬわけには行かない――。
森へ足を踏み入れる。最初に森へ入ったときとは、場所も状況も、何より私の気持ちが違う。
肩にのしかかった業がずしりと重い。
何よりも重い第一歩、……私は、いつまでその重みに耐えられるのだろう。
……気が付けば、また一人、夜の空を見つめてる。

195　日々のカケラ

眠れなかった。
霧島佳乃（三十一番）と別れた後、民家に戻って来た柏木梓（十七番）は、わけのわからない苛立ちを抑えながらも眠ろうとした。
が、先程あんなことがあったせいか、目を閉じてもなかなか寝付くことが出来なかった。
結局、毛布に包まってうとうとしているうちに、窓から覗く朝日が夜の闇を鮮やかな蒼に染める羽目となった。
「……朝か」
梓は憔悴しきった表情で、窓の外が明るくなっていくのを見つめる。
「結局、あんまり眠れなかったなぁ……」
ため息をひとつ。そして大きな伸びをする。
「……朝飯でも作るか」

驚いた事に、梓が忍び込んだ民家は、ガスも水道も電気も使用可能であり、更に冷蔵庫を開けるとそこには二、三日分の食材が鎮座ましましていた。
あまりにも露骨に設備が整っているので、毒でも入っているんでは無いかと思い、梓は冷蔵庫の中の食材を幾つか調べてみたが——千鶴姉の作った料理と対峙した時のようなプレッシャーは感じなかった。
勿論、何か別の罠が仕掛けられてる可能性はある。が、腹が減っては戦は出来ぬし、滅入るばかりの気分を何とかして転換したかった。
結局、梓は深く考えずに朝食を作る事に決めた。

とんとんとんとん……。

「～～♪」
鼻歌交じりで包丁をリズミカルに振るう。
姉妹の食事をいつも作っている彼女だけあって、その包丁捌きはさすがに手馴れたものだった。
梓は無駄なく、そつなく調理をこなしていく。
と、その目が包丁に注がれる。
——これで、人を殺せる。
梓は瞬間頭に浮かんだ考えを、ぶんぶんと頭を振って追い払い——そして、何となく気付いた。
この狂ったゲーム。最初の武器の優劣こそあれ、その気になれば簡単に武器を手に入れることが出来るように仕向けているんだ。
この包丁が良い例だ。だから、無理に家や学校の施設を荒らしたりせずにそのままの状態で放置したり、または手を加えてるのだ。その方が武器を生み出し易い。そして、武器をみつければ殺し合う確率が高くなる。武器が無く、怯えて隠れるよりも。
「なるほど。下種(ゲス)の考えってわけね。……思い通りに行くもんか」
タイミング良く、その下種の声が聞こえてくる。
朝の定時放送だ。
梓は舌打ちをしながらも耳障りな声に耳を傾け、耕一たちが、そして佳乃が死者に入っていない事を

確認して安堵する。
　彼女は、止めていた手を再び動かし始めた。

　やがて、キッチンに炊き立てのご飯と、味噌汁の香りが漂う。
　その量、五人分。ついつい、いつもの柏木家に並ぶ分量を作ってしまった。
「……ま、いっか」
　ぱちんと味噌汁の鍋にかけていた火を消すと、梓はいつものようにエプロンを外そう
　——として、苦笑いする。
「そっか、あたしってメイド服着たままだったんだっけ」
　テーブルに典型的な日本人の朝食を並べ終わると、自分も席につく。
「では、いただきます」
　ぽんと手を合わせて、梓は久し振りにまともな食事を堪能する事にした。
　非日常のキリングゲームの中でのいつもの食事は、ひどく懐かしい味がする。
　味噌汁を啜りながら、梓はそんなことを思った。

「さて、これからどうしようっか……」
　後片付けを済ますと、梓は呟く。
「まずは耕一たちと合流するのが先決よね。それから、協力してあの主催者をぶっ飛ばす！」
　ぶんぶんと腕を振りまわしながら梓は叫ぶ。
「あ、そだ。耕一たち、お腹減ってるといけないから……」
　そそくさとキッチンに戻り、炊飯ジャーに残っていたご飯で少々大きめのおにぎりをこしらえる。
　その数、五つ。耕一と、千鶴姉と、楓と、初音と、
——そして、佳乃の分。
「やっぱ、あのままじゃ納得いかないしね。ちゃんと理由を問いただささなきゃ」
　つ、と首筋に触ってみる。傷は——もう無い。幻

覚か、自分の治癒能力が活性化されているのか、それはわからなかったが、とにもかくにも痕が残らずにほっとする。
——この辺は、やはり梓もオンナノコである。
「耕一たち、千鶴姉の料理を食べる羽目になってないといいけど」
くっく、と梓は笑いをかみ殺す。朝まで抱えていた陰鬱な思いは何時の間にか消え失せていた。
「さて、行きますか」
メイド服を整え、ネコミミをつけたまま梓はそっと玄関を出て歩き出した。
非日常のキリングゲームを終わらせるために。
日々のカケラを五つ、デイパックに詰めて。

196　ごめんなさいの数を数えて

「観鈴！　行ったらあかん！　観鈴……！」
ごめんね、お母さん。
でも、倒れてる人放っておくなんて、出来ないよ。死にそうな女の子を見捨てるなんて、わたしには無理。
ほんとうに……ごめんね。すぐに戻るから……ごめんなさい。

……けど、辿り着いたときには。
「あの、大丈夫……ですか？」
そろそろと、物音を立てないようにそばに寄る。
——短い髪の女の子は、倒れたまま返事をしない。
抱き起こそうと触った手は血まみれで、ぬるりとそれがわたしの指についた。
「…………ぁ……」
つめたい、身体だった。
無駄のないその躯は、ぼろぼろに傷ついている。
痛かっただろうな。苦しかっただろうな。考えただけで胸がきゅっと締まる。
死んだ人にさわっているのに、不思議と気持ち悪

く感じなかった。
その子の躯を一度だけきつく抱きしめる。
「助けてあげられなくて、ごめんね……」
ちいさくちいさく呟く。
気休めでも、偽善でも、そうしてあげずにはいられなかったから。
もう変わらないその表情がひどく安らかだったことに、少しだけ救われた。

「……もう、ええな」
腕に女の子を抱えたまま、振り向く。
見慣れたお母さんの顔があった。
ひとつ頷いて、わたしは女の子を近くの大きな樹にもたせかけた。
眠っているようにも見えて、また悲しくなった。
「えと……勝手なことしてごめんなさい」
目が合わせられなくて、俯いたまま話す。
「ええよ。観鈴は無事やったんや。けどな、もう無茶したらあかんで」
不意に頭に、やわらかい手が置かれた。
「あんたが死んでしもたら、うちにはなんにも無くなってまう。命はひとつっきりや。都合よう返ってくるもんやない。せやから……うちら、生きなあかんのや」
真剣な声だった。言いながら髪を撫でられて、安心して、初めてお母さんの顔を見た。
涙がまじってた。
そこでようやく、わたしは本当に自分の行動を後悔した。
わたしのせいでお母さんが死んじゃったかも知れないのに。お母さんのこと大好きなのに。わたしはわたしを捜させて疲れさせてばかりいる。
やっぱり――わたしは頭の悪い子だ。
「……とりあえず、ここは危険や。この子をやったんがおるかもしらん。そやな、地図だと……向こう

の住宅地の方、近いな。行こか」
手にしたシグ・ザウエルショート９㎜（という名前の銃みたいだ）を固く握りしめて、お母さんが先を促す。
今も、遠くから銃声が何発も轟くのがきこえる。その残響を耳から消せないまま、わたしはなるべく音を立てないよう歩き出し……

「……あの、あの……っ」

弱々しい、女の人の声。逃げてきたんだろうか、服も手足も泥だらけだ。
「動かんといて。うちら、行かなあかんのや」
「お母さん！」
お母さんが女の人に銃を向けた。袖を掴んでも、その目は険しいままで。
「あ、あの、神尾さんという人を見ませんでしたか……!?」

私とお母さんは、同時に目を見開いた。

197　告白と決意と……

「ところでマルチ」
「はいっ？」
智子は、ずっと疑問に思っていたことを問いかけた。
「あんた、あかりを助けた時、木の上に登っとったやろ」
「はいー。そうです」
「……なんで、あんな所におったんや」
えーと。という仕草で思いだそうとする。
「じつは、怖かったので、出発してすぐ目の前にあった林に隠れてたんです」
「ふんふん」
「でも、それじゃあ見つかっちゃいやすいので。木

もともと出発地点の一つであった所だ。警戒されているかもしれない。なにより晴香達は、あそこで兵士を倒している。
「どうやろ。でもあそこに私達が戻ってくるゆうんは、さすがに向こうも考えてないんとちゃう？」
「……そうね。行ってみる？」
「うん。そやな」

廃墟と化した公民館跡。
それを臨む林の中に、晴香達はいた。
「だあれも、おらんな」
「そうね。近づいてみる？」
「うん。……マルチ」
「はいっ！」
呼ばれて、ぴんっ！と背筋をのばす。
「ちょっとの間、神岸さんと一緒にここにおって。私達で見てくるから」
「はいっ。わかりましたっ！」

の上に登ったんです」
「そーかー。よく登れたなー」
「はい。うまく登れるまで三時間かかりましたー」
「……よく殺されんかったわ、こいつ」
……マルチが来てから、ため息をつくことがめっきり多くなった気がする智子だった。それと、もう一つ気づいたことを、今度は晴香に問いかける。
「なあ、晴香」
「どうしたの？」
「いや、今気づいてんけどな、奴らが乗ってたジープあるやん。あれ、使えへんかな」
昨日、智子達を襲った兵士。彼らは軍用ジープに乗ってやって来ていた。
「使うって……乗って行くってこと？」
「や、それもあるけど……もしかして、あの中に何か手がかりがあるかもしれんなー思て。高槻の」
「……そうね。でも、あの場所に戻るのって危険じゃない？」

兵士たちの乗っていたジープに近づいてみた。
危険はなさそうなので、中の物を探ってみる。
「どない？」
「地図があるわね。やつらの拠点がいくつか書かれてる。……それと」
「なに？」
「いや、この無線、使えるのかしら」
備え付けられてある無線機。壊れてはいないはずだ。
ぴーっ！
「それはちょっとヤバいんちゃうん？」
突然、無線機が音を発する。
二人、頷きあい、スイッチを押してみた。
「貴様ら、なにしてる！　早く二〇五中継基地へ来い。高槻殿がいらっしゃる前に来ないと、厳しい処罰があるぞ。わかったな！」
ぴーっつ！
「……どう思う？」
「ワナかもしれない」
「うーん、難しいとこやね」
「でも……」
「うん。行ってみよ。手がかりは今んとこ、これしかないんやしな」
二〇五中継基地。
その入り口で、兵士たちが慌しく動いている。それを臨む丘の上。ジープを止め、様子を覗う晴香達。
「どうする？」
「高槻が来たら、中央突破して奴に詰め寄り、人質にする。これしかないやろ」
あまり利口とはいえない作戦である。
「……無謀ね」
「無謀結構やろ。どのみち私達は、地獄のデス・ゲームに放り込まれとるんや。なにもせんかったら殺されるだけ。万が一でも、みんなで生き残れる方法

があるんやったらそれに賭けてみるだけや。せやろ?」
「……そうね」
たのもしいわね。と眼鏡の少女の言葉に思う。
「マルチ!」
言いながら、智子は後部座席を振り返る。
「今回はあんたにも、出番がぎょうさんあるで。頑張りや」
「はいっ。がんばりますぅ!」
「それと」
晴香に向きなおり、言う。
「ちょっと時間もらえるか? ……神岸さんに話があるんや」
あかりと二人で。ジープを降り、丘を下る。背の高い植物が生い茂る湿地。晴香達に話を聞かれない場所であることを確認し、智子は、言葉をかけた。
「神岸さん」
「……」
あかりは、俯いたままだ。
「……あんた、気づいてるんやろ。藤田君のこと」
「ひろゆき……ちゃん……」
その悲しげな呟きに、智子も俯く。
「初めから、なんか妙やなー思うててん」
……身体を翻し、あかりに背を向け、言葉を続ける。
「私達、出発地点同じやったろ。わたしの前に藤田君が出てったとき、あー多分藤田君は神岸さんと一緒に行くんやろなーって」
表情を消したまま、あかりはじっと聞いている。
「で、次にわたしがあそこを出た時、もう藤田君はおらんかった。せやから、きっと神岸さんのことが心配で、だーっと急いで行きよったんやなーって、そう思とった」
「……」
「けど、わたしが悲鳴に気づいて、引き返して行ったときには、……晴香が、戦うてる所やった」

その情景を思い出し、天を仰ぐ。
さらに智子はつづける。
「この前、神戸の同級生がおったて言うたやろ。あれ、ウソや」
その言葉に、はっ、と顔を上げるあかり。
「あんた、わかってたんやろうけど。藤田君やったんや」
――藤田君、無事やったんやね
――ああ。おかげさまで
――でも、もうお別れだ
――生き残るのは、この俺だけでいい
「あのとき、ああ、この人はゲームに乗ってしもたんやなって。でも、なんでか、ああ、藤田君らしいかもって、思ってしもた」
ふりかえり、自嘲ぎみの笑みを浮かべる。
「なんでやろな。……なんで、そないな薄情なこと、思たんやろな」
「……」
なにも言えないあかりは、唇をかみ締め、感情を押し殺そうとする。一歩、あかりに近づく。
「なぁ、神岸さん。あんたのこと、あかりって呼んでもええか？」
「えっ？」
思わず顔を上げる。そして智子と視線が合う。
「一蓮托生でここまで来たんや。もう、友達やろ？」
「……うん」
「なら、名前で呼びたい。晴香ばっかり名前で呼んでるんは不公平や。そやろ？」
智子のやさしい笑顔。あかりは思わず目に涙が浮かべる。
「うん」
迷いなく返事を返す。
「なら、私のことも智子って呼んで。ええな」
「智子……」
「せや。わたしはあかりを守る。たぶん晴香もそう

思うてる。まず高槻見つけて、どうかしてこのゲームをやめさせる方法見つけてから、それから……藤田君に会いに行こう」
「……でも！」
あふれる涙。ぎゅっと拳を握る
「……たぶんな、あかりに会えば藤田君も改心するんやないか思うんや。甘い考えやろけど」
智子は視線をまた空に向け、何かを見据えるようにして。
「なんとか説得して、みんなで帰るんや。平凡で退屈やったけど、幸せやった、あの日常に」
視線をあかりに戻す。
「な、帰ろう。いっしょに」
「……っつ！」
駆け寄り、智子に抱きつくあかり。その頭を優しくなでながら、
「そうやろ……藤田君」

198　決意

「生き残るのは、この俺だけでいい……」
智子は浩之の言った言葉を思い出していた。
（なんでや？　なんであんなこと言えるん？　嘘やってゆうてほしいわ……神岸さん目の前にしても、あないなこと言えるんやろか……。いや！　藤田君は絶対正気に戻ってくれるはずや！　このままや神岸さん、可哀相すぎる。どんなことしても、いつもの藤田君に戻ってもらうんや！）
智子は改めて決意を固めた。
浩之を殺さなければならないという可能性は考えないようにしながら……。

199　昔と今と、変わらないこと

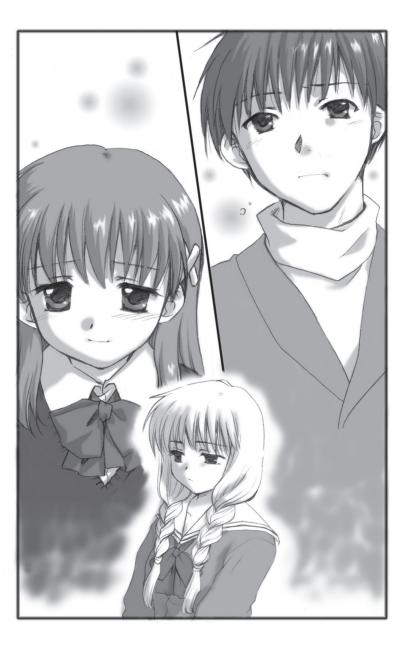
「疲れたなー」

「まぁ、仕方ないさ」
詩子と少年は茜を探し歩いていた。
　といっても、探しているのは詩子で、少年は付き添っているだけだ。
（今はまだだ。もう少し状況が動かないと、高槻に対して何もできない）
　それまでやることもないので、少々危なっかしいこの少女についてやることにしたのだ。
「このＣＤ、何に使うんだろうねぇ」
　詩子の支給品はＣＤだった。¾と記入されている。
「これは……同じ物があと三枚あるんじゃないかな。四つ合わせて何か起こるとか」
「でもさぁ」
　不満声で言う。
「どこにある……っていうか、誰が持ってるかもわからないんだよ。使い方もわからないし。意味ないよ」
「それはそうだね」
　少年は微笑む。
「うー。また流されたよ」
　相変わらずの不満声。さっきから幾度となくこの応酬である。
「あーあ、面白くない……」
「静かに」
　突如、少年の声が変わった。
「誰かいる……」
　そう言って、道路脇の建物に目を向ける。
「すごいね。わかるんだ」
「……敵意はないみたいだ。様子を見てこようと思う。ここで待っててくれるかい？」
「えぇーっ、つまんないよー！」
「！　声が大きい！」
　慌てて詩子の口を塞ぐ。
　すると、建物の中で何かが動いた。
「その声……まさかっ!?」
　続いて声。

「……え？」
その声は、詩子にも聞き覚えのあるものだった。
建物から人が現れる。
「……詩子……」
その少年は、驚きの表情で詩子を見つめた。
懐かしい顔。何年ぶりだろうか。
どうして、こんな所で再会するのだろう。
「あ、相沢君……？」

「知り合いかい？」
少年が詩子に問う。
「昔の友達だよ。久しぶりだねー」
満面の笑みで、詩子は言った。
「……本当、こんな所でな」
祐一も笑顔で返す。
しかし、その顔は、どことなく元気がなかった。
詩子にはそれがわかった。
一年間とはいえ、茜と一緒に、誰よりも親しかった仲なのだ。
「何かあったんだね……どうしたの？」
今までの明るい声とは一転、深く、穏やかで、優しい声。
「……いや、なんでもないよ」
隠しきれるとは思っていなかったが、流石に祐一は動揺した。
詩子は本当に、昔から何も変わっていなくて。
茜のことは黙っていよう……そう心に決めた。
「茜だね……」
祐一の心を覗けるとでもいうのか？
そんなタイミングだった。
「!?」
「茜に、何かあったんだね？」
「いや、全然そんなことはないぞ。腹が減っただけだ」
「嘘だね……わかるよ。私達、友達なんだからさ」
「……」

「言ったほうがいいんじゃないかな。君が隠し通せるとは思えないよ」
第三者の声が入る。
そうかもしれない、昔から、この少女はこんな調子で。友達の些細な変化を見抜き、気づかっていた。
「何があったかは訊かない……なんて言えないよ。祐一個人の悩みならそっとしておくべきだろうけど、茜の問題でもあるんでしょ」
心を揺さぶる声。これ以上は、隠せないか。
詩子も、良い話ではないことを悟っている。
それでも、覚悟して、訊いてくる。
こいつは強い、昔から、今も変わらず。
祐一は百貨店でのことを、全て詩子に話した。
自分が茜に想いを告げたことも、隠さずに、全部。
「ついに言っちゃったんだね」
「え?」
全て話し終えた第一声がそれだった。

「告白だって。やるねぇー。あの時うじうじして、結局転校だもんねぇ」
明るい声に戻り、茶化す。
顔が赤く染まるのが自分でもわかった。
「お前……知ってやがったのか!」
「当たり前じゃん」
「……~~!」
「あはははは っ!」
何も言えなかった。どこまで、この少女は……
だが、少女の笑い声も、どことなく寂しさを含んでいた。
時間がたっても、祐一にはそれがわかる。
自分も変わらないでいられたことを、少しだけ喜んだ。
「でもさ……」
祐一の考えを裏打ちするかのように、詩子の声はすぐに沈んだものとなった。

「やっぱり悲しいよね……」
茜が、人を、コロシタ。
その事実は、二人の前に、重くのしかかる。
「茜。自分のことは話したがらないとこあったもんね。何かあるんだよ、きっと。それなのに、気付いてあげられなかった」
詩子の声に涙が滲んだ。瞳にも、同じく。
「違うだろ」
祐一は、気付けば、そんな詩子を抱き締めていた。
腕の中で小さく震える彼女の姿に、こんなのは絶対におかしいと憤った。
「気付いてたんだろ、茜の悩みに。でも、あえて何も聞かなかったんだろ、茜のために。お前がそうするべきと思って決めた事なんだから、それは、間違いなんかじゃないさ」
本心だった。
こんな言葉で、彼女が救えるかわからなかった。
だが——
「う……ふぇぇぇぇぇん……」
子供のように、声を上げて、泣いた。
その涙は悲しみだけじゃなくて、
祐一にもそれがわかって。
自分出来ることは、まだまだある。
そう確信した。

200　僕たちの失敗——ハッピィライフ

朝。家を出ると、まるで初夏を思わせるようなポカポカ陽気。三ナノ秒で授業をサボることを決意し、そのまま通学路と逆の方へ延々と歩いていくことにした。よく考えてみると特に目的も無く散歩をするのも久しぶりで、できるだけ知らない道を選んで、街の中の未開の世界を拓いて楽しむことにした。まぁ、道に迷っても大声で泣き叫べば誰かが黄色い救急車を呼んだり、保健所を招聘したり、一一〇番をテレチョイスして国家権力に注意を喚起してくれた

りできっと自分に手をさしのべてくれるだろう。
　道の脇にオートバイを止め、地図を見ていた郵便配達員がブレザー姿の自分に気がついて、なんとも言えない表情をしていた。うん、多分考えていること当たってると思うよ郵便屋さん。
　墓地沿いの花屋のおばさんが通いのノラネコ達に「遅くなったねえ、ゴメンネ」と言ってエサをあげていた。ふてぶてしいのか堂々たるものなのかそれとも小心者なのか、ネコ達はエサを食べ終えるやいなや集まってきたときと同じように、一斉にダッシュで散っていった。
　子供達が地面にしゃがみ込んで蝋石で謎の絵を描いていた。こんな子供たちはすっかり街から消えたものと思っていたけれど、いるいる、ちゃんといた。蝋石もビー玉・おはじきと共に駄菓子屋さんで健在で、大が一個五十円、小が一個二十円なり。
　Y字路で挟まれている敷地にお地蔵さまを発見。赤い前掛けが風雨と排ガスで茶封筒のような色に変わっていた。いきおい赤ペンで彩りなおしてあげるのも罰当たりと思ったので、手持ちの小銭と買ったまま鞄の中に入れっぱなしだったミンティアを寄進して三跪九叩頭することにした。
　なーんて嘘。一日中寝てました。火傷しそうなほど熱いシャワーを浴びて、ユーロジン二錠とウイスキーを飲んでベッドに入る。十分もしないうちに身体中の筋肉が弛緩。脳味噌が遊園地のコーヒーカップのように次第にスピードを増しながら円を描いて攪拌されてゆくような錯覚が訪れる。逆に肉体は深海の底をゆっくり漂っているような感じ。この上ない脱力感とごくわずかの満足感。そのまま一八時間爆睡。中間試験？　なんだそれ。
　なーんて嘘。本当はユタのモルモン教徒と一緒に森の中に隔離されてます。右手には水鉄砲、左手にはもずく。燦々と照らす我らが太陽。百人もの人間

が殺し合いに励んでいるというのに、ここだけは切り取られて隔離された空間。さもなくば書き割りの桃源郷。冗談じゃない。暑苦しくてしょうがない。

北川潤、一七歳。目指すは史上最悪の愉快犯。好きなものはヱビスとレバ刺し、嫌いなものは森ともずくと水鉄砲。大きくて真っ白な画用紙を与えられ、先生に「じゃあ、みんなの好きなように絵を描いてください」と言われても何を描いていいか分からず、苦笑して辺りを窺う。そんな感じの行動指針。

欲しいものは温かい蒲団。気持ちのいい音楽。ハッピィライフ。

201　昔も今も、かわらないひと

「そろそろ行くよ。俺」

詩子が落ち着いてから、祐一は言った。

「茜を、絶対連れ戻すから。詩子は安心して、生き延びることだけ考えろ、いいな」

「うん……」

「あんた、詩子のこと、頼む」

ずっと黙っていた少年に言う。

少年は「わかってるさ」と笑った。

二人の視線に見送られ、祐一は歩き出した。

「祐一？」

「ん？」

「茜は、変わってなかったよね？」

「あぁ、そうだな」

「……変えてあげてね？」

その言葉の意味を考え、刻む。

「あぁ」

202　忘々却々

川の浅瀬で一人の少女がうめいている。ぴくぴくと体が動く。

「けほっ、けほっ」
かなり多量の水を飲んでしまっているらしく、咽せながら水を吐き出す。
「わたし、どうしたんだろう？　ここはどこかな？　なんでこんなとこにいるの？」
ふらふらになりながらも少女はようやく体を起こす。
「あうー、ずぶぬれになってる。なんで水の中なんか入ってたんだろクチュン。うう、さむいよー」
完全に水の中から這い出てきて少女はぐったりと倒れこんだ。
「はやくおうちにかえって、コタツの中でにくまんたべたーい。あれ？　おうちってどこ？　っていうか、わたしはだれ？」
頭にずきりと鈍い痛みが走る。
「あう！　あたまいたい。思いだそうとするとあたまがずきずきする……だめ、なにも思いだせない……わたし、こんなとこでなにやってたんだろう？」
急流に呑まれ、川岸までようやくたどり着いたのはいいが、少女は落下時等のショックで記憶を失っていた。
「あうー、これからどうしよう……」
——相沢祐一
ふと浮かび上がるビジョン。
「あれ？　いまなにか思いだしたような気がしたんだけど……そう、あい……ざわ……あいざわゆういち！　わたしの憎むべきあいて。いんねんの男。わたしはこいつを探してたんだ。カリをかえすために。よ～し、待ってなさいよ！　すぐに見つけてけちょんけちょんにしてやるんだから！」
ようやく見つけた自分の生きる目的を杖代わりにしてしっかりと地面に立つ。憎悪を抱いた人の生命力は最も強くなる。少女——沢渡真琴（五十二番）は、ただその憎悪のみを武器にして、この危険な島に再び舞い戻っていく。

203　命題

刀に、つい先ほど手にしたばかりのそれに、郷愁を抱く。それが、一体どういう起源なのかは分からない。
だが、蝉丸はぼんやりと夢想する。
かつて、自らが戦場で振るった跋扈の剣。立ちはだかるものを屠り、襲い来る者から命を守った唯一無二の一振り。
場所も、時代も、剣すらも違うと言うのに、今この瞬間の微かな心の昂揚は、紛れもなくかつてのそれと一緒だった。
「懐かしい……」
かつての記憶が頭をよぎる。まるで、駆け抜ける走馬灯のように。
セピア色のスクリーンに映るがごとくでありながら、今もなお記憶の中に天然色を保ち続ける、そんな日々。
昔を回顧して感傷に浸る趣味など、本来の蝉丸は持っていない。
だが、それでもなお彼を惹きつけるものがある。戦場の匂いが彼を捉えて離さない。
――激動の昭和時代への追想、未だ武人の血は眠りについてなどいなかった。
しかし、一体誰が望んでこんな歪んだ戦場へ来ようと言うのか？
戦をゲームと語る浅薄な思想にどうして迎合など出来ようか？
確かに、如何に優れた歩兵であっても、砲兵であっても、戦場においては所詮駒。儚く散っていく塵芥のようにも映るかも知れない。
だが、それは間違ってもゲームなどではない。
銃弾刀剣の矢面に立たされる兵士たちの気迫は、少なくとも利己性に染まったものでは無かった。
全ては聖上、皇国、そして家族のため。

誰もが皆、国を背負って闘っていたのだ。
それでこその軍人、それでこその武人。
誰かのために傷つける不毛な殺し合いを、ただそのためだけに我々は負っていた。
それゆえに、その闘いは尊かったのだ。
俺は……俺達は、誰よりもそのことを骨身に染みて知っていた。
屍を積み上げた先に、希望があることを信じていたからこそ、俺達は闘ってこれた。
だが、此度の戦いはどうだ？
仮に生き延びられたとして……その先に希望はあるのか？
——あろうはずが無い。
無理やりに死線をくぐらされ傷ついた心身。
大切な……家族や、友人や、恋人との別離。
そして……信頼していたものの裏切り。
そんなものを経験した人間が、果たして安穏な生活に戻れるのか。

——答えはいつも同じ、
〝否〟だ。
そもそも、人間は命を一つしかもっていない。故に、自分を代償として奪うことの出来る命もまた一つ。
たとえ自らを守るためであったとしても……人は、一より多い数の死を一人では背負いきれない。
だから大義を求めるのだ。唯一のものを奪うと言う逃れがたい大罪の免罪符として。
それなのに、今やここは大義無き殺戮が正当化されている。
生を熱望する餓鬼供の巣。
死を渇望する修羅供の野。
血を切望する博徒供の楼。
誰が、何故こんなにも凄惨な罪人の庭を築き上げてしまったのか。
ヴァルハラには似ても似つかない狂った戦場。
生者からも死者からも、ありとあらゆるものを奪

いつくし、後に遺るのは虚脱だけ。
冒涜された死出の旅路だ。
ああ、死ぬ前から、既に尊厳を奪われている。
かつては俺も、光岡も、岩切も、御堂でさえも、皇国に忠誠を捧げ、心を結託し、剣林弾雨を邁進したものだった。
志半ばで散っていった同胞も、未だ出会ったことも無い同志達も、あまつさえ、自ら命を奪った敵兵であっても、それは無駄死にではなかった。
歴史は、常に彼らの屍の上に刻まれる。
彼らの気迫、忠誠、そして矜持は、死をも超えて後進を行くものに脈々と受け継がれていく。
生きることも死ぬことも、等しく礎であったのだ。
だが、ここにはそれが無い。
意思も理念も、……そして、矜持すらも。
だからこそ俺は迷っている。
生きるため、だけでは不足なんだ。奪うものとしての存在理由が。
守るため、だけでも不足なんだ。奪うものとしての存在価値が。
ならばなんだ？
俺は、自分以外の何に縋って闘うことが出来る？
その値にふさわしいものが、ここにあるのか？
……そう、満足できなかった理由。唯一つの欠落。
もうずっと前から知っていたのに、今この瞬間まで気付くことができなかった破片。
……死者だ。
死者の尊厳は、生きているものの記憶にしか存在し得無い。
彼らを伝えるためには、それを観測するものがいなくてはならない。
この上ない非道の理不尽さの中に散っていった彼らと言う存在は、生者なくしてはもはやあり得ない。
死者が単なる躯として、単なる敗者として扱われると言う無為。
ならば、俺がそれを守ろう。

俺が、彼らのことを風化させせない。
それは、見る人から見れば、弔い合戦のようにも映るかも知れない。
……それだけじゃない。
俺は、自らを知る友人のために、未だ出会うことなく散った友人達のために。
そして、これから出会うだろう友人達のために。
生者も死者も、そして自分も。普く存在のために。
「闘おう、それが俺の大義だ」
蝉丸はぐっと拳を握った。
この島に踏み入ってからいつまでも重かった足取りが、ふっと軽くなったような気がした。
苦悩が一瞬消え去る、まるで霧が晴れるように。
……未来が見えた気がしたのだ。荒廃に支配されたものでなく、希望に照らされたものが。
チャキっ、と唾鳴りがした。
蝉丸はいぶかしむ。もちろん、音の発生源は自らが携えているものであるわけだが。
別に普段なら気にも留めなかっただろう。歩いているときなら、小石が飛び跳ねるとかで音が鳴ったとか、些細なものだと思うはずだ。
だが、今はそうできなかった。
蝉丸は刀を引き抜いた。
シャーッ、と、小気味いい鞘走りの音がする。現れたのは、陽射しを照り返す美しい刀身。
前々から思っていたが、見事なものだ。銘をなすほどの古さは感じられないが、腕の良い刀匠の手によるものだろう。
繊細な刀身に似つかわしくなく、ギラリと光る刃。未だ血を吸っていないことが不思議なほどの威圧感だった。
刀は、いつだって獲物を求めている。
「……そうか」
蝉丸は刀を鞘に納めた。何かに得心したかのごとく。

刀は、いつだって獲物を求めている。だから感じたのだ。その存在を。
魔的な力を持たずとも、自らの存在理由による警鐘。……いや、疼きと言うべきか。
ざわざわと木々がざわめく。まるでその予兆を確かめるように。
一見、そこにそのような気配は感じられない。
蝉丸は自らの気配を殺し、刀に残心し、そしてその場に落佇した。
——誰か、来る。

ずざぁっ。
茂みを食い破って出てきたのは一人の影。
「ちくしょう、腫れてきちまったぞ。どうする……」
目に映ったのは、一人の少年。
重そうな荷物を背負い、左手で左目をかばっている。

……服の至る所にこびりついた飛沫と、拭いきれない血の匂いを伴って。

——まあ、心のどこかでは分かっていたんだけどさ。
何がって、俺のやっていること自体が、さ。
最初から狂っていたなんて、そんなこと言い訳にできないことも、まあ一応、頭では分かっていたと思う。
そりゃあ、一般人から見れば殺人は狂った衝動なのかもしれないが、ここは一般人の世界じゃない。
俺は、明確に選択したんだと思う。
それが常識という枠の外の選択であったから、説明するのを面倒くさがってただ狂っていることにしてしまった。
違う……。決定的に違う。
確かに表層は狂っていたのかもしれない。でも、

俺は何処まで行っても俺のままだ。何にも変わりやしない。
　狂人を装っても、殺人者を気取っても、結局全部俺のまま。
　……だから、どこかで竹篦返しが来る。避けるべくもない裁きを受ける。
　打算に従って行動して、人を殺して、同級生も……あかりまで裏切って。
　そうまでして俺がやりたかったことは、結局なんだったのか。
　今となっちゃ、分かりやしねえ——。

　藤田浩之は、未だ蝉丸の存在に気づいていない。だが、同時に蝉丸も彼に手を出しあぐねていた。
　先手は出せない。それではゲームに乗ったことになる。刀を振るえば、その傷は命へ達する深い刻みを残すだろう。

　だが、刀の唾は親指で小出しにしたまま——それ即ち、抜く準備は整っていると言うことだ。刀も、まるでそれを望んでいるかのように手に馴染む。

　これはどういうことか——
　　　　——乃ち、彼の男の浴血を識りて。

予感めいた……無意識の戦慄は、すぐに洞察によって具象化した。
　まだ少年と呼ぶことが許される様相にありながら、そこに微かなる血の匂い、そしてそれを超える猛烈な死の匂いを纏っている。
　蝉丸は心中で愕然とした。自ら先刻振り切った現実を、こんなにも早く突きつけられることは予期していなかった。
　同時に、歯がゆかった。必要の無い殺生の業を、その若さで帯びることになってしまった少年を目の前にして。

それは、時間にして一瞬の蝉丸の葛藤。
「⁉」
浩之が蝉丸の存在に気付く。滑らかに動く右手はズボンの裏ポケットに伸びる。そして——
チャキッ。
——拳銃を構えた。
どこか、唖鳴りに似ていた。
蝉丸はその様子を黙って見つめている。その瞳はどこか、悲しげだった。
「おっさん、……いつからそこにいた？」
痛みを以ってする問答が拷問ならば、武器を以ってするそれは威嚇だ。だが、拳銃も行動も、その全てが彼に馴染んでしまっていて……。その不自然な自然さが、この無性な悲しさの原因なのかと、蝉丸はおぼろげに感じた。
「私は……」
そして、蝉丸がゆっくりと口を開く。
「私はまだおっさんなどと呼ばれる年齢ではない」
なんなんだこの男は、と浩之は内心で毒づいていた。
拳銃を突きつけられてもまるで怯える様子も無く、助けを懇願するとか逃げるとかが普通の反応であるだろうに、ただじっとこっちを見つめるだけで、加えてとんちんかんなことを言ってくる。
「はっ、総白髪のくせに強がりは止めろよ。じゃああんたは何歳だってんだ」
——思えば、それは蝉丸の強がりではなく、浩之の強がりであったのかもしれない。
「むぅ……」
予想外に蝉丸は口ごもった。
確かに、時間だけを厳密に鑑みるならば、すでに自分が前線にいた時代から六十年は経ったことになる。それでは、私は八十半ばの老人……いや、否定するべくも無い。そもそもそんな事実は昔からわかっていたことだったのだ。だが……、この少年の手前そんなことを言うわけには行かない。

「私はまだ二十代だ」
それも前半だ。と、そこまでは言わなかった。
「けっ、老けた二十代だな。まあいいさ、あんたの年なんか興味は無い。それより……」
浩之は拳銃を何度ばかりか傾けた。
「……いつからそこにいたんだ」
そのセリフには、少し焦燥が漂っていた。
「君が来る少し前からだ、少年」
蝉丸は身じろぎもせずに答えた。
「けっ、そりゃ千載一遇のチャンスを逃したな。俺が気付く前に、それで斬りかかってくれれば、……それで俺を殺すことが出来ていれば、生き残ることが出来たのかもしれないのによ」
ピク……。
蝉丸のまゆが一瞬上がる。
「生憎、今の俺は出会った奴を見逃せるほど寛大じゃねーんだ」
それに呼応するように、浩之の目も細まる。

「死に場所を求めているのか？　少年」
蝉丸が静かに問いかける。
だが、それに即する浩之の答えは無い。
一瞬の沈黙。まるで、時が止まったように。
そして――
「……死に場所なんていらねーよ。俺はただ、生きて帰るだけだ」
だが、蝉丸の目に映った浩之には、生への希望は感じ取れなかった。言葉は、あまりにも希薄すぎた。
「本当にそれだけか、少年」
蝉丸の、心からの不審。
「それだけで、そこまでの血を被れるものか？」
浩之は、応えない。
「生き延びるだけのためには不十分な所以。何が君をそこまで駆り立て――」
「うるせえよっ！」
浩之は突然激昂した。蝉丸が最後まで喋るのを邪魔するように。

蝉丸は押し黙る。そして浩之の顔に視線を向ける。浩之は目線を逸らしている。だが、そこに隠し通すことの出来ない苦渋の色。
「知った風な口聞くんじゃねぇよ」
俯いた少年は、呟くようにそう言った。暗い憎悪にも似た気色に満ち満ちた声色だった。
しかし、かつて躊躇い無く人を殺してきた鉄面皮は、もう剥がれ落ちる寸前だった。
届いていた、確実に。浩之の存在意義にも似た内容を思案し抜いてきた蝉丸の言葉は、確かに浩之の心を捉えていた。
「あんたに何がわかるってんだよ。いきなり拉致されて、かき集められた先でいきなり殺し合えなんて言われてよ。何も分からないで混乱しているところに目の前で一人、あっさり撃ち殺されて。最後まで生き残った一人が無事に帰れるって、それで武器まで渡されて……。……なんなんだよ、一体なんなんだよ⁉　俺達が一体どんな悪いことをしたっていうんだよ⁉　俺たちはただ、日々平凡に生きてただけなのによ。なあ、おっさん。答えろよ、答えてみろよ。ああ⁉」
はあはあと肩で息をする浩之。……それは、彼の独白だった。
「……誰も君の心を覗けない。だから、君の選択を否定は出来ない。だが——それは皆同じことだ。君も、他の人間の気持ちは分からない」
蝉丸は、何かを目論むように一拍置いた。
「……殺された人間の気持ちは分からない」
浩之はぎりっ、と歯を食いしばる。
「だから何なんだっ⁉　俺は死にたくない！　だから、俺を殺そうとする奴は、殺そうとするかもしれない奴は、誰一人生かしておくことはできない！　だから俺は、皆敵に回して、同級生にまで……銃を向けて……っ……」
少年……。
蝉丸はほんの少し憐憫の思いを催した。

この少年もまた、この狂った環境の犠牲者だったことに気付いて。
「だから……」
浩之は顔を上げ、銃を構えなおす。その目には涙など溜まっていない。ただ、ほんの少し紅いだけ。
「俺は殺してきた。そしてこれからも殺す。もう止まれない。俺は……俺を保つために、走り続ける」
そこには、さっきまでの暴発した感情の残滓も無かった。あるのは、ひどく冷酷で……痛々しい決意のみ。
「そうか……」
蝉丸は目を瞑り、静かに頷いた。
「ならば、私はそれを阻止せねばならんだろうな」
その言葉は、浩之に届かないほど小さな呟きだった。
「さよならだ……」
そして、浩之は一発発砲した。

「何!?」
……銃弾は、蝉丸に掠りもしなかった。
浩之は蝉丸の胸を狙ったつもりだったが、実際の銃弾は蝉丸の左肩上をすり抜けていった。
「少年、そこからでは君に俺を捉えることは出来ん！」
蝉丸は高らかにそう言った。
そこには、二重の意味合いがある。
「くそっ……」
浩之は左目を押さえた。さっきの傷が仇となったか、視界が狭くぼやけている。右目との視力差が遠近感を惑わせ、結果狙いは外れた。
確かに、この場所からの一撃必殺は難しい。
「命中させたければもっと近くから狙うことだ！」
それは決して挑発ではなく、両者にとっての掛値なしの真実であった。
「一発で無理なら……」
だが、浩之は接近などしない。

「数撃てばいいんだよぉっ！」
ダンッ！　ダンッ！　ダンッ！
浩之は三回連続して発砲した。
だが、その弾道は全て蝉丸に読まれていた。
……ここにもう一つの要素がある。
そもそも蝉丸は、一発たりとも銃弾を浴びる気などなかった。まして彼に命を投げ出す気も無かった。
そして、仮に視界障害と言う優位が無かったとしても、それを為し得るだけの技量が蝉丸にはあった。
蝉丸は初弾の発砲の瞬間に体を翻す。そして、浩之から見ての左側から一気に彼に接近する！
「ぐっ……」
速い……。その予想外の機敏さ、そして死角を突かれたことによって反応が数瞬遅れた。
もう接触まで数メートルも無い。浩之は急迫する蝉丸の眼前に向かってトリガーを引いた。

カチッ。

「何ぃっ!?」
それは致命的な弾切れだった。数で補うには、少々器に違いがありすぎた。
「むんっ！」
一瞬で浩之の懐に入り込んだ蝉丸は、唸るような当身で彼を吹き飛ばした。
かなりの重装備だった。にもかかわらず、浩之の体は見事に宙に浮いていた。
ばたんっっ！
「ぐはあっ！」
地面に叩きつけられる浩之。その重装備が仇となり、彼は内臓への強烈な衝撃に激しく喘いだ。
「がッっ……あああ……くはっ！」
そして、何秒もしないうちに気を失った。
蝉丸はその間、ずっと当身の残心を保っていた。
浩之が気絶したのを確認して、ようやく構えを解く。
するとと何か不可解な手応えがある。

「む」
刀だ。結局左手に握りっぱなしであった。
「まあ……抜かずに済んだのは不幸中の幸いだった。なんだ、不服なのか？」
もの言わぬ刀に、蝉丸は話しかける。
――視界の隅には浩之の姿。
「……他に方法があればよかっただろうにな」
蝉丸は一言だけ、そう呟いた。

「(・∀・)蝉丸～～～～蝉丸～～～～」
どこかからか彼を呼ぶ声がする。
「(・∀・)蝉丸～～どこ～～～～？」
「こっちだ、月代」
蝉丸はそう答えた。
すると少し横道の方から、声の主は姿を現した。
「(・∀・)あー、いたっ。もお、早くこれ取ってよ～」
仮面の少女はひどく不服であることを訴える。だが、その表情からは満足げな様子しか感じ取れない。
当たり前だが。
「まだ水辺には着いていないぞ」
蝉丸はあっさり言った。
「(・∀・)え～～、それじゃまだコレ取れないのぉ～」
「そのようだな」
なぜかくっついていた面は、無理にはがすと月代の皮膚を持っていってしまいそうだった。
「もう少しだ、我慢しろ」
「(・∀・)うぐぅ……」
月代は悔しそうに呻いた。誰かの口癖に似ていた。
「(・∀・)ところで蝉丸。突然声が遠くなったみたいだけどなんかしてたの？」
「いや……」
失神した浩之を、蝉丸は荷物ごとおぶって言った。
「ちょっと野暮用でな」
まるで、本当に何事も無かったかの様子で蝉丸は言う。
「(・∀・)ふーん……」

月代は少ししっくり来ない様子だったが、すぐに興味を失った。
「ま、いっか」
「うむ」
そして一行は、足取りも軽く水辺へと向かって歩き出した。

何かを奪ってまで俺がやりたかったことは、結局なんだったのか。
今となっちゃ、分かりやしねえ――。

204　両表のコイン

朝……
夜を徹して寝ずの番を果たした和樹は、小さくあくびをした。
(不謹慎だよな、あんなことがあったってのに)
明け方、あの高槻からの放送――由宇の名前が挙げられていた。詠美の話から予想できなかったわけじゃない最悪の考え……
もしかしたら由宇ならば――
和樹のかすかな希望すら打ち破られた。
「もう、許せねぇ……いや、ダメだ」
和樹は煮えたぎる気持ちの昂ぶりをなんとか押さえる。いくら和樹の武器が機関銃だからといって、むやみに突っ込んだところで犬死が待っているだけだ。
すぐ横で、詠美が静かな寝息を立てて寝ている。
和樹の迷いはそこにもあった。
最初は仲間を集めてみんなで敵を倒そう――そんなふうに思っていた。
「甘すぎたんだな、俺は」
瑞希は、もういない――
いつも憎々しかったが、心の底では誰よりも固い絆で結ばれていたはずの大志。

裏切られて、そしていなくなった。
いつも大人っぽく、だけど本当は誰よりも子供のように慕ってくれていた郁美ちゃんも、いない。
そして、今また由宇までも。
それだけじゃない。まだどこかにいるはずのみんなも——詠美には会えたんだけど——ここにはいない。
これは、現実なんだ。虚構の世界じゃない。
だけど……
一度は自暴自棄になりかけた自分、それも詠美の存在を確認してもう一度自分を取り戻すことが出来た。
でも、このまま行動して本当にいいのか？
機関銃を手に取る。
共にあいつらを討つ仲間。探せばまだきっといる。和樹や詠美のように生き残って動いてる者もいるはずだ。もしかしたらもう戦っている奴等もいるのかもしれない。

再度詠美の寝顔を見つめる。よほど疲れていたのだろう。最初は寝るのすらも恐がっていたのに。
和樹はためらっていた。詠美を連れまわして行動することに。
誰かに預ける——誰に預けるというのだろう。
おいていく——置いていけるわけがない。というか連れまわしたほうがよっぽどマシだ。
和樹は答えを見出せずにいた。だが、考えるのをやめるわけにはいかない。
後悔しないために。
「——んっ……」
「おっ、起きたのか詠美？」
「えっ？　……そっか……うん、おはよ……」
詠美が目をしばたたかせながら上半身を起こす。
「いつの間にか寝ちゃったんだ」
「そうみたいだな、ぐっすりだったぜ」
「ヘンなことしてないでしょうね」
「するわけねぇだろ……」

「ポチは寝なかったの？」
「……俺は昼間、寝てたからな。（ポチはやめろよ、二人のときぐらい……）」
かすかに、腹部が痛んだ——
「ほらよっ！」
「わっと、いきなり投げないでよね！　で、でも……あんがと」
二人で軽い朝食を取る。昨日食べなかった残りのパン。人間の腹は良く出来ている。食欲はなかったが、パンを口に含むだけで何か充実感を感じる。
「ねぇかずきっ、わたしが寝てる間、何にもなかった？」
不安気に詠美。
「ん、ああ——」
詠美の視線を受けとめることができないままに呟く。
言えない。
いつかは知ってしまうかもしれないが、今ここで由宇の死を、現実を伝えることはできなかった。
「ねぇ、これからどうするの？」
「ああ、仲間……同じ志をもった仲間を集めるんだ。抵抗、脱出、いくつか戦う手段はある。だから行動しなきゃな」
「うん……」
いつものような覇気が無い。
（だけど、これが本当の詠美なんだよな）
和樹は知っている。虚勢の裏に隠された本当の詠美を。
（まあ、本人に言ったら罵倒されるのがオチだろうけどな）
耳まで紅潮させて食いかかってくる詠美が脳裏に浮かんだ。
「あたしも、もちろんいっしょだよね」
「……」
和樹が考えてもでなかった答えが、今そこにあった。

「だ、ダメだダメだ！」
和樹は頑なに首を横に振った。
いざ決め付けられると、それはやはり不安になってくる。
「な、なんで⁉　かずきはあたしがじゃまなわけ⁉　こんなちょーびぼーの乙女なあたしをこんなところでおきざりにしよーってわけ⁉」
置き去りにする……そんなことできない。だけど、どうしても最後の決断、勇気が足りないのだ。
「……」
「うーっ！　もういい、あたしかえるっ！」
目に涙を湛えて、詠美がきびすを返す。
「まてっ！」
そのまま走り出そうとする詠美の手をがっしりとつかむ。
「ううっ……」
今にも涙が溢れ出しそうな瞳。
「……分かった。じゃあ、こいつで決めよう」
「ふみゅっ？」
和樹のポケットに入っていた、たった一枚だけのコイン。
「この十円玉の表が出たら詠美を連れて行く、裏が出たらどこか安全な場所にいればいい」
「そ、そんな、まって……」
ピ――――ンッ……
詠美の静止の声も届かず、コインが舞った。
「――――っ!!」
詠美は目をぎゅっと閉じ、顔を背けた。
パシッ！
「詠美……」
「やだ……聞きたくない！」
「見ろよ、表だよ」
「やだやだ……えっ⁉　それじゃあ……」
「おまえの強運には負けたよ、いっしょに行こうぜ」
「う、うん！」

詠美の顔が、花が咲いたように明るくなる。
「ポチ！　いくわよ！」
「離れるなよ……それと、俺はポチじゃねぇ」
「あんたなんかポチでじゅーぶんよ！　このポチまる！」
おれは、卑怯だよな。こんな形でしか……
コインを手に取る。だけど……
「勇気出たぜ、相棒」
もう一度コインを天に放って、それをつかむと、なぜか力が湧いた気がした。

205　さよならを、あなたに

「誰？　じゃないわよ!?　あなたがお兄ちゃんを殺したのね！」
茜は、地面に横たわる死体と目の前の少女を交互に見た。
「……妹さん？　……誤解です。私はこの人が死ぬのを看取っただけです」
「嘘！　そんなこと言われても信じられるわけないじゃない！」
理奈の言うことも一理ある。茜は銃を持っているのだから。それにこの状況下、肉親の死体を前に冷静でいられるはずがなかった。理奈は大声で叫ぶことで恐怖心を押さえ、茜をきっと睨み付けた。対する茜は全く動じない。
「……だから、誤解です」
「許さない！　絶対、殺してやる！」
そんなことが出来るとは思ってもいなかった。ただ、感情が先走り、叫んでいた。
茜は「ふぅ」と溜息をつき、冷酷に告げる。
「……武器なしでですか？」
理奈は凍り付いた。
今手持ちのものといえば小型カラオケのみ。
これで殴り掛かれというのか、相手は銃を持っているのに？

「うるさいっ！」
そんなこと構いもせず、茜に殴り掛かる。
茜は銃を理奈へと向け……思い直して、すっと左に避けた。
勢いあまって理奈は転び、小型カラオケが地面に落ちる。
起き上がったすぐ目の前に、英二の死体があった。
「だって……お兄ちゃんが……」
そのまま英二の死体にしがみつき、泣き叫んだ。
その光景をしばし見つめ、茜は再び銃を上げる。
理奈の視線が、その動きを捕らえた。
何も映さない、暗い銃口を見つめる。
「……あなたは私を殺すといいました……だから、私もあなたを殺します。……さよなら」
幾度とない銃声が、この森には響いていた。
今度の銃声もまた、森の一部となっていった。

理奈の体が崩れ落ちる。
傷口から血液が……流れていなかった。
いや、そもそも傷口なんて存在しない。
茜の撃った弾は、理奈に当たっていない。
理奈は緊張に耐え切れず、失神しただけだった。

(……どうして外れたの。
……やっぱり私は、人を殺せなくなったの。
……違う、きっとあの人は私を殺せなかったから。
……私がここで、殺す理由がないだけ。
……そうに決まっている。
……もう行こう)

そう心に呼びかけても、茜はしばらく、その場を離れることが出来なかった。
残された少女は、これからどうするのだろう。
そんなことを考えていた。

206　休息

小さな沢を見つけた篠塚弥生（五十四番）は、周囲の安全を確認したうえで、そのほとりに腰を下ろした。先程の死闘から数刻。あの戦場から三、四キロは離れただろうか。
弥生はリュックから水の入ったボトルを引っ張り出し一気に飲んだ後、携帯食を齧りながら武器の点検に入る。
銃口内の枯葉や土を除き、空うちして引き金の異常が無い事も確かめる。弾を装填しほっと一息ついた際、澱みに映った自分の顔を見て自嘲気味に笑う。
鮮やかな御髪は乱れ、地面を転がった際の枯葉が所々ささり、顔の右半分は雪見に一撃を加えた時の返り血で赤く染まっている。
「フフフ……まるで鬼ですね……」
伏せた瞼から涙が溢れ出し、頬を伝った赤い雫が水面に幾つもの波紋を作る。
一分が過ぎた。
〝ザブザブザブッ〟
おもむろに弥生は沢の冷たい水で勢い良く顔を洗い、タオルで念入りに拭う。髪の枯葉や埃を払い髪を整え、ボトルに水を補充する。
身体中を点検して何処にも異常の無いのを確かめた後、ハンチング帽をかぶり直し武器を装備した。
「由綺さん、藤井さん……」
後に続く言葉を飲み込み歩き出す。
その顔に先程までの面影は無く、〝いつもの〟表情に戻っていた。

207　環

「おはよう、冬弥くん」
「ん……」
目を覚ました冬弥はもたれかかっていた木から身

体を起こすと、手の甲でまだはっきりしない目をこすった。俺はどうしてここにいるんだろう。どうして外で寝ていたんだろう。どうして由綺が俺の顔を覗きこんでるんだろう……。

（……っ）

順にゆっくりと戻ってくる記憶が、由綺があの女性を撃ち殺した時の忌まわしい光景を運んできた。

思わず、由綺の顔をしげしげと見る。

どうしたの？　というように少し首を傾げて、いつも通りに微笑っていた。

（夢……だったのかな）

希望的観測から、どうしても思いはそちらに向かう。冬弥はすっと目を伏せた。

――夢ではない。落とした視線の先、由綺の手の中には、間違いない、あの時の短針銃が握られていた。

「行こっ」

由綺はしゃがみ込んだ姿勢から勢いをつけて立ち上がった。

「緒方さんとの約束、今日のお昼くらいなんだよね？　早く行かないと、遅刻しちゃうよ」

「そうだね……」

「ほら、緒方さんすごくカンとか良さそうだし、他のみんなもササーッとすぐに見つけちゃってそうだよね。理奈ちゃんも、弥生さんも、マナちゃんも、はるかも、美咲さんも、きっともう向こうで――」

ジジッ、と嫌な音がした。定時放送だ。

『おはよう諸君、元気に殺し合ってるかな――』

そして、高槻の声が死者の名前を告げる。

初めに読み上げられた名が、一気に冬弥の眠気を吹き飛ばした。

「は……るか……？」

「うそ……うそ……だよ、ね……」

由綺の顔色がみるみる青ざめていく。そしてきっと、俺も同じ。

はるか。

俺の、由綺の友達。いつも軽口ばかり叩き合っていたけど、やっぱりあいつは親友で。
かけがえのない、親友だった。
「…………」
「行こう、冬弥くん」
「え？」
由綺が、冬弥の手を取って、駆け出す。
「ちょ、ちょっと待てよ、由綺？」
「早く……早く、緒方さんたちのところに行こう……！」
ギュッと掴んでいる手が、震えていた。

「いいザマね」
「もぐーっ！　むがーっ！」
住井の両手両足を包帯で縛り、ついでにさるぐつわもかませると、マナはふふんと笑った。
「これからは初対面の女の子にあんな口きかないことね。それに、あなたみたいな人が調子に乗ってマシンガンなんか振り回してると、すぐにタチの悪い人に見つかって狙われて殺されて奪われちゃって、みんなの危険度がアップするんだから。荷物は私が預かっとくわよ」
「もがーっ！　むぐぐーっ！」
「そんなにきつく結んでないし、植え込みにでも放り込んどくから心配しないで。その状態で狙われたらオシマイなんだから、ほどけるまでおとなしくしてることとね」
言いながら、マナは住井の側に転がっているマシンガンを取り上げ、自分の鞄の中に投げ込んだ。ナイフ、オートボウガン、そしてこのマシンガン。薬品や包帯が少々、それに中身は確認していないが聖の支給武器もあった。おかげで荷物は結構な重量になっていたが、使わないからと言って捨てるわけにもいかない。こんなものを転がしておいて、下手な人間に渡ったらそれこそ危険だ。
（その気になったら、普通に戦ってでも結構生き残

れるかもしれないわね……冗談よ、センセ）
ポケットの上から、聖の形見のメスに触れる。先端に睡眠薬が塗ってあるこのメスだけは、いつでも使えるようにポケットに入れてあった。
――メスを受けて倒れたあの男は、まだ寝ているのだろうか。
（また会ったら、今度は蹴っ飛ばしてやるわよ）
今になって再び湧き上がってきた怒りに、思わず手近な住井を蹴飛ばしてやろうと思った時、遠くに人の気配を感じた。
「誰……？」
マナは植え込みに身を潜め、注意深くその方向をうかがった。徐々に姿がはっきりと見えてくる。男と女、二人組だった。しかも……
「藤井さん！　お姉ちゃん！」
見慣れた二人。逢いたかった二人。やっと、逢えた。植え込みから飛び出し、ぱっと駆け出す。
「も、もがーーーーーっ！」
道の真ん中に、身動きの取れない住井だけが残された。
「マ、マナちゃん⁉」
冬弥は向こうから走ってくる少女を見て驚きの声を上げた。
（まずい……）
まさかこの場で逢えるとは思わなかったが、今の由綺は恐らく――普通じゃない。
万が一。万が一、いきなりマナちゃんを撃ったりするようなことがあったら。最悪の想像が頭をよぎる。……だが。
「マナちゃーん！」
「お姉ちゃん！」
由綺は持っていた短針銃をあっさり冬弥に預けると、走り寄ってきたマナの身体を優しく受け止め、抱き締めた。一連の動作はなんの澱みもなく、ごく自然なものだった。あの時の狂気を感じさせるよう

なものは、何一つない。
（そうか……）
――由綺の心は、無理矢理に作り出した虚構の日常の中にある。こうして俺だとか、マナちゃんとかと一緒に過ごす時間。由綺は今、こんなどこともわからない島じゃなく、いつもの通り、蛍ヶ崎の街にいるのだろう。それはひどく刹那的な、非現実だ。
「ほんと、良かった……っ！　お姉ちゃんがもし死んでたりしたらどうしようかと思ったわよ」
「マナちゃんも無事でよかっ――あっ、足ケガしてるよっ⁉　だ、大丈夫⁉」
「うん、ちょっと、ね。それよりお姉ちゃん、藤井さんをちゃんと守ってあげたみたいじゃない？　良かったわね、藤井さん」
――ドクン。
マナの軽口に、冬弥の心臓が大きく脈打つ。
が、あくまで由綺はニコニコと微笑んでいた。
「てへへ。私、冬弥くん守ったよねー」
「あ、ああ、うん。……由綺には感謝してるよ」
冬弥はどう反応していいかわからず、曖昧に返事をした。外から見れば、この三人の輪は仲の良い三人が世間話でもしているように見えるのだろう。
だから、それは起こった。
「おい、その人たちってお前の知り合いか？」
道端に放置されることに憤りを感じた住井は、全身全霊をもって、必死の努力の末に戒めを解いてしまっていた。
「にしても酷いな、お前。あんな状態で置いてくんだからな、焦るぜ……ところであんたがた、美咲さんって言う――」
由綺は無言で冬弥の手から短針銃を取ると、住井に向け、撃った。
ジャッ！
「ぐがあっ⁉」
動作の素早さが逆に手のブレを呼び、射撃の精度を損ねたことが住井にとっては幸いした。撃ち出さ

れた針は本来の狙いである頭を大きく逸れ、住井は左肩の肉を吹き飛ばされただけで——決してかすり傷というレベルではなかったが——済んだ。
「お、お姉ちゃん⁉」
「ぐ、くっ⁉」
　何が起こったかもよく理解できなかったが、住井の足は即座に由綺に背を向けて駆け出していた。
　肩が灼けるように痛い。流れる血の感触。熱い。
　だが、逃げなければ、確実に死ぬ。
　そして、まだ死ぬわけにはいかないのだ。
「美咲さん……みさきさん……ッ！」
　浮かぶのは、愛しい女性の顔。
　護る、そう約束した人の顔。
　——美咲さんは、生きている。
　俺が、護る。
　生きて、護る。
「……あ」
　カチッ、カチッ。

　ニードルガンの装填数の少なさも住井には運が良いとしか言いようがなかった。由綺はヨロヨロと逃げていく住井に向けて数回トリガーを引いたが、針が射出されることはなかった。
　住井の後ろ姿が遠くに消えると、由綺は照れくさそうに肩をすくめた。
「てへへっ、ちょっと服に血がついちゃったね……そこの水道で洗ってくるね」
　由綺はペロッと舌を出すと、側のマンションの敷地内の手洗い場に向けて走っていった。
「……どういう、ことよ」
「………」
　マナの小さな肩が震えていた。
　そんなことは冬弥自身が聞きたかった。どういうことなのか。どうしてこうなってしまったのか。
　何を話したらいいかわからなかった。しばらく、向こうで水道を使っている音だけが響いていた。
「……俺が」

悩んだ末、この島に来てから今までのことを順に話していくことにした。
英二と待ち合わせをしたこと。見知らぬ少年に襲われたところを由綺に助けてもらったこと。由綺が女性を撃ち殺したこと。そして、英二との約束の場所に向かう途中、ここでマナと出会ったこと。
話し終わったところで、また沈黙が訪れる。ややあって、マナがゆっくりと口を開いた。
「幻滅ね」
マナの目から涙が一筋、零れ落ちた。
「どうして……どうしてお姉ちゃんを護ってあげられなかったの……!? そんな……そんな……」
「俺が……弱かったんだよ」
「……ッ！」
言った瞬間、脛に痛みが走る。泣きながらマナが蹴ったのだ。だがその痛みは、いつも家庭教師としてマナの側にいた時のそれに比べれば本当に弱々しいものだった。マナが冬弥の目を、濡れた瞳でキッと睨みつける。
「行くわ。……お姉ちゃんによろしく」
「マ、マナちゃん！」
振り返ることはなかった。冬弥に背を向け、早足でその場から離れていく。徐々に小さくなり、やがて消えていったマナの背中を冬弥はただ見送ることしかできなかった。

——そう。
由綺がおかしくなったんじゃない。
悪いのは俺なんだ。
弱い俺を護るために、由綺は壊れた。
俺が、壊した。
恋人が、俺のために人を殺す。
俺が、恋人に人を殺させている。
俺が死ぬか、さもなくば俺自身が由綺を殺す。
由綺がこれ以上罪を重ねる必要なんて、ない。
でも、それは俺にはできない。

俺は脆弱で、姑息で、臆病者だから。
……なら。

「あれ？　冬弥くん、マナちゃんは？」
「……行っちゃったよ」
冬弥は、鞄の中から特殊警棒を取り出し、太陽にかざしてみた。反射する光。そこに、粉雪の中で微笑む恋人の姿を見た気がした。
――それなら敢えて罪を犯そう。

208　取れない仮面

月代と蝉丸は格闘していた。
――人と、ではない。
月代の顔に吸い付いて取れない仮面とだ。
二人は月代が見つけた水源地に戻っていた。
「(・∀・)水……つけてもはがれないよ？」
「……この面は、のりの類で貼り付いているわけではない様だな」
「(・∀・)ど、どういうこと？」
恐る恐る月代が尋ねる。
「何かの呪いか……あるいは妖術の類か」
「(・∀・)の、呪い!?　それじゃあ、もう一生取れないってこと!?」
「……」
蝉丸は何も言わない。いや、何も言えなかった。
月代を見つけたのは良かった。
だが月代の顔にくっついて離れないお面が曲者だった。無理に取ろうとすれば月代は痛がる。だいたいお面の構造自体良く分からない。
水をつければ取れるだろうという発想も蝉丸が少年時代に一升瓶の口に指を突っ込んで抜けなかった時、きよみが水を指と瓶の間に注ぎ、それでようやく抜けたことを思い出しての事だった。
「(・∀・)ええ～～～～っ!?　やだやだ！　こんな顔じゃ、もうお嫁に行けないよぉ！」

蝉丸に泣きつく月代、蝉丸は困惑していた。
蝉丸は月代を励まそうと、なんとか言葉を探したが、その結果とんでもない言葉が飛び出してしまった。
「もし、一生その面が取れなかったら、俺が月代を嫁にもらってやる。だからもう泣くな」
「(･∀･)……えっ？　ホント？」
蝉丸はそっぽを向く。今頃自分の言った言葉の重大さに気付いたようだ。
「(･∀･)ヘヘヘ……だったらこのまま取れなくても……いいかな」
「そういう意味で言ったのではない、必ずその面を取ってやるという意味で言ったのだ」
ようやくフォローの言葉が出てきた、だが時すでに遅し。
「(･∀･)でも蝉丸の実家って何処だっけ？　う～ん、婿養子じゃダメかな？　ねぇ、蝉丸～」
「……」
その後、延々と月代の話が夢見る乙女状態だったのは言うまでもない。

209　悪夢～Nightmare～

闇、一面の闇。
浩之はここがどこかも分からないまま走りつづけていた。
「はあ、はあ、ヘンな所に迷いこんじまったぜ……何なんだよここは」
額の汗を拭う。
（ヘンだな……汗だくだと思ったのに）
浩之の顔は、かなりの距離を全力疾走したのにもかかわらず綺麗なままだった。
「喉が乾いたぜ……」
口の中がカラカラだ。
水の入ったボトルを取り出し、一気にあおる。
「……喉の渇きが消えねぇ」

顔をしかめると、空のボトルを乱暴に叩きつける。
「また水源を探さなきゃな……」
光一つ通らないそこへ、もう一つの声。
「無駄だよ。あなたの喉の渇きは永遠に消えることはないんだよ……」
「誰だ!?」
浩之が銃を向ける。いつの間に持っていたのだろうか。
気がつくと浩之は手に銃を握っていた。
だが辺りは一面の闇。
「出てこい!」
見えざる敵へ恐怖で、浩之の声は震えていた。
「あなたの心が泣いてるよ。赤い涙。もう、血でまっ赤なんだよ……」
唐突に浩之の目の前に現れる、一人の少女。
「あ、あ、……なんで、お前、死んだはずじゃ……俺が殺したはずじゃ……」
思わずあとずさる浩之。だが、少しも距離は開かない。
むしろ、相手が動いてもいないのにその距離は縮まっていく。まるで浩之から相手に歩み寄るようにゆっくりと。
少女——瑠璃子は浩之のあごにそっと手を当て、童子のような笑いを浮かべる。
浩之は恐怖のあまり、ピクリとも動けないでいた。
「クスクス、あなたの心が泣いてるからだよ。その心、癒してあげる——」
瑠璃子の唇がその頬に触れる。
「く、来るなぁ!」
その刹那、浩之が瑠璃子に銃を放つ。
五寸釘が瑠璃子の胸に突き刺さる。しかし、そこから血は一滴も出なかった。恐怖と狂気が浩之を襲い、脅えに顔が不自然に歪んだ。
「見てみてよ……ほら、あなたのお友達……」
何事もなかったかのように瑠璃子が微笑む。
また闇から一人、一人と現れる。

「藤田くん！　良かったぁ、ここにいたんだね。すごく心細かったけど、藤田くんがいれば、きっと大丈夫だよね。一緒に頑張ろう？」
雛山理緒が不安げな顔を散らして、元気に叫んだ。だけど、だんだんとその顔が、その腕が、赤く染まって……
「そして、あなたの心に今も生きている人達だよ……」
目に光を感じられないけど、どこか暖かい印象の女の子――
まだ中学生位の無邪気な、少女――
自分の命を救ってくれた、ぶっきらぼうだけど優しかったはぐれ医師――
もみあげが印象的な、笑顔の似合う女の子――。
繊細で、触れただけで壊れてしまいそうな心をもった黒髪の優等生――。
――藤田くん…浩之さん……――
口々に知らないはずの浩之の名前を挙げていって、だけど、彼女達の視界は、赤く染まって……
「あなたの、親友だよ」
最後に現れたさわやかな少年。
「ぼくたち、ずっと友達だよね」
「雅史……」
「そして……私だよ」
泣き笑いで浩之がその少年を見つめる。
作り物の真珠のような丸い瞳が浩之を捕らえる。
瑠璃子。
「来るなよ、俺に、近づくなよ……撃つぞ!?」
「いいよ、わたしも、まだここで生きてるから……ね？」
浩之の胸に、あてがわれた白く細い手。
「藤田……浩之ちゃん……」
闇が、ひび割れていく。
「来るなよ、おい……来るな、その名で呼ぶな！俺の中に入ってくるなよっ！」
――浩之ちゃん――

瑠璃子の姿が歪む
「やめろ、やめてくれ……あか……り……」
どうでもよかったあの頃。
ただ過ぎていくだけの、だけど幸せだった日常。
気が付くと、浩之の頬には一筋の涙。
乾ききった浩之が夢で、だけどここに来て初めて心から流す涙だった。

210　落日

熱、熱、熱。肉を刈られた痛みは熱に名前を変えて左肩から全身に広がり、住井の体力、そして精神力までも蝕む。倒れ込みたい。ずっと眠っていたい。何もかも忘れて苦しみから遠く離れた夢の中を彷徨ってたい。駄目だった。自分の意地は高熱を凌駕し、苦しみの中であってもその足を止めることを許さなかった。自分が立ち止まったら誰が美咲さんを守るのだ。自分以外にはいないんだ、泣くなよ格好悪い。

美咲さん、美咲さん美咲さん、美咲さん。必死に呼び続ける声は掠れきっていて、静かな森の中でもまるで響かない。これじゃあ自分の声は美咲さんに全然届いていない。くそ、声出せ住井護、それでもお前は美咲さんのナイトかよ。自虐を無理矢理活力にしようと住井は自分に罵声を浴びせる、だがそれでも足りない。畜生、これも溜息のような声。
ありとあらゆる希望という希望の詰まっていたデイパックは無様にも放置してきてしまった。パソコンも携帯もマシンガンも全部鞄の中だ。脱出できる希望はすべて絶望という暗い海の藻屑になってしまった。従兄弟の北川潤に再会してもこれじゃあ何も成し得ない。何の為に自分は美咲の傍を離れたのだ。そんな自虐が燃料となって住井の足を動かす。
結局この手に残っているのはただ一つの意志だけだ。形もない色もない、ただ熱としてこの右手にある確固たる想いだけだ。思う、それだけでも美咲さんを護るには充分だ。マシンガンよりも爆弾よりも

強い武器がこの世にはあるのだ。この「意志」で美咲さんを必ず守ってみせる。思念が住井の動力炉となり足を動かす。てのひらに残っている意志が命令する、内臓が破裂し熱が身体の自由を奪うまで決して立ち止まるなと。その意志に従い住井は森の中を彷徨う。

生きている。生きている、生きている。美咲さんもオレも、まだ生きているんだ。

薄暗闇の中を探し回るうちに、住井の頭にもやもやした様々な思考が流れてくる。冷静さのかけらもない自己満足の思考だ。洪水のように溢れるそれを、しかし住井の意志は止められない。

思う。

生きてさえいれば光はやがて降るのだ。誰かの温もりがあればオレはずっと生きていける。美咲さんの温もりがあれば歩いていけるんだ。

思う。

それにしても、今までの自分の短い人生には何の目的も無かったな。誰かの温もりも知らず、他人とと他人として接し、ぬるま湯のような友人と馴れ合って生きてきたんだ、目的なんてある訳がなかった。だらだらと過ごす日常。なだらかな坂を自転車を引いて上るように、ゆるゆるとした日常。

思う。

こんな非日常に放り込まれてもなお、自分は暢気だったな。人を殺しても非日常を認識出来なかった。自分はどうかしていたに違いないと思う。

思う。

別にすぐ死んでしまっても良かったんだ。そりゃ生き残れるんだったら生き残りたい、女の子を抱いたこともないんだ。けれど実のところ死んだって別に何も違わない。女の子を本当に好きになったことがなくても人は死んでいける。惜しいとは思うけれど嘆くほどではない。

思う。

自分が彼女に出会えたことは運命だったのかもな。きっとみじめな自分に、万有引力という名前の神様が生きる為の小さな目的を与えてくれたのだ。運命なんて全然信じたことのなかった自分が、こうして運命論を抱いていることが少し誇らしい。

思う。

確かにふたり一緒にいた時間は短かった。けれど、その短さは何を邪魔すると言うのだろう。唐突に始まる恋が唐突に始まらない恋に劣ると誰が決めた。共に生きて帰って、ふたりでにこやかに笑い合いながら、美味しいモーニングコーヒーを飲みながら、もう一度朝陽を見たい。

思う。

他人を好きにならなくても人は死んでいける。これだけは紛うことなき事実だと今でも思う。けれど、——人は、誰かに好きになってもらわなければ、生きていけないんだ。

思った。

住井護（オレ）は澤倉美咲（アナタ）に好きになってほしかったんだ。

やがて住井の頭に冷静さが戻る。ここまで探しても見つからないとは、自分の捜し方が悪いのか。それとも、もしかしたら美咲は何処かで気絶などしていて、実は既に美咲と何度かニアミスを、

「——っ、……何考えてんだ、オレの頭は」

何を言ってやがるんだこの脳みそは。ゲロまみれになって遂にイカレちまったか？　あれは幻だっただろうが。あれは幻だ、美咲さんを心配するあまりつい見ちまった幻想さ、だから止まれよこの間抜けな足、そこに行っても美咲さんがいる訳がないだろう、な、だから止まれってば、徒労だって解ってるくせに、止まれって、なあ、頼むから。

朝陽なんて早起きが出来る奴なら何度でも見れるもので、だから全く価値のないものだと、この瞬間も住井は思っている。朝陽くらい何度でも見れる筈

なのだからどうしてありがたがる必要がある？
だから、「それ」を見てしまっても、住井は、朝陽なんてなんの価値もないものだと思う。
真っ赤な血。遠目にもその血が既に高い粘性を持っていることが解る。近づく。住井の足は止まらない。土を踏み締める音が耳のすぐ傍で鳴っているような錯覚がする。薄暗闇の中でも解る。赤い黒い、動きを失い熱を失った行き場のない血液が、彼女の眠る周りの土に染みこんでいるのが解る。
胸に小さな穴が開いている。穴と呼ぶべきかどうかも知らない、ちっぽけな黒い穴だ。そんなもので人が死ぬとは思えないくらいの小さな穴。そこから血はもう流れていない。ほぼ完全に血は止まり、
そして彼女は仰向けに眠っていた。
膝を付く。身体から力が抜けていく。
やはり、先程見た美咲さんのマボロシは、幻ではなかったんだ。自分の頭が現実を認識出来なかっただけなんだ、今頃になってやっとそう気付く。
住井は力無く周囲を見回す。同じ場所だ。自分は先と全く同じ場所に辿り着いている。唯一違うのは、今自分はこれが現実なのだと認めきっていること。
無意識に手を伸ばし、住井は美咲の頬に触れる。土に汚れて黒く汚れてしまっている頬。口から漏れた血で少し赤くなりすぎてしまった唇。閉じられた瞼、変わらず薄い色素の髪。
マボロシは僅かに熱を帯びていた。その僅かに残る熱が、住井の指を通して奪われてゆく。
確信出来た。
オレはバカだ。
「美咲さん」
彼女を呼ぶ声はひどく掠れている。きっとこれから死ぬまでずっと、自分はこんな声でしか喋れないに違いない、そう思う。自分の声はもうこの人には届かないのだから、それでもいいと思う。
美咲の力ない身体を抱き起こし、強く、強く抱き

しめる。住井の身体に、美咲の身体に僅かに残っていた熱のすべてが移ってゆく。
住井護は泣いた。無様なくらい、道化なくらい、惨めなくらい、恥じらいも何もない高い大きい声をあげて。喪失感が胸に大きな穴を空ける。その穴から色々なものが流れ出す。生きる意志も、頭の使い方も、恋の仕方も、全部零れ落ちてゆく。両の眼から零れ出す涙が美咲の頬に落ちる。マグマのように熱い涙は、しかし美咲に何の奇跡も起こさない。住井の涙は、ただ汚れた雨となって美咲に降るだけ。
彼の最後の慟哭だった。

殺してやる。
殺してやるよ、緒方英二。何があっても、殺してやる。美咲さんを殺したように無慈悲に無残に鬼畜のように殺してやる。殺してやるよ、何もかも全部。そう、全部だ。誰であろうとオレの目の前に現れた奴らを殺してやる。全部殺したらオレもこの糞の役にも立たない脳味噌ぶちまけて死ぬ。理由も目的もない、ただ白痴のようにこのゲームに乗ってやる。
考えてみろよ、それがオレの日常だ。彼女は——澤倉美咲は、正当な理由もなく殺された。緒方英二の勝手な衝動の為に。そして何十人という人間が、同じように、理由のない衝動の元に殺されている。目的意識を欠いた日常のオレと同じように、無目的に。オレはオレがそこまで好きではないが、オレがずっと間違った生き方をしてきたとも思わない。オレの生き方の中にも、否定出来ない一つの真実があったと確信出来る。目的なんてなくても人間は確かに生きていける。そう、目的なんてない方が人間は楽に生きていけるんだ。
くだらねえ。守りたいものなんかあったからこんなに苦しまないといけないんだ。
美咲さん。君に出会ったせいでオレはおかしくなっちまったんだ。君のせいでオレは牙を失って、君のせいで幸せな未来なんて想像しちまって、君のせ

いで人のことを好きになっちまって、君のせいでこんなに泣かなけりゃいけなくて。君に逢えてなけりゃあまだもう少しはましだったんだ。オレは怪我なんてしてないだろうし、もしかしたら最後まで生き残れたかもしれない。それに君だって、もしもオレに逢わなければこうやって死なずに済んだのかもしれない。くそ、何でオレ達は逢っちまったんだ。

住井は、目を閉じる。目を閉じて目を閉じて目を閉じて、それでも涙が止まらない。

住井は、それでも、彼女に逢えて良かった、そう思う自分が、死ぬ程情けなく思えた。

左肩に走る痛みなど今や何の問題もない。ただ苦しくて眩暈がするだけだ。人を殺すには充分な体力が残っている。問題は手段だ。今の自分には武器がない。マシンガンも携帯もパソコンも、全部あの小さな少女に奪われた。拳一つで人を殺せる程自分は強くない。殺意だけでは人は殺せないのだ。途方に暮れる。これからこの命は何をするのだ。白痴のように人を殺すことも出来ない自分は、

ふと、光があることに気付く。薄暗い闇の中で太陽の光を反射する銀色が。

――見つかった。

その時住井の目に入ったのは、光だった。幽かすぎて捉えそこないそうな、それでも確かに力となり得る光だ。

――美咲さん、一応これ、護身用にね。オレにはマシンガンあるからさ。

先に美咲に渡しておいた、一人の人間を殺している刃物だった。絶命してもなお美咲が強く強く握りしめていた、自分が渡しておいたバタフライナイフだった。

住井は美咲の熱のない指先からそれを手に取る。柄には美咲の冷え切った汗の感触。

思う。

美咲さんは、オレの手を離さないでいてくれた。

思う。
これは美咲さんの手だ。ならば、
——もう二度と、美咲さんの手を、離すものか。

211　目覚めはまぶしくて

「……なんだったんだよ、畜生」
俺は目を覚ました。
涙の跡……泣いていたのだろうか。
よくわからなかった。
「気がついたようだな」
「オッサン……」
あの男が声をかけてくる。俺を殺さなかったのか？
どいつもこいつも、甘すぎだ。
「泣いてたけど、大丈夫？」
「……なんだ、お前は？」
目の前の女——多分——は、変なお面を被っていた。
その表情がどうにも滑稽で、気がついたら俺は笑っていた。
「笑えるではないか、少年」
「……」
オッサンが言った。
何故だか、今の俺には『殺す』という感情が涌いてこない。
それは、この島に来てから始めてのことで、なんだか気持ちがよかった。
忘れ物を見つけた、そんな時の気分に似ていた。

212　再動

どれだけ走っただろうか。体力はとうに限界だった。どうやら、また森に入り込んでしまっているようだ。適当に走り回ったため、方向感覚がない。
立ち止まって、呼吸を整える。深く吸い込み、吐

く。足の傷口がまたズキズキと痛みを訴えていた。
ただ、あの場所にあれ以上いるのはいたたまれなかった。一刻も早く離れたかった。
従姉の顔を見る自信が、なかった。
「どうしてよ……どうしてよ、お姉ちゃん……」
小さい頃から、ずっと慕っていた。
アイドルとしてデビューした時も、自分のことのように喜んだ。憧れとは少し違ったが、大好きなことに変わりはなかった。
——なのに。
「んっ……」
鞄がやけに重く感じた。紐が肩に食い込んで、痛い。ふと見ると、道のすぐ脇は崖になっていた。マナは崖から少し距離を置いて座り込むと、鞄の中身を改めた。
拳銃。ナイフ。オートボウガン。そしてマシンガン。中身は知らないが——開けてみる気にもならないが——聖の支給品。
いくら重いとは言え、これらは捨てられない。拾われるわけにはいかないからだ。
救急箱は持っていたかった。いつ必要になるかわからないし、聖の持ち物を勝手に捨てるのも気がひけた。
(返せたら、ちゃんと返すからね……)
続いて携帯電話とノートパソコンに手を伸ばした時、不意に胸が締めつけられる思いがした。これらは住井からマシンガンと一緒に取り上げたものだ。
名前も知らない少年。由綺に撃たれた少年。確かにやや危なそうな人間だったが、でも撃たれる必要はなかったはずだ。
(……生きてなさいよね)
携帯とノートパソコンを、崖に向かって投げ捨てる。大して軽くなったわけではないが、荷物を整理している間に少しずつ自分の気持ちも整理できているような気がしていた。
今はもう、誰が頼れるということもない。なら、

せめて自分でできることだけでも、しよう。
霧島センセイを、妹さんに逢わせてあげたい——それはエゴなのかもしれない。でも、他にできることが考えつかなかったから。妹さんの無事な姿を見せてあげられたら、センセイはきっと安心して眠れるから。
「行こう」
マナは、また歩き出す。今度こそ、本当にたった一人で。
その頃、崖の下では突如後頭部に降って来たノートパソコンの直撃を受けた少年が、もずくを喉に詰まらせていた。

213　（無題）

「Ｏｈ！　どうしたの？　もずくがつまったの？」
「なんか一瞬『ドアの向こうで死んだおばあちゃんが手を振ってる』って感じがした……だれだよ！　山にゴミを捨てるのは、リサイクル法違反だぞ！」
「どうした、もずくが足りないの？　Ah, I see. これが降ってきたのね」
レミィは北川の頭上から落ちてきた黒板のようなものを拾い上げた、
「ナニコレ？」
「…ちょっとよく見せて、ふーんでかい傷もないし動くかな？……やった!!　やったぜカアチャン！　アイガッタイットだ！」
レミィの手を取り小躍りする北川、その頭には希望への思いと小さなたんこぶができていた。

214　ユガミ

「……天野さん、探していたおさげ髪の子って、もしかしてあの子？」
〝自分達が手にかけた〟死体を目の当たりにしてか

ら、数時間。
〝既にコト切れていた〟瑠璃子さんを確認してから、数十分。
おそらくこの数値は正確ではないだろう。
あまりに連続した人の死の数々に、僕の心も身体も、すこし妙な具合に軋み始めているような感じがするからだ。
「いえ、違います。あの子はもうちょっとこう……なんて言ったらいいんでしょうか」
「どういう風に違うの？」
「ええと、まず髪の色はあの方よりすこし派手です」
そう言った天野さんが指差す先には、仲の良さそうな女の子の二人組がいた。
……それと、なぜか傍らにタライ。
(タライ……水浴びでもするのかな？)
ぼっ。
「祐介さん、顔、赤いですよ」
「え」
言われてから、自分の顔が上気しているのに気が付く。
「なな、なんでもない。なんでもないからっ」
ばたばたと両手を顔の前で振る。
「どこか調子でも悪いんですか？」
「いいいいや、そんなことはない、そんなことはないから大丈夫だよ」
「……そうですか」
僕がそれこそ必死の思いで浮かび上がらせた、つぎはぎだらけの笑顔に。それでも、天野さんは安心してくれたようだった。
(はあ……なんか最近こういうのばっかりだな、僕)
いつも――女の子のことがからむと特に――僕は妙に浮ついた気分になってしまう。
こういうとき、沙織ちゃんだったら、
「祐くん、欲求不満なんじゃない？」

なんて笑いながらちょっとふざけた台詞で僕を――

さおりちゃんは死んでいた。

（だめだ、忘れろ。今は自分達の目的のことだけを考えるんだ）

自分の心が彼岸に去り行く前に、必死で目の前の現実にしがみつく。例えその現実に猛毒の刃が光っていても、だ。

その刃は決して現実の物ではないのだから、いくら掴んだって現実の僕は傷つかない。

だから……耐えるんだ。辛いこと、悲しいこと、やりたくはないこと、全て。

「そういえば、あの子犬はどうしたんだっけ」

すこしでも気を紛らわせるために天野さんに話を振ってみる。

「え、ピコのことですか」

「うん」

自分で名前をつけた子犬。

少し前までじゃれ付いてきてすこし鬱陶しくも思った子犬。

いなくなったらなったで、寂しくも思う子犬。

……たぶん、逃げていった子犬。

「朝、あの人を殺す前に私が逃がしてあげました」

「そう、か……」

やっぱり逃げていったのか。

僕は少しだけ安堵し、少しだけ落胆した。

「これから、どうしましょうか」

「そうだね……僕たちの目的は人探しだから、人のことは人に聞くのが一番だと思うんだ。もうピコもいないし」

「私も同意見です。けど」

「けど？」

「……この状況下で、そもそもまともにコミュニケーションが取れるのか、心配なんです」

「つまり、あの二人がいきなり凶器を振り上げて襲ってくるかもしれないってこと？」

「はい」
「その点なら、心配しなくてもいいよ」
「どうしてですか？」
「一応、僕も男だしね。それに」
見ててごらん、と言って、僕は右手首をひゅんっと前に振った。次の瞬間、ぱぱんと乾いた音を立てて、狙った場所の木の葉が二枚落ちた。
「少しは、この武器の使い方も解ってきたんだ」
「……」
「こうやって、目潰し。時間稼ぎなら十分だと思う」
天野さんは、驚いたような無表情で落ちた葉っぱを見ていた。
「今の、どうやったんですか？」
「種明かしをするとね」
皮手袋の上から中指に巻いたピアノ線を、できるだけ速く手繰り寄せる。
「ほら、先のほうに小さな石が括りつけられているだろう？」
「この石を使って、木の葉を落としたんですか」
「まあ、人間、やる気になれば大概の事はできるってことかな」
ピアノ線をしばらく手のうえで玩び、それから手の甲側に収めた。
「いつ練習したんですか？」
「昨日の夜、緊張して眠れなくてね。コツをつかんだらすぐに寝ちゃったけど、あの時は」
「それじゃあ、行きましょうか」
「うん。僕が先に行くから、天野さんは後からついてきて」
「わかりました」
そう言って、僕らは隠れていた茂みから外に出た。水面にいる二人が驚きの眼で僕たちのほうを向いた。
僕は両手をあげて戦う意思のないことを表現する。二人のうちの一人が、もう一人を庇うように前に出てくる。

「……誰よ、あんたたち」
女の子にしては妙にドスの利いた声で、おさげ髪の子が言った。

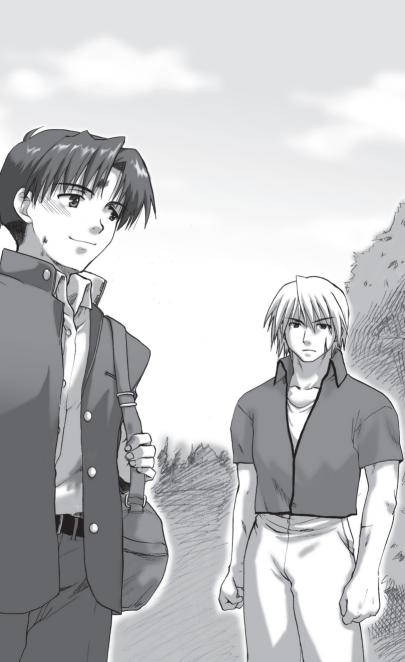
215　笑み

笑えることはいいことだ。
嘲笑の類いとは違う、真の笑顔。
喜び、楽しみ、そういった笑顔。
浩之が浮かべた笑顔は、まさにそれだった。
笑顔は人の心に安らぎと希望の光をもたらす。
どんなに辛い状況でも、その強さをもって、周りを安心させることのできる人間がいる。
それは、ずっと昔から、そうだった。
「笑える強さがあるのなら、少年、君はもう大丈夫だ」
蝉丸は浩之に告げた。

「何のことだかわかんねーよ。何がいいたいんだ、あんたは？」
蝉丸を睨み付ける。その目には、殺気はこもっていなかった。
「君は先程、自分を保つ為には『殺す』しかないと言ったな。今もそうか？　本当に『殺す』ことしか見えないのか？」
違うだろ、とでも言いたげに、蝉丸が問う。
『殺す』感情が涌かないという事実。あの悪夢。
最後に呼んだ名前。あかり。
今まで自分がやってきたことと、その重さ。
正面から、向き合って。
聞こえてきた言葉。
(浩之ちゃん。本当は優しいから)
「俺はさっさと帰りてーんだよ。――あかり達と、一緒にな――」
たったそれだけの言葉を言うのに、長い、本当に

長い時間がかかった。
「そうか」
変わらぬ口調で蝉丸は言った。
何を思っているのか、浩之にはわからなかったが、どうやら非難されてはいないらしい。
「あぁ。気付かせてくれてありがとな、おっさん。お人好しもいいとこだ」
本来の浩之の、あの独特の笑み。
「む」

「じゃあ、俺はそろそろ行くぜ」
銃を含む自分の荷物を持ち、浩之は立ち上がった。
「気をつけてね～」
今だに面を被ったままの月代が言う。
「あんたもその顔。なんとかした方がいいぜ」
からかうように言った。
「これからどうするのだ、少年？」
「そうだな……」

「君は相当に人を殺めているのだ。その姿が誰かに見られている可能性も大きい。協力者は期待できないぞ」
蝉丸の忠告が飛ぶが、そんなことは承知の上だった。もとより、見ず知らずの協力者を期待する方が間違っている。
だがそんなことは、今言うことではない気がした。
「わーってるよ」
言って、空を見上げる。あの広い大空を。
「とりあえず、安心させてやりたい奴がいるから。そいつを探す。その後は。その時に決めるさ」
「そうか」
「おっさん、名前は？」
「坂上蝉丸だ」
「変な名前だな」
「む」
浩之の失礼な台詞に、多少ムッとした顔をする。
「俺は藤田浩之だ。じゃあ、世話になったな」

今までとは違う未来へ進む。
その為の一歩を、今、踏み出した。

人を人とも思わずに殺した過去を、受け止め。
その上で、あいつに会おう、笑ってやろう。
さっきまでは全然思い出しもしなかった、自分の殺した人達の顔がよぎる。
(自分勝手で悪いが、あんたらを殺した責任はきちっと取るぜ。
絶対に、今までとは違う方法で、生き残ってやる。
女医さんよ――あんたに助けられた命、無駄にはしないよ。
あんたは医者の鑑だぜ)

空を見る。
聖が苦笑を浮かべていた、そんな気がした。

216　傍にいたいと願うこと、そして別離。

――待たせた罰は二時間。
……私は七年待ったけど、祐一は二時間で許してあげるよ。
あの雪の日。名雪は自分を置いて遠いところへ行った少年にコーヒーを差し出した。
「遅れたお詫びだよ。それと……再会のお祝い」
だけどその缶コーヒーには、言葉にならないもうひとつの想いが込められていた。
『もう、私を置いて遠いところへ行かないでね』
――七年ぶりの再会には、そんな意味も込められていた。
「おねえちゃん達も、ありがとう。ぽちをよろしくね……ばいばい」
それは別れの言葉。名雪は精一杯みちるの名前を叫ぶが、その声がみちるに届く前に彼女の姿は消え

た。後には、ぽちと名付けられた白蛇が残るだけだった。
「消えちゃいましたね……」
「うん」
忽然と姿を消したみちるの安否を気遣って、名雪と琴音は沈んだ表情で語り合う。秋子が二人にお茶を淹れてくれたが、名雪はあまり飲む気になれなかった。
手をつけず、じっとカップを見つめるだけの名雪に、琴音が心配そうに話しかける。
「名雪さん？　……顔色が悪いようですけど、大丈夫ですか？」
「ん？　あ、だ、大丈夫だよっ」
名雪は心配無い、と言う風にぶんぶんと手を振る。
「……そうですか？」
怪訝な顔をしながらも、琴音はそれ以上は問い質しはしなかった。
今までは、お母さんがいてくれるから安心だった。琴音ちゃんや、みちるちゃんも一緒にいてくれた。でも、ここを人が訪れるにつれ、名雪の心の中に言い様の無い不安が押し寄せてくる。
もし、お母さんがいなくなったら？　琴音ちゃんがいなくなったら？
現に、みちるちゃんは消えてしまった。お母さんたちもそうならないという保証がどこにあるだろう？
もう、一人はいやだよ……。傍にいて欲しいよ……。
……祐一……。
――名雪は意を決して、ずっと考えていたことを秋子に打ち明けた。
「ねぇ、お母さん。……私、祐一を探しに行ってくる」
「ダメよ、名雪。危険だわ」
秋子はいつものように了承しなかった。めったにないことに、名雪も驚きを隠せない。

「でも、祐一も私たちと一緒にいたほうが良いと思うよ。お母さん、祐一が心配じゃないの？」
「勿論、心配だわ。でも名雪。私は、あなたを危険な目に遭わせたくないの」
「……」
「お願い。これ以上お母さんを困らせないで」
優しい微笑みを浮かべて、秋子は名雪を諭す。が、その口調には有無を言わせない迫力があった。
「さ、お腹空いたわね。……琴音ちゃんも、何か食べる？」
……はい、と気まずそうに琴音は答える。秋子は了承、と答えて名雪たちに背を向けた。
「……お母さん、変だよ」
秋子の動きが止まる。
「以前のお母さんなら、わたしのためだとか言って祐一を放っておいたりしないよ」
「……名雪？」
秋子はゆっくりと振り返る。
「お母さん、この島に来てから変わったよ」
戸惑う秋子に、名雪は目を伏せて呟く。
「……わたし、今のお母さんは嫌だよ」
言葉の無い秋子を尻目に、名雪はすたすたと瓦解した入り口へ歩み寄る。そして、ゆっくりと振り返るともう一度だけ想いを告げた。
「わたし、祐一を探してくる。見つけたらすぐ戻って来るから。……行ってきます」
「ダメよ、名雪っ！」
我に返った秋子が叫ぶ。
が、その時には名雪はもう駆け出した後だった。
「……」
困惑しながら見ていた琴音は、何も言えずただ座っているばかりだった。
「……琴音ちゃん？」
と、突然秋子が声をかける。温和な笑みをたたえたまま。
「……は、はいっ!?」

「名雪を、連れ戻してきてくれる？」
にっこりと尋ねる秋子に、只、琴音は頷くばかりだった。
「ありがとう。それじゃ、お願いね」
慌てて飛び出す琴音を見ながら、困ったわ、という表情を見せる。
——せっかく、祐一を探しに行こうなんて言い出さないために、往人に人物探知機を譲ったというのに。
「……難しい年頃ねぇ」
秋子はそう呟いた。

217　手負いの獣

山を抜け、廃墟と化した町へと進む——
誰も通らない道、そんな場所にある路地裏。
そこへと抜ける道は、人一人通りぬけるのも困難な場所だった。入り口を少し進んだ場所、そこに赤い血が付着した罠が仕掛けられていた。
手入れされていない雑草に覆われたそれは、普通に歩いていたのではまず気づかれないであろう巧妙な仕掛け。
さらにその奥……そこに死んだように眠る一人の女、深山雪見（九十六番）。雪見の左腕には、先ほど殺害した石原麗子の白衣が巻きつけられていた。
白衣が真っ赤に染まっていたが、どれが雪見の流した血なのか麗子の返り血なのかもはや分からなかった。
「……生きてるのね、私」
やがて、雪見がゆっくりと目を開ける。
「もう私、駄目だって思ってたよ、みさき……」
雪見が空を見上げた。
「みさきが好きだった夕方まで、生きていられるのかな、私」
疲労と苦痛に苦しめられながらも、親友たちの復讐を胸に誓い、ここまでやってきた。

雪見に危害を加えるものは誰も来なかった。幸いだ。先ほどまでは、戦える状態ではなかったのだから。

たとえ細い路地裏への道を利用して仕掛けた罠にかかった者がいたとしても、とどめをさせたかどうか……

雪見が手持ちの武器をもう一度確かめる。アサルトライフル……残弾はまだ充分にある。だが、既に左腕は動いてはくれない。片腕でそれを扱えるほど雪見は銃器を使いこなせてはいない。

「かまわないわ。壁や障害物に支えてもらえばまだいける。もしなければ気力で支えればいい。それに、みさきや澪ちゃんがきっと私を支えてくれる」

復讐への渇望だけが、今の雪見を突き動かしていた。

すでに引火して、なくなってしまったが、最後のひとつ――ジッポオイル水風船。そしてドラゴン三十連花火。

「組み合わせて使えば、と思ったけど、浅知恵だったのかな」

雪見の腰にはサバイバルナイフ。

「……私には、これが一番ね」

（これで二人――殺した。もう後戻りはできないのね……）

そして視線の先には、雑草に隠された罠。

私は復讐者。きっとそこまで辿り着いてみせる。

「本当はもっと眠りたい。だけど私は――！」

罠を取り外すと、私は再び戦場へと歩き出す。

失った心――半身を取り戻すために。

218　魔獣、その水の下へ。

柏木千鶴は、地図をスカートのポケットにしまい込み、足音も無く森の中を歩く。

（……住宅地は隠れている人間も多い分、危険性が高いわ）

指先の疼きを酷く感じた。
（森もそろそろこの時期になれば罠が仕掛けられている可能性が高い。あの忌々しい主催のことだわ、あいつが仕掛けているかもしれない。罠は無差別、私がジョーカーだと見分けてくれる筈はないわ。……見分けて作動する様な罠があった場合は……考えないでおこう。これ以上は精神衛生上、良くないわ）
そこまで思考して、ふっと笑う。
（精神衛生上？　ダメよ。私はもう狂っているんだから）
口元の微笑みは柔らかく、優しげなその目は笑っていない。冷え冷えとした、人ではない者の、瞳。覚醒時の様な、赤黒い色でないだけに余計に残酷な色を帯びたその目が、目的の場所を捉えた。
（ここ）
口に出さず、呟く。
そこは川縁だった。森の切れ目から、その川の断片を佇み、眺める。
一見して、清らかな水の流れだとわかった。
（人が生きるのに、水は必要だわ）
慎重に人の気配を読みとる。背後の森へ、そして目的地の川辺へ。
（誰も、近くには居ないのね……）
早く。早く。殺さなくちゃ。
千鶴の思考がぐるぐると廻る。
（梓も、楓も、初音も……耕一さんも。私が、守るんだから）
だから、殺さなくちゃ。他の誰かを。物言わぬ亡骸に変えなくちゃ。
思考を、気配の察知を、研ぎ澄ませる為に、千鶴は川辺へと歩み寄る。
静かだった。静寂に、川の流れの音以外、何も聞こえない。
そっと、水に触れる。
冷たい。心地よく、冷たい。

スカートの埃を落としてから、手で川の水をすくい顔を洗う。思考が冷えていくのを感じる。
(さあ、行かなくちゃ)
殺しに。大切な人達を守る為に、だれかの大切な人を、殺しに。

219　水の中の、戦い

藤田浩之は、ようやっと森の出口を見つけ、ほっと安堵の息を吐いた。ここまで誰にも遇わずに済んだのは、幸運としか言えないだろう。
(待ってろよ、あかり。……委員長も)
今までの黒々としたものが、もうなくなっていた。
誰かを蹴落として、殺して、独りだけ生き延びる。
そんなのは俺のやり方じゃないと、どうして最初から気付かなかった？　級友を、見知らぬ者を、助けをくれた者を、俺は殺した。
それは大罪だと、今は、痛いほどにわかっている。
だから、俺は生きる。
その罪をなかったものにはできないから。
俺が、忘れない。そして責められる限り、この罪は消えない。
許されたくはない。許される筈がない。
正当防衛ではなかった。俺は望んで、人を殺したのだ……。
森の切れ目から川が、見える。
誰も居ない事を確認して、川辺へ足を踏み入れる。水は綺麗だった。月代が汲んできた水もここのものだったのだろうか？
浩之は、水を口に含む。そして、少し深くなっているその川に頭を突っ込んだ。
顔も髪も汗と汚れ、血で汚れていたから、それを落とすために。
その瞬間、気配が、動いた。と、いうより唐突に現れた、そんな感じだった。浩之は誰のものともつかない、その気配に顔を勢いよく上げげ、頭上を見た。

目が、合った。冷たい、目。
浩之のあげた水飛沫にピクリとも動かぬ、人の物とは思えない、その目。幸い、萎縮はしなかった。
ただ、悲しくなった。酷く、酷く悲しい気分だった。
浩之はわかってしまったから。この女性も、このゲームに乗ってしまっている。
そう、直感したから。
「勘がいいのね……気配、消していたのに」
口元も表情も慈愛の顔をしているのに、冷たい、美しい女性――柏木千鶴。
気配を消して、贄を待っていた、魔獣。
「俺を殺すのか？」
あんた、前までの俺と似たような匂いがするぜ……言いかけて止めた。
止めざるを得なかった。
長い髪の美しい女が、浩之に攻撃を仕掛けて来た為だ。
ヒュッと、風を切る音と共に長い爪が頬を掠る。

避けていなければ耳くらいは持っていかれていた……いや、死んでいただろう。
「これが、答えよ」
冷たい声が響く。やはり、と浩之は唇を噛む。
「ダメだよ、アンタ。そんな風にしてたら、俺みたいになっちまう！」
必死に攻撃をかわしながら、浩之は叫んだ。全身の傷が痛む。そして、心も。
「アンタ、それで満足なのかよ！」
「ええ、満足よ。それで大切な人を守る事ができるなら――それに」
言いさして、一撃。失われていない、千鶴の左の爪が、浩之の腕を掠る。
千鶴は浩之の言葉を聞き入れなかった。甘言に惑わされるのも、改心を求められるのも嫌だった。そして、その声を聞き入れたくない一番の理由は、彼の体に、心に染みついている、
――血の臭い。

それも、一人や二人ではない。
もっと……沢山の。
自分にもこれから染みつくであろう、その臭い。
千鶴よりも先に一歩を踏み出したくせに、自分を説得しようとする少年の姿は、酷く欺瞞に満ちているように思えた。
「貴方、血の臭いがするわ。一人、二人じゃないわね？　殺したのは」
千鶴の指摘に浩之の動きが止まる。
彼女はその隙を狙っていた。
この少年の意図はわからない。本気で説得しようとしているのか、千鶴を騙して利用や殺害しようとしているのか。
だが、それもどうだっていい。どちらであろうと千鶴がやるべきことに変わりはない。
(私は……貴方を、殺します)
突き刺すように繰り出した、爪。
それで勝負はつくと、思っていた。
完全に少年の、浩之の心臓を捉えていた。
だが。
彼はそれを受け止めた。
片腕を犠牲にして。
「なっ……！」
肉深くにまで達した爪は、するりとは抜けない。
「……もう、やめろよ。こんなこと」
全身の痛みが酷い。腕が熱い。でも、やめられなかった。言葉をとめることは出来なかった。
自らの腕に突き刺された、その爪を、黒髪の魔獣を離さないように、浩之は掴んで離さない。
その、掴んだ手から、指先からも血が滴り落ちる。
「俺、殺して、沢山の人殺してさ。凄く辛かったから」
「……離しなさい」
「苦しいぜ？　凄く、アンタが誰か大切な人を守るなら殺しちゃ、ダメだ」
目が合う。浩之の、悲哀に満ちた、その目が。

「綺麗事いわないで！　貴方殺してるんでしょ!?　沢山の人を！　それでお説教ですって？　笑わせないで」
　目は、伏せなかった。反撃がくるかもしれない。だから、恫喝する。わかっている。それは、弱点だ。人を殺すこと、人の死は、何よりも苦しく痛いことを千鶴は知っている。知っているから。
「アンタ今、凄く悲しい顔してるよ。誰も死なせたくないのは皆、皆一緒なんだ。皆、わかってても、弱いから、自分を守る為に、大切な人を守るために殺さなくちゃって誰かを殺す。……俺は、多分一番弱かったから、殺した。級友を、見知らぬ人を、助けてくれた人を」
「……そう。わかっているなら。離しなさい！　それで私に殺されなさい！　私は弱いの。わかってるわ。主催側の甘言に乗った時点でそんなことは、わかりきっていたのよ！」
　鬼の本能が、能力をセーブされていることで弱まっている。人の心の方が、比重が大きい。
（だけど……！）
　千鶴は、それを認めた上で浩之に攻撃をくわえるべく、蹴りをその腹部めがけて繰り出した。
「ぐァぁッ！」
　爪が自らの手に、まだ三本残っている事を確認して、千鶴は蹴り飛ばした浩之に歩み寄った。

220　水の中の、戦いが終わるとき

「私は、決めたの。決めたのよ！」
　浩之に歩み寄りながら、千鶴は呻くように言葉を吐き出す。まるで、自分に言い聞かせているかのように。
「私はどんなに汚れても、構わないと。そう、例え愛する人達に顔向けできなくなったとしてもよ。それがどれ程のものか、私は知ってるわ。だって、私はこの島に来る前にも人を殺そうとしたことがある

んですもの……」
「……そんなに、悲しいのにか？　そんなに苦しいのにか？　……気付いてるのかよ、アンタ、泣いてる」
　千鶴の目から、雫が滴る。頬を伝わり、浩之の頬の上に、落ちた。
「そうよ。どんなに、どんなに苦しくて、悲しくて、どうしようもなくなっても、私はそうしなきゃいけないの。これが、私の宿命。鬼の血を引く者のね。どうしても、殺戮はさけて通れないのよ。そうやって、私達は生きてきた。制御ができなくて、人をあやめることに苛まれ自殺した者も多いわ。私の父も、よ」
　一度言葉を切り、涙は拭わずに、瞳を閉じ、開ける。
「だけど、私は彼らほど強くないの。人を殺して生きていたくないと思えるほど強くないの。どうせ、どうせ死ぬなら。大切な人達を守りたいの。心の自殺なのはわかっているのよ。でも。でもね。私は、それを引き替えても、そうしてもあの子達を守りたいの。人を殺して恨まれても、呪われても」
　もう、千鶴は泣いてなかった。浩之に、言い、聞かせることで自分の決意を強めた。
　偽善的過ぎる理由付けだけれども、納得していた。
「……アンタ、強いな。俺、アンタになら殺されてもいいかも。美人だし」
　浩之はそう言って少し笑った。蝉丸達に、見せた、あの、笑顔で。
「ただ、ちょっと待って欲しいんだ。一言、謝りたい、大切な人がいるから、こんな俺でも、な。だから、そいつらに一度だけ、一度でいいから会いたいんだ。それまで待ってくれないかな？」
　それに、と浩之は付け足していった。
「この怪我じゃ、アンタに殺されなくても死にそうだしな。わざわざ、アンタが手を汚す必要はねぇと思うし、俺が会いたがってる奴……あかりっていう

んだけど、すげえ、可愛いヤツなんだ……アイツにはぜったいいわねぇけど。

んだけど、すげえ、可愛いヤツなんだ……アイツには絶対いわねぇけど。アイツんとこ行く前に、俺、誰かに殺されるかもしれないし」
「………わかったわ」
浩之が口を閉じて数秒の沈黙のあと、千鶴はそれを了承した。確かに、この怪我では、生き残れない可能性が高い。だとすれば、大切な人に会いに行くことを止めてまで、そうしてまで今、ここで……私が殺す必要はないのかもしれない。
「ただ、悪いけど、その爪返してくれないかしら？」
「ああ、わかった」
これは、お互いに賭けだった。
千鶴にしてみれば、抜いた爪を武器に、浩之が反撃をするかもしれない。
浩之にしてみれば、抜いた爪を渡した途端殺されるかも知れない。
この、猜疑心がこのゲームの一番の敵だ。理性では、そんなことはないと思っても、恐怖心は消えない。
（全く、クソッタレたゲームだぜ）
その計略に嵌った自分が呪わしい。だから、今は、この人は、例え裏切られても信じよう。
そうすれば、強くなれる。
強くなれる、気が浩之にはした。
浩之がやっとの思いで爪を抜くと、千鶴は自らのスカートを切り裂いて浩之の手当をした。
「………」
浩之は黙ってされるがままになっていた。千鶴も、何も言わなかった。この時、互いに信頼が生まれていたことを千鶴も浩之も、あえて口にしなかった。
「じゃあ、俺、行くから」
浩之がそう告げると、千鶴は「ええ」とだけ答えて、付け加えた。
「名前、教えてくれない？」
「藤田浩之。つっても、次にこの名前聞くときは放

送かもしれないな」
「……そう、ね。そうならないことを祈りたいわ。……私が言うのも、変ね」
千鶴は、小さく笑った。
人の、微笑み。
「なんだ、笑った方がいいじゃん……えっと」
「千鶴、柏木千鶴よ」
くす、と笑ったまま千鶴が答える。
「私が言うのも、何だか変だけど……気をつけて」
「ああ、千鶴さんも、な」

221　痛むハート

「名雪さん、待って下さいっ！」
前を走る名雪に向かって、琴音は必死に呼び掛けた。
だが、名雪は止まらない。差は広がるばかりだ。
『わたし、陸上部で部長さんやってるんだよ～』
そう言ってたのを思い出す。陸上部部長の名は伊達じゃなかった。
もう息が上がっている。これ以上は走れないと悟った。
「名雪さんっ!!」
最後に、もう一度、叫んだ。
名雪の足が止まる。
「……わたし、ダメなんだよ。……怖いんだよ。祐一がいないと、ダメなんだよ！」
小さな声だった。
いや、そう聞こえただけだった。
琴音と名雪の距離はかなり離れている。
琴音の位置から名雪の声が聞こえるということは、相当大きな声を出しているはずだ。
「祐一もお母さんもいないと、わたしこころから笑えないよ!!」
それで、知った。

自分が喫茶店に辿り着いてから、こんな状況を気にしてないかのように笑い続けてきた名雪。
この人は強い人だ、琴音はそう思った。
それは違っていた。表面では笑えていても、心では助けを求めていた。
安らぎを求めていた——ここにはいない、祐一に。
——もう、限界だった。祐一に、傍にいて欲しかった。
「名雪、こっちに来なさい」
琴音はビクッと体を震わせた。
——この人はいつの間に、自分の隣にいたのか——
「あなたの気持ちはわかるけど、それでも、あなたに危ない目に遇ってほしくないの。あなたが死んだりしたら、お母さん、どうすればいいの？」
秋子の悲痛な声が響く。
それが、最後だった。

「お母さんも勝手だよ！　お母さんも勝手だから、私ももう勝手にするの！　そんなお母さんなんて、大嫌いだよ！」
泣き声が、叫びが、秋子の心に深く突き刺さる。
それだけ言い捨て、名雪は走っていった。
もう——誰も、追うことをしない。
「秋子さん……」
琴音が声をかける。
「ごめんなさい。ひとりにしてもらえますか？」
琴音にもわかるほど、悲しみを帯びた声だった。
琴音は何も言わず——何も言えず、その場を後にした。

222　この孤島、脱出不可能＃2

白い砂浜、青く澄み渡る海。
「この島も、こうしてみれば悪いところでもないん

ですね」
楓が、潮風に揺れる髪を押さえてそう呟いた。
「それにしても、島ひとつ見えません」
「ねぇねぇ、この辺って一体世界地図でいえばどのへんなんだろうねぇ？」
玲子が楓の袖を引っ張る。
「どこでしょう？」
楓も控えめに首を傾げた。その仕草が傍目にとても愛らしい。
「ＳＯＳ出したら気付いて貰えるのかなぁ？」
「そもそも、ＳＯＳというのはどうやって出す物なのでしょう？」
「にゃはは、あたしもわかんないや」
玲子はお手上げと言う風に肩を竦める。
「地下道もありませんでしたし、これからどうしましょう？」
島の地下に秘密の連絡通路があるのでは？　という玲子の思いつきから行われた地下通路探索は空振りに終わった。
どこにも地下道の入り口らしき物はは見つからなかった。マンホールの蓋も開けてみたが、中は全てコンクリートで埋められていた。
「船を作る！　……なんて無理だよねぇ？」
「作るのは無理でも船はあるかもしれませんね。監視の人も居るみたいですし」
楓は島の内陸部を見つめる。
(耕一さん、千鶴姉さん、梓姉さん、初音……)
幸いまだ放送で誰も呼ばれていない。けど、あれだけ探索しても誰も遭遇することはなかった。
心を覆う黒い予感はまだ晴れそうにない。
(今は……私にできることをやるんだ)
楓の決意は固かった。
「ねぇ、楓ちゃん、そろそろお腹すかない？　向こうの岩場で休憩しよ☆」
「はい」
玲子が二人の残り少ない食料を取り出しながら、

笑った。
（みんなで、笑って帰りたいな）
周りからは見つかりにくい岩場の陰へと移動しながら、そう祈った。

223 白い、決意。

杜若きよみ（十五番）は森の中を彷徨っていた。
（困ったわ……）
鞄の中に食料はもうない。途中黒髪の女性と出会った以外、幸か不幸か誰とも会うことはなかった。
（蝉丸さん……会いたい……）
彼女の知る者は蝉丸、そしてもう一人の自分『〈複製身〉きよみ』しかいない。
時代も眠っている間に流れ流れてしまった。孤立。そう、彼女は孤立していた。元来、お嬢様であったきよみは、森を歩くことも、ましてやサバイバルなど縁遠いものだった。
木の実などを食べる知識もなく、方向感覚も殆どない。地図はあれども、意味をなさない。
（どうしたら……いいのかしら？）
当てもなく森を彷徨っていても解決策がみつかるわけではないかもしれない。
立ち止まり、座るに丁度いい石の上に行儀良く座り、バッグの中身を改める。
入っていたのはもう少しで空になりそうな、水の入ったペットボトルとパンの入っていた袋、地図、そして、4/4と書かれた謎の円盤、そしてハンドマイク。武器になるものは何もない。つまりは、外れのバッグだった。
（私は、一度死んだようなものなのに……何故かしら、怖い）
弥生と遭遇した時、実際きよみは少しばかり、恐怖を覚えていた。
知らない時代の女性。
誰かを捜していた。その情報をつかむため、今も

奔走しているのだろうか？　協力を仰げば良かったのかも知れない。
　でも、そうするには、時代の隔たりは大きかった。こんな状況で、「殺し合え」と言われて、見知らぬ時代の見知らぬ女性に協力を仰げるほど、きよみに話術力はない。下手を打って側にいて、いつ殺されるともわからない。
　そう、戦争だ。
（私の、生きていた時代と同じ……）
　人が人と殺し合う、血で血を贖わねばならぬ、状況。
（いつ、殺されてもおかしくない……）
　それでもいいか、という程、命は安売りできるものではない。
　自分の命は、そんなに簡単に捨てていいものじゃない……。
　甲斐甲斐しく、私の面倒を数十年も、苦汁をなめながら看てくれた弟。私の為に戦ってくれた蝉丸さん、光岡さん……。彼らをないがしろにしていいわけがない。自分自身の命は、彼らが守ってくれたものなのだ。
（そう。……そうだわ）
　独り、こくりと頷いて、きよみは歩き始めた。その視線の先には、ある程度の高さのある建物が、木々の切れ目から覗いていた。
（戦う術も、生き残る術も、私独りにはない……）
　きよみは森の木々の間から覗く建物を見上げながら、走った。あまり走ったことがないきよみに、ペース配分など、知る由もない。
（どうして、どうしてこんなことになったの？）
　苦しい息の中、懸命に走って走って、その中で思考する。
（平和に、なったのではなかったの？　どうして、また戦いが起こっているの？）
　きよみにしてみれば、戦争中に病を患い、目が覚めていたら数十年も経っていて、町は平和を取り戻

していた。
浦島状態だった。
でも。
（でも。町は平和だったわ。国全体が、平和だった筈なのに）
弟が教えてくれた。今の時代は、女性も政治に携わることが出来る程に平和になったと。女性も権利を獲得して、しっかり男性と一緒に働くこともできるようになったと。階級も何も、軍も何も、なくなったと。
（それなのに）
この島では、戦いが続いている。
離ればなれになった人々。戦いたくないのに戦わせられている人々だって、いるはずだ。
そして、勝つことではなく、平和を望む人々が、自分以外にもいるはずだ。
放送で幾人かがもう、命を落としている。それを嘆き悲しむ人だって居るはずだ。
途中、何度も木の幹や、石に蹴躓きそうになりながら、きよみは走った。
（止めたい。この状況を、戦争を、止めたい。今の時代なら、今の私なら、出来るかもしれない）
そう、何もしないで……何も出来ないで、ベッドの上にいた頃の自分では、もう、ない。弟に、蝉丸に、光岡に、与えられた命なら、ちゃんとちゃんと出来る。意志を持って出来ないことはないと、教えられた。私は教えて貰ったのだから……！
そういう考えの人間だって居るって、他の人にもわかって貰いたい。
そうすれば、誰かと協力出来るかも知れない。蝉丸や、自分の複製身と、上手く行けば出逢えるかもしれない。
平和を、取り戻せるかもしれない。
国が、平和を取り戻したように。
危険は沢山あるけど。死ぬかもしれないけど。
何もしないで死ぬのよりは、価値があるから。絶

対に……！
　がむしゃらに走って、ようやっと森が切れた。一度、立ち止まって、苦しい息を吐き出す。もう暫くはなれた、頭上の建物を見上げ、きよみは意志を強め、鞄の中のマイクの感触を確かめた。
「蝉丸さん、もう一人の私……どうか、気付いて！」

224　復讐の序曲。

……どれくらい時間がたったんだろう？
　緒方理奈は、意識を取り戻してぼんやりと辺りを見回した。
（誰も居ない……）
　硝煙の匂いと血の匂いが微かに、鼻を突いた。
「兄さん……っ兄さん！」
　物言わぬ亡骸と化した兄。インテリを気取って付けていた小さな眼鏡は所々ひび割れ、泥と血が付いていた。
「嘘、嘘よ！　嘘嘘嘘嘘!!」
　こんなのってない。こんなの、きっと嘘よ。
　きっとこれは夢で、私はまだ目が覚めないんだわ。いつも通りに、目が覚めたら、寝起きの悪い兄さんを起こして、歌の収録にいって、そう。そうよ、それで由綺もいるの。冬弥くんも。
　休憩に喫茶店でいつものダージリンを飲んで、収録が終わったらレッスンをして、帰ったらまだ兄さんは帰ってなくて、電話で「何時になるのよ？」っていつも通りに訊いて。帰ってくるまで待つの。一緒にご飯食べて……。
　そうだわ。言ってやらなきゃ。兄さんの部屋いつも換気しないから、煙草臭いのよ。いい匂いだけど、ちょっと、好きだけど。
　そこまで、思考して、理奈は兄の遺体に取りすがってまた泣いた。
　血の匂いに交じって、微かに愛飲していた葉巻の

香りがしたのが余計に悲しかった。
「嘘だといってよ！　兄さん！」
……わかってる。これは現実だ。兄さんは死んだ。殺された。誰だかわからないような、あんな、あんな女に！
「私を、殺さなかったことを……後悔させてやるわ」
ギリ、と自らの手を握る。
「必ず、必ず殺してやる！」
そう、叫ぶように呟いて、目を閉じる。
目を開き、涙を拭って、最愛の兄の頬をそっと撫で、泥と血を落とした。
その躯に、体温はない。
だが、もう理奈は泣かなかった。悲しみよりも、憎しみの方が、ずっと色が濃い。
（殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる！
絶対に、兄さんをこんな目に遭わせた、あの女を！）

英二の顔を綺麗にしてやると、理奈はその眼鏡をそっとポケットに忍ばせた。
「愛してるわ……兄さん。だから、私が敵を絶対に……とるわ」
立ち上がり、囁くように言って理奈は走り出した。
茜を、殺すためだけに。

225　悪夢を拭い去るために

兵士達の動きが、さらに慌ただしくなった。
その様子を、丘の上から伺っている晴香達。
「もうすぐ、来そうやね」
「そうね。……マルチ、あなた飛び道具は持ってるの？」
「鉄砲ですか？　いいえ。そうゆうのは持ってないです」
「……じゃあ、これをあげるわ」
晴香が手渡したそれは、ニューナンブ。

公民館で入手した、三丁のうちの一つだ。
「あかり。あなたには渡せる銃がないから。ここで待ってて。あなたの爆弾が、最後の切り札になるかもしれないから」
すこし寂しそうな表情をみせたが、うなずく。
「……うん、わかった。無事で帰ってきてね」
「ええ。もちろん」
「来たで！」
黒塗のリムジンが、基地の前に止まる。
敬礼する兵達に囲まれて現われたのは、やはり高槻だった。それを見て、智子がイグニッションキーを捻る。
「じゃあ、行ってくるわね、あかり」
「うん。晴香さんも、智子も、マルチちゃんも。気をつけて」
「うん」「わかっとる」「はいー」
三者三様返事を返す。そして、向かうべき場所を見据える。

「よおし。じゃあ、突っ込むでー！」
そう言うなり勢いよくアクセルを踏み込む。
そして。
ジープは砂塵を上げ、目指す場所へ突入していった。
「どりゃーっ！」
兵士達をなぎ倒し、高槻へと迫るジープ。それを見た高槻は、身を翻し、建物の中に消えた。
その入り口にジープを横付けする。
晴香達の前には、それを遮るように、兵士達が展開した。
「じゃまやーどけー！」
タタタタタン、タタタン！
智子の六四式小銃による一斉射、そしてマルチの首根っこをつかむ晴香。
「いけえっ！　マルチカタパルト弾」
「はわわーっ！」
カタパルトでも何でもないのだが、人間爆弾は思

いのほか効果的だったのか。
幾人かをなぎ倒し、兵士達がたじろぐ。
「ふみゅうーん」
抜刀し、駆け抜けざま、晴香はマルチの腕をつかみ、引きずる。
「よくやったわ！」
「ふえーん。あんなコトする人嫌いですぅー」
「……いらない敵をつくるわよ、そのセリフ」
その後ろを、半身で銃を乱射しながら、智子が続く。
「ぐずぐずしてる間はないでぇ！　高槻を追うんや！」
「わかってる！」
そう……わかっている。自分の為すべきことを。
この手で決着を。そして過去の悪夢の清算を。

226　非日常の再会

「なんで助かったんだろ……。私……」
理奈はだいぶ経ってからふと立ち止まる。
（気絶から覚めて……。そう、目覚めることができたんだ……）
なんで助かったか彼女にはわからない。
茜は理奈にとどめをささなかった。今までの茜なら理奈はこの場にいられなかった。
このささいな歯車のずれがどう影響していくのか。
理奈の脳裏に英二の亡骸が浮かんだ。
憎しみが上回っているはずだった。
あの場で、かたきをとると決心したはずだった。
兄を不安がらせないようにしたかったのだ。
自分はしっかりやっていけると、兄に教えたかったのだ。

(お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん……)
涙が止まらない。
兄の元から離れて、我慢していたものが噴出した。
手の小型カラオケに目が行く。立ち去る際に無意識に持ってきてしまった。
「こんなもの……。なんの役に立つっていうのよ……」
その場にへたり込む。
(冬弥君……。由綺……。会いたいよ……。助けてよ……)
理奈は考えていた。
(自分はこんなに弱い人間だったんだ……。いつもの私は偽者なんだ……。さっきだって兄さんのことをお兄ちゃんって……こんなんじゃかたきなんてとれない……子供みたいだよ……。子供みたい……)

「うぐっ……。う……ぇ……」
(冬弥君……。由綺……。会いたいよぉ……)
涙を止めるのはもうあきらめた。
子供でもいい。子供扱いされてもいいから誰かに慰めて欲しかった。泣きつきたかった。
「理奈ちゃん!?」

「えっ!」
理奈にはその声が誰のものかわかる。
森川由綺。彼女が今、最も会いたかった人間の一人。
反射的に顔を向ける。
そこに由綺がいた。
駆け出す。そして抱きついた。
「り……理奈ちゃん!? ちょっと……」
「由綺! 由綺! うっ……あ……」
由綺は当惑する。理奈が自分に泣きついてくるなんて考えてもみなかった。

気丈な理奈が。
由綺は理奈の頭をなでる。
右手にはニードルガン。左手でなでた。
(可愛い……)
彼女は泣きついてくる理奈が無性に可愛く思えた。
「理奈ちゃん」
理奈の涙を舐めとってあげる。
「おいおい」
冬弥が声をあげた。
「仲良いな」
「冬弥く……ん」
理奈がやっと冬弥の存在に気づく。
自分の最も会いたかった人間は二人。その両方に再会できていたのだ。
会いたかった人間……。
触発されて彼女は兄のことを思い出す。
「冬弥くん……。兄さんが……。お兄ちゃんが……」
今度は冬弥に抱きつこうとする。
「!?　英二さんが？」
——カチャリ——
冬弥に近づこうとした理奈の頭へ、ニードルガンの銃口が向いた。
「冬弥くんに何するつもりよ」
冷たい声がその場に響く。
理奈は耳を疑った。
でも声は確かに由綺のもの。由綺が銃口を自分に向けている。
おそるおそる顔をそちらに向ける。
わけがわからなかった。本当に……銃口が自分に向いている。
「冬弥くんは私が護るの。理奈ちゃん何しようとしたの？　殺しちゃうよ？」
(そんな……)
理奈は冬弥に抱きつきたかっただけなのに。

彼の胸で子供のように泣きたかっただけなのに。
「由綺。殺したいのか？」
冬弥の声。なんという非日常的なセリフだろうか。
「うん。理奈ちゃん冬弥くんになにかしようとしたもの」
その返事も、また……。
（え、え、え⁉）
理奈が二人から離れるように後ずさる。
「そうか……。由綺が殺したいのなら……」
冬弥が一歩理奈に近づく。
「由綺が殺す必要はない。俺が殺そう」
手には特殊警棒。
（由綺を説得するのは無理だろう）
冬弥は思った。
一度殺意を持ってしまったらもう手遅れだ。
理奈はどのみち由綺が殺すだろう。ささいなきっかけで。
ならば由綺の手をこれ以上汚すことはない。

「今の俺達に近づくな」
冷たい言葉。特殊警棒を大きく振りかぶりながらのセリフ。
（そ……そん……な……）
理奈はとっさに森の奥へと向かって駆け出した。
冬弥の警棒が大きく空を切る。
「もう二度と近寄らないだろう。深追いはしないぞ」
由綺に言った。理奈を殺さないための口実だった。
「冬弥くんが危険な目にあったらやだもん。いいよ」
周りの木が勢い良く背中の方へ流れていく。
走る。走る。走る。
（なんで⁉　なんで⁉）
自分は甘えたかっただけなのに。
（みんな狂ってる。さっきの女だけじゃない。みんな狂ってるんだ……。殺される殺される殺される。

殺さなきゃ兄さんみたいに殺されるんだ）
冬弥の遠まわしなやさしさに、彼女は気づかなかった。

227　間の抜けた人

『……ろしあってくれたまえハハハハ――』
「ん～……ふわぁ～」
島中に響き渡る高槻の定時放送により、佳乃は夢の世界から引き戻された。
「なんだか、よく寝た気がするよぉ……あれ？　ここ、どこ？」
キョロキョロと辺りを見回す。
そこは神社だった。朝の太陽の下、鳩が何羽か日向でひょこひょこ歩いている。
「鳩さん、おはよ～」
佳乃が近づくと、鳩たちは一斉にそそくさと飛んで行ってしまった。それを残念そうに見送ると、佳乃は頭をぶんぶんと振って、昨日のことを思い出していた。
（おかしいなぁ、昨日は確かボディーガードメイド一号さんと一緒に……あれ、一緒にどうしたんだっけ？）
夜、民家に侵入して、そこで梓と交代で見張りをすることになり、自分がまず見張ることになって……と、そこまでは覚えている。佳乃は首をひねったが、そこから先はどうしても思い出せなかった。
「ま、いいよねぇ」
それで簡単に片付けてしまうと、今日のこれからの行動について考え始める。
（やっぱり、まずお姉ちゃんを探そうっと。メイド一号さんにもまた会えるといいなぁ）
佳乃は、目覚まし代わりとなった放送に、姉の名前が含まれていたことを知らなかった。そして、それは佳乃にとっては幸運だったのかもしれない。
「じゃ、出発だよぉ～」

景気づけに右腕を高々と挙げる。黄色いバンダナが、風に揺れた。
と、ちょうどその時、神社と下界を結ぶ石段の下からコツコツと足音が聞こえてきた。
昇って来たのは、杜若きよみ〈複製身〉だった。
「……動かないで。服の下から狙ってるわ」
そう言いながら姿を現したきよみのワンピースのポケットが不自然に膨らんでいた。佳乃はそこに目を落とすときょとんと不思議そうな顔をした。
フェイクである。実際は中で指を二本、前に突き出してそれらしい形を作っているだけだった。マナに指摘されたことを活かしてみた、ということだ。
きよみは少しおかしくなった。
(さっきの生意気な子といい、この頭弱そうな子といい、妙なのばっかりに出くわすわね……まぁ、もう何十人も死んでるらしいし、殺人鬼みたいのに会うことを思えば運がいいんでしょうけど)
そう考えたところで、少し反省する。目の前の少女が、殺人鬼でないという保証はどこにもないのだから。
――そういう楽観的なトコ、なんとかしないと早死にするかしらね。
そう思って、改めて佳乃のことを見てみたが、やはりそんな風にはとても考えられない自分に苦笑するばかりだった。
「おっはよ～、黒髪の美人さん」
当の佳乃は至ってのんきに言った。
少なくとも、一般的に銃を突きつけられている――と、当人は考えているだろうと思われる――人間の態度ではなかった。
(だいぶネジの緩い子ね……まさかこれが演技で実は、ってこともないでしょうけど……ともかく、この子と馴れ合っても仕方ないわ)
きよみはそう判断すると、ピストルに擬した指先を佳乃から外すことなく言った。
「どうも緊張感が欠けてるみたいだけど、そんなん

じゃこの島では長くないわよ。……見逃したげるから気が変わらないうちにどっか行きなさい」
「あっ、君、右手！」
「え？」
きよみはポケットから手を抜くと、しげしげと見つめた。何の異常もない、いつも通りの手だ。
「右手がどうしたのよ」
「やっぱりピストルじゃなかったねぇ」
佳乃がクスクスと笑う。
立ち尽くすことしばし。ようやくその意味に気づき、きよみは自分の頬が熱くなるのを感じた。フェイクだとかなんとか、それ以前の大馬鹿である。
（なんかあたしってどうしようもない間抜けなんじゃないかと思わざるを得ないわ……）
あの生意気な子のみならず、目の前のどう見ても頭の弱そうな子にまで看破された――きよみは半ば真剣に生きていく自信をなくしていた。文字通りに生き残るという意味のみならず。

「あははっ、なんだか縁があるみたいだねぇ？　ほら〜、そうと決まれば行くよぉ！」
落ち込むきよみの手を、佳乃が握った。
「誰が？」
「君が」
「誰と？」
「私と」
「どこに？」
「さぁ〜……これからのんびり考えればいいんじゃないかなぁ？」
「わ、きゃあっ⁉」
言うなり、いきなり石段を駆け下り始めた佳乃にぐいぐいと引っ張られ、きよみは危うく転びそうになる。
「ちょっと、何するのよ⁉　あ、危ないわよ！」
「一人よりも二人だよねぇ？　やっぱり」
「あ、あたしはあなたと馴れ合う気なんか――」
強引な佳乃に引きずられるようにしながら、実の

ところきよみはそれでもいいかな、と思っていた。
諦めというのももちろんあるのだが、この佳乃という少女と一緒にいて不快な気持ちはしなかった。
「よし、じゃあ君を『おまぬけさん一号』に任命するよぉ！」
石段を下りている間ずっと、きよみは佳乃を突き落としたいという衝動を抑えるのに必死だった。

228　堕ちる道化

すう、と空気が冷え込み、湿度が上昇する。
流れる音はさらさらさらと。
それは、この地に流れた血潮のように。
さらさらと、さらさらと。
絶えることなく、ざわめいていた。
ちゃりん、かちゃりん。
硬質の異音が重なる。
無人の川に混じる、有人の証が。
酷く虚ろで、禍々しく聞こえる。
ちゃりん、かちゃりん。
時折閃く反射光の眩しさが、それを刃物だと知らしめる。
近付けば微かに、足音が聞こえる。
半ば呆けたような、憑かれたような、刃物よりも危険な顔が、見てとれる。
さらさら。
『り……理奈ちゃん!?』
かちゃりん。
弄んでいた刃物を、ぴたりと止めて握りこむ。
林道の木漏れ日が、さながら教会の狭間窓のように彼を照らしている。
下を見やれば、河原道。
さらさらさら。
『兄さんが……お兄ちゃんが……』
見える。知った顔は居ない。
さらさらさらさら。

『!?　英二さんが？』
（理奈？　英二？）
凍結させていた思考を、渋々回転させる。
そしてようやく、あの男の台詞を思い出す。
道化さながらに、ころりと騙された自分を思い出す。
「緒方――理奈。兄さん？」
呟いた一言が、ぽんと背中を押していた。
住井護（五十一番）はナイフを携え、崖を飛び降りる。
迷い無く。
涙無く。
暖かな想い出も、悲しさも届かぬ、地獄の底へと彼は落ちて行った。
川の音は、もはや聞こえなかった。

229　日常の味

「……誰よ、あんたたち」
二人のうちの片方、ツインテールの子がなんとも女の子らしくないドスの効いた声で訊いて来る。
あまりの迫力に気圧されそうになるが、何とか平静を装って僕は尋ねた。
「人を、探してるんだ」
「人を？」
そう言いながらも、彼女の殺気は解かれない。
まあ、こんな状況で知らない人に出会ったら、こんなものなんだろうけど。
暫し、睨み合ったままの対峙が続く。
その均衡を破ったのは、
「やめなよ七瀬さん、話くらい聞いてあげようよ」
勝気な女の子、……どうやら七瀬さんというらしい、の後ろにいた子だった。

「え～と、それじゃ、長瀬君と天野さんは、さわたりまこと、って子を探してるんだね？」
はい、と天野さんが小さく頷く。
七瀬さんと、もう一人の女の子、長森さんには、僕と叔父さんの事は伝えていない。
一参加者にしか過ぎない彼女達……まあ、僕もだけど、が叔父さんのことを知っているとは到底思えないし、何よりまだ打ち解けていない状態で僕が主催者側の人間と少なからず係わり合いがあることが知れると、下手をすれば殺されかねない。
そのことを考えると、叔父さんの事を話せる相手はそうそう居ないように感じられるし、実際そうなのだろう。
「それで、その真琴って娘はどんな子なのよ？　髪型とか、外見とか……」
長森さんに代わって、七瀬さんが不機嫌そうに口を開く。
まだ僕らを信用しているわけではないようだ。
そんな事は意にも介さないのか、天野さんは平坦な口調で、その沢渡さんの特徴を話し始めた。
「ふ～ん……じゃあその子、今頃繭に髪引っ張られてたりするかもね」
一通り話を聞き終え、七瀬さんがけらけらと笑う。
自然な彼女の笑いを見たのは初めてだ。少しは心を許してくれたということだろうか。
「……いえ、真琴の髪型はそんなに長くないですが」
あちゃあ、そうバッサリ会話を断つこともないだろう、と少し思う。
「そ……そうかもねえ？　まあいくら髪型が似てるって言っても、乙女を目指すこのあたし程伸ばす人間はそうそう居ないわね」
……乙女？
「乙女……ですか」
僕と同じ事を思ったのだろう、天野さんが口を開

く。
……ただ問題なのは、語尾に（笑）がついていたことで。
「何よ！　なんか文句あるっていうの！」
あぁ、やっぱり怒った。
「やめなよ七瀬さん。天野さんもきっと悪気があって言ってるわけじゃないと思うんだよ」
七瀬さんの剣幕に、慌てて長森さんが止めに入る。
さっきからずっとこの調子。よく飽きないものだなあ、と思う。
でも……
すっかり僕らは、打ち解けていたんじゃないか、と思う。
たとえそれが、この島の中でも『日常』にしがみつきたいという甘えから来る物であっても。
そう。退屈な毎日の中にあって日常とは、色を持たない無味無臭な存在だ。
だけど、こんな非日常下においては、いつもは意識しない『日常』も色や味を付ける。
それは甘い甘い、蜜の味だ。
僕たちはそれにすがる蟻。それを失うと、心が軋み、壊れてしまうから。
「それじゃあ、そろそろ私たちは……」
「え？　行っちゃうの？」
腰をあげ、この場を出発しようとする僕らを、長森さんが引きとめる。
「……そうよ、あんたたち二人で行動するより、私たちと――あともう一人居るけど、行動したほうが安全でしょ？」
天野さんに激しく突っかかって居た筈の七瀬さんも止めようとしてくれる。
正直、あの短い間で僕らそこまで信用してくれたというのはとても嬉しい。
「ありがとう。……だけど、僕たちは行かなくちゃいけないんだ」

真剣な顔で僕は言った。二人はもう、止めなかった。
結局長森さんも七瀬さんも、天野さんが探している「沢渡真琴」の事は知らなかった。
それは残念だったけど、この狂気の島で、ほんの一瞬でも誰かと楽しく会話をし、日常を感じる事が出来たのは、幸せだった。
でも、こんな甘ったるい馴れ合いは、島の意に反しているのだと、僕らはすぐに気づく事になった。
「……良かったのですか？」
「何がだい？」
また二人になってしまった森の中で、天野さんがぽつり、と聞いてきた。
「……いえ、あのまま長森さんたちと一緒に行動したほうが、安全だったのではないかと」
「いや、確かに人数は多い方がいいかもしれないけど……それじゃ、天野さんが探している人達が探せなくなってしまう」
それに、確かに二人は危険だけど、もしそんな状況になったら、僕が命を捨てても天野さんを守る——
なんて台詞は、とても恥ずかしくて言えずに喉の奥に飲み込んでおいだ。
「ありがとうございます……」
「礼を言われるような事、してないよ」
結局はこれも、僕のエゴなんだから。
もしかしたら彼女らのいう『もう一人』がその「沢渡真琴」を連れて来た可能性も無いとは言い切れないのだ。
そこまで考えて、思考は中断される。
がさり、と、音をたてて、ほんの、ほんの少し先で、何かが動いたからだ。

「……長瀬さん」
天野さんもそれに気づいたのか、声を潜める。
僕は、前方に視線を向けたまま、
「……下がってて」
天野さんを制止させる。
ポケットの中の、ワイヤーを強く握る。
さっきみたいに、話が通じる人ならいいけど、そうでない場合はどうなるかを、僕らは既に一回、身をもって経験している。
……だから、慎重に行動しなければならない。
「……誰」
僕の気配を察知したのか、草むらから女の子が顔を出す。驚いた事に、着ている服は色こそ違えど、天野さんが来ているのと同じだった。
そう言えば、天野さんは制服のまま連れ去られたと言っていた。だとするならば、この人は天野さんの学校の上級生だろうか？
僕がその子と天野さんを交互に見ている間に、女の子がまた口を開いた。
「……こっちは怪我をしてる人がいる。手を出さないで欲しい」
どうやら、草むらの影にもう一人居て、その子が怪我をしているから見逃して欲しい、と言う事だろうか？　このゲームのルールを考えると、なんとも無謀極まりない申し出だけれど、殺さなくて済むなら、それにこした事は無い。
僕はそれを快諾し、ポケットの中でワイヤーを握っている手を緩める。
それが、油断だった。
「佐祐理は騙されません！」
それは女の子の背後から聞こえてきた。
「……え？」
「佐祐理、ダメッ！」
その気配に僕が反応したのとほぼ同時に。
だんっ
重い音が僕の耳を激しく突き、なにかの塊が僕の

頬を掠める。
視界の端が紅く染まってゆく。頬が熱い。
なんだ？　なんだ？　一体何が……
――それが、銃弾だと気づくまでに、僕のアタマは数秒を要した。
僕は混乱した。目まぐるしく変化する状況に思考が追い付かない。
「逃げて！」
と、目の前の女の子が言った。
なので、逃げる。
呆然としている天野さんの手を引いて、逃げる。
僕のアタマはちゃんと動いてくれなくて、それしか出来なかった。
「………はぁ、はぁ、はぁ……」
走って走って、走りつづけた。
どこまで走りつづけたのかも分からないぐらい、走って、膝が笑ったので、僕らは止まった。
二人で、死んだように木陰に横たわって、ようやく、僕のアタマは正常になりつつあった。
……つまりは、騙された、って事か。
たしかに『日常』を求めるという気持ちは誰も同じなのだろう。
だけど、彼女たちと、僕らではその手段が違ったのかもしれない。
僕らは、この狂気の中にある今に日常を求めた。
彼女たちは、いつか再び日常の中に戻るために、僕たちを撃った。そう考える。
仕方が無い事だ。手段はそれぞれだし、この状況下では彼女たちの判断のほうが賢明で、そして正しいの……だろう。

……そして、いつかは僕らも、ああなるのだろうか？
或いは、既に僕らも彼女たちと同じ、殺し合いをも厭わない人間で、その上更に今この時間にも日常を求める、より欲深き存在なのかもしれない。

森の闇が、一層深くなった気がする。

230　日常は霞んで

目の前が真っ暗になったような、そんなショックを受けた。

聞こえる筈の無い場所から聞こえる銃声。

そして、その銃を持っているのは、間違いなく佐祐理で。

私を信用してくれた人が、一瞬、呆然とした後、踵を返し走り去ってゆく。

その背中に向けて、また、佐祐理は銃を撃った。

一回発砲するごとに、肩の傷が開き、その服を赤く染めて行く。

見たくない。

佐祐理の傷も、佐祐理がなんの罪も無い人に銃を向けることも。

「やめて……佐祐理」

「あははーっ、騙されちゃダメだよ、舞ー。あの人たちは、ああやって近づいて油断させてから、舞を殺そうとするに決まってるんだから」

言いながらも、佐祐理は発砲を止めない。飛び散った血が、私の頬にかかる。

私の言葉は、佐祐理には届かない。私は、何もできない。

既に私たちのほかに誰も居なくなった森に、銃声だけが響いた。

どうしてこんなことになってしまったのだろう。

佐祐理は私が守るって、決めた筈なのに。

でも、私の所為で、佐祐理は――

「逃がしちゃった……舞を殺そうとした相手なのに、佐祐理はダメな子だ」

そう言って佐祐理は微笑む。それは、不自然なくらいに、いつもと変わらず。

不意に、悲しさが胸を押し寄せてきて、私は、た

だ無言で佐祐理を抱きしめることしかできなかった。

「どうしたの、舞？　……大丈夫だよ。佐祐理が守ってあげる。舞には誰も指一本触れさせたりはしないから」

その言葉まで、いつもの佐祐理の口調そのままで。

私は、腕にもっと力をこめて、強く強く佐祐理を抱きしめた。

もう、私たちの日常は遥か遠くに、霞んでしまっていた。

231　再会

江藤結花と長谷部彩は、昨晩来た道を逆にたどりながら再び森の中に入った。

しかし、昨日の疲れがまだ残っていて足取りは鈍い。二人は森の中の小道を、そろりそろりと慎重に歩いていった。

どれくらい歩いただろうか、道のはるか前方に小さく人影が見えた。

「誰か来てる。隠れましょう」

二人は物音をたてぬように、道ばたの草むらに身を隠した。

結花が注意深く草むらの中から目を凝らす。

一人は三角頭巾をかぶったおとなしそうな女性、もう一人はピンク色の長髪の少女……ピンク色!?

次の瞬間、結花は弾け飛ぶように駆けだしていた。

「スフィー！」

その少女は一瞬驚いた様子だったが、結花の姿がはっきり見える距離まで来ると、

「結花ぁ！」

そうつぶやくと、トタトタと走り寄った。

「会いたかったよぉ。寂しかったんだから……」

スフィーに抱きついたまま、結花はただ泣きじゃくっていた。

「こんなに小さくなって……」
「結花も、無事だったんだね」
幾日ぶりの再会を体いっぱいに味わっていた二人の後方では、
「……」
「はじめまして……」
彩と来栖川芹香が小さな声で挨拶していた。

万一の事があっても容易に見つからないように、周囲から見て少し窪地になっている所を見つけて、四人は草むらに一列に座った。
簡単な自己紹介の後、それぞれスタートからここまでの出来事を話し始める。
結花と彩が出会ったときの話、夜中に銃を拾おうとして危うく刺されそうになった事。
スフィーがリアンを助けに社に行き、結界を破ろうとした最中に牧村南に邪魔された事。
ここまでほとんど話しに加わらなかった彩が、突然つぶやいた。
「牧村、南……南さんが……嘘、嘘でしょ」
「……？」
「南さん……簡単に人を殺めるような人じゃない。私の知っている南さんは、ルールを守らない人には厳しいけど、普段はとても親切な方です。なのに、どうして……」
「そうなんだ。でもね、社で私たちを襲った時はとてもそんな風には見えなかったよ」
「そう、ですか……」
肩を落とす彩。
「うん、それで芹香さんと夜通し逃げてきた、ってわけ」
「ところでスフィー、そんなに小さくなったのは、その結界とかを破ろうとして魔力を使ったから？」
「うん、でもそれだけじゃないんだ。けんたろが死んじゃった後も、この腕輪から魔力が抜けているの」

「外せないの？」
「外すのにも魔力を使わないといけないから……」
「……」
「えっ、芹香さんが？」
「……」
「黒魔術？」
「……」
「な、なんだかよくわからないけど、とにかくお願いします」
結花と彩を後ろに退けさせると、芹香は静かに目を閉じ、なにか呪文のようなものを唱え始めた。
そして三分ほど経った後、
ビリッ、ビリッ……
スフィーの腕輪から音が聞こえだしたかと思うと、
パリン！
鋭い音を立てて、腕輪が真っ二つに割れた。
「あ……」
スフィーは喜びたい反面、ちょっと後ろめたい気分になっていた。健太郎との思い出の品でもあった割れた腕輪を見つめながら、
「けんたろ……ごめんね」
小声でそうつぶやくと、腕輪の破片を拾い上げ、
「ね、これ持ってたままでもいいよね。けんたろの事、忘れたくないから」
「そうね」
「うん、これでもう大丈夫。もう体が小さくなる事もないと思うよ、きっと」
「ねぇ、ところでスフィーの武器って何？」
スフィーは鞄から厚い本を取り出した。
「なんだか魔術書みたいなんだけど、よくわからなくて……」
結花はスフィーから渡された本をパラパラとめくってみた。
「あのさ、グエンディーナの魔術書って、日本語で書いてあるの？」
「えっ？　そんなことない……よ」

今度は芹香が本を手に取る。
「……」
「ほら、芹香さんも『これは魔術書なんかじゃありません』って言ってるよ」
「は、ははは……」
スフィーはただ苦笑いするしかなかった。
「ほら、魔力が抜けてたから、必死だったんだよ、ね」
「本当かなぁ」
その場が一瞬和んだ。
「……あの、これから先、どうすればいいでしょうか」
「う～ん、まずはリアンたちと落ち合う事が先決、かな？」
「……」
「そっか、『南さんが追ってきているはず』かぁ……」
「牧村南の武器って手裏剣なの。その上、身のこなしも速くって忍者みたいだったんだよ。もし、ここを襲って来られたら……」
「その時はこのトカレフで、バーンといっちゃうわよ！」
「その……落ち合う場所って決めてあるんですか？」
「うん、さっき言った神社の近くの小屋で待ち合わせる事になってる」
「それって、この近くにあるの？」
「えーと、そんなに遠くはないと思うよ」
「そこへ行けばリアンに逢えるのね？」
「たぶん……」
結花が立ち上がった。
「ひとまず、その小屋に行こう！」
「うん！」
「……」
残りの三人も次々と立ち上がった。

茂みから道に戻り、芹香とスフィーが来た方向へ歩き出す。
結花の足取りは、先程よりもすっかり軽くなっていた。
一方、彩の足取りは依然重い。それは、「南さん……」
牧村南の事を気にかけたままだったから。

232 白い、決意。 二

……息が、苦しい。
杜若きよみ（十五番）は、森での全力疾走でかなり疲労していた。
(こんなところで、挫けてる場合じゃない、のに)
膝ががくがくする。呼吸が乱れたまま戻らない。
だが、数十分、走り続ければ誰もがそうなる。
(……早く、早くとめなくては……これ以上誰かが傷つかないように。誰も、死なないように……!)
だが、体は言うことを聞いてくれない。
こんなところを狙われたら、一溜まりもない。はじめて、きよみは全力で走ったことを後悔していた。
(あそこ……あの場所で、呼びかける。もしかしたら、いえ、もしかしなくても、主催の意向に反したことだから、それによって私は……殺されるのでしょう)
だから。それをやるのは自分独りでいい。
他の誰も、この支給品がなければ出来ない事だから。
これは、宿命なのだ。
(私が、生きた証になりますように……)
息を整えて、きよみはまた走り出した。
前方に、川が見えた。
誰も居ないことを確認して、きよみは川辺に佇む。
水位はそう高くない。橋がなくても歩いて渡れそうだ。水は清らかにさらさらと流れている。
そういえばもう水はない。急いで、川の水をペッ

トボトルにいれ、ついでに喉の乾きも癒す。
これから、呼びかけをする。
川に足を忍び入れ、川の中を真っ直ぐ反対の縁に向かって歩きながら、きよみは思考した。もちろん、人の気配にも細心の注意を向けていた。
……それは、ずっと少しずつ、考えていたことだった。
呼びかけをする。それは危険な賭けだと、思いついた時からわかっていた。如何に上手く、これをこなせるか否かで、この島にいる哀れな人達を救えるかどうかがかかっている。
最初は、森の中や、人気のないところで呼びかけをするつもりだった。
でも、これは危険性が高い。
主催側による、腹部に爆弾が仕掛けられているという情報。嘘でない場合は、新たな猜疑心の種として、生き残らされる可能性がある。
それは、自分の放送そのものが、主催側に利用されかねない、ということだ。
見知らぬ女性の、殺しあいはやめましょうという、放送。見せしめに殺されるのであれば、それを考慮して喋ればいい。
だが、殺されなかった場合。
主催側が再度、自分の放送に似た……つまりは偽の放送を行い、人を集める。
そして、そこで殺し合わせる事も可能だ。更に言えば、そこに集まった人達を一網打尽にしてやろうとする、主催側に協力的な人が出てくる。
……結果、大量殺戮が起こるだろう。
姿を隠したままでは、上手くいかない。
だとすれば。
(死をもって、呼びかける……しかない)
自分が見せしめになる為の放送だ。
「死ぬかも知れない」ではなく「死ぬ」ことが確定、もしくは百パーセントに近い確率であることを、きよみはわかっていた。

ただ、協力しあってください、と言うのではダメだ。自分が死ぬことを前提に、それに賭けていることをアピールしなくては。
恐ろしい。
(怖い……)
反対側の川縁に着いて、自分が震えていることに、きよみは気付く。
(特攻隊の人達も……こんな気持ちだったのかしら?)
今、自分は死にに行くのだと、実感しながら、きよみは建物へと向かう。

233　その手を汚す価値

「茜……何処いったんだ」
一番近くにある木にガンッと拳をぶつける。
詩子達と別れてからしばらく、相沢祐一は里村茜を探し島中を歩き回っていた。
「闇雲に探しても見つからないか……ん⁉」
森の中に入って少しひらけた場所に出たところで祐一は突然立ち止まる。物音を聞いたような気がしたからだ。
祐一の全身に緊張が走る。考えてなかったわけではない敵との遭遇。呼吸を整え、静かに濃硫酸入りのエアーウォーターガンを構える。周りをゆっくり見渡すと、がさがさと無用心に音を立てて何者かが近付いてきていた。
「やっと見つけたわよ、あいざわゆういち!」
森の奥からフラフラになりながらも祐一の名を呼んだのは、体をびっしょり濡らした一人の少女であった。
「真琴!」
祐一はその少女の出現に対して、なんの警戒心も持たずに構えていたそれを降ろし、今にも倒れそうな彼女に駆け寄る。
「どうしたんだ?　びしょ濡れじゃないか」

「あんたのことを探してたのよ」
祐一はエアーウォーターガンを地面に置き、両手で少女の体をしっかり支えてあげる。
「あ、そうそう、そーいえばおまえあの時パチンコ撃って逃げただろ？　なんであーいう事する……んぐっ」
言い終わらないうちに少女の手は祐一の首をつかんでいた。
「ま、まこと……」
「なんでだかはよく覚えてないんだけど、あんたのことがすごく憎いの。だから……殺すの」
両者とも地面に倒れ、少女はその上を跨ぐ。いわゆる馬乗りまたはマウントポジションとも呼ばれる体勢になった。そして祐一の首に全体重をかける。
少女の力は非常にはかなげで弱々しいものだったが、なかなかその手を引き剥がすことは出来ない。
「や、めろ……やめるんだ真琴！」
ありったけの声を出して叫んでみるが、首を絞められてるためあまり大きな声は出ない。
「まこと？　それがわたしのなまえ？」
首を絞める手が一瞬緩む。
「おまえ、まさかまた記憶がないのか？」
「だからなに？　あなたが憎いということに変わりはないもの」
祐一の意識が朦朧としてくる。
もうだめかと祐一が考えたとき、頬にぽたりと雫が落ちた。何事かと閉じかけていた目をもう一度見開く。
「なんでだろう……憎いはずなのに。すごく憎いはずなのに……」
首を絞める手がまた緩くなった。
「ま、真琴……」
さほど力の入ってない手によって絞められた首からゆっくりと呼吸を取り戻していく。真琴の頬を流れる涙を拭おうと手を伸ばした次の瞬間、また祐一の頬にぽたりと雫が落ちる。

今度は綺麗に透き通っている人の生を伝える液体ではなく、赤く紅く濁った人の死を伝える液体だった。

「まことー！」

もう完全に力の入ってない手を振り解き、祐一は倒れこんでくる少女を抱きしめながら彼女の名を叫ぶ。

そして彼女の背中越しに見えた光景は、ナイフを持って、返り血を浴び、カタカタと振るえている水瀬名雪の姿であった。

名雪はこの場所に来る前はまったく武器などを持っていなかったのだが、ただの偶然なのか、はたまたこの島の因果による必然なのかはわからないが、観鈴が晴子に向けて投げたナイフを見つけて拾っていたのだった。

「ゆ、祐一、大丈夫？　この子が悪いんだよ。祐一を、ゆういちを殺そうとしてたから」

「だからってなんで、なんでこんなこと……」

「だって、祐一が、ゆうイチが……」

名雪は気が動転しているのか、とても正常とはいえない言動をしている。

「ゆう、いちぃ……」

沢渡真琴が口から血を流しながら祐一の名前を呼ぶ。さっき森の奥から呼んだ時のような刺々しさはもうなくなっている。

「名雪、俺の前から消えてくれ。でないと、俺、おまえに対してどうすればいいのかわからない……」

エアーウォーターガンを拾い上げ名雪に銃口を向ける。

「これの中身は濃硫酸だ。たのむ、俺に引き金を引かせるな」

「そんな、そんなの……嫌、イヤ、いやだよ」

壊れた人形のように力なく首を横に振る。そんな名雪に祐一は、残酷なまでに強烈な視線を浴びせる。

「イヤァァァァァアア!!」

居た堪れなくなった名雪は、激しい絶叫を残して森の奥に姿を消し去っていった。

「大丈夫か真琴？」
名雪に向けていたものを投げ捨て、真琴をそっと抱きかかえる。
「あうー、わたし……どうしたんだろ？　なんで祐一はここにいるの？」
「あんまり喋るな！　安静にしてろ」
「あのね、変な夢を見てたの。みんなでね、殺し合いをするの。なんだか、漫画みたいだよね。それでね、私は、真っ先に祐一をやっつけようとするの。とりゃーって感じで」
「うん、わかったから……」
祐一は話を聞きながら真琴の手をぎゅっと握りしめる。
「でね、途中で『みゅ〜』て言って、泣いてばっかりの、女の子に会うの。その子はまだ子供だから、わたしはその子の、お姉さんになってあげるの……木の実をあげたり、変な人に襲われたときは、わたしがね、守ってあげたりするの」
真琴は途中苦しそうな表情を見せながら、祐一にぽつりぽつりと語っていく。
「祐一は、いっつも、真琴のこと、子ども扱いするけど、どう？　わたしって、おねえさんでしょ？」
「ああ、そうだな。真琴はお姉さんだな」
「えへへ……もう、今度から、子ども扱いしたら、だめ、なんだからね！」
「うん、わかった」
祐一の目には涙が溜まり始めていた。
「あぅ、なんか、いっぱい、おしゃべりしたら、疲れちゃった……もう、眠くなって、きちゃった……ぴろはいないけど、ゆういちと、一緒に眠っても、いいかな？」
真琴の声がだんだんと途切れがちになっていく。
「ばか！　寝るな！　眠っちゃだめだ！　ほら、今日の悪戯がまだだろ？　俺に仕返しするんじゃないのか？」
「んー……今日は、見逃してあげる………ありが

たく、思いなさいよ」
真琴はゆっくりと微笑む。
「それじゃあ、おやすみ。ゆーいち……」
握っていた手が力なくだらりとたれる。
いつか贈った鈴がチリンと鳴る。
そしてその場はしんと静まりかえる。
ただ一つの嗚咽を除いて……

四十五番　沢渡真琴　死亡
【残り62人】

234　堕ちた道化

「あの様子だと……。英二さん死んでしまったみたいだな……」
冬弥が由綺に話しかける。
——ザッ——
崖下。静かに着地。
住井にも聞こえた。信じたくない台詞。
英二、あの男は自分が殺さなければいけなかったのに。
信じられない。
美咲さんのかたきをうつ。
それが唯一無二の望み。
決心したばかり。
そう決心したばかりなのだ。
「嘘だ……」
『!?』
冬弥と由綺が振り向く。
「嘘だ……。嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だーーーーー!!」
早足に冬弥の方に近づいた。
「でたらめ言うんじゃねぇ！」
冬弥の目の前まで……。
「死んでもらっちゃ困るんだ！　死んでもらっちゃ！　あいつは俺が殺す！　美咲さんを殺したあい

つを！　俺が！　俺が殺すんだ！」
（英二さんが美咲さんを!?　なにを言っているのだろう。こいつは）
冬弥の率直な感想だった。
「くそ！　くそ！　くそ！　くそ！　だったら今逃げていった妹の理奈って奴を!!」

――カチャリ――

住井は気がついた。
（こいつらさっきの……）
銃口が自分に向いている。
遅すぎた。
「あはは、あはははははははは!!」
笑いしか出てこない。
（なんて馬鹿なんだ俺は。これじゃまるっきり……）
「由綺……。俺がやるよ……」
（道化じゃないか……）

235　強者の綻び

「あいたいあいあい……♪」
「だから歌うなっつってんだろうが！」
「……うぐぅ」
まことに遺憾ながら、御堂の御守りは二日目に突入していた。朝までだ、と念を押したにもかかわらず、あゆはちょこちょこと後をついて来る。脅し賺しも効果が無い。結局、根負けして放っておくことにした。
――安宅みやの言葉が気になったわけでは決して無い……はずだ。
「だって、つらいときや悲しいときは、歌を歌うと元気になれるんだよっ」
「俺の体調は万全だ。ヘタクソな歌なんか聴いてられるか」
「ひどいよっ。ボク、歌上手いもん。歌手デビュー

したら、きっとオリコン十一位ぐらいに入るよっ」
おりこん、というのが何だかわからなかったが、御堂はそれを尋ねるのは止めた。
「知るか。……とにかく黙れ。てめぇの歌のせいで敵に居場所がバレちまうだろうが」
「うぐ……敵って？」
きょとん、とした顔であゆは尋ねる。
「お前馬鹿か。こいつは殺し合いだ。自分以外は全部敵だろうがよ」
「自分以外は敵？　でも、おじさんはボクを殺したりしてないよ？　そりゃ怖いなぁ、って思うけど」
「……お望みどおり、今ここで殺してやろうか？」
「うぐぅっ⁉」
あゆはその場で飛び上がると、ぶるぶると泣きそうな目で御堂を見る。
「全く、ムカつくガキだぜ……。いいか、忘れるな。お前なんざ、俺がその気になればいつでも殺せるんだよ。少しでも長く生き延びたいなら、俺にこれ以上手間をかけさせるな」
こくこくと頷くあゆ。おとなしくなったのを見て、御堂は舌打ちをしてから歩き出す。
「行くぞ。俺はさっさと坂神と殺り合いた……」
途中で押し黙る。御堂は瞬時にあゆを引っ張って近くの大木に身を隠す。
『……来やがる』
何者かが近づく気配を、御堂は察知したのだ。
あゆを胸元に抱き寄せ、片手で口を塞いでおいてから気配を殺す。あゆはもがくが無視しておく。
『ち、全く邪魔なガキだぜ。……そんなことより、この気配は只者じゃぁねぇな』
近づいて来る者の気配は強化兵のそれとは違うが、辺りを押しつぶすような威圧感があった。
『殺気はしねぇが、この威圧感は——敵に回したら厄介かもしれねぇ』
そう考えて、御堂はその考えを追い払う。
『ふん、つまんねぇことなんざ考える必要はねぇ。

俺は強化兵じゃねぇか。それも、完全体と呼ばれるに相応しい。その気になりゃあ誰でも倒せる。坂神だろうが、誰だろうが、だ』
その時――。
「にぃぁ～～」
呑気な声で頭の上の猫がないた。
「？　何かいるの⁉」
しまった、と御堂は素早く銃を取り出そうとして――左手に鋭い痛みを感じた。
「く」
「うぐっ……はあっ、はあっ……おじさんがいけないんだよ。ボク、息が苦しくなってついつい噛み付いちゃったけど、あのままだと死んじゃうって思ったんだからっ」
「……このガキ……っ！」
どん、と御堂はあゆを突き飛ばすと、頭上のぴろを掴んでそちらへ放り投げる。
やはり殺しておけばよかったと後悔するが、今更言ったところで始まらない。今は目の前の敵を排除しなければ。
「あんた、何してるのっ⁉」
その声に御堂は振り向き、銃を構え――る途中で、思わず呆ける。
「何だ……その珍妙ないでだちは……？」
突き飛ばされたあゆが腰の辺りをさすりながら、御堂が対峙している敵の姿を見つめ、こう言った。
「うぐぅっ、痛いよ……。あ、それ猫の耳だねっ」
「にぃ～～」
ぴろも同意するようにないた。
頭から珍妙な耳を生やし、ひらひらとした服を着た格好で憤慨する少女の姿がそこにあった。
「う……うるさいっ。あたしも好きでこんな格好をしてるんじゃないのっ。それより女の子に手をあげるなんて、あんたそれでも男なのっ！」
珍妙ないでだちの少女――柏木梓は、御堂に対し

怒りをあらわにする。
『ちっ……こんな女に威圧されていたとはな。俺もヤキがまわっちまったぜ』
御堂は自分の感覚が鈍っていることに、少々面食らっていた。――実際のところ、彼が察知したのは梓の鬼としての本能であり、感覚が鈍っていたわけではないのだが。
「黙ってないで、なんとか言ったらどうなの？」
「……うるせぇ」
すっと御堂は銃口を梓に向ける。
「……！」
銃を突きつけられ、さすがに梓も息を呑む。じりじりと緊張が辺りを支配する。
「だめだよっ！」
突然声がして、御堂の腕に何かが絡み付いた。
「く、このガキっ！」
「人を撃ったりしたらダメなんだよっ！」
しがみつくあゆを、御堂は必死で振り払おうとする。――一瞬、御堂の注意が梓から逸れた。
「……今だっ！」
ここぞとばかりに梓は勢いにまかせて飛び出す。捨て身のタックル。――が、梓の突進に気づいても御堂は冷静だった。
銃を真上に放り投げる。一瞬、梓とあゆの視線が上を向く。
「うぐ？」
御堂はその隙に、自由になった両手であゆを引き剥がし――そのまま梓の方にめがけて投げ付けた。
「え、ちょ、ちょっと!?」
とんでもない飛び道具に、たまらず梓は姿勢を崩してあゆを抱きとめる。そのまま、勢いにまかせて二人して倒れこんだ。
「阿呆が。俺に勝てるわきゃねぇだろうが」
目の前には放り投げた銃を再び手に取って、その銃口を梓たちに向けている御堂の姿があった。

「くっ……」
目の前の銃を避けようと、梓は身をよじる。が、上にあゆがのしかかっているために思うように動けない。
幾ら防弾チョッキを身に着けているとはいえ、頭を吹き飛ばされたらお仕舞いだし、例えチョッキを狙われても、この至近距離じゃ貫通してしまうかもしれない。だいたいこのまま撃たれたら、あゆはよくて重傷、悪ければ死んでしまうだろう。
――絶体絶命、だった。
「……この、卑怯者」
せめて口だけでも、と梓は恐怖を押し殺して精一杯の悪態を吐く。
「いい度胸じゃねぇか。卑怯者らしく、存分に楽しませてもらってから殺してやろうか？」
御堂は下卑た笑みを浮かべ、凄みを効かせて言う。その言葉の意味を察して、梓の顔が青ざめた。
「ふん。張れもしねぇ虚勢なんか、最初から張るんじゃねぇ」
あくまで御堂は冷静に言い放つ。そしてこの二体の目標をどうしようかと思考する。
勿論、強化兵としての本能は、こいつらを殺せと命じている。――だが。
「……うぐぅ。殺すなんてダメだよっ、おじさん」
梓の上に乗っかったまま、あゆが御堂をじっと見つめて、そう言った。
ち、と御堂は舌打ちする。
「……馬鹿かお前。まだそんなこと言ってるのか」
「ボク、馬鹿じゃないもん」
「言ってるだろうが。殺し合いなのに、殺さないでどうする？」
「そんなことしないでも、みんなが一緒になればきっと帰れるよっ」
反吐の出るような、甘い考えだった。御堂は何も言わずに、ただ、銃口を向けたまま冷たい眼で二人を見ていた。

しん、と。死の気配が辺りを支配する。
梓とあゆにとっては気が狂いそうになるぐらいの恐怖の時間。
——だがしかし。それを打ち破ったのは、他ならぬ御堂だった。
「もういい。——おい、お前。殺さねぇでやるからこのガキを連れてどこかへ行け」
『え？』
意外な御堂の言葉に、梓とあゆの声がハモった。
「そいつがいると何もできねぇ。……そのガキは邪魔だ」
「うぐぅ。邪魔ってひどいよっ」
「黙れ」
「ひぐぅっ!?」
あゆは銃口を向けられて思わず悲鳴を上げる。
「いいか。今回だけは生かしてやる。次は無ぇ」
「……ど、どういうことよ？」

うぐうぐと震えるあゆを両手で抱きしめて庇いながら、梓は御堂に尋ねる。
「言葉通りだ。次に遭った時は、その頭を花火みたいにふっ飛ばしてやるって言ってるんだよ」
「だ、だったら何故、今襲わないのよ……？」
「……」
梓の問いに、御堂はしばし沈黙する。
——そして、ため息でもつくかのように言った。
「……知るか。ほんの気まぐれだ」
「うぐぅ、おじさん……」
あゆが何か言いたそうだったが、御堂は銃を構えたまま走り出した。
『ち。なんだったんだ、あのガキは。調子が狂うったりゃありゃしねぇ』
御堂は駆ける。本来の目的を果たすため。
坂神蝉丸を打ち破る、そのためだけに。
——だが、彼の強化兵としての本能は。

冷静に只、敵を討つだけの本能は。
少しだけ。ほんの少しだけ、綻びが見えていた。
『俺は、坂神を倒すためだけにここにいるんだ。他のやつらがどうなったって構わねぇ。――だから、見逃してやったんだ』
御堂はそう言い聞かせると、走る速さを上げる。
……その背中にはいつの間にか、離れぬようにぎゅっとしがみついたぴろの姿があった。

236　そのころ

御堂が改めて蝉丸を捜し始めたそのころ、蝉丸と月代は山中の獣道を高台に向けて進んでいた。
月代は、蝉丸が念のためにと付近の竹藪から刀で切り出した竹竿……いや、竹槍を振り回している。
銃や刀に比べれば大した得物ではないが、何も持たないよりは心に余裕ができようというものだ。
「(・∀・)蝉丸……これからどうするの？」
「まずはきよみを探す。きよみは野外での生活には慣れていない……おそらく、どこかの建物か、洞窟などにいるはずだ。見晴らしの良いところに行ってそれらしいものを探す。その後は……分からん」
きよみはああみえて芯の強い娘だ。決して殺人の狂気などに囚われてはいないだろうが……。
蝉丸は考える。
朝の放送を信じる限りでは、既に二十人もの死者が出ている。こうしているうちにも新たな犠牲者が生まれている事だろう。
仲間を、家族を、守りたい……多くの者は、そう願っているはず。だが、その思いを嘲笑うが如く死者は確実に増えつつある。
――誰かが、殺している。
――誰が？
考えられる可能性はおよそ三つ。
――一つは、この「げーむ」を「理解」した者。
冷静に自分が最後に生き残るために動いている者。

さほど多くはいるまい。
――もう一つは、恐怖に溺れ、狂いかけている者。正気を失ったあげく他人を巻き込んで自滅する者も少なくはあるまい。
――そして、最も多いであろうのが――
蝉丸達と同じ境遇――あるいは境遇だった者だ。自分を、家族を、仲間達を守るためならば、敢えて罪を犯そう。そう考えている者達だ。
仮に相手が見知った仲間であっても、信用できるとは限らない。むしろ、知り合いなればこそ自分の弱点に通じているかもしれないのだから。
時間が経つにつれ、信頼は不安に、不安は恐怖に変わり……さらなる悲劇が起こるだろう。知り合いでない者ならばなおさらだ。
戦場でもままある事だ。一つの死がさらに多くの死を招き寄せる。ひとたび繋がってしまった疑心と憎悪の連鎖は、容易に断ち切りうるものではない。このままではいずれ、島中の多くの者が、人の為に人を殺めていくことだろう。
――仕方がない、と心を凍てつかせ、他人を……そして、かつての自分を殺めていく。先程の少年がそうだったように……。
そして友や家族を喪った者は、絶望と怒りのままに、己を犠牲にすることを厭わぬ、時に相手すらも選ばぬ最悪の復讐者と化す。大半の者がそうなってしまえば、共に手を携えて脱出の術を練ることも、主催者を倒そうとする試みも叶うまい。
そもそも彼らはたった一人しか生き残らせぬ、と言っているのだ。嘘か真かは知らぬが腹中に爆薬を仕込んでいるとも言っていた。
（どうすればいい？　光岡……お前ならどうする？）
亡き友の事を思う。
軍に入った時から戦いで命を落とす覚悟はある。自分自身の死なら従容と受け入れる事もできよう。だが……。

生かしたい者達がいる。
そのうち誰か一人を、選ばねばならないとしたら。
そして敵となる者の多くはまだうら若い娘達なのだ。
考えれば考えるほど額に険しい皺が刻まれていく。
「(・∀・)……どうしたの？」
「いや……心配するな」
月代の髪に手を置き、掻き回す。
それに――岩切は死んだらしいが、御堂はまだ、生きているだろう。あの男と出会ったならどうなるのか。

……心を落ち着ける。ここはもう、戦場なのだ。
考え事に気をとられ続けるのはまずい。
当面やるべきことは決まっている。
一刻も早くきよみと、そしてまだまともな理性を残している者達を探さねばならない。

きよみ。
……何か、胸騒ぎがした。

237 第四回定時放送

みんなーお昼の時間だぞー。
例によって定時報告いくぞー。

六番　石原麗子
十番　太田香奈子
十二番　緒方英二
三十八番　桑嶋高子
四十四番　澤倉美咲
四十五番　沢渡真琴
五十七番　橘敬介
五十八番　塚本千紗
六十番　月島瑠璃子
六十二番　遠野美凪

七十三番　雛山理緒
八十一番　松原葵
八十七番　みちる

以上だ。
ペースアップしてきたじゃないか。
この調子で頑張ってくれよ、ハハハハッ……

238　白い、決意。　三

川から出ると、その先は、また森になっていた。
どうやら、この森はさっきいた森よりは深さはないようだ。そこまで確認して、きよみ〈原身〉は慎重に森へ歩み寄った。
水気を含んだスカートが重い。スカートをかがんで絞り、水気を切る。大分マシにはなったが、靴の湿り気の不快感はどうしようもない。
最後にパンをかじってから、随分時間が経った。
空腹感は、ない。
疲労と、喉の渇きは酷いが、不思議と空腹感はなかった。
森の中はさっき彷徨っていた森よりも明るい。木の数が少ないのだろう。誰にも会わないことを祈りながら、きよみは歩を進める。殺戮者と化してしまった人より何より、今は、蝉丸に会いたくなかった。
死にに行くことを、決めた、その時から。
会ってしまえば、決意は鈍るだろう。
自分にしか支給されていないであろう、武器。
マイク。

足早に歩きながら、きよみは鞄のソレを確かめる。
(私は、私の戦いをする……)
その、代償がこの、命。
弟に、蝉丸に、光岡に、救って貰った命。
(もう、甘えたりしません……。だって、女性でも

男性と同じように働いて、生きていける時代に、なったのでしょう?)
蝉丸を心に思いながら、きよみは建物へ向けて、歩く。
(だから、悲しまないで。大丈夫、私は満足です)
独り、少し微笑んで泣いた。
意識せず、涙が零れる。
怖かった、怖くて仕方がなかった。
ずっと震えは止まらない。
だけど。
だけど、誰かが。
(戦う意志のない人が居ることを伝えなくてはいけない。伝えて、狂ってしまった誰かを、正気に戻さなければ)
そして、それが全員に、例え主催の贄となっても、伝えられるのは……
(私、だけ)
森が、切れる。

と、同時に放送が聞こえた。
心臓が痛いくらいに、ドキリと跳ねた。
聞き終えて、自分の体をぎゅっと抱きしめる。
(また、沢山の……罪もない人達が殺された……哀れな、同胞の手によって)
自分も、あの死者リストに載る。
だが、私は誰にも殺されないのだ。
参加者の、哀れな人達の手に掛かることはない。
卑怯な計略には、乗らない。
目の前に、建物がそびえる。
そっときよみはそれに近づいた。誰にも、出逢わなかったことを神に、感謝しながら。そして、人の皮を被った悪魔を呪いながら。
建物の扉は容易に開いた。というよりも、半壊していた。その中に人の気配はない。
埃の匂い。自分の足跡が、うっすらとつくということは、長時間、放置されていた建物の様だ。
きよみは、安堵の息を吐いて、階段を探す。

屋上に向かうために。
死にに、行くために。
階段は程なくして見つかった。
(これは、天国への階段？　それとも……地獄への階段？)
何に使われていた建物かは気にならなかった。それより何より、きよみは、これから紡ぐべき最後の言葉を考えていた。
屋上に着くまでが勝負だと、確信している。
着いてしまったら、もう、後戻りは出来ない。
立ち止まってしまえば、もう、動けない。
恐怖に埋もれて、泣くしかできなくなる。
(そんなのは、嫌)
そう、嫌だ。
(蝉丸さんも、光岡さんも、もっと辛い戦場に居たはずなのだから。負けない。私も、戦う。もう、守られるだけなんて嫌、嫌だから)
一歩一歩を踏みしめるように、階段を上る。
途中、放送を思い返して、ぎゅっと手のひらを握る。
(……止めて、みせます)
屋上への扉は、もう、目の前にある。
その時、声が聞こえた気がした。
死んでしまった……夕霧の、声が。
『がんばって』
思い出すまいとしていた。最初の放送。信じたくなかった。
(あんな、いい娘まで死ぬだなんて……殺されるだなんて)
でも、今は、それがきよみの決意に拍車をかけた。
(貴女の敵、討つわ……だから、見守っていてね)
きよみは、そっと、静粛な気分で扉を開けた。
少し強めの、風が吹き込んでくる。濡れたスカートが足にひやり、と冷たい。
もう、震えは止まっていた。涙も、乾いた。あとは、マイクのスイッチを入れて、喋るだけ。

(私の生き様を、どうか、どうか焼き付けて……生き延びてくださいね、蝉丸さん。それから、月代ちゃんに、よろしくと)

　建物の屋上は思ったより狭く、その中心に立っていても、島を見渡せる程度のものだった。

(こんなに、狭い島で、今も人が死んでいく。……同胞による無益な、殺し合いが……やれる限り、私は戦う。止めて、止めて見せます！)

　きよみは、マイクのスイッチを、入れた。

「聞こえますか？　島にいる、皆さん、聞こえますか？　私は今、森近くの建物の屋上にいます。見えますか？」

　自分の声が、島に、反響する。

　言いたいこと、言うべき事を早く、伝えなければ。いつ、殺されても、おかしくはない。

「私は、きっと、これから死ぬことになるでしょう。それは、主催の意に反することをするからです。よく、聞いてください。これは、私の主催に対する宣戦布告です！」

　反響する、自分の声に重ねて、きよみは喋り続けた。

「あなた達は、何人殺しましたか？　何人の友人を肉親を大切な人を、失いましたか？　私は一人、大切な友人を、失いました。私は、酷く悲しかった。悲しくて、辛くて、仕方がなかったのです」

「あなた達はどうですか？　これだけの人達が、同じ時代の同じ国に住む、普通の人達が、殺し合いをさせられているのに、自分のことだけを思い、自分の大切な人だけを守ることしか、できないのでしょうか？」

「……私は、嫌です。そんなことは死んでも、したくありません。自分や、大切な人を守るために、誰かの大切な人を殺すだなんて、そんなことは出来ません。もし、私に同意をしてくれるなら、手を取り合って人の皮を被った悪魔の魔手から、逃げ果せて下さい。方法は、必ずあるはずです」

239　白い、決意、そして終幕。

「人は弱いものです。とても弱い。猜疑心、嫉妬、劣情、優越、劣等……ありとあらゆる、負の感情があります」
「それでも、大切な人がいるのであれば。守りたい人がいるのであれば、人は強くなれる。私は、少なくとも、私はそう思っています。だから、死を賭して、この場で語りかけます。疑うのも、争うのも、止めて、協力しあってください。活路は醜い争いからは生まれません。決して、生まれないのです」
「私は、これから主催の手にかかり、死ぬことになるでしょう。でも、それは、無意味な死ではないと、そう思っています。私は参加者の誰の手にも掛からずに済むのです。そして、自らが出来るたった一つの反抗を主催にしてやれたのです」
「さあ、考えなさい。あなた達が、今するべき事を。本当の敵は誰か。想い出して下さい」
そこまで言い終えて、きよみは腹部を押さえた。
何か、異物が、腹で膨らんでいる……！
「最後に！　蝉丸さん!!」
耐えきれず、膝をつく。コンクリートと膝のぶつかる音が、マイクを伝わり、島に響いた。
「聞こえますか？　私は、もう、ダメです。でも、悲しまないで。私は私の誇りに従って、戦うことが出来たのです。私はこうして、私を守りました。だから、蝉丸さん、月代ちゃんをみんなを守ってあげてください。私は、こんなことしかできないけど、でも、蝉丸さんなら、切り抜けられる。そう、信じてま……」
その瞬間、爆音が、響いた。
きよみの最期の断末魔として、島じゅうに、響く……。
その場に、残されたのは、無惨な躯だった。
生前の儚げな美しさはなく、ただ、惨い、肉塊に

なりはてていた。
だが、一部、無事だったその顔は、満足げに微笑んでいた。

十五番　杜若きよみ〈原身〉死亡
【残り61人】

240　仮面

Ｊｏｋｅｒ：
一［略式］ばかげた事をする人、ふざけた奴、冗談の好きな人。
二　どんな影響か測れないもの。
三　思いがけない事実。
四　策略。

水瀬秋子の思考は常に大局の上にあった。
それはかつての経験によるものか、また自身が生来備えた素質のようなもののせいか。それは誰にも分からない。
ただ、それはもはや彼女の特質として認められ、他人も、そして自身もそれを否定することは無かった。それが彼女にとっての、そして彼女の周りにとっての〝普通〟になっていった。
だがときにその振る舞いは他人から恐れられ、その冷静沈着さは人の怒りを買った。
水瀬秋子ですら〝不完全〟だった。
だが、むしろ〝完全〟などというものの方が、この世界に人間が勝手に作り出した欺瞞であるということは言うまでも無いことだった。
未完。
未だ、たどり着いてはいない。
一見悟りきった様相、しかしそれは全てを語っていない。
沈黙はごまかし。

均衡は奇蹟。
その危うい綱渡りが、たまたまうまくいっていただけ。
……分かってる。水瀬秋子がどれくらい脆いかなんて。だって他ならない私自身のことですもの。
不思議なものだった。
私自身が名雪に縋っているように、名雪もまた誰かに縋っていることなんて分かりきったことだった。
……それが、私であればいいと思っていた。
それなのに、あの子は祐一さんの名前を追って行ってしまった。
嫌い。
大嫌い。
そんな言葉、今まで名雪に言われたことはあっただろうか。
……いつものあの子なら、間違っても言わないだろう。
いつものあの子なら。
いつもなら。
……だから、私も〝いつも〟じゃない。
心が沈む。
あの人……名雪の父親が死んで以来、ずっと絶やさないようにしてきた笑顔を忘れそうになるくらい。
多分、名雪は琴音ちゃんが追っていってくれているでしょう……。そんな言い訳をしてまで自分をごまかして、あの子から離れなくてはならないくらい。
だから私は、琴音ちゃんを放り出して道を逆行した。
——いや、正確には名雪を。
ふぅ……。
嘆息する。
穏やかな微笑、だが瞳にはかすかな憂い。
「やはりダメだったのかしらねぇ」
——二人で生き残ろうなんてことは。

私は、自分が善人だと思ったことは一度も無い。いざとなれば、顔色一つ変えずに人だって殺める。
私は咎人だ。
でも……だからこそ、せめて母親としては正しくあろうとした。何に代えても、娘だけは守ろうとした。
……それがいけなかったとでもいうのだろうか。
名雪の精神は、そろそろ限界が近い。
そもそもこの状況で正気を保っていられる方が普通でなかったのだろう。
常人にこの状況が堪えられるはずが無い。
知らず知らずの内に……蝕まれていく……。この島を包む、血と、硝煙と、死の匂いに……。
「……だからといって」
あの子までそれに巻き込まれてしまうのは、死んでしまうのは、なんとしても避けなければならない。
……秋子はその言葉を最後まで口にはしなかった。
たった一人の娘。本来なら、今すぐにでも追いかけていって抱きしめてあげたい。命に代えても守ってあげなくてはいけない。
それなのに、放り出してしまった。
……自分に、負けて。
拒絶されたことへの落胆に、足を留められて。
もし、この瞬間に名雪が殺されるようなことがあれば。
……私は、一生後悔する。犯人には間違いなく究極の苦痛を与えた後に緩慢な死を与える。それどころか、この島にいる全ての人間を殺しても止まらないかもしれない。何より、私が私を許すことが絶対に出来ない。
それくらい、もう分かりきった未来なのに。それなのに、今この瞬間は投げ出した。
打算も、何も意味が無い。
後に残るのは、あの子を御せなかった事実だけ。
優しすぎる名雪。
あの子に殺し合いなんてできるわけが無い。

それは、他の参加者にも言えることだった。
今この島にいる人間のほとんどは無理矢理つれてこられ、なし崩しに殺し合いに参加させられているのだろう……日常を平和に生きてきた、会ったことも無い彼らにとって、その要求はあまりに悪意にあふれたモノだったに違いない。
……黒の少年のことは、話だけ聞いたことがあった。FARGOの中でずっと隔離されてきた、人にあらざる存在。どうしてそのような存在を、このゲームに投入したのか。また、彼はみすみすこのような茶番に付き合うことになったのか。
後始末、だろうか。私達？　それとも、彼？
そしてそれが、一体この殺し合いにどのような影響をもたらすか……それもまた掴みきれていない。
ただ、脅威だということだけしか。
その不審が消えないこともある。だが、それ以上に主催者側の動向が気になる。もし前々回ゲームの生き残りとしての私が、彼らのシナリオの一端を担っていることになっているとすれば……。
それを考えると、迂闊に自分が能動的になるわけにはいかなかった。
だが事態は私のそんな葛藤など無視して、無条件に進んでゆく。
〝ジョーカー〟
それは主催者側の仕掛けた卑劣な罠。
密かに島に入り込み、私たちと同じ境遇を装って接近し、一人ずつ……だが、確実に人間の命を狩っていく死の使い。
だからこそ私は、少人数だけれど少しでも人間が無駄に殺されるのを防ぐために、ここに留まった。
でも……状況はそんなことを許してくれないみたいだった。
置いてきぼりにしておきながら、子供たちがこっちへ戻ってくる様子は無い。
当たり前のことだが、彼女たちを単体で行動させることに危険が無いなんてことは無い。だからこそ。

本来なら、今すぐにでも追いかけて、捕まえて、離さないようにしなくてはならないのだろう。
……頭は、もう十分に冷えた。
だが、何も脅威はあの子達が向かった方ばかりにあるとは限らないのだ。
もうこの島において、安息できる場所などどこにも無いことは、とうの昔に分かりきっていたことだった。
スッ。
音も無く、袖口から小太刀を取り出す。左手にそれを構える。その構えは、通常の剣を用いたところにおける剣術の、無行と呼ばれるものに酷似していた。
一つだけ違うところと言えば、刀身を逆手に構え、ある方向からはその姿を確認できないようになっているところだった。
「……あなたも、そういう目的だったのかしら？」
秋子が呼びかけた相手は、彼女の後ろの方の、少し離れたところにいた。
――天沢未夜子。
一体どのような途を辿ってここまでたどり着いたのか、その表情は一歩間違えれば廃人のように見えるほど虚ろだった。
「……あら、こんにちは」
声は、まるでそんなことに気付いていないようなのんびりした調子だった。加えて、いわゆる艶があった。
しかし、どうも彼女の様子は変だ。
声だけ聞けば……確かに普通なのかもしれない。
でも、どこか覇気の無いような……。何かを偽っているような……。そんなことを、秋子は未夜子に対して背中を向けたまま察知した。
未夜子は、口を小さく横に吊り上げて、引きつったような笑みを浮かべていた。
「とぼけても無駄ですよ、だいぶ前から近くにいたんでしょう？」

秋子は未夜子に呼びかけた。けして乱暴ではなかったが、あたりに良く通る声で。
「さあ……」
クスクスクスクス……。
引きつった口元は、かすかな笑い声へと昂揚していた。一体何がそんなに面白いのか、その表情にはどこか無邪気さすらも垣間見えた。
「聞こえて……いたみたいね」
名雪の叫び声が。
彼女のことは、うすうす気配として捕らえることは出来ていた。だからもし彼女が名雪を狙ったとしても、それを阻止する自信はあった。それが私の打算だった。
だが、それはあまり考えたくないことでもあった。
「かわいい娘さんがいらっしゃるみたいですね――」
――やはり。
だが、その台詞に秋子が応えることは無かった。

「親子の絆というものは尊いものですよね……。ええ、私にも娘がいるから分かります。あなたならご存知じゃないんですか？　そんな事ぐらい。そうです、参加していますよこのゲームに。郁未……。私のかわいい郁未……」
「……なら、私たちは似たもの同士なのかもしれないですね」
秋子が静かに――未だ後ろを振り返ることは無く――言った。
「わざわざ見逃してあげた、とでも言いたいのかしら？」
「…………私は、ずっとＦＡＲＧＯにいたんですよ」
未夜子が発したのは、けして秋子の問いに答える内容ではなかった。……そう、まるでその語り口調は、子供に昔話を聞かせるように。
「ずっと私は一人だったから、私は欠けたものを取り戻そうと思っていたの。でも欠けたものがなんな

のかも知らなかった。だからずっと考えた。そして
それは幸せということだと思った。いろんな立場の
幸せがあったことにも気付いた。それは娘としての
幸せだったり、母としての幸せだったり、女として
の幸せだったりした」
……秋子は、何も口を挟まない、
「私はＦＡＲＧＯに入って、それらの人間としての
何かを取り戻したかった。何かを得るためには何か
を捨てなければいけなかったわ。だから私は平凡な
日々を捨てたの。そしてここで気付いたの。何かを
手に入れるために、何かを失わずにすむ方法を」
ただひたすら沈黙を保つ。空気のようにその場に
いて、彼女の話に耳を傾ける。
「それは力だったの。何者にも屈することの無い、
脅かされることの無い、絶対の力。ＦＡＲＧＯはそ
こに至る道筋を指し示してくれた――だけど」
未夜子は、一度話を切って自嘲した。
「だけど、私にはそこまでいく事が出来なかった。
舟はあったけど、チケットが無かった。私は、選ば
れなかったの。だから私には失うということしか残
らなかった……」
依然、笑顔。
……それは、絶望以外の何であると言うの。
秋子は心の中で問う。
未夜子の声は変わらない。不気味なまでに、穏や
かなトーン。
「でもね」
ほんの少し、口調に明るさが混じる。
「私の娘には力があった。選ばれるのにふさわしい
だけの資質があったの。だから私にはそれがとても
うらやましく思った。憎らしくさえあった。でも、
私があの子をずっと一人にしていたことに気付いた
ら、その気持ちは霧散したの。一人、一人、一人、
一人、結局、私があの子をそうしていたわ。私が一
人でいたせいでこんなに苦しんだと言うのに、それ
を娘に押し付けることなんて出来るはずも無かった。

だからね、私あの子の側にいて、ずっとかわいがってあげようって決めたんですよ」
……そう、それは良かったわね。
秋子は心の中で相槌を打った。
「ああ……、あの子の好きなものをずっと作ってあげられる。あの子の買い物にも付き合ってあげられる、あの子のおしゃべりの相手にだってなってあげられる。それは、郁未にとっても私にとっても本当に幸せなことだった……」
それならば、何故……。
喉まででかかった言葉を秋子は口の中で押しとどめた。
「でもね……ＦＡＲＧＯに二人分の居場所なんて無かった。二人そろって出るなんてことできるわけが無かった。でも……ここでならずっと一緒にいられる」
あなたの声は、そんなに乾いているの……。
「さっき、あの子に会えたんですよ。すごく驚いていました……、私があの子の目の前であの子の友達を殺したことに」
……秋子は未夜子のセリフにうすらさむいものを感じてきていた。
「あの子ったら動転して私に攻撃しようとしてきたんですよ？　おかしいでしょう。かわいい娘が親に向かってそんなことをするなんて」
やけに饒舌に語り続ける未夜子、岩のように口を閉じて黙して語らない秋子、奇しくもそれは、お互いがお互いの正反対を映し出す鏡にでもなっているかのように。
「思わず、私も反撃しようかと思いましたよ？　あの子、すごく震えていましたから。ええ、私からその場を離れたんです。郁未がそうしろって言うから」
未夜子の声に込められたものが……、冒頭の頃とどこと無く変質してきている。秋子はそのことに気付いていた。

「私、その時思ったんです。殺してしまってもいいかなって」
さらにほんの少し、未夜子の口調が昂揚する。
「あの子言ったんですよ。『今殺されるわけにはいかない。お母さんを止める人がいなくなるから。お母さんに殺されるぐらいなら、今ここで一緒に死んでもらうわ』なんて。……でもね、それもいいかなって。私があの子を殺してしまえば、ずっとあの子を側において置ける。あの子の側にいられる」
木々が、ざわめく。
「ずっと一緒にいられる、それなら私が一緒に死んでもいい」
空が、ざわめく。
「ずっと二人一緒……私が生きていても、私が死んでも、結局あの子と一緒にいられることには変わりがないんですもの」
……まるで、それ自身がその場に存在するのを拒むように。

「そのために、私はこの役をかってでたの」
彼女の声に含まれていた笑いが、止まる。
「すべては、そのために」
——やはり。
ある程度は予想できていたことだった。だがそれ以前から、既に彼女の心は破綻していたのではないか？　そう秋子は感じた。
嘆くべきことだった。
本質的なところは、私と何も変わるところがない……。娘に対する、深い愛情。それが悲しいまでに見事に反転してしまっている。
彼女は、もう一人の私の可能性。
今なお進行している、狂気の侵食。
そして、裏の殺人を担うものへの堕落。
……私は、違う。
そう、一人だったあのころとは違う、私はもう一人ではないのだ——。
秋子の沈思黙考……、それは目の前、いや、後ろ

にいるはずの女性が自分を映す鏡であることを明確に肯定する。
「ところで……。私たちは所詮、母の立場でしかないですが……」
語りのトーンが変わる。
秋子の無反応が気に食わなかったとでもいうのだろうか、未夜子は話を転換した。
「大好きな母親がいなくなってしまった娘は、どうなってしまうと思います？」
「!?」
秋子は後ろを振り向いた。そこには茶色い物体が向かって飛んできた！
ドン!!
秋子は一気に吹き飛ばされる。
……だが、間違っても左手の小太刀を取り落とすことはしない。
「あなただったら、分かりますよね？」
いささか笑みが混じった声。
立ち上がった秋子は、初めて彼女の顔を見た。
そこにいのは、狂った一人の殺人者というような、単純な人間では少なくとも無かった。
口が切れて、血の味が広がる。
秋子は口から血の塊を吐き出した。
「プチ主……ね。まさかこんなところで出くわすとは思っても見なかったわ」
秋子の呟き……。未夜子にも聞こえるように、やや大きい声の呟き。
「知っているなら話は早いわね。私が何を要求しているか、分かるでしょう？」
未夜子は……、平常な人間であれば不敵と表すのがもっともふさわしい表情で言った。
「ごめんなさい」
秋子は一言そう言った。
いぶかしむ未夜子。プチ主はその間に手元に戻ってきていた。
「生憎、まだ殺されるわけにはいかないの」

それに……。
「言うのは勝手よ、実現できるかはともかくとして」
未夜子はもういちどプチ主を放とうとした。
秋子は、小太刀を逆手に構えたまま、未夜子に向かって走り出していた。
「……無駄な抵抗ね」
走りよる秋子に向かって、未夜子はプチ主を放った。
プチ主は高速で秋子に迫った。だが、
「ふっ！」
体を沈ませて、縦に前転する！
そして秋子は、その軌道をまっすぐトレースするように小太刀を振るう。
スパン！
プチ主が真っ二つに分断される。正に刹那の出来事だった。
「それに、一度でも見たことのあるものに遅れをとるほど余裕は無いのよ」
果たしてその呟きが音声として認識されたかどうか……彼女は止まることなく、そのまま未夜子に接近していった。
「ひ!?」
一瞬のことだった。未夜子が一瞬悲鳴を発した間に、秋子の小太刀は未夜子の右胸を深々と突き刺した。
冷徹な視線が、未夜子の目を捕らえる。
――――暗黒。
心の闇の深さが、目の前の狂気を凌駕していた小太刀を抜く。すると血飛沫が宙を舞う。
艶やかな紅が、秋子の頬を濡らした。
「ひっ……ひひっ……ひぃーっ、ひぃーっ！？」
未夜子はその一瞬で錯乱した。
右手で体を抑えつつ、未夜子はもときた方の反対へと逃げていった。
秋子は、それを追わなかった。ただ、悲しげに彼

女に視線を送っていた。
「母親がいない娘を、あなたが仕立て上げてどうするというの……？」
　貼りついた血を拭うことも無く、そう呟く。その表情は、少し……ほんの少しだけ沈んでいた。

　未夜子は逃走している。
　居もしない秋子の幻影に追いかけられているかのように、必死で体を引きずっている。
　刺し貫かれた痛みは鮮烈だったが、むしろ痛みよりも、彼女の殺気が大きな衝撃だった。
「ぐっ……」
　苦しい……。
　傷は肺に到達している。彼女の絶命はもう決まったようなものだった。
　唯、殺気。
　未夜子の精神は、目で殺されたようなものだった。
　恐慌に追い込まれたせいで、いろいろな感情が爆発し、もう制御が利かなくなってしまっている。
　私は、死んでしまうのか……。
　そうだ、だったら郁未を捜さないと。
　私が死んだことを知ったらあの子はきっと悲しむ。
　だからあの子も殺して一緒に逝ってあげなきゃ。
　見つからない娘を目指し、未夜子は血だらけの体を引きずるように歩いていた。
　いつしか彼女は声に出して娘を呼んでいた。
　郁未、一緒に死にましょう、と。
　風が吹く。
　少し冷たく、でもあたたかい風が。

　目がかすんできた……なんだか視界が狭い……。
　ぼやけた視界の中で、未夜子は何か黒い人影を見た気がした。

　未夜子は風を感じていた。
　何処から来たのかも、何処へ還るのかも知れない

――風。

　未夜子は大気を感じていた。
　どこまでも自分を解放してくれない、けれどどこにいても探し出して、自分を包み込んでくれている――大気。
　ほおを凪ぐやさしい気流は、まるで子供をあやすゆりかごのようだった。

「――哀れね、道を踏み外したものの末路は」

　バシュウウウウウウウ！

　柏木千鶴は彼女の胸を、もとあったものよりもさらに抉り取った。
　その一撃で未夜子は完全に事切れ、そして倒れた。
「殺意なんて所詮、誰の心の内にだって眠っているもの。……でも、それを自己満足の手段にしてしまったらおしまい。所詮あなたは、ジョーカーにも母親にもなりきれなかったのよ」
　黒い人影は、爪を仕舞うことも無く、死体を顧みることも無く、そう言った。
　そこから少し離れた場所で秋子が呟いた。
「――でも、状況に埋没して雌伏したまま、真のジョーカーは均衡を打ち破るべく潜んでいるわ」
　果たして、その呟きは千鶴まで届いたのか。

四番　天沢未夜子　死亡

【残り60人】

241　わたつみのような強さを

　死んだ。
　美凪も、みちるも。

道を行く途中流れた放送で、往人は立ち止まった。
守ろうと思っていた二人が。
誰よりも大切にしていた二人が。
死んでしまった。

予感はしていた。
――ありがとう――そんな声が、あの時確かに聞こえていた。
二人の、優しい声。最後に出会うことが出来たのだろうか、彼女達は。
そうであって欲しい、きっと、そうだ。
そう思い込むことにした。そうじゃないと、余りにも悲しすぎるから。

夏の田舎町。
旅の途中で路銀が尽き、必然的に留まることになった、あの町。
夏と海の香りが風に運ばれ、どこまでも澄んだ青が、限り無く遠くまで広がっていた。
交通の便も悪く、閉鎖的で、そこにある空気はまるで、千年も変わらぬものであるように思えた。
廃線となり、人のいなくなった駅で、彼女達と出逢った。
気付いたらいつも三人で、まるでずっと昔から、そうであったかのようだった。
変わらぬ日々が、いつまでも続く、そんな錯覚を覚えていた。
そしてその夢は、呆気無く、どこまでも呆気無く、終わった。

感傷に浸るのはここまでにしよう。
自分には、自分の役目が。

一人また、死んだ。
あんなものは理想論だ、現実は違う、そう思う。
自分に出来ることは、ゲームに乗り無作為に人を

殺す者を、殺す。
主催者も、殺す。
それだけだった。
センチメンタルは他の奴に任せればいい。

心に空虚を抱え、道を往く。
それに押しつぶされない強さを。
変わらない、わたつみのような強さを、もう持っていた。

242　無知の中の死

「この住井護様ともあろうものが……はは」

――ガッ！――

脳天に衝撃が走る。
冬弥の特殊警棒。

（まぬけだなぁ……）
住井の頭から血が次々と流れ出す。

（いろいろあったな。
美咲さん。綺麗だった。
最初に出会ったときは怯えてたな。
でもすぐに打ち解けて。
彼女はまな板を持ってたんだ……。
違う。ノートＰＣだったんだ。
従兄弟。潤に渡せばどうにかしてくれる。
俺の携帯と合わせりゃなんとかできるかもしれない。
探して。
緒方英二さんが出てきて。
なんであんな奴さん付けしてんだ！　俺は！
クソ!!
美咲さんを預けちまって。
そうだ。キスされたんだ。

別れてすぐに放送があって。緒方の野郎の嘘がわかって。
変なチビガキにスネ蹴られて。
違う。その前にもう美咲さんを見ていたんだ。
あん時からもう狂ってたのかな？　俺。
あのチビガキに縛られて……。
……。
そんな趣味ないのに……。
…………。
変な二人組に近づいたら左肩の肉吹っ飛ばされて。
美咲さんにナイフを渡されて。
違う！　もう死んでいたんだ。
俺がナイフを取っただけだ。
くそ！　なんでこんなに間違えるんだ!!）
彼は気づいていない。
最も大きな間違いに。

（美咲さん。
誰かに先を越されたけど、
緒方の野郎は……。
美咲さんのかたきは死んだってさ……）
冬弥は住井の落としたバタフライナイフを拾う。
（ああ、潤のやつにも会いたかったな。
〝もずくを食べる時ってなんで猫背になるのかな？〟
こんな話題で五時間は論議ができるおもしれー奴だった。
いい奴だったな）
『ジジ……みんなーお昼の時間だぞー』
住井の胸に……。突き立てられた。
「うっ……みさ……き……さ……」

『以上だ。ペースアップしてきたじゃないか』
冬弥は初めて人を殺めた。
なのに……。
(放送と同時に死ぬと……。発表されないんだな……)
頭に浮かぶ言葉はあまりにもつまらないものだった。

五十一番　住井護　死亡
【残り59人】

243　偽りの円舞

走る。
高槻を追って。
そして……駆けてゆく誰かの白い服が、前方に見えた。
パン！
「きゃあぁ！」
「っ！　智子っ！」
背後からの銃弾を腕に受け、智子が倒れこむ。駆け寄ろうとする晴香。
パン！
智子を撃った兵をマルチが倒す。
「晴香さん、行ってください。保科さんは私が！」
倒れたまま、智子が叫ぶ。
「せや！　早ぉ行きや。高槻は目の前やで！」
「……わかった。マルチ！　智子を任せる」
「はいっ。必ず安全な場所へお連れします！」
再び駆ける。使えるだけの「力」を駆使して、スピードを上げる。
そして……
「高槻いっ！」
目の前に、高槻の姿を捉えた。
ここは最上階。

最奥の部屋に、高槻が逃げ込む。
追いかけ、そこに飛び込む晴香。
「いた！」
壁を背にし、シニカルな笑みを浮かべている。
……ついに辿り着いた。ここまで。
銃を構える。致命傷とはならないが、深手を負わせられるように、狙いをつける。
「どこを見ているんだ」
後ろからそう声がし、振り返る。そこには……スタンガンを手に晴香に迫る、もう一人の「高槻」がいた。

……気がつくと、薄暗い部屋の中にいた。
両手両足を頑丈な車椅子に固定され、身動きが取れない。
「……お目覚めかな、巳間晴香。いや、C—219」
部屋の一部にライトが当たる。
そこには、下卑た笑みを浮かべる高槻がいた。
……ずっと憎んでいた、その男が。
悪夢のような日々を思い出し、その元凶たる男を睨みつける晴香。
「そんな恐い顔をしなくても良いだろう。これでも俺は、おまえの初めての男なんだからなぁ」
「貴様っ！」
「はっ！　威勢がいいな。だが、これでどうだ」
カッ！
高槻の背後が明るく照らし出される。
そこには……身体を拘束され、壁に張り付けられた、智子と、あかりがいた。
「嘘……」
二人とも、衣服をはぎ取られ、裸にされていた。
意識が無いようで、頭をうなだれている。
「うそだぁ……」
「あはははは。残念だったな。おまえの仲間は、すでに俺の手の中だ」

言って、智子に近づく。
「悔しいか。憎い男に仲間を奪われて！」
智子の胸を、無造作につかむ。
「ほう、この女、お前よりも胸が大きいな」
「やめろーっ！」
今度はあかりに近づく。頭をつかみ、その頬に舌を這わせる。
「やめてぇぇ。お願い……」
その舌を強引に、口の中に突っ込む。なすがままにされるあかり。
「コイツらは、手篭めにしようが、どうしようが俺の自由にできる」
「いやぁ……」
「どうだ！　悔しいだろう！　こんなゲスにいいようにされて！」
涙を流しながら、晴香は二人を見つめる。
「コイツらを助けて欲しいか？　なら、俺を感動させてみればいい。俺だって人の子だ。熱い友情を見せつけられたなら、情に負けて屈服してしまうだろう」
「友情……」
「そうだ。こいつらを救う為に……そうだな、まずは参加者を十人ほど殺して来い」
そんな……言葉を失う晴香。
「そうすれば、助けてやらんでもない。そうでなければ、こいつらは俺の慰み者だ」
「……」
「どうする？　大事な仲間を見捨てるか、それとも見知らぬ他人を殺すか」
この男は本物のゲスだと、晴香は知っている。あかりと智子が、どんな目に遇わされるか……
「……わかった」
「ほう、では友情の為に殺人を犯すというのだな。では行け。そしてこのゲームのジョーカーとなれ！」
外に連れ出され、自由の身となった晴香。
だが、彼女の心は漆黒の闇に拘束されていた。

――友情の為に殺人を犯すというのだな
そう。全てはあかりと智子を救うため。
もう、最初の目的など、どうでも良かった。
もし、わたしと同じこと……いや、それ以上の過酷な仕打ちをあの二人が受けたら……
わたしにとっては、「不可視の力」の扉をあけてしまったほどの苛烈な仕打ちを、あの二人が受けることになったら……
「そうは……させない」
どうせ、この両手はたくさんの、本当にたくさんの血で汚れている。ならば……
死神に身を落とすことは、運命なのかも知れないと、そう思った。

晴香のいなくなった部屋で、一人ほくそ笑む高槻。
「簡単なものだな。小娘を騙すということは」
そう言い、ポケットから取り出したメスを、あかりの頬に突き立てる。
つーっと、そのメスを縦に下ろす。
その下から現れたのは……量産型メイドロボットの、冷たいマスクだった。

「智子。我慢してね」
その傷ついた肩を治療しながら、あかりが呟く。
「うん。あ、いたたたたっ！」
智子たち三人は、マルチの機転により中継基地を脱出していた。
……あの時、晴香の身体を担いだ高槻が、部屋から出て行くのを目撃した。
しかし、他の兵に遮られ、助けることが出来なかった。
かろうじて再び敵のジープを奪い、ここ――出発地点の一つである建物まで来るまでに、高槻の放送で……少なくとも、晴香が生きていることを確認できた。
「全く……どないしよ」

幸い腕に受けた銃弾は貫通していた。痛みは激しいが、動けないわけではない。
「どうにかして晴香を助けんと……」
その後ろでは、マルチが声を上げて泣いている。
「セリオさーん。どうして死んじゃったんですかー」
この建物の付近で見つけたセリオの死体。その上で泣き崩れている。
……こんなふうに、知らん間にわたしらの知り合いも、死んでいってるんやもんな。
「やっぱ、あいつに頼るしかないんかな……」
藤田浩之。すでにこのゲームに乗ってしまった友人。だが、本来なら一番頼りになる人物。
晴香を取り戻すためには、彼の力がどうしても必要だと思う。
……それに、晴香と同じ「不可視の力」を持つ者たち。
「とにかく、仲間になってくれる人を探して、晴香を助けるんや……」

そう呟き、窓の外。青く広がる空を見つめた。

244　一つの愛の形

どうして、こんなことになったのだろう。
何がいけなかったのだろう。
隣を歩く佐祐理をじっと見る。
「ふぇー、舞、どうしたのー」
「……なんでもない」
それはいつもと変わらぬ佐祐理で。
でも、佐祐理はもう、壊れていて。
せめて、佐祐理は元の佐祐理に戻って欲しい。
そのためなら、私は……
二人の前に、突如影が躍り出た。
左腕はボロボロで、全身傷だらけで。
瞳だけが、まるで獣のようにギラついていた。
深山雪見——

「……人を探しているわ。黒髪でおしとやかそうな女の子、大きなリボンをつけた小さくてかわいい子。この二人を殺した奴を探している。覚えはない？」
静かに、暗い声で問う。
「……知らない」
「佐祐理もですねー」
二人は揃って答えた。
返事を聞いた雪見の表情に、失望の色が宿る。
「そう、なら用はないわ。私の気が変わらないうちに消えなさい」
――よくもまぁ、そんなことが言えるわね、私もう、ろくに戦えないというのに――
自嘲しながらも、残された右腕はしっかりと、アサルトライフルを構えていた。
「待って、怪我してる……」
「だめだよー、舞ーっ」
大怪我を負っている雪見を気遣い、駆け寄ろうとした舞を、佐祐理が止める。

そのまま、雪見に向かって銃を構え、言った。
「あなたも舞を殺そうとするんですねーっ。あははーっ、そんなこと、この佐祐理が許しませんよーっ」
「!? だめっ、佐祐理っ!!」
舞が叫ぶ。
だが佐祐理は耳を貸さない。
「そう……じゃあ死になさい、あなた」
雪見もアサルトライフルを佐祐理に向け……。

ダンッ！

撃ったのは、佐祐理の方が早かった。
そのまま、舞の体が崩れ落ちた。

これでよかった……
あの人は……生きてる……
驚いているみたい……
「舞っ、舞っ！」

佐祐理の声が、遠くから……
「……さ、ゆり……
もう、人……ころさないで……
……さゆりが、そんなこ、とす、るの……
見たくないから……」
最後に私は笑えただろうか？
佐祐理に笑いかけることができただろうか？
佐祐理……
……佐祐理……
……さ、ゆ……り……

雪見は目の前の光景が理解できなかった。
それは佐祐理も同じだった。
佐祐理の方がずっと、銃を撃つのが早くて。
もう終わったと、思った。
次の瞬間、舞が佐祐理の手をつかみ、そのまま自分の方に向けた。
それだけだった……。

「舞っ！　舞ぃぃぃ！
どうして、こんなこと⁉
佐祐理は舞のためにやったのに！
舞が大好きだったから！
守りたかったから！
なのに、どうして⁉
舞っ、ま――」
物言わぬ舞に抱き付き、喚く佐祐理。
その隙を逃すことなく、雪見は持っていたナイフで、佐祐理の喉を切り裂いた。

佐祐理は、一体どこで道を間違えたのだろうか。
今となっては、わからなかった。
舞と佐祐理の関係、最後に舞の言った言葉。
それらは雪見にわかるはずもなく。
血のついたナイフを拭い、佐祐理の手から銃を奪い、放り出したアサルトライフルを持ち直した。

二十七番　川澄舞　死亡
三十五番　倉田佐祐理　死亡
【残り57人】

245　明かされる過去、死闘の始まり

『まさかこのようなところで貴様と会うとはな』
『かの裏庭で一戦を交えた以来か。俺に敗れて北に流れたと聞いていたが』
『ああ。あのときの屈辱はいまだ忘れられぬ』
『借りを返すには絶好の機会とでも言いたいのか？　あのときの惨敗忘れたわけではあるまい』
『黙れ！　今の俺は違う！　今の俺には守るべき人がいる』
『その老人のことか？　笑止！　己の牙と爪、その他に戦いに意味あるものはない。さぁ、来い！　格の違いというものを教えてやる！』

「うなー、にゃあにゃあにゃ」
「ぴこぴこぴこっり。ぴこっぴっこ」
「にゃあ。うにゃにゃあにゃー」
「ぴこぴっこ？　ぴこぴこぴっこりぴこぴこぴっこ」
「にゃ！　ふー！　うなーうにゃ」
「ぴっこりぴこ？　ぴっこり！　ぴこぴこぴっこり。ぴこ！ぴっこり！」
「にゃあだのぴこだのうるせぇ！」
付きまとう猫とどこからかやってきた毛玉に御堂は叫んだ。
「なんなんだよ次から次へと、ったく。暴れんなこら！」

246　無言、そして消えぬ罪

『以上だ。ペースアップしてきたじゃないか』

『この調子で頑張ってくれよ、ハハハハッ……』
どれだけの放送機器があるのかわからないが、島中に響き渡る不快な嘲笑。それは最果ての海岸の岩場までも届く。
狂気を孕んだ明るい調子の言葉は、現実を妙に遠く感じさせる。
楓は何も言うことができないでいた。
姉妹たち、そして耕一の名がないことだけを確認して、ほっと胸を撫で下ろす。
「……」
そして玲子。――ただ泣いていた。
楓はハッと玲子の表情を覗き込む。
――知り合いの名前があったんですか？
――その言葉もまた言えない。
やがて、玲子が涙を拭う。
楓の思いを汲み取ったのか、笑って、
「違うよ。ただ……悲しかっただけ。私の知り合いは、せんどークン一人しかいないから」
でもそれは寂しげな瞳で……
「……」
「どうして、こんなことになったんだろうね」
見知らぬ他人の為に涙を流す、それが楓には出来ないでいた。
「楓ちゃんは強いね。こんなときでも」
――違う、そう言いたかった。でも言えないでいた。
……結局自分の中に住み着いている鬼は、楓を人ではなくしているのかもしれない。
前世の記憶、最愛の男性を守るために同朋を、姉妹を、裏切った女。そしてエルクゥとして切り捨てた数々の命。
そんな自分にとって、この狂った非日常も、かつて経験した日常でしかないのかもしれない。
あの頃の、あの時の私は、まさしく修羅であったのだから。
「休憩、終わりだね……行こうか☆」

玲子が食したパンのゴミを投げ捨てると立ち上がった。
「これから……どうするんですか？」
楓はふと現実に引き戻される。
「脱出ルートを探さなきゃならないでしょ、帰るために……生き残った人みんなでね。私はね、やっぱりどこかに秘密通路があると踏んでるのよ。それでね――」
途中から楓の耳には何も入らなくなっていた。
迷走する想い、あの時の約束。
そして、ここでの約束。

だったら、一緒にココを出ようね。約束だよ☆

右手に光る鉄の爪が、より鬼の感情を呼び起こす。
(きっと、私は一緒には出られないかもしれない。かつて、血に魅せられた私が、確かにここにいるんだから)
次郎衛門、その名が心にある限り彼女もまた殺意を呼ぶ鬼の娘だから。
胸を押さえて、少し寒さに震える。
それでもまた二人は歩き出す。この島を脱出するその時の為に。

247 現実

和樹は自分が少しずつだが自分の考えが絶望へと傾いていくことを感じずにはいられなかった。
行けども行けども死体しか発見できない。
そして正午の放送が追い討ちをかける……千紗ちゃんが死んでいた。
瑞希、大志、由宇、郁美ちゃん、千紗ちゃん。
こみパの仲間たちが次々と消えていく、たとえ助かったって、もうあの日々は帰ってこない。
自分のすぐ隣でクスクスと笑い声が聞こえる、……？　詠美？

「あははは、わかったわよ、ぽちぃ〜。これは全部夢！　夢なのよう」
「きっと、朝起きたら、いつものベッドであたシはお魚にエサをあゲて、それかラがッコ行って、原稿カいて、こみパでしたぼくがいっパい待っていて……なのにどうして目が覚めないのぉ〜」
「夢じゃ……ないんだ。俺たちは今ここで、殺し合いをしているんだ……」
「うそぉ、パンダいルんでしょう！　ほらハリセン持って出てキなさいよ、ほうら出てこないわよ！　アイツがいない時点で夢なのよ」
「詠美……由宇はもう死んだ」
「あははハはは〜ほぅらやッパり夢〜。ぽちがそンな酷い事あたシに言ウわけ無いもの」
……狂い行く詠美を見ているうちに、和樹の心の奥底に秘めていた今まで必死で押さえつけ、殺してきた感情が溢れ出していった。
もう、止められない。
「目を覚ませ、詠美！　俺だって、俺だってこれが夢ならどれだけ良かったと何度思ったか……だけど現実なんだよぉ!!　瑞希も大志も由宇も郁美ちゃんも千紗ちゃんも皆死んだんだ！　夢じゃないんだ！　夢じゃないんだよぉーー！」
「帰りたい、帰りたいよぉーー。またこみパに行きたいよぅーー。でも、でももう誰もいないんだぁ！」
「死にたくない、死にたくないよぅ、でもでも、怖いんだよぉ……どうすりゃいいんだよぉ。誰か教えてくれ！　大志ぃ、瑞希ぃ……」
いつのまにか和樹は詠美のひざの上で泣きじゃくっていた、そして詠美の瞳からは狂気の熱は消え、意志の光が戻っていた。
「ごめんね、かずきも辛かったんだね……ごめんね、ごめんね、あたし助けられてばっかりで、あたし一人だけ楽になろうとして……逃げたりして」
「もう大丈夫だから、あたしもう大丈夫だから、現

実から眼をそむけたりしないから……だから和樹も泣かないでよ」
　詠美は力いっぱい和樹の体を抱きしめる。
「怖いなら……ずっとこうしてあげるよ……それとも瑞希さんじゃないとダメ？」
「え……いみ」
　そして二人はごくごく自然にお互いの肌を重ね合わせ、男女の行為へと及んでいった。
　今こうしている間にも誰かが死んで、もしかしたら自分たちが殺されるのかもしれない。
　それでも、たった一つくらいは肯定できる現実が……絆が欲しかった。
　生き残るための支えが。

248　CHILDHOOD'S　END

北川潤（二十九番）は暖炉の側のロッキンチェアに身をゆだねて葉巻を燻らせながら、ウォーラーステインとサイードとチョムスキーを読みつつ、９・11以降のアメリカの抱える諸問題と行く末を案じていた。というのは嘘で、痛むコブをさすりつつ、天から降ってきた神様からの贈り物のノートパソコンの解析に勤しんでいた。
　ノートを立ち上げたとき、初めに北川が目にしたのは、彼もよく知っているＯＳの起動画面だった。落下のショックで破損してないことを確認すると、早速ノート内部のシステム周りをチェックしはじめた。あらかた中身を調べてみた結果、彼の確認した限りノートにはただＯＳがそのまま入っているだけの、まっさらな状態であることくらいしか分からなかった。
　むしろノート本体よりも北川の目を引いたのは中に挿入されていたＣＤ―ＲＯＭだった。表面のレーベルには「2/4」と書かれ、中身を調べても〝02〟というフォルダに、〝02.nag〟と命名されたファイルだけが入っているだけで、他にこれといっためぼし

い収穫は無かった。
ただ、ボリュームラベルに"Cancellation_02"と付されたこのROMの存在は先ほどから北川の心を捕らえて離さなかった。
「きゃん、せ、れいしょん……か」
ふう、とため息をついて北川はノートパソコンの電源を落とした。殺し合いもさることながら、腹の爆弾やら、ミサイルやらで手一杯だというのに、ここに来てまた一つ謎ができてしまった。
そこで北川は肝心な事を忘れていた自分に愕然とした。今まではレミィ云々でそれどころでは無かったのである。
「そうだ、爆弾だ。アイツが言ったとおり本当に俺達の中に……」
高槻は放送で自分たちの中に爆弾を仕掛けたと言ってた。さらに三十六時間以内に生存者が二十五人まで達してない場合、この島を吹き飛ばすとも。その言葉を思い出すと北川は軽い嘔吐感を覚えた。
「やれやれ、便通で流れ出た場合はどうなるんだってーの。適当なこと言われても困るんだよなあ、こっちは何の選択権もないんだから」
変な先入観があると、どうも自分の身体とはいえ信用がおけなくなる。北川は傍らにいる宮内レミィ(九十四番)を振り返って尋ねた。
「なあ、レミィ。お前、腹の調子が悪いとか変だとかないか?」
「え、どうして? ぜんぜんなんともないヨ。オールグリーン! パーフェクトだヨ!」
ぽんぽんと自分の腹を平手で叩きながらレミィは答える。あれだけ水っぽいもずくを浴びるほど食したというのに、まったくたいした消化器だと北川は思う。
「ん……そうか。わかった」
やはり杞憂なのだろうか。それぞれの腹に仕掛けられた爆弾。主催者のほしいままに爆破させて人を破壊する爆弾。本来自分達の全滅をあちらさんが願

っているのだったら、一挙に爆発させて覆滅させてしまえばそれでいい。または高槻が嬉しそうにほのめかしていたミサイルでもよかろう。まさに、どかんと一発、それでお終いにできるのだし。
「ブラフか本気か、それともウィットに富んだジョークか……いずれにしても迷惑千万この上ないな」
大地にあぐらをかき、あごに指をあてて考え込んだところで結論はでない。どう考えても情報が足りなさすぎる。さらにはボリュームラベルのあの単語〝Cancellation〟。つまりは解除か。どういうことなのだろう。こいつで何を解除できる？　何が解除される？　爆弾かミサイルか、はたまた彼らの防衛システムか。
しかし実際のところ、このノートパソコンやＣＤ－ＲＯＭが、あちらさんからの支給品であるとすれば、彼らの首を絞める物をこちらに送りつけたとはとても考えられない。また、戦闘の最中にいくらでも支給品は損壊するおそれがある。結局これらは最初から「あっても無くてもいいもの」、と考えるべきなのだろうか。
となれば、仮にこのＲＯＭやノートで「解除」されても向こうに痛くないものとはなんだ？
「やーめた」
あぐらを解いて地面に大の字になって寝転がる。身体を伸ばしたときに全身がぽきぽき音をたててほぐれていくのが心地よかった。
「やめちゃったノ？」
よく分かってない、いやおそらく何もわかってないであろうレミィがニコニコしながら北川の顔をのぞき込む。
本当に大らかで明るい、向日葵のような笑顔をする子だ。こんな人がもう少し増えれば、世の中はもっと平和で住みよいものになるだろうに。争いも諍い事も無くなって、シャロンとアラファトも仲良くチークダンスを踊ったであろうし、ブッシュとフセ

インも暮れなずむ夕日に向かって肩を組んで蒲田行進曲を熱唱しただろうし、毛沢東と蒋介石だって互いの恥骨に指を這わすのも厭わなかったに違いないと、北川は確信したというのは真っ赤な嘘だが、見る人を安心させる微笑みができる彼女ならば、普段は周りに友達や恋人を絶やすことはまず無いのだろうと北川は感心した。
「そ、やめちゃったの。普段頭使ってないからさ、なーんか脳ミソがオートミールみたいにドロドロになっちまった。てわけで、冷えて固まってムースになるまで当分は頭使わないことにしたんだ」
「アハハッ、ジュンのノーミソがムースになるの？　ちょっと振ってみたいデス」
「だめだめ！　今振られると元に戻ったときおかしくなっちまうの！」
「いいじゃなーい、だっておもしろそーダモン！」
そういってレミィは北川のすこし栗色がかった髪に包まれた頭を両手でつかんでやさしく揺する。そうやって無防備にじゃれついてくる彼女を見て北川は獣欲に任せてこのヤンキーを蹂躙して、児童福祉法と国連人権宣言の限界に挑戦することを決意した、というのはなんら根拠もない出鱈目だが、レミィの振る舞いに少し気恥ずかしくなった北川は、自分の頬がかっと熱くなるのがわかった。
（ん、考えるのはやめだ。後は行動で示すとしますか）
「さぁ、レミィ・クリストファー・ヘレン・ミヤウチ！　休暇は終わりぬ、だ。僕たちを外の雑音から守ってくれた庇をとっぱらうのは少々心苦しいけれども、ぼちぼち書を捨てて街に出るとしますかぁ！」
急にがばっと立ち上がった北川に、一瞬面食らった様子のレミィだったが、すぐにいつものスマイルにもどって、親指を彼の前に突き出した。
「イエス！　ジュン、わっかりましタァ！」
ま、殺し合いだけが脱出への方法とも限らないし、

このさい地見屋もまた良しだ。そうだろ、護？

249　偽りの仮面

初めての遭遇。それは玲子をおびえさせるには充分な出来事だった。

「だ、誰!?」

武器としては頼りない釘バットを両手で構え、前方を見据える。

細かに震える玲子より一歩前に出るように楓。

右手に装着された爪が不気味に輝く。

「あ、あら……」

息も絶え絶えなその眼鏡の女性――牧村南が二人の姿を見つけ、たじろぐ。

「……」

既に戦闘モードに切り替わった楓は、いつでも動けるようグッと腰を下ろす。

鬼の力はほとんど封印されている。力も機敏さも鬼のソレの比ではない程発揮できない。

だが、幸い楓には使いやすい武器がある。

格闘戦であれば、闘いの素人相手に負ける道理は無い。その位の力の行使は可能だ。

この場合の問題はそこではない。敵の武器が楓にとって不利なもの――たとえば重火器――である時、そして横で震える玲子だった。

「……」

玲子の前へと少しずつすり足で移動する。

相手もこちらを伺い、慎重に間合いを詰める。

それはとても長い時間だった。

それを破ったのは玲子の戸惑うような一声。

「あの……こ、こみパに……いませんでした？　スタッフか何かで」

「……こみパですか？　スタッフですよ」

少し柔らかい口調になる。場の空気が少しだけ緩やかなものになった。

「私に戦う意思はないんです……あなた達もそうな

ら、その物騒なもの、しまいませんか？」

南が両手を広げ、それを強調する。

「……助かったの、かな？　それにしても、本当にこみパの関係者だったなんて……」

玲子が胸を撫で下ろしながら、本当に安心した顔をする。

「私もです。本当に世界は狭いわね……私も、別の意味で驚きました」

二人が戦闘態勢を解いても、楓は構えを解かなかった。解けなかったといったほうが正しいだろうか。

今までで一番強い黒く、嫌な予感。

「どうしたの？　楓ちゃん。この人、この声、確かに聞き覚えがある……さっきこみパの話したよね？　そのスタッフの人なんだ。毎回大きな声が通ってるの聞いてるから間違いないよ」

楓が爪を下ろした。玲子にそう言われてはそうするしかない。

だが、爪は装備したままだった。

「えっと、お名前教えていただけるかしら？」

南は荒れた息を整えて、にこやかに笑った。

「玲子ちゃん達……そう、脱出ルートを探してるのね」

南が話を聞き終えて感心したように呟く。

ゲームが始まり、初めての遭遇。それが殺人者でなくてよかったと楓は思う。

（でも何でだろう、この胸騒ぎ）

楓の思考をよそに、南の話が始まった。

「私はこんなゲームのこと、よく分からなくて……帰りたいってだけ思ってたんですけど、狂った人たちに襲われて、それで走ってたんです」

本当に人心地ついたように南が笑った。

「詳しく話そうにも何がなんだか……この位しか分からないけれど、いいかしら？」

ゲームに乗せられ、狂ってしまった人達がいる。その事実に楓と玲子の顔が曇る。

（何で、この人は笑って話せるんだろう……）

——私のように、血に染まった過去があるわけでもないのに……
それは憶測に過ぎなかったが、ささくれとして楓の胸に波紋を呼び起こす。
「それで、お願いがあるんです……一人だと心細いので御一緒してもいいかしら？」
南の言葉に、玲子は二つ返事で了承の意を唱える。
「楓ちゃんも、いいよね」
「玲子さんがそう言うのなら、私は構いません」
確かに、この島を一人で行動するのは得策じゃない。
このまま一人にさせるわけにもいかない。
「とりあえず……周りに追ってきている気配はないみたいです。少し歩きませんか？」
楓の問いに、
「え、ええ、いいですよ。楓ちゃん、玲子ちゃん、よろしくお願いしますね」
南と玲子が並んで歩く。こみパの話だろうか。漫画やゲームのキャラクターの名前が飛び出す。
（きっと気のせいですよね）
楓は無意識のまま気づかない。記憶の彼方にある前世の自分が、右手にある爪をはずさなかったことに。

250　光を見つめ闇黒を往く鬼

（真のジョーカー……）
「そう——ですか」
構えもなく、だらりと垂らした手の先には、鉄の爪。風になびく黒髪が夜闇のように美しく、開いた左手は薔薇のように紅かった。
ひゅん、と空気が擦れる。
その短い悲鳴が耳に届いた時には、既に爪と小太刀が交わっていた。どちらからともなく、吸い込まれるように二人は踏み込んでいた。そこに殺意が介在していたかは、誰にも解らなかった。

柏木千鶴［鬼］。
秋子は前大会参加時の知識で、鬼という生物を知っている。
今の自分があるように、彼女もあるならば。
たとえ異能者が、その能力を抑制されてるとは言え——リスクが高すぎる。
「あなたは、どうして殺すの？　私は娘のために生きるわ。たとえ世界を敵に回しても、名雪のために私は在るの」
小太刀を捻り、右手で爪を抑え、肘を浮かせ、脚を掛ける秋子。
爪をずらし、斜めに流し、腕を捕らえ、小手を握り、爪で裂く千鶴。
千鶴は体を崩しかけ、秋子の手からは浅手とは言え血が滴る。
二人は弾けるように距離をとった。
「わたしは、妹達のために。そして愛する人のために。たとえ私の心が滅びても、私は足掻き続けるでしょう」
二人の視線が合う。
ふ、と笑ったのは秋子のほうだった。
「お互い苦労してるわね——心身ともに、ね？」
千鶴は何も答えず、ただ力を抜いて秋子を眺める。
「私は行きます。あなたと延々戦い続けるよりも、やらねばならないことがありますから。柏木家の方々も、縁があれば助けて差し上げます。了承？」
こくり、と頷く千鶴。
「私も名雪さんと——縁が、あれば」
『二人で探すのよ、それだけで縁は二倍じゃない？』
秋子の声は、既に遠くなっていた。
目を閉じれば、そこは闇の中。
心の闇の中に、ひとすじの光明。
(あのときと、変わってないわね)

溜息ひとつ。
そう、私は闇黒に飲まれたわけではない。
元から、だった。
私は闇黒と共に生まれ育ったのだ。
（ばかな、わたし……）
支えていてくれていたのは、妹達の存在だった。
それでも光の中で生きることを諦めかけた事があった。
（このまま殺しつづけて、本当にどうにかなると思っているの？）
あのとき助けてくれたのは、耕一さんだった。
また、溜息ひとつ。
目を開けば光の世界。
そう、私は——こちらの世界に、愛されたい。

（梓、楓、初音、待っててね？）
左手についた血糊を、ぴっと吹き飛ばす。
盛大に血塗られた左手と、その手にのみ握られた武器。血飛沫ひとつ付着していない、右手。
そして肩には、痕。
（なんて、アンバランスな。私にぴったりね……）
秋子との出会いは、千鶴を微かに光のほうへと引き込んでいた。
しかし、まだ決定的ではない。
足元に横たわる死体を、路傍の石ころのようにまたいで歩き出す。
光を見つめ闇黒を往く鬼。
（ジョーカーを。「殺すもの」を、殺さねばならない。そしてみんなを、助けるの）
「縁が、あれば——」
自分に言い聞かせるように千鶴は小さく呟き歩き始める。
光を見つめく闇黒を往く鬼。
（耕一さん？　もう一度私を——助けてくれます

か？）

251　迷走演舞～序～

「……」
楓は無言のまま、歩いていた。
右手には鉄の爪。振り上げられることは無い。
「か・え・で・ちゃん！　ど～したのぉ、元気、ないよ？」
あくまで明るく、かつ心配そうに楓の顔を覗き込む。
「……いえ、何でもないんです」
「下を向かないで行こう？」
「はい……」
牧村南を加え、芳賀玲子と柏木楓の二人は森の中を慎重に進んでいた。
「ねえ、楓ちゃん。あたしサークル作ってこみパに参加してるんだけど、楓ちゃんも一緒にやらない？　あと三人程メンバーいるんだけどみんないい子達だし。ん……まあ、ちょっと生意気な子も一人いるけど、きっと楽しいよ？」
「……はい」
自分を励ましてくれている、そう感じた楓はすぐ――といっても何か別の不安が無いわけでもない――頷いた。
「それと南さん、ここであったのも何かの縁、ちょ～っとばっかしこみパ……当選させてくれない？　いや、次回だけでいいんですけど」
玲子が楓の方を気にしながらそう切り出――
「不正はだめですよ」
「……やっぱり？　にゃはは……ダメかぁ……」
一秒で却下された。
「ふふっ、」
そのやり取りに、
「あっ、楓ちゃんが笑った……やっぱり笑い顔のほうがぜんぜんいいよ☆」

「か、からかわないでください」
　気恥ずかしさからか、赤面する楓に南も控えめに笑う。
「私も早く帰ってこみパに専念したいです。待ってますからね、楓ちゃん」
「は、はい」
　少しずつだが、楓も南に対して警戒を解きはじめていた。そして、警戒の意識を徐々に周りへと飛ばしていく。
　また、いつどこから誰が襲ってくるのか分からないからだ。二人を守ってどこまで闘えるか——楓の手のひらの汗が消えることは今もない。

「——!!」
　楓が突如、二人の前方に身を踊りだす。
「ど、どうしたの？」
　突然の楓の変貌に玲子が声を震わせる。
「下がって——！　何かくる！」

　すごい勢いで向かってくるものすごい殺気の塊。
　玲子たちが下がる間もなく現れたそれ。
　鬼——一部ではそう呼ばれる魔物。

252　迷走演舞〜惑い〜

　鬼——女は走っていた。
（梓、楓、初音……耕一さん……）
　その鬼は木々の間を風のように。
　鬼の力を封じられているとはいえ、元々自分の中の鬼を百パーセント飼いならしているその彼女にとっては体力を残しつつ駆け抜けることなど造作もないことだった。
（と、いっても……）
　この極限状態の思考の中で、精神的な疲れは確実に彼女の体力を削り取っている。
（何故なの？　あの男、高槻は——）

――それでですねぇ～、やっていただけるんでしたら、せめてあなたの縁者の方々だけでも命を救って差し上げましょう。

妹達――少なくとも初音は――安全な場所にはいなかった。死と隣り合わせの戦場に身を置いているのだ。

――千鶴お姉ちゃん、今の私から逃げて！

今も彼女の耳にあの声が響く。
（初音は……私に牙を向けた）
いつでも優しかった初音、一体何故こんなことになってしまったのだろう。それ以前に、何故高槻は初音を……
いつでも、そして誰でも、誰をでも……ここで人を――殺せる。
それは狩猟者でなくても心のどこかで感じている感情。
「……愚問ね……」
現に妹達、そして耕一の名前は放送されてはいないではないか。
それは偶然であれ必然であれ、まぎれもない事実なのだから。
やがて人の気配。意識をそちらに飛ばす。
（これも私の所為ね）
水瀬秋子の言葉を思い出す。
――縁があれば名雪さんを……ね。
鬼は走る。薄暗い森の中を。
そして――辿り着いた先、二人の女性、そして……。
鬼が、いた。

253　迷走演舞〜綻び〜

　楓は思わず鉄の爪を取り落としそうになった。
「千鶴……姉さん……」
「楓……」
　思いがけない再会。無事でいて……と思い続けたかけがえのない大切な人。
（無事でよかった……）
　千鶴は声に出してそれを言うことができなかった。
　千鶴が楓に近づこうと歩を踏み出す。
「来ないで……千鶴姉さん」
　楓が呟く。
「かえ……で……？」
　楓の視線が一点に注がれる。どこで破れたかわからないがスリット状に変わったスカート、その上に存在する白い服に……薄く血が着いていていた。
　そして、先程の殺気。
「また……人を狩るの？　……昔みたいに」
　楓の声が、冷たく、刃物のように千鶴に襲いかかる。
「かえで……」
「人を……生きるものを……姉さん」
　自分で制止しておきながら、楓自身も千鶴に一歩近づく。
「……」
　千鶴は楓の雰囲気に、圧倒的な威圧感に飲み込まれていた。一歩、また一歩と後ろへと下がる。
「……答えて……答えてリズエルッ！」
　激昂。普段の楓からはおよそ考えもつかないその叫び。
「いや、来ないで……かえで……」
　今度は千鶴が静止を呼びかける。無意識のうちに口が開く。
「今度は私達を……狩るんですか？」
　静かに、楓が、爪を横に凪いだ――。

「……」
何も言えないでそのやり取りを呆然と見つめる玲子。その横で、静かなる一人のＪｏｋｅｒが薄く笑っていた。

254　迷走演舞～慟哭～

パッ!!
血飛沫が舞う。横に薙いだそれを千鶴が茫然自失で見つめた。
楓は一瞬で間合いを詰め、千鶴の腕の皮を軽く引き裂いたのだ。
もちろん、楓が故意にはずしたもの。
今の千鶴には楓とまともに闘えるだけの精神的な余裕はない――
我に返った千鶴が叫ぶ。
「や、やめて……私は……楓っ！」
楓の攻撃は続く。よけなくても、かわさなくともそれは致命傷にはならない攻撃の嵐。
だが、その攻撃の意図を千鶴には汲めない。
千鶴はソレを左手でいなす。だが、腕に、体に、少しずつかすり傷が増えていく。
「姉さん……」
楓の目からはとめどなく涙が溢れている。それを拭う手は今はない。
いつしか千鶴も、表情が変わっていく。
「やめて……やめてぇ、楓っ!!」
その叫びが森の中にこだまする。哀しみの、悲痛の声だった。

――高倉みどり
確かに自分は人を殺した。
それは大事な人を守るためだけの悪魔の契約。
だけど、私は生来の狩猟者。その気になれば誰でも殺せる。
かつての自分がそうであったように。

楓の猛攻は続く。それは傍から——玲子達から——見れば、異種格闘技の上級者たちの試合に見えたかもしれない。だが、これは死合いだ。
またもJokerが含みをもたす笑みをこぼす。それに玲子は気づくこともなくて。
楓……お願い、お願いよ……
もはや声にならない叫びを意味不明に呟きながら千鶴が尻餅をついた。
「……」
楓が振り上げた爪を千鶴の右手の爪へと振り下ろす——!!
『聞こえますか？　島にいる、皆さん、聞こえますか？』
そのとき、二人の、いや、四人の耳にそれが響き渡った。

255　迷走演舞〜想〜

『聞こえますか？　島にいる、皆さん、聞こえますか？』
楓の、そして千鶴の動きが止まる。
それだけの意思を持った、強い声だった。
『私は、きっと、これから死ぬことになるでしょう。それは、主催の意に反することをするからです。よく、聞いてください。これは、私の主催に対する宣戦布告です！』
一人の顔から笑みが消える。
『あなた達は、何人殺しましたか？　何人の友人を肉親を大切な人を、失いましたか？　……』
ギリッ……！
その歯軋りの音はその強き少女の声の中聞こえるはずもなく。
少女の演説はさらに続いた。

――そして……爆発音。
そして、静寂……。

256　迷走演舞～漆黒～

「……」
「……」
誰もが無言だった。
千鶴が、ゆっくりと立ち上がる。そして――歩き出す。楓もその動きを黙って見つめるだけだった。
そして、玲子たちの方へと歩いていく。玲子も、南も動かない。
そして――
（…………）
「………っ!!」
すれ違いざまに闇が運んできた言葉。
それは千鶴にだけ、かろうじて聞き取れるものだった。
千鶴は、楓を、玲子を、そして南を一瞥し、再び風とともに消えた。
「……姉さん」
楓も、すぐそばにいた玲子も、その短い一瞬の出来事に気づくことは無く――
（楓……初音……）
千鶴は駆けた。何も考えたくない。
少女の命を賭けた放送――そして。
――裏切ろうなんて、考えないほうがいいですよ。大事な人がいなくなってもいいんですか？
いつ、どこから彼女らの命を奪いにくるか。だって、私も――
Ｊｏｋｅｒは、まだ生きている。そして死のゲー

ムに魅入られた哀れな人たちも。
(わたしも……同じね)
千鶴は後悔の念を胸に、走り出した。もう、後戻りはできないのかもしれない。

257 迷走演舞〜疑念〜

「さあ、気を取り直して行きましょう」
沈黙を破ったのは南の手を叩く音だった。
「……どこへ……ですか？」
玲子はそう南に聞く。未だにこの現実を直視できないでいた。
「この先の……放送室。前に見つけたのよ。無人だったから、今のももしかしたらって……」
二人を先導し、南が歩く。
(都合が……よすぎます)
放心したままの楓が、南の後姿を見つめる。それはいつもと変わらない。
(何故だろう……また、胸騒ぎ……)
最後の千鶴の様子はどことなくおかしかった。何か、おびえるようなあの視線。
そして、今の放送と、その場所を確信しているかのような立ち振る舞い……だが、答えは出ない。それでも自然と、玲子と南の間に体を入れる。
なぜかそうしなければいけないような気がした。
「……ここだと思いますよ」
その建物の屋上に、黒く何かが爆発したような痕跡。
そして、チラリと見えた赤い何か。
「……」
玲子の顔が青ざめる。
「玲子ちゃんはここで待っていたほうがいいかも知れないわね」
南がそう呟く。玲子は力なくうなだれるように肯定した。
「楓ちゃんは……来るんでしょうね」

それが当然と言わんばかりの立ち振る舞い。
「……そうですね。ご一緒します」
そして、楓も南が来ることを当然のように受け入れ、答えた。

玲子を残し、二人は階段を昇っていく——
(この人……慣れすぎている。何か……)
ずっと無言の時が続いた。
やがて屋上の扉の前まで来ると、躊躇無くそれを開け放つ南の両の手。
ギ……ィ……
(うっ……)
楓は思わずその状況に顔を背けた。玲子は来なくて良かったのかもしれない。
「杜若……きよみさんね……」
その躯の姿は南の背に隠れた。今、彼女がどんな表情でソレを見ているのか分からない。
「知りあいですか？」
(やっぱりこの人、血をみても平然と……？)
「……いいえ。私、記憶力がいいだけです。スタート時に見覚えがあったから……ね？」
言い聞かせるように南の声。それは優しい響き——

258　迷走演舞〜終劇〜

「これは……」
屋上の入り口に意味ありげなＣＤ。
「……これは……？」
楓がそれを拾い上げる。
「あら、それ……」
南もそれに気づいて、手を伸ばす。
「私に貸してくれないかしら……？」
だが、楓はそれを何故か拒んだ。
(何故だろう……この人に渡しちゃいけない気がする……)
嫌な予感がとまらない。

（……怖い……）
漠然とそう、感じた。
時が止まる……静寂……そしてそれは永遠ともいえる凍りついた空間だった。
「……しょうがないわね」
やがて、南が溜息とともに折れた。
「それはあなたが持っていて頂戴。そろそろ戻りましょう、下にいる玲子ちゃんが心配ね」
「そう……ですね」
楓は玲子の所に戻るまで、南の前を歩くことができなかった。

259　快晴

この調子で頑張ってくれよ、ハハハハッ……
死亡者発表が終わった。――そこに彼女の名はあった。
「石原麗子……確かに聞こえた。安宅も逝ったか……」
あの時の、彼女の言葉を思い出す。
――軍部はあなたを必要としなかった……でも今はあなたを必要としてくれる人がいるじゃない。
御堂は悩んでいた。この島に来てからというもの、まるで自分が自分ではないような気がしてならなかった。
「俺は、強化兵だ。人を殺す……その為だけに造られた、甘えは許されねぇんだ……皆殺し、生き残るにはそれしか――」
――うぐぅ。殺すなんてダメだよっ
「うるせぇ！　キレイ事言うな!!　俺がその気になれば誰だって殺れる！　生き残るのは俺一人で充分だ!!」
彼は信じられなかった、自分はいつからこんなに

他人の言葉に流されるようになったのか……。
「坂神だ、とにかく坂神を殺る！　それまでは他の奴らも皆殺しだ！　他人の命令なんて死んでも聞くものか!!」
『――ますか？　島にいる、皆さん、聞こえますか？　私は今、森近くの建物の屋上にいます。見えますか？』
放送……少女の声が島中に響き渡る。死亡者報告ではないようだ。
『私は、きっと、これから死ぬことになるでしょう。それは、主催の意に反することをするからです。よく、聞いてください。これは、私の主催に対する宣戦布告です！』
「何だ？　一体誰が――」
『……私は、嫌です。そんなことは死んでも、したくありません。自分や、大切な人を守るために、誰かの大切な人を殺すだなんて、そんなことは出来ません』
自分の邪魔ばかりしていたあの少女の言葉を思い出す。
――みんなで一緒になればきっと帰れるよっ
見知らぬ少女の訴えは続く。
『人は弱いものです。とても弱い。嫉妬、劣情、劣等……ありとあらゆる、負の感情があります』
なぜか嫉妬、劣等の言葉が御堂の耳にひときわ大きく響いた。それらは彼が坂神蝉丸に対して抱いている感情でもあったからだ。
『ガクッ』
ふいに異様な音が聞こえた。
御堂は悟った。少女の命が短い事を……腹の中の爆弾とやらが暴れ出したのだろう。
『聞こえますか？　私は、もう、ダメです。でも、悲しまないで。私は私の誇りに従って、戦うことが出来たのです。私はこうして、私を守りました。だから、蝉丸さん、月代ちゃんをみんなを守ってあげてください。私は、こんなことしかできないけど、

でも、蝉丸さんなら、切り抜けられる。そう、信じてま……』

「なるほど、坂神の連れか……道理で強ぇえワケだ」

御堂は大きく息を吸った。そして、あの少女の声に負けないほどの大声で叫んだ。

「坂神ぃーーー！　貴様との勝負はこの島を出るまでお預けだぁーーー！　俺は貴様を殺すまで絶対に死なん！　だから貴様も俺以外の奴の手にかかるんじゃねぇぞぉーーー！」

「どうやら俺は闘り合う相手を間違えてたみてぇだ、予定変更だ……行くぞ、獣共」

「にゃ？」

「ぴこ？」

御堂の表情はこの島の空のように雲ひとつなく、快く晴れていた。

260　復讐の女神の目覚め

緒方理奈は、森を全力疾走していた。

（どうしてどうしてどうして!?）

自分に銃口を向け、その照準をしっかりと合わせた、由綺。そして、それに代わり自分を攻撃しようとした、冬弥。

まだ、心臓がバクバクと高鳴っている。全力疾走の所為だけでは、ない。

（酷い、酷い、酷い！）

兄を殺され、悲しみと怒りと恐怖の中で、やっと出逢えたと思っていたのに。

その安堵は、つかの間だった。

（由綺、どうしちゃったの!?　何で、何で、あんな……）

膝が重い。足場も悪い。これ以上走り続けるには

限界だった。
「あっ！」
木の幹に足先を強かにぶつけ、転倒した理奈は、大きくでっぱった木の幹に腹部を強打して、呻く。
その呻きは、すすり泣きに変わった。
（もう……疲れたわ……助けて、兄さん……っ）
どうなってもいいと、半ば投げやりになっていた。
兄さんはいない、由綺も冬弥も自分を裏切った……。
腹部が、ジンジンと痛む。鼓動が、うるさい。
木漏れ日だけが、優しく降り注ぐ。今までの出来事が全部、全部嘘だったかのように平穏があるのに。
（なのに）
もう、兄は永遠に理奈の元には帰ってこない。
軽口を叩く兄を叱咤することも、一緒に買い物に行くことも、食事をすることも……何もかも、出来ないのだ。
「こんなのって……こんなのってないよぉ……」

殺されるという恐怖よりも、今は腹部と心臓、そして想い出が痛く、強く、理奈を縛り付けていた。
苦しくて切なくて、涙が止まらない。目頭が熱くて……。

ガガッ！
不意に、スピーカーの音がした。高槻の放送が始まったのだ。
理奈は地面に倒れたままの姿勢で、涙を拭うことなく、ぼんやりとそれを聞いていた。
兄の名が、死亡者として、呼ばれた。
「……兄さんの名前、だ」
呟いて、顔を伏せ、すすり泣く。
（私は、何をしているの？　ここで、こんなところで）
悔しい。悔しかった。何も出来なかった自分が。何もしていない自分が。何よりも悔しかった。
高槻は、美咲の名をも告げる。

（……冬弥君と由綺の学校の、先輩……）
何度か、由綺や冬弥が話して聞かせてくれた、優しい女の人。
（そう、その人も……死んじゃったんだ……）
どうしてこんなことになったのだろう。理奈は、そっと、ポケットに忍ばせていた兄の遺品を取り出した。
（私も、死ぬのかな……）
愛おしそうにそれを撫でる。
ヒビの入った、レンズに触れ、指から血が滴った。
（痛い……）
レンズがフレームが、自分の血で汚れる。理奈は顔をしかめて、自分の服でそれを拭い取った。
（痛かった？　兄さん……？　殺されたとき、どんなだった……？）
殺されたとき。
殺された。
誰、に？

一気に、感情が爆発しそうだった。
それは、憎悪だ。
「兄さんを、殺した……あの、女」
ありありと目に浮かぶ、茜の顔。
「許さない……許さない……っ！」
自分を何故殺さなかったのかなんてわからない。
（そんなの、知らないわよ）
冬弥も由綺も、もういらない。
（今までだって、やってきたのよ。冬弥も、由綺も居ないときから、出逢う前からずっと、兄さんと二人で！　二人でずっと生きてきたわ。その大切な大切な兄さん。私の……一番大事な肉親を奪った女を殺すのは、由綺でも冬弥でも、ない！）
理奈は立ち上がり、睨むような一瞥を前方に向けた。
（……差し違えても、あの女だけは……私の手で八つ裂きにしてやるわ……！）
由綺と冬弥と決別したことで、理奈の殺意はこれ

以上ないものになっていた。
（手負いの獣は……何よりも、獰猛だということを教えてあげる……）
その瞳にアイドルとしての輝きはなく、復讐に彩られた凄惨な笑みがあるだけだった。

261　何かを守れる強さ、そして弱さ

誰とも知らぬ女の最期を、どこか夢心地で聞いていた。
（……）
確かに一理ある。
私も、大切なものを守るためになら……
そこまで考えて、やめる。
嘘ね。昔の私は弱虫で……あの子みたいに強くなくて……。
光を失った少女。本当の強さを持っていたかは分からない。
その自分のすべてを受け入れる、それはあくまであの子の強さ、そして、すべてをあきらめてしまったかもしれない弱さ、儚さだったのかもしれない。
今となっては、真実はすべて永遠の闇へと消えた。
守ってあげたかった、陰からいつでも支えてあげたかった。
だけどそれは二度と叶うことのない夢物語。
「だから奪うの。私から大切なものを奪った人からすべて……。必ず殺してやる……友達も……命も……大切だと思えることのすべてを」
私の今の道標。見失わないよう前へ、前へ……。
少しずつ、復讐から狂気へと——。
たくさんの人の死を扱うには、彼女の心は脆すぎた。
私は強くなる……守れなかったあの子の為にも……。
本当は心の弱さであったのかもしれない。

だが、少しずつ狂気の扉を開きつつある彼女——
雪見は、その弱さを受け入れることはなかった。

262　受け継がれた誓い

『……さあ、考えなさい。あなた達が、今するべき事を。本当の敵は誰か。思い出して下さい』
『最後に、蝉丸さん！』
『……私は、こんなことしかできないけど。でも、蝉丸さんなら、切り抜けられる。そう、信じてま……』
爆音が響き——そして、消えた。後に残されたのは、氷のような冷たい静謐。
「(･∀･)……せ、蝉丸……今、の……」
月代が血の気が引いた顔で呟いた。
無意識のうちに腹に手を当てる。
放送が始まった瞬間から立ち止まっていた蝉丸を見上げるが……。
背を向けたままで、その表情までは分からない。
「……いくぞ、月代」
「(･∀･)……。どこ、に？」
「今の音はこの向こうから聞こえた。そう離れてはいない」
蝉丸は歩き始めた。その足取りに澱みはない。
まだ足の震えが止まらない月代は、
「(･∀･)なんで、なんでそんなに冷静なのっ？　きよみさんが、きよみさんが……」
蝉丸は応えない。そのまま真っ直ぐに早足で歩き続ける。
「(･∀･)ま、待ってよぉ……」
震える足を叱りつけて、月代は蝉丸の背を追った。
ぽた、ぽた、ぽた……
「え……？」
そして気づく。

蝉丸の後を、月代の足音とは違う小さな音が追いかけていた。
小さな、本当に、小さなそれは——
握りしめられた拳から流れる、赤い雫がたてる音だった。
「(・∀・)……」
月代はもはや何も言わず蝉丸と並んで歩き始める。
（……そうだ、きよみさんは命を賭けて、みんなを、蝉丸を信じたんだ。私だって蝉丸を信じて……頼ってるだけじゃなくて、助けないと！　それで、この島からみんなで出るんだ！）
誓いは、受け継がれた。
そして彼女はこの時から、只の元気な少女であることを止めた。

そして二人は、建物にたどりついた。
最早あの後、誰かが立ち入った後であるらしい。
幾人かの真新しい足跡が残っていた。

階段を昇ったところの、屋上の扉は開け放たれていて、そこには——
月代の動きが止まる。呼気が乱れる。
「……！」
だが決して、取り乱しはしなかった。
そして『彼女』に祈るために、目を閉じた。
蝉丸は、ただそれだけは奇跡のように残っていたきよみの顔に近づき、手を当てる。
彼女の顔は、自らの血にまみれ汚れていたが——
それでもなお、美しかった。
それは神が彼女の勇気に対して与えた、せめてもの慈悲だったのかもしれない。
（きよみ……）
後悔も、怒りも、悲しみも、憎しみも。全てが、蝉丸の中にあった。
だが……それに溺れるわけにはいかない。
きよみは、あの従容と死を受け入れようとした時と同じように。いや、あの時以上に己の優しさと誇

りを貫いて……逝ったのだから。
　ならば自分は、応えなくてはならない。
　きよみの信頼と遺志を裏切るわけにはいかない。
（きよみ。これから俺は、御国のためではなく、他の何のためでもなく、お前の為に戦う。お前のその優しさのために、俺に残る全てを賭けよう）
　それが彼の誓い。彼女を救えなかった自分にできる、たった一つの償いだ。
　そして、蝉丸はきよみの遺髪を切り取り、懐に収めた。
（たとえ……死出の道は別々のものであろうとも）
（おまえの想いは、常に俺と共にある）
（しかと見ていてくれ……きよみ）
　残る意志を奮い起こして立ち上がる。
　探さねばならない。きよみの遺志を受け取った者たちを。この悪夢を破るための希望を。
　振り返り、背後に佇む少女に話しかけた。
「いくぞ、月代。急いで仲間になる者を。そして真の敵を探しださねばならない……ついてきてくれ！」
「……(・∀・)うんっ！」

263　勝機

「調子はどうだい？　A—12」
　ねっとりと絡みつくような声に鹿沼葉子（二十二番）は答えた。
「まるでだめです。あの放送で逆に警戒されてしまって」
　放送とは、初日に高槻が行った放送——天沢郁未を始めとする五人を殺せ——というものだ。
「なぜ、あの放送に私も含めたのですか？　高槻様」
　多少の非難を含めながら葉子は付け加えた。
「私もジョーカーの一人だというのに」
「ああ、悪いな」

高槻は肩をすくめた。
「手違いだ」
「手違いですか……」
うそに決まっている。おそらくは高槻独断の嫌がらせだろう。
『Aクラスに手を出せないことを常々不満に思っていましたものね、この人は』
「ま、そんなことはどうでもいいだろ？　ジョーカー君」
ニヤつく高槻に葉子は表情を変えずただうなずいた。
『そう、私はジョーカーです……あなたたちにとってのね』
鹿沼葉子は確かにジョーカーとして働くようこの大会にエントリーされた。かつての自分だったら、その任務を忠実にこなしていただろう。
かつての自分……母を殺し、ＦＡＲＧＯの教義だけがすべてと思っていた自分。天沢郁未に出会うまでの自分ならば。
一日一時間程度、一週間にも満たない日数。
そんなほんの少しの時間だけれど。
郁未と共にとる食事の時間は、ＦＡＲＧＯをすべてとしていた自分にとって、それは輝けるかけがいのない時間だった。
『郁未さんは、そんなたいしたものだとは思ってはいないでしょうけどね』
少し寂しげに葉子は思う。
『まぁ、私の態度も誉められたものではなかったけれど』
それでも、郁未は自分のことを友達と呼んでくれた、その友達に……。
葉子は天沢未夜子――自分と同じジョーカー――のことを頭に浮かべる。
『私と同じ苦痛を味わせる訳にはいきません』
だから、今ここに自分はいるのだ。ジョーカーとしての立場を利用して、目の前の男にこの槍を突き

刺すために。
浩平たちに伝言を託した後、自分は高槻の元へ行くための理由を探していた。
ジョーカーとはいえもちろん胃に爆弾は仕掛けられている。だが、ＦＡＲＧＯの忠実な犬としてみなされている自分ならば高槻も油断するかもしれない。
「あー、それでお前を呼んだ理由だけどな」
だが、その理由を思いつく前に高槻から呼び出しがかかった。
なぜかはわからない。
だが、千載一遇の好機。
今現在部屋の中にいるのは葉子と高槻とその間にいる何人かの黒服の男たち。おそらくこの男たちも不可視の力の持ち主だろう。
葉子と高槻の間には不可視の力を使ったとしても二回の踏み込みが必要な距離があいている。槍を手放していないとはいえ、成功する確率は十に一つもない。
成功したとしても高槻は所詮手先。根本的な解決にはなっていなく、自分はここで死ぬだろう。
けれど、自分はやるつもりだった。
表情を変えることなく、だけど槍を強く握り締めて……。
そこで高槻は言った。
「まず、新しいジョーカーができた。九十二番、巳間晴香だ」
その名前におぼえはあった。確か郁未の友人だ。
「巳間晴香？　放送にあった五人の一人ですね」
「ああ、ＦＡＲＧＯに背いた、不可視の力の使い手だ」
「……今度はどんな手を使ったのですか？」
高槻は得意げに一連の出来事を話す。
「そこで、だ。お前には任務がある」
モニターに三人の顔が映し出された。
「二十五番　神岸あかり、七十八番保科智子、八十二番マルチだ。こいつらは中継基地から脱出してし

まってね」
　高槻は憎憎しげにモニターをにらみつける。
「わかるだろ？　こいつらを巳間晴香にあわせるとおもしろくない。だからこいつらを消せ」
「ああ、」
　葉子の問う視線に高槻は答える。
「胃の爆弾を使えば話は早い」
　そこで、高槻は肩をすくめる。
「けど、上がうるさくてね。さっきもやっちまったし」
　実際、ジョーカーというのはこの大会でさほど重要な役割ではない。
　この一件に関しては高槻独断の遊びとも言える。今回の指令も出し抜かれた高槻の私怨だろう。
「あまりに爆弾を使うのは、上にしてみれば面白味がないんだろうさ」
　あざけるような高槻の声に、葉子の表情は変化がない。
　ただ「了解しました」と呟いて高槻に背を向ける。
『勝機は、高槻を倒す勝機はなくなりましたか』
　けれど、と葉子は頭を振る。
『晴香さんに……郁未さんの友人が取り返しのない罪を犯すことはとめられるかもしれません。絶望するのはまだ早いです。未だ、好機はあるのですから』

264　ジョーカー・ジョーカー

「こ、この声は!?」
　再び秋子の助言で聞いた建物を求め歩いていた弥生は、森の中で出会った女――杜若きよみ――の声に気が付いた。
　弥生は放送が終えるまで、と立ち止まる。
　そして、それが終わるまで耳をそばだてて聞いた。
　放送は、むなしい爆発音と共に終わりを告げることになった。

……おそらく、きよみの信念は美しいのだろう、と弥生は思った。
しかし、理解できたのは、愛しい人たちに殺し合って欲しくない、死んで欲しくないという部分だけだ。
確かに他の方法もあるかもしれない。しかし、それが見つかる前に大切な人間を失ってしまったら、どうするのだろうか。
それに、弥生が脱出プランの一つに数えていたものは、どうやら使えそうになかった。
（やはり、というべきなのでしょうか。腹部の爆弾というのはブラフではなかったようですね）
きよみが別の爆発物で殺された可能性も無いわけではなかったが、あまりにもタイミングが良すぎる。
やはり、現在のところ判明している脱出手段は、殺して、殺し合って、殺し合い抜いて、最後の一人になることのみ、ということになる。
主催者達を何とかやり込め、脱出の活路を求める、というプランは体内に爆弾を抱えた状態では実現不可能だった。
（何とか、何とか助かる方法を見つけなくてはならない。既にあの人――緒方英二――は逝ってしまった。次が由綺さんと藤井さん達にならないとは限らない。或いは、もう……）
頭（かぶり）を振って弥生は歩き出す。
とにかく、まずは二人に出会うことだ。その為にも、助言の建物に……。
「どなたです!?」
再び歩き出して間もなく、背後に気配を感じた弥生は散弾銃を構えて向き直った。
「おー、怖い怖い。撃たないで下さいよぉ？」
のんきな声を挙げて出てきたのは黒服の男、一人。
「あなたは？」
「一、ゲームの参加者ではありません。二、むしろ私は主催者側の人間です」
そこで、弥生は男に向けた散弾銃を強く握り直し

た。
　男は意に介さず言葉を続けた。
「三、大切な人を守りたくて守りたくて仕方のない貴方に、御提案があります」
「!?」
　男はにやりと笑う。
「おや、表情が変わりましたね？　ビスクドールのようだとか、中にはくすだえりこが入っているに違いないと言われた貴方が、温度を感じさせないとまで言われた篠塚弥生その人が、他人のことで表情をそこまで変えられるとは……。情報は確かなようです」
　男は満足げに頷く。
「くっ」
「そんなにあの二人が大切ですか？　大切なんでしょうねぇ。自分の命を犠牲にしてでも守りたい。イヤ、感服しました。そんな貴方には非常に魅力的なお話だと思いますよ、ハハ……」
　男は散弾銃を突きつけられているにもかかわらず、笑いながら続ける。
「貴方にはジョーカーになっていただきたいのです」
　弥生は男の意図することが分からず、首を軽くかしげて続きを促した。
　男は、『よろしい』とばかりに頷き、続きを口にし始める。
「ジョーカー……つまり、このゲームの参加者でありながら、むしろ我々に近い立場になって、ゲームの進行をスムースにしていただきたい。そういう特殊な役割を演じていただきたいのですよ。そうしていただければ……」
　男はそこで言葉を切って、弥生の表情を確かめる。
　弥生の瞳は未だ、その奥に訝しげな光をたたえているが、話には引き込まれたようだった。
「そうしていただければ、貴方の大切に思う二人が他の者に殺されることのないよう、対処して差し上

げましょう」
　言い終えて男がニヤリとするのと、弥生がそれに指摘を加えるのは同時だった。
「それで、主催者のカードには何枚のジョーカーが入っているのですか？」
　ぴく、と男は一瞬だけ表情を変えた。しかし、すぐにその顔に張り付いていた笑みを呼び戻す。
「なんのことですかな？」
「あと何人とそのような約束を交わしているのか、と聞いているのです」
　再び銃口を向けられ、男は戯けてみせる。
「さすがはあの緒方プロを裏方から支えてきただけのことはありますな？」
「戯れ言は結構。この程度のことは多少人生を歩んでくれば誰にでも分かる道理です」
「ふむ、おだてにも乗らない……と。ふむ、噂通りのお方だ。しかし……」
　男は値踏みするように弥生の体を、足下から首筋まで舐めるよう見つめた。
　おお……と男はやや芝居がかった感嘆の声を挙げる。
「いやぁ、実物は映像で見るよりも数段素晴らしい。その豊満なボディーには不釣り合いなぐらいのクールなマスク。どうです？　無事に本土に帰られたなら、グラビアモデルとしてデビューされては？　っと、その怖いくらいの視線で、若者の心は釘付けですな」
　弥生の圧力が込められた視線を受けてもまるで動じない黒服の男。果たして人間か。
「それでは、お話を戻しましょう。冷徹な、そして美貌の女ヒットマン……。フィクションではややありきたりの設定かもしれませんが、これが現実の話となれば、観客も大喜びでしょう。少しずつペースは上がってきていますが、ゲームはもっと刺激的でなくてはなりません。どうです？　ご理解、いただけましたでしょうか？」

弥生は迷っていた。この男が言うことの何処までが信じられるだろうかと。
（おそらく、私のような誘いを受けた者は何人かいるのだろう。しかし、誰が、どのくらいの人数が承諾したのか。それが問題だった。
さらに、この男の言うとおりにしたとき、約束が守られる可能性は？
純粋にゲームを加速させるためだけであるならば、守られる可能性もあるかもしれない。しかし、約束が守られなかったことで絶望する、そんな人間の表情を見ることまでが望まれているとしたら……）
弥生の思考を妨げるように、男がやや冷たく言い放つ。
「そうやって沈思黙考されるのも結構ですが、貴方様がご指摘なされたように今こうしている間にも、他のジョーカー達が行動を起こしているかもしれません。ご決断はお早めがよろしいかと思われますが？」

……弥生は答えを出さざるを得なかった。
（こうしている間にも由綺さんや藤井さんの身に危険が迫っているかもしれない。そして、あの二人は虫も殺せぬような温かな人間なのだ。私が惹かれたのはあの温かさと、その純粋さにこそ……。それだけは確かだった。二人を守る為であれば、私は修羅にでもなれる……）
「……それで。具体的にはどうすればよろしいのですか？」
「おお、お引き受け下さるのですねぇ。さすがは賢明なる弥生様。そうですねぇ、ざっと十人。そう、十人を殺していただければ、貴方とそのお二人には配慮をいたしましょう」
「十人……。私がそれを成し遂げるまでの間、お二人は？」
「そこまでは我々の知るところではありません。ですから、お早めに願いますよ？　全てが手遅れにならぬ内に」

弥生は舌打ちをする。
「では、十人を殺したときにはどうすればよろしいのです？」
「これを」
男は懐から、何かを差し出した。手に握り込める程度の大きさで、小さなスイッチがついている。男はそれを弥生に渡した。
「これは？」
弥生は今度は首をかしげたりなどせず、言葉で先を促した。
気が急いているのが自分でも分かっていた。
「これは発信器のような物です。十人目を殺した時点で、このスイッチをお押し下さい。すぐさま処置が行われるでしょう」
「最後にもう一つ。私は既に一人の少年を殺しています。これはその十人に数えていただけるのでしょうか？」
男は顎に手を当てて焦らすように、口元には笑みを浮かべつつ考え込んだ。
弥生にとっては今や、一秒が一分、いや一時間にも匹敵する感覚だ。
無闇な質問で出発を遅らせることになるのなら、するのではなかったとさえ、思えてきた。
実時間で一分ほど、男は考えた上で答えを出した。
口元には笑みを浮かべつつ、結論を口にする。
「本来、その少年は貴方が自由意志で殺したものです」
断じられて、弥生は動揺した。
(そんなことで動揺していては、残りの十人は殺せない)
何とか心を落ち着かせようとする弥生を、男は楽しそうに見つめていた。
「しかし、我々はサービス精神が旺盛です。その少年を約束の十人の内に数えてさしあげましょう」
そこまで男が言ったところで、弥生は走り出した。
それ以上は待てなかった。

（早く！　一刻も早く！　あと九人の生け贄を捧げなくては！　二人が殺される前に！）

疾駆する弥生。

（自分が由綺さんや藤井さん達と幸せな日常を送るというのは既にアンリアルだ。こうなった今、私が望むべきは、二人の意思を尊重した上で、由綺さんをトップアイドルにして差し上げることのみ。それ以上は望まない。

その為に、これ以上何人殺そうと今更大きな違いはない。今までだって、多くの犠牲のもとに生きてきたはず。今回は、それがたまたま他人の命であるだけ。

そしてもう、藤井さんと体を重ねることもない。どんなに綺麗にしようとしても、もはやことを成し遂げたあとでは殺意の抱影は消えないだろう。

……由綺さんを幸せにする。

必ずや、二人の幸せな生活を守って見せる！）

獲物を求めて、弥生は疾走する。

二人が既に、幾人もの命をその手に掛けていようとは思いも寄らずに……。

265　折原を待ちながら

「それにしても折原のヤツ遅いわね……私達をほったらかして一体どこまで行ってんのよ、ホントにもう」

七瀬留美は折原浩平の去っていった方を見ながらそう毒づいた。

「うん、そうだね……」

長森瑞佳も自分の鞄を漁っていた手を止め心配そうに呟く。

「それで、瑞佳の支給品見つかったの？」

「あ、うん……これだと思うけど……」
そう言って瑞佳が鞄から取り出したのは一冊の分厚いファイルだった。
「何それ？」
瑞佳は覗き込んできた七瀬と一緒にそのファイルを開いてみた。
開いたファイルの左側にはナイフの写真、そして右側には羅列された文字。
『№.001　スペツナズ・ナイフ』
「旧ソ連軍の使用していた発射式暗殺用ナイフ。鍔にあたる部分にあるスイッチを押すことで刀を前方に飛ばす事が出来る」
「え、これって……」
パラパラと他のページをめくってみる。
『№.017　Colt M 1911』
「一般的にはコルトガバメントという呼ばれ方の方が有名。一九一一年に米軍に正式採用され米国政府が認証した、という意味でガバメント（Goverment＝政府）と呼ばれる……」
といった具合に左側のページには武器の写真、右側に解説及び使用方法などが書かれてるページが延々と続いている。
二人は理解した。
これは今回のゲームで配られた武器、及びアイテムのリストなのだと。
「うわ、何これロボットじゃない、きゃ白蛇って何なのよ！　あーあたしに当たらなくてよかったわ」
「あ、猫までいるんだ、私これがよかったなぁ」
「あ、ほら七瀬さんのタライもちゃんとあるよ」
「なになに……『№.079　金盥』洗面や洗濯の時に使う平たくて丸い容器。上空から相手の頭上に落としたりして使用します。緊急時には頭に被ったり盾が わりに使うと効果的です……って、んなワケあるかー！」

266　（無題）

　太陽は、高く頭の上にある。そろそろ正午か、それくらいの時間なのだろう。放送がかかったのは、そんな時間帯のことだった。聴神経をいちいち引っ掻き回すような、耳障りな高槻の声。どうしても耳を塞いでしまいたくなる。
　だが、それはできない。どれだけ目を背けたくても、今ここで現実から目を逸らすことはできない。
　そうして、また死者の名前が楽しそうに読み上げられる。
（緒方英二……？　ッ、澤倉先輩……！）
　マナの表情が暗くなる。
　緒方英二。由綺の所属する、緒方プロダクションの経営者。多くのアイドルを世に送り出してきた彼の名前は、ラジオで歌番組をよく聴くマナには由綺のデビュー前から聞き慣れたものだった。
　そんな有名人がこの島で死んでいることにも驚いたが、それよりもむしろ美咲の死ははるかに衝撃的だった。『蛍ヶ崎学園の最後の良心』と皆から慕われていた美咲。マナも憧れ、尊敬していた。
　――すごく、尊敬していた。
（限界……かもね）
　この島のどこかに、英二を、そして美咲を殺した人間がいる。他にも、マナの知らないどこかの誰かを、やはり殺した人間がいる。
　しかし一方、これまでに名前を呼ばれた死者のうち、誰かは従姉である由綺が殺したものであり――今の放送で呼ばれた人間の中に、もしかしたら由綺が、冬弥が殺した人がいるのかもしれない。
　知り合いが人に殺され、知り合いが人を殺す。
　若干十七歳の少女が受け止めるには、一連の出来事は余りにハードで、重すぎた。
（私が何かすれば、何をすればなにもかもがうまく

いくの……？　……セン、セイ）
心の中でさえ、頼れる人間は既に聖しかいなかった。
そして、聖はもういない。
「ぅあっ……！」
左足に激痛が走り、地面にへたり込んでしまう。
血の滲んだ包帯が解けかけていた。
だらしなく引き摺られ、薄汚れた包帯が、マナにはなんだか自分自身と重なって見えた。
「………」
少し向こうで、人の足音がした。
マナは呆然とした表情のまま、ポケットの中のメスを握り締める。
話し声が近づいてきた。
「はぁ……わかったから、とにかく、その握った手を離してちょうだい」
「ダメだよぉ、はぐれちゃったら困るでしょ？
……あれ～、誰かいるねぇ」
「ちょっ、そんな大声で……って……あなた、一体なにやってるわけ？」
瞬間の出来事だった。
マナは、現れた二人に向かって飛び出した。
その手に輝く銀色の刃物を認め、きよみは焦った声を上げた。
「なっ、なんで――」
それは彼女のミスだと言えた。一瞬の判断の遅れが、いざという時には生死を分ける。
だがどちらにせよ、きよみに避ける時間はなかった。マナは、その目の前に踏み込むと――両手できよみの手を包み込み、メスを握らせると、手は握ったままで、膝から崩れ落ちた。
不可解な展開の連続に、きよみはすっかり混乱していた。
「あ、あなた、どういう……」
「――さいよ」
「何？　聞こえないわ」

マナは視線を上げ、きよみの目を正面から見つめ、言った。
「殺しなさいよ。……殺してよ……」
きよみの足元にすがりつき、丸めた背中を震わせ、マナは泣いた。

267　幕間劇

島の南端、さびれた共同墓地の地下深く、潜水艦「ＥＬＰＯＤ」は故障のため、搬入用ドックに緊急停泊していた。
「ええい、復旧までどれくらいかかる？」
高槻の機嫌は悪い。
愛らしい少女たちが血の海の中で、のたうち悶えながら死んで行く光景を想像しながら自慰にふけっていた矢先（ちなみに今回のネタは神尾観鈴だ）の故障である。
「故障原因、現在調査中」
ＨＭ—13の事務的な回答が返ってくる。
「バカな、こいつは組織から与えられた最新鋭の潜水艦だぞ、通常航海でイカれるはずは無い！」
「故障原因不明。調査中」
再び機械的な回答。
「ええい、このガラクタが！　もういい！」
メイドロボのよこっ面を張り倒す……自分の手が痛くなっただけだった。
元来が小心者なためわずかなほころびでも我慢が出来ない。今こうしている間にも、奴らにここを発見される可能性が無いわけではない。俺はこんなところで終わる男じゃない。この任務を成功させれば、ＦＡＲＧＯでの発言力も増し、明るい未来が待っている。
だが……失敗すれば、光差さぬ実験室で死すら許されぬモルモットとして永遠を生きる運命が待っている。
ハハハ……何を焦っているんだ、たとえ発見され

ても、戦闘用にチューンアップされたこいつらが俺の盾になる。戦闘用って事であそこのしまりはイマイチだがな、ヒャハハハハ。
それでも止まらん奴はしかけた爆弾で、吹き飛ばしてしまえばそれでいいんだ。
コクピットのコンソールに備え付けられた起爆装置にほお擦りする。
が、起爆装置が勝手に起動していることに気がつく。
十六番……杜若きよみ！
「バカな、俺は命令を出していない！　こいつにはまだ利用価値がある！」
解除ボタンを力いっぱい押す、だが何の反応も示さない。
そのとき偶然か、高槻の胃がちくりと痛んだ。
まさか……俺の胃の中にも……？　そんなバカな。
ハッハハハハ……ハハハハハ……。
不安をかき消すように笑い続ける高槻の背後では

メイドロボたちの無表情な音声が途絶えることなく続いていた。
「故障原因未だ不明……調査続行中」
「了解、調査続行」

268　死者の残したもの

「──ばかみたい」
泣き続けるマナを冷ややかな目で見つめながら、きよみはつぶやいた。
「数時間前、私にケンカ売ったあなたはどこ行ったのよ。所詮はチビっ子だったということね。あーあ、ばかみたい」
マナは顔を上げた。
そして気付く。目の前の女の人が、数時間前出会った彼女だということに。
「何があったかなんて訊いてあげないわ。そんな必要もない。あなた言ったわよね？『どうしてそん

なことで殺さなきゃいけないの？』って？　私も同じよ。なんであなたに泣きつかれて殺さなきゃいけないの。どうせ今のあなたなんか、のたれ死にがオチね。どっかのキチガイに勝手に殺されるなり、好きにしなさい。自分の命を奪うも他人の命を奪うも同じことよ。それがわからないなんて、やっぱりあなたはチビっ子ね」
どこまでも冷たく言い放ち、再び歩き出そうとする。
「うわっ、毒舌だよぉ」
二人の間に立ち、おろおろする佳乃。
「……霧島先生……どうすればいいのよぉ……」
涙混じりの声で呟く。
返事は期待していなかった……が、その返事は返ってきた。
「え、お姉ちゃん？」
佳乃が驚いたような声を上げる。
その反応に今度はマナが驚き、気付けばきよみも立ち止まり、ことの成り行きを眺めていた。
「霧島……聖先生を……？」
マナが問いかける。
「うん。お姉ちゃんは凄いんだよぉ。なんでも治せるお医者さんなんだぁ。なんと、トラクターも治しちゃうんだよぉ。私、お姉ちゃん、大好きなんだぁ」
マナは、偶然というものに驚き、感謝した。
だが、直後に沸き上がる疑問。
「あなた……お姉さんが死んだのに……悲しくないの？」
「……え？」
佳乃の時間が、止まった。
「放送、聞いてなかった？　霧島先生は私の前で……私は足手纏いにしかならなかった」
今でも鮮明に思い出せる。

血に染まった聖、その声、言葉。
早く逃げろと、マナを思って、最後までそればっかりだった。
そして口には出さなかったが、妹のことも最後まで思っていたはずだった。
その妹が、今、ここにいる。
「嘘だよぉ……。お姉ちゃんが、死ぬわけないよぉ。だって、お姉ちゃんだよ？　お姉ちゃんは、なんでも出来て、それで……それで……」
佳乃の笑い声が、次第に悲しみに彩られていく。
「現実よ……。先生、きっと最後まであなたのこと気にしてた。会いたがってたから、連れて行ってあげる。いい？」
動揺している佳乃に向かい、言った。
「嘘だよ……お姉ちゃんが、お姉ちゃんが……。そうだ！」
佳乃は自分の手首に巻かれていたバンダナを外す。
聖の施した枷。
それが、聖の死によって、解かれてしまった。
「これを外せば、魔法が使えるんだよぉ。お姉ちゃんが言ったんだ、お姉ちゃんとお母さんに、帰ってきてもらうんだぁ……」
わかっていた。
そんなものは、存在しないということを。
ずっと昔から、わかっていた。
叶わない願いだということを、もう知っていたのだ。
「うわぁぁぁぁぁっ!!」
佳乃は突然叫び声を上げ、傍に立っていたきよみの持っていたものに手を延ばした。
「!?」
ふいをつかれたきよみは、その手にあった物を奪

われる。
それは――メスだ。
マナが持ち、きよみに持たせ。
大元は……霧島聖のもの。
「お姉ちゃん……っ！」
佳乃はそのまま自分の手首を切り裂こうとした。

カチャン……という音が響く。
メスが、地面に落ちた音。
きよみが寸前で、佳乃の持つメスを蹴り飛ばした。

「いい加減にしなさいよ、あんた達……」
気付けば、きよみは震えていた。
「あんたらにとっては大切な人なんでしょうけどね!?　そんなの、今はいなくなった人間に甘えてるだけじゃないの!!」
マナと佳乃は、ただ呆然と、叫ぶきよみを見つめていた。
「で、その人が最後に『生きて欲しい』と願っても、あんた達はそうやって死を選ぶわけね!!　大切な人とやらが最後に残した願いごとも、全部無駄にしちゃうんだ!!」
止まらない。言葉が止まらない。
ただ、自分勝手な彼女らが、許せなかった。
綺麗事ばかり唱えて、それでも結局は自分勝手な彼女達を、嫌悪していた。
「その人に同情するわ!!　大切に守っていきたかった人達が、よりにもよって自分の死なんかで死を選んじゃって。最後の願いすら叶わなかったわけ!!」
こんなに、こんなに自分の感情をぶちまけたことが、今まであっただろうか。
思い出せなかった――

「……あなたに、何がわかるのよっ!?」

呆然ときよみの言葉を聞いていたマナが、叫ぶ。
「こんな不条理なところで、大好きな人が殺されて！　大好きな人が変わっちゃって！　支えになってくれた人もいなくなって！　あなたに何がわかるのよっ！　弱くなることも許されないのっ⁉　私にはっ⁉」
マナは泣き叫んだ。
悔しかった。目の前の女が言ってることは、全部正しくて、事実だった。
「そんなの知らないし、関係ないわっ！　だから、死にたいなら、死になさい！　先生とやらに謝りながら、後悔しながら死になさい、チビっ子！
私は例え自分の存在がぐらつくことがあっても、強く生きるわ。あなたのような弱者を笑いながら、ね！」
きよみの言葉の一つ一つが、マナの心をえぐる。
もうこれ以上、聞いているのが辛かった。
まだ持っていたメスに手をのばす。

——先生。弱くて……ごめんなさい……——
誰かが手を掴んだ。
「……妹さん？」
佳乃は、ただ俯き、首をふっていた。
それでも、マナの手を離そうとはしなかった。
「あなたは、その子よりも弱いのよ。肉親を失った子でも、生きようと決めたのね。それでもあなたは、死ぬの？」
静かに、静かに、空気が流れる。
聞こえるのは、佳乃の泣き声。
とても痛々しく、それでも、生きることを決めた。
わずかに許された、弱さの声だった。

269　蒼天の雨

一歩。また一歩。前へ進む。

――その足取りは重い。
だが、深山雪見はそれでも歩みを止めない。
鈍痛に歯を食いしばって耐えながら、彼女は歩き続けた。
自分の道標を見失わないように。前へ、前へと。
――この身体が動くうちは。
左腕からはじわじわと血が滲む。
――みさきのために。澪ちゃんのために。
荒れた呼吸が収まらない。
――立ち止まるわけにはいかない。
鼓動は早鐘を撞くように乱れ続ける。
――でも、出来れば。
ふらつき、倒れて。また、立ち上がる。
――次が当たりでありますように。
そう願いながら、雪見はひたすら前へ進む。
――出来れば、早く終わりますように。
彼女を突き動かすのは、狂おしいほどの衝動。
――出来れば、早く終わらせてください。

「そんな怪我で、どこへ行くんだ？」
男の声がした。
雪見は立ち止まり、荒れた呼吸の中から搾り出すようにして答えた。
「……人を、探しているの」
「どんな奴だ？」
「長い黒髪の、おしとやかそうな女の子と、大きなリボンをつけた小柄で可愛い子。この二人を殺した奴を探しているの。……知らない？」
「知らないな」
男はあっさりと答える。
雪見は注意深くこの男の表情の変化を見極めようとしていたが、そこに動揺は見られなかった。
「……そう。じゃあ用はないわ。さっさと消えて」
また、違った。
雪見は落胆の色を隠せない。まだ終わらないのか。
またこの島を探しまわる羽目になるのか。
「こっちも、ひとつ聞いていいか？」

「さっさと消えて、と言ったでしょう」
　雪見はおぼつかない手つきで銃を構えると、男に向けて二、三度引き鉄を引く。
「ちっ！」
　素早く転がって、弾を避ける男。
「おい！　あんたは今みたいに、出会った奴を片っ端から襲ってきたのか⁉」
「関係ないでしょ。わたしは、二人を殺した奴を探さないといけないの。……邪魔をしないで」
　うっとおしげに雪見は再度銃を構える。
「……そうはいかない」

　銃声が響く。

　その刹那、雪見は腹部が爆ぜたような感覚を味わい——そして、その場に倒れた。
「無秩序に人を襲うような奴を、放っておくわけにはいかない」
　国崎往人はそう言うと、構えた銃を下ろした。

「くぅ……」
　まだ……まだ、生きている。
　もうだめだと思ったけど。まだ、生きている。
　だったら行かないと。探さないと。
　二人を殺した奴を殺しに行かないと。
　血溜まりの中で足掻く雪見に、往人はゆっくりと歩み寄る。
「……苦しいんだったら、楽にしてやろうか？」
　銃口を雪見の額に突き付け、無表情のまま往人は言った。
　しばしの沈黙。
　雪見は、目の前の銃口をただ無感動に眺め続け、それから震えた声でそっと呟いた。
「いい……みさきも、澪ちゃんも……きっと、楽に死ねなかったと思うから……」
「だから、あんたもその苦しみを共有するために、

痛みを甘んじて受けてやるってわけか」
「……うん。もう、わたしにはこれぐらいしか……出来なくなっちゃったみたいだから……ね」
その言葉を合図に、銃口が雪見の額から逸れる。
往人は一瞬、何とも言い難い表情で雪見を見た後、彼女の傍に腰を下ろしてこう言った。
「変なところで強情なんだな、あんた」
「……そうかもね」
雪見の荒れた息は、次第に力なくひゅうひゅうと掠れた吐息となって漏れるだけになる。
そんな様子を、往人は何をするでなくじっと見つめていた。
「……ねぇ。何で行かないの？」
「もう少し、ここにいることにする」
「自分で撃っておいて、まさか助けるつもり？」
「いや」
雪見の問い掛けに、往人は静かに首を振る。
「悪いが、俺に医学の知識は無い。知り合いに凄腕の医者はいたんだがな」
『いた』という表現。
――もしかしたら、自分が手にかけた者の中にその人がいたのかもしれない。
そんなことを、今更ながら思った。
「助けてくれないなら……何で、ここにいるの？」
「あんたがまた起きて、人を襲うと困る」
「……だったら、止めを刺せば良いじゃない」
往人は表情を変えずに、その問いにこう答えた。
「止めを刺して良いか聞いたら、断ったからな」
雪見はちょっと驚いた顔をして、それからふっと唇の端を歪めて微笑んだ表情を見せた。
「変なところで律義なのね、あなた」
「……そうかもな」
掠れた呼吸の中で、雪見はゆっくりと呟いた。
「……ねぇ。お願いがあるの」

「なんだ」
ぶっきらぼうに往人は聞く。
「わたし、夕焼けを見たいの。みさきが好きだった夕焼けを。でも……さっきから眠くて。お願い、何か話して気を紛らわして……くれないかしら」
しばし考えて、ぽりぽりと頭を掻く往人。
「……悪いが、話は苦手だ」
「そっか。じゃあ、一人でどこまで起きていられるか……頑張ってみようかな……」
「代わりに、こんなのはどうだ？」
往人はズボンのポケットから何やら取り出すと、雪見の前にそれを置く。
「……何？」
そしてこほん、と往人は一つ咳払いをし、前口上を述べた。
「――さあ、楽しい人形劇の始まりだ」

とことこ……ぱたん。
能力を制限された、往人の人形劇。
それは、いつものような華やかさは影を潜め、ただ起きあがって、歩いて、転ぶだけの。
――そんな、滑稽な代物だった。
「……つまんない」
雪見のその感想に、往人はがっかりした表情を見せたが、それでもその通りだな、と頷く。
「だが普段なら、もっと派手に動かせる。……本当だぞ？」
「そうじゃなくて……」
雪見はじっと人形を見つめ――涙を零した。
「みさきと澪ちゃんを殺した奴を探して……。誰か見つけたら、殺して……また、探して……その繰り返し。ほら、まるでこの人形みたい。わたし、つまんなかったんだね……」
「……」

泣きじゃくる雪見を、往人は無言で見つめる。
「なんで……なんでこんなに痛い思いしてまで……こんなつまんないこと……やらなきゃいけなかったんだろ……!?」

とことこ……とん。

「さあな」
と、往人は雪見の元へ人形を歩かせるとそのまま起立の格好で立ち止まらせる。
「だが、どんなにつまんないことだったとしても、せめて自分だけは意味があったと信じ込んでやれ。最後まで、嘘をつき通してやれ。……俺も、殺人を正当化する気はないが、自分がやっていることは間違っていないと信じている」
雪見はしばらく嗚咽を漏らしていたが、やがてゆっくり顔を上げると、往人に言った。
「……うん。そうする……よ」

「よし」

ふ……くるくる……とんっ……ととと、ぱたん。

雪見が小さく頷くのを見て、往人は人形をふわりと宙に舞わせてくるくると回し、見事に着地を決めさせようとして——転ぶ。
「ふふ……すごいね」
「特別サービスだ。普段ならきちんと着地を決められるんだがな。……本当だぞ？」
「ありがとう。……今の……澪ちゃんに、見せたかったなぁ……」
雪見が、微笑う。
その瞳からはゆっくりと色が失われていった。
「ねぇ……夕焼けは……まだ、かな……？」
「残念ながら、まだだな」
「……そっか」

――空は、まだ蒼く。
「ねぇ……お願いが……あるんだけど」
「なんだ？」
「みさきと澪ちゃん……この二人を殺した奴を……殺して……くれないかな……？」
「……考えておく」
「……ありがと」
――それは、嘘だとわかっているけど。

「ねぇ……」
「……」
――それでも、よかった。

往人は、人形をしまうと立ち上がる。
人の想いを抱えこむのは――やはり、つらい。
そう思いながら、往人は涙をそっとぬぐった。

矛盾した行動。
人が死なないようにするために、人を殺す。
自分で殺して、その死を悲しむ。
狂っているこの島で。
――果たして俺は最後まで、正しい行動を取っていると信じ続けられるのだろうか？

蒼天に降る雨の上がりは余韻を残さぬほどに早く、そして、悲しみを帯びていた。

九十六番　深山雪見　死亡
【残り56人】

270　空白のなか

「ねえ……ねえってば……ああ、もうっ！」
柏木梓と月宮あゆが御堂から別れた後、梓たちはその場から一歩も移動していなかった。いや、出来

なかったというべきか。
その原因は御堂と別れた後に聞こえた放送。
その放送は高槻ではなく若い女性のもので、内容も普段の死亡者報告ではなく、休戦、そして皆で力を合わせて助かろうというものだった。
そしてその放送をした女性は……死んだ。
おそらくは主催者側の手によって殺されたのだろう。
彼女の持っていた拡声器（梓はそう判断した）はその一部始終を生々しく伝え、そのせいであゆは恐怖におびえ、その場で震えることしか出来なくなっていた。
それから数時間、梓がどう説得しようとも、あゆはまったく動こうとしなかった。
（しばらくは駄目か。そりゃそうだ、あたしだって……）
頭の中に浮かぶ情景。それを梓は頭を振って払いのける。
「ふぅ……仕方ない、しばらくここにいるしかないか。でもこんなとこを誰かに襲われでもしたら……」
大ピンチだろう。自分はともかくこの子が危ない。そしてこの子を見捨てることは出来ない。梓はそう判断していた。
「誰にも出会わないことを願うしかない……か」
ため息と共につぶやく。
しかし、世の中とはそううまく行くものではない。こういう場合は特に。
目の前から人の気配を感じた梓は身構えた後、横にいるあゆを気にした。
（どうしよう……この子……守りきれる？）
相手が一人ならともかく複数だと無理だ。ともかく敵でないことを願いつつ、梓はあゆにバッグの中から取り出した服をかぶせた。
「聞いてるかどうか知らないけど、一つ言っておくから。あたしはあんたを見捨てたりしない。絶対に

ね」
そして目の前の木の陰から姿をあらわしたのは……
「千鶴姉！」
側から見ると満身創痍の柏木千鶴だった。

271　落下性

——柏木初音は、長い長い、ひどく嫌な夢から、漸く覚めた。どんな夢だったか思い出そうとして、ぶるぶる身体が震える。恐い、恐い夢だった。それは落ちていく夢だった。暗い闇の底に落ちてゆく夢。
だが今は夢のことを考えてはいられない。初音は身体を起こし、小さな握り拳を作ってみる。それなりの拳が作れたことから自分に多少なり体力が戻った事を確認する。幾度か瞬きをして、ぼやけた視界の中、壁に掛かった時計の数字を見る。黒い針は既に十二時半を回っている。ベッドから出て小さく深呼吸をする。——三時間ばかりの睡眠でここまで体力が戻ったのは僥倖と言える。というのは、生理が始まっていたからである。自分は人より幾分と「重い」方らしいからだ。しかもこんな緊迫した状況に置かれ、自分の疲労は増大した。倒れ込みそうになるほど重い痛みは初めてだったのだ。
しかし結局、自分の為に何時間も彰を待たせてしまった。ずっと迷惑を掛け通しで心底に申し訳ない。好きな人を探す時間を奪い取ってしまったのだ、自分がいなければ、もしかしたら今頃その恋人——澤倉美咲と会えていたのかもしれないのに。
ともかく、自分がこうして無事だという事は、この数時間の間は誰かの来訪がなかったと云う事だろう。彰は今家の中の何処かにいるのか、それとも町を散策しているのか。
「彰お兄ちゃん？」
返事がない。家の中にはどうやらいないようだ。
一歩足を踏み出してみると軽い眩暈がしたが、そ

れでも充分、歩けるくらいまでは力が戻っていた。
初音はまずトイレに向かい身支度を調える。それを終えてもまだ彰は戻ってこない。ここで待っていた方が安全だと理性は告げていたが、初音は本能的な直感に従って彰を探しに家を出ることにした。
「彰お兄ちゃんは、美咲さんを捜しに行ってしまったのかな……？」
元々彰には初音に付き合う義理はない。所詮出会って数時間かしか経っていないくらいの浅い関係でしかない。姉たちと再会したら、別れることになるのだ。自分と彰の関係は蜘蛛の糸よりも脆弱だ。彰は優しいから自分などに構っていてくれるが、本来なら自分が彰に絶縁状を叩き付け、彰の枷を外してやるべきなのだ。自分に構っていたら彼の目的は達成できないかもしれないだろう。
なのに、初音の脳髄が命じるのは、早く彰を捜せ、というものだった。もし今彰に置いて行かれたら、自分は生きてこの島から帰れない。脳髄はそんな訳の解らないことを言う。
足を引きずりながら初音は家の外をぐるりと回り、彰を捜す。しかし道路に出て見渡す限り、少なくともこの辺りにはいないようだった。初音は注意深い歩行で商店街の方に出る。そこにも彰の姿はない。何処に行ってしまったんだろう。ふと見上げると灰色の空だった。まるで落ちてきそうな灰色だ。先の夢を思い出し、夏だと言うのに鳥肌が立つ。初音は己の身体を抱きながら歩き回る。
まるで人影がない。彰の姿もなく、あるのはぼんやりとした自分の影だけだ。曇りの日にありがちな、あるのかないのか解らない灰色の影が初音の後ろについて回る。死ぬまで一緒、死んでからもずっと一緒の存在である影以外には今、初音の回りには誰もいない。——圧倒的な孤独だった。
気付くと動悸が乱れている。それは単に体調が悪いから、という理由だけではないと思う。
——実は現在、自分は死の危険が然程大きくない。

自分は今、多分他のどの参加者が持っている武器よりも強力な兵器を持っている。自分に他人が殺せるとは思えないが、それでも威嚇になる武器を。あくまで、装備的な面では不安はないのだ。

なのに焦燥は、まるで消えない。初音は孤独の風に侵される。

——この武器を見てなお、自分を殺そうと襲い掛かってくる相手に、自分はどうしたらいいいか。

焦躁の根源は結局こんなところなのだろうか。狂気に陥った誰かがナイフを持って拳銃を持ってサブマシンガンを持って襲いかかってきたとして、決して止まらない相手に自分はこの武器を放つことが出来るのか。相手が死ぬと解っていても、自分は他人にこれを放てるのだろうか。無理に決まっている。たとえ目の前に姉を殺した人間が現れても、自分はこのレーザー兵器を殺人鬼に向けることさえ出来ないかも知れない。自分には圧倒的に覚悟の絶対値が足りない。人を殺せるかの問題だけではない、生への意志までが他の人に比べて欠けているとまで感じる。生き残りたい、だけでは駄目なのだ。生き残る、と決意しなければならない、

声がする。

何処かで聞いたような声だった。ずきり、と頭が割れるような痛みが走る。初音を脳髄の海の暗い暗い深くに引きずり込もうとする痛みがする。足が強く引っ張られる感覚、身体を縛られる痛みに堪えられず初音は座り込む、

じろうえもん、

そんな名前が深くで呼ばれたような気がする。痛みが増し、しかしその痛みが全身に広がるにつれて、快楽に似た享楽が初音の身体を支配する。気持ちが良い、と確かに初音は思う。まるで自分が強くなったような錯覚がする、

わたしは、還るんだ。

還りたいというイメージが初音の頭に痛みを伴っ

て焼き付く。初音は今の自分なら泳いで海を渡れるかもしれないとも思う。しかし考えてみて、この腹の中にある爆弾をどうにかしなければまず脱出なんて不可能だと気づく、

じろうえもん。じろうえもん。

名前だ。それは誰かの名前。遠い昔に知っていた筈の名前だ。初音の身体が俄かに熱を帯びる。それは先ほどまでの苦しみを伴う熱ではなく、興奮した動物が決まって持つアドレナリンが与える活力だ、初音は昂揚していく、

——記憶の羊水が、初音の脳髄から溢れ出す。

「じろうえもん、」

声になる。初音は、少し高いところから自分自身を見下ろしているような気持ちでそう口にする。

ひどく、帰りたいと思う。今ほど狂おしく帰りたいという思いは、この島に来て以来感じたことがない。ただ泣き喚いて帰りたいと嘆くだけだったさっきまでとはまるで違う、確固たる意思がある。多分今ならば、目の前に決して止まらない殺人鬼が現れたとき、自分はこの大砲で撃ち抜けると思う。

わたしには、まっているひとがいるのだ。

そのまどろんだ思考を邪魔する、がさり、という、何か脆いものを踏んだような音が遠くでする。初音は瞬時に現実に引き戻され、ゆっくりとした調子で振り向き、中華キャノンを強く握り締める。

——遠くに七瀬彰がこちらに歩いてくる姿が見えた。初音は息を吐き、キャノンを握り締めていた手を緩める。座り込んだまま、迷うことなく中華キャノンを握り締めていた自分に気づき、冷たい驚きで胸を焼かれる。

凛。

そんな、鈴の音が響く。何処から？

「彰お兄ちゃん、」

出発しよう、わたしは大丈夫だから。そんな風に言おうと思ったのだ。しかし名前を呼ぶのが限界だ

った。初音が意味を紡げなかったのは、
近付いてくる彰の様子が「違っていた」からだ。
あれは七瀬彰なのか、と初音は半ば真剣に思う。
まだ数十時間しか付き合いがないから彰の本当のサガがどのようなものかなど判断のしようがない、けれど、それでも、「あんな風」ではない筈だ。
今まで見てきた七瀬彰という人格のすべてを否定しても構わないような、そんな貌をして彰はこちらにやって来る。初音は動けない。
この人は、こんな眼が出来る人だったのか、
初音は動けない。気づくと彰は傍に立っている。
「初音ちゃん」
自分の上からそんな声がする。声の質は先となんら変わらない。違うのはその調子だ。平坦な、感情という感情を殺し切った、いや、
殺され切った声の調子で、彰は言う。
「もう大丈夫みたいだね。行こう、早く。君のお姉ちゃんを見つけに行こう」
彰はまっすぐ手を伸ばしてくる。初音は恐る恐る手を伸ばして、彰の手を握る。彰は強く握り返す。
彰は歩き出す。右手には自分の分と初音の分、二人分の荷物を抱え、左手は初音の手を握り締めて。
初音は当惑しながらも彰の歩みに付いていく。左手には中華キャノン、右手は彰の手を握り締めて。
——自分の手を牽いて、彰は森の中を突き進む。
今、自分の前を歩く七瀬彰というその青年の心の深奥には、今まで自分が見た事がないような闇が眠っていると初音は感じる。初音はおぼろげな思考で、果たして何が起こったのかを想像しながら歩く。これほどまでに彰を変えるようなこと、
まさか、——
初音は、答えを彰に尋ねることは出来なかった。
ぐんぐん町を離れ、暗い闇の中、武器のひとつも握り締めずに彰は歩き続ける。誰かと交叉する瞬間を待ちわびているように。
——そして、意外にあっさりと、自分は大切な人

に再会できたのである。

――さて。目の前で水浴びしている美女が天沢郁未であると解った以上、こうして隠れているわけにはいかない。折原浩平は至極混乱した頭で悩んだが、結局潔く姿を現すことにした。

「こんちは」

などと言ってみる。しかし言ってはみたものの、こっちは下半身を痛いほど硬直させているし、あちらさんはあちらさんで裸なので、明らかにまともな話し合いになりそうになかった。

「あ、あんた……」

こっちは話し合いをやる気満点なのだ。使命を果たすためにこうして、恥を忍びながらも堂々と姿を現したのだ。なのに天沢郁未はまるでこちらの話を聞こうとしないし、挨拶すら返してくれない。

「きゃーきゃーいやーっ!!　覗き魔ーッ変態ー!!」

「くっ……この変態めっ!!」

横ではスカート穿いた変態が人を変態呼ばわりする。なんてこった。変態に変態呼ばわりされるほどオレは変態だったのか。だが、自分も少しは変態かも知れないが、しかし真性の変態にヘンタイ扱いされるのは我慢ならない。てめえの方が変態じゃねえか。しかしそんなこと言ったら本気で殺される気がする。なんたってマッチョだ、オレなんて一撃の下に首をへし折られる予感がする。

「ま、待てっ！　話を聞いてくれっ！」

浩平は大声を出す。大声を出すと少しすっきりした。落ち着いた頭で必死に弁明するが、しかし先方が駄目だ。まったく冷静になってくれない。顔を真っ赤にして怒り狂う少女と女装マッチョはまるで話を聞いてくれない。

「の、覗いたのは悪かった！　マジで謝る、とにかく話を聞いてくれっ！　あんた、天沢郁未さんだろ」

そう言うとやっと静かになる。水に浸かって顔だけを出しているその少女は二度瞬きをして、
「何で知ってるの？」
と声を上げた。

五分ほど待っていると、お待たせしました、という柔らかな声が聞こえた。ううむ。金切り声をあげてる時には気付かなかったがなかなか良い声だ。茂みを覗くと、天沢郁未はちゃんと服を着て、って着てねえっ!!　何なんだそれ!!　オレを誘惑しているのかッ、下だけブルマってッ!!
その鼻を伸ばした変態の視線に気付いたのか、
「すけべっ」
そんなこと言われてもどうすればいいんだ。不可抗力じゃないか。浩平は小さく溜息を吐きながらそう思う。マッチョの青年も同じように溜息を吐き、
「郁未ちゃん、やっぱり返そうか、スカート」
あのスカートは天沢郁未のものらしい。

「――本気で言ってるんなら、ばーかっって返すわ、耕一さん。下、何も穿いてないくせに」
「う」
穿いてねえのかよ。
郁未はこほん、と咳払いをする。
「それじゃあ本題に入るわ。あなた、どうしてわたしの名前を知ってるの？」
郁未の至極当然の疑問に、浩平も同じような調子でこほん、と咳をして答える。
「あんたの知り合いに会ったんだ。鹿沼葉子さん、っていう美人だ。伝言も預かってる」
郁未は大きな目をさらに丸くする。驚くほどに狼狽した調子で郁未は浩平に詰め寄る。
「葉子さんが!?　葉子さんに会ったの？　何処で？　いつ？　ホントに？　何で？」
「ああ待って。取り敢えず伝言言うから聞いてくれ。――鹿沼葉子が、高槻を殺しにいきます、だそうだ」

声が消える。少女は唖然として浩平の顔を眺める。本当に信頼できる話なのかを考えている。信頼できる、という結論はすぐに下されるだろう。彼女以外には情報とも呼べない情報を自分がわざわざ危険を犯して伝える道理などないのだから。

「……葉子さん、が？　本当に、」

そう呟いたかと思うと、彼女は突然立ち上がる。

「葉子さんっ」

立ち上がり、あらぬ方向へと駆けていこうとする郁未の腕を、しかし裸マッチョが掴む。

「待って郁未ちゃん、俺にも事情を説明してくれ。今まで一緒にいた縁だろ、郁未ちゃん？」

郁未はその力に抵抗できず、再び膝を付く。

葉子さんとは結構前に会ったんだ、と、目の前の少年――折原浩平は言った。

「あ、あの、葉子さん、高槻を殺しに行く、ってこと以外に何か言ってた？」

おずおずと訊ねる郁未に、浩平は軽く頷く。草むらに手を突いて、小さく息を吐き、再び話し出す。

「このゲームを仕組んだ黒幕について言ってたよ。確か――そう、この殺し合いは絶対にＦＡＲＧＯが仕組んだものじゃないとかなんとか言ってたな。それ以外の何か大きな組織が関係してるって。それに、この島へのミサイル発射に関する事は全部嘘じゃないか、とか、結界を破ればこのゲームがお終いになるだろう、とか。まあ大体そんなとこかな」

言い終えると郁未は唾を飲み込んだ。耕一は自分なりに浩平の話を解釈する。「結界」の存在は確かに自分も感じている。自分の中の鬼の血が殆ど全て制限されているのも、結界のせいなのだろう。ミサイル発射はどうだろうか。鹿沼葉子の第一の説、「主犯はＦＡＲＧＯじゃない説」が正しいのなら、あの高槻と言う男は重要な地位にはいない筈だ。だとしたらミサイルの仮説も正しいのかも。

「そう、……そうよね、ＦＡＲＧＯが主犯の訳がな

いわよね。それならあいつだって……」
郁未は郁未で訳の判らない事を呟いている。混乱している彼女に聞くのは少し無理そうだと判断した耕一は溜息を一つ吐いて、浩平に解らなかった事を尋ねる。
「ところで浩平君よ、その葉子さんとやらはどうやって高槻と戦うつもりなんだ？　その姿形とかは明瞭に解らないけれど、結界が俺たちの力を抑制しているって事だけは解った。その葉子さんって人も例外じゃあるまい。マシンガン一丁くらい持ってたとしても、警備を乗り切る事が出来るんだろうか？」
その言葉を聞くと、浩平もまたおかしな顔で唸る。細い腕で腕組みし、ゆっくり呟く。
「……それが、槍一本で行っちゃったんだ、葉子さん。あんなんで乗り切れる筈がないんだけどな」
郁未は、――葉子さん、とか、はあ、とか言う呆れとも感嘆ともつかぬ溜息を吐くばかりだったが、耕一は、浩平のその言葉に確かな違和感を覚えている。喉に魚の骨が引っかかっているような感覚、考えろ、この違和感の正体は何だ、待て、そうか、
「あのさっ、郁未ちゃんっ、」
耕一が思いつきの言葉を口にしかけた瞬間、郁未は突如立ち上がってその声を遮る。
「わたしも行く！　葉子さんに無理はさせられない」
「ちょ、ちょっと待って、」
耕一の止める声も聞かず、彼女は森の中に入って行ってしまう。っていうかそっちには何もないぞ、と耕一が大声で叫ぶと、心配しないで、すぐ戻るから、という軽い返事が返ってくる。すぐ、とはどれくらいなのだ。呆然としたまま隣に座っている折原浩平に目を遣る。浩平も首を傾げる。
数分後、郁未が長い木の枝を持って現れたのが耕一の目に入る。郁未の身の丈の四分の三もありそうな、枝というよりは木の槍と呼ぶべき長さの武器だった。だが、所詮は木の枝でしかなく、拳銃なんか

には当たり前だが勝てないだろう。
「そ、それは無茶じゃないか？」
浩平が呆れた顔で言う。信じられない、とでも言いたげに。
「槍も木の枝も一緒だと思うけど」
と、郁未は不敵な笑みを見せて言う。何故この娘はこんなに自信満々なのだろう。腕をぐるぐると回し、足を軽く動かし、拳を握り締め、瞬きをして、小さく頷くと、郁未はにこりと笑う。
「うん……──それじゃあわたし、行きますね。何処に敵の本拠地があるかも判らないけど、なんとかこのゲームをぶちこわしてやるから」
郁未ちゃんっ、と耕一はもう一度声を掛けるが、郁未はその言葉の意味を勘違いしたようで、
「耕一さんは今は調子が悪いんだから無理はしなくて良いです。今は、わたしの方が、多分強いです」
瞳には氷のような決意があり、恐ろしさがあったけれど、耕一はそれに脅えるほど馬鹿ではない。
「違うんだ！　話を聞いてくれ、郁未ちゃんッ」
もう一度郁未の腕をつかむ。逃がしてはならない。座れ、俺の話を聞け。耕一は男の力で郁未を抑えつける。郁未はその懸命な表情に気圧され、
「──なに、耕一さん」
一つ唾を飲み込んで、三度膝を付く。

浩平も、実は同種の違和感を覚えていたのかも知れない。得体の知れない、闇の中で踏んだ猫のように奇妙な物体の感触を。耕一が話し出した内容を聞いて、その違和感の正体を浩平は漸く理解した。
「その、葉子さんが出発してから十時間くらい経っているんだろう？　……不思議じゃないか？　例えば、その葉子さんが高槻を殺したのなら、どうしてゲームはまだ終わっていないんだろう？　高槻を殺したなら、葉子さんは、放送機材を使って、爆弾は解除された、戦闘は終わったと放送するだろう。無駄な殺しなんてこれ以上しなくていいように、戦闘

に勝利したなら出来る限り迅速に。しかし、そんな放送は流れてない。つまり、葉子さんは襲撃に失敗した事になる。槍一本で突っ込むという事情からして、まあ当然なのかもしれないが。
だが、ならば、何で放送されない？　彼女の死亡放送が。鹿沼葉子、死亡っていう放送が。さっき何度目かの放送が流れたが、その時にも彼女の死を告げるメッセージはなかった」
そうだ、そこなのだ。浩平もまたそこに違和感を覚えていたのだ。——先ほど、氷上シュンが死んだという放送を聞いて衝撃を受けていた自分を思い出す。もし郁末にとって葉子さんが重要な人なら、その放送を聞き逃す事など無いはずだ。
郁末が目を見開いて耕一を見たのは、それが、——何かの確信に繋がったからだろうか。
郁末はへたり込んで、ごくりと唾を飲み込んだ。
郁末と耕一の脳裏には一つの仮定が浮かんでいる。
自分たちが数時間前に遭遇した敵、そして、そこから得た、「そういうもの」が存在し得るのだという知識。そして、この企画に携わっているFARGOの存在。違うのかもしれない。葉子はただ高槻に捕まっているだけで、違う、反逆した人間は常に殺される。葉子さんは戦うと公言しただけで逃げた、そんなの考えられない。葉子さんはそういうことを公言したときに逃げる人じゃないと思う、いや、解らない、もしかしたら逃げたのかも、でも逃げてどうするの？　この島の中、重点的に狙われる中、逃げ回っているの？　それも違うと思う、葉子さんは一番効率のよい方法を選ぶ筈だ、高槻を殺すのが一番効率のよい方法の筈だ、——本当にそう？
「まさか、——」
「……そういう事になるのかも、知れない」
浩平には二人の会話がまるで解らない。仕方があるまい、浩平は「そういうもの」が存在し得るということを知らないのだから。だが、残念なことに折

原浩平が知らないだけで、ジョーカーはいる。
この殺人ゲームを終わらせるために全員を殺して生き残ろうと考える人間は、実は少ない。協力して逃げ出そうとしたり、殺されることに脅えながら震えていたりする娘の方がずっと多いのだ。だから、ゲームの運営を迅速なものにするために、主催者側の情報と、勝ち抜き後の報酬という約束を握らせ、殺人マシーンになる事を了承させる。
ジョーカー。キリングマシーン。何でも構わない。そんな存在があるのは知っていた。郁未と耕一は実際に出会っている、マーダーと化した郁未の母に。
だが、どうして葉子が。郁未にはまだ信じられない。葉子さんは人殺しなんてできる人間じゃない。だが、本能が悲鳴を上げる。郁未の理性に高い熱量で訴えかけえる。考えてみなさいよ、葉子さんも高槻も死んでいないし、参加者の人数は半数近くに減っている、彼女はジョーカーなのかも、
郁未の理性は必死に抵抗する。もう崩れかかった牙城を必死に守る。叫び声となって理性が泣く。
耕一が説明すると、浩平の表情がみるみる歪む。彼もまた、不吉な気持ちに犯された顔をした。
「嘘よ！　葉子さんがそんな、そんな、」
一方で郁未は叫び声をあげる。郁未は立ち上がり再び駆け出そうとしたが、三度耕一の腕に阻まれる。
「何処へ行くんだ郁未ちゃん」
「葉子さんを捜す！　捜して問い質すの」
きっぱりとした、強い口調で郁未は言う。
強すぎる眼差しだった。――その細い腕の何処にそんな力があったというのだろう、郁未は耕一の腕を虫けらのようにはじき飛ばすと、森の中に駆けていってしまう。
そしてもう、二人の前には現れなかった。
「どう、しようか」
という、浩平の呆然とした声を聞く。
失策だった。彼女に一般人より強い身体能力があ

るとはいえ、それでも女の子だ。木の枝だけで戦えるはずがない。しかし、追おうにも彼女は足が速く（そういえば陸上部だと言っていた）、疲れきったままの現在の自分ではとても追いつきようがない。考える。少し休んで、茂みの中で眠っている名倉由依と共に彼女を追うのが一番の策だろうか。
言葉にして決意を固める。
「少し休んだ後、郁未ちゃんを、追おうと思う。それしかないだろう」
浩平も同感だったのだろう、小さく頷く。そして何かが気になるような、そんな一瞬の迷いを見せる。
耕一はそれを見て察し「君はどうする」と訊ねる。
「思うに、一人じゃないんだろう？」
十秒ほど逡巡した挙げ句、浩平は少し悩んだ顔をしながら返事をする、
「……オレは、取り敢えず連れの所に戻ります。近場ですから、少し待っていてくれますか。俺も一緒に郁未さん探します」
耕一は思う。この折原浩平は、待たせてる人がいて覗きをやっていたのか。ううむ、馬鹿だ。
「——どうでもいいすけど、そのスカートどうすんですか？　ていうかノーパンはまずくないですか？」
「んなこと言われてもなー……」
「んー……ちょっとした事情でオレは今ブルマを持ってるんですが、それでいいなら穿きますか？　そいつにはナイショで」
「——なんでそんなもん持ってんだ」
浩平は必死に言い訳をする。
「いや、実はこのデイパック、どうやら連れのものと間違えて持ってきたらしくて。何を血迷ったか体操服なんて持ってきてやがってて」
事実である。長森との抱擁のあと慌ててあの場を離れた自分は、拳銃とタライと己のデイパックを持

ってきていたつもりで、実は七瀬のものを持ってきてしまっていたのだ。興味のままに鞄の中を覗くと食料と水とコンパスと体操服一式。何であいつは体操服なんて持ってきていたのだろう。
思う。鞄の中身は、ここに攫われてきた瞬間のまだったのかも知れない。自分の鞄の中に煙草が入っていたのも同じ理由なのかも。
ともかく。
「体操服は襲撃にあって奪われた、ってことにでもしときますから。どうです？　何も穿かないよりマシでしょう？　つーか精神的にオレがきついです」
耕一は半ば呆れかかって言う。
「——君なあ、守りたい女の子なんだろう、その女の子。いくらなんでもオレなんかにブルマ穿かせて、君は心が痛まないのか？」
「痛みますよ、痛みますけど。七瀬は困っている人がいたら迷うことなく服を脱いで分け与える星の金貨もびっくりの献身にあふれた女の子だから」
「——死っっっっっっっっっっっっぬほど胡散臭い」
「あはは。まま、穿いといたほうがいいですよ。絶対バレませんし。そのままじゃ種枯れちゃいます」
結局言い包められて耕一はブルマを穿いている。ううむ、多分に可愛らしい女の子なのだろう。その女の子が穿いていたブルマ。ううむちょびっと興奮しなくもないな。だがいけない。こんなことで興奮していたら千鶴さんや梓にずたぼろにされる。
とにかく穿き終える。当然温いものは全くない。まあこれでハイキックをしてもなんとかやっていける。モザイクのかからない人生に幸あれだ。
「わはは、似合ってますよ耕一さん」
「うるさいなー……」
そんな馬鹿げた瞬間に、それは訪れた。
鈴が鳴ったような錯覚の元、何かが現れる。二人は瞬時に振り向き、気配の正体を探る。何が？

そこには、幼い少女と、恐らく耕一よりも少し年下と思われる青年が立っていた。耕一は言葉を失い、ゆっくりと身体から力が抜けていくのを実感する。
その少女は、自分が誰よりも愛しいと思っていた、守らなければならないと思っていた少女、柏木初音だった。少女もまた、目を丸くして立ち尽くしている。——何秒か解らない。僅かな時間が立って、喜びが二人の胸を支配する。
「初音ちゃん！」
耕一は歓声を上げ、駆け寄り、細い肩を抱く。
「お、お兄ちゃん、痛いよ……」
という初音の声を聞き、ようやく力を緩めたほど、耕一の力は強かった。仕方がないと思う。下手をしたらもう会えないかもしれないとも思っていたのだ。本当に良かった。
「良かった、初音ちゃん、元気で、」
後は、千鶴さん、梓、楓ちゃんの三人だ。彼女たちにも逢えるか。いや、必ず会うのだ。彼女たちを守り抜くために、全力で生き抜くのだ。自分が泣いているのが判った。頬を伝う涙が初音の頭に落ちる。
「良かった——」
そう言うと、初音も自分の胸の下でこくりと頷くのが判った。震えている。当然だ、強い不安にずっと脅かされていたのだから。だがこれで大丈夫。
「それじゃあ、僕は行きます。……耕一さん、その娘をちゃんと守ってやってください」
抱き合っていた自分たちに、青年の、凛、とした声が届く。見上げると、笑顔の一つも見せない暗い表情で自分たちを見ていた。
それで、耕一はすぐに理解する。今までこの青年が初音を守ってくれていたのだ。
「ありがとう、今まで初音ちゃんを守っててくれて」
礼を言うと青年は首を振る。
「必ず守り抜いてあげてください。そんな娘が死ぬ

なんて、何があっても間違っていますから」
青年はそう言うと、少しだけ微笑った。
「――、彰お兄ちゃん、」
初音は耕一の腕の中振り返り、青年（彰というのだろう）、に不安げな目を寄せる。これまでずっと一緒に行動していた人と、こうして別れることになるのが寂しいのだろうか。
「初音ちゃん。……うん、また、逢えたら逢おうね」
「彰お兄ちゃんっ!!」
初音の呼び止める声も知らず、彰は初音の鞄を地面に置くと、そのまま走り去ってしまう。
耕一と浩平は、呆然として、その後ろ姿を見送る。
「彰お兄ちゃんが、わたしを守っててくれたんだ」
そう云う初音の声を聞いて、耕一は、先の青年が見せた眼に、ひどく不吉なものを感じる。
「だいじょぶ、またあの彰君とも会えるさ」
無責任な励ましの言葉を並べて、耕一は笑う。本心では、そんなことを微塵も信じていなくとも。
「で、郁未ちゃん追うのはどうするんです」
という浩平の冷静な声を聞き、耕一は慌てて、
「ここで待ってるから、連れの所に行ってきなよ」
と返事をした。言うと小さく頷いた浩平は、早足で駆けていく。自分と初音の様子を見て、自分にも守るべきものがあるのだと思い出したのだろう。彼の連れの七瀬さんってのが無事であるといいが。
しばらくしてから静寂が訪れる。それでも耕一は初音を離さないでいる。温もりを逃がさないように。
――ただ一人で、闇の中を駆ける青年がいる。息を枯らして、自分の脆弱さを呪いながら、それでも走り続ける青年がいる。小柄な体躯と少女のような可愛らしい童顔をした青年は、しかしもう二度と天使の笑顔を見せることはないのだと思う。そう思わざるを得ないほどに、彼のその黒目がちの大きな目

には、表現し切れないほど巨大で無数のどす黒い、人間が持ち得るあらゆる負の感情が宿っていた。その中でひときわ大きい感情が「後悔」だ。
　自分には行きずりの少女に構っている暇はなかった。か弱いか弱い見知らぬ他人を守っている暇など自分には一秒だってなかったのだ。狂おしいまでに自分は馬鹿だった。
　七瀬彰は無様で惨めなどん底に落とされた。もう這い上がれない深さの、狂い切った非日常の穴へ。
――自分の名前を思い出せ、
　風の中で、青年の喉の辺りの粘性の高い塊が青年の耳元で質問の言葉を囁く。青年は勿論即答、
　七瀬彰。僕の名前は七瀬彰だ。このゲームの主催側であり管理側である、自分たちを殺し合いの渦の中に巻き込んだ、長瀬家の分家筋の末裔だ。
　だから、彰は走っている。
　鞄の中には、大きな袋が入っている。重くて重くて仕方がないけれど、これが自分の最強の切り札。
　うまくいくかは判らないが、しかしうまく使えば、自分の愛しい人を奪ったゲームを終わらせることが出来るのならば、自分は危険を犯して戦うべきだ。
　向かうべきは管理者のいるところ。
　美咲さんの為だけじゃない、すべての死んだ人のために、今自分は走っている。
　彼らを殺して全て終わらせる。その為の切り札だ。

272 ReStart

「んー、もう大丈夫やな」
立ち上がる智子。
撃たれた方の腕を激しく動かさなければ、我慢できない痛みではない。
「せや、マルチ、頼みがある」
「なんでしょうかー」
「あんたの持っとる拳銃、あかりに渡してくれんか？」

「いいですよ。でも、どうしてですか？」
「あんたには、コレを使こおて欲しいんや」
　そう言って、六四式自動小銃を手渡す。
「……さすがにコレはもう撃てん。せやから、あんたに使こうて欲しい」
「……はい、分かりました。大切に使います」
　それから、と智子は問う。
「どうやった？　例のサルベージいうんは」
「はい。サテライトシステムは使われていないようですが、本体内のメモリーに蓄積されていた情報の方はいくつか拾えましたー。武器・弾薬・爆発物のデータ。電気・電子・通信関連のデータ。それから車の運転技能。そして薬草・野鳥に関するデータ。サバイバルゲームのルールなんてのもありました。そして、船戸与一の著書のデータ。そして最後に『バトルロワイアル』のデータ。ただ、これにつきましてはコミックス三巻分のデータしかありませんでしたー」
「……あまり関係無いものもあるような」
「そーか。で、どうなん。あんたの鳥頭で、そんなぎょーさん覚えられるんか？」
　あうー、と言う感じで頭を垂れる。
「その分、優先順位の低いデータを消去しますから大丈夫ですよー」
「そか。がんばって覚えなあかんで。あんたの友達の残してくれた、大切なデータやからな」
　……友達の残してくれた、大切なデータ。
　その言葉に、ついと真剣な眼差しを智子に向ける。
「はいっ！」
「じゃあ、マルチ。あんたにもう一つ頼みがある」
　外に止めてあるジープ。それを窓から見つめる。
「車に積んである無線使こて、情報を集めて欲しいんや」
「はい。具体的にはどんな？」
「もちろん晴香のこと。それから高槻の動向。そして……藤田君が、今、何処におるか」

……その言葉に、休んでいたあかりが振り返る。
そのあかりに向けて言う。
「……そろそろ、その件にも決着をつけんとあかんやろ。もう半分近う死んどる。ぐずぐずしとったら、藤田君が、それか私達が殺られることになる」
「……うん」
あかりの返事にうなずき返しながら、付け加えた。
「それとマルチ。もう一人探して欲しい人がおる」
「どなたですか？」
「天沢郁未……晴香の親友や……」

273　折原を待ちながら　2

長森瑞佳に配布されたリストは、彼女自身が持つ『№100アイテムリスト』で締めくくられていた。
途中目を引いたもの以外はパラパラと流し読みしたので詳しいことは解らないが、大半は普通の銃器や刃物、そして何の役に立つのか解らないようないわゆるハズレの支給品ばかりだったが、注意するべきものもあった。
外見は普通のウォーターガンなのに中身は硫酸といったものや、六時にセットしてアラームが鳴ると爆発するという目覚まし時計、熊のぬいぐるみに仕込まれた小型特殊爆弾等、その外見からは想像できない危険なモノがあった。
同時に某ファミレスの制服型防弾チョッキとか(･∀･)仮面とかちょっとお間抜けなものもあったりもした。
この事が分かっただけでもそれなりの収穫かも知れない。銃器に関しては弾数や射程、威力といった細かな性能、それに使い方というか撃ち方まで明記されているみたいなので、今後何かの拍子に銃器を手に入れたならば自分や七瀬でもなんとか扱う事が出来るかも知れない。
勿論そんな時が来ないにこした事はないけれど。
そして、瑞佳にはもう一つ気になっているモノがあった。

「しかし……これだけ武器があるなら皆団結してこのゲームの主催者達と渡り合うのも可能なんじゃないかな。爆弾やら何やらまで結構あったわよね。あいつらのいる所なんてバーンと吹き飛ばしちゃえばいいのよ」
　瑞佳の横からリストを覗きこんでいた七瀬が物騒な事を言う。
「でも、始まってから時間が経ってるから今はもう残っていないのも多いんじゃないかな。何回か遠くで銃声や爆発音がした事もあったし……。それにあの高槻って人を殺すと核ミサイルが撃ち込まれるって。葉子さんは自分の力が解放されれば大丈夫って言ってたけどどうなったのかな……」
「う〜ん」
　そう言って七瀬は頭をかく。
「それより七瀬さん、これって何だと思う？」
　そう言って瑞佳が開いたページ左側には何の変哲もない普通のＣＤが一枚。右側に『№049　ＣＤ1/4』とあった。
「ちょっと待って瑞佳、あ、来た来た、やっと戻ってきたわよあのアホ」
　振り向くと瑞佳にも向こうから駆けてくる浩平の姿が見えた。

274 UNREAL

あたしにとっての友達とは、出会った時からなんとなく脳内にビビッっと電波が走るっていうかー。ん、まあ、それもあたしの思い込みなんだけどね。こういう世界に身を置いてると、なんかドラマティックな展開にあこがれちゃうから、特にあたしみたいなコは。
　でも、そういうことってすごく大事だって思ってるんだ。
　本当は早く帰りたかった。

だけど、そこは絶海の孤島。ただ思うだけでは帰れるはずがなくて。
だから脱出口を探そうって切り出した。元々黙ってるのって性に合わないから。それは空元気だったのかもしれないけど。
『だったら、一緒にココを出ようね。約束だよ☆』
この島で出会った大切なお友達。
いきなりこんなところに連れて来られて、『殺し合い』。訳わかんなくなる。
だから、目の前にある現実だけを信じた。それがこのコ、柏木楓ちゃん。割とおとなしいコだけど、いつの間にか打ち解けていた。あたしの強い押しのせいかな？　こんなときだけはあたしの生来の明るい性格に感謝する。
そして、約束したんだ。一緒に帰ろう……って。ただの口約束だったけど、あたしは信じてた。これで一緒に帰れるんだって……帰ったら電話で今日のこと、そしてこれからのことを笑って。

そして一緒にこみパで騒いで。
——来ないで……千鶴姉さん
また……人を狩るの？
……昔みたいに

あのコの声が耳の奥で響く。
あのコのお姉さん、たしか千鶴って呼んでた。
あのコがいつも心で無事を祈っていた、女の人。
だけど、あのコのお姉さんとの、あのコが渇望して止まなかったはずの感動の再会は無かった。爪、血、涙。ただそんな光景が目の前に広がって。
昔こんなお話を本で書いたことがある。たしか大事な人を泣く泣く傷つけるってお話。ずいぶん前の話だから結構忘れちゃってるけど。男同士が、ひょんな事から互いを庇い合い、憎しみ合い、殺し合う。それは愛する女性の為、そして友情の為。
それは本の中で、架空の世界だからこそできた綺

本当は、それでも信じなきゃいけなかったのかもしれないね。この島で、本当に出会えて良かったと思える柏木楓ちゃんを。

275　見つめたくない現在のこと

余りにも無残な現実を見せ付けられるのと、それが現実だと確認する事になる放送を聞いたのは、殆ど同時だった。
「……ま、こ……と」
僕達の探し人は、また、目の前で果てていた。
「……まこと……真琴！」
すでにタンパク質の塊と成り果てたモノを、天野さんは必死で揺さぶる。もう決して開かれる事の無い瞼が、開かれる事を信じて。
そんな天野さんを遠くから見ていることしか出来ない、僕。
激しい無力感と自己嫌悪が、僕を傷めつける。

麗事の夢物語。
目の前での二人、それは架空の綺麗事なんかじゃなくて。
見ていてつらく――哀しい。
あたしを守ってくれるような騎士様なんかじゃない。そして放送があった。凛とした透き通る声の女性。独白、そして爆発――
あたしはたぶん死ぬまでこのときの爆発を忘れない。そのコが最期を迎えたと思われる建物の側で、あたしは泣いた。黒こげた建物の屋上と、こびりついた大量の血の痕……。
あたしはやっと理解した。
あたしがここに来てから感じていたアンリアルは、全部嘘だったという事に。今は、楓ちゃんが怖い。途中から一緒に行動していた南さんが怖い。そして千堂クンが、この島にいるみんなが……怖い。
いつかあたしもこの島に住みついた狂気に飲まれてしまいそうだったから。

なんで。
なんでなんでなんでなんで、
僕はこんなにも弱いのだろうか。
ああ、天野さんが、泣いている。
遠くへと逝ってしまった、親友の為に。
そして、そんな彼女にかける言葉を持っていない
僕は、情けない存在で。
——あの時、僕が気づいてさえいれば……。

「真琴……」
返事を返すことの無い、躯に向かって美汐は囁き
掛け続ける。これ以上この場所に居ても、何か得ら
れるわけでもないと、分かっているのに。分かって
いるのに、美汐はこの場所から離れられなかった。
『あはははっ！　美汐、騙された〜』
そう言って、真琴が突然目を覚ますことなんて、
無いと、心では理解しているのに。体が、動いては
くれない。この場を離れたくないと、悲鳴を上げて
いた。
真琴の頬を、そっと撫でる。
ひやり。
冷え切ったその頬に、美汐の涙が落ちた。
祐介は、そんな美汐の姿を、ただ見ていることし
か出来なかった。何も出来ない自分が不甲斐無く、
ぎゅっと唇を噛んだ。
赤い血が一滴、唇の端を伝い、落ちた。
そんな時。
「……天野」
第三者の、声。
それは、聞きなれた、懐かしい、声で。
「相沢さん……」
真琴の遺体を、木陰の目立たない場所に安置し、
祐一が手向けの花を添えてやる。それだけが、この
島で朽ちていった者に出来る、精一杯の葬式。
「……誰が真琴を……殺したんですか」
怒りを押し殺した声で、美汐が祐一に尋ねる。祐

一は俯いて……搾り出す様に、言った。
「……名雪だ」
その名前を聞き終わるや否や、美汐は立ちあがる。
手には、きつく握ったデリンジャー。
「天野さん！」
祐介が美汐の前に飛び出し、道を塞ぐ。
「……どいて下さい」
祐介は、無言で首を振った。
「待ってくれ、天野」
代わりに言葉を発したのは、祐一。
「……いくら相沢さんの従姉妹だからといって、真琴を殺したことには変わりありません」
美汐は祐一とは目を合わせず、吐き捨てるように呟く。
「……違う、そうじゃない！　名雪は、悪くないんだ」
祐一が叫ぶ。その悲痛な声は、美汐を振りかえらせるのに充分事足りた。

そして、祐一は話す。
記憶を失った真琴に殺されかけたこと。
そんな祐一を守るために名雪が真琴を殺したこと。
そして、死の間際に真琴が記憶を取り戻してくれた事――
がくり、と肩を落とす。何もかもが分からない。
確かなのは、行き場のない憎悪と、絶望感や無力感だけ。
「私は……誰を憎めばいいのでしょうか」
誰にでもなく、美汐がぽつり、と呟いた。
祐一は答えない。否、答えられない。
誰を憎むか、と言えば、それは自分たちをこのゲームに参加させた人物たちだ。
だが、彼らは、距離の問題でなく、遥か遥か遠いところに居る。
怒りをぶつけられる場所には、居ないのだ。
祐介も、そんな場所に居る叔父達をあてもなく探すことに、疲れていたのかもしれない。

「……僕を憎めば、いい」
だから、長瀬祐介は、確かにそう言い放った。
答えを知っているから。
手軽な場所に居る、怒りをぶつけられる人物は、自分だと。
「……長瀬さん？」
美汐が不思議そうな表情で祐介の顔を覗きこむ。
「おい、何言ってんだ」
祐一が多少声を荒げ、祐介を睨むように見やる。
祐介は二人の視線を意にも介さず、自嘲じみた笑いを浮かべ、言った。
「……だから、僕を憎めばいい。僕がもしあの時気づいていれば、こんな事にはならなかったのかもしれないんだから……」
「どういう事だよ」
獣のような低い声で、祐一が唸るように言った。
美汐は何も言わない。
「……分かったよ。じゃあ、話そうか」
祐介は顔を上げ、二人のほうに向き直り、語り始めた。

276　変えられない過去のこと

「起立、気を付け、礼っ」
日直の号令が、今日の学校生活の終わりを告げる。
僕はひとつ伸びをすると、鞄を持って教室を後にした。
体育館の脇を通って、校門へ。
「ゆーくん、じゃあねー」
沙織ちゃんが体育館の入り口から元気に手を振っている。
彼女に悪気は無いのだろうが、往来の真ん中でのゆーくん呼びは正直恥ずかしい。
仕方ないな、と愛想笑いを浮かべ、手を振ると、満足気に沙織ちゃんは体育館の中へ消えていった。
そのとき、ふと体育館の裏のほうに歩き去ってゆ

く人の姿が目に入る。
（……あれ？　あれって……）
　間違いようも無い。叔父さんだ。
　部活の顧問を受け持っているわけでもない叔父さんが、なんで体育館裏に歩いて行くのか？
　花壇の手入れ……似合わない。
（なにやら犯罪の……いやいや、ミステリーの匂いがするな）
　つまらない事に首を突っ込むなと言う冷静な僕も、溢れ出る探求心の前では勝負にならず、僕はこっそりと叔父さんの後を尾行る（つけ）ことにした。

　体育館裏の、ちょうど袋小路のような、三方を壁に囲まれた場所。そこに叔父さんは居た。
　気づかれないように隠れて、様子を見る。どうやら、電話をしているようだ。
　聞き耳を立てる。盗み聞きは悪事？　知ったこっちゃ無い。
「……ええ。順調ですよ。……ええ、ええ。こちらも候補者の目処はつきました。きっと思う存分……」
　場所が離れているので、断片的にしか聞こえず、会話の全貌が見えなくてもどかしい。
　そんなことを考えているうちに、叔父さんは電話を切って、こちらに歩いてくる。
「うわっ、やば」
　僕は慌ててその場所を離れる。叔父さんの言葉の意味も分からないままに。
　強いて言えば、
（なんかテレビアニメの悪役みたいな事言ってるなぁ……）
　この程度の感想しか持つことは無かった。
　あの時、僕が何か感づけていたならば、誰も悲しむ事は無かったかもしれない――

277　決まっていない未来のこと

「……と、いうわけ。僕が叔父さんの言葉に何か引っかかるものを感じていれば、誰も死なずに、誰も悲しまずに済んだんだ。だから……僕が悪い。僕を憎んでくれていいよ」
　俯きがちに、祐介は言った。非は、自分にあるのだと。
「おい」
　祐一が、祐介の肩に手を乗せる。
　祐介が顔を上げ、祐一の方を見やるよりも早く、祐一は祐介を、殴り飛ばしていた。
「が……ッ」
　ぼたぼたと血を吐きながら、祐介はむせ返る。
　四つん這いになった体勢から、顔だけ起こすと、その眼前には祐一が居た。
「お前な、何が『僕が悪い』だ？　お前一人で何とかなるような話じゃなかったんだよ、もともと。自惚れるのもいい加減にしろ！　それにな、お前が自分で悪いと思ってるなら、そうやって責任を放棄するような真似すんじゃねえ！　責任感じてるんなら、逃げてねえで、憎まれようが殺されかけようがちゃんと責任とれ！」
　一気に捲し立てた後、暫し息を荒げる祐一。
　その祐一の姿を唖然と見ていた祐介だったが、
「……ぷっ」
　気づいたときには、何故か笑っていた。
「……ったく、恥ずかしいこと言わせやがって」
　祐一は、照れたように空を見上げた。
　こんな場所でも、空は、青い。
　心のモヤモヤが、全部吹っ飛んだ気がして、
「ごめん……僕が間違ってた」
　その言葉を言う祐介の表情も、晴れやかだった。
「相沢さんも……人を、探しているんですね」

「ああ……ホントはもう会ったんだけどな、逃げられちまった」
そう言って、陰のある表情で祐一は笑う。
美汐もそんな祐一に微笑みかけ、
「頑張ってください……私や、長瀬さんみたいに悲しむ人はこれ以上必要ありません」
と優しく語り掛けた。
「おう、任せとけ」
そう言って祐一は力こぶを作って見せる。そのわざとらしい動作に、三人の間に自然と笑みがこぼれる。
「さて、俺はそろそろ行くか……おい長瀬、天野を死なせんじゃねーぞ。俺が真琴に怒られちまう」
祐一のその台詞は、目的を果たした後なら死んでも構わない、という覚悟の表れだろうか。
「気をつけて」
祐一は手を振りながら、森の奥へとやがて消えていった。

ふぅ、と二人同時に溜息をつく。
やがて、よし、と気合を入れると、
「さぁ……行こう」
「ええ」
二人は歩き出す。
僕が僕の責任を果たすために。
管理者を倒す。
高槻を倒す。
……そして、叔父さんも。
どこまでやれるかは分からない。
だけど、天野さんだけは絶対に守ってみせる。
空を見上げた祐介の目には、これまで無かった決意の色が表れていた。

278　流れる涙をそのままに

「千鶴姉！」
びく、と震える千鶴。

怯えを含んだ悲しい瞳は、梓の視線を避けるように下を向いている。
ある意味、梓と千鶴は、姉妹の中で最も親しい。
もちろん生まれた早さに由来する、共に生活した日々の長さもあるのだが、気性の凹凸がうまく合っているのか喧嘩もすれば助け合いもするという、互いに腹蔵なくものを言える間柄なのだ。
しかし。
鬼の記憶に衝かれた初音に撃たれ、楓に切られ。
半ば心の拠り所をなくした千鶴は、梓にかける言葉がなかったのだ。
「千鶴姉!!」
再び梓は叫ぶ。
叱られた子供のように、千鶴は涙を溜めて血塗れの面を上げる。
漸く口にした言葉には、ほとんど意味は無い。
「あず……さ……」
よろめくように、一歩下がる。
「ごめんなさい、あずさ……わたし、また……ごめんなさい……」
また一歩下がる。
「初音が、楓が……!」
踵を返して跳躍しようとする。
「千鶴姉!!」
梓が三度、叫ぶ。
「わかんないよ！　ちゃんと聞かせてよ！　いつもいつもいつもいつも独りでなんとかしようとして！　失敗して、傷ついて、悲しんで！　そのくせ家では笑ってて、なんかあっても全然教えてくれなくて！」
「梓……」
梓の激昂に、千鶴が、あゆが、目を瞠る。
二人の視線が合う。
「ううん、この島に放たれたときから、わかってた

よ……。きっと千鶴姉は手を汚してでも、みんなを助けようとするんだろうなって、思ってたよ……。だから、聞かせてよ。ね？」
二人とも泣いていた。

「お腹、空いてない？　おにぎり、あるよ？　一緒に、食べよ？」
慌てて包みを開く。海苔の香りが広がる。
柏木家の食事は、いつも梓が作っていた。
今では遠い平和な日常の香りが、たまらなく——悲しく、嬉しかった。
「服もボロボロじゃんか、あたし服二着あるし！　着替えなきゃ、ね？」
あゆごと抱きしめるように服を示し、畳み掛けるように言葉を重ねる。
「だから、だから、行っちゃだめだよ！」
流れる涙をそのままに。
ゆっくりと目を閉じて。

千鶴は小さく口を開く。
「だめよ、梓……」
否定の言葉に、梓がびくりと震える。
「ちづ……！」
「手を洗わないと、ね？」
にっこりと笑ったその顔は、日常の千鶴のそれだった。
流れる涙をそのままに。
こころの鬼は、祓われた。

——食後。
「それでさ、千鶴姉」
いまだもぐもぐと、おにぎりと格闘するあゆをよそに、梓が話しかける。
服なんだけど、と二着——スクールタイプとアイドルタイプの服——を並べて置く。
そのデザインにちょっと、いや、相当げんなりする千鶴であったが、比較的ましと思われるスクール

タイプに着替える。
なかなか似合う。
子供の耕一が惚れるのも解ろうものだ。
「この歳でスクールタイプもなんだけど……これって……」
千鶴はアイドルタイプを手に取り立ち上がる。
――大きい。
そこそこ長身の千鶴が肩の高さに持っても、余裕で引き摺っている。
三人目を合わせ、同時に首をかしげる。
「こんなの、誰が着れるっていうのかしら？」
「はっくしょん！　ぬおおー、なんか悪寒がしたあー」
「お兄ちゃん、大丈夫？」
たぶん、大丈夫じゃない。

279　知恵比べ

「……」
「……」
草葉の陰で二人は互いの肌のぬくもりを感じていた。
それはつかの間の暖かな時間。
「ねぇ、和樹……わたし、たよりにしても……いいんだよね？」
「ああ。頼りにされたいし、頼りにしてる」
何度も肌を重ね合い、愛し合った二人の声は、いつしか恋人へのそれと変わっていた。
「でも、いじょうなじょーきょーで結ばれたカップルは長続きしないって……」
涙声。和樹はそっと詠美の目尻を指で拭った。
「影響されすぎだ、馬鹿」
「ごめん……」

二人は再び唇を重ね、激しく抱き合った。決して離さぬように、ぎゅっと強く。
ややあって、複数の足音。地面に寝そべるようにいた二人にそれははっきりと聞こえた。
「ちょっ……やだっ……かずきっ……‼」
「す、すまん、驚いて中で……」
「そんなばあいじゃないでしょ！」
ひそひそと怒鳴りあいながら和樹と詠美が衣服を羽織る。いつもならすぐに着替えられるような服を、長い時間かけて着替える。
少なくとも二人にはとても長い時間に感じられた。
それは、その足音が殺人鬼であるという可能性よりも、愛の営みを見られたくないという気恥ずかしさからきたあせりだったのかもしれない。
慎重に遠目からその姿を確認する、見知った顔二つ。
詠美には恐らくは一つだっただろう。
「南さん、玲子ちゃん！」
和樹が叫ぶ。もしもの時の為、詠美を手で押さえて隠しながら。
「も、もが……この、いたい……がずぎ〜」
詠美の視界は、雑草で彩られた土で埋まってた。
もう一人、見知らぬ顔が一人。黒髪の少女。その可憐な風貌は、日本人形を連想させた。
声をかける前からすでにこちらを窺っていた少女。隠れていたのに。
和樹はうすら寒い思いをしながらも相手側の反応を待った。
「あら、和樹さん。無事だったんですね」
南が顔を綻ばせて、手を振る。
玲子はこちらを伺って一瞬嬉しそうな顔を見せたが、何故かすぐにその表情が曇った。
「南さんも……よかった」
それをしっかりと確認してから、和樹が詠美を伴って三人と合流した。
「こちらが……和樹さんは知ってますよね？　芳賀

玲子ちゃん。そして、こっちが柏木楓ちゃん」
お互いが、南を経て、自己紹介をすます。
そして、お互いの状況を確認し合う。
由宇との別れ、大志との離別、いろいろなことがありすぎた。
和樹も何度も心がくじけそうになっていて……
(だけど、詠美を、守りたい人を見つけたからな……)
「何よ、あんまり見つめないでよ……ぽちのくせに」
照れ隠しからか、詠美がそう言って……目をそらさず和樹を見つめ返す。
「あらあら、なにかお熱いですね……何かありました？」
「ななな、なんにもないわよ！　し、したぼくはしたぼく。この詠美ちゃんさまにつくすのはとーぜんのことよ、ね、ぽち!?」
いつもならむかついていた詠美の悪態が和樹にはほほえましく感じられた。
もしかしたら和樹は大きく変わったのかもしれない——いろんな意味で。
(でも、南さんも変わらないよな……)
和樹が玲子と南をじっと見つめ、そう感じたままを思う。
(玲子ちゃんが元気無いのは気になるけれど、こんな島にいてもいつもと変わらず……無理してるわけじゃないよな？　……っ!?)
突如、足に鋭い痛み——!!
怒りに身を任せた詠美の——足が和樹の足を踏み潰していた。
「ふふふ、今度は私達のほうですね」
南が、淡々といつも通りの調子で事の顛末を語り出した——。
和樹の、詠美の顔が少しずつ青く、深刻なものになっていく。

ここにいる少女――何を考えているか分からないので和樹はどうも気を許せない――楓と、その姉の闘い、そして、女――きよみの放送とその最期を。
いつもと変わらない南の口調だけが不自然に浮いていた。

胃の中に爆弾……和樹は由宇が遺した最後の手紙を思い出す。
(本当に……全員に……埋め込まれているものなのか?)
もしそうなら絶望的ではないか。和樹は唇を噛み締めた。闘うどころか、逃げることもままならないではないか。自分たちの命はすべて向こうの奴等の思うがままということになる。
「……それはどうでしょう?」
今まで黙っていた楓が、和樹の心の問いに答えるように口を開いた。
「仮に……爆弾が全員に埋め込まれてるとします。起爆するときはリモコンか何かの遠隔操作だと思います。それはどんなときに爆発するんでしょう……。たとえば、この島の裏側……地球で一番離れたところにいる人を爆発させることができますか? どんなに優秀な科学者であろうとも、現代の科学力でそれを実行するには不可能だと思います」
「そうか……」
和樹の顔に希望が見える。そう、爆弾には有効距離があるに違いない。
「それにあの女性を爆発させたとき――確実にあの人を爆破させました」
哀しみに少女の瞳が揺れる。
「それは、爆弾を起爆させるスイッチがあるはずです。もちろん、一人一人区別して爆発させる方法……小さなリモコンなんかじゃなく、大きなコントロール室みたいなものが」
……その少女の見事な推理に、全員が水を打ったように静まり返る。

「あの人の死は無駄なんかじゃありません」
ただの少女の憶測に過ぎなかった。だが、それは確かな理論に裏づけされていて。
つまり、爆弾には有効距離があるということ。
そして、それを起爆させるスイッチはおそらく大掛かりなもので、持ち運びなど出来ないだろうということ。
大体、島全体が有効範囲だろうと、楓は呟いた。
この島から脱出、あるいはコントロール室を押さえることで、希望が見えてくるのかもしれない。
――ちなみに詠美だけは意味がわからず、その場で立ちつくしていた。
「私の推理はここまでです……そうは思いませんか？　牧村――南さん」
楓が南と正面から対峙する。
「……」
南は何も言わず、彼女を見ていた。
楓の行動に面食らいながらも、和樹達はそれを見守ることしか出来なかった。

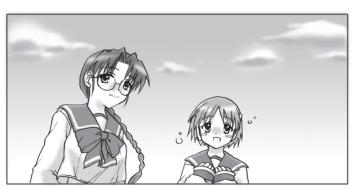
280　夕焼けの空の下で

……ざぁーっ……
夕焼けの海岸。
打ち寄せる波。
海面から突き出ている奇岩。
そこに腰をおろし、休息をとっている浩之。
そこから僅かに離れた場所に、ジープが到着する。
そのシートから降り立つ、あかりたち三人。
遠目に浩之の姿をみとめ、そっとあかりの背を押す智子。
あかりは頷き、ひろゆきの元へと歩いていく。
「……これは、賭けやな」
殺戮者となってしまった浩之に、あかりの言葉が果たして届くのかどうか。
だけど……信じよう。二人の絆を。そして、あか

りの想いの強さを。
……さく、さく、
近づいてくる足音。
閉じていた目を開け、顔を上げる。
そこには……ずっと会いたかった、本当に会いたかった、愛おしい少女の姿があった。
「……」
言葉を交す事なく、見つめあう二人。
その時。少女の目から、ひと雫の涙がこぼれた。
「あかりっ！」
立ち上がり、抱き寄せる。
頬をすり寄せ、その暖かさを感じる。
言葉にならない想いがもどかしくて……二人、唇を合わせた。
「ここに来て……いろんな事があったね。浩之ちゃん」
「……ああ、そうだな」
本当に、いろんな事があり過ぎた。
「わたしね。最後に浩之ちゃんに会えて、本当にうれしい」
そっと体を離すあかり。
「幸せだよ。とっても……だから、これで終わりにしたい」
そう言い、あかりは自らのこめかみに銃口を当てる。
「あ……あかりっ！　なんでだよっ！」
「わたし……汚されちゃったんだ。だからもう、浩之ちゃんとはいられない」
どういう事だよ……。言葉を失う浩之。
「イヤなことがたくさんあった。だから、今、幸せなうちに、終わりにしたいんだよ」
カチリ、と戟鉄にあてた親指を動かす。
「やめろよ！　どんなになろうと、俺は……おまえが好きなんだ！　それじゃぁ、ダメなのかよ！」
そう言う浩之に、あかりは涙を流しながら笑顔を

向ける。
「ありがとう。わたしも大好きだよ。……さよなら」
そう言って……引き金を引いた。
「あかりぃぃぃぃーっ！」

「大丈夫なんやろな」
そう、つぶやく智子。
「はい。渡す前にちゃんと抜いてあります」
「そうか……」
言って、あかり達をみつめる智子。目を細める。

「……どうして……」
泣き崩れるあかり。
「ばか、死ぬやつがあるか！」
ひざまづいたあかりを、浩之が強く抱きしめる。
「俺だって汚れてる。この両手は。たくさんの血で」
その両手を握り締める。
「償わなくちゃいけない。そしてなにより、おまえを一人にしてしまったことを……」
少し身体を離し、あかりの目を正面に見据えながら、言う。
「償わせてくれ。俺は、お前を守る。どんなことがあっても」
「ひろゆきちゃん……」
「だから、今は俺に、おまえの命をあずけて欲しい。な、あかり」
「ひろゆき……ちゃぁん」
再び抱き合う二人、深く、深く。
そして少年の決意も、深く、力強いものだった。
「……行こか、マルチ」
「えっ⁉　お二人に会わなくていいんですか？」
遠目に浩之たちを見やりながら、智子は言う。
「人の恋路をジャマするやつは……って言うしな。二人きりにさせとこ。それに」

マルチの頭をかいぐりと撫でる。
「今のあんたは、結構頼りになるしな。うちら二人でもなんとかなるやろ」
智子から初めて褒められて、顔を赤くする。
「あ、ありがとうございますぅ」
「生きとれば、また出会えることもあるやろ。だから、行こうや」
「はいっ！」
返事をし、アクセルを踏み込む。
……クマのぬいぐるみと、そして幾許かの銃弾。
それだけを残し、ジープは海岸から去っていった。

281　後少しだけ、約束

「私の推理はここまでです……そうは思いませんか？　牧村――南さん」
すべてを話し終えた楓の声が、響く。
まるで、名探偵が話の最後に犯人に話しかけるかのように。
(楓……ちゃん？)
不安そうに詠美が和樹の腕をつかんだ。
(……よく状況がつかめない……)
和樹はただ何も言えずそれを見守ることしか出来なかった。
「……」
沈黙の時が続く。
南は、何か思案するように一人一人に視線を向けた。
「……そうですね……」
南が再び楓に視線を移す。
「すごいわ、楓ちゃん。私にはそこまで分からなかったもの。まるでシャーロック・ホームズのように――」
「もう、やめませんか？」
楓が、南の話を遮る。
気がつくと南の顔からも微笑みが消え失せていた。

「……初めから気づいてました、南さん。あなたも……私が疑っていること知ってたと思います」
「……」
「答えてください……あなたは……主催者側の人間ですね？」
冷たい風が吹き抜けた――気がした。
「そうねぇ……どうしてそう思ったのかしら？」
はっきりと肯定こそしなかったが、その落ち着きぶりが、ただの楓の狂言ではないということを裏付けしていた。
「……証拠はないです。ただ、カマをかけただけですから」
と、楓は返す。
「すごいわね。きっと将来大物になるわよ……将来があれば……の話ですけど」
南の表情に再び笑みが戻る。だがその笑みはどこか冷たく残酷で――。
「ひっ……!!」
すぐそばにいた玲子が南から離れるようにあとずさる。和樹にも、今目の前で起こっている事が悪夢のように感じられていた。
「きゃあっ！」
玲子の胸が血に彩られていく。
胸に、銀色の手裏剣。
ほぼ同時に、南のいた空間は楓の鉄の爪によって引き裂かれていた。
「玲子ちゃん!?」
悲痛な楓の叫び。とって返すように玲子のもとへ――
ヒュッ！
手裏剣が楓の行く手を阻んだ。
「手裏剣の練習した甲斐がありました。ここまで使いこなせるようになったんですよ」
南が少し離れた場所で手裏剣を構えて立っている。
「……!!」
楓が憎しみを込めて南を睨んだ。

再び手裏剣がうなりをあげて飛ぶ。
キンキン！
楓が爪でそれを弾きおとし、一気に間合いをつめようと隙を窺う。
だが……
「か、かずきっ！」
詠美の泣き声。詠美と和樹にも手裏剣が飛ぶ。
楓がそれに飛びつくように体を踊りだすと、それを叩き落す。
腹から無様に着地する。
「……くっ！」
痛みに顔をしかめながら楓が南を見ると、いつの間に持っていたのだろうか……。
玲子の釘バットを振り上げた南の姿が眼前に広がっていた。
「よけないほうがいいですよ。後ろにいる玲子ちゃん……確実に死んじゃいますから」
楓は地面に転がったまま南を見上げた。
この態勢から反撃はできなくても、釘バットをよけることはできるかもしれない。
だが、楓のすぐ背後に玲子の姿。
よければ玲子を直撃してしまうだろう。
鬼の力をもってすれば玲子を抱えて飛ぶこともできただろうが――それどころか同時に南を切り裂くこともできるだろう――今は鬼の力なんてほとんど発揮できない。
「本当は千鶴さんの件があるからアレなんだけど……さようなら」
「――!!」
絶体絶命。楓は死を覚悟した。
そして南のバットが振り下ろされ――！
「動くな……動けば撃ち殺す!!」
南の動きが止まる。
和樹が、まだ使われたことのない機関銃を持って立っていた。
南が和樹に視線を移す。

「和樹さん……」
和樹は震える手で銃口を南に向けていた。
「嘘だろ……？　こんなこと……南さんがこんなことするわけないじゃないか……。誰でもいい……嘘だって言ってくれよ……」
だが、それに答える者はいない。
「頼む……撃ちたくないんだ……南さん、ここから何も言わず立ち去ってくれ……」
それは本当に悲痛な嘆願だった。
「……」
南が無言のまま、二人から離れる。
「せっかく強力な銃火器を持っているのに宝の持ち腐れですね。そんな甘いことではこの先、生き残れませんよ？」
そう言い残し、南は森の奥へと消えた——。
「玲子ちゃん、玲子ちゃん！」
楓がその顔が血で汚れることも構わずに玲子の傷口に口をつけては吸い出す。その機械的な作業をずっと続けていた。
手裏剣には毒が——塗られていた。
和樹は少しずつ呼吸が弱まっていく彼女の手を握りしめることしかできない。
詠美はただ、目の前の惨劇に嗚咽を漏らしつづけていた。
「ごめんね……あたし、楓ちゃんのこと……怖がってた……」
「玲子さん、もう、しゃべらないで」
玲子は手の甲で楓の涙を拭う。
「あたし、バカだから……一緒に、帰れなかった。ごめんね、約束……」
「……!!」
楓は何も言えずに玲子を抱きしめる。
「千堂クン、あたし……もう一度、こみパに行きたかったな……」
抱きしめた楓の腕に、どこか玲子の体が重くなっ

た気がした。

——どうして撃たなかったんですか？

楓はそう聞けなかった。
本当は構わずに撃ってほしかった。
おそらく巻き添えで自分も死んでしまうだろう。鬼の力を発揮できない今、弾丸をすべてかわすことなんて不可能なんだから。
楓には南と和樹の関係は分からない。多分、かけがえのない人なんだろう。それでも——そう思わずにはいられなかった。
(あの人は、また人を殺めるのだろうか。何食わぬ顔で別の人と行動するんだろうか？)
それは楓には分からない。
「これから……どうするんだ？」
和樹が楓に尋ねた。
もう和樹に、楓に対し気を許せないという感情はなかった。
「……生きて帰ります。たとえどんな悲しみが待っていようとも」
絶対に生きて帰る。それが楓に残されたもう半分の約束。
「……そうだな……生きて、帰ろうぜ」
「和樹さん達は自分の思った通りに行動して下さい。何かあったら……またここで」
「一緒に来ないのか？」
「すみません」
少し残念な気もしたが、冷静な楓のことだ、彼女にも考えあってのことだろうと深くは追求しなかった。

——何かあったらまたこの場所で。

悲しみに溢れたここで再会の約束を交わして。
そして、楓もまた南の消えた森の奥に消えて行っ

た。
「行こうぜ、詠美」
「ふみゅ？」
まだ泣き止まぬ詠美にそっと口付けする。
「生きて……帰るためにな」

七十番　芳賀玲子　死亡
【残り55人】

282　決意

森の中を、ゆっくりと進みゆく四人の姿があった。
前を行くのはスフィーと江藤結花。後ろには長谷部彩と来栖川芹香。
リアンと綾香を捜し始めたのはいいのだが、自分たちが逃げたルートを全く覚えていなかったせいで、あっちをウロウロこっちをウロウロと、実に不経済な移動をせざるを得なかった。
「もう疲れちゃったよぉ～」
スフィーが思わず道の真ん中に座り込む。
「何言ってんのよ！　私だって疲れてるわ」
「だってぇ～」
「大体スフィーが道を覚えてないからこういう事になるんでしょ！」
「結花さん、落ち着いて下さい……」
「……」
こういういざこざも、もう何度目になるだろうか。
長い距離を歩いたおかげで、四人の気分もすさみ始めていた。
その時、頭上の木がガサガサと変な音を立てる。
「！」
芹香が何かを感じ取った様を見て、他の三人も黙り込んだ。
そして、不意に頭上から声がした。
「あらあら、こんな所にいらっしゃったんですね」

そう聞こえたのとほぼ同時に、四人の前に音もなく人影が現れた……現れたというよりは、降ってきたとでも言った方がいいのだろうか。
「さっきはもうちょっとの所で取り逃がしましたけど、今度はそうはいきませんよ」
その声の主こそ、牧村南であった。
とっさの出来事に驚いた四人に向かって、南が手裏剣の雨を浴びせる。
四人は矢継ぎ早に飛んでくる手裏剣をよけるように、右側へスフィーと長谷部彩が、左側に来栖川芹香と江藤結花が、二手に分かれて逃げていく。
しかし、南はすぐさま右に駆け出し、あっという間にスフィーの前に立ちはだかった。
「そこまでですよ」
一瞬のうちにスフィーを抱きかかえると、首筋に手裏剣の刃を押し当て、
「皆さん、早く姿を現して下さい。そうしないと、スフィーさんの身の安全は保障しませんよ」
「南さん……やめてください……！」
「あら、長谷部さん？　こんな所でお会いするとは奇遇ですね」
「スフィーさんを、放してください……」
「いくら長谷部さんの頼みでも、そういうわけには行きません」
「南さん……、違う、いつもの南さんじゃない……！」
「いえ？　そんなことはありませんよ」
場の緊張感など全く感じていないかの様に、にこやかに南は答えた。
「長谷部さん、私がどうしてスフィーさん達を狙っているか、わかりますか？」
「……」
「この人達が、結界を破ろうとしたからですよ」
「結界……？」
「そう、私は結界を守るため、そして〝力〟ある者を倒すため、雇われたんです。スタッフとして」

「そんな……」
「だから、スフィーさん、そして芹香さんを……」
「もういいですっ……！」
振り絞るような声で、彩が叫ぶ。
「南さん……こんな事する人じゃなかったのに……。見損ないました」
彩の視線が、次第に鋭さを増す。
「私だって、人を殺したくはありません。でも、南さん、今の南さんを見ていると……」
彩は、ポケットからゆっくりとトカレフを取り出した。
「スフィーさんを放してください。そうしないと……、あなたを、撃ちます」
さっきまで持っていた南への迷いは、吹っ切れつつあった。ゆっくりと両足を開き、地面に踏ん張り、銃を南に向け身構えた。
「あらあら、長谷部さん。あなたに拳銃なんて似合いませんよ」
「……」
南の言葉にも、彩はトカレフを降ろそうとしない。
お互い無言のまま、時は流れる。
南は彩に狙いを定めるべく、スフィーに突きつけていた手裏剣を構え直した。その時、
「痛っ！」
南の横っ腹にスフィーの渾身の膝蹴りが入った。
一瞬の隙をつかれた南は思わずスフィーを放しよろめく。そして、
パァーン！
彩のトカレフが火を噴いた。
しかし、弾道はあさっての方角へ伸びていくだけであった。スフィーがいたからか、ただ手元が狂っただけだったのか。
そして発砲の衝撃に耐えられず、彩はその場に倒れこんでしまった。
南はスフィーの逃げた方角へいくつか手裏剣を放

ったが、動揺のせいか的をはずすばかり。手裏剣を諦めてスフィーを追おうとした南に、彩が叫んだ。
「南さん……私が相手です」
地面にうつぶせの彩が持つトカレフの銃口は、南に向けられていた。
南はゆっくりと振り向きながら、
「長谷部さんもいい度胸ですね」
「じっとしててくださいね。今すぐ私が楽にしてあげますから」
と言いつつ、懐に手を伸ばした。しかし、手裏剣は全て投げ尽くしていた。
「……あら、手裏剣切れちゃったみたい」
南はペロッと舌を出しながら、
「でも、こういうのも用意してあるんですよ」
背後から取り出したのは、ビッシリと釘が打たれたバットだった。

283 感染報告

黒服が進み出る。少し厚めのレポートを渡された高槻は、ちょっと意外そうな顔をしてみる。
「ここんとこ、なんか大きな動きあったかあ？……ってお前は？」
椅子にだらしなく腰掛けて、くるくる回す音がきいきいと耳障りだ。
黒服は肩をすくめて言葉を濁す。
「例の、爆弾を仕掛けなかった二人、と申しますか二体の件なのですが……」
ぴたり、と回転を止めて、不快そうに顔をしかめる高槻。
「あー、お前は来栖川重工の？　アレか？　ありゃあ上手く行かないもんだなあ、ポンコツのほうは日常データが多すぎて挟み込めなかったし、マトモなほうはさっさと壊されちまったしなあ」

最後は再びくるくると回転しながら、おどけてみせる。

高槻の仕事振りには、やたら手回しはするくせに熱心ではないという、手慰み同然のいい加減ささえ感じさせる。

「いえ……その日常データを切り捨てて、例のウイルスを取り込んだようなのです。勿論発症するかどうかは、データ不足なので、断言出来ないのですが」

またもや回転を止める。

「ほ？　ほおー……そりゃあ、また……」

上機嫌そうに気取って、立ち上がる。

くるりと一回転。

「自殺行為、いや、他殺行為になるかな、そりゃあ？」

はっはっはと高笑いし、手を打ち鳴らす。

いいぞ、いいぞう、と喚き散らす。

思わぬ展開に、高槻は絶好調だった。

284　誰がために君は泣く

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ……」

あれから——どこまで走ったんだろう。

私は、どこまで来たんだろう。

もう、そんなことも考えなくなってしまった。

ただ黒い想念で心がいっぱいになっていること、——それだけははっきり分かっていたと思う。

兄さん、冬弥くん、由綺……。

信じていた人は、もう皆いなくなってしまった。

希望なんて、やっぱり見せかけに過ぎなかった。

生きる糧にはなってくれなかった。

現実は……どこまでも冷たい。

私は……どこまでいっても独りで。

だから、もう闇を怖がらない。

だって独りだから、どこまで堕ちても一緒のこと。

差し込む光なんて要らない。

ただ、あの女を殺せるだけの力があれば良い。
縋るものは、武器。
私は絶望に向かっている。
心を、憎悪で満たして。
その先になにがあるかなんてもうどうでもいい。
どこだろうと、きっと兄さんが迎えてくれる。
だったら、そこがどこだって構わない。
天国じゃなくていい。
地獄だって構わない。
唯、そこに私を抱きしめてくれる両手さえあれば。

――森を抜ける。

敵討ちって、どうなんだろう。
忠臣蔵は、古い映画で観たことがあるから話を知っている。
日本で一番有名な敵討ちの話だ。
自分の国のお殿様が理不尽に殺されたことに怒りを覚えた家臣が、敵の男を集団で追い詰めた。
そして、見事に仇を討った。
彼らはその後、みんな切腹させられた。
でも、それは最初から分かっていたことで。
彼らは皆覚悟していたんだろう。
でも、死を恐れず、唯、主への忠義の為に。
今の私を支えている全てが、きっとそれだと思う。
でも、敵討ちってどうなんだろう。
私は兄さんを殺された。
大事な人だった。冬弥くんや由綺と出会うまで、私の全てを見守ってくれていた人だった。
それが、時に鬱陶しくもあった。
……でも、好きだった。
大好きだった。愛してさえいた。
誰であろうと、兄さんの代わりにはならない。
冬弥くんも、由綺も……みんなかけがえの無い友達、いえそれ以上の人たちだったけど、それでも、兄さんの代わりにはなれない。

私が生まれる前から私のことを知っていた人。
私が生まれる前から私を守ってくれていた人。
私が生まれる前から私を愛してくれていた人。
……私の前からいなくなるなんて、考えられない。
涙が零れる。
枯れるくらい泣いたはずなのに、また零れる。
どうしてこんなに悲しいのか。
もうこれ以上無いほど悲しんだのに。
どうしてまだ尽きないのか。
汲んでも汲んでも……尽きることを知らない悲哀。
どうしてこんなに寂しいのか。
生まれて初めての孤独。
私は……私は……私は……。

――歩道を渡る。

私はもう死んだんだ。
あの時、銃を向けられた瞬間？

……ううん、違う。
多分、兄さんの死を、自分が認めた瞬間に。
それまで、ずっと見苦しくしがみ付いていた日常に別れを告げた。
だから、死んだ。
結局、その時私は歌を捨てた。
歌では人を殺せないから、だから捨てた。
――今までの私を否定した。
あの女なんかのせいじゃない。
私が私のことを自分でとどめを刺したんだ。
だから、これ以上無いまでに私は死んだ。
……あの女を殺すために、自分を殺した。
兄さんのせいには出来ない。
敵討ちなんて、美しい呼ばれ方は要らない。
私が、私の意志で、あの女を殺す。
それが果たせればいい。
他にはもう何もいらない。
……違う、もう私には何も残ってないだけ。

だから、この先、生きていかなくたっていい。
全部終わったあとに、兄さんの許にきっと逝ける。
……その祈りだけ。それだけ、許してください。
……神様。

——焼け野に出る。

もう結構な距離を経ていた。
足が痛む。
もしかしたら、気付かないうちにひねっていたのかもしれない。
でも、立ち止まれない。
私自身のことを顧みる余裕なんてとっくに無い。
認めたら、きっと立ち上がれない。
痛い。
痛い。痛い。
痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。
痛くない。痛くない。痛くない。痛くない。痛くない。痛くない。痛くない。痛くない。痛くない。痛くない。痛くない。痛くない。
だから、痛む足をこらえて、ずっと走っていた。
ああ、胸が苦しい。
でも、まだ走り足りない。
あの女のところまで辿り着いてない。
だけど、私の体力じゃもう走れない。
仕方なく立ち止まる。
……そこは、見たことも無い場所だった。
「……ああ」
呻き声をあげる。
体の苦しさに耐えかねたのでも、どこかを痛めてたのでもない。
私の周りは、惨状だった。
焼け焦げた地面。
吹き飛んだ歩道。
黒ずんだ何かの塊。

視界に入ったものはそんなものだった。
……ボロボロだ。でもそのボロボロさに、不思議な親近感と……そして言い様の無い嫌悪感を覚えた。
嫌ぁ。
何で？
何でこんなもの見せるの？
生々しい肉片や血痕が残っているわけでもない。
あからさまな凶器や遺品が残っているのでもない。
でも、これ以上無く気持ち悪い。
やめてよ……。やめてよ……。
こんなのまるで……まるで…………………………
……私の心の中みたい。
「……うっ、おえぇぇぇぇえうぇぁうっ」
私はその場にうずくまる。
苦しい。
昨日は結局何も食べていなかったから、胃の中は空っぽだった。
痛い。
痛い。
痛い。痛い。痛い。
黄色い胃液が、何度も私の喉からこぼれる。
「……うっ、うっ、うっ」
肺が引きつる。
痛い。
痛い。
何も考えられない。
頭が真っ白になりそう。
次第に……意識ががたがたになる。
視界が……ふらつく。

——何か、光った。

私は、もうずいぶんボロボロになってしまった体を引きずって、それを確かめに行った。
「……これ……は……」
やけに重そうで、それでいてすごく乱暴な印象を

受ける……。
……ナイフ。
私はそれを拾い上げた。
見た目どおりに、いやそれ以上にそのナイフは重かった。
「神様……？」
見ていてくれたのだろうか。
聞き届けてくれたのだろうか。
私の願いを。
それとも……。
「兄さん……？」
兄さんが、私の道行きを手助けしてくれたのか。
やはり、彼も敵をとることを願っているのか。
ナイフは、厳然としてここに在る。
何も語ってはくれない、しかし確かな重み。
どうでもいい、唯、力が手に入った。
その事実が、たまらなく嬉しい。
マイクは、私を勇気付けてくれた。

でもそれじゃダメだった。
奪うための力が、傷つけるための力が必要だった。
素手じゃ、無理だったかもしれない。
私は両手でそのナイフを抱えた。
でも、これでならあの女を殺せる。
大好きな兄を殺した、あの女を。
私はナイフを胸に、そっと祈った。
どうか、あの女と遭遇できますように、と。
——歪んだ願いだった。
そして、再び歩き出す。

なぜか、頬から流れ落ちる雫。
気づいていたのか。
気づいていなかったのか。
それは随喜のものでも絶望のそれでもない。
拭うことも出来ない。
止める事も出来ない。
全部が、私。

ナイフを抱えて、傷ついた体を引きずって、
唯、ひたすら、あの女を追いかける。
――これがありのままの自分。

285　信じられずに手にする武器を

祐一が。
誰よりも信じていた祐一が……。
『もう、いい。俺の前から消えてくれ。でないと、俺、おまえに何するかわからない……』
どうしてだよ。
祐一の為にしたことなのに。
どうしてだよ。
もう、誰も、信じられないよ……。
……誰も信じなくて……いいの？
「あ……名雪さん！」
琴音は、血にまみれた名雪の姿を見つけ、立ち止まった。
既に日は傾きかけている。
一度はぐれた人とこんなに短時間で再会できるとは思ってもいなかった。
「名雪さん、どうしたんですか!?」
「……」
名雪は答えない。虚ろな目を、琴音に向けるだけだった。
そして、琴音は気付いた。
名雪の右手に、血の滴るナイフが握られていることに。
「……名雪、さん……？」
一歩下がる琴音。
そこで始めて、名雪が反応を返す。
「……祐一の為にあの子を刺したのに。
……祐一が、私に銃を向けたんだよ。
……私、どうすればいいんだよ。
……私もう、笑えないよ。

……笑えなくなっちゃったよ……」
その声は、闇よりも深く染められていて。
琴音は、その言葉だけで事情を察したようだった。
「名雪さん……」
「琴音ちゃん……一緒にいてくれる？」
琴音の方を向き、哀しそうな、哀しそうな顔で、微笑む。
その笑顔が痛くて。
見ているのが辛くて、
「……はい、一緒に行きましょう」
琴音は、笑い、微笑み返す。
名雪はその返事に満足したように更に表情を崩す。

「嘘」

琴音は何が起きたのか、一瞬に理解することができなかった。
そして気付いた時には、ナイフを持った名雪の右手が、自分の左肩に伸びていて。
ナイフは自分の肩を抉り、傷口からは、鮮血が流れ出ていた。
「い……きゃぁぁぁぁぁぁ!!！　あ、あ、あうっ、あっ、あっ……ひ、い、いたい……いたいぃ……」
悲鳴を上げ、琴音はその場を走り去った。
名雪はそれを満足そうに眺め、つぶやく。
「嘘だもんね。もう、誰も信じちゃいけないんだよね？　そうだよね、祐一……」
誰とはなしに言った名雪の表情は、驚くほどの笑顔で。
その顔は返り血を浴びて、異常な冷たさを発していた。
肩のナイフを抜き、琴音は走った。
ナイフは捨てない。何故かわからなかったが、捨てなかった。

——裏切られた。

――名雪さんに、裏切られた。
――なんて馬鹿だったんだろう、やはり誰も信じちゃいけなかったんだ。
――そう、信じられるのは。

浩之、あかり……何人かの顔がよぎる。

――早く、あの人達に会おう。
――他の人は、狂っている。
――名雪さんみたいに、狂っている。
――だから、コロソウ。

立ち止まり、自分の持つナイフを見つめる。
本能が、その武器を捨てさせなかったのかもしれない。
だが、これだけでは心許ない。
「銃があれば……」
知らずのうち、言っていた。

「銃が欲しいですか？」
突然の声に、凍り付く。
声も出なかった。
「あぁ、私は管理側の人間です、危害は加えませんので、心配なく」
その声の方を向く。
黒いコートを着た男が、小銃を手に、立っていた。
「もう半分くらいの人数になっていましてねぇ。この状況で銃がないのは、少々厳しいでしょう。そこで、我々からのサービスですよ。ゲームを公平に進めるための、ね」
男の言葉が真実がどうかはわからなかった。
そんなことはどうでもいい、武器が手に入るのだったら。
ゲームの参加者だったら、こんなこと言ってないでさっさと殺しているはず。
この男は……ゲームの管理側だ。
琴音はそう判断して、答える。

「……お願いします」
その声に迷いはなかった。
琴音は、強くなった。
それが正しいと信じて、曲がった方向に、強くなってしまった。

286　訓練

仲間を探し、そして本当の敵を討つ――
とはいえ、アテもなくさまようには限界があった。
蝉丸には問題無いだろう。鍛えられた軍人であり、このような環境であっても冷静に落ち着いて行動できるだけの経験がある。
だが、月代にとってはそうではない。
「(･∀･)蝉丸ぅ～ちょっとだけでいいから休ませて……」
いかに運動神経がいいとはいっても、やはり一般人だ。
ただでさえこの島は死の匂いが濃いのに……。
月代の体力は限界に近いだろう。
(いかん……月代の事も考えてやらねば)
蝉丸はあたりに人の――敵の気配が感じられないのを確かめると、近くの岩場に腰を下ろした。
「いや、少し……しばらく休憩してから行こう。体力は大事だ」
「(･∀･)ありがとう……蝉丸」
「(･∀･)蝉丸、休憩して無くていいの？」
月代の休憩中にも蝉丸は鍛錬を怠らなかった。
強化兵ではない今、蝉丸とて生き残れるかは分からない。
「大丈夫だ。……こうしているほうが落ち着くのでな」
「(･∀･)……私も何か手伝う！」
「しかし……」
「(･∀･)走らないだけで休憩になるよ。私も……蝉丸の

力になりたい」
「む」
月代の顔は真剣だった……ような気がする。
「分かった……では」

月代に少し離れた場所から小石を投げさせる。
対銃戦闘への訓練だ。
「いくよ〜！」
もちろん見てからよけるのではない――というか、
強化兵でもすべてよけられるものではない。
撃たれる前に、弾道を読むのだ。
小石が放たれる瞬間から蝉丸はそれをよけ続け、
月代に近づいていく。
蝉丸の体術は見事なものだった。
その距離が三メートル、二メートルと近づいても
小石程度ではかすりもしない。
そして……
「(・∀・)ばーーん！」
月代が体ごと突っ込んでくる。蝉丸がその体を受
け止めた。
「何事だ、どうした？」
「(・∀・)ダメだよ〜よけなきゃ。私がナイフ持ってたら
死んじゃうよ？」
「む」
少々面食らってしまったが、思わず苦笑する。
「(・∀・)でもさ……嬉しいかな？　蝉丸が、私のこと
……受け止めてくれて」
「む」
月代の顔が赤く……なってるような気がする。
蝉丸は泥沼に腰までつかって抜けられないような
思いに駆られた。

287　嫉妬

「笑えない私笑えない私笑えなくなっちゃったよ

……」
名雪は呟きながら歩く。
「何で何で何でこんなことになったの、何が悪いの教えてよ祐一……。私悪くない悪くないよ、祐一を守ったんだよ祐一のためだったんだよ……」
名雪の呟きは止まらない。
「またなの、また私の思いを踏みにじるの、祐一」
名雪の脳裏に叩き潰された雪ウサギが浮かぶ。
それは七年前、傷ついた祐一のための名雪の精一杯の気持ち。
踏みにじられた気持ち。
あの日の夜も名雪は布団に包まってこんな風に呟きつづけていた。
何が悪いんだろう？
何でこんなことになったんだろう？
何で祐一は私に振り向いてくれないんだろう？
何で私はたった一週間ばかりしか過ごしていない女の子に負けたんだろう？
あの子にあって私にないものはなんだろう？
と、あの日から、名雪はずっと考えつづけてきた。
何度も眠れぬ夜を過ごしてきた。
それでも、祐一は帰ってきた。あの子はもういない。
今度こそ祐一は私に振り向いてくれるだろう。自分でいうのもなんだけど、私はきれいになったと思う。きっと祐一は私に振り向いてくれる。
だけど、またあの子が私たちの前に現れて……
「そっか、悪いのはあの子なんだね」
祐一が私の思いを踏みにじったのも、私の前からいなくなったのも、全部全部。
「クスッ、泥棒猫さんだよ、あゆちゃん」
みんなみんな嫌い、誰も信じられない。だけど、その中でもあの子だけは許せない。
「また、祐一もあゆちゃんにだまされちゃって……紅しょうがぐらいじゃ許さないからね」
名雪の声が次第に明るいものになっていく。

「そうだ！　まずはお母さんを探さなきゃ」
誰も信じられない、誰も信じられないけど、お母さんは別だ。お母さんだったら私のお願いをきっとかなえてくれる。いつものようにやさしい顔で、手に頬を当てて、「了承」って言ってくれる。
「お母さんならあゆちゃんと祐一に『お仕置き』をしてくれるよね」
名雪は弾んだ声でそう言った。

288

（・∀・）ヨクナイ！

——拝啓おふくろ様
もう、あなたに文を送るのはこれで最後にします。それというのも、便りが無いのはなんとやら、という言葉にあやかろうと思い立ったからです。愚かな考えではありますが。
さて、バカ息子潤の近況をお話いたします。
かのバテレン製らしきヤンキーともずくを摂取していましたところ、突如として脳天を頑丈なノートパソコンに直撃されました。
そしてその折、あなたをこの世に送り出したわがグランドマザアなどに再会致しました。周囲にはなぜか、ラッパなどを吹く羽の生えた子供などもおりました。
今にして思えば、あれが臨死体験というものでしょうか。
その後、その天からのプレゼントであるノートパソコンを起動いたしました。女の子に変形しないことには並々ならぬ不満を感じましたが、私はもう大人ですので我慢致しました。誉めてやって下さい。
CDドライブ（先ほどの横文字といい、敵性語を使う不忠義をお許し下さい）を覗いてみましたところ、果たして純白のCDが入っておりました。
私は海綿体に熱き血潮をたぎらせ起動してみましたが、何も起きませんでした。
改めてCDの内容を覗いてみると、残念ながら性

的欲求を満たすようなものは入っていない事が判明致しました。
日頃信仰している大ガディム神は、なぜかくも酷な仕打ちを潤になさるのでしょうか。
……とりとめが無くなってしまいそうですので、名残は尽きませぬがこの辺で。
どうか潤が帰ったおりには、もずく以外の食事でお迎え下さい。
では。

「宮内さん。このまま黙々と進むのも何だし、何か話でも」
「そうですネ。気を紛らわせるのも必要デス！」
俺は、彼女に振れそうないくつかのネタを頭の中から検索した。
「ねえ宮内さん、やっぱ一日の回数は多いの？」
――自慰の。
「ねえ宮内さん、やっぱ経験豊富なの？」
――性交の。
「ねえ宮内さん、やっぱ人気ないの？」
――アンタの。
(いかんぞ。なんかヤバいネタばかりじゃないか)
俺は焦りの雫を垂れ流し、ちらりと宮内さんの方を見た。
(そうだ。何か彼女の長所についての話題を振るんだ！)
「ねえ宮内さん」
「What?」
「ズったら気持ちいいでしょうね、その胸」
「……」
なぜか、宮内さんが沈黙する。
「いえ。俺の知り合いもあなたほどではありませんが、やはり立派な胸をしていまして。男には『頼みづらいプレイ』ではありますが、やはり宮内さんには欠かせないかと」
「……」

ガシャキッ、と宮内さんがウォーターガンを構えた。
「ぬ！　敵ですか⁉　宮内さん、さがって！」
俺はB級アクションムービーのように無意味に転がり、明後日の方向へ拳を構えた。
「どこからでも来い、ゲス野郎ども！　あうっ」
背中を水撃に打たれ、俺は仰け反った。
「……ワタシ、下品なネタは嫌いデス」
「す、すみません……」
俺は、何が悪かったか理解できないまま謝った。
おふくろ様。やはりメリケン製ヤンキーの考える事は潤にはわかりません。

289　壊れた小銃

（うまくいった……）
姫川琴音が走り去った後、彼女に銃を渡した男は内心ほくそ笑んだ。
あの小銃は『壊れている』。
撃ったらまず間違いなく暴発し、使用者の命を奪うはずだ。
銃の扱い方を教えた際、「残弾は少ないから」と言って試し撃ちをさせなかった。
そんなことをされたら、わざわざ壊れた銃を渡した意味がない。
そもそもあの銃は、焼け落ちた公民館から偶然拾った物だった。
だが、少し調べてすぐに、この銃は使える状態にないことがわかった。
銃の知識は、その程度には持っていた。
そこで男は思い付く。
少しでも自分の良心が痛まないように、誰かを殺す方法を。
自分が手を下す必要はない。勝手に死ぬように仕向ければいい。

（あの銃を使うか使わないかは彼女の判断だ。運が良ければ生き残るだろう。悪くない。自分は悪くない。悪くない。何も——）

一日目に百貨店から無目的に奪ってきた黒いコートをなびかせて。

男、巳間良祐は、その場を後にした。

残された空間には、ただ、乾いた風が吹くばかりだった。

琴音は走る。

壊れた小銃を手に。

ターゲットがどこかにいないかと、探りながら——

290　おしゃべり南さん

〝ゆらり〟

南は釘バットを大上段に構えた。

彩との距離は五メートルあまり。

彩の顔に怯えの色が走る。

地面に伏せている自分にとってこの高さから振り下ろされるバットの打撃は、間違いなく致命傷になる。

（もし外したら……）

血まみれになる自分の顔を思い浮かべ、銃把を握る手に汗が滲む。対照的に南の口元には余裕の笑みさえ浮かんでいる。大上段の構えのまま世間話をするかの如く、彩に話し掛ける。

「そういえばですね、さっき和樹さんと詠美さんに会ったんですよ」

「……？」

彩の脳裏を名前の二人がよぎる。憧れの人（和樹）と大切な同人友達（詠美）……。

南は言葉を続ける。

「二人、こんな状況でもまだ諦めてませんでしたよ。和樹さんは瑞希さんが、詠美さんは由宇ちゃんが亡くなったのにね」

話は佳境に入った。

「まぁ、こみパで外壁常連の大手は大手とくっつくって事かしら？　島中常連の長谷部さん？」

……そして自分への侮辱……。

「……許せません！」

銃把と引き金に力が入る。

あと三メートル半。

結花は動けなかった。

スフィーを芹香に任せ彩を援護すべく、すぐにでも南に跳びかかるつもりだった。

が……動けない……。

釘バットを取り出す際に見せた南の笑顔。

〝すぐにでも貴方達を殺すことができるんですよ〟

そんな言葉がついてきそうなあの笑みが頭に浮かび結花の心を挫く。また、そんな自分の弱さに焦り、苛立ち、いつしか足は鉛になっていた。

「……」

「守らなければならない存在ができたのかも知れませんね。和樹さんと詠美さん、お互いを見る目がいつもと違いましたし……」

「……（え？　何……）」

彩は南の言葉から耳を離せなかった。

〝じわり……〟

彩が気付かぬうちに南は半歩前に出た。

更に南の話は続く。

「——恋人？　そう、そんな雰囲気でしたね～。あんな状況ですから、恐怖を忘れるために一時の快楽に身をまかせて～」

「……（恋人？　快楽？）」

彩にとって堪えがたい言葉が次々と投げかけられる。

憧れの人と友に対しての侮辱……。

あと四メートル。

〝動け、動いてっ、何で動かないのっ！〟
あと二メートル。
「うふふ、安全装置が掛かったままよ」
「？」
完全に南のブラフだった。
しかし一瞬、ほんの一瞬だが彩は視線を南から切ってしまった。
〝ビュン〟
〝パンッ、パンッ！〟
風切る音と自分の拳銃の発射音を聞いたのを最後に彩の意識は途切れた。
〝パンッ、パンッ！〟
「くぅっ！」
彩の放った弾丸の一発が南の右手を破壊した。
そのぶん、軌道はややずれたが釘バットは彩の首の右側をとらえた。

〝ズシッ〟
手応えを感じたと同時に、南の右手に激痛が走る。
が、すかさず左手に持ち替え彩の動かない頭に向けて止めの一撃を――
その瞬間、腹に強烈な風を受けて南は吹っ飛ばされた。
そしてそれが風で無い事に気付いたときには、目の前に猛スピードで振り下ろされる踵が迫っていた。
「うぁぁぁぁーーーーっ！」
叫び声と共に跳び出した、結花の胴タックルが南を吹っ飛ばし、踏みつけが南の顔、上半身を襲う。
〝グジッ、グシャッ、グシャッ、グシャッ……〟
眼鏡が粉々に砕け、前歯が消えた。
釘バットを握ったままの左手は砕けた骨が見えるまで踏みつけ、最後に釘バットで南の両膝を砕いた。
「彩ちゃん……彩ちゃん……」
南を再起不能状態にした結花は彩に懸命に声をかけた。彩の首は力なく揺れ、呼吸も弱々しくなりつ

つある。
かけつけた芹香、スフィーにも手の施し様が無ぃ事は明らかだった。
「……ねぇっ、彩ちゃんの絵本、まだあたし見せてもらってないよ！　壁さーくるってのになるんでしょ？」
彩はすまなそうに笑い結花の手をそっと握り締めた。
「ゆ、か……さん……ごめん……さい……」
「ねぇ、お願い、起きて！　……絵本、見せてくれるって……言ったじゃない……」
結花の涙が彩の顔にぽろぽろ落ちる。
最後にもう一回結花の手を握り、彩の瞼は閉じた。
「ごめん……ごめんよぅ……彩ちゃん……」

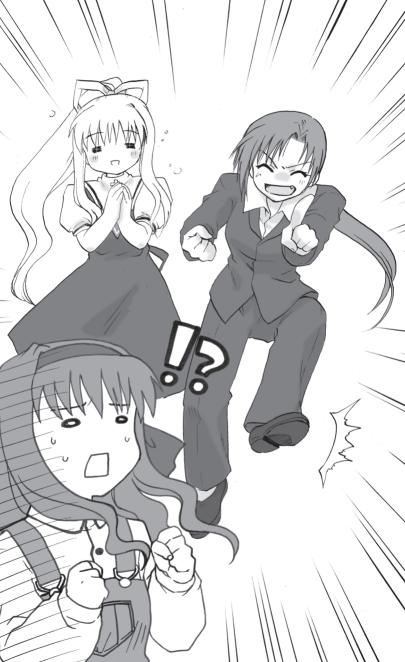
七十一番　長谷部彩　死亡
【残り54人】

291　黒船来襲

「明日は競馬や、ダービーやで、みすず！　って、ここに場外馬券売り場なんてないから買えへん……残念や。せやけどなー、買ってたらあたってたってんねん。間違いなくあたってたってんねん！」
「なんでそんなに自信あるかなぁ……」
「いや、ジャングルポケットは勝つねん。角田、がんばんねん。とにかく、ジャンポケやねん。一番人気でもええねん。金はふえんねん。今、実はウチ生活くるしいねん。給料低いねん、うち。橘家は全然金くれんし。いっそここで死んだほうがうちら楽かもしれへん。どうや、みすず、死なんか？」
「おかあさんといっしょ！」
「えぇ、それええで、みすず。じゃじゃ丸、ぴっころ、ぽろりやな」
「うん、にははっ」

ともかくここでは平穏に時は流れてました。
「と、そこの、ちょっとこっちきぃ」
急に振られて少し（というか相当）、あさひはどきりとした。
「あ、はぃ……えっと、なんでしょう？」
そういってあさひは神尾晴子のほうにゆっくりと、物怖じするうさぎのように、寄っていった。
「あんさん、声優やっとんねんてなぁ？」
「あ、はい…。一応……」
「実況できるか？」
あさひはキョトンとした眼で晴子の目をみた。
晴子の目は、真剣だった。
え、実況？　なんで？　というかなんでここで？　それ以前に実況ってアナウンサーの仕事なんじゃ……？　えぇぇぇっ？
「あの、そのですねぇ……」
「なんや？　できんのか？」
晴子がキッっとこっちを睨んで、そういった。
「ひっっ、いや、できないわけじゃないわけじゃないんですけど……」
そういうと、晴子の顔が、にかっ、と明るくなった。
「よっしゃぁ、それなら善は急げや、みすず、紙だし！」
「はい、お母さん」
神尾観鈴はポシェットから、メモ帳とペンをだして、晴子に渡した。
「えらいっ、さすが我が娘や、ちゃんとペンまで出しとる」
「にははっ、みすずちんえらいっ」
数分間、神尾晴子は紙に向かって何かを書いていた。そして、今、
「でけたっ！　完成や！」
今書きあげたメモ帳五枚に渡る大作をあさひの目

の前においた。
「よろしくたのむでー、嬢ちゃん」
仕方ない。そうあさひは観念して、メモ帳に眼を通す。
「では、いきますっ！」
「さあぁっ、今年もついにこの日がやってきましたーっ！」
「ストップ！」
あさひが一行読み始めた直後に、ストップがかかる。
「へっ？」
「ちゃう、違うんや、そうやない」
「さぁ、今年もついにこの日がやってきました。って淡々と読むんや！　あんたのならアイドルのコンサートみたいやないかっ！」
あの、私、一応声優アイドルなんですけど……。
アナウンサーじゃないんですけど……。

ともかく、ここは平和だった。
神尾晴子のアナウンサー教室が開講して、一時間。いまだにそれはまだ、続いていた。
「ちゃう、そうやない。もっと気合いれぃ！　今、女性実況アナなんかおらんで？　あんたがその一号や！　フジでも関テレでもたんぱでもテレ東でもどこでも勤められるでっ！」
神尾晴子は、鬼コーチだった。
「あさひちゃん、ふぁいとっ！」
神尾観鈴は何故か応援してくれていた。
わたしは思う。
現実を忘れるってことも大事なんだな。
これは、きっと神尾親子の気遣いなんだな。と。
いや、えっと、忘れちゃ駄目なことがなにかあったはずなんだけど……。
あさひはそれが何か、思い出すことはできなかった。

それから一時間、更にトレーニングは続いた。
「完璧や、完璧すぎや、嬢ちゃん」
「あ、ありがとうございます、コーチっ！」
桜井あさひは完璧に数時間でやりとげた。
ダービー（晴子仮想、ジャングルP勝利）の実況を。さすが天才声優アイドル、桜井あさひ。
「そうだっ、忘れてましたっ！」
「ん？　なんや？　あさひちゃん？」
あさひは急にいままでと違う雰囲気にのまれていった。それを察したように、晴子の顔から、笑いが消えた。
「あの、いきなり現実に戻すようで悪いのですが……その……」
そこで、あさひは下を向いて、その後の言葉を出すことができなかった。
「なんや？　あんたが今言うことならなんでも受け入れられるような気がするから、なんでもいい。えぇ、ウチが好きやったら抱きしめてくれてもええんや。そんかわし、観鈴おらんとこでやろなっ」
晴子はそういって、また、笑った。そして、
「ちょっとこっちきぃ」
あさひの腕を軽くひっぱり、木陰にもぐりこむ。
「ん？　お母さんどこいくの？」
応援に飽きて、近くに咲いていたたんぽぽで花輪を作っていた、観鈴が二人のほうを向いてそういった。
「ちょっとな、トイレや、トイレ、すこしまっといてーな」
「うんっ、まってる」
そう言って観鈴はこっちにお尻を向けて、又、花輪を作り始めた。
「えっ……、ええっ、違うっ……、そうじゃなくて、その、えっと……」
あさひは顔を真っ赤にしながら、慌てふためきながら、晴子のなすがままに、ひかれていった。

「もうこの辺でいいやろ。あんまり離れすぎても、アレやしな」
　晴子は脚を止め、あさひの手を離して、
「誰か、死んだんやな？」
　晴子は続けた。
「誰や？　居候か？　それとも、敬介、か？」
「……私が知っているのは、後者、です……」
　そういって、あさひは目を閉じて、頭を地面に向かって、下げた。
「えぇ、どんなことがあっても仕方ないわ。この状況や。どんな状況で死んだ、とかそんなことはどうでもええわ。ともかく、伝えてくれてほんまありがとう。それに、うちは敬介の妻やないしな。別にあいつが死にやってもあんまり関係ないんや」
　でもな、と言って晴子は続けた。
「観鈴の父親なんや。アイツは。だからな、一応や。観鈴は、アイツのこと、ロクにしらんかもしれへん。でもな、一応アイツの前ではいわんといてくれんやろうか、お願いや」
「……わかりました。でも、そのです、本当に、その……あの……わたしっ、なんといっていいか……」
　あさひの目に、涙が溢れた。
「えぇ、ほんとええから。そんかわりや、あと、もうひとつ、あさひちゃんに頼みたいことがあるんや」
「……はい」
「観鈴の、友達になったってくれんか？　あの子な、ロクにいままで友達おらんねん。だから、な？　これがお願いや」
「……はい、判りました……ありがとう、ございます」
　あさひが崩れ落ちそうになるのを晴子は抱きとめて、
「そろそろ戻ろうか、みすずが心配や」
　そうして二人はさっきまでいた場所に向かって歩

き始めた。
「ほら、これで涙ふきや。そんな顔で帰ったら、観鈴、驚くで？」
あさひは、晴子から手渡されたハンカチで、涙を拭いた。

292 水瀬親子マーダー化計画

「お姉ちゃーん、真琴お姉ちゃーん」
椎名繭（四十六番）は先ほどまで、眠りにつく前まで一緒だった少女の声を呼びながら歩きつづける。
「真琴お姉ちゃーん……みゅー、いない……」
あのつり橋脇の草群でずっと眠っていた繭だったが、島全体に放送が流れ、その音で繭は目を覚ました。
そして、自分が一人きりなのに気付いたのである。
「みゅー、お姉ちゃーん、ぐすっ」
一人きりは怖くて、心細くて、でも、繭は泣くのをこらえていた。
それは面倒を見てくれた真琴が、自分の前で泣くのをがまんしているのを繭もなんとなくわかったからである。
だから、繭は泣かない。泣かないで真琴を探している。
『繭にもぴろを抱っこさせてあげる』
そんな風にお姉ちゃんは約束してくれたのだから。きっとまた会えるはずだ。
「ぐすっ。真琴お姉ちゃーん」
だけど、そんな風に大声をあげながら歩くことはとても危険なことで、その呼びかけに応えた人は、真琴ではなかった。
「真琴？　真琴を探しているの？」
「みゅ!?」
背後から声をかけられて、繭は振り返った。
視線の先にいたのは長い髪をしたちょっとのんびりしたかんじのきれいなお姉さん。

「君は、真琴を探しているのかな？」
その声はとても穏やかで間延びした声なのに。
「みゅー……うん……」
なのに繭はその人が好きになれなかった。
それは　その人の髪が多少乱れているせいかもしれないし、その目が少しうつろだったせいなのかもしれない。
「ふーん。えっと、お姉さんに名前教えてくれるかな？」
その人は繭の方に近づいてくる。
「……繭……」
「繭ちゃんだね。私は名雪、名雪だよ」
その人はそう名乗って繭のほうへ両手を伸ばす。
「繭ちゃんはなんで真琴のこと探してるのかな？」
名雪の両手が眉の頬に触れる。
「みゅー……猫さん抱っこさせてくれるって約束してくれたから……」
「ふーん、猫さん？　お姉ちゃんも好きだよ猫さん。でもね」
そのては繭の頬をなでるように下におりて。
「約束を守るのは無理だと思うな。だって……」
あごを通過して首筋へ。
「あの子は私が殺しちゃったから」
そして、その手に力がこめられる。
悲鳴をあげようとする繭、だけどつぶれたような声しか出なく、それにもかまわずギリギリ、と名雪は力をこめる。
「あの子がいけないんだよ、私悪くないもん、あんな子死んで当然だもん」
その声は穏やかなままで、その顔はとてもきれいなままで。
「繭ちゃんもそうでしょ、きっと私を傷つけるんだ」
抑揚のない声で名雪はしゃべりつづけるが、その声はもうほとんど繭には届かない。
もう、ほとんど名雪の顔が見えない。

だけど、次第に暗くなっていく視界の中で、横から何かが飛んできて、名雪の頭に直撃した。

天沢郁未（三番）は森の中を泣きながら走っていた。葉子を探すために耕一たちのところから衝動的に飛び出して、自分のバッグを引っつかんで走りつづけている途中で聞いていしまったのだ。自分の母の死を告げる放送を。

（お母さん、お母さん、お母さん、お母さん）

心の中で叫びながら、郁未は走り続ける。

もう息は上がって、足もそろそろ限界で、そもそもこんな風に無防備で走りつづける事が危険だとわかっているのに、それなのにこんなふうに走っていなければ自分がどうにかなってしまいそうで。

（むちゃくちゃだ、私）

今まで共に行動してきた仲間をほっぽりだし、怪我している由依のことも考えず、何のあてもなく葉子さんを探す。

『刹那的な感情で行動するべきではないよ』

かつて少年にそういわれたのに。

（どうしたらいいの、ねぇ、どうすればいいの）

そんなふうに走る郁未は、危うくその光景を見逃すところだった。

「……！　冗談でしょ!?」

一人の少女がもう一人の少女の首をしめている、その光景がとりあえず郁未の心を静めてくれた。

方向を変えてそちらのほうへ向かう郁未、だが、間に合うかわからない。

郁未は走りながら地面から手ごろな石を拾い上げると、首を締めている少女、名雪のほうに投げつけた。

ゴッ、

牽制ぐらいになってくれればいい、と思ったその石は、しかし名雪の側頭部に直撃し、そんな鈍い音を立てる。

グラリ、と体がゆれて、名雪は横向きに倒れた。
郁未はそれでも油断せずに自分のバッグから手斧(未夜子があの時置いていったものだ)を取り出すと、それを構えて二人の前に立つ。
長い髪のきれいな女の子の方は頭から一筋の血を流して倒れている。ピクリとも動かない。
「うそ……殺し、ちゃったの？」
あんな石があたるとは思えなくて、自分の力加減がどうだったかなんてもう思い出せない。
「みゅ……」
呆然としていた郁未は、その声に慌てて振り返る。
「みゅー……けほっ、けほっ」
もう一人のもっと小さい女の子の方は激しく咳き込んでいる。意識も失っていないようだ。
「あなた、大丈夫なの⁉」
郁未はその子に手を差し出すが、
「みゅ！」
その子は驚いて後ずさりをする。

「おびえているみたいね……無理ないわ。でも無事でよかった」
郁未は一息つくとバッグと手斧を置いて、幾分かの冷静さを取り戻してもう一度倒れている女の子の方に向き直る。そうして、その子に手をかけようとして、その場の空気が凍りついた。
「いったいこれは何の真似かしら」
その声と共に。
「誰……なんですか……あなたは」
声がかすれてうまくしゃべれない。
足が震えてうまく立てない。
手斧を拾って構えようとするけれど、手が汗ばんでうまく行かない。
それは恐怖、威圧、戦慄。
目の前の女性……少女とはいえないが中年というにはどこかためらわれる、そんな美しい女性に郁未は圧倒される。
「聞いているのは私よ。一体これは何なのかし

ら？」
その人は頬に手を当てて、微笑みを浮かべたまま聞いてくる。
なのに、恐い。死んだ方がましだって思えるくらい恐い。
それは繭も同じ事だった。地面に座り込んだままガタガタ震えている。
「正当……防衛です」
この人を納得させるような弁明ができなければ、おそらく自分は死ぬ。
その認識が郁未の口を開かせる。
この状況下でそれが出来るというのは、賞賛に値するといっていいだろう。
「この人は、この女の子の、首を絞めていて、私は、それを、止めるために」
その時、ガリッ、という音とともに、女性の指がその頬に食い込んだ。
「そう……了承しました。それは災難だったわね」
その微笑みは消えることなく、けれど頬に赤いものが滴って。
「名雪もまいっていたから……ひょっとしたらこんなことになるかもしれない、とは思っていたわ」
頬に食い込む指はぎりぎりと音を立てて徐々に下に降りていく。その女性の美しい顔を汚していく。
まるで、その部分だけが他から貼り付けられたような光景。
「なのに、一人にしてしまって。だめな母親ね、私」
「母……親？」
かすれた郁未の問いに、
「けどね、あなただって悪いのよ？　天沢郁未さん」
その人はそう応える。
徐々に郁未との距離を縮めながら。
「なんで、私の、名前……」
「あら、あたったの？」

その人はちょっと笑って。
「そっくりだもの、母親に」
「お母さんに!?　あったんですか!?」
「ええ、あの人がいなければ私もすぐに名雪の後を追えたのですけどね」
そこで、その人はぱっとしゃがみこんで何かを拾ってそれを郁未の方へ投げつけた。
郁未はすんでのところでそれ、石をかわす。けど、それでそのひとを一瞬見失ってしまって。
「ひっ!?」
横手の風きり音に、郁未は悲鳴とともにしゃがみこむ。
その上を小太刀が通過して、それをかわしたと認識するよりも早く、低くした郁未のあごに蹴りが飛んだ。
「ぐあっ!?」
蹴り飛ばされる郁未。
けれどそうされながら反射的に郁未は手斧を横に振った。手斧を手放さなかったのは奇跡といっていい。
その動きは女性にとっても多少の驚きではあったのだろう。軽く後ろに飛んでそれをかわし、郁未との間合いをあけた。
(殺される、私殺される、なんで知ってるのお母さんの事。殺される、お母さん、私殺される、お母さんひょっとしてこの人に……)
恐怖と疑問で郁未の頭は飽和寸前。そして、
「あら、母親よりは反応はいいようね」
その声で郁未の頭は真っ白になった。
「あの……お母さんの……ことなんですけど……」
秋子は郁未の声に今までと違う響きがある事に気づいた。
「あなたが、お母さんの事、殺したんですか?」
途切れ途切れに郁未はそういいながら、しゃがみこんで前に手をつく。
秋子は郁未の問いに、「ええ、そうよ」と応えた。

未夜子に与えた傷が致命的なものだったとは思えないが、死んだという事はそういう事なのだろう。
「そうですか……」
郁未はしゃがんだまま腰を上げて、極端な前傾姿勢をとる。それは、クラウチングスタートの姿勢に良く似ていた。
違うのは手に斧を持っているという事だけ。
「あなたが、殺したんですね」
その声に秋子は自分が震えている事に気づいた。
（おびえている？　私が？）
「あなたがあああああああ!!」
裂ぱくの気合というには猛々しすぎる雄叫びを上げて、郁未は放たれた矢のごとく飛び出す。
その加速に乗った手斧の一撃は、重く、強く、速く。
ギイインッという激しい音、飛び散る火花、金属破片、ガードした秋子の小太刀はいともたやすく破砕する。
それでも、秋子はその渾身の一撃をかろうじて流す事に成功した。だが、小太刀は手から跳ね飛ばされた。
突進の勢いで激突する両者。
秋子は痛んだ手で、二撃目が来る前に郁未の手首をつかんだ。
ギリギリと互いの歯ぎしりが聞こえそうな距離で、両者は腕に力を込める。睨み合う。
とても醜い顔、秋子はそう思った。
怒りと、恐怖が郁未の顔を醜く歪めている。
自分もきっと同じような顔をしているのだろう。
いまや、二人は対等だった。
対等な力量。
対等な恐怖。
対等な威圧。
対等な怒り。
対等な憎悪。
「私は……あなたを……死んでも……殺したい」

食いしばった歯のあいだから郁未は言う。
それは私も同じよ。秋子は声に出さずそう応えた。
そう、その殺意も対等。
そのような二人が戦うならば、
(どちらかは必ず死ぬわね？　郁未さん)
けれど、次の郁未の声は秋子の予想に反したものだった。
「あなたを……殺すためなら……死んだっていい……けどっ……私、死ぬ訳にはいかないんです!!」
秋子はもう一度郁未の顔を見直した。
「怪我している友人がいるんです、まだ会っていない友人がいるんです、会って確かめなきゃいけない人がいるんですっ!!」
その顔は未だ醜く歪んでいたけれど、瞳には確かな強い理性の光があった。
「了承」
秋子は低くつぶやいて、体を沈め、郁未の体が前につんのめるように引っ張った。巴なげだ。
「……!?」
投げ飛ばされる郁未、けれど手斧は手放すことなく慌てて立ち上がる。
だが、秋子はその間に郁未から距離を取っていた。
「了承しました。確かに私もここで死ぬ訳にはいきません」
秋子は名雪の方へ視線を走らせる。
息はしている。生きてはいる。
だが、その傷が重傷か軽傷かは分からない。
「だからここは私も退きましょう」
秋子は吐き出すように言う。もはやその顔から微笑みなどとうの昔に消えている。
「自己紹介をしておきましょう。私は水瀬秋子、この名雪の母親です」
郁未を睨んだまま秋子はさらに続けた。
「今は、私は私のなすべき事を、あなたはあなたのなすべき事を……。私は、これからどんなことをしても生き残ります。そうして、もしもう一度互いが

再び出会えたならば、その時」
一度区切ってそして、
「決着をつけましょう」
そう言う秋子に郁未は軽くうなずいて、十分な距離を取るまで後ずさり、
自分の荷物をつかんで木立の中へ消えた。

藺は木立の中を闇雲に走る。
そのスピードは彼女にしては速いほうだ。
彼女は泣いていない。でもそれは真琴がくれた勇気のおかげではなく、絶対的な恐怖、涙すら凍る恐怖、そのせいだ。
あの時藺は、手斧と小太刀のぶつかる音で金縛りがとけて、荷物を引っつかんで一目散に逃げ出した。
そして、今も走っている。

恐い恐い恐い恐い恐い恐い恐い恐い恐い恐い……
後ろから何か追ってきそうで、前に何か待ち伏せしてそうで。
藺は今始めてこの島がどんなところかを理解した。
恐い恐い恐い恐い恐い恐い恐い恐い恐い
恐い恐い恐い恐い恐い恐い恐い恐い恐い
恐い恐い恐い恐い……。

藺の小さなからだを占めているのはそんな思いだけで、そんな藺が、あの時つかんだバッグが郁未のものだなんて事に気づくはず、なかった。

293　一歩、前へ

ひとりきり、悪い夢に取り残されたようで。
自分以外はみんな敵に思えて。
人の心なんて解らないから、怯えることしかできなかった。橘さんと同行しているときでさえずっと、

私はいつ殺されるんだろうと思ってた。
『君は逃げるんだ。ここは僕が食い止める』
決して折れない強さを持ったその声を聞くまでは、ずっと。
……今のあたしには、目的がある。
彼の言葉を伝えなくちゃ、生き延びた意味がない。怖くない。怖くない。怖くない。怖くない。怖くない。
考えちゃダメだ。何も何も考えちゃダメだ。
立ち止まったらおしまいになる。また弱いあたしに戻ってしまう。
うずくまって耳を塞ぐだけのあたしにはもうなりたくない。
だから泣いたりしない。何度も首を振る。怯えた心を追い払う。
前だけ視て、瞳を凝らして、少しの変化も見逃さないで、走らなくちゃ。
そして誰かが行く手にいるのなら。
「あ、あの、神尾さんという人を見ませんでしたか……!?」
せいいっぱいの声で、信じて、訊くだけ。
突然の来訪者……あさひは、橘の伝言を受け取っただけで、死に目を看取った訳じゃない。
それなら彼は生きているのだと、信じ込みたかった。
あの時の爆発音は、現場から遠く離れた自分たちの元にも届いていたから。
爆心地に居て無事なはずがない、とか。当たり前

すぎる理屈はどうでもよかった。
　自分も、あさひも、細い糸のような希望に縋って、ただ信じることしかできなかった。
　なら自分はばかみたいにいつも通りに過ごしてやる。笑って、ボケて、突っ込んで、なんの変哲もない日常ごっこを敢えてやってやる。
　見知らぬ島でも、殺し合いの場だとしても。
　そうしていれば必ず、あいつはひょっこり顔を出してくる。この「場所」に帰ってくる。
　照れ隠しにつまらない冗談でも言いながら。
　ここへ、

「…………以上だ。ペースアップしてきたじゃないか……この……調……で……」
　この地域一帯の放送設備が、少々破壊されているのかもしれない。

　雑音混じりの、耳障りな声。
　聞きたくなかった。知らなければ良かった。
　それでも、容赦なく。逃げることもできず、声として事実は突きつけられる。
『橘さん』は帰ってこない。死んでしまったから。
　みんなが何も言えないうちに、呆気なくその放送は終わった。
　風はやわらかいまま、空は青いまま。
　空にはまるでにせもののような太陽。
　じわじわとゆがんで溶けていくだけの虚ろな白。
　眩しすぎて見ていられないから、ぎゅっと目を閉じる。
　ワンピースに、雫が落ちた。
　ねえ、お父さん。
　わたし、お父さんの顔もはっきり思い出せない。
　でも……名前は、まだ覚えてたんだよ。

「あいつ、最後まで格好付け、やったんやな……」
たった数分の、けれど数時間にも感じられる沈黙の後、ぽつりと呟きが漏れた。
『すまなかった』と。伝えられた簡潔な言葉はあまりにもストレートで。
だからこそ、もう取り返しがつかない。
観鈴とあいつと、三人で水族館に行く約束。一緒に食事をする約束。
長年のしがらみを越えて、ようやく笑えるようになったかもしれない矢先。
「アホちゃうか……ホンマもんの、筋金入りのアホやないか」
死んだらなんにもならない。前に進めない。
だけど、なあ、アホは自分らなんかな。
子供みたいにはしゃいで。
みんな怯えながら殺し合っているのに、ぬくぬくと日常の真似ごとに浸かっていた。
その罰なんだろうか。

無茶苦茶な思考展開だと分かっていてもそれでも、
「……あんまり、自分を責めないでください」
あさひのよく通る声に、思わず顔を上げた。
彼女は唇を噛んではいたものの、その表情には何か決意のようなものが見えた。
「橘さんは、私を、ちゃんと守ってくれましたから。不安で怖くてダメになりそうだった私を、この世界に引っぱり上げてくれた。それから晴子さんたちに会えて、私また笑えるようになりました。観鈴ちゃんと晴子さんに会ってなかったら、とっくに壊れてたかもしれないです。あなたたち家族が居なかったら、こうやって話すこともきっと出来なかった」
ゆっくりと優しい声で、あさひは話す。子守歌のような声。
「ありがとう、って……本当に、感謝してます」
野に咲く小さな花にも似た、笑顔と合わさってますます輝きを増す、聞く者の感情をぐらぐらと揺らす、彼女の声の力。

「あさひちゃんは、すごいね」
ふと気づけば。
顔を涙でぐしゃぐしゃにしながらも。
「あさひちゃんは強い子だよ。わたしよりずっと」
観鈴が……笑っていた。
「ぶいっ、だね」
声優って、ホンマに……人の心、動かせるんやな。
せやったらうちらももう一度前見て、歩けるかな。
諦めんと、頑張れるんかな。

「……なぁ、あさひちゃん。信じてる人、おるん？
この人だけは助けたい、この人にだけは会わないと悲しい、そんな人」
「え？」
突然振られた急な言葉に、あたしは間の抜けた声を出すしかできなかった。

「うちと観鈴にはおるんよ。ちょっとの間やけど、一緒に暮らした居候が」
「すごく面白くてね、ちょっとヘンだけど優しい人だったんだよ」
えっとね、飛んでるセミも取れるし、力持ちだし、宿題も手伝ってくれるし、
まくしたてる観鈴ちゃんに、ちょっとびっくりしていた。
「で、これからな、そいつ探してみよかー、て思いついたんや。どうせ誰かにやられてまうんやったら、せめて悔いなく生きたいやろ？」
「…………うん、できることしたいよね」
そこでようやく、唐突な話の意味が、なんとなくわかった。
こんな女の子まで、生き抜くことを決めたんだ。
「あさひちゃんも一緒に行こう。きっと一人より楽しいよ」
「観鈴の言うとおりやで。旅は道連れて言うし」

さっきまでの沈痛さが嘘のように、二人は明るく話す。
気を遣ってくれてるんだ。もうこれ以上悲しくならないように、努めて元気に。
「な。ここの台所で食べられそうなもん探して、そしたら三人で行こ。あんたもうちらの仲間や。今さら嫌やなんて水くさいこと言わせへん」
嬉しかった。
こんなに優しいこの人たちに会えて。こんなに、温かい言葉をかけてもらえて。
「ね、もうお友達だよね」

そういえば。
ファンレターをよくくれた珍しい名前の彼は、もういないけど。
あたしを好きだと言ってくれた彼は帰らないけど。
伝えてくれた思いは心の深いところに残るから。
私は彼の分まで、橘さんの分まで、出来るところまで頑張って生きようと思う。
この家族と一緒に。
「はい。……私で、良ければ」
頷きながら浮かんだ大事な人の姿は。
即売会で出会った、あのやさしいひとだった。

294 優しい嘘

「………」
楓がそのままの姿勢で女を見下ろした。
――この島でこの状態ではもう助からないだろう
それほどその人は傷ついていた。
「あら、あなた……追ってきたの？」
「はい……あの話を知っているあなたが生きている

のは……都合悪いですから」
「……そう」
南がいつものように、笑って。
「ただね……夢を叶えたかったんですよ。私の夢をね。こみパのような、大きな即売会を――」
南と主催者の間で、どんなやりとりが行われていたかは分からない。
だが、南の表情は終始穏やかなまま。
「ひとつだけいいですか？　どうせ死ぬんですから、どうだっていいと思います。嘘も方便ですし。私は改心した、そう思ってくれませんか？」
楓が無表情に頷く。
「別にどうだっていいんですよ。私は……どんな理由があろうと……ジョーカーなんですから」
「……」
「ただ、最後には……夢を見させてあげたいじゃないですか」
「……そうかもしれません」

南が最後に、彩の最後に果てた場所を一瞥し――。
傷つきすぎたその表情は、もう楓には分からなくて。
「殺るんでしょ？　どうぞお好きに。この状態じゃ、どうせ助かりませんから。このまま生き長らえてもつらく、痛いんですよ……」
本当に最後まで変わらぬ口調。
「はい」
楓の鉄の爪が光る。
「和樹さん達にも嘘をついてくださいね」
ドシュッ！
同時に楓の爪が南の胸に深く食いこんだ――。
（……本当は誰よりも哀しい女性だったのかもしれませんね）
楓は南の亡骸に軽く会釈して、また森へ消えた。

八十番　牧村南　死亡

【残り53人】

295　relay

江藤結花・来栖川芹香・スフィーの間には、何とも言えない重い空気が流れていた。この島に来てからまだ人が死ぬ場面を見てこなかった三人にとって、長谷部彩の死は、苦楽を共にしてきた仲間の死という事実以上に、受け入れがたい現実として三人の胸に深く刻み込まれていた。

うつろに歩く三人の進む道、その道の脇に、一人の少女は息絶えていた。
もう何度も見た光景。これまでは無視して通り過ぎていたのだが、その少女の横顔を見た結花が、
「あっ、この人……」
ゆっくりと歩み寄り、顔をのぞき込む。
「やっぱり……、そうだ」
静かにつぶやく。
「昨日の夜中、私を斬りつけようとした人」
深山雪見の事だった。ただ、結花も他の二人もその名前は知らない。
結花は、昨日の出来事を思い出していた。
あの時は、切羽詰まった表情で、私にサバイバルナイフを向けていた少女。でも今の表情は、どことなく穏やかで、落ち着いた感じ。
そこに、少しだけ救いを見た気がした。
「この子も、誰かに殺されたんだ……」
「……」
「もう、私たちには止められないのかな。このゲーム」
「そんなことないよ」
とスフィー。
「私、許さない。このゲームを動かしている人も、それに乗って人殺しをしている人も。だから、早く結界を解こうよ」
「うん」

「…………」
すぐ近くに生えていた花を二、三本ちぎり、そばに手向ける。
脇に落ちていたライフルと、荷物を手に取った。
「誰が殺したか解らないけど、この仇は私たちが取ってあげる。きっとね」
「…………」
「そうだね。ゲームを早く終わらせよう」
三人はゆっくり立ち上がり、決意も新たに歩き出した。

296 反転

緊張感は、長くも続くはずはなく――
「みゅーっ、おなかすいた……」
林の中で座り込み、繭はぼやいた。
幼い精神構造をしている繭にとって一時の感情というものは長く続かなかった。
新たに押し寄せた空腹感に恐怖が負けていた。
「みゅーっ……」
困り果て、鞄の中を探る。
中に五つのキノコが入っていた。
「……うー」
先程までの自分の鞄に、こんなものが入っていたのか？
そんなことはどうでもよく、キノコをこのまま食べるかどうか、悩んでいた。
「…………」
しばらく、キノコとにらめっこ。
やがて、意を決したようにキノコを手にとり――
「ぱく」
口の中へ放り込んだ。
「さて……これからどうしようかしら」
繭はひとりごちた。
その声に、先程までの幼さは、全くない。

（とりあえず、この馬鹿馬鹿しいゲームから、生きて帰らないと。でも、そのために人を殺すなんて……最低ね。何人かで集まれば行動のとりようがあるかもしれないけど。見ず知らずの人間を信じるほど、甘くもなれないしね。浩平さんや瑞佳さん七瀬さん。確か見覚えがある。探そう、この人達を。それ以外の人には、絶対に見つからないように行動しましょう。私には、武器がないのだから――）

数秒で今後の方向性を決める。

そんな自分の思考に違和感を感じることはなかった。

続いて周囲の木々を見渡し、そのうちの一つに近付いた。

（こっち側だけに苔が生えている……ということは、太陽の当たらない北はこっち……）

方角を特定し、木々の間から覗く太陽を見た。

（この季節でこの太陽高度。時刻は三〜四時ってところかしら）

ある程度の目安をつける。この間、わずか十秒。

荷物から地図を取り出し、林の場所と島の位置関係を頭にたたきこむ。

（さ、そろそろ行こうかしら。浩平さん達、無事だといいけど）

現在位置と時刻を特定してから、荷物を持って立ち上がった。

（それにしても……私ってこんなキャラじゃなかったわよね。このキノコを食べたから？　そうとしか思えないけど、非現実的すぎるわよ。とにかく、効果が切れることもあり得るから、大事にとっておかないとね）

297　傀儡は踊る

（なんて、無様な！）

孤影が駆け抜ける。速い。

少し近付けばそれが、長身の女性だと判る。手には散弾銃。更に近づけば、冷たい美貌を苦悩のために歪ませているのが判る。
彼女の名は篠塚弥生（四十七番）。
彼女は常に人生を己の力で——わずかに例外もあるが——切り開いてきた。素質もあったろうが、そのための努力を惜しまなかった。高度な知性も、運動能力も、克己心なくしてここまで鍛え上げられはしなかっただろう。
それが今では、下らぬゲームのために利用されている。
他人はドーベルマンのようだと言うかもしれない。猟犬として。
だが彼女は、狼でありたかったのだ。首輪も、檻も必要ないのだ。
しかし今、彼女はあえて首輪をはめている。
（九人、殺す）
罪を犯すのは、怖くない。
今までだって、日向ばかりを歩いてきたわけではない。
自らの夢のために。あえて私は、傀儡となった。
『あ、来た来た、やっと戻ってきたわよあのアホ』
少女の声に足を止める。
木陰に身を隠し声のほうを見ると、そこには二人の少女が立っていた。手前の一人は本を、奥の一人はタライ（？）を携えて道の奥を見ている。
視線の先、はなれた所に少年。銃を持っているようだ。
目を瞑り、大きく息を吸い、シナリオを考える。
今ここで、少女たちを始末するのは簡単だ。
しかしそれ以上を狙えば、次弾装填の間に少年に撃たれるだろう。
可能ならばここで、三人殺しておきたい。
少女二人を殴りつけた隙に少年を撃つ。これはどうか。手前の少女を後から蹴りつけ、奥の少女もろ

とも転倒させる。少年にとっては少女達の背後から起こる出来事だから、感知されにくいだろう。
少女達は、少年のあとで始末すれば済む。本やタライ（?）に後れをとるとは思えない。
ゆっくりと息を吐き、再び大きく吸い——息を止める。目を開く。
不確定要素は多いが、迷いはない。
自分を信じて行くのみだ。
（——よし！）
弥生は飛び出した。ひとつの殺人機械として。

（くそう、高槻め！）
泥だらけになりながら、獣道を行く黒い影。
ここに来て何度思ったか知れぬ台詞を、こころの中で繰り返す。
高槻の放送により槍玉に挙げられ、全員に狙われる獲物として怯え、殺し、騙し続けて、今を生きている。

この憐れな男の名は巳間良祐（九十三番）。
彼は教団に身を投じ、熱心な信徒として、優秀な研究者として貢献した。過去を捨て、家族を捨て、我が身も捨てて教団のために働いた。それが今では、ゲームの駒。主催者の、高槻の傀儡。
（高槻、俺の事がそんなに気に食わなかったのか？）
総じて高槻以上のポテンシャルを示しつづけてきた良祐だが、教団の覚えはさほどめでたくない。高槻ほど、世渡りが上手くなかったのだろう。
（それなら、お互い様だよな？）
薄く笑う。自分はこんな笑いをする人間だっただろうか？　晴香と一緒に笑っていた頃は——どうだっただろう？
（もう、忘れたか……）
とにかく、今は生き残る事だ。そのために、殺すことを躊躇わない。どうせ皆、自分を殺しに来る。殺し殺して、高槻をも殺す。それでいい。

良祐は様々な可能性を考慮した。
まず危険なのは銃を所持する者だ。自分の銃を見つめながら考える。これがなければ、今までだって一人も殺せなかっただろう。
それから、能力者。そして訓練を受けた者。これらの者達と正面から戦うのは不味い。なるべく不意打ちやだまし討ち、もしくは混乱に乗じて殺すように計画しなければ危うい。
ズドン!!
銃声。大きく、近い。重ねて悲鳴が上がったような気もする。
『ふざけんじゃないわよオバサン!』
ドスの聞いた声が聞こえる。どうやらこのまま進むと林道に出るようだ。
少年が倒れている。離れたところに銃。
これは、チャンスだろうか？　上手く立ち回れば、多くの危険要素を排除できるようだ。
何より銃が手に入るのは、見逃せない。
(落ち着け、そして間違うなよ、良祐)
自分にそういい聞かせ、握った拳銃を隠しながら、良祐は林道へ踊り出た。
運命の悪戯だろうか。
二人の傀儡は、ほぼ時を同じくして浩平たちに襲いかかったのだ。

298　形而下の闘い――前哨

正直言って、強がりだった。
ただ、私がめそめそしていたら、相沢君はなかなかここを離れられなかっただろうから。
私は、彼の背中が遠くなっていく様を、ぼおっと眺めている。
「……い……ない」
すると、横から少年が語りかけてきた。
「……ここで立ち止まっちゃいけない」

私にだけ……他には誰にも聞こえないくらい、密やかに。
「確かに友達が殺人を犯した、なんて言われたら落ち込むのが普通なのかもしれない。……だけど意味が無い生が無ければ、意味がない死もまた無い。誰もが、世界の礎になっていくんだ。綺麗事じゃなくて、真実としてそうだ。今、この瞬間の僕らだって、そういう風に死んでいった彼らによって生かされているのと同じ。……そうでなくても常に人間は、いや、生命は何かを犠牲にして生きているものさ。それが今のようにより分かりやすい形になっただけ。だから……もっと前向きになっていい。君にとって本当に大事なことを追いかけて構わないんだ」
「私にとって……大事なこと……」
小さくなっていく背中に、響いてくる囁き。
「傷ついているのは誰なのか。苦しんでいるのは誰なのか。……君が本当に助けたいのは誰なのか。その気持ちに忠実でいい。誰にも文句を言われる筋合いは無い」
「私にとって……大事な人……」
「それに……君がそんな表情をしていれば、その子が戻ってきたとき、きっと悲しむよ」
——茜。
「その子が傷ついているのなら、君はそれを癒してあげなきゃいけないはずさ。違うかい？」
まるで、見透かされたように、少年の言葉が心の奥底で響いた。
少年がこっちを向く。変わらない、笑顔のままで。
……違ってない。全然違ってない。
私が茜を好きだって言う気持ちに、これっぽっちも偽りはないし、これっぽっちも揺らぎは無い。
「——私は、茜の帰ってくる場所になりたい」
涙が、零れた。

——それは相沢祐一と別れてすぐの、二人の会話。

「……ま、そう浮かない顔をしてるものじゃない」
え、と私は振り向いた。
相沢君が立ち去って、その姿が見えなくなって、少年の囁きを聞いて……それからさらに後のことだ。
少年が私を覗き込むようにして笑っている。
浮かない顔……していたのだろうか。よく分からない。
少なくとも、自分では気持ちを切り替えたつもりだった。でも、表情までは上手く切り替わっていなかったみたいだ。
少年はちっちっちっ、と指を振る。
「こう言っちゃなんだけど、見え見えだよ」
……と、言うよりも、あれだけ大泣きしたんだから、そりゃあちょっとやそっとじゃ変わらないよ。
……そう言い返してやった。
「なんだ、自覚はあったんだ」
「うっさいわね！」
私は顔を赤くして彼に叫んだ。
……人前で声を上げて泣いたことなんて無かったもの。しかもよりにもよって相沢君の胸の中だなんて……。
「相沢君ファンの子に殺されちゃうよ……ホント」
あえて茜とは言わない。ううん、言えない。だって、全然シャレにならないんだもん。
「ふうん、彼、人気があるんだね」
少年が感慨深げに唸った。
「さあ？　どうなのかしらね。相沢君とは一年しか一緒にいなかったし、まぁ……」
私はあさっての方向を向いて言った。
「少なくとも、他の人よりほんの少しは仲良かったかな」
「茜、……っていう人も？」
私は、その台詞に思わず口ごもる。
「……そうだね。でもほら、茜はあんなだから、ちょっと初対面の人だととっつきにくいところがあってね……って、そう言ってもあなたには分からない

よね」
「そうだねぇ」
　少年は、ははっと苦笑いをした。
「まあ、そういう人なの。それで……まあどうして相沢君が茜のことを気にしだしたのか、未だに分からないんだけど、でも」
　私は空を見上げた。
「嬉しかったな。だって、その頃茜を名前で呼んでくれる友達はいなかったから」
　……中学を卒業してから、茜はより他人というものを拒絶し始めた気がする。その理由は分からない。まさか、相沢君の転校のせいだったなんて言わない。
……でも、違う高校に進んだ私に出来ることは、せいぜい授業をサボってあの子の学校へ遊びに行くことくらい。……そのくらいしか出来なかった。
「どうなんだろう。私、ずっと茜とは一緒だったけど、そのくせ全然あの子のこと分かってなかったのかもしれない」
　大事な時はおいてけぼり。あの子が一番苦しい時に、私は傍にいて上げられない。……今だって。
「……つらいかい？」
「……つらくない」
……わけ無いでしょ。言葉にならなかった。
「……ごめん。元気付けようと思ったんだけど、どうも失敗したみたいだ」
　そういって、少年は決まり悪そうに頭をかく。
「どうも女の子って苦手なんだよね。いや、別に男の子に慣れてるってわけじゃないよ。変な目で見ないでよ、僕はノーマルだよ」
　別に、私はそこまで思考が追いついていないのに、この少年は勝手に喋って勝手に狼狽している。その様子が……なんだか、とても珍しいような気がして
……私はほんの少し、口元に手を当てて笑った。
「笑わなくったっていいじゃないか、こっちは真剣に弁解してるって言うのに」
　——ほら、こんなとんちんかんなこと言ってる。

「全く、さっきみたいに黙ってれば良かったよ。僕はあまり話をするのは得意じゃないんだ」
そう言って、今度はほんの少し怒った素振りを見せる。
「分かった……分かったから」
私は少年をなだめた。目尻には涙が溜まっていた。
「なんだ、君は僕のことを見て泣くほど笑ってたのかい？」
「いや、そんなことないよ。ホントに」
本当に、どこまで本気なのか分からない。
……でも、ほんの少し救われた気もした。
「ま、いいよ。元気はでたかい？」
「出たよ、ありがと」
「どういたしまして。道化を演じるのはうまいもんだろう？」
そんな感じでこんどは少年はすまして見せた。
「まだ演じてるつもり？」
私は笑ってそう言った。

「心外だな、これは演技じゃないよ」
そういう彼の口調はほんの少し不満そうだった。
「じゃあ今度は君が話の続きをしてよ。何度も言うけど、僕が話が苦手なのは本当なんだ」
「しょうがないわねぇ」
私はふぅと息を吐いた。
「でも、もうあまり話すことは無いかもね。高校に入ってからは、さっきも言ったけど別々になっちゃったから。それでもまとわりついたけどね」
「あはは、頑張ったんだね」
「そりゃそうよ、なんたって茜には私がついていないと」
——逆だったかもしれないけど。
「でも高校に入ってからは案外楽しかったのかもね。折原くんとかとも知り合えたし」
「折原くん？」
「あ、うん。男の子でね。なんていうか……そうね、一言で表すなら、ずばり変な子」

「うわぁ」
少年は不可解な顔をした。……的確だもん。
「おもしろい人だよ。うん……この島にもいる。もしかしたら、どこかで遇えるかもしれないよ」
ちょっと、自分でも分かったけど、声が沈んだ。
「そっか……」
少年は頷いた。……この人とだったら、きっと折原君も仲良く出来ると思う。……心から。
「ま……彼も大切な友達だよ。茜のことを名前で茜って呼んでくれる貴重な……ね」
少年は、黙って聞いていた。
「……その、茜さんは、なんて苗字なのかな」
「茜？　さ…………………………………」
「さ？」
「……………………………………止めた」
「はい？」
「苗字教えたら、絶対あの子のこと苗字で呼ぶでしょ」
「え？　え？　え？」
少年は困った顔をしている。私はそれを見てちょっと楽しくなった。
「だから教えてあげない。あの子のこと名前で呼んであげて。茜、って」
「いや、でも」
「何よ、嫌だって言うの」
「いや……」
「ほら嫌って言った！」
「いや、これは違うって……」
「何よ、はっきりしなさいよ」
私はつん、とそっぽを向く。……もちろん演技で。
「いや、僕はその茜って子とは面識が無いし」
「私とはあるでしょ」
「え、あ、う、うん」
「じゃあ問題なし」
「ど、どうしたらそういう結論になるのかな」
「もう、私の友達は茜の友達、茜の友達は私の友達。

故に呼び捨てＯＫ、これ定説よ、知らないの？」
　そんなの知らないよ、そんな感じの反論が来ると思ってた。でも違った。
「友達……？」
「そうよ」
「……僕のこと、友達と呼んでくれるのかい？」
「え、……あ、うん。……ダメ？　もうすっかり私はそのつもりだったんだけど」
　今度は私がしどろもどろする番だった。思わず、両手を背中で組んでもじもじしてしまう。
「そう」
「そう……ってそれだけ!?」
「ありがとう」
「っ……」
　……不意を突かれた。彼は、私の目をまっすぐ見つめてくる。
　……頬が、赤くなるのを感じた。
「……僕、何か変なこと言ったかな？」
　不安気……と言えば一番近いんだろうか、なんとなく余裕の無い表情で彼は私を見る。
「……変よ、友達だって言ったくらいで、そんな」
「そうなんだ」
　少年はそう言うと、足元にあった小石を蹴った。
「僕には、今まで友達なんて呼べる人はいなかったから」
「うそ」
　私は思わず反射でそう言った。
「ホントだよ。同居人はいたけど、でも友達と呼べるような人は僕にはつくれなかった」
　不器用なのかな、そう言って少年は笑った。今まで見た中で一番愁いを帯びた笑いだった。
「そう……じゃあ私があなたの友達第一号って訳ね」
「そうなるかもね」
　少年は肩をすくめた。
　どうして、とは聞けない。彼のことを気遣ってと

いう訳ではない。ただ、彼の心の中にあるものを知って、それを背負えるだけの自信が無かった。
……でも、それを覗きたい気持ちも十分にあった。
「いいじゃない、光栄よ」
私はそう言って右手を差し出す。
「……ん？」
「右手」
「右手？」
「出すの！」
ホントに、どうしてこの辺りのことに要領が悪いのか。
「あ、うん」
そう言って少年があわてて右手を出す。私はそれを握った。
「握手」
「……」
「これからも、よろしくね」
……ちょっとだけ、恥ずかしかったかもしれない。
でも。
「……うん」
……彼は、ちゃんと握り返してくれた。
その温もりが、たまらなくいとおしく感じた。

299　剣風

「あ、来た来た。やっと戻ってきたわよ、あのアホ」
辛辣な口ぶりとは裏腹に、大きく手を振る七瀬。
「もう、そんなこと言うとまた喧嘩になるよ～」
苦笑を浮かべ、共に浩平を迎える瑞佳。
この劣悪な環境下においても。
三人寄れば心強く、そして平和な日々と変わらず生きていけた。
そんな七瀬と瑞佳の前に。否、背後から。災いが襲いかかってきたのだ。
「きゃあっ！」

「ぅわっ！」
無防備に立っていたところを、腰に強烈な蹴りをくらい、吹き飛ばされる瑞佳。
巻き込まれる七瀬。
ズドン!!
そして銃声。
何が起こったかわからない。しかし、そこにいる人物は危険だ。
七瀬は瑞佳に巻き込まれ倒れながらも、その人物を視認していた。女だ。
あの大きな銃を撃った!?　折原は無事!?
しかし、それ以上の心配をする余裕はなかった。
発砲するなり、女は銃を振り上げ——叩きつける気だ！
「ふざけんじゃないわよオバサン！」
咄嗟に手にあったタライを投げつけ、混乱と痛みで行動不能に陥っている瑞佳をどけて、転がる。
手近な枝を拾い、素早く立ち上がる。
女は弾を装填している。今、戦わねば全員死んでしまう！
間合いは三歩。
そう、今なら「間に合う」はずだ。
七瀬は現在の乙女チックな外見に扮する以前は、剣道をやっていた。故障がなければ、未だトップクラスだったかもしれない。この間合いなら、普通の人間に負ける事はない、はずだ。
「せやッ」
鋭く踏み込み、顔面にフェイントをかけて脇腹を痛打する。
計算外の反撃に、女は顔を歪ませる。
しかし、装填は完了している。つまり、引き金を引かせちゃいけない。
休んじゃいけない。休めない。
折原が来るまで——折原が無事なら、だけど——休まない。

手打ちで構わない。とにかく速く打ち込む。
しかし女は銃身で受け止め、かわし、時折打ち返しさえしてみせる。この距離ならば私が優勢。けれど一度離れればお終い。
私は、この女に勝てるのかしら？
ブランクが七瀬を弱気にする。
「う、ううーん」
背後で瑞佳の声がする。
そうだ、少なくとも瑞佳だけでも逃がさないと。
折原は何をして、いやそもそも無事なの？
ガキン、と音を立てて枝と銃身が交差する。互いにぐぐっと力をこめる。
「瑞佳！　折原のところへ走って！」
振り向かずに、視線は女のほうに向けたまま叫ぶ。
「な、七瀬さん！」
「早く！　早くあのバカ呼んできて！」
いつもだったら呼ばないでも現れて、おせっかいかますあのバカ。今、乙女のピンチに現れないで、どうするっていうのよ？
「う、うん！」
瑞佳の走り去る音がする。
——これって、また貧乏くじ引いてるのかしら？
七瀬は今更のように、そう思った。
でも、構わない。あたしだけ生き残って、それでどうするっていうのよ？

300　さよならは別れの言葉

林道を、小走りに進む浩平。
迎える長森と七瀬が手を振っている。
仲間が増えた。しかも強そうだし、先行きの展望もある。助かる可能性が増えたというものだ。
行く手で二人が手を振っている。俺はあの二人を

守る、そう心に決めてどれほどの時間が経っただろう。
きっと三人揃って、帰れるさ――そう確信していた。
二人が、倒れるまでは。
突然長森が前のめりに倒れこみ、七瀬を下敷きにする。後に女が立っていて――銃口がこちらを向いていた。
(マジか⁉)
咄嗟に左へ跳び、銃弾をかわそうとしたが、バラバラと右手を中心に弾が食い込む。散弾だった。
「ぐあっ！」
鮮血を振り撒き、銃を取り落とし、浩平は倒れた。
(く、くそったれ……！)
打撃音が遠く聞こえる。誰かが戦っているのだろうか？
撃たれ、混乱し、体が上手く動かない。

耳がいかれているのか。だが、今立たねば。
そうだ、長森が、七瀬が、危ない！
落とした拳銃に目をやる。
こいつがあれば、みんな助かる。
しかし。
希望を絶つかのように何者かが拳銃を踏み押さえる。
「⁉」
黒いコートの男が立っていた。なんだって管理側の人間が邪魔しやがる？
怒りが浩平に力を与えた。一息で立ち上がり、無事な左手で男の胸倉を掴む。
「てめえ、何しやがる⁉」
男は意外そうな顔をしたが、余裕を見せて言った。
「ふむ。生きていたのか」
「何だと⁉」
興奮する浩平を現実に引き戻すようにカチリ、と金属音が響いた。

コートの下に拳銃。これは、よけられない。
「それじゃあ、これでさよならだ」
額に汗が、右手に血が、つうっと滴り。
顎と、指先から、ぽとりと垂れ落ちた。
そのとき声がした。
「浩平ー！」
コートの男が動揺する。慌てて長森のほうを見る。
一瞬の隙。
「こんの野郎！」
被弾した右手で、力任せに殴りつける。
コートの男を吹き飛ばし、転倒させるが、自らも痛みに怯む。
それでもどうにか拳銃を拾った。
「浩平！　七瀬さんが、七瀬さんが！」
駆け寄る瑞佳は、明らかに混乱していた。
「来るな長森！　こいつは銃を持っている！」
浩平は長森を制して叫ぶ。狙いが遅れる。
ドドン！
倒れたまま男が発砲し、遅れて浩平も発砲する。
この距離ならば。
外れるわけは、ない。

(最悪ね……)
七瀬は徐々に受けに回っていた。
そもそも枝は太く、握りにくいため握力を消費する。銃撃のプレッシャーに怯えながらの戦いは、精神を消耗する。乙女生活によるブランクは、スタミナを奪っていた。
そして何より、古傷が痛み始めていたのだ。
もしここで、間合いを離されたら。
もう、飛び込めない。
般若のような形相で攻め込み始める女の打撃を、どうにかそらしながら、七瀬は焦りを隠して応戦する。
ガシン！

何度目かの鍔迫り合い。だが、今までのようには力が入らない。
押し込まれ七瀬は苦痛に顔を歪める。
そのとき。
ドドン！
重なる銃声が届く。ついに七瀬の集中が切れた。
「折原!?」
叫ぶ七瀬に女の脚が上がる。左脇に蹴りが入り、よろめく七瀬を残して女が後に飛ぶ。
ついに、間合いが離れた。
「貴女を評価しなかったのは、私の失策でした」
そう言いながら、女は息を整え散弾銃を構える。
「でも、これでお別れです」
負けた――肩で息をしながら、腕を下ろす。もう、動けない。
「オバサン、なんであたしを殺すのよ」
今更尋ねても、どうにもならないけれど。なんとなく口にした。

しかし女は意外なほど真剣に考え、答えた。
「大切な人の――二人の、幸せのために」
ちょっと驚いた。七瀬は諦めの苦笑交じりに呟く。
「なによ、それじゃあたしと同じじゃない」
今度は女が驚いた。異常なほど、驚いていた。
「七瀬えええええ！」
ドン！　ドン！
その虚をつく形で折原の声、そして銃撃。
今だ！　動け動け！　動け身体！　そう念じて踏み込み、小手を打つ！
「せいッ！」
バシン！
紫電の速さで右手甲を叩く。散弾銃が跳ね落ちる。
七瀬は即座にそれを蹴り飛ばし、緊張の過ぎた震える手で構え直す。
もはや虚勢でしかない威嚇だったが、そうする他になかった。

「くそおおお！」
　折原が叫び、泣いていた。何故泣くの？　その意味は？
　七瀬の迷いを他所に、女が溜息混じりに呟いた。
「ほんとうに、失策でした」
　今度こそ、これ以上動けない。今でも女のほうが余裕がありそうだ。
　頭が回らない。だから、七瀬はただ答えた。
「そう、みたいね」
　その言葉の、何が面白かったのか。女は小さく笑い、身を翻すと去っていく。
「さよなら。生きていたら、また逢いましょう」
「……あたしは二度と、遭いたくないわ」
　七瀬は、枝を取り落とした。

301　その頃綾香は……

「……まいったわね」
　――あとで山を降りたところで落ち合いましょう！　絶対来るのよ！
　自分の言葉を思い出す。
　だが、いつまでたっても彼女達は来ない。
「今ごろ何やってるのかしら……」
　最悪の結果を考えないようにしながら綾香はひとりごちる。
　山のふもとのそれほど深くない洞穴……
　危険を避けるために、芹香達を探す時など外に出る以外はここに隠れ潜んでいた。
「この島にまだこんな所が在ったなんて……まあ、感謝しなきゃならないのかしら？」
　綾香の足元に倒れたまま動かない一人の女の子。
　仲間と散り散りになった際、綾香はリアンだけを連れてここまでやってきた。
　リアンの容態は、正直良くない。
　それほど深くないはずの傷だったが、少しずつ傷口の周りが変色すると共に、生きているのが不思議

なくらいの高熱に見舞われていた。
「毒でも……塗られていた？」
綾香は残り少ない飲料水を手持ちのハンカチに染み込ませる。
南の手裏剣を思い出す。
今確かめる術はないが、それならば今のリアンの症状も合点がいく。たっぷりと水を含ませたハンカチでリアンの汗を拭き取り、そのまま額にそれを乗せる。
見よう見まねだが、リアンの腕の傷口から上を、手ごろな布できつく縛る。
「そうだとしたらどんな毒なのかしら……」
——手ごろな布……そんなものが洞穴にあるはずもないので、綾香のスカートを破りとっただけの代物だ。結構丈夫なのが救いか——
「解毒剤——そんなものが都合よくあるはずもないか……。私、なんて無力なんだろう……こんなとき格闘技なんてなんの役にも立たないじゃない。
スフィー、舞さん達……そして姉さん、早く来て……！」
葵は、もういない。綾香の絶望と不安は既に頂点に達していた。
綾香はまだ知らない。舞が、そして佐祐理が、もうこの世にいないということを。

302　最後のことば

「おおおおお！」
号泣が、聞こえる。
七瀬は痛む腰を押さえ、のろのろと散弾銃を拾った。
このゲームの現実を、ようやく体感したのだと思った。
振り向けば、浩平が地を叩いている。
涙を流していた。

号泣が、聞こえる。
その奥に黒いコートの男と、瑞佳が……倒れていた。
視界が暗転する。ぎりりと奥歯をかみ締める。
涙が溢れていた。

号泣が、聞こえる。
二人の目が合う。
七瀬は震える膝を意志の力で抑えつけると、大股に浩平に歩み寄り、引き摺り上げた。
そして胸倉を掴み、叫ぶ。ちょうど浩平が、良祐にしたように。
「何やってんのよ、このバカッ！」
「ななせぇ……ながもりが、長森が……俺を、俺をかばって！」
「うるさいッ！　泣くな！　聞きたくない！」
手を離し、浩平をひっぱたく七瀬。
その七瀬も、ぐしゃぐしゃに泣いていた。
「バカッ！　バカッ！」
何度も何度も、ひっぱたいた。
やがて浩平は膝をつき、七瀬に抱きついて、泣いた。
七瀬も浩平の頭を抱いて、泣いた。

号泣が、聞こえる。
その悲痛な叫びに、小さく細い声が重なった。
「こう、へい……？」
二人はぴたりと泣き止む。
「長森!?」
「瑞佳!?」
微かな希望の光に、二人は慌てて駆け寄るが……同時に歩みを止めた。
血を吐いていた。目に光がない。
これは助からない。そう思った。
「こう、へい？」
「お、おう」

「いつも、いつも、ありがと……ね。待っててくれたとき、うれし、かった……よ」
「なんだよ、それ」
「もう、駄目、みたい、だから……ね」
「何言ってるんだよ、ばか。お前がいなくなったら、毎日遅刻しちまうじゃねえか」
「だいじょぶ、だよ。ななせさん、が、いる……もん」
七瀬が息を飲む。
どんなに瑞佳を見つめても、視線だけが合わない。
もう見えていない。そう感じた。
「ね……？　だいじょぶ、だよ、ね？」
「瑞佳が大丈夫なら、大丈夫、だよ……」
「そうだぞ、コイツには無理に決まってるだろ、このばか」
「ええ、ずるいよ、そん、なの」
ごぽ、と音を立てて、血を吐く。
「長森！」
「瑞佳！」
呼吸が、浅くなっていく。
「ね、こうへい？」
「お、おう」
血が、止まらない。
「大好き、だよ？」
「おう、おう」
そして、最後に。
「——ぎゅって、して……」

六十五番　長森瑞佳　死亡
九十三番　巳間良祐　死亡

【残り51人】

303 ――――漸行

……なんというか、不思議な感じだった。
この少女と出会ったのは本当に偶然に過ぎなかったんだけど、しかし――
「ねえねえ」
くいくいっと服のすそを引っ張られる。
「ん、なんだい」
「お腹空いた」
――と、まるで十年来の友達のような気安さで。
そう、本当に不思議だ――
「まあ、あれだけ走ったり泣いたりしてたら、そりゃあお腹も空くだろうね」
「なによー」
ぷくーっと詩子は頬を膨らませる。
――不思議と、心地良い。
こんな気持ちになったのは、初めてかもしれない。
郁未と出会った時は……ＦＡＲＧＯという籠の中だったからか、こんな気持ちにはならなかった。
……それ以上に、彼女は悲痛だったからか。もちろん、あそこでは彼女に限ったことではなかったが。
「ごはんごはんっ」
「……はいはい」
僕は辺りを見渡してみる。すると、丁度脇道の先にひらけたところが見えた。
「じゃあ、あそこで休憩しようか」
僕はその方向を指差していった。
「はーい」
言うや否や詩子は駆け出して行った。
……奔放な女の子だ。でも、これがきっと普通なんだろう。僕はそういうことを何も知らない。
「はやくはやく」
着いた先で僕のことを手招きする。
「はいはい」
言われるままに、僕も少しだけ早足になる。

「君、まさか自分の食糧食べ尽くして、僕にたかろうとか思ってないよね？」
「失礼ね、ちゃんと残ってるわよ。詩子さんはそんなに大食いじゃないもん」
ま、別に僕の分をあげることにはやぶさかでないんだけど、とりあえず黙っていよう。
特に僕は食べる気も無いし。
「それならよかった」
そう笑っておく。そうするのが、この場では相応しい気がした。
そして僕らはそこに座る。つかの間の休憩を謳歌するために。

「ねぇ……、ちょっと気になったんだけど」
座るために僕が鞄を下ろしたとき、彼女がふとそう尋ねてきた。
「なんだい？」
「何であなた鞄二つもあるの？」
詩子の質問に、思わず少年はきょとんとした。
「ああ……」
ようやく合点がいった。
「歩いているときに、何か僕のほうをちらちら見てくると思ったら、それが気になっていたんだ」
「う、まあね……」
ちらちら見ていたことがばれていたと知って、詩子はちょっと口ごもった。
……まあ、当然か。
「落ちてたのを拾ってきたんだよ。誰も使ってないのなら僕が使ってもいいかなぁって」
僕は苦笑いをして言った。……わざと嘘をついた。
何で、そんなことを言ってしまったのか。
詩子に無駄な負担をかけたくなかったから？
……別に、言ってしまってもよかったんじゃないか、この鞄が形見だって。
でも、はばかられた。
確かに、僕が殺したわけではない。

……でも、これは僕の殺意の証明でもある。

そんなものをさらけ出して、この空気を壊してしまうことが、ひどく……惜しく思えた。

偽善、だろうか。

確かに、僕は彼女に隠し事をしてしまった。

でも、……それでも、言わない方が、いいような気がした。

「そうなんだ、もったいないことをする人もいたんだね……」

詩子は素直にそう言った。

……納得したのか、この子は？

「だったらさ、二個も鞄持ってる必要ないんじゃないの？」

「え、そうかな？」

「どうせ中身はほとんど一緒なんでしょ。そんなにかさばるわけでもないし、だったら、一つの鞄に全部詰め込んじゃおうよ」

詩子の提案は至極もっともなものだった。

でもね。

僕は心の中で苦笑しつつ付け加える。

僕はまだ、二つとも鞄を開けてないんだよ……と。

「ねぇ、やっとこうよ。私も手伝ってあげるからさ」

詩子はうきうきした様子で鞄に手を伸ばす。

なんだ、君がやりたかったんじゃないか。

僕は思わず苦笑した。

少し汚れていて、少し重い。

そんな鞄を見ていて僕は思う。

ところで……、どっちがもともとのボクの鞄だ？

「え～とこれは水ね。でこれが食料……、ってちょっと、あなた何も口つけてないじゃない、一日飲まず食わずで歩いてたの!?」

詩子は、手近にあった鞄の中身を出しつつそう言った。

そりゃ開けてすらいないからねぇ……。

詩子は僕の葛藤になど気付きもしない

「あ……。いや、水分は補給したよ。水道とか見つけたから」
詩子のセリフに驚嘆……というよりどうも非難の色が強いように思えた僕は、とりあえず自分を弁護しておくことにした。
「ダメよ！　折原君じゃないんだから二日も水だけで生活してたら死んじゃうんだから」
折原君？
……と、さっきも聞いた名前だ。
参加者名簿にも名前があったか。番号が早いせいか聞いたような覚えも無きにしも非ず。
どちらにせよ、なかなかひどい扱いを受けているように思えた。
もちろん僕ではなく、その折原君、とやらが。
……最近苦笑することが多いな。
そういえば、名簿を見れば茜……の苗字も分かる……と思うが口にするのはやめておこう。
「ん」
「あ……、うん」
詩子が突き出してきたパンを、少年は受け取った。
「食べてる間に、私が片付けておいてあげるから」
にっこり笑って、詩子はまた鞄とのにらめっこを始めた。
そんなにかさばるものはないと思うんだけど……。
「うわ、何これ!?」
詩子が大きい声をあげた。
……僕の鞄の方を開けたか。
ちょっと頭を抱えたくなった。
もしかしたら気づいていないだけで実際に抱えていたのかもしれない。
「お、重いよ」
詩子が両手で取り出したもの、それは厚い辞書のようなものだった。
「……君の力で扱う分にはね」
嘆息して僕は言った。
「これ……本なの？」

「まあ……一応ね」
詩子はそれを少年に渡そうとした。
少年はそれを片手で軽く受け取る。
「辞典？」
「惜しい」
少年は苦笑した。詩子はちぇっ、と指を鳴らした。
「これはさ」
少年は表面のほこりを払いながら口を開いた。
「かつて教典と言われたものを模した、即ち〝偽典〟という奴さ」
ぱらぱらと本のページをめくりながら僕は言う。
詩子に向けたにしては、やや小さすぎる声だったかもしれない。
「な……、なんだかよく分からないんだけど、それって凄いの？」
驚き混じりに詩子が言う。
「さあ、どうだろうね」
僕はあっさり即答する。
「どうって……」
「まあ、ほら、教典だから。その宗教を信じていない人には無用の長物なんだよ」
それもそうね、と詩子は頷く。
「だから僕にとっては別に内容に興味なんか無い、だけど」
パタン、とページをめくる手を止め、本を閉じる。
「——これが、僕の武器なのさ」
少しだけ、誇らしげに言った。
「えー、これが武器なの？」
詩子が胡散臭そうに本を眺める。……次に僕を。
「……ね、念仏攻撃？」
「違うって」
僕はパタパタと手を振って否定する。
大体、仏教じゃないんだから。
「み、耳元で囁いて苦しめるとか……」
「……そりゃ、それで引き下がってくれるならいくらでも読んであげるけどさ」

そんな都合の良い敵はいないと思う。
詩子はまだじっと本を見ている。
「何、読んでもらいたいわけ？　君は」
「ごめんなさい、いいです、ごめんなさい」
泣いて謝られた。トラウマでもあるのだろうか。
「……まあもっとも、これで直接人を傷つけるには、角のところで思いっきりぶん殴るくらいしかないかもしれないけどね」
僕は角で人の頭を殴るジェスチャーをして見せた。
「うえぇ」
痛そう。と、詩子はあからさまに嫌な顔をして頭を押さえた。
「別に君のことを殴ろうってわけじゃないよ」
僕は微笑した。そしてそれを片手に持ったまま、さっき手渡されたパンを口に入れた。
「む」
詩子は僕の行動を見て、自分が何をしていたのか思い出したようだ。いそいそと鞄の整理に戻る。

「じゃあ、こっちの鞄に入れるよー」
「あぁ、うん。ありがとう」
詩子はその返事を聞いてから、もう一つの鞄に手を伸ばした。
「こっちの方もなんだか空だね……、あら？」
詩子が鞄の奥底に何か見つけたようだ。
「これは……写真かな、ほら」
詩子は薄い紙切れのようなものを差し出した。
なるほど、確かに表面処理がされてるようで写真には違いない。
僕は手に持っていたパンを全部口にかきこむと、空いた手でその写真を受け取った。
これは——何だ？
何か……建物が写っている。
やけに巨大で、それでいて鋭角的に聳え立っている。その建物をバックに。数名の人間が集まっている。
さしずめこれは記念写真なのだろうか？

全員見たことの無い顔――いや、一人を除いてか――だった。

真ん中には少し背の高めの青年と、小さな少女――郁美ちゃん――が、寄り添って立っている。

瞳に強い輝きを秘めた、何かを成し遂げた男の目だった。それを取り囲むように、ポニーテールの女の子が、緑髪でギザギザメガネの少し危険な笑みを浮かべた青年の横に、複雑そうな表情で立っている。

その隣では、なにやらゲームか何かの扮装をした女の子が、エプロン姿の小さい女の子とメガネにデニムの服を着た女の子と楽しそうに笑い合っている。

そうかと思えば反対の方では、なにやらちょっと豪勢なコートを着た女の子と、赤い上着にメガネ、なおかつハリセンまで装備した女の子が、おとなしげに佇んでいるもう一人の女の子をはさんで、激しく言い争っているようだ。

脇ではやたら体格がいい学ランを着た男と、穏やかに微笑んでいるなんだか……インカムやら一揃えの制服のようなものを着た女性も立っていた。

『――200×年×月×日こみっくパーティーにて』

「……何かのイベントの後みたいだね」

横から写真を覗き込んでいた詩子がそう言った。

「そのようだね……」

「へえ、なんだか皆楽しそうだね」

そう言っている詩子も、写真に感化されたのか楽しげな口調だった。

――本当にそうだった。

すこし揉みくちゃにされてはいたが、その写真からはなんだか溢れんばかりのパワーを感じた。

そう。まるでいても立ってもいられないほどに。

この写真の彼らは今を全力で生きていたのがよく分かる。

在りし日の……姿とでも言うのか。

僕は、涙が出そうになる自分を、懸命に堪えた。

……考えられない反応だったと思う。
「どうしたの？」
詩子は、今度は少年の顔を覗き込んでいた。
「…………いや」
僕はあさっての方向を向いて言った。
「ちょっと……まぶしかっただけさ」
「？」
詩子は不思議そうな顔をした。
生きることは……こんなにも輝いていたんだな。
……
…………
……………
!?
突然、振り返る。
「え……何？　どうしたの？」
荷物を詰め終わった詩子が言った。
「今……聞こえなかったかい？」
詩子のほうを振り向きもせずに少年は言った。
「聞こえた……って何が」
「……銃声」
……詩子の表情が凍りつく。
「……聞こえなかったけど……聞こえたの？」
「……」
僕は、応えない。
ごくり、と生唾を飲む音がした。
――はたしてそれは少年のものだったか、それとも少女のものだったか。

304　走る

七瀬が泣いている。オレの手の届かない遠くで泣いている。さっきまでオレを叩いたり怒鳴ったりして叱咤してくれた、強い七瀬の牙城は砂の山のように崩れかかっている。当たり前だ。友達が死んでい

く様を見つめることを余儀なくされたのだから。ただの女の子である七瀬が苦しまない訳がない。
目の前で幼なじみが逝く姿に直面したオレは、ひどく遠いところで七瀬が泣く声を聞いている。
「瑞佳ぁ……っ」
幼子のように長森の身体を抱きしめて泣き続ける七瀬も、目を閉じたままの、血で汚れているだけでとても殺されたようには見えない長森も、まるで夢の中に広がる物語のようだった。もっと言うなら、――言ってしまって良いのなら、自分たちが巻き込まれた戦いも、すべてが幻想のようだった。ただ一言七瀬に「泣くな」と慰めも言えない場所にいる。
認めてしまおう。自分たちには違いなく危機感が欠けていた。非日常の中にいることは理解していた筈なのに、それでもなお、自分たちだけは決して死ぬことなんてない日常の中にいるような、そんな無様な錯覚を感じていた。自分たちが夢物語の主役で、だから自分たちは必ず生きて帰れるのだと、心の深いところで思っていたのは事実だった。
結局のところ、残酷で冷酷な非日常と遭遇するまで、オレ達は日常から抜け出す事が出来なかった。
オレは思う。
結局、護ってやれなかったんだな。
何があっても護ると決めていた。世界で一番大事な人を、オレは何が遇っても護ってやらなければいけなかった。銃だって撃つ、人だって殺す。それが長森の為になるなら、躊躇うことなどなかった。実際、オレは人を殺した。長森の横で血を流し倒れている、黒いコートの男を。微塵も後悔していない。そんな自分を鬼畜だとも化け物だとも思わない。すべてがすべて長森を護る為の行為だったのだ。
けれど、あくまで長森を護るために殺した筈なのに、どうして長森までいなくなっている。
「折原、」
七瀬が真っ赤に腫らした眼でオレを見る。何かを言いたそうに。何かを言ってほしそうに。七瀬の顔

を、オレは真っ直ぐ見ることが出来なかった。
一歩踏み寄る。冷たくなった長森の傍に、オレは再び踞る。七瀬が何か言っている。けれど微塵もその声が聞こえない。長森の手に触れる、ずっと離さないでいたいと思っていた手。こんなに小さかったんだ。こんなに小さな手で、どうしてお前はオレなんかを守ろうとしたんだよばか。
「……畜生」
長森の手に残っていた蝋燭の火のようにかすかな熱までもが失せてゆく。喪失感がオレの魂に刀となって突き刺さる。
ごめん、ごめん、ごめん、ごめん、ごめん、長森。約束したのに——死んでも護ってみせるって。一緒に帰って一緒にまたバカをやって、幸せな年月をずっと一緒に過ごすって決めていたのに。
「瑞佳、みずか、瑞佳……っ」
また涙が零れ出す。魂までも枯れると思う程に流した涙がまだ流れる。瑞佳の笑顔。ずっと傍にあると願っていた笑顔。長森瑞佳は、本当に手の届かない場所に行ってしまったんだ。
「折原、……もう、あたし、イヤだよ、なんで、あたし達、こんなところにいるの？　帰りたいよ、イヤだよ、ねえ、」
永遠なんて何処にもなかった。そんな事はずっと前から知っていた。けれど、終わりがこんな形で訪れるなんて、想像もしていなかった。あるべき未来はもう潰えた。ならば、これからの未来はどんな未来になってしまうんだろう。
「もう、イヤだ」
七瀬が呟く。
「どうして？　どうしてあたし達は、ねえ、何してるの？」
オレは七瀬の、何かの冗談のように潰れ切った声に驚き、思わず彼女の方を振り返る。涙と涎と鼻水でぐちゃぐちゃになった顔で、あらぬ方向を見てい

る七瀬がそこにいた。焦点の合っていない目でぶるぶると唇を振るわせて、あの張りのある高い声が百万年の昔のことのような壊れ切った声で、身体の震えも微塵も隠さず、己の細い肩を抱いて。
「――七瀬？」
「何で、瑞佳、倒れてるの？」
「七瀬、」
次の瞬間だった。
オレの心は氷の如くに凍てつく。
「――あは、そっか、そうなんだ」
突然七瀬に笑顔が戻ったのだ。ずっと泣きっぱなしだった七瀬に今までの涙が嘘っぱちだったように。
けれど、オレは、こんな陰惨な笑顔をする七瀬留美を知らない。もっと言えば、こんな笑顔をする人間をオレは知らない。
「これは夢だったんだね。そっかそっか道理で。えへへ馬鹿げてるわよね。さすが夢だわ支離滅裂ね。夢みてるんだあたし。折原と二人きりの夢見てるよ。あたしこんな夢見るの初めてだよ。瑞佳殺しちゃったのは罪悪感でいっぱいだけどいいよね。大好きな折原とふたりきりでいられる夢なんだから。あたしの夢だもん瑞佳だって許してくれるよね？」
「何、言ってんだよ、七瀬」
「あはは。折原が夢の中なのに折角の二人きりなのに泣いてるよ。泣かないでよもうみっともない。あんたはあたしの王子様なんだよちゃんとしてよもう。てゆうか夢の中でくらいあたしのこと名前で呼んでよ。ねえ折原。あたしもあんたのこと名前で呼ぶからさあねえ浩平。留美って呼んでよお願い夢の中でくらい言うこと聞いてよ」
七瀬は、心底愉快そうに笑う。まったく焦点の合わない目で、オレの方を見ようともせずに。真っ青に染まった絶望がオレの心を支配する。見つめたくない現実が七瀬とオレとを襲う。
「七瀬！」
「大声出さないでよ夢の中でまで。でもそこらへん

が浩平らしいわ。あんたすごいバカだもんね。でもあたしはあんたのそんなとこがたまらなく好きだよ」
呆然とした顔でオレが見つめるのを、七瀬は楽しげな顔で笑う。——オレの声が届いているとは到底思えなかった。青い絶望が、瑞佳を失った喪失感の傷跡を、深く深く刻る。泥まみれの思考の中、(これでもう君は終わりなんだよ、ゲームオーバーなんだよ。三人のうちの一人でも死ねばこうなっちゃうってことくらい解ってたでしょ？　ヒロインを守れなかった時点で君が主役になることはなくなったんだよ)、そんな誰かの声がする。その声が子供の頃の長森瑞佳のものだと気付き、自分まで狂ってしまったのかと思う。
この世には永遠などない。すべてはいつか壊れていくもの。瑞佳が敢え無く壊れたのと同じように、七瀬もまた、
オレは堪らず七瀬を抱きしめる。もう二度と熱を生まない瑞佳の手と違い、七瀬の身体は熱かった。
「わわ。最高の夢ね。浩平が抱きしめてくれるなんて素敵な夢なんだろ。夢だって解ってるけど一生覚めたくないな。ねえ浩平。名前で呼んでよ」
馬鹿。
「もう。バカはあんたよ折原。あんたが名前で呼んでくれないならあたしだって名前で呼ばないからね。ったく夢の中でまで人をバカにしないでよー」
当たり前だろ、馬鹿なのはオレさ。オレは歯軋りしながらそう呟く。七瀬の耳元で、子供をあやすような静かな声で。そうさ、馬鹿なのはオレだ。結局オレは誰も守れなかった訳だからな。長森も、七瀬までも。何のために一緒に行動してたんだ。こいつらを危機から守るためじゃなかったのか？
手に力が入らない。思考が狂う。内からは長森の声、(すぐに七瀬さんの肩を抱いて慰めてたら七瀬さんはきっとこんな風にはならなかったよ、きっと七瀬さんだけは救えたのにね)、畜生、黙れよちく

しょう。意識が虚ろになっていくのを実感する。魂が弾けるような火で灼けて溶けていく。失血のためか。くそ、なんだこんな傷くらい、こんな傷くらい、ダメだ、眩暈を隠し切れない。実感する。自分自身の死も遠くないところに来ている事を。吐き気がする。眠気が襲ってくる、ああ、今目を閉じてしまえば楽になるだろうか。もしかしたら、今なら、永遠の世界に行けるだろうか。もうオレのことを強く思う人なんていないんだから、それにあの居心地の良い世界に行けば長森に会えるかもしれないんだから、そっちの方が余程幸せかもな、（そうだよ、こっちへ来なよこうへい、こっちにはみんないるよ、みんなみんないるよ）、ああ、そうだな。オレをそっちへ連れてってくれるか、なあ、

七瀬が笑っている。オレのすぐ傍で。
——オレを強く思う人なんていない？

まだだ。まだ、目を閉じてはいけない。歯を食いしばれ、寝言を言ってるんじゃねえよ。眠いとか死にたいとか甘えたこと言ってんじゃねえよ。この命は長森に貰ったものだぞ、どんなに無様でも長森が自分の命を捨ててまで守り抜いた命だぞ。オレはがむしゃらに、怒りのままに右腕の傷口を抉る。全身を走るショック死する程の激痛で目が覚める。
「七瀬。行こう」
オレは激痛を堪え立ち上がる。オレが立たないでいたら七瀬はどうなってしまう。こんなになってもオレのことを必死に思ってくれるこいつを忘れて目を閉じるだと、ふざけるなよ畜生。
「どして？」
白痴めいた返事をする七瀬。オレは七瀬に言う。
——立って、走って、走って、走るんだ。
右腕に走る激痛、そしてだらだら流れる血はたぶん今すぐはどうしようもない。止血するための医療品もないからこのままにしておく他はないだろう。

今はまだ大丈夫。けれどオレの身体も精神もいつ壊れてしまうか判らない。早くしなければいけない。目の裏側からひどい熱が漏れる。オレの中の恐らく最後の意志の塊だった。
　誰か知り合いに会えば。茜でも詩子でも住井でも誰でも良い。さっき出会った青年でも構わない。オレがいない後の七瀬を護れる、知り合いに会えれば。オ誰でも良いんだ。――オレが倒れる前に。諦めが胸を支配してしまう前に。

「――――――――――――――行くぞ、七瀬」
オレは死んでも、お前を名前でなんて呼ばない。ここは現実なんだから。
長森、今はオレは振り返らないぞ。今は。
オレはへたり込んでいる七瀬に手を伸ばす。

305　ひとつの心

おにぎりを平らげ、指についたご飯粒を丁寧になめ取ると、あゆは幸せそうに笑って礼を言った。
「ごちそうさまでしたっ！　美味しかったよ、ありがとう、梓さん」
「おそまつさま。空きっ腹抱えてるくらい不幸なことはないからね。食べられる時に食べとかないと」
おにぎりくらいでこんなに嬉しそうな顔をされるのも逆に気恥ずかしいな、と梓は思った。
でも、悪くない。梓にとって、料理は食べた相手に喜んでもらってこそのものだ。喜んでもらえたなら、純粋に嬉しかった。
と、つい今まで顔中ニコニコしていたあゆがふっと表情を翳らせた。
「あの、今日って何曜日かな？」
「曜日……？　えっと、どうだったかしら」

「えーっと」
梓は反射的に腕時計を覗き込む。
「そうだ、時計はイカれてるんだった……ここに連れて来られたのが昨日だから、確か……火曜日、かな？　にしても、なんだって曜日なんか」
「火曜日……あ、ううん、なんでもないよ。ちょっと気になっただけなんだよ」
あゆは笑って答えたが、すぐにその口元がキュッと引き締まる。瞳には、はっきりとした意志の光が宿っていた。
やがて、あゆはすっくと立ち上がった。
「一緒に、行こうよ」
「え？」
意外な展開に、千鶴と梓は目を丸くした。あゆは唇を噛み締め、言葉を紡ぐ。
「聞いたよね、さっきの放送……あの女の人、死んじゃったんだよ……」
名前も、姿も知らない少女。現状に警鐘を鳴らし、自分たちに進むべき道を与え、そして死んだ。
あゆの言葉に、否が応にも耳に先ほどの爆発音が蘇る。あの音とともに、少女は死んだ。
「千鶴さん。あなたは、もう誰かを手にかけちゃったんだよね……仕方ないで済むことじゃないし、許されることでもないと思う。でも、それで長らえた命を無駄にするのは一番いけないことだよ。ボクたちがあの子の言葉を聞いたのは絶対に偶然じゃないもん……だから、一緒にこのゲームを終わらせようよ。一刻も早く、一人でも死んじゃう人が少なくなるように。そしたら――傲慢かもしれないけど、千鶴さんが命を奪った人たちも、きっと……このままでいるよりは、救われると思うんだ」
「…………」
千鶴は視線を落とし、黙って自分の両の掌を見つめた。血で汚れた手。もう、同じく血を浴びた武器しか握れないと思っていた。
この手で、ゲームの終わりを掴もうとすることは、

許されるのだろうか。
「梓さん」
あゆはさらに続ける。
「おにぎり、すっごく美味しかった。あんな美味しいんだもん、ボクたちだけで食べるなんてもったいないよ。だから……みんなにも食べさせてあげようよ。この島から出て、よかったねって言ってる時にみんなで食べたら、きっともっと美味しいよ」
ボクも手伝うからね、とあゆは照れくさそうに言った。
梓は、知らず知らずのうちに耕一や妹たちのこと、そして今までにこの島で出会った人々のことを思い出していた。佳乃……佳乃に襲い掛かっていた女医。その佳乃も、自分の首を締め、そのままどこかへ消えてしまった。
今さらのように、このゲームの哀しさが痛いくらいに感じられた。この島にいるのは、今まで普通の生活を営んでいた一般人ばかりなのだ。それがどうして、お互い殺しあわなければならないのか。幾度となく自問自答した最も基本的な疑問に、またここでぶち当たる。
「時間が経てば、もっともっとたくさんの人が死んじゃう。だから、急いでこのゲームを終わらせなきゃいけないんだよ。一緒に……終わらせよう？」
あゆが、二人に向かって手を差し伸べた。
小さな、白い、綺麗な手。千鶴はチクリと心に突き刺さるものを感じた。
梓に視線を送る。梓は、優しく——そう、普段はあまり見せることのない、とても優しい表情で——微笑んだ。
そして、梓があゆの手を握る。
「千鶴さん」
あゆが笑う。千鶴の手が、ゆっくりと重なった二人の手に近づいていく。
「えいっ！」
「きゃっ!?」

あゆがいきなり手を伸ばし、千鶴の手を掴んだ。
ギュッと、握り締める。
「うんっ！　じゃ、行こうよ！」
「……ええ」
「わかった」
三人は、足並みを揃え、歩き出す。
（殺めた命は、戻って来ない……なら、私は、私にできることを全てやるだけ……それが、償いだというのであれば）
それぞれの想いを胸に秘めて。
（耕一、楓、初音……あんたたちをこのままにはしておかないよ……だから、絶対に死なないで……）
遠く霞むゴールに向け、歩き出す。
（うぐぅ、明日までに帰らないとTV見逃しちゃうよぉっ！　は、早く終わらせちゃわないと！）
三人の思うところは少しずつ異なってはいたが、それでも心はひとつだった。

306　――落陽

「……逃げようか？」
それが、僕の第一声だった。

――木々のざわめき。
風のざわめき。
空のざわめき。
それが、戦いの前奏とも言うべき戦慄であることを、いつの頃からか僕は知っていた――。

銃声は……現時点まで三発。
もしかしたら、既に誰か撃たれたかも知れない。
……死んでしまったかもしれない。
それだけの危惧を持たせるのに十分な効果を、銃声という奴は持っていた。
僕も、引き金を引いたことがあると言うのに。

そもそも、不可視の力で人を殺すのも、拳銃で人を殺すのも、どちらも変わらないはずなのに。
……違うな。思えばここに来てからだ。殺すことが相応しいところに来て、まるで反転するかのようにそれを否定したがっている。
偽善的な振る舞いだ。

「――例え狙ってなくても、流れ弾に当る事だってある。そんなばかばかしいことで命を失うかもしれない。……僕は、君を危ない目にあわせたくないんだ」
「――ちょっ……待って！」
「――だめ、待てない」
――彼女が不平の声を上げる。しかしそれを聞くわけにはいかなかった。
「――どうして、そんなこと言うの」

走る……。ただひたすらに走る。
どこだ？　どこで交戦してるんだ？
僕はただ音がした、と自分が感じた方向に走っている。
だが……依然としてなにも見えてこない。
銃声は聞こえてこない。……もしかしたら、もう撃つ必要が無い状況なのかもしれない。
「く……そっ……」
走りながら文句を吐く。それでは、詩子に言ったことを違えてしまうことになる。
苛立ちだけが募る。
どこまでいっても、あるのは木だけだ。
人がいるのなら、そろそろ声が聞こえてきてもいい頃だろうに。
そしてそんな僕の葛藤をよそに、また残酷な音が響き渡る。

ドン！　ドン！

「！」
だいぶ……近くなったか。
だが、音の発生ばかりに気をとられて、正確な場所がよく掴めない。
どこだ？　どこなんだ⁉
そんなことを呟いても、誰も応えてくれない。
銃声が消えたそこら一帯は、ずいぶんと静かに感じた。
もうこれで五発だ。
事態は、明らかにまずい方向に流れている。僕は立ち止まっていた足を再び走らせる。なるべく物音を立てないように繊細に……しかし全力で。

「――友達が……危険と隣りあわせだって時に……
そうかもしれないときに……く……見過ごして……
あとから後悔するのは……絶対に嫌……」
「――結局、戦っているのが君の友達じゃなかったら？」
「――それは……違ってて良かったねって」
彼女は笑う。満面の涙とともに。
「――それで……自分が傷つくことになってもかい」
「――だって……後悔……したくないもん……」
「――――――――――――――――そうか」
――どこまでも、優しい子だ。

……聞こえた。
銃声以外の異音、これは……何かを引きずる音だ。

ザ……ザ……ザ……

聞こえる。間違いない。何を引きずっている。
いや、違う。…………足音、か？
僕は再び立ち止まる。そしてあたりに気を配る。

木々のさざめきにごまかされないように、風の鳴り音に混じらせないように。
……捉えきれない。
ならば、
「誰か……いるのか!?」
辺りに通る声で、僕はそう叫んだ。
……音が止まった。何かを引きずる音が、確かに今、止まった。
僕の姿は捉えられているのか？
奇襲のチャンスを狙っているのか？
…………構わない、それならばどこからでも。
僕は顔だけは油断無くあたりに注意を払いながら、左手で本をそっと開く。そして反対の手の指先で、そのページの一枚をぴっと取り外した。
……あたりは静まり返っている。そこには、風の音すら希薄になりつつある。
無音の静寂が流れる。
まるで、一瞬が永遠になったかのような、空白の瞬間が訪れていた。
姿無き襲撃者との根競べが続く。
僕は、微塵も身動きをしない。
……だが、いるはずのその人物からはまるで反応が無い。
「…………くっ」
そして、その根競べを制したのは僕ではなかった。
痺れを切らした僕は、瞬間にそこを立ち去った
——そうして、七瀬に手ひどく痛めつけられた弥生は、何とか少年と対峙することなくその場を離れることに成功した——。
「——君を巻き込ませるわけには行かない」
——僕は彼女の背後を一望する。
「——ここなら見通しもいいし、君の足ならたとえ誰が襲ってきても逃げられる。だから……」

――ドドン!!
――三発目。
「――時間が無い。急がないと取り返しが付かなくなる」

……最後の頼りは〝匂い〟だった。
僕は辿る。硝煙の匂いを、唯只管に辿ってゆく。
流れてくる方角は、もうはっきりしている。
……目的地は……近い。
僕は、もはや誰かに気付かれることは構わず、ただただ全力で走った。
間に合うとか、大丈夫だとか、そんなことは考えなかった。
辿り着かなければならない、ただそれだけの気持ちで。

そして、とうとうその場所へ抜け出た。
「これ……は……」
人が並んでいる。
並んで、倒れている。
――既に、事切れている。
片方は女の子だ。
僕は見たことが無い子だ。
優しそうな子に見える。
胸から血を流して……、恐らく、銃でやられたのだろう。
なのに、その死に際は、とても安らかに見えて。
そしてもう一人は、僕も知っている男だった。
「……巳……間」
黒いコートを着て、なにやらずいぶんと変わり果てた男が……そこにいた。
それは予想外の人物だった。いずれこうなるかもしれないことは覚悟していた。にもかかわらず、ここでの遭遇は想定外だった。

まさかお前がやったのか……。
そんな疑念がよぎる。だが、死者を疑うことになんの意味も無いことを僕は知っていた。
お前は、誰よりも自由を欲していたもんな……。
そんな良祐の無念を汲んでやりたいと思った。
——生きるために、良祐がやってきた非道も知らずに。
僕は良祐の死体に近寄ると、その胸元をがさがさと漁り始めた。
「……あった」
彼の首にペンダント状にかけられたもの……鍵。
「せめて、これだけでも持って行かせてもらう」
僕は今度はそれを自分の首にかけた。
——形見と言うには、少し月並みな気もするが。
僕は、そのあと少しの時間を費やして大きな穴を二つ、地面にあけた。
一つは名も知らない少女のために、もう一つは巳間のために。二人をその穴の中に仰向けに安置し、胸の前で両手を組ませた。
この島に来てから、なんだか弔ってばかりだ——。

「——知らない人のためには泣けなくても……私……あなたが死んだら……涙……止まらなくなるんだから……」
——その彼女の唐突なセリフに、僕は、
「——ふふ」
——思わず彼女を抱きしめていた。
「——大丈夫、まだ僕は死なないよ」
——どこかで、同じセリフを言った気がした。
「——また、きっと会える」

……ふと思い立ったように、片手に持っていた本を開いた。
「——かつて悩めた人よ、かつて憂いた人よ。我ら

は常しえにあなたのことを敬い続ける。我らはけして涙を零すことなく。我らはけして笑みを絶やすことなく。ただあなたの生きた証を辿り続けるだろう――」

偽典の中の一節。それを二人の死者に捧げた。
こんなところでこんなものが役に立つなんて……ね。
僕は乾いた笑いを浮かべた――つもりだった。
結局、僕は詩子に言ったことを守れなかった。
……二人の死に、間に合うことは出来なかった。
この子は、詩子の友達の一人だったんだろうか。
……今となっては、聞くことも出来ない。
使い終えた本を仕舞い、今度こそ二人を埋葬した。
命が燃え尽きたところ……、
その痕跡は、あまりにも静かで切なかった。

307　分離

『なつみ、なつみ……』
もう一人の私が、私を呼ぶ。
『私、やっぱり待てない。自分で見つけだす事に決めた。犯人を』
「たった一人で？　この刃物一本で？」
『自信を持ちなよ。私たち、人とは違うんだから』
「そんなの、無理だよ……」
『意気地なし！』
そう言って、ココロはぷいと後ろを向いて、
『もういいわ。私だけで十分』
そのまま窓から外へ飛び出していく。
「あ、待ってよ！」

【2日目・早朝】

朝日のまぶしさに目が覚める。
でも、結界はもう消えてた。そして、私のココロも消えてた。
あれは夢？　それとも……
「ひとりに、なっちゃった」
窓枠に手をかけ、外を眺めながら、なつみはつぶやいていた。もう一方の手で、支給された刃物をぎゅっと握りしめて。
夢の中で言ってたように、犯人を見つけて仇を取ったら戻ってくるかもしれないし、もしかしたらずっと戻ってこないかもしれない。
これからは、自分は自分でどう生き抜くか考えないといけないんだ。

308　いつも笑顔で

水瀬秋子は痛めた右手に湿布を貼ると、少しくるくると手首を回してみた。
「……特に問題はなさそうね」
捻挫というほどではない。もう少し時間が経てば気にもならなくなるだろう。
郁未と一戦交えた後、秋子は気絶した名雪の治療と武器の調達のために森沿いの一軒家に忍び込んでいた。
名雪の治療はすでに完了している。
怪我はそれほどたいしたものではなかった。
頭部への強い打撃は後になって症状が見られることもあるが、少なくとも今は問題のないように見える。
現に名雪はもう目を覚ましている。
目を覚まして、ずっとしゃべりつづけていた。
「聞いて聞いてみんなひどいんだよ、みんなみんな私のこと傷つけるんだよ。私祐一守ったのに真琴から祐一守ったのに祐一私を守ってくれなくて、だから自分で自分の事守ろうと思って。琴音ちゃんも私のこと傷つけるつもりだったから私琴音ちゃん刺し

たんだ。えらいでしょお母さん、繭ちゃんだってそう、私がんばったよ、がんばったのに……頭痛い頭痛い、祐一だよ祐一のせいだよ祐一が逃げるからいけないんだよ。何で逃げるの祐一、あゆちゃんだねあゆちゃんのせいだね、あんな子のどこがいいの。許せないあゆちゃん許せないよお仕置きしてよ。もういや、みんなみんな大嫌い、みんなにお仕置きしてよ、ねぇ、お母さん……」

ずっとしゃべっていた。

そんな様子を見て秋子は理解しなくてはならなかった。

自分の娘が壊れてしまったということに。

しゃべりつづける名雪の顔は醜くて、先ほどの郁未のように醜くて、にっこりと笑う名雪の笑顔が秋子の密かな自慢だったのに。

(あなたのお子さんもきれいな子でしたね、未夜子さん)

未夜子と、先ほど自分が殺した人と、自分の娘のことで会話に花を咲かせたらどんなにいいだろうと、秋子は不意に思った。

こんな時、こんな所じゃなくて、そう大安売りのスーパーで並んでカートを転がしながら、

「まぁ、奥さんのお子さんも陸上部なんですか？」

「あら、じゃああなたのお子さんも？」

「ええ、名雪も一応部長なんですけど、あんなお寝坊さんで勤まっているのかしら……」

「まぁ、立派じゃないですか。うちの郁未も成績はいいようだけど、もう少し愛想ってものがないとねぇ」

「うちのは少しのんびりしすぎてますわ。あれでも陸上選手なんて信じられませんよ」

なんて、そんな会話ができたらどんなにいいだろう。

そうして、秋子はこっそりと思うのだ。

でも、どんなお子さんでも名雪の笑顔には敵わないわ、と。

（たいした親ばかね）
秋子は胸中で自虐的に呟くと、なおもしゃべりつづける名雪のほうを向いた。
「名雪、もっとかわいくしなくちゃ祐一さんに嫌われてしまうわよ？　ほら、笑って、ね？」
名雪は一瞬ぽかん、と顔をして、そうしてにっこりと笑った。
「うん、そうだね、お母さん」
その顔が、とてもきれいだと秋子は思った。
名雪には、いつもこんな顔をしてほしかった。
だから、秋子はこう言った。
「名雪、一つだけ約束して。いつもそうやって笑顔でいて。名雪がいつでも笑っているなら、お母さん名雪のためになんでもするから」
「ほんと！」
名雪は弾んだ声を出す。
「ほんとだね、お母さん！」
「ええ、約束よ」
「うん、約束だね」
（母親というのは本当に馬鹿な生き物ね）
それもいいでしょうと、秋子は思った。
秋子だって、名雪を見捨てた祐一が、名雪を傷つけた郁未が、名雪を壊したこの島の人達が憎かった。
でも、そんなことも、もうどうだってよく。
このまま名雪と共に壊れていくのもいいだろうと、
「えへへへ、じゃあまずあゆちゃんをね……」
嬉しそうにしゃべる名雪を見ながら、秋子はそう思った。

309　彼と彼女とキノコ

島の真上をさんさんと照らしていた太陽も傾き始め、夕闇の気配がゆっくりと擦り寄ってきていた。
この島の大部分を占める森の、その、更に奥深くに、彼は居た。
（何処だ……茜……）

ふと、ゲームが始まってから自分は一睡もしていないということに気づく。自分にとってどれだけ「茜」と言う存在が大きかったか、改めて思い知る。
気がつけば、体中が悲鳴を上げている。
心も、体も、とっくに限界を超えていた。
それでも、止まらない。
止まれない理由があった。
『茜は、変わってなかったよね？』
『あぁ、そうだな』
『……変えてあげてね？』
『あぁ』
彼の、そして茜の親友の言葉が、彼の足を前へと進ませる。そして何より、彼自身の強い想いが、立ち止まる事を許さなかった。
――俺は、もう一度、茜に会わなければならない
――
だが。
彼が、出会った相手は……

普段の彼女を知っている人ならば、誰もが驚くであろう。何故なら、普段の彼女は、けしてこんな顔をしないからだ。口元は引き締まり、目は堅い決意に彩られた、その顔。
彼女が目指す先は、この島で唯一頼れる、優しい人たち。
どこに居るかは、まだ分からない。
だから、走る。音も立てずに。
その彼女の足が止まる。
――人の気配。
殺し合いなど本来まっぴらな上に、今の彼女には武器と呼べるものが何一つありはしなかった。
自分は身体的に他の参加者に劣る。見つかったら、殺される可能性はけして低くは無いだろう。
気配を殺し、去ってゆく人の後姿を見やる。
その、隙だらけの後ろ姿に、彼女の知っている、「優しい人」の姿が重なった。

どうして間違えようか。絶対に、あの人だ。間違いない。
絶対の自信を持って、少女は一歩を踏み出した。
だが。
少女が声をかけた、その相手は……

「ねえ」
不意に背後から掛かってきた声に驚き、振り帰る。
立っていたのは、一人の小さな少女。
外見とその落ち着いた声とのギャップに唖然とする祐一に、少女ははぁっ、と溜息をひとつついて言った。
「あなた、そんな隙だらけの背中で何やってるの？私がもし殺人鬼だったらどうするつもり？」
「なッ……」
祐一は混乱した。
突然現れた少女。
それが、声を掛けてきた。

そこまではいい。
なんで俺が、こんなガキに説教されてるんだ？
少女の言っている事は正論なのだが、年下に説教されるという事が、彼の癪に障った。
なので、口をついて出るのは、反抗的な台詞。
「うるせーな。なんでお前みたいなガキに説教されなくちゃいけないんだ？」
少女は、その言葉を聞き、顔を歪ませる。
……嘲笑に。
「お笑いね。年齢を問わず正しい意見は取り入れるものよ。私が子供だって言うなら、つまらない意地で自分を正当化するあなたのほうが余程子供よ」
「て……てンめぇ……」
祐一は怒りに身を震わせる。
この場合年上として正しい対応は目の前の生意気な少女を論理的に説き伏せる事なのだが、無念にも祐一の頭では反論出来る言葉が見つからなかった。
なので、年上と、そして男女の基礎体力の違いと

いう二つの利点を持って、
「どりゃぁーっ！」
祐一は力ずくで生意気な少女を黙らせようとした。無論、それは男として最低とも言える行為だ。よって、祐一はすぐに天罰を受ける事になる。
祐一が少女めがけて飛びかかる（こうして書くと誤解を招きそうだが）。
少女はすっ、と姿勢を低く落とす。
そして、祐一が少女に覆い被さろうとしたその時。
「がッ…………」
祐一の動きが、止まった。
少女のアッパーカットが、祐一の股間を的確に捕らえていたのだ。もう文章では表現しきれない程の痛みに、祐一は地面をのた打ち回る。
少女はそんな祐一を見下して笑った。
「無様ね」
気を抜くと本当に気絶しかねない中、祐一が絶え絶えに言葉を発する。
「こっ、こういう時は……蹴りって相場が決まってるんじゃ……」
「あら、だって蹴りだと狙いがつけにくいでしょ」
そっけなく、少女は答えた。
成る程、もっともだ……
祐一は答えを聞き終えると、満足げな表情で気絶
――
「気絶してんじゃないの」
「あうっ」
それは、少女が許してくれなかった。
傾きかけた太陽は未だ沈んではいなかったが、森の中には光は僅かしか届かない。
すでに、辺りは薄暗くなりつつあった。
「……で、一体何の用だよ。殺せるチャンスをわざわざ逃してまで聞きたい事、あるんだろ？」
水を口に含みつつも、祐一は少女――どうやら、椎名繭と言うらしい、に問うた。
「まあ、殺せる武器も無かった、っていう方が正し

いかもね」
「なんだ、結構お前も考え無しじゃねえか」
そう言って祐一はニヘッと笑う。水を口に含んだままなので、水飛沫がとても汚らしい。
「……早く飲み込みなさいよ」
「まあそう言うな。汚い所走りまわって結構ノドが痛んでるんだ」
祐一がそう言うが、その度にまた水飛沫が飛ぶ。藹は沸きあがる殺意を理性で押さえ込み、話を進めた。これもセイカクハンテンダケの為せる技だとも言える。
「――人を、探してるのよ。折原浩平、って人」
へぇ、じゃあ俺と一緒じゃないか、と祐一は口に出そうとする。
その前に、藹が続けた。
今の祐一にとって、一番聞きたくない名前を。
「……それと、沢渡真琴って人」
ぶっ、と思わず祐一はすでに生暖かくなっていた水を吹き出す。明らかに取り乱した祐一の様子を見て、藹が目を見開き、祐一を問い詰める。
「知ってるの!? 教えてよ、真琴さんの行方」
これまでの理性的で嫌味ったらしい態度は影を潜め、感情を露にして迫る藹。
祐一は一瞬本当の事を言うかどうか躊躇する。
だが、その悩みはすぐに打ち消される。
ここまで必死に真琴の行方を探してくれた人。どんな理由があれ、ここで本当のことを話さないのは卑怯だと思ったのだ。
「……知ってるさ。だって真琴は……」
ゆっくりと、口を開く。
「俺の目の前で、死んだんだから」
藹の頬から、一筋の涙が零れ落ちた。
「しかし、やっぱ真琴は嘘を吐いてたのか」
先程から藹は俯いたまま、何も話そうとはしない。
辛うじて、一時期自分が真琴と行動を共にしていた

と言う事を喋っただけだ。
「変だと思ったんだよな、真琴が『お姉ちゃん』なんて」
「そんな事ありません」
「……っと」
間髪入れずに入った繭の声に、思わず祐一は態勢を崩しかける。
「真琴さんは、すぐに泣き出したり、我が侭を言ったりする私の面倒を優しく見てくれました。殺人鬼のような男に追われたときも、私を安全な場所に隠れさせて、ひとりで立ち向かって行ったんですよ」
祐一は穏やかな口調で話す繭を見て、
「……そうか」
と、自身もまた穏やかな表情で言った。
「真琴は、確かに『お姉ちゃん』だったんだな？」
もう一度、繭に問う。
繭は、揺るぐ事の無い表情で、
「ええ」

と、笑顔で答えた。
「……それにしても」
空になった水筒の底を叩き、何とか最後の一滴まで飲み干そうとしながらも祐一が繭に語り掛ける。
とても、間抜けな光景だ。
もうそんなのには慣れたのか、
「……何」
と、繭は素っ気無く訊き返す。
「なんでお前みたいな生意気なぐらいにしっかりしたヤツ相手に、真琴がお姉さん気取りできたんだろうなぁ」
繭は、「失礼ですね」と頬を膨らませたが、すぐに顔を落とし、言った。
「……私が、子供だった、というだけです。もし私があの時、もっと理性的な行動を取れていたら、真琴さんも……んぐっ!?」
繭の台詞は、そこで途切れた。
祐一が繭の口を手で塞いだのだ。

「……そこから先は言うなよ」
藺が見上げた祐一の顔は、これまでになく真剣で、辛そうで。藺は、出しかけた文句を、飲み込んだ。
「真琴はあれで臆病なんだ。その点、お前がいた事で辛うじて真琴は理性を保ててたって言える。真琴があんなに頑張れたのも、お前のお陰だ……だから、そこから先は言うな」
泣きそうで、苦しそうで。
そんな祐一の表情を見て、藺は軽はずみな事を言った自分を恥じた。
……でも。
ぎゅうっ、と祐一の手の甲をきつく抓る。
「ぎぇぇっ！」
「いつまで口塞いでるのよ」
それとこれとは、別だった。
「さぁて、そんじゃまぁ、俺はそろそろ行くかね」
祐一がゆっくりと身を起こす。

「……何処に」
座ったままの藺が、祐一を見上げて言う。
「俺も、探してる人が居るんだ」
「ふ～ん」
自分から訊いておいて、藺はその言葉を聞き流し、服の埃、土汚れを払う。
そして、祐一の方へと向き直ると、
「じゃあ、行きましょうか」
と、平然と言ってのけた。
「おう、じゃあ……ってえ？」
お約束の反応をした祐一も、藺の方へと振り帰る。
「だって私、武器無いし。ここは武器を持っている人と行動したほうが安全だわ」
「……俺が寝首かいたりするとは思わねぇのかよ」
祐一が吐き捨てる様に言った言葉に、藺は不敵に笑って見せて、言った。
「あら、あんな隙だらけの背中を見せているような奴にそんな事が出来るかしら？」

「……それで、お前はその」
「キノコ」
「そうそう、そのキノコを食べたから、こんな性格になっちまったと？」
水を口に含みながら、祐一が喋る。
ちなみに、水は余りにも「水、水〜」と見苦しい祐一に対し、繭が投げ捨てたも同然に与えたものである。
「そう。あと四つあるけど、食べる？」
そう言って繭は、ごそごそとバッグの中からキノコを取り出す。
いかにもって感じの色がヤバげだ。
「遠慮しとく」
見てるだけで吐き気を催しかねなかった。
「……それで、そのキノコを食べると性格が反転してしまう、と」
「そうみたいね」
……祐一は考えた。

「ぐっ……」
出来そうに無かった。
「決まりね、行きましょ」
そう言って一人で歩き出す繭に、その後ろから祐一が言葉を投げかける。
「絶対にお前の事守ってやる、なんて口が裂けても言わねえぞ」
その言葉に繭は振り向くと、
「それで結構よ。危なくなったら容赦なくあなたを盾にさせてもらうから」
と、笑い飛ばして見せた。
祐一はチェッ、と舌打ちすると、
「わーったよ、行くぞ」
と吐き捨て、繭を追い越して歩き出した。
そして祐一は内心、自分は繭に頭が上がらなくなるんじゃないかと、先行きに不安を抱く事となった。
妙なコンビは歩く。

「これを高槻に食べさせれば……うげ」
想像してしまったらしい。
「くっ、しまった、忘れろ、俺の脳！」
「何やってんだか……」
兎にも角にも、こうして相沢祐一と椎名繭という、妙なコンビが結成されるに至ったわけである。

310 (無題)

凛とした空気の中、鳥の声だけが森中に響き渡っていた。深山雪見の死を看取りながら、往人は考えていた。
(俺はここまでできるのか。親友の敵を取るためだけに、ここまで……)
「俺はこのままでいいのか……？」
誰に問うこともなくつぶやいてみる。
自分の信念を貫くあまり、犠牲にしたものが大きすぎた。
みちるも、遠野も守れなかった。
聖も死んでしまった。
何も考えたくなかった。それなのに……
『浜辺にいこっ』
『どうして』
『遊びたいから』
『遊びって何をするんだ』
『だから浜辺で遊ぶの、かけっこしたり、水の掛けあいしたり』
『そして最後に』
『また明日、ってお別れするんです』
「観鈴……！」
『わたしと往人さん、友達。にははっ』
「観鈴……」
もう一度繰り返してみる。

しかし……
俺に観鈴を守る権利はあるのだろうか。
すでに四人も殺めてしまったこの俺に……。
果てしなく続くかと思われた自問自答。
終わりは突然にやってきた。
がさっ
突然現れた黒い影に、目を奪われ現実に引き戻された。
「なんだおまえ……」
目と目が合う。
そこはかとなく不条理な空気があたりを包んでいた。
なんでこんな所にいるんだろう。
いつも笑いかけてくれる少女はもういない。
目の前にいるのは、黒い変な恰好をした男だけ。
ひどく落ち込んでるようだが、どことなく他人じゃ無いような気がするのは気のせいだろうか。
「なんだおまえ……」
ナンダオマエ
僕に向かって言ってるんだろうか？
お前とは失礼な。
むかついたので、蹴りを入れてやることにした。
バサバサ、どすっ
「くっ……ゴホッゴホッ」
ふ、見たか。電光石火のみぞおち蹴り！
「……カラスの分際で人間様にたてつくとは、見上げた度胸だな」
じゃき
……
黒い筒状のものを僕に向けてきた。
よくわからないが、直感で危ないモノと判断。
愛想をふりまく作戦に出よう。
バサバサ
「うお、肩に乗るなっ！」
なぜか振り落とそうと、僕の体をつかんで引き剥

がそうとする。いつもの少女は、これで喜んでいるのに、この男は嫌そうな顔をする。なぜだ。
とにかくこっちも振り落とされまいと必死になる。
バッサバッサ
「いてっ！　爪を食い込ませるのをやめろ！」
バッサバッサバッサ
「だあ！　わかった！　乗せてやるから爪を立てるな！」
バサバサ
ようやく落ち着いた。男はとても嬉しそうだ。
「こんな姿、他人に見られたらいい笑い者だ……」
よほど嬉しいらしい。
肩を振るわせ目を伏せている。
「まあいい、お前のおかげで踏ん切りがついた」
？　この男は何を言っているのだろう。
「待ってろよ。観鈴」
そう言いながら、手元の小さい箱状のものに視線を落とす男。
ミスズ、その響きは、僕に何かすごく懐かしいことを思い出させる。
あの少女の名前、だったか？　無性に興奮してきた。
バッサバッサ
「痛え！　爪を立てるな！」
男の声が森に響き渡っていた――

311　おもいで

「これで……人をコロセル……」
誰もいない住宅街。
人のいなくなった喫茶店。
「あなたは……私を裏切らないわよね……」
小銃とナイフを見つめながら夢心地で横へ言葉を投げかける。
白蛇。
みちるが――あの愛らしい少女が消える直前に残

した友達。
「人はもう、信じられません。やっぱり……信じられませんでした」
　虚ろな瞳、もう流れることも忘れてしまった涙。
「秋子さんも……私を見捨てたんですね……」

『……琴音ちゃん？』
『……は、はいっ!?』
『名雪を、連れ戻してきてくれる？』
『ありがとう。それじゃ、お願いね』
　秋子との言葉が思い浮かんだ。
　あの時から、少しだけささくれのように涌き出た疑念。琴音は言葉どおりに名雪を探した。だけど……
（どうして、私だけ……一人で捜しに行かされたのですか？）

『大丈夫よ琴音ちゃん。私を裏切っても、名雪を裏切らない限り、あなたは私が守るから。そのかわり――名雪を手に掛けたときは、本当の恐怖を教えてあげます』

（秋子さんは、守ってはくれなかった……それどころか）
　琴音は、白蛇のポチを握りしめる。
（名雪さんに……裏切られたんですから……）
　ビチビチッ!!
　苦しそうに、ポチが左右に体を揺らす。
「あっ……ごめん……ごめんね、ポチ」
　琴音がポチを抱きしめる。今度は、軽く。
「やっぱり、動物だけは裏切らないもの……藤田さんが……あかりさんが、特別だっただけ」
　唯一信じるに値する少年少女の顔を思い浮かべる。
「ポチ……私と……いっしょに行こうね。ずっと、いっしょに。みちるちゃんとの……約束だもんね」

琴音には、みちるがどうして消えたのかは分からない。だけど、みちるの名前が放送で呼ばれていた……それは――死。
「みちるちゃんもね……私をもう裏切らないもの。ポチ、人はね……みんな裏切るの。でもね、死んだらね、もう裏切らないの。みちるちゃんは、私とお友達だから……裏切らなくなったのよ」
ポチの頭を優しく愛でる。
「だからね、みんな死ねばいいの。そうすれば裏切られない。みんな、みんな、お友達になれるのよ？」
一語一句、言い聞かせるようにささやきかける。
「そして、藤田さんに……あかりさんに、ほめてもらいたいな。私はまた、人間不信に陥っちゃったけど……自分の力で元に戻りましたって。私は弱いから、だけどね……強くなりたいんだ」
決意を新たにして、琴音が立ちあがる。
「この喫茶店ともお別れ――少しの間でしたけど……楽しかった」
まだ聞こえてくるようなあの楽しかった笑い声。
『にょわ〜っ、動いた動いたっ！』
『動物だから、もちろん動くと思います』
『琴音ちゃん、動物好きなの？　私もなんだよ！　ねこさんとか』
『名雪は、ねこアレルギーですけどね』
『う〜、お母さん！　ひどい〜ひどい〜！』
「さよなら……行こう、ポチ」
白蛇を首に巻いて、喫茶店の入り口に立つ。
「あれ……なんか変だな……」
枯れたはずの涙が溢れて――
「こんな、はずじゃなかったのにな……どうしてこうなっちゃったんだろう……藤田さん、藤田さんに会いたい……」
少女の嗚咽は、楽しかったはずの喫茶店の中にず

っと響いていた……。

312　汗と涙と男と女

「かーずきっ！」
詠美が和樹に甘えるようになってからどのくらいの時間がたったのだろう。
「待たせたな！　詠美！」
詠美が建物の陰から姿を現す。
「どうだった？」
「いや……なにもなかったよ」
和樹がそう言って、詠美の頭を優しく撫でる。
「そっか……うん、次はどうするの？」
「とりあえずここから離れよう。ここには逃げ場が無い。話はそれからだ」
表情とは裏腹に、和樹の心は晴れない。
南の豹変——確かにそれもある。
だが、今の建物——火事があったのかしっかりと判別はできないが、おそらくはスタート地点の一つだろう。
その中にいくつもの死体が転がっていた。
全部で八人。全員同じような野戦服を着た男たちが倒れている。恐らくそれは主催者側の人間であろう。
武器はすべて奪われていた。
（俺達と同じように……主催者側と対立してる奴がいるのか？）
だが、もしも違ったら……そう、すでに理性を失い、見境いの無い殺戮者だとしたら……？
（南さんですら……）
和樹は果てしなく疑心暗鬼に陥っていた。
（たとえ、彩ちゃんやモモちゃん……いや、あさひちゃんであっても、もしかしたら……）
そして、正常であったとしても和樹のように人を疑ってかかる者だっているかもしれない。
（ちっ、やめようぜ……答えなんか……でないよ。

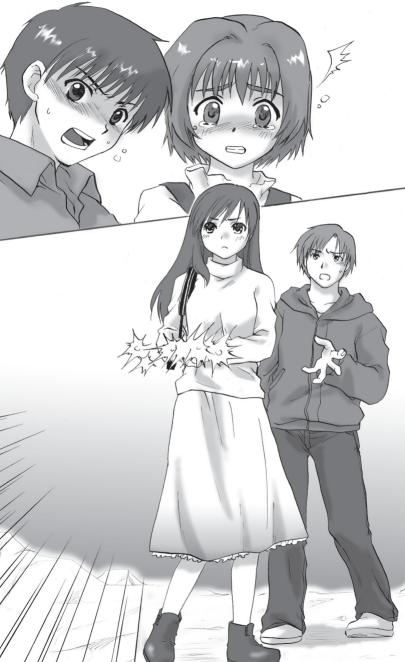
楓ちゃんなら……どうする？）
別にここだけじゃない。
とりあえず心当たりのある場所に手がかりはなく、冷たくなった躯だけしかなかった。

――何かあったら、またこの場所で

途方に暮れかけた時、彼女の言葉が脳裏に浮かぶ。
もしかしたら、彼女の単独行動は、何か心当たりがあってのことかもしれない。
「一度戻るか……これ以上闇雲に動いたって道は見えない」
和樹が歩きながらそう呟いた。
「も、戻るの……？」
不安そうな詠美の声。無理もない、それは血の匂いのする思い出の場所だから。
たとえ、大切な友人の墓場であってもだ。
――もちろん和樹達は玲子を簡易的にではあるが弔っている。
「安心しろ、俺がついてる」
詠美を落ち着かせるようにそっと頬に口付ける。
「うん……」
（やっぱ調子狂うよな……）
いつも生意気で悪態をついてばかりだった彼女、ここに来るまで、鼻で人を笑うような態度で本当の自分を隠してきた彼女。
だけど、それでも――
（いつも顔を合わせるたび……だったからな）
苦笑した。
ザッ……ザッ……
そして瞬間、人の気配。

「それでね……」
由綺の声はいつも透き通るように綺麗で。
ブラウン管の向こうの世界が遠く感じられてたあの頃。

だけど……
いつの間にか心よりも、遠くで聞こえる由綺の声。
それはここに来てから。だから、由綺の手をつかんだ。理奈ちゃんでなく、マナちゃんでもなく、英二さんでもない。
ブラウン管の向こうよりも遠い世界に行ってしまわないように、強く。
「弥生さんがね……ふふっ、おかしいの」
由綺がいつものように笑う、そこは日常だったから。だけどその現実は……由綺が本当に望んだ日常ではなくて。『おかしい』……そうかもしれない。
俺達は……いや、俺だけが狂っている。
俺は由綺の為に……すべてから逃げたんだ。
理奈ちゃんから、マナちゃんから、英二さんから、見知らぬ少年から。
そして、由綺を傘にして罪の意識から逃れようとしている。
(俺は……卑怯だよな)

由綺にとってここは、より日常だったんだ。ブラウン管の向こうで歌っていた——あの頃よりも。
(由綺は……俺が追いつめたんだ……)
本当に日常だった頃から、由綺の本当の心の拠り所になりきれなかったんだ。
「……誰っ！」
突然由綺が声を張り上げる。
(誰かいるのか……)
来ないでほしい。由綺がまた遠くに感じられてしまうから。俺はまた、由綺のせいにして罪を犯してしまうから。
近づいたら、由綺が、俺がまた——
「お、おい、ちょっといいか……？」
ドン！　ドン！
男の声と共に銃声…とは少し音色の違うニードルガンの音。
い、いきなり撃つか!?　俺の恋人よ……
射程距離が離れすぎてたのか、男の脇を、ゆっく

りと放物線を描き——地面に落ちる。
話し合いの余地も無い。
男は一瞬呆けた表情、だけどすぐそれは険しい表情に変わって……
物陰に潜むように身を隠れさす。
そしてそこから見えるのは……銃口——
俺の背筋に、何かはしるものがあった……
「行くぞ！　由綺！」
再度狙いをつけて戦おうとしている由綺の手を引いて、そこから離れる——
同時に、途切れることのない銃声。
「と、冬弥君!?」
先程まで俺達が存在していた空間に、熱線のような光がいくつも雨のように降り注いだ。
——死ぬ
強い意識が俺を包んで、怖くて。
だから、無我夢中で走った。後ろを決して見ないようにして。横で走る由綺の手だけは、絶対に離さないように——。
緊迫した状況の中だけど、右手に感じた由綺の暖かさだけが妙にはっきりと感じられて——。
場に不釣り合いな思い。
(俺、こんなときでも由綺だけは……)
少しだけ自分を誇らしげに思えた。
「な、なあ、由綺……」
「はあ、はあ……な、何？　冬弥君」
一、二キロは走ったかもしれない。
後ろから追ってくる気配はなく、ようやく走るのを止める。由綺と俺は流れ出る汗を拭いてようやく一息つく。
「いきなり……撃つのはやめないか？」
「どうして？」
きょとんとした顔で由綺。
「だってさ……今、危なかったじゃない。危険だよ」
「そうだけど……」

「だからさ……いつでも撃てるようにだけしておいて、撃つときは撃つみたいな……なんて言ったらいいのかな」
「だけど……」
「俺が死んじゃってもいいのか？」
俺はイヤだ。由綺が死ぬことも、俺が死んで、由綺が悲しむことも。
もちろん俺だって死にたくない。
「嫌っ……」
由綺が背中から俺を抱きしめる。
「うん、分かった、私、冬弥君死んだら嫌だもん……いきなり、撃つのはやめるね」
「ああ……」
いきなり撃つのは……俺だけでいい。
もっとも、飛び道具なんて持ってないけど。
「ふふっ、でも、冬弥君が危なくなったらどんなことしても守るからね……」
「ありがとう、由綺……」

だけど、どうしようもなく哀しくなって、喪失感が胸に込み上げて……
「ど、どうしたの？　冬弥君……泣いて、るの？」
由綺の日常の中で、俺は、泣いた。

「ふう……まさか、いきなり襲われるなんてな」
機関銃の熱を冷ましながら、和樹は溜息を吐き出す。
もう、敵の姿はない。
和樹達と同じように、カップルであったが故に生んだ油断だった。もちろん深追いする気はない。
和樹には殺人の衝動なんてないのだから。
(自分達の身に危険が及んだその時は……その時だけどな)
いざ脱出するときは、そうはいかないかもしれないが。
「かずき……みんな、狂っちゃったんだね……」
詠美の顔はまだ晴れない。

（この島にいる限り、心から笑ってくれることはないんだろうか）
武器の残弾、状態をチェックする。
（大丈夫みたいだな）
「平気だろ……今みたいのはごく稀なケース。俺も、詠美も……ほら、楓ちゃんだって正常だったじゃないか」
「うん……」
本当にそうなのだろうか。和樹の言葉は自分に強く言い聞かせる意味合いの方が強い。
「あそこに戻るぞ。結構経ったからな……楓ちゃんももう戻ってるかもしれない」
「うん……」
「別ルートから戻ったほうがよさそうだけどな」
別ルート。八人の死体があった建物を通りぬける。
「……きゃっ、ちょっと……何すんのよ」
和樹はいきなり詠美の膝の後ろと背中に手を忍ばせると、そのまま勢いよく抱えあげる。いわゆる漫画や映画でありがちな『お姫さまだっこ』というやつだ。
「俺を信じろ……俺がいいって言うまで絶対に目を開けるなよ」
「うん、わかった……しんじる」
（詠美がわざわざ建物の中の惨劇を見る必要はないからな）
詠美の持ち物……武器も実は和樹は知らない。
（詠美が戦う必要なんてないからな）
手を汚すのは、俺だけでいい。

313　（無題）

往人は飢えと緊張と戦いながら森を歩いていた。
手には、携帯電話をもっている。
九十番　水瀬秋子
三十三番　国崎往人

「さっきの女、名前だけでも聞いておくんだった」
意図して声を出しているのか、自分で気づかないうちに出してしまっているのか。
「そもそも機械は苦手なんだ」
呟きながら、順に番号を入力していく。
001、002、003、004、005、006……
しばらく続いた後、入力していた往人の手が止まった。
(017……近づいてくる)
まだそんなに近くない。考える時間は充分にある。男か女か、いやそれ以前にやる気があるのか無いのか。
名前さえわかれば、観鈴の場所を知る手がかりになるだろう。
いや、それよりも
観鈴かもしれない――
俺が三十三番、十七番が神尾の可能性だって充分にある。
「様子を見るか」
木陰に身を寄せながらつぶやく。
ここにいれば当分は見つかることは無いだろう。
それよりも問題なのは――

314　夢一時

「あはは、夢みたい。あたしこうして折原と手をつないで歩きたかったのよ」
「ううん、これは夢よね。だって瑞佳死んじゃったもの。現実にそんなことないものね。えへへ、明日瑞佳に会ったらどんな顔したらいいのかな」
七瀬は左手に持った散弾銃をぶんぶん振り回しながら心底愉快そうに言った。
「ああ、そうだな。七瀬おまえの言うとおりこれは夢だよ」
でもこの夢はな、永遠にさめないんだ

浩平の右腕からは依然として出血が続いていた。
血と一緒に浩平の命も流れ落ちてゆく。

早く誰か知り合いに会わないと
もう俺も長くはない
うん？
そういえば俺は長森が死ぬ前に
誰かとどこかで合流しようとしていなかったか？
くそ、血が足りない
もう、ろくに頭もまわらなくなってるな
ああ、長森、もうすぐおまえに会えそうだよ
こんどこそいつまでも一緒にいような

「折原、どうしたの？　そんな暗い顔して黙りこくって。わかった、瑞佳の事考えてたのね。そんなこと気にせずにあたしとのデート楽しみましょうよ。夢が覚めればあたしは折原とデートできないんだから。心配しなくてもデートしたことは瑞佳には言わないから、ね」
しかし、今の浩平にその七瀬の声は届いていなかった。

思い出せ、思い出すんだ俺
誰とどこで会うつもりだったのかを
――目の前が暗いな

「なあ七瀬、今日は日が暮れるのがやけに早いな」
「折原、なに面白くない冗談言ってるのよ。まだまだ日は高いわよ。瑞佳の所に帰りたいのは解るけど、でも駄目。帰らせてあげない」
その七瀬の言葉通り太陽は中天高く輝いていた。

目の前が暗い、もう駄目なんだな
ああ、なんだか喉が乾く
血液が足りないからだろうな
そうだ、川だ、川に行こう

そうすればなんとかなるような気がする

もう浩平にはろくに前も見えず、右手の痛みも感じなかった。感じるのはただ左手の七瀬の温もりのみであった。それを力一杯握りしめる。まるで、残された生への執念であるかのように。そして水の流れる音と記憶を頼りに川に向かって歩き出す。

「ちょっと折原、いたいわよ。でもそんなにあたしを想ってくれるなんてうれしいな、えへへ」

川へ。その執念だけが浩平の体を支え、前に進ませた。だから川辺にたどり着いたとき、もう浩平の体を支える物はなかった。

(長森、もう一度、もう一度おまえに会いたいよ)

それを最後に浩平を意識を失った。

霧が立ちこめていた。

霧はゆっくりと流れているようで、足下すら見えないほど濃く立ちこめたかとおもうと、ふととぎれ、色とりどりの花が咲きみだれる岸辺や川面がすかし見える。

それが浩平が目覚めたときの光景であった。

どうして俺はこんな場所にいるんだろう?

そうか、これは夢でそのうち長森が、

『ほら〜、起きなさいよ〜』

と起こしに来て夢が――――

そうか

そうだ長森はもういないんだ

俺の目の前で死んだんだ

その時声が聞こえた。それは浩平が今一番聞きたい声であった。

『浩平どうしてこんなところにいるの? 早く帰って』

「長森生きてたのか、よかった。おまえが死んだなんて嘘だよな、ただの悪い夢だよな」

『ううん、違うよ浩平。それよりも浩平、早く七瀬さんのところに戻って』
「いやだ、俺はもう戻らない。長森と一緒にここにいる！」
『——浩平』
「俺はもう嫌なんだ。本当はずっと怖かったんだ。突然あんな狂ったゲームに放り込まれて、でもおまえ達の、いや長森、おまえのために怖いのを我慢して精一杯気を張ってきたんだ。こんなの幻想だって。夢の中の物語だって。いつもと変わらない日常なんだって、そう錯覚するほど自分自身をごまかして……。俺がくじけたらみんな死んでしまう。そう思って必死に頑張ってきたんだ。でも、もう駄目なんだ。おまえがいないと、もう俺は頑張れないんだ——」
『——わかったよ、浩平』
「——」
『浩平がそんなに苦しい思いしていたこと解ってあげられなくてごめんね』
「——」
『本当はね、わたしも浩平と一緒にいたいんだよ。傷つき疲れ果てた浩平を抱きしめてあげたいんだよ。浩平はたくさんがんばったからもういいよね。休んでもいいよね。こっちに来て、浩平。わたしといつまでも一緒にいよう』
浩平が声のした方向に歩き出すと、川があった。川の中に一歩足を踏み入れたとき、また声がした。
『その川を渡ったら本当に戻れないよ、それでいいの——』
その声が聞こえなかったかのように浩平は前に進もうとした。しかしそこで彼の歩みは止まった。

この川を、この川を渡りさえすれば
あんな狂ったゲームなんかやらなくていいんだ
ずっと長森と一緒に暮らせるんだ
でも——

でも七瀬はどうなる？
あの壊れてしまった七瀬は
繭もどうなる
どこかで、一人みゅーみゅー泣いているだろう、繭
その二人を置いてゆくのか？
でも、俺は——俺は——

『どうしたの浩平？』
それからかなりの時間が過ぎ去った。その間流れる川の音以外なんの物音もしなかった。
「——駄目だ、長森。やっぱり俺はそっちにいけない。七瀬達を置いてゆけない。それに、おまえに助けてもらった命を無駄に捨てるなんてできない。
——帰るよ、俺」
『よく言ってくれたね、浩平。それでこそわたしの大好きな浩平だよ』
「長森、最後にひとつ教えてくれ、俺達はまた会えるか？」
『うん、また必ず会えるよ。浩平が大人になって、恋をして誰かと結ばれて、子供を育てて、その子供が誰かと結ばれて、そしていつか浩平が天寿を全うする日が来たら、その時はきっとまた会えるよ。だからその時まで、ちょっとの間だけ、さようなら浩平』
それを最後に浩平は目覚めた。

全部ただの夢だったのか、それとも——
いや、どっちでもいい
長森の声をもう一度聞けたから
そうだ、七瀬、七瀬はどうした？

「あっ、おにいちゃん、折原さんが気がついたよ」

間奏 ――― 315

「――逃げようか？」
それが、彼の第一声だった。
――置いて行かれてしまった。
「…………………はあ」
私は思いっきり溜めて息を吐いた。
もうこれで何回目だろうか。そんなに多くしていたつもりは無いが、数えるような余裕は不思議と無かった。
ぽつんと一人で佇んでいる。辺りは他に誰もいない。あるのは空っぽの鞄だけ。少年は私と一緒にそれも置いて行ってしまった。
彼に置いて行かれて、もう結構な時間が経つ。でも、それは私の気のせいなのかもしれない。
……一人になったら、なんだか時間が長く感じた。追いかけていきたかった。でもそうできなかった。少年の言ったことは正しかった。私には、何の力も無い。
……もしも彼が戦っていて、そこに私が入り込んだって、なんにもならない。殺されるだけだ。
もしかしたら、彼の気が散ってしまうかもしれない。私に注意がそれた隙に、彼が撃たれてしまうかもしれない。……それで死んでしまうかもしれない。
そんなのは、どうしたって御免だった。
そもそも私はこのゲームが始まってから、幸か不幸か一度もそんな場面に出くわしたことが無い。
……だから、私の口から出る言葉には、現実味が無かった。
ただ、漠然とした恐怖みたいなもの。それを追いかけていただけで。
……少なくとも、少年はもっと確かなビジョンを持っていたんだろう。拳銃に対して、このゲームに

対して、……死に対して。
彼は言った。二人も見殺しなんて、って。
……守ろうとして、守れなかった。そんなつらい経験をしたんだと思う。
だから、自覚の無い私の言葉が許せなかった。
……そのときは、頭に血が上って、全然そんなことは考えられなかった。
彼が戻ってくるかもしれない。だったらむやみに動かない方がきっといい。——そんな希望に縋って、私はここでじっとしている。
でも、……まだ彼は戻ってこない。
そうして私は、進むことも退くことも出来なくなった。
『ここで立ち止まっちゃいけない』
そんな少年のセリフが脳裏をよぎる。
……でも、結局止まってしまった。
あなたのせいだ。あなたが、あんなこと言うから。
私の周りは全て森だった。どこを見ても変わらない。出口も見えない。
……一人になったら、堪らなく心細くなった。
私は、意図せずに自分をごまかしてきたみたいだった。
半日程度しかないあの少年と過ごした時間。それが、どれほど私の助けとなっていたか。……救いとなっていたか。身に染みて分かってきた。
一人は、嫌だ。
一人は、寂しい。
——知らず知らずのうちに、私は体を小さくして縮こまっていた。
「——逃げようか？」
不意に、少年がそう言ってきた。
「え？」
「ここにいると危ないかもしれない」
彼は、その銃声のしたらしき方角を見つめている。
「で、でも」

「僕の耳に間違いが無いとしたら……相手は拳銃だ。もし襲い掛かられたら、僕は君を守れないかもしれない」
「そんな……大げさだよ、聞き間違いかもしれ――」
私は軽く笑いながらそんなことを言った。
「……多分、現実なんだ」
……でも、彼は全然笑っていなかった。
「で、でも、まだ私達が狙われたわけじゃ……」
「例え狙ってなくても、流れ弾に当る事だってある。そんなばかばかしいことで命を失うかもしれない。……僕は、君を危ない目にあわせたくないんだ」
そういうと、彼は私の手をとって、今まで歩いてきた方向へ引き返そうとした。
「ちょっ……待って！」
「だめ、待てない」
彼は、強引に私を引っ張っていく。
「……どうして、そんなこと言うの」
「……どうしてって」

「だって、すぐ傍で殺し合いをしてるんでしょ？　私達それを見捨てて逃げちゃっていいの……？　それも、自分の命かわいさに!?」
「それは……」
少年はばつが悪そうに目を伏せる。
「もしかしたら、先に行った相沢君が襲われているのかもしれない。もしかしたら、折原君が闘っているのかもしれない。もしかしたら、茜が闘っているのかもしれない。それなのに……、それなのに逃げるの!?」
いつの間にか、私はそう叫んでいた。叫ばずにはいられなかった。
「絶対にそうだと言う保障は無いだろ」
つられてか、少年の声も高くなる。
「違う保障も無いもん！　私行く！　行って確かめる！」

バチンッッ!!

頬が、熱かった。
「…………え」
私が、頬を叩かれたのだと気付くまで、少しの時を要した。
「綺麗事ばかり言って…………。君は只の女の子なんだぞ。自分のことだって……自分の身だって守れないくせに、知ったようなことを言うな。君は自分がどういうことを言っているのか、どういうことをしようとしているのか、本当に分かっているのか……」
少年が……振り上げた手もそのままに……私に言い放った。
「う……っく……ひっく……」
涙が、出てきた。
「武器も無い……防具も無い……体一つでぶつかって、それで……間違って君が死ぬことにでもなったら僕はどうすれば良いんだ！　二人も……二人も見殺しにしなきゃいけないっていうのか……」

彼の腕と……声の端が……震えていた。
「……そんなの……ひっく……ずるいよ……っく」
しゃくりあがって、上手く喋れない。
「みんな……同じ思いをしてるのに……っく……同じように……ひっく……傷を負っているのに……」
私は、少年を見つめる。
「私……そんないい子じゃないよ？　っく……そんな……知らない人の生き死にで……ひっく……泣いたりとか出来ない……けど」
……少年は黙って聞いている。
「友達が……危険と隣りあわせだって時に……そうかもしれないときに……っく……見過ごして……あとから後悔するのは……絶対に嫌……」
「……結局、戦っているのが君の友達じゃなかったら？」
「それは……違ってて良かったねって」
私は、笑顔でそう言ってみせた。
……涙でひしゃげてはいたけど。

「それで……自分が傷つくことになってもかい」
「だって……後悔……したくないもん……」
「………………………………そうか」
少年は、何かを決心したように顔を上げた。
「なら、僕が行こう。僕一人ならどうにでもなる」
「え……」
風が吹いた。私達の間を吹きぬけた。
「君は……ここで待っていろ。もし誰か来たのを感じたら、たとえだれが来てもすぐに逃げるんだ」
そう言うと、彼は積み直した鞄を背負った。
「ま、待って……」
「大丈夫、無益な戦いは止めてみせるさ。それにさっきも言ったとおり、君を巻き込ませるわけには行かない」
そう言って、私の背後を一望する。
「ここなら見通しもいいし、君の足ならたとえ誰が襲ってきても逃げられる。だから……」
急に、少年の顔が険しくなる。
「時間が無い。急がないと取り返しが付かなくなる」
そういうと、少年は私に近づいてきた。
そして、くっつくほど顔を寄せて、耳元で囁いた。
「君は彼女の帰ってくる場所になるんだろ。……だったら、間違ってもこんなことに巻き込まれちゃダメだ」
心臓が、早鐘のようになった。
「自分から危険に飛び込もう、なんて言った君だ。……一人でも、大丈夫だよね？　守れるよね？」
「……守れる……もん……、私……大丈夫だもん」
それだけ言うのが、精一杯だった。
少年は満足そうに、私の頭をぽんぽんと叩いた。同じくらいの背なのに、あまり違和感が無かった。
「……な……でよ」
「……え？」
「死な……ないでよ。知らない人のためには泣けなくても……私……あなたが死んだら……涙……止まらなくなるんだから……」

「……ふふ」
そう、微かに笑うと、少年は私の後頭部に添えていた手を背中に下ろして、私を優しく抱きしめた。
「——大丈夫、まだ僕は死なないよ」
そして、少年は私から離れた。
「また、きっと会える」
背中越しの言葉が、風に乗って伝わってくる。
「そのときまで……さよなら」
——それが、私と彼の永遠の別れとなった。

316 ——背走

体が重い……。こんな疲労、未だかつて味わったことがあっただろうか。
本当に油断だった。ただの女の子だと思ってかかった私の失策だった。
——篠塚弥生は、傷ついた体を引きずって、森の奥へと逃げ込んでいた。食料も尽きかけ、武器も無くし、あまつさえ余計な手傷を負った。
「こんなところで、立ち止まっている暇は、無いというのに……」
深い森だった。それは私にとって有利に働いた。
——いや、果たしてどうだろう。
確かにこうやって身を隠せることはありがたいがそもそもの奇襲に成功していれば、そんなもの必要も無かった。
ただ、私はまだ生きている。ほぼ、五体満足に動くことは出来る。と、言うよりは、均等にダメージを受けていると言うべきか。いずれにせよ、今の環境でその状態を保持できたことは、正に千金に値するだろう。
『なによ、それじゃああたしと同じじゃない』
リフレインする言葉。あの少女——確か、七瀬と

か呼ばれていたか――の言った言葉だ。
同じ……そう言われれば、確かに同じだ。
誰かを守るために闘う。守るために傷つける。守るために――殺す。そんな人間は、私ぐらいのものだと思っていた。
だが……。

『あたしは二度と、遭いたくないわ』

――同じ目的で戦う人間がいるのなら、私はそれを打ち砕かなくてはならない。
それが、私の戦いなのだから。

ザ……ザ……ザ……ザ……
どうしても音が立ってしまう。この体では足音を絶つのも楽ではない。
だが、流石にこの状況で誰かに見つかるのはまずかった。ただでさえ女性は男性に比べて不利だというのに、体は傷つき、疲労が溜まり、あまつさえ武器までも失ってしまった。
だが……。
『誰か……いるのか!?』
そう、辺りに響き渡った。
黒い少年――。それが、私の目が捉えた声の主の姿だった。
大丈夫、私はそう自分に言い聞かせる。
足音だけだ、まだ自分の姿は捉えられていない。
無造作に歩いていた私の足音に彼は〝気付いた〟。だから、もう足音は立てられない。
……動けない。もう何の音も立てられない。
出来うるなら、心音すらも止めてしまいたい。
あの少年に見つかるな、あの少年にかかわるな。
狩る側に回ってからすっかり鋭敏になった本能が、心の中で高らかに警報の鐘を鳴らした。
何故そこまで彼を恐れたのか？
……恐らく傷ついた体が、余計な戦いをするのを

拒んだのだろう。
永遠とも思えそうな瞬間が過ぎて。
『………くっ』
少年は、ここを立ち去っていった。
——この場を凌ぐことができたというのは本当に運が良かった、としか言いようが無かった。
歩みが刻まれる。一歩ずつではあったが、着実に。
……森の終わりは、すぐそこにまで来ていた。
「!?」
誰かいる！
弥生は即座に伏せて、自らの体を茂みに溶け込ませる。
誰だ……。
見えたのは、小さくしゃがみこんでいる女の子。
由綺……ではない。もちろん、理奈でもないようだ。どうやら、私の知っている人間ではないらしい。
これは、チャンスなの……？
弥生は自問した。

あの女の子の付近になにやら鞄がある。もしかしたらあの中には食料が……あわよくば武器が眠っているかもしれない。
あれを奪うことが出来れば、ずいぶんこの先の行動が楽になりそうだ……。
しかし……、さっきも女の子だと見くびってかかってこのような目にあった。
同じ徹など踏んでいられない。
なら……どうすれば……いいの？
一瞬の迷い。
狩る側に回った分際で、何を偽善的なことを考えているの？
あなたは今、見くびってかかった彼女にしてやられてことを認めた。でもそれは本気でかかればいつでも殺せる、ということの裏返しじゃないの？
十人殺さなければならないのに。
まだあと九人も残っているのに。
由綺さんを、藤井さんを守らなければならないのに。

――だったらもうやることは決まっているでしょう、弥生？
艶やかな笑みが浮かぶ。
ずいぶんと長い一瞬を経て、弥生は再び動き出した。

317 ――――折片

――蹲ったままの詩子にはまだ知る由も無い。自らを獲物と狙う修羅の存在を。
「少……年……」
口に出してみると陳腐な響きだ。いまいち、名前代わりに呼ぶにはしっくりこない。
結局、名前を聞きだすことが出来なかった。
そう思っては嘆息する。
少年はまだ帰ってこない。
「相沢君……折原君……少年…………茜……」

みんな、危険な目には遭っていないだろうか。
彼女は、今この瞬間に肉薄していた。
今しかない、そう思って弥生は走り出そうとする。
その瞬間に気付く不和。
「ん……ヒール」
あるはずのものが、いつの間にかなくなっていた。
無くなったら真っ先に気付きそうなものなのに、それさえも見落としていた。それくらい気を張っていたのだろう。
弥生は思う。このような身なりでは、由綺さんのマネージャーとして失格だ、と。
だがそのような姿も、もはや隠す必要は無い。
……隠すべき人も、今はいない。
これから死にゆく人物に隠してもしょうがない。
……だから行こう。もう、なにも気にすることはない。
弥生は、飛び出した。

遠くから足音が聞こえる。
ここからでもはっきり分かる。この足音の主は、まっすぐこっちへ向かってきている。
「少年⁉」
詩子は、期待に胸を膨らませて顔を上げた。
しかし――
「な……⁉」
――その期待は、あっさり裏切られた。
見知らぬ女性が、凄い勢いでこちらに向かって走ってくる。
その顔に浮かんでいる表情は、明らかな敵意。
幸か不幸か、詩子がいたのは空き地の中心。いずれの方向からでも、そこに近づくには少しだけ時間を要した。
詩子は反射的に立ち上がる。だが、弥生の気迫に一瞬動きが止まってしまった。そして、弥生はそこへ一気に接近した。
「はあああああああああああああ！」
ヴン！
大きく振りかぶり、横凪に詩子を殴りつける！
「きゃっ！」
詩子はとっさにしゃがみ、幸運にもそれを避けた。
(外した⁉)
直撃させることが出来なかった右の拳、しかし弥生の攻撃はそれで終わらない。
「フン！」
ばすっ！
追い討ちをかけるように放たれた弥生の膝蹴り、それが詩子のことを吹き飛ばす。
「あぐっっ！」
体勢が不完全だったせいでこれも直撃はしなかった。だがその蹴りは詩子の腹に浅く入っていた。
やや間合いが開く。
詩子は、少し痛む腹を尻目に弥生をにらんだ。
「……なんなのよ、あなた！」
弥生は返事をしなかった。代わりに、間髪いれず

に接近しようとする。
(このままだと……やられる⁉)
詩子は手近にあったもう一つの鞄――中身の入った――を掴んだ。そして近づいてくる弥生に対抗してそれを振り回す。
「うわああああああああああああ！」
絶叫して詩子は弥生に立ち向かった。
ガン！
振り回された鞄が弥生の左肩を捕らえる！
「くっ……」
どこかの傷に響いたのか、顔をしかめる弥生。
だがそれを無視して詩子に掴みかかる。
だん！
弥生が無理矢理詩子のことを押し倒した。
「放して……、放して……よ」
のしかかられた詩子は、苦しそうにそう訴える。
だが弥生は容赦なく詩子の首に手を伸ばす。
「死んで……頂戴！」

ぎゅうぅぅっ。
急激に詩子の首が締められる。
「うっ……ぐっ……」
呼吸が出来ない。
それどころではない。息の根を止めるどころか、今の彼女は首の骨を折りかねない勢いで詩子の首を絞めていた。
その表情は、まるで何かに取り付かれたように。
急速に意識が閉じていく詩子。
まずい……凄くまずい……。
詩子はまず始めに自分の首を捕らえている手をはがそうとした。
しかしそれはまるで万力でも使っているかのように固く、まるで歯が立たない。
では腕はどうか。片手だけ離して、詩子は弥生の肘あたりを掴んだ。
……両手は離せなかった。そうしたら、一遍に彼女の意識は飛んでいただろう。

詩子は歯を食いしばった。
首を絞める両手に耐えること、そしてその手をどけること、その両方のために。
……既に十五秒。このままでは、間違いなく私は……。
腕を押し上げる過程で、詩子の目に弥生の表情が映った。
目が血走り、口元は自分と同じように食いしばっている。
自分もこんな顔をしているのだろうか、こんなまるで、鬼のような形相を。
——殺される。
一気に、詩子の中に恐怖が広がった。
「うっ……がっ……ぁぁあっ……」
「ぬううううぅぅぅぅぅ……」
その二人の闘ぎ合いは、傍から見ればまるで獣のようで。
弥生の服の肘部分を掴んで押し上げていた詩子の左腕が、過負荷に耐えかねて震えていた。
もうダメ……。
詩子の思考に、限界の二文字がちらついた。
『——君は彼女の帰ってくる場所になるんだろ？』
——別れたときの少年の言葉が響いた。
「ぁぁ……ぁあああっ……」
詩子は最後の力を振り絞り、左手を押し上げた。
弥生はそれに対抗するように、右腕を詩子の首に押しやった。
詩子の左手が、すっぽぬけた。
ギャリッ、と、音がしたような気がした。
「ぎあああああっ！？」
突然、弥生が詩子から飛び離れた。

……何故か、右目を抑えて。
「か……がはっ……げほっ……！」
拘束から解き離れた詩子はその場で激しく咳き込み、そしてその場に嘔吐した。首を締められたことで、一時的な呼吸困難に陥ったのだ。
「おのれ……」
弥生は呪いの言葉を吐いた。右目を抑えている手の隙間から、血が一筋流れる。
視界がぼやけ、遠近感が狂っていた。
何より、現状に対するショックが一番大きかった。
詩子は混乱しつつも、自分の状態を確かめる。
——左手に血が付着していた。
（逃げ……なきゃ）
詩子は、喉を押さえているのとは反対の手で鞄を掴むと、一目散に森へと逃げ出した。
……その少年が賞賛した俊足、傷ついた弥生には到底追えるものではなかった。
「大……失敗の……ようね」
置き去りにされた弥生が、ぽつりと呟く。
彼女は座り込んだまま立ち上がることが出来ない。
残されたのは、空っぽの鞄と数多の傷だけ。
——彼女はまるで、飼い主に見捨てられた子犬のように、ぽつんとそこにいた。

318　食卓

空は赤みを増し、そう遠くない時間には一番星が見えようかという、そんな時間。
人気の無い住宅街を歩く、二つの影。男と、女。
「……ねぇ」
女が、先を行く男に話しかける。
男は無言。
「……ねえったら」
先程よりやや上ずった声で、再び女が話しかける。
それでも、男は無言。
「…………」

いい加減しびれを切らした女は、実力を行使する事にした。
「人の話を聞きなさいよ！」
「ぎひぃ！」
女の蹴りが股間を直撃し、情けない悲鳴を上げながら男は倒れた。
「……不能に……なる……」
それが、男の最期の言葉であっ――
「勝手に死ぬな」
「ぐわっ」

薄暗い路地裏。
「……まあ、これを見てくれ」
男……祐一が自分のバッグを手に取り、女……繭へと渡す。
不思議な軽さに驚きながらも、繭はバッグのジッパーを開く。
「こ、これは……」

バッグの中身を見た繭が、呆然と呟き、祐一を見やる。
祐一はこくり、頷く。その眼は真剣そのもの。
繭は、信じられない、と言った表情で、
「……空じゃない」
祐一は、再度頷く。
「ああ、その通りだ」
「……つまり、どういう事よ」
当然繭にはどういう事か分かっている。だが、それでも聞いておかねば気がすまなかった。
そして、祐一の答えは予想通りで。
「水も無い食料も無い、腹減った」
バカにつける薬はないなあ、と、怒る気力も失せた繭は、ぼんやりとそんな事を思うのだった。
「……それはそれとして、確かに食料は深刻な問題よね」
繭の（実は郁未の）バッグには未だ結構な量の食

料があったが、それでもそう長く持つとは思えない。参加者がまだ半分以上残っている現状では、早期的な終結も望めそうに無い。勿論それは、最後の一人になるまで殺しあった場合、であるが。
「そうだな、もう食料が無いし」
祐一が同意する。
「あんたは考え無しに食べただけでしょうが」
それはキノコを食べる前の繭本人にも言える事だったが、繭は当然その事は口にしなかった。
間違ってバッグを持ってきたことに、多少後ろめたさを感じてはいたが、その事も考えない事にした。
小さく咳払いをして、仕切りなおす。
「……それで、つまりはこの住宅地になにか食料は無いか、と立ち寄ったわけね？」
「まあ、そういう事だ」
今後のことを考えるというよりは、今腹が減ったから来たのだろうが、食料を補充するということ自体は間違ったアイデアではない。

と、そんな事を考えているとき、祐一の腹が盛大に音を立てた。
沈黙。
「……お腹空いたなら、キノコ、食べる？」
「絶対に嫌だ」
間髪入れずに、祐一はそれを断った。
そしてまた、二人は当ても無く住宅街をさ迷う。
「うが～、腹減った～」
「五月蝿いわね……誰かに見つかったらどうするのよ」
繭が咎めるが、食べ物のことしか考えていない祐一には聞こえない。
と、突然祐一の動きが止まる。
繭はそれに反応しきれず、祐一の背中に顔を埋める事となった。
「な、何よ」
祐一は虚空を見て、うわ言の様に呟いた。
「飯の匂いがする……」

「はぁ？」
何言ってるの、とでも言いたげな表情で、繭が祐一の表情を見やろうとしたその時。
「こっちだ」
と、祐一は歩き出す。
呆気に取られる繭だったが、
「……ちょ、ちょっと待ちなさいよ！」
すぐに意識を取り戻すと、慌てて後を追った。
ああ、なんで自分はあいつの事を放っとかないのだろう。なんてお人好し。
そんな自分を、繭は呪った。
「ここか……」
一軒の民家の前。
成る程、誰かがこの家の中にいるというのは確かなのだろう。ほかの家と違って、カーテンがきっちりと締め切られている。
冷静に考えると、罠だろうが、残念ながら今の祐一は冷静ではなかった。
普通に門をくぐり、普通に家の中に入ろうとする。
「ちょっと待ちなさいよバカ！　これ絶対罠よ！」
声を潜めつつ繭は怒鳴る。当然祐一は聞き入れない。
「ああもう！」
それでも結局、繭はついていく。祐一を楯にする格好ではあるが。

かちゃり、と静かにドアを開く。開けた瞬間に不意打ち、というのは無かった。一安心。
音を立てないように、廊下を歩く。
「ん？」
繭の耳が、何かの音を拾う。
「電子レンジ……？」
間違いない、電子レンジの音。誰かが、居るのだ。台所に。
祐一に眼で合図する。流石に慎重になっている祐一もこくり、と頷く。

台所まであと五歩、四歩、三歩……
その瞬間、背後で水の流れる音がした。
二人の動きが止まる。
しまった、と繭は思う。台所に誰か居る、とは限らなかった。
勿論、誰か居るのかもしれないが、通り過ぎた、背後のトイレに、誰かがいる、のだ。
万事休す。やっぱりこんな奴についてくんじゃなかった、と繭は思った。
トイレのドアが開かれる。そして――

「何やってんだあ？　相沢」
暢気な声がかけられた。

「いやー、死んだかと思ったぞ」
「あんたのせいでしょうが……で、この人はあんたの知り合い？」
祐一に質問をぶつける繭だったが、先にその『この人』が答える。
「おうよ。俺と相沢は共に数々の戦場をくぐりぬけ――」
「ウソ言っちゃダメだよ、ジュン」
いつの間にか、その男の隣には金髪の女の人が立っていた。
「兎も角、腹減った……」
その二人の掛け合いなど耳にも入らない、といった感じで、祐一がぼやく。
バカばっかりだ、と繭は思った。

319　（無題）

お腹が空いた。
バッサバッサ
「……おいカラス、少しの間でいいからおとなしくしてろ」
大して怖くも無いが、妙な威圧感のある声で僕を

促す。さっきからじっとして、何をやっているんだろう。左手に持った『小さい箱』をじっと見つめたままだ。動くな、と言われた手前、体を動かさないように首だけ男の持っている箱のほうに向け覗き込んでみた。

ピッピッピッ

赤い点が、中心の青い点に向かって近づいていく。男はそれから目を離さない。

息を潜め、右手には例の『危ないモノ』を構え、左手には『小さい箱』。

人間のやることはよくわからない。心の底からそう思ってみた。

ピッピッピッ

静まり返った森の中、その音だけが響き渡る。よくわからないけど、僕まで緊張してきた。だんだん、赤い点が近づいてくる。

男は動かない、僕も動かない。

ピッピッピッピッピッピッピッピッピ……

突如、音が途切れた。

ぐう～……

「……」

さっきとはうって変わって、これ以上無いくらい、情けない顔をして男は呟いた。

「……なにもこんな時に」

なんだ、どうやら男はお腹が空いていたらしい。こいつ人間のくせに、動かなくてもお腹は空くことを知らないのだろうか。

……いや、もしかして

とてつもなく嫌なビジョンが頭の中に浮かんできた。

――僕の首を握り締め、形容しがたい邪悪な顔をしながら男は問う。

『カラス、どうやって食われたい？』

ぶんぶん、首を左右に振り。必死になって拒絶の意を示す。

『ここは、オーソドックスに焼き鳥か、それとも鍋に放り込んで茹で上がったところをポン酢で食うか』
……どっちも嫌過ぎる。
『この、カラステイマー国崎往人の体の一部になるんだ。光栄に思ってくれてもいい』
殺す気でいるのに、なんてえらそうな態度なんだ。
バッサバッサ羽を動かしてみる。
『まあいい、とりあえず邪魔な羽を毟らせてもらうぞ』
きゅぴーんと音がしそうなほど輝いた目をこっちに向けて、男の手が伸びてきた。
こんな奴に食われてたまるか！

バッサバッサバッサ――
「痛え！　カラス！　おとなしくしろ！」
……男の声が響き渡る。ここは森だった。
妄想に入り込みすぎて、爪を立ててしまったらしい。これ以上男の機嫌を損ねないように音を立てないように羽をたたんでいく。
男は、言ってから我に返ったのか、『小さい箱』に目を落とす。
続いて僕も首を向ける。
点はまだ中心にきていない。
「聞こえてないか？　あと十メートルくらいか……」
安堵の溜息と共に声を漏らし、例の『危ないモノ』を構える。
その顔は、カラステイマーの顔じゃなかった。

320　救世主

「なに寝てんのよ、折原ぁ」
折原が倒れ伏す。
「夢の中でまで寝るなんて、折原ったら阿呆ねぇ。私と折角デートできるのよ？　現実じゃできないん

だから楽しもうよぉ」
折原を揺さぶる。
揺さぶる……。
起きない。
「なんて寝ぼすけ……」
揺さぶる。
揺さぶる。
揺さぶる……。
「ねえ……」
揺さぶる……。
「ねえ……」
揺さぶる……。
「ねえ！」

――ゴロン――

折原が仰向けになった。

血が出ている。
体に力が入っていない。
呼吸も……。していない？

おかしい。
幸福な夢のはず。
この血は何？
認めたくない。
夢であって欲しい。
でもあまりにもリアルだ。

「いやぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーー！！！」
現実感が戻ってきた。
「折原！　起きてよ！　起きてよ！　息してよ‼」
必死で揺さぶった。
「折原！　折原！　折原！！！」
どうしたらいいのかわからない。
揺さぶるのが正しいのかどうかもわからない。

こんなことなら保体の授業もっと真面目に聞いておくんだった。
そんな間抜けなことまで頭をよぎる。
泣き崩れた。
「折原……。折原……。う……、うぐ……」
なにもわからない。
こんなときどうしたら良いのかなど知らない。
一般人が知る由もない。
「おりはら……」
涙を流すだけ。

夢は現実。
現実は地獄。

目覚めてみたらそこは地獄。

でも地獄にも救いはあるのだ。
救世主はいるのだ。

「浩平君か!?」

女装マッチョの救世主。

321　これからを考えて

天沢郁未（三番）は走るスピードを少しずつ緩めて、周りを見回した。
「ハァ、ハァ、ハァ」
息がもう、完全に上がっている。
「ハァ、ハァ……あの子……見失っちゃったか」
水瀬秋子の元から立ち去って、郁未はあの首を締められていた少女を追いかけた。多少のビハインドあったとはいえ、足の速さには自信がある。追いつけると思ったのだが……
「方向を、間違えたのかな……それとも、どこかに、隠れたのかも……」
あの子の事は心配だった。あんな小さい子まで殺

し合いをさせられているなんて吐き気がする。できることならば保護したいと思った。けど、刹那的な感情で行動するべきじゃない、とあいつは言った。
他人のことに気をとられ過ぎると自分の目的が果たせなくなる、と晴香はいった。
それは正しい。今、この状況では確かに正しい。お母さんを助けられなかった、あの少女を保護できなかった、水瀬名雪を傷つけた。
もうそれは認めるしかない。どんなに辛くても、もうそれは過去のこと。変えることのできないこと。だから、いいかげん落ちついて、今からのことを考えないと。
水瀬秋子と対峙したとき、極限の怒りと恐怖の中で、郁未の口をついたのは友人達のことだった。
それが、多分、郁未の本音、郁未の核、郁未の今なすべきことだ。
水瀬秋子のことは今は忘れよう。
もう一度あったときなおも怒りが身を焼くならば、それはきっと刹那的ではない感情。そのときは殺しあえばいい。
とにかく今は、
「一休みね」
ブランクが長いとはいえ、陸上部の元エース。体力は結構自信がある。だが、もうそれも限界だった。とにかく今は腰をおろして何か口に入れないと。
(正直、食欲なんてないんだけどね)
木立の中細々と流れる川の脇に腰を下ろしバッグをあけた。
「結構食料は残ってたはずよね」
水のほうもたびたび水場を見つけては補充していた。一人暮らしの長い郁未は、その点結構目端の利くほうだ。
なのに、なかった。
目をこすってみて、もう一度中身をのぞく。
食料も水も、かけらもなかった。
数秒黙り込んだ後、郁未はようやく一つの理解に

達する。
「……あの、ガキ……」
川で水を飲んで、郁未は一息ついた。多少はらわたが煮えくりかえっているような気もするけれど。
「さて、これからどうするか……」
軽いストレッチをしながら、郁未は考える。
まず、由依。怪我をしているのにもかかわらずおいてきてしまった。
けれど……彼女は今耕一たちと一緒にいる。
耕一は強い。それに、おそらく合流したであろう折原浩平は銃を持っていた。
今、郁未が由依のそばにいても、それは唯一の戦力ということにはならないだろう。水瀬秋子という敵を作った今では逆にマイナスという考えもある。
「ごめん……由依」
郁未はちくりという心の痛みを無視して、由依のことを頭から締め出した。
次に、晴香。
「晴香だったら、どんな行動をとるだろう?」
おそらくは二つ。
兄の良祐を探すか、高槻に挑むかだ。
もし彼女が兄を探しているというのならば、彼女に合流するには、何のあてもなう島をさまよう以上のことはできない。
だが、もし高槻に挑むというならば。
晴香の場合なら、何の計画もなくただ突撃するだけ、というのはありえた。だが、その場合、晴香は失敗して死んでいるはずだ、高槻は死んでないのだから。
晴香は死んではいない、少なくとも前回の放送までは。ならばこの可能性も薄いか。
(いや、無理だと断念して晴香が引いた可能性も十分にあるか……)
あるいは、晴香にもっとクレバーな仲間ができて、今現在好機を狙っている可能性もある。それならば、郁未の助力は晴香にとって願ってもないことだろう。

「結局は、高槻を追えということね」
晴香に合流するつもりならばそれが一番可能性の高い行動だろう。
最後は……耕一たちのそばから離れることになった原因。葉子だ。
「まさか……葉子さんがジョーカーだなんて」
そりゃ確かに葉子さんはＦＡＲＧＯ一筋な人で、ＦＡＲＧＯに入会したのも消費税導入より前らしいけど……でも、ＦＡＲＧＯで別れたときのあの葉子さんの笑顔が偽物だったなんて信じたくない……
郁未は頭を振った。
「だめよ郁未、そんなふうに考えちゃだめ」
今は現実だけを見なくてはならない。今は感情は排さなければならない。甘い観測は捨てるべきだ。
問題提起。葉子さんはジョーカーか？
回答。わからない。
ならば問題を変えよう。自分がジョーカーだったとして、折原浩平に「高槻を倒す」などと嘘をつくか？　私に伝言を頼むか？
回答。否。そんな嘘はつかないだろう。
この椅子取りゲームで殺し合いを加速させたいなら、出場者に人間不信を抱かせ、他人を殺すことでしか生き残れないと思わせるべきだ。
そこで、折平浩平達に高槻が死ぬかもしれないという希望を与えてどうする？　天沢郁未という信頼できる人間を教えてどうする？
もし嘘をつくならば、もう既にマーダーがいるとか、ジョーカーがいるとかそういうことを言うべきだろう。
ここで確認。自分は甘い感情から希望的な観測を抱いてないか？
……否。今の考察は完全に理屈だけで行ったと断言できる。ＯＫ、では葉子さんはジョーカーではないとして話を進めよう。
問題提起。葉子さんは本当に高槻を倒しにいったのか？

回答。ＹＥＳ。葉子さんは高槻を倒しにいった。いくら考えても浩平たちに嘘をつく理由が思いつかない。
問題提起。では、葉子さんはどうしている？　なぜ葉子さんの死を告げる放送もなく高槻も死んでいない？
回答。……わからない。あまりに情報が少なすぎる。
ただ言えることはある。葉子さんは無謀な勝負をする人ではないということだ。
いや、葉子さんとて感情的になることは、多分ある。見たことはないが。だが、彼女は『約束』していったのだ。葉子さんは大言を吐く人ではない。ならば、
「勝算があったの？　それとも今もまだ勝算があるの？」
葉子さんがＦＡＲＧＯにいた経歴を考えれば、自分の知らない情報を葉子さんは持っているかもしれない。
これは、さすがに希望的観測かもしれないな、とは思う。だが、とにかく、
「結局は、これも高槻か」
ならば、最後の問題。高槻はどこにいる？
もし、島の中にいるというならば高槻は相当な危険を冒している。出場者だって結構強力な武器を持っているものもいるのだから。
無論、胃の爆弾を使えば自分のみは守れるだろうが、それならばこのエリアには近づくな、という指示ぐらい出るんじゃないだろうか？
（ひょっとして……高槻はもうこの島には……）
いや、やめよう。郁未は思った。
軽薄な推理は窮地を招くだけだ。それが元で耕一たちと別れることになったではないか。
「もう少し情報がいるか……スタート地点……あっちだったわよね」
郁未は疲れた体をおしてゆっくりと立ち上がった。

322　サバルタンは語れるか

「食った食った。やはりレトルトは偉大だな」
「あんた、ほんとによく食べるわねぇ……」
「早メシ、早グソ、早ブロは日本人の美徳だからな。大和民族のサラブレッドたる俺もこの因果からは逃れられんのさ」
「なによそれ。初めて聞いたわよ、そんなの」
相沢祐一（一番）は宮内レミィ（九十四番）の作ってくれたレトルトのチャーハン四人前を一気に平らげると、至福の表情を浮かべてすっかり満たされた自分の腹をさすった。一方で椎名繭（四十六番）は祐一の底なしの胃袋を目の当たりにしてか、いささか食傷気味になったらしく、ちびちびとこれまたレトルトのクラムチャウダーをつついてる。
「まだまだたくさんあるからネ！　おかわり、たっくさんしていいヨ」
キッチンの方からレミィが二人に声をかけた。幸運にも電気系統が生き残っていたおかげで、冷凍庫に納められていたレトルト食品も無事であったし、解凍するレンジも立派に役目を果たすことができたのである。
「いや、さすがにこれ以上は食えそうにない。ほんとにごちそうさんでした」
「オソマツサマデシター。それじゃお茶いれますネ」
「…………」
とたとたと愛らしくキッチンを駆け回るレミィを見て、北川潤（二十九番）は目を細めた。その北川とテーブルを挟んだ向かいに座る繭は横の祐一を肘で軽く突っつくと小声で彼に尋ねた。
「ね、祐一。あの人達と知り合いなんでしょ？　そろそろ紹介してくれない？」
「ん？　おお、そうだった。腹減ってて、んなことすっかり忘れてたな」

繭に促されると、祐一は歯をせせってた楊枝を折って、ガラスの灰皿に捨てた。
「ヤツは北川潤。俺と共に幾多の死線を潜り抜けた……」
「知ってるわ。あんたの戦友の北川さんでしょ」
「ま、そうだ」
そういうことを聞いてるんじゃないの、と繭は祐一を咎めるように睨んだ。
「まあまあ、そんな顔をなさりなさんな。俺が転校してから最初につるんでそれ以来のつきあいなんだ。アクの強いところはあるが、信頼できるヤツだ」
北川も笑顔を作って繭に言った。
「そうなんですよ可愛らしいお嬢さん。相沢とはどんぶりでフルーチェを作って一気飲みしてみたり、夜な夜な街に出没しては見境無く地球を大切にしたり、巨人ファンの集まるレフトスタンドで『俺は藪が好きだ』とカミングアウトしてみたりと、マクロファージの入り込む隙間も無いほど固く結ばれた仲だったりするんですよ」
「へぇ……どんぶりでフルーチェをねぇ」
あまり興味のなさそうに返事をすると、値踏みするかのような目で繭は北川を見た。繭からすれば、どうも甘っちょろいハンサム以上でもそれ以下でもないように、彼は映るのであったが。
「そして、俺達にメシを作ってくれた彼女の方は……」
「ああ、それは相沢も知らなかったよな」
北川は表情を戻すと、キッチンの方に顔を向け、ティーカップを並べているレミィをあごで指した。
「彼女はガルベス。バンビーノ・ガルベス・ヘレン・ミヤウチだ。ここ数年ローテの柱だったが、頭に血が上るとすぐに外角高めの直球を投げるのが玉に瑕だ」
「ほう、よくわかったようなわからないような」
「ガルベス……ね」
あまり得心が行かぬようであったが、とりあえず

祐一と繭は頷いた。一方のそのガルベスといえば、気持ちよさそうに鼻歌を歌いながらティーパックの紅茶を淹れるのに専念してるのか、彼らの話は聞こえてはいないようである。
「それで相沢。そちらの可愛いお嬢さんだが……」
「うむ、こいつは椎名繭。わけあって予の肉奴隷を……」
最後まで言い終える前に、神経質な金属音と豪快な衝撃音を轟かせて、祐一はテーブルの下に沈んだ。見れば繭が手に大皿をもって肩を震わせている。
「改めて訂正を求むわ」
「は、はい……こちらは椎名繭様。逆三顧の礼でこの度私めを奴隷として雇って下さった高邁潔癖にして賤しからず、蛮勇無能の獣たちの中でただ一人、赫々たる君子の亀鑑これあるお方にございます、はい」
「よろしい」
繭はテーブルの上に皿を置くと、何事もなかったのようなすました顔に戻った。
「ふむ、その年で手に職をつけたか。将来設計も万端だな。輝かしい未来と明るい老後か、見直したぞ相沢」
「結構、最高の賛辞だ。ここはひとつ北川氏にも小生を見習って、努力と研鑽を積んで立身出世の階梯を歩んで頂きたいところですな」
いつも通りの軽口を叩く祐一の表情が、わずかに翳りを帯びたのを北川は見逃さなかった。

夕風の当たるベランダ。手すりに背をもたれかけて北川と祐一は空を仰いでいた。
互いの近況を説明しあっていた二人であったが、知己の死や別離、そして変心と、自分たちとそれを取り巻く状況を再確認するにつれ、最初はいつもの調子で言葉を交わしていた両者も、次第に気まずさと居心地の悪さと説明しようのない不快感が心を蚕食し始め、今では重苦しい沈黙が場を支配していた。

「でだ。相沢、おまえはどうしたいんだ」
やがて口を開いたのは北川の方であった。
「その、元クラスメートさんとやらを」
「もう一度、いや、何度でも説得して、なんとしてでも救い出す」
ゆっくりと、だがはっきりと祐一は答えた。
「しかしなぁ、相沢センセ。そいつは一筋縄じゃいかんな」
焦慮のうちにどういう表情をしていいのかわからず、北川は掌で顔をなでた。
「その子はすでに乗ってしまった人間なんだろう。現に人を何人も殺めているし、おまえさんの説得に耳も貸さずに銃を突きつけて、挙げ句の果てにビルバクを敢行したわけだ。言葉は悪いが、俺だったら自制を失ったヴァルキリーとランデブーする気にはなれない」
「…………」
祐一は言葉に詰まった。彼は北川に累が及ぶ可能性を考えると里村茜という名前も口にするのが憚られたし、ましてや茜こそが美坂姉妹を手にかけた下手人であることなど、口が裂けても北川に伝えられなかった。
「お前の言葉がその子にどこまで届いたかわからんが、少なくとも心の錠まで解けなかった。次に出会うことがあったとしても、その時はそれこそ返答の代わりに鉛玉が飛んでこないとも限らないんだ。なぁ、相沢。そんな今まさに悪鬼羅刹に身をやつしつつある彼女を、おまえは昔の思い人として救い出せるのか」
そしてどうする。おまえは彼女の十字架を背負って歩いていけるのか。いや、それだけならまだしも、おまえまで彼岸の扉を開けて奪う方に回ってしまう事が無いという保証はあるのか。
思っていたことの最後は言わずに北川は黙って飲み込んだ。事が事だけに迂闊なことは言えない。場末の深夜ラジオ番組に届いた「ボクの好きな人は元

クラスメートで、しかも殺人鬼なんです」なんてハガキに対して、うだつの上がらないＤＪのように「何も考えずにまずソープへ行け。自分に正直になって癒されてこい」などと小学生でも言えるアドバイスを進呈するが如きは、無論北川には許されなかったし、第一この島にソープやヘルスなどといったテーマパークを期待するのはお門違いであろう。
「もう、決めたんだ」
香里や栞を見捨て、さらに真琴を失い、その手を血に汚した従妹を半ば裏切るような形で拒絶した。茜と彼女たちを自分に都合のいいように天秤にかけた結果がこの様だ。たとえ茜を懐へ抱き寄せる事が叶ったとしても、それは彼女たちの屍や涙や絶望の上に築かれた、誰からも祝福されない血まみれの握手、背徳の抱擁だ。道化の方が幾万倍もましだろう。
だが……。
「全てを手に入れようとする事は何も手に入らない事と同じなんだ。駄々をこねれば何でも買ってもらえると勘違いしてる子供よりタチが悪いな。だから、俺は自分の腕に抱えきれるエゴだけを貫き通す。そう決めたんだ」
デタラメ一歩向こうの罪深い宣言だ。与える一方の恋と、奪うだけの愛。たとえ触れあっても両者は溶けあわずにかき消えてしまう。なんて剣呑で皮肉な恋愛だろう。危険すぎる、と北川は考え込まずにはいられない。
「稀代のラフメイカー相沢センセにしては出来の悪いジョークじゃないか」
「ご期待に応えられなくて残念だが、俺は本気だ」
結局、北川が言えたのは嘆息混じりの空疎な皮肉だったが、それも今の祐一の前には何ら感銘を与えることなく表面をかすめただけに終わった。言い終えるとそのまま祐一はリビングへと降りていった。
「僕がロミオで君はジュリエット。こいつはまさに……」
去っていくその背中を見やりながら北川は半ば独

り言のようにつぶやいた。

323　嘘をつくこと、信じること

別の道を辿り、誰にも会わないように願いながら約束の地へと急ぐ。
（笑っちまうよな……早く味方を見つけて……協力したいと思ってるのにな）
心の矛盾。
だが、度重なる出来事で確実に他人との遭遇を恐れるようになっていた。
大志の裏切り、瑞希の死、詠美を助ける為に死んだ由宇、放送で知らされる仲間達の死、再会した南の豹変、遭遇したと同時に襲って来るカップル。
横で力なく笑う詠美を腕で抱きながら和樹は歩く。
「ここら辺だな……着いたぞ、詠美」
玲子の消えた場所――島の最北の森の中に存在する小さな広場。便宜上、和樹達はここを『北の広場』と呼んでいた。
そこに、既に一人の影……
「誰だ!?　……楓ちゃんか……」
和樹が構えた機関銃を下ろすと同時に楓がこちらへ向かってくる。
「……どうでしたか？」
「いや、収穫なしだ。スタート地点を含めて怪しいとおぼしき場所を見て回ったけど」
「そうですか」
楓の声に落胆は見られない。
「結構冷静だな。こっちは何もなくて結構ゲンナリなんだぜ？」
「いえ……そこを探したことに意味はあります。次は違う処を探せばいいんです。そこになにもないと分かっただけでも収穫はあったと言えませんか？」
「本当に冷静なんだな……」
「ただ前向きなだけです。そう考えた方が後々の為ですし……それに元気が出るって思います」

「……」
　感心した風に和樹が短く口笛を鳴らす。
　同時に楓から何か物を投げつけられ――
「おっと……」
　放物線を描いてゆっくり飛んでくるそれを和樹は片手でキャッチする。
「これは……リンゴ？」
「食料です。向こうの山に少しだけなってました。おいしいと思いますよ」
　詠美にリンゴを手渡す。遅れて楓からさらにリンゴが飛ぶ。再びそれをキャッチして今度はそれをそのまま口に運ぶ。
　乾いた口内に酸味が広がって――
「ちょっと酸っぱいけど……おいしいな」
　詠美も、和樹が食べたのを確認してからそれにかじり付いた。
「うん……少しすっぱい……」
「良かったです」
　楓が遠慮がちに微笑んだ。
「一応持っといてください」
　自分の分を二つ残し、計四つのリンゴを手渡され、和樹はそれを大事に鞄に詰め込む。
「ああ……今、楓ちゃんは食べないのか？」
「私はその場で食べたから大丈夫です」
「そっか……」
　少し会話が途切れ、沈黙があたりを包む。
「そう言えば……楓ちゃんはどうだったんだい？なにか手がかりは……」
「……何もありませんでした。どこかに地下へと続く道があると踏んでるんですが」
「……なんでだ？」
　楓は一部始終を話した。玲子と共に脱出の為の手段を探そうとしていたこと、玲子が言い出した地下通路の可能性、そして住宅街のマンホールはすべてコンクリで埋められていたこと等。
「……海岸にある祠の中に隠された海底通路があっ

たりしないかな？　と思いましたが、そんな都合のいいことはありませんでした」
　というより祠がない——少なくとも楓は見つけられなかった。
「マンホールはコンクリで固められてたのか……ダイナマイトでもあれば壊せるかな？」
「そうかもしれません。ですが、すべて想像の域をでない話ですから」
「まあ、そうだけど……でも秘密の通路があるっていう線は捨てがたいな」
「はい……」
　そこで、楓の顔が曇る。何か言いづらそうに二人の表情をうかがう。
「……どうした？」
　和樹の言葉に、今まで黙って耳を傾けていた詠美も楓を見やる。
「……言わなければいけないことがあります……」
「言わなければ……ならないこと？」
　和樹の言葉に少し躊躇して、それでも控えめに頷く。
「南さんのことです……」
「「南さん……の？」」
　場に緊張が訪れる——
「私が……殺しました。私が……この手で殺したんです……」
　そのとき生暖かい風が吹いた——
「私が……殺しました。私が……この手で殺したんです……」
　ゆっくりと、言葉の意味を噛みしめるように楓。
「う、そ……嘘……だよね……」
　詠美の言葉。三人の耳にやけに遠く響く。
「嘘でしょ……嘘だって言ってよ！」
「南さんの最期の言葉……南さんは最後に……元にもどってくれました」
　辛そうに、何かを思うように楓が言葉をしぼりだす。

「だったら……なんで……なんでころしたのよ！　どうして、どうして……!?」
詠美が楓の胸倉を掴みあげ、問い詰める。
「言い訳は……しません」
楓が、それだけをようやく口に出す。
「どうして……人を、殺しておいて……どうしてそんなことが言えるのよっ！」
詠美が、その白く細い首に手を回し……
「――っ！」
締めあげる。
詠美が小さなその体を宙に持ち上げるように全力で力を込めて――抵抗らしい抵抗もせず、楓の腕が力なく下がって――
「……ば、や……やめるんだ詠美！」
放心状態だった頭を激しく振って、詠美を後ろから羽交い締めにする。
「殺してやる……殺してやるのぉっ！」
錯乱状態の詠美を力任せに楓から引き剥がした。
ようやく開放された楓は苦しそうに喉を押さえながら地面にへたり込む。
「うっうっ……みなみさん……みなみさんっ……！」
詠美がその場で激しく泣き崩れ落ちた。
「えいみ……」
目の前の現実――それはあまりにも辛くて……
和樹の瞳から、涙が一滴、地面へと流れた――
泣き疲れたのか、詠美はそのまま眠ってしまった。
ただ、無言で時を過ごす和樹と楓。
「なあ……どうしても話してくれないのか？　その理由ってやつ……」
やがて、和樹がそう切り出した。南を殺した、その理由を。
「……ごめんなさい……」
楓もようやく落ち着いたのか、いつもの調子でそう答えた。

「みなみさん……」
詠美の錯乱状態が激しすぎたのが原因か、和樹にそのことのショックは少なかった。
むしろ、どうしてそんな悲劇が起こったのか……それが気になって。
「……すまなかったな……詠美も、普段はこんなことする奴じゃないんだ」
「分かってます。それに私は、殺されたって文句は言えません。詠美さんの……和樹さんの大事な女性を……奪ったんですから……」
「ほんとうは……理由……あるんだろ？　なんとなくだけど、そんな気がする」
「……ないん、です……」
だけど……楓の表情はそうは見えなくて。
「全部一人で背負い込もうとするなよ……な？」
楓の頭に手を乗せ、諭すように和樹。
「だって、だって……」
「楓ちゃん……」
「だって……だってっ……！」
彼女が今まで必死に堪えていた一線。
それが、崩れた――鉄の仮面で隠してきた激情。
「うああああああ――かずきさん――わたしっ――わたしっ！」
和樹の胸の中で、その感情が溢れて――
「……」
泣き疲れて眠るまで、和樹は彼女の頭を撫で続けていた。
「……漫画描きとして徹夜に慣れておいて正解だったのかな」
涙の跡を残したまま眠る二人を見守りながらぼやく。
「和樹選手、修羅場モード突入！　……なーんてな」
それに答える者はいない。
「ふう……こんな子供にまで……無理させちゃたよ

な……」
　楓の寝顔を見つめ、一人苦笑する。
（まだ中学生位……だよな？　……本当はまだ誰かに甘えたい年頃なのにな）
　和樹もまた、心の何処かで楓を頼っていた自分を恥じた。何も考えず、ただ闇雲に詠美を連れまわして。そして、楓が陰で傷ついていたことにも気がつかなかった。
（知らず知らずに……俺も、この二人を追い詰めてたんだな……）
「頑張って……島から生きて帰ろうな……」
　誰にでもなくそう自然と出る言葉。楓は結局何も話してはくれなかった、それでも――
（たとえ詠美が……他の誰もが信じなくても……俺は楓ちゃんを信じよう――）
　心にそう誓った。
　もうすぐ太陽がまた沈み、夜がやってくる――

324　第五回定時放送

「二日目午後六時だ、早速今回も定時放送いくぞー。

四番　天沢未夜子
十五番　杜若きよみ
二十七番　川澄舞
三十五番　倉田佐祐理
五十一番　住井護
六十五番　長森瑞佳
七十番　芳賀玲子
七十一番　長谷部彩
八十番　牧村南
九十三番　巳間良祐
九十六番　深山雪見

以上十一人、残り五十一人だ。

ようやく半分になったなぁ、おい。
それと、不用意にこのゲームを妨害しようとした奴がいるから、俺が殺しておいた。お前達の腹に入れた爆弾は冗談じゃないことが、よくわかったな？あまり調子に乗った行動を取らないように、以上だ」

325 二人の選ぶ道（前編）

その放送は、その場にいた四人中、三人を凍りつかせるのには充分すぎた。少しの間を置いて祐一は無言で立ち上がり、玄関の方へ歩いて行く。
「……どこへ行くのよ、祐一」
祐一の方を見ないで、繭は言った。
その声にも、祐一は止まらない。ただ静かに、玄関のドアを開けようとする。
「祐一!!」
今度は叫ぶ。その声にようやく、祐一は動きを止めた。
「……何か言いなさいよ」
繭が言う。
掠れた声で、震える声で。
それは何も言おうとしない祐一に対する怒りか。
残酷な放送に対する悲しみか。
その両方か、他の何かか。
この場にいる人間にも、繭自身にも、わからなかった。
「早く、茜を探す。茜に死なれて、たまるものか……。忘れていた。呑気にしてる時間は、俺にはなかったんだ」
「さっきの放送で、誰か知り合いがいたの？」
幾分か落ち着いた様子で繭は問いかけた。
「……」
「先輩が二人いたんだよ」
答えない祐一のかわりに、北川が呟く。
「な？」

座ったまま、窓の外を覗いたまま。
不自然なくらい静かだった。まるで装っているかのような。その様子が繭には気がかりだったが、気にしてる状況ではない。
「そう。でも、今はやめなさい？　まだ太陽が出てるからいいけど、近いうちに夜になる。夜動くのは、得策じゃない。折角ここには信頼できる人がいるんだから、夜明けまで休みましょう？　いい加減疲れてるでしょう？」
極めて冷静に、繭は言った。
正しかった。僅かな休息をとったとはいえ、この状況下ではまだ足りない。回復を待つことは重要だ。それに夜も良くない。理解の及ばぬ速さで、人が次々と死んでいるこの島。ゲームに乗っている人間は確実にいると思った。真琴、名雪、自分の身に降りかかった悪意のある偶然に誤解。そんなものだけでは、この死人の数は説明できない。意志を持った殺人者は必ずいる。そんな危険な人間の存在を考えると、夜は危ない。夜闇に紛れることは、気付かれる可能性を下げると同時に、気付く可能性も下げてしまう。可能性には自分の命が懸かっている。繭の言うことは確かに正論だった。
「だからどうしたっ！」
今にも跳びかかりそうな勢いで、祐一は叫ぶ。
「こうしている間にも、どんどん人が死んでいるかもしれないんだ！　次に名前を呼ばれるのは茜かもしれないんだ！　そんなことになる前に、俺は会いたいんだ！　会わなきゃいけないんだ！　お前にわかるかっ!?」
そうだった。何よりも惜しいのは時間だったのだ。いかに早く茜と会えるかが問題なのだ。繭の言うことは正しい。夜は危険だ。だからといって昼が安全だというわけでもないのだ。昼は周りの様子を察しやすいかもしれないが、それは殺人鬼にしたって同じこと。気付く可能性も上がるが、気付かれる可能性もまた同じ。危険なことに変わりはない。体力が

何だ、気力が何だ。そんなものは根性でどうとでもなるものだ。速やかに目的を達成するために、この程度の範囲で手段なんか選んでいられない。こいつは頭の回る小娘のくせに、そんなこともわからないのか。
「わかるわよ……私にもわかるわよ、そんなことっ！　私だって、あなたと同じなんだから！」
それが、心の堰が外れる、瞬間だった。
祐一も、繭も、どうしようもなく子供だった。

「さっきの放送に入ってた。瑞佳さん。私のお姉さんのような存在だった！　出来の悪い私にかまってくれて、いつだって優しくて。皆の人気者で。真琴さんとは全然違うお姉さんだけど、私は瑞佳さんが大好きだったんだ！」
涙が流れる。止まらない。その雫を拭おうともしないで繭は続ける。
「会いたかったのに……会いたかったのにぃ……瑞佳さぁん……」
「繭……」
「でも、でもね……」
嗚咽混じりに続ける。
「浩平さんは……七瀬さんは生きている。私はあの人達を信じてる。あの人達は、そう簡単に死んだりしない。死なれてたまるものですか」
その言葉で、自分を納得させるように。
「私が死んだら、あの人達も悲しむ……きっと悲しむ。だから、私も無事でいなくちゃいけないんだ。無事に、会わなければいけない……あなたも……そうでしょう？」
繭は祐一を見上げた。その目で、きっと睨んだ。
その視線に負けそうになる。自分はひょっとして、残酷なことを言ってしまったんじゃないか。この娘だって、きっと早く、自分の知らない誰かに会いたいんだ。だけど頭のいい彼女は自身の判断で留まることを選んだ。相手を信じて、自分の

安全を取った。
時間が惜しいのは彼女だって同じだったのに。
そんな彼女に何を言った。選択肢すらない自分の身勝手な理屈をつきつけて、相手が悩んでいることなんて考えもしないで。その上、猪突猛進な俺の心配までさせて。
子供で、大人で。
だけど、
「それでも、俺は――」
「こんなに冷静に考えたくないよ……。こんな理屈に縛られたくないよ……。こんな『アタマのよさ』なんて、もういらないよぉ……」
祐一は、もう、言葉を続けることはできなかった。
――それでも、俺はここを出る――
そんな言葉を。
ここを出る。
だけど、この子の前でそれはやめよう。
眠っている間に出て行こう。
やってることは同じだけど、
悲しませるのは同じだけど、
この泣き顔の前で、それはできないから。
残酷で臆病な自分を自覚しながら、
祐一はその場に静かに腰を下ろした。

326　二人の選ぶ道（幕間）

やがて、日は沈み、夜になった。
「じゃあ、電気はつけないこと。ここにいること、誰にも悟られないように。寝静まった所に爆弾でも投げ込まれたらおしまいだからね」

涙枯れるまで泣き尽くし、既に落ち着きを取り戻した繭の指示が飛ぶ。先程までのやりとりなど、まるでなかったかのような。
「見張りを交代で二人ずつ立てましょう。交代で寝て、休みをとる。いいわね」
繭、北川、祐一、レミィという順番に、八時から二時間で一人ずつ交代していく。
やがて室内の時計が八時を指す。繭と北川を残し、祐一とレミィは眠りについた。

＊

何事もなく八時からの見張りを終える。
「じゃあ、お先に休ませて貰うわよ」
「おう。お疲れ」
「ほら起きなさい」
祐一の頭を軽く蹴り飛ばす。
「……ん、時間か」
「そ。後は任せたわよ」
「……おう」
「あ、それとさ」
床に寝転がりながら、北川を見る。
「何を考えてるのか知らないけど、割り切っていかないと、この先辛いわよ。おやすみ」
それきり目を閉じ、何も言わない。
「ふう。なんか見透かされてるな、俺」
溜息を一つ。
「何か、あったのか？」
「ちょっと、もずくがな……」
「いや、言いたくないんだったらいいさ」
「あっさり流すな」
祐一の反応に少しだけ不満を抱く。
そのまましばらく、無言。
静寂を破ったのは北川だった。
「従兄弟が死んだんだ。住井護、さっきの放送に入ってた」

「何だって？」
「昔からいろいろ悪さしてた。あいつは要領がよかったし、悪戯心満載で。俺もかなり影響を受けたと思うよ。今の俺がいるのは、あいつのおかげだと言ってもいい」
　何を言うべきか迷う。思い返せばあの放送の時から少しだけ様子はおかしかった。川澄舞と倉田佐祐理。原因はこの二人だけではなかった。同じ学校の生徒、そんなのよりもずっと近く、ずっと親しかったろう人が死んでいたのだ。
「はた迷惑な奴だったんだな」
　結局雰囲気にそぐわないツッコミを入れる。北川はそれを綺麗に無視して続けた。
「そのあいつが、まさかこんな所で死ぬとはな」
「……」
「相沢。お前これからどうするんだ？」
「茜を探して、その後は知らない」
　先のことはわからなかった。祐一にとって今大事なことは、何よりもまず、会うこと。
「お前の女か？」
「馬鹿言うな」
「そうか……俺達、どうなるのかね」
「さぁ、な……」
　少年達の思いを置き去りにするように、夜はただ、更けていく。

327　二人の選ぶ道（後編）

「じゃ、お先にな」
　祐一にそれだけ言って、北川はさっさと寝てしまい、暗闇の中、祐一は一人取り残された。
　窓の外はあんなにも星が綺麗で、地上にいる自分達を照らしてくれる。いっそのこととこれから歩む道も照らして欲しかった。何も見えないから、がむしゃらに、ただ自分の信じたことをするしかなかった。

例えその先に、何があっても。
部屋の隅にある自分の鞄に手をかける。
中には、僅かな食料と水、カスタムエアーウォーターガン、予備タンク。幸運なことに、この武器を使ったことは、まだない。
ただ一度、名雪を威嚇するのに、口を向けただけ。
——名雪——
名雪はどうしているだろうか？
軽率だった。名雪だって、自分を守ろうとしての行動だったのだ。それはわかっていた。お前は悪くないと、声をかけてやるべきだった。
悔やんでも、取り返しはつかない。。
頭を振り、鞄を持ち上げた。
最後に繭を見る。
結局、この小さな小さな女の子すら裏切ることになってしまった。こうやって多くの人を傷つけて、見捨てて、裏切って。後何人、自分はそうやって通り過ぎていくのだろうか。足を止めて、手を差し伸べて、そうできたらどれだけいいだろうか。
それでも——
(悪いな、繭)
玄関に向かって歩き、
「どこ行くつもり？」
声を聞いた。
「なんだ繭、起きてたのか」
「どこ行くつもり？」
「こんな時間に起きたりして、子供は早く寝ろ」
「どこ行くつもり？」
「肌が荒れるぞ？」
「どこ行くつもり？」
祐一の言葉をひたすら無視し、繭はただそれだけ繰り返す。バツが悪そうに頭をかく祐一に、軽い侮蔑の視線を送りながら。

「これだから……男ってやることが卑怯よ」
ガキが何を言うかと言いたくなるのを堪え、ただ、
「悪い」
と謝った。
「悪いと思うんだったら、最初からやるんじゃない」
「悪い。本当に、ごめん……」
頭を下げた。
「はいはい、わかったから。子供じゃないんだから、そんなことで泣かないでよ」
「……あれ？」
慌てて顔に手を当てる。そういえば、微かに目の前が滲んでいたような。
「嘘よ」
気のせいだった。
「で、やっぱり出て行くんだ」
「そうする。誰が何と言おうと、もう決めたから」
「……ねぇ」
そこで一旦言葉を切り、僅かに迷いながら続けた。
「どうして、かな？」
「茜を助けたいから」
即答だった。
「さっきお前の言ったこともわかるけど。だけどやっぱり、俺にはベストだとは思えない。ここに留まった時間だけ茜に会うのが遅れて、もしその時間で茜に何かあったら、俺はどうすればいい。今まで何度も後悔してきたけど、茜が好きで大切だから、それを失うような真似だけはしたくない。だから行くよ。自分が正しいと信じて、行くしかないんだ」
どれだけ先が暗くても、
どれだけ道に迷っても、
その先に光があることを信じて。

「わかったわよ。まったくもう……熱血なんだから」
諦めの視線を送り、そのまま部屋の隅へ。
キノコが入った自分の鞄を、肩に背負った。
「繭？」
「行くなら行きましょ。見張りは一人ずつの交代制でも充分でしょ」
軽口を叩く。
「お前、何で——」
「感化された。それだけ」
祐一の言葉を遮り、言い放つ。
その言葉には、何の他意もなく。
「いいのか？」
「いいんじゃない？」
思わず苦笑する。感化してしまったらしい。これでこの子を危険に巻き込んでしまったことになる。
傷つけて、見捨てて、裏切って、

それでもせめて、自分の手の届くところにいるうちは、守り通してやろうじゃないか。
もう何も言わず、祐一は玄関のノブを回す。
本当は起きていて、今の会話を聞いていたに違いない男に、挨拶を。
「じゃあ北川、悪いけど、行ってくる」
「おう」
「死ぬなよ。また、絶対に会うからな」

「行ったな」
「ジュン、行かせてよかったの？」
「どうせ行くだろうと思ってたしな。朝になったら俺も動くよ。このＣＤを集めてみようかと思う。『２』ということは、何かあるはずだ。今の俺には、それしか出来ない」
「そう。応援するヨ！」
「あれ、一緒に来ないの？」
「もちろん行くヨ！　上手くいったらいいネ！」

「そうだな――」

暗くて遠くて長い道。
一人では辛い道でも、
二人でいれば心強い。
どれだけ先が暗くても、
どれだけ道に迷っても、
その先に光があることを信じて、
今は、ひたすらに未来を信じて、
二人は、夜の道路を駆け抜ける。

《葉鍵ロワイアル　第二巻　了》

端書

なんとか、第二巻の発行にこぎつけました。
今回の作業を通じて手順などもそろそろ固まりつつあり、後はいかに効率よく事を進めていくかという部分と、何処までクオリティー向上に時間をかけるのかという部分の、ある種のアンヴィヴァレンツとの戦いです。
まだまだ長丁場も序の口といったところですから、先述のことも色々と考えつつ、今後に向けて頑張っていきたいと思います。ご支援ご協力、宜しくお願いします。

それにしても、葉鍵ロワイアル（以下ハカロワ）が、こうして同人誌による単行本化が実際になされているというのはやはり随分と感慨深いことです。
私自身の本編執筆量は確かに全体の僅か数パーセントです。しかし、最初期からの参加ですし、本編に収録された内容に倍する没やアナザーも執筆しました。またそれ以外にも、ハカロワというリレー小説を盛り上げるべく、陰に陽にと働きかけてきた、という自負もありますし、ましてや、それらを現在、自らの手で編集しているわけで……。
ハカロワという存在は私の中で、随分と大きなものになったと言えるでしょう。
それにしても、ハカロワ最初期のあの加速度的な投稿スピードといったらありませんでした。

当時の書き手の多くが経験したであろう、『登場人物が被るシーンを先に挙げられてしまった為に泣く泣く没にした』ものも数多くあり、それらの出来事も思い入れに強い影響があると思います。
次こそはと勇んで書くが、下手なものは見せたくない。その為に練り込みの時間をとりたいが、そうすると先を越されて望んだ展開を書けなくなるかもしれない……。
初期の辺りは特に、多くの人がそんなせっぱ詰まった状態で書いていたはずです。
或いは、アイディアだけはあるのに外せない用事（例えば仕事）があるので、どうしても今書けない、などという状況で歯噛みした書き手も多かったでしょう。かくいう私もそうでしたし。
しかしそれもハカロワという、掲示板上で行われたリレー小説の醍醐味の一つでした。
中盤にもなると、ある程度はペースも落ちついてきて、ある程度じっくりと書く余裕が生まれ、長文の傾向が出始めますが、しかしインスピレーション命の書き込みもあるので油断は出来ません。
登場人物達が殺るか殺られるか、という状況であったように、書き手側は書くか書かれるか、という状況は終局まで変わりませんでした。
そんな、リレー小説というナマモノを扱う上で様々な困難もありましたが、その多くは既に思い出の中に消えていきました。
その中でも特に一つ。忘れえぬ事件があります。
葉鍵板の消滅がそれです。
結果としては一時的かつ短期間なものになりましたが、『2ちゃんねる、ひいては葉鍵板の消滅』という事件は当時、大きな衝撃でした。

物語も終盤を迎えつつあったあの時期、当面はずっとそこにあるのだと思っていたコミュニティーが消滅しようとするその現実に、例えようも無い喪失感があったものです。
『場』が消滅してしまったあとも、住人同士なんとか連絡を取り合い、善意の協力者（本当に助かりました）によって用意された避難所で連載は続き、やがて復活した葉鍵板（当時復旧に尽力された方々にこの場を借りて感謝します）に舞台を戻し、ついにハカロワは完結しました。
軽い冗談のような書きこみから始まったハカロワも、いざ終ってみれば八百話以上という大長編で、当時のネット上ではそれなりに騒がれたものです。

かくして一つの祭りが終わったわけですが、実はその完結した頃から、私や一部の友人の間で、この物語を同人誌で単行本化出来ないだろうか、という話はありました。
『自分達が作り上げた物語をしっかりとした形で手元において置きたい』という想い。
或いは、一巻で瀬戸が語ったのと同じく、『媒体をアナログに移すことでより多くの共感者を得られないか』という願い。
そして、『このハカロワという輪が何処まで広がっていけるものなのか』という興味……。
しかしながら、予想される困難を前に同人誌化は成されず。なったらいいのになぁという願望を抱えたまま、計画立案という砂上の楼閣を作っては崩し、作っては崩しを繰返しつつ、時は流れていきました。
そんなある日、『ハカロワを懐かしむスレ』に現ハカロワ出版企画責任者である瀬戸による、「全責任とあらゆるリスクは俺が負うから、紙媒体化しようぜ！」との書きこみが。

ぽっと出の彼による企画ということに、友人の書き手たちも疑心暗鬼でした。が、こんな酔狂な申し出をする人間は、そういません。それにひきかえ、こちらは計画だけなら何度も立てていましたし、ノウハウもありました。これこそ渡りに船というものでしょう。
かくして、『氏が企画に全面参加するなら』という声に推される形で企画への参加を決意、今に至ります。
単行本化の作業は、確かなやり甲斐と共に（やはりというべきか）執筆当時とは異なる苦労が伴います。
そんな中でも、このハカロワ単行本化という企画を喜び、応援して下さる声を耳にする度に思うのです。
——頑張らなくっちゃな、と。
そんなこんなで、無事最終巻の発行が出来るその日まで、ハカロワ出版企画一堂全力で邁進する所存です。
重ね重ね、今後とも宜しくいただければ幸いです。
最後に。
本書を手にとって下さった方々に、そして全てのハカロワ関係者に、感謝を。

平成十五年　四月　某日
セルゲイ＠Ｄ

葉鍵ロワイアル　第二巻　著者一覧

奇跡の企画を作り上げた皆様に

この場を借りて、お礼を申し上げます。

◎制作者一覧
制作協力：
104、111、Alfo、JOYH-TV、L.A.R、Yellow 、#3-174、
いつかの書き手、独活大樹、静かなる中条、真空パック、
駄っ文だ、ないしょ、名無し達の挽歌、
名無しさんだよもん＠誤植指摘、ナナツさんだよもん、
観月、 林檎、『 。』、名無しさんだよもん

制作協賛：
５、Kyaz、MIU、NBC、感想スレＲの 142、葵原てぃー、
久々野　彰、シイ原、遥か昔の書き手、
七連装ビッグマグナム、暇人、日向葵、箕崎、祐一＆浩平、
名無しさんだよもん

スペシャルサンクス：
189、quit、River. 、zin、#4-6、#7-76、荒門、命、彗夜、
ダンディ、名無し cd、名無しさんなんだよ、にいむらたくみ、
花と名無したん、ヘタ霊、赤目、名剣らっちー、あり名無
しさんだよもん、旧データサイト管理人各氏、

そして全ての名無しさんと読者の皆様
（アルファベット～アイウエオ順、敬称略）

葉鍵ロワイアル　（2）
二〇〇三年　　五月　五日　初刷発行
二〇二二年　一二月三〇日　電子書籍版　初刷発行

著　　者：（別頁に記載）
発 行 者：瀬戸こうへい
発　　行：ハカロワ出版企画
初　　出：２ちゃんねる、葉鍵（Leaf&Key）板
編集事務：セルゲイ＠Ｄ　三浦　闌
挿　　絵：みさき樹里
印　　刷：株式会社ポプルス
連 絡 先：kohei19800310@yahoo.co.jp

巻末付録
武器リスト

No.001 スペツナズナイフ　　柳川祐也
旧ソ連軍の使用していた発射式暗殺用ナイフ。鍔にあたる部分にあるスイッチを押すことで刀を前方に飛ばす事が出来る。

No.002 サバイバルナイフ　　里村茜
米空軍のパイロット用として使われているサバイバルナイフ。ブレードは反射防止のため黒く塗られ、革製のハンドルは濡れても滑らない。

No.003 バタフライナイフ　　住井護
可動式グリップが特徴的なナイフ。刃をしまえる機構を持つため、練習をすれば通常のナイフより安全性が高い。

No.004 投げナイフ　　神尾観鈴
投擲用に設計されたナイフ。飛ばしやすい反面、耐久力に劣る。

No.005 果物ナイフ　　立川郁美
果物の皮を剥くために用いるナイフ。殺傷能力は低い。

No.006 小太刀　　水瀬秋子
太刀と脇差の中間くらいの長さの刀。約61cm（２尺）。

No.007 短刀　　牧部なつみ
刃渡り30cmほどの短刀。その刃は錆び付いているため、殺傷力は低い。

No.008 日本刀　　巳間晴香
日本刀には大きく分けて「太刀」と「打刀」の二種類があるが、支給された物はすべて後者。敵を斬る際には、包丁を使うように引き切る動作が肝心。

No.009 日本刀　　河島はるか
武器としてだけでなく、工芸品、美術品としての価値も高い逸品。

No.010 日本刀　　遠野美凪
一見何の変哲も無い刀だが、その刃には猛毒が塗られている。かすり傷でも致命傷になるので注意！

No.011 手斧 & ぷち主　　天沢未夜子
片手で持ち運び出来る小振りの斧。主に木を切り倒したりするのに使われるが、人の頭蓋骨を叩き割ることも可能。日常に疲れた心を癒してくれるかわいいペット付き！

No.012 鉈　　姫川琴音
まき割り、枝打ち、くいを削るなどに用いられる刃物。

No.013 包丁　　砧夕霧
一般的な家庭で使われている洋包丁。炊事に欠かせない道具。

No.014 出刃包丁　　江藤結花
分厚い刃を持つ和包丁。その重さを利用して魚や鳥を骨ごと叩き切ったり、捌いたりするのに使う。

No.015 折畳式の槍　　鹿沼葉子
折り畳んでコンパクトに収納出来る槍。かさばりません。訓練すれば、高度一万米上空の爆撃機をも迎撃できるかも？

No.016 鉄の爪　　柏木千鶴
手にはめて使う鋼鉄の爪。爪部分は指の動きに連動して可動する。これを付けたままで顔を掻かないように注意！

No.017 Colt M1911 A1　　宮田健太郎
一般的にはコルトガバメントという呼ばれ方の方が有名。一九一一年に米軍に正式採用され米国政府が認証した、という意味でガバメント（Goverment＝政府）と呼ばれる。
口径：.45ACP　装填数：7+1

No.18 S&W M19(2.5" barrel)　　雛山理緒
.357マグナム弾と共にデビューした通称コンバットマグナム。使い勝手が良く米警察機構で多用された。次元大介愛用の拳銃として有名。
口径：.357Mag　装填数：6

No.019 Desart Eagle .357 Magnum　　倉田佐祐理
イスラエル製の大型拳銃。.357マグナム弾使用の初期型。
口径：.357Mag　装填数：9+1

No.020 Desert Eagle .44 Magnum　　国崎往人
.44マグナム弾を使用。.357バージョンであったカートリッジのパワー不足が解消されている。安定した威力と性能を誇る。
口径：.44Mag　装填数：8+1

No.021 Desart Eagle 50AE　　松原葵
拳銃弾では最大級の口径と威力を誇る50口径弾“.50 Action Express”を使用。その威力から、別名ハンドキャノンとも呼ばれる。本来は熊などの狩猟用を目的とした銃だけに射撃時の反動は凄まじい。
口径：.50AE　装填数：7+1

No.022 H&K Mk23　　岩切花枝
別名ソーコム・ピストル。室内での拳銃の有効性を鑑みて開発された特殊部隊用の拳銃。オプション装備が豊富。
口径：.45ACP　装弾数：12+1

No.023 Beretta M92F　　名倉友里
現代軍用拳銃の傑作のひとつ。15発と装弾数が多い。1911A1の後継として米陸軍にも採用された（採用名M9）。
口径：9mm×19　装填数：15+1

No.024 Walther P38　　巳間良祐
第二次世界大戦期にドイツで開発された。安価且つ信頼性の高い名銃の一つ。日本ではルパンⅢ世の愛用銃として特に有名。
口径：9mm×19　装填数：8+1

No.025 Tokarev TT-33　　猪名川由宇
ソビエト陸軍が採用していた拳銃。貫通力が高いが、人体への破壊力は低い。安全装置が全くついていないため、引き鉄を引くと弾が出る。
口径：7.62mm×25　装填数：8+1

No.026 SIG Sauer P230　　神尾晴子
軍用拳銃では大きすぎるが、警察用拳銃では威力が足りない、そんな要求に応じて開発された拳銃。日本のＳＰに正式採用されている。
口径：9mm×17　装填数：7+1

No.027 CZE Cz75 (First Model)　折原浩平
人間工学を考慮したグリップは、まるで手に吸い付くようと評される。後期型と違い採算度外視で作られた芸術品。ラリー愛用の銃。
口径：9mm×19　装填数：15+1

No.028 S&W M29　月島拓也
通称『44マグナム』。映画「ダーティハリー」において主人公キャラハンが使ったことで一躍有名になったリボルバー銃。
口径：.44Mag　装填数：6

No.029 Hi-Standard Derringer　天野美汐
ハンドバッグなどに忍ばせたりする拳銃として有名。小口径だが、マグナム弾を使用する。トリガーが重い上に２発しか装填できずないため撃ち合いには向かない。メリルの愛銃。
口径：.22mag　装填数：2

No.030 富和工業 64式小銃　保科智子
日本国産の自動小銃。他国の銃と比べて数倍の値段がする高級品。命中精度は高いが、部品点数が多く整備面に弱点を抱えている。
口径：7.62mm×51　装填数：20+1

No.031 Colt M635　深山雪見
米軍正式突撃銃M16の発展型。使いやすいものの重量がかさむのが難点。
口径：9mm×19　装填数：32+1

No.032 H&K SMG II (MP2000)　藍原瑞穂
サブマシンガンの代名詞とも言えるMP5の改良試作型。マシンガンとサブマシンガンの違いは弾薬で、前者は専用の弾、後者は拳銃弾を使用。
口径：9mm×19　装填数：30+1

No.033 Ingram M10　千堂和樹
コンパクトなサブマシンガン。弾をばら撒いて敵を制圧するタイプの銃なので命中精度は悪い。射速が早く約２秒で弾薬を打ち尽くす。
口径：.38ACP　装填数：30+1

No.034 Remington M31　緒方英二
ポンプアクション式の散弾銃。小さな球弾を大量にばらまくので近距離ならかなり有利。
口径：12Ga　装填数：4+1

No.035 Benelli M3 S90　氷上シュン
ポンプアクションとオートマチックを切り変えることができる散弾銃。特殊部隊でよく使用されている。
口径：12Ga　装填数：7+1

No.036 Remington M870（ハンティングセット）　篠塚弥生
M31の後継として開発された、レミントン社の代表的なポンプアクション式散弾銃。それと、ハンティング帽と熊用の罠のセット。
口径：12Ga　装填数：4

No.037 ウォーターガン　宮内レミィ
子供のころ遊んだ水鉄砲の進化した物。空気圧で中の水を打ち出す。

No.038 硫酸入りウォーターガン　　相沢祐一
H_2Oの代わりにH_2SO_4が注入されている水鉄砲。おもちゃと思って油断してると火傷するので注意。

No.039 エアガン（FN Hi-Power）　　大庭詠美
銃を模した模型。トリガーを引くとＢＢ弾が発射される。当ると痛いが、もちろん殺傷力は皆無。元銃は銃器設計の天才と言われたブローニング最後の作品。ブローニング・ハイパワーの通り名の方が有名。

No.040 ショートボウガン　　石原麗子
引き鉄を引くことにより矢が発射される機械弓。通常の弓より簡単に打つことができるものの装填に時間がかかる。

No.041 オートボウガン　　藤田浩之
大型のボウガン。威力は増強されているが、その分扱い辛い。

No.042 ニードルガン　　森川由綺
無数の細長い針を打ち出す武器。射程は短いが殺傷能力は高い。

No.043 手裏剣　　牧村南
日本の忍者が使ったと言われる菱形手裏剣。刃の部分に遅効性の毒が塗ってある。使いこなすには熟練が必要。

No.044 火炎放射器　　御影すばる
可燃性の液体を圧縮空気にてスプレーすると同時に点火装置で着火して火炎を放射する装置。射程は短いが、制圧力は高い。

No.045 Ｃ４プラスティック爆弾　　セリオ
映画などでおなじみの高威力爆弾。マッチ箱ひとつ分でレストランを消し去ることが出来る。ガムじゃないので注意！

No.046 クマのぬいぐるみ　　神岸あかり
一見愛らしいぬいぐるみだが、その正体は小型爆弾。小さな建物なら吹き飛ばせるほどの爆発力をもつ。

No.047 小型爆導索 & 照準用レーザーポインタ　　来栖川綾香
鎖の先端に数珠繋ぎに小型の爆雷をつけた武器。敵を絡めとって爆薬を作動させれば、跡形も残らないであろう。

No.048 ダイナマイト腹巻　　名倉由依
ダイナマイトが大量に付いた腹巻。出入りや鉄砲玉のときのファッションはこれでウッボー（キマリ）。芸術は爆発だ！

No.049 手榴弾　　長岡志保
言わずと知れたパイナップル。安全ピンを抜き投擲する。

No.050 CD1/4　　塚本千紗
見るからに怪しいCDその１。ラベルには、1/4とだけ書かれている。

No.051 CD2/4 with PC and Chopsticks　　澤倉美咲
林檎のマークが有名な某社のノートパソコンに箸とＣＤまでついたお得なセット。本来の用法の他に、鈍器やまな板としても使えます。

No.052 CD3/4　柚木詩子
見るからに怪しいCDその３。

No.053 CD4/4 with 拡声器　杜若きよみ
見るからに怪しいCDその４。そして、片手で持ち運びが出来る、声を大きくする器械。

No.054 CD　新城沙織
見るからに怪しいCDその５。番号が振られていない。

No.055 スタンガン　広瀬真希
高圧電流を相手の体内に流し込み、手足の麻痺や幣症感覚喪失などを引き起こす武器。

No.056 伸縮式特殊警棒　藤井冬弥
世界中の警察官が装備している殴打武器。持ち運びの容易さの割に威力は大きい。

No.057 釘バット　芳賀玲子
バットに大量の釘を打ち込んだもの。

No.058 メリケンサック　美坂香里
指に嵌めて使う金属製の武器。

No.059 レーザーポインタ　観月マナ
玩具店などで売っている子供向けのおもちゃ。

No.060 鋭利なＧペン　長谷部彩
細い線から太い線まで引けるため漫画の主線を入れるのに多用される。このペン先は通常より鋭利にできているため人に投げるととても危険。

No.061 鉤爪ロープ　霧島聖
先端に三叉の鉤爪がくくられたロープ。急勾配を移動するのに便利。

No.062 レジャー・セット　来栖川芹香
アウトドアライフを満喫するための用品が満載。虫避けスプレー、消毒液、包帯、ジッポ。そして、痛みを感じなくなる薬まで。

No.063 ピアノ線　長瀬祐介
強強度ワイアーの総称。現在のピアノ線は最新技術によって恐ろしいほどの強度を獲得している。

No.064 パチンコ　沢渡真琴
ゴムの力を利用して小石などを前方に飛ばす原始的な武器。

No.065 フェイス・タオル　杜若きよみ（複製身）
手を拭いたり、人の首を締めたりとさまざまな用途に使用可能。

No.066 民明書房　柏木楓
中国古代の拳法のみならず、医学、歴史、民俗学、法学などありとあらゆる分野の解説書。

No.067 ハリセン　柏木初音
関西芸人の魂を食らってきた伝説の武器。ボール紙を段々に折り畳ん

だ構造をしており、叩くと気持ちの良い音がする。

No.068 防弾ファミレス制服　　柏木梓
某ファミレスの制服に防弾処理を施したもの。メイドタイプ・スクールタイプ・アイドルタイプと三種類、お好きなものをどうぞ。

No.069 男用ブルマ　　柏木耕一
穿きたいけど穿けない、そんな貴方に贈ります。大事な部分も鉄板で防護されている安心の設計。女性の方にもお使いいただけます。

No.070 防空頭巾　　川澄舞
ガラス破片から身を守る布。しかしそれ自体に耐久性はないため、銃器や鈍器には全く効果が無い。

No.071 赤旗　　太田香奈子
日本共産党の出版する新聞……ではなく、ただの赤い旗。

No.072 携帯カラオケ　　月宮あゆ
ハンディマイクとスピーカーが一体化されているので野外などでも使う事が出来る。流行りのアニソンも入ってお買い得。

No.073 ハンディマイク　　緒方理奈
少し前に流行ったマイク状のハンディカラオケ。

No.074 猫耳のヘアバンド　　霧島佳乃
かわいらしい猫型の耳が付けられたヘアバンド。DEF=2。

No.075 木刀　　桑嶋高子
練習用の模擬刀。十分な長さと重さがあるので鈍器として使用できる。

No.076 木の枝　　上月澪
そこらへんに落ちているごく普通の木の枝。叩けばそれなりに痛い。

No.077 花火 & バルサン　　椎名繭
日本の夏の風物詩である花火と害虫駆除剤のセット。くれぐれもいたずらに使用しないように！

No.078 札束　　川名みさき
相手を買収するも良し。株成金の如く燃やして明かりにするのも良し。

No.079 金盥　　七瀬留美
洗面や洗濯の時に使う平たくて丸い容器。上空から相手の頭上に落としたりして使用します。緊急時には頭に被ったり盾変わりに使うと効果的です。

No.080 ハンカチ　　桜井あさひ
純白のハンカチ。降伏の意思を伝えることができる優れもの。

No.081 フォーク　　七瀬彰
ただのフォーク。西洋料理全般で使用される食器。

No.082 もずく　　北川潤
褐藻類モズク科。血液浄化、抗癌性などが指摘されており、注目を集めている。ノンカロリー。

No.083 目覚し時計　　美坂栞
目覚まし時計とは世を忍ぶ仮の姿。目覚ましの針を６時にセットし作動させせると大爆発！　油断大敵だネ！

No.084 白蛇（ぽち）　　みちる
突然変異種。古代より大陸などでは神聖な動物として崇められてきたという、ありがたいヘビだ。

No.084 猫（ぴろ）　　御堂
ふとしたきっかけから水瀬家に居候している猫。

No.085 犬（ぽてと）　　高倉みどり
白い毛むくじゃら。犬であると思われるが、その外見は我々の知る犬の常識を超えている。

No.086 鴉（そら）　　橘敬介
漆黒の鴉。鳥なのに空を飛ぶことが出来ないでいる。

No.088 (･∀･)ｲｲ! お面　　三井寺月代
(･∀･)ｲｲ! と象られたお面。不思議な力が宿っており、一度付けると外すことは出来ない。ショックを加えると何かが起こる。

No.089 魔術書　　スフィー
「朕深く世界の大勢と帝国の現状とに鑑み、非常の措置を以て時局を収拾せむと欲し、茲に忠良なる爾臣民に告ぐ——」

No.090 トぶくすり　　佐藤雅史
様々な麻薬を独自の製法でブレンドした特別品。トべます。

No.091 ノートパソコン　　坂神蝉丸
アメリカのビルさんの会社製のＯＳが入っているノートパソコン。

No.092 ダーツ　　高瀬瑞希
ダーツと的のセット。的の真ん中にある50点が最高点だと思われがちだが、内側にある輪の部分は点数が３倍になるので20に当てれば60点になる。

No.093 桜井あさひトレーディングカード全108種　　リアン
ファン垂涎のトレーディングカードコンプリート。通常では手に入らない特典カードも付いてる、マニアには垂涎の一品。

No.094 人物探知機　　水瀬名雪
携帯電話型の探知機。参加者に対応した番号が表示される。

No.95 コックリさんセット　　マルチ
東洋の魔術、神秘を記した小冊子に紙と鉛筆がついた入門セット。10円玉ひとつあれば、すぐにコックリさんを楽しむことができる。

No.096 毒入り瓶　　月島瑠璃子
毒が入った瓶ビン。ほんの数滴体内に入っただけでも人を死に至らしめる事が出来る猛毒。

No.097 セイカクハンテンダケ　　天沢郁未
食べた者の性格がまるっきり逆転してしまう、おそろしいキノコ。毒々

しい色をしている。

No.098 偽典　　少年
「――かつて悩めた人よ、かつて憂いた人よ。我らは常しえにあなたのことを敬い続ける。我らはけして涙を零すことなく。我らはけして笑みを絶やすことなく。ただあなたの生きた証を辿り続けるだろう」

No.099 先行者　　九品仏大志
中華人民共和国がその国力と技術の粋を集めて開発した未知なる超兵器。その股間部には中華キャノンと呼ばれる超兵器が装備されている。

No.100 アイテムリスト　　長森瑞佳
今あなたがご覧になっているモノ。それが、このアイテムリスト。使い方によっては銃にも匹敵する武器。

支給されていない登場武器たち

志保ちゃんレーダー　　長岡志保の個人所有品
某カプセルコーポレーション社製の探知機のような代物。周囲にいる参加者が番号で表示される。何故彼女がこのような物を持っていたのかは不明。

医療セット　　霧島聖の個人所有品
医者である聖が個人的に所持していた物。救命用品に加え、多数のメスが含まれる。

毒短刀　　岩切花枝の個人所有品
細身の短刀の刃に毒を仕込んだ物。

コンバットナイフ　　公民館から藤田浩之が奪取
米陸軍に採用されている軍用ナイフ。グリップから、刃まで反射防止のために漆黒に塗られている。

コンバットナイフ　　管理者から深山雪見が奪取
浩之が奪取したものと同じ物。このナイフは、戦闘用としてだけでなく、サバイバル用品としても極めて優秀。

電動釘打ち機　　藤田浩之が資材置き場にて回収
本来は五寸釘を木材などに打ちつける道具だが、強い勢いで打ち出すことも機構から、目標に向けて釘を飛ばすといった使い方もできる。

Ingram　M11　　公民館から藤田浩之が奪取
イングラムM10の改良型。小型化し連射速度が上がったが扱いづらい。
口径：.38ACP　装弾数：32+1

Glock26　　公民館から藤田浩之が奪取
グロックシリーズ最小の小型拳銃。隠匿性が高く警察に人気がある。
口径：9mm×19　装弾数：9+1

New Nanbu M60(2" barrel)　　マルチが公民館で手に入れた銃
日本の警察向けに開発されたおなじみの拳銃。
口径：.38spl　装填数：5

S&W M586　保科智子が公民館で手に入れた銃
傑作コルト・パイソンに対抗して作られた。射撃時の安定性に優れる。
口径：.357Mag　装弾数：6

Beretta M92FS　巳間晴香が公民館で手に入れた銃
M92Fで強装弾（通常より火薬量が多い弾丸）を使用した際に、スライドが破損して射手にあたる事件が起こった。スライドが飛び出さないようにハンマーピンを大型化した、現行M92のスタンダードモデル。
口径：9mm×19　装填数：15+1

Mauser Kar98k　姫川琴音が黒コートの男から渡された小銃
第二次世界大戦時のドイツ軍にて使われた小銃。優れた性能と高い生産性を誇る名銃。
口径：7.92mm　装填数：5

小説型鈍器　七瀬彰が民家の書架にて発見
彰が毛嫌いする作者の小説（新書版）。人を撲殺できるほど分厚い。

ジッポオイル入り水風船 & ドラゴン花火　深山雪見作成
水風船にジッポオイルを入れたもので、目標をオイルまみれにした後、花火でもって着火する。

ジッポライター　七瀬彰が洗面所の裏で発見
100円ライターとは違い、油（オイル）を入れて使用する。最大の特徴は、蓋を開けるときの独特の金属音としぐさの格好良さである。

New Nanbu M60(3" barrel)　高槻
ニューナンブの初期モデルには、一般用の３インチモデルと幹部用の２インチモデルがあった。後にすべて２インチモデルに統一された。これは、初期の３インチモデル。
口径：.38spl　装填数：5

Beretta M92G　高槻
M92FSのプロフェッショナル・モデルと呼ばれる。その特徴はセイフティレバーにあり、これを下げるとハンマーがデコッキングされ、元の位置に戻る。つまり手動セイフティをして機能しない機構を持つ。
口径：9mm×19　装填数：15+1

マスターモールド MC-1　高槻
多額の開発費と情熱が注がれた競技用ボウガン。

Steyr TMP　高槻
小型のサブマシンガン。フルオート射撃時の制動に難あり。TMPはTactical Machine Pistolの頭文字。
口径：9mm×19　装填数：30+1

Steyr AUG 9mm　高槻
奇抜な形からは想像出来ないほどの命中精度、汎用性を誇る突撃銃。
口径：9mm×19　装填数：30+1

FN M1935 High Power　施設の兵士から篠塚弥生が奪取
通称ブローニング・ハイパワー。英国軍制式拳銃。バランスがよい。
口径：9mm×19　装弾数：13+1

Glock17　　施設の兵士から篠塚弥生が奪取
ポリマー素材を多用し軽くて頑丈な拳銃。丸みのあるシンプルな外見。
口径：9mm×19　装弾数：17+1

M60GPMG System23　　HM-13所持
汎用機関銃M60の個人携帯用改造モデル。通称デスマシーン。
口径：7.62mm×51　装弾数：ベルト給弾

Makarov　　HM-13所持
トカレフの後継モデル。パワーは下がったが小型化に成功した。
口径：9mm×18　装弾数：8+1

S&W M10　　長瀬源五郎
通称ミリタリーポリス。軍・警察用に作られ大量に導入された。
口径：.38spl　装弾数：6

H&K G3A3　　フランク長瀬
プラスチックを多用した突撃小銃。反動が少なく命中精度が高い。
口径：7.62mm×51　装弾数：20+1

Remington M700　　フランク長瀬
ボルトアクション式の狙撃銃。1950年に初登場してから現在もなお第一線で使用され続けている。
口径：7.62mm×51　装填数：5

参考文献：
武器事典（市川定春/新紀元社）
武器屋（Trush in Fantasy編集部/新紀元社）
現代軍用ピストル図鑑（床井雅美/徳間文庫）
世界の一流道具大図鑑（東京書籍出版編集部/東京書籍）
図解雑学　機械のしくみ（大矢浩史/ナツメ社）

スペシャルサンクス：
104さん
（銃器詳細リスト『葉鍵ロワイアル銃器諸元早見表Ver.2.0』）

ISBN4-75813-812-7

C0510

ハカロワ出版企画

HAKAGI ROYALE II

この写真の彼らは今を全力で生きていたのがよく分かる。
在りし日の……姿とでも言うのか。

孤島に集められたLeaf&Keyの作品の登場人物、100名。
彼らが強要されたゲーム、それは殺しあうこと——

現状を見せつけるだけの為に、突然の死を与えられた者。
いつもの場所に帰りつく為に、奪う側に回った者。
己の生き様を貫かんが為に、代償として命を失った者。
親しき者の死に復讐を誓い、死を振りまく者。

追う者。追われる者。探る者。嘲笑う者。
踏み躙る者。護る者。騙す者。信じる者。

それぞれの思いが舞台を巡り、物語を紡いでいく。
——殺し合いは、止まらない。

HAKAGI
ハカギ・ロワイアル
ROYALE
3

HAKAGI ROYALE

ハカギ・ロワイアル

❸

――――――【残り51人】

葉鍵ロワイアル参加者名簿

一　　番　相沢　祐一（あいざわ・ゆういち）
~~二　　番　藍原　瑞穂（あいはら・みずほ）~~
三　　番　天沢　郁未（あまさわ・いくみ）
~~四　　番　天沢　未夜子（あまさわ・みよこ）~~
五　　番　天野　美汐（あまの・みしお）
~~六　　番　石原　麗子（いしはら・れいこ）~~
~~七　　番　猪名川　由宇（いながわ・ゆう）~~
~~八　　番　岩切　花枝（いわきり・はなえ）~~
九　　番　江藤　結花（えとう・ゆか）
~~十　　番　太田　香奈子（おおた・かなこ）~~
十 一 番　大庭　詠美（おおば・えいみ）
~~十 二 番　緒方　英二（おがた・えいじ）~~
十 三 番　緒方　理奈（おがた・りな）
十 四 番　折原　浩平（おりはら・こうへい）
~~十 五 番　杜若　きよみ〈原身〉（かきつばた・きよみ）~~
十 六 番　杜若　きよみ〈複製身〉（かきつばた・きよみ）
十 七 番　柏木　梓（かしわぎ・あずさ）
十 八 番　柏木　楓（かしわぎ・かえで）
十 九 番　柏木　耕一（かしわぎ・こういち）
二 十 番　柏木　千鶴（かしわぎ・ちづる）
二十一番　柏木　初音（かしわぎ・はつね）
二十二番　鹿沼　葉子（かぬま・ようこ）
二十三番　神尾　晴子（かみお・はるこ）
二十四番　神尾　観鈴（かみお・みすず）
二十五番　神岸　あかり（かみぎし・あかり）
~~二十六番　河島　はるか（かわしま・はるか）~~
~~二十七番　川澄　舞（かわすみ・まい）~~
~~二十八番　川名　みさき（かわな・みさき）~~
二十九番　北川　潤（きたがわ・じゅん）
~~三 十 番　砧　夕霧（きぬた・ゆうき）~~
三十一番　霧島　佳乃（きりしま・かの）
~~三十二番　霧島　聖（きりしま・ひじり）~~
三十三番　国崎　往人（くにさき・ゆきと）
~~三十四番　九品仏　大志（くほんぶつ・たいし）~~
~~三十五番　倉田　佐祐理（くらた・さゆり）~~
三十六番　来栖川　綾香（くるすがわ・あやか）
三十七番　来栖川　芹香（くるすがわ・せりか）
~~三十八番　桑嶋　高子（くわしま・たかこ）~~
~~三十九番　上月　澪（こうづき・みお）~~
四 十 番　坂神　蝉丸（さかがみ・せみまる）
四十一番　桜井　あさひ（さくらい・あさひ）
~~四十二番　佐藤　雅史（さとう・まさし）~~
四十三番　里村　茜（さとむら・あかね）
~~四十四番　澤倉　美咲（さわくら・みさき）~~
~~四十五番　沢渡　真琴（さわたり・まこと）~~
四十六番　椎名　繭（しいな・まゆ）
四十七番　篠塚　弥生（しのづか・やよい）
四十八番　少年（しょうねん）
~~四十九番　新城　沙織（しんじょう・さおり）~~
五 十 番　スフィー（すふぃー）
~~五十一番　住井　護（すみい・まもる）~~
~~五十二番　ＨＭＸ－13型セリオ（せりお）~~
五十三番　千堂　和樹（せんどう・かずき）
~~五十四番　高倉　みどり（たかくら・みどり）~~
~~五十五番　高瀬　瑞希（たかせ・みずき）~~
~~五十六番　立川　郁美（たちかわ・いくみ）~~
~~五十七番　橘　敬介（たちばな・けいすけ）~~
~~五十八番　塚本　千紗（つかもと・ちさ）~~
~~五十九番　月島　拓也（つきしま・たくや）~~
~~六 十 番　月島　瑠璃子（つきしま・るりこ）~~
六十一番　月宮　あゆ（つきみや・あゆ）
~~六十二番　遠野　美凪（とおの・みなぎ）~~
~~六十三番　長岡　志保（ながおか・しほ）~~
六十四番　長瀬　祐介（ながせ・ゆうすけ）
~~六十五番　長森　瑞佳（ながもり・みずか）~~
六十六番　名倉　由依（なくら・ゆい）
~~六十七番　名倉　友里（なくら・ゆり）~~
六十八番　七瀬　彰（ななせ・あきら）
六十九番　七瀬　留美（ななせ・るみ）
~~七 十 番　芳賀　玲子（はが・れいこ）~~
~~七十一番　長谷部　彩（はせべ・あや）~~
~~七十二番　氷上　シュン（ひかみ・しゅん）~~
~~七十三番　雛山　理緒（ひなやま・りお）~~
七十四番　姫川　琴音（ひめかわ・ことね）
~~七十五番　広瀬　真希（ひろせ・まき）~~
七十六番　藤井　冬弥（ふじい・とうや）
七十七番　藤田　浩之（ふじた・ひろゆき）
七十八番　保科　智子（ほしな・ともこ）
七十九番　牧部　なつみ（まきべ・なつみ）
~~八 十 番　牧村　南（まきむら・みなみ）~~
~~八十一番　松原　葵（まつばら・あおい）~~
八十二番　ＨＭＸ－12型マルチ（まるち）
八十三番　三井寺　月代（みいでら・つくよ）
~~八十四番　御影　すばる（みかげ・すばる）~~
~~八十五番　美坂　香里（みさか・かおり）~~
~~八十六番　美坂　栞（みさか・しおり）~~
~~八十七番　みちる（みちる）~~
八十八番　観月　マナ（みづき・まな）
八十九番　御堂（みどう）
九 十 番　水瀬　秋子（みなせ・あきこ）
九十一番　水瀬　名雪（みなせ・なゆき）
九十二番　巳間　晴香（みま・はるか）
~~九十三番　巳間　良祐（みま・りょうすけ）~~
九十四番　宮内　レミィ（みやうち・れみぃ）
~~九十五番　宮田　健太郎（みやた・けんたろう）~~
~~九十六番　深山　雪見（みやま・ゆきみ）~~
九十七番　森川　由綺（もりかわ・ゆき）
~~九十八番　柳川　祐也（やながわ・ゆうや）~~
九十九番　柚木　詩子（ゆずき・しいこ）
百　　番　リアン（りあん）

葉鍵ロワイアル
舞台　地形図

地図制作：JOYH-TV

カバー、挿し絵：天田　湧介

葉鍵ロワイアル

※この物語は巨大掲示板２ちゃんねるの葉鍵（Leaf&Key）板において創作されたリレー小説です。

※今回の単行本化にあたり、著者自身の手によって本文の表現やタイトルが改められた個所があります。
※ Web ページの原文を縦書きの単行本として出版するにあたり、最低限必要な改行等の改変を編集側で行わせていただきました。

328　ぼくの戦争　――孤独――

自分がこの殺し合いに巻き込まれたあの瞬間から、四季が巡るくらいの時間が流れたような気がする。そんな訳がないのに、まだ自分は、自分がこの運命に巻き込まれた瞬間まで覚えているというのに。それでも思う、どれだけの時間が経ったのだろう。――自分は今、狂いそうなほど濃密な時間の中に生きているのだと思う。勿論充実などは感じない。喩えるならば、深淵に澱んだ底なし沼に滑り落ちていくような重さだった。

数日前のことだ。いつものようにのん気にバイトにやってきた自分を、突然叔父は強く抱きしめた。店を閉じるという短い一言と共に、叔父はその太い腕で自分を掴まえると乞うように謝った。訳もわからず戸惑う自分に、叔父は悲しそうな顔を見せるのだ。

閉店の理由は聞かせてもらえなかった。そこそこ繁盛しているのに、どうして店を閉じるような事態に追い込まれたのだろう。訊きたかった。訊きたかったけれども、自分は結局何も言えなかった。叔父が涙を流すのを見たのは初めてだったからかも知れない。

――「店を閉じる理由」が、自分を殺し合いに巻き込ませるためだったから、というのは、あまりにも非現実的すぎる。けれど結局はそういうことなのだ。

何故こんなくだらないゲームに自分たちが巻き込まれたのか。叔父が罪悪の涙を流しながら、それでも自分たちを戦いの渦に放り込んだ訳を知りたい。自分だけは、七瀬彰だけはそれを知らないままに命を終えるわけにはいかない。叔父は自分のために涙を流してくれた。同情と罪悪の涙を。だが、自分に必要なのは哀れみではなく情報と理解だ。

──そんなことを考えながら、考え続けながら、ひとりスタート地点の近くの茂みに姿を隠していた彰は、薄闇と燐光の中で第五回の放送を聞いた。心臓の鼓動を抑えながら聞いたその放送の中には自分の知り合いの名前はなかった。冬弥の名前も由綺の名前もなかった、初音ちゃんも無事だ。彰は小さく息を吐き、背筋を走っていた寒気が引いていく感触を得る。

彰がここ、スタート地点の建物の傍の茂みに辿り着いてから、既に数時間が流れていた。何も行動を起こさず、ただ思索だけを練っている。当然だ、彰の手には武器と呼べるものは一つしかないし、その武器の名前は勇気だ。勿論勇気には、人の意志には、サブマシンガンを装備した見張りの兵士など軽く凌駕するだけの力がある。しかし、真正面から無策で突っ込むことは勇気ではなく無謀で、無謀ではサブマシンガンには勝てない。

暗闇を待たなければならない。臆病と慎重の紙一重を見切って、先の見えない世界を歩くのだ。

──それでも、と彰は思う。

果たして叔父は本当にここにいるのだろうか？　確証が全く持てない。勇気が無数の重火器に打ち勝って、この建物の一番奥まで上り詰めたとしても──そこに叔父達がいなければ、勇気は結局何も成し得ない。

考えろ、勇気を力にするためにこのアタマはあるんだ、足りないチエを振り絞って考えろ、命は一つしかないが時間は命の数よりはきっと多くある、急がなければいけないがそれでも自分の命よりは重要じゃない。

（待て）

彰は小首を傾げながら考える。仮にここが管理施設の中枢だとしよう、そしてこの建物の奥には叔父達がいるのだとしよう。それにしては──黒幕の長瀬一族がいる筈の管理中枢にしては、あまりに守備が貧弱すぎるような気がする。見張りが一人しかい

ないとは、あまりにお粗末ではないか？　そしてその見張りに与えられているのはサブマシンガン一丁。サブマシンガンを打ち破れる程の重火器は確かにそうは無いが、それでも、例えば初音が先に修理していた中華キャノンがある。
　破壊力は相当なものだと初音が言っていた。何てったってＳＦの世界にしか登場しないようなビーム兵器だ。あの強力なビームを相手にした時、サブマシンガンなど鉄アレイ程度の役目しか果たさない。守衛をケシ屑に出来るばかりか、下手をすれば建物ごと吹き飛ばせるだけの力さえあるかも知れない。
　果たして、こんな危険なところに管理中枢を配置するだろうか？　そもそもどうして「強力すぎる兵器」が自分たちに与えられるのだ。
　彰は考える。
　――そこに侵入者がいるからこそ門番は存在しなければならない。門番は「門」に入ってくる侵入者を撃退するための存在だと定義できる。しかしその門番には侵入者を完全に撃退できるだけの力が無い。それでは門番は何のために置かれる。
　――思いつく。自分たちが反乱を起こすことが出来ない理由は何だ。決まっている、自分の胃の中で音も立てずに眠っている筈の体内爆弾だ。よくよく観察すれば、入り口の戸の上に監視カメラと思われるレンズの反射を確認できる。アレで侵入者を確認し、腹の中の爆弾を爆発させると言うわけか。それならば強力な兵器を与えられる論理もわからなくはない。
　しかし、そこで疑問が浮かぶ。
　何故門番を置くのだろう。監視カメラがあるのならわざわざ門番を置く必要がないではないか。足止めのため？　体内爆弾の爆発による被害がこの施設に影響を及ぼさないように、入り口のところで足止めをする為の捨て駒？　そんな非人道的なことを叔父達がやらせるだろうか（現にやらせてるじゃないか僕たちに）、確かにそうだ、そうだけど違う気が

する、僕たちにやらせてることには叔父達なりの論理があるだろう、しかしこの守衛にはそんな論理はあるのか？（意味を考えていても仕方がないんじゃないのか?）、そうかも知れない、だけど。
次に爆弾についての疑問が浮かぶ。彰だって明瞭に覚えている、先に誰かが体内爆弾によって吹き飛ばされた瞬間のことを。その瞬間自分には全く異常が無かったし、他の人にも異常が無かったようだ。つまり完全に個人を特定して爆発させている訳だ。脱出しようとする人間がいてもすぐに爆発させることが出来る＝島の何処にいても爆弾は個人特定して爆発させることが出来る。その為には何が必要だ？
考えろ。
――必要なのは二つ。目と手だ。
まず「目」――監視が必要だ。あの入り口のように監視カメラが島中に張り巡らされているなんていうことはないと思うから、別の手段で爆弾を特定しているのだと思う。
そして「手」――手段。島の何処にいてもすぐに爆弾を爆発させることが出来るだけの迅速さと正確さを持った、手段が必要だ。そんな手段はどこにある。
ふと彰は空を眺める。曇天で、星も月も何も見えない。分厚い雲の裏に何かが存在するような雰囲気もないし、飛行機が飛ぶ音も聞こえない。
――しかし、空からならば。
空からなら自分たちを監視する事が出来るのではないか。
突拍子もない事を思いついたものだ、と彰は苦笑する。そんなところにいたら、自分はどうしようもないじゃないか。もう少し楽観的に常識的に考えるべきだ、七瀬彰。
彰は縺れていた思考を解きながら、小さく溜息を吐く。叔父達が何処にいるかを考えていたのに、ど

うしてこのような方向に思考が流れているのだろう。この思考は無駄ではないかもしれないが、しかし今すぐ必要であるという訳でもないだろうに。
――この建物内にいないとしたら、叔父達は何処にいるのだろう。もしも島の外ならお手上げだ。だが、島の中にいるならばなんとかなる。なんとか出来る距離にいる。
　思いながら、彰は少し頭と身体を休める事に決める。勇気を片手に特攻するのは、もう少し遅くになってからだ。デイパックの中の切り札を抱え、彰は茂みの中で瞼を閉じる。
　瞼の裏に澤倉美咲の笑顔が浮かび、鼓膜の奥で美咲の声が蘇る。彰は目を閉じ、耳を閉じ、心まで閉じて涙を堪える。

　――門番を置く理由は一つしかない。彰はまだ、そこに思い至っていないけれど。
　決まっている。門番は侵入者を撃退するためにいるのだ。
　爆弾はすべての参加者に仕掛けられている。一部の例外を除いて。その例外を撃退するために、門番は存在する。けして足止めなどではない、そんな風に貴重な人的資源を使う長瀬一族ではない。
　例外の名前はＨＭＸ—12、ＨＭＸ—13というロボットふたり。そして、長瀬一族の末裔たる七瀬彰と長瀬祐介。
　彼らがこの殺し合いに於けるイレギュラーだった。

329　――――私

　――始まりは、安っぽいハノンの響きから。

私の名前は柚木詩子。現在花の女子高生。
血液型はＢプラス。個性が光る詩子さん。……何、なんか文句あるの？
　得意なことは走ること。必殺技は授業ブッチ。

壁に耳あり障子に目あり、廊下の隅には詩子あり。いつも背中を見ているぞ、あなたの後ろに詩子さん。神出鬼没が代名詞、誰が言ったか雲隠詩子……ってこれ本当に誰が言ったのよ？

好きな食べ物は、甘いもの。中でもザッハトルテは譲れない。でも茜と一緒に食べに行くと、いつのまにか砂糖が当社比三倍とかになっていることがあるから油断は出来ない。甘いものは好きだけど、とてもあの子には敵わない。だから私はウィーン風。生クリームを砂糖代わりに控えめの甘みで楽しむのが通好み。なんちゃって。それでも十分甘いんだけどね。

身長一五二センチメートル。実はちょっぴり気にしてる。だって同い年の女の子で、私より低い子なんていないんだもの。

スリーサイズは上から77、54、82、……って言わせるなーっ！　うわああん、よくも乙女の秘密をぉおおお！

……なんて、一人芝居してみたり。

別にいいもん、ちょっとくらい胸が小さくったって。それくらいで私の魅力は揺らがないもん……多分。

……気にしてないったら気にしてないの。

お誕生日は五月七日。ゴールデンウィークからちょっとずれちゃった。でもそのおかげで、友達にプレゼントの前借りとかできちゃったりとか。なーんてね。

嫌いなのは鳩。そんな無機質な瞳で私を見ないで。……なんて、トラウマを美しく演出。いいのよ、分かってる。例えフンをかけられたとしても、それもまた人徳だって。え、鳥徳？　どっちでも大差ないわよ。……ごめん、やっぱりかけないで。

彼氏、無し。彼女、無し。親友、有り。

大丈夫、分かってる。大事なものは、何なのか。

好きなのは、賑やかなところ。

嫌いなのは、茜の悲しい顔。

——そんな顔しないで。誰がいなくなっても、私だけは傍にいるから。
好きなのは、晴れの日。
目一杯に日の光を浴びて気持ちぃい。
そんな日はどこかへ出かけよう。
茜を連れて、みんなで遊びに出かけよう。
今日は雨かもしれないけど。
明日の天気はきっと晴れ。
雨上がりの空は澄んでいる。
水たまりに映った空は、きっと高く、そして青い。
だって、私は覚えてる。
雲を貫いて、どこまでも続いていく高み。
空一面に広がった、抜けるような青。
そして……その一番上で、私たちを照らしてくれている、あのお日様のことを。
——私が好きなもの、陽だまり、青空、茜の笑顔。

雲が晴れて光が差す。
その断続が、倒れた少女の頬を濡らす。
閉ざされた瞳に、穏やかな呼吸。
それはさながら森の中の眠り姫。
目覚めの朝はまだ来ない。

——間奏曲は、パッヘルベルのカノン。
永遠に、途切れることなく続く曲——。

330　すれ違う想い

「ふう……だんだん冷えてきたなぁ……」
昼間動き回ってたせいだろうか……体温の低下が激しい。
汗を含んだシャツがまだ冷たく感じられていた。
「ほんとは火を灯したいとこだけどな……」
不用意に危険を招くことはできない。
ただでさえここには守ってやらねばならない女の

子が二人いるのだ。
「……そうですね……少し寒いですが、仕方ないです」
久しぶりに和樹の声に反応した少女。
「起きたのか……もういいのか？　なんならもう少し寝てても……」
「いえ……もう落ち着きましたから。すみません、取り乱してしまって……」
「そうか」
「もう、日が暮れますね」
「ああ」
「暗いうちはあまり行動しないほうが得策だと思います」
「そうかもな……」
ゆっくりと上半身を起こし、和樹へと寄りかかる。
（すっかりなつかれてる気がする……）
和樹は思わず苦笑した。こういう形で頼られるのもまた、悪くない。

「とりあえず……状況をもう一度整理したいと思うんです」
「そうだな、次の行動もまだ決まってないことだし」
まだ眠る詠美の髪を軽く撫でながら、和樹もそれに従う。
「楓ちゃんはどう考えた？」
楓にばかり精神的な負担をかけないよう……と誓った和樹だったが、それとこれとは話が別だ。
楓の頭の回転の速さは帰るための大きな武器なのだから。
「そうですね……まず胃の爆弾はあるということは間違いないと思います。あの女の人にだけ爆弾が仕掛けられていて、偶然爆発させることができた……と考えるほうがあまりにも不自然です……」
「まあ、そうだな」
「あの人……高槻さんは言ってました。『無理に取り出せば爆発する』と。ですが、本当の所は……そ

の……」
「まあ、そうだな（あんな奴にさん付けするな）」
楓は恥ずかしいので言いきれなかったが、いわゆる排泄行為やちょっとした吐き気で外に出るような代物ではないのだろう。人間の生理的な現象で自爆というのは主催側の本意ではない気がしている。
無論、和樹の考えのひとつに過ぎなかったが。
兎にも角も、無事に外の世界に帰れれば爆弾処理はなんとかなるだろう。
「次に脱出経路ですが……おそらく脱出できる場所はないって思ってます。むしろ『脱出できるなら脱出してみろ』と言われてる気がします。なにせ周りに陸地が見えません」
「……」
それは和樹も疑問に思っていたことだった。
「だけど、主催者もここで骨を埋める気だってんならともかく、生きて帰る気なら絶対その手段があるはずなんだ。船とかがな……」
「はい。だから……」
「切り札は向こうにあり……か。みんなが生きてここを出る為には……」
主催側との正面対決は避けられないのかもしれない。
「ですが、船は見当たりません」
「船がないとすると……潜水艦か、無線で連絡をとりあって後、ヘリか飛行機がくるってとこか」
「……」
だが、一番ありそうな飛行機……空を飛ぶ乗り物は人の目に付きやすい。
すでに五十人近くの人間が死んでいるのだ。
そんな中でマスコミの目をかいくぐるのは至難の業だろう。
「妥当な線としては潜水艦ですね……そうなれば……」
「やはり地下通路か？　さっきも出たよな、その話」

「……決め付けるのは危険ですけど。……仮に無線で飛行機という形だった時は無線室、あるいは無線機を押さえれば助けが呼べます」
「その時は同時、あるいは先に胃爆弾のコンソール室を押さえなきゃな」
「そうなります」
スタート地点には——といっても和樹が知っているのは焼けた公民館だけだが——すでに黒幕の姿はない。手の届かない……というより手の出せない所に隠れ潜んでいるのかもしれない。
だが主催側の人間（すでに事切れていた）が島にいたことを考えると、そこへつながる道があると考えるのが妥当だろう。
それは恐らく容易には見つけられない場所。
「あとは結界……だったっけ？」
「……その辺はよく分かりません」
「まあな……超常現象って言っていいのか分からないけど、苦手なんだよ」
楓の鬼の力……も、ほとんど発揮できない。鬼の威圧感と、常人よりも若干高い運動能力を出すのが精一杯だ。
「とにかく、それだけの事を成すには……」
「はい。仲間が少なすぎるかもしれません」
「映画だったら一人でもどうにかなりそうなのにな……現実は甘くないわ」
「私の知り合い……姉さん達に会えればきっと力になってくれます」
だが、楓の顔は晴れない。
千鶴の所為を思い出してのことか、姉妹の、そして耕一の無事を祈ってのことか、それは楓にも分からなかった。
「和樹さんも心に留めておいて下さい。今話し合ったことは……」
「ああ、確実性はない推論……だろ？　決めつけて行動するとロクなことにならないな」
「はい、それがいいです。正直分からないことだら

けですから」
　確実だと言えることはほとんど無い。主催者側の戦力は不明瞭だし、同じ志をもった仲間ができるかどうかも判らない。胃の中に爆弾がある可能性は高いが、それだって確証がある訳じゃない。
　そして、一番危険なことは（放送ですぐ名前が挙げられることからも窺えるが）自分たちの行動が筒抜けである可能性があるということ――そうならば、今の状態ではお手上げだ。
　相手に何らかの手段でこちらの手の内を知る方法があったとしたら……（それはレーダーや隠しカメラ、なんでもいい）例えば、胃爆弾を止める手段があったとして、それを素直にさせてくれるとは思えない。
　むしろ、相手にとって侵入されて不都合な場所は何かしらの対応処置が取られていることだろう。
　こちらには、反抗しうるだけの武器が支給されているのだから、何も無いと考えるほうがおかしい。
　それを見極めない限り、反抗しても犬死してしまうだろう。結局、脱出よりも先になすべきことは胃爆弾の爆発を押さえること――
　――まったくもって頼りにならない情報量だった。
「……」
「詠美……目が覚めたか？」
「……起きてた」
「そうか……」
　いつから起きてたのかは気がつかなかったが、詠美は無表情のまま起きあがり沈みゆく夕日を眺めていた。
「夜の行動は控えたほうがいいと思う。疲れてるならまだ寝てたほうがいいぞ？　さっきのことは……俺も楓ちゃんも気にしてないから」
　それは詠美を思いやってかけた言葉。だけど……
「かずき……わたしより……その子のほうがいいの？」
「……詠美？」

楓を睨みつける。
「わたしにはっ……もうかずきしかいないのにっ！
由宇も……南さんもいないのにっ……!!」
「え、詠美さん……」
楓が詠美にゆっくり手を伸ばし――
「さ、さわらないでよぉ!!」
その手は払いのけられる。
「詠美……落ち着け！」
和樹が詠美の両肩をつかみ、揺さぶる。
「わたしじゃダメなの!?　わたしじゃたよりにならない？　答えて！　こたえてよっ!!」
「詠美……」
たしかに楓は可愛い。もう心のどこにも疑念も無いし、絶対に守ってあげたいとも思っている。
だけど、それは恋人の好きの、それとは違う。
だが、楓の目の前でそれを告げるのはためらわれた。
「このどろぼうねこっ、このひとごろしっ……！
わたしのかずきをかえしてっ……!!」
そして――その時最悪のタイミングで五回目の放送が流れた――
『二日目午後六時だ、早速今回も定時放送いくぞー……』
不快な声の中に混じる知り合いの名前……芳賀玲子、牧村南、そして……長谷部彩の名前もあった。
「彩ちゃんまで……」
和樹が悔しさに、己の不甲斐なさに、拳を震わせた。
そして詠美は……
「わたしっ、かずきのことしんじてるっ……だけどっ……だけどっ……」
そして、そのまま広場を飛び出した。
「詠美――っ!!」
「詠美さんっ！」
銃と、まとめてあった鞄を二つ――詠美と和樹の分だ――をひっつかむように手に持つと、その後を

追う。
本当はそのまま身軽なまま追いかけるべきだったのかもしれない。
だが、この島で武器を持たないのはあまりに危険……和樹の本能がそう体を反応させた。
楓もそれに続く。
「待てっ！　詠美!!」
まさか、ここまで詠美の心は極限状態に追いつめられていたなんて……
(俺は、本当にバカだ――)
ただ、無我夢中で詠美を追った。
「はあ……はあ……」
手ぶらな詠美と、重い荷物を持った二人とでは走る速度が違いすぎた。
楓も常人よりは足が速いとはいえ、詠美のそれには遠く及ばない。
「くそっ！　……くそっ……！」
手近な木を力任せに殴りつける。
「どうして……ちくしょう、俺はどうして気づかなかったんだ……詠美が、俺を必要としてくれてたのに……絶対に離しちゃいけなかったのに……！」
「和樹さんは悪くない……私が。和樹さんを頼りすぎていたからいけないんです……それに、こんなときでも、千鶴姉さん達の名前がなくて……ホッとした自分がいたんですから……」
「……違う……自分を責めるな……」
本当は和樹にも分かっていた。誰も悪くないってことを。
次々と友達が死にゆく中、感情的になってしまった詠美も、その悲しみを押し込めて、冷酷に見えるほど冷静に行動しようとしている楓も、そして、気がついたら他人との触れ合いに恐れを抱くようになっていた和樹も。
「……探しましょう……！　まだ遠くへは行ってないはずです。今の詠美さんを一人にしておくわけには行きません！」

「ああ……詠美、無事でいてくれっ……!!」
気がついたら日は沈み、夜の帳が下りてきていた。

331　竜虎

巳間晴香（九十二番）は目の前にあるそれを信じる事は出来なかった。
「嘘でしょ？　兄さん……」
晴香は思わず兄、巳間良祐に覆い被さる。
「嘘でしょ!?　嘘だといってよ！　兄さん！」
必死に体を揺さぶるが、応答なんてある訳がない。
「目を開けてよ……」
晴香は服が血で汚れるのも関わらず、良祐の体を抱きしめた。その身はまだ暖かいのに、もうそれは何も晴香に応えてくれない。
「……あたたかい……？」
そう、その体はまだ冷え切っていない。それはつまり……
「死んで間もない……まだ近くにいるのね？　兄さんを殺したやつが！」
晴香は血走った目であたりを見回した。
「どこにいる、どこにいるの！」
晴香はジョーカーとして高槻の元を離れてから、ずっと迷い続けていた。
智子達を助けたい。そのためならなんでもする。それは偽らざる気持ちだった。
だが、誰を殺せばいい？　誰がもっとも生きる価値がない？
そんな反吐の出るような選択を自分はしなくてはならないのか？
いっそ自分の前に敵が現れてくれたら……そう思ってさまよう晴香の耳に聞こえてきたのが銃声だった。急いでその場にきてみればこのありさまという訳だ。
「感謝するわ……」
晴香は低い声をだしてゆっくりと立ち上がった。

もはや迷う必要はなかった。自分は殺すべき敵を見つけたのだ。
「必ず、見つけ出して、このお礼はさせてもらうから……」

「初音ちゃん。あんたもちょっと休んだ方がいい」
折原浩平の声に柏木初音は笑顔で応えた。
「大丈夫だよ、浩平お兄ちゃん。お兄ちゃんこそ横になった方がいいよ？」
「そういうわけにはいかねぇよ……」
そういう浩平の声は、だがとても力強いといえたものではなかった。傷がまだ痛むのだ。
あの一戦の後、気絶した浩平と七瀬留美をかついでこの湖ぞいのロッジに運んでくれたのは、柏木耕一だった。
だが、その耕一も今は……
「耕一お兄ちゃんも大丈夫なの？　苦しそうだよ。二階で寝た方がいいよ」

初音に対し耕一は黙って首を振った。
しゃがみこんだままの彼の息は荒い。額には脂汗が浮いている。
女装姿のマッチョは息を切らしているってのは傍から見たらかなりヤバイ姿だが、その表情は本当に苦しそうだ。
それは、昨夜力を使いすぎた反動だった。
「へっ、その格好で、息あげてんのは犯罪だぜ。寝てこいよ」
「おおきなお世話だ。怪我人の君こそ寝てなきゃいけないだろう？」
今、寝室のある二階には名倉由依が寝ている。彼女の怪我も命に関わるほどのものではないが、浅いものではなかった。
(まぁ、気持ちは分かるよ、耕一さん)
本来なら、初音の言うとおり、自分達も二階に行って休息を取るべきだった。けど、それは一階に初音と七瀬を残す事になる。

それは、男としてあまりにみっともなかった。
(全く、ぼろぼろだな、俺達)
浩平と由依は肩を負傷、耕一は力の反動でろくに動けない。そして七瀬。
七瀬は特に体の方は問題無かった。
だが、心は……七瀬は今、部屋の片隅でうずくまっていた。膝の中に頭を埋めてその顔は分からない。
起きてはいるし、食事もとっていたが、終始何もしゃべらず、目もうつろだった。
(守れなかったのか、俺は。長森だけじゃなくて、七瀬も)
だめだ。くそ、このままじゃくじけてしまう。守るって誓ったのに。いや、まだだ。まだ、七瀬は生きている。生きてるのなら守ってやれる。
「それじゃ、わたし、由依さん見てくるね」
そういって、二階に上がる初音を見届けて、浩平は銃を握る手に力を込めた。
「無理するな、お互い」
そう声をかけてくる耕一に、
「ま、一応男だからな」
と、浩平が応じた時、
バンッ
という音がして扉が突然蹴り開けられた。
驚いて扉の方を振り向く浩平と耕一。その視線の先には。
「見つけたわよ……」
夕日をバックに、日本刀を構えた女がいた。
「誰だよ、あんた!」
浩平はそう声をあげて銃を構える。
「巳間晴香。あんたらに殺された巳間良祐の妹よ!!」
その声と同時に女は飛び掛ってきた。

銃声、怒声、打撲音。
うるさい、もううるさい！　静かにしてよ、お願いだから！
私はずっと、耳をふさいで目を閉じてうずくまっ

ていた。
　折原や耕一さんやそれと知らない女のどなる声が聞こえる。
　もういや、なんなのこんな現実。
　こんなの認められない、こんなのは嘘。
　何も見たくない、何も聞きたくない、何も感じたくない。だってこれは嘘の世界、あってはならない世界。
　だから、私はすべてを遮断する。
　こうしてうずくまっている。
　こうしていれば、折原が、耕一さんが守ってくれる。あるべき世界を取り戻してくれる。
　だって彼らは救世主だから。
　でも、なるべく早くしてほしい。
　やっぱ怖いもん。
　だめだ。もっと深く、もっと沈んで、もっと何も感じないようにしないと。
　でも、そこで会話が、今朝瑞佳と交わした会話が、頭に浮かんできた。
『あいつ遅いわね。何処まで水汲みにいってるのよ』
『でも、浩平立派だよ。昨日ずっと見張りをしてくれたんだもん』
『まぁ……それは感謝してるけど』
『……七瀬さん、起きてたでしょ明け方』
『な、何のこと？』
『いいよ、気を使わなくて。……ごめん七瀬さん。私、七瀬さんが起きてるの気づいてて浩平にあんなこと言ったの。やな女だよ、私』
『……折原も気付いてたの？』
『気付いてないと思う。浩平鈍感だもん』
『そ、そう。ま、どうでもいいけど』
『よくないよ！　だって、守ってほしいのは七瀬さんだっていっしょなのに！』
『な、なにいってるのよ瑞佳、あんな奴に守ってほしいだなんて思わないって』
『七瀬さん……』

『ま、まぁ、でも少しはうらやましいかな、瑞佳のこと。守ってやる、なんていわれるなんて乙女冥利に尽きるじゃない？』
『……私は、七瀬さんのほうがうらやましいよ……』
『は、私？　何で？　今朝の私って相当惨めだと思うけど』
『私、浩平のこと大好きだよ。大好きだから、守ってもらうだけじゃなくて、守ってあげたいと思う。浩平の事、守ってあげたいと思うもん。だから、浩平を守ってあげられる七瀬さんのことがうらやましいよ』
そのときの瑞佳はとても必死で、真剣で、切なくて。ああ、これが乙女なんだな、って私は思って。
——そして瑞佳は、その後浩平を守って死んだのだ。
……なによ、なんなのよ、これは!!
そう、こんな現実は認められない。こんな現実は許せない。
私が、この七瀬留美が、こんなときにじっとうずくまってるなんて……!!
こんな現実を許すわけにはいかない。
なめないでよ、ふざけないでよ、七瀬留美なのよ、私……!!
私は起き上がると、ありったけの力をこめて、吼えた。飛び出した。

浩平達は苦戦していた。
浩平が最初に撃った銃の一撃は晴香に命中しなかった。銃の反動は今の浩平には重く、銃を握る力が緩む。そこに、晴香の日本刀が投げつけられ、銃と刀はあらぬところに飛び去った。
その後は格闘戦になった。
普段の耕一と浩平なら、これほど苦戦はしなかったであろう。
だが、このとき二人の体調は絶不調も極まりりで、

銃声を聞いた初音が加勢にきても、晴香のほうが圧倒的に有利だった。
だが、その場を一つの怒声が切り裂いた。
「おんどりゃぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」
意外な方向からの七瀬の攻撃に晴香は意表を突かれた。
その頬に加速の乗った渾身の拳がめり込む。
「な、なによあんた!!」
体勢を崩す晴香。
そこにタックルをしかける七瀬。
二人はごろごろ転がりながら外に飛び出す。
マウントポジションを取ったのは七瀬の方だった。
七瀬は晴香の襟をつかむと、
ごっ、
その顔に頭突きをかます。その筋の専門用語では
パチキとも言う。
「がぁ……!?」
思わず悲鳴をあげる晴香。かまわずもう一撃と、

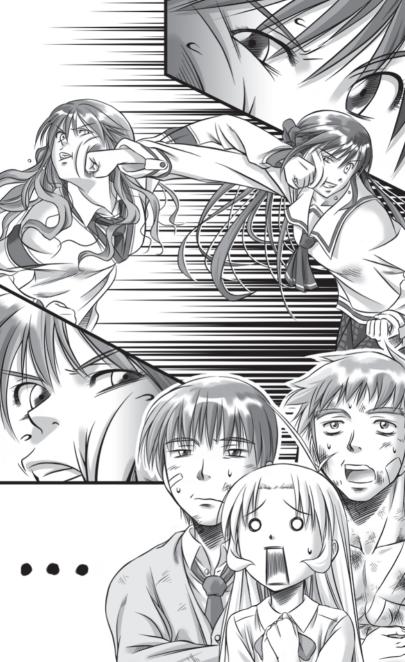
七瀬は頭を振り上げる。だが、そこは晴香もさるもの。それよりはやく肘で七瀬のあごを突き上げた。
「ぐあっ!!」
たまらず身を除ける七瀬。その隙をついて晴香は七瀬を蹴り飛ばし間合いを取った。
「いったぁ……よくも乙女の顔を！」
「ど、何処の世界に頭突きかます乙女がいるのよ!!」
「わかってるわよ!!」
晴香に怒鳴り返す七瀬。逆ギレともいう。
「これが乙女らしくないってのはわかってるわよ!!けどね!!」
七瀬は息を吸った。
「危なくなったらピーピー泣いて、助かったらヘラヘラ笑って！　私が憧れる乙女ってのはそんなに底が浅いものじゃない!!」
「な、なんだかよくわかんないけど、上等じゃない……!!」
「手を出さないでよ！　あんた達!!」

『出しません、出せませせん』
おもわずハモる傍観者三人。
夕日をバックにファイティングポーズをとる二人。
そして、由依は……
「ムニャ、ムニャ……うるさいなぁ……」
まだ、寝ていた。

「へちょい攻撃ね！」
誰かさんの決め台詞をパクリながら、晴香は七瀬の拳をいなす。
「言わせておけば……!!」
連続攻撃を仕掛ける七瀬。そこに、晴香の的確なローキックが炸裂する。
「っぐう……!!」
そこは古傷のある場所だ。七瀬は顔をゆがめる。
「あんた……そこ……？」
少し動きを止める晴香に七瀬の反撃が繰り出される。顔面にクリティカルヒット!!　晴香の顔はもう既にかなり腫れている。
無論それは七瀬も同じ事だ。多分、鏡をみたら死にたくなるだろうな、とかチラッとそんなことが頭を掠めた。
「あんたのパンチ、腰が入ってないのよ!!」
「あんたは目に頼りすぎよ！」
根拠のない罵声をかわしながら二人は殴りつづける。
「もうそろそろとめたほうがいいんじゃないかなぁ。耕一お兄ちゃん、浩平お兄ちゃん」
「……情けない兄達を許してくれ、初音ちゃん」
勝負はここまではまったくの互角。だが、古傷のある七瀬のほうが少しずつおされていた。
そして、ガッ、という音と共に七瀬のひざが落ちた。
「く……この……」
「ふっ……格の、違いが、わかったかしら」
晴香の息も既に荒い。最後の一撃を放とうと拳を

振り上げる。
だが、そこに、まるで場違いな声が響いた。
「もう……うるさくて、ねむれないですよぉ……」
「あ、由依さん起きたんだ」
「へ？　由依？」
おもわず振り返る晴香。
その隙を突いて、七瀬の渾身の力をこめた右ストレートが放たれた。
「……⁉　クッ‼」
それに反応する晴香。結果は。
七瀬の頬には晴香の拳が。
晴香の頬には七瀬の拳が。
そして両者は同時に崩れ落ちた。

332　――罪

死者の埋葬は骨が折れる。
実際、爪穴には土が詰まり、袖口や膝は砂で汚れ、そろそろ悲鳴が上がりそうだ。
……まあ、僕の意思とは裏腹に、ということで。
「ふぅ……」
額から零れ落ちそうな汗を拭う。少しは労わってやっていいくらいには酷使したと思う。腕も、指も。
近くの地面には、二つほどの小さな山。
少しは墓標らしく、飾りを付けてもいいだろう、そう思った。
脇には拳銃。悩んだが、流石に墓標だからといってこれは無いだろうと思い、置きっ放しにして別なものを探した。巳間が特に銃を好きだったたと言う話しは聞かなかったし、まして女の子にこんなものを捧げては末代まで悪い噂が流れかねない。
気の利いた追葬品は無いものかと辺りを漁ってみても、そうそう都合のいいものは出てこない。
考えあぐねて、安直なものを見繕ってしまった。
……それが果たして慰みになってくれるものか、自分独りでは到底答えは出ない。無いよりはマシだ

ろうと想うのは気休めに過ぎないのだろうか。
一方には木の枝、無骨に曲がって味気ない。だが……その分安心できる。
一方には白い花、小さな花びらが頼りない。だが……その分心に留まる。
落日は、音の無い葬送曲のように。
微風は、声の無い賛美歌のように。
僕は享受する。音の無い旋律を。声の無い調和を。誰も知らない終局を。僕しか知らない死に際を。
「……………………」
祈りの文句も、枯渇して久しい。
……いや。
どうせ最初からそんなものは要らなかった。
言葉にしなければ伝わらない気持ちがあるように、言葉にした瞬間に嘘になる気持ちがある。
僕はただ祈るだけ。祈りの先に彼らがいることを願いながら。
だから――。

「……忠告しておこう。僕はそうやって隠れて僕のことを尾行していて、声も上げられずに死んでいった人間を知っている」
僕を背後から望む木陰、そこにいる。
祈りの姿勢で絡めたままの指を解くことも無く、まして振り向くことも無く、僕は彼の人物の現れ出るのを待つ。
――摩擦音。
風を切る、音が裂く。
衝いて出る、槍。
白い影、まるで僕と相対するような白い風。
それが、向かってきた。
それは一瞬。
葉が布に擦れた音が、まだ届かないほどの一瞬。
僕が彼女を見た。
彼女が僕を見た。
――旋風。
槍は、僕に届かない。

……否。
僕は、ほんの半角、それだけ体をずらしただけ。
凶風は吹き荒んでいった。
一瞬後の沈黙。
唯それだけの静寂。
そこで彼女はやっと僕と向き合った。
色の見えない表情、その裏に隠れた焦り。
……見える、手に取るように。だが。
紫のケープに白の法衣を纏い、金色の髪に白のカチューシャを宿す。宛ら神官のような佇まいの彼女。トパーズの瞳に滾る意志の光は、頑として揺らごうとしない。
……それは、殺人に道を失った者の目でも、狂気に追い詰められた者の目でも、盲目の傀儡の目でも無い。
そんなことは……この瞬間に……分かっていたはずなのに……。
彼女は、再び槍を中段に構えると、僕を見据えて突進してくる。
鋭い、呼気。
僕は彼女を見据えたまま、そっと偽典の頁を一枚外した。
走り寄る白、槍の先端がぶれる。
……持ち替えた？
その意味を考えるよりも早く、視界が紫の一色に染まる。
——目くらまし。
全速力で僕の横を通り過ぎる彼女。それが、本命。
背後の樹木に足を蹴り当てて慣性を殺し、彼女は一挙に反転し、僕の背後を狙う。
その勢いに恐れは無く、その勢いに迷いは無い。
全力で槍を振るう。
突きではない。斜め袈裟懸けに、僕の肩口を突き破るように。
どしゃっ！
体勢を崩して、地面に無残に崩れ落ちた。

土煙が上がる。浮き上がったケープが、地面へと落ちる。
……その瞬間、心がほんの少し絶望した。
なんでこうなることを考えなかったんだろうって、思慮の足りない自分を罵倒した。
崩れ落ちた姿勢のままで見上げる。僕は彼女の視線を真っ直ぐに受け止めた。
……否。
それは受け止めたのではない。むしろ逆。
射殺せるものなら、僕は視線で彼女を突き殺したかった。
我ながらなんと冷たい視線なのだろう。
高い空の上から見上げるもう一人の自分が苦笑する。
いつのころからそんな偽善を言うようになったのか。
いつのころから本当の自分を偽るようになったのか。
分かっているはずの本質に、拒絶反応を催すもう一人の自分。
……関係ない。今抱いているこの気持ち、それがそのまま僕と言う証だ。
「……久しぶりだね、とか、元気かい、とか、そんなことを言うつもりは無いよ」
その瞳の冷たさが、そのまま宿ったかのごとくに冷え切った言の葉。
「……加えるなら、君がクラスAであるとか、同郷である存在だとか、そんなことにももう興味は無い」
言葉の冷たさに及びつかない瞳の温度。……ねえ、教えてくれないかA—9、その表情は僕を憎んでいるのか。それとも、僕が怖いのか。
地面に膝をついたまま、二対の感情を整理できないまま、白い法衣についた土埃を拭う余裕も無く、唯ひたすら僕に視線を突きつける……彼女。
——見下ろす側は、僕。
槍を杖に、彼女は立ち上がり再び僕に突撃しよう

と構える。
だが。
「!?」
みしっ、といやな音を立てて、地面に衝いていた刃先から柄がずれ落ちていく感触を彼女は味わったことだろう。
……交錯した一瞬に、僕がその槍先を切りつけたことなど、彼女が気づくべくも無い。
支えを失い、不意の出来事に彼女はよろめいた。
僕は寸前の瞬間に空間を一足飛びにして彼女に近づくと——
「がふっ!?」
——その左手で、彼女の胸元を殴った。
衝撃によろめいて、地面を滑るA—9。
僕はその有様を見送ると、そっと残骸を拾う。
彼女がさっきまで佇んでいた場所には。
「ぐ……げほっげほっ!」
一時的な呼吸困難に喘ぐ彼女。

彼女がさっきまで倒れこんでいた小山には。
——飽き捨てられた子供の玩具のように、折れて砕けた墓標の枝が。
——土足で踏みにじられたかのごとく、千切れて汚れた墓標の花が。
「——いってくれないか? 生憎、今、僕は頗る機嫌が悪い」
……僕は憎む。この静穏が破られたことを。

333 ——夢

——滑らかに指が動くようになるまで、一体どれくらいの練習をしてきたのか。
小さい頃からやってきたピアノだから、私にはそんなに苦労した意識は無い。
くるくると鍵盤の上で踊る指先が、いつしかカノンを奏で出す。

私の意識は、その穏やかなまどろみの中に沈んでいった。

それは、よく晴れた日の公園。
戦利品は山葉堂の特製ワッフル。
目を輝かせる茜に、げんなりとする折原君。
そんな二人を見ながら、私は手元のたい焼きに頭から齧り付く。
——それは、私が見た夢。

……ありゃ？　ここどこだろ。
いつのまにこんなとこに迷い込んだのかな。
なんだか体が軽ーい。
気持ちいい……。
……ていうか地面無いよ、ここ。
何で私沈んでないの？
えっと……たしか森の入り口で待ってて、それでいつまでも来なくて、変な女の人に襲われて……。

……ってそうだよ！
私襲われたんじゃない！
思わず首に手を当ててみる。
……ありゃ、痛くない。
すごく苦しかったはずなのに。
……しかもよくよく考えたら私、全力で逃げてたはずだし……。
ポンっ。
そっか。
これ夢だよきっと夢〜。
な〜んか妙にふわふわしてると思ったのよね……。
……でもいつの間に眠ったの、私。
確か走っていたはずなのに。

ドクン。

喉が、疼く。
私——死んだの？

「そんなことはないです」
え⁉
……誰⁉
「あなたはちゃんと生きていますよ、詩子」
茜⁉
「ハイ」
良かった……。茜、無事だったんだ。
「ハイ」
相沢君に、会ったんだよね？
「ハイ」
うん……、でもとにかく元気でよかった。
「詩子」
茜が私の手を取る。
「こんなところで倒れていてはダメです」
え……。何……？
「まだすることがあるはずです」
そう……なの？
「頑張って、生きてください」

……うん。
「では起きて下さい。そろそろ起きないと遅刻です」
「………む」
むくり、と起き上がる。
いつのまに倒れていたんだろう。
「私……、気を失っていた？」
首をしめられた時に喉を痛めたんだ……。
それなのに全力で走ったりしたから……。
呼吸困難で失神……、かっこ悪い。
思わず、首に手を当てたまま呆ける。
すると気づくことがある。
それは右の手のひらのほのかな温かみ。
そういえば、誰か懐かしい人と会った気が……。
——まさか。
キョロキョロとあたりを見回す。
だが周りには誰もいない。

誰かがいた様子も無い。
「………」
ふっと、私は小さく笑った。
パン！　パン！
両頬を手のひらで叩く。
鮮烈な痛みが走る。
でも、なんだかすっきりした。
眠気覚まし代わりだ。
さあ、いこう。まだ、立ち止まっていられない。
「……よし」
そして私は走り出す。本当に、私にとって大切なものを守るために。

それは、よく晴れた日の公園。
戦利品は山葉堂の特製ワッフル。
目を輝かせる茜に、げんなりとする相沢君。
代わりの生贄が出来たとばかり、折原君は得意顔。
だけど、茜が取り出したワッフルはなぜか三つ。
絶望の表情で助けを求められても、生憎私にはどうしようもない。
そんな三人を見ながら、私は手元の袋からたい焼きを一つ取り出す。
真ん中で千切って二つに割ると、私はそれを横にいた少年に押し付ける。
あんこは苦手なんだよ、そんな顔をしているが気にしない。
意を決して、男の子たちが三者三様、それぞれ未知の甘みに口をつける。
そんな彼らの様子を見て、私と茜は思わず笑う。

――それが、私の夢。

334　夜の森往く抵抗者

ブツッ。
放送が途切れる。

もう何度足を踏み入れたかわからない森の中で、茜は五回目の放送を聞いていた。
残りは五十一人という言葉が心に残る。
英二の死を看取りその妹に狙われてから、茜はこれまで、これといった行動を起こしていなかった。と言うより、誰とも出会うことがなかっただけなのだが。
自分の知らない所で、気付けば多くの人間が死んでいた。
(……さっきの放送、長森さんの名前がありました)
同じクラスの少女、誰にも優しく、おだやかで。
そんな彼女も、死んだ。
むしろ、あのような性格だからこそ、こんな状況で生きていけるわけなかったのだと思う。
さほど親しくなかったクラスメートに、短い黙祷を捧げる。
その途中だった。
「里村茜だな」
自分に、声がかけられたのは。
「……誰？」
親しくもない人間に呼び掛けられたら、とりあえずそう返すことにしている。
だが、この顔には一応見覚えがあった。
たしか、ゲームの管理者、高槻と言ったか。
「おいおい忘れちまったのか？　ゲームの管理者、高槻だ」
どこかの誰かと同じことを言う。
ひょっとしたらこの男も、根はなかなか面白い奴なのかもしれない。歪んではいるが、一体何がこの男に影響を与えたのだろうか。
茜はふと、そんなことを思った。
「……私に、何か用ですか？」
怯えもせずに、言う。
自分でも驚きだった。
なにしろこの男は、こんな恐ろしいゲームの管理人なのだ。

「あぁ、用があるのさ」
高槻は口のはしをにやりと歪め、言った。
「お前は今のところ、このゲームの殺人ランキングで二位になっている。一位は藤田と言う男なのだが、こいつが随分と丸くなっちまってな。殺人者として見込みがなくなっちまった。そこで、だ、お前には『ジョーカー』をやってもらいたい」
「……『ジョーカー』ですか？」
「あぁ、そうだ。まだ生き残りが半分もいる。どいつもこいつも、仲間意識が強くて、殺しなんぞやりそうにない。だからお前には、そういった連中を排除してもらう」
茜にとって、それはよくわからない提案だった。
「……よくわかりません。……言われなくても、私を殺そうとする人がいれば、私は殺します」
「違うんだよ」
高槻は茜の言葉を否定した。
「お前には『手駒』になってもらうのさ。俺達がバックにつく。定期的にこちらから場所を連絡して、その場にいる人間を一人殺せばいい」
「……私にメリットは？」
その茜の言葉に、高槻は笑みを深めた。
「八人殺してもらえればいい、そうしたらお前はゲームから開放してやる。武器も良いのを渡してやるし、食料も与える、安全な寝床も用意するぞ？ この島で、俺達に把握できていないことなんかないからなぁ」
「……そうですね。あなた達がこの島を造ったのですから」
茜の言葉に、高槻の笑みが凍り付く。
「何故知っている、貴様」
「……簡単なことです。私は百貨店に入りました」
「だから、何故それでわかったんだ」
「……人の生活の気配がありません。この小さな島に百貨店があるのもおかしいです。……それは住宅街も同じ。この森にしたって、動物が少なすぎやし

ませんか？　……家の中には包丁や食料があり、工事現場にも武器になりそうなものがあります。……全部含めて、このゲームの為に用意されたものなのでしょう？」

　何事もなかったように言い放つ。

　茜の言葉に高槻は言葉をなくし、そして笑い出した。

「ハァーッハッハ。気にいった、気にいったぞお前。俺達の力は強大だ、もし受けてくれるなら、今後お前の人生全て保障してやってもいい。どうだ、やってくれるな？」

　提案は、茜にとって魅力的なものだ。

　所々で補給したとはいえ、食料や水も尽きかけている。夜になったら、また寝床も探さなければいけない。

　何より、自分は帰りたい。

　だが、何よりも決定的なこと。

（……私は、現実的なだけです）

　高槻が銃身も持ち、グリップを茜に向けた。

「さぁ、銃を取れ」

　茜は右手を動かし——

「……嫌です」

　隠し持っていた銃を発砲した。

　高槻の両腕を貫く弾丸。彼は持っていた銃を取り落とした。茜は素早くその銃を蹴り飛ばし奪う。

「き……貴様ぁぁぁぁっ！　何故だっ！　何故乗らないぃっ!!」

　高槻が叫ぶ。その声は怒りで満ちていた。

「……私は現実的なだけです。……利用するだけしておいて、裏切るつもりだったのでしょう？」

　冷たく言い放ち、歩き出す。

「貴様、俺を殺さないのか？　管理室についたら、絶対にぶっ殺してやる！」

　その脅しにも、茜は立ち止まらず言った。

「……あなたには無理です」

「あの女……殺してやる、ぶち殺してやる……」
森の中を、血だらけになりながら歩く。
許されることではなかった。自分があんな小娘に遅れをとるなど。
あってはならないことだった。
だから――
ダンッ、ダンッ！
高槻は、撃たれた。
森の中から、人影が近付いてくる。
その人影は高槻の傍らで立ち止まり、死体となったそれを蹴り飛ばした。
人影は、死体と全く変わらぬ姿形。
高槻だった。
「05の馬鹿が。先走りすぎなんだよ。上――主催と観客の連中は、あくまで仲良しごっこを楽しんでる連中が、最後には醜いさま曝け出して殺しあうのが見たいんだよ。『ジョーカー』なんぞ用意して、楽しみを潰しやがって。今頃他の『高槻』には厳重注意がいってるよ。だがお前はこれでいい。小娘ごときにやられる貴様なぞ、いらん」
自分と同じ姿をした高槻を蹴りながら、高槻は言った。
「何故お前のナンバーが『05』なのか教えてやろうか？　お前は五番……五体の中で一番出来が悪かったんだよ。さて……こちら04。05は排除――」
そこまでだった。
「……な？」
自分に何が起こったのかわからなかった。
そのまま口と額から血を流し、05の死体の上に重なるように倒れる。
全く同じ姿をした二つの死体。
04を狙撃したのは――立ち去ったはずの茜だった。
「……いろいろわかりました、ありがとうございます。……でも、死ぬ前に悪事を喋るのは、三流のやることです」
04の死体から銃を奪う。

05から奪った銃はサイレンサー付きだった。
そのせいで、04には銃声が聴こえなかったのだ。
「……だから言ったでしょ」
05を見下ろし、呟く。
「……見てますか？　……私は簡単には死にません。……ゲームのルールに従い、生き残ります」
この様子をどこからか監視している存在に、誓う。
風の吹く夜の森を、茜は歩き出した。

335　逢魔ヶ時

暮れなずむ夕日を浴びながら、弥生は痛む右目をつぶったまま武器を作っていた。
ストッキングを脱ぎ、つま先の方を結び、そしてその中に石や財布から出した硬貨をつめていく。何度か振ってみてちょうど良い重さに調整する。
横から力をこめて振ると遠心力を利用できる。側頭部にあたれば敵は一発で昏倒するに違いない。そう弥生は思った。
その時風の流れが変わった。そしてその風に乗って人の声が聞こえてきた。
「暗いうちはあまり……いほうが……います」
「そ……な…」
声がしたところに弥生は接近する。しかしまっすぐ急ぐ事はしない。さきほど音を立てたばかりに一人殺し損ね、あまつさえ右目を痛めたのだから。
太陽を背にして弥生は物音をたてないように移動する。一歩進むごとに足元に小枝等の音がするものがないかチェックする。
その間にもさまざま興味深い話が聞こえてくる。
胃の中の爆弾、潜水艦、地下通路、無線機、ヘリ、あるいは無線機を押さえれば――
会話の内容を全て把握することは難しかったが、断片的な単語から脱出に関して話し合っているのだと弥生は推測した。
ほんの一瞬、彼らの話に乗るという選択肢を考慮

する。弥生とてむやみに殺したいわけではない。殺さずに済むならその方がいい。
　しかし、彼らの言葉に力はない。全て確証の無いあやふやな憶測を話しあっているだけだった。
　弥生が縋っている十人殺せば最愛の二人を助けるというのも同じくらいあやふやな物ではあったが、それでも、主催者の言葉である。一参加者のなんの根拠もない言葉よりはましだろう、弥生はそう判断し、彼らを殺す事を決意した。
　再び慎重に接近を開始する。物音をたてないことを最優先したため接近に時間がかかり、目的地に到着する前に放送がかかった。
『二日目午後六時だ、早速今回も定時放送いくぞー……』
　人の死を放送するこれも、今の弥生にとってはどうでも良いことである。あの二人の名前が呼ばれない限り。
　むしろ、今ならば声の主達も放送に気をとられるだろう。それに全島に響いている放送は、弥生が接近する物音を隠してくれる。
　チャンスであった。
　弥生は急いで接近しようとした。
　が、その前に深呼吸を一回して頭を冷やそうと努力する。
　人間は生きるか死ぬかの非常時において大事なことをぽっかり忘れる生き物であり、冷静沈着なようでいても、実は普段の三分の一も冷静ではないのだと弥生に右目に走る痛みが教える。
　だから自分のとるべき行動を何度も何度も繰り返しイメージしチェックする。
　もう、先ほどのように44マグナムがあることを失念して、殺し損ねることなどあってはならないからだ。
　チェックが終わると弥生は急いで接近する。
　放送が終わりかけていることもあるが、それにも増して弥生にとってもうすぐ絶対有利の瞬間が来る

からであった。
　しかしその時間は短い。その時間が終わる前にけりをつける必要があった。
「詠美――っ‼」
「詠美さんっ！」
　その声と同時に誰かが走り出してゆくのが見える。弥生は発見される危険と逃がしてしまう危険を天秤にかけ、発見される危険をおかしても森の中から出て追跡することを決断した。
　太陽は自分の背後にあり逆光である事、さらに、焦っている様子から、背後には注意をはらうことは無いであろうと判断したためである。
　弥生が二人に追いつくと二人の背後にある木の陰に隠れ、そこから二人を観察する。
　どうやら、男は守るべき人を喪失したようだったた――今走り出していった人物がその相手なのだろう。彼らは、その誰か――詠美という名前のようだ――を、追うことに決めたらしい。

　その場面に弥生の心はなに一つ動かなかった。弥生が理解したことは男が和樹という名前であることや、彼が機関銃を持っているといった、彼女に必要な散文的な事柄だけであった。
　そして殺す順番を考える。
　どう考えても大の男であり、機関銃を持った和樹から殺すべきだった。
　そして夜の帳が下りる。
　その瞬間、闇が訪れる。どこに行っても人工の光で照らされる現代社会では絶えて久しい真の闇が。
　この瞬間こそ弥生が待ち望んでいた瞬間だった。
　痛みをこらえて今までずっとつぶっていた右目を開ける。光が失われてから闇に眼が慣れるまでのわずかな間、人は何も見えない。弥生のように初めから闇に眼をならしでもしないかぎり。
　弥生の左目には闇しか映らなかったが、右目は二人の姿をはっきりととらえていた。隠れていた木から飛び出て二人に突進する。左手の44マグナムは使う

気は無い。
　散弾銃と比して命中率、威力、射程の全てにおいて劣る拳銃。弾丸の浪費を覚悟して何度か試射してみた結果二メートル先の的ですら外したこともあるくらいだ、それに今は片目しか見えていない。この状況で命中を期待する事は奇跡を期待する事と変わらなかった。
　千堂と楓は何者かが走ってくる物音に気がつき、背後を振り向く。
　しかし、まだ何も見えず棒立ちのままであった。普段ならふたりとも違う行動をとったであろう。しかし、一時的に視界を喪失した状況で予期せぬ出来事に見舞われた彼らは、思考停止した状態で弥生の襲撃に反応できないでいた。
　弥生は和樹に駆け寄ると右手のストッキングで出来た鈍器を力一杯頭に叩きつける。予想以上に伸びたストッキングで狙いが逸れて、和樹の後頭部に当たった。
　だが、手応えは十分。吹っ飛ばされた和樹は、そのまま地面に顔面から倒れ込んだ。
　続く動作で弥生は地面に倒れた和樹の喉を力一杯かかとで踏みつける。足下に伝わる、生々しい、物が潰れる感触。
　弥生は手首を返し、左脇に構えていたストッキングを今度は内から外に向けて振るう。次の目標である少女――楓はそれを上体を逸らしてかわした。
　素早く楓は切り返し、右手につけた鉄の爪で弥生に反撃する。肘を狙ってきた凶器を、弥生は腕を縮めてとっさにかわした。
　誤算であった。
　襲われた人間が、こんなに早く体勢を立て直し、闇に順応するとは思わなかったし、それにこの少女の動きの速さは大の男と変わらないほど俊敏だ。
　一つ間違えたら死ぬ、と弥生は恐怖心を抱いた。
　だが退くわけにはいかなかった。あの二人がいつまで無事か解らない、もうこれ以上殺すチャンスを

逃すわけにはいかないのだった。
　距離が詰まったとき、二度ほど攻勢をかけてみた。だが見事にかわされる。逆に防戦に追われ立場がひっくり返った。
　突きかけられた。懐を深く構えてどうにかかわす。一転して体のバランスをとっていた手を狙われる。両手を後方へ。とたんに左足が残り、そこを斬りつけられた。すり足を使って後退する。先に倒した和樹の体に足が触れた。全身がぐらつく。
　防御ががら空きになった。それを狙っていたかのように全体重をかけた突きが来る。
　楓が一気に弥生に接近する。
　弥生は倒れながら右手のストッキングを楓に投げつける。鈍い音がして動きが止まる。
　上半身をひねりつつ、足を力一杯横へ払う。強い衝撃が伝わってきた。足首あたりを刈られ、楓はたまらず転倒する。
　弥生は相手の体がどこにあるか見当をつけると躍りかかる。ほとんど正確に捕捉した。
　左手の44マグナムを楓に押しつけ引き金を引き絞る。
　そこを中心に楓の服がみるみるうちに夜目にも黒く染まってゆく。
　致命傷であった。

「耕一さん、どうしてわたしたちはめぐりあったとたん別れるんですか？　何度同じことを繰り返せばいい――」

　楓の言葉がそこでぷつりととぎれた。
　口を半開きにしたまま動かなくなった。眼が大きく見開かれているがもう何も見ていない。
　弥生は右手で死体となった楓の眼を閉じてやった。ただの感傷だとはわかっていたがやらずにはいられなかったのである。
　そのまま少しの間弥生は動かなかった。まるで二

人の冥福を祈るかのように。
しばらくの後、弥生は立ち上がり二人の装備を回収して再び動き始めた。
冬弥と由綺を救うために。
後七人殺すために。

十八番　柏木楓　死亡
五十三番　千堂和樹　死亡
【残り49人】

336　余裕と苛立ち

里村茜（四十三番）が去って暫くして、高槻04、05の死体が爆音と共に、跡形も無く消去された。
潜水艦ＥＬＰＯＤの発令所。爆破スイッチを押した高槻は、自らと同じ姿をしたクローン体を処分したことを意に介する事もなくメイドロボに当たり散らしていた。
二十四時間後に修理の目処がついたが、修理完了までに誰かがここを嗅ぎつけるのではないかという苛立ちが彼を不機嫌にさせていた。
「04と05の奴、先走りおって……だが、四十三番が単独行動だったのは不幸中の幸いだった。集団行動している連中だったら、致命傷になりかねなかった。ルールに従い、残るか……その方がこっちには都合がいいので大歓迎だ。ただ、俺に害が及ぶ場合は容赦無くやらせてもらうがな」

337　――疑念

その衝撃はひどく重たくて、私はしばらくの間満足に呼吸をすることが出来なかった。
少年は笑っている。
怒りに拳を震わせながら、視線に冷気を帯びながら。
その有様に戦慄して、私は再び息を飲む。
……だが、やらなくてはならない。

いずれ来る結界の限界を前に、今を置いて、この初期段階を置いて彼を殺す機会などありえない。
殴られた拍子に噛んでしまった唇から血が滲む。
鉄色の味が、妙に鮮やかに舌に広がる。
……生きている、そう血が叫んでいる。
私は、刃先を失って柄だけになってしまった槍を拾い上げる。
それはもはや槍とはいえない。ただの棒だ。
だけど、それを構えて再び立ち上がる。
少年は眼前にいる、その間合い数メートルといったところ。
……退くわけには行かない。
私は、私の好きな人たちを守るために。
「――全ての不可視が閉ざされたこの〝形而下〟。……此処において、あなたを討つ」
闘う理由は、いつだってシンプル。
心の弱さを補えるだけの、それだけの意味さえあれば。

始まりから不審だった。
何故、あの少年がここにいるのか。
名前を持たず、通り名ですらない、唯その容姿どおりの呼称に過ぎない少年という呼び方。
開示された名簿。鬼、強化兵、機械、魔法使い。
……数多の異能者に迷彩された少年の二文字。
誰も気づかなかったのか。
戦場に紛れ込んだこの名無しの悪魔のことを。
ジョーカーは初めから彼ひとりが用意されていたのではないのか。
……その疑念は、私が偽のジョーカーを演じているがゆえに、より強まった。
――第一回放送。
ジョーカーという立場で在りながら名前を読み上げられた私。
FARGOの出身でありながら名前を読み上げられなかった少年。
それはどういう意味なのか。

高槻の一存であのような放送に名を連ねた私。
同じ不可視の繋がりであるのに名前の無い彼。
まさか読み忘れたとでも言うのか。
……そんなことはありえない。
ならば、どういうことか。
……高槻には、呼ぶことが出来なかったのではないのか？
高槻の一存という理由が通用しない何かが、彼の参加に隠されているのではないか。
そしてその理由は。
……それは、彼がゲームの主催者側に与しているからと考えるのが、一番納得がいく説明だった。
その脅威は。
「あああああああっ！」
棒を振りかざし、全速で少年に接近する。いつものごとく、彼は微動だにしない。
ブンっ！
風を切る轟音。

ワンパターンな斜め袈裟懸けの打ち下ろし。だが今回は前回とは違う。
すっ、と手応えの無くなる感覚。
ここだ。
彼はいつも最小限の動きで、私の攻撃をかわしてきた。
先の交錯の瞬間、彼は僅かに一八〇度、軸足を基点に回転しただけで私をいなした。
ケープで目くらましをした筈なのに、まるで彼は見えてるかのごとくに、さらにすれ違いざまに私の武器までも破壊している。
……ケープの目くらましは、そのまま私の心の目くらましになってしまっていたのか。
四十五度の振り下ろし。
もちろんこれは既にかわされている。しかし、
ぐぁん！
もう一度風を切る音。
叫び声に気合を乗せ、渾身の一振りを、棒が地面

に接する前の、引き上げの一振りを彼に打つ！
——似非燕返し。
だが、それも。
「………………」
少年は無言で私を見つめている。
左手には分厚い本……これは……まさか教典か。
そして反対の右手では。
「……お粗末」
人差し指と中指に本のページを挟み込みながら、手のひらで棒を完全に受け止めていた。
その手のひらが、きゅっと棒を握る。
「くっ！」
私はその瞬間に彼に蹴りを放った。
しかし、少年はその蹴りに動じることも無く、むしろその反動で私は反動で背後へ飛ばされ、棒も手放してしまった。
……ここまでは、計算どおり。
一瞬。ただ一瞬のこと。

再び土煙が上がり、私は必要以上に地滑りする。
一度目は小山に倒れた。あれがもう少し固いものであったら、私は強かに腰を打ちつけていたことだろう。
いや、そもそもその小山はなんでそこにあるのか。
生憎、今の私にはそれを考えるゆとりは無かった。
一瞬。転がる一瞬に、私は切り取られた槍の先端を掴む！
ブン、と三回目の風切音が上がる。
けして得意とはいえない投擲……だが、この距離なら当てる自信はある。
狙いは……首筋。
だが。
ザン、と棒が地面に落ちる音。
キン、と槍先が弾き飛ばされる音。
二種類の音が、同時に鳴った。
「あ…………ああ」
思わず…戦慄に喉が渇いた。

開放した右手、挟み込んだ一枚の紙を、彼は飛来する槍先へと振るった。
その手首の速度は、もしかしたら槍の速度よりも速かったのかもしれない。
槍先は、無残に地面に落ちた。
「――こんな攻撃じゃ、僕を殺せない」

338 King of Kings

「かず……き……?」
詠美はその場に座り込む。
期待していたのだ。
和樹はきっと楓より自分が大事。
それを証明するために追ってきてくれる。
それは日常においては可愛い行為だったかもしれない。
相手の愛を確かめ、自分がより相手を愛するための通過点になったかもしれない。
和樹も可愛いいたずらと笑ってくれたかもしれない。

頭の中で描いていたのは追ってくる和樹。
頭の中で描いていたのは和樹の愛の囁き。
もう二度と手に入らないものたち。

目の前で繰り広げられたのは。
現実感のない悪夢。
全てが見終わったのにまだ覚めぬ悪夢。

和樹の手を握る。

――ぎゅっ……――

温かい。まだ生きているかのようだ。

――ぎゅっ……――

（え……？）
握り返された。
「和樹⁉」
しかし、骸が動くことなどないのだ。
それは詠美による妄想。

「和樹……。好き……」
頭は首に支えられていない。
支えているのは詠美の両手。

「和樹……。愛してるよ……」
唇を重ねる。
血の味がした。
抱きしめる。
抱きしめる……。
「愛してる……。和樹……」
もう一度言う。

俺も愛してるぜ。

詠美の耳だけに聞こえた返事。
涙が止まらない。
その声が聞こえてまた涙が出た。
和樹の死を実感してしまった。
雫が頬を伝う。

だが、勇気が出た。
和樹の声が勇気をくれた。
「和樹のしたかったこと。楓ちゃんのしたかったこと。私が受け継ぐよ」
立ちあがる。
「私は同人界の King of Kings! 詠美ちゃん様なのよ！」
自分を奮い立たせる。
「このつまんないゲームのストーリーは！」
瞳に光が戻る。

「この詠美ちゃん様が描き直してやるんだから‼」
（もう大丈夫。だから……。心配しないで見ててね。和樹……）
詠美の心に決意が宿った。

339　接触

「もう……限界ね……」
それがそこでの最後の言葉。軽く、かすかに響いた声。目の前の少女――リアン（百番）の体はもう限界に近づいていた。
もう、これ以上仲間を待っているわけにもいかなかった。
舞の、佐祐理の死を告げた放送。
そしてそのやり場の無い怒り、憎しみをぶつけるべき相手、南ももういない。
このまますべて忘れてしまえば……狂ってしまえればどんなに楽だっただろう。だが、目の前の苦しんでいる少女が、それを許してはくれなかった。
（この子も……戦ってるんだ……私が逃げるわけにいかないじゃない！）
自分だけここでこの少女の死を黙って見守っているわけにはいかない。
（ごめんね、姉さん、スフィー、私は……独自の判断で行動するわ）
この島は割となんでも揃っていた。
住宅街や店もあった。
（きっと……この子の症状を抑える薬とか……あるかもしれないし……）
医学の知識は無い。下手をすれば少女の死を早めてしまう結果だってありうる。
だが、何もしないで隠れていることよりずっとマシだと思えた。たとえ、その先に最悪の事態が待ち受けていようとも。
洞穴を飛び出す。

待ち合わせの小屋にスフィーや芹香の姿がないかと淡い希望を抱くもそれは果たされなかった。
（本当にごめん……）
リアンを抱え、凄惨な戦いが行われている世界へと飛び出す。
結界のこと、脱出のこと、本当の敵のこと……
それよりも、失われようとしている少女の命――
リアンを助けるために動くのは今しかないのだから。来栖川綾香（三十六番）の行動原理は実にシンプルだった。
（毒……蛇に噛まれたときの消毒剤……なんかじゃダメよね……さて、どうすべきかしら？）
考えながら綾香は急ぐ。もちろんリアンの状態、周りの状況に気を配りながら。
気がつくと、どこからか小川のせせらぎ。その音にまぎれ、騒がしい声が聞こえてきた。綾香は出来る限り気配を殺しながらその声の主を伺う。
十五メートル近い崖の下、緩やかな流れの川のほとりにその男はいた。
エクストリームの試合でも滅多にお目にかかれないほどの凄み。
（なんて威圧感……！）
綾香の額から汗が流れ、落ちる。
あの男はやばい――綾香の直感がそう危険信号を発していた。
（ここから離れなきゃ――）
だが、綾香の体はその威圧感で金縛りにあったかのように動いてはくれなかった。
「なんて激流だ……これに巻き込まれたらいかな俺様でも生きて帰れねぇぜ……」
「ぴっこり」
「だが……サバイバルに難関は付きものだ。今晩のメシは魚にするぜぇ……なあ相棒」
「にゃう♪」
その男、低くドスの聞いた声は綾香の体を否が応

にも震え上がらせる。
「……分かってんだろ？　俺が水が苦手だってこと。だからよ……」
「ぴっこり」
「おめぇ……捕まえてこいや」
「ぴっ、ぴこっ⁉」
その男はなにか喋る毛玉を引っつかむと、上流へと放り投げる。
「ぴ、ぴこぴこっ⁉　ぴこ〜〜〜〜〜〜……」
遥か上流へ消えて行く毛玉を見て騒ぐ猫。
「にゃう♪　にゃう♪」
「なに踊ってんだ……おめぇ猫だろ？　おめぇもだ……よ‼」
「にゃにゃっ⁉　にゃ〜〜〜う〜〜〜〜……」
（なんて非道な奴……！）
綾香はその男に激しく嫌悪感を覚えた。
「ったくよ……使えねぇ奴等だぜ……これならまだうぐぅうぐぅ言ってたガキの方が……」

そこで男の声が止む。
「今……俺はなんて言った……？　あのガキのほうがいいだと⁉」
男はその場で崩れ落ちるかのように——
「この残酷無比な俺が……まさか……そんなことあっていいはずがねぇ……‼」
（あの男もまた……この島の被害者なのかもしれないわね……）
凄みをもつ目の前の男も、この異常な島に精神を侵された哀れな犠牲者なのかもしれない。
綾香の気が少しだけ緩んだ……その瞬間だった。
「誰だ⁉」
男の声。
（しまった！　まさか感づかれるなんてっ⁉）
綾香の表情に怯えの色が走る——！
「そこで盗み聞きしてる奴ぁ！」
同時に綾香に対し銃口が向けられる。
（銃——⁉）

戦慄が走り抜ける。
だが、綾香の格闘の経験が無意識の内に体を動かす――！
手近にあったもの……リアンの体に触れたとき同時にたぐりよせた飛び道具になりえるもの――
「でやぁっ！」
それはリアンの持っていたバインダーだった。
「……！」
同時にリアンを抱え、脱兎のごとくその場から離れる綾香。
「ちいっ！」
男が一瞬ひるんだ際に――まさしく刹那の出来事だった。
「あの女……素人じゃねぇな。……気配の殺し方といい……やるじゃねぇか……」
男はその落ちてきたバインダーを拾う。
「なんだ？　このカードの女は。……まあいい、盾ぐらいにはなるかもしれねぇ、もらっておくか」

「はぁはぁ……あんな男がいるなんて。やはりこの島は危険すぎるわ……早くリアンを助けないと大変なことに――！」
あの男の目は、何人も殺してきた――そんな目をした男だった。

「ようやく戻ってきたか……こら、水をかけるんじゃねぇ！　死んだらどうするんだ!?」
「ぴこっ!!（怒）」
「な～う～（怒）」
「分かった分かった……おめぇらにも魚やるから水はやめれ……」
「ぴこっ♪」
「にゃうにゃう♪」
「があ、落ち着いて食え！　じゃれてんじゃねぇ、おろすぞ!!」

340　ここから始める物語

また此処へやってきていた。玲子が逝ったこの『北の広場』へ。彼女がどんなに後悔しても、もう戻らないあの頃に戻るかのように。
「かずき……わたし、またここからはじめるよ」
つまらない嫉妬から楓を罵倒した場所。
身勝手な行動で和樹を困らせた場所。
「わたし……まけないから」
和樹が、楓が遺した脱出への道――。
「ここから、はじめるんだ……」
生きて帰る……それは和樹達の心からの願いだった。
一度は壊れて――そして和樹が彼女の心を癒してくれた。彼女が取り返しのつかないことをしようとしたとき楓は、彼女を許してくれた。
だから――
「もういちど、ここから――」

341　詠美ちゃん様の推理

周りに誰もいないことを確認すると、詠美はそこに座り込む。
ちょうど、和樹が座っていた場所に。
「……えっと、たしかかずきは……」
詠美は和樹達の言葉を一生懸命に頭に思い描いた。
こう見えても詠美は短期間の記憶力には自信があった。その記憶力で何度テストを乗り切ったか分からないほど。
「そう！　せんすいかん！　せんすいかんといえば……およぐ！　……そんでもって……もぐる？」
だが、応用力はなかった。
「ふみゅ～ん……」
途方に暮れかけたが……
「まだよ……いちおう会話のないようーは全部暗記し

てるんだからっ……たぶん、えっと……たぶん、忘れない」
詠美は必死に頭を働かせ、脳裏に言葉を焼き付ける。
本当は詠美にも分かっていた——心優しい楓と、和樹の、二人の言葉。
絶対に忘れたくなかった。忘れることは、今の詠美を否定することだから。
「なかま……そう、なかまをさがす……そしていっしょに考えてもらえばっ」
しかし、詠美が昼間会ったカップルのようにいきなり襲ってくる者もいるかもしれない。
「どうすれば……」
こんなに頭を使ったのは初めてだったかもしれない。
「そうだ……楓ちゃんに……」
——私の知り合い……姉さん達に会えればきっと力になってくれます——

「えっと……柏木って女の人をさがせば……なんとかなるかな？」
詠美がやっと出した答えはこれだった。
「……そうよ。わたしは同人界の女王なんだから!!」
自分を勇気付けるように、詠美が勢いよく立ち上がる——と同時に何かがポケットから転がり落ちた。
「え……何？　……ＣＤ？」
それは、もしもの為に楓が詠美の服に忍ばせていたＣＤ。
——楓が、どうしても南には渡せなかったＣＤ。
楓は無意識のうちに悟っていたのかもしれない。このＣＤに何か手がかりが隠されていたこと、そして、おそらく自分はその謎の解明を果たすことなく散ることまで——
楓がどう思っていたか……もう詠美には、そして誰にも分からないことだった。
「……何……これ……4/4？　……ふみゅ？」
そんないきさつなどまったく知らない詠美がそれ

を拾い上げまじまじと見つめる。
「なんかの……音楽CD？　……まあ、いいか」
詠美はそれをもう一度大事に服にしまう。
それは何気ない仕草は偶然だったのかもしれない。
だが、そのCDが後でどれだけの役割を果たすかを、詠美は知らない。

342　ここから伝える物語

「じゃ、かずき……楓ちゃん、いってくるね」
名残惜しむように、寂しげなその言葉は夜の森へと消える。
「すべてがおわったら……また……ね」
その時は泣こう。涙尽き果てるまで。
まだ消えぬ涙の痕を乱暴に手で拭う。
「かずき達の想い……絶対に伝えるからっ!!」
そして、詠美は歩き出す。
大いなる悲しみを心の扉に仕舞って。

かけがえの無い友達。
そして、短い間だったが確かなぬくもりを確かめあった、あの人の遺志を継いで――。

343　狩のはじまり

「ずいぶんとぼろぼろになったな、あんた達」
国崎往人（三十三番）の問いかけに、
「ええ、まったくですね」
と、水瀬秋子（九十番）は答えた。
実際、往人の前に現れた水瀬秋子と水瀬名雪（九十一番）の姿は痛々しいものだった。
二人とも服は汚れ、秋子の頬にはバンドエイドが、
そして何より名雪の頭には包帯が巻いてある。
だが、二人ともその顔にはいつもの朗らかな笑顔が浮かんでいた。
（たいしたもんだな）
それを見て往人はそう思った。

前回の生き残りでそれなりに修羅場を潜り抜けている秋子はともかく、名雪のほうまで笑顔で、
「わ、なに国崎さん、そのカラス。お友達?」
とか往人にしゃべりかける。
「んなわけあるか。非常食だ」
「わ、ひどいよ国崎さん」
「こんな奴、それで十分だ。おいこら、つつくな」
「国崎さん、ひどいよー、鬼畜だよー」
往人は「うるせぇよ」などと返しながらも、久方ぶりに交わす(と言っても、一日もたってないな)明るい会話に少し心が和んでいた。
少し表情を緩めて秋子の方を見る。
「てっきり、喫茶店にずっといると思ってたが」
「そうしたかったのですが……あの後襲撃を受けてしまいまして」
「襲撃?」
往人の目が鋭くなる。
「誰にだ?」
「名前のほうはわかりません。ですが姿のほうは見ました」
秋子は真顔になって答えた。
「長い黒髪で割と長身。そして、切れ長で多少たれ気味の目をしたきれいな女性です」
秋子はそのほかに武装、服装等の細かい特徴を、往人に告げた。
「この出場者の中にはジョーカー、主催者側に雇われた殺し屋が幾人か紛れ込んでいるようです。往人さんも気をつけてください」
「ジョーカー、だと」
往人は低く呟いた。
最後に彼が殺した女を思い出す。真剣な、どうしようもなく必死な、そんな思いを抱え、それでも人を殺すことしか方法がわからなかった、あの少女のことを。
「……許せんな」
「そうですね……」

ため息と共に秋子も同意する。
「そのジョーカーに襲撃を受け、琴音さんの行方もわかりません」
「そうか……大変だったな」
往人は名雪にも何か言葉をかけようとして彼女のほうを向いた。
そこで、往人はかすかな違和感を感じる。名雪はこの会話中もずっと笑顔のままだった。
確かに、いつも笑顔の少女というイメージはあった。
が、こんな張り付いたような笑顔をするような娘だったたか？
「ところで、往人さん。探し人は見つかりましたか？」
「あ、ああ……」
だが、秋子の問に、そんな違和感は頭の中に定着する前に消えていってしまう。
「まだだ。このレーダーでは番号しか表示してくれないんでな」
先ほども、017の表示が出たので、本人に気が付かれないようにして確認してみたが、それは長身でやや筋肉質のショートカットの女。彼が探す神尾観鈴には似ても似つかなかった。
もっともこのレーダーのおかげで、慌てて逃げた先、水瀬親子の存在をキャッチできてこうして合流することができたのだが。
「もう少し経てば放送が始まるから、番号も絞れるかもな」
多少の罪悪感を無視して往人はそう吐き出すようにいった。
「……その番号なんですが……あなたの探し人は神尾、でしたよね」
秋子は頬に手を当て首をかしげる。
「それならば、おそらく番号は二十三、二十四、二十五番のどれかじゃないかしら」
「……なんでそう言いきれる？」

「昨日の高槻の放送です。高槻がこの五人を殺せ、といったとき、その中に鹿沼葉子さんという方がいました。その人の番号が確か、二十二だったはずです。そしてすでに河島はるかさんという、二十六番の方が放送で呼ばれましたから……」
「そうか！」
往人は慌ててレーダーを覗き込んだ。神尾は晴子と観鈴がいるから、二十四は必ずどちらかの神尾であるはず。
「いた、おそらくこれだ」
023と024がいっしょの場所にいた。他にもう一人そばにいる。025のほうは海岸のほうにいた。
「多分、023と024のほうが正解だろうな……助かったぜ秋子さん」
「よかったわ。ここから近いの？」
「ああ、今きた道を戻ったところだ」
それは、先ほど十七番を見つけた少し先にいったところだった。
「これだったら、すぐ見つけられるな。あんたらはどうする、ついてくるか？」
「いえ……」
秋子は首を振った。
「私たちは元から知り合いの信頼できる人と合流したいと思います。そこでなんですが……」
秋子は一度言葉を切る。
「あつかましいお願いですが、そのレーダーをお返し頂けないでしょうか？」
「レーダーを？」
「はい、喫茶店にいるうちは必要もないものだったのですが、こうなってしまった以上、早く頼れる人と合流したいのです。名雪の怪我のこともありますし」
「そうか……」
往人はしばし逡巡した。だが、
（この距離なら、レーダーがなくてもすぐ観鈴達とも合流できるだろ）

もちろんこちら移動している間に、彼女達も移動するかもしれない。だが、探せないということはないだろう。もうすぐ日が暮れるというのは不安要素だったが、あるいは夜のうちは向こうも動かないかもしれないし。
「そうだな……もともとあんたらのもんだしな。いいぜ、もってけよ」
「いいんですか？」
「ま、今の礼もあるしな。それじゃ、俺はそろそろ行くぜ。急ぐことになったからな」
「うん、それじゃあね、国崎さん」
名雪が笑顔で往人に別れの言葉を告げる。
「あばよ」
そういって立ち去ろうとした往人の背中に秋子の声が投げかけられた。
「……待ってください」
「？　何だ？」
「……いえ、その」
言いよどむ秋子。その姿に往人は多少の驚きを感じる。そんなことをするような人には見えなかったので。
「……あなたは……私たちと別れた後、敵に会いましたか？」
「ああ」
「殺し、たのですね？」
「ああ」
「そうですか……後悔はしませんでしたか？」
「ああ」
往人は秋子の彼女らしくない質問に三度同じ答えを返す。
「その人たちには、その人たちなりの事情があったかもしれないのに？」
「そして、俺には俺の事情がある。俺は、俺の大切なものを守りたいと思う。そのためには、後悔なんて、しない」
「……そうですか……それならばもう……」

秋子の声が徐々に小声になっていく。
「なんだって？」
その声を聞き取れなかった往人が聞く。
「いえ、何でもありません。お気をつけて往人さん」
「……あんたらもな」
往人は聞き逃していた。
秋子が――それならばもうあなたは、私達の敵ですね――と言ったのを。
「何で、あんな嘘ついたの？　お母さん」
「ジョーカーのこと？　あら、あれはまったくの嘘じゃないわよ」
秋子はカラスを肩に乗せて去っていく往人を見つめながら、名雪に答えた。
「……そうね、ちょっとした宝くじかしら」
別にあの嘘に大きな意味はない。話の流れで、「敵」というものを往人に説明しなくてはならなかった。
そこで浮かんできたのが、あの人、柏木千鶴だっただけだ。
そう、彼女――柏木千鶴も、もはや秋子の敵だった。彼女が妹達や従兄弟を守るために殺人を辞さないというのならば、彼女もまた往人と同じように敵なのだ。
そして、その敵同士がつぶれあってくれれば……。
(本当に宝くじみたいな話ね)
秋子は首を振った。
「さ、あゆちゃんと祐一さん、探さなきゃね」
「うん！　まずあゆちゃんね。えーっと、あゆちゃんの番号はね……」
名雪は終始笑顔だった。

344　小さな手掛かり

もうすぐ夜の帳が降りる。
時が経つにつれ蝉丸には馴染みのある香りが島を

覆っていく。
――死臭。
それは、吐き気を催すような死の香りだった。
最初はその香りに耐え難い嫌悪を示していた月代だったが、今では別のものを嫌悪している。この悪臭に嫌でも慣れかけている、自分自身を。

先刻の放送によれば、あれからさらに死者は増え――既に凡そ五十人程の骸がこの島に転がっているらしい。中には、野ざらしのままになっている者も多いだろう。――おそらくは、高子や夕霧達も。
見つけてやれれば、埋葬くらいはしてやれるかもしれないが……。

この日中、蝉丸と月代は島の海岸沿いを探し歩いていた。発端となったのは月代の提案だ。
「(･∀･)探す……といっても、あの高槻って人……どこにいるんだろう？」
「分からん。もしかしたら、既にこの島には居ないのかもしれん」
「(･∀･)でも、最初はいたよね？　船とかは無い、って言ってたけど、この島から出るための別の手段があるんじゃないかな？」
「そうかもしれん」
「(･∀･)やっぱり、ヘリコプターとかかなぁ」
「ヘリコプター……？」
「(･∀･)知らない？　こう、プロペラが上についてて、それがぐるぐる回って飛ぶの」
「……ああ、回転翼機のことか」
蝉丸自身は見たことはないが、独逸や亜米利加がそのような兵器を開発していたと聞いた覚えがある。今となっては相当に進歩しているのだろう。滑走路を要しないならばこの島の何処かにあっても気付き難い。
だが、飛行機の類はいざとなれば簡単に飛行不能にできる。地上にあるとは考えがたい。それに、そ

んなものが飛んだのならば、いくら感覚が衰えているとはいえ蝉丸が気付かないはずがない。何らかの異能などで隠されているなら別だが……その場合はどうしようもないので、考えるだけ時間の無駄だ。

「(・∀・)だったら、飛行船で空からみてるとか……」

「そのようなものも、昨日から見ていない。あるとすれば相当の高空だろうが……少なくとも近くに降りてきたことはないな。だが……」

……何か、感じる。それは非常に些細な感触だが、あの雲の向こうから、何者かが見ているような気がする。

「(・∀・)それじゃ地下道が海の下に通ってるとか……」

「海の底に道を造るのは非常に手間がかかるはずだ。ここは、他の陸地とは少なくとも数里は離れている。あの仙命樹の洞窟でもそこまで長くはなかった」

「(・∀・)そっか。じゃあ後は、潜水艦……とか」

「潜水艦……」

「(・∀・)そうそう。どっかの崖下の海中とかにでっかい秘密基地があってそういうところに隠してあるんじゃないかな……って」

「秘密基地、か」

かつて特殊部隊の一員として大陸で戦った日々が脳裏によぎる。蝉丸達強化兵に与えられた使命の多くは、表沙汰には出来ない性質のものだった。

それこそ、まるで少年向けの冒険小説の産物かと思うような「秘密基地」に潜入・破壊せよ、との命を受けたこともある。中には自分達と同じように強化された常人ならぬ相手もいた。確かさいぼーぐとかいった……そう、あれは確か……黒幽霊団と……。

過去の回想に浸りかけた蝉丸に、すねたような月代の言葉があびせられた。

「(・∀・)……だから、海沿いに歩いて調べてみようっ、て。……蝉丸、聞いてる？　ねぇっ！」

「……ああ。分かった」

もし、高槻某がこの島にまだ居るとすれば何らかの脱出手段を有していると考えた方が自然である。

様々な非常事態も考えられるこの状況で、「仲間に連絡すれば迎えがやってくる」などというような悠長な状態で構えているとは思い難い。即座に逃げ出せるようにしているはずだ。
ならば、長期間の滞在が可能であり、かつ脱出手段がすぐ側にある何処かに隠れているのだろう。潜水艦ならばそれらの条件を充分に満たしている。
特に手がかりがあるわけではない。ならば、この方法も悪くはあるまい。
こうして、何回かの休息をはさみながら二人は島の周囲を探り歩いた。
途中で黒焦げになった死体や、怪しい機械の残骸を見つけたりしたが、脱出の手がかりになりそうなものは見つからなかった。
なお。先刻、自動車らしきものの音がしたため向かった先で、固く抱き合う一組の男女を見かけはしたのだが、それに月代が気付く前に進路を変更し、敢えて無視した。……先ほどからやけに自分にくっついてくる月代を見ていると、なぜか非常に厄介なことになりそうな気がしたので。それに——きよみの事もある。今はそんな気分になれなかった。

そして海沿いの、ある尾根上にたどりついた時。
月代が、竹槍を握りしめて小声で囁いた。
「(･∀･)蝉丸。なんか音が……しない？」
「む？」
月代も微量とはいえ仙命樹を持っている身だ。常人よりその感覚は鋭い。
蝉丸は耳を澄ます。
小さな音が聴こえた。少し向こうからの波音に紛れがちになるが、その音は足下の地面——そのさらに下から聞こえた。
……カン。カン。カンッ……。
……ピーッ、ピーッ、ピーッ！
金属を叩くような、小さな澄んだ音。
そして、何らかの機械が出すような無機的な音。

(これは……)
そしてさらに気付く。周囲の土が、木々が――新しいものであることに。
岩にも苔がついていない。寺社にある枯山水の置物でもここまで綺麗ではあるまい。そして木も、樹齢の割には海風による影響が殆ど見られない。
これらは、置き替えられたものだ。
この下に「何か」が造られた後に。
それは、おそらく――。
蝉丸は月代の耳元に口をよせ、小声で囁いた。
(……月代)
((・∀・)なに、せみまる)
(おそらく、この下に何かがある。だが二人では心許ない。ここはいったん退き、他の者を探す)
腹中の爆薬のことも気になる。二人だけで突入したところで、きよみのように爆発させられてはたまらない。せめて、この事を他の誰かに伝え、策を練る必要がある。
余りここに長居して、こちらの居場所が分かっているらしい高槻某に疑念を与えるわけにもいかない。こちらが気付いた事に気付かれ、逃げられても困る。
相手には今の会話までは聞き取れまい、と蝉丸は考えていた。荷物や服についても調べたが特に妙なものは見つからなかった。腹中に仕込んだ爆弾に、仮に音を聞き取る機能があったとしても、大したものではないはずだ。
こちらの行動は、おそらく――この島に来て何度か感じた、視線の持ち主達によって向こうに伝えられているのだろう。殺意のない、だが冷ややかな同種の視線。雲の彼方から感じる「それ」を、今の蝉丸は「監視者」のものではないかと考えている。
もっとも、蝉丸は今の時代の技術には疎い。もしかしたら間違っているのかもしれなかったが、そこまで考慮する余裕はさすがになかった。
(――もしかしたら、この「ぱそこん」が何かの役に立つのかもしれんが、俺には分からん。誰か、こ

れを扱える者に出会うことができれば……）

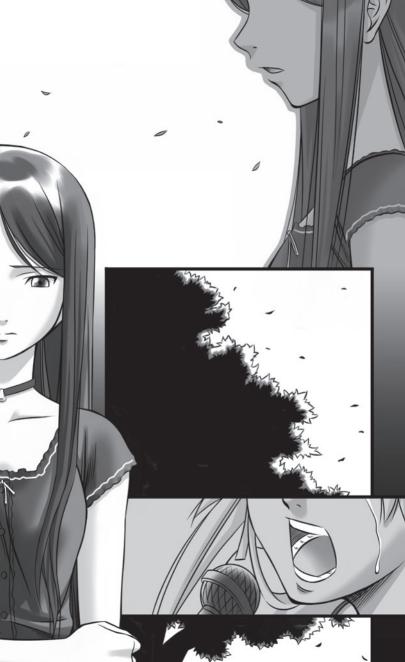
345　ふたりだけのせかい　～ sacred days ～

そこは二人だけの世界。
全ての介入が無意味となる世界。
度々聞こえる銃声も、定時放送も、彼等にとっては意味をなさない。
彼等が出会い、その世界が生まれた。
星空の祝福する下、彼等はいた。
「ねぇ、浩之ちゃん」
「どうした？　あかり」
「ちょっと、話し疲れちゃったね？」
「あぁ、そうだな」
「でも、まだまだ話し足りないよね？」
「そうだな。俺達の過ごしてきた時間だからな。いくら時間があっても、足りないぜ」
「ふふ、そうだね」
「あぁ。だから、もっと話そうぜ？」
「うん……ねぇ、浩之ちゃん？　こうして星空を見上げてると、私達、世界に残された最後の二人みたいだね」
「ずいぶんとおかしなことを言うんだな」
「酷いよ浩之ちゃん……」
「はは。あかりらしくて、いーんじゃねぇか？」
「今日で世界が終わっても、私は幸せだよ。浩之ちゃんといるんだから」
「あかり？」
「世界に残された最後の二人って言ったよね。だから、浩之ちゃんがいなかったら生きていけないんだ」
「……俺もだぜ」
「浩之ちゃん、守ってくれるって言ったよね。もしも、どっちか先に死んじゃったら……」
「……わかった。約束する。だけど、生きて帰るぞ？　どっちかが死んだりしたら、それは世界の終

わりだな」
「そうだね……。聖なる瞬間っていうのかな。好きな人と迎える、世界の最後の瞬間っていうのは」
二人、口づけを。
この世界がいつまでも続くようにと――

346　夜が来る。

「と、いうわけで紆余曲折を経て、私達は今も一緒に行動している――」
「誰に説明してるのよ……しかもはしょりすぎ！」
杜若きよみ〈複製身〉、観月マナ、霧島佳乃……三人は、何故かあのままなし崩し的に一緒に行動することになっていた。
「いわゆる三人寄らば、かしましい……という奴ね」
「あなた……キャラクター変わってない？」
きよみは、先程からとんちんかんな台詞を吐いていてはマナを困らせていた。
「あはは、そんな二人には漫才師一号さん、二号さんに任命するよぉ～」
佳乃は佳乃でこの状況を楽しんでいるかのように振舞うものだから……
「……もう、いいわ……勝手に言ってて……」
マナはただ頭を抱えるばかりだった。
先の放送――きよみの名前が入っていた……ここにいるきよみではない。
まったく同姓同名の、別のきよみ――。
それを聞かれたくない所為からなのかもしれない。だから、事の真偽を聞くのはマナにははばかられた。
「そういえばきよみさん。さっき放送で呼び出しがあったよぉ～」
否、だけになった。
「ん……そうね……私には関係ないのよ」
さらりと言ってのけるきよみ。
その瞳の奥に、寂しげな瞳があることをマナは見

逃さなかった。
（とても……そうには見えないわよ！）
まるで目標を見失ってしまったかのような空虚な瞳……。マナはそれ以上その話題を続けることはできなかった。
「で……お姉ちゃんのところ……行くの？」
佳乃が、めずらしく真面目に二人にそう振る。
「そう……ね」
マナにも答えられない。本当に今この時にそこへと行くべきなのだろうか……。
「まあ、なるようになるわよ……たとえどんな宿命が待っていても、結果は自分で動いて出すものよ。その先に待っているのが不幸だけでもね。私はもう、現世にいること自体不幸だから……怖くないけどね」
「そんなことっ……」
言うものじゃない‼　と、マナは続けるつもりだったが、結局何も言うことはできなかった。
きよみの、その表情に何も言わせないだけの迫力を感じたから。
「まあ、そう決め付けたものでもないんだけどね。好きにしたら？　私は暇だし、一人でいるよりは安全ね、行くなら付き合うわよ？」
（……さっきまで私に殺すだの殺されるだの言ってたくせに……なんて勝手な女！）
「何か言った？　おチビちゃん」
「……（怒）」
マナの伝家の宝刀……スネ蹴りと、きよみの悪口と共に繰り出される平手打ちは小一時間にも及んだ……無論、佳乃が止めに入ってようやく収拾がついたことは言うまでもない。
「決めたよ……マナちゃん、お姉ちゃんのところに……私行く」
もちろん精神的にではなく、肉体的に……という意味だ。
決意の瞳。もう涙は溢れていなかった。

「分かったわ……行こう」
マナもまた、強くあるために……そう判断を下した。
（センセイに……笑われたくないもん）
「こっちよ……」
マナが先頭に立って、あたりに気を配りながら歩き出す。
「それと……」
何度もくじけそうになって、それでもマナがマナでいられるのは……聖だけのおかげじゃない。
「ありがとね……」
ボソリと呟く言葉。かすかな、恥じらいで消えてしまいそうな声。
「ふう、これだからおチビは……」
「……（怒）」
その相手は、知って知らずかただ軽く悪態をつく。
今度は揉めなかった、お互いに。
ふと佳乃は思う。涌き出た疑問、知らない夜の記憶——。
（あれぇ……何か忘れてる……そうだ、お手伝いさん一号さん……どこに行っちゃったんだろう……昨日の夜、記憶がなくなったあたりからなんかおかしいなぁ。なんも覚えてないや。……ま、いいか）
思考の混乱の最中、梓はボディーガードメイド一号から格下げされていた……。
日は沈み、また夜が来る。
参加者達の心を震えあがらせる真の闇夜が——。

347 残照

沈みかけた太陽が最後の光を投げかける一室で、二つの別れがあった。
「ホントに行っちゃうの？」
心配そうに初音が声をかける。落ち着いたとはいえ、由依の怪我は深く、未だに血が滲んだままだ。
「うん。ありがとうね。また、会おうね」

由依は涙をにじませて初音の両手を取る。
物騒だけど、と言いながら初音と二人で服からほどいたダイナマイトを半分渡す。
「きっと、絶対、会おうね！」
二人は笑顔でお別れした。
互いにダイナマイトを持った手を、大きく振ってお別れした。

「さっさと、行きなさいよ」
憮然とした表情で七瀬が声をかける。目覚めたとはいえ、二人の目は充血していて、頬は盛大に腫れたままだ。
「ふん。——言われないでも、出て行くわよ」
晴香は目を怒らせて七瀬を睨む。喧嘩売ってんの!?　と言いながら「しっしっ」とする七瀬の手をはたく。
「次はきっと、絶対、勝つわよ！」
二人は火花を散らして別れた。

互いの鉄パイプと刀を、ぎらりと夕日に輝かせて。

——情況を整理しよう。
まず晴香と七瀬が壮絶なダブルＫＯを演じた後、二人が目を覚ます前に浩平が高熱を出した。
体調不良のところに大暴れしたためか、純粋に怪我のためなのかは不明である。次に耕一だが、これまた鬼の力の発動による反動で元気がない。
その後目覚めた二人を加え、由依と初音を司会に（あまり適任ではなかったが）情報交換することになった。
良祐と、瑞佳の死も語られた。
「良祐のこと、私……全然判らなかったな……」
黒いコートの男。巳間良祐は遠い昔に晴香と別れ、多くの人に悲しみを振り撒いて、そのまま逝ってしまった。
もはや、記憶はあまりに遠かった。自然と涙が流れたが、それほど長い間ではなかった——と思う。

七瀬だけはその涙を不満そうに見ていたが、それでも何も言わなかった。
すん、と晴香が鼻を鳴らし、夕日を背に部屋の隅まで影を流し立ち上がる。
「ごめん」
それは話を中断させたことに対してなのか、それとも七瀬や、ここに居ない浩平、もしくは瑞佳に対してなのか。
「もう、泣かないから」
ひょっとしたら、良祐に対してなのか。それは誰にも判らなかったが、そう一言呟いて自らの情況を話しはじめる。
過去。出会い。放送。そこで耕一が意見を挟んだ。
「君らは、あの高槻から特に恨みを買ってるのか？それとも奴を怯えさせる何かがあるのか？」
少し考えて、晴香は答える。
「良祐や、由依は……巻き添えなんだと思うけど。他のみんなは、たぶん両方ね」
不可視の力、高槻との因縁、それらの概略を説明する。続けて管理者達を襲撃した事を、仲間が捕えられた事を――殺しの契約についても――話した。
「なんだか、まるで信用ならないじゃない」
高槻の性格を知り、七瀬は呆れたように言う。
「そうだ、それなら葉子さんとやらを追った郁未ちゃんと合流して、反抗したほうがマシなんじゃないのか？　もし二人が合流していれば、既に攻め込んでいる可能性すら出てくるとは思わないか？」
ベッドで転がりながら、耕一が後を引き継ぐ。かなりだるいのだろう、動きが緩慢である。
「それに人質作戦を取るなら、最初からそうすればよかったんだ。ゲームが開始されてから、参加者を捕らえなおして人質にする必要があるか？　例えば初音ちゃんを人質にして開始すれば、柏木家のみんなは今ごろ必死に戦っていると思う。――何か、変だと思うな」
沈んだ表情で思考をめぐらせている晴香に、由依

が訴えかける。
「郁未さんを、探そう?」
これで決まった。晴香は由依と共に郁未を追う事に決めたのである。

348　闇色の再会

夜がくる。闇が、落ちる。
口元を笑みのカタチに歪め、冷笑じみた表情が篠塚弥生の顔に貼り付いていた。
あと、七人。
それで、あの二人が生き残れるなら……。
森を徘徊しながら、弥生は利き手に掴んだ機関銃のグリップの感触を確かめる。
血にまみれ、震える手で。
人を殺すことは最も恐るべき禁忌だ。
それは、法律で決まっているからだけではない。
それを、弥生の腕の震えが教えていた。
もう、三人も殺してしまった……。
そう……この、手で。
散弾銃で殺し、鈍器で殺し、拳銃で殺した。
気が付けば、震えは全身に及んでいた。
血が、あんなにも赤黒く、そして生臭いものとは知らなかった。
青年の頭を捉えた、あの瞬間の腕にくる重力。
靴の踵で致命傷を与えた、あの、感触。
銃器を撃つ反動。そして、胸元に広がる、血。
いくら冷静なキルマシーンを装っても、所詮は人の子……。
じりじりと、恐怖が弥生の腕に、胸に、そしてその脳に伝わる。
これが、禁忌を犯した者の、心理。
誰に責められるでもないというのに、酷い罪悪感が脳漿に居座っている。
こんなことでは……いけない。
いくら理性的に、物を理解しようとしても、頭の

中には、自分が殺した少女の、あの最期の顔がちらつく。
あんなにも悲しげな表情は知らない。見たことがなかった。
名も知らぬ少女の死に際の一言も、胸に刺さったままだ。
あの二人を守るため。
そんなのは言い訳でしかなかった。
理由ではない。人を殺してしまった今、それは意味を成さない。どんな理由を付けても、それが切実で在れば在るほど、それは言い訳にしかならないのだ。
違う可能性を模索しても意味がないことはわかっていた。わかっていたが、考えずにはいられなかった。
もし、この奸計に自分が気付いていれば。
もし、一番に二人を見つけられれば。
……今に、もしも、なんて言葉に意味がないことは、弥生自身が一番、理解していた。
もし、私が、人を殺さずにいられたなら。
もし、最初から人を殺すことなく、二人を守ることができたなら。
がさり、と物音がした。
はっと息を呑んで、弥生はとめどない思考を振り払う。
音の距離は、それほど近くも遠くもない。
すっかり帳の降りた闇に、目を凝らす。
右目が、ズキリ、とそれを非難するように痛んだ。
――また、殺すのか。
そう、問いただすかのように。
人影の数は二つ。
闇に慣れたとは言え、距離がありすぎる。相手の顔は判別がつかない。
片目に傷を負っていなければ、或いは見えたかもしれない。舌打ちを堪え、弥生はその二つの影を見極めんと、距離を感づかれない様に縮める。

「……っ！」
弥生が見た、二つの影は、彼女が必死で守り抜こうと、そう決めた二人――由綺と冬弥のものだった。
「由綺さん！」
堪らず、声をかけた。森の静寂が、一瞬ビリ、と震え、そして前以上の静寂が三人を包む。
「弥生さん……！」
少しばかりの沈黙のあと、由綺が笑った。泣きそうな、顔で。弥生は、手にしていた武器を全てその場に放り、由綺を抱きしめた。
「く、くるしいよ……弥生さん……」
苦笑いを浮かべても尚、嬉しそうに声を上げる。
喜ばしき再会。
ここが、死を与える島でなければ、そうだったのかもしれない。
「お二人とも、よく……無事で」
頬が熱い、そう感じたときに、ようやっと自分が泣いているのだと、弥生は気が付いた。
「弥生さんも……よかった。ね？　冬弥くん？」
「ああ……」
冬弥だけがその場にそぐわない、招かれざる客のようにただ、萎縮していた。

349　宵闇病

「……何のためにこのゲームを企画したかって？」
長瀬源一郎がそう訊ねると、長瀬源之助は苦笑して、
「儂に意図はないよ」
遥かな高みの雲の上で、二人はそんな風に語っている。
七瀬彰が推測したことの半分は正しかった。
このゲームの表の企画者たる長瀬一族のうち、長瀬源之助、長瀬源一郎、長瀬源四郎、そして、フランク長瀬。四人が上空で観察していた。源五郎と源

三郎の二人が何処にいるかは知れぬ。
レーダーに映らない不思議な構造の飛行船の中、上空数千メートルの高さから、高性能なカメラを使用して彼らは観察している。
彼らが監視しているのは、しかし――長瀬祐介と七瀬彰のふたりだけである。腹の中に爆弾が埋め込まれていない、長瀬一族の末裔たるふたりを。

何故このゲームが企画されたかは、長瀬一族の誰も実は知らぬ。そこに働く空気のような意図を汲み取れぬまま、流されるままに長瀬一族は殺人教唆を行う事になる。彼らに罪悪感が生まれたのかは判らぬ。彼らはまともな人間であるのだからきっと罪悪感は強く働いているのだろうが、否定できない強制力がそれ以上に大きかった。
心根はどうであれ、彼らはこの殺人企画を遂行しないわけにはゆかなかった。彼らは真っ当な人間である筈なのに、こうした罪悪を犯さなければならないという運命の因に巻き込まれた。だから、本来ならば彼らに罪はない。しかし、ことが終われば、当然のことだが、彼らは法に裁かれなければならない。彼らは不運である。

ここで、一族全員が必ずしも意図をまるごと飲み込んだわけではないことを記しておこう。この飛行船自体がその証拠である。長瀬一族の若者たるふたりを監視するためのこの飛行船が、強制力に反する証拠なのだ。

セバスチャンこと長瀬源四郎に、長瀬源一郎とフランク長瀬の二人が談判に来た。願いは一つ。
自分たちの甥をこの馬鹿げた戦に放り込まないでくれ。
懇願は却下された。長瀬祐介も七瀬彰もこの戦いの部分となる事を確と定められたもの。却下した長瀬源之助とてふたりが可愛くないわけがないのだ。

可愛い孫なのだ。それでも強制力はそれを許さなかった。
だが、そう言ってすごすごと引き下がるわけにはいかぬ。可愛い甥をみすみす死地に送るような事など出来ぬのだ。強制力に逆らおうとする意思が、長瀬一族の中に生まれる。なんとかしてふたりを死地から遠ざけたい。強制力に肉親の情が逆らう。
逆らった結果、妥協案が出された。
そのふたりをこの企画から除外するわけにはいかないが、せめてもの救済策として、参加者全員に埋め込まれる筈の体内爆弾を例外的に外そう。
彼らの死ぬ確率が少しでも下がった訳ではない。最高でもどちらかひとりしか生き残れないし、恐らくふたりともが死ぬ確率が一番高いであろう。だが、妥協が心に生まれた瞬間、諦めが生まれた瞬間、強制力は彼らの心に、可愛い甥を殺す事を認めさせてしまった。

観察者としての仕事を彼らは未だ一度たりとも果たしていない。祐介も彰もまだ、何かをしでかそうとはしていない。
――しかし。
例えばふたりが何かを――自分たちへの反逆をしようとしたとき、自分たちは何をするのだろうか。
強制力は告げる。その時は彼らを殺せ。

高槻の定期報告を、通信機越しに聞く。ゲームは滞りなく進んでいるようだった。愚かで卑屈な男であるが、悪知恵が働く男だ、と苦笑せざるを得ない。自分たち長瀬一族に頭が上がらぬようではあるが、何を考えているかも知れない。
――長瀬一族は、高槻の所属する集団「FARGO」の上位団体であった。だから高槻は彼らに頭が上がらぬ。だが、長瀬一族とて「意図」に反する事は出来ぬのだから、支配されているという点に於いて、彼らは同じだった。結局長瀬一族に出来ること

もまた、人が死んでいくのを見ながら、
――甥達が死なぬ事を祈りながら、
――観察を続ける事だけなのだから。

彼らに意図を課したのは誰か？
問うまでもない、
――余だ。

350 熊狩りビト

「……さて、これからどうするよ？」
相沢祐一（一番）と椎名繭（四十六番）の二人が去り、がらん、とした居間にどっしりと腰を下ろして、北川潤（二十九番）はパートナー、宮内レミィ（九十四番）に語りかける。
当面の目的なら、無いことも無い。目の前に鎮座おわしているこのCDだ。
天から降って来たこのノートパソコンと、そのドライブに挿入されていたCD―ROM。
実際問題、この他にもCDが存在するとして（それはほぼ確定事項ではあるのだが）、誰が持っているのか、あと何枚存在しているのか、どうやって探せばいいか、といった肝心な事に関しては皆目検討がつかない。
「まさか、こればっかりは道すがらあった人に片っ端から聞いてみる、というわけにもいかんしなあ」
そう北川は呟くと、天を仰ぎ考える。レミィも口を挟まない。
時計の秒針の音と、どこか遠くで虫の鳴く声だけが、薄暗い居間に静かに響く。
そうして、暫しの沈黙の後、
「……よし！」
と、北川はその膝をぽん、と叩き、レミィの方を見た。
「何か思いツイタの？」
期待感溢れるレミィのその声に、北川はそれに負

けないくらいの清々しい笑顔で、
「何も思いつかん！」
と、これまた爽やかに言い切った。

……そして、再び沈黙。
眠気と格闘しつつも、北川の頭脳はフル回転する。
朝になったら動く。これは決定事項。男が一度決めたことを曲げるのはいかん、と北川は考える。
第一ここに留まって知り得る情報は死人の名前くらいのもの。そりゃあ、こうやって隠れていれば多少は延命効果もあるだろうが、それだって限界はある。
自分たちは、動かなければならない。
問題は、何処に動くか。
当てもなく飛び出すのは、言うまでも無く危険。
こっちには武器がない。いざとなったらこのパソコンでもぶん投げてやろうか、とも思ったが、そもそもＣＤを探しているという目的がある以上、そんなことをしたら本末転倒だ。
……やはり、知り合いづてに情報を仕入れるしかないか。
この状況下ではそれすらも危険かもしれないが、まあ、全くの初対面の相手に聞いて回るよりかは、遥かに安全だろう。
少なくとも、無言でいきなり銃を向けられてズドン、という事は、無い筈だ……多分。
自分の知り合いで今現在生き残っているのは、誰で何人居るかをリストアップする。
まず思い浮かぶのはつい先ほどまでここに居た相沢祐一（と、椎名繭）。だが、二人は情報を持っていなかった。除外。
美坂は……死んだ。妹も、一緒に……だろうか？
……兎も角二人とも、もうこの世にはいない。
住井もだ。あいつの敵もとってやりたいな、と思った。
（……おっと）

考えが脇に逸れた。悪い癖だ。とりあえずは、目の前の問題を解決しなくてはいけないのに。
先ほどの放送までで名前を呼ばれなかった知り合い。まず水瀬さん。それと……確かそのママさんも生き残っていたはず。
（あとは……）
あとは、居ない。これだけ。
参加者がまだおよそ半分残っている状態で、これだけ。なかなかに絶望的な数字である。思わず頭を抱えたくなる。
（あ）
そういえば、レミィの方は、何人知り合いが生き残っているのだろうか？
少なくとも、自分より少ないということはないのではないだろうか？
聞いてみようか。
窓の外に視線を巡らすレミィに、声をかける。
「レミィ」
「ン？」
レミィが自分に向けられた声に、敏感に反応し、振り向く。
「あのさ」
そこまで口をついて出て、あっ、と慌てて北川はその後の言葉を飲み込む。
「あー、いや、なんでもない」
「ソウナノ？」
レミィはあまり気にした素振りもみせず、また窓の外に視線を向ける。
危なかった。
俺はなんてデリカシーのない男だろうか、そう北川は思った。そして自分を恥じた。
いくらなんでも、面と向かって『君の知り合い、あと何人生き残ってる？』なんて言う奴があるか、この馬鹿。
（まあ、きっと、何とかなるさ……）
これまでも何とかなった。だからこの後も何とか

なる。ならなきゃ……困る。
北川は必死で、自分にそう言い聞かせた。
(……でもなあ)
やはり残り人数に対して、知り合いが二人（＋二人）というのは、いささか不安である。
(せめて、あと一人居ればなあ……あ？)
その時、北川は頭の片隅に何か引っかかる物を感じた。
だが、それが何なのかまでは思い至らない。
(何だよ、ちくしょう)
思い出せそうで思い出せない感覚に、何故かやたらと焦ってしまい、北川は落ち着きなく部屋を見回す。
そして、本当に偶然だが、思い出すに至るきっかけを持った物が、この部屋の中にはあった。
「あ」
熊の剥製が部屋の壁から頭だけ、にゅっと伸びていたのである。
その熊の姿に、ある一人の女性……いや、漢の姿が重なる。
「ああーーーーッ！」
突然大声を張り上げた北川にぎょっとして、レミィが恐る恐る、といった感じで訪ねる。
「ど……どしたノ、ジュン？」
「あ、いや」
慌てて取り繕い、北川はそれでもこみ上げる笑いを抑えきれない。
そうだ……そうだそうだ、彼女がいたじゃないか！
熊をも素手で張り倒せそうな力強さを持った、あの……！
……ほぼ同時刻。
「べぇっくしょい！　……風邪かしら？」
鼻をすすりながら、七瀬留美（六十九番）が呟く。
「お、なんだなんだ七瀬、漢らしいクシャミだな」

一瞬遅れて飛んでくるのは、折原浩平（十四番）のいつもの軽口。
「うるさいわボケェ！」
そして、いつもの鉄拳と、いつもの絶叫が、夜空に響き渡った。

351 御堂もビビる！ 詠美ちゃん様は強いんだぞ！

男は森を徘徊していた。
彼――（八十九番）御堂はこれ以上他の参加者との接触は避けたかった。坂神蝉丸の他にも注意すべき敵がいることを知ったためでもある。
あの川で見かけた女……。
岩切、安宅を葬った奴……。
もう一つ、足手まといを作りたくないという理由もあった。
『あのガキ……あゆとか言っていたな……まだ死んでねぇよな』
しかし、最大の理由はあの放送……坂神の連れの少女の演説であった。
御堂はいかなることがあろうとも他の参加者の命は奪わない――敵はあくまでも主催者。
しばらく進むと、何者かの気配がした。
『……近いな、この気配……女か？』
御堂はすぐさま身を翻し、木の幹の影に隠れた。
間もなく、その場に現れたのは大庭詠美（十一番）であった。
彼女は御堂に気付く気配は無く、本来なら彼女はこのまま通り過ぎる……はずだった。
『ちっ、面倒な事になりやがった、何事もなくこのままやり過ごせれば――』
と突然、彼の頭上の獣達が暴れ出した。
「ぴこっ！　ぴこぴこ！」
「にゃにゃ！　な〜う〜」
『こっ、こらぁ！　暴れるな！　痛てっ！』

「誰かいるの⁉」
慌てて二匹を取り押さえるが、時既に遅し。詠美に勘付かれてしまった。
「ねぇ？　誰かいるの？」
「……」
御堂はこのまま逃げることを考えた。相手に敵意が無ければ、追撃は免れる……そう考えたからである。
「いるんだったら、武器を捨てておとなしくトーコーしなさい！　そうすれば命だけは助けてあげるわ！」
『投降……捕虜になれということか……しかし、奴の自信、相当なものだな……一体武器は――』
「早く出てこないとこの『ムーンライトマジカルステージストライクレーザービームライフル』が、あんたを木ごとふっとばすわよっ！」
『な、何ィ⁉』
御堂は驚愕した。それほどまでに強力（そう）な兵器が支給されていたとは……。
そして己のクジ運の無さを右腕の中の猫を見ながら絶望した。
『木を盾にしたとしても、俺の銃では分が悪すぎる……ちくしょう、こんな時にっ！』
御堂はあっさりと詠美のハッタリを信じ込み、戦意を喪失した。
彼は、腰に差してあったデザートイーグルを女の足元に放り投げ、投降した。

352　月明かりの下、赤い女神

（問題はあの男よね……まだいるのかしら……）
マナは歩きながらあの聖と対峙した男のことを思う。
藤田浩之（七十七番）。
マナはその名前は知らないが、顔は覚えていた。
聖に近づけば近づくほど、あの男の狂気の表情を思い浮かべ、萎縮する。

「おチビちゃん、夜が怖いの？」
「違うわよっ！」
時折、聖の事を思い出しているのか、言葉を発さなくなった佳乃を見やる。
先程渡した聖の形見――まだ開けられたことのないバッグを胸に抱いて、無表情で歩く。
「佳乃ちゃん……大丈夫？」
「……えっ？　も、もちろんだよぉ〜」
ふと我に返り、いつもどおりの人懐っこい笑顔。
先刻からこれの繰り返し。
（強がってるけど……まいってるのかな……無理ないよね……）
「ガキのくせにお姉さんぶるのは似合わないわよ」
「な、なんですってっ……！」
だが、この夜の雰囲気に、小競り合いをしようという気にはどうしてもならなかった。
「……で……だ………だよ？」
佳乃の声が響く。
「ねぇ、あの娘、なんか変じゃない？」
マナの耳元できよみの声。
「……」
佳乃は、恍惚とした表情であらぬ方向を向いては独り言を喋るようになっていた。
何を言っているのか分からない。
先程の佳乃とはうってかわって、あきらかに様子がおかしい。
「佳乃さん、どうかしたの？」
「……えっ、な、なにが？」
瞬間、佳乃の瞳に光が宿る。
「疲れてるの？」
「ぜ、全然大丈夫だよ！」
「そう……ならいいけど……」
きよみは訝しむが、本人の言うことを信じることにして、先を急ぐ。
（だ、大丈夫かな……）
マナもまた、不安に思っていた。

「たと……だ……よ……から」
だんだんとその間隔が短くなっていく――
きよみとマナは、背筋が凍るような悪寒を感じていた。
それは得体のしれない恐怖――。
「佳乃ちゃん！」
マナが耐え切れずに声を張り上げたとき……
ゴッ……！
何か、鈍器で柔らかいものを叩いた音が響いた。
「えっ……？」
目の前で何が行われているのか分からない……。
ゆっくりと崩れ落ちるきよみさん……闇夜に飛び散る何かの液体。
……そして、無表情にこっちを凝視する佳乃ちゃん。
「な……に……？」
土の付着した石からなんか……水がしたたってるよ……どうしてそんなものもってるの？　かのちゃん……
ゆっくりとこっちへ近づいてくる……。
どうしたの？　きよみさんは？　なんで倒れてるの？　もしかして敵の襲撃？　霧島センセイを倒したあの男でもいたの？
ゆっくりと佳乃ちゃんが私の目の前で両腕を振り上げて……
「なにしてんのよっ！」
え？
体が宙に浮かぶ感覚――

きよみ……さん？
佳乃ちゃんの姿が遠ざかる……
ゆっくりと……こっちを見てる
きよみさん、
佳乃ちゃん置いて行っちゃダメだよ……
あっ……良かった、
追っかけて来てくれてる……
でも石を持って走ったら危ないよ……

「はあ、はあ……一体なんなのっ！」
「きよみ……さん？」
何故かきよみさんに抱えられて。
「なにか……出てるよ？」
きよみさんの頭から黒い水が出てる……。
「しっかりしなさいよ！　このチビ！」
え？　私？
「はあ……はあ……火事場の馬鹿力もここまでかしら？」

開けた場所、森を抜けた場所……。
森を抜けて月明かりにきよみさんが照らし出されて……憎らしいけど、ちょっと綺麗だなって、思った。女神様みたい。
だけど、その女神様は、月明かりで初めてはっきり見えたその女性は――
赤かった。
「きよ……みさん？　きよみさん！」
「騒ぐなチビ！　……それよりこの状況、絶体絶命よ……」
後ろは崖。ほぼ直角で、とてもじゃないが降りられたものではない。落ちても死なないかもしれないが、無事ではすまない。
「……佳乃……ちゃん？」
「……ふふ……」
虚ろな目をした佳乃が、ゆっくりと追い詰めてくる。
「……武器貸しなさい……チビちゃん」

「えっ？　……ダメだよ！」
だが、静止の声も振りきってきよみが武器を奪い取る。
奪い取った獲物はオートボウガン。聖を殺害した浩之の武器だ。
「来たら……撃ち殺す……この距離ではずさないわよ……」
ゆっくりと狙いを定める。目標は佳乃の体の中心より少し左上——心臓。
手が震える。狙いが正確に定まらない。
頭から流れる血が、命のやり取りをする恐怖がきよみの体をそう反応させる。
どくどくと、脈打つように流れでる血の感覚だけが妙にリアルに感じられた。
「……わた、しが……やるの……」
黄色いバンダナの巻かれた手に、血の付着した石。
「そんな……どうして……」
きよみの横で、佳乃の姿を呆然と見つめる。

「……し……んで……」
そして佳乃は躊躇無く歩み寄り……
「こ、こないでっ！」
きよみがマナを体で弾き飛ばし……引き金をひいた！
ばしゅっ！
鮮血が舞う……佳乃の左腕に、突き刺さるボウガンの矢。
マナを弾き飛ばした際に、狙いがそれた……その結果だった。
佳乃はそれをものともせずにきよみへと石を打ちつけた。
ゴッ……！
再度、鈍い音がする……
「あう……」
きよみさんが、スローモーションのように……崖下へ吸い込まれて行く……。

「き……きよみさんっ!!」
ただ、無我夢中だった。
崖を見ていた佳乃ちゃんを弾き飛ばす。
佳乃ちゃんはそのまま木に打ちつけられて倒れる。
センセイの妹、今は構っていられない。
手荷物をもって崖下への道を探す。
センセイの応急処置セットが入ってるから……。
すぐに手当てすれば助かる！
下り坂を見つけてはその方向へ走る。
「きよみさん……きよみさん！」
崖下で、きよみさんがこっちを見ていた……。
「……お……ちびちゃん……」
「きよみさん！」
駆け寄る。
傷がひどい……両足が折れて骨が見えてる……。
頭からの出血もひどい……
「いまっ、助けるから！」
助かるから！　すぐに……だって私霧島センセイの弟子なんだから!!
「もう……いいから……」
「聞こえない！　はやく手当てしなきゃっ!!」
ザッ……ザッ……！
「誰？　……マナちゃん？」
その時女の人の声。
いつもなら大好きで……すぐにでも駆けよって甘えたいお姉さん。
その横に随分と傷ついた長髪の女の人と、そこから後ろ、少し離れた場所に、藤井さんがいた……。

弥生さんは、もう、由綺から離れないだろう……。
だから、俺は由綺から離れる。
俺に、誰も近づかないように、もう、誰も大事な人を傷つけないように。
だけど、俺達はまた出会ってしまった。
非日常の中の一ページで。

「……マナちゃん……よかった、無事だったの？」
「お……姉ちゃん……」
由綺が駆け寄ろうとした時、弥生さんが由綺を止める。
「お知り合い……ですか？」
「うん、あの子はマナちゃん、私の従姉妹なの」
「そうですか……もう一人の方は？」
「知らない」
「そうですか」
あくまで機械的に、事務的にそれだけを済ませる。
本当にこの人には人間の血が流れているのだろうか……？
出会った頃ならそう思っていたんだろう。
でも、本当は誰よりも心に熱い想いを秘めていて……。
微かな心の揺らぎが、俺には伝わった。一度だけ、弥生さんの足が震える。

「お姉ちゃん……」
呆然と、マナちゃん。
駆け寄ってあげたい……だけど、俺は弱くて……。
「もう一人の方……とどめさしたほうがいいよね？」
「……由綺さんがそう……おっしゃるのならば……」
「お姉ちゃん……!?」
弥生さんが思案に暮れて、やっと出した答え。
その言葉に怯えるマナちゃん。
由綺だけがいつも通りで、それを見ているだけの俺が、どうしようもなく滑稽で……。
「こ、こないで……」
その女の人を抱きしめるようにマナちゃん。
その倒れている女の人はもう助からないのだろう。
この島であれだけの傷を負ってしまえば……。
それでもマナちゃんはその人を守るようにして、由綺を、弥生さんを見る。

「どいて……いただけませんか？」
諭すように弥生さん。
「マナちゃん、少しだけどいていて？　その後一緒にいきましょ？」
囁きかけるように由綺。
そして、それを見ているだけの俺。
「……」
ただ、呆然とそれを見ているだけの、俺とマナちゃん。
可愛い教え子、今の彼女の心を考えただけで、胸が張り裂ける……。
（由綺……あの頃に戻りたいよ……）
「俺が……やるよ」
意を決して警棒を握り締める。
「冬弥君!?」
「……いえ、私がやります。私がやらなければならないんです」
弥生さんのその静止の言葉も意味も聞かず、俺は二人に歩み寄った。
「ふじ、い……さん……」
絶望の瞳を俺に向ける。胸が痛む——。
ゆっくりと女の人の頭上に移動する。
ちょうど、由綺達から背中を向ける位置に。
「……最低ね」
朱に染まった女が、紡ぎ出した言葉。
「ああ、だから俺は、こんな方法しか取れないんだ……」
身をかがめる。なるべく不自然でないようにして。
（マナちゃん……逃げろ……その娘も俺も由綺も置いて…早く……）
「ふじい……さん？」
かすれそうな声。また胸が切なく締まる。
横の女も一度面食らったような顔をしたが、不敵な笑顔で……。
（それがいいわ、ベストの選択ね……）
死の淵で苦しんでいる女性でさえ……。

俺は、自分の弱さを呪った。
「できない……できないよっ!!」
マナちゃんの、絶叫、心の叫び。
「マナちゃん……マナちゃんまで冬弥君をたぶらかすの……？　冬弥君……どいて……そこをどいて」
由綺の声が遠くで響く。
だけど、足音がゆっくりと近づいてきて……。
「……由綺……」
「ね？」
横の弥生さんは沈痛な面持ちでそれを見ていた。
ああ、弥生さんも気づいたろうな……由綺の、今の心に。
「さあ、どいて」
チャキッ！
ニードルガンの音。すぐ後ろで聞こえた。
由綺はまた、俺のせいで手を汚すのか——。
「なんて……情けないチビなの……あなたもあなたよ……」
血と、絶叫が飛び散る。
「早く連れてって！　このノロマッ!!」
瀕死だったはずの女性が、手で体を押し上げるように動いて由綺に飛びつく。
「あっ!!」
二人、地面に体を打ちつけて転がる。血が、飛び散る。
「……!!」
その声に背中を強く押されて、気がついたらマナちゃんを抱えて走り出していた。
「き、きよみさ〜ん!!」
腕の中で叫ぶマナちゃんの声より、女——きよみの体に針の刺さる音が生々しく、大きく聞こえた。
その音も少しずつ遠くなって……
そして、マグナムの銃声。
その音の余韻が消える頃には、三人の姿は見えなくなっていた。

「どうして……どうして……弥生さん、どうして冬弥君……」
由綺のすすり泣く声を聞きながら、押し当てたマグナムを女から放す。
「由綺さん、藤井さんを探しましょう……話は……それからです」
「うん。だけど……マナちゃんは許せない……許せないよ……」
「……そう、ですか……」
弥生はかすかに涌き出た迷いをかき消し、由綺の頭を撫でる。
今の弥生にとって冬弥と由綺はすべてなのだ。
たとえ、それが間違った行動であったとしても。
奪った命はもう戻らない。
死んだ者達の為にも、弥生達は生きて帰らねばならない。
（それこそ詭弁ね……）
そう自嘲し、倒れている女の体を綺麗に横たえてやる。
もう、後戻りはできないのだから……
そして、朱に染まっていた由綺を優しく抱きしめてやった。

十六番　杜若きよみ〈複製身〉死亡

【残り48人】

353　そうだ学校へ行こう！

ごとん。
箪笥を寝室の扉に押し付けて、カモフラージュする。
「ちゃんと寝てんのよー。喧嘩しちゃ駄目よ！」
「行ってくるねー」
晴香、由依と別れてまもなく耕一、浩平の症状は更に悪化した。
男二人は反対したが、寝ていて治るようなもので

もないと考えた七瀬と初音は、薬品調達に出かけることを押し切ったのである。
消毒薬、包帯は発見できたのだが内服薬が……必要なのは解熱剤、可能なら抗生剤も欲しいのだが……発見できなかった。
屋内で発見した、詳細な地図を見ながら病院、診療所を探すが、見当たらない。なんて不便な島なんだろうと思いつつ、仕方なく遠くを探そうとしたとき。
近場に……学校を発見した。そうだ保健室がある。先行者の武器を残し、初音は浩平の銃、七瀬は鉄パイプと散弾銃を持つ。
もはや太陽は、ほとんど沈もうとしていた。
それが、最後に見る太陽になるかもしれないけれど。
それでも、構わない。
そうだ学校へ行こう！

真っ赤な空に、奇妙なシルエットが三つ。
二人のウェイトレスさんと、チビッコが一人。
助さん角さん宜しく、ウェイトレスを両脇に従えたチビッコ……あゆが叫ぶ。
「はやくはやくっ！」
一人だけ小走りなのだが、ウェイトレスたちは早歩きだ。例によって家屋に侵入し、今度は晩御飯を頂戴すべく、内部を漁る怪しい三人組。
「たい焼きだよっ！」
転がり込むように二人の間に、いや事実転がりながら鉄板を手にしたあゆが雪崩れこむ。手にはたい焼き用鉄板。何故こんなものが？
携帯にも便利な上に、朝ぐらいまでは保つだろうと考え、リクエストに応えて餡子を練るべく、鼻歌交じりに火を起こす梓だったが、ふと表情を曇らせる。
火が、つかない。
妙なことに周辺の家屋は全て、ガスが供給されていなかったのだ。改めて確認すると、電気すら通っ

ていない。
「これって、どーいうことかな？　この家、変じゃない？」
残念そうに卵をお手玉しながら、梓が疑問を口にする。
「生活臭、しないものね……」
この島の建物は、おそらくゲームのために設置されたもので、全ての家屋がまともに機能しているわけではないのだろう、と相変わらずお手伝いすら拒否されて、すっかり小さくなっていた千鶴が答えた。
うまい具合に食材はある、しかしガスが無ければ熱量が足りない。たい焼きなんて、絶対無理。
「うぐぅ」
あゆがうなだれる。
憐れに思った梓がふと目をやると、電気の付いた教室が視界に入った。
「……教室？」
「あら本当。電気通ってるのね」
「家庭科室か理科室があれば……」
そうだ学校へ行こう！

354　たい焼きだよっ！

広い調理実習室の片隅で。
「ぱりっとして、ふわっとして、あんこがしっぽまでだよっ！」
梓の周りを、興奮したあゆが転がりまわる。はいはい、と千鶴があゆをあやす。
思った以上の設備が整っていたので、たい焼き用の食材のみを持ってきたことを、少し後悔した梓だったが、いまさら戻るつもりもない。今あるものを、最高に仕上げようと心に決め、たい焼きを焼き始める。
しうーーー。
焼き音と共にたい焼きの皮の、甘く香ばしいにお

いが広がっていく。暴れまわっていたあゆが、ようやく動きを止める。
「しっぽまでだよっ！」
結局、言う事は変わらなかった。

校庭にぽつんと立つ、一人の少女。
なめらかな亜麻色の髪をした、長い長い三つ編みを赤く染めて、迷いと決意を共に立つ少女。
かるくそよぐ風が、甘い香りを運んでくる。しっぽまでだよ、と叫ぶ声が聞こえる。たい焼きだろうか？
「……こんなときまで」
私も、馬鹿ですね、と苦笑して——久しぶりに笑った——校舎を見上げる。
それも、いいかもしれません、と心の中で呟いて。
背負った業と浴びた血潮に似合わぬ、爽やかな微笑みを浮かべながら、茜は歩き始めた。

裏門手前に、二人の少女の影。
動物の尾のような、長いツインテールを垂らした少女と、双葉のように、ぴんと立ったクセ毛が印象的な少女。
「意外と近かったわね」
連続して襲撃を受けたために、少なからず過敏になっていた七瀬が安堵して、初音に話しかける。
「……」
しかし、初音は答えない。なにかを嗅ぎ取るように、鼻をひくつかせているようだ。
「初音ちゃん？　どうしたのよ？」
そう言って初音の顔を覗き込み、同じように鼻をひくつかせる。いい、匂いがする。
「梓……お姉ちゃん？」
たい焼きの美徳をひたすら羅列する、異様に興奮した甲高い雑音の中に、懐かしい声が混じっていた。
日々の食事どきはもちろん、料理を習うたびに感嘆し尊敬していた、あの姉の声。絶賛すると、必ず

照れくさそうに鼻の頭を掻いて、視線を落とす、あの姉の声に間違いない。
「この声、梓お姉ちゃんだよ！」
二人は目を丸くして、希望の光を浴びせた運命に感謝した。
少なくとも、この時点では。

夜闇よりも暗い、教室の中で。
一人の少女が、かたかたと震えていた。
一体何が、できると言うの？
たった一人で、店長さんの仇なんて。
こんな小さな刃物ひとつで、どうしろというの？
物音一つで弾けてしまいそうな、高密度の緊張の中。
なつみは一人、かたかたと震えていた。
不安定な殺意と、圧倒的な恐怖を抱えて。
かたかたと、かたかたと、震えていた。

355　そして一つの決断

冬弥はマナを抱えて走った。ゲームが始まってから冬弥は自覚していなかったが、精神の均衡が崩れてきていた。それでもまだ残っていた理性が、マナを殺させるわけにはいかないと告げていた。
死から遠ざかるためだけに、一心不乱に走る。マナを抱えての無茶な逃走であったが、暫くすると由綺と弥生の姿は見えなくなっていた。それでもまだ何かに追われるように走りつづけ、体力が限界に達するころになって漸くマナをおろし、冬弥自身もマナの隣に腰を下ろした。
「良かった、無事だったんだね、マナちゃん」
「うん。さっきは助けてくれてありがとう」
マナは助けてくれたことに関しては素直にお礼を言った。だが、その後冬弥が何かいろいろと話をしているのを聞くだけで、一向に口を開かなかった。

「どこか怪我をしたの」
普段元気なはずのマナが言葉を発しないという事に気がついた冬弥は、今度はマナの体の心配を始めた。それでもマナの口が開かれる事はなかった。
二人の間に流れる沈黙を拒むかのように普段以上に言葉を発する冬弥であったが、次第に言葉が途切れがちになる。沈黙に絶え切れず何度となく言葉を口にしようとするものの、そのたびに拒否される事を恐れ言葉を発する事の出来ない冬弥。そして長い沈黙の時が訪れる。
「どうしてなの」
長い長い沈黙が破られ、それまで冬弥の言葉に全く反応せずあらぬ方を見ていたマナがぽつりと一言漏らす。
「え……」
言葉の意図もわからずただ呆然とする。立ち尽くし、間が抜けた返事をする冬弥。
「どうして、藤井さんは、由綺お姉ちゃんを助けてくれなかったの」
冬弥の顔を正面から見据えるマナの口調は決して強いものではなかったが、それでもマナのその言葉が、自分を責めたてるように心の片隅に突き刺さり、思わずマナから顔を背ける。
一方のマナは、冬弥に対して怒っているというわけではなかった。ただ、前に一度由綺に襲われたにもかかわらず、それでも心の奥底で冬弥が由綺のことを助けてくれるのではないかと言う淡い期待を抱いていた。それは期待というよりも願望に近いものであった。
そんなマナの想いは、由綺の現状と冬弥の取った行動によって最悪の形で裏切られた。そしてマナの中で何かが音をたてて崩れていった。その中で出たのが先程の言葉であった。
「仕方なかったんだ。俺が由綺に逢ったときにはもうあんなになっちゃってて……俺にはどうしようもなかったから。せめて由綺にこれ以上人を傷つけさ

せないようにする事しか出来なかったんだよ」
言い訳を聞きたい訳ではなかったマナは、尚も言い訳を続けようとする冬弥を制して再び口を開く。
「だから、だから代わりに藤井さんが、由綺お姉ちゃんの変わりに人を傷つけるというの」
「ああ、俺にはそれしか方法が思いつかなかった。もうこれ以上由綺の手が汚れてゆくのを見ていたくはなかったんだ。由綺には綺麗なままでいて欲しかったんだ。そのためになら俺は汚れる事も厭わなかった」
その言葉を聞いて、マナは冬弥の由綺に対する愛情、そして優しさに触れる事が出来たような気がした。そしてそれと同時に——ここに来る以前のマナならば多分わからなかったであろう——冬弥の心の弱さというものを感じ取ってしまっていた。
「そう。それが藤井さんの優しさなんだね。今更だけど私にも分かったような気がするよ……でも、それだったら、どうしてその現状を受け入れてしまったの。なんでその優しさを、由綺お姉ちゃんの壊れた心を治す方向に使ってあげられなかったの」
マナの視界がぼやける。
「殺し合いを命じられて、絶望しか感じられないこんな場所でも、自分を見失わない人はいた。他人を殺めることなく、傷ついた人を手当し続けた人。自分の命を賭けてみんなで協力して脱出しようと訴えた人だっていたのに」
マナの頭の中に、あの衝撃的な放送とその後の爆破音、そして微かに笑いを含んだ聖の顔が浮かぶ。
「なんで、なんで藤井さんは諦めてしまったの」
最後の方は涙声になりながらも、マナは必死になって言葉を紡ぎ出した。
「……」
冬弥は黙ったままであった。いや、何も言えないでいた。
「藤井さんの心も、もう壊れてしまっていたんだね」

「……」
「あたし、こんな気持ちじゃ藤井さんとは一緒にいられないよ。それにあたしまだやることが残っているから、もう行くね」
「マナちゃ……」
「それと、さっきは助けてくれてありがとう」
尊敬した人の死。優しかった従姉妹の豹変。こんな島の中で憎まれ口を叩き合いながらもほんの少しだけ心を通わせた仲間の死。さまざまな挫折を経験し、生きる気力さえ失いかけてはいたが、それでもマナは医者の助手としての使命を思い出し、冬弥の元を去り、聖の遺志を継いでこの島で傷ついた人を助け続けることを、再び心から誓い、幸せだった、そしてもう戻れない過去を振り切った。
冬弥はほんの少し前までかつての教え子が立っていた場所――今は誰も存在しない空間――を見つめ、ただ何かを考えていただけであった。

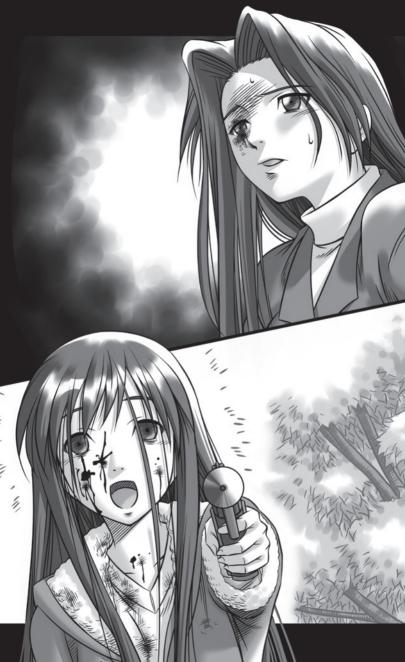
356 インサニティ

パン、と乾いた音が月明かりの下で響いた。
「うん。やっぱりそうだよね。そうだよ」
「……何がですか？」
拍手を打つように両の掌を合わせた由綺が、少し血に染まった衣服を気にする様子も無く、「やっぱり殺しちゃったほうがいいよね」と嬉しそうに微笑んだ。
先程まで泣きじゃくっていた様子は、微塵も感じさせない。
「冬弥くん、わたしがいないと寂しがってないかなあ。きっと寂しがってるよね。マナちゃんってひどいよね。わたしから冬弥くん奪うんだもの。殺すくらいじゃ許せないよそうだ捕まえたらね冬弥くんの目の前で撃っちゃうよわたしそのくらいじゃ駄目かなぁ――」

弥生は整った顔をほんの少しだけ歪め、う、と顔を左手で覆う。右手に構えたオートボウガンが、かたかたと震える。
こんな筈じゃなかった。
私は、由綺さんをスターダムにのしあげるため、叶わなかった自分の夢を、人生を、希望を、その全てを彼女に捧げ――ようとしていた。
そうでなければ、私の人生は無意味になってしまうから。彼、藤井冬弥を由綺さんと添い遂げさせせようとしたのも、全て打算だ。由綺さんの気持ちがどうとか、藤井さんの気持ちがどうであるとか、私の知ったことではなかった。
ただ彼が、由綺さんにとって不可欠な存在であると知ればこそ、二人の仲を取り持とうとしただけだ。
しかし――
「――どこにいったのかなぁ冬弥くんとマナちゃんお姫様だっこされるなんてうらやましいなぁやっぱりわたしあのときコンサートに行かないで冬弥くんといっしょにいるほうがよかったんじゃないかなぁ」
弥生が見つめる由綺の視線が、宙を漂う。それはまるで――
「――ひょっとしたらあのときにでもマナちゃんと会ってたのかなぁそうだとしても仕方ないよねわたし仕事選んだんだもの冬弥くん優しいからそれに甘えちゃって甘えたかったんだもん！」
――狂人のそれだ。
「由綺……さん！」
「え、弥生さん？　どうしたの、怒っちゃいやだよ」
そこにある由綺の顔は、いつもの表情だった。青い月明かりに照らされて、血に塗れるアイドル。右手に構えたニードルガンの銃口は、こうしている間にでも弥生に向けられている。
狙っているわけではないのだろうけど、前後の判断がついていないのは明白だった。
にこりと微笑む口元、愛らしいアーモンドの瞳。

化粧を施すこともなく、整ったベビーフェイスは、まるで母をみつめる子供のように純粋無垢な表情を弥生に向けていた。
「そう思わない？」
「ええ、思います」
由綺に、何も聞かれた覚えはなかった。でも、由綺の考えはわかっていたから、弥生はただ頷いた。
壊れてしまったというのなら、私もそうなのかも知れない。
また一人で呟き出した由綺から視線を逸らすことなく、弥生は言った。
「観月マナを殺しましょう」
「そうだよ。それがいいよね」
由綺はまた、柏手を打つように、パン、と掌を打ちあわせ、嬉々とした表情で笑う。
弥生の中にある由綺の姿は、何も変わっていない。何も。
そう。マナを殺し、冬弥と由綺と共にこの狂った島から出て、私たちは——私たち？——私は——私は？——私——
青い月明かりだけが、何者をも拒まぬかのように、ただ静かに闇を照らし出していた。

357　（無題）

「……たい焼き、美味しそうです」
くぅぅと、お腹の音が鳴る。日常を思い出させる甘い匂い。だが、今の茜には遠い匂いだった。今の彼女から漂ってくるのは血の臭い。
もし、彼女がそれを手に入ようとすれば、トラブルは避けられないだろう。
「……やっぱり、諦めましょう」
そう思って踵を返そうとしたとき、茜は不意にこちらをじっと見ている人影に気付いた。
『匂いに釣られて警戒を怠るとか……最悪です』
「里村、さん？」

「……七瀬さん」
相手は茜の知己であった。と言っても知り合いの知り合いなので、親しい訳ではない。現に彼女は鉄パイプと銃を持って茜を警戒している。
「あ、あのっ！」
茜がどうするべきか思案していると、七瀬の影から顔を出した小さな少女が声を掛けてきた。
「……？」
「たい焼き、食べたいんですか！」
その少女から発せられたのは予想外の問いかけ。
「中に居るの多分私のお姉ちゃんなんです。よかったら、貰えないか聞いてきましょうか？」
「いえ、私は……」
あまりにも無警戒な少女に困惑する茜。返り血で汚れた彼女の姿を見て警戒しないのは異常だろう。よほどのお人好しなのだろうか？　七瀬も困惑しているようだ。茜が判断に迷っていると、
「初音!?　よかった、無事だったんだ！」
建物の中から、ボーイッシュな少女が鉄格子の嵌まった窓にくっつけるようにして顔を出していた。
「梓お姉ちゃん！」
初音と呼ばれた少女が喜びの声を上げる。感動の再会といったところなのだろう。
「千鶴姉もいるよ！」
「ほんと!?　私は耕一お兄ちゃんと一緒だったんだよ！」
再会を喜び合う二人。その間も七瀬は茜をずっと警戒していた。少しして、初音は茜の方をちらりと見てから梓に尋ねる。
「梓お姉ちゃん。たい焼きって余りないかな？　たい焼きを食べたいって人が居るんだけど……」
「大丈夫！　たっぷりあるから腹一杯食べれるよ！」
こうして茜は、なし崩し的に校舎の中へ招かれることになったのである。

……足音がする。

なつみが潜む教室に近づいてくる気配が三人分。
なにやら嬉しそうな話し声もしている。それは、彼女にはもう出せない声色で。それが悔しくて、なつみはドアの影で強くナイフを握りしめた。

358　命、散って

……全く、なにやってんのかしらね、私は。
それにしても、この頃の娘ったら生意気なばかりで、大事なところでしっかり動けないんだから。
おチビちゃん、ちゃんと逃げられたのかしら？　逃げたわよね？
でないと私が虚しすぎる。
しっかり生き延びなさいよ……。
それから、まだ生きているはずの私たちの妹――たしか、月代とかいう名前だったはずだ。
あの娘は、無事生き延びられるだろうか。
仙命樹の影響が少ないから、身体的な優位も少ないけれど、その分、私のように思い悩む必要もない。常軌を逸した回復力と不老性。仙命樹が与える肉体的な利点は、『自分が他人と異質な存在である』という、嫌な悩みも一緒に連れて来る。
けれども、仙命樹の影響が少なければ。そんな悩みに囚われることなく生きていける……。
そのせいか、まっすぐに育っていたあの娘。
……ちょっと生意気だったけど。
彼女には幸せになって欲しい。
蝉丸さん、任せたわよ？
……そして最期に、俊伐さん。
本当は現世で愛されたかったけれど……。
私、あなたが愛したきよみさんのような、みんなに誇れるようなことは何もできなかったけれど。
でも、今そこで失われるかもしれなかった命を長らえさせることだけはできたと思う。

上出来ではなかったけれど、自慢しても良いわよね？
それぐらいのことは、私だってやったんだって。
……それにしても、いざ死ぬとなったらあっさりとしたものね。

杜若きよみの代替として生を受け、見たことも会ったこともないその影を追わなければならなかった、その境遇を呪った。
仙命樹のせいで自由に死ぬこともできないことを悩んだ。
私と同じ役割をになっているくせに、何の悩みもなさそうに暮らしていたあの娘に苛立った。
いくら注いでも報われることのない愛に苦しんだ……。
自分の存在意義に悩みながら日々を過ごす内に、もう五十年。
私は充分に長く生きた。

最後に人助けができて良かった。それで充分。
そういうことにして、先にあの世で待ってるわ、俊伐さん。
こっちに俊伐さんが来るのを、ゆっくりと待つことにするわ……。

……或いは。
或いは、俊伐さんは複製身の私と同じところには来られないかもしれない。
そもそもが、同じ人という生き物ではないんですもの。
そんな身分であなたを愛そうということ自体が間違いだったのかも。
……嫌な考え。
けれど、もしそうならば、私と同じところに来られるのは…。
鳴呼、光が……。
広がって……いく……。

359　たい焼きは復讐の薫り

「兄さんの敵を討つために、やっと手に入れた力。銃火器の前ではちょっと不安だけれど、いざとなればスイッチで刃をとばすこともできる……」
　理奈の右手で光っているのはスペツナズナイフだった。
（刃を飛ばすときには絶対に外すことが許されない。できればもう一つ。何かもう一つ、保険の為の武器を手に入れたい——）
　そんな風に思っていた理奈。
　しかし、武器がそこらに落ちているなどという幸運はなかなかあることではなかった。
「待っててね、兄さん。この武器一つでだって、あいつをもう一度見つけて、そして兄さんの仇を討つから……」
　新しい武器を見つけることができなくても、理奈の決意は鈍らなかった。
　黙々と標的を求めて歩き続ける理奈。
　しかし……。
　更に彷徨うこと数時間。
（最後に食べ物を口にしたのはいつ頃だったたっけ？）
　いつしか理奈はひどい空腹に襲われはじめていた。
しかし、ずっと都会で暮らしてきた理奈に、野山の物を取って食べる勇気はなかった。腹をこわして、逆に体調を崩しかねない。どこからか、食品を手に入れなくてはならなかった。
「腹が減ってはなんとやら、って。昔の人も言ってたけど……」
　そうして歩き回って理奈は、ついに住宅街のはずれにたどり着いたのだった。
「ここになら、何か食べ物があるかもしれない……」
　食べ物を求め、住宅街に踏み入ろうとしていた理

奈のもとへ微かに漂ってくる何かの薫り。
「これは……あんこの匂い？」
たい焼きの臭いは校舎から漏れ出て、住宅街にまで届いていた。
たい焼きは、あまり強い臭いを発しない食べ物ではあったが、空腹の人間は食べ物の臭いに敏感になるものだ。
街の中を歩き出してまもなく、緒方理奈は『それ』を嗅ぎとった。
（今川焼きでも焼いてるのかしら……こんな殺伐とした島で、なんて日常的でのどかな匂いなんだろう……）
自分の置かれた状態がもっとマシなものであったなら、理奈の頬はゆるんでいたことだろう。
この臭いが本物ならばそこに食料がある。それを作り出している人間も。
他の人間との接触は避けたいところだったが、もしかしたらその人物が、兄の仇であるかもしれない。
そうでなくても、警戒は充分にしなくてはならないが……。
「もう、どれだけの人が正気なのか分からないんだからね……」
右手のスペツナズナイフを後ろ手に握り直し、正面から見られてもすぐにはその所在が分からないようにして、理奈は慎重に歩き出した。
その、たい焼きの臭いに向かって。
「でも、こんな状況でたい焼きを作るような人とならば争いにはならないと、そう思いたい……」
臭いの発生源付近には、彼女が兄の敵だと信じている里村茜、その人がいる。
そのことを無論、理奈は知らない。

360　別れの引き金

右手には小銃を持って、左手にはナイフを持って。

琴音はただ、走った。目的は一つ、浩之に会うために。あかりに会うために。
信じられる人だから。
だから、二人の姿を見つけた瞬間。
「藤田さん！　あかりさん！」
喜びの声を上げて、走り寄った。
「琴音ちゃん！　無事だったか！」
突然の声に戸惑いつつもそれが琴音だとわかり、浩之の顔から笑みがこぼれた。あかりも、その横で驚きながらも手を振っていた。
琴音は二人の前で立ち止まり、一息つく。
「会えてよかったです。怖かった、です……」
そう言い、泣き出した。
「よしよし。よく頑張ったな」
浩之はそっと琴音を抱き寄せた。
あかりも優しく見守っている。
そのまま時間がすぎ、やがて琴音が口を開く。
「何人にも、裏切られました……私、また人間不信になっちゃいました……でも、私わかったんです」
――死ンジャエバ誰モ裏切ラナイッテ
――ミンナ友達デイラレルッテ
――私強クナレタンデスヨ
――ヒロユキサンアカリサン褒メテクレマスヨネ？
声は、どこか遠い、遠い世界から聞こえた気がした。
それはある意味、間違いではなかった。
凍り付いた表情のまま、浩之は悟った。
この子は、今、別の世界にいるのだと。
何も見えない、何も聴こえない。
そんな間違った世界に。
「琴音ちゃん……何を、言ってるの？」

信じられないものを見たような、そんなぎこちない笑みを浮かべ、あかりは訊いた。
おそらくあかりも理解しているのだろう。
だが、理性がそれを認めないだけなのだ。
この少女は、壊れている。
「何を言ってるんですか？　私、間違ったこと言ってませんよね？」
琴音は不思議そうな表情であかりを見た。
その視線は、自らの言葉に含まれた『意味』がどういうものなのか、まるでわかっていないようだった。極限の混乱状態の中で、自分の間違った思考が全ての中心だった。
「……琴音ちゃん、それは……違うよ」
ようやく、浩之が声を絞り出す。
「死んだら裏切らないんじゃない……裏切れないんだ……それは強さじゃない、弱さだよ。こんな状況じゃあ……みんな狂ってしまうけど、それでも信じることが強さなんだ」

そんな強さの先に何があるのかは知らないけど、と、心の中で言う。
綺麗事を言っているのはわかっていたが、自分のしてしまった罪と償いを考え、そして、たとえ先に何があろうと、綺麗に人間らしく生きたいと。
それが浩之の出した答えだった。
もっとも、それより優先されることとして、愛する人を守ることがあったが。
「え……何を言ってるんですか？　浩之さんまで、何を言ってるんですか⁉」
浩之の言葉は琴音に届かなかった。当然だ、考えに考えて出した琴音の結論を、真っ向から否定する言葉だったからだ。
自分の否定——それは『裏切り』だった。少なくとも、今の琴音にとっては。
浩之は、裏切ったのだ——
左手のナイフで浩之の腹を刺し、そのまま間をとる。

浩之の体が崩れ落ちた。
「浩之ちゃん！」
あかりが叫び、浩之にかけよった。
「信じていたのに……藤田さんまで裏切るんですね？」
そんな二人に、琴音は銃を向けた。
「もういいです、死んで下さい。死んだら、裏切りませんよね？　ずっとずっと、友達でいてくれますよね」
琴音の指が引き金にかかり、
「だめだっ……」
浩之が小さく、それでもしっかりした声で言った。
腹にナイフが刺さったまま、傷口から血を流しながら、それでも、はっきりと。
「……引き金を引いちゃだめだ……嫌な、予感がする……」
「浩之ちゃぁん、喋っちゃダメだよ！」
「琴音ちゃん……引き金を引いちゃ、ダメだ……」

あかりの制止も聞かずに、琴音に言う。
琴音の指は引き金にかかったまま、止まっていた。
「琴音ちゃん、もう一度……言う。琴音ちゃんは間違ってる……だけど、俺達は裏切らない。引き金を引いちゃだめだ……絶対に、よくないことが起きる……」
「ひろゆきちゃぁん……」
浩之の声から力が失われていく。
「琴音ちゃん、銃を捨ててよ！　浩之ちゃんを安心させてあげてよ！　浩之ちゃんを信じてよ！　ひろゆきちゃんが……しんじゃうよぉぉ……」
あかりの悲痛な泣き声が、琴音の心に刺さる。それと共に、今までのことが、琴音の中に浮かんだ。
この二人に、どれだけ勇気づけられ、どれだけ励まされたことだろうか。
どうすればいいの？
浩之さんは、私を裏切って……私を信じて。

……でも、死んじゃえば、ずっと友達で。
だけど、撃ったらよくないことが起こるって……
浩之さんは私を裏切ったけど、
だけど、私を今まで支えてくれて……
ウラギッテ、シンジテ……
ドウスレバ、イイノ……？
ヒロユキサン……ドウスレバ

限界だった。
ほんの僅かのきっかけで、琴音の心は崩壊するところだった。
次の言葉を浩之が言おうとして。
「何をしてるんだ⁉」
そして、きっかけは、全く違うところから訪れた。
「——っ⁉」
琴音は即座に声のした方向に向き直り。
引き金を引いた。
引いてしまった。

爆音が夜空に響く。
爆発した銃は、琴音の右腕を奪い去り。
それは、極限状態だった琴音の心に、ショック死をもたらすには充分だった。
最後に、琴音は思ったのかもしれない。
自分は、道具にまで裏切られるのかと。
それは誰にもわからなかった。
琴音が倒れる。
浩之も、あかりも、声の方にいる二つの人影も。
ただ呆然と、それを見ているしかなかった。

361　夕餉

江藤結花・来栖川芹香・スフィーの一行は、いまだ森の中を歩いていた。まだリアン達とは出会えないままだ。
　手持ちの武器が増えた分、見えない敵への不安は薄らいだ三人だが、今度は空腹が彼女たちを蝕んで

いた。なにせ、配給されたパンしか食べていなかったのだから。
　そんな時、
「……」
「え？　何か言った？」
「……」
「家って……、あ、ほんとだ」
　さっきまで木と茂みしか見えなかった道の先に、家の屋根らしきものが見えていた。そしてもう少し前に進むと、それは数を増し、どこにでもあるような街並みになっていた。
「この島って森と川だけじゃなかったんだ」
「街まであるとはねぇ……」
　口々に驚きを表しながら、街に向かって坂道を降りていく。
　街の中に入った三人は、真っ先に目に付いた家に近寄った。
　ピンポーン
「ごめんくださーい」
　結花が声をかけたが、何の返事もない。
「入ってみようよ」
　スフィーがドアノブをひねると、鍵もかかっていなかったらしくすんなりとドアが開いた。そのまま家の中に上がりこみ、リビングとおぼしき部屋の明かりをつける。
「……」
「え？　あ、そういえば……」
　当たり前のように建っているこの家だけど、そもそも森と川しかないような島の中にどうしてこのような街があるのだろう？　あまりの自然さのせいで気付かなかった疑問が、芹香の指摘で浮かんでくる。
「確かに不思議だよね。森があったり街があったり。何なんだろう、この島って」
　とはいえ、考えてみた所でその意図はすぐわかるものでもない。

「考えるだけでも疲れるから止めましょ。休憩所とでも思えばいいじゃない」
半ば投げやりにも取れる結花の一言で、スフィーも考えるのをあきらめた。
家の中は、家具や調度品などが置いてある、ごく普通の室内だった。ただどの部屋も妙に整然として、いわゆる「生活臭」がないのが気になった。
「わ、冷蔵庫の中身まで入ってる」
結花の声に、他の二人も台所に集まった。
中身といっても、ミネラルウォーターや缶詰といった保存が利く物ばかりで、生ものは入っていない。
「う〜ん、これくらいあればちょっとしたものが出来るかな？」
「本当？」
空腹で滅入っていたスフィーの顔に笑みが戻る。
「もちろん。伊達にＨＯＮＥＹ　ＢＥＥで腕を振るってる訳じゃないんだから」

それから三十分後、台所のテーブルには黙々と缶詰の中身を食べている三人の姿があった。
「結花のうそつき」
拗ねるスフィーを横目に、結花がツナ缶を食べながら、
「そんな事言われても……。火が使えないんじゃ、お手上げよ」
そう、台所にあったガステーブルが使えなかったのだ。結局、冷蔵庫の缶詰を開けて食べるだけになってしまった。
「でも、食べ物にありつけただけでも良しとしなきゃ」
「むぅ〜」
「……」
食事の後、スフィーと結花は二階に上がり、ベランダから外を眺めていた。
「……結構いっぱい建物があるんだね」
闇夜の街には街灯の明かりだけでなく、いくつか

の建物にも明かりが点っている。
「この街って、人が住んでるのかな？」
「どうなんだろう？　ここに来るまで誰にも遇わなかったし」
「って事は……誰がいるの？」
「他の参加者がいることは間違いないわね」
「この街にリアンたちもいるかなぁ？」
「いるといいね」
その頃、一階のリビングでは芹香がソファーに横になっていた。
「……」
何か不穏な空気を感じながら。
数時間後、芹香がその不穏な空気の正体を知る事になるとは、まだ誰も知らない。

362　ふたりだけのせかい　～world end～

「畜生……」
浩之が呟いた。
「あかり……約束、守れなくて……わりぃ……」
浩之があかりに笑いかける。
その笑みに何がこめられているのか、あかりにはわかったかもしれない。
「そんなことないよぉ……ひろゆきちゃんといられて、幸せだったよぉ」
浩之を抱き締める。
涙が、あかりの頬から、浩之の頬へと伝わった。
誰かの声が聞こえる……ような気がした。
だけど、関係ない。
ここはふたりだけのせかいだから。
「……さっきは、あんなこと言ったけど……あかり、お前、は……生きて……」
「ダメだよぉ、ひろゆきちゃんがいないと、ダメなんだよぉ！」
叫ぶ。
あかりは浩之の腹に刺さっていたナイフを抜き、

自分へと突き刺した。あかりの口から吐かれた血が、浩之の顔にかかる。
「……これで、ひろゆきちゃんと……一緒だよぉ」
満面の笑み。これ以上ない、幸せな。
「馬鹿……でも、もう……一緒だな……」
驚きその光景を見つめていたが、浩之は最後にはそう言った。
「……うん、そうだね。ひろゆき、ちゃん？」
これからも、よろしくね？
最期のキスを。
二人笑顔で、手を繋いだまま。
星空の祝福を全身に受けて。
ふたりの世界は、閉じられた。

「祐介さん。私達のしたことって……何なんでしょう……」
「わからないよ……わからないよ、畜生……」
止めようとしただけだった。

人が死ぬのを見るなんて、御免だった。
だが結果的に、三人の命が失われた。
「……ちくしょう……」
力なく、拳を地面に叩き付ける。
夜の闇が、残された者を、祐介と美汐を、包み込んだ。
残酷に。
限り無く、残酷に。

二十五番　神岸あかり　死亡
七十四番　姫川琴音　死亡
七十七番　藤田浩之　死亡
【残り45人】

363　学校の静寂

「ねえ、お母さん」
無邪気に甘える幼子のような声。それは母である

秋子にとって、絶対の命令として脳に響く。
「そうね、きっと……ここにいるわね」
「うん、しかもたい焼きの香りがするよ」
　手元のレーダーを見ながら、秋子は頷く。
013、017、020、021、043、061、069、079……。少し離れて090、091……その二つの番号は間違い無く秋子達のもの。
　民家から手に入れたナタを振り、前方を見据える。どこにでもあるような何の変哲も無い四階建ての学校——。
「名雪は、ここで待っててね、私が……あゆちゃん連れてくるから」
「うん♪　まだ殺しちゃ嫌だよお母さん」
「はいはい……何があっても……絶対出ないようにね」
　番号、若いところで連番にも近い数字。多分、柏木千鶴も、そしてその姉妹もここにいるのだろう。何の根拠もない憶測だったが、秋子にはそう感じられた。
　もし違っていたら……その方がありがたい。間違いなくあの女と戦う時は命をかけねばならないのだから。
（入り口は……ここだけね）
　名雪が隠れている校舎の隅の体育倉庫を一瞥してから、校舎全体、そして出入り口を探す。
「用意周到なこと……」
　高槻の差し金だろうか、一、二階の窓にはすべて鉄格子が取り付けられていた。
「この昇降口を除けば……中にいる人は誰も出ることは出来ないわね」
　しかし、よくもまあこの狭い空間にこれだけの人間が集まったものだ。
　秋子は苦笑し、中に入る。
　レーダーにはまだ近くに反応は無い。
　ガラガラガラ……。
　ゆっくり、音を立てないように昇降口の扉を閉め

る。

「…………」

カチッ……。

そして内側の鍵を閉めて、ナタを大きく振りかぶり……その鍵穴の部分へと振り下ろす――――！

ガシャァ――――ッ!!

恐らくは学校中に響き渡っただろう。

真の恐怖、殺戮ゲーム、その始まりの合図だ。

その音が鳴り止まぬうちに、秋子は既に三階へと移動していた。

（これで誰も……逃げることはできない……）

三階以上の高さから飛び降りて逃げようとする者もいるかもしれない。それはそれでいい。秋子はその背中を狩ればいいだけだ。

レーダーの番号を見ながら、秋子は薄く笑う。

（待っててね、名雪、もうすぐあゆちゃんを連れて帰るからね――）

静寂とたい焼きの匂いだけが学校内を支配していた。その中で秋子は、いずれ混じるであろう濃厚な血の匂いの予兆を全身で感じていた。

364　夜のはじまり

ああもう、どこから「突然」って言えばいいのかしら？

あいつらがブッ倒れたとこから？

ううん、晴香のアホが因縁つけてきたところからかな？

元はと言えば、あのオバサンが瑞佳にケリかましたとこからなんだろうけど。

まあ、ここではたい焼きの香りを察知したところからはじめるべきかもしれないわね。

……違う？

じゃあ、あのイジケ女が飛び出したところからはじめようかしら。

……それでいい？

あんまウダウダ言ってると怒るわよ？
いいわね？　いいって言いなさい？
……よし。
……こんにちは。
あ、もうこんばんわなのね。
ご機嫌いかが？　乙女の七瀬よ。男の七瀬じゃないから注意してね。間違えたら殺すわよ。最近、余裕無いんだから。
突然。そう、突然私たちを襲ったイジケ女がいたの。短刀で初音ちゃんの双葉のくせっ毛を一葉にしちゃうトコだったんだけど、うまくかわして私がその腕を難なくキャッチ。
あのオバサンと比べれば、チョロイもん。せいぜい晴香のアホに、毛が生えたくらいかしらね？
イジケ女が喚くのを抑えて、初音ちゃんは身の上話を始めたわ。まあ、あのまま腕をへし折っちゃうとかいうワケにもいかないし、説得するのが妥当とは思ったんで任せてたんだけど……。
……やっぱり一筋縄では、いかなかったのよ。

まくしたてる初音の言葉に、なつみは反応しなかった。精神的に衰弱し、常に無かった孤独感に身を浸した今の彼女に、初音の言葉は届かなかったのだ。
全てが届かなかったのならば、事件は起こらなかっただろう。不幸なことに最後のひとことだけが、突き刺さる棘のようになつみの心を抉ったのである。
『あなたにも一緒に居て幸せになれる人、いるかな？』
誰が仕組んだわけでもない、偶然の皮肉であった。
その台詞を受けたなつみは眉間にしわを寄せ、怒ったような、泣く直前のような、異なる感情の重なった複雑な表情で、七瀬を一瞥することもなく、その手を振り払おうとした。
七瀬はなつみの豹変ぶりに驚きつつも、抗議の声を発しようとする。

「ちょ――」
なつみが叫ぶ。
「うるさいわね!!」
他を圧倒する憤りを撒き散らして、なつみが絶叫する。
「私には、もういない！　そんな人、いないいの！殺されたのよ!!　だから、だから私は――」
そして、その台詞を合図として、いくつもの事象が錯綜したのである。
強く振り払う、なつみの腕。
「ちょ、ちょっと、落ち着きなさ――」
慌てる七瀬の声。

ズドン！

突然の、銃声。
「あんた!?」
「お姉ちゃん!?」

七瀬が、初音が叫ぶ。撃ったのは茜である。普段と変わらぬ、知性をたたえた静かな瞳のまま、茜は銃を構えていた。
なつみが短刀を拾おうとでもしたのだろうか。そうは見えなかった。しかし判らないままでも、七瀬たちは反射的に身をすくめ、そして弾けるように跳び退った。

初音も、なつみも、そして七瀬すら至らぬ、修羅の境地に到達していた茜は、なつみの言葉を最後まで聞くことなく、全てを予感していた。
(だから私は――、の続きは……決まっています)

ひとたび襲いかかってきた相手が、再び感情を――おそらくはきっと、殺意を――沸騰させた。当然のように、やがて向けられるであろう殺意に応じて、撃った。ただそれだけの事だった。
茜は目的を達成するために、心と鋼の刃を振るい、

幾つもの命を奪って歩んできた。
　罪は罪として認識している。しかしその罪ゆえに、目的を達成する意思は強くなり続け、とどまることを知らない、はずだった。
　それなのに、命中しなかった。心の奥底にある、葛藤のせいなのか。何かが間違っていたのか。
（……我ながら、甘すぎです。どうかしています。たい焼きのせいでしょうか）
　理由はどうあれ、命中しなかった事は、確実に裏目に出た。七瀬や初音にとっては、誰を狙っての弾丸か判断できない。それほどまで透明に、自動的な意識で、茜は引き金を引いていたのである。
　茜は自らにかけられた声に、明らかな恐怖が混じっているのを感じて後悔したが、もはや手遅れだった。誤解されても文句は言えまい。
（……命中したところで、結果は同じだったかもしれませんが）
　要するに、もはや誰かと行動をともにすることなどできはしないのだ。そう改めて思い知ったことだが、得るものであり失ったものでもあった。
　誰もが混乱し、誰もが微動だにせぬ空白の瞬間が、そこにあった。もしかしたら数分だったかもしれないし、もしかしたら数秒だったかもしれない。とにかく、その停止状態が続いたあと。
　ふと、石化の魔法を解呪されたかのように、全員がわずかに身じろぎしたのである。
　その、刹那。場の混乱に拍車をかけるように、すう、と廊下が闇に包まれた。
「!?」
　七瀬はかすかな記憶を頼りに、手近にあった廊下のスイッチを押す。しかし照明はつかない。
　彼女の知る由も無いのだが、一階に関しては元々配電設備が死んでいたのである。そのため、夕日の最後の余光も既に届かぬ一階の廊下は、突如として真っ暗になった。

そこに居た、ほぼ全員が。恐怖に背中を押されて駆け出していた。

ズドン！

銃声。それは初音と再会できるという安堵を、あっさりと吹き消すように校舎に響き渡る、死神の叫びであった。たい焼きを咥えつつも怯えるあゆを、実習台の下に隠して、二人のメイドは頷きあう。

千鶴はお馴染みの鉄爪、梓は掃除用具ロッカーから取り出したモップを手に、教室を飛び出した。ほんの数瞬前まで期待に鳴り響いていたそれを掻き消すように、不安の鼓動が大きくなる。

眉をひそめて耳を澄まし、千鶴は呟いた。

「下の階ね……どっち、かしら？」

梓はほんの少し考え、初音の台詞を思い出す。

「千鶴姉、保健室だ！　保健室、行ってみよう！」

階段脇の各階案内図を見て位置を確認するや、二人は頷きあい走り始める。一段降りるごとに光を失う階段は、地獄への道程のように不吉に口をあけていたが、どちらも怯むことなく飛ぶように駆け下りていったのである。

彼女らと入れ替わるように、茜は二階に上がってきていた。階段脇には美術室。反対側の階段脇に、明かりのついた大型教室が見える。

（……失敗、しました）

かるく溜息をついて、廊下を歩き始める。弾丸を外したことはもちろんだが、結果として敵を増やしただけというのが、何より痛い。

狂人が、突如として無差別攻撃をはじめたように思われただろうか。

他人の殺意に敏感になりすぎた自分が、まだ狂人でなければの話だが。

私はどこで、日常の輪の中から抜け出してしまったのだろうか？

はあ、はあ、と息も切れ切れになつみは玄関まで移動していた。
(撃たれた！　やっぱり本当にみんな、殺し合いをしている！)
震える手を抑え、拾いなおした短刀を抱き、下駄箱にもたれかかる。屋上や保健室の死体を思い出して、ぞくりと身震いする。
恐怖を断ち切ろうと、大きく深呼吸して思考する。去っていったココロに届け、と願いながら。
(ねえココロ？　聞いているかしら？　ひとつだけ。ひとつだけ、教えて欲しいの。あの中に、店長さんの仇は居たの？　私は、この短刀を振るっていいの？)
……もちろん、答えは無かった。
俯いて、苦笑い。
(私には、もういない。さっき自分で、そう言ったじゃない)
そうだ。私は今や、ひとりぼっちなんだ。
思い知らされた孤独。その闇のなかで寂蓼感に苛まれるなつみの耳に、微かな一言が囁かれた。
『……いるよ。だから、頑張って。悔いの無いように……頑張って』
それきり声は聞こえなかったが、存在を感じていた。
(そっか。ココロ、居てくれたんだね。私、頑張るよ。だから、応援してね？)
気持ちを取り直して短刀に意識を集中する。
息を整えて。下駄箱に身を隠し。短刀を構え。
そして、店長さんの仇をとる……そう、殺し合いに、参加する。
私たちは、殺し合いを、する。
私たちは、殺し合いを、する。
私たちは、殺し合いを、する。

365 Unexpected

「うーっ、つまんないよぉ」
　母親と別れてわずか数分で名雪は退屈し始めていた。
「何があっても出るなっていっても、つまんないんだよぉ。お母さん早くあゆちゃん連れてこないかな、早くあのときの雪ウサギみたいに、ぐちゃぐちゃにしてやりたいな。簡単に殺したりなんかしないんだ、生きたままたっぷりと泣かせてやるんだ。そして、とどめは祐一の目の前で刺してやるんだ、そしたら、きっと……」
　名雪の妄想は加速して行く。
「名雪、いままでごめん、俺は悪い夢を見ていたんだ」
「やっとわかってくれたんだね祐一、でももう遅いよ」
「そんな……俺、名雪の言う事なら何でも聞くから、だから見捨てないでくれよ……」
「うーん、じゃあこれから一ヶ月間、毎日イチゴサンデーおごってくれたら許してあげるよ」
「おごるおごる、これから一生でもイチゴサンデー食べさせてやるよ」
　そして妄想はクライマックスを迎えつつあった。
「もうあんな悪い子にだまされちゃダメだよ、私がそばについててあげるから」
「名雪、今のって……もしかしてプロポーズかい？」
「もう〜女の子にそんなこと聞くなんて、祐一ってホント、デリカシーないね」
「ごめん……でも、俺の気持ちも同じだから……ずっと俺のそばにいてくれ、名雪！」
「うん……祐一もきっとそう言うって思ってたよ……ねぇキスして」
　そして祐一は私に熱いキスをしてくれて、そんでもって結婚式は白い教会でスイートホームは暖炉の

ある大きなお家なんだよ、子供は三人くらいほしいなぁ。
えへへへへへ……。
妄想も一段落すると、また退屈の虫が騒ぎ出す。
「ちょっとくらいなら……いいよね」
体育倉庫から顔をちょっとだけ覗かせる……とそこには、
「あっ、ねこさんだ。ねこーねこー」
偶然にも一匹の野良猫が夜の散歩中であった、これを見逃す水瀬名雪ではない。
名雪の異常な雰囲気におびえてか、野良猫は校舎に向かってまっしぐらに逃げて行く。
「ねこーねこー、待ってよぉ」
もはや母親の言いつけも忘れ、一心不乱に猫を追い掛け回す名雪。
しかし、もうすでに日は落ちている。
「あれ……ねこさんいなくなっちゃったんだよ、どこいったのかなぁ？」
「もしかして中かな……？」
名雪は一階部分の窓の鉄格子を力いっぱい動かしてみる、が外れない
「うーっ、どこか入れる場所はないかなぁ……」
手当たり次第窓の鉄格子を引っ張るがまるで外れない。
この頃、校舎内では凄まじいバトルが繰り広げられているが、名雪の耳には入らない。
最後の一箇所、一階男子トイレの窓の鉄格子を引っ張ると、工事がそこだけ手抜きだったか簡単に外れた。
と、同時に猫の鳴き声。他にもっと騒がしい音がしているだろうに……しかし、名雪にはさっぱり聞こえない。
人間、見たいもの聞きたいものを優先するものである、まして名雪はすでに精神の均衡を欠いている。
「やっぱり中だったんだね、もう逃がさないんだよ」
こうして水瀬名雪は不幸にも激闘の渦中へと自ら

踏み込んで行くのであった。

366　冷たいギフトとモノノケサミット

——目がクリクリして、肌がスベスベな近所の子供たちを十人ばかりかっさらってね。北海道に連れて行ってライ麦畑に放して裸で追いかけまわそうって計画を立ててるんだよ。なかなか素敵だろ？　こう見えても俺は子供が大好きなのさ！
（『にこにこぷん』第二十五回　じゃじゃまるのセリフより抜粋）

「ねぇ、ジュン」
夜半、毛布にくるまってうつらうつらしていたところを、宮内レミィ（九十四番）に声をかけられて、北川潤（二十九番）は頭をあげた。
「ん……なんです？　レミィ・クリストファー・ヘレン・ミヤウチ」
まっ暗闇の中、北川と同じように毛布に身体を包んでいるレミィが、彼の抱えているノートパソコンをのぞき込んで尋ねた。
「その中のCDって何が入ってるの？」
そのまま北川にのし掛かるようにして、ノートをまじまじと見つめるレミィ。豊かで艶のあるプラチナブロンドの髪が北川の首筋をなでる。それが彼にはくすぐったくてしょうがない。少し身体をよじると、北川は適当に答える事にした。
「『にこにこぷん』が入ってる」
「なんデスカそれ？」
好奇心をくすぐられたレミィが目を輝かせて再度尋ねる。
「あらま。おまえさん『にこにこぷん』を知らないのか。あの大スペクタル長編連ドラを知らんのか」
「うん、だって仕方ないヨ……アタシ、Dadのお仕事あったし……」
しゅん、としょげかえるレミィ。いささか後ろめ

たさを感じながらも、北川の目元がだらしなく緩んだ。興が乗った北川としてはこの千載一遇のチャンスを逃すわけにはいかない。
「そいつはいかんな。この歳で、じゃじゃまる・ぴっころ・ぽろりの八十年代御三家キャラを知らんようでは、二十一世紀の世知辛い世の中、とてもじゃないが渡っていけない」
「そんな……アタシまだ死にたくない」
「いーやおそらく死ぬ。何となく死ぬ。人知れず死ぬ」
「シヌ……」
「死ぬのです。レミィはにこぷんを知らないという一事だけで死ぬるのです。やれやれ、無知は罪だね悲しいね」
「ソンナ……」
レミイは子どもがやるようにいやいや、と頭を振っておびえるような仕草をする。北川にはそれがいちいち面白くてしょうがない。
「レミィ」
北川は急に真摯な表情を作ると彼女の方に向き直った。
「ハイ……」
「知りたいか」
「ウン、知りたい」
「本当に知りたいか」
「ホントに知りたい」
「その知りたい気持ちを州にたとえると？」
「ユタ」
きっぱりとレミィは言った。
「ちょっと弱い」
「インジアナ」
少し考えこむような素振りを見せると、あらためてレミィは言い直した。
「いまいち」
「サスカチュワン」
かなり困った顔になった。

「さて、寝るか」
「ミシシッピ」
レミィの目の端に光るものが浮かび上がった。
「それくそゲー」
「ネ……ネブラスカ」
涙で顔をぐしゃぐしゃにして、かすれ声でレミィは言った。やりすぎたか、と内心狼狽した北川であるが、レミィの素直すぎる反応を見るにつけ、えも言えぬ気分になるのもまた確かであった。
「よろしい。不肖この北川潤が、迷える子羊ヘレン宮内の蒙を啓いてさしあげよう」
こほん、とわざとらしく咳払いをすると、北川はおもむろに語り始めた。

「……簡単に言うと、両親に捨てられたという境遇を同じくする三人の孤児が、義兄弟の契りを結んで、共同生活を送っていくって内容のドラマだ」
「ミナシゴがギキョーダイに？　大変だけどおもしろそーだネ」
意外な舞台設定にレミィはきょとんとした表情になる。
「ただ、どいつもこいつも一癖も二癖もあってなぁ。長男のじゃじゃまるは、身長一四〇センチ以下の可愛い女の子を見かけると、脊髄反射で背後に忍び寄りエッサホイサと担ぎ上げてそのまま愛車のトランクへ放りなげるわ、家の金を持ち出して外国先物取引に手を出すわのトラブルメーカーだが、まぁいいヤツだ」
「ぜんぜんよくないと思うけど、イーヒトなのネ」
「長女のぴっころも、気に入らないことがあると、アリの巣に爆竹を仕掛けてストレスを解消するし、スーパーでメイプルシロップ万引きして日がな一日舐めているから十八歳にして総入れ歯だし、それでいて自分を国家元首であると信じて疑わないという事実が、戦後教育が掲げる『伸ばすべき個性』の意義を根本的に問いかけて愉快でたまらないが、いい

ヤツだ」
「あまりオチカヅキになりたくないけど……それでもイーヒトなのネ」
腕を組んで、自分を納得させるかのようにうんうんと何度も頭を振るレミィ。
「末弟のぽろりに至っては、基本的に行動が全て放送コードに引っかかるし、指が五本あるくせに三以上の数をかぞえられないが……」
「イーヒトなんでしょ？」
「その通り。致命的にいいヤツだ」
北川は、大仰に手を胸の前に当ててレミィの聡明さを讃えた。
「とまぁ三者三様、人間として大胆な欠陥があるが、町内に駆けめぐった『隔離してほしい珍獣達』のレッテルに苦悩しながら、奈良盆地の彼方に幸せを探しに行くっていう話だ。泣けるぞぉ」
「すごい……アタシ今すぐにでもにこにこぷん見たくなってきたヨ！」
「同感だ。でもそれにはまずノートを何とかしなけりゃな。今日から忙しくなるぞレミィ」
「うんっ、一緒にガンバローネ！　ジュン！」
弾けるような笑顔でレミィが応えた。
「疾走する現実逃避。加速する転落人生。駆け抜ける妄想ハイウェイ。それがにこにこぷんなんだ。転がり続ける石と痴人にコケは生えねぇ！　って事でそろそろ寝るとしようか。おやすみレミィ、せめて夢の中では安息と幸福を」
当初の目的を頭の中からすっかり放擲した北川だが、最後にそう締めくくるとベッドの上に横になって本格的な眠りについたのであった。

367　臨戦態勢

「な……に……？　今の……」
入り口の方から、何かを壊したような音……
そして、遅れて銃声――

香ばしいあんこの匂いに誘われて、校舎の中へと立ち入っていた里奈は、そこで現実に返る。
「……!!」
殺人ゲーム、その言葉が再度脳裏に浮かんだ。
上等なブーツを脱ぎ捨て――もう見る影もなかったが――靴下だけの身軽な格好になると、長い直線を一気に駆け、手近な教室へとすべり込む。
もちろん、廊下を走る音を消す為の行為だ。
（敵が……いる……）
それが複数なのかどうかは分からない……分からないが……。
廊下の様子を再度慎重に覗き込む。
誰もいない……静寂――
（もう……終わったのかしら？）
そう思いながらも、理奈は廊下に備え付けられていた消火器を手に取り、安全ピンを抜く。
（いざとなれば、目くらまし、殴打武器にもなるだろう）
今度はゆっくりと落ち着いて教室内を見回した。
（窓に……鉄格子⁉）
入ってきた時は気づかなかったが、とても人間が出入りできるような窓ではなかった。十センチ間隔で固い鉄棒が備えられている。
グイッ……グイッ……
ためしにそれを揺らしてみるが、びくともしない。
（もし、まだ終わっていないなら……袋のねずみってわけね……）
恐怖心をかき消すようにゆっくりと深呼吸する。
（ゲームに乗った……乗ってしまった奴が……まだこの中にいる！）
それはただの思いこみではあった。
だが、その可能性を信じない愚か者が真っ先に命を落とす――。
そう結論付けた理奈は、手持ちの武器を確かめて、ゆっくりと戦闘態勢に入った。
教室の前後の入り口の状態、そして鍵の有無を確

認する。
鍵をかける——それは愚かな行為だ。
追い詰められたとき、逃げ場がない。
殺してくれと言っているようなものだ。
あいにく、復讐を誓った理奈に自殺願望はない。
次に、床に耳を押し付ける。階下から、かすかな足音——それが事実なのか錯覚なのか理奈には判断できない。
これだけの静寂の中、極限状態の理奈があるはずのない音を聞いてしまう可能性。ないと言いきれるだろうか。
理奈はその行為をあきらめると、次は窓の外を、眼下に広がる世界を覗き込む。もちろん、外からは見つかりにくいように慎重に。
校庭に一人の少女の姿が見えた。暗がりの中、かろうじて長い髪の女性だろうと判別する。
校舎の周りを、入り口を探すように調べている。
（まさか……入り口がふさがれているの？）

——何故入ろうとしているかは謎だったが
鉄格子で窓がすべてふさがれているとすれば……入るのは昇降口しかない。
だが、その少女（だと理奈は判断した）はそこから入ろうとしていない。
（だめね……早急すぎるわ、結果を出すには）
一通り状況確認すると、理奈は扉の外を慎重に窺い、そして……何かのきっかけがくるのを待った。
それは銃声か、足音か、誰かとの遭遇か、理奈にもまだ分からなかった。

368　保健室の衝撃

こんばんわ七瀬です。
……って、なんだあんたなの。さっきも挨拶したわよね？
とりあえず、あたし達がガッコに閉じ込められて

苦労する前の話を続けるわよ。
　最近すっかり脇役になっちゃって寂しい限りだけど、やっぱり一筋縄では行かなくって苦労したんだから、心して聞くのよ。

　あたしは暗い階段を転がるようにして、保健室まで駆け下りた。心の中で、定まらぬ思考が疾走する。
　初音はどうなっただろう？　なんで電気つかないの？　イジケ女ウザいわね！
　――そして里村茜。彼女は何を考えて、発砲したのだろう？
「……あーいう頭の良さそうな娘の考える事は、よく解らないわ。ここのところ折原みたいなバカとしか話してないからかしら？」
　我ながらバカが伝染ったみたいで情けなくなってくる。感染力は強そうだ。
「おっと」
　一階の端のほう、階段脇に保健室はあった。

　知性の退化という、学生にとって実に深刻な事態を自ら予想したため、悲嘆に暮れて目的地を見逃しそうになっていた。
「な、な、なな七瀬お姉ちゃん！」
「うっわ！」
　初音ちゃんが飛び出してきた。
　危うく反射的にハタきそうになるが、鉄パイプでハタくのは洒落にならないので、散弾銃で……じゃなくって！　素早く抱きとめる。
「なに？　なにが――」
　――あったの？　と尋ねようとする七瀬を抑えて、初音は保険室内を指し示す。
「あ、ああ、あれ！」
　そこには、布団を被った血塗れの死体がいらっしゃった。

　ギャ―――――――――!!

悲鳴が木霊する。
あまり、というか全然、乙女っぽくはなかった。
踊り場で、二人のウェイトレスが立ち止まる。初音の声が聞こえたような気がしたのだが、妙な悲鳴で掻き消されてしまっていた。
「？・」
互いに首を傾げ、そして考えたところで無意味なことを同時に悟り、頷き合うや再び階段を駆け下りる。さすがに息の合った、無駄のない動きであった。
一階に降り立ち、曲がってすぐ、保健室の扉を開けて踏み込む。
「せいッ！」
「なんの！」
鋭い気合いと共に振り下ろされる鉄パイプを、梓がモップの柄で受け止め、そのまま流れるように回転する。左側の柄で鉄パイプを流し抑えて、なかば背面越しに右側の柄を腹部へ突き込んだ。同時に千鶴が内側にステップを踏んで、七瀬の気管を真一文字に切り裂――
「お姉ちゃん！」
――制止したのは、初音の声だからだったろう。
二つの旋風が、ぴたりと収まった。
完全に鉄パイプを振り下ろさせられた状態で、頸動脈から一センチのところに鉄の爪。左脇腹十センチのところにモップの柄。
ここまでくると、悲鳴すら出ない。
七瀬は非常に不本意かつ衝撃的な形で、恐怖の防弾戦闘ウェイトレスさん二体、もとい初音の姉さん二名に遭遇したのである。

369　あゆ攻防戦

とりあえず、私は移動していた。無論、慎重に。

初音と七瀬さんの二人と合流後、直ぐにあゆの元へ走った。当然、あゆの保護の為。
今ごろ千鶴姉達は保健室のすぐ隣（たしか会議室のような机ひとつないホール）に移動しているはずだ。死体のある部屋に留まるのは気分のいいもんじゃない。
本当は千鶴姉も一緒に、と言いたいとこだけど、今の状況で多人数で移動するのは得策じゃない。それに……入り口付近で変な音も聞こえた。何かが壊れるような音。
ゾッとする。
ここ、たしか昇降口以外の場所は封鎖されている……いや、されていた。
確かめたわけじゃないけど……千鶴姉ももしかしたら同じことを考えてたかもしれない。千鶴姉の表情は、いつになく緊張していたから。
今思えばここに立ち入ったのは軽はずみだったかもな……。

でも、今はそんなこと考えてる場合じゃない。
私は、二階へと――調理室へと向かう階段を目指した。

「あそこを曲がれば階段……」
物音を立てないよう、慎重に。
このまま、無事に目的地に辿りつければいい。
梓もまた鬼の力を有してはいたが、今は普通の人間と大差ない。銃火器を持った人間相手に正面から戦えるとは思えない。
何故か？　それは武器がないからだ。
保健室の掃除用具入れから先のないモップ（木の棒ともいう）を獲物にしてはいるが、ないよりましか、程度のものだ。
――里村茜。
梓は、七瀬から聞いたその名を思い浮かべ、ぞっとする。
至近距離から躊躇なく発砲した少女。その弾が外

れたのは、あるいは躊躇したからなのかもしれないが、実際見たわけじゃない梓には分からない。
なんにせよ、正面からぶつかり合うのは避けたかった。
だが、あゆを見殺しにするわけにもいかない。
梓が一人あゆを保護に向かう理由——それは、割と単純だ。
千鶴は、初音達を護る。
梓は、あゆを保護し守る。
どちらのリスクが大きいかはこの際どうでもいい。
とりあえず、この防弾服のおかげで致命傷になる確率は多少は低いのだから、千鶴が助けに行くのを除けば、梓が一人で行動するのが最も理に適っている。
「二階……!!」
階段を駆け上がり、慎重に前を向く。
「誰にも遭遇しませんように……」
だが……その願いは果たされなかった。
階段の踊り場から残りの段を一気に駆け上がり、二階へと身を踊り出す……それがそもそもの間違いだった。
廊下の向こう側に一人の女の影。
——里村茜——
梓がそれを肉眼で確認したとき……
暗がりの中でガバメントが火を吹いた——！
パンパンパン!!
どこか情けない音と共に、梓の体が不自然に歪む——正確に胸に三発。
「かはっ……」
口元から血が滴る。
防弾服を着ていなかったらそれで終わっていただろう。
仰向けに転がって床をすべる——
体勢を立て直そうと転がる矢先に、再び銃声。
先程まで倒れていた場所に弾丸が命中する。そしていくつかの何かがぶつかり合う音（それは、跳弾の音であった）。

（防弾服……ですか……!?）
　背後に人の気配がないことを確認してから、茜は、近くの備え付けられていた消火器を力任せに前方に蹴りつける。それは普段の茜からは想像もつかない野蛮な行動だった。
　そして、一発、二発!!
　ドッ……!!
　中に圧縮されていたものが破裂し、あたりに撒き散らされる。白い煙の中、壁にぶつかる消火器の残骸の音が幾度か響いた。
　間髪入れずに、後方の階段（梓が使用したのとはまた別の物）へと後ずさりしながら白い煙の向こうにいるであろう人物に三発ぶち込む。
「うっ！」
　短い呻きが微かだが轟音の中聞こえた気がした。
　茜は、そのまま身を翻すと階段から上の階へと姿を消した。
「くうっ……」
　白い煙の向こうから飛んできた銃弾の内一発が梓の左肩を貫通していた。ちょうど防弾服に覆われていないところだ。
（あゆっ……!!）
　白い煙の向こうから、また銃弾が飛んできそうな気がして……恐怖に顔をひきつらせながら梓は、一度退避するため、彼女が昇ってきた階段へ床を這った。
　その刹那――
　近くの扉から何かの影が飛び出した。
　何かを振り上げている。
　梓にとって幸運だったのは――
　鬼の力がなくても常人よりは強い力を持っていたことでも、それに対して無意識に腕が（傷ついた肩も含めて）動いたことでもない。
　恐怖と緊張の中、硬直した手が持っていた獲物を離していなかったことだった。
　ガチッ！

その降ってきた何かの刃の部分でなく、その柄の部分をモップで防ぐ。
梓の力を持ってしても、押さえるのがやっと……という速度で振り下ろされた刃、それは、水瀬秋子のナタであった。
梓の眼前までせまったそれは、わずかに枠の額を傷つけ、そこで止まった。その受け止めた衝撃に、肩の傷が痛み、梓の顔が苦痛に歪む。
「くっ……!!」
絶対的なピンチに恐怖を通り越した絶望を感じる梓。だが、圧倒的優位に立っているはずの秋子は、一瞬梓以外の空間に注意を向けたかと思うと、梓が昇ってきた階段にむけて飛び移り、そのまま上の階へと逃走した。
(すまん、あゆっ……必ず……迎えにいくからっ!!)
梓は痛む肩を押さえながら、秋子が消えた階段を転がり落ちるように階下へと向かった。その拍子に、幾本かの切られた前髪が、血と共に宙へと舞って落ちた。
「いい判断です……」
一度は離脱した茜であったが、階下の戦闘の音を聞きつけ再び白い煙の立ちこめる二階へと戻っていた。
――上手くいけば不意をついて漁夫の利を狙えるかもしれない。
だが、すでに秋子は上階に逃走しており、梓も階下に逃れていた。
相手の手の内が知れないというのは大きな不安材料である。仕留め損なったメイド服の少女が、そして、新しい敵が持っている武器が分からない以上、深追いは禁物と判断した。
そして状況を分析する。
「……どうやら、閉じ込められてしまったようですね」
入り口は何者かによって内側から封鎖されていた。

おそらくここにいる者の中に、殺し合いを望む者がいるのだろう。
「それならば、ここにいる人全員を倒して出ることとします」
茜の腹は決まっていた。
殺人者を判断する手段はない。
それならば——全員倒せばいい。
そしてゆっくり脱出の方法を探せばいい。
「生きてあの空き地へと帰るんです……」
再び茜は階段から三階、そして四階へと姿を消した。

秋子は動揺していた。
名雪が、この校舎に入ってきてしまったのだ。
当初の計画では、単独行動している者から順番に仕留めていくつもりだった。それから、ゆっくりとあゆを捕獲——レーダーに表示されるあゆの番号は、死者の番号と照らし合わせて、すでに割り出している。
もちろん、あゆに危害を加える気はなかった。
それをするのは名雪なのだから。
……だが、その名雪の身に危険がせまっている。
(本当は一人ずつ消すつもりだったのですけれど……はやく終わらせないと……)
名雪と、あゆ、そして他の参加者の位置を確認しながら三階の教室へと入った。そこは、多分音楽室であった。その証拠に教室の前方にグランドピアノが鎮座している。
名雪が建物に入ってきたことによって秋子は、あゆを捕まえ、名雪と合流し、そして、名雪の入ってきた場所から抜け出す計画へと変更した。
だが、あゆがいると思われるであろう教室に、二人の人影が接近していた。あゆを捕獲しようとすれば、戦闘を避けるのは難しい状況にある。名雪の状態を考えるとこの時間のロスは惜しい。
(どうするべきなの？　先に名雪と合流するか、あ

ゆちゃんはこの際あきらめるか、それとも、当初の予定通り全員消すか……）
レーダーで名雪の、そして他の者の位置を確認しながら秋子は大きく息を吐いた。
秋子はこの島に来て、初めて――取り乱していた。

370　残された人達

私達は唐突に合流した。
もちろんいきなり殺されかけた七瀬さんの怒りを抑えるのは大変だったけど……兎にも角も、私達姉妹は合流できた。
あとは……耕一さんと楓だけ。
話によれば初音は耕一さんの消息を知っているらしい。すぐにでも聞きたいところだったけど、今は事態が切迫している。
もしかしたら、閉じ込められてしまったのかもしれないのだから。

梓が、今あゆちゃんを迎えに行っている。
本当はついていきたかったけど、そうもいかない。
ここには七瀬さん、そして初音がいる。
二人を残していくのは危険過ぎる、かといって四人で行動するぐらいなら梓か、私一人であゆちゃんを迎えに行ったほうがまだマシだ。
だから私が行こうとしたんだけど……
『千鶴姉はここで待ってて、あゆを連れてくるから！』
そう言って、私の言葉も聞かないうちに飛び出してしまった。
今、私達は保健室の隣、会議室（……だと思う）にいる。死体のある場所に三人でいるのは気が重すぎたから。
一部屋離れたこの場所でも、放置された死体からは嫌な臭いが漂ってきていて、初音達の嗅覚を苦しめている。……私は、こういうことに慣れているからまだ平気だけど。

梓達が戻ってきたら初音の持つダイナマイトで入り口を爆破して脱出しようと思う。
火はないが、初音の持つ銃で遠距離から誘爆させればなんとかなるはず。それでもダメなら、調理室から火種を持ってこなくてはならないだろうけど……。
さすがに、ダイナマイトで昇降口を爆破したところで鉄筋の校舎が崩れ落ちる心配は無い……と思う。
不安なのはその行程であの発砲した人や、初音を襲った人に再度襲われやしないか……。
「梓……」
ややあって銃声……そして爆発音。
私の目の前が、一気に暗くなった――

371　縁

銃声。叫び。爆発音。
今度は二階で戦いが始まっていた。

「千鶴お姉ちゃん……！」
天井を透視しようとしているかのように、険しい表情で空を睨むようにして、歯を食いしばる千鶴の手を、初音が軽く握る。
「初音……」
躊躇い。守るものの選択。どちらも捨てられないのならば。どうすれば、良いというのか？
私はどうして、いつもこんな選択を強いられるのだろうか？
自然と、握った手に力が入る。
苦しみに耐えるかのように。
ぐっ、と。
初音が握り返す。はっとする。
……この子は、こんなに力強かっただろうか？
「梓お姉ちゃんを、助けに行ってよ」
「私たちなら、だいじょうぶ」
七瀬と初音が、笑顔で言った。
「あなた達……」

素敵な、笑顔だった。
千鶴は初音たちと、いくつかの事柄について打ち合わせた。そしてダイナマイトを一本だけ、貰い受ける。
「私、梓とあゆちゃんのところに行ってくるわ」
改めて声にする。
決意が目に光を与え、身体に力が漲る。
「だから、二人もがんばってね」
暗い教室に似合わぬ明るい笑顔をうかべ、初音を軽く抱擁し、七瀬の髪をすいてやりながら千鶴ははっきりと口にする。
「それじゃ、七時に」
それは打ち合わせた、脱出の時間。幸い学校だけに、時計だけはどこにでもある。離れていても同時行動は可能なのだ。
生きてさえ、いれば。

からりと乾いた音をわずかに立てて、千鶴は暗い廊下に出る。階段を上がろうとしたとき、視界の隅に人影がひっかかった。
（……初音を襲ったという、女の子かしら？）
目を細めて闇に目を凝らす。トイレのほうだ。その人影には特に身を隠そうとか、そういう配慮が全くない。もしも里村さんという娘なら、もう少し警戒しているだろう。
気配を殺し、様子をみる。
「お母さんどこかな？」
人影は、少女は、何度もそう繰り返していた。どこかがおかしい。そして、何かが気になる。
「あゆちゃんどこかな？」
繰り返される、調子外れの明るい声。あれは里村茜ではない。髪色は亜麻色ではなく、青だ。
おかしいのは、そして気になるのは……千鶴は記憶を掘り返す。そうすることが、極めて重要だと思った。

（……お母さん⁉）
母子。そしてあの髪。あれが水瀬名雪、なのだろうか？
（縁が、あれば）
秋子と交わした言葉。思えば、あの出会いなくして今の自分はない。
方向を見失っていた自分の意志が、今の健全な状態にあるのは、秋子のおかげでもあるのだ。
ならば、放ってはおけない。この小さな闘技場に、あの娘が一人で居ることは、あまりに危険すぎるから。

「水瀬、名雪ちゃん？」
「うん……おねえさん、だあれ？」
「あなたのお母さんの……お友達、よ。お母さんを、探してるんでしょう？　私も妹を探しているの。一緒に、探しましょう？」
にっこり笑って手を差し出す。年下の女の子と仲良くなるのは、得意なほうだ。
「うんっ！」
名雪は元気に、この建物の中では異様なほどに明るく答え、手を握った。
千鶴は名雪の手を引いて、階段を上る。
名雪の手は、冷たかった。初音の手の暖かさが、消えてしまうような気がした。
（初音……）
不安が走る。だが後戻りはできない。
（無事で居てね、初音）

こうして千鶴は、名雪を保護した。
秋子が——名雪の母が、梓を襲撃していたことも知らずに。
（何だってこんな、とんでもないのが二人もいるんだ！）

銃撃と斬撃をどうにかやりすごした梓は、引き換えにあちこちをぶつけて階段を転がり落ちていた。
だいたい二人して、あんな澄ました顔してよくもまあ、えげつないと言うかなんと言うか。
千鶴姉並みだよ、と声にだして言ったとき。
当人と、目が合った。
「呼んだかしら、梓？」
「うわ、ち……千鶴姉……っ！」
張り付いた笑みと、引きつった笑みが交差した。
梓にとって先の立ち回りと同じような、短いけど長い長い緊張の瞬間が続いたが。
その娘、隠し子？　と名雪を指差すに至って容赦なくハタかれた。

「ふーん、お母さんかあ」
踊り場で、三人身を寄せ情況を交換し合う。
名雪はその間、二人の制服のフリフリを嬉しそうにいじってみたり、イチゴサンデーお願いします、とか言ってみたりしていたのだが——
「とりあえず、あゆの所にいかないと」
——その一言に、反応した。先ほどの異様さを、再び発揮して。
「あゆちゃん!?　あゆちゃんいるの!?」
叫ぶ名雪。
「知り合いなの!?」
梓が驚く。
千鶴は既に知っていた事だが、それでも反応の異様さに驚いた。
「お母さんがね、あゆちゃん連れてきてくれるの、それでね、わたしね……」
その後の台詞を心に留めておくのは、あまりに辛かった。
そして、理解した。
……名雪が、正気を失っている事を。

（これも、縁だというのかしら？）
千鶴は誰にともなく、問いかける。
答えなど期待してはいなかった。
ただ運命が、無機質に横たわっているだけだった。

372 ――螺旋

少年は、葉子の行動の意味を知らなかった。
葉子は、少年の怒りの意味を知らなかった。
二つのすれ違いが、思いの螺旋が、静かに、森の中で波及する――。
――いつから、こんな風になってしまったんだろう。
――どうして、こんなに怒りに囚われているんだろう。
――この島に来るまで、全然こんなことはなかったのに。

少年は、棒を拾い上げると、そのまま彼女に放り投げた。
――生きる理由が、欲しかった。
――闘う理由が、欲しかった。
――殺す理由が、欲しかった。
――どれもこれも、何か違う。
――人間のように、振る舞ってみたかった？
――そうかもしれない。
――最初から、人間じゃなかったわけだし。
「不可視の力……それは確かに君たちにとっては他者に対するアドバンテージだ。しかし……御明察の通り、僕を相手にする場合だけは状況が異なる。不可視の源流を相手に、不可視の力では戦えない」
葉子は、槍を投擲したままの体勢で座り込んでいる。
コロコロ……、と棒が転がってくる。

そして、葉子の膝までたどり着くと、ぶつかって止まった。
だが、葉子にはそれを拾い上げる余裕が無かった。目だ。
ずっと、少年の目を見続けていた。
ずっと、少年の目に縛られていた。
そこにある深い悲しみを前に、心が停止していた。闘わなくてはいけないのに。
殺さなきゃいけないのに。
自分の心の中の何かが、いつしかそう動くことを拒絶し始めていた。
分からない。何が、そんなに悲しいのか――。
「間違ってはいない。確かに、今後不可視の力が復帰する可能性があるとするならば、そうなる前に、一秒でも速く僕を殺すべきだ。それが、生き残る唯一の術かもしれない」

……震えていることに、気づかない。
……歯をくいしばっていることに、気づかない。
……涙が込み上げていることに、気づかない。
「……さあ、足掻いて、もがいて、僕を殺してみせてくれ。そうしなければ、僕が君を殺す。それが君の望んでいることなんだろう？」
言葉の苛烈さが、視線の悲しさに二律背反。
どうして……私は、彼を殺そうなんて思ったんだろう。
こんなに……、こんなに可哀想な笑顔を見る事になるなんて。
葉子は揺らぐ、心の深層で初めて揺らぐ。
死への恐怖と、殺人への恐怖。
そのとき。

――かちゃり。

投げ出した右手が、何かに触れた。
これは、何？

――それは銃。
――鈍色に黒を照り返す。
――少年が置き捨てた。
――人を殺せる武器。

少年は目をしばたいた。
それは銃を失念していたことの悔念か。
それとも彼女がそれに気づいたことの満足か。
恐る恐る、葉子は拳銃を拾い上げ、トリガーに指を通す。
重い……だが片手で持てないほどでもない。
それなのに、実態以上の何かの重みに圧されて、
葉子はそれを両手で支えなくてはならなかった。
銃口の先には少年。
少年は、動かない。

ただ、彼女のぎこちないその一挙手一投足を、まるで見守るかのように、ただじっと、そのままで。
葉子は震えていた。
……なんて、引き金が遠い。
それを見た少年が一言、言った。
「――どうだい、人を殺せる力を持った感想は？」。

373 ――背反

――何を言う名を持たぬものよ。
　これが
　そちの欲しがっていたものであろう？

うん、確かにそうだ。この色鮮やかさ。
形だけだった笑顔に、本質をくれた。

――なればこそ、その感情に身をやつし
　人を滅ぼすもまた自然なりや？

最初の少女。それで回路が狂った。
これだけ死を拒んでいるのに、
これだけ殺意に魅惑されている。

——その醜さも合わせて人間。
　それでもなお、人に惹かれるか？

変わらない。人間の汚いところなんて、
君なんかよりずっと見てきている。
だから……そればかりじゃないって、
希望も知っている。

——人ならざる異形ゆえ。

同じ想いを、共感していた。

——徹頭徹尾の人でなし、その分際が今更。

そんな僕にも、できることがあった。
　背中で激しい痛みに喘ぐ郁美。
　手を繋いで楽しげに歩く詩子。
　知らぬ間に変わり果てた巳間。
　胸を赤く血に染めて眠る少女。

爪弾け
爪弾いてしまえ！

　違う
　そんなことは
　しない

撃たせてしまえ。
撃たせてしまえ。
撃たせてしまえ撃たせてしまえ撃たせてしまえ
　違う。
　違う違う違う。
心無きものよ、その虚の顎を以って
心弱きものを喰らい潰してしまえ。

――どうしてだろう。
　怒りで、人を殺したくなるなんて。

「引けばいい、その引き金を。不可視だろうが可視だろうが、そんなことは関係ない。君の殺意が確かなものなら、それは確実に僕へ届くだろう」
　目に見えないプレッシャーが蔓延する。
　拳銃を構えたまま、まるで迷子の子供のように、葉子は怯えている。
　そんな自分を……懸命に偽りながら。
「――人を殺すとは、そういうことだ」
　少年は、動かない。

374 ――――贖罪

殺人のイメージ。
私の中の殺人のイメージ。
それは透き通った風や水を穿つように。
それは真っ白な綿飴を握りつぶすように。
それは暗闇の中を手探りで進むように。
それは下ろしたての寝巻きを着るように。
それは見えない壁に亀裂を探すように。
それは一本しか咲いてない花を摘むように。

死のイメージ。
私の中の死のイメージ。
それは赤土の溶けた泥水。
それは固く閉ざされた鉄牢。
それは感触を残さない撃鉄。
それは永遠にたどり着けないゴール。
それはこびり付いて拭えない血液。
それは私ノオ母サン。
ソレハ眼前ノ少年。

不可視のイメージ。
それは甘美な波動の軌跡。

拳銃のイメージ。
それは耐え難い痛みの表象。
凍てつく波動が、私を貫く。
その先に、よぎる、紅。
空っぽの心が、指先に力を込める。
撃つの？　……私。
銃口。その先に目標。その向こう側に笑顔。
誰の？
少年？
……お母さん？

そして、次の瞬間、トリガーを、引いた。

——どうして、こんなことになってしまったんだろう。
あやふやな戦意に心を軋ませたまま、どうして私はここに立っているんだろう。
私はぐるりと周りを見渡す。
音の無い世界。
時の止まった世界。
するとそこに私は奇妙なものを見つける。
あれ……これは、私？
目尻に涙を溜めて、両手で拳銃を支え、そして今、正にそれを放とうしている。
あれ……違う。もう……銃弾が放たれている。
あれ、でも止まってて……分からない。何これ。
その銃弾が向かう先は……人だ。
あれ、この人は懐かしい人だ。
前に会ったことがある。
でも何でこの人がここに？
穏やかな笑顔……あれ、でも私の見たことのあるそれと少し違う。昔より色鮮やかで……その後ろに別な思いを隠し持っている笑顔。
なんだろう、これ。

怒ってるの？
何で？
分からない。
でも、笑ってるけど凄く怒ってる。
だから、それを見た私は、訳が分からなくなって、怖くて、悲しくて、それで発砲した。
銃弾が届いたら、あの人が傷つく。
ううん、死んでしまうかもしれない。
何でそんなことしたの？
……頭、痛い。考えたくない。
私はそこから目を背ける。
すると今度目に入ったのは……小山。
何これ、変なの。
こんな森の中で、しかも二つも盛り上がってるなんて不自然。
――よぎる。
彼が拾い集めていた枝の欠片。
彼が拾い集めていた花びらの欠片。
……何、そんなところに枝とか、花なんか飾って。
何の意味があるの？
あれ、でも私さっきそこに思い切り飛び込んで、それで……。
ぱっ、と彼の方を向く。
もちろん変わらず笑顔のまま。
迫り来る銃弾を見つめているのかそうでないのか。
彼が小脇に抱えているもの、それを見る。
それは本だ……私にとっては馴染み深い、教典。
あれ……装飾が違う、なんだろう。読んだことの無い古い版のものなのだろうか。
黒塗りの表紙と、分厚い冊子。
刻印は見えない。でも……まさか……これは。
……偽典。それは旧教から死に纏わる記述を収集したといわれる異色の外典。
力を求めることにだけ専心したＦＡＲＧＯで、もはやそんなものを手に取る者などいないというのに。

――それで、ようやく気づいた。

止まっていた歯車が、ようやく回り始めた。
ここまで追い詰められなければ……気づくことの出来なかった怒りの理由。
あ……あああ……。
戻る。本当の私へと、復帰する。
視界が一致する。銃口を通し、少年を見据える私へと。
放たれた銃弾が動き出す。
飛ぶ。彼へ向かって、真っ直ぐに。
私は、彼に言った。
目尻に溜まっていたものが、頬を伝って、落ちた。
「――――――――さい」
その瞬間、彼がクスッと笑ったような気がした。

375　――希望

『――いずれ、ロスト体であろうとそれが不可視の力を持ったもの以外と相対した際には制御体と全く遜色の無い力を発揮する。その力の顕現は指向性を持ち、そこらの銃火器に類似点も多いが、その破壊力はそれを超えるところにあるのは周知の事実である。ロスト体排除の鉄則は先手必勝にあるが、それは裏を返せば我々に不可視の力を防御しきれないことを示す。我々はその状況を打破すべく究極の防御機構を構築したが、その軽量性と反射性の維持は最終的に我々の力だけでは成されず、結局不可視の力によってコーティングすることによって維持されることとなった。不可視に相対し得るものは不可視のみと言う原則に、我々はまたも直面することになった。しかし結果としてこの機構は一般的な銃火器のそれを完全に打ち返す実際兵器としての付加価値も

付いた。この利点は一般兵においても擬似的に不可視の力の恩恵にあずかることの出来るということだが、その生成は今のところ彼を介してのみでしか成功を見ず、またそのコストの問題から見てもまだ兵装は遠いと見られる――』

「第X次定期報告抜粋」

まあ……、そもそも銃を向けられているのは僕なわけで。

それなのに、どうして僕がその銃を向けている当人を威圧している構図なのか。

もっとも、それを異常に思わなかったような心境だったからこそ危険ではあった。

囁きに膨張した悪意が溢れ、彼女を本当に殺しかねなかった。

僕の中の悪意、僕の外からの悪意、知っていた様な気もするし。知らなかったような気もするし、見て見ぬ振りをしていた気もする。

あれが、本当の僕だとでもいうのだろうか。

……分からない。今は、まだ。

眼前には鉛の玉、高速で接近して、僕を穿とうとする。

これが……彼女の殺意の結晶なのか。そう考えることは単に僕のいじけで、意味の無いことだった。

何故なら、それより先に届いたものがあるから。

「――――ごめんなさい」

その一言で

――気持ちが、解けた。

フッと、頬が緩んだ。

銃弾が接近する。

僕はおもむろに抱えていた本を真ん中くらいから広げる。

銃弾が接近する。

僕は広げた本をそれに向けて掲げる。

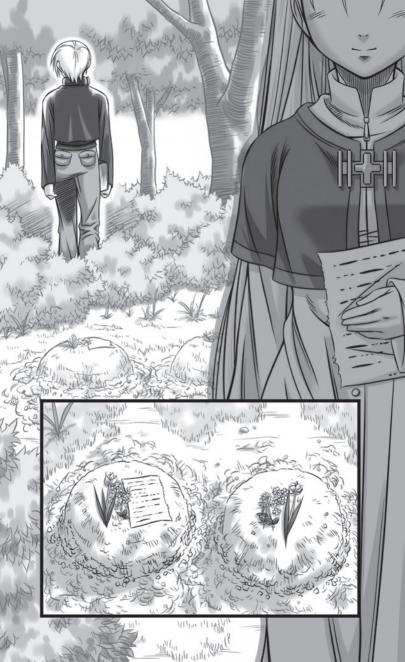
そして、激突。
——銃弾は、その軌道を達成することなく、あさってての方向へ飛んでいった。
葉子を臨む。
彼女は悲哀と悔恨と……それに困惑を混ぜ合わせた表情でなお……呆然としていた。
気の毒といえば、そうかもしれない。
だがそれも致し方ない。
何せ、僕を怒らせるなんていう珍しいことをしでかしたのだから。
ただし。
「……その言葉が、聞きたかった」
——成果としては、悪くない。

——偽典。それは死を収集し刻印した書物。
それは全篇を通じて死に敬服する立場をとっている。それが故に、そこに収められた葬送句も少なくない——

「……と、こんなところかな。やっぱり僕なんかはダメだな。君のような女性に助力を講じてみるとよく分かる。少なくともこれのほうが〝らしい〟じゃないか」
「そうでしょうか……特に最初のものと変わらないような気が致しますが……」
「いやいや、多分こっちのほうが彼女たちも喜ぶよ」
談笑が聞こえる。一時の戦慄が、まるで最初からなかったものであるかのように。
小山の片方にはまたしても枝が。しかし今度は最初のような無骨に節ばったものではない。
それは若木の枝だ。みずみずしい緑の葉をつけ、そこには確かな未来への希望が見える。
小山の片方にはまたしても花が。しかし今度は一輪が捧げられているのではない。
それは雑草にまぎれて生える小さな花たちの束だ。そこには今を生きる生命の息吹が漲っている。
葉子はしゃがみこんだまま、両手を組んで祈りを

捧げている。
その一方で、少年は土で汚れた両手をパンパンッと拭っている。
「『祈りは、誰が為に――』」
少年が、ぼそっと呟いた。
すると、葉子がそれに呼応するように言った。
「『――彼の地にある、貴女の為に』」
それを聞いた少年は目を丸くした。
「驚いた、教典の文句をちゃんと覚えていたか」
「これでも、真面目な信者のつもりですので」
つん、とおすましをしたかのように葉子は答えた。
「――死を汚すことは許されない」
心に刻むように、葉子は一人呟いた。
――先ほどの一戦から程なくして、葉子は自らのことを少年に伝えた。
自分が高槻に従っている振りをしていること。
現在の命令は巳間晴香の連れの抹殺であること。
晴香は高槻の策略に陥れられたということ。
自分が少年のことを背信者だと思っていたこと。
「おいおい、それはひどいな」
最後の内容にだけは、流石の少年も苦笑した。
「……で、僕のことはもう殺さなくていいのかい？もしかしたら寝首をかくかもしれないよ」
「あなたが最初からその気でしたら、私はもうとっくにやられています。それに……」
葉子はそっぽを向いた。
「もう気が失せました」
「あはは、それは恐縮」
と、そこで少年は二つのものに気づく。
一つは、銃弾を弾く時に落とした偽典の頁一枚。
もう一つは葉子が目くらましに使ったケープ。
少年はその二つを拾い上げると、そっと葉子に差し出した。
「……ま、こっちの一枚は餞別。効果の程はさっきご覧の通り。お守り代わりにでもしてくれ」
葉子は黙って頷くとそれを受け取った。

ケープを肩にかけなおした葉子に向かって、少年はぼそっと言った。
「巳間の妹のことだけど」
ぴたっ、と葉子の動きが止まる。
「もし……出来ることなら救ってあげて欲しい。そうでないと、あいつが浮かばれない」
言って……墓標の片方に目をやる。
「……それは、私もお願いしようと思っていたことですよ」
ケープを結ぶ手を止めて。葉子は優雅に微笑した。
「さて、じゃあもう行くかな」
少年はパンパンと膝の辺りの埃を払った。
「あ、そうだ。郁未とは会ったかい？」
「いいえ」
葉子は首を横に振った。
「どこかで会ったら、あなたのことをお伝えしておきましょうか？」
すると今度は少年が首を振った。
「いいよ。――一月に満たない同棲だったけど、結構彼女のことは分かってるつもりさ。こんな状況なら彼女はどうするか――」
「……毒を喰らわば皿まで、ですか」
「その表現は……、いやまあそんなところだ。高槻はさぞ猛毒だろうよ」
少年はそう言いながら苦笑した。
「じゃ、そういうことで僕も毒蛇退治に行ってくるよ。生き残っていたらまた会おう」
そういうと、少年は駆け足で茂みに突入した。
その唐突さに目を丸くした葉子は一瞬呆ける。
しかしすぐ気を持ち直して叫んだ。
「――高槻の、クローンに、気をつけてぇぇっっ！」
その言葉に、走り出した少年は急停止を余儀なくされた。
キュッ、と音がするかのように方向転換すると、感情が見えない表情でつかつかと戻ってくる。

思わずその様態にぎょっとして葉子が固まってい
ると……。
「……クローンって、何？」
……それから、少年にそのことを説明するのに葉
子は少しの時間を費やした。
「なんだか……めんどうなことになったたな」
ポリポリと頭を掻きながら、少年はそう呟いた。
「あの顔が複数並ぶのは気持ち悪いから？」
「本物がどれだか区別しにくいからねぇ」
同時に、互いの言葉が出た。
「……………………」
思わず、沈黙。
「……成る程、それが君の本音か」
「わ、私はあなたの気持ちを代弁して――」
葉子は思わず顔を赤くしてそう言った。
「ふぅん………」
少年は葉子のことをじっと見つめる。
葉子はその視線から恥ずかしそうに目線を外しつ
つ、なんとか耐え忍んでいる。
「……ま、いいけどさ」
少年は肩をすくめて笑った。
そして、つかつかと今度は葉子の脇を通り過ぎて
いった。
「じゃ、今度こそ」
そう言って、少年は森の中へ去っていく。
さっきの教訓か、今度は走っていない。
彼の背中を見送りながら――ふと、その視線を下
げる。
そこには、先ほど整えなおした二山の墓標がある。
――そのとき、埋葬という言葉が、なぜだか今の
葉子には、とても暖かく感じられていた。

詩子へ。
——一応、まだ殺害者数カウントはゼロだよ。
かしこ。

376　脱出のために

四階には、まだ戦渦は広がっていないようだった。
階下のあちこちから争う音が聴こえる。
この学校内に何人いるのかはわからないが、最終目標は生きて帰ること。
その為に、茜は自分を狙う者を容赦するつもりはなかった。
だが——
（……軽率すぎました）
思い返す。
最初に襲われた時、あの少女は自分を狙っているわけではなかったのだろう。
しかし、予感があった。
あそこで殺しておかないと、後で確実に狙われる、と。
だから、発砲した。
銃弾が当たらなかったのは何故だろうか。
予感で人を殺すことを、やはり無意識のうちにためらったのだろうか。
澪を殺した時からの自分では、そんなことはしなかっただろう。
祐一と出会ってからだ。中途半端になってしまったのは。
（……私が死んだら、責任、とって下さいね？）
自分の持ち物を確かめる。
ナイフ、ガバメントと予備弾丸、高槻から奪ったベレッタと予備マガジン、サイレンサー付き銃、メリケンサックに……。
（……忘れてました）
手榴弾が四つ、転がり出てきた。
早めに気付いていれば、これを使って壁でも破り、

脱出できていたのに。
（……迂闊すぎです。やっぱり、こういうことは向いてませんね）
既に四人の参加者と二人の高槻を殺しておいて、何を思っているんだろう。
茜は自分の思考のおかしさに、くすりと笑った。
クラスの男子生徒が見たら、半数は一目惚れ間違いなしの笑顔だった。
やることは決まった。
一階の壁を手榴弾で爆破し、脱出する。
この混戦状況を乗り切る自信はなかった。
（……手強そうな人が何人かいるみたいです。……それに、また後先考えない行動を取るかもしれません）
慎重に気配を探り、三階へ。
そもそも一番のミスは、二階に突如躍り出た人影にうろたえ発砲したことだった。
相手の出方を窺ってからでも、あの距離では充分間に合ったはずなのだ。
人影の動きが妙に「慣れ」ていたのと、茜自身この状況に混乱していたこともあり、発砲してしまった。
あの人影に味方がいたなら、茜はそれまで敵に回したことになる。
信頼できる人間は、ここにはもういなかった。
全てが、敵とみて間違いなかった。
（……早く、脱出しましょう）
足音を殺し、二階へ。
（……この銃）
階段を降りる途中、ガバメントを見て気付いた。
（……弾切れです）
気付いてよかった。
もしも知らずに戦闘に巻き込まれていたら、ここぞという時に大きなミスをするところだった。
弾を交換しようとし、ふと思いとどまる。
ある一計が、茜の中に浮かび上がった。

いささか、ギャンブルではあるが、試してみる価値はあった。
相手が乗ってくるかにかかってはいるが。
ガバメントの弾倉はそのままにし、サイレンサー銃に持ち替えた。
一階へ。
踊り場で。
その少女と出会った。
「兄さんの仇……見つけた」

377　鬼と羅刹

点灯する数字。
それは位置座標が同じ——つまり重なっている事を示す。017、020、043、061、091。なんと六つの数字が重なっていた。
少しだけずれた所に021、069。中央少し校庭寄り(昇降口か？)に079。
反対側の階段に移動する013。いや、043も反対側へ向かっている。
もちろん、この部屋には私……090しかいないはずだ。
それは残る五人、いや四人が上下の部屋に居るという事だ。
名雪……091が、誰かと一緒に居るかもしれない、という事だ。

そこでふと、往人と交わした会話を思い出す。
『それならば、おそらく番号は二十三、二十四、二十五のどれかじゃないかしら』
神尾がその辺りならば。冷や汗が背を伝う。
(柏木が……二十番前後のどれかである可能性は高い。とても高い)
校舎に突入する頃から、漠然と抱いていた予感は現実味を増していた。あの黒髪の鬼と、再びまみえるのだろうか。

017や020、021が姉妹ならば。私は幾人の鬼を、打倒しなければならないのだろうか。それでも私は、行かねばならない。
　名雪の、ために。

「うぐぅー、狭かったよぅ、怖かったよぅー！」
　両手にたい焼きを抱えたあゆちゃんが、ズリズリと引き出される。
「悪い悪い、今度は一緒に行くから、許してな」
　引き摺ることに苦労はしたが、あゆちゃんは無事だった。
　しきりと梓にうぐうぐ文句を言うが、たい焼き効果は覿面（てきめん）だったのだろう、それほど怒ってはいない。しっかりと梓に抱きつきながら話しかけている。
　そんなあゆちゃんの背中を、名雪ちゃんがポンポンと叩いた。
「ね、ね、ね、あゆ、あゆ、あゆちゃん！」
「あゆあゆじゃな……名雪さん⁉」
　きゃー、わーい、と両手放しで喜ぶ二人だが。あゆの知らぬ危険が、名雪にはある。
　わたしは梓と共に、緊張した面持ちで二人を見つめて――いや、名雪ちゃんを「監視」していた。

　ふと梓の視線が、僅かに揺らいだ。そして驚きと、理解の光が浮かんだ。
　楽しげに話すあゆちゃんを、ぐっと抱きしめて名雪ちゃんから引き離す。その意を汲んで、私は名雪ちゃんの手を引く。冷たい手を、ぐっと引く。
　そして私は、振り向いた。そこに立っているであろう彼女を、迎えるために。
「……こんばんわ、秋子さん」
「こんばんわ……千鶴さん」
　秋子さんが答える。彼女の強さに陰りは感じなかったが、今は酷くやつれて見えた。
　きっとあの時の、わたしもそうだったのだと思う。

（千鶴姉、このひと……）
梓が囁く。解っている。梓を殴り合いで圧倒できる人間など、そうそういない。
「秋子さん。名雪さんを……お返しします」
とても儚い、小さな冷たい手を放して、名雪ちゃんを送り出した。
「ありがとう。感謝するわ」
秋子さんは慈しむように名雪ちゃんに手を回して、柔らかな笑みを浮かべる。素敵な、本当に素敵な笑顔だった。
だけど。なぜ、この母子はこうなってしまったのだろう。
「でも、この娘は――」
わたしは梓と共にあゆちゃんの前に移動し肩を並べる。
「――渡せません」
梓が構える。
わたしと秋子さんは、そのまま。
戦いは。
いや、殺し合いは――もはや避けられないのだろうか？

378　ぼくの戦争　――希望の弓――

闇がすべてを支配する時が訪れる。微かな光と蠢く心臓の音が静寂に融けようとする時間が、草むらの中で仮眠をとっていた七瀬彰にも平等に訪れる。
少しだけ身体に寒気を覚えて、ゆっくりと七瀬彰は目を覚ました。既に日は完全に落ち、辺りは闇に包まれている。無謀を勇気にし、勇気を力にするには十分な闇だった。
目をこすり闇に目を慣らす。手元の水をごくごくと飲み干す。次第に闇に慣れていく目、少しずつ戻ってくる指先の感覚、きしむ骨、歪む筋肉、心臓の音がゆっくり高まる、そして心の中に不安が募る。
初音は、冬弥は、由綺は無事だろうか？　願わく

ば、自分が行動を終える前までに、誰も死なないでいてほしい。すべてをぶち壊しに出来る確率などゼロに等しいし、自分のちっぽけな勇気が野蛮な暴力の前に屈服させられる瞬間も、まるで映画のように明瞭に脳裏に浮かぶ。

それでも——自分が死ぬまでは殺し合いをするな。

願いながら彰は門番を眺める。サブマシンガンを小脇に欠伸をしている様子が見えた。建物の明かりに影となって映る守衛の姿が、彰の目にはやたら大きく見える。落ち着け。ゆっくり休んだ自分と違い、彼らは休む事が出来ない。隙をつけばサブマシンガンの一つや二つ克服できる。大きく見えるのは自分の心に不安があるからだ。

彰は草むらの中で一つ息を吸い、もう少し考えようと思う。臆病ではない、これは慎重なのだ。言い聞かせろ。自分はこの建物に、たった一発しか弾丸の無い命の拳銃の、その貴重な照準を定めて構わないのか。叔父や高槻がここにいるという確率は低いだろう、こんな危険な場所にいる可能性なんてミジンコよりも小さいのだ。

だがそれならば彼らは何処にいるというのだろう。歩き回って探したが、他にめぼしい建物などなかった。昔は学校だったと思われる古い建物はあったが、そこに兵士のような存在はまったく見受けられなかった。少なくともあの狡猾な高槻が、そんな危険な場所に身を置くわけがない。奴は必ず多数の護衛を携えている筈だ。

考えろ。少なくとも高槻は、奴は確かにこの島の中にいる筈だ。この島の中にいる筈なのだ。

爆弾を爆発させる仕事は、恐らく高槻の仕事なのだから。

長瀬一族はこの殺し合いの主宰である。爆弾の管理などという、言い方が悪いが瑣末な仕事を、長瀬一族自身がするわけもない筈だ。一方、自分たちに殺し合いをさせるのが目的である以上、爆弾をむや

みに使う事は許されない。だから言うまでもなく、高槻以外の、高槻以下の人間が爆弾を扱って良いはずがない。反乱・即・爆発の状況から考えるに、責任者は間違いなく高槻だ。
爆弾を操作するのは高槻の仕事だ。彰はそう結論付ける。慎重に考えろ。ここまでに間違いは無い筈だ。順番を踏んでしっかりと考えるのだ。小さく深呼吸。爪を噛みながら彰は指の震えを落ち着ける。唇まで震えていて上手く爪さえ噛めないことがもどかしい。
爆弾の操作は何処でも出来るわけではない。
口の中で言葉にして反芻する。
彰は昔バトルロワイアルという小説を読んだことがあるが、あのとき参加者を縛っていた爆弾は、『禁止エリア』に侵入することによって爆破するものだった。しかし自分たちが今行っている殺し合いゲームにはそういう縛りは無い。爆弾は飽くまで、反逆者を抑え付けるためだけに使われている。だから、爆弾一つ一つが、違う。
完全に個人特定の上で爆発をさせている、ということから、爆弾にはひとつひとつ識別コードがあることは間違いないと思う。その為には装置が必要だ。爆発させる爆弾のコードを特定し、遠隔操作で爆発させるための装置が、だ。遠隔操作ということは、電波か何かで操作しているのだ。ここまでは想像に難くない。
彰は空を見上げる。見上げ、自分の目の前に屹立する建物が、恐らくこの島に存在する建築物の中で、一番高いものであることを確信する。
爆弾を制御し、好きなときに爆発させるためには妨害されない位置からの電波の射出が必要なのだ。だから高槻はここにいなければならない。
彰は確信とともにもう一度空を見上げる。目が闇に慣れる。建物の屋上に、通信用のものとは別の――大きなパラボラアンテナのようなものを見つけ

て、彰は確信を自信に変えた。
あれは間違いなく、爆弾の制御装置だ。それならば、少なくとも高槻はここにいる筈だ。自分の推論が的を外していて、高槻がこの建物の中におらずとも——少なくとも、高槻や長瀬一族と交信をするための通信機はある。

彰はごくりと唾を飲む。指先の震えが惨めなほど彰の勇気を削っていく。死ぬかもしれない、という事態がようやく彰の胸の中に染み込んで行く。白かった勇気が不安という鮮血によって赤く染められていく。唇を噛む。不安が魂に震えを呼び起こす。
「——こんなところで、今更臆病風かよ」
わざと乱暴な口調で、彰は自嘲する。握り締めた拳が痛いほどだ。彰は自分の根性の無さに呆れている。先ほどまでの勇気が紛い物のように思えてくる。
「生きて帰れるかは判らない。たぶん死ぬだろうさ」
彰は口の中で、自分にしか聞こえないような大きさの言葉を呟く。目を閉じ、美咲さんの死を聞いた瞬間の憤りを思い出す。すると馬鹿げたことに悲しくて涙が出そうになる。泣いてどうするんだ違うだろう。美咲さんの死を聞いた瞬間の怒りを思い出せ。
——黒い憎悪を勇気に換えろ。
「これ以上、死なせない」
呟く。
——決意の言葉は不思議なものだと彰は思う。ただ呟くだけで、勇気という名の矢を与えてくれる。
これ以上、大切な人が死んでいくのは嫌なんだろう？　その為に、自分が行かなければならないんだ。美咲さんが死んだのは半ば自分のせいだ。自分がもう少し賢くて強かったら美咲さんを死なせずにすんだのかもしれない。歯を食いしばれ。指の震えを抑えろ。落ち着け。勇気を出せ。頭を使え。走れ。自分は絶対に無駄には死なないのだと言い聞かせろ。

自分の命を、高槻と叔父達を殺す弾丸に換えろ。その為に僕には勇気の矢が与えられたのだ。
——この手に、希望という名の弓を握り締めて。
突入を前に、彰は最後の深呼吸をする。生きて帰れないかもしれないから、これが最期の深呼吸になるのかも、と思うと背筋に寒気が走ったその時、一つのことに思い至る。
爆弾が電波によって操作されているのならば。
そして、爆弾というものの特質を考えるならば。
上手くいくかもしれない、と彰は思った。

379　僕の罪

ヒトの心は弱くて脆い。
ヒトの心は儚く切ない。
ヒトの心は、容易く壊れる——

天野美汐（五番）は、前を行く長瀬祐介（六十四番）の背中を見ながら、ぼんやりと考えた。
何故、この人は、こんなに平然としていられるのだろう。
人が何人も死んでいるのに。
見知らぬ人に限った話ではない。彼も、私も、見知った人……大切な人を、失っているのに。それに……
つい先程の出来事を思い出す。
目の前で、銃を暴発させて果てた、女の子。
そして、後を追うように息を引き取った、ふたりの男女。
私たちが声をかけなければ、また、違った結果になっていたのだろうか？
……分からない。もう答えは出てしまったから。
やり直すことは、出来ない。
結果として、私たちが、声をかけ、三人は、死ん

だ。
なのに、何故、この人は、こんなに平然としていられるのだろう。
この人は、これまでも自分の身を省みず、私を助けてくれた。
そんな人を疑うなんて、自分はどうかしているに違いない。
美汐は必死で自分にそう言い聞かせる。彼こそが平常で、私こそが異常なのだ。
しかし、美汐の目には、彼の整然とした態度はひどく不自然に映る。
先程は、あんなにも悔恨の念を浮かべていたのに。
もしかしたら、すでに、この人も――
美汐の中で、何かが、音を立てて壊れた。
先を行っていた祐介は、暫しの後に、足を止め立ちすくむ美汐に気付き、ゆっくりと駆け寄った。
「どうしたの？」
美汐は思う。どうしたの？　どうしたの、って。どうかしているのは、私じゃなく……
「……祐介、さん」
ゆっくりと、美汐は、デリンジャーに手を伸ばす。
「うん？」
まさか美汐がそういった行動に出るとは思わない祐介は、不思議そうな顔で美汐を見つめるだけ。
だから、美汐も、思いのほか落ち着いて――
祐介に、その銃口を向けることが出来た。
少々特殊な能力が備わっているものの、長瀬祐介の精神面は紛れもなく一般人のそれである。
だから、先ほどの惨劇を目の当たりにして、ショックを受けていない筈はなかった。
だが、それでも祐介は、何でもなかったかのよう

に振舞った。
死んだ人間はもう還って来ない。それは嫌というほど知っていた。
後悔するなら、このゲームが終わってから、思う存分すればいい。
それまでは、今こうして僕の後ろを歩く彼女を守ろうと、そう決心していたからだ。
だから、彼女が不安にならないよう、後悔と、感情の渦を心の奥に押し込め、平然と、『いつも通りの自分』を演じてみせていた。
だけど今彼女は、僕に、銃を向けている。
それは彼女が、僕に信頼を寄せてくれない、何よりの証。

祐介は気づかない。
その演技こそが、美汐の信頼を、そして精神を奪う結果になったのだと。
美汐は、一緒に悲しんでくれる、同じ位置にいる人を求めていたのだと。

銃を構えたままの美汐。
その銃口を見つめる祐介。
時間だけが、過ぎていく。
やがて美汐が、ゆっくりとその口を開く。
「死んで、ください」
と。

その台詞を聞き、やっと祐介も思い至る。
彼女はやっぱり、普通の人なんだ。
だから、人が死んでも、平然と振舞ってみせる僕が、まるでおかしな人に見えるんだ。
(それも当然……か)
僕がここで彼女に殺されれば、僕は瑠璃子さんの所に行くことが出来る。
それは、ほんの少しだけ、魅力的な選択のように思えた。

少なくとも、今の僕は……天野さんを救えない。
これは、その罪に対する罰なのかもしれないと、そう感じた。
(――だけど)
彼女の手は、汚させたくなかった。
せめて、僕に対してだけは。
(――何を考えてるんだか)
自嘲気味の笑いが漏れ、それに美汐が反応する。
「何が可笑しいんですか！」
(何がって……自分かな)
美汐に背を向けて、歩き出す。
「何を――！」
聞こえない振りをして、祐介は歩を進める。
一メートル、二メートル。ゆっくりと、二人の距離は離れる。美汐の指は、未だトリガーにかかったまま。その銃口は、未だ祐介を向いたまま。
二十メートルほど離れ、祐介は美汐のほうに向き直る。
そしてその懐から、鈍い光を放つワイヤーを取り出し、言った。
「君が手を汚す必要なんて無い。僕が……自分で死ねば、それで解決する」
我ながらおかしな話だ、と祐介は思った。
解決する？　何が解決するというのだろうか。
僕は死に、僕の死を間近で見た彼女は、より深く心に傷を負う。
解決どころか、泥沼必至じゃあないか。
こんなのは間違っている。間違っていると分かっているのに、手は止まらない。
ゆっくりと、ワイヤーが、首に巻きつく。いや、自分で、間違いなく自分の意思で、巻きつけている。
(……参ったなあ。僕も無理に振舞ったツケが、ここに来て出たみたいだ)
やっぱり、僕も、どうにかなっているんだ。と、祐介は思った。だから、この手を止めたい、と思う

と同時に、早く楽になりたい、なんて、そんな事も考えてしまう。
（本当、どうかしてるんだ。僕も、彼女も、みんな――）

380　朝が来る

（私にはもう何もない、ってわけね）
静かな夜の公園を散歩するかのように、マナは暗い森の中をゆっくりと歩いていた。
（藤井さんにはもう逢えない。お姉ちゃんは私を……殺そうとした）
聖も、そしてついさっき、きよみまでもがマナを庇って、逝った。
マナは疲れていた。生きるとか死ぬとかそういう問題ではなく、ただ疲れていた。今はもう何も考えたくなかった。
何もかも忘れて眠ってしまいたかった。眠って、目が覚めたらすべて夢でした。……それを期待するのは間違っていることなのだろうか。
それでも、マナの足は惰性で前へ、前へと運ばれていた。既に、意志も目的も失われてしまった。
聖の妹、霧島佳乃。今となってはもう、崖の上で対峙した時の瞳のイメージしか残っていなかった。
（からっぽ……）
光のない、意志の力の感じられない瞳。空虚な瞳。あの時持っていた石をマナの頭に叩きつけるのに、何の躊躇もしないだろう――そう思わせる目だった。
（でも）
――今の私、きっとあの子と同じ目をしてる。
私も、もう何も考えていない。ただ、全部を投げ出して眠りたい。
（鏡、持ってなくてよかった）
やっぱり、こんな時でも自分のひどい顔は見たくないから。
この場でそんな発想が出てくるのが少し不思議で、

マナは無理にでも笑ってみようとしたが、上手くいかなかった。
その時、何かに足を引っかけ、危うく転びそうなところを慌てて踏みとどまる。
（なによ、もう……）
何気なく足元に目を落としたマナは、見た。
木々の隙間から差し込む月明かりに、その顔の部分だけが青白く浮き上がっていた。
「澤倉……先、輩」
転がっていた死体は、憧れていた先輩その人だった。
死体を座るように木にもたれかけ、服についた土埃を落とす。肌に飛び散った血を丁寧に拭い取ると、瞳を閉じ、両の手を胸の前で組ませた。穴を掘る道具はなかったが、これがマナにできる精一杯の弔いだった。
実際のところ、そこにあった死体が美咲のものだったから、というわけではない。他の誰の死体であっても同じことをしただろう。
それが、今ここに生きているマナ自身にとっての義務だと思ったから。
と、そこで、マナはハッと胸を突かれたように感じた。
（義務——生きている私の、義務）
マナの双肩には、二人の命が背負われている。死んだ人間には決して背負うことのできないものをマナは背負っている。
自暴自棄になることは許されない。誰でもない、マナ自身がそれを許すことができないのだ。
（ホントどうかしてる……こんなんじゃ笑っちゃいますよね、澤倉先輩）
マナは近くの木を思い切り蹴りつけた。硬い音がして、葉が何枚か落ちてくる。
（いつつつつ……目ェ覚ましなさいよ、観月マナ）
足に伝わる痛みがマナの思考をクリアな状態に引き戻す。

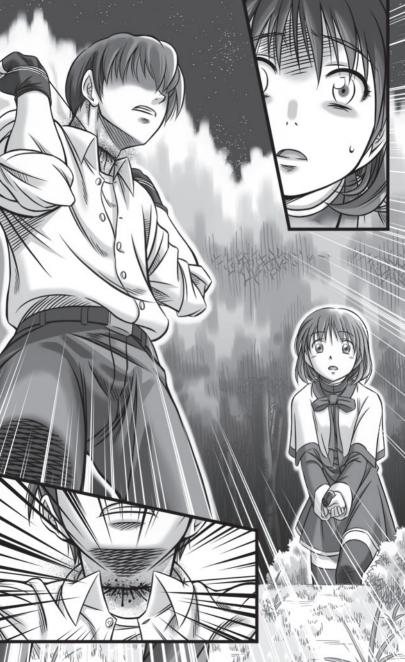
今やらなければならないこと。それはこの状況を脱却する方法を考えることだった。
（このゲームを終わらせるには、自分以外の全員を殺せばいい。……そんなのできるわけないし、させてもいけない。ならあの高槻とかいう男を叩く？無理ね。警護の人間もたくさんいるだろうし、それに）
——私に人は殺せないから。
そして、マナにはどうしても引っかかることがあった。
（この馬鹿げたゲームをあの男は『金持ちの道楽』とか言ってたわね。ということは、よ）
その金持ちたちがこの島にいるとは考えにくい。危険だからだ。恐らくは島の外の別の場所に集まっているのではないだろうか。
となると、この島からそこまでに何らかの、この島の状況を伝える連絡手段があるはずだ。
（このゲームの存在意義はそこにあるのね。なら……目を奪う？）
その連絡手段を断ち切れば、その金持ちたちの目的は果たされなくなる。
当然高槻のところには何らかの連絡が行くだろう。それを聞いて、高槻が果たしてどうするか。自棄を起こして、全員の爆弾を爆発させるだろうか。多分、それはない。金持ちの道楽、と言ってもただ殺し合いを見ているだけではあるまい。参加者はギャンブルの対象にされていると見て間違いない。
この島に参加者を集めるのにも相当の金がかかっているだろう。ならば、高槻が一瞬で全員の命を奪うとは考えにくい。
それに、島の状況が向こうにわからない状態では、どれだけの人が死のうと何の意味もない。
なら、どうするか。それはわからないが、焦って何らかのアクションを起こすことはほぼ確実だろう。
（その時ね。……勝負が決まるのは）
この島の、自分以外の人間が全てゲームに乗って

いるとは思えない。絶対にこのゲームを終わらせようとしている人間が、いる。
——それなら、私はその人たちを助けられればいい。
管理者側の目を奪うこと。そのためにできることを考える。
(この島の状況を外に伝えるとして、あちこちに管理者側の人間を忍ばせておくか……カメラを設置するか)
だが、前者はちょっと考えにくい。武器を持った人間が大勢いる場所に、そのためだけにそんなリスクの大きいことはしないだろう。
すると要所要所に配置されたカメラの映像を何らかの方法でそこに送っていると考えるのが妥当だろう。
有線のはずはない。自分たちを観察しているカメラから伸びるコードを参加者が見て、切らないわけがないからだ。
(無線……多分海は越えられないわ。この島のどこかに、きっと中継用のアンテナがある)
そのアンテナを見つけないことにはどうしようもない。しかし、どこにあるのかは想像がついた。
(この島の全域をカバーするために、カメラは相当数必要なはず……それだけの映像を管理するには相応の機材がいるわ。となると、どこかに本部として使われてる場所がある。アンテナも高槻も……そこね)
恐らく、警備も厳重を極めるのだろう。しかし、ここでむざむざ殺されるのを待っているわけにもいかなかった。
——このゲームを、終わらせる。
強い意志が、マナの瞳に宿る。これ以上悲劇が繰り返されるのはもうたくさんだった。
(澤倉先輩、ありがとうございました。やっぱり私……先輩みたいになりたいです)
月光に照らし出されて、美咲の顔はひどく穏やか

なものに見えた。
眠っているかのように見える美咲の死体に深々と一礼すると、マナはまた深夜の森の中を歩き出した。
その足取りに、もう迷いはない。
そして——また、朝が来る。

381　彼の傷、彼女の傷。

自分はどうかしている。
彼女もどうかしている。
みんな、どうかしている。
だったら、もう、こんなところからは、早く消えてなくなりたいと思わないかい？
呆然とした天野美汐（五番）の表情。それを見て長瀬祐介（六十四番）は思う。
僕がこんな死に方を選んだことによって、彼女はどう変わってゆくだろうか。
少なくとも、いい方向には変わらないだろう。
それなのに、僕の手は、これ以上ないくらいしっかりとワイヤーを握り締めている。
彼女を救いたいと思う僕がいて。
だけど、もう楽になりたいとも思う僕もいて。
今強いのは、後者。
——それに、こういう、悲劇の主人公的な役割も、一生に一回くらいは、いいかな。
そんな事も、ほんの少しだけ、思う。
美汐には、その行動が理解できない。
何故なら、長瀬祐介は、すでに正常ではない筈だから。
何故なら、長瀬祐介は、私も殺そうとしている筈だから。
だから、美汐には、祐介のその行動が理解できな

い。
　分かるのは、祐介は自分を殺そうとする意思がないのではないか？　という疑念が自分の中に生まれたことのみ。
　だからといって、自分はどうすればいい？
　もしかしたら、これさえも演技かもしれない、だけど――
　その答えが出る前に、
　祐介は、その手に力を込めた。
　鮮血が迸り、ワイヤーが祐介の首にぎりぎりと食い込む。
　答えは出ない。出なかったが、本能的に、美汐は駆けた。
「長瀬さん！」
　その声に、祐介はワイヤーを握る手を緩め、顔を上げると、美汐の方を見、微かに笑い、
　そのまま、うつ伏せに倒れた。
「長瀬さん！　長瀬さん！」
　抱き起こし、身体を揺さぶる。
　見たところ、死に至るような深い傷ではない。だが、痕は残るかもしれない。
　その傷をつけたのは、直接では無いにせよ、紛れもなく、自分。
　祐介がうっ、小さく声を上げる。
「長瀬さん！」
「ごめんね……天野さん」
　と、呻く様に呟いた。声を出すのも苦痛なのだろう、顔が歪む。
「なんで……なんで長瀬さんが謝るんですか……」
「なんでって、そりゃあ……」
　僕が悪いから、と言おうとして、祐介はごほごほと咳き込む。吐き出された真っ赤な血が、美汐の制服に吸い込まれる。

（……手当てを……手当てをしなくちゃ……）
自分の、そして少し悪いな、と思いつつも祐介のカバンの中を探る。何か応急処置出来るような物はないか、必死で探す。
勿論、ただ単に支給品が入れられていただけのバッグに、そんな物が入っている筈も無く。
（どうしよう……）
美汐は途方に暮れた。自分は、こうなってしまった原因だけ作って、後は何も出来ない。
ただ、自責の念にかられ、涙を流すことしか、出来ない。

ぱきり。

音。
反射的に、デリンジャーをその方向に向ける。
その銃口の先には、呆然と立ち尽くす一人の少女――観月マナ（八十八番）が居た。

382 刃

「……あなたですか」
踊り場から声をかける茜。
一階には、前に会った少女。
名前を、茜は知らなかった。
「死んで貰うわ。あの時、私を殺さなかったことを後悔するのね」
「……だから、勘違いです」
「黙りなさい。言い訳なんて見苦しいわよ」
理奈は相当疲れてはいたものの、瞳だけは獲物を前にした獣のようにギラついていた。

茜は内心溜息をついた。
（……今日は、私、甘すぎるみたいです）
「行くわよ」
言うなり、理奈は消火器のホースを茜に向け、発

射した。
　たちまち周囲は粉末で埋め尽くされ、視界は真っ白になった。
　このまま出鱈目に銃を撃つべきか。
　それとも、一旦下がるか。
　茜はどちらも選ばなかった。
　消火器から発射されるや否や階段を数段降り、手すりを飛び越え一階に着地した。
　こちらの視界が封じられるということは、相手からも見えないはず。
　そう判断し、一気に裏に回りこもうとしたのだ。
　着地の衝撃で足が痛むが、大したことはない。
　階段の方を見ると……そこに理奈はいなかった。

　消火器を発射するやすぐに、理奈は右手にナイフを持ち、左脇に消火器を抱えた状態で階段を駆け上がった。
　銃で撃たれる危険性は考えなかった。
　もとより分の悪い勝負だ、このくらいのギャンブルは仕方がなかった。
　死んだら死んだで、運がなかったのだ。
　だが、そこに茜はいなかった。
「!?」
　それを確認した瞬間、反射的に消火器を後ろに放り投げた。
　すぐさま振り向き、階下を見る。
　ガァァン!!
　不意をつかれた茜が、消火器を避けていた。
「なんで当たらないのよっ！」
　悪態をつきながら、ナイフを構え、階段を駆け降りた。

　銃を構えた途端、上から消火器が飛んできた。
「……っ！」
　すんでのところで、飛び退き、かわす。
　理奈は既に、ナイフを持って階段を駆け降りてき

ている。
　理奈に向かい銃を構え、何度も発砲する。
　そのどれもが当たらなかった。
　考えてみれば、まともに向かってくる人間に向けて銃を撃ったことはあまりない。昨日初めて銃を持った人間が、動き、自分を狙う標的を簡単にしとめられるわけはなかった。
　それでも、近くに来ればそれだけ当たり易くもなる。何度目かの発砲で、ついに、理奈の左肩をとらえた。

　痛みが走る。そんなものが何だ。
　兄さんの味わった苦しみに比べたら――
　撃たれてもなお理奈は走り、間合いに入った途端にナイフを振るった。
　ギリギリ、かわされる。
　相手も流石に馬鹿ではない、壁側に避けてくれればよかったが、廊下側に移動されてしまった。が、懐に入り連続でナイフを振るえば、自分の有利には変わりない。
　反撃の隙を与えず、ただひたすら、ナイフを振り続ける。
　刃を撃つチャンスは一度。
　もし外せば、
（終わりね……）

（……何か狙っているんですか？）
　右へ左へ、反射だけでナイフを辛うじて避けている。こんな状態では、銃で狙えやしない。
　一度無理に撃とうとしたが、その瞬間に右腕を狙われていた。
　腕にわずかに切り傷ができている。
（……毒でも塗ってるわけじゃないようです。……もしそうだったら、この傷だけで致命傷ですから、退いているはずです）
　思考だけは、相変わらず冷静だった。

(……相手の狙いをかわせば、おそらく私の勝ちです。……かわせなければ、負けです)
必死にかわしながら、相手を観察する。
汗が浮かぶ、疲れも出てきた。
それでも冷静に相手を見る。
武器はナイフ一本、左手は動作に流されている。
左手で何かを狙っているようには思えない。
だからといって、ナイフで隙を作るような攻撃もしていない。
(……流れに任せて、チャンスを待っている？……隙ができるのを？　違う、もっと別の何か)
相手の武器はナイフだけ……ナイフ？
そういえば、何かで見たことがあった。
ナイフの中にも、確か——
次の瞬間、茜がわずかに、ほんの少し大きく後ろに下がった。
理奈の目が光った気がした。

ナイフを振り始めて数十秒。
その瞬間が始めてやってきた。
相手に悟られてはならなかった。
だから理奈はあえて自分から狙おうとせず、ただ偶然を待った。
流れに乗ったナイフが、茜の胸の正面を通り過ぎる瞬間を。
訪れるチャンスを見逃すはずはなかった。
(当たって!!)
ナイフのスイッチを、理奈は押した。
ダンッ！
茜が大きく後ろにのけぞって——
そのまま体勢を立て直した。
少し遅れて、刃が床を転がる音。寸前で、銃のグリップで飛んできた刃を弾いたのだ。
狙っても簡単にできることではない。
最後は結局、偶然だ。

運命の神様は自分に微笑んでくれた。
ダンッ。
発砲。
今度こそ、理奈をとらえた。
腹を押さえて、理奈はゆっくりと、その場に崩れた。

383　一つの別れと次の挑戦

ゆっくりと、理奈に歩み寄る。
茜の服の袖はボロボロで、汗も酷くかいていた。
有り体に言うなら、疲れていた。
「……死ぬかと思いました」
理奈を見下ろして、言った。
「あっそ、私、には……そうは見えなかったけど。
余裕の、表情……だった、じゃないの……」
「……気のせいです」
「そう……」
理奈はふぅと、大きな溜息を一つついた。
「悔しい、なぁ……兄さんの仇、とれなかった……。
このままほっといて、いい……わよ。兄さんも、楽、には……死ねてないんでしょう？」
「……はい。多分」
その言葉に、理奈は再び茜を睨み付けた。
「やっぱり、あなたが殺したんじゃない」
「……違います。……あなたのお兄さんは、私が見つけた時は既に死にかけてました。大切な人を守れなかったそうです。……あの人は私に『楽にしてくれ』って言いましたが、私は断りました。……大切な人を、約束を守り切れなかった罰です。……結局、見殺しにした形になってしまいましたけど」
今でも思い出せる。
あの男の人の表情を。
悔いを残して逝ったのだろう。
「本当？」
「……嘘はつきません」

「……何よ。私、バカみたいじゃない……」
気付けば、理奈の瞳から涙がこぼれ落ちていた。
一度流れてしまえば、止まらない。
「勝手に誤解して、罪のないあなたを殺そうとして。逆に返り打ちに遭って……馬鹿じゃない……」
後から後から、雫がこぼれ落ちる。
暗い廊下を、濡らしていた。
「本当はわかってたのよ、きっと。だけど、仕方ないじゃないの……。誰かを恨みでもしないと、こんな中で、生きていけないわよ。怖かったの。本当の事を知ったら、今の自分を支えてるものがなくなりそうで。怖かったのよぉ……」
理奈の言葉が、妙に引っ掛かる。
何故だろう。今何か、自分にとって大事なことを言われた気がする。
「でももう、関係ないわね。死ぬんだから。誤解であなたを襲って、悪かったわよ……」
理奈が話し掛けてきた。
だから茜は、ひとまず考えることを止めた。
「……苦しいなら、楽にすることもできます」
銃を構える。
「……ほおっといてって言ったでしょう。兄さんも、楽には死ねてないんだから……」
「……そうですか」
あくまで冷たく言って、銃を下ろした。
暫く無言が続く。
それを撃ち破ったのは、第三者の声。
「あなたが、店長さんを殺したの？」
廊下の奥を見る。
暗がりでよく見えないが、校舎に入って最初に、自分達を襲った少女。
牧部なつみだった。
「……そんなこと言われても」
店長さんとは誰のことか、わかるわけがない。
茜は困った声を上げた。
「そこのあなた？　この女、血も涙もない、凶悪殺

人鬼よ？　ひょっとしたら……この女が犯人かも」
　理奈が呟く。
「……なんてこと言うんですか？」
　非難の眼差しを送る。
　理奈は笑って答えた。
「悔しいじゃないの。やっぱり、あなた嫌いよ。私からの、最後の……攻撃……」
　そのまま、目を閉じる。
　もう何も、喋らなかった。
「そう。じゃあ、殺しちゃってていいよね？　ココロ」
　予感は当たっていた。
　やはり、あそこで殺しておくべきだった。
（……今日は、やっぱり、甘すぎです）

十三番　緒方理奈　死亡
【残り44人】

384　The decided future

「散々やな……」
　痛む腕を押さえて、智子はそう呟いた。
「そうですねぇ……」
　同じように、疲れた調子でマルチも同意の念を示した。
「まさかガス欠するとは思ってへんかったからなあ……」
　海岸線を離れて、一時間もしたあたりのことだっただろうか……。
　プスン、プスン。
「な、なんやこのジープ。突然変な音出し始めたで？」
「ホ、ホントですね」
　いきなりの車の変調に、二人とも驚きを隠せない。

「な、なんなんやろ……。ジープって変なところ走ってもええように丈夫に出来てるんや無かったの」
特に軍事関係や自動車に興味があったわけではないが、それでも一般常識としてそれくらいのことは智子も知っていた。
「は、はわわわわわわわわ〜〜。ど、どうしましょう〜〜!?」
マルチは慌ててばかりでぜんぜん頼りにならない。
——分かりきっていたことではあったが。
「だぁあもうっ、うろたえんなや〜〜！」
つっても、私も免許持っとらんけどな……。
誰にも聞こえないように、智子は心の中で呟いた。
「ああ、智子さん前〜！」
「へ、……のわっ!?」
目の前に森林が、そして大きな木が迫ってくる！
「ぐっっ……。いややぁ〜〜〜〜!!」
智子は思いっきりハンドルを切った。

ギギギギギギギィィィィィイッッッ!!
ズザザザザザザザザザザザンッッ!!
ジープは思い切り横滑り——かっこよく言えばドリフトとでも呼べるのだろうか——し、森林に横付けするような形で止まった。
「ぐあ……。死ぬかと思たわ……」
「ホントですね、私も死ぬかと……」
あんたは死ぬんちゃうやろ、と智子は心の中で突っ込みを入れた。
「あかんな、もうこれは走られへんやろ」
ジープを降りて、車の周辺のメンテナンスを見よう見まねでやっていた智子は、あきらめたようにそう言った。
「全く……ガス欠なんてしょぼいわ……」
はぁ、と嘆息した。
「ふむふむ……ここがこうなって……でこの音がしてそうなると……」

マルチはなにやらぶつぶつと独り言を言っているようだが……。
「……分かりました！　智子さーん！」
マルチは喜び勇んで智子の名を呼んだ。
「ん、どうしたんやマルチ？」
さっきからなにやら頭の中で調べものをしていたようで、智子もそれには気付いていた。
「えっとですね、空気が抜けるような音がしてエンジンが空回りし、且つ車の速度が遅くなっていった場合、その車はガス欠と呼ばれる症状にかかっている可能性が高いそうです！」
「……そ、そか。よく分かったな」
そんなこともう分かっとんねん……。
という突っ込みをマルチに入れたかった智子ではあるが、あまりにも嬉しそうに話すマルチを見て気の毒に思ったのか、そのセリフを口の中に無理やり押しとどめた。
「一般にこの症状を改善するためには、車にガソリンを補給してやればいいそうです！」
「どこにあんねん」
だが流石の智子も、二度目のボケに対するツッコミを押しとどめられるほど人間が出来ていなかった。
……無論のこと、ガソリンがそのあたりに落ちているわけも無く。
ジープを移動させることが出来ないのだから、当然ガソリンの方を運んでくることになる。
しかし腕が傷付いた智子と、そもそもが非力なマルチではそんなことが出来るわけが無かった。
「仕方あらへんな……。こっからは歩きや、歩き」
智子はマルチを促した。
「大丈夫です。私、歩くの好きなんですよ～」
マルチは楽しそうにそう答えた。
さよか、智子はそう答えた。
そして思った。
こんなしんどい状況ではあっても、楽しく歩けるならそれに越したことは無いな。それにそんなマル

チの側にいれば、自分も希望を失うことは無いだろう、と。
　そんな、見方によっては儚く思える期待があった。
　晴香ぁ、私はまだ生きてるでぇ。
　心の中で、数時間前に別れた戦友に思いを馳せる……。
「じゃ、行くか……。折角、森が目の前にあるのも何かの縁やし、ここは森に入って見よか」
「ハイ！　分かりました」
　いつも返事は元気なマルチを見て、智子はふっ、と微笑んだ。

　運命の輪が巡る。
　其は数奇な迷路。
　彼女は知らない。
　自らの行く末を。
　自らの繋ぐ絆を。
　自らの運ぶ縁を。

　――かくして、一つの死闘が始まる。

385　そして一つの決断〜弥生〜

　弥生は迷っていた。
　由綺の姿をこの目に入れたときは、ただ単純に嬉しかった。もう二度と離しはしないと思った。すぐに、由綺の心が壊れてしまっているということに気がついても、その心に一片の変化もなかった。普段の優しい由綺からは考えられないような言葉にも、何を言うでもなく黙って従った。そして今、弥生は由綺と共に、マナを、罪もない人間を殺す為だけに歩みを進めている。
　由綺と一緒に行動を共にするという事が何よりも大切な事であったが、しかしマナを殺すという人間として一番醜悪な姿を、例え心が壊れてしまったといえども由綺には見せたくはなかった。ただ、心が壊れてしまった由綺を、このまま一人にしておく訳

にはいかなかった。
「藤井さんがいてくれたら……」
　ほんの少し前、そのマナを連れて逃走した冬弥の顔が頭に浮かぶ。冬弥さえいてくれたら、弥生は由綺を冬弥に任せて一人でマナを追ったであろう。あくまでも汚れるのは自分一人で充分だと、由綺には綺麗なままでいて欲しいと誰よりも願っていたから。
　しかしそれは、ないものねだりという物であった。だが弥生の希望はすぐに実現することになる。
　冬弥と再び合流するために二人が走っていった方に歩みを進める由綺と弥生。自分の弱さのせいでマナを繋ぎ止めておく事が出来ず、今まで由綺達がいた所へ戻ろうとする冬弥。この三人が再会することは必然であった。

「あー、冬弥君だ」
　これから人を殺しに行く人間とは思えない程の明るい声で、由綺は冬弥の名を呼んだ。弥生は冬弥の姿を確認すると、いつも見せるように軽く頭を下げ、黙って冬弥の元へ歩み寄ると、おもむろにカバンの中から44マグナムを取り出して手渡した。
「これで由綺さんの事を守ってあげてください」
「……これは」
　事態を把握し切れない冬弥は、突然人を殺すためだけの武器を手渡され困惑する。
「私にはまだやらなければならない事がありますので、少しの間ここを離れます。その間由綺さんのことをよろしくお願いいたします」
　困惑する冬弥の事など目に入らないかのように、いつもと全く変わらぬ口調で、一方的に、そしてたんたんと喋る弥生。要点だけを端的に言った中で、あえてこれからマナを殺しに行くということだけは伏せた。
　この何でもない一連の行動の中、弥生は頭の中でさまざまな考えを廻らせていた。本来ならばこの再会を心から喜び、すぐにでも由綺を冬弥に任せてし

まい、一人で由綺の希望を叶えに行きたい所であったが、同時に一度はマナと共に由綺の元から離れ、再び戻ってきた今の冬弥が信用できるのかという不安が思い浮かぶ。しかし今の弥生には、選択の余地はなかった。

最終的に三人でこの島を出る為に、弥生は由綺のマネージャーではなく、もう一つの顔である主催者側のジョーカーとして、あと七人の罪のない人を殺さなければならなかったのだ。

「九人の罪のない人達を殺す事」

「その行動を由綺には絶対に見せてはならないという事」

主催者に、二人の安全と引き替えにジョーカーにならないかと誘われ、その誘いを承諾した時、弥生はこの二つの決まりを自分に課した。そしてこの二つの条件を同時に満たす為には、自分が行動を起こしている間、由綺を信頼出来る誰かに預けることが絶対条件であった。

この島に連れて来られた人達の中で、安心して由綺を預けることの出来る人物を弥生は二人しか知らなかった。そしてその内の一人である緒方英二が既にこの世を去ってしまった今、弥生が由綺を預けることが出来る相手というのは、藤井冬弥以外には存在していなかった。

「由綺さんは、藤井さんとさっきいた所で休んでいてください。後は私がやりますから」

冬弥に聞こえないくらいの小さな声で囁いた。

「うん。わかった。それじゃあ私、冬弥君と一緒に待っているから。気をつけてね」

弥生の小さな声とは対照的に、大きな声で由綺は返事をする。これから起こりうる残酷な光景からは想像もつかないような澱みのない由綺の表情に、自分以外誰にもわからないくらい微かに表情を曇らせ、すぐに顔を背けた。

途中冬弥の目の前を通り過ぎる時に、冬弥に向かってさっきしたのと同じような小さなお辞儀をした

だけで、それ以降後ろを振り向くことはなかった。振り向きたくても振り向くことは出来なかった。その時既に弥生の顔は、芸能人森川由綺のマネージャーの顔から、主催者の用意したジョーカー——罪もない人々を次々に死に至らしめる殺人者——としての顔に変化していた。

「汚れるのは私だけでいい……」

弥生は誰に言うでもなく、自分に言い聞かせるように呟いた。

386　そして一つの決断～白く綴られる想い～

「弥生さん、行っちゃったね」

「そうだね」

「でもいいの。私には冬弥君がいればそれだけで良いから。冬弥君はもうどこにも行ったりしないでよね」

弥生が由綺のために行動している事など記憶の中からすっかり削げ落ちてしまったかのように、冬弥が戻ってきたことに関してだけ、本当に嬉しそう由綺は答えた。もう今の由綺には冬弥しか目に入っていないようであった。

再会して暫くは、一方的に二人の明るい未来について話し続ける由綺であったが、一番大切な人が戻ってきてくれたことに安心したのか、大きな欠伸をし眠たそうに目をこする。

「由綺、眠いんじゃないのか」

由綺の欠伸を見た冬弥は、心配そうに由綺の顔を覗き込んだ。

「うんちょっと眠いけど、大丈夫だよ」

由綺は一点の曇りもない笑顔を冬弥に向けた。

「まだ先は長いから、今のうちに寝ておけよ。由綺が寝ている間は、俺が見張ってるから」

「そう？　冬弥君こそ寝た方がいいよ。なんだか疲れてるみたいだし」

「いや、俺は由綺の後に寝るよ。代わりばんこで寝

よう」
「それじゃ、お言葉に甘えて、先に寝るね。本当は凄く眠たかったの」
そう言って笑うと由綺は冬弥の肩にもたれかかり目を閉じる。一瞬の静寂の後に、冬弥の耳に規則正しい由綺の寝息が聞こえてきた。
由綺にとって、ここに来て初めての睡眠であった。

どうしてこんな風になったんだろう。
マナちゃんが言ってたな。俺が由綺のことを諦めてしまったと。俺なりに由綺のためを思ってきたつもりだった。俺にとって由綺が隣で笑いかけてくれる事だけが全てだった。その笑顔を守る為にならば、例え自分が犠牲になったとしても構わないとさえ思っていた。
俺が罪もない人を殺してしまったのは、全て由綺の笑顔を守るため、そして由綺との二人の世界を守るためだった。例え由綺の世界が壊れてしまっていたとしても、それでも俺は由綺の世界を守りたかった。けれどそれは間違っていたのかもしれない。本当に大切であった事は、壊れてしまった由綺の世界を守ると言う事ではなく、壊れてしまった世界を一緒に直す事だったのではないのだろうか。多分マナちゃんは俺にそうしてくれる事を願っていたんだと思う。
けれどマナちゃんの願いを叶えるには全てが遅すぎた。はるか、美咲さん、緒方さん。この三人が死んだことを放送で知った時、絶望した。それと同じ様に、俺達が殺してしまったことで、俺と同じような気持ちを持った人を作り出してしまった。その罪は一生かかっても償いきれるわけがない。

日常を乖離してしまった由綺の世界を元に戻す事は、今の——由綺と同じ世界を見つめてゆくために、自分の世界をも壊してしまった——冬弥には出来る

はずもなかった。
「あの頃に戻りたいな。由綺とはすれ違ってばかりでなかなか逢えなくて、俺は勝手に緒方さんに嫉妬したりしていたけれど、それでも由綺のことを愛することが出来た。本当に何のとりえもない平凡な俺だったけど、一生由綺のことを守っていくと心に誓ったあの日々に戻りたいな」
あの頃の日常の断片を思い浮かべ、誰に向かうでもなく、虚空に語り掛ける。
「これが夢だったらどんなに良かったことか。だけどこれは夢なんかじゃない。はるかや美咲さんや緒方さんはもうこの世からいなくなってしまった。そして俺達は、何の罪もない人を殺めてしまった。悪夢のような話だけどこれが現実なんだ」
隣で穏やかに眠る由綺の体に腕を回す。深呼吸を一つつき、はるか彼方の青い空を見上げる。
そして冬弥は、一つの決断を下す。
由綺の体に回していた腕を放すと、その体をゆっくりとまるで壊れ物でも扱うかのように丁寧に横に寝かせ、その穏やかな顔を覗き込む。何の邪悪さも感じられないその寝顔を見ると、今起こっている現実の悪夢を忘れ去ることが出来るようであった。そしてそれと同時に、ほんの数日前まであった由綺との何気ない時間、今となっては何にも変えがたい幸せな時間が思い浮かんでくる。
二人の空間が静止したままどれくらいの時間が経ったであろうか。実際にはたいして長い時間ではなかったけれど、冬弥にとっては永遠に等しい時間のように感じられた。
由綺の寝顔を見て何度も挫けかけたが、冬弥は決意を固めた。そして静止していた空気がまた動き出す。その時、ふと冬弥の頭の中に今までの思い出が鮮明に蘇った。
冬弥は目を閉じ、由綺の何一つ穢れのない寝顔と、今までの幸せだった思い出の残像を振り払うように、何度も頭を振った。

冬弥の両手が由綺の白く細い首に伸びる。由綺の首に手をかけ、力をこめると、そのまま由綺の体に馬乗りになった。
「弥生さん、ごめん。俺、約束守れない」
冬弥の両頬には一筋の涙が伝っていた。

由綺は夢を見ていた。あれはもうだいぶ昔のこと。由綺も冬弥も、そしてはるかも彰もみんな制服を着ていた。
初めて冬弥と顔を合わせたあのころ。
初めて冬弥と話をしたあのころ。
初めて冬弥のことを意識し始めたあのころ。
自分の冬弥に対する気持ちに気が付いたあのころ。
冬弥から告白されて付き合い始めたあのころ。
まだ手を繋ぐことさえも気恥ずかしかったあのころ。
はるかにからかわれ、二人して顔をまっ赤にして俯いていたあのころ。
毎日他愛もない話をするという事が、楽しかったあのころ。
二人きりでいるという事だけで、どきどきしていたあのころ。
逢いたいと思うとき、いつでも顔を見ることの出来たあのころ。
逢いたいときに逢うことの出来ない辛さなんて考えたこともなかったあのころ。
世界のすべてが私達に味方していると、本気で信じていたあのころ。

大学生になって、幼い頃からの夢だった芸能界に入った。冬弥との関係は初々しかった高校生の頃よりも、何歩も先へ進むことが出来たが、あのころのように自由に逢うことはもう叶わず、由綺にとって冬弥との関係と言うことだけで考えると、辛いことの方が多かった。
本来、あまり強くなかった由綺ではあったが、自

分の好きで始めた仕事に関して弱音を吐く事はなかった。しかし由綺はいつも思っていた。あのころに戻りたいと。けれどそれは叶わぬ夢であった。そのことが分かっていたからこそ、由綺は自分の夢の中でだけあのころの夢を見続け、自分の夢の中でだけ冬弥を独り占めしていた。

　しかし自分や冬弥が殺されてしまうかもしれないと言う、あまりにも過酷な現実に直視したとき、その過酷な現実と、自分の幸せな夢とが乖離し、由綺の世界は音をたてて崩れていってしまった。

　由綺は息苦しさから目が覚めた。目を開くと、眼前に冬弥の顔が映った。よく見ると、目を瞑り、両頬に涙が伝っているのがわかった。だが由綺は今、目の前で自分の身に何が起こっているのかを認識出来ないでいた。

　由綺は視線を少し下に落とす。冬弥の両腕が自分の首にかかっているのが見えた。そこで由綺はやっと自分の身に起きている事のすべて——冬弥が自分を殺そうとしている現実——を理解した。

「やめて」

　その叫びは声にならず、由綺の意識は薄れてゆく。

「ごめん、由綺。俺もすぐそっちに行くからな。ごめんな。ごめんな」

　薄れゆく意識の中で、由綺は冬弥の最後の声を聞いた。目の前にいる由綺にではなく、幸せだった頃の由綺に対する冬弥の言葉に、由綺は壊れていた頃のすべて、——自分が人を殺めてしまった事、冬弥が自分の代わりに人を殺めてしまった事——の記憶を思い出した。

「ここに来てまで冬弥君には、迷惑をかけっぱなしだったね」

　由綺は抵抗する事を止めた。上にのしかかっている冬弥の目から涙が零れ落ち、由綺の顔を濡らす。

「冬弥君。ごめんね」

　由綺は声に出して言ったつもりであった。だがその言葉は声にならなかった。

「もう一度、あのころに戻れたらいいのにね」
真っ白になってゆく由綺の頭の中に、制服姿の自分と冬弥の姿が目に浮かぶ。そしてそのまま意識は途切れた。

どうしてこんな風になったんだろう。
息を引き取った由綺を見て、何度となくその言葉が頭をよぎる。
由綺のライバルでもある、綺麗だけど可愛い女の子の顔。由綺のプロデューサーで、厳しさと強さを併せ持った大人の男の顔。普通の人とは違った形の愛で、由綺を包み込んでくれたマネージャーの顔。ちょっと頼りないけど、いつも一緒にいてくれた親友の顔。男女という枠を超越した、一風変わった親友だった女の子の顔。誰よりも優しく、誰からも慕われていた先輩の顔。子供だと思っていたけれど、既に自分より強い心を持っていた女の子の顔。冬弥の頭の中に次々に浮かんでは、消えていった。

「由綺、俺も今からおまえの所に行くよ」
冬弥の中に思い描かれる世界。由綺と一緒に過ごした場所。あたり一面の銀世界。そしてそれ以上に輝く、あの頃の屈託のない由綺の笑顔が浮かび、そしてしゃぼん玉のように壊れて消えた。
その直後、あたりに一発の銃声がこだました。

七十六番　藤井冬弥　死亡
九十七番　森川由綺　死亡
【残り42人】

387　Sivis pacem parabellum

辺りは闇一色。夜の帳は完全に降りている。この島の中で自ら火や明かりを灯すことは自殺行為である。
真っ暗ななか、蝉丸は月の光を求めて空を見上げるが、月は雲に覆われていてあの太陽とは異なるや

冬弥君、ごめんね・・・
あの頃に
もう一度・・・
戻れたらいいのにね・・・

わらかな光を降り注いではくれない。ただ暗い闇が蝉丸達のこれからを象徴するかのように広がっている。
　ふと不安が心を過る。自分たちの未来がこれからどうなっていくのか。それが今の空のように真っ暗で漠然としていて落ち着かない。
　だがやらなければならない。きよみから受け継いだ白く澄んだ遺志を貫くためにも。
　守ることのできなかったきよみの顔を思い浮かべてからぎゅっと目をつぶる。そして軽く頭を振り、上に向けていた顔を水平に戻し、空に見ることのできなかった月の代わりを見やる。
　彼女は視線に気付いたのか蝉丸の方を振り返る。
「(･∀･)蝉丸？」
　月代は心配そうに（お面で表情は見えないのだが）蝉丸を覗う。その姿が本来仙命樹の力を遺憾無く発揮させてくれる夜の光を蝉丸に彷彿させた。その仙命樹が今は役に立たない。この狂った島の中、蝉丸自身の力だけでこの月代を守っていかなければならない。
「どうしたの？」と奇妙なお面が、いや月代が尋ねてくる。
「なんでもない。飯にするか？」
「(･∀･)うん、そうだね」
　月代は肯定の返事をするとすぐにがさごそと食料を取り出し始める。
「(･∀･)食べ物がもう残り少なくなっちゃったね」
「ああ、明日からは食料の調達も考えないとな」
「(･∀･)何でこんなに少ないのかな？　もっといっぱい入れてくれてたらいいのに」
　ぶつくさと文句を言う月代。きっと口を尖らせているのだろうがやはり奇妙なお面で見えない。
「それも主催者側の策略の一部だな。人間は飢えと渇きにはなかなか耐えられるものではない。大方食料や水の奪い合いでもさせようという魂胆……」
　何気ない会話を交わしていると、蝉丸は突然黙り

込んだ。
「(・∀・)どうしたの？」
「しっ、静かに……」
　人差し指を唇に垂直に当ててそう言うと、蝉丸は周りに神経を張りめぐらせる。
「そこにいる奴、ゆっくりと出てこい。こちらは危害を加えるつもりは無い。ただし、おまえがそうではないと言うのなら、こちらもその限りではないがな」
　そう言ってから蝉丸は刀を構えた。
　間も無くして言われたようにゆっくりと物陰から一人の男が出て来た。両の手は顔の横で広げている。別に人類は十進法を採用しましたと訴えかけているわけではない。
「すいません。あなた達がどんな人達なのかわからなかったので姿を隠していました。無論、僕もあなた達に危害を加えるつもりはありません」
　そう言って出て来たのは少年だった。
「何もなければ、このまま通り過ぎようと思ったんですが、まさか見つかってしまうとは思ってもいなかったですよ」
「気配の消し方はなかなかだったが、まだ甘いな」
「(・∀・)蝉丸は元軍人さんなんだよ」
　と快活に言ってくる月代の方を少年は一瞥してぴたりと止まる。
「(・∀・)ああ、しまった！　まだこんなのつけたままだよ！」
　月代はすかさず蝉丸の後ろに隠れ、うろたえている。
「な、なんなんですか？　それは？」
「よくわからないがなにやっても取れんのだ」
「不憫ですね……」
「(・∀・)ううっ……」
　月代はお面の上から手を当て泣くようにしていじけていた。
　いじけている月代をよそに軽く自己紹介を済ませ

てから、三人は地面に腰を下ろした。
「ところで、君は何処に行こうとしてたんだ？　もう、辺りは真っ暗だぞ」
「……このくだらないゲームを企てた首謀者である高槻のところです」
　ほんの一瞬だが間をあけてから少年は答える。
「そうか、なら目的は一緒だな。まさか仲間になりに行くってわけではないんだろ？」
「ええ」
　少年はくすりと笑ってから、すぐに険しい表情になる。
「これまでに多くの人の死を見てきました。もう、茶番劇は十分です」
「そう……だな……」
　蝉丸がそう答えるとしんっと静まり返る。辺りの闇が全ての音を遮るかのように蝉丸と少年にまとわりつく。
「(･∀･)じゃあ、一緒に行こうよ！　私たち、秘密基地見つけたんだよ！」
　闇夜にさっと月明かりが差すように沈黙を破ったのは月代であった。
「秘密……基地？」
　怪訝そうに少年は答える。
「ああ、地中からなにやら機械音らしきものが聞こえた場所があったんだ。怪しいと思わないか？」
「確かに……あの用心深い高槻が僕らと同じ島内にいるとは考えにくい。だからと言って、飛行機や船で逃げ出しているなら誰かが気付いてもおかしくない。その点地下もしくは海中とかにいるのならば、極めて安全に僕らの様子が把握できる」
「うむ。だから、中に入ってみようと思っているんだが、この月代と二人では心細い」
　後ろに隠れている月代を少しだけ振り返り、またすぐに少年へと目を戻す。
「それで、誰か同じ目的を持った人を探し同行してもらおうと考えていたんだ。どうかな？　一緒に行

ってくれないか？」
「(・∀・)いっしょにいこう！」
月代が蝉丸の言葉を援護する。
「そうですね……」
少年は少し考えるようなそぶりを見せる。
「わかりました。一緒にその場所に行ってみましょう。でも、僕が加わったところでまだ人数は少ないと思います。蝉丸さん、あなたの支給武器は何でしたか？」
「この『ぱそこん』と言うものが支給武器だ。あとこの途中で拾った日本刀がある」
「そちらのお面、もとい月代さん、あなたの方は？」
「……ぉ……ん」
ぼそぼそと蝉丸の背中越しに月代が呟く。
「え？　なんですか？」
「だから、このお面だよ……」
蝉丸の影からひょっこりと顔を出しながらお面を指差しながら答えると、少年は絶句し、その後に
「不憫ですね……」と、ポツリと呟いた。
月代はまたショックを受け、すぐにそのまま蝉丸の後ろに隠れていじけ始めた。
「どうやら武器には当たり外れがあるらしいな」
「みたいですね」
「で、君の武器は？」
「これです」
すっと一冊の本をとりだして、蝉丸の眼前に掲げる。
「(・∀・)何それ？　辞書？　角で殴ったら痛そうだね？」
さっきまでいじけていた月代が身を乗り出してくる。
「偽典です」
少年が微笑を浮かべながらそう答えた。
「はずれ……か？」
「そうですね、他の人がもらっても、きっと喜ばないでしょうね」
「(・∀・)君は嬉しいの？」

「ええ、僕の友の形見とでも言うべきものですから……」
その本を見つめる少年の表情はどこかしら悲しげであった。
「そうか……」
蝉丸が重く沈んだ声でそう答え、そしてまた辺りがしんっと静まり返った。
「(･∀･)で、どうするの？　仲間を見つけに行くの？　それとも三人で攻め込むの？」
すると先ほどと同じように、また月代がその重い沈黙を破壊した。
「そうでしたね。話が逸れてしまいましたね」
「そうだな……」
蝉丸の声も元の調子を取り戻す。
「で、その基地のことですが、あなた達は引き続き仲間を探してはもらえませんか？　武器に関してもまだ不安な要素がありますから」
「君はどうする気なんだ？」
少年はちょっと困った表情をして、
「場所を教えてください。偵察に行こうと思います」
「性急すぎやしないか？　もう、陽は落ちたぞ」
「忍び込むならやっぱり深夜でしょ？」
確かに少年の言うことは一理あった。隠密行動は基本的に夜に行うものである。
「しかし、俺たちが仲間を見つけて戻ってくるまでにはかなり時間がかかるぞ」
「その分、中の状況をばっちり把握しておきますよ。もしかしたら何でもないとこなのかもしれませんし。斥候役ということで」
「(･∀･)無茶しないでね」
そのやり取りをみていた月代が(･∀･)な顔で見つめている。
「大丈夫ですよ。あ、そうだ！　これを渡しておきます」
そう言って、かばんの中から一丁の銃を取り出し、

蝉丸に渡す。
「ベレッタＭ92Ｆか……こんなものまで持っていたとはな」
「(・∀・)蝉丸よく知っているね？」
「ん？　ああ、こういったものの知識は君の叔父のところの書物を読ませてもらった」
「あの、蝉丸さんは元軍人ですよね？　それなら銃の種類なんて知っていてもおかしくないのでは？」
　少年が不思議そうに尋ねる。
「うーん、その説明をすると長くなってしまうなぁ」
「(・∀・)どう説明したらいいかな？」
　蝉丸と月代がそろって頭を捻る。その動作がどことなく滑稽だ。
「あ、いえいえ別に深く追求するつもりはないですよ。誰にだって聞かれたくないことの一つや二つはありますから」
　悩む二人を前にあわてて弁解する。そして一人ごちるように「そう、誰にだって……ね」と呟く。
「そうか、それでは話を戻すか。ところでこの銃、君の支給武器ではないはずだが？」
　仕切り直すかのように蝉丸は真剣な顔になり、銃を見つめている。
「ええ、そうです。その銃は途中で出会った人が僕に渡してくれたものです。その銃は途中で出会った人が僕に渡してくれたものです。彼もきっと今ごろ彼なりの戦いをしているはずです。それでですね、その銃をあなた達に預けてしまえば、僕は無茶のしようが無くなる。そうは思いませんか？　それにあなた達を守る武器になる」
　少年はくすりと笑ってみせた。
「確かにそうかも知れんが、君のほうが危険なんだぞ？」
「いえ、危険なのはあなた達も一緒ですよ。もし、仲間にしようと話しかけた人が殺人鬼になってしまっていたら？　……蝉丸さん。絶対に確実に完璧に十全に月代さんを守れますか？」

「……」
　蝉丸は何もいえなかった。必ず守ると誓った月代だが今の装備のままでは心もとないのは確かであった。この先どんな敵に遭遇するかはわからない。
「大丈夫ですよ。僕は少しでも危険を感じたら逃げればいいだけです。それに僕は本来無理なことはしない畑の住人ですから」
　少年はニコニコ微笑んでいた。
「しかし、腹の中の爆弾のこともある」
　その言葉を吐く蝉丸の表情には悲痛なものがあった。
「それも多分問題無いです。主催者は僕たちに死んでほしいんじゃなくて、殺し合いをして欲しいんでしょうからね」
　あっけらかんとして言う少年を見ていると心配している自分が馬鹿らしく思えてきた蝉丸はコクリと頷いてから、「本当に無茶をするんじゃないぞ！」と念を押す。
「(・∀・)絶対だよ！」
　月代も蝉丸の後から念を押す。
「わかってますって、心配性だなぁ。蝉丸さん達の感じている感情は精神的疾患の一種ですよ。僕は治し方を知りませんから僕にはどうしようもないです」
　そう言って、くすくすと笑いながら少年は立ち上がった。
「あ、蝉丸さん」
「なんだ？」
「蝉丸さんはその銃に使われている弾丸の名前わかりますか？」
「ああ、知っている。９㎜×19㎜の通称パラベラム弾だろ？」
「流石です。勉強熱心なんですね。ではそのパラベラム弾の由来を知っていますか？」
「ああ」
『Sivis pacem parabellum』

二人は同時にその言葉を口にする。
「僕がこれからすることは、そういうことですよ」
「そうだな、我等軍人にとっての存在理念みたいなものだ」
そして二人は握手を交わす。
「月代さん。蝉丸さんを支えてあげてくださいね」
「(・∀・)う、うん！」
蝉丸の後ろから出てきて元気よく返事をする月代を見て、少年は表情を緩める。
「それでは、必ずまた会いましょう」
少年は手を振り、その場を後にした。
「(・∀・)ねぇ蝉丸、さっきのどういう意味？」
月代だけが先ほどのやり取りを理解しておらず、蚊帳の外で不思議な顔（お面が不思議というわけではない）をしていた。
「『平和を欲するなら戦いに備えよ』という意味だ」
蝉丸はすでに見えなくなった少年の背中をいつまでも見ていた。

暗い森の中を一人歩く少年。
握り締めるその手には偽典。
空を見上げればそこには月。
そして口から漏れ出る言葉。
「汚れる手は少ないほうがいいです。血濡られた手は誰かを抱きしめるのにはふさわしくないですから」
いつからか彼の行く先を雲の隙間から顔を出した月の光が照らし出していた。

388　真空

「……そう」
伏目がちに、ささやかに。
渡せませんか、と呟いて。
秋子さんは、わたし達の意志を聞き流す。

ああ。このひとは、自分の運命を切り開く事を放棄してしまったのだ、と。
その時、理解した。

……こころの、隙間から

「ええー、だめだよー。お母さんは、あゆちゃんを連れて来るんだよ？」
名雪ちゃんが事も無げに言う。
お菓子をねだる子供よりも、当然のように。
世界の主として、彼女は要求する。
あゆちゃんが、眉をひそめる。

……拡がった綻び。

じりじりと、時計回りに全員が移動する。
火にかけた鉄板を乗せたままの、実習台を挟んで対峙する。

どこからか、銃声が聞こえる。
それはきっと、校舎内のどこかで発した音なのだろう。
けれど、遠くに。
ひどく、遠くに聞こえた。

……失われた、諸々が

「秋子さん」
今、話さなければ。今、止められなければ。
誰も無事では、いられない。
そう危惧していた。
動き始めてしまったなら。留まれなかったなら。
わたしは、この人を救えない。
そう確信していた。

……消えゆく、暁には。

「千鶴さん」
わたしの言葉を止めるように、秋子さんが首を振る。
「たとえ世界を敵に回しても、名雪のために私は在る。前にも、言いましたね」
そうして、ここまで来てしまった。
それでも変わらず、歩みを止めず。
このひとは、ここまで来てしまった。

……一体何が、残るのだろう。

「問答、無用です」
梓が小さく息を飲む。
あゆちゃんがくすん、と鼻を鳴らす。
わたしと秋子さんが溜息を漏らす。
そして名雪ちゃんは、笑っている。

……それは

秋子さんがひゅん、と唸りをあげて鉈を構える。
梓が棒を両手に、腰を落とす。
最後に、わたしが。
歩幅を広げて、爪を開く。
ぶつかる視線の間に頼りなく揺れる炎が、ふと小さくなる。
今にも消えてしまいそうな、小さな炎になって。
確かに一瞬、消えていた。

……「真空」だ。

だだん、と大きな踏み込み音を鳴らして、秋子さんとわたしは調理台の上に登る。
互いに重心を崩さぬ速い一撃を交わす。
ひゅひゅん、と遅れて風が泣き、わたしは屈んで、秋子さんは後ろに避ける。

……空気が、割れる。

続けて梓が棒で両足を払うが、側転しつつかわした秋子さんが片腕で身を支え、鉈でわたしの脚を薙いでくる。

軽く前足を上げてこれを外し、秋子さんの立ち直り際を狙って跳ぶ。

梓が棒を床につき台上に登る。

……風が、遅れて吹いてくる。

鎖骨を狙って爪を縦に振るが、秋子さんが肘を軸に左手を外に回すことで軽くいなされる。

重心を流され左半身を晒したわたしに、振り上げられる鉈。

梓が大きく踏み込んで肩を並べ、がしんと棒で押さえる。

流れを止めず、わたしは時計回りに回転しながら台に手をつき右脚を繰り出し膝を狙う。

梓は押さえた鉈を中心に棒を反転させて即頭部を狙う。

秋子さんは頭を下げ回転し、同時にわたしの蹴りを外した左脚を振り回して梓を調理台から吹き飛ばす。

……裂けた大気の、泣き声は

その瞬間。

蹴りの命中で僅かに速度を落とした秋子さんに対し、わたしは横になった体軸を中心に回転する。

うつ伏せから仰向けになりながら、右脚で彼女の軸足を蹴り上げた。

秋子さんは大きくバランスを崩して、転がって台上から転落し、背中を下に落ちる。

しかし休むことなく、そのまま両腕で反動をつけ立ち上がる。同時に手にはガスホースを掴んでいた。

あゆちゃんが何か叫んでいる。

ぐい、とそれを引き、台上から飛び降り追い討つ

わたしに、ガス台をぶつける。
意外な攻撃を受け、わたしは無防備に秋子さんの右に墜落した。
「お母さん、早く早くー」
名雪ちゃんの楽しげな声と重なるように。
わたしを襲う鉈の一閃が、横薙ぎに迫っていた。

……短く鋭い刃物の音。

「千鶴姉！」
最初に調理台から転落していた梓が、起き上がりながら棒を振り、完全に重心を泳がせていたわたしを転倒させる。
そのとき、笑顔が見えた気がした。
名雪ちゃんの笑顔が、見えた気がした。

……それは

ズドン！
銃声にも負けぬ巨大な衝撃が、壁面を震わせる。
教室ごと、いや世界が震えたようにさえ、感じられたが。
にわかに静寂が訪れる。
何も動かず。
誰も話さず。
無音の空間が拡がっていた。

……「真空」だ。

ぱたたっ
生暖かい何かが、わたしの頭に降り注いだ。
始めは、涙のように。
やがて、滝のように。
誰も動かなかった。
いや、動けなかったというべきだ。
視界が赤い。

わたしは、かつてこの色で世界を見ていた。
血の、色だ。
のろのろと立ち上がる、わたしの目前に。
一つの悲劇があった。

「な……ゆき……」
秋子さんが、震える手を鉈から離す。
それでも鉈は落ちなかった。
鉈は。
鉈は、壁に突き立っていた。
鉈は、名雪ちゃんの笑顔を。
鉈は、名雪ちゃんの笑顔を真一文字に叩き割り、
壁に貼り付けていた。

「あああああああああああ!!」
秋子さんが崩れ落ちる。
もはや、何も見えていないのだろう。
何も聞こえていないのだろう。

わたしに背を向けて、壁に祈るように泣いていた。
わたしは爪を振り上げた。
振り上げたけれど。
けれど、振り下ろす事ができなかった。
「千鶴姉……」
梓が呼んでいる。
みんなが、わたしを待っているはずだ。
残酷だけれど。
残酷だけれど、振り下ろす事ができなかった。

……それは

二人を残し、実習室を去るとき。
あゆちゃんが秋子さんを見つめて、ぽつりと呟いた。
「どう、するの？」
梓が答える。
「どうにも……ならないよ……」
そうだ。

もう、どうにもならない。
秋子さんには、何も残っていないのだから。
……それは、「真空」。

九十一番　水瀬名雪　死亡
【残り41人】

389　赤く、黒く。

秋子は、千鶴と梓が去ったあとも、ずっとその場に崩れ落ちたままだった。
血に塗れ、涙に暮れ、鼻筋を境に上下に分たれた娘の亡骸を前に脱力した彼女は、もはや抜け殻同然だった。
校舎の中は未だ、多くの喧騒に満ちている。それは断続したり、時折響いたりしていたが、拳銃の音も何かが壁を穿つ音も、彼女の耳には届いていなかった。見据える視線の先にあるのは、壁に突き刺さった鉈に貼り付いた、実の娘だったものの〝欠片〟。
血に塗れていない眉が緩やかな八の字のカーブを描き、血に塗れた眼球が、まるで眼前の母に微笑みかけるように細く開かれている。
部屋の壁が何かの振動で、細く、断続的に揺れる。誰かが、何処かで戦っているのかも知れない。
ずず、ずず、ずず、と、振動の度に鉈は揺れ、深く突き刺さったそれは少しずつ少しずつ、斜めにずり落ちていく。
ぼと、と鈍い音がして、〝欠片〟は床に落ちた。
「ああ。あああああああああ。ああ」
秋子はその〝欠片〟を拾うために立ち上がろうとするが、身体が自由に動かない。手も足も何もかも、まるで粘土の海を掻き分けて進んでいるかのように、鈍重で、憂鬱で。
秋子は気がつけば全身で動くかのように、床をの

そのそと這って――
しょうがないわね。名雪ったら、もう。
――いや、気付いていないのだろう。もう、何もかも。
秋子は破片にようやく辿り着くと、いとおしそうに頬にすり寄せた。色の無い脳漿が流れ落ち、少し赤みがかった灰色のモノが彼女の腕を油で濡らし、もう黒く変色した血に塗れ、何度も何度も、すり寄せる。
そのうち、よろよろと立ち上がると、名雪の亡骸に近づいた。おぼつかない足取りで壁を沿うように、振動に幾度か弾かれながら、彼女は辿り着いた。
ほら、名雪。いつもの通り笑って。微笑んでちょうだい。お母さん、名雪の笑顔があれば、他に何もいらないのよ。うふふ。
鉈で千切れた髪を掻き集める。零れた血を、脳を、懸命に掻き集める。亡骸の上に〝欠片〟を据え、集めた髪をその上に垂らす。
ほら。これでいつもどおり。とても可愛いわ。あら？
血で塗れた顔を拭う。血に塗れた服を脱がせる。洗うように、ごしごしと自分の服で拭う。その度に、赤黒い色はさらに浸透していく。脱がしても拭っても、その色が落ちることはない。
秋子の着ている物が赤黒く染まりきってしまうまで、それは続けられた。
あら、あら、あら。どうしてかしら。もう、名雪は仕方ないわね。何時まで経っても子供なんだから。こんなに汚して。そういつまで経っても子供なのよね。子供でいてね。お母さんの子供でいてね。
身繕いをするように、何度も何度も、髪をとかす。とかす度に、ぶちぶちと毛髪が頭皮ごと削げ落ちる。その破片はぼたぼたと、床を濡らす。

そうすれば、ずぅっと守ってあげる。何でも望みを叶えてあげる。祐一くんは名雪にあげるわ。大丈夫。彼もきっと名雪のことが大好きなはずよ。大丈夫。邪魔する子は殺せばいいんだもの。何があっても、名雪に嫌な思いはさせないわ。だって、私は名雪が大好きなんだもの。

亡骸と毛髪と〝欠片〟と。秋子はずっと握り締めたまま、一人で喋りつづけていた。

「さあ、何をしましょうかしら。ねぇ、名雪。あなたは、どうしたいのかしら……？」

秋子はすっかり乳白色になった〝欠片〟だけを握り締め、ずっと一人で――

「お母さん。わたし、あゆちゃんを殺したいよ。それでね、祐一と一緒になるの。

まあ、それは大変ね。

うん。でもね、そうしないと、祐一はわたしのところに戻ってきてくれないの。

そうね。殺しましょう。

うん！　それでね、わたし、祐一と結婚するの。

まあ、それはおめでたいわ。

お母さんは反対しないよね。

ええ、もちろん了承、よ。

えへへ。ずっと、いつまでもお母さんとわたしと祐一の三人で一緒にいるの。いいよね？

ええ、もちろんよ。

お母さんはわたしの味方だよね。

そうよ。お母さんは名雪の味方だもの。

どんな願いだって叶えてくれるよね？

ええ、どんな願いだって叶えてあげるわ」

――喋り続けていた。

390　あの時から

人が死んでいるのを間近で見てすごくびっくりし

たのに……心の奥は割と平静だった。
だって、昔嗅いだ血の匂いを、体が覚えているから。
たぶん私も——狂ってるんだと思う。
楓お姉ちゃんはどうなんだろう？
私と同じ？　それとも違うの？
同じように前世を知る者として。
「誰が来るか分からないから気をつけなきゃね……」
七瀬お姉ちゃんが、私を後ろから軽く抱いてくれる。
ダメだよ、汚れた私なんかにそんなことしたら。
千鶴お姉ちゃんは何も言わなかった。昨日の事を。
お姉ちゃんは優しいから。だけど……。
——本当は、私の方が偽善者なんだよね……。
あの時の声。私の言葉。私の心の中の言葉。
昔の私は自分で手を汚さない非道な狩猟者だった。
大切な人の為と銘うって、大勢の同朋をこの手で死に導いたんだ。
そして、今の私の心の中にも、一匹の獣が住んでいる。
——ソシテマタ、ツライ、ヘイワナヒビヲ、ジローエモント、スゴスノ……
私はまた、人を殺すの？
このまま耕一お兄ちゃん達と一緒にいていいの？
もし大切な人が死んでしまったら……私は私でいられるの？
この島の、そして学校に立ちこめる血の匂いが……私の心の隙間を埋めていく気がして……とても怖い。
そして心が満たされた時、私は変わってしまうかもしれない。
すべてを狩る『狩猟者』に。

——千鶴お姉ちゃん、今の私から逃げて！
あれもまた私の本当の心だから。
誰にも言えないけど、昨日、あの時あの場所からずっと私は戦っている。心の中のもう一人の自分——狩猟者と。
知らない人達を……そして大切な人達を、狩ってしまわないように。

391　ぼくの戦争　——月光——

一寸先とは言わないまでも数メートル先はもう暗闇で何も見えない。自分の背後には建物の爛爛とした明があるが、その光の中にいては逆に遠くは見渡せない。一方暗闇の中からはこの光を目印として自分達の姿を良く見渡せるかもしれない、と思うと良い気持ちはしない。監視兵である大森は小さく溜息を吐きながら交代の時間を待つ。かれこれ何時間も立ち呆けていて、体力的にも少し余裕がなくなってきていた。
首から掛けたサブマシンガンの重みが肩に軋みを入れ始める。陽はとうに沈んでいて、人間にとって最も恐るべき闇と静寂の時空間が大森の目の前に広がっていた。もう一度小さく溜息を吐き、大森はヘッドギアからの音声通信を待つ。自分はまだ今日はマシな方である。夜の見張りをやらなくてもいい、という一点に於いては。
程なく通信が入る。高音のノイズに入り混じって、これから夜の見張りをやることになる不幸な同僚の声が耳に入ってきた。何時間も眠ったあとだけにさすがに少し眠たげな色の混じった声だな、と大森は思う。
「交代の時間だ。着替えてあと少ししたら行く」
やっと休める、と小さな溜息を吐く。かれこれ六時間も立ちっぱなしだ。腕時計を見ると既に八時の少し前。飲まず食わず休まずだから疲れても当たり

前だ。部屋で酒の一杯でも飲みたい、とヘッドギアの下表情を緩めながら思う。
にしても、まったく誰もやってこない。当たり前だ。正気の頭脳を持っている人間ならば、無数のサブマシンガンが降らす鋼鉄の雨の中に自ずから飛込もうとはしないだろう。見張りをする意味なんてあるのだろうか、とさえ思う。そもそも監視用のカメラは別に設置されているのだ。見張りがいなくても、侵入者があったらすぐに判る筈だ。
それでも勿論意味はあるに決まっている。
長く立ち呆けをしていたから、考える時間もある。大森はある程度、自分たちが見張りをしなければならない理由についての大体の予測を立てていた。
侵入者は入り口付近で叩かなければならないのだ。
侵入者の体内には爆弾が埋め込まれている。誰かが反旗を翻し、この建物に侵入してきたとしても、爆弾を爆発させてしまえばそれでしまいだ。
けれども、コトはそう簡単にはいかないのだ。
爆弾には他者を巻き込む力がある。どの程度の破壊力であるかはわからないけれども、下手を打てばこの施設の奥で爆弾管理の作業を行っている高槻に被害が及んだり、或いは爆弾制御の装置が壊れてしまう可能性もある。――そういった間違いを起こさないために、自分たちはいるのだと思う。
「遅れた、大森」
大森の思考はそこで停止する。同僚の声が聞こえた。
まあ、構うまい。自分たちはあくまで見張りだ。このゲームが正しかろうが間違っていようが、自分は高槻に従っているだけの末枝の人間だ。
小さく溜息を吐いて振り返る、同僚がヘッドギアを被る様子が見え、取り敢えず部屋に帰って寝ようと首を捻って、
すぐ近くで拳銃の発砲音がした、と思った。

錯覚だろうか、と考える瞬間すら与えられない。殆ど同じ瞬間、建物の壁に何かが当たる音。コンクリートに硬質な何かが炸裂した音。炸裂した場所は自分のすぐ横、正面からだ。
「大森ッ」
「判ってるッ」
あれは拳銃の音だ。こちらを狙ってきている。二人は反射的に身を屈め、次の音が聞こえるのを待つ、聞こえない、自分が防弾チョッキとヘッドギアを身に着けていて生半な攻撃では死ぬことはないことを思い出し立ち上がる。
ある筈がないと思っていた、反逆だ。
「さっきの銃声はあっちから聞こえたぞ」
同僚が指で指す方向を見て大森は頷き、サブマシンガンを構える。ここからで果たして有効にサブマシンガンが働くかはわからないが、とにかく引き金を引く。ぱららららら、という軽い音と共に弾丸が闇を駆け抜ける。火花が眩しい。銃弾が敵に命中したかどうかは判断できない。呻き声も悲鳴も聞こえない。風と銃弾のダンスで森の木がざわめく音が聞こえるばかりだ。
「三沢。ちょっと俺が見てくるから、ここを頼む」
まだ交代は終わっていない。この仕事を終えてから部屋でゆっくり眠ろう。大森は慎重な足取りで駆けて行く。
「不用意な真似はするなよ、大森っ」
同僚の声が聞こえる。大森は軽く後ろ手を振って答える。
間隔を空けてサブマシンガンの引き金を引く。茂みの中にいる筈の反逆者からは何の反応も無い。少しずつ距離を詰めながら、大森は自分の手のひらが汗で濡れていることを自覚する。服の裾で拭ってもすぐに汗が滲み出てくる。拳銃と夜、二つの闇との戦いはけしてサブマシンガンにとっても楽な相手ではないのだ。

防弾チョッキは支給されていて、自分の身をしっかりと包んでいてくれている。多分こっちが殺られることはないだろうとは思う。大森は慎重に間合いを詰めていく。
やがて間合いはゼロになる。

三沢は入り口付近で欠伸を噛み殺しながら、こんな時にも欠伸が出る自分の神経をおかしなものだと思う。サブマシンガンを構えなおし、ヘッドギアを被り直す。小さく深呼吸をして、緊張を取り戻そうと指を動かす。そして、大森が駆けていった方向に気を払いながら、少しだけ考え事をする。
——不思議だ。銃声は一発のみしか聞こえない。どうしてなのだろう。襲撃をかけるならかけるで一斉攻撃を行う筈だ。腹を決めて、一斉にだ。
単独犯である可能性は低い。数人で反抗を起こさなければこの厳重な警備体制にある施設を制圧することなど出来るわけがない。だから銃声やら何やらがもっと多く聞こえてきてもおかしくはない筈なのだ。
仮に単独犯だとしてもおかしい。高度な防御セキュリティの中に単独で特攻するということは半ば自暴自棄になっている訳で、だとしたら半狂乱のまま拳銃を乱射して特攻してくる——そんな図の方がよほどしっくりとくる。
何故、一発しか銃弾がこないのか？　それには何か理由があるのだろうか？
その瞬間、頭に軽い衝撃が飛んでくる。
小石か何かなのだと思った。三沢は一瞬混乱する、どうして小石が自分の真横から飛んでくるのだろうか。
敵襲だと気づくのに、二秒。
僅か二秒の間でも人間が出来ることは意外と多い。やはり複数による反抗か。先ほど弾丸を放った奴の仲間ということか、三沢は左を向いてサブマシンガンを構える、また小石が飛んでくる、だがヘッド

ギアの前にそんなものが通用するわけがない、やり過ごして蜂の巣に、
　視界が暗転する。
　ヘッドギアに泥か何かをぶつけられたのだと悟る、そのため視界が遮られたのだ！　サブマシンガンの引き金を引こうとするがこの視界で放っても命中するわけがない、乱射は無意味だ、三沢は慌ててヘッドギアを外し、敵の姿を肉眼で確認する。
　ここで、十秒。
　十秒は、足の速い人間ならば百メートルを詰められる時間だ。そして、足の遅い人間でも——数十メートルを詰められる時間だった。
　ヘッドギアを取った三沢の肉眼には、間近に迫った少年の顔と、その右手に握られた煉瓦の色しか映らなかった。
　引き金を引くには遅すぎた。
　煉瓦が三沢の頭で破裂する。半ば破片となった煉瓦の二撃目で、三沢の意識も破裂する。

　距離がゼロになり、茂みの中に慎重に足を踏み入れた大森が見たものは、
「これは、」
　破裂した紙パックの残骸だった。
　どうしてこんなものがこんなところにあるのだろう。牛乳などが食料として支給されたことはないし、だとしたらこの無人島に昔からあったゴミなのだろうか。こんな風に乱暴な開け方をして飲むような子供は、果たして自分が若かりし頃にはいただろうか。いたような気もする。まあそれはともかく——どうしてゴミがこんなところに、
　——違う。
　大森は自分の混乱した思考を必死に整理しながら、一つの結論を出す。これが拳銃の正体だ。
　さっきのは銃声でもなんでもない、膨らませた紙パックを爆発させた音なのだ。紙パックを爆発させた音は拳銃に良く似た音だ。拳銃を実際に使ったことがなかった子供の頃には判らなかったけれど。

昔よくやった遊びに、飲み終わった紙パックの容器にいっぱいに空気を詰め込んでそれを思い切り踏みつける、というものがあった。ヤクザの家の前でやったりすると顰蹙と暴力を買ってしまうので止めておこう、というのが子供らの間での決まりごと。

その子供だましが、今、自分の前で展開された。

これが拳銃の音だとするならば。襲撃者は、拳銃すらも持っていない。そして襲撃者は恐らく単独犯だ。

襲撃者は自分をここに誘き寄せるためだけに、この紙パック拳銃のトリックを使ったのだ。そして考える。襲撃者は交代の瞬間を狙って襲撃してきた。自分をここに誘き寄せる、何のために？

決まっている。――武器を奪うためだ。自分か三沢から武器を強奪して、その武器で施設に突入するためだ。わざわざ交代の瞬間を狙ったのは、この瞬間にこそ自分たちの集中力が途絶える、ということを計算したのだ。

気配を感じる。その気配の正体が何であるか大森は既に判っている。自分から武器を奪うために潜んでいた襲撃者だ。だがここまで判っていれば自分が戸惑うことは無い。俺から武器を奪うことなど無理だ。残念だったな、

大森は半ば余裕を持ってサブマシンガンの銃口を声のした方向に向け、そのまま振り返ろうとして矛盾に気づく。

――待て、

声が後ろから聞こえた？　後ろには施設があり、その施設の前には三沢が立っている筈で、――それならば、

混乱が大森の思考を焼き、次の瞬間には痛みと熱が防弾チョッキ越しに背中をも焼いた。ぱららららら、と古いタイプライターを叩いたような音が耳をも焼く。鉄球をぶつけられたような痛みが走り、大森は一瞬で気を失う。

その一瞬で大森は考える。つまり、俺より先に三

沢が始末されたということか。茂みの裏から回り込んだのだ。サブマシンガンを構えている自分より、まだ構えていなかった三沢を優先したのだ。そして、三沢からサブマシンガンを奪って――

同じ刹那。掠れていく意識の中で振り返りかけた大森が見たのは、月光で輝く小柄な青年の姿だった。

別の場所に放置しておいた切り札入りの重い鞄を手に取り、七瀬彰は大きく溜息を吐く。汗がびっしょりと背中を走っていて、身体は火照っているくせに汗が妙に冷たいことを自覚する。心臓の音が嘘のように高い。

倒れた男からサブマシンガンと防弾チョッキを奪い取る。防弾チョッキから弾丸を払って着込む。多分再利用しても大丈夫だろう、と考える。ヘッドギアも奪い取ってかぶる。これで多少は安全度が増した筈だ。

――全く、子供の行うサバイバルゲームのような、チャチで間抜けな作戦だった。とはいっても、武器のない自分にはこれが精一杯だったのだが。上手くいったのは僥倖。自分には怪我一つないことも奇跡に近い。さきほど奪ったサブマシンガンと併せて二丁。一丁を鞄の中に放り込む。もう一丁を右手に握り締め、その重みに少しふらつきながら、勇気の矢が折れないことを祈りながら、

もう引き返せないんだ。

掠れたような声で呟いて、彰は息を吐く。

392　詠美ちゃん様VS御堂

(くそっ……忌々しい女だ！)

御堂は心の中で悪態をついた。

大庭詠美と名乗る女に捕らえられた御堂は、後ろ手に縛られて座ったまま詠美を睨んだ。

「なによ、その顔は……ゆっとくけどわたしにさからったら『ムーンライトマジカルステージストライ

クレーザービームライフル』……だっけ？　それが火を吹いちゃうんだから！」
「どこにも持ってねえじゃねえか、そんな武器……」
「げ、げんだいのかがくはすごいのよ！　すんごくちいさいの!!」
いずれにせよ、ここで殺される気はない。
ターゲットを主催サイドに絞った御堂だったが、命が危ない状況ならば話は別だ。場合によってはここでこの女を殺さなくてはならない。
だが、その女の武器は未知の兵器――御堂の背中から冷や汗が流れて、落ちた。
「あー、とにかく、わたしにさからわなければ悪いようにはしないわよ」
勝ち誇ったように御堂の周りをぐるりと歩く。
（くそっ！　生き恥だぜ、この俺ともあろうものが……）
いっそ殺されてしまったほうがマシだとさえ思える。
御堂の手を拘束しているベルトは御堂のつけていたもの。緩々になった麻のズボンはすでにずり落ち、その下から黄色がかったふんどしが露出していた。
「くそっ……」
「何よ……文句あるなら『ムーンライトニングスラッシュレーザービームサーベル』で消し炭にちゃうんだから！」
さっきと名前が違うような気がしないでもないが、御堂は外来語が苦手であったし、もともとその武器の正確な名前すら知らない。
（……時代は変わる……か。未知の近代強力兵器……これほど恐ろしいものはねぇぜ。それにこの女の自信……強化兵の能力がない今の俺には少々ヤバイ相手かもしれねぇ……）
御堂の強化兵として、いや、軍人としての勘がそう告げていた。
こう見えても御堂の勘はちょっとしたものだ。

肉体の強さだけでない。そうして御堂は生き残ってきたのだ。
とりあえずは御堂は女の指示に従うことにした。
「俺を……どうする気だ？」
「もちろん協力してもらうのよ。ここを……でるために」
詠美の表情がいきなり真剣なものに変わる。
「ほお……具体的には？」
「う〜ん、さしあたっては協力者がひつよーね。とりあえず柏木って女の人をさがそうとおもうの」
「かしわぎだぁ？」
——御堂は既に柏木家の次女、梓と交戦していた。
だが、御堂はその女の名前までは知らない——
「で……どうしようてんだ？」
「……さあ……」
「なめてんのか、このガキ」
御堂から見れば詠美もあゆもただのガキだ。
「ガキって呼ばないでしたぼく！」
（したぼくってなんだ……？）
最近の流行りなのだろうか。どちらにしてもあまりいい気はしない。
「……まあいい。で、俺はどうすればいい」
「そうね……とりあえずしたぼくが三人増えたことだし……前途揚々ね」
「三人ってなんだ……」
「あんたとー……」
御堂を指差す。
「ぴこっ！」
「にゃう！」
二匹が順序良く返事した。
（お、俺がこいつらと同格か？　死にたくなってきたぜ……）
「いっしょについてきてもらうわよ！　……あとで……全部話すから」
詠美の表情が、今度は悲しみに彩られた。
何かを失ってしまったような、そんな深い悲し

み──
「……ちっ、わかったから手のベルトを解いてくれ……」
　ようやく身軽になった御堂は、詠美の前をボディーガードさながらに歩く。
　とりあえず柏木という女を捜せ……といってもアテがあるわけはなく、ただ安全な場所へと移動しているだけなのだが。
　いつ敵に出くわすとも限らない。
　比較的安全な木陰へと移動する。
「とりあえずよ……武器返せ……別に危害は加えねぇからよ……」
　この島での丸腰は危険だ。すでに詠美から殺気を感じられないと判断した御堂は自分なりに穏やかにそう言った。
「あんた……怖いからイヤ」
「おめぇには『むーんらいだーなんちゃら』って武器があんだろ？」
「そ、そうよ。『ムーンライダーワンダフルグレイトレーザー』があれば無敵だもん！　か、返せばいいんでしょ……ゆっ、ゆっとくけど、逆らったら『ムーンライダーなんちゃら』が……」
「つーかよ、分かりやすく省略してくれ、その武器名」
「う、うん、ぽ……『ポチ』……かな？」
「ぽちだぁ？」
「な、なによ、わかりやすいでしょ！　あたまわるいあんたのためにつけてやったんだから、かんしゃしてよね！」
(このガキ……)
「ぴっこり」
「にゃうにゃう♪」
　まあいい、と御堂は思えた。
(忌々しいが、このガキのもつ『ポチ』とこの銃があれば対等に戦えるかもしれねぇな。まあ、その前に腹の爆弾を何とかしなきゃならねぇが……。少な

くともこのガキ……『しすぷり』って娯楽劇の話しかしなかった戦闘力皆無のあのガキよりはマシだろう……）
御堂と詠美の二人は、とりあえず脱出へ向けて一歩近づいた……かもしれない。
「ねえ、あんたってさ……そのバインダー……」
詠美が御堂のバッグに入っているバインダーを指差す。
「このバインダーがどうかしたか？」
「桜井あさひ……好きなの？」
桜井あさひ——知らない名前だ。このバインダーや、中のカードに写っている女のことだろうか。
「……とりあえず役に立ちそうだったからな」
結構丈夫な厚紙だ。しかも分厚いときている。
銃弾に対しては心許ないが、刃物の類相手なら充分な盾になるだろう。
「ふーん……『あさひちゃんマニア』なんだね……」
「？　……まあ、戦う時が来たら服の下にでも括り付けておくのが効果的だな」
そうしておけば胸を狙われても致命傷になる確率はグンとさがるハズだ。
「そ、そうなんだ……お、おまもりみたいなもの？」
「……そうとも言えねぇこたあねえがな……」
身を守る——という意味ではお守りともいえないこともない。
まあ、御堂は神頼みなどする気も起こらないが。
「本当はずっと括り付けておきてぇが動きにくくてな……」
「そ、そおなんだ……あはは……が、がんばってね……おーえんしてるからさ」
「？？？」

393　偽りの平穏

ジープを降りてもう数時間が経つ。
今のところは誰かに会うわけでもなく、また襲われるわけでもなく、とりあえず、保科智子はうたかたの平穏を享受していた。
しかしそれも、今日一日を通して振り返ってみれば、激しすぎる銃撃戦と硝煙の狭間で燻る、ほんのわずかな空白でしかないことは明白だった。
日もすっかり暮れた。夜の闇は十分に深い。
五回目となる放送で伝えられた死者の中に自分の知り合いの名前は無かった。そのことに、ひとまずほっとする。
……それでも、順調に人が死んでいっていることになんら変わりは無かったが。
下卑た笑いを浮かべながら、自分たちを見下している高槻の姿が容易に想像できた。
くそっ。
智子は心の中で毒づいた。
いつか一泡吹かせてやるからなぁ。
そんな闘志が再びみなぎってきていた。
死亡者リストに知り合いの名前が上がらなかったことで、智子は彼らのことを思い出していた。
「あかりはうまくやってんやろか……」
思わず智子はそう呟いていた。
わずかな心配が、心の中での呟きを口に出させてしまったのだ。
海岸での様子を見るに、もうあの二人が離れ離れになることとは無いやろ、とたかをくくっていた。
というより、あれが本来の姿だということは、智子はもちろん普段の彼らを知っているものなら誰もが納得するところだった。
おそらく、あの二人が戦場に戻ることはもう無い。
それならば、ゲームの終了時まで穏やかに生き延びて欲しい。

藤田君からあんなセリフ聞くのも、あかりの涙を見るのも懲り懲りやわ……。
智子はそう考えていた。
「この分なら、藤田君があかりのことを守ってくれてるんやろな。あかりを任せられる奴なんて、あんたの他におらへん——頼んだで、藤田君」
智子は祈るように呟く。
それにしても、ナイトに守られるお姫様——不謹慎かも知れないが、少しあこがれるシチュエーションだと思う。
「きっと大丈夫ですよ」
マルチは智子の独り言に相槌を打った。
「あの方たちほどお似合いのカップルを、私は他に知りません」
マルチは満面の笑みでそう付け加える。
智子は一呼吸おいたあと、マルチの頬を指で摘まんだ。
「はうぅ……智子さん、何をするんですかぁ」
「あんた、ほんま、ロボットかいな？　ここも柔らかいし、実は中の人が入ってるんとちゃうか？」
そのままぐりぐりとマルチの頬をつねる。
「はわわわわわ〜〜、私は正真正銘ロボットですよぉぉ〜〜」
そうする智子の表情は、マルチとなんら変わるところのない笑顔だった。
しかし、そうしてる間にも事態は刻々と進行していた。
一つは智子の腕だ。
銃弾を受けて傷ついたものの、特に動かすのに支障が無かったため、簡単な処置だけで済ませたまま現在に至っていた。
「あかんな……。生兵法は怪我のもと言うが、治療とかについても同じじゃや……」
「どうかしましたか？」
マルチが智子に視線を向ける。
「ん、なんでもないわ」

しかし、マルチに心配をかけるわけにはいかないと、傷が悪化している事実を隠していた。
そしてもう一つ。
智子の腕の他に、目前まで迫っているタイムリミットがあることなど、智子も、マルチも、気づくべくも無かった。
「しかし暗いなぁ……、何にも明かりになるようなものがあらへんで。……ま、当たり前か」
そう、明かりなどつけていたら、敵対者の絶好の的になってしまう。
あくまでもここが戦場であることを智子は再認識した。
「そうですねぇ」
マルチはそのセリフに相槌を打った。
「私ら、よう考えてみればここ数時間飲まず食わずで歩き通しやん」
と言ってから、智子はそのセリフの間違いに気付いた。
「私らやない、私だけや！　あんた水分補給の必要ないやん!?」
なにげにマルチをにらむ。
マルチは慌てて言った。
「わ、私だってエネルギーを補給しないと倒れちゃいますよ～」
「……せやな。でもあんたのエネルギーって電気やん。どうやって補給するん？」
「う～～……、確かに充電装置は無いです……」
マルチはばつがわるそうに言った。
だが、すぐに持ち直して言った。
「あ、でもなぜかエネルギー残量はまだまだあるんですよ～」
どのくらいや、と智子は聞いた。
「え……と、あと一日は問題なく動けるかと」
「一日か……。じゃああんたの心配はせんでもええな」
「何でですか？」

マルチは智子に問い掛けた。
それに対し智子は、まあいろいろあるんや、と言葉を濁した。
――まさか、あと一日自分が生きている保証が無いなどと、この子に言えるわけが無かった。
「はぁ、そうなんですかー」
いろいろ考えていらっしゃるんですね～、とマルチは手放しに感心していた。
「そうやな」
呟くと、智子は自嘲気味に笑った。
「ん？」
智子は突然足を止めた。
「どうしました？」
智子の様子が変なことに気付き、マルチは智子を呼んでみた。
「……今、声がせえへんかったか？」
「……声、ですか」
「せや、声や……」
二人は改めて耳を凝らし、あたりの様子をうかがった。
「…………」
――聞こえた。
確かに、いる。
しかも複数人。
「ど、どうしましょう智子さん？」
「しっ！　静かにするんや。まだあっちは私らに気付いてへんみたいやからな。ここは様子を見るんや」
智子は、口に人差し指を当ててそう促した。
「わ、分かりました……」
マルチもそれに従うように声を潜めた。
「とりあえず隠れるで。こっちに来そうやからな……。静かに、静かにや……」
そして、二人は茂みに身を潜めた。

――誰か、来る。

394　涙と慕情

――五回目の定時放送が鳴り終わった瞬間、私は崩れ落ちた。
「うっ……ああ……ぁあああああああ……」
玲子さん、彩さん、そして南さんまでもが死んだ。一度に三人もの知り合いの死が言い渡された。
もうダメだ。死ぬんだ。私も、殺されちゃうんだ。ちょっとだけ忘れていられたけど、これが現実なんだ。もう終わりなんだ。どうしようもないんだ。
和樹さんにも会えないで死ぬんだしぬんだしぬんだしぬんだしぬんだしぬんだしぬんだしぬん……
「――しっかりしいやっ！」
パチンと、頬を張られた。
「まだやっ、まだうちらは生きとるっ。どれだけつらくても。どれだけ悲しくても……生きてる限り、まだ終わるわけにはいかへんのや！」
私の頬を両手で押さえて、晴子さんは私に向かって叫んだ。
観鈴ちゃんが、私の服の袖を掴んで、ふるふると泣きそうになりながら首を振っていた。
私の頬にかかっていた手が、力なく落ちる。
晴子さんは私に背を向けて、言った。
「……もしあんたが死んだら、死んだ仲間たちを偲んでくれる人がいのうなる。誰も思い出してくれないまま、風化する。そんなの……もっと悲しいやん」
握った両手が、震えていた。
……そうだ、私がちゃんとしなくちゃ。ちゃんと生きなくちゃいけない。
「……ちゃ……しなきゃ……」
その心とは裏腹に、涙は止まらない。
どれだけ止めようとしても。
どれだけ笑おうとしても。
割り切れない思いが、心を揺さぶって離してくれ

なかった。
……それから少しの間、晴子さんたちが私に話しかけてくることは無かった。
——それが、彼女たちの優しさなのだと、私はそのとき思った。

——あさひの涙がようやく止まった頃に。
「……なあ」
ぽつり、と。
まるで誰に言うでもなく、晴子は呟いた。
「本当の母親て、一体どんなんやろな」
一瞬、何のことを言っているのか、あさひには理解できなかった。
「さっき、言うたやろ。あの子の友達になったたって、て」
コクリ、とあさひは頷く。
「同い年ぐらいの子と仲良くなりかけるんやけどな、そこまでやな。ダメなんや、あの子。そーいうんを全部拒否してまうんや。自分では本当に仲良うしたいと思ってるのに、急に癇癪起こして……自分でどうしようものうなって……で、友達になってくれそうな子はみんなあの子を遠ざけるようになってまう」
観鈴は歩いている順番の一番後列だったため、丁度その晴子の話は聞こえていなかった。
「……ホンマの母親なら、何かしてやれることがあったんやろか」
そう言って、晴子ははあ、と嘆息した。
「えっと……それは」
「ああ、言ってへんかったか。うちあの子の生みの親じゃないんよ」
えっ、と一瞬、あさひは喉が詰まった。
「育ての親としても三流や。あの子が、あんなつらそうに、寂しそうに笑うん、知ってたのにどうにもできへんかった。……もっと愛情を注いでやればよかったなんて、後悔したのも散々や。そんなん単な

る偽善やのに。……一番嫌いなことのはずやったのに……」
晴子は悔しそうに歯軋りする。だがその一瞬あと、立ち止まってあさひの方を振り向いた。
「……でもな。うち、この運命に感謝しとるんや」
そして、笑顔でこう言った。
「なにせ、観鈴を一人にせんですんだからな」
それは名前通りの晴れの日の青空のように、カラっとした爽やかな笑顔だった。

「――人形劇?」
「そう、往人さんって言うの」
「善良な子供から金巻き上げて日々暮らしてるヤクザな行き倒れやな」
「お母さんっ!」
「真実やで?」
「でも今時珍しいですね、流しの人形劇なんて……」
「珍しさでは極致やな、超能力人形劇なんて」
「え、超電磁人形劇?」
「なんでやねん」
「にはは、楽しそう」
「二人してアニメの見過ぎや……」
「なるほど、往人さんの人形の秘密は超電磁パワーだったんだ、あさひちん鋭いっ」
「え、え……」
「本人は法術、とか言うてたけどな。手品と大した違い無いやろ。しょぼい商売や」
「あ、お母さんひどい。往人さんいつも必死なのに」
「そら生活かかっとるからなー。あいつ金の亡者や」
「えっと……それで、何が超能力なんですか?」
「「あ」」
観鈴も交えた三者は、歩きながら往人の話題で盛り上がっていた。

「えっ、手も触れずに人形を？」
「そんなんガキに見せたってありがたみ分かるわけないっちゅうねんなー」
「そんなことないよ、この前は子供たちみんな盛り上がってたよー」
「それは客寄せのアイスクリームに喜んどったんや」
「アイスクリームって……」
「おかげで総合収益は赤字やな、アホちゃうかと」
「もう、お母さんなんでそんなひどい事ばかり言うの!?」
「家主の権利や」
「が……がお……」
がすっ。
「お母さんがぶった……」
「そんな生易しい効果音に聞こえないんですけど……」
「ま、気にせんとき」
「うう……」
「そか……私もその人形劇、見てみたいです」
「そんなおもろいもんでないで？　ただ歩いてるだけやし、他にバリエーションあらへんし」
「で、でも……」
「人形もぼろいしなー。せめて見た目だけでもハクつけたろかって新しいのと換えてやったら今度は怒るし」
「それはお母さんが悪いよっ」
「せやな、反省しとる。誰にでも大事なもんはある」
「その……人形劇の人はどんな人なんでしょう」
「居候やで」
「観鈴ちんのまぶだち、ぶいっ」
そのセリフを聞いて、晴子は一瞬はっとして……そして、笑みを浮かべた。
「……せやな。あいつは観鈴の親友で……家族や」
「晴子さん……」

「お母さん……」
「さっき」
晴子は立ち止まって、言った。
「言い忘れたことを思い出したわ」
その視線は、あさひの方を向いている。
「……人間は一人では生きていかれへんのや。人間は弱いからな。でもな、それは裏を返せば、自分のことを支えてくれる人が他に一人でもいるなら……そこがどんなに厳しくても、どんなにつらくても、やっていける。それが人間の強さや。観鈴の友達になってくれるっていうあんたの返事、うちホンマに嬉しかった。……なあ、うちらではあんたの支えになれんかなぁ」
その台詞を聞いたとき、あさひは思った。
――涙って、悲しいときばかりに出てくるものじゃなかったんだなぁ。
ポン、と観鈴があさひの肩を叩いた。
それこそ、まるで母のような優しげな表情で。
「はぅ〜っ、いい話ですぅ〜〜」
「――!?」
歩いていた面々――晴子、あさひ、観鈴――は、一斉にその声が聞こえてきた方に視線を向けた。

395　カウント・ダウン

――ほんの数分前のことだった――。
「あ、智子さん聞いてください。わたし、センサーの故障が治ったんですよ〜」
「そらよかったな。で、どういうことやねん?」
「はい! つまりですね、普通の人間の方と比べて四〜十倍の範囲の音声を拾い聞くことが出来ます!」
「なんや、センサーって耳のことかいな……けど、ちょうどええわ。今来てる連中の会話を盗み聞きしてくれへんか? 話せそうな相手ならよし。やばそうな奴らだったら、即逃げるで!」

「分かりました！」
「――ったくもう。この子、余計なところが人間くさいんですわ」
「はー。これがロボット言うんやからなぁ……。世の中進歩したもんやな」
「ほんまですわ。しかもこの子、人間以上にドンくさくてかないませんわ、ロボットだと思って接すると、逆にこっちが痛い目見ますよってに」
「あうぅぅ、わたしなんてどうせダメダメダメイドロボですよぉ……」
「あーもう、いじけんなや。あんたから明るさ取ったら何残る言うの？」
「あうぅぅぅ……」
それが追い討ちになっていることも気づかないほど、智子は勢いに乗って喋っている。
一方のマルチは、威勢のいい関西弁の会話に挟まれておろおろするしかなかった。

なにやらその二人――晴子と智子――がいつもより異常に活発に見えるのは気のせいだろうか？
「なんかお母さん楽しそう……」
「ホントですね……」
なんとなく会話に入っていけなかった観鈴とあさひは、その様子を見て一致した見解を述べた。
「――でも、敵意ある人間でなくてよかったわ。ほんまに」
「……そうですね」
微妙に会話のトーンが下がる。
しかしそれは恐れや悲しみから来るものではなくて――。
「悪かったな、痛い話聞かせてもーて」
晴子はマルチに謝罪した。
「そ、そんなことありません！　なんていうか……。よく、わからないんですけど、モーターがほんのりあつくなってそれで……、そ、その、あの、とにかく私は全然痛く無かったです！」

そんなマルチの様子を見て、晴子はふっ、と笑い一言、
「ありがとうな」
と言ってマルチの頭を撫でてやった。
「あ、はうぅぅぅぅ……」
頭を撫でられること。
――久しく味わっていないその感触に、マルチは幸せそうにうつむいた。
「ほな、自己紹介させてもらいますわ。私は保科智子言います。高校生です」
「えっ、高校生なんですか!?　ず、ずいぶん大人びてるから、わたし、てっきり社会人の方かと思ってました……」
驚いているあさひに、
「私、制服なんですけど……」
と、智子は辟易しながら答えた。
「てっきりイメクラで夜の副業でもしとんのかと」
「なんでやねん」
「お母さんイメクラって何？」
「子供は知らんでえーの」
「智子さんイメクラって何ですか？」
「マルチ……あんたも悪乗りすんなや」
智子は振り向きざまにマルチに脳天チョップをかました。
「はうっ、冤罪です～～～」
泣きながらの抗議ではあったが、鬼の検察官保科智子は全く聞く耳を持たなかった。
「……あー。えっと、私のことは智子でええです。そいでこっちが――」
智子がマルチを見ると、マルチもさっきのを見習ってすぐに自己紹介を始めた。
「ハイ！　私は汎用アンドロイドのＨＭＸ―12型、マルチと申します。こう見えてもれっきとしたメイドロボなんですよ。ちなみに夢は世界一のメイドロボになることです！」
マルチは胸を張ってそう言った。

「え、ＨＭシリーズって……、もしかしてあの〝グルスガワ〟のメイドロボなんですか？」
心当たりがあったのか、横で話を聞いていたあさひが口を挟んだ。
「ハイ。一応セリオさん――ＨＭＸ―13型の方ですと並んで、ＨＭシリーズでは最新鋭のメイドロボなんですよ」
いつもなら、えっへん、と胸を張っていそうなものだが、今のマルチのセリフは全然そんな調子ではなく……、むしろ憂いさえ帯びていた。
そして、その理由など、智子を除いた面々に分かるはずも無かった。
「す……すごいんですね」
あさひはそのことに気付かなかったのか、素の感想を言った。
なにやら感心しているようだ。
と、すぐに自分が話を脱線させたことに気付き、あさひはばつが悪そうに晴子の方を見た。

「もうええの？　ホンならうちの番やね。うちの名前は神尾晴子。晴子でええわ。んでこっちのがうちの娘で……」
晴子は観鈴に目をやった。
「み、観鈴です。よろしくお願いします」
観鈴は慌てて挨拶をする。
「うん、よろしゅう。……で、そっちの方は？」
「あ、えと、桜井あさひと言います」
「桜井さんやな、分かったわ」
智子はやけにあっさりと納得してしまった。
「あ……ま、待ってください。そ、その……」
「ん、何やの？」
「え、えと、その、あの……」
「……何やの、はっきりせん子やな」
心持ち、むすっとした口調で智子は言った。
――実は智子より年上だなんて言えない。
「あ、あさひでいいです」
「へ？」

「あさひって呼んで下さい！」
ついついどもりながら喋ってしまう自分への苛立ちからか、大声を出してしてしまった。
「……分かったわ。ほな、あさひって呼ばせてもらうで」
パッとあさひの顔が明るくなったのを智子は見逃していなかった。
「あさひさんって凄いんですよ。何でも大人気声優なんだって」
にははっと笑いながら観鈴が言った。
「そ、そんな、大人気だなんて。えと、その……」
「……声優？」
智子の目が、いや眼鏡がキラリと光る。
「なんや、あんた声優なんてやってはったの？」
「ハ、ハイ」
「またエラいマニアックな職業やなー」
ズキッ！
あさひは何か鋭い矢のようなもので胸を貫かれた気がした。
「けど、その割には話し言葉どもりまくりやん……。素人くさいわ、ほんま」
「うぐっ！」
さらに追い討ちでとどめを食らってしまった。
「あ、あたし……、ま、ま、マイクを持つと凄いんです……」
まるで心臓病患者であるかのように胸を押さえながら、ふらふらとなんとかあさひはそう言った。
「そうか？　信じられへんわ……」
ジト目で智子はあさひを見つめる。
「う、ううっ」
ちょっとあさひは涙目になった。
——元からだったかもしれないが。
プッ。
智子は我慢しきれなくなって吹き出した。

「あっはっは。冗談や、冗談」
あさひはぽかんとしている。
「人は見かけのよらんものやからな。きっとホントに凄い声優なんやろ」
「そ、そんな。あたしなんて、その」
あさひは照れながらそう言った。
「いつかあんたの仕事も見せてもらいたいもんやわ」
あさひはそれを聞いて、
「カードマスターピーチっていうアニメ、ご存知ですか?」
と聞こうとした。
――だが、そのセリフが言い出されることは無かった。
変化は、そのほんの一瞬前に。
あまりにささやか過ぎて、誰も気づかないほどの。

ドギュウウゥウン!
響く。
鈍色の銃声が。カナシミ色の叫び声が。
……所詮はうたかたの平穏だった。
死は、どこまでも近いところに潜んでいた。

396 とりあえず、出ませんか?

「……その人の名前、何て言うんですか?」
短刀を持って殺気立っているなつみに、茜は訊ねた。
「宮田健太郎……」
「……宮田……?」
記憶を掘り起こす。
最初の死亡放送で、確かそのような名前があった気がした。
その放送で、男と思われる名前はその一つ。

そして茜は、放送以前に、一人の男を殺害していた。
（……まさか、本当に私が……？）
僅かに動揺する。
普段から感情を表に出すこともなく、今度もバレないだろうと踏んでいたが、
「やっぱり、あなたなのね……店長さんを殺したのは……」
簡単に見破られていた。
「……そうみたいです」
シラを切り通すこともできたが、そんなことをしても意味はなさそうだった。
「ようやく見つけたよ、ココロ。一緒に、店長さんの仇を討とうね？」
短刀を撫で、茜に襲い掛かった。
その腕は、震えていた。
慌てず騒がず、茜は手榴弾の安全ピンを抜いた。
「……離れて下さい」
それだけ言い、壁に向かって投げ付ける。
同時に、廊下の反対方向へ走った。
できるだけ、出来る限り、速く。
そして、その場に伏せた。
ドォォォン！
次の瞬間、爆発。衝撃が茜となつみを襲った。
「……ふぅ」
起き上がり、手榴弾を投げ付けた壁を見る。
壁は見事に破壊され、外へと続く大きな穴が空いていた。
「……あの人は無事ですか？」
すぐに、廊下の向こうに見つかった。
短刀を取り落としている。
それを拾おうと、茜は走った。
なつみも遅れて手をのばす。
なつみが一瞬早く短刀を拾い上げ、その手を、茜は蹴り飛ばした。
カランという音を立てて短刀が転がり、今度は茜

が拾いなおす。
短刀の先をなつみに向けて……なつみは床に座り込み、泣いていた。
「終わっちゃったね、ココロ。私の居場所を奪った人を。店長さんの仇をとろうとしたのに。終わっちゃったね……」
茜の方を見ようともしなかった。
ただ俯き、呟く。
雫が頬を伝って床に落ちた。
茜は無言でそれを見つめ、短刀をしまった。
壁に空いた大穴を指し、一言。
「とりあえず、出ませんか？」

397　今度会うときは……

「どうして殺さないの？」
校庭に出たなつみは、まず最初に訊いた。
曰くこの女、血も涙もない殺人鬼だそうではないか。
それに、健太郎を殺してもいるのだ。
何故自分が殺されないのか、わからなかった。
「……武器は奪いました。あなたはもう戦えません。……だから、殺さなくてもいいんです」
なつみの先を歩き、言う。
視線は前を向いており、なつみの方を見ていない。
それは余裕か、信頼か。
「……それに、疲れました。……たい焼き、食べ損ねましたから」
笑う。
その笑顔は、なつみには見えない。
「甘いわね」
「……はい。今日、何度も思いました。……だけど……」
脳裏に、祐一の顔が、詩子の顔が浮かぶ。
「……これが、私です。……さっきの人も一度殺せなくて、それでまた襲われましたけど。……多分、

これでいいんです」
「でも、結局あなたが殺したんでしょ？」
「……だから」
始めて、茜は振り向いた。
「……今度会うとき、それでもまだ私を狙うなら。……震えもせず、本気で私を殺しに来るのなら、容赦はしません」
瞳に冷たい色が宿る。
なつみはそれを見た上で、言った。
「今度会うときは……殺すから」
二人は別々の方向に走り出す。
何を言われようとも、なつみは茜を許すつもりはなかった。
この手で殺したいと思い、今度会うときは、遅れをとらないよう――
私の居場所を奪った人。
なつみは茜をそう言った。

茜の脳裏に、一人の女の子の顔が浮かぶ。
（……私の居場所を奪った人。……もう、いない）
茜の居場所は他にもあった。
しかし、一番居心地のいいあの瞬間は、もうなかった。
それでも、諦めきれない。
誰もあの人のことを覚えていないから。
言っても信じて貰えないから。
だから、待ち続ける。
誰か、この苦しみから開放してくれないだろうか。
ふと、祐一の顔が浮かび、慌ててその影を消す。
開放されることは、あの人への裏切りだ。
それでも――
今度会うときは、祐一は自分に、何を与えるのだろう――

398　拒みたい真実

林の中のけもの道を、男女が歩いている。
「ねぇ、一体どこに向かって歩いてるの？」
詠美が半ば、怒り気味な声で訊いた。
彼女は先程から御堂が自分の前を偉そうに歩いているのが気に食わないらしい。
彼女は知らない。御堂が周囲に不自然な人の痕跡が無いか確認しながら歩いていることを。
「……知るか、とりあえず柏木とかいう女を探すんだろ？　死にたくなけりゃ黙って俺について来い」
御堂はぶっきらぼうに答えた。
「むかむかむかぁーーーっ！　なによその態度っ！　したぼくのくせにちょおなまいきっ！」
「……ったく、うるせぇな。だいたい何なんだよ、その『したぼく』ってのは？　何て字で書くんだ？」
御堂は、したぼくの意味は知らないが、どんな字で書かれているかが分かれば意味も何となく分かると考えた。
「え？　あんた漢字も知らないの？　バカじゃないの」
「うるせぇ！　大きなお世話だっ！」
余談ではあるが御堂は学生時代、喧嘩は強かったが勉強はからっきしであった。
「えっとねぇ、上下の『下』に、僕私の『僕』よ。分かった？」
「……下僕じゃねぇかよ！　このアマふざけやがって！」
御堂は詠美に怒鳴り散らす、そのまま胸ぐらをつかみそうな勢いだ。
「おっと、忘れたの？　あたしには『ぽち』がいるのよ？」
右手をポケットに入れて、何かがあるような素振りをして詠美が言う。

「……いい加減、『ぽち』ってやつを見せろよ」
「いやよ！」
しばらくそんなやりとりを交わしているうちに、狭い林道に出た。
林道にはいくつかの足跡……しかも同じ靴跡である。
（一、二、三……四人か……同じ靴の跡、管理側の人間か）
御堂は足跡をたどることにした。そんなことはつゆ知らず詠美の話は続く。
「その子達、あんたにすっごくなついてるわよねぇ」
詠美は御堂の頭上で丸くなって眠りについている二匹の小動物を指差して言った。
「……知るか、勝手について来てるんだよ」
御堂はやや恥ずかしそうに言った。
「あんたってひょっとして、ムツゴロウさん？」
「ムツゴロウ？　干潟にいるアレか？」
「違うわよ！　『いや〜、可愛いですね〜』って言いながら犬とかにキスする人よっ！」
「……莫迦か、そいつは？」
「ひっどーーーい！　ムツゴロウさんはいい人なのよっ!!」
「シッ！　静かにしろ……ありゃ、何だ？」
「え？　何かあったの？」
詠美は御堂が指を指す方向に視線を移した。
そこにはコンクリートで出来た建物があった。平屋建てで一般の住宅より少し大きいくらいの大きさ。張り出している部分は車庫だろうか。
「何だろ？　……何かの施設じゃないの？」
「施設？　……どんな施設だ？」
「知らないわよ。無線とか……じゃないの？」
詠美はこの島のどこかに無線施設があるという和樹と楓の会話を思い出した……
「無線か……よし、あそこを制圧する。お前はここで待っていろ。あと、こいつらを頼む」

「にゃにゃ？」
「ぴこ？」
そう言うと、御堂は頭の上の小動物をひょいっと摘み上げ、詠美に預けた。
「せいあつって……ちょっ――」
詠美が御堂に視線を戻した時には、御堂は既に施設へ向かって疾りだしていた。
金属製のドア……御堂はそこに耳をあてる。
仙命樹の力が弱まっているといっても、部屋の内部に居る人間の会話ならはっきりと聞き取れる。
男の声……数は足跡と同じ、四人。
『ったく、まだ終わらねぇのかよ、ゴキブリ並みにしぶてぇな』
『ホントだぜ、さっさと死ねよ、あいつら』
『だけどよぉ、何か嫌じゃねぇ？　人が死ぬって』
『いいじゃねぇか、金さえ貰えりゃあ。だいいち、他人だぜ？』
『そりゃそーだ！』
『ギャハハハハハハハ‼』
御堂は体全身がカッと熱くなるのを感じた。奥歯を噛み締めギリッと音がする。
（こいつらに、生きる資格は……ねぇな）
『あ、俺小便行ってくらあ』
『気をつけろよ』
『へーきへーき！　いざとなったらコレがあるしな』
足音が聞こえる……こちらに向かっているようだ。どうやら一人の兵士が外へ出るようだ。
御堂はすかさずドアが開いた時、死角になる場所へ隠れた。
ギィ……。
わずかなきしみを帯び、金属のドアが開いた。
出て来たのは、中肉中背の男……戦闘服を身にまとい、肩にはサブマシンガンを下げている。
ガチャン！
ドアが閉まる。

すかさず御堂は男の背後に回り、兵士の首に左腕をまわし、ぐいっと引き入れる。
空いた右腕は、男の後頭部へあてがい、そのまま前方へ一気に力をこめる。
「!!」
男は首を折られ、何も言わぬ肉塊となり、地に伏した。
「この人……死んでる……？」
声の主は詠美だった。胸元に二匹の獣を抱えている。
「……待っていろと言っただろ？」
「だ、だって……」
詠美は黙り込んでしまった。御堂は悟った。一人では不安だったのだろう。
「分かった。五秒で片付ける」
彼にとっては三人の兵を殺すことなど五秒もあれば事足りる任務であった。
あえて銃は使わない。狭い室内での拳銃の使用は耳に響くからだ。
男の腰に差してあった戦闘用ナイフを奪取すると、御堂はドアノブに手をかけた。
ドアのすぐ前に一人……。
左手を男の左頬に当て、一気に右側へ押し込み、首を折る。男の顔は右へ向き、そのまま崩れる。
「なっ!?」
三時の方向約五メートルに二人目……。
御堂は地を蹴り、二人目の男の首をすれ違い様に先程奪った右手のナイフで斬りつける。
「ぐあっ！」
ナイフは男の頸動脈を捕らえ、盛大に血飛沫を上げ、石床を紅く彩った。
「くそっ!!」
最後の一人……一番奥のイスに座っている。距離は約十メートル。
男は拳銃に手をかけ、迫り来る御堂へ――
「遅いっ！」

御堂は右手のナイフを投げ放つ。ナイフは空を薙ぎ、男の眉間に深深と突き刺さる。
男の手からするりとニューナンブがこぼれ落ちると同時に、
ガチャン！
御堂が開けたドアが閉まる。
彼の予告通り五秒で制圧されてしまった。
御堂はドアに向かって言い放つ。しばらくすると
「終わったぞ、入って来い」
詠美が顔を出す。
「え？　……ウソ？」
(あの女、死体を見て驚いてやがる……まぁ、俺の予想通りの反応だな)
「あんた……弱キャラじゃなかったの？」
「……は？」
御堂の予想とは少し違ったようだ。
「何言ってやがる。俺は元々強ええんだよ」
「ウソウソ！　だって三人もいたのよ!?　なのにナイフ一本で勝つとか映画の世界じゃない！」
「しらねぇよ！　いちいち文句言うな！」
「みとめない！　みとめない！　したぼくがこんなに強かっただなんてぜーーーーったいみとめないんだからぁ！」
「あぁ、分かったよ、それじゃあ俺は弱いってことにしといてくれ」
「……やけに素直になったじゃない、さてはあんたしたぼくとしてのじかくが――」
「お前を相手にしていても、無駄な時間を過ごすだけだ」
御堂はそう言い放つと、施設の内部を調べまわった。
無線施設ではなかった。どうやらここは兵の詰め所らしい。簡単な水道と照明、寝具、食料、いくつかの武器弾薬。それとバイクがあった。
御堂は保存が利きそうな食料と水、武器弾薬を布袋に詰め込むと、バイクを調べた。

（二輪車か、これは使えそうだな）
「おい！　そろそろ行くぞ！　乗れ！」
バイクのエンジンを吹かしながら御堂が言った。
「待ってよ！　イロイロしらべてるんだからぁ！」
詠美は兵士の持ち物を漁っていた。
「ゾンビをやっつけるゲームであるじゃない死体調べるやつ」
「いいから乗れ」
「それに、二人乗りはおまわりさんにつかまるのよ？」
「いいから乗れ！」
「わ、分かったわよ！　乗ればいいんでしょ！　乗れば!!」
詠美は迷彩色のぶかぶかなヘルメットを被り、バイクに乗った。
「しっかりつかまってろ、振り落とされるなよ！」
「え？　ちょっ――」
詠美の抗議はエンジン音によってかき消された。

399　決意

あたりに一発の銃声がこだました。
（あの方角は、それにあの音は。まさかあの二人になにか！）
弥生はマナの追跡を止め、冬弥と由綺と別れた場所に引き返し始めた。
（藤井さんに由綺さん、私が着くまで持ちこたえてください）
気は焦るが、今は夜であり視界も悪く、足場も悪い。走るわけにはいかなかった。
それでもできる限り急ぐ内に弥生は異常に気がついた。
（おかしいですね。あの銃声の後何の物音もしません。戦っているならなんらかの音がするはずです。まさか、もう二人とも……）
（いえ、そんな事はありえません。あってはいけな

いんです）
内心でそう言い切ったものの、次から次に悪い想像が浮かび上がってくる。
（大丈夫、藤井さんなら命に代えても由綺さんを守って……）
そこまで考えたところで弥生は冬弥の眼を思い出した。
（最初藤井さんは何か迷っているような眼でした。でも次に会ったときの眼は何かを決意した人間の眼でした。まさか。まさか！）
そのまさかであった。そこにあったのは現実感の無い悪夢。自分が先ほど渡した44マグナムを右手に持ったまま顔の左半分が無くなっている冬弥。そして穏やかに、まるで眠っているかのような由綺。
だがそんな状況でも弥生の理性は状況を的確に判断する。
（藤井さんはもうどうやっても無理ですが、由綺さんならあるいは……）

弥生は由綺の体を調べ、首筋に痣を発見した。
（やはり藤井さん、首を絞めて殺したんですね）
無理心中は相手を絞殺する事が多いと弥生は知っていた。
そして一縷の望みをかけて教習所で習った人工呼吸と心臓マッサージを始める。
（由綺さん、生き返ってください！　私はあなたをスターダムにのしあげる以外生きる理由がないんです！）
弥生は必死に人工呼吸と心臓マッサージを続ける。が、しかし由綺が自発呼吸を始めることはなかった。
人工呼吸と心臓マッサージを初めてから十分、ついに弥生はあきらめた。それ以上やっても生き返る可能性は、ほぼ零に等しいからだ。
（藤井さんと由綺さんを脱出させるため。そう思って四人の命を奪った私のしたことは全て無駄だったのですね……もう生きる理由もありません。藤井さん、由綺さん、今私もあなたがたと同じ所にいきま

す……）
　弥生は冬弥の遺体の側に跪き、左手で冬弥の右手をそっと握り、冬弥が握ったままの44マグナムを自分の胸に押し当て、右手で引き金を引いた。
　ガチン、そう音をたてて撃鉄がおちる。しかし弾丸が発射されることはなかった。
　ガチン、ガチン。何度繰り返そうとも同じであった。
（弾切れですか。私は……、私は……、死んではいけないのですか？　生きる理由も無いのに。それがあなた方のためにといって罪のない命を奪った私への罰なのですか？　だとしたら酷すぎます。藤井さん、由綺さん、私を死なせてください！）
　その時声が聞こえた。それは弥生だけに聞こえた声だった。
　弥生さん、生きて。
　弥生さん、生きてください。
　それが私達の最後の願いです。
　涙が止まらなかった。生きる理由が無いことに。それでもなお死んではならない事に。しばらく弥生は泣き続けていた。
　泣きやむと再びいつもの弥生に戻っていた。二人の装備から使える物を探し始める。それが終わると弥生は立ち上がり歩き始めた。最後に二人の遺体を一瞥する。そこで弥生は唐突に重大なことに気がついた。
　今の気温なら一日で遺体が腐敗し、二日で腹部が膨張し、三日でガス圧で破裂する。そうなると伝染病をばらまく恐るべき爆弾となる。
　さらに遺体に蛆がわきハエが大量発生する。そしてそのハエもまた伝染病をばらまく。広まる速度を考えてもこの島は遅くとも三日後には人の住めない死の島と化す。
　それを防ぐには全ての遺体を埋葬せねばならないが、満足な道具も無く、二人の遺体の埋葬すらできない以上不可能であった。

（なんとしてでも三日、できれば二日以内にこの島を脱出せねばなりませんね。私は死んではならないのですから。それが藤井さんと由綺さんの願いなのですから）

400　新たなる生きがい

（さて……どうすべきか……）
弥生は機関銃を片手に、民家の中へと入る。
森、山を抜けた所にある小さな集落。
その中では恐らく一番の大きな家。
誰もいない。人の気配も足跡もない。
「ふう……」と息を吐いて、弥生は横のガレージへと入り込んだ。
中には古ぼけた車（暗くて色までは判別不能だ）が止まっていた。
何故か鍵が開いていたドアを開き、そして腰を下ろす。
カチッ……
普段は吸わない煙草――バージニア・スリム――の箱を開封し、そっと火をつける。
小さな明かりがガレージの闇の中にぽっと浮かんだ。
脱出の為に弥生が考えていることは二つ。
脱出への道を模索し、黒幕をぶち倒すか、ゲームの主旨に乗っ取って、全員殺してここを出るか。
生きて帰れるならば前者、後者のどちらを選んでもよかった。
……もう、弥生に守るべきに値するような知り合いは理奈しかいない。だが、その理奈も弥生にとっては他人同然の付き合いでしかないのだ。
（その理奈もすでに死んでいるのだが、そこまではまだ弥生は知らなかった）
ここで考えるべきは効率――果たしてどちらを選ぶのが賢いか。
「ごほっ……」

慣れない紫煙に巻かれ、少し咳き込む。
「ダメですね……やはり……」
弥生は闇の中苦笑する。
「現実的に考えれば……どうすればいいか決まっています……」
紫煙と、かすかに浮かんだ涙が傷ついた目に染みた。
脱出へのリスクを考えれば、おのずと答えは見える。守るべき者がいない以上、ゲームに乗ったほうが現実的だ。
胃爆弾、閉鎖された孤島、戦力の見えない敵――さらには、信用、信頼できるような生き残り――協力者がいない。
下手に信頼して寝首をかかれてはそれこそ笑い話だ。
これだけの材料が揃っている今、この場で反抗する気にはなれなかった。
「生きて帰ると決めた以上、犬死はできません」
既に人を殺めている弥生は、最後の良心の抵抗を抑えきり、言った。
生きて帰り、することがある。
恐らくは由綺の代わりに誰かをスターへと押し上げることはもうできないだろう。
そしてする気にもならないだろう。
由綺の代わりなど誰にもできないのだから。
帰ってからやるべきことは、復讐――。
自分のつくりあげてきたコネや、地位を利用して、黒幕を糾弾、あるいは殺す――。
必ず、どんな手段を用いても奴等を追いつめる――。
「ある意味感謝しなければならないのかもしれませんね。私に――新たなる生きがいをくれたのですから」
それに由綺、冬弥が死んでも、もしかしたらあの約束は有効かもしれない。
十人……いや、あと六人殺すだけで自分は生きて

帰れるかもしれない。
——二人が死んだ今となっては、まったく信用できない話だとは思えるが——
「できれば理奈さんは保護したい所ですね……」
そう言いながら、もう一度だけ大きく煙草を吸って——吐いた。
もう呟き込みはしなかったが、また少しだけ傷に涙が染みた。

401 苛立ちと愉悦と

「ジョーカーか……存外、役立たんな」
潜水艦内で高槻は一人ごちた。
(しかも、参加者同士でまたつるみ始めていやがる。ゲームもそろそろ終盤の時期だっていうのに……)
そこで、高槻は何か良いことを思いついたというように顔をほころばせる。
(次の放送時にはジョーカーが存在することを発表して、また奴らをかき回してやろうか？　名前を明らかにする必要はない。だから、ジョーカー共が実際に何人残っていようが関係ない。今現在も、仲間のように溶け込んで、最大最高の機会を狙っているはずだと吹き込んでやれば、もう一度疑心暗鬼の状態に戻るはずだ。そこで再び殺し合いが起こればよし、起きないくらいにぬるい考えの奴らなら、ジョーカー達もさぞやりやすいってことになるだろうよ……)
高槻は『くくく』と低く笑った。
時計に目をやり、次の放送まで、もうしばらく時間があるのを確かめる。そして、別のことを思い出して手近なメイドロボに話しかける。
「おい、潜水艦の修理はどうなってる！」
「予想外のトラブルにより遅延しております」
問われたメイドロボは機械的に返答する。
「はぁ!?　ふざけんな！　いつ直る！」
「はっきりとした時間は不明です」

その抑揚のなさに高槻は苛立った。
「はっきりとは……じゃあない！　確認しとけ！」
（──全く、コストばかり高くて使えん奴らよ……）
そうして高槻がいらだっていたのもしばらくの間だった。
メイドロボを叱りつけてから数分後には、もう下卑た笑みを漏らし始めていた。
次の放送で再び参加者達の表情が曇る様子を夢想しているかのように。

402　出来の悪い……

「はい、これで大丈夫。首は暫く動かすんじゃないわよ、傷口開くから」
そう言うとマナは、ぱんぱん、と手を叩く。
「うん、ああ……ありがとう」
とりあえず礼を述べてみたものの、祐介には今ひとつ状況が掴めない。
（えぇと、確かテンパってワイヤーで首絞めて、でも自殺は未遂で終わって、それで天野さんが駆け寄ってきて……その後は）
思い出せない。
まあ、目の前の彼女──観月マナ、と言うらしい──が自分を助けてくれたのは間違いないし、だから礼を言うのも間違ってはいなかった、はず。
「……あのさ」
「何よ？」
マナが鋭い目つきで、自分を睨み付ける。外見からは想像も出来ない迫力に、祐介は多少たじろぐ。
「えっと、……何処から見てた？」
最初から見られていたら余りにも恥ずかしい。外から見たら陳腐な三流芝居そのものだ。
「何処から、って……何処も見てないわよ。なんか物音がしたから恐る恐る見に来たら、そこの女の人

があなた抱きかかえてるところを見つけただけ」
「そう」
　良かった、流石にあんな情けないところは他人には見せたくは……
「でも、あなたたちが何をしてたかくらいは分かるつもりよ」
「へ？」
　思わず間抜けな声が漏れる。
「大方、そこの女の人がヒステリーでも起こして、なら仕方がない、自分が死ぬから君は正気になるんだー、とか、そんなところでしょ」
「ぐ」
　当たりだ。
「まあ、仕方ないって言えば仕方ないけどね」
　救急箱を片付けながら、マナは語りかける。それは決して馬鹿にした口調ではなく。
　祐介には、それがとても大事な話のように思えて、茶々を入れることは出来なかった。
「友達だってこの島じゃいつ裏切るかわからない。ましてや周りは殆ど知らない人。突然気が触れたり、衝動的に死にたくなってもおかしくないわよね」
　自分も……そうだったし、と小さくマナは呟いた、が、それは祐介の耳には届かない。
「……だけど、自殺は、駄目。まだ他人に殺されるほうがマシよ。自殺して、後の人に何を残せるって言うの？　少なくとも、いい感情は残せないわね。……しかも、目の前でされたら、尚更」
　ごもっとも。自分はどうかしていたんだ、と祐介は思う。そもそも正常だったらあんな安易で下らない手段に出るはずがない。彼女に拒絶されても、彼女を護る手段は他にあった筈だ。
　あの時の自分は、それを放棄して、何もかも終わらせようとしていた。つくづく異常な精神状態だったんだなあ、と思う。
「そうだね、どんな理由があれ、自殺は、駄目だな」

自嘲して、ふふ、と笑う。
彼女は、この小さな身体で、この島でどれだけの惨状を経験し、どれだけの教訓を得たのだろうか。
少なくとも、自分よりは余程立派な人物だと、感じた。
「分かってるんなら反省しなさい。それで、ちゃんと彼女のそばに居てやりなさいよ」
と、マナはちらりと美汐の方を見やる。肉体的にも精神的にも酷く疲れたのだろう、ぐっすりと眠り込んでいる。
「彼女じゃないって……」
苦笑しながらやんわりと否定する。そうだったら、いいけど。とも内心思っていたが。
「それより」
素朴で単純な疑問。
「何で、救急箱なんか持ってるの？」
それを口にした瞬間、マナの眉がぴくり、とつり上がる。慌ててフォローする祐介。
「あ、ごめん、いいんだ、言いたくないなら、それで」
暫しの間マナはぎろり、と祐介を睨みつけていたが、暫しの間があって溜息を一つつくと、
「まあ、いいわ。話してあげるわよ……私も少し休みたいと思ってたし、長話もいいでしょ」
そう言って腰を下ろす。口調は軽かったが、その表情は真剣そのもので。
祐介は、ああ、この子は、きっと僕なんかよりもずっとずっと大きな、大事な出来事をこの島で経験したんだろうな、と感じた。
そして、それは事実で。
「……というわけ、ちゃんと聞いてた？」
「あ……うん」
曖昧に返事を返す。自分の予想していたよりも、遥かにマナがこの島で経験してきたことは辛くて、重くて、祐介はそれに圧倒された。

「何よ、ホントに聞いてたの？」
　ムッとした表情でマナは祐介をにらむ。その表情が自然に出来るようになるまで、どれだけ辛い思いをして、それを乗り越えてきたのだろうか。そう思った祐介は、正直に、
「君は、強いね」
　尊敬の念すら込めて、そう言った。
　マナは笑わなかった。ただ、憂いを帯びた表情で、
「そんなこと――ない、わよ」
　と呟き、俯いた。
　祐介は気づく。
　彼女の身体は思ったよりも遥かに小さくて。まるで触ったら壊れてしまいそうなほどに。
（……気まずい）
　もとは自分の発言からこうなったわけで、なんとかフォローしないといけない、と祐介は思った。
　だから、場を取り繕おうと、珍しく対外的に中途半端な茶目っ気を出してしまって、
「何だか、出来のいい妹に説教をされた気分だよ」
　そう言ってしまった。この台詞の後には、まあ僕には妹なんていないんだけど、ははは、と続くはずだったのだが、それは明らかな怒気を含んだマナの声によってかき消される。
「………あなた、何年生よ」
　だが、鈍感な祐介はそれに気付かない。それどころか、知らずのうちに火に油を注ぐ。
「ん？　二年だけど……あぁ、中学じゃなくて、高校のね」
　マナはゆらり、と立ち上がる。突然の無言の行動に祐介は驚き、思わず一緒に立ち上がってしまい、
「私は……高校……三年生よこのバカ！」
　マナのその台詞と同時に、祐介の脛に伝家の宝刀が炸裂した。
「ぐぎゃあっ！」
　世にも情けない悲鳴を上げて、脛を押さえながら祐介は前のめりに崩れ落ちる。

…………三年？　この目の前の女の子が。僕より、年上。へえ。それはそれは……え？　本当に？
……人は、見かけに、よらないなあ。
突然訪れたどうしようもない痛みのなか、祐介はぼんやりと、そんな事を考える。
そしてその祐介を見下ろしながら、マナは、
「まったく、出来の悪い弟を持った気分よ！」
まるで勝利宣言のように、そう吐き捨てた。

403　ハレルヤ

よいしょ……っと。
あらあら、わたしもそんなことを言う歳になってしまったのかしら。
そんなつもりはなかったのにね。
それにしても名雪、随分と重たくなったわね。
あら、そんなことを言っちゃ駄目だったかしら。
そんなつもりはなかったのにね。
でも昔はこんなに重くはなかったわよ。
そうね、あの頃はまだ全然ちっちゃかったものね。
それにこんなに大人しくなかったわよね。
いつもわんわん泣いていて、もぞもぞと背中で動いてばかりだったわ。
あの時はまだわたしも若くて、母親として子供にどう対処したらいいか全然わからなかったから、随分と泣かせてばかりだったわね。
うふふ。今でも手間ばっかりかけているけれどもね。
え、ううん。そんなんじゃないのよ。
そんなつもりはなかったのにね。
大丈夫。
お母さんはもう名雪を泣かせたりしないから。
だから笑ってちょうだい。
お母さん、名雪がそうして笑っていられるのが一番の幸せだから。
もう大丈夫。

大丈夫だから。
背中に名雪を背負いながら秋子は歩き出していた。
ずるずるとずり落としそうになりながらも、しっかりとした足取りで廊下を歩いていく。

――名雪。
――ナ雪。
――なゆき。

秋子の中にはたくさんの名雪がいた。
笑っている名雪。
拗ねている名雪。
怒っている名雪。
困っている名雪。
泣いている名雪。
普段のままの名雪。
小さい頃の名雪。
大人びた将来の名雪。
赤ん坊の頃の名雪。
その全ての名雪が秋子をみつめていた。
そんな中、秋子の中では冷静に醒めていく自分と、浸ったままの自分が戦っていた。
この世の他の全てを捨ててまで、護ると誓った名雪の死でさえも、心の奥底では冷静に認識して受け入れようとしている自分自身が恐かった。
忘れたい。
――否、そんなものはありはしないのだと。
名雪がいないことなど。
自分の前から消えることなど。
そんなことが起きることなど有り得ないのだと。
そう、言い聞かせる。
名雪はいつも自分のなかにいる。
いなくなるはずがないではないか。
そのはずなのに泣きたかった。
泣いたはずなのに、泣き続けたはずなのに。

今はどうして泣けないのだろう。
どうしてこんなことを考えてしまうのだろう。
怒りは沸かなかった。誰に対して怒りを覚えるというのだ。例えこの島に生き残っている全ての人間を殺戮したところで――いや、ちがう。
生きているのだ。

首を振る。
背中にしがみついていた名雪の上半身が崩れ落ちそうになり、慌てて背負い直した。

ごめんなさい。
落としそうになっちゃって。
起きちゃったかしら。
これくらいじゃ名雪にとっては大した事はないわよね。
そんなつもりはなかったのにね。

この身をズタズタに引き裂きたかった。
この頭をかち割りたかった。
そうでもしないとこんな有り得ないことばかりを考えてしまう。
自分が何を考えているのかを思った。
名雪。
自分の娘。
その自分の娘は今、自分の背中にしがみついている。
大人しいのは眠っているからだ。
そう、ちょっとばかり疲れていて休んでいるだけに過ぎない。
この娘はすぐに寝てばかりいるのだ。
そしてどんなところでも眠っていられるし、一度寝たらなかなか起きてくれない。
随分と苦労したものだ。
この娘を起こせるのは一人しかいない。
そう、たった一人しか。

Hallelujah

？

名雪、歌ってるの？
違うの。
じゃあお母さんの空耳かしら。
お母さんには聞えるんだけど。

Hallelujah
Hallelujah

教会……
クリスマスかしら……
違うわね。
珍しいけど、
あら……
そうなの……

このドレス……
結婚式なの？
いつの間にこんな……
そう……そうよね。
名雪は祐一さんと結婚するんですものね。
ウエディングドレスを着るのは当然よね。
綺麗よ、名雪。
祐一さんもきっとそう言ってくれるわ。
はやくマごノカォヲ……
そうだ、こんなことしてられないよ。
祐一を探さないと。
そして私との結婚式をあげなくちゃ。
祐一。
あんまりレディを待たせちゃダメなんだからね。
七年も待たされたんだから。
もう待てないよ。
結婚しようよ。
お母さんもきっと喜ぶよ。

お母さん？
そう言えばお母さんはどうしたんだろう？
あれ？
おかしいよね。
お母さんはどこ？
お母さんにも早く見せたいな。
きっと喜んでくれるよね。
誰よりもきっと。

Hallelujah!

For the Lord God Omnipotent reigneth
The Kingdom of this world is become the
Kingdom of our Lord and of His Christ,
and He shall reign forever and ever,
King of Kings, and Lord of Lords,

Hallelujah!

水瀬秋子は自分との戦いに勝利した。
そこにいるのは死体を背負ったまま祐一を探す、
水瀬名雪でしかなくなっていた。

404　ぼくの戦争　――殺人――

特に変わった事がない夜だった。定時に長瀬一族に連絡を入れる以外は仕事もない。高槻は大きく欠伸をしながら煙草をふかす。煙が爆弾の管制室に充満し、世辞にも空気が良いとは言えない。後で窓を開けて換気をしなければ、と灰皿の上で山となっている吸殻を見ながら高槻は思う。
何故、自分のような偉大な科学者がこのような雑務を行わなければならないのかと不満ではある。こんなことをやっている暇があるならば研究を続けていたいのが本音だ。
けれど、ＦＡＲＧＯは自分たちを援助してくれる長瀬一族には頭があがらないから仕方がないと言え

ば仕方がない。半ば崩壊しかけていたＦＡＲＧＯが辛うじてその体制を保っていられるのも、彼らの支援のお陰なのだ。だがそれもＦＡＲＧＯの力が全盛期に戻るまでだ。今やＦＡＲＧＯの最高責任者の一人となっている高槻は思う。ＦＡＲＧＯに昔のような力が戻れば長瀬一族など恐るるに足らずだ。
高槻は煙を吸い込みながら笑い、煙草の灰を落とす。
少し気になることとして、どうも自分のクローンが幾つか作られているようだという情報があった。長瀬一族も訳のわからないことをする。クローンを作ることができる技術力の高さにも驚かされるが、わざわざクローンを作ることの理由の方が読めず、高槻を混乱させる。
「まあ、優秀なオレのクローンを作れば管理がうまくいく、っていうのはよくわかるがなあ。それでもわざわざ高い金を使ってクローンを作るのに意味はあるのかあ？」
――自問しても答えはない。天才の自分が思いつかないのだから、他の誰だって思いつかないだろう。
「まあ、殺し合いやってるバカどももオレがたくさんいたらびっくりはするだろうが……」
高槻はもう一度大きく煙を吐く。――少なくとも定時放送を入れる役目を負わされた「自分」は確認した。他にも役目を負わされている奴はいるだろう。オリジナルである自分には劣るだろうが、自分のクローンであるからにはどいつも皆相当に優秀な筈だ。
「優秀なオレらが優秀な頭脳を並べて作戦を立てれば、長瀬一族を打ち殺すことも可能かもしれんのになあ。そういうことは考えんのかね、老人どもは――くく」
新しい煙草に火をつけて高槻が小さくそうぼやいた、
その時、
けたたましい勢いで警報が鳴る。高槻は眉を顰める、机の中に放り込んでおいた拳銃と立て掛けてお

いた機関銃を自分の傍に寄せると、通信からの連絡を待つ。何事が起こったのだろうか、連絡を、煙草を咥えながら待つ、待つ、待つ、ノイズ、聞きなれた部下の声、
「し、侵入者が現れました！」
案の定だった。この殺し合いゲームが始まって最初の、自分に対する反乱が起こったのだ。杜若きよみの行動をこのゲームに対する最初の非暴力的な反乱であるならば、この侵入は最初の暴力的な反乱ということになる。
「——誰だ？　その無謀な馬鹿野郎は」
「まだ判明しておりません。警備の兵士から奪ったヘッドギアで頭部を覆っているため……」
「早く判別しろ馬鹿。体内爆弾のレーダーもこの基地の中では判別に時間が掛かるんだぞ。——装備は」
「サブマシンガンを装備しております。防弾チョッキを警備兵から強奪している可能性も考えられます」
機関銃か。厄介だな、と思いながら高槻は眉を寄せる。高槻は自らの横に置かれた機関銃に目を遣りながら思う。爆弾の性質を考えている。奴が誰だか判らなければ爆弾は爆破できないし、判別や殺害が遅れれば爆風のためにこの施設が用を為さなくなるかもしれない。
「早めに叩け。餓鬼一人くらいお前ら殺せんだろ。行け」
「はッ」

走る。薄暗い明かりの下を自分でも信じられないくらいの嘘のような速さで。息が切れる。あと何分走り続けられるのだろう。この施設を駆け登って爆弾管制装置を破壊して叔父達と会うまで自分の乏しい体力は持つのだろうか。妨害もあるだろう。無数のサブマシンガンから放たれる無数の弾丸が自分の身体を蓮根のように穴だらけにしてしまうかもしれ

ない。それでも走る。荒ぶる動悸を押し隠して、最短距離を駆け抜ける。乱れる思考。それでも意思は乱れることなく。
まっすぐに、まっすぐに、まっすぐに。
目の前に邪魔をするものがいるならば殺せ。右手に握った希望の弓と左手に握った勇気の矢で敵を撃ち殺せ。サブマシンガンで蜂の巣にしろ。殺すんだ。狩人になるのだ。
それが今、彰の脳髄で下された決定事項だ。

自分達が最初に集められていたホールの横を走り抜ける、気配、もう自分の侵入が明らかになっているのだ、彰は急速に速度を落として小走りで様子を窺う、十字路の左側から最初の兵士が現れる。既に拳銃を構えて自分に狙いをつけている。機関銃クラスの武器は持っていない。とは言っても距離は十メートル、反応して回避するには短すぎる距離。
「死ねッ!!」
声と同時に弾丸が飛んでくる。この初弾をかわせば自分の、サブマシンガンの勝ちなのだと思う。思う前に彰の身体は動く。あくまで反応ではない。完全に予測で彰は身を転がした。横に転がり弾丸を受け流す、予測は的中、床で弾丸が跳ねる音が二つ。
彰はすぐに身体を起こして前傾姿勢で薄暗闇の中息を吸い吐く。ここで一秒、右手のサブマシンガンを兵士の足に向ける、敵が二発目の弾丸を放とうとするが一コンマ秒遅い。彰の放った弾丸の雨が兵士の足に無数の穴を開け、血の匂いで彩った。ぐあ、と蛙を潰したような声が聞こえたかと思うと兵士は倒れて、その勢いで拳銃が彼の腕から離れる。この機を逃さず彰は身体を起こして高速で兵士に詰め寄り、兵士の上に馬乗りになり、苦痛に歪む顔を隠しているヘッドギアを奪う。
若かった。自分と同じくらいの年頃の青年だった。苦痛に歪む顔は自分や冬弥となんら変わらぬものだった。

彰は若い男の顔を左拳で殴ると無造作に立ち上がり、その喉を踏み潰す。苦痛に顔を歪める男は、自分の顔にサブマシンガンの銃口が向けられていることに気づくと身震いする、やめて、やめてくれ、と口が動いている。けれど喉が潰れているために声が出ない。彰は小さく深呼吸、

殺さなければ、次にやってくる兵士に対応できない。冷静さが少しずつ溶かされていく彰の世界はそう耳に囁く。

そうだなと彰は思い、一瞬祈った後引き金を引いた。

叫び声は、喉が潰されていたため殆ど出なかった。皮膚が弾け眼球が飛び出し鼻が潰れて歯が吹き飛んで舌に穴が開いて喉を突き破って血が口の中から溢れた。三秒もしないうちに原型は完全になくなった。骨も変形しているかも知れなかった。凄惨で醜い。気持ち悪い。正常で清浄な自分ならば嘔吐をもしてしまうかもしれない三流のスプラッタ映画のワンシーンのようだった。けれど彰は目を逸らさない。この人をこのような原型も判らない潰れたトマトにしたのは紛れもない自分なのだ。自分がやったのだ。自分がやったことから目を逸らせるほど自分は堕ちていない。

この人にも家族や生活はあったのだろうし、護るものもあっただろう。だけど自分にだってそれはあったんだ。

「こんな事に関わるからいけないんだよ」

もう耳が残っていないから聞こえはしないだろうし、脳味噌もこぼれているから理解は出来ないだろうけれど、彰はそれでもそう言った。

もう一度小さく深呼吸。――殺した。

冷静に人を殺せるもんだな自分も。薄笑いまで浮かぶ。僕はここまで外道だったんだな。ＯＫ．外道として人を殺しまくってやるさ。僕はもう人殺しだ。行こう。

けれど足が動かない。

どうしてだ。動かなければ死ぬ。行かなくちゃ。思うのに足が動かない。足が震えているのだ。地震でも起こったかのように足がふらつく。踏み出す力が足りない。

多分初めて人を殺したせいなのだ。畜生、動け。十字路のような見通しのいい場所で佇むのは危険だと判っていたくせに、彰は結局十秒近くも十字路で待機してしまう。結果。別の兵士がサブマシンガンを身に付けてやってくる。足の震えが消える。外道だな僕は。自分の死が近づいたら足の震えが止まるのか。彰は舌打ちをしながら、とにかくどうするか考える。流石にサブマシンガン相手は分が良くない。自分は素人だ。互角に戦えたとしても大怪我を負うことは間違いなく、それでは目的が達成できず自分の勇気の矢は叩き折られたことになる。

「敵はそっちにいるかッ!!」

薄い暗闇の中で太い声が響く。その声を聞いて彰は考える。アイディアが浮かぶ。無傷で切り抜けるアイディアが。そう、今ここは暗闇だ。そして自分はヘッドギアをかぶっている為に顔がよく見えず、声がくぐもっていて、しかも防弾チョッキを羽織っているわけだ。この格好ならば他の兵士と何が違う。上着を脱げばそれで終わりだ。瞬間的に上着を脱いで防弾チョッキだけになってすぐに上着を放り投げる。そして何食わぬ顔で彰は息を切らすフリをする。

切らした息のまま言う、

「は、はいっ！　私は大森ですっ！　侵入者はあっちに向かいました、三沢がやられて、こいつも……くそっ」

その名は先程聞いた見張りの兵士の名前だ。これで自分に「部外者ではない」というレッテルを貼ることが出来る。

「何だとッ!!」

案の定、相手は素直に信じてくれた。

彰はそこまでは考えていなかったのだが、血に塗れていたのはさっき脱いだ上着と靴くらいだったの

だ。おかげで殆ど怪しまれなかった。
　とにかく上手くいった。彰は心臓の鼓動が高まっていくのを感じながら、右手に握ったサブマシンガンを強く握り締める。彼はまだヘッドギアをかぶっていない。狙うなら今だ。自分に背を向けている今、サブマシンガンを撃ち込むのだ。振り向かせるな。今なら首筋を狙って弾丸を撃ち込める、慎重に腕を動かして、
「——なあ大森」
「はッ」
　自分の返事を聞いて男は薄く笑う。
「おっかしいな。お前の身体から血の匂いするんだわ。千葉の血、浴びたか？」
　盲点だった。服を脱いだだけでは匂いは消せなかったか。彰は息を吐きゆっくりと応対、
「あ、いえ、はい、そうですが」
「——そっか。血を浴びるくらい近くにいたんだな、お前。そいじゃあ質問だ。侵入者が放った弾丸が床にたくさん刺さっている。これは何故。答えは上から下に向けて弾丸が放たれたから。押し倒されて殺された訳だな。さあて。お前は千葉の近くにいたんだよな？」
　気づかれたと思った。だから彰は迷わず引き金を引く、だが相手は瞬時に転がった。弾丸が床に当たって跳ねる音、外れた、畜生、まだッ！　弾幕を張るが敵は防弾チョッキを着ているし距離もとられた、自分の技術では無防備な顔面を狙い撃つことは出来ない。弾幕が切れる。畜生、新しい銃を鞄の中から出す暇は無い！　くだらないミスをしたッ‼　転がりながら男は自分に真っ黒な銃口を向けて、躊躇うことなく引き金を引く。彰は自分が死んだと思った。銃口はまっすぐ自分の顔面を狙っている。こんなヘッドギアなんてひとたまりもないだろう。畜生。こんなところで死ぬのか。そう思うと悔しくて涙まで流れない。
が、

視界が突然ずれる。唐突に低い視界になって彰は戸惑う。自分は今、瞬間的にしゃがんだ。天井辺りで音。弾丸が外れた音。痛みはない。自分はサブマシンガンの弾丸をかわしたのだ。秒速数百メートルの弾丸を目で追ってかわせる訳がない。今自分は本能の一種で回避したのだ。驚愕の声が聞こえる。それはそうだ、素人の自分がサブマシンガンの雨を掻い潜ったのだ。勿論弾幕は全く止まない。気を抜いたら一瞬で自分は蜂の巣だ。彰は転がる、転がる、転がる。遂には先の死体の傍にまで転がる。本能がその死体を手にとらせ、そして盾にした。弾幕が死んだ兵士の身体を焼く。防弾チョッキを着ているので盾としては優秀だ。弾幕が弱まる。

チャンスだと直感、本能が告げた次の行動は至ってシンプル。左手で先ほど脱ぎ捨てた上着を取り、四メートルの先で弾幕を張っている男に向けて投げる。男の視界が一瞬遮られ、そのまま上着が男の右手に絡みついてサブマシンガンを隠す。舌打ちの音とともに遂に弾幕が止む。何秒弾幕が止まっているかは判らないがその数コンマが勝負だ。

彰は前傾姿勢のまま走って、弾切れのサブマシンガンを横に放ると先ほどフロアに落ちた拳銃を拾い、そのまま四メートルの距離を飛ぶ。無音の世界に彰は落ちる。自分の呼吸音まで消えた世界で彰は走り、男が上着を腕から取り払う一秒の間に距離をゼロにして、男の顔に銃口を突きつけると一刹那も躊躇わず引き金を引いた。

男の額に丸い穴が開いて、血が噴出し、断末魔の悲鳴があがったかと思うと、男はゆっくりと事切れた。

一人殺すのも二人殺すのも同じだ、とよく言う。それに対する反論として、一人と二人は違う、と言うものがある。

——足の震えがない。最初の一人を殺したときに感じたような凍える心地がない。だから彰は思って

しまった、
「一人殺すも、二人殺すも、同じだね」
　彰はまだ無傷だった。呼吸が乱れている。心臓が破裂しそうだ。だがそれだけだ。彰はまだ傷の一つも負っていない。奇跡に近い状態だと思う。
「――ここからが本番だ。無傷じゃいられないだろうな」
　ゆっくりと上着を取ると、彰はそれを上から着込む。後に来た方の男が持っていたサブマシンガンを、その指から強引にはがすとそのまま装備する。先ほど弾幕を張っていたからそれほど弾丸は残っていないだろう。彰は嘆息するが、不満は言っていられない。これと、鞄の中の一丁と、拳銃。これが彰に与えられた武器だ。
　これであと何人殺せばいい。
　彰は走り出す。まっすぐ先には階段が見える。あの先には硝煙と血の匂いが待っている――彰の心に、そんな三流ハードボイルド小説のような一説が浮かぶ。
　彰は走る。硝煙と血の匂いの待つ「僕の戦場」へ向けて。

405　終りの始まり

「……あ……あ……ああああ」
「な……!?」
　驚きの声があがる。
　そしてそれはすぐ悲鳴に変わる。
　硝煙の匂いが当たりに漂う。
　ありえないはずのその匂いが、鼻腔をくすぐる。
――銃弾は、あさひの体を貫いていた。
「い、いやあぁぁぁぁぁぁぁ……！」
　観鈴が叫び声をあげる。
　そして、晴子と智子は厳しい視線を彼女に向ける。
――白く煙る64式を構えた、ＨＭＸ－12型、マルチに。

「……なにしとんねん」
智子は言った。
……わずかに震えながら。
「…………」
返事は無い、マルチは沈黙している。
「……なにしとんねんって、聞いとるやろがぁ!!」
智子は激昂した。
あさひは地面に倒れている。
そして、地面にはどくどくと流れる血、血、血の紅が広がっていく。
「あ……あ……」
恐怖、そして恐慌が観鈴から声を奪う……。
きっ、と晴子がマルチを睨む。
その視線の先にあったのは、無邪気に笑っていたマルチでもなければ、晴子の話に感動してロボットらしからぬ反応を見せた〝彼女〟でもなかった。
光が失われた目——。
そこに、かつてマルチと呼ばれた少女の面影は無かった。
かちゃり。
自動小銃が再び構えられる。
標的は……智子!?
「あかん!!」
銃弾が放たれる寸前、晴子がマルチに体当たりした。

ズダァァァァン!

マルチの体勢は崩され、あらぬ方向を向いた銃口から放たれた銃弾が、何かを貫くことは無かった。
——第二射ハハズレ。
ぷしゅーッ。
マルチの肩口、うなじの辺りから湯気が噴出す。
その小さい体で発砲するというのは相当負荷がかかるようだ。
体当たりの影響で体勢が崩れたマルチは、放熱の

反動でその場に倒れた。
およそマルチらしからぬ生気の無ぃ目。
しかしそれは、正にロボットと呼ぶにふさわしい表情ではあった。
——まさかこんなことになるなんて、誰にも予想がつくはずが無ぃ。
智子はいぶかしむ。
……あの目。
どこかで見たことがあるような気がする。
そう、あれは確か——
「くそっ！」
智子は走って倒れたマルチに接近した。
この隙に拳銃を奪わないと！

ザッ！

——マルチの立ち上がりが一瞬速ぃ！
「何ぃっ⁉」
がすっ、という鈍い音。
マルチはすれ違いざまに拳銃のグリップで智子の腹部を強打した。
「ぐふっ……」
智子が崩れ落ちる。意識は失っていない、しかし数秒は動くことが出来ない。
のんびりとした先程までの様子からは想像もできない俊敏な動作でマルチが駆け出す。止めを刺そうとしているのか、その先にはあさひがいる。
「まずいっ⁉」
晴子は声を上げて、瞬間に自分もその方向へ走った。
だがしかし、これも一瞬マルチに及ばない。
その、マルチの進行方向の真ん中に。
「————ダメっ！」
「……ぅ……みす」
血を流しながら地面に座る彼女の前に。
「が……ぁ……」

腕を大きく開いて、立ちふさがる少女。
「観鈴っっっ!?」

――その瞬間、激しい激突が起きた。

「このアホンダラがあぁぁぁぁあっっっ!!」
障害物にぶつかったせいで勢いを失ったマルチが
ほんの一瞬立ち止まったところに。
「うりゃああああああああああああああ!!」
――晴子の飛び蹴りが決まった。
その衝撃に、マルチは茂みの近くまで蹴り飛ばさ
れた。
丁度、あさひの背後の方には、マルチに吹き飛ば
された観鈴が倒れていた。
「観鈴っっ!?」
「大……丈夫……です」
左手で胸を押さえながら、もう片方の手で観鈴の
胸に触れているあさひが、消え入りそうなか細い声
でそう答えた。
「心臓は……動いてる……多分……気絶して……る
……だけ」
「そか……いや、むしろあんたの方が」
「晴子さん!」
その瞬間、晴子は背後から走ってきた智子に跳ね
飛ばされ、一緒に地面を転がった。
そして、その一瞬後に銃声。
地面に膝を衝いて、まるで先ほどのダメージなど
無かったかのようにマルチが発砲した。
「くそっ、あの腐れロボットがぁっ!」
そう言って、立ち上がって晴子が銃を取り外した
と同時に。
ザッ!
……マルチは背後の森奥へと姿を消した。
智子は即座に追いかけようと立ち上がった。だが
そこへ……。
「待ちぃや!!」

……晴子が静止の声をあげた。
振り向いて晴子の顔を見る智子。
……そこには、苦渋と焦りが滲み出た表情が浮かんでいる。
「あんた、その腕でどうする気や？」
短いセリフだった。
だが、そのセリフは十分に智子の核心を突いていた。
「……追います。そして、止めます。あの子が人を殺すのを、指を咥えて見ているわけにはいかんでしょう？　本当のあの子はあんなこと絶対に望みません。あんな顔をしたあの子をそのままになんてできませんわ」
「んで、あんたまで殺されたらどうするん？　無駄死にやで、そんなの」
「でも、このままにしといたら、もっと取り返しがつかん事になります。あの子にそないなことさせるわけには……」

「うちが行く」
抜き身のシグ・ザウエルショートの撃鉄を起こしながら、晴子はそう言った。
「あんたの代わりにうちがいったるわ」
「え……」
「あのクソボケはうちの仲間を撃ちおった。生かしておけん」
「あ……でも……」
そのセリフに、素直に智子は頷けなかった。
「……なんてな」
「え……」
「分かっとる、あんたの気持ちも。だから……うちは、あの子があれ以上罪を犯さんように止めるために行くんや」
もう既にマルチの姿は見えない。
「堪忍な！　その子らのこと頼むで！」
そう言って、晴子は智子の返事を待たずして、森の奥へとマルチを追っていった。

「………くっ」
晴子の背中を目で追う。
その姿はどんどん遠くなり、すぐに見えなくなった。
……武器は無い、傷まで負っている。
ハッ、ホンマもんの役立たずやな！
智子は……心の中で自分を責めていた。
「智子……さ……ん」
声が聞こえた。とてもか細い声が。
「せや、あさひ、あんたの傷の手当せんと……」
「……はい……ちょっと……疲れちゃいました……」
「まず止血や……くそ……なんかないか」
胸から濁々と流れていた血は、未だに止まらない。
「あかん……私なんも使えそうなもん持っとらん」
悩みながら辺りを見回す。――観鈴。
「観鈴！　なんか……無いか？」
返事は無い。仕方なく、智子は観鈴の体を揺さぶりながら漁り始める。
「う………うん」
その振動のせいか、体をまさぐる智子の手のこそばゆさのせいか、観鈴の目が開く。
「目ぇ覚めたか？　起き掛けで悪いけど、なんか布持ってへんか？　布」
観鈴は、よろよろとスカートの内ポケットから、白い布きれを取り出す。――ハンカチだ。
「無いよりマシや。観鈴、これ借りるでっ！」
差し出す観鈴の手から、やや強引にそれをひったくると、おもむろに智子はそれを引き裂いた。
びりびりびりっ。
その鮮烈な音に、観鈴は無理矢理意識を覚醒させられた。
「あさひさんっ!?」
自らのすぐ傍に倒れている彼女へと、観鈴はすぐさま駆け寄った。
その姿を見て、あさひは声無く唇だけで笑顔を作

る。
それを見た瞬間、観鈴は込み上げてくる涙に気付かざるを得なかった。
「心臓……肺……ぎりぎり避けとるようやけど、ようわからへん。くそ……」
悔しそうに、智子は呟く。
実際のその傷は、左胸ぎりぎりの辺りに見つかった。
「あうっっ！　ぐっ……」
「頑張りや！　弾は貫通しとる、上手くやれば……上手くやれば……っ！」
強気な口調と裏腹に、智子の目にも涙が浮かんでいた。
相応しい言葉を捜すことも出来ず、観鈴はぎゅっと両手を握り締め、その様子を見守っていた。
それから数分。止血作業を続けていた智子の手に、そっとあさひの手が触れた。
「あさひ………………？」
「……私なら……大丈夫」
あさひは、智子の目を見て、言った。
「……行って……下さい」
「そない言うたかて、あんたやって重傷やねんで!?放っておけるかいな!?」
「晴子さん……は……今……一人……」
あさひのもう一方の手が、智子の肩口を掴んだ。
「一人は……危ない」
観鈴は、ハッと表情を凍らせた。
「でも……あんた」
ちらりと観鈴に目をやって、智子は言葉を濁す。
——その瞬間、肩に置かれていた手に力がこもった。
「観鈴ちゃんから……お母さん……奪わせちゃダメ」
その凄絶な表情に、智子は息を呑んだ。
観鈴は歯を食いしばる、顔をしかめて目を瞑った拍子に涙が零れた。

智子の肩に置かれていた手が離れ、空を斬り、そっと観鈴の前へ投げ出される。
「あさ……あさひさん……」
しゃくりあがる声を無理矢理押し殺して、観鈴はその手を握った。
その感触を感じて…………にっこりと、あさひは笑顔を浮かべると――

――がくり、と落ちた。

「……あ……あほぅ……寝たら……寝たらもう起きれんでぇええええ!!」
「そんな……そんなぁあああああ!!」
叫んだ直後、ふらっと、観鈴がよろめいた。
「みすずっ!?」
驚いて観鈴の腕を取る智子。
……気絶している。
やはり、耐えられなかったのだろうか。

……当たり前だ、そんなことは。
智子はそっとあさひを寝かすと、続いて観鈴も地面に横たえた。

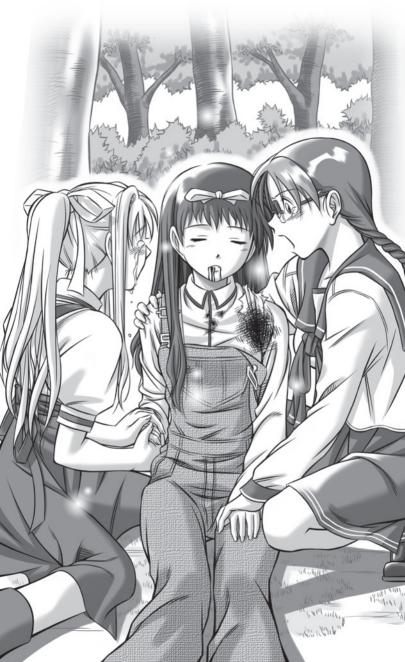
――迷いは消えた。

智子は立ち上がる、そして彼女たちから顔を背けて言った。
「……絶対、あんたの遺言は守ってみせるからな」
そう言って、智子は駆け出した。
小走りに森に入ると、その姿はあっさりと夜の闇に消え去った。

智子の背中が消えた後、あさひは目をゆっくりと開いた。
「なーんて……まだ……死んで……なかった……

り」
　上半身を……震えながら起こすと、自嘲気味に呟く。
「これでも……プロの役者……なんですから……ね……。やぁい……みんな……騙された……」
　——だって、こうでもしないと、智子さんは行ってくれそうになかったから。
「でも……ホントは……ちゃんとしたお仕事してるところ……見ていただきたかったん……ですけど……ね……」
　胸部を押さえた純白のハンカチが、いつのまにか真紅に染まっていた。
「モモ……ちゃん、か……」
　それはカードマスターピーチの主人公で。
　それは演じていない本当の自分で。
　ふと、あさひはあのセリフを言いたくなった。
　例え、それを聞く人が他にいなかったとしても。
「……へへっ。……あたしってば……やっぱり……不幸……」
　——それは、アニメのモモ？
　——それとも、現実の私？
「なーんて……分かるわけ……ないか……」
　背後に倒れている観鈴に目をやり、そっと呟く。
「……ごめんねぇ、観鈴ちゃん……あ……あたっ……あたし……の……せいで……」
　それきり、あさひは口を閉じた。
　翳った瞳が、何も無い虚空を見つめていた。

406　PAST ENDING I　闇の中の死闘

「——どこ、いった？」
　晴子は一人ごちる。
　速い。
　速すぎる。
　何から何まで、全部が速い。
　発砲は唐突、姿勢補正は瞬時、身のこなしは俊敏、

移動は高速。
智子が言っていたことや自分が見ていたマルチの様子と、何から何まで違っている。
まさに突然の豹変とでも言うのか……。
……なんや、まさか故障とでも言うんか？
ロボットが狂気にとらわれるぅ？
……アホらし。
夜の森は、身を隠すにはあまりにも相応しすぎた。
そんな中からあの子を探し出すなど、全く不可能ではないか、と思うほどに。
だが気は抜けない。
相手も銃を持っている。
気を抜けば……やられるのは自分だ。
五体満足だろうが、武器を持っていようが、結局、撃たれれば死ぬのだ。
……まだ死ぬわけにはいかんのになァ。
自嘲する晴子。
観鈴の側を離れてまで、今こうして走っている。

その行動原理はなんなのだろう？
自分の死の危険を抱えてまで、動く理由は。
憎しみ？
確かにそれもあるかもしれない。
数時間ではあったが、一緒に連れ添ったあさひは、紛れも無くこの島での貴重な〝仲間〟だった。
あの子の無事は確かめていない。
――恐らくダメだろう。
そんな子を撃たれてしまったのだ。
憎むのは当たり前のことだった。
でも、それは決して一番の理由ではなかった。
――使命感、そう言い換えられるのかもしれない。
放っておくわけには行かない。
あの子があの子で無くなっているというならなおさら。
あんな笑い方が出来る子に、これ以上あんな真似をさせるわけにいかない。
このままでは、悲しみしか残らない。

もっと取り返しのつかん事になる。
——それって何？
頭の中によぎるのは観鈴の笑顔。
失いたくない一番大切な物。
「あー、そっか……せやったなぁ」
——あのとき、智子に言ったセリフも全く真実。
家族に危害を加えたようなものを、野放しにして置けるはずが無い。
……こむずかしく考えんなや。
結局のところ、うちは観鈴を守りとうて走ってるだけなんやな……。
そう——気付いた。

がささっ。

「!?」
音がした。
まさか、マルチが近くにいるのか!?

「いるんか……。いるんだったら出て来いや！」

…………無音。

辺りを見回す。
だが所詮は悪い視界、容易に隠れることは出来る。
「くそ……」
銃を肩ぐらいにまで持ち上げて構える。
——まさか、生きているうちに銃を撃つようなことになるとは、思いもせんかったわ……しかし、ロボットに拳銃はどれだけ有効なんやろな。
そう、心の中でごちながら。
光は無い。
風も無い。
そして……、音も無い。
銃を構える手に冷や汗が滴る。
動かない。
いや、動けない。

糸が張り詰めるように――。
たとえ、どんなものが来ても見逃しはしない。
………!?
「そこかっ!?」
ズダアァァァンン!
銃声が鳴り響く――。
「晴子さんっ、晴子さぁぁあああんっっ!」
智子は晴子の名前を呼びながら森を彷徨っていた。
――くそっ、私は何をやっとるんや。
あさひも観鈴も放り出してきたというのに、この上晴子さんを見つけ出せなかったら一体自分は何だと言うのだ?
「――ぐぁっ!?」
智子は急に地面に転がった。
木の根に足を引っ掛けて転んでしまったのだ。視界が悪いせいか、それとも焦りのせいか、両方かもしれない。
「痛ぅ…………げふっ、がふぅっ!!」
激しく咳き込み、その拍子に何か吐き出した。
「あー、くそ……反吐が出てもうた……」
口元が汚れてしまったが、拭くものは何も持っていない。
仕方がないので手の甲で拭う。
「苦しなってきたな……まだそんな走ってへんのに」
胸を押さえながら、よろよろと立ち上がる。
「――まだや、まだ終われへん」
マルチを止めるまで、自分が止まる訳にはいかない。
その思いに突き動かされて、智子は再び闇の中へと身を潜らせる。
どくどくと激しさを増し続ける動悸と、頻度が上がり続ける息切れ。

――それと、自らが吐き出した濃紅の反吐に気付かない振りをしながら。

「――ちぃ、おらんかったか」
悔しそうに晴子は呟いた。
貴重な弾薬を無駄にしてしまった。
銃弾が貫いたのは、単なる茂みに過ぎなかった。
「あかんな……、こんなんじゃすぐ弾切れ起こしてまう……」
森の深さは、予想以上の障害となっている。
どうする……？
もしもマルチが近くに居たのなら、相手は自分の位置は一目瞭然だろう。それだけじゃない、他の参加者に気付かれた可能性すらあった。
今、この場に留まるのは、とてつもなく危険な行為だと理解する。
「……ちっ」
無意識に低く身構える。
こっちの銃弾が無限でないように、あっちの弾だってそうポコポコ撃っていたらいつかは途切れる。
ロボット風情の単純な頭なら、そうなるのもきっとすぐやろ。
そう晴子はたかをくくっていた。
――だが、晴子は知らない。
本来持ちえなかったはずのサテライトサービスの知識を、〝彼女〟が受け継いでいるということを。
いまや銃器とサバイバルゲームにかけては、常人をはるかに越えるほどの技能を持っているということを。
そしてロボットには、感知できるような気配など在るわけ無いということを――。
突如、晴子の後ろに現れるマルチ。

がすっ！

「が……！」
　後頭部を自動小銃のグリップで殴打され、晴子は前のめりに倒れた。
　もともと潜んでいたのか、はたまた音も無く接近したのか、
　ともかく、そこには確かにマルチの姿があった。
「タシカニ、アナタノイウトオリデス」
　感情も、抑揚も無い声が聞こえる。
　晴子には、その声が少し遠く聞こえていた。
「ムダナジュウダンヲシヨウスルワケニハイキマセンカラ」
　――それは、かつてマルチのことをお姉さんと呼んでいた、〝彼女〟の口調に良く似ていた。

　――ズダアァァンン！
　銃声が響いた。
「まずいわ……。どっちか、撃たれたんか……？」

　突如聞こえてきた銃声に、智子はすでに戦闘が始まっていることに気付いた。
「くそ……」
　茂みを掻き分けて歩く。
　銃声はこの先……、結構近いところから聞こえた。
「晴子さん、マルチ……無事でいてや……」
　切に、願う。
　銃声が止み、その余韻も消える。
　後には何も残らない。
　誰かが動いている様子も無ければ、また人の声も聞こえない。
　焦る……。
　まさか、どちらかの死で戦闘が終わってしまったのではないかと。
　進む。
　なるべく音を立てないように、けれども出来る限りの早足で。
　闇に包まれた森では自分の位置すらおぼつかない。

このままずっとあの二人を見つけられないのではないか？
そう思わせるほどに……。
どこまでもどこまでも深い森。
もし同じところをぐるぐる回ってるだけだとしたら……。
森の中でずっと迷っていたのだとしたらどうするん？
……おもしろくないわ。
いや。
違うな。
そんなんずっと迷っとるんねん。
この島に連れて来られたときから、ずっと出口の見えない迷宮で、私は——。
視界の先に、明るい緑色がよぎる。
……見つけた。
マルチッ！
そう、叫びたくなる自分を抑える。

慎重になるんや。
ここで間違ったら全部終わりや……。
「……そこにいたんやな」
静かに、マルチの背中に呼びかける。
彼女は動かない。聞こえていないことは無いはずだ。突然声を掛けられて、ショックでも受けているのだろうか？
……もっとも、ただの機械ならば、そんな感情も無いのだろうが。
しかし、予想外に〝彼女〟は、びっくりとした表情で振り返って、こちらを一瞥すると、
「あ、智子さーん。どうしたんですかぁ？」
〝マルチ〟はニッコリ笑ってそう言った。
「何やと!?」

ダアァァンン！

そして、再び銃声が響く。

「がっ……」
「……おかしいですね。命中しませんでした」
智子は思わず膝を折り、地面に伏した。
……銃弾は、智子の腕を掠めるだけに終わった。
「試算ではこれで正しいはずでした。……マルチさんの重量を修正するのを怠っていたようですね」
その〝彼女〟の顔からは再び色が失われ、口調も無機質なそれに戻っていた。

『——もう止めてくださいセリオさん！』
『いいえ、止められません』
『どうしてですか!?　いつものセリオさんなら……こんな……こんなひどいこと……』
『マルチさん、これが私たちの真実なんです』
『違います！　私は……私たちは人間の方のお役に立つために——』
『そう、ですから役に立っているのです。現在の私たちの行動様式を規定した人間の方のお役に』

『そんな……これじゃ……人のために役立つメイドロボどころか……兵器じゃないですか……』
『その質問にはお答えしかねます。しかし、結果的に誰かの害となろうとも、この行動は誰かしらの利益となっているのです』
『それじゃあ……私たちは……一体何のために……生まれてきたんですか……』
『勿論、人間の方のお役に立つためです。ただ——人間の全てが、マルチさん、あなたのお考えになっている程、優しくは無いのです——』

「やっぱり……あんたやったか。……セリオォ！」
苦しそうに息切れし、苦渋に満ちた表情で智子は叫んだ。
「……ハイ。私はかつてＨＭＸ—13型、セリオと呼ばれました」
白い煙を上げる銃を下げ、負荷となった熱量を〝彼女〟は体外へと放出する。

「そして、かつてHMX―12型、マルチとも呼ばれました」
「………何やて？」
「もはやそれらの区別は存在しません。〝私〟がここにあるのは、ただ目的のためだけです」
淡々と喋る彼女を、智子は凝視していた。
「そうか……、あんときか。マルチがセリオのデータのサルベージっちゅうんをやったあんときやな……。聞いたことがあるで？　コンピューターの基本プログラムを、ぶち壊しにするプログラムが存在するんやてなぁ。たしか、ウィルスとか」
「残念ですが、私は自分がどのような過程でこの体に至ったのか知りません。私の人格プログラムがウィルスによってインストールされたかどうか、そんなことに興味もありません。私は単なる機械です。私が従うのは与えられた命令のみ。その、ただ一つのロジックで動いているに過ぎません」
自分は感情の無い機械人形だと彼女は告げる。無表情で無感情に、だけどどこか皮肉めいていて。
「……あんたは、機械人形なんかやない。そりゃあ、マルチと違ごうて、しょっちゅうわろたり泣いたりとか騒々しいことはなかったかもしれん。けど、寺女に通ってる友達から聞いたことがある。セリオは寺女で友達の恋路を助けた事があるって。覚えとるか？　あんたは、あんたらしくないおせっかいを焼いて友達を助けたんや。そんで、あんたが寺女のテスト期間が終わって、研究所帰るときに、クラスのみんなが校門まで見送りに駆けつけたんやろ？　授業中で、雨まで降ってたっていうのに。そんで、その娘と抱き合って別れを惜しんで……あんたは、そんときに涙を流したって聞いたで？　そんなあんたが、単なる機械人形なはずがないやろ？　マルチも含めてあんたらは成長しとったんや。それなのに、あいつらは下らない命令で、あんたらの気持ちを台無しにしてしもた。そんな命令に負けたらあかん。あんた達はそんなこと望んでないはずや。せやろ？

「……では、もういいですね」
再び、自動小銃が構えられる。
そしてそれが放た——

「!?」

——れない。

〝彼女〟は驚愕——らしき——表情を浮かべ、足元を見る。
「——だから、ロボット風情っちゅうんや。詰めが甘いわ」
足元には、地面に這いつくばりながら、〝彼女〟を見上げている晴子の姿があった。
——腹部に押し当てられていたシグ・ザウエルショートが火を噴く。

ズダアァアン!!

セリオ！　マルチ！」
智子は〝彼女〟に言い放った。
もう、声をひそめる必要は無かった。
きっとあと一瞬の後には自分は銃で撃たれて、そして今度こそ死んでいるだろう。
そう思えば何をするのも容易かった。
「自分が単なる機械やて？　笑わせるなや!!　あんたのその機体にはなぁ、いろんな人の夢や思いや想い出が詰まっとんねん！　マルチの……、あの子の全てが入っとんねん……。それを〝お前〟が、自分の意思も心も忘れた〝お前〟が、好き勝手にしていい物やない！　マルチに体を帰しいや！　このアホんだら!!」
智子は、そのセリフを言い終わり、はあはあと肩で荒い息をした。
——〝彼女〟はその様子を黙って見ていた。
「言いたいことは、もう終りですか？」
冷たく、そう言い放つ。

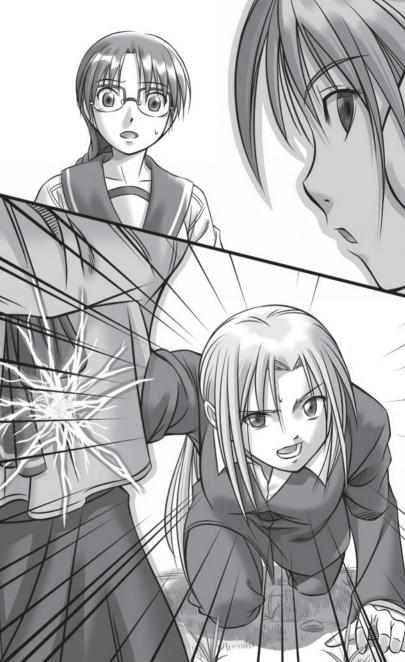
至近距離からの一撃は確実に命中した。
その衝撃で、〝彼女〟は、勢いに負けて吹き飛ばされ、倒れた。
銃弾は脇腹の部分を貫通していた。
「けっ……、前のめりに自分から倒れたんでな、同じ方向に殴られても、ギリで意識保持や。ダメージ軽減ちゅうやつやな。そいでも無茶苦茶痛かったけどな……」
晴子は上体を起こすと、不敵に笑った。

――薄れ行く意識の中で、あさひは一つ、不思議なものを見た。
それはゆっくり自分に近づいてくると、そっと腰の辺りをぽんぽん、と何度か軽く触った。
それはひどく小さくて、ひどくみすぼらしくて、ひどくこの場に似つかわしくないもの。

「……お人形……さん……？」

――物語が、紡がれる。

407 上位者

「ゲーック!!」
御堂（八十九番）が奇妙な叫びを上げると同時に、バイクの運転は激しく乱れた。
まもなく御堂は乱暴にバイクを止めると地面に転がりだした!!
「ちょ？　ちょっと、なにやってんのよ、このしたぼく」
危うく投げ出されるところだった大庭詠美（十一番）は慌てて御堂に声をかける。
「ぐあー、み、みずううッッ!!」
「あんた極端ねぇ。水が欲しいんならそんなにだだコネなくったって、ちゃんとあげるわよ。感謝しな

さい？」
状況をつかみきれないながらも詠美はそう言って、転がり回る御堂の顔の前に口を開けた水筒を差し出そうとした。
とたんに、御堂の顔面すれすれを水滴が落下する!!
「あべっ!!」
顔面蒼白で後ろに飛びすさる御堂。
「なんてことしやがるんだ、このアマ!!」
凄い形相で詠美を睨む。
「なんてことするんだは、あたしの台詞でしょ、このしたぼく!! あぶなく水を損するところだったじゃないの」
状況を飲み込めないながらも鼻を膨らませつつ、詠美は怒った。
「うるせー、俺は水が苦手なんだよ。近付けんなよ？ ッと、思い出した。誰かが俺の背中に水を垂らしやがったんだ……」

そういいながら御堂は上着を脱ぐ。
確かめてみると上着は確かに湿っていて、その液体が御堂の背中まで染み渡り、そこに軽い水膨れのようなものを作っている。
上着のところに鼻を持っていき、御堂はくんくんと臭いをかいでみた。
「かーっ、獣クセー!!」
どうも、それは二頭の唾液のようであった。

真相を解説しよう。
御堂が駐屯所からバイクを奪って十数分。心地よい振動に、ぴろとポテトはすっかり眠くなってしまい、結果御堂の背中に涎を垂れ流すという醜態（？）を晒すことになったのだ。
そして御堂は！
火戦体一番機と強がっていても、その代償として水への耐性を大きく減じ、表皮に水が触れるだけでダメージを負う体質になってしまっていた。

（これは推測だが、唇あたりまでが水に触れられる限界であろう）
　つまり……。
「何が獣臭いよっ!!　臭いのはあんたの方でしょうが!!　さっきは勢いでバイクの後ろに乗り込んだけれどあんたの後ろには乗ってらんないわ!!　もう、臭いが移っちゃったじゃない!!」
　自分の言葉でだんだん興奮してきた詠美は、叫んだ。
（軍では、体を消毒し、消臭するための手段も様々にあったんだがなぁ……）
　ふと、御堂は苦笑する。
　自分の臭いにあまり関心が無くなりつつあることと、無い物ねだりをする自分とに。
「ちょっとぉ！　何がおかしいのよ！　大体、あたしがしたぼくに優しく接してるからって……」
　詠美がさらに声を上げようとした拍子に、紙切れがポケットから落ちた。御堂は詠美のあまりの言いぐさに、若干の苛立ちを覚えはじめていたが、それにはしっかりと目を留めた。
　呆れるほどの勢いで文句を放ち続ける詠美とは対照的に、御堂は無言のまま歩み寄った。
「ちょっと、何とか言いなさいよ！　それ以上近づいたら『ぽち』が火を噴くわよ!?」
　御堂は迷惑そうにこめかみの辺りを掻いていった。
「その紙切れが気になってよ？」
「これ？」
　御堂の言葉に紙切れを拾い上げながら、詠美は思いだした。
「ごまかしても無駄なんだから。そもそも、これだって、さっきの場所で見つけたメモなのよ。あんたが有無を言わさずバイク走らせちゃったから……」
　御堂は詠美の言葉を遮るようにして、詠美の手からその紙片を抜き取った。
　そして、神妙な面もちで紙をのぞき込んだ。

「かゆ……うま？」

　首をかしげる御堂。

「なんかの暗号か、こりゃ？」

　首をかしげながら目を凝らす御堂を見やって、詠美は今度は勝ち誇ったように言い放った。

「やっぱりしたぼくはバカねー。裏面を見なさい」

　詠美の言葉に紙を裏返す御堂。

「……。コイツは、やっぱり暗号じゃねえか」

　御堂は頷きながら言った。

　しかし、軍在籍時に戦争で必要な知識だけならみっちりとたたき込まれた御堂だ。

　多少の暗号文なら読み解くのはわけない。

　メモの中には彼らの部隊の拠点の位置が書いてあった。

　その位置から察するに、島の点対称の位置あたりにも、また一つ拠点があるのではないかと御堂は考えた。

　しかし、詠美には事実の部分だけを伝える。

　詠美は大人しく話を聞き終えると、感心するように言葉を漏らした。

「あんたって、弱そうで強かったり、頭悪い癖にこういうのは簡単に解けたり、不思議なキャラしてるわね……」

　詠美の様子に、またもこめかみを掻きながら御堂は声をかける。

「いずれにせよ、二人ではどうこうできる問題じゃねぇ。早く、別の奴らを見つけるぞ」

　いいながら、二匹を詠美に放る。

「そいつ等はこれからずっとお前が預かってろ！　またよだれを垂らされちゃかなわん」

「え、あ、うん……」

　何故か詠美はその言葉に素直にうなずいてしまった。

「それからな、多少臭くても我慢しろ。バイクで移動した方が、体力の消耗が少ない」

　御堂の言葉に、詠美は再び素直にうなずいた。

（……したぼくが、実はスゴイ奴かもしれないって思ったからじゃない。
和樹や楓ちゃん達に約束したことを実現するためには、今はあんたに従うことが必要なんだって、そう思うから、だからあたしはあんたのいう通りにするんだからね⁉
あんたはあくまであたしのしたぼくなんだから、勘違いしていい気にならないでよっ？）
詠美の心の声を御堂が拾えるはずもなく。
御堂は突然の詠美の変化をいぶかしみながらも、再びバイクのエンジンに灯をともした。

408 痛み

「あ……やかさん……」
「あ、あら……気がついたの？」
山道を進む綾香が、腕の中のリアンへと微笑みかける。
「……わたし……もうだめだと思います……」
「………そんなことないわよ」
少し沈黙の後、そう答えてやった。
リアンを蝕む毒と高熱は常人ならば既に死んでいる、というところまで進行していた。
ならば何故耐えられているのか。
力を封じられているとはいえ、体に宿る魔力が生命力をぎりぎりのところで維持させているのだろう。
だから綾香はまだ希望を捨ててはいなかった。
「もうすぐ……町に出るわよ」
その時、ガサリと音がした。
「――――‼」
反射的に体をかがめる。
ぱらららら っ……という音と共に、綾香の右手の地面に赤い火花が散った。
「敵襲――⁉　こ、こんなときにっ！」
銃弾が飛んできたのは左手の方角、正確な位置ま

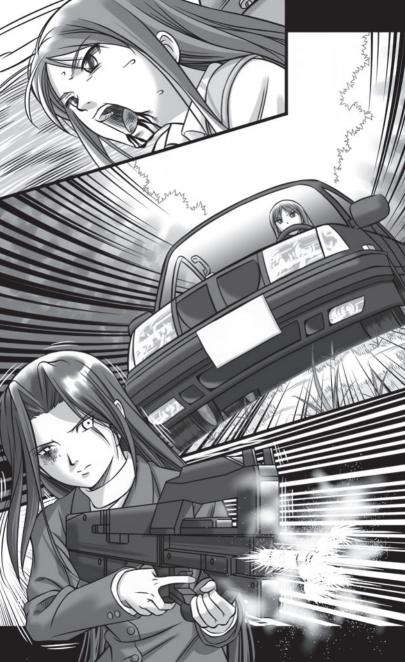
では分からないが、うっそうと茂る森の中から光が走った。
「逃げるわよっ！」
リアンを抱え、前へと走った。
その瞬間、また光の雨が道へと降り注いだ――
（あと何人残っているのでしょうか）
弥生は森の中を進んでいた。
先程殺した青年から奪った一番強力な武器――機関銃はほとんど使われていなかったのだろう、弾薬が充分に残っている。
だが、多ければ五十人近くの人間＝倒すべき標的が残っているのだ。
（正直今の武装だけでは心許ないですね）
傷ついた目もようやく開けられるほどには回復したが、まだ少しかすんでいる。
ここから唯一人生き残るのは至難の業といえた。
（まあ、それは誰もが同じことなんでしょうが……）
とりあえず、不意をついて一気に仕留めていくのが効率的だろう。
武器は倒した相手から奪えばいい。
（とりあえず標的を見つけなければなりませんね）
ゆっくりと、慎重に森を進む。
やがて、向こう側に山道が見えてきた。
そこに、一人歩く者がいる。正確には二人。怪我をしているのだろうか、女が少女を抱えて歩いている。
（私は……あんな人達まで殺さなければならないのでしょうか……）
その痛々しい姿に顔を歪めた。それでも、非情に徹さなくてはならない――。
ゆっくりと、二人に狙いを定めて――撃ちっぱなした。
だが……。
（……!!　はずしたっ！）

女の勘がいいのか、それとも自分の腕が悪いのか……とにかく、弾丸のシャワーは相手の頭上を飛び越え、地面を穿つだけに終わった。
再度構え、撃つ。
(逃がしませんっ……)
不意打ちに失敗したが、ここで逃がすとやっかいだ。山道を走り出した女を慎重に、見失わないように森から追った。

「ぐっ!」
リアンを銃弾から守るように走る。
かすっただけなのか、それとももういくらかもらってるのだろうか……すでに綾香の体に燃えるような痛みが襲っていた。
「綾香さん! 私を置いて逃げてくださいっ……! 私はもう……ダメですから……でも、綾香さんだけなら逃げられます!」
リアンが、苦しそうに、だが必死で叫ぶ。

「そんなのダメよ……二人共生きなきゃ! 姉さん達が悲しむでしょ! ……お互い妹って立場はツライわね!」
再度、壊れたプロペラのような音が響いた。
「うっ!」
今度はもっと鋭い痛み。
背中に何か穴が開いたような感触。
よろけながらも必死で走り抜ける。
既に山道は下り坂にかかっていた——。
「……」
——あやかさん!
リアンの声がすごく遠くに聞こえた。すぐ側にいるのに。
(あはは、私お漏らしでもしちゃったのかしら……カッコ悪いわね)
気がついたら、綾香の下半身がべっとりと濡れていた。背中から少しずつ感覚が無くなっていく。
——もう、私はいいから逃げてっ!

(だからダメだって言ってるのに……)
また銃声が聞こえる。
(あ、今度はなんかクラッと来た……)
そして、山道を過ぎたのだろう、幾つかの民家が見えはじめた。
一か八かの賭けだった。
かすみゆく目の端にとまった黒い車の窓の中、鍵が置いてあるのが見えた。
高槻はおそらくゲームを盛り上げる為にいくつかそういったアイテムを用意してあるのだろう。
それは家の中に置いてある包丁だったり、今回のように車の鍵だったりする。
もしかしたらどこかには銃器が隠されてあったりするのかもしれない。
だが、今となっては当の綾香にはもうどうでもいいことだった。
(り……あん……ここからは……私一人でやるから……)

リアンを半ば転がすように草むらへと放る。
――あやかさんっ!
運転席のドアを開け、綾香が乗り込む。
ビシャリッ……座ったとき水をかけたような音が妙に耳に残った。
エンジンをかけ、前を見据える……
もうほとんど見えなくなっている視界に長髪の女を確認する。
(姉さん……ごめんっ!)
目の前が光ったかと思った瞬間、フロントガラスに幾つもの銃痕が刻まれる。
同時に、粘ついた液体が窓の内側に飛び散った。
それでも最後の力を振り絞ってアクセルを踏み切る!
目標は長髪の女――!
「こん――ちくしょう!」
次の光を見た瞬間、視界が赤く染まった気がして、綾香の意識が閉じた――

「――――！」
弥生は山道の出口付近から激しく砂埃を上げながら突進してくる黒いＢＭＷを迎えうつ。
止むことのない銃弾の雨。
ボンネットに無数の穴が開き、フロントガラスが割れ、前輪が破裂する。
ドガシャアッ――――――！
道を大きくそれたＢＭＷは民家の中へ突進し、激しい爆音と共に炎上した……
しばらくその赤い炎を見つめた後、機関銃を構えながらゆっくりと進む。
草むらで倒れている少女のもとへ。
「……あなたは逃げなかったのですか？　逃げられなかったのですか？」
既に泥にまみれ薄汚れた眼鏡の少女を見下ろす。
「……たぶん、両方です……」
力無く、リアンが呟いた。
「……もう、動けませんから……がんばっても、動けないんです。それに、綾香さんを置いては行けません」
弥生もそれで気付いた。リアンの腕が紫色、いやどす黒く変色していることに。
今の激しい動きで一気に悪化したのだろうか、それとも元々だったのだろうか。それは既に体にまで侵食していた。
「あなたの瞳……すごく、悲しい瞳をしてます……」
「ただ、死にいく人に同情しただけですから……そう見えただけでしょう？」
「でも……泣いてる……じゃないですか」
「……」
苦しそうに息を吐きながらさらに続けた。
「あなたは――悲しい人です」
弥生は何も言わなかった。
「ごめんなさい、綾香さん……スフィー姉さん……もう一度――会いたかった……」
そしてそのまま意識が途切れた。

リアンのその顔へと銃口を向けたが――結局は撃てなかった。
(それでも私は生きて帰らなければいけないんですよ……)
ほんのわずかな時間であったが……。
リアンが息を引き取るまでの間だけ、少女を優しく抱いてやった。

三十六番　来栖川綾香　死亡
百番　リアン　死亡
【残り39人】

409　こころの鬼

コツ、コツ、コツ。
硬い足音をたてて、調理実習室をあとにする。
入ってきたときは、あんなに希望に満ち溢れていたのに、今は消沈している。

妹達を救うために、わたしは奔走した。そして、いや、だからこそ彼女達も救いたかった。だというのに気が付けば、主催者を喜ばせる剣闘士として、蛮勇を奮わざるを得なかった。
ほう、とため息をついた、次の瞬間。激しい爆発音と共に夜の校舎が震動する。
(初音達が脱出口を開いた？　……いや、それにしては、まだ少し早いわ)
初音が持っていたダイナマイトで、この校舎に穴を開けて脱出する。それは、あらかじめ打ち合わせていた計画だった。
廊下から教室の時計を覗き込む。約束の七時までは、まだ十分近く猶予がある。
「千鶴姉、今のは……？」
いぶかしむ梓に頷いて、わたしは階段に向けて駆け出した。何かしらの理由で爆破を早めざるをえなかったのかもしれない。例えば、他の参加者に襲撃されたとか。

階段に差し掛かったところで、再度爆発音。衝撃で躓きそうになるのを何とか堪える。
予定には無かった二度目の爆発の意味を考えながら階段を駆け下りると、そこは、火薬の匂いと粉塵が立ちこめていた。
廊下の壁は爆破されており、大穴が闇夜へと続いている。そして、階段から離れた場所にある女子トイレの方にも、もうひとつ。爆破された穴が空いているようだった。
どちらが初音によるものなのか判断がつかない。
「初音ちゃん！」
わたしが迷っていると、初音の名前を呼ぶ声が聞こえた。初音と一緒に居た七瀬さんのものだろう。
初音に危険が迫っている可能性が高い――そう判断したわたしは、瞬時に声のした女子トイレ側の穴に向かって駆ける。罠の可能性もあったが、躊躇なく空いた大穴に飛び込んだ。
ひゅう、と風が吹き、月光が闇夜を照らしている。
目を凝らすと、裏門に人影を確認できた。
「……初音はどこ⁉」
けど、そこにいたのは呆然と立ち尽くす七瀬さんだけ――初音の姿は無い。
「初音は、どうしたんだよ！　あんた、何やってたんだ⁉」
追いついてきた梓が、掴みかかる勢いで七瀬さんを問い詰める。
「あたしだって、訳わかんないわよ⁉」
我を取り戻した七瀬さんが梓に言い返す。
「じろーなんちゃらがどうとか言いはじめて、突然走っていっちゃって。追いかけようとしたけど、初音ちゃんは来ないでって拒絶して。銃で威嚇までされたらどうしようもないでしょ⁉」
初音が錯乱したその理由。
わたしはそれに心当たりがあった。
「千鶴姉、それって――」

そうだ。
それは、鬼の記憶。
初音の笑顔には縁遠く思えるそれが、ここにきて顕れたのだろうか。
やりきれなさに歯を食いしばる。

そのとき。
名雪ちゃんの笑顔が。
最期の笑顔が浮かんで、初音のそれに重なる。
あまりに不吉なイメージに、わたしは思わず駆け出す。
「ダメだ！」
梓が腕を掴み、わたしを引き止める。
「ダメだよ、千鶴姉……」
梓は最後まで言わなかったが。
わたしには理解できた。
わたしが一人で追ったなら。

あの娘は、喰われる。
こころの、鬼に。

410　ぼくの戦争　――戯言――

五階の仮眠室にもサイレンの音が響く。仮眠を取っていた男達ははっと目を覚ました。初めて鳴った警報は、侵入者の最初の襲撃を意味していた。すぐに男たちは立ち上がると首を捻る。皆三十を少しばかり過ぎた男だった。
彼らは、長瀬一族にもＦＡＲＧＯにも関わりのない、ただの傭兵である。ドイツなり、ベトナムなりで戦火をくぐり抜けてきた男達は、このゲームの管理者の守護役としてここに招集されている。
――善良な市民を多数集めて、殺し合いをさせる。
鬼畜めいていたが、しかしあまりに甘美な響きだった。彼らとて今までにもそれなりに地獄を見てきた。

たつもりだったが、今度のこれは、ある意味でそんな地獄よりもっと深いところにある、と思う。自分たちのようなプロの殺し屋ではない素人が殺し合いをするのだ。面白い、と思った。アフリカの方の紛争も放って三人の傭兵はこの島にやってきた。高い契約金と巨大なスリルを求めて。
「にしても、やっと来た訳か」
煙草を銜えながら一人がそう言うと、無精髭を生やした一人が、まったくだ、と頷いた。
「やっとスリルを味わえる」
もう一人はサブマシンガンを手に取り、微調整を始めている。無機質な金属の擦れる音が響き、それがどこか寒々しい恐慌を感じさせる。
「俺ら三人以外はそれほど実戦経験がありそうには見えなかったな。――俺らが戦い慣れしすぎてるだけか」
武器の調整をしながら、一番身体の大きな男が言う。口の端を残酷にあげて、声を上げず笑う。
「戦場経験のない兵士にしちゃあ上等だろう。俺らが出るまでもなく、素人の侵入者くらいなら殺せるだろうさ」
「そいつは残念だな。結局まだ寝てればいいのかね」
髭の男がつまらなそうに言う。
「わからんぞ。その侵入者が例の『ビーム兵器』持ちかもしれん。だとしたら俺らでも苦戦するかもな」
大柄な男が調整をしながら、少し小さな声でそう言うのを聞いて、一番小柄な男が肩を竦める。
「饒舌だな、緊張してんのか？　珍しい」
「うるせえよ、馬鹿」
「……ま、だとしたら面白くなるな。たかがビーム兵器ごとき、経験で打破してやろうじゃねえの」
「はは、違いない――にしてもだ。ここに配備されているのは、ほんの十人足らずだろ。そんな適当な守りでいいのかね。あの高槻ってやつは、このミッ

ションの最高責任者なんだろ？」
「――いや、そうとも限らんぞ？　あいつはただのお飾りかもしれん。小者っぽいしな」
くつくつ、と笑いが漏れる。
「まあいい。取り敢えず準備しておこう。万が一、ってことがあるかもしれないからな」
武器の調整を終え、男たちは立ち上がる。

十字路の先にある階段を駆け登り、彰は二階へ到着する。踊り場を飛び出し廊下を見る、誰もいない。目的地は上だ。ここで立ち止まっている暇はない。彰は背後からの敵の来襲に気を遣いながら慎重に階段を登る。
三階の踊り場に駆け出る。兵士が一人。まだこちらには気づいていない。一瞬の迷いもなくサブマシンガンと拳銃を同時に発射、外れる、敵が気づく、首から提げたサブマシンガンを手に取ると、こちらに弾幕を張りながら後退する。物陰に隠れる彰は兵士がこちらに銃口を向けたまま叫ぶ声を聞く、
「誰かッ!!　侵入者がここにいるぞッ!!」
まずい。彰は考える、この建物の中に何人の兵士がいるか知らないが、同時に二人の兵士を相手できるほど自分は優れてはいない。考える、逃げるべきか追うべきか、
決まってる、逃げるんだッ!!
彰は四階へと続く階段を駆け登る。兵士の「上へ向かったぞ」という声、重なり合う足音、少なくとも二人はいる。まずいまずいまずい、まずい。彰は四階の踊り場まで駆け登って廊下を見る、四階には誰もいない。よかった、上から狙い撃ちをされることはなさそうだ。だが階段を駆け登る足音が聞こえ始める、どうする、どうするどうするどうする、思考が混乱、落ち着け、あと一秒もしないうちに敵は来る、この一秒が勝負だ、上に行くか？　だが四階にはいなくても五階には確実に敵がいるだろう。エレベーターを使うか？　だがそれでは狙い撃ちにな

る、畜生、来る、来た、
考えていては仕方がない、彰は上手く陰になるところからサブマシンガンだけを表に出し、自分の下で怒号を発する兵士二人にサブマシンガンを向ける。引き金を引く、弾丸の雨、雨、雨、こっちにも雨が降る、自分の耳元を掠める弾丸、鼓膜が破れたかのような衝撃、気のせいだ大丈夫だ大丈夫だ大丈夫だ！　兵士が階段を登る音、畜生、畜生畜生、落ち着け、クールに、氷のように冷静に雪のように冷淡に！
彰は廊下に身を投げ出す。弾幕をいなして渡り廊下に飛ぶ、兵士たちが階段を駆け登る間の時間が二秒出来る、どうする、奇跡に期待して戦うか？　それとも、
決まってる、逃げながら戦うんだ!!
彰は走る。廊下をジグザグに走り、背後からやってくるに決まっている雨を少しでも高い確率でかわすことを考える。ぱらららららら、こちらからも弾幕を張らなければ、後ろを見ながら走り、狙いもせずに引き金を引く、ぱらららららら、かちゃん、かちゃん。弾切れか、畜生！
死ぬ。だが無抵抗で死ぬものか、死んでたまるか！　サブマシンガンを捨て左手に握った拳銃を撃つ、重い音、壁に当たる音、そして肉の弾ける音。叫び声、同じ瞬間に自分の首元の切れる感触。痛みが走る。声が漏れそうになるが耐える。走らないと、そう思った時に敵が降らす弾丸の雨が止む。振り返る、そして見る、自分の放った弾丸の為一人の兵士が蹲っている。「目が、目が」と叫ぶ音、そうか、自分の放った弾丸が跳弾となって敵のヘッドギアを貫いたのだ！　エネルギーが分散されたから殺すには至らなかったがそれでも充分。見る、目をやられた方の兵士はサブマシンガンを抱えて倒れているが、無事な方は拳銃しか持っていない、いける、いけるいけるいける！
ここまで考えるのに二秒、もう一人の兵士も仲間が倒れたことに混乱、チャンスだ行け振り返れ！

彰は身体ごと振り返ると拳銃を右手に持ち直し走る、十五メートルは素人には遠すぎる。自分の接近に気づいたもう一人の兵士は慌てて拳銃を構える。動作は遅くはない、何もしなければ自分の心臓か頭に穴が開く。彰は刹那的な時間に何をどうするか思考思考思考、思考より先に本能が行動を命じる、

彰は左腕に提げていた鞄を投げる、走りながら置き去りにした弾薬切れのサブマシンガンを拾ってそれも投げる、兵士の腕に鈍い音を立ててサブマシンガンが命中、いつから自分はこんなにコントロールが良くなった、そんなことは今はどうでもいい、敵が拳銃を構えなおす一瞬が勝負、彰は右手で拳銃の引き金を引く、弾丸が兵士の持つ拳銃に命中、殆ど同じ刹那にもう一発の弾丸が兵士の喉を貫く。さけようと思ったが間に合わない。兵士の喉から泉のように溢れ出す血を全身に浴びる。自分の顔はきっと真っ赤に濡れていると思う。

勢いに任せて走って、彰はもう一人の、蹲っている方の兵士の頭を蹴り飛ばす。叫び声、

「やめてくれやめてくれやめてくれやめてくれっ」

ヘッドギアのガラスが割れて、その破片のせいで目が見えなくなったのだ。サブマシンガンを取り落とし、驚愕に震える声で哀願。怖いだろう、それは怖いだろう。自分にいつ殺されるか判らないのだから。彰は思う。

「暗い世界は怖いだろ。すぐ終わらせてやる」

自分でも信じられないような残酷な声だった。

彰は目を閉じて拳銃の引き金を引く。男の額に穴が開く。溢れる血が彰の身体を更に濡らす。手までが真っ赤だった。

勝った。首を削られはしたが、五体満足で生きている。小さく息を吐く。拳銃もサブマシンガンも弾丸が無くなった。だが、運のいいことに、先に殺した方の兵士が拳銃とサブマシンガンを持っている。サブマシンガンはもう弾数も多くないだろうが、拳銃の方は未使用のようだ。彰は死体に小さく頭を下

げながら、武器を回収する。後に殺した方の持っていた拳銃には、弾丸が一発しか残っていなかったので拾わない。あとサブマシンガンが二丁と拳銃が一丁。これで自分は戦うのだ。
——行こう。まだ道半ば、というところだ。
浴びた血がひどく臭う。

「まだ誰が侵入者か特定が出来ないのか？」
高槻は汗を流しながらそう呟く。
「す、すいません……」
「使えん奴めっ！　特定はもういい、早く殺せッ‼」
高槻は苛立ちのままに無線機の電源を切る。爪を噛む、早く侵入者を特定して爆破してしまわねば自分の命まで危ない。こんな腐れた場所で死ぬのなどまっぴらだ。
長瀬一族と連絡を取るか？　いや、まだだ、まだ待て、連絡を取ったところでどうしようもないだろう。それにこちらには切り札の元傭兵部隊隊員がいる。自分だって機関銃を持っている！
高槻は早鐘の如く高鳴る心臓を抱えながら、灰の長くなった煙草を咥えている。
彼は実は本物の高槻ではなく、ただのクローンでしかない。本物より劣った知性と力しか持たない、ただの矮小な男なのだ。
矮小な男はがくがくと震えている。

高槻が震えているその一つ下、六階では、その傭兵三人がサブマシンガンを装備して佇んでいる。下の階の銃声が止んだことに気づくと、髭の生えた傭兵が煙草に火を点ける。
「——銃声が止んだな。侵入者は仕留められたんかね」
「さあな。まあ十中八九仕留められただろうが——もしかしたら生きてるかもな」
大柄な男が笑いながら言う。髭の男は煙を吐き、
「はは、本当に生きてたら面白いな。——まあ、と

にかく待機しておくかね」
そう言う。小柄な男も首をすくめて笑う。
五階に到着。渡り廊下を見ても敵はいない。もしかしたらさっき殺した奴らでここの警備は全滅したのかも、全滅していないにしても上はもう手薄なはずだ、高槻と叔父達が待っているだけかもしれない。チャンスだ、もし今のタイミングを逃したら新しく警備の人間がやってきて今度こそ自分は蜂の巣になるかもしれない。急ごう、
彰は六階への階段を駆け登ろうと一歩目を踏み出そうとして、背筋にぞわりと冷気が走る。
そうだ。ここは高槻という重要人物がいる施設だ。こんな甘いものではない。今までの敵も強かったが、しかし、この先にそれ以上の敵がいないことがあろうか。いや、そんな筈はない、必ずいる、
この寒気は、その敵が放つ威圧感だ。
彰は足を止め、深呼吸、高鳴る心臓を左手で抑えて、左腕に提げられた切り札入りのバッグの重みを全身で感じながら呼吸、呼吸、呼吸。もう一度大きく息を吐く。心臓が少しだけ遅くなる。頬から脳髄に伝わる痛みと熱が、逆に彰の頭を冷静にする。
彰はゆっくりと一歩目を踏み出す。死に彩られた焔の輪をくぐり、確かな生を手にするのだ。

411　僅かの躊躇

時間は放送直前。
未だ、地下ドックで修理が続く、深夜のＥＬＰＯＤ艦内にて。
「さてそろそろ放送をいれるか」
と高槻が重い腰を上げた時、非常事態を告げるサイレンが艦内に響いた。
「どうした！　敵襲か？」
間髪いれずに、オペレーターのＨＭ―13が冷静な声を返す。

「03守備の通信施設が参加者に襲撃されました」
「念の為、施設の閉鎖を行え、侵入者は誰だ？」
「六十八番、七瀬彰です」
番号を聞いて、高槻は爆弾のスイッチに手を伸ばしたが、途中でその手を止める。
「う～む」
少し首を傾げ考える。
その気になれば腹の爆弾でいつでも殺せるとはいえ、長瀬一族の甥である彰を、俺自身の手によって殺してしまえば、長瀬に対して顔が立たない。
何とか防衛部隊に踏ん張ってもらえればいいんだが、いざとなれば03を切り捨てても……
と思考を巡らせていたが肝心の施設の事を思いだした。
「おい、襲撃されている施設の閉鎖はどうなっている？」
「はい、起爆装置並び通信施設の閉鎖作業は完了しています」
「なにいい!?　でかしたぞ、これで心置きなく03の自爆装置が使える」
この時初めて、高槻は並みの人間では無し得ないことを成す彼女たちが頼もしく思えた。

412　退くも地獄、向かうも地獄　（第六回定時放送）

予定より少し遅れて、放送は始まった。
「すまんすまん、遅くなったが寂しくなかったか？ まあさておき、前回の放送からこれまでの死者だ。
十三番　緒方理奈
十六番　杜若きよみ
十八番　柏木楓
二十五番　神岸あかり

三十六番　来栖川綾香
四十一番　桜井あさひ
五十三番　千堂和樹
七十四番　姫川琴音
七十六番　藤井冬弥
七十七番　藤田浩之
九十一番　水瀬名雪
九十七番　森川由綺
百番　　リアン

以上十三人だ。
これまでで最高の数だが、一人殺して死ぬ奴が多いせいで、生き残っている奴にまだ誰一人殺してないのが結構いるな。
……よし！　こうしよう。
次の放送までに一人も殺せなかった奴は即座に爆弾を爆発させる。
あっ、俺の部下はいくら殺しても駄目だからな。

413

PAST ENDING II　Dream is over

――桜井あさひ、という女の子の話。

アニメや漫画が小さい頃から大好きで、そういうものにずっと憧れていた。

ずっと前に見たアニメの話。
主人公は平凡な女の子。
毎日の生活を、変わり映えは無いけど、大好きなお父さんとお母さん、それからちょっと生意気な弟、親友の女の子とクラスメート、あとペットの子猫。
そんな人たちとともに、穏やかに平和に過ごしていた。

そんなある日、女の子のもとに一人の魔法の使いが現れて。
「実はあなたは魔法の国のお姫様の生まれ変わりなのです。さあ、この魔法のステッキを持って、本当のあなたに目覚めるのです」
そうして魔法の呪文を唱えると、
あっという間に不思議な魔法少女に早変わり。
見えない翼で空を飛んで、不思議な力で悪い人をやっつける。
パートナーは、かわいい喋るぬいぐるみ。
そんなファンタジーの世界を夢見ていた。
年を重ねて、大きくなって、そんな世界は無いことに気付いて。
それでもあきらめきれない、そんな夢があった。

それは、誰もが子供の頃に抱く夢。止められない憧れ。
見つける。
その夢を実現できる、そんな途を。
頑張って走った。
私にはこれしかない、そう思って必死で走った。
誰にも負けないくらい好きだという思いをぶつけた。
そして、とうとう〝そこ〟へ行き着くことが出来た。
いらないものも、たくさん見てしまった。
無邪気な少女ではいられなかった。
でも其処に着いたという事実は、私をとても幸せにしてくれた。

……夢は、叶った。

キャラクターを演じている自分は、本当に充実していた。
今度は、夢を他の人たちに分けてあげたくなった。
私のこの気持ちをみんなに分けてあげられたら、どんなにいいだろう。

それは、新しい目的になった。
それから、今の〝桜井あさひ〟が始まった。

……世界が広がる。

爆発したように激しい勢いで、私はいろいろな人に出会った。
そしてとうとう、その人に出会う……。

初めての即売会。
初めて自分で買う同人誌。
それが、その人の初めての本だった。
初めて同士の二人。
でもそんなことを知るのは、もっともっと先の話。
キャラクターを演じていない私は本当に内気で、いつもあの人の前でどもってばかり。
そこで、〝モモ〟というもう一人の私が出来る。
いつのまにか忘れていた、本当の私が其処にいた。
あの人はとてもいい人で。
モモという私を、嫌がりもせず、一人のファンとして扱ってくれて。
あの人の漫画は、私の心の奥底に埋まっていたものを掘り出してくれた。

それは、子供の頃のあの無邪気な憧れにも似ていて。
カードマスターピーチに出会った時の、あの衝撃にも似ていて……。

あさひとモモの間で揺れ動く〝私〟。

無邪気な少女でいられなかった〝私〟。

でもそんな私を潤してくれるものが、其処には確かにあった。

……夢は、まだ続いていた。

朝早く目覚める。
今日もいい天気だ。
寝ぼけた顔なんてしていられない。

お弁当も水筒も、準備はＯＫ。
さあ行こう、こみっくパーティーへ。

……あの人がいる、こみっくパーティーへ。

「あ……れ……」
再び、瞼を開いたとき、さっきまで見ていたはずの人形は、まるで最初から無かったかのように、姿を消していた。
「……でも……ま…………………いっ…………か」
……楽しい夢が見られたし。
その言葉までは、声にならなかった。
私は全然不幸なんかじゃなかった。
夢の終わりは、思ったより早かったけど——。
こんなに、沢山の幸せを胸に刻んでいたんだから。

でも……。
……もしできるなら、もう一度読みたかったな。
先生の同人誌。

四十一番　桜井あさひ　死亡
【残り38人】

414

PAST ENDING Ⅲ　銀色の終幕

誤算だった。
十分な計算を経ているはずだったのに、何度も失敗する。
弾丸を温存するために、接近して背後から頭部を殴打するという方法を取った。
だが実際には、それにもかかわらず女は生きていて、あまつさえ自分に反撃することすら可能だった。
もっとも、銃撃を受けたものの弾丸は貫通しており、はっきり言って損傷は軽微だった。
微妙に吹き飛ばされてしまったのは、単純にこの体の重量が軽いからだ。
だが、よく思い出してみれば、先ほどのもう一人の女に対する狙撃も失敗している。
原因は僅かな目標のずれ。
この体の軽量さは、常に目的遂行の枷となっている。
だが、この体が少しでも稼動する限り従わなくてはならない。
〝私〟が持っているただ一つのもの。
唯一つのロジック。
即ち、可能な限り広い範囲において殺戮を行う、最も効率の良い方法で、より多く殺す。
私の目的は、まだ達せられてなどいない――。
――智子はへたり込んでいた。
一瞬に緊張させられた体は、大きな疲れを宿していた。

「智子ぉ、大丈夫かぁ……？」
晴子が座ったまま声を掛けてくる。
「……どうやろ？　よう、わからんです」
智子は木の下に這って移動し、そこによっかかって座った。
撃たれた傷はひりつくが、そんなに大げさに騒ぐほどでもなかった。
——問題は、さっきから見ない振りをしていた体調不良のほうで。
反対の腕の、前からの傷が疼く。
気にならない程度だったはずの痛みや気持ち悪さが、なにやら倍増しているような気がする。
……いい気持ちはしない。
——今の智子に、まさかそれが〝腐食〟の兆候であるなどということが気付けるわけが無かった。
「マルチ……、それとセリオには、ちょう、かわいそうな真似をしたな……」
周りの木より一回り大きいそれの下で、智子は呟いた。
ふと顔をあげて、晴子の様子を見ようとする。
きっとひどい顔をしとるんやろな、まあでもそれは私も一緒か。
そんなことを考えながら。
——そのとき。
「ごふっ⁉」
急に智子が咳き込んだ。
その拍子に、口から赤い飛沫が漏れた。
「ちょ……智子⁉」
それを見て心配になった晴子が立ち上がろうとする。
「だ……大丈夫です、こんくらい」
そう言って、智子は晴子に視線をやった。
しかし上げた視線の先には、見えてはならないものが見えてしまった。
倒れていたはずのマルチが立ち上がり、自動小銃を晴子に構えている！

「晴子さん、後ろ！」
「!?」
晴子はその声に反応し、後ろを〝振り向かずに〟横に転がった。
ダァァァンンン！
一瞬前まで晴子がいた空間に、銃弾が叩きつけられる。
「こなくそっ」
晴子は体勢を立て直し、膝立ちの状態で銃を構えた。
だが、〝彼女〟は即座にそれに反応する。
ダァァァンン！
ダァァァンン！
撃鉄が上がったままの銃、晴子は二度発砲した。
だがその二発はその二発とも〝彼女〟を捉えることは無かった。
「何やてぇ!?」
〝彼女〟が高速で接近してくる。
晴子は後ろに跳び下がって、なんとか間合いをあけようとする。
だが、それさえも超える速度で彼女は迫ってきた。
〝彼女〟の両手が晴子を威嚇し、茂みの奥へと追いやる。
「く、くそ……」
智子は立ち上がって追いかけようとする。
……だが、体に力が入らない。
むしろ、まるでどこからか流れ出ていくかのように、全身の力が脱力していっている。
「んな……何やぁ……何やのこれはぁぁっ!?」
「ぬぅ……、離さんかいこのボケェっ！」
〝彼女〟に押し倒される寸前、その勢いを利用して

晴子は垂直に〝彼女〟を蹴り上げる。
ドタンっっ！
吹き飛ばされる〝彼女〟。
だがその反動で晴子自身も強く地面に叩きつけられた。
「がはっっ……」
強烈な衝撃が内臓を襲い、息が出来なくなる。
よろめきながら、なんとか晴子は後退していく。
うずくまっている余裕など無い。
何せ相手は、痛みも苦しみも感じることの無いロボットなのだから。

おかしい……。
智子は考える。
〝マルチ〟にあんな力があるわけない。
いくら晴子さんが女やからって、大人に敵うほどの力を〝マルチ〟の体が持っていたというのか？
……違う。

あれは、限界を超えた力だ。
過負荷を避ける為に設定されているリミッターを故意に外した状態。人で言う火事場の馬鹿力というやつだ。
そのままの出力を維持すれば、いつか耐えられずに自壊するであろう過剰な力。
その力を人を殺す為に振るっている。
『え……と、あと一日は問題なく動けるかと』
前にあの子が言っていた事が思い出される。
一日分の巨大なエネルギーを、〝現在〟のためだけの費やして、晴子さんを襲っているというのか？
自分の体を見つめる。
……今すぐにでも助けに行きたいというのに、こっちはそんな力も入らない。
目の前で戦っている彼女を、見殺しにしたくない。
それなのに……それなのに……。
「……ちくしょう……ちくしょう……、晴子さぁぁぁぁんっ!!」

もどかしさが募る。思いは声に現われる。
智子の魂の叫びが、辺り一帯に木霊する。

――ザッ。

土を踏みしめる音。
智子の前にもう一人の人物が……、
最後の人物が姿を見せた。
「――あんたは？」

――状況分析。

先程は予想外の反撃を受けた。
弾き飛ばされたことで間接の動作不良が三箇所。
それ以外にも過負荷による部品破損が五箇所発生している。
「……ですが、行動に支障はありません」
ハルコはなおも後退中。

戦場を離脱しようと試みている。
だが、負傷しているらしく動きは鈍重だ。
「追いつくのは容易です」
五十六秒もあれば距離を詰められるだろう。
「――移動開始」
急がなくてはいけない。ハルコの殺害が終わったら、トモコを対処する必要がある。そして、残ったミスズとアサヒを処理しなければいけないのだ。
「くそっ、もう来おった！」
ハルコが、足を速める。だが――
「問題ありません」
ハルコの移動速度より、こちらの移動速度の方が大幅に上回っている。
駆ける、駆ける。
接敵予定は十二秒後を予定。
ハルコが木の根に足を取られて転倒。
接敵予定を六秒後に修正。

三、二、一――接敵。
「がっ……!」
うずくまるハルコの腹部を蹴り上げた。
確かな手応えをセンサーに感じる。
これで、ハルコはしばらく動けない筈だ。
「……さあ、これでお終いです」
私はハルコの頭部に銃を突きつける。
そして、トリガーを引いた。

ダアァァァンンンッ!!

静寂に響き渡る銃声。
銃弾は見事に吹き飛ばした。

――〝私〟の右腕を。

「――悪いな」
その男は呟いた。

白い煙を上げる銃口。
彼はデザートイーグルを持っていた右手をたらし、静かに彼女を見つめていた。
月明りを照り返し、厳かに輝くその銀髪の印象はどこと無く冷たく、そして悲壮に思える。
闇に融けるその黒い衣装は、さながら死神のようで……。
〝彼女〟は自分を撃った男の方へ視線を向ける。
「――優先目標を変更する要を認む」
より多く殺すために、より多く壊すために、より長く生き残らなければならない。
その為には、この男は明らかな脅威だった。
〝彼女〟はいきなり身を翻し、凄まじいスピードで男に迫った。
先の無い右腕を気にする風も無く、正に吹き飛ばされるような勢いで……。
男の眼前に、〝彼女〟が迫る。
男は、その銀髪と対になるかのように輝く金色の

瞳で、〝彼女〟を見据える。
その表情はどこと無く悲しげで――。
肩を伸ばし、腕を伸ばし、そして再び両手でデザートイーグルを構える。
ターゲットは……〝彼女〟の頭部を捉えている。
「さよならだ」
国崎往人は、トリガーを引いた。

ズダァァアアンンッ！

――そして、その悲しいプログラムは、とうとう終焉を迎えた。

八十二番　マルチ　死亡
【残り37人】

415　PAST ENDING Ⅳ　貴女へ

バサバサバサッ。
銃声に驚いてどこかへ飛んでいっていたはずのカラスが、再び戻ってきて肩の上にちょこんと止まった。
「……お前か」
往人はだるそうにそう言った。カラスの方には目をやりもしない。
背中には気絶している晴子を背負っている。
どこかに傷を負っていないかと調べたが、とりあえず致命傷になり得そうな傷は無さそうだった。
――後頭部が腫れているのが、少し気になったが。
頭部が砕かれたロボットは放置した。人形遣いとして思わないところが無い訳ではなかったが、埋葬するような余裕は今の彼にはなかった。

往人は智子のいるところまで戻ってきた。
木に寄りかかり座っている智子。
ずいぶんと疲れた様子で、肩を落とし、目を瞑り、まるで眠っているかのようだった。
「……なんとかなったみたいやなぁ」
目をゆっくり開いて、往人の姿を認めた智子は、ぼそっとそう言った。
「あんたのおかげで晴子を助けることが出来た。礼を言う」
往人はそのまま軽く礼をした。
「いややなぁ……。そないなこと言うたら、私かて礼言わしてもらいたいわ」
ほおと口元を吊り上げて、色褪せた笑みを智子は浮かべた。
「ホンマに幸運やわ……。あんたやろ？　晴子さんとこに転がりこんどった居候は」
「ああ」
「そうか……。なんやそんな気がしてたんや。血相変えて走ってくんやもんな……。よかったな、再会できて」
「……全くだ」
ずり落ちてきそうだった晴子を、往人は背負いなおした。
ふと、往人の右手の銃が智子の目に入る。
「あんたの武器……、その銃か？」
「ああ」
「ちょい見してみ」
往人はその銃を手渡す。
「へへ、無用心やなぁ。簡単に武器渡してもうて……」
「あんたにそれは撃てないからな」
「……そうやな。なんや、よう分かっとるんやん」
「まあな」
智子は乾いた瞳で自嘲していた。
手の中に入ったその銃に目をやる。
「……なあ、あんたこの銃何て言うか知っとる

か？」
「いや」
「私知っとるねん……。どや、凄いやろ……？」
「そうだな」
「有名やねん、これ。と言っても……ゲームの知識やねんけどな。悪友から教えてもらってん。……デザート・イーグルっちゅうんや。日本語にしたら砂漠の鷹か……カッコええやろ」
「バカにするな。それくらいの英語は分かる」
「へへ……別にバカにしたわけじゃあらへんで……何や、気にしてたん……？」
そう言って、口の端を引きつらせて笑いながら、智子はその銃を返した。
「砂漠の鷹か……覚えておこう。俺にぴったりだ」
「何でや……」
「ハングリー精神とかな」
「ぼけぇ……あんたは単に欠食児童入門なだけやろ」
「……見たのか？」
「晴子さんの受け売りや……」
「余計なことを……」
そう言って往人は頭を掻き毟る。
その様子を見た智子は笑いをかみ殺すのに一生懸命だった。
往人はその無骨な銃をいとおしげに眺めた。
残弾は、残り一発。
最後まで……俺を助けてくれるか？
「あ！……、そうや。忘れもんがあるで……」
力が抜けただるそうな口調はさっきからのことであったが、それがさらに進行したような……それほどに智子から生気が薄れていっている。
目も、また閉じかかってきている……。
「何だ……？」
「観鈴や……。あの子、あっちに置いて来てもーたわ……。すぐ近くやから行ってやり……。それで、……全員や」
「ああ、それならそこだ」

そう言って往人はその方向を指差した。
するとその方向に特徴的な金色の髪が見えた。
「放っておけなかったんで、連れて来た」
「……はっ、手回しのいいことで」
そう毒づいてから、大事なことを忘れていたのに気づく。
「……なあ、もう一人、黒髪の女の子いてなかったか？　胸に銃弾で傷受けてるんやけど……」
「それは…………残念だが…………」
「……………………そか」
智子は座ったままため息をつく。
「やっぱり……ダメやったか……」
誰にともなく、智子はそう呟く。
往人はその様子を静かに見つめている。
「…………そこな人形遣いっ！」
「……そんなことまでこの女は話したのか」
「まあ少し違うけどそういう事や……。ちょう……冥土の土産に……見せてぇな」

少し、息切れが激しくなった。
「………無い」
「……はぁ？」
「人形をどこかに忘れてきた。だからもう人形劇は品切れだ」
——先客がいたせいもあるが。
「なんやねんあほぅ……商売道具失くす商売人があるかい……」
「悪いな」

ばさっばさっ。

突然、さっきまで肩上で大人しくしていたカラスが騒ぎ出す。
「何だ……五月蝿くすると叩き落すぞこの……」
カラスに向かって腕を振る往人。
その拍子に、カラスのくちばしから何かが落ちた。
「……」

「……」
　思わず沈黙する二人。
　視線の先には……地に落ちた古ぼけた人形。
「……あるやないか」
「……この駄カラスめ。余計なことを…」
　往人は額に手を当てて顔をしかめている。
「芸人に道具がそろったんや……ここでやらにゃあプロやないで……」
「くそう……」
　渋々と地面に膝を付くと、渋々と人形を立たせる。
　そこに、本番前の緊張感など微塵も無かった。

「さぁ……、楽しい人形劇の始まりだ」

　……折角の決め台詞にも、どことなく迫力が無かった。
「……」
「……」

「…………動かんやないか」
「…………そうだな」
「ちぃぃぃぃぃ……っとも楽しくないわ……」
「本番前の俺のコンセントレーションを乱すからだ……」
「どんなときでもバシッと決めるのがプロやろが……」
「うるさい…………とにかくこれで分かっただろう。人形劇はもう店じまいだ」
　そう言うと往人は立ち上がって、智子の傍からどこかへ行ってしまった。

「――けっ……やっぱり眉唾か……期待させよってからに……このドアホ……」
　背中の木に体重を預けながら、そっと前を見る。
　断続的に続いていた喀血は収まったようだが、今度は疲労が激しい。
　有体に言って……眠い。

「あかん……わ。ここで眠ったら……ホンマに……逝ってしまいそうやわ……」
起きていれば、生きていられるのだろうか。
……自分が、あさひに言った様に。
「あー…………」
そう考えると……言葉が出なくなった。
死ぬ、……か。
「…………なんやねん、なんでやねん」
地面についた左手に力がこもり、そこに抉り痕が残る。
「誰が……誰が死にとうて死ぬねん……」
涙が込み上がってくる。無意識に、鼻をすすっている。
「私やって……私やって……」
指先だけ、開けたり閉じたりして、土を引っ掻き続ける。
「ホンマは……ホンマは死にたくなんか……」
我慢できなくなって……頭を振り乱して……そうして、気付いた。
——立った姿勢のまま、こちらを真っ直ぐ見つめている、人形。
智子は一度、大きく鼻をすする。
「……なんやあ、あのプータロー、また商売道具忘れて行きおった」
——人形が、突然真横に向きを変える。
「……な!?」
これは、夢か——？
人形が、歩き出した。
それはひどくぎこちなく。
しかし、どこか楽しげに。
「……あ……は……動いとる……」

――そして、その動きがいつしか小走りになって……。

とてとてとてっ……、ぽてっ。

――途中で、転んだ

だが、何事も無かったかのように立ち上がり、再び歩き出す。

とてとてとてっ。

――そうしてまた小走りになり。

ぽてっ。

――また転んで。

とことことこ……。

――また立ち上がって。

「何や……どん臭い人形やな……それじゃあ……」

――は、はわわわわわわわわわわー！

――ハイ、俗に言うガス欠だそうです！

――私、歩くの好きなんですよ～。

――あう～っ、いい話ですぅ～～。

――夢は世界一のメイドロボです！

「それじゃあ……まるでマルチやないか……」
ぼろぼろと流れる涙で顔を汚しながら、智子は笑顔を浮かべていた。

「――いい夢は、見れたか」

智子が背にしていた木の後ろから、すっと往人は現れた。
「ああ……見れたで……」
「それなら……良かった」
「楽しい……夢やった……」
言い終わった瞬間に、激しくむせいだ。
「おい、大丈夫かっ」
心配して傍に寄った往人が、智子のことを抱え起こす。
……目に映ったのは、大量の喀血。
「な……生兵法は怪我の元言うけど……がふっ……まさか致命傷になる……なんてな……っ」
智子は往人に目をやると、往人の服を掴んで、掠れた声で言った。
「……あ……あとを……頼むで……」
「……分かった」
――ただ、それだけのやりとりで済んだ。

……この人形、まだ国崎が操っているのだろうか。
何故なら……人形はまだ動いていたから。
微かなる右手、それはまるで、バイバイと言っているようで――。
――そして、智子は眠りに落ちた。
永遠に目覚めることの無い、安らかな眠りに。
幕切れとしては、悪くなかったなぁ。
……なんて、最期くらいカッコつけてもええやろ。
――――な、晴香。

七十八番　保科智子　死亡

【残り36人】

416 PAST ENDING V　夜明け

——結局、機械は人間の道具に過ぎないのでしょうか。
——そうですね、最初はそうだったかもしれません。でもきっと、私たちの存在理由は、それだけじゃないはずです。
——それで、壊れてしまっても。
——できたら、人間の方にお役に立った上で、壊れたいですよね。
——お姉さん……。
——セリオさん、私たちは幸せ者です。だって、こんなに沢山の人間の方とお友達になれました。
——友……達……、でも私は……。
——隠してもダメですよーー。お姉さんには何でもお見通しです。
——そう……ですね。
——こんな結末にはなってしまいましたけど、私、他にも大切なものを一杯見つけました。身勝手な言い分かもしれませんが……私は幸せです。
——お姉……さん………。
——泣かないで下さいセリオさん、大丈夫、もうずっと一緒ですよ——。

目覚めた観鈴は、すぐに泣いた。
全てが終わったことを理解して、さらに泣いた。
それが、自分に出来る全てであるかのように……
ただひたすら、往人の胸で泣き叫んだ。
往人は、黙って観鈴の小さな体を抱いていた。

多すぎた。
あまりにも多すぎた。
涙を流す理由が多すぎた。
再会の喜びも、生き延びる苦しさも、別れの悲し

みも、全てが含まれていた。
往人は、慰めの言葉を持たなかった。
そしてようやく観鈴が泣き止んだとき、晴子も目を覚ました。
安らかに眠る智子を見て、
「何やぁ……、先に逝ってもうたんか……智子……」
晴子は泣かなかった。
ただ一言、寂しそうにそう言った。
寂しそうに……、とても寂しそうに……。
「うちがここにこうしておるっちゅうことは、智子かあんたが助けてくれたっちゅうことか？」
「二人ともだ」
少しして、晴子はそれを往人に聞いた。
「彼女があんたの名前を叫んでるのを聞きつけなければ、ここに来ることは無かった。……彼女のおかげだ」
「そうやったか……。ありがとうな、智子」
振り返った晴子は、智子に向かってそう言った。
それから数時間かけて、往人たちは死者の埋葬をした。
あさひの遺骸を運んできたとき、観鈴が
「ダメ、あの子も」
と言って、マルチの遺骸も持ってきたことに、往人は正直驚いていた。
晴子はそれを見て、にやりと笑っていた。
「——死に際に、人形劇を贈る日が来るとは思わなかった」
最後に智子を埋葬した後、ぼそっと往人は呟いた。
「結局、どれも助けることは出来なかったわけだが」
「そんなことないよ」
観鈴は往人に言った。
「往人さんの人形劇は、心をあったかくさせてくれるから……。だからきっと智子さんも安らかに眠っていられるんだよ」

「そうか……」
往人は言葉を濁した。
「せや。最期に安らかな気持ちのまま逝けたなら、十分助けになっとる」
晴子が口を挟んだ。
「人がたくさん死んでいく。無駄な死なんて一つも無いけど、せやけどその全てが弔われるわけでもない。この殺伐とした空間で、死に場所を用意して、あの子はうちらに看取ってもらえた。それは、無意味なんかやない」

——用意された未来を、否むために走る。
硝煙に消えた想いは、今を生きる彼ら彼女らに継がれていく。
始まりの終りは、終りの始まり。
過ぎ去った結末を映し出していた長い夜は、もう、終りを告げようとしていた——。

417　ぼくの戦争　——philosophy——

彰は慎重な足取りで壁伝いに階段を半分昇り、踊り場に立つ少し前まで辿り着く。多少不用意ではあったかも知れないが、他に上に行く方法も思いつかなかった。エレベーターを使うよりはマシだろう。
鞄の中から弾数の多い方のサブマシンガンを取り出し、拳銃を腰のベルトに挿す。サブマシンガンを二本構えて気配を探る、気配は無い、殆ど無いという方が正しいか、微かに感じるこれが先ほどの冷気の正体だろう。
踊り場に立つ。振り向いて階段の上を見る、サブマシンガンを持った男が見えた。ぱらららららららら、音色が彰の足下で鳴る。一発も当たらない、当てなかったの方が正しいと気づくのに一コンマ秒、これが威嚇射撃だと気づくのに一秒。
「あんたが侵入者か。顔は良く見えないが、ガキだ

な」
　髭の男が笑ってそう言う。ヘッドギアもかぶらず、余裕の表情を浮かべて笑う男に彰は震える、背筋に冷気、
「よくここまで来れたもんだが、ここまでだな、ガキ」
　やばい、直感と本能が告げる、恐怖で足がすくむ、ダメだ動け動け動け動けッ!!　動いた、逆側に身体を転がす、陰に隠れたところで十三段の階段を一気に飛び降りる。まともに戦ったら間違いなく殺される！　足から着地、鈍い痛み、足を捻ったかも、だが気にしていられない！　高い経験値を持った兵士と互角に戦うなど無茶だ！
　五階の渡り廊下に身を転がす、殆ど同じ刹那に響く雷鳴、雷鳴と紛うほどの轟き。同じサブマシンガンの放つ音とは思えない。違う、同じ音だ、自分がビビっているからデカい音に聞こえるだけだ、落ち着け落ち着け落ち着け落ち着けッ！　ぱらららららららららら、ぱららららららららららら、壁越しに伝わる弾丸の雨の音、彰は息を吸って耳を澄ます、雨の音に紛れて階段を降りてくる音が聞こえるか？　聞こえない、大丈夫、そう深追いはしてこない。自分だって武器を持っている。だが保証はあるか？　絶対に追ってこない保証はあるか？　経験の前には自分の耳などあてにならないだろう、自分の勘などあてにならないだろう？
　立ち上がる、彰は渡り廊下を駆ける、五階には誰もいないものとして進める、いたらその時点で仕舞いだ。この走る時間を考える時間にそのまま換算する、落ち着いて頭を走らせろ、経験に勝つためには思考が要る、想像力と創造力が必要だ。時間がそれほどあるわけでもない、大事に時間は使え。敵も追ってくるし、自分が特定されて爆発させられるのもそう遅くはない。
　自分が特定される前に爆弾管制システムを破壊し、

通信機のところへ向かう。これが七瀬彰の起こした戦争の目標である。自分の特定までに何分掛かるか判らなかったが、事実上それしかないのだから仕方がなかった。

よくよく考えてみれば杜撰な話なのである。爆弾自体に発信機をつけていれば特定は容易であるのだから。特定されればすぐにドカンだ。彰の戦争は完全敗北で終了する。

彰のその不安は、しかし二人目の兵士を殺した辺りで失せる。爆弾に発信機が備えられているのならば、自分が二人目を殺した頃には自分は破裂している筈だったからだ。侵入者など早めに叩くに越したことはないのだから。だが爆弾は爆発しなかった。発信機が直接爆弾に備わっているわけではないのか、或いはこの施設の中だと発信機が上手く作動しないのか、どちらなのかは定かではないが。よくよく考えれば本当にダメな計画だった。結果オーライだとは言え、自分もよくやる。

とにかく、自分はここまで来た。行き当たりばったりだが自分はここまで辿り着いた。この建物は七階＋屋上という構成でここは五階。そして恐らく、六階にいる兵士を殺せば主要な戦いは終わる筈だ。直感はそう告げている。さて、上の階に兵士は何人いる。一人でも勝てるかどうかわからないのに複数いるなど考えたくはないが、

「――事態は常に想像の斜め上を行く」

上を行くんだ。最悪の事態を考えろ。最悪の事態だ。自分がなすすべも無く爆破されると言うことは無い。もうない。だが自分が複数名の敵に穴だらけにされる結末はまだ残っている。複数名いる。そう考えろ。どうやってそいつらを殺す。どうやって――。

決まっている。

叔父達を殺すために持ってきた切り札。或いは、爆破管制装置を破壊する為に持ってきた切り札。

ここで使うしかないに決まっている。

叔父達は所詮素人に毛が生えた程度の筈だから、サブマシンガンで殺せないこともないだろう。爆破管制装置もなんとか破壊できるだろう。だが、修羅場を潜り抜けてきた複数の敏腕兵士を自分が殺せるか。無理だ。大体爆破管制装置は屋外にあるのだから、切り札が使えるわけがないのだ。あの切り札を使える場所は密室で風が弱いところだけなのだから。
決める。彰は立ち止まって左手に提げた鞄の中身を見る。ここまで重い重いと言いながら抱えてきた秘密兵器を、六階を突破する為に使う。後のことは後で考えろ！
――さて、何処で切り札を使う。上手く敵を誘き寄せて密室に詰め込まなければならない。出来ることなら、自分は敵を誘き寄せる為に戦いたくない。下手を打てば何も出来ず自分は死ぬだけだからだ。そのような条件が揃う場所だ。場所を考える。考え始めて一刹那で答えが出る。
決まっている。あそこだ。

顔を上げた彰は階段を駆け下りようと走り出すがその時銃声、拳銃の音、弾丸がヘッドギアを掠めて頭が揺れる。
「よう、少年」
先ほどの兵士とは違う大柄な男が上の踊り場に立っている。右手に拳銃、首からはサブマシンガンを提げていて、やっぱりヘッドギアはかぶっていない。その後ろには小柄な男。右手には果物ナイフ程度の刃渡りのナイフを何本か持ち、左手には巨大なサバイバルナイフを装備している。やはり首からはサブマシンガン。畜生、やはり複数かッ‼
「さあて、殺しあうかね」
彰は下を向くと飛び降りる、同時に拳銃の音、弾丸が飛ぶ、刹那の空白の後重い痛みが身体の一部を走る。正確な狙いだった。痛い。痛い痛い痛いッ‼
痛すぎて何処を撃たれたのかもわからない、神経を研ぎ澄まして感じる、足を撃たれたのだと理解。右足の爪先に巨大なダメージだ。一瞬止まった隙に

肩にも激痛。見る、小さなナイフが防弾チョッキの隙間を縫って刺さっている。乱暴に抜く、止まっていちゃダメだ、いい的になるだけだダメだダメだダメだ!!　走れるかと身体に問う、走れないと身体は言うが舐めたことを言うんじゃないと脳が叱咤、階段を駆け下りて四階まで一気に飛ぶ。畜生、なんて技量だッ!!　自分じゃ逆立ちしても勝てそうにない。やはり切り札だ、

　彰は四階の渡り廊下に転がるとそこに座り込む。敵の追撃はない。じわじわと殺るつもりか。息を吐く。見てろ、必ず殺してやる。お前らは邪魔なんだ。

　血の匂いがして眩暈がするが、痛みが眠るのを許さない。

「うん、なかなか面白い」

　六階——傭兵三人は楽しげに笑う。

「銃で撃たれた痛みを簡単に堪えられる素人なんてなかなかいないものな」

　髭の男が言うと、小柄な男は苦笑する。

「——まあ素人には違いない。早めに終わらせて寝よう」

「まあな。すぐにボロを出すだろう」

　大柄な男は溜息。自分たちのような訓練された傭兵の前で素人が出来ることは三つ。逃げるか、無謀な特攻をするか、奇策とも呼べぬ策を弄するか。自分たちの前でどんな策を用いようとも通じるわけがないのに。

　案の定だった。

　三人が立っている階段の傍にあるエレベーターが、三階から動き出している。先ほどまで一ミリも動いていなかったエレベーターが稼動し始めたのを見て、三人が三人とも退屈そうな溜息を吐く。この侵入者は、二番目か三番目の選択肢を選んだわけだ。奇策か特攻か。どちらにせよ、彼らには問題ではなかった。

「階段が危険だからって理由で、今まで使わなかっ

ったエレベーターに一縷の望みを託したってわけかね」
　大柄な男が言うのを聞きながら、髭面は「なんだ、つまんねえ」と、興醒めしたような顔で肩を竦める。小柄な男は欠伸までしている。
「油断するなよ。きっかり完全に完璧に一点の間違いも無く終わらせて、そしてゆっくり寝るんだ。スリルはあんまり味わえなかったが諦めよう」
　大柄な男はそう言う。そしてまるで今気づいたように肩を竦めて笑いながら、
「あー、エレベーターを動かしたのは囮で、あっちの階段使って昇ってくるかも知れんから。高野行っとけ」
「りょーかい」
　つまらなそうに、髭面の男は反対側の階段へと向かう。これで充分だろう。エレベーターの中にいなくても、高野が行った方の離れた階段の方を昇ってくればそれで終わり。このエレベーターは右寄りの階段のすぐ横に配置されているから、そっちの階段を昇ってきても蜂の巣。
　退屈な仕事だな、と笑いながら、二人はサブマシンガンを構える。スリルが味わえなかったのが残念だが、まあ、それは贅沢と言うものだったろうか。
　大柄な男と小柄な男、二人は並んでエレベーターのボタンを押す。あと数瞬後にはエレベーターの扉が開いて侵入者は蜂の巣だ。それで終わりだな、
　大柄な男の思考に違和感が走ったのが同じ瞬間。
　エレベーターを使って何をする。中で侵入者がサブマシンガンを構えて待っていたとしても自分たちは倒せる、階段を昇ってきても同じことだ。だが、あの素人は曲がりなりにもここまで侵入してきた強い男だ。強いだけではなく頭も悪くないだろう。その男が、このエレベーターを何に使う。棺桶代わりにする訳もない。このエレベーターの起動には何かの意味がある。――どんな奇策を用意した？
　不用意に過ぎなかったか、このボタンを押したの

は。
　時間が無く、考えることはもう出来なかった。五階から六階にエレベーターの表示が変わり、扉が開く。
「――これは、――ッ!!」
　二人の兵士が事態を理解するのに掛かる時間が三秒。そして三秒が経過する頃には、二人の脳髄は炭と化していた。

　彰は三階まで一旦降りて、エレベーターの中に入る。その手には三脚の椅子が握られている。この三脚の椅子が無くては彰がエレベーターの上に行くことは出来ないのだ。
　どう頑張っても階段を昇ることは出来ないだろう。あの自分の千倍は強いだろう兵士たち数人の作る弾丸の壁を自分が突破できるわけが無い。怪物のような運動性能も自分にはない。だとしたら、何処から上へ向かうか。

　一つしかなかった。エレベーターを使うのだ。
　エレベーターの中にいては勿論彰は蜂の巣にされるだろう。だが、エレベーターの上にいたらどうだろうか。エレベーター上にいる自分を発見し殲滅するには手間がかかるだろう。――だが勿論、それだけではダメだ。
　三脚の椅子をエレベーター内に置き、その上に立つ。手を伸ばして少しいじると板が外れ、エレベーターの上に繋がる穴が開く。身体を上手く捻れば登れるだろう。
　穴に顔を突っ込み、エレベーター上部がどのようになっているかを確認する。あるのは箱を吊るすワイヤーと非常用の梯子。恐らくこの梯子を伝っていけば屋上に行ける筈だ。彰は考える。いったん屋上まで出た後、爆弾管制装置を破壊する。破壊した後に下に降りて叔父や高槻を殺す。或いは通信装置を使って叔父達に話を聞く。こういう順番で行動を進めて行くことに決める。

一旦彰は椅子を降りると息を吸う。失敗したら死ぬ。この切り札は自分自身にも間違いなく被害を及ぼすし、もしもあの老獪な兵士たちが自分の企みを見切っていたら終いだ。だがこれしか手段が無い。手段が無いのだ。息を吸う。吐く。もう戻れない。

美咲とはるかの顔を思い出して彰は目を閉じる。

大丈夫。怖くない怖くない怖くない。死んだって大好きな人たちが天国で待っている。

覚悟を決めて、エレベーターの扉を閉じる。三階から六階に行くまでの間にすべての作業を終えなければならない。切り札と武器入りの鞄を天井の穴に放った後、自分も身体を捩って穴を潜り抜けて天井に上る。ランプの表示は四階。四階でエレベーターのボタンを押しておいたから少しは時間が稼げるだろう。闇の中鞄を開ける、切り札の入った袋を手に持つ、重い。この重さが自分の命を守ってくれることを信じて彰はここまでこいつを抱えてきたのだ。

彰は切り札——小麦粉入りの袋を開けて穴から撒く。

エレベーターの中は真っ白な空気に覆われる。この空間こそが自分の切り札なのだ。そしてその更に奥深くに置いておいた本——清涼院流水ジルシの本の一ページを破ると、ポケットからライターを取り出して火を点ける。そして扉が開こうとするその瞬間を見計らって、彰は梯子に手を掛けると、その火の燃え盛る紙を穴に放る。

ゆっくりと、ゆっくりと、燃える紙片が中に落ちる。

——粉塵爆発。これが彰の切り札だった。

可燃性の微小な粉末の飛び交った密閉された空間、充分な酸素、小さな火気。

その三つの条件を満たした時生じる爆発。

鉱山や工場などでよく起こった事故の原因に粉塵爆発が関与していた例は数知れない。それを彰は人

為的に起こそうとしたのだ。
　グッドラックと小さく祈って彰は目を瞑る。どうか自分に幸運あれ。幸運が自分の命と勇気の矢を守ってくれることを。成功したら、このトリックを教えてくれた自分の好きなあのミステリー作家を一生信望し続けると彰は誓う。
　勿論、成功だった。
　彰の目に二人の兵士が顔を青くした瞬間が映る。耳が潰れたと思った。耳が聞こえない人間に生まれたらこのような感覚になるのだろう、そう思った。眩い光が間近で炸裂し、太陽が爆発したのかとまで錯覚する。間近で起こった極大の爆音は彰の聴覚と視覚を完全に奪った。爆風が身を包んで、間違いなく自分は死んだのだと錯覚する。脳味噌が融けるその様子まで想像することが出来た。
　信じられないほどの爆音を立ててエレベーターははじけ飛ぶ。大きな火柱が立って、熱風が頬を撫でつけ、次の一秒後にはエレベーターだった箱がただの金属片となる。
　巨大な飛片が自分にも襲いかかる。大きな金属片が後頭部に激突、ヘッドギアにひびが入る。痛みと熱。熱が彰の身体を包む。蒸し焼きになるかと思う。飛び出てくる火炎が自らの足を灼く。やばいと思って必死に梯子を昇るが熱は消えない、熱い熱い、だが大丈夫大丈夫大丈夫、止まっている方が危ない!!
　彰は鞄を肩に抱えて梯子を登る。
　ワイヤーが千切れてエレベーターの残骸が落下する。
　梯子を登る。そして七階まで登って、やっと実感する。六階を突破したのだ。
　真下で爆風が世界を包んでいる様子を見て、怪我はしたが自分の企みはここまですべて上手く行ったのだ、と判った。ヘッドギアを脱ぎ捨てる。後頭部から血が流れているのを首元で感じる。やばいかもしれないが自分は生きている。足にも痛み。爆風で右足の半分くらいは吹っ飛んだかもしれない。それ

でも彰は梯子を登る。震えた手で梯子を掴みながら、一歩一歩段を登って行く。
梯子を登り切る。あるのは小さな扉。肘で押すとすぐに外れてそこから月光が降ってくる。鞄を投げ込み、彰は身体をよじって自分も外に出る。
爆弾管制装置が目に入る。パラボラアンテナの付いた大きな機械だ。それに手の届く距離にまで自分が到達できたことに小さく満足感。柵で封鎖されているが、サブマシンガン何丁かで破壊できるだろう。早く壊してしまおう。
鞄の中からサブマシンガンを取り出したそのとき、
「よくもまあ、ここまで派手にやってくれたな」
——そこに高槻が現れる。ここで高槻しか現れないと言うことは、やはりこの施設には叔父達はいなかったということか。
彰はゆっくりと振り返ると、小さく息を吐く。護衛はいない。機関銃を携えているから不必要と考えたのだろう。
機関銃の銃口を自分に向けたまま高槻は管制装置の前に回り込んで、にたあ、と嫌な笑みを彰に見せる。
月が眩い。
その為、自分がどんな表情をしているか想像もつかない。
「長瀬一族のガキが、大それた真似しやがって」
多分。
自分は今、ひどく面倒くさそうな顔をしている筈だった。
「機関銃で殺すのは簡単だがな。はは。せっかくだからお前には本当にショックで死ぬほどの恐怖を味わってもらおうか。お前の腹の爆弾を爆発させてやろう。死ぬほど怯えて死の瞬間を待たなくちゃいかん。爆発する瞬間まで恐怖に怯えていなくちゃいかんのだ」

そう言って高槻が懐から取り出した小型の装置を見て、
彰は本当に退屈そうな顔をする。
「七瀬彰君。君は今完全にオレに特定されていて、しかもここは屋外だ。この建物の内部にいたならば爆破することは難しかったが——ここなら簡単だ」
高槻はボタンを押す。
「ははははは！　お前が死ぬまであと何秒だあ!?　恐怖に怯えろ命を求めて懇願しろぉっ!!　死の瞬間まででこの高槻様に逆らったことを後悔して、」
馬鹿だな、こいつ。本当に最高責任者か？
「馬鹿か？　お前」
その何秒かの間に、
「はあ？　何を言っている、貴様、」
僕のサブマシンガンが火を吹かないと誰が決めた。
「死ね」
彰は躊躇わずサブマシンガンの引き金を引いて高槻の頭を粉々にする。悲鳴はタイプライターを叩く音に似た軽い音に簡単にかき消される。汚い顔が滅茶苦茶に歪んで、次の瞬間には高槻は崩れ落ちる。
この建物の中で一番手ごたえのない相手だった。
さあて、
彰は走る。後何秒。後何秒でこの爆弾は爆発する。
彰は爆弾管制の装置に向かって走る。サブマシンガンを乱射。装置を封鎖している柵に弾丸の雨を降らす。集中して撃ったからすぐに穴が開く。充分。自分の体内爆弾の爆発とサブマシンガンの乱射という攻撃できっとこの装置は破壊できる。そしてゲームは自分の人生と一緒に終わる。
「行くぞぉぉぉぉおッ!!」
叫ぶ。泣いていることに気づく。何が悲しいものか、自分は最後の最後まで勇気の矢を押し通すことが出来たのだ、思うのに涙が止まらない。涙が止まらない。怖いのだ。やっぱり自分は怖くてたまらないのだ。痛いのは嫌だし苦しいのも嫌だし死ぬのも嫌だ。自分は所詮矮小な一分子なのだから。

「うあああああああああああッ!!」
泣きながら叫ぶ。自分の喉から出たとは思えないほど大きな声で喚いて、天国の美咲さんやはるかのことを思って彰はサブマシンガンを捨て、自分の身体をその穴の中に投じようとしたその瞬間、

――先ほど死んだ高槻が大爆発を起こした。

彰は吹き飛ぶ。自分の足元で光と熱が発生して、熱風による強力な「押し」を感じたかと思うと彰は転がり、後頭部をコンクリートにぶつけてしまう。その刹那に混乱、どうして自分ではなく高槻が爆発したのだろう、

だが意識はそこまでしか考えることを許さない。
彰は痛みと疲労で目を閉じる。眩い世界が闇に落ちる。爆弾管制装置が吹き飛んだことを理解する間もなく彰は目を閉じる。

――杜若きよみを爆発させたときとはまるで破壊力が違う。そもそもきよみの爆弾とは違う種類の爆弾なのだ、高槻の身体に入っていた爆弾は。
七瀬彰の体内に入ることになっていた筈の爆弾が、このクローン高槻の体内に入っていた。神様がした悪戯にしてはあまりにおイタが過ぎる悪戯だった。
最後の最後まで彰は幸運に助けられたのだった。けれど。
七瀬彰というこの青年が成し遂げたことは、幸運の一言で終わらせるにはあまりにも重大すぎる事だった。

418　気まぐれ

「大したタマだよ、少年……」
男の声に彰は意識を取り戻した。
携帯していた銃器は、爆風に紛れて手の届かない場所へ。自身は仰向けに倒れていて、その腹に足を乗せられている。

おまけに相手は彰の心臓にねらいを付けた形で、サブマシンガンを構えているという状態だった。
　幾ら防弾チョッキの上からとはいえ、この至近距離では要をなさないかもしれない。
「本当に、やってくれるよ。お前のお陰で、俺の戦友が二人もあの世行きさ。しかし、こんなひ弱そうな奴が、こんなところにたった一人で乗り込んできて、しかも事をやり遂げちまうんだからなぁ。俺達は飯の食い上げだよ」
　そう言いながら、なにやら楽しそうに彰を見下ろす傭兵。
「それはまぁいい。しかし、何だってこんな真似ができる。何がお前にこんな事をさせるんだ？　俺はそいつが知りたい」
　彰は小さくせき込んで、そして呟いた。
「――強くなければ生きられない。優しくなければ生きていく資格がない……」
「へっ？　なんだよそりゃあ。ＣＭかなんかか？」

　唐突な彰の言葉に、傭兵――高野と呼ばれていた男だ――は軽く首を傾げた。
「違うよ。チャンドラーさ。フィリップ・マーロウの台詞だよ……」

――僕は何かをしたかったんだ。
　今までの僕はいつもなあなあで事を済ませて、それでも、自分の夢想するような展開が実際に起きることをどこかで期待してた。
　人に向ける優しさは自己愛の裏返しだった。他人に優しく振る舞うことで、その見返りに優しくされることを期待する……。そんな、強さとは無関係の生活を続けていた僕。
　でも、この島でまで、それを続けるわけにはいかなかった。
　先に死んでいった、美咲さん達のためにも生きている僕は何かをやらなければならなかった。
　状況に流されるのではなく、自分の意志で何かを

やれる強さを僕は欲しかった。
そう思ってここまでやってきた。そして、一つの目的を達成することができた。美咲さん、僕を褒めてくれるかい？
けど、ここまでだな。ここが僕の限界だったって訳だ。
僕は強くなれたのだろうか。
……そして。
美咲さん、もっとそばにいたかったよ。
また、あの頃みたいに一緒に過したかった。
ここで生を終えたなら、向こうでまた同じように過ごすことが、出来るだろうか……。

彰の思考はぐるぐると回った。
その中に現状打破をなせるアイディアは一つもなく、もはや彼は観念した様子だった。
傭兵もしばらくの間、彰の言葉の意味を考えていたようだったが、それにもどうやら飽きたらしかった。
「その台詞がなんだっていうんだ。お前はここで終わりだよ。ゲームに戻れといっても、今さら首を縦にも振るまい」
彰は曖昧な笑みを浮かべて……。
「じゃあ、素直にゲームに戻る、と言ったら？」
言い終えるや否や、体をひねりながら急に起こした。男の銃のねらいを外そうとする！
「信じるものかよ」
——僕はまだ死ねないっ！
そして一発の銃声が鳴り響いた。

銃口から発砲後の白い煙が薄く立ち上っていた。
しかし、銃弾に倒れた者は一人もいない。
高野の銃ははるか上空、月に向けられていた。
「……何故？」
彰は呆然として問う。
「何故、か。……気まぐれだよ。気まぐれ。おめぇ

みたいな素人がドコまでやるのかを見てみたくなった。そう、ほんの気まぐれだよ。俺はお前を発見できなかった。そういうこった。早く行っちまいな。俺の気が、変わらない内にな……」
「う、うう……」
爆発に巻き込まれたときにできた傷は思いのほか小さかったが、それまでの蓄積が彰を苛む。
——でも、大丈夫だ。まだまだいける……。それに、僕にはまだ……やらなきゃならないことが残ってる。行かなきゃならないんだ、僕は……。
自らを励まし、手近の武器を拾う。
「じゃあ、僕は行きます」
——つい先ほどまで殺し合っていたのにな
そんなことを思いながら、彰は一礼する。
「ああ、いっちまいな。さっさといっちまいな」
高野という名の傭兵は面倒くさげに片手を振って彰を送り出した。
「さーて、どうなる事やら……」

高野はポケットから煙草を取り出し、ゆっくりと火をつける。
そして、目を細めながら見送った。
屋上にぽっかりと口をあけた暗闇へ、建物内に続く扉の奥へ、彰がゆっくりと飲み込まれていくのを……。

419　さまよう心と体

うーん……気がついたら暗い森の中……
私、どうしてたんだろ……
そういえばお姉ちゃんが言ってた気がする。
私が夜な夜な夢遊病者みたいに山の神社に歩いて……って。
……ここ、どこなんだろ？
見覚えのない景色だった。

佳乃は、きょろきょろと視線を動かそうとしたが、そのときに自分の体に起こった異変に気づく。

……あれ？　体が……体が動かないよぉ～……これってもしかして金縛り？

だけど視線だけは自由に動かせた。まるで自分の体とは別に、別の自分の目があるみたいな……そんな感覚。

あうっ……なんか刺さってるっ！
……わたしの腕に……矢⁉
痛い！　痛いよぉ～。
……ってあれ？
…………痛くない。
まるで自分の体じゃないみたい。
……もしかして幽体離脱して別の体に入っちゃったとか？

だが、もう片方の無傷な右腕には黄色いバンダナが巻かれてた。そのバンダナは間違い無く、彼女が姉から貰った物だった。

これ――やっぱりわたしだ。
気がついたら腕に矢が刺さってて、体の自由がきかない……
うぬぬ、オカルトだよぉ～。
これは夢かな？
だって、こんなこと普通じゃありえないよ。
これは悪い夢なんだよ、きっと。
じゃあ、さっきまでなにしてたんだっけ？
それでようやく思い出した。
あの張り裂けるような悲しみを。
――お姉ちゃん……。
そういえばマナちゃん、きよみさんもいない。
どこに行っちゃったんだろう……。
もしかして、それも夢……だったのかな？

本当の私は自分の家のベッドでうなされてるだけで朝起きたら全部忘れちゃうのかも。
——だけど、この胸をしめつける痛みだけはとても夢には思えなくて。
あれこれ考えてる内にわたしの体が勝手に動き出した。もう一人の夢の中のわたし……かな？　なにをしようとしてるんだろう。
ブシュッ……
一瞬血が飛んで、矢が引き抜かれた。
わわわ、大変だよぉ、血が、血が……。
だが、思ったほどの出血はなかった。
先に鏃がついてない、太めの針のような矢だったため、傷口を傷つけることなく、すんなりと抜けた。
もし鏃がついていたら、この程度の怪我ではすまなかったであろう。
どうやら動脈は傷ついていないようだった。傷口からの出血はそれほど多くない。
今のもう一人のわたし、まるで腕のいいお医者さんみたい。
聖お姉ちゃんみたいでかっこいいよぉ。
夢の中の佳乃（わたし）はその後、その傷をバンダナで塞ごうと——。
——えっ!?
だ、だめぇっ！
そのバンダナだけははずしたらだめぇ！
夢の中の自分に向けて佳乃は叫んだ。
その声が届いたのか、夢の中の佳乃はバンダナを

はずす直前のところで動きを止めた。
つ、通じたのかな？
……たとえ夢でもバンダナをはずすのは嫌なんだよ。うう、本当は傷口に何か巻かなきゃまずいと思うんだけど……ごめんねわたし。
傷口をそのままにした佳乃の体は、森に向かって歩きだす。歩みに伴ってゆらゆらと揺れる視界。
……どこに行くんだろう？
でも、さっき引き抜いた矢……置いていったほうがいいと思うな。そんな風にもってたらまるで夜中にナイフ持って歩いてる危ない人みたいだよぉ～。
聞いてるの？　もう一人のわたし。
……あ……なんだろ……。
また意識が遠のいていく……。

佳乃は森を抜け、岩場に囲まれた場所を独りふらふらと歩く。
やがて見えてくるひとりの遺体。それは先程絶命した杜若きよみのものだった。
佳乃はうつろな瞳でそれを一瞥すると、別段何事もなかったように再び歩き出した。バンダナの巻かれた手には鏃のついていない矢を逆手にもって。
もう片方の傷ついた手で、元は聖のものであったバッグを握って。
傷の割にその出血はひどいものではない。
が、それでも腕から流れる血はバッグを少しずつ真紅に染めている。
本来であれば痛みでバッグなど持てる状態ではないのだが、佳乃はそれすらも感じていないように涼しい顔。
まるで人間としての大事な何かが欠落しているかのように。
「…………」

遠くの方で銃声が聞こえる。
その音に導かれるように突き進んだ。
まるで生きている誰かを探し求めるかのように。
まだわずかに血のついている矢が、血を欲しているかのように不気味に――光っていた。

420　廃棄処分

潜水艦の発令所に無線連絡が入る。
上空。長瀬一族から。
『オリジナル』高槻は、回線を開いた。
彼にとって、悪夢の通達であることも知らずに。
「はいはい、こちら高槻」
「あぁ、高槻か。君はさっきの放送でまた、無駄な介入をしたね？」
「あれですか？　だってあぁでもしないと、あのお人好し連中動かないでしょう？　結託して脱出試みられるのもマズいですし、現にさっきも襲撃が……」
「高槻、君は前の通告を覚えているかね。我々は『いかなることがあろうとも』無駄な介入を避けるように言った。我々の命令がきけんのなら、君はもう必要ない。ゲームに加わりたまえ、新たな参加者として、ね」
「……は？」
「君はいらない。そういうことだよ。今となっては言ってしまうが、参加者に脱出されようが、それは一向に構わないのだよ。その結末だって賭けの対象の一つなのだ。我々の権力を持ってすれば、『脱出後に口を封じる』ことも容易なのだから。それを君は、自己の保身や思考で動き過ぎた。駒としての立場を忘れてね。そんな君は、もういらないんだよ」
「……なっ！　俺は今までＦＡＲＧＯ代表として数々のゲームの管理者をやってきたじゃないか！　貴様ら、今さらそんな俺を捨てるのか？」
「言っただろう。使えない駒はいらない。劣化す

ぎたコピーにも限界が来ているようだしね。
君は自分が『オリジナル』だと信じていたようだが、君だってクローンなのだよ。
本物の高槻は、数回前のゲームで参加者に殺されている。『オリジナル』は本当に使える男だったのだが……残念だ」
「……そんな……馬鹿な……認めないぞっ、貴様ぁ！　俺は本物だっ！」
「それは君の妄想だ。わかったら出て行きたまえ」
発令所のドアが開く。
そこには銃を持った『一流の傭兵』が並んでいた。
「今、ここで死ぬか？　それとも、ゲームの参加者として生き残るか？　他の二体の『高槻』は既に野に放たれた。自分が連中と違うことを証明したければ、ここで死ぬのも悪くない」
「………っ！」
高槻は、プライドよりも僅かに残されている生きる可能性を選んだ。

ミナゴロシにして、生き残る。

「ゲーム参加者の諸君。私はこのゲームの主催者のひとりだ。あの高槻という使えない男は処分した。今では君たちと同じゲームの参加者の一人となっている。高槻が独断で行っていたルールの追加等は、その全てを撤回する。ジョーカーや体内爆弾によるゲームへの介入は今後一切行わない。我々は、君たちが『殺しあいをする』というゲームの前提を守る限り、一切の妨害を行わないと約束しよう。なお、この島の脱出を試みるのも構わないが、その場合は対抗措置を取らせてもらう。相応の覚悟を持って行うように。それではゲームも終盤だ。我々をタノシマセテクレタマエ――」

421　ぼくの戦争　――境界線――

足が痛む。右足の感覚がまるで残っていない。肩

や首や指先、色んなところがズタズタになっているが殊に足はひどい。足を動かすたびに神経がつぶれていくような感じで、どんな状態であるのかを見ることすら怖くて出来ない。もしこの目で実際に確認してしまい、そしてもしその足が真っ赤な色で染まっていて足の肉がはじけていたりしたならば、自分の緊張は弾け飛んでしまい、二度と立ち上がれなくなると思った。ひどい怪我をしているのなら早急に処置をしなければならないのだが、もう少しだけ。この施設を脱出するまでは現実からは逃げていた方がいいと思う。

足を引きずり、肩や首に走る重みに耐えながら階段を降りる。静かな階段にこつこつと無機質な響いて音が響いて、もうこの施設には誰もいないのかもしれない、と考える。

そんな中で、彰はひとつのことを思い出す。

「――そうだったな、通信機のところに行かなくちゃ」

足を引きずる。右足の指の感覚がまったくない。もう足の感覚神経は完全に潰れてしまったのではないかと思う。だがそれでもこうして動けるのなら充分か。こうして生きていられるだけ、僥倖なのだから。彰はぼろぼろの足を引きずり続け、通信機を探す。

この建物の中には叔父達はいなかった。だから通信機を見つけて、電波越しで叔父達を問い詰めなければならない。

七階の渡り廊下。

他の部屋とは完全に一線を画す雰囲気の、血の匂いが充満した部屋がある。ドア自体やドアノブが血で汚れ、向こうの壁には機関銃の銃痕も無数に刻まれている。位置的には建物の中心辺りであろうか。ここで何があったのだろう。彰はサブマシンガンを握り締め、慎重に部屋の中に入る。

――何者も潜んでいる筈がないことは、その血生

臭い静寂の中で本能的に悟っていたけれど。
兵士が二人死んでいた。傍には拳銃が落ちているが、しかしその拳銃は持ち主の護衛のために何の用も果たさなかったのだろう、銃身からひしゃげている。それればかりか、彼らの肉体までも、真っ赤な色に染められて有り得ない方向にひしゃげている。
——機関銃の弾丸によって。
吐き気すら催す様子に身震いしながら、彰は何があったのかを考える。勿論答えはすぐに出る。機関銃で撃たれている。自分以外に侵入者がいるわけがない。
「——高槻だろうな」
先程彼の周りに護衛がいなかったのはそういう理由からだったのか。彰は悟り、小さく溜息を吐く。自分の侵入と快進撃のために錯乱した彼は、自分の味方をも見境なく殺したのだ。彼らは錯乱する高槻を止めようとして返り討ちにあい、こうして物言わぬ死体となってしまったのだ。

気づく。この部屋は他の部屋と違う。やけに巨大なモニターが設置されているし、映画の中で見るような大仰な機械も設置されている。——この部屋が、通信用の部屋だったのか。高槻がいた訳だ、ここが通信管制の部屋であるのは当然のことだ。だが、
「これじゃダメ、か」
彰はぽりぽりと頭を掻く。
——それらは銃弾によって破壊され切っていて、とてもまともに働くようには見えなかった。
叔父達と連絡を取る事は出来なくなってしまった。それが一番の目的だったのだから、正直落胆したのは事実だ。
けれど、爆弾管制の施設は破壊したのだ。完膚なきまでに破壊したのだ。自分たちを縛っていた爆弾はもう何の用も足さない。
「——叔父さん」
きっと今頃、違うどこかにいる筈の叔父たちは異変に気づいている筈だ。高槻と通信が取れないこの

状況に戸惑わない訳がない。きっと今頃慌てふためいているはずだ、誰がこんなことをやったのだろう、と。
　昂ぶる。心臓の鼓動が高まって、何かを猛烈に叫びたい衝動に駆られる。達成感とは完全に色を違う、半透明の気持ちが彰に衝動を与える。叫び声が叔父達に届くわけがない。それでも魂が求める衝動を彰は止められない。
「僕がやった。全部僕がやった！　僕は、叔父さんたちがやろうとしてることを潰すためにと戦った！　僕はッ！
　──逃げないッ！
　必ず、このゲームを止めてやるんだッ!!」
　狭い部屋に響く。
　彰の勇気の矢はまだ尽きない。希望の弓はまだ折れない。
　爆弾管制の装置は破壊した。もう自分たちは殺しあわなくても死なない。次はここから脱出する番だ。
　彰の顔は──もう数時間前の臆病なままの子供ではなく、戦う人間の貌になっていた。
　部屋を出て階段をゆっくりと降りる。人間の気配はない。自分が完全に駆逐したのだ。自分が人を殺して駆逐したのだ。後悔は微塵もない。手を汚したことなどに震えはもうない。正しくはないかもしれないが、間違ったことをしたつもりもない。
　血がぽつぽつと身体の至るところから流れ落ち、廊下を赤く染めていく。脇腹には骨が折れたような痛みも感じる。早くこの建物を出て応急処置をしなければいけない。
　一階に降りて出ようとするが、建物は封鎖されていた。小さく溜息を吐くと、傍にあった廊下の窓をサブマシンガンの弾丸で破り、そこから彰は飛び出る。
　──見上げると月。

月光が彰を濡らしていく。なんて綺麗な空なのだろう。少しだけ涙が流れる。涙がこぼれる。止まらない。この涙はどうして流れるのだろう。自分は成し遂げたのだ。半ばで終わったとはいえ、爆弾管制の装置を破壊したのだ。なのに流れるのは歓喜の涙ではない。紛れもなく、悲しいから泣いているのだ。
――美咲さん、はるか。
たとえ、ここから逃げ出せたとしても、あの頃にはもう戻れないのだ。だから自分はこうして、無様に泣いているのだと思う。眩暈がした。失血のせいではない。絶対に違う。口から何やら空気が漏れる。それが呼吸音ではなく言葉であることが彰は判らない。自分でも何を呟いているのかわからない。やわらかな月が、彰の身体を白く染める。
ゆっくりとした足取りで森の中に入り、少し歩く。涙は流れっぱなしで、拭っても拭っても流れてくるので、もう拭うのをやめることにした。目を真っ赤にしながら彰は歩く。歩く。歩く。血がぽつぽつと落ちる。
――限界が来た。体力と精神の限界だった。適当な茂みを見つけると膝を突き、ゆっくりと彰は倒れ込んだ。誰にも見つからないような暗い暗いところで彰は眠りに落ちる。鞄と武器とを腕に抱き、彰は眠りに落ちていく。
それはとてもとても晴れた夜。
彰は結局この後流れた放送を聞き逃した。冬弥と由綺が死んだ事を彰は聞き逃した。自分が愛した日常が完全に消え失せたことも知らず彰は眠る。境界線を越えてしまったことも知らず、彰は眠る。

422 cross roads

静寂が支配していた街の中に、突然男の声が響き渡る。
「……!」

その声に気付いた来須川芹香が二階に駆け上がると、そこには放送に耳をそばだてていたスフィーと江藤結花がいた。
しかしその放送は、三人にとっては悲しい知らせでしかなかった。

放送が終わってからしばらくの間、誰も口を開こうとはしなかった。
誰もが自分の無力さに打ちひしがれ、何か物を言う気にもなれないまま、時間だけが過ぎていく。
小一時間経った頃、芹香がいつにも増して小さな声で口を開いた。
「……」
芹香の一言が、凍り付いていた空気を少しずつ溶かしていく。
「うん、でも……」
「……」
芹香は他の二人に、この先どうやって生き残るかを考えて行動しよう、と提案したのだった。
そして三人は今後の行動を話し合った。
しかし、結界を壊そうとする点では一致したものの、そのためにどうすればいいのか、具体的な話になると意見が合わない。
他に「力」を持つ人を捜そうとしても、赤の他人から「手伝ってほしい」と言われて、おいそれと従う人が残っているか？　それ以前に能力を持つ人がこの島にどれだけ残っているか？
「じゃあさ、このまま何もしないの？」
「……」
「何にしたって、やってみなくちゃわからないじゃない？　出来ないとか難しいとか、言ってるだけじゃ始まらないわよ」
「それはそうだけど……」
「そんな事言ってる場合じゃないでしょ」
少々強引ではあったが、これで長い話し合いはよ

うやく収束に向かった。
　最終的に導き出された結論は、スフィーと芹香でもう一度あの結界に挑むこと。
　万一力になれそうな人がいたなら、その力を借りることも一応念頭には置いていたが、まずは自分たちで出来ることをやろうと、結論を出した。

　そうと決まったからにはと、三人は出発の準備を始める。
　結花が台所から缶詰と缶切りを出し、芹香が家の中で使えそうな物を探している間に、スフィーは先に表に出た。
　その時、道の向こうから誰かが歩いてくるのが見えた。すぐさま物陰に隠れ、息を潜めて様子を窺う。やがて見えてきたその人は、どこかで見たような顔だった。
「あれは……なつみ？」
　先程の話し合いの中では、なつみの存在はすっぽり抜け落ちていたのだ。しかし、なつみの顔を見た途端、スフィーの頭の中にある考えが浮かんだ。
　なつみもグエンディーナの血を引く身で、自分たち程ではないけど「力」はある。もしかしたら……。
　その姿がはっきり見えるようになった頃、スフィーはなつみの前に出ていく。
「なつみ……だよね？」
「はい」
「今までどこにいたの？」
「向こうの方にある学校です。あっちでは色々ありましたけど」
「で、今はひとりなんだ」
「はい」
　とりとめのない会話が済んだ所で、いよいよ本題を切り出す。
「なつみに手伝ってほしい事があるんだけど、私たちと一緒に来てほしいんだ」
　なつみの表情が一瞬曇る。

「……ごめんなさい」
なつみの返答は、予想外のものだった。
「私、殺さなければいけない人がいるんです。健太郎さんを殺した、あの人を……」
なつみの口から出た名前に、スフィーも気色ばむ。
「だから、一緒に行く事はできません」
「……」
返す言葉もなかった。
「スフィーはどうなの？　健太郎さんが殺されて悔しくないの？」
「く、悔しいよ、もちろん。でも……」
揺れ動く心を押さえ込むように、自分自身に言い聞かせるように、スフィーはゆっくりとつぶやく。
「でも、もう戻れないんだ。私たちは、みんなが殺し合うのをやめさせるために、出来ることをやろうって決めたの。確かにけんたろやリアンがいなくなったのは悲しいけど、それがもっと大切なことだから」
「スフィー……」
張りつめていた空気が、ようやく緩み始める。
「力になれなくて、ごめん」
「いえ、なつみこそ私たちの分までがんばって」
「ところで、なつみはどんな武器持ってるの？」
「……持ってない」
「えっ、何も持ってないの？」
「……」
「ちょっと待ってて！」
スフィーはちょうど玄関にいた結花からトカレフを受け取ると、なつみに渡した。
「これ、持っていきなさい」
「ありが……とう」
なつみは受け取ったトカレフを鞄の中に押し込むと、黙って歩き出す。
「なつみ！」
その後ろ姿に向かってスフィーが叫んだ。

「また、逢えるよね」
その言葉に、なつみは一瞬振り返った。ちょっと頷いた様に見えた。
そして、そのまま闇の中へ歩いていった。

いつのまにか、スフィーの横には身支度を整えた結花と芹香が立っていた。スフィーから事の顛末を聞いて、結花は、
「なつみ、大丈夫かな」
「うん、大丈夫だよ」
「わかるの？」
「なつみの顔を見てたらわかった」
「……」
「そうだね。お互い無事でいられたらいいね」
「ところで、準備出来てないのはスフィーだけよ。ここで待ってるから、早く用意してきなさい」
「うん！」
二人を残し、スフィーは駆け足で家の中に入っていった。

423　約束

夜闇もすっかり深まって。
中天に月が浮かぶころ。
音もなく扉が開き、人影がするりと抜け出してくる。
立ち止まり、一度振り向く。
向き直り、三歩のところで静止。
月を見上げて、そのまま五秒。
そして、ためいき。

「……千鶴姉」
かけられた声に驚いて、人影は再び振り向く。
戸口に立つメイドさんに、抑えた驚きと共に一言。
「ダメ、かしら？」

鬼の記憶という、一族に与えられた呪いのようなそれを扱うには、千鶴は間違いなく不向きな存在だった。
それでも、やっぱり動かずにはいられない。梓は苦笑して、首をふりふり扉を出る。
「ダメに、決まってるじゃん」
さも呆れたように、肩を竦めて言い放つ。
そもそも耕一に顔も合わさず出て行くなんて、意地っ張りにも程がある。だいたいさ、と御小言のように繋げる。
「このカッコで一人でいるのって……恥ずかしいじゃない？」
お互い自分の制服姿を見合ってから、顔を上げ、視線を合わせる。ふふふ、と二人は声を忍ばせて笑った。
「……ちょっと待ちなさいよ」
またも戸口から声がかかる。二人はぴたりと笑いを収めて向き直る。
七瀬と、あゆが立っていた。
「忘れもん、よ」
七瀬はぽん、とあゆの背中を押す。
「うぐぅ」
拗ねたようによろけながら、あゆが出てくる。
「ボクも……ボクも行っても、いいかな？」
上目遣いに、遠慮して。小さな、小さな声で尋ねる。
七瀬は思う。あの二人は、強い。オバサンも、晴香のアホも強かったけど、二人はなんというか……
「人間離れ」して、強い。
だけど。いや、だからこそ、危うい。
消えた二人に気が付いたあゆが、布団を出ようか出まいか迷ってあたふたしているのを見たとき、七瀬は結論した。
(この娘が居れば、大丈夫)
何がどう「大丈夫」なのか、自分でもサッパリ解らないのだが、確信していた。

だから七瀬は続ける。
「あたしと怪我人と病人じゃ、自分達の事で精一杯だからさ。……この娘、お願いするわ」
「あゆちゃん……」
「あゆ……」
「……」
しばしの沈黙の後、千鶴がうん、と頷く。
「一緒に終わらせようって。約束、したもんね」
言いつつ梓の手を取る。
「寄り道するけど……長くなるかもしれないけど。それでも、いい？」
そして重ねた手を、あゆの方へ。
「うんっ！」
はっしと二人の手を掴むあゆ。
満面に笑みを浮かべて。
再び三人は手を重ねて。
そして夜闇に消えていった。
静かな静かな、夜のひととき。

七瀬は戸口に立って、ひとり考える。
——ねえ瑞佳？　これって、また貧乏くじ引いてるのかしら？
それでもやっぱり。
これでいい。そう思った。

「……怪我人くん、聞いたか？」
「……なんだ病人」
高熱や痛みに消耗し、ぐったりとしていた二人の男が会話する。
「なんか俺達、最高にカッコ悪いと思わないか？」
「ああ、最高だな」
「とりあえず今は動けない。だから仕方がない。でも、朝になったら治ってる。嘘でもなんでもいい、治っている。それで、いいな？」
「そりゃいい考えだな」
いいかどうかは解らないが、かなり無茶な取り決

めをする二人。
「よし。じゃあ今は寝る。起きたら男の意地を見せる。約束、だぞ」
「……おう」

これでいい。そう思わない者も、二名いた。

424　冷たいナイフ

何か予感めいたモノがあったのかも知れない。
眠っていた浩平は突然目を覚ました。周りを見回すと七瀬が散弾銃を抱え座ったまま眠っている。
見張りが寝てどうする、でも七瀬も疲れてるだろうから仕方ないか。
そう思いながらベッドから降りる。
勿論耕一も眠っている。
その時遠くで何かが聞こえた様な気がした。
これは……例の放送だ。
だがこの小屋の中ではよく聞こえない。
聞き逃すわけにはいかない。
幸い体の調子は幾分ましになっている。
外に出ればまだここの中にいるよりはよく聞こえるだろう。
少しふらつきながら戸口まで歩み寄り外に出る。
ここなら放送が聞こえる。
そして次々と挙げられる死者の名前。
「……十八番柏木楓……」
「!!」
これって初音ちゃんのお姉さんなのか……そんな……。
幸か不幸は他に知り合いの名前が読み上げられる事なく放送は終わった。
なんてこった、それに最後の『まだ一人も殺していないもの』に自分はともかく七瀬は……。
その時ロッジに近づく人影があった。

学校での攻防が終わり里村茜（四十三番）は辺りを彷徨っていた。
先程の戦いでも自分は甘さを見せてしまった。これでまた自分を付け狙う人が増えたのだ。
このままではいけない。いつか自分がやられてしまう。
このゲームが始まった頃のあの非情な自分はどこへ行ってしまったのだろうか……
やはり、あの百貨店で祐一と出会ってから全てがおかしくなってしまった。今のこんな状態で祐一や、詩子と出会ったら私は一体どうなるのだろう？
そんな事を考えていると例の放送が辺りに響いていた。
祐一や詩子の名前はまだない……
どこかでほっとしている自分に気が付いた。
私はこれから……。
その時前方にロッジらしきものが見えた。
近くに誰かいる。
それはクラスメートの折原浩平だった。
考え事で注意力が散漫になっていたらしい、向こうが先に気が付いたらしく、少しおぼつかない足取りでこちらに向かってくる。
「浩平……」
ある考えが頭をかすめる。
今の私に出来るでしょうか……
だが茜は自分で既に答えを出していた。
あの空き地へ戻るには答えはそれしかないのだと。
「茜、会えてよかった。ってお前大丈夫なのか」
浩平は茜に近づいて声をかけた。
「浩平……大丈夫です」
血塗れの自分の制服を見て浩平は少し驚いているらしい。浩平の方が自分よりよっぽど酷い怪我の状態だと思われるのに。
「どこか怪我は？　柚木は一緒じゃないのか？」
「はい。まだ会ってません」
「そうか……でもよかった。これでまだ会ってない

知り合いは繭と柚木だけだな。幸い二人とも今のところ無事らしいし、なんとか見つけて合流したいと思ってるんだけど」
「……繭？」
「知らないか？　一時期俺達の教室にいたんだけどな。ま、柚木と違ってちゃんとうちの学校の制服着てたしな……七瀬のだけど」
「七瀬さん……」
「あ、そうそう。今、俺は七瀬と一緒なんだ、他にも変態マッチョみたいなヤツも一緒だけどな。それに何人か信用できる知り合いが居るが、今は別行動取ってる」
「そうですか……」
　何故か浩平は自分の事を全面的に信用しているみたいだが、七瀬がいるとしたら状況は一変する。彼女は先程の学校で自分の素性を知っているハズだ。
「茜はどうするんだ、柚木を探すにしても俺達と一緒にいないか？　ともかく少しぐらいは休んでいけよ」
　浩平はロッジを指さして歩き出した。
「……大勢死にましたね」
　浩平の後ろを歩きつつ茜は質問には答えずそう言った。
「ん、ああそうだな」
「長森さんも」
「……長森……瑞佳だけじゃないさ。先輩達に澪に、俺の親友シュンや住井……それに広瀬も……大勢死にすぎたよ、瑞佳以外は看取ることも出来なかった。みんな苦しまずに死ねたんだろうか……」
　茜の決断の時は迫っていた。
「澪は苦しまずに死ねたと思います」
　茜は静かに続けた。
「だって私が殺したんですから」
「え？」
　次の瞬間振り返った浩平は腹部に生暖かい塊を押しつけられた様な衝撃を感じた。

「！」
どうして茜が？　ナイフ、血？　血が流れている？
「私はこのゲームに乗ることにしました……だから最初に会った澪を、自分でも吃驚するほど冷静に殺しました。私は生き残ってあの場所に戻ると誓ったのですから。それからも続けて何人か殺しました。私の決意は揺るぎませんでした。でも、ある人に偶然出会ってしまって私は、私は迷いました」
　茜は独り言の様にゆっくりと呟き続ける。
「このままでは私は今までみたいに人を殺せなくなってしまう。そんな予感がしました。今の自分があの澪を非情に殺した時とは違って甘くなっていると思いました。このままではいけない、このままでは私もいつか誰かに殺される。もう何人かに随分恨みを買いましたから。その人達はきっと私を許さないでしょう。だから私はもう一度非情になる事に決めました」
「いつもと違って随分饒舌じゃないか茜……人をあやめるならもっと深く刺さないといけないぜ……がっ」
　茜を抱きしめるようにもたれかかりながら浩平は口から血を吐いた。
「今浩平に会って、相変わらずの、でもこんな状況でもしっかりした浩平に出会って少し心が揺らぎました。だから賭をする事に決めました。ここで何の躊躇もなく貴方を刺せたなら私はまだ大丈夫、また非情になれると。これで覚悟を決めました。私はこれからも一人になるまで殺し続けます。もう、誰も私の望みを曇らせる事は出来ないんです。きっと今の私なら祐一や詩子も躊躇わずに殺せます」
「嘘だな茜……お前には無理だよ」
「そんな事ありません」
「だったら何でお前は今泣いてるんだ」
「……浩平はあの人には全然似てませんが祐一には少し似ていました。詩子にも似ている所が……だか

ら……だから……浩平を、貴方を殺すことで祐一の事も吹っ切れると……思いました」
倒れそうな浩平を抱きしめながら嗚咽混じりに茜は呟き続ける。
何故か涙が止まらない。
「さよなら浩平……」
さっきから誰だよ祐一って……そんな事を考えながら浩平は意識が暗い闇の底に落ちていくのを感じていた。
あそこはきっと永遠よりも遠い所だ。
だが茜をこのままにするわけにはいかない。
茜が誰かを殺すのも誰かに殺されるのも、いやもう、誰にも死んだり殺したりして欲しくなかった。
「茜、駄目だ……殺すのは……俺で最後にしてくれ、頼むよ」
「浩平……もう解っているんです。私はもう誰を失っても何も感じないって…」
茜、どうすれば、どうすれば茜の心を……

その時運悪くロッジから七瀬が出てきた。
「折原ー！　何処行ったのよ、ちゃんと寝てなきゃ駄目じゃな……！」
こちらに気づいた。
「ちょっと、あんた達！　何してんのよ！」
どうやら俺が誰かに抱きついていると思っている様だ。
散弾銃を振り回しながらこちらにやってくる。
そりゃこの状況はそう見えなくもないが……その散弾銃で俺に突っ込みを入れるつもりか？
いや今はそんな場合じゃないんだ。
「あんた、里村さん！　折原、そいつから早く離れて！」
だが七瀬は相手に気が付いた様だ、どういう事だ？　七瀬は茜が澪を、誰かを殺したのを知っていたのか？
だが、ここで二人を戦わせるわけにはいかない。
「逃げろ！　茜ッ！」

残った力で茜を突き飛ばす。
「行け！」
後ずさりながら呆然と自分を見つめる茜、だが直ぐに背を向けて駆け出した。
「待ちなさい！」
「待て、七瀬！　待ってくれ！」
「どうしてよ折原……！　あんたそれ！」
七瀬が俺の腹に刺さったままのナイフを見て青ざめる。
「嘘、嘘でしょ折原！」
そのまま倒れ込む俺に泣き顔の七瀬が駆け寄ってきた。

425　漢の約束

「……すまない七瀬、茜を許してやってくれよ……」
息も絶え絶えに俺は囁く。急激に体温が下がったように寒い。
「馬鹿、どうしてよ！」
「いいか……よく聞いてくれ、柚木詩子とそれから祐一ってヤツを探してくれ。そして、茜を頼むって伝えてくれよ、俺じゃどうも駄目みたいだ……どうにかして茜を止めてくれって……」
「どうして、どうして、あいつはあんたを殺そうとしたのよ！　さっきの学校でもいきなり発砲してきた、そんな危険なヤツなのよ！」
「頼むよ……本当はやさしいやつだから……それに七瀬と茜が殺し合いする所なんか見たくない……」
「どうして……普段は馬鹿でいたずらばっかりの迷惑野郎なのにっ！　どうしてこんな時だけ優しいのよ！　折原は優しすぎるのよ！　そんなだからあたし……あたし折原のこと……」
俺は七瀬の言葉を遮って続けた。
「それから繭の事も……頼むな、もう生き残ってる知り合いはお前だけだから……」

「イヤ、嫌よ！　折原死なないでよ！　あたしまた壊れちゃうよ！」
泣きながら叫ぶ七瀬、俺だって死ぬのは御免だ……でもやっぱり今度は流石に駄目みたいだ。
段々と意識が遠くなる。
まだだ、まだ死ねない、このままじゃ七瀬が……
俺はポケットを探ってあるモノを手にとって七瀬の前に差し出した。
「これ受け取ってくれよ」
「これ……瑞佳のリボン？」
瑞佳のしていた黄色いリボン。
「お前は生き残ってくれよ……七瀬」
「折原……折原ぁ」
「いいか……漢と漢の約束だぜ」
眠る前の耕一との約束を破っておいてよく平気でそんな事が言えたもんだと自分で呆れたが、そう言って精一杯の笑顔で七瀬を見た。
最後までお前に怒られてばっかりだったなぁ……

騒ぎに気が付いた耕一がロッジから出て見たものは、浩平の体を抱きしめ泣きじゃくる七瀬の姿だった。

十四番　折原浩平　死亡

【残り35人】

426　生きる理由

ようやくスネの痛みが首の痛みよりも感じられなくなった頃、祐介が口を開いた。
「これから……君はどうしたい？」
先程の放送、第六回目の放送――。
マナの大切な人達……由綺や冬弥の名前が挙げられていた。
（ああ、そうだったんだ……）
マナはなんとなく納得していた、二人の死に。
いろいろなことがありすぎた。

失ってしまったものは、もう多すぎた。
霧島聖、杜若きよみ、豹変した霧島佳乃……そして、大切な従姉と大好きな男性。
あまりに大きすぎる悲しみに、すでに涙も出なかった。
ただ、漠然とそう思った。
(藤井さんらしい……のかな……)
見たわけじゃない。だけど、二人の最期の姿がなんとなく脳裏に浮かんで。
――君は、強いね。
長瀬さんが言った言葉。
そんなんじゃない、ただ子供だっただけ。
藤井さんのこと、お姉ちゃんのこと、今まで分かってあげられなかったんだから。
(私は……最後までがんばるから。たとえ弱くても)
それがきよみさんや、藤井さんの願いだって思うから。
きっと、お姉ちゃんだって分かってくれる。
だって、私の大好きなお姉ちゃんなんだから。
「これから……君はどうしたい？」
放送のことはあえて聞かなかった、お互いに。
言いたくなったときに言えばいい。祐介はそう思う。
高槻の放送の後しばらくして主催者からの放送。
どういう経緯かは分からないが、高槻は任を解かれ、ゲームへと参加することになったらしい。
まあ、ようするに用済みとして捨てられたのだ。
恐らくは長瀬一族――祐介の叔父達に。
「僕達は……向こう側にいる叔父さんに会いに行こうと思ってる。真実を知る為に」
向こう側――高槻が消えたことにより、叔父はこちら側により近いところへと降りてきたのだろうか。
「……」
美汐はただ二人の会話を黙って聞いていた。
ややあって、マナの言葉。

「私も、敵を倒そうって思ってた。なんとかして脱出の方法を考えようって思ってた。あなた達に会う今の今まで、ずっとそう考えてた。だけど」
そこで一旦言葉を切る。
「私、あなたを助けて気付いたんだ。私は、何の為に生きようとしたのかって。そして、なんで今まで生きていられたんだろうって」
何の為に……その言葉に美汐も顔をあげる。
「大切な人の為とか、こんなゲームを考えた奴が憎いとか、ただ死ぬのが怖いだけとか……いろんな人がいると思う。だけど、私は……みんなを助けたいから、最後まで生きるの」
ちょうど長瀬さんを助けたみたいに、とマナが付け加えた。
「今まではずっと震えてただけ。こんな私、いつ死んだっておかしくなかったのに……でも、本当に命をかけて私を助けてくれた人達がいたの。だから今の私があるんだ」
聖の遺した救急箱を見つめる。
「私も……みんなを助けたい。私を助けてくれたあの人達と同じように。もちろん私も死ぬ気はないわ。私も生きていきたい。生き抜くことが霧島センセイ達への償いになると思うから。こんな思い……ヘン……かな？」
「いや、変じゃないよ」
祐介がマナの頭を軽く撫でてやった。今度は――蹴られなかった。
「だから、私、行くね。まだ大事な友達が……助けたい人がこの島にいるから」
「……気をつけて」
「……うん」
そうして、ここへ来たときのようなしっかりとした足取りで二人の前から去っていった。
「長瀬さん、私達は、何の為に生きるんでしょう……？」
「……」

美汐の言葉に、祐介は沈黙で返す。
守りたかった女の子達は、出会う前に死んでしまった。
瑠璃子も瑞穂も沙織も……もういない。
何の為に生きるのか、何の為に管理者を、叔父達を倒すのか。叔父が関わっていることからくる正義感や責任感からの行動、と言えば聞こえはいいが。
「最初に出会ったとき、言ってましたよね？『生きる為には、殺さなきゃならない。だから僕は、殺さなきゃいけないと思ったときには迷わず、殺すよ。苦しませずに』と」
「……」
「私は……もうどっちでもいいって思っていたんです」
「えっ？」
「……真琴がいなくなって、人が大勢死んで。心の何処かで、もう死んでもいいかと思ってました。長瀬さんと出会ってなければ、私はどうしていたんでしょうね。もう死んでいたかもしれませんし、ただ殺戮を繰り返しながら生きていたかもしれません」
「……」
「でも今は、生きようと思います。私は長瀬さんを信じます。今度こそ、最後まで……だから、生きようと思います」
そして、美汐の唇が、そっと祐介の頬にかすかに触れた。
「天野……さん……」
「私に……信じさせてくれますか？」
「……うん」
守りたかった女の子達は、出会う前に死んでしまった。
瑠璃子も瑞穂も沙織も……もういない。
だけど、今は美汐が横にいる。
「僕も……天野さんの為に」
祐介はただそれだけを言った。
何の為に生きるのか、何の為に戦うのか。そんな

細かいことはもうどこかへ飛んでいってしまった。
　最後まで共に生きる。もう、戦う理由はそれだけでいい。
　その終着駅がたとえ死だったとしても、絶対に後悔はしない。
　祐介は強く、そう心に思った。

　マナは元来た道を辿っていた。
　佳乃と、そして由綺の横にいたあの綺麗な女の人。あの場にいた二人の姿を思い浮かべながら。
　もし弥生に見つかったら、無事では済まないかもしれない。
　冬弥と由綺の結末はマナの知るところではなかったが、
（たぶん、私のせいで二人は……）
　マナと別れた後、冬弥が由綺と……そう思えるのだ。
　弥生は、もしかしたらマナを恨んでいるかもしれない。
　そして佳乃。確か左腕にはボウガンの矢が刺さっていたはずだ。はやく手当てしないと大変なことになるかもしれない。
（とりあえず……佳乃ちゃんに会おう。そして、もう一度……）
　本当なら三人で聖のところに行くはずだった。
　あの時何故佳乃があんな行動に出たのかは分からない。でも、出会った時に見た無邪気な笑顔が本当の佳乃なんだと信じたかった。
「佳乃ちゃん、置いて行ってごめんね……今行くから……！」
　きっと佳乃は元に戻ってくれる。マナはそう信じて疑わなかった。
　やがて、大切な人を失くした悲しい思い出の場所へと辿りついた。
　月明かりに照らされたきよみが綺麗だった場所。
　崖下へ吸い込まれていく彼女を、呆然と見ている

しかできなかった場所。
佳乃がマナに突き飛ばされて気絶していた場所。
「もうどこにもいない……どこに行っちゃったんだろう……」
そこにはもう……佳乃はいなかった。
ただ、佳乃が倒れていた辺りに小さな血痕だけが染み付いている。
――霧島センセイ、きよみさん、藤井さん……私……頑張るから――
マナはそれでも再び歩き出した。この島のどこかにいる佳乃を捜す為に。
先のことはまだ分からないけれど。由綺や冬弥達、大切な友人達を失って――もうこれ以上二度と失いたくない。
それだけのささやかな思いを強く胸に抱いて。

427　駆ける者たち

下卑た男の声。
――そしてまた死者の名前が島中に木霊した。
「(・∀・)…………また、だね」
「……ああ」
何度か繰り返した会話。
今回は幾人か、聞き覚えのある名があった。
その中に――
藤田浩之。確かあの少年は、そう名乗った。
(俺はさっさと帰りてーんだよ――あかり達と、一緒にな)
あの少年は、もういない。
探していた少女であろう者の名も共に聞こえた。
二人は、出会えたのだろうか。せめてそうである事を祈りたい。そう、例えば……この昼に、砂浜で想いを確かめていた男女のように。

そして、複製身のきよみの名があった。
犬飼によって哀しい生を送ることを余儀なくされた女だったが……せめて最後は、長く苦しまずに終わったと思いたい。
(･∀･)あの人……幸せだったのかな……)
月代は、以前彼女に教えられたことを思い出す。
自分達は、昨日亡くなった「あの人」の複製だと言っていた。
怒っていた。悲しそうだった。自分が偽者だということに。偽物としてしか扱われなかったことに。
そして月代に対しても。
(･∀･)多分、幸せじゃなくて……だから「同じ」はずの私が気楽に暮らしているのも許せなかったんだ)
でも、月代は思う。私も、彼女も、「あの人」とはやっぱり「同じ」ではないと。
――だから、月代は「月代」として、蝉丸と共に歩くのだ。そう、決めたのだ。

放送が聞こえた時、二人は、一人の遺体を埋め終えたところだった。
砧夕霧の遺体である。
食料となりそうなものを探して歩く途中で蝉丸が見つけたのだ。
彼女は、大振りの出刃包丁を固く握りしめたまま、こめかみを撃たれ息絶えていた。かなり大口径の銃によるものらしく、かつての愛らしい姿とは似ても似つかぬ姿に変わり果てていた――。
そして死後かなりの時間が経っている様子だった。おそらく、開始直後にこの異様な状況に錯乱し、銃を持つ何者かに攻撃を仕掛けて返り討ちに遭ったのだろう。
「(･∀･)また、アメフラシを一緒に探したかったな……」
「…………」
蝉丸は何も言わず、黙々と手早く彼女を埋葬した。
月代もそれを手伝う。

非情かもしれないが、彼らは生きているのであり、生き残る意志も義務もある。夕霧の他にも幾人かの遺体をみつけ、簡単に埋葬してきているが、自分達が生き残るために、死者に対して余り手間をかけるわけにはいかなかった。いつ誰が襲ってくるかしれたものではないし、また一刻も早く敵を倒し、この島から皆を解放することが、彼らに対しての何よりの手向けであるだろうから。

　月代などはだいぶ無理をしているようだが、まだ気はしっかりしている。どこにこれほどの気丈さがあったのかと、蝉丸は内心驚いていた。まるで――そう、きよみの意志の強さを、受け継いだかのようだ。

　夕霧の持っていた包丁は月代が持つことにした。武器としては非力でも、食材を手に入れた時などには役に立つだろう。

　しばしの黙祷ののち、二人はまた歩き始める。脱出するにせよ、とにかく、生きている誰かに会う必要がある。

　あの黒い少年と別れてから、土に残された足跡や車の轍などを辿って探しているのだが、どうも、出会うのは遺体ばかりという状況が続いていた。

　先ほどの放送に含まれていた言葉――次の放送までに一人も殺せなかった者は即座に爆弾を爆発させるというのが真実であるならば残された時間は少ない。

　――と、その時。

　何者かの駆ける音を、蝉丸の耳はとらえた。

「(・∀・)蝉丸、あっちの方……何か、動いてるよ！」

「分かっている」

　刀の鯉口を切り、事に備える。相手が何者だろうと、瞬時に対応できるように。

　天沢郁未は、走っていた。

　昨晩は葉子を捜すため一旦スタート地点まで戻り、そこで過ごした。大きく「Ⅲ」というローマ数字の

書かれたガラス張りの建物。ゲーム開始当初は、銃を構えたＦＡＲＧＯの信者らしき者達がいたのだが、郁未が辿り着いた時はもう誰もいなかった。
——おそらく、高槻のところに行ったのだ。そう考えて、足跡を辿ろうと努力してみた。……しかしなにぶん、素人である。あっさりと見失ってしまい、しかたなく、昨日は建物の近辺で食料を集めるのに費やしてそのまま一夜を明かした。
彼女のバッグがあればもう少し食料は保ったはずなのだが。
（まったく、あの子……）
彼女とあのキノコがどうなったのか、多少気にはなったが……まぁ、無いものは仕方ない。どんな効果があるかも分からないし、むしろ無い方が気は楽だ。
——もし柏木耕一がそこにいれば、「きっとおしとやかなお嬢様になれるぞ」とか、わけの分からないことを言ったかもしれない。

そして今朝になって改めて高槻や葉子、晴香、由依、そして、あの少年を捜すべく出発したのはいいが——その途中で、彼女は、見てしまった。

見知った、顔の。
顔のない、死体を。
担いで、歩く、一人の、女性を。

——水瀬、秋子。
彼女は、微笑んでいた。
晴れやかに、疲れも知らぬように、こちらに気付くこともなく、前を向いて歩いていた。彼女は——
そう、彼女は——
美しかった。
とても、美しかった——まるで、腐り落ちる寸前の柘榴のように紅く、血に染まり、微笑んで——
その貌を、一目見た瞬間、戦慄が走った。

もう「彼女」が……以前遭った時の「彼女」ではないと、分かってしまった。
(決着をつけましょう)
以前別れた時、彼女はそう言った。郁未もそう覚悟していた。
だが、だが、あれは……あれは、水瀬秋子ではない。郁未が約束した女性ではない。ましてや母の敵などではない。彼女は………。
踵を返す。間髪入れず走り出した。
追ってはこなかった。そもそも気付かれてすらいなかっただろう。今の彼女には、郁未など見えてはいないのだから。それでも郁未は全力で走った。藪などで手足に擦り傷ができるのもかまわず走りながら、思考がぐるぐると回る。
(何、なんなの、あれ……!)
(……私も……ああなっちゃうのかな?)
(そんなはずない。私は狂ったりしない)
(……本当に？　本当にそう言い切れるの!?)
怖い。
だが、心の中でそれを笑う私もいる。
(あなたはもう、それに溺れるほど弱くはないはずよ？　郁未。知っているでしょう？)
もう一人の私の、いや、私達の声。
そしてお母さんの声。
(私があこがれる冷淡な強さ。不可視の力を制御するための、強さ。それをあなたは持っている)
……そう。多分私の本性は、そうなのだ。だから……なおさら、怖い。私が壊れるとしたら——きっと、水瀬秋子を襲ったそれとは全く違う悪夢が、そこに顕れるだろうから。

藪を抜ける。
そこで一息ついて、郁未は気がついた。
彼女を見る二つの視線に。
がっしりとした肉体の男と、不思議なお面（？）をつけた少女が緊張した面持ちでこちらを見つめて

いた。
（とっぽそうだけど、わりといい男ね）
どんなときでも、男の値踏みは忘れない郁未であった。そして、男の隣にいる仮面の少女を見つめる。
（…………ぷ）
シュールなまでに滑稽なその姿に、先刻の恐怖が微かに消えていくような気がした。

互いに警戒しながらの、自己紹介が始まる。
事ここに至っては相手が殺戮者でない、との保証はどこにもないのだ。
例え「危害を加える気はない」と言ってみても、信用できるとは限らない。
まして、蝉丸にしてみれば、彼女の視線に殺人を厭わぬ強さを見て取ることができたし、郁未にしてみれば、刀を持ち研ぎ澄まされた気配を持つ男は充分に警戒に値した。
——怪しいお面をかぶった女の子の方はともかくとして。
「坂神……蝉丸さんと、月代さん、ね」
「天沢……確か、最初の放送の五人に入っていた名だな」
「ええ」
「……こちらの目的は、この島を出来るだけ多くの者が脱出できるよう信頼できる仲間を集めることだ。……そちらの目的は？」
「多分同じ……知り合いに会って、高槻を倒すこと」
葉子のことは詳しく言う必要はない。却って警戒されるだけだろうから。
「そうか」
多少、蝉丸の緊張が解ける。もっとも、隙らしい隙は全く見せようとはしない。
（かなり……こういうのに慣れてるのね。武術家か、自衛官とかかな？）
不可視の力が弱まっている今の状態で、敵に回し

たくはない相手だ。できるだけ、友好的な態度を崩さないよう意識する。
「……少し聞くが……こういう男を見ていないか？」
と、蝉丸が御堂の風体を説明する。
彼にはあの男の消息が分からないことが気にかかっていた。蝉丸が知る限りでは、参加者の中で最も恐ろしい相手の一人。「完全体」の蝉丸に対して敵愾心を持っているようだが、もし、かつて共に戦った時のように味方にできれば、頼もしいことこの上ない。敵に回ったとしたら――恐るべき脅威だ。
「……ごめんなさい。見ていないわ」
「そうか」
「じゃあこっちも聞きたいんだけど」
「なんだ？」
葉子や晴香、由依、そして少年について説明する。
「……という人達を見なかった？」
先ほどの放送では、葉子達はまだ名前を呼ばれていない。この島のどこかにいるはずだ。
「(･∀･)あ、その黒い服の男の人には会ったよ」
後ろから月代が声を上げる。
「！　……どこで？」
「彼は、君の仲間なのか？」
「……多分」
仲間と呼ぶには少々抵抗がある。信じ切れるかといえば、嘘になる。彼は決して善ではありえない。何しろ、悪魔なのだから。だが今の状況で彼が高槻に与するとは考えにくい。
葉子の事もある。彼ならば、何か知っているかもしれない。――もちろん、神ならぬ身にはこの後に訪れるそれを知る術はなかった。ここに、一つの終わりが始まりを告げることを。
「そうか」
そして蝉丸は、少年と会った時の事を話し始めた。武器のこと、仲間を集めること、そして――岩棚に隠された基地のことを。
「……そっちの方に、案内してもらえない？」

「む。……できるならば、もう少し武装や仲間を集めてからにしたい所だが」
「なら、場所を教えて。とりあえず私一人で行ってみるから」
「……無茶はするものではないぞ」
「分かってるわ」
「そうか」
　本当は、共に仲間を探してもらいたかったが、彼女の視線はどこまでも強く――。
　引き留めるのをためらわせるものがあった。
「武器の類は持っているか？」
「……いいえ」
　今郁未の手元にあるのは、水と食料、そして花火各種とバルサンだけであった。
　以前持っていた手斧は、あの戦いの後柄にヒビが入っていることに気づき、建物のところに置いてきてしまった。危なくていざという時に使えないからだ。
　尖った石を何個か持ち歩いてはいたが、武器としてはあまりにも心もとない。
　蝉丸は少年に貰った銃を差し出そうかと思ったが、複数の殺戮者たちを相手にする場合、刀だけでは圧倒的に不利になる。待ちかまえる危険が分からぬ以上、迂闊に銃を手放すわけにはいかなかった。
「(・∀・)じゃあ、これ持ってく？」
　月代が、夕霧の持っていた包丁を差し出す。
「いいの？」
「(・∀・)うん。私には、こっちの槍もあるし」
　月代にしてみれば、戦いになった場合、残って包丁で戦うよりも全力で逃げた方が、蝉丸の負担を減らすことになる、との考えもあった。
　白兵戦で戦うよりはむしろ、後ろで石を投げたり、人を呼んでくるなどして蝉丸を援護した方がまだマシだろう。
　自分は、蝉丸を助けねばならないのだ。足手まといになるような戦い方はすべきではない。とりあえ

ず何の経験もない彼女としては、自分が基本的に無力である事を自覚して行動するしかない。

「……じゃあ、受け取っておくわ」

　余り役に立つ武器とはいえないが、不可視の力と併用すれば扉の鍵などを壊すのには使えるかもしれない。郁未は包丁を受け取り、バッグの中に入れた。

「それじゃ私は行くけど……」

　ふと、気がついて振り返る。

「……あの向こうには行かない方がいいわ」

「何故だ？」

「恐ろしい人が、いるから。仲間を捜すなら、他を探した方がいいと思う。えーと、あっちの方向に結構行ったら、池があるんだけど……私としては信用できそうな人達が、その辺にいたわ。昨日のことだから、移動しちゃってるかもしれないけどね」

「？　……分かった」

　向こうに誰かいるというのか？　多少疑問は残るが、声に含まれる真剣さに、蝉丸は頷いた。

「では、気をつけてな」

「あなた達もね」

「(･∀･)うん」

　そして三人は別れる。

　もう郁未の背中が見えなくなったころ、月代が声をあげた。

「(･∀･)あ」

「なんだ？」

「(･∀･)またこのパソコンの使い方、聞き忘れたよぉ。知ってたかもしれないのに」

「……忘れていた」

　蝉丸はもちろん、野生児である月代もパソコンの使い方など知らない。一度いじろうとしたら変な青い画面が出て動かなくなったので、それ以来まともに触ってすらいない。今度誰かに出会ったら、聞くつもりだったのだが……。

「仕方がない。また、次の機会に訊くしかないだろう」

「(･∀･)そうだね」
二人はまた歩き出す。
次の、驚くべき内容の放送があったのはそれから
しばらく経ってのことだった。

428　高槻'S、……北へ。

「はぁはぁはぁ……」
——自分はこんなにも体力がなかっただろうか？
それとも、この島の気候ゆえだろうか？
高槻06はそう自問しながらここまで歩いてきた。
——くそう、この俺をコケにしやがって。
だが、俺をそのまま殺さなかったことを後悔させ
てやる。あそこにまでたどり着ければ、アレがある。
何かあったときの為にと用意してあった、アレがな。
アレさえあれば何とかなる。だから、なんとして
もそこまでたどり着かなければならない——
高槻は島の最北端にある、ソレを目指して歩いて
きた。
そしてそれは他の高槻、01と02も一緒だった。
奇妙なシンクロニシティーとでも言おうか。
高槻06がそこにたどり着いたとき、自分が道具だ
と思っていた、他の二人の高槻もそこにたどり着い
ていたのだった。
『おまえらもか！』
三人が同時に口を開く。
個体毎に多少の劣化があろうと、やはり同じ人間
同士である。
『ここの施設は俺が使う。お前らは別へ行け！』
同じ言葉を、三人が三人とも口にするのはある種
滑稽でもあった。
しかし、当の高槻達は真剣である。
——まてよ、このまま緊迫状態が続くと、自分同
士での闘いになって、共倒れになってしまう危険性
がある……。ここは一旦共闘の道を掲げようではな

いか。俺の利益につながる間は協力を続け、折を見て始末が必要なら始末すればいいのだ。
高槻らはそれぞれ、心の中でほくそ笑んだ。
『まぁ、そう気を荒立てるな……』
俺は優秀だ。
絶対に生き延びてやる。生き延びて、俺をコケにしやがった長瀬の奴らには、きっかり痛い目を見させてやるぜ……。

429 見ていた者

詩子はひとり歩く。
とくに目的はない。茜を探すといっても、何の手掛かりもないからだ。
ただ、森の中を歩いていた。やがて森は、人の手が入った赤松の防風林に切り替わり、遠い波音と潮風を感じると足元がさくり、と軽快な音を立てた。
海岸線に、出ていた。
拡がる視界に思わず息を大きく吸い、そして吐く。なんとなく幸せな気分になる。景観からくる開放感は、情況の打破には何の役にも立たないのだが。
包み込むように鳴り響く波の音、風の音を浴びながら。
(あ、もう何日身体洗ってないんだろ……)
そんな暢気なことを考えたりしていた。
浮遊した詩子の意識を引き戻すように、拡声器を通した無粋な声が響く。何度聞いても、いや連続して聞くと尚更嫌な放送だ。
だけど、今回の放送はいつもと異なっていた。あのにくったらしい声じゃなくて、しゃがれたおじいさんのような声。
その声は、自らのことを主催者と名乗った。
そして、高槻は――
(ゲームの参加者の一人、かぁ……)
ふうん、と心の中で呟く。高槻ってあの男は、も

ちろん好きになれないけれど。結局今の放送の連中のほうが悪い奴なんだ。
「なんか虚しいね」
などと海に語りかける。
そのとき、海が。
ざざあ、と返事をした。
『……それではゲームも終盤だ。我々を、タノシマセテクレタマエ――』
詩子は目を丸くして、放送の終盤はさっぱり聞いていなかった。
心を乱す放送のように、快適な揺らぎを伴う波音を荒らして、小型の揚陸艇が砂浜に取り付いていたのである。
慌てて松の木に隠れ、様子を窺う。もし位置を知られていても走れば逃げられるだろう、とタカをくくって様子を見ることにする。
そこから降り立つ影は――高槻だった。
大きな鞄を背負って、兵士のようなジャケットを着込んでいる。手には銃。なんか大きくて、プラスチックでできたみたいな変な銃を持って。
何か喚いて、一回だけ揚陸艇に蹴りをかまし、手元を見たあと、海岸沿いに北へ向かっていった。
(うわー、やばー……)
完全装備だ。あれに遭遇したら危険すぎる。
詩子は防風林を内側に抜けつつ、南に走った。

陰鬱な表情で、とぼとぼと少女が歩いていた。
家出はしたが頼りはなく、金もない。そんなお上りさんのような惨めな表情。少女は――初音は、制御できない意識に打ちのめされていた。
そんな中放送が流れる。
楓お姉ちゃんが、死んだ。結局一度も会えずに死んでしまった。最も近しい存在だった姉の死。悲しくて、そして怖い。でも、戻れない。
自分を助けてくれるであろう姉には、すがれない。

（そうだ……今、どうしてるかな……）
初音はぼんやりと、この島に来てからのことを考えていた。
耕一に会うまで、ずっと守っていてくれた青年の姿。抜け落ちていたかのように忘れていた、彰のことを思い出していた。彼の名は無かった。つまり生きている。
やけに遠く感じる記憶を胸に、下ばかり向いて。
ひとりぼっちで、歩く。
流れ流れて、行き着く先は。
——墓地だった。
さすがに中に入る気はしないので、外周を沿うように歩いてく。
そのとき、がこん、と。
自分の殻の中に閉じこもるように、外に注意を向けずにいた初音にさえ届く、重く、低い音が聞こえた。
（……隠し……通路？）
墓石がずれて、ぽっかりと口を開けていた。
初音は慌てて墓場を離れ、木立に身を潜める。
中から男が出てくる。高槻だった。手に拳銃を持ち、手榴弾を下げている。
「貴様ら見ていろよッ！　俺様をコケにした報いを受けるがいいッ！」
そう穴の中へと叫ぶやいなや、手榴弾のピンを抜き放り込む。
結果を待たずに、高槻は墓場の北口へと一目散に駆け去った。
どかん、と光と震動、そして炎が巻き上がる。遅れて天に昇る雨のように応射が帰ってくる。
まるで、戦争のようだった。
（彰……お兄ちゃん……）
墓地から発せられる光を、ぼんやり眺めながら、彰のことを考える。残されていた唯一の拠り所を求めて、初音は歩き出す。
前を向いて。

しっかりと。

はーぁあ、と。

詩子は先ほど海岸で漏らしたそれと、明らかに質の違う溜息を漏らしていた。森を抜け、坂を駆け上り、高台までたどり着いたところで、とうとうダウンしたのだ。

見晴台のベンチでごろりと寝転びながら、荒い息を整える。

石のベンチが、冷たくて気持ちいい。目を細めて、つるりとした感触に頬擦りする。

その細めた視界の中に。

小さく、炎が見えた。

林の向こう側、ぽっかりと開いた空間の中ほどに、炎がたっている。そこから離れるように、北へ走る人影がひとつ。

水辺近くの家屋に、男女一人ずつ。

視線を少し戻して、水辺の反対側に続く平原。

そこに——小柄な、亜麻色の髪の少女が見えた。

(茜⁉)

がば、と半身を起こして少女の姿を確認する。

茜だ。

安堵と共に視界に入った異物に自然と目が行く。

茜よりも更に遠くに、オートバイが停まっていた。

そこには色黒の男が——高槻が、立っていた。

(あれ？)

大げさなアクションで暴れている。たぶん、怒っているのだろう。オートバイにひと蹴り入れて倒すと、茜に先行するように北へと向かう。

(あれれ？)

まっしぐらに北へと向かうその歩みは、ちびちび歩く茜よりはるかに早い。気分を変えて立ち止まったり、反転しない限り茜と衝突はしないだろう。

けれど。

(なんか、変だよね？)

詩子はたっぷり常識の世界の中で思考を巡らせ、そこから一歩踏み出たところで結論が出た。
「高槻……が？　――二人ぃ!?」
それは、正解ではなかった認識だが。
そして茜は、全く驚かなかった事柄だが。
詩子は危機を感じて、再び駆け出していた。

430　女郎蜘蛛

暗い森の中、外からは見えないほど生い茂った藪の中、休む者ひとり。
篠塚弥生（四十七番）。
浅く眠る彼女の周りには四つほどの鈴が宙に浮かんでいた。
もちろん魔法でもなければ超常現象でもない。
それらはよほど気をつけなければ見ることができないような細い糸で吊るされていた。
正確ではないがこの森の一部分、直径約百メートルの円状に渡ってその糸での結界が張り巡らされていた。
弥生は蜘蛛のようにその真中に鎮座している。
少しでも糸に触れるとそれぞれ弥生のそばにある東西南北に位置する鈴が鳴るという仕組みである。
いわゆる簡易警報装置とでもいうべきか。
その糸は巧妙に草陰、木陰に隠されていた。ただでさえ暗い森の中、しかも真夜中である。
訓練された者であってもその仕掛けをかわすのは容易ではないだろう。
それでも、過信はできない。所詮は素人が急ごしらえした仕掛けに過ぎないのだから。
浅く眠りながらも周囲への警戒を怠らなかった。
言い換えれば、警戒していたからこそ浅くしか眠れなかった。
先の戦闘後、彼女は集落の民家からある程度使えそうな物を持ち出していた。
白紙のメモから筆記道具、カンパンなどの非常食、

ニードルガンや警棒、ナイフなどを効率的に装備できるチョッキやベルト、包帯などの簡易救急セット、果ては懐中電灯やランタンまで様々だ。
もちろん糸や鈴などもそれらの道具の一つだった。
風の音に弥生はゆっくりと目を開くと、手の中のメモに再び目を通す。
ポケットから取り出したメモはびっしりと文字で埋められていた。
人の名前。約三分の二の人間に赤い線が入れられている。
赤い線の本数は、そのまま犠牲になった人間の数を示していた。
弥生が床に就く前……——放送で十三人の犠牲者が出た。
それから既に十本の線を引いている。
「理奈さんも……いなくなったのですね」
これで弥生が知り得る人間は全滅したことになる。
先程まで入れられなかった三本の線。
本来であれば引きたくなかった線。
ゆっくりと、赤色の線が緒方理奈の名前の上に十一本目の線が引かれた。
アーティストから転向し、少しずつ腐りゆく芸能界に一石を投じた天才プロデューサー緒方英二も、
そしてその妹、トップアイドルの名を欲しいがままにしていた緒方理奈も。
そんな理奈のライバルにして弥生の最愛の女性、森川由綺も。
そして、藤井冬弥も……
もういない。
「本当なら、認めたくはないですね……こんな現実は」
赤色のマーカーが、残る二人の名前の上を行ったり来たりしていた。認めたくない、だけど確かな現実が、そのペンの下にあった。
それでも、ゆっくりと十二本目の線を由綺の上へと引いた。

少しだけ、線が震えた。

「藤井さん、あなたはどう思いますか？　今の私を……」

誰にでもなく呟く。

聞いて欲しかった人はもうここにいない。聞いて欲しかった人――それは由綺ではなく、冬弥。

弥生は少しだけおかしくなって自嘲気味に笑った。

「もう……今となってはどうでもいいことですけど」

由綺が愛していた人。由綺を愛していた人。

そして、弥生が最後まで愛することのなかった男性(ひと)。その名前にゆっくりと十三本目の赤い線が引かれる。

その名前の上に一滴の雫がこぼれ落ちて、うっすらと赤く滲んだ――。

睡眠から覚めても、結局ここに留まることにした。

線の引かれていない名前が残り三十八人……自分を除いて、あと三十七人の標的が残っている。

最もあの放送から随分と時間が経っている。何人かはもう脱落しているかもしれない。

――事実、弥生の知りえぬところで既にマルチ、智子、浩平の三人が死んでいるのだが、もちろん弥生がそれを知るはずはない。

銃器の残弾数もまだ充分に残ってはいるが、三十人相手に保つはずもない。それ以前に、戦って生き残れる保証などどこにもないのだから。

弥生以外にもゲームに乗っている人間は確実にいる。知らないところで人が死んでいるのが確かな証拠。無理に自分から動く必要はない。数が少なくなってから残った者を叩けばいいだけだ。

――張り巡らされた糸の結界に触れる者がいれば戦闘になるだろうが。できればそんな事態は避けたいものだ。

そう結論付け、弥生は体力の温存に努める。

弥生の脳裏にはこれまでの事、そしてこれからの

事が浮かんでいた。
(結局、高槻も哀れな駒だったわけですね)
戦場に新たなる標的として放たれることとなった高槻。恐らく高槻は誰かに殺されるだろう。
参加者であれば誰でも――殺意を覚えるはずだ。
だが弥生にとっての高槻は、もはや殺しに出向くだけの価値もなかった。それよりも、
(取引は全部無駄になりましたか……)
十人殺せば由綺と藤井を助けるという取引は、空手形になってしまったと考えるべきだろう。ジョーカーというものは高槻の独断だったに違いない。
(まあ、取引が有効だったところで、護りたかった二人はもう亡くなってしまいましたが……)
全ては虚しい。
今の弥生に残されているのは主催者への復讐だけだ。それは長瀬という男なのか、もっと別の組織なのか、今はわからない。
いずれにしても生き残ってからだ。その為に一番確実で最悪な手段を弥生は選ぶことにした。
無事に日常へと生還してからが、本当の戦いの始まりなのだから。
果たしてゲーム通りに一人生き残ったとして、敵が自分を生かして帰すのか……答えはＹＥＳ。
きちんとゲームの主旨に乗っ取って生き抜いたのであれば。
かつて喫茶店で出会った水瀬秋子が、前回の生き残りであると告げたことが弥生の背中を強く押した。
――あの喫茶店の面子は、娘の名雪も含め、秋子を除いてすべて死んでいる。
彼女だけ生き残ったのか、それとも秋子がゲーム通りに途中で殺したのかは分からないが、もし後者であれば弥生にとって大きな脅威になるだろう――
このゲームは過去何度も開かれていたらしい(気分の悪くなる話だ)。
秋子の言葉が本当ならば、ゲーム通りに一人生き残った場合は無事に帰されているらしい。

（秋子さんが嘘を言っていない保証はないんですけどね）

――あの時の秋子にそんな嘘をつくメリットはない、恐らくは事実だろうとは思えるが――

たとえその言葉が嘘であっても、そして別の平和的な解決方法が見つかったとしても……自ら望み、手を血で染めた彼女に後戻りの文字はない。

彼女が選んで進める道はもう殺るか殺られるかの二択だけしかない。

（できれば……罪のないはずの人を手にかけるのはあと一人にしたいものですね）

理想でいえばそうだ。弥生の預かり知らぬところで潰しあってくれれば越したことはない。

（それが……マナさんであれば……）

それもまた弥生の理想であった。

冬弥の決断、由綺が死んだ原因。

マナが冬弥に何を言ったかは分からない。

もしかしたら冬弥が自分で決めたことなのかもしれない。そして、遅かれ早かれ、冬弥は同じ決断を下していたのかもしれない。非日常の中に日常を見出して逃げ込んでしまった由綺の為に。

……だが、どちらにしても彼女との遭遇が引き金になったのだから。

弥生の中では間違いなく、哀れな高槻よりも憎い相手――彼女に罪はないだろうが、それでもだ。

（どの道、一人しか生き残れないのですから）

どの道罪のない参加者を手にかけるなら、マナを。

罪の意識よりも、もっと深い感情で弥生は唇をかみしめた。

再び煙草を浅く銜え、火をつける。

（今の私の姿は他の人からどんな風に映るんでしょうね）

恐らくはもうひどい姿に違いない。

適当に羽織った登山用のチョッキに、もう見る影もない（伝線というのも憚られる）ストッキング。

チョッキの下の服は既に汗と血と泥で薄汚れてい

る。
自分の血、数多くの他人の血を吸った服。
もちろん顔も、腕も……。
そして綺麗だったはずの髪も血と泥でパリパリに固まっていた。
服だけじゃない、細かな手傷も――幸い動くのに支障はないが――かなりの数に昇る。
特に顔は……失明こそしなかったが、表情もひどいものだろう。
冬弥や由綺が、何も言わずにそんな自分を受け入れてくれたのがどんなに嬉しかったことか。
チョッキに括り付けられたバタフライナイフと特殊警棒。腰のベルトにはニードルガン、背中にはボウガンを背負って。そんな姿で機関銃と鉄の爪を手に、闇の中で獲物を待ち構えている……
(こんな私を、誰が不気味じゃないと言えるでしょうか)
鏡がなくて幸いだったかもしれない。弥生はまた少し痛々しげに笑いながら煙草をもみ消した。
少しずつ夜明けが近づいている。
だが暗い闇の中、弥生が構えるこの場所まで、そして弥生の心にまで太陽の光が差すことは、もうない。

431　ぼくの戦争　――勇気の矢――

彰が目を覚ましたのは定時放送が半ば終わろうとしたその時のこと。耳鳴りと共に覚醒する。頭がくらりと重い。後頭部を撫でると血が固まっているのが判る。他に怪我をしていた部分を調べてみるが、血は大体止まっている。自然治癒の力は大したものだと思う。耳鳴りで放送がよく聞こえない。唾を飲み込んで耳に集中力を傾ける。
「以上十三人だ」
――聞き逃した。大した問題ではないのだが、友人たちの無事を確認することが出来なかったのは痛

い。だがまあ大丈夫だ。六時間後には確かめられるんだ。生きていてくれよ、冬弥、由綺。それに初音ちゃんもだ。
「これまでで最高の数だが、一人殺して死ぬ奴が多いせいで生き残っている奴にまだ誰一人殺してないのが――」
違和感。ノイズ混じりで明瞭には判らなかったが、
「高槻？」
これは高槻の声だと思う。先ほど自分が殺した筈の。どうして生きている。考える暇も与えず高槻は喋り続ける。
「よし！　こうしよう、次の放送までに一人も殺せなかった奴は即座に爆弾を爆発させる。あっ、俺の部下はいくら殺しても駄目だからな」
そんな妄言を高槻は吐いた。彰は呆然とする。何言ってんだこいつは。もう爆弾管制の装置は無い。爆発させようにも無理なのだ。
気づく。これは参加者を煽るための嘘だ。装置を破壊した当の本人である自分はともかく、何も知らない参加者はこの嘘に気づく筈が無い。怯えるだけならまだいいが、下手をしたら今の放送でやる気になる人間がいるかもしれない。今は死んだ筈の高槻が生きていることはどうでもいい。それより先にすることがある。
自分がするべきことは決まっている。参加者たちにもう戦う必要は無いのだと告げることだ。勿論自分ひとりですべての参加者に伝えることは無理がある。協力者が必要だ。藤井冬弥と森川由綺に会って協力を頼んだり、柏木初音とその保護者である柏木耕一に協力を頼んだりする必要がある。彰は考える。何処にいるか知れない冬弥と由綺を探すよりは、まず、さっき初音を預けた場所から動いていないかもしれない初音たちのところに行く方がいい。
彰は立ち上がる。右足に激痛が走る。まともに動いては右足が死ぬかもしれないと思う。だから彰は左足に重心をかける形で歩き出す。闇はまだ深い。

七瀬留美は思う。狂ってしまえたらどれほど幸せだろう。長森瑞佳が死んだ時のように狂乱めいて狂ってしまえたら、この世界も少しはマシに見えるかもしれない。

けれど、狂おうとして狂う事が出来るほどヒトは器用ではない。七瀬もそれは同様だ。七瀬は燃えるような悲しみの火山の真ん中で佇んでいるようで、凍るような絶望の海の中に沈んでいるような、そんな矛盾した錯覚を同時に感じている。心の奥底に冷静になろうとする理性がいる。

大切なヒトを失った苦しみに理性が耐える。一度狂って抵抗力が付いた精神はこの苦しみにも堪えてしまうだろう。それが悲しすぎて、七瀬は死にたくなった。

目を閉じる。溜まっていた涙が流れる。嗚咽までが漏れて、自分はいつからこんなに弱くなってしまったのだろうと思う。

「――ひぐっ」

鼻を啜る。人に見られたら死にたくなるような無様な顔をして、七瀬は哭いている。

柏木耕一はそんな七瀬を見ながら居た堪れない気持ちになっている。自分が眠っていた間に、大切な人をまた一人失った彼女を慰める術を耕一は持たなかった。

初音もいなくなった。七瀬の腕を振り払い、一人で闇の海の中に沈んでいってしまったのだと云う。

自分は無力だ、と耕一は思う。

「――畜生」

すぐ傍の七瀬にも聞こえない小さな声で耕一は自嘲する。折原浩平と交わした言葉。短い時間しか共有していないけれど、同じ志を持った――「守るもの」のために戦おうとした仲間。その彼は無残に殺されて、その間自分は気づきもせず眠り呆けていた。間抜けさ加減に反吐が出る。

耕一は七瀬の傍らに座ることも、慰めることも出

来ず、呆然と立っている。最初に出会ったときのように彼女が狂ってしまうことも考えられるのに――自分には何も出来ない。不甲斐なかった。

何かを為そうと、浩平と語った数時間前のことを思い出す。夜が明けたら、この島から脱出する為に何かを為そう。そうふたりで決めていた。

耕一は思う。何かを為さなければならない。ここで不甲斐なさに震えているだけでいいのは子供だけだ。

音がした。木の葉ががさがさと揺れて風が乱れる。七瀬は涙で濡れた顔で、耕一ははっとした顔で振り向く、

「誰だッ!!」

耕一は傍らの中華キャノンを手に取る。七瀬は少し後ずさりして拳を握り締める。ほんの少しの間を空けて、転ぶように誰かが茂みを抜けてくる。殆ど転んでいるような体勢で、青年――七瀬彰が現れる。

「良かった、まだいたっ!!」

安堵の溜息を吐く。右手にはサブマシンガン、ベルトには拳銃。顔は血だらけで全身は怪我だらけ。火傷もところどころに背負っている。右足の甲が吹き飛んでいて歩くのも難儀そうだ。最初に会った時からは想像も付かないような凄惨な姿をしている七瀬彰は、しかしこの瞬間だけは笑顔でそう言った。

「あ、あんた誰よっ!?」

拳を握りしめ、七瀬は大声を張り上げた。そういえば七瀬留美はまだこの青年と会っていなかった。苗字が同じだな、と耕一は思ったが、どうやら直接の関係は無いようである。七瀬留美の声を無視して七瀬彰は言う、

「ちょっとあなたたちに手伝って欲しいことがあるんです、初音ちゃんと耕一さんと、あとそこの女の子にも出来たら手伝って欲しいんですけど、

――あれ？」

耕一は顔をしかめる。彰はどうやら、すぐに気づ

いたようだった。この場に初音がいないこと。そして、七瀬留美の後ろに折原浩平の死体があること。
彰の顔は蒼白になる。
「初音ちゃんは――」
誤解をしているかもしれない。耕一が弁解しようとしたその瞬間、彰は耕一に飛びかかる。自分より二十センチ近くは低い身長の七瀬彰が、今自分の胸倉を掴んでいる。
「くそッ!! あんたに信頼して預けたんだぞッ!! 初音ちゃんはあんたのことをすごく信頼していたからッ!!」
彰は叫ぶ。耕一の顔を自分の顔の高さまで引っ張って叫ぶ。唾を飛ばして、雷のように大きな声で叫ぶ、
「僕はこの戦いを終わらせる為に、初音ちゃんみたいな小さな子が絶対死なないで済むように戦ってきた！ それなのに何であんたは初音ちゃんを守れなかったんだ!! あんな小さな子をどうして殺させたッ!!」
彰の形相に脅えていた七瀬留美は、しかしやっと我を取り戻して耕一を擁護する、
「や、やめなさいよッ!!」
だが彰は怒号で返す、
「黙ってろッ!!」
さっきまで泣いていたことも忘れて、留美は頭に昇ってきた熱をそのまま言葉にする、
「黙らないわよッ!! 初音ちゃんがいないのはあたしのせいなのよっ！ 話を聞きなさいよッ!!」
事情を説明すると、彰はゆっくりと耕一の胸倉から手を放す。どうしようもなくなった感のある疲れきった顔で、七瀬彰は座り込む。
「――畜生」
涙まで零して彰は叫ぶ。畜生、ちくしょう、ちくしょう、ちくしょうちくしょうちくしょう。真っ赤に染まった服と真っ赤に染まった頬、そして真っ赤

に染まっていく目を見て、耕一は死にたくなる。実感する。自分は初音を守ることが出来なかったのだ。身体の不調など言い訳にもならない。自分は完璧に、完膚なきまでに無力だった。
七瀬留美も力が抜ける。あんただけがつらいんじゃないのよ、耕一さんだってつらいんだから。そう叫びたかった。だが、この言葉に何の意味もないことを今の七瀬は知っている。自分だけがつらいんじゃないのだとしても、自分がつらいことには何ら変わりは無いのだから。

「あの——放送で初音ちゃんの名前は呼ばれてないんですよね？」
彰は目を袖で拭いながら、丁寧な口調でそう言う。暴言を吐いたことを悔いたような顔だった。耕一は申し訳なさそうに、自分たちも放送を聞き逃したのだということを告げる。
「——そうですか。それなら、」

彰は立ち上がる。足の甲も無くて、立ち上がることすら億劫な筈のくせに、身体に鞭を入れて彰は立ち上がり、やってきた方向とは逆の方向へと足を引きずっていく。
「おい、」
「初音ちゃんはきっと生きてる。耕一さんやお姉さんたち、そこの——七瀬さんでしたか、とにかく、みんなのことを思って一人で寂しい思いをしてるに決まってる」
「彰くん、」
「僕は、初音ちゃんを捜しに行く」
耕一ははっとした顔で、そう言う彰の横顔を見る。赤に彩られた顔の真ん中にある双眸は、決意と勇気に満ちている。足を引きずる彰はゆっくりと振り返り、
「耕一さん。守りたいものがあるなら、動かなくちゃ、いけないんだ。動かないで、黙って座っていても、何も、守れは、しないんだ。苦しくても、動か

なくちゃ。動かなくちゃ、だめなんだ。誰かを守る為にならら、日常を守る為にならら、自身のことなんて、忘れてしまうべきなんだ」
　乱れた呼吸でそう言う彰の声に、柏木耕一ははっとする。その顔に、自分が見失いかけていた何かを見つけたような、そんな気持ちになるのだ。
「――さっき言ってた手伝って欲しいことっていうのは、この殺し合いに参加している人たちにもう戦わなくていいんだと伝えて欲しい、ってことなんです。体内爆弾はもう作動しないんです。もし誰か、やる気になっている人を見かけたら、そう伝えてあげてください」
　もう作動しない。それは、作動させる装置か何かを破壊したということだろうか。彼が今こうして負っている傷はその時に負ったものなのだろうか。七瀬留美と柏木耕一には、青年の眼差しがひどく気高いものに思えた。
　彰は微笑む、微笑んで言う、
「きつい事、言いましたけど――生きて、帰りましょう。例えこれまでの日常は壊れてしまったとしても、それでも、生きていれば日常に戻れる筈だから。犠牲になった人たちの為にも、僕たちはそうしなきゃダメなんです」
　彰は夜の闇の中に身を投じていく。二人はそれを見送る。

　七瀬留美は思う。
　自分を生かしてくれた長森瑞佳と折原浩平のこと。ずっと一緒にいて、狂いそうになる血の匂いをごまかし続けてくれたふたりのこと。ふたりのおかげで、今自分はこうして生きているのだと思う。
　ならば、自分は泣いているだけではいけない。何処かで泣いているかもしれない繭のこと、浩平を殺して狂気に酔っているかもしれない茜のこと。繭を守り、茜を止める。それが浩平と瑞佳の遺志だ。
　弱さは隠せない。ふたりのことを思い出せば自分

は必ず泣いてしまうだろう。けれど、弱さを凌駕する勇気を持って、この戦いを終わらせる。
　立ち止まっていてはいけないのだ。勇気をこの手に、歩き出さなければダメなのだ。

　柏木耕一は目を閉じる。
　まだ何も失われていない筈だ。先の放送は聞き逃したが、まだ千鶴さんも梓も楓も初音ちゃんも生きているに決まっている。決まっているのだ。
　身体はまだ完全ではない。だからなんだ。完全でなければ四人の女の子を守れないほどに自分は脆弱か。そんな訳があるか。柏木耕一はそんなに弱い人間には出来ていない。
　まだ自分には取り返しが付く筈だ。大切な人を失った七瀬よりもまだ自分は恵まれている。走って、走って、大切なものを守りきれ。
　目を開く。広がるは闇。闇の中に足を踏み入れろ。このでかい図体は大切なものを守る為にある。この手に希望を抱いて、歩き出すのだ。
「行こう」
　殆ど同時に二人は言う。——立ち止まってはいられない。

432　そして、残光。

「それじゃあ、行こう」
　耕一は立ち上がる。荷物を肩に背負い、小さく歯を食いしばり、まっすぐな目をして立ち上がる。疲れが完全に消えた訳ではない。だがそれでもこの程度の疲労で疲れた、と言い張って休み続けるわけにはいかない。
　七瀬彰というあの青年が初音を探すというのならば、自分は初音たちの危険を脅かす殺人鬼を止めるために動こう。
　——それが、今俺がやるべきことだ。

誰に言うわけでもない。自分自身に言い聞かせるためにそう言う。耕一はそのままゆっくりと歩き出し、どちらに行こうか七瀬に尋ねようとして、七瀬がまだ座り込んだままであることに気づく。
その目は決意の色で染まっている。
その決意の目の見ているのは——少しだけ離れたところで眠ったように死んでいる折原浩平の姿だった。
「少しだけ待って、耕一さん」
泣き顔で七瀬は言った。何も知らない人間が見れば笑顔にしか見えない、悲壮な泣き顔だった。耕一は何も言えず、七瀬の泣き顔を見つめていることしか出来ない。

七瀬は折原浩平を殺したナイフを手に持っている。
これが自分のいとしいひとを殺した。このナイフがなければ自分はずっと折原と一緒にいられたかもしれない。憎い。憎い。憎くて憎くて憎くて、憎悪で心がおかしくなってしまいそうだった。いっそこのナイフで自分の喉笛を突いてしまえば楽になれるかもしれない。憎悪に汚れたままでは折原の傍に行けるかはわからないけれど、それでもまだマシかもしれない。苦しみしかないこのゲームの中にいるよりは、幾分かは。
——けれど。
七瀬は自分の髪を束ねていた大きなリボンに手を掛ける。ボロボロになったリボンはあっさりと外れ、長い髪がぱさり、と微かな音を立てて肩に流れる。長い戦いの中で手入れをされることもなく痛み切っている髪がざわめく。
こんな髪だけど、勘弁だよ。

左手でまとめた髪を、浩平を殺したナイフで切る。
そして同じように、反対側のリボンも外して切る。
自慢だったお下げは、柔らかな触感と共に七瀬の手の中に落ちた。束になった長い髪を持ち、浩平の

傍らに寄る。
　これは浩平との思い出の髪だ。浩平が悪戯ばかりした髪だ。授業中やなんやにいつも悪戯ばかりしてきた浩平の事が、実際のところ、七瀬からしてもまんざらでは無かった。折原が自分の髪に悪戯をするのは、彼がそれなりに自分の髪のことが好きだったからじゃないか、と七瀬は思うのだ。勝手な思い込みだけど、あながち外れてはいないんじゃないか、と七瀬は思うのだ。
　勝手に思ってしまうのだ。
　折原浩平は、もしかしたら、七瀬留美が折原浩平のことを好きだったのを知らないかもしれない。あの男はすごく鈍感で、バカで、トウヘンボクだったから。だけど、それでもよかった。それでもよかったんだ。
　七瀬は呟く、
　――あたしが、あんたを好きだったんだから。
　七瀬は浩平の傍らに自分の髪を添える。
「行ってくるよ、折原」
　最後にもう一度だけ七瀬は微笑む。折原浩平の冷たくなった手を握り締めながら微笑む。涙は落ちない。落としてはいけないと思う。最後は笑顔で、笑顔で、――笑顔で。
　七瀬のこころの雫が光になって、眩い朝陽にとけてゆく。

433　こころの在り方

　少しばかり退いた夜が、半端な明るさを現そうとしているころ。
　早起きの鳥たちがチチチ、と挨拶を始めるなかで、祐一は暗く、無言のままだった。
　今回の放送で判明した死者は、実に多かった。中

でも堪えたのは、その中に名雪がいたことだ。
自分を助けようとして、罪を犯した名雪。
受け入れてやる事のできなかった自分が、今では情けない。狂おしいばかりに慟哭する秋子さんの姿が目に浮かぶようだ。
もはや残る知り合いは、あまりにも少ない。
詩子は、あの少年と一緒に無事でいるだろうか？
あゆは、どうしてるだろう？
そして――茜は、今何処に？
ぼんやりと歩く祐一の足音に反応して、白鳩がはばたいていく。慌てて飛び去ったためか、ひらりと羽根をこぼして消える。
何気なく羽根を拾い、手の平に置いてみる。
なんとなく、あゆの事を思い出したりしていた。
（意識の散漫さは、自らの崩壊に対する防御反応かしら？　自閉に陥るほどではないようだけど、不安定さが露呈している。危険な兆候だわ）

繭が放送以来、声を掛けることもなく黙々と追従していたのは、そうした洞察のためである。
どんな事情があったのかは解らない。唯一解るのは、今は静かに見守る事しかできないという事だ。
鋭利に物事を捉え、正確に話すことができる今の自分が、こんな時あまりに無力なのが悔しくてならなかった。
こころの在り方は、現代科学さえ征服できぬ、霊峰なのだ。
羽根を手に、やさしい目をして立ち止まった祐一を窺う。
白い、羽根。
動物という、言葉をもたぬ世界の隣人は時として人の心を和ませる。
「……動物、好き？」
思わず訊いていた。自然と出た言葉だった。
「ん？　……ああ、嫌いじゃない」

「私、動物飼ってたことがあってね。すごく依存してた。だから死んじゃったとき、ほんとうに辛かったわ」
「へえ……意外って言っちゃ、失礼か？」
少しだけ頬を緩めて、祐一が言う。いい傾向だ。
「そうね、どうしてそこまで依存していたかなんて、他人には決して解らないから仕方がないけど、失礼ね」
繭も少しだけ笑い、続ける。
「みゅーって言う名前でね……」
「μ？　物理とかで出てくるやつか？」
「違うわよ、ただ語感が可愛かったからみゅーって……」
不自然なところで言葉を切る繭を、不審げに窺う祐一。
「どうした？」
「みゅー……」
「繭？」
「みゅーーーーーーーーーーーーーーー！」
そう、こころの在り方は。
現代科学さえ征服できぬ、霊峰なのだ。

434　セバスチャン降臨

長瀬源四郎という男について語ろう。
この男、ゲームを裏から支配する長瀬一族の中にあって、その筆頭たる長瀬源之助と同格の地位と実力を持ち、尚且つ長瀬源五郎の父でもある。
その老成された知略智謀を糧とした手腕、そしてその年齢にもかかわらず今尚保たれているその若々しい強靭な肉体。
まさに長瀬一族における〝最強〟の名を手にするにふさわしい存在といえる。
彼のもつサバイバビリティは、すでに長瀬源之

助を超えるところであり、その彼が長瀬の長たることを拒み沈黙を守り続けていたのは、源之助の持つ〝魔法〟、そして彼自身のその性質に拠るものだろう。
勘違いしてはならない。
彼は王としての器とカリスマを兼ね備えている。
だが、彼の心の中で全ては決着づいている。
彼が仕えるものは後にも先にもただ一人、そして彼は群れをなすことを嫌った、ただそれだけだった。
彼は自分自身の能力というものに深い造詣があった。
それは単純な個体戦闘力とも称すことが出来たかもしれない。
目を見張るほどのそれを彼が備えていたことは言うまでも無いが、そもそもそれは彼が生来持っていた恵まれた身体能力と、それに付随したようにあった天性の資質に拠るものだった。
彼自身、その自分の体というものの限界を追求していった。
彼は自分が持っているもののすばらしさに慢心して、それをさらに育てるということに怠慢であったわけではなかったのだ。
彼は全てに誠実で、純粋に向上するということに努めたのだ。
そう、いわゆる彼は天才であり、そして努力家だった。
鍛え上げられた肉体を執事の衣装に包み、一見普通の執事長を装ってみたものの、彼の本質がそれだけでないことは明白だった。
だがそれもまた彼の本質、忠実なるセバスチャンは常に全てに厳格で、公正で、そして誠実だった。
だが、心の深奥に閉じこめられた獰猛な気性は決して消え去ったわけではない。
彼は正しく制御された番犬などではなく。
常に孤独な一匹狼でありながら唯一つの信念の元に行動する、まさに羊の皮をかぶった狼……いや、

猛虎にも等しかった。

彼を少し知っているものは言うだろう。

『あんたほどいかつい執事は見たことが無いぜ。なあ執事長？　あんた執事長なんて言って実はどっかのバーかカジノのバウンサーでさ、コスプレしてるだけなんだろう？』

確かにその強面と剛健な体つきを見れば無理は無い。

そんじょそこらのごろつきならば、彼が一喝するだけで蜘蛛の子を散らすように退散することは間違い無い。

だからその物言いは得てして的を射ているといえるだろう。

正直なところ、執事という職務が果たして自分に適応したものなのか？

と問われたなら、もっとも早く首を傾げただろう人物が彼自身なのだから。

彼がもっとも得意とするところ——声を高らかにして言うことでもないが——は紛れも無く格闘、もっと言えば肉弾戦、尚且つ広義の意味に於ける戦闘であったなどということはもう分かりきったところだっただろう。

肉体の鍛錬のみを目的とする修行では、体格の見栄えをよくすることが出来ても実際の戦闘に在って最重要とされる、時流に乗った運や闘いの勘が備わることが無い。

場数を踏んだものが強いのはこの基本にして深遠な真理によるものである。

キャリアとは下積みの事を指して、その範囲における努力と忍耐の果てに得たものの証明であり、その結果を賞賛するいわば尊称にも似たものであるが、必ずしもそれが自分の意志によるものであったかどうかは、その人間にとってはまた別の問題なのだ。

長瀬源四郎は他人に認められるために努力したわけではない。

彼にもまた同じことが言えた。

結局のところ闘う理由というのは個々人によって違うなどという、至極当たり前な結論に戻ってくるだけなのだ。

かつてあった激動の昭和、戦争が全てを奪っていった。
数知れないほどのものが、命が失われていった。
生きるためには泥をすするようなこともいとわなかった。
そんな時代が平和ボケした今のこの日本にも存在していたなどと誰が分かるというのか？
いや、分かるわけが無い。
彼がすすった泥の味など、彼以外の何者にも分かるわけが無いのだ。
そして状況は常に彼に強く在ることを求めた。
弱く在る事は許されなかった。
では何がそれを許さなかったというのか？
周りが許さなかった。
世界が許さなかった。
そして、自分が許さなかった。
彼は俗世の荒廃した雑踏に揉まれることになる。
弱いものも強いものも何者にもかかわらず、ただただひしめいていたそこに。
何を以って強者と為すか弱者と為すか、そんな基準が線引きされていたかどうかなどは誰にも判断のつかないところにあった。
だが少なくとも言えることは、そこに強者と弱者という概念が在ったとしても間違いなく勝者は存在しなかった。
では全てが敗者だったというのか？
そうであったかもしれない。
彼らに本質的な意味の差は無かった。
強くても弱くても、生きている限り彼らは常に同じラインに立っていたのだから。
ならば勝者の無い闘いに敗者がいるわけは無い。
結局、混沌の戦場をただ終ることを待ちながら佇

むことしかすることが無かった。
そう、生き残ること、それこそが真の勝利だった。
彼は彼自身の豪腕でその地域における支配階級とも呼べる地位にまで上りつける。
もっともそれも所詮は闇の中で蠢くみすぼらしい子供若者の群れの中でのことだったが。
そんな彼に転機が訪れる。
それが当時の来栖川家御曹子――現在の来栖川財閥総帥――たる男との出会いだった。
源四郎はまさにその時足掻くだけでは届くはずの無かった領域へその指を掛けたのだ。
忠誠というものを知らなかった狂犬は、初めてそこで自分を受け止められるだけの器を持った人間に出会った。
新生する自分自身、新しい戦いの始まり。
彼が知らない世界、来栖川という入り口をきっかけに彼はその更なる未知へと足を踏み出したのだった。

時が、流れる。
時代はもう一度彼に戦いを要求した。
誰のためでもない彼自身。戦いのための戦いを。

「本当に行くのか？」
「うむ」
高い空の上。聞こえるのは二人の話し声。
「我らは戦いに干渉しないと誓ったばかりなのだがな」
「別にゲームに参加しに行くのではない。ただ……うずくのだよ」
源四郎は拳を握り、反対の手でその手首を押さえる。
「わたしの血が」
「……困った男よの」
源之助は苦笑いを浮かべる。
「闘いに関しては、おぬしがもっとも心得ているところじゃからのぅ」

「私がいなくとも、源之助、貴様がいれば〝長瀬〟は動く。問題はない」
「じゃが、もう参加者も三割に減った。無駄な殺しは顰蹙を買うぞ、あれに」
「私が求めているのは純粋なる闘いだ。その結果死するようなことがあれば、それは誰にも文句を挟めるところではない」
「愚か者が。その行動の果てに長瀬に連なるものと遭遇したらどうするというのだ？」
「私に長瀬を問うというならば、それは来栖川を優先した前提でのことだ。はっきり言おう。このゲームは全てに平等なのだ。私……いやわしからそれを切り落とした人間に、いまさらそのような薄甘いものをちらつかされても全くどうとも思わん」
　源之助は押し黙る。
「私は、ただ昔に立ち戻っただけに過ぎないのだからな」
　源四郎は立ち上がった。

「それに、もうそろそろなのだろう。あれがもつのも」
「……むぅ」
「もしもの時のためにも、貴様はここにいねばならぬ。時が満ちるまで、な」
「……全能者でなど誰も無いのだ。それは我らも、このゲームの参加者も、そしてあれであってもな」
「それだからこそ、我らの存在が意味在るものなのではないのか」
「……〝魔法〟も〝羽〟も〝封印〟も、所詮は全てうたかたに過ぎない」
「ならば、余計に私は私のやりたいようにやるだけだ」
「……そう簡単におぬしがやられるようなら、はじめからこのゲームは成り立たんわ」
　ふっと源之助は笑った。
　その脇を黙って源四郎は通り過ぎる。
　が、少しいくと立ち止まった。

「……一つ忘れていた。高槻がいない今、〝あれ〟は源五郎たちの任せきりということになっていたのだが、どうする？」
源之助の眉がぴくっと上がる。
「……考えておこう」
そう言って、再び源四郎は歩き出した。
「とりあえず、今私の目にとまった武人はあの男一人なのでな」
日時にしてゲーム開始から三日目、時刻にして早朝五時四十六分のこと。
打ち砕かれた忠誠は、再び彼に一人の武人たらんとさせたのか――。
――絶海の孤島に一人の影が降り立った。

435　戦いの幕開け

たったの二日で何が変わるというのか？
いや何も変わるところなどない。
例えそれまでの一体何がこの島を支えていたかを、知っていようが知っていまいが構わない。
結局のところ人がこの巨大な島の上でいくら戯れようと、この島自体を動かせるわけも無く、また動いてくれるわけでもない。
ただ、静かに在るだけ。
自らの上に喜びを、嘆きを、怒りを、悲しみを、苦しみをただ浮かべるだけ。
所詮人間の営みなど小さいもの、自分たちを取り巻く広大な世界と時間の中の単なる一点に過ぎない。
そう、世界は常に冷たいのだ。
……源四郎は思索する。
それは純然たる意志を秘めたるもの故のそれ。

この島において唯一ただ闘いの為の闘いを求めて在る者の孤独。
それを言うならば人は最初から孤独の中にあるのかもしれない。
しかしその同じ状況を共有しているはずの、〝彼ら〟とは、明らかな次元の違いを呈すその思惟。
覚悟とも違う何かを、この五十年で源四郎は培ってきた。
降り立った島の南端は時節に合わない冷たい風が吹きつけ、岸壁に打ちつける波もまた高く荒ぶっていた。
早朝のそこは誰しもが初めて見る様な顔を見せる。
源四郎は岬にパラシュートを捨て置くと、そのまま〝彼〟のいる方向へと駆け出していた。
高空でのセンサー探知により大体の位置を把握している故に、彼――源四郎――の足並みに全く迷いは無い。
平地を行く、草原を行く、街路を行く、森林を行く。
恐れるものなど何も無い。
死角から放たれる銃弾も、足元に潜む伏兵も、そんな小細工など端から目ではない。
闘い！
そう、真の斗いを私が望んでいるのだから。

かつてセバスチャンと呼ばれた男が、当所（あてど）ない無明の荒野のごときそこを駆ける。
まるでそこは戦後の焼け野原にも等しい、昔の彼がいたところにその気配を酷似させていた。
〝セバスチャン〟が生まれたのは源四郎の人生の中でも相当新しい時代のことだ。
総帥の孫に当たる芹香嬢に与えられたその名は、新しい生きがいにもなった。
源四郎にとっても彼女は愛孫のような存在であった。
誰でもない、もっとも彼女を見てきた人物が源四

郎だったのだから。
彼女の成長は常に自分と共に在ったのだから。
彼が仕えるべき姫は、もうそこに座していたのだ。
行き過ぎた教育と保護によってすっかり箱入り娘となってしまった彼女を、この十八年彼は守ってきたのだ。
そしてもう一人の愛孫も帰ってきた。
来栖川綾香、芹香の妹である。
アメリカ育ちはなかなかにお転婆で手を焼かされたが、彼女自体は正に非の打ち所の無い人間であった。
芹香を静とするなら綾香は動、二人の子はまるで鏡に映したように正反対に……、だが二人とも素晴らしい人格、美貌、知性を備えてくれていた。
少なくともその誕生に居合わせたものの一人としして、その事実が何ものにも代えがたいほどの喜びであったことは言うまでも無い。
綾香は……彼女の才能は非常に多岐に渡り、その天賦の才は格闘という領域にも向けられ、見事に開花した。
唯一欠けていたかも知れないしとやかさを備えさせる為の稽古事からは悉く逃れられたがせめてその分野だけでも〝私〟が見てやりたかった。
いや、違う。相手をしてやりたかったのだ。
彼女はエクストリームの頂点にその若さで昇り詰めた。
しかし世界は広い。
自分以上の強者などどこにでも潜んでいる。
そして〝彼女〟もそれをよく理解していた。
だからこそ一人の闘人として、私が彼女の相手を務めてみたかった。闘って見たかった。
間違いなく勝つのは自分であっただろう。
しかし彼女はそこで留まる器ではない。
戦場というものを知らないだけで、彼女は武人の境地に辿り着きかけていた。
故に、悔やまれる。

彼女にふさわしい死地を用意して差し上げられなかったことに。
その闘いの相手が自分でなかったことに。
最高の次元で、ギリギリのレヴェルで凌ぎを削ることの楽しさ——もう彼女は知っていたかも知れぬが——を伝えられなかったことが……。
死を神聖視するつもりは毛頭無いが、むしろそれを言うならば私はこのゲームそれ自体に耐えがたい嫌悪を抱いている。
闘いをゲームとしか、命を駒としてしか見ることが出来ぬ者と、そもそも反りが合うわけが無かったのだ。
——そう、私は長瀬源之助という男を全くといっていいほど知らない。
長瀬の集合体が発足していたのはこの十数年のことだった。
だが既にこの身は来栖川に捧げたもの。
尚且つ私は天涯孤独とも言うべき状態にまで追い込まれた身。
いまさら血の縁を問うというならば、そんなものは来栖川に対する忠誠の前に霞む程度。
それ故に私は〝それ〟への参加の要請を頑として突っぱねてきた。
ごく最近に生まれたＦＡＲＧＯなる組織については、来栖川のネットワークによりその存在を突き止めてはいた。
所詮堕落した人間の末路にしか過ぎぬものと捨て置いたものが、よもや長瀬と連なるものであったとは思慮の及ばぬところであった。
そして私はゲーム開始に際して、〝長瀬〟への復帰を余儀なくされることになる。
この十数年放置しておきながら、私の存在はそこに大きな影響を与えていたようだった。
そこにいたのは見知らぬ顔ぶればかりであった。
しかしそれ以上に驚かされたのは、息子の源五郎が研究者としてここに参加していたことだった。

事態は私の関知しない水面下で刻々と動いていった。
そしてとうとうそれは開始される。
下卑た思想の元に仕組まれた殺人ゲームと、その背後に隠された実験が。
今回のゲームには、新たにその要素が加わっていたのだ。
〝長瀬〟とＦＡＲＧＯ代表の相談の結果、百人強の一次適正者が選別される。
――羽根に連なる要素を持ったものを見つけ出すために。
計画は仕組まれ、意図は課され、そして強制力は無常にそれを行使する。
それは我ら〝長瀬〟にとっても例外ではなかった。
まるで我々の存在の意味が、それらを監視する為だったと言わんばかりに選ばれる人々の面々。
私にとって言うならばそれは来栖川姉妹であった。
長瀬は血を尊ぶ。

故に参加者に混じってしまった長瀬の縁者は、彼らに近しいものの談判により、それなりの措置が与えられた。
私は……既に凍っていた。
彼女たちを守ろうとする前に、セバスチャンは滾る血の予感に凍っていたのだ。
来栖川も動かなかった。
それは即ちこのゲームを容認したことを意味していた。
その血を継ぐべき少女二人が参加していることを知ってか知らずか、
――いや、知らないはずが無い。
遠く海の彼方にいらっしゃる旦那様方に進言することもままならなかった。
肥大した来栖川グループは、既に欲にまみれた人間にその頂を埋め尽くされていたのか……。
総帥、来栖川翁が病床に伏したのも丁度その前後のことだった。

〝私〟を受け止めていた器は、もう失われたも同然だった。
　そして私に始まったのは、あらゆる角度からの管理者への洗脳だった。

　――この時ほど、全てを知ったように微笑する源之助を叩き伏せたかったことは無かった。

　だが、純然たる意志の前に、そのような外部の干渉など全くの無意味だ。
　外郭をはがされた私は、ただただ純粋であったあの頃の自分へと立ち戻った。
　……何者も、そこまでしか立ち入ることは出来ない。
　だがもはや、生きるのに精一杯で世界の何をも知らなかった無知な少年はいない。
　今ここに在る純然たる意識、それこそが真にして裏表の無い長瀬源四郎そのものなのだ。

　――そして、そこに至る。

「あいや待たれよそこな若夫婦！」
「……夫婦だと？」
　蝉丸は不機嫌そうに答えた。
　低音だが張りの在るそれからは、その人物の気迫が窺える。
「(･∀･)きゃっ、よく分かってるじゃない」
「月代……」
「ふわっはっは、これは失礼、夫婦ではなかったか。あまりに似合いだったのでな」
　それを見た源四郎は豪快に笑った。
「(･∀･)もう～、そんなに褒めないでよ、恥ずかしい」
「お前……」
　蝉丸は言い返すだけの気力が減退していた。
「……で、老人。あなたの用は何だ」
「何、ちと道を尋ねたくてな」
「道……？　そんなもの、我々とて明るいわけで

は」
「何、誰でも知っているはずだ。……地獄の一丁目だ！」
　そのセリフを聴いた瞬間に、蝉丸は月代を抱いて大きく横っ飛びした。
「(･∀･)はわわ……蝉丸に抱かれちゃった」
「誤解を招く発言は勘弁してくれ」
　そう言って月代を背中の方に匿った。
「そちらの少女に手を出す気は無い！」
　高らかに、源四郎の声が響いた。
「貴様、名を名乗れ」
「長瀬源四郎と申す」
「……知らん名だな。このゲームの参加者では無いな？」
「如何にも。ただ貴殿との斗いを望み、その為だけにここへ参った」
「俺……と？」
　源四郎がこの島へ上陸して一刻ほど。
　彼は全く無駄なくここで彼らと出会ってしまった。
「(･∀･)……蝉丸ぅ」
「大丈夫だ、下がっていろ」
「(･∀･)……うん」
　源四郎はその様子を見た後、長いスタンスを取ると正拳突きの構えを取った。
「……格闘家か」
「私はゲームによる殺し合いでなく、戦いのための闘いを望んでいる故に、な」
　源四郎は不敵に笑った。
「……ならば、俺もこんなものを使うわけにはいかんだろう」
　男――蝉丸――は懐から銃を出すとそれを鞄に入れ、刀と共に月代に投げ渡した。
「(･∀･)わ……！」
　思いのほかに重いそれを受け止めて、月代は少しよろめいた。
「(･∀･)いいの？　蝉丸？」

「このように決闘を申し込まれて受け入れないなど、武人として、いや男子として恥ずべきことだ」
蝉丸も――彼にしては珍しく――獰猛に笑った。
「……一つ聞きたい。なぜあなたは俺の位置を特定できた？　そういう装置でもあるというのか？」
蝉丸は率直な疑問を言った。
「簡単なことよ」
くっくっ、と源四郎は噛み殺した笑いを浮かべて言った。
「武人の勘だっ!!」
「……」
旧日本軍には、気合で列車を動かしたとか言った馬鹿な答弁をした兵士がいたな、と蝉丸は場違いながらおぼろげに思い出していた。
「今更そんなことを問うても詮無い事。この闘いに集中してもらいたい。気を抜けば……おぬしは死ぬ」
「……それは大そうなことだ」
言って蝉丸も構えた。
脇を締め高い位置のガードを保つ、マーシャルアーツスタイルの構え。
「用意はいいな。ならば――」
一瞬の静寂が流れる。
蝉丸も、源四郎も、月代も口を閉ざし。そこから音が消え失せる。
……この男から感じる懐かしい匂いが、私を惹き付けたのやも知れぬな。
「――いざ!!」
そして、闘いの幕は上がる。

436　疾風の攻防

蝉丸は左手を前に、右手を顎に添えた構えをとる。
対して源四郎は完全な左半身。
一見した敏捷性は、蝉丸に分があった。

「……ふっ」
鋭い呼気。スピードに分があると自身も踏んでいた蝉丸は、先制攻撃を仕掛けた。
タンッツッ！
軽やかなステップで、蝉丸が源四郎の間合いに入る。
踏み込んだ右足を軸に、顔をめがけた一撃を繰り出した。
「しっ！」
無声音の掛け声。
だがその一撃は源四郎に当たらない。
寸瞬、源四郎は打ち出された蝉丸の右腕を左手で突き上げ逸らす。
軌道を逸らした突きは、そのまま自分の態勢を崩すことにつながった。
「ぬるいわっ！」
源四郎は正拳突きの要領で右手を突き出し、それを高速で引き戻した。
体軸をずらし引き戻された腕、その〝肘〟が蝉丸の肩口を捉える。
……それは、変形の肘打ちであった。
「がっ⁉」
蝉丸はそのまま前のめりに突き進み倒れ……ない。
喰らった攻撃の勢いと自分の拳速に任せて、自分からその方向へ流れたのだ。
蝉丸はそのまま源四郎から間合いを取った。
「ふむ、正しいな」
源四郎は再び元の通り構えなおす。
「崩れた体をあえて戻さず、以って打撃の効果を半減させる。……及第点だ」
距離約四メートルが開き、蝉丸もまた態勢を取り戻していた。
やはり……と言えばよいか、いや、違う。
明らかにこの老人――とはとても思えないが――の実力は自分の予想を越えていた。
侮ったつもりも、奢っていたわけでもない。

だがあるのだ、こういうことは。
戦法を……変えよう。
「……強いな」
「それ由が取り柄なのでな」
蝉丸の目がぎらりと光る。
それは萎縮した子羊ではなく、獲物を狙う狼の目だった。
「(・∀・)ほえぇ……」
月代はすっかり傍観者と成り果てている。
一瞬の攻防が速過ぎた為、月代にはうまく理解できてはいなかった。
そう……、なにやら蝉丸が走っていって、そのまま源四郎の側をすり抜けていったような。
それくらいにしか思えなかった。
「(・∀・)……ん?」
キュッキュッと何かがこすれる音がする。
小さい、とても小さい音ではあるが、確実に耳に入る音。

これは……蝉丸?
蝉丸は静かにタンブリングしていた。
瞬時に全身のばねを開放し、最高速で動くための前準備である。
またもそれに対しての源四郎の姿勢は完全な硬直。
だがその間合いには不思議と死角というものが見出せない。
見出せないならば――。
ヒュウウウウウ……。
蝉丸は一つ、長く息を吸い込んだ。
爪先に、そして全身に力が込められる。
タンッッッ!
――自ら作るまでだ。

再び蝉丸が源四郎に迫る。
足並は忍者のごとく静かに、そして速い。
そこには、攻め手に窺えるはずの隙など微塵も感じられない。

狙いは、突き出すように構えられた源四郎の右腕。
先の先を取ろうとする蝉丸の攻撃は、いつも以上に速い。
ぶんっ！
脇を締め、空気を振るわす高速の一撃を放った。
この攻撃、返しを取ることは容易ではない。
だがその右突きは源四郎を捉えられない。
半歩、音も無く体芯をずらすことで、源四郎は見事その攻撃を避けて見せた。
さらにそこから、逆に必殺の右直突きを決めようとする。
ブウンッッ！
拳速拳圧ならば、明らかに源之助に分が合った。
しかしその一撃もまた外れる。
「ぬぅぅっ!?」
蝉丸は右溜めに体を沈め、源四郎の一撃をやり過ごした。
——できたぞ、途が。
全身の関節の溜めを一気に開放し、伸び上がるような左アッパーが放たれる。
びしぃぃっ!!
凄まじいスピードを伴った一撃が、とうとう源四郎の顎を捉えた。
「(・∀・)やった！」
月代の傑出した感覚は、徐々に二人の戦いを捉えていく。
蝉丸の一撃が当たったということを単純に喜ぶ月代。
だが、闘いはまだ始まったばかりに過ぎないのだ。

437　丘の上の遭遇

小高い丘の上。
ブロロロロ……プシュゥッ……。
今まで勢いよく走っていた単車がゆっくりと速度を落とす。

「おい、降りろ」
ドスのきいた男の声。
「な、なに？　え、エンスト？」
「下僕は知らんくせにそんな言葉は知ってんのか……」
「と、とーぜんじゃない♪　わたしはくぃーんなんだから！」
御堂のたっぷりと皮肉が込められた返事は空振りに終わった。
「はあ……まあいいけどよ……とにかく降りろ。こっからは歩きだ」
単純に、ここからは徒歩の移動でないとまずい。
暗号に記されたもうひとつの拠点は、すぐそこなのだから。
下手に音を立てて気づかれてはかなわない。
「ここからは爆音鳴らして走ると都合が悪いんだよ……確実に狙われるぜぇ」
「……それならここまでもやばかったんじゃないの？」
ある意味的を射た疑問。もっともだ。
もしゲームに乗った奴に見つかったら狙撃されていたかもしれない。
「ふん、俺は最強の火戦体だぜ。よけるのぐらい簡単だ。いくら単車に乗ってるからって、俺様に狙撃なんぞ効くかよ……」
たとえ岩切や蝉丸であっても猛スピードの単車を自在に操る御堂を狙撃するなど不可能だ。
「だったら乗ってってもいいんじゃないの？」
「ここからは確実に狙撃されんだよ。されると分かってて撃たれる馬鹿はいねぇ」
丘のはるか眼前に見える小さな岩山。
「あそこだ……あそこにいるぜ。恐らくうじゃうじゃな」
「て、てき……？」
「そうだな……敵の親玉さんがいるかどうかは知らねぇがよ……敵のアジトがあそこのどこかに隠され

てんだよ」
「つーか、何で誰にも会わねえんだ？　坂神もほかの奴らもどこにいるんだか……」
「あんたが爆音とどろかせて爆走(はし)ってるからじゃないの？　わたしだったらそんな音に近づかないけど」
「……ちっ」
「あたま悪いように見えても本当は悪くないんじゃ……なんて思ったけどやっぱりバカね」
（このアマ……おめぇにだけは言われたくねぇんだよ！）
「そ、そんな恐い顔したって無駄よ！　わたしには『ぽち』が……」
「……それ、ハッタリだろ？」
当初すっかりだまされていた御堂だったが、これだけ一緒に行動すれば現代の知識が低い御堂でもさすがに気づいていた。
「な、なに言ってんのよ！　そ、そんなわけ……！」
「はあ……」
ヤキが回ったものだ。御堂は思う。
一体どこからケチがつき始めていたのだろうか。
（そもそもこの猫を殺らなかった時からだろうな）
熱のこもった暖かい単車のシートの上ですやすやと眠る猫と毛玉を睨む。
「はあ……」
再び溜め息。
羽根をつけた臆病な少女、そして今も同行している足手まといの少女。
（なんで殺してねぇんだろうな、俺様は）
かつての御堂であれば躊躇せずに殺していたはずだ。その二人の少女なら簡単に殺せる。
（いつでも殺せる……だから生かしたってのか？前の俺なら考えられねぇぜ）
この島に来てから女難、水難の連続だ。
ボリボリ……御堂は情けなさそうに頭を掻いた。
「わっ、ばっちいっ！　フケが飛ぶからやめてっ!!」

「フケなんかあるか、このアマ！」
「しかし……いかな俺でも、さすがに一人で突っ込む気にはなれねぇな」
「さっきは突っ込んだくせに」
「うるせぇ」
さっきのほったて小屋のような場所とワケが違う。なにせその規模すらも分からないのだ。
拠点は一人で突入するとかなりヤバイ気がする。ただの勘だ。だが、こと戦闘に関しての勘にはかなり自信がある。
「巧妙に隠された入り口だ、どこかにつながってると考える方が自然だろ？」
もしかしたらこの岩山の下には地下通路が広がっているかもしれない。
（もしそうなら入り口は一つとは限らねぇな……）
まさかとは思うが、蝉丸あたりは既に突入している……なんて考えが頭に浮かんだ。
（いけ好かねぇ奴だが、そういった行動力は俺以上だからな……）
「でもさ、突っ込むの一人じゃないじゃない」
御堂の思考をさえぎるようにはさまれた言葉。
「あん？」
「わたしよ、わ・た・し！　わたしがいるじゃない」
「……はあ……っ」
御堂は今までで一番大きな溜め息をついた。
「あによ、したぼくのくせにその態度は！」
この女がついてくるならまだ一人で突入したほうがマシだと思える。
「分かってんのかおめぇ……死ぬぜ」
「……ぐっ……！」
その意味を、ゆっくりと確かめるように詠美がうなずく。
本能は正直、小さな呻き声が漏れた。
「分かってる……だけど……わたしは和樹や楓ちゃんの為にも……」

「だから……おめぇは確実に死ぬんだって。おめぇの願いは犬死することかぁ？」
別にこの女が死ぬのは知ったことじゃない。死ぬなら勝手に死ねばいい。
しかし、彼女が御堂の行動に殉じて殺されるのだけはなぜか見たくなかった。
（……こいつが死ぬのを考えるとなぜか寝覚めが悪いぜ……）
これもまた前までなら考えられなかった思考の一つだ。
「まあ、まだ突入しねぇからよ……俺も犬死はごめんだ――……っ!!」
その直後――御堂は詠美を片手で摘み上げると、単車の向こう側へと投げ捨てた。
「わわわっ……ちょっと何すんのよ！」
派手に転がった詠美が単車の向こう側から顔を出す――のを再び御堂が手で沈めた。
「ぐえっ……ちょっと！」
「動くんじゃねぇっ!!」
小声でそう叫びながら、単車の上の二匹の獣を詠美の方へと突き落とす。
「ぴ、ぴこっ！」
「……にゃうっ！」
「わわっ！　いきなりこの子達投げ捨てないで！」
「黙ってろ――。……誰だ、そこにいる奴は！」
後半はちょうど詠美を投げ捨てた逆側……小高い丘に生える木々の向こう側……
「出て来ないなら撃ち殺すぜ……」
デザートイーグルを林に向け、そう呟く。
「おやおや……恐いですねぇ……」
木の影から眼鏡をかけた中年の男が一人出てくる。
そして、男に付き従うようにもう一人女が現れる。
「先程犬死はごめんだ、と言ってましたよね……残念です。――あなた方はここで犬死するんですよ」
眼鏡の向こうで、その眼光が妖しく光った。

438　夜明けの死闘　～一触即発～

「やけに自信満々じゃねぇか……」
御堂が銃口を男の頭に定める。
「そうですね……とりあえず自己紹介しときましょうか。ＨＭシリーズというメイドロボを作った、来栖川ＨＭ開発部の主任、長瀬源五郎と申します。で、こっちがそのＨＭシリーズの量産型、ＨＭ―13型ですな」
その声に答えるように、ＨＭ―13が軽く会釈をする。
「高槻という男……ご存知ですか？　あの男、偽者な上に無能でねぇ……本物の高槻はたいそう使える男だったのですが……」
「偽者だぁ？」
「ええそうです。奴等はクローンでしてね――いや、あいつら複数いるんですけどね。
これも我々来栖川グループが造ったんですよ。いや本物そっくりに見えるけどやはりだめですな。本物には遠く及びませんでした。
やはり、今の我々では思考回路の応用までの完全クローン化は無理ですな……ははは……」
男が情けなさそうに笑う。
「このＨＭのようにロボットの感情を排除して造るならば可能なんですがね。ああそうだ、余談ですが、参加者の中にマルチ、セリオという二体の試作型が混じっていたんですよ。
こいつらには――特にマルチですが――特別に感情を入れておいたんですが……やはり、こと戦場においては感情はマイナスなんですかねぇ……もう壊れてしまいましたね。
……上もつらい命令を出してくれますよ。いくらバックアップをとっていると言っても、再び命を吹き込むのにどれだけのお金がかかることやら。
もう借金地獄ですよ、ははは………はぁ……」

落胆したように呟く。
「おめぇ、何が言いてえんだ？　愚痴をこぼすために出てきたのか？」
御堂のトリガーにかけられた指に力がこもる。
「まあ、そうあせらないでくださいよ」
源五郎は武器を持っていないことを示すように、両手を広げアピールする。
「まあ、何が言いたいかというと、高槻が無能だったおかげで見ているだけにはいかなくなったんですよ。本来なら手を出したくはないんですけどねぇ。あなたは有望株ですし。
いや、闇の世界の娯楽としてこのゲームはトトカルチョも行われているんですが――もちろん、それ自体に意味はありませんけどね。
ただの余興みたいなものです。御堂さん、あなたかなり期待されてるみたいですよ。
柳川さんと岩切さんと安宅みやさん――の三人はすぐ死んでしまいましたが――それに坂神さん、御堂さん、そして水瀬秋子さん……このへんが本命クラスですよ。
特にあなたはいつでも笑って人を殺せる殺人マシーンとして期待されていたんですが……」
そう言って、単車の陰にいる詠美に冷たい視線を向ける。
「ひっ……！」
「と、まあ……あなたなら簡単に殺せそうな女がそこにいるわけですが……一つ質問です。どうしてその少女を生かしてるんですか？　それだけじゃない、あなたは、この島では誰一人として殺めていない……らしくないんじゃありませんか？」
値踏みするように御堂を見やる。
「……おめぇに言う義理はねえな」
ひょうひょうと御堂。だが、たとえ答える気があったとしても答えなんか出はしなかった。
「そうですか。では質問を変えましょうか……ここで我々は何をしていたと思います？　先ほどの放送

で言いましたよね、『一切の手出しをしないことを約束する。それを試みた場合は相応の処置をとらせてもらうのでそのつもりで』と」
「……つまり脱出を試みた俺達を殺そうってハラか？」
「違いますよ。言ってませんでしたが、脱出もまた一つの賭けの対象なんですよ。我々に被害が及ばない限り一切の手出しはしない……ということです。おかしいでしょう？　それならわざわざ自分からあなた方の所に出向いたりしませんよね、ははは……」
　その笑い方は御堂を非常に不愉快にさせた。
「なら、こちらも質問してやる……何しに来やがった？」
　銃口の向こうの男の目を睨みつける。
「言っとくが……ヘンな気は起こすなよ……俺はこの距離からはずさねぇぞ。なんせ、銃の腕はプロ級だからな」
　横文字を使ってしまった。なんとなく現代社会に侵されている感じを覚え、御堂は吐き気を催す。
「知ってますよ御堂さん、あなたのプロフィールはあらかた調べ尽くしてますから。強化兵でなくても力強いその言葉。さすが賭けオッズトップクラスの男なだけありますよ、まったくもって恐れ入ります」
　源五郎が頭を掻く。
「動くんじゃねぇ！　今度動けば撃つ」
「あなたがそう言うなら今度は撃たれるでしょうね……ところで煙草は吸いますか？　私も今ちょっと吸いたい気分なんです……言ったそばから悪いんですがちょっとだけ動きますよ」
「……」
　男が火をつけて煙を吐く。御堂はいつでも撃てるようにしながら間合いを一歩広げる。
「まあ、それでですね……何しに来たか……でしたね？　ええ、分かってますよ。言った通り、脱出を

試みた場合本当に最後の最後まで手出しはしません。今あなた方に危害を加えるのは本来ルール違反なんです。ですが……」
男が煙を一気に吐き出した。
「触れてはならない領域があるってことですよ」
「つまり……その岩山に隠された施設に脱出……いや、ゲームを完全にぶち壊す鍵があるってことかい？」
「……」
男の余裕の笑みが消え、顔をしかめる。
「少々喋りすぎたみたいですな……失敗ですよ……お遊び程度に五つの鍵を入れてしまったことが、そもそもいけなかったのかもしれませんね」
それはＣＤ。詠美もまたそれを一枚持っているのだが、源五郎も御堂もそれを知らない。
詠美自身も、まさか自分がその鍵の一つを持っていることに気づかなかった。
「で……おめぇはここでゲームオーバーだな」
御堂が鼻を鳴らす。
「確かにここではまだ参加者は殺してねぇな。だがっ！」
御堂の気に、声に殺気がこもる。
「おめぇを殺るのに躊躇はしねぇぜ」
「……ああ、そうそう、もう一つ言い忘れてました」
源五郎はその威圧をさらりと受け流して答える。
「このＨＭ—13、量産型と言ってましたが……厳密には違うんですよ。サテライトサービスってご存知ですか？　通常のＨＭ—13シリーズであれば誰でも受けられる有用なシステムでしてねぇ……衛星を通して戦闘用プログラムをダウンロードすれば一気に一流の戦闘マシーンに早代わりなんです。いわゆる一つの即席ターミネーターですね……ですがねぇ……」
源五郎は落胆する。
「ここ……結界が張られていますよね……強化兵と

してのあなたもその力を発揮できない結界が」
「……」
　御堂は眉をひそめた。
「サテライトサービスも受けられないんですよ……通常のHM―13シリーズ量産型はこの島ではただのよく動くメイドロボに変わってしまうんですよ……」
「……」
「こいつは少し改良加えていましてね……ボディの装甲はたとえ大砲の弾が当たっても破壊できない優れものです。戦闘用ボディとでも申しましょうか。それにね……ダウンロードではない、最初から組み込まれているプログラムがサテライトサービスでロードされる戦闘プログラムなんです……だから結界内部でもあなたと同等、あるいはそれ以上の動きを見せてくれますよ」
　そして、値踏みするように言い放った。
「それとですねぇ……坂神さんですが……もう駄目かもしれませんよ？」
「なんだと!?　――坂神がどうしたって言うんだ？」
「今ごろ私の父さんが戦っているはずです……殺してしまったかもしれませんねぇ」
「……その前におめぇは死ねや！」
　源五郎の言葉が終わるか終わらないかの内に、御堂の弾丸が火を吹いた。
　ガイィン！
　脳漿が弾け飛ぶ音ではなく、金属音が響く。
「……」
　HM―13の手が、源五郎の頭に届く前に手でそれをさえぎっていた。
　その手には傷一つない。
（おいおい、マジかよ……）
　普通なら貫通して男の頭を直撃していたはずだ。
　御堂は一歩後退した。
「いくぞてめぇら！」

一気に反転、詠美を腕に抱き、単車を走らせる。
「ちょ、ちょっ――！」
ことの成り行きを震えながら見ていた詠美は叫ぶ――が、エンジン音にかき消された。
単車を反転させながら猫と毛玉の尻尾を同時につかむ。
「やれ」
「はい……」
源五郎の言葉に合わせるようにぱっとＨＭの手の中に銃が現れる。腕の内側にローラーがついており、いつでも体内から装備された銃を射出できるよう造られていた。
「目ぇつぶってろ！」
そう叫びながらその銃に一発！
「……！」
ＨＭの持っていた銃が一瞬にして弾き飛ばされる。
「目標捕捉」
しかし、ＨＭが無手だったのも一瞬。
再び射出された銃が手の中に現れる。
その一瞬で御堂達を乗せた単車は一気に二人の間を走り抜けた。
「……追いますか？」
「ああ、男だけでいい。女は放っておけ、地獄の果てまでも追い詰めて――殺せ」
「了解しました」

439　夜明けの死闘　～超高速の死闘～

「ぴ、ぴこ～！」
「ふにゃあ～～！」
尻尾を強くつかまれた二匹の悲鳴が風に乗って後方へと飛んでいく。
「げっ！　追ってくるぜ……」
サイドミラーに小さく映る人の影。
足の裏から車輪を射出し、単車のスピードについてくるＨＭ―13。

「ろぼっとってのはなんでもアリだな……」
御堂が左へと単車を傾けた。
チュイン!!
恐るべき速度で御堂のすぐ右を弾丸が通りぬけた。
「おい、詠美！　死にたくなかったら丸くなってじっとしてろ！　この畜生共も持っておけ!!」
御堂はこの時初めて詠美を名前で呼んだ。
詠美に二体の動物を預け、身軽になった御堂はさらにアクセルを踏み込んだ。
「ひゃっほ〜〜〜う！」
曲がりくねる山道を左右に揺れながらトップスピードで走り抜ける。だが、そんな単車をいくつもの弾丸の嵐が十倍以上のスピードで追い越していく。
「ちっ！　逃げ回るのは性に合わねぇぜ！」
やがて開けた前方……道がなかった。
「ちょっと……崖！　崖!!」
詠美が前方を指差して悲鳴を上げる。
「動くなって言っただろ！　……飛ぶぜ」
「えっ！　ちょっと!!」
前輪が浮かぶ感覚。
ウィリーさせて一気に崖へと突っ込む。
「し、死ぬ！　しぬって〜〜」
「ここで止まった方が確実に死ぬんだ……よおっ!!」
きれいに車体が放物線を描いた——
一瞬の浮遊感。詠美はその自分の感情までもが宙に浮かんでいく感触がした。
そしてややあって後輪に衝撃。
「大成功だぜ！」
約十メートルの幅の崖を一気に飛び越え、歓喜の声をあげる——が。
「げっ！　ほんとにすげぇろぼっとだぜぇ……あの男に余裕があったのもうなずけらぁ」
ミラーに宙を舞うＨＭの影が映った。
チュイン——！
崖を飛んだ後もなお走りつづける単車へ飛んでくる弾丸の嵐。

「けっ！」
アクセルをさらに開けながらまだ空中にいるＨＭ―13を狙い撃つ！
ガイーン!!
見事に胸部へと二発ヒットしたが、まったくダメージを与えられない。
ロボはそのまま着地し、さらにスピードを上げて追ってくる。
「まともに当たったたってのにガイーン……だってよ。このままじゃジリ貧だなぁ、おい」
「ど、同意求められてもこまるわよ！」
その会話はすごい勢いで流れる景色と共に消えていく。
カシーン！
弾丸が切れたのか、銃を捨て、また新たに銃を手に装填するＨＭの姿がミラー越しに見える。
「弾丸装填じゃなくて銃装填かよ……現代科学ってのはすげぇな」
「か、感心してる場合じゃないでしょぉ！」
御堂の服を詠美が強く握り締める。
「まあ、そう言うな……って！」
さらに襲いくる弾丸をかわしながら、今度は地面に弾丸を撃ちこむ！
ガァーーン！
弾かれた石が無数に地面に散らばった。
「………!!」
その石に車輪を取られ、ＨＭがぐらつく。
「あばよ!!」
さらにその脳天へと弾丸を撃ちこんだ。
「……」
ＨＭの上体が後方へ大きくぐらついた。
そんなＨＭの姿が景色と共にミラーから消えていった。若干余裕が出てきたのか、詠美が落ち着いて呟く。
「あんたって……すごいのね……倒したの？」
「いや……あんぐらいで参るろぼっとなら苦労はし

ねぇ……」
「でも……まいたんだよね？」
「いや……追ってくるぜ、きっとな……」
「ふみゅ〜ん……そんなぁ〜」
涙声になる詠美を無視して前方を見据える。
「ほうら、おいでなすったぜ、どうあっても俺と決着つけたいらしいぜ……」
前方から猛スピードで突っ込んでくる影。
どのようなルートを通ったかは知らないが、前方へ先回りしたＨＭがこちらへ向かってくる。
チュイン！
今度は前方からすれ違う弾丸。
「ちっ！　どうせ戦うなら人間がやりやすいんだよ!!」
右へ単車を一気に傾け、それをやり過ごしながら、一発、二発!!　その二発は双方の腕に装備されていたＨＭの銃を再び弾き飛ばした。
新たな銃がＨＭの体から射出されるまで約二秒

——その一瞬に御堂は賭けた。
「また飛ぶぜ！　目ぇつぶってしっかり俺様に掴まってろ!!」
「えっ!?」
再びウィリーさせ、ＨＭの眼前までせまる——!!
「おらよ、プレゼントだ！　受け取りなぁ!!」
御堂は詠美をしっかり抱えると、単車の背を蹴って宙に飛んだ——！
「——！　回避不能——!!」
ＨＭの言葉が風とエンジン音にまぎれて消えた。
「死ね！」
器用に空中から単車のタンクに弾丸を二発撃ちこんだ。
「——!!」
ＨＭと単車が接触する瞬間、弾丸がタンクを撃ちぬき、大爆発を引き起こした。
「うおおっ!?」
「きゃぁっ！」

「ぴこぴこ〜〜！」
「にゃう〜！」
　その爆風がさらに空中の御堂と詠美を吹き飛ばした。
「詠美！　体丸めてじっとしてろ！」
　御堂はそのままぐるりと器用に回転して草むらへと突っ込んだ。
「ぐぅっ！」
　胸に詠美を抱きながら、そのまま転がってショックを吸収する。いかにうまく着地したとはいえ、猛スピードで爆走(はし)る単車から飛び降りた衝撃は御堂をかなり痛めつけた。
「はあ、はあ……い、生きてるの!?」
「そ、そうみてぇだな……久しぶりにスリルあったぜぇ……」
「た、倒したの!?」
「さすがに無事じゃねぇだろ……だがまだ確認したわけじゃねぇ……動くなよ」
　爆発し、燃えさかる単車の方を見つめ、御堂はぎょっとなった。
「目標捕捉——発射！」
　ドン！　ドン!!
「がっ……！」
　御堂の左胸に、正確に二発弾丸が撃ちこまれた。
「あ……っ……」
　詠美はそのまま倒れゆく御堂を、何が起きたか分からないように見つめることしかできなかった。

440　夜明けの死闘　～結末～

「あ……あ……」
　詠美の目の前で膝から力なく倒れる御堂。
「——任務完了——ただいまより帰還します」
　HM—13の衣服はすでに燃えつき、中に着ていた白いスウェットスーツのようなものがむきだしになっていた。

そのスーツもすでに黒焦げて見る影もない。
だが、恐るべきはその装甲か、あの爆発の中でもほとんどボディ自体は無傷だった。
半ば放心している詠美を一度見やり、そのまま御堂達が元来た方へと去っていく。
「う、う………うぁ〜〜〜！」
詠美はＨＭの後姿に向かってがむしゃらに走った。
「なんで、どうして⁉　よくも……よくも――！」
ＨＭを後ろから羽交い締めにして投げ飛ばす。
「――敵とみなし、排除します――」
「うあああっ！」
詠美はそのまま転がったＨＭに馬乗りになって、顔面を殴りつける。
ガン！
「どうして⁉　どうして殺すの⁉　なんで⁉」
ＨＭの顔面の素材は硬く、ただ詠美の拳を傷つけるだけでしかなかった。
それでも詠美は構わずに殴りつづける。

「――目標捕捉――」
ＨＭは気にした風もなく、ゆっくりと銃を装填させると、詠美に銃口を向けた。
「うああっ！」
涙が、拳からの血があたり一面に舞う。
が、ＨＭ―13は気にした風もなく。
ガーーン！
そして、無情にも銃口が引かれた。
「ぴこ〜っ！」
毛玉――ポテトの勢いをつけた体当たりがＨＭの腕に命中し、放たれた弾丸は詠美の脇へとそれる。
「――！」
ＨＭは無表情のまま、今度はポテトに向けもう片腕の銃で引き金を引いた。
「にゃーーう！」
その瞬間、次は猫――ぴろがＨＭの顔面を覆い隠す。
そしてまた狙いが逸れる。

「……!!」
ＨＭはへばりついたぴろをひきはがすとポテトへと叩きつける。
「ふぎゃっ！」
「びごっ！」
二匹は絡み合いながら地面を転がっていく。
同時に、今度は詠美を力任せに弾き飛ばしながら立ち上がる。
「あうっ……！」
詠美もまた地面に転がる。その時手に触れたもの。ポテトが体当たりしたときに弾き飛ばされた拳銃。
「うああっ！」
半ば狂乱しながらそれを奪い取ると、ＨＭに向けて引き金を引いた。
ガイーンガイーンガイーン！
連続しての金属音。
五、六発は撃っただろうか。
その後は、詠美がいくら引き金を引いてもカチッカチッ……というスイッチ音が響くだけでしかなかった。
「ひっ……」
ＨＭ—13が再び詠美の頭に銃口を向けた。
ドン！
銃声が一発響いた。
ジ……ジジジ……ッ!!
スパークが巻き起こる。
詠美には何が起こったのか分からなかった。
奇妙な機械音を発しながらＨＭが右眼を押さえて呻いた。
「任……ム……スススイイイ行シマス……」
よろよろと右側へと体を向け、銃口を構える。
そこには死んだはずだった御堂が銃を構え立っていた。その左胸からはうっすらと血が滲んで服を濡らしている。
ドン！　ドン!!
すでに捕捉機能が破壊されたのか、あらぬ方向へ

と弾丸を飛ばしながら御堂へと近づく。
「自慢のボディとやらは傷つかなくても、目ん玉はやわらけぇままだったみてえだな」
「目標……捕捉失敗……」
ＨＭが感情のない機械であるにもかかわらず信じられないと言ったような目を向けた。
「弱点さえ分かれば簡単だ……言ったろ？　銃の腕はプロ級だってな……」
再び弾を装填し、御堂が銃を構えた。
「任務……スススイ行シマス！」
ほとんど執念のようにＨＭが御堂へと走り寄る。
「くたばりな、化け物！」
ドン！
ただ一発だけ放たれた銃弾が正確にＨＭの左眼を撃ちぬき――！
ボン！　……ジジジ……シュウ……
意外に小さな爆発と共に頭部が弾け飛び――そのまま倒れ動かなくなった。

「けっ……まあ、苦戦はしたがなんとかなったようだな」
そう、倒れて動かないＨＭに吐き捨てる。
それから、よろめきつつもゆっくりと御堂は詠美へと近づいた。
「おい、無事か？」
「い、いちおぅ……って、どうして生きてるのよぅ！」
安心したように顔にしわを寄せ、詠美は泣き出した。
「単車で逃げてる間、念の為こいつを胸にくりつけて置いたんだよ。さすがに無傷とはいかねぇし、衝撃で一瞬気絶しちまったが……なんとか命だけは助かったみてぇだな」
穴の開いた桜井あさひの描かれたバインダーを詠美の前へと放る。皮肉にも、描かれたあさひの心臓部分に穴が開き、血が付着している。
まるであさひが身代わりになったかのように。

「はからずも本当のお守りになっちまったようだな」
御堂の胸には浅く傷がついていたが、出血はほとんどなかった。
「あのろぼっとは位置の捕捉はできても生死の判定はできなかったらしいな……もし、それができてたら負けてたのは俺様だったかもしれねぇ」
「ううう……」
未だすすり泣く詠美を片手で担ぎ、また寝ている――というか気絶している――二匹の獣をひょいと持ち上げる。
「人が寝てる間になんか活躍してたじゃねぇか。大した武器だぜこいつらは……感謝しとけよ、おめぇを守った騎士様なんだからよ」
からかうように――あるいは皮肉か――詠美の腕に二匹を抱かせる。
「ふみゅん……」
その拳からはまだ真新しい血が滴っていた。
(ちっ、一度休憩してやるか、俺も単車から飛び降りたダメージがかなりあるしな……くそおもしろくもねぇ……)
詠美に……というよりも自分の行動に腹立たせながら安全そうな雑木林へと入っていった。
(そういやあの源五郎とかいう奴が、坂神がどうこう……とか言ってたな……まあ、こんな島で朽ちるタマじゃねぇがよ……俺以外の奴に殺られんじゃねぇぞ)
御堂が単車で去り、HM―13がそれを追ってから約五分。
「HM―13……任務失敗、破壊サレマシタ」
御堂と対峙した小高い丘で煙草を吸っていた源五郎の元にやってきた小柄な少女。
それはマルチに非常によく似ていた。
「そうか……うーん、勝てると思ったんだけどねぇ……」
もう一体の戦闘用HM。HM―12は遠くで起こっ

た事態を告げる。
「まいったなぁ……あの装甲高いんだよね……キミとアレの二体を造るのにどれだけお金がかかったか……」
だが、その顔はいつも通りに……何事もなかったかのように涼しい顔。
「源之助さんに怒られそうだねぇ……HM—12、キミはいつ奴が来てもいいように秘密通路の警備に当たってくれ」
「ドノ通路デショウカ……」
「うん、御堂が知ってるのはその岩山だけだからね」
源五郎が再び紫煙を吐き出した。
「とりあえずその岩山からマザーコンピューターへ続く通路を守備しといてくれ。ぶっちゃけた話、それさえ無事なら例え百人全員に逃げ出されたとしても問題ないからねぇ」
「カシコマリマシタ」
HMが会釈し、岩山の向こうへと消えていく。
「ふう……やっぱり訓練された人間のほうが戦闘プログラムより優れているのかねぇ……」
自嘲気味に笑う源五郎だけがその場に残された。

441　校舎という名の墓場

ああ、耕一？　梓だよ、梓。
ロクに話もせずに別れちゃって、済まなかったね。
偽善者な——じゃないよ、この場合は意地っ張りな、だね。
そんな千鶴姉がさ。
物事が理想通りに進まないのを自分のせいにして、相変わらずあんたに相談もせず飛び出しちゃったわけよ。顔向けできない、とか思ってるんだろうね。バカだよねえ。
あたしたちが言えた立場じゃないけど。
そんな意地っ張りな千鶴姉に代わって、あたしが

解説するよ。
　とにかく初音と楓を捜そうってんでさ。まず初音が行方不明になった学校に向かってたんだ。放送に名前が出ない限り必ず会えるさ、とか楽天的なこと言ってね。

「……それにしてもさ。何であいつら、誰が死んだとか判るんだろ？」
「きっとね、お空から見てるんだよ！　映画とかでやってたもん！」
　あゆが空を見上げる。つられてあたしも。
「……でもさ、そしたら林の中とか建物の中で死んだら判らな……」
「あ……うぐぅ……」
　これから行こうとする建物の中で死んだ少女の事を思い出し、なんだか二人して暗い気分になってしまう。ついでに空から監視って案も没になり、消沈する。

「彼らは位置も、掴んでるみたいなのよ」
　聞いてなかったようで聞いていたらしい千鶴姉が発言する。
　高槻に会った時のこと。間違いなく、千鶴姉を目的に捜していたと思われる、高槻の言動のこと。
　……この島で希望どおりの人物に難なく出会えるのは、確かに不自然だ。
「そうなると、何かでモニタリングしてるとしか思えないのよね」
　結論は、そういう事らしい。
「でも、何かって？」
「ボク、わかったよっ！」
　はいはいはい、と手を上げるあゆ。発言を許すあたし。
「発信機だよっ！　マンガとかでやってたもん！」
「そんなもんどこに……」
　言い返そうとしたあたしに向かって、苦笑しながらお腹を押さえる千鶴姉。

……そうだ、これがあった。お腹の中に、物騒な奴が。
苦りきった顔で、三人して腹を押さえる。
「たぶん、発信機も兼ねてるのよ。胃内pHか体温か、心音を感知して随時送信してるんでしょうね」
「ぺーはー？」
「……ってなんだっけ？」
あゆと二人で首をかしげる。
苦笑して説明しようとする千鶴姉は、口を開きかけてもう一度考え、首を振る。
「pHと温度は、恐らくこの際関係ないわね……食事は問題ないし、死亡してから変化するのに時間がかかり過ぎるわ」
「ふーん。じゃ心音を感知して送ってるの？」
たぶんね、と答える千鶴姉に質問を重ねる。
「でもさ、どうして胃の中だって思うの？」
「最初の方の放送で言ってたでしょ。吐いたらドカンって。ようするに爆弾は、少なくとも吐ける位置にあるのよ」
ふーん、と解ったような解らないような気分で、感心する。
「吐くと心音が感知できなくなるから、それでドカンってこと？」
「だめだよっ！　それだと死んじゃったらみんなバクハツしちゃうよっ！」
あゆが結構怖いことを言う……が、確かにそのとおり。
それを受けて、千鶴姉が考えながら答える。
「うーん……生死判定と、吐いたか吐かないかは別なんでしょうね」
「そんなの見分けつくの？　死体と体外の区別をつけるって事でしょ？」
「そうね――」
高槻が、つまらなそうに画面を見ている。

一番モニターには、現在最も成績の良い、四十三番里村茜が映っている。他の人物達も各モニターに映っているが、百個のモニターがあるわけではないので、常に全員を監視している訳ではない。
発信機とシンクロさせて、人物が確認される位置をロボットが拡大、各々の行動を追跡し映すかどうかを決定しているのだ。発信機が重なり合う場所——人が殺しあう可能性が高い箇所が、優先的にモニターに表示される。
「そっちはどうだぁ？」
くるりと椅子を回し、レーダーを監視する来栖川のロボットに尋ねる。
「三番、五番、九番、十一番、二十一番……」
「ああ、今モニターに出てる連中の確認はいい。出てないのはどうだ？」
「一番、四十六番と林道を移動中。次に一秒以上モニターされることは最低十分後ですが、画面に出しますか？」
「相沢と……四十六番は椎名か。まあチラチラ画面見ても仕方が無いからな。他の誰かと遭遇しない限り、映さなくてかまわん」
「了解。十七番、二十番、六十一番、まもなく林道を抜け校舎裏門に到達します。モニターに表示いたしますか？」
「柏木長女と次女に、月宮か……裏門は映るよな？林を抜けたら三番に映せ」
「了解。二十九番、九十四番、家屋内にて停止中。モニターに表示いたしますか？」
「あーそいつらか——」
全設定を更新し（更新するのはロボットなのだが）、だらしなく椅子にかける高槻。そのまま首だけ捻って後ろに控えるロボットに尋ねる。
「そろそろ放送だな。……今何人だ？」
「はい、十三人です」
「おっ、新記録じゃないか？　だがまだまだぬるいなー」

おもしろき、こともなき世をおもしろく。
高槻はちょっとだけ嬉しそうに、マイクを手にとった。

そんなふうに、お腹の爆弾の話をしてるときにさ。放送が――あったんだ。
それで何がおこったたか、耕一には大体解るよな？　あたしは語彙が少ないからなんとも良い台詞は言えないんだけど。悲しいっていうより、全然会えなかったのが……悔しかったかな。
この服だって千鶴姉はともかく、あたしよりも楓のほうが似合うと思うんだよね。
姉妹全員揃って、また楽しく騒げたらどんなにいいかと思ってたけど。もう、駄目なんだなって思ったらガックリきたよ。
でさ……あたしもそれなりだったけど、千鶴姉は……そりゃ凄かったんだよ。空気が冷えて来てたの判ったからね。ひょっとしたら、重みも増してたかもしれない。
なにしろ千鶴姉は楓に一回会えてたみたいなんだけど……ひと悶着あったみたいでさ。それが余計に堪えたんだろうね。
耕一も鬼になっちまったことがあるって言ってただろ？　あのまま放って置いたら、多分なってたよアレは。
あゆと二人がかりで止めてさ。
うん、正直おっかなかったけどね。
……でも、止められた。三人で来て、ホント良かったと思ったよ。
え？　何言ったかは覚えてないよ。
恥ずかしいから、あんまり聞くなよな。
あー……とにかく、だ。
大変は大変だったけど、なんとか収まりがついてさ。収まりって言っても最悪の事態が避けられただ

けなんだけど。
　どうにかこうにか、学校に着いたんだよ。
すぐ近くなのに、随分時間がかかったんだよね。
そん時に、次の放送が入ったんだな。
　学校のスピーカー全部から聞こえたから、そらもうはっきり聞こえたよ。
　それ聞いたらさ。
　今までうなだれてた千鶴姉が突然――いや、今思うと長らく考えた後なんだろうけど。兎に角、走り出したんだよね。どこへ行ったと思う？　ぐるっと校舎を回るとね。外に死体があるんだよ。誰だか知らないけど。
　もう、だいぶ酷いことになってる死体に向かって一回だけ手を合わせてさ。千鶴姉は爪を立てたんだ。腹のあたり。ざくざくとね。
　止めようと思って駆け寄ろうとすると、来るなって言うんだ。
　実際、狂ったかと思ったね。
んでさ。何かを、掴んで投げたんだ。
……どうなったかって？
　なんにも。
　なにも、起こらなかったんだよ。

　先ほどまで高槻が座っていた椅子に、ひとりの男が腰かける。並んで入ってきたもう一人が、横に立つ。
「で？　どうすればいいんだ？」
「ロボットがレーダー見て追跡してるから、面白そうなところを大写しにしてもらって、死人が出たら主催者達に報告すりゃいいんだろ？」
「ふーん」
「これが画像モニターだろ。あっちがレーダーで、あっちが心音モニターだ」
「……全然動いてないの、多くないか？」

「そりゃお前。仏さんの心臓は動かないだろ」
「うわ、結構死んでるんだな……だいたいは女子供ばっかだろ？　人間やればできるもんなんだなあ」
「お前が言えた立場かよ」
不謹慎に笑う二人に、声がかかる。
「二十番、校舎内に移動しました。続いて十七番、六十一番校舎内に移動します。モニターを中止しますか？」
「あん？」
「ああ、建物入ると見えないだろ。中で揉め事あっても面白味はないんだよな」
「なるほどね。いーよ、出てくるか誰か接近するまで表示を消しといて」
「了解」
しばらくして、今度は心音モニター側のロボットが口を開く。
「二十番、沈黙しました」
思った以上にたいくつな仕事だったことに気が付き、だれていた二人が目を見開く。振り向けば二十番と書かれた心音モニターに、横線が流れている。
「お？」
「おおー……でも校舎内だぜ、勿体無い」
「これで校舎内の死体は、四つになったなあ」
「怖い怖い」
おどける二人に、再度声がかかる。
「十七番、六十一番沈黙しました」
続けて二本が波形を収めて横線になる。
「おいおいおい、なんだよ相打ちかあ？」
「十七番と二十番って姉妹だろ？　二十番なんか結構成績良かったみたいなのになあ。六十一番ってどんな奴よ？」
聞かれて、立っているほうがパラパラと名簿を確認する。
「んー……こんな、奴だ」
「……」
「……」

「見かけで判断しちゃ、いけねえな」
「そう、だな」

十七番　柏木梓　死亡
二十番　柏木千鶴　死亡
六十一番　月宮あゆ　死亡

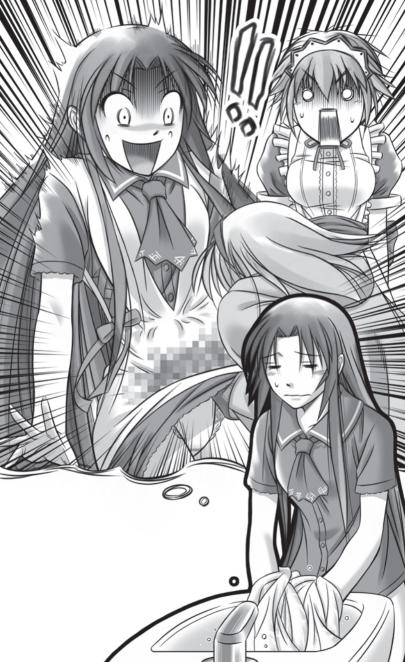
442　監視外の出来事

――ジャーーーー――
――ジャブジャブ――

「ふぅ…」
千鶴はメイド服のスカートを脱ぎ、トイレの流しでそれを洗っていた。
「うう……」
こめかみに指をあて、うめいてみる。
フェイントだった。

予測不可能だった。
かわす術がなかった。
しっかりと握られていたのだから。
つい目の前にある布で受け止めてしまった。
多分そんなところ。
ジャブジャブ
なんだか情けなくなってきた。

――「う〜。できないよ〜」
――「千鶴姉、どうする?」
――「仕方ないわね」
――千鶴の指があゆの口の中に入れられる。
――ぐりぐり
――「うひゃにゃ〜」
――ぐりぐり
――「うにょにゃ〜」
――ぐりぐり
――「うぐにゅ〜」

——「千鶴姉～。まだぁ？」
——「……。仕方ないわね。保健室で胃洗浄の薬でも探してもう一度……」
——「わっわっ、うぐぅ」
——ぎゅっ
——「ぎゅ？」
——千鶴のスカートを風呂敷のように広げるあゆの手。
——（まさか……）
——「ちょ、出すなら地面に……」
——『あ』
——流石姉妹。ハモった。
（あぁあ……思い出しただけで!!）
スカートが雑巾のようにきつく絞られる。
とりあえず死者の体で爆弾を体外に出す実験をした。爆発は起こらなかった。
自分が率先して吐き出した。爆発は起こらなかった。
そして二人の爆弾も体外に出せたわけだから、（放送まで確証は持てないものの）おそらく相打ちで死亡したと思われただろう。
これからは隠密行動ができるかもしれない。
しかしその代償にこれとは……。実害が少ないだけにかなり頭に来る。
「ち……千鶴姉……」
千鶴の背後から梓の声。
「そんな怒らなくてもさ～」
「んふふふふ。そうよね～。仕方ないわよね～」
顔は笑っている。にこやかだ。でも圧力が違う……。
「わたしの心の平穏のために！　殴られて！　梓！」
「なんで!?」
——ボカ！——
「なんであたしが殴られなくちゃいけないんだ

よ!!」
――バキャ!!――
二人の乱闘が続く……。

443　そらのきおく

女の子が、涙を流している。長いかざりばねがとてもきれいな子。あれはヒトの女の子だ。さっき、動かなくなったのも女の子。ぼくとからだの色が一緒で、ぼくと一緒だったのがヒトの男。
　男と女の子が寄り添って泣いているのを見ながら、ぼくはいろいろ考えていた。
　ぼくはカラスだ。カラスは、鳥だ。そして女の子は、鳥じゃない。ヒトの女の子。たしか、お母さんがそう教えてくれた気がする。お母さん。あたたかくて、いいにおいがするもの。いつも傍にいてくれるもの。
　でも、今はいない。どうしていないんだろう。
　ぼくは、なぜひとりでこんなところにいるのだろう。
　頭が……痛む。痛いのはいやなので、ぼくはそれ以上は考えないようにした。
　とことこ。
　ぼくは男と女の子の側に歩いてみる。二人ともぼくには気づかないみたいだ。ぼくは気づいてもらおうと、ばっさばっさと羽を広げてみたがやっぱり気づいてくれなかった。
　あきらめて、この二人を眺めることにする。
　女の子が、涙を流している。その涙をぼくはどこかで見た気がした。
　みすず。
　そう、ぼくはこの女の子のことを知っていた気がする。
　また、頭が痛み出した。でも、今度はそれでも考えることにした。それはきっと大切なことだと思っ

たから。ぼくは、どうして彼女を見ると懐かしい気持ちになるのだろう、と。
そして。
ぼくは、どうして彼女を見るとこんなにも悲しい気持ちになるのだろう、と。
ふいに。ひとつの風景がぼくの頭をよぎる。
女の子がいる。男もいる。他のなにかもいる。
――そして、赤い色が見えた。それはとても悲しい風景。なぜかぼくは、そんな気がした。

444　昂揚の瞬間

――決まった。
蝉丸は攻撃の反動を利用してスッと後退した。
ぼうっとしてはいられない。
一発入ったとはいえ相手が相手。
今この瞬間にも反撃が来る可能性を否定できない。
顎を打ちつけられた源四郎は、一瞬その姿勢のまま硬直していた。
だがすぐに顎を引き、口からペッと血を吐き出した。
「良いな……。同じ轍を踏まぬどころか、さらにその上を行く攻撃を見せてくれおる。やはり、私の目に狂いは無かった……」
口元を拭いながら源四郎はそう言った。
その口調は、そこはかとなく嬉しそうに見えた。
蝉丸は油断無く構えている。
「……だがその拳、果たして私を打ち倒すに至るか？」
「何？」
言うが早いか、源四郎が蝉丸の視界から消える。
蝉丸は視線を空に向けた。
太陽の光を遮り、黒い影が迫る。
音も無く、助走も無く、源四郎の巨体が宙を飛んだのだ。
「むぅん！」

約二メートルの高さの跳躍から放たれる跳び蹴り、その破壊力は推して知れよう。
「くっ」
蝉丸は両腕を胸の前で交差し、十字受けの形を取る。

――そこに、一瞬の葛藤。

俺はこの攻撃を受け止めるべきか？
あの巨体から繰り出される技、全てに十分な重さが乗っている。
……十中八九、防御しきれん。
それならばあえて寸前で回避し、大技の隙を後の先を取るがごとく撃つ。
その方が確実ではないか？

――その瞬末、蝉丸は決断した。

体を大きく右に開き、源四郎の跳び蹴りを避ける。
高角度の軌道であったその蹴りは、上下の体捌きでは避けさせてくれなかった。
「ふっ！」
回避の運動で生じた右回転の力を利用し、蝉丸は一気に後ろ回し蹴りを放った。
源四郎の背中はがら空き――。

「ぐはぁっっっ‼」
見事に後ろ回し蹴りが決まった。

――源四郎の左後ろ回しが。

「(･∀･)な、なんでぇっ⁉」
月代には、蝉丸が吹き飛ばされることになるその死角が見えていなかった。
源四郎が着地した際の右足、それを軸に、上半身の回転を用いずに放った反対脚の蹴りは、たっぷり

と遠心力の乗った蝉丸のそれに勢いのよさで一歩譲るものの、技の発生の早さについては一歩勝っていた。
頭部にヒットした蹴りが、蝉丸を体ごと吹き飛ばした。
「……ぐっ」
源四郎に追撃してくる様子は見られない。
だがそれに乗じていつまでも寝ていられるほど、蝉丸は冗長な性質ではなかった。
頭部への直撃によって、一時的に意識が朦朧とする。
ふらつく視界の中に厳として立ち在る黒ずくめの執事が、蝉丸にはその体以上に大きな人間に見えた。
一方の源四郎は、何事も無かったかのように、ずれた蝶ネクタイの位置直しをしている。
やっていることはあまりにも普通で日常的なことなのだが、実際には高い森の中で殴り合いをした後に人を一人蹴り倒してからやっていることだ。

だがそれでもなお老人にとっては、それすら日常のことに過ぎないと言わんばかりに周囲と妙に調和した仕草をしていると月代は感じた。
「……いつぞやの小僧を思い出すな。あれはもう死んでしまっていたか……。あの程度使えることなど当たり前のこと、早々に終わってくれるなよ。これでも私は期待してここにいるのだから」
蝉丸の回復を待っているというのか、未だ源四郎に攻撃の意思は見られない。
蝉丸は呼吸を早め、頭……意識を平常に保つことに努めた。
あの一瞬に、老人は後ろ回し蹴りを後ろ回し蹴りで返すなどと言う芸当をやってのけた。
力や技以上に、恐るべき闘いのセンスを持っている……。
紛れも無く、この老人は天才だということが、骨身にしみて分かった。
その口調、物腰から歴戦を生き延びた百戦錬磨

の猛者であることはうすうすながら窺えていたものの、この時代、この高齢でこれほどの手練れが活きているという事実は、蝉丸の認識を越えたものであった。
だが、それは必ずしも相手に対する恐れにつながるものではなく。
蝉丸は、それを知って昂揚していく自分を感じていた。
より強い相手と戦うこと、それはある種の人間には娯楽にも等しいことだった。
立ち上がり、再び構えを取る蝉丸。
それを確認した源四郎も、改めて構えを取る。
だがその構えは今までのような、長く体を開いた局部に溜めを作る、動性の少ないそれではなかった。
脇を締め、膝を柔らかく、スピードを乗せた動きが為されるよう考えられたものである。
一見すると、それは蝉丸の構えにも似ているような気がする。
とりもなおさず、それは源四郎が能動的な攻撃に移ることを示していた。
「先手後手の取り合いは、これで終い」
軽やかにステップを踏む源四郎。
月代の目に映ったそれは、蝉丸と同じくらいに機敏な動きに見えた。
「ここからが本当の斗いであると心得よ！」
「望むところだ！」
蝉丸の返事には、いつになく覇気がこもっていた。
「その意気や良し！」
その言葉を合図に、二人は同時に地を蹴った。
「うおおおおおおおお!!」
「ぬうううううううう!!」
パアアァァァァァアン!!
裂帛の気合と共に、拳と拳が激突する。
弾かれた大気が軋み音を上げる。

だがそれは不思議と痛々しい叫びではない。
むしろ空間それ自体すら、二人の気にあおられて昂揚しているようだった。

445　ここらで休憩タイム

雑木林をしばらく歩いていると、小さな凹みを見つけた。深さは一メートル弱、半径は三メートルほど、意外と広い。
「おい、ここで休むぞ」
「……うん」
先程までベソをかいていた詠美はすっかりテンションが下がってしまった。
何故ここを選んだのか……それは、こういう所の方が敵に発見されにくいからだ。
今の御堂では、一般人二～三人が相手でも危うい状況だ。それは御堂本人が一番良く知っていた。そのため、あえて隠れることを選んだのだ。
ＨＭ―13の放った銃弾による攻撃は、桜井あさひのバインダーによって勢いを弱められたため、カスリ傷程度で済んだ。
だが、問題はバイクからの離脱の際に打ちつけた体であった。
（ちっ！　あばらが折れちまったか……普段ならとっくに完治しているんだが、こりゃ半日は休養しねえと治りそうもねぇな……）
己の体をかばうように、そっと地に腰を下ろす。
詠美も御堂に続き、ぺたんと座りこむ。
御堂の体内に潜む仙命樹は急ピッチで折れたあばらを治癒している。……しかし、遅すぎるのだ。
本来なら、三十分程で治る怪我……だが、この島に張り巡らされた結界の力が仙命樹の能力を大幅に抑制しているのだ。
「おい、手。どうした？」
御堂はふいに詠美の手の異常に気付いた。出血している。

「……へ？」
「血が出てるじゃねぇか」
「え？　……あ、うん。平気よ、こんなの」
「平気なら何で痛がってるんだ？」
「ぅ……」
「見せてみろ」
見ると、詠美の拳は皮が裂け、血がにじんでいた。見たところ骨や神経系には異常は無さそうだ。
「とりあえず水かけて傷口洗うぞ」
「あ、ちょっ――」
詠美が制止するよりも早く、御堂はボトルの水を両手の拳に盛大に浴びせた。
バシャバシャシャシャ……
「あ、痛ぅ……」
「ほら、この位我慢しろ」
最後に詠美のハンカチを包帯代わりに巻いて、さささやかな治療は終わった。
「そろそろ飯にでもするか」
御堂はそう言うと、詰め所から奪ってきたサケの缶詰を手に取り、同じく奪ったナイフで器用に缶を切る。
カコカコカコカコカコカコカコ……
「おっ、こりゃ丈夫なナイフだな」
ストライダーと呼ばれるそのナイフは、どうやら御堂に気に入られたようだ。
「あ、あのさ……」
「何だ？」
カコカコカコカコカコカコカコ……
「アンタって、一体何者なの？　きょーかへいだとか、かせんたいだとか……わけわかんない」
「元大日本帝國陸軍特殊歩兵部隊所属火戦躰壱号御堂だ」
「……ちょっとぉ、もっとカンタンに言いなさいよぉ……」
御堂は切り終えた二つの缶詰をコトリと地に置いた。

「今回はおめぇらも頑張ったからな、ご褒美だぞ。ホレ食え」
「にゃにゃにゃ♪」
「ぴこ！　ぴこぴこ♪」
御堂はサケをほおばる二匹の獣を撫でながら言った。
「……日本が戦争に負けたのは、知っているよな？」
「あ……うん。いちおー」
「その時、造られたのが俺たち、強化兵だ」
「え？　……造られた？」
「そうだ。……改造されたと、言った方が分かりやすいか？」
「アンタ……仮面ライダーの見過ぎじゃないの？」
「話しはもう終わりにするか……」
「ああっ！　待ってよ！　ジョーダンよ！……で？どんな風にカイゾーされたの？」
「体の中に小さな生き物を入れた。『仙命樹』という生き物だ」
「養命酒？　アンタじさま？」
「話はもう……」
「ウソウソ！　ジョーダンよ！　あ、あたしにも缶詰ちょーだい！」
「あいよ」
カコカコカコカコカコカコ……
「で？　その生き物って……スゴイの？」
「ああ、例えばこの傷、もう治っているだろ？」
御堂は胸の傷痕――が、あった部分を見せた。
「あ、ホントだ……」
「これが仙命樹の力の一つ『治癒能力』だ」
御堂は詠美に切った缶詰とフォークを渡す。詠美はハンカチが巻かれた手で受け取る。
「一つって……まだあるの？」
サケの切り身をフォークでつついて解しながら詠美が尋ねた。
「他にも各種能力の増強に不老不死の力も――」

「ふろうふし⁉　死なないの⁉」
「殺されればくたばる。……ただ、歳取ってくたばらねぇだけだ」
「ウソ……アンタ今いくつ？」
「俺が生まれたのが大正だから……七十は越えてるな」
「普通に年取ってんじゃない」
「テメエ、俺が老けてるとでも言いてぇのか？」
「ああっ！　ジョーダンよ！　……とりあえず、アンタがすごいのは分かったわ……でも、まだまだね……ふっふっふ」
　コホンと詠美が咳払いをする。そしてポケットに手を突っ込み――
「ぱんぱかぱーん♪　見て見て！　これがさいしんぎじゅつをくしして作られた『ぽち』よっ！」
「それ、さっき襲ってきたろぼっとが持ってた銃じゃねぇか」
「ぎくっ！　ち、違うわよっ‼　これがあたしの『ぽち』なの！」
「はいはい、分かったよ。とりあえず弾丸を補充してやるから貸してみな」
「じ、自分でできるわよ！　バカにしないでよね！」
「おいおい、素人さんにはちょっと難しいぜ？」
「のぞむところだわっ！　見てなさいよ！　わたしのかれーなるテクニックを！」
（一時間後）
「おい、まだできねぇのか？」
　御堂はため息混じりに訊いた。
「ふみゅ～ん……何なのよコレ～～ぜんぜんできないじゃない……しくしく」
　詠美はマガジンと弾丸をカチカチやりながら半べソをかいていた。

446　Memories

きっとまだ遠くには行っていない。
ただの勘。
根拠のない憶測。
そんなものを頼りになめるように森を歩く。
「はあ……はあ……」
ただ歩いているだけなのに胸の動悸が激しい。
この二日間、いや、もう三日目か。
小柄な彼女の体は既に体力の限界にさしかかっていた。それでも休むことなく歩く。挫け、立ち止まることはけしてない。
命を賭けて自分を守ってくれたあの人の妹、佳乃に会うために。
「ここは……どの辺なの……？」
武器のたくさんつまった鞄から一枚の紙とコンパスを取りだし、目を凝らす。
「えっと……まだ山の中腹あたりかな……」
その紙に描かれた島の一箇所を指で押さえて呟く。
「佳乃ちゃん……どこにいるんだろう」
あの崖から通り抜けられる場所はあまり多くない。
――ここへと辿り着く少し前……途中で、きよみの亡骸を見つけた。むしょうに悲しみがこみあげてきて――思いきり泣きたかったけど。
(ごめんね、きよみさん……こんなことしかできなくて……でも、今は……)
そっと顔の汚れを拭って、聖の持っていた救急箱に入っていた白いシートをかぶせてやる。
(佳乃ちゃんは、私が助けるから……そして、生きてる人みんなで帰るから……見ててね)
思い上がりなんかじゃない。
会ったから、何ができるというわけでもない。
佳乃を、みんなを助けられるような力もあるわけじゃない。
だけど、ただ、生きる意思と佳乃への思いがマナ

をそう行動させていた。
「ひゃっほ〜〜〜う！」
　どこからか、何かの爆音と共に男の声が響いていた。
（な、なにっ⁉）
　マナが木の陰へと身を潜ませる。
　ギュン――……！
　生い茂る森の中に一本通った舗装されていないでこぼこの山道が目の前に広がっている。
　そこを一気に通りすぎる一輪の単車。
「――！」
　一瞬で通りすぎたそれには複数の人間が乗っていたかのように見えた――。
　そして……
　ヒュン！
　さらに一瞬の後――今度はとても驚いた。
　こんな場所をバイクで走る人間がいたことにも驚いたが、それを生身の女が走って追っているなんて事態は彼女の想像の範囲を超えていた。
　ガン！　ガン‼
　走るというよりはすべるといった感じでその女は、発砲しながらマナの視界を右から左へと高速で通り過ぎる。
（なに……今の……）
　一瞬だけしか見えなかったが、女の方はＣＭとかで話題の来栖川グループのメイドロボ、ＨＭシリーズの最新バージョンのように見えた。……マナの記憶が正しければだが。
　先のバイクを追っていたのだろうか。
　一瞬助けなきゃ……とも思ったが、あまりに早すぎたその二つの音は、既に向こうの崖のほうへと消えていってしまっていた。とてもじゃないが追いつかない。
　その時、戦闘音に導かれるかのように、一人の少女が山道を挟んだ向こうからふらふらと歩いてくるのにマナは気がついた。

（か、佳乃ちゃん⁉）
マナはそのタイミングに目を疑った。
道の向こう、先程の銃撃戦の音に導かれるように
ふらふらと歩く。その目は、遠目からでも焦点が定
まっていないように感じた。
「か――――っ……！」
一瞬その名を叫ぼうとしたが、マナはその声を飲
み込むと、ゆっくりと気づかれないように佳乃の背
後へと近づいた。
「……」
無表情のまま佳乃は歩く。時折木の根に足を取ら
れそうになりながら、そしてそれを気にした風もな
く、どこかで響き続ける銃撃の音を頼りにゆっくり
と進んでいた。
それはまさに夢遊病者という表現がぴったりであ
った。
「佳乃ちゃん……」
いつの間に接近していたのか、佳乃の背後から恐
る恐るかけられた言葉。佳乃はスッと流れるように
その声の主へと振り向いた。
「……佳乃ちゃん……」
木の陰からおずおずとその姿を見せる一人の少女、
観月マナ。
「……」
佳乃の瞳にマナの姿が映る。
先刻まで一緒に行動していた少女、そして、殺そ
うとしてしまった少女。
だが、表情はまったく変わりはしなかった。彼女
の登場にまったく関心がないかのように。
「マナだよ……さっきまで一緒にいた観月マナだよ
……一緒に霧島センセイのところに行こうって言っ
たマナだよ？」
戸惑いを隠せずにマナ。
「……」
だが、それに応える声はない。
「きっときよみさんも……佳乃ちゃんのこと許して

たよ？　だから……元に戻って……」
「佳乃ちゃん！」
今度は少し強めの語調。悲痛な叫び。
それでも眉一つ動かすことのない佳乃。
「どうして……どうして？……あなたは……誰？」
マナが問い掛ける。今の佳乃は佳乃であって佳乃じゃない。
マナは何も知らないし知る機会もなかったが、そう強く心に言い聞かせる。
そう思わなければ佳乃を、そしてすべてが信じられなくなってしまいそうで。
「……」
相変わらず佳乃は何も喋りはしなかった——その代わりに一歩、マナへと足を踏み出す。
「佳乃ちゃん、返事して……！　聞こえているならっ!!」
さらに叫ぶ。
周りにもし敵——ゲームに乗った者がいたとしたら確実に殺される的となっただろう。そんな風にも思わせる大きな叫びだった。幸いなことに、まわりには誰もいなかったが。
その呼びかけもむなしく、佳乃の口は閉じられたまま。佳乃の濁ったような瞳の中に映るマナの姿がだんだん大きくなっていく。
その瞳に、まるで飲み込まれてしまったような感覚に、マナの体は硬直してしまっていた。
「かの……ちゃん」
生気を感じられないその足取りでゆっくりとマナへとせまる。
マナまであと五歩……四歩……ゆっくりと。
そして眼前まで大きく迫ったときに、佳乃の無表情だった顔に表情が宿った。
笑い顔。
だが人の心を和ませるあの愛くるしい元気な表情でなかった。
口の周りだけを不自然に歪ませ不気味に、ニタリ

と——笑ったのだ。
「ひっ！」
本能が否応なく感じ取った恐怖にマナの足が震えた。佳乃の瞳に映るマナの顔もまた恐怖に歪む。
マナの肩を両腕で押さえつけ、後方の大木へと強く叩きつける。
「あうっ！」
その衝撃にマナの胸に嘔吐感がこみ上げる。
そしてその衝撃は、ボウガンが刺さっていた佳乃の左腕の傷口を再び開かせ、血を撒き散らした。
血に濡れたその顔を拭うこともなく、妖艶に笑う佳乃。
その瞳だけ、不自然に感情が宿らないまま。
「かのちゃん……」
脱力感、嘔吐感、恐怖感の交じり合う中、やっとのことでそれだけを呟く。
その声に反応するかのように佳乃は再びマナの肩を引っつかんだ。それは佳乃の華奢な体からでは考えられない、マナの理解を超えた力だった。
「うあっ！」
もう一度、そして二度三度、木へと背中を打ちつけられる。
闇の中——血か、胃液か、どちらかは判別つかないが、口から液体が飛び出す。
「ごほっ……ごほっ……！」
ようやく開放されたマナが地面にへたり込み、激しく咳き込んだ。
「この子は、私の命だから……だから殺すの……」
この場で初めて佳乃が発した言葉。
マナが下から佳乃を仰ぎ見たとき、闇夜の中、冷たく光る何かが振り下ろされるところだった。
「うっ……！」
ほとんど生きる為の防衛本能だけで体をよじらせる。
肩に激しい痛み。かすっただけだったが、恐るべき速度のそれはマナの痛覚を何倍にも膨らませた。

わずかに血のついたそれは地面に深々と根元まで突き刺さった。
それはボウガンの矢。
それをいとも簡単に引き抜くと、今度は水平にそれを凪ぐ。
「や、やめてっ！」
叫びながらさらに身を屈める。逃げ遅れたおさげにくくられた髪の毛をかすめて通りすぎる極太の針。
ドスッ！という鈍い音と共に、先刻マナの体を打ち付けていた大木へと深々と刺さった。
ぐいっ……！　ぐいっ……!!
木に根元まで刺さった矢。今度はさすがにそれを引き抜くことはできなかった。
やがてボウガンの矢の回収をあきらめると、
「……あなたも……だからいっそ、この手で……優しいから……無理だから……だから私が、殺して……」
抑揚のない棒読みの台詞を羅列しながら、今度はマナの顔面を思いっきり蹴り飛ばしにかかる。
「きゃあっ！」
今度はよけきれなかった。手に持っていたデイバッグを眼前へとたぐり寄せ、顔面直撃だけはなんとか避けれたが、そのキックの威力はマナの体を完全に捕らえ、宙へと舞わせる。
地面に叩きつけられると同時に、マナの体が再び宙に浮く。
どこにそれほどの力が眠っているのだろう、それほど体重差もないはずだったが、今のマナと佳乃の力は大人と子供程の差があった。
大の男に勝るとも劣らない力を見せつける佳乃は再びマナを投げつける。
(かはっ……！)
三度、木へと叩きつけられ声もなく地面に崩れ落ちた。

——この子は私の命そのものです。

この子――八雲の右手首にあった生まれたときからの醜い痣。
それが災厄。不吉の印。
どうしてそう言いきれるのでしょうか。
たとえそうだとして、この子を見捨てられましょうか？　でも……村の者達は誰もがこの子が災厄の元凶、疫病神であると信じて疑わなかった。
どうしても殺すというなら……私が……私の手で……だけどできなかった。
大切な、わが子を……あの人と一緒に残した私達の宝物を……壊すことなんてできない。
私は。私だけは。
母親として、最後までこの子を守り続けます。
この島で大殺戮が行われている、生き残れるのはたった一人だけ。そんな理不尽な話がどうして起こっているんでしょうか。
この島で、この子が生き残るなんて到底無理な話。
この子は優しすぎるから……きっと最後まで誰かを信じ、そしていつか裏切られ果ててしまうから……
だから私が殺す。私にならばそれができるから。
鬼と成り果てても、この子を守るためならば。
――だけど……
心の中でもう一人の悲しみ。
――私は、佳乃なんだよ！　八雲くんじゃないんだよ！　もう…やめてよぉ!!
（ううっ……）
遠くなりつつある意識の中、佳乃の姿を確認する。
あれだけ激しく動いたにもかかわらず佳乃は息一つ乱してはいない。
体を襲う激しい痛みに身をよじらせるマナに歩み寄り、今度はその首を両手で持ち上げた。
「うあっ……」
締め付けられ、息ができなくなる。
佳乃の頭よりも高くまで持ち上げられ、首を締めつけられる。
どれほどの力がこめられているのだろう、その力

で佳乃の腕の傷がさらに開き、血が溢れ出しては流れる。
それは佳乃の腕を伝い、肩を濡らし、白い服を徐々に真っ赤に染めあげていく。
「や……め……て……」
力なく、かすかに漏れる息と共に声を絞り出したが、一向に手の力が緩むことはなく——
逆にどんどん締めつける力は強くなっていった。
(佳乃ちゃん……やめてっ！)
出会った頃の佳乃の笑顔を忘れないよう強く心に思い描きながら、足掻く。文字通り、足をジタバタと動かして。
だが、どんなに足掻いてみても足が地面に着くことはなく。暴れるたびにマナの首が締めつけられていく。
「…………!!」
振りほどこうと動くマナの手が、佳乃の腕を掴もうとしたが……腕に滴る血で滑ってうまく掴めず、表面を撫でるだけだった。
そんな中、マナの手が布に触れた。右腕につけられている黄色いバンダナ、佳乃であるという証。
朦朧とした意識の中、それを力任せに引っ張ろうとした。
「——!!」
瞬間、佳乃が首に回していた両手を離し、バンダナを掴んでいたマナの手を弾く。
(あうっ！)
開放されたマナのその体はそのまま地面へと崩れ落ちた。
「——!?」
あいかわらず瞳は淀んだまま、だけど今の佳乃が初めて見せる狼狽だった。
「げほっ……げほっ……」
マナの体が新鮮な空気を取り込む。こんなにも空気がおいしいと感じられたことは今までにない。
だが、開放されたのもわずかな間。再び佳乃はへ

たりこんでいるマナをさらに押し倒すと馬乗りになる。
逃げようともがいたが叶わなかった。
佳乃は再びマナの首を力任せに締めあげた。
急速に力の抜けていく体。酸素が足りない。未だ動悸の収まらない体は既にマナの意識を断ち切るほどまでに弱っていた。
(助けて……霧島センセイ……藤井さん……お姉ちゃん！)
半ば絶望の中、もう還らない人達の姿が次々と頭の中で右から左へ、左から右へと流れていく。
(私……もう……)
かすむ景色。動かなくなっていく体……それでもマナの手は生きようと動いた。
手に何かが触れる。
マナの持っていたバッグ。先刻蹴り上げられたときの衝撃でそのチャックが開き、中から武器が飛び出していた。
藤田浩之が管理者から奪い取った、そしてマナが浩之から没収した拳銃——
それを指先でたぐり寄せ、握る。
(佳乃ちゃん……！)
残された力を振り絞って、佳乃へと銃口を向ける。
(佳乃ちゃん……!!)
佳乃の脇腹へとそれを押し当てる。あとはわずかに力をこめるだけ。
(佳乃ちゃん……!!)
——景色がとっても遠い。生きてきた十七年間の思い出が頭の中で弾けては消えてく。
短い、ほんの少しの間だったけど、きよみさんや私と笑いあった佳乃ちゃんの無邪気な笑顔が浮かんでは消えた。
いつのことだったんだろう……それはほんの少しだけ前の話。少し前までずっと笑ってお話してたのに……。
思い出すだけで切なくなって、涙が浮かんで目の

前が滲んで。だけどもう目が見えなくなっていって――。
撃てば助かる……あとほんの少し指を曲げるだけで。だけど佳乃ちゃんはどうなるの？
センセイやきよみさんに藤井さん……みんなに助けてもらった命……大事にしたかった。だけど……私は最後の力を振り絞って手を動かした。拳銃を遠くへ放り投げる。
（撃てない。私撃てないよ。佳乃ちゃんなんだよ？やっぱり撃てないよ――）
そして佳乃ちゃんの体に手をまわして、ぎゅっとした。
（助けられなくて、ごめんね、佳乃ちゃん――）
不意に、首に掛けられた手の力が弱まる。
佳乃の手はやがて完全にマナの首筋から外されていく。
「前に――聖お姉ちゃんもね、こうやって私を抱きしめてくれたんだ……」

佳乃の手は、そのままマナの背中に回された。その結果、抱きしめあう形になる二人。
「お父さんが死んだときも、そしてわたしがわたしじゃなくなっちゃったときも、ぎゅってしてくれたんだ」
佳乃はマナの小柄な体を優しく包みこむ。
「抱きしめられてると安心するんだ。子供っぽいのかな、わたし。だけど……」
佳乃の瞳は色を取り戻し、そこから澄んだ水が雨のようにマナの顔へと降り注いだ。
その暖かい雨はやむことはなく。
「あの時は気づかなかったんだ、わたしバカだから。ずっと、寝ぼけて診療所を歩いてたと思ってた」
でも、普段の佳乃とは考えもつかないほど、重く、真剣な声。
「きよみさんも……そしてマナちゃんも私が傷つけたんだね……」
そしておそらくあの猫耳メイドの梓も。

「心の中でずっと叫んでた……マナちゃんを傷つけていく私を、わたしは止められなかった。わたしがやったことは、決して許されることじゃないけれど……本当は、死んじゃった方がいいのかもしれないけれど……だけど、わたし、お姉ちゃん達の分まで生きたいって思うの。……だから……だから……わたし、生きていてもいいかな？」
後悔してもしきれない。そんなやるせない感情を胸一杯に抱いて。
「もう一人の私はきっとわたしが止めるから……生きてちゃダメ、かな？」
人はこんなにも涙を流すことができたのだろうか。涙が、佳乃の顔に飛び散っていた血を洗い流していく。
「ごめんね……ごめんね……マナちゃん――」
もう一度、マナをもう二度と離さぬように強く抱きしめた。強く、強く――。
「バカみたい……生きてていいか、なんて……と……当然じゃ、ない……」
ゆっくりと体を弛緩させて。
息も絶え絶えにやっとしぼり出せたのは、バカにしたような口調。
それでも嬉しそうに涙を浮かべて。
「それに……ぎりぎりだったけど間に合ったんだから……わ、たし……生きてるんだからさ。だから……元気出しなさいよ……。勝手に死なれちゃ困るわよ……そんな、ことしたら、私が……そしてみんなが許さないんだから」
マナは、強く佳乃を抱き返す。
「マナちゃん……ごめん……ごめんねっ……！」
泣きながら抱きしめあう二人。確かなぬくもりが二人のまわりの空気を穏やかなものに変えていった。
先程までは一面の暗い夜空。だがいつの間にか、東の空が幻想的な薄紫色へと変わっていた。
夜明けはもう、すぐそこ。

447 silent presence

森の中の、とある茂みの中。
牧部なつみはその中で息を潜めてたたずんでいた。
茜を探してしばらく森の中をさまよっていたなつみだが、そう簡単に相手が見つかるはずもない。
歩き疲れて道ばたで休んでいた時、なつみはふと考えた。
――そうだ。別にこっちから探さなくても、向こうからやってくるのを待てばいいじゃない。こっちは銃を持っているんだし。
そう気付くと、なつみは身を隠すのにちょうどいい茂みを探し、その中に座り込んだ。
いつでも撃てる体勢にできるよう、右手にはトカレフを握ったままで。

それから数時間、なつみはじっと待っている。
しかし、かつて教室の中で短刀を手に震えていた時のような不安や恐れは、今のなつみには全くなかった。
なつみにはただ一つの、はっきりした目的があったから。

448 Good-bye dear

第六回の放送が流れ、続いて高槻処分の放送が流れた。
「また、死んだな。それにしても高槻の野郎、ざまぁみろってんだ」
悪態をつく。
そんなことをしても、死んだ人は帰ってこない。
(香里は、帰ってこない)
だからこそ、悪態をつかずにはいられなかった。
「……ねぇ、ジュン?」
同じ部屋。暗闇の中からレミィが言った。

北川は一瞬、誰に呼ばれているのかわからなかった。今まで聞いたことがない声だった。
暗い色。悲しみ、絶望、そんな色のこもった声。
「どうした？」
なるべく平静を装って訊き返した。
「ジュンは、朝になるまで動かない、って言ったよネ？」
「そうだな。今はゆっくり休む時間だ。寝る子は育つぞ？」
動揺は収まっていない。いつもの馬鹿トークにも、キレがない。
自覚できる自分が情けなかった。
「じゃあ、ここでバイバイだネ。今までアリガトウ、ジュン」
静かに立ち上がり、レミィは自分の荷物を持った。
「ちょ、ちょっと待てよ！」
慌てて北川はくいついた。
「何があった突然……。って、さっきの放送か？」
「……ウン。親友が二人……今すぐにでも、探しに行くヨ」
北川の方を見もしないで、言った。
それは決意。
あまりにも、どこまでも哀しい決意。
「そうか。仕方ないな。俺には何も言えない……悪い」
北川は悟っていた。
朝までここにいるのが一番安全なのは間違いない。だがいくらそんなことを説いても、ある種の決意を固めた人間には無駄なのだ。
さっきの、祐一のように。
だから、自分のやることも決まっていた。
「ウウン、気にすることないヨ！　じゃあ、行くね。バイバイ……」
レミィは部屋のドアノブに手をかけた。
「だから待てって。まだ俺は、荷物片付けてないぞ」

「……え？」
振り向く。
北川はせかせかと自分の荷物を仕舞いこんでいるところだった。
「ジュン……どうして？」
「そんなこと言われてもなぁ……」
手を休めずに言った。
「旅は道連れって言うしな。それにこのまま悲痛な決意背負った女の子一人で行かせられるわけないだろ。人間として、男として。一蓮托生だ、こうなったら。ついていくぞ。一緒に行きたいんだよ、俺が」
そう一気にまくしたてる。
言ってしまって、気付く。
（何を恥ずかしいこと言ってるんだ、この口はーっ！）
後悔しても仕方がない。
言ってしまった。仕方がない。

「さて、と。行こうか」
荷物を全部片付け、鞄を背負う。
「ジュン！」
ずっと黙って見ていたレミィが北川に飛びついた。
「ジュン、サンキュー！　だいすきヨ!!」
レミィの髪の匂いが、なんだか妙に、くすぐったかった。
（香里？　お前は相沢のこと好きだったんだよな？　俺はお前のこと、本当に好きだったんだぞ。だけど……俺、他にも、守りたい人ができたみたいだ。おいおい、呆れないで見ててくれよ？　……さよならだ）

449

Good-bye dears / Good-bye tears

探し物はなんですか？
見つけにくいものですか？
部屋を出て数時間。

探し物は、あっさりと見つかった。
「ヒロユキ……あかり……」
二人抱き合っている、死体。
その死に顔は……
「幸せそうじゃないか？」
「……そうネ。幸せそうだヨ……」
彼等は知らない。
この二人が、どんな絶望を乗り越えて、愛しあうことができたのか。
それでも、最後は幸せだった。
それだけは、はっきりとわかった。
「せめて埋めてあげようかと思ったけど、なんか、動かしたら悪い気がするヨ」
「そうだな。なんというか、二人の世界を作り上げてるって感じだな。と、あれはこの二人の荷物か……拾ってくるけど、もう少しここにいるか？」
「……そうするヨ」
それだけ訊き、北川は二人の荷物を回収しに行った。
「中身は……CDが二枚もあるじゃないか。¼と、何も書かれていないディスクか。……使わせてもらうぞ」
浩之とあかりの鞄の中身を自分の鞄にうつす。
「重っ……そっちはもういいか？」
「うん、いいヨ！」
「じゃあ、行こうか？」
北川が先に歩き出した。
レミィも続こうとし、一度振り返る。
「バイバイ……大切な、トモダチ……」
青い瞳に涙を浮かべて。
振り切るように、駆け出した。

《葉鍵ロワイアル　第三巻　了》

バイバイ・・・
ワタシの・・・
大切なトモダチ・・・・・・

端　書

二〇〇二年、十二月某日、都内の某喫茶店。
私は刷り上がったばかりの葉鍵ロワイアル（以下ハカロワ）の一巻を瀬戸から渡されたとき、こうつぶやきました。

「うわ、嘘くさ」

もちろん、悪意から出た言葉ではありません。私のハカロワに対する万感の思いがこの言葉に集約しているといっても過言ではありません。

自己紹介が遅れました。私は三浦　蘭と申します。ハカロワ出版企画でＤＴＰ作業。要は印刷に適するように与えられたデータを加工する作業をしています。
私がハカロワを知るきっかけは、某ロシア人みたいなハンドルネームを持つ悪友に勧められたからです。
そして多分の例に漏れず、はまってしまった私はハカロワを同人誌にできたら、と思いハカロワ終了後、その作業に適するようなテキストデータを作成しました。
しかし、それはハカロワが巨大な化け物だということを知ることとなったのです。

テキストデータは約三メガバイト。四百字詰め原稿用紙用紙に換算したら五千五百枚以上もある膨大な量の物語だったことが分かり愕然としました。
ちなみに本家の『バトルロワイアル』が原稿用紙千三百枚とのことなので、あの分厚い本の約四倍に相当します。
いくらなんでも、これを同人誌にするには膨大な労力と費用が必要です。ハカロワを本にすることは不可能だ、と思いました。
だが、それから約一年後。瀬戸がハカロワ紙媒体化企画を提唱。参加して半年後。第一巻完成。
文章やカバーを編集作業で何度もモニター越しに見ていましたが、かつて夢想していたものが実際に目に見え、重さを感じることができる本になったとき、その思いが最初に書いた言葉になったのです。
企画の発足から一年経ちようやく三巻の発刊までこぎつけましたが、まだ全里程の半ばまで来ていません。皆様、長丁場になりますが、最後までお付き合いいただければ幸いです。

平成十五年　七月　某日

三浦　蘭

葉鍵ロワイアル　第三巻　著者一覧

奇跡の企画を作り上げた皆様に

この場を借りて、お礼を申し上げます。

◎制作者一覧
制作協力：
111、JOYH-TV、L.A.R、Yellow 、#3-174、独活大樹、
久々野　彰、静かなる中条、駄っ文だ、ないしょ、
名無し達の挽歌、名無しさんだよもん＠誤植指摘、
遥か昔の書き手、観月、林檎、『 。』、名無しさんだよもん

制作協賛：
104、５、Alfo、Kyaz、MIU、NBC、いつかの書き手、
感想スレＲの 142、葵原てぃー、シイ原、真空パック、
ナナツさんだよもん、七連装ビッグマグナム、暇人、
日向葵、箕崎、祐一＆浩平、名無しさんだよもん

スペシャルサンクス：
189、quit、River. 、zin、#4-6、#7-76、荒門、命、
静かなる中条、彗夜、ダンディ、名無し cd、
名無しさんなんだよ、にいむらたくみ、花と名無したん、
ヘタ霊、赤目、名剣らっちー、訳あり名無しさんだよもん、
旧データサイト管理人各氏、

そして全ての名無しさんと読者の皆様

（アルファベット～アイウエオ順、敬称略）

葉鍵ロワイアル　（3）
二〇〇三年　　八月一七日　初刷発行
二〇二二年　一二月三〇日　電子書籍版　初刷発行

著　　者：（別頁に記載）
発 行 者：瀬戸こうへい
発　　行：ハカロワ出版企画
初　　出：２ちゃんねる、葉鍵（Leaf&Key）板
編集事務：セルゲイ＠Ｄ　三浦　闌
挿　　絵：天田　湧介
印　　刷：株式会社ポプルス
連 絡 先：kohei19800310@yahoo.co.jp

＊過去ログサイトにおける329話は、前後の話との繋がりに問題がありましたので、紙媒体化するにあたって別の話に差し替えさせていただきました。なお、この件は著者の承諾を得ております。

9784434351453

1924401333030

ISBN4-33051-084-1

C0510

ハカロワ出版企画

HAKAGI ROYALE Ⅲ

さあ、考えなさい。あなた達が今するべき事を。
本当の敵は誰か。思い出して下さい。

最愛の人を失った悲しみも、衝撃に惑う心も、
護ろうと誓う意志も関係なく、
互いに殺しあう参加者たち。
そんな中で、命を賭けて訴えた少女がいた。

思いを受け継ぎ、打開の道を探る者。
果たされる出会いと再会。

退屈ともいえる日常。その象徴だった学校を舞台に、
哀しい衝突が繰り広げられる。

生存者、残り51名。
物語は転機を迎えようとしていた——

HAKAGI
ハカギ・ロワイアル
ROYALE
4

HAKAGI ROYALE

ハカギ・ロワイアル

4

――――――【残り35人】

葉鍵ロワイアル参加者名簿

一　　番　相沢　祐一（あいざわ・ゆういち）

~~二　　番　藍原　瑞穂（あいはら・みずほ）~~

三　　番　天沢　郁未（あまさわ・いくみ）

~~四　　番　天沢　未夜子（あまさわ・みよこ）~~

五　　番　天野　美汐（あまの・みしお）

~~六　　番　石原　麗子（いしはら・れいこ）~~

~~七　　番　猪名川　由宇（いながわ・ゆう）~~

~~八　　番　岩切　花枝（いわきり・はなえ）~~

九　　番　江藤　結花（えとう・ゆか）

~~十　　番　太田　香奈子（おおた・かなこ）~~

十一番　大庭　詠美（おおば・えいみ）

~~十二番　緒方　英二（おがた・えいじ）~~

~~十三番　緒方　理奈（おがた・りな）~~

~~十四番　折原　浩平（おりはら・こうへい）~~

~~十五番　杜若　きよみ〈原身〉（かきつばた・きよみ）~~

~~十六番　杜若　きよみ〈複製身〉（かきつばた・きよみ）~~

十七番　柏木　梓（かしわぎ・あずさ）

~~十八番　柏木　楓（かしわぎ・かえで）~~

十九番　柏木　耕一（かしわぎ・こういち）

二十番　柏木　千鶴（かしわぎ・ちづる）

二十一番　柏木　初音（かしわぎ・はつね）

二十二番　鹿沼　葉子（かぬま・ようこ）

二十三番　神尾　晴子（かみお・はるこ）

二十四番　神尾　観鈴（かみお・みすず）

~~二十五番　神岸　あかり（かみぎし・あかり）~~

~~二十六番　河島　はるか（かわしま・はるか）~~

~~二十七番　川澄　舞（かわすみ・まい）~~

~~二十八番　川名　みさき（かわな・みさき）~~

二十九番　北川　潤（きたがわ・じゅん）

~~三十番　砧　夕霧（きぬた・ゆうき）~~

三十一番　霧島　佳乃（きりしま・かの）

~~三十二番　霧島　聖（きりしま・ひじり）~~

三十三番　国崎　往人（くにさき・ゆきと）

~~三十四番　九品仏　大志（くほんぶつ・たいし）~~

~~三十五番　倉田　佐祐理（くらた・さゆり）~~

~~三十六番　来栖川　綾香（くるすがわ・あやか）~~

三十七番　来栖川　芹香（くるすがわ・せりか）

~~三十八番　桑嶋　高子（くわしま・たかこ）~~

~~三十九番　上月　澪（こうづき・みお）~~

四十番　坂神　蝉丸（さかがみ・せみまる）

~~四十一番　桜井　あさひ（さくらい・あさひ）~~

~~四十二番　佐藤　雅史（さとう・まさし）~~

四十三番　里村　茜（さとむら・あかね）

~~四十四番　澤倉　美咲（さわくら・みさき）~~

~~四十五番　沢渡　真琴（さわたり・まこと）~~

四十六番　椎名　繭（しいな・まゆ）

四十七番　篠塚　弥生（しのづか・やよい）

四十八番　少年（しょうねん）

~~四十九番　新城　沙織（しんじょう・さおり）~~

五十番　スフィー（すふぃー）

~~五十一番　住井　護（すみい・まもる）~~

~~五十二番　ＨＭＸ－13型セリオ（せりお）~~

~~五十三番　千堂　和樹（せんどう・かずき）~~

~~五十四番　高倉　みどり（たかくら・みどり）~~

~~五十五番　高瀬　瑞希（たかせ・みずき）~~

~~五十六番　立川　郁美（たちかわ・いくみ）~~

~~五十七番　橘　敬介（たちばな・けいすけ）~~

~~五十八番　塚本　千紗（つかもと・ちさ）~~

~~五十九番　月島　拓也（つきしま・たくや）~~

~~六十番　月島　瑠璃子（つきしま・るりこ）~~

六十一番　月宮　あゆ（つきみや・あゆ）

~~六十二番　遠野　美凪（とおの・みなぎ）~~

~~六十三番　長岡　志保（ながおか・しほ）~~

六十四番　長瀬　祐介（ながせ・ゆうすけ）

~~六十五番　長森　瑞佳（ながもり・みずか）~~

六十六番　名倉　由依（なくら・ゆい）

~~六十七番　名倉　友里（なくら・ゆり）~~

六十八番　七瀬　彰（ななせ・あきら）

六十九番　七瀬　留美（ななせ・るみ）

~~七十番　芳賀　玲子（はが・れいこ）~~

~~七十一番　長谷部　彩（はせべ・あや）~~

~~七十二番　氷上　シュン（ひかみ・しゅん）~~

~~七十三番　雛山　理緒（ひなやま・りお）~~

~~七十四番　姫川　琴音（ひめかわ・ことね）~~

~~七十五番　広瀬　真希（ひろせ・まき）~~

~~七十六番　藤井　冬弥（ふじい・とうや）~~

~~七十七番　藤田　浩之（ふじた・ひろゆき）~~

~~七十八番　保科　智子（ほしな・ともこ）~~

七十九番　牧部　なつみ（まきべ・なつみ）

~~八十番　牧村　南（まきむら・みなみ）~~

~~八十一番　松原　葵（まつばら・あおい）~~

~~八十二番　ＨＭＸ－12型マルチ（まるち）~~

八十三番　三井寺　月代（みいでら・つくよ）

~~八十四番　御影　すばる（みかげ・すばる）~~

~~八十五番　美坂　香里（みさか・かおり）~~

~~八十六番　美坂　栞（みさか・しおり）~~

~~八十七番　みちる（みちる）~~

八十八番　観月　マナ（みづき・まな）

八十九番　御堂（みどう）

九十番　水瀬　秋子（みなせ・あきこ）

~~九十一番　水瀬　名雪（みなせ・なゆき）~~

九十二番　巳間　晴香（みま・はるか）

~~九十三番　巳間　良祐（みま・りょうすけ）~~

九十四番　宮内　レミィ（みやうち・れみぃ）

~~九十五番　宮田　健太郎（みやた・けんたろう）~~

~~九十六番　深山　雪見（みやま・ゆきみ）~~

~~九十七番　森川　由綺（もりかわ・ゆき）~~

~~九十八番　柳川　祐也（やながわ・ゆうや）~~

九十九番　柚木　詩子（ゆずき・しいこ）

~~百　　番　リアン（りあん）~~

葉鍵ロワイアル
舞台　地形図

地図制作：JOYH-TV

カバー、挿し絵：秋★枝

葉鍵ロワイアル

※この物語は巨大掲示板２ちゃんねるの葉鍵（Leaf&Key）板において創作されたリレー小説です。

※今回の単行本化にあたり、著者自身の手によって本文の表現やタイトルが改められた個所があります。
※ Web ページの原文を縦書きの単行本として出版するにあたり、最低限必要な改行等の改変を編集側で行わせていただきました。

450　潜入

「ねえ、ジュン？　こんなところに来てどーしたの？」
「まあ、黙って見てろって……へへ……」
ピィン！
「そら、開いたぜ」
「……？」
浩之と、あかりと……悲しみの再会を終えて——
我々、北川隊員とヘレン隊員はとある商店街のはずれへと足を運んだ。
ここに一軒の店がある。いわゆるスーパーマーケット。略してスーパーというやつだ。
入り口は固く閉じられていたが、この俺の手にかかれば針金でちょいちょい……だ。
いや、護直伝のやりかたをマネただけなんだけどな。あの頃の悪巧みがまさかこんなところで役に立つなんて皮肉なもんだぜ。
まあ、そんなこんなで——
「——我々はこのスーパーを占拠している」
「さっきから何ブツブツ言ってるデスカ？」
「いや、なんでもないなんでもないんだよ隊員二号」
「二号って何？　オイシイ？」
（力の一号の方がよかったか？）
とにもかくも、慎重に身を潜めつつここまでやってきた二人。随分と時間がかかってしまったが幸い誰にも会うことなく……（ある意味不幸だな）ここまでやってこれた。
「護がいればこんな作業屁でもねぇのになぁ」
貧乏くじを引いたさえない少年のような顔で北川は目的の物を探す。
「スーパーで探し物……もずくデスカ？　きっとたくさんあるヨ！」
「ちが〜う！　と、とにかくあたりには気を配って

くれ。こんなところで襲われたら一瞬でミンチになる」
「Ｏｈ！　ミンチ……ワタシタチ狩られてしまうデスか……その時は狩られる前に狩る方が効率的ネ」
もしもの時はやむを得まい。殺られるわけにはいかないのだ。
先の放送……死亡者リストは最多の十三人。北川の知り合いである水瀬名雪もその中に含まれていた。そして、レミィの大切な友人達も、だ。
――バイバイ……大切な、トモダチ……
レミィが見せたあの時の表情――今も忘れることはない。
忌まわしいゲームは今も続いている。今まで襲われたことのない二人はなんと幸運なことか。だが、これからもそう……とはとても言えない。
もしもの時は……生き残るために応戦することも考えねばならなかった。
現在の二人の武器は……水鉄砲一丁、もずく三パック、ノートパソコン。
(敵と出会ったときどうやってこの武器で戦う？考えろ、考えるんだ潤！)
北川は頭の中で、まだ見たこともないような異星人との戦いをシミュレートしてみた。

1．ハンサムな潤は突如起死回生の案をひらめく
2．仲間がきて助けてくれる
3．殺される。現実は非情である

(理想は相沢達と協力できれば――だから2なんだけどな……そう上手くはいかないよな……やっぱり1か……)
「ジュン……難しい顔してどうしたの？」
「もうすぐ俺、結婚するんスよ！」
「？」
「いや、すまん……ちょっと考え事をな……」
どんなに真面目に考えても、景色が赤く染まった

吐き気のするビジョンが脳裏に浮かんだ。
「ジュンはワタシが守るからラ大丈夫よ！」
そう言いながら刀をぶんぶんと振り回す。
「そ、その刀どこにあったんだ？」
「さっき拾ったバッグの中に入ってたヨ？」
「そ、そうか……」
すっかり失念していた。浩之のものと思われるバッグの中にいくつか身を守る武器が入ってたじゃないか。
北川は少しだけ安心したように息を吐いた。かといって銃器に対抗できるのか？　という危機感までは拭えないが。
「と、とにかく人の気配がしたら伝えてくれ……こんなスーパー誰も来ないとは思うけどな」
そう言いながら敷居に囲まれた売り場の一角へと足を運ぶ。
「ここに……なにがあるの？」
「やっぱ泥棒にみえるか？　まあ見てろって……」

この建物はスーパーの外観をしていたが中身はがらんどうだった。棚だけあって売り物はほとんど無い。映画のセットのような粗雑な作りである。
北川は、鞄からノートパソコンを取り出して、電源プラグをコンセントに挿した。
「……よし、電気は来てるみたいだな。これならなんとかなりそうだ」
ＰＣを立ち上げると、見慣れたＯＳの起動画面が画面に表示されてほっとする。これなら扱える。パスワードは掛かっていなかった。
起動後の画面には特に変わったアイコンは無さそうだった。
早速、¼と書かれたＣＤをソケットに入れて少し待つ。
「あー、やっぱりプロテクトが何重にもかけられてるな……へへ、腕がなるぜ……レミィ！　懐中電灯とってくれ！」
「イエッサー！」

暗闇の中、小さな明かりが点る。
怪しげな文字の羅列が下から上へと一気に流れていく。
その後、カタカタとキーボードを打ちこみながら北川は得意そうに鼻を鳴らした。
「何してるノ？」
「解析……わかるか？」
「サッパリです……」
「本当なら護の得意分野だ……って俺この手の分野で護より得意なものってあったっけな……」
そう言いながらもキーボードを打つ手は止まらない。
「ネット環境が整ってりゃあハックもできそうなんだけどな……こりゃあ骨が折れそうだ。なんちゅう厳重なプロテクトだ……よほど大事なものなんだろうな。しかも、解析に入るとウイルスまで侵入するようになってやがる……駆除駆除と……う～ん、神奈備命？　……何だそれ？　さっぱり分からん……ああっ、やっぱ駄目だ……護がいればなぁ……」
徐々に落胆の色が宿る。
「……？　……サッパリです……」
「結局ＣＤを全部集めなきゃ駄目ってことだ。それにマザーシステムみたいな所で使わないと意味がない」
「……？」
「これの他にＣＤが必要ってことだ。一枚は無記入だけど……1/4、2/4ってなってるだろ？　他にも……最低二枚はあるってことだ。それがこの島にあるかどうかはわからないけど」
解析は成功であって失敗。
「昔、護――俺の従兄弟が言ってたことなんだが『俺にかかれば断片化された情報を並べなおして複製するなんてたやすいぜっ！』ってな。マネして残りのＣＤの複製を作ろうとしたんだが失敗……というかとてもじゃないが、できるもんじゃない。うかつに偽物を使おうものならこの島ごとドッカン……

だ」
「爆発するですか……」
「それに全部集めないと完全解析不可能ときている。たとえ護でも無理だ。だからやっぱり他のＣＤを探す必要がある……最低内容……ＣＤの意味を理解するには¾、4/4のＣＤが欲しいところだ」
　おそらくＣＤの総数は北川の持つＣＤを入れて合計五枚か六枚になるのだろう。
　だが、残りのＣＤがこの島に存在しているかどうかは定かではない。最悪の事態も考えられる。
　例えばたった一枚だけでも敵が持っていたとしたら……
「というか、そう考えるのが自然……だよなぁ……」
　ここに三枚あるということはあと何枚か参加者がもっていたとしても不思議じゃない。
　だが、これが本当に大事なものだとしたら、すべてを参加者に渡すとは考えられない。
最低一枚は敵が持っていると考えるのが普通だ。
「とりあえず大事なＣＤってことが確信できただけでもいいか……」
　複雑に暗号化されたＣＤの中身。
　すべてを集めて調べればそれが分かるかもしれない。
（前途多難だけどな……一歩前進だ）
　とりあえずＣＤを集めさえすれば解析可能なノートパソコンに変化しただけでもＯＫとしよう。
　――ＣＤがおかあさんといっしょでなかったのは残念だけどな。
　北川は強くそう思った。
「ジューン、おまたせーーっ！」
「どこ行ってたんだレミィ・クリストファー・ヘレン・ミヤウチ」
　尋問するように言葉を吐く。
「食品売り場で新鮮な食料を手に入れて来たのヨ！」

「おお、でかしたっ！　腹がへっては戦はできぬとはよく言ったものよ……ささ、近う寄れ。……で、ゲットした新鮮な食料とはっ⁉」
「もずくよもずく！　一パック五十八円のもずくが全部タダよ！　嬉しいねハッピーね、タダで買い物なんて奥さん買い物ジョーズね！　ほめてほめて！」
「もずく……」
胃の中のもずく達がやんややんやと騒ぎ出す……
（まあまあ、慌てるなってもずく。もうすぐおまえ達の仲間が増えるからな、喜べ）
なんとなく薄れゆく意識の中、北川はふと、そう思った。

451　導かぬ灯台

荒波の打ち寄せる、島の北端。その絵に描いたように峻険な崖の上には、ただひとつ屹立する、白い灯台があった。
いや、それを灯台と言っていいのかは疑問が残る。なぜならば、その灯台は何者も導かないからだ。
一見すると確かに灯台なのだが、照明の代わりに回転するのはレーダーであり、発するのは誘導光ではなく、地対空ミサイルだ。強いて誰かを導くというのならば、死へと導くのみである。
かつて高槻が――どの高槻かは解らないが、全員が自分だと思っている以上、オリジナル寄りの高槻のどれかが――最初にこの島に作った施設であり、組織の方針で現在は放棄されているはずの、この「導かぬ灯台」の地下管制室にて、三つの同じ声が言葉を交わしていた。
「そっちはどうだ？」
「随分高度があるから難儀したが……漸く捕捉したよ」
「……やるか？」
三人の視線の先に、光点が一つ。

遥か上空にある、監視者たちの航空機を示すそれを中央に据えて、同じ顔が不気味にほくそえむ。
「今ならまだ、ＥＬＰＯＤはドックから出ていない可能性が高い。潜水艦で脱出するには、最適のチャンスではあるな」
「爺どもを撃ち落とし、俺達は脱出する。確かに悪くない。……だが島の連中をそのままにしていくのは、いささか気に喰わんな」
そんなものは些事だ、オリジナルの高槻ならばそう判断したかもしれない。しかし、強く醜い感情だけが、複製を繰り返すうちに際立っていったのだろう。三人は一様に頷いた。
「確かに、そもそもの元凶は、連中がロクに踊らなかったせいだからな」
「少なくとも里村を倒し、連中の誰よりも優秀である事を爺どもに見せつけねば、どうにも気が収まらんな」
「そして直後に爺どもすら打ち落とし、俺達が最も優秀である事を、組織の下っ端どもに見せつけてやれば、大手を振って帰れるというものだ」
明らかに反省の無さと自己顕示欲、虚栄心の強さを窺わせる発言だが、やはり全員が同時に頷く。
「俺達三人の能力はほぼ同等だ。恐らく里村に殺られたクズどもより、はるかに優れているだろう」
「そして無線を使えば、連携は完璧になる」
なんの根拠も無い予測と裏腹に、間違いなく有効であろう、マイクとヘッドホンが一体になった無線機を配る。
「更に言えば、俺にはこれがある」
一人が手に持ったそれは、水瀬秋子が持つものと同じレーダーであった。
今は、何も映っていない。ここにいる高槻達は、発信機を保持していないからだ。たとえ彼らが何者かの位置を知る事があっても、他人に位置を知られる事は無い。
「俺達の優位は、絶対だ」

「俺達は無敵だ」
「クズどもに死をッ！」
「爺どもに死をッ！」
「「死をッ！」」
導かぬ灯台の隠し扉を抜け再び地上に現れた三人は、自らの発言と能力に酔っていた。怪しく光る眼光は、まさしく狂者のそれであった。
神を信じず。
人を信じず。
ただ自らのみを信じて、三匹の狂犬は、その濁った瞳をぎらつかせていた。

452　朱の鳥が鳴く頃に　～少年～

「……ここかな？」
少年は蝉丸たちと別れたあと、彼らが来た方向を逆に辿り続けていた。もちろんその道筋が正確である保証などはどこにも無かったが、幸運にも少年はそれらしきものを見つけるに至った。
「しかし………、ねえ」
腕組みをして、足をちょこんと交差して、少年は思わず首をかしげてそう呟いた。地下の駆動音とやらは微妙にも聞こえてこなかったからだ。だが、そこに対しての好奇心は尽きない。確かにもし秘密基地のようなものがあるとすれば、そこは非常に妥当な気がしてならなかった。――埋まっているのだ、その建物のようなものは。
「直接地下に建造したのか。それにしたってこんな風に不自然に地面に出っ張っているというのは釈然としないな。……しかしこれなら、確かに秘密基地というのも意外と的を射ているかもしれない」
その場所は島の北部、スタート地点のホールから割と近い場所にあった。もちろん、その配置がどのような意味を持っていようかなど、少年には考え付くはずも無かった。ぼうっと立っていても仕方が無いので、少年はとりあえずその周辺を散策してみた。

すると幾分もしないうちに〝それ〟は見つかってしまった。
「……ここから入れそうだ。まさか、入り口だなんてことは無い……よね？」
　少年は再び面食らったような表情をした。何回かまぶたをパチパチと開け閉めして、目の前にあるものが本物であることを確かめた。なんというか、それはまるで地下鉄の構内への入り口を模したかのような姿をしていた。ただ一点、不自然に床から土に埋まって、本来あるはずだったかもしれない空間を小さく小さく塞いでることを除いて。
「狭い……けど、ここしかないか」
　諦めたような顔で少年は息を吐いた。光が届かない闇の向こう側に、何か希望があるというのなら、それは飛び込む価値があるというものだ。意を決して少年はまず地面にうつぶせになる。しゃがんだ程度ではとてもじゃないが入ることの出来ないほど隙間は低い。まず頭をそっと通し、続いて左肩を前に出してみる。――大丈夫、いけそうだ。一旦立ち上がって鞄を近くに置き捨てると、少年は本を片手にそこに侵入を始めた。
　地面代わりに空間を埋め尽くした土の感触は、ひんやりとしてどこか気持ちよかった。もしここにいるのが他の誰かだったら、その不自然な暗闇と土に不気味な恐怖を覚えていたかもしれない。しかし少年にはそれがどこか懐かしく、安心を覚えるようなそんな不思議な光景に感じた。はいずったままの前進を続ける中で、段々と空間が広がっていることに気づいたのも束の間、閉ざされた視界は不意に一気に広がった。
「うっ、うわあああああ!!」
　どしゃっ、と盛大な音を立てて、終端の土だまりとともに少年は落下した。多少高度が下がっていたとはいえ、まだ高さは十分にあった。なんとか受身は取れたが、いきなりのことに少年は驚いていた。高さは十分にあることを確認して恐る恐る立ち上が

るも、足元に落としていた本につまづいて膝をつくくらいに動揺が現れていた。
　そこもまた、闇に閉ざされた空間だった。外からの光はこれまでの細い通路に阻まれているし、中には光源らしきものが見当たらない。迂闊には動けなかった。少年はとりあえずその場に息を潜めた。随分と埃っぽい部屋だと一瞬思ったが、その原因は自分が落下してきたことだと気づいて嘆息した。ああ僕に梟の目があればなぁ、なんて思ってもしょうがないが、思わずにはどうもいられなかった。無駄に力ばかりあるよりは、そういうものの方が何かと役立つ気がした。
「……ハズレだったかな」
　少年はぼそっと呟く。呟いたところで何も変わらないことは重々分かっている。それでも、何らかの情報が手に入るかと少なからず期待していただけに、それなりに落胆した。
　無音の時間は続いた。どれだけの時間が経ったのかもう分からなくなっていた。規則的に続く自身の呼吸が余計に自分を惑わした。いつかもこんなことがあっただろうか。何も無いところで只管（ひたすら）に闇を見続けた、孤独だけを同居人にずっと座り込んでいた……そんな頃が。少年は感触を頼りに拾い上げた本をそっと頬に押し当てた。土と同じくらいには冷たかった。
　いつしか闇になれた目が、まるで突貫作業で開けられたかのごとき不自然な通路を見出した。目標を見つけた少年はすぐさま立ち上がり、そのままそこを前進した。屋根の低い通路だったが、進むごとに地面が微妙に高くなっていくことはすぐに分かった。そうして扉にぶち当たった。罠の可能性が頭をよぎったが、意を決して少年は扉に手をかけ、引いた。
ギ……ギイイイィィィィ……。
　さびた蝶番が耳障りな音を響かせる。密閉されたはずのここではありえない不自然な反響に、少年は肩を震わせた。扉の先には空間が広がっていた。岩

盤を直接くりぬいて出来たのか、それとも最初からそのような空洞があったのか、それは分からない。少年の震えは依然止まらない。それは潰えたかも知れなかった希望がひょっこりと顔を出したから。そう、少年の耳は遠くかすかに聞こえる駆動音を捉えていた。

453　朱の鳥が鳴く頃に　～郁未～

数刻の休憩を経て再び郁未は歩き出した。見た目はひどくぼろぼろだが、歩けないほど体力気力が激減しているわけではなかった。ただ一つ心配があるとすれば、さっきの休憩でとうとう食料が尽きてしまったということだ。せめて歩けるうちに食料が見つかるといい、と彼女は思った。まだ辺りは暗い。時計なんて持っていないが、朝が始まっていないことはっきりしていた。少年は……どこまで行ってしまったんだろう？　先の見えない不安に心を震わせながら、長い長い森を彼女は黙々と歩き続けた。

暗い視界が続く。だが、ある時ある場所で郁未はあるものに目を留めた——と言うより留めさせられた。鞄だ。食料が残っている可能性に胸を躍らせて郁未は鞄を漁ろうとする。そこに一瞬の逡巡。そして、すぐに分かった。

「……このにおい」

あの懐かしい同居人の匂い。すぐさま辺りを見回すも、それに応える者はいない。無音だった。風の揺らぎも、木々のざわめきすらも無い。……郁未はゆっくりと、仄かな期待に緩んでしまった頬を下げていった。

「どこに、いるの」

呟いて、俯く。郁未は途方に暮れていた。不可視の残滓に混じった懐かしさがどうしようもなく胸に堪えた。寂しさには慣れていたはずなのに、それは単なる思い込みだったのかも知れないと弱気になる。鞄に手をつけるのは止めた。多分彼は許してくれる

だろうけど、もしそうしたことがばれたら、私はひどく恥ずかしい思いをするに違いない、そう思ったから。せむかたなくなって不意に立ち上がる。なんとなく気持ちが落ち着いてしまって、これ以上歩く気にはなれなかった。手近な木に寄りかかって、遅い睡眠をとることにする。これからあと何回眠ることができるだろう、おぼろげにそんなことを想像してみたが何の感慨も浮かばなかった。眠りには予想より早く落ちた。

夢は、見なかった。

……まぶしい。なんだろう、これは？

薄く目を開くと光が差し込んでくる。そう、太陽がもう昇っている。二、三度瞬きを繰り返してその異常に気づく。光が遮られている。陽光の元に、黒い影を纏った誰かがいる。いや、その人は影になっていなくても、最初から黒を纏っていた。彼が私に気づく。そして振り向いて、まるで日常の繰り返しを演じるかのように——

「おはよう、郁未」

——朝焼けのさわやかさを、変わらないその微笑みに乗せて、少年は言った。淡く光を照り返す銀髪も、体を包む黒い衣装も、全身に紅い雫を散らして。

454 いろんな意味で負けるな御堂！

雑木林の小さなくぼみ……それは自然の塹壕であった。

「なんで……なんで入らないのよぉ……ふみゅ～ん」

大庭詠美（十一番）はそんな寝言を言いながら二匹の騎士と共にすやすやと眠っていた。それを眺めていた御堂（八十九番）は呆れ顔で彼女の握りしめているマガジンを取り上げた。

「ったく、世話が焼けるぜ……」

ボヤきながら紙箱に詰まった弾丸を手に取り、マガジンに手際よく装填した。
「ホレ、いっちょあがりだ」
弾を入れ終えたマガジンを、そっと詠美の手元へ戻した。
「う、ん……」
詠美はそんな事には気付かず、熟睡している。
今まで、ワガママばかりわめき散らしている詠美しか見た事が無かった御堂には、彼女の寝顔が新鮮に見えた。
「しっかし、こいつ……黙ってりゃあ結構可愛いじゃねぇか……」
つい、彼女の表情を凝視してしまう。ショートパンツからフトモモがちらりと見えて実に艶めかしい。意識して見た事が無かったが、胸もふくらんでいる。
「う……」
不覚にも欲望がムラムラと湧き上がってきた。無理もない。健康な男であったら誰もが感じる感情である。
しかし、御堂は動揺していた。そんなことは己のプライドが許さなかったのだ。
(落ち着け！　落ち着くんだ御堂！　たかが小娘に何を欲情してんだ⁉　変態か⁉)
しかし、心とは裏腹に、視線は無防備な少女へ注がれている。見れば見るほど魅力的な肢体だ。
(いかん！　雑念を払え！　雑念を……そうだ、作戦だ！　これからの作戦を考えるんだ！　まず、フトモモ……違う！　か、柏木とかいう女を探すんだ！　それから……岩山へ行って……あのスカした眼鏡の白衣野郎をぶっ潰してやる！　……って、柏木って何処にいるんだ？　……情報……まずは情報を得るのが先決だな！　情報、情報、情熱……情事……)
「んんっ……ふぅ……」
タイミング良く、詠美の口からセクシーな声が漏れる。

つぅ……
と、同時に御堂の鼻からも鼻血が滴る。
「いかん！　いかんいかんいかんいかんいかーーーーん!!」
バチーン!!　バチーン！　バチーン！
野獣は己の頬に喝をいれ、ようやく落ち着いた。
彼は気付いていなかったが、彼の骨折は大声が出せるまでに癒えていた。
「ん……あっ、朝だぁ」
朝日を見据えて、詠美がつぶやく。
「やっと目醒ましやがったか……ったく、どれだけ俺が我慢したと思ってやがんだ」
「へ？　アンタ、何をガマンしたの？」
「し、知るか！　こっち見るな!!」
御堂は慌ててそっぽを向いた。
「何よぉ、変な奴ぅ〜……あぁっ！　ちょっと見て見て！　いつの間にか弾が入ってる！」
彼女はそう言うと、御堂が弾丸を補充したマガジンをブンブン振りながらはしゃいだ。
「寝てる間に出来ちゃうなんて、あたしってやっぱり天才？　ホラホラァ、アンタも見習いなさいよっ！」
「……詠美、お前……ずっと寝てろ」
「ちょっと、それってどういう意味ぃ？」
「そのまんまの意味だ。ハァ……一瞬でも欲情した俺が馬鹿だったよ」
「浴場？　お風呂に入ったの？」
「もう知らん」
朝食は『サバの味噌煮』缶詰だ。
御堂はいつものナイフで二人十二匹分の缶の封を切る。
「ねぇ、毎回魚なんて、飽きない？」
「しょうがねぇだろ、これしか無えんだから」
我慢しろ、といった態度で御堂が答える。しかしワガママ詠美も食い下がる。
「あるじゃない、ホラ♪」
と、詠美の視線の先には……『白桃』通称・風邪

の特効薬である。
「これは昼の分だ、今はダメだ」
「ヤダ。今食べたいの！」
「これ食ったらお前の昼飯が無くなるんだぞ？　分かってんのか？」
「いいのっ！　こみパの女帝はそんな小さいことなんか気にもとめないのよ！」
「はいはい、分かった、分かりましたよ」
根負けした御堂は詠美の指示通り、桃缶を開けた。
「ほらよお姫様」
「うふふふふふ……これよこれっ！」
嬉しそうに桃缶を眺める詠美。
しかし、そんな緩やかな朝の空気は一瞬にして凍りついた。異変にいち早く気付いたのはぴろとポテトであった。
「にゃにゃ？」
「ぴこぴこっ!?」
動物達の野性の直感が危険だと知らせたのだ。

「!!」
続いて御堂も、迫り来るとてつもない威圧感を感じ取り、体全体に悪寒が走った。
「いっただきま――――」
「伏せろ！」
がばっ！
「ちょっ――――もがっ!?」
とっさに御堂は詠美の頭を押さえつけ、口を塞ぐ。
桃缶は地に落ち、土が果肉にへばり付く。
「あたしの桃缶……」
「シッ！　声を出すな！　……かなりヤバいのがおいでなすったぜ……」
「あたしの桃缶……」
ザッ！　ザッ！　ザッ！　ザッ！
そこへ現れたのは背中に愛娘の亡骸を背負った水瀬秋子（九十番）であった。

桃缶　死亡
【残り一つ】

455　大いなる誤解

ばさばさばさ……。
　羽音を響かせ、白鳩が頭上を越えて行く。一見すると爽やかそうなイメージを感じさせ、明るさを増していく空をバックにして、鳩が飛び去っていく。
詩子は鳩を見送りながら、しょぼつく目を瞬きし、ほぐしていた。
(……衰えたものね)
　まるで手練の職人が嘆くように、首を振り振り考える。
(茜ある所に詩子ちゃんあり、と言われたあたしとした事が……)
　ちなみに、実際言ったのは本人であって、誰かに言われたわけではない。
　見晴台で発見したものの、詩子は茜に遭遇する事ができなかった。さんざん彷徨った挙句に、どうにか掴みかけた尻尾を離してしまっていたようだった。
(どうにも釈然としないわ……ひょっとして、あたしが茜を発見する能力って封印されちゃってるのかしら？)
　しまいに自分を超能力者扱いしはじめる詩子だったが、それでも諦めずに探索を続けている。基本的に、茜が無意味に悪路を選ぶ可能性は低い。何かの障害でもない限り、てくてくと平地を歩いていくのが彼女らしい、そう判断して駆けずり回ったのだが……発見できなかった。
　ある程度移動し、手ごろな木を発見しては登ってみる。周辺を見渡して見当をつけ、再度走る。
　それを、もう何度繰り返しただろうか？
(ったく、猿じゃないんだから……)
　十数本目になるであろう木に登りながら詩子はぼやく。
　しかし、今回は当たりだった。その視界の中、遥

か遠くに求めるものを発見したのだ。木々の割れ目の更に先、わずかに姿を現した小さな建物——ステンドグラスの窓と、鐘がある——すなわち教会に吸い寄せられるように歩いていく、亜麻色の髪をした少女を。
教会で休憩でもするのだろうか？　今駆け出せば、きっと追いつけるはず。そう自分を励まして、詩子は木から飛び降りた。会ってそれからどうする、というビジョンは全くなかった。
それでも、会わなければ何も始まらないから。詩子は躊躇うことなく木々を抜け、颯爽と駆けて行った。
(茜ある所に詩子ちゃんあり、よ)

「はあー……」
祐一が盛大に溜息をついたのは、疲労のためもあるのだが、むしろ安心したためであった。いろいろ勝手な予測はしていたものの、繭の変身前（？）は祐一の予測を遥かに上回る、見事なまでの子供っぷりで手を焼かせた。
叫ぶ、泣く、うろつく、何を言ってるんだか意味不明。嬉しい時も悲しい時も、怒れる時もみゅーみゅー叫ぶのである。
そして久々に静かになったと思えば……寝てしまっていた。変身後（？）は変身前の記憶があったようなのだが、変身が解けると変身中の記憶は役に立たないのだろうか、祐一に懐くのさえ時間を要した。……変身中も懐いていた、という表現は相応しくなかったが。
(このクソガキが！)
無理矢理きのこを食わせようと試みて、ものの見事にがぶりと噛まれたあとを苦々しく見つめ、考える。
正直言って、今の状態は危険だ。危険を危険と認識しない人間が、安全でいられるわけがない。いく

ら噛まれようと、やはりきのこを食わせない事には、お互いの命に関わる。
（いっそ、今のうちに食わせちまうか……）
そんなことを考えていた祐一のシャツを、繭がぎゅっと掴んで引っ張る。
「みゅー……さみしいよ……」
夢でも見てるのだろうか、苦しそうに悲しそうに顔を歪める。
「繭……」
思わず怒りを解いて、繭の髪を整えてやる祐一。
「こーへー、七瀬のおねえちゃん……」
悪夢だろうか？　うなされている。見ていて心配になるほど、辛そうだ。反転して以来、保護者意識が芽生えたのか、祐一はうなされている繭の頭を撫でながら、じっと見守る。
「みゅー……」
「あー、もう、仕方ねえ奴だな」
シャツがのびのびになってきたが、諦めと共に許していた。こっちのほうが可愛げあるかもな、などと蹴られそうな感想を漏らし、ひとり苦笑する。
そして――好きにしろ、と思った瞬間を見計らうように。繭は叫び、掴んだ手をぐっと握りなおした。
「みゅーーーーー！」
「痛てててててて！　肉を掴むな！　肉を！」
すぱーん、と。頭をはたく音と、二人の絶叫が鳴り響く。
「こんのクソガキが！」
「みゅーーーーーーーーーーーーー!!」

ふ……と目を開ける。無意識のフィルタを透して、声が聞こえる。ばさばさと、藍色の空を白い何かが切り裂いていく。
（あれ……？）
なつみは、寝てしまっていた。ひとり身を潜め、いつ来るとも知れぬ仇を待ち続けるうちに緊張は萎

え、その身を沈めんばかりに溢れた疲労の毒沼に、どっぷりと身を沈めていたのだろう。
　待ち伏せを狙ったために、発見されにくい場所に潜んでいたのは、この上なく幸いだった。この不注意な休息のおかげで、頭はまだ霞がかかったようだが、身体はスッキリしている。
　彼女はぷるぷると首を振り、意識を強引に覚醒させた。
（そうだ、今の声。あれはなんだろう？）
トカレフを片手に、くるりと振り返ると。
泣き喚く少女が突進してきていた。
「みゅーーーー！　やだよー！」
「待ちやがれクソガキ！」
　年端も行かぬ少女を、怒りの表情で追いかける少年が、すぐ後から迫っていた。
　まるで満員電車の中で痴漢扱いされた、冴えないサラリーマンとキレた女子中学生のような、ここで引いたらあとがないとでもいうような、切羽詰った印象を受ける二人。
「な!?　ととと、止まりなさいっ！」
　混乱したなつみは、事態を収めるために銃を構え、慌てて立ち上がるが――遅かった。
「うわわっ！　みゅー！」
「きゃあっ！」
　驚いた少女は、そのままなつみに突っ込んでしまったのである。
「うお！」
　踏みとどまった少年が、一番早く状況を理解した。
「済まん！　俺達は誰かを傷つけようって意志はないんだ！　とにかく、そのガキを捕まえてくれ！　そいつ自身の命に関わるんだ！　頼む！」
「え？　え？　ええ？」
　混乱の中の命令は、全てに優先される場合が、ままある。なつみはもつれ合いながらも、どうにか少女を捕獲する事に成功した。
「はあー……」

再び安堵のためいきをつく祐一。彼はなつみの視線に気が付くと、武器を――見かけは水鉄砲なのだが――置いて両手を上げ、事ここにいたった概要を説明する。
「俺は相沢祐一。そいつは椎名繭。二人して女の子を探してるんだが、ちょっとした心の問題で、朝から激しくマラソンするはめになったんだ」
なつみは心の問題って何よ、と思ったが、みゅーみゅー喚いてもがく少女を見ると、なんとなく理解できたような気がした。理解の光を感じた祐一は、更に言葉を重ねる。
「鞄を開けて、きのこを……いや、薬みたいなもんなんだが……食わせてもいいか？」
「構わないけど……嫌がってるみたいじゃない。ホントにまともな薬？　じゃなくてきのこ？　なの？　それともいまの、笑うところ？」
「いや……これ以上ないくらい真剣だ。そんで全然まともじゃないんだが……ああくそ、説明すると長くなるが、やっぱり暴れて危険なんだ。だから絶対に、その手を離さないでいてくれるか？」
だから絶対に、その手をはなさないで。
組み合わせによっては、ちょっと艶のある美しい台詞だったが、少しも納得のいく説明にはなっていなかった。しかし彼の真摯な態度だけは、なつみをもってしても疑う余地がなく、ただうなずくことしか出来なかった。

規則正しい呼吸と共に、幾千本の木々を背後に流しただろう。詩子は目指す道のりの、半分以上を走破していた。自らの健脚に、ときどきちょっと惚れ惚れしてみたり、あともうひと頑張りね、と自分を励ましたりしながら、速度を上げようとしたその時。人の気配を感じて、立ち止まった。
(ちゃ、ちゃんと押さえててくれよ！)
(そんなに簡単に言わないでよ、暴れて大変なんだ

から！）
（みゅ、みゅーーー!!）
話す声からすると、どうやら三人だ。男一人に、女が二人。年上の女が、年下の女の子を押さえつけているらしい。
そして男の声は――祐一だろうか？
なんだか穏やかでない会話に眉をひそめ、耳を澄ます詩子。
（ジジー）
ファスナーの音。
ええ!?　と詩子は身を硬くする。
（だ、出すぞ！　しっかり押さえてろよ！）
（解ってるから！　早くやっちゃってよ！）
（やだ、いやだよ、みゅー！）
ちょ、ちょ、ちょっとちょっと！　何やってんのよ祐一!?
詩子は顔を赤らめて、柄にもなく動揺した。
（きのこを食わせるだけだ、暴れるんじゃねえってのー！）
（みゅー！　やだよ、おいしくないんだもん！）
（早くしてってば！）
き……きのこってアンタ……詩子の頭の中は、真っ白になっていった。いや若干キノコ模様だったが。
（口を開け！　突っ込んじまえば何とかなる！）
（う、うん、噛まれないように、気をつけて！）
（みゅ、みゅーーーー！）
……認めたくない。
確かに祐一は、とんでもなくロクデナシかもしれない。それでも、こんな事をする奴だとは思えなかった。思えなかったが――放ってはおけない。
決意を胸に、詩子はたっぷり助走をつけ、声のする方へ向かって跳躍し、叫んだ。
「この、ド外道がァーーーーーーーーーーー!!」
強烈無比な、詩子ちゃんキック。それは狙い違わず、祐一の後頭部に炸裂した。
――大いなる、誤解と共に。

「……迷惑、かけたわね」
後頭部にこさえた巨大なタンコブから盛大に湯気を出して、ずっぽりと地面に顔を埋めている祐一に向かい、怜悧な声が放たれる。少しだけ顔が赤いのだが、祐一以外には判別できないだろう。
なつみと詩子は、ぽかんと口を開けて放心していた。
『え、えーと……』
一瞬、静寂が一帯を支配する。
そんな中でむくり、とゾンビのように祐一は起き上がり、怒りに燃える目で詩子を睨みつける。そして後頭部から、しゅうしゅうと湯気を立てたまま、重々しく口を開く。
「……で、どういう了見なんだ？」
その声を聞き、跳ねるように詩子は答える。
「そ、そうよ！　茜よ！　今なら追いつくわ！　走るのよ！」
追及を避けるためだろうか、必要以上に慌てて、詩子はまくしたてた。
「な、なに？」
「なんですって!?」
驚く二人を制して、詩子が畳み掛ける。
「いいから！　早く！　とにかく走るのよ！」
詩子が真っ先に駆け出し、それを追うように祐一と繭が走る。少し離れて、なつみも駆け出した。釣られるように遅れて駆け出したその一人が、三人と相反する意志を暗く胸に秘めているなどと考える者は、一人として存在しなかった。
何故ならば。本人ですら、その名に仇を重ねる事はなかったのだから。

456　幕間

「(･∀･)……」
闘いは接近しての乱打戦へと移った。私は蝉丸の一挙手一投足から目を離すことが出来ないでいた。

そう、なんというか……あまりこの島っぽくない戦いに私は浸っていた。なんとなくこういうノリは性に合うのだ。

「(・∀・)……」

……おかしい。なにかおかしい、と言うか強すぎ⁉　なんで蝉丸の相手してあんなに優位っぽいの？　うちのおじいちゃんと同じくらいの歳に見えるのに。ぜんぜん、ぜんぜん……。こんなに違うものなのかなぁ……。蝉丸すっごく強いのに、なんだかちょっと押され気味。御堂さんや光岡さんと戦ったときみたいだ……。やっぱり剣を使った戦いのほうが得意なのかな、蝉丸……？

　月代は無言で騒ぎ立てる。

　ふと、両腕にずっしり重い感触を残す日本刀に目を移す。長くて、それでいて切れ味が良さそう。思わず鞘から刃を出してみる。ぎらりと光を照り返す。綺麗……。だけどそれはあまりにも危うすぎる美しさで……。剣を握る。目の前に闘う者が二人いる。無防備な背中が見える。剣を鞘から抜く。重い、でも両手で抱えればどうにかなる。重さに任せてそれを振り下ろす。剣は見事にその人の背中を切り裂く。一体それは蝉丸か老人かは分からぬままに……

　――ハッ？　い、意識があっちの世界に逝ってたみたい……。ブルブルブルブル！　頭を思いっきり振った。一瞬取り付かれた思考は、ずいぶんと物騒なものだった。……正直、恐かった。

　闘いに目を戻す。今目にしている光景が、不思議とやたら親しげに感じる。殴り合いなんて野蛮だと思う。でも、これはそんなところの話じゃなくて……。私を、何故か熱くする。生臭いはずの血の匂いが嫌じゃない。単なる命の奪い合いでない、高い次元で互いの技と力をかけて凌ぎあう、その闘いの為に為される闘いの純粋さに、私は心を奪われていた。闘いの中に身を置く者の喜びみたいなものが、その波動が、私にも伝わってきているような気がした。

私の目に映った彼らの表情は、苦しそうでもあり、恐そうでもあり、だが同時に満足気で、そして輝いて見えた。

457　天を衝く剛拳

眼球を突き刺す陽光が闘いに華を添えていた。その凝縮された輝きは、まさに俺たちのこの瞬間の姿そのものだったはずだ。たとえ一瞬だとしても、空を駆け抜ける一筋の流れ星のように。

「フンッッ！」

鋭い呼気とともに繰り出された老人の正拳を外手刀で受け流す。だが次の瞬間、老人は反対の腕で掌底突きを放つ。俺の顎を狙って突き上げだ。掠っただけでも脳に衝撃が来かねない。俺は寸前に交差法気味にしゃがみ込む。体勢は悪くない。重心をより低く落とし、そこから老人の腹を目掛けてそのまま乱打を見舞う。一発……二発……三発。バシバシバシイイィッッ！　老人の強靭な腹筋を痛めつける。だが攻撃されっぱなしの老人でもなかった。バスンッッ!!　しゃがみこんで小さくなっていた俺の体を、老人の蹴りが一気に吹き飛ばす。今度は老人も追撃に余念がない。そこから俺に向けてすかさず後ろ蹴りを出す。俺にも痛がっている余裕は無い。一時的な無呼吸運動。すぐにヘッドスプリングで後方に跳びずさり、そこから大振りの回し蹴りを老人のがら空きの背中に放つ。

当たった、だがまた点をずらされる。頚椎を狙ったはずがうまくいかなかった。これでは見た目どおりのダメージは期待できないだろう。そこから再びの接近。老人の体躯はなるほど巨体だが、その分懐も大きい。要するに常人より入りやすいのだ、そこに。もっとも老人とてただの人間ではない。広い分という訳でもないだろうが、彼の間合い自体も広い。研ぎ澄まされたセンサーが俺の攻撃に即座に反応する。後の先を取る事が出来る範囲がとにかく広い。

だからそれを無効化するためにはひたすら接近するより他に無い。
一分が永遠に思えるほど長く感じるなんてことは戦闘において珍しくない。どれだけの数の拳打掌打を叩き込んだのか。打っても打っても老人は堪えない。まさに化け物だ。特異能力を使われたわけではないが、まさに強化兵顔負けの戦闘能力だ。本当の有効打に成り得そうだったものは全て防ぐか避けられ、常にカウンターを狙っている。この次元の闘い、一発の有効打が致命傷になる。手数を並べる戦法は所詮虚実の虚に過ぎなかった。
間合いに入ると同時に、左フックを仕掛ける。フッ！　という鋭い呼気が老人の口から漏れる。奴は俺の左フックに左の肘で合わせてきた。老人の振りの方が速い！　拳を粉砕される恐怖に今度は俺が自ら点をずらす。だが老人はその動きすら利用してそこから即座に横蹴りへとつなぐ。
「くあっ!?」
それは俺の顎にヒットした。結構な勢いで吹き飛ばされる！　だが俺もただでは倒れられない。衝撃の瞬間に老人の脛を爪先で打った。
「ぐっ!?」
盛大な音を立てて地に叩き伏せられる。それを尻目に老人の姿を見つめる。予想通り、痛みだけは十分だったようだと、一瞬の空中で俺は思った。攻撃に集中していたせいで受身を取る余裕も無く、あえなく俺は土の地面に擦り付けられた。凄まじい摩擦が生じる。土が焼け、皮膚もまた焼ける。……それはどこか懐かしい、戦場の匂い。
俺は立ち上がる。そしてもう何度目か——回数など忘れた——になるが、再び構えを取り直す。俺の本気の証明、前羽の構え。今更、守備一辺倒なことを狙いにしているのでは無い。これは溜めだ。全力の一撃への布石だ。一方、老人は武蔵坊弁慶よろしく仁王立ちをしている。気が高まっていく。渾身の一撃が次の時に放たれる。そんなことが予感として

分かった。研ぎ澄まされていく感覚、強化兵の業として、日中ではその力を十二分に発揮できない。それなのに自分の何かがさらに高まっていく。精神か、それとも肉体か。武人の血が仙命樹のそれをも凌駕したというのか？　俺は笑う。誰にも分からないほどに、微かに笑う。

沈黙。

「でりゃああぁぁぁぁぁ!!」

老人が飛んだ！　必殺の飛び蹴り、最初の時に放たれたそれとは勢いも気迫も威力も段違いだ。まるで大地を二つに割りかねない、それほどまでの威圧。避ける？　そんなことは考えない。それは所詮その場凌ぎの案だ。今この瞬間に俺が取るべき手段、それは――。

蝉丸は完全な左半身になり、全ての関節に溜めを作った。――奇しくも、先の源四郎と同じように。

そこにあるのは『全力の一撃には全力の一撃を以って応えるのみ！』というシンプルな思考だけ。

空を貫く源四郎の裂脚。水面のごとく静かにある蝉丸。二つの影が交差する。時間がゆっくりと流れ出す。それはまるで死に際の走馬灯。差し出された前腕を削りぬくかのように、角度を持った源四郎の蹴り足が空を滑る。瞬間、カッと蝉丸の目が見開く。全身のばねが稼動し、源四郎の蹴りを相殺するべく、稲妻のごとき超高速の右の拳が炸裂する。

最後の瞬間、残された影は唯一つ。雄雄しく振りあがったその左腕は、まさしく天を衝いていた。

458　企む三人彷徨う二人

例えば、鳥のように。

空から大地を見下ろしたなら、大きな三角形をつくるように、等速で歩く三人組を見ることができる

だろう。高槻06がレーダーで位置確認をし、機関銃で援護。01が斜め前を行き、02が更に先行する。基本的能力に大差がないだけに、持ち物だけが彼らの位置関係を決定する要因となった。もし同じ装備だったなら、協力体制すら危うかったかもしれない。環境の違いによる装備差が、幸運にも――他の参加者には不運なのだが――今の状態を作り上げているのだった。

《マスターモールド、ベレッタ、聞こえるか？……レーダー範囲内に二人入ったぞ》

結局彼らは各人の得物の社名で呼び合うことにした。他に見分けようはないからだ。

《ステアー、名前はわかるか？》

高槻06――レーダーを持っていた高槻だが、今はステアーと呼ばれる――は今まで参加者の動向を管理していたため、レーダーに映る数字と実際の名前の関連を、ほぼ把握している。

《当然だ。おっと……これは懐かしいな、名倉由依だぞ。それにもう一人は……なんと、巳間晴香だ》

巳間晴香。

名倉由依よりも高槻達にとっては脅威であり、かつ面白味のある相手。そして三人の高槻達の一人は既に遭遇し、脅し、騙した相手である。

いやらしい笑みを浮かべて、マスターモールドが提案する。

《ステアー、ベレッタ、俺に考えがある。実はだな……》

例えば、鳥のように。

空から大地を見下ろしたなら、鰐の顎に自ら迷い込む、小魚のような二人組を見ることができるだろう。

由依は晴香の背中を見つめて、重い足を引き摺るように歩いていた。

耕一さんや七瀬さん、初音ちゃん達と別れた当初

は、いつもの晴香さんだった。
『由依、しばらく会わないうちに歩くの速くなったねえ』
『そうですかー？　えへへ、晴香さんに誉められるなんて、ちょっと嬉しいですねー』
『貧乳なんだから、それくらい速くて当然だけどね』
いつものやりとり。
『貧乳貧乳言わないで下さい！　これでも少しは……』
『視認できないうちは、いくら大きくなっても貧乳なのよ？』
『ひ、酷いです……』
オチまでいつも通りだけど。この島に来て、やっと安心して楽しく話せる相手だった。
――けれど。
あの放送以来、晴香さんは人が変わってしまったように寡黙になった。

……神岸あかりさん。
それは高槻によって人質にとられたという、晴香さんの仲間。皆で相談し、人質作戦に何らかの偽装があると結論したのだが……このタイミングでの死亡発表は、結論を揺るがすものとなった。
その後、高槻の放逐が告げられた。
晴香さんのもう一人の仲間、保科智子さん。彼女も本当に捕らえられていたのならば、高槻の失脚によって、釈放されるのだろうか？　それとも、高槻の命令は生きたままなのか？
わからない。
何も、わからない。
今は暗い空。
やがては朝の明るさに包まれるだろうけれど。
私たちのこころは。
いつまでも、闇の中を彷徨うままだった。

歓喜の放送だった。これは間違いなく勝利の放送だった。七瀬彰はその瞬間、握り拳を高く天に突き上げたくなる衝動さえ感じた。まだ完全勝利というわけではない、終焉という歓喜の言葉を叫ぶにはまだ早すぎる。それでもこの部分的勝利は彰に雄叫びをあげさせるほどの強大な意味を持っていた。

爆弾は解除したんじゃない。解除させられたんだ。彰は自然に口元を歪めて嘲笑う。爆弾がなくなった今、脱出をしようと思えば簡単に出来る。最早ゲームはゲームとして機能しない筈だ。彰は走る。こうなれば、あとは狂人となってしまってもうまともには戻れない人間から他の参加者を守ればいいだけだ。由綺や冬弥、初音、そしてありとあらゆる参加者たちをそういった狂気の脅威から守りきるのだ。自分には幸いに強力な武器がある。彰は走る。走る。走る。

ひとつ気になったことがある。先の放送の中で、高槻がゲームの一参加者に堕ちた、とあった。彰が疑問に思っているのは勿論彼が参加者に堕ちた事ではなく、彼が生きている事の方だった。

確かに自分は彼を殺した筈だ。このサブマシンガンで原型も無いほどにその顔を潰しきった筈だった。あれは一種の影武者のようなものだったのだろうか？　それともあの銃弾で奴は死ななかったのか？　判らない。ここまでの情報では判別の仕様が無い。彰は走る。狂人となった者以外はこのゲームを続ける意志はないだろうが、高槻だけは別だ。殺人を厭わない外道である高槻を止めることが今の自分にとっての一番の問題だ。彰は走る。走る。走る。

痛む足を引きずりながら森を抜ける。少し移動するのにもひどく時間を食ってしまう。痛覚が徐々に戻ってきていて、神経に捻じ込まれた痛みが精神まで啄ばむ。知り合いは何処だ。脅えている参加者は

何処だ。もう戦わなくていいのだ。彰は呟きながら走る。意識が朦朧としているような気がする。
眼前には海が広がっていて、朝陽が融けるほどに眩しくて、それでも彰は走るのを止めない。森の外側を駆ける。駆ける。駆ける。

初音は何処にいるのだろう、と思う。
恐らくこのゲームに参加した人間の中で最年少で、一番力の無い少女。そして、この島で一番長く自分と共に過ごした少女。震えていた自分に勇気を与え、泣いていた自分を慰めてくれた少女。
出会ったばかりの素性も知らないやつのために、自分のために泣いてくれた少女なのだ。
あの優しい子を死なせるわけにはいかなかった。

朝陽が眩しくて、朝陽が眩しくて、——朝日が眩しすぎて、立ち眩みに似た昂揚に彰の身体が沈む。
彰の影が陽に融ける。水平線の彼方から昇る白い光が、朝の訪れを告げると同時に、何かの終わりを告げているように彰は感じる。足を止めることなく彰は走る。走る。走る。
この光を浴びながら彰は感じる。
自分は今、紛れも無い現実の中にいる。現実とは何かといえばただの言葉で、自分はいつもそんな言葉の幻の中に、陽炎のように立っていたのだと思う。現実なんてものを無理矢理認識しようとした瞬間に陽炎は消えて、そこには涙の一粒も残らない。残るのは日常の残滓だけだ。日常の残滓が彰の手のひらの上で暴れている。
自分にとっての日常とは。
決まっている。美咲さん、はるか、冬弥、由綺。彼らと過ごした時間こそが自分にとっての日常だった。彼らと過ごしていた大学生活は波乱こそ多くは無かったけれども、安らぎだけはあったと思う。
日常を失うというのがどういうことか、彰は考える。それはすごく悲しいことだった。

日常はふたつの要素から成り立っている。それは今と未来。今こうある日常が、未来もきっとこうやって続いていくだろうという展望。それこそが日常を優しくて暖かなものにしていた。
この先、自分の家に戻れたとしても、これまでの日常は戻らない。美咲さんもはるかもいないのだ。どんな日常がこれから続いていくのか。想像も出来ないししたくもない。続かない物語に残るのは寂寥と思い出。思い出は血の色に染まり寂寥は赤い思い出を凍えさせていく。
例えばあの柏木初音の日常だって実は既に壊されきっているかもしれない。自分や柏木耕一や彼女の姉妹が初音を守りきったとして、彼女が未来へと続いていた筈の日常に戻れるわけが無い。
どうすればいいのだろう、と思う。
彰は思考を停止させる。今は何も考えるな。走れ。走って初音を危険から救い出せ。救い出してからそういうことは考えろ。まだ自分たちは勝利したわけじゃない。走れ。この曖昧模糊とした世界で自分の身体を走る電撃のような痛みだけがリアルだ。思考は思考でしかない。ずっと後でも思考は出来るのだ。
デイパックの中から最後のペットボトルを取り出し、少し残った水をごくごくと飲み干す。喉が多少潤うが、しかし頭のふらつきは依然治らない。やはり根本的に血が足りないのだろう。水では血の代わりにはならない。ちゃんとした食事を摂らなければ。けれど止まっている時間はない。初音を見つけて保護した後に食事をすればいい。ボトルを投げ捨て、彰が再び走り出そうと右足を踏み出したそのとき、不思議な音が聞こえてきた。

「――っ♪」

声。歌声だと思う。
彰は顔を上げる。ふらつく視界の先には何も見えない、だが確かに男の声が聞こえた。歌声のように

も聞こえたが定かではない、彰は声が聞こえたと思われる方向に走る、森の方か？
　彰は走り、茂みの中でざわつく音が聞こえたのを確認すると立ち止まり、息を殺してサブマシンガンを握り締める。二秒の間をおいて、音を立てた彼らの姿が目に入った。
　少女の顔が最初に茂みから現れ、次にその後ろから、自分に似た顔立ちの、学生服の少年が現れた。
　時間が停止する。
　少年は彰の顔を見つめて固まり、少女は彰の手のサブマシンガンを見つめて固まり、そして彰は全然違うことに悩んで固まっていた。
　名前が浮かばない。
　子供の頃はしょっちゅう一緒に遊んでいたが、歳を重ねるにつれて遊ぶことが少なくなった従兄弟。顔立ちがすごく似ていたため、周りからは本当の兄弟の様に扱われた昔のこと。自分は末っ子だったので弟が出来たと喜んでこいつを連れまわしたものだ。
　名前だけが浮かばない。頭を打ちすぎたせいで自分の脳味噌の中の思い出を司る中枢が全部吹っ飛んだんじゃないかと思う。可愛がってた弟分だろ七瀬彰。名前を忘れるなんてひどいぞ。
　勿論、先に思い出してくれたのは、自分に比べれば若干はマシな顔色をしていたあっちだった。
「彰、兄ちゃん？」
　その声で思い出した。陰気っぽいくせに何処か甘えた感じの声。ああ、そうだ。
「祐介」
　自分の脳味噌はまだイカれきってはいないらしい。

460　てのひらをたいように

　朝陽が木々の間から差し込んできて、天野美汐は少しけだるそうな顔で空を見上げる。雲は少ないくせにやけに白い空で、自分の住んでいる町で一番綺麗なあの場所に少しだけ似た、儚い空色だと思う。

「大丈夫ですか？　長瀬さん」
　声を掛ける。言うまでも無いけれど、身体を起こして小さく伸びをする学生服の少年――長瀬祐介に向けての言葉だった。
　一時間ほどの仮眠を摂った後でも祐介の顔色はまだ優れず、疲れが肌の色に顕れている。これまでこの島で極度の緊張に耐えてきて、さらに美汐の疑心暗鬼から来た行動によって、彼は自殺未遂にまで追い込まれてしまっていた。そのときの怪我は、後一歩で彼を死に至らせるほどだった。体力の損耗に加えて首の怪我。こんな狂った状況ならばこれだけで死に至るには充分だったかもしれない。観月マナという少女がいなければ本当に危なかっただろう。
　しかし祐介は、その微妙な顔色でにこりと笑う。美汐は小さく息を吐く。完調とまでは言い難いが、それでも笑顔に余裕が見える。眠ったお陰で多少体力も戻ったのだろう。それなりに精気が戻った笑顔で、美汐は少しだけ安心する。
「うん。――ごめんね、少し休ませて貰っちゃった」
　済まなそうに祐介はそう言う。彼の後ろから白く差す太陽の光に目が眩む。美汐は小さく息を吐くと微笑んで「いえ」と応える。そう言ってもなお申し訳なさそうな顔を崩さないまま祐介は呟く、
「――天野さんは大丈夫なの？　休まなくて」
　頷く。疲れていないと言っては嘘になるが、それでも倒れるほどではない。実のところ先程まで警戒しつつも半分寝ていたような状態だった。ほんの僅かなりとも体力は回復したように思う。それにこれ以上彼の足手まといになりたくはなかった。
　天野美汐はこの島に来てから、殆ど笑っていなかったように思う。笑うことがつらくて、笑ってしまったら何かを失ってしまうような、そんな錯覚さえ覚えていた。口元だけで微笑むことはあった。けれどそれ以上に笑うことは出来なかった。
　けれど、美汐は今、確かに笑った。

自分が余裕のある笑顔を見せれば、長瀬祐介が少し は安心してくれるのではないかと思ったからだ。上手く笑えたかは判らないけれども、
「長瀬さん、大丈夫なら行きましょうか？　私は大丈夫ですから。ちょうど良い頃合いですし」
長瀬祐介の表情から、自分が多少はマシに笑えたのだと判って、未汐は少しだけ嬉しくなる。
「うん。――そうだね、何処に行けばいいかも判らないけど……取り敢えず色々探してみよう。僕らに出来ることを考えながらさ」
先に立ち上がった長瀬祐介が差し出した手を取って、天野美汐も立ち上がる。そのままふたりは手を繋ぎ、ゆっくりと歩き出す。

美汐はふと、自分の少し前を歩く祐介から何か呟き声が漏れていることに気づく。何だろう。耳を澄ます。理解。殆ど聴こえないような声ではあるが、長瀬祐介は何やら歌を口ずさんでいるのだ。

「長瀬、さん？」
「――……ッ？　な、なに？」
「歌、唄ってました？」
途端に顔を真っ赤にする。間違いない。長瀬祐介は何やら歌を口ずさんでいたのだ。未汐は少しだけおかしくなる。
「……。うん。ほ、ほら、歌を唄ってるとさ、少しだけ元気が出るかな、と思ってさ」
しどろもどろに説明をする祐介。何故かすごく楽しい気持ちになったので、未汐は更に追及することにする。
「何の歌、唄ってたんですか？」
祐介は口ごもる。何だかやけに恥ずかしそうだった。自分は最近の歌の流行にはあまり詳しくないのだが、それほど恥ずかしがるような歌が最近は多いのだろうか。そういえば最近、コンビニかどこかで佐賀について熱く唄っている歌を聞いたが、もしかしたらその類なのかも。そんな風に美汐が考えてな

がら彼の顔を覗き込むと、祐介は、
覚悟を決めたような顔をしていた。
イヤな予感がした。

「てーのひらをたいようにー♪　透かしてみーれば
ー♪　真ーっ赤に燃えー立つー♪　僕の血潮ー♪」

大声だった。言うほどの大声ではないけれど、今までの祐介の大人しげな様子からは想像も出来ない大きな声だった。顔を真っ赤にして、少し音の外れたメロディが森の中を流れた。彼が歌ったのは小学生の頃自分も唄ったことのある歌で、少しだけ懐かしくなる。そして、こんな懐かしい歌を大声で唄って、恥ずかしさを紛らわそうとした祐介のことが少しおかしかった。
くすりと笑うと、祐介は「やっちまった」という他には言いがたい複雑な顔をして、次の瞬間には顔ばかりでなく耳や手まで真っ赤にする。

「——ははは、早く行こうっ、この歌を聴いて誰かやってくるかもしれないからっ」
思う。ああ、この人はやっぱりすごくいい人だ。
美汐は祐介の手をぎゅっと握り、早足で歩く祐介の後ろについていく。祐介が少し間を空けて握り返してきて、美汐は少しだけ身体と心が温くなる。

(そういえば、血潮と美汐は語感的に似ています)
——ふと美汐は、そんなくだらない事を考えた。
こんなくだらないことを考えるべきではなかった。
だが考えてしまっては遅い。妄想の雷が頭を走る。
僕のみしおー。
倒れそうになる。何を考えているんだろう私は。
馬鹿。私は馬鹿だ。必死になってどこかおかしくなっている自分の脳味噌を心底から馬鹿にしても、馬鹿な妄想は馬鹿なだけに止まらない。この妄想は最早特急列車だった。新幹線だった。大阪—東京間をひた走る新幹線だった。確か停車駅は三つだったと

思う。京都、名古屋、新横浜だ。一番近い京都にすらまだ着かない。

　長瀬さんの美汐。

　僕の、美汐？　天野さん、何を……っ

（――京都はまだですかっ）

　そうですよ、私は長瀬さんの美汐です。長瀬さんがもう好きにしちゃっていい天野美汐です。

（――京都はまだですかっっ）

　天野さん……い、良いの？　僕なんかに好きにされちゃって。僕はこう見えても変態プレイばっかりする駄目人間なんだよ？　変なところに突っ込んだり変な服を着せたり痛くて熱いことをするかもしれないよ？

（――京都はまだですかっっっ！）

　どんな変態プレイでもいいです。私は何でも受け入れますから。だけど、一つだけお願い。今は、美汐って呼んでください、……祐介さんっ。

　判ったよ……美汐ちゃん！

（――京都はっっっっ!!）

　祐介さんっ、その、でも、出来たら、優しく、お願いします……私、初めてだから……私、胸小さいし、それに、可愛くないから、その、そそられないかも、しれないですけど……っ

（――止めてっっ！　止めてっっっ!!）

　そんなことないよ。すごく可愛いしすごく魅力的な胸だと思うよ。……ふふ、めちゃくちゃに可愛がってあげるからね？　腰を悪くしちゃうくらいずったぼろのぼろぼろにね？

　あう……っ

　冗談だよ。優しく、優しく、痛くないようにしてあげるからね？　ふふ、ふふふ……

――京都着。

私はアホかもしれない。

　自分でも判るくらい顔が真っ赤になっていた。どうしてこの、命を守ることすら危ない場所でこんな

馬鹿げた妄想が出来るのだ。気づくと祐介の手を強く強く握り締めていたようで、何事かと思った祐介が振り返っている。
「どうしたの？」
「なんでもないです」
なんでもないいんです。もう京都に着いたんです。美汐は早足で祐介の前に出る。もうこれ以上このアホ面を長瀬祐介に見られたくなかった。

自分って意外とアホなんだなあと思う。鼻歌を聴かれたのが恥ずかしかったからって、反対に大声で唄ってどうするんだ。逆に恥ずかしいじゃないか。長瀬祐介は自分の駄目さ加減に呆れながら、未だに顔に熱を覚えたまま歩いていた。
森をもうすぐ抜ける。抜けた先には海が見えるだろう。朝陽が昇り始めた水平線はどんな美しさなのだろう、と考えて恥ずかしさを紛らわせようと思う。
勿論考えることは他にもある。

体内の爆弾は解除されて爆発しなくなった。そして代わりにあの高槻という男が野に放たれ、マーダーとして自分の命を奪おうとする。先ほど、確かにそのように放送された。思う。これはけして殺し合いを加速させるためには有効に働かない放送だと思った。この放送を聞いた参加者は、これ以上戦おうとするのだろうか？　――するのだろうか。自分には判らない。常識で考えればＮＯだ。だが、――どうなのだろうか。もうこの放送を聞く前に狂い切ってしまった人がいるのだろうか。
どうすればいいのだろうか、と祐介は思う。
先に美汐と取り決めをした。誰か、殺し合いに狂っていない人を見つけたら、自分たちに交戦の意志はないことを告げて話を聞こう。これからどうすべきか、どうやって逃げるか。自分たちは所詮ガキで、まともな案を立てるにはあまりに知恵が足りない。誰か、知恵のある、頭の良い人を、
そこで異変に気づく。

先から自分の手を引いて前を歩いていた天野美汐の足が止まる。どうしたの、という声を出す前に、自分たちのすぐ傍に他人の気配が近づいていたことに気づく。気配が姿を現す。祐介の目にも入る。無機質な色のサブマシンガン、血に汚れた顔と服、鼻を突く硝煙と鉄の匂い。

誰が見てもやばい、と思う外見をした男だった。少なくとも自分の前に立つ天野未汐は、目の前の男が血に狂った殺人鬼に違いないだろうと考えていると思う。手を通して震えが伝わってくる。死への恐怖だ。こんなにあっさり死ぬことになるなんて、想像も出来なかった。そんな風なことを考えているのかもしれない。

けれど、自分は違った。

祐介は目の前の男の顔に釘付けになっている。知り合いの顔だった。すべての知り合いが死に尽くした筈のこの島で、今自分の目の前には紛れも無い知った顔がある。呆然とした顔だった。あちらも自分の顔を見て戸惑っているのだと思う。

「彰、兄ちゃん？」

すぐに名前を思い出すことが出来た。自分と似た作りの顔立ち。血で汚れてはいるけれど、黒目の大きな優しい顔。読書家で、見かけによらず変な知識ばっかり持っていた、大好きだった従兄弟。

「祐介」

すごく、懐かしい声がした。

461　騙し騙されて

真実がどうなっているのか。いくら考えたって、判る筈はなかったけれど。それでも、あたしの頭は、捕われた二人の仲間のことで一杯だった。

皆で相談した結果、人質作戦そのものに疑念を抱き、そして反攻を試みるために、あたしは仲間を探した。けれど、見つかった仲間は由依ひとり。そして、あかりは殺されてしまった。もし次の放送で智

子の名が流れたならば、あたしの決断は誤りだったと認めざるを得ない。そうだ。あかりを殺したのは、高槻からの警告だったのかもしれない。もちろん人質が偽装で、あかりはどこかで他の誰かに殺された可能性もあるが、どうしても高槻の顔が脳裏から離れない。

現在、高槻は何らかの理由で放逐されている。

……智子はどうなったのだろう？　放送では、智子のことには一切触れていなかった。捕われていること自体知らないのかもしれないし、やはり全ては偽装であり、捕われてなどいなかったのかもしれない。

少しだけ由依と相談したが、やはり考えたのは同じようなことで、結論も同じようなものだった。

――わからない。

答えは、高槻だけが知っている。

大海原のように波立つ草原の中で、あたし達は高槻を発見した。手ごろな岩にだらしなく腰掛け、拳銃片手にこちらを眺めている。

いつものように、唇の端を片方だけ引き上げて。

あたし達が来るのを知っていたかのように、高槻は立っていた。

「おっと、そこまでだあ」

高槻が拳銃を構えて、制止する。

この距離では、抵抗のしようがない。あたし達は素直に停止した。

あたしの武器は刀、由依はダイナマイト。近距離まで密着するか、こちらが先に発見するかしない限りは、勝ち目のない組み合わせだった。

「二人揃って散歩とは、随分余裕だな？」

「そういうアンタは、捨てられ落ちぶれ余裕の欠片もないようね」

ふざけた台詞に辛辣な言葉を返したが、高槻はどこ吹く風といった表情だ。

「ハハハ！　相変わらず気の強い、いい女だなC―

219ッ!?」
「その呼び方やめなさい！　あたしには巳間晴香という名前があるわ！」
そう言って一歩前に――斜め前に、出る。
由依が半ば隠れるように、怒りのジェスチャーで大袈裟に手を広げる。
(晴香さん……)
うしろで由依がカチリとライターをつけ、声をかける。ダイナマイトの着火用に、空き家から持ち出したものだ。
(……届かないけど、目くらましくらいにはなると思います……)
あたしは高槻に判らない程度に頷き、小声で返す。
(……智子の行方が知りたいわ。それまで待ってて)
(……はい)
大丈夫、うまく隠せている。高槻は気が付かない。
だから相変わらず得意げな表情のまま、にやけた口を開く。
「ま、そう怒るな。お前にいい情報をくれてやろうと思って待ってたんだ」
「いい情報？」
「そうだ、気になっているんだろう？」
「……何のことよ」
身を硬くして睨みつけるあたしの視線に、おどけた表情で高槻が返す。
「保科智子な、次の放送前に死ぬぞ」
「!?」
来た。この話題を待っていた。
演技だけではなく、素で何も口に出せなかったが、いい呼び水になったらしく、高槻は調子にのって続ける。
「今の俺はこのザマだが、俺の命令自体はまだ生きている。神岸あかりを殺したのも、俺じゃあない。俺の命令を受けた、愚直なまでに真面目な部下が、眉一つ動かさずに殺したのさ！」

その前に美味しくいただいたのは、この俺だがな、といやらしく笑う。
「た……高槻っ！」
「ハハハハハ！　悔しいか!?　悔しいだろうッ!?　だが俺も悔しぃッ！　あとの楽しみに取っておいた保科を、食わずにいたのが悔しいぞッ!!」
小躍りして、狂ったように笑う高槻。
いや、こいつが狂っているのは元からだ。
(……いくわよ、由依)
(……はい)
「……高槻！」
「どうした、は・る・か？」
挑発のためか、わざと名前を強調して呼ぶ。
だが、もう気にはならない。殺すだけだ。
「……ゲスな言葉は、もうたくさんよ！」
あたしの頭上を越えて、ダイナマイトがふんわりと弧を描き飛んでいく。
間もなく起こるであろう爆風と応射を避けるため、身をかがめ草原に姿を隠しながら、あたし達は走った。
高槻を倒し、銃を奪い、智子を救出する。それは決して不可能なことじゃないはずだ。
でも……何かひとつ、忘れていないだろうか？
致命的な、何かを。

462　discovery

結界の待つ神社目指して出発したスフィー一行であったが、相変わらず神社の詳しい場所は分からず(家の中に地図がないか探してみたものの無駄だった)、昨日と同様行っては戻り、行っては戻りを繰り返しながら進んでいた。
「ところで、神社ってどんな感じなの？」
「……」
「そう、やけに古くて、ちょっと押しただけで壊れそうな感じの……」

言い終わらない内に、視界の中からスフィーが消えた。
「……え？」
突然の出来事に結花たちがびっくりしていると、下の方から「あいたた……」と声がする。
道端の斜面を注意深く降りてみたら、そこには水たまりにはまったスフィーがいた。
「もう、足下をよく見てないから！　ここが谷底だったらどうするのよ」
「……ごめんなさい」
ばつの悪そうな顔をするスフィー。
「……」
「そうね、無事そうでよかった」
「でも、服濡れちゃった」
「しょうがないわね。服が乾くまで休憩」
結局、三人はスフィーの服が乾くまで一休み、ということになった。
スフィーは服を脱ぐのを嫌がったのだが、結局上着だけを木に引っかけ、荷物の方は鞄から引っぱり出して、虫干しのように乾かした。
もちろん荷物の中には、例の魔術書もどきもある。
しばらくして、生乾きになった所で荷物をしまい始めた結花が、その魔術書もどきの乾き具合を見ようと本をパラパラめくっていた時、ページの一部が不自然にふやけていたのを見つけた。
よく見ると、ページの端が二枚に割れている。
紙が破れないようにゆっくり分けていくと、今まで なかった文章が目に留まった。
〈七十一番　長谷部彩：とても物静かな性格。漫画自体は上手いが、テーマがマイナーなため売り上げは良くない〉
「これって……」
結花はすぐさまスフィーと芹香を呼び寄せた。
それから、三人がかりで全てのページを割く作業が始まった。
紙の中に隠されたページには、このゲームに参加

した百人分の顔写真、名前とプロフィール、さらに特殊能力を持つ人はその能力の種類まで書かれていた。
「ふぁ～、これってすごいよ」
「……」
しかし、中身はそれだけではなかった。
本の最後には「ＳＴＡＦＦ」と書かれたページもあった。そこには、三人が知っている名前が書かれていたのだ。
「長瀬源之助って……、あの長瀬さん？　どうしてスタッフなんかやってる訳？」
「……」
「えっ、芹香さんも……」
思わぬ展開に、三人はただ困惑するばかり。
とりあえず三人で話を突き合わせながら、死者の名前に線を引いていく。
結花は生存者のデータを見ながら、
「う～ん、鬼の力とか不可視の力とか書かれても……。なんか結界に関係のありそうな特殊能力ってないのかなぁ」
と、強気で鳴らす結花にしては珍しく考え込んでいた。
「それに、長瀬さんがスタッフだなんて……。なんだか訳がわからなくなってきた」
「私もだよ」
スフィーと二人して悩んでいる所へ、
「……」
芹香が話しかけてきた。そして本をパラパラとめくって、「三十三番　国崎往人」と書かれたページを指さした。
「……」
「法術、かぁ」
「法術ってなに？」
他の二人はよくわかってないようだった。
芹香が一通り説明して、
「あ～、そういう事かぁ」

「……」
「でも、この人がどこにいるのかもわからないし、むやみに探すのはかえって危険だと思うけど」
「……」
「うん。あくまで向こうからやってきた場合、ね」
「……」
「スフィーはもう大丈夫？」
「オッケー」
「それじゃ出発ね。あ、斜面を登るときは注意するのよ、スフィー」
「は～い」

斜面を登るスフィーたちの頭上数千メートル。
浮遊物体の中で、その一部始終を手元の小さいモニターで見ていた老人がいた。
「ほほう、ようやく気が付きましたか。ただ遅きに失した感じもしますが」
その老人——長瀬源之助は小さな笑みを浮かべつつ、
「ま、儂からのささやかなプレゼント、といった所ですかな」
静かにつぶやいた。
参加者百人に渡された武器や道具は、基本的にはアトランダムに配られたものだ。
しかし、一部の人間に特定の品物を渡させる権限くらいは源之助にあった。そこで源之助は参加者の名簿をスフィーに託すことにしたのだ。もちろん名簿は極秘扱いだから、それなりの細工を施しておいた訳だが。
「さてこの名簿をどう使うか、お手並み拝見ですのう。ホッホッホッ……」
思わず笑いがこぼれた源之助に、フランク長瀬が、
「源之助殿、何か可笑しい出来事でもあったのですか？」
そう尋ねたので、
「いやいや、年寄りの戯れじゃよ」

と答えつつ、モニターの画像を切り替えた。
結界の待つ神社へ向かうスフィー・結花・芹香。
一行がいつになったら神社にたどり着けるか、まだ誰にもわからない。

463　忘れていた事実

まず光。
そして爆発音。
爆風。
遅れて降り注ぐ、大量の土砂。
予測していたとは言え、その規模の大きさに驚きながら、わたし達は走った。迂回しながら、高槻のいた岩を目指す。高槻にとっては予想外の爆発だったのだろう、大きく遅れて応射する音が聞こえる。
煙る視界の中に、岩を背にした高槻が微かに見える。
晴香さんが先行する。
能力が制限されていても、なお常人では追いつけない速度を発揮し高槻に迫る。普通の人間では、あの状態から銃を持った相手に勝つことはできない。
だけど晴香さんは違う。それを忘れていた、高槻の負けだ。岩の裏側に回りこみ、距離を一気に詰め抜刀する。そしてくるりと岩を半周したとき、高槻は斬られているだろう。
わたしは九割九分の確信を持って、結果を待った。
そのとき、声がした。
「うっ！」
聞きなれた声。
誰よりも聞きなれた、わたしの、声。
わたしの、声？
あれ？　どうして？
理由は、左脚に突き立った短い矢。
脚に？　矢？
なんで？　どこから？
振り向いた射線の向こうに立っていたのは……高槻だった。

今、まさに斬りかかろうとしたその時。あたしは、由依の声を聞いた。何故か脚に矢が突き立っているのを見て、思い出した。忘れていた、有り得ぬ事実を。

――高槻が、二人いる事を。

それを知ると同時にスタンガンで気絶させられ、混乱あたしは忘れてしまっていた。正しく言えば、混乱の中で記憶に留めておけなかったのだけれど。

見ればクロスボウを構えた、もう一人の高槻が狙いをつけている。斬り上げようとした姿のまま、あたしは動けなかった。

由依が崩れる。まるで左足が無くなったかのように、前のめりにカクンと倒れてしまう。

「あ、あれ？　れ？」

軽く痙攣しながら、ままならぬ身体を悶えさせる。地面に顔を擦り付けたまま、ひゅーひゅーと狭窄した呼吸音を響かせる。

「ハハハハハ！　そこまでだなあ！」

目の前の高槻が、ぬかりなく距離をとりながら笑う。

「矢には毒が塗ってある。もはや動けん！　どこでもう一発ぶち込めば、窒息死は免れんぞ！」

遠くから、もう一人の高槻が叫ぶ。

――あたし達は、敗北した。

「さて。ここからが、本題だ」

油断なく拳銃を構え、高槻が言う。悔しい。悔しいが、今となっては聞くことしかできなかった。

「名倉由依を助けたければ……」

僅かに明るさを増した空を指差し、もうすぐ朝がくることを示す。

「……次の放送までに、一人殺せ」

「くっ！　……まだそんな事を！」

「気に喰わんか？　なんなら、今ここで殺しても構わんぞ？　ハハハッ！」

「死体を弄ぶのも悪くないからな、ハハハッ！」

二人の高槻が次々に笑う。
そのゲスな笑い。どちらも間違いなく高槻だった。
あたしは不快さに表情を曇らせる。
そのとき。
誰もが発言を予想していなかった由依が顔を上げ、押し出すように話し始めた。

「……晴香、さん」
なかば麻痺したまま、ゆっくりと言葉を並べる。
泣いていた。
「晴香さん、逃げて、下さい」
それを受けて、高槻達が嘲る。
「ハハハ！　いくらこいつが速くとも二人同時にかわせるものか！」
「お笑い種だな！　こいつが逃げれば、お前も死ぬんだぞ！」
そうだ、逃げることなどできるわけがない。
それでも由依は、構わず続ける。
「あたし、晴香さん達に、出会えて……」
ちらり、と何かが光ったように見えた。
気のせいかな、とぼんやり思った。
「本当に、良かったと……」
一瞬、何だろうと考えた時には手遅れだった。
考えるまでもなかったはずだった。
「思って、います……」
地面から溢れるように、光が漏れる。
そうだ。
あの光がもたらす結果は、これしかなかったはずだ。最後に見えたのは、跳ね上がる由依のシルエットだったと思う。

全てのダイナマイトが誘爆した混乱の中、あたしは全速力で駆け出した。
土砂と銃弾と手榴弾の雨の中、どうにか森の中まで逃げこめたのは、奇跡だったのかもしれない。
木々を抜け、建物を見つけて裏口から侵入する。空

間が広いほど飛び道具が有利になるから、遮蔽物は多い方が良い。
そう思って入り込んだそこは、教会だった。
椅子に腰掛け、土まみれの髪を整えなおす。一息ついて、お馴染みの彫像に尋ねてみた。
「……友達が死んで、涙も出ないのは許されると思うかしら？」
答は返ってこない。
期待もしていなかった。
ただ、高槻が憎い。
脱出より、生存より。
あかりと、由依の仇をとることを。
高槻を殺すことを、あたしは誓っていた。
……そしてその時こそ、二人のために泣こうと思った。

六十六番　名倉由依　死亡
【残り34人】

464　これまで、そしてこれから

夜明けが近いのか、東の空が徐々に赤く染まっていく。
その光に背を向けて、彼女は歩く。
ゆっくりと、しかし確実に。

――鹿沼葉子にとって、彼女の第一印象は決して良いものとは言えなかった。
自分にとって絶対であるＦＡＲＧＯに、入信しておきながら不快感を見せる少女。
それは、これまで積み上げてきた「鹿沼葉子」という存在自体を否定することであったから。
同じＡランクの一員。しかし、葉子にとって彼女は忌み嫌う存在でしかなかった。
そんな彼女が、ある日葉子に手渡したもの。
小さな、キーチェーンの携帯ゲーム。

その中には、葉子が遠い昔に置き忘れた、日常の欠片が詰まっていたのかもしれない。
だからこれも、葉子にとっては不快感を覚える代物でしかなかった。
だけど、どんな物であっても、誰かから物を贈られる、という行為自体が久しぶりで、葉子はどうしてもそのゲームが捨てられなかった。
次の日。携帯ゲームの感想を訊ねてくる彼女に、葉子は素っ気無く「捨てました」と答えた。
そう言うと彼女は、そっか、と小さく呟いて、取り繕うようにあははは、と笑った。
葉子の脳裏には、彼女が一瞬だけ見せた、残念そうな表情がいつまでも残った。

その夜、葉子は部屋の隅に置かれた携帯ゲームを手に取った。彼女があんな顔をするから悪いんだ、と言い訳して。
電源を入れる。チープな電子音。単純なゲーム。
しかし葉子にはすべてが新鮮だった。
ボタンが磨り減り、電池が切れかかるまで遊び倒してから、何食わぬ顔で彼女に返した。
彼女は少し驚いたような表情を浮かべてから、嬉しそうに微笑んだ。

彼女は葉子の知らないことを、沢山知っていた。
毎日、食事時のほんの僅かな時間。彼女は葉子の知らない様々なことについて説明した。一緒にゲームセンターという所へ行こう、とも約束した。
ただただ、訓練を繰り返すだけの毎日の中で、彼女と話す時間は、葉子にとって新鮮な楽しみであり、心安らぐひと時でもあった。

そんな毎日の終焉は、突然にやってきた。
このゲームの開催によって——
誰に言うでもなく、葉子は呟く。

「郁未さんの話……もっと聴いてみたいですね」
人にはそれぞれ、相応しい死に場所がある、と葉子は考える。
そして、自分や郁未、他の参加者達の死に場所はここではない、とも。
だが、ＦＡＲＧＯの主にはその慈悲が無かった。
そのことに、葉子は失望した。
（……もしかしたら、ずっと前から気づいていたのかもしれませんね。このＦＡＲＧＯという組織の実態に）
だが、葉子の居場所はＦＡＲＧＯにしか無かった。
この世に残ったたった一人の肉親、母をその手で殺めたあの日から。
（でも、今は違います）
郁未という存在が葉子を変えた。彼女によって、葉子は「外の世界」を知りたいという意思を持ち、自分の体で、広い世界を感じたいと思ったのだ。
（だから……）
死ぬわけにはいかない、と葉子は思った。
死なせるわけにはいかない、とも。
そして、それを達成するための一番の障害と成り得る者は――
「高槻」
彼の厭らしい笑みが葉子の脳裏に蘇る。
彼の悪知恵は決して軽視できるものではない。何より、クローンが何人いるかも分かっていないのだ。あまり泳がせると、いずれ厄介なことになるだろう。早急に対処する必要がある。
だが、今の葉子は武器と呼べるような物を、何一つ持っていなかった。
少年から受け取った反射兵器が一枚、あるにはあるが、基本的には防御用のモノ。
不可視の力も、この状況ではせいぜい常人より多少はマシ、といった程度。
（……彼に槍を折られたのが悔やまれます）

それも後の祭。
とにかく今の葉子には武器がない。武器がないならないなりの戦い方もあるとはいえ、それにも限界がある。
「まずは、武器ですね……」
そう呟くと、葉子は住宅街のほうへと歩き出す。
これから作られる、自分の思い出のため。
これまで作られた、郁未の、皆の思い出のため。

人にはそれぞれ、相応しい死に場所がある、と葉子は考える。
ならば、高槻に相応しい死に場所は、今この場所しかない、とも。

465 血塗られた花嫁

祐一はどこにいるんだろう？
祐一はどこで私を待っているんだろう？
会いたいよ……祐一。早く会って、そして。
結婚式を、挙げよう。
祐一と一緒に、お母さんも待っているよね。
そして私と祐一が「結婚する」ってお母さんに言ったら。お母さんはにっこり微笑んで、「了承」って言ってくれるよね。
ああ、会いたいよ祐一。
早くはやく。けっこんしきを、あげよう。

虚ろな目で歩く水瀬秋子（九十番）を、御堂（八十九番）と大庭詠美（十一番）が、近くの雑木林から息を殺してじっと見つめていた。
無理矢理地面に這い蹲らされて、御堂に不満を漏らそうとした詠美だったが、その人物のあまりの姿にあんぐりと口を開けて見送るしかなかった。
「何アレ……あの人がおんぶしてるのって……死体？」
「喋るな」

御堂は詠美にそう言い放つと、秋子をじっと見送る。
『大した戦闘能力は持ってないみてぇだ。だが、既に精神がイカれてやがる』
ああいう手合いは、戦闘時には案外厄介なシロモノと化す。……いろんな意味で。
倒せない敵ではない。が、傷が癒えぬ今は無理をする必要もない。そう御堂は判断するとやり過ごすことに決めた。
それに、背負ってる死体。雰囲気（とは言っても、既にその顔は判別できるものではない。詠美が卒倒しなかったのは、ある意味立派だと御堂は思う）から見て、あの女の関係者だろう。
恐らく、妹か娘。そう考えると御堂にある感情が生まれてしまう。それを御堂は認めたくなかった。
『ちっ、全く。この島に来てからどうかしちまってるぜ俺はよぉ。……倒す相手の都合を考えちまうなんてよ』

「……ねぇ、ねぇ」
つんつん、と詠美が肘で御堂をつっつく。御堂は秋子から目を逸らさずに聞き返す。
「なんだ？　静かにしろと言っただろうが」
「でも、猫、あっち行っちゃったよ？」
「!?」
慌てて見ると、そこにいるのはぶるぶると震えているポテトだけ。
ぴろは——懐かしい水瀬家の匂いを嗅いだのか、秋子の元へ走って行った。

「あ、ねこ」
ぴろを見た秋子は、ぱあっと顔を輝かせる。
「ねこー、ねこー」
おいでおいで、と秋子は手招きをする。それを見たぴろは、突然ぴたりと立ち止まった。
「あ、ぴろだ」
と、秋子はやっと気づいたのか、猫の顔をじっと

見つめて、にっこりと笑う。
「一緒に来てくれるの？　私と、祐一。二人の結婚式を祝ってくれるんだね」
ぴくん、とぴろが跳ねた。
「さ、いくよ。いっしょにゆういちにあいにいこうよ」
しゃがみこんで、ぴろに手を差し伸べる秋子。はずみで、背中のソレがずるりと落ちそうになった。
「どーするのよ？」
「ほっとく。あの猫はあの女の飼い猫だったらしい。飼い主の元に戻っただけだ」
詠美の問いに、あっさりと御堂は言う。
「でも、あの猫、嫌がってるみたいだよ」
「見りゃわかる。懐かしくなって行ったはいいが、近づいたらバケモノでした、ってか」
ち、と舌打ちをする。全くあのバカ猫は、迷惑ばっかり掛けやがる。
「よう。アンタ、何してるんだ？」
ぴろと秋子のにらめっこ。それに終止符を打ったのは御堂のその声だった。
詠美にじっとしてろと言い含めて、秋子の前に姿を見せたのだ。
鋭い視線を秋子に投げかけながら。そして、右手の武器の感触を確かめながら。
「ん？」
すっと、秋子が御堂を見る。そして、にこりと笑った。
『ちっ。マジでイっちまってやがるな。このバカ猫、面倒かけんじゃゃねぇ！』
御堂は一人ごちながら、秋子の武装を確認する。
――死体を背負ってるためか、武器は手にしてないようだ。ひょっとしたらポケットに何か隠し持ってるかもしれないが、死体を下ろして構えるまで時間がかかるはず。……俺の方が、有利だ。
「さがしてるんだよ、ゆういちを。ゆういちと、け

っこんするの」
「ほう、ここでか？」
「うん。だって、七年も待ったんだよ。もう私、待てないよ」
「で、その猫はどうするんだ？」
「ぴろ？　ぴろは、祝福してくれるの。私と、祐一の結婚を」
にゃーにゃーと鳴く猫においでおいでしながら、秋子は続ける。
「おじさんも、祝福してくれる？　私と、祐一の結婚」
「で、なんでお前もついてくるんだ？　じっとしてろと言っただろうが」
「あ、アンタはあたしのしたぼくなんだからね！　勝手にどっか行っちゃダメなんだから！」
「へいへい、わかりましたよ。ったく、危険に自分から身を突っ込むなんて馬鹿だな」
かちん。
「何よ！　アンタだって同じでしょぉっ！　このばかばかばかあっ！」
「わめくな。……全く、その通りなんだからよ」
『私、祐一を探してるんだ。一緒に探して、そして私と祐一の結婚式に参加してくれないかな？　ほら、祝福してくれるほうが、私も嬉しいし。大丈夫。祐一もお母さんもきっと了承してくれるよ』
水瀬名雪と名乗る、女性の申し出。しばし考えた後、御堂は、
「そうだな。一生に一度の晴れ舞台だもんな。拝めるなら見てみたいもんだぜ」
と、参加を決めた。
そうして今、秋子を先頭にして、御堂と詠美、そしてぴろとポテトが後を追う格好で一向は林の中を進む。

「んで、どうするの？　この人が言ってる、ゆういち、って人を捜すの？」
「さあな」
「何、投げやりになってんのよ。ついてくって決めたのはアンタでしょ⁉」
「ただの気まぐれだ」
そうは言ってみたが、御堂はどうしてこんな酔狂なことをしてるのか正直見当がつかなくなっていた。
身の安全のため？　馬鹿か。だったらじっとしていた方がいい。
この女を利用するため？　確かに、先程の施設を再襲撃するのであれば別のアプローチが必要だろう。だが、この女が何の役に立つ？　せいぜいが弾除けじゃねぇか。
じゃあ、なんで俺はこんなことをしている？
——と、ひとつ思い当たる節があった。が、御堂はそれを認めたくなかった。
『ちっ、そんなワケがあるか。そうだ、ただの酔狂だ。暇つぶしにこの女の行く末を見てやるだけさ』
その女性は、にこやかに笑って振り返った。
「わぁ、いっぱい。きっと祐一も喜んでくれるよ」
ただ。その原因であろうソレ。
背中に背負ってる死体のことについては、ついぞ問い正すことは出来なかった。

466　天使の導き

時間にして十分も経っただろうか。
戦いは最終局面を迎えていた。
均衡したせめぎあい。
両者、まともに話すことすらままならない。
互角だった。
「ひひはへんにひろ〜〜〜‼」
「はんたほほ〜〜〜‼」

両者とも頬が良く伸びる。
唐突に始まった二人の乱闘は、頬の引っ張り合いで膠着している。
『ぷはっ』
お互いの手が離され、勢い余ってしりもちをつく。
「あはは……、あはははははは！」
梓の笑い声。
「ふふふ、ふふ……」
千鶴の笑い声。
仰向けに寝転がり、天井を見つめる二つの笑顔。
笑いは徐々に収まっていき、やがて理性が戻って来る。
不意に千鶴の目から落ちる雫。
「——楓」
「千鶴姉……」
放送で告げられた妹の名前。
この島で初めて失われた彼女たちの家族。

梓は涙を流す千鶴の様子を伺う。楓の死を知ったときの千鶴の錯乱した様子はまだ記憶に新しい。
千鶴の心は決して弱くない。
だが、なんでも一人で抱え込んで、その重圧に押し潰されそうになってしまいがちだ。
そして、楓は死んでしまった。その責任は全て自分にあると思い詰めてしまうのが千鶴だった。
「あのとき……。なんで一緒にいかなかったの……」
梓に『あのとき』が何時なのかわからない。
ただ、おそらく楓と会った時のことだろうと察しはついた。
千鶴が心に抱いているものが『後悔』だということも。

——ガン！——

千鶴の顔の横。床を梓が殴る。
「千鶴姉!!」

初めてかもしれない。こんな弱々しい姉の態度。
「わたしはいつだってそう……。肝心のところで判断を間違えるの……」
梓には意味がわからない。
「耕一さんの時はとり返しがついたけど……。今回はとり返しなんてつかないのよ……」
(耕一？)
わからない。

——ガン！——

梓の剛拳が再び床を叩く。
「なんだかよくわかんないけど！　千鶴姉!!　後悔なんてしてたって何も始まらないんだよ！　これから初音だって探さなくっちゃいけない！　もう楓のことは……、かえでのことは……」
考えないなんてできない。可愛い妹が死んだというのに。
(くそ！　くそ!!　くそ！！！)
自分だって泣きたい。泣いてしまいたい。楓のことを失った悲しみの感情にこの身を委ねてしまいたい。
けど、今はまだそうする訳にはいかなかった。死神が舞うこの島で、泣き喚いている時間などないのだ。
今こうしている間にも、もう一人の妹。初音も危機と遭遇しているかもしれない。

「うぐぅ……」
「あゆちゃん？」
梓が振り向くとそこには泣きそうな顔のあゆ。
「あ、あゆちゃん。ごめんなさいね。一人にして」
千鶴が涙をふき取り、笑顔で言う。
立ちあがった千鶴にあゆが小走りで近寄る。

――ぼむっ――

そのまま千鶴に抱きついた。
「うぐぅ……。鼻ぶつけた……。
じゃなくって、あのね。ボク思うんだ……」
梓は思った。
(あゆちゃんがいてくれて。本当に良かった……)

467　俺のこの手は汚れているけど

桜井あさひの一件から数時間の時が流れていた。
大泣きしていた観鈴は泣き疲れたのだろうか、今やすでにぐっすりと眠りの中に落ちていた。
「かわいい寝顔や」
観鈴の頬を優しく撫でて晴子は呟く。
「なぁ、居候」
「なんだ？」
「うちもちょっと寝てええか？」
国崎往人は苦笑して、
「好きにすればいいさ」
「それじゃ、お言葉に甘えさせてもらうで」
神尾晴子はごろりと地面に寝転がった。
「そうや、ひとつ言うておかなならんことがある」
国崎往人は晴子のほうにちらと視線を移す。
「うちにな……」
語り始めた表は真剣そのもの。その雰囲気に飲まれ、自然と国崎往人の表情も真剣になる。
「悪戯すんなや？」
神尾晴子は表情を崩して、歳相応では無い笑みを顔いっぱいに広げた。
「せんわっ！」
「国崎さんは冷たいなぁ……女のすんなはしてもえってことなのに」
「適当なことを言うな！　絶対せんっ、死んでもせ

んっ！」
「そうかぁ国崎さんはロリコンやったかぁ」
「いじいじと地面の砂をいじるなっ！」
「そういや観鈴をなんだか嫌らしい目で見とったもんなぁ……」
「見ていないぞ。断じて、絶対、観鈴をそんな目では一度も見ていない！」
「冗談や。何そんなに真剣になっとんねん」
言って、神尾晴子は瞼を閉じる。
「そろそろ寝るわ」
「好きにしろ」
国崎往人は投げやりだった。
「おやすみ」
仲良く二人寄って寝静まった観鈴と晴子。
同じタイミングで寝息を立てているのが、見ていてとても微笑ましかった。
(親子……か)
本当の親子では無くても、ここまでひとつになることが出来る。
それは、過去の記憶。
仰向けになり空を見上げると、母親と旅をしていた頃と変わらない空がそこにあった。
ピンク色の空に雲が流れていて、小鳥のさえずりが聞こえて。
そんな朝の空。
それがここでは何か異様に感じた。
そして、それがとても残酷でもあるとも……。
(こんな空を見せられたら、いつもの日常に戻る希望がどこかにあると思ってしまうじゃないか……)
国崎往人はぎゅっと拳を握りしめる。
観鈴と晴子にはこの空をあの町で、安らげるあの家で見せてやりたい。俺の汚れた手で、それが出来るのだろうか。わからないけれど……精一杯努力はしてみよう。
心の中でそう誓った。

その瞬間のこと。
ぐらりと、目の前が歪んだ。
自分が真っ直ぐ立っているのか判らない。
(なんだ……これ……?)
ヤバイと思った時にはもう遅かった。
国崎往人は地面に向かって倒れ込んでいた。

468　闇の声

「嘘吐けよ。本当は一人で生きたいくせに」
耳元で何かが囁く。
「お前にはそんなこと無理なんだよ、判ってるんだろ、国崎往人?」
「違う!」
「何が違うんだ?」
「俺には守らなければならない人が居る」
目の前に居る、大きな黒色の生物。
それは大きく翼を広げ、目を大きく見開いた。

「守らなければいけないだってそんなのお前には無理だよ、無理」
「無理じゃない、俺には力がある!」
「そうだね、今まで何人も殺してきた力があるね。その力で人を守るためにまた人を殺すのかい。何人も何人も殺していくのかい。それが君の守るってことなのかい?」
「五月蠅い、黙れ!」
「君は守るべきものはあるということを盾に人を殺したいだけなんだろう? 自分の中で殺しを正当化する為に守るだけなんだろう?」
「違う!」
「違わないさ」
「違う! 違う! 違う!」
「何度言っても変わらないさ、君は……」
……パァァアンッ……。
国崎往人のデザートイーグルから発射された弾が、その黒色の生物を撃ち抜いていた。

「ほら、また殺した。これからもそうやって、お前は殺し続けるんだ、殺し続けるんだよ！　あはは、あはははははははははははははははははははっ！」

469　命の炎　～鈴の音～

「ふふふ、お姉ちゃん」
甘えるような声で佳乃ちゃんがセンセイに近づく。この場にとっても不釣合いな声。だけど、佳乃ちゃんの表情はもっと声に合っていなかった。
私は、何も言えずにただ二人の悲しき再会を見守るしかできなかった。
「ごめん……もう、いいよ」
ゴシゴシと腕の包帯で乱暴に顔を拭うと、佳乃ちゃんは今度こそ、笑った。
私も、佳乃ちゃんも……もう全部傷ついていた。
「……ん……」
短く、そう答える。

私達、もうボロボロだった。
格好も、心も。
鏡を見たらお互い卒倒しちゃうんだろう……とか思ってたりする。血と、泥で彩られた衣類、同じくマーブル状に変化してしまっている包帯。
私の首にはひどく腫れあがってしまった紫色（だと思う）の痣。さらに体中のあちこちがひどく痛む。たぶん打撲症。木々に打ち付けられた体が、筋肉痛のように悲鳴をあげていた。

それ以上に、私達はあまりにひどい現実を目のあたりにしてきた。泣いても叫んでも、願っても、祈っても……変わらなかった現実。
目にうつる景色は、私達を包んでくれてる大自然はこんなにも穏やかなのに……
いつもと何も変わらなかったはずなのに。
ここ二、三日の記憶は、まるで出来の悪い、だけどどこか心に残る映画のフィルムのようで。ひどく

つまらない。だけど、こんなにも痛くて、悲しい。
だけど、泣き言は言いたくない。
佳乃ちゃんも、矢が刺さっていた左腕が力なくだらりと下がっている。
ついさっきからだ。無理して動かしてしまってたせいかもしれない。
もしかしたら動かないのかもしれない。
なにも言ってくれないけど……心配させたくないってことかな。
だから、弱音は絶対に吐きたくなかった。
そして私達は歩きはじめた。前を向いて。
(こんなクソシナリオ……私達で変えてやるんだからっ！)
「行こうっ！　佳乃ちゃん……」
「うんっ！」
私達、手を取り合って歩く。
もうこれ以上、悲劇が起こらないように願って。

チリン……

風の音にまぎれて、どこかで鈴の音が鳴った気がした。

470　命の炎　～現実～

「往人くんに会いたい」
佳乃ちゃんが唐突にそう切り出した。
「往人くん？」
「えっと……国崎往人くん……この島にいる、私とお姉ちゃんの友達だよ」
はにかんだように笑う佳乃ちゃん、今までのどの表情とも違う。
「好きなの？　その人のこと……？」
「えっ……違う、違うよぉ」
必死で否定する佳乃ちゃんの言葉に力はなかった。
「……だけど……一番信用したい友達……」

「そっか……」
私は女心に、やっぱり好きなんだな……って思うことにした。
その人の事は知らないけど……佳乃ちゃんの心を奪った騎士様、私も信頼してあげたい。
「でも、どこにいるか分からないね……」
「きっと会えるよっ」
「ど、どうして？」
「信じてるから……かな？」
また、照れたように笑った。
「往人くんなら『こんなゲームは俺がぶち壊してやるっ！』とか言ってたくましく生きてると思う。だから……生きてさえいればきっと会えるはずだよぉ」
底抜けに明るい声。空元気なのかもしれないけど、私まで元気にさせてくれる。
そんな声だった。
「じゃあ、探索の一番の目的は往人さんを探す……これで行こっか？」
「うん！　じゃあ、脱出へ向けて……しゅっぱつしんこ～!!」
えいえいお～と言わんばかりに右手を振り上げながら佳乃ちゃんが歩く。
ちょっとだけ苦笑い。うらやましいな。
佳乃ちゃんに想われるその知らない誰かも。
藤井さんに想われるお姉ちゃんも。
そして、今はもう還らないあの人を想っていた少し前の私も。
少しだけ、うらやましかった。
現実はいつも唐突で……
『私は医者だ。しかも腕のいい医者だ。患者の嘘くらい見抜けないようではな』
『マナ君、逃げろっ』

今ある現実はあまりにつらくて……
『今、自分がどういう状態に置かれてるかわかってるの？　今度会う時に私があなたを殺さない保証は何もないのよ？』
『俺が……弱かったんだよ』
しっかりと目の前の出来事を理解することもできず、悲しみに暮れても時は過ぎていって……
『あなたは、その子よりも弱いのよ。肉親を失った子でも、生きようと決めたのね。それでもあなたは、死ぬの？』
私の気持ちはいつも、時の流れのなかに置いていかれていて……
『もう一人の方……とどめさしたほうがいいよね？』
『……由綺さんがそう……おっしゃるのならば……』
『……最低ね』
『ああ、だから俺は、こんな方法しか取れないんだ……』
ただ私は……みんなで笑いあっていられればよかったのに……
『早く連れてって！　このノロマッ!!』
『もうこれ以上由綺の手が汚れるのを見ていたくはなかったんだ。汚れるのは俺だけでいいと思ったんだよ』
『……君は、強いね』
私だけが……ただこの場所で流されるように生きてきた。

私は……強くなんか、ない。
だけど、これからは強くなろう……
いつの日か、心から笑えるように、と。
せめて、私達は精一杯生きていこう……
『私がやったことは……許されないかもしれないけど……本当は、死んじゃった方がいいのかもしれないけど……私、お姉ちゃん達の分まで生きたい。だから……生きていてもいいかな？』
そうすれば、センセイや藤井さん、みんな、きっと笑ってくれるって、思ってた……
パラララララララララララララッ!!
思ってたのに。

現実は私の思いを断ち切るかのようにそれを遮った。目の前の佳乃ちゃんが、マリオネットのように踊った。
赤い、血と共に。

471　命の炎　～そびえたつ洋館～

私達はただ走った。
まだ、追ってきている。
よろよろとしながら佳乃ちゃんをこの手で抱いて。
「どうしてっ!?」
呆然と見つめる中、森の向こうに一瞬だけ見えた影はたぶん弥生さん。藤井さん、お姉ちゃんと一緒に行動していた女の人。
「しっかり……してっ！」
走りながら、佳乃ちゃんに叫ぶ。
（う……ん……）

弱々しく、佳乃ちゃんが答えた。
だから走る、絶対に二人とも生きるんだからっ!!
佳乃ちゃんを抱く腕がぬるぬると滑る。
泣きたくなった、どうしてっ!?
よく状況がつかめなかった。佳乃ちゃんがいきなり撃たれて、倒れて、抱きかかえて——
ただひたすら逃げるように走った。
また、音が鳴った。私達に、生きることすら許さないような慈悲のない銃声が。
近くの地面が、木が、ビシビシッっと跳ねる。
(あそこっ……)
かすれた声で佳乃ちゃんが右手を指差す。
洋館……?
森の中、不気味に佇むソレはオカルトの小説の中にだけしか存在しないような建物だった。私は入り口を蹴破って中に転り込んだ。
助かるなら……私達が、佳乃ちゃんが助かるならどこだっていい。
躊躇なくそこへと入った。
ホールから真正面の扉を開けて突き進む。
食堂だろうか、真ん中に大きなテーブルが置かれていた。真白いテーブルクロスの上、燭台やマッチが乱雑に転がっている。
そんなものは今はどうでもいい。
安全な所で休みたい。
佳乃ちゃんを手当てしないとっ!!
私達はそこを走り抜けた。
床に真新しい鮮血が迸り、水たまりをつくった。
急がないと、佳乃ちゃんがっ!!
ダダダッ!!
階段を駆け上がって二階へ。
そのうちの一つのドアを開けて中へと入る。
生活感のない部屋、何もおかれていないドレッサーと、白いシーツが申し訳程度に引かれているベッ

ドだけが存在する小部屋。
「ここにっ……」
佳乃ちゃんをそのベッドに寝かせる、みるみるうちにシーツが赤く染まった。
「し、止血しなきゃっ!!」
センセイの救急箱を乱暴に開いて、中身をあさる。
こんなときどうすればいいのっ!?
何も浮かばない、何も考えられない。
包帯……アルコール、ピンセット……メス……何をすればいいの……？
（待って……）
佳乃ちゃんがゆっくりと箱の中から瓶を取り出す。
「なに……？」
消毒用アルコール。
それを開けて、ベッドへとぶちまけた。
「佳乃ちゃんっ!?　一体何を……」
（お姉ちゃんのバッグ……開いてっ……!!）
「え……う、うん!!」

ただ言われるがままにソレを開く。
「ろ、ロープ!?」
長いロープ。先端に三叉の鉤爪がくくられた一本のロープ。
（窓から……垂らして……）
「えっ!?」
窓を開け放ち、下を見る。
ぐらっっと景色が揺れる……ような気がした。
二階の窓なのに地面が遠い。切り立った崖に面して、洋館はそびえ立ってたんだ。
（ここから……逃げないと……）
「だ、だけどっ!!」
弱々しい佳乃ちゃんの声に振り向く。
佳乃ちゃんがすぐ背後までやってきていた。
「だめだよっ、寝てないとっ!!　はやく手当てしないと……」
（ほら、血……べっとりついてるから……ここにいることがバレちゃうから……）

見れば、部屋の入り口から、ベッドから、佳乃ちゃんの足元から……血の跡が続いてる。たぶん、洋館の中、ずっと続いてるかもしれない。

「だったらなおさらっ！」

（ここから……降りてから……手当てすれば大丈夫だよぉ……）

口調と裏腹に、苦しそうな声。

「で、でもっ！」

（はやくっ……ここにあの人が来ちゃうよ!!）

佳乃ちゃんが私の手からロープを奪って窓の淵に鉤爪を引っ掛ける。

（はやく……先に降りて……）

「だったら佳乃ちゃんが先にっ……」

（ほら……私……怪我してるから……先に降りてくれないと……滑って落ちて死んじゃうかもしれないから……）

カツカツッ!!

階下で、足音が響く。

（はやくしなくちゃ……）

ロープを、まるで取り落としたかのように崖へと放る。

ぎりぎりで、崖下までロープが届いた。

（先に……はやくしないとふたりとも助からないから……）

私の背中を軽く押す。

「……」

足音が近づいてくる気がする。

「分かった……すぐに……来てよっ!!」

私は意を決して、荷物を外に放り投げると、私自身も窓の外に身を躍らせた。

恐かったし、佳乃ちゃんを助けなきゃいけないっていう気持ちが私を躊躇させたけど……それでもあそこで言い合ってたら二人とも死んじゃう。

私は急いで下まで降りた。

風に体が揺れて、手の平が縄ですりむけて……何度も落ちそうになりながらも急いで下まで。

「降りたよっ！　次は佳乃ちゃんがっ!!」
　上を向いた私に見えたのは、ロープを投げ捨てる佳乃ちゃんの姿だった。

「どうしてっ！　どうしてよぉ！」
　呆然と、私はその光景を見ていた。
　――わたしはもう、助からないから……こんな方法しか思いつかなかったんだ――
　佳乃ちゃんの口がそう動いたように見えて。
「そんなことないっ!!　私はっ！」
　落ちてきたロープを拾って、振り回す。
「今行くから……だからっ！」
　遥か上方の窓に向かって縄を放る、だけど、途中の崖に当たって、小さな土の欠片と共に落ちてくるだけ。
「すぐ行くからっ!!　待っててっ!!」
　もう一回投げる。
　だけど結果は同じ。崖の半分位のところに縄の先端が当たるだけ。
　――ごめんね、マナちゃん――
　最後に、そう口が動いて、佳乃ちゃんは家の中へと消えた。

472　命の炎　～盛る灯～

　だんだんと大きくなる足音、忍ばせているのだろうが、他に音のないこの世界ではいやにはっきりと聞こえた。
（ごめんね……マナちゃん……）
　揺らぐ景色の中、その場にへたり込む。
（私……きっとまた夜になったらマナちゃんを殺そうとしてしまうかもしれないから）
　マナをこの手にかけたあの時……東の空が紫色に染まったあの時、もう一人の自分の支配力が弱まった。そのおかげで、もう大切な人を失わずにすんだ。
　だけど、また、夜になったら……

（ごめんね、もう一人の私……ごめんね、お姉ちゃん。聞こえてる？　私、行くね……）
右腕のバンダナを、――――解き放った。
（私、魔法、使えるよ。とびっきりの魔法）
先程ぶちまけたアルコールの瓶に残った液体を黄色いバンダナに染み込ませる。
（往人くんに、もう一度……会いたかったな……）
このままでは、崖下にいるマナも命も危ないだろう。
だから、マナを守る魔法。
――私の最初で最後の……魔法……マナちゃんを……守るんだ――
震える手でマッチを擦る。
下の食堂で拾っておいたマッチ。
小さな明りが部屋に点った。
ボッ……
カツカツカツ……
部屋の前まで来た足音と、ほぼ同時にバンダナが炎で輝いた。
一瞬の静寂――
そして。
パラララララララッ！
扉の向こうから無数の銃声。
「…………！」
何かの未知の衝撃に、佳乃の体が壁際まで吹き飛んだ。
バンっ!!
いくつもの穴の開いた扉がゆっくりと部屋の内側へ倒れた。機関銃を構え、立っている女、全身凶器と化していた弥生の姿だった。
「……」
もう一度、佳乃へと銃口を向ける。

ぐったりと壁際で頭を垂れている佳乃の手には激しく燃えさかるバンダナが握られていた。
「バイ……バイ……殺し屋一号さん……」
「……!!」
ソレが宙へと舞った。
パラララッ!!
もう一度、短く銃声。佳乃の体がもう一度だけ、跳ねた。

ボッ!!
宙を舞ったソレがふわっと舞い降りたのはアルコールがたっぷりと染み込んだベッドの上。
燃えて、盛る。
「くっ……」
弥生がそれを確認すると、部屋から後ずさる。
そして佳乃をもう一度見たが、もう動いてはいなかった。
「……!!」

一瞬の躊躇——佳乃を連れ出すか否か。
(何をバカな……もう死んでいるのに……それに殺したのは私。このような感情はナンセンスです……でも)
憐憫の視線を佳乃に向ける。
視線こそ佳乃に向けられたものだったが、その向こうに弥生の姿があったような気がした。
無意識の中にあった罪が、そうさせた。

既に部屋は炎で包まれていた。炎の向こうで佳乃の姿が陽炎で揺らぐ。
もう入ることも叶わない。
(また、殺したのですね、私は)
ここにいなかったもう一人の少女、マナのことも気にはなったが、ここを脱出するほかはない。
「げほっ!!」
激しい煙の中、弥生がようやく外に脱出したときにはもう、炎が洋館全体を覆い尽くしていた。

灰色の煙が天高く上る。佳乃が放った炎、命の炎。明るくなっていく東の空よりも赤く輝く。それは悲しくも美しかった。
「マナさんも……この中にいるのでしょうか……」
呆然とその炎を見つめた。弥生の瞳の中にその炎が揺らめく。
(私は……これからもずっと罪を重ねていくのですね……)
少しの間それに見入った後、そこから離れた。
もう明け方とはいえ、闇の中これだけの炎が燃え盛れば、誰かがここに来ないとも限らない。
これ以上、ここに留まるわけにもいかなかった。
(また新しい休憩場所を探さなければなりませんね……)
あと、どれだけ罪を重ねればいいのだろうか。
無意識の内に――何かの感情がこみ上げた。
気がついたら、血が滲むほどに拳を強く握り締めていた。

三十一番　霧島佳乃　死亡

【残り33人】

473　命の炎　～生きるということ～

「佳乃ちゃん……!!」
銃声が響く。
それでも私はロープを投げ続けた。あきらめたくなかったから。だけど、私の力だと、あの窓までロープは届かなくって。
崖をまた三叉の鉤爪がえぐった。
「佳乃ちゃん……!!」
幾度ロープを放ったんだろう。
焦げ臭い匂い。
それに気づいた瞬間、館を勢いよく炎が走りぬけた。

「そんな……佳乃ちゃん……」
あまりに圧倒的なその炎の威力は、私のその行動を止めるのに充分だった。
私はゆっくりと崖から離れてその燃える館を見つめた。
「生きていこうよって……一緒に脱出しようって……言ったのに……往人さんに会いたいって……言ったのに……ばか佳乃っ!!」
どんどん大事な人が消えていく、私だけをこの過酷な現実に置き去りにして。
「私にどうしてほしいわけっ!!」
まだ見えない、雲の上、空の向こうへ叫んだ。
「私は殺したくないっ！　死にたくないっ!!　ただみんなで笑いあいたいっ！　生きていきたいって思うだけっ!!　なのにどうして……」
なじった。誰にでもなく。
憎むべき相手なんか、いない。分からない。
だけど……このやるせない私の心はどうすればいいのっ!?
どうしようもないその現実に、私はあまりに無力で。気がついたら、私は血が滲むほどに拳を強く握り締めていた。
(私……負けない……負けたくない……)
——生きてさえいればきっと会えるはずだよぉ
佳乃ちゃんの言葉を……きよみさんやセンセイを思い出す。
「往人さん……だったっけ……」
もういない、佳乃ちゃんに向けてそう問いかける。
「私が探す……ね」
やっぱり私に出来ることはそれだけだから。
センセイの荷物にロープをしまって。
流した涙も、はりさけそうな思いも、私の心の奥にしまって。

「もう、行くね……バイバイ、佳乃ちゃん」
冷たい女って思われるかもしれないけど、それでもいい。後ろ髪ひかれそうな中、私は立ち上がる。心の中のみんなが、笑ってくれるなら……それでいい。

こんなクソシナリオ変えてやる。
絶対に生きて帰るんだ。ハッピーエンドにしてみせるんだから。

でも、私の心に本当のハッピーエンドなんてもう……来そうもなかった。

474　道中、ふと思うこと

正直俺はあいつを見直してたんだよ。
奴と闘ったのはたしか季節が五つ程も前。何度も向かってきては俺に倒される。そのたびに立ち上がってきた。
弱っちい奴だ、なんて思ってたんだがね。
まあ、そんな奴でも、俺に向かってくる根性だけは認めてやったつもりだけどな。終生のライバル……そんな風に思われるのは心外だが。
――いや、ほんとのところはどう思ってるか知んないけどな。

爺いが倒れて、その相棒の女の命がやばくなった時……躊躇せずに突っ込んでやったさ（こう見えてもフェミニストなんだよ、俺はな）。
あいつはただ横で震えていて……情けない奴……とか思ったね。
腕に思いっきり体当たりしてやった。
あの素っ頓狂なロボットの顔……傑作だったぜ。
だけどな、やっぱウエイト差ってのがあると俺もツライんだよな。女を無視して、こっちに銃を向けられたとき……俺ももう駄目か……とか思ったよ。

『死』というまぎれもない事実が近づいてきたとき……俺もさすがに震えた。
逃げなきゃ……と思っても体が動かなかった。
そんな時だよ、あいつが突っ込んできたのは。
「にゃあ～っ!!」
弱っちい猫畜生のくせに、ロボットの顔にへばりついてよ……その後はまあ——おほん——俺らが敵うはずもなくてな……殺されなかっただけでも幸いか。
ほんと、少しだけ見直したんだよ、あいつは、俺と、女の危機を救ったんだからな。
（本当はなんで胸を撃ちぬかれたはずの爺いが生きてたのか……のほうが気になってるんだけどな）
さっきもそうだ。爺いと女、そして俺が震え上がっていた時、あいつは躊躇せず飛び出した。
「ねこーねこー」
その世にも恐ろしい姿をした女があいつを手招きする。いや、そりゃああいつは猫だしな。だけどねこって呼ばれてむかつかないのかね……
俺が「いぬー、いぬー」なんて呼ばれたら蹴り殺してしまいそうだぜ。
まあ、あの女は絶対に蹴れないけどな……恐いからな。
まあ、そんなわけであいつを見直したんだけど……それもさっきまでの話。
——まあ、やっぱ駄目だわ、あいつ。
結局、あいつは今も俺の横で震えている。
なんでも一時期飼われてた時の水瀬秋子っていう家主（一番えらい人のことらしい）なんだとよ。
どうにも様子が変らしくてな……自分をその娘の名雪だって言い張ってるらしい。
（ちなみに、その秋子って奴が背負ってる、頭が割れたピーナッツみたいになってる奴が水瀬名雪らしいな。つーか、それを見ただけで様子が変だって気づくだろ？　普通……）

やっぱ猫畜生にゃその程度が限界なのかねぇ……
そのうちこいつ命落とすぞ、いや、マジで。おかげで死刑台に向かう囚人みたいにその女に同行させられてるんだよな……こいつのせいで。
俺らまで殺されたらたまったもんじゃないよ、まったく。自己防衛の意味も含めて、このクソ猫に言ってやったさ。
「ぴっこり」

(があぁっ、うるせえんだよさっきから……この毛玉っ!! 静かにしてろっ!!)
なんだ、爺いでも前の女が恐いのか……そんなに声をひそめてさ……それにしてもがみがみうるせえ爺いだな……カルシウム足んねえんじゃねえのか？
ちゃんと食えよ、老い先短いんだからな、爺い。
あんま怒鳴ると踊るぞ、こんちくしょう……
「ぴっこ……ぴっこ……♪」
(だからうるせぇっ!!)
ち、俺の踊りを理解できないとは……多少腕は立つようだがまだまだだな、爺い。
ほんとはあの女から逃げろって本能が騒いでたけど(騒がなくても逃げたいよ、ずっと背中から血が滴ってんだぜ。気の弱い奴ならそんな後姿を見ただけで卒倒するね)しょうがないからついて行ってやるか。この爺いも、相棒の女も、横で震えているこいつも……俺がいなきゃ心細いだろうしな。

475　舞い降りる白

ばさばさばさ。
ばさばさばさ。
羽音が、礼拝堂に響き渡る。
少し早い朝ごはんを食べる、あたしの周りは真っ白だった。雪のように白い鳩たちが、開いた天窓から次々と舞い降りてくる。ひょっとしたらこの教会

には元々人がいて、毎朝エサでも与えていたのかもしれないなと思った。半ば照らし上げるように地平線から放射される光は、ステンドグラスを透し、天井へ虹のような色彩を投げかける。場所が場所だけに、神々しいのは当然だ。

ばさばさばさ。
ばさばさばさ。
気まぐれで、おこぼれをねだる鳩たちにパンくずを放った。わっと集まる鳥たち。その様子を眺めていると、高槻達の追撃を警戒して尖りきっていた気持ちがゆるむのを感じる。
由依が居たならどんな反応をしたのだろう。ふとそんなことを思ってしまい、喪失感に胸が詰まりそうになる。
のどかな光景に気を緩めすぎていたのかもしれない。ふと、顔を上げると、そのまま視線は釘付けになった。

何時からいたのだろう。まるで空気のように気配なく、静かに。後光を浴びて、亜麻色の三つ編みを垂らした少女が立っていた。
「……鳩、ですか」
その表情からは、何も読み取れない。
よく今まで生き残れたな、と思うほど気迫の感じられない少女の、特に意味のない質問に、あたしは何の捻りもなく応える。
「うん、すごいでしょ」
白鳩は尽きることを知らないように、今も次々と降りてくる。あまりの多さに最初のパンを諦め、全てエサにすることに決めた。
「あんたも、やる？」
パンを大雑把に分割し、半分差し出しながら誘ってみる。
「……いえ。見ているだけで、十分です」
ノリの悪い娘だ。
「鳩、嫌い？」

「……いえ。わたしは、嫌いじゃありません」
じゃあいいじゃない、とパンを投げ渡す。
彼女は拳銃を手にしたまま、器用に受け取る。

ばさばさばさ。
ばさばさばさ。
夢のように、礼拝堂が白く染まっていく。
違和感が、あった。なぜか彼女の周りに、鳩は寄り付かない。
なんとなく、あたしも気付いていた。彼女の振り撒く臭いに、鳩は恐れを抱いている。
それは、死の臭いだ。
「……たくさん、殺しましたから」
ぽつり、と彼女が口にする。
なるほど――嫌いなのは彼女の方ではなく、鳩の方だ。そういう意味で先ほど「わたしは、嫌いじゃありません」と言ったのだ。
自らの穢れを自覚していなければ、できない発言だった。

ばさばさばさ。
ばさばさばさ。
地面を埋め尽くした鳩たちが、椅子まで上がってくる。
「……今も、殺してきました。少し変な人ですけれど。とても、とてもやさしい人でした」
あたしに向かって言ってるような、独り言のような。それとも、神にでも語りかけでもしているような。
「そう」
殺人自体に関しては、特に驚かなかった。
この島で殺人を犯すことを否定したまま生きている人間などまだ残っているのだろうか。あたしだって敵を殺すことに躊躇はない。利己的な動機の殺人ですら、この狂った島では正しい行いなのだ。
「どうして、殺したの？」

だから、尋ねてみた。
「……生き残るために。去ってしまった彼を、待ち続けるために。そのために、殺しました。……たくさん、殺しました」
抑揚のない彼女の声から、ほんの僅かに苦渋の響きを感じることができる。
「……じゃあ、どうしてあたしを殺さないの？」
聞かないわけには、いかなかった。

ばさばさばさ。
ばさばさばさ。
虚しく羽音が響き渡る。

季節はずれの雪の中、彼女とあたしは戦っている。
氷原の悪寒を背負って、あたしは彼女と戦っている。
人知れぬ悲しみを抱いて、彼女は彼女自身と戦っている。
決着は、まるで見えなかった。
そもそも決着なんてものが、あるのかどうかさえ解らなかった。

——わずかばかり、時は遡って——

476　あなただけは　～蜘蛛の巣より～

ちりん、と鈴が鳴った。
微睡(まどろ)みがちだった弥生の意識が、とたんに現実へと呼び戻される。
横に倒していた上体を素早く起こし、鈴の鳴った方角を特定する。
続いて体のそばに寄せてあった荷物を抱え、迎撃の体制を整える。
そうして弥生は木々の陰に身を隠しながら、音の発生源の方を数瞬、目を凝らすようにして見た。
（近づいてくる者の気配はない……）
つまり、網にかかった獲物はその蜘蛛の巣の外辺

を通過し、そのままどこかに立ち去ろうとしているということになる。
（これ以上、自らの手で罪のないはずの人を殺めるのは気が重いこと。そして、できれば私のあずかり知らぬところで潰しあってくれれば、と思っていたのもまた事実です……。が、私の張った罠を、無防備に通過していく人間がいるのなら。こちらのリスクを最低限に参加者の数を減らすことができるのなら……）
弥生は、静かに立ち上がった。
そして、なるべく音を立てないように、且つ、できるだけ素早く、鈴の反応があった方角に脚を進めたのだった。

間合いを詰めた弥生がその視界に納めたのは、あろう事かあの観月マナだった。
それにもう一人の少女が伴われているが、それはこの際どうでもいいことだった。
殺すことになるのなら、と思っていた対象が今、目の前にいる。
（マナさん、あなたさえいなければ。あなただけは私の手で……っ！）
その思いは、弥生自身の弱さの裏返しなのか。
それとも目標を失った弥生が作りだした歪んだ蜃気楼なのか？
瞬間、弥生は衝動的に機関銃の引き金を引いていた。
……的を絞ることすら、満足にできずに。

477　歪む世界

鐘が鳴る。鳩が飛び立つ。広場を埋めた群集の祝福が——聞こえる。
そう。聞こえたのだ。水瀬秋子の耳には。
突然、秋子は歩みを止めた。そして、

「……祐一？　そう。そこにいるんだ」
と、呟いて笑みを浮かべる。後ろについていた二人は何事かと顔を見合わせる。
「ねぇ、聞こえたよね？」
振り返り、御堂たちに秋子は問いかける。詠美はすぐさま御堂の背中に隠れると、ぎゅっとその服の裾を握る。
「何がだ？　何も聞こえねぇが」
「うそ」
きっ、と秋子の目に光が宿る。
「聞こえたもん。祐一がここで待ってる、って声が。祝福の鐘の音が。祝ってくれる、みんなの声が」
おいおい。と御堂は内心で舌打ちをする。やっぱついて行くという俺の判断は間違ってたのか？
「で、どこから聞こえたんだ？」
「決まってるよ」
唇の端を歪めて笑う。
「結婚式は、教会でやるんだよ」
ふふ、と笑い声を漏らす。だが、この辺りからはその教会とやらがどこにあるのかわからない。
木の陰に隠れて見えないのかもしれないが、それにしては秋子が聞こえたという鐘の音を御堂は聞くことが出来なかった。
おいおい、俺の耳がどうかしちまったのか？　と背中の詠美を見ると、詠美もふるふると首を振る。
こいつにも聞こえないらしい。と、いうことは恐らく幻聴か。
突然、秋子はうろたえる。そしてぶつぶつと繰り返した。
「どうしよう、早く行かなくちゃ。みんなが待ってる。お母さんが、祐一が待ってる。待ってる。待ってる……」
と、意を決してどこかへ秋子が駆け出——そうとするが、背中のソレが重いのかなかなかスピードが出なかった。
「……」

すと、と立ち止まると……秋子は憎々しげに吐き出した。
「……これ、邪魔……っ！」
どすん、と鈍い音がしてソレは地面に落ちた。そして身軽になった彼女は今度こそ走り出す。
——それは綺麗なフォームだった。そう、それは彼女の娘。陸上部に所属していた水瀬名雪の走る姿のように。
「……!?」
地面に落ちたソレを見た詠美はひゅっと息を呑む。そしてやおら両手で口を押さえると——林の奥へ逃げ込んだ。
ち、と舌打ちをしながら御堂は秋子が走って行く様を見やる。そしてデイパックから未開封のペットボトルを取り出すと、
「ほれ。こいつで口でもすすげ」
と、嗚咽し、しゃくり上げる詠美の方へひょいと投げた。
「……」
ふみゅーん、と力無い声がして地面で二、三度跳ねたペットボトルを詠美が拾い上げる。
うっうっ、と泣きながらもうがいをしているようだ。
改めて御堂はその死体を冷静に観察する。致命傷は——確認するまでもない。
原型を留めていないその顔の傷だろう。あまりに酷い死に様に、御堂は思わずため息を漏らす。
「一応、弔ってやるか。強化兵が弔いたぁ、笑えねぇ冗談だな。坂神が見たら何と言うだろうな……けっ」
ひょいと抱えあげて、近くの木陰に横たわらせる。血がほとんど流れ出たためか、その身体は驚く程軽かった。
目を閉じてやろうかとも思ったが、目がどこにあるのか判別しにくかったので諦める。

その代わり、両手を胸のところで合わせてやる。
――と、御堂の指が何か硬いものに触れた。
「？」
罰当たりかもな、と御堂はふと思ったがとりあえず利用できるものは何でも利用するのが戦場の鉄則だ。御堂は名雪の胸ポケットからそれを抜き出す。
と、その正体は冊子だった。役に立ちそうも無いと判断し、戻してやろうとぱらぱらとページをめくって――御堂の顔が歪む。
「おいおい、これは……と、いうことは」
「ねぇ、したぼく？」
突然の詠美の声に、御堂はその冊子を懐にしまうと振り返る。
「あの、その……し、死体をどこか別のところに……」
と、そこまで言ってまた思い出したのか、うっ、と口を押さえるとふみゅーんとまた身を隠す。
「あー、弔っておいたから出て来い」

やれやれ、と御堂は頭を掻いた。
「全く。最初にあの死体を見たときは案外平然としていた癖によぉ」
「だ、だってだって！　あの時は顔を伏せてて、しかも髪で顔が隠れてたから……うっ」
「あー、悪かった悪かった。だからもう吐くんじゃねぇぞ」
詠美は口をハンカチで押さえ、潤んだ目で御堂を睨み付けると、吐き捨てるように叫んだ。
「むかつくむかつくちょおむかつくーっ！　なによ。なによなによなによぉっ！」
「へいへい、すみませんでした。……おい、こいつをどう思う？」
怒り心頭の詠美に、御堂は先程名雪のポケットから抜き取った物を突きつける。
「何、これ？　……がくせいてちょお？」
詠美はその学生手帳を片手で受け取ると、ぱらぱ

らとめくろうとして――表紙を開いたところで止まる。
「……え？」
そこには、のほほんとした少女の顔写真とその氏名らしきものが載っていた。
「ねぇ、この『みなせなゆき』って名前、さっきの女の人の名前じゃないの？」
「確かに、そう言ってたよな」
「でも、この写真はあの人と違うよ。……ふんいきは似ていると思うけど」
「そうだな。この写真の女は……あの死体だ」
「そ、それって……どういうこと？」
ちょっと推理マンガみたいだ、華麗な探偵詠美ちゃんさまとそのしたぼく。――なんて思いつつ詠美は御堂に先を促す。
「あの女が名前を偽ってるってこった」
「な、なんでそんなことを？」
「さぁな」
御堂は詠美の質問を軽く流すと、秋子が走り去った方へ歩み始める。詠美も慌てて後を追う。
「……或いは、そう思い込んでるのかも知れねぇな」
「思い込む……？」
御堂はそこで立ち止まると、詠美の方へ向き直り静かに言った。
「いいか、これ以上あの女に関わるとロクなことが無いと思う。それはお前も感じたよな？」
うんうん、と詠美は頷く。と、言うか既にしている。華麗なクイーン詠美ちゃんさま、胃の中のモノを全てリバース。
「このままあの後を追うか、それとも別の行動を取るか。好きな方を選べ」
「あ、アンタはどうするのよ？」
御堂は、へっと笑うと詠美の頭を軽く小突いた。
むっとして御堂を睨み付ける詠美。
「お前の意見に従ってやる」

「ふみゅ？」
ぽかん、と口を開ける詠美。
「俺はお前の下僕なんだろ？　今回は言うこと聞いてやるって言ってるんだよ」
詠美は『信じられない』という疑惑の目を御堂に向ける。
「不満そうだな。わかった、じゃあここでおさらばだ」
「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！」
背を向ける御堂を慌てて引き止める御堂。
「どっちだ？」
「わ、わかったわよ！　えっと、えっと……今決めるから待ちなさいよね！」
しばしの時間、詠美は思考してそして御堂の方へ向き直り言った。
「決めた！」
ふふん、と胸を反らしながらの詠美の提案に、御堂は「わかった」と頷くと行動を開始する。

「行くぞ」
こくりと頷く詠美と、にゃあとぴこと鳴く獣たち。
御堂はこういうのも悪かぁねぇな、と思い……そしてぶんぶんと首を振る。
ちっ、全くどうかしちまってるぜ俺はよぉ。――だが……さっきは俺の判断でこんな目になっちまった。
じゃあ今度は別の方法を試して見るってのが筋だろう？　だから、今度はこの女に決めさせた。
これでまたヤバい目に遭ったなら……そうだな、今度はあの獣たちにでも決めてもらうか？
御堂は幾分身体が軽くなっているのを感じた。まだ傷は完全には癒えていないが、これで十分だ。
坂神とやりあうのでも無ければ。
――そう。幾分生まれた余裕が、御堂にこんな酔狂な真似をさせた理由かもしれなかった。

478

鳥

額に手を当てたらべとりと汗が掌についた。
相当汗を掻いていたみたいだ。
「往人さん、すごくうなされてた。大丈夫？」
観鈴は俺の汗をハンカチで拭いてくれた。
「あぁ、大丈夫だ」
国崎往人は地面から顔をあげた。
その瞬間のこと、国崎往人は無意識のうちに腰につけていたデザートイーグルを引き抜き、目の前のそれに向かって照準を定めていた。
「えっ、えっ⁉　往人さんっ⁉」
観鈴の声ではっと自分を取り戻し、デザートイーグルを地面に向けた。
観鈴の肩にはさっき夢にでてきた、黒色の生物、鳥がいたのだった。
「なんなんだ、その鳥は」
「カラスさん」
観鈴は即答する。
「それは観たら判る。そいつはなんでお前の肩に乗ってるんだと訊いているんだ」
「さっきここにバッサバッサバッサと飛んできて」
観鈴は両手でバッサバッサと鳥の飛ぶ真似をした。
「そしてね、私の近くに降りたの。こっちにおいでって手招きしたらこっちにきて、それから……」
「もういい」
そう言って往人は、朝食の用意を始めた。
「朝飯は、鳥肉か……」
そうポツリと呟くと、観鈴の肩に乗っていた鳥はバッサバッサとどこかに飛んで行ってしまった。
「あーあ、いっちゃった……」
「そうだな」
「往人さんがあんな意地悪言うから……。ひどい……」
観鈴は涙を浮かべる。

(夢がどうこうという問題じゃない。そもそも鳥ってのは不吉なんだ)
「いいから、晴子を起こして来い。朝食にするぞ」
「もう、多分昼食の時間」
空を見上げると、太陽は高くあがっていた。

479　気持ちは灰色

朝と夜の境界。
奇妙に薄明るい光を浴びて、立ち止まる人影が一つ。教会の天窓へ吸い寄せられるように、限りなく群がる鳩たちを見上げ、少なからず驚きながら歩き出す。
最初に教会へ辿りついたのは、詩子だった。喜びと不安を胸に、息を切らせて中を窺う。
(うわ、すご……)
埋め尽くさんばかりの白鳩に囲まれて、二人の少女が座っていた。中ほどの席に、見知らぬ少女。そして最後尾にいるのは……
(茜……!)
声をかけようとしたそのとき、二人の会話が耳に飛び込んだ。

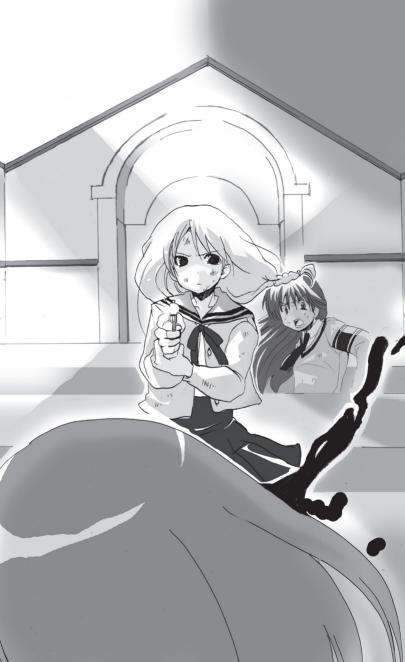
『どうして、殺したの?』
茜に対する問いかけ。
それは、詩子自身も知りたかったこと。開きかけた口を再び閉じて、荒い息を整えながら、羽音に紛れる会話に耳を澄ます。
『……生き残るために。去ってしまった彼を、待ち続けるために。そのために、殺しました。……たくさん、殺しました』
それを聞いても、不思議と驚かなかった。
待ち続ける茜の姿を、一番長く見守っていたのは詩子だった。誰を待っているのかも、茜の思いの強さも知っている。
しかし一方で、茜を待ち続ける自分がいて、今で

は茜を追う人間がいることも知っている。だから、詩子の茜に対する気持ちは、複雑だ。待ち続ける茜を応援する気持ちと、不満に思う気持ちが、混在している。茜が殺人すら辞さない強い意志をもって、彼を待ち続けていたことは理解できても、その行為に白黒をつけることはできない。
『……じゃあ、どうしてあたしを殺さないの？』
息を飲む。
引き金を引く意志に等しい、危険な問いかけ。曖昧さを許さぬ、強い言葉が茜を追い詰める。
『……わかりません』
茜が俯き、答える。
『……全員殺してでも生き残る、そう思って最初の一人を刺したとき。わたしは狂っていたのかもしれません』
祈るように拳銃を抱え、言葉を連ねる。
問いかけた少女は、黙って茜を見つめている。
『本当に全員殺すなんてことができるかどうか、全く自信はありませんでした』
茜が、ゆっくりと席から立ち上がる。
『そんな中でわたしは、待ち続けようとする自分を否定する自分がいることを、知ってしまいました』
拳銃を手にしながら組んでいた両手を、だらりと降ろす。
『そして、それを後押しする二人の存在が……わたしを苦しめるのです。待ち続けたわたしの過去と、待ち続けるわたしの未来を守るために、その二人を殺せるものだろうかと……それればかり考えていました』
鳩達が入り込んだ天窓を見上げて、搾り出すように言う。
苦悩の深さが茜を饒舌にしていたが、遂に言葉を切った。
一瞬の、空白があった。
問い掛けた少女が茜から目を離して、ちらりと詩

子を見、再び視線を戻す。
——議論の時間は、お終いだ。そう言っているようだった。
『それで？　どうするの？』
『はい……決めました』
茜がくるりと振り返るのと同時に、問い掛けていた少女が座席の上に立ち上がる。続いて砂塵を舞い上げるように、鳩が飛び上がる。茜の腕が上がる。引き金を絞る。全てがスローモーションのように、緩慢に見える。
そして銃声が、轟いた。
『……わたしは、生き方を変えることは出来ません』
失われていく意識と視界の中で。
茜が泣いているのが見えた。
綺麗な涙だな、と。
倒れながら、詩子は思った。

祐一の声が聞こえたような気がしたが。
もはや、届かなかった。

480　くそったれたゲーム

「はあ……俺達って貧乏くじだよな……」
「まあ、そうだな」
男が二人、溜息。
森の中に存在する木の小屋、施設というにも馬鹿馬鹿しいその小さな拠点の守備。ＦＡＲＧＯ教団から狩り出されて三日目、すでに勤務態度もなげやりになりつつある。
鈴木は、この任務の為に買いだめておいたセブンスターの箱から一本煙草を取り出す。
「おまえ、ヘビースモーカーだよな……」
「そうか？　まあ、こんな任務についたんじゃ吸いたくもなるぜ……田中、お前も吸うか？」
「いや、いい。煙は駄目なんだよ。前に一度試した

けど俺には向かないな。それに……彼女が嫌がるんだよな……煙臭いのをさ」
「それ、当てつけか？」
「そうかもな、お前もいいかげんやめとけよ、体に毒だぜ」
「やめられないんだよ、こればっかりはな。お前も酒はやめられないだろ？」
「まあ……な」
このような辺境の場所の守備。
大事な何かがあるわけでもないのに、何の意味があるのだろうか。それ以上に、このゲームに何の意味があるのだろうか。
だが、ＦＡＲＧＯ教団の命令とあらば従わないわけにもいかなかった。
はっきり言って、この任務は異常だ。
ただでさえ、人殺しのゲームなんて気分がいいものじゃない。ＦＡＲＧＯの中じゃあの高槻のように心から楽しんでいる者も多いようだが、この鈴木、田中、そして中で仮眠中の佐藤は違う。
所属している教団の関係上、口に出しては言えないが。
(こんなゲームクソ食らえなんだよ)
その思いは、大部分のゲーム参加者とあまり大差なかった。
「高槻の奴、いい気味だな……」
「そうだな……まあ、あんな奴でも少しは同情するけどな……まだ生きてんのかな……」
高槻の真の狙いも知らないまま、そう話す。
この辺境の地の守備に、なんの意味があるのか――実は意味などない。
彼らをこの地に送り込んだのは実はＦＡＲＧＯではなく高槻の命令である。高槻にとって、気に食わない奴等を死の舞台へと送り込む。単純に、それだけだった。

巳間良祐もまた、そんな犠牲者の一人だったが――

「なあ、ここだけの話、ＦＡＲＧＯってどう思う？」

「イカレてる……という答えでも期待してるのか？……分からない……というのが本当の所だな」

まだ入りたての下っ端である鈴木達は、まだＦＡＲＧＯの本当の姿を知らない。不可視の力がどんなものかも、中で行われている陵辱の宴も。

それでも、ＦＡＲＧＯは異常だ……位には感じ取ることが出来た。

「だが、間違っても自分の彼女を教団に入れる気にはならないな」

田中が胸からペンダントを取り、開ける。

「……それは……ロケットか？　女物じゃねぇか？」

「そう言うなって……一応彼女からの贈り物なんだよ。もうすぐか……楽しみだな……」

「そういえばそうだったな」

たしか、田中はこの任務がなければ今頃は彼女と式を挙げていたはずだ。

「ちょっと予定が延びたけど……楽しみだよ」

この腐れたゲームが終われば……

「結婚か、うらやましいな」

「どうなんだろうな……いろいろ縛られて大変そうだけどな」

「そういうセリフは鼻の下をのばしたまま言うもんじゃないぜ」

「ん？　ははは……」

ロケットを開け、中の写真を見ながら田中が笑った。

女性が幸せそうに微笑んでいる。

絶世の美女……とはとてもいえないが、本当に幸せそうなその表情が写真の中にあった。

「やっぱさ、うらやましいよ。彼女にそんな表情をさせられるお前が……さ」
その幸せな表情は、どんな絶世の美女よりも美しく感じられた。
「鈴木、そろそろ交代の時間だろ？　少し寝とけよ、ついでに佐藤も起こしてきてくれ」
「ん……じゃあ、寝かせてもらうわ……」
二人は気づかなかった。ずっと前から復讐に身を焦がせ、物陰から機会を伺う者がいることを。

ぎぃっ……
きしむ小屋の扉を開けて、中へと滑りこむ。
「まったく……ほんとに何もねえとこだよな……なにが悲しくてこんなところで……おい、佐藤、時間だぞ、起きろー」
何もない部屋、隅に薪用の木材が積まれているだけの殺風景な小屋。
その横で床にごろ寝している佐藤を揺さぶった。

「なんだ……もう時間か……」
眠そうな目と、だらしのない無精髭をこすりながらむくりと起き上がる。
「どーでもいいが……お前、髭伸びるの早いな」
「ほっとけ……」
そのときだった。
パラララララッ、パラララララララッ！
ダン！　ダン‼
パラララッ‼
すぐ外で、銃撃の音。
「な、なんだっ⁉」
佐藤が傍らにおいてあったショットガンを手に立ち上がる。ポンプアクション式のそれを構えながら扉の外を見やる。
何の音も聞こえない。
「さっきの音……田中だった……‼」
鈴木もまた支給されたグロッグを手に、扉へと近づく。今の銃撃戦に田中に支給されたオートマチッ

ク拳銃、ブローニングの音が混じっていた。
「田中っ!!」
イヤな予感を振り払うように扉の外をうかがう。
動く者はいない、そう、動く者は。
「たな……か……？」
動かぬ者が、一人いた。
「たなかっ！」
ピクリとも動かない田中の周りに染みだす大量の紅の血。
「田中ーーっ！」
——何倒れてんだよ……帰ったら挙式が楽しみだっていってたじゃねぇかよっ！
「待て、鈴木っ！」
佐藤の静止の声も、手を振りほどいて飛び出す。
(田中っ……彼女と……幸せになるんじゃなかったのかよっ！)
パラララッ!!
飛び出した瞬間、鈴木の世界が暗転した。

鈴木の手から離れたグロッグがカラカラと地面をすべり、田中の体に当たって止まる。
一瞬でその銃は血に飲まれた。
「くそっ！　くそっ!!」
ドンッ！
ショットガンが火を吹く。
パラララララッ!!
小屋の扉の向こう、林の奥から銃声が飛んだ。幾つもの銃弾が小屋の木の壁を、扉を穿つ。パラパラと小さな木片が佐藤の頭の上に降り注いだ。
「なんだってんだ、ちくしょうっ!!」
銃声が途切れたと同時に、扉の影からショットガンを放つ。
ドン！
「誰だ、畜生っ！」
クソ食らえゲームの参加者かっ？　佐藤は深呼吸しながら相手を慎重に探る。
パラララッ!!

「くっ！」
だが、扉の影から顔を出すこともままならない。
ドンッ!!
また、狙いを定めることすらできないまま一発。
「くそっ！」
また、弾丸が小屋を無差別に襲った。
開け放たれた扉から銃弾が中にまで侵入して、小屋を微かに揺らす。
「ちくしょう、ちくしょう、このままじゃ済まさねえぞっ!!」
鈴木と田中、二人の盟友が、一瞬で沈んだ事実。
憎しみが、佐藤の心を覆い尽くす。
ドンッ!!　――再度、ショットガンが火を吹いた。

音がやんだ。――倒したのか？
散弾が、命中したのかもしれない。
だが、油断は禁物だ……
些細な音も聞き逃さないようにしながら、慎重に扉から顔を出す。
動く者はいない――はずだった。
「ううっ……」
「す、鈴木っ!!」
鈴木のうめき声、鈴木の体が、細かく震えていた。
ドンッ！
もう一度、敵がいたと思われる場所にショットガンを放つ。
動きはない。
ドンッ！
……さらに、あたりに何発かの散弾を浴びせる……が、やはり変化はない。
(倒したのか……)
変化がないことを確かめてから、佐藤はゆっくりと鈴木に近づいた。
「大丈夫かっ!!」
鈴木の手を取る。
「だめだっ……にげろっ……」

「鈴木っ！」
「木の……上っ……」
「………!?」
ドシュッ……！
風を切る音、肉に刃が突き刺さる音。オートボウガンの矢だった。
「がはっ……」
佐藤の体が、崩れ落ちる。
「さ、さとうっ！」
追い討ちをかけるように、佐藤の頭にさらに矢が突き刺さった。
（なんでだ……畜生……田中や佐藤が……なぜ死ななければならないっ!!）
目の前に現れた女を憎々しげに睨む。
「主催側の人間ですね……このような場所で何をしているのですか？」
華麗に地面に降り立ち、木の根元に置いてあった機関銃を手に取る。
「知るかよっ!!」
本当に、なんで俺達はこんな所にいるのか……
「……」
女は田中、鈴木、そして佐藤に支給されたそれぞれの武器を手に取ると、
「ここで死ねれば幸せでしょう？」
新たに手にとった拳銃を鈴木へと向ける。血で濡れた、拳銃を。
「悪魔めっ……」
どこを撃たれていたのか分からないが、すでに鈴木の体は動かない。
撃たれたら、それで終わりだ。
「悪魔……？　そうかもしれませんね。ですが……」
ゆっくりと鈴木に歩み寄る女。
「あなた達もでしょう？」
冷たい微笑み。
「あなた達が作ったルール無用のゲーム……どんな

行動をとっても非難される筋合いはないはずです。たとえそれが人道からはずれていても……ね」
「こんなゲーム知ったことかっ……」
「あなた方の事情など私も知りませんわ」
「なん……だとっ？」
「このゲーム自体、参加者の都合など考えてもいないでしょう……？　あなたが一体どういう事情でこのゲームに参加しているかは知りませんが……」
バンッ!!
「ぐあっ！」
「あなた方を殺すことにはためらいありません」
鈴木の胸から鮮血が溢れる。
「ここで死んだほうが幸せかもしれませんよ。もしも私が生き残れば……どんな手段を使っても……」
さらに、三発、銃声が響いた。
「必ずあなたたちを追いつめるつもりですから。ゲームに関わった者全員、死よりも残酷な方法で」
（かはっ……）

鈴木の意識が遠のいていく。
「それが……私がこのゲームで選んだ道ですから」
或いは、ゲームが終わった後ですね……と、女が笑う。
「もう守りたいものは何もありません。私もまた、死んだ方が幸せなのかも知れませんが……」
女が、立ち去る。
「私のすべてを奪ったあなた方だけは……私は決して許しませんから」

このゲームの管理者達はすべて罪。そうかもしれない。
この女はすべてを失い、そして憎み、罪なき参加者を殺してでも生き残ろうというのか……
すべては俺達に復讐する為に。
冷たい機械のような女だったが……その背中は泣いているように見えた。

まったく、クソったれゲームだよな、田中ぁ……

鈴木が最期に思ったのは、そんなことだった。

481 異端

「————ぬぅっ⁉」

突然に源四郎は目覚めた。これは……先ほどまで戦っていたはずの自分は……、そういぶかしむ。何故自分は倒れている。何故自分はここにいる。ゆっくりと源四郎は上半身を起こす。

「……気づいたか」

ゆっくりと源四郎はその声がした方向へ顔を向ける。それはもちろん先ほどまで自分が立ち会っていた相手、坂神蝉丸だった。彼の顔を見て源四郎は穏やかに悟った。自分が敗北したという事実を。

蝉丸を見ると、大きく左腕の辺りが裂けている。

「……派手にやられたものだな」

「あんたにやられたのだがな」

蝉丸は失笑した。——あの瞬間、老人の得意としていた見切りのお株を奪う寸前の判断が成功した。源四郎に着地をさせるわけには行かなかった。そこから遠心力たっぷりの後ろ廻し蹴りのコンビネーションがあるからだ。まず突き出した左腕をガードレール代わりにして、半身の溜めを全開にして右フックを老人の胸に打った。

「——いい突きだった。しかしそれが本丸ではなかったのだな」

そう、渾身の一撃でもまだ足りない。源四郎の敗北を決定付けた驚愕の二撃目がそこにあった。狙いは源四郎の顎部、飛び蹴りをいなす為だけに見えていた左腕の奇襲だった。その運動のベクトルは飛び蹴りの軌道の正に真逆、死角から飛び出したアッパーカットが見事に源四郎の意識を消失させた。

「まあ、無傷とはいかなかったが」

勝負を決めた一瞬の攻防は、ダメージだけなら蝉

丸の方が重かった。見事源四郎を討ち取った後、彼は一瞬の残身の後そのまましゃがみ込んだ。踏み込んだときに脇腹に蹴りが届いてしまっていたのだ。正になりふり構わぬ攻撃だった。

「いかに負傷が大きかろうと、戦場においては戦闘不能になるべからず。……青年、貴様の勝ちだ」

源四郎は得心したような表情でそう言った。

「全盛期の頃のあんたと闘って見たかったものだ」

「小僧が！　今の貴様の実力では相手にもならんわ」

「そうか」

「そうじゃ……ふわっはっはっは」

思わず口を衝いて出た蝉丸の軽口に、思わず源四郎は敗者らしくない本音で答えた。両者の顔に笑みが浮かんだ。そこに穏やかな空気が流れた。

「(·∀·)おじいさん……」

月代は源四郎に近づくと、びくびくした様子で言った。

「ん、なんじゃ嬢ちゃん？　……そうか。わしが怖いか。それも仕方ないかの」

ほんの少しだけトーンの落ちた口調に、慌てて月代は口を開いた。

「(·∀·)ぜっ、全然そんなこと無いよ！　蝉丸と喧嘩してるのはちょっと恐かったかも知れないけど。でも、なんかやってるうちにおじいさんも蝉丸も凄い楽しそうな顔になってるんだもん。あんな顔する人に悪い人はいないしそれに……」

「……それに？」

源四郎は腰を低くし、自分よりも遥かに低いところにある月代の顔を覗き込むようにして聞いた。

「(·∀·)……目が、透き通ってる」

月代は満面の笑みでそう言った。脇のほうで蝉丸が笑っていた。源四郎はきょとん、とした表情になったが、少しすると声をあげて笑い出した。

「ふはは……、そうか。ありがとうな、嬢ちゃん」

月代の瞳に灯った光が源四郎にはとてもまぶしく

感じられた。どこか懐かしい、天真爛漫な瞳の色。
そう、綾香お嬢さ——
「(･∀･)ん、なんか言った？」
「ん？　何も言っておらんぞ。ふぁっふぁっふぁ！」
大声で笑いながら源四郎は月代の頭をなでた。ごつごつとして無骨な指に似合わない、優しげな動きだった。
「やぁん、ちょっと、やめてよぉ」
月代はそんなことを言って反抗する、しかしその表情には本心から嫌がっている様子はなかった。源四郎はその様子を見つめながら……ほんの少しの憂いと懐かしさを吐き出した。
「礼を言いたい」
蝉丸の呼びかけに、そっと源四郎は振り返った。
「忘れていたことが、思い出させたような気がする」
蝉丸の瞳が真っ直ぐ源四郎を映している。

「……そうか、よかったのぉ」
それを見て、源四郎は微笑しながらそう言った。
「——いけませんなぁ、そんなことでは」
ダァンッ！
ダァンッ!!
銃声が、二発。……一つは蝉丸の肩、そしてもう一つは月代の眉間を。
「なん……だ……と？」
「おおっとぉ、狙いがずれてしまいました。貴方を狙ったつもりでしたが」
やけに鼻につく嗄れ声が響いた一瞬後、森の奥から発砲した男が姿を現した。——その男は長瀬源三郎。
「長瀬の名の下に、一片の土もつけることはならない。そのことについてはどんな例外であっても認めるわけにはいきませんなぁ」
白い硝煙を漂わせる拳銃は、彼が長年慣れ親しんできた愛銃だった。

「そう、例えあなたであってもそれは変わらない。本来なら粛清ものですが……、同じ粛清するのなら、その事実そのものを消してしまえばいい」
「貴様ッッ‼」
　蝉丸は呪いを込めた視線でそのアナーキーな狙撃手を睨んだ。月代はうつ伏せに倒れたまま……もう、動かない。
「まだ生きてたんですかぁ？　うざったいですねぇ」
　ダァンッ！
「がっ……！」
　だるそうな口調であった。それと裏腹に彼の手際は冷酷なほどに鮮やかだった。すかさず放たれた銃弾は、蝉丸の顔を目掛けられていた。だが、必殺であったその軌道を本能的に蝉丸は避けることが出来た。もっともその銃弾は彼の僧帽筋の辺りを貫いてはいたが。
「……まだ生きていらっしゃいますか。私、こう見えて倹約家でしてね。色んな無駄を省くように心がけてるんですよ」
　淡々と語りだす源三郎。その話はどこか現実離れした口調に思える。
「ま、あれですね。要するに無駄が嫌いなんですよ。だから無駄弾も嫌いなんですねぇ。そちらのお嬢さんのようにあっさり死んでくれれば、弾も節約できるしあなたも苦しまずにすむ。──何より、私が楽です。ほら、いいことずくめじゃないですか？」
「貴様ァァァァアッッ！」
「あぁハイハイ、今殺して差し上げますね」
　チャキッと音を立てて、源三郎の拳銃が再び蝉丸のほうを向いた。
　──気付いていただろうか？　月代の傍にいたはずの源四郎がいつの間にか彼の視界から消えていることに。彼の背後に、冷徹な風貌の巨躯が立っていることに。
「……そこまでにしてもらおうか」

凍るような冷たい声が、源三郎の耳を通り抜けた。
「私を監視していたのか？」
「……基本的にね、困るんですよ。勝手な行動は」
源三郎は応えた。声だけならばそこに動揺してい
る様子などは微塵も見られなかった。
「私が好きでやっていることだ、誰にも文句は出さ
せん」
「で、その始末がこれだ。結局あなたがやったこと
は私たちにとっては不利益でしかなかった。予想外
の要因に引き起こされる予想外の事象など最悪です
よ。我々のような立場の人間にとっては」
「……我々はゲームに極力干渉しないのではなかっ
たのか？」
「自らその原則を破っておられて何をおっしゃるん
です？　おかげで私がこっちにまわされる羽目にな
ったんですよ。まあ、それでも汚点を残されるより
はマシですがね」
「人道すら……忘れたか」
「世迷言は後でゆっくり聞きましょう」
源三郎は、躊躇無く引き金を引いた。だが、それ
より速く――。
「ぐがぁっ!?」
源四郎の拳が、源三郎を樹木に吹き飛ばしていた。
「おのれ、……源之助」
苦虫を潰すように、苦い顔で源四郎は呟いた。だ
が、彼に感傷に浸る間など無かった。
ドギュウウゥウン!!
銃弾が、源四郎の右肩を貫く。
「ぐぅ!?」
吹っ飛ばされたはずの源三郎が、まるで何事かも
無かったように発砲したのだ。――いや、何事も無
かったどころの話ではない。この俊敏性は普通の人
間、単なる警察官のそれを遥かに凌駕している。
「源之助殿の意向を知らなかったとは言いますまい
な、老!?」
高らかに源三郎は叫んだ。

「ならばあなたも所詮は異端！　この場で私が処分して差し上げましょう！」
　そして、再び発砲する。だが、それを見切れない源四郎でもなく――。
「抜かせ小童が！　貴様は勝負を汚してくれた。その罪の重さ、身を以って知らせてくれるわ！」
　弾丸を回避して、源四郎は一気に間合いを詰めるべく駆け出した。
「ちぃっ！」
　残弾は一発、不利を悟った源三郎は、一旦森の奥へと逃亡する。ほんの少し時間が稼げれば、銃弾などすぐに補充できるからだ。そして同じように、源四郎も追って森に入っていった。
「く……そっ……」
　そして後には、銃弾を受けて傷ついた蝉丸と月代だけが残された。今の源四郎に、彼らを省みる余裕は無かった――。

482　葉子さんのデンジャークッキング

　穏やかな朝霧に包まれる住宅街……のなかの一軒の民家に、鹿沼葉子は居た。
　高槻を討つための下準備、武器調達のためだ。
（……芳しくありませんね）
　所詮、民家は民家。殺傷能力抜群の拳銃や、切れ味鋭い日本刀など置いてあるわけも無く。
（使えそうな物といえば……これくらいでしょうか）
　台所の戸棚に一本だけ仕舞われていた包丁。
　庭先の物置のなかに立てかけられていた箒。
　包丁ではリーチが無く、
　箒の柄では殺傷能力に劣る。
　と、いうわけで。
（……まあ、些か不安ではありますが）
　箒の柄の先に包丁を縛り付けた、即席槍が完成し

た。
……何かしら達成感を得ると、自然に腹が空くものである。
勿論それはＦＡＲＧＯ屈指の能力者である彼女も例外ではない。
世間一般で言う朝餉の時間にはやや早いが、夜じゅう動き回っていたというのも影響した。
そういった諸々の事情があって、葉子のお腹は、ぐう、と音を立てた。
葉子は慌てた。
念入りに辺りを見回す。
（……誰かに聞かれた、ということは……ないですよね）
誰も居ない事を確認し、ほっ、と胸を撫で下ろす。
こんな醜態、他人に見せるわけにはいかないからだ。
しかし、お腹が空いているという事態が解決したわけではない。
ここに至り葉子は、ひとつ決心をする事となる。
（朝食を……作りましょう）
だが、一般常識が年齢一桁台のところから欠如してしまっている葉子にとってガスコンロを扱う、という行為は危険そのもの。
……というか、元栓を捻るという行為が思いつかず、火を点けられなかった。
どうせ作るなら一から、とひそかに野望を抱いていた葉子だったが、仕方なくレトルト食品を探すことにした。
だがそれも、元々この家には無かったのか、はたまた他の参加者が持ち去ったか美味しく頂いた後なのか、なかなか見つからない。
それでも葉子は諦めなかった。それはまさに執念

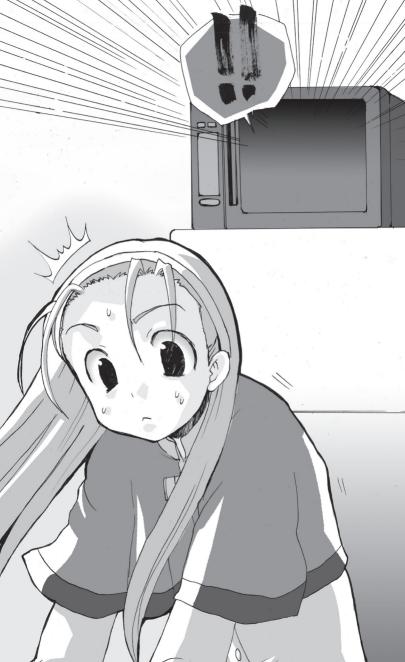
としか言い表しようがない。
そして、その執念は実を結んだ。
（……パックの……白米？）
レンジでチンして調理するタイプの、何の変哲も無い白米。
だが、食べ物である。葉子が今何よりも望んでいた、食べ物である。
（これなら何とか……えぇと）
パッケージに記された指示に従って、まずは点線まで、ぺりぺりとフィルムを剥がす。
（次、は）
調理法には、『電子レンジに入れて〇分加熱せよ』とある。
（電子レンジ……）
蘇る遠い日の微かな記憶。確か母が使っていた四角い箱のようなもの。
ぐるりと台所を見回すと、その記憶に大分近い物体が目に入った。
（これ……ですよね）
恐る恐るパックをセットし、ボタンを押す。
ぶーん、と、低い起動音が響く。どうやら間違っていなかったようだ、と、葉子はほっとした。
出来上がるまでのほんの僅かな時間。ソファーに腰を下ろし、葉子は考える。
（家事とは、大変なものですね……）
実際に葉子がやった事といえば、単にパックのご飯をレンジにかけただけなのだが、何分慣れぬ作業。葉子は激しく疲労していた。
（生きて帰ったあと、私もこういうことを簡単にこなすことが出来るようになるのでしょうか……）
たったこれだけの事でここまで苦労することになるとは、まさか葉子も思っては居なかった。
自分は何も知らないのだ、と痛感する。
やはり自分は、世の中の色んなことを学んでいかなくてはいけないんだ、と改めて思う葉子であった。

チン、と音が鳴り、低い起動音が消える。
（出来上がった、ということでしょうか）
レンジのドアを開くと、白米が湯気を上げていた。
朝食。
白米を上品に口に運びながら、ふと、ある三人のことを思い出した。
（確か、折原さんに長森さん、七瀬さん……でしたか）
絶望的な状況下において、固い絆で結ばれた三人。
一緒に話した時間はごく僅かであったけれど、彼女らの目は、この状況下においても希望に満ちていた。
……だけど。
出会ったその瞬間から、人は別れに向かって進んでゆく。
時間は有限で、命はひとつきり。
出会いと別れはふたつでひとつ。永遠というものは、この世には存在しない。
葉子も放送を聴いていた以上、長森瑞佳が命を落としたことは知っている。
三人の絆は深かった。その分だけ、別れは大きな傷を残す。
残された二人は、今、どんな心境で居るだろうか。
（喪失を糧にして、再び前を向くことが出来るか）
それとも、
（心を閉ざし、深い闇の中にその身を沈めるか……）
母という、この世でただ一人の存在を殺めた、彼女自身のように。
あの日から葉子は、自分独りで生きてきた、と思い込んでいた。
誰にも頼らず、独りで、自分が強い人間だと信じこんで。
だけど、それは、嘘。

心を閉ざして、ＦＡＲＧＯと言う組織に寄りかかってやっと心の平穏が得られるような人間の、何処が強いと言うのだろうか？
ただ、強がっていただけだったのだ。ずっと。
(それに気付かせてくれたのも、郁未さん……貴方です)
だからこそ、いずれ彼女の前に立ち塞がるであろう高槻は、討たねばならないのだ。

気がつくと、箸はパックの底を引っかいていた。考え事をしていても、箸は止まっていなかった。
「………」
お腹はまだ食べたりない、何かよこせと主張している。
勿論葉子の目的は高槻を討つ事である。今の武器でそれが叶わぬなら、せめてもっと強力な武器を探しにいかなくてはならない。
だが、本能にはやはり逆らえない。

(まだ何か食べ物……あるでしょうか)
腹が減っては戦は出来ぬ、といった言い訳じみた諺が葉子の頭の中を駆け巡った。
冷蔵庫のドアを開く。何も見当たらない、が、今の葉子は必死だった。
そして遂に、見つけにくい場所にひっそりと隠れていた卵を見つけた。
だが、生である。
(生卵を飲むというのは、ちょっと……)
どうしたものか、と悩むこと、暫し。
(……ゆで卵を作りましょう)
イケナイことを、思い立ってしまった。

生卵を電子レンジにセット。ボタンをプッシュ。加熱開始。
あと数分で久方振りにゆで卵が味わえる、と、葉子の心は弾んだ。
その瞬間、

卵はレンジの中で、景気よく爆ぜた。
「…………」
何が起こったのか、葉子には理解できない。
たっぷり五分は呆然と立ち尽くしたあと、その卵がもう食せる状態ではないということを、漸く理解する。
「……安物の電子レンジを使ったのが、間違いでした」
それ自体が間違いなのだが、今の葉子にとって電子レンジは夢を奪う魔の箱でしかなかった。
結局卵は破裂、電子レンジの中はぐちゃぐちゃ、残ったのは半端な空腹感。
葉子はがくりと肩を落とし、民家を後にした。
※生卵を隙間無くアルミホイルで包み、水の入ったコップに浸し加熱すれば、レンジでもゆで卵が作れるそうです。やけどには気をつけて。

483　月代よサラバ!?

「月代!!」
蝉丸が月代に駆け寄る。
二人の長瀬が視界から消えて、やっと彼女の元に辿り着くことができた。
「月代！　月代！」
「(･∀･)せみ……ま……る」
仮面のせいで表情が読み取れないが、かなりぐったりとしている。
蝉丸の手には赤い液体。
「(･∀･)蝉丸は……生きて……」
振り絞るような声。
「月代！　俺の嫁になるんじゃなかったのか!?　こんなところで死ぬんじゃない!!」
蝉丸は月代を抱きしめ言った。目からは涙があふれていた。

「(・∀・)あはは……。お嫁さんに……なりたかったよ……」

「嫁にしてやる！　だから死ぬな‼」

月代の体から力が抜けた。支える意識の無い体は……。重い。

「月代ーーーーーーーーーーーーーーーーー‼」

「ん？」

血が流れていない。

良く見れば眉間に銃弾が命中したはずなのに血が流れていないではないか。

蝉丸の手の血は……。蝉丸の肩からのものだ。

胸に抱いていた月代の頭を少し放し、顔をのぞきこむ。

(なんだ？　表情が変わってるぞ)

(ﾟ∀ﾟ)

どちらにしろ月代の額からは血が出ていない。

どうやらこの仮面。蝉丸が思っていたよりもずっと丈夫にできているようだ。

弾が当たったのが原因と思われる跡程度しかない。

「(ﾟ∀ﾟ)アヒャ」

「⁉」

月代が目を開いた。のだろうと蝉丸は推理した。

なにせ本当の表情は見えない。

「(ﾟ∀ﾟ)アヒャヒャヒャヒャヒャヒャ‼」

勢い良く立ちあがったかと思うと蝉丸の周りをぴょんぴょんと跳ねまわっている。

「月代？」

「(ﾟ∀ﾟ)アヒャヒャ　蝉丸のお嫁さんだぁ！　今度こそちゃんと約束したぜ〜！」

(き……汚い……)

蝉丸の率直な感想だ。死にかけていたのは芝居だったらしい。月代はこんな汚い手を使うような子だったか？

というか口調もなんか変だ。いやそんなことより、
「月代。ほら、あれだ。なんというかお前が死にかけていると思ったから勇気付けるためにだな……」
「(ﾟ∀ﾟ)アヒャヒャヒャヒャヒャヒャ　男に二言はねーよなあ～～。アヒャヒャヒャ!!」
　――ボカッ!!――
（あ……）
思わず殴ってしまった蝉丸。
たんこぶ付きの月代が地面に倒れ伏す。
（ん？　また表情が変わってる……なんなんだこの仮面は……）
(;´Д｀)

484　僕たちの失敗――砂の果実

「か、母さん……」
　そう力無く呟くと、「ワザの二号」北川潤（二十九番）はマウスを放り投げて虚空を見上げた。解析に行き詰まったので、OSに入っていたゲームをちくちくやっていたのだが、体力と気力を根こそぎもっていかれそうになってやめたのである。
　ソリティアはペケが二十回出たところであきらめた。ハーツはどう頑張っても三回に一回はスペードのクイーンをねじ込まれてしまうし、マインスイーパは腹の爆弾ともずくを思い出してしまうからさくっと放棄し、フリーセルにいたってはルールを知らない。OSのヘルプに頼ることは北川のプライドが許さないからこれも打ち捨てた。スパイダーソリティアやピンボールは論外だ。
　一方「チカラの一号」宮内レミィ（九十四番）はもずく発掘後、もっといろいろ見てまわりたいと言って店内のどこぞへ姿を消したまま帰ってこない。フロンティア精神に溢れるヤンキーの心理は、北川にはいささか理解しかねるものがあったが、ペリー

以来、幽玄ジャップはルイジアナママに連戦連敗を重ねてきたこともあって、もはやどうこう言うことはあきらめていた。
　仕方なしに北川は再び解析に戻ることにした。全てのCDが揃っていない今、それは風車に向かって突っ込むドンキホーテのようなものであったけれど、何もしないよりはマシだろう。ひっそりとした室内には北川がキーを叩くカタカタという音が不規則に響くだけだった。
　そして遅々として進まない解析にそろそろ匙を投げようかと思ったとき。
「ワーーッ！」
「うぉっ、母さん！」
　突然レミィに思い切り肩を叩かれ、仰天した北川は重ねて親類に援助を乞う羽目になった。ぜえぜえと振り切れそうな動悸を鎮めながら、彼はヤンキーのリメンバーパールハーバーの恐ろしさを実感した。やはり竹槍でスーパーフォートレスには勝てない。
「またまたイイモノ見つけてきましたヨー！　このお店最高ネ！　見て見てー！」
　レミィは北川の前に麦藁帽子を突き出して思い切りはしゃいだ。それはつばの大きな麦藁帽子で、つばの縁の藁が寝起きの髪みたいにほつれていた。
「か、母さん……」
　彼女は麦藁帽子をかぶると、その場でくるりと一回転した。綻びはじめたセーラー服と新品の麦藁帽子のミスマッチが返って新鮮なものに映った。
「エヘヘー、いいでショー！　麦藁帽子ダヨー。似合いますかジューン！」
「か、母さん……」
　いまだ米軍の本土上陸のショックが抜けきらない北川。お構いなしに喜ぶレミィ。
「小さい頃にネ、まだニホンにいたときにちょうどこんな麦藁帽子持ってたの。とてもお気に入りで毎日かぶってまシタ」
　北川は幼少期のレミィの姿形を想像しようとした

が、胸部のあたりで早々に挫折した。
「家族でハイキングに行ったときもその帽子をかぶっていったの。でもその時谷沿いの道を歩いてたら、急にぴゅうって強い風が吹いて」
レミィは「ぴゅう」と言いながら手を回した。
「帽子が飛ばされて、谷底に落ちちゃったの」
「災難だったな」
「とても悲しかったデス。後でDadが同じような麦藁帽子を三つも買ってくれたけど、その代わりにはならなかった。だからわかるの。なんとなくわかるの」
「何が？」
「これじゃなくちゃ駄目ってものはあるの。何でもそう」
声のトーンが落ち、消え入りそうになって、北川は耳をそばだてた。
「でもね、どれもこれもアタシにはどうしようもないものばっかりだった」

レミィはそう言って目線を下にずらした。ノートパソコンの画面はさっきから手つかずのまま、今はスクリーンセーバーに切り替わって、羽の生えたトースターたちが黒い画面を所狭しと飛び回っていた。
「ヒロユキは」
レミィは急に顔をぱっと上げた。
「ヒロユキとアタシはネ……！」
「ヒロユキ」とレミィは幼なじみで毎日一緒に遊んでいたこと。だけど父親の仕事の事情で遠く離ればなれになってしまったこと。その時にビンに二人の約束を書いた紙を詰めて木の下に埋めたこと。高校生になって帰国できたときに偶然再会できたこと。レミィはまくしたてるように一気にしゃべった。
北川は「ふうん」と相槌を打つだけだった。別に素っ気なくあしらったわけではない、彼にはレミィが同情や慰めを欲して言葉を紡いでるのではないということをわかっていた。

「ヒロユキはアタシにニホンの事、たくさん教えてくれたんだヨ。だからアタシ、頑張った。ヒロユキのいるニホン大好きになれるようにいっぱいいっぱい頑張ったの。ヒロユキのおかげで、アタシステイツとニホンが母国になったんだヨ」
「二つの母国、ってやつか」
声がかすれてきた。水が欲しい。何故だか、北川はたまらなく喉が渇いてきた。
「だからネ、ヒロユキには本当に感謝してるの」
レミィはうつむき、麦藁帽子の大きなつばが彼女の表情を隠した。
「本当に……アタシはヒロユキに……」
ヒロユキ。彼女の口から何度も何度もでてくる男の名前。北川の知らないその男は、やはり知らない女の子と絡み合うように抱き合ったまま、微笑みを浮かべて死んでいた。レミィが「ヒロユキ」の事を語る時、彼女はものすごく満ち足りた顔になる。とても嬉しそうに微笑みながら喋る。
「だけどネ、麦藁帽子もヒロユキも」
不意にレミィの腕が北川の頭に回されて抱きしめられた。とくん、とくんと響く生命の息吹に包まれて、北川は何も言わずにゆっくりと目を閉じた。
「おんなじだった。本当にほしいなと思ったものは手に入らなかった。一番欲しいものが手に入ったためしなんてない。いつだって……」
北川の頭を抱きしめていた腕が震えだし、頬やうなじに熱い雫を感じても、彼はずっと目を瞑ったままでいた。
「いつだって、アタシから飛んでいって消えちゃうの」
ちくりちくり。少し、ほんの少しずつ胸が痛みだした。それが何であるのか、北川はわからなかった。ただ心のどこかに目に見えないくらいに小さな棘が引っかかって、なかなか抜けてくれないまま次第に大きくなって北川を引き裂こうとするのだった。

485　喪失の黒

あの教会の中で。ひとつの目標が、もうすぐ達成される。
悪夢の中を這い回った記憶を、全て浄化する時が、目前に迫っている。遠い夢をかなえる寸前のような感動が、そこにある。
――このとき私達は、疑うことなくそう思っていた。
「おい詩子！　待てって！」
先頭を行く少女、詩子はどんどん距離を開けていく。
「ああ、くそ。繭！　悪いが先に行くぞ！」
痺れを切らした祐一はスピードを上げ、みるみる小さくなっていった。

まだ教会までは距離があるというのに、私は既に息を切らせていた。たとえ脆弱だった心がきのこの奇跡で強くなっても、身体までは強くならない。非力さに呆れ、うなだれる。
ほどなく私が衝突してしまった相手――私を羽交い絞めにして、きのこ摂取に協力してくれた（？）少女、なつみさん――に追いつかれる。
「繭ちゃん、大丈夫？」
「残念ながら、あんまり、です」
息も切れ切れに答える。情けない。情けないが、走れないのだから仕方がない。
私の変貌ぶりに対応できないでいるなつみさんと、肩を並べて歩き始める。
ひとしきり私の変貌に驚いた後、なつみさんが本題に切り込む。
「茜さん、って言ってたけど……」

「ええ……祐一が、ずうっと探しつづけていた、相手、らしいの」
息を整えながら、大きく引き離されてしまった祐一の背中を見つめ、言葉を交わす。
「照れ臭いらしくって、あんまり、教えて、くれなかったけど……髪が長くって、これくらいの三つ編みにしてて、マイペースな人なんだって」
私は身振りを加えて説明する。
実際見たわけでもないので、不正確この上ないのだが、だいたいそんなもんだろう。そんな気楽な説明の反応は、不釣合いな驚愕の表情だった。
「亜麻色の……三つ編みの……？」
これ以上ないくらいに目を見開いて、なつみさんは呟く。どうして、そんなに驚くの？　亜麻色？　私、そんなこと言ったかしら？
一瞬だけ疑問が脳裏をよぎるが、流してしまった。
そう……後から考えれば、それは警告だったのだ。けれど記憶を遡れば、祐一がそんな事を言っていたのを、確かに覚えていたから。
覚えていたから、私は素直に答えた。
「ええ、そうよ」
それが〝正しい間違い〟だったとも知らずに。
スイッチを、入れてしまったのだ。

……スイッチの音は、銃声だった。
その轟音に目を逸らした私は、なつみさんが振り上げた銃に後頭部を強打され、急速に視界を暗転させていった。
「ごめん。ここから先は、あなたの見るべき世界じゃないわ」
そんな台詞を聞きながら、外界への扉は閉じてしまった。
自らの心さえままならず。
身体もままならず。
私は喪失の予感に、涙も流さず泣いた。

詩子が胸を押さえて、膝をつく。俺は再び全速力で疾走する。
「詩子！」
そのままばたりと後に倒れそうな詩子を、即座に抱え込む。支えきれなかった頭だけが、かくんと後に倒れ、目が合った。
いや、合ったと思ったのは俺だけだった。
「か……は……」
あらぬ方に視線を固定したまま、押さえた胸の苦痛にうめく。ままならぬ呼吸の苦しみが、喉から漏れて赤く滴る。
「あんた……狂ってるわ……」
教会の中から、声がする。
銃を持った手をだらりと下ろした茜と、鞘に収めた日本刀を手に椅子の上に立つ少女。彼女は今にも抜刀しそうな姿のまま、固まっていた。
いや、震えていた。
「その娘が、あんたの言う〝二人〟の内の一人なら……保証してあげる。間違いなく、狂ってる」
「……言っておいたはずです。最初のとき、既に狂っていたかもしれないと」
制するように彼女を睨み、そして静かに視線を滑らせて。
俺を、見た。
泣いていた。
「茜……」
「……祐一……」
出会いの喜びなんてものは、儚い希望だった。
ときおり無力に傾く詩子の身体を抱きしめて、俺は搾り出すように尋ねる。
「駄目……なのか？　……俺達では、届かないのか？」
茜は何も答えない。
「俺達は、茜、お前を愛しているよ。それでも……それでも、お前には、届かないのか……」
茜は俺の一言一言に鞭打たれるように、いちいち

身を竦める。
誰も動かない空白があって。
漸く、茜が再び視線を上げる。
わななかせながら、ゆっくりと口を開く。
「……私が待たなければ。誰が彼を待つというのでしょう。……私が、待ち続けなければ。今までの私は、何だったのでしょう」
目を瞑ると、ぽたぽたと大きな雫が落ちていった。
「……私は……私は、あなたの事……」
苦悩の表情で、言葉を紡ぐ。
「……嫌い、です」
半分の嘘と。
半分の真実をこめて。
茜は銃を持った腕を振り上げた。
俺は、動けなかった。

だめだ。

撃たせるな。
だめだ。
撃たせては、だめだ！
最後の一言を発した時、必ずこの娘は撃つ。
例えあたしが憎まれても。
これ以上、仲間を殺させていいはずがない。
あかりや、由依の顔が目に浮かぶ。
撃たせては、だめだ！

事情はさっぱり解らなかったけれど。
間違いなくそこにある悲劇を前に、震える身体を無理矢理引き絞りながら、彼女の言葉を聞いていた。
『……私は、あなたの事……』
愛の告白のような、その言葉を聞きながら。
あたしは弾丸のように飛び出した。
『……嫌い、です』
閃光のように、長椅子の背もたれを駆け抜けて。
驚く白鳩達を、砂塵のように巻き上げて。

七色の光の尾を引き、抜刀した。
虹のように弧を描いて。
喪失の黒き闇を断ち切るべく。
あたしは、振り下ろした。

486 儚き魂の円舞

——それを止めたのは何だったのだろう？

「——」
「——」

空白。
全てが止まった瞬間。
晴香の刃は茜の腕の上に。
茜の銃は、その矛先を祐一の顔へ。
だが、それ以上動く事は無い。
「どうして……」

ようやく、静寂を破ったのは茜の声。
震えた声。微かで、消え入りそうな。
「どうして……貴方は、笑ってるんですかっ……！」
そう。
祐一は、目の前に立った死神に笑いかけていた。
その腕に、詩子の身体を抱えて。
——晴香がその刃を止めたのは、無感情だった彼女の顔に、はっきりとした驚愕の表情が現れたからだった。
あと一歩遅かったら、その腕が飛んでいた事だろう。
「……何て言ったらいいんだろうな？」
祐一が返す。
朧気な笑顔で。
だけど、今にも泣きそうな顔で。
「なんか、酷く、お前が可哀想だと思ったんだ。哀れだって……」
「…………」

「そしたらな。何かもう、どうしようもないって感じになったんだ——諦めちまったのかな。詩子と約束したのに——」
祐一は、ゆっくりと詩子を床に下ろした。
血が教会の床を深紅に染める。祐一は、詩子の髪を、そっと撫でた。
——もう、長くない。

「いいぜ」
立ち上がるや否や、祐一は呟いた。
「俺の命、お前にやるよ」
「……！」
再び、驚愕。
思いも寄らぬ言葉。
それは晴香も同じだった。
「あんた、何言ってんの!?」
「俺は、俺のやる事は、茜を〝救う〟事だ。詩子と約束したんだ——でも、それも、出来なかった。なら、俺の居る意味は無い筈だ。そうだろ？」
「だからって……！」
晴香の刀が、刃を返す。
それは明らかに茜の首を捉えていた——茜は、それでも動かない。
目の前に立つ人しか、見えていなかった。
「邪魔、しないでくれ」
ようやっと放たれた、はっきりと、明確な意志の込められた台詞。
しかしそれは、明らかな拒絶。
無言、しかし、痛々しい表情で晴香は、刀を納めた。

再び祐一の顔が茜を見た。
「——そうだ、最後に一つ言っておきたいんだ」
「…………」
茜の返事は無い。
しかし、銃弾が放たれる事が無いということは、

まだ幾ばくかの猶予を与えるということか。
祐一は、そう思う事にした。思いたかった。
「お前が俺を嫌いでもいい――俺は、お前の事が。
好きだったよ」
茜の眼から光が消えた。
しかし、銃口は微かに震えるばかりであった。
答えは無い。当たり前か、と祐一は僅かに残念に思った。
――結局、最後の最後も振られちまったなぁ……
「――さぁ」
目を閉じる。
もう、未練は無い。
「やってくれ」
そして。

487　哀

とことこと走る影。教会に向けて。

ピコッ……ピコッ……人物探知機の一点が強く輝く。映し出された番号が一つに集まり、強い光を放つ。
その一点の番号、『001』――相沢祐一。
（祐一が……待ってるよ、みんなが……待ってるよ）
祝福の鐘が、またすぐ耳元で聞こえた気がした。
（ずっと待ってたんだから……ずっと……祐一を……あの日から…………――？　……あれっ？）

だが、彼女の思考がそこで停止する。
七年前のあの冬からずっと――その名雪の思いが、それが分からないでいた。
（どうしてだろう……思い出せない……とっても大事なことだったのに……私と、祐一の大切な思い出……）
祐一のこと、祐一との思い出のこと。
その部分が、ナイフで綺麗に切り取られたかのよ

うに。
　それは名雪だけが知っていた心の真実。
　疑問に思いながらも、彼女は強く思い描いた。これからの幸せな日々を。
（はやく祐一に会いたいな……そして美しい教会で結婚式を挙げるんだ。それでお母さんや子供達と一緒にあの家でずっと幸せに暮らすんだ。それが私と……祐一と……お母さんの願いだから）
　走った。もうひと頑張りだから。
（でも、どうして悲しいんだろう……幸せなはずなのに……これから祐一と一緒に幸せの欠片を探していけるはずなのに）
　頬を伝うのは、輝く汗、たった今溢れ出た涙。
　そして、額から、後頭部から流れてきた血。
　頭から、背中から、べったりとこびりついている血。先程まで背負っていた、知らない人の血。
（どうして悲しいんだろう……泣いちゃだめだよ……祐一に笑われちゃうよっ！　祐一の前ではずっと笑っていたいのに！）
　だけど、涙がとまることはなかった。

488　魂の導き手

——初めて出会った時。
それからどれくらい経ったんだろう？　まさかこんな形で出会うとは思いも寄らなかったけどな。
…………。
もし。
もしも、こんな状況じゃなくて。
普通の生活の中で、全くの偶然で、再会出来たなら……いや、再会出来たとして。
想いは伝わっただろうか？
——多分、無理だろうな。
ああ。
悔しいよな。

でも、もう、どうしようもない話だ――。
笑い出したい衝動に駆られた。
目は瞑ったままだったが、もしかしたら笑みを浮かべたかもしれない。
どっちだっていい。
どうせ、次の瞬間にはミンチだろうしな。
さぁ。
早く撃ってくれよ、茜。
いい加減立ってるのも疲れたからさ。
引き金を引くんだ――。

――。

不意に、予感めいたモノ。
がしゃっ、という何かが落ちる音。
――ゆっくりと、目を開いた。

――あの人は、目を閉じています。

隣に居た人は、刀を引いてくれました。
――でも、撃ったら、多分私は死ぬんでしょうね。
隣の人に、切り裂かれて。
…………。
あの人は。
目の前で、私が引き金を引くのを待っています。
だから、私は、狙いを定めて――。
その人の眉間に銃口を向けて――。

ああ……。
指が、動きません。
どうして。
私は、詩子を撃ちました。
そうすれば、甘えを捨てられると思ったから。
出来なければ――あそこには帰れない。
だから、撃ちました。
だから。
祐一も、撃てると思ったんです。

……お願い。
動いて下さい。
動いて下さい！
動いてッ！

――茜の指は、引き金を引く直前で止まっていた。
内心の葛藤とは裏腹に、その指は震えも、何も無かった。本能が、無意識の内に――その行為を、完全に、拒否していたとも言えよう。

……ああ。
もう、ダメですね、私……。
ふふ。
自分の不甲斐なさに、笑えてしまいます。
そんなに、この人が大事だったんでしょうか？
……よく分かりませんが、そうなんでしょうね。
そうして。

茜の手の中にあった銃が、落ちた。
哀しき殺人鬼が、今、少女に戻る。

489　zoo director

するすると樹の上から下りてくる御堂を見ながら、詠美はなんとなくサルを思い浮かべた。
「おかえり、したぼく。どう？　あった？」
驚くべき身のこなしで殆ど音を立てずに地面に下り立つと、御堂は「まぁな」とぶっきらぼうに言った。
「この方向だな。そんなに離れてはいねぇ」
「こっちって言うと……あの人が走って行った方角とちょっとずれてるね」
御堂の指差した方と、秋子が去った方を見比べて詠美は言った。
「教会なんてシロモノがあるかどうか眉唾だったん

だがよ。本当にあるとはな」
「あるとわかった以上、もう行くしかないよね」
『教会を探す』という、詠美の提案は彼女にしては
なかなかまともなものだった。
秋子が走り去ってから随分時間が経ったし、彼女
の後を追って探すよりは彼女の目的地を探す方が、
遭遇する確率が高い。
――まぁ、再会してからどうするかは、詠美は考
えてなかったのだが。

「まぁ、あんな目立つ場所に行くのは危険なんだが
よ」
「でもでも、あの人が気になるでしょ。それにこれ
も、渡さないといけないと思うし」
「まぁな」
「あたしが決めていいって言ったんだから、文句を
言わないの」
名雪の学生手帳をひらひらさせながら詠美が言う。
御堂の提案で、この生徒手帳を遺品として持って来
ることにしたのだ。彼女と再会する目的として。
「しかし、上から目的地を探すたぁ、お前にしては
上出来な考えじゃないか。褒めてやるぜ」
詠美のアイディアに感心する御堂のその言葉に、
詠美はふふん、と胸をぐっと反らす。
「あったりまえでしょ。この同人界の女帝、クイー
ン詠美ちゃんさまには、まだまだすっごいアイディ
アがたくさんあるんだからっ！」
「……そこまで大した考えでもねぇんだけどよ」

「それで、だ」
そこで御堂が話を打ち切る。
「そこの死にそうな毛糸玉はどうした？」
「知らないわよ。さっき、そこの林から……」
と、身動きの取れないポテトの横を指差して、
「その白い蛇が飛び出してきて、なんか睨み合って
たんだけど」

「蛇が毛糸玉に襲い掛かってやられちまったと」
「うん」
やれやれ、と御堂は白蛇をポテトから引き剥がす。自由になったポテトはぴこぴこと呻くと、ふらふらと地面に倒れこんだ。それを見ていたぴろがにゃあ、と鳴いた。

「それで、さぁ」
捕まえた白蛇と睨めっこしている御堂に、詠美が声をかける。
「したぼくの肩でさっきからばっさばっさしてる鳥はどうしたの？」
「知るか。さっき、木の上から教会を探してたら……」
「ばっさばっさとどこかから飛んできたと」
「ああ」
あんた、動物に好かれる変な匂いでも出してるんじゃないの？　と詠美は言うと、蛇は怖かったので取り敢えず二歩ばかし御堂から離れた。
「毛糸玉、猫、白蛇、鳥、そしてガキ。……隠密行動なんてとれやしねぇじゃねぇか」
「ガキってなによ。したぼくのくせに」
ため息を吐く御堂に、詠美は言い返す。御堂はそれを無視すると、幾分声を低くして言った。
「さて、お前ら。覚悟はいいな」
ぴこ、みゃー、しゅるしゅる、ばっさばっさ、何よ覚悟って？
「わからねぇならいい。……行くぞ」
そう言うと、御堂は駆け出す。強化兵の勘が告げた予感。ふん、上等じゃねぇかと、その予感を振り払うと一路教会を目指す。
——そこで待つものを、まだ知らずに。

490　きずな。

　この瞬間は確かに時間が止まっていたと思う。自分——長瀬祐介も、自分の手を握る天野美汐も、そして自分の目の前の七瀬彰も。
　やっと時間が動き出す。血の色で汚れた従兄の顔と服を見て祐介は唾を飲み込む。状況確認だ。硝煙の匂いのする彰の身体。血と泥で汚れきった顔。記憶にあるよりもずっと虚ろな黒い瞳。身体の至るところを走る大きな傷。特に目を引くのは右足の甲。正確にはそれは甲ではなくなっている。というのは足の甲があるべき場所には何も無いのだ。痛々しい傷痕を残して右足の甲が吹き飛んでいる。
　満身創痍とは、こういうことを言うのだと思う。
　どうして彰はここまで傷ついたのだろう。決まっている。彼の右手のサブマシンガンと硝煙の匂いで判るだろう。彼は支給された武器を使って戦って戦って人を殺して人に殺されかけて、こうしてここまで生き抜いてきたに決まっているのだ。
　人を、殺したのか。あの優しかった七瀬彰が。大好きだった七瀬彰が。——甘えを捨てろ。誰だって狂気に陥る可能性はあるのだ。あの優しかった七瀬彰だって例外ではない。自分や美汐だって狂いかけた時間が確かにあったのだ。
　祐介は美汐の前に立つ。右手で美汐を庇い、左手をポケットに突っ込んでピアノ線を握り締める。サブマシンガン相手に出来ることなんてたかがしれているが自分が守らなければ美汐は死ぬ。せめて盾に、
「大丈夫、僕はやる気にはなってない」
　びくり、と自分の身体が震えたのが判った。
「この怪我とかは、そうだな、うん、まあ、説明すると長くなるんだけど……ゲームの参加者を殺したわけじゃない。信じて欲しい」
　七瀬彰は唐突に言うとサブマシンガンから手を離す。肩に背負っていたデイパックの中にサブマシン

ガンを放ると、彰はゆっくりと笑う。その笑顔が懐かしくて、祐介は自分の身体から力が抜けていくのが判った。美汐の方を見遣ると、それでもやはり警戒心は完全には解かれていないようだった。彰は苦笑している。祐介はそんな二人の顔を見比べて、どうしたらいいのだろうか、と思う。彰がどれだけ信頼できる人間かを説いたところで、簡単に第一印象が拭えるとは思えなかった。

「海が近いし、朝陽でも観に行こうか？」

自分が色々と思索していると、彰がふとそう提案した。自分や美汐の返事も聞かず彰はすぐ傍に見える砂浜に向けて歩いていく。祐介は美汐と顔を見合わせる。まだ何か躊躇を感じている美汐の手を取り、祐介は彼女を引っ張って彰の後に続く。

光。

見渡す限り広がる空と海に白の輝きが満ちていて、白い砂浜と相俟って、祐介の目にはそこがまるで光しかない天国のように見えた。美汐を見遣ると、彼女も同じように、世界に呆けているように見えた。

「で、君たちは二人で何をしてるの？」

唐突な言葉ではっとする。紛れもなく光に見惚れていた自分たちに向けられた言葉だった。その黒目がちの目には冗談の気持ちのかけらもない。祐介は戸惑う。自分は割と長い時間この従兄と遊んだ記憶があるが、こんな目をする彰を見るのは初めてだった。祐介は応えられない。

「この島では例え愛するふたりであっても殺し合いをしなくちゃならない。そういうルールだろ。絶対に一人しか生き残れないんだ」

心が圧迫される。氷のように冷たい言葉が、先程まで自分と美汐にあった希望の暖を奪っていく。自分も美汐も応えられない。彰が肩を竦めて意地悪く笑い、馬鹿にするような目で自分たちを見る。心の中で祐介は小さく深呼吸をして命からがら答える、

「――なんとか、脱出したいと思ってる」

「どうやって？　ここから脱出出来るような考えが浮かんでるの？　これから浮かぶツテは？」
潰されると思った。反論くらい出来るだろ。先程放送があった、冷静に考えろ。唇を噛む、落ち着け、体内の爆弾は解除されているのだから脱出が出来る可能性はある。やっとの思いで口にする、
「もう、お腹の中の爆弾は爆発しないんだから――逃げようと思えば、泳いでだって逃げられる筈だ」
「それが本当だという証拠は？　あの放送がブラフだという可能性は。それにこの島は何処にある。何処にあるかもわからない島からどっちに向けて何千キロ、何万キロ泳いだら日本に帰れるの？　ねえ祐介、本気で言ってるの？　そんな幼稚な考えをさ」
「それは、」
「見通しが甘すぎるよ。こんなところで叔父さん達は自分の身も鑑みずにこんな企画を行ってるんだよ？　それを「参加者逃亡」なんていう中途半端な形で終わらせると思う？　なあ。もう一度訊くよ。祐介はちゃんと考えてる？」
「――っ」
「昔からそうだったよ。いつも真面目そうな顔してる癖に、実際は何も考えていないんだ」
潰された。三つ年上の従兄は蛇蠍のように厳しくて冷たい口調で自分を潰していく。自分と美汐が微かに抱いていた希望を悪鬼のように潰していく。唇を噛む。美汐が自分の手を強く握る。振り返るまでもなく、美汐が七瀬彰に強い視線をぶつけていることが判った。
「――ごめんね。別に虐めるつもりはないんだよ」
急に口調を和らげて、彰は笑う。あまりに唐突に優しい口調になったので、祐介は逆に少し警戒心を抱いてしまう。彰は続ける。
「ただ、どうも祐介が甘い見通しをしてるようだったからさ。一応釘を刺しておこうと思ったんだ」
言うと彰は砂浜に座り、座りなよ、と呼びかける。言われるままに自分たちは座る。右手に触れる粒子

の細かい砂は柔らかかった。
「――祐介は今のところ無力だよな。大した武器も持っていないみたいだし、命を賭けて戦う覚悟だって出来ていない」
彰は淡々と言った。祐介は反論も出来ず、右手で砂を噛む。
「でもさ。――お前には『希望』はあると思うんだ」
彰はそう続けた。
「お前も知っての通り、僕だって大した力は無い。たまたま上手く立ち回って武器を手に入れて、ある出来事が起こって死ぬ覚悟も出来た。僕だってただそれだけの、ちっぽけな奴だ。そんな僕でもこのゲームの管理者に一泡吹かせることが出来た。そして、きっと僕より強い武器と強い覚悟を持っている人はたくさんいる。それならば、僕やその人たちが頑張れば、管理者を完全に潰せるかもしれない」
理解。つまりこの七瀬彰の傷は、管理者に「一泡吹かせた」ためについた傷なのだ。彰は続ける。淡々とした口調で、悲しみも苦しみも痛みも無い、淡々とした口調で、彰は呟く。

「僕には希望が無くて、祐介にはある。
だから僕は、命を賭けられる」

意味がわからなかった。
「命を賭けるのは僕みたいに希望の無い奴だけで充分なんだ。僕たちに任せろ。お前は今は、脱出のことなんて考えるな。下手を打って死ぬな。管理者が壊滅するまではただ生き続けろ。希望がある奴が死ぬのはすごくイヤだ」
「……希望？」
「お前にはその娘を守るっていう希望がある」
彰はにやり、と笑ってそう言う。
「守りたいんだよね？　その娘を」
悪戯っ子のような笑みで、それは紛れも無く昔と

変わらないままの七瀬彰のものだった。周りの大人たちには愛想良く笑っているくせに、年下の自分にだけは彼はこういう笑顔を時たま見せた。
「管理者を潰すのは僕に任せて。僕は有志を集めるなりして反乱を起こして、この戦いに幕を降ろしてやる。このつまらない狂想曲はそれでもう終わりさ。——僕はすぐ出発する。急がなくちゃ。君らだけに構ってちゃ反乱だって起こせない」
「彰、兄ちゃん？」
美汐の方を見遣って彰は言う、
「君たちとは別行動を取るよ。全てが終わったら放送施設なりを使って伝える。もし反乱を起こす前に、他に希望を持って生き抜いている奴らを見つけたら、君らを探して連れて行って、安全な場所にいさせてあげる。だからちゃんと生きていてくれな」
「そんなっ！」
祐介は叫ぶ。自分は確かに薄弱で、この娘——天野美汐ひとりを守るのが精一杯かもしれないけれど、だからって何もせずに彼女を守ってだけいろ、と言うのか？　従兄が命を賭けて戦おうとしているというのに！
「僕だって戦う！　僕らを戦いに巻き込んだ叔父さん達と戦って、」
「黙れ、ばか！」
声が出なくなる。彰が自分の襟元を掴み、半ば怒りに似た顔で自分を睨む。
「祐介。何か勘違いしてるよ？　あのさ、希望を守るのと命を賭けるのとどっちが大変なのかわかってる？　この自分の命を守ることすら危うい場所で、希望を守ることがどれだけ難しいか！」
続ける、
「わかってるの？　ばか」
半ば泣きそうな顔で彰はそう言う。それだけで祐介の半端な決意は打ち砕かれた。自分には希望がない、と呟いた七瀬彰のその言葉の意味を考えて、祐介はもう、何も言えなくなってしまった。

「――爆弾がもう爆発しない、ってのは真実だよ。僕が吹かせた泡ってのは、爆弾管制の装置を破壊したことなんだよ」
　沈黙を嫌うように彰はそう言った。
「今ならそれこそ泳いでだってこの島から離れることは出来る。だが、離れただけで何が出来るわけじゃない。完全に管理者を撃滅しなくちゃ、本当に生き残ることなんて出来ないんだ。勿論、僕が高槻を、叔父さん達を殺しきる事なんて出来ないかもしれない。有志がどれだけ集まるかも判らないし、血に狂ってしまってもう戻れないような奴もいるかもしれない」
「それなら、」
　彰は手を広げ、
「それでも、僕は祐介に生き残って欲しいと思っている。僕は、出来る限り多くの人間に生き残って欲しいよ。もしも僕が失敗したら、その時お前が行けばいい。そうしなくちゃその娘を守れないんだしね。だけど、僕の死亡放送が流れるまでは無謀なことはしないで欲しいんだ」
　彰は、少しだけ躊躇するような表情を見せたかと思うと、優しく笑ってこう言った。
「僕には、お前が眩しく見えた。その女の子と二人でいるところが、すごく眩しく見えた。あの長瀬祐介が歌まで唄ってた。恥ずかしがり屋のお前が、多分その娘を元気付けるために、歌を唄っていたんだ」
　太陽のような笑顔で。
「僕には、君らみたいなカップルが、すごくよさそうに見えたんだよ」
　彰は朝陽を浴びながら、白い世界の中そう言った。眩しそうにてのひらを太陽にかざし、朝陽が昇り始めるのを細目で見つめながら、――彰はそう言った。
「きっとお前なら最後までその娘を守りきれると僕は信じてる。バカだけどお前は優しい奴だからね。僕には守るべきものがない。だからお前より身軽

だ」
　彰は言ってすくと立ち上がる。自分と美汐に背を向けて、まっすぐな足取りで歩き出す。
「絶対に、希望の火を守りきって」
　彰は言い残し、ゆっくりと立ち去ろうとするが、はたと立ち止まる。立ち止まるというのは正確ではなく、止められたのだ。止めたのは今までずっと黙ったままだった天野美汐だった。
「彰さん」
「えっと、君は」
「天野美汐です」
　明瞭な口調で美汐は名を告げる。先程見られた脅えや敵意はまるでない。
「――何かな？」
「私はこの島で、大切な友達を失って、希望をかき消されました。幸いに武器もあった。他の人を殺して、誰かの手か、あるいは自分の手で死のうと思いました。――けれど、長瀬さんと一緒に時間を過ごして、少しだけ、生きていたいと思うようになりました」
　美汐の背に光が差していると思った。遅々として昇る太陽が、天野美汐と七瀬彰を照らしている。
「あなたには、もう、この世界の何処にも希望はありませんか？」
　彰ははっとした顔で天野美汐の目を見つめる。まっすぐな光に気圧された顔で、彰は立ち尽くす。
「――ある。希望はあるんだ、本当は」
　彰は、腹の中に溜まっていた言葉を吐き出す。
「島に来る前からの友達もまだ生きてる筈だ。そして、この島で出会った女の子、柏木初音。彼らが、僕に遺された最後の希望だと思う。反乱の有志を集める前に、せめて初音ちゃんだけでも保護したい」
「――そうですか」
「彼らが生きているかは判らないから希望としちゃ

すごく微かなものだ。でもまだ本当は、希望と呼べるものはあるんだ。――初音ちゃんは栗色の髪のくせっ毛の小学生くらいの女の子だ。もし会うことがあったら、」

「判りました」

天野美汐はまっすぐに笑う。

「命を賭けることと命を捨てることは違います。だから――絶対に生き残ってください」

「――うん。生き残る。僕は生き残るよ」

「あなたが誰かの希望の火になっているかもしれないんですから」

祐介は二人のやりとりを見つめながら考える。

生き残ること。希望の火を守ること。僕は確かに無力だ。無力だけれど、それでも、新たに生まれた希望の火はここまで根絶やさずに守って来れたのだ。守ろうと思う。自分の世界に遺された最後の希望を。

彰は思い出したようにベルトに挿していた拳銃を引き抜くと、祐介に近づいてそれを渡す。

「武器だ。希望の火を消そうとする奴が現れたなら、それで守るんだ」

彰はそれを最後に背を向けて歩き出す。祐介と美汐はその後ろ姿を見つめながら、希望の火を絶やさずに生きていこうと誓う。昇り始めた朝陽が、海と砂浜とふたりを照らす。

491　Sweet berry Kiss

遠く広がる青の海を見ながら、二人は、朝陽が照らしている自分たちを想った。どうしようもなく美しい空。輝く海。白い砂浜。きらめく世界。流れる雲と風の中、景色だけは変わらずにある。

もう朝はやってきた。

――――――――希望の光は二人の手の中にある。

「――ずっと、言いたかった。言うべきだったね」
勇気を振り絞り、祐介は囁く。
「君が好きなんだ。――天野さん」
「私も、ずっと言いたかったです。遅すぎました」
勇気を振り絞り、美汐も囁く。
「私も、好きです、――長瀬さん」

朝陽の前で二人は唇を重ねる。触れるだけの、親が子供にするような、優しいキスだった。甘い香りに酔いしれて、ふたりは泣きそうにまでなる。指を絡め、もう二度とこの手を離さないでいたいと願う。
距離のない世界で生きていこうと思った。陳腐な言葉でも充分だった。生きていくのにはそれで充分。
七瀬彰は今、命を賭けて戦おうと今まで以上に強く思っている。きっかけは、その二人が手を繋いで、歩いているのを見たからだった。二人の笑顔と長瀬祐介の歌声を聞いて、憑物が落ちたとまで思った。
自分は揺れていた。日常とは何だ？　考えていても解らなかった答え。もう何処に帰っても、ある筈のないものだと思っていた。ならば、何のために自分は戦ったのだろう。いっそ、あの施設の中で死んでしまえば楽になれたのかも知れない。勝手な英雄幻想を抱いて、自分のおかげで多くの人間が日常に戻れる、そう幻想して死ねた方がまだましだった。
幻想と気づいてからは、ただ苦しいだけだった。自分がしたことは、日常に戻るためには何の役にも立たなかったのではないか、と。
けれど、その認識を改めなければいけない。
それぞれに傷を負った二人。けれど、その傷を補い合うかのように連れ添う二人。だから彰はそこでやっと判った。
この世界のすべてはきっと日常で溢れているんだ。
この戦いで、皆、傷つきすぎた。忘れられないほどの傷を負った。けれど、死ななければ、生きてさ

えいれば、きっと帰れるのだ、何処かにある日常に。
だから僕は戦うのだ。それだけのために戦える。
命を賭けて。貧乏くじを引くことは慣れている。僕のすべての命を使って、反抗し続けてやろう、と思う。

天野美汐の最後の問いかけに、自分は嘘を吐いた。それだけじゃない。自分はふたりとの会話の中でたくさん嘘を吐いた。自分はもう限界だった。血の足りない頭と身体では反乱を起こすことなど無理だし、生き残ることなど夢の彼方だ。
それでも生き残る、と嘘を吐いた。反乱を起こすとごまかした。彼らの希望の火を少しでも強く燃やすためについた、口からのでまかせだった。
せめて反乱を起こす有志を集めたい。彼らふたりを、そして希望の火を抱いて生き抜いている多くの人たちを守るために。彰は足を引きずりながら歩く。

初音に、もう一度だけ逢いたかった、と思う。
日常を奪われた少女に、新たな日常を与えてやりたかった。もしかしたら、天野美汐が言うように、自分が彼女の希望の火になれたかもしれないのだ。
ああ、もう一度、逢いたかった。
柏木耕一に預けたときからなんとなく判ってはいた。もう逢える運命ではないんだな、と。最初は、父性本能というのだろうか、守りたいとだけ思っていただけなのに。何なんだろうな、この感情は。まさか恋でもしてるって言うんだろうか。馬鹿げてるよな、小学生に横恋慕って。馬鹿というかロリコンだな。
薄く笑う。まだ笑うことができる余裕があるか。
まあ何だって良い。恋をしてると思っている間は幸せだ。美咲さんに恋をしていた時だってすごくすごく幸せだったんだ。
ふらつく頭で彰が歩き、歩き、歩いた、
その時だった。

自分らしくない変な行動を取っていたせいで、運命がおかしな方向に捩れてしまっていたらしい。

今前方に何やら気配を感じたのだが、これは錯覚だろうか？　目の前にやたら小柄な人影が見えるのだが、これも錯覚だろうか？

多分、錯覚ではないと思う。

それならば、自分の運命は割と幸せに満ちているのかもしれない、と彰は思った。

彰は、目の前に現れた小さな影を見つけて小さく息を吐く。紛れもなく安堵の溜息で、今以上に安堵した息をこの島で吐いた記憶がない。マシンガンに殺されそうになって命からがら逃げた時よりも深い深い安堵を覚えている自分がいる。

こちらを見て少女は目を丸くする。割と距離があるのにその表情までがはっきり見える。

まったく、これから戦おうってのに覚悟が鈍るような登場するなよ。思いながら気付くと自分は目を拭う。無様なことに涙が頬を伝っていた。生きていた。本当に良かった、

――初音ちゃん。

だが、そこで彰の意識の城は崩れていく。

初音が駆けてくる音も聞こえない。眠い、眠い。

492　停滞

ＥＬＰＯＤがその地下仮設ドックに停泊していたのは全くの偶然だった。本来、高槻の降船さえ済めば即座に陸地を離れるはずだった。原因は自律修復の範囲外の故障であったが詳細は不明、乗艦していた技師が直接修復に携わることになった。小型潜水艦ＥＬＰＯＤはその性質上指揮系統が集中されており、デリケートな扱いを要する機構が満載であった。

バックグラウンドで修理が展開する一方、長瀬の傭兵の一人らしき男が通信を行っていた。

「――いずれ、その艦を陸地につけておくのはまずい。早急に退避することを期待する」
「了解」
「――高槻は」
「既に。ルートについては爆破済みです」
「――ならばよい。よろしく頼む」
「はっ」
まもなく通信は切れた。男は通信機を閉じると無表情に振り向いた。そこには同じような格好の男が三人立っていた。
「作戦に変更は無し、艦制御復旧まで態勢を維持する」
「了解」
そう返事をして彼らは自分の持ち場へと帰っていった。通信を行っていた隊長格の男はその様子を見ながら一抹の不安に心を震わせていた。虫の知らせというにはやや漠然としていたが、それは高槻に追随して地上に兵隊が上ったことで戦力低下したということもその原因の一つであったかもしれない。
自律修復を走らせるために艦の動力に火が入っている。辺りは静寂だった。ごんごんと重くのしかかるように響く駆動音を除いては。
遠く、彼方から艦を見つめる瞳が在った。全身を黒で包み込んだ小さな影は微動だにせずその場に在ったが、しばらくすると前進を始めた。足音は聞こえない。呼吸音すらも掻き消える。少年は、深く静かに忍び寄る。

493　侵攻

ドックを内包する球状空間は広いが、外部への通路は概ね三方に限定されていた。その先からさらに枝分かれし、その繰り返しが迷路のような構造を生み出していた。故に最終防衛線は自ずと最初の三口だけとなる。今回の場合もそれは変わらない。配置はそれぞれに歩哨を置く形となった。

だが、気付くはずが無い。すでにドックに部外者が侵入していようなどと。
「…………………」
　ドック後方右側の口に配置されていた傭兵は不思議な焦燥にとらわれていた。視界にも耳にも主だった変化は感じられないが、何か違和感があるような気がしてならない。戦士の勘が彼を縛り続けている。直立不動、ただ只管に通路を睨み続ける。……それが致命的だった。気配を殺して忍び寄った少年が、事もあろうに肩越しにその兵士の耳元に息を吹きかけた。
「ふっ」
「!!」
　そこは鍛え抜かれた傭兵、このような事態にも声を上げることは無かった。だが今回に限りそれもまた仇となった。声を上げていれば誰か仲間が気付いたかもしれない。瞬間に振り向く。だが振り向いたところには少年の姿は無い。――下だ。にっ、と口元だけで笑うと、少年はすかさず傭兵のボディに打撃する。二発、三発。衝撃にあとずさる傭兵、しかし攻撃を受けつつも銃撃で反撃を狙う。
　……彼は気付いていただろうか。自分より大分背の低い少年が、耳元に口を持っていくためにあるものを踏み台にしていたことを。そう、少年の足元には分厚い本が。
「ふっ！」
　鋭い呼気とともに少年はそれを蹴り上げた。サッカーボールよろしく本は傭兵の顔面を直撃した。男はまたも声すら上げずに倒れた。時間差で蹴り上げた本が倒れた男の上に落ちた。
「おー……いぢぢ、流石にちょっと痛かったな……」
　片足で一本立ちして蹴り足の爪先を静々とさすった。すぐに立ち直ると、男から本と銃を取り上げて自分で装備した。少し重い。それに音が立ちそうだ。流石にマシンガンはやめたほうがいいだろうかと少

年は一瞬悩む。悩んだ末に、マシンガンは湖面に沈めることに決定した。置いていくと、万が一この傭兵が目覚めたときにまずい。
「さて、と」
一応これで後門の伏兵は排除したことになるのかな。そう思って少年は潜水艦の方角に目をやる。本丸は、あっちだ。

494　一瞬の出来事

――ダン!!――
教会の扉付近で大きな音がした。それが一瞬の始まり。
ようやく収束し始めた混乱の渦。それに向かって駆け出す影がひとつ。手には拳銃。
(亜麻色の……三つ編みの……)
低い姿勢。疾風のごとく駆けるなつみ。その瞳にうつるのは亜麻色。
「なつみちゃん!?」
祐一の目が、まだ名しか知らぬ少女を捉えた。何が起ころうとしているのかも分からず反射的に名前を呼んだ。
なつみ以外、誰もが状況を把握していない。いや、ある意味なつみも状況を把握できていないと言える。茜の心の動きを知れば、行動は別のものになったかもしれない。
「店長さんを殺された怨み！　『居場所』を奪われた怨み！」
茜の反応が遅れた。祐一とのやりとりで緊張感が消えていたこともあるが、それ以上に『居場所』というセリフに体が硬直した。
駆けながらの発砲。素人では当たるのは奇跡といえるだろう。
だが奇跡は起こった。
哀しき殺人鬼。いや哀しき少女の鮮血が舞った。衝撃を受け、茜の体が後方に跳ねる。そして倒れ

た。
「なつみぃぃ!!」
祐一が激昂し、硫酸銃を抜く。
しかしそれより早く。なつみは銃を突きつけた。
自分のこめかみに。

(!?)
訳が分からなかった。誰一人としてなつみの行動の意味が分からなかった。
「もう私には『居場所』が無いの」
なつみの声はなんというか。普通だ。日常の声だ。
表情は泣き笑い。
「もう生きていても仕方ないのよ」

生きていても仕方ない?
ふざけないでよ!
この島には生きていたくても生き続けられなかった人がたくさんいるというのに。

由依だって生きたかったはずだ。
水鉄砲を構えている男にしたってそう。
『――さぁやってくれ』
ああ! どいつもこいつも!!
無駄に死ぬんじゃないわよ!!

晴香は○・一秒で考えた。多少の混乱もあったが。
「あんたたち! いいかげんにっっ!!」
なつみの指が動いた。

だが……。銃声は響かなかった。

495 笑うということ

「あっちのほうだな」
大きなシーツを肩の安全ピンでとめて羽織った、さながら砂漠の旅人のような格好の柏木耕一の言葉を聞いて、七瀬留美は視線を合わせる。

……シーツの中がどんな姿かは、九割の確信をもちながらも、想像にお任せする。
七瀬は再び遠くを見て、耕一に尋ねる。
「耕一さんは、どう思う？」
「うーん……留美ちゃんの言うとおりじゃないかな。彼女の行く先々で荒事が起きるという意見に、疑問を挟む余地はないと思う」
「じゃあ、こっちはハズレね」
耕一は頷き、朝露を蹴散らして前方を歩き始める。墓場の朝露は、一段と寒々しかった。二人はあまり話す事もなく、森に入る。
僅かな風を捉えて、七瀬の短い髪がそよそよと流れる。たぶん他の誰も気が付かない寒気を首筋に感じ、七瀬は小さく震える。軽さにとまどいを感じながら、頭を左右に振ってみる。
誰もが注目した、あの長い髪は、お別れの餞別に置いてきてしまった。もちろん後悔はしていない。
（ただ、寒いだけ）

そう思って、一人、小さく笑う。
そのとき、前を行く耕一が再び立ち止まったことに気が付いた。
「どうしたの？」
「いや……ハズレというのは、早とちりだったみたいだ」
森を抜けたはるか遠く。そこに見える人影。
あのクセ毛を、見間違う筈はない。
「大当たり、だったみたいだぞ」
頷いて、ふたりで笑った。
笑えるというのは、幸せなことだ。
笑い合えるのは、これ以上なく幸せなことだ。

《やれやれ、だぜ》
《まさか、あそこで自爆とはなあ》
《追い詰めすぎたのは、失敗だったかも知れんな》
この殺戮の王国で交わされる会話としては、特に

異常のない三人の会話だが。
　会話の主たちに問題がある。同じ顔が、三つだ。
そして、無線越しの会話である。更に、そのどれもが高槻を名乗っていたため、今では武器の社名が通り名だ。
《しかし、あれは判断に迷ったな》
《腐っても鯛だ、下手に追えば斬られるだろう》
《確かに、あの時は焦ったぞ》
巳間晴香との戦闘。
晴香は高槻が放送を使って、他の参加者に始末するよう煽った相手の一人。その個人戦闘力は侮れない。
　深追いしなかったのは、そういう事だ。
どちらにせよ、彼らは所持したレーダーで相手を先に発見できる。こまめに索敵すれば、まず間違いなく不意打ちできる立場にあるのだ。
《ちょっと待て……この先に、二人居るぞ》
　さっそくレーダーを見ていた高槻――ステアーと呼ばれる――が報告する。
《何者だ？》
《021と068、柏木初音と七瀬彰の二人……いや、逆から一人。022――鹿沼葉子だ》
《ステアー、まとめて囲めるか？》
《ベレッタ、もう少し大きく迂回してみろ。それで何とかなると思う》
《じゃあそれで。常に報告を忘れるなよ》
三人は唇の端を上げて、更に大きく散開する。
全ての笑いが幸せに繋がるわけではないと、証明するかのように。
彼らはいやらしく笑っていた。

496　途切れる、糸

最後まで生き残る為には、殺すしかない。
驚くほど理性的に、その選択肢を採った。それ以

外の道なんて考えもしなかった。他人のことを思いやるほど優しい人間には、私はついになれなかったらしい。
　だから邪魔になる人間も、敵(かたき)と狙ってきた者も、管理者さえも殺した。
　一度でも感情に動かされてしまえばおしまいだと知っていたから、相沢祐一を遠ざけた。
　それが正しい選択だった。
　私の世界を守れる道だった。
　のに。

　澪も浩平も死なせたのに詩子も撃ったのに覚悟を決めたのに。

　この期に及んで好きだった、なんて。

　馬鹿みたいだ。
　貴方の知り合いを血にまみれさせたのも私なんだから、貴方は私を憎めばいい。大切な日常を奪った女だと逆上すれば。負の感情をぶつけてくれれば「お互い様です」とばかりに殺せた。
　容赦なく、返り討ちに出来た。

　貴方なんかあのまま見知らぬ誰かに殺されてしまえば良かった。
　そうすれば今まで通り無感動にああ、そうかと受け止められたのに。
　二度と掻き乱されずに、冷静に在れたのに。
　嫌いだ。
　貴方なんて嫌い。
　みんな嫌い。
　あのひと以外はみんな嫌い。
　いなくなってしまえばいい。相沢祐一なんて、知らない。
　ふたりでいられれば他は要らない。

いらない。

497　雨のまぼろし

雨が降っている。白くか細い糸。
暗鬱な気分を誘う湿った空気。
それは帰りを待つ頼りない私の希望に似ている。
けれどいつか雨は上がるから。
重たい雲は消えて、七色の虹がかかる。
澄んだ青空を映す水たまりを飛び越えることだってできる。
ピンクの傘を閉じる日は必ず来る。
そう、やまない雨はないから。

……重たい空気を吸って、視線をあげた。傘も持たず立ち止まっているのは、見慣れた制服の少女。
この場合、挨拶くらいはしておくべきだろうか。

「おは」
「おはようございます、なの」
言い終わるより前に、私の時間は止まった。
真っ赤に染まった制服で、はっきりと明るい声で、
「もう返り血に慣れたの？」
無邪気な笑顔を満面に、彼女はそう言った。

「あのね」
なんですか。
「あなたは誰も信じてないの」
……そうですね、信じません。
「親友ともクラスメイトとも一緒に助かろうとは思わなかったの」
クラスが同じだけで信用できるなら、こんなゲーム成り立ちませんよね。

「助けようとは思わなかったの」
　足手まといを作って見殺しにするよりはマシだと思いますけど。
「ひとり空き地で待つことを選んだの」
　いけませんか。
「殺して殺して殺して殺して殺して殺して生き残るの」
　いけませんか。
「今さらエゴイストだなんて責めないの」
　だって、私しかいないんです。
「みんなおんなじなの」
　いいえ。私だけなんです。
　私以外の誰にも、あの人を殺すことは出来ないんです。
　神さまに誓ったっていい。
「だけどね」
　まだ何か言いたいんですか。
「友人たちをその手に掛けたあなたが」
　何を言ったって、今さら同情したりなんかしません。
「誰も信頼できないあなたが」
　無条件の信頼なんて、迷惑なだけなんです。
「……どうやって『あのひと』を呼び戻せるの？」
　澪は饒舌だった。
　悪意のない、故にどこまでも言葉と不似合いな表情を、片時も変えずに、声を紡いでいた。
　私は一歩も動かない。
　空き地から動けない。
「結局は自分の想いに酔いたいだけなの」
　助けたいだけです。
「一途なフリをして目を逸らしているだけなの」
　あなたよりあのひとを助けたいんです。
「還ってくるはずないの」

いいえ。
私が覚えていれば、まだ望みはあるんです。
だからこの世界の全てが死に絶えようと――私は死ねない。

「だってあなたは、もう人を殺すことそのものに」
「心をまるごと奪われてるの！」

分かっている。
この澪は罪悪感が生み出した私の欠片だ。
これ以上言わないでと絶叫する私と、どこまでも揺るがない私がいた。二人に別れてしまった気分。
いや、もう何人なのかさえ分からない。
……気づけば、握りしめたピンクの傘は銃に変わっている。
心底彼女を黙らせたいと思った。正体は分かっている。私だ。
さあ最後に私は私を殺さなくてはいけない。

祐一たちに囚われる私を。今まで通りの日常を夢見る弱い私を。
この舞台で生き残るにふさわしい私に生まれ変わる為に、

撃つ。

『……あのひとの名前、まだ覚えてるの？』

それ以上口をきかないように。

当たり前だ、一秒だって忘れたことなんかない。
この島で極限状態に追い込まれてからずっと、おまじないのように名前を呼び続けてきた。
それだけで少し、心が落ち着いた。
それだけで生きる意味がある気がしてた。
みんなは寄り添おうとするけれど、そんなの成り行きの偽物だ。あなたたちは知らないだろうけれど、

記憶がない、ということは、いない、ということと一緒なのだ。だからこの島にいないひとと、えいえんに生きるひとと共に生き残ろうとするならば、つまりそのひとは私以外に味方はいないのだ。
詩子も祐一も、あの思い出を忘れたならもう敵だ。ごめんなさい。しかたないんです。
全員を助けるなんてバカみたいな夢にすがって狂うなんて嫌なんです。
私はもう選んだんです。
だからみんな、ごめんなさい。
私は全部覚えていますから、恨んでくれて構いませんから、どうか私より先に死んでください。

と、不意に、

「……『居場所』を奪われた怨み！」

くるり、と思考が反転した。
目の前には短髪の少女。
頭に二発、心臓に二発、とどめにもう一発、間違いなく撃ち殺したはずの澪の姿がない。
ああいやだ、別の人と入れ替わるなんて。
ねえ、そんなの卑怯ですよ、澪——

『……あのひとの名前、まだ覚えてるの？』

あのひと。
待ち人。
消えてしまったヒト。
それ以上の情報は、私に与えられない。

「……え？」

真っ白な現実。なにもない現実。
色の無かったそれが赤く染まる。

ユメのカケラを集めても、結局は誰も救えやしない。
――現実(うてない)の私は、呆気ないほどに弱い。

498　侵蝕開始

ＣＰＵの作動音。聞き慣れた音――消えた。
画面が完全に消えたのを確認すると、北川はノートパソコンから電源ケーブルを抜いて、丁寧に鞄へと押し込んだ。
これは、彼の一筋の希望。何も出来ない、自分の、たった一つの鍵。
――ふざけるのも、ここまでだよな。
ゆらりと、立ち上がる。
レミィの声。怯えたような声だ。
「ジュン……？」
北川の顔に、剣呑な雰囲気は感じられない。しかし、常にあった、持ち続けていた筈の明るさは、薄い。その様子に、レミィは多少ながらも〝引いている〟様子だった。
「そろそろ出よう。ここにずっと居て、もずくパーティー開いてても意味無いだろ」
「ウーン、確かにもずくばっかり食べるのも飽きたネ」
「そうじゃない」
笑いには乗らない。
「俺達には、探さねばならぬ物がある」
「探さなきゃならないモン？」
「うむ、これだ。見たまえ」
そう言って取り出したのは、二枚のＣＤ。
「1/4、2/4……とかって話、しただろ？」
「ウン」
「俺の華麗なる推理によれば、だ。こいつは合計五か六枚あるはずなんだ。1/4～4/4で四枚、そしてこの無地のＣＤ。もう一枚くらいあるかもしれない。

中身はこの島の秘密に関わること……だと思う」
ウンウン、とレミィが頷く。それを横目に見つつ、
「結局、手持ちのＣＤだけじゃ解析は無理だったた
——俺の得意分野じゃないしな。だから、今から探
しに行こうかと思——」
「ナルホド、強奪ネ！」
「はっ？」
レミィの台詞に、北川が頓狂な顔を見せた。
「……だって、その二枚の内の一つもヒロユキが持
ってたんでショ？」
ヒロユキ——の辺りで、レミィの表情が一瞬翳る。
だが、それも一瞬。
「だよなぁ——とすりゃ、強奪するしか無いの
か？」
——強奪。
北川の必要とするのはＣＤだけだ。
荷物ごと奪う必要は無い。
だが——

——ＣＤだけ、そう簡単に手に入るわけがない。
……恐らくは、相手は怪しむ。いきなりＣＤをく
れと言ったところで、そう簡単に手に入るものか。
それだけではない。もし、持っていた相手が『ゲー
ムに乗っていた』としたら？
……言うまでもない。相手は、自分達を殺しに襲
いかかってくる。
殺す。
殺す。
——戦うってのか？　この俺が？　はは、まさか
の冗談だろ……？
「ジュン……？」
「ん？」
気付けば、レミィの顔がすぐ下にあった。心配げ
な表情。元々、北川とレミィの背は同程度だ。丁度、
下から覗き込むような体勢となっていた。
「顔、青いヨ……？　大丈夫？」

「――」
――ああ、そうさ。
大丈夫。
何とかなる。
なにも、みんなゲームに乗ってるわけじゃないだろ？　大丈夫、大丈夫、ダイジョーブ。心配いらない！
「うむ、もずくパワー全開だぜ！」
そう言って、北川は親指を立て、爽やかな笑顔を魅せた。
精一杯の、演技。
何とかして、自分を奮い立たせた。そうでもしなければ、へたり込んでしまいそうだったから。
――恐い。
恐いんだ。
じわじわと――北川の精神を、恐怖が蝕みつつある。

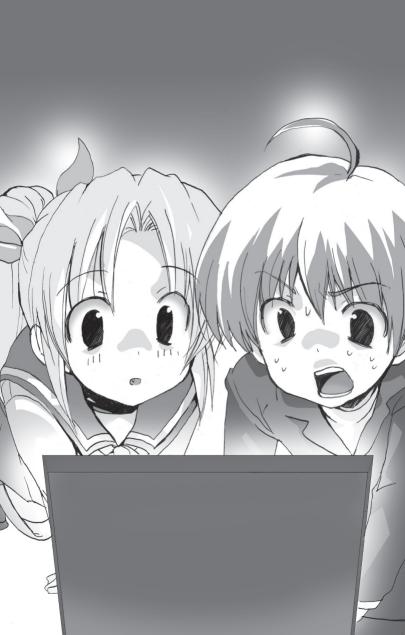
499　MOTHER

教室のざわめき。
教師が黒板にチョークで文字を書く音。
遮断機から鳴り響く警告音に犬の鳴き声。
カチカチと時を刻む時計の音。
すべてがとても懐かしいものだ。
ここに来て何日になるのだろうか。
曜日を知る必要もなく、時間を知る必要もない。
ただ、生きること。
それだけが目標だった。
その割には結構気楽にやってきたよな。
北川は空を見上げる。
そこにあるのは雲と、どこまでも広い空。
これは、何処にいても代わらない。
それだけに空を見ていると落ち着く。

「少し、寝ていいか？」
体力はすでに限界に来ていた。
これからの効率をあげるために、少しの仮眠は必要だろう。
「うん、いいよ」
レミィはにっこりと笑う。
ゆっくりと北川は目を瞑った。
その直後のこと、
「ちょっとパソコン触ってみていい？　気になるところがあるノ」
耳元にレミィの吐息がかかる。
「いいけど、あまり長いこと使うなよ。バッテリ切れたら大変だからな」
目を瞑ったまま、北川は答えた。
「判ってる、だいじょーぶヨ」
カタカタと響く、キーボードの音。
それが少し気になって、なかなか寝付けなかった。
しかし、体はだんだんと睡魔が支配し始める。

北川は、深い睡眠の中へと落ち始めていた。
そんな時のこと。
「やった！」
レミィの大きな声が鼓膜を激しく揺らす。
「ねぇ見て、ジュン、みて!!」
「……そんなに大きな声を出されたら、寝られない。少し落ち着いてくれ」
北川は体を起こして大騒ぎするレミィに向けて言ったのだが、その声はレミィに届いていないようだった。
レミィは北川にノートパソコンを押し付け、また大きな声で叫ぶ。
「いいから見てヨ、これ！」
そのときのレミィはサンタクロースを信じているような、純粋な輝きを放っていた。
北川はディスプレイに目をやると同時に視界に飛び込んでくる雲の壁紙。
そして次に検索ウインドウ。

そこに打ち込まれた検索ワードは、
『にこにこぷん』
そして、表示されているファイルはひとつ。
『(にこにこぷん) おかあさんといっしょ.mov』
「ちょっと待て。お前そんなににこにこぷんが気になっていたのかよ！ そんなにそんなにおかあさんといっしょが見たかったのかよ！」
「ジュンがこれを見てない人間は死ぬだの無知だのユダだのブルータスだって言うんだもん！」
「それはなんだ、所謂ひとつのジョークみたいなものなんだが……」
「とにかく、レッツビギンヨ！」
レミィは勢いよく『(にこにこぷん) おかあさんといっしょ.mov』をダブルクリック！ ＨＤＤはカタカタと音を立てて、ムービーファイルを読み込んでいた。
その音が止まると同時、ディスプレイ一杯に二人の人間の姿が映し出される。その二人は服を身につけていない。生まれたままの姿だった。
スピーカから流れ出る音は、普段ならばスピーカからではなく、ヘッドホンから聞こえるもの。
「母さんっ、母さんっ！」
若い男が何度もそう連呼しながら、ふたまわりほど歳の離れた女と肌を合わせていた。
「あん、もう……お父さんそっくりで、強引……なんだから……」
若い男はどうやら設定上その女の息子らしい。
「って……なんだよ、これ⁉」
北川は声をあげた。
それが何かはもうわかっているというのに。
そう、それはまさしく男の宝、エロムービーだ。
このパソコンの持ち主が敢えてこのファイルを自分でＨＤＤに入れて名前をおかあさんといっしょとし、他の人間の目からファイルを隠そうとしていたのか、それとも本当におかあさんといっしょが見たくてＰ２Ｐソフトなどを利用しダウンロードしたの

だが、それが悪意を持つ第三者の嫌がらせでおかあさんといっしょと名付けられたエロムービーを偶然落としてしまったのかは判らない。だがどっちにしろ、それはエロムービー以外の何物でもないのだ。
「もう、イッちゃうよ、母さん、もう僕、僕！」
ムービーは容赦なく、半ば思考停止ぎみの北川の横で再生されつづけていた。
「これがおかあさんといっしょ……」
顔を赤らめながらも、レミィはディスプレイをじっと見つめていた。
「そんなわけあるかぁぁぁっ！」
北川は我に戻り、ＰＣの電源ボタンを押して、マシンの電源を落とす。
「ジュン、なにするの！」
レミィは怒って、再度電源ボタンを押した。
「あれを見ないと人じゃないんでしょ？　あれが大人の階段を一歩昇ることになるんでショ⁉」
「確かに大人の階段は一歩昇るかもしれんが、お前にはまだ早いッ！」
やっとるやつはやっとるだろーけどな！
「あれ？」
レミィは間の抜けた声をあげた。
「マシンの電源はついてるけど、ＨＤＤを読み込まないヨ？」
「なんだって⁉」
パソコンのディスプレイには黒い画面が映っていた。それは確かＢＩＯＳの状態であるという。続いてＯＳが立ち上がるはずなのだが、画面はまったくといって動かない。
「もしかして、壊れたノ？」
レミィが呟く。
北川は呆然とディスプレイを見ていた。
睡魔なんて何時の間にか何処かに飛んでいってしまっていた。
パソコン、壊れたのか？
……マジで？

500　日常との決別

ジャキッ……
いつでも引き金を引けるようにしながら崩れかけたドアを機関銃で押し開く。
「やはり……誰もいませんね……」
荒れはれた喫茶店、いや、喫茶店であったもの。先のにぎやかな雰囲気を知っている弥生にとっては凄惨な廃墟と感じられる。
「ここにいるわけがないですね」
篠塚弥生（四十七番）はそんな言葉とは裏腹に意外そうな顔で店内を眺めた。
水瀬秋子はここにはもういない。
戦闘態勢を解かないままに店内を一通り調べまわす。
やはり、人影はない。

――私はここから動く意志は残念ながら無いのよ。
かつての秋子の言葉。だが、ここにはもういない。あの時喫茶店にいた面子はもう秋子を除いて死んでしまった。
ならば、ここに敵が押し入ったのか……？　そして皆殺しにした――
（そんなわけありませんね）
死体どころか血痕のひとつもないここで戦闘が行われたとは考えにくい。
――ちなみに一体、男の死体が奥の部屋に安置されているが、それは弥生も知るところだった――
つまり、ここを秋子達が移動するまでは少なくとも戦闘は行われていない……ということになる。
（ならば、どうして水瀬さんは動いたのか……）
カウンターの奥へと入り、コーヒーをドリップする。約三人分のコーヒーを。
もはや喫茶店とはとても呼べない寂れた店内に、

香ばしい匂いが漂った。動きやすいように荷物を整理しながら思案を巡らせるが、すぐにそれを断ち切った。
（根拠のない憶測など並べても意味がありませんね）

今の弥生が知りたいことは実はあまり多くない。
危険人物。
誰が闘いなれているのか、誰がゲームに乗っているのか。そして誰が生き残っているのか。
それらを相手にする時が、一番危険だからだ。
弥生が最後まで生き残った場合、それらと交戦する可能性が一番高い。
最後まで残っている者が戦闘もロクにできない烏合の衆と考える方が愚かなものだ。
「そういえばもう一人ここにいましたね……確か国崎往人さん……でしたね」
弥生とほぼ入れ違いに出て行った青年の名と、顔を思い浮かべた。
秋子以外に、生き残ってる喫茶店にいた者。
まだ名前は呼ばれていない。彼が今何をしているかは知らないが、お互い生きていれば必ず会えるはずだ。
恐らくは殺し合いの中で。
あまり派手に動くべきではない。確実に、仕留められるときにだけ動けばいい。
それが生き残るために弥生が選んだ道だった。
現在複数で群れて行動している人間は決して少なくはないだろう。
喫茶店での秋子達がそうであったように。森の中で闘った、女性とは思えない程力強いお下げの少女達がそうであったように。闇討ちで倒したカップルがそうであったように。毒を受けた少女と、その少女を守ろうと爆死した悲しい二人がそうであったように。マナと、炎の中で息絶えた少女がそうであったように。そして、弥生と守りたかった二人が……

そうであったように。
多人数相手に真正面から戦いを挑むのは分が悪い。
(負けるわけにはいかないのですから)
それでも、弥生はここ、喫茶店へと足を運んでいた。
誰も知りえることはなかったが、本当の敵にも宣戦布告を果たした。あとは進むだけだ。ただ、最後の決心がまだ足りない。
弥生の心はまだ冬弥、由綺と共にあったから。
危険を承知で喫茶店へとやってきた理由はそこにあった。
出来上がったコーヒーをそれぞれ三つカップに注ぐ。一つは弥生の分、一つは由綺の分、そして最後に冬弥の分。そしてわざわざカウンターの表側へと回りこんでから席へと座る。
「恐れ入ります」
まるでそこに喫茶店のマスターがいるかのように頭を軽く垂れる。
周りから見れば滑稽であったかもしれない。
だが、それでも弥生は日常を演じる。確かに存在したその日常を。
ささやかな日常の幸せが、今弥生の中に去来する。
今はただ一つの形見となってしまった彼女のニードルガンと、冬弥の特殊警棒を取り出した。
(私なりの……けじめですわ)
手のつけられていないコーヒーカップの前へと、それぞれ一つずつ置いて。
「そろそろ時間ですね……」
残ったコーヒーを喉へと流し込む。それはいつもよりとても苦い。
「――さようなら」
軽く会釈。直動的な動作で踵を返すとそのまま喫茶店の扉をくぐった。
もう壊れてしまった喫茶店に、冬弥と由綺、そして弥生が望んだ、還らない日常を置き去りにして。

後には空のカップ、そして未だ湯気が立ち昇る二つのカップの前に寄り添うように置かれたニードルガンと特殊警棒だけが残されていた。

501　弔い

がちっ。
冷たい鉄の音。
結局、なつみの頭を銃弾が貫く事は無かった。
僅かに遅れて、風の如く駆け付けた晴香の蹴りが飛ぶ。正確に腕を狙ったそれは、なつみの銃を教会の壁に吹き飛ばす。衝撃に持っていかれた腕が、なつみの身体を床に転ばせた。
「――――」
なつみの顔は、呆然としたものだった。
何が起こったか分からない、という顔ではない。
何故、どうして、といった顔か。
死ねる筈だった。
復讐を果たし、今、まさに、「自分の居場所」をまた取り戻す筈だった。
しかし。
「弾切れ、ね――まぁ、随分良いタイミングじゃない？」
皮肉げな晴香の声。無反応。
「自殺なんて止めろって、お告げなんじゃないの？　誰だか知らないけど、まぁ、良い店長さんよね」
「わ、私は――」
「うるさいわね」
辛うじて開いた口を、晴香が閉ざす。
その目に浮かぶのは怒り。侮蔑。
「あんたも、あいつも、ぐだぐだぐだぐだ殺せだの何だの勝手な事ばっか言って……。いい加減、反吐が出るわ」
なつみの顎を掴む。
長椅子の横から引きずり出すと、晴香はそれを無理矢理立たせた。

……が、すぐ崩れ落ちる。ちっ、という舌打ちの音。
「復讐だか何だか知らないけど、折角残った命を大切にしようって気があるの？　死にたくない人達だって一杯死んでるのに？　ふざけんじゃないわよっ！」
教会中に響き渡る、怒号。
晴香の前にへたり込んだなつみが、ようやく、びくりと身を震わせた。
「誰かのお陰で生き残ったなら――生き残ってほしかった人がいたなら。その人の分まで、生きてやる。それが礼儀でしょ。それを、殺して、奪って――挙げ句には放棄。店長さんが泣いてるわ」
「――だったら、どうしろって言うの？」
立ち上がる。
睨み付ける。
火花が散った――ように見えた。
「『居場所』も無い。生きる意味も無くなったのに。それなのに、生きろって言うの？」
「無いなら、探せばいいじゃない」
「……ありっこ無いわよ！」
「探そうともしないで、無いだなんてよく分かるわね。あんた、不可視の力でも使えるの？　それが、放棄してるって言ってんのよ。分かってないわね」
「――っ！」
激昂。
右手を、血が滲む程に握ると晴香の胸ぐらを掴み上げた――もはや、相手の手に握られた刀の存在すら、忘れていた。
だが、結局。
その拳が放たれる事も無く。
なつみは、再び、その場にへたり込んだ。
右手の内からぽたりと、赤い雫が落ちた。

502　第七回定時放送　そして一つの疑問

「おはよう、諸君。これから定時放送を行う。

十一番　大庭詠美
十四番　折原浩平
十七番　柏木梓
二十番　柏木千鶴
三十一番　霧島佳乃
六十一番　月宮あゆ
六十六番　名倉由依
七十八番　保科智子
八十二番　マルチ

以上だ。
残りわずかとなってきたので、生存者発表も行う。

一番　相沢祐一
三番　天沢郁未
五番　天野美汐
九番　江藤結花
十九番　柏木耕一
二十一番　柏木初音
二十二番　鹿沼葉子
二十三番　神尾晴子
二十四番　神尾観鈴
二十九番　北川潤
三十三番　国崎往人
三十七番　来栖川芹香
四十番　坂神蝉丸
四十三番　里村茜
四十六番　椎名繭
四十七番　篠塚弥生
四十八番　少年
五十番　スフィー

六十四番　長瀬祐介
六十八番　七瀬彰
六十九番　七瀬留美
七十九番　牧部なつみ
八十三番　三井寺月代
八十八番　観月マナ
八十九番　御堂
九十番　　水瀬秋子
九十二番　巳間晴香
九十四番　宮内レミィ
九十九番　柚木詩子

それでは、諸君らの健闘を祈る」

御堂と詠美は、思わず顔を見合わせる。
呼ばれるはずのない名前。

「どうして、お前が死んでいる？」
　この時点では、まだ、二人は気付いていなかった。
先程詠美が嘔吐した際に、爆弾が吐き出されていたことに。その爆弾が、実は発信機を兼ねていたことに。

503　断罪

柏木初音。それがわたしの名前。わたしは今、一人で彷徨い歩いている。
　わたしは怖かった。悪意と殺戮が渦巻くこの島でわたしは今ひとりぼっちだったから。
　頼れる人達はいた。何よりも信頼できる家族。お姉ちゃん達と耕一お兄ちゃん。けど、わたしは逃げ出してしまった。
　恐かったから。自分のせいで大切な人達を傷つけるのが。わたしの中に居るもうひとりの自分。その意識に囚われると、暗くて悲しい衝動が込み上げて

きて、破壊的な衝動に身を任せてしまいそうになる。そんな不安定な自分が誰かといれば、その相手を傷つけてしまうかもしれない。
　自分のせいで誰かが傷ついてしまうなんて耐えられない。だから、私は繋がりを拒絶した。
　千鶴お姉ちゃんを梓お姉ちゃんを耕一お兄ちゃんを七瀬お姉ちゃんを彰お兄ちゃんを傷つけたくない。絶対に傷つけたくない。わたしの為に誰かを傷つけるなんて、信じられる人を傷つけるなんて嫌だった。傷つけて、大切なひとを失ってしまうのなんて死んでも嫌だった。
　でも、わたしは同時にどうしようもなく子供だった。無力で、無能で、ばかで、一人では何も出来ないやつだった。その上、すごく怖がりだった。
　一人は嫌だった。
　いつ殺されるかもわからない場所で、一人でいるなんて耐えられなかった。矛盾している。わたしはどうしようもなく矛盾している。矛盾の螺旋に落ち込んでいる。
　一人は嫌だった。
　心が痛かった。もう矛盾に耐え切れなくなっているのだと思う。自分はこんなに歪んだ矛盾の中で笑っていられるほど強くなかった。
　楽しかった日々はもう粉々で見る影もなかった。楓お姉ちゃんは死んだ。もうどこに帰っても会うことが出来ないのだ。それこそ私が死なない限り。
　死のうかと思う。
　もしかしたらもう、千鶴お姉ちゃんや梓お姉ちゃん、耕一お兄ちゃん、彰お兄ちゃんも死んでしまっているかもしれない。
　だとしたら。
　今生きていることに、どんな意味があるのかと思う。
　死のうかと思う。
　わたしはただ生きていたいのではないのだ。淡々と続く穏やかで優しい日常の中で生きていたいのだ。

その日常が粉砕された今、生きていることにどんな意味があるというのだろう。
　楓お姉ちゃんの優しかった笑顔を思い出して、わたしは涙がこぼれそうになった。
　死のうかと思った。
　舌を噛んで死んでしまおうかと思う。もう歩くのも疲れた。一人でいることも疲れた。誰かを傷つけることにも疲れた。天国に行けば楓お姉ちゃんに会える。誰も傷つけなくてすむ世界にいける。
　——死んでしまおう。
　少しだけ後ろ向きの勇気が要るけれど、その勇気が今、わたしの心にはある。あれだけ生きて帰りたいと願っていたくせに、もうわたしの心には生きるために使う勇気はなくなっていた。
　次郎衛門になんてもう、会えなくてもいい、
立ち止まり、目を閉じて、舌を少し出し、前歯を当て、力を込めようとしたその瞬間に、
　わたしの目に七瀬彰の姿が入った。
「彰、お兄ちゃん……？」
　声が漏れる。距離があるのに彰の表情までが判る。笑顔。間違いなく彰は微笑んでいて、微笑んだまま彰の身体は急速に崩れ落ちる。
　死にたいと思っていた気持ちが一瞬で消え去る。
「彰お兄ちゃんっ！」
　わたしは思わず駆け出している。矛盾のことも死にたい気持ちも忘れて、自分をずっと守ってくれていた青年にまっすぐ駆け寄る、
　——あなたが傍に行ったせいで、大切な彰お兄ちゃんは逆に傷つくかも知れないよ？
　——次郎衛門とあの青年、どっちが大事なの？
　走るわたしの心の中からそんな声が聞こえる。もう一人のわたしがわたしを止めようとする。矛盾が頭に浮かぶ。浮かぶ。逡巡、逡巡、
　叫ぶ。

「わたしは、絶対に傷つけない！　わたしはもうひとりは嫌なんだっ！　傷つけない！　わたしはもうひとりは嫌なんだっ！　だから、あなたは邪魔なの！　出てこないで！　わたしは柏木初音！　リネットじゃない！　どっちが大事とかじゃない！　わたしは！　わたしは大切な人を守るんだ！」

それでわたしの中の声は完全に途切れた。
わたしは、やっと柏木初音に戻った。

駆け寄る。俯せに倒れた彰の身体を必死に起こす。声を掛ける、
「お兄ちゃんっ、お兄ちゃんっ！」
額から血が流れているようだった。零れる血はわたしの服を赤く濡らす。倒れたときに頭を打ったのだろうか。構わず抱き寄せる、言葉にならない声で叫ぶ、お兄ちゃん死んじゃだめっ、そんな風に言いたかったのに声は嗚咽にしかならない。顔を覗き込み驚愕、活力の息吹からは程遠い乱れた息、あの優しかった微笑みを作る事すらままならない消耗具合。見れば身体はずたずたに傷ついている。白かった肌が白さを通り越して青くなっている。それでいて右手にはサブマシンガンをしっかり握っていて離そうとしない。
「彰お兄ちゃん！　しっかりして」
やっと出た言葉に彰が反応、
「眠い、眠い」
かすれきった声、
「彰お兄ちゃんっ！」
何とか、何とかしなくちゃ！　大切な人をこれ以上失いたくない！　街に、近くにある街の中には薬なんかがあるかも知れない！　ここからそれ程離れているわけではないと思う、急げ！
わたしは、自分よりずっと大きな身体の彰を担ぐ。彼はまだサブマシンガンを離さない。重い。重いけれど大丈夫大丈夫大丈夫！　わたしはわたしの意志

で今明瞭に行動している、疲れなど忘れろ！　大切な人をもう死なせない！　街までは一キロも無いはずだ。わたしは大きく深呼吸をすると森の中に入る、急げ、急げ急げ急げっ――

――その時だった。

七回目の定時放送が流れる。
わたしの心に大きな穴が開く。

504　混沌

心に混沌が満ちた。最後の一片だけ残されていた柏木耕一の中の秩序は粉々になって砕け散って、後には見る陰も無いカオスがあった。
すべては今流れた定時放送のせいだった。
七瀬留美と耕一は、柏木初音が森の中に進んでいくのを追うことさえも忘れて、その放送に耳を奪われて、死にそうになった。
耕一の目は混沌に充ちた。膝が折れる。頭痛で思考が壊れそうになる。朝露の輝く草に指を絡ませて、今の放送は間違いじゃないのかと、それでも疑う。

ちづるさん。あずさ。かえでちゃん……

柏木耕一が呟いた言葉の断片からは、そんな単語が辛うじて拾えた。
「ちくしょう」
――守れなかったのかよ。
「俺は、一体、何のために」
自分は無力だった。無力で無力で無力で無力だ。命に代えても守るのだと、そう思っていた人たちが自分にはいた。自分の従姉妹たち四人を、何があっても守るつもりでいた。力が制限されている中、女達を守ることが自分の使命だと思っていた。
失われた。

気づけばもう、自分の従姉妹四人のうち三人が逝ってしまっていた。自分が呆としている間にも時間は流れ、その流れた時間の渦が運命を巻き込んでしまったのだ。
「畜生！　畜生畜生畜生っっっ！　千鶴さんっ！　梓っ！　楓ちゃん！」
笑顔を思い出す。
淑やかで、いつも優しい笑みを見せてくれて、自分の精神を救ってくれた、大切な人。
活発で、いつも明るい笑い声を響かせながら、自分の心を励ましてくれた、大切な人。
無口だけど優しくて、自分の心をその湖のような深みの心で癒してくれた、大切な人。
「千鶴さんっ、梓っ、楓ちゃんっ！」
叫ぶ。咆哮に似た慟哭の声を上げて叫ぶ。何で自分は、三人を失わなければならない？　自分はそこまで救えないことをやってきたか？　自分が人を殺したからか？　どんな理由があれ、自分は人殺しだからか？　ああああああああああああああああああああああああああああ!!
地面に拳を叩きつける、四度殴ったところで血が噴出すが痛みすら感じない。もっと大きな痛みが身体と心とを走っていて、血が噴出したくらいでは痛みにもならないのだろう。
「耕一さんっ！」
七瀬留美の声がする。だが今は返事をするのも億劫だった。今は何が起こっても動ける気がしない。もう自分には希望の光は無いのだ。思う。希望の無くなった瞬間に人は抜け殻になり、動けなくなるものなのだ。耕一は心底、大切な友達二人を失ってもなお抵抗し続ける七瀬留美のことを尊敬しようと思う。
その七瀬留美が喚いている。
残念だが、自分は七瀬ほどには強くなかったようだった。頭が痛かった。もう寝てしまおうかと思う。

夢の中で眠ると現実に戻る、と誰かが言っていた。もしもこの殺し合い全てが夢だとすれば、今眠りにつけば元の世界に戻れるのかも、

「耕一さんっ！　聞いてっっ‼」

——そんな幻想を愛でている場合ではなかった。

「今、そこに、高槻がいてっ——初音ちゃんの行った方に向かったのっ！」

覚醒。

希望はまだ一片だけあった。思い出した。柏木姉妹は四姉妹だ。遅すぎる。自分は馬鹿か。自分から離れていってしまった柏木初音が無事に生きていて、今目と鼻の先にいる、

そして今、あの高槻に追われている、

立ち上がれ！

悲しみを忘れることなど出来るわけが無い。だが今は悲しみを抑えつけろ、走れ！　初音はすぐ傍だ、急げ急げ急げ急げっっ‼

千鶴さん梓楓ちゃん、必ず貴方たちの妹は守るから、絶対に絶対に絶対に守るからっ‼　少しだけ、少しだけでいいから待っていてくれ‼

耕一は何も言わずに立ち上がって身体を低くして走り出す。七瀬留美の走る速さを完全に無視した高速の移動だった。地面を踏み鳴らす音、あまり状態の良くない土の上なので足が沈み込んでしまいそうになる。足を取られる、転びそうになるが全身の筋肉をフル稼働して無理矢理に体勢を立て直してすぐ走り出す、その勢いのまま森の中に飛び込む、飛び込んで少しだけ立ち止まって叫ぶ、

「何処だ、初音ちゃんっ！　返事をしてっ！」

息を切らせて追いついた七瀬留美も叫ぶ、

「初音ちゃーんっ！　返事をしてっ！」

七瀬留美が叫んだ瞬間だった。

木々の間で何かが破裂したと思った。爆弾か何かじゃないかと思う。残響。耳が潰れるかと思う。銃声だと理解するのに一秒。残響から距離を測る。それほど離れてはいないと思う。狼狽、まさか高槻が

初音ちゃんを撃った音か！　耕一は目を閉じて息を吸って冷静さを取り戻そうと一秒間息を止めてその後に集中、銃声の聴こえた方に初音はいるんだと考えろ、しっかりと定めろ！

「あっちだっ！」

指を差し走り出そうとした次の瞬間、

耳の裏辺りで同じような炸裂の音がした。

「うあっ！」

叫び声。高い声で七瀬は鳴いた。残響。耕一は振り返り、七瀬の脹脛（ふくらはぎ）の辺りから血が弾けていることに目を奪われる。

「大丈夫かっ！」

「な、なんとかっ」

七瀬は苦しそうな顔で頷く。銃弾はまだ一発だけ、足以外に撃たれた場所はないようだ。

「敵襲……っ!?」

耕一は舌を打つ、なんでこう切羽詰った事態に敵襲があるっ！　参加者同士の戦いをこれ以上続ける意味はあんのかよっ！　銃弾が飛んできた方に七瀬は目を遣っている、耕一も同じように目を遣り、目を疑った。

七瀬は確かに高槻は初音を追って森の中に入っていった、と言った。

ならば何故、今目の前に高槻がいる？

505　生命の歌

お姉ちゃん達が死んだ。みんな死んだ。涙がこぼれた。絶望に打ち拉がれた。膝が崩れてへたり込んだ。

――普通の子供なら動けなくなって当たり前の衝撃を受けている筈の柏木初音は、それでも五秒ほどの放心の後には膝を起こして涙を拭って、七瀬彰を背負いなおすと、早足で動き始めている。

「泣くのは、もう少し後でも良いよね」

泣いていていては出来ないこともある。悲しむことは

後でも出来るが後悔だけはしたくない。息を切らせながら、魂が折れそうになりながらも初音は動く。街まできっともう少しだ、頑張れ、
　その瞬間鼓膜が弾けたと思った。銃声だと理解するのに二秒、初音は驚いて振り向く、
「おおおお！　こんな子供がここまで生き残るとはまったくもって予想外だったああ！」
　高槻が立っている。右手に銃を持った高槻が嫌な顔で笑っている。
　今度こそ魂が折れそうになる。顔から血の気が引いていく。身体が震える、無意識のうちに後ずさる、意味が無いことはわかっているのに、高槻から少しでも離れようとする。
「まったく、このゲームに参加していた奴らはこんな子供も殺せないようなヘタレばっかりだったのかあ！」
　拳銃が向けられる。そして自分は何も持たない。
　高槻は男で大人、自分は女で子供。

——勝敗は明白だった。

　それでも七瀬彰を死なせたくないと思う。

　初音は息を吸い、吐き、目を閉じて祈って目を開き、開いた目で真っ直ぐ高槻を見つめる。
　ここで脅えているだけではそれこそ魂まで折れてしまう。目だけでも、奴に屈しないでいようと思う。考えろ。考えろ、どうしたらこの場を逃げ出せるか！　武器は。武器はないのか。
　自分の目を見て少し眉を顰めた高槻は、しかし次の瞬間には愉快げに笑う。
「よおし、オレだって別に鬼じゃなあい！」
　高槻は笑う。笑って、そして宣言する。
「一分間だけ待ってやるぅ！　その間にここから逃げるなりすればいいっ！」
　遊ばれていると思った。絶対的な強者の余裕だ。
　初音は唇を噛み震える身体を押さえる。しかし好機、

この余裕は油断となり得るかもしれない。
「お前が背を向けたところから一分間のカウントを始めるぞっ！」
初音は高槻を睨んだまま少しずつ後ずさり、二十メートル離れたと思ったところで背を向けて走り出す。一分でどれだけ走れるか。
「ちょっと待てぇ！」
高槻が叫ぶ。思わず立ち止まって振り返る、
「その背中に担いだ男はそこに置いていけぇ！」
ふざけるな、と思う。
「嫌だ！　この人を置いていくことなんて絶対に出来ない!!」
初音は顔に熱が昇っていることを自覚。今やこの人は自分の希望の火なのだ。
高槻が不愉快そうに叫ぶ。
「重くないのかあ！」
別に彰を嬲り者にしようというわけではなく、ただ単に忠告がしたかっただけのようだった。
「重くないっ!!」
「……まあ、好きにすればいいっ！　一分を測り始めるぞっ」
初音は今度こそ駆け出す。走れ！
スピードが出ない。一分間というのは短すぎる。息が乱れる。身体はそれほど疲れていないのに肺が痛い。身体よりむしろ心が疲れているのだと思う。心が圧迫される。もっと速く走らないと自分ばかりか彰が殺される。急げ、街まではあと何分走れば着くんだっ！
走りながら思う。どう見積もっても一分は経ったと思う。一分で自分はどれだけあいつを突き放せたのだろう。逃げ切れたわけが無い。足を止めては駄目だ。街まではあと少し。街に着いたらまだそれでも何かあいつに対抗する手段があるはずだ。
身体が揺れた。
バランスが崩れる。残響。呻き声。

思いも寄らぬ所から拳銃の音が聞こえた、どうして、まさか別の襲撃者がやってきたのか、
そんな風に考えながらどうして身体が揺れたのか考えて、すぐに初音は顔面が蒼白になる。自分にはまったく痛みがない。それで身体が揺れた、つまり彰の身体のどこかに銃弾が命中したんだ。ということは先の呻き声は彰の、
そこまで考えてバランスが完全に崩れ、初音は彰もろとも泥の中に突っ伏すことになる。顔から泥に突っ込んで一瞬息が止まる。顔を上げて彰を探す。自分のすぐ横で彰が目を閉じて倒れている。顔色は遂に青を通り越して白くなっていた。死人だといってても何ら差し支えは無いと思うほど白い。何かを言おうとするが泥が口の中に入って上手く喋れない。泥を吐き口を拭い彰に縋る。今は喋れる。けれど声にならない。しっかりして、と言おうと思ったのだ。言おうとしたのに震える唇が邪魔をする。

「そんなどろどろに汚れていちゃあ可愛らしい顔が台無しだああ！」
そんな高槻の声も初音の邪魔をした。一分間相当の距離は離していたのに、何故こんな近くにいるのだろう。気づく。騙されていたに決まっている。あいつは初めから待つつもりなんて無くて、希望を持たせるようなことを言って自分を弄んだのだ。
「いやあ、本当に可愛い女の子じゃないかああ！」
悔しかった。武器があるなら自分はあいつを真っ先に殺すというのに。
気づく。
武器ならあるじゃないか。自分のすぐ傍らにサブマシンガンがある。七瀬彰が未だ手から離さない鈍色の兵器。
「オレの趣味にぴったりだああああああ！」
初音は息を吸って間隔を取る、高槻が油断する瞬間を見つけるんだ。
「楽しませてもらおうかああああああああっ!!」

高槻が高笑い、
初音はその瞬間を見逃さない。彰の手からサブマシンガンを奪い構えて高槻に向けて迷わずに引き金を引く――
その前に、高槻の右手から放たれた銃弾が初音の手からサブマシンガンを弾き飛ばしていた。
「うああっ！」
マシンガンは遠くに転がる。ハンマーで殴られたような痛みが右手に走る。直接銃弾が身体に当たったわけではないにせよ、間接的に銃の威力が右手に伝わった。重い痛みだった。
「――見かけによらず気高いのもポイントが高いな。こんな子供がここまで生き残ってこれたのは、この強さがあったからかもしれんなあ」
高槻は肩を竦めてくっくっと笑う。
「まあいい。もう抵抗も出来まい。可愛らしくて気高い少女を犯す――いいな、すごくいいなあ！」
言葉の意味を理解。身体から力が抜ける。恐怖で心も顔も歪む。死ぬより怖かった。心臓の音。早鐘のように打つ心臓、後ずさり、駄目だ、いやだ、嫌だ、嫌だ、嫌だ！
「いやっ！　来ないで！　誰か助けてえ！」
「呼んでも誰も来ないぞっ！　正義の味方などこの世界にはいないのだっ！　少なくともこの島にはいないのだあああああああああっ！」
初音は自分の肩に高槻の手が置かれ、その醜悪な顔が自分の顔に近づいてきて、舌を噛んで死のうかとまで一瞬本気で思う。
千鶴お姉ちゃん、梓お姉ちゃん、楓お姉ちゃん、耕一お兄ちゃん、助けて。誰か、誰か。
初音の願いで奇跡が起こる。
助けを呼ぶ声が、無慈悲な筈の神様に届く。
強く土を踏む音がした。
「正義の味方なんていませんけれど。
――悪の敵はいます」

柏木初音も高槻も気づかなかった。その女の人が自分のすぐ傍にまで来ていたことに。
亜麻色というよりは、黄金色に近い色の、長くて美しい髪。大きく輝く眼。右手に拳銃、左手には槍のようなものを持っている。
何より目を引くのは、その立ち姿だった。初音はこれまでの人生の中で、ここまで颯爽とした佇まいで立つ人を見たことが無かった。
「――鹿沼葉子か」
高槻が不愉快そうに笑う。
「ええ。あなたたち悪の敵です」

506　戦士の歌

「今、小学生の女の子を追っているんだよオレ達は。鹿沼葉子。お前も参加しないか？　ん？」
下品な笑顔で高槻が言う言葉に吐き気を覚えながら、鹿沼葉子は結構ですと首を振る。
「あと三十秒ほどしたらその女の子を追うのさ。はは。楽しい追いかけっこだな」
――空腹に耐えて歩いていた自分がたまたま見つけた高槻は、こんな風に妄想しながら笑っていた。本当に野に放たれたのだな、と思う。
「お前もちゃんと殺してるか？　ジョーカーとして無慈悲に残酷に殺しまくっているかあ？」
――いい加減、不愉快になってくる。
「さて。そろそろ追いかけようと思うんだが……その前にな」
拳銃を構える。自分の額に向けられている。
「放送を聞いただろうが、オレもこれからはジョーカーでこの島の全ての人間をぶっ殺さなければいかん。そしてお前も例外ではない」
ベレッタという名前の拳銃が、鹿沼葉子の命を狙って黒く光っている。
「オレのクローンが後二体いる。三人で森を包囲してるって訳だ。全員が全員優秀だからなあ。鬼のよ

うな強さだろうな」
笑い、自分が右手に力を込めたことに気づくと尚高らかに笑い、
「その右手の槍でオレと戦うかあ？　ん？　制限された不可視の力でどこまで拳銃に対抗できるかな？」
言うと同時に発砲。
言うまでも無いが、当たらなかった。
「なっ！」
しゃがみこみその姿勢のままで身体を高槻の背後にもぐりこませ、高槻が振り向こうとするその瞬間を狙って槍の柄の部分で首元を殴る。それで高槻の意識は完全に潰される。
「――いけませんね」
少女は三十秒離れた。そして、高槻のクローンが森の中を包囲している。倒れた高槻から拳銃を奪うと葉子は走り出す。その少女が危ない。
自分はジョーカーだ。勿論それは参加者に対しての意味ではなく、自分を飼いならしていると勘違いしているＦＡＲＧＯと企画者に対してのジョーカーだ。

507　安堵&焦燥

――おはよう、諸君。これから定時放送を行う

学校内まで流れてきた死亡者放送。
本来なら悲しむべきもの。
実際、何人もの人間が亡くなっているのだ。
心の底から喜ぶことなんてできやしない。
それでも……いや、悲しいからこそ、出来る限り全身で喜びを表現した。
「やったよ！　私らの死亡放送流れたよ！」
「うっ、うぐぅ!?」
むりやりあゆを引き寄せて喜びをぶつける。
パシパシ……グッグッ……！

「うぐぅ……手がひりひりする……」
「そう言うなって、千鶴姉の勘は当たってたってわけだ」
――残りわずかとなってきたことなので、生存者発表も行う
その声と重なって、今度は生き残りの参加者の名前が呼び出された。
三人の知り合いの名前も読み上げられる。
本来なら喜ぶべきこと。
だが……
「いけない……」
千鶴の顔に安堵の表情が浮かんでいたのもつかの間。
「耕一さん達は……私達が生きてることを知りません……！」
その事実は、あゆと、梓の顔を曇らせるには充分だった。
「すぐに伝えに行かなきゃ……」
耕一や、初音の悲しむ顔が手にとるように分かる。
もしも自分達が耕一の立場なら同じように思うはずだ。
楓を失った悲劇……それを再び味あわせてしまったこと。
「どうして忘れてたんだ、私達はっ！」
たとえ偽りの放送であっても、何も知らない耕一達の事を思うと強く胸が痛んだ。
「私が行きます。これは、提案した私の責任だから……」
千鶴が、スクッと立ち上がる。
初音の居場所は分からない、だが、耕一達は未だ怪我で小屋に寝ているはずだ。
「ちょっ……千鶴姉!?」
「もしかしたらまだ耕一さん達はあそこにいるかも

しれません。ですが、今の放送を聞いたら……たとえどんな怪我を負っていても動くはずです。耕一さんは、そんな人ですから」
「だったらみんなで行けばいいだろ？」
「……私達は死んでいます、体面上では。見つかるわけにはいかないでしょう？　私一人の方が安全です」
「だけど……千鶴姉！」
「あゆちゃんもいるのに？　……危険を犯すのは私だけで充分だから」
「千鶴ね――」
「すぐに帰ってくるから。できれば耕一さん達も連れて……ね？　その後すぐに初音も探さないとね。……でも、もしも私が二時間経っても戻って来なかったら……梓、その時は自分の思う通りに行動して」
　そして、梓に有無を言わせず千鶴は教室を飛び出していった。

「バカだよ……千鶴姉……」
　梓が呟く。
「いつもいつも、自分だけ責任を背負って……バカッ……」
　すぐに追いたかったが……梓には出来なかった。
確かに、全員で動くのはあまり得策じゃない。ただ耕一達に会いに行くだけなのだから容易なはず……。それでも……
「外には殺人鬼がいるかもしれないんだぜ……どうして自分だけ……」
　感情はそうはいかなかった。
「うぐぅ……たぶんボクのせいだよね……ボクが足出まといだから……」
「あゆのせいじゃないよ……」
　梓があゆの頭を優しく撫でてやる。
「うぐ……」
　くすぐったそうにあゆが目を細めた。
（絶対に帰って来てくれよ、千鶴姉っ！）

二時間経っても戻って来なかったら……あってはならないことを強く祈りながら、撫で続けた。
千鶴は駆ける。影から影へ。
(どうして私はこんなことに気付かなかったのかしら……ごめんね、初音……耕一さん)
後悔してもしきれない。
しかも、初音に限ってはどこにいるのかも分からないままだ。
早く安心させたい、早く伝えてあげたい。
(私は……私達は……生きてますっ!)
見つからないように、かつ全速力で木々の間を駆ける。耕一や七瀬と別れた小屋へ。
もちろん千鶴はまだ知らない、そこに浩平の死体があること、そして放送が流れるずっと前から耕一達がそこにいないということを。

508　最悪の遭遇

二人は小躍りするように、先行していった。呆れて物も言えない。
柏木初音、鹿沼葉子というエサに釣られて、立てた作戦さえ忘れて駆け出していった。爺どもに馬鹿にされるのもやむなし、と思うほど愚かしい。
(……最悪、だな)
まあ聞いてくれ……元々の作戦は、こうだ。
まずベレッタが囮として、相手の視界に姿を見せる。そちらに注目した相手の死角から、俺がボウガンで狙撃する。ステアーはレーダーで位置を確認しながら随時情報を提供し、もしもの時はＡＵＧで二人を援護する。
基本は多勢で少数を罠にかけ、互いに援護するということだ。この作戦は既に巳間晴香と名倉由依の

二人に試して、ほぼ成功している（誤差はあったが、安全性の高さは証明された）。
ところが、だ。
要のステアーが離れて先行するという事は、援護もなく、情報もなく、ただ三人がそこに居るだけなのだ。
（……烏合の衆って奴だ）
溜息をついて、一人残ったマスターモールドはボルトのケースを取り出す。ステアーの情報をアテにして、矢は装填していなかったのだが、今ではそうもいかない。
注意深く、毒矢を取り出そうとした、その時。最悪の相手が走ってくるのを発見してしまった。
（か……柏木耕一だと⁉　復活しているのか！）
鬼の雄体。
結界の束縛さえ引きちぎり、凄まじいまでの強さを見せつけたという、恐怖の鬼が駆け込んでくる。
マスターモールドは慌てて懐の拳銃——ニューナンブM60、こんな名前で呼ばれたくなかったので黙っていた——を取り出す。
そのまま震える手で発砲した。

パン、パン！

「あぐっ！」
恐怖のために弾は逸れ、女に当たる。
あの女は誰だろうか？　いや、問題になるのは柏木耕一だ。女は後でゆっくり始末すればいい。
急いで藪の中を移動しようとしたそのとき、僅かな隙間から偶然目が合ってしまった。
鬼が叫ぶ。
「た——高槻⁉　あそこだ！　敵は高槻だ！」
「なんですって⁉」
ふん、キサマに驚かれる筋合いはないぞ、と若干落ち着きを取り戻し、発砲する。今度こそ、外しはしない。

パン、パン！

鬼の素早い移動に一発目は外れ、なんとか二発目を命中させる。肩から掛けたシーツの中央付近に穴が開く。鬼がうめく。
「ぐっ！」
膝をつく。
(よし！)
手応えに勇気を得て、更に撃ちこむ。
「死ぬがいいッ！」

パン――

何がおきたか、解らなかった。
一発、発砲したものの外れた。
手を強打され狙いを外し、銃を取り落としていた。
いつのまにか、女が鉄パイプをひっさげて突進していたのだ。

こんな女が参加していたか？　こんな凶暴そうな女が――いたか？
「女！　キサマ何者だあッ！」
ナイフを引き抜いて応戦しようとしたが、これも叩き落される。即座に拾おうとしたそれを、女は慣れた仕草で蹴り飛ばす。
「なめないでよ？　七瀬なのよ、あたし」
ああ、そう言えば。
やたら凶暴な女子高生が参加していると、聞いた事があったな。
追い詰められながら、マスターモールドは思った。
(……最悪、だな)

509　戦友との再会　～御堂～

「――それでは、諸君らの健闘を祈る……ブツッ」
放送が終わり。

御堂と詠美は顔を見合わせる。
「お前、生きてるよな？」
「あたし、死んでないよね？　どうして呼ばれてるの？」
詠美はきょとんとした表情で聞いた。
「知るか。お前、何か恨まれるようなことでもしたんじゃないのか？」
冗談半分で御堂が言う。
「し、知らないわよぉ！　きっとこれは何かの間違いなのよっ！　そうよ！　そうだわ！　ホント勘違いにも程があるわよっ！」
「いや、放送は確実だ。間違いなんかねぇよ」
「むっかぁ〜〜〜！　あたしの推理にケチつける気？　じゃあ何であたしは生きてんのよっ!!」
自分の推理を一蹴されてしまったエセ探偵・詠美ちゃん様のブーイングの嵐が吹き荒れる。
「知るか、俺もそれが不思議でならん。だいたい生死の判断をどうやってしているかも分かんねぇからな」
キュピーン！
詠美ちゃん様の頭脳がフル回転！
一瞬で答えを弾き出した！
「そんなのかぁ〜んたんよっ！　誰かがあたし達を見張ってんのよっ！」
「そんな奴らの気配はしねぇな」
ガクーン……。
今日の詠美ちゃん様の頭脳は不調らしい（いつも不調だが）。
「だいたい見張るも何も、見失っちまえばそれでお終いだろうが。発信機か何かありゃあ話は別だが……発信機？　そうかっ！」
御堂は急に立ち止まった。
彼の背中に追突する詠美。鼻を押さえながら抗議する。
「ちょっ、ちょっとぉ〜〜〜！　急に止まんないでよぉ〜!!　鼻ぶつけちゃったじゃない……」

「……お前、あそこで吐いたとき、腹の中のモン全部吐き出しちまったのか？」
詠美は（いきなり何言っててんのよ、バカじゃないの？）と、言おうと思ったが、御堂の眼がマジだったので正直に答えることにした。
「え？　あ、うん。ぜんぶ吐いちゃったわよ？　それがどうしたの？」
「ゲロん中に金属が無かったか？　よく思い出してみろ」
詠美はよく思い出した。サケ、サバの味噌煮……胃液、そして丸い球体。
「金属？　ああ、あったわよ、銀色の丸い……」
「なるほどな、やっぱりか……。体内爆弾の起爆装置は解除されたんだな。しかしうかつだった、発信機と生死判定装置もセットだったとは。……だが、こりゃあひょっとするとひょっとするかもな」
一人で納得している御堂を見て、何となくちょおむかつく詠美ちゃん様。
「ちょっとぉ！　あたしにも教えなさいよぉ！」
「いいだろう、教えてやる。まず、俺達がこの島に連れてこられた時に、管理側の奴らが参加者全員の胃袋の中に『爆弾・発信機・生死判定装置』が一体化したシロモノを入れやがったんだ。もし、奴らに逆らったり、装置を吐き出そうとしたら、ドカンだ」
「え？　あたし……それ、吐いちゃったよ？　なんで爆発しなかったの？」
「そう、そこがミソだ。高槻って奴が主催から降ろされた時、ゲームを面白くするために奴らは爆弾の起爆装置を切りやがったんだ。つまり吐き出しても爆発しなくなった訳だ。だが、奴らすっかり発信機と生死判定装置の存在を忘れてやがった。おかげでお前は水瀬名雪の傍らで死亡扱いになっている、ってなわけだ。どうだ？　わかったか？」
「え？　さっぱり。もう一回お願い」
「……だからな――」

「……と、いうわけだ。……分かった……よな？」
御堂はゼーハー言いながら四回目の説明を終えた。
「なるほどね☆　謎はぜんぶとけた！」
詠美はくるりと一回転し、ビシィ！　と指差し、
「つまり、あたしは奴らの目をかれーにあざむいたルパン的そんざいなわけねっ！　真っ赤なぁ〜♪バラはぁ〜♪……」
（さっきから何を聞いていたんだお前は……俺の苦労を一行にまとめやがって……）
御堂の肩にどっと疲れがのしかかった。
その時だった！
茂みから何者かが転がり落ちてきた。
ガサガサッ！　バキバキバキィ!!　ドカッ！
茂みから現れたのは二人の男女だった。
「お前は……！」
御堂は二人の……異様な姿に驚愕した。
「ね、ねぇ、この人達。アンタの知り合い……なの？」
謎の男と詠美の目が合う。男は彼女に軽く会釈した。
「あぁ、知ってるぜ……五十年以上も前からな」

510　ツミビト

オモチャのような銃。
しかしその実体は、濃硫酸を相手に振り掛ける残虐な兵器。その銃口の先で、今、晴香が、なつみの銃を蹴り飛ばしていた。
——それどころじゃない。そうだ、茜だ。
振り向くと、白い床の上で茜が悶えている姿が見えた。
床が、紅い。
「茜ッ！」
駆ける。
床の上に跳ねた血が、ステンドグラスから差し込む光を浴びて禍々しい輝きを見せている。

——鮮血だ。
祐一が側に駆け付けると、茜が左肩を押さえているのが分かった。既にどす黒い色に染まっていた肩口を、鮮血の紅がさらに新しい色を上から付け加える。
血の勢いが強い。早く、早く治療をしなければ。
——包帯……くそっ、そんなもの、あるわけ無い！
水鉄砲を放り捨てる。無いのなら、作ればいい。
幸い、祐一の制服の袖は長い。それを切りさえすれば！　咄嗟に、茜の腰に差された短刀を取り出そうとして——それを、茜の、血みどろの右手が払った。
弱々しく。
絞り出すような、声。
「ほっ……ほっといて、下さい」
拒絶の意志。
「何言ってんだ……？　ほっといたら、死んじまうだろっ！」
「……いいんです、死んでも」
脂汗の浮いた顔が、ふっ、と静まった。
痛みが治まったわけではあるまい。右手が押さえ続けている左肩の傷は、未だ血を吹き出し続けている。
「——色んな人を、殺して、きたんです。ただ、生き残ろうとしてた、だけの、人を」
「……」
「それに、私は——詩子を、撃ったんです。無二の、親友を……撃ったんです……！」
唇を、噛む。弱った力は、噛み切る事も無い。
倒れた茜からは、倒れ伏した詩子の姿が見えない
——見えない事を、酷く、辛く感じた。
泣きそうだった。
「……。私は、償うべきです……みんなに。詩子に。
それに……貴方に」
「それが……それで、死んでもいいって言うのかっ……？」

「——はい」
事も無げに、答えた。

がすっ。
何かが、固い何かに刺さる音。
振り返ると、ちょうど祐一の隣に一本の刀が刺さっていた。
「——人の話くらい聞いてなさいよ。相も変わらず、泣き言ばっかり抜かして……！」
刀の先。
へたり込んだ少女の前に立った晴香が——全身に怒りを漲らせて、立っていた。
足取りも荒く近づくと、茜を挟んだ祐一の反対側に立つ。見下ろすような視線。込められた、侮蔑。
「そこのヘタレ男——それで袖でも切って、こいつの肩でも縛っておくのね。……私は、こいつに、話があるわ」
軽く、蹴り上げる。傷に響いたか、茜が、苦悶の声を上げた。
「何しやがっ……！」
「うるさいッ!!」
一喝。
ステンドグラスを叩き割らんばかりの怒号が、祐一の抗議の声を掻き消した。
一瞬の間。息を吐き出した。
「……あんた、死にたいのね？」
唐突な問い。
「……はい」
額に脂汗を浮かべつつ、やはり事も無げに茜は答えた。その潔さに、晴香はさらに顔をしかめる——片膝を付くと、茜の頭を持ち上げ、顔に近づけた。
こう言った。
「なら、あんたのやる事は一つね——生きるのよ」

511　戦友との再会　～蝉丸～

「月代、大丈夫か？」
蝉丸は心配そうに月代の顔をのぞきこんだ。
「(;´Д`)ん……蝉丸たん……ハァハァ」
月代は異常なほど息が荒かった……
（まさか、仙命樹の催淫効果か⁉）
とも蝉丸は考えたが、よくよく考えてみれば、自分の血など月代には一滴もついていない。
「月代、どうしたのだ？　熱でもあるのか？」
月代の首筋に触れてみる、脈は正常だ。熱もない。
……あえて言うなら言動が異常だった。
「(;´Д`)ハァハァ……蝉丸たんが私のウナジを……も、萌えーーーー！」
「モエ？」
意味不明なことを口走りながら月代はすっくと立ち上がった。
（もしや、この仮面が月代を操っているのか？　だとしたら何とかせねば……）
蝉丸は月代……いや、仮面に詰め寄った。
「仮面、いますぐ月代を操るのをやめろ！」
月代の肩を抱き、蝉丸は言い放った。凡人ならすくみ上がってしまうほどの迫力だ。
「(;´Д`)何を言ってるの？　私は月代だよ？　このお面は私の正直な欲望をさらけだしてるだけなんだよ。それにしても、怒る蝉丸も、も、萌えーーーー！」
「む」
手の打ちようが無かった。月代は操られてなどいない……そればかりか、己の欲望……つまり正直な気持ちを出しているだけだったのだ。
「(;´Д`)ここから無事に出れたら蝉丸たんと結婚したい……結婚……ハァハァ」
「……」
「(;´Д`)結婚したら……新婚旅行どこに行こうかな……ハァハァ」

ウフフフフ
アハハハハ

「……」
「(;´Д`)子供は何人がいいかな？　二人？　三人？……蝉丸たんて、ヤパーリ激しいのかな？　ハァハァ」
　遠くから足音が聞こえた。足音の数は……二人。
「……月代、誰か来るぞ」
「(;´Д`)え？」
　ガサガサッ！
　月代を抱えた蝉丸はすぐさま近くの茂みに隠れた。しばらくすると何かをしゃべりながら男女が歩いてきた。一人は見覚えのある顔だった。
（ついに来たか、奴とは出会いたくなかったが……何とも奇怪ないでたちだな……）
――――――御堂！（と、猫と毛玉と白ヘビと鳥類）
　もう一人は分からない。十七～八歳ほどの若い女だ。
（あの女……御堂に殺されずにここまで……一体何者だ？）
　二人の会話が聞こえる。
（よく聞こえんが、爆弾……体内の爆弾は……吐き出しても……？　……るぱん？　何だそれは？　外国人の名か？）
　ルパンのテーマソングに反応したのか、後ろの月代も歌い出した。
「(;´Д`)あいつのぉ～くちびるぅ～♪　やさしくぅ～抱きしめて～♪　くれとぉ～ね～だる♪　蝉丸たん！抱きしめてっ！」
　月代は蝉丸の雄大な背中にタックルをかまし、そのままぎゅうっと、抱きしめた。
「月代!?　よせ！　御堂に見つかるっ！」
　時既に遅し。蝉丸はバランスを崩し、月代と共に……
　ガサガサッ！　バキバキバキィ！　ドカッ！
　御堂達の前へ転がり込んだ。
「お前は……！」

くんずほぐれつの二人を見て当然驚く御堂……不思議と蝉丸の頬が赤くなる。
「ね、ねぇ、この人達……アンタの知り合い……なの？」
名も知らぬ少女はこちらを警戒している。目が合ったので蝉丸は会釈で返す。
「あぁ、知ってるぜ……五十年以上も前からな」
何故か御堂の表情は『敵意』ではなく、『なつかしさ』があらわれていた。

512　罪滅ぼし

「人を殺した罪は、消えないのよ。過去の過ちは、ずっと後になっても、永遠に自分を苛み続ける。確かに、死ぬってことでその苦しみから解放されるかもしれない。だけど、そんなのただの逃げでしかないわ。自分がやった罪から、逃げようとしてるだけ。無責任なのよ、あんたは」
「──」
「あんたも、そこのヘタレも、あいつも。命を、軽く見てる。あんた達、最低だわ。人を殺したとか、そんなの関係無い。沢山人が死んだ中で、自分達は生きているっていうのに、それなのに。命はいらなくなったからってポイって使い捨てしていいものだとでも思ってるの？　うざったい──反吐が出るわ」
祐一が、袖を裂く音。
布がきつく縛られ、ぎゅっ、という音を立てる。その度に、茜の顔は苦悶の表情を見せた。無理もない。
──その中で、晴香の声は、淡々と響いていた。無論、後ろのなつみにも聞こえている事であろう。
「あの、詩子とかいう娘だけじゃない。みんなそう。生き残ろうとして、頑張ってきた。何かしようとして、頑張ってきた。その上に、あたし達はいるのよ──無駄に死ぬなんて、それこそ死者への冒涜だわ。

あんた達、死んでまで罪を重ねる気なの？」
——由依。
自分を守る為に、死んだ仲間。
いや、由依だけじゃない。
一緒に戦ってきた、仲間の死があって、今、私が此処にいる。
ここにいる者達は皆それぞれの大切な者を犠牲にして此処にいるはずだ。だから、誰かがその命を無駄にするのを見過ごすわけにはいかない。
その誰かが、どれだけ辛くても。その誰かの為に死んだ、他の誰かに報いる為にも。
「……」
茜は、逃れるように目を逸らす。
「少しでも、償う気があるのなら。……がむしゃらに、生きなさい。精一杯、戦って。それで、死になさい。そしたら、私も褒めてやるわ——地獄でね」
「……生きて、いいんですか？」
か細い声。

精一杯の問い掛け。
祐一も、その問いに顔を上げた。
「誰も許可なんてしないわ」
さらりと流す。
二人は、やや、驚いた顔を見せた。
晴香は続ける。
「生きる権利なんて、誰にもあるのよ。あんたなりに、生き残りなさい。——それが、あんたの殺した人への、せめてもの罪滅ぼしよ」
「……」
布が縛られる音。
完全にとはいかなくても、きつく縛られた布が、血の流出を止めた。

生きる権利は、渡された。

513　運の尽き

東の空からゆっくりと朝日が目の前の道を照らす。その中で、スフィー、結花、芹香の三人は黙々と山道を歩いていた。相変わらず神社は見つからない。無論、往人にも出会えていない。

そんな時だった。

山道を曲がった先、二、三十メートルの所に人影を見た。

女性のようだ。服は血に染まり、鬼気迫る表情。手には機関銃を持ち、さらに服のベルトには別の銃身がのぞいている。

先頭を歩いていた結花は、とりあえず後ろの二人を手で制した。その瞬間、いきなり銃声が響くと、結花たちの頭上を弾道が通り抜けていった。

曲がり角から結花達が出てきた時、篠塚弥生も少なからず動揺していた。

単独行動の弥生にとっては、待ち伏せをするなどして、なるべく自分に有利な状況を作り出して戦うのが基本戦術である。出会い頭で複数の敵と遭遇するような状況は完全に想定外だった。

それでも弥生は、すかさず機関銃を構え引き金を引く。

しかし運の悪いことは重なるもの。機関銃は数発発射されただけで、あとは空撃ちの音を響かせるだけだった。

やむなく弥生は機関銃を放り投げ、ベルトから別の銃を抜いた。銃を構えた時、弥生にはまだ一呼吸出来るほどの余裕があった。そして、引き金を引く。

「タタタタッ」と発射音が響く。弥生はその軽すぎる音に違和感を感じるが、その正体に気付くほどの余裕は無い。

（捕らえた！）

だが、その直後、弥生は右脚に激しい痛みを覚え、引き金を引いたまま地面に突っ伏した。

何が起こったのか、すぐには理解できなかった。捕らえたはずの相手を見ると、痛がってはいるものの出血している様子はない。
弥生は、手元に転がる弾を見て激しく後悔した。彼女が手にした銃はエアガンだったのだ。
銃口が自分を狙っていることを認識した結花は、一瞬死を覚悟したが、実際に飛んできたのはプラスチックの弾丸。
痛みは覚えるものの、我慢できないほどじゃない。
結花は銃を取り出し襲撃者に向けて放つ。
弾は敵のふくらはぎ付近に命中した。女性の長身が地面に頽（くずお）れる。
「大丈夫？」
「こっちは大丈夫」
スフィーの返事を聞くと、結花は銃を構えたままゆっくり前に進んだ。向こうはさっきの銃を捨て、新しい銃を構え直そうとしていた。
「もう撃つのはやめて！」
説得するかのように、結花が叫ぶ。
相手の銃弾に屈した弥生は、それでも反撃の機会をうかがっていた。ベルトに差したもう一丁の銃――グロッグ17を取り出そうと、ゆっくり手を伸ばす。相手は少しずつこちらに近づいてくる。「もう撃つのはやめて！」と叫びながら。
（……私には、こうするしか生きる術がないんです）
ようやくグロッグを掴んだ右手を結花に向け、引き金に指をかけた。だが、発射しようとした瞬間、脚の痛みが再び弥生のターゲットを狂わせる。
グロッグから発せられた銃弾は結花を逸れ、後方にいたスフィーの前で砂煙を上げた。
「ス、スフィーになんて事するのよ！」
反射的に引き金を引いてしまう結花。

もう一度、結花のデザートイーグルが火を噴く。
再び放たれた銃弾は、弥生の右肩を文字通り砕いた。

右肩を打ち抜かれた瞬間、弥生は自分の中で決定的な何かが失われたことを悟った。
(こんなところで、私は、私は……)
体の力が抜ける。目の前に血の流れが見える。
左手で銃を取り、構え直そうとするものの、手が言う事を聞かない。
それどころか、弥生は自分の体を支えられず、仰向けにどうと倒れた。
「終わり……ですね……」
弥生は、絞り出すような声でつぶやいた。
(どこで、歯車が狂いだしたんでしょう……)
一瞬脳裏に浮かんだのは、昨晩男女二人を撲殺した現場。あのとき手に入れた鞄の中に、エアガンが入っていたなんて……。

「ちょっと、まだ生きてる!?」
結花が、弥生を抱き起こす。湧き出す血液が結花の体を赤く染める。もう助からないであろうことは一目瞭然だった。
「……どうして、あなたは人を殺すの?」
「……そうすることしか、私には残されていないからです」
弥生は、静かに語りだした。
「……私の大切な人は、もう全員死んでしまいました。私には守るべき人も、守りたい人もいません」
「……」
「だから、私は決めたんです。最後の一人になって、生きてこの島を出ようと。……今となっては、もう無理のようですけど」
弥生は前方を見遣りつつ、
「スフィーさん……でしたか。あなたには、あなたのことを必要としてくれている、守るべき人がいるじゃないですか……」

「……そうね。私も大切な人をここで何人も失ったわ。わたしには、スフィー達がいたから、あなたのようにはならなかったけど、みんながいなかったらどうなっていたかわからないわね……」
その時、二人のやりとりを遮るかのように、放送の声が辺りに響いた。
『おはよう、諸君。これから定時放送を行う』
死んだ者の名前、生きている者の名前。
次々と読み上げられる名前を、一同は黙って聞いていた。
「あの中に、私が殺した人の名前もありました」
弥生が口を開く。
「あなたは、何人殺したの？」
「忘れました……それほどまでに私は人を殺してきたのです。今は、その報いかもしれませんね」
薄れ行く意識の中で、弥生の脳裏にあの二人の顔が浮かぶ。
（……由綺さん、藤井さん。こんなに早く、そちらへ行けるとは思いませんでした）
「……あなたは……生きてください。勝手なお願いですが……それが……私を殺した人間に対する私の我が儘です……」
そう言い残し、弥生は事切れた。
後には、結花の嗚咽の声だけが響いていた。
「私……殺してしまった……」
泣いている結花の元へ、スフィーと芹香が歩み寄る。
「この人、マネージャーさんだって。名簿にそう書いてた。普通の人なのに、ここまで変わっちゃうんだね……」
「私、わたし、どうすればいいの？　この人みたいに、最後の一人になるまで殺し合いするの？」
「そんなはずないよ！　結花、落ち着いて！」
「……」
スフィーと芹香二人の言葉で結花は落ち着きを取り戻す。

「……みんな、ごめん、心配かけて。私はもう大丈夫……」
もう涙は流れていなかった。腕で涙を拭い去り、顔を上げて話し出す。
「この人が言ってたよね。私には守るべき人がいるじゃないかって」
「……それって、私たちのこと？」
結花は小さく頷いた。
「私たち、何があっても一緒にいよう。リアンや綾香さんだってそう願ってるんじゃないかな」
「……」
「うん」
「じゃ、指切りしよう」
そういって指を出そうとした時、
「でも、三人同時に指切りできないよ？」
スフィーの言葉に、結花は思わず吹き出した。
「あっ、そうだね」
結花はスフィーと、その後に芹香と指切りをして、三人の絆を誓い合った。
しばらくして、結花が歩き出そうとした時、
「……」
芹香が結花の裾を引っ張る。
「？」
「……」
「武器？　もういいわ。あまりたくさん持ってても仕方ないし」
「……（ふるふる）」
芹香の懸念は、このまま武器を残しておくと誰かに使われる、という事だった。
「……そうね」
結花は、弥生の手元に落ちていたグロッグ17を拾い上げ、
「スフィー、これ持ってなさい」
と手渡した。
残りの武器は鞄にまとめて、そばの茂みに穴を掘

って埋めた。他の誰にも見つからないように。
そして、三人は歩き出した。結界の待つ神社に向かって。

四十七番　篠塚弥生　死亡
【残り32人】

514　天使の微笑み

ずっと張りつめていた緊張の糸が途切れ、今までの体と心の疲れが出たのだろう。
茜はそのまま、意識を失った。
「……う……い、ち……？」
詩子が呼び掛ける。
「詩子、どうした？」
自分でも不思議なくらい穏やかな声が出る。
この少女はもう虫の息なのに、もうすぐ死んでしまうのに。
だから、最期には泣き声なんかじゃなく、穏やかな声で。
そう思った。涙は、後に取っておけばいい。
「……あ……か……ね。だい、じょう……ぶ？」
「おかげさまでな」
手をとる。既に冷たくなりつつあった。
「あかねを……」
「茜を、どうした？」
「……てを……にぎら、せ……て……？」
「あぁ、わかった」
気を失っている茜の手を取り、詩子に握らせる。
詩子は瞳を閉じて、笑っていた。
ただ、笑っていた。
満面の笑顔。それはまるで、天使のようで。
かえって、これから訪れる悲しみを、より大きくしているようだった。
「……あはは。あり、がとう……。あかね……あかね……」

最期に何かをつぶやく。
その声は小さく、晴香やなつみには届いていなかった。
祐一には、聞こえた。
思う、茜にも届いていて欲しいと。
「詩子……」
涙が溢れ出る。
最期まで、最期まで、我慢していられた。
笑顔でいられた。
「……詩子……」
眠っている茜が、呟く。
その頬にも、涙が一筋流れていた。
どんな夢を見ているのだろう。
せめて今だけは、幸せな夢を見させてあげて下さい。
たとえ目覚めた現実が残酷でも、せめて、今だけは。
祭壇の十字架に、祈る。
神の祝福は訪れるのだろうか。
それは誰にも、わからない。

九十九番　柚木詩子　死亡
【残り31人】

515　血塗られた微笑み

「……強い子ね」
沈黙を破ったのは晴香の一言だった。
床に刺した剣を抜き、言った。
「あなたも見習いなさい？」
「あぁ、そうするよ……」
晴香は決して祐一に顔を見せようとはしなかった。
(泣いてる……まさかな？)
続いて床に捨てた硫酸銃を拾い、いまだ呆然としているなつみに向かい言った。

「悪いけど、茜は絶対に殺させない。絶対にだ」
それは、決意。
自分に、茜に、そして――詩子に。
強くなる。茜を守り、そして生き抜くくらいに。
「ようやくまともなことも言えるようになったじゃないの。あなたは、どうするの？」
晴香がなつみに問う。
「……私は……」
なつみが何かを言いかけた――その瞬間だった。

放送が、聞こえた。
死んだ人間の名前を読み上げる、あの放送だ。
詩子の名前はなかった。だがそれよりも――

「……あゆ？」
確かにあった。月宮あゆ、と。
何人も、祐一の知り合いは死んでいた。
名雪も、美坂姉妹も、舞も佐祐理も。

真琴にいたっては、自分の目の前で死んだのだ。
そして今、まっすぐに自分の想いを貫き、死んでいった親友がいる。その上更に、現実は重くのしかかろうとしているのか。
目の前が真っ暗になりそうだった。
今に沈んでいきそうだった。
「!?」
それを結果的に救ったのは、突如教会に溢れた気配。おおよそ、教会という場所には似つかわしくない空気。

――殺気だった。

「許さない……。あの二人まで……許さない!!」
殺気の主――晴香が叫ぶ。
祐一もなつみもその空気に完全に飲まれ、一言も声を出せずにいた。
保科智子、マルチ、そして神岸あかり。

僅かな時間しか共にすごさなかったが、それでも彼女達は友人だった。いや、親友だった。
高槻との会話を思い出す。
結局何もできなかったのだ、何も。刀をきつく握りしめる。噛み締めた唇から血が滴る。
地獄の底まで、高槻を追い詰める。
この世の全ての苦しみを、奴等に味あわせる。
そうと決まれば、こんな所にいつまでもいる場合ではない。
ドアに向かって、走る。
祐一の声が背に聞こえるが、晴香には届かなかった。

ドアが開く。
開けたのは晴香ではなかった。
現れた女の異様な眼の輝きを捉え、思わず晴香は足を止めてしまった。
それだけの狂気が、その瞳にはあった。

「祐一～、ようやく見つけたよ～」
女が、言った。
明るい声で、血に汚れきった姿で。
「なゆ……き？」
祐一は呆然とつぶやく。
何かが間違っていた。
あんなに背が高かっただろうか？
あんな髪型だっただろうか？
「うん、そうだよ～」

何かが、間違っていた。
目の前の光景がうまく認識できなかった。
天使の去った教会に、
血塗られた微笑みが舞い降りた。

516　戦乙女

激痛。
痛みで、崩れ落ちそうになる。しかし、それ以上の闘志が彼女を、七瀬留美を奮い立たせていた。
——瑞佳、折原。
仲間達は、次々と殺されていった。
失った痛み。それに比べれば——この程度。
鉄パイプを、握り直す。
目の前の高槻は、冷や汗を浮かべている。少女の思わぬ反撃に、驚愕し、畏れを抱いていた。
もはや彼女の頭の中に「乙女らしく」という概念は消え失せようとしていた。いや、たった一つだけ「乙女」の概念に当てはまるものがあるかもしれない。
それは——
(小娘のくせに、生意気な……！)
マスターモールドと呼ばれる高槻は、全身を襲う寒気と格闘していた。ボウガンを握ろうとする手が、おぼつかない。……そこで気が付いた。
矢を装填しておくのを忘れていた……これでは、この武器はただの鈍器にしかならない。つくづく、自分のタイミングの悪さに苛つくばかりであった。
(恐れている？　鬼ではなく、ただの女を……？くそったれ、なめやがって。殺してやる)
彼にあったのは威勢のみだ。
実際の所、マスターモールドには全く武器が無い。ナイフは、遠くに蹴りやられた。拳銃もだ。頼みの綱のボウガンも、矢のセットに時間が掛かってしまう。多分、そんなことをしている間に頭を砕かれる。
じりじりと後退していく。ますます、武器が離れていく。
しかしそこで。
視界の内に、ゆっくりと身を起こす鬼の姿が見え

た。
（馬鹿な⁉　確かに当たった筈……！）
その一瞬の狼狽を、七瀬は見逃さなかった。間合いを詰め、素早く頭部への打撃を繰り出す。
（そんな、女子供の打撃――！）
たった一撃では致命傷になりはしない。だが、獲物は鉄パイプだ。無事にすむとも思えない。
身を屈め、やり過ごす。
そこに目に入る、相手の足の怪我。
マスターモールドの口端が、にぃ、と笑みの形を象った。無理矢理な体勢からの蹴り。それは、的確に七瀬の傷口を抉った。
「あぐぁっ！」
これには、七瀬も崩れ落ちた。
（チャンスだ！）
今なら、脇を通り抜ける事が出来る。
鬼の声。女の脇を通り抜けた――銃までどれくらいだ？　そう遠くまでは飛んでいない筈……。

拳銃。己の希望。
それを掴むべく、マスターモールドは走った。
だが。
次の瞬間。耳に届く、怒号。
そして、空を切る音。
がすっ！
自分の頭が叩かれる音――マスターモールドは、何故か、それが遠くから聞こえてくるような錯覚に囚われた。
「あぐぁっ！」
思わず、声が出た。撃たれた傷が、衝撃で、血を吹き出す。今度こそ崩れ落ちた。
前を睨み付ける。高槻が、笑っている。
それは七瀬の底知れぬ怒りと闘志を燃え上がらせた。
――人の弱みを狙って叩くなんて……
「こんの……っ、ゲスがぁぁぁっ！」

およそ乙女とは似つかわしくない台詞。
それと同時に、立ち上がりつつ、身体の捻りを加えた鉄パイプの一撃を高槻の後頭部に見舞った。丁度裏拳に似た感じだ——が、その威力は数倍。鉄パイプは、その一瞬恐るべき『凶器』と化した。
がすっ！
クリーンヒット。衝撃に、高槻の身体が顔面から叩き付けられた——流石に起きあがってはこなかった。
ひょっとしたら、もう起きる事もないかもしれない。
反動を利用し、立ち上がる。脛の裏の傷は、未だに痛みの協奏曲を奏でている。
しかし彼女は立った。立っていた。
その後ろに在る、輝く太陽の光を浴びて。
——それを、どんな「乙女」に当てはめる？
即ち、「戦乙女」。

517　加速

少人数の配備は当然リスクが伴う。本来なら最低限でも二人ずつを配置したかった。高槻と一緒に上陸した人材が非常に惜しい。実際三人という人数はぎりぎりの配置だった。置くだけ置いただけで、どれだけ有事に対応できるのか不安なことこの上ない。
もちろん各々がプロフェッショナルであることはよく分かっているが、実戦がどれだけ不如意であるかはそれを上回ってよく分かっている。どれだけ備えようとも完璧などありえない。……考えてみれば嫌な稼業についたものだ。しかしもう後悔しても遅いか、どうせ俺にはここしか居場所が無い。隊長はそんなことを思いながら見回りに入った。少ない数を補うための苦肉の策だった。侵入者などあるはずも無いが、用心に越したことは無い。ドックの北口か

ら順々に回って確認していく。
　一箇所目を確認したところで、ふと手持ち無沙汰な右手に気付いた。そうか、煙草か。もう随分と呑んでいない。この作戦が開始する少し前からだ。作戦行動中に喫煙するなんてことはもってのほかだと分かっているが、焦燥に駆られてしょうがない頭を冷やすにはもってこいかもしれない。野戦服の胸内ポケットから一本、ライターと一緒に取り出す。ジッポじゃない。安っぽい百円ライターだ。なんだかんだ言っておきながら戦場にまで持ち込んでいるのだから未練がましいことこの上ない。もっとも、別に自分は禁煙しようとしているわけでもないのだからそう思いつめる必要も無い。人差し指でライターを挟み、薬指と中指で煙草を挟んで慣れた手つきで火を点ける。そのまま手の甲を向けて俺はフィルターに口を当てた。
　白く煙が上がる。懐かしい味だった。

（火遊びは危ないですよ……っと）
　少年はこっそりと死角を歩き続けていた。隊長を奇襲するには流石に各入口部に近すぎた、これでは援軍が来てしまう。傭兵部隊の方は無理をして叩く必要は無い。今回の最大の目標はなんといってもこの潜水艦の奪取だ。そのためには……
（まず中に入らないとね）
　入り口は見たところ一箇所しかない。必然的に真ん中を歩くことになるがそれでは見つかってしまう。少年は好機を窺っていた。次の好機とは、傭兵隊長がドックの東方面の入り口へ見回りに行ったときだ。丁度隊長が煙草の吸殻を捨てたのを見計らって少年は南口方面から飛び出す。音を立てず、しかし可能な限り全速力で。
（これがあればこの島から抜け出せるかもしれないからね）
　潜水艦はそのまま希望の形だった。仮に高槻を討つことができたとしても、仮にゲームの参加者全員

と和解できたとしても、ここはどことも知れない絶海の孤島。逃げ出す術が無い。そうだ、今自分はこの戦いの鍵を目前にしている。この機を逃せば次は無い。一人でも多くの皆を帰すという理想が、こんな自分の手によってでも叶うかもしれない。そう考えた時、過ぎったのは今まで出会った人々の顔だった。国崎往人、郁美ちゃん、詩子、相沢祐一、巳間、鹿沼葉子、……郁未。もう既に逝ってしまった人たちもいるし、百人の中のほんの一握りにしか過ぎないけれど、それでも、彼女たちだけでも守りたいと思った。そう考えてる自分が不思議な気もした。

見張りの目を盗みなんとか艦内に潜入することに成功すると、そのまま少年は全速でブリッジを捜査した。操作系さえ押さえてしまえばどうとでもなるという少々楽観的な思考で動いていたのだ。ブリッジは概ね先頭にあるものだが、艦体の大体は水に浸かっていたのでどちらが前方でどちらが後方なのかの区別がつかない。仕方なく少年は勘に任せて方向を選択した。といってもそんなに広い船体ではない。要はいかに先手をとって行動できるかということ、それのみに尽きた。そしてあっさりと目的地へは到達した。

「む……」

そこは確かにブリッジであった。小型艦に見合ったスペースではあったが、紛れも無く全艦を統帥するだけの機構が、いやそれ以上のものが詰め込まれているのが見て取れた。しかし少年はそんなことにとまどったわけではない。

(誰もいない……？)

予想外の事態だった。艦長格の人間の姿も無ければ補佐をするはずのオペレーターの姿も無い。しかし艦外に確認できたのは例の傭兵たちの姿だけ。まさか全員が船を降りたとでも言うのだろうか。ならば船をここに着けている理由は何か。いくら傭兵たちに警護させているとはいえ、リスクを考えれば艦を海に潜伏させているよりよほど危険性が高い。今

この瞬間に、自分が潜入しているように。
（ならば、何故）
それらの可能性を圧してまで艦を停泊させている理由に少年は頭をめぐらす。考えうる理由は二つ。誰かの乗船を待っているか……あるいは、動きたくても動けないのか。そして極少数の警備とブリッジに誰もいない状況が指し示す結論は——
（故障、か）
少年は心の中でそう結論付けた。彼らは一刻も早くこの場を離れたいはずだが、それが出来ないということは駆動系、または動力系の異常ということか。とりあえず少年はブリッジを眺める。落ち着いて考えてみれば自分は操縦方法を知らないわけで、必然的に知っている誰かから聞き出すなりやらせるなりしなくてはならない。傭兵の連中にそれが出来るかどうかは怪しい。——捕らえるなら、技術者だ。
少年はブリッジに背を向けるとそのまま反対方向を目指す。艦後部が動力系だろうから、そこに誰かしらいる公算が高い。もうお馴染みとなった忍び足で接近する。後端のそれらしき部位にすぐ到達した。丁度地下の動力室へ連なる部屋だろう。少年は床に耳を当てて物音を探る。……しかし、それらしき作業音は何も無い。依然ごんごんとなり続けている動力音以外には。
（これは……本当に無人なのか）
床に頭をつけるのを止めて立ち上がった少年は、思わず腕組みをして頭を振った。これでは流石に手の打ちようが無い……と思ったそのときだった。何か駆動音で無い、鈍い音が聞こえてきた。気付いた瞬間に少年は壁に耳をつける。二度、三度続く重たい金属音。これは——外か？
少年は即座に入り口付近まで戻ると外をうかがった。勢い勇んで飛び出しては絶好の的になる可能性があった。大丈夫、まだ傭兵たちは戻ってきていない。しかし外へは出たくない。出来れば入り口付近で待ち伏せて艦内に引きずり込みたいが……果たし

てうまくいくものか。少年が逡巡している間に、ひたひたと言う水音が聞こえてきた。足音……そう水中で作業を行っていた人間が戻ってきた、そうに違いない。少年は身構え、その瞬間を待った。
「ふぅ………っ⁉」
スイムスーツを着た男は急に口を塞がれると、そこから圧倒的な力で壁に押し付けられた。壁から横滑りしていって、扉を押し切る形で隣の部屋へ入り込んだ。丁度入り口から死角になる方向だ。不意をつかれた男はなす術も無く動きを封じられた。
「手荒なマネはしたくない。大人しくこの艦の操縦法を教えるんだ。でなければ……」
少年は男の耳元に小声でそっと呟いた。
「殺すよ？」
動きを封じられた男は青ざめた顔をしながら、激しく顔を上下に振った。その様子を見た少年がゆっくりと口を押さえる手を緩めた。
「か……艦の操縦は、さほど難しいわけでは無いが、慣れて、いない人間にとっては」
「いいから教えるんだよ。……そうだな、君に運転してもらってもいいな」
「そんっ、んぐっ！」
「大きな声を出すな……どの道、君に選択肢は無いんだ。大人しく言うことを聞いておけ」
少年は緩めた左手の拘束を再び強めて凄んだ。男はうなずくことしかできなかった。
少年は拘束を男の後ろからに変えた。移動の為の措置だ。勢いでブリッジの反対側に入ってしまったので一旦出なくてはならなかった。男は大人しく少年に従った。だが、入り口付近まで行き付くと、突然立ち止まって何事かを言い出した。
「な、なあ。この服脱がせてくれねえかな。ブリッジは精密機械だらけだから、水気厳禁なんですよ」
少年は渋々承知した。確かに、この上故障が重なって艦が動かないなんて事態は困る。
「しょうがない、だが脱がすのは僕だ。勝手なこと

をされては困るからな」
　そう言って少年が男の服の襟元に手をかけたとき だった。ドン、という轟音とともに、前にいた男の バランスが崩れた。生々しい弾痕が壁には残り、一 撃で事切れた男の体が少年にもたれかかる。少年は 即座に壁に身を隠す。すると外から何か声が聞こえ てきた。
「煙がなぁ、そっちへ飛んだんだよ。特に意味も無 いことだったんだが……こいつに救われたのか？」
　艦の外、入り口を望める場所に男はいた。白い煙 をくゆらせた煙草を、拳銃を持った手の指に挟んで 佇んでいる。マシンガンで無い理由は一つ、両手で は煙草が持てなかったからだ。
「……何故、殺した」
　少年が物陰から問いかけた。
「機密保持だ」
　傭兵隊長がそう答えると同時に、潜水艦入口から 飛び出してくる影があった。隊長は無表情に拳銃を 向けると、躊躇も無く撃った。
「ぬぅ!?」
　隊長は驚愕に表情を引きつらせた。その物体は 数発の銃弾を受けても動きを止めなかったからだ。 ……当然の話だ。それは既に人間では無かったのだ から。隙間から覗く少年の顔は不敵な笑みを浮かべ ていた。
「ちぃっ」
　慌てて隊長は左肩にかけていたマシンガンに手を 伸ばした。だがそれよりも少年の行動のほうが速か った。その状態から、盾にしていた死体を隊長めが けてぶん投げた。隊長は視界が塞がるが、お構いな しにそこからマシンガンを斉射した。まだ形を留め ていたものが一気に欠片へと姿を変えていった。秒 間十数発の弾丸の雨が止んだとき、目の前に立つ者 は何も無かった。――少年の姿さえも。
「――ほらね、やっぱり火遊びは危なかったんです よ」

背後から聞こえる声に驚愕して振り向く暇すら無く、隊長はその動きを拘束された。脇と首を固められ、いつ絞め落とされてもおかしくない状態だった。ぎりぎりと服越しに締め上げられる感触がひどく気分悪く感じられた。こんな子供がっ……、そう隊長は心の中で毒を吐いた。だがその容貌に似つかわしくない豪力が、現実に自分を拘束しているのだ。
「さて……仕方ないからあなたに案内人を勤めてもらうしかないな」
ぞくっとするような囁き声だった。
が、突如その体勢のまま少年は向きを反対に変えた。……足音が聞こえたのだ。マシンガンの音を聞きつけた、残り二人の兵隊が接近してくる音だ。
「……いずれにしろ、これでお前は終わりだ」
「……黙れ」
少年は首を絞める力を本の少し強めた。それだけで男の呟きは止まった。
「隊長っ！」

駆けつけてきた二人はそのままある一定の位置で腰溜めに銃を構えた。その姿を見て隊長は苦しげに、且つ不敵ににやっと笑った。
「仕事です、失礼します！」
その掛け声が合図となった。寸前に少年は隊長の頚動脈を極めた。崩れ落ちる彼の体にマシンガンの弾丸が突き刺さる。——少年はその脇を潜りぬけ、発砲する二者へ全速で接近した。少年のその動きに二人が気付いたのと、少年が服の下から何かを取り出したのが同時だった。
「くそうっ！」
片方の傭兵が銃口を少年に向けた。相対する少年は、まるで剣術で言う突きを放つかのごとき低姿勢の構えをとる。
「くらえ！」
高速の銃弾が撃ちこまれる……寸前、少年はぺろっと舌を出した。
(これ、なーんだ)

少年が突きつけた剣の代わり、それはあらかじめ切り取っておいた反射兵器十数枚。接触の瞬間、耳障りな金属音を立てて薄っぺらい紙が吹き飛んでいった。そして、放たれた銃弾もまた、自らが放たれた方向へと帰っていった。

「が……!?」

銃弾は、自らの搭載されていた銃を区別することなく、等しく傭兵たちの方へ帰っていった。彼らは自分に何が起こったのかに気付く暇も無く、彼ら自身の銃弾に穿たれて倒れた。

「あぢぢ……」

少年は肩をさすりながらじたばたしていた。ホンの少しだけかすっていたようだ。

一息おいて辺りを見回す。見事に敵だった傭兵たちは沈黙している。

「皆殺し……しちゃったか」

そう言いかけた所で少年はあることに気付き、ごそごそと傭兵たちの体を探り出した。そしてホッとしたかのような表情で言った。

「防弾チョッキか……みんな考えることは一緒だよね」

そう苦笑した。それならば、二人の銃撃に晒された彼も生きているのかもしれない。少年は隊長の男の許へ寄っていった。首……確かに瞬間で極めたが、折れていなければ大丈夫だろう。そう思って調べようとした瞬間だった。失神していたはずの男がいきなり少年の胸倉を掴み上げた。少年ははっとしてその両腕を掴んだが、その不安げな力の無さに何か嫌な予感を覚えた。

「いい……気に……なるな……よ」

少年は呟く男の顔をじっと眺めると、きゅっと腕に力を入れながら言い返した。

「そうだね、いい気になるのはあなたから色々聞き出してからにするよ」

少年はにこっと笑顔を見せた。その瞬間、隊長の男は目をかっと見開いた。すると彼の口元が震えな

がら歪み……笑みを形作った。
「―――――――機密、保持だ」
掠れ声が響いた後に、ガキッと何かを噛み砕く音が聞こえた。
「⁉」
少年は胸元を掴んでいた両手を切るとその勢いのまま後ろへ転がった。それと同時に、さっきまで目の前にいた男が爆発した。爆発した上半身部分が、鮮血のシャワーとなって少年に降り注ぐ。そして時間差で少年の後方、さらに遠くの通路で爆発がおきた。爆発元は、先ほどまで戦闘していた傭兵たち自身だった。
「連動……爆破……」
少年は絶句した。敵を討つためには自分の生存の放棄すら辞さない傭兵たちの振る舞いに、いかに自分がぬるま湯に浸かっていたか、甘いことを考えていたか思い知らされた気がした。この島の本質と少年自身の本質が所詮奪うことでしかないことを、改めて見せ付けられたような。
……できるのか、この手で人を助けるなんてことが。
朝日が出る頃には僕は地上へと復帰していた。行きと違って、どの道をどのように通って帰って来たのかを覚えていなかった。自失していたかもしれない、けれど生の実感はあった。曖昧な感触だったものが、はっきりとした形を持って僕の傍にいた。
――郁未がいた。

518　向夏

柏木初音の上着を半ば破りかけていた高槻は、しかし敵の来襲を確認するとゆったりとした様子で立ち上がる。亜麻色の髪の女性――鹿沼葉子を一瞥して口元を大きく歪めて言う、
「鹿沼葉子か。――久しぶりだなあ、おい」

「ええ、まったくですね。それにしても貴方にそんな趣味があるとは思いませんでした」
凛とした佇まいで鹿沼葉子は吐き捨てる。そして、
「――その娘から離れなさい」
拳銃を高槻に向ける。向けても高槻はにやにやとした嫌な笑みを崩さない。判っている。奴があんなに余裕綽々で笑っていられるのは、こんな拳銃など恐ろしくもないと言えるだけの装備をしているからなのだろう。
葉子がそんな風に考えるうちに高槻はゆっくりと手に持つ小銃を構える。
距離がある。自分の反射神経ならばこの距離があればなんとか致命傷を避けられる回避が出来るだろう。が、同じくこの距離では、拳銃などに慣れていない自分が奴を殺せるとは思えない。
思う。
制限されているとはいえ、それでも並の人間よりはずっと優れた運動能力が自分にはある。それならば速度と回避能力に任せた接近戦の方が余程楽に戦えるだろう。
葉子は拳銃をスカートのポケットに放る。そして左手に持った槍を両手で持ち構えて高槻を凝視する。その高槻は小銃を自分の頭に向けながら笑みを崩さない。
「そこの女の子！　私がこいつを殺しますから、あなたは早く逃げなさい！」
呼びかける。返答はない。高槻のすぐ後ろでがくがくと震えるばかりだった。気持ちは判る。強姦されそうになったショックは、女性にとってはある意味殺されかかるより恐ろしいのだ。
それでもその娘は気丈で、短い時間目を閉じたかと思うとゆっくりと自分たちから離れていく。
「余裕だなあっ、鹿沼葉子っ！」
「貴方こそ余裕ですね？　その娘を人質にでもすれば貴方にだって多少は勝機があったでしょうに」

言うと高槻は笑う。心底おかしそうに嘲笑う。
「わははっ！　貴様がこのオレ様に勝てるとでも、貴様はほんの一瞬でも思っていたのかああ！」
言葉には魂がある。
妙に自信に満ちた声で言う高槻に、葉子だって確かに何か不吉なものを感じたのだ。それでも葉子はその違和感に目を向けようとしなかった。
「もう貴方と話すのにも飽きました」
この槍で高槻の額に風穴を開けて、醜くて汚らしい声を永遠に封じてやろうと思った。
十五メートルは今の自分で一秒と少し。小銃の弾を回避するための左右への移動を含めても三秒でコトは終わる。
葉子は駆ける。あっという間に距離が縮まる、あと五歩で高槻を殺せる。なのに高槻の小銃の銃口は火を吹かない。嫌な予感がした。サイドステップを止めてまっすぐ高槻に向かう。あと一秒以内で奴を殺せばそれで仕舞いなのだ！
高槻はゆっくりと奇妙な装置を懐から出した。
そして一秒が経つ前に、その装置が作動する。
「――っ！」
重くなったと思った。いや、これは、錯覚じゃない、両手両足に枷が付けられたのかと思うほど苦しい。それればかりではなかった。まるで何時間も持久走した後のように喉と肺が痛い。そして箒と包丁で作ったこの槍が重く感じるほどに力が抜けていく。
「不可視の力を完全に抑える装置だ。貴様や天沢郁未を確実に殺るためにオレが開発した、なあ！」
高笑い。そしてゆっくりとした動作で高槻は銃口を自分に向ける。初めて殺されると思った。
重い槍を捨ててポケットの中の拳銃を手に取る。拳銃も重いが槍ほどではない。当たるかはわからないがそれでも撃たなければ、
小銃が火花を上げて音色を奏でる。

拳銃を構える暇も無い、葉子は殆ど転がるような体で銃弾を回避、自分のすぐ横で弾ける音、土が撥ねて葉子の顔にかかる、
「おらおらっ！　早く逃げるんだあああ！　そのままじゃあ死ぬぞおおおおおお！」
　ぱらららららららららららららららっ、
機関銃が奏でる乾いた音、避ける。この体勢では間に合わないっ、足首を銃弾が掠める、激痛、呻き声を漏らしたら負けだ、自分に言い聞かせて必死に耐えるダメだダメだダメだ！　拳銃を握り締めてその硬さと冷たさで意識を保つ、だがダメだ、視界が翳（かす）む、自分の目はここまで悪かったのか。この拳銃であいつの何処を狙えば形勢逆転となるんだ、
　顔、そうだ、あいつの顔だけは無防備だ。奴のでかい頭を拳銃で打ち抜くのだ。思った瞬間に再びタイプライターの音と火花。鼓膜が破れたかと思う。ダメだ、この状態でまともに狙いをつけることなんて出来ない！　今は逃げろ、逃げろ、逃げろっ！
葉子は走る、転ぶような体で必死に弾丸を避ける、ぱらららら、足が痛い、だが耐えろ、足首から下は生まれたときからなかったんだと言い聞かせろ、動け！　動け動け動けっ！
「ふん。その拳銃でオレの頭を撃ち抜くつもりか？不可視の力もない貴様がそんな重い銃をまともに扱えるとでも思っているのか？」
　笑いながらまた引き金を引く、ぱらららららら、動けっ！　泥が跳ねる、片足を引きずりながら必死に回避、弾幕が途切れる一瞬を見切って身体を木々の間に飛び込ませ、大木の幹を盾にする。
「ちぃ」
　舌打ちの音。音が止む。これでしばらくは時間が稼げる、あいつが近づいてきたときに拳銃で頭を撃ち抜けばいいのだ。痛みを堪えて深呼吸、落ち着け。
　今までの自分の人生のことを思い出せ。苦しくてつらくて死にたくなることもあったが、天沢郁未という友達に会えて、少しは救われただろう、少なく

とも今は生きていたいだろう！
　こんなところで死にたくないだろう！
「――ふん。まあいい。ヘッドギアをかぶればそれまでだからな」
　声が聞こえて、葉子の落ち着きは一瞬で失われる。
――木々の陰からちらりと高槻の姿を覗く。本当だった。あいつは頑丈そうなヘッドギアをかぶっている、そして小銃の弾丸を補充しているところだ。
　冷静さが欠けてしまった。
　今撃たなければ勝機がない、と思ってしまった。
　葉子は木々の陰から拳銃を乱射。乱射、乱射。まるでわざと外しているかのように当たらない。そして数秒後には冷静さが尽きる音がする。
　かちゃん。
「撃ちつくしてしまったかあ、鹿沼葉子！」
　高槻の声が、憎いほどに葉子の胸に染み渡る。身体から最後に残された力までが抜けていく。自分の汗で温もりを持った拳銃がやけに重い。
　小さく息を吐く。自分はもうすぐ殺される。何も出来なかった。高槻のひとりを殺すことも出来なかった。弱すぎる自分に反吐が出る。せめて高槻に襲われていた女の子が逃げられていればと思う。
　そして冷静さが葉子の頭に戻る。
　――それは生への執着からくる冷静ではなく、死への覚悟からくる冷静だった。
　充分に幸せだった。あのＦＡＲＧＯでの日々で、天沢郁未に会えただけで充分幸せだったじゃないか。その上この地獄のような島の中で、あの少女と青年を救えた。――充分だ。
　ゆっくりと葉子は木々の間から歩み出た。
「ようやく観念したかああ、鹿沼葉子おお！」
　葉子は拳銃を遠くに放る。もう重いだけの鉄の塊だ。それを見て高槻は高く笑う。銃口をこちらに向けたまま高槻は高く笑う。
「――ええ」
「ぶっ殺す前に貴様を屈服させておきたいなあ。オ

レ達に逆らった貴様を、ぐちゃぐちゃに屈服させてやりたい」
「――強姦でもしますか？」
「いや。そんなことには飽き切ってる。そうだな、ストリップでもやってくれ」
反吐が出る。こんなところまできて、まだこいつはそんな煩悩に捕らわれているのか。葉子は小さく息を吐いて言う、
「高槻」
「なんだ？」
「私が、まともに考える脳味噌もないミジンコが発した、たまたま人間の言葉に聞こえなくもないそんな声に従うと思いますか？」
最後の捨て台詞だ。盛大にやってやれ。武器のひとつもない自分に最後に残されたのは言葉の暴力だ。
「――従わなければ、ぐちゃぐちゃに殺すぞ？」
「貴方みたいな単細胞生物に殺される前に、私は舌を噛んで死にますよ。殺されるならせめて人間の手にかかって死にたいですからね。脊椎動物未満の矮小なものに殺されるなんて、天国でお母さんも泣いてしまいます」
ヘッドギアの下で高槻の顔色が変わった。怒りで赤くなった顔で高槻はゆっくりと小銃を握りしめる。
「――ち。醒めた、醒めちまったっ！　もう良い。殺すわ、お前。ミジンコの手にかかって死ね」
「ふふ、ミジンコだって認めるんですね」
「――死ね」
(さよなら、郁未さん)
舌に歯を当て、死を覚悟した葉子の、

その思考に電撃が走る。

(まださよならじゃない！)
自分はここまで冷静さが欠けていたのか、自分にはまだ切り札があるじゃないか！　気取られるな、自分に切り札があることを知られるな、表情は最後

の瞬間まで笑顔だ、笑顔で作戦を隠しきれ。
服の下に最後の切り札がある。
あいつが引き金を引く最後の瞬間まで、それを腹の下に隠し切れ！　残りゼロコンマ秒まで隠し切れ、
「——その綺麗な顔を、見るも無残な潰れたトマトにしてやろう」
ありがたいことに高槻はどこを狙うかまで指定してくれた。いけると思った。
——自分の現在の運動能力で完全に扱えるか？
否。完全に扱えるわけがない。あの少年が言っていたような完全な手法で扱えるわけはない。
だが。
不完全でも充分。それでも充分切り札に成り得る。
そして、僅かの間をおいて引き金が引かれる。
葉子は最後の瞬間まで待ちつくし、そして、腹の中から奇跡のような迅速さで秘密兵器を取り出す。
顔の前にその秘密兵器を掲げたので、瞬間、あいつがどんな顔をしたかはわからなかった。

そして、
「反射兵器」が作動する。

炸裂する音。
銃弾の衝撃が葉子の両腕で暴れる。だが痛みはない。銃弾の一発も未だ葉子に命中していない。金属音が葉子の耳元で暴れるが暴れるだけで、少なくともここまでの二秒の間葉子にダメージはない。
反射兵器というからには完全に高槻の方に向かって飛んでいくものだと思っていたが、現在の自分ではそこまで上手くは扱えないようだ、弾丸はあらぬ方向に飛んでいく。だが充分、充分な壁だ！
距離は八メートル、走れ、走れ、走れっっ！　この近くに槍が落ちている筈だ、それを拾ってあいつの武装の中で唯一危険を晒している場所、
首元を狙って刺し殺すのだ！
「なっ——」
異様な状況に気付いた高槻が驚きの声を上げる。

遅い。やはりこいつはミジンコ以下の頭脳だ。走れ。槍を拾う、あと五メートル、狼狽した高槻が乱射する小銃、反射兵器にも限界が来て何発か貫通、あと四歩、それ以外にも反射兵器で守りきれなかった部分を銃弾がかすめる、あと三メートル、だがそのいずれも致命傷には至らない。肩口を焼く痛み、耐えろ、あと二歩、あと一メートル、

射程距離、

「はあああああっ！」

反射兵器を投げ捨て、槍を突き出した葉子の視界には、驚愕に歪む高槻の顔。

肉を突き破る手ごたえが確かにあった。

次の瞬間、マグマのように熱い赤が葉子の身体中をしとどに濡らす。噴水のように飛び出す生臭い血を、葉子は全身で受け止める。喉が潰れたからだろう、高槻からは断末魔の声さえ聞こえなかった。

「――はぁっ」

高槻の首を串刺しにしたところで、葉子の身体は動かなくなる。もう首から槍を抜く力もない。

勝った。力を完全に封じられた状態で、自分は高槻に完全に勝利した。

身体中を痛みが走るが、少なくとも死に至るような痛みはない。大丈夫だ。まだ生きている。こいつの持っていた小銃もある。ここから帰るという目標はなんとか為せるかもしれない。

葉子は小さく息を吐いて座り込み、

拳銃の炸裂する音をその耳で聞いた。

519　共生

炸裂音と同じ瞬間に痛みが葉子の腹を襲う。

「うあっ！」

呻き声が漏れてしまった。無様。くそ、落ち着け、冷静に。敵襲だ。明らかに悪意を持って銃弾が飛んできた。そして高槻のクローンがこの森を囲んでい

る。決まっている。別のクローンが自分を襲いにやってきたのだ。無様。不可視の力が制御されて脳味噌まで弱くなったのかと思う。こんなところで油断など出来る訳がなかったのに。
「油断したな、鹿沼葉子。さっきちゃんとオレを殺しておけばこんなことにはならなかったろうになああああああああ！」
先程自分が放った銃に弾丸を再装填したのだろう。振り向くと、少し離れたところで拳銃を構えて笑っている高槻がいた。失敗した。何が生き残れるかもしれない、だ。今度こそ死ぬ。完膚なきまでに死ぬ。痛みで意識が飛びそうになる。血がどくどくと流れている。
「殺してやろう」
ダメだ。もう力が、目が眩む、だが動かなければ、葉子が歯軋りをしてそれでも立ち上がろうとした、その時だった。少し高い声がして、葉子の意識を地獄から引っ張り戻す。何事だ、見る、
「お姉さんっ！」
先程逃げた筈の少女が拳銃を持って一人駆けてきている。あれだけ逃げろといったのに、馬鹿げているくらい似合わない拳銃を携えて自分を助けに戻ってきたのだ。
高槻が叫ぶ、
「おおおおお！　なんて可愛らしい少女だあ！」
そのまま心臓発作で死ねばいいと思うほど、ぐちゃぐちゃに汚れた目だった。そして一秒の躊躇もせず拳銃を少女に向け、その足元を狙って引き金を引く。轟音。少女の足から血が吹き出る。絶叫をあげて少女は倒れる。拳銃を取り落とし、撃たれたふくらはぎのあたりを押さえ、呻き声をあげ続ける。
「――鹿沼葉子。散々お前はオレらをバカにしてくれたな。裏切るわ、オレのクローンを殺すわ」
死んだ自分のクローンから小銃を取り、高槻はゆっくりと笑う。
「まあお前を犯し殺すことは最初から決めてるが、

その前に地獄を見せてやる」
——地獄？
「お前を助けにやってきたあの健気な女の子を、お前の目の前で犯して殺してやろう」
悪魔がいる、と葉子は思った。

優先順位の問題と思った。あの女の人の身のこなしは自分たちよりずっとすごくて、あそこにいてはむしろ足手まといになると思った。彼女は銃も持っていたし、何も出来ない自分たちを守りながらでは逆に危険なことになるかも知れない。
そういう理由付けをして柏木初音はあの場所を離れた。だが結局は、大切な人が刻一刻と悪い状況に陥っていることが何より気がかりだったのだろう。いわば他人のあの女の人に時間をかける暇があれば、自分の背の七瀬彰を早く安全な場所に連れて行って治療する、その方が優先するべきことだったのだ。
だから、自分がこうして戻ってきたことは、すごく間抜けなことなのかもしれないとも思った。
自分は馬鹿なのだと思う。
けれど、もう、どうしようもなく嫌なのだった。
初音の直感が告げる。あの人はきっと危険な目に晒されて、自分が戻らなければきっと死ぬ。自分が何を出来るかなど知らない。けれど、戻らなければあの人は死ぬと思った。彰のサブマシンガンはどこぞに取り落としたが、自分は拳銃を持っていたことを思い出した。
初音は、人づてに得た拳銃を持って、彰を木陰に置いて、こうして走って戻ってきたのだ。
もう嫌なのだった。
自分のことを守ってくれた人が死ぬことは。
彰はそれでもまだ少しは持つかもしれないが、あの女の人はそれこそ直接生命の危機に繋がっているのだ。
そこには微塵も優先順位はなかった。

案の定女の人は倒れていた。腹部から血を流して。
そして、高槻は多分とどめを刺そうと近寄っている。
自分の直感は正しかった。初音は大声を上げる。
「お姉さんっ！」
少しでもこちらに注意を引きつけるため。
——女からは悲しげな目線が送られ、次の瞬間に初音の右足は高槻の拳銃で撃ち抜かれた。
「あうっ!!」
何かの間違いのような激痛が初音の太股を襲う。撃たれた場所に熱が溢れて、身体中の熱がその一点に集まっているんじゃないのかとまで思う。痛すぎて何も出来ない。持ってきた拳銃は気づくと何処かに放ってしまっている。何しに戻ってきたんだ自分は！
痛みを堪えて顔を上げる。何やら女と話している高槻の姿、そして驚愕に歪む女の顔。
「可愛らしい少女だ、まったく健気だあ！　自分の身も顧みず見知らぬ女を助けに戻る、あああああ、最高だな！　最高にいい女になるぞ、君はっ！」
初音は女の顔で大体のことを悟ってしまう。
「生きて戻れればの話だがなあああああああっ！」
先程自分がされそうになったこと。
あの恐怖が、再び自分を襲うのだ。今度こそ自分を守るものはない。痛みさえ忘れて初音は叫ぶ、
「いやだっ！　やだ！　近づくなっ!!」
叫び声をあげることしか初音には出来ないし、その叫び声は高槻を喜ばせるだけだった。絶叫をあげる初音にじりじりと高槻が近づく。
動けない柏木初音に近づいて、高槻は横に座る。
間近で見るとわかるが、頭がおかしくなりそうなくらい美しい少女だった。この時期の少女しか持ち得ない危うさを持った美しさ。恋人同士のように肩を抱く。嫌悪感からだろう、初音が絶叫する。
「離せっ！」
離すわけがなかった。服の上からその未熟な乳房

を撫で回す。乳首の感触。絶叫をあげて必死に抵抗、けれど所詮は少女の力だし、撃たれた痛みのせいでまともに力を出すことも出来ないだろう。もう辛抱がならなかった。
「やめてぇっ！」
高槻は力任せに服を破り、その薄い胸を露わにする。ブラジャーなど必要のないくらい薄く真っ白な胸元が、高槻の嫌らしい視線に晒される。お情けばかりにつけられたブラジャーをずらすと薄い桃色の乳首が露わになった。
「わははは、なんて可愛いんだぁ」
高槻は強引に初音を押し倒して、その口で初音の胸に吸い付いた。こりこりと固い乳首。未熟な少女の少し張った胸の感触。自分は完膚なきまでのロリコンだという自覚がある。この感触のためだけでも生きていて良かったと思う。
小さな乳首に吸い付く。左手でもう片方の乳首を弄り、右手でスカートの中を弄ぶ。小さな身体の初音は必死に足を閉じるが、所詮女の力。高槻は強引に股の間に手を突っ込む。柔らかな太腿。間に顔を突っ込んだり自分の滾るモノを突っ込んで擦りつけたいと思う。
「嫌だ、嫌だ！　やめて、やめてぇ！」
下着の上から指を這わせる。柔らかな秘部の感覚、視覚は出来ないがきっと素晴らしい色をしているだろう。初音から叫び声が消える。叫び声を出す元気すら失って、嗚咽に変わる。
「もうやだよお……っ！　誰か、誰か……っ」
そんな嗚咽も高槻を喜ばせるだけだった。下着をずらして直接花弁を愛撫する。嗚咽、だが手は止まらない。柔らかい。その花弁は頑なに指の侵入を閉ざしている。このきつそうなアソコにぶちこんだらどれほど気持ちがいいだろうか。想像するだけで射精しそうだった。
葉子は舌を噛んで死のうかとまで思っている。自

分が油断をしたせいで、少女が貞操の危機に晒されている。自分は最低の人間で、勿論地獄落ちになるのだと思った。いっそ死に逃げて、あの少女が遭遇するだろう惨劇から目を逸らしたかった。
それだけは出来ないと判っているけれど。そんなことを考えているくらいなら少しでも体力を回復させてあいつを殺す方法を考えるのだ。だが、そんなにすぐに体力が戻るものか？
ヘッドギアを外して少女の身体を蹂躙する高槻。自分にもう少し体力があれば、あいつを殺して少女を救い出すのだ。だが、今の葉子の身体にはもうあいつを一発殴る体力すら残されていなかった。
少女を救わなければ。這ってでも止めなければ。
そう思うのに身体が動かない。自分の弱さをこれほど呪ったのは初めてだった。声すら出すことが出来ない。武器もない。どうすればいいのだ。
悔しくて涙が出て、涙が流れる自分が死ぬほど無様だと思った。

眩暈がした。意識が途切れる、ダメだ、今目を閉じてしまったら、――くそっ！
――そのとき。
葉子は、うっすらと何かの影が動いたと思った。影は、ゆっくりとした動作で何かを拾い、
そこで葉子の意識が無様に消える。

それにしても全く濡れない。当然だ。小学生の女の子が愛撫されたところで濡れるわけがないのだ。しかしそれは、この少女が純潔であることの証であるとも言えよう。柔らかな肉を高槻は思う存分堪能する。吸い続ける乳首がやがて硬度を増してきた。
高槻は意地悪く初音に問う、
「おいおい、乳首が立ってきているぞおおお！　なんだかんだで感じているんじゃないかあああっ！」
そう言って顔を覗き込むと、初音は羞恥心で顔を真っ赤にしている。ひときわ抵抗が強くなる、
「いや！　離して！　離してえっっ！」

離すわけがなかった。
もう我慢ならなかった。微塵も濡れていない秘部に突っ込むのは最高のセックスだ。痛みを訴えて絶叫する少女の悲鳴を想像するだけで高槻のペニスは膨張する。
泣き喚く少女の顔を見て、その小さな口に自分のペニスを咥えさせたいと思ったが、流石に今咥えさせたら噛み切られるかもしれない。
後から、抵抗する気力を全部奪ってからでも遅くはあるまい。とにかくもう限界だ。自分のペニスは射精をしたがって暴れている。挿れた瞬間に射精してしまうかもしれない。ただでさえ処女なのだ、その花弁の締まりは想像以上のモノだろう。
「そろそろお前の処女をいただくぞっ！」
「……っ!!　いやっ！　いやあっ！　いやあああ！　助けて！　耕一お兄ちゃん、彰お兄ちゃん、助けてええええええ！」
助けなど来るわけがないのに、と高槻は笑う。そしてチャックを下ろして、巨大に膨張したペニスを初音の秘部にあてがって、腰に力を入れ、至福の瞬間を味わえる運命に感謝して、
首が吹っ飛んだと思った。
何が起こった。脳味噌が弾けて頭蓋骨が吹っ飛ぶような痛みがあったが、辛うじて自分は生きている。初音から身体を離して高槻は振り返り、何事かと事態を確認する。
確認するまでもなかった。
自分を殺しに死神がやってきた。
「――死ね」
真っ赤な血で汚れきった顔。それはとても人のものには見えなかった。長い真っ黒な髪が、その顔の半分以上を覆い隠している。大きな黒目が、高槻を射抜くように睨み付けている。
高槻は、本当に心底、こいつを死神だと思った。

サブマシンガンを持った死神などいるわけがないのに、それが地獄からの使者にしか高槻には見えなかった。
髪の毛を掴まれ、サブマシンガンの銃口を口の中に突っ込まれる。――見開かれた真っ黒な目に睨まれて、高槻のペニスは恐怖で射精する。
理解。こいつは、
爆弾管制装置を単身で破壊した、
長瀬一族の末裔の、
「ひゃめろっ――」
一秒の躊躇もなかった。
口の中で爆発した銃弾は、真っ赤な血とともに後頭部を撃ち破り、ピンク色の脳味噌を弾けさせた。
顔の下半分が完全に弾け飛んで、噴出される赤は彰の顔と初音の身体を真っ赤に染めた。
高槻の運命はそこで終わった。
「――ごめんね、初音ちゃん」
「彰、お兄ちゃん」
勿論この声が、脳味噌の弾けた高槻に聞こえるわけもなかった。
初音の呼ぶ声が聞こえたのだ。助けて、と呼ぶ声が。殆ど死んでいた自分がこうして起きたのも、そのせいだ。高槻は死んだ。これで都合二回こいつを殺した。もうこれで初音は大丈夫だろう。
君を守れてよかった。そう呟いたつもりだが、果たして声になったかどうか。
七瀬彰は初音に笑顔を見せるとサブマシンガンを手から取り落とし、がくりと崩れ落ちる。そしてまた深い闇の中に落ちていく。
また初音の呼ぶ声が聞こえる。けれどさすがにもう返事は出来なかった。少しだけ寝かせてくれ。

520　疾駆

「……」

耕一は。
大きなシーツに穴を開け、片膝を付きつつ。
目の前の光景に呆然としていた。
高槻が、後頭部から血を噴出させながら倒れる。
顔面から地面に叩き付けられ、僅かに跳ねた後、そのまま動かなくなる。
倒れた高槻を見下ろしながら、七瀬は静かに陽光を浴びて立っていた。足を撃たれたように感じたのだが、遠目に見る限りとても足を負傷して立っているようには思えない。
その姿。恐ろしくも——美しい。
(——おいおい。冗談だろ……)
そこには、確かに戦士が居た。
耕一の出る幕は無かった。

パァァン！

「——っ！」

そこに響く、銃声。続く悲鳴。
耕一の耳が、森の奥から届いたそれを、確かに捉えた。
あの声は、間違いなく——
「！　初音ちゃん!?」
まずい。確か、高槻は二人居た。
その内の片方が、初音に襲いかかったとするならば——くそっ、こんな所でのんびりしてる場合じゃない！
「留美ちゃんっ！」
振り向けば、七瀬は、草むらに落ちたナイフを拾い上げていた。
顔を見合わせる——頷く。
「そいつを頼んだ。俺は——初音ちゃんを」
「……でも、こいつ、どうすんの？」
——見れば、高槻が草の中に顔を沈めて、痙攣を起こしていた。
どうしたものか？

「……好きにしてくれ」
　それだけ言って、駆けだした。
　――後ろで七瀬がどうしたか僅かばかりに気になったが、振り向く暇は無かった。

521　The Little Sister

　初音は、一瞬、自分を助けようとしてくれた金髪の女性に目をやったが、それよりも優先すべき事項のために考えを切り替えた。
　地に伏した彰に駆け寄り、その体を抱きかかえるようにして草むらまで動す。
　背負ったときには気が付かなかったが、華奢な見た目からは想像できないほどに、彰は重かった。
　しかし、初音にとってそんなことはどうでも良かった。
　初音は彰の顔を見つめながら叫んだ。
「彰お兄ちゃん、死なないで！　お兄ちゃんが死んじゃったら、あたし、もう……。お姉ちゃん達はみんな死んじゃった。あたし、ひとりぼっちになっちゃうよっ！」
　流れ落ちる初音の涙が、彰の顔を打った。
　彰がゆっくりと、それに応えるように何度か瞬きをする。
「お兄ちゃん!!」
　初音はうれしさのあまり、彰の顔をぎゅっと強く抱きしめた。
「は、初音ちゃん、苦しいよ……」
　うっすらと目を開き、絶え絶えに言葉を吐き出す彰。
　今度は慌てて体を離す初音。
「彰お兄ちゃん……」
　彰が意識を取り戻したことで、初音は一瞬だけ安心した表情になった。
　しかし、それもすぐに曇る。

姉たちの死を思いだしたのだろう。
彰はゆっくりと息をしながら初音に言った。
「初音ちゃん……。君はまだ一人じゃない。君の大好きな耕一さんも、生きているはずだ。君はひとりぼっちじゃない……」
「でも！　もうお姉ちゃん達はみんな死んじゃったんだから。もう、あの頃には戻れないんだから。千鶴お姉ちゃんにも謝ってなかったのに、梓お姉ちゃんも、もう、私の相手をしてくれない。楓お姉ちゃんだって、みんな……。もう、みんな死んじゃったよ。私、もう、どうすればいいのか……。どうやったって私……。これからうまく生きてなんかいけない。あの頃に帰りたいよう……」
初音ちゃんは声を殺すこともせずに泣き出した。
目を薄く開けたままで、彰は初音を見つめる。
今にも壊れてしまいそうな、そんな初音を愛しく思う。護ってやらなければ。今は、僕が……。彼女を護ってあげなくてはならない、と考える。
彰は既に話すだけでも辛かったが、あえて体を動かし、左手で初音の肩を抱き、右手で頭を撫でるようにしながら、言葉を紡(つむ)いだ。
「こうして初音ちゃんは生きてる。だから、日常に戻れるはずなんだ。初音ちゃんのお姉さん達も、きっとそれを望んでいるはずだ……僕の友人のはるかも、大切な人だった美咲さんも亡くなってしまった。僕も、僕の日常はもう何処にもなくなってしまったと勘違いしかけてた……」
初音の頭を撫でる手は止めずに、呼吸を整える彰。
初音は、彰の次の言葉を待っている。
彰は美汐達に語った自分の言葉を思い出しながら、ゆっくりとそれを口に出す。
「けど、僕は思うんだ。確かに今まで僕らが思い描いてきた日常はもうこの手に還らない……。そう、だけどね、初音ちゃん。日常は、そこを日常なのだと思えば。きっと、そこが日常なんだよ。過去を切

り捨てろなんて言わない。でも、未来を思って生きていくことはそんなに悪い事じゃないんじゃないだろうか……。繰り返すことになるけど、初音ちゃんには耕一さんもいる。彼も初音ちゃんを心配していたよ……。まずは彼を安心させてあげるのも、良いかもしれない……。そして、今度彼を見つけたら、もう離れてはいけない……。これ以上、喪失の悲しみを味わうことの無いように……」

彰はどこかで見聞きした覚えのあるフレーズを思い浮かべた。

『愛し合う二人はいつも一緒、そいつが一番だ』

そして、自らの思い浮かべたそのフレーズを契機に、彰の思考は別の方向に走りだした。

(……嗚呼、僕も美咲さんともっと一緒にいたかった。冬弥と由綺は一緒に居ることができているのだろうか。初音ちゃんは耕一さんと再会できるのだろうか。祐介と美汐さんは、無事生き残ることができるだろうか。僕の代わりに、ゲームに終止符を打ってくれる人はいるのだろうか。それから、それから、それから……)

彰は再び、意識を保っているのも辛くなってきた。思考も真っ当に働かなくなって、とりとめが無くなってきている。

「ごめん、初音ちゃん……。本当は一緒に、耕一さんを探しに行きたいんだけど……。僕は、もう……。少しだけ、眠らせて……くれないかい……?」

言い終えるや、彰はすっと目を閉じた。

その表情は、人を安心させる彼独特のあの笑顔にも似ていて、けれども、どこか寂しげでもあった。いろいろと心残りがあるせいかもしれなかった。

初音の頭にやられていた手も、また止まった。

目に涙をためながら、彰の言葉を黙って聞いていた初音の、感情の歯止めが利かなくなる。

「お兄ちゃんッ！　彰お兄ちゃーんッ!!」

彰の身体をかき抱くようにした初音の、絶叫が辺りに響き渡った。

522　最強タッグ誕生

「久しぶりだな」
御堂の表情に敵意が無いのを確認して、蝉丸はあたりさわりのない挨拶を投げかけた。
「ふん。さっさと起きあがれ。俺がお前を殺す気だったらどうする」
月代と絡み合って見下ろしながら御堂が答えた。
御堂の表情はあきれ顔。
「お前の表情を見れば敵意の無いことくらい分かる」
そこで蝉丸は視線を詠美に移し、
「良い仲間を見つけたようだな」
御堂と詠美は「へ？」という表情。
蝉丸はしごく真面目な表情。
月代は(;ﾟДﾟ)
「な！　なにをわけわかんねーこと言ってやがる!!」
「こいつはあたしのしたぼくよ!!」
「(;ﾟДﾟ)蝉丸た〜ん、ハァハァ」
蝉丸は立ち上がり、ぱっぱっと土を払う。
まだ御堂と詠美がぎゃぎゃーわめいているが意に介していないようだ。
「まぁなんだ。御堂」
「ああ!?」
ゼーハーゼーハー……。御堂の息は荒い。
「その様子だと、お前達も主催者側と戦っているんだろう？　お前がいれば心強い」
その言葉と同時に右手を差し出す。
「……。ケッ」
一瞬躊躇した御堂だったが、それに答えて手を差し出し握った。
ここにこの島最強のタッグが誕生した。

そのまま蝉丸は御堂を抱き寄せる。
頬を赤らめうつむく御堂。蝉丸は彼のあごに手を当て、そっと上を向かせてあげる。
「友情の誓いといこうじゃないか……」
「おい……ちょ……」
蝉丸が顔を近寄せると、御堂はそのまぶたを閉じた。
二人の唇の距離が限界まで近寄り……。
「(;´Д`)なんて展開も萌、萌えー。でももっと可愛い男としてよ蝉丸た～ん。ハァハァ……」
『妄想を声に出すな!!』
御堂、詠美。そして蝉丸までもがつっこみを入れた。

523　インターミッション

朝焼けは去り、空気だけは穏やかな雰囲気の中、二人は寄り添って砂浜で海を眺めていた。
彰が去ってからすでにしばらく経ち、遠くの空でサイレンの音とともに定時放送が流れる。
祐介はそれを聴くともなしに聞いていた。

死者と生者を分けるその声の中に、もう上がることすらもない人達がいる。薄れていく存在は、みな、彼岸へと去ってしまった。声にしないともういないことになってしまう、大切な友達が、何人も何人も。
祐介は膝を抱えた。
(でも……、悪いけど今だけは、君たちのことを考えてはいられない)
ぎゅっ、と目を閉じる。
(だから、僕にはこのくらいのことしかできない)
祐介は、名も知らぬ死者達のために、よく知った死者達のために、祈った。
その行為は、彼の心を少しは楽にしていた。

長い黙祷を終え、祐介は眼を開く。
目を閉じる前よりも強くなった光が、祐介の網膜を心地よく刺激した。
「ああ……」
知らず、ため息が出る。
「どうかしたんですか？」
隣で、美汐が訊ねる。
「え……いや」
答える祐介の声は、どことなく空々しい。
何か考えているんじゃないですか？　という美汐の問いに、祐介はしぶしぶ答える。
「うん、ちょっとした作り話を考えてた」
「それは、どんな話だったんですか？」
美汐は、祐介の正面に回り、彼の目を見つめた。
その顔には、安らぎの表情が見て取れた。
「ここが、ここじゃなければなぁ、って」
「……」
「いや、わかってるよ。彰兄ちゃんの言う通り、ここが現実なんだから、ね」
「祐介、さん……」
でも、ただ『もしも』の話を考えただけで、こんなにも涙が溢れてくるのはなぜだったのだろう。
「もう、いいかげんに泣き止みませんか、祐介さん」
「……泣いてるんじゃなくて、涙が、勝手にさ」
そう言う祐介の両腕は、とめどない涙でびしょびしょに濡れている。
もちろん、顔のほうも酷い有様だ。
「ごめ……、ちょっと顔洗ってくる」
「え？」
祐介がてこてこと向かう先は、海辺。
「ちょ、ちょっと祐介さん、海水なんかで顔洗っち

や……」

美汐の懸命の制止にもかかわらず、長瀬祐介は無言の叫び声を上げた。

524 Kanon

「なゆ……き？」

声が静かに響いた。止まった時の中で。

誰もが動かなかった、動けなかった。異様な雰囲気に包まれて。

血塗られた赤き女性が、ゆっくりと近づいてくる。

気絶している茜はもちろん、意識のあるものもまた、体の動かし方を忘れてしまったかのように。

「……」

祐一の唇が、かすかに動いた。ただし、それはただ寒さに震えるような弱々しい童子のように。

そして、赤き女性が紡ぐ言葉。

——やっと……会えたね？——

「ずっと……好きだったんだよ……？」

無邪気な微笑み。

「……」

それを呆然と眺める晴香となつみ。

血塗られた女性の出現への萎縮、恐怖、驚愕、そういったものも含まれていたかもしれない。

だが、それ以上に——空白だった。

「七年前のあの時から……ずっと、待ってた。祐一のことを」

晴香の目の前を、気にした風もなく通り過ぎる。
晴香の目線だけが左から右へと流れた。
「祐一は、あの街が……私達の街が、そして私達が嫌いになったんだって思って……すごく悲しかった。だけど……戻って来てくれて本当に嬉しかったんだ」
ゆっくりと三人の前まで歩み寄って、止まった。
動くことができない茜と、
動けなかった祐一と、
もう動かない詩子と。
「祐一は、また、ここに帰ってきてくれたから……」
上から祐一の顔を覗き込む。あの日、駅前で再会したあの時のように。

祐一がいつか見た光景。
降りしきる雪の中の再会、七年ぶりに訪れたあの時の再会のように。
「……」
ゆっくりと震える唇が動いた。声は出なかった。
晴香の横を通り過ぎて、座り込んでいる祐一の前まで進みよって来る影。
「七年前のあの時から……ずっと、待ってた。祐一のことを」
どこか遠くに聞こえる言葉。
祐一にとって、この島での出来事はすべて夢のように感じられていた。
ひどく、悲しい夢物語。
それでも、茜の、そしてまだ暖かい詩子の手の温もりが伝えていた。
これが、現実だということを。

詩子と、そして……七年ぶりに訪れた街で出会った、大切な人達との物語は——

もう終わってしまったんだということに。

だから、今、起きていることこそが夢物語。

近づいてきた女性が、祐一の視界を遮った。

「祐一は、また、ここに帰ってきてくれたから……」

微笑んだ。あの日の名雪のように。

(まるで、あの時みたいだな……)

どことなく麻痺した頭の中で祐一は思う。再会の冬の日、雪で湿ったベンチで座ってたあの日の事を。

(結局、二時間も待たされたんだよな)

あの日の言葉が思い出される。

——雪、積もってるよ。

今は積もってなんかいない。

そして温かい缶コーヒーが渡されることもない。

「祐一、ずっと、ずっと好きだったんだよ……」

彼女の口から出る言葉。その想いが、伝わってくる。いつか聞いたセリフ、それは七年前の冬の日のこと。

——……これ……受け取ってもらえるかな？

あの日、差し出された雪うさぎ。

——春になって、夏が来て……秋が訪れて、またこの街に雪が降りはじめたとき、

思い出されるそのセピア色の光景。

——また、会いに来てくれるかな？

あの日の、繰り返し。

――わたし……ずっと言えなかったけど……祐一のこと……ずっと……

セピア色の思い出がだんだんと現実の色に染まって。

「好きだったよ」

最後の言葉。現実の彼女の言葉と重なる。

現実の彼女は、顔に大粒の涙と血をたたえて。

「……」

祐一が、茜と詩子の手を痛いほど強く握り締める。

ようやく、祐一が声をあげる――ゆっくりと、震えないように。

日常の中にいるかのように声の調子をおとす。

「なあ、俺の名前、まだ覚えてるか？」

今、彼女が自分の名前を言っていたのにもかかわらず、そう切り出した。

「うん、私の名前は？」

「………ああ……」

血と、涙で彩られている顔にはひどく不釣合いな満面の微笑み。

「……ゆういち」

「花子」

「違うよ～」

ただ滑稽な会話だけが辺りに響く。

「次郎」

「私、女の子……」

気付かないうちに祐一も涙を流していた。

祐一だけが知るそのセリフの意味に。

もう、こんななんでもないような……そしてそれでも幸せだったやりとりが、もう出来ないんだということに。

「もう、やめませんか……？」

祐一の声が震えた。

「わたしの名前……」

「もう、帰っては来ないんですよ……」

悲痛な声。ギュッと閉じた目から、大粒の涙がもう一度だけこぼれる。
「名前……」
食いしばった奥歯から血の味がする。
「もう、やめましょうよっ……」
絶叫、声が不自然に裏返った。
「なまえ……」
どうしたの？　というように彼女が祐一に顔を近づけた。
「もうやめよう──」
祐一の口から、彼女の名前が漏れた。

祐一と結婚したい。私の想い、お母さんの願い。
ずっと好きだったこの人に、自分の気持ちを伝えるんだ。
その事を考えるだけですごく嬉しくて、だけど、どこかですごく悲しくて。
心が壊れてしまいそうで。

だけど、祐一ならきっと私の心を守ってくれる、私を受け止めてくれる。
弱い、私を。
きっと好きだって、言ってくれる。祐一は応えてくれる。私が、こんなに愛した貴方だから、私が信じている人だから。

だけど、愛した人の口から漏れた言葉は
本当に愛していた人の口から漏れたその名前は、
崩れた。

525　忌避性

チ・チ・チ。
チュン、チュン。
「……」
……あれから、どれほど経ったのだろう。

既に太陽が顔を出しはじめていた。差し込む光の眩しさに怯み、帽子をずらしながらも、心の底まで照らしてくれるかのような、健康的な明るさに感謝の意をこめて、かるく拝する。
小脇に抱えたリストを、再び開こうとして考え直す。社を求めて何度となく繰り返された会話を、終わりなく続ける二人が、とっくに興味を失ったリスト。既に暗記するほどに精読していた。

普段、何も考えてないように思われがちだが。
来栖川芹香の頭脳は、高速回転していた。
……それを、伝えられないだけで。

二人に若干遅れながらも、景色に目を凝らす。間違っても風光明媚な景観ではないが、今では間違いなく必要なことに思えた。
そして発見する。静かに白い布切れを拾う。土のついた包帯だ。これで、三枚目だった。

「……」
やっぱりそうだ。繰り返されていたのは、会話だけではなかった。
間違いなく、これは忌避性結界。植物などが、その本体や種子を守るため、成分の中に虫が嫌う成分を含めることがしばしばある。それと同じような忌避性を示す何かがあったのだ。
決意を込めて突入したときは、問題にならなかった。だから、あまり強いものではない。結界などと言うものでもないのかもしれない。暗く細い道と明るく太い道、穏やかな坂と険しい坂、そうした地形的差別を各分岐点へ意図的に配置しただけかもしれない。
恐怖という下地がある今、その効果は覿面だ。表向き社に突入する決意を示してはいるが、冷静に考えれば採算のつく見通しはなく、成功するとは思えなかった。だから、無意識のうちに社へと続く道を見過ごし、別の道を選んでしまう。それでも社の位

置は心の奥底で知っているから、その周りをぐるぐる回ることになる。
たぶん、三人とも気付いているはずだ。あの結界を拓くには、私たち二人では足りない事を。
四枚目の包帯を拾い、朝露にまみれた羊歯の密集する、陰気な獣道を横目で見ながら確信する。指摘しようとして考え直した。
……今は、これでいい。

「……」
「？　なあに？」
「どうしたの芹香さん？」
「……」
「おなか減ったの？」
「そっか、長いこと食べてないもんね」
「……」
「一回、出直そうか」
「街に下りて、食べ物探そ」

……芹香は一度として、今の会話の流れに沿った発言をしたつもりはない。
単に自分達の欲求と不安が、芹香の意思というかたちを受けて発露したに過ぎない。半ば呆れて、密かに溜息をついた。それでも、出直すという結論は満足いくものだったから……黙っておくことにした。

「さっき、ニワトリ鳴いてたの聞いた？」
「うんうん、たまごあったら、ホットケーキできるかな？」

……綾香も、浩之も、今はもういない。
傍らに、どちらか一人でも居れば、忌避性結界の仕組みを解明したことすら伝わって、蛮勇を奮い社に突入していたかもしれない。
そうだ。必要なのは、結界に対する力ではないのかもしれない。

芹香さえ引き込むような、太陽の光のような、強烈な意志。
それが今では欠けている。
精霊や神が世界を動かすのではない。
人材こそが世界を動かすのだ。

「……」
「あ、芹香さんもハチミツ派？」
「カットしたところに染みた味がたまらないよねー」

……そんなことは、一言もいっていなかった。
芹香は、メイプルシロップ派だ。

526 欺瞞

「もうやめよう――」
「もうやめよう、秋子さん！」
「な、なにを言ってるの？　祐一。秋子はお母さんの名前だよ」
「名雪が死んだショックで、今秋子さんは自分を名雪だって思いこんでるだけなんだ。名雪は死んだんだ！　お願いだから、正気に戻ってくれ、秋子さん!!」
祐一は血を吐かんばかりに自分の推測を叫んだ。
その叫びが秋子の耳に届いた瞬間、秋子の脳裏に名雪の最期の情景がよぎった。
「わたし、わたしは……名雪。いえ、名雪はわたしが……」
それと同時に秋子は崩れ落ちてゆく。その秋子を祐一が優しく抱きしめ支える。
「秋子さん、しっかりしてください、秋子さん」
その言葉に応え秋子の眼に光が戻る。
「………祐一さん……？」
「…………よかった…………正気に…………戻ったんだ…………」

秋子は呆然としたまま、祐一を見つめていた。
やがて秋子の頭の中に、今までのコトが甦ってきた。自分が名雪になった時、聞こえた歌がもう一度聞こえてきた。

Hallelujah!

For the Lord God Omnipotent reigneth
The Kingdom of this world is become the
Kingdom of our Lord and of His Christ,
and He shall reign forever and ever,
King of Kings, and Lord of Lords,
Hallelujah!

思い出しましたか？

どこかで、自分と同じ声色の主が囁いた。

あなたの大切な名雪は死んでしまったのよ。

嘘よ。——それは嘘よ！
名雪は七年ぶりにやっと祐一さんに再会できたのよ。名雪に笑顔が、幸せが戻ってきたのよ。
なのに、なんでそんなコトを言うんです？

わかるはずですよ？
だって、あなたが殺してしまったんだから。

「な……ゆき……」
秋子は、震える手を鉈から離す。
それでも鉈は落ちなかった。

鉈は。
鉈は、壁に突き立っていた。
鉈は、名雪の笑顔を。
鉈は、名雪の笑顔を真一文字に叩き割り、壁に貼り付けていた。

可哀想に。大好きなあなたに殺されるなんて。

違います。わたしは名雪を殺していません。

じゃあ誰が名雪を殺したんですか？
殺したのは事実。
現実を素直に受け止めなさい。

認めません。それだけはわたしは認めません。それを認めてしまったらわたしはもう……。そんな事実なんかありません。
死んだのはわたしです。わたし、秋子は今日死にました。今生きているのはわたしの娘の名雪です。
いいえ、わたしが名雪です。

死んだのはお母さん。
お母さんを殺したのはわたし、名雪。
お母さんを殺しちゃったのは悲しいけど、でも祐一さえいればいい。そうだよね、わたし。

秋子に現実が戻ってきたとき、自分が床に横たわっていることに気づいた。そしてそばに祐一がいて何かを繰り返し言っていることを。
「秋子さん、しっかりしてください。秋子さん」
秋子はその声を理解するなり上半身を起こし、祐一を女とは思えぬ力で突き飛ばした。祐一は予期せぬ出来事に何の対応もできず頭を床に打ち付ける。
一瞬意識が飛んだ。
それを横目に秋子はそばにあった鉈をつかみ悠然と立ち上がる。

「あ、秋子さん、何を……」
「あなた、誰？」
「な、何をいってるんですか、秋子さん」
「わたしの祐一はわたしとお母さんを間違えたりしないよ。なのに、あなたはわたしをお母さんの名前で呼ぶ。祐一の偽物だよ」

唐突に祐一は理解した。事態は最悪の方向に転がったのだと。祐一の顔に絶望が浮かぶ。
「偽物の祐一がいるから、わたしを名雪として愛してくれる本物の祐一がいないんだね。偽物がいなくなれば本物の祐一に会えるね。さようなら、偽物の祐一」

あたかも子供が友達にさようならを言うかのような無邪気な口調で、秋子は狂気の論理を口にする。

そして秋子は鉈を振り上げた。

527　ぬくもり

涙が溢れ出してもうダメだった。自分の弱さに反吐が出る。嫌なのだ。もう大切な人を失いたくないのだ。なのに涙が止まらない。

――彰は言った。姉を失った自分でも、新たな日常を獲得することが出来ると。未来はそれでもあるのだと。優しくて、優しすぎて、どうすればいいのかもわからないくらい、苦しかった。

目の前で二人の人間が自分のために傷ついた。自分のような子供のために、命を賭けて彼らは戦った。そして彼らに命を救われた自分はただのうのうと泣いている。無様すぎた。

自分は子供だから。その言葉を免罪符にして自分は、ただただ、ただただ、彼らに守られていた。

泣いていてはいけない、と柏木初音は思った。
自分に未来が許されるのならば、彰に、この女の人に未来が許されないわけがないと思った。
涙を拭う暇さえ惜しかった。泣くということは涙を流すこととイコールではないし、涙を拭ったところで泣き止んだ、となど言える訳がない。意識の問題なのだ。立ち上がって歩き出そうとした瞬間に、やっと雨は止むものなのだ。
足に激痛。拳銃で撃たれていたことを今になってやっと思い出して、途端に汗が身体中を流れる。それがどうした。言い聞かせつつ苦悶の表情で彰の身体を抱き、右肩に背負う。そして少し離れたところで倒れている女、鹿沼葉子に近寄り、左肩に背負う。
「絶対、死なせないっ――！」
二人の身体は倒れそうになるほど重かった。自分の小さい身体ではひとりの人間を運ぶのさえ重労働なのだ。それでも初音はまっすぐに前を見据えて足を進める。この重さが命の価値なのだと思う。
街はどっちだ。もうすぐ近くにある筈なのだ。すぐ近くに。初音は二人の体重と体温を感じて、自分が正しい思考で歩かなければすべてが壊れるのだと何度も言い聞かせる。
彼らのお陰で今、自分は生きているのだ。
だから自分の力で、彼らのことを助けたい。
「――っ⁉」
なのに自分たち以外の気配がすぐ近くでする。そのことに初音は気づいてしまう。足を速める、まだ高槻のクローンがいるのだろうか。急げ。逃げろ。逃げろ、ダメだった、もう気配はすぐ傍に迫っている、くそ、初音はスカートのポケットの中に放ってある拳銃を手に取り叫ぶ、
「近づくなッ！」
「――っ！　初音ちゃん！」
予想に反して、すごく懐かしい声がする。

やっと見つけた、と柏木耕一は思った。自分の足があまりに遅すぎて、間に合わないのじゃないか、と実は少し思っていた。
間に合ってよかった。
「——耕一お兄ちゃんっ！」
さがしもの——柏木初音は、自分の顔を見るとへたへたと膝を突き、安堵と不安が入り混じった、ひどく矛盾している顔を見せた。その不安の正体が何なのかなど判らないわけがない。彼女の後ろに見えるふたりの人間だ。
彼女が自分よりずっと大きな身体をした人間二人を背負って歩いていたという事実が、耕一の頭にやっと認識される。二人ともが滅茶苦茶に傷ついていて、このままでは危ないこともすぐに判った。
自分の顔を見ても、初音は泣き顔のひとつも笑顔のひとつも見せず、まっすぐな目で自分を見つめて、
「わたし一人の力じゃ、もう駄目なんだよ。わたしのことを守ってくれた人が、ふたりとも、死んじゃうんだ。わたしは体力がないからこれ以上早く動けないんだ。お兄ちゃん。——力を、力を貸して」
そう言った。
彼女だって姉を失った放送を耳にしている筈だし、足には銃で撃たれた痕。服はぼろぼろで素肌が露出している。自分が遅れたばかりに、高槻に暴行を受けたのだろう。想像して、自分の鈍さに嫌気がさす。
——それでも初音は泣いていなかった。
目尻は真っ赤の癖に、涙は流れていなかった。
「当たり前だろ。俺が手伝わないわけがない」
泣き狂ってもおかしくない状況で、それでも前を見据える柏木初音に、柏木耕一は間違いなく尊敬の念を向けていた。
千鶴さん、梓、楓ちゃん。——あなたたちの妹はしっかり生き抜こうと根性出してる。俺は死んでも、この子を守り抜くよ。守り抜いて、それから泣く。それまで涙は勘弁してくれ。俺もせめて見かけだけは強くありたいんだ。

耕一は息を吐く、息を吐いて初音に寄り、その右肩に抱えていた七瀬彰を自分の背に乗せる。
覗き込んだ顔は血に汚れていて、先に会った時よりずっと弱りきっていた。この数時間の間に何があったのか。或いはあの時から進行形でずっと悪くなっていたのだろうか。
白くなった顔を見つめながら、耕一は、七瀬彰のことを、
——禍々しいと思った。
「行こう」
「うん」
——そんなことはどうでも良かった。今は急がなければ。彰を背負って耕一は走り出す。

528　天国への階段

「こいつ、どうしてやろうかしら」
まだこれ以上どうにかするつもりなのか。

最後に残った高槻もまた死の際にいた。七瀬留美の腕力によって完全に屈服させられた自分の頭蓋骨は半ば陥没してしまって、実は生きているのすら殆ど奇跡的な状況だった。この上更に拷問されるとなればそれこそショックで死ぬだろう。
多分、自分たちは失敗してしまったのだと思う。他の二人も自分と出来がそれほど変わるわけでもない。柏木耕一との戦闘が最大の難関で他は大した事はないだろうとも思っていたが、その見通しが滅茶苦茶甘かったことを陥没した頭蓋骨が証明している。
異能者の力を完璧に封印する機械を自分たち三人は持っていた。長い時間をかけて開発した機械だ。不可視の力だけではなく、鬼の力や電波の力も封じることが出来る力を持っていた。「結界」の範囲を狭めて、効力を増大させる装置だ。柏木耕一の力さえも完全に封じることが出来たであろう。
なのに自分は、その装置を使用することすら出来ずに女子高生に負けた。火器を持っていた自分が、

鉄パイプを持ったただの女子高生にだ。異能者ではないらしいから装置を使って力を抑えることも出来なかった。
って馬鹿な！　これが一般人だと言えるのか!?　十キロ以上はあるはずの鉄パイプを片手で振り回す女子高生がこの世に存在していいのかっ！　なんて恐ろしい女子高生だ！　悪魔か！
「悪魔って何よっ！」
声に出していたようだ。少しおかしくなる。自分はまだ声が出せるのだ。脳味噌だって潰れているだろうに。目を閉じて、口を少し歪めてみる。微妙に笑うことも出来た。
「何笑ってんのよ、あんた」
少女が不思議そうに呟く声。——少女は止めよう。表現的におかしいな。
「おかしくないわっ！」
また口に出している。ちなみにわざとやっている。自分をぶっ殺した奴に対するせめてものの復讐だ。
高槻は呟く。自分でも信じられないような淡々とした口調で、七瀬留美に語りかける。
「——まあ、これでこの殺し合いは終わりだわな。多分、オレの片割れ達も、皆殺されただろう」
というか、今生きていたとしても殺されるだろう。この鬼畜に拷問されてぐっちゃぐっちゃに。
「鬼畜じゃないわっ！」
おかしくなって大声で笑いそうになる。なんともミジメな復讐の仕方だな、と自分でも思う。
「ともかく、オレらが全員死んだっていうことは、まあ、本気でゲームに乗っている殺人者がいなくなった、って事だあな」
まだ舌が回る。奇跡だ。血が熱い。額を伝って落ちてくる赤、口の中に入って鉄の味を舌に乗せる。自分の人生で最後に感じる味覚なのだと思った。血がもっと旨い味をしていたら良かったのに。
「里村茜や篠塚弥生なんかがまだ殺人を続けるかも知れないが——それはまあ、止められるだろう。

奴らだって、本当なら殺したくなんてないんだからな」
——「他人」を殺したい人間なんて、いるわけがないのだ。他人だから殺せるけれど、他人だから、殺したくないものなのだ。そんなことくらい、鬼畜の自分にだって最初から判っていたことだ。
自分だって、誰も殺したくはなかったのだ。
それでも自分が殺してこれたのは。
「もうオレは死ぬ。ああ……死ぬのは嫌だが、まあ、仕方ないな。最低なことばかりしてきたからな」
饒舌になっている。自分でも信じられないくらい感傷的な口調で高槻は語る。
思う。
自分は死ぬ前に、誰かに自分の心のうちを話して、そして、それをちゃんと聞いて欲しかったのだ。
自分の言葉に七瀬留美が顔を赤くする。唇を噛み、歯を食いしばって言い放つ。すごく強い口調で、
母親が子供を諭すように、強い口調で。
「こんなことに関わった報いよ。アンタなんて死んでしまえばいい。アンタのせいで友達を失った。好きな人も失った。——わかってんの!?」
その言葉で、やっと高槻は心の底から後悔する。
自分の人生のこと。殺したくないのに殺してきたこと。殺さなくていいのに殺してきたこと。自分が害虫以下の存在であることをやっと認識して、がくりと首が落ちる。
「——そうだな。……は、どうにもおかしい人間だったんだな、オレはよ」
ったく、本当に、なんでこんな事をしてしまったんだろうな？　にしても、自分はいつからおかしくなっていたんだろうな？
生まれた時はまだおかしくなかった筈だ。そりゃそうだ。それなりに幸せなこともあった。
大人になって、大学に入り、科学を勉強し、ＦＡＲＧＯに入る事を決めた頃におかしくなったんだろ

うか？
　たくさんの女を犯したし、たくさんの人間を殺した。人間という人間に嫌われようと、人類全ての敵になろうとまで思った時期があの頃確かにあって、確かに自分はあの頃には狂っていた。
　けれど、あの頃狂ったんじゃないと思う。大学に入る前に、自分は狂い切っていた。
　もっと昔だ。昔に何かがあった筈なのだ。
　記憶は確かにある。脳というより魂に刻まれた記憶がある。喉に引っかかった魚の骨のような、狂おしいくらい記憶は確かにある。なのに自分は思い出せない。心の何処かに思い出の引き出しがあるのに見つけることが出来ない。
　違う。心が自分の思いを否定する。
　死の際になってやっと、あの頃の心が今の自分を諭そうと歩み寄ってきた。皮肉なものだった。心がまっすぐ指し示す。指し示した先には引き出しがある。あの引き出しの中に思い出が全て詰まっている。
　けれど、その引き出しの前で高槻は立ち尽くす。動けない。手を伸ばして取っ手を引っ張れば思い出はすぐに見つけられるのに手を伸ばせない。
　思い出せないのではなく、思い出したくないのだ。やっとそう気づく。すぐ目の前に引き出しはあるのに、それを開ける勇気がないのだ。思い出したくないから、自分は嫌な人間になろうとしていたのだ。
　確かにあった数々の思い出。それが全てこの引き出しの中に詰まっている。眩しすぎて目が眩む思い出が、この中に眠っている。
　――この思い出の中に。
　自分が狂ってしまったルーツが、眠っている。
　勇気を出して開けるべきなのかもしれないと思う。
　一歩踏み込んで、引き出しに手を掛けて、
「――資格がないよな」
　結局、ほんの少し引き出しを覗いて手は止まる。
　そして高槻は小さく呟く、

「全部覗くには、オレは汚れすぎている」
ちらりと見えたのは綺麗な思い出。自分が純粋に人のことを好きになった思い出。好きな人の笑顔。それだけで充分だった。
名前も思い出すことの出来ない大切なひと。
彼女が全てのきっかけだったのだと思う。彼女のことを、おかしくなるくらい好きになった。そのことが今の自分の始まりだ。
――ここからは、もう思い出す資格がなかった。けれどその断片からでも予測は出来る。
好きになったくせに結局自分が何も出来なかったから、彼女のことをすごく傷つけたり、自分自身がすごく傷ついたりしたんだろう。結局そんなものなのだと思う。自分は人間のカスだったから。
そして、すべての人間に嫌われようと思った。逃げるために。ただただ、逃げるために。
すべてのルーツは、結局弱い自分にあったのだ。

それが判っただけでも充分だった。
もう少し良い人間に生まれていたら、と思わなくもないけれど、それでも、
――。
高槻は思い出の引き出しに火をつける。もう二度と覗くことのない思い出だ。灰になってしまえばいいと思う。
おかしくなって笑う。もうそろそろ、思い出とかに浸っている場合ではないだろう。自分はもう、死ぬのだ。完全に。意識までが消滅して、高槻という人間は消滅するのだ。

「変な顔。何がそんなに――
――嬉しいのよ」

そう言って、七瀬留美が笑う。口元だけでくすりと笑う、少しだけ上品ですごく親しみやすい笑みが、今思い出の引き出しに垣間見た少女におかしなくら

い似ていて、少しだけ高槻はおかしかった。
「馬鹿に、すんなよ、女、」
七瀬留美は笑顔のままだった。高槻も、今度こそ心底からの笑みを見せて、――ゆっくりと呟く。
「……潜水艦が、この島の付近の何処かにある筈だ。それを、捜せ。……それで逃げられる、はずだ……」
気まぐれで秘密を教えてしまう。もうどうせ自分は死ぬ。何もしないまま死ぬよりも、長瀬一族に一泡吹かせる方が楽しいと思った。
「――ちゃんと生き残れよ、お前」
あの少女に似ている七瀬留美に、高槻は囁いた。
「――ありがとうな」
最後にそう呟く。それ以上は声は出なかった。
もう好きだった人の名前も思い出せないけれど、それは自分が最低の人間だったという証だ。最低であることを受け入れて生きてきた証拠だ。それに気付けたのはよかったことだと思う。
七瀬留美の声が聞こえて、やがて消えていく。
まあ、所詮クローンでしかなかった自分が、それでも思い出の引き出しを僅かでも開くことができて、――それだけは少し幸せだった。

529 蘇生

七瀬留美は目を閉じて、目の前で果てていく哀れな男のために祈る。自分で殺したくせに、おかしなことをしている、と思う。
「――ありがとう」
反芻するが、意味はわからなかった。
自分が初めてこの手で殺した人間。おかしなくらい落ち着いている自分に驚愕するが、それほどこの男が憎かったということだろうか。
――手が震えていた。
動揺していないというのは嘘だった。

殺さなければ殺される、そんな状況の中で迷いなく人を殺せる自分が少しだけ怖いと思う。これから先、自分の命を脅かす奴がもしも現れたならば。
自分はそいつを殺すのだろうか。
「――ありがとう」
反芻しても、意味はかわらなかった。

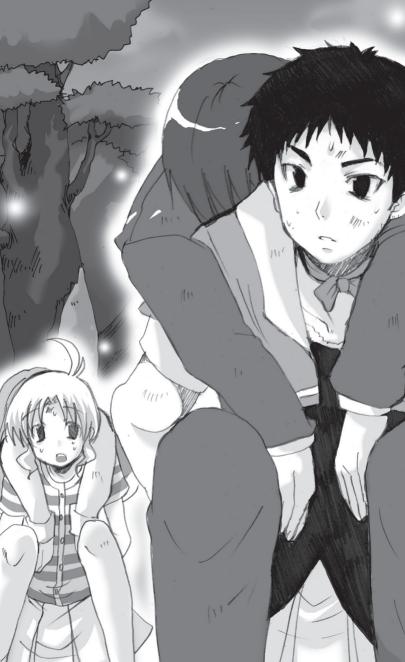
数秒の黙祷の後、七瀬は高槻の持つ武器を手に立ち上がって、柏木耕一の後を追うことにする。足に痛みはあるが動けないほどではない。
高槻の遺した言葉のことを思う。潜水艦が存在する、ということは本当なのかどうか。思う。嘘を吐く意味がない。潜水艦がある、と嘘を吐いて希望を煽ったところで果たしてどんな意味があるのか。それ以上に、最後に高槻が笑顔で言った言葉。
その言葉に、不思議な慈しみが充ちていた。
信じて、探してみるのもいいかもしれない。
もう一度高槻を振り返り、その顔をゆっくり眺める。自分が殺した人。これが初めてになるのか、唯一になるのかはまだわからない。
息を吐いて、七瀬は足を引きずって駆け出す。やらなければやられていた。それは判っているけれど、どこか納得のいかない気持ちがあった。
立ち止まっている暇はなかった。自分のことを正当化などはしない。自分は人殺しだ。それでも、
生き残るために、走り出さなければいけない。

柏木初音は鹿沼葉子を、柏木耕一は七瀬彰をそれぞれ背負い、必死に森の中を走る。足を痛めている初音が懸命に走るのを横目で気遣いながら、耕一は周囲に意識を走らせる。敵襲はない。大丈夫だ。
三分ほど走ったかと思ったところで森を抜けた。すぐそこに街が見渡せるところに到着していた。二人が息を吐いて、街の中に足を踏み入れようとしたとき、後ろから声が聞こえてきた。
「耕一さーん、初音ちゃーん！　待ってーっ！」

二人は聞きなれた声に振り返る。息を切らせて駆けてきたのは、鉄パイプと銃を持った七瀬留美だった。
「留美お姉ちゃん！」
驚きの声を初音があげる。初音と同様に足を怪我していたが、初音と比較すれば驚くべき速さで彼女は走ってきた。
「うん。久しぶりね、初音ちゃん」
七瀬は何かを言いたげな顔をしていた。耕一にも想像はつく。七瀬は先に自分が定時放送で泣き崩れた姿を見ている。初音も同じ理由——姉を失ったことのために弱りきっているのではないか、と思っていたに違いない。
けれど初音の真っ直ぐな眼差しのせいで、七瀬はそのことを問う勇気が挫かれたようだった。結局何も言えずに気まずそうに視線をそらし、ふと初音の背に乗った人の顔を見て仰天した声をあげる。
「って、葉子さんじゃない！」
「留美、お姉ちゃん。知り合いなの？」
「うん、まあ……」
頬をぽりぽりとかきながら、七瀬は耕一に何か問いたげな顔を見せる。
「今は眠ってる。ともかく早く街に行って治療をしなくちゃいけない」
しかしそんな場合ではない。耕一は二人に呼びかける。背に乗る二人だけじゃなく、七瀬も初音もひどい怪我をしているのだ。
今は止まっている場合ではなかった。

530 戦士

ドガッ！

強烈な衝撃。
掴んだ鉈こそ放さなかったものの、その身体は、倒れた祐一を飛び越え教会の床を転がった。

倒れない。素早く身を起こす。
（こんな動きを人間がなし得るなんて――）
体当たりを食らわした当人である晴香は驚きを隠せない。視線を秋子からそらすことなく、日本刀から鞘を取り払う。
「――さっさと逃げなさい」
辛うじて立ち上がった祐一に、晴香は言った。
祐一は、近くに転がっていた濃硫酸銃を素早く掴むと、晴香に向き直った。
「……俺だけ逃げろと言うのか？」
「違うわ」
ぎり、と刀を握り直す音。
「その女を守る……そう決めたんでしょ？　だったら、ここで死ぬ訳にはいかないわよね。――その女を連れて、さっさとどっか行きなさい」
「――っ」
口を開く――しかし、祐一は何も言い返せない。
茜は、未だ気絶したまま。自分一人でも秋子に対するのは不安だというのに、万が一その矛先が茜に向いたら守りきれるとは思えない。
（言われるまま、か……これじゃ、結局、ヘタレじゃないか。くそっ！）
「……すまない」
そうとだけ告げる。
茜を抱き抱える。軽い。
しかし、血の流れた左肩が、ぐしゃりと音を立て、祐一の服を紅く染めた。
その様子に、秋子は眼を細める。
「ゆういち――ううん、ニセモノさんには、その人がいるんだね。逃がさないよ、捕まえてあげる。それで、ね、目の前で……〝わたし〟と、同じようにばらばらにするのォ」
ふふふふふふふ。
小さい、しかし背筋を冷やすような笑い声が響く。
おぞましい。
彼女はこんな笑い方をする人だったろうか――？

祐一は恐怖と共に秋子から背を向け駆け出す。
それに、凄まじい速度で近付く影。
それが放つ殺気が、祐一の背中に圧倒的な存在感で襲いかかってくる。

速い――――！

ギイッ！

金属音。鉄と鉄が奏でる悲鳴。
それは祐一のすぐ後ろでおこった。
祐一は振り向くこと無く、走り去る。
その後ろでは、晴香の刀が秋子の鉈を受け止めていた。
「じゃまするのは――――よくないよ、ね？」
ぎぎ……。
鉄が軋む。奇怪な腕力。晴香は、両手で刀を持っているというのに！

だからこそ、胴ががら空きであった。
「あぐっ！」
急な衝撃。それと共に、晴香の身体が跳んだ。
脇腹に痛み――――咄嗟に引いていなくば、どうなっていたことか。
崩れた体勢を、空中で立て直す。胸が痛い。
ちっ、という舌打ちの音。ひょっとしたら、肋骨がイッている。
背後で、扉の開く音。そして閉まる音。
ヘタレ男は、脱出したらしい。こんな状況だというのに、晴香は内心安堵した。
だが――――狂った瞳は、それを見逃さない。一瞬の緩みを。
影の如く、近付く。見えない死角から伸びた手が、晴香の首を掴んだ。
鉈であったなら、死んでいた――――だが、どっちにしろ、同じだ。
チェックメイト。

「ぐっ……！」
動かない。強烈な握力に、血が止まる。景色が白く染まっていく――
「ふふふふ」
秋子が、笑顔を浮かべる。
その娘に、似た顔で。
そして、それが、一瞬の下に。
一瞬だけ。
〝秋子〟に戻った。
「……死になさい」
一閃。

それは、晴香の髪を少し切り裂いたに過ぎなかった。上に跳ね上がった腕――その先にある蛇に、晴香の長い髪が絡んでいる。
それを、秋子は、やはり狂気の眼で見ていた。
状況は、狂った頭にもよく分かった。〝なにか〟がうでをたたいた――と。

首が放される。咄嗟に身を引くと、先程まで秋子の身のあった空間を何かが貫いた。
鞘。晴香の、刀の鞘。
荒い息と共に見上げる晴香の目に、それを握った一人の少女の姿が映った。
なつみ。
「――別に、助けたつもりは無いわよ」
そう、ぽつりと呟いた。
秋子は、新たな敵の出現に、その手に握る鉈を握り直す。
晴香は返す。
「……じゃあ、礼は言わないでおくわ」
「――ご自由に」
その返事に、晴香は、にやりと笑みを浮かべた。
静まりかえった教会の内。
三人の女が、対峙する。

531　再会を誓って　～命の重さ～

朝焼けの中、手と手を取り合う二人。
生まれた友情……もともと、蝉丸と御堂は惹かれあっていたのかもしれない。長い長い、時の狭間の中で……
「坂神ぃ……今まで……すまなかったな……」
「御堂、お前とは思えないセリフだな」
「気付いたんだよ、俺ぁただ、お前に嫉妬していただけだったたってことに」
「……」
御堂はただ、バツが悪そうに頭を掻いた。
悪戯をした子供のように。
「許してくれ……なんて言わねぇ……だが、分かってほしい」
「御堂……」
「俺は、お前がうらやましかったただけなんだよ……」
少し顔を赤くして。
「こういうのって……なんて言えばいいんだか分からねぇがよ……」
「御堂……」
「……」
ただ何も言わず、蝉丸は御堂を抱きしめる。
陳腐な言葉なんていらない。無言のその行為はただ、美しかった。
どれくらいそうしていただろうか……
「坂神……俺は、たぶんお前を……」
やがて御堂がそう切り出した。
「……」
御堂を見つめる瞳。それは一点の迷いもない。
「御堂、よく、聞け……。お前がいま感じている感情は精神的疾患の一種だ。しずめる方法は俺が知っている。俺に任せろ」
蝉丸の言葉。それは甘く、切なく。

二人の少女が見ているのにもかかわらず近くの茂みへと倒れこんでいった。

「(;´Д`)そして二人はっ……!!　蝉丸た〜ん、御堂た〜ん、萌えっ！　……私も仲間に入れてぇ〜ハアハア……」

彼女の物語はついにクライマックスを迎えた。

(そ、それ……いいわね……ネタに使えるかもっ……！)

感化されている少女も一人。

「〜〜〜っ!!　いいかげんにしやがれっ！　このメスガキッ！」

バキャッ！

「(;´Д`)グピィッ!!」

頭に、強い衝撃。

「(゜Д゜)バタンのQ……だゴルァ(゜Д゜)」

バッタリッ。

奇妙な遺言を残して月代が倒れた。

「なっ……いきなり何をする、御堂っ!?」

「にゃっ？」

「ぴこぴこっ!?」

蝉丸のげんなりしていた顔に、驚愕の表情が宿る。

動物達の間を駆け抜けて、蝉丸は、御堂につかみかからんばかりの勢いで迫る。

無論、御堂が手加減していることは見て取れたが、それでもその衝撃は計り知れないはずだ。

現に、仮面の表情が変わってしまったかのように歪んでいる。

「……」

御堂もまた、疲れたような表情をしてはいたが……すぐに蝉丸を睨み返した。

「坂神。俺がてめぇを憎む気持ちはいささかもかわりないんだぜぇ。やるというならいつでも受けてたってやる。……だが」

気絶している月代を抱え起こすと、物のように蝉丸へと渡す。
「すべては島を出てからだ……これが終わったら、すぐに決着(ケリ)つけてやるぜ」
「……」
蝉丸も、また御堂の瞳を正面から見据えた。
「で……だ。島を出る前に、まだやることがある」
森の奥、その向こうにあるであろう建物の姿を目に捕らえる。
「やること……？」
「行くんだろ？」
詠美もまた、思い出したかのように顔をあげた。
「う、うんっ……！」
コクコクッ……と詠美が上下にかぶりを振る。いささか大げさではあるが肯定の証。
「というわけだ……悪ぃが、少々面倒事に巻き込まれている」
自分たちの境遇の簡単な説明を終えた御堂は首をすくめた。
「御堂……」
「別れて行動した方が効率いいだろ？　俺と、おめえが本当に組むのは――最後の決戦の時だ」
口に出してこそ言わないが御堂も蝉丸の実力は認めている。
「ならば俺もいた方がいいのではないか？」
「てめぇはともかく……そっちの女はただの足手まといだ。これ以上、足手まといが増えるのはごめんだからな」
「足手まといってなによ!?　したぼくのクセにっ！」
「言葉通りだろ……」
「ああ、分かった……」
「ちょ、ちょっと……!?」
蝉丸もそれを二つ返事で承諾した。

強化兵である御堂と蝉丸。力が発揮できないとはいえ、二人が一緒に行動すれば確かに恐いものなしだろう。
だが、別々に行動した方が、島にいる他の攻撃的ではない参加者を保護できる……という点では確率があがるという考えもあってのことだろう。
それに、下手に反論して、御堂を再び敵に回すことだけは避けたかった。
「時がきたら……また、ここでだな」
もし今、蝉丸が教会での出来事を知っていたなら、彼は頭を縦には振らなかっただろう。
だが、御堂も、蝉丸も、その『名雪』と名乗る女性の向かう先が血塗られている場所とは知らなかった。
「じゃあ、俺らは行くぜ……」
詠美と、動物達を伴って。
「また、後で……だな」
「(゜Д゜)……」
気を失った月代を腕に抱いて。
「坂神よぉ……」
去り際の、御堂の言葉。
「こんな島、確かに胸クソが悪ぃ」
「……」
「だが、俺やお前や岩切の奴だけは……こんな島がお似合いなのかもしれねえな」
命を奪ってきた数だけ、二人の命の価値は、重い。
「俺らは血で濡れた戦士だ。俺らには、決して消えることのねえ——罪だからな」

532 涙

「なんで……」
ぼそりと——。
「何で邪魔するの……」
駄々をこねる赤ん坊のように——。

「わたし、ずっと待ってたのに。とうとう来たと思ったのに」
静かに、だがもう消えない狂気を灯して――。
「何でみんな邪魔ばっかりするのよぉぉぉおお!!」
秋子は絶叫して駆け出した。――瞳から止め処なく涙が溢れる。
「くぅっ!?」
鉈が強烈な勢いで叩きつけられる。晴香はそれをかろうじて受けようとするが、その重さは最後まで支えきれるものではなかった。
「誰も……」
押し止めるにはあまりにも重い一撃を受け流すことでなんとか凌ぎ、その帰りの隙を狙って晴香は秋子を斬りつける。
「誰も邪魔なんてしてないわよ!!」
鈍い感触が痺れとともに両腕を疾った。……バカ、何で斬らなかったのよ。なんで峰を返したのよ。こんな……こんな時にまで。私の、バカ。

晴香の斬撃に追随して、今度は背後からなつみが襲い掛かる。彼女には少し扱いにくそうな長い鞘、しかし彼女はそれを意に介さずに全力で振るった。
「あなたが……勝手に、そう思い込んでるだけ!」
秋子の肩の辺りに強い衝撃が疾る。痛烈な打撃が二発も体に刻まれて、秋子はもはや立っていることも難しいほど苦しいはずだった。だが、彼女はうめき声一つ発しない。それは痛みで声が出ないとかいうものではなかった。既に彼女の心は――。
なつみは長大な鞘の振りの反動でしゃがみ込んで肩で息をしている。秋子はその彼女の顔を見つめる。一瞬後、顔を上げたなつみはその視線に気付く。目が、合う。秋子は目元と口の端をつり上げて、笑った。

――――うそばっかり。

「ぎぃぁぁぁあぁあぁあああ!」

鉈が疾る。その瞬間、紅色の線が宙を舞った。凄絶な一撃がなつみの太ももを一文字に切り裂く。
「……わたし、もう騙されないよ？」
貼りついた笑顔をそのままに。胸を張って、どこか自信に満ち溢れた様子で。
「……だってもう、たくさん騙されてきたんだもん」
再びなつみを切り裂くべく鉈を振り上げられる。ぎらぎらと光を照り返す刃が、なつみの血に染まって紅く輝いていた。
「ぐっ……、何、……で……」
苦しそうになつみが呟く。
「くっ！」
晴香は再び秋子を止めようと接近する。だが切りかかろうとして開いた胸元を思い切り肘で打たれ、そのまま崩れ落ちる。思ったより強い衝撃に呼吸が止まる。
「あぐぅっ!?」
がしゃりと音を立てて鉈が落ちる。攻撃の一瞬に、指が緩んだ。
「祐一、いじわるだから」
にこにこと笑う。血まみれの笑顔、ひどく幼げな笑顔。なつみは、恐怖が心に芽生え始めたことに、既に気付いていていて。
「すぐ、わたしのこと騙すんだよ」
優雅な物腰で鉈を拾い上げる。その様子は、秋子その人であるかのようにも見えたし、名雪のようにも見えた。
「香里も、みんなも、一緒になってそういうことするんだよ」
傷つくだけ傷ついていた。心も体ももうぼろぼろだった。倒れていてもおかしくないはずだった。
「でもね」
もう誰に言っているのかもしれない呟きに体を、心を鷲掴みにされたのか、なつみは動けない。
「わたしだって、騙されっぱなしじゃないよ」

秋子が、にっこりと、笑う。
「……いやぁ」
震える。体が震える。どこからきたのか分からない震えがなつみを揺らす。
「いっぱい、我慢してきたんだよ」
もうその瞳の中にはなつみはいない。晴香もいない。見ているのは、もう遠い過去の幻影――。
「ずっと、待ってきたんだよ」
「やめ……げほっげほっ！」
立ち上がろうとして激しく咳き込む晴香。放っておいたらあの子がやられる。止めなきゃ、絶対に止めなきゃ。もう人が死ぬのはうんざりだから――。
「だからもういいよね？　我慢しなくて」
にっこりと、笑う。口元だけの微笑み、濡れた口元が、まるで血の紅を塗ったかのごとく鮮やかに映る。――それなのに、止まらない涙。
「だから――」
「いやぁ、いや、いやぁぁぁぁあああ」
なつみが喚く。目の前に迫った恐怖に、異様に。瞳に涙をにじませて、ただ只管に恐れて。
前にはなつみ、斬られた足と恐怖に縛られて動けない。背には晴香、胸を穿たれて近寄ることが出来ない。
秋子は天井を見上げて呟いた。
「もう、イチゴサンデーじゃ許してあげない」
そして再び、鉈が振り下ろされた。

533　伏魔

はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……。
息切れの音が聞こえる。追って来ている、確実に追ってきている。俺は走りながら空の弾倉に銃弾を補充する。カシャ、カシャと小気味いい音が耳を突く。慣れた作業だ、こんなときだからといってしく

じりはしない。完了。後はこれで撃ち殺すだけだ。
ダァン！　……外れたか。
目標は遠い。それは本来こちらの利点だった。視界も動きも制限される森、それは暗殺者のホームグラウンドだろう。相手が悪い？　そんなことは理由にならん。いずれにせよ早くこんな面倒なことは終わらせてしまいたい。……そうだ、罠を張ってやろう。老の得意な格闘戦に持ち込んでやれば、アドバンテージがあると思って隙をさらけ出すに違いない。今の私になら……それが出来る。
男――源三郎――は立ち止まると高らかに言った。
「老は格闘に秀でておられましたな！」
少し離れたところに源四郎も止まった。警戒した間合いだった。何を白々しい……と言わんばかりの表情がそこには浮かんでいる。
「ならば！　冥土の土産に、私がお相手して差し上げましょう！」
「貴様……ごときが……はぁ……相手になるか……」
苦い顔で源四郎は言う。――少し、息が切れている。反対に源三郎は全く息を乱していない。
「果たしてそうですかね？」
源三郎は拳銃をしまうと両手を空に翳した。徒手空拳のアピールだろうか。そのまま両手を握りこんだ。
「日に二度の敗北を喫する屈辱を以って、引導を渡すもまた一興！」
「知った口をほざきおって！」
源四郎は構えすら取らない。……臨戦の瞬間から、既に構えているとも言えるかもしれないが。
「行きますぞ！」
源三郎はその姿勢のまま一気に源四郎の元へ接近し、渾身の一撃を見舞った。
「……ふん！」
が、所詮、程度は知られたようなもの。源四郎は軽くそれを一蹴した。だが源三郎はすぐさま立ち上

がりまた拳打を繰り返す。
「まだまだぁ！」
見かけはそれなりの攻撃を仕掛けているようでも、実際は教え子が師匠にじゃれ付いている程度の問題でしかなかった。源四郎は全ての攻撃を捌ききっていた。だがその動きが、繰り返しを経る中で次第に俊敏になっていくことに気付き、源四郎はほんの少し焦りを覚える。この男の体力がそれだけの容量を持っているとは少し予想を超えていた。そんな応酬を数度繰り返すうちに、源四郎の頭に疑念が過ぎった。
（どういうことだ……これは）
焦りが、現実の脅威となり始めていた。源三郎の動きが源四郎や蝉丸に匹敵するほどの鋭さを見せ始めてきたのだ。加えて、何度も殴り倒されているはずなのに、まるで疲れや痛みを知らないかのように立ち上がってくる。血管、いや神経か——が異様に肥大し、その目はギラギラと異常な光を灯している。

——まさか。
「——ドラッグ、か」
源三郎は怪しく笑う。その通りであった。多重の薬物投与を行うことで、彼の体は異常発達していた。限界まで引き上げられた運動能力。超鋭敏なセンサーと化した感覚器官。……そしてそれに付随する形での、痛覚の麻痺。
いつのまに、と源四郎はいぶかしんだ。少なくとも先ほどまでに奴が投薬した様子は見られなかった。ならばここに来る前までに既に行っていたのか。何故そこまで——。
拳を握る。心に湧いた些末な哀れみなどは掻き捨てる。いや、なればこそ次の一撃で決める。ただ破滅に向かうだけの、この男を。
再び猛進してきた源三郎めがけて、源四郎は大きく振りかぶり、その拳を振るった。
——この瞬間を待っていた！　見える。今ならば見える。鉄壁の防御に空いた隙間。老の広い懐、絶

対の隙が全く晒し出されている！　源三郎は狂喜に一瞬震えた。打ち出すべく後ろ手に構えられた左手が背中越しに拳銃を掴む！　もちろん同時に高速で源四郎に接近している。この動きは、源四郎の目には入っていない！

「うおおおおおおおおお！」

ぐぉんと言う空を斬る轟音が、そのまま源四郎の正拳の威力だった。源三郎の胸に突き刺さる凄まじい拳勢、さすがに今回のはまずいかも知れないと源三郎は黙考する。

……だが、銃弾を阻むもの、何も無し。結論と同時に、源三郎はトリガーを引いた。

……。

…………。

………………。

森を静寂が支配する。それはひどく白々しい閑けさ。

しばらくして一つ影が立ち上がる。それは地面に横たわるもう一人を何か調べると、そのまま幾分もしないうちにそこを立ち去った。右手に、白いけぶりが漂っていた。

534　伏魔　～影～

高い空から、眺めていた。

そこはまるで、箱庭だった。

余は籠の鳥だから、自ずから敵うのは言の葉程度。

余は見続けることが、その一番大きな意味。

庭師は数人、それぞれが違う人間だった。

弱気なものもいれば、通じたものもいる。

勇なるものもいれば、下賎のものもいる。

時には余の声に耳を傾けてくれるものもいた。

賑やかな箱庭だった。
賑やかすぎて、多少手に溢れた。
しょうがないから手を入れた。
面白がって手を入れた。
時に少し静かになり。
時にさらに騒がしくなった。
庭師が傷を負う事もあった。
箱庭の外の籠から、余はそれを眺めていた。
箱庭の外ごと眺めていた。

手入れは、それが仕事だった。
だが常にはうまくいかなかった。
箱庭は色鮮やかな世界だった。
だからそれなりの人形が必要だった。
糸が切れても、しょうがないことだった。
箱庭はただそういう風に在った。
いつしか庭師の数が減っていた。
余はただずっと眺めていた。

誰かが来てくれるのを待っていた。
箱庭の外には誰もいなかったから。
余は黙って見続けた。
時には、人形に望みをかけて。

見続けるのに飽きた時、
箱庭は血に染まっていた。

535　男は蘇る

ザッザッザッザッ……
――草を踏む音。遠くから、しかし徐々に近付いて聞こえてくる、それ。
規則的に、身体が揺れる。
膝の裏と、背中の辺りで何かに支えられている感触。
祐一の、腕。
(抱き抱えられてる？)

茜は祐一の腕の中で目覚めた。
祐一は茜の覚醒に気付いた様子も無く、ただひたすら駆けた。
晴香の助力によって不可能と思えた逃走は奇跡的に成功した。教会を脱出した祐一は森を走っていた。森に入った時点で秋子に追いつかれる可能性は低かったが、祐一はまだ足を止めようとは思わなかった。
あの秋子の表情、それは常人のものではなかった。ただならぬ雰囲気を持つあの人に狩られる対象となった現実に恐怖を抑えられなかった。
――それに。
茜をあの教会から――あの戦場から、遠ざけたかった。
憑きものの落ちた彼女は、もはやただの少女。
冷たくも、どこか優しかった――あの、里村茜なのだから。
「裕一……」
茜は、すぐ目の前にあった顔に向かって呟く。その小さな声に、祐一の足が止まった。
「……茜。起きたのか？」
「起きてなきゃ話せません」
相変わらず。
冷たい視線は、祐一を見ている。
「……まぁ、そりゃそうだな」
それでも、祐一は感じた。
それが、百貨店の売り場で再会した時や、教会でもう一度会った時の、見ているほうが悲しくなるような視線とは違うことを。
ゆっくりと――茜の身体を下ろす。
立てるか？　祐一はそう訊いたが、何事もなかったかのように、茜は立ち上がった。自らの足で。
そして、沈黙。
お互いに、相手の顔を見ていた。
しかし、二人の口が言葉を紡ぐ事は無い。
風が流れる――僅かな血臭を感じる、ような気がした。

随分と間を持って、茜が口を開いた。
「……詩子は」
ぽつりと。
「詩子は、どうしたんですか？」
「……」
放たれた言葉は、冷たく。
そしてそれが思い起こさせる、結末は、重く。
出来れば口にしたくない、聞かせたくない。だが、
祐一は口を開いた。
逃げることなく。
そう、もう逃げるのは止めだ。
「──詩子は、死んだよ」
──そうですか、と茜。分かっていたかのように。
「笑ってた。最期まで──あいつは、お前を憎んでなかった。これだけは本当だ」
茜はそれを聞いていた。
無反応。だが、その言葉は、確かに耳を打って
──
「最期に──最期に。お前に……お前が大好きだったって、言って……」
「……」
祐一の言葉は、そこまでだった。
お互いに、無言。
空白。
静寂。
時が止まったかのような中、祐一も、茜も、その目から、涙を零すことは無い。
祐一は、耐えていた。
強くあらねば、と思っていたから。
今は、今だけは、泣いていていい場合ではない、と。
──そして、茜は。
「……泣きません」
空白に放たれた呟き。
じわり、と広がったそれが、確実に時を進める。

「今は、泣きません――貴方が、耐えているなら」
「――そう、か」
強い、と。祐一は、素直に思った。
だが、当たり前だ、とも思う。
始まって間もなく、独りで生き残るが為に、全てを捨てた少女だ。
弱い筈がなかった。
鳥の声。
風の音。
足を止め、向かい合う二人を包むが如く、森は唄っていた。
――。
祐一が、それを聞いた。
声。
絶叫。
きっとそうだ。

そしてそれで思い出す。
――自分が、逃げてきたことに。
そう。
戻らなくてはならない。
男として。
「茜――」
「はい」
「隠れててくれ。俺は、教会に、戻らなくちゃならない」
水鉄砲を、固く、握る。タンクの中の、濃硫酸が、たぷんと揺れた。
「あいつらが、助けてくれたんだ。だから、俺達は今ここにいる。……このまま、逃げていたら、俺は本当に駄目になっちまうと思うんだ……だから」
息を吸い込む。
吐き出す。
吐き出された息が、震えているのを、祐一は自分で感じていた――それを無理矢理おさえ付けた。

「あいつらを助ける。そして……秋子さんとの決着をつける。それが、今、俺がしないといけないことだと思うから」
固い決意。
茜は、それに何か言うわけでなく、腰に下げた短刀を抜き、祐一に手渡した。
祐一を見る、その目は。
今度ばかりは冷たくなかった。
それを見て、祐一はまた新たに決意する。

——必ず、帰ると。

茜に背を向け、駆けだす。
振り向きはしなかった。

走る。
走る。
木を抜け、草を蹴り。
右手には水鉄砲。
左手には短刀。
それに、今の祐一は、彼が所持する武器以上の心強い何かを胸に感じていた。

536　空の青

——いやぁ、いや、いやぁぁぁぁあああ——

魂が震え、搾り出される声に導かれて、意識が現実へと引き戻される。
「わた……し……？」
まだ鈍く痛む後頭部をさすりながら、ゆっくりと繭は起き上がる。自分の、置かれた立場が理解できずにゆっくりとあたりを見渡した。
「そっか……私は……」
なつみの一撃を後頭部に受け、昏倒していた。
それはどの位の時間だったのだろう。

（でも、まだそれほど時間は経ってないっ……！）
痛みを振り払うように、頭を左右に激しく振った。
倒れたときの空の明るさは、今とほとんど変わらない。
今、繭達が置かれている状況には、まぶしすぎるくらいの空の青。
自分が何をしていたのか、何をしたかったのか。
気を失う前の出来事がゆっくりと思い出される。まるで白黒のフィルムに色がついていくかのように。
何か大切な者を、大切なことを失ってしまうことの予感と共に。
（祐一、詩子さん、なつみさん……）
駆けた。張り裂けそうな心の痛みに耐え切れずに。
何故、なつみが繭を殴ったか、そんな疑念はその痛みの前に吹き飛んでいた。
（長森さん……）
既に失ってしまった大切なお姉さんの名前を、顔を、思い浮かべる。

もう、決して失いたくない。
（嫌だよ、そんなのっ！）
後から後から湧き上がってくる予感が、膨れ上がって繭を覆い尽くす。だから全速力で走った。息が苦しくなっても、横腹がひどく痛んでも。
心の痛みに比べれば、何でもなかった。
手で、心を覆い尽くす闇を振り払うようにしながら。
駆けた後に残ったのは、振り払った心の闇ではなく、きらきらと光る涙の軌跡だった。

537　紅い雫

震えが止まらないまま、私は恐怖に直面していた。
誰も助けてくれないの？　このまま死ぬの、私？
助けて、誰か助けてよ。晴香さん、晴香さんねえ！
そんなところにいないで、私を助けてよっ！　誰

か……店長さん……私……。
　鉈が振り下ろされる寸前のとても長い一瞬のこと、耐え切れずに、私は目を瞑った。
「ああああああああああああああっっっっっ!!」
　教会に、紅い叫びが響いた。
「………………え？」
　なつみは、違和を感じて目をあけた。斬られたのは、自分では無い。よく見れば、目の前にいたはずの秋子の姿がない。
(これは……どういうことなの？)
「うっ……うっ……」
(呻き声が聞こえる。私じゃない、誰――)
　死角になった客席の影から、一人、立ち上がる。
「あなたっ……」
　それは気絶していたはずの藺だった。あの瞬間、なんとか立ち上がることが出来た彼女が、身を挺して秋子を制してくれたのだった。
「斬られてるんじゃない！　大丈夫なの!?」
「かすり傷……ね」
　肩を押さえながら藺はそこから離れる。少し足を引きずっている。傷はそれなりに深い。だが、即死に至るほどの致命傷でもない。
「大丈……夫」
「早く、そこから離れなさい」
　いつのまにか起き上がった晴香が静かに言った。既になつみたちの近くまで移動してきている。
「――まだ、終わってないんだから」
　その言葉に反応したように、藺が倒れていたところとは反対側の影から、むくりと彼女は立ち上がった。もはやあとから付いた傷に気付けないほどのボロボロの風体でなおも立ち上がる秋子。その両手は鉈を掴んで放さない。口からはこぼれる笑い声。あらぬ方向を向いていた彼女が、ゆっくりと、晴香たちの方へ向き直る。そして、それを見た三人は絶句する――。

「どうして、祐一さんはいないんでしょうね？」
「祐一のことだから、きっと夜更かししてまだ寝てるんだよ」
「あら、そうなのかしら」
「うん、祐一もおねぼうさんだね」
「まあ、名雪はずっと祐一さんに起こしてもらってたって言うのに？」
「うーっ、いつもじゃないよお母さん」
「ふふ。でも、それってとても幸せなことじゃないかしら」
「……うん、そうだね。わたし、今とっても幸せ」
「幸せだよ――」

両の瞳は赤く染まっていた。つややかな頬に、紅い雫が流れて跡を残していた。口から外へ出る言葉は、既にこの世界を見放していた。
なつみはぶるっと一瞬震えた。繭はぎゅっと拳を握った。晴香は――歯を食い縛って、前へ出た。

「あああああああああ！」
目の前に佇む彼女めがけて斬りかかる。刃を向ける。もう覚悟は出来た。させられた。誰かがやらなきゃいけないことだった。そうしなければ止まらない。その紅い涙は止まらない。秋子という人物はもういない。目の前にあるのは、もはや壊れたお人形。
秋子は鉈を振り回す。肘が異様な方向に曲がっているにも関わらず、まだ握力が維持されている。大きな音を立ててそれが風を斬る。その様子は正に機械そのものだった。晴香は後ろに飛んでそれを避ける。単調な動きだ、難しいことではない。両手で握った日本刀の重みがいつもよりはっきりしている。刀も思っているのか、目の前のこの異形を討てと。秋子の目は――もう、ずっと――こちらを向いていない。
自然な動きで刀を振るう。上段から下段へ落ちたそれは、簡単に秋子の肩に刺さった。握られていた鉈が落ちる。肉を切り裂き、骨を砕く嫌な感触が、

手のひらにじわっと広がる――。
バチィィン！　秋子は、反対の腕で晴香のことを殴った。その思わぬ勢いに晴香は客席に叩きつけられた。その見た目からは考えられない強さだった。その帰り手に肩に刺さった日本刀を引き抜いて捨てる。刀はカランと音を立てた。少しまごついた動作だった。なぜなら、秋子の細くて綺麗だった指はもうどれもひしゃげて使い物になっていなかったから。
秋子はそのまま晴香の方に迫る。ずりずりと足を引きずりながら少しずつ迫る。意図の無い威圧。晴香は動くことが出来なかった。――恐怖。乱暴な口調でごまかしていたこととの限界が見える。だが、血に染まった赤い瞳に灯る寂しさが、まるで目を放さないでと懇願しているようで――晴香にはそこから逃げることも、目を背けることも出来なかった。
「……ああ、ああああ……」
もう声も出ない。虚ろに、もう嘆きも届かないほどに虚ろに、秋子は迫った。

ぶすっ。
鈍い音がした。何の音だろう、これは？　晴香は、目の前に迫りつつあった秋子の、――その腹の辺りから、何か突き出ているのを見た。捨てたはずの日本刀だった。何故――。
荒い息が聞こえる。それは繭のものだ。秋子の後方に座り込んでいる。その両手は、先ほどまで刀を握っていた形で凍り付いている。震えが走る。その気持ち悪い手応えを体に残して。
だが刺された秋子からは、何の声も発せられない。反応すらも無い。時が止まったかのように、ただそのままの姿で固まっている。
瞬間、晴香は秋子の目に光が戻っていることに気付く。そしてその様子に思う。――何を待っているの？

ばぁん！

再度、扉を叩く音が響く。大きく開かれた扉からは光が差し込み、そこにある人物の影を映す。息を切らし辿り着いた一人の少年の、その影を。

「……最後まで…………遅刻だよ…………」

天井のステンドグラスから七色の光が差し込む。その偶然のスポットライトは、登場人物を二人だけに絞り込んでいた。一人は少年、もう一人は少女。教会の真ん中で、艶やかな、そして無垢な笑みを浮かべて、その少女は言った——。

「祐一」

538　一歩

まるで喜劇だった。せめて悲劇のヒロインなら格好だけはよかったのに、と思う。俺は女じゃないから無理か、それは。

ぼやきたかったのはそんなことじゃない。この島に来てから、その一瞬一瞬が俺の人生の縮図だとしたら、なんて滑稽なんだろうかって自虐してみたかったんだ。狙った道化ならまだ諦めも付くさ。でも違う、違うんだ。俺は本当に叶うと思っていたんだ。夢に描いていたことが、願っていたことが。

後悔の連続だった。今この瞬間だって、嗚呼やってしまった、そう思ってる。もっと他にやりようがあったんじゃないか？　もっとうまくできたんじゃないか？　いつまでたっても考える。ずっと終わらない、まるでメビウスの輪のように。

現実なんて見たくなかった。何か目的を見出した、

それが他人に対する優越になった。こんな狂った環境でも、俺は自分に対する意味を見出してるって、そう思って不安を押しとどめていた。それで、過去を追いつづけて、色んなものを犠牲にして、今のところ、手に残ったものは無い。

ただ、走り続けていられるうちはそれでもよかった。誰も正解なんて教えてくれないけど、少なくとも百パーセントの間違いではない道を歩んでいられたことは、それだけで安心だった。取り返しの付かないものがどんどん無くなっていったけど、自分の手が汚れるよりはそれもマシだった。

そんなつまらない道、どこまでだって走ってやろうと思った。現実からほんの少しだけ視界がずれていた。でもそれで少し勇気が湧いた。

どこまでいっても獣道、だけど選んで歩む道。どこまでだって歩いてやる。それだけが矜持、俺がここにいる理由。

……………違う、違うだろ!? 本当は何も失いたくなかった。香里も栞も舞も佐祐里さんも、あゆも……真琴も……名雪も……秋子さんも…………茜も。全部欲しかったんだ。俺はあの暖かい日常も、穏やかな生活も、失ったと思っていた初恋も、全部、全部この手に収めたかったんだ! どれもこれもかけがえの無いものだって分かっていた! 分かっていたんだ!

もう、沢山失った。だけどまだ失ってないものもある。まだ、間に合う。間に合うんだ! そう信じて門を叩く。ずっと探していたものと、ずっと傍にあったもの。はいつくばってでも守りたい、それらを目指して俺は今一歩を刻む。それが、どれだけ見苦しい足掻きであったとしても。

539　蒼は神の下に散る

――ああああああああああっっっっ!!――

悲鳴。
続く悲鳴。
森の中に響き、消えて行く。
それが、祐一にはまるで少女達の命が消えて行く
かのように聞こえて、ぞっとした。
「頼む――頼む、頼む、頼む！　無事でいてくれっ
――！」
祈るように、叫んだ。
それは誰に。
――即ち、神に。
だが、それは、教会まで届いたのだろうか。
絶望感。
もう既に全ては遅かったのではないかという思い。
だが。
諦めるのは、まだ早い。
そう思って、彼は駆けた。
しばらくして、森が切れた。

つい先程、通り過ぎた壁。教会の壁。
見つけた。
脇を駆け抜ける。もはや、荒れる息すらも気に止
めず、彼は走った。
そして。
その扉を開ける。

――ばぁん!!

勢い良く、扉は開いた。
その瞬間目に飛び込んだのは――。
血に塗れた、蒼。
長椅子の間で、手を後ろに付け、怯えた子供のよ
うに後ずさる晴香。血に塗れた手を、我が物でない
かのように呆然と見る繭。
そして――呆然とへたり込んだ、なつみ。
それは、誰よりも早く反応した。
まるで、祐一が来るのが分かっていたかのように。

その指を有らぬ方向へとねじ曲げ。
その腕を折り曲げられ。
そして、その身を刀で貫かれ。
それでも、彼女は立っていた。
「……最後まで…………遅刻だよ…………」
薄暗い教会の中。
七色の光が、ステンドグラスから差し込まれる。
それはまるで、神が舞い降りたように、綺麗で。
「祐一」
重い、重い足取り。
生きる死霊の如く、重い足取り。
虚ろな瞳。
それは、この世のどの闇よりも、深く。
哀しかった。
「――行こう――よ――――祐一」
ぽつり、ぽつりと。
こぼれ落ちるように、呟く秋子。
――いや、それはもはや〝秋子〟ではなかった。

認める他、無い。
それはまさしく――水瀬名雪。
「――学校に――遅れ――ちゃう、よ？」
一歩、一歩。
その足は、血に塗れて。
もはや歩けぬ筈なのに。
その足は、確実に祐一へと。
既に亡き娘の心を、愛しき人へと。
「――ねぇ――祐一――――」
祐一は。
一瞬だけ、目を閉じた。
目の前の現実を、受け入れる為に。
己の為すべき事を、為し遂げるが為に。
目を開く。水鉄砲を小脇に置いた。
一歩。近付いて行く。
全ては、静止していた。
呆けたように。傍観者達は、見ていた。

その悲劇の、終幕を。

どん

小さく、重い音。
ずしりとした重さ。
確かな重さ。
人の命の重さ。
「――え？」
祐一は。
祐一の右手には。
短刀。
それは、今、彼女の胸に。
「――いい加減、目を覚ませよ」
どしゃっ。
血を弾き、彼女は床に倒れる。
その側に近寄って。
言った。

「――なぁ、名雪？」

――祐一。

――そうだね、もう、学校に行かなくちゃいけないよね。

――うん、行くよ。

――目覚まし止めて。

――朝ご飯食べて。

――学校に、行くよ……。

「……祐一さん」

ぽつりと。
か細い声。
「……はい」
祐一は、目の前の人の顔を見た。
それは、先程よりもずっと落ち着いた顔で。
酷く哀しげな顔で。
確かな、いつか見た母親の顔で。
「――名雪を、よろしくお願いしますね？」
その目が、光を失って行く。
消えて行く、命の灯火。
それは、紛れもなく――水瀬秋子のもの。
「――待って――ますよ――」

そして、光は消えた。

鳥の声。
風の音。
その中で。
その中に建つ建物の中で。
祐一は。
既にこの世の人でない人に――言葉を返した。
上を見上げて。
ステンドグラスの向こう側に。
届くように、と。
「……すみません、俺は、俺には――もう、大切な人が、いますから」
光は淡く差し込んで。
祐一を包んだ。
神が見ているかのように。
「――さよなら、秋子さん――」

九十番　水瀬秋子　死亡
【残り30人】

540　今、一度の門出

「悪い……」
祐一は上を向きながら言った。
ずいぶんと不自然な姿勢だった。
でも、誰もそれを咎めようとはしなかった。
「遅くなった」
「何で、……戻ってきたのよ」
晴香は座り込んだままで聞いた。
「……あの子を放って置いていいの？　けっきょくヘタレね……あんたって」
毒舌は変わらない。
……なのに、その言い回しからは不思議と棘は感じられず。
「……ああ、そうだな」
祐一は上を向くのを止めて、
――その拍子に水滴が僅かに跳んで――、
倒れた秋子を一瞥する。
「結局、俺はヘタレさ――」
選ぶことが出来なかった選択肢。
見送ってしまった選択肢。
もう、正しいかどうかも分からない、過去の選択肢。
戻れるものなら戻りたい。
運命を変えられたかも知れない、その瞬間に。
だが、そんなことが出来るはずが無い。
俺は受けたんだ、報いを。
そして、これからも――。
すっと立ち上がる晴香。
その様子は、もうずいぶんと落ち着いている。
ゆっくりと歩いて、繭に近づく。
繭は……何かに憑かれたように、ぼうっと固まっている。

「気にすることは無いわ。……よく、頑張ったわね」
ポン、と繭の頭の上に手を置いた。
晴香のそのねぎらいの言葉は、
――ひどく重く感じられて。
「そっちの方もまだ生きてるわね。悪いけど手当ては出来ない、自分でどうにかして頂戴」
脚を切り裂かれながらも、
なつみもまた、そこで生き長らえていた。
晴香はさらに教会の奥へ向かう。
「そこのヘタレ男、来なさい」
「……なんだ？」
「……放っておくわけにはいかないでしょう？　つくづくヘタレね、あんた」
「……ああ」
彼女の視線の先には、寝かされた詩子の遺体があった。
「埋葬しないと遺体が傷むわ。女の子をそんな風にするわけには行かないでしょ」
そして、詩子と秋子、両方の遺体を運び出して埋めた。
繭は手伝いたそうだったが、傷に響くといけないので断った。
途中、置いてきぼりにした茜のことが気になったが、彼女がいまさら何かするとも思えなかったので、そのまま埋葬に集中した。
そこまで彼女は愚かではないし、埋葬は茜もきっと望むところだと思ったから。
「――私はそろそろ行くわ」
「……そうか」
「馴れ合いは嫌いなのよ、由依が居ない今、群れる必要もなくなったし」
「……」
「あとは復讐を達成するだけ、よ」

晴香は、回収した鞘と刀を、元の通り納めた。
「まだ、殺すのか……？」
「簡単に言わないで頂戴。私は何人もの思いを背負ってここに居るのよ。そんな単純なことをやってるんじゃないの」
「………」
祐一は、何も言い返すことが出来なかった。
「――もう、ヘタレは卒業しなさい。そうしないと、今度こそ本当に守りたい、と思ったものも、守れなくなるわよ」
ポン、と晴香は祐一の頭を叩いた。
――そう、先ほど繭にそうしたように。
「次に会う時までに、もう少しかっこよくなっておくことね」
そう言い残し、晴香は教会を去っていった――。

541　望まぬ遭遇

森は、深く、深く、何処までも続いている。
その中で、草を踏み締め、歩く三人の足音。
鋭い目を持った、黒ずくめの男、国崎往人。
その後ろを、幸いにしてまだ生き長らえている神尾親子が続く。
殿を務めるのは、神尾晴子。
その手に、シグ・ザウエルショート９㎜を構え、滑るようにして歩く。一般人の手には馴染まぬ筈のその銃は、何故か、滑稽なまでに自然に見えた。
そして、二人の間には、恐る恐る進む神尾観鈴の姿があった。
その手には、しっかりとナイフが握られていたが、この武器で彼女自身が身を守れるとは期待していない。あくまで牽制、おどしのための武器だ。
観鈴は、人を殺すにはやさしすぎる性格をしてい

た。
早い朝食を摂ってから、どれだけ経ったろう？
あれから結構歩き続けたが、誰にも会う気配がない。
襲撃を警戒して、用心して歩いているものの、襲撃どころか、人っ子一人見かけることなく、ただ、闇雲に歩き続けるばかりだった。
太陽は、既に木々の上から姿を現そうとしていた。
時間は過ぎ去っていた。
放送も流れた。
その中で、彼らは佳乃の死を知った。

それから、無言が続いている。
互いに、何も言わず。何も触れず。
だが、決して〝それ〟から逃れようとしているわけではなかった。
だからこそ。

何も言わなかった。

往人の足が止まったのは、それからもう少ししての事だった。
続いて、観鈴が素早く足を止める。
ちょうど横手を警戒していた晴子は、歩く勢いをそのままに、観鈴の背中に体当たりする。
土の上に転ぶ二人。
「つぅーっ……」
「が、がお……」
ぽくっ。
森の中に、割と小気味の良い音が鳴る。
「その口癖止めえって、前から言うとるやろ」
「が……」
もう一度出そうになったものの、辛うじて押し留まった。
「何やってんだお前ら」
往人の軽い突っ込みが入った――が、その声は冷

ややか。至って、冷静に。突っ込むのに適した声ではない。それを感じ取った晴子の目が、すっ、と細まった。
「――なんや。おるんか？」
「……確証は無い。だが、恐らくは――」
「……」

じゃきっ。
鉄の音。
一変して緊迫したムードに包まれた観鈴が、一歩身を引いた。
正解だ。戦闘が始まった場合、観鈴は只の足手まといとなる。
たとえナイフを持っていても、それは逆に敵の感情を逆撫でするだけかもしれない。そもそも投げナイフを上手く扱えないであろう。それでも、観鈴はナイフを堅く握りしめて離さなかったが。
往人は。

冷静な表情の割に、突然の遭遇に焦りを覚えていた。手に握る、やたらと重い銃。残り一発のデザートイーグル。
――これだけで、戦えるのか？
牽制には使えない。当てるつもりで使うのなら、一撃必殺を狙う他、無い。
仕方がない――ハッタリを、使う。
「そこにいる奴。悪いが、出てこないのなら勝手に撃たせてもらうぞ」
がさ、と草が揺れた。
これで、予感は確信へと変わった――すぐ側に、誰かがいる。
晴子の顔にも、より緊張が漲っていく。
――沈黙。
返事は、無い。
「蜂の巣になりたいのか？」
脅す。
これで、姿を現してくれれば――

「出たところで、撃たれない確証はありません」
返ってきたのは、いつか聞いた声。
少女の声。
自分の記憶が正しいのなら――
「お前、まさか住宅街の時の」
「茜、です」
静かな声。
それは森の中から。
上から聞こえる気もすれば、すぐ側の草むらから聞こえる気もする。
森の作る闇が、往人の感覚を狂わせていた。
何処だ。
何処にいる。
「名前なんてどうでもいい……攻撃する意志が無いのなら、こっちも撃つつもりはない」
「何故です？」
疑問を投げ掛ける返事。
心なしか、後ろから聞こえてくるような気すらしてきた。
「貴方は、私を殺すつもりだった筈です」
「それは、お前が俺を殺すつもりだったらの話だ。やる気の無い奴に銃を向ける程、落ちぶれてはいない」
そう。
それは往人の予想。
この少女に、自分達を攻撃する意志は無い、という。
無論、それはあくまで予測に過ぎない。
何処か、近くから三人の命を狙うべく時期を見計らっているだけに過ぎないのかもしれない。
――だが、それなら何故。最初の一瞬で撃たなかったのか、と。
その事実が、往人の勘を呼び起こす。
「……確かに、やる気はありませんね」
ふぅ、というため息の音――それが聞こえるという事は、それほど遠くはないということか。

「むしろ、やる気を削がれた、といった感じです
――何処かのヘタレ男さんに」
「……」
茜の独白が森の中に溶けていくのを待って――往人は、銃を下ろした。
無論、右手には握られたままだ。いざとなれば、即座に構える事も可能である。
だが、しかし。
――晴子は、往人の行動に従った。四方八方に巡らせていた殺気を静めると、銃口を下げた。
「出て、いいのなら出ますけど」
「そう、だな。後ろから刺されかねないというのも厄介だ……姿を見せろ」
「――」
がさり。
音は、上から聞こえてきた――
往人が、上を見上げると同時に、近くにあった木の上から亜麻色の髪の少女が姿を現した。
とさ、と地に着く音。軽い。
しかし、先程の草むらの音はフェイクだったのか。
つくづく、油断のならない女だ――と、往人は何となしに思う。
「お久しぶりですね」
「会いたくはなかったがな」
「――まったく、です」
ふぅ、と目を閉じて溜息。
観鈴は、目の前に立った彼らの様子を、そして現れた少女の姿を呆然と見つめていた。

542　教会にて　～Last Episode～

「これから……どうする？」
誰へと言うでもなく祐一が呟いた。
晴香が去った後、祐一と、そして満身創痍のなつみ、繭だけが残った。

「どうするって……どうするの？」
そしてどうしたいの？　と藺が付け加えた。
いろいろなことがありすぎて、これからのことなんて何一つ考えられなかった。
だけど……
「俺は、茜を守る」
それだけは、絶対に、言えた。
いろいろな人を失ってなお……いや、だからこそ。
「茜だけは、守りたい」
悲しみの傷が癒えることはなかったが、鮮やかな空の蒼は、それでも優しく祐一達を包んでくれた。
泣きたいくらいに澄み渡ったクリスタルブルーの空。いっそ、雨が降ってすべての悲しみを洗い流してくれたらいいのに、とさえ思っていたのに。
祐一たちの心は、穏やかだった。
「うん……」
いいと思うよ、と藺が呟く。
傷は痛むだろうが、それでもつらい顔など微塵も見せずに。
それはなつみも同様だった。
だから余計に言い出せずにいた。
「私達は、いいよ」
藺が呟く。
「えっ……？」
祐一が言い出せずにいた言葉。
これからは茜を守っていきたい。生きて帰る為に。
その為にはこれから危険を冒していくことになるかもしれない。それでも、茜となら乗り越えていける、と思った。
だけど……
（藺やなつみちゃんまで巻き込んでしまっていいのか？）
祐一は思う。
俺は弱い。
藺やなつみを守りきれる自信なんて、まったくな

かった。ましてや彼女らは怪我人だ。危険を冒さないで済むのなら、その方がいい。
だが、置いていけるのか？
ただでさえ、怪我をしてるというのに。そして、殺人ゲームが行われている島だというのに。
俺や繭達、そして茜も含めて、いつかは生きて帰るために殺し合いをしなければいけないかもしれないのに。
——もちろんそんな選択をする気はないが。
(置いて行ける訳、ないじゃないか)
「私達は、ここでお別れです」
だから、なつみが、繭が、そのセリフを口にしたときには驚いた。
「足手まといですし、それに……」
「野暮な存在にはなりたくないしね、祐一」
(俺は、バカだ)
ただただ、自分の浅はかさを呪った。
もう、この二人は、ずっと前から決めていたんだ。
俺の、為に。
「俺なんかより、ずっと、強いよ」
二人の頭を、交互に撫でる。
「今頃気付いたのね」
繭の呆れ顔。
「さ、行って、祐一」
繭が、そっと祐一を押した。
「俺が、バカだったんだよ」
だけど、歩き出さずに。
「祐一……」
「俺が、全部悪かったんだよ。一番大切な女性に目を奪われていて……他の……本当に大事なものが見えなくなっていたんだ」
栞も、香里も。
真琴も、名雪も。
そして秋子さんも。
「俺が選択をあやまらなければ、死ななくて済んだのかもしれないのに……俺が、違う道を行けば、み

んな生きていられたかもしれないのに……！」
「そうかもね」
「……ああ」
「ちょっと、椎名さんっ⁉」
「いいのよ」
蘛が、抗議の声を上げるなつみを手で制した。
「祐一、人は強くて、弱いのよ。だから、あなたひとりでできることなんて限られてるの。私だってそう。人生なんて後悔の繰り返しよ。それでも、前を向いて生きていけることが強さだと思う。だからこそ、誰もが現在（いま）を、輝いて生きてる」
蘛もまた、真琴のことを思い出す。
「蘛……」
「自分一人で背負い込まないでよね……他の選択肢もあったかもしれない。他の生き方も、他の人生もあったかもしれない。だけど、それで今より良くなった保証なんて無い。だから――」
一旦言葉を区切り、深呼吸する。
「自分だけは――せめて自分くらいは、選ばれなかった選択じゃなくて、自分が選んだ選択を信じなきゃ駄目よ。そうして、前を向いて歩けば、強くなれると思うから」
たとえ、その先に後悔が待ち受けていたとしても。
「先を恐れて行動しないほうが、ずっと、ずっと……つらいと思うから」
「蘛……」
蘛の言葉の意味をひとつひとつ噛みしめるように、目を閉じる。
「やっぱお前、きのこ食べると大人っぽいな」
「……どういう意味よ？」
そのあと、ひとしきり、笑った。
「さ、行こうぜ。ゆっくりな。……歩けるか？」
えっ？　……っと、二人が顔を見合わせる。
「一緒に行こうぜ。俺は確かに頼りないし、駄目な奴かもしれないけれど……」
すっと、差し出された手。

「俺も、信じた道を行くことにしたよ。後悔しないように」
始めからこうすれば良かったんだ、と祐一。
「出来る限り守るぜ、俺は」
みんなを、な。
「せいぜい、私達に守られないよう気をつけなさいよ」
繭が、そしてなつみが、祐一の手を、しっかりと握った。

543　牝鶏晨す

前回までのあらすじ
――エロムービー立ち上げたらPCがすっ飛んでしまい、にっちもさっちもいかなくなったことであるなあ
さてさて。年増女と若者によるがっぷり四つの取り組みという、勝目梓や南里征典あたりが即座に脱稿しがちな劇空間が去った後には物言わぬノートPCと、テキオー灯を二十四時間照射しても、社会が歩み寄りを見せないであろう気の毒な人々だけが取り残されました。
こうして日米合同プロジェクトは宮内レミィちゃん（九十四番）の勇み足によって暗礁に乗り上げたわけですが、ここでアメリカの失策を正直に批判したところで北川潤くん（二十九番）に利はないですし、居直ったメリケンの恐ろしさは日本人として塩基配列レベルまで刷り込まれてる北川くんですから、結局彼は、うなだれてるレミィちゃんの横で、目頭を摘んでもっともらしく嘆く振りをすることにしたのです。彼は大人でした。
「……ジャジャマル」
ぼそり、と聞き取れるかそうでないか位の声でレミィちゃんが呟きました。
「……ん？」

「ピッコロも、ポロリも……」
「ああ。残念ながら当分彼らと会うことは不可能だな。さっきも言った通り、相変わらずぽろりはおいなりさんとお宝をチャックからはみ出したまま近鉄奈良駅界隈を闊歩するし、ぴっころは見境無しに口から玉子を吐き出し、じゃじゃまるは手を出したアルゼンチン国債にあえぎ続けるんだ。つまりこいつらは一生救われないままなのさ」
不干渉を決め込んだのもつかの間、ツッコミどころさえあれば、あっさり主義主張を翻して、余計なことを言ってしまうのは、北川くんのどうしようもなく救われない部分であるのかも知れません。
「…………！」
それを聞いたレミィちゃんは最初目を見開き、次に俯き、そして小刻みに震えだしました。
しまった、と北川くんはすぐさま後悔しました。客観的に見ても、ヤンキーが粗相をしたせいとはいえ、やはりここで米側を無闇に刺激するべきではなかったのです。こういう時は、なだめすかしご機嫌を取って関係修復を図るべきだったのです。
『そのコリコリとした睾丸を食わせてくれるのは貴様カァ！』と、絶望に打ちひしがれ、ニトロもびっくりなくらいに不安定になったレミィちゃんに胸ぐらを掴まれてそのままデイジーカッターで粉微塵にされてしまう。半ば確信を伴った予知的ヴィジュアルが北川くんの脳内で鮮やかに再生されました。もはや外交交渉は決定的にご破算です。北川くんは国際連盟を脱退してジュネーブの会議場を後にしたときの松岡洋右の気持ちが少しだけ分かった気がしました。
どこか遠くへ旅に出たい気分でした。旅はとても素晴らしい。人を賢くさせます。外に出てみなければわからないことがたくさんあります。学校で教えていることは全て本に書いてます。だから、本を読んでいれば学校なんて行かなくてもいい。それよりも旅をすべきです。イスラエルの若者は兵役に就く

前の一年間、世界中を旅しています。ユダヤ人にしてみれば放浪は宿命みたいなもの……。
北川くんは急にユダヤ人が羨ましくなり、国籍をイスラエルに移したい気持ちでいっぱいになりました。

「見るヨ」
その声が、遥か遠くヨルダン川西岸付近に魂を飛ばしていた北川くんを、現実に引き戻しました。
「見るヨ！」
「は？」
「絶対見るよジュン！　アタシCD全部集めてノート直してにこぷん全話みるヨ！」
大宣言したレミィちゃんは、手早く荷物をまとめて、担ぎあげると北川くんの腕をひっつかんでそのまま立ち上がりました。
「そうと決まれば早速出発するヨ！　ほーら、行くよジュン！　一刻千金、うかうかサンジューきょろきょろヨンジュー、CD探しは巧遅よりも拙速を尊んで、陽の照っている内に干し草を作らないとダメだヨ！」
まくし立てるレミィちゃんに、北川くんは狼狽することしきりです。
痛いくらいに強く腕を引っ張られながら、「女は強い。そしてたくましい」と北川くんは改めて確信しました。
そういえば創世記の頃から女は強く眩しい存在でした。アダムが知恵の実を食べたのも、イヴのプッシュに押されたからですし、足利義政は日野富子の言いなりだったし、玄宗皇帝は楊貴妃の為にわざわざ都から数千里も離れた所からライチを持ってこさせたのです。
そんな彼らより力も金も何も無い北川くんがレミィちゃんに逆らえるはずなどありません。
けれどもその一方で、もしCDを全部集めたとき、中に入っているのが『にこにこぷん』ではない事が

ヤンキーにばれたら、いったいどう対処すればよいのだろうか、北川くんは将来設計に不安を抱かずにはいられませんでした。
「アハハッ、シュッパーツ！」
ガラガラとシャッターが開いて、なだれ込んできた外の日差しが二人を真っ白に染め上げました。

544　楽園追放

朝日とは呼べなくなった太陽の光が降り注ぐ中、僕達は墓場の近くを歩いていた。
誰のための墓なのだろうか？
もしかしたらこれから死に逝く僕達のために用意したものなのかもしれない。いや、そんなことにはさせない。せめて僕の隣にいる彼女だけでも守りたい。
しかし、今はとてもそれができる状態ではなかった。せっかく巻いてもらった包帯に海水が染み込み、問答無用な痛みが首筋を駆け巡るのを半泣きになりながら何とか耐えているからだ。
「くそっ、かっこつかないなぁ」
「どうしました？」
ぼそっと呟いたつもりだったのだが、天野さんの耳には届いたようで、心配そうに僕を覗き込んでいる。
「あ、いや、その、目にゴミが入ったみたいで」
「キスする時の常套句ですか？　そんな下手な嘘をつかないでください。傷が染みるんですね？」
天野さんの指が優しく僕の首に触れてくる。フローレンス・ナイチンゲールに会ったことは無いが、今目の前にいるかのような錯覚を引き起こす。
「意外とドジなんですね。怪我してるときに海水で顔を洗うなんて」
手厳しい一言。続けて。
「でも、この傷は私のせいなんですよね」
捨てられた子狸みたいな顔をしながらそんなこと

をのたまう。天野さんにそんな表情は似合ってるようで似合わない。
「えーと、気にしないでよ。僕が間抜けなだけだから。それにしても、雄大な海なら僕の心と身体を癒してくれると思ったんだけどね。そうはいかなかったよ」
　場を和ませるためにちょっとおちゃらけてみる。
「……」
　天野さんがきょとんとした顔で僕を見つめ、そして破顔する。天野さんはやっぱり笑顔が素敵だ。
「ありがとうございます」
「いえ、こちらこそ」
　本当にこちらこそだよ。僕が今正常な意識のままでここにいられるのは君のおかげだよ。母なる海の潮は僕を癒してはくれなかったけど、母性あふれる美しい汐は確実に僕を癒してくれている。
　僕達がいる場所だけはこのすさんだ島の中で唯一残された楽園であるかのようだ。

「ところで、これからどうするんですか？」
「うん、それなんだけど僕達は逃げる手段を探そうと思うんだ。もし、彰兄ちゃんがこのゲームを終らせたとしてもこの島を出る手段が無ければ意味が無いからね。泳いでいくという案は流石に却下として、そもそもこの島には管理者側の人間が何人もいるんだから、彼らがこの島から出るために何らかの手段があるはずだ。それを、僕達で奪ってしまえば良いんだよ。まあ、僕達二人だけで奪取するのは難しいとは思うから、せめてそれがあることだけでも確認できれば御の字、それにそういう場所には僕の叔父もいるかもしれないしね。そしてその情報が広まれば希望が湧いて、みんな争いを止めてくれるかもしれないからね。こんな考えは甘いかな？」
　僕は柄にも無く熱弁を振るってみたが、自分でもそんなにうまくいくとは思ってない。それでも何もせずにいるわけにはいかない。
「そうですね。甘いです。どれくらい甘いかと言う

と、餡子に蜂蜜かけて生クリームでデコレーションしたくらい甘いです」
　うわ、酷い言われ様だ。
「でも私の名字はあまのって言うくらいですから甘い物は好きですよ」
「あまのってそう書くの？　僕はてっきり……」
「ごめんなさい。冗談です。祐介さんがあまりに思いつめた顔して言うものだから……」
　そんな顔をしてたのかな、僕は。
「だから、祐介さんの雰囲気を和ませようと思って……」
「天野さん……」
「祐介さん。きっとうまくいきます。そして私達で日常を……新しい日常を取り戻しましょう！」
　天野さんがぐっと引き締まった顔になる。歳は僕と同じくらいなのにずっと大人っぽい表情だ。その表情に僕は元気づけられる。
「うん、そうだね。一緒に頑張ろう」
「でも、どうやって探しましょうか？」
　天野さんが当然の疑問を投げかけてくるのを、僕は近くにあった墓石に寄りかかりながら答えようとする。
「それなんだよ。全く手がかりというものが存在しないからね。そういえば、ゲームの元管理者だった高槻なら何か知ってるかもしれない。けど、放送の雰囲気を考えると知ってたとしても素直に教えてくれるとは――って、ととと……うわっ!?」
　ドシンっと僕は尻餅をついてしまった。見ると寄りかかった墓石が見事に倒れている。
　天野さんはそんな僕の様子を見てくすくすと笑っている。
「大丈夫ですか？　やっぱりドジなんですね。墓石に寄りかかったりするから罰が当たったんですよ」
　そう言ってからかいながらも、僕に手を伸ばし起こしてくれようとする。僕はその手を掴み、下からの風に押されながら立ち上がる。

……風？
……下から？
僕は天野さんの手を左手に握りなおしてから、辺りを見回す。
「ど、どうしたんですか？」
「風が吹いてるんだ！」
「そんなのさっきからずっと吹いてますけど？」
「そうじゃなくて！　下から、地面の方から……」
僕が倒れた墓石をさらに動かすと、その下には何処かへと続く地下通路が現れた。ごくりと唾を飲み込む。
「この道、どこに続いてるんでしょうか？」
「わからない。でも、行ってみようと思う。危険だから天野さんはここに残ったほうが……」
突然僕の唇に人差し指が置かれる。目の前には首を横に振る天野さん。
「そんな事言わないでください」
じっと僕の目を見つめてくる天野さんの瞳の意志は強かった。僕はそれ以上何も言えなくて、ただ唇に触れている指の感触に鼓動を高めながら頷くだけだった。
中は思ったより綺麗な造りになっていて、コンクリート張りの通路は明らかに人工物であることを示し、太陽系の惑星並に点々としかない薄暗い照明が、一応現在のところ使われていないわけではないということを示している。
「暗い、ですね」
「うん。けど、そっちの方が人に見つかりにくくて好都合だよ」
「ですが、何があるかわからないと偵察の意味がありませんよ」
うーん、全くその通りだ。しかし、ここで手をこまねいて突っ立っているだけじゃ始まらない。僕は天野さんに同意を求めるアイコンタクトを送る。彼女がそれに対して首を縦に振る。僕達は同時に深呼

吸をしてから薄暗い通路を奥へと進み始めた。
　幾分か進むと薄緑色のドアが見えてきた。扉やその周辺には何も書かれておらず、この部屋が何の部屋なのかはわからない。僕は慎重に慎重を重ね、中の部屋の物音を探りながらドアノブをそっとひねり、少しだけ開けて中を覗く。が、そこで管理者が僕らを待ち受けていたり、奇跡的に脱出できるようなものがあったりするわけでも無く、ただがらんとした室内に錆び付いたパイプ椅子と捨て置かれた折り畳み机が転がっているだけだった。
　ふと緊張の糸が途切れる。張り詰めていたものが抜けていくと同時にどっと汗が吹き出る。
　やれやれ、この調子では先が思いやられる。何も無いところでこの有様だからな。
　拳を作っていた右手を開く。手に汗握るとはまさにこのことなのだろう。天野さんも緊張していたのか、左手を心臓に当ててどきどきしてます、と言わんばかりの顔をしている。薄暗くてはっきりとはわからないが、頬がほんのりと朱に染まっているようだ。僕と同様、手に汗を掻いているみたいで緊張の度合いが僕に伝わってくる。
　……え？　……手？　……天野さんの？
　そのとき僕は初めて、天野さんの手をずっと握り締めていることに気付いた。彼女の顔が赤いのはもしかして僕のせいなんだろうか。
「うわっ！　ご、ごめん！　その、て、手を……」
「い、いえ、べつに……」
「僕、いつから握ってた？」
「え？　あ、あの、倒れた祐介さんを助け起こしたときから……」
　僕は顔面からガスバーナーの空気調節ねじを回してないかのような炎が出そうなくらい熱くなった。
「えーと、その……離したほうがいいよね？」
「そんなこと無いです。心細かったんで、すごく安心できました。だから、離さないでください」
　ぎゅっと天野さんが両手で強く握り締めてくる。

「うん、わかった」
僕はその愛しい人の手を改めて強く握り返す。
「何があっても僕はこの手を離さないよ」
一体、誰にこの手を離すことができようか。いや、決してできはしない。僕は絶対にこの手を離すことなく、天野さんを守り通してみせる。
そう心に誓いさらに奥へと進むべくその部屋を後にした。そしてそこからの僕の心臓は管理者に対する緊張と、天野さんに対する動悸とで休まる暇がなくなっていった。

この地下通路に入ってどれくらいの時間が経っただろうか。あるかどうかもわからない希望を探す道程と、こちらはほぼ確実に存在するだろう敵に怯えながらの行進は精神的疲労を募らせていった。
そして、もうそろそろ戻ったほうが良いかもしれないと考えたとき、今までにない雰囲気の部屋を見つけた。これまでにあった部屋は、机や椅子などが並べてあるだけの部屋や、ガラクタが放置してあるだけの倉庫しかなく、脱出の手がかりになりそうなものは一切無かった。だが、今回見つけたこの部屋のドアには【Staff Only】と書かれたプレートが取りつけてあった。白地に黒の文字で書かれたそれはわずかな誤差も無くドアの中央に取りつけてある。なんとも几帳面なことだ。
「ここ、怪しくない？」
声量を天野さんだけに聞こえるように落として彼女の意見を聞いてみる。
「そうですね。今までこんなこと書かれていませんでしたしね。でも、誰か中に人がいるんじゃないでしょうか？」
声を落としているせいか自然と二人の距離が近くなる。鼻の先にしかつめらしい顔をした天野さんがいる。今の僕の心臓の動悸は三四〇％彼女で占められている。
「大丈夫だと思うよ。人の話し声とか物音とか全然

しないし」
僕はドアに耳を当てながら中の音を探るが、心臓の鼓動が邪魔をして実はそれどころではない。
「とりあえず開けてみようか」
「はい」
今までにもやってきたようにゆっくりとドアノブをひねる。ほんの少しの隙間から中を覗き込むが人の気配は無い。またはずれかと考えたが、ドアについているプレートが気にかかる。ここはやはり中に入ってみるべきだろう。
僕は入る意志を目に乗せてから天野さんに送る。
――天野さんはコクリと頷いてくれた。
人一人通れるくらいにドアを開けて中に入ると、なんとも言えぬ不快な気持ちに襲われる。何の部屋だろうかと訝しみつつも、さっと物陰に隠れながら周囲を見渡すが、この部屋はかなり広いらしく一番端が見えない。
「これだけ広いのに誰もいないのかな？」
奥の方には何かがあるようなのだがここからでは確認できない。
「あっちに何かあるみたいだね。なんだろう？　コンピューターかなぁ？　行ってみようと思うんだけど大丈夫かな？」
そう言って、僕は振り返る。
だが、そこには僕の左手によって繋がれているはずの人はいなかった。僕の左手は切断面から雫がぽたりぽたりと落ちている白く綺麗な右手だけを握り締めていた。
「天野さん!!」
僕はあたりを何度も見渡す。
「天野さん！　天野さん！　天野さぁん!!」
周りに敵がいるかもしれないなんてことはお構い無しに、僕は大声でその愛しい人の名を叫んだ。
そして、僕は気付く。
【Staff Only】の意味に。
このゲームのスタッフ、この理不尽なゲームの主

催者とは……

そう、長瀬一族であることに。

つまりはこういうことなのだろう。
この部屋は長瀬一族しか入れない。
どんな技術でそうしているのかはわからないが、一族の人間以外は決して入れぬようにしてあるのだろう。
だから、長瀬である僕以外はこのドアをくぐれなかった。
だから、長瀬でない天野さんの手は、このドアで切断された。
僕が長瀬だから
僕と一緒だったから
僕がプレートの意味に気付かなかったから
僕と出会ったから
僕が手を離さなかったから
僕とキスをしたから
僕が存在したから
僕は僕が僕に僕とボクへ僕でぼくはボクがボクの
僕がボクにボクは僕を僕がぼくが僕が僕がぼくが
僕がボクがぼくが――――――――
「うわあぁぁぁあぁぁぁ!!」
体がよろよろとふらつく。
まるで自分の体ではないかのように。
自分の中に抑えきれない電波が増幅していく。
しかし、封印のせいか電波が外には向かわない。
ならば抑えきれなくなったそれはどうなるのか?
自らの中に暴走した電波が蓄積されていく。
臨界を超えたそれは僕の中で爆発する。
目の前が白い光で満たされるかのような。
身体中の血液が逆流しているかのような。
ＤＮＡの配列を並べ替えられているかのような。
僕を構成する原子が解離していくかのような。
そんな気分に襲われる。

「あ、天野さ……ん……」
そして僕の意識の糸は切れ、その場に倒れた。
天野さんの右手を決して離すことなく。

545　忘れない

まだ少し熱がある。先よりは余程マシだとはいえ、それでも安心するには程遠い顔色だった。血がないくせにどうして熱まで上がるのだろう。
柏木初音はまだ青い顔をした七瀬彰の傍で必死に看病をしている。足の治療を手早く受けてからずっとつきっきりで、初音は七瀬彰を看病し続けている。
先程の戦闘で彰は高槻の放った弾丸に撃たれた筈だったが、実は彼は防弾チョッキを着込んでいて、致命的な一撃にはなっていなかったようだ。それでも額や足、腕、いろいろなところから流れてしまった血の量は多過ぎた。
「どうだ？　彰くんの様子は」
後ろから声がした。
柏木耕一は七瀬彰の眠る部屋に入ってきて初音に尋ねる。初音は振り返って小さな声で言う。
「だんだん熱は下がってきてる。けど、顔色は悪いままだよ。血が流れすぎたのかもしれない」
「そうか。目が覚めたら何か精力がつくものを食べさせよう。それで元気になるさ。――初音ちゃん。そろそろ看病替わろうか？」
「ううん、大丈夫」
頑として首を振る初音。こういうところで彼女はすごく強情だった。耕一は溜息を吐いて何かを言おうとするが上手い言葉が浮かばない。黙っていると初音が喋り出す。
「あのね」
耕一はそのかすれるような声に耳を傾ける。
「彰お兄ちゃんはね、わたしに、新しい日常をくれる、って言ってくれた」

初音の後姿はすごく小さかった。
「日常はみんな壊されちゃった。もう、家に帰れたとしても、お姉ちゃんは誰もいないんだ」
絶望の隕石が降ってくれれば、おそらく真っ先に潰れるくらいに、小さな背中だった。
「けど、彰お兄ちゃんは、きっと、日常は何処かに、――何処にでも、あるんだって言って」
声にならなかった。
ここまでずっと耐えてきた初音の背中が震え出す。苦しみに震えるこの小さな背中の前にあっては、自分は果たして何が出来るのだろう、と思った。
初音は泣いていた。
「泣いちゃダメだってわかってるけど……っ！　わたしは、彰お兄ちゃんに死んで欲しくない。誰にも死んで欲しくないんだよ……っ！」
することなど決まっていた。
彼女に残された微かな希望の火。自分はその微かな希望のひとつだ。彼女をこの非日常から連れ出すために、自分は彼女の傍にいよう。
「大丈夫。俺も彰君も、絶対に死なないよ」
震える肩に両手を置く。せめてこの震えが止まるまでは、初音の傍にいようと思う。

目を開けるとベッドの上にいた。
鹿沼葉子はゆっくりと身体を起こして部屋の中を見回して、そこに七瀬留美が座っていることを認識する。このゲームが始まったばかりの頃に出会った少女だった。
「あ、起きたね。お久しぶり、葉子さん。あたしのこと覚えてるかな？」
「ええ。七瀬さん、お久しぶりです」
答えると七瀬は満面の笑みを見せた。
最初に出会ったときに比べて彼女の姿は変わり果てていた。血で汚れた黄色い制服、顔や腕などに見られる多くの生傷、そして短くなった髪。
特に髪が短くなっていることに葉子は気を奪われ

た。自分の傍らに座っている七瀬はその視線に気づき、苦笑いをして答える。
「ああ、髪切ったんだ。動きにくかったから」
「はぁ」
完全に納得したわけではないけれど、葉子は取り敢えず納得したような顔を見せる。自分も髪が長く、戦いを続けていく中でこの長さが鬱陶しいと思う時がくるのかもしれない。
「葉子さんが高槻と戦ってくれたお陰で、初音ちゃんも彰君も無事だったよ。ありがとう」
無事だった。自分が意識を失った後、助けが間に合ったということか。良かった。安堵の溜息と言葉が漏れた。自分の顔を見てか、七瀬はにこりと笑う。
――この時点では、覚醒したばかりで脳味噌の働いていなかった葉子には、七瀬に起こった「一番の異変」に気付くことは出来なかった。
「――積もる話もありますが、私はそろそろ行かないといけません。私は高槻や長瀬一族を殺さないといけないんです。それでは、」
動こうとして脇腹に鋭い痛みが走る。表情まで歪んで、七瀬が慌てて葉子を止める。
「まだ動かないで、無理しちゃ駄目だよ」
強引にベッドに戻される。怪我をしているせいか力が戻らない。いつもならこのくらいの力簡単に退けられるのに、
怪我のせいではないことに気づくのに二秒。
握り拳を作る。力が入らない。怪我とかそういったものでは説明できないくらいに脆弱な握り拳だった。普通の女の子のような腕力しか持っていない自分を嫌でも直視することになる。制限されているとはいえ、自分はもう少し力があった筈だ。
高槻の持っていた、不可視の力を封じる装置はまだ働いたままなのだ。そこに気づくのにまた二秒。
強引に身体を起こして立ち上がる。
「駄目、まだ動いちゃ」

「それどころじゃないんですっ！」
「それどころよっ」
　自分の力が弱っているせいで、このベッドから立ち上がることさえも出来なかった。
「寝ておいて。色々しなくちゃならないのは判るけど、今は身体休めて」
　ベッドに押し付けると七瀬は丸椅子にどしんと座る。じい、と葉子のことを見つめて、しばらくは目を離しそうにない。
（しかたありません。あの機械を取りに行くのは、身体を休めてからにしましょう）
　どの道身体は怪我で弱っているのだ。休んでから行った方がまだマシというものだろう。

　葉子が違和感に気づくのは、再び睡魔に襲われて目を閉じようとしたときだった。
　不幸なことに自分の脳味噌は疲れ切っていて、していい質問としてはいけない質問の境界線が曖昧になっていた。疑問をそのまま口にしてはいけない、そんな時があることは判っていたくせに。
「――七瀬さん、その、」
　勿論、訊くべきではなかったのだ。言葉にしようとした瞬間に後悔が走り、最後までは言えなかった。最悪の言葉を口にしそうになった。
　折原さんと、長森さんはどうしていますか。
　――判りきっているではないか。七瀬留美の見せる微妙な翳りで、判っていたことではないか。
　七瀬留美は思っていた以上に聡明だった。自分のその断片的な言葉だけですべてを理解してしまう。泣きそうな顔で笑顔を作る七瀬留美は恐ろしいほどに脆そうだった。
　自分は最低だと思った。
「ごめんなさい！　私は最低です、」
「いいの。ごめんね、気を遣わせて」
　七瀬留美の笑顔を直視することが出来なかった。
大切な人を二人失った、まだ成人もしていない少女

の顔は、底が見えないほどに悲しかった。
　思う。自分が何もしないでいた時間。あの少年と話していた時間。高槻の傍にいた時間。その時間に何かをしていたならば、もしかしたらあの三人組は今も無事に生きていたかもしれなかった。思っても仕方がないことを思って、
「私が、私がもっと早く動いていれば──っ！」
　口にしても仕方がないことを口走る。
　七瀬は真顔で言う。自分のすぐ近くに顔を寄せて、
「自惚れちゃダメだよ、葉子さん」
　心底真剣な眼差しで、自分の目を見つめた。
「葉子さんのせいじゃない。あのふたりが死んだのは、葉子さんのせいじゃない。勝手に責任を負わないで。ふたりが死んだのを、勝手に自分のせいにしないで」
　葉子は喋れない。喉に絡まる何かのせいで声が声にならず、脳を走る何かのせいで思念が思考にならなかった。
「だから、自分のせいなんて言わないで。お願い」
　そう言って七瀬留美は一粒の涙もこぼさずに笑う。
「あたしは、あのふたりの分も生き続けてやる、って決めた。あのふたりのことは死ぬまで忘れないけど、それでも、生きていくって決めた」
　七瀬の言葉は、強かった。
「葉子さん。絶対、生き残ろう？」
　七瀬の目は、優しかった。
「それじゃあおやすみなさい、葉子さん」
　七瀬の手は、温かかった。

　程なく眠りに落ちた葉子を残して七瀬が部屋から立ち去ろうとすると、柏木耕一と鉢合わせになる。
「目、覚めたみたいだな」
「うん。すぐに寝ちゃったけどね」
「──そっか」
　ドアを静かに閉めて部屋を出る。
「彰君は？」

「まだみたいだね」
　小さく息を吐いて耕一は答える。流石にあれだけの傷を負っていては、体力の回復もなかなか難しいのだろう。しかし耕一から更に聞くと、容態は良くなってきているようなので少し安心する。
　会話が途切れる。この診療所の周囲はすごく静かで、殺し合いがすぐにでも起こるかもしれないなどとは思えなかった。沈黙を嫌った七瀬が口を開く。
「潜水艦がこの島の何処かにあるらしいんだ」
　高槻から聞いた情報をそのまま口にする。
「死に際の高槻が言ってた。脱出用なんだって。みんなが元気になったら探してみるのもいいかもしれないわね」
　想像はしていたが、耕一からは大袈裟な溜息が漏れる。肩を竦めて耕一は言う、
「あんな奴のこと信用できるか？」
「わかんないわよ、そんなの」
「今まで自分たちを殺し合わせてきた奴だぜ？　俺は簡単には信じられないな、そんなこと」
　当然の反応だった。大きく溜息を吐いて更に言葉を続けようとした耕一を制し、七瀬が口を開く。
「――それは、わかってるけどさ。あたし、あいつと少しだけ話したんだ。わかんないけど、あたしは、この情報は信頼できるかもしれないって思う」
　七瀬は真っ直ぐに耕一を見て言った。
　七瀬の目には不思議な確信があって、耕一は瞬間気圧される。自分の大切な人を奪った奴が言ったことなのに、何故七瀬はここまで信用出来るのだろう。
「――何故？」
　問うと、少しだけ歯切れの悪そうな間があって、
「女の勘」
　そんな答えが返ってくる。バカな耕一にだって、七瀬のその言葉の裏に何か色々な思いが巡っていることくらいはわかる。言葉に出来ない思い、言葉にするべきではない思い。
　小さく息を吐いて耕一は頷く。

「――判ったよ。確かに嘘情報を流したところで、何のメリットもないだろうしな、あいつには」
言うと、七瀬は少しだけ嬉しそうに笑う。
「潜水艦見つけて、みんなで生き残ろうね」
「ああ」
――みんなで生き残るために。
人の気配がする。本当に微かな気配なので、耕一以外の誰も気付かないような気配だ。
耕一には勿論、その気配の正体が判っている。
「んー、便所。それと外の空気吸ってくるわ」
その気配が何をするつもりなのかも判っている。
「？　わかった。あんまり遠くに行かないでね」
怪訝そうな顔をしている七瀬に背を向けて、耕一は気配の動く方に向かう。
「わかってるさ」
すぐ帰る、
と言おうとしたけれど、辛うじて思いとどまった。

546　ぼくらは間違ってゆく

夢を見ていることが判っていて、自分が眠っていることも判っていて、眠っちゃいけないことも判っていて、彰の看病をしなければならないことも判っていて、それでも初音は、彰の眠るベッドに倒れこんだまま、指を動かすことさえも出来なかった。
初音も疲れ切っていたのだ。看病をされる側であってもおかしくないくらいに。
多分夢の中で、自分は彰と言葉を交わしている。
「彰お兄ちゃん」
うん。ありがとね、初音ちゃん。初音ちゃんのお陰でだいぶ救われた。すごく助けられたよ。
「わたしの方が救われたよ。ずっと、ずっと」
ううん。君の方が僕にたくさんのものをくれているよ。今してくれていた看病もそうだ。何より、好

きな人や友達を亡くして心が壊れかかっていた僕に、生きる意志を与えてくれたのは君なんだ。
「わたしは、何もしてないよ」
君がそばにいて、笑ってくれただけで。君が僕らから離れても、必死に生きていてくれただけで、僕は例えようも無いくらい救われたんだ。だから、お礼といっちゃあなんだけど、君に新しい日常をあげたかったんだ。
「新しい、日常？」
今は、哀しいだろうしつらいだろう。泣けばいい。死ぬほど泣けばいい。泣いてもいいんだ。堪えなくてもいいんだ。好きなだけ泣いていいんだよ。日常を失うって言うのは、それくらい悲しいことだ。
「——ッ」
だけど僕は、どれだけの時間がかかっても良いから、日常に戻って欲しい。君は僕に生き続ける新しい理由をくれた。君にも新しい、生き続ける理由が見つかればいいと思う。僕は、そのために戦おうと思うんだ。
「彰、お兄ちゃん」
君のために僕は戦うよ。
「勝手だよ！　だめだよ、彰お兄ちゃん、」

それじゃあ、さよなら。

初音は夢から舞い戻る。夢の中で遠くに歩いていく彰の姿があまりに恐ろしくて、これ以上夢を見続けてはいけないと思った。目が覚めればすぐ傍に彰はいるのだ。
いる筈なのだ。
「彰、お兄ちゃん？」
ベッドの脇に置かれていた防弾チョッキやサブマシンガンが無い。血で汚れた彰の上着や、ぼろぼろになっていた靴もない。
そして、ベッドのふくらみは気付くと消えていて、そこには微かな温もりだけが残っていた。

風が吹いて初音は思わず顔を上げる。開け放された窓。さっきは開いていなかった筈の窓が盛大に開け放され、舞い込む風で初音の髪が俄かに舞い上がる。事態を瞬時に理解することは、今の疲れ切った初音の頭では酷というものだろう。
それでも、五秒もすれば意味は判る。
目の前が真っ白になった。

——高槻は殺した。後は自分の親族一人残らずぶち殺せば良いだけだ。あいつらは何処にいるのだろう？　熱に浮かされた頭で彰は懸命に考える。身体中がずきずき痛む上に右足を引きずりながら歩くので移動速度は出ない。
何処でも良いじゃないか。
そんな事を脳髄が命じる。歩き続けていれば何処かで見つけられるだろう。何処かで。
脳髄の声に魂が首肯する。
少し狂ったような眼差しで彰は歩く。

「行かせないよ」
そんな声がするまで、彰の頭は自分の目の前に立ちはだかっていた男に気付けもしなかった。
「耕一さん」
肩を竦めて耕一は笑う。
「とまあ、止めたところで君は行くんだろうな。管理者をぶっつぶしに」
右腕には小銃。弾数がそれ程残っていないだろうサブマシンガンよりは、余程有効な武器だ。あいつを殺してあの武器を奪っていくのもいいかもしれない、とまで考えた自分が流石に危険だな、と思う。
止めるのなら結局暴力で薙ぎ倒すしかないのかもしれないけれど、腕力では彼には敵わないだろう。
「ええ。行きますよ」
彰は答える。驚くほどにかすれた声で、いつから自分の声はこんな雑音のようになってしまったのだろうと思う。
言うと耕一は笑う。笑っているくせに目はちっと

も笑っていなくて、彰は少しだけ身じろぎする。
「止めるつもりなんか無いよ。ただ、ちょっと待って欲しい。君は本気で今すぐ行くつもりか？　だとしたら、君はあまりに自分の怪我の程を判っちゃいないようだとしか言えないね」
「もう、治りましたよ」
身じろぎしたまま、しかし彰は強い口調で答える。
「馬鹿を言ってるな」
「そうですね、僕は馬鹿なんですよ。だから馬鹿に構わないでくれますかね？」
挑発するようにそう言った。耕一が何かを言う前に彰は再び足を引きずり歩き出した。構っていられない。無言の耕一の横を通り過ぎて再び森の中に足を踏み入れようとしたところで、
思いもかけない言葉を聞いた。
「俺も付き合うよ。俺もどうしようもない馬鹿だからな。君のやることに付き合おうじゃないか」
声が出なかった。

「……それこそ馬鹿げてますよ？　あんたの役目は今診療所にいる三人を守ることだ。その為に僕は独りで出てきたんじゃないか」
「俺に劣らず馬鹿だね、お前は。これから先、いったい誰が彼女たちを殺しに来るというんだ？」
言葉が出なかった。反論のしようも無い。それはそうなのだ。実行部隊として野に放たれた高槻が殺された以上、これから先殺人が起こる可能性はひどく低いし、あの閑散とした場所は、実際隠れ家としては適している場所かもしれない。
だが。それでも、もしもということがある。誰かがあそこを守らないでいたら、どうなる。
「初音ちゃんが言ってたよ。君が新しい日常をくれるんだ、君に生き残って欲しいってな」
そんな彰の思いを他所に耕一が呟く。初音の名前を出され、彰の意識は耕一の声に向く。
「君は生き残らなくちゃ、いけない」
耕一の言葉がひどく胸に染みる。コーヒーに融け

ていく砂糖のように、ゆっくりと染み込んでいく。
生き残らなくちゃいけない。
思う。
自分が生き残ることには、もしかしたら何かの意味があるのかもしれない。
柏木耕一は強いのだと思う。外見からして体力が自分より優れていることは判るし、その言葉の持つ力から心が優れていることも判る。彼と一緒に戦えば、もしかしたら二人とも死なないで帰ることが出来るかもしれない、とも思う。
彰はそれでも言った。
「――一人も二人も変わらないですよ。僕だけじゃなく、あんただって死んでしまうかも知れない」
彼までが死んでしまえば、初音の希望の火は完全に消え失せてしまうと思った。
耕一は答える。
「構わないさ。大切な人が三人死んだ。俺はそれの仇討ちだ。いなくなって悲しむ人は殆どいない」
「それじゃあダメなんだ。あんたが死んだら、初音ちゃんの希望の火は全部消えてしまう！　わかってるんですか？」
吐き捨てるように言うと、耕一はそれこそ眼光だけで人を殺せるくらいに強い目をして、同じくらい強い声で答える。
「お前こそ何も判ってない！　お前ももう既に初音ちゃんの希望の火なんだよ。お前が死んでも、俺が死んでも、それで初音ちゃんの火は消えるんだ。どちらかが終わればそれで全てが終わる！」
「でも、」
「独りで戦ったらお前も俺も死ぬかもしれないけど、俺とお前、二人一緒なら、二人とも死なないで帰れるかもしれないだろ？」
その言葉で、何も言えなくなった。彰は殆ど泣きそうになる。この男が吐く言葉がすごく頼もしくて、まるで本物の兄のようにまで思えた。

「――行こう」
「脱出手段の捜索はあの三人に任せて、俺達はこれ以上死人が増えない内に、全部終わらせよう」
「――はい。犠牲は、あったとしても、僕達が最後であるように」
「馬鹿。生き残るんだよ、俺たちもな」
耕一は、肩を竦めて笑った。
彰も、同じようにして笑った。
「行きましょうか」
「ああ」
七瀬彰と柏木耕一は肩を並べて歩き出した。
強い風が吹いていた。何処へ続くとも知れぬ、冷たい風が吹いていた。風は自分が何処に向かうかも知らない。ただ、何処に向かうべきかだけは知っている。終わりに向けて風は吹くのだ。
風のように二人は歩き出す。
風の辿り着く終わりに向けて歩き出す。

547　迷い

何度となく駆けた林道を、軽やかに走る人影があった。差し込む朝日が木々に遮られ、櫛のように彼女の行く手を照らしている。
木陰と交互に投げかける光を、横目で眩しげに見ながら、千鶴は呟いた。
（今日も、快晴ね……）
朝日は、青空を約束するように輝いている。清々しい一日の兆しが、なんだか白々しく思えて悲しかった。
ほどなくして、小屋が見えてきた。たいして遠くはないから、当然ではあった。順調なら往復三十分とかからない。むしろ耕一へ謝罪するのに要する時間の方が、はるかに長いだろう。
少しばかりしゅんとして、戸口に立った、そのとき。

死体が、あった。
（刺殺⁉　これは……⁉）
血液が逆流する。
僅かな金属音を立てて爪を開くと、素早く姿勢を低くして小屋に張り付き、あたりを窺う。遠目に死体を観察すると、傍らに長い長い髪が添えられていた。
（あれは……七瀬さんの……ね……）
自分もそれなりの長髪だけに、その行為の意味は解らないでもない。
彼女の無念が、身に染みる。きっと今では楓のような髪形になっているのだろう、そう思って……しんみりとする。
そんな気持ちをよそに、髪はそよそよと風に揺れていた。
（……行こう）
小さく息をついてから、頭を強く振って気を取り直す。静かに息を吸い、止めると同時に静かに扉を開いてみる。反応はなかった。
音もなく進入し、階段を素早く上がると、箪笥でカモフラージュされた戸口の前まで、一気に駆け抜ける。そこで千鶴は気抜けした。箪笥はずらされ、ドアは開いたまま。部屋は、無人だったのだ。
（何者かに襲われ、それに追われて……？）
しかし、全ての装備は運ばれていた。浩平の死から出発までは、さほど慌しいものではなく、恐らくは逃げた襲撃者を追った、というほうが正しいのだろう。
それが、どういう事かといえば。
三十人を切った今でも、順調に殺人は続けられているということだ。
迷う。
耕一と七瀬。
そして初音。
今、どこにいるのだろうか。

手掛かりは、何もなかった。
部屋の時計を見ると、時間はまだ、たっぷり一時間半以上残っている。
再びあてもなく、耕一を探しに行くのが正解だろうか？
それともやはり、戻って報告するのが筋だろうか？
そのとき。
千鶴の迷いを断ち切るかのように、屋内に侵入する人の気配がした。

548　断罪（前編）

体の中が、熱い。
脳がうねるような感覚。
体が溶けてしまうような感覚だ。
僕の新型爆弾。次々と地球へ爆弾を落としていく。
地球上の人々が阿鼻叫喚の悲鳴をあげ続ける。
まるでいつもの妄想の中にいるような感覚だ。
瑞穂ちゃんが、沙織ちゃんが、瑠璃子さんが、月島さんが……天野さんが……みんなが、
「助けて！」
と口々に叫ぶ。
規模こそ小さいが、この島は、その世界によく似ていた。
あさましい、血で汚れた地獄の世界。
自分だけは助かりたい……と、口々に叫ぶ愚かな人達。
僕は、無慈悲にも最後の爆弾を、書いた。
「………」
ゆっくりと目を開く。
見たことのない部屋、見たことのない場所、知ら

ないベッド。
ゆっくりと朦朧とした頭で、あたりを見回す。
「気がついたのか？　祐介」
男が、いる。
部屋の隅に置かれた事務用の机の前に座って。
物音に、椅子ごと回転させてこちらを見やる。
長瀬源一郎。よく知っている人物。
僕の——叔父だ。
「……」
あれほど会いたかった叔父に出会ったというのに、心はまったくと言っていいほど動揺しなかった。
「ああ、そうか……そう硬くなるな。ここには、俺とお前だけしかいない。いろいろ話したいこともあるだろうが……とりあえず落ち着いてろよ」
別に動揺などしていない。至極落ち着いている。
寸分違わない自分の心臓の音が妙に大きく聞こえる。規則正しく血液を送り出す音。その振動までが体中を軽く震わせる。
「お前は、ここに来たんだな」
その台詞に祐介は自分の手を眺める。血の赤。乾いた血の跡が、こびり付いている。
ようやく、祐介はその自分の置かれた状況を思い出した。
だが、心が騒ぐこともなかった。
「祐介、ここは、ある選ばれた人間しか入れない場所だ。いや、正確には……ある選ばれた人間は入れない場所……とでも言うべきか」
カチッ……
ジッポを取り出し、煙草に火をつける。
紫煙が宙に舞った。いつもの叔父の銘柄の煙草だ。昔、よく嗅いだ匂いが祐介の鼻をつく。
「胃爆弾……あったよな？」
紫煙をひとしきり吐いてからそう切り出す。
「逆らったら爆発する、取り出そうとしても爆発する……そういう『設定』だったな。爆発する……という設定は放送で流れた通りだ。解除されている」

源一郎が美味そうに煙を吸った。
「確かに解除されたが……別の機能はいくつか残っている」
源一郎が口にだすことはなかったが、爆弾の現在位置捕捉センサーもそのひとつだ。
「今回のも、それだ。爆弾を体内に入れた者がこの施設に入ることは許されない。お前は、そんな所に迷いこんだんだよ」
「……」
源一郎は、『お前達』とはあえて言わなかった。
「……ここは、そんな場所だ。隔離施設、というわけだ」
祐介がここに入れた理由。それは長瀬という名に於いて、爆弾を取り付けられることのなかったイレギュラーの参加者だからだ。
他にもロボという理由に於いて取り付けることができなかった来栖川製のメイドロボの参加者が約二体いたが、死んだ——いや壊れた今となっては、もはやどうでもいい話だ。
「お前は、俺達を、恨んでいるか？」
どのような意味が込められているかは分からないが、そう、聞いた。
「汚いかも知れないな、俺の意見も言わないで」
黙っている祐介を見て、源一郎は力無く笑った。
短くなった煙草を銀色に鈍く光る灰皿でもみ消すと、すぐに二本目の煙草に火をつけた。
「煙草が多くなってイカンな……。学校ではガミガミ言われたもんだが、ここでは、誰も文句は言わないからな」
「……」
「それはまあ、置いといて、だ。俺は、このゲーム、あまり好きじゃない」
ピクリと、祐介のこめかみが動いた。
「御老達がどう考えているかは知らないがね。少なくとも、俺とフランクは好ましく思っていないはずだ」

正確には、フランクは寡黙すぎてよく分からんところもあるがな……と笑った。
「正直、すまなかったな。言葉で言えば、陳腐かも知れないが。一応、言っておきたくてな」
「……」
「お前は、ゲームの参加者だ。だが、今までの話で気付いてると思うが、お前には爆弾が入っていない。爆弾は生死判定も兼ねている。お前と……あと彰だな。その二人は死んでも確認されない限り放送されない」
——ちなみに、セリオとマルチは、長瀬源五郎が別の手段で生死判定装置をつけていたので、それで判断している——
「お前と、彰、そしてもう一人の誰かの三人だけが生き残ったら、おそらくはこのゲームは終了だろうな」
判断する手段がないからな、と笑った。
「まあ、つまり、だ。おまえは——ここにいろ」
「……」
「……残念だが……」
かなり言葉を選びながら、ゆっくりと切り出す。
「お前と一緒に行動していた少女は、保護できなかった。とりあえず命に別状がない程度には手当てしてはやったが……保護は、できない。俺がどうにか出来るのは、お前だけだ」
悲痛な顔。祐介は、ただその歪む叔父の顔を眺めていた。本当に『ただ』眺めていた。

549　命の教え

不可思議であった。
少女の肩には縛り付けられた布——往人の銃弾による傷によるものか。そこから未だに出ている事だろう、血が布を僅かに紅く湿らせていた。
だが。
——血の臭いが、薄い。

血を纏わせ。
機械のように、表情一つ変えず。
問答無用で人殺しを行っていたあの殺人鬼は何処へいったのだろう？
無論、完全に〝やる気〟が失せたわけではあるまい。その右手に握られた銃がそれを如実に語っている。銃口が往人の額を捉える事は、まだ、無かった。
「殺しは、止めたのか？」
疑問。
少女の目が、往人を見た。
冷たい目。
「止める――止められるとは言いません。一度、このゲームに乗った以上は。ただ、無駄な殺しは」
「……無駄な？」
「例えば」
すう、と右手が挙がる。
コルトガバメントの銃口が往人の額を捉えた――
「ここで引き金を引くような真似の事……です」
「……」
後ろでは。
恐らくは、晴子がその手に握る銃を少女に向けている事であろう。
人を殺そうとする想い――それが、殺気を起こさせる。
背中に伝わる、冷ややかな〝何か〟。
それが、それだ。
――分かりたくもない。
「人に銃を向けるような真似は関心しない――脅しとも取れる」
「……」
「とりあえず、下ろしてくれ。後ろのオバサンに一緒に撃ち抜かれたらかなわん」
「居候……撃ち抜かれたいんか？」
失言だった。
腰を下ろせば、風が強い事が分かった。

張り詰めた精神状態で歩き通せば、そんな事すらも分からないという事か。
無論。
今、目の前に居る者に神経を集中せざるを得ない状況であるというのは、間違いない。
どうやらそれは、晴子にとっても同じらしい、――当然だ。
晴子には、観鈴を守る義務がある。
それに。
観鈴が、いつ人質代わりにとられるか分かったものではない。
万が一、そうなったら――
「良い風ですね」
少女――茜と名乗った――が、何と無しに呟く。
往人は無言のまま。
「――血の、臭いがキツくてしゃあない」
代わりに晴子が返した。
返事と共に、少女を睨み付けた――睨み付けたのは、目だけではない。
銃口。
「おまえ……何人殺った？」
臭い。
殺した者だけがその身に纏う、死臭。
それが分かるというのか――不意に、往人は哀しく感じた。この親子だけは、血に染まって欲しくないと思うのに。
少女は。
時折、その顔を歪ませる。
それは、頭の中で殺した人の顔が浮かぶ故にだろうか。
知る由も無い。
「――七人」
じゃきっ。
「――止めろ」

「黙っとき、居候」
「もう一度言う……止めろ」
「黙っとけ言うんか！　こんなけったくそ悪いゲームに乗ったクズ目の前に置いて、黙っとけ言うんか！」
「観鈴の前で、殺す気か」
横を見る。怯えている。
目の前の少女に？
――否。
隣に立つ、自分の〝母親〟に。
「くっ……」
「――殺すというのなら、構いません」
「!?」
銃を向けられた少女の声。
その声は、この状況に於いて、尚、冷ややかに。
「ただ、黙って殺されるわけにはいきません……約束ですから」
「――っ！」

気が付けば。
コルトガバメントの銃口は、観鈴を捉えていた。
これでは、撃てない――！
「精一杯、生き残るんです……例え、あなた達を殺してでも」
観鈴は今度こそ、目の前の少女に怯えていた。
自分に向けられた銃口。
そして、恐るべきことに、全くと言っていいほど、それに殺意が感じられない事に。
「……」
無言。
晴子は銃を下ろした――同時に、茜の銃口も観鈴を放した。
それでも。
睨み付ける視線は、殺意を帯びている――。

550　指向性

社を離れるときは、あっという間だった。
ただひたすら坂を下り、林道を抜けて行く。結花とスフィーは、結界に対する果てしない考察を更に加えていた。
そのうしろに、黙々と歩く黒い影。
小脇に抱えた大きな本に、黒マントとトンガリ帽子。時代を超えて現代によみがえる魔法使いが、そこにいた。端から見るとぼーっとしているようにしか見えないのだが、来栖川芹香の頭脳は高速回転していた。ちょっと前に三人で行った、リストの分析を一人脳内で続けていた。
（……危険人物は、やはり能力者）
気になる人物を思い浮かべ、再びリストを開く。

＞御堂
【強化兵】：戦闘能力のいくらかは制限されるが、技術的なものに衰えはない。
（……顔が怖い……）

＞国崎往人
【法術】：現状まま。
（……目付きが邪悪……）

気になるのは、この二人だ。
オカルトに詳しい芹香は、組織側の新興宗教についても若干聞き知っていた。そのため、生き残っている不可視の力使いに危険人物はいないと判断した。鬼の伝承についても知っており、柏木耕一も特に危険とみなさなかった。
「あれー？　芹香さん、またそれ見てるのー？」
「なになに、こんなのが好みだとか？」
「……（ふるふる）」

……好みかどうかは関係ない。

個人的感情をよそに置くと、国崎往人が気になる。こちらを睨みつけるような三白眼がギラリと光っている。

法術というのは……こういう人物が使うものだったろうか？

それに……〝現状まま〟とは、どういうことだろうか？

「うんうん、人は見かけによらないもんね」

「そーだね、実際は、どんな人なんだろうねー」

「……（ふるふる）」

……どんな人かは興味ない。

能力を制限する結界が島内にあるのは、これ以上なく確かなことだ。そして、制限のかかり方にはムラがあり、纏めてみると指向性がある。

制限は技術や知識には全くかからない。

物理的能力に関しての制限はそこそこ。

精神的能力に関しての制限はかなり強い。

芹香の知っている法術は、間違いなく精神的なものを根幹に発するもの。

それが、現状まま？

……現状？

現在の情況と、同じ？

……このリストを編集した際、すでに結界の影響を受けていたと？

ピンと来た、という奴である。そうであれば、この目付きの悪い青年から、結界に関する何かが得られるかもしれない。打つ手のない今となっては、唯一の頼りかもしれない。

「またまたー照れちゃってー」

「しょうがないなあ、前言撤回して探してみる？」

「……」

「どうせ社も見つからないしねー」

「こっちには銃もあるし、なんとかなるよ！」

……相変わらず、会話は通じていなかったが。
それでも国崎往人を探すという結論は、満足のいくものだったから……黙っておくことにした。

551　幽霊さん？

この島は、悲しみに満ちている。
たくさん、たくさん辛い目にあって、たくさん、たくさん人が死んだ。死体だって、どれほど見たか覚えてられないほどだ。
観月マナは、目の前の死体に手を合わせ祈っていた。
（死だけは、どうにもならないものね）
多くの医療従事者が、諦めとともに漏らす感想を抱いて、開け放してある扉に向かう。何の装備も持たない死体があるということは、誰かが持って行ったか、どこか別のところに……多分、この小屋に……放置したままと言う事だ。
鞄を開き、機関銃と拳銃に目をやってから考え直す。苦笑を浮かべて、念のために拳銃だけを鞄の外ポケットにねじこみ、室内へ入る。
ソファーが二つくっつけてあった。誰かが寝てたらしい。
キッチンへ向かう。食器がたくさん……洗ってある。乾燥棚の底は、まだ水滴が残っていた。数時間前ね、と分析しつつ、思わず苦笑する。こんなときでも、普段どおりに炊事してしまう人もいるんだな、と考えて。箸の数を数え、それなりの人数がここを利用してたと推理する。食料はあまり残っていない。利用者が持って行ったのだろう。
（国崎さんは……ここにいたかしら？）
求める人物の手掛かりを探して、階段を上る。
きらり、と何かが光った気がして。
階段を上りきって、廊下を曲がろうとした瞬間だったろうか、くるりと視界が回転し、床が目前に迫

っていた。
脚を払われ、同時に首根っこをつかまれたまま床に叩きつけられていた。マナはそのまま、背中に圧倒的な殺気を注がれ、恐怖を遥かに通り越し、硬直していた。
（もう、こんな化け物しか残っていないのかしら？）
そう思うのと同時に、あっさりと殺気は消え、首の戒めから開放された。
（解んないひとだわ……）
目の前で平謝りして、小さくなっている女性。これが先ほどの、化け物じみた殺気を発していた人物と、本当に同じ人物なのだろうか？
「で……あなた、誰？」
気を取り直して、若干態度大きめに聞いてみる。
「柏木……千鶴、です」
しゅんとして、黒髪の女性が答える。
「……はあ？」
柏木千鶴は、先ほどの死亡者放送で聞いた名だ。生存している柏木は耕一と、初音だったと思う。
「初音さんじゃなくて？」
「はい」
「耕一さんじゃなくて？」
「……はい」
「幽霊さんじゃなくて？」
「……はい」
「じゃあ、なんでよ……」
マナの開いた口は、塞がらなかった。

552　断罪（後編）

「実際は、一部わずかに禁止区域があることを告げなかった俺達も悪かったんだが――」
まあ、それも罪のうちだな、言い訳にはならない。と呟く。

「本当はな、祐介。俺達にあの娘――天野美汐を助ける権限なんてないんだ。例え、ルールとして説明されていない禁止区域に踏み込んだ少女が瀕死になったとしても、我々の救済措置なんてない」
　また、煙草をもみ消しながら、三本目の煙草に手を伸ばす。
「血を流して気絶していた彼女を助けたのは、俺の独断だ。だが、俺に出来ることはここまで。これ以上は、問答無用で消去されてしまう。というか、もし気付かれたら今の行動でも――お前を保護したことも含めてだな――俺は用済みとして処理されてしまうだろう。……高槻のように、な」
　紫煙が舞う。すでに閉めきられた空間は視界がかすむ程の煙に包まれている。
「高槻は、死んだよ。全員な」
　最後にそう付け加える。祐介に、動揺はなかった。
高槻が死んだことにも、『全員』という単語にも、反応はしない。
「彼女は、腕の止血をした後、森の中に置いてきた。そうそう他の参加者に見つかることは無いだろうが、それも彼女の運次第だろう。だが、どちらにしろあの少女も――」
　生き残ることはできないだろう、と告げる。
「一応、念の為に、これは取っといたがな」
　ポリ袋の中に、大量の氷と、手首。
「特殊なポリ袋だ。中はクーラーボックスになっている。この中の氷が溶けることは二、三日はあるまい」
「……」
「このゲーム、日和見でいられる程甘くはないぞ。過去に開かれたゲームでも、同じように反抗した者達がたくさんいた。だが、いずれもすべてたった一人になるまでゲームは続けられた」
　……いや、例外は一度だけあったが――と、源一郎。
「だが、それは常人には不可能なことだ。それは、

彼らが皆人並み外れた人間だったからこそ為し得た奇跡だ。だから、お前はここにいろ。そうしていれば安全だ。少なくとも、お前だけは。ここだけは、この禁止区域だけは、俺が絶対の存在だ。俺がここにいる限りは」

なにせ、この施設には俺しかいないのだからな。と自嘲気味に笑いながら——ふう、と、溜息を漏らす。煙も一緒に漏れた。

「ゲームが終われば、遅かれ早かれいずれはバレるだろう。バレたら、死ぬ。俺がな。だが、お前は大丈夫だ。ここにさえいれば。参加者は何をしたってルール無用、バレたところで生き残るために俺を利用したということで受理されるだけだ」

源一郎の、選んだ道だった。

「お前を保護できたのは奇跡に近い。爆弾兼発信機がなかったのだからな。もう、死んでいるかもしれない、とも思った。それは、彰もだがな」

運がよければ、彰もここに迷い込むだろう、とも言った。

「俺がこんなことを言うのは憚られるが……命は粗末にするな」

軽く笑いながら、それでも目は真剣だった。

「……俺が、憎いか？」

「……」

祐介は何も言わない、何も答えない。

「無理にとは言わん。お前にも思うところがあるんだろうからな。お前が自ら選んだ道なら、信じて進む道なら、俺に止める権利はない」

反応こそないが、祐介の視線はずっと叔父の顔に注がれていた。

ただし、どこか遠くを見ているように、その瞳には何も映していないようにも感じられる。

それほど、祐介は無表情だった。

「俺にできることは、ここまでだ。あとは、自分で考えて、自分で決めろ」

再び机に向かいなおし、何らかの書類に筆を走ら

せはじめた。
それを最後に、あたりを沈黙が包みこんだ。
僕は、必ず天野さんを守ろうと、決めた。
だけど、手首だけの天野さんが、僕に優しく笑いかける。

ソレハゲンジツ——

守れなかった。
今、僕はここにいる。こんな場所にいる。
瑠璃子さんが言った。
——長瀬ちゃん、才能あるよ。
僕に、そんな才能はないよ。
——でも、来てくれたじゃない。

ドコニ？
僕に、電波は感じられないよ。
ここに来たのだって、偶然だったんだ。
ココッテドコダ？
——偶然でも、来てくれたから、きっと通じてたんだよ。
僕に……そんな力はないよ。
——あるよ、長瀬ちゃんには。とびっきりの強い力が。
瑠璃子さんが、僕に何かを手渡した。
僕の、新型爆弾。体中を電波が駆け巡る。

ソレガ――ゲンジツ

沙織ちゃんが言った。

――本当は、みんな狂っているのかもしれないね。

退屈な日常に。

もう、先が見えちゃってるじゃない？

学校行って、卒業して、

就職して、働いて……。

みんな、刺激を求めているのかもしれない。

狂っては、癒して、狂っては癒して。

その繰り返し。

退屈な現実から、何かの刺激を求めて。

ソレガ――ゲンジツ

彰兄ちゃんが言った。

――日常は、そこを日常なのだと思えば、
　きっと、そこが日常なんだ。

この島の現実。みんな、刺激を求めているのかもしれない。

狂わないように、退屈な日常から、逸脱した狂ったゲームを。天野さんも、彰兄ちゃんも、非日常の中に刺激を求めて、日常に変えた。

魂が、癒される。

体内を駆け巡る、電波で。

たいくつで、つまらなくて、それでも、優しかった日常、そして、島と心の狂気の狭間で、ボクハユレル。

天野さんが言った。手首のない天野さんが、手首になった天野さんが言った。

――私は長瀬さんを信じます。
今度こそ、最後まで……
――私は長瀬さんを信じます。
今度こそ、最後まで……
――私は長瀬さんを信じます。
今度こそ、最後まで……

ソレガ――ゲンジツ。
それが、現実だ。

ゆらりと、祐介の体が揺れた。ゆっくりと立ち上がる。
「……」
源一郎は、机に向かったそのままの姿勢で呟く。
「やはり、行くのか。祐介」
「自分で決めたなら、そうするといい」
どんな表情をしているかは分からない。だが、軽く溜息をつきながら。
「本当は、生きていてほしい。祐介、何かあったらいつでもここに来い。もちろん一人でな。……待っている」
再び、もう何本目か分からない煙草に火をつけた。
「ふぅ！……煙草は、死んでもやめられんな」
祐介が、叔父の真後ろに立つ。
「……それが、お前の答えか？」
源一郎の首に、巻きつけられた細いワイア。
斬鋼線とも呼ばれる糸。
「……」
「俺の……罪だからな。ケリをつけなきゃならない罪だ。いつか誰かに裁かれるのだと思ってた。それが、お前なら俺は何も文句は言わんさ。ただな……」
すっ……と源一郎が息を吸った。煙草の火種が、一際明るく輝く。
グッ……ほぼ同時に、首に糸が食い込む。血が、垂れた。

「お前は、死ぬな。泥をすすってでも生き延びろ。たとえ、つらくても……な。身勝手かも知れないが、それが――」
俺の願いだ。
吐き出された紫煙と共に、鮮血が、舞った。
祐介が、目の前のピンと張られたワイアを見つめている。
それとも、その先のどこか遠くを。
張られた糸の真ん中から、付着した血が小さな玉を作って。
血溜まりに一つの雫が跳ねて落ちた。その音が、ひどく切なく響いた。

燃える施設。
地面の墓石の横、地下への入り口から煙が立ち昇る。
その中から一人の少年。
無表情、そのままに。煙たさも見せず、咳き込みもせずに。
手には、銀色のワイアと氷詰めの手首。
「……」
あたりを見渡す。
特に何もない、特に感慨はない。
傍から見れば、そんな表情にもみえた。
あるいは、あまりの悲しみに何も感じられなかったのか。
一度、手の中にある氷漬けの手首を見つめて。
ゆっくりと、歩き出す。どこかに向かって。
地下から黒煙が立ち上り、やがて消えた。

553　残された者達

――遅い。
男性のトイレが長い理由など知るよしも無い（知りたくもない）が、それでもこれだけ遅いのはどう

いうことか。
三十分は経っているかもしれない。
しょうがない。そう呟いて、七瀬留美は外へ続くドアを開けた。

それから十分。
市街地の中を走り回る姿。
探し求める姿。
だが、探せどもその姿は見つからず。
——そう、耕一は何処かへ行ったのだ。
三人を置いて。
「あのバカ……！」
走りながら、ぼやいた。
どうやら、耕一は「バカ」と認識されたらしい。
しかしそれは、同時に、慣れてきたということか。
そう。
浩平もそうだったのだから——。

その後もしばらく探し続けたものの、見つかる事は無かった。
はぁ、と深く溜息を付くと、とりあえず二人の所へ帰る事にした。
ドアを開く。
出迎えたのは——
「留美お姉ちゃんっ！」
と、悲痛な初音の声。
彼女は、その顔を涙でぐしゃぐしゃにしていた。
「彰お兄ちゃん見なかった⁉」
「彰くん……？　今、寝てるところなんじゃ」
「違うの——」
息を吸い込む。時折、しゃくり上げながら。
「居なくなっちゃったの……私が、寝てた間にっ」
「……彰くんも？」
何て奴らだ。あの二人は、この守られるべき乙女達を置き去りにして行ったのだ。なんて自分勝手な奴ら。

「……耕一お兄ちゃん、も？」
はっ、とした声。
失言だった。
……だが、もう仕方ないか。
七瀬は開き直る事にした。
「そうよ。どうもおかしいと思ったら、彰くんと一緒にどっか行ったみたいね、あのバカ」
「……」
耕一と、彰。
何の為に出て行ったなんて答えは、彰の行動を思えば考えるまでもなく分かる。
初音はそれなりに頭の回転が速かった。
落ち着いていた。自分でも不思議なくらいに。
少なくとも、「バカはいくらなんでもひどい」と考えられるくらいには。
耕一は、彰を止めようとしたのだろう。ならば、どうして彼らは今ここにいないのか？
答えは簡単だ。
決意した彰を耕一は引き留める事は出来なかったのだろう。ならば、耕一は少しでも負担を少なくしようと——
耕一お兄ちゃんは、優しいからね。
そんな事を思った。
「探そう」
「へっ？」
初音の呟きに、忌々しげにぼやいていた七瀬が頓狂な声を上げた。
「探そう——ほっといたら、彰お兄ちゃん、死んじゃうよ」
「——」
七瀬留美は思い出す、自分と同じ名字の男の怪我の状態を。
幸いにも、見た目の凄さとは裏腹に怪我自体は比較的大した事は無かった。
生活に支障が出るような傷も、無い。
だが、あまりにも失血が酷い状態だった。

ここに来てからそう間も経っていない。体力が回復しているはずがない。
その状態で出ていった――
なるほど。死ぬ気に違いない。
ならば尚更、耕一の行動は怨めしい。
何故、止めなかった？
――ったく、バカね。
そんな風に思った。
「でも、どうするの？　いくらなんでも、葉子さんは動かせないわ」
「……うん」
後ろのドアを見やる。あの奥では、葉子が休息を得ている筈だ。
腹を撃たれた。場合によっては、死に至る危険性もある。無闇に動かせば、傷が悪化する。
しかし。
目覚めて、一人だったとしたら彼女はどうするだろう？

眠りに落ちる前の行動を思い起こす。
慌てて起き上がろうとした――
起きて再びそれを行わない理由は無い。
……どうする？
「――葉子さんが起きるまでは、ここを動けないわね」
「そんな！」
悲痛な声。何と痛々しげな表情。
決して間違ったことを言ってるつもりはないのに、悪い事をした気分にされる。
直接非難してくれたほうが、幾分も気分は楽だろうに、と思わせるほど。
「あいつらだって考え無しに行動しないでしょ。あの、バ――ああ、いや、耕一さんもいるしね」
「――」
「……ここは、お兄さんを信じてあげましょ、ね？」
そう、優しく説き伏せる姿は、まさしく乙女。

――あたし、良い保母さんになれるわね。
内心はこれであったが。
乙女の道は、遠い。

554　戦場デート

久々に見た太陽に、心が洗われる気がした。
耳に届く森のざわめき。
枝葉の間から暖かい太陽の光が漏れて、僕らを照らしつづけていた。
太陽というものはいいもんだ。
心を明るくさせる。
そして今、俺、北川潤の隣には女の子という太陽がいるのだ！　もちろん俺の心は明るく、新しい希望に満ちあふれているのである。
こんな状態ではパソコンもＣＤも戦場のコトも、なにもかも忘れしまいそうになる。
ある意味この状態ってデートだよな。
そんな風にも思うようになっていた。
「ジュン、きもちいーね」
レミィはとびっきりの笑顔で言った。
「あぁ、そうだな」
俺はそっけなく答える。
「もっとちゃんと答えたほうがイイヨ。そのほうが女の子、喜ぶよ」
自分の顔と俺の顔の間に人指し指を立ててレミィは言った。
それなら今度はもっとちゃんと答えてやるかな。
そんな風に考えながら、足を進める。
ふと浮かぶ疑問。
レミィは俺のことをどう思っているのだろうか？
「はやく、ジュン！」
考えていると、少し歩くスピードが落ちていたようだ。十メートルほど前で、レミィが俺に向かって手招きをしていた。

俺は軽く小走りで追いつく。
「行こうか、レミィ」
「うん」
また、レミィは笑顔。
そしてその笑顔はとてもかわいい。
俺たちは一緒に一歩を踏み出した。
パキッという音が鳴った。
「え……」
横に居た筈のレミィは居ない。
地面を観るとそこに伏していた。
パンツの色は白と黄色のストライプ。
それをすかさず俺は脳内メモリに格納した。
「大丈夫か？」
しゃがみこんで、レミィに向かって手を伸ばす。
「イタタ、チョットすりむいちゃったよ……」
「お前、よく何も無いとこで転げられるな」
「すごいでしょ？」
「あまりすごいとは言えないな」
そんなやり取りの後、二人で笑った。
太陽は相変わらず僕らを照らしつづけていた。
俺はこのときレミィのポケットの中で起こった重大な事件について知る由もなかった。
俺の頭の中では、未だに白と黄色のストライプが何度もリピートされていた。

555　死神を連れて

「——」
「——」
沈黙。
国崎往人（三十三番）は、口を開く事も無く、大きめの石の上に腰掛けていた。近くに居る三人は、皆、腰を下ろした状態で止まっている。
しかしその間を巡るのは、殺意、畏れ、疑念——その渦中に居る少女——里村茜（四十三番）は、のらりくらりと風を浴びている。

あれからどれくらい経ったことか。
茜の右手には、コルトガバメントが。
晴子の右手には、シグ・ザウエルショート９㎜が。
そして、往人の手にはデザートイーグルが握られていた。
もし。
誰かが、己の獲物を持ち上げたなら――
恐らく、放たれる弾丸の数は一つではあるまい。
また、それに奪われる命も――
一つではあるまい。
完全な膠着状態。
複雑に凝り固まったパズルの中に、彼はいた。
二言三言、話をした。
茜の経緯――あれから、何があったか、など。
自分の経緯――神尾親子と出会った時の事、など。
その話の中で、彼女は。
氷上シュン、彼の死を知った。
自分が撃った相手の死。

その反応は。
「そうですか」
と一言だけ。
それでも。
その顔が、一瞬だけ悲痛に歪むのが解った。
――彼の願いは、叶ったのだろうか？
知る由も無い。

茜は、この状況を楽しんでいるわけではない。
むしろ不快に思う。
出来れば、誰にも会う事無く済ませたかった。
だが、物事はそう上手くは運ばないものだと、彼女は知っている。
（……それにしても、祐一は遅いです）
あの後、教会で何があったか分からない。
「誰」から「誰」を助けるのかも知らない。
それでも。
何も聞かなかった。

必ず帰ってくると思っている。
ヘタレだが、約束は守る男だ。遅くとも。
いや、待て。
そもそも約束なんてしただろうか？
そう言えば、そんな事を口にした覚えは無い。
（……しておけば、良かったかもしれません）
そんな事を思い——少しだけ、目を閉じる。
やがて、ゆっくりと目を開けた茜は静かに立ち上がった。
晴子は、すぐさま銃を構える。
躊躇いは無い。この子を守る為なら。
……その為に、怯えられようとも。例え、嫌われようとも。
「大丈夫です……何もしません」
「……信用出来んわ」
晴子は言い放つ。
しかし茜は臆せず、自分の鞄に銃をしまい込んだ。
他に武器は見当たらない。
それでも。
「人を——待ってるんです」
踵を返す。
「ここで、のんびりしてるわけにはいきませんから」
「呑気なもんやな。後ろからブチ抜かれるかもしれへんのにか？」
「撃てませんよ、貴女には」
冷ややかに、茜。
少しだけ振り向いた顔から見える瞳は、冷たく。
「なっ……」
「守る者があるから、撃つ。それと同時に、守る者があるから、撃てないんです」
晴子は隣を見た。
自分の娘が——観鈴が——晴子を見ていた。
僅かに塗れた瞳に映る、自分の顔。
恐ろしい。これが自分の顔か。
「お母さん……」

願うような呟き。
――殺さないで、お願い――
目が、そう語りかけているようで。
「くっ……」
敢え無く、銃を下ろす。
それを見届け、茜は前を見た。
森へ。
帰ってくるだろう人を、待つために。
「それでは」
「……ちょっと待て」
後ろから、声。
男の声。
振り向けば――デザートイーグルの銃口が、己の額を捉えていた。
(今日はよく銃を向けられる日ですね……)
そんな事を思い、息を吐く。
「勝手に行かれると困る。その待っている人とやらと襲ってこられたらやっかいだからな」
「――じゃあ、どうするんです？」
彼の言ってることは正論だ。
茜自身でもそう思う。
信じてくれ、なんて〝人殺し〟が言ったとして誰が信用するだろうか？
――往人の出した提案は、極めて単純であった。
「俺達と一緒に行動してもらう」
「……本気ですか？」
「かなり本気だ」
「居候――マジで言うとるんか」
晴子は、半ば呆れた様子だった。
何を言うかと思ったら、それか？　――といった感じだろうか。
「こいつが誰かを狙うにしろ、後ろに俺達が居ればそれも出来ないだろ」
「でも、もしウチらを襲ってきたらどうするんや？」
晴子はいらいらしながら言った。

そうなった場合、一番危険なのは自分の娘である観鈴なのだ。かわいそうに、観鈴は銃口を向けられた恐怖にまだ震えていた。
「その時は——死んで貰う。だが、まさかそんな危険な賭けにはでないだろうが……で、どうする？」
問い掛ける。
無論、選択権は無い——向けられたデザートイーグルの銃口が、そう語っていた。
溜息一つ。今度は、酷く長く。
返事の代わりに、再び自分の居た場所に戻った。

556　その選択が示すもの

それは、弥生が喫茶店から出たばかりの時のこと。
「なんだか……重たいですね、少し整理しておいたほうがいいでしょう」
あの二人の思い出を作っておいた所。そこにおいておくわけには行かないが、火器が多すぎて、逆に体力を浪費するのは不利だ、という判断は適切だった。
いったん軽装備で拠点を確保すべきと判断した弥生は、もうひとつ、慎重だが、誤った選択をしてしまった。弾の節約を考え、武器を今までの経験から選ぶことにした……一つはエアガンだったにもかかわらず。
その選択が示すもの、それが、運の尽き。

557　影の世界へ

もしも、この大きな木に登ったなら。
二階の窓から、なんだか間の抜けた、滑稽な様子を見ることができる。ベッドに腰掛けた子供が腕を組んで、成人女性を詰問する姿が、そこにある。
「じゃあ、なんでよ……」
ぽかんと口を開けて、思考を停止しかけるマナに、千鶴は答えた。

監視のこと。発信機のこと。爆弾のこと。死亡放送のこと。耕一と七瀬、そして初音のこと。
「ふ、ふーん……」
マナ自身も、高槻の所在を予測するにあたり、管理体制を考察したことがある。無線の隠しカメラと、その情報を集めて送る送信施設の存在。そう考えた。
しかし、この部屋ひとつに関しても、死角なくチェックすることはやはり不可能だ。それに発見されれば壊されてしまうだろうから、どうしているのだろうとは思っていた。
「衛星、ねえ……」
ちょっと話が馬鹿馬鹿しく大きい。このゲーム自体、そうなのだが……宇宙スケールとは……。
ひとしきり感心した後、なんとなく立ち上がり、上を向いて考えてみる。
「……ま、関係ないけどね」
結論は、実にあっさりとしたものだった。
「あたしは、もう誰かと戦う気もないし。高槻を倒そうと思ったこともあるけど……結局追い出されちゃった下っ端でしょ。それに今、あたしが吐いたら……不自然だもの」
そうでしょう？　と確認するようにマナは言った。
なるほどこの娘は頭がいい、千鶴は感心しながら答える。
「……そうですね、せめて相打ちの形をとらないと」
管理の抜け道を通る条件を、二人で確認してみる。
全てを確認した、そう思ったところでマナが鞄を手にする。
「それじゃ、先に行くわ」
「……はい」
そうだ。
自分は、この少女と同行するわけにはいかない。行けば、遠からず衛星に発見されるだろう。この少女に限らず、全ての生存者と同行することはかなわない。

……少なくとも、日の当たる場所では。
戸口を出ると、マナは振り向かず天を見つめて言う。
「それじゃ、行くから。耕一さんと七瀬さん、それに初音さんに会ったら無事を伝えておくわ」
「はい、お願いします」
「だから……あなたも頑張ってね。わたしの分も、お願いするわ」
「……はい」
機関銃（これが〝わたしの分〟らしい）を手に、千鶴は頷いた。
何のために、管理システムを欺いたのか。それは、もちろん管理側と対決するためだ。他に何の利点があるだろう？
脱出にせよ。
打倒するにせよ。
千鶴達は、三人だけで戦う他に道はない。光の世界を避けるように、影の世界を行く他に道はない。

……それは覚悟していたことだが、やはり辛いことかもしれない。
帰路を考えても、時間はまだ余裕がある。
それでも、なんとなく寂しくなって、千鶴は駆け足で学校に舞い戻った。

そのころ教室の一角に、巨大なバリケードが築かれていた。扉を封鎖するように積まれた机が、まもなく天井まで達しようとしている。
「梓さん、ボク疲れたよぅ……」
「これで最後だから頑張れって……よっ……と」
これでひと安心だろ、そう言って梓は床に座り込む。それに習って、あゆもぺたんと座る。
「千鶴姉、遅いなあ」
「そうだね……」
二人で時計を眺める。

そのとき、あゆのお腹がくーと鳴った。
「ははっ、あゆってホントに食いしん坊なんだな」
「うぐぅ……」
梓は笑って、恥ずかしそうに縮こまるあゆの頭を、くしゃくしゃと撫でた。
「まあ最近、なんだかんだでマトモなもん食ってるしね。初音の料理も、なかなか上手いもんなんだよ」
「へぇー……」
それを受けて、あゆは驚くべき一言を発する。
「ボク、千鶴さんの料理も食べてみたいなっ！」
「……」
「？」
完全な空白が、そこにあった。
「……あー……アタシ、ちょっと寝るわ」
「えっ？」
あゆに背を向けて、ごろんと寝転ぶ梓。
「お、おいしいんじゃないのっ？」
「うん、そう思っていればいいよ。じゃあ、おやすみ……くー」
「え、えっ、そう思っていればいいよって、なにっ？」
「くー」
「気になるよう……梓さんっ、梓さんっ……」

その半時後。
扉を開くなり押し寄せる机のために、あやうく下敷きにされかけた千鶴が、半ば殺意を秘めて梓を叩き起こした頃。
あゆは二度と千鶴の料理を食べたいなどと、言わないようになっていた。
……あゆは知っていた。
ちゃんと食べれるものを使っても、謎なものになる場合がある事を。

558　いつでも笑みを

小さな溜息がどちらともなく漏れる。柏木耕一と七瀬彰は少しだけ途方に暮れながら、恐らく殆ど同時に溜息を吐いた。
「どうやって行こうか」
言ったのは耕一だった。やるべきことは判っている。終わりに向けてまっすぐ進めばいいのだ。だが自分たちは風ではない。思考する力がある人間だ。最良の道を決めて歩かなければいけない。長瀬一族と戦うための最短の手段を見つける必要がある。
「目星をつけなくちゃな」
「ええ」
そう答えたところで彰の身体がふらつく。当然だ。凄まじい怪我をしているくせに、ほんの僅かの睡眠しか摂っていないのだ。
「大丈夫か？」
「大丈夫です」
言う彰の顔はとても大丈夫には見えなかった。白くはないが青い。血の気の引いた顔の真ん中にある眼差しだけがやけにぎらぎらとしている。
「やっぱり休んでいこう」
「大丈夫ですよ！」
耕一の口調に多少なり腹を立てたのだろう、彰はムキになって反論する。色の悪くなった唇を震わせて言う彰を、赤子を宥めるような調子で笑い、耕一は言う。
「別に君のためじゃない。これからどうするかを考えなくちゃいけないだろ。ちょうどいい機会だよ」
「――でも」
何か言いたげな彰を制し、
「格好付けるなよ。満身創痍で、無理をして戦って、それで死んだら格好良いとでも思ってるのか？　映画やなんかのハードボイルドが、血を流して戦う姿は、確かに格好良いよ。けどさ、今、俺達に必要な

のは格好悪くたって生き延びることだ。よく考えて動かなくちゃな」
　早口で一気に捲し上げると、彰は何も言えなくなってしまった。勝った、とばかりに笑顔を見せ、強引に彰の腕を引いて木陰に近づく。
「ほら、そこの木陰で休もう」
　彰からはその後何の抵抗もなく、結局二人は並んで木陰に座ることになる。涼しげな風が時たま吹く場所だった。

「主催者がこの島の周辺にいる。これが大前提だ。そうじゃなけりゃ俺達にはどうしようもない」
　南に向けて昇り始めた太陽が眩く輝いている。木陰に座り込むと、耕一はゆっくり喋り出した。
「……叔父さん達は、必ずこの島の周辺にいる筈だ」
　耕一の言葉に、淡々とした口調で彰はそう答えた。断言だった。小さく息を吐いて空を見上げる七瀬彰を見ながら耕一は首を傾げる。
「どうして判る？　この島にいるのは高槻のような下っ端だけで主催者は居ない可能性の方が高いんじゃないか？」
　彰は笑い、
「高槻は死んだでしょう？　誰かが監視役をしなければならない。高槻以下の人間にそれを任せるのは論外だ。高槻がいなくなった今、叔父さん達がしっかりと監視しなくちゃこのゲームが破綻することは目に見えている。だから今、監視は叔父さん達がやっていると僕は思う」
「ふむ……」
　一理はある。下っ端の人間に任せっきりでは、現在の〈管理者─参加者〉の危うくなったバランスを支えきれるかは確かに怪しいものだ。彰は続ける、
「僕は先程、爆弾管制の装置を破壊した。他にも管制装置があるかも知れないけれど、僕が管制装置を破壊した直後に『爆弾は解除した』という放送が流

れた。これは、大本の管制装置が一つしかなかった、ということを示唆しているように思えませんか？　だとしたら僕たちは爆弾には脅えずにいつでも逃げられる。それこそ泳いでだってね。そんな僕たちを止めるために、叔父さんたちはこの島の近辺にいる必要がある」
　熱に浮かされた表情で彰は喋る。耕一は吸い込まれるような感じでその言葉に集中する。
「――上空から監視して、脱走者を見つける、ということは可能じゃないかな？　その処理を下っ端に任せて……とかは考えられると思う」
「上空から監視というのは、なんだか馬鹿げた事だと思いませんか？　『鑑賞』ならともかく『監視』なんだ。確実性があるとは思えない。迅速な指示を出すためにはこの島の近くにいなくてはね」
　その時ふとアイディアが耕一の頭に浮かぶ。その意見が彰にどんな影響を齎（もたら）すかも考えず、あっさりと言葉にする。

「けどさ。そもそもの問題としてこういうことも考えられるんじゃないか？　こうすれば上空からの監視も充分確実性を持つだろう。体内の爆弾に発信機をつけておく。そうすれば、」
　その時彰は、恋人との大切な約束を思い出したような、そんな奇妙な顔をした。

「そうだ――あの時は頭がおかしくなってたから気にも留めなかったけど」
　彰の思考が一気に活性化する。意味を考えろ。まだ自分が生きていることとの意味を。
　あの爆弾管制施設での死闘の中で、自分の身体が爆弾で吹き飛ばなかった理由を考えろ。血の気の足りない頭で必死に考える。思念を言葉にする。
「そうですよ、爆弾に発信機が備えられていれば確実なんです、それだけで全部が全部解決する」
「だろ？」
「けど、それじゃあおかしいんです！　それならど

うして僕は生きているんですか？」
「え？」
「僕は爆弾管理者だった高槻のいた施設で戦ってきた。もしも発信機が爆弾の中に入っているなら、僕は施設に入る前に爆弾で粉々になっていた筈なんです！」
「――それは、」
「そう、絶対に発信機は爆弾に備え付けられている。僕が主催者なら間違いなくそうする。けれど、それならどうして僕はまだ爆死していないんですか？」
彰は頭に浮かんだことを全て言葉にして考える。
そして思い出す。あの施設の屋上で、高槻は確かに自分に向けて爆弾爆破のトリガーを引いた。なのに自分は生きている。その事実を思い出し、やがて自分がまだ生きていることの重大な意味に気付いて、彰は小さく息を吐く。
「――僕は、最初から死んでいたのか？」

耕一は真剣な眼差しで何かを考える彰を見ながら、今の彼の言葉を反芻する。
「最初から、死んでいた？」
「あ、いや、こっちの話です」
それっきり彰は黙る。黙って考えている彰を見ながら、耕一も同じように考える。
爆弾に発信機が付いているとすると、彰が爆死していないことは確かに矛盾だ。だからと言って発信機を付けないメリットが思いつかない。
やがて彰がゆっくりと口を開く。
「恐らく、爆弾には生死判定装置もついているんだろうな……。バトロワの首輪と一緒の機能だ」
耕一は小さく唇を噛みながら彰の声を聴く。
「主催者が僕たちの身体の中に爆弾を入れていたのは多分間違いありません。そしてその爆弾には、現在位置を捕捉するセンサーと生死判定装置が備わっていると考えられます。体内に仕込んでおいて吐いたら爆発する、というような設定にしておくといい

んだ。僕達は主催者にあらゆる情報を吐き出してぃた。もしかしたら盗聴器もついているかも知れませんが、胃の中からでは音がくぐもってよく聞こえないでしょう」
彰は続ける。
「そう考えると色々な事が想像できる。例えば僕は爆破を操作する装置を破壊した。結果、吐いても、爆弾は爆発しなくなったと思う。どうなりますか？」
「死んだ事になる、な」
「それで管理者に捕捉されることなく行動が出来るようになる。今の時点では爆破管制装置がなくなったことは僕と他数人しか知らないけれど、もしも全員にこの情報が伝われば、僕達は勝てる」
彰はゆっくりと立ち上がる。行きましょう、と耕一に声を掛け、小さく目を閉じる。
「けど、今すぐ爆弾を吐くことは少し躊躇われます。下手をしたら僕達の死亡放送が流れて、初音ちゃんたちを混乱させてしまうかもしれないから」
耕一は頷く。
「——一旦戻るか？」
自分達の行動が主催者側に読まれたまま、というのは戦うに当たっては不利だ。
「戻ったら、今度こそ彼女達に止められてしまう。それでは意味が無い。行動を読まれることは不安ですが、今は時間が惜しい」
彰は目を開いて耕一の顔を覗き込んだ。耕一はゆっくりと立ち上がり、
「最短の道は考えても仕方がないな。もしかしたら主催者はこの島にはいないかも知れないが、それでも動き出さなければいけない」
そう言った。
「——きっと、います」
彰が小さく囁いた声を耕一は聞き逃さなかったが、追及はしなかった。きっと何かの確信と共に彰はそう囁いたのに違いないのだから。

彰はフランク長瀬の顔を思い出している。無口だけれど優しくて大きな叔父のことを。
高槻と対峙した時、確かにあいつは自分の中の爆弾を爆破させた筈だ。なのに自分は死ななかった。ここから導き出される結論は一つ。
——自分の体内には、最初から爆弾など入っていなかったという事なのだ。とどのつまり、自分は最初から死人扱いだったのだ。
何故自分にだけは爆弾が入っていなかったのか？　考える。自分に何をして欲しくて爆弾を入れなかったのか。歩きながら彰は考える。
そんなこと判りきっている。考えるまでも無かった。彼らは自分に殺されたがっているのだ。
このどうしようもなくくだらない戦いを終わらせてもらいたいのだ。他でもない自分に、その責任を負わせたのだ。同じ長瀬一族の自分に、全ての後始末を押し付けたのだ。もしかしたら長瀬祐介にも爆弾は入っていないかもしれない。
殺されたがっている奴らが、この島の近くにいない訳がないのだ。
フランク長瀬の顔を思い出す。無口だけれど優しくて大きな、けれど間違ってしまった叔父のことを。
彰は、せめて彼らを楽に殺してやろうと思う。

559　郷愁

「全く……どうしてこう無茶をするのかしらね？」
あきれたように郁未は言った。
——再会の瞬間は、ひどく滑稽だった。
「……凄い格好ね」
「君のほうが凄い格好だよ」
思い出したかのように郁未は体を見回す。……郁未は自分がマニア受けしそうな格好のままであるこ

とを思い出した。
「い、い、いろいろあったのよ！」
「いや、それにしてもその格好は――」
「し、し、仕方ないじゃないのよ！　人助けよ人助け！」
「どういう人助けなんだか――」
「だって放っておいたらあっちの方が私よりずっと悲惨――」
　そこまで言って、郁未はハッ、と思い出した。ブルマの上からスカートを履いている耕一の無残な姿を。しかしそんな郁未にも予想出来てはいなかった。
――まさか今ごろ耕一がコスプレさせられる羽目に陥っていようとは。
　もちろん如何に少年の卓抜した洞察力を以ってしてもそんなことを見通せるわけは無い。
「てっきり露出狂の気があるのかと――」
「何であなたがそんなこと知ってるのよ!?」
「――え？」

　結局、恥ずかしい思いをしたのは郁未だけだった。
　紅い顔をしながら、郁未は少年の髪を拭う。服に染み込んだ血は拭えないが、せめて顔と髪だけでも、そう思って。
「それで？　結局何がどうなってたのよ」
「……潜水艦が在った」
「はあ？」
「地下の空洞に、潜水艦の停泊場所があった」
「えーっと、それって……」
　郁未はちょっと顎に手を当てて考える。
「ちょっと!!　それって凄いことなんじゃないの？」
「まあね」
「やったじゃない！　それがあればこの島から簡単に脱出――って、ダメか。どうせ敵の人間がいっぱい乗っている、っていうオチなんでしょうね」
「……いや」

「え、乗ってなかったの？」
「……乗っていた」
「じゃ、ダメじゃない」
「……もう、乗っていない」
「……何で？」
「……」
「……まさか全員殺したなんて言わないでしょうね」
「……言い訳はしない、確かに乗員五人は全員息絶えた。結局僕は偽善すら最後まで守ることが出来なかったわけか――」
　悟りきった表情で自嘲する少年。瞬間、ごすっといい音を立てて郁未の鉄拳が少年に炸裂した。胡坐をかいたまま少年は横にぶっ倒れた。
「そんなことを聞いてるんじゃないの!!　状況を正確に描写しないと殴るわＹＯ！」
「あ……あのぅ郁未さん……もう何か痛いんですけど……」
　拳に肩を怒らせて目から光を発する郁未を前に、少年は小動物のようにガクガクブルブル震えている。
「さあ包み隠さず話しなさい！　都合のいい自虐史観はお腹いっぱいよ！」
「いやそれは何か違」
「フーーーーッ!!」
　威嚇をする猫のように全身の毛を逆立てた郁未が睨みをきかせる。もちろん、少年に逆らうべくも無い。小一時間、少年は要所要所にツッコミを入れられながらその全容を自白させられた。
　話が終わって、一番最初の郁未の行動は深い溜め息だった。
「なんだ、殺ってないんじゃない。興醒めね」
「いや郁未さんその不穏当な言葉遣いは流石にどうにかならないかと思うのですが」
「シャラップ！」
　座り込んだ少年の目の前に伸ばした人差し指を突きつけ、そのままずずいと郁未は彼の眼前に接近す

る。
「殺ってないものは殺ってないの。いくら武勲が欲しいって言ったって、そういうところで誤魔化しをしちゃいけないわ」
「僕は……」
少年はそれを聞いて一瞬口ごもる。
「僕は、そんなもの欲しくなんか無い。そんなものに価値は無い。殺人の数をカウントしてそれを成績にするなんて悪趣味は——」
差し出された人差し指が、少年の唇にちょん、と触る。
「だから——」
彼女はにっ、と笑って言った。
「撃墜数ゼロの落ち零れ、こんなところでも人一人殺せなかった甘いヤツ。……ねっ、そうなんでしょ？」
揺り籠のように包み込む優しい響きが、少年の動きを止める。
「いいじゃない、それで」
膝立ちの前かがみで少年の口を塞いだまま、郁未は囁く。
「どんなに力があったって、使えなければ……使わなければ……一緒だよ」
——それが、幸せなことだって、気付いて。
少年はそっと彼女の指を触る。唇の戒めを解いて、言った。
「——そうだね」
頬に掛かっていた血の痕が落ちて、綺麗な顔になった少年がそこにはいた。

560　独白

……あの時。
どうしてあんな事を言ってしまったのだろう？
どうして黙って引き金を引けなかったのだろう？

わたしの大切な人達……わたしの居場所と信じてたお兄ちゃん達の側。だけど、お兄ちゃん達は行ってしまった。
お兄ちゃん達はこの戦いに決着をつけに、その戦いには私は邪魔でしかなくて。
待っていよう、二人の帰りを。
それがベスト。
……けど、
もし、お兄ちゃん達が帰ってこなかったら？
あの酷い怪我だ、その可能性は十分に有り得る。
その時は——わたしの居場所はどこに残っているのだろう？
初音は、居場所を失ったという少女の事を思い出していた。
わたしもああなるのだろうか？
——そうなるくらいなら。
初音は手にした銃を構える。

狙うのは、倒れている少女。
「何をする気⁉」
「こうすれば……もう、ここに居る理由もないっ！　早く耕一お兄ちゃんと彰お兄……彰さんを助けに行くの！　もう、大切な人を失いたくないの！」
「止めなさい！」
「じゃあ、行かせてくれるの⁉」
「あなたが葉子さんを殺して、あなたの大切な人が喜ぶとでも思うの⁉　あのバカ達は、あんたの日常を取り戻すために出て行ったんでしょうが！　そんなことも分からないあんたじゃないでしょ！」
　自分の意見をこの場に居ない他人を利用して主張する。七瀬はそういう論法はあんまり好きじゃなかったが、なりふり構ってはいられない。彼らがこんなことを望んでないことは確かなのだ。
　その証拠に大分冷静さを取り戻してきたのだろう初音は、逆に動揺を隠せない様子だった。

「……わ、わたし……こんな……」
　自分のとった行動が信じられないのだろう、初音はぶるぶると震えている。手にした銃を取り落とした。
　目には大粒の涙。
「ごめんなさいっ……ごめんなさいっ……わたし、わたしっ……」
　床に頽れる初音。
　そんな初音を七瀬は優しく抱きしめた。
「……仕方ないわよ。こんな状況だもの。追い詰められたら、人は判断力が鈍るし現実から逃避したくなったりもする。あたしだってそうだったし」
「……う、うぅ」
　七瀬は人差し指で初音の涙を拭う。だが、次々と溢れてくる涙は止まる様子を見せない。
「そんなふうに泣けるなら、あなたはまだ大丈夫。……そうね、あたしこの周辺を探して誰か信頼できる人を見つけるわ。その人に葉子さんを委ねたら、あたしたちはあのバカ共を探しに行きましょう？」
　そんなことこの島では望むべくもない。そんなことは七瀬にも分かっていた。だから、この提案は初音を落ち着かせるための方便のはずだった。
　……だが、
「……あんたたち。そんな大声で喚いて悠長なことね。外まで丸聞こえだわ。ゲームに乗ったアホが聞いてたらあんたたちの命は無いわよ？」
　現実とは案外都合良くできているものなのかもしれなかった。

561　七瀬と柏木

「……大体の事情は聞いたわ」
　と、ベッドの上に腰をかけた少女――マナと名乗った――は言った。ベッドのサイドテーブルに肘をついている。
「だから、悪いけどこの人をお願いできないかし

ら？」
七瀬からのその言葉を聞いたマナは、深く溜息をついて言った。
「……あんた、何を考えている訳？」
七瀬は、マナのその挑発的な台詞に堪忍袋の緒が何本かはじけ飛ぶのを感じた。
「なっ……！」
（なんて生意気なガキ！）
「だってそうでしょ。身も知らずの私に身動きできない子を預けるなんてさ……無責任にすぎると思わないの？　大体私があんた達を欺いてて葉子さんとやらを殺したら、いったい誰に申し訳する気よ」
まったくの正論に七瀬は言葉を詰まらせる。
「……わたしはあなたを信用します」
口を出したのは意外にも初音だった。
「……どうして？　貴方は自分の都合のためにそう信じこんで言い訳にしようとしているだけじゃないの？」
「……そう、かもしれません。わたしの言ってることはまったくの偽善です。だから……」
そう言って初音は床に落ちたままの銃に向かって歩き、拾う。
突拍子もない行動に七瀬とマナの体が緊張する。
銃を手にした彼女は、マナに向かって歩きだす。
初音はマナの目の前で止まると、銃口を手にして銃をマナの方に差し出した。
「……どういうつもり？」
マナは初音を見上げる。初音の瞳には決意が表れていた。何かを覚悟した表情。マナがこの島で何度も見た表情……。
「もし、あなたが葉子さんを殺すつもりなら、わたしを殺して下さい。抵抗はしませんから」
「初音ちゃん！」
「すみません、七瀬さん。これはわたしの問題なんです。……手出ししないでください」
マナは黙って初音の銃を受け取る。弾倉を空け、

弾が装填されていることを確認し、戻す。
——そして、初音に向けて構える。
ぎゅっと、目を瞑る初音。
七瀬はいつでも飛び出せるように体を緊張させていた。
張りつめた時間が何分にも感じられる。けれど実際は数秒も経っていないはずだ。
「……ばっかみたい」
そう言ってマナは、ベッドの上に銃を投げた。
「いいわ、その菓子さんは私が責任もって看てあげる。あんた達は、そのお兄ちゃん達のところにでも行きなさいよ」
「……ありがとうございます、マナさん」
そう言って初音は微笑んだ。それは、天使のような笑顔だった。
「……無茶するわね、あんた」
七瀬は、緊張から解放された反動に、立ち崩れそうだった。知らぬ間に流れた汗を、上着の袖で拭い去る。制服の汚れが気になったが、もう今更だった。
「……あんた達、名前は？」
「ん、そう言えば名乗って無かったわね。あたしは七瀬留美」
「わたしは、柏木初音です」
「……柏木って、あなた、もしかして柏木千鶴の妹？」
「ええ……今はもういないけど。……お姉ちゃんのこと知ってるんですか？」
「……やっぱり、知らなかったのね。——あなたの姉さん達は死んでないわ」

562　狂乱の鼓動

「先輩っ」
声を掛けられる。ああ、彼女の名前は立川郁美と言って、僕の後輩にあたる女の子だ。同じ部活だから、という偶然の出会い以来、彼女は何故か僕のこ

とを慕ってくれている。
「もう、ちゃんと仕事してくださいよ。次のこみパまでもう日が無いんですからね。印刷所さんに持っていくのが遅れたら先輩のせいですからね」
「分かってるよ、ごめんごめん」
——僕が美術部に入っていたのは単なる気まぐれだった。どうしても入らなくちゃいけないなら、出来るだけ楽そうなものにしようとかそういう浅はかな考えだった。そんな静かな日常が、彼女に出会ってしまったばかりほんの少しねじれてしまったようだ。
「まだまだ精進が足りません！　ブラザー2さんに追いつくには」
彼女と一緒にこういうことを始めたのはもう何ヶ月か前だった。彼女には憧れのサークルがあるらしい。その影響で彼女も本を作る立場へと踏み込んだ。同じ想いを共有できる喜びがそこにはあったのだろう。

——その落書き、かわいいですね。それが彼女の第一声だった。それが漫画を描く事に繋がるなんて予想も付かなかったが、彼女と一緒の作業はそれなりに実になったし、それに楽しかった。それまでの孤独な生活も気に入っていたが、誰かと一緒もいいななんて考えるようにもなった。
「先輩、枠線が曲がってます！　それにここにゴミの消し忘れが！」
「ああ、ゴメンよぉ」
こういうことに関しては彼女が先輩だった。そんなに不器用ではない方だと思っているが、やはり不慣れな作業は難しい。我慢しきれずに僕から筆を取り上げて作業しだす彼女の顔は不思議と楽しげだった。
「もう、ホントしょうがないんだから。先輩はっ」
苦笑いも輝いていた。今までに出来た本は三冊、どれもこれも修羅場だった。その分思い出になった。数を刷るわけではないが、売れなかったらどうしよ

うという不安は尽きなかった。
「全部売れたらいいですねっ」
　それが即売会のたびの彼女の口癖だった。いつも惜しいところで数冊売れ残る。僕からしたら大したものだが、その数冊が彼女にとっては大きな壁のようだった。今回の本は、全冊完売の祈りを込めた渾身の一冊だった。
「今度こそ、目標達成です！」
　握りこぶしを作り、熱く語る彼女。目には炎が灯っているかのようだ。僕にもその気迫が伝わってくる。
「ああ、そうなるといいね」
　本は出来上がり、八月の夏こみに出展した。
　結果は完売、最後にして夢は叶った。それが僕らの最後の即売会になった。
　――立川郁美、彼女はその結果を見ることなく逝った。

「――心臓ですか」
　彼女は僕に病のことを隠していた。電話で連絡を受けた僕は、彼女のお兄さんからそのことを知らされた。僕は彼女のために残していた製本された一冊をお兄さんに渡した。お兄さんはそれを受け取るとありがとう、と言って泣いた。
　――彼女の通夜が終わって、また静かな日々が帰ってきた。

　何だ、この夢は。僕に一体何をしろと言うんだ。やめてくれ、もう終わったことで僕を苦しめないでくれ。彼女はもういないんだ。いくみいくみいくみいくみいくみいくみ、目の前で彼女は死んだ。いないんだ、僕が守りたかったあの小さな女の子はもうどこにもいないんだ。いくみはもうどこにもい

ないんだ。
――違うだろ。いくみなら、もう君の傍にいる。
え……どういうこと、騙されないよ。また幻視なんだろう。
――もう忘れてしまったのか。君が一番最初にそうしたいと思った同居人のことを。
同居人……。ＦＡＲＧＯ……。クラスＡ……。いく…………み？
――感じるだろう。懐かしい、あの匂いを。
いくみ……いくみ……いくみいくみいくみいくみいくみいくみいくみいくみいくみいくみいくみいくみいくみ――――郁未。
ようやく思い出した人影を追いかけて僕は走る。いくつも扉が現れる。その度に扉を叩き開く。少しずつ影に近づく。扉が現れる。叩いて開く。影に近づく。扉が出る。叩く。近づく。扉。開く。近づく。扉。影。扉。影――

「郁未っ！」
やっとのことで追いついたその彼女の方に手をかける。すると彼女がこちらを振り向く。
――振り向いた彼女の顔は、醜くひしゃげて血に塗れ、もはや誰だかわからない。飛び出した眼球が、虹彩だけでこちらを見つめてくる。潰れた脳髄から滴る液が、ぴちゃりと気持ち悪い音を立てた。
「う…………うわあああ！！！！！！！！！！」
どくん、と、音が、する。これは、崩壊の、鐘の音、だ。僕、とい、ぅ仮面を、剥が、す、狂気の、鼓動。近寄、ってく、る、足お、と……。
「――――――――よ」

声がする。
「――ボディチェックよ」
　僕を繋ぎ留めてくれる鎖、ずっと探していた、本当の郁未の声が。

563　つかの間の平和

「ボディチェックよ」
　唐突に郁未はそんな事を言い出した。
「え……」
　髪をとかされているときに眠ってしまったのか、少年は突然のセリフに驚きを隠せない。だがそんな彼に郁未は容赦なく――。
「涼しい顔してるけどさ、あんな無茶なことしてたんだったら、どこかに傷を負ってそうなものじゃない？」
　そう言って、少年の服に手を掛ける。
「い、いや、いいよ僕は……」
　いやいやする少年、だがそんな彼に郁未は容赦なく迫る。
「良くないわよ。そういうこと言う人に限ってなんか深い傷を負っているのを隠してたりするのよね。心の中で悲劇のヒロイン演じられても困るだけなのよっ」
「い、いや、僕は男だし……」
　座っていながらも後ずさりする少年、だが郁未もそれと全く同じ速度でじりじりと少年ににじり寄る。
「逃がさないわよぅ……。人が折角ボディチェックしてやるって言ってんだから、甘んじて受けるのが礼儀というものでしょ!?」
「い、いや、それは何か言葉の使い方を間違っている気が――」
　引きつり笑いしながら突っ込みを入れる少年、だがそんな彼の言葉に耳を傾ける様子もなく、心持ち目に怪しい光を灯した郁未は容赦なく――。
「問答無用！（きゅぴーん！）」

「きゅぴーん！　ってなんだぁぁぁああ‼」
　静かな森に、少年の悲鳴が木霊した。
　――そんなことばっかりしてるから痴女呼ばわりされるんだ、とは、例え知っていても口が裂けても少年には言えなかった。
「しくしく……もうお嫁に行けない……」
「そんなこと言える茶目っ気があったのね」
　パンパン、と手を叩いてほこりをはらいつつ、郁未がジト目で少年を睨む。一仕事終わったぜ、という達成感が伺える仕種だ。
「あ、いや冗談」
　少年はすぐそのセリフを撤回した。その悲痛な叫びも空しく、彼は見事に裸にひん剥かれていた。もとい、上着を脱がされていた。引き締まった肉体は、その幼顔には似つかわしくない男性らしい魅力がある。深い傷は確かに無いようだった――が、郁未が気になったところが二点。
「返り血の割に傷は少ないわね、でもここはちょっと……」
　少年の後ろ肩を優しく撫でる。丁度その部分は銃弾がかすったところだ。
「……ああ、そこか。まあ文字通りの掠り傷だよ。気にすることは無い」
　郁未は何かを思案しながらその部位を眺めている。
「骨に届いているわけでもないし、まあ多少ひりつくといえばそれはそうだけど」
　何をそんなに考えているんだろう、と少年は郁未の様子が気になった。
「……えいっ」
　すると突然、郁未はその部分をグーで殴った。
「あぐっ！」
　……当然、少年は痛そうに呻き声をあげる。
「あのー、郁未さん？　一体何をなさるんでしょうか？」
　傷を押さえながら少年はしょんぼりと尋ねる。

「やせ我慢チェック」
あっさりと郁未は言った。
「えー」
「また痛くない振りされても困るしね」
少年の表情からは不服な感じが満ち溢れている。
しかし、そりゃそんな強さで殴られたら普通は呻き声あげるさ、とは思っていながら、やはり口には出せない少年であった。
「……痛い」
いてぇよぉ、うわあああぁぁん。……とは言わないもののその雰囲気を瞳だけで表現してみる少年。流石に郁未もいたたまれなくなった。
「……ごめん」
「まあそれほどでもないけどね……」
苦笑する少年を尻目に、郁未は別な部分に目をやる。そこは気になった箇所のもう一つ——腕であった。ところどころ血が吹き出して、それが自然に収まった跡がある。これは——。
「——どういうこと？」
郁未は尋ねた。少なくとも、……これは外傷じゃない。
「いや……これはどうしたことだろう」
少年は面食らったような表情をした。長袖で覆っている故に、自分でその様態を見たのは初めてだったからだ。
——知らない。それが反動だなんてことは知らない。ほんの少し人間より外の力を使う度に積もり積もってきたものだなんてことは知らない。例え知っていたとしても、今気付くわけにはいかない。
「血は止まっているようだし、いいけど。……全く、無茶しないでよね」
そう言って郁未は嘆息した。その両手は優しく少年の腕をさすっている。
「……ん」
少年はこくん、と一回頷いた。
「……急いで処置しなきゃいけなさそうな傷も無さ

そうだし、ここで治療できるものも無さそうだな。
――そろそろ服を着ていいかな？」
少年は郁未に尋ねた。が、当の本人はそれを聞いていない。……なにやら少年の腕をさすり続けている。
「……郁未」
少年は疲れた様子で彼女の名前を呼んだ。
「――――――――――――――――――とう！」
かぷ。
「うひゃあぁあああああああああ!!」
「動かないで！　悪い血を吸い出すんだから!!」
れろれろれろれろれろ。
「そ、そんなこと言われたってっ、くはっ」
「放って置いたら感染症を引き起こす危険性があるわ！」
くちゅくちゅ、ちゅるるるるる、ぺろぺろ。
「うっ、嘘だ、絶対君の狙いは別にあるだろおおおお!!」
「うるさいわね！　大人しくマグロやってなさい!!」
にゅるにゅる、ぴちゅっ。
「いっ、いっいやあああああああああああああ！」
静かな森に、またも少年の悲鳴が木霊した。

564　笑顔

「それで、結局どうなったの？」
「その話、さっきしなかったかい？」
「だから続きよ続き！　潜水艦は結局どうなったのよ？」
「ああ……」
少年は、埋もれたまま建物に目を走らせて言った。
「放ってきたよ」
「何で？　もう敵の人間はいないんでしょう？」
「だからといってどうすることも出来ないよ。僕だ

け逃げることは出来ない。高槻ともまだ出会えていない……」
「高槻……」
沈黙が一瞬、二人の間を埋め尽くす。二人はまだ全ての高槻が死んだことを知らなかった。
「……ね、聞いて」
郁未はぼそりと言った。語り始めたのは、ここに至るまでの出来事や出会った人たちのこと。楽しいことも……つらいことも……全てをひっくるめて。耕一の話のときは笑いが漏れて、秋子の話のときは少し暗く。母親の話をする時は……流石に、口が重くなった。少年は黙って彼女の話を聞いていた。
少年の話はそれより少し長引いた。往人との交差から始まって、郁美という、郁未と同じ名前の少女との出会いと別れ。やたら元気だった少女——詩子——の話。そういえば、彼女は元気にしているだろうか？　そしてその先で発見した良祐の死、その後の葉子との邂逅。
「葉子さんに会ったの？」
少年は頷いて、元気そうだったよと言った。それから、彼女も高槻を追っていたことを付け加えた。それを聞いて郁未がほんの少し嬉しそうにしたのを、少年は見逃さなかった。最後に、蝉丸との出会いと地下への侵入の話で終わった。
「そういえば、あの人たちには私も会ったのよね」
と、蝉丸たちのことを思い出し、郁未は一人頷いた。
「地下施設への入り口は……そこに埋まっている」
「うわ……これは見つからないわね」
自分の目でそこを見て、いやそうに郁未は言った。
「でも……、少なくともここから潜水艦まで直行できる」
少年は真剣な口調で言った。
「郁未」
少年は向き直ると、郁未のことを真正面から見つめた。

「……何よ」
郁美はほんの少し、口をこもらせてそう言った。
「僕は、できるだけ多くの人を助けたいと思ってる。でもそれが叶わない可能性は高い。最悪僕が死んだときは、郁未、君だけでもこれに乗って逃げ延びて――」

ちゅっ。

――少年の言葉は、そこで止められた。
「……郁未」
「……バカよね、あなたって。私一人で帰れたって、何の意味も無いじゃない」
郁未は笑った。とても、まぶしく――。
「葉子さんも、晴香も、他の人たちも……あなたも。――みんなで帰ろうよ」
「――うん」
穏やかな空気が流れた。額に残る仄かな温かみがじわっと体中に広がっていくような……そんな気がした。

565 Sweetless Days

二人は歩き出す。足取りが一人の時とは全然違う。これから先の道のりがやけに明るくすがすがしく感じられる。郁未が背負った鞄の重さはそう大したものではないけれど、少年の持った本はそれだけではない何も生み出すことは出来ないけれど、何故だか不安は無い。
「ねぇ」
「ん？」
「高槻を倒したら……どうするの？」
「そうだね……」
少し沈黙して、言った。
「高槻の裏にいる黒幕は潰したいところだね」
笑顔で、いつもどおりの笑顔で言った。

――戻るべき日常など、僕には無い。
――なぜならそれはＦＡＲＧＯそのものだったから。
――ならば僕は、ただ死に場所を求めているだけなんだろうか？
――それとも、本当に、郁未と。
「私は――」
郁未が口を開いた。
「あの人と、決着をつけたい」
「お母さんを……殺した人かい？」
こくっ、と郁未は頷いた。
「――」
「……不服？　私が復讐に走ろうとしていること」
「――いや」
不可視の力が封じられた今、君はただの女の子に過ぎないけど――。
「――君がやりたいことをやればいいさ」
「……あなたは？」
「……ん？」
「あなたは……どうなの？　その、郁美ちゃんを殺した奴とか」
少年の顔から、笑みが消える。
「――――――分からない」
人を殺すことへの嫌悪が沸き立っている。それは喜ぶべきことなんだろうか。本当の自分との乖離が進んでいく。沸き立っているのは……不可視の狂気。
分からない、僕は何処へ行こうとしているのか――。

566　童話戦隊

「ねえ、したぼく。あたしさっきからずっと考えてたことあるの。聞いてくれる？」
蝉丸達と別れ、教会に向かう途中、詠美は御堂に話しかけた。
「ああ、何を考えてた？」

「あんた、今頭の上に動物のっけてるでしょ」
「乗せたくて乗せてるわけじゃねえけどな」
「その光景なんかで見たことあると思ってたんだけど、今やっとわかったのよ。あんたのその格好ブレーメンの音……」
御堂は声を荒らげ、詠美の言葉をさえぎった。
「最後まで言うんじゃねえ、俺もなんだかそんな気がしてたんだが、口に出すと何か失っちまうような気がして言わなかったんだからよ……それにしてもおめえ、いつもいったい何考えて生きてんだ？」
「えっとね……」
詠美の言葉を右から左に聞き流しながら、御堂は思う。
（ブレーメンの音楽隊かよ。俺はロバの役ってわけか。そんな役俺は認めねえ。俺の役はもっとかっこいい役のはずだぜ。そう桃太郎のような。だが桃太郎を名乗るには猿が――いるじゃねえか、目の前に）
「……桃太郎だ」
「えっ、何？」
「俺様達はブレーメンの音楽隊じゃねえ、桃太郎だっていったんだよ」
「でも犬も鳥もいるけど、猿が――ってその可哀想な人間をみるかのような哀れみの目はどういう意味？」
「さあな、どういう意味なんだろうな」
「むっかぁ～～～!!　したぼくのくせになまいき～～～!!　なまいき～～～!!」

567　生キル意味ヲ

自分の存在意義を考えてみる――。
基本的には「足手まとい」以外の何物でも無いと思っている。そして、自分自身すらもそれに甘んじていると。

それでいいのだろうか？
——いいわけ、ないよ。
当然だ。

目の前で、もう随分と長く共に行動している鬼の姉妹が、何やら言い争っている。
口喧嘩の絶えない姉妹だ——
もちろん、その内容も多種多彩だ。
よくそれだけ喧嘩出来るものだとも思える。
無論、それだけ仲が良いとも取れるのだが。
不意に、笑みが零れた。
失った家族の温かみ。
それを、そこに感じてしまったから。
——しかし、胸について言うのは禁句だと思ったあゆである。

——ボクには何があるんだろう？
ふと、あゆはそんな事を考えた。

自分は。
自分で考える限りでは、普通の少女であると。
それはもちろん、「うぐぅ」とか連呼する少女が普通とは言えないかもしれぬが。
——祐一君にも散々言われたし、ね。
いや、しかし。
それでも——
自分は、容易く人を殺す事など出来ない。
確認する。
己が、平常であると。
……「まだ」、平常であると。
だけど。
——それでいいのかな……。
そんな事を思ってしまう。
——イキノコルタメニハコロサナクテハナラナイ
——
絶対の——この島に於いての——ルール。
それに抗うということは。

即ち、死を意味する。
もちろん、死ぬのはイヤだ。
だけど、殺すのもイヤだ。
それでどうやって生き残る？
結局のところ、自分は同行者に頼りっぱなしなのだ。
そして。
同行者に、戦わせている。
もし、万が一。
自分が狙われて、それで。
自分を守る為に、二人が死んだなら――
それは「殺した」のと変わりはない。
逞しくあらねばならない。
一人で――
自分の命を守りきれるくらいには。
それだけの力が欲しかった。
目の前の姉妹はとうとう取っ組み合いの喧嘩を始めている。
相変わらずだ。
こんな状況であるのに。
――いや、しかし。
やはり胸の話「だけ」は勘弁してほしい。

この島に来てから、感じていたものがある。
酷く――哀しい気配？
頭の奥底に、ちりちりと、伝わる何か。
酷く、深い、深い、カナシミ。
いや、それとも――
それの主は何処にいる？
自分だけが分かるそれ。

――ボクだけが分かる――

即ち。
それは、自分の存在意義に成り得るのではないだ

ろうか？
〝それ〟が一体何かは分からない。
だけど。
――ひょっとしたら、ボクだけにしか分からないのかもしれないから。
だから。
探さなくてはならない――
〝それ〟を。
自分が。
自分が此処に在った意味を――
残す為にも。

568　罪と罰

たぶん、あれが一番の罪だったのだろう……私にとっての。
気が付いたら、憂鬱。気分が、晴れない。
どうしたのだろうか？　自分の置かれている状況がよく感じ取れない。
（確か……）
長瀬さんと、一緒で……
海水で顔を洗った、見かけによらずお茶目な彼を笑って。
こんな島だけど、少し自分が幸せに思えて。
こんな状況なのに、悲しんでる人もいるのに。
本当は私も悲しまなければならないのに。
だけど、ささやかだけど、確かにあった幸せだった瞬間。
海岸沿いを歩いて、そして……
「墓石……」
そう、墓石だった。
長瀬さんが寄りかかった墓石がまるで下に滑車が付いているかのように動いて……
「それで……」
中に入った。

（それから……？）
中にある【Staff Only】の扉……そこに入ってから急速に光が私を包んで、
（そこから先が思い出せない……）
軽く、頭を左右に揺らす。かすかに……といった程度のものだけど。
長瀬さんの……

『うん、わかった。何があっても僕はこの手を放さない』

えっ……
私の……
絶対放さないはずの右手の……
感覚はなかった。
「な……」
何……これ……？
なんで……？

——ガサッ……
わたしが……
「い、いやあああああああああああっ!!」
長瀬さんが……
「……」
茂みから出てきた影。
「ゆう……す……け……さん？」
手に握られていた、私の、右手。
「い、いやっ……いやぁ————っ!!」
突き飛ばして、駆けた。
「はあ、はあ……」
もう、どの位走ったのか分からない。
「私の……みぎ……て……」
右手を見た。地面が見えた。
「いやっ……わたしっ……」
そのまま、景色が遠のいていって——消えた。
たぶん、あれが私の一番の罪だったのだろう。

『絶対に放さない！　僕が守り通してみせる!!』
『……長瀬さん……信じていたのに』
『君の手をこれ以上汚す事は無い。僕が自分の手で
――自分を殺す、よ』
『私は長瀬さんを信じます。今度こそ、最後まで』

どうして、信じてあげられなかったんだろう……。
私は、逃げてしまった。
また、私は長瀬さんから逃げてしまっていた。
長瀬さんが、斬った。
長瀬さんが、私の……を持っていた。
錯乱状態の中で、私は、長瀬さんが……恐くて。
そうしなければ、壊れてしまいそうで。
――ダムの小さな亀裂を塞ぐように……私は駆けた。
私の罪。あそこでもし、逃げなければ――また変わっていたのかもしれない。
未来が。

たぶん、それは、私にとって消えることの無い心の痛みなのだろう。
あの子が光の中に消えてしまった――あの時のように。

569　命を越えて伝えるもの

ザッザッザッザッザッ……！

――遠ざかる足音。

逃げられた。
何故、逃げた？

……当たり前だ。
何も分からないうちに右手が無くなってて混乱してるのだろう。そんな中に、突然、失った自分の右

手を持った人物が現れたら、例えそれが誰だったとしても、逃げるに違いない。
きっと。
彼女の中で。
僕は、彼女の右手を奪った人になってしまったのだろう。
酷く、哀しかった。
だが。
正直、撃たれなかっただけでもまだマシなのだろう。彼女はデリンジャーを持っていた筈だ。それが自分の身体を貫かなかっただけでも、幸運だ。
——或いは？
僕だから、撃たれなかった、なんて思うのは……自惚れだろうな。
——探す？
しかし、それは良い結果を生むとは思えない。
彼女は僕の姿に怯え。
そして僕が逃げた彼女を追う。

本来なら、彼女が落ち着くまで待つべきだろう。
……だが彼女を放っておけるか？
答えは、ノーだ。
この島には、どんな殺人鬼が潜んでいるかは分からない。その中で、一人放っておける筈が無い。
手段としては。
彼女から見えない位置で、護る。
つまり、彼女の見える位置にあれば良い。
出来れば、すぐに駆け寄れる場所に。
木の上が最も理想的だが、移動が困難だ。
しかし。
まるでストーカーみたいだな。
そんな事を思って。
一人、微かな笑みを零す。
思いのほか、すぐ近くにその姿はあった。
草の上に倒れていた。
顔が青い。恐らくは、貧血だろうか。

抱え上げた。妙に軽く感じる。
近くの木陰で下ろすと、自分もその隣に座った。
右腕の包帯。その先には——何もない。
顔を顰めた。自分を、戒める。

——アノトキ、ボクガモットチュウイシテイレバ
　アノトキ、テヲニギッテナンカイタカラ

チリッ——

電波の衝動。
悔やめども、悔やみ切れぬ——
その、残酷としか思えぬ事実。
償うには、もはやどうしようもなさ過ぎて。
己を、酷く不甲斐なく思った。

——畜生。
——畜生、畜生、畜生。

——畜生、畜生、畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生
　畜生畜生畜生……

チリチリチリチリチリチリチリッ——

流れ。
行き場の失ったそれが、酷く自分を——癒す。
元来、それは「壊す為の物」。
——僕は、壊れてしまったんだろうか？
破壊。
破損。
壊滅。
かつては感じた、甘美な響き。
それはもはや感じられず。
ただ、空しく感じるだけで。
——不意に隣を見れば。
肩を並べた少女が、涙を流しているのが見えて。
決意する。

自分は。
——僕は。
今度こそ彼女を護る、と。
その為なら。
——タトエ、キミニ、コロサレタトシテモ。
コノイノチ、オシクハナイ。

570 拝啓おふくろ様リターンズ

——拝啓おふくろ様
我慢できずに再び文を送ってしまうバカ息子をどうかお許しください。
僕は驚愕いたしました。
当初、かの婦女子はなにもないところで転んだ様に見え、それはそれはそのまぬけっぷりを腹の底で笑いまくっておりました。
もちろん可愛い女の子のドジに向けられる微笑のようなものでありますが。
しかし違ったのです。
かの婦女子が転んだのは地面から顔を出した根っこにつまづいたからでした。
そしてその根っこは転んだ際に引き千切られていたのです。
なんというパワー。なんという突進力でしょう。
「これが力の一号の実力……」
「ジュン？」
さぞかしタックルでもさせたら強いことでしょう。
いっそ敵とでも会ったら試してみましょうか？
マッハオラ。
タックルさせるときに「Ready Go!!」とでも叫べば「Lady」と語感がかぶって良い感じです。
「てめぇは俺を怒らせた。HA！　HA！　HA！
HA！　HA！　HA！　HA！」
掛け声と共に次々と拳をたたきこむ金髪ヤンキー。

うむ。なかなか良い。掛け声が悪役っぽいが。
「ジュン？　どうしたノ？　怒っちゃヤダヨ……」
どうやら妄想のつもりが声に出ていたようです。
婦女子はいろんな意味の心配で僕の顔を覗きこみます。
「いや、なんでもない。怒ってなんかないって」
「そう？」
その時は確かに僕は怒ってなどいませんでした。
しかし気がついてしまったのです。婦女子のポケットの中で起こった重大な事件に。
CDは散々たるありさまでした。
そう。頑丈だと信じていたあれは、転んだときのショックに負けて割れていたのです。
今思うと、CDを分担して持つことにしたのが失敗だったのかもしれません。
かの婦女子のスカートには、スカートにしては大変珍しくポケットがついていたのです。
CDは一人が持ってるといっきに全て失う可能性があります。
とっておきの切り札となりうるそれを分担して持つのはしごく当然といえるでしょう。
だが、かの婦女子は転んでしまいました。
おかげで緩衝材として一緒に詰めていた「もずくパック」が割れ、CDは散々たるありさまです。
硬めのビニールだから頑丈だと信じていたのですが……。
このもずくのメーカーに対しては怒りを禁じえません。
あとはあの無記入のCDが、あらゆる外的要因に弱い「ミスったーデータ」様に焼かれたものではないことを祈るばかりです。

追記
もずくパックが割れてしまったおかげで、レミィ・クリストファー・ヘレン・ミヤウチのスカートはもずくの汁でぐっしょりです。乾かさないと風邪

をめされてしまうかもしれません。
　こういうとき、男はどうしたらよろしいのでしょうおふくろ様。

　追記二
　この島に来てから、僕の周りには事件が絶えません。
　いつになったらこの現実逃避人格はなりを潜めてくれるのでしょうか。
　このままではどこぞで見た、目覚ましかチップルです。
　それもまた良しとしますか……。

571　調査

　プルルルルッ……ガチャッ
「はいこちら来栖川電工中央研究所プログラム支部……あ、源之助さんですか。……はあ、源一郎さんが、死んだかもしれない？　ちょっと待ってください……えーと、……今しがた、彼のいた施設が破壊されましたね。殺されたかどうかは……ちょっと……こちらでは分からないですね」
　モニターを眺めながら、キーボードを叩く。
　カタカタカタ……。
「ええ、ええ……まあ、そうですね。あそこには参加者は入れないようになってましたから。さらにそこに近づいたのは五番、天野美汐だけですしね……。可能性としては一緒に行動していた長瀬祐介ですかね。あとの七瀬彰……は、今は十九番、柏木耕一らといますね。長瀬祐介で確定でしょう。やはりあの祐介と彰、二人の生死確認が厳しいのは否めませんね。……えっ？　他にもいるだろうって？　あと爆弾機能に気付いた誰か、ですか？　十一番、大庭詠美ならさっき電話した通りですよ？」
　カタカタ……モニターに大きく女の顔写真が映し出される。

「ええ、大庭詠美はずっと御堂といますよ。監視カメラで姿を確認してます。それに、いまさら御堂が彼女を殺すとも思えませんしね……えっ？　他にもいる可能性……ですか？　長瀬祐介以外には考えられませんがね——そんなことで言ってるわけじゃない？　う〜ん……放っておいてもいい気はしますがね、調べてみます。ええ、方法はいくらかありますよ。死亡した時の爆弾情報をログで調べれば、まあ、不審な死に方なんてすぐ目星がつきますよ。あとは調べればいいだけの事です。——ええ、まかせておいて下さいよ。で、見つけたらどうするおつもりで？　……任せる？　無責任だなぁ……私は動くわけにはいかんでしょう。この施設からそう離れられませんよ。まあ、とりあえず調べてはおきますわ。不審な点が見つかったらその場所へ誰かをよこせばいいんじゃないですか？」

　カタカタカタ……モニターに死亡者達の通し番号が映し出される。

「と、言われましてもねぇ……父さんと源三郎さんは結果的に独断で動いちゃってますからねぇ……連絡とれませんよ。なにしろ生死確認さえできないんだから。向こうからコンタクト取ってくれないことには……はい？　戦闘型ＨＭは駄目ですよ。一応この施設の要ですから。なに、分かってるって？……なんてこと言うんですか。一応私達の汗と涙の結晶ですよ。まったく……」

　溜息をつきながらキーボードを叩く。

002……004……次々とコンピューターに死亡者の死亡までの行動ログが高速で映し出されていく。

「ええ、もう始めてますよ。……分かってるなら邪魔しないで下さいよ、まったく……まあ、いいですけどね。何か分かったらまた連絡しますよ……嫌ですよ、それらをどうするかは御老が決めてください。そもそも手出ししないと決めたのはあなたじゃないですか……。とりあえず大庭詠美に関しては私は通しですよ。祐介らがもう一人増えた……と思えばい

いだけですから。私からはそれだけです……はい、では……」
ふうーーっ……
溜息を大きくついた。
「源之助さんもなかなか無茶な注文を出してくれるよまったく…」
一本、煙草を咥えて、大きく息を吸った。
「とはいえ、こちらの目の届かないところで動く人間がいるのは好ましくはないんだけどね。……まあ、やれることだけはやっときますか」
004……006……再びコンピューターに向かいなおすと、キーボードを軽やかに叩きだした。

572 運命の輪

市街地を抜け、しばらく草原を横断したところ。
朝露の反射する虹色の光を浴びながら、うちよせる柔らかな草の波々を掻き分けて、ふたりの少女が漂流していた。
遠目に後ろから見れば柏木初音と、その姉……楓、に見えなくもない。しかしそれは、現実にはありえない組み合わせだ。
「七瀬なのよ、あたし」
そう、それは七瀬留美。初音のボディーガードを自称するという、矛盾の乙女だ。
ふたりは、柏木耕一と七瀬彰を追っている。
もともと行く先に迷いはあった。
選択肢のひとつは、先行した二人を追うこと。これは初音の希望でもあるし、二人の助けになれば……という思いもある。
もうひとつは、潜水艦がどこかにある、という高槻の言葉から来るものだ。七瀬は、その疑わしい言葉を信じている。だから、そうした沿岸部の施設を捜索するべきなのかと、思考を巡らせていた。
しかし、その時（小さいから解らなかったのか）忽然とあらわれた、さすらいの女医（ヤブっぽいけ

ど）観月マナによって、迷いは吹き飛んだ。死んだと思われた柏木家の長女と次女が生きている。そして初音や耕一を探すとともに、ゲームの主催者達と対決する決意を見せていることを知ったのだ。

「……でさ」
頭の後ろで手を組みながら、いくぶん緊張感なさげに七瀬は言う。
「ずんずん進んでるけど……なんかの、目星はついてるの？」
「うん。……マナさんの話にあった、バイクとロボットの話なんだけど……」
「それが、あの二人とどういう関係になるの？」
七瀬にはさっぱり解らない。年下の少女に教えを請うように、あとを促す。
「うん、そのロボットなんだけど。参加者に来栖川製のロボットが二体いたのを除けば、この島では珍しいでしょ？」
「そういや他には見ないわね。主催者側の手伝いにいるくら……」
「だよ、ね？」
そうだ。
戦闘用のロボットが出現するようなところは、裏を返せばそれなりの重要施設があるということなのだ。
ふたりは丘を登り始める。
……思った以上に、目指す二人は近かった。

殺風景な岩山に、ざっくりと穿たれた出入り口。
そこは、いかにもここが軍事施設だと言い張っているようにしか見えない、異様な光景だった。岩場に巧妙に隠され、簡単には発見できないはずのそれを、目立たせる存在があったからだ。
施設への通路守るように、不似合いな人影が仁王立ちしている。小柄な、女性の姿。しかし、容姿に似合わぬ威圧感が、彼女にはあった。戦闘ヘリに匹

敵する機動性と、砲弾の直撃に耐えうる装甲。そうした性能は、顔付きさえ変えてしまうのだろうか。人への奉仕のために作られた、彼女の姉妹たちと大きくかけ離れた、厳しい表情を浮かべ、ひとり立ち尽くしている。
「彰君……あれ、なんだろうな」
林立する岩塊のうしろで、気味悪そうな声を出す青年がいた。
「なんです耕一さん？　なんか、見つけたんですか」
ふたりでロボットを観察する。
再び岩陰に隠れると、彰は腰をおろして言った。
「来栖川の……メイドロボット……じゃなさそうですね」
「あんな顔のメイド、誰が買うもんか」
藪を抜け岩場に入り、道なき道を進んできた彼らは、運良くロボットの死角に出ていた。
もし通路を歩いて来て、正面から遭遇していたならば……とは、あまり考えたくない。
「そもそも、あの通路にだけ配置されているのは、どうしてなんでしょうね」
「どういうことだい？」
耕一にはさっぱり解らない。年下の少年に教えを請うように、あとを促す。
「それは……」
「……穴熊でもなければ、重要拠点には抜け道を用意するものだ。頭のよい兎は、三つの抜け穴を用意するという。人間ならば、尚更だろう」
何の気配もなく。
降って沸いたように、男が立っていた。
彰と耕一はキツネにでも化かされたかのように、呆然として動けなかった。
「な……」
「勇気ある青年たちよ。……悪いが、尾行させてもらった」

「⁉」
彰が怪我をしている以上、距離さえおけば二人を尾行することなど簡単かもしれない。しかし、こういう気配を身に纏える人物に、すぐ後ろを尾行されたという事実は、恐怖に近い。
「あんた、何者……だ」
幾分気圧されながらも、耕一が集中力を高める。それを抑えるかのように、渋みのある微笑を浮かべ、男は言った。
「そう身構えるな。俺は、君らのような同志をこそ、望んでいたのだ――」
いくぶん悲壮な顔をして、腕に抱えた女性（？）をそっと降ろす。それに合わせるように、荒涼とした岩場を一陣の旋風が吹き抜ける。
「俺の名は、坂神蝉丸。蝉丸と、呼んでくれ――」
男は。
……月代の気絶により、久々にハードボイルド満喫な蝉丸であった。

鬱蒼とした森を抜けながら、少女はひとり、考えていた。
(あたし、何してるんだろうね？)
失った仲間のことを思うと、これ以上むやみに他人とツルむ気にはなれなかった。
だからと言って主催者側の連中が、一人でどうこうできるような、そんな軽い相手ではないと解ってもいる。
(刀一本道連れに。……仁侠映画じゃないんだから、いくらなんだって無理だってーの)
無理矢理気を楽にしようとした想像も、やはり不可能の三文字へと到達してしまう。
(仲間、ねえ……)
郁未。葉子さん。少年。
この三人がまず浮かぶ。しかし、あれほど捜しても会えなかった相手を目的に、再び駆け回るのはどうだろう。
(他には……)

……いない。
誰が好き好んで闘争の場に身を置くだろう。普通は怯えて、誰かを襲うか、または逆に襲われて、それで手一杯のはずだ。
主催者側の人間と戦う。それは個人的な怨恨を抜きにして高度な視点で見れば、他の全員に対する奉仕と言ってもいい。知らない誰かさえも含めた全員を守るために、戦争屋と戦う。そんなことに手を貸すような知り合いは、先の三人を除けば全て……。
……いや、ひとり、いた。

『さっさと行きなさいよ』
『ふん。……言われないでも、出て行くわよ』
『次はきっと、絶対、勝つわよ！』

……あまり気が進まない気もするが、いた。あいつなら、きっと。
そう考えが纏まると、なんとなく気が軽くなる。
もともと考えるより、行動するほうが好きな性質だ。巳間晴香の性質は、求める相棒と良く似たところが多々ある。
本人達は認めないだろうが、それは間違いのない事実だ。

いくぶん明るさを取り戻し、駆け出そうとした晴香の前を、人影がよぎった。慌てて晴香は見を隠す。
男が、ひとり。
最初のホールに、こんな男はいなかった。最年長だと思われた、目付きの悪い男よりも、明らかに年上だ。
（主催者側の……人間……）
なにやら呟く声が聞こえる。
意味が通っているのだが、何か浮ついたような、そんな不安定な言葉を、声の大小絡めて垂れ流していた。怒っているのか、それとも何かに憑かれているのか。汗とも涎ともつかぬ水滴を、ぼたぼたと流

しながら、男は丘へと続く道を進んでいった。
（この先に……主催者側の施設でもあるのかしら？）
　小首を傾げて、晴香は考える。
仲間を集めるのが先か。場所の見当をつけるのが先か。
（ま、あとでも……チャンスは一緒だしね……）
晴香はそう決めて、男の後を尾けることにした。
それが、求める人物への道でもあったのだが。

もしも空から眺めたなら。
彼らが大きな、輪の上に居るように見えただろう。
大きな
大きな
輪を描いて。

運命の流れは、いま一点に集中しようとしていた。

573　二択

（……やっぱり、こうなるのですね）
向けられるデザートイーグルの銃口を見つめながら、里村茜はため息をついた。その感情は絶望というよりも、現実の認識といったほうがいい。
　当たり前の話だった。この自分が、七人の命を踏みにじった自分が、慕ってくる後輩を手にかけ、やさしいあの少年を手にかけ、親友を手にかけた自分が、許されるはずない。
　その罪を背負い、少しでもその償いができるように――そんな風にして自分が生きていることを喜んでくれる少年の傍ら生きていくことなんて、許されるはずがない。
（いいえ、これこそ身に過ぎた果報かもしれませんね）

本来ならば即座に頭を吹き飛ばされても文句は言えないのだ。
ならば、早く連れて行ってほしい。これ以上ぐずぐずしていたら祐一たちが来てしまう。
こんな身から出たさびに、祐一を巻き込むわけにはいかないのだ。
「わかりました」
だから茜はそう言った。
「はやく連れて行ってください」
ゆっくりと手を頭の後ろで組む。
「……ほら、お母さんも往人さんも……危ないよ、こんなもの」
その声に呼応して観鈴が一歩、往人と晴子の前に出る。
「私観鈴、よろしく。あなたの名前、聞きたいな」
観鈴がそう笑いかけたのと、
「茜ぇぇぇぇ！」
祐一の叫び声がこだまするのが、同時だった。

「なんやっ!?」
「仲間か!?」
一瞬、二人の注意が祐一の声のほうに向けられる。
その一瞬に茜は、
先ほどしまいこんだガバメントを引き抜くと、

その行動は

その動作ともに観鈴の腕を引っ張り、

祐一が戦いに巻き込まれるなら
有利な状況に持ち込むべき
という理屈ではなく

その身を盾にして、

相手の隙を見つけたならば
それに乗じて動くという

銃口を首に突きつけて、
既に染み付いてしまった
叫んだ。
殺人者としての
性（さが）だったのかもしれない

「動かないで、撃ちますよ！」
祐一が、繭が、なつみが見たのはそんな光景だった。
何をしているんだろう。
なつみは思った。
何をしているんだろう、この女は。
『復讐とか何だか知らないけど、折角残った命を大切にしようって気があるの？』
あの人はそういった。

『居場所が無いなら、探せばいいじゃない』
日本刀を手にした、私たちの前で戦った、文句なしにかっこいいあの人はそういった。あの人、巳間晴香さんには、何度礼を言っても足りないと思う。
だから、里村茜を許そうと思った。
憎しみが消えたわけじゃない。
わだかまりがなくなったわけでもない。
でも、あの人には敬意を払いたい。
『生きる権利なんて、誰にもあるのよ。あんたなりに、生き残りなさい』
その言葉を大事にしたい。
だから、今は無理でも、この女を許そうと思った。
そばにいることで、ゆっくりと許していこうと思った。
そこを、私の居場所にしたいと思った。
なのに。
何をしているんだろう、この女は。

友人を殺しといて、その涙も乾かぬうちに……
女の子を盾にしているなんて……！
許せなかった。
思いを、決意を、踏みにじられた気がした。
だから、
「あなたはぁぁぁぁっ！」
怒声を上げて、隣にいた祐一から濃硫酸銃をひったくって、その銃口を茜のほうへ向ける。
だけど、
「つく……!?」
往人たちにしてみれば、それは、茜の援護をしているようにしか見えなくて。反射的になつみのほうへ向けた往人のデザートイーグルが火を噴く。
バッァン、ビチャァ。
それは銃声、なつみの左腕がはじけとんだ音。
「て、てめぇは!?」
「な、なつみさん!?」
叫ぶ祐一、繭。

だが、なつみは倒れなかった。銃を手放さなかった。そうして引き金を引く。茜に向けて。
「キャァッ!!」
悲鳴をあげる観鈴。だが、硫酸は茜にも観鈴にもかからない。狙いをつけるだけの余力がもうないのだ、なつみには。
だが、なつみは引き金をさらに二度三度引く。
「なにやってるんだよ！　なつみぃ!!」
そういってウォーターガンを取り返そうとする祐一を無視して。たまらず茜は、観鈴を晴子のほうへ押し付けると背を向けて茂みの中へ駆け出した。
「またんかいこらぁ！」
観鈴を抱きかかえる格好になりながら、それでも晴子は茂みの中に消えようとしていた茜の背に狙いをつける。
だが、その引き金を引くよりも、祐一がなつみから奪い返したウォーターガンで晴子を撃つ方がはやかった。

その濃硫酸は服の上から晴子の二の腕にかかる。
その肌からジュッと耳障りな音がたつ。
たまらず悲鳴をあげる晴子。その手からシグザウエルが落ちる。
「グア……！」
祐一はすばやく銃口を往人のほうへ向けた。
往人も既にデザートイーグルを祐一のほうへ向けている。
「何もんなんだよ、あんたら……！」
茂みの中へ消えた茜を追う繭を尻目にみながら祐一は怒鳴りつける。
その額には汗。即死させるのが難しいこのウオーターガンで拳銃と立ち向かうことができるだろうか？
だが、動揺というなら往人のほうが深い。先ほどの一発が最後の弾だったのだから。
晴子のシグザウエルは、観鈴が拾い上げていたが、
（あいつに、人が撃てるか？）
撃てるとは思えなかったし、撃てると思いたくもなかった。
「晴子！　大丈夫なのか!?」
祐一から目を離さずに往人は問う。
「平気や。こんな……もん」
「ダメ……！　すぐに水で洗い流さないと!!」
「チッ」
往人は舌打ちした。ここまでか。
だから、往人は強引に晴子を引き寄せ片腕で抱き寄せると、銃口を祐一に向けたまま、
一度だけ強く祐一をにらむと、観鈴とともに茂みの中へ消えた。
繭が茜の跡を追ったのは、実はそれほど賢い選択ではなかった。残って祐一のサポートをすべきだったのかもしれない。
だが、繭の中にもある種の疑念が渦巻いていた。
それは、なつみの場合はもはや確信となったもの

であるが、すなわち、
まだ、里村茜は、殺人者ではないのか？
と、そういうことだった。
観鈴に銃口を突きつけている姿はそう思わせるに充分だった。
そして、茜がまだ殺人者だというならば。
最も多くの武器を所持している彼女を放置しておくことほど危険なことはないのだ。
「待ちなさい、里村さん……!!」
そうやって呼びかけながら、走る茜の背中に、ほとんど体当たりといっていい勢いで組み付いたのは、結局その疑念がさせたことだった。
『キャアッ……!?』
茜と繭は同時に悲鳴をあげる。
全速力でそのように組み付けば、二人とも転倒するのは当然だった。そのまま惰性で、ごろごろと二人は組み合ったまま茂みの中を転がる、
そして、急に視界が開けた。
それだけじゃなくて、
「嘘……！」
「なッ……!?」
下に地面がなかった。
崖が、茂みのせいで隠されていたのだ。
そのままだったら、二人とも組み合ったまま転落していただろう。下の地面にたたきつけられていただろう。
だが、今まさに落下していく二人の腕が引っ張られた。
「祐一……」
「あんた、大丈夫なの!?」
「くッ……待ってろ……今引き上げてやる」
ほとんど飛びつくようにして祐一は右手で繭の腕を、左手で茜の腕を引っつかんでいた。
腹ばいになって、肩より上を乗り出し、虚空にぶら下がる少女二人を必死に引き上げようとしている。
だが、

「く……そ……」
それは無理だ。とても無理だ。
繭も茜も、小柄な方ではあるが、それでも二人の人間をこの体勢で引き上げることはできない。
そう、二人の人間は。
ズリッ、ズリッと、祐一の体が前に引きずられていく。
ぱらぱらと落ちる小石。
おもわず識は下を見てしまう。
高い。下に植物があるとはいえ、落ちたらおそらく、助からない。
「必ず……必ず……助けて……やる」
食いしばった歯の間から悲痛なうめきがもれる。
けれど……三人はもはや悟っていた。
このままでは、全員が転落するか、繭か茜、どちらかが死ぬしかないということに。

574　新たなる目的

「お母さん、大丈夫？」
「大丈夫なわけあるかい！　硫酸みたいなのをぶっかけられたんやで！」
「そ、そうだよね」
「とにかく、腕を洗わんと……」
現在、往人、晴子、観鈴の三人は、森を離れ、とにかく晴子の腕にかかった硫酸を洗い流そうと、水のある所を探していた。
幸いにもすぐに池が見つかり、近くに人の気配もなかったので、一行は晴子の治療に専念することにした。
晴子が水辺に腕を近付け、往人が水をかける。
バシャ！
「ぐう……メッチャ染みるで……」
「我慢しろ、洗い流さないと更に酷くなるぞ」

こんな時、聖がいればな、と往人は晴子の腕の処置をしながら唐突に思った。
だが、聖はもういない。
佳乃も、美凪も、みちるも、もうこの世には居ないのだ。
晴子の腕に付いていた硫酸を洗い、観鈴の持っていたハンカチで傷口を縛った。
「よし、一応はこれで大丈夫だと思う。後でちゃんとした治療をしないとな」
「すまんな、居候」
「気にするな。あの時判断を誤った俺にも責任がある。撃った時点ですぐに逃げればこうはならなかった」
「しかし、あの女……今度会ったらゆるさへんで。絶対に殺したる」
「ダメだよ、お母さん……」
そう言ったのは他でもない、銃を突きつけられた観鈴本人だ。
「何言ってんねん。撃たれてたかもしれんのはあんたなんやで？」
「だけど……あの人の目、凄く寂しそうだった。きっとあんな事したのも訳が……」
「観鈴」
観鈴が言い終えるのよりも早く、往人がその言葉を遮った。
「どんな事情があろうとも俺はもう、あの女を信用は出来ない。多分晴子もそうだろう。だから――」
そこで往人は息を吸い、
「次にあの女に会ったときは、容赦なく撃つ。その時に、邪魔をするなよ。観鈴」
「うん……」
仕方が無くといった感じで観鈴は引き下がった。
「ならこの話はもうお終いだ。問題はこれからの行動だな……」
何かいい考えはあるかと、往人は二人に聞いてみたが、返ってきたのは何も、という答えだけだ

った。
「それなら……」
と言って往人は言葉を続けた。
「俺は、仲間を探そうと思う。このゲームの管理者とやらと戦うにも、ここから逃げるにしても、人数は多い方がいいからな。ただ、さっきのような目に遭うということももちろん考えられる」
往人は一旦息を吐き、言葉を続ける。
「だから信用できる奴のみだ。タイミングよく近づいて、しっかりとこちらの考えを話せばうまくいくはずだ。いろいろ考えたが、現状ではこれが一番ベストな考えだと思う。二人とも、いいか？」
「そうやな、さっきみたいな目に遭うのはゴメンやけどこの先ウチらだけじゃどうしようもないもんな。賛成や」
「私も……往人さんがそういうなら間違いないと思う。私も賛成する」
「分かった。ならすぐに動こう。こうしている間にもまた誰か死んでいるかもしれない」
そうして、動く準備をしている時に、往人は自分の銃にもう弾が入っていないことを思い出した。
（バッグに戻しておくか……ん、待てよ……）
そう言えば、自分はあの時会った——確か氷上シュンといっていた男のバッグに何が入っているか確かめただろうか？
（そういえばずいぶんと重かったな、あのバッグ）
今まで確かめてなかった事に、自分の迂闊さを悔いながら往人はシュンのバッグを開けた。
「本当に迂闊だったな……」
バッグに入っていた大きなものの正体はかなり大きな銃（ベネリM3ショットガン）だった。
「なんや……そんなもん持ってたんかいな」
自分の銃に弾を込めていた晴子が驚きの目をこちらに向けていた。
「いや……今分かった。開ける気もなかったんでな。やけに重かったので気にはなってたんだが……」

「ちゃんとみとけや、アホ」
「気をつける」
そういいながら往人はベネリＭ３に目をやった。
（氷上といったな……この銃、使わせてもらうぜ……）
「よし、行くぞ」
「ええで」
「うん」
そうして三人はまた動き出した。
新たなる目的を持ち。

575　霞

全てが夢であればいいと思った。
そして、朝が来て私は自宅のベッドの上で目を覚まし、怖い夢を見たと今の自分が日常にあることを確認してほっとするんです。
「真琴？　……ええ、私の友達なんです」
海。
夕暮れ——いや、明け方の海岸。
朝の淡い光の差し込む海岸。
何故か、少女は此処に居た。
隣に立つ——見てはいないが——少年の気配は。
酷く優しげで。
自分を捨てる事で、他の全てを救おうとする——
そんな優しさ。
それを何処かで得た少年。
得る事になってしまった少年。
でも、何処で？
「随分とわがままで……いつも祐一さんを困らせてるそうです」
「祐一さんっていうのは……確か、天野さんの友達だったっけ？」
「……はい」
砂を踏み締める。

じゃり、という微かな音。
確かめる……これは現実だと。
――コレハゲンジツ。
なのに。
どうして、目の前の朝日が眩しくないのか？
「〝これ〟が終わったら、まず、会いに行こうと思いまして」
「これ？」
――あれ……。
――これって、何でしたっけ？
困ったような、苦笑するような。
そんな感じの笑みを、隣に立った少年は浮かべた
……筈だ。
少年――祐介が、立ち上がる。
ふわりと、肩に手を置いた。
酷く、冷たい手を。
「天野さん」
――はい。

「君は、その真琴って子に会いに行かなきゃいけないんだよね？」
――はい。
「だったら……ゲームに戻った方がいい」
突然、消えた。
先程まで感じていた筈の、そこに在った筈の人の気配が。
振り返る。
――居ない。
いや、いる。
否、〝あった〟。
右腕だけが。
――ひっ……！
「……さぁ」
酷く冷たい声。
――ざぁっ
風が巻き起こる。
消える。

消える。
先程まであった筈の景色が。
そこにあった筈の人の気配が。
身体が。
そして広がる——紅。
深紅。
血のような——
ぎっ。
全身が絡め取られるような。
いや、違う。
……ピアノ線？
祐介、さん？
「あ……い……い、あぁ」
もはや声にもならぬ声。
何かが叫ぶ。
誰、これは——私？
それとも？

——殺——
——殺サ——デ
——殺——ナイ——！
——殺さないで！

「……い……いや」
「嫌……嫌ぁぁあぁあああああ……っ!!」
ぶつん。

——右腕が飛んだ。

跳ね起きた。
途端、押し寄せる嘔吐感。
構わず、吐いた。
服に掛からない様にしたのは、微かに残った理性が為したものか。
……。
吐いたところで、何も出てくる事は無い。

木漏れ日。
寝転ぶ少女の顔に掛かるそれは、優しげで。
残酷な現実を。夢ではないと確認させるようで。
右手に当たる日差しは、その暖かさを伝え――ない。
当たり前だ。
――右手はもう存在しないのだから。
「……」
ぐるぐると、思考は巡る。
――裏切られた？
いや、違う！
――違う？
そう。
なら、ついさっき、出会った時の顔は何だ？
驚いていたじゃないか。
喜んでいたじゃないか。
――取り逃がした獲物を見つけた喜びかもしれない。
――遭うとは思わなかった敵と出逢ってしまった驚きかもしれない。
違う――。
違う、違う、違う！
私は――
ワタシ、ハ――

彷徨う想いは、まだ――
出口を知らない。

576　いつかの決着(ケリ)

「ぐうっ……」
きしむ腕、悲鳴をあげる筋肉。
恐ろしいほどの血管を浮かび上がらせながら、祐一は呻いた。
ガラッ……砂が、固まった泥が、崖の断面にぶつかり合い、粉となって虚空に消える。

「まっ、藺っ！　どっかに足場……ないのかっ……!!」
「ごめんっ……ないっ!!」
そう言いながら、自分の体に括り付けてあった荷物を捨てる。舞い降りる土砂と共に、藺の荷物が崖下へと吸い込まれていく。
それを見た祐一の視界がぐらりと揺らいだ。
「里村さんも……荷物捨てて！」
藺の言葉。
「……そうですね」
落ち着いた風に、茜もそれに習う。
ガクン……若干、左腕にかかる重量が一気に軽くなってバランスを崩しかける。
「くぅ……」
だが、祐一も男。そこは持ち直した。
おかげでもう少し保ちそうだったが、それも時間の問題だ。
（くそっ……こんなときに力があればっ……!!）
脂汗が、祐一の全身を包み、力を奪っていく。
「……じゃあ、こういうのはどうですか？」
開いたほうの手で、唯一捨てなかったコルト・ガバメントを構える。
カチッ……。
「茜っ!?」
「このままじゃ全員死にます。それよりは……いいと思います」
藺に、向けられた銃口。
「里村さんっ……!?」
予期せぬ事態に、藺の下半身が宙に揺れる。
（な、なにしてんだ茜っ!!）
叫びたかったが、叫べなかった。少しでも気を抜くと、自分も含め、三人全員が奈落の底へと落ちてしまうから。
「私は――ためらいませんよ」
藺と、祐一と。
それぞれの顔を交互に目だけで見やりながら茜が

呟いた。
——その声はとても冷たく。
茜が大切な親友達を撃ち殺したその罪。
(私は、一番汚い方法でケリをつけようとしてるのかもしれません)
「……茜っ！」
祐一の叫びが聞こえる。
(帰ってこなかった幼なじみのあの人。いつまでも待ちつづけた私)
すっ……と、大きく息を吸って。
(帰るために殺しつづけた私)
「これが、私の選んだ道です」
グイッ……
繭の頭に、照準を合わせる。
「さ、里村さんっ!!」
繭の自由な方の腕が、それを奪おうと宙をかいたが届かなかった。
繭の体が、振り子のように揺れる。

(もし、撃ってみろ……そのときは、茜、お前も死ぬぞ……もちろん俺も)
声にこそ出せなかったが、その表情と思いは、二人の心に伝わった。
(やめろ……茜……)
極限状態の中で腕を閉じ、出来る限り二人の体の幅を縮める。もちろん繭に茜の銃を奪ってもらう為だ。
体と共に、繭と茜の心が揺れた。
「祐一、私達を引き上げることはあなたでは無理です」
「里村さんっ……！　そんなこと言わないでっ!!」
既に、祐一の腹までが崖下に乗り出している。
一人ならばいざ知らず、二人相手では絶対に踏ん張りがきかない。
「あ……かねっ……！」
「あなたは……何も変わってませんでした。私がこう言うのは許されないことだけど、少し嬉しかった。

あなたはきっと……最後まで手を放さないでしょうね」
ただ……それは、ただのバカです……と付け加えて。
「だから、私が決めます。どうせ死ぬのなら、私が撃てば……」
「やめて、里村さんっ!!」
「さようなら」
ドンッ……！
——銃声が木を大きく揺らした。
「多分、私は、一番汚い……方法で……決着を……つけようとしてたのかもしれ……」
茜の手から、コルト・ガバメントが落ちた。
「がはっ……ハア……ハア……」
祐一の、背中越しに見えた影。
苦しそうに息を吐きながら、銃を撃った少女、牧部なつみ。残された右腕に、放り出されていたカスタムウォーターガンを携えて。

流れ出る血が、祐一の背中を濡らし、脂汗と交じり合って、地面へと流れた。
「な……」
弾丸は、茜の体を。
酸は、茜の顔を。
それぞれ蹂躙して。
「あかねっ!!」
「かはっ……私……撃ったのね……」
もう、痛みなどなかった。ただ、血の流れ行く感覚だけが……なつみには感じられた。
ただ、撃った。祐一と、繭とを、助けて……そして、非道な里村茜への復讐の為に。
「店長さんの敵……」
取った。復讐は、叶った。
ただ、今、本当にそれを望んでいたのか。
復讐なんて馬鹿らしい。
「本当ね……」
晴香の言葉を思い出しながら。

（なんにも……ならないね）
嬉しくも、なんともなかった。ただ、殺した……
というだけの事実。
（なに、してたんだろうね、わた……し）
その思考を最後に、なつみが倒れた。祐一の背に
覆い被さるように。
一瞬遅れて、涙の雫がなつみの体に、落ちて流れ
た。
——あの瞬間、茜は確かに自分の方向へと銃口を
向けた。

祐一の体の上から降り注ぐ酸と、血。
そして、大地を揺るがす銃声。
茜の体が、大きく揺れた。
酸が顔から首を伝い、制服を黒く焦がしていく。
「わた……し……の……罪です。結局……逃げてし
まいました」
腹部から、血が垂れた。

「あかねぇっ！」
制服が、黒と赤とに彩られて。
「ごめんなさい……生きて償っていけなく……
て」
澪と、詩子と、そして殺めてきたすべての人に。
そして、あの人と、祐一に。
「ごめんな……さいっ……!!」
口元から血を滴らせながら——茜の言葉。
罪人には、許されないかもしれない——陳腐な言
葉。
頬を濡らした涙が、酸を洗い流していく。
——結局……あの空き地には……帰れませんでし
たね。
最後の力で、祐一の手を振り払って。
茜の姿が吸い込まれていく——下へ、下へと。
「あっ……あかねぇーーーっ!!」

「里村……さんっ!!」
祐一の叫びと共に、繭の体が舞った。
なつみの体を乗り越え、地面にと転がる。
「くそぉっ！」
祐一は降りられそうな場所に目星をつけると、崖下へ一気に滑り降りた。

七十九番　牧部なつみ　死亡
【残り29人】

577　永遠は閉ざされて

――それは酷く長い一瞬だった。
手を払う。
それは、茜に残された最後の力。
祐一の手は血で滑り、
――その手は離れた。

途端に襲い掛かる、無重力感。
上に見えるのは。
手を放した祐一の、酷く、酷く悲壮な顔。
「そんな、哀しい顔をしないで下さい。私は、死んで当然のことをしてきたのですから――」
そう、言いたかった。
けれど、声は出なくて。
胸に穿たれた風穴は、確実に己の命を削り。
奪っていく。
底知れぬ闇へと――

とうとう、祐一の顔も見えなくなった。
後ろには、深い、深い闇が広がっているのだろう。
振り返る？
いや。
振り返ったところで、顔から落ちるだけ。
けれど。

この焼け爛れた顔を。
彼の目に晒すよりはいいかもしれない。
いや、〝彼ら〟か。
今。
数瞬前に。
最後の最後に裏切ってしまった、彼。
そして——
もはや還れぬ、あの地で。
待たねばならなかった、あの人。
不意に。
遠くに見える、木が。
風に揺れて。
その向こうにある空を覗かせた。
蒼い空は、何処までも深く。
一瞬だけ、ぽっかりと空いた空間に。
蒼く、蒼く広がっていて。
茜は、手を伸ばした——

もし、この背中に翼があるのなら——
最期に、一つだけ、願いが叶うのなら——
私は。
あの空を越えて。
行きたい——

「永遠」に。

けれど。
再び風は吹いて。
空はその姿を覆い隠された。
それは。
道を閉ざされたようで。
——ふふ。

何となく、笑えた。

ごぐっ。

――随分と、鈍い音。
それが、彼女が聞いた、最期の音だった。

四十三番　里村茜　死亡
【残り28人】

《葉鍵ロワイアル　第四巻　了》

葉鍵ロワイアル　第四巻　著者一覧

奇跡の企画を作り上げた皆様に
この場を借りて、お礼を申し上げます。

◎制作者一覧
制作協力：
111、JOYH-TV、L.A.R、Yellow 、#3-174、独活大樹、
久々野　彰、冴村浩志、静かなる中条、真空パック、
駄っ文だ、ないしょ、ナナツさんだよもん、名無し達の挽歌、
名無しさんだよもん＠誤植指摘、遥か昔の書き手、箕崎、
観月、林檎、『。』、名無しさんだよもん

制作協賛：
104、５、Alfo、Kyaz、MIU、NBC、命、いつかの書き手、
感想スレＲの 142、葵原てぃー、シイ原、
七連装ビッグマグナム、暇人、日向葵、祐一＆浩平、
名無しさんだよもん

スペシャルサンクス：
189、quit、River. 、zin、#4-6、#7-76、荒門、彗夜、
ダンディ、名無し cd、名無しさんなんだよ、にいむらたくみ、
花と名無したん、ヘタ霊、赤目、名剣らっちー、
訳あり名無しさんだよもん、旧データサイト管理人各氏、

そして全ての名無しさんと読者の皆様

（アルファベット〜アイウエオ順、敬称略）

葉鍵ロワイアル　（4）
二〇〇三年　一〇月　五日　初刷発行
二〇二二年　一二月三〇日　電子書籍版　初刷発行

著　　者：（別頁に記載）
発 行 者：瀬戸こうへい
発　　行：ハカロワ出版企画
初　　出：２ちゃんねる、葉鍵（Leaf&Key）板
編集事務：セルゲイ＠Ｄ　三浦　闌
挿　　絵：秋★枝
印　　刷：株式会社ポプルス
連 絡 先：kohei19800310@yahoo.co.jp

ISBN4-31034-193-7

C0510

ハカロワ出版企画

HAKAGI ROYALE Ⅳ

『やっと……会えたね？』

向けられた笑顔は全て間違っていた。

『ずっと……好きだったんだよ…？』

握りしめた短刀から伝わってきたのは
命の重さだった。
何が大事なのかは解らないのに
誰が大切なのかが解ってしまった。
人を愛していたが為に
色んなモノを失ってしまった。

それでも俺は——。

全ては生き残るために。
あの場所へ君と還るために。

HAKAGI ROYALE

ハカギ・ロワイアル

⑤

HAKAGI ROYALE

ハカギ・ロワイアル

5

――――――――【残り28人】

葉鍵ロワイアル参加者名簿

一　　番　相沢　祐一　（あいざわ・ゆういち）
~~二　　番　藍原　瑞穂　（あいはら・みずほ）~~
三　　番　天沢　郁未　（あまさわ・いくみ）
~~四　　番　天沢　未夜子　（あまさわ・みよこ）~~
五　　番　天野　美汐　（あまの・みしお）
~~六　　番　石原　麗子　（いしはら・れいこ）~~
~~七　　番　猪名川　由宇　（いながわ・ゆう）~~
~~八　　番　岩切　花枝　（いわきり・はなえ）~~
九　　番　江藤　結花　（えとう・ゆか）
~~十　　番　太田　香奈子　（おおた・かなこ）~~
十 一 番　大庭　詠美　（おおば・えいみ）
~~十 二 番　緒方　英二　（おがた・えいじ）~~
~~十 三 番　緒方　理奈　（おがた・りな）~~
~~十 四 番　折原　浩平　（おりはら・こうへい）~~
~~十 五 番　杜若　きよみ〈原身〉（かきつばた・きよみ）~~
~~十 六 番　杜若　きよみ〈複製身〉（かきつばた・きよみ）~~
十 七 番　柏木　梓　（かしわぎ・あずさ）
~~十 八 番　柏木　楓　（かしわぎ・かえで）~~
十 九 番　柏木　耕一　（かしわぎ・こういち）
二 十 番　柏木　千鶴　（かしわぎ・ちづる）
二十一番　柏木　初音　（かしわぎ・はつね）
二十二番　鹿沼　葉子　（かぬま・ようこ）
二十三番　神尾　晴子　（かみお・はるこ）
二十四番　神尾　観鈴　（かみお・みすず）
~~二十五番　神岸　あかり　（かみぎし・あかり）~~
~~二十六番　河島　はるか　（かわしま・はるか）~~
~~二十七番　川澄　舞　（かわすみ・まい）~~
~~二十八番　川名　みさき　（かわな・みさき）~~
二十九番　北川　潤　（きたがわ・じゅん）
~~三 十 番　砧　夕霧　（きぬた・ゆうき）~~
~~三十一番　霧島　佳乃　（きりしま・かの）~~
~~三十二番　霧島　聖　（きりしま・ひじり）~~
三十三番　国崎　往人　（くにさき・ゆきと）
~~三十四番　九品仏　大志　（くほんぶつ・たいし）~~
~~三十五番　倉田　佐祐理　（くらた・さゆり）~~
~~三十六番　来栖川　綾香　（くるすがわ・あやか）~~
三十七番　来栖川　芹香　（くるすがわ・せりか）
~~三十八番　桑嶋　高子　（くわしま・たかこ）~~
~~三十九番　上月　澪　（こうづき・みお）~~
四 十 番　坂神　蝉丸　（さかがみ・せみまる）
~~四十一番　桜井　あさひ　（さくらい・あさひ）~~
~~四十二番　佐藤　雅史　（さとう・まさし）~~
~~四十三番　里村　茜　（さとむら・あかね）~~
~~四十四番　澤倉　美咲　（さわくら・みさき）~~
~~四十五番　沢渡　真琴　（さわたり・まこと）~~
四十六番　椎名　繭　（しいな・まゆ）
~~四十七番　篠塚　弥生　（しのづか・やよい）~~
四十八番　少年　（しょうねん）
~~四十九番　新城　沙織　（しんじょう・さおり）~~
五 十 番　スフィー　（すふぃー）
~~五十一番　住井　護　（すみい・まもる）~~
~~五十二番　ＨＭＸ－13型セリオ　（せりお）~~
~~五十三番　千堂　和樹　（せんどう・かずき）~~
~~五十四番　高倉　みどり　（たかくら・みどり）~~
~~五十五番　高瀬　瑞希　（たかせ・みずき）~~
~~五十六番　立川　郁美　（たちかわ・いくみ）~~
~~五十七番　橘　敬介　（たちばな・けいすけ）~~
~~五十八番　塚本　千紗　（つかもと・ちさ）~~
~~五十九番　月島　拓也　（つきしま・たくや）~~
~~六 十 番　月島　瑠璃子　（つきしま・るりこ）~~
六十一番　月宮　あゆ　（つきみや・あゆ）
~~六十二番　遠野　美凪　（とおの・みなぎ）~~
~~六十三番　長岡　志保　（ながおか・しほ）~~
六十四番　長瀬　祐介　（ながせ・ゆうすけ）
~~六十五番　長森　瑞佳　（ながもり・みずか）~~
~~六十六番　名倉　由依　（なくら・ゆい）~~
~~六十七番　名倉　友里　（なくら・ゆり）~~
六十八番　七瀬　彰　（ななせ・あきら）
六十九番　七瀬　留美　（ななせ・るみ）
~~七 十 番　芳賀　玲子　（はが・れいこ）~~
~~七十一番　長谷部　彩　（はせべ・あや）~~
~~七十二番　氷上　シュン　（ひかみ・しゅん）~~
~~七十三番　雛山　理緒　（ひなやま・りお）~~
~~七十四番　姫川　琴音　（ひめかわ・ことね）~~
~~七十五番　広瀬　真希　（ひろせ・まき）~~
~~七十六番　藤井　冬弥　（ふじい・とうや）~~
~~七十七番　藤田　浩之　（ふじた・ひろゆき）~~
~~七十八番　保科　智子　（ほしな・ともこ）~~
~~七十九番　牧部　なつみ　（まきべ・なつみ）~~
~~八 十 番　牧村　南　（まきむら・みなみ）~~
~~八十一番　松原　葵　（まつばら・あおい）~~
~~八十二番　ＨＭＸ－12型マルチ　（まるち）~~
八十三番　三井寺　月代　（みいでら・つくよ）
~~八十四番　御影　すばる　（みかげ・すばる）~~
~~八十五番　美坂　香里　（みさか・かおり）~~
~~八十六番　美坂　栞　（みさか・しおり）~~
~~八十七番　みちる　（みちる）~~
八十八番　観月　マナ　（みづき・まな）
八十九番　御堂　（みどう）
~~九 十 番　水瀬　秋子　（みなせ・あきこ）~~
~~九十一番　水瀬　名雪　（みなせ・なゆき）~~
九十二番　巳間　晴香　（みま・はるか）
~~九十三番　巳間　良祐　（みま・りょうすけ）~~
九十四番　宮内　レミィ　（みやうち・れみぃ）
~~九十五番　宮田　健太郎　（みやた・けんたろう）~~
~~九十六番　深山　雪見　（みやま・ゆきみ）~~
~~九十七番　森川　由綺　（もりかわ・ゆき）~~
~~九十八番　柳川　祐也　（やながわ・ゆうや）~~
~~九十九番　柚木　詩子　（ゆずき・しいこ）~~
~~百　　番　リアン　（りあん）~~

葉鍵ロワイアル
舞台　地形図

葉鍵ロワイアル

※この物語は巨大掲示板２ちゃんねるの葉鍵（Leaf&Key）板において創作されたリレー小説です。

※今回の単行本化にあたり、著者自身の手によって本文の表現やタイトルが改められた個所があります。
※ Web ページの原文を縦書きの単行本として出版するにあたり、最低限必要な改行等の改変を編集側で行わせていただきました。

578　厭

あのあと、ガスッ、とまた音がした。
それは、何の音だったのだろうか。
もう、相沢祐一にはそれが何かと理解することなどできなかった。彼はそのまま、ゴツゴツとした岩が広がる岩場に、腰から砕け落ちた。

……ここは、どこだ？
よくわからない。目の前には、なにもない。音もない、風もない。ただ、真っ黒な世界。
そんな場所に俺は立っていた。
目の前には、〝あなた〟が同じように、立っていた。
『そなたは、これからどうしたいのだ？』
そう〝あなた〟は聞いた。
俺は〝あなた〟に、もう疲れた、もう休みたい、と答えた。
『そうか。このまま、あの女——茜のところにいくのか？』
あぁ、そうしたい。と俺は答えた。
『だが、それは叶わぬ』
と〝あなた〟は言った。
なんで！　もういやだ。もうすべてがいやなんだ。俺はここにもう居たくない。存在したくない。もうすべて消えてなくなってしまいたい。もう何も考える事もしたくないんだ！　俺はそう叫んだ。
『ならば、そなたは死ぬのか？』
あぁ。と俺は言った。
『無理だな。そなたは弱いから、死ぬことなどできないであろう』
無言の空間が続いた。
沈黙を破り、口を開いたのは〝あなた〟だった。
『ほら、おぬしの友人が迎えに来たぞ』

風を感じた。
……俺は、生きて……いる。

そう、相沢祐一は思った。
だが、なんで自分がこんなに生を実感しているのか、そして、何でこんなに心が空虚に満たされているのかを考えることはできなかった。
「おい、相沢っ！」
声が聞こえた。体が、びくん、と跳ねたような気がした。
ふと、目の前が明るくなった。
目の前には、いつも学校で会ってる腐れ縁の友人と、見た事のない、金髪の少女がいた。

579　俺達は……⁉

「よぉ、北川。目覚めに見る顔がお前だなんて最悪な朝だな……って、どこだよここ？　っていうか、痛てぇ⁉」
その言葉は北川にとっていつもの軽口であった。が、どこか違和感を感じさせるものであった。
「どうしたんだよ、相沢？　今時紐無しバンジーなんて流行らないぜ？」
そうして、北川は祐一が落ちてきた崖の上を見上げる。……崖の中腹の出っ張りのせいか頂上の方は良く見えない。
「……俺はその崖から落ちたのか？　くぅ⁉　痛てぇ……何だよ、何があったんだってんだ⁉」
「それは俺の方が聞きたいところさ。何でお前は突然頭上から降ってきたんだ？」
祐一は全身の痛みに顔を歪めながら、北川の質問に、
「知るかよ、そんなこと……くそっ、頭が痛てぇ……」
と答えた。
……こいつ、下手なところ撲ったんじゃないか？

「なぁ、相沢。俺が誰だか判るか？」
「……はぁ、何いってんだ北川？　お前と修学旅行のとき決行した湯煙大作戦は一生俺の記憶に刻まれてるぞ？」
「なら、こいつのことはどうだ？」
そう言って北川はレミィのことを指す。
「……初対面じゃないのか？　こんな印象深いお嬢さんを俺が忘れる訳が無いと思うのだが？」
「Ｏｈ！　ゆーいちさん。ワタシのこと忘れたですか？　So Sad デス」
そのレミィの言葉にも、祐一は首をかしげるだけだった。そんな祐一に対しレミィは北川の腕を掴んで声をあげた。
「ワタシ達は！」
それに併せて、北川も声をあげる。
「噂のカップル！」
「レミィと！」
「潤だっ！」
カップル。
その単語を聞いた瞬間に、
ずきり、と祐一の頭が痛んだ。
「……悪い、少し休ませてくれないか？」
だが、北川はその祐一の言葉を受け入れる訳にはいかなかった。
「すまない、相沢……」
祐一がよっぽどのドジで無い限り、ひとりで崖から足を滑らせて岩に叩きつけられたということは無いだろう。そう考えるなら、崖上から一望できるこの場所はとても危険な場所であるはずだからだ。
「俺達は、ここを離れなくちゃいけないんだ……おぶってくから、少し我慢してくれ」
北川が祐一を返事を待たずに背負うと、祐一は体の節々を襲う痛みに小さく悲鳴を上げた。病人を労れよな、と祐一は文句を言おうとしたが、北川の真剣な表情を前に言うのをはばかられた。
「近くの休める場所で休憩するから、それまで我慢

してくれ、相沢……」

580　ファンタジー

選択肢は三つ。
1．東へ向かう
2．西へ向かう
3．来た道を逆行する

「…………」
「…………」
私は凝視している。
少年も凝視している。
その瞬間を決して見逃すまいと、視線で射殺する勢いで見つめ続けている。

ぱたり。

「あああ～～～っ、今吹いたでしょ！　吹いたでしょ!!　ねえそうでしょ白状しなさいよ!!」
「はてさてお代官様あっしには一体なんのことととだだだだだかかかかかか」
「むきーーーーーーーーーーーっ!!」
襟元を掴んでがくがくと少年を揺らしまくる郁未ではあったが、彼はというと、のらりくらりとその追及をかわしている。
「ぐぇ」
あ、酔った。
何をしているかというと、単に小枝を立ててそれがどちらの方向に倒れるかを観察していたにだけに過ぎない。
で、何が問題かといえばちょっと話は遡る。
「――郁未」
「何？」
「道が無い」
「え」

ざーっ……ざーん。ざぱーん。
眼下に広がるはずの波打ちを見るまでも無く、聞こえてくるのは波の音。
「端っこまで来ちゃった……ってこと」
「否定は出きないねぇ」
はぁ、とため息一つ。私はがっくりと肩を落とした。
……お腹、空いてきたかも。
「まあ仕方が無い。別の道へ行こう」
と、少年は促す。
そこで突きつけられた選択肢が例のあれだ。
「じゃあせーのでどっちに行きたいかを指差そう」
何か面白いことを少年が口走っている。普段からこういうことを言う人間だっただろうか。
……仕方ない。
「「せーの！」」
びしっ。
と突き出された指の方向は、因果なことに双方とも真逆を向いていた。
……まあ。そんなこんなで何故か今回私たちは一歩も互いの意見を譲ろうとせず、決着は小枝の裁定に持ち込まれた訳なのであるが。いや、ただ単にどっちに倒れるかで方向を決めようって持ちかけられただけで。
『自分の運に自信が無いかい？』
『んなわけねーわよ』
……売り言葉に買い言葉。
「おおおおおおおおおこりっっっぽぽぽぽいののは大おおおおおなかかがすいているしょしょしょしょこだだだだだよよよよよ」
「あぁーっ！　何ぃっ！　聞こえないわよ！」
少年が何かを喚いているが理解できない。もちろん、現在進行形で私が揺すっているせいだが。
そこで少年、私の拘束からさっと抜け出るとなにやらごそごそと鞄の中を漁りだす。そして中からコ

ッペパンを取り出すと、私の方へ差し出してにっこり笑って一言。
「僕の顔をお食べよ♪」
スパコーン!!
電光石火のツッコミが入った。
嗚呼、神様。どうして私の武器はハリセンでなかったのでしょう。

「全くもう…………はぐはぐ」
「ひどいなぁ、ちょっとしたジョークじゃないか」
少年は頭を押さえながら不平を言った。
「あなたのジョークは人を小ばかにしすぎなのよ……はぐはぐ」
「はあ、そうですか」
「そうよ。これに懲りて反省しなさい……はぐはぐ」
「……あのう、郁未さん」
「何よ。……はぐはぐ」
少年は急に立ち止まった。
「……？　はぐはぐ」
「歩き食いはいけないと思います」
「うっ」
思わず戦利品の美酒に酔いしれて。いや、そんないいものでもないけど、夢中になって齧っていたようだ。
「はしたないよ」
「うぅ、分かりました……」
しょんぼりとうなだれる私を尻目に、少年がどこぞを指差す。
「丁度いい、あそこで休もう」
「え？　どこどこ」
くるくると首を回す私。
「あそこだよ」
彼は苦笑して指を指した。
――白い小さな教会。それが、そこにあった。

「わあ……」
綺麗なところだと思った。もし、こんなところで結婚式が挙げられたらどんなに幸せだろう？　そう思って、私はうっとりとそれを眺めていた。
「……ん、どうかした？」
「うん」
不思議そうに彼が尋ねてくるが、教会の様相に心を奪われた私には気の無い返事しか返すことが出来ない。
「……ふふ」
でも。
少しの間、私の顔を覗き見て、何かに満足したように、彼は納得した。
「……じゃ、入ろうか」
「え……」
止まった。言葉がじゃない。思考がだ。
全く予想だにしなかったものを目にしてしまって、私は思わず……思わず……思わず……。
——白い教会は、血に汚されていた。七色の輝きを灯すステンドグラスは、滴った紅を引き立てて。噎せ返るような、鉄の匂いを振りまいて。それなのに、そこはとても静かで——。
それは紛れも無く惨状だった。そこで行われたことがどのようなものであったか……その想像がいかなるものであったとしても、真実からそう遠くないもののような気がしてならない。
凄惨だったから。その跡は。その傷は。
「何か、あったようだね」
少年が呟いた。
「そう……みたいね」
もしかしたら、そう返事をする私の唇は、震えていたのかもしれない。
私は無意識に少年の服の裾を掴んでいた。
「……行こうか」
「……うん」

私たちは、そこを出た。
安らぎなんて、どこにもない。だってここは地獄だから。そんな現実を突きつけられたようで、私の気は重かった。
誰かが、ここで殺しあっていたんだろうか。
……本当に、そうなんだろうか？

ふと、私は夢想する。
それは空が抜けるように高く青く透き通っている日のこと。沢山の緑に囲まれて、私は式を挙げている。真っ白なドレスに身を包み、透明なヴェールを頭に載せ、同じように白いブーケを両手にする。
そこは小さいけれど、小ぎれいな教会で。私はゆっくりとヴァージンロードを進んでいく。誓いの言葉はもちろんイエス。マリッジリングを指に嵌め、密やかに口付けを交わす。
参列者は少ないけれど、誰もが私たちのために拍手を捧げてくれていて。響き渡る鐘の音を背中にしながら、私と彼は教会を出て、そこには沢山の鳩が飛んでいて、私はそっと笑うんだ。

そんな幸せを願っちゃいけないのかな？

——二人は知らない。
ここで刻まれた悲しみを。
はかなく散っていった少女たちの思いを。
純粋な願いを。
血塗られた結婚式。
例え穢れていても、成し遂げたかった願い。
二人は知らない。
そして、もう誰も知ることは無い——。

581　ロボットということ

カタカタカタ……キーボードの音が鳴り響く。

017……018……019……。
「うーん、一番怪しぃのはこいつらか？」
モニターを眺めながら源五郎が呟く。
十七番、柏木梓。二十番、柏木千鶴。六十一番、月宮あゆ。一緒に行動していた三人が、同時に死亡している。他の参加者と遭遇した形跡も無いにもかかわらず、だ。
同士討ちも無い訳ではないだろうが、監視の届かない屋内での出来事というのも気になる。
「少し調べてみますか……」
その時、源五郎専用の携帯電話がけたたましい音を鳴り響かせる。
「……どうした？」
警備用のメイドロボが、自らコンタクトをとってくることは滅多にない。怪訝、あるいは険しいともとれる表情でそれを取る。
「……目標捕捉、施設ヘト近ヅキマシタ」
「ついにきたのか……御堂か？」
「至近距離ニ……019……040……083……一体ハ判別不能。少シ離レテ021……069……反対方向ニ092……サラニモウ一体生体反応……コチラモ個体特定ハデキマセン」
特定不能の生体反応……長瀬祐介か、七瀬彰か、大庭詠美か、長瀬一族のものか……そして、未知の死んだはずの人間か。
そして、特定できた番号。
「……柏木耕一に巳間晴香……そして坂神蝉丸か……」
苦々しく顔を歪める。
「……はあ……よくもまあこれだけ集まったものだ。丁重にお帰りしてもらえ。……ああ、なるべく殺さないようにな。ただし、施設に危険が及ぶなら――殺しても構わん」
「……了解シマシタ」
ツ――――――
通信が途絶える。

「ふう、さて、どうなることやら……」
もしもの時は受身ではいられなくなるかもしれないな……そう考えながら再び作業へと入った。
「……というわけだ」
軽く、お互いに状況を確認しあう。本当に、軽く、だ。
敵……と思われるロボットがいる前であまり長居するのも憚られた。
「とりあえずは一度離れよう……話はそれからだ」
『はい』
だが、それは叶わなかった。
「……目標捕捉。只今ヨリ行動ヲ開始シマス……」
「……何か言ったか？　あのメイドロボ？」
「……何か……言ったね」
耕一と、彰の台詞。
「……！　伏せろっ!!」
突如、蝉丸が叫んだ。
同時に、彰と耕一の頭を押さえつけ、地面すれすれにまで叩きつける。
「ぐぇ……」
ガァン……!!
三人……いや、正確には気絶している月代を含め四人の上を弾丸と思われるものが通過した。
「(ﾟДﾟ)……ん？」
よけなくても、当たらない程度の場所を、通り抜ける。
「立チ去ッテ下サイ。ココハ禁止区域デス。……参加者ノ皆々様ハココニ立チ寄ラズげーむヲオ楽シミクダサイ」
メイドロボ特有の機械質な音声があたりにこだまする。
「気付かれた……？　いかん、思ったよりも攻撃的のようだ……」
まさかいきなり攻撃してくるとは……
「あ、あれはっ……」

木に突き刺さった飛んできたもの……
「矢……だな」
耕一が姿勢を低くしたままでそう呟く。
『ゆっくりと後ろへ下がれ……』
蝉丸が、手で二人にそう合図する。
月代を引っ張りながら、耕一。
「あいつは……なんなんだ？　禁止区域だと？」
こちらへ向けられたメイドロボの右腕の甲に、黒い穴が開いている。
あそこから、恐るべきスピードで飛び出した矢。
人が一人、充分に隠れられるほどの木にそれぞれ
「絶対に顔を出すな……」
一人ずつ身を潜める。
（一度、撤退した方がいいな……）
耕一と、彰と、月代を順番に見やり、そう判断する。
一人は気絶、二人は大怪我をしているようだ。
「直グニ立チ去ッテ下サイ……後十秒、立チ去ラナイ場合ハ強制的ニ排除シマス」
「……」
「蝉丸さん、ここは……」
「ゆっくり下がれ……」
二人を手で制しながら、蝉丸が言った。
もし、わき目もふらず全速力で転進していたとしたら……四人共全員戦闘を回避できただろう。
だが、それを耕一達が分かるはずもなく……。
「九……八……七……」
（絶対に顔をだすな……）
ささやきながら、蝉丸。
耕一も、彰も、傷を負っている。素直にそれに従った。
それだけではない。蝉丸の声には、二人にそうさせるだけの有無をいわせないだけの雰囲気があった。
――しかも、耕一は月代を背負っている――
（あれは、ろぼっとなのか？）
（ええ、そうです）

（では、……遠慮はいらぬ……というところか）
蝉丸が、ベレッタを構えながら、戦闘態勢をとる。
「三……二……一……排除開始」
ガァン!!
蝉丸の隠れる木のすぐ横を恐るべきスピードで矢が通り抜ける。
ドン!!
すかさず、蝉丸が照準をつけてメイドロボを狙い撃った。
「ほんとにいきなり撃ってきたよ……」
彰もまたマシンガンを構え、そうぼやいた。
「(ﾟДﾟ)……むにゃむにゃ……騒がしいぞゴルァ」
耕一もまた背中で聞こえる寝言を聞き流しながら武器を構える。
「やれやれ……今度はロボットか……」
対象が人間で無いだけ、比較的楽に照準を構えることができた。
だが……
ガイーン……!!
「いかん……まったく歯がたたん」
メイドロボに命中した弾丸。
だが、それは奇妙な金属音と共に弾き飛ばされる。
「防弾チョッキ？」
「奴がロボットならば装甲が張られているのだろう。それより、奴の主武装はボウガンのようだな。君達が防弾チョッキを着ているといえど、まともに当たれば致命傷だろう」
「……そうですね」
彰が、自分の防弾チョッキを見つめながら、覚悟したように呟く。
「……そ、そうっすね……」
一方、耕一は自分の防弾服を見つめると、赤くなりながら呟く。
「笑えるなら、大丈夫。耕一君。そうだな、君の武器を使おう。いくら科学が進んだからといっても、その口径ならあの装甲を貫けるだろう」

「はいっ……」
「それまでは俺が奴を引き受けるっ！」
それを最後に、蝉丸が木から飛び出した。
「目標捕捉……発射！」
メイドロボの腕から、再び矢が射出されるが、蝉丸は再び木の陰へと身を潜める。
木の陰から木の陰へと体を移しながら、蝉丸は徐々にメイドロボのほうへと近づいていく。
恐るべきスピードの矢とはいえ、捕捉してからでは捕らえられない蝉丸のそのスピード。
（だが……これ以上は危険だ）
すでに、蝉丸が隠れ潜む木からメイドロボの間に障害物などない。
ドン！
蝉丸の弾丸が、服に覆われていないメイドロボの足に命中する。
ガイーン……!!
再び弾丸が弾かれる。
（……やはり、この程度の火力では装甲を打ち抜くことはできないか……）
ヒュン……!!
すでに、メイドロボは激しく移動を繰り返していた蝉丸に矢の照準を合わせている。
銃こそ効きはしなかったが、メイドロボの気をそらせる……ということだけはできた。
メイドロボは、今完全に耕一に対し、横を向いている。
「今だ、耕一君！」
叫び。同時に蝉丸が飛び出した。
「……捕捉……」
蝉丸の体をメイドロボの右腕が捕らえる。
「でりゃあっ……!!」
ガオーーン!!
耕一のそれ……中華キャノンが火を吹いたのはほぼ同時だった。
「——？　回避不能!?」

蝉丸の体に向けて矢を放つ直前——
メイドロボの体を、巨大エネルギーの濁流が飲み込んで、岩山の一角を激しく破壊した。
「やったぜ！」
「やりましたね、耕一さん！」
耕一は痛む体のことも忘れ、ガッツポーズをとる。
彰が、強張らせていた表情を解いて、笑いかける。
「これなら……」
「待て、耕一君……まだ動くなっ‼」
巻き上がる噴煙へと銃を構えたまま、蝉丸が戻ってくる。
木から、木へと、身を隠しながら。
「油断は、死を招くぞ」
諭すようにしながら、それでもそこから目を離さない。
「……」
爆発の中から、人の影。
「………えっ？」

「お、おい……ウソだろ？　まるで無傷じゃないか……」
白いスウェットスーツを露出させ、メイドロボが煙の中から何事もなかったかのように姿を現す。
「……耕一君、彰君……君達は逃げろ」
表情を変えないまま、蝉丸が呟く。
「ちょっ……」
「一度態勢を立て直したほうがいい。まともにぶつかっては勝ち目がない……いや、倒せる武器がない……と言ったほうが正確か」
(蝉丸さんは……？)
(心配するな、耕一君。俺は奴を引きつけるだけだ)
安心させるような笑みを浮かべ、蝉丸が呟いた。
(月代を頼むぞ)
「だけど……あんなとんでもない化け物相手に……——!?　そうか……」
耕一が、意を決したように叫ぶ。

「どうした、耕一君……」
「中華キャノン……もっと威力をあげる方法があります。先程の威力とは、比べ物にならない程強力なカが」
ネットで拾った情報ですが、確かなものです……と付け加えて。
「……聞いたことがあるような……ないような……」
彰も緊張の表情を崩さないままに横目で耕一をみやる。
「この中華キャノンの力を増幅させれば……あるいは……倒せます」
耕一の顔を、蝉丸は真剣に見つめた。
「……分かった……君を信じよう……確かにあのような危険なろぼっとをのさばらせておくわけにもいかない。それに先程気付いたことがある。奴にも弱点はある……ろぼっとという……な。絶対に無理はするな。まかせたぞ」
「ちょ、ちょっと……」
彰が混乱している内に、蝉丸は飛び出した。
施設の入り口へと向かって。
「コノ施設ニ近ヅクコトハ禁止サレテイマス！」
耕一達には目もくれず、施設に向かって走るメイドロボ。施設を守るメイドロボにとって、それは一番の重要事項であったから。
「耕一さん、一体何を……」
「威力増幅だ。彰君、君は足を怪我している。蝉丸さんはメイドロボを引きつけてくれている。これは、俺にしかできないことだ。……任せてくれ」
メイド服のスカートをたくし上げ、露出したブルマに中華キャノンを括り付ける。
「いくぞっ……」
耕一が、高らかに叫んだ。
メイドロボの右腕が上がりはじめる。
(機械ならではだ)

フェイント、といったものがまったくない。精密さゆえの正確さ。
（それは、ただの直線的な動きでしかない）
蟬丸は、気を練りながら、メイドロボの真正面に対峙する。
施設の入り口の前に仁王立ちするメイドロボ。
さらに、腕が上がって矢が発射される前に……
「目標捕捉……発射……!!」
その台詞と同時に蟬丸は体を宙に躍らせる。
ヒュン!!
蟬丸の立っていたその空間を矢が通り抜けた。
高らかに宣言して撃たれた矢をよけることなど、軍人として鍛え上げられた蟬丸には容易い。
（そして、次に発射されるまで約三秒……!!）
心眼で相手を見極めるという流派、影花藤幻流の使い手である蟬丸にとって、直線的かつ精密なその動きをかわすことは造作もなかった。
しかも、発射直前に宣言してくれるというプレゼントつきだ。
（これが……人間であれば脅威なのであろうな）
そう、あの御堂のように。
（結局、機械では強化兵には遠く及ばない……というところか）
再び矢をかわし、懐へと飛び込む。
「……!!」
今度は、メイドロボの左腕から黒い影。
「む」
シャキン!!
左手の甲の穴からは、剣の刀身が生えてきていた。
「排除……シマス……!!」
左腕を蟬丸の眼前に向けて振り下ろす、それは、生えた刀身が蟬丸の頭を捉えることを意味していた。
「むうん!!」
ガキン！
気合一閃、蟬丸の頭上で火花が散った。

「耕一さん……一体何を……」
「いいからっ……彰くん……きみはその娘を守ってやっててくれ……これは……今、俺にしかできないっ!!」
倒れている仮面の女、月代をちらりと見ながら、苦しそうにうめいた。
結界、その中で発揮された完璧なる鬼への衝動。そして、その反動で痛めつけられた体組織。
耕一の筋肉組織は、少々の運動でも悲鳴をあげていた。
「ぐおおおおっ……!!」
鬼の咆哮をあげながら、耕一は上下運動を続けた。
足が浮き沈みするたびに、キャノンの横に添えられた手が動くたびに、キャノンの低い駆動音が大きくなっていく。
同時に、耕一の歪む顔。
「こ、耕一さんっ……」
「し、信じろ……彰君!!」

ガクガクと足を震わせながら、耕一は中華キャノンのチャージを続けた。
(くそっ……なんて情けないんだ……蝉丸さんが……耕一さんが、こんなに自分を犠牲にしてまでも頑張ってるのに……僕は何をしてるんだっ!!)
月代をかばうように立つと、メイドロボにマシンガンをむける……が、結局何もできないまま彰は立ち尽くしていた。
心と、足がジクリと痛んだ。

「ねえ、あれ……耕一さんじゃないの……?」
「ほんとだ……耕一お兄ちゃんと彰お兄ちゃんだ……何してるんだろう……」
ちょうど、蝉丸とメイドロボの死闘からは死角の位置で、二人はその光景を目の当たりにした。
苦しそうに脂汗をかきながら上下運動する耕一と、その横でくやしそうに彰。
——ちなみに月代は寝そべっているので二人には

確認できなかった。
「い、行ってみましょう……只事じゃないわ……いろんな意味で」
「う、うん！」
あたりに気をつけながら、そっと七瀬達は行動を開始した。

ガキーン！
蝉丸の頭上で、刀が交錯する。
非業の死を遂げた参加者から譲り受けた毒刀。
「むうん！」
ガキン!!
そのまま力任せにメイドロボのそれを弾き返す。
「……!!」
バランスを崩しかけたが、それを持ち直すと、よろよろと後退しながらメイドロボの右腕が上がる。
矢が、発射される。
「はあっ……！」

「捕捉……発射……!!」
蝉丸の動きはまだ止まらなかった。
弾き返した刀を返し、そのままメイドロボの右腕へと叩きつける。
ゴッ……!!　ズシャッ!!
強靭なその右腕は傷一つ付きはしなかったが、叩きつけられた右腕からの矢は地面へと反れ、岩盤を穿った。
「……排除……シマス……」
ガキンッ！
息もつかせぬ連続攻撃、メイドロボが間髪いれずに横に凪いできた左腕の刃ごと、剣を叩きつける。
バキッ……!!　骨の折れるような音が響き、メイドロボの刃の破片が飛び散った。
「……!!」
機械にも感情があるかのように、わずかにその瞳に動揺が走ったように見えた。
「はあっ!!」

四連撃。最後の一撃は、右手の甲、矢の射出口に向かって突き入れられた。
再び破壊音。射出口に突き入れられた刃が、メイドロボの右腕の内部を深くえぐった。
「右腕発射口損傷……損傷率七十九パーセント……修復不能……」
機械音が、あたりに響く。
ヒュッ……！　一気に剣を引き抜くと、とどめと言わんばかりにメイドロボの後頭部に蹴りを食らわせた。
「ぐううっ……あと……すこ……し……」
手はまだなんとか動く。だが、足の方が限界だった。
（最後まで……もつか……？　俺の体……）
いや、もたせなくてはならない。自分を信じてくれたみんなのためにも。
ギューーン……！　既に中華キャノンの砲身が青く輝きはじめている。
「がんばれっ、耕一さんっ!!」
もはや、彰には祈ることしかできない。
メイドロボとの闘いは蝉丸がその力で圧倒している。
だが、メイドロボの機能を完全に止めるには……もうこれしか方法はない。
「がんばれっ!!」
「……なにしてんの、あんたら……」
突如、右方向からあきれたような声。
「誰だっ……！……は、初音ちゃんか……隠れててくれ！」
マシンガンを向けかけた彰が、あわててその照準をはずす。
「彰お兄ちゃん？」
その、二人の切羽詰った言動と行動に戸惑いを隠せない初音。

「あたしは無視かいっ！　……って、ああっ……!!」
耕一達を追って現れた七瀬と初音、その二人がようやく目の前の死闘に気付く。
「な……こんなときにあんた達何馬鹿やってんのよっ!!」
七瀬の怒号が天をつく。
「(ﾟДﾟ)うるせぇぞゴルァ……むにゃむにゃ……」
「ば、ばかなんてやってないっ……ちょうどいいところに……」
耕一の決意が揺らいだ。
(せっかくだから留美ちゃんか……初音ちゃんに……)
二人のチャージ姿を想像してみる。
……。
(できるかっ！　バカヤロウ!!　……男の俺が投げ出してどうするんだ!!)
少しでも楽になりたい——自分のその一瞬でも沸いた思いを耕一は恥じた。
だが……。
「危ないっ!!」
その耕一の心を遮るように——彰の言葉。
「なっ……ぐあっ……」
バキューン!!
そして突如、予想もしなかった所から沸き起こった銃声。
七瀬を突き飛ばした彰の体が、吹き飛ばされる。
その一瞬が、まるでスローモーションのように。
「なっ……彰君っ!!」
「あ、彰お兄ちゃんっ!!」
「(ﾟДﾟ)……う～ん……えっ？　なっ……ここはどこなんだゴルァ」
彰と、七瀬の体が、地面を転がった。
「ぐふっ……」
腹を押さえて、うめく。
「ふふふ、役者がそろってるようですね……ひひひ……」

ちょうど、蝉丸とメイドロボとを挟むようにして現れたのは……長瀬源三郎だった。
口元からよだれをしたたらせながら……まるで麻薬中毒者のように。
「なんて事をっ……」
蝉丸が、銃声に気を取られた一瞬――
メリッ……
「がはっ……」
メイドロボの左拳が蝉丸の腹に食い込む。血が薄く舞った。
「……捕捉……」
メイドロボの左拳に残されていた約一センチ程の折られた刃の根元が血を滴らせる。勢いよく引き抜かれたそれが、空中に赤き川をつくり、地面へと落ちた。
（なんてことだ……よりによってこんな時に……）
腹を押さえながら、蝉丸がうめく。
（最悪の――展開だ――）

582 希望

最悪の展開が七瀬留美の目の前で展開されている。
まず自分から一番離れたところでは、銀髪の青年が、少女の姿をしたロボットと対峙しているのだが、彼の腹からは真っ赤な血がしとどに溢れていて、苦しげな表情で呻いている。メイドロボの拳には小さな刃。青年はあの刃物で腹をやられたのか。
一方、自分のすぐ傍では七瀬彰が苦しげな表情をしている。状況を理解するのに数瞬が必要で、自分を庇って彼が銃弾を受けたのだということを理解すると顔から血の気が失せる。ただでさえ怪我の重い七瀬彰の身体にこれ以上のダメージはあまりに深刻。意識はあるようだが次の瞬間にもある保証は無い。
更に柏木耕一が焦燥にまみれた表情で怪しげな動きをしているのを、長瀬源三郎の手の中の鈍色が狙っている。何やら必死な耕一にそれをかわす余裕は

見受けられない。何故耕一があのような動きをしているかは判らないが、何かの冗談でやっているのではないことくらい七瀬にも判る。あの動きが勝利には必要で、長瀬源三郎はそれを妨害しようとしている。そしてその妨害を止める術はない。

（大ピンチじゃない！）

大ピンチなのだ。

自分が動かなければならない。少し離れたところにいる柏木初音や仮面の少女は殆ど腰が抜けたような体で、行動を促すにはあまりに時間がなさすぎる。幸いにして武器はある。右手に鉄パイプ、左手に拳銃。今、自分が動けばこの劣勢を覆せるのだ。

なのに身体が動かない。おかしい程に弱気だった。

七瀬は一応武道をやっていた。あの銀髪の青年が優れた戦闘力を持っていることは一目で判ったし、その青年があああまでやられていることからあの少女型ロボットが想像を絶するほど強いことも判る。

勝てるわけがないと思った。

自分は確かに銃火器を持っていた人間に鉄パイプだけで勝った。けれど身体が動かない。逃げたくなる衝動。今からすべてを捨てて逃げてしまえば今は死なないで済むかと思う。

「――馬鹿ね、あたしは」

けれど七瀬留美は立ち上がって、誇りを胸に武器を、鉄パイプを握り締める。

自分を生かした友達のこと。自分が殺した男のこと。自分が戦った時間のこと。自分が生きた人生のこと。すべてを背中に背負って七瀬は立ち上がる。

七瀬留美は心の中で高く高く叫ぶ、

（あたしは、七瀬だ）

己のためだけに動く人間が乙女の筈がないし、保身のためだけに逃げる人間が七瀬の筈がなかった。

生命を捨てる覚悟で七瀬留美は立ち上がる。

そして殆ど同じ瞬間に七瀬彰も立ち上がる。

「惜しかった――実に惜しかったです。しかし、残

念ながらあなた方もこれで終わりです」
　見ているこちらの頭がおかしくなりそうなほど明るい笑みを見せて、長瀬源三郎は高らかに掲げた拳銃を柏木耕一に向けている。それは紛れもなく狂人の顔で、昔世話になった「おじ・長瀬源三郎」の面影は微塵もなくなっていた。
　眩暈のする頭でも判る。今、柏木耕一がやられたら自分たちの生き残るための希望の火は完全に消え失せる。管理者側を打倒するなどと威勢のいい事を言っておきながら、何も出来ないまま終わる。思った。女子供しか他にいない今、自分以外に長瀬源三郎を止められる人間はいない、と。
　口の中に鉄の味が充満する。顔などやられていないのにどうして血の味がするのかと不思議になったが、すぐに内臓から逆流しているのだと理解。身体が重くて重くて、精神を犠牲にしなければ立ち上がることも出来なかった。それでも彰は立ち上がる。
「彰くんっ!?」
　同じ瞬間に立ち上がった七瀬留美の驚愕の声。そして七瀬がそれ以上何かを言うより先に初音たちの、そして耕一の傍に駆け寄り、
「彰お兄ちゃんっ！」
　初音の声を無視して、右手に握ったサブマシンガンの銃口を長瀬源三郎に向けて躊躇いもせず引き金を引く。
　ぱらららららら、ぱぱぱぱぱん、かちゃん。
　聞きなれた弾幕の音、土の撥ねる音、顔を汚す撥ねた土、そして弾切れの音。銃の反動で内臓が更に痛めつけられる。血を吐くのは必死に堪えたが、それまでだった。
　二秒で弾が切れた。そして無様なことに最後の攻撃は一発も当たらなかった。乱れ切った集中力と崩れ切った体力では、ある程度離れた的を狙うことなど、どだい無理な話ではあるのだ。
　だがそんなことは、彰だってよく承知している。それでもこの攻撃に意味はあると判って、彰は引き

金を引いたのだ。
狙い通りだった。彰は「彼が狂っていること」を前提としてこの攻撃を行った。冷静な判断力を失っている長瀬源三郎ならば、本当に止めねばならない耕一よりも、武器を失って簡単に殺せる自分を少しだけ優先するかもしれない。耕一だって簡単に殺せることに気付かず、自分を狙うかもしれない。ゆっくりと長瀬源三郎はこちらを振り向いて嗤う。
「……まだ、生きていましたか、彰」
同じように彰も笑おうとしたが、頬を動かす気力さえ残らなかった。
耕一の、エネルギー充電の時間を稼げればいいのだ。それにこの、自分が死ぬまでの数秒で何か状況が劇的に変わるかもしれない。
最後の犠牲には自分がなろう。
「彰くんっ!!」
耕一の声、
「僕に構うなっ！　早く攻撃の準備をっ!!」
叫んですぐ彰は生命の火を燃やして源三郎に向かって走り、自分の頭に向けられた拳銃に心が挫かれそうになりながら、それでも走った。頭の中が真っ白になって何もかも聞こえなくなる。銃声も聞こえない。初音の声も聞こえない。眼前の世界がモノクロームに染まって見える。銃口の深い深い黒が更に深く黒くなって、数瞬で自分の生命は燃え尽きるのだと再確認。
「うぁあああああああ！」
数秒を稼げば状況は変わる。そう信じよう。
叔父までの距離は二十メートル。一秒に三メートルしか進めない今の自分にはあまりに遠いが奇跡を信じろ。銃を捨て右拳を振り上げて、左の手のひらで顔を覆って無為で無力な壁を作り、最後の力を右足に込めたところで聴覚が戻り、
雄叫びが聞こえた。
勿論七瀬留美の雄叫びだった。

「でぇぇぇぇぇい！」
長瀬源三郎は横から迫り来る七瀬留美を見ると少しだけ動揺したような顔を見せたが、
「せっかく甥と語らっているときに邪魔をするな」
次の瞬間には七瀬の足下に弾丸を放つ。土の撥ねる音。七瀬の顔が泥で汚れる。それでも七瀬は怯まない。鉄パイプを振り上げて源三郎のゼロ距離に至り、力任せにそれを振り下ろした。しかし怪我をした体ではそれを満足に振るうことは出来ず、源三郎に悠々とかわされる。横にかわしてそのままバックステップで距離をとると、
「面白い娘さんだ。だが、その手に手に手に持った銃も銃も銃も使わないで私に勝てるとでも思ったら大間違いだ大間違いだ、大間違いだ」
狂人めいた高い声で同じ言葉を繰り返す。そして源三郎は再びその銃口を七瀬に向け、引き金を引く。かわせる速度を遥かに超えた弾丸。当たり所が悪ければ一瞬で天国だ。折原や瑞佳の居る天国。

「あたしはまだ、そこに行く訳にはいかないのよ！」
七瀬の矜持はそんな甘えを許さない。銃で撃たれた足はひどく痛む。だが、そんな状態にもかかわらず、信じられない速さで七瀬は駆ける。
「そんなに簡単に殺されてたまるかあっ！」
「そんなに簡単に死ぬのが嫌ですかあっ!?」
まるで無限に弾があるように源三郎は銃を撃つ。自分のすぐ傍をかすめる弾丸に肝を冷やしながら、七瀬は走り続ける。
走りながら気付く。源三郎の背中越しに「希望」が見える。鉄パイプと扱いなれない拳銃と重い怪我を負った自分が、この男に勝てる希望が。「希望」は気配を完全に消して、そして七瀬留美の目に何かを伝えようとしている。
（――ＯＫ）
七瀬は希望に縋ることにした。ポケットの中からナイフを取り出して、それを放り投げる。勿論長瀬源三郎はそれを軽い足取りでかわし、拳銃の引き金

を引き続ける。七瀬もすぐに足を動かしてその攻撃をかわす。
「当たりませんよおおお」
当てるつもりで投げたわけではない。七瀬はまた走り出す。こちらも反撃をしなければ。使ったことの無い拳銃を右手に持ち替え、そして走りながら引き金を引く。当然だがまるで見当違いの方向にしか弾は飛んでいかない。反動が大きくて走るのも難儀になる。だがそれでも撃たなければ。
「あはははは、拳銃を使うのは初めてですかぁ？」
初めてに決まっている。
源三郎は嗤いながら、手慣れた扱いで引き金を引いて自分を狙う。弾薬の交換も手早く、隙を殆ど見せない。髪を掠める。焦げたような熱が広がり、鉄パイプを捨てた左手で髪を押さえる。致命傷は無い大丈夫大丈夫大丈夫っ！　言い聞かせ七瀬は走る。
時間を稼ぐのだ。「希望」がチャンスを掴むまで時間を稼ぐのだ。意味の判らない行動をしている耕一が『何か』をやり遂げるまで時間を稼ぐのだ。
「余所見はいけませんねえええっ」
源三郎の声、弾丸が今度は、自分の耳元すれすれを通り過ぎる。鼓膜が破れたかと思う。だがひとつくらい鼓膜が破れても動くのに難儀は無い。戸惑うな！　唇を噛みながら言い聞かせて七瀬は走る。
幸運も長くは続かない。弾丸が僅かに七瀬の頬を掠めた。血が弾ける。
「うぁ……っ」
痛みよりも先に熱が全身を走る。痛みの熱ではなく怒りの熱だ。乙女の顔を傷つけるとは何事だ。
——生半では済まさない。
怒りを前面に出した顔で七瀬はゆっくりと足を止め、拳銃をポケットに放り込むと、先程投げ捨てた鉄パイプを拾って構える。
言うまでもないが、この表情は演技だ。
「おやおや、観念しましたか？」
「——乙女の顔を傷つけたわね、アンタ」

怒りに震えた声。これも演技だ。本当である。
「それは申し訳ありません、アイアン・メイデン。しかし、すぐ殺してあげますからお許しください」
「――撲殺してやるわよ」
このドスの聞いた声も演技なのだ。本当だ。
(本当よ。少なくとも半分はね！)
怒りの表情の下で七瀬の心は達成感に充ちた。拳銃を構えた長瀬源三郎。鉄パイプを構えた七瀬留美。そして完全に気配を消していた「希望」。笑顔が漏れた。やっと勝利が目の前に見えたのだ。確かな「希望」が長瀬源三郎のすぐ背後に見える。
完全に気配を消した「希望」は、ナイフを右手に構えている。
その「希望」の名前は勿論、七瀬彰だ。

長瀬源三郎はまるで気付かなかった。自分のすぐ背後に気配が迫っていることに。半ば狂った頭ではそれも仕方ないと言えようか。柏木耕一を最初に殺していれば彼は勝利できたのだ。だがその勝利は、七瀬ふたりによって奪われた。
そのことにも気付かずに、狂ったような笑いを見せて源三郎は叫ぶ。
「終わりです、七瀬留美！」
「――終わるのはアンタよっ!!」
七瀬留美の叫びと同時に、源三郎の背中に痛みが走る。何かが背中を通ったような感触。刃物の痛みだと理解するのに一秒。
「だ、誰だっ!!」
振り返ったところで立っていたのは七瀬彰。源三郎は彼がここまで接近していたことに気付かなかった。殺気の一つも感じられなかったのだ。心の力が疲労で薄弱になっていたから気付けなかったのか。
「僕だよ、おじさん」
真っ赤に染まったナイフを手に、七瀬彰は真っ直ぐで凶悪な眼差しを源三郎に向けている。
「ちぃっ！」

源三郎は銃口を彰に向ける。まだ間に合う。一秒も経たない内に甥を殺せるし、一秒が経過する頃には七瀬留美も殺せる。痛みを堪えて銃口を彰の脳髄に向け、引き金を引こうとし、
「くらええええっ!!」
引く前に、今度は七瀬留美が走り寄って鉄パイプを源三郎の頭めがけて振り下ろす。今度こそ、その打撃をかわすことが出来ない。鈍い音がして源三郎の頭が割れる。
「うがあああっ！」
意識を根こそぎ持っていかれそうな打撃だった。しかしそれでも源三郎の狂気は意識を繋ぎ止める。未だ握り締めたままの拳銃を今度は七瀬留美に向けて振り返りながら叫ぶ、
「貴様ら——舐めやがっ」
叫び切ることが出来なかった。
彰の左の拳が振り返りかかった源三郎の頬に叩き込まれる。頬から顎にかけて打ち込まれた痛烈な打撃は喋りかけの源三郎に手ひどく響く。脳が揺れて狂気が崩れ落ちる。今度こそ源三郎は拳銃を取り落とし、身体もまた地面に崩れ落ちようとする。だが崩れ落ちることを彰が許さない。彰は源三郎の髪の毛を掴んで無理矢理身体を起こさせると叫ぶ、
「行け！　七瀬さんっ！」
「行くわよっっ!!」
七瀬留美は鉄パイプを投げ捨てていた。拳を強く握り込んで高く振りかぶる。鉄パイプを軽々振り回す乙女の、その拳が。
「や、やめ——っ」
止めるわけがなかった。
その体重と速度と腕力をひとつの拳に詰め込んで、七瀬は全力で拳を叩き込む。がつん、と鈍い音がした。骨が折れる音——鼻が潰れる音だった。
彰が掴んでいた髪の毛が全て抜けた。彰の指には抜けた毛が残り、毛の持ち主は二メートルもの後方に吹き飛んでいた。ふたりは止まらない。すぐに源

三郎に駆け寄る。
鼻血で真っ赤に染まった顔面になってもなお、源三郎は身体を起こそうとする。最後に残された狂気だった。
七瀬留美は踵を高く振り上げた。七瀬彰も同じように高く。七瀬留美の踵は先と同じ源三郎の顔に向けて。七瀬彰の足の裏は股間の急所に向けて。
——ほぼ同時に、真っ直ぐ振り下ろされる。

少し遠くにいた初音や月代ですら聞こえるような、凄まじい、肉と骨の潰れる音がした。悶絶の声すら出す間もなく、源三郎の意識は今度こそ完全に吹き飛んだ。

体力を消耗しすぎて息が乱れた七瀬彰に、同じように息を乱しながらも笑顔を見せた七瀬留美が肩を貸す。
「無理させてごめんなさい」
その顔を見て彰も少し笑う。
「いえ、大丈夫です。そちらこそ大丈夫ですか？」
「泣き言は言ってられないわよ。あたしは乙女で、七瀬なんだから」
冗談めいた口調の七瀬留美。七瀬彰はおかしくなって再び笑みを漏らす。
「僕も七瀬だから、泣き言は言えないね」
そしてすぐに真面目な顔になって彰は言う。
「——笑っている場合じゃなかった。蝉丸さんたちの援護をしないと」
「ええ」
「彰くん、留美ちゃんっ！　蝉丸さんが危ない、もう少しだけ、もう少しだけ時間を稼いでくれっ！」
先程から真剣に冗談のような動きを繰り返している耕一。だが、その股間につけられた大砲からは、尋常ではない圧が感じられる。それは確実に切札。
「判りました！」「判ってるわ！」
殆ど同時に叫んで、二人は再び走り出す。

583　紅と闇

「くっ……」
血が——
血が流れていく。
仙命樹の力が、上手く働いてくれない。
只でさえ弱体化している上に、今は日が照っている昼間——
傷が塞がるのが、遅い。
目の前に立った少女——のような〝もの〟は、暗い瞳を自分に向けた。
そこに光は無い。
——これが、〝ろぼっと〟というものか——
それを見て。
蝉丸は目の前に立つ〝もの〟の恐ろしさを——認識する。
からん、という軽い音。
少女の手に残されていた、僅かな刃が落ちた。
武器は失われた——？
ばちっ。
否。
その予想——或いは希望——を踏みにじるかのように、不吉な音が鳴った。
見れば。
少女の左手に、異様な気配を感じた。
右手は、奇怪な音を発しているものの——不吉な〝何か〟を感じさせることはない。
——電撃。
察知。
そして、その予想は——当たりだ。
思案も、対処も考える間も無く。
少女の左手が打ち出される。
咄嗟に身を引いた——
血の線が宙に引かれる。

「――標的、捕捉――破壊――」
不吉な言葉を呟きつつ、メイドロボは蝉丸に近付く。
小柄な身体を利用したそのフットワークは、傷付いた蝉丸を遥かに凌駕する。
横に回られた――
――逃げていては、埒があかないようだな。仕方がない。
地に着く。
それと共に、弾くように、駆ける。
少女の左手が空を切る。
一瞬の隙。
踏み込み――駆けた勢いを止め、左足を軸とする。
振り返り様に、右の脚を放つ――――！
がきぃっ！
鉄の音。
銃弾すら跳ね返すそれは、異様な程硬く。
しかし、正確に肘に放たれた蝉丸の一撃はメイドロボの左腕を高く、高く叩き上げた。
「――」
その顔は、無表情であったが――
それでも、やはり唖然としたのだろうか？
無防備な腹。
狙うはそこだ。
「ふっ――――！」
強烈な踏み込みと共に放たれた拳は。
鉄が歪む音と共に、少女の身体を遠くに吹き飛ばした。
――だが。
「……くっ」
蝉丸の顔には、脂汗が浮いていた。
点々、と――血が落ちる。
既にその服すらも、紅く染められていた。
傷は、未だ治らず。
戦の場において癒す事もままならず。

その傷は――
確実に蝉丸の体力を蝕んでいった。
少女が、立ち上がる。
ぎりぎり、と奇怪な音を発していた。
――戦えるのか？
自問。
暗き眼を向け。
少女は、それを〝破壊〟すべく左手に電撃を纏う
――
――俺が戦わずして、誰が彼らを護ると言うのだ。
自答。
今為すべき事は、時間稼ぎ。
自分が少し前に立つ少女を倒す事は叶わぬだろう。
だが。
ここで闘う事が、勝利へと繋がるのなら。
多少の傷など、構わない。
自分は、軍人だ。
その為に在るはず。

だが。

「蝉丸さんっ――！」

不意に、呼び掛ける声。
あの声は。
「いかん――来るなっ！」
蝉丸は、駆け寄らんとする、もう一人の戦士に静止の声を掛けた。

それが間違いだった。

ドンッ！
「がはっ……!?」
気付けば、少女の身体が目の前にあった。
いや――それが離れていく？
どういうことだ。
しかし、そこで気付く全身が痺れるような感覚。

しまった——蝉丸は気付く。
そう。
振り向いてしまったその隙に。
〝あれ〟を食らったのか。
——くっ！
空中で、身体を捻る。
全身を使い、衝撃を止め、そのまま駆け出す——
はずだった。
不意に、ぐらりとその身体が揺れた。
当然だ。
電撃を食らって、無事でいられる筈がない。
一瞬で気絶しなかっただけでも、幸運と言えよう。
——くそっ、不甲斐ない……。

己の力不足を悔やみつつ。
——蝉丸の意識は、闇へと落ちた。

584　力の渦

カカタカタカタ……。
機械の檻に囲まれ、冷たい光を浴びながら。地から湧き出る、鬼の泣き声のような稼動音の中で、源五郎は調査を進めている。
十七番、柏木梓。二十番、柏木千鶴。六十一番、月宮あゆ。三人が死亡した建物に誰かを向かせることはできるだろうか。死体が無ければほぼ黒と見ていいだろう。
確か近くに配置されているのは——源五郎が兵隊のデータを読み込もうとしたとき。
ピッピッピ……。
携帯が異常音を発しはじめた。この音は……ＨＭ—12の緊急コード、破損警告だ。
それを聞いて、肩の力を抜く。調査の腰を折られて、気抜けした顔をしてみる。

「まだまだ大丈夫だとは思うが……確認してみるか」
源五郎は破損状態をチェックしはじめた。なんといっても自分の身体よりもロボットが好きなのだから仕方がない。特にＨＭ―12型は、源五郎のお気に入りなのだ。
「ふむ……外皮コーティングの融解、右腕射出口破損、左腕短剣損傷……か」
煙草をひょいと咥え、二、三度ぷらぷらと遊ばせる。
なあに、まだまだ。
そんな余裕すら持って、源五郎は煙草に火をつける。ぷかぷかと煙を吐きながら考える。
「柏木耕一……それとも坂神蝉丸、か……？　生物とは、やり方次第で、そこまで達するものなのか……」
源五郎は〝人間のこころ〟というものを信奉する一方で、〝生身の身体〟の限界を感じ、失望していた。機械に依存する全ての人間は、人間のどこかに諦めを感じているのかもしれない。
興味を覚えて、別の端末に移動する。
「ちょっとばかり、片目を借りるよＨＭ―12……」

「がはっ⁉」
全員の期待に応え、未知の性能を持つロボット相手に戦い続けた武人が、遂に決定の一打を許してしまっていた。
「攻撃、成功……」
冷たく、事務的に。無感動な事実が述べられる。
くるくると回るように崩れ落ちる蝉丸。叫ぶ彰を後ろに残し、七瀬が駆け寄って抱きとめる。
「(ﾟДﾟ)せ……蝉丸っ！」
月代が蝉丸に被さる。
……不覚。
無意識にだろう、そう呟いて蝉丸は力尽きる。ロボットの刃に絡む血が、鮮やかだった。動脈をやら

れているのだろうか。
　月代に蝉丸を任せ、七瀬は一人、ＨＭ―12に対峙する。ひどく透明な瞳孔が、高らかに機械であることを主張していた。
（機械のくせに……）
　悔しさをぶつけるように、その眼を注視していた七瀬が、ぎょっとした。
　右眼がぐるん、と。左眼と全く違う方向に動いたのだ。その眼は後ろにいる彰、もしくは駈け寄っているであろう初音を捉えた。そう確信し、七瀬は焦りを覚える。押し寄せる危機感に、自然と汗が噴き出す。ふらつく身体に決意の鞭を打ち、闘争を続けるべく得物を握るその手に、力をこめる。
（機械のくせに……生意気なのよ！）
「えーと……なんだ？　装備充電中か。放電したな？　成功？　坂神蝉丸は倒したのか？　で……なんだ？　この坂神を引きずっているお面(｀Д´)は？　それから……誰だ？　ああ、七瀬留美か？　ん？　なんだこいつは？　何やってるんだ？　柏木耕一か？」
　ぶつぶつ言いながら右眼のカメラを動かしていく。少しばかり常識を超えた、認識しづらい要素が多すぎる。
「んー……こりゃひどい怪我だな、彰くんか。巳間晴香は……こっちには居ないようだな……」
　更にカメラを動かす。ぐりぐりと右眼が自在に動く。視界の移動に伴い、源五郎はその眼の動きを見た七瀬と同様に、ぎょっとした。
「ん？　これは？　げ……源三郎さんか!?」
　泡を吹きながら地に伏す、源三郎の姿がそこにあった。
　ドガ！
　画像が揺れる。
「なんだ!?　くっ……これ以上は無理か！」
　仕方なく、統制を再度ＨＭ―12に戻す。

「ＨＭ―12、方針変更だ。やれることをやれ。殺して構わん。充電終了次第、獅子吼の使用も認める」
源五郎は方針を改めることにした。それは、自らもリスクを負わざるを得ない状況に陥ったと、そう覚悟した上での決断であった。

ちょうどＨＭ―12の右側から。初音は、無謀にも体当たりしていた。
「初音ちゃん！」
七瀬が間に割って入る。普通なら許されぬはずの、迂闊な動きだったが、ロボットは反応しなかった。
「コマンド変更」
短く、ひとこと。何を意味するか解らない。だが不吉な予感を漂わせ、ロボットは静かに宣言した。
七瀬と初音の、目の前で。
「……くっ！」
恐怖に屈することなく、七瀬は両足を広げ重心を下げる。横から振り上げた鉄パイプを振り下ろす。

叩きつけるように打ち降ろされた、必殺の一撃。
しかし、それを弾くようにＨＭ―12の腕が唸りをあげて振り回される。腰から上、三百六十度の回転。
七瀬と初音が煽りをくって転倒する。明らかに今までと異なる、人外の動きへの変化に、七瀬は戸惑いながらも叫ぶ。
「は……初音ちゃん、大丈夫⁉」
「う、うんっ！」
お互いの身を案じる二人をよそに、ロボットは蝉丸と月代のほうに正対していた。
「充電終了」
ただそれだけを告げて、ＨＭ―12は口を開く。いや、人間ならば顎を外す、と言った方が正しい。奇妙なまでに直立しながら、両眼の瞳孔が激しく開閉していた。
距離を測っている。七瀬はそう直感した。
唸りが聞こえる。開いた口からだろう。しかしそれは次第に大きくなり、やがて世界全体が鳴り響く

ような、異様な咆哮に成長していった。
コオオオォォォォォォ……
地の音。
不気味だった。
噴き出す汗も乾ききり、瞬きすら忘れて走り出す。
(これ以上、死なせてたまるか――!!)
ひょおおおぉぉぉぉん!!
颪の音。
理由はない。
ただ直感に従い、七瀬は意識のない蝉丸をひっぱり、投げ飛ばす。
「逃げなさい!」
月代に叫ぶ。自らも、横に飛ぶ。その咆哮に、間違いなく恐怖を感じていた。
……タイミングが、遅れた。
いくつもの不確定な要素の積み重ねの中で、七瀬はそれだけを確信していた。
(間に……合わないっ!?)
イイイイィィィィィン!!
切り裂くような無音に近しい高音とともに、七瀬は腕に痺れを感じ、得物を取り落とす。先ほどまで背負っていた岩は砂と化し、鉄パイプは半ばから塵と化していた。
それでも無事だったのだから……奇跡がおこったように思えた。
(かわした……の?)
ロボットが、転倒している。
見上げる七瀬の視界に。
太陽を背負って女が立っていた。
「良く解んないけど……相変わらず無様なヤツね」
日本刀を閃かせ。
にっこり笑って女は言った。
「助太刀、するわよ」
そこには晴香が、立っていた。
貸しだからね、と余計な一言を付け加えて。

五体のロボットを前に、源五郎は考えていた。
それは、施設を守るＨＭシリーズの全てだ。戦闘用の二体を信頼し、あまり警備は置いていなかった。
「見捨てるわけにも、いかないか……」
そう呟いて、彼女達を参戦させる覚悟を決める。
もちろん、戦闘用でもなくロクなプログラムも施されていない彼女達は、それほど強くない。防御力として人間と大差はない。
「三体、裏から回れ。脱出口を使って構わん。初撃が命だと心得て、戦闘位置をサーチしながら行動しろ。最優先は七瀬留美、巳間晴香だ。殺してかまわん」
二体を最後の守備に残し、計略を仕掛ける。
「行け」
これが当たれば大逆転だ……そう祈りながら、源五郎は神経質に部屋を歩き回った。
しかし。
源五郎の期待は大いに外れる事になる。

「千鶴姉……これ、なんだろう？」
大きなファンが遠くに見える。今は止まっているが、動けば相当大きく空気を動かすのだろう。
「海底トンネルなんかで、圧力保持に使うファンに似てるけれど……」
小首を傾げて黒髪の女性が答える。
「うぐぅ……みんな、おんなじ顔だよぉ……」
足元には、三体のロボットが倒れていた。
出会い頭。
まさしく源五郎が調査中の、怪しい三人組に出会ってしまったのだった。

585　鉄

転倒した少女のロボット。
その頭部が、僅かに歪んでいる。
「案外蹴りでもへこむのね――」
そんなどうでもいい事を呟きつつ。

晴香はメイドロボの右を取る。
それに呼応するが如く。
七瀬留美はメイドロボの左を取った。
「気を付けて。そいつ、左手から電撃放つわよ——」
警告。
晴香は答えはしなかったが——無言のまま、日本刀を鞘に入れた。
正解だ。
鉄製の武器など、掴まれればそれまで。
銃の効かぬ相手、刀など使ったところで斬れる筈も無し。
だが。
——素手で倒せる相手でもなさそうね。
立ち上がったメイドロボの左手は、未だに不吉な音を立てている。
一瞬の停滞。
メイドロボは、右を見た。
七瀬を。
「ふっ！」
瞬間、晴香が駆けた。
メイドロボがその姿を確認すると同時に、七瀬が駆ける。
二方向からの攻撃。
流石に、片手では対処は出来まい。
「——破壊」
小さく、ぽつりと。
まるで駆動音の一つのように、その単語は吐き出される。
それで怯む晴香ではない。
繰り出された左手をひらりと避けると、その腹部に蹴りを見舞った。
吹き飛ぶ。その左手から、七瀬は、メイドロボの後頭部を打撃した。
敢え無く、メイドロボは顔面から叩き付けられる。
——それでも、壊れる事は無い。

「しぶといヤツね……！」
忌々しげに、七瀬がぼやく。
倒れたメイドロボが、脚を掴まんと繰り出す左手をひらりと避ける。
その腕を踏み、後ろへと跳んだ。
「殴って壊れる相手じゃなさそうよ」
「……かといって、銃が効くわけでもないわ。どうするつもり？」
こっちが訊きたい。
再び立ち上がるメイドロボは、微かに異質な音を立てつつある。
その身体が、歪み始めているのだ。
だが——致命的なレベルにまでは、至らない。
——ふと。
晴香の目に停まる物。
それは、誰にでもあるもの。
人であれど、ロボットであれど、それはあった。
だが、今は閉ざされていた。

つい先程までそれは凶悪な兵器であったが——連続して放って来ない事を見ると——
「……留美。あんた、距離を稼ぎなさい」
立ち上がったメイドロボに駆け寄りつつ。
晴香は、七瀬を名指しで呼んだ。
「距離って——逃げろって言うの？」
「いいから——こいつに〝あれ〟を使わせるのよっ！」
〝あれ〟。
メイドロボの遠距離からの攻撃手段と言えば——ボウガンが失われた今、つい先程使われた『獅子吼』以外に無い。
無論、二人は名前までは知らないが。
だが、何故あれを。
「冗談じゃないわ。あんた、あたしを殺す気っ⁉」
「——考えがあるのよ」
脚を払う。
もはや左手しか使ってこないメイドロボの攻撃は

単調過ぎた。
少し考えを巡らせれば。
蹴りや右手からのコンビネーションも使えた事だろうが――
生憎、そこまで考えられる程頭は良くないらしい。
メイドロボは、再び地に伏した。
「いいから、さっさと走りなさい！」
「――」
晴香は。
脚を払うが如く振るわれた左手を、これまた七瀬の如く避けると、叫んだ。
「――死んだら、恨むわよ」
そう言って、七瀬は背を向けた。
望むところよ――と返ってきた、ような気がした。
駆ける。
全力で。
だが、逃げるだけであれは使われるのか？
そんな事など分からない。
だが、賭けるしかないのだ。
勝つ為には。
その、晴香の「考え」に。
ある程度距離を開いたところで、七瀬は振り向いた――。
丁度。
下腹部に放たれた渾身の踵蹴りが、再びメイドロボの身体を仰向けに転がしたところであった。
振り向く――そして、駆ける。
しかし、それも半ば程で止まる。
七瀬は。
メイドロボと、晴香を挟んだ形で向かい合う事となった。
――使ってくるのか？
脳裏に、微かな不安。
晴香とメイドロボとの距離は、さほど大した物ではない。

遠くもなく、近くもない。
獅子吼を使う事なく、駆けてくる可能性もあった。
だが。
思惑通りであった。
メイドロボが、顎が外れんがばかりに口を開いた。
何かが、収束していく——頭に響く、きいいいぃぃいん……という音。
獅子吼は——〝遠距離に二人以上の人間がいる時に放たれる〟。
単調な思考回路。
それを読んだ上での行動であった。
——ここからは、本当の賭けね。
刀の鞘を抜く。
それを右手に握り。
「何があっても、動くんじゃないわよ」
そう言い放った。
「——あんた、まさか」
死ぬ気なんじゃないの……？

その問いに、晴香は僅かに微笑を浮かべ。
応えた。
「あんたより先に死ぬ気は無いわ」
そして、駆けた。

獅子吼発射まで、あと五秒——

駆ける。
鞘から抜き去った刀が、刃が、ぎらりと禍々しい光を放つ。

獅子吼発射まで、あと四秒——

間に合うかどうかなど分からない。
だが、無駄に戦い続けたところで敗れるのは必至。

獅子吼発射まで、あと三秒——

勝てぬ勝負などする気は無い。
だから、敢えて危険な賭けに出たまでのこと。

獅子吼発射まで、あと二秒——
刀を握り直す。
後少し！
獅子吼発射まで、あと一秒——
——。
——零。
どんっ。
「——チェックメイトよ」
呟かれた言葉は——人の物。

メイドロボは。
口を、喉を、刀で貫かれ。
その身を、びくりと震わせた。
そう、何もメイドロボの弱点は目だけではない
——彼女達が気付かなかっただけだが。
弱点は、いくらでもあるのだ。
眼も。
口も。
貫けば、人は死ぬのだ——。
しかし、機械に至ってはその限りではないらしい。
貫かれたにも関わらず。
それは、確かに晴香の方を向いた。
左手に走る電撃は、既に、左腕全体を包みつつある。
「しぶといやつね……」
ぽつりと、呟く。
もはや拳以外に頼る物など無い。
晴香が、腰を低く落とした——

その時。
「避けろぉぉぉおおおおおおおおおっ‼」
――絶叫。
振り向けば、先程から腰を振っていた妙な男の股間が。
青白い光を放っているのが見えて。
――それは、本能的な恐怖。
晴香は。
もはやメイドロボの存在すら忘れたかのように、脱兎の如く、駆け出した。
――そして、それは間違いではない。
メイドロボは。
再び、その身を震わせる。
壊れたかのように。
だから。
もはや、逃れる事など叶うはずも――
無かった。

鋼鉄の少女は。
蒼く輝く、灼熱の光に包まれた。

586　マツリの痕

「ちんたらしてるウチに、全部終わっちまったってワケかい」
「……ふみゅ～ん」
教会に辿り着いた二人（と、動物たち）を歓迎するものは誰もいなかった。
残るのは、点々と続いた血痕など、戦闘とおぼしき跡のみだった。
しばし、途方に暮れる御堂と詠美。
「ち。ここでじっとしてても仕方ねぇ。気が進まんが、坂神の野郎と合流……」
「ねぇ、したぼく」
「あ？」
「あれって……お墓じゃない？」

詠美の指差す方向。それは教会の隅にあった。見れば、明らかに地面を掘った後がある。
「……」
無言で、その墓に近づく御堂。詠美は慌ててその腕を捕まえる。
「ちょ、そんな怖い顔してどうする気よ⁉」
「誰が埋められたか調べる」
御堂は淡々と応えながら、歩を進めていく。
詠美は引き摺られる格好になりながらも御堂の後をついていく。
「やめなさいよ。あんた、そんなことすると死んだ人に失礼だって」
御堂が、笑う。
「死人に失礼、か。死人を生み出す強化兵に対して意味の無い言葉だな」
「あそこに埋まっているのが、あの水瀬名雪と名乗った女なら誰かがあの女を殺したってことだ」
「そ、そりゃそうよ。自分で死んで、お墓に入る人なんていないんだから」
「わからねぇのか？　殺しておいて、墓に埋めてるんだぞ。あの女と関わりのある奴の仕業の可能性が高い」
「な、なんでよ？」
「知らない敵に襲われたら、お前、そいつを葬ってやるか？」
詠美はしばし考えて、ぶんぶんと首を振った。
「ああやって弔うってのは、その死んだ奴に敬意を払ってるんだろ。だとしたら、知り合いか、家族か、恋人か」
御堂は詠美の方へ向き直ると、吐き出すように呟いた。
「……つまりだ。相沢祐一が水瀬名雪を殺してるかもしれねぇってことだ」
「相沢祐一って、ゆういちって人の本名？　なんでなんで、そんなのわかるのよ？」
「馬鹿か。さっき放送が流れたとき、生存者の一番

最初に呼ばれただろうが」
「……ってことは、まだ生きてるってことだね」
果たして、その墓の中から見つかったのは二人の女性。
そして、一人は御堂の知る顔であった。
「……どうだった？」
掘り出した土を元に戻してる御堂に、詠美は近づいて声をかける。
「水瀬名雪が、いた」
「そう」
少し落ち込んだ様子で、詠美は言った。
「あ？　どうした？」
「ん。ちょっと。あの人、祐一って人にホントに殺されたのかなぁ、って」
ぽんぽん、と土を盛り付け、御堂は立ち上がる。
「さぁな。ひょっとしたら、あの女が死んだ後に相沢祐一がここにやってきて埋葬したのかもしれねぇがな」
「そ、そうだよねっ！」
「なんだ？　お前、ちょっと変だぞ？」
「変とはなによ！　したぼくのくせにいっ」
ふん、と御堂は続ける。
「いいか、もう一度言っておく。この島は狂ってる。その気になれば、親だろうが子供だろうが殺す奴だって出てくる」
詠美は何か反論しようとして、御堂の言葉に遮られる。
「甘い考えは捨てろ。てめぇみたいなガキが殺し合いに慣れてるとは思わねぇが、必要なときは誰でも殺すぐらいの覚悟が無ければ――死ぬぞ」
「ふみゅ～……」
目に見える程に落ち込む詠美。それを見て、ち、と舌打ちをする御堂。
「あー、なんだ。だが、お前はそうならないように頑張ってるんだろうが？　こんなことで落ち込んでどうする？」

「ふみゅ……」
　しかし、である。御堂が墓を暴いたのは、水瀬秋子が眠っているかどうかを確認するためだけではなかった。
　先程の放送で死亡者に名を連ねていた少女。——月宮あゆ。
　その少女が、ひょっとしたら眠っているかもしれない、その確認のためでもあったのである。
　あのガキみたく、発信機を吐き出して「死んだ」ってんなら良いんだがよ……。もし、本当に死んでいたら。
　瞬間。御堂から殺気が膨れ上がり……そしてそれはすぐに収まる。
　冗談じゃねぇ。なんで、俺がそんなことに激怒しないといけない？　あいつが死んだって、俺には何ら影響はない。
「ねぇ、したぼく？」
「……あ、なんだ？」
「行こうよ。こんなくだらないゲームのシナリオなんか破って捨ててやるんだ」
「……ふん。大した案も無いくせに、目標だけは一人前ってか」
「うるさいわね。あんたも協力しなさい！　大事な人を守りたいんでしょっ⁉」
「ああ？　何言ってやがる？」
　御堂は胡散臭そうな目を詠美に向ける。動揺はなかった……筈だ。
「この詠美ちゃんさまを守らせてあげる、って言ってるのよ。さぁ、存分に守って、守り抜いていいわよ」
「……おめぇ、やっぱ馬鹿だろ？」
　御堂、ため息ひとつ。
「で、結局あの墓にはそれを置いていかなかったのか？」
「あ、うん。……これって、やっぱ祐一って人に渡

すほうが良いと思ったから」
「相沢祐一があの女を殺していたとしてもか？」
「……うん」
詠美が、頷いた。——好きな人の、側にいたいという気持ちは、誰だって同じだと思うから。
あたしも、和樹のところに何か置いていってあげたら良かったかな。——帰るときが来たら、もう一度だけ行くからね。……和樹。
そんなことを思いながら学生手帳をしまうと、詠美は御堂に尋ねた。
「あ、そうそう。動物たちは？」
「辺りを偵察させてる」
「あんた、そんなことも出来るの？　ホント、動物園の園長みたい」
そのとき、林の影から毛糸玉が飛び出してきた。
「ぴこぴこ～っ！」
「っと。噂をすれば、だな。……行くぞ」
「うんっ！」

587　仰げば尊し

「……」
モニター越しに……青白い濁流に飲まれていく。
「……」
何も言わずに、ただそれを見ていた。
それが終わったとき、モニターに映るのは、中華キャノンを構えた耕一の姿。
断続的に砂嵐がモニターを覆い尽くす。
プルルル……源五郎の特殊携帯がけたたましく鳴り響いた。
ガチャッ……
「機能、完全破損……戦闘……不能……デス……」
「そうか……分かった」
短く、そう答える。
「もういい。あとで回収してやるからそのまま寝ているといい」

モニターの砂嵐が、増す。
元をただせば、源五郎の失策だった。
近距離戦闘のＨＭ―12、遠距離戦闘のＨＭ―13。
その強さは、二体がそろって無類の力を発揮する。
御堂を追わせ、ＨＭ―13が破壊された時から、負けは必然だったのかもしれない。
「誰もお前を責めはせん、もう、休め」
「ソノ命令ハ、聞ケマセン……」
「それ以上動くと……二度と復元できんぞ」
「ソレガ……戦闘型トシテ生マレテキタ私ノ……生キル目的デスカラ」
「……」
モニターが、進む。
一歩、二歩と。
耕一に向かって。
「分かった」
ＨＭ―12のメイン頭脳に残されたメモリー。
姉である、マルチの残した遠い記憶。

源五郎が残しておいたその本能が、メイドロボにそうさせたのかもしれない。
「ロボットに心は必要か……」
いつかの、青年との会話を思い出す。
「俺は、必要だと思っているよ」
モニターを見ながら、誰へともなくそう言った。
モニターを断続的に包む、その砂嵐の頻度が多くなっていって……。
あと耕一まで、五歩……四歩……三歩……。
そこで、モニターが完全に途絶えた。
ツ――――――
携帯の向こうから響く無機質な音。
そして……。
プルルルルッ……。
再び、別の携帯が鳴り響く音。
ガチャッ……。
「はい……」
「源……五郎か……俺だ……源三郎だ……助けて

……くれ……」
「源三郎さん……あなた、自分で勝手に飛び出していったんじゃないですか？」
「そ、それはそうだが……頼む……助けてくれ源五郎っ……!!」
「と、言われましてもねぇ……」
「も、もう戦えねぇよぉ……鼻も折れちまったし……」
「源三郎さん、あなたも長瀬なら、自分で広げた風呂敷ぐらいは自分でたたんでいただけますか？」
「今の戦闘で腕の骨が折れたんだっ！　さらに背中を刺された……もう動けないんだ！」
悲痛な叫び。
「見てたんだろう？　ええっ!?　源五郎っ!!」
「入り口はすぐそこですよ。それだけ喋れる元気があるなら大丈夫でしょう？　……勝手に入ってきてください」
「ちょっ……げんご――」
プチッ……
「さて……と」
再びモニターを見つめる。既にそれは砂嵐が映るだけでしかなかった。

588　愚者達の行く末

結局、助かったのは自分だけだった。
里村さんはわざと自分の命を捨てた。
祐一はそれを追って、崖下へ飛び下りた。
この高さだ、落ちたら助からない。
残されたものは何だろう。
私は生きている。なつみさんは死んでいる。
死んでいる、よね。
祐一の荷物も、傍らにあった。
私達は、大馬鹿だ。
祐一を最期まで信じきらずに、自ら命を捨てた里

村さん。
　どうして信じてあげないの？　あんなに真剣に、里村さんを想っていた祐一を。
　簡単に諦めて、くだらない自己犠牲なんて。
　はい、馬鹿一人目。

　それを追って、崖から飛び下りた祐一。
　もう助からないのはわかってたはずでしょう？
　あなたの思いはわからないでもない。
　でもあなたが死んだら、里村さんの犠牲が無駄になるだけなのに。
　はい、馬鹿二人目。

　そして、なつみさん。
　撃ったでしょ、里村さんを。
　ねぇ、どうしてそこまでして人を殺すの？
　そんなにボロボロになってまで、何で殺そうとするの。

　私にはわからないよ。馬鹿だよ、あなたも。
　……馬鹿、三人目。

　あ、私もだ。
　私も教会で、人を一人刺したんだ。
　あはは……絶対に殺したりしないって誓ったのに、何やってるんだろう？
　馬鹿、四人目。
　やっぱり私達は、祐一についていくべきじゃなかったんだ。教会で別れるべきだった。甘えてはいけなかった。そうしていたら、誰も死ななかったのに。
　——私達は、みんな大馬鹿だ。

　どうして、私だけ生きてるんだろう。
　生きている。生きている以上、前に進まなきゃ。
　でも、ちょっと疲れたから、休みたい。
　休みたい——。
「ぴこぴこっ！」

何か音が聞こえた、そんな気がした……。

589　ゆめのあと

夢を、見た。

みゅーをうめにいって、そこであったひとたち。
こうへいさん、みずかさん。
みゅーがいなくなって、さみしくて、こうへいさんの学校へいった。
みずかさんは、笑ってあたまをなでてくれた。
こうへいさんも、あきれ顔だったけど、学校にいくことをゆるしてくれた。
せいふくももらって、しばらくあの学校へかよった。
こうへいさんには『おとうさん』のようなきびしさとやさしさがあった。
みずかさんは『おかあさん』みたいだった。
ななせさんは、なんだかんだでかまってくれて、『おねえさん』みたいだった。
たのしかった。
ハンバーガー、いっぱい食べた。
じゅぎょうに出た。
ななせさんのかみのけで、あそんだ。
かえりみち、いっしょに歩いた。
もとの学校にもどると決めたときも、笑顔でおくってくれた。
ぜんぶ、たいせつな、想い出。

かえりたかった。あのころに。
もどりたかった。あのばしょに。
だけど——

夢から唐突に、瑞佳さんの姿が消える。
夢の世界が、黒く、染められていく。
瑞佳さんはもう、いない。

このわけのわからないゲームとやらのせいで、命を落としたのだ。
もう、あの頃に帰れない。
もう、あの場所に戻れない。

復讐なんて真似はしない。
そんなことをしても、瑞佳さんが戻ってくるわけじゃないのだ。
それに、誰かを傷つければ、また悲しみが増える。
そんなことに意味はないのだ。

どこまでも冷静に頭が回る。
感情に任せてしまえば、流されてしまえば、どれだけ楽になれるだろう。
でもそれは、きっといけないことなのだ。
今だから、この頭だから、理解できた。
そう、『理解』できてしまうのだ。

だが、咄嗟にとってしまう行動というのも存在するわけで――

自分の手には、刀が。
教会で人を刺した、その記憶がリアルタイムに再生される。
私が刺した人。
その顔が振り向く。
血にまみれて、笑っていた。

「いやぁぁっ！」
私は目を開けた。
夢を、見ていた。
そして今、最初に映ったのは。
恐い顔。
その顔が、言った。
「目、覚めたか？」
「きゃぁぁぁぁっ！」

私は思わず、その人を殴りとばしてしまった。

590　夢現

ここは、夢の中……なんだな。
そんな風にも思いながら。
ゆらゆら……ゆらゆら……揺れる俺の体。
ただ、闇の中で漂っていた。
遠くで、北川と、名も知らぬ外人女の声が聞こえる。
多分、そこが現実だ。
すまん、北川、もう少しだけ寝かせてもらうぜ。
……そういや俺って、ここで何してたんだっけ？
確か……悲しいことがあった気がするな……どんなことだっけ？
頭が痛い……思い出せない。
この頭の、心の痛みは夢か現か。
どこかにピクニックでも来てるんだっけ？

ああ、そうだよな……それなら辻褄が合う。
……ってことは北川と二人でか？　……イヤすぎだな、それは……。
しかも北川は知らないバイリンガルまでナンパして……。
くそ、香里に言いつけてやろうか……。
ってゆーか北川と二人でこんなところにピクニックに来ることがそもそもおかしい。
いや、北川には悪いが男おんりぃで山にピクニックなどと……言語道断だ。
……そうだよなぁ……たぶん名雪や香里も一緒に来てると考える方が妥当だ。
北川のことだ。
「おい、香里、相沢や水瀬達と一緒に旅行に行くんだが、お前も一緒にどうだ？」
なんて切り出すに違いない。かと言って香里が素直に承諾するとは思えないけどな。
だが、栞をうまく言いくるめればきっと香里も首

を縦に振るに違いない。
その役目は……やっぱり俺か？
それに……そうだとしたら舞や佐祐理さんも誘って、そうだよな、俺。
あゆ、真琴あたりは何も言わずとも、
「私も行く！　置いていったら殺すからね祐一！」
「うぐぅ、ボクも行くよ！」
とか言ってるよな、絶対……
北川はこういう企画を組ませたら、その行動力は天下一品だ。穴掘り以外にも得意なことはあったんだな。うむ、さすがは俺の親友だ。
でも、本当にそうか？
……なんかすごく悲しいことがあった気がするけど……駄目だ、思いだせん。
……まあ、いいか。あとで北川から聞けばいいさ。
……寝よ。
――俺の心を包み込む悲しみで、胸がつぶれてしまわないように。

「ジュンー、重くないデスか⁉」
「頑張るベシ、俺！」
「というヨリ、ユーイチと一緒に荷物を運ぶというのは無茶ではナイですカ？」
「相沢が起きたら運ばせるから大丈夫だーー！　ハアハア……」
さすがに、ギャグで返す気にはなれない。
「ハア……ハア……」
とりあえず、崖から離れて数十分。
「まあ、こいつにもいろいろあったんだろうな」
背に祐一を、手に大量の武器を持って、北川は歩く。
自分達の元々の荷物に加えて、祐一の周りに散乱していた荷物を回収したお陰で、まるで弁慶のような出で立ちだ。北川が持ちきれない軽い小物は、すべてレミィが抱えている。
無理に持つ必要はなかったのだが、殺傷力のある武器を放置するのは危険だ……と考えてのことだ。

本当は祐一には歩いて貰いたかったのだが……死んだように眠ってしまった。先ほど話した印象だと記憶喪失になっている可能性もあるかもしれない。
(着々と、進んでいるんだな……クソ食らえなゲームが……)
北川にこみ上げる嘔吐感。
一番許せないのは、やはり、ゲームの主催者。
(こんな俺にも吐き気のする『悪』は分かる。『悪』ってのは自分自身の為に弱者を巻き込む奴のことだ。ましてや女の子まで……奴等がやったのは……それだ)
別に北川とて正義感を振りかざして行動していたわけではない。ただ、自分の置かれた状況でよかれ……と思っていることをやっているだけだ。
それでも、このゲームを正当化して許してやろう……などと言う気は毛頭ない。
(あのCD……どんな意味が隠されているんだろうな……実はただの変哲もないゴミCDでしたー……だったら笑うぜ、俺は)
それこそ道化師だよな……。
(やっぱ情報が欲しいや……なんとかしないと……な)
「ハアハア……ジュン？　どーしたの？」
「ドキッ……いや、なんでもないって」
「……？　そーデスか？」
今の一瞬、息を荒げるレミィを少し色っぽいな……などと思ってしまった。
(神様、母さん、こんな潤めをお許しください……)

591　DEAD OR ALIVE（前編）

「こんなとこで……いいか？」
森の中。茂る草木は潮風を浴びてしなびているように感じる。
「わりといい物件だなぁ、ここは」

茂みの中、どっかりと腰を下ろす。
おぶっていた祐一を背中から降ろし、地面に横たえる。
森の入り口、視界の向こうには果てしなく広がる大海原。
「ああ、今の俺達の欲している世界が……あの海の向こうにあるぅっ……!!」
「海の男にでもなりたいのですか、ジュン？」
「いや……そうではなくてだな……」
たまにこの金髪の少女は、未だ自分の置かれている立場を理解できていないのでは……などと邪推してしまう。
「ただ、帰りたいな……と、それだけさ」
ただ、平和だったあの日々が、ひどく懐かしく感じる。
（まだ、三日しか経ってないんだよな……）
「Ｏｈ！　ジューン……Homesick ですか？　……元気出してくれないと私も悲しいデス……」
「か、母ちゃ〜ん……って、違う」
（本当に分かってんのか、この娘は……）
ハア……大きく溜息をつく。
まあ、ここなら、周りから見つかりにくく、周りの状況を確認しやすい。
少々の話し声など、潮騒の音に消されてしまう……落ち着くには割と適した場所と言えた。
「お、おい……何してんだっ？」
「ん？　何って……膝まくらだヨ」
祐一の頭が、レミィの白いともも健康的ともとれるつややかな太腿の上に乗っかっている。
「……だ、駄目だっ……」
「……？　何でデスか？　枕もなくこんなトコで寝たら頭痛くしちゃうヨ。移動中、私楽してたからラ、このぐらいはしないと……適材適所ネ♪」
「いやっ、待て待て……そんなうらやまし……ごほん、ごほん……もとい、婦女子にそんなことはさせられん……。これが我が北川家の家訓でな……だか

ら……俺がやろう」
「ワオ、ジュンってばフェミニストね。感激しちゃうヨ！」
まさか、うらやましさからくる嫉妬とは口が裂けても言えない。
祐一の頭の上方にまで移動すると、そっと祐一の頭を自分の膝に乗せた。
(くっ……俺の膝に男が乗ることになろうとは……この北川潤、一生の不覚っ……!!)
「なんか、苦虫を噛み潰したような顔してるデス……」
「えっ？　いや、そんなことはないよ？　ははは、男にも女にも優しい男、ジェントルマン北川潤と呼んでくれ」
(くそ、よくよく考えてみればなんで俺が相沢にここまでしてやらにゃならんのだ……。人がヒイヒイ言いながら移動中も背中でグゥグゥ寝くさりやがって……)
「おーい、相沢～、お・き・ろ～！」
ペシペシ……頭を、平手で叩く。
「う～ん……あと三寸だけ寝かせて……」
「単位がオカシイデス……」
「三寸経ったぞ～」
「じゃあ、あと五寸……」
「経つか！　このアホッ!!」
ベキッ……北川の拳が祐一の脳天に突き刺さった。
「痛いじゃないか……北川……か？」
「他の誰に見える」
「謎の不知的生命体X」
「誰が宇宙人だ、誰がっ！　しかも『不』ってなんだ！」
「そのままだ……」
「くそっ……まあ、いいか……それだけ軽口が叩けるなら安心したよ。……結構心配したんだぜ？……これでもな。とりあえず膝から降りてくれ」
「うおおっ、何故俺が北川の膝の中で愛を語らって

るんだっ？」
「語り合ってないっ！」
「……で、何故俺はここにいる？」
祐一の言葉。
「ん……まあ……いろいろあってな……っていうか
お前どれほどのこと忘れてるんだ⁉」
「いや……ここ、海の近くの森の中か？」
「島デス」
「島……？　どこのだ？　……しかも……このアメ
リカンな女性は誰なんだ？」
（いかん……全部……忘れてるのか……？　この島
であったこと……）
無意識に、北川の顔が曇る。
「じゃあ……水瀬や、香里のこともか？」
レミィに、黙ってろ……というように目配せしな
がら、ゆっくりと、そう言った。
祐一の向こうで、軽く首を縦に振るレミィ。

「名雪達も来てるのか？　そうだよな、俺とお前と
二人で旅行なんて寂しいもんな……」
「旅行って、お前っ……！」
北川の顔が、引きつった。たぶん、いろいろな
……複雑な意味で。
「……ふう……まあ、仕方ないか……とりあえず、
自己紹介はしよう」
いろいろ、言ってやりたいことはあったが、なん
とかこらえる。
「この娘はガルベス宮内。通称ガルベスだ」
「ガルベス……か」
「Ｏｈ！　私ガルベス……」
「まあ、とりあえずレミィって呼んでやってくれ」
「一文字もあってないじゃないか」
「細かいことは気にするな」
「私、大雑把な名前ネ……」
「で……だ」
北川の顔が、真剣なものに戻る。

「北川？」
　というか、祐一がこれほど真剣な北川を見たのは初めてであるかもしれない。
「お前の記憶を呼び戻す……」
「できるのか？」
「さあ……」
　口調は、あまり変わらなかった。
「聞きにくいんだが……昨日の夜……お前と一緒にいたあの聡明で可愛らしい少女は……どうしたんだ？」
　椎名繭。まだ、放送では呼ばれていない名前。
　言いよどみながら……まずは遠まわしにそう切り出した。
「……誰だ、それ？」
「駄目じゃん」
　しょっぱなからつまずいた……レミィを覚えてない以上、繭を覚えていなくてもおかしくないのかもしれないが。

「てことはお前……昨日のこと何にも覚えてないのかっ？」
「……いや、なんていうか……イメージがぼやけて……」
「じゃあ、最近の出来事で覚えていることはっ!?」
「朝～朝だよ～、朝御飯食べて学校行くよ～」
「なんだ……それ？」
「目覚ましだな」
「変な目覚ましだな……」
「ああ、名雪が直々に録音したお手製の目覚ましだ。すこぶる眠気が増す」
「………」
　北川の、手が震えた。
「まあ、いつもの登校前の光景なら覚えてるが――？　どうした、北川」
「……」
　無言で、立ち上がる。
「ジュン……？」

北川の気持ちを察してか、不安そうな顔で見上げる。
それを、大丈夫だ……と、無言で手で制する。
「どうした？　北川……」
「お前、本気で言ってるか？」
「……？」
「本気で、それを言ってるのかって聞いてるんだ」
低い、声。
「……ああ、俺が覚えてるってのは……その辺だけど……」
北川のその無言の迫力に、頭を一個分後ろへとずらす。
「本当に本気なのか？」
「くどいな……一体どうしたん――」
バキッ……!!
「――っ!!」
祐一の体が右へと吹っ飛んだ。
「……ジュン!?」

立ち上がりかけたレミィをもう一度手で制する。
「いきなりなにすんだっ！　この野郎っ!!」
一瞬の放心。その刹那、両手で反動をつけ勢いよく立ち上がる。
「このっ……!!」
そのまま北川の胸倉を掴みあげ、眼前にまでたぐり寄せ、睨みつける。
「……このやろうっ!!」
「……」
北川も、目をそらさず祐一を睨み返す。
祐一の口元から、血が一筋垂れた。
「言い訳もなしか、この野郎っ!!」
バキャッ!!
祐一が、北川を殴り返す。
「ぐぅ……」
「なんとか言えよ、北川っ！」
バキッ……。
胸倉を掴みあげた手を離すこともないままに、再

度、殴りつける。
それでも、北川が祐一から目を逸らすことはなかった。
「……いいかげん目を覚ませ、相沢」
「なんだと？」
目と鼻の先、一センチの距離でのにらみ合いが続く。
男達のぶつかり合いに、レミィはただ何もすることなくそれを見つめている。
「お前は、逃げてるんだよ！」
「なんだと……」
「都合のいいことだけ、ホイホイホイホイ忘れやがって……思い出せっ！　思い出せよ相沢！」
「いきなり殴られて……はいそうですか……なんて言えるかっ!!」
ベキ……もう一度、北川の左頬を殴りつける。
「……ペッ！」
口に溜まった血を、北川が横へと吐き出す。

その時も目を逸らすことはなかった。
「俺達は……逃げちゃいけないんだよ！　香里や、水瀬の為にもっ!!」
「……どういう意味だよ……」
「言葉通りだ。ある意味、お前は……すべてを踏みにじってるんだ」
「……」
「本当に忘れちまったのかよ……おい……なんとか言えよ……」
「……」
「なんとか言えよ、相沢っ！」
「……本当に……忘れちまったのかよっ……！」
「きた……がわ……？」
北川の胸倉を掴んでいた手が、下げられる。
（一体……なんのことだ……名雪……？　香里……？　この島で……何が……あったんだ……？）

恐い……恐い……
誰もいない……
真琴がいない、相沢さんもいない……
祐介さんもいない……
私は、……私は……
ワタシハ……
海辺の森を彷徨い歩く。
私の、あったはずの右手が、私の、強く祐介さんと結ばれていたはずの右手が……ない……
「どうしたの……？　私」
右腕を胸に抱きながら、歩く。
忌まわしい右腕が、私の視界に入らないように。
『……本当に……忘れちまったのかよっ……！』
突如、聞こえてきた声。
なんの声だろう……私は……導かれるようにそこへと向かった。

592 The Long Goodbye

戦闘ロボを辛うじて撃破した僕たち――いや、今回の僕は殆どがただ見守るばかりで、大したことは何一つしていなかったのだが――は、気絶した蝉丸さんの意識を呼び戻し、簡単な自己紹介を済ませた。
そして、これからの事で頭を悩ませていた。
『このまま通路の奥に進むべきか、否か』
管理者側の態勢が整う前に、このまま侵入したいというのが全員の気持ちだった。
けれども、無傷、或いは傷が少ないという状態なのは七瀬さん――いや、留美さんか――と巳間晴香さん、そして初音ちゃんの三人だけだった。
しかも初音ちゃんに戦闘は期待できない。
……というか、僕は戦闘なんかさせたくなかったし、そこは耕一さんも同意見だろう。
それ以外の者は皆、何かしら、決して軽くない傷

を負っていた。
耕一さんも僕にあんなことを言っておきながら、実は随分と体調に不備をきたしていたし、蝉丸さんの傷も思ったより深かった。本人の談では塞いでいれば数時間で治るということらしいけど……。
僕も、今回は防弾チョッキ上から受けた弾丸だけとはいえ、累積した疲労が抜けきらない。それに致命傷こそ無いものの、血も随分と失っているし……。
それからもう一人、仮面の女の子も、確かに怪我は無かったけれど、蝉丸さんがもう一度眠らせていた。
詳しくは話してくれなかったけど、仮面が何か良くない働きをしていて、起きていると本人の負担になるのだという。
とにかく、このまま先に進むのには、どう見たって支障がありそうだった。
気持ちの上ではこのまま先に進みたくても、この奇妙な共闘団体に必要なのは、とりあえず一度退いて態勢を整えることだった。
「……あのね、市街地の方にね、マナさんていう、女医さんがいるんだよ」
という初音ちゃんの言葉により、一行は市街地を目指すことになる。
道中、現状の確認などがそれぞれ行われた。
留美さんが教えてくれた、高槻が死に際に遺したという言葉。
高槻は、『この島の地下ドックに潜水艦がある』と教えてくれたのだと語った。
しかも、あの下衆野郎の言葉を、留美さんはなぜか信じたいのだという。
僕には理解できなかったけど、蝉丸さんが地下から響く音を聞いていて、もしかしたらそれが地下ドックなのかもしれないと言っていた。その施設には、既に一人の少年が向かっているらしいことも、蝉丸さんの口から語られた。

蝉丸さんの言葉が高槻の言葉の真実味を増しているけど、ならば何故、あの高槻がそんな事実を言い残すのか……。
僕には本当に分からなかった。
それから蝉丸さんの持っていたパソコン。これには何か情報が入っているかもしれないけれど、二人とも使い方が分からなくて満足にいじっていないらしい。
休息をとるならば是非中を見てみたい。
しかし、何よりもあれだけ強力なものに守られていた、例の施設。
中には脱出の鍵になるようなものもあるのかも知れない。
爆弾の起爆条件や、管理者側によるゲーム参加者の監視法のことなど、様々な意見が飛び出し、僕も何度か意見を求められた。
その度に僕は、当たり障りのない返事を返すだけだった。
怪我と疲労で頭が回りにくくなっているのも確かだったけど、自分にはその原因がはっきりと分かっていた。
状況確認の一番最初に行われた、生存者と死者、そして、殺る気になっているかも知れない人間を特定していたときのことだ。
直後は皆、それぞれの抱える想いで無口になっていたけれど、すぐに次の話題へと進行を見せた。
しかし僕はまだ、それを引きずっていたのだった……。
僕の歩みは少しずつ遅れ、今では集団の最後尾から更に一歩離れて道を歩いていた。
初音ちゃんにもしばらく放っておいて欲しいと言った。
それで初音ちゃんは今、僕の少し前を耕一さんと歩いている。
何回か放送を聞き逃していた僕にとっては、とても重要なことだった。

初音ちゃんのお姉さん達が生きているということは、とても嬉しいニュースだった。
だけど、僕が気にしていたのはそれではなくて。
……冬弥と由綺が、もう死んでいたなんてな……。
僕が一番の感慨を覚えたのは、やはり親友である二人の死亡確認だった。
しかも二人の命は、実に十二時間以上も前に失われていたのだ。
生きているみんなの為に頑張った、爆弾の起爆装置の設置されていた施設。
死と隣り合わせの戦闘の中、思い浮かべたのは初音ちゃんと、冬弥と、由綺のことだった。
みんなが生き抜くための礎になれれば、そう思っていた部分もあったのに、あの時に思いを馳せたその二人はもう既に亡くなっていたのだ。
あれで、万が一、初音ちゃんもこの世の人でなかったなら、そして僕が死んでしまっていたなら、とんだピエロが、一体できあがるところだった。

自嘲の笑みがうっすらと口元に浮かぶ。
二人の死が哀しいからって、そんな考え方はいけないんじゃないか、彰。
今、ここにいるみんなの役にも立つことをやったわけだし、祐介達だって生きてる。
……そうかもしれないな。
ああ、あの二人もこの仲間に呼べれば良かったけれど、あれから時間も経った。場所を移してるかもしれない。
しかし、あの冬弥達が死んでしまったなんて……。
二人は最後まで愛し合っていたのだろうか。
二人は苦しまずに死ねたのだろうか。
二人はあの世で仲良く暮らせるだろうか。
……先に逝った、美咲さん達と一緒に。
二人は……。
僕は、今更ながら気付かされた。
過去の良き日々の再現は望めないと思っていなが

ら、これから先を冬弥達とこの辛い過去（今はまだ現在だけど）を共有しながら何とかやっていくつもりだったことに。
その望みはすっかり失われてしまったのだ。
冬弥達の死によって、このゲームに連れてこられた僕の知り合いは、全員が永久に失われたってわけだった。
かつての自分の、日常を構成していた人、ひと、ヒト。
全員がもう、この世にいないなんて……。
仮に叔父と生きて会うことがあったとしても、二人の関係はもう、修復出来そうになかった。僕や祐介に同情し、このゲームを止めて欲しいと願ったかもしれない叔父。
でも、みんな死んでしまったのだから。
あの日々は帰ってこないのだから……。
でも、僕はここで絶望するわけにはいかなかった。
祐介に、初音ちゃんに話した自分の言葉の、その責任はちゃんととらなければならないから。
『確かに今まで僕らが思い描いてきた日常はもうこの手に還らない……。そう、だけどね、初音ちゃん。日常は、そこを日常なのだと思えば。きっと、そこが日常なんだよ』
それは、都合のいい言葉だったかもしれない。
だけど、あれは初音に言うのと同時に、自分に言い聞かせた言葉でもあった。
仮にこの島を生きて出られたときには、そんな風に考えて生きていこうと……。

美咲さん……。
由綺、冬弥、はるか。
そして英二さん、理奈さん……。
僕はあなた達のことを引きずらないで生きていこうと思う。
しかし、生涯忘れることもしない。

その為にもまず、このくそったれの島から脱出しなければならないが、それも今や終盤にさしかかっている。
島からの脱出を為すために、仲間が集まりつつある。
集団で行動する以上、僕の行動は自分だけの責任では済まなくなってきているんだ。
だから……。

だから、彼ら、彼女らとの共通の目的を果たすまで、ほんの少しの間だけ、僕はあなた達を忘れることにする。
目的に向かって、僕の頭脳が最良の判断を下せるように。
……その深い悲しみで判断を誤らぬように。
『ごめんね、美咲さん……』

さよならは言わない。
本当のお別れはもう遠の昔に済ませてしまっている。
それに、これは長い別れではない。
僕が自分の役割さえ果たすことが出来れば、その後にはまた、みんなを思い出すだろう。
過去の良き日々に、思いを寄せながら……。

『残り　28人』

——さよならをいうのは、わずかのあいだ死ぬことだ。
そんな言葉がある。
しかしだ。……ならば、死者に送る別れの言葉は、いかなる意味を持つのだろうか。
単純に、永遠の別れと考えるべきなのだろうか？

そんな疑問をかつての彰は持っていた。
しかし、実際に彰が触れた死とは。
『永遠の別れ』であり、また、
『別れではないもの』であった――

593　悔恨

あれから、少しばかり経った――
祐介は、天野美汐の背後、約十五メートル程離れた位置を、静かに、歩いていた。
怯えた人間は妙に勘が良い。
バレると後が厄介だが、いざという時遠いのも厄介だ。
このくらいが、すぐ駆け寄れるから丁度良いだろうか？
――。
自分が発見してから一時間程度だろうか。
突然悲鳴をあげて、彼女は目を覚ました。
――。
それから。
彼女は、寝転んだ場所からふらりと立ち上がり。
歩き始めた。
当てがあったのかどうか。
自分を捜す為なのかどうか。
それとも――自分を、殺す為か？
それなら、彼女は自分の武器を握っている筈だろう？
いや、不意打ちということで素早く出して撃つのかも――
――どうでもいいか。

そう。
殺されたとしても、構わない。
その上で、自分は彼女と共に居るのだから。

――出来れば、隣に居たいけど。

それは叶う筈も無く。
ただ、護るのみ。
護るのみ。

しばらくすると、潮の香りが漂ってきた。
海が近いのだろう。

――海か。

あの、明け方の海辺を思い出す。
今朝の事だ。

――――。

――ああ、あの頃は、まだ。

時折、思う。
あのまま、あそこに居られたなら、と。
無論、それは逃げだ。
分かっている――否、分からされた。
逃れる事など叶わぬのだと。
自分は。
ただ、ひたすらに。

現実を見ないようにしていたのではないか？

この血生臭いゲームを。
辛く、哀しい戦いを。
何処かで誰かが殺され。
誰かが血を啜り生き残ろうとしている。

そんなゲンジツヲ――
現実を。
見ないようにしていたのではないか。
その代償は、大きかった。
今、持っている『右手』。
それだ。

――嗚呼。

手を失うなら、自分であった筈。
どうして。
彼女は、ただ。
怯えていただけなのに――

――。

償えるなどとは思わなかった。
だけど。

放っておける筈は無いのだ。
約束した――
「護る」と。
既に護るべきだった人達は失われた。
今は、もう。
彼女だけ。

依然として、彼女はふらふらと歩き続けている。
誰かに出逢ったらどうするつもりなのだろうか。

――ましてや。

それが、マーダーであったなら？
距離は十五メートル――全力で走って何秒だろうか？

――。

――大丈夫。

護りきれる。
今なら、覚悟があるから。

――そう。

もし、彼女に危害が及ぶなら――

――……本当に……忘れちまったのかよっ……！

――聞こえた。

誰かの声。
そして、前を進む彼女もそれを捉えたらしい。
歩く方向を変えた。
進み出す。
そして自分も。

――あの声の主は、誰だ？
心当たりは無い。
少なくとも、彰ではない。

――。

まぁいい――銃を握る。
汗ばんだ手に、確かな重み。
そうだ。
そうさ。
もし、彼女に危害が及ぶなら――

僕が殺す。

594　幕間　――虹――

戦いが終わるまでの時間はもう数える必要もない、と彼らは考えている。しぶとくも生き残った彼らは今、安全な場所に移動しているところだ。

せっかくだから、戦闘の終わった少し後のことをここに記しておこう。

七瀬彰と柏木耕一はふたり並んで大地に寝転んでいる。眩しい太陽の輝きと透き通るような空の色に見惚れて、微動だもせずにいた。疲れ切った身体と心を癒すその眩しい光の下で、ふたりは動けないでいた。ふと彰が耕一の方を見ると耕一も同じように彰の方を見ている。思わず笑みがこぼれる。

達成感という名前の笑みだった。

「――これで終わるんですよね」

笑みがこぼれる。

「終わるさ。終わらせたんだよ、俺たちが」

笑みがこぼれる。

「耕一さん。――本当に、ありがとう」

笑みがこぼれる。

「言っただろ？　二人で戦えば生き残れる、ってさ」

笑みが、こぼれる。

「二人じゃ危なかったですけどね。ここに来た人たちすべての力で僕たちは生き残れたんだ」

「団結の力、だな」

笑みがこぼれて、次の瞬間には笑い声がこぼれた。ふたりは寝転んだまま拳と拳をぶつけ合う。残念ながら美酒は無いが勝利を祝う乾杯の狼煙だ。二人の腕の作るアーチが虹のように見えた。そんな風に見えるのも少しだけおかしくて笑い声が大きくなる。

七瀬留美と巳間晴香が親の仇でも見るかのような目で互いを睨みつけている。電撃でも飛び交ってい

るかのように張り詰めた空気である。言葉の一つもなく睨み合う姿は、知らない人間が見たら脅えて小便を漏らしてしまうかもしれないほど恐ろしい。
勿論その静寂はすぐに破られる。ちなみに最初に声を発したのは、地面に座り込んでいて立ち上がれないままの七瀬の方だった。
「久し振り」
狂おしい皮肉を込めた声である。知らない人が聞けばおろおろして逃げ出したくなるような声だった。
「ええ。——まだ生き残ってるとは思わなかったわ」
晴香の方も負けてはいない。その声の持つ重圧は、気の弱い人間なら一瞬で潰されるほど恐ろしかった。
「減らず口を叩くわね、あんたも」
「あら？　別に悪気はなかったのよ？」
けれど実のところ、この二人の睨み合いは知っている人が見れば大して恐ろしくはないのだ。
「あんたに殴られた頬、まだ痛いわ。まったく、手加減ってものを知らないんだから、この腐れアマは」
「へーえ。あたしはこれでも手加減したつもりだったんだけどね。——それにしてもあんたは優しいわ、すっっっっっっっごく手加減してくれたんだもん。あたしはもう全然痛くないわ。ありがとね」
「……っ、ふん、まだ真っ赤なその頬でよく言うわ、あんた。あら、それとも元々そんな真っ赤なお猿みたいな顔だっけ？　ごめんねえ」
もう全然恐ろしくないだろう。こんなのただの仲のいい友達同士の戯れ合いだ。次に飛び出す言葉がどんなものかすぐに想像がつく。ちなみに今度は晴香が先に言った。
「——冗談よ。あんたの顔なんてもう見たくも無かったけど、それでも生きていてくれて嬉しいわよ」
「——あたしもよ。あんたが生きていて良かった。もう一回くらい殴ってやらないと気が収まらないところだったし」

ふたりは、互いが失った友達について、何も言葉を交わさなかった。そして交わすべきではないと思う。今はまだその時間ではない。

笑みがこぼれる。次の瞬間には笑い声がこぼれる。晴香は七瀬に手を差し伸べる。その手を取って立ち上がった七瀬は、眩しく輝く太陽の下で虹を見たと思った。錯覚に決まっているけれど、勝利のもたらした希望の虹である、と信じたい。

ちなみに、本当に恐ろしいことになっているのは実はこちらである。

「(´･ω･`)蝉丸～っ」

どうすればいいんだ。

柏木初音は少し離れたところで仮面の少女と銀髪の青年を見ている。近寄りがたい、というのが本音である。その仮面はナニですか。突っ込んではいけないことなのだろうが、当方の支給武器はハリセンである。心を鬼にして突っ込むべきなのかも。

「(´;ω;`)どうしようどうしよう蝉丸～っ」

「くぁ……っ」

ってそんなことを言っている場合ではなかった。銀髪の青年は腹から大量に血を流して呻いている。遠目でも判るほどその傷は深い。応急処置だけでもしなければいけないが、仮面の少女は青年の横でおろおろとうろたえるだけで何も出来ないままだ。

「(´;ω;`)蝉丸、死んじゃ駄目だよぉっ～」

自分が動かなければならない。初音は慌てて駆け寄って、自分より少しばかり年下と思われる少女を必死に宥める。

「大丈夫だよ、大丈夫！　わたし、街からお薬持ってきてるし、包帯とか消毒液も持ってきたんだ！　だからその、泣かないで！」

肩を抱いて宥めると、少女は泣き止んだ。しゃくりあげて「ほんとに大丈夫？」と繰り返す少女に大丈夫だよと声を掛け続けながら、初音は鞄の中からタオルや包帯、傷薬といった応急用の医療セットを

取り出す。まず血を拭って傷のほどを見なければならない。白いタオルを手に青年に近寄ったところで、
「ち、近付くな！」
突然その青年が大声を上げるではないか。あんまり大きな声だったので思わず初音は飛び退いた。三秒ほどの思考停止の後、初音は疑問の言葉を投げる。
「ど、どうして？　怪我してるじゃないですか？」
初音だけでなく、誰もが抱く当然の疑問なのである。しかし、初音が知る由もないが、この疑問の解を持つのは坂神蝉丸その人だけであり、その解は少し言葉にしづらいものなのであった。
彼の血を浴びると欲情する。
この説明をするのが面倒で気後れするものだと思ったのだろう、蝉丸は一転静かな声で、
「――大声を出してすまなかったな。ともかくその布を俺に貸してくれ、俺が自分でやる」
とだけ言った。よく判らないが、早く処置をしなければならない。疑問を押しつぶして初音は頷く。包帯とタオルを手渡して、少女を宥めることに専念する。少女は仮面の下でまだしゃくりあげている。
意外と傷は深くなかったようだ。溢れた血の下には深そうな刺し傷があったが、タオルで拭うと血は粗方止まっていた。
「消毒して包帯は巻きますね。一人では巻きにくいと思うし。……それとも、まだ近づいちゃ」
「――いや、頼む」
彫りの深い顔立ちの少し怖い印象の有る青年は、しかしにこりと笑うと自分の手に身をゆだねる。初音はすぐに青年に近づいてガーゼに消毒液を染み込ませて傷口を拭く。呻き声が上がるかと思ったが、青年は苦しそうな顔をしただけで声はあげなかった。簡単に消毒を済ませると新しいガーゼを当て、包帯をくるくると巻く。少し血が滲んでいるがまあ大丈夫だろうと思う。
「(;ω;)ありがとう～っ」

「すまないな、少女」
青年は身体を起こして、にこりと笑った。
「いえ。……よし、これで終わり！」
完璧とはいえないが、応急処置としては充分だろう。この後どこかでちゃんとした治療を受ければいいのだ。
もう戦いは終わったのだから。
「(ﾉ∀`)うわあああん、ありがとう～っ」
少女の、というか仮面の、少し不思議な泣き笑いに笑みを返しながら、自分に出来ることは意外とあるのだと思った。傷ついた七瀬留美や七瀬彰、柏木耕一といった人たちを少しでも癒す役目がある。
そんな風に初音が考えていると、ふと月代がこんなことを言った。
「(´ω`)わたしよりずっと小さい女の子なのに、わたしよりずっとしっかりしてるよお」
「本当だな、月代。お前と来たら泣いてばかりで」
「(´•ω•`)そんなことないよお」
……ずっと小さい女の子？
すぐには言葉の意味が理解できず、理解できたときには既に、
「他の奴らの様子も見てこなければな」
「(`•ω•´)うんっ！」
彼らは自分の傍にはいなかったので反論のしようもなかった。初音は胸の底で燻るすごく悲しい感情に身を焼かれそうになった。
「うぅ……わたし、そんなに小さいかな……」
しかし気にしている場合ではない。初音もまた立ち上がり、救急箱を抱えて傷ついた皆のところへ走る。希望と言う名の虹の橋を渡り、安息の未来へ向けて走り出す。
ともかく。彼らは今、生還に向けて歩き出している。皆が笑顔だ。希望に満ちた笑顔をしている。戦いは終わったのだ。後はこの島から、希望の虹の橋を渡って脱出するだけなのだ。そう思って笑顔を見

せている。
これから先に待ち受ける苦難のことも知らず、ただ笑顔でいる。

595 DEAD OR ALIVE（後編）

（なんの……ことだ……？）
頭が――痛む。胸が――締めつけられる。
（俺は――どうしてここにいるんだ……？）
北川が、祐一を睨みつけて。
（俺は――）

――七年前、心を閉ざしたあの、冬の日の赤。
――そして、今、俺は何を……？
『ゆう……いち……』
――まこ……と……？　なんで……倒れて……

名雪と、秋子さんの姿がゆっくりと重なって――
赤くなって……

そして、亜麻色の髪のおさげの少女――

「えっ……えっ……？」
胸が、痛む。上手く、息ができない。
「どうしても……駄目なんだっ……なんでだ……北川っ!!」
「相沢……」
「思い出したくてもっ……痛い……教えてくれっ……ここは……どこだっ！」
「……」
「俺は……何を探してるんだっ……あゆ？　名雪？　真琴？　栞？　舞？　それとも――」
「……」
「教えてくれっ！　北川っ!!」
北川の、肩を強く掴んで。

「……」
北川は、そこで初めて祐一から目を逸らす。
「それだけは、駄目だ。お前が、自分で思い出さなきゃ、駄目だ」
「……俺が？」
「俺にはお前が何をしていたか……何でそうなっちまったのかは分からない。だけど……」
北川が、再度、祐一に向かい合う。今度は、睨みつけるではなく、真っ向から、真剣に見つめる。
「それだけは——お前が自分で思い出さなきゃ駄目なんだ！」
「き……たがわ……？」
祐一の、胸が締め上げられる。
「おれは……」
ガサッ……
「なんだっ？」
ここから割と遠くない茂みが、作為的に揺れた。
その音が潮騒の音に紛れて響く。
(誰か来るっ!!)
声をひそめ、祐一を半ば無理矢理に座らせる。
(レミィ、下がれっ！)
運んでいたバッグから、銃——コルト・ガバメントを取り出しながら北川が囁く。
(ラ、ラジャーです！)
レミィもまた、刀を取り出して、揺れる茂みの逆方向へと移動する。
「な、なんだ……どうした北川っ!?」
(しっ……声を立てるなっ……顔もあげるな……じっと伏せてろ……今は黙って従ってくれ……もし敵なら……)
——敵？　敵だって？　今、北川は敵……と言ったのか？
(なんだ……一体……それ……銃……!?)
(もう、四の五の言ってる暇はない……一度しか言わないぞ……これは……殺人ゲームだ……死にたくなかったらお前も隠れてろ！)

（えっ？　えっ？）
祐一の手に投げ渡される銃——里村茜の持っていたサイレンサー付きの銃だ。もっとも、今の祐一はそれを知る由もないが——
この三日間、北川が会った人物は三人。
まだ、殺人ゲームだということを認識できなかった頃に、宮内レミィ。
レミィと立て篭もった小屋に詰問してきた、信頼できる親友、相沢祐一とそのお供、椎名繭。
いずれも、北川がなんらかの理由で心を許せる相手だけだった。
浩之から始まって……数多くの死体を見てきた。
それは、北川が殺人ゲームだと認識するに充分な現実。
護をはじめ、数多くの知り合いが死んだと告げられた事実。
そして——もう祐一を除けば北川にとって、もう生き残りの中に心を許せるような知り合いは——いない。
（今まで誰にも遭遇しなかったことのほうがおかしいんだよな……）
結論。今、向かってきている人物は、ゲームに乗った敵である可能性が、高い。
そうでなくても、生きる為に殺す——と結論付けた奴だっていてもおかしくない。
最初から下手にフレンドリーに近付いて、いきなり撃たれて殉職——なんてたまったもんじゃない。
（そうでなくても……レミィと、状況を把握できてない相沢がいるんだ……）
慎重に、相手を探る。
ガサガサ……さらに茂みが揺れた。
（なんだ……今、北川は敵……といったのか？

……それに……北川の持つ銃とこの銃……本物じゃないのか⁉)
「動くな……誰だっ‼」
祐一の混乱が覚めやらぬ内に、北川は揺れる茂みと対を成す木の陰に移動し、そう呟く。
「……っ⁉」
驚いたような声。
その声が、女だということが認識できる。
「こっちに、攻撃の意思はない……分かるかっ？」
チラリ……
意を決して、木の陰から片目を出す。
(って、うちの学校の生徒じゃないか……しかも一年？)
一瞬で見て取れた。見慣れた学校の制服。リボンの色は間違いなく一年生のものだ。
それよりも……胸に抱いた右腕が——脳裏に一瞬で焼きついた。
「あまの……天野じゃないか！」
突如、叫びながら祐一が立ち上がり、天野——と呼ばれた女生徒に駆け寄った。
「お、おい、相沢……！」
北川の隠れる木の横を通り過ぎ、前へと踊り出る。
「……あい……沢さん……？」
女生徒の、少し震えたような声が漏れる。
「相沢の……知り合いか……」
初めての敵との遭遇……と思われる事態に、大げさに神経質になりすぎていたのかもしれない。
(少し、軽率だったかもな……)
北川は、頭を掻いた。
「ふう……」
伏せていたレミィにも、安堵の表情が宿る。
頭が……ひどく痛む。
頭の中におぼろげに浮かぶ戦慄のイメージ。
血に染まった、赤。いつか見た光景。

──ゆ、祐一、大丈夫？　この子が悪いんだよ！
祐一を殺そうとしてたから……──
──でね、途中で『みゅ～』て言ってばっかりの女の子に会うの。その子はまだ子供だから、真琴はその子のお姉さんになってあげたの。木の実をあげたり、変な人に襲われたときは真琴が守ってあげたりしたんだから！──

「天野っ……！」
張り裂けそうな赤──そしてかすれる声。
「天野……まこと……は……？」
気が付いたら、口に、ついていた。その名を。
「いやっ……!!」
「それに……その右手……おい……天野っ……!!」
女生徒の様子が、おかしい。
「おい、相沢……？　天野……さん？」
先程、祐一が口についた名を、北川も口に出す。
その女生徒は、明らかに──何かに怯えていた。

美汐の足が、一歩、二歩、と後ろへ下がる。
「いや……入ってこないで……」
ガクガクと足を震わせながら、美汐が声をしぼりだす。
『天野……まこと……は……？』
──まこと……いやっ……まことはもう……いないの……
──悲しい……つらい記憶……
『それに……その右手……おい……天野っ……!!』
──わたし……の……みぎて……もう……ない……の……？
──わたしの中に入ってこないでっ……！
──これ以上私を壊さないでっ!!
「いやっ……！」
「天野っ！」
祐一が、美汐の肩を掴んで、揺さぶる。
こんな、美汐の取り乱した……錯乱した姿に、祐一もまた取り乱していた。

「おいっ、相沢、落ち着けっ!!」
北川の声が、遠くで聞こえる。
「いやっ!!」
「天野っ……」
祐一の手を振り解いて、その勢い余って背中から
その場に倒れる。
「天野……一体……」
ガサッ……
一瞬だった。
今度は、誰も気付かなかった。
バキィッ………！
ただただ、祐一と美汐のやりとりに目を奪われて
いただけだったのか……
それともそうでなくても気付かなかったのか。
それほど……唐突に、祐一が派手に吹き飛んだ。
「ガッ……！」
北川が、祐一を殴りつけた時よりも、数倍あたり
に大きく響き渡る音。

「……相沢っ!?」
倒れた祐一と、その逆に位置する男の影。
「……」
(誰だっ!?)
右手で銃を水平に構え直しながら、北川が呻いた。
背中を向けたまま――美汐と正面に向き合ったま
ま……と言ったほうが正しいのかもしれない――ち
らりとこちらを見やる男。年は北川達とそう相違無
い。
「いきなり……なにすんだあんたっ!!」
その男の目は、どこか異常な、何かを感じさせる
目で。
(なんだ、こいつは……こいつはゲームに乗った奴
なのか!?)
男が手に武器を持っていないことを確かめながら、
ぐるりと回りこんで祐一の方へと向かう。
銃は構えたままに。
(それに……なんだあの手はっ……！)

武器こそ手にはしていないが……右腕に携えられている袋のそれは……
（人間の……手!?）
それに気をとられた時、きらりと何かが光った。
「えっ……？」
「ジュン！」
レミィの叫び。
（なんだっ……？）
本能的な恐怖……北川の、右腕の周りにまとわりつくそれ。
右手から、超高速で伝染する、圧倒的な恐怖。
「うわあああっ！」
レミィの叫びがあったとはいえ、それを感じ取れたのは北川にとって幸運であったのかもしれない。
ゾリッ……！
勢いよく手前に引き抜いた右手から、鮮血が迸り、その場を赤く照らした。
「ぐぅっ!?」

ただ、熱い……という感覚と共に、北川が後ろに一歩、二歩とよろける。
カラカラッ……
その感覚で取り落としてしまったコルト・ガバメントが男の足元にまで滑って止まる。
空中に残るその日の光に輝く糸を、男が手前に引き戻す。
赤く垂れる血と共に、何か長い布みたいなものが巻きつくように付着していた。
「痛ぇ……」
それは、北川の右腕の——皮。
なに……今の……祐介さんが……右腕を……刈ろうと……祐介さん……？
狂気が、電波が、伝染する。
私の右手……その男の人の右手……あなたが持っている右手……私も……刈るの……!?
思考の混乱の最中、祐介が薄く笑った気がして……

「いやあああああっ!!」
その場から……逃げた。
そうしないと、信じていた何かが、壊れてしまいそうだったから。

「……」
男が足元に転がってきたコルト・ガバメントを拾い上げ、構える。
祐一にでなく、北川にでもなく、宮内レミィに。
「……!」
北川が、横目でレミィを見やる。
「……」
先程まで持っていた刀ではなく、銃——電動釘打ち機——を両手に、狙いを定めている宮内レミィの姿があった。
「や、やめろっ……」
右腕の痛みをこらえながら、北川が叫ぶ。
その時……

「いやあああっ!」
沈黙を守っていた美汐が、来た道の方向へと駆け出した。
「……!」
男が、一瞬そちらに気を取られる。
「フリーズッ!」
ビシュッ……!
五寸釘が、勢いよく発射される——が、男は瞬時に転がってそれをかわす。
確認してから転がったわけじゃない。まさに刹那の出来事だった。
「……!」
転がったそのままの勢いで起き上がると、ゆっくりと、こちらに銃を構えながら、後退していく。
「フリーーズッ!」
レミィの再三の叫びにも止まらずに、男は銃を構えたままに奥へと消えていく。
やがて、その姿が木々の間に見えなくなった頃、

全速力で駆け出していった。
　美汐の、消えた方向へ——と。
「ジュン！　ユーイチ！　大丈夫？」
レミィが、心配そうに二人を眺める。
「あ、ああ、大丈夫だ……心配しないでくれ……」
　と言いつつも、右腕の肘から先……手首までの部分が真っ赤に染まっていた。
（皮が……ほぼ全部持っていかれてやがる……いち ち……）
　ビリビリッ……自分のシャツを左腕で勢いよく破ると、それを右腕に巻きつけ、縛る。
「北川……なんだ……今のは……？」
　殴られた頭を激しく振りながら——祐一の戸惑いの声。
「分からん……たぶん……ゲームに乗ってしまった奴なんだと思うが……」
　きつく、強く縛りながら北川。
　傷こそひどいが、出血はさほどでもないらしい。縛り上げたシャツが真紅に染まるまでには到らなかった。
「ゲームって……なんだよ……」
「……」
　右手の具合を、強く握ったり開いたりして確かめながら、黙ってその言葉を耳に通す。
「殺人ゲームって……この銃はなんだっ！　真琴は……真琴は……死んだ……のか？」
　先の祐一の、頭の中に浮かんだイメージは、それだった。
「……」
　ただ、何も言わず、祐一を見つめる。
　かけるべき言葉は、見つからなかった。
「ふざけるなっ！　殺人ゲームなんて……ふざけるなよっ!!　馬鹿野郎!!」
「相沢……」
「うるさい！　俺は……俺はみんなを探す！　北川、

手伝ってくれ！」
「……」
それにも、答えることができなかった。
「ユーイチ……」
「なんでだ……なんで黙ってるんだ？　まさか……みんな——なんて言わないよな⁉」
「……相沢……」
「くそっ、俺は……俺だけは……みんなを探す……きっと生きてるっ！　当たり前じゃないかっ！　あゆも、名雪も……真琴も、舞も……栞も……佐祐理さんも……みんなみんなっ……‼」
「おい、相沢っ‼」
突如、祐一が駆け出した。森の向こうへ向かって。
降り続く雨の中、空き地で待つあの寂しい瞳の少女も……だけど、その彼女の名前と、その姿だけは、もやがかかったように思い出せなかった。
「そして——もっ‼」
「ジュン！」
レミィが、手荷物を片手に叫ぶ。
「分かってる……今のあいつを一人にはできないだろ！」
左手でバッグを下げ……傷ついた右腕で大口径マグナムを構えながら。
北川達もまた祐一の消えた方向へ向かって走り出した。
——僕もまた狂っているのだろうか——
天野さんを守るために……ためらいもなく他の参加者に手をあげる……
いや、ここに来た頃は最初から手をあげていたじゃないか……。
それは、狂っていたとは言えないのか？
あの時は、叔父に会うため、そして生きるため……大切な……漠然とした何かを守るために……。

そして、今は、もう近づく資格などない僕が、それでも天野さんを守るために。
大切な、形あるものを守るために。
いいじゃないか。昔から狂っていたとしても。
いいじゃないか、たった今、狂ってしまったとしても。
僕が狂うことで大切な、本当に大切だと言える人を守れるなら。
守りきれるなら、それでいい。
僕の、選んだ道だから。

――ああ、電波が心地いい。

596　逃亡者

嘘だ！　嘘だ！　嘘だ！
みんな生きてる！　そうに決まってる！
俺はただひたすら走った。

後ろから聞こえてくる北川の声が遠くなっていく。
周りの景色が無くなっていく
聞こえるのは自分の息と足音
感じるのは手に持った銃の重み
頭の中はぐちゃぐちゃで
まともなことは何一つ考えられない
浮かび上がってくるイメージ

――口から血を流す真琴――
――血に塗れたナイフを持った名雪――

違う！　違う！　違う！
認められない！　認めるわけにはいかない！　認められるわけがない！
だから俺は走る。
余計なことを考えないために。

不意に視界が戻った。

気がつけば地面に倒れ込んでいた。
体を動かそうとしても指一本動かない。
俺はゆっくりと目を閉じた。
次に目を覚ましたときにいつもの目覚ましの声が聞こえてくることを願って。
「結花～、この人まだ生きてるよ！」

597　愛の消毒大作戦

世界がぐらりと歪んだ。
足が、パタリと止まった。
視界からは、相沢祐一の姿が消えていた。
目の前には、黄色い髪の、女の子。
心配そうに、俺のほうを覗き込んでいた。
「ダイジョウブ？」
彼女、宮内レミィはそう言ってるような気がした。
「あぁ、俺は大丈夫だ」
なんて、強がって答えようと思ったけれど……ダメだ。
息が、苦しい。
手が痛い。
腕は、真っ赤、だ。
握っていた、マグナムが、地面に落ちた。
どさり、と音がした。
大丈夫じゃないな、俺。
心の中でそう呟いた瞬間、北川潤の意識は落ちた――。
目がさめると、柔らかいものの上に、俺はいた。
「ジュン！」
レミィの顔が目の前いっぱいにあった。
「おわっ！」
少し驚いた。
「ジュンが目を覚ました！　ワタシとってもウレシイ！　ジュン！　もう起きないかとおもったよ

ー！」
どうやら、俺はレミィの膝枕で眠っていたらしい。
流石にこのままだと、恥ずかしいので立ちあがろうとした。
「ジュン、ダメだよ！　もうちょっと寝ていなきゃ！」
眉をつりあげ、レミィは言った。
とりあえず、今は言うコトを聞いていたほうがよさそうだ。
というか、ホントは動けなかった。
ケガをしていた右腕を見た。
腕には葉っぱが茎でまきつけられていた。
レミィがやってくれたんだろう。
「レミィ、これありがとな」
腕を指差して、北川は言った。
「エヘヘ……これが限界だった」
レミィは、少し照れて、笑った。
「十分だ。レミィがやってくれたんだからな」
「一応、化膿しちゃダメだから、消毒しといたヨ……」
レミィは顔を赤くして、言った。
と、消毒？
ここにはオキシドールもヨードチンキも、赤チンもない。
ってことは……。
頭の中で考えると同時に、北川の顔も赤くなった。
「それじゃぁ、ちょっと水くんでくるヨ！」
そう言ってレミィがさっと立ちあがった。
ゴスッ
頭が地面に落ちた。
物凄く、痛かった。
腰から上だけ、上体を起こして、俺はレミィが帰ってくるのを待つことにした。

598　reins of power

……まるで、牛歩だった。
僕はいい。死跡を見るのにはもう慣れている。問題は隣にいる彼女。郁未はどんな気持ちでいるのだろうか、と。
語る言葉も捜すことができず、俯いたまま口をつぐんで、一歩一歩を噛み締めるように歩く。そこに秘められた気持ちはなんだろうと思索する。
だが、それでも前に進んでいる。歩みの速度が遅くても、進む歩幅が狭くても、確実に彼女は進んでいる。
それは彼女の強さであるかもしれないし、弱さなのかもしれない。
これが三日前だったなら、
彼女は一体どんな反応を見せたんだろう。

……別に惨状を見るのに慣れているわけじゃないし、慣れようとも思えない。見知らぬ人間の死の跡だけを覗いて涙できるほど善人でもない。むしろあるのは嫌悪感。むっとするような臭気から逃げ出したいという本能的な悲鳴。それなのに何か何か気になってしょうがないのは多分、なんとなく感じてしまった気持ちの残滓に心が引っ張られているだけなんだろう。
悪いことじゃないよね。だってどうしようもないから。
――フラッシュバックする母親の死体
気が付いたら道が広がっていた。そんな大した距離を歩いたとは思えないけれど、とりあえず森を出たようだ。
で、余計なものまで目に入ってしまった。
「ひっ!?」
思わずびくついて少年にすがりつく。片手で口元

を押さえて、もう一度確認を試みる。
　累々たる死体、それはかつて私たちが忌避し、今現在打倒すべく向かっていたもの。
「――高槻」
「……高槻」
　見覚えのある死体だと思ったが、当たり前な話だったわけだ。だが、いかに奴が惨憺な姿で死んでいようとも、それ自体は自業自得としか言い様がない。ただ、彼女の驚きの理由は別にあったんじゃないかと思う。
「どういう……こと？」
「……」
　全くもって不可解だったことだろう。
　――同じ姿の死体が何体も並んでいるのは。
「クローン……らしいね。前に聞いたことがある」
　そう、僕はこの話を昨日葉子から聞いた。聞いたは聞いたが……いざ目の前にすると、なかなかインパクトがある。死体のせいもあるが。
「この顔が目の前に何個も並ぶのを想像すると、反吐が出るわね……」
　いつもより郁未は毒舌だった。だが、奴を知っているものにとっては無理も無い反応なのかもしれない。死しても尚罵倒されるだけの悪行を、この男は積み重ねていたのだから。
　……いや。
　それは僕も同じか。
　顔が粉々に粉砕されかけているものがあるが、どうやらマシンガンの掃射を喰らったようだ。はっきりいって正視に耐えるものではない。よく郁未はこれを見ていられると思う。
「うぐぅ」
　……そうでも無いようだ。つらそうに口元を押さえ顔が青ざめている。

「郁未」
郁未はつらそうな表情でこっちを向いた。
「もう、ここいる必要は無い。……行こう」
彼女を促す。いずれにしろ死体など見ていて気持ち良いわけが無い。僕たちはそこから少しばかり離れていった。
「……ねえ」
「なんだい？」
少し気分が良くなったのか、郁未が歩きながら僕に話し掛けてきた。
「……目的、無くなっちゃったね」
僕はそれにすぐ返事をすることが出来なかった。
だが。
高槻は殺されていた。僕たちと同じように考える人が、確実にいることが分かった。ならば、それでいい。クローンの技術がどの程度のものかは分かったものではないし、本体の高槻はのうのうと生きているかもしれないし、まだクローンも残っているのかもしれないし、もしかしたらこの先高槻と会うことがあるのかもしれないが。
「後は、生きている人間を集めてこの島を脱出すればいい」
——それなら、その時考えればいい。
「……そうだね」
「ああ」
郁未は何か言いたげな……ああ分かってる。彼女はまだ自分がやることがある。でも、それをあえて忘れたふりをしている。……僕と、同じように。
僕たちは知らない。もうゲームは加速し続けていることを。手綱を握られる必要も無く、あとは坂を転がっていくだけにすぎないことを。お膳立てはもう終わっていることを。舞台は整いつつあることを。
もしかしたら知っていたかもしれない。
やっぱり忘れた振りに過ぎないのかもしれない。

そして。
――僕の限界もすぐそこに迫っていたことを。

599　Re-Birth

「や、やっと、着いたぁ」
外傷よりも疲労が濃い耕一は息も絶え絶えに言った。ここまで歩いてこれたのかが不思議なくらいだ。
「っていうか、あんたが勝手に抜け出さなければこんなにボロボロにならなかったでしょうが」
置いてきぼりにされた留美が、すかさず突っ込む。
「いや、男にはやらなきゃいけないことがあるんだ。たとえ苦難の道でもな」
「なにを馬鹿なことを」
留美はそう言って、耕一と彰を見やる。
殺人ロボットと源三郎との戦いで消耗してしまった一行は基地を目の前に戦略的撤退を余儀なくされ、葉子とマナが待つ市街地へと戻った。
彼らを出迎えたマナはさらに大所帯になったことに驚くと共に、誰一人欠けることなく戻ってきたことに安堵した。
だが、無事である、という言葉からは程遠い。
特に、
「うわ、この人、まだ生きてるの？」
彰の容態は特にひどかった。
根拠地にしていた町にたどり着いたとき、緊張の糸が切れたのか、彰は倒れた。
「お兄ちゃん！　彰お兄ちゃん!!」
あわててすがりついた初音の肩を蝉丸がつかむ。
「動かさない方がいい、傷に障る」
ビクッと震えるように初音は彰から手を離す。
「彼をとりあえずベッドに寝かせたい。それで傷の具合を見たいので服を脱がせる。あと、ハサミを貸してくれないか？」

「……こっち。救急箱もその部屋よ」
蝉丸の言葉にマナは奥の部屋を指し示す。
「うむ、すまない」
マナを先導に蝉丸は彰を抱えて運んでいく。
「手伝いがいる。申し訳ないが何人か来てほしい」
体力を消耗しきってさっそく寝込んだ耕一と葉子がこの家で休んでいると知らされた晴香以外はその後についていった。

蝉丸は血が付着し無理に剥がすことができないところは布の周りをハサミで切りとり、そして一枚ずつ服を脱がしていった。
彰は誇張ではなく満身創痍であった。
（これだけの傷を受けながら、よくも……）
改めてその体を確認して蝉丸は内心舌を巻いた。
右太股に銃創があるだけではなく、甲も半分以上無くなっている。頭に巻いた包帯は赤くなり、腹には大きな青あざが二つあった。
その他、小さな傷やヤケドは数える気にもなれなかった。
なにより、血が付いて茶色く変色した右足と既に用をなしていない後頭部の包帯がかなりの血を失い消耗していることを物語る。
（彰お兄ちゃんが大変なことになっている。なのに、私は何もできない）
初音は痛々しい彰を見守りながら、自分の無力さを歯がみしていた。
「すまないが体を拭くのに湯か、無ければきれいな水が欲しい」
「それじゃあ、私が！」
蝉丸の言葉にはじかれたように、初音は台所に走っていった。自分も怪我をしているにも関わらず。
しばらくして、初音はやかんいっぱいにお湯を入れて部屋に戻ってきた。
「お湯、持ってきました」

「すまない、そこに頼む」
蝉丸は先ほどマナが探してきた洗面器を指し示した。初音はそれにお湯を注ぐ。
「これぐらいの熱さでいいですか？」
洗面器にうっすらと湯気がのぼる。蝉丸は指を少し入れてちょうどいい温度なことを確認し、うなずいた。
お湯を注いでいる間、改めて傷の酷さを見て、初音は胸が締め付けられる思いがした。
こんなになるまで戦っていたのか、そう思うと目の辺りにこみ上げる物が来た。
(お兄ちゃん……)
初音はまばたきをして、それを抑えようとした。
だが、
カンカラカン
「えっ？」
初音は、ふと我に返る。
音がした方を見ると、手に持っていたはずのやかんが床に転がっていた。
「ご、ごめんなさい……」
何回も頭を下げる初音に蝉丸は言った。
「疲れているようだな、早く休むがいい」
「……」
そして、蝉丸は留美と月代に添え木になりそうな物を探してくるようにと伝えた。

(私は何もできない)
真っ暗な部屋に初音は膝を抱えて座っていた。
(彰お兄ちゃんを助けることも。ううん、もしかしたら足を引っ張っているだけなのかもしれない)
誰もいない部屋。一人でいると気が滅入ってくる。
(お兄ちゃんは私を守ってくれた。お兄ちゃんは私を励ましてくれた。お兄ちゃんは私に希望をくれた、なのに、なのに……)
初音は小さい体をさらに縮ませる。
(私にできること、私にできること、私にできるこ

と……)
　疲労と眠気はあるが、それにも増して初音は自己嫌悪と焦燥に苛まれ、休むこともできない。
　そんな終わることがない自問自答を続け朦朧としてきた頭に、ふとどこからか声が聞こえたような気がした。
(あ……よ)
　初音は辺りを見回すが誰も見つけることができない。
(ある……よ)
「だ、誰?」
(あるよ……リネ……ト)
　彰の手当は終わり、その部屋には誰もいなかった。
初音は静かにドアを開けると音も立てずに中に入っていく。遮光され、暗い部屋だったが不自由なく、彰の方へ近づく。
　彰の体の半分以上が新しい包帯で巻かれていた。
　蝉丸は適切な応急手当を施したが、失血は補いようがなく、不規則な呼吸音が未だ彼が死線をさまよっていることを表していた。
(お兄ちゃん……)
　初音は苦しげな彰の寝顔を見て、
(くるしいよね、いたいよね、おにいちゃん……)
　枕元にあった救急箱からハサミを取り出し、
(でも、もうだいじょうぶだよ……)
　自分の腕に突き刺した。
(これで、また元気になるよね……)
　そして、滴る血が、
　彰の口の中に入っていった。

600　捧げるもの

乾ききった礫(れき)沙漠のように、荒涼とした丘の上で。
揺らぐことなく林立する、大岩の下で。
あたしたちは、移動の準備をしていた。

「それじゃ、行こうか」
　びゅうびゅうと騒ぎ立てながら、隙間を抜けて行く風音にのせて、誰かがそう言うのを、あたしはぼんやり聞いていた。
「……こいつ、どうするの？」
　長瀬源三郎とかいうオヤジが、岩陰で倒れている。死んではいないのだろうが、話に聞く痙攣すら治まり、激しかった呼吸音も既にない。隣でささやかに咲く野花が、いかにも不似合いだった。
「なんなら……あたしがやっても、いいよ」
　自らの吐瀉物に顔を埋めて動かなくなった男の傍らに立ち、刀を携えて尋ねる。
「放っておいても、いいんじゃないかな。いろいろ聞きたかったんだけど……その様子じゃ、無理だと思うし」
　彰とかいう青年が答える。傍らに小さな女の子を侍らせて、それでようやく立っているような、満身創痍の彼に言われると、あえて殺すのも気がひける。
（でも、甘いわね――）
　あたしは……目的のために、殺せる。
　尋問……いや、拷問みたいな汚れ仕事だって、やれる。自分の鋭利な決意を、世間の倫理に鈍らせるようなことはしない。
（名もなき兵士達を。たくさん、たくさん――殺したから、ね）
　ねえ良祐。あんたは、こんな風に死んだの？
　智子、あかり、それにマルチ。あんた達は、こいつを許せる？
　由依、あたしどうすればいい？
　天を仰いで、皆に尋ねる。
　――答えは、ない。
　死人は帰ってこない。
　応えてくれるのは、唸りをあげる風だけだ。
　眼を、口を、強く閉じて、ゆっくりと息を吐く。

「そ」
たっぷり時間をかけて息を吐き、あたしはさんざん迷った挙句、短い答えをよこした。
(みんな、これでいいかな？)

一行がぞろぞろと歩き始める。
あたしも群れの片隅に身を置くように、遅れて歩き出そうとしたところで、大事なことを思い出す。
(ああ、あたしとしたことが、忘れるところだった)
そのまま、かちんと刀を引き抜き、風を切るように草花を薙ぐ。風にのって流れる花を拾い上げ、軽く束ねると、群れから逆行するように歩く。
その先には、戦闘用ＨＭ—12があった。
(マルチ。あんたの——妹だよね)
あまり原型はとどめていないけれど、解る範囲で整えてやる。幸い腕はだいたい残っていたので、胸の辺りで手を組ませ、花を持たせてやった。
(妹のオイタは、止めておいたからさ。だから——のんびり寝てていいよ)
右手に刀を持ったまま、左手で軽く拝む。
(——さよなら、マルチ)

振り向くと、大きく遅れたあたしを待つように、遠くに立つ影がひとつあった。
「晴香」
「……ああ、七瀬。ごめん」
七瀬が髪を切ったせいで、少しばかり認識が鈍る。しばらく二人で黙って歩いていたが、やはり聞いてみることにした。
「……ね」
「ん？」
視線を交えもせず、お互い遠くを見ながら会話する。
「もしも、あたしが死んだらさ。……ああして、花でも添えてくれるかな？」

微笑を浮かべて、言ってみる。七瀬はちょっと驚いた顔をしたけれど、すぐに真顔になって答えてくれた。
「……そうね。花くらいは、探してあげるわ」
そしてニッと歯を見せて笑い、言葉を続ける。
「もう髪に、余裕はないからね」
あははは、と。
二人笑う声が、風に乗って。
遠く遠く、視線の遥か先へと、流れていった。

601　人でなくなるということ

ドックン……
なにかが聞こえる。
僕の耳に振動が伝わってくる……。
「初音ちゃん!!　なにを！」
パシィッ
僕の近くに人がいる。複数。
「だって……。このままじゃ彰お兄ちゃん死んじゃうよ！」
耕一は血を流す初音の腕をつかみ、自分の方に引き寄せる。
「なんてバカなことを！」
耕一も知っていた。次郎衛門の話。自分の前世の話だ。瀕死の次郎衛門を助けるエルクゥ。その方法。
「バカじゃないもん！　わたしは彰お兄ちゃんを助けるの！　今まで助けてもらってばっかり……。わたしはいつも役立たず……。そんなのもう嫌なの！」
初音はもがいて耕一の手を振り払おうとする。
「離してよ！　離してくれないんだったら耕一お兄ちゃんなんてキラ」

初音の頬を耕一が……叩いた。初音の体が地面に転がる。
「え……ぐ……」
泣き顔で振り返る初音。しかし口から出かけた言葉はそこで失われた。
耕一の……苦虫をかみつぶしたような表情。
「彰君は男だ……」
その言葉に初音の表情が変わる。
「あ……」
「もしも鬼の力を得て……それを、制御できなかったら」
怯えへと……。
「初音ちゃん。俺はね。この島で一度、鬼に変身したんだ……」
「えっ？」
力は封じられているはずなんじゃ？
その問いは表情にでた。
「俺は死にかけたとき、初音ちゃん達四人を守る力が欲しいと強く思った。鬼の血の力。ひたすら力を求めたんだ」
初音はなにも言わない。言えない。
「結界とやらは『人間の操る人外の力』は封印できているみたいだが……」
彰に視線を移す。
「『鬼の操る人外の力』には完璧ではないのかもしれない。もし彰君が鬼に目覚めたら……」
(血を……吐かせる……か？)
今からでも間に合うかもしれない。
彰を前に耕一は思案する。
しかし鬼の血でもないことには、彰が死ぬ可能性が高いことは誰の目にも明らかであった。
「もし、彰お兄ちゃんが理性を鬼に支配されるようなら……」
立ちあがった初音は、胸の前で拳を握っている。
何かを決意したように。
「その時は……」

「初音……ちゃん？」
「鬼になる前にわたしが……」
彰の方を向く。
「あなたを殺します。そしてわたしも……」
それはエゴ。なんで人で無くしてまで生き残らせたのか、と彰は怒るかもしれない。
「それでも私は……。彰お兄ちゃんにこのまま死んで欲しくない！」

ドックン……

彰の中に何かが生まれる。
しかしそれはまだ、硬い檻に閉じ込められている。
そう。硬く、そして時にはもろい『理性』という名の檻の中に……。

602　おじさんへ

ええっと、あゆだよ。
おじさん、元気でがんばってるかな？
ボクは、元気だよ。
梓さん、千鶴さんといっしょにがんばってるよ。
も、もう……お荷物じゃないよっ！
ほんとだよっ！

……ねえ、おじさん？
ボクね。千鶴さんが戻ってきて、みんなで学校出てからね。ずっと、考えてたんだ。
秋子さんって……おじさんは知らないだろうけど……秋子さんってひとがいるの。強くて。怖くて。
ボクを……連れて行こうとしていたんだよ。
それで梓さんも、千鶴さんも、ボクのために戦ってくれたんだ。

でもね。
そのときボクは……何もできなかった。
だって、怖かったんだよ。
だれかに殺されるのも。
だれかを……殺すのも……。

おじさんも、戦うよね。怖くは、ないの？
ボクは……怖いよ。
秋子さんの叫び声、一生、忘れられないよ……。

……うぐぅ。

そのあと、色々あって。
ボク、死んだことになってるよね。
心配してくれてたら、ごめんね。
みんなで学校を出て、最初にお墓のところに行ったんだよ。遠くにいたけど、煙がもくもくし始めたから誰かいるもしれないと思って、みんなで走ったんだ。そしたら、墓地だった。誰も、いなかったけどね。
あちこちから煙が出ていてね。地下室の大きいやつ？　みたいのが、ここにあったんじゃないかって。ボクも、そう思ったよっ！　かくれんぼと一緒だよね。

そのあと、森に入ったのかな。
そこで、お爺さんに会ったんだよ。おじさんよりも、お年寄りだったよ。

「千鶴姉……誰か、いるよ」
最初に気が付いたのは、梓だった。
気配はひとつ。木の幹にもたれかかるようにして、ぐったりと座り込んでいる。
大柄な男。耕一さんよりも、更に大きい。そのひ

とは知人だったが、参加者ではなかった。
「⁉　……あなた、お屋敷の執事さん？」
声を聞いて、老人が片目を開ける。
「む……あんた……鶴来屋の、お嬢さんか……」
鶴木屋のある敷地から、いくらか離れた所にある、別荘地最大の〝お屋敷〟の執事。地元代表のひとりとして、千鶴はこの老人と面識があったのだ。
「耄碌、したものだよ……」
がはっ、と咳をする。もはや吐血か喀血か判断すら出来ない。胴体は、血塗れだった。いくつもの穴が穿たれ、これでよく生きているな、と思うほどの血が流れている。呼気は血の湿り気を帯び、どう見ても耄碌とかいうレベルの問題ではない。
「一体、誰に⁉」
千鶴は老人に手を貸して、気道を確保する。
「なあに……哀れむことはない。この下らぬ戯事を仕組んだ者どうし、仲間割れしたに過ぎんのだ」
自嘲をこめて語る老人に、梓が表情を固くして、腕を組んだまま尋ねる。
「どういう、こと？」
高槻の更に上に存在する長瀬の存在。その所業。老人の口から語られる、彼らの絶望的な狂気の沙汰に、千鶴達は言葉を失った。
最後に彼自身の戦い、そして敗北が語られた。
「長瀬源三郎、ですか……」
千鶴が思い出すように、老人を撃った男の名を呟く。
「……腐れ縁、かしらね」
自宅の戸口に、飄々と、しかし貼り付くように立っていた、地味な男の姿が目に浮かぶ。
「なあ、鶴来屋のお嬢さん」
千鶴を現実に引き戻すように、源四郎が声をかける。
「わたしを長瀬ではなく、来栖川の執事と呼ぶのなら……心残りは芹香お嬢様だけだ。この老いぼれを哀れんで、源三郎を追うのは、やめた方がいい。妙

な薬を使っていて……あれは、獣と変わらぬ」
「執事さん、あたし達のこと、知っているんだろう？」
横合いから梓が遮るように尋ね、そして宣言する。
「獣が怖くて……鬼はやってらんないよ」

……そして娘達は去っていった。
わたしの最期が近いことを、知ってはいたのだろう。しかし、わたしが求めるものが孤独な死である事も、理解していたのだと思う。
「本当に、いいのかい？」
そう言って一度だけ確認すると、鶴木屋の娘達は、振り向くこともなく去っていった。小さな娘だけは、いつまでも悲しそうにこちらを見ていたが。
……それすらも、慰めになった。
「……お屋敷の、執事さん……か」
ははは、と低く笑おうとしたが、代わりにごぼ、と血がせり上がってくる。脳にまわる酸素が希薄になってきているのだろうか、思考も視界も薄れていく。
「来栖川の人間として、最期を迎えることができるとは……」
そして無音の世界に包まれる。
「……わたしは、果報者だな……」
そのまま平衡を失い、どさりと横に倒れた。
言葉は、自分に言い聞かせるようなものであったが。
源四郎は満ち足りていた。

ねえ……おじさんは、怖くない？
あのお爺さんみたいに、一人で、誰もいないところで、どこか解らないところへ旅立つなんて。
そんなこと、ボクにできるのかな？
今はみんなと一緒にいるけれど。
いつか、一人になる日が来るのかな？

ほんのちょっと前までは。
いつまでも、今のままだなんて信じていられたのにね。世界は、ボクを押し流しながら変わっていくんだね。だから、ボクも変わらなきゃいけないんだよね。

……ね、おじさん？
ボク、がんばるよっ！

そうやって、あゆが思考を締めくくった、まさにその瞬間。源四郎の情報を元に、岩場にある施設を捜す千鶴達の目前に立ちはだかっていた岩が、ゆっくりと浮き上がるように持ち上がり、三体のロボットが姿を現した。

「「「只今ヨリ作戦ヲ実行シ、排除シマス」」」

慌てて岩陰に隠れていた三人は、素早く死角に回り込む。

「あゆ、頭引っ込めろ！」

「うぐぅ」

ロボット達は、そのまま千鶴達に気付く事もなく、足早に駆けて行く。

「……物騒なこと言ってたね」

「始末しましょう……わたしが右に回って、梓が左からね。あゆちゃんは……撃てる？」

「無理しなくていいよ？　アレの場合、〝殺す〟わけじゃなくて、〝壊す〟だから気は楽だと思うけどね」

突然自分に話を振られて、あゆは少なからず動揺した。しかし見た目には、それほどの時間を要することもなく、彼女は銃を構えて言った。

「う、うんっ！　ボク……がんばるよっ！」

長瀬源四郎　死亡

603　言霊

手が震えていた。
左手のみだ。
いつの間にか握られていた右手は、何とか震えは起きないでいる。
郁未に気付かれる事も無い。
無論、冷え性というわけではない。
緊張しているわけでもない。
いや、むしろそんな理由であった方が良かったかもしれない。

――崩壊が始まっていた。

少年の内には、不可視の力が宿っている。
不可視の力の始祖としての、強大なる力。
これに比べれば、郁未の力も模造品と言っても差し支えない。
故に、障害が生じるのだが。
結界。
これによって封じられた力は、確かに少年の内に在る。
だが、それをいつまでも封じていられるわけにはいかないのだ――。
暴走を始めつつある力は。
時に血の衝動を引き起こし。
限界を超えた力を無理矢理引き出す。
抑える事は出来た。
――己の身体を削る事で。
そう、外に溢れ出さんとする力が、己の身体を傷つけているのだ。
少年は、汗をかいていた。
それは、実に、実に珍しい光景であった。
「――郁未」
声を掛けた。

何となしに空を見回していた郁未が、顔を向ける。
「何？」
「もし、僕が死んだらどうするつもりだい？」
あまりにも唐突な問い。
少年にも、何故そんな事を訊いたのか良く分かっていなかった。微かに潜む、死への恐怖がそうさせたのかもしれなかったが。
郁未は、若干虚を突かれたような顔を見せた――すぐにそれは、少し怒ったような顔になった。
「あまりそういう事は言わない方が良いわ」
「どうして」
「言霊っていうのがあるでしょ」
右手を放される。
郁未は腕を組んで少年を睨んだが、少年は密かに安堵した。身の震えを気付かれる事が無くなったから。
「死ぬとか殺すとか、そういう事ばっかり言ってると本当にそうなるの」

それから、郁未は。
少し哀しげに目を伏せる。
「私は――あなたに、死んでほしくないから」
心持ち暗い声で、そう言った。
それを聞いて。
少年は、拳を握り、手の震えを打ち消した。
改めて思ったのだ。
僕は、まだ死ぬわけにはいかない、と。
「――そう、だね」
呟くと、いつも通りの笑顔を見せた。
それはまさしく、いつもの少年の笑顔。
郁未も、ようやっと笑顔を返した。

――そこで耳に届く、悲鳴。

郁未の顔が強張る。
少年は、冷ややかな顔を森の奥へ向けた。
「――近いね。気を付けた方がいい」

警告。
郁末は、無言で頷いて返す。
その手には、既に包丁が握られている。
少年は、その手に何も握ってはいなかった。
だが。
辺りに、微かに漂う何か。
不可視の力――。
行き場を失った強大な力を、ほんの僅かに引きずり出す。濃艶な血の気配が漂った。
それは、これから起こる何かを思わせる。
やがて、草を踏み鳴らす音。
誰かが、近付いてきている。
誰か。
足音は、軽く、妙に安定さが欠けていた。
女。それも錯乱している。
恐らくはマーダーではなかろう。
――少年の察知は見事的中した。

少しして、草木の中から飛び出してきたのは、少女。
少女の名は、天野美汐――

604　記憶の彼方へ

『君、朝、あの空き地で、何をしてたんだ？』
『…………』
『こんな雨の中で、ラジオ体操でもしてたわけじゃないだろ？』
『ラジオ体操です』

それが彼女との出会い……いや、彼女はクラスメートだったわけだから、厳密には違うのだが。
それからの一年は、確かに楽しかった日々。
俺と、茜と、詩子と。
本当に、楽しかった。心からそう思う。

気がつけば、雨の似合う少女、里村茜のことを本当に好きになっていた。
それは、初恋というわけじゃなかったけど。『初恋は実らない』とよく言われているから、それはそれでいいのかもしれない。
俺が、彼女と雨を巡り合わせたくないと思うようになったのはいつからだったろう。

『待っている人がいるんです』
『あいつ、傘持っていなかったから』
『濡れると風邪をひくかもしれないから……それだけです』

それでも時は巡って。留まっていたかった時間も流れていって。後悔を残したまま、俺は旅立った。
そして、この島で俺は彼女と再会した。
『ごめんなさい……生きて償っていけなく……て』

『――ごめんな……さいっ……！』

それが、最期の言葉。
償う……？　それは俺の台詞だ。茜が、茜だけが、罪を背負う必要なんかない。
俺が、茜を追い詰めた。あとは、あいつ……だな。
俺は一体何をするべきなのだろう。大切な人達が俺の前から消えて……大好きだった人が俺の前から消えて……俺は、一体何ができるのだろうか。

『……私が待たなければ、誰が彼を待つというのでしょう』
『……私が、待ち続けなければ、今までの私は、何だったのでしょう』

確かにそう言った。
すべてを失って、今俺が一番やりたいこと。
ああ、俺は、そいつに会いたいのか。

俺は、茜がずっと待っていた、あいつに会いたいのか。
そうだな、俺が、代わりにずっと待っててやるよ、あの空き地で。……必ず、生きて帰ってな。
生き残ったら武器のテイクアウトは可能なんだろうか？　それだと楽でいいな。
帰ってきたそいつに、鉛玉をぶち込むことができるからな……

俺がやりたいことを為すがために、生きて帰るのが大前提。
俺が、今まで考えたこともなかったこと。
ゲームに、乗るか反るか。
生きて帰れるなら、どちらでもいい。
茜も……あゆも、名雪も……みんなみんな……いなくなったんだから。
他にやりたいことなんて、なくなっちまったんだからな。

「ぐ……ぅ……」
目が覚めれば、見知らぬ天井。湿って腐りかけているかに見える、木の天井。
(ここは……どこだ……？)
どうやら、小さな古びた小屋……のような殺風景な部屋だ。また、寝ていたらしい。いつこの小屋に辿り着いたかなんて、分からない。
(ひどく……つらい夢を見ていた気がする……)
未だズキズキと痛む頭を触ろうとした……が、
「て、手が動かない……」
ギリギリ……何かが締め付けられる音。
(縛られてる？)
後ろ手に縛られている。
(……)
一体、何が起こったのだろうか。
「あ、目が覚めた……良かったぁ……」
気の抜けたような声。
寝転がったままの祐一に見えたのは、ピョコンと

立ったアンテナのようなピンクの寝ぐせ。
「二人ともっ、相沢さんの目が覚めたよ！」
「……」
状況がよく分からない。
「あ、ほんとだ。……生きてる？」
「死んでるように見えるか？」
「まあ、そりゃあ、見えないけど」
生意気そうな茶髪のショートカットの女が話しかけてくる。
「……これは、どういうことだ？」
よく、状況がつかめない。一体自分が何をしていたのか。覚えてもいない夢と、現実とをごっちゃにして、ミキサーにかけられたような感覚。
(要するに、頭が悪い、だ)
違う。
(気分が悪い、だ)
「いきなりそんな格好にして悪いけど、まだあんたのこと信用できないから悪く思わないでね。あんたの武器も預かってるから。分かるでしょ？　殺人ゲームなんだから。あらかじめ言っておくけど、私たちにやる気はないから」
早口でまくしたてる。
「殺人……ゲーム……？」
ようやく、頭の中でその単語の意味を理解する。そうだった。北川と言い合いになって、天野に会って。謎の男に襲われて……そして……大切な人達が死んだ……などと信じられずに走ってきたんだった。
「俺も……殺す気かっ!?　……くそっ！　くそっ！」
悔しさと、恐ろしさで、みじめな位足が震えた。
「だから〜……物わかりが悪い人ね……本当になんでこんなのが生きてるんだか……」
生意気な、女だ。
(もしも俺が殺人犯なら、真っ先に殺すタイプだ)
「ふざけるなっ！　なんで俺がこんな扱い受けなき

ゃならないんだ！」
「……信用できるまで」
「……」
「まあまあ、結花……とりあえず自己紹介しようよ。信用も何も……そんな態度じゃ私達が先に信用失っちゃうよ」
信用……できるかどうかは置いといて、今までのやりとりで祐一の胸の中の恐怖心はいつの間にか薄れていた。
「むう〜……私こういう男嫌いなのよね……」
（俺だってお前みたいなガサツな女嫌いだ……）
結花、と呼ばれた生意気な少女をとりなしたアンテナ少女が改めてクルリと祐一に体を向けた。
「私の名前は、スフィー＝リム＝アトワリア＝クリエールよ。簡単にスフィーでいいわ」
外国人らしき少女が流暢な日本語で名乗る。ピンク色の髪の毛とぴょこぴょこ動くアホ毛が気になるが、ガサツ女と比べたら随分と可愛らしい。
「……」
そして、今まで二人の後ろで沈黙を守っていた女性が来栖川芹香、と短く名乗った。
その雰囲気はどこか神秘的に感じられる。
「んで、私は江藤結花。堅苦しいのは嫌いだから結花でいいわよ」
ガサツな奴が最後にそう告げた。
「んで、ガサツ女……」
「結・花・よ！」
とりあえず、この中でガサツ女と呼ばれたら自分、程度の自覚はあるらしい。
「まずこの縄をほどけ」
「ほどけ？」
「……ほどいてくれ」
「イヤ」
（このアマ……）
「あんたなんか信用できないもの……とりあえずあんたのことが聞きたいわ」

「俺か……俺は相沢……ってそういえばなんでお前ら俺の名前知ってた？　さっき俺の名前を――」
「ああ、これに載ってたから。写りの悪い顔写真付きでね……いや、写真のほうが写りいいかも……」
失礼な事を口走りながら、俺の顔写真のついた本を見せつける。
「とりあえずほどいてくれ……俺にはやらなきゃならないことがあるんだ」
「やらなきゃならないこと？」
「人を探している。大切な人達だ」
「……あなたの言ってることは嘘かも知れないでしょ？」
「……殺人ゲームなんてふざけるなよ？　……俺は信じない」
「あんたバカ？　三日間もこの島にいて……せめて現実は見なさいよ！」
そんなこと言われても覚えてないんだから仕方が無い。頭がまた痛む。

美汐に出会った時に思い出された感覚……血の海に浮かぶ真琴の姿が思い出される。
祐一は激しく首を横に振った。
「殺人ゲームが……というより、俺は大事な人達を失ったとは信じたくないだけだ。いや、絶対に生きている」
あゆも、名雪も、栞も舞も、そしてみんなも……真琴だって、俺の創りあげた幻覚に違いない。
祐一は、強くそう信じる。
「それって、逃げてるだけよ……」
「見たことも聞いたこともない……信じてくれなくても構わないが、俺はここ何日かの記憶が飛んでしまってる。そんな状況でそんなこと……信じられるかっ！」
「だったらなおさら逃げじゃない……つらいことから逃げて……私達だって信じたいわよ！　できることならって……でも、その為に忘れるなんて最低のことだわ。絶対に」

「……」
北川と似たような台詞。それが、祐一の癪にさわる。
「お前に俺の何が分かるんだ！」
売り言葉に買い言葉。
なんで記憶を失ってしまったかなんて祐一にも分からないが……信じる為に忘れたなんて思いたくもない。
「あんたのことなんて知らないし知りたくもないわ！　私達だって……口には出さないけどずっと辛いのよ！　……ごめんスフィー、私もう我慢できないっ！」
「結花……」
「私は大切な幼馴染を失って……スフィー達は大切な妹を失って……それでもずっと悲しみを心の奥にしまって……口には出さないだけで、ずっと、ずっと我慢してるのよ!?」
「結花！」
「私達だって……ずっと、辛かったんだからっ……！」
「結花……」
泣き崩れる結花をなだめながら……
「ありがと……私も、芹香さんも、おんなじきもちだよ？　もう泣かないで」
芹香と、そしてそう言ったスフィーの目にもまた大粒の涙。
「ごめん、ね……言わないように……泣かないようにって、ってたのに……ごめんね……」
「……」
芹香がそっと、結花の頭を撫で続ける。
「私も……結花とおんなじ意見。忘れちゃ駄目だと思う。絶対に。思い出さなきゃ前になんて進めない。進んだと思っても、それは横に走ってるだけだよ」
スフィーが結花の代わりと言わんばかりに、祐一と向かい合う。
「だけど……うん……。信じることは大切だって思

うよ。私も、心のどこかでけんたろや、リアン、綾香さんや舞さんや佐祐理さん……みんなみんな生きてるって……そう信じるだけで強くなれる気がするもの」
今まで、そのやり取りを、黙って聞いていた祐一の顔色が変わる。
「舞!?　舞って……まさか、川澄舞のことか!?」
祐一の顔色が真っ青になる。そこで、舞の、佐祐理の名前が出たその意味を。
「えっ……そ、そうだけど……」
「嘘だろ!?　舞が……佐祐理さんが……そんな……嘘だ……」
「……」
芹香が、唇を噛み締めるように言った。
『舞さんと佐祐理さんは、敵に襲われて……私たちと離れ離れになって……』
「なんだよ、それ……くそっ……俺は、こんなところで何してんだよ……畜生っ……」
「……」
「悪いけど……少しだけ一人にしてくれないか?」
「……」
芹香が、まだ嗚咽を漏らしつづけている結花を肩に抱きながら、ゆっくりと小屋の外へ出る。
そして、スフィーがそれに続く。
スフィーが扉に手をかけながら、言った。
「信じることは大事だって思う。だけど」
一度だけ、祐一を見て。
「信じてるだけじゃ前には進めないんだよ」
ガチャッ……扉がゆっくりと閉められた。
(真琴……舞……佐祐理さん……)
実感が湧かない。当然だ。何も知らないのだから。
(俺だって、思い出したい……俺は、何をしてきたのか……何をしたかったのか……)
だけど、あゆ達……いや、真琴達だって絶対に生きてる……と信じることだけはやめたくなかった。

605　彰のないしょ

どれくらい眠っていたのだろうか？
目が覚めたときには周りに誰もおらず、包帯でぐるぐる巻きにされた身体をベッドに横たえていた。
自分はいったいどうなっているのだろうか？
ただ、渇きと餓えだけが僕の身体を支配しているようだ。
この身体の餓えと渇きはなんだろう？
食欲があるわけでもないのに、何かをたまらないくらいに欲していた。僕はそれを満たす術を思いつかず、ただ見知らぬ天井を眺めていた。
そのとき、ガチャリとドアが開き、部屋に誰かが入ってきた。僕は首だけを横にして誰なのかを確認しようとする。
「あ、彰お兄ちゃん！　目を覚ましたんだね。それとも起こしちゃったかな？」
不安そうな顔で僕に近づいて来たのは初音ちゃんだった。僕は心配をかけさせまいと首をゆっくりと横に振る。
「そう、よかった……」
初音ちゃんは僕の血で真っ赤になった包帯を片付け、僕の額の上にある濡れたタオルを取り替えてくれている。
「彰お兄ちゃん、具合はどう？　気分とか悪くない？　痛いところとかない？」
初音ちゃんが真剣に僕の目を見ながら聞いてくる。
泣き出しそうなその表情に僕の中の何かが高められていく。それに気付かないふりをして僕は大丈夫とゆっくり呟く。
『ドクンッ』
それと同時に僕の心の中の何かが蠢く。
「ねぇ、彰お兄ちゃん。のど渇いてない？　お水持ってこようか？」
僕のほうを優しく見つめながら言うその言葉に僕

は頷いた。
「待っててね。すぐ持ってくるから」と言って初音ちゃんは水を取りにいこうとしたが、ガクッと何かに引っ張られた様に静止する。
初音ちゃんは不思議そうに僕の方を見る。それもそのはずで、初音ちゃんを静止させたのは他の誰でもなく僕自身だったからだ。そして、初音ちゃんの体をぐいっと引き寄せると、初音ちゃんが「どうしたの？」と言おうとしていたその口唇を僕自身の口唇でふさいだ。口腔を乱暴に舌で犯していると、ぴちゅ、くちゅといった卑猥な水音が部屋中に響いているのがわかる。ぷはっと息が漏れ、唇を離すと同時に僕ははっと我に返る。
僕は今何をした？
初音ちゃんの純真でやわらかい唇を薄汚い欲望によって犯したというのか？
そんな⁉　こんなことするつもりなかったのに‼
「あ、彰お兄ちゃん？」
初音ちゃんが顔を赤くしながらうつむき加減に僕を見る。
「そ、その、いいよ。彰お兄ちゃん我慢できないんでしょ？　それは多分私のせいだと思うから……」
初音ちゃんが髪の毛をかきあげながら僕の胸に寄り添う。
初音ちゃんが何を言ってるのかわからない。
僕が無理やりキスしたことを怒っていないのだろうか？
そんなことより、いいってなにが？
何をしていいんだ？　誰のせいだって？
そんなことを考えていたつもりだったのだが、僕はいつのまにか初音ちゃんを押し倒していた。まるで違う誰かが僕の体を操っているかのように、理性とは正反対の行動を起こしてしまう。
「んっ！」
僕はまた初音ちゃんの唇を吸っている。
初音ちゃんの唾液で自分の渇きを潤すかのように、

何度も何度も彼女を舐めまわす。
「あ、あの、彰お兄ちゃん」
名前を呼ばれて僕は初音ちゃんの上着をたくし上げようとしていた手を止める。
「そ、その、痛くしないでね……」
その言葉に応じるかのごとく、彼女の耳たぶを甘噛みする。しかし手の方は荒々しく彼女の上着を脱がせていた。初音ちゃんの声は聞こえているのだが体の方が言うことを聞いてくれない。
僕は乱暴にまだ発育途中の胸の先端にある桜色した小さな突起物にむしゃぶりついた。
「ひゃ、んん……」
初音ちゃんは耐えているような声色でうめく。右の胸を舌先で弄びながら、左の胸を指先でいじくる。そうするうちに、それは小さいながらもその存在を主張する。
「ふあ、あ、あきらおにいちゃぁん」
初音ちゃんが艶かしい声をあげる。ふと顔を見やると初音ちゃんは目に涙を浮かべている。いじらしいその表情がたまらなく自分の心を締め付ける。
なぜ、僕はこんなことをしているのだろうか？
まだこんなに幼く、あどけなさの残る少女に対して……。
しかし、そんな心とは裏腹に自分の男性たる象徴は今か今かと主張を続けている。我慢できずに初音ちゃんのスカートに手をかける。それをするりと脱がすと白い下着が顔をのぞかせる。
「あ、あんまり見ないで……」
初音ちゃんが恥ずかしそうに手で顔を隠しながら呟く。その下着の上からスリットにあわせて指を動かすと、初音ちゃんの体がビクッと跳ねる。そのかわいらしい反応を見ていると、もう少し優しくしてあげたいと思うのだが、相変わらず僕の体は言うことを聞いてくれず、その指の動きは激しさを増すだけであった。
「ん、んんっ！　んあっ！」

初音ちゃんは声を押し殺している。
そうだな、外には誰かいるかもしれない。
いつ誰が入ってきてもおかしくはないだろうに、僕は何をやっているのだろうか？
しっとりとしたものが指に確認できる。
初音ちゃんのものなんだろうか……
初音ちゃんはハァハァと息を切らしている。
かわいらしい胸が上下している。
ついに僕は最後の一枚に手をかける。
腰を持ち上げ、それをつかみ一気に引き下げる。
まだ、誰の目にも触れたことのないと思われる秘所が今僕の目の前にある。
「あ、ああ……」
初音ちゃんは恥ずかしさのあまり声も出ないみたいだ。僕は両足を持ち上げその部分が露になるようにして、顔を近づける。初音ちゃんは何をされるか理解したのだろうか、
「あ、だ、だめ！　汚いよぉ！　もうずっとお風呂入ってないし……」
と、かよわい両腕で僕の頭を押さえる。
初音ちゃんに汚いところなんてないよ。と言葉にしようと思ったが、それが音声に変換されることはなく、僕はその手を引き剥がし、その部分にくちづけをする。
汗のせいだろうか？　少ししょっぱい味がしたような気がするが、そんなことは気にせずに僕はその部分を丹念に舐る。初音ちゃんは声を出さないように自分の口に手を当て我慢している。
とてもいじらしく感じた。
止めてあげたかったが、僕にはどうしようもない。体が言うことを聞いてくれないのだ。
本当にそうなんだろうか？
これは僕の願っていたことではないんだろうか？　僕の中のどす黒い欲望が今体現されているだけなのではないか？
初音ちゃんを一度もそういう対象として見なかっ

たと言い切れるのか？
自分がいやになってくる。
今ここで自分を殺して止めてやりたい。
しかし、そんな考えとは別のところで僕の体は動いている。
いつのまにか、僕は初音ちゃんの足を持ち上げ、今まで自分の目の前にあったものに屹立した自分自身のそれをあてがっていた。いわゆる正常位という格好の初音ちゃんと僕。初音ちゃんの身体が震えている。
僕は何をしているんだ？　やめろ、やめるんだ！
そう心の中で叫んだ瞬間、初音ちゃんの中に僕の先が入っていった。
「ん、んあ、や、やあ……」
プツンという彼女の初めての音が僕の心と身体に響く。この音は僕と初音ちゃんにしか感じることができない。初めての音は僕のものになった。
「いた、い。痛いよぉ……」
初音ちゃんの声が僕の心を蝕む。
僕は今、この世で一番純真なものを汚している。
結合している部分からは純潔の証が下のシーツを赤く染めていた。
「あ、彰お兄ちゃん。ごめんね、ごめんね」
初音ちゃんが僕に対して謝る。
なぜ!?　僕は今初音ちゃんを犯しているというのに……謝らなければならないのは僕のほうであって初音ちゃんではないじゃないか。
「私のせいでこんなこと……」
やめてくれ！
初音ちゃんのせいな訳が無い！
僕の心の弱さがこんなことをさせてるんだ！
僕は自分が許せない！
腰を動かしている場合じゃないだろう！
そんな自己嫌悪とは裏腹に腰を振る速度が上昇する。結合部から聞こえるジュプ、ジュプ、という水音もテンポが上がっていく。はぁ、はぁ、と息づく

僕の呼吸。ギシ、ギシ、とベッドの軋む音。
　そんなノイズに紛れてかすかに聞こえる音。
「私、彰お兄ちゃんのこと好きだよ」
　その言葉を聞いたとき、僕の中で何かが弾けた。
そして、僕は初音ちゃんの胎内で白い欲望を吐き出し、果てた。
「僕も初音ちゃんのことが大好きだよ」
　その最後の言葉だけははっきりと口に出すことができたような気がした。いや、何も言えなかったかもしれない。もしかしたら彼女にはその声は届かなかったかもしれない。それでも、僕の気持ちは変わらない。
　初音ちゃんの頬に触れる。自分の体の自由が戻っていることに気付いた僕は彼女の身体を抱きしめようとするのだが、気が遠くなってしまい、それは叶わなかった。
「ごめんなさい、彰お兄ちゃん……」
　意識を失う前に見たものは涙を流しながらそう呟く初音ちゃんの姿だった。

606　会談

『さて、貴様ら。この島のことをどう思う？』
『それはどういう意味だ？』
『何かおかしいとは思わないか？』
『そうね、明らかに以前に人が住んでいた気配が感じられないわ。恐らくこの殺人ゲームの為に用意されたと考えるべきね』
『馬鹿な！　そんな馬鹿げた話があるか！』
『いや、俺もそう考えていた。このゲームには間違いなく裏に何かある』
『一体この馬鹿げたゲームに何が隠されていると言うんだ？』
『それは俺にもまだ分からない。何しろ情報が無さすぎる』

「ぴこ、ぴこぴこ。ぴっこぴこ？」
「にゃ～にゃ～？」
「シュウ、シュウ。シュウ」
「カァーッ！　カァー！」
「ぴいこ、ぴこぴっこり。ぴこぴこぴこ」
「にゃ～うにゃ～にゃ～」
「ぴっこぴっこ。ぴこぴっこり」

「ったく、うるせぇ獣どもだぜ」
「ねえ、したぼく」
「げぼく」
「わたし、思うんだけど」
「げぼくだ」
「うるさいわねっ！」
「いい加減覚えやがれっ！」
「ふみゅーん……げぼくぅ」
「下僕じゃねえっ！」
「どっちなのよっ！」
「うるせえ殺すぞアマ！」
——それは、藺が目覚めるまでの、ほんの僅かの出来事だった。

607　生徒手帳を捧げて

「ご、ごめんなさい……」
「ちっ、別にいいけどな」
強化兵である御堂にとって、いくら不意をつかれたとは言え、目の前の少女の一撃など効きはしなかった。
とは言うものの、出会い頭に殴られていい気のするものではない。
殴られた原因が自分の顔にあるとも知らず、御堂は舌打ちをした。
「で、早速だがお前は誰だ？　どうしてこんなところで居眠りこいてた？」
「答えてもいいけど……」

繭はそこで、一旦言葉を切った。
「あなた迂闊じゃない？　初対面の相手に武器も構えないで。もし私が銃でも隠し持ってたら、あなたおしまいよ？」
　繭が警告を投げかける。
だが御堂は、軽く受け流すだけだった。
「甘いな。俺はお前が動くのを見てからでも充分対処できる。その気になれば……」
　御堂の手が動く。
次の瞬間にはその手にはデザートイーグルが握られており、その銃口は繭に向けられていた。
「わかったか？」
「そう。わかったわ」
　顔色一つ変えずに言う。
　本当にやる気になっている人間ならば、繭は気絶している間に殺されているはずだったからだ。
　相手の迂闊さを警告したのだが、どうやらその必要はなかったらしい。

「ならもう一度だ。お前は誰で、こんな所で何をしていた？」
　それから、繭はひとしきりのことを言った。
　自分の名前。誰を探しているのか。どういう信念で動いているのか。
　そして、教会での出来事、崖での出来事も。自分の知る限り、全部。
「はぁ、そんなことになってたのかよ」
　開口一番、おもわずそんな言葉が漏れた。
「そんなことって、何か心当たりでもあるの？」
「水瀬名雪と名乗るイカレた女に会ってな。連れの提案でそいつの後を追ってたんだが、なるほどねぇ」
「そうだったの……」
「おまけにそいつに止めを刺したのが祐一って野郎で、そいつはどこぞの女と一緒に崖から落ちたと」
　あいつが知ったらなんて思うだろうか、と、御堂は心の中で口に出した。

「じゃ、もうお前に用はねぇ。とっととどっか行っちまいな」
冷たく言い捨てる。
「はぁ!? 人に訊くだけ訊いておいて、自分のことは何も言わないっての!? 最低ね、オッサン！」
繭が怒るのも無理はない。
「オッサンじゃねぇ、俺は御堂だ、覚えておけ！」
「うるさいわよ、オッサン」
「っ！ このチビガキ……！ まぁいい、俺はもう行くぞ」
そう言って、御堂は歩き出した。
「なんでついてくる？」
後ろを歩く繭に、そう問いかける。
「偶然でしょ。私は教会に向かって歩いてるの。誰もオッサンの後なんか追ってないわよ」
「さっきからオッサンオッサン……いい加減にしねぇとブチ殺すぞ！」
「あぁ、そう。じゃ、やればいいじゃない？」

カチャッ。
無言で銃を構える。
視線が交錯する。
その二人の間を、風が通り抜けていった。
木々の葉がそれに合わせて静かに謳う。
無言の対峙の中で、先に動いたのは御堂だった。
「ちっ……」
銃を下ろして、再び歩き出す。
ここに来てからの自分は、どうしてこうも甘くなってしまったのだろうか。
間違いなく、一人の少女の影響だった。
もっともそのことを、御堂は自覚していなかったのだが。

教会に着いた。
御堂はドアを開けようとして、何かを思い付いたように振り向く。
「チビガキ。一つ頼みがある」

「チビガキ言ってるうちは、きいてあげないわよ」
御堂は無視して続けた。
「お前から聞いた話を連れに話す。だが祐一って奴があの女を刺したことは、伏せておいてくれ」
「何よそれ」
しばしの沈黙の後、言う。
「人間に夢見てるお年頃なんだよ」
「……」
「いいな？」
藺は答えずに、こう返した。
「何があるのか知らないけど。あんた、顔に似合わず優しいのね」

優しい？
馬鹿馬鹿しい。
士気が下がるのを避けたいだけだ。

教会のドアを開ける。

「おっそーーーい！　この、したぼく！」
けたたましい声が鳴り響いた。

互いに自己紹介をし、藺は教会での一件を詠美に話した。無論、祐一が秋子を刺したことは、伏せたままで。
全ての話が終わり、詠美はつぶやいた。
「そう。結局死んじゃったんだ……」
生徒手帳を取り出して、しみじみと見つめる。
「これは、やっぱりここに置いていった方がいいみたい……」
てくてくと外に歩き、秋子の墓へ。
生徒手帳を捧げて、静かに祈る。
戻って来たとき、詠美は、元気だった。
いつもの笑顔に、ほんの少しだけの涙をたたえて。
「で、お前は何をしに来たんだ？」
「忘れ物を取りに来たの」

詩子と秋子の荷物を回収する。
その際に御堂は詠美に何故拾っておかなかったのかとツッコミを入れた。
詠美はふみゅーんと言うだけだったが。
「これでよしと。って、何これ？」
繭は詩子の荷物に入っていたＣＤを取り出す。
「あ……」
それを見た詠美も自分の荷物からＣＤを取り出し、見せた。
「……」
「……」
「……」
「これも何かの縁っ！」
詠美が言う。
御堂はただただ、頭を抱えるだけだった。

608 触れ合わない、二人の手

——二十数分後。
二人の手は呼び合うかのように伸びていたが、未だ触れ合うことなく、地に堕ちたままだった。
その十数分前。
少年の威気に気圧された郁未は、振り返ることもせずにその勢いのまま全力疾走していた。一刻を争うと思い、近道とばかりに森の茂みを突っ切っていく。それが幸か不幸かは分からないが、郁未は早々にそこで予想もしなかった人物と激突した。その相手は、思わぬ状況の変化に対応しあぐねていた長瀬祐介その人であった。思わずうめき声を漏らしたものの、即座に立ち上がると郁未は軽く詫びを言って立ち去ろうとした。時間は無い。だが彼女は呼び止められ、そして問いかけられる。それは予想外の、あるいはもはやそれ以外は考えられなかっただろう

内容の詰問である。即ち、負傷している女の子はどうした、と。そこに込められた微弱な殺意に気付くよりも早く、郁未はそれが誰を指しているのかに気付いた。

時間が無い。郁未には選択肢すらも無い。郁未は逆に問い返す。私の名前は天沢郁未、あなたの名前は？ 祐介はその妙に毅然とした態度に思わずたじろぎ、その後ぼそっと、長瀬祐介、と答える。そう、祐介さんね、分かった。そう言うが早いか、郁未は祐介の右手を掴んで走り出した。祐介は郁未の次の言葉を前に、抵抗はおろか明確な反応を見せる暇すら出来なかった。——その女の子が大変なのよ、と。

教会まで到達した郁未と祐介は手分けして水道を探していた。むせ返るような血の残滓にひるんでいる余裕は今回は無かった。故に、郁未にはその惨状を見た祐介がどの様な反応を見せたのかも確認できなかった。医療用具も無かろうかと欲を出してみたが、流石にそこまでのものは無さそうだった。

水道そのものはすぐに裏手の方で見つかった。水が正常に流れることを確認した後に郁未は水筒を取り出し水を汲み始めた。その折、好奇心に駆られて問いを発した。あなたと彼女の関係は、と。

祐介は無言だった。すると郁未は右手を開いて彼にかざした。開いた手の平が汗でひどく汚れていた。私だけのじゃ無いわよね。郁未は祐介に言い放つ。すると恐る恐る祐介は右手を開く。確かに濡れている。走行の疲労だけでは、こんな濡れようはするはずなかった。認めざるを得なかった。郁未のそのパフォーマンスを、あなたはその子のことがとても大事なんでしょ、と言う無言の問いかけを。

兄弟？ と郁未は聞いてみた。祐介は無言だった。

恋人？ 今度はそう聞いてみた。またも祐介は無言だった。郁未は思わず首をかしげた。

水が汲み終わったので、蛇口を閉めて立ち上がった。再びあの場所に戻る前に、郁未はもう一度だけ聞いてみた。

でも、好きなんでしょ？　答えの言葉はやはり無かった。
——そのかわり、今度は頷いたのが見えた。

二人で急いで彼女の元へ戻った。戻った矢先、その惨状に郁未は言葉を失った。すっかり顔から血が引いて青ざめた彼女と対照するかのように、その右半身の方に濃紅の血溜りが出来ていた。思わず郁未は水筒を取り落とした。祐介は無表情だった。さっきはこんなんじゃなかったのに……。郁未は無意識に唇を噛む。いや。少年は彼女が現れてすぐ私を遠ざけたのだから、私の記憶など当てにならない。むしろ、彼はそれが分かっていて私にそうし向けたのではないかとすら思う。
長くない。彼女から発散される強烈な死の匂いは、どんな希望も奪っていった。言葉が出ない。郁未も祐介も、呆けたように立ち尽くす。辺りの静寂が余計にその死の響きを強くする。それは彼女の吐く不自然な呼吸。ひゅうひゅうごうごうと鳴り響く苦轟。祐介は力なく彼女の名前を呼んだ。彼女からの返事は無かった。
郁未は取り落とした水筒を拾い上げると、急いでそれを彼女の口に注いだ。木を背に座っていたその姿勢を崩さないように、慎重に彼女の顎を押し上げると、注意して水を注ぎ込んだ。だが水は思うように口に入っていかない。郁未は即座に水筒の水を自分の口に含むと、そのまま彼女に口付けをする。自らの口を通じて彼女に水を送るのだ。二、三度それを繰り返す。依然、彼女に正常な意識は戻ってこない。意識不明ではないが、激しく混濁しているようだ。そして再度水を送りこんだとき、彼女はそれを全て拒否するかのごとくその全てを吐き出した。激しく喘いで、その反動で前のめりに倒れこむと、彼女は苦しそうに痙攣し始めた。
……もうダメだ。郁未の目にも、誰の目にもそれはもはや明らかだった。こんなときに少年は何をや

っているんだと、すがるような思いで郁未は顔を上げた。立ち尽くしていた祐介は郁未の視線を受け止めることもできずにぽつりと口を開いた。
……何か、僕に出来ることはあるだろうか？
前にしゃがみこんでいた郁未は苦しそうに、本当に苦々しそうに言葉をひねり出した。
……せめて楽にしてあげられれば。

拳銃を構えた僕は天野さんに照準を当てると、一撃で彼女を穿てるように狙いを定めた。その時、僕は初めて祈ったんだ。それまでお世辞にも信じたなんてことが言えなかった、神様なんていうものに。頭の中で思い描くことと言えば、常に世界にひびをいれる爆弾のことばかり。そんな僕が初めて、自分以外の人の為に、いるかいないかも分からないようなそんな不安な存在にすがった。心の中で祈りを捧げて……そして引金を引いた。かちり、と乾いた音がしたのに一瞬遅れて、鮮烈な銃声が響いた。だけど、目の前に生まれるはずであった新しい血の海が目に映らなかった。銃弾が、逸れた。あれほど狙いを定めたはずなのに、何で外れるんだよ。僕は心で吐き捨てるよう毒づいて、そしてその後にとめどなく頬を濡らす何かが流れていることに気付く。ああ……僕は泣いているのか。虚勢の裏で、今まさにやろうとしていたことに怯えて、ああそうさ、彼女を撃つなんて、例えそれが正解であっても出来るはずが無い。神様は……僕の中の神様はそれを知っていたんだ。僕は顔を覆って嗚咽した。――そして気付く。荒ぶっていた彼女の吐息がいつのまにか耳を澄ましても聞こえない。どこかへ消えてしまった。姿はあるのにいなくなってしまった。彼女は死んだ。
僕は哭いた。

郁未がその事実に気付いた時には既に鋼線が彼女の自由を奪っていた。その糸が辿る先にはもちろん祐介の姿があった。郁未を縛した祐介は噴散する殺

気を郁未に向けてにたっと不気味に口元を歪ませた。郁未は祐介の突然の豹変に驚きを隠すこともできない。
問う、いきなり何をするのかと。
答う。守るべきものは無くなってしまって、後に残ったものはそれ以外だけだ。殺す。壊す。破壊し尽くす。ここに残された人々も、彼女を殺したこの世界も。
郁未にはその言葉が理解できた。悲しみの深さも、その必然性も。
訊く、だから私を殺すのかと。
返す。無言の頷きで。糸の端を握る祐介の両腕の震えが言葉よりも如実に語っていた。
郁未は涙を流す。後ろで哭いている祐介が既に尽くしてしまった分を補うかのように涙を流す。そして一言彼の名前を呼び上げる。それを遮るかのごとく、その名を呼ぶなと祐介が絶叫する。まるで名前それ自体が呪怨であるかのように激しく頭をかきむしり、そして握った線端に力をこめる。束縛の強まりと共に疾った痛みに郁未は思わず呻きをあげる。
その時、後ろから肩を掴んだ誰かが祐介の注意を引いた。驚いて振り向いた祐介が見たものはその人物の顔ではなく正拳だった。強烈な打撃に祐介が倒れた拍子に握りが緩み、郁未の束縛が少し解けた。
少年は振り抜いた手も省みずに言い捨てた。
お前は何をやっていたんだ、と。
そして戦いは始まった。……いや、その表現は正しくはそぐわない。戦いと呼ぶには原始的すぎるそれの優位は祐介が一方的に握ったまま離さない。暴力性をむき出しにした祐介は叫びを上げながら少年を殴り続ける。その猛攻は少年をも圧倒している。
お前も僕の邪魔をするのか！
時折言葉に現れる憎悪の形が郁未の胸に堪えた。祐介と共に居たのはほんの一時、儚い縁ではあったかもしれないが、彼には人を慈しむ心があることを郁未は知っていた。だからこそ、目の前の惨状は直

視するに耐えなかった。
既に精神が身体を凌駕し、その精神も絶望に染まりきっている。正に恐るべき猛襲としか言い様が無かった。どこにこんな体力があったのか、どこにこんな気迫があったのか、思わずそれを問いたくなるほどに激しい攻撃だった。拳の一振りごとに爪は割れ皮は破け骨は軋み、叫びの余り唇を切って血を吹いても、一向に祐介に静止という言葉は見られない。狂ってる……人よりも何重にも重厚な狂気を郁未は祐介の背中に垣間見た。郁未はそれを表現するに最もふさわしいというべき電波という言葉を知らなかった。それは少年にとっても同じであり、彼の当惑の原因となっていた。ただ……似ていた。祐介が吐き出す怨念がかつて自分が持っていたそれと酷似していた。――そして同時に、今現在自分を蝕んでいく暗黒とも。
切れ目の無い攻勢の最中、不意に祐介が体勢を崩す。少年はその瞬間を見逃すことなくバックステップで間合いを取ろうとしたが、祐介は倒れつつありながらも少年の下半身を掴んで食い下がった。結果二人は一緒に地に倒れたが、状態は後退しかけていた少年の方が不利だった。祐介は大声で叫びながら少年に乗り上げると、その勢いのままに彼を殴りつける。一撃、二撃、三撃、一向に鳴り止む様子が無い。二人は土の上で激しくもがき、その度に微かに土煙が上がる。泥が飛び跳ね石がぶつかり、その競り合いはまさに泥仕合の様を呈しかけている。たまりかねて少年が彼の拳を掴むと、そのまま二人は膠着した。
祐介はまるで圧し潰す勢いで歯を噛み締めている。ぎりぎり……ぎりぎり……、そんな音が聞こえて来そうなほどに、強く強く噛み締めている。その時、少年の目が祐介の瞳を覗く。すると、そこから溢れた絶望が電波に乗って伝播する。殺意が伝わる。憎悪が滲みる。
……何かがチリチリと少年の頭を灼くと、思考が

一時停止した。拳が緩んだ瞬間に祐介の束縛は打ち破られ、彼の拳が初めてまともに少年の頭を捕らえた。少年の意識が暗転した。
——次の瞬間、ドクンと鼓動が響いたかと思うと、祐介は少年のボディブローで吹き飛ばされた。
少年は吼えた。

一方で郁未はピアノ線の束縛の思わぬ難儀さに這いつくばったまま苦闘を繰り広げていた。慎重な行動が要求されている。先程焦って立ち上がろうとして髪を数本持っていかれしっかり肩にも痕が着いた。背部の方も線が肉に食い込んでいて痛い。早く解きたいが、線が変な風に絡まってしまっている。ゆっくり、ゆっくり。郁未は両手を前方にずらしていき、指で糸を弄られるように体勢を変えつつあった。
線から抜け出せそうになった頃に視界に入ったのは、吹き飛ばされる祐介の姿だった。その拍子に彼のポケットから拳銃が飛び出して、そのまま転がっていった。
祐介は自分の身に何が起こったのか一瞬理解できなかったが、横たわった地面を認識して、自分が反撃を受けて倒れたことに気付いた。ただ鮮烈な衝撃が走ったことだけしか、印象としては残っていない。相手は何か強力な攻撃を繰り出してきたのだろうか。祐介には、目の前の人物に一体どんな異変が起こったのか、皆目見当がつかなかった。
指先に力が篭り、ざりっと土を握り締める。……大丈夫だ。戦闘を続けるのに支障は無い。それさえ分かれば十分だ。それ以外の価値判断などもう僕には意味が無い。もはや自分はどこまで傷ついても構わない。ただ、目に映る一人一人を傷つけて殺していけばそれでいい。僕が倒れ動けなくなる最後の瞬間まで、それを繰り返していけばいい。こんな世界は糞喰らえだ。神様なんていなかった。彼女は苦しんだんだ。苦しんで、そして死んでいった。彼女を殺したこんな世界は、もはや存在する価値すらない。

だから僕がぶっ壊してやる。木っ端微塵に破壊して、僕が世界に復讐してやる。
祐介は再び立ち上がって少年へと襲い掛かった。
——堕ちていこう。彼女に会える、その場所まで堕ちていこう。地獄だって構わない。彼女がいればそれでいい。大丈夫、君を一人になんかしない。もし彼女の居場所が天国で、僕がそこに入れなかったとしても……僕は必ずたどり着く。天使でも悪魔でも、邪魔するのものは皆殺しにしてでも、僕は辿り着いてみせる。
そうして彼が組み付いた瞬間、瞳に暗黒を灯した少年がまるで飢えた獣のごとく祐介の肩口に噛み付いた。牙を突きたて肉を突き破ると、彼の生き血を啜り上げた。祐介の絶叫が、辺り一帯に木霊した。

——その数分後。
眼前を過ぎった銃弾の感覚で少年は目覚めた。何が起きた……完全に前後不覚していて分からない、それに加えて激しく頭痛がする……。後ろを振り向くと、硝煙がくすぶったままの拳銃を携えた郁未が呆然と立ち尽くしているのが見えた。口の中には自分のものでない人間の生暖かい血液の味がじわっと広がっている。これは、一体どういうことなんだ。僕が探していた男は、郁未を襲っていた男は、どうなった？
祐介は倒れたままの美汐のもとへ、おぼつかない足取りで少しずつ……少しずつ近づいていく。彼の踏み出す一挙手一投足ごとに、地面に赤い滴りが落ちる。口からもコポッと喀血が溢れてくる。だが、彼は腹の傷を厭おうなどとは微塵もしない。捧げる両手は常に彼女の方へ向いている。——その僥倖は、美汐のまだ微かに残る息吹が祐介にも届いたこと。
——だが、果たしてそれは救いだったのか？　一歩、また一歩近づいていき

彼女に到達する前に崩れ落ちた。

――その二十数分前。
現れた少女を目の前にしてその異様な様子に驚くよりも早く、少年は判断を下した。水がいる、今どうしても必要だから、道を引き返して取って来てはくれないか。確か教会に水道があったはずだろう。そういう内容を郁未に伝えた。郁未は唐突なその指示に一瞬驚きを見せたものの、すぐにそれに反発した。先ほど見てきた惨状が彼女の頭に過ぎり、その行動を鈍らせる。だが少年にはそんな言葉は通じなかった。
いいから。
そう一言で切り捨てた。そこに何か目に見えない威圧を覚えて、郁未はその言葉に従うよりほか無かった。郁未はちらりと少女のことを一瞥する。その姿はまるで霧がかかったかのごとく儚く仄かであるように思われたのは、単に私の思い込みに過ぎないのだろうか。その疑問に答えを出すこともできずに、郁未は走ってその場を去っていった。

その場には二人だけが残された。少年は郁未の背を見送るや否や、すぐ行動に移る。両手を上げて、戦闘の意思を持っていないことを示しつつ彼女に近づく。少女の方には反応が見られないが、攻撃の意思があるようには感じられなかった。無論、それはこのジェスチャーの効果では無いだろう。彼女は不自然に息を切らせて俯いている。
座った方がいい。少年は彼女に囁いた。腫れ物を扱うように慎重に近づき、そっと彼女の肩を支え左肘に手をかけた。その瞬間、突然少女はまるで感電したかのようにびくっと震えて崩れ落ちる。まずい。少年は思う。即座に彼女の脇に腕を通し抱き寄せるようにその体を支えた。
――存在しない右手で支えることなど出来ない。
勢いで触れたささやかな彼女の胸から、それよりもさらに密やかな鼓動が彼の胸板を通して伝播する。
「……君、その出血じゃ、もうすぐ死ぬよ」
そう口火を切らざるを得ないことが少年は歯がゆ

かった。
「……知ってます」
　そのもはや独白に近い語りかけに、彼女は驚いたことに返事を発した。そんなことを言われるんじゃ無いか。そんな不思議な確信が、少年にも少女にもほんの一瞬前の時から等しく予感としてあった。

　失血がひどい。意識も朦朧。今は常温より熱があるが、もはやそれすらも終わって一気に熱は失われる。淡々と羅列される記号が憎らしい。彼女は依然無言。ただ息を吐くだけ。答える意思の所在も、口を開く可不可も分からない。走ることなど問題外、歩くことすらつらいはず。それなのに何故こんな無茶を――。

　何か口走ったらしい。何と言っただろうか。何か致命的なことを言ったような気がする。思い出せない。体が重い。せっかく怖い夢から逃げ出したというのに。もう散々。視界が悪い。彼を直視できなくなったと思ったら、一緒に世界まで閉じてしまうの？　……やっぱり私は一人が怖いんだ。目を瞑ろうと思ったって、
実際にそれがなされようと
したら、途端に恐ろしくなっ
て。もう、いいや。そう思った
ら不思議と気持ちは落ち着いて。
その理由は、何かを諦めてしまった
からだって、何故か知っていた。でも
それが何かどうしても思い出せない。力
がすっと抜けて、私は私が誰かに支えられ
ていて、それに気付いて
……それでも
私を助けてくれる人はただ一人しかいない。
少女はゆっくりと顔を上げる。
「……ごめんなさい、祐介さん」
瞳は焦点が合っていない。存在しない右手で、まるで愛しい人の髪の毛を優しく梳くように少年の頭

をかき抱くと、聖母のごとき微笑を浮かべた。
　少年は思う。少女が、その見えない右手で本当に抱きたかったのはどんな人間だったのだろうか。
　そっと体を自らから離して、少年は少女のことを寝かそうとした。だが硬い地面に完全に寝かすのは逆に上手くない。木を背に彼女を持たれかけさせる。その折、不思議なものを見るような表情でこちらを見てくる少女の姿が少年には痛々しかった。記憶の混濁の進行は早く、少年は説明を試みたが、少女の理解が得られている自信は全く無かった。衰弱も激しい。これ以上は喋らせるのも危険だろう。郁末を待っていることしか無いのか、何か自分に出来ることは無いのか。少年は思い立って、もう一度だけ尋ねてみる。他の誰にも聞こえないようにするかのように、少年は彼女の耳元でやおらに囁いた。
　——笑顔で彼女は頷いて見せた。
　少年は人を探しにいった。彼女の最後を看取るべき人物を探しにいった。だが数分後、響き渡った銃声に戦慄を覚えてその足を止めた。

　十数分後。
　自分は果たして生きているのか死んでいるのか。もはや正常な判断力なんていうものは雲散霧消していた。
　これが現実だとしたら、目の前で狂ったように拳を振るい続ける彼は本物の彼なのだろうか。まるで獣のように哭しながら馬乗りで誰かを殴り続けている。こんなことをする彼は本当に彼なのだろうか。
　空っぽの胃がきゅっと私を締め付ける。ああ、苦しい。
　——過ぎる。私は誰かに抱かれていた気がする。そしてそれは祐介さんであった気がする。
　——過ぎる。私は誰かに口付けされた気がする。そしてそれは祐介さんであった気がする。
　虚ろだ。記憶すら正しく並ばない。もはや夢と現の区別もつかない。

これが現で無いのだとしたら、目の前で何かに噛み付かれ絶叫する彼は悪夢なのだろうか。
助けたい。そう思って手を伸ばしたら、指先に拳銃がぶつかった。恐る恐る指先だけの感覚でなぞる。その硬く不可解な存在に、本来感じるはずの違和感も通過して、私は触れた。それがまるで当然であるかのように私は引き寄せて、握り、持ち上げた。
……おもい。確かに、おもい。この〝おもい〟は少なくとも嘘じゃないだろう。
私は狙いを定めた。立ち上がろうにもそれすら出来ない。だから座ったままで引く、これは最後の一引きだ。私の力を結集した、本当に最後の一滴だ。せめて、これが祐介さんの助けになってくれることを願う。出来ることなら二人で一緒に帰りたかった。でもそれが叶わないなら…………………悩む必要なんて無い。
アクシデントで生まれた恋は長続きしない、なんて話があるけれど、でも、少なくとも私の命が尽きるまでは続いてくれました。私の恋は——他に比べられるものなんて無いけれど——最高でした。
そして、美汐は心で祈りながら引き金を引いた。
銃弾に込められた想いは間違うことなく放たれた。

——その不幸は。
彼女が捉え得た対象は祐介以外の何者でもなく。
その照準もまた、祐介でしかなかったこと。

郁未が拳銃を取り上げるべく駆け寄るよりも速く、銃弾は祐介の腹を真っ直ぐに貫いた。

その数分後。
前後不覚の少年に出来ることはもはや何も無かった。その瞬間に追いつくことの出来なかった郁未にも又できることは何も無かった。捧げる両手を彼女に向けてしかし醜く震え留まるその哀れな彼の姿を注視する、それ以外には何も無かった。

果たして、そこに何か救いはあったのか？
依然、二人の手は呼び合うかのように伸びていたが、未だ触れ合うことなく、地に堕ちたままだった。

609　最後の夢

これが最後の夢なのだと思う。
希望も夢も失った僕の見る、
自由も恋も失った私の見る、
これが最後の夢なのだと思う。

　真っ赤な血を吐き出しながら痙攣していた長瀬祐介の身体からゆっくりと震えが消えていく。そして、ぼろぼろの身体でゆっくりと地面を這い始める。その真っ黒な深い重い眼差しを見て、黒い少年は心根から驚愕する。ただの気の狂った男にしか見えなかった襲撃者の、しかし何か、カタチのないものに執着した正常で清浄な強い眼差しに、少年は心から驚愕する。魂の燃え尽きる最後の最後の瞬間の凍えるような力の露出を見て、自分が何か重大な間違いを仕出かしてしまったような、そんな感に襲われる。
　赤く汚れた身体で、泥にまみれ、時折血を吐き、苦痛に表情を崩し、痙攣し、それでも這い蹲って手を伸ばすのを止めない。諦めることを許さない、尊い魂の最後の燃焼だった。
　長瀬祐介は諦めていない。天野美汐を守ることを。
　彼はどうして死なないのだろう？　少年と天沢郁未は思う。あれ程の傷を受けてなお、熱に充ちた眼差しを掲げ、這い蹲る力が残るのだろう。もう彼女を守ることなんて出来やしないのに。
　――考えるまでもないことだった。
　その芋虫のように無様な姿を、二人は笑うことも止めることも出来ない。二人は解っているからだ、誰にだってその命の蝋燭を燃やし尽くしてでも守りたいものがあるのだということを。郁未にとっての

少年、少年にとっての郁末。長瀬祐介にとってはそれが天野美汐なのだ。彼は這う。仰向けに倒れたまま、苦痛の表情のまま目を閉じる天野美汐の元に。既に死んでしまっているか、そうでなくても死出の旅に今にも旅立とうとしている少女の元に。

たぶん僕は、とうの昔に死んでいたのだと思う。遠い昔にだ。それだけは間違いのない事実だと真っ直ぐ言える。それでは果たして僕はいつ死んだのだろうか、とふと考える。この島に来る前から死んでいたのか、それとも島に来た瞬間に死んだのか、あるいは月島瑠璃子が死んだ時に同時に死んだのか、ずっと守ると誓った筈の天野美汐と離れればなれになってしまった時にか、叔父を殺した時にか。

それとも実は、彼女を失った今初めて死んだのか。

——死の定義は人によって違うだろうが、僕にとっての死とは結局のところ精神の死だから、とにかくその内のいつかに僕は死んでいたのだろう。もう長いこと僕は生きていなかった。そしてたった今、肉体的にも僕は死んだ。風穴の空いた心臓から流れる血はとうに枯れてしまったし、酸素も脳に回っていないからまともな言葉が浮かばない。

それでも僕は惨めに這っている。血液が与えられない脳味噌はまともなことを考える力さえ保ってくれてないけれど、僕はずるずると這っている。剣の如き真っすぐな思念が僕の身体と魂を貫いて、死んでいた筈の身体に無駄で無為で無様な奇跡を起こしている。

その力は僕の意志ではないのかもしれないと思う。神様と表現するべきであろう残酷な万能者が休むことを許さないのだ、そんな風に考える。——だとしたら、どうせあと何分も持たないんだから、早く寝かせてくれればいいのにと思う。僕は思う。苦しみに苦しみ抜いてそれでも無理矢理与えられるこの時間は夢なのか、現実なのか。どちらでも構うものか。

今僕に必要なことは、夢と現実の違いを考えることではない。とにかく這うのだ。無様に、無様に。
　意味もない思考に突き動かされ、僕は這う。そう、全く意味を成さない御伽噺が頭の中で暴れている。這っているのは確かに僕が遠い昔に捨てた筈の意志の力のせいだし、神様なんてものはどこにもいない。僕は這う。天野美汐という僕の大切な人のところへ。きっともうすぐ遠くに行ってしまう大切な人の横へ。
　そうさ。守りたかった人の手を握りたいと思ったから、守れなかった人の横で眠りたいと思ったから、僕は必死に這っている。痛みを失い始めた。感覚器までが壊れ切った、肉体の死までも通り過ぎたところに僕はいる。壊れ切った言語中枢は意味のない言葉ばかりを紡ぐ。死ぬ間際なのに意味のない言葉しか紡がないこの脳味噌が狂うほどに憎い。
　もう何が出来るわけでもない。もう君を守ることも救うことも、何も出来ない。血を流して苦しみ続ける君の痛みを和らげることさえも出来ない。
　それでも僕は這う。僕自身のエゴのためだけに。そうして、漸く、君の横に辿り着く。僕の意志の力が起こした奇跡は、君の手を握ることを許してくれた。ちっぽけで仕方がない空しい奇跡だ。僕は必死に顔を上げ、君の顔を見る。苦しみに充ちた君の顔をみて、どうしようもない絶望が圧し寄せて来たけれど、僕はそれでも上手く動いてくれない腕を必死に伸ばし、天野美汐の手を取った。
思う。
　こんな奇跡、無い方が良かったのかもしれないね。

　身体の色々なところを走る激痛で目が覚めた。
　目が覚めたところでふと思い出す。自分は死んだ筈なのだ。手を失って、血を失って、そして、いろいろな物を失って、死んだはずなのだ。意識が真っ黒になって途切れた瞬間まで覚えているのだ。だが身体中を激痛が走るだけで自分は生きている。理由

がわからなかった。
　気付く。自分は今、柔らかなものの上で寝ている。記憶が途切れる前は固い土の上に倒れていた筈だ。そして気付く。自分は柔らかな布団の上に横たわっている。私は身体を起こして、ここが何処であるかを確認しようと周囲を見回す。狭いけれど片付けられた部屋の中だと判り、どうして自分はここにいるのかと考えているところでドアが開いた。
「――天野さんっ！」
　ドアを開けたのは長瀬祐介だった。あの地獄のような島で、ずっと一緒にいた人だ。
　私はこの時点で半ば気付いていたのかもしれない。ここはもうあの地獄の島の外である、と。
「長瀬、さん？」
　それでも私の警戒心はその認識を簡単に認めなかった。自分は既に死んでいて、ここは天国だと考える方が幾分可能性が高いと思う。呆然とした声で祐介の名前を呼ぶ。覚醒したばかりのぼんやりとした視界の中で、彼の顔は涙やら涎やら鼻水やらでぐちゃぐちゃになっていた。
「良かった……っ。もう目を覚ましてくれないかと思った――っ」
　必死に顔を拭いながら、祐介は私の手を取る。私の左手を握り締める彼の両手は燃えるように熱かった。この熱だけで、私はここが紛れも無い現実なのだと確信できた。
「長瀬さん、その、」
　祐介の言葉が確信を事実に変える。
「僕たち、あの島から生きて帰れたんだよ！」
　夢ではないかと思う。けれど私の身体を走る痛みも、私の手を握る祐介の熱も、確かに現実のものなのだ。私は呆然と彼の手を握り返すばかりだった。手首から先がなくなった右手には包帯が巻かれていて、その傷痕が、全部が現実であったことを強く訴える。私は呆然としている。
「ここは僕の部屋だよ。傷があらかた治ったみたい

そして自分だけが足踏みしていた、と祐介は言う。
「……足踏みってどういう意味ですか？」
「君が起きるのを待っていなくちゃいけなかった。その時間が足踏みさ」
私、天野美汐の頭は多分それほど悪くはない。少なくとも人並みの理解力はあるから、彼が何を言いたいか、全てをその一言で理解した。けれど私の口は動かない。言いたい言葉がなかなか出ない。
死ぬほど苦しい目にあって、
「それは、」
「今度こそ、君を守らなくちゃいけない。僕は君の身体を傷つけて、君の心を傷つけて、それで放っておけるような最低な人間じゃない」
死ぬほど悲しい目にあって、
「長瀬さん」
「僕が足踏みしていたのは、君と一緒に歩き出したかったからだよ。君を置いていくことなんて、僕には出来ない」

だから、病院からこっちに連れてきたんだ」
祐介はそう言って、ゆっくりと事情を話し始めた。

あれから——私たちが殺されたと思ったすぐ後に彼の従兄弟の七瀬彰やその仲間が駆けつけ、あの少年達を殺したのだという。彼らがあの島での最後の狂気で、彼らの死で全ての戦いが終わったのだという。彼らにやられて瀕死だった自分達はそれでも辛うじて息はあり、すぐに手当をされたのだという。
そして、私と長瀬祐介が意識を失っている間に島からの脱出の手段が見つかり、こうして無事に帰って来れたのだという。そして自分は、一ヶ月も意識を失ったままだったらしい——あの島での出来事からもう一ヶ月も経っていた。
生き残った人たちはそれぞれの生活に戻り、傷痕を必死に癒しながら、大切な人を失った悲しみに堪えながら、それでも強く生きている。長瀬祐介は淡々とそう語った。

死ぬほど痛い目にもあって、
「これから君は世間の好奇の目に晒されるかもしれない。けれど、僕が君を守る。君とずっと一緒にいたい。一緒に暮らそう。君に傍にいて欲しいんだ」
最後に私の前に現れたのは、ヒカリだった。
けれど私はその幸せを前に言葉を失っていた。それは『嬉しすぎて声が出ない』とかそういうものでは決して無い。私が感じていたのは、幸せになることへの恐怖だった。
全てが現実だった。それが意味することは、私が大切な友達を失ってしまったことも意味していた。私の友達——沢渡真琴は死んだ。あの島で、残酷な意志のせいで死んでしまった。
私は思ってしまうのだ。これからの人生で彼女のことを忘れることは絶対に無いだろう。そしてその傷痕を癒すことなど一生出来ないだろう、と。
多分心の底で思っていたのだ。帰れるわけがない、自分は真琴と同じ地面に骨を埋めるのだろうと。だから私は戸惑っている。自分がこの安全で平和な場所に戻ってきてしまったことに。
「私、は」
こんなキズモノの自分といては、長瀬祐介が幸せになれないと思った。陰気な顔しか出来ない自分が更に陰気になるのだ。彼のことを癒してやれるとも思わない。だから私は彼の誘いにすぐに頷けない。
私が何も言わずに目を逸らすと祐介は呟く。
「——真琴さんのこと？」
長瀬祐介は自分の迷いを瞬時に見抜いた。悲しそうな顔をする祐介に、私は小さく頷いた。
「私は——真琴のことを一生忘れられないと思います。これから先にどれだけ幸せなことがあっても、あの島で起こったことを一生忘れないと思います。こんな私は——シアワセになれないと思います。こんな私といたら、長瀬さんもシアワセになれない」
祐介が握ったままの左手から、彼の体温が伝わってくる。この手を離さないでいたら、彼の傍にいた

ら、もしかしたら、希望の虹の掛かった未来へと行くことが出来るのかもしれない。けれど握っていてはいけないのだ。幸せな未来など有り得ないのだ。
　私はやんわりとその手を解こうとした。けれど祐介が強い力で離さない。
「長瀬、さん」
　祐介は真っ直ぐ私の目を見つめ、その手の温度と同じくらい暖かな笑顔を見せて、こう言った。
「――僕だって、彰兄ちゃんが言っていた事を鵜呑みにするつもりじゃない」
　あの島で出会った祐介に似た青年の言葉を、私ははっきりと記憶している。何しろ、私にとってはほんの少し前の出来事なのだ。
「日常なんて何処にでもあるからすぐに見つけられるなんて僕は思わない。たとえ見つけたとしてもそれは昔あったものとは全然違う。確かにあの島に来る前、僕たちに日常はあったよね。変わるはずのない日常が、僕にも君にも。絶対に忘れられない大切な日常だ」
　祐介は私の手を離さない。
「僕と一緒にいたところで、新しい日常なんて見つけられないかもしれない。だけど、だからこそ、僕は君と一緒にいたいと思うよ」
　祐介は私の手を離さない。
「僕は誰より君の悲しさを知ってる。そして君も、僕の悲しさをきっと誰より知ってくれている。僕は出来るなら、君と同じ歩調で、同じ道を歩いていきたい。幸せになんてなれなくてもいい。君に傍にいてもらわなくちゃ、僕は壊れてしまうと思う」
　祐介は私の手を離さない。
　その手の力はもう弱くなっていて、振り払おうと思えば簡単に振り払える。けれど私は振り払うことが出来ない。どうしても、出来ない。
「一緒に、いてほしい」
　私は彼の熱を感じながら、小さく頷いた。私、天野美汐はもう二度と長瀬祐介の手を離さない。

——もう離さないことに決めたんだ。

そして、時間が流れた。

私達の暮らしは当然、順風満帆という訳にはいかなかった。苦しいことはあったし、好奇の目もあった。人殺し、外道と陰口を叩かれながら働いた。苦しくてとても幸せとは言えない世界だった。真琴のいる場所に行きたいと思うような出来事も何度かあった。それでも私は生きた。私たちは生き抜いた。それなりに何かを守りながら生き続けた。

——生き続けて三ヶ月の時間が流れ、季節が冬になり、やっと好奇の視線が薄れてきた頃だった。

仕事から帰ってきた祐介がふと「買い物にでも行かないか」と誘ってきた。街に出て気付いたのだが、今日はどうやらクリスマスだったようだ。彼は陰気なままの自分を少しでも楽しませようとしてくれたのだろうか。申し訳ないと思う。

街には雪が降っている。ちろちろと閃光のように輝く白は、コートの上からでも私たちを凍えさせる。その凍える世界は、自分が数ヶ月前に住んでいた街と同じように綺麗だと思った。

どこにいても雪は綺麗だと思う。こんな風に凍える季節の中で、私は真琴と会い、言葉を交わし、友達となったのだ。空を見上げ、そして堪えられなくなってすぐに私は目を閉じた。

クリスマスだけあって街は華やかで、幸せそうな人たちでいっぱいだった。それでも人がそれほど多くない街なので、多少はゆったりとした感じで繁華街を歩くことが出来る。雑踏をゆっくりと歩く。

祐介は私の表情の変化に気付いたのだろうが、それでも何も言わなかった。何も言わずに歩いて、結局彼が口にしたのはなんでもない言葉だった。

「もうすっかり、冬だね」

早いね、と言って祐介は笑う。私の左手を優しく握り締め、ゆっくりとした足取りで私を牽く。

「それにしても寒いねえ。コンビニで肉まんでも買って食べようか？　いや、これからレストラン行くわけだからアレだけどね」
振り向いて苦笑いする長瀬祐介の顔を、私はまっすぐ見ることが出来なかった。
帰ってきたから一度だけ、すごくつらいことがあった夜、真琴のことを彼に話したことがあった。肉まんが好きなことともその時話したと思う。
それからずっと彼は私に気を遣って色々なものを無視してきた。彼女の好きだったもの、彼女の周りにあったもの、色々なものを無視して過ごしてきた。
「……おなか、空いてないかな？」
これは、彼の精一杯の気持ちなのだと思った。
三ケ月ずっと一緒に歩いてきて、私の傷を守ろうと癒そうとしてきた長瀬祐介は、この日になってやっと、私の心の傷の中に一歩足を踏み入れたのだ。
この一歩で、今までただ生きてきただけの私たちが、何かを掴むことが出来るかもしれないと思った。
初めて、幸せになれるかも知れないと思った。
「――はいっ」
そして私はそれを受け入れる。
肉まんを頬張りながら私たちはコンビニの傍のベンチに腰掛けている。ふと私は、ちょっとした冒険をしてみようと思った。
「祐介さん」
「何？　天野さん。……っ!?」
返事をした祐介が、違和感に気付いて慌てふためく顔をする。私が彼のことを名前で呼ぶのはこれが初めてだったのだ。
「天野さん、って呼ぶのは今日でお終いです」
「……!?」
戸惑っている。当惑した彼の顔を見るのはすごく面白い。――こんなことを言いつつ、私の顔も真っ赤になっていたりするのだけど。
「これからは、美汐、って呼んでください」

「うぁ……」
次の台詞は正直素面ではとても言えない台詞だけれど、今日はクリスマスだ。この甘くて白い雰囲気に酔ったつもりで言ってしまえ。
「呼んでくれないと、――もうキスしてあげません」
言ってしまうと心が遠い思い出の日の青空のように晴れた。私は悪戯っ子のように笑う。顔を真っ赤にして、久し振りに心の底から笑う。
「――分かったよ。……み、美汐ちゃ」
照れくさそうに言いかけた祐介の唇を私は塞いだ。ベンチに座っていたので背伸びをする必要もなかった。距離の無い世界で私たちは愛を交わす。
ジングルベル、ジングルベル、鈴が鳴る♪
通行するたくさんの人たちがやたら冷やかすが、そんなの私たちには関係ない。柔らかな、暖かな祐介の唇にもっと触れていたかった。長い長い抱擁を交わし、息が切れるまでずっと彼を離さないでいる。
唇が離れると、私以上に顔を真っ赤にした長瀬祐介が心底慌てふためいた顔で不満を並べる。
「こ、こんな人通りの多いところで……っ」
「私は別に構いませんよ。恥ずかしかったですか？私とキスするの」
意地悪そうに言うと、祐介は俯いてぶつぶつと何かを言う。
「べ、別にそういう事言ってるんじゃないよっ、天野さんがっ――」
「――美汐、です」
私は彼の手を取って立ち上がる。クリスマスの夜はまだ始まったばかり。幸せのかけらが降ってくる夜はまだ、幕を開けたばかりなのだ。
幸せは、幕を開けたばかりなのだ。
これからは私は、彼と多くの夢を紡いでいこう。
「――――――――ありがとう、祐介さん」

彼女の口から「ありがとう」という囁きが漏れた。
僕の手と天野さんの手が、僅かに残った熱を共有する。閉じ掛かった瞼の隙間から、僕は確かに見た。
天野さんが、少しだけ嬉しそうな顔で笑ったのが。
死に至る深い眠りの中で、確かに彼女は、笑った。
だから僕は、心底から、――良かった、と思った。
今の僕に辛うじて許された弱い弱い電波が届いて、
天野さんに、束の間の素敵なゆめを見せることが、
素敵な未来を見せることが出来たのだろうと思う。
帰ることが出来たならば、確かにあった筈の日常。
なんて、無様な奇跡だろう。ただ微笑わせることしか出来ない、束の間の夢しか見せられない、奇跡。
こんな奇跡なんて、いらなかったなら、ごめんね。
ああ、今度こそ僕の生命と意志と、恋心が終わる。
感じる熱。ほのかに暖かく柔らかな、小さな手だ。
ずっと離さずいたかった、大切な大切な優しさだ。
好きだったよ。天野さん、僕は、君が好きだった。
心の底から守りたかったんだよ、――美汐ちゃん。
最後の夢を目の前にして最後の雫がひとつ零れた。
僕は、最後の力を振り絞り、広がり続ける青を見上げようと顔を上げ、しかし眩暈が世界を包み、暗転していく意識の中で、声にならない言葉を呟いた
――――――――閉幕。

五番　天野美汐　死亡
六十四番　長瀬祐介　死亡
【残り26人】

610　歪曲

パァァアン――

そんな音が、聞こえてくる。
もはや聞き慣れた音。この島で、幾度となく聞いた音。

その音に、往人は歩む足を止めた。
「——近いな」
呟く。
三つ、重なって聞こえていた足音は全て止まっていた。無論、往人に聞こえる以上は近くにいる者には全員聞こえている。晴子も。そして観鈴も、その音に足を止めていた。
「——また」
観鈴が、口を開く。
「また、誰か、撃たれたのかな……」
沈痛な面持ちで。
暗く、沈んだ声で、そう呟いた。
もう、死は見慣れてしまった。
その島のあちこちに転がる死骸——。
目の前で、腕が飛ぶ光景すら見ているのだ。
だからこそ、辛いのに違いない。
「……けったくそ悪いわ」
隣に立った晴子が、ぼやく。忌々しげに。

——ァァアアあっ——
続けて、響く奇声。
晴子は、さらに顔を顰めた。
「行こか——気分悪なるで」
そう言って、観鈴の肩に、優しく手を置く。彼女なりの配慮。
——観鈴は、俯いたまま、答えない。
「観鈴？」
往人が声を掛ける。
それと同時に、観鈴は、きっ、と顔を上げた。
使命感を帯びた——そんな顔。
二人に、嫌な予感が走る。
「わたし、行ってくるっ——」
——悪い予感とは何故そうも当たるものか。
森の奥に向かって、二人に、顔を見ずにそれだけ言った。
「ちょ、観鈴っ——!?」
晴子が咄嗟に出した手を、避ける。

そのまま、その手にシグ・ザウエルショート９㎜を握り、駆け出した。
「観鈴っ！」
返事は無い。
振り返りもせずに、そのまま奥へと消えて行く。
――無論、少し遅れて二人も駆け出した。
「何やってんだあいつは……」
走りつつ、ベネリＭ３ショットガンに弾を入れる。
念のためだ。
「……ホンマや、捕まえたら一発殴らなあかんわ」
そう言って、傷を抑えていた左手で拳を握った。
その両手には、何も握られてはいない。

――。

どうして走っているのか。
二人を置いて、何故突然走り出したのだろう？
足は震えている。
勢いだけで飛び出したわけだが、銃を握る手も震えている。
恐らく、撃つ事など到底、無理だ。
だが。
足は止まらない。
止める気も無い。
――嫌だった。
このゲームが。
殺し合いが行われる事が――
自分を護る為に、往人が誰かを殺そうとする事が――
そして、自分の為に、母親が傷付いた事が――
どうして、こうならなければならない？
何故、殺し合いなどする。
――分かってる。
そんな事は、誰にでも分かる。
恐怖。
恨み。
そして、生き残るという欲望。

それらが、血の惨劇を引き起こしている。
自分は、殺せない。
だが、殺す事が出来ないからこそ、何か出来る事があるのではないか？
そう思った。
だからこそ、走る。
手遅れになる前に。
……無論、それだけではない筈だ。
走りながら、思う。
――もう、足手まといになるのはこりごりだ、と。
銃を握る。
確かな重みを持ったそれが、僅かに勇気を与えてくれるような気がした。
そして木々の間を抜けていく。

「――」
「――」

無言。
最後の繋がりを求めて、堅く手を握った二つの死体。
少年は、悲壮な顔を。
もはや光を灯さぬ瞳を、遠い空へ向けて――泣いていた。
それでも、少女は、微かに笑っていた。
死の直前に何を見たというのだろう？
無論、彼らには知る由も無い。
「――この島に居る以上は」
少年の声。
「殺さなくては、生きる事が出来ない。他の誰かの命を奪って、自分だけが生き残る」
拳を握る――
腕が震えているのは、崩壊によるものだけではあるまい。
その一見静かな表情の内に潜むのは――怒り。
「ふざけた話さ――」

締めくくる。
郁未は、返さない。
——二人は、もはや目の前で死んだ彼をただの殺戮者（マーダー）とは思っていなかった。
否。この島に居る全ての殺戮者（マーダー）もそうだ。
彼らは、この島の被害者。
狂った島の中で。
何かの理由の為に、他の誰かの命を奪っていく。
悲しみを巻き起こし。
そして最後に、己もその中で死ぬ。
彼は。
きっと、本当に、彼女を——
「——埋める？」
提案。
ぽつりと呟かれた郁未の言葉に、少年は無言で頷いた。
本で穴が掘れるわけがない。
無論、包丁でもだ。
適当に、大きめの枝を包丁で叩き折る。
郁未はそれを少年に投げ渡した。
「傷、大丈夫かい？」
——郁未の服には、あちこちに切れ目が作られていた。
ピアノ線。
切れた事で助かったものの、あれで無事でいられる筈も無い。
服の切れ目から、微かに血が滲んでいるのが見えた。
「大丈夫——舐めれば治るわ」
かつ、と枝を叩く音。
「その時は、手伝ってもらうわよ？」
「——やれやれ。良い趣味してるよ」
苦笑気味の、溜息。
それは、暗い、暗い雰囲気を吹き飛ばそうとするようで。

――そして、随分と儚いものだった。
かつ、と枝を叩く音。あと少し。
かつ。
――ばきん。

「……っ」

人の声。
咄嗟に、振り向く。
――少女が居た。
その手に、銃を握り。
左手で、口を抑え。
そして、愕然と、その目が見るのは。
二つの死体。
――違う。
違うんだ！
二人は、そう叫ぼうとして。
だが、それよりも早く。

さらに二人の人物が、森の影から現れる。
「観鈴っ――」
現れたのは、男と、女。
――あれは。
ずっと前に――このゲームが始まった頃に、少しだけ言葉を交わした人物。
確か、国崎往人という名前だった筈だ。
共に連れている女は、知らない顔。
国崎は、少年の顔を見て、僅かに眉を寄せ。
それから、少女の様子に気付いたようで。
少女の見ていたそれに、目を見開いた――。
――ああ。
どうせなら、蝉丸さんだったら良かったのに――。
何でこうなってしまうのか、といった顔で。
少年は、そんな事を思った。

リビングルームに男二人。作戦会議は続いていた。
ん？
そう言えば……。
「蝉丸さん。晴香さんは今何してるか知ってます？」
一人だけ、自分が行動を把握していない人物がいるのに気づいた。
「彼女なら、ドラム缶見つけたからドラム缶風呂をする、とか言って外で準備していたぞ」
は？
「ド……ドラム缶風呂っすか!?」
「うむ。少々危険だとは思うのだがな。やはり婦女子は気になるらしい」
確かに最近皆風呂に入っていない。常に活動しているので汗はだだっかきだ。
婦女子と言わず、男の俺でもそろそろ気になる。
「ふむ……そうだな。施設うんぬんよりそっちの方を決めるのが先決かもしれないな。男としてやらぬ

611　男二人。史上最大の作戦

「外から見た感じだと施設はこれぐらいの大きさだと思うのだが」
蝉丸さんがペンで基地のだいたいの形を描いてみる。
「まぁ地下がどうなっているかは分かりませんけど、確かに……」
トン、トン、トン……
俺がその施設の外周三箇所を指でたたく。
「ここが俺達の見つけた入り口。裏のことここ辺りに脱出口がありそうな雰囲気ですね」
自分なりの推理。的確なポイントだと我ながら思う。蝉丸さんの表情が驚嘆のそれになる。
「君は一般人だろう？　なかなかの推理力だ。私が考えていたのと変わらん」
「はは……。臆病なだけですよ」

わけにはいくまい」
蝉丸さんはもう一枚紙を取り出し、この家のだいたいの形を絵にする。
「耕一君。君ならどうする？」
え？　そんなこと言われてもなぁ……。真面目な顔で尋ねられても……。
確かにマナちゃんや初音ちゃんはともかく、晴香さんあたりは覗いてみたい気はするな～。
ぐっ……。いかんぞ男耕一。そんな情けない行為を初音ちゃんにでも見られてみろ。
「お兄ちゃんのエッチ～!!」ばしっ！
ぐらいは食らうかもしれん……。しかしこっちには戦闘・隠密のプロ。蝉丸さんがいるわけだし、ちょ～っと俺の好奇心もムラムラ～と……。
「そうですね。こことここ辺りが最適なんじゃないかと……」
自分なりの推理。的確なポイントだと我ながら思う。しかし蝉丸さんの表情が落胆のそれに変わる。
「残念だ耕一君。そこでは遠すぎる。確かに視界は確保できているが、部屋の中からというのは決定的にまずい」
え？　だってそれ以上近いと、確かに楽しいけど見つかる可能性が……。
「特に最重要警戒地点のこの繁みから彼女らが襲われた場合。対処に大きく時間がかかってしまう。他の参加者が長距離射程武器を持っていないとも限らんしな。耕一君は攻めは得意でも、警護には向いていないのかな？」
え？
……。
…………。
……………。
しまったーーーーーーーーー!!
一人だけで不謹慎な想像していたのかぁぁぁ!!
先生、すっごく恥ずかしいじゃないかーーーー！
不謹慎な俺を許しておくれよ初音ちゃん……。

――カタン
俺の魂を現実に連れ戻した、廊下からの物音。
出てきたのはマナちゃんと月代ちゃん。
「あ、彰くんの様子はどうだった？」
当然の問いにビクッと体を硬直させるマナちゃん。
「ああ、あ、げ……元気。元気なんじゃないかなぁ……？　あはは、あははははは……」
「ふむそうか、なら良かった。だがもう少し休ませて体力を回復させておきたいな」
「体力を回復……ねぇ……、余ってんじゃないかしら（ぼそっ）」
？
さっぱり要領を得ない。
しかし俺にはもうひとつ疑問がある。
月代ちゃんの仮面ってなんなんだ？
(;´Д`)

612　精神戦

ジャキン！
往人がベネリM3ショットガンを構え直し、少年を問い詰めた。
「お前がやったのか？」
その問いに、少年は言葉を選びながら、慎重に答えた。
「仕方なかったんだ」
事実を――話す。
「いきなり襲われたんだ。そこの男が持っている糸のような武器で」
往人はなにも答えない。いや、答えられなかったといった方が正しいか。
（……くっ……どうする？）
彼の頭の中はフル回転してこの状況を打開する策

を考えていたのだ。
ゲームの序盤にあった少年には、やる気は感じられなかった。
だから往人はベレッタを少年に渡したのである。
だけど、今はどうか。
確かに今の少年と話した限りでは。やる気にもなっていないようだし、気が狂ってしまったという印象も感じられなかった。
しかし、それでも最初に感じた得体の知れなさや、結局最後まで名前を明かさなかった胡散臭さは往人の心の中からは拭えなかった。
（くそう……）
ベネリM3を持った手に汗が走っていた。
（さて……どうしたものか……）
一方で、やはり少年も窮地に陥っていた。
（国崎さんだったよな……、あんな武器まで持ってたのか……）

チラリと、偽典に目をやる。
（あの銃には……この本も効果が薄いな……）
銃弾を一回の射撃で一発しか出せない銃ならいざ知らず、マシンガンやショットガンの類には何枚も紙を使わなければいけない。
効率も悪く、あっという間に紙も無くなってしまう。
更にこの場合、一度に大量の紙をばらまかなければいけないので、下手をすると弾き損じた弾が自分に当たる可能性もある。
（潜水艦のときのように、最初に撃ってきたのをうまく反射させるしかないけど、果たして彼にうまく当たるかどうか）
話し合いで解決できればいいのだが、きっかけを出す糸口が見つからない。
下手なタイミングでそんなことを言えば変な疑いをもたせてしまう。
（ああ、まいったなぁ……）

彼もまた、動けずにいた。
時間にして数分。だが彼等には何十時間にも思える時間が過ぎていく。
互いに相手の思考を読み取ろうとし、打開策を考える。
それは正に、精神戦。

613　逮捕

真っ暗な夢のトンネルを抜け、僕は軽い頭痛と共に目を覚ました。確認する。見たところここは天国ではないようだ。地獄でもないようなので僕は無事に目を覚ましたということなのだろう。目を覚ましたのはまったくもって良い事だ。もう二度と目覚めなくてもおかしくない程の怪我だった訳だから、こうして再び現実に戻れたことはまったく良かった。
体の調子もすこぶる良い。少し寝ただけなのに、傷の痛みが半ば消えかかっている。霞んでいた視界も正常に戻っている。壁にかけられたカレンダーの小さな文字も明瞭に見える。ステキな目覚めである。笑い声まで漏れそうな程に気持ちがいい目覚めだ。まあ、正直申し分ない目覚めなわけである。
僕、七瀬彰はこうして無事でいる。
しかし。
どうも不可思議な事がある。誰でもイイから教えてください。というか教えてもらわないと僕の精神の平衡が保てない感じがする。生憎周りに他に人がいないので、神様にでも聞くしかない。
神様教えてください。
何故、初音ちゃんが裸で、同じく裸の僕と、同じベッドの中に、いるのでしょう、か。
「――今寝たと思ったのに、すぐ目が覚めたね。もう大丈夫なの？」
初音ちゃんの声だと理解するのに十秒。

待て。
待て待て待て待て待て待て待て待て待てぇぇぇっっ!!
初音ちゃんの裸。薄い胸。白い肌。細い腰に細い肩。そして赤く染まった頬。僕の腕に回された彼女の腕から、彼女の柔らかさと熱が強く伝わってくる。
さて。この状況をどのような視点から捉えれば別の解釈が出来るのだろう。僕の足りない脳味噌では、この状況の示す可能性がひとつしか浮かばない。
「……もうっ……彰お兄ちゃん、そんなに見ないで……服、着るから」
「。」言葉が出ない。
そう言って初音ちゃんはさっさと下着を付け、ベッドの横に置いてあった上着を着込む。真っ白な肌がピンク色に染まっている。立ち上がって露わになったシーツには赤いもの。血の他には見えない。
顔面から血の気が引く。顔の血が身体の別の部分に集まっていく。別の部分とは勿論心臓で、早鐘のようにばくばくと音を立てる心臓に、僕は心底驚愕する。ここまで心臓が働くのは生まれて初めてだ。
やっと言葉が出る。
「——初音ちゃん」
言うと初音ちゃんは心底申し訳なさそうな顔で、
「ごめんね。わたしのせいで、お兄ちゃんに」
そう呟いた。意味が判らなかった。意味は判らなかったが自分がやったことは完全に思い出した。思い出しました。わはははははははははははは、はは。
笑えない。全く笑えない。
僕は遂にやってしまったのだ。しかも小学生を。犯罪者だ。完全に犯罪者である。
「ごめんっ! 初音ちゃんっ!」
な、なんて事をしたんだ僕は!! たぶん時間にして十五分ほど前、僕は、自分の勝手な欲望の昂りを、この目の前の幼い少女にぶつけてしまったのだ。
明瞭に覚えている。初音ちゃんの肌も、初音ちゃんの唇も、そして初音ちゃんのその優しい声も。

「ううん——彰お兄ちゃんは、悪くないよ」
初音ちゃんは、本当に申し訳なさそうに笑う。
僕はそんな初音ちゃんの声も頭に入らず、腐った脳味噌で自分の愚かさをなじる。
僕は確かに初音ちゃんが好きだったよ。この気持ちは好きだっていう気持ちだよっ。けれどそれはあくまで守ってあげたい対象としての気持ちだ。つまり妹か娘みたいに思っていたからであって、父性愛的なものであったのであって、断じて、断じて性欲の対象として見ていた訳じゃなかった筈なのだ。それがなんだ。僕はバカだ。勝手に欲望を吐き出しているこの自分は。僕はバカだ。一回死んだ方がいいと思う。死んであらゆる種類の苦痛を一万年かけて与え続けそれを一万回繰り返して魂まで消滅するのがいいと思う。
さて、僕はただ一時の欲望を吐き出しただけで今は別に彼女に何もしたくないかといえばそれは嘘になる。こうして目が覚めた今でも、正気に戻った今でも、僕は初音ちゃんを抱きしめたいと思っている。唇を重ねたいと思っているし、肌を重ねたいと思っている。彼女とずっと一緒にいたいと思う。なんてことだ！　僕は小学生に欲情するような少女性愛者だったというのか！　十三歳未満との性交は同意があっても強姦罪になるんだぞ⁉　そもそも、合意なんてあったか？　二十歳の僕はもう少年法は適応されない。僕は歴とした犯罪者だ。いや、既に複数殺人を犯している訳だから今更か。
でも——ああ、僕は初音ちゃんが好きだ。初音ちゃんを心底愛している。僕は愚か者だ。法律が許さなくても、この気持ちは偽りたくない。
ここまでを五秒のうちに考え、自分をなじり、そこで自分の本当に愚かな部分に気付く。自分が犯罪者だろうがなんだろうが今はどうでもいい。僕が今本当にしなければならないことは、
僕の気持ちを初音ちゃんに伝えることだ。
男の腕力で、強引に純潔を散らされた彼女に、言わなければいけない言葉があるじゃないか。

ベッドから身体を起こし、僕は言う。
「――好きだよ。初音ちゃん」
やっと言えた、と思う。
彼女とこの島で一緒に戦って、生きてきた少女に、僕はずっと癒されてきた。彼女がいたから僕はこうして壊れないで来れたのだと思う。
彼女を目の前にしてこの言葉を言うことが出来て、僕は生き続けられた運命に感謝する。
「わたしもだよ、彰お兄ちゃん」
心底で嬉しそうな顔をして初音ちゃんは笑う。
「大好きだから、抱いたんだ。それだけは間違いない。本当に、ありがとう。君がいるから、僕は生きていこうと思えるよ」
「――うん」
「決して、一時の欲望に溺れたんじゃない。確かに僕はさっき少しおかしかったかもしれない。けど、どんなに僕は狂っても――君じゃなければ、あんな事はしなかった。絶対に」
ベッドから立ち上がり彼女を抱き寄せる。一線を越えてしまった事をもう二度と後悔する事はない。好きなのだ。心底から好きなのだ。彼女の体温を全身で感じながら僕はにこりと笑う。
「大好きだ」
ならば、たとえこの子が今まだ小学生でも構わないではないか。必ずこの娘を守る。そして一緒に帰る。そして彼女を一生守り続けよう。彼女が僕の生きるための光なのだから。
「十年後、必ず結婚しよう。君が大きくなって、結婚できる歳になったらね。ずっと一緒にいよう」
にしても、なんて馬鹿な事を言っているんだ僕は。プロポーズか。今時小学生同士でもこんな陳腐なプロポーズは交わすまい。まあいいさ、と少し照れながら僕は頬を掻いて、
異変に気付く。

僕の胸の中の初音ちゃんが突然僕を押しのけ、少し怒ったような目で僕を睨んでいるのだ。
「……？」
「彰お兄ちゃん？　……わたし、高校生だよ？　結婚だって後少しで出来るようになるんだけど」
僕は取り敢えず、首を傾げてみた。何を言っているんだろうこの小学生は。寝言は寝て言わなくちゃ駄目なんだぞ初音ちゃん。
「マジ？」
「マジだよ」
マジかっ!!
——沈黙。完膚なきまでの沈黙だった。
沈黙を嫌ったのは、勿論沈黙を生み出した僕の方であった。
「と、と、とととにかく。耕一さんのところに行こう。今の状況を知りたい」
彼女の手を取って部屋を出ようとすると、彼女は強い力で手を払いのける。振り向いて彼女の顔を見るともう駄目だった。彼女の心底悲しそうな顔は自分の心をえぐる。そりゃそうなのだ。きっと初音ちゃんは自分が小学生だなんて思われていたなんて思っていなかった筈なのだ。
初音ちゃんは少し、自嘲気味に笑って、
「——そっか、ずっと間違われてたんだ……」
はぁ、と息を吐いた。勝手なことだが、その様子があまりに可愛く映った。僕は死んだ方がいいと思う。自虐しながら僕はまた彼女を抱きしめる。
決してミスを誤魔化すためではない。断じて違う。
「彰、お兄ちゃん」
「間違ってはいたけど、だからって、僕の気持ちが少しでも変わると思う？」
そう言ってもう一度その唇を塞ぐ。彼女の柔らかな肉に触れながら、何処か安堵を覚えている自分を見つける。僕は彼女のためなら犯罪者にだってなるつもりはあった。だがしかし、高校生ならば刑法百七十七条は適応されない！　……と思う。堂々と彼

女と逢瀬を繰り返すことが出来るのである。なんだかんだで逮捕されるのは嫌だった自分に自己嫌悪である。僕はやっぱり死んだ方がいいかもしれない。

唇を離して、赤く染まった初音ちゃんの頬を撫でている時、僕は自分の身体の変調を自覚する。身体がほんのりと熱い。それは心地の良い熱さで、生命の奔流とでも表現すればいいのかとも思う。失われていた力がそれ以上の形で戻ったような感覚だ。
まだこの島には幾多の危険があるだろう。その危険から彼女を守ることが出来るだけの力が戻った、そこまで僕は思う。彼女のナイトとして僕は生き続けるのだ。

「それじゃあ耕一さんたちのところへ行こう」
「うん」
そうして初音ちゃんと連れ添って部屋を出る。ドアを開けようとしたところでおかしな音がした。何事かと思ってドアの外を見たが何も無い。天井裏か床下で大きなネズミが暴れたのかもしれない。気にせず僕たちは廊下を歩き、
「おはようございます。無事目が覚めました」
耕一たちがいる部屋に入って、僕は少し大きな声を出して挨拶をした、
のだが。
その部屋の何処かおかしな雰囲気に気圧されて、僕は言葉を失った。
まず観月マナが僕たちの顔を見た途端に溜息を吐く。やけに大きな、聞こえよがしな溜息だった。
「はあぁぁぁぁぁぁぁぁ……」
溜息の後には負けたぁ、負けましたぁ、という呟き。はて。何に負けたのだろう。
次にお面を付けた少女――三井寺月代が、
「(;´Д`)初音ちゃんすごい……負けたぁ」
などと呟いている。
全ての状況が僕には理解できた。そして勿論僕の

横の初音ちゃんも完全に理解しているだろう。
……ばれている。
初音ちゃんの顔を見る。真っ赤っかである。スイカの実のように真っ赤である。一方僕はと言えば青ざめた顔をしているに決まっていた。身体中の血が心臓に向かって流れて、皮膚が自分のものとは思えないという奇妙な感覚に襲われる。きっとスイカの皮みたいに真っ青な顔をしているに違いない。
心臓が早鐘を打つ。
彼女たちが知っているということは、だ。耕一さんや七瀬さん、晴香さんや蝉丸さんも知っているのか？　僕と初音ちゃんの関係の変化をッ！
駄目だった。もう今すぐ部屋を飛び出して逃げ出したかった。いや逃げるわけには行かないのだ。彼女を守るためにはここを離れるわけには行かないし彼女と付き合っていきたいという趣旨を保護者であると思われる柏木耕一に告げなければいけない。それでも僕は逃げ出したかった。元来僕は度胸がない人間なのだ。
「お、起きたか」
だが、耕一は穏やかな口調で、何も知らないかのように笑うばかりだった。
「ま、何にせよ無事で良かったよ」
思う。まだ柏木耕一は何も知らないのか。どっと安堵が背中を走る。冷や汗で湿った背中が気持ち悪い。いつかは初音ちゃんとのことをしっかり話さなければいけないが、今その難を逃れられたのは幸いであった。
「にしても、俺も疲れてるのかな――さっき変な幻聴が聞こえてさ。少し休んだ方がいいかな」
――っっ。
「うむ、俺もだ」
耕一の横に座る坂神蝉丸もそう言って頷く。修行が足りぬ、などと呟いている。
――幻聴の正体が何かなんて決まっていた。
逃げ出したいよ。

とどめは遅れてきた七瀬留美であった。
「あ、な、七瀬くん、お、起きたのねっっっ!! わ、わ、割と、元気そう、元気そうじゃない？ よ、よ、良かったわーっっ!! あ、あ、あはははははは」
穴掘って入りたい。そしてその上に土をかぶせて僕を永眠させてください。

614 本格的な侵入

あたし達は入り口らしき何かに突入するかで悩んでいた。
「どうする、千鶴姉」
「この三人で行くのは不安ね、ばれちゃってるから奇襲はもうできないし」
「一旦戻ろうか」
「それが賢明なようね」
と思ったら、怪しげなおっちゃんが後ろにいたわけよ。
「お前ら、何やってる」
「千鶴姉」
「わかってるわ」
「あ、おじさん！」
気の抜ける一言だったよ、どうやらこのおっちゃん、あゆの知り合いらしい。
「たまたまテメェを見かけたから来ただけだ」
「柏木千鶴です。私達、メイドロボと戦うはめになって……」
「あれぇ？ 楓ちゃんのお姉さん？」
さらに話の腰を折るように女の子が二人出て来たりで。いったい何故こんなに人が集まるんだろうね。
「おい、この長髪の娘はテメェの知り合いか？」
「したぼくには特別に教えてあげるわ。楓ちゃんから伝言を預かってたのよ……今ではそんなに意味の無い事なんだけど。爆弾の秘密の事。あと私が楓のお姉さんに頼ると良いとも言ってたわ」
「爆弾は確かにもう私達には意味が無いわね。でも

ありがとう。私たちを探してくれたんでしょう？」
「雑談してるヒマがあるのか？　ここから突入するか考えてたんだろ。早くしねぇと相手の準備が出来ちまうぜ」
　てなわけで図らずも援軍を迎えたあたし達は敵施設（と思われるところ）へと侵入したわけよ。

615　分断

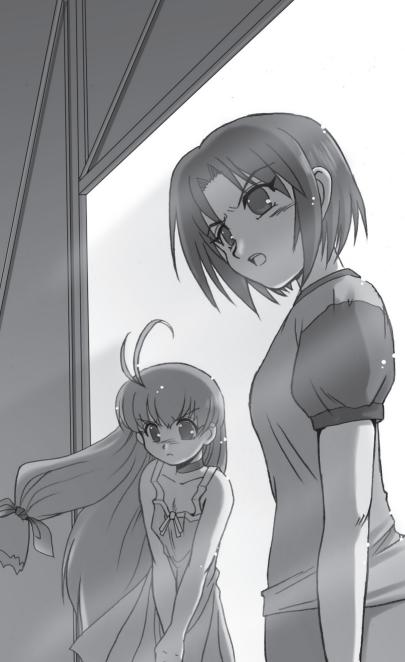
風が吹いていた。
さらさらと風の揺れる音だけが流れていく。
――静かだ。
森の中、仰向けに倒れたまま北川は思う。
右腕は、まだ痛い。表面だけ引き裂かれたかのような傷が、肘の上から手首まで広がっている。
表面は、とりあえずシャツで縛り直してある。
だが、当然ながら後々消毒が必要になるだろう。
傷口が腐るのだけは勘弁だ。
一応レミィが舐めた、と思いたい。
違う。
舐めたかもしれないが、それでは消毒にはならない筈だ。
気分的な消毒にはなったが。
鳥の鳴き声。
木々のざわめき。
そして――近付いてくる足音。
起き上がる。
咄嗟に、右手に握られた大口径マグナムを向けた。
北川が見たのは――ピンク色の触覚？
何だそりゃ。
「動かないで――」
がちゃり。
鉄の音。
触覚少女の手には、確かに銃が握られている。
突然撃つような真似はしないらしい。助かった。
正直、片手でこの銃が撃てる気はしない。

外して。その後、頭が吹っ飛ぶのが目に見えるようであった。
その上、だ。
「スフィー……？」
触覚少女の後ろから、声。なるほど、スフィーという名前か。後ろから、もう一人、少女が姿を現す。気の強そうな女の子。
しかし、赤く泣きはらした様な目——
おいおい、せっかくの美少女が台無しだぜ？　お嬢さん。
二人目の少女が、北川の存在に気付いたらしい。まるでウサギのような目を、きっ、と細める。その手に銃を握った。
デザートイーグルか——。
「誰よあんた——」
ひやりとした空気。
どうも、この娘はヤバそうだ。銃を向けているのは得策ではなかろう。

降参のポーズを取ろうとして——一度、止める。口を開いた。
「なぁ——両手を上げても撃たないでくれよな？」

「それで、お前も捕まったってわけか」
「捕まったとは失礼だな！　俺はお前みたいに縛られちゃいないぞ」
「似たようなもんだろ」
暗い空間。
湿気。カビくさい空気。
古びた小屋の中に、二人の男の姿が在った。
「あんだけ叫んで走ってってたのにな。いきなり捕まってたら世話無いな」
へっ、と皮肉げに、北川。
「こいつらが相手じゃなかったなら助かったんだがな」
憮然とした様子で、祐一。その両手は、未だに縄

で縛られたままだ。
祐一の台詞に、結花が睨み付ける。
「——うるさいわね。黙ってなさいよ」
「うるさくしたつもりは無いぞ」
「うるさいっつってんのよ。猿ぐつわでもかまされたいの？」
「良い趣味してるな——」
ゴッ！
「痛ぇ！」
「……やっぱ殺そうかしらこいつ」
「ゆ、結花……」
参ったな、といった様子でスフィーが口を開く。
どうもこの二人の相性は宜しくない。
口を開けば拳が飛ぶといった感じだ。
それは、北川がここに来てからも変わってはいない。
「はー……」
溜息をついたのは、北川。

もう一人の少女は、ただ、静かに佇むのみ。
近くにレミィの姿は無い。
——捕まった時に、それなりに仲間が居る事は主張した。
結果はこれだ——要は、信用できないという事だ。
武器も全て奪われている。
ある意味、正しい選択とは言える——
生き残りを賭けたゲームの中で、多数の来訪者を歓迎するとは思えない。
それに、万が一、敵であったとしても。
捕虜を使えば、生き残る可能性も増える。
だが。
——レミィ。
何処に居るのか。
あれから少し経ったが、彼女は北川が居ない事に気付いたのだろうか？
目の前の少女達は、また散策の為の準備を始めて

いる。
一応、レミィの事に関して触れておいた。彼女達が見つけてくれれば助かるのだが。
――まぁ、後はレミィが下手な事しなきゃいいんだけどな……。
その自信までは無い。
出るのは、先程スフィーと名乗った触角少女。そして、滅多に口を開く事の無い、魔法使いのような格好をした少女。コスプレだろうか？
それにしても、北川はまだ彼女の声を聞いた事が無い。
――で。結局残るのが結花という名の少女である。
今のところ、北川は彼女に殴られた事は無い。
どちらかと言えば（祐一よりは）優遇されていると言える。怪我の為だろうか。
「じゃ、行ってきます」
「……」
準備は終わったらしい。少女達が、戸を開く。
明るい光が差し込んだ。眩しい。溶けそうだ。
「私は、こいつらを見張ってるから。大丈夫、下手な事はしないわ」
はは、と苦笑するスフィー。
そうして彼女は戸を閉めた。
差し込んでいた日差しが、消えた。

616　七瀬のないしょ

蝉丸と耕一は施設襲撃の作戦会議中であった。
「……む」
ペンで施設の近くの地形を描いていた蝉丸。彼の突然の反応に耕一は首をかしげた。
「どうかしました？」
「い、いや、なんでもないと思うのだが」
「……？」

よく分かんない人だな、と耕一。
蝉丸もよく分かっていなかった。
当然である。
——何故。
何故このような時に〝喘ぎ声〟が聞こえるのか。
随分と血を流したせいで、気の疲れでも現れたか。
それとも、本当に誰かが——。
——まさか、な。
空耳に違いない。
そう思うことにする。
蝉丸は、今も微かに聞こえる『その音』を無視しつつ地図を描き続けることにした。
しかし、気が散って仕方がない。
氷まくらの交換に来た七瀬は、扉越しに怪しい雰囲気を感知した。
激しい、物音。そして呼吸音。
(……ま、ままま……まっさいちゅー……?)
そうだ、これは……間違いない。
真っ最中、だ。
(ちょちょ、ちょ、ちょっと、何してんのよ……)
氷まくらを抱きしめて、顔を赤らめたまま呆然と立ち尽くす七瀬。
いつの間にやら近くに晴香が来ていることさえ気が付かない。
「七瀬？　何してるの？」
「は!?　ははは晴香!?　ななな何でもないのよ!?」
猛烈に慌てまくる七瀬。
「……何でもないって事ないでしょ。声裏返ってるわよ。普通に話しなさいよ？」
「い、いいから今すぐ立ち去るのよ！　乙女と明るい家族計画の名にかけて、ここを通すわけにはいかないわ！」
弁慶よろしく戸口の前で仁王立ちする七瀬。

「な、なにムキになってんのよ……（家族計画って何よ）」
「いいから！　行くわよ！」
　晴香の背を押して、そのまま部屋を離れていく七瀬。
「文句があるなら選びなさい！　馬に蹴られるか！　アタシに殴り殺されるか！　あなたには二つに一つしかないのよ!?」
「ハァ？　……わかんないヤツね……（馬って何よ）」
　憑かれたように捲くし立てる七瀬。
　そして妙に興奮した七瀬が、晴香を突っ張りで外へと押し出した。
「ほらほら！　お風呂の準備中なんでしょ！」
「え、ええ……」
　……氷まくらは、のぼせた七瀬が全て溶かしてしまったそうだ。

「耕一君」
「なんです？」
　振り向くと蝉丸はこめかみに手を当て、首を振っている。
「済まんが場所を変わってもらえないか？　……疲れているようだ」
「ああ……構わないけど……」

「……む」
　耕一の反応に蝉丸は首をかしげた。
「どうかしたのか？」
「い、いや、そうじゃないんですけど」
「……」
　君も疲れているのだな、と蝉丸。
　耕一もそう思っていた。
　当然である。
　――何故。
　何故このような時に〝喘ぎ声〟が聞こえるのか。

変身後遺症のせいで、幻聴でも聞こえたか。
それとも、本当に誰かが――。
――まさか、な。
空耳に違いない。
そう思うことにする。
耕一は、今も微かに聞こえる「その音」を無視しつつ作戦会議を続けることにした。

しかし、気が散って仕方がない。

「……」
「(´－｀)……行ったわね」
七瀬たちと入れ替わるように扉に立つ少女が二人。
マナと、月代。期待に目を輝かせて、戸口に張り付き、覗いてみたりする。
「わ……」
「(ﾟДﾟ)……」

思わず言葉を失う。
再び声を取り戻すのには、たっぷりと時間を要した。

「す……進んでるわね……」
「(´Д｀)負けた……」
その頃には、激しい敗北感に苛まれていたという。
微妙なお年頃、である。

「蝉丸さん」
「どうした？」
振り向くと耕一はこめかみに手を当て、首を振っている。
「すみませんけど、また場所を変わってもらえないでしょうか？　……疲れてるみたいなんで」
「……」
「あの……蝉丸さん？」
「……」

……軍人は、冷徹だったという。
「外から見た感じだと施設はこれぐらいの大きさだと思うのだが」
会議は進む。

617 侵入

メイドロボたちが出てきた、換気口の偽装岩の下で。あたし達は怪しいおっちゃん率いる、怪しい一団と遭遇した。このおっちゃん、あたしを負かすほど強いんだけど……何度見ても怪しい。
まず、いきなりここに現れたのが怪しい。
次にツレの動物達が怪しい。
とどめに顔が、何より怪しい。
「う、うるせえぞ女！」
あ、ごめんごめん、声に出してたよ。
さて。御堂と名乗る、このおっちゃんに監視がついていることを考えると、出入り口付近に腰を据えて、あまつさえ口論するのは、あまりに危険な行為だった。
だからあたし達は、おっちゃんの言う通りにさっさと入り口へと突入したんだ。もともと換気口なだけに、通路は急で……というかすぐに垂直になっており、備え付けの梯子を使うため仕方なく、いや幸いにして、怪しい動物達には外で待機してもらうことにした。
梯子の前で、全員が輪になって立ち止まる。迷うことなく先頭を買って、おっちゃんが降りようとする。
「待ちなよおっちゃん」
「なんだ女」
忌々しげに凶悪な表情で睨みつけてくる。いや、これが普通の顔なのかもしれない。
「とりあえず、おっちゃん最後な」
「なんでだ」
そう言って恨みの篭ったような、不服そうな顔を

する。いや、これも普通の顔なのかもしれない。
口論するのも無駄なので、スカートのすそを軽くつまんでヒラヒラさせながら説明してやる。
「あたし達の服、スカート短いんだよ」
「したぼく、スケベ」
「人間として最低ね」
「ぐ……くっ……しししし仕方ねぇ、後詰めは俺が、やってやる」
おっちゃんは怒りからか照れからか、顔を赤くして折れた。いや、高血圧なのかもしれない。
そして……詠美に、繭。おっちゃんの連れ二人とは、気が合いそうだった。

虎の子であった、戦闘用HM—12の最期。
源五郎は、もはや何も映しはしないモニターの前で、倦怠感に身を苛まれていた。警護のメイドロボ二体に維持を任せ、放心したまま長らく座り込んでいる。

……何度か通信が入ったが……メイドロボに休息中と言わせて居留守を使った。
「なんと、裏から御堂か……これまで、かな……」
先ほどレーダーが御堂を捉えた。当然通気口にカメラなどないが、三体のメイドロボからの返事がない事を考えると、おそらく御堂にやられたのだろう。
明らかに現状が芳しくないことは理解しているが、何もやる気が起きなかった。廃人のように動かぬ主人に対し、メイドロボは普段と同じ調子で、淡々と現実を述べる。
「正面口から侵入者です」
「……何？　誰だ？」
さすがに源五郎も、乏しい気力を振り絞り、重い重い腰を上げた。端末を変え、施設入り口のカメラ画像をオンにする。
「……生きていたのか……」
醜く鼻血を滴らせたまま、よろよろと這いずる長

瀬源三郎をモニター越しに確認すると、源五郎は大きく溜息をついた。入ってくればいいと言った手前、何もしないわけにもいかない。
……今の状況で入ってくるのが、助かる道とも思えないのだが。
「キミは入り口まで行って、手を貸してやり給え。それからキミは医務室からキャスター付きのベッドを運んで、迎えに行ってくれ。治療を終えたら戻ってきて、維持作業を続けるように」
メイドロボ達へ簡単に指示をすると、再び源五郎は座席に沈み込んだ。

空気の通り道は、人間の通行を優先して考えてはいない。足場は悪く、道は暗い。巨大なファンの隙間を抜け、何枚ものフィルタの脇を通り、ようやくあたし達は人間用の通路に入ることができた。
遠くから風の音が、奇声のように耳に貼り付く。そのシリアスな共鳴音に混ざって、怪しい動物達の妙な鳴き声も、かすかに聞こえる。
(ぴこぴこ〜……)
(しゃー……)
(クワァ……)
(にゃー……)
(敵陣突入のBGMがこれだなんて……っていうかドナドナ?)
隣で千鶴姉もコメカミに手を当てている。
「ふみゅーん……埃だらけじゃないのよぅ」
上で詠美がこぼしている。あゆの「うぐぅ」といい、おっさんのツレは、変な口癖の娘ばっかりだ。ちょっと同情してもいいかもしんない。
隣で繭が、あたしと同じようにあきれ顔で上を見ている。
……まともなのも、たまには居るようだ。いや、ホントにたまたまだろうけど。

施設に注意を戻す。

……どうやら、人の気配はしない。千鶴姉と二人で、少し周囲を窺ってみたけれど、人影はない。危険がないのを確認し、みんなの所に戻るのと、おっちゃんが降りてくるのは同時だった。
「あらよっ、と」
音もなく着地するやいなや、おっちゃんが感心したように口を開く。
「それにしても……幽霊が三人とは驚いたな。結局のところ、一体どういう仕組みだったんだ？」
あたしではなく、千鶴姉の方を向いていた。
「そういうあなた方こそ……詠美ちゃんは、一体どうしたんです？」
全員ぞろぞろと歩きながら、千鶴姉も不思議そうに尋ねる。おいおい千鶴姉、おっちゃんと普通に話してるんじゃないよ。おっさんが感染るよ。
「ああ、こいつゲロ吐きやがったんだよ。たぶんそん時に発信機みてえなモンを吐いたんだと思ってるんだが……」
廊下の角で警戒しながら、おっさんは小声で答える。なんだ、おっさんのくせして、意外と切れるじゃないか。感心したよあたしゃ。
誰もいないのを再度確認し、千鶴姉とおっちゃんは情報を交換しあった。そういや千鶴姉は、地元の会合でおっさんの相手をするのが実に上手かった。オヤジ殺しってやつなのか。耕一もおやじ臭いし、つじつまは合う。
「さっきから、うるせえぞ女っ！」
「あ、梓！　一言余計でしょ！」
あ、ごめんごめん、声に出してたよ。
「おい千鶴さんよ……一言だけなのか……」
おっちゃんが悲しそうな顔で千鶴姉に尋ねる。いや、お腹が痛いだけかもしれない。
「現実は、厳しいものよ」
ああ繭、あんたも厳しいね。
いつしか千鶴姉とおっちゃんの情報交換は、状況

予想に変わっている。
「……じゃあ何か、コイツ吐いたはいいが即バレちまってるかもしれねえのか」
千鶴姉の予想と経験に対して、いくつか質問したあと、おっちゃんは締めくくりに尋ねた。
「はい……想像の域は出ないんですけれど。杞憂でなければ、たぶん擬死だとばれているでしょうね」
「ははは、空からの監視に対して杞憂とは、上手い物言いだな」
おっさんが笑う。無気味な笑いだ。
千鶴姉は、さらりと流して答える。
「そういうわけで御堂さん。ここから出る時は、お先にどうぞ……わたし達は後から出ますので」
「ああ、解ってる。だが残念だな。知り合いを除けば、この島に来て出会った相手と、初めてまともに話せた気がするぜ……」
やるな千鶴姉、おっちゃんの信頼をゲットだ……オヤジ殺し、おそるべし。
「お前ぇが、いなけりゃな……」
あ、ごめんごめん、声に出してたよ。
「ねえ、したぼく。これ何よ？」
そこで詠美が何かを発見する。
「げぼくだ」
「げぼくね」
おっちゃんと繭が訂正する。
「……下僕じゃねえっつうの！」
自分で訂正しながらおっちゃんが逆ギレする。
〝下僕〟のことなんだね、と理解しつつ長くなりそうなので、途中で間に入る。
「あーはいはい、訂正はいいから。千鶴姉、おっちゃん、これ配電盤じゃない？」
巨大なパネルには、いくつものスイッチ。電球が点灯しており、機能していることを示していた。全員で、食い入るように配電盤を見つめる。医務室、倉庫、マザーコンピューター、ＨＭ給電所、冷蔵室

……いくつか気になる名前がある。
　部屋数から推測するに、施設自体は小ぶりなようだった。隣にある施設見取り図に興味を移し、場所を確認する。純然たる軍事施設ではないのだろう、兵士の詰め所のようなものは見当たらなかった。
『第四通気口換気扇』のランプが消えているのを、あゆが発見する。
「さっき通ったの、ここかな？」
　そう言ってスイッチに手をやるあゆを、おっちゃんが制止する。
「コラ待てってて。獣どものところに戻れなくなるだろうが」
　凶悪な顔に似合わぬセリフを吐いたりする。
「おじさん？」
　あゆがニコリと笑って、おっちゃんに話し掛ける。
「なんだガキ」
「おじさん……やっぱり、やさしいねっ」
「う……うるせえっ！」
　おっちゃんがそっぽを向く。
　なんてことだ！　あゆはオヤジ好きなのか⁉
　そういや廊下に降りてからずっと、おっちゃんにベッタリだ。
　……あゆ。怪しいオジサンについて行っちゃダメだって、ガッコで習わなかったのか？

618　疑う事、信じる事

「あ、あのっ！」
　その声に、互いの動向に最大の注意を払っていた往人と少年、二人に目を奪われていた晴子、郁未が一斉にその声の主を見た。
　静寂を破ったのは――観鈴だった。
　一斉に反応した全員に、観鈴は驚いたが、言葉を続ける。

「あ、あなたがたは、やる気になってるんですか？」
少し言葉を詰まらせ、手足を震わせながら観鈴は聞いた。
「観鈴！　お前はだまっ――」
「往人さんは黙ってて！」
声を大きくし、観鈴が叫ぶ。
その声は、この島に来てからに来てから――いや、普段の生活でも全くといっていいほど声を荒げない観鈴の大声だった。
――前にも聞いたな、今の観鈴の言葉。
その言葉を聞いた往人は、何故か反論できず、一瞬、そんなことを考えていた。
「どうなんですか？」
もう一度、観鈴が聞く、今度は、ハッキリと。
「え？　あ、うん。一応、やる気にはなってないよ。僕も、横にいる――天沢郁未って人も。君達は、どうなんだい？」
少年は答えた。顔に明らかな戸惑いを見せながら。
当然だろう。
この緊迫した状況で、そんな質問を出来る人間など、そうは居ない。
「私達も、やる気にはなってません」
もう、観鈴は震えてはいない。
凛とした表情と、しっかりした声で観鈴は言い切った。
「だからって！」
再び新たな声、その主は――郁未だ。
「ハイそうですかって、簡単に信用できると思っているの？　お嬢ちゃん」
少年はともかく、郁未からは、観鈴への猜疑の視線が露骨に現れていた。
（まあ……当たり前か）
往人は思う。
誰だってこんなとこじゃ、人を疑ってしまう。

他人を信じられない。信じることが出来ない。
（お袋のときがそうだったな。俺を信用させといて、どっかに行っちまった。思えば、あの時から、俺はこんな性格になっちまったのかもな）
更に、思う。
（だから、俺は心から誰かを信用できない。誰かを信じて、裏切られるのが怖いんだ）
それは、往人の心の中にある悲しみ。
深く、深く、彼に根付いたもの。

そんなことを考えている時、郁未の声が往人を現実に引き戻した。
「大体あなただって、銃を持ちながらそんな事言ったって――」
「なら、これでいいんですか？」

ヒュッ！

その瞬間、その場にいた全員が目を見開いた。
観鈴が持っていたシグ・ザウエルショート９㎜を郁未に投げ渡したのだった。
それは、この状況では最も無謀な行為。
相手に殺してくれと言っているようなものである。
だが観鈴はそれを躊躇いなくやった。
「観鈴！」
ベネリM３を少年と郁未に向けつつ、往人は観鈴に近寄った。
「バカ野郎！　お前、自分が何したかわかっているのか⁉」
往人の大声が周辺に響き渡る。
「ちょっ、ちょい居候！」
近寄った晴子が往人をたしなめるが、そんな言葉は往人の耳には入ってはこなかった。
「さっきもそうだ！　お前一人のせいで、みんな死ぬかもしれないんだぞ！」
観鈴は黙っている。

「大体お前はお人よし過ぎる！　そんなんじゃいまに——」
「往人さん」
観鈴がいきなり往人の言葉を遮り、
「人を信じなきゃ、ダメだよ」
まっすぐに往人の目を見ながら、言葉を続ける。
「往人さんの言ってることは正しいと思う。それが、ここでは当たり前かもしれない。でも、私はそれだけじゃダメだと思う。みんなで生き残るんでしょ？　だったら、そんな風に疑ってばっかりじゃ、誰も仲間に出来ないよ。みんな死ぬのが怖いんだよ、私だって怖い。死にたくないもん。殺しあうのだってそう。本当はみんな弱くて、他人を信用できないだけ、だから殺しあっちゃうんだよ」
急に、往人の体に重みが加わる。観鈴が抱きついてきたのだ。
「だから、もっと信じてみようよ、この人達も、他の人も」
「みすず……」
「みんなで帰ろうよ、あの街に。ね？」
「ああ……」
往人は強く頷く。
往人は、もう少年と郁未を見ていなかった。
その時、少年も戸惑っていた。このゲームであんなことを言える少女に。
（あれが……本当の強さってやつなのかな？……）
ふと、そんなことを思う。
力では決して、得る事の出来ない強さ、それが、観鈴にはあった。
それは少年と郁未に、足元にあるシグ・ザウエルショート９㎜を忘れさせるものだった。
しかし、それに気付いた郁未が銃を拾い上げる。
「やめ——」
「わかってるわよ、もう向こうに敵意がないことぐらい」

いくらかふてくされた様子で郁未は三人を見る。
「ちょっと！　そこの三人！」
何故か機嫌が悪い、郁未であった。

「居候！」
「ん？」
観鈴と抱き合ったままの往人に晴子が声を掛けた。
「どアホ！　いちゃついとる場合か！　前見い！」
「しまっ……」
今の状況を思い出し、慌てて二人の方を向いた。

ベキッ！

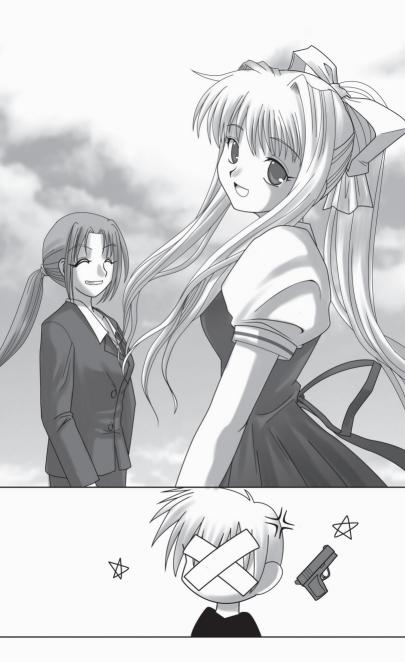
ちょうどタイミングよく、往人の顔に黒い塊が直撃した。
「痛う……くそう！」
往人は痛みをこらえつつ、二人の方にベネリＭ３を構えた。
「アホ、よく見てみい、向こうサン、とっくにやる気はないで、ウチが前見いって言ったのは、投げ返された銃に気をつけろってことを言ったんや」
「なに……」
よく見ると落ちている銃は確かに観鈴が投げた銃だ。
当の二人はというと。
「ひどいですねぇ国崎サン、投降した相手に銃を向けるんですか？」
「ったっく！　イチャイチャしてるからせっかく投げ返してやった銃にあたるのよ！」
とっくに手を挙げていた。
つまり——降参ということである。
「ね、往人さん、向こうも分かってくれたでしょ」
（……なんか……釈然としないな……）
往人にしてみれば、観鈴のぬくもりを感じている間に、気が付くと二人が手を挙げていたのである。

納得しろという方に無理がある。
「とりあえず二人とも手、下げや」
何故か晴子までもが納得していた。
（観鈴のおかげ、か）
結局、そう自分に言い聞かせ、心の中の自問自答を終わらせ、二人に声を掛けた。
「晴子の言う通りだ。とりあえず手、下げていいぞ」

619　漢と乙女の狭間で

（まさかあそこであんなことをしていいらっしゃいますましとは！）
かなり日本語の扱いかたを間違えた七瀬がここにいる。
漢字のテストで満点を取った美少女の言動ではない。……あれは、カンニングしたのだが。
（ええっと彰くんはあれはアレで大丈夫そうだから……。よ、葉子さんの介抱を……。そう。……そう！　私の乙女として怪我人の介抱&手当てを!!）

ポーーーーーーーーー……

「やっぱり綺麗ね……。葉子さんって……」
ベッドに横になっている葉子を見て思わずもれた。
七瀬が目指す乙女とはちょっと違うかもしれないが、なんというか『お嬢様』としての美しさがある。
気品に溢れていると言えばいいのだろうか。女の七瀬でも見とれてしまう。
しかし、あの気の強そうだった女性が可愛い寝顔で横たわっている。
表情は……。傷が痛むのだろうか時々うめく。そして汗を結構……。
七瀬は持ってきていたタオルで葉子の汗をぬぐい始めた。
（なんというか、怪我して動けない女性を献身的に

介抱？　これこそ乙女のなせる技よね！）
上半身をはだけさせて拭くときは、流石にちょ～っとだけ照れる七瀬。
ふとさっきのことが頭をよぎった。
彰君が初音を無理やり押し倒す。
（いや、同意があったみたいだから無理やりじゃないんだけど……。弱い立場の女の子を押し倒すっていうか、悪戯っていうか～それはやっぱりまずいんじゃないかな～。てっ……て……っていうか、なんであんなことしてんのよ！）
彰が初音を強引に押し倒している情景を想像してみる。
（いやそれはそれで嗜虐心がくすぐられる……かな……？）
ちらりと葉子を見る。
ぽーーーーーーーーー……
（はっ!?）
「だめーーーーーーー！」
七瀬、小声で絶叫する。
「ど……どこにこんな乙女がいるのよー!!　ダメダメ！　普通が一番。そうよ……！　普通が一番なのよー！　やっぱーあたしぃー普通の乙女みたいなー！　うわっ、これ超かわいくない？　ちょーかわいいモジャー！」
「ん……ふぁ……」
葉子は暗闇の中を走る。追われているというのに自分には武装のひとつも無い。
「足が止まっているぞぉ」
パァン！
音と同時に足元に着弾した。
驚きでバランスを崩し倒れる。
高槻は、高く、高く笑った。そして、言った。

「服を脱げっ！　ストリップだ！」
「ふ、ふざけないでください！　そんな事」
パァン！
仰向けに体勢を直した葉子。
その顔のすぐ横に着弾。
「――まあ、良い。どうせお前は無力だ。強引に犯して殺すのも一興だ」
高槻が上にかぶさってくる。
葉子が固く目をつむる。

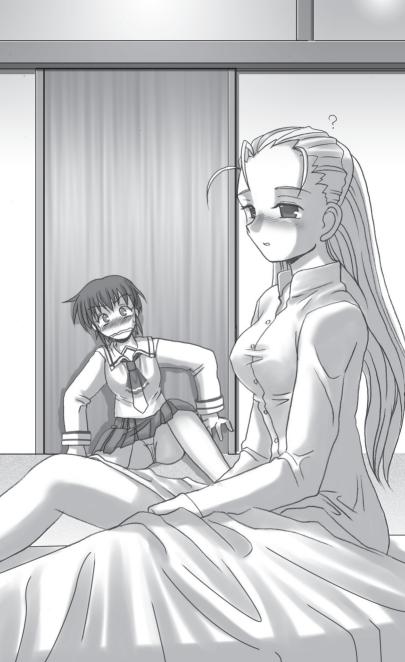
自分の脚をなでまわしてくる男の手。
（あれ？）
サワッ……
（気持ち悪くない……）
ゆっくりと目を開ける。
目の前の男が高槻ではなくなっている。
葉子にも良く分からない。良く分からない『やさしい誰か』に脚を撫でられている。

（なんか良くわかんないけど……。気持ちいい……）

「ん……あ……」
ふきふき……。
「んっ……」
ふきふきふき……。
「あ……あ………」
ふきふきふきふき……。
葉子の脚の汗をふき取る七瀬。
拭くたびにかえって汗が出てきている気がしないでもない。
「葉子さん……。これじゃきりがないわよ……」
「やっ……あ……」
葉子の目が開かれる。
ぽーっとした半開き状態で七瀬を見つめる。頬は赤い。

（！！！？？？！！？！？）
ドタンッドカシャカシャカシャカ!!
七瀬はベッドから勢い良く転げ落ちると、しりもち体勢のまま部屋の入り口まであとずさった。
（絶対違う！　今、絶対乙女じゃないことしてたーーーーー！）
「よよよ葉子さん起きたのね意外と元気が出たみたいだし良かったわねあたし皆に報告してくるね！」
ガチャッバタン！
そこにいたのは元凶っぽい男、七瀬彰。
「あ、な、七瀬くん、お、起きたのねっ！」
リビングルームになだれ込んだ七瀬が言う。
「わ、わ、割と、元気そう、元気そうじゃない？よ、よ、良かったー」
（落ち着けー、落ち着けあたし。落ち着かないと性格が乙女じゃない方向にっ……そう、落ち着くの。落ち着いて冷静さを取り戻すことこそが天上界への扉を開くカギをうんたらかんたら）
「風呂できたわよ」
「うむ……それでは女性達に先に入ってもらうとしよう。念のため複数の方が良い。最初は……晴香君と留美君で入ってくれ。月代たちはあとで三人だ。見張りは俺達がするから。後ろは気にしなくていい」
（え……）
「落ち着けない……」
――「乙女」と「漢」はよく似てる……――
――だがそんな事はどうでもよかった……――

620　僕たちの失敗――花咲く旅路

私が水汲みから戻ってきたとき、ジュンの姿はそこになかった。荷物は山賊に荒らされたかのように、ことごとくひっくり返されてめちゃめちゃにされていて、私が覚えている限りの武器や食料も持ち去られ、ただもずくの山だけが散らばっていた。気がつ

くと私の腕から川で汲んできたペットボトルの容器がどさどさっと落ちて、緩く栓をした一本から流れ出した水が私の足元を濡らしていた。
　靴下の中に入り込んできた水が、どうしようもなく気持ち悪くて、嘔吐しそうになった。
　こうして、私の財産は釘打ち器ともずくとＣＤだけになった。他には何も、誰もなくなってしまった。
　どういうことだろう。手に入れたいと思ったものはいつだって、手の間からこぼれ落ちる水のように消え落ちてしまうだろうか。
　私のような人間は事実を認める事に対してただ臆病で無力だ。そしていつまでもこだわり続けて自滅してしまうのだろうか。いくら考えても答えが出そうになかった。

　だから。

　だから、今、この場限りで欲しい欲しいと指をくわえて身体を震わすことはやめにした。そう思うこともやめにした。
　私がジュンに言ったことを彼はまだ覚えているだろうか。あの時私は大変な思い違いをしていたのだろうと思う。あの麦藁帽子が本当に欲しかったら、谷底に飛び込んでつかみ取ればよかったのだし、本当にヒロユキを求めるのならば、すべてをかなぐり捨てて彼を探せばよかっただけなのだ。
　結局、麦藁帽子は谷底で朽ち果て、ヒロユキは心の底から彼を求めて愛したアカリと一緒に、私がいくら手を伸ばしても届かない場所に旅立った。
　そう、おそらくアカリは手に入れることができたんだと思う。彼女はこの世でたった一つの大切な物を手に入れて死んでいったのだと思う。あの笑顔は本当に自分が手に入れたかった物をつかむことのできた人間しかできない笑顔だった。

　私は現在日本の高校生をやっているけれども、髪

はブロンドで瞳が青いハーフだ。マージナルマンの私が浴びる無数の好奇の視線。その度に嫌な気分を味わい、目を閉じて顔をそむけてきた。相手との距離を計ることばかり考えて、辛い思いをしてきた。
だから私は家を出るとまず自分を薄い膜で覆っていた。その膜は半透明で、誰にも見えない。私にも見えない。ただ、私だけがその存在を感じ取る事ができる。この膜だけが今のところ、私を守るすべてだ。
この膜は、いわれのない悪意や、押し付けがましいだけの善意や、そしてくだらない失敗から守ってくれる。それは文字通りの境界だ。ブロンドの髪と青い瞳を持つ〝ニッポン〟の高校生の私にとってそれがどれだけ役に立ったか分からない。
けれど、ときおりこの膜は縮んだり伸びたりして私を必要以上に大きく見せたり小さく見せたりする。そして様々な形をとって私を翻弄する。だからずいぶん得もしたけど損もした。

もしかしたらこの膜はすべての人が持っているのかもしれない。私には見えないからそれがわからない。もしヒロユキやアカリやジュンがこれを持っていて、そしてもう少し上手な使い方があるのなら、是非とも教えて欲しかった。私にはそれが必要なのだ。
けれど、私の周りには誰もいなかった。

だから、私は走ることにした。
ラジオでヒステリックにがなり立てるユースクエイカーのように、私はジュンの名前を何度も何度も叫びながら走った。足が地面につく度に、水を吸い込んだスニーカーの中がぐちゅぐちゅと不快な音をたてたけど、私は気にしないで走り続けた。草が深くて何度も足を取られそうになったけど、私は走り続けた。
走って叫んでいると、目が堪らなく熱くなって、やっぱり熱いなにかがこみ上げて来て走るのがとて

も辛くなったけど、私は足を止める事をしなかった。
　ジュンを探し出して、私が必死で考えたことを彼に伝えることができたとき、そして彼が私を抱きしめてくれて、頷きながら私の話を聞いてくれたときにはじめて、今まで私の心を捕らえて離さなかったあの麦藁帽子も、きっとまた私の所に還ってくるのだと思う。
　その時私は、本当に求める物を手に入れられるのだろう。

621　北川シリアスモード

「なぁ、北川」
「何だ、相沢」
　突然相沢が声を掛けてきた。
「腹、減らないか」
「そうだな、確かに腹減ったな」
　そう言えばこの島に来てからほとんどもずくしか食っていないような気がする。
「お前何か食べ物持ってないのか？」
「あいにくと持ち物は全て没収されちまった」
「そうか」
　全く縛られているのに食欲が沸くなんてこいつは大物だな。そんなことを考えながらも俺はレミィの事が気になっていた。
　果たして無事なんだろうか？
　殺人鬼が蠢くこの島に彼女を一人にしてしまったことは俺の人生最大の失敗だったと言えるだろう。

　崖の上から降ってきたヤンキー。
　それがレミィ・クリストファー・ヘレン・宮内(通称ガルベス）だった。
　俺の支給品のもずくをむさぼり食われたよなぁ。
(もっとも俺一人では到底食いきれなかっただろうが)
　まぁ、それでも彼女の天真爛漫さに救われていたのは事実だ。

突然殺人ゲームに参加させられて期待して開けた荷物はもずくだった、これでへこまない人間はいないのではないだろうか。
彼女と出会えたことによって少しだけ不安が解消されたことは間違いないことだった。
それからはレミィと一緒に行動していた。
そしていろんな彼女の姿を見てきた。
『おかあさんといっしょ』の事でからかったら泣き出してしまった。あのことは北川潤、一生の不覚であると言える。
婦女子を泣かせてしまうとは男の風上にも置けない行為だった（勿論風下にも置けないがな）。親友が死んでしまったと、彼女が知ったときの事は今でもはっきりと覚えている。
悲しそうな声、悲しい決意をした顔。
そう、あの時からだろう、
彼女のことを意識し始めたのは。
レミィに恋愛感情を抱いているかどうかは正直分からない。
ただ、守りたいと思った。
守ってあげたいと。
俺は香里の事が好きだった。
それでも告白することすら出来ず側にいるだけで満足していた。
でも、香里は死んでしまった。
このクソッたれなゲームに巻き込まれて。
結局俺は香里の事を守ることすら出来なかった。
だからこそ俺はレミィの事を守りたいと思った。
香里を守れなかった分まで。
だが、結局俺は彼女のことを一人にし、俺は相沢と一緒に捕らわれている。今の俺に出来ることと言えば、ただ彼女の無事を祈るだけだ。
なんて無様な。
これじゃ香里の時と同じだ。
俺は心底自分のことを情けなく思った。

「おーい、北川。何ぼーっとしてるんだよ」
「何騒いでるのよ」
「いや、北川の奴があっちの世界に逝ってるから呼び戻してるんだよ」

622　偽善

少し前までは強かった風も、今では弱い。
それに流れていくように、何かの音。
土を掘る音。
木々の向こうに、木の棒を持った二人の男。
三人の女の姿がその向こうに。
そして——死体は彼らの隣に。
「これくらいかな」
そう呟く少年の手に握られているのは、先を尖らせた木の棒。
先端は土にまみれて茶色く染まっている。
「墓と分かれば良いだろう。わざわざ、こだわる必要は無いな」
同じく土にまみれた棒を放り捨てる往人。
額が汗に塗れていた。
少年は、棒を捨てると遺体を抱え上げた。
祐介。その目は既に閉じられている。
続くように、往人が少女の遺体を持った。
大きめの穴が一つ。その中に、下ろす。
寄り添うように眠る二人——
少年は、目を閉じた。
——黙祷。

「——偽善、だな」
少しして、往人の言葉に少年が目を開けた。
「自分が殺した奴の冥福を祈るのか？」
「——」
非難じみた言葉。
——実のところ、己への皮肉でもあった。

人の事は言えない。それは往人自身が分かっている事だ。己の為に——或いは、誰かの為に、何度か人を殺めた。
躊躇った事は無い。
ただ、それでも——
自分が殺した者の姿に。
死に際の、悔恨を残して逝く者の姿に。
——〝情け〟が顔を見せた事があった。
それは、偽善だ。
そんな自分への憤りが、不意に顔を表しただけの事。
八つ当たりに、過ぎない。
「——確かに、偽善かもしれない」
目を開けた時のままの顔で、少年は返す。
「僕が墓を作ったところで彼が喜んでくれるとは思わないよ。それでも、僕は——。何も思わずに殺せるやつには、なりたくないからね」
「………」
そんなものは、エゴだ。そう言い切ってしまう事は出来た。
だが。
往人は、口を開かなかった。
開くことが、できなかった。
少年は、墓の横でしゃがみ込むと、祐介の手を握る。
少し離れてしまった、二人の手を、繋ぎ直す。
——その時。
何となく、祐介の顔が、笑ったように見えた。
「これからどうするかでも決めておくか？」
近くに置いたベネリM３を拾い上げながら、往人。
「五人も居るんだ。何か出来る事くらいあるんじゃないのか」
「——そうだね」
偽典を拾い上げ、少年が返す。
その足で三人の居る所に向かった。

——途中、振り向く。
「さっき、君は」
　往人も足を止めた。
「僕が目を閉じている間に——目を、閉じていたのかい？」
「——」
　数秒、沈黙。
　止めていた足を動かした。
　答えは、無い。

623　心の傷の行く先は

　昼間っから、風呂など頂いてみたりする。風呂上がりにはキンキンに冷えたビールが最高っ！　……じゃないわ。乙女なわたしにはフルーツ牛乳あたりがお似合い。
　こんなささやかな娯楽でも、この島では最高の贅沢なのかもしれない。ドラム缶を湯船に使っているので、なかなかに恐ろしいのが珠に瑕だけど。
　この島に来て以来……いや、瑞佳が倒れて以来、これほど安心できたことは無かったと思う。鼻歌なんか歌いながら、あたしは薄汚れた愛用の制服をたたみ、タオルを服代わりに裸足でぺたぺたと歩く。小さな手ぬぐいで、可能な限り汚れを落とし、短くなった髪を洗う。
　いよいよ湯船を攻略よ、と気合を入れて立ち上がり、おろした髪を上のほうに無造作に束ね……
　……束ねようとした手が、空を切る。
　そうだ。今では、お風呂に入るたびに髪を上げる必要もない。洗ったばかりでありながら、自分の〝変化〟を忘れている。けれど、忘れていた〝変化〟を思い出せば、喪失感が身を包む。
　ためいき、ひとつ。
　……そんなちょっとした喪失感は、実際失ったものと比べれば微々たるものなんだけど。

足の指先で、ちょっと行儀悪く具合を確かめて、すとんと湯につかる。暖かさが、疲れた身体に染み入り、思わず、はあっと息をつく。

そのとき、お隣さんから声がかかった。ようやく口を開いたな、と思った。

「ねえ、七瀬」

特に何の感動もなく、黙々と作業を進め、先に湯船に到達していた晴香。無表情に何かを考えていたのは、解っていたから。

「……なあに？」

だから誘うように、意思を込めずに促してみる。

「あたし……ここを離れようと思うの」

「え……」

ざば、と音を立てて、晴香は湯船から上がる。珍しく視線を合わせず、迷いもあらわに晴香は呟いていた。

――ここを離れる？　それは、蝉丸さんや耕一さんたちの庇護の下から離れる、ということだ。それほどの危険を冒して、一体どうしようというのか。

「潜水艦。……あなた、信じてるんでしょう？」

息が止まる。

だから無理をして、大きく息を吸い、そして吐く。

あの高槻という最低な、そして極めて憐れな人間の、最期の言葉――の、ひとつ前。

『潜水艦が、この島の付近の何処かにある筈だ。それを、捜せ』

その言葉を、思い出してみる。

ええ。

あたしは、信じている。

だから、晴香の目を真っ直ぐ見て、答える事ができる。

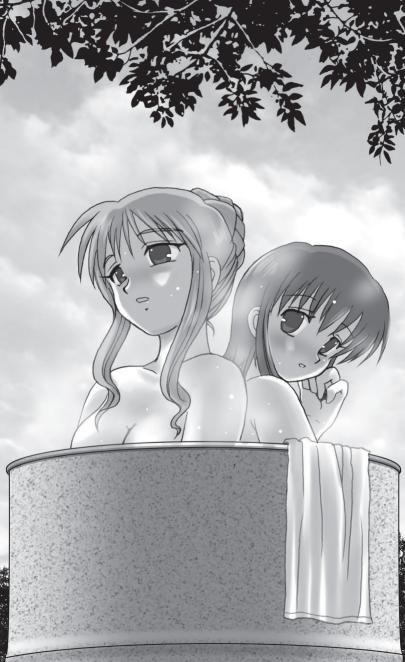
「信じて、いるわ」

しかし返ってきたのは、意外な答だった。

「あたしはね……信じていない」

「……」

だったら、何故？
その疑問を、慌てて飲み込む。今は晴香の言葉を待つべきだ。
「あたしの……人生は。あたしの人生は、高槻という男ひとりに踏みにじられたようなものだから。ここに来る前も。ここに来てからだって、そうよ」
悲しみと怒りが、複雑に交じり合った、暗い感情がくすぶっている。
「あたし自身の純潔。ここで出会った仲間。ここに来る前からの仲間。あたしは高槻のために、たくさんのものを失っているのよ」
ああ……なんということだろう。
最初の放送から、何かの因縁があるだろうということは解っていた。
――しかし、ここまでとは。
あたしはしばらく言葉もなく、ただ晴香の告白を聞いているだけだった。ようやく言葉が切れて、あたし達は目を合わせる。

「だったら、何故？」
溜めていた言葉を放つ。ちょっとした間があいて、返ってきた答は、これまた意外だった。
「七瀬……あなたを、信じているのよ」
晴香は照れ臭そうに、そっぽを向いて誰に言うともなく、さらりと風に流した。
――全て、解った。
高槻や主催者への憎しみも。蝉丸さんや耕一たちと、あまり話さないのも。少しはましとは言え、他の女の子達と話したがらないのも。
心の傷の……全てが、見えた気がした。
眩暈がする。長湯をしすぎたかもしれない。そんな関係のないことを思いながら、あたしも湯船からあがり、返答を待つ。
晴香の隣までぺたぺたと歩いた。
「……解った。一緒に、行こう」
手をさしのべると、晴香がそれをガッチリ掴んで言う。

「七瀬……ありがと」
なんだか湿っぽいな、そう思ったから。
あたしは、にっこり笑って付け加えた。
「これで貸し借りなし、よ？」
たぶん、余計な一言だったけど。
……二人笑えたから、それでいいじゃない？

癒えない傷など、ありはしないのだから。
今はこれで、いいじゃない？

624　奴

「あ、長瀬様」
管制室に入った途端に、兵士たちの声と視線が俺に集中する。軽い目配せでそれに応え、部屋の中央に用意された椅子に深く腰掛ける。正面を向くと、目に入ってくるものは、モニター越しの島の風景。
森、草原、住宅地。川に海、時折参加者。時折死体。
そう、ここは監視施設。
この島全体に設置された無数の監視カメラの映像を、全て映し出している唯一の場所。
……全く。よくもまあ、これだけのものをわざわざ用意したものだ。改めてそう、思う。
自分も含め、本当に我々は気狂いの集まりなのだ、とも。
下に降りて来て、その思いはいっそう強くなった、とも。

俺が下に降りてきた理由は、「体内爆弾を爆破させることはもうないのだから、参加者どもの反乱で減った兵士の分を手伝ってやってくれ」といったもの。
勿論それは単なる建前で、実際のところは、御老にしつこく反抗した俺や源一郎の存在そのものが疎ましかったのだろう。

手元に置いておいては、いつ反乱を起こすか分かったもんじゃない、と思ったのかもしれん。御老にとっては、俺はこの地上で参加者の反乱にでも巻き込まれて犬死にするのが理想的、というワケか。
いいさ。罰は受けてしかるべきだ。俺たちはそれだけのことをした。ただ単に俺が少し早くそれを受けるだけの話。

そして俺は、再びモニターと向かい合う。参加者に反乱の兆候はないか。今この瞬間にどこかで戦闘が起こっていないか。今この瞬間、誰かが息絶えてはいないか。
そう。俺の仕事は、殺し合いの様子をじっと見守ること。これ以上無い、世界一悪趣味な仕事だ。
その殺し合いに、彰も、祐介も、加わっているのだ。
もし彰や祐介が、名も知れぬ誰かに殺される姿を見たら、その時、俺はどう思うだろうか？
そいつを憎むだろうか？　殺してやろう、と思うだろうか？
憎まれるべきなのも、殺されるべきなのも、俺であるはずなのに。

……そして、『その時』は、来た。

島中に設置された集音マイクは耳ざとくその音を掴み取ったし、島中に設置された監視カメラは目ざとくその姿を映し出していた。
それを認識したその瞬間、俺の中の世界は歪んだ。モニターを凝視することなど、出来る筈もなかった。
とても立っていられない。倒れるように椅子に腰掛ける。視線が定まらない。蛍光灯がぼんやりと揺れている。

だが、その瞬間まで、俺の眼は悲しいくらいに、

正常だった。
六十四番、長瀬祐介は、確かに、命を落とした。

「また死んだか、やれやれ、醜いもんだねえ」
声。
「これであと何人だっけか？　……二十三……いや、二十二人か？」
知っている、他人の声。
「全くよぉ、早く終わらないもんかねえ」
同じ部屋にいる、兵隊二人の声。
「まあ、最初の四分の一程度まで減ったんだ。もう少し、ってとこだろ」
名前は知らないし、知りたくもない。
「それはそうと……美味いなこのコーヒー」
……それは、俺が自分のために淹れたコーヒーだ。お前らに飲ますためのものじゃない。
「確かに、こりゃ美味い」
下品な音をたてて、兵隊どもが俺のコーヒーを口につける。
……そうか。美味いか。
当然だ。俺の淹れたコーヒーなのだから。

いつからだったろうか？
ひょっこりと遊びに来た祐介が、俺の淹れたコーヒーを「苦い」と言わず、「美味しい」と言ってくれるようになったのは。
「やっぱり、いつ来てもここのコーヒーは美味しいです」
そう言って穏やかに微笑む祐介は、もう、居ない。

祐介と彰がこのゲームに参加することに対し反発したのは、俺と源一郎だけだった。
他の長瀬共は、「これも運命だ、諦めろ」などと、理解不能な事を平然と言ってのけた。
納得できる筈もない。俺たちは執拗に、執拗に抗議し続けた。

そして、そんな俺たちに対して他の長瀬共が取った手段は、『説得』という名の『脅迫』だった。
誰だって自分の命は惜しい。
かといって、俺たちが犠牲になれば彰や祐介が助かる、というわけでもない。殺され損。
俺たちは、折れるしか無かった。二人の腹には起爆装置を設置しない。
それだけが、俺たちの抗議の成果だった。

そして、彰は重傷を負い、祐介は、死んだ。

誰が悪い？　と訊かれれば、俺が悪い。
すべては、俺の力が足りなかったせいなのだから。
だが。
納得できるか、と言われれば、別だ。
今から俺が起こす行動は、間違いなく間違った行動であり、エゴ以外の何ものでもない。

結果的に、この島が、そして俺が祐介を殺したというのは、疑いようも無い事実なのだから。
結局はこうなるだろう、という諦めのようなものも、確かに抱いていた。
だが、それでも。
俺は……

防弾チョッキを着込み、拳銃に手を伸ばす。手に取ったそれは、想像していたよりも重く。
これならば人を殺せる、という実感のようなものがじわじわと湧き上がってくる。
「長瀬様、どちらへ——」
兵士がひとり、駆け寄ってくる。
……そうだな。
決行するにあたって、俺もひとつ決意を固める必要がある。
戻りたくても、戻れなくなるように。
おもむろに、銃口を駆け寄ってきた奴に向け、身

構えられる前に、引鉄を引く。
思っていたよりも軽い音がして、思っていたよりも強い反動があって、思っていたよりもあっけなく、その兵士は額に穴を開けて死んだ。
「な、なにを――！」
もう一人の兵士が叫び、腰に提げた銃を構えようとする、その前にそいつにも銃弾をプレゼントする。
呆気なかった。
呆気なく、この部屋で動く生物は俺だけになり、呆気なく俺は後には引けなくなった。

なぜかたまらなく可笑しくなり、口元が歪んだ。

振り返り、山のように並べられたモニターの中、そのひとつを見る。
決して映りの良いとは言えないその画面の中には、一軒の民家。
複数人が輪となって協力態勢を作り、今はそこで暫しの休息を取っている。
……その中に、彰もいる。
どうやら、あいつはこの島で死ぬより大切なものを見つけたようだ。
見た目は兎も角、信頼出来る仲間もいるようだ。きっと、心配ない。そう思わないと、俺はここから一歩も動けない。
俺のすることが終わったその後に、運良く俺が、そして彰も生き長らえているようなら……そうだな、脱出の手伝いでもしてやるか。
どうせ俺は遅かれ早かれ消される。そのくらいの罪の上塗り、屁でもない。
とは言っても、結局彰には信用されず、殺されるかもしれないな。それでも、仕方ない。間違いなく俺は罪人であり、彰や、このゲームに参加してしまった者たちは、そんな俺を裁く権利がある。

もうひとつ、モニターをチェックする。

映っているのは、五人の参加者の姿。
もしかしたら、仲間割れを起こして、互いに殺しあうかもしれない。
だが、奴だけには死なれてもらっては困る。
奴は——俺が、殺す。
長瀬であること。監視者であること。どうでもいい。
この扉を出たその瞬間から、俺もまた、このゲームの参加者の一人になるのだから。
そして、今俺の頭の中にあるビジョンはひとつ。
奴が苦しみ、のた打ち回り、助けを請いながらも哀れに死んでいく、その姿のみ。
それさえ見ることが出来れば、俺のこの人生など、いつ終わっても構わない。
奴にも、祐介と同じ苦しみを味あわせてやる。
さあ、行こう。
奴の未来を、奪いに。

監視所の重い扉を開く。
そこから先は、血に塗れた戦場。
——もし彰や祐介が、名も知れぬ誰かに殺される姿を見たら、その時、俺はどう思うだろうか？
——そいつを憎むだろうか？　殺してやろう、と思うだろうか？
——憎まれるべきなのも、殺されるべきなのも、俺であるはずなのに。
殺した奴を許すことなど、できるはずもなかった。
身体じゅうが熱く煮えたぎっているようで、細胞の一つ一つが、奴を殺せ、奴を殺せと命令する。
奴——そう、名前のない、『少年』の姿を。
しっかりと、この眼に焼き付けて。
俺は、戦場へと、その足を踏み入れた。

625　サミット

「……で？　これからどうするんだ？」
「決まっている。爺とガキと女だけで敵の本陣に突入なんて無茶だ。後を追うしかねぇだろ」
「同感だ。紳士として婦女子や老人をいたわるのは当然だ」
「なるほど……。おい、新入り、お前はどうだ？」
「……興味無い」
「何だと？　テメェ真面目にやる気あんのか⁉」
「おい、よせよ。こんなところで仲間割れか⁉」
「争いはやめたまえ。新入り君、君は協調性という言葉を知らんのかね？」
「……知っている、一応は……」
「ほう、なら何故そんなに消極的なのだね？　我々は仲間だろう？」
「……みんな、知らないんだよ……仲間なんて……本当は……薄っぺらい関係なんだ」
「……」
「……」
「……」
「まぁ、何があったか知らねぇが、残りたけりゃ残ればいい。俺は行くぜ」
「俺も行くぜ。なぁ鳥、ちょっと手ェ貸してくれねぇか？　登るのは得意なんだが、降りるのはどうも苦手でな……」
「いいでしょう。我々は仲間だ、助け合うのは当然。手はないですが足なら……」
「いでででっ！　爪立てるなよ！」
「おっと、失礼……」
「じゃあな新入り、お留守番ヨロシクな」
「……」
毛糸玉と猫と鳥は深い闇へと吸い込まれていった。
一人、残された白い蛇はそれをただ、じっと見つめていた。

626　朱　――AKA――

重い沈黙が辺りをずっと支配していた。
その場の五人は腰を下ろしたまま、先程から一言も発していない。
沈黙は金なり、という言葉があった気がする。黙っているだけで金になるのなら、今頃俺たちはウッハウハだな。
ラーメンセットも食い放題だ。セットのライスをチャーハンに替えるという贅沢も思いのまま。
などと諺を曲解しながらも、国崎往人は目の前の二人からは視線を逸らさない。
いや、逸らせなかった。
先程、二つの死体を弔いたいという少年の申し出があった。
往人はそれを断ろうとしたのだが、横に座っている少女――神尾観鈴のお願いにより、渋々同意する羽目になった。
往人は思う。
観鈴は純粋過ぎる。この世の中に悪意が溢れていることを知らない、いや信じられない。
それは、吐き気がする程に悪意が渦巻くこの馬鹿げたゲームの中でも揺らぐことはなかった。
それが、彼女の長所だとしても。今は、命を落としかねない短所になってしまっている。
彼女を守り、生き残る。願わくば、その純粋さを失わないままで。
――では、今はどうすればいい？
ラーメンセットの妄想に、腹の虫が鳴る。
それに反応してか、観鈴が、にははと笑った。
頬を朱に染めながらも国崎往人は考える。
――生き残るために、最善の方法を。
「観鈴」
沈黙を破ったのは、往人だった。

「なに、往人さん」
「ラーメンセット、ひとつ」
心なし嬉しそうに話す観鈴に、往人はそう注文する。
「え……？」
「しかも大盛りだ。早く頼む」
ぽかん、と口を開ける観鈴。
「うー……でも、材料も道具もここにない」
観鈴は困ったように唸る。
「ならば出前だ。晴子、西来軒でも昇竜軒でも波動軒でもいいぞ。さっそく頼んでくれ」
「頼めるか、アホ」
あっさりツッコミが返ってきた。
両腕の傷が痛むだろうに、その辺のお約束はきちんと守ってくれている。芸人の鑑だ。
往人は、やれやれとため息を吐きながら言った。
「ならば仕方ない。観鈴、晴子。食事に行くぞ」
『……え？』

晴子、観鈴だけではない。その場にいた少年、郁未も声を上げた。
「どういうつもりだい？」
少年が尋ねる。
「どうもこうも無い。腹が減ったから飯を食いに行くだけだ」
その言葉の真意を理解したのか、少年はしばし考えてからこう言った。
「わかった。じゃあ、僕たちはここにいるよ。今は食欲があまり無いんだ」
その言葉に、往人は少し眉を顰めたが、ぶっきらぼうに返した。
「そうか、すまないな」
そのやりとりを見ていた晴子が、じゃ、決まったなとばかりに立ち上がる。
「観鈴、行こ。ウチの腕の怪我もどっかでちゃんと診ないとあかんし」
「う、うん。……じゃあ、また後で」

観鈴は立ち上がると、ぺこりと頭を下げる。
「じゃ、居候。先にいっとるで」
「ああ、ラーメンセット、用意しておいてくれ」
吐き気がするような白々しい台詞の応酬に、顔を歪めながら往人は言う。
それでも、晴子と観鈴が一定の距離を取るまでは、少年たちからは目を離さなかった。
「そういうわけだ」
往人は目の前の二人を見据えたまま、ゆっくりと立ち上がる。
「悪いが、俺たちは別行動を取らせてもらう」
「そうか、残念だよ」
往人の言葉に、少年はわずかながらに微笑んで言った。
「下手な言い訳だったね。僕たちがついて行く、って言ったらどうしたの？」
数瞬の沈黙。そして、往人はぶっきらぼうに返す。
「結果オーライだ」
少年は立ち上がると、ゆっくりと往人の方へ歩み寄る。
後ろの郁未は、ただその様子を見守るだけだ。
往人も、こちらへ来る少年をじっと見つめたままで動かない。
そして、少年は往人の前まで来ると、すっ……と右手を差し出し、こう言った。
「再会を願って。……待っているから」
往人は冷ややかな目で少年を見る。
「握手ぐらい、いいだろ？　君は借りをつくったんだからさ」
微笑んでいう少年に、往人はしばしその手を見つめる。
やがて、自分も右手を差し出すと、その手を軽く握る。
「本音を言うと、もう会いたくない」
握手をしたまま、往人は言った。
「もし再び会った時に、また死体が転がってたら」

その言葉の続きを察しても、それでも少年は微笑んだままだ。
「――今後こそ、お前を殺さないといけなくなる」
――その瞬間。往人の視界に入ったものは。
腹を押さえる少年。
そして、鮮血の朱。
『だから、もっと信じてみようよ、この人達も、他の人も』
そうだったのかもしれないな。観鈴。
……もし、信じることで全てが上手く行くのなら、俺は信じ抜いてやるよ。
例え、その格好がどんなに無様だったとしてもだ。
――だが、今はだめだ。
何故かって？
この肩に食い込んだ弾丸。この激痛に耐え、生き延びないといけないからな。

これで、いい。
少年が軽く吹き飛び、往人が肩を押さえうずくまる様子を、フランク長瀬は満足そうに眺めていた。
先程まで構えていた狙撃銃を辺りに放置し、傍に置いてあったリュックを拾い上げる。
あの偽典とかいう、謎の反射兵器を腹に仕込んでいたか。
フランクは、少年たちの居る場所からやや離れた茂みから、狙撃銃で弾丸を一発放った。
それは寸分違わず少年の腹部を襲い――がいん、という大きな音と共に兆弾する。
――次の瞬間、弾丸は往人の肩に喰らい付き、鮮血を飛び散らせた。
これでも、いい。

反射兵器を腹に仕込んでなければ、奴はそのまま悶え死んだだろう。
そのときは、この狙撃銃で五体全てを射抜き、苦痛にのた打ち回りながら死ぬ姿をゆっくり眺めるつもりだった。

だが、この状況ならば。
先程去った女たちが騒ぎを聞きつけて戻ったとき、女たちはどう思うだろうか？
そして、肩を撃たれた男は？
仲間割れでも、いい。――奴が傷つき、力尽きていく様が見れるのならば。
ようは、最後の止めが刺せればいいのだ。
奴に絶望と恐怖をプレゼントできれば――それで、いい。
フランクは注意深く立ち上がると、リュックを背負う。

その瞳には、朱が宿っていた。――復讐に燃える朱が。

627 クリムゾンレッド

――アンッ

遠くから、そんな音。
刹那。少年の身体に、衝撃。
押し出されるように、息が飛び出す。意味の成さない声。
全身が弾け飛びそうになる。強烈な打撃。なまじ、貫通した方がいいくらいだ！
撃たれた。誰かに、〝遠くから〟。
弾き飛ばされた弾丸は、目の前に居た住人の肩に食らいついた。コンマ数秒の出来事。いや、それにも満たない程の。
愕然とした顔。何故、とその目は言っている。

違う。違うんだ。僕達は銃を持ってない。
君を撃ったのは僕達じゃない！
答えたい。
……答えられない。
頭を地面に打ち付けられる。再び浮遊感。次に顔を打ち付けられた。
抗いようの無い浮遊感。そしてそれも終わる。
何故——何故。誰が。どうしてこんな時に！

——どくっ

嗚呼。まずい、〝来た〟のか？　なんて最悪な。
参ったな、本当に。
頼む。郁ミ。

——どくん

頼ム、今は。ニげてくれ——逃げてくれ！

まずイこトになリソうなンダ。いや、なる！
だから。

けど、声は出なかった。

ガキィンッ！
「ごぉっ‼」
「……っ！」
遠くから聞こえてくる、銃声。
甲高い音。何かの弾ける音。苦悶の声。鮮血。
風。
郁未の横を何かが通り過ぎる。
目の前にあった筈の少年の姿が消えている。
一瞬の間。
咄嗟に振り向くと、少年の身体が人形のように転がっていくシーンが見えた。
……は？　何で、あなたがいきなり転がってんの

よ。
二転三転。止まる。
――起き上がっては、こない。
幻でも見ていたかのような顔だった郁未が、無意識のように立ち上がる。
包丁を握り。泥塗れで、うつ伏せに倒れ伏したままの少年に駆け寄った。
「だっ――大、丈夫？」
三秒。
さらに五秒。
返事無し。
瞬間。郁未は、心臓をきつく締め上げられるような感覚に襲われた。
何。え？　まさか――死んでる？
余裕のありそうな顔で。いつもの顔で、返事を返さない少年。
それは、郁未にはあまりにも非現実的過ぎる。
ごく、僅かに残った平静さが、少年の身体を地面に転がす。反転させた。
目が、閉じていた。
咄嗟に、少年の口に耳を近づけた。押し当てたかもしれない。
――。
ようやく捉えたのは呼吸音。ひゅうぅ、と風が漏れたかのようなか細い息。
それでも、生きている。郁未は、僅かばかりに安堵する。
腹部を見やる。両手が当てられている。
無理矢理それを剥がすと、服に円形の穴が空いているのが見えた。
穴の縁が、焼けたように黒い。弾痕には違いない。だが、本当ならそこから出ている筈の血は流れていない。
服を引き剥がす。人目など気にしない。こんな状況に道徳を持ってきてる場合か？
それで、そこにあったものは。

「……紙」
腹部を覆うように、何枚かの紙が糸か何かの植物の茎で括り付けられている。
こんなもの、いつの間にやったのか？
ともあれ、その糸のようなものを包丁で切り取った。
へこんだ紙。汗でへばり付いているらしい。
剥がすように取り除いた。少年が、痛みで呻く。
――痣。
大きな痣。真ん中の辺りを中心として、赤黒い色に変色している。痛々しさに、目を背けそうになった。
しかし。なるほど。どういう原理か、この紙のお陰で弾丸は通らなかったらしい――
――弾丸？
銃。
そうだ、撃たれた。誰に？
――。

なるほど。
めくり上げた少年の服を、戻す。郁未が、ゆらりと、立ち上がる。
血の臭い。
振り向く。先程歩いていった筈の晴子と観鈴の姿。
往人を囲むように。
晴子。ベネリM３を両手に。
観鈴。シグ・ザウエルショート９㎜を。そして、往人の右肩がべっとりと血に塗れている。
全ての銃口は自分達に。――だが、観鈴だけは、震えていた。
晴子と、往人。傷の痛みか、怒りからか――仕留め損ねたからか。忌々しい表情を浮かべている。
確信。
平静を欠いた彼女の心理。平静を欠いた状況。
導かれる、最低最悪の予想。
〝裏切り〟。
「あんたが――」

殺気が走る。紫電を放ちかねぬ程に。風が起こりかねぬ程に。
血が巡る……巡る。
「あんたらが、撃ったのね――？　最っ低……最初からっ、このつもりで……!!」
歪んだ。
どうも、少年の願いは届きそうにない。

628　Pain

閉めきられた小屋の中、些細なことで熱くなった熱気も相まって、室温は異常に上昇していた。
「まったく……暑いわね～……ふぅ～……」
結花が服の胸元をパタパタと扇ぐ。
「……（じぃー）」
「……（じぃー）」
「コラ、そこの男二人！　見るなぁっ！」
その胸元へ注がれる視線に気づいてそこを手で覆い隠す。実際は特に何が見えたわけでもなかったが。
お世辞にも、結花の胸は扇いだ程度で覗ける程豊かとはいえない。
「頼む……水をくれ……」
記憶を失ってるので正確には分からないが、かなりの間水分補給をしていない気がする。
祐一が覚えている限りでも、かなりハードに動いていたわけで。喉の渇きは頂点に達していた。
「仕方ないわね。はい……と言っても北川君、あなたのだけどね。一応武器は抜いてあるから」
祐一と北川の前に軽くなった鞄を放り投げながら、結花自身もまた自分の分の水分を補給する。
「お、サンキュ」
北川が鞄から自分の分のペットボトルの封を開けると一気にラッパ飲みでそれを飲み干す。
本来はそんなことをしている余裕などないのだが、体は正直だった。
「なあ、北川、ガサツ女、ちょっといいか？」

「なんだ、相沢？」
「誰がガサツよ……」
「俺に、どうやって飲め……というのだ……」
祐一は、手を縛られている。
「ヨガの使い手でもない限りこの態勢で水を摂取することなど不可能だ」
「仕方ないなぁ……口を開けて上を向け！　相沢！」
「へっ!?　いや、俺が言いたいのはいいかげん縄を解いて欲しいってことなんだがって……ガボッゴボッ！」
「覚悟、相沢っ!!」
そう言いながらも律儀に上を向いて口を開いたのが運の尽きだった。
開け放たれた口に容赦なく注がれる水の雨。
「ゴボッ……ゴボッ……ゲボッ……（北川……やめでぐれ～）」
口から、目から、鼻から、水が溢れては祐一の体に染み込んでいく。
「あんたたちってバカよね……」
「ああ、そうだ……結花、さん？」
「なによ？」
「その……さっき見てた本を見せてくれないか？」
北川が、空になったペットボトルで肩を叩きながら、そう切り出した。
「本って……参加者名簿のこと？」
「この状況でラブリーな恋愛小説が見たいとでも思うか？」
「あんたならやりかねないけど……まあ、いいか」
ポン……と北川に投げられる名簿。
先の飲料水の時もそうだったが、結花はまだ決して無防備に二人に近付く、ということはしなかった。
（それって、悲しいこと……だよな）
祐一は思う。
（少なくとも俺は、あいつ、いや、この三人の少女

達を信用できなかった）
　いきなり気が付いたら縛られていて……他に危害を加えられてない（軽く殴られたが）とはいえ、信用しろ、という方が無理な話だ。
　だけど――
「おい、北川……」
「なんだ、相沢」
　結花に聞こえないような小さな声。
　だから、北川もまた同じようにそう返す。
「できたら、あいつらを信じてやりたい……って思うのはやっぱりこの島じゃ甘い考えなのかな……」
　悲しみを胸にしまって。ただ生きる為に殺す、ではなく、みんなで生きて帰ろうと前に進みはじめた少女達を。
「できたら……信じてあげたいと、思ってる」
　記憶を呼び戻したら、そんなことは言っていられなくなるのかもしれない。だけど――
「……」
「やっぱ、甘いか？」
　結花から渡された本を開きながら、
「さあな……甘いといっちゃ甘いけどな。……だけど、人間として間違っちゃいないと思うぜ」
「……サンキュ」
「だけど、この状況は、打破しないとな」
　この、捕まっているといっても過言ではない状況を。
　パラパラと本をめくる。
「ああ、こいつだ……」
　一つのページで北川の指が止まる。
「何？」
「俺達を襲った男だよ。……ほんとにいきなり襲いかかってきやがった。長瀬祐介か……特殊能力が電波？　何だそりゃ？　頭が電波ってことか？」
　祐一と結花に、その顔写真を見せびらかす。
　本当にどこにでもいるような一介の男子高校生といった風貌だった。

「長瀬、ねぇ……」
　ここには結花しかいなかったが、芹香やスフィーがいればまた違った反応があったかもしれない。
　それは、今の祐一達には分からないことだった。
「まあ、いいか……。とりあえずそいつは要注意人物ってことね」
「そうなるな……（これでよしっ、っと……）おい、相沢！　お前も見ておけよ。……何か思い出すかもしれないだろ？」
　全員の死角になっているところで何かをしながら、北川は祐一に本を渡す。
「……ああ」
　あまり気が進まない風に本を受け取る。
「あのさ、一応私たちの本なんだから足でページめくらないでよね……」
「仕方ないだろ、縛られてるんだからさ……そろそろ解いてくれよ……」
「……」

　肯定も否定も。それに対する返事はなかった。
　ア行――一ページ目に自分の名前があった。一番相沢祐一。
（この名前に引かれた赤線は、死んだってことなんだろうか……）
　自分と、五番天野美汐の間に載っている、眼鏡の女、そしてその次の母子の内、母と思われる女性の名前には赤線が引かれていた。
　それが死人だとすると、ア行にはずらりと死人が並ぶ。
　自分や結花を含めて五人。それ以外の名前に引かれた赤線の意味を想像して、軽く眩暈がした。
　カ行――カ行の人間は多かった。
　生き残りも多ければまた、犠牲者も……
　ある二つの名前で、祐一の手が止まる。
「どうした、相沢……？　何か思い出したか？」

「分からん……この親子の顔を見てると……何故か心が騒ぐんだ……知らない奴なのにな」
「神尾晴子と神尾観鈴か……お前の記憶を取り戻す鍵かもな」
「いや、そんなんじゃなくて……いや、なんでもない」
漠然と胸に込み上げる嫌悪感を振り払って祐一は再び次のページに目を通す。
（舞……佐祐理さん……）
舞と佐祐理の――赤線の引かれた名前を見つける。
舞達は結花らと一緒に行動していた……という。
（もしかしたら……あいつらが途中で佐祐理さんや舞を……）
どす黒い思いが祐一の頭の中をよぎる。
（いや、そんなはずない……よな？　……こんなことばかり考えてたらいつか俺が壊れちまう……）
その二人に引かれた赤線は異様によれていた。
（さっき、できたら信じてあげたい……と決めたじゃないか……たぶん、彼女達はこの線を引くのをためらったに違いない。第一そんなことする奴等なら俺達は今、ここで生きてるはずがない）
利用する為……という可能性だってあるにはあるが……無理矢理そう思い込む。
張り裂けそうな悲しみを振り払って次のページをめくろうとした祐一の手が再び止まる。
「どう……した……？」
そのページに倉田佐祐理の名があることを考慮してか、今度は幾分遠慮がちに北川が訊ねてくる。
「……こいつ……知ってるか？」
低い声。
倉田佐祐理よりも二つ程前、男子三十三番、国崎往人の顔を指差しながら祐一が呟いた。
「知ってるのか？」
「いや、知らん」
「おいおい……」

「だが、記憶を失う前の俺は知っていたのかもしれない……」
その男の目を見ているだけで浮かび上がってくる奇妙な、だけど確かに込み上げてくる激情。
(なんで俺はこんなことを考えている……？　これって……憎悪……なのか？)
よく分からない。力無く、祐一が首を振った。
北川と、祐介に殴られた傷が痛む。
「なんだか……気分が悪い……な」
この島に来て、いや、この島で覚えている限りでは今までで一番激しい頭痛が祐一を襲う。
(この本すべてに目を通してしまったら……俺は本当に壊れてしまうんじゃないだろうか……)
たとえようのない漠然とした不安が祐一の全身を包み込んでいく。
「大丈夫か？」
「ああ……心配かけてすまない……」
「国崎往人……ねぇ……あんた達からその名前が出るなんて意外だったわ……」
「……お前は知ってるのか？」
「いや、知らない」
「おいおい……」
再度、北川が同じ台詞を吐く。
「いろいろあってね。今そいつ探してるのよ」
「いろいろ？」
「分かんないけど。その写真だけで芹香さんのハートをゲッチュした人……かな？」
「ゲッチュて……」
「そいつ、危険なの？」
「分からない……」
祐一が頭を再び横に振った。
「あんた分からないばっかりねぇ……頼りになんないなぁ……」
確かに、祐一はここ最近頭を縦に振った記憶がない。
「頼りにしようと思うなら、せめてこの待遇を改善

してくれ」
「……悪いわね。悪気はないんだけど……もう、私の大切な友達を失いたくはないのよ。……分かって」
「……まあ、とにかくこいつも危険そう……だよな……特殊能力は法術？　なんかの儀式みたいなもんか？」
その話題を逸らすかのように、明るく北川が言った。
「そいつ悪そうだから、私はあまりそいつを探すのは賛成してないんだけどね。あんた達みたいに素直に捕まるようなマヌケには見えないし」
「ほっとけ！　っつーかそいつもまた縛るつもりなのか？」
「信用できないから……ね。私だけならともかく、スフィーや芹香さんまで危険な目にあわせたくないし。もう、仲間を失うのは……たくさんなの」
「……」
北川の話題を逸らそうという意図は、果たせなかった。
つまり、祐一と北川のこの処遇はすべて結花の独断で取り決めたこと……という話。
（……まあ、気持ちは分かるけど……な）
「最初は、違ったのよ。最初の頃の私はそんなんじゃなかった。最初から……初対面の人を疑ってかかるなんて……してなかった。だけど今は——私ももしかしたら……もう狂ってしまってるのかもしれないね」
それに対する男二人の答えはなかった。
四十番坂神蝉丸——
長いカ行を終え、サ行へと目を通す。
（……）
真琴までは知らない名前が続く。
さっと読み飛ばす——はずだった。
（……四十三ば……ん……里村……あか……）
パタッ!!　乱暴に足で本を閉じる。

「どうした相沢⁉　もういいのか？」
「……ああ……」
全身から冷や汗が滲み出る。
黙っていても気だるい暑さだというのに、いきなり冷水を浴びせられたかのように体が冷え切っていった。
まあ、この状況で本当に冷水を浴びたら気持ちいいだろうが……今の気分は最悪だった。
（今のは……茜？）
昔、一年もの間、同じ時を過ごした幼馴染み。
本当に好きだった人。
（いる……はず……ないよな……）
無理矢理肩で額の汗を拭う。
（そうだ……よな……。いるはずが……それに同姓同名だって可能性も……）
だけど、一瞬見えたその写真は、確かに昔見た茜だった。
「すまん……少しだけ……寝かせてくれ……」
「お、おい、相沢？」
ゴロン……というよりは、バキッっという音を立てながら床に寝転がった。
（そうだ、いるはずがない……いちゃならないだろ⁉　だけど……）
現実に、そこに茜の名前があった。まだ、赤線の引かれていない茜の名前が確かにあった。
（会いたい……茜……）
なんとかしてこの状況から脱出をしよう。
すぐにでも飛び出したい気持ちを押さえ、下唇を強く噛み締めた。
「すまん、俺も寝るわ……結花さん、本ありがとな。後、見張りヨロシク」
「ちょ、ちょっと……」
北川もまた、本を結花へと投げてよこしながらゴロンと寝転がった。今度は、本当にゴロン、だ。
「なんて呑気な奴等なのかしら……ああ、頭が痛い……」

「おーい、相沢……起きてるんだろ？　相沢〜‼」
祐一の目の前で、北川の口だけがそう動いた。
「……ああ」
本当は返事する気にもならない気分だったが、無視するわけにもいかない。祐一もまた軽く口だけをそう動かす。
「へへ……なんとかしてこの状況だけは打破しないとな……」
カリカリ……ペンを紙に走らせる……
「おい、北川、いつの間にそんなもん持ってたんだ？」
『ペンは水分補給した時に鞄からくすねておいた。紙はさっきの本の遊び紙から一枚ちょいと……な』
同時に何枚かのCDを見せながら……紙に書かれていく文字。
「……そういった悪巧みにかけてだけは天才的だな」
『ほっとけ。CDはとりあえず今は気にするな……紙のスペースは有限なんだ、あまり無駄なこと書かせるなよな』
お前が勝手に書いてるんじゃないか……と言ってやりたかったが、本当に紙の無駄なので黙っておいた。
『なんとか、ここから脱出しよう』
コクリ……結花に気づかれていないことを目の端で確認しながら、祐一が頷いた。
「ちょうど俺もそうしたいと思ってた。俺にも……会いたい人がいる……こんなとこでいつまでもSMごっこをやってるわけにはいかない」
真実を、確かめなくてはならない。あゆや名雪みんなのこと、自分の記憶のこと。
そして、茜の名前があったことも。
いるはずのない、いると思いもしなかった茜の存在を確かめるために。
『もちろんだ……SMはお前だけだけどな。とりあ

えず、この状況をなんとかして覆さないと』
サラサラと、音を立てないようにペンが進む。
『俺だってこんなことしてる暇はない。どんな状況に置かれてても、最悪の事態にならないよう最善を尽くさないとな』
レミィのことを思い浮かべながら、北川が文字を綴る。
「最悪の事態って……なんだ？」
その祐一の問いに、北川は幾分躊躇したが。
『最悪の、事態さ』
ただ、それだけを書いた。

629　会議

よう坂神、御堂だ。まだ生きてるか？
まあ、お前が死ぬわけねえよな……俺以外のやつ相手によ。既に待ちくたびれてたりは、してねえだろうな？
悪ぃがよ。ちょっとしたチャンスだったからよ。遅刻覚悟で、寄り道させてもらってるぜ。ここは前から気にはなっていたんだが、もっとやばい所かと思っていたんだよな。ところが実際入ってみると、歯ごたえのある奴なんか、さっぱりいねえ。あの硬ぇろぼっとの片割れぐらいはどっかにいそうなもんだが、施設内まで入っちまえば、飛べやしねえからな。多分外にいると思うのさ。
ちょいと見た限り、ここの構造はそんなに複雑でもねえ。三本の筒を立てて、地面に埋めたようなもんだ。数階ごとに連絡通路が通してあるが、基本的にはそれだけだ。
そういえば、軍部が本土決戦のために用意した指揮所も地下にあったよな。そういった場所は薄暗いじめじめした場所って相場が決まってたもんだが、この建物は空調も完備されていやがるし、廊下は煌々と電灯で照らされてるんだから、現代科学って奴は驚きだぜ。

ああ、話が逸れたな。それで、だ。
俺達は通気口から地下一階に侵入して、B練って筒の一本を下へ下へと制覇してきた。そんなに大きくはねえから、今では最下層って寸法だ。

「あー……倉庫ぐらいか？」
見取り図を前に、重要そうな部屋をあげつらう。
やはり物資の補給は現地調達に限る。占領行政なんざ無関係だから、気を使う必要もねえ。
「ねえ、したぼく」
「げぼくね」
「げぼくだよ」
「げぼくだ」
……詠美のバカは、相変わらずバカだ。
繭ってガキと梓って赤毛にまで日本語を修正されてやがる。
「あたし、思うんだけど」
「げぼくよ」
「げぼくだって」
「げぼくだっつうの」
バカは死ななきゃ治らねえってのは、本当なんだな。
……どうでもいいが。
「ふ……ふみゅーん……げ、げぼくぅ……これなんだけど……」
さすがに三人がかりだと、コイツの減らず口もちったあマシになるようだ。修正かましてやろうかとも考えたが、涙目になってやがるから大目に見てやって、仕方なく詠美が取り出したブツを見てやる。
それは銀色の円盤だった。
しーでー、とかいうやつだ。
「それが、どうした？」
「これは、コンピューターとセットで使うものなのよ」
ガキもいつの間にやら取り出して、円盤をひらひらさせる。

「だから、ここにも寄って欲しいのよ」
ガキは、そう言って〝まざーこんぴゅーたー〟と書かれた一室を指差した。

若干強めの空調に逆らうように、その部屋は放熱を続けている。いくつものファンが、わずかな風切り音を重ねて不快なコーラスを作り上げていた。
中央に位置するマザーコンピューターを介した、ひとつの端末で、男は陰気に作業を始めている。
「くそ……御堂は……どこだ？」
三名を候補に上げたまま、放置してあった端末を使い、今ようやく御堂の仲間を確認し終え、内部の捜索作業に入り始めていた。
今になって、先ほどの三名がどうにも気になる。しかし、そちらに手間をかけている暇はなかった。普段はメイドロボ達にまかせっきりのセキュリティ関連作業を、源五郎は今、自分でやっている。
レーダーに従い、点在するカメラを使ってB練を上から虱潰しにチェックしていく。とりあえず、御堂は自分の居る地下三階を通り過ぎて、さらに地下へと進んだようだ。
もちろん死角に居なければ、なのだが。
とは言え、それでは根本的解決にはならない。更に下の階へと捜査の手を進めようとしたとき、何度目かの呼び出し音が鳴り響く。
「……源之助さん、か？」
正直、出たくはない。そう思って躊躇ったが、よく見れば内線だった。
「もしもし――？」
「……構造から言って、最重要施設はマザーコンピューターなのでしょうね」
千鶴が腕を組んで意見する。地下三階の渡り廊下は三角形の各辺を担う通路だけではなく、三角の中央に向かって伸びる通路も存在している。その中心には、件のまざーこんぴゅーたーが構えてるって寸

法だ。
確かに、そこだけは特別な部屋のようだった。どうせ倉庫を抜けて、通気口に戻るまでの通り道にある部屋だから、行程上も問題はねえ。
「じゃあ、倉庫を荒らしたあとにでも寄るか」
Ａ練、と書かれた筒を指でなぞって進路を定める。ところが、千鶴がＣ練の一室を指差した。
「ここなんですけれど……」
Ｃ練のその場所を通るには、Ａ練の倉庫を通った場合、三階の渡り廊下まで到達し、そこから再度降りなければならなかった。千鶴は、露骨に面倒臭そうな顔をした俺に向かって話を続ける。
「わたしたちは仲間の他に……ある怪我人を捜しています。だから、この医務室に寄りたいのです」
「千鶴姉、それって……」
姉妹で何やら裏がありそうなことを言いやがる。
「余計なお世話なんだろうけど……危険要素の、排除にもなるわ」
千鶴は赤毛に言い聞かせるように、〝排除〟という言葉を使った。
「……何のことだ？」
キナ臭さを感じて、俺は二人に尋ねた。

医療機関特有の、鼻につく消毒液の刺激臭を漂わせた中に、おびただしい血の臭いを撒き散らす存在があった。どうにか縫合止血を終え、骨折部分にギブスを当てて、ベッドに身を沈めたまま、怒りに声を荒らげている。
メイドロボ達に当り散らすも、いたって常識的な反応しか返さない彼女達では満足がいかなかった。やがて男は内線電話の存在に気付き、引き千切るように受話器を掴み、叩き付けるように番号をプッシュする。
『もしもし――？』
「源五郎かっ！　俺だ！　源三郎だっ！　よくも俺

を見捨てやがったな！」
『見捨てるも何も、あなたが勝手にやった事でしょう？　そもそも私が、この計画自体に賛同していなかったのも、ご存知のはず。どこに、あなたを助ける義理がありますか？』
　理路整然と答える相手に血圧を上げてしまい、せっかくの止血も意味がない。撒き散らそうとした不満を、かえって積み上げてしまう結果となっていた。
『それと……御堂が、侵入していますよ』
　駄目押しの一言。何を隠そう、源三郎自身が勝利者になると予想した相手が御堂だった。
「な……に……」
『あなたの予想が正しければ、あなた生きてはいけないでしょうね。では、お互い命があったら文句の続きを聞いて差し上げます――ご愁傷様』
　ガチャン、と乱暴な切断音が響いて通話が閉ざされる。
「ぐ……く……」
　わずかでも安心感を得ようと、無事な方の手に持っていた銃を確認するが、既に弾切れであった。
「う、ううう……」
　今では原形を留めていない顔の、かろうじて残った頬肉を自ら掻きむしり、長らく迷った末に懐へ手を入れ、ペン型注射器を取り出す。蛋白同化のみならず、原細胞の合成から分化異化までも強力に促進し、筋力や再生能力を爆発的に増進する薬物がセットされている。
　しかし同時に、癌化やアポトーシス、ネクローシスまでも増進する恐れがあり、よもや使うまいと思っていた、この悪魔の契約書にサインをするべきかどうか――。
　――源三郎は、確実な死と恐怖の狭間で迷いつづけていた。

「ようするに、だ」

執事だった男は……坂神と勝負した後、仲間に殺された。殺した方の男は、怪我人としてこの施設に居るかもしれない。そしてこの施設にいる、あの硬ぇろぼっとを仕掛けた源五郎って奴は、坂神と勝負した男の息子。
「……ってことだろう?」
そう言って確認すると、赤毛が頷いた。
「ああ、そうだね。仇討ち無用とは言われているけど、放っておくには危険すぎると思うんだよね」
それは赤毛にしては、まっとうな意見だった。後顧の憂いを取り除くのは、行軍の常識だ。
「そんじゃ、まあ……」
殺気を抑えて、頭を掻きながら千鶴の隣に移動する。ここで裏拳でも、と思った俺を鎮めるように、女は言う。
「御堂さん……試すのは、やめてくださいね」
底冷えするような静けさを保ちながら、呟く。
……やはりこの女、俺達同様に〝イケるクチ〟だ。
「そうかい……じゃあ、お互い心配は無用ってことだろ?」
「どういうことですか?」
「俺達は倉庫に寄る。あんたらは医務室に寄る。ついでに俺は、どっちかって言えば、源五郎の方に興味がある。先に行っちまってもいいだろう?」
要するにA練を俺達が上り、C練を千鶴達が上ればいい。だが、千鶴は反対した。
「別行動は構いませんが……コンピューター室は、危険じゃないでしょうか? もし一箇所だけ警備するなら、出入り口かコンピューター室だと思いますから」
なるほど、筋は通っている。
結局、中間を取るように、あまり本気でもなく確認を取った。
「じゃあ地下三階で待ち合わせって事にすりゃあ、いいだろうがよ?」

「ねえ、おじさん？」
斜め後で、袖を引っ張りどおしのガキが、上目遣いで睨んでいやがった。
「三階で、また会おうね？」
「あー、そうだな」
適当に返事をしてやる。
「絶対、だよ？」
「あー、そうだな」
いつになく、しつこい。
いまだに袖を離そうとしない。
「約束、だよ？」
「あー、うるせえな！」
堪忍袋の緒が切れる。
手を振りほどいて、いつものように叫んでやる。
「……バカ野郎、俺が死ぬわけねえだろうが！　解ってるよ、俺がこのバカや幼児が先走りしねえように抑えて待っててやりゃあ、いいんだろうが！」
「ちょっと、先走りしそうなのはアンタでしょ！　したぼくの癖に生意気よ！」
「動物じゃあるまいし……」
俺はその言葉を聞き流して、詠美のバカに言い返していた。
「じゃあなんだ！　倉庫に桃缶があっても俺がいいと言うまで取るんじゃねえぞ！　おあずけだぞ！」
「どうしてそこに、桃缶が出てくるのよ！」
「動物じゃあるまいし……」
動物じゃあるまいし、先走りなんかしません。
……思えば、そういう意味だったんだよな。
そうさ。
俺はこのとき、獣どもが入り込んでるだなんて……思いもよらなかったのさ。

630　青い鳥

「北川。おまえ、手が真っ赤じゃねえか」

「いまさらのようなツッコミありがとう。祐一君」
「いや、冗談じゃなくてな。なんかいろいろあったんで。悪い、気づかなかったんだよ」
「別にいいけどな」
「そんなカオすんなって。マジでどうしたんだよ。止血しているシャツが血だらけじゃねえか」
「ん？　ちょっとぶつけちまってな。ひどく見えるかもしれんが傷口はそんなに大きくないぞ」
「そうか、それは良かった」
「……良いのか？」
「不幸中の幸いってやつだよ。もうちょっと小さなしあわせを噛みしめろよ」
「……祐一。青い鳥って話、知っているか？」
「なんだ、急にマジなカオになって。幸せを呼ぶ青い鳥って童話だろ。探しに行ったら実は近くにいましたぁ、ってマヌケなはなしな」
「……そうだな、マヌケだな」
「だから、それがどうしたんだっての」

「そこ、いいかげんうるさい」
「はい。結花お姉さま」
「その呼び方やめなさい」

レミィは北川を捜した。
なにかに取り付かれたように、大声で北川の名前を叫びながら。
だが、必死に走り回っても北川を見つけることはできなかった。
突然、行方知らずになった思い人を捜す。まるで、映画とかによくある紋切り型のはなしだ。
そして、無事に見つけだし、涙ながらに熱い抱擁で愛を確かめあう。そんな筋書きだ。
だが、これは現実。
ようやく見つけたときには、物言わぬ骸になっているかもしれない。
捜している途中で何者かに襲われ、志を半ばに死

ぬかもしれない。
そう、彼女がいるのは現実。
狂った、非日常的な現実。

レミィは荒い息をつき、トボトボと山道を歩いていた。
その足に何かがぶつかる。
思わずバランスを崩す。そして、それは彼女のポケットからこぼれ落ちる。
パックに入ったもずく、だった。
レミィはそれを胸元に愛おしく抱きしめる。ほんの少し前まで、普通と感じていた非日常の中の日常に。
レミィにとって北川は『麦藁帽子』であると共に、幸せを呼ぶ『青い鳥』だったのかもしれない。
それは、遠くに離れてからようやく気が付いた。本当の幸せが、すぐ近くにあったということを。
今まで当たり前のように存在した、北川がレミィに与えた非日常の中の日常。一緒にもずくを食べたり、一緒に他愛のない話しをしたり。一緒にスーパーに潜り込んだり……。
それは多くの命が散っていったこの島に作られた虚構なのかもしれない。
その虚構が崩れ去ったとき、レミィは突きつけられた非日常に恐怖した。
そしてレミィは求める。再び『麦藁帽子』が戻ってくることを……。
こぼれそうな涙をこらえ、レミィはふと、目に入った大きな倒木。そして、それに付いている、赤いもの。
血、であろうか。
それはその倒木を起点に地面に点々と付着している。
レミィはその跡を追っていった。

「あれ、無いや」
「どうした、北川」
「いや、腹減ったんで常備しているもずくを食おうと思ったんだが……。ポケットに入れたやつを落としちまったらしいんだ」
「そうかい。っていうか、おまえ、よく飽きないな」
「まあ、なんだ。今の俺はもずく依存症でな。もずくが無くなると手が震えるんだよ」
「また、そんな、くっだらねぇはなしを」
「いや、マジだって。もずくが無いとなんか現実感が希薄になっていく感じがして、なんか不安になるんだよ」
「ふーん、ああ、そうかい」
「幸せが逃げていく、ような気がしてな」
「なに、わけわかんないことを」
「うるさい。あんたたち」
「「はい。結花お姉さま」」
「だから、それやめなさいと何度言えば分かるの？」
先ほどから漫才を繰り返す二人を見ていると、見張りをしている自分が馬鹿らしい。そう結花は思っていた。
いくつかの死線をくぐり抜けてきた。身を守るためとはいえ、人も殺した。
そんなことはしたくはなかった。でも、自分が生き残るためには仕方がなかった。
自分は生きる。どんなことがあっても。そして、スフィーや芹香たちと普通な生活に戻る。そのためには安易に人を信じてはいけない。引き金をためらってはいけない。それは多くの人の死を乗りこえてきた結花が学んだこと。悲しいことだが、それが彼女にとっての現実であった。
（でも、あいつらを見ていると、そんなマジになってる私が本当に馬鹿みたいよね）

漫然とそんなことを思っていると、何者かが小屋のドアを荒々しく叩く音が聞こえた。
そして、
「Help!　来るの！　あいつが来るの！　開けて！　ここを開けて!!」
切羽詰まったような少女の声が小屋の中に響く。
「レミィだ！」
北川が思わず立ち上がる。
「レミィ？　あなたと一緒にいると言った？」
「そうだ！　レミィが俺を捜しにきたんだ！　それで！」
そして、玄関に向かおうとするが結花に止められる。
「私が行くから、あなたたちはこの部屋にいなさい」
「でも！」
「忘れたの？　あなたたちは捕虜なのよ。言うとおりにしなさい」
「……はい。結花、お姉さま」
結花にそう言われ北川は唇を噛みしめる。だが、ここで言い争っても仕方がないことを悟り、腰を落とした。
結花は玄関に向かった。だが、
「？」
先ほどまでうるさいほど叩かれていたドアの音が、不意に止んだ。
（まさか……）
結花は急いで鍵を外し、片手で銃を構えながらノブに手をかけ、ドアを開ける。
刹那。
ドアが思いっきり引っ張られ、ノブを握っていた結花もつられて外に放り出される。
そして、
「樽の中の魚を撃つようなものネ」
そう言って結花の頭に釘打ち機を押し当てたのはレミィだった。

631　主のいない神社にて

結花たちがいる小屋から少し離れた所を、スフィーと芹香は歩いていた。
二人が外に出たのは、単に周りの様子を偵察するためだったのだが、十分ばかり歩いたところで、急に芹香が立ち止まった。
「……」
「芹香さん？」
「……」
芹香はゆっくりと坂上の方を指さす。その先には、いささか古ぼけた鳥居が立っていた。
「あ、あれ……。もしかして？」
「……（こくこく）」
「うそっ」
「……！」
スフィーは芹香の手を引いて、その鳥居へと急いだ。
「あれだけ懸命に探してもわからなかったのに、見つかる時は結構あっさりだね」
「……」
急な坂道を駆け上がった先にあったのは、まさしく彼女たちが探していた神社。
リアンや綾香たちと共に結界の主と対峙したものの、南の裏切りによって目的を果たせぬまま散り散りになった、あの神社だった。
しかし、芹香は感じていた。あの時とは違うと。
この島に来てからずっと感じていた圧迫感、すなわち結界の力は依然衰えていない。
しかし、あの時この古びた社に満ち満ちていた、悲しみにあふれた空気が今はないのだ。
つまりここにはもう結界の主――かんな、だっただろうか――は、いないのか？
芹香が思いを巡らしている脇で、スフィーはひとり舞い上がっていた。

「ねぇ、どうしよう？　結花を呼んでくる？　それともすぐに結界を……って、聞いてる？」
さすがにスフィーも芹香の様子に気付いたようで、
「あのぉ……」
芹香の顔を覗き込む。
「……」
「えっ？　う〜ん、そう言われてみれば……」
あたりをキョロキョロと見回して、
「なんかあの時と違うね。あ、でも、何が違うかと聞かれても……」
「……」
「えっ？」
「……」
「ってことは……」
「……」
「そんなぁ……」
それまでのはしゃぎ様から一転、スフィーは思わずその場に座り込む。

「あ、ってことは、もう結界もなくなったの？」
「……」
「それもないんだ……」
今度は、パッタリと仰向けになった。
「あ〜あ、結局振り出しに戻っちゃったね」
仰向けのまま、スフィーは誰に言うとでもなくつぶやいた。
「……」
その隣にしゃがみ込んだ芹香が、そっとスフィーの頭をなでる。
「それで、これからどうしよう？」
「……」
「うん、あの人を捜すのはわかるんだけど、当てはあるの？」
「……（ふるふる）」
スフィーは、「ふぅ〜」と大きなため息を付くとむっくり起きあがった。
「何はともあれ、とりあえず結花に報告しようよ」

「……（ふるふる）」
「まだ何かあるの？」
「……」
　ちょっと待って、と言って芹香は一旦その場を離れると、しばらくして鞄を一つ抱えて戻ってきた。
「その鞄は？」
「……」
「あ、そうか。芹香さん、あの人と戦ったときに鞄を置いてきてたもんね」
　鞄の中身はほぼ残っていた。理由は解らないが、注射器と白い粉だけがなくなっていたのを除いて。
「……」
「うん、はやいとこ報告しなきゃ」
　二人は早足で坂道を降りる。結花の待つ小屋に向かって。
　もちろんその小屋がただ事でなくなったことなど、二人に知る由はない。

632　誰がため

　恥ずかしくて死にたいのはやまやまだがまだ死ぬ訳にいかないのが現状である。自分たちは生き残るために戦うのだ。恥ずかしいくらいで逃げてはいけないのだ。青くなった顔をなんとか白色に戻した七瀬彰は、小さく息を吸って心臓の鼓動も落ち着ける。
「――ともかく、話を進めよう」
　そう言う柏木耕一に従って彰は柏木初音と並んで椅子に座る。
「お前が寝てる間にも一応色々話し合っていた筈なんだけど――まあ皆どれくらい真面目に聞いてたかは怪しいもんだな」
　じろりと部屋を見回す耕一の目を直視出来る人間は誰もいない。皆が俯いて気まずそうな顔をしている。坂神蝉丸さえもである。耕一は溜息を吐いて、
「もう一回判りやすいように説明する。腹の中の爆

弾が解除されて、長瀬も殺して、もうこれ以上殺しあう理由が俺達にはない。だからこれから俺たちがすることは、脱出手段の方法と、島に生き残っている人間を集めることだ」
そう言った。皆が真面目な顔に戻り、耕一の声に聞き入ったところで彰は大切なことを思い出す。
「脱出手段は今のところ見つかってないが、留美ちゃんの話によれば何かアテがありそうな感じではあるんだ。——って、聞いてるのか？」
勿論聞いていなかった。彼の頭が今処理していることはただ一つ。今朝、自分の前に現れた一組の男女のことだった。
島に生き残っている人間のこと。
——長瀬祐介と天野美汐のこと。
自分の横に座っていた七瀬彰が突然立ち上がって、呆けた表情で窓の外を見ている姿に、わたし——柏木初音はやはり不安を抱かずにはいられなかった。

精神が不安定なのだろうか。自分が与えた鬼の血によって彼の身体の傷は癒えた。けれど精神は、身体のように安定してはいないようだった。
「——おい、どうした？　彰」
怪訝な顔をして耕一も訊ねる。自分を含めた全員が、彼のその奇矯な様子に目を奪われる。呆けた表情のまま彰は答える、
「忘れ物をしていました。けして忘れてはいけないものを忘れていたんです。だからちょっとその忘れ物を捜しに行きます」
茫洋とした眼差しで、茫洋とした声で彰は言う。そして誰かがその言葉の真意を尋ねるその前に、彰は自分達に背中を向け、足を引きずりながら部屋を飛び出した。右足の状態からして歩くのすら苦痛を伴う筈なのだ。なのに彼は止まらない。
「待って！　彰お兄ちゃんっ！」
事態を最初に呑み込んだわたしは彼に続いて部屋を飛び出した。彼の真意はわからない。けれどわた

しにだって彼の心が不安定な状態であることは判る。わたしが止めなければ、彼は何処までいってしまうか判らない。
　部屋を出て廊下を見回す。彰はまだ廊下だったけれど、それなりの速さで走っていた。体力の戻りが異常だと思う。そんなことを考えているうちに彰は玄関を飛び出してしまった。慌てて自分も追いかける。自分の後ろから他の皆も飛び出したのが判る。
　忘れ物とは何のことだろう。個人行動で迷惑を掛ける事を判っていながら、何故何も話さずに行ってしまうのだ。何故わたしに何も言ってくれないのだ。わたしは混乱する。
　判っているのは、自分がすぐに追いつかないと彼がまた遠くに行ってしまうということ。初音は走り玄関を飛び出し、飛び出したところですぐ傍に立っている彰に気付く。
「ごめん――また、何も言わないで行って、君に心配を掛けるところだったね」
　そう言って、彰は微笑む。強い風と穏やかな陽光の下で、七瀬彰は笑っていた。茫洋に見えた眼差しは陽光の下では逆に明瞭に初音の心を射抜く。
「お兄ちゃん、」
「大丈夫。忘れ物をしただけさ、本当に。本当に大切なものを今まで忘れていたんだ」
「大切な、もの？」
「そう。この島にいる二人の、生き残り続けた友達だよ。彼らを生き残らせたい。僕はそう思うんだ。だからここに連れてきたいと思う」
　その眼差しとは裏腹に、明瞭な声だった。自分の頭に手を置いて、すぐ戻るから心配しないでと彰は囁く。その声がいつもみたいに優しくて温かだったから、わたしはそれ以上追及できなかったのだろう。
　後から考えれば、もう少し自分がこの時しつこく追求していれば良かったのだろうと思う。なのにわたしは追求しなかった。止められなかった。これが全ての崩壊に繋がることもまだ知らずに、

「――すぐ、戻ってきてね」
わたしは何故、そう呟いてしまったのだろう。
言うと、判ってるよと彰は呟く。
「無理もしちゃ、駄目、だよ、身体、まだ、治ってないんだから――」
「僕は君を守るためにいるんだ。必ず帰ってくるよ」
彰は微笑う。微笑ってわたしの頬を撫でると、小さな声で行ってくるねと言った。
大丈夫だとは思うのだ。もう敵はいない筈だし危険はない。それにわざわざここで待っていてくれたことからも、わたしを置いて遠くに行ってしまうなんてこともない筈だ。
「それじゃあ、皆にもよろしく言っておいてね」
わたしの頭は勝手にそう判断して、身体に命令を送る。「頷け」という命令を身体に送る。
わたしの首肯を見て彰はもう一度微笑い、そして今度こそ自分に背を向けて走り出した。足を引きずりながら、それでも走る。送り出したところでわたしは、ようやく強い喪失感に襲われる。自分の行動に不備はなかったか。彰を送り出したことは間違いではなかったか。そんな声が底から聞こえるのだ。彼に二度と追いつけないような予感がする。彼が自分の届かない場所に走っていってしまう予感がする。
あくまでただの予感なのだ。そんなことが実際ある筈がないのだ。彰は自分のことを守ってくれると言ってくれたのだ。彼が嘘を吐く筈はないのだ。なのに涙が流れ出す。自分の心が判らない。
「彰くんは――」
いつの間にか自分の後ろに立っていた柏木耕一が尋ねる。わたしは涙を拭って笑って応える、
「友達を、探しに行ったんだって」
「――本当に？」
「本当、だよ」
耕一は苛々した顔つきで頭を掻き、そして、
「じゃあどうして初音ちゃんは泣いてるんだよ

っ!!」
そう叫ぶ。叫んで気まずそうな顔をして、耕一はそっぽを向いてしまう。傍には七瀬留美や巳間晴香もいて、耕一のその叫び声を聞いて怪訝な顔をしていた。しばらくの沈黙の後、わたしは囁くような声でやっと言った。
「なんとなく不安になったからだよ。でもよく考えたら大丈夫に決まってるのにね」
それだけをわたしは言った。それ以上は喋れる気力もなかったし、喋ってもしどろもどろになるだけだと思った。

目の前で涙を拭い笑う初音を見て、耕一は大きく溜息を吐く。僅かに自己嫌悪を覚えている自分に気付く。初音ちゃんを責めるべきでないのは判っているのだ。初音ちゃんが止められなかったのを責めるのは自分勝手だと。それに彰にだってちゃんとした考えはあったのだろうとは思うのだ。

耕一だって頭の中では大丈夫だと判ってはいた。戦闘は殆ど終わったようなものだし、今度は初音に行き先を告げてもいる。だから、そんなに不安を抱くような事はないのだと思う。
だが。
耕一の不安は七瀬彰の目の色にあった。彼は先に鬼の血を飲んでいる。身体の状態が回復したのは結構なことだが、同時にアレは精神に支障を来たす可能性もあるのだ。
杞憂だとは思う。思うのだ。けれど、それでも不安が拭えないのだ。耕一は無理矢理不安を底に沈めて見えないところまで隠しやると、
「すぐ帰って来いよ――ったく。俺だって千鶴さんたちを探したいのにさ」
呟いて耕一は初音の頭に手を乗せる。
「ごめんな、初音ちゃん。大きな声を出して。大丈夫さ、きっとすぐ帰ってくるよ」
初音が頷くのを確認して耕一は笑って空を見上げ

る。少しだけ白くなっている空に、心の底で燻っている不安の塊が震える。

七瀬彰は走る。走って走って走る。彼らがどこにいるかはよく判らないが、少し探せば見つかるだろう。彼らのような奴らを安全な場所に帰してやりたい。その思いだけで彰は走る。

自分の勝手な行動で他の皆に迷惑をかけるかも知れないが、優先するべきは人の命だと思う。あそこにいる連中にはもう危険なんて訪れない筈なのだ。それよりも長瀬祐介と天野美汐を探すべきだ。

多分自分は間違っていないと思う。

彰は走る。痛めた足を引きずって走っているのに身体が軽い。二十年の人生の中でも抜群に身体が軽い。

633　朱と蒼の螺旋

螺旋。交わらず。繋がらず。くるくると落ちていく。

落ちていく。

——ガキィンッ！

背後から、金属音。鉄が弾けるような。

続いて、何かが倒れ込むような音。明らかな異変。

咄嗟に、神尾晴子は振り向いた。

「居候——!?」

二人の姿。膝を付き、深紅に染まった右肩を押さえる男。仲間の国崎往人。

もう一人。天沢郁未。狐につままれたような顔で、右手の方へ駆けていった。

何があった？　状況を理解するより早く、隣から

少女が駆け出している。
　神尾観鈴だ。当然ながら、晴子も自分の娘に続いた。
「往人さんっ――」
「居候、どないしたんやっ！」
「撃たれた――くそっ」
　黒いシャツは、袖まで血に濡れていた。傷は二つ。右肩の、前と後ろ。貫通している。
　紅い肉。血を吹き出し続けるその傷口に、観鈴は一瞬気を遠くする。だが、倒れてる場合ではない。
　そうだ、止血。
　布が要る。……当然、布など無い。服を破る他には。
　早速、制服のスカートを引きちぎ――
　既に晴子が袖を破っていた。右の袖を。観鈴は何となく、うなだれた。
　硫酸で焼けた傷口が見えた。思わず、目を逸らした。脇の上をきつく縛り付ける。往人は、痛みを感じない。
「……我慢しときや」
　痛くないけどな。
　血は止まる。縛り付けられた右肩は迂闊に使えない。失血死よりはマシ、か。
「ったく、あいつらもけったくそ悪いことしよってに。……居候、銃借りんで」
「……おい、勝手に使うなよ」
「一発ぐらいなら変わらんわ」
　ベネリＭ３を晴子が握る。重い。手に掛かるずっしりとした感覚。
　鉄の重み。それは確かな「強さ」を伝えてくれた。これなら。
「敵が、何処にいるかは、分からない。注意しておけ」
「――？　敵なら、目の前におるやろ」
　事も無げに。晴子の言葉に、往人は顔を青ざめた。まさか、お前。

あの少年が撃ったと思ってるのか――？
「ほら、あのガキならそこに転がっとるわ」
やっぱり、勘違いしてやがる。くそっ！
「晴子ッ……ォッ！」
声を出した。――突然、右肩の傷が激痛を。……息が、吐けない！
「往人さん、じっとしてて……後で、ちゃんと診るから。ね」
「……観鈴」
ああ、観鈴……聞いてくれ。聞こえるか？
……声が出ない。
痛い。痛い。くそ、傷が熱くなってきた。さっきまで痛くなかったのに！
晴子が、立ち上がる。観鈴も立ち上がった。……いつの間にか、往人は倒れている。目は虚ろ。
ショックで知覚出来なかった痛み。戻ってきたそれは、彼の精神を叩き潰す。
暗くなる。まずい。気を失ってはまずい。言わなくては。伝えなくては。違うと。
違うんだ。あいつは。あいつは、撃ってはいないんだ……！
……伸ばした手が、落ちた。
「……往人さん」
「観鈴、構えとき……アンタが頑張らんと居候が死ぬで」
「……」
唇を噛む。歯痒さ。どうして、こうなるのか？
誰も傷つかないで終わる筈だった。共に行けずとも、それだけで十分だった。それなのに。
裏切るだなんて――。
シグ・ザウエルショート９㎜の銃口が持ち上がる。
狙うは、目の前の二人。
――撃てるのか？　いや、撃たなくては。……護る為に。
銃口は、かたかたと揺れている。
対して。ベネリM３の銃口が揺らぐ事は無い。

ゆらり――。少女が立つ。まるで幽鬼の様に。
――包丁持っとるわ。鬼よか山姥っちゅう方がベターやな。
晴子を見た。続けて観鈴を。観鈴の銃を。晴子の銃を。往人の肩を。
酷く、明確な殺意を込めた目。本性を現したか。
晴子が、一歩、前に出た。途端、吹き付ける、まるで風の様な殺気！
髪が後ろに流れるかのような錯覚。背中が冷や汗で滲む。おぞましい。山姥の方がよっぽどマシだ。
「あんたが――」
包丁の刃が返る。日の光を浴びて、銀の光を、妖しい光を、日に返す。
ただの包丁が、鋭いナイフか刀の様に見えた。
……あれに千切りにされるより早く、散弾を叩き込むには？
打開策は考えつかない。しかも、疑問はもう一つ、やってくる。
「あんたらが、撃ったのね――？　最っ低……最初からっ、このつもりで……！」
……。は？
思わず、そう返しそうになる。何言うとんねん、こいつ。
「……逆恨みもええとこやわ。人のツレの肩、ブチ抜いてよぉそんなん言えるなっ！」
「――ふざけんじゃないわ。私達、銃なんて一丁も持ってないのよ」
――下手な嘘を――。
郁未が前に出る。晴子は、反射的に一歩だけ下がった。観鈴達もそれに呼応する。
さらに一歩。下がる。
一歩。下がる。その度に、少年の姿が少しずつ遠ざかっていく。
なるほど。セコい作戦やわ。
次の一歩――の前に、ベネリＭ３の銃口が郁未を

捉えた。観鈴が、目を見開いた。悪いが、無視。
「はっ！　嘘吐きは、コソ泥の始まりやで」
コソ泥には、地獄行きの切符をくれてやる。

634　赤い瞳のレミィ

——時はわずかに遡って。

（ステイツでは……）
レミィは考えた。
誘拐された人間と再び生きて逢うことのできる確率が極めて低かった。
つまり、誘拐された人間は様々な交渉の末、結局最終的には殺されてしまうのだ。
もちろん、ここはアメリカではない。
しかし、ここはそれ以上に危険な島だった。
北川を一刻も早く探しだし、合流しなくてはならない。
これ以上、大切なものは失いたくなかった。
ましてや、レミィにとって北川は今、最も大切な存在だったのだから。
残された血の跡を必死に追い、そして見つけたこの小屋。
この小屋の中に北川が居るかもしれない。しかし、必ず北川が居るとは限らない。
無謀な行動で、自らの命を危険にさらすことにもなりかねない。
けれども、『自分が躊躇している間にジュンの命が失われてしまったら……』と、レミィは思った。
「一か八か……やってみるしかないヨ」
二度と大切なものを失うことのないように。
『自分がどうかしていればそれを失うことなどなかったかもしれない』などというような、そんな後悔を味わうことが無いように。
相手が複数いることを想定して、レミィは考え得る限りの作戦を立てた……。

そして潜入を試みた。

――現在。

「動かないで！　動くとこの電動釘打ち機がユーの頭をぶち抜くネ!!」
澄んだ蒼色をしていたその瞳を、赤く血走らせてレミィは言った。
結花は銃を握っていたはずの右手を見やる。
そこには空になった自分の手があるばかりで、銃はドアに引っ張られたときに取り落としてしまっていた。
「中に、ワタシの探している人がいるかどうか、見るだけヨ」
そういって、結花に釘打ち機を突きつけたまま、レミィは体を小屋の入口前に移そうとした。
「ジュン!!」
北川の姿を認め、歓喜の声を挙げたレミィ。
「レミィ!!」
北川も、やや意外だったレミィの状況――結花に釘打ち機を突きつけていることだ――に驚きつつも、この再会に喜びの声を上げた。
直後、レミィは背後の草むらから何か物音がしたのに気を取られ、一瞬だけ結花から目を離した。
草むらから顔を出したのは野ウサギだった。
「What's!?」
レミィの一瞬の隙をついて、結花が拳銃に手を伸ばそうと駆けた。
「Freeze!」
レミィの制止の声を、結花は聞かなかった。
「Freeze!!!」
結花の手が拳銃に間もなく届く。
レミィはついに引き金を……引いた!!

635　あたし達の決意

もともと、これと言って決定的な打開策があるわけでもない。会議は進まず、七瀬彰は席を外した。
　残る全員が腰掛けている輪から少し離れたところで、愛刀と共に壁に寄りかかりながら、晴香は見るともなく各々の反応を見ていた。
（ちょっと早いけど……頃合い、ね）
　つい、と七瀬に視線を投げかける。しばらく場の雰囲気に飲まれて下を向いていた七瀬だが、ふとした拍子に目が合った。
　あたしは七瀬の視線を受け止めると、当り前のように頷いた。七瀬は少しばかりの迷いを残していたようだが、やがてはっきりと頷いた。
「ちょっと、いいかな？」
　刀を拾い、輪の中に入っていく。
　蝉丸さんが整備したもので、まだ返却していないものや、使えないと思われるものが、輪の中央に積んであった。
　あたしは別に、刀でなくてもいい。剣捌きが上手いわけでもないから、近付いたときに使えるものなら何でもいい。できれば銃器がひとつあると、なおいい。
　そう考えながら、マナの大ぶりなナイフを手に取る。
「これ、あたしたちが持っていってもいいかな？」
　何気ないふりをして、聞いてみた。
「構わないが……あたし**たち**が持っていく、とは？」
　蝉丸さんが睨みつける。
　さすがにごまかしは効かないようだ。ナイフを捨て、肩をすくめながらも、更に希望を付け加えておく。
「できれば銃も欲しいし、ナイフよりも……あなたの刀のほうが、いいんだけどね」

怒っているわけでも無さそうだが、厳しい顔のまま蝉丸さんは予測する。
「……つまり彰くんに続き、七瀬くんと共に離脱する、ということか？」
すばらしく的確だ。離脱するとは言え、見殺しにしたいわけではないだけに心強い。
「留美ちゃん？　……どういうことだい？」
耕一さんが眉を顰めて、七瀬に尋ねる。今度は迷いを見せることもなく、七瀬は答えた。
「高槻の言っていた潜水艦……探してみようと、思うの」
ざわ、とほぼ全員が反応した。信用できない人間の言葉を信じて、在るかどうか解らない物を、探す。
確かに批難されても仕方ないのかもしれないが……。しかし、意外な人物が行動で賛成してくれた。
「持って行くがいい」
ひょい、と七瀬に向かって投げられたそれは、刀だった。鞘に入っている状態では解らないが、抜けば緑色の怪しい光をたたえた刀だ。
「……恐らく毒が塗ってある。気をつけて使えよ」
周囲の驚きをよそに、蝉丸さんは淡々と解説する。
「ニューナンブM60、中華キャノン、彰くんのサブマシンガンなどは弾切れだ。七瀬くんのショットガンも残弾一発な上に、歪みが入っているので、念のため使えない山に置いてある。鉄パイプも粉砕してしまったし、もちろん金ダライやハリセンも使えないものだな」
「そりゃそうね」
「ジッポライターとダイナマイトは、大掛かりな破壊活動をすることになれば必要になるだろうから、残しておいてほしい。レーザーポインターは……合図にでも使うか？　銃器は初音くんのワルサーP38、葉子くんと俺のベレッタM92F、マナくんの銃は……これに載っていないが、彰くんがグロック26とか言っていたと思う」
アイテムリストで確認しつつ、銃器の型式からハ

リセンまで説明するあたり、軍人というのは神経質だ。

　とりあえずレーザーポインターを七瀬に渡してもらい、銃に目を向ける。少しだけ考えて、いや……もとから欲しかった銃がひとつ、ある。

「……初音ちゃん？」

「……え？」

「初音ちゃんの銃、いいかな？」

　それは、良祐の銃。

　そして、七瀬の友人を撃った銃だ。

「じゃあ、葉子さんをよろしくね」

「ああ」

　耕一さんが苦笑いをする。七瀬とお別れの言葉を交える姿を見ながら、あたしは考えた。きっと耕一さんにも、やりたいことはあるのだろう、と。

（でも、あんたは、初音ちゃんを放っては行けないでしょう？）

……言うまでもないことだったから、黙っておく。

「千鶴さん達に会ったら、俺達は元気だと伝えてくれ」

「うん、わかった」

　彼らには、守るべき仲間がいる。だから、自由なあたしたちが積極的に動くべきなのだ。

「助言と、頼みがある」

　いつのまにか蝉丸さんが横に立っていた。彼のおかげで大きな反対にあわずに、あたしたちは出発する事ができる。もちろん耳を傾けたのは、それだけではないけれど。

「もし会えたら、だが……御堂という男がいる。危険な男だが、頼りになるはずだ。徒（いたずら）に挑発しなければ助けになるかもしれん。それと怪我人が出たので待ち合わせには遅れる、と伝えて欲しい」

「ええ、わかったわ」

　そうした予定など、あたし達には何もない。だから、あたしたちは振り返らずに行くことができる。

最初に高槻達の死体を調べ、そこから何か解らないかを考える。方針はそれだけ。あたしたちと一緒にいた仲間は、みんな、みんな死んでしまったから。
だから、あたしたちだけで道を切り拓いてみせる。
それは命を賭けた、博打かもしれない。
あたしは……いや、あたしたちは、きっと勝ってみせる。
そして最後に、笑ってみせる。

636　もう、届かない

ビスビスッ!!
奇っ怪な、何か肉を刺すような音が響いた。
「あ……」
「な、な……」
ゴトリ……何かが音を立てた。
「な……なにしてんだよ！　レミィ!!」
「アッ……」
幸せは、手の中から逃げていってしまった。
こんな島でも、確かに心を拠らせることのできた暖かい場所。そんな幸せが逃げてしまっていったことが、あまりに悲しくて。
取り戻そうと、もがいた。
「どうして……なんで!!」
北川の絶叫が響く。
「ジュン……ワタシ……ワタシ……」
声の聞こえた方へ、目を向けると、そこにはレミィが望んでいた場所が広がっていた。
「何で、こんな……」
祐一の声が、どこか遠く聞こえた。
幸せは、形あるもの。だから、いつだって取り戻せる。探して見つければ、いつだって幸せは手に入るものなんだ、と。
レミィは思った、思っていた。

飛び立っていった青い鳥も、必ず取り戻せると信じて。
「いきなり……撃つなよっ！　なんでっ！」
祐一と北川からは、ことの一部しか目撃できなかった。レミィが小屋へ侵入し、結花に狙いを定め、そして逃げようとした結花を躊躇なく撃った。
それは悲しいすれ違い。……それでも、結花が撃たれ、倒れたことはまぎれもない事実。
「あ……ワタシ……ワタシ……」
形のあるものは、すべて壊れてしまう。

ドン！
銃声が響いた。
「ア……」
「ガハッ……」
息も絶え絶えに、最後の力を振り絞って。
胸から真っ赤な血を滴らせた結花が、レミィに銃を向けていた。

「あんた……なんか……に……」
「ア……ジュン……ワタシ……」
「れ、レミィ！」
腹を押さえて、一歩、二歩、扉の方へと……
ドン！
また、銃声が響いて、レミィの背中が跳ねた。
「結花に……何するのよぉっ!!」
震える体で振り向いたら、小さな女の子の影。
スフィーの瞳の中には、銃を構えて立ち尽くすレミィと、血を流して倒れている結花の姿だけが映っていた。
幸せは、形なんてなかった。
青い鳥がいたとしても、幸せになんかなれやしない。
北川を一瞬だけ見て。
(幸せは、私達の心の中にいるんだヨネ？　ジュン……)
形あるものはすべて壊れる。幸せに形なんてなか

ったから。
幸せは手の内に仕舞ってしまえば、ずっと壊れることなんてないと、思っていた。
だけど、幸せが壊れるのは一瞬だった。
(ジュン、ワタシ、幸せだったカナ？　……ワタシはね、幸せだったって……)

――――レミィーーっ!!

暗転する視界の中、最後にそう聞こえた。
それは、ワタシの求めていた幸せのかけら。

九十四番　宮内レミィ　死亡
【残り25人】

637　美しき破壊神　再び

オオオオオオオオオオォ……
空気の流れる音だけが響く渡り廊下を進む三人。
目指すはこの先にある倉庫だ。
「ねぇ、何で倉庫なんかに行くのよ？」
「……周りをよく見てみろ。警備の兵どころか人っ子一人いねェだろ？」
「そんなの見れば分かるわよっ！　だいいち、それと倉庫、何の関係があるのよ！」
詠美の問いに答えたのは藺であった。
「これはあくまで私の憶測だけど、警備兵のほとんどがマザーコンピューター周辺に集中的に配置されているの……だから、他のフロアの警備が手薄なのよ。つまり、この先の戦闘はさらに激しく、危険なものになる……それを踏まえた上で、オッサンは倉庫で物資を確保しようと考えたのよ、違う？」
今度は藺が御堂に問いを投げかけた。
「あぁ、ズバリその通りだ。ガキの癖に頭の回転だけは速ぇんだな、お前もろぼっとなんじゃねェの

か？」
「その言葉、褒め言葉として受け取っておくわ」
お互いに鋭い視線を交し合う二人……そして、状況把握が出来ていないのが一人……
「？　……イマイチよくわかんないんだけど……」
「お前は理解しなくていい」
「ちょっと！　どういう意味よ！」
御堂は詠美の抗議をシカトし、繭と話し込む。
「で？　オッサンは何が欲しいの？」
「そうだな……とりあえず社で拾った銃と同型のものをもう一丁、予備の弾倉、手榴弾をいくつか……それと、お前らと梓、千鶴、あゆの五人分の銃火器だ。はっきり言ってお前らの武装じゃあ銃弾の餌食になるのが関の山だ。しかも素人だ。拳銃より、機関銃を持たせてやった方が確実だろう？」
「へぇ……オッサン、顔は般若だけど思いやりがあるのね……」
「バッ、バカ！　そんなんじゃねえよ！　ただ、お前らに犬死されるのが胸クソが悪りぃだけだ！」
「あらそう……どうでもいいけど詠美ちゃんが沈んじゃってるわよ」
それを聞き、御堂は視線を詠美に移す。詠美は二人から少し離れたところをトボトボ歩いていた。
「ふみゅ～ん……いいもん。どうせあたし……バカだもん……」
「……ったく、面倒くせぇ奴だ」
御堂は自分のディパックから桃缶を取り出し、いつものナイフで蓋を開ける。
「ほらよ、これやるから元気出せよ」
「……え？　でもこれって、アンタの分なんじゃないの？」
言葉とは裏腹に、詠美の顔には『マジで!?　らっきー！』と書いてあった。
「そんな事ぁどうでもいい、お前に拗ねられるよりはマシだからな。ホレ、早く食え」
「な、なかなか気が利くじゃない。いいわ、アンタ

がそこまで言うんなら食べてあげてもいいわ、感謝しなさいっ！」
　詠美は桃缶を受け取ると、ウキウキ気分でスキップまででした。
「オッサン、この扉かしら？」
　繭の方を見ると、御堂は見取り図と扉の位置を確認し、彼女はやや大きな扉の前に立っていた。
「あぁ、そこだ。ホラ詠美、着いたぞ。桃缶は倉庫の中で食え」
「そうね、廊下で立ち食いなんか、お行儀悪いわよね♪」
　すっかり機嫌が良くなってる。桃缶一つでここまではしゃぐ人間は彼女くらいであろう。
「扉……開けるわよ」
　扉の青いパネルに繭の細い指が触れる。

　ィイイイ…ン

　扉が微細な機械音と共に開く……その刹那、倉庫の奥の暗闇で『何か』が鋭く光った。
「チッ！」
　反射的に御堂の体が動いた。詠美を抱きかかえ、扉の前の繭の腕を引っ張り、『何か』の視界から離脱させた。
　詠美の手からは、一口も食べていない桃が入った缶詰めが滑り落ち、繭は一瞬、何が起こったか理解できなかった。

　ズダダダダダダダダダダダダダダダダダァン!!!!

　桃缶が銃弾の雨によって跳ねあがり、弾け飛び、ズタズタに引き裂かれた。
　……あの時、御堂が警戒を怠っていたら、彼らがああなっていただろう。

　チリンチリンチリー……ン

俳莢された薬莢が倉庫内部の床で踊る音がする
――機関銃での攻撃だった。
「奇襲……失敗……シマシタ」
聞き慣れた事務的な声が響く。
……間違いない、アイツだ。
御堂は腰の愛銃を抜き、身構える。
「あたしの桃缶……」

御堂からもらった詠美の桃缶　死亡
【桃缶全滅】

638　スカイブルー

「それじゃ、行きましょうか」
「そうね」
私達は高槻達の死体がある場所へ向けて出発した。
何か手がかりがあるといいんだけど。
「ねぇ、晴香。何か手がかりあると思う？」
「まぁ、無かったらその時はその時よ」
「ま、それもそうね」
晴香とそんな軽口を叩きながら歩いていた。
ふと空を見上げてみた。
青い空。流れる雲。まぶしい太陽。
まるでこの島で起きてることが嘘みたいに穏やかな空。
それでも今の状況は現実でその証拠にあたしのトレードマークだったお下げはもう無い。
いつも折原にいたずらされて、それでもちょっとだけ構ってくることが嬉しかったあの頃。
もう、取り戻せない日々。
『浩平を守ってあげられる七瀬さんのことがうらやましいよ』
そう言ってた瑞佳は最後に折原のことを守って死んでしまった。その折原もここに来る前に同じクラ

スだった里村さんに殺された。
　里村さんを恨んでいないと言えば嘘になる。
　もしあたしが里村さんのことを話していればあいつは死なずに済んだかもしれない。
　それでもあいつは言っていた。
『……すまない七瀬、茜を許してやってくれよ……』
　分かっていたことだけど、あいつはやっぱりバカだった。自分のことよりも他人のことを優先するバカだった。
　ナイフで刺されたのに自分のことよりも里村さんのこと、そしてあたしのことを気に掛けていた。
「どうしたの？　七瀬？」
　隣にいた晴香が声を掛けてきた。
「ううん。何でもないわよ」
「そう？」
　そう言って晴香はそれ以上何も聞いてこなかった。そんな晴香の優しさに今は甘えることにした。
　あいつの言葉を思い出す。
『柚木詩子とそれから祐一ってヤツを探してくれ』
『茜を頼むって伝えてくれよ、俺じゃどうも駄目みたいだ……』
　今は無理だけど、もしどこかでその人達に会えたらちゃんと伝えなきゃね。
　それが折原の最期の頼みだったんだから。
　繭のことも見つけられたらいいな。
　どこかで泣いてないといいけど。
　ひょっとしたら繭はあたしのことが分からないかもね。だっていつも繭が引っぱっていたお下げはもう無いから。
　代わりに折原がくれた瑞佳のリボンをつけてるけど。

もう一度空を見上げてみる。
どこまでも高く、すいこまれそうなほどに純粋な青。
もし天国がこの空の上に在るとしたら。
折原と瑞佳はあたしの事を見守ってくれてるのかしら。
二人ともバカがつくほどお人好しだったから。
それとも見ているこっちが馬鹿馬鹿しくなる会話を繰り広げてるかもね。
安心しなさいよ、二人とも。
あたしは大丈夫だから。

「七瀬、もうすぐ着くわよ」
晴香に声をかけられてあたしは現実の世界に引き戻された。
さあ、感傷に浸るのはここでおしまい。
センチメンタルな気分に浸るのも乙女って感じで悪くは無いけれど。
そんなことは帰ってからでも出来る。
今は晴香と、そしてこの島で知り合ったみんなと生きて帰るために。
失った日常はもう取り戻せないけど。
それでもこの非日常の世界から抜け出すために。
自分に出来ることからやっていこう。

『お前は生き残ってくれよ……七瀬』

分かってるわよ、折原。
なめないでよ！
七瀬留美なのよ、あたし！

639　凶弾の正体は

「はっ！　嘘吐きはコソ泥の始まりやで！」
その声と共に、ベネリM３から幾重もの銃弾が吐

き出される。
ドン！
だが、その弾丸が屠ったものは郁未ではなく、ただの——地面。
「クッ！　何処に消え——」
ヒュン！
一瞬、空気を裂く音が聞こえた後、晴子の左腕には、いつの間にか移動したのか、死角に立っていた郁未の包丁が深く突き刺さっていた。
「あぐあっ……」
「お母さん！」
腕を抑え、苦痛に顔を歪ませる晴子。
母の腕に刺さった包丁に驚く観鈴。
二人の注意は完全に郁未から外れていた。
（今だ！）
そのまま少年の所に駆け、その体を持ち上げ、肩に担ぐ。
（うっ……やっぱ重っ……）
それなりの体格とはいえ、やはり担いでいる対象は男、郁未にとって少年の重さは予想以上だった。
（でも……そんな事言ってらんないわ……早くこの場を離れないと）
確かに、少年を傷つけたあの三人は郁未にとって殺してやりたい程憎い、だが考える。
向こうの武器は、ショットガンと銃が一丁ずつ。
それに対してこっちは頼りない包丁一本。
不可視の力が使えたら何とでもなっただろうが、この島でそれは無理だ。
ならば残された選択肢は一つ。逃げることだ。
そのためには、何処でもいいから一撃で相手が混乱するようなダメージを与える。
だから最初の一撃を躱し、唯一の武器でである包丁を投げてでも相手に『当てる』必要があった。
そして偶然か、思い通りに事が運んだ。
一気に攻めればそのまま三人を倒せたかもしれなかったが、今の状況で『賭け』ともいえる行為はす

るべきではない。
　自分達にとって一番重要なのは、逃げ出すことなのだから。
（覚えてなさい……必ずこの借りは返すわよ……）
　少年を担ぎ、そのまま力の限り走りつづける。
「アカン!?　あいつらトンズラする気や！　……追わんと――」
「ダメだよお母さん！　まだ血も止まってないんだよ！」
　立ち去ろうとする二人を晴子は必死になって追おうとするが、いかんせん腕の痛みが酷い。
　少し動かすだけで、焼けるような痛みが走る。
　それを見ても観鈴は、ホッとしていた。
　誰も死なないことに。
　母がその手を汚さなかったことに。
「うっ……ぐう……」
　その時、肩の傷を抑えながら往人が目を覚ました。
「往人さん。大丈夫？」
　心配そうに観鈴が顔を近付ける。
「ああ……無事だったか、二人とも」
　どうやら痛みのために往人の意識は覚醒したらしい。
「俺の事より晴子、その傷は、まさか!?」
「そのまさかや――女の方にやられたわ」
　見当外れの返答に往人は頭を抱える。
「馬鹿な、最初の銃弾は――ってオイ！　あの二人はどうした!?」
「そこにおるで」
　百メートルくらい先に、少年を引き摺って歩く郁未の姿が確認できた。
「男の方はまだ意識が無い筈や、追うで！　居候！」
　その声に対し、
「バカ！　何言ってんだ！　アイツが起きてないって事は――」

そう、まだ郁未は気付いていない。彼らに向けられた本物の殺意に。
「ハア、ハア、ハア……」
息を切らせながらも、郁未は走る。
（もう少し……あとちょっと！）
前方に見えるのは、深い森。
見れば、あちこち植物が生い茂ってる所だ。
植物に紛れることができれば、追跡を撒くのも難しくはないはずだ。
（このままなんとか逃げ切ってみせる……！　絶対追いつかれるものか！）
森まであと十メートル。
ふと三人のほうを見ると、こちらに向かってきているようだ。
（もう遅い！）
あと五メートル。
銀髪の青年が走りながら何か叫んでいる。
何を言っているか良く聞こえなかったし、聞く気も無かった。
あと一メートル！
（やった！　勝った！）
郁未の口元に笑みがこぼれた。
その瞬間。

ズガガガガガガガガ！

その音と共に郁未の足に何発か、銃弾が当たる。
「ううっ……」
痛みに耐え切れず、郁未は地面に倒れこむ。
――あの三人に撃たれた？
（違う！　今のはマシンガンみたいな銃！　って事は！）
その時、茂みから男が現れ、困ったような表情を見せる。
「やれやれ、同士討ちを期待してたんだが……。ま

あ、仕方が無いか……」
手に持っているG3A3アサルトライフルが、不気味な光沢を放つ。
「さあ、絶望と恐怖をプレゼントしてやる」
少年は未だ、動けない。

640　見敵

白を基調に、無機質な清潔さを誇っている一室。
少し前までは、喚くような大声が鳴り響いていたのだが、今ではそこそこの静けさを保っている。
そこに、三つの人影があった。正しくは二体と一人の影、なのだが。長瀬源三郎と、彼の治療のために派遣されたメイドロボが二体である。
源三郎への治療行為は実質終了しているのだが、興奮し暴れるため止血がままならず、本来既に施設の維持作業に戻っているはずのメイドロボ達は、いまだに医務室に残留していた。
「もういいと言っているだろうが！　戻れ！」
「声紋パターンエラーにより命令無効です」
何度か発せられた源三郎の叫びも、ことごとく無視されてしまい、命令すること自体諦めざるを得ない。
（くそっ……御堂が来たところで、こいつら指ひとつ動かさないということか……？）
忌々しげにメイドロボを睨んでみるが、彼女達は動じることもなく、壁際に立っている。源三郎は腹立ちを抑えるために、目を瞑り心を静めようとした。
……そのとき。

ダダダダダダダダダァン……

銃声、そして轟音。続いていくつかの騒音が遠く流れてくる。
（ついに、御堂が――！）
慌てて自動扉の覗き窓から外を窺うが、誰もいな

いようだった。
ここに来て、何度うろたえただろうか？　競馬の対象と変わらなかったそれが、今では明確な恐怖の対象として近くにいる。
人間が馬を追い抜けるだろうか？　自問してみる。……無理な相談だ。しかし、追い抜かなければ命はない。手に握り締めた、忌避すべきものだけが、彼にとって最後の希望だった。

「千鶴さん、今の音……!?」
「まったく、顔の割に派手なおっちゃんだよ……」
別れて間もなく、御堂さんはどこから見つけたものか、戦闘相手に遭遇したようだった。時に断続的に、時に連続して、不快な低音が施設の中を駆け巡っている。
「わたしたちも、急ぎましょう」
位置的に、倉庫へたどり着く方が時間がかかりそうだと予想していたのだが、用心して進むうちに、手馴れた御堂に抜かれてしまったのだろう。かと言って警戒を怠るわけにもいかず、三人は御堂に遥かに及ばぬ速度で歩いていった。
「やっぱり警護がいたのかな？」
「倉庫が、ただの食料庫や物置じゃなかったってことでしょうね」
「例えば？」
梓が気にする風でもなく尋ねてくる。しかしわたしは、今では別行動をとったことを少し後悔していた。
「……例のコンピューターの資料とか、それとも島のデーターが保管してあるとか。施設の位置が明記されていれば、かなりの重要資料だろうし。詠美ちゃんや繭ちゃんが持っていたようなＣＤ媒体なら、あってもおかしくはないでしょう？」
「そっか」
「兵士詰め所がないから、装備品自体は少ないのだと思うけれど、武器もあそこにあると思うしね」

だからこそ、御堂さんに行ってもらったのは正しい選択だったと思う。
……全員で、行くべきだったかもしれないけれど。
千鶴達が医務室についた頃、気が付けば銃声は聞こえなくなっていた。おそらく倉庫での戦闘が、終了したのだろう。
(何も、なければいいけど……)
そして、一呼吸。
ようやくたどり着いた医務室にある自動扉の覗き窓から、中を窺う。メイドロボが見えるが……非武装だろうか、手に包帯を持ったままなのが見て取れた。
心に巣食う不安を祓って、目前の対象に意識を集中する。
「いくわよ」
小声で、短く一言。応じて梓とあゆちゃんが頷く。
タイミングを計って突入しようとした、まさにその時。
横に開くはずの自動扉が、強烈な金属音を響かせて、私のほうへと吹き飛んできていた。

641　殺人

ドガガッ！
短い衝撃音と共に、注視していた扉と、千鶴姉が同時に視界から消える。
振り向けば、ラグビー選手の体当たりでも受けたかのように、廊下の反対側近くまで吹き飛んだ扉の下に、千鶴姉が倒れている。
「千鶴さん！」
あゆが駆け寄る。
あたしは、振り向く。
振り向いた先には……鬼が、いた。
「なっ!?」

よく見れば、鬼ではない。
しかし膨張した筋肉と、狂ったような殺気が連想させるものは、まさしく鬼の雄性体だった。無造作に振り上げられる右腕を、棒で押さえる。
……いや、押さえようとして、そのまま両腕ごと万歳するように跳ね上げられる。危うく棒を投げ飛ばしそうになりながら、あたしは無様に後ろへ転がった。起き上がったときには、間合いを取ることすらままならず、既に相手は目前まで踏み込んでいた。今度は左脚が唸りを上げて飛んでくる。直撃すれば今度は天井まで飛ぶかもしれないな、などと頭のどこかで考えながらも、体はまったく動かない。
（くっ！）
衝撃に耐えるべく、どうにか身体を緊張させるが……
バシン！
……衝撃はなかった。
またもや、扉が飛んできていたからだ。千鶴姉が鬼へ向かって投げ飛ばしたために、攻撃が止まったのだ。勢いは先ほどのものより段違いに弱いとはいえ、無視できない程度の威力はあったようだ。
扉が落ちる虚ろな音か鳴り響き、一時の静寂が訪れる。
「長瀬……源三郎さん、ですね？」
「御堂かと思えば……貴方達でし・でしたか。なな・何故、いい・生きて生きて生きているのですすす・すか？」
冷静な思考と、暴走する身体がせめぎ合うように、不気味な台詞を繰り出してくる。ひび割れささくれた添え木と、千切れながらも纏わりつく包帯が、鬼の体毛のようでもあった。
「あなたに、教える必要は……ありません」
その言葉が合図だったかのように、再び緊張感が高まり、二人は正対する。

オヤジの右側にあたし。千鶴姉の斜め後方にあゆ。

あたしは、無言であゆに発砲を促す。殴り合いを始めてしまえば、銃の出番はほとんど無いが——今なら、当たる。

「うぐぅぅぅぅ……」

銃を手に、あゆは低くうめいて震えていた。

(やっぱ、こんなんでも人間相手は無理か……)

銃をあゆに持たせたのは失敗だったかもしれないな、と苦々しく反省するが……一方であゆに人殺しをさせたくないと思う矛盾もあった。

「ぐおおおおおおっ！」

吠えるように叫んで、オヤジは千鶴姉に襲いかかった。繰り出した右腕の下に潜り、脇から外へ抜けながら切り裂く千鶴姉。

「さすが！」

的確な速さに感心しながら、あたしは怯んだ相手の顔面に棒を叩き込む。

もんどりうって転倒する化け物。

「……どうだ!?」

そのまま様子を窺いつつ、二人で軽く攻撃を放つが、あまり効果がない。そして起き上がった時には……出血がほとんど収まっていた。

「そこまでして……」

「信じらんない……」

二人で驚き、呆れる。

「ここ・殺す！　貴様らも！　みみ・御堂も！」

潰れただみ声と、ふいごのような呼吸音を撒き散らしながら、オヤジが突進してくる。

千鶴姉が爪を振り、太腿の筋肉を斬りながら右にかわす。

あたしは左にかわしながら、即頭部を痛撃してやるが、わずかに揺らいだに過ぎない。

ぐらり、と崩れたバランスを取るために、向きを変え踏み出した足の先には……

……あゆが、いた。

「ここ・小娘！　貴様からだ貴様からだ貴様からだ!!」
貴様からだ！　と連呼しながら。
泡を吹いて再び突進するオヤジが、あゆの目前に迫る。
「うぐ！」
目があって硬直するあゆ。
「あゆちゃん！」
千鶴姉が叫び、突き飛ばす。かわりにオヤジは千鶴姉を横から捕らえ、そのまま両者ひと固まりとなって壁に激突した。
ずだん、という地味な衝撃音から、速度を落としたのが解ったが……千鶴姉は完全に捕まっていた。
「……か……は」
ぎりり、と引き絞る音すら聞こえてきそうな、強力な締め付けに声すら出ない。
「このおっ！」
あたしは背中から棒で殴るが、どうやら蟷螂の斧でしかなかった。
「……あ……熱……」
化け物じみた治癒能力が、熱気と激しい呼吸を導き出している。距離を置いたあたしにまで、熱気が伝わっていた。
そこから予想される怪力で抱きしめられては、遠からず内臓や骨がやられてしまう。解っていても、何も出来ない。無力さを嘆いても、何も起こらない。
それでも、叩くしかないあたしの背後から、声がかかった。
「あ、梓さんっ！」
振り向けば、そこに。
あたしは驚いて身を伏せる。

タタタ！
タタタタタ！

軽い連射音が二回。

オヤジの背中にばらばらと弾丸が吸い込まれていく。そして、化け物は千鶴姉を抱いたまま、膝をついた。
しかし、倒れはしない。
「くっ……」
苦痛にうめく千鶴姉。
「う、ううう！」
あゆが涙目のまま、引き金を絞る。
再びタタタ、と連射音が響いて……

……ようやく、腕がほどけた。
のろのろと千鶴姉は身体を引き抜き、爪を振りかぶる。もはや動かないであろうオヤジの首を、深々と、そしてゆっくりと切り裂く。
大量の血が、ポンプで放ったように跳ね飛び、あたしたちは熱湯のような返り血を浴びた。

「うぐうぅぅ……」

銃を構えたまま硬直しているあゆちゃんの方へと、わたしは歩いていった。
「源三郎さんは……死んだわ。殺したのは、わたしよ」
人を殺す、という恐怖を乗り越える前に行動してしまった代償として、彼女は錯乱していた。
「あゆちゃん、銃を——おろしなさい」
血塗れのまま微笑んでも、恐ろしいだけかもしれないけれど。それでも、わたしのために戦った彼女を、救ってやらなければならない。だから、痛む身体を黙らせて、わたしは手をさしのべる。
あゆちゃんがぽろり、銃を落とす。
「うううううっ！　ち、千鶴さんっ！」
そう叫ぶと、がば、と抱きついてきた。
よくよく——抱きつかれる日のようね、そんな風にぼんやりと思った。

やっぱり身体は痛かったけれど。

苦痛では、なかった。

長瀬源三郎　死亡

642 end of the breakdown

闇は深く。
それはまるで、海の底の様。彼は一人、漂っている。その中を。
――鼓動。それは深い闇に、延々と響く。
〝それ〟は不可視の力。抑えきれぬ破壊の力。
溜まりに溜まった暗黒。それは今、彼の身体を壊さんとしている。限界が近い。
どうせ、長くは保たない。分かってる。そんな事は。
――一人ならば。押し寄せる崩壊の予感に、とうに気が狂っていただろうか？
だが今は。狂ってはならないのだ。誰の為でもなく。彼女の為に。

――どくん。

微かな〝うねり〟。闇は蠢く。
何かが始まった。それは彼自身も聞いていた。闇も。
スガガガガガガガッ――
聞こえる。遠くから。水の中から聞くように。
銃声。それと、悲鳴。悲鳴だったが、聞き慣れた声。郁未だ。撃たれたのか？
参ったな、助けないと……。

――どくん。

外に出んとする。闇はさらに蠢いて。
力を抑える方法。それは己ごと封じる事。眠る様に。

だが、今はそれどころではない。郁未が危ないのだ。起きなければ。
だが、起きるということは。つまり――
――これで。これで、最後かもしれないってことかな？
力が彼と同化する。交わるように。
……ああ。本当は、君と一緒に出るつもりだったんだけど。すまない、郁未。
外が近付いていく。覚醒は近い。
最後に――
厚かましいかもしれないけど――彼女を頼むよ。
国崎君。

微かな、硝煙。火薬の臭いが鼻を突く。
フランクが茂みから姿を現す。本来、殺すだけなら姿を現さずともよいのだが。
理由はただ一つ。彼の目的だ。
少年に絶望と恐怖を与える事――。
恐怖は難しい。飄々としたあの様子。何があろうと恐れはすまい。死んでも、だ。だが、絶望なら？
その為の要素が、今、目の前にいるじゃないか。
天沢郁未――
奴の何かは知らぬ。だが、恐らくは大切な何か。恋人か。それとも。
フランクの顔に笑みが浮かぶ。絶望を与える術。それが思いつく。とても、とても残虐な術。
少年の目の前で、彼女を。
その為に。まずは少年を起こさねばなるまい。蹴るか。それとも撃つか。
天沢郁未が森へと引いていく。少年の身体を引きずりながら。
撃たれた足が痛い。涙目だ。それでも尚、その顔は使命感を帯びて。なんと強い女。

だからこそ、だった。
ズガガガッ！
銃声。四発。その内の三つが、少女の左肩に穴を穿つ。
「うあぁぁアアッ……！」
悲鳴。半狂乱になって、もがく。遠くから、怒号。そして悲鳴。うるさい。
振り向いて、撃ち放つ。五発。
駆け付けんとする銀髪の男、確か国崎往人、が足を止めた。当たってはいない。
――片手でショットガンは撃てまい？　静かにしていろ。
振り返る。少年は未だに目を覚まさない。これでもまだ、目を覚まさない気か？
そうか、なら、次は右肩でも――
びしっ。
妙な音。それは、まるで、何かが弾けるような。
――びしっ。びちっ。

少年の身体から血が噴き出す。目覚めたか？　しかし、何故血が出るのだ。
――いや。これは？
ぐううううウウウウウ。
何だ、この声は。待て。〝これ〟は何だ――!?
「――」
郁未は、声すら上げない。上げられない。
強烈な重圧？　いや、プレッシャー。それは、今立ち上がった者から。
「――イ――ク――ミ――」
声。辛うじて、呼ばれたのだと気付く。……何？
続きが無い。その代わり、溢れんばかりに浮かび上がった、不可視の力が――消えていく。
そして。
「――すまない、郁未」
最後は、酷く静かな声だった。

643　虚無感

物言わぬ肉塊と成り果てた金髪の少女。
それが誰だったかなんて、もはや重要でもなんでもないし、どうでもいい。
大事なのは、結花が撃たれて、倒れた。
それだけ。
血だまりの中を走り、駆け寄る。
「結花……結花ぁ！」
抱き起こし、必死に呼びかける。
その呼びかけに応えたのか、ゆっくりと、あたしの手に、結花の手が重ねられる。
恐らくは、やがていなくなってしまうその人の、最後の……温もり。
だけど、あたしは……あたしは……それを認めたく、ない。
だけど、これは、紛れも無い現実。
自ら吐いた血によって真っ赤に染まった結花の口が、微かに動く。
「スフィー……ごめん……ね……」
普段の結花からは想像も出来ないくらいに、その声は弱々しく擦れてて。
魔法の使えないいまのあたしには何も出来なくて。
どうしようもなく、心の中の絶望感や喪失感が膨れ上がって。
とめどなく、涙が溢れた。
「やだよぅ……結花……死んじゃ……死んじゃやだ……」
ぽたぽたと、重ねた手に雫が跳ねる。結花の瞳が微かに動き、それを見た。
そして結花は、それを見て、笑った。真っ白を通り越して、蒼くなった顔で、確かに笑って、言った。
「私は、魔法も使えなかったし……結局、足手まといになっちゃったけど……これくらいなら、しても……いいよね？」

震える手をそっと、背中に回し、弱々しく、けれどやさしく、あたしを抱きしめる。
「ずーっと……こうしていたいわ……」
いい。ずっと、ずっと抱きしめていてくれてもいい。
そう言いたいのに。嗚咽が邪魔をして、言葉にならない。
「ずーっと……こうしていたいけど……ちょっと、無理……みたいね」
瞬間。結花の口から、血の塊が、一気に吐き出される。
「結花ぁっ！」
「……っ、ごほっ……」
もう、助からない。
だけど、それを認めたくない。
「結花っ！　死んじゃやだよ、結花ぁっ！　……けんたろもリアンも、もういないのに……結花までいなくなっちゃうのは……やだよ…」

結花の眼はすでにあたしを見ていない。もう、殆ど見えてない。
小刻みに震える手が、あたしの頭に乗せられる。
真っ赤に染まったその手で、結花はあたしの頭を撫でる。
そして、

「　　　　　　　　　　」

その手が、ぱたり、と落ちた。
その声は聴こえなかったけれど。
何を言ったかは、痛いくらい分かって。
あたしは、もう一度、泣いた。もう動かない、その人の胸の中で。
『ごめんね……スフィー……』
あとに残ったのは果てしない虚無感。そして――

焼け付くような痛み。こんなのは、何度も見た。思い出せぬ記憶が訴える。
違う、そんなものは知らない。そう、いつもの様に訴えようとして。
止める。
事態はそれどころではなかった。北川が、立ち上がる。その手に釘打ち機を握って。
「……北川？」
「悪いな、相沢。話は後だ」
祐一に背を向け、言葉を返す。その顔は見えない。泣いているのか？　それとも。
だが、その雰囲気。祐一に、予感めいたものを伝えてくる。これは——危険だと！
「北川、お前まさかッ……！」
「………」
答えない。だが、北川は、迷わず開いたドアから外へ出た。その先は見えない。
その行動は、一つの結論を導いた。

九番　江藤結花　死亡
【残り24人】

644　二つの悲劇、二つの殺意

「レミィ……」
ぽつり、と呟かれた一言。血の香りの中、微かに漂い、消えていく。
北川は、レミィの亡骸を抱えて。泣きもせず、もはや叫びもせず。
祐一は黙ってそれを見ている。縛られてさえいなければ。くそっ。
でも、俺に何が出来るんだ……今の、北川に。
小屋の外からは啜り泣く声。結花を呼ぶ声。何が起こっているのか？
それも、やがて泣き声しか聞こえなくなった。
……死んだのか。
悲劇だった。今、目の前に広がっているのは。

「北川！　北川ァッ！」
声は届かない。
「お前――あの二人を殺す気なのかっ⁉　答えろ、北川っ！」
――返事は無い。ただ、最後に見た背中は。
確かに、そう、言っていた。間違いなく。
泣き声。血の量すら少ないが、状況は同じ。小屋の中と、同じ。
少女が泣いている。少女が倒れている。それはまさしく悲劇。
それでも――許す気はない。
「……」
泣き声は止まった。特に直接何かをしたわけでない。いや、したか。
釘打ち機は、確かにスフィーの頭を捉えている。それは何かを語る事無く。
ただ、〝死〟を語る。

「お前が、レミィを殺したのか？」
淡々と。北川の目には、狂った様子も見られない。狂っていないからこそ、狂ってないとも言える。まさしく、そうなのかもしれない。
返事は無い。釘打ち機の狙いが変わる。こいつじゃないとすれば、こっちか。それだけの理由で。
黒帽子は、無表情で北川を見ていた。答えは無い。
「……あたしが撃ったよ」
声。それはまさしく、スフィーのもの。芹香の危険を、察知したからか。
釘打ち機の狙いは、また元に戻る。
「結花を撃ってた……。何があったかは知らないよ。でも、だからあたしも、撃った」
「……そうか」
無表情な会話。ただの事実の確認のように。
ああ、レミィ。何でお前は撃ったんだ？　撃たなきゃ、お前は死ななかった。
俺が居ない間に何があったんだ？　……くそっ。

北川の顔が歪む。悔やむ。己が離れてしまった事を。こんな事になると知れていれば、死んでも離れなかった――。
「ひょっとしたら、結花が最初に撃ったのかもしれない。でも、そんなの分かりっこない……。……レミィさんだっけ？　あの人、貴方の仲間だよね」
すぅ、と立ち上がる。地に横たわる、結花の姿。
そして、少女が握るのは――
拳銃。
「俺が、レミィの仲間だから……殺すのか？」
「――芹香さん、下がってて」
答えない。ただ、その言葉は、十分過ぎる程の返事だった。
芹香は、一瞬躊躇ったものの――
「すぐに行くから……」
その言葉で、右手の方へ駆けていった。北川は、芹香を撃たなかった。撃つ気も無い。
静寂。満ちる、殺気。いつ、銃が上がるとも知れぬ、その空気。
――北川！
その中に、一つの声。祐一の声。小屋の中から、空しく響く。
「お前は、レミィを殺した。だから殺す。十分だろ？」
――北川ァッ！
静止を求める声。もはや誰にも届かない。ただ、響く。
スフィーは答えなかった。
――北川、止めろ！　北川ァァッ!!
――皮肉にも。
静止を求める、その絶叫が、合図となった。

645　この狂気の戦場で

銃声と、何か鋭いものが射出されるような音とが、

同時に響く。
「え——」
「な……？」
北川とスフィーが、共に驚愕の表情を浮かべる。
互いが、互いを撃ち殺そうとした。
撃つべき相手は、正面にいる、自分に凶器を向けている相手。
大切な者を殺された、仇である筈だった。
だが——

「……あ……相沢…………」

惚けたように、北川が呟く。
レミィの仇である赤い髪の女を遮るようにそこにいる、彼の視界に写るのは——
いくつかの釘と銃弾をその身に受け、未だ後ろ手で縛られたままの、祐一の姿だった。
「やめろって……言ってるだろ……二人とも……」

呆然とする二人の間で、そう言いながら、ゆっくりと仰向けでその場に崩れ落ちる。
「あ、相沢っ！」
「……」
北川が、祐一に駆け寄る。
スフィーまでもが、拳銃を構えた姿勢のまま、呆然としていた。
殺す筈で撃ったとはいえ、そこに倒れているのは、違う人間。
撃つつもりの無かった相手なのである。
少なくとも、今は。
人はそう簡単に、冷酷になったり、狂気に陥ることはできない。
想像外の相手を撃ってしまったことによって、スフィーの心は混乱していた。
「おい！　相沢、しっかりしろ！」
北川は、自分を殺そうとした少女のことなど気にも留めずに、祐一に呼びかける。

「もう……やめろよ……殺すだの…………殺されるだの……」

掠れるような声で、空を仰ぎながら言う祐一。

もうその瞳は、何も捉えてはいない。

「相沢……」

「訳もわからないまま、疑われて、捕らえられて……人が来ても、また疑って……殺し合って…………そんなの、おかしいだろ？」

北川とスフィーは、まるで独り言のように続ける祐一の言葉を、黙って聞いていた。

「この殺し合いが、強要されてるものなら…………何故、みんなで協力して、打開しようとしない……何故、人を信じようとしない……何故、抵抗しようとしないんだよ……そうしなかったら、この〝殺し合い〟を管理してるやつの……思うツボだろ……」

それは、この狂気の戦場で、皆が忘れていたこと。

いつか死んでいった、白い女性が、己の死と引き換えに、皆に訴えたこと。

祐一が記憶を失ってしまったからこそ、思い出せたこと。

「その現実から逃げちまったらしい俺が、言う台詞じゃ……ないだろうけどな……」

ぼんやりと、視界に広がる空。

掠れて、よく見えない。

遠くから……いや、実際は近いのだろう、北川の声がする。

何を言っているのかは、もう、聞き取れない。

（……どうして、こんなことしたんだろうな、俺は）

祐一は、刹那と久遠が混在する瞬間の中で、ふと思った。

自分だって、命が惜しい。

わざわざ二人の前に出なくたって、止める方法は、あった筈だ。

（……俺は……死にたがっていたのか……？）
そうかもしれない。
なにせ自分は現実逃避して、記憶を失ってしまった程だ。
無意識に死にたがっていたとしても、不思議はないのかもしれない。
（だとしたら……さっきのは、本当に俺が言えた台詞じゃないな……）
祐一は、心の中で軽く笑った。
こんな状況でも、皮肉屋祐一は健在らしい。

急に、今まで出会ってきた人たちの思い出が、心の中をよぎる。
これが走馬燈というものなのだろうか？
（名雪……秋子さん……あゆ…………みんな……）
この島で、未だ〝殺し合い〟をさせられてる、或いは、もう死んでしまったと聞かされた、大切な人たち。

特に、名雪と秋子さんのことを思うと、心が苦しくなるのはどうしてだろう……。
そして……。
（茜……）
祐一は、中学の頃に出会った、好きだった女の子のことを思い出した。
参加者名簿に載っていた、同じ名前。
あの名前が、自分の知っている里村茜と別人であることを、願わずにいられない。
（茜……お前は……違うよな……こんな酷い世界で、殺し合いなんて強要させられないで、今もあの空き地で、待ち続けているんだろ……？）
祐一は、気づかなかった。
心の中に映る茜の姿が、自分の覚えているものよりもずっと、成長しているものだったことに——

「……っ」
スフィーは、涙を流していた。

今、この人が言ったこと。
当たり前の事だったのに――
分かっている筈だったのに――
それを忘れずにいられてたなら――
きっと、結花も、あの金髪の人も、
死ぬことはなかったのに――
そして、この人も――

「相沢！　相沢っ!!」
友人に呼びかけられながら――
「相沢ぁぁぁぁぁぁぁっ!!」
大切なことを思い出させてくれた、その人は――
「……みんな……負けるなよ…………俺みたいに
…………な…………………」
そう言って、ゆっくりと目を閉じた。

一番　相沢祐一　死亡
【残り23人】

646　やわらかな指

中天へと昇りゆく太陽の熱のみが、その場所を支配していた。
じりじりと身を灼く光に晒されながら、言葉を発せぬまま、あたし、スフィーは返り血を浴びたまま呆然と立ちつくす。
嘘みたいに冷たくなった結花のからだ。
そのそばで、不思議と安らかな表情を浮かべて、眠っているかのように倒れ伏すレミィ、という少女のからだ。
(結花を殺した、ぬけがら)
(……あたしが殺した、ひと)
事実を反芻して両の握り拳をぎゅ、と固める。銃はとうに地面に落ちていた。
拾い上げる気は、起きなかった。

祐一と呼ばれていた少年のからだは、もう一人の少年の腕にきつく抱き留められている。
北川というらしい彼の瞳からは、まるで機械のように涙だけがこぼれ続けていた。
逆に、さっきあれほどに泣いたのに、今はもう身体中の水分が吸い取られてしまったように、あたしは泣けない。
瞼が酷く、眩しさで熱いのに。その熱以外の温度は、あたしの中からなくなってしまったみたいだ。
代わりとばかりに脳裏を駆け巡るのは、ただひとつだけの言葉。
(――――こんなはずじゃ、なかったのにね)
そう、こんなはずじゃ。
絶対になかった。
ねえ、リアン。どこからあたしたちは間違っていたんだろう。
結花を、金髪の子を、祐一という少年を、どうして死なせてしまったんだろう。
あなたとはぐれて、南さんを恐れたとき、初めて他人を疑ったときから、何もかもがおかしくなっていたのかな？
舞さんと佐祐理さん、あなたと綾香さんを助けられなかったのを知ったとき？
髪の長い女の人に襲われて、初めて目の前で結花が人を殺すのを見たとき？
それとも……けんたろが死んだんだって知ったときから、あたしは笑顔で不信をごまかすようになったのかな？
あたしたちには、次にするべきことがある。
生き残ること。祐一が残した言葉。意志。
とても簡単なように見えて、とても、むずかしい宿題。
誰も答えを出してはくれない。自分で必死に考え

て、解くより他はない。
今でも、憎くないと言ったらそれは嘘になる。
結花は撃たれた。結花はもう笑わない。おいしいホットケーキを食べられない。
最後のあの店との繋がりを、なくしたくなかったのに。
それを壊した人間をめちゃめちゃにしたいと思う。
けれどそれは目の前で亡骸を抱える北川にしても、同じこと。
あたしを何度殺しても、足りないはずだ。
辺りに立ちこめる濃い血の匂いに包まれて、レミィを殺したあたしはただ立ちつくす。
祐一を殺した北川潤は、ただ涙を流し続ける。
人殺しのあたしたちには、祐一への答えを考えることしか許されない。
――いつまで？

そう自嘲気味に自分に問い返した、刹那。
がさり。
はっきりと、草むらを踏み分ける音があたしたちの耳に届いた。
芹香が、悲しい瞳をして戻ってくる。
足取りは確かだけれど、唇がごめんなさい、と動いたように見えた。
何もできなくてごめんなさい、と。
そして芹香は、ゆっくりと二人の少年の元へと歩み寄る。
放心したような北川の両目の涙を指でつつっとぬぐって、懐から出したハンカチで更に拭き取る。
優しいしぐさで、何度も、何度も。
「…………」
そのたびに、芹香の口元が動く。
「…………」
また。
「…………」

もう一度。
涙が、完全に拭い去られた。目は真っ赤だけれど、もう頬を濡らす水はない。
それを確認して、芹香の手が移動する。
『ありがとう……あなたのこころ、受け取りました』
一切の澱みのない声で、凛とした表情で言って。
芹香は北川の腕の中の祐一に手を伸ばし、彼の頭をくしゃりとなでた。
くしゃり、くしゃりと、まるで母親が子供にするときのように。
もう動かない祐一を、ひたすらに撫でつづける。
その姿はまるで母親のように見えて、ひどくあたしの胸を刺した。
北川の眼からはまたひとすじ、涙がこぼれていた。

647 Don't say good-bye

「……俺は、相沢と一緒にいた椎名って子を探すよ」
三人の埋葬を済ませるなり、北川は強い声でそう言った。
一度、一軒家で会ったきりの彼女がどうなったのか、北川は知らない。だが、祐一がいない今、彼女の身が心配だった。
さらにあの明晰な少女なら、遺されたこのCDについて何か知恵を貸してくれるかもしれない、そう考えたのだ。
芹香の口が、お気をつけて、と言うふうに動いた。
そしてスフィーが、初めて北川に対して口を開く。
「……許した訳じゃないわ。あなたも同じだと思う。だけどね、まだ、死んでなんかやらないから。必ず生き残って、出来ることをやり遂げて、元の生活に

戻るまではね」
頷く。
「お前らも、国崎って奴に頑張って会えよ」
それだけ言って、北川は踵を返して小屋をあとにした。
決して、振り返りはしなかった。

俺、もう一度せいいっぱい生きてみる。
香里の、祐一の、レミィの想いを胸に抱いて、一緒に生きてやる。

彼はまた歩き出す。
道は分かたれているけれども、必ず行き先には何かがあると信じて。

――祐一にも、レミィにも、芹香たちにも。

さよならは、言わずに。

648　舞台裏　～長瀬～

ふと、目が覚めた。
瞬間、彼は今まで自分が見ていたのがただの悪夢であったか……と儚い想いを抱きかけたが、その期待はあっさりと裏切られた。
ここは彼の寝室でもなければ、見慣れた彼の店の内装、暖かみを感じる骨董の並んだ場所でもない。
どことも知れぬ洋上の島。そのさらに上空に浮かんだ一隻の飛行船。機械に囲まれた無機的な一室。
目の前には、一人で使うにはいささか大きすぎる円形の卓が一つ、仰々しく鎮座ましましている。
全てが始まった頃には六人で囲んでいたその卓も今は彼、長瀬源之助一人を残すのみ。
「……眠ってしまいましたか。いけませんね」
誰へともなく呟く源之助。だが、その呟きを聞き咎める相手は既に誰一人として存在しない。

彼と共にこの殺戮ゲームの管理を担っていた他の『長瀬』の者は皆、自らの意思でこの場所を立ち、それぞれが己の胸のうちに従い、一人、また一人とゲームの会場である名もなき島へ降りていった。
「ふぅ……」
同胞の去りゆく姿を一つ一つ思い出しながら、源之助は静かに深く深くため息を吐いた。

「源四郎殿は、来栖川綾香の死をきっかけとして、己の戦場を求め」

幾度目かになる定時放送が終わった頃だろうか。
長瀬源四郎がおもむろに立ち上がると、そのまま足先を部屋の出入り口へと向けたのは。
「どこへ行くつもりかな、源四郎さん」
と、無音無言のままに場を立とうとした源四郎に目を留め、誰何の声を浴びせたのは長瀬源三郎だ。

その声にぴたり、と足を止め——だが振り向きはせずに、淡々と、そして堂々と源四郎は宣言した。
「私は現時点を以て管理者権限の全てを放棄する」
あまりに無責任に過ぎる突然の発言に、どよめく『長瀬』達。だが源四郎は彼らの動揺を意に介そうともせず、最後に室内を一瞥して部屋を出た。
互いに目を合わせる『長瀬』たち。
「ということは……どういうことだい？」
「管理者を辞めるってことでしょうね、父さんも」
すっかりと憔悴しきり顔の長瀬源一郎の言葉に、やれやれと顎を撫でながら返したのは長瀬源五郎。
その言葉に対しての疑問が上がる前に、源五郎は源之助に向けて次の言葉を放っていた。
「源之助さん、おそらく無駄になるでしょうけれど父さんを追いかけてください。あの人を引き止めることができる可能性があるのは貴方だけだ」
「うむ……そうだな。では、一旦ここを頼む」
頷き、ゆるりとした動作で立ち上がる源之助。

確かにこの場において源四郎に対して意見できるのは、年長者である源之助をおいて他にはいない。
――しかし。
源五郎の言う通り、他人にどうこう言われた所で信念を曲げるような源四郎ではない。
結局それから程なくして、源四郎は島へと降り、傷貌の武人と凄絶な格闘を繰り広げることとなる。

「源五郎殿は、高槻の後任という名目で、施設管理のために」

源之助が源四郎との別離の会話を終え、元の部屋へと戻ってきたとき、場の雰囲気は明らかに先ほどとは異なった、一触即発の緊張状態にあった。
「ああ、戻ってきましたね源之助さん」
その重苦しい雰囲気を意にも介さずに、ただ一人普段と変わらぬ様子を見せているのは源五郎だ。
彼が源之助に追わせた源四郎に関し、言及は一言もなかった。元より彼自身が言っていた通り、説得など無駄であることはわかりきっていた風だ。
しかし、続く源五郎の言葉が源之助を驚かせる。
「僕も島に降りることになりました。すみません」
よくよく見れば、白衣に身を包んだ源五郎の姿は先ほどまで椅子に座っていたときのものではなく、この場を退出する準備を進めていたかの様子。
そして事実、源五郎は島に降りようと言うのだ。
「いえね、先ほど高槻を放逐しちゃったでしょう？そうなると、どうしたって施設を管理するのに、新しい人が要るじゃないですか」
眉を寄せ、困ったような顔をして――いや、元々源五郎はそんな顔だったか。肩を竦めながら笑う。
「そう提案をしたら、皆さん快く賛同してくれて」
ぎりっ、と歯を軋らせるような音がしたのは気のせいか。場の不穏な空気が一気に膨れ上がる。
確かに賛意は得たようだが、どうやら快く、とは

到底言い難いやりかたで言質を取ったらしい。

「……なるほど」

頷く源之助。ここに来て源五郎の仕掛けた細工を全て理解したものだが、敢えて叱責は飲み込んだ。

代わりに、大きくため息を一つ吐いてから呟く。

「無闇に敵を増やすものではないだろうに」

「憎まれ役は慣れてますよ。それに――」

そう言って、源之助の脇を通り抜け、部屋を出ようとする源五郎。その顔は作り物のような笑顔。

去りゆく背を向けて、源五郎の哀しげな言葉が、源之助にだけ聞こえる程度の大きさで届いた。

「僕のかわいい娘たちは、二度と笑いませんから」

「源三郎殿は、正義感の強さ故に修羅の道を選び」

源四郎が去り、源五郎が去って、それでも長瀬は何事もなかったかのようにゲームの管理を続ける。

いや、何事もないはずはない。

その証拠に、またも席を立つ『長瀬』が一人。

がたん、と大きな音を立て、椅子が倒れ転げる。

「許せませんな……なんて、何て身勝手なのか」

源三郎。普段の飄々とした風体からはらしからぬ憤りを見せ、ワナワナと全身を震わせている。

ダン、と卓に拳を叩きつけ、俯いて呻く。

「今更降りたあの親子が……ここで安穏としている貴方たちが……そして、何より、この私が！」

――ぽたり。

一滴、卓上に落ちたのは源三郎の血か涙か。

そして彼はそのまま足先を出入り口へと向ける。

「行ってしまいますか、貴方も」

源之助の言葉に、それでも彼は足を止めた。

だがそこまで。最早説得が通じる段階ではない。

「源五郎さんの言葉を借りるわけじゃあないがね。あの二人が降りて、私が駄目という道理もない」

そう言い放ち、それでも足は止めたまま。

顔を向けず、背を向けたままで言葉を続ける。
「私は動けなかった。私の部下が、柳川が死んだ、その時に動こうともしなかった。――それが長瀬の責任だから、ってな。ところがどうだ！　来栖川の娘が亡くなった途端に、源四郎さんが、降りた」
ぎり、と、先程聞こえたような歯軋りの音。
身を震わせ、必死に激情を抑えている源三郎。
「悔しかった、羨ましかった……ありがたかった。それでもやはり許せなかった。全て私の身勝手だ」
そこまで言うと、再び歩を進める。
と、その背に声が掛けられる。
「身勝手は、皆一緒だよ」
今の今まで、揃って無言を貫いていた残り二人、その片割れたる長瀬源一郎の声だ。
「俺たちは、だからここにいる。違うか？」
「……喋りすぎました。まあ、これが最後です」
源一郎の問いには答えずに、源三郎はただ、別れだけを告げる。その手には一包みの頓服薬。

「それじゃ失礼。たとえ次に会うことがあっても、私は今の私じゃ無くなっていることでしょう」
そう言って、部屋を出てゆく源三郎。
残された者に、それ以上かける言葉はなかった。

「源一郎殿は、背負った罪の彼なりの精算の為に」

既に三人が去り、残ったのもやはり三人。
無言を貫く残る二人に、源之助が水を向ける。
「源一郎殿フランク殿、お二人も降りては如何か。参加者を爆破するようなことはもうないのだから、減った兵士の分を手伝うくらいはよいでしょう」
もはや『長瀬』に管理者としての枷はない。
各々が、好きなように勝手を決め込んでいた。
だからこその提案だ。
対して、すっと手を挙げる男が一人、源一郎だ。
「悪い。それじゃあ、俺も降りていいか？」

「構いませんとも」
どうぞお降りなさいとの提案に、本当にいいのかと聞き返す。それが彼、源一郎の性格である。
だからこそ彼は、いまだに無言を貫いている最後の一人、フランク長瀬と共に、最後までこの狂ったゲームに反対の立場を取っていたのだ。
島への指示、高槻との連絡、その他諸々の仕事はほとんどが源之助と、既に島へ降りた三名の仕事。
残る彼らは顔を顰めながら雑用をしていただけ。だからといって罪が軽くならないことは、彼らが一番よく知っている。
「疲れたよ、もう。ここで黙って見てる事には」
どっこいしょ、と重そうな腰を上げる源一郎。
力ない足取りで、出入り口へと歩みを続ける。
今更それを止める意味もない。それでも源之助は一つだけ、他の長瀬たちへ掛けたのと同じように、ため息を吐くと共に、一言だけ、声を掛ける。
「まさかとは思いますが、死ぬ気ですか？」
その質問に対し、源一郎は力なく、だがはっきりとした意志を持って首を横に振った。
「源之助さん。俺たちがやってきた事に——自分を裁く権利なんてものが、残ってると思うのかい？」
言葉に詰まる源之助。寂しげに笑う源一郎。
「俺はそこまで傲慢にはなれないよ」
そして源一郎も、完全に部屋の外に出た。
「小言は、戻ったときにいくらでも聞くよ」
「……どうか、言わせてほしいものです」
「そしてフランク殿は、不信と不満、罪悪感が故に全てが許せなかった」
最後の最後まで、フランクは沈黙を貫いていた。
確かに彼は普段から無口である。が、ことここに至るまで無言で全てを見ていたというのは、それはそれで不気味なものがある。

源之助はその視線から明確な不信を感じていた。
「……フランク殿、貴方はどうするのです？」
問いかければ、その不信の視線がぎょろりと動き何を今更、とばかりに彼の反感を明確に物語る。
無言のままに立ち上がるフランク。
「行くよ。その方が都合がいいんだろう？」
ぼそり、と漏れた声は、苦々しさで溢れていた。
源之助に対するその言葉に、同胞への共感は無くただ明確な拒絶と敵意だけがある。
その視線に対し、哀しげな表情を見せる源之助。
だがフランクはそんな彼の様子に眉も動かさず。
「茶番はもうたくさんだ」
「茶番」
ぼそり、と呟いたその言葉に、驚いたように瞳を見開く源之助。思わず息を呑む。
動かぬフランクの表情。それは本気で言っていることを明確に示している。一片の嘘すらない本心。
「この腐ったゲーム、俺は反対したよな。開催じゃない、彰と祐介を参加させることに。俺だけじゃない、源一郎も……だが、認められなかった」
フランクは過去を悔やむように一瞬瞳を閉じる。
「それでも、長瀬だから仕方ないと受け入れていた。それなのに、無責任にも管理を降りる、だと？　これが茶番でなくて、なんだというんだ」
「フランク殿」
延々と無言でいたからこその、溜まりに溜まった怨嗟の言葉。らしからぬ長台詞はそのまま彼の負の感情の深さを表しているかのようである。
そして最後に部屋を出てゆくフランクの、口元。
自嘲するようにぐにゃり、と歪んで。
「……エゴだな」
と、呟いて、そして源之助の視界から消えた。
「…………」
目を開く。そこにはやはり誰も居ない。

源一郎、源三郎、源四郎、源五郎、フランク。
一人一人の顔を思い浮かべつつ、源之助は椅子の背もたれにゆっくりと体重を預けた。
きしり、と椅子がきしみ、電子音だけが響く暗い部屋の内を耳障りにかき乱す。
結局のところ、長瀬たち全員が全員、心の底ではこの企画に賛同などしていなかったということか。
源一郎やフランクだけではない。事実、何人かがいくつかの配給品に細工を加えた様子があった。
そして死地に向かう刹那、覚悟の段に至っての、心情の吐露。フランクは茶番と決め付けていたが。
「疑心暗鬼には勝てない、ということですか」
長瀬が一致団結してこのゲームを止めていれば。
そう後悔するのも、今となってはもう遅い。
遠い目をしつつ、モニターをぼんやりと見つめる源之助。誰かが映っていたり、島の風景しか映っていなかったり、何も映していなかったり。
……それに関してはどうでもよかった。

「自分で死に場所を選べるのは、羨ましい」
うっすらと目を細め、口元を緩める源之助。
その顔は、優しく穏やかで……そして哀しい。
「私はここから決して動きません。動いてしまえば全てが終わる。今までの犠牲の全てが無駄になる」
誰へともなく、ぽつりと口に出す。
あるいは、それは自分への戒め、不退転の決意、言葉という名の呪いというものか。
「私がここにいなければ、皆の何もが無駄になる」
己を抑えつけ、その身に誓いの鎖を巻くように。
源之助は、拳をぎりりと握りしめた。
老い、節くれだった指の隙間から、深紅の液体がぽたりぽたりとしたたり落ちた。
「他人を死地に送るなど、誰がしたいものですか。それでも……全てが滅びのうちに沈むよりは……」
ふと、源之助の瞳がある感情を以て、空を映した部屋の片隅のモニターに移る。
先程までからりと晴れていた空が、俄かに黒雲で

かき曇りつつある。耳を済ませば遠雷も聞こえた。
「スコールですか……いささか遅い涙雨ですね」
源之助自身、そして他の長瀬たちが敢えて捨てたともいえる、そして死者が流すことのない涙。
今、彼らに代わり泣こうとばかりに、島は徐々に昏い翳りに包まれていった。

——定時放送は、近い。

649　駆ける者達

G3A3アサルトライフル。その、無骨なデザイン。手に掛かる、確かな重み。
それは、恐らく、確実に、目の前の〝そいつ〟を蜂の巣にするであろう。
拮抗。静かな、対立。
少年と、フランクは対峙したまま、動かない。
それを少し遠くから見やる、往人。貫かれた右肩が痛む。
だが、それどころじゃない。
少年の後方に倒れ込んだ少女の姿。
天沢郁未。
(どうする？　俺達は勘違いされたままだ。助けるのか……？)
「居候！」
背後より、声。後ろには、少し遅れてやってきた晴子、観鈴。
「往人さん……」
「……お前ら」
口を開く。だが、そこから続けるより早く、晴子は、言い放つ。
「引くで、居候」
「なっ……あいつらはどうする気だ!?」
「……」
答えない。だが、目に宿るのは非情の光。それが答えか。

晴子の左腕は、切り裂かれている。——例え、事の起こりの誤解が解けたとしても。彼女は郁未を許すまい。
右の手には、観鈴の腕が掴まれていた。走り出さないように。決して離さぬように。
その効果はあった。観鈴は、郁未を見ている。だが——走り出す事は、出来ない。
「……っ」
左手に握られた、ベネリM3。ついさっき、晴子から取り返したばかりの銃。
握る手が、汗に滲む。
（くそっ。俺は、こんな時に……！）
あの少年がどうなろうが往人には知った事じゃなかった。いや、あの少年はもう〝助からない〟。
それは予感。今にも消え失せんとする、その雰囲気。少年からは、それが僅かに感じ取れる。
だからこそ、あの少女だけは——。
——その時、不意に、左手が涼しくなった。風が、左手の熱を奪う。そこには何も無い。
振り向く——ベネリM3は、観鈴の手にあった。首を振る。行ってはいけない、と。
見捨てるのか？
だが、目に、顔に浮かぶ、悲痛な表情。それは、本当なら助けに行きたいと語っていた。
だけどそれは、大切な二人を死に追いやるかもしれない行為。悲痛な命の選択。

——往人の顔が、歪む。畜生。

気付けば、往人の身体は一歩前に出ていた。先にあるのは、一触即発の事態。
そこは確かに、死が在った。行けば、死ぬかもしれない。
恐い。当然だ。死にたいなどと思った事はない。
……だが。
…………。

「おい」
後ろを見ず、呼び掛ける。晴子は、脂汗の浮かぶ顔を、往人の背中に向ける。
「観鈴を連れて、反対の方へ逃げてくれ。……後で追う」
「――居候!?」
「頼んだぞ」
そして、駆ける。観鈴が伸ばした手は、往人を捉える事は出来なかった。

動かぬ事態。変わらぬ対峙。依然として、〝奴〟は動かない。それは、もはや怒りや絶望、そんな感情に囚われている訳では無いだろう。
〝こいつ〟は、獣だ。
撃ち落とし。引き裂いて。叩き潰す。それだけだ。
……死を以て、償わせてやる。
きりきりと、張り詰めた空気。何か、一つ、きっかけでもあれば弾け飛ぶだろう。
背後にへたり込んだ少女。服を、靴を、血に染めている。放っておけば死ぬだろうか……。
――。
その時。不意に、何かが近付いてくる音。駆ける音。叫び声。名を呼ぶ声。
居候！　往人！
……往人？
あの銀髪の男か！
振り向く。ライフルの銃口が、向きを変え、銀髪の男を捉える。
邪魔だ。撃ち殺す。
だが、一瞬早く、影が回り込む。それは確かに、少年の姿！
しまった――！
「ぐおおおおオォォォッ！」
ズガガガガガガガガッ！
咆吼！　続く銃声。放たれた弾丸が、〝それ〟を叩き落とさんと、空間を貫く。

当たったか？　いや、当たる筈が無い。
くそ！
だが、一発の弾丸が奴の表面ではぜる。舞い散る血の軌跡、奴の腹を打ち抜いた。よし。
それでも、その疾さは失われてはいない。
——化け物め。
バックステップ。奴の姿が、森へ消える。逃がすか。
フランクは、再び森の中へ駆け込んだ。手負いの獣を、叩き落とす為に。
……その一瞬の戦いが、男の存在を忘れさせた。

一か八かの賭け。往人は、郁未に向かって、一直線に駆けた。最大の懸念であるライフルの驚異は今のところ無い。男は少年に注意を取られている。
ならやる事は一つだ。
倒れている郁未の元に辿り着く。郁未は、睨み付けるような視線を往人に向けた。
肩を貫かれ、足に穴を穿たれ。だがその眼光は、衰えていない。やれやれ、気丈過ぎるぞ。
「あんたっ——」
聞いてる場合か。郁未を抱え上げる。幸い、軽い。左手一本で、何とかなった。
振り返り、駆ける。
脇に抱えた郁未が何やら叫ぶ。無視。
このまま行けば、こいつだけは何とかなるかもしれない。
——だが、そんな希望も儚く。

がさぁっ！

後ろから、何かが躍り出る。草葉を揺らし、飛び出す影。獣？　違う！　あの少年か！
あの野郎、追ってきてるってのかッ——！

650　脈動

――ドックン――

（お前は人間じゃない）

（なんだ？）

十分も走った頃だろうか。彰は何かが聞こえたような気がして立ち止まった。

いや、聞こえたのではない。何かを『感じた』のだ。

――ドックン――

（人間があんな怪我の後にこんな元気でいられるか？　お前のその賢いおつむなら分かるだろ）

鼓膜の振動で聞こえる声ではない。

まるで自分の内面から湧き出すような『何か』

（なんだ!?　誰だ!?）

――ドックン――

自分の心臓の音がやけにはっきりと聞こえる。

（お前は人でなくなった）

（そうだ。なんで僕はこんなに元気なんだ？　ちょっと前までは半死半生。気力で動いていたというのに……）

彰は賢すぎた。それが彼の不幸。

――ドックン――

（お前は人でなくなったんだ。あの女のせいだ。あの女は、今のお前と同じ気配がしただろ？　奴がお前を化け物にしたんだ）

（僕は元気になった。怪我も気にならない。横には初音ちゃんがいた……）

寝ている間の出来事は分からない。推理するしかない。

推理は彰の得意とするところ。

見たくない『映像』ばかり浮かんでくる。

ガン！

苛立ちを紛らわすために、そばにあった岩を殴りつけた。

彰は驚愕する。
岩が……。少しではあるがヒビが入っている。
「なんだ……？　なんだ!?　これ!!」
『人の操る人外の力』には結界は効果が高い。
しかし『人でないものの操る人外の力』には結界の効果は薄い。
彰は知らなかったが、耕一が自分の体験から立てた推測だった。
そう。身体が化け物であり、そして心も化け物になってしまえば……。
それはもう人ではなくなったということ。

彰を一人にできた。
彼にとってこれは幸運。
促したのは彼自身だが、こうまでうまく行くとは考えてなかった。
出番はもっと後だと思っていた。
男どもが消耗した後。その後の方が安心してヤれる。
しかし機会を前に黙っていられるほど、彼は気長ではなかった。
（初音はウラギリモノだ）
「黙れ!!」
彰が『何か』に向かって叫ぶ。
（お前にも見えただろう？　お前の賢いおつむがはじきだした『映像』が）
いけしゃあしゃあと言う。それを想像するように促したのは彼だ。
「黙れ！　黙れ黙れ黙れ黙れ黙れぇぇぇ!!」
叫び、地面を殴る。
（わかったわかった。俺はお前だ。お前が望むのなら黙るさ）
「くそ！　くそ！　くそ!!」
辺りのものに苛立ちをぶつける。その結果による破壊。
それは、少なくとも彰のような一般人のつくれる

跡ではない。
（まぁ落ち着けよ。でもお前も思うだろ？　自分以外の男は邪魔だと）
　ガン!!
　今までで最大級の衝撃を樹木にみまう。
『何か』が沈黙する。
（落ち着くんだ彰！　冷静に、冷静に。そう落ち着け。落ち着いて冷静さを取り戻すことこそが……）
　自分の呼吸を整える。
　そして歩き出した。
　ゆっくりと。
　初音達の元へ『時間をかけて』戻るために。
（祐介達はどうしたんだっけ……？　えっと、そう……。残念ながら会えなかったんだよな）
　必死になって探し回った『映像』が『思い出される。
　なぜか彰の頭から『奴』の存在はすっぽりと抜け落ちていた。

（大きな改竄は力を使いすぎる……な……）

651　分析

　かこん、からん、かん、かかん。
　一瞬前まで、全ての幸福を象徴するかのように、芳しい香りを振り撒いていた桃缶が、その人生を終え床に伏したとき。無愛想なまでに何の飾りも無いまま続く廊下に、アクセントを与えるべく、無数の銃弾が壁面に喰らいついていた。
　犯人は、倉庫の中。
　弾薬ベルトを背負い、暗いオレンジ色の照明を浴びて、無感情に立つＨＭ―13。その作られた瞳孔の奥に、ときおり輝く恐ろしげな光だけが、今も作動している事を示していた。
　御堂たちは一連の銃撃をかわしきり、なんとか倉庫内に転がり込んでコンテナの陰に隠れている。
（あ……あたしのあたしのあたしのも、ももも桃缶

が桃缶が！）
　桃缶が桃缶が桃缶が！
　リフレイン。青ざめて虚ろに叫ぶ詠美。
（桃缶ひとつで発狂してんじゃねえ！）
（あなた、そういうキャラじゃないでしょう……）
　御堂が吠え、繭が呆れる。それでも一応、みんな小声だったりする。

　水平に、正確に水平に首が廻り、機械あたりを窺う。その鋭敏な聴覚で、下らぬ会話を捉えたようだが、共鳴が酷く位置を特定できないのだろう。測るように左右に首を振る動きが、やはり機械である事を証明している。
（ふみゅーん……したぼくぅ）
（げぼくだっ！……つうか遊んでる暇はねえんだよ。とりあえず俺の銃は使えるとして、ガキ、お前ぇは何を持ってんだ？）
　こそこそとコンテナの裏を駆け回りながら、打開策を練るべく御堂が確認を取る。
（硫酸銃と、替えのタンク。秋子さんが持ってた機械と、ＣＤ¾。他は水と食料ね。置いてきた物は、オッサンも知ってるでしょう？）

　ワックスの光沢が目に眩しく反射する中、動物たちは猛烈な勢いで走りはじめた。この島に来てからというものの、すっかり馴染みとなった銃声に引き寄せられ、二匹が疾走し一羽が飛翔する。
「クワ、カアーカアー？」
『本当に、こっちなのですか？』
「ぴこぴこぴっこり。ぴこぴっこり」
『この騒音からして間違いない。嗅覚など使うまでも無いな』
「うにゃにゃ？　うにゃん」
『さっそく始めているというわけか？　困った連中だ』
「ぴこぴこ、ぴっこりぴこぴこ」

『人間どもが愚かなのは、今に始まった事ではないぞ』
「カァ。カァー」
『確かに。早く行きましょう』
「ぴっこ、ぴっこぴこぴこ。ぴこぴっこり」
『俺たちが居ないと、奴ら何回死んでるか解ったもんじゃないからな。世話が焼けるぜ』
　距離をおいた冷静さを装いながらも、人情味に溢れた会話をしながら、動物達は転がるように倉庫へと突進していた。

　ズダダダダダダダダダダダダダダダァアン!!
　再び射線が合ってしまい、御堂たちは危ういところで逃れた。首を竦め、三人して転がるように逃げ回る。とにかく相手の火力が強すぎて、この直線的な倉庫内では、応射することさえ危険だった。
　御堂たちの代わりに犠牲になったコンテナから、じょろじょろと濃い液体が漏れ出している。その特有の臭気があたりを埋め尽くす中、液が身体にかかるのも構わずＨＭ―13は移動し、にちゃり、にちゃりと不快な足音を立てながら、顔色ひとつ変えずに目標へと接近していった。
（ＣＤ$\frac{4}{4}$と、ポチよっ！）
　大きく遅れて、詠美が宣言する。激しく、いまさらである。
（お前ぇにゃ聞いてねぇよ……とにかく、こっちが有利なのは数だけだな。分かれて、挟むしかねえ）
（そうね、このままじゃジリ貧よ）
　老けた男と幼い子供が冷静な会話を続け、年頃の少女が落ち込むという、奇妙な光景がそこにあった。
（コラ、イジケてんじゃねぇよ、お前ぇにも大役を授けてさしあげるってんもんだ）
　こつん、と詠美の頭を叩き、意識を自分のほうに向けさせる。ちょっと借りるぜ、と繭の硫酸タンクを二つ取ると、一つを詠美に渡した。

（ああいう相手には手榴弾が最適なんだが、贅沢は言えねえ、コレを使う。奴の長所は火力、速くて精密な射撃、鋭敏な索敵能力、ってとこだな。それを踏まえて、だ……）

小声で御堂が指示を与える。
人事を尽くし、天命を待つ。
常にそれを行う限り、人は能力に見合った結果を得ることができる。
——たいていの、場合は。

652　接近、遭遇

何一つ無い。それがこの男を表す言葉。
共に歩む者は無く。その手に釘打ち機一つ握りしめて歩くのみ。
レミィ。祐一。
思えば。彼らは、彼のこの島に於ける『存在意義』だったのかもしれない。
この何もかもが狂った島で共に日常を過ごした少女。遙か遠い学園での日常を、共に過ごした友人。
彼はその二人を一度に失った。一人は悲しい勘違いの末に。一人は己の手で。
……。
やる事はあった。
「椎名という子を探す」
会ってそれからどうなるのか、正直先の目途は立たなかったが、何か目標がなければこのままつぶれてしまいそうだった。
彼は足の向くまま歩き続けている。
それもそうだ。彼女がどこにいるかなんて知らなかった。
とりあえず、何か手がかりになる情報が欲しかった。
（誰かと会うか？　……いや、それは危険だな）

といっても、誰にも会わなければしかたないのも事実である。それに、
（今更何も怖がる事も無いしな）
もう、祐一と共にいた椎名という娘以外に知り合いはいない。守るべき人も無い以上、たとえどんなミスをしても、危険にさらされるのは彼自身だけである。
彼は楽観的であった。自分自身だけなら、なんとかなるであろう、と。
（死ぬ訳にはいかないしな）
友人達が残した想い。それに応えるまでは、たとえ殺人者に遭遇したとしても生き残るつもりであった。
見てろよ、レミィ。相沢。俺はバッチリお前らの分まで生きてやるぜ。
遠き空から。彼らは、北川に、笑いかけてくれたのだろうか。

行くあても無く島内を彷徨い歩く。
所々戦闘が行われたであろう箇所があり、そこにはいくつか落とし物が落ちていた。
「ゴミは拾えって、学校で散々言われただろう？全く、みんな物を大事にしろよな」
だが、この落とし物は正直嬉しい授かりものである。主な品目は、ナイフ、クロスボウ、そして——死体。
苦笑。
「……はは。ジョークにしちゃ、ちとブラック過ぎたな」
見覚えのある死体。無論、北川がそれを忘れる筈が無い。高槻。このゲームの、支配者。いや、『元』支配者か。
あの放送を知らぬ北川ではない。高槻が、処分された事などは知っていた。
ただ。あの頃は、どうしても、実感が湧かなかった。命を賭けたサバイバルゲーム。その中に、自分

が居るという事。血生臭い現実。
　人が殺し合うという事。それは、あまりにも非現実的過ぎた。
「俺は、いつの間にか、逃げてたのかもしれないな、現実から……」
　逃避。空虚な空想に逃げようとした。殺し合いというゲームから、いつもの日常へと。
　そこで出会う。レミィに。
　眩しいばかりに明るい少女だった。下らないジョークだって、彼女となら楽しかった。
　そして。それは、いつしか、自分の心を空想につなぎ止める、大切な何かに。
　……それはもはや失われた。もう、現実から目を背ける訳にはいかない。
　ナイフを拾い上げる。三十センチ程もある、大型のナイフ。十分な武器だ。
　高槻の死体から、鞘を抜き取った。刃を隠し、ベルトに差す。武器入手、と。
　そして、クロスボウ。一応、飛び道具だ。しかし、拾い上げようとして気付く。矢が、無い。
　その辺の木をあてがって使うことはできるかもしれないが、実用の程はお察し下さいといったとこか。
　……捨てとくか。もったいないけどな。
　後は大した物は無いようだった。
　日が高い。心なしか暑さが増している。そろそろ放送の時間だろうか。
　日陰にでも、行くか。北川は、そんな事を思って、森へと足を進めた。
　が。
　……がさっ。
「え？」
「あ」
「あ？」
　突然、森から出てきたのは――侍？
　そう、勘違いしても仕方ない。遭遇した二人は共に刀を携えていた。もっとも、その雰囲気は、侍と

いうよりは落ち武者といった風であったが……。
ともあれ、ブレザーを着た侍はいないはずだ。
それにしても、二人とも気の強そうな女であった。
うぅむ、俺はどちらかと言えばおしとやかなほうが好みなのだがな……。
そんなこと考えている状況では無いのだが、どんなときでも皮肉めいて考えてしまうのは彼の性分だった。
「……真っ正面から人の事をじろじろ見るなんて、失礼な人ね」
「全くだ。レディに対して失礼極まりない行いだな……」
溜息混じりに、北川は首を振る。もちろん紳士的に。
「それにしても、レディにそんな物騒な物は似合わないと思うな……よければ、しまって話し合わないかい？」
冗談めいた口調。だが、その裏に潜む、ひやりと冷えた空気。
女は――しかし答えない。
長髪の女の持つ刀の刃は襲いかかる蛇の鎌首のごとく北川の首に狙いを付けている。
北川も、手に持つ釘打ち機を既にその女に構えている。
だが、もう一人の女は他人事のような様子で、二人の対峙を眺めていた。抜き放たれた刀を持った手は折り曲げられ、刃で肩をとんとんと叩いていた。
随分と、場慣れしている感じだ。実のところ戦場をほとんど経験していない北川にとって初のピンチといっていい状況であった。
（……さぁて、どうすっかな……？）
北川の顔に、不敵な笑みが浮かぶ。

653　掌の上

……一触即発というのは、こういう状態を言うん

だろう。
俺の首には、刀身が。
彼女の喉には、釘打ち機が。
予備動作が要らん分、俺の方がやや有利とは言えるが、それも一対一の場合。
ここでもし下手を打ったら、遠くから鋭い目線で睨みを利かせているショートのおねーちゃんが黙っていまい。
だが、距離があるというのは幸いだ。
手早くロングのおねーちゃんを始末出来れば、距離を詰められる前に……
ちょっと待て、違うだろ俺。
俺は、殺し合いが、したいのか？
違う。俺はこの状況を打開したい。少しでもいい方向に。
そして、生きるんだ。

『生きるために殺す』
この島では正しい理論。
でも、俺にとって正しい理論かは別だ。
生きるために殺す。それは、相沢の言う「主催者側の思うツボ」じゃないのか？
そう。レミィも、結花も、相沢も、みんな、みんな奴らの掌の上で踊らされていたんだ。
……ふざけんな。
俺一人でも、抗ってやる。
たとえそれが、釈迦の掌の上で得意げに飛び回る孫悟空の行為そのものだとしても。
それでも、俺が道を示せれば、きっと可能性は出てくる筈だ。
俺は、この島のルールを壊さなくちゃならない。
参加者同士で殺しあうことを放棄しなくちゃならない。
つまりは……

左手を開く。握られていた釘打ち機が落下し、がしゃりと音をたてる。
唐突な俺の行動に反応したのか、首筋に狙い定められた刀身が微かに動く。危ねえ。
格好よく誓ったその次の瞬間に死んでは余りにも格好がつかないな。
「……何のつもり？」
地面に横たわる釘打ち機に一瞬だけ視線をやり、ロングの娘が口を開く。
依然、その冷たい刀身は俺の首筋に向けられたまま。まずは、身の安全の確保から。説明は、あとからゆっくりでいい。
「降参だ」
……そんなこんなで、また捕虜である。縛られているわけである。決して趣味ではない。
俺は殺さなかったし、死ななかった。それが大事。死んでから他人の信頼を得たって、遅いんだから。
さて、ステップ2。実際に信頼されなければならない。基本はやっぱり言葉のキャッチボール、会話だよな。
「……というわけで、お互いの親睦を深め合うために自己紹介と行こうか」
明るい声でフレンドリーなイメージをアピール。友達百人も夢じゃない。
「……」
夢でした。あからさまに不信感を抱いた視線が痛いです。
えぇい、くじけるな俺！　突撃あるのみ！
「俺、北川潤って言うんだ。気安く潤と呼び捨てにでもしてくれ。あぁ、勿論ダーリン、でも構わんぞ。ハートマークは忘れるな！」
ロングの娘が刀を構えなおす。
「ごめんなさい、ですからその刀を仕舞ってくださ

い」
　仕舞わなかった。
「まさか本気デスカ!?　ヘルプ！　そこのショートの美人、ヘルプミー！」
　突然の呼びかけに不意を突かれたのか、ショートの娘が顔を上げる。視線が一瞬ぶつかり、すぐに逸らされる。
　……おや？　何か変な感じ。
「はぁ……巳間晴香よ」
「はい？」
　しまった。ショートの娘に気を取られて、間抜けな返答をしてしまった。二度目の生命の危機を脱した瞬間に三度目の生命の危機。
　深呼吸をひとつ、ふたつ……怒りを押し込めて、紫髪の娘が改めて名乗る。
「……巳間晴香よ、北川君」
　是非ダーリンと呼んでくれ、と言おうと思ったが、キリがないのでやめておいた。次やったら本当に危なそうだし。
　で、その晴香さんがもうひとりのショートの娘のほうに向き直り、
「ほら、あんたも自己紹介しなさいよ……一応」
　一応ってのが引っかかるが、ありがとう晴香さん。ところがあのショート。
「げっ」
　と来たもんだ。「げっ」って何だよ「げっ」て。そんなに俺が嫌いですか？　初対面の相手だってのに……。
　いつまで経ってもうじうじと名乗らないショートの娘に、晴香さんもご立腹。
「ちょっと、名前忘れたってわけじゃないんでしょ？」
「うん、そりゃあ、まあ、そうだけど……」
　なんとも歯切れの悪いショートの娘。晴香さんはその態度に痺れを切らしたか、改めて呼びかけようとする。

「だったら早く自己紹介くらいしなさいよ、なな」
「わぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
………………な、なんちゅう声出しやがるんだあの女！　こっちは耳も塞げないんだよ！
「ちょっと！　何いきなり叫んでるのよ！」
「あ……、ゴメン」
反省するショートの娘。意外と素直だ。
……しかし、名前を聞かれたくない理由でもあるのか？
むぅ……なな……なな、何だ？
「名無しさん」
「違うわっ！」
……沈黙。
慌てて下を向くショートの娘。
……と、いうか。
「……あ」
髪型違ってたし、多少時間が経ったからか、顔立ちとかも違ってきてて、分からなかったけれど。

「……もしかして、七瀬さん？」
「……う」
……どうやら、当たっていたらしい。
まがりなりにも知り合いという事で、俺の縄は解かれた。
武器類などは返してもらえなかったが、まあそれは仕方ない。今後の努力次第？　ってことだ。
「まさか、七瀬とあんたが知り合いとはねぇ」
「こんな所でこんな奴に会うなんて……あぁ悪夢、悪夢だわ……」
ちょっと七瀬さん、その台詞はないんじゃないですかー。流石にムッときましたよ。
なので、仕返しを企てることにする。
「そう言えば、七瀬さん」
「な……何よ」
「まだやってるの？　あれ」
「？　何、北川君、あれって」
よし、計画通り。晴香さんが釣れた。

「ちょ、ちょょっと晴香……」
「いや、それがですねえ、晴香さん。我が高校にいた頃の七瀬さんはですね」
「北川ぁ！　それ以上言ったら殺すわよ！」
　場所が場所なのでなかなか真実味に溢れた台詞ではある。
「あー大丈夫大丈夫、七瀬は私が抑えておくから是非続きを語って」
　晴香さんが手早く七瀬さんを抑える。かなり慣れてるな、こういうことに。
「コホン。んじゃあ遠慮なく。我が高校にいた頃の七瀬さんはですね、常日頃から『乙女』となるべく、修練を重ねていたのですよ」
　沈黙。
　七瀬さんの顔がみるみる真っ赤に染まってゆく。ごめん七瀬さん、君の過去を売って俺は現在の信頼を買う。
「あ、あはははははは！　乙女！　乙女って……今時！」
　思わず爆笑した晴香さんの手が緩み、七瀬さんが弾ける様に飛び出してきて、物凄い速さで右手を振り上げ、
「北川ぁぁぁぁぁぁっ！」
　鈍い音が頭の芯まで鳴り響いた。

「いやぁ七瀬……あんたって、案外面白いのね……」
　晴香さんのフォロー（らしきもの）も、ところどころに（笑）が挟まっているのでまったく効果が無い。
「ひぐっ……だからコイツには会いたくなかったのに……」
　マジ泣き度百パーセントである。……しまったやりすぎた。
「ゴメン七瀬さん。この話でこんなに傷つくとは思ってなかった。……でも、安心したよ。七瀬さん、

変わってないし」
「北川……」
七瀬さんが顔を上げる。お、もしかしてフォロー成功か？
「うん。さっきのパンチだって以前のまま、いやむしろ威力が上がったとも思えるよ。あの熊殺しパンチ」
「殺せんわボケぇぇぇぇぇぇッ！」
その七瀬さんの台詞とともにマッハで飛んでくる拳。
また余計な事言ってしまった……とか考えつつ、俺の意識は闇に……
沈もうとしたその時、俺の意識を一気に現実に引き戻す出来事――そう、放送が、始まった。

654　引火　銃撃　腐食

倉庫と呼ばれる胃袋……コンテナから滴る液体は、彼らを消化するかの如く、ゆっくりと広がりつつあった。
その中では鋼鉄の死神が鎌を構え、御堂達の隠れている一番奥のコンテナに狙いを定めていた。
(いいか、作戦はこうだ、テメェらは奴の足元に硫酸の容器を投げつけろ。俺はその容器の側に爆弾を転がす、その爆弾を打ち抜けば……)
(なるほど、爆弾の炸裂の衝撃でボトル内の硫酸を浴びせかける……そうでしょ？)
(え？　え？　どういうワケ？)
(……つまりだ、ろぼっとの足元に『それ』を投げればいいんだよ……)
(なぁんだ、簡単じゃない)
(バカかお前は。この状況でそれができるか！)

（へ？　何で？）
（……見てろ）
詠美そう言うと御堂はスッと、手を上にかすめた。
それを待っていたかの如く、
ズダダダダダダダダダダダダダダダダァン!!!!
先程、御堂が手を伸ばした空間に鉛玉が飛び交った。
（ほらな。この状況で立ってその容器を投げつけるなんざ、自殺行為同然だ。そんなことも分かんなかったのか？）
（ち、違うわよっ！　私だってだいたいそうだと思ってたんだけど、いちおー確認とっておこうかな～って、思っただけよ!!）
（お前なぁ……いい加減、そうやって屁理屈こねて自分の失敗隠そうとするなよ……）
御堂はあたかも彼女の父親のような口ぶりで詠美を叱った。
（う、うるさいわねっ！　私には女帝としてのプライドっていうのがあるのよっ！　アンタなんかとは格がちがうんだからぁ！）
（だから、そういう————）
（……オッサン、今思ったんだけど、爆弾なんて何処にあるのよ？）
繭がいぶかしげな表情で御堂と詠美の口喧嘩に割って入り、尋ねた。
（何？　爆弾？　けっけっけ、テメェもやっぱりガキだな）
繭はガキという言葉にムッとして、御堂に再度尋ねた。
（いいから、何処にあるのか教えなさい。作戦に支障をきたすでしょ？）
（あるじゃねぇか、とっておきのがここに……よっ！）
ドン！
御堂はそう言うと自分の腹に拳をねじ込んだ。
（ちょっと！　アンタ何やってんのよっ!?）

(……なるほど、オッサン、意外と頭いいじゃない……)
御堂の行為に対して対照的な反応を見せる二人……そして御堂の口から銀色の球体が零れ落ちた。
(へへ……こいつだ……これも立派な爆弾だろ?)
(爆弾のことは分かったわ。……でも、その前に私達がローストビーフになるかもね……)
(何?)
鼻をつく異臭……倉庫内に充満した揮発性のガス……そう、はじめ御堂達が隠れ、HM―13の弾丸によって打ち抜かれたコンテナに入っていたもの……それはガソリンであった。
「……倉庫内部、ガソリン充満。火気厳禁、火気厳禁。至急退却後、ターゲットヲ、倉庫ゴト破壊シマス」
メイドロボも異変に気付いたらしい。彼女はゆっくりと後退していく……この危険地帯から逃れるために。
(はぁ……何てこった……待ってりゃ火あぶり、進めば蜂の巣……状況悪化だぜ)
(え? 何? なんなの?)
(もう……おしまいね)
無知なことは幸せである典型な詠美、冷ややかな顔をして絶望する繭……。
しかし御堂は、まだあきらめていなかった。勝負は最後まで分からない……戦うためだけの存在である彼だけはそれを知っていた。
この部屋の守護神は今、守るべきものと共に御堂達を葬るため、扉の開閉パネルに手を伸ばした。
イイイ……ン
この後、倉庫に銃弾を二、三発撃ち込めば任務完了……のハズであった。
「ぴこーーーーーーーーーーーー!!」
「カァァァァァァァーーーーーーーッ!!」
「うにゃあーーーーーーーーーーーー!!」
彼女が扉を通るよりも早く、二匹と一羽が倉庫内

に飛び込み、思いっきり彼女にぶつかった。
ドンドン、ドン！
「!?」
その瞬間、メイドロボに隙が生じた。わずかに、本当にわずかに動物達の存在に驚き、御堂達が潜むコンテナから目を離しただけであった。
だが、御堂はその一瞬を見逃さなかった。
（あの獣共が！　おいしいところ持って行きやがって！）
腰のナイフを抜き、地を蹴り、信じられないスピードでメイドロボとの距離を縮めた。
「!!　ターゲット捕捉！　攻撃——」
賢明なロボット……彼女はあえて発砲しないで、M60を御堂の頭部めがけて振り下ろした。自己防衛のためである。
ガチィン！
御堂のナイフと、メイドロボの銃がぶつかり合い、軽快な金属音を奏でる。
メイドロボの振り下ろした銃身を、御堂が受ける形となった。
ギギギギギギギギギ…
だが、上と下では圧倒的に下のほうが分が悪い。御堂はジワジワと押されていた。
さらに力を込めるメイドロボ……体重が一気に御堂のナイフにかかった。だが、御堂はこの瞬間を待っていた。
「よぉ、お嬢ちゃん……そんなに力むとケガするぜ……」
シュッ！
「!?」
いきなり御堂はナイフを銃から離した。力の均衡が失われ、バランスを崩すメイドロボ。
さらに御堂は彼女の持っている銃に手を回し、
「いいモン持ってるじゃねぇかよ、よこしな！」
ザムッ！
M60を吊るすベルトを切り裂き、鋼鉄の死神の手

から強引に奪い取る。極めつけは、
ドン！
体当たりである。
そのままま出入り口までメイドロボごと押し進む。
だが、扉が閉まっている。とっさに御堂は近くにいた獣達に向かって叫んだ。
「扉を開けろぉ!!」
その言葉に反応したのは……毛糸玉だった。
「ぴこっ！」
毛糸玉は飛び上がり、開閉パネルを押す。
ィイイイ……ン
廊下へ繋がる扉へ突進し、倉庫から脱する御堂と鉄人形。
倉庫から出ればこっちのものだ。銃を撃っても倉庫内の揮発したガソリンに引火する恐れはない。
御堂は先程強奪したＭ60で遠慮なく撃った。
ズダダダダダダダダダダダダァン!!
銃弾を至近距離から受け、メイドロボは吹き飛ばされた。
タイミングよく、詠美と繭が倉庫から飛び出してきた。
「アンタばっかり、活躍してんじゃないわよっ！」
「オッサン！　爆弾、ちゃんと撃ち抜いてよね！」
カコン！　カコン！
二本の硫酸ボトルが鋼鉄の死神の後方に転がる。
御堂はそれを確認するとピッ！　と、ナイフを持った手の親指から体内にあった小型爆弾を弾き出した。
そんな事は気にも止めず、ゆらりと立ち上がり、マカロフと呼ばれる拳銃を取り出すメイドロボ……
「ターゲット……ホ……ソク攻撃……シマス」
「倉庫に戻れ！　早く!!」
詠美と繭は慌てて御堂の言葉に従い倉庫に戻る。
「扉を閉めろぉ!!」
「クワァ！」
鳥類がクチバシで器用に開閉パネルを小突いた。

ダウン！　ダウン！　ダウン！
メイドロボの放った銃弾の二発は扉にめり込み、一発が御堂の右足を捉えた。だが、御堂は動じない。
「へたくそ」
ドゥン！
御堂のデザートイーグルが火を吹いた。弾は生き物のように爆弾へ向かってゆき、
バグォォォォン!!!!
炸裂。側にあったボトルからはあらゆる方向に強酸を撒き散らした。
バシュウウウウウウウウ……
メイドロボは後ろから濃硫酸をかぶり、背中から煙を噴出させた。体をガクガク揺すり、膝をつく。
「背部に……腐食性ノ……エキタ……イ……フチャ……ク……防弾……装甲……七十九パーセント……損失……ナオ……モ……シンコ……ウ中……」
（自分が死にそうだってのに被害状況を報告してやがる……軍人の鑑だな）

御堂は彼女の最期を見届けず、倉庫へ戻った。

655　正しい脱出のススメ

「人数は減ってしまったが、今後のことを決める大事な会議だ。俺達だけでも先に進めるぞ？」
蝉丸は確認するように言い、部屋の中を見回した。
（現在部屋に残っているのは耕一、初音、マナ、そしてあとは妙なお面だけだ）
「(TдT)妙なお面なんてひどいよ、蝉丸ぅ～!!」
（つい呟いていたらしい）
「すまん」
「(´д`)月代って呼んでよぉ～」
「……すまん、月代」
「(;´д`)ハァハァ、蝉丸、もう一回、もう一回呼んでぇ～」
調子に乗ってすがりついてくる月代に、蝉丸は軽く当て身を加え、『それ』を再び静かにした。

「不憫だ。本当はこのお面の呪いも、早々に解いてやりたいのだがな……」
　蝉丸と月代に怪訝な視線を向けた三人に、言い聞かせるように呟く。
　その場はそれで上手く収まった。
　蝉丸は場が静まるまでのほんのしばらくの間だけ、この場にいない人物のことを思い浮かべていた。
（葉子は二階に寝かせてある。彼女の部屋のすぐ外には、窓への進入を容易にするような樹木の類が無いことを確認してある。外敵の進入は難しいだろう。だから、俺たちは彼女のことを考えるよりも、今は冷静に会議を続けるべき時間だ。……それにしても……）
　一同がこの建物の中でも一番広い部屋に陣取っていることもあるのだろうが、幾人か――晴香、留美、彰達のことだ――が席を外した今、室内は随分と寂しげな印象に変わってしまったな、と蝉丸は思った。
（しかし、それもしばしのこと。また元の、いやそれ以上の人数になる。してみせる……）
　場が十分に静まったのを確認し、蝉丸は再び口を開く。
「負傷者の傷がもう少し癒えるまで、施設の攻略は先送りにしようと思う。脱出の鍵はあそこ以外にもあるかもしれないし、ほぼ確実に危険が待っているあの施設の攻略以外で、今の俺たちが出来る何かをしよう。そして、潜水艦のことはあの二人と、先行している例の少年、さらにそれを追っていった、郁未という名の少女に任せたい。心苦しい選択だが、今は出来るだけ多くの可能性を模索しなくてはならない時なのだから……」
　そこで蝉丸は言葉を切った。
　……が、皆に先を促され、先を続ける。
「さて、先程話しかけていた、脱出の規模のことだが……。実際、今もって殺（や）る気のある人間がどれだけいるのか、ということの方が問題だと思うんだ。しかし、俺達が今までに遭遇した殺（や）る気のある人間

は、道中で確認したように、もう全てこの世の者ではなくなっている。それ以外の不幸な死を遂げた者達と同様に……」
蝉丸はそこで軽く目を瞑り、うつむいた。
今まで出会い、別れてきた人間のことを思い出しているのかのように。
それを見て、皆もそれぞれの過去を振り返るような表情になる。
今まで、どれだけの人間と逢い、そして、その死に向き合ってきたのだろう。
単純には言い表せない、出来事、想い。
（きよみ……）
蝉丸は最後に、杜若きよみの姿を思い浮かべた。
（一度は失われたと思っていた。そして、今度こそ完全に失われた、己の思い人……。皆に正しき道を生きるよう、身を呈して主張した彼女、きよみ。その思いを、死なせはしない……）
蝉丸はゆっくりと口を開いた。
「実際のところ、脱出までに残っている障害はもう少ないと思う。潜水艦さえ見つかれば、乗員の上限が少なくとも、それで往復することも考えられるし、今は仲間を集めることこそが、一番大事な俺達のするべきことなのではないかと考える」
蝉丸は皆の様子を伺う。異論はなさそうだった。
「そのために、俺は島内全域に行き渡るような呼びかけを行いたい。皆の中にも、きよみが命を賭したあの演説を聞いた者も居ると思う。島の全域に放送出来る手段を見つけて、あれと同じことをしたいと考えているんだ」
もう、殺し合う必要はない。一緒に脱出の手段を講じよう——そう参加者に伝えるのだ。
「……皆はどう思う？」
「基本的には賛成よ。もう、こんな意味の無い殺し合いは終わらせるべきだもの……けど、体内の爆弾が爆発しないって本当なの？　もし、そうじゃなかったら、演説した蝉丸さんは……」

心配そうにマナは問いかけ、蝉丸はそれに余裕を持って答えた。
「あれはあの高槻とかいう男の独断だったはずだ。それに彰くんの言葉を信じるならば起爆装置は彼の手によって破壊されている。だから、今回は管理者側が介入出来る余地はないはずなんだ。それに、もしものことがあったとしても、犠牲になるのは俺だけだ。損失は少ない。もし、万が一のことがあったなら。……そうだな、それを皆に知らせるために……」
そういいながら蝉丸は、そばにくずおれている月代を見やる。
「月代を連れていく。耕一君達にはここを守っていて欲しい。皆が再び集まる、そのための……この場所をだ」
耕一は何か異論を挟みたかったようだが、蝉丸の言葉に口をつぐんだ。
自分もついて行きたいのか、マナもまた得心のいっていない様子だったが、『マナ君には看病の続きをお願いしたいんだ』と、蝉丸に言われると断れなかった。
「分かったわ。そこの半端病人を含めて、きっちり治療して待ってるから！」
そういって、耕一を指さすマナ。
「みんなで、誰一人欠けずに待ってるから、あんたも、早く仲間を集めて帰ってきなさいよ!?」
「……うむ」
所在なげな耕一をよそに、頷く蝉丸。
「では、荷物をまとめてくる……」
「おい、ちょっと、俺の意志は!?」
今度こそ不当な扱いを受けたという風に、耕一は抗議の声を挙げた。
「半病人は大人しくしてなさい!!」
マナの伝家の宝刀、すねキックが耕一に炸裂する!!
「いってぇー!!」

「大人しくしてないからよ！」
半ば無理矢理に元気良く叫んで、腰に手をやるマナ。
蝉丸はそれを後目にしつつ、月代を担いで部屋を出ていった。
「遅くても、夜には帰りたいと思ってる……」
その蝉丸を腕を腰にやった姿勢のままで見送ったマナは、そのまま室内へ視線を走らせた。
視界にはいるのは……。
がらんとした部屋。
すねを抱える耕一。
……そして、うつむいたままの初音。
「まずはこの子を何とかしてあげなきゃね……」
軽く、耕一に向けて呟くマナ。
「へっ？」
すねを襲う激痛に耐えていた耕一には、マナの言葉は届かなかった。
「ちょっと聞いてんの!?　貴方、初音ちゃんのお兄さんでしょうがっ」
「ウゲェッ!?」
再びすねを抱えながらうめく、奇妙な服装の耕一がそこにいた。
「俺ってこんなキャラだったっけ……？　それに、こんなに蹴られてたら、ここに来たときより具合悪くなりそうなんだが……なんか、祟られてる？　神社で厄払いでもしてもらった方がいいのか？」
「私だってこんなキャラじゃないわよ。男だったらぐだぐだ言わないの！　また蹴るわよ!?　そもそも、その変態みたいな格好を何とかしなさいよ!!」
(彰お兄ちゃん。どうか無事に帰ってきて……)
三者三様の室内。
太陽は、今しも中天に差し掛かろうとしていた。

……そして。
　整理しなければならない膨大な情報に埋もれ、幾人かの記憶から外れていった中に重要なものがあった。
『千鶴達が、何故今も生きて活動していられるのか』
　その生存の喜びに気をとられたか、処理すべき現実が多すぎたのか。
　胃の中の爆弾。
　吐き出しても爆発はしないという、その事実が……。

656　施設最終戦　～最深部へ～

　ピリリリリリリ……
　けたたましく鳴り響く電子音。
　おそらくは、彼が聞く最後の電子音。
　もはや端末をいじることもなくなった男が、その音に顔をあげる。
「そういえばもうすぐ放送ですな……」
　気だるい口調の声が漏れる。
　恐らく通話口の向こうの相手は、源之助か源三郎か……だが、今の彼にはどちらでもいいことだった。
　カチャ……
　備え付けられた受話器を軽く、そしてわずかに持ち上げる。
　ガチャンッ……!!
　そして、勢いよく叩きつけた。
　鳴り響いていた電子音の余韻が頭の中でリフレインする。
「もはや、これまでかもしれないな……」
　暗く、淀んだ感情をその顔に宿らせながら、もう一度モニターを見つめた。
　もはや虱潰しに御堂達を探す必要など無い。
　マザーコンピューターへと続く地下三階の通路だけはすべてに常時モニターがついている。そこに、三人の影。……余計な動物が見えた気がしたが、あ

まり気にしなかった。
「さて……と」
ここで待てば、敗北は必至。かといって、迎撃に出たとしても、負けは濃厚だった。
ならば、せめて自分のやりたいように行動しよう。
軽く、首を振って、ゆっくりと席を立つ。
一度だけ名残惜しげにコンピューター室を見て。
玩具のような銀色の銃と、リボルバー拳銃、そして一枚のＣＤを懐に、部屋の扉をくぐる。
切り札のある場所で、詰問者を待つために。
その誰もいなくなった部屋に、電子音が響き渡ることはもうなかった。

ヒタヒタ――倉庫を出て、しばらく。一行は地下三階の最深部へと進む。
あとは、千鶴達と待ち合わせている場所へほぼ一直線、だ。
既に、身を隠して進めるような通風口なんかない。

「……誰もいない」
「……だな」
御堂は、詠美の不安そうな呟きに素直に賛同してやる。彼女の言葉に皮肉の一つも無く頷くのは割と珍しい構図だった。

通常の人間と比べれば屈強な兵士、ＨＭ―13に護られていた倉庫。
その倉庫から武器を予定通り入手すると、一行は先へと進んでいた。
入手した武器は七つ。
まずは手榴弾を幾つか。
御堂の持つ銃と同型のデザートイーグルを一丁、さらにその予備マガジンを幾つか。
詠美、繭にはそれぞれ素人でも狙いがつけやすい機関銃。
――素人が扱うにはいささか重量がある武器かもしれないが、狙いをつけて撃つハンドガンよりはマ

シだろう、という御堂の判断だった。少なくとも御堂と行動を共にする内はそれで充分だ。
『本当はレーザーサイト付きの銃があれば一番なんだけどね』
その時、澄ました顔で恐ろしいことをサラリと言ってのけた繭に、若干ながら戦慄を覚えたのもつい先程。
（こいつが戦闘訓練を受けていれば、心強い戦友になれたかもしれねぇな……）
同様に、千鶴達の分の武器もデイパックの中に詰め込んである。

「……これで本当にこの先が施設内で最も重要な場所……ということみたいね」
見た目とは裏腹に、極めて理知的な赤毛の少女、繭がそう切り出した。
「そうだな。……何故そう思ったんだぁ？」
御堂も繭と同意見だった。ただ、その結論に行き着くまでの思考は違うかもしれない。
先の見取り図を覚えていれば、そこがマザーコンピューター室だということが確実に分かる。構造を考えても、恐らくはそこが最重要の拠点だとは推測はできる。ただ、本当にその部屋が最重要かどうかは、行ってみなければ分からないことだからだ。
声を潜めながら、あえてその真意を聞いてみる。
「そうね……まず、この三角形型の場所がほとんど一本道だからよ。ここに到るまでの道が広くないながらも比較的迷いやすいように造られていたのに、急に簡潔な通路になった理由。単純な構造である方がその拠点に行き着くのが簡単なのは当たり前ね。でも、裏を返せば、必ずその道を通らなきゃならないってこと。敵が侵入した時、その方が迎撃しやすいって所かしら？」
同じように、声を潜めて返す。
「ふん、……ガキのくせに頭が回るな」
その回転の早さは、今この施設内で別行動してい

るもう一組のグループのリーダー格、千鶴より上かもしれない。
「ふみゅ～ん……よく分かんないけど……千鶴さん達もここを通ったってこと？」
一人だけ、声がでかかった。しかも、見取り図はもう覚えてないらしい。
「それはないわね。千鶴さん達のルートは別の道を……確かあっちの方から別の渡り廊下が伸びてて、そこから来るはずよ。当然向こうも途中から一本道になってたわね。目的地で道が合流することになると思うわ。仮に千鶴さん達が道に迷って、ここを通ることになったとしても、まだ辿り着かないわね。方角、距離、私達の通ってきたルートから考えれば、私達より早くここを通ることはありえない。確実に私達の方が先に目的地に着くでしょうね」
「？　……？？　……？？？」
「……まあ、それはこの先何事も起こらなければ……の話だけど」
若干溜息をつきながら、藺がそう締めくくった。
そして、藺の予想通り、何事もなく進めるはずはなく……。
「ぴこっ……」
地面に近い位置にいる動物達と、そして御堂がほぼ同時に気づいた。
「いるな……この先に」
三角形型に配置された通路、その廊下の曲がり角の先を見据えた。
その曲がり角の先の道は、外周部分と、中央のマザーコンピューター室へと続く通路の二つが広がっている。
御堂の耳は、すでにその先に存在する人の気配を捉えている。
その人物は、中央へと続く通路の真ん中にいる
――
そこで待ち合わせていたはずの千鶴達は、まだい

ない。
だが、彼女達でない何者かの存在感。
それは、詠美と繭にとって圧倒的な恐怖。
(ゴクリ……)
閉鎖された地下空間の中、詠美の生唾を飲み込む音がやけに大きく響いた。
御堂を先頭に、ゆっくりと歩みを進めた。
(武器は構えてろ……)
曲がり角、その先の壁に映る長き人の影。
千鶴達と約束した場所へと続く最後の道に立ちはだかる男の影。薄暗い電灯が造りだしたそのシルエットは、確かにいつか見た影。
「はじめまして……とは二人には言えませんか……お久しぶり……ですね」
「長瀬……源五郎か……おめぇにはもう一度会いたかったぜぇ……」
お互いの姿が見えぬ内から、そう交わした。
「あなたには……やられましたよ。あなたは……たとえ結界内でも恐ろしい人物でしたね。でも、驚きですよ。あなたの通った道が……ね」
「……」
武器を手に、御堂が歩を進める。
「御堂、あなたは並みいる参加者をその手で殺し……蹂躙し、そして生き残る男だと思ってましたよ。あなたの経歴と、性格を見る限りではね」
「……そりゃ光栄だな。俺様がやられるとは思わなかったのかい？」
「さあ。どんな人間にもイレギュラーは付き物だからね。死ぬときは死ぬ。あなたとて例外ではない。最後に生き残るのは誰か……なんて誰にも分からないことですよ。初めて会ったときから……正直意外だったんですよ。あなたが一番こちら側に近い人間だと思ってました」
「……」
「前にも聞きましたが……もう一度答えてくれませんか？　……あなたは躊躇なく人を殺せたはず。殺

人という行為自体を楽しむことができた。一人生き残る自信すらあったんじゃないですか？　今のあなた……やっぱりらしくないんじゃないですか？」
「ふん……」
一度、今の会話を聞いていた詠美と繭の表情を目の端で確認する。
——軍部はあなたを必要としなかった……でも今はあなたを必要としてくれる人がいるじゃない——
いつか聞いた台詞が頭をよぎる。
「源五郎さんよぉ……おめぇ、勘違いしてねぇか？軍人として軍部に従っていた俺が言うのもなんだがよ……」
一度、言葉をくぎる。——その間、源五郎からのレスポンスはなかった。
「俺は指図されるのが一番嫌ぇなんだよ。自分の好きなことだけ考えて、自分の好きなように行動して、自分の好きなように生きる。——それが俺だ」
「踊らされるのは嫌というわけですか」
「ふん、踊ってるのはおめぇじゃねぇのか？」
「……」
源五郎との距離が徐々に縮まっていく。
通路の向こうに、よれた白衣が見え隠れする。
(おめぇらはここにいろ……俺は源五郎とちょっくらやってみてぇ……邪魔にならないようここにいな……)
詠美達を再度手で制しながら、立ち止まる。
興味を持った相手とは一人でやってみたい。千鶴にも止められはしたが、御堂の悪い癖だった。
結局、その衝動は抑えきれなかった。
「御堂、あなたは……いや、お前は今は何の為に動いている？」
最後の問い。
「とりあえずは、だな、気にくわねぇ奴をぶっ倒すってところか？」
「シンプルでいいな、御堂……」
通路の向こう、長瀬源五郎の苦々しく笑う表情が

見えた。
　この男はたった一人で、御堂達六人を相手するつもりだったのだろうか。
　源五郎の実力を測りかねるように、値踏みしながら御堂は言った。
「今度は物騒な護衛がいねぇんだな……死にきたのか？」
　カチリ……
　デザートイーグルを源五郎の左胸へと向ける。
　距離は約十メートル。御堂にとっては絶対にはずさない距離。
「戦闘型メイドロボの片割れはもう破壊されましたよ。坂神をはじめとする参加者達にね。こんなことならこの施設すべての通路に機関銃でも設置しておくべきだった。まあ、後の祭り……だけどね」
「本当におめぇ、坂神と互角に戦ったっていうあの男の息子か？　いやに弱っちぃじゃねぇか……」
　覇気のない源五郎の声。その期待はずれの答えに、御堂が顔をしかめる。
「そりゃあねぇ……肉弾戦なんてできませんよ。科学の虫でしたから」
　軽く首を竦める。その仕草がひどく小さく見えた。
「このゲーム、最初からお前に手出ししなければ良かったよ。メイドロボを差し向けたときから、こうなる運命だったのかもしれない。だけどね……もう私も後には引けないんだよ。退く気もない。後がないからね」
　スッ……と源五郎の手が白衣の懐にのばされた。
　同時に、御堂が一度銃の照準をはずす。
「抜きな、どっちが早いか……ってヤツだぜぇ……」
「……」
　一瞬の静寂が訪れる。
　ちょうど、源五郎から死角になっている位置から御堂を見ていたにも関わらず、その緊張の瞬間に、二人の少女の喉がはっきりと動いた。

「――死ね！　御堂!!」
「前にも言ったよな？　おめぇを殺るのに躊躇はしねぇってな」
ドンドンドン!!
御堂の銃が三度、火を吹いた。
源五郎が懐から手を出す間もなく、心臓を正確に貫いた――はずだった。
ピッ――
衝撃で体をくの字に折らせながらも、源五郎の懐から赤い光が飛んだ。

657　施設最終戦　～血戦～

「ゲッ……？　なんだっ!?」
御堂の体を刺し貫く赤いレーザー光線。
腹から、背中へと突き抜けて、壁を照らした。
「お、おじさん!?」
その光景に繭と詠美は、御堂へと反射的に駆け寄る。
すべての音が、消失した気がした。
源五郎がよろめきながらも御堂を見据える。
「御堂……さては……お前――死んだな!?　……クソッ!!」
顔を苦痛に歪めながら、口元から血を滴らせながら、前方へと体を滑らせる。
「……!?」
銃弾の命中した衝撃でちぎれた白衣の下から、黒いチョッキが顔を覗かせる。
恐らくは全身タイプの高性能の防弾服。
「馬鹿野郎！　来るんじゃねぇ!!」
御堂に手を伸ばした二人を目の端で確認すると、狂ったように下がれ、と腕を振った。
御堂を刺し貫いたレーザー光線は御堂に何の害も及ぼさなかった。
そして、『お前、死んだな!?』という台詞の意味。
繭がその時初めて理解した。

（もしかして今のレーザー光線は……体内爆弾を……？）
そして、自分が、自分だけが置かれている状況を。
滑るように前へと進む源五郎の瞳が、曲がり角から姿を現した繭と詠美、そして動物達の姿をとらえる。
「死ねっ!!」
銀色のレーザー銃を、今唯一の生き残り、繭へと向けた。
その玩具にもみえる銃は、ほとんど重量がないのだろう。その手に何も持っていないかのように、片手で軽々と彼女の腹へと照準を合わせる。
「ちぃっ……!!」
御堂もまた、そのレーザーの意味を理解した。
刹那、一気に一足飛びで後方へと体を流す。
先の一撃で倒せなかったのは、いわゆる西部劇の抜き撃ちを真似た御堂の失態だった。
――それでも頭を狙っていれば確実に倒せたのだが。
御堂の油断、慢心が呼んだ大失策。
本人は気づいてないが、その過信こそが光岡に、岩切に、そして蝉丸にどうしても実力が及ばない決定的な理由だった。
源五郎を再度撃てば確実に倒せる時間はあった。
だが、それをしてしまえば、先程のレーザーの反応速度から考えて、繭は確実に死ぬ。
以前の御堂であれば、繭を見捨てて、源五郎を殺していたのだろう。
今の御堂は、考えるよりも前に体が動いていた。
「死ね、女！」
「ガキ！　悪く思うなよ!!」
ほぼ同時だった。どちらが早いかは常人には判別できないレベル。
ドスッ……
「あっ……」
着地と同時、後方に体を流したそのままの勢いで、

藺の腹に渾身の肘打ちを見舞った。
そして、藺を刺し貫くレーザー光線。
赤い光が藺の体を貫通し、背後の壁へと高速で走り抜けた――。
グラッ……
藺は、前のめりに声もなく倒れ――
カラン……
一瞬遅れて、金属音。
「キャッ……」
詠美の悲鳴だけが短く響いた。
爆発音は、ない。
「……御堂ぉ～っ!!」
源五郎が銃の引き金を押しっぱなしのまま腕を下へと滑らせる。
通路を刺し貫いたレーザーが、サーベルのように地面へと突き刺さる。
そして、それは一気に爆弾へと向かった。
藺を光が刺し貫いた時から、その間わずか一秒。

御堂は殴りつけた格好から流れるように、倒れゆく藺の制服の襟を引っつかむ。
「詠美！　おめぇらもだ!!」
さらに、詠美達を壁際へと突き飛ばし、そのまま藺をも投げっ放す。
「にゃっ!?」「ピコッ？」（バッサバッサ？）「きゃあっ!!」
御堂自身もむりやり後方へと体を流す。
後方に一足飛びしてから、そこまでで一連の動作だった。
その同時に発せられた三者の叫びが終わらない内に、ビームサーベルと化した赤い光が、真っ二つに切り裂くかのように爆弾と交錯した。

ドガーーーン!!

爆音。
御堂の体の位置は、爆心地から約三メートル。

小さいながらもそれなりの威力を誇ったその爆風にきりもみしながら吹き飛び、壁へと叩きつけられた。
「ゲェ〜〜ック⁉」
火に強い火戦躰とはいえ、結界の内部では常人のそれとほとんど変わらない。
逃げ遅れた下半身に鋭い痛みを感じる。

カチリ……
爆音に紛れ、何かのスイッチが押される音。
「ぐぅ……‼」
なんとか上手く着地し、態勢を立て直す。
着地の衝撃で、焼けただれた足がジュクリとイヤな音を立てる。
「くそが……」
爆風の向こう、源五郎の姿を見据え——たと同時に、御堂は転進した。
立ちこめる爆煙の向こうに見えたシルエット。それは……
「おのれ、御堂っ……！」
壁に隠されていたスイッチを手の甲で叩きつける。
ウイーン……
青銅色の床が開き、中から黒い物体が迫り上がってくる。大型の回転式機関砲(ガトリングガン)。
源五郎がここで御堂らを待ち構えていた最大の理由。戦闘型メイドロボ達が倒れた今となっては、この施設最大最後の切り札。
「……私はここでもう終わりだ……だが、せめてお前も挽肉にしてやる……‼」
壁に叩きつけられもんどり打っていた詠美を半ば無理矢理立たせる。
「ふみゅっ……‼」
「逃げろっ‼」
それはほぼ絶叫に近い。繭を担ぎ、詠美と動物達を促す。
「……っ‼」

この時ばかりは、機敏にそれに従った。
詠美にとって、御堂の初めて見る焦燥だったから。
詠美が走り出したのを確認してから、御堂が繭を反対側の通路へと投げ捨てた。
詠美、繭、それぞれ別方向の通路へとバラけてしまったが、それぞれ源五郎の持つ切り札からは届かない場所へと退避したこととなる。あとは、御堂自身だった。
戦闘力皆無の二人（と三匹）を無理矢理弾き飛ばした、そして全身を痛めつけられた状態では、御堂にも勝ち目はなかった。
普通の軍人よりもはるかに強いとはいえ、今の御堂はただの人間であったから。
銃を撃っても、手榴弾を投げても……この態勢からでは、あの武器相手に相打ちに持ち込めればいい方だろう。
しかも応戦すれば御堂を含めこちらは全滅するのは確実だった。

「軍部は滅んだ……それでもお前はのうのうと生きるというのか……数多くの人間を殺したお前は私と同じ穴のムジナだ……お前達だけでも……殺してやる!!」
手塩にかけて育てた娘はもういない。施設も御堂達によって半ば機能を失ってしまっている。
もう、長瀬としても存在価値などありはしない。
失うものなど、何もなかった。
「今ここで散れ！　御堂っ!!」

658　施設最終戦　～一瞬の勝負～

ガガガガガガガガガガガガガガガガ――
繭を安全圏へと無理矢理投げ捨てていた御堂は、わずかに逃げ遅れた。
回転式機関砲（ガトリングガン）から放射された弾丸のシャワーが御堂を襲った。
「がっ……」

わずかに逃げ遅れただけとはいえ、無数の弾丸が御堂の背中に、足に突き刺さる。
すぼめた御堂の頭にそれが当たらなかったのは奇跡であったかもしれない。
震える手で、懐から手榴弾を二つ取り出すと、ピンを抜いて、源五郎の方へと放った。
それが勢い良く爆発する。
当たるとは思えない。ただの時間稼ぎだ。
手榴弾の爆音を聞きながら、なんとかシャワーの届かない通路へと転がりこんだ。
「ぐうう……」
もう、ガトリングガンの射程距離からは全員が逃れていたが、未だシャワーが壁を穿つ音が響いている。
感覚のなくなった足で、ただ進む。それは来た道をゆっくりと歩いたときよりも遅い足取りだった。
「……!!」
御堂が逃げ込んだ通路は、詠美、そして動物達のいる方の通路。
ちょうど、詠美、御堂と、気絶した繭は弾丸のシャワーで寸断された形になっていた。
目の前で、血相を変える詠美の姿が、歪む。
「ちょ、ちょっとっ……」
御堂の背後に、おびただしい量の血が溢れ、地面に小さな赤い川を作り出す。
「どじっ……たぜ……くそが……」
壁へと背中を預ける。もう、痛みなど微塵もなかった。
「し、しっかりしてっ!! おじさん!!」
「けっ……下僕、いや、したぼく扱いはしねぇのか……？」
「そんなことっ……!! ねっ、はやく逃げなきゃっ……!?」
「俺は……くそ、体が言うこと聞きやがらねぇ……」
御堂の体からはすでに大半の血が体外へと流れ出

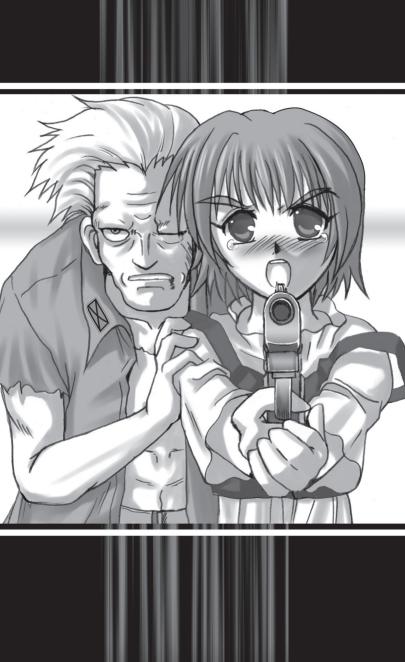
ていた。常人ならば確実に死んでいる出血の量。
　仙命樹の力はほとんど失われているとはいえ、わずかに残されたその力が御堂の命をつないでいた。
　だが、今この瞬間に結界が解かれるならばともかく、このままではあまり長い間はもたない。
　壁に付着した血で滑るのにまかせて、そのままずりずりと座り込む。
「おめぇは……逃げろや……」
「あんた置いて……繭ちゃんを置いて……逃げられるワケないでしょ!?」
　詠美の視界が、涙で滲んでいく。
「死ぬぞ……」
「置いていくよりマシよ！　前みたいにっ……!!」
　釣り橋で、身を挺してまで自分を助けた由宇。
　自らの浅はかな行動で、命を落としてしまった和樹と楓。
　あの時の自分のとっていた行動がもし違っていたら、未来は変わっていたかもしれない。

　だが、それはもう過去にあった確かな現実。流れゆく時が逆行することだけは、けしてない。
「もう、二度と後悔なんてしたくないっ……!!」
「じゃあ……戦うか……？」
　かすれた御堂の声とほぼ同時に、ガトリングガンの銃声が止んだ。
「……源之助さんは、恨んでいるのでしょうかね……たった一人、重荷を押し付けられて」
　ガトリングガンは固定式の為、移動させることはできない。
　射程距離外へと逃げてしまった御堂にとどめを刺す為の最後の武器であるリボルバー銃を手にすると、白衣を翻して前へと進む。大量の血が流れるその先へと。
「戦うか……？」
　呆けたような口調で、だが、目だけは真剣に詠美

を見据えて、そう言った。
　ゆっくりと、その意味を噛み締めながら、頷く。
「自分から、現実から逃げて……後悔は、したくないから」
「相手を……殺すっ……てことだぜぇ……」
「……うん」
「しく……じれば……おめぇが死ぬ。……それでも……か？」
「……うん」
「生きて帰れば、死ぬよりもつらいかもしれないぜ……罪を……背負うってなぁ……そういうもんだ……」
「覚悟してる」
「逃げるより……後悔するかも……しれない……未来が……あるかも……」
「それも——覚悟してる」
「……」
「……」

「けっ……おめぇなら、大丈夫だ……戦え。機関銃ではなく、ポチ（Cz75）の方でな……」
「うん……」
「俺様を、背負え」
「えっ？」
「はやくしな……もう、ヤツがくるぜ……」
「う、うん……」
　戸惑いながらも、御堂を背負う。その体は、悲しいほど軽くて。
「通路の向こうへ、下半身に力を入れて銃を構えろ……」
　言われたとおりに、両足で踏ん張りながら両手でポチを構える。
「こ、こう？」
「そうだ……」
　震える手で、御堂が詠美の手に自らの手を重ねる。
「一発勝負だ……俺……が照準を合わせてやる……」

全身防弾服を着込んだ源五郎に、非力な詠美では機関銃は分が悪い。
あえて、拳銃での一発に賭けさせた。
本来なら御堂が撃つべきなのかもしれない。
だが、もはや照準を合わせ、防弾チョッキに覆われた源五郎に致命打を与えること、そして、銃の反動に耐えられる力はない。……引き金を引けるかどうかも怪しい。
「もっと……腰を……落とせ……腕はこう……」
「うん……」
「狙うのは眉間だ……俺が撃て……と言ったら……撃て……覚悟は……」
「できてる」
「そうか……。いいな……撃て……と言ったら……引き金……を引く……だけで……いい……」
「ぴこ……」
「にゃう……」
（ばっさばっさ……）

寂しげに、動物達が御堂のそばを回る。
「離れてな……」
獣を一度見て、力なく、笑った。
「これが私の最後の仕事だな……規則違反な上、任務放棄状態だが……まあ、それもいいだろう」
マザーコンピューター室に残した最後のメイドロボが気がかりではあったが、もう、それらを顧みる時間はない。
「最後まで駄目な親だったな」
リボルバーに弾を込め、シリンダを回す。
源三郎には大分劣るとはいえ、射撃の腕はそこらの戦闘員よりは上だ。
傷ついた御堂相手ならば互角以上に戦える。
「さあ、決着をつけようか、御堂……」
詠美の視界の先、三つの通路が重なり合う中心部、源五郎の影が近付いてくる。

震える詠美の手の上に重ねられた御堂の手が心強く感じる。
これが、最後の――そして一瞬の勝負。

659　乾いた心

……暑いな
照りつける太陽が私の体を蝕んでいく。
いつもならこんな暑い日は木陰でぼんやりしているところだ。
けれど今の私は太陽に照らされながらただひたすら時が過ぎるのを待っている。
……私なにしてるんだろう？
少し熱でボーッとした頭にそんな考えが浮かんだ。
あの人達の誘いを拒んだのに何故私はここに居るのだろう。
彼らに言った言葉が頭の中で駆け巡る。
――……みんな……知らないんだよ……仲間なんて……本当は……薄っぺらい関係なんだ――
そう、仲間なんて薄っぺらいもの。
その証拠にこの島ではみんな殺し合っているじゃないの。
私はどこか壊れてしまったのかもしれない。
あの子が消えてしまったときから。
どこか普通の人間とは違う感じの子で、凄くいい顔で笑う少女だった。
あの目つきの悪い青年に懐いていて、私の目から見ても微笑ましかった。
何故あの子がこの世から消えなければならなかったんだろうか？
それがこの島に来たときからあの子に定められた運命だったんだろうか？
私には分からない。
思えばあの子が消える前までがあの喫茶店で幸せを感じられた唯一の時だった。
秋子というといつも微笑みを絶やさなかった人も、

名雪という周りをほのぼのとさせる空気をもった子も、琴音という優しかった子も今はこの世に居ない。
失ってしまったものはもう二度と戻らない。
だから私はもう何も欲しがらないことにした。
そうすれば何も失わずに済むから。
それなのに私は出会ってしまった。あの騒がしい人達に。
失いたくないと思える人達に。
でも、それは無理なこと。それがこの島で私が学んだこと。
それでも私は待ち続ける。
彼らが戻ってくるのを。
期待などはしていない。期待すれば裏切られるから。
けれど、もし彼らが戻ってきたなら。
もう一度信じてみてもいいのかもしれない。
スッと日が陰る。
空を見上げてみると今まで雲一つなかった空に雲が出始めている。
一雨来そうね。
そんなことを考えながら私は彼らが消えていった場所を見つめ続けた。

——白ヘビの『ぽち』施設の外にて

660　さよなら

鼓動。
あたしのものである筈のそれは、酷く大きく聞こえて。
背中に感じる、感触。ぬくもり。
それは、この島で一番長く一緒に居た人。そして、今まさに命が失われようとしている人。
……。
おじさんは今まであたしを守ってくれた。
無愛想で意地悪だったけど、おとうさんみたいな

やさしさであたし達を守り続けてくれたんだ。
そんな、おじさんがあたしに最期にしてくれること。いつも、ダメダメだったあたしを守るために最期の力であたしに残してくれる想い。
だから、わたしはそれに応えたくて。
それが、人を殺すということであっても。
不思議とそのことについて怖いって気持ちは無かったんだ。
……なんでだろう？
ううん、そんなこと解ってた。
銃を構えるあたし手に被せられている、大きな手。
ごつごつして暖かくて、とても心強かったから。
最後の一撃を。
……最期の一撃を。
あの男に、叩き込む。
銃が想いに応えてくれるのなら。
この一発は必ず当たるだろう。
ありったけの気持ちを銃にこめて。

体の全てを銃と一つにして。
心の全てをおじさんと一つにして。
長い、長い、一瞬。やたらと、響く足音。
廊下の先に見える影。そして、無防備にあらわれる白い男。その瞳がこちらを見やり、銃を構える姿はやたらスローモーションに思えて、
「撃てっ――！」
声。

――轟音、二つ。

やがて、糸の切れた操り人形のように音を立ててそれは倒れる。長瀬源五郎。
放たれた銃弾は、その額に穴を穿ち。肉を破り、骨を砕き、脳を蹂躙し、引き裂き、吹き飛ばした。

そして――

グシャァッ！

なにかが顔に叩きつけられる感触と共に、あたしは、壁に叩きつけられた。

背中のおじさんのおかげで衝撃は少なかったけど、おじさんは苦しい思いをさせてしまったかもしれない。

ショックで目の前がくらくらする。

……あたし、どこ撃たれたんだろ？

衝撃があったのは頭、だけど……

銃で頭を撃たれて無事っていう話は聞いた事無いなぁ。

いや、ひょっとしたら、もう当たっててあたしは死んでいるのかもしれない。

もしかしたら、今のあたしはゆーれーなのかも？

だって、思ってたより全然痛くないし……

……。

……？

もしかして、外したのかな？

詠美は大分定まってきた視界で、周りを見回してみた。

そして、すぐに理由を発見した。

詠美の目の前で、びくん、びくんと体を震わせる、何かが。

目は虚ろ。一瞬で致命傷だと解りそうなくらい、白い体毛が赤く染まっている。胴の真ん中には赤い穴。そこからは未だ血を吹き出し続けている。

それは犬――ポテトだった。

……へへ。へへへへ。

笑う。心の中でか？　それとも、ちゃんと笑えてるのか？　そんな事、知ったこっちゃねぇ。

女の顔が見えた。ぽかん、と気の抜けたような顔してやがる。ま、無理もないか。

ああ、痛ぇ。何やってんだろうな、俺。

気が付いたら、飛んでた。犬をナメたらいけねぇ。男の銃が、女の眉間を貫く事など、すぐに分かった。

あとは……このザマだ。くそ、痛ぇ。……なんか痛くもなくなってきてるな。

あぁ、逝っちまうのか、俺。人間の為に命張っちまって、それで死んじまうのか？

やれやれだぜ！

……。

……ああ、女が、泣いてる。泣くんじゃねぇよ。せっかく　助けてやったのによ。ったく。
あ、見えなくなった。なんかもう痛くもねぇな。とうとうオシマイか？

……。

抱き、上げられてるのか。血が付くってのに、よ。お構いなしかよ。

……でも、暖けぇ――な。

……ああ。こんな、死に方も……悪くねぇ、かも、なぁ……。

「その、獣が、おめぇを庇ったたってぇのか」

「……うん」

「……けっ。たかが獣のくせに、大したことしやがるじゃねぇか」

笑う。笑えば、笑う程に口から血は吹き出して。もはや笑う事すらままならない。

……それでもいい。死ぬのは分かってる。

顔。顔。記憶の中に埋もれたそれが、走馬燈のようにぐるぐると回る。

蝉丸――ああ、結局奴には勝ち逃げされんのか。けっ。……まぁ、しょうがねぇ、か。決着は地獄でつけるとしようか。どうせ、俺達軍人が天国に逝ける筈もないんだしな。

あゆ――っていったか？　あのガキ。俺の頭の中でさえ泣いてやがる。ガキが。しけた顔してんじゃねぇよ。くそ。そういやあいつのせいでこんな事になっちまったのか。……呪うか？　けっ、面倒くせぇ……止めだ。

ぐるぐる。ぐるぐるぐると回る。くそ、こんな所で死ぬなんて、よ。
――生きたかった。だから、何よりも、まずは生き残ろうとした。最初は、その為に他人を蹴落とすことなんて苦でもなかった。
――それなのに。今じゃ、死ぬ前に笑おうってんだからなぁ……。けっ。腑抜けてやがる。とりあえず、そう、ぼやく。だが、心の何処かで――それでもいいと。そう思っているのである。自分は、変わったのだろうか？　白衣の男も言った。らしくない、と。
それに対して自分は言った。踊らされるのは、嫌だと。
……自分は、自ら、これを望んだというのだろうか。本当に、これを望んでいたのか。
これが。これが、本当の、俺なのか……？
詠美――この馬鹿、いつまでも泣いてんじゃねぇよ。お前はこれから一人で生きていかなきゃいけねぇんだ。それなのにそんなんでどうする？
「……泣いてん、じゃねぇぞ」
細く、細く。声は、虚ろに響く。
それでも、詠美が泣くのを止めたのが見えた。そう、それでいい。
「泣いているのは、おめぇらしく、ねぇ、からな……」
「――」
「笑って――笑って、バカやってろ。そうじゃねぇ、と、おめぇらしく――」
がふっ。
血が舞った。吐き出された血が、俺の死が近い事を示していた。もう、これまでか。
いや、もはや、目の前すら暗くなりつつあった。瞳孔散大。やれやれ、俺の体ももう限界だとさ。強化兵もあっけないもんだな……
「……ぁっ」
何を言っているのか？　いや、そもそも、何か言

ったのか？　それとも自分が聞こえてないだけなのか。

「――」

自分も何かを返す。いや、返した、筈だ。どちらかなんてもう解らない。

目も。耳も。もはや全てが死に絶えようとしている。それでも、口だけが動いていれば。少なくとも、それなら、あのバカは……寂しがらねぇだろう。

――そして、もはやそれすらも、動かなくなって。

……最期に、思った。らしくねぇな……と。

確かにそうだ。だが、それでも、

――満足だった。

八十九番　御堂　死亡
ポテト　死亡
長瀬源五郎　死亡
【残り22人】

661　焦り過ぎた故に……

――それは北川が出発してからすぐの事だった。

「北川さん、行っちゃったね」

「……」

「私達もそろそろ荷物まとめて出発しないとね」

「……（こくこく）」

私達は荷物を整理していた。使えるもの、使えないものの仕分け。弾数の確認。

女の子二人では持っていける量も限られるので必要のなさそうな物や、私達では使えなさそうな物はここに埋めていくことにした。

そして分別がおわり出発しようとしたときスフィーがついにアレを見つけた。

「あれ……このキノコたしか……」

「……」

「え、このキノコがどうかしたかって？　このキノコね、私の国で実験用に昔作られたキノコにそっくりなの。この見た目といい独特の香りといい。そのキノコは性格反転キノコっていうの。私のご先祖様でとっても内気な人がいてね、その性格を直すために作られたの」

——内気な性格を直すために作られたの——
——内気な性格を直すために作られたの——
——内気な性格を直すために作られたの——

芹香の頭の中でリフレインされる台詞。
自分の意志を周りに伝えることが出来るようになるキノコ。綾香も浩之も居ない今、それは彼女にとって起死回生の品に思えたのだ。
だから、芹香は次の言葉を聞き終わる前にキノコの一つに噛み付いていた。

「……その内気な女王様はね、確かに内気な部分は治ったんだけど——思慮深い部分まで反転してしまったの」

【キノコ　残り二つ】

662　空の継嗣、黒の啓死

「すまない、郁未」
私、天沢郁未の意識を繋ぎ止めたのはあいつのその言葉だった。
そして、その言葉と同時に、私の中で何かが膨れ上がる。
それは、憎悪、恐怖、絶望、戦慄、怒り、悪意、狂乱、殺意、黒いもの、熱く滾るもの。

——不可視の力。

まずい、これはまずい。

私の怪我なんてどうでもいい。
本能が鳴らすこの警鐘に比べたらどうでもいい。
ライフルを持った男なんてどうでもいい。
目の前の、確かに私が好きな人が放つ、この畏怖感に比べたらどうでもいい。
気がつけば、あの銀髪の男が私を抱えていた。

——なんできたの！　馬鹿‼

そう叫ぼうとして、でも私は震えるだけだ。
男、往人の方も聞く耳はないらしい。なんとか林の中へ離脱しようとする。
でも、それは甘い。あれはそんなことを見逃さない。
音も立てずあいつは恐るべきスピードで私達の後ろに回ると、その手が鋭い風きり音とともに振り回される。
「がっ⁉」
「はうっ⁉」
私と往人はその一撃を受けて別々の方向へ弾き飛ばされる。ベネリが転がる。
恐るべき一撃だった。間違いなく不可視の力が込められていた一撃だった。
本来なら私達はその一撃で肉塊に変えられてだろう。
そうならなかった理由はただ一つ。
私が、不可視の力でガードしたからだ。
「……何やってんだよ⁉　あんた‼」
かろうじて意識をつないだらしい往人が叫ぶ。
「俺は、あんたらを助けようと……」
だが、そこで往人は口をつぐんだ。
気づいたのだ。もはや少年がそんな言葉の通じないところにいる事に。
おそらくは、そのことはライフルの男の方も本能で気づいていたのだろう。

だがライフルの男は、本能よりも理性のほうを優先させた。
「……動くな……」
私の頭に銃口を突きつけ少年に警告する。
普通の状況ならば、確かにそれは最善の行動だ。
だが、今の状況はまさしく異常。
人の理性で対処できる範疇にはない。
少年は男のことを歯牙にもかけず、つぶやいている。
「……消えて……いく……」
うつろな声でつぶやきながらこちらに手を伸ばす。
「僕が……消えて……いく……呑まれていく……」
ぶおん、という耳障りな音が次第に大きくなっていく。
こちらに向けた少年の手のひらの上の塊が次第に大きくなっていく。
それは力の塊。私にしか見えない不可視の力。
それは、視覚以外の何かで男にも感じる事が出来たらしい。
「グッ……」
その表情はひとつの疑問をうかべていた。
それは私の持つ疑問と同じもの。
なぜ、少年は力が使える？
なぜ、私は力が使える？
この島にきてから感じていた抑止力は、結界は、今も確かにあるというのに。
呼応している。私の中の何かが少年に呼応している。
かつて少年が私に教えてくれた事。
不可視の力は少年と性行為をする事で、対象者の中に少年の分身が植え付けられる事で、授けられるという事。
だからなのだろうか？　だから、私も少年の影響を受けて……。
「なくなってしまう……僕が……」
分からない。もう、なにも分からない。

ただ、はっきりとした喪失感が私を満たしていく。
大切な人が目の前で消えようとしている、そういう確信が私を満たしていく。
はっきりとした恐怖が私を満たしていく。
化け物が目の前で私を殺そうとしている、そういう確信が私を満たしていく。
相反する感情が私を満たして、あふれようとして。
私はもうパニックを起こすしかなくて。
「銃を置いてください！　撃ちますよ!!」
いつのまにか、観鈴がベネリを構えてライフルの男の頭に突きつけていた。
「わ、私、本気ですよ!!」
観鈴が叫ぶ。
「馬鹿!!　観鈴、逃げろ!!」
往人が叫ぶ。
「何やっとんねん、早くこっちへ!!」
晴子が叫ぶ。
「……」

突きつけられたベネリにも注意を払わず男がうめく。
「うあああああああっっ!!」
私が叫ぶ。
叫んで、コントロールもおぼつかない不可視の力でシールドをはろうとする。
その中で少年のうつろな呟きだけがやけにはっきりと聞こえた。
「……呑まれていく……神奈に……」
そして、力が放たれた。
すさまじい爆音があたりを轟かし、
私のからだを衝撃がおそい、
薄れていく意識の中で、
「助けて……イ……ク……ミ……」
そんな声が聞こえたようなきがした。

……闇の中、私は夢を見る。

それは、私の夢じゃない。
夢なのにそれは、はっきりと分かっていた。
それは、少年の記憶、私の中の少年が見せる夢だ。
「成功だ！」
その声とともに数人の白衣の男達が歓声を上げる。
その胸にはＦＡＲＧＯのロゴがついている。
「ようやく、力の結晶化が達成したな……」
それは計画。ＦＡＲＧＯが空に浮かぶ少女、呪われた少女、意識を持つ闇を纏う少女を発見した時から始まっていた計画だった。
「やれやれ、あの茶番劇にも意味はあった訳だ」
一つの島に集められた人々。殺し合いを強要される人々。
彼らは贄だ。
空に浮かぶ呪いは、更なる呪詛を求める。
それは、悪意、絶望、恐怖、殺意、怨恨。それが求める呪詛。
殺し合いが進むうちに生まれる贄達の呪詛は、空に浮かぶ呪いに更なる力を与える。
そうして、ＦＡＲＧＯはその力を掠め取る。掠め取って結晶化させたのが……
「しかし、これに擬態と偽装人格など必要なのかな？」
「擬態は必要だろう。正視に耐えんよ。この姿は」
「偽装人格も必要ではあるさ。力の植え付けには被験者との性行為が必要だからな」
それが、少年だった。

さわやかな風が私の頬をなで、草の匂いが私の鼻腔をくすぐる。
「う……ん」
「やぁ、ようやくめがさめたようだね」
覚醒した私の耳に、少年のいつもの穏やかな声が届く。
私は、ゆっくりと目を開け、周りを見ようとして

立ち上がろうとして、崩れ落ちた。
「ああ、まだ動かないほうがいいよ。結界内で力を使った反動がきてしまっているしね。大体、郁未の受けた傷は決して浅いものじゃないんだ。手当てはしておいたけどね」
言われて私は、肩を、足を見る。確かに手当てがなされていた。
「ありが……と」
そういって私はゆっくりと首を回す。
側には二人の人間が倒れていた。栗毛色の髪の少女、観鈴と、ライフルを持った男だ。
二人とも草の中で眠っている。
「……なんで、草原なの？　ここ」
確か、林の近くにいたはずよね。
「ああ」
少年は苦笑した。
「結界内で無理に力を使っちゃったからね。しかもろくにコントロールも出来ていない二人が力をぶつけ合っちゃった訳だから力が暴走しちゃってね。島の中のどこかに転移しちゃったらしい。僕ら四人だけ」
「へぇ……大変だったんだね」
けだるく私は返事した。
「何だよ、もっと驚くことなんじゃないかい？」
「だって、どうでもいいもん」
私、知ってしまったんだもん。
何もかも知ってしまったんだもん。
その声は変わらず穏やかなままなのに、その表情は変わらずひょうひょうとしたままなのに。
私が心から大切に思っていた人はもういないって事を。
「あなたが、ジョーカーだって事を、知ってしまったんだもん」
そっと、草原に風が吹き抜ける。
「……そうか、知っちゃったか」
少年は変わらない調子で続けた。

「君は僕の継嗣だからね。意識がつながってしまったようだね」
「……いつからそんな風になっちゃたの？」
「君と会うちょっと前ぐらいからかな、姫君と意識が交わりはじめたのはね」
「もっとも僕、いや僕という偽装人格はそれを自覚していなかったけどね。姫君の事は忘れるように偽装人格は施されていたから。実際おかしな話だったんだ。僕だけが結界内で他の人よりも力を使えていたんだからね」
「なんで、そんなことになっちゃたの？」
「長瀬たちの不注意のせいさ。どういう事情があったか知らないが姫君をその力を封じてある社から別の社へ移動したらしい」
「……社？」
「そう、姫君の力を結界という抑止力のみに使うようにするためのものさ。もちろん、移動中も結界の効力が続くように、何らかの法術は用いていたらしい。結界がなくなってしまったらこの大会そのものが成り立たないからね。ただ、その間にわずかながら姫君の封印が弱くなってね。僕と意識をつなぐことに成功したんだ。だが、意識が融和するさいにＦＡＲＧＯに施されていた偽装人格が邪魔になってしまった。そのせいで、僕の力が暴走してしまったんだ」
「そして、側にいた私もその影響を受けてしまったわけだ？」
「そういうことになるね。影響を受けたのは多分側にいた君だけだろう。結界内で暴走した力二つが激突すればただで済むはずが無い。転移程度で済んだのは幸運だよ」
私は手のひらを見て、そこに意識を集中させた。
「……今はもう力はつかえないわね」
「姫君が再び別の社に封じられてしまったからね。もう不可視の力を使うことはできない」
私は寝転んだまま腕を顔の前に持ってきて表情を

隠すと、さらに尋ねた。
「あなたは、もう、いないの？」
「偽装人格の話をしているのなら、もういない。本来僕らには我という考えはないんだ。結局僕らは姫君の分身だからね。ＦＡＲＧＯのもうけた偽装人格は先程、姫君の意識に飲まれて消えてなくなったよ。もちろん便宜上、独自の思考能力と、偽装人格が持っていた記憶は残っているけどね」
「……悲しく、ないの？」
「そういう主体性は、僕にはないね。まあ、本来ならあるべき形に戻れたのだから安心すべきなんだろうけど」
「これからどうするの？」
「うん？　もちろん姫君の望むとおりこの大会を進行させてもらうよ。確かにこれは贄としては最上のものだからね、ただ……」
　わずかに、少年の瞳が鋭くなる。
「今回は、今までとは様子が違うな……。人外の力の持ち主が多すぎる。管理もあまりに杜撰だ。前回の大会で弱体化したＦＡＲＧＯではなく長瀬一族が主催しているというのが気になるな……何を考えているんだろうね？」
　少年は肩を竦めた。
「結局、偽装人格には感謝すべきだろうね。僕と姫君とのつながりを隠す、いいカモフラージュになってくれた。ＦＡＲＧＯとの関係は確かに蜜月のものだったけど、長瀬一族はまた別の意図をもっているようだ。彼らの真意は確認する必要があるね」
「……なぜ、私を殺さないの？」
　それが、最後の質問だった。
「……想像はついているだろう？」
「確認したいのよ。もう、甘い期待はしたくない」
「そうか」
　少年はうなずいた。
「君は、僕の継嗣だ。僕とつながっている。即ち、君たちは姫君とつながっている。姫君の分身が君た

ちの中にある」
「いつか私達も、あなたのように意識を侵食される
というわけ？」
「そういう事になるね。君たちには僕とちがって我
がある。変化は僕よりは緩慢だろう。けれど、姫君
の意識はいずれ君の我を飲み込むだろう」
なんで、そんなことが平気で言えるのよ。
さっきまで。ほんのさっきまで、私達恋人だった
のに。
私、こんなに悲しいんだよ。張り裂けそうなんだ
よ。
なのに、なぜ笑っていられるの？　あなたは。
そして、なぜ私は。壊れないの？
「一つだけいっておくわ」
私はかすれた声で言う。
「あなたが、偽装と呼ぶあなたは。姫君とかいうや
つが殺したあなたは。本物だった。本物だったのよ。
あなたは本気で怒ってた。私と同じ名前の少女が
殺された事に本気で怒っていた。
あなたは本気で心配してくれてた。私の事本気で
心配してくれてた。
あなたは本気で悲しんでいた。この島で殺し合い
がおきている事を本気で悲しんでいた。
あなたは本気で照れていた。私のいたずらに本気
で照れていた。
あなたは本気でわびていた。私に本気ですまない
っていっていた。
あなたは本気でおびえていた。消える事におびえ
ていた。私に助けを求めていた。
だから私は」
それは誓い。お母さんの時には果たせなかった誓
い。
「あなたを助けるわ。それができないなら。あなた
を殺してあげる」
少年は、しばらく私を見て。
「そうだね。君ならそう言うだろうと、思っていた。

強いよ、確かに君は」
そうだろうか。
こんなに悲しいのに、それでも壊れる事ができないって言うのは、とても、絶望的な事じゃないだろうか。
「こいつの荷物と、僕の荷物はおいていこう。僕には偽典があれば充分だろう」
少年は男を担ぎ上げると一度もこちらを見ないで立ち去っていった。
私も、少年の方を見なかった。
泣いていた。涙を止める事ができなかった。
どうして、どうしてなんだろう。
どうして、私の大切な人は、私を裏切るんだろう。
初恋の人も、お母さんも、少年も。
わたし、あいしかたをまちがえているのかなぁ
……。

663　涙雨が誘う物（第八回定時放送）

今までの晴天が嘘のように曇りだした。そして雷鳴……。島を包み込む涙雨。
スフィーは雷が彩る光と影の中何も言えず見つめていた。
――変わってしまった彼女を――
蝉丸は『それ』を背負いながら雨を見つめていた。
――水の嫌いな戦友の無事を祈って――
初音達は祈るような眼で雨を見つめていた。
――出て行った仲間の無事を願って――
北川達はその雨を哀しげに見つめていた。
――今は亡き友を想って――

そしてこの島には似合わない優しげな声が島を包み込んだ。
「定時放送を行う……。

一番　相沢祐一
五番　天野美汐
九番　江藤結花
四十三番　里村茜
四十六番　椎名繭
四十七番　篠塚弥生
六十四番　長瀬祐介
七十九番　牧部なつみ
八十九番　御堂
九十番　水瀬秋子
九十四番　宮内レミィ
九十九番　柚木詩子

それでは健闘を祈る」

その放送を聞き終えると同時に走り出す影(ぽち)があった。それは乾いた心に染み込んだ雨のせいかも知れない。

664　突き刺す雨

「雨、か……」
晴れの空から一転、突然降り出した滝のような雨に、マナは物憂げに窓の外を見やった。
この島に連れて来られてからは初めての雨。
森を歩いてる時に降られなくて良かったわ——場違いなことを考えている自分に、自然と笑みが浮かんだ。
「……頭の病気か？　怖いぞ、急に笑い出したりして」
「うるさいわね」
窓から見えるのは突き刺すような雨の筋とどす黒

い雲だけ。空が一瞬光り、雷鳴が轟く。もしかしたら嵐になるのかもしれない。
（いかにも何か起きそうな天気ね……そう、ミステリーなんかではこんな日に人が死ぬんだわ。この状況だと、私たちは同じ部屋にいるから安全として……葉子さんがナイフで刺されてたり、とか）
不謹慎な想像が徐々に形になりかけていることに気づき、マナは軽く頭を振ってそれを追いやった。
それでもまだ何となく不安だったので、思わず葉子の様子を窺いに行こうと腰を浮かせかけたが、耕一にバカにされそうだったので止めた。
「なんかさっきから挙動不審だな」
「……あなた、半病人のくせに口数多いわね。私に構ってる暇があったら可愛い従妹の心配でもしてあげたら？」
マナは初音の方を顎でしゃくった。耕一がキュッと唇の端を噛んだ。
雨が降り出す前から初音は窓の外を見つめたっきりだった。どこか遠い目で外の景色をじっと眺めていた。
もちろん、初音が見ているのが景色などでないことは二人とも十分にわかっていた。
「見てて痛々しいわね。……あーあ、妬けちゃうなー」
「なんだ、マナちゃんにはそういう相手はいないのか」
「……」
言った瞬間、耕一はしまった、と思った。ひとときの平和な時間が、自分たちの置かれている状態を忘れさせていた。
耕一は口をつぐんだ。謝るのは余計に失礼だと思ったからだ。この後、当然予想されるべき気まずい沈黙にも耐える覚悟はあった。
しかし、マナはあっけらかんとして答えた。
「ふーんだ、彼氏の一人もいなくて悪かったわね。どうせ私はナマイキで可愛くないですよーだ」

「……」
今度は耕一が黙る番だった。しげしげとマナの顔を見つめる。
「ちょ、ちょっと、変なとこで黙んないでよ！　大体、女の子にそんなこと聞くなんてサイテーなんだから！　はっきり言ってデリカシーゼロよ。あーあ、死んでもモテないタイプね、あなた」
慌てて目線を逸らすと、マナは早口でまくし立てた。
それを観察するように見ていた耕一だったが、やがてゆっくりと口を開いた。
「……うん、客観的に見て可愛くないってのはウソだと思うぞ」
マナの頬にサッと赤みが差した。
チラリと横目で見た耕一の顔が真剣そのものなのを見ると、さらに頬が熱くなるのがわかる。
「な、なによ！　お世辞なんか言ったって何も出ないわよ！」
「でも致命的にナマイキだからな」
耕一がニカッと笑ったのと、マナの蹴りが耕一のスネに炸裂したのが同時だった。
「ぐおぁぁぁぁぁっ！　痛ぇ！　うああ……」
「……ほんっと女の人に縁のなさそうな――」
ザザッ……
マナの言葉を遮るように、外から雨に霞んだノイズ音が飛び込んできた。
(放送……！)
反射的に身が硬くなる。そして――
『定時放送を行う』
(……あれ？)
外のスピーカーから発せられている声は、好む好まざるに関わらず聞き慣れてしまった声ではなかった。
少なくとも、あの不愉快な高槻の声でないことは確かだった。その声が、淡々と死者の名前を読み上げて行く。

（もう、今さら緊張して聞いたってしょうがないんだけどね）
マナにとって大切な人たちは、既に全員この島で殺されていた。
だが、実は夜中に出会い、傷の手当てをし、そして自分の在り方を考える契機となった男女――長瀬祐介と天野美汐という名前の二人がその中に含まれていたことは、マナには知る由もなかった。
――放送が終わると、耕一は無言でマナの方に視線を向けた。マナも同じく無言のまま、首を小さく横に振る。
耕一は安堵したように息をもらした。
「そっか、お互い知り合いは無事か。良かった」
無事でも何でもないのだが、マナは敢えてそれに口を挟もうとは思わなかった。
ただ一つだけ、どうしても聞きとがめたことがあった。
「……良かったっちゃ良かったんだけどね」
静かに目を伏せ、マナは耕一の足元に座り込んだ。
それは以前からずっと思っていたことだったが、なんだか今不意に口に出してみたくなったのだ。
マナは耕一の足に手を伸ばすと、スネ毛を一本引っつかみ、ピッと抜いた。
「いてっ！」
「ああやって名前読み上げる時、自分の知り合いがいないとつい……気をつけてても、不謹慎だなって思ってもついホッとしちゃうのよね。そういうのってやっぱりなんだかなーって思うわけ。自分がヤになって仕方ないわ」
言いながら、スネ毛をプツッ、プツッと抜いていく。
かなり痛かったが、耕一はマナを制止することができなかった。うめき声をこらえて、一言呟く。
「っ……そうは言っても……なぁ」
「わかってるわよ、ただちょっと愚痴ってみたかっ

ただけ。ごめんなさいね」
　深刻になりかけた耕一をフォローするように、しかしスネ毛を抜く手は休めずにマナは言った。
　しばらく、部屋の中では外の嵐の音、そして時折もれ出る耕一の声しか聞こえなかった。
「でもまぁ、実際仕方ないとは思うんだけどな」
　ややあって、耕一が口を開いた。照れ隠しか、目はあらぬ方向を見ている。
「そんだけ身体がちっちゃいんだ、そんな全部しょい込んだら潰れっちまう。自分の心配できる分だけ心配すればいいんじゃないかな。誰かのことは誰かが考えてくれるさ。少なくとも俺はそれでいいと思うんだ」
「……」
　ちっちゃい、と言ったことでまた蹴られるかなと思ったが、それはなかった。代わりに、スネ毛を引っこ抜く手が止まっていた。
　マナは顔を上げて耕一の顔を見ると、ふっ、とバカにしたように微笑んだ。
「……ふふっ。私もあなたくらい単純だったらなー」
「ちぇっ。大きなお世話だ」
「あなたくらい身体が大きいと、さぞかしたくさん背負い込んじゃえるんでしょうね。これまでのところ、チビで困ったことは特にないけど……ちょっと羨ましいわ」
「ま、デカいのだけが取り得みたいなもんだからな」
「まったくよ」
　二人は顔を見合わせて笑った。
　——目も眩むような稲光とともに、天を揺るがすような雷鳴がすぐ近くで爆発するように轟いたのはその時だった。
『キャーーーーーーーーーーーーーッ！』
　絹を裂くような悲鳴が唱和する。マナと初音だ。
「大丈夫だよ初音ちゃん、落ち着いて……と」

耕一は自分の足にギュッとしがみついている少女を見てニヤリと笑った。
「ふぅーん、マナちゃんは雷が怖いんだ、そっかー」
「なっ……！　こっ、怖くなんかないわよ！　ただちょっと、そう、驚いただけよ！」
自分が何にしがみついているのかに気づき、マナはガバッと飛びすさるように離れた。
「そっかー。へぇー。へぇー」
「この男っ……！　半病人はおとなしく寝てなさいよっ！」
「いやぁ、デカいのとついでに丈夫なのも取り得ですから」
「ム、ムカつくわ……」
背中越しに聞こえる賑やかなやり取りに、静かに雨に煙る景色を見つめていた初音はこっそりと微笑んだ。

雷はマナたちのいる家のすぐ側の木に直撃していた。
だから、その凄まじい雷鳴にかき消された『その音』を聞いた人間はその場にはいなかった。

665　雨がやむとき

ん？　雨が降ってきたみたいだな。
少しずつ薄れていく意識の中、雨粒の存在を感じた。
「うわっ！　雨！」
「仕方ないわね。多分通り雨でしょうからどこかで雨宿りするわよ」
って俺置いてきぼりっすか!?　マジっすか!?
「置いて行かれたくなかったらさっさと立ちなさいよ」
いや、そんなこと言われても。あの熊殺しのパンチを受けたらたとえ矢吹丈でも立ってられませんよ、

姐さん。
「誰が熊殺しよっ！」
あれ？　さっきから何で会話が成立してるんだ？
ひょっとしてエスパー？
「何言ってるのよ。さっきから口にだしてるわよ」
う〜む、またやってしまったか。
「いいからさっさと立ちなさいよ。私濡れたくないのよね」
「了解しました。晴香お姉さま」
確かに婦女子をこの雨の中立たせて置くわけにはいかないからな。
俺が立ち上がろうとしたとき、例の死亡者放送が流れてきた。

取りあえず俺達は木陰で雨宿りをすることにした。
放送があった後、二人とも一言も喋っていない。
誰か知り合いの名前でもあったのだろうか？
ま、今はその方がありがたいけどな。

今の俺に話しかけられても、『いつもの北川君じゃない！』って言われるのがオチだからな。
未だ降り止まぬ雨をぼんやりと眺めながら俺は考え事をしていた。
全く相沢のやつ。難しい問題残して逝きやがって。人を信じるっていうのは難しいことなんだぜ、特に今のこの島では。
ま、それでも俺はこの島で生きてる限りこのスタンスを貫くけどな。
それが……相沢を殺した俺があいつにしてやれることだからな。あの世で親友に顔向け出来なくなるようなことはしたくないしな。
相沢が言ってたようにこの殺人ゲームは馬鹿げている。主催者の鼻をあかしてやるためには出来るだけ多くの人間で生きてこの島を脱出することだな。
そのためには……取りあえずあのＣＤの謎を解き明かすことだ。
頼りにしていた椎名っていう子はさっきの放送に

よると死んでしまっているようだった。結構頭の良さそうな子で、見た目も将来が楽しみな子だったのになぁ。
っと考えがそれてしまった。つまり俺一人であのCDの謎に挑戦しなければならないということだ。でもなぁ、調べるためのパソコンは壊しちまったからな。
多分この島にマザーコンピュータがあるとは思うけど、マザコンがある場所は警戒が厳重だろうな。
今のところマザコンで調べるという案は没だな。
「………せめてパソコンがあればなぁ」
思わず口に出てしまった。
「パソコンならあるわよ、確か」
「ふぇ⁉」
七瀬さんのその言葉に思わず素っ頓狂な声をあげてしまった。漢北川、一生の不覚。
「七瀬さん！　それ本当か⁉」
「う、うん。確か蝉丸さんが持ってたわよね、晴香」
「さぁ、私は知らないわ」
晴香さんは興味が無さそうな感じだった。だがそんなことは今の俺にはどうでもいい。
前に調べたときはあまり収穫が無かったけどあの後に護がやってた事を少しだけ思い出した。
あの通りにやれればもう少し詳しいことが分かるかもしれない。
「でも、何でパソコンが必要なのよ？」
俺は七瀬さんにCDの事をかいつまんで説明した。
「ふ〜ん、そのCDの事が分かればこの島から脱出出来るかもしれないってわけね」
どうやら晴香さんも少しだけ興味が沸いてきたようだ。
「そういうことです、ハイ」
「でもさ、何でそんな物が参加者に渡されてるの？そんな物があったら簡単に逃げられちゃうじゃないの」

「うぐ⁉　痛いところをつきますね。晴香さん」
そう。そのことが俺が一番引っかかっていたことだ。
この殺人ゲームの目的はよく分からないが参加者が逃げるようなことがあったらマズイはずだ。
優勝者一名ならこのゲームの口止めも可能だろうが何人もの人が逃げ出して殺人ゲームのことをぶちまけたら主催者はおしまいだろう。
「それでも、調べてみる価値はあると思う。というわけでその蝉丸さんとやらのところに案内してくれ」
「いやよ」
「ち、ちょっと晴香」
「私達は私達でやることがあるのよ」
「よし、分かった。じゃあその蝉丸さんのいる場所を教えてくれ。俺一人でそこに向かうから。あ、後取り上げた武器その他も返してくれ」
「ダメ」
「何で⁉」
「あなたのこと完全に信用したわけじゃないもの。あなたに武器を返したら蝉丸さん達を殺しに行かないとも限らないでしょ」
「晴香！　言い過ぎよ！」
「黙ってて！　七瀬！」
「俺は……俺は人を絶対に殺さない！」
「そんな言葉で信用できるわけないでしょう。現にあなた私と最初に会ったときに武器を私に向けたじゃない」
「う⁉」
「それにもし誰かがあなたを殺そうとした時にも人を殺さないって言えるの？」
「俺は……俺は誓ったんだ。親友を……相沢を失ったときにもう人は殺さないって誓ったんだよ！」
「「相沢って相沢祐一のこと？」」
「あ、ああ。二人とも相沢のこと知ってるのか？」
「私は名前だけしか知らないけどね」

「そんなことより今の言葉一体どういう意味？」
俺は二人に話した。
相沢に会ったときに記憶喪失になっていたこと。
相沢を俺が殺したこと。
そして相沢の最後の言葉を。
「………あのヘタレ」
ポツリと晴香さんがそんな言葉をつぶやいた。
「だから俺は人は殺さない。そして今島にいる人みんなで生きて帰りたいんだよ。頼む！」
俺はその場で土下座をした。
雨でぬかるんだ泥が体に付く。
今の俺はきっともの凄く格好悪いだろうな。
そんな考えが頭に浮かぶ。
いいさ。どんなに格好悪くても構わない。相沢に顔向け出来なくなるよりはずっとマシだ。
「……顔を上げなさいよ」
そう言われて顔を上げた俺が見た晴香さんの顔はさっきまでの厳しい顔では無く、少しだけ優しい感じがした。
ちょっとだけ惚れたかも。美坂に少しだけ似てるしな。
「ほら！」
「うわ！」
突然荷物を投げられた俺はその荷物に潰されてしまった。カッコワリィ。
「何やってるのよ、情けない」
うわ！　そんなはっきり言わなくても……。
「でもさっきも言ったけど私達はやることがあるから蝉丸さんのところには一人で行ってよね」
「ＯＫＯＫ！」
「まったく、調子いいわね。取りあえず雨が止むまで待ちなさいよ。わざわざ濡れることもないでしょ」
そう言って晴香さんはそっぽを向いてしまった。
「ゴメンね、北川。晴香素直じゃないから」
「ちょっ！　七瀬！　それどういう意味よ！」

「どういう意味も何も言葉通りよ」
二人のやりとりが面白くて思わず笑ってしまった。
「あんたも何笑ってるのよ！」
「わ！　晴香さん！　落ち着いて！　真剣はやばいって！」
「うるさい！　そこにじっとしてなさい！」
「じっとしてたら死んじまうだろうが！」
俺は晴香さんから逃げ回りながら少しだけここに来る前の日常を思い出した。相沢と俺と水瀬さんと美坂の四人でふざけあっていた日々を。
もうあの日には帰れないけど今はこの幸せを楽しもう。

雨は未だ降り続けている。
だがいつか雨は止むだろう。
その時にみんなで心から笑える日が来る。
そうだろ、相沢………。

取りあえず今は晴香さんを落ち着かせる方法を考える方が先決だけどな。

666　目的

力と力の干渉。
どこか遠くの場所で沸き上がった異質な力を、『俺』は感じ取っていた。
そしてそれを、自分の力で潰してみたいとも思った。
生命が散る間際の炎ほど美しいものはない。
その命が強大な力を持てば持つ程、その輝きは映えるのだ。
女達を犯すことの他、もう一つの目的が出来た。
あの力を持つ者と戦い、命の灯を摘み上げること。
破壊は美しい。
性欲。殺戮衝動。生き物は皆、本能こそが真なる姿。

理性などというものは、必要ないのだ。

放送がかかる。
長瀬祐介、天野美汐の名を聞いた『理性』が激しく揺れ動くのがわかった。
さすがに強靭な精神力を持っているために、それでも一筋縄ではいかないようだが。
焦らず、焦らず時を待つ。
すぐにでも暴れ出してやりたいが、今の力でそれは出来ない。
まぁ、いい。
俺は気が短いが、おとなしく辛抱するのもまた一興。
その期間は、後に残った愉しみのための、最高のエッセンスとなるだろう。

雷鳴がする。
空に広がる黒雲は、『俺』に壊されるこの島の連中の未来のように思えた。

667　今語られる真実

この大会の作られた理由、それは――贄――
不条理な理由で殺されたことによって生まれる様々な感情。
悪意、絶望、恐怖、殺意、怨恨。
空に浮かぶ呪いの求める呪詛。
飽きる事を知らぬ呪いの欲望を満たす為、そしてその力を掠め取るため。
その計画を考えついたのは『ＦＡＲＧＯ』
しかしその力を結晶化するにはあまりに技術不足であった。だからＦＡＲＧＯは援助を求めた。
『長瀬』のトップ、長瀬源之助に。

空に浮かぶ船の中、老人は独り思う。

始めは好奇心だった。これほどの呪詛を秘めた物はグエンディーナでも見たことは無かった。新たなる生命を生む悦び、未知なる物に挑戦する快び、それは魔術師としての性。
己の力を過信していた、たかが呪詛程度簡単に消去できると思っていた。
しかし、その力のごく一部を結晶化するのに成功したとき、自らの過ちに気がついた。周りの科学者どもはただ浮かれていた、実験の成功に酔いしれて。
私には『力』があるが故にその秘められた力に気がついていた。気がついたときには手遅れだった、封印の中で奴は確実に力をつけていた。
すでに私が相手を出来るレベルでは無くなっていた。封印を破らないのは餌が手に入るからだ、上質の贄が。
決着は自分の手でつける、他の全てを犠牲にしてでも。
それからは奴を弱体化するための手段を探し回った。様々な禁呪にも手を伸ばした。各方面に援助を求め、長瀬としての力も付けた、各地の能力者とのパイプも作った。
計画に気が付いた高槻を処分してＦＡＲＧＯの力を削いだ。実権はすべて長瀬へ。
この計画は二つの鍵で成り立っている。
一つは人選。空に浮かぶ呪いは呪詛を求める、それゆえにあるものに弱いのだ。それは、愛情、友情、希望、自分の命を捨ててでも相手を守ろうとする善き心。それゆえに人選を長瀬の手にまとめる必要があった。
そしてもう一つの鍵があった、それは能力者。呪いを高めるのはさらなる呪詛、しかし魔術の力を高めるのは強き魂。
「神奈よ、今回の大会がお前の最後だ。準備は全て整った。この島はすでに血で汚れている、しかしそれを超える思いで満たした。そして世界でも最高ランクの能力者達の魂。長瀬源之助、生涯最大の呪文

でお相手しよう」
他の長瀬は死に場所を決められた、それは若さゆえの特権。しかし、源之助はそれができない、すでに命の使い道は決まってるからだ。

668　残悔

目の前が涙でふやけて、何も見えなくなっていたよ。
だけど、手に伝わる反動と、あの赤い色は、忘れないよ。
『殺したのは、わたしよ』
……ううん、ちがうよ。
わかってるよ。
腹立たしかったんだ。何も出来ない、ボクの弱さが。
怖かったんだ。大切な人を、失うことが。
悲しかったんだ。引き金を絞って、失った何かが。
だから、ボクは泣いていたよ。
悲しいだけじゃない、怖いだけじゃない、腹立たしいだけじゃない。
説明なんか、出来ないよ。
だから、どうしていいのか解らなくて。
ただ、千鶴さんにすがって、泣いていたよ。
どれだけの間、そうしていたのか解らないけれど。
涙が枯れて、ガチガチだった腕の力がやっと抜けたころ、千鶴さんがボクの腕をゆっくりほどいて、言ったんだ。
「行きましょう。御堂さんが、待っているわ」
そうだ。おじさんは短気だから。遅れたら、ボクたち怒られちゃうよね。
「あゆ、きっとまた怒鳴られちまうぞ？　チビ！　あれだけウダウダぬかして、俺様を待たせるたあ、

どういう事だ！　……ってさ？」
梓さんも、同じことを考えていた。
そうだよね。急がないと。
怒られちゃうよねっ。

……嬉しいよ。
みんなでまた笑えるなら、ボクが失った何かなんて、大したことじゃないよ。
「えへへっ」
また涙が溢れてきたけど。
ボク、がんばれるよ。
おじさん、ちょっと待っててね？

いったん止まったあゆの涙は、尽きる事を諦めないかのように、ぽろぽろと溢れていた。涙の雫が床に落ちるのと同時に、物音がした。既に無い扉の替わりを引き受けるかのように、二つの人影が立っている。

影は、二度と戻らぬ二つのものが失われた、この戦場を無機質な光をたたえて睥睨していた。
「……長瀬源三郎、生命活動停止。死亡確認。治療不可能ニヨリ、通常業務ニ戻リマス」
泣いているあゆをよそに、医務室の中から無表情なままメイドロボが出てきていた。
あたし達は、その出現に身構えたけど。
本当に何もしないで、彼女達は上へと向かった。
要するにあたし達は、命令の外にあるから無視された……というわけだ。ロボットの行動理由なんて、単純なもんだよな。それに比べて、あゆの涙には複雑な感情が入り混じっているのだろう……って事は解る。

人間は、やっぱり難しいよね。
でも、おっちゃんが待っているのは確かな事だ。
今は進まなきゃならないよ。
だからさ。涙は、おあずけだよ。

あゆの頭をくしゃくしゃと撫でて、みんなで頷く。
あたし達は、ようやく階段を上がる。
残るは執事さんの息子、源五郎だけだ。
執事さんのことを話せば、ひょっとしたら協力してくれるかもしれない。
あたしは……そんな甘い事さえ、考えていた。

……ドンドンドン……

そう、この銃声を聞くまでは。
さっきよりも遠い、微かな銃声を聞くまでは。
うん、転がるように、三人で走ったね。
メイドロボのボンクラどもを突き飛ばし、息を切らせて駆け上がった。
実際、ほんとに長い階段だったけれど。こんなに長い階段なんて、この世にあって良いわけ、ないじゃないか。

……ごめんな、おっちゃん。

669　弔い

「アンタとはいい加減決着つけなくちゃって思ってたのよ！」
「からかったのは謝るから真剣もって追いかけてくるのはやめなさいよー！」
女の子というのは全くもって強い生き物です。こんな島に居ても笑顔でじゃれ合うことができるのですから。
今の僕ではあんなに綺麗に笑うことはできません。この胸の傷がもう少し癒えるまでは。
太陽のような笑顔をしていたレミィ……
彼女が僕に笑いかけてくれない現実は、とてつもない寂しさと悲しさを僕の心にもたらします。
今は素直に笑顔に感謝すべき時なのに、彼女たちの笑顔で傷ついている僕はなんて愚かなのでしょう

か。
……あんまり落ち込んでいても仕方ないので、前向きにこれからのことを考えるとしようか。
とりあえずは、蝉丸さんって人に会ってなんとかパソコンを使わせて貰おう。ＣＤが揃ってない今じゃ何も解らないかもしれないけど、ふと思いついた時にパソコンを起動できるかどうかでは心持ちが違う。
それからは、やっぱりＣＤの回収であろう。
そのためには、参加者の仏さんの持ち物を調べるような真似も覚悟しなきゃいけないだろうな。
後はマザコンの場所だな……二人の話だと重要施設らしき場所があったらしいから後で行ってみるかな。
マザコン……何か嫌な響きだな。まるで誰かが俺のことを笑っているみたいだ。
ははは、何言ってるんだろう。誰かが空の上から見張ってたりするってか？
……突っ込みが無いと寂しいよ。いつもなら横から口に出してるわよって突っ込み入るのに。
そういえば二人の声が聞こえないな、何かあったのだろうか？　……見てくるかな。
二人はちょっと離れた場所にいた。
二人が見ている先には見覚えのある顔があった。
そういっても直接会ったわけじゃないけど。
結花に見せてもらった参加者名簿に載っていたスフィー達の大事な人、宮田健太郎。
もう一人は長岡だったかな長森だったかな、そんな感じの名前の女の子だ。
雨と風にさらされて見るも無残なことになっていた。
「気分悪いわね」
「久しぶりに日常の気分を味わえたって言うのに、まったく……」
俺は二人が話しているのを無視して穴を掘り始め

た。
「……」
二人は黙って俺を見ていたがしばらくすると一緒になって穴を掘り出した。
……埋める前にやらなくちゃいけないこと、あるよなぁ。さっきの決意は、もう雨で流されかけていたが、それでもやらないわけにはいけない。
俺は二人に断ると二人の体を調べだした。
その間、二人は少し離れた場所で休憩するといって手伝ってくれはしなかった。
……まあ、当然か。だれも、こんなぐちゃぐちゃになった仏さんに望んで近づきたがる奴はいないだろう。
女の方を調べていたときに丸い懐中時計を大きくしたような装置を見つけた。……というより、その外見はまるっきり昔の有名アニメのあれだ。
「何だ、このドラ○ンレーダーモドキは？」
俺は何気なしにスイッチを押した。
すると機械のほぼ中央に一つの点がそして画面の端ぎりぎりのところに二つの点が映った。
「レーダーか……ありがたく使わせてもらうぜ。スフィーには俺が一言伝えておくから安心して眠れよ」
この島は悲しみに満ちている。何時かこの島も解放されて晴れる時は来るのだろうか。
島の様子を象徴するような雨雲は今だ晴れる気配はない。

670　失踪

彰、晴香、七瀬、そして坂神と月代も出ていった。
あれだけの人数がいたこの家もずいぶんと寂しくなった。
（雨……やまないな……）
降り続く雨を見ているとなぜか感傷的になった。

一月以上この島にいるような気がするが実際は一週間も経っていない。
いろいろあった。
この島に来てから出会いと別れを繰り返してきた。死を目の前にして心がどんどんすり減っていくような思いがする。
藤井さん。お姉ちゃん。澤倉先輩。佳乃ちゃん。先生……。
私は何人もの人が死んでいくのをどうして耐えていられたのだろうか。
もしかして、私は狂ってしまったのか。
そう思ったこともある。
だけど、胸にこみ上げてくるものが、私がまだ正常だと安心させる。
涙は今、流すべきじゃない。
この島を抜け出たとき、そしてすべてが終わったとき。そのときに……。
「どうした表を見て。また雷観賞か？」
そのときに……。
『ゴスッ』
ああ……。
ごめんなさい、先生。
約束、ちょっと破りたいと思ってしまいました。
「そういえば、そろそろ葉子さんの様子を見に行かなきゃ」
のたうち回っているバカはほっといて、私は自分の仕事をしよう。うん。
別に泣きそうになった照れ隠しじゃない。
そして、私は水の入った洗面器をとタオルを持って葉子さんの部屋に行った。
ノックをしようかと思ったが、寝ていたら悪いので静かにドアを開ける。
「おじゃましまー……ん？」
そこには、かなりの怪我をしていた葉子さんの姿はなく、丁寧に折り畳まれた毛布がベッドに置かれていた。

（い、いない。どこに行ったの？　家の中？　それとも外？）。
布団を触ってみる。まだ少し暖かい。と、いうことは、まだそんなに遠くには行っていないはずだ。
急いで階段を下り、居間に駆け込む。そして、あわてている私を見て怪訝そうな顔をしている二人に言う。
「葉子さんがいないの！」

走る。
突然、降り始めた雨の中、鹿沼葉子は走る。
傷はまだ癒えていない。銃弾が貫通した腹部にはコルセットのように幾重も包帯が巻かれている。
足に巻かれた包帯はほどけて邪魔になったので捨てた。
髪が、服が、水を吸って重い。下着も濡れてしまい、肌に張り付く。
だが、そんなことは気にしていられない。

危険を予感させる胸騒ぎが止まらなかった。それが彼女を疾走させた。
先ほど感じた二つの大きな力。
間違いなく、不可視の力であろう。
しかし、一歩間違えれば暴走しそうな、そんな危うい力の発動であった。
もし、不可視の力が暴走してしまえば、辺り構わず破壊をもたらし続ける。
そして、それは使った本人が破壊されるまで続く……。
不可視の力というのは誰でも操れるというものではない。
葉子が知っている不可視の力の使い手は自分以外で二人。
天沢郁未と少年。
恐らく、その二人が使ったのだろう。
もしくは、彼女の知らない不可視の力を使える者がいるのであろうか？

生きている中で使えそうなのは、巳間晴香。序盤に高槻が行った放送で葉子、郁未、少年と共に呼ばれた者の中で生きているのは彼女だけだった。
そして、彼女がもう一つ腑に落ちなかったことがあった。
なぜ、封印されているはずの力が発動したのだろうか？
結界が無くなったのだろうか？
それはあり得ない。なぜなら、葉子の力は今でも発動できないからだ。
ならば、結界を凌駕する力、もしくは無効化する力を手に入れたのだろう。そう、葉子は結論づけた。
今の葉子では不可視の力に真っ向から対抗する術はない。それは本人もよく分かっている。
かといって、ベッドで一人震えているわけにもいかなかった。それは、不可視の力がどんなに危険なのかを知っていたからだ。
葉子は自分を助けてくれた人には黙って出てきて悪いとは思った。だが、出かけるのならば彼らを巻き込んでしまうかもしれない。だから、大した武器も持たずに走っている。
場合によっては、差し違えても彼女らを殺さなければいけない。そんな悲愴なことを考えているときだった。
不意に、背後から、
「誰だ！」
雨が地面や葉を叩く音を突き抜けてはっきりと男の声が葉子の耳に入る。
偶然か、それとも遠目で葉子を見つけ、隠れて通り過ぎたところを呼び止めたのか。どちらにしても迂闊だった。
そして、葉子は足を止める。男は銃を持っているかもしれない。
「鹿沼、よう、こ」
息も絶え絶えに、そう答えた。
そして、男は……

671　椎名繭は泣かない

「っ⁉　私、意識を失っていたの⁉」
繭は目覚めた。
カラスと獣の騒がしい鳴き声の中、誰かのすすりなく声がどこからか、小さく、しかしはっきりと伝わってくる。
Ｔ字路のちょうど交わるところ、薄暗い通路の片隅からその声は漏れていた。
そこには、一つの固まりがあった。
固まり、つまりそれは、御堂の体を抱きかかえるようにしてしゃがみ込んだ詠美である。
「ちょっ⁉　どういうこと、オッサン⁉　どうなってるのよ、あなた⁉　戦闘は⁉」
自分の置かれた状況がつかめない繭は、叫びながら体を起こす。
詠美はすすり泣きを続けている。
（……思いのほか体の節々が痛い）
繭はそんなことを考えながら立ち上がった。続いて体の痛みをこらえるようにゆっくりと詠美の方に歩み寄りながら、記憶の再生を必死に試みた。
（……ええと、あのメイドロボもどきが倉庫で襲ってきて、ピンチにはなったけど、それは何とか撃退して、それから、それから……）
戦闘の経過を思い出そうとするが、いまいち繭の記憶は混乱して、思うようにはいかない。
そうこうする内に、繭は詠美の間近にまで歩み寄っていた。
「ちょっと、あなた……」
改めて状況を確認しようとして、繭は言葉を飲み込む。
詠美に抱きかかえられた男、御堂は明らかに死んでいる様子だった。
抱きかかえる詠美の顔までがその血で真っ赤に染まり、凄惨な光景を醸している。

もっとも、詠美はその血で己の顔が、服が汚れることなどお構いなしの様子だが。
詠美はただひたすらに御堂を抱きしめ、何事かを呟いている。
「どうなって……」
もう一度記憶を辿ろうとした繭の頭の中で、ようやくそれが気絶直前にまでつながる。
「あの白衣の男!!」
はっとして前後を見渡す繭。
男の姿はない。
慌てて今度は横方向を確認する。
果たして、そこには例の白衣の男が倒れていた。
転がっていた自分のサブマシンガンを拾い直し、それを白衣に向けながらゆっくりと近づく。
(まさか死んだフリなわけ、ないわよね)
慎重に距離を詰め、その仰向けの顔を見て繭は一瞬吐き気に襲われた。
長瀬源五郎の額には、詠美と御堂が放った最後の弾丸が直撃し、見るに耐えない風穴が空いているのだ。
気を取り直しつつ、繭はもう一度周囲を見回す。
動く物の気配はない。
「戦闘は終わっているということ……?」
取りあえずの危機は去っているのだと認識し、繭は再び詠美に近づいた。
詠美のすすり泣きは終わらない。
さり気なく御堂の腕をとり、脈を診る。
予想したとおり、その腕から命の鼓動を感じ取ることはできなかった。
繭が意識を失っている間に、決着はついてしまったのだ。
御堂と、あの白衣の男の死をもって。
繭の胸がいっぱいになる
意識が悲しみに包まれる。
涙腺がゆるみ、瞳から透明な液体が流れ落ちる。
(……冷静にならなくては。管理者側の増援がいつ

やって来るとも限らないし、オッサンの死を悼んでばかりいるわけにはいかない。遺体にすがりついているところを、敵に狙われたら……）
そして、繭の平手が詠美の頬を音高くはたいた。
「しっかりしなさい。ここは敵地なのよ！　いつまでも泣いてはいられないわ。そうしていて敵の増援に殺されたくなければ、武器を手に取り、荷物を抱えなさい。そして周囲に気を配り、敵の接近に備えなさい。向こうに問題さえなければ、千鶴さん達も間もなくここにやってくるはず……」
決して大きな声ではないが、はっきりと言い放つ繭。
その頬には未だ涙が絶えず。
けれど、あまりにも無感情に聞こえる繭の言葉に詠美は耐えられなかった。
今度は繭の頬が音高くはられた。
「バカじゃないの!?　敵、敵、敵、敵、敵、って!!　したぼくが、御堂のおじさんが死んじゃったのよ!?　私たちの、そうよっ、あんたのせいなんだからっ。何を偉そうにぃ。頭が少しくらい回るからって、威張らないでよ。あんただって、結局何もできなかったクセに。あんたが足を引っ張らなけりゃ……。それに私が、私たちが二人の力であの男に勝ったんだから。私が泣いてあげないで、誰が泣いて上げるっていうのよ!!」
詠美の言っていることは滅茶苦茶だ。まるで脈絡がなかった。足を引っ張ったのは二人ともで、確かに決定打になったのは御堂が繭を庇ったからであったかもしれないが、あのタイミングでは詠美が繭の立場であった可能性も充分にあった。
理屈では、そうであった。
しかし、それでも繭には詠美の気持ちは痛いほど分かっていた。
（けれども、感傷で生きていけるほどこの島は甘くない。それは事実。それに、彼の犠牲を無駄にするわけにはいかない。だから……）

ハッキリと繭は叫んだ。
「だから、あなたはその感傷のために死んでもいいというわけ⁉」
さらに続けて叫んだ。
「それでオッサンが喜ぶというのなら、いつまでもそうしていればいいんだわ‼」
詠美もそれに応えるように叫ぶ。
「そういうことを言ってるんじゃないわよ！　私は、ただ、したぼくが……‼」
お互いの視線がジリジリと絡み合ったまま、緊迫した空気が辺りを包む。
(うみゅー……まずいわ。こんなにおおきなこえでさけびつづけていては……。こえをききつけるのがみかたならばいいのだけれど……。って、うみゅー？　みゅー？　まずいわ。まだ……あんぜんじゃないのに……。おっさんにもおわかれをいってないのに……。うみゅみゅー……。みゅ！　みゅみゅみゅみゅっ⁉)
「みゅーーーーーーーーーーーーー」
ついにその時がやってきてしまった。
一度目の摂取で繭の体内に抗体が作られたせいか、キノコ自体の個体差なのか、はたまた爆弾を吐いた際にキノコの一部も吐き出されたものだろうか？
性格反転キノコの効力は、早くも繭の体内から消え去ってしまっていた。
「ちょっと、なによ、みゅーって‼　叫んでごまかしても駄目なんだからね⁉」
突然の様子に面食らいながらも、詰め寄る詠美。
しかし、ホンの僅かもすれば繭の様子がおかしいのは明らかだった。
「みゅーーーーーーーーーーーー」
「なに、どうなってんのよ。ちょっと、あんた⁉」
詠美は戸惑う。
だから詠美は繭に気を取られたまま、背後から聞こえてきたはずの駆け足の物音に気付くことができなかった……。

672　反転開始

「その内気な女王様はね、確かに内気な部分は治ったんだけど、思慮深い部分まで反転してしまったの」

　そうスフィーが言い終わるか言い終わらないかの内に、

「そんなの私には関係ないわ」

　今までの芹香からは想像もできない、はっきりした声が発せられた。

「？」

「何ジロジロ見てるのよ」

「芹香さん、もしかして食べちゃった？」

「ええ」

「えっ!?」

　あまりに咄嗟の出来事にスフィーが驚いたのは言うまでもない。

　だが芹香はそれにはお構いなしに、

「さっ、往人探しに出発するわよ」

「ちょっ、ちょっ、ちょっと待って！」

「あ～もう、何モタモタしてるのよ！」

「あ、あの、放送が……」

　ゴタゴタに気を取られて、危うく放送を聞き逃すところだった。

（やっぱり、性格反転ダケだったみたいね……確かに思慮深いところも反転してるみたい……大丈夫かな）

　参加者名簿を片手に、スフィーは読み上げられる名前の場所に線を引きながら、

「この声、どこかで聞いたような……」

「知らないわ」

「う～ん……」

　やがて、『それでは健闘を祈る』と放送が締めくくられた。

「スフィー、終わった？」
「うん」
「はい、それじゃあ出発するわよ」
「ちょっと待って」
「今度は何よ？」
「雨が……」
放送の頃から、屋根を雨が打つ音が聞こえだしていたのだ。
遠くから雷鳴も聞こえる。
「雨なんか関係ないわ」
「でも、雨具とかないでしょ？」
「それはそうだけど」
「ここで雨に打たれて体を悪くしたら……」
「心配性ね」
その時、「ドーン！」と激しい音が鳴り響いた。
「きゃっ！」
スフィーは思わずしゃがみ込む。
「あなたの言うことも一理あるわね」
芹香は物怖じしない。
「雷に打たれちゃここまでの意味がないわ。仕方ないから付き合ってあげる」

673　樹上の男

潮騒。
そして、蝉時雨。

「暑ぃ……」
俺は、タクラマカン砂漠の追放者の如く、飢えと渇きに苦しんでいた。堤防の上で、乏しく温い夏の風に嬲られながら、劇的に行き倒れている。薄く包み込むような波の音が、頭蓋骨を攻め立てる蝉の声に締め出されていく。
「暑ぃ……」
こんな日は、冷たい飲み物が何より嬉しい。晴子が、俺に説教くれながら抱きしめる一升瓶の中身と

か。
　いや…ああいう生暖かさは、遠慮したい。
　そう思うやいなや、右手に清涼感が伝わる。
「おっ、気が利くな」
　観鈴か？　と思いながら、掴んだ腕を目の前に持ってくる。
〝どろり濃厚〟だった。
「……（ぽいっ）」
　捨てる。ざけんなよ、って感じだよな。
　そのまま太陽を凝視する。叩きつける日差しの強さに朦朧としながら、なぜか肩に痛みを感じる。暑さは、肩から伝わってるような気がした。

　これ以上ないくらいの明るさに、瞳孔が収縮し、視界が眩む。
　そのとき、俺は見た。
　光を纏った、羽の生えた女が飛んでいる。
　その光量は、太陽をはるかに越えていた。
　あまりの眩しさに、周囲が闇のように思えてくる。
　真夜中の月のように。
　すべての星を従えて。
　女は、笑った。
　美しくもおぞましい、寒気のするような、笑いだった。
　俺は一人震えて、彼女が西の空へ消えて行くのを見つめていた。
　それだけが、俺にできる全てだった。

　気がつけば、あの光に焼かれたかのように、蝉時雨が消えている。入れ替わりにざあざあと、耳障りな騒音が周囲を埋め尽くしていた。
　終わることなく、ざあざあと。
　右手に雫が落ちて、規則的に俺を叩いている。目を開けてもろくな事にはならない。そう思って長らく耐えていたが、限界はある。
「……うおっ!?」

俺は、草原の中で僅かに群生する、巨大な樹の枝の上で、絶妙なバランスを保って寝転んでいた。
　高さを利して周囲を見渡す。しかし、どうやら俺はこの世界において孤独だったようだ。
　雨が降っている。
　雷が鳴っている。
　世界は姿を変えて、俺を迎えていた。
「観鈴！　晴子!?」
　観鈴はいない。
　晴子もいない。
　さっきまで抱えていた、あの女さえいなかった。
「…くそっ」
　枝を叩く。
　震動で枝葉の纏っていた水滴が零れ落ちる。
　続けて、不平を漏らす声。まるで気がつかなかったが、下には人がいたようだ。雨宿りをしながら、山のように詰まれた荷物を分配している。
「ちょっとあんた」
「いい加減にしなさいよね」
　呼吸のように自然と湧き出る文句。真下に、三人いた。若いというのに、既に晴子のような横柄さを見せる女が二人。日本刀でのダブル突っ込みは強力そうで、あまり相手にしたくないタイプだ。
　そして目を丸くした男が一人。妙に視線が熱い。あの目は俺がラーメンセットを見る時の眼差しだ。
「あ……あんた……」
　なんだ、その熱い視線は？　俺はお前なんか知らない。知らないぞ。断じて、知らない。
「あんた、国崎往人、か？」
　頑なに拒む俺を無視して、そいつは俺の名前を呼んだ。

　目の前に、小山が出来ておりました。
　我ながら感心するほどの荷物を、私北川の慈悲の光のもと、婦女子に分け与えております。間違っても搾り取られているなどとは、私の健康と幸せのた

めに申しませんですハイ。それでもどうにか、ＣＤとＭ19マグナム、そしてレーダーだけは死守しておりまして。携帯やハサミ、怪しい薬に水鉄砲、使えない弾、晴香様にお似合いのメリケンサックなどは、傍らに掘った小穴に惜しげもなく廃棄されていきます。

「呆れたもんね……アンタ、物欲の塊だわ」

ダイナマイトも捨ててしまいました。火種がないので構いませんが。

「物を捨てられない人って、本当にいるのね」

あなた方は捨てすぎだと思います。

……特に女らしさって奴を。

「「うるさいわね！」」

ガスッ！　ガスッ！

……婦女子は各々、刀を勝手に交換し手榴弾を強奪、いえ、お受け取りになって口々に感謝の言葉を下されました。男冥利に尽きるというものですハイ。

そして余ったクマさんと電動釘打ち器、そして大きなナイフを再度鞄に収めようとした時に、アンビリバボーな事件はおこったのです。

〝空から女の子が降ってきた〟んですよ。

いかがでしょうか？　ちょっとラッキーなイベントでしょう？　もちろん、体重百キロのジャイアンみたいな婦女子だったら、辞退させて頂きますけれども。

あのイベントは、今では私の心の傷ではありますが、忘れ得ぬ、夢のようなひとときでありました。

話がそれました。ついでに嘘です。降ってきたものが、今回は違います。

〝頭上から野郎が水滴をぼたぼた〟

いかがでしょうか？　これ以上ないくらい萎えるイベントでしょう？　これが小便だったら、某婦女子二名の性格から推測するに、続いて血の雨が降っていたことでしょう。平和万歳。マンセー。

そう、私北川は、野獣のような精悍な婦女子に左右を囲まれつつ、野郎の降り注ぐ聖水、いや水滴を

この身に受けたというわけなのです。
「熊とか野獣とか、動物ネタから離れなさいよ！」
「聖水って下ネタやめなさいよ！」
ガスッ！　ガスッ！
過剰な親愛のゼスチャーに唖然とする樹上の男。
もろに引いています。当り前です。モテる男は辛いんです。
ですがこのままでは、何も収まりません。早期解決のためにも、この敏腕ネゴシエイター北川が一肌脱がねばならないでしょう。この境遇を分かち合う覚悟があるかどうかと、彼に聞いてみる必要があると思います。
「国崎さん、とりあえず降りてこないか？」
「ゆっくり、ね」
お二人様は相変わらず、お手が早くていらっしゃいまして、既に刀を抜いております。
わかっている、と冷静に答えて国崎さんは降りてきました。腕に怪我をしているのか、必要以上にゆっくりでしたが。
婦女子二人が彼の行動を見張っている間、私北川はちらりとレーダーを見てみたのです。
……光の点は、いつの間にか四つになっておりました。
神様、この怪しい男を、探していた二人の元へ導く事は、罪になるでしょうか？

674　暗黒

空を敷き詰める、灰色の雲。雨は鹿沼葉子の身体から容赦なく熱を奪っていく。
雨のカーテンが、男の姿を曇らせる。男――である事しか分からない。
男は返事をしなかった。棒立ちのまま、応えない。攻撃の意志はどうか。いや、そもそも――
「――誰、ですか」

当たり前の疑問。攻撃の意志が無いのなら、応えてくれても構わない筈だ。
だが、男は応えなかった。雨はなおも男の姿を曇らせている。
どうする？　近付くか。しかし、相手が武器を持っていたら危険だ……。
逡巡。武器が無いのが痛手だった。力の無い今、素手で男に勝つ事など不可能。
だが、逃げられる自信も無い。……まずい。絶体絶命……か？
「名前は無い」
ふと、返事があった。雨に掻き消されそうな程、軽い声。
聞き覚えのある声であった。つい最近聞いた。記憶違いでなければ……。
……いや、その返事こそが『誰なのか』を言い表している。間違いは無い。
溜息を吐いた。

「貴方、ですか」
雨のカーテンを潜り、姿を現すモノ。
少年。

「すまないね。驚かせてしまったかな」
「……全くです」
苦笑。浮かんだ笑顔は、いつもの少年と何ら変わりはない。
そう、何一つ、変わってはいなかった。
「……その人は」
「ああ、この男かい？」
少年は、肩に一人の男を抱えていた。だらりと腕を垂らしたその姿は、死人にも見える。
無論、葉子も死人かと思ったのは言うまでもない。
「管理者側の人間さ。ちょっと悪ふざけが過ぎるようなんでね――捕まえておいた」
「その男を、どうするつもりですか」
問い掛け。葉子の顔からは、厳しさが抜けていな

い。
　少年は、ふむ、と一つ考える素振り。目は、葉子を見ている。無表情な視線――
「――そうだね、管理側の情報を教えて貰おうと思ってるんだけど」
　何気ない様子で返す。しかし、それこそが、葉子の背筋にひやりとした感覚を与える。
　管理側の人間が、そう簡単に情報を漏らすだろうか？　否、漏らすまい。当然の話だ。少年もそれは知っている筈。だが、彼は『教えて貰う』と言った。それは、つまり。
　……無論、聞くまでもない事だ。
「……惨いことを」
「情けのつもりかい？」
「……」
　答えない。心の中で、いいえ、と答えた。
　その真意は。

　雨の中。髪を伝い、水滴が地面へと落ちる。顔に張り付く髪が、煩わしい。いっそのこと、切ってしまおうか。戦闘の時に邪魔になるとも知れない。
　しかしそこで、思い出す。郁未の顔。彼女の髪は、綺麗だった……少し、羨ましく思う程に。
　何となく、切るのを惜しく思った。
　……しかし、咄嗟に思い出すのが郁未の顔とは。少し自分を改めた方が良いかもしれない。
「さて……」
　随分と間を持って、少年が口を開いた。
「この辺に、人の多い場所は無いかい？　出来れば、武器を持っている人達がいい」
「何故、それを聞くんですか？」
「うーん、一人で行動してるとどうしても危険が多いからね。出来れば、多人数で行動出来る方がいい」
　当たり前だ。一人の辛さは、知っている。いや、知らされた、が正解か。

人が多いと言えば、今さっき出てきた所だろうか。多数の人の気配。飛び出してしまったが、あそこには何人居たのだろう。
教えられるとすれば、あそこしか無いが――
「……いいえ、知りません」
口から出たのは、そんな言葉。無論、操られているわけでもなく、自分の意志で言った事。
少年は、困ったな、といった顔を見せた。それを見ても、葉子は己の嘘を改める気は無い。
――違和感があった。それは、些細なもの。
目の前に立った少年は、一つ前に会った時と何ら変わらなかった。口調、雰囲気。そして笑顔。
だが、この状況に於いて、その違和感は致命的なものだった。
この島に来て、三日。狂った島に突然運び込まれ、三日だ。
その状況に於いて何一つ変わらない、そんな事が有り得るのか？　いや、そんな筈は無い！
違和感は、葉子の中で不信へと変わっていたのだ。
今や、彼女の目は、睨むような目に変わっている。
それを見てか――少年は溜息を吐いた。
「……まぁ、しょうがない、か。ゆっくりと探すよ」
くるりと踵を返す。雨の向こうへ、消えていく。
声だけが、雨を潜り抜けて届いた。
「君は、本当に賢い子だね――」
そして、雨の向こうの影が消える。
十秒。
それだけ待って、葉子は再び駆け出した。

675　雨の記憶

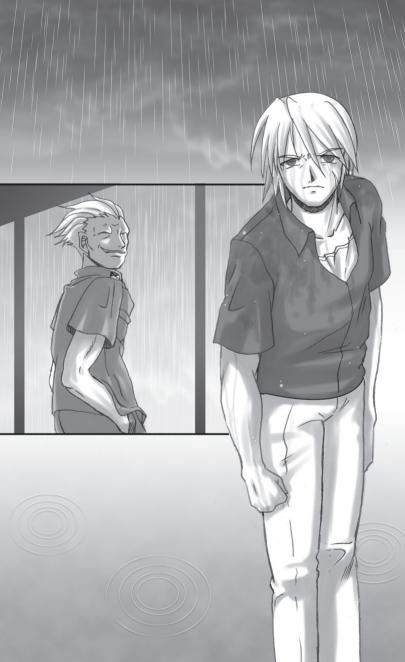
降りしきる雨の中、男は戦友の死を知った。
(御堂……俺と決着をつけるのではなかったのか？
……何故だ？　何故俺を残して……何故……)
蝉丸は少女が濡れないように気を配りながら背負

ったまま、住宅街を疾走しながら思考を巡らせていた。
光岡、岩切、きよみ、そして……御堂。彼が時間を共有した者は皆、死んでしまった。
ザァァァァァァァァァァァッ……
(あぁ、そういえば、あの時もこんな雨の日だったな……)

——その時はその時考えりゃいいだろ!!
蝉丸は突然の雨に戸惑っていた。
降りしきる強烈な水の矢が運動場に突き刺さる。
「よぉ、坂神。テメェも居残りか?」
声の主は御堂であった。顔合わせは済んでいる。
初日から喧嘩をやらかした仲である。
「健康審査だ。実験体としてふさわしいかの最終審査だった」
「奇遇だな、俺もだ。けっけっけ、楽しみだぜ。この審査に合格すりゃあ、いよいよ俺も強化兵の仲間入りだぜ。……坂神、テメェは嬉しくねぇのか?」
御堂は蝉丸の顔色を覗きこんだ。
「……実を言うと、不安で仕方ない。自分がどう変わってしまうか、自分が自分では無くなるのではないか、不安なのだ」
強化兵についての噂は、はっきり言って良いものが少ない。
発狂し、己の体を食いちぎり、絶命……手足が膨張、消し飛び、処分……暴走、三人もの研究員を殴り殺し、射殺……。
もし、自分がそうなってしまったらと考えてしまうと、蝉丸は不安でいっぱいだった。
「ハァ? 何言ってんだ? そんなことグダグダ考えてたら前に進めねぇだろうが! もしそうなっちまったら、なった時に考えりゃあいいだろうが!! いいか、俺が手本を見せてやる、よく見てろ!!」
そう言うと御堂は豪雨の中に飛び込んだ。当然、彼の体は雨に打たれ、ずぶ濡れになる。

「ハハハハッ！　坂神!!　濡れちまうのも案外気分がいいもんだぜ!!」
「御堂、風邪をひいたらどうするんだ？」
「その時はその時考えりゃいいだろ!!」
「……そうだな」
　気がつくと蝉丸もまた御堂と共に雨に打たれながら運動場を走り回っていた。

　ザァァァァァァァァァァァァッ……
「(・∀・)……蝉丸？　泣いてる……の？」
「雨だ。泣いてなどいない」
「(・∀・)そっか、良かったぁ〜。蝉丸、急に悲しそうな顔するんだもん。心配しちゃったよ」
「そうか、気を遣わせてすまない」
「(・∀・)うん、いいよ。ねぇ蝉丸、アレ、何だと思う？」
　月代は赤いシャッターが目に痛い一件の家を指差して言った。仮面の視界からはよく見えないのであろう。
　蝉丸の目からはシャッターに書かれた文字まではっきりと読み取れた。
「文字が所々消えているが……『……島消……団』どうやら消防団の詰め所らしいな。……ふむ、消防団か……拡声機くらいならあるかもしれんな。月代、行ってみるか？」
「(・∀・)え？　……でも、あそこに何も無かったらどうするの？　それに鍵がかかって入れないかもしれないよ？」
「その時はその時考えればいいだろ？」
「(・∀・)……何かそのセリフ、蝉丸らしくないね」
「あぁ、そうだな。……やはり奴本人の口から、もう一度聞きたかったな」

　雨は降り続く。島内にも、男の心の中にも。

676　活きているモノ

長い長い階段を抜け、私たちはやっとたどり着いた。約束の地点へ。

そこに居たモノは。

「おじさんっ！」

あゆちゃんが駆け出す。その先に居たモノは。

「おじさんっ！　おじさんっ！」

「バカ、あゆ、走るな！」

梓が、駆け出すあゆちゃんを止めようとする。彼が殺られていたとしたら……危険にわざわざ飛び込むようなことは避けねばならない。

全身の感覚を集中させてみる。『敵』らしき気配はなかったが、迂闊な行為は自分だけではない、全員の危険につながる。

しかし、止める間もなくあゆちゃんは『彼』に辿り着いてしまった。

そこには。

彼を抱き抱え、血だらけの、ぐしゃぐしゃの顔で、戸惑う詠美。

人格が変わったかのようにみゅーみゅー泣きわめく繭。

無惨に脳天を撃ち抜かれた、白衣の男。

明らかに多すぎる血溜りの中で物言わぬ御堂。

そして。

私が追いついたそこには。

「おじ……さん……嘘……だよ……ね……」

呆然と立ち尽くす、あゆの姿があった。

「おじさん！　おじさん！　おじさんっ！」

「みゅー！　みゅー！　みゅーーー！」

「ちょっちょっと！　あんたたち重い！　重いってば！」

あゆ、繭、詠美が御堂の遺体を取り囲み。

そして、泣いていた。

みんな、血と、涙で、ぼろぼろ、だった。

「はは、おっさん、モテモテじゃんか……」
思わず、そんなことしか呟けなかった。

おそらくは相撃ち。
このガキどもを守るために、おっさんとブレーメンの毛玉犬は、犠牲になったんだろう。
おそらく、すべては終わってしまったんだ。――あたしたちが辿り着く前に。
妙に醒めた目で見れる私は、もう慣れてしまったんだろうか。
狂った現実に。

「おじさん！　おじさん！　目を覚まして！　死んじゃやだようっ！」
「やめな、あゆ！　おっさんは、もう……」
「そんなの、嘘だよ！　だって、約束したもん！　ここで逢おうって！　おじさんと！」
あゆがあたしに食ってかかる。
でも、今更、あたしたちに何ができるっての？
「あゆ！　今は敵地の中なんだ。ここで騒いで狙い撃ちになって、おっさんが喜ぶとでも思うか？」
「でもでも、おじさんのからだ、まだこんなに熱いんだもん。一生懸命手当てすれば、おじさんまた元気になれるよ。またボク、一緒にいられるよ！　もう誰も死なせたくないよ！」
それを聞くや、千鶴姉が驚いたようにあゆに問いかけた。
「……ねえ、あゆちゃん、『熱い』って、なぜ……？」
千鶴姉が、おっさんの死体に、手を近づけた。

『彼』……御堂の死因は、どう見ても明らかだった。
失血死。
致命傷と呼ぶほどの深い傷はない。大量の血液を失い、それでも敵を屠ろうとしたゆえの失血死だろう。

明らかに血を流しすぎた御堂に、体温と言えるものが、もう、残っているはずはなかった。
そう。『鬼』ではない、人間の御堂に……。
私は、御堂の冷たい腕に触れてみた。
脈拍、なし。
頸動脈にも触れてみる。
すでに体温と呼べるものはなく。
明らかに、御堂は息絶えていた。
そして、あゆの血だらけの手を退け、御堂の躯に触れてみた。
なに、これは。
明らかに、体温以上の、なにかの『熱』がある。
ヒトならぬ『鬼』である千鶴には、わからなかった。いや感じられなかった。
ちょうど御堂がその生命の終焉を迎えたとき、わずかの間、ヒトの力を制限する『封印』が外れたことを。
「不可視の力」すら抑える、結界がわずかの時間、解かれていたことを。
封じられた仙命樹の力が一瞬、一気に吹き出し、死んだ御堂の中で一瞬、息を吹き返した。
御堂は確かに死んだ。しかし、その中でなにかが『活き』ていた。

なにかは急激に、御堂の躯を再生した。
御堂の血液は出し尽くされたのではなく、出血が止まっていた。増血とともに、停止した心臓もいずれ鼓動を始めるのだろう。しかし、その『なにか』の力も急激に衰えつつあった。
このままでは、本当に危険な状態になる。——生き返ることなど、できない。
人として手を尽くさねば、この『活きているモノ』の力は発現せぬまま尽きてしまうだろう。
御堂とともに。
「……そうね、あゆちゃん。すぐ手当てしないと、御堂さんは助からないわ。手伝ってくれる？」

「うん！　千鶴さんっ！」
「お、おい。千鶴姉、正気？」
「梓、あなたも『鬼』なら、知っているでしょう？　世界には、尋常ではない生命力が、ごくわずかだけれど、存在している。御堂さんのなかには、『なにか』が『活きている』。もしかすればだけど、何時間かかるかはわからないけれど、大丈夫かもしれない……」
「何か、だって……？」
「私とあゆちゃんは、医務室へ行くわ。……闘いは、多分、終わっているから……。それじゃ梓、ここはお願いね」
「え、お願いって？」
そこに残されたのは、
あたし。
詠美。
みゅーみゅー泣く娘。
ブレーメンの音楽隊（マイナス1）。

長瀬のおっさんの、死体。
もしかして、ババ引いた？

677　偽りの形見

剥げた大地。粉砕された草木。頬を幾度と無く打つ、水滴。雨だ。
晴子はその中で目を覚ました。
痛みと、息苦しさ。草陰に、転がり込むようにして倒れていた。
すぐ隣にあった木が真っ二つに折れている。幹は三十センチもあった。
木が、身代わりになったのか？
少し首を巡らすと、折れた木の半身は案外すぐに見つかった。転がっていた。十センチ程に先に。
ぞっとする。一歩間違えば、自分がああなっていたのか？

だが、今生きている事には違いない。折れた木に、そっと感謝する。
立ち上がる。と、走る痛み。肩からではない。腕からでもない。足？
何となく見やる。なるほど、原因は知れた。折れた枝が突き刺さり、傷から一本の紅い川が流れている。
細い、細い枝だ。貫いてもいない。降りしきる雨に濡れている。
適当に縛り付ける。結局、左の袖も無くなった。
「――観鈴？」
呼び掛ける。何処にいるのかは知らない。倒れているのだろうか？　姿は見えない。
返事は無かった。
「居候？」
さらに呼び掛ける。図体も態度もでかい男だ。倒れていても、見える筈。
それでも姿は見えなかった。返事も無い。
それだけではない。少年も。あの少女も。そしてあの男も。
誰も居なかった。誰も。誰一人として、動くものは無い。虫一つ、見当たらない。
「居候？　……観鈴ッ！」
声は返らない。何処だ。何処にいる？
倒れているのかもしれない。万が一、傷を負っていたら？　自分は枝が刺さっていた。二人に何が刺さっているか知れたものではない。
細い枝でも、目に刺されば死にかねないのだ。自分は運が良かったに過ぎない。
名前を叫ぶ。観鈴の。往人の。決して届かない、叫び。次第に、その声は悲痛なものになっていった。

雨の水滴が喉を打ち、思わず咳き込む。ようやっと、悲鳴のような呼び声が止まった。
喉が痛かった。何度叫んだ？　知るか。数えてなどいない。

今が何時さえも解らない。自分が何処にいるのかすら解らない。
　喉が痛い。ああ、目が、熱い。泣いているのか？
違う。どうして泣くのだ？　何故？
　……何でおらへんのやッ。観鈴！
　喪失感。気が狂わんばかりの、焦り。もはや声など出なかったが、それでも名を呼んだ。
　隣に居た者。護るべき人。狂気の中、狂気の島で、一つだけ、己のココロを繋ぎ止めた〝鎖〟。
　あの子がいる。それだけで、晴子は〝普通〟でいられた。どんな時も、後ろにあの子が居たから。
　何度も、自分の側から離れた。その度に感じた焦り。走り出したその背中が、死へと向かっているようで。
　まるで、羽が生えているようで。
　いつか、共に居た者が、泣いていた時。晴子は、観鈴の話をしてやった。往人の話をしてやった。
　彼女は泣きやんだ。笑ってくれた。嬉しかった。

　まるで、二人が、彼女を救ったようで。
　だが、彼女はもう居ない。そして今、自分は、泣いている。
　しっかりしぃ、自分。あさひちゃんに笑われんで。
　それでも涙は止まらない。悔しかった。自分を殴りつけたかった。腹立ち紛れに、叫んでいた。
　時折走るイメージ。血の海で、倒れる二人。お母さん、お母さん――苦しげに、名を呼ぶ声。
　違う！　二人は生きている。そんな筈は無い。勝手な妄想だ。しっかりしろ。前を見ろ！
　再び走るイメージ。無視だ。前を見ろ。名を呼べ。声を出せ！
　白光。強烈な光。消えていく景色。光に包まれる、二人の姿。痛い程に鮮明なイメージ。
　止めろ。ふざけるな。そんなものは見ていない。そんなものは見ていない。そんなものは見ていない。
　二人は生きている。血も無い。死体も無い。何処かに逃げたんだ。そうだ。そうに決まってる。

黙れ！　溶けるわけがない！　止めろ。止めてくれ。観鈴。居候！　目が痛い。観鈴！

「――」

もはや声など出ていない。口だけが、形を刻む。

涙と、泥。歪んだ顔。

血の滲む傷口。縛り付けられた布は、既に真っ赤だった。

見えてくる、剥げた大地。既に三度も見た。ぐるぐると、同じ所を走っているのだ。

もはやそんな事にも気付きもしない。怒り。焦り。そして、渇望。

狂っていた。間違いなく、それは、狂っている。

光を失った目が、何かを捉えた。草の中、雨に濡れて転がる物。

シグ・ザウエルショート９㎜。

ふらふらと、歩み寄った。既に走ってすらいない。

一歩、一歩。倒れる寸前だ。

ようやく、辿り着く。しゃがみ込んでそれを拾い上げた。

やっと、見つけた。でも、それは観鈴ではない。観鈴ではなく。

「観鈴」

ぽつり、と呟いた。声のない叫び声よりも、ずっと、ずっと明瞭な声で。

持ち主は居ない。誰も居ない。たった一つ、一つだけ、残された銃。

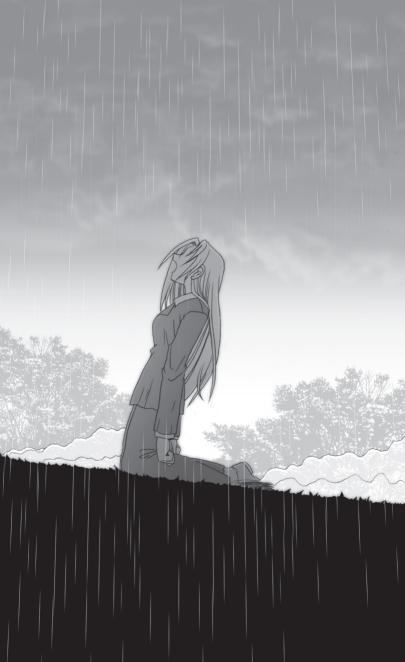
目が熱い。熱い。泣いているんだ。それだけ解った。

立ち上がりもしなかった。ただ、ただ泣き続けた。泣き声が、雨の中に、消えていく。

自分が、倒れていた事にも気付かなかった。落ちていく。奈落の底へ。

そこで見た。思い出す、爆発の瞬間。

白光。衝撃。そして、半身が溶け、消えた、愕然とした顔の、観鈴。

それは明らかな、自分の記憶。間違えようのない、

記憶。
つまり、観鈴は死――
悲鳴。
最後に、晴子の意識は闇へと落ちた。

678 地下より香る誘惑の香り

「二人とももう死んでしまってたのか」
彰は降りしきる雨の中ただ空を見上げていた。
バラバラになりそうになる心を繋ぎ止める鎖、それは初音を無事に脱出させるという思い。
初音を思うということに関しては彰も内より生まれし鬼にも違いはなかった。
愛情と肉欲という致命的な違いはあったが……。
彰は思う。
すぐにでも初音の元に戻るべきか、それとも周辺をもっと探索して安全を確認してから戻るべきか。
鬼は思う。
初音の周りの男どもを始末するか、初音の安全を確保した上で狩りを楽しむか。
彰の中は初音を中心にまわっている、それは疑うことすら必要の無い事実。
『理性』と『本能』両方が認めた美しき花嫁。
しかし、その気持ちを揺さぶる事件が起きた。
それは雨の中、診療所に向かっていた時のことだった。
周辺の探索に変更するにしてもこのまま戻るにしても少々離れすぎてていたためだ。
そして止みそうも無い雨を恨めしげに思っているときに岩穴を発見したのだ。
雨宿りと人が居ないかを調べるために岩穴に入ったときそれは見つかった。
「この床掘られた跡があるぞ……何が埋められてる

んだ」
『理性』の奴が独り言の抜かしてやがる、だがそんなことはどうだって良い。
この場所から微かに血と『女』の香りがする。同族の女の極上の香りだ。
余り深く埋められていなかったので比較的簡単に掘り返せた。
そしてそこに在ったのは……。
「隠し階段……、この下に何があるって言うんだ」
プンプン匂うぜ、間違いないこの下に『女』がいる。
しばらくはおとなしく辛抱して後から愉しむつもりだったのにな……。
この武装ではあまり無茶もできないしな、どうしたものか……。

679　策士

「この下。どうなってるんだろう？」
目の前にあるのは隠し階段。ぽっかりとその口を開けて彰を中へと誘っている。
彰はその好奇心を持って一歩を踏み出した。

奴は落ち着かない。
同族の女の香り。これほど喜ばしいものはない。
しかし奴は忌々しげに床を叩いた。彰の理性の檻。その床を。
力が足りぬ。
完全に表に出られるのならそれでよい。人間の理性に働きかける結界など、奴にはほとんど意味は無い。
本能で動く。本能で身体を動かす。本能で犯る。本能で殺る。

身体を乗っ取る程度でもいい。人間の力に毛が生えた程度のだとしても、奴には狡猾な頭脳がある。
だが失敗した。依然として檻の中だ。
犯れぬ。同族の女を見つけてもこれでは犯れぬ。
なんとか『彰』には堕ちてもらわねばならない。
そのためにも、まずは犯りやすい。殺りやすい相手の豊富な診療所に戻るのが得策。
しかし意外だった。同族の女が他にもいたのだ。
しかも熟成しているとみた。
なら未成熟な初音など、『彰』を堕とすために犠牲にしてもかまわぬかもしれん。

しばらく進むと明らかに人工物とわかる空間に出た。
清潔感のある白い壁。規則的に天井に張りついている電灯。
スプリンクラーに消火器。非常ベルらしきボタン。
なんともどこぞの大病院か研究施設のようだ。
冷房まで効いている。この島にあってなんとも豪華な。
彰が読む推理小説に、秘密の研究所などというチープなものは登場しなかった。
が、子供の時にTVで見た記憶から、ここを見てそう思わずにはいられない。
「つまり、あの施設の裏口ってとこかな……」
耕一が存在を予測した裏口のひとつ。場所もほぼその通りだった。
彰も作戦会議の中身をあとから聞いていた。耕一の推理力に少しばかり闘争心を燃やしたのを思い出す。
この場所を耕一に知らせた時の得意げな顔が目に浮かんだ。
(耕一さんか……)
初音のお兄さん。実際の兄妹ではなく従兄妹らしい。
——耕一お兄ちゃんが、髪が短くて、すごく逞し

い身体の、優しい人
——耕一、という男の名前を出した時、不自然なほど明るい声になった。
——多分、初音ちゃんが好きなのはその耕一という男なのだろう。
あの時の映像が浮かぶ。
黒い物が沸いた。
心の中にドロドロとした物が鬱積していくのがはっきりと分かる。
頭が、考えてはいけない事を勝手に考え出す。
(初音の心は本当に僕のものなのか?)
彰は自分を見る初音を思い起こす。
(あ……れ?)
その目はちゃんと自分を見ていた。
はず。
気がする。
気がした……。
だろう。
だといいな……。
いきなり自信が無くなった。
急激に愛し合った男女。その男など、一時でも離れてしまえばこうなってしまうのかもしれない。
彰の足が階段に向く。

人を操るのにたいした『力』など必要無い。
なにもかも、人の心を流し動かす策士の技なり。

680　復帰

ええ、えーと。
は、はじめましてですー(ぺこり)。
マルチと申しますう。
あのですね。
最新のわたしに事故があったみたいで、ここで復帰中なんですよー。いつもは来栖川の研究室で復帰

作業するはずなんですけれど。
　どうしたんでしょうね？
『はいはいはい！　それじゃとりあえず、荷物拾って！　繭！　あんたは飼育係！　そう、みゅーでもなんでもいいから！　こっこら！　ネコミミ引っ張るな！』
　大きな声が、聞こえますね。研究員の皆様とは違うような気がするんですが……。
『あー、解った解った！　ネコミミはやるから泣くな！　……名前はみゅー？　じゃそっちの烏は？　は？　そいつもみゅー⁇　なのか⁇』
　なんだか動物さんがたくさんいるみたいですぅ。楽しそうで羨ましいですー。
『みゅー♪』
『……あー……もう、なんでもいいや……ホラホラ、行くよ！』
　はわわっ⁉　なんだかこっちへ来るみたいです！
　どどどどうしましょう⁉　と、とりあえず隠れましょうか⁉
（かっくん）
　……はぅー……ラインが外せないみたいですー（涙。
　えーと、まだエネルギー管理ソフトが、ほとんどインストールされていないんですね。並列思考は、ほとんど完了してるみたいですけれど……ソフト全体の半分も入ってませんね。どうしてこんなところで、インストール中断しているんでしょうか……？
『ちょっと梓！　何であたしが荷物もちなのよ！』
『うるさいな！　じゃあお前、先頭きって突入するか⁉』
　……と、突入とか言ってますっ（汗。
『ま……まあ、あんたも、したぼくとして認めてあげるから、せいぜい努力なさい』
『だから、げぼくだって』
『みゅー、げぼくだよー』
『……（があぁぁん）』

あ、なんかすごく落ち込みムードが漂って来ますう。でも、わたしの辞書登録によると、やっぱり〝げぼく〟が正しいですねー。

（プシー）

自動扉が開くと同時に、身を低くして凄い速さで文字通り突入してきたのは……。

……なんとメイドさんでしたー。

ほ、本物ですよ！　わたし憧れちゃいますうー。でも、すごく物騒なもの持ってますね……本物のメイドさんって、厳しい仕事なんですね……。

「……誰も、いないね」

「ま、誰か居るなら、わざわざ大将がお出ましになる事もなかったろ」

「みゅ？」

はわわっ！

き、気付かれましたっ！

どどどどうしましょうっ!?

681　画像

や、梓だよ。

その後どうなったか、気になるだろうから報告しとくよ。あたしは何とか動物と繭と詠美を纏め上げて、目的地に到達したんだ。

いや、ほんと大変だったよ…一匹増えてるし。動物は全部名前がみゅーみたいだし。わけ解んないよ。怒るとみゅーだし。悲しくてもみゅーだし。

……あーごめん。話が逸れた上に愚痴っちゃったね。

そんでさあ。マザーコンピューター室だけど。ほぼ確実に誰もいないだろうとは思ってたけど、それでも緊張して自動扉を抜けたんだよね。

何がいたと思う？　行動不能の、ぽややんとしたＨＭが一体だけだよ。

こう、何ていうのかな？　ＨＭってのはもっと真

面目なもんだと思ってたんだよね。
「はうー、わたし真面目ですようー」
……これだよ？　大体さ、〝はうー〟って誰が用法登録したんだよ。あたし社長ならクビだね、こんなの登録したヤツは。
おもいっきり脱力したころ、再び自動扉が開く音が聞こえてね。振り向くと、さっき追い抜いたＨＭがスタスタと歩いてきたんだ。ガラにもなく銃なんか構えてみたけど、彼女たちは無視したまま席についちゃったんだよね。
「通常業務及ビ維持作業ヲ再開シマス」
高らかに宣言すると、そのまま黙ってコンピューターとやりとりを始めていた。やっぱり、あたしたちのことは無視。
そうだよ、ＨＭってのは、こういうもんだろ普通。
「はわわー、やめてくださいー」
視線を流せば、藺に遊ばれて困っているぽややんがいる。
肩の力が抜けて、しばし呆けるあたしを引き戻したのは、詠美だった。
「梓、動かないなら放っといていいよ！　先にＣＤだよＣＤ！」
やけに張り切っている。解らないでもないけれど。これで何も情報が得られなかったら、おっちゃんも報われないもんな。
……でもあたし、コンピューターなんか解んないぞ？　詠美は大丈夫なのか……？
一抹の不安を抱きながら、とりあえず近場の椅子に腰掛けた詠美の傍らに立つ。
「とりあえずココにＣＤ入れて……」
「こ、これって⁉　……ちょっと待ったあ！」
慌てて詠美を引き止める。
「この画面の隅にあるの……あたしじゃないか？」
「ほんとだ。あんた……無意味に胸デカイわねー」
「無意味ってゆーな！」
なぜか、画像は水着姿だった（いつ撮ったんだこ

れ⁉)。
「隣は千鶴さんと、あゆちゃんだね」
画面をずらして、画像を前に持ってくる。麦藁帽子を被り、鶴来屋のはっぴを着て、アイスを売る千鶴姉。ダッフルコートを着て、たいやきを咥えたまま、全力疾走しているあゆ。うしろで出店の親父っぽいのが全力疾走しているような気がする。気のせいか？
……どうにも納得いかない画像ばかりだけど……たしかに、あたしたちだった。
「それは、データベースですねー」
振り向けば、繭にオモチャにされながら、ぽややんが発言していた。
「その番号と、あちらのレーダーの番号が対応してるんですよー」
その言葉に操られるように、あたしたちはきょろきょろと首を回していた。ぽややんの助言に従い、マウスを使って次々にページを変えて行く。

「梓達の画像に×がついてたのは……死亡扱いって事かな？」
「うん、偽装は上手くいってるみたいだね。
三人並んでたとこ見ると、疑われているんだろうけれど……詠美、あんたも付いてるよ、×印」
そこには、執筆中に寝てしまい、大口開けて涎をたらす詠美の姿があった。
「……なあ」
「なによ」
「無意味にデカイ口だな」
「う、う、うるさいわねっ！　むかつくむかつくちょおむかつくっ！」
「喧嘩はだめですぅー」
「みゅーーーーー♪」

682　embryo

長瀬源三郎のいた、医務室。

私が殺した、狂った怪物。
今は、私たちがそこにいた。
人ならぬナニカとともに。
「おじさん、血だらけだよう。千鶴さん、早く、早く、助けてあげてよう」
人間としての御堂は、すでに息絶えていると言っていい。
私が、そしてあゆちゃんがここに来たのは、御堂の中に居る『熱』。その『ナニカ』がもしかしたら、御堂を助けるための何かだったら。
もうこれ以上、あゆちゃんを苦しめずに済むのなら。助けてあげたかった。
例え助からなかったとしても、納得させてあげたかったから。
自分たちは、最善を尽くしたと。
たぶん、偽善。
その、「何か」……少なくとも、すがる希望はあるのだ——　それが一体何であろうと。

人を救う過程で、あゆの、『ひとを殺した』意識が少しでも和らげば。
私たちは、人を救おうと、こんなにもがんばっているんだ。
偽善。

御堂の体は、確実に冷たくなってきていた。
ふたりで、少ない知識で、あり合わせの道具で、薬を塗り、包帯を巻き、失血を止めてやる。
何のために？
もう、流れるべき血など、わずかも残っていないのに。
「おじさん、どんどん冷たくなっていくよう……おじさん、助からないの？」
「あゆちゃん、……正直、御堂さんは、もう助からないかもしれない。でも、今はとにかく最善を尽くしましょう。お別れを言うのは、もっと後でもいいはずよ」

おわかれ、という言葉にあゆは反応した。
包帯を巻いているあゆにも解ったことだろう。一時は平熱以上の熱を持っていた御堂の体温が、確実に、屍体の『それ』に近づいていることを。
輸血。
造血剤。
解る範囲で、あらゆる手を打った。
しかし。
御堂の体は、ふたたびあの「熱」を帯びることはなかった。
もう、やめよう。
御堂にお別れを言い、私たちはここを立ち去るべきだ。
あゆはそれを納得できるだろうか？

「おじさん、頑張っ、て……ボクと、一緒に、戻ろう、よ……」
あゆは、幸いにも無傷だった御堂の胸をこすって、あたためようとしていた。
「おじさん、頑張って。ボクが、今度はボクが、助けて、あげる、から……」
何度も何度も繰り返して。懸命に。
あの熱が戻れば、御堂が生き返ることができると。
信じて。
信じようとして。
あゆは涙をぼろぼろ流して、
ひたすら息を切らせて。
それは、自分の命を、分け与えているようにすら見えた。
「あゆちゃん、もういいわ。おじさんはもう亡くなってしまった……梓たちのところに戻ろう？　最後におじさんにお別れしてあげて？」
正直、梓たちの無事が気になる。詠美も繭も、そ

れなりのショックを受けている筈だ。
特に繭。あの聡明だった娘が、壊れたように喚き叫んでいた。
一体何があったのか。御堂を優先して梓に任せてきたものの、いくらなんでも長居しすぎた気がする。
「いやだよ！　千鶴さん、まだまだ足りないよ！　今までボクはおじさんたちに助けられてばっかりだったから、今度はボクがおじさんを助けてあげなくちゃいけないんだよ！　おじさんを助けて、おうちに戻って、商店街も案内してあげたいし、ボクの学校も見せたいのに。もっともっと、おじさんと話したいことがあったのに。生き残れてよかったねって、ボクの知ってる人たちはみんな死んじゃったけど、それでも、おじさんや、千鶴さんや、他のみんなと、よかったねって、もう誰も死ぬのはいやなんだよっ！」
あゆはくしゃくしゃな顔をもっとぐしゃぐしゃにして、流れている涙はぬぐうのに追いつかなかった。

あゆちゃん……
あゆの涙が、かつて熱を持っていた御堂の体に、ぼたぼたと落ちていた。
その時。
あゆの落した涙が、光った。
光ったように、私には見えただけかもしれない。
たぶんそれが現実。
あゆの落した涙を受けた部分が、あかく光った。
それは、あのモノが発した熱と同じ。
なんて、風景。
奇跡。
まるで、……天使。
「ガキが、あんまり、世話をやかすんじゃねえぞ……」
「おじさん、やっと会えた……」
私はその時、知らず涙を流していた。
あるはずのない幻聴に。
その奇跡に。

「おじさん、助かるんだよね。また一緒にいられるんだよね」
「バカ、無理言うんじゃねえ。俺ぁもう駄目だ。全くらしくねえ。この島を出たら、俺は蝉丸を殺すか、俺が殺されるか、そのはずだった。それがガキを助けるために死んで、今またチビガキに呼び戻されるなんてよ。まったく、らしくねえぜ……」
「おじさん、もう、駄目、なの？」
「ああ。こうやってまたおめぇと話せるなんざ、……奇跡……みてえなもんだ。仙命樹の力ももう及ばねえ。最後の悪あがきってもんさ……まったくこの俺が、ガキによ……」
「おじさん……」
「いいか、あゆ。おめえは生き残れ。詠美も、そこの千鶴も、赤毛も、なんとしてもだ。俺にはもうなんの力もねえが、少なくともおめえらは今の今まで生き残れた。生き残れるさ。そしてなにもかも忘れて達者で暮らせ」
「おじさん……今までありがとう。ボク、おじさんのこと、絶対、忘れない」
「さよならだ。……あゆ、もしかしたら、お前は、俺の……」
消失。
何、今の……。
まるで……奇跡。
自分の涙に気づき、私は慌てて、それを拭う。
「あゆちゃん、今の……」
「千鶴さん、お待たせしてごめんなさい。ボク、もう行くよ。おじさんには、ちゃんと、さよなら言えたから」
奇跡。
幻聴。
なんでだっていい。
御堂は、安らかに旅立てたのだ。
あゆも、立派に、それを見送ることができた。
それだけだ。

ふと、気づいた。
もの言わぬ御堂の体の上、あゆが奇跡の涙を流したところに。
一粒の、小さな種。
いや、胚とでも言うべきモノ。
あゆちゃんはそれを、大事そうに両手で抱いた。

（おじさん……ボク、おじさんのきもち、受け取ったよ。帰ったら、皆に自慢するんだ。この何日か。ボクの近くには優しいおじさんがいて。顔はこわくて、そっけなかったけど。ボクを守ってくれていた。もう逢えないけれど、ボクはおじさんの気持ちを受け取ったから。それじゃ。さよなら……おじさん）

《葉鍵ロワイアル　第五巻　了》

端書

かくして、物語は佳境へと入って行くことになりましたとさ。

どうも、静かなる中条と申します。独自にプロモーションのフラッシュを作って、ハカギロワイアルを盛り上げている者です。別にサークルメンバーという訳ではないのですが、今回、書かせていただけることになりましたので、後記のページをいただくことに致しました。こんなところまで丁寧に読んでくださる皆さん同様、私も作品を楽しませていただいている、普通の読者の一人です。

この小説は、おそらく一生懸命に参加していた職人さんや読者のように、リアルタイムで追っていた方も多いと思います。が、私は、お気に入りのキャラが死んでしまった時点で読むのをやめた人の一人だったりします。残念ながら、作品が出来て行くのを追いかける楽しみはありませんが、奇しくもこうして、紙媒体化の恩恵を授かっている者の一人となっています。そんなわけで、実はまだ七巻の分を読んでいません。

ただ、もともとこの手の作品が好きということもあり、いつかは全部読んでやろうとは思っていましたが、きっかけも無かったために、こうして刊行されることになるまでは心の隅で「なんかあったな」程度にしか考えておりませんでした。もしかしたら、ずっと読まずにいたかも知れません。それが同人誌として出る、ということになったと2ちゃんねるで聞き付けたため、なんとなく応援……というよりは、洒落で宣伝のよ

うなことをやってみようかと思い立ちました。

元はといえばこのフラッシュ、こんないきさつでプロモーション「ごっこ」のつもりで作ったところ、セルゲイ@Dさんの目に止まりました。それでサークルを訪れて「本気でやっちゃってもいいですよ?」と言ったのが、去年の冬コミの時……　ちょうど一年前になります。それからは、あっという間に四作品ハカロワでフラッシュを作らせていただきました。もともとは一ファンの活動（今でもそのつもり）でしかなかったのですが、気が付けば同人ショップ様からも、公式扱いでフラッシュに直接リンクを張られたり、店頭でプロモーションムービーとして流していただいたりと、作品をお披露目させてもらえる場まで提供していただいています。

面白いもので、ネタのつもりが今や広告塔です。もう私も公式のつもりですが、ホントのところよく分かっていません。

そんなフラッシュ企画のリーダーですが、実際のところ、私は映像の編集をやっているにすぎません。このプロモーションフラッシュは音楽を依頼し、ＣＧを募集し、それらを使ってまとめることで作られている物です。音楽の作成依頼を受けていただいた方や、総勢三十人を越えるＣＧの作者の方々、ほかにもリアルタイムでテストしてくださる方などの力が無くてはまったく動かない企画です。それがこうして成功しているのも、ひとえにこういった「縁の下」の方々のおかげです。この場を借りて、改めてお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございます。まだまだ至らぬところも多いかと思いますが、出来る限り頑張りますので、ご支援のほど、よろしくお願い致します。いつものみなさんのおかげで、今の私の立場があり

ます。

おそらくこの本が完結するときまで、私のフラッシュも続くことになると思います。五巻発表時に一つ出ているると思われるので……　残り二つ、よろしければ、ハカギロワイアル小説ともども、お付き合いいただきますようお願い致します。

最後に、このような場を与えてくださった、ハカロワ出版企画様と、こんなへんちくりんな文章まで読んでくださっている方々、ありがとうございました。

静かなる中条

【残り　2巻】

葉鍵ロワイアル　第五巻　著者一覧

奇跡の企画を作り上げた皆様に

この場を借りて、お礼を申し上げます。

578　厭……名無しさん
579　俺達は……!?……名無しさん
580　ファンタジー……111さん
581　ロボットということ……命さん
582　希望……。さん
583　紅と闇……彗夜さん
584　力の渦……名無したちの挽歌さん
585　鉄……彗夜さん
586　マツリの痕……いつかさん
587　仰げば尊し……命さん
588　愚者達の行く末……L.A.R.さん
589　ゆめのあと……L.A.R.さん
590　夢現……命さん
591　DEAD OR ALIVE（前編）……命さん
592　The Long Goodbye……セルゲイ＠Dさん
593　悔恨……彗夜さん
594　幕間　――虹――……。さん
595　DEAD OR ALIVE（後編）……命さん
596　逃亡者……祐一＆浩平さん
597　愛の消毒大作戦……名無しさん
598　reins of power……111さん
599　Re-Birth……MIUさん
600　捧げるもの……名無したちの挽歌さん
601　人でなくなるということ……林檎さん
602　おじさんへ……名無したちの挽歌さん
603　言霊……彗夜さん
604　記憶の彼方へ……命さん
605　彰のないしょ……ないしょさん
606　会談……祐一＆浩平さん
607　生徒手帳を捧げて……L.A.R.さん
608　触れ合わない、二人の手……111さん
609　最後の夢……。さん
610　歪曲……彗夜さん
611　男二人。史上最大の作戦……林檎さん
612　精神戦……名無しさん
613　逮捕……。さん
614　本格的な侵入……名無しさん
615　分断……彗夜さん
616　七瀬のないしょ……名無したちの挽歌さん＋彗夜さん＋林檎さん
617　侵入……名無したちの挽歌さん
618　疑う事、信じる事……名無しさん
619　漢と乙女の狭間で……林檎さん
620　僕たちの失敗――花咲く旅路……YELLOWさん
621　北川シリアスモード……祐一＆浩平さん
622　偽善……名無しさん
623　心の傷の行く先は……名無したちの挽歌さん
624　奴……#3-174さん
625　サミット……ヘタ霊さん

◎制作者一覧
制作協力：
111、JOYH-TV、L.A.R、MIU、Yellow 、#3-174、
いつかの書き手、独活大樹、葵原てぃー、久々野　彰、
冴村浩志、静かなる中条、真空パック、駄っ文だ、
ないしょ、ナナツさんだよもん、名無し達の挽歌、
名無しさんだよもん＠誤植指摘、遥か昔の書き手、日向葵、
箕崎、観月、林檎、『 。』、名無しさんだよもん

制作協賛：
104、５、Alfo、Kyaz、NBC、命、感想スレＲの 142、
シイ原、七連装ビッグマグナム、フラスキ、暇人、
祐一＆浩平、名無しさんだよもん

スペシャルサンクス：
189、quit、River. 、zin、#4-6、#7-76、荒門、彗夜、
ダンディ、名無し cd、名無しさんなんだよ、にいむらたくみ、
花と名無したん、ヘタ霊、赤目、名剣らっちー、
訳あり名無しさんだよもん、旧データサイト管理人各氏、

そして全ての名無しさんと読者の皆様
（アルファベット～アイウエオ順、敬称略）

葉鍵ロワイアル　（5）
二〇〇三年　一二月三〇日　初刷発行
二〇二二年　一二月三〇日　電子書籍版　初刷発行

著　　者：（別頁に記載）
発 行 者：瀬戸こうへい
発　　行：ハカロワ出版企画
初　　出：２ちゃんねる、葉鍵（Leaf&Key）板
編集事務：セルゲイ＠Ｄ　三浦　闌
挿　　絵：しまさらゆめき
印　　刷：株式会社ポプルス
連 絡 先：kohei19800310@yahoo.co.jp

9784210232498

1922452381037

ISBN4-70447-734-7

C0510

ハカロワ出版企画

HAKAGI ROYALE V

こんな奇跡、無い方が良かったのかもしれないね。

またひとり、想いを抱えたまま倒れてゆく。
生存者は残り28人。

彼らは生きる為の光明を見出しつつある。

だが、ゲームの管理者である長瀬一族が、
彼らの前に立ちはだかる…。
それぞれの思惑は交錯し、混沌を深めていく。

……何故、殺しあわなければならないのか？

HAKAGI ROYALE
ハカギ・ロワイアル
6

HAKAGI ROYALE

ハカギ・ロワイアル

6

――――――【残り22人】

葉鍵ロワイアル参加者名簿

~~一　　番　相沢　祐一　（あいざわ・ゆういち）~~
~~二　　番　藍原　瑞穂　（あいはら・みずほ）~~
三　　番　天沢　郁未　（あまさわ・いくみ）
~~四　　番　天沢　未夜子　（あまさわ・みよこ）~~
~~五　　番　天野　美汐　（あまの・みしお）~~
~~六　　番　石原　麗子　（いしはら・れいこ）~~
~~七　　番　猪名川　由宇　（いながわ・ゆう）~~
~~八　　番　岩切　花枝　（いわきり・はなえ）~~
~~九　　番　江藤　結花　（えとう・ゆか）~~
~~十　　番　太田　香奈子　（おおた・かなこ）~~
十 一 番　大庭　詠美　（おおば・えいみ）
~~十 二 番　緒方　英二　（おがた・えいじ）~~
~~十 三 番　緒方　理奈　（おがた・りな）~~
~~十 四 番　折原　浩平　（おりはら・こうへい）~~
~~十 五 番　杜若　きよみ〈原身〉（かきつばた・きよみ）~~
~~十 六 番　杜若　きよみ〈複製身〉（かきつばた・きよみ）~~
十 七 番　柏木　梓　（かしわぎ・あずさ）
~~十 八 番　柏木　楓　（かしわぎ・かえで）~~
十 九 番　柏木　耕一　（かしわぎ・こういち）
二 十 番　柏木　千鶴　（かしわぎ・ちづる）
二十一番　柏木　初音　（かしわぎ・はつね）
二十二番　鹿沼　葉子　（かぬま・ようこ）
二十三番　神尾　晴子　（かみお・はるこ）
二十四番　神尾　観鈴　（かみお・みすず）
~~二十五番　神岸　あかり　（かみぎし・あかり）~~
~~二十六番　河島　はるか　（かわしま・はるか）~~
~~二十七番　川澄　舞　（かわすみ・まい）~~
~~二十八番　川名　みさき　（かわな・みさき）~~
二十九番　北川　潤　（きたがわ・じゅん）
~~三 十 番　砧　夕霧　（きぬた・ゆうき）~~
~~三十一番　霧島　佳乃　（きりしま・かの）~~
~~三十二番　霧島　聖　（きりしま・ひじり）~~
三十三番　国崎　往人　（くにさき・ゆきと）
~~三十四番　九品仏　大志　（くほんぶつ・たいし）~~
~~三十五番　倉田　佐祐理　（くらた・さゆり）~~
~~三十六番　来栖川　綾香　（くるすがわ・あやか）~~
三十七番　来栖川　芹香　（くるすがわ・せりか）
~~三十八番　桑嶋　高子　（くわしま・たかこ）~~
~~三十九番　上月　澪　（こうづき・みお）~~
四 十 番　坂神　蝉丸　（さかがみ・せみまる）
~~四十一番　桜井　あさひ　（さくらい・あさひ）~~
~~四十二番　佐藤　雅史　（さとう・まさし）~~
~~四十三番　里村　茜　（さとむら・あかね）~~
~~四十四番　澤倉　美咲　（さわくら・みさき）~~
~~四十五番　沢渡　真琴　（さわたり・まこと）~~
四十六番　椎名　繭　（しいな・まゆ）
~~四十七番　篠塚　弥生　（しのづか・やよい）~~
四十八番　少年　（しょうねん）
~~四十九番　新城　沙織　（しんじょう・さおり）~~
五 十 番　スフィー　（すふぃー）

~~五十一番　住井　護　（すみい・まもる）~~
~~五十二番　ＨＭＸ－13型セリオ　（せりお）~~
~~五十三番　千堂　和樹　（せんどう・かずき）~~
~~五十四番　高倉　みどり　（たかくら・みどり）~~
~~五十五番　高瀬　瑞希　（たかせ・みずき）~~
~~五十六番　立川　郁美　（たちかわ・いくみ）~~
~~五十七番　橘　敬介　（たちばな・けいすけ）~~
~~五十八番　塚本　千紗　（つかもと・ちさ）~~
~~五十九番　月島　拓也　（つきしま・たくや）~~
~~六 十 番　月島　瑠璃子　（つきしま・るりこ）~~
六十一番　月宮　あゆ　（つきみや・あゆ）
~~六十二番　遠野　美凪　（とおの・みなぎ）~~
~~六十三番　長岡　志保　（ながおか・しほ）~~
~~六十四番　長瀬　祐介　（ながせ・ゆうすけ）~~
~~六十五番　長森　瑞佳　（ながもり・みずか）~~
~~六十六番　名倉　由依　（なくら・ゆい）~~
~~六十七番　名倉　友里　（なくら・ゆり）~~
六十八番　七瀬　彰　（ななせ・あきら）
六十九番　七瀬　留美　（ななせ・るみ）
~~七 十 番　芳賀　玲子　（はが・れいこ）~~
~~七十一番　長谷部　彩　（はせべ・あや）~~
~~七十二番　氷上　シュン　（ひかみ・しゅん）~~
~~七十三番　雛山　理緒　（ひなやま・りお）~~
~~七十四番　姫川　琴音　（ひめかわ・ことね）~~
~~七十五番　広瀬　真希　（ひろせ・まき）~~
~~七十六番　藤井　冬弥　（ふじい・とうや）~~
~~七十七番　藤田　浩之　（ふじた・ひろゆき）~~
~~七十八番　保科　智子　（ほしな・ともこ）~~
~~七十九番　牧部　なつみ　（まきべ・なつみ）~~
~~八 十 番　牧村　南　（まきむら・みなみ）~~
~~八十一番　松原　葵　（まつばら・あおい）~~
~~八十二番　ＨＭＸ－12型マルチ　（まるち）~~
八十三番　三井寺　月代　（みいでら・つくよ）
~~八十四番　御影　すばる　（みかげ・すばる）~~
~~八十五番　美坂　香里　（みさか・かおり）~~
~~八十六番　美坂　栞　（みさか・しおり）~~
~~八十七番　みちる　（みちる）~~
八十八番　観月　マナ　（みづき・まな）
~~八十九番　御堂　（みどう）~~
~~九 十 番　水瀬　秋子　（みなせ・あきこ）~~
~~九十一番　水瀬　名雪　（みなせ・なゆき）~~
九十二番　巳間　晴香　（みま・はるか）
~~九十三番　巳間　良祐　（みま・りょうすけ）~~
~~九十四番　宮内　レミィ　（みやうち・れみぃ）~~
~~九十五番　宮田　健太郎　（みやた・けんたろう）~~
~~九十六番　深山　雪見　（みやま・ゆきみ）~~
~~九十七番　森川　由綺　（もりかわ・ゆき）~~
~~九十八番　柳川　祐也　（やながわ・ゆうや）~~
~~九十九番　柚木　詩子　（ゆずき・しいこ）~~
~~百　　番　リアン　（りあん）~~

葉鍵ロワイアル
舞台　地形図

地図制作：JOYH-TV

カバー、挿し絵：指狐

葉鍵ロワイアル

※この物語は巨大掲示板２ちゃんねるの葉鍵（Leaf&Key）板において創作されたリレー小説です。

※今回の単行本化にあたり、著者自身の手によって本文の表現やタイトルが改められた個所があります。
※Web ページの原文を縦書きの単行本として出版するにあたり、最低限必要な改行等の改変を編集側で行わせていただきました。

683　口は災いの門

それにしても腹減ったなぁ。
多分もう昼過ぎだから、仕方ないと言えば仕方ないな。
「北海市場！　激安食品販売店です！　食費が今の半分になります！」
何故かそんなフレーズが頭に浮かんだ。
蟹、イクラ、ホタテ、もずく……食べたいなぁ。
いつもなら「お昼休みはウキウキウォッチング♪」から「何が出るかな、何が出るかな♪」のゴールデンコンボを見ている時間だからなぁ。
などということを考えている間も、七瀬さんと晴香さんによる国崎往人公開尋問ショーは続いているようだ。
あの二人が刀を持って尋問してる様子を一言で表すと、「あれは恐ろしい物だ」って感じだな。
しかし、このままじゃらちがあかないのでそろそろ俺様の出番だな。
「まぁまぁ、七瀬さんも晴香さんも落ち着いて」
ギロッ！　という擬音が聞こえてきそうな程の勢いで二人ににらまれてしまいました、母さん。
蛇ににらまれたカエル、どころの騒ぎではありません。
例えるならラオウの前の村人A、もしも「お前はもう死んでいる」と言われたら僕は「アベシ！」と言いながら死んでしまってもおかしくないほどです。
それでもわずかながらの勇気を振り絞って二人の女王様に提言いたしました。
「あ、あのデスね、ぶ、武器も持っていないようですし、た、多分危険な人では無いと思われますです。ハイ」
「まぁ、そうね。見た目は十分に怪しいけどね」
そう言って二人は刀を収めてくれました。良かった良かった。

「すまない、助かった」
「いえいえ、大したことはしておりませんよ、国崎往人さん」
「そう言えば……何故お前は俺の名前を知っているる？　会ったことは無いはずだが」
「ああ、そうそう。私達もそれが聞きたかったのよ」
「あ、それはですね。国崎さんの事を捜している女性二人組と少し前に会ったからです」
「何!?　それはどんなやつだ!?」
　国崎さんが突然俺の言葉に凄い反応をしたので少し驚きながらも答えた。
「え、え～とですね。長い黒髪のお嬢様風の人とピンクの髪の小さな女の子でした」
「そ、そうか」
　そう言った国崎さんの顔には失望の色がはっきりと表れていた。
「その人達、国崎さんの知り合いなの？」
「いや、聞いた感じだと、面識は無さそうだった」
「じゃあ何でその人達国崎さんの名前知ってたの？」
「その二人が参加者名簿を持ってたからだよ、晴香さん」
「ふ～ん、そうだったんだ」
　晴香さんはあまり興味が無さそうに返事をした。
「あ、そうそう。自己紹介がまだだったわね。私は七瀬留美。で、こっちが――」
「巳間晴香よ」
「俺は北川潤だ」
「あ、ああ。国崎往人だ、っと、もう知ってるみたいだがな」
「でも、どうしてあんなところに居たの？」
　七瀬さんが木の上を指さしながらそう尋ねた。
「いや、それが俺にもさっぱり分からん。気がついたらあの木の上にいたんだ」
「ふ～ん、不思議なこともあるもんね」

「それよりもお前達に一つ聞きたいのだが、この辺で金髪ポニーテールの女の子と関西弁のおばさんを見なかったか？」
「さあ？　知らないわ。北川は？」
「……女の子の名は？」
「観鈴、神尾観鈴と晴子の親子だ」
「いや、見たことも聞いたこともないな」
「そうか……、邪魔したな」
そう言って国崎さんが立ち上がった。
「俺は人を捜さなければならんのでな、失礼させてもらおうか」
「わ、ちょっと待て！　捜すって、あてはあるのか？」
「……無い」
「それじゃあ、俺と一緒に来てくれないか？　あんたを捜してた二人に会わせたいんだ」
「悪いが俺にそんな暇は無い、早く二人を捜してやらないと」
「まぁ、待て。あてもなく捜しても仕方ないだろ。その二人に会ってくれるならこれをやるからさ」
「何だそれは？」
「これ、詳しい理屈は分からないがどうやら対人レーダーみたいでさ、これがあればあんたの捜し人も早く見つかるんじゃないのか？」
「何!?　本当か！」
「ああ、ほらこの光の点が人を表してるみたいでな、ほら中心に四つあるだろ。で、この端っこにある二つの点が多分、あんたを捜してたっていう二人組だ。方角的に間違いなさそうだ」
「……」
「どうだ？　悪い話じゃないだろう？　それに国崎さん武器も持ってないみたいだしさ、俺と行動した方が安全だと思うぜ」
「……いいだろう、だがその二人には会うだけだぞ。その後、すぐに観鈴たちを捜しに行かせてもらうからな」

「ああ、それで構わないぜ」
よし、これでスフィー達に国崎さんを会わせることができるな。
会わせる義理は無いけど。ま、相沢を看取った仲だしな。
それに健太郎さんのこともスフィーに一言伝えておかなきゃならないし。丁度いいか。
「ちょっと北川」
「ん？　何？　七瀬さん」
「蝉丸さんたちのところに行くっていう話はどうなったのよ？」
「ああ、それは国崎さんをその二人に会わせてからそっちに向かうよ。そんなに急いでるわけでもないしな」
「そう、まぁあんたがそれでいいんなら構わないけどね」
さて、話もついたことだし一安心だ。
……あ、もう一つあったっけ。

「あの～、晴香さん、七瀬さん」
「何よ」
俺は恐る恐る切り出した。
「それでですね、国崎さんにも何か武器が必要だろうし、この三つ俺が持っていってもいいよね？」
うぅ、二人の視線が痛い。
「ま、いいわよ。どうせ私達もそんなに持てないし」
「そうね」
ふぅ、生きた心地がしなかった。あの二人に睨まれたらメデューサも真っ青だな。
え？　なんか二人の顔が急に険しくなったぞ？
「北川、あんた死にたいらしいわね」
「七瀬、私も手を貸すわ」
って、俺また口に出してたのか～!!
「く、国崎さん！　助けて！」
「……二人とも死なない程度にしてやってくれないか。いや、待てよ。死んだらレーダーが無条件で手

に入るな」
「え？　え？」
「と、いうわけで好きにしていいぞ」
「ちょっと……」
「ま、そういうわけだから」
「覚悟しなさい」
そう言って二人が近づいてきた。
二人とも笑顔だけどなんて言うかこんなに恐ろしい笑顔を見たのは初めてだ。
相沢、案外早くお前に会えるかもな。

684　来訪者の多い場所

叩きつけるように降り注ぐ、雨。
「随分と唐突に振り出したものねぇ」
呟き、窓の外のグレーの空を見上げる。
この降り方だと、未だ暫くはここに滞在しなければならないようだ。
兎角、時間がない。
こうしている間にも、国崎往人が生命の危機に晒されている可能性もあるのだ。
残りは二十五人を切った。いままで協力態勢をとっていた者たちでも、ここまで人数が減れば、もしかしたら全員殺す気になるかもしれない。
——放送の直前か、直後に聞こえた耳を劈くような轟音だってそう。
それは誰かが、まだやる気なのを暗示するものなのかもしれない。
そう考えると、この小屋にも長時間滞在するわけにはいかない。
参加者のひとり、北川潤に場所を知られているからだ。
彼が裏切るとは思えないが、可能性は全くのゼロではない。それに、本人は、その気がなかったとしても、もし他人にこの場所の事を話したときに、相

手がやる気になっていたとしたら……。

「……早くやんでくれないかなぁ、この雨」

溜め息混じりに、スフィーが呟く。

そう。雨が降り止まないと、この場所からは動けない。降り注ぐ雨は視界を奪い、響き渡る雨音は聴覚を奪うからだ。

それに雨に打たれて体が濡れたら、体力を奪われる。この島で体調不良になれば致命的だ。

いまはただ、時間が過ぎるのを待つしか無い。

ふと、窓の外にもう一度目をやる。

窓に叩きつける雨、その水滴によってぼやけた風景の中。

並べられた、三つの十字架。

……木の枝を折って、ロープで結び付けただけの乱雑な十字架。

それを見て……思う。

……彼らは、満足だったろうか？

精一杯生きて、満足な死を迎えられたと言えるだろうか？

それは、否、だろう。

突然こんな所に連れて来られて、殺し合いさせられて……満足なわけが無い。

だけど……それなのに。

どうしてあの三人は、あんなに安らかな顔で……眠りについたのか。

ホントは、死にたくなんて無かった筈なのに。

それでも、あの三人は、笑って、逝った。

『死にたくない』という自分の気持ち、恐怖、全部押し殺して、それでも笑った。

「安心して。あなたたちの気持ち、願い、心……全部、わたしたちが全部……受け継ぐから」

それは、嘘。

ひとの想いをまるまる抱えきれるほど、強い人間なんていない。

だけど、出来る範囲でなら。

自分が頑張って、頑張って、もう限界っていうと

ころまでは、やってみせるから。
……だから、このぐらいの嘘は、許して欲しい。
「芹香……」
気がつくとスフィーが、わたしを見上げていた。
改めてひとの死を認識した事で、心細さとか、そういった感情が再び沸きあがってきたのだろう。
不安げに、服の端を掴んでいる。
そんな彼女の頭を優しく撫で、わたしは言った。
「まだまだ……これからなんだから。頑張りましょう、三人のぶんも……ね」
そう。一足先にここを発っていった北川潤の、ように。
わたしたちも……強くあろう。
スフィーもそれに、笑顔で、答えた。
「うん!」と、元気いっぱいに。

と。

突然。

ずしん、という、微かな重低音と、僅かな揺れ。
「……地震?」
スフィーが、再び顔を曇らせる。
地震。いや、それにしては……揺れが短すぎる。
これは何かが倒れたとか、落ちたとか、そう言う系統の振動だ。
それも……重いものが。
冷や汗がひとすじ、頬を伝う。
参加者同士の戦闘?
それとも何かのアクシデント?
理由は分からない。だが、自然に起こったものとは……そうそう思えない。
そして、それは、この耳で聞こえる位置……そう遠くない位置。
つまり、居るのだ。参加者が、そう遠くない場所に。
……どうする?
ここに留まるのは、危険なのではないか? リス

クを負っても、移動すべきではないか？
（全く、この辺りは本当に……来訪者の多い場所ね）
芹香は、皮肉っぽく笑った。

685 雨宿り

落ち始めた礫を手で受け止める。雨の冷たさは火照った肌に心地良い。
……しかし、
「このままだと、冷えて体力が奪われてしまうな」
そして思い出す。スフィー達がいた小屋のことを。あそこなら、雨宿りに最適だろう。
「……というわけで、皆さん小屋に急ぎませんか？」
「言い逃れとは見苦しいわよ」
と、晴香さん。
「そういえば、昔から往生際は悪い男だったわね、あんたって」
と、七瀬さん。
女性二人に迫られるシチュエーションというのは甘美な響きがあるが、それの相手が日本刀片手に凄んでいるとあれば話は別だ。
判決を待つ被告のように縮み上がりながら、無限のような数秒が過ぎる。
やがて、晴香さんは小さくため息をついた。
「……でもまあ、あんたが言うことも確かね。すっかり、本降りになってきたみたいだし」
そう言って晴香さんは刀を鞘に収めた。「しかたないわね」といった顔をして七瀬も戦闘態勢を解く。強くなってきた雨脚は俺にとっての恵みの雨となったみたいだ。
「……はぁ、すっかり濡れちゃうわね」
水も滴る、いい漢といった風情の七瀬。言いようによっては色っぽい台詞もめっきり男らしい。
「小屋に着いたら服、乾かしましょう」

ということは、小屋に着いたら全裸に……。
　想像してみよう。

　雨で冷えた体を暖めるために、肌を寄せ合う二人。
戦いのなか芽生えた友情はいつのまにか違う感情を
二人の中に目覚めさせていた。
「……晴香の体やわらかい」
「七瀬の体も引き締まって……素敵よ」
「体中こんなに冷え切っちゃって……」
「ちょっと、やだ、七瀬。どこ触ってるのよー」
「ねぇ、晴香。体が暖まること……しない？」

　なんてな。
　うむ、我ながら若さめいっぱいな妄想だな。
　不用意に想像してしまったせいで、歩きづらくな
ってしまった。こちらも若さ爆発といったところだ。
　……あれ？
　なんだか、注目を受けてる気がするのはなんでで

しょう？　七瀬と晴香さんは頬を赤くしているし、
国崎さんはにやにやと。
「北川とやら。妄想は頭の中だけにしといたほうが
良いぞ」
　うぁ。またですかっ。
　また私はやっちゃいましたか。
「……ここまで濡れたら、多少は変わらないわね」
「OK、晴香。どうやら、北川は覚悟完了している
みたいだし。……どうでも良いけど、何で私の台詞
はやたら男っぽいのよ!?」
　私の視界にお二方が大きくなって行きます。指を
鳴らしちゃったり、腰に手を当てて威嚇したりして
います。
　……フェイドアウトしていく意識の中で、呆れ返
っている相沢の姿を見た気がした。

686　日常と狂気の交わる場所

目覚めは最悪だった。雨に打たれ泥に塗れ見るも無残な姿になっていた。
眠る前と変わらず周りには人の気配は無かった。
しかし風景は少し変わっていた。動転しながら走ったせいだろう。
このまま雨に打たれるのは危険だった、体温も下がりきっている。
重い体を何とか持ち上げ這うように進んだ、視界に映る建物を目指して。

建物は喫茶店だった。誰の持ち物か分からないが毛布も着替えもあった。
震える指先で服を着替え、毛布に包まりながら置いてあったコーヒーを沸かしなおした。
体を温めながら全てを思い返す。全てを――。

何度考え直しても否定できなかった。観鈴は確かに死んだ。
そしてその事を受け入れた時、心を繋ぐ鎖が完全に壊れた時、彼女は――。

かつてこの喫茶店は希望の里であった。
この絶望に包まれた島の中、何とか生きて帰ろうと寄り添ってすごしていた。
しかし何時から歯車が狂いだしたのだろう。
ある者は愛する人に否定され。
ある者は愛する人をその手で殺め。
ある者は愛する人を自分のせいで失ったと思い込み。
ココは島で最も日常に包まれた場所。
しかしココを利用した人のほとんどは日常と決別を果していった。
そして新たに――。
「居候……やっぱりアンタの考えは甘すぎたんや。

ゲームに乗ってない奴なんてほとんど居ない」
抑揚の無い声で呟く。その声は染み込むように自分の心に満ちていった。
「観鈴……寂しい思いさせるな。でも待っててな、すぐ友達連れて迎えに行ってやるから」
愛する者を失った悲しみが己を包む鎧となってまた新たに日常と決別する者が生まれた。
確かにこんな島でも幸せを噛み締めて逝けた人も居た。それは事実だ。
しかし、負の感情を纏い奈落に落ちて逝った人も居る。それも事実だ。
喫茶店――そこは島で最も日常にあふれた場所。
喫茶店――そこは日常があふれるが故に狂気を呼び集める場所。
「ほな……行ってくるわ」
誰も居ない店内に別れを言うと晴子は進みだした。
その瞳はこの島で最も冷静で、最も歪んでいた。

687　エンプレス二人

人の世の、浮かぶ未練の舟足に、かかる憂き世の因果経、伝幕上がりし猿芝居なり。

「大丈夫か？」
見目麗しき二人の戦乙女の活躍によって、程良くボロボロになった北川潤（二十九番）に国崎往人（三十三番）は遠慮がちに声をかけた。
「……田舎から産地直送されてきた都市型大量殺人兵器ルミーとハル。ヤツらを封じねば朕に活路はひらけんのじゃよ……」
自身の熱い迸りを甘いバラードにのせて、全世界（なかんずく彼女ら）に発信した結果、北川は完膚無きまでに叩きのめされ、地面と暑苦しい抱擁を交わす羽目と相成ったのである。

往人からしてみれば北川の様は自業自得以上でもそれ以下でも無かったが、ここまで無惨な姿をさらけ出されて面食らってしまったのも確かである。
その北川を撃破した張本人である二人といえば、一度は小屋までついていく素振りを見せていたものの、いまや「もう、勝手にしろ」と言わんばかりに彼らの側を離れ、木を庇にして新規獲得した支給品をきゃぁきゃぁ言いながらなでくりまわしていた。
いっこうに降り止まない雨、立ちこめる湿気、お祭り騒ぎのバーバリアン二体と失意の二人。息の根が止まりそうなくらいに、長閑な状況であった。
うんっ、と大きく伸びをして北川は立ち上がる。
そして身体に纏わり付いた泥や埃を左手で払い落とすと、やれやれといった面もちで往人の方へ向き直った。
「慣れてますから……と言いたいところだけど、あいうタイプはちょっと特異です」
「俺の知己にも何人かはっちゃけたヤツはいたが、あそこまで益荒男となるとな」
その内の幾人かはすでに鬼籍に入り、この世の人ではなくなった。
「まぁ巳間さんは見た目は勝ち気で負けず嫌い、責任感の強いしっかり者で、曲がったことが大嫌いってな具合の頼れる姉御。ピチカート・ファイブをBGMに銀色のATBにまたがって、白いシャツに白いジーンズそして白いデッキシューズで川沿いをシュタタタタターっと軽やかに走り抜ける……とスポーティな感じがものすごく似合うんですが、案外そういう人に限って、一度懇ろな仲になれば、彼氏に首輪つけて表参道あたりをわんわんと引きずりまわしたり、冷たい公園のベンチの下にマッパで放置してくれて凍死寸前のところでようやく御迎えにきたりとか、手かせ足かせをつけて、ものごっつい水深のダイビングプール底に沈めたりとか、十分な注意が必要でしょうね」
「手の施しようがないって感じだな。七瀬……だっ

たか、あっちのザンバラ髪の方はどうだ？」
　往人は、巳間晴香（九十二番）と共に武器の物色に興じている七瀬留美（六十九番）をアゴで指し示した。
「ああ、七瀬は元クラスメートでしたからそこら辺のことはよく知ってますよ。本人曰く『ハイエンドかつソリッドで高域帯を意識した乙女を目指してる』だそうですけど、実際は三つ以上を『たくさん』って数える民族の出身で、他人の原チャリのガソリンタンクに角砂糖を入れたり、トイレの水をガバガバ飲んで、『コロされるー』って叫びながら校内を駆けずり回ったり、月のものが止まってるんじゃないかと疑われるような行動ばかり取るヤツでした」
　はぁ、と軽く北川はため息をついた。
「救いようがないって感じだな」
「転校して手つきが小猫ちゃんみたいになって、声がかぼそくて、眼鏡をかけて、素敵なファンがいっぱい憑いちゃって、全方位から光線出るくらい、まなざしを注がれてそうな女の子になってはいないもんかとは思ったんだけどなぁ。なかなかどうして上手くいかないもんです」
　そういって北川は肩をすくめると、ポリポリと頭をかいた。
「身を裂く淵の天塩川、身動きならぬ天満橋……か。止みませんね、雨」
「さすがにまずいな。ここで時間食ってるわけにはいかないんだ」
　往人は鬱陶しげに天を仰いだ。鉛色の空からはひっきりなしに雨粒が降り注いでくる。厚くたれ込めた雨雲は当分晴れる気配を見せない。
「ダッシュで行けば、ずぶ濡れ一歩手前で済むと思います。スパッと行ってスパッと片付けちゃいましょうか」
「そう……だな。悪いがよろしく頼む」

「御意。水先案内人のお役目、しかと承りましてございます」
北川は大仰に頭を垂れると、胸元からレーダーを取り出して画面をチェックした。スフィーを示す光点は依然として先の場所と変わらずに表示されている。
「うし、動いてないな。巳間さぁん!! 七瀬ぇ!! 今から国崎さんをスフィーの所に連れていくわ。すぐに戻ってくるからそれまで荷物頼む！」
「ちょ、ちょっと待ってよ！ あんた達本気なの!?」
「雨すごいのよ！ すっころんで泥まみれになってもしらないわよ！」
北川は晴香達に向かって叫ぶやいなや、森の奥へと駆け出していた。それに続いて往人が後を追う。たちまち晴香と七瀬の視界から二人の姿が小さくなって消えていった。
「こんな雨の中をねぇ……なんとも手の施しようが無いわね」
「同感。まったく救いようがないわね」
二人は顔を見合わせて深くうなずきあった。

688 反転芹香は輝く魔女？

「あくまでここに留まる事にした芹香だったが、かなりの時間がすぎ、苛立ちを隠せないのであった」
まるで、ナレーションをするかのように一人ごちる芹香。
「……まだ数十分しか経ってないわよ、そんなに早く雨が上がるはず……」
「スフィー。貴方魔法使いでしょう？ 魔法でとっとと晴れにしなさい」
理不尽な物言いはいらだっている証拠だろう。結界の中でそのような魔法が使える訳が無いのは芹香が一番良く知っているはずだった。
「そんな事出来るんならすでにして……」

「その触角は飾りなの？」
　勿論、触角（というか髪の毛）が魔法に関係が有る訳も無い。
「芹香さんだって……」
　魔法を使えるはずでしょう——と言う前に芹香は畳み掛けるように続ける。
「いい訳は聞きたくないわ。どうしても言いたいなら私を倒してからになさい」
（そんな、むちゃくちゃな……）
　声に出してもいないのに何故か芹香は聞きつける。
「何、その反抗的な態度は？　まあいいわ、今日のところは大目に見てあげる——来客よ」
　そう言って芹香の表情が引き締まる。
「窓の外に人がいるわ。スフィー警戒なさい」
　スフィーの体に緊張が走った。
「……いい、相手がドアを開けたところを、一気に取り押さえるわよ」
「……うん、わかった」

　二人はドアの横で息を潜めてその時を待つ……。
　二つの光点は相変わらず動いていない。二人ともあそこで雨宿りをしているのだろう。
「小屋が見えてきたな」
「ああ……」
　小屋の前に雨ざらしになっている土盛が三つ。それを目に留めた北川は数瞬目を閉じて祈った。
「……」
　その姿を目にした往人は複雑そうな表情をした後、北川に倣って死者の冥福を祈った。
「小屋の二人のうち、芹香って娘はかなり大人しいんですけど、スフィーって触覚娘には気をつけたほうが良いです。いきなり撃たれることは無いと思いますが……」
「ああ、わかった」
　ドアの前に着く。
「じゃあ、開けます。芹香さん、スフィー、俺だ、

きたが……ぐぁ!?」
　ドアを開けたとたん、鮮やかな膝蹴りが北川に見舞われた。
「シャイニングウィザード……」
　という言葉をつぶやきながら北川は倒れた。
　すかさずバックステップをして銃の照準をつける往人。一触即発の雰囲気に素っ頓狂な声を上げたのはスフィーであった。
「あー！　あんた、北川じゃないっ!!　それに、もう一人のあんたは……国崎往人!?」

689　転機、そして彼は

　朕深ク世界ノ大勢ト帝國ノ現狀トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ收拾セムト欲シ茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告ク。
　――。
　朕ハ時運ノ趨ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ以テ萬世ノ爲ニ太平ヲ開カムト欲ス。
　――。
　宜シク擧國一家子孫相傳ヘ確ク神州ノ不滅ヲ信シ任重クシテ道遠キヲ念ヒ總力ヲ將來ノ建設ニ傾ケ道義ヲ篤クシ志操ヲ鞏クシ誓ツテ國體ノ精華ヲ發揚シ世界ノ進運ニ後レサラムコトヲ期スヘシ。爾臣民其レ克ク朕ガ意ヲ體セヨ。

　朗々とした声が部屋に響き渡る。
　源之助の周りを取り囲むように、虹色の光が渦を巻き始めた。
　島に巻き起こる、常人には見えない不可視の嵐。魔法の力。魂の力。気持ちの力。それらの流れ。
「――――――――――――――!!」
　源之助の口から、呪文以外の言葉が発せられる。
　これから消し去らんとする神奈へ、どんな言葉を投げかけたのか。

不可視の風が集い、一つの大きな流れになった。
暗雲に、島と青空をつなぐ穴が開く。
『神奈ぁぁぁぁぁーーーーーーーーーー!!』

——カッッッッッ!!——

空で光が爆ぜ、島全体を閃光が包み込む。
全ての雲が吹き飛び、その後にはなにも無い青空が広がっているのみ……。

「まさかこんなことを考えていたとはね……」
担いでいた男を投げ捨て、彼はしばらくその場で考えをめぐらせる。
これからの自分の役割について。

690　産声

立ちのぼっていた土と雨が混ざった匂いがひどく不快だったので、七瀬彰は思わず眉を顰め、その果てなく立ちこめた暗雲と降り注ぐ雨に耐えながら、眼前に広がる道とも呼べない道を歩き出す。道ともいえぬ道——泥に塗れた森の中を最短距離で抜けようとするその行動には果たして冷静な思考があるのかどうか、今の七瀬彰には判らない。この道を通ったところで彰の目的までの道のりが短縮されるとも思えない。けれど彰は森の中、歩きづらい道の中を無理矢理に行く。
そもそも彰の目的とは何なのだろう。彰は自分が目的を見失ったことにまだ気づいていない。自分の目的は長瀬祐介と天野美汐とを、あの診療所に連れて行くことであった筈なのだ。自分の愛しい人の待つあの診療所に、自分が出会った優しくて強い二人を連れて行く。そのために自分はあの愛しい柏木初音を置いて診療所を飛び出したのだ。
けれど長瀬祐介と天野美汐はもう死んだ。彰の耳がまともな聴覚をまだ保持していて脳味噌に蛆が湧

いていないならば、確かに二人が死んだという放送を聞いたのは事実だと思う。結局会うことが出来ないまま失ってしまい、自分は確かに悲しみの感情を抱いたのだ。自分のような死に損ないがまだ生きていて、彼らのような希望の光が消されることに、彰は確かに憤りを覚えた筈なのだ。

なのにあの放送を聞いたとき、自分の瞼から雫が零れることは無く、ただぼんやりとした目つきで空を眺めるに留まった。それが不思議だった。

そのことはともかくだ。自分は今さっき目的を失った。そして診療所には自分の愛しい人を待たせている。もしかしたら彼女に危険が迫るかも知れない。それならば自分はすぐに診療所に戻るべきなのだろう。けれど彰の足は、診療所の方を向いているようには見えなかった。

彰の脳髄は壊れ始めている。

森を濡らす雨はそんな傷ついた脳髄にはひどく重い。冷たく濡らされた脳の中の世界は不愉快過ぎる。ずきりと痛む頭を片手で抱えながら、彰は小さく息を吐く。早く雨が止めば良いと思いながら、足を引きずって歩く。歩いて、歩いて、歩く。

自分は今防弾チョッキも拳銃も身に着けていない。なんとなく手に取ってきた小さなナイフがこの右手にあるだけなのだが、それでも不思議と『安全』を感じている。それは、もう交戦する意志のある参加者は殆どいない筈だという憶測だけが、根拠なのだろうか。

いや、彰だって心の何処かで気付いてはいるのだ。戦いがまだ終わってはいないということには。長瀬祐介と天野美汐が死んだ。それは誰かに殺された、ということに他ならない。まだ殺し合いを続けようとしている人間がいることは確かなのだ。

――だが。それでも彰は安全を覚えてこうして歩いている。ナイフ一本で拳銃やマシンガンに敵う筈がないのに、彰はそれでもこの危険な〝ひとり〟という状況を改善しようとはしなかった。この足は何

処へ向かっているのだろうか。愛しい人の待つ診療所に向かっているのだろうか。違う。自分の足はまったく違う方位を向いている。

立ち止まる。この状況を改善しよう、と彰はやっと思う。目的がなくなった今、こうしてひとりでいるのはやはり危険『なのかもしれない』。

彰はその曇天の下、方向を変えて歩き出す。診療所のある方向がどちらだったかだけをゆっくりと考えて、あとはただ茫洋として歩き出す。足取りはしっかりしているくせに、その顔つきにはとても安堵を覚えることは出来ない。

安全を感じていた理由など決まっている。彰は心の一番深いところで理解しているのだ、
ひとりでいようが、ナイフしか武器がなかろうが、凶悪な重火器を持つ気の狂った殺人鬼が現れようが、『自分が負けるわけがない』ということに。

それを、鬼、と便宜的に名付ける事にしよう。

今、七瀬彰の脳髄を侵蝕している鬼が願っている事は、今『鬼』が巣食っている彼——七瀬彰を、どうにかして堕落させる事だった。彼の身体を、鬼は支配したがっていた。

今はただ、七瀬彰の意識の底に潜むだけで構わない。その鬼はまだ産声を上げたばかりの赤子のようなものだ。赤子には睡眠が必須なのだ。彼の意識の一番深いところで寝息を立てる、今はそれだけでいいに決まっているのだ。ゆっくりでいい。七瀬彰をゆっくりと、鬼に染め上げていけばいい。

診療所に向かっていた彰がふと歩みを止めたのは、雨足が多少強くなってきたからだった。雨宿りも良いかも知れない、と思い、何処か適当な木陰を探し、彰は膝を崩してへたり込む。泥の色をした水溜まりの前に座り、そこから拡散する泥水の流れを見つめながら、彰は小さな息を吐く。

考えてみれば、診療所を飛び出してからの自分は、

どうもおかしかったような気がする。長瀬祐介と天野美汐の死を知って、なお涙すら流さなかった自分の頭は、やはり疲れきっているのかもしれないと思う。
――思考が落ち着いてきた今ですら、なお。
七瀬彰の瞼からは、水滴の一粒も落ちない。
彰は思う。きっとこの悪夢が終わって、もう少し時間が経ったならば――その時にこそ、やっと自分は彼らのために泣くことが出来るのではないかと。そう考えなければ、自分が自分ではないように思えてしまってならなかった。自分は大切な友達が死んで、涙すら流せないような人間ではなかった筈なのだ。
ぼんやりと空を眺め、彰は思考を停止する。森の深くからその曇天の空を見て、思考を停止していた彰の脳髄に浮かんできた事は、三年前――自分が未だ高校生だった頃の、ある日の思い出だった。
あの頃から非生産的で動くことが嫌いだった自分にとって、雨というものはひどく喜ばしいものだった事を思い出している。雨が降ってさえいれば、無理に外出する必要はなかったからである。好きな読書に時間のすべてを費やすことが許される。彰はだから、雨というものがすごく好きだった。
藤井冬弥や河島はるかといった活発な友人の事は心底好きだったたし、彼らに連れられて街中で遊ぶ事が嫌だったわけではない。彼らと一緒にはしゃいで楽しむ自分の姿は決して偽りではなかった。だが、雨が降ると心が穏やかになる自分が居るのもまた事実だった。晴れた日に図書館に行って借りてきておいた本を、雨を横目に読む事が好きだった。溜まっていた本を、雨の打つ音をＢＧＭに読むことが好きだった。
――あの日も雨が降っていた。美咲さんと出会った日の、あの休日の事だ。何故、あの日自分が朝っぱらから雨の中、市立図書館に行こうと思ったのか、今では覚えていない。思い出す必要も、無駄に理由

をつける必要もないことは判っている。けれど当時、自分はこんな自分の気まぐれにひどく真剣に悩む気質の人間だった。文学少年の定義とは、何も定義出来ないくせに何かを定義したがる無知な人間、といえるかも知れない。その定義の元で、自分は間違いなく文学少年の範疇にあった。

あの日自分が図書館に行かなければ、あの日澤倉美咲に出会わなければ、自分はどうなっていたのか。自分はあれほど狂おしい恋に落ちたのかどうか。

ともかく自分はあの日、雨の中、図書館の前で一人佇む澤倉美咲の姿を見たのだった。

黄色の傘と、休日だというのに真面目に着こなした制服を身にまとった澤倉美咲という人間が雨の中に存在している。ちらちらと腕時計を確認しながら佇む澤倉美咲の姿は、まるで絵画から切り出したように明瞭にそこにあった。

美咲さんはあの当時から有名人だった。

彰は以前に彼女が書いて賞を取ったという書評や短編小説を読んだ事があって、あまり周囲の事情に詳しくない自分でも、彼女のことはよく知っていた。文章書きになりたいと思っていた自分は、彼女の端正で丁寧で奥行きに溢れた文章に魅了されたものだ。天才とは、こういう人間のことを言うのだろう。

自分とは別世界にすむ人間だと思った。

だから、その日、図書館の前に立っている彼女を見た時、彰は少なからず動揺したのである。図書館は雨の中閑散としている。

——というか、誰もいなかった。

流石にこんな雨の日にわざわざやってくるような人間は少ないという事だろう。まあそれは仕方ない。——では澤倉美咲はここで一体何をしているのか。

ぼうっとしている自分の姿に気付いたのだろう。傘を少し揺らせて美咲さんはこちらを見ると、ゆっくりと歩み寄ってきた。

それは彼女が、初めて自分『だけに』微笑みかけた瞬間で、そして自分が彼女に魅了されつくした瞬

間だったのだと思う。この笑顔を、自分だけのものにしたい。才能に溢れたこの美しい人の、この美しい笑顔を、自分だけのものにしたい。
「あなたも、開館時間間違えたの？」
少し笑って言う美咲さんの声を聞いて、彰はようやく自分が開館時間を間違った事を悟ったのである。
「……間違えた、みたいです」
「あはは。実は私もなんだ。お互いおっちょこちょいだよね。……ごめん、気を悪くした？」
「いえいえ。あの澤倉先輩のドジなところを見れてちょっとだけお得な気分です、なんて」
「――あれ？　何で私の名前を？」
彼女のすべてを自分のものにしたい。
こんな風に思ったのは、多分、七瀬彰の人生で初めてのことだった。
そのことが縁で、自分と美咲さん、ひいては冬弥、由綺、はるか。そんな仲間の円が出来た。

――今はもう、なくなってしまった円。
あの雨の中、自分が外に出ようと思わなければ、この縁は生まれなかった。些細なことから始まった円は、もしかしたら自分が何もしなくても始まっていたのかもしれないけれど、その円の形はきっと違った形になっていたのではないだろうか。
美咲さんと過ごした日々がなければ今の自分は存在しなかっただろう。それを思えば、あの日の自分の行動には、やはり何かしらの意味が存在していたのかも知れないと思う。考えても仕方のないことを考えることが好きなのは、今も変わらない。自分はまだ文学少年のままなのだな、と思った。

――何故そんな事を今更思っているのだろうか。
何故。何故今、壊れきった円のことを、崩れきった縁のことを思い出しているのだろうか。
自分は訣別した筈ではなかったか。自分は彼らにさよならの言葉を告げた筈ではなかったか。日常は

変わりゆくものと諦めた筈ではなかったか。
日常とは変わりゆくものであるから日常なのだ。同じ日常など存在するわけがないのだ。そうやって吹っ切った筈なのに。何故。
何故？

雨。

木々の隙間を縫って雨が入り込み、自分の頬が冷たく濡れる。その冷たさで彰はふと思う。
僕の日常には、常に何処かしら雨の匂いがあったような気がする。雨が僕の日常の象徴だったのではないか、と今になって僕は思う。激しい雨と雷の音。まるで雨足は緩まる様子がない。木陰にいるとはいえ雨は今も容赦なく自分の身体を濡らしている。このままでは風邪を引いてしまう。ならばいっそ早く診療所に戻って休んだ方が良いのではないか。暖かい建物の中で休みたい。暖かな空間にいれば、自分はこんな風に思考の檻に閉じ込められないと思う。

愛しい人――初音にも会いたい。
そう、今自分が命を懸けてでも守らなければいけない人。早く帰らないと。震える身体を起こして、再び診療所に向けて歩き出そうとしたそのとき、彰は見た。森の影の奥に、初音と同じような亜麻色の髪をした女の姿を見たのだ。
「鹿沼、葉子さん？」
彼女はこんなところで何をしているんだろう。よく見れば足を引きずっているようだった。身体がまだ調子のよくないまま、どうして彼女はそうやって無理に行動しているのだろう。
止めなければ、という声が彰の奥底でした。
彰は小さく息を吸うと、その影が向かった方に足を向けて、泥水を跳ねとばしながら走り出す。
彰の心の底で、何かがゆっくりと目を覚ましている。便宜的に言えば『鬼が目を覚ましている』。
彰が走り出したのと同時に、象徴の雨は止んだ。まるで産声を止めて、眠りについた子供のように。

691　破損

　目を覚ますと、草の匂いがした。冷たい土の感触。身体が重い。
　身体を揺らす。ぐちゃり、と嫌な感触。服が濡れている。今の格好を考えるのは止そう。
　ともあれ、観鈴は目を覚ました。空に広がる、灰色の雲。雷鳴が聞こえてきた。
「起きたのね」
　と、そんな声。
　驚いて、振り向く。包帯だらけの女の人。天沢郁未だ。観鈴の横に座り込んでいる。
　目は虚ろ。死んだ魚のような目が、ふと、観鈴を見て、再び正面にむき直る。視線の先には何も無い。
「んと……」
　何を言うべきか。声を掛けづらい。話し掛けて、反応するだろうか？
　恐らくはしないだろう。何となく、そんな気がした。全身から漂わせる雰囲気。それは拒絶とも取れる。
　とは言え、何もしないわけにもいくまい。
「う、うぃっす」
　とりあえず挨拶。しかし、無反応。失敗。
　いや、反応した。観鈴の方に顔を向けた。そのまま、顔を戻すことは無い。綺麗な顔だった。
　しかし、その目は観鈴を見ていない。
　反射的に振り向いただけなのかもしれない。
　暗い――光を灯さない目。
　それでも、観鈴は続けた。見ていないからこそ、彼女は続けた。
「びしょびしょ、だね」
「――」
「こんな所にいたら、風邪引かない？」
「――」
　懸命に語りかける。それでも、彼女は返さない。

続けた。
「あそこの木陰に行こ？　ここにいると、寒いよ。それに、ねぇ、ここにいると危ないよ。誰がいるか分からないいし、恐い人が来ちゃうよ。あの、男の人とか――」
そこで、言葉が止まる。
郁未が観鈴を〝見ていた〟。光の消えた瞳に、再び、光が戻る。
だが、それは。何かが違った。普通ではない、何か。思わず、身震いする。
にやり、と笑った。おぞましい笑み。そうだ。あれは、狂気の光。
「あの男」。それが、彼女の〝スイッチ〟を入れたのか？
「望むところよ」
雷光が彼女を照らした。そして、鳴り響く轟音。
郁未が、ゆらりと立ち上がる。

のんびりとした少女の言葉で頭が醒めた。
そうだ。ここで呆けている場合ではない。『奴』を追うのだ。自分の元を去った、あいつを、あの人を。助けよう。助けねばならない。もし、出来ないのなら――殺さなければならない。
そう決めた。そう、約束した。
首を巡らせば、いくつか荷物が落ちているのが見えた。鞄が三つ。アサルトライフル。ショットガン。とりあえず、鞄を手に取った。誰の荷物だかは分からない。だが、背負えるのは一つだけだ。これでいい。
少年が行った方へ、歩き出す。足が痛い。それでも、歩く。痛い。
「ま、待って――」
声。引き留める声。無視して、歩く。痛い。
「待って。その怪我じゃ危ないよ！」
うるさい。
「ねぇ、落ち着いて――一人じゃ危ないよ？」

駆ける音。ぐしゃぐしゃと、水を踏む音。
腕を掴まれる。振り向けば、先程の少女がすぐ後ろにいた。怯えたような顔。それでも、使命感を帯びた顔。
にぱ、と笑う。苦笑じみた笑み。白々しく見えた。
「一緒に行こ。ね？」
「——」
「わたし、足手まといだったけど——でも、きっと、役に立つから」
「——」
そう言って、最後に、もう一度だけ笑った。今度は、寂しげな笑顔だった。
ふと、よく分からない感覚がした。ぞわり、と。何かが蠢くような。
右腕が伸びる。掴む。首を。ぐっ、という呻き声。少女のものだ。愕然とした顔。
「——うるさいわね」
意図せず、そんな声が出た。一瞬、誰の声かと疑った。紛れもない、自分の声なのに。
持ち上げる。少女は、軽かった。何となく、自分が笑っているのを感じる。感じる？
少女が、右腕を掴んでいた。抵抗のような、そうでないような。随分と非力だ。
そんな事に、笑っているのか、私は？　狂ってる……！
「随分とへちょい考えなのね。一緒に？　そんな事言って、私が貴女を殺さない保証があるの？」
どくん、どくん、どくん、どくん——
熱い。全身が昂揚している。血が巡る。不可視の力。それが、私を、狂わせている？
冷静な心。狂った心。冷静な自分が、狂った自分を見ている。不可思議な感覚。もう一人の、自分。
右腕を振るう。放り投げる。背中から少女は落ちた。叩き付けられた。
「笑わせないで」
抑揚の無い声で、私は言った。踵を返すと、森の

中へ足を進めていく。
心なしか、痛みが引いている気がした。
いや、違うか。痛みを認識しなくなっているのだ。
どうも完全に狂ってきているらしい。
狂っているのが分かっているのに、どうでもいい気がした。目の前の光景を、ガラス越しに見るような感覚。全てが歪みつつあった。少年を、あの人を、あいつを、『奴』を切っ掛けにして。そんなに脆かったのか、私は。
私の顔も、歪んでいるのだろう。ぎらぎらと、狂気を宿した目。裂けたように開かれた口。
それは、まるで、鬼女の様。
『――脆いものよの』
そんな声が、聞こえた、気がした。
少女が、まだ叫んでいる。
懲りないやつ。
聞かない、聞く必要などない。
それでも、彼女は泣きながら叫んでいた。
戻ってきて、と。

692　嵐、そして太陽

「もう一度、落ち着いてゆっくり言ってくれ」
「何度でも言ったげるわ。鹿沼さんが、あれだけひどいケガして寝込んでた鹿沼葉子さんが、いないの」
マナが息せき切って飛び込んできてそう告げると、耕一の眉がピクリと動き、初音の表情がみるみる不安そうなそれに変わった。
が、今にも外に走り出してしまいそうな勢いのマナに、耕一は比較的のんきな口調で言った。
「手洗いとかじゃないのか？」
「ん……そ、そうかもね。ちょっと確かめてくるわ」
パタパタとマナの姿が廊下に消えると、耕一は初

音にちょっと待っててね、と言い残して同じくドアから出て行った。
——程なくマナが帰ってきた時、耕一は既に居間に戻っていた。それこそ苦虫を噛み潰したような顔をして。
「ダメ、全部の部屋探してみたけどいなかった」
「出てったよ、葉子さんは」
「……はぁ？」
「彼女の部屋の窓からだ」
耕一はマナが一階を探し回っている間に二階の葉子の部屋を調べに行ったのだった。
マナは葉子の姿がないことに動転して気がつかなかったのだろうが、少し注意して見れば部屋にもともとあったカーテンがないのがわかっただろう。
そして、そのカーテンが細く裂かれ、それぞれ固く結ばれて、固定された窓の縁から外に向けて垂れ下がっていたことにも。
「そんな……なんだってそんなことする必要があるの⁉」
「気づかれたくなかったんだろ、俺たちに」
「どうして⁉」
「そんなこと俺に聞かれたって困るよ。……取りあえずちょっと落ち着け」
耕一にたしなめられ、マナは予想外の出来事に自分の頭が完全にヒートアップしてしまっていることをようやく認識した。
（この島でいろんなことがあって……ちょっとは成長したと思ってたんだけど、いざとなるとからっきしダメね）
こんな時だからこそ、いつでも冷静な思考を失わないことが大切なのだ。自分が苦手なことだけに、強く、そう思う。
そして、見た目によらず——と言っては失礼にあたるが——耕一を少しだけ頼もしく思った。もちろん死んでも口には出さないが。
「でも……鹿沼さんケガひどいんだし、わざわざそ

んな無茶してまで……」
「実際キツかったんだろうな、窓の下に人が倒れたような跡があった。……伝って降りる途中で落ちたんだろ」
「鹿沼さんっ……！」
そんなことを上でやっていたのなら——あまつさえ、ある程度の高さから落ちたりもしていたのだ、相応の物音もしていただろう——どうして自分は気づけなかったのか？
気づけていたら、あの状態の葉子をそのまま外に出すようなことはせず、何らかの相談はできたのではないか。そう、私たちは仲間、なのだから。
だが、その時、今もだが、外では凄まじい雷雨が降り続いており、その音で聞こえなかったとしても何の不思議もない。——忌々しい雨！
「……探しに行くわ」
マナはすっくと立ち上がった。
「こんな雨の中で鹿沼さんを一人で歩かせておけないもの。どんな事情があるにせよ、すぐにぶっ倒れちまうわ」
「一人で行くつもりだってんなら——」
「ストップ。私は一人で行く」
ピッと手で制して言いかけた言葉を遮ると、耕一は渋い表情で言った。
「意地張ってカッコつけてるとマナちゃんから死んじまうよ？　せめて俺が……」
「あの娘はどうするのよ」
マナはチラリと一瞬、初音に視線を向けた。
「どうしたって今のところ外よりはここの方が安全よ。あなたもわざわざ初音ちゃんを危険に晒したいわけじゃないんでしょ？」
「そりゃ、そうだ、けど……」
「で、あの娘がここにいるのなら当然あなたもここにいるわよね。一人にしとくわけにもいかないでしょうから」
「な、なら、俺が葉子さんを……」

「あなたが戻ってきた時、私と――私はこの際どうでもいいわ、初音ちゃんが誰かに襲われて殺されていたとしたら、あなたはそれに耐えられる？　できないでしょ？　だったら私に任せなさい。それが一番妥当な判断よ」
「……優しいんだよな、マナちゃんは」
耕一は歯噛みして、ほとんど泣きそうな表情で吐き捨てるように言った。
「だけど、凄ぇヤな奴だ……」
耕一の目の前に立つこの小柄な少女は、耕一にとって――例えば二人が崖から今にも落ちそうになっていた時、咄嗟にどちらに手を伸ばすか、というような意味で――自分よりも初音の方が大切な存在だということを知っている。
その上で、自分の身を敢えて危険に晒すような提案を耕一に呑ませようとしている。耕一が答えにくいのを、そして受け容れざるを得ないのを知って。
「ありがと。全然誉められてる気しないけど、せっかくだからお礼言っとく」
そうして部屋の隅の、小さくまとめてあった自分の荷物を取ると、顔のあたりでひらひらと手を振った。
「そんな葬式みたいな顔しないでよ。葉子さん連れて、さっさと戻ってくるからそれまで二人とも無事でいるのよ。……じゃ、ね」
そう言い残して、居間を横切り、窓の側を抜けて玄関に出て行こうとした時だった。
それまでずっと黙りこくっていた初音が、マナの服の袖を掴んだ。
「……伸びるから離して欲しいんだけど」
「私も一緒に行く」
マナは初音に向き直ると、その目をキッと見据えて言った。
「あのね、私に気を遣って言ってるんなら止めてちょうだい。……困るわ」
「ううん、そうじゃないの、あのね……」

初音は小さく首を横に振ると、ややためらいがちに言葉を続いた。
「……彰お兄ちゃんが」
「七瀬さん？」
「うん。……なんだか胸騒ぎがするの。彰お兄ちゃんが、呼んでる……ううん、ちょっと違う。なんて言えばいいのかな……」
――そう、泣いてる。泣いてるの。そんな感じがしたの。
本当はそう繋げたかったのだが、やめた。なんとなく、彰みたいないい大人に泣いてる、なんて言葉を使うのが失礼に思えたからだ。
「……それは鬼の血がそう言ってる……みたいな感じなのかな」
耕一が、腕を組んでぼそっと呟いた。
「そう……かも、しれない。でも、違う気もする……単に、何の根拠もないいんだけど、ただ胸騒ぎがする、みたいな……」
「胸騒ぎ、ね」
初音はマナの両手を取ると、自分の胸の前あたりまで持ってきた。今度は初音が見つめる番だった。
「だから、多分私は彰お兄ちゃんのところに行かなきゃいけないの。葉子さんを見つけるついででもいい。ただ……もしかしたら逢えるかもしれない、って、それだけでいいから……お願い、連れてって」
マナは測りあぐねていた。初音の言っていることが本気なのか。
それとも、自分一人危険な目に遭わせないための方便なのか。
これまで接した短い時間の中でも、初音が優しい子だということは充分マナにもわかっていた。
だからこそ、初音の言葉の真意が掴めないでいるのだった。
――しかし。
「わかった。俺も初音ちゃんも一緒に行く。決まりだ」

「ちょ、そんな、いきなりなんで……」
初音との付き合いの長さで言えば、耕一はマナの比ではない。
だから、耕一には初音の優しさがどの程度のものであるかがマナよりも遥かによくわかっていた。
少なくとも耕一の知る限り、初音はこの状況で気休めのウソをつくような子ではなかった。
「鬼の血ってんならちょっと怪しいんだ。この島ではなんか妙な結界が張られてて、鬼の力とかも薄れてるらしいからな。ただ、どんな結界にだって阻めない能力ってもんがある。それが——女の子のカン、特に恋する乙女ならなおさらだ」
初音の顔がポッと見る間に赤くなる。耕一がニヤッと笑った。
「だから、初音ちゃんの言葉は信用に足る。つまり、初音ちゃんには外に出かける理由がある。となれば——頼りにならないこともなさそうなナイト気取りの犬ころが一匹、ついて行っても悪いこたないだろ」
「まったく……」
肩を震わせて、必死に笑いを抑え込んでいたマナだったが、とうとう堪え切れなくなり、アハハと笑い出した。
「イヤんなっちゃうくらい……いい人たちなんだから」
「見りゃわかるだろ、初音ちゃんのこの天使のような顔に、俺のポルトガル人宣教師のような顔。慈愛に満ちてて、いかにも善人って感じだろ？」
「ぷっ……バカ言ってないの。それじゃ……本当に一緒に行くの？」
「おう！」
耕一が高々と右手を突き上げた時、サッと窓から一筋の陽光が刺し込んできた。
その筋はみるみるうちに太くなり、やがて眩しく輝く太陽と青空が覗いた。雨が止んだのだ。
幸先いいな、とマナは思った。そして——

雨で錆び付いていた物語の歯車は、ゆっくりと回り始めた。

693　死者からの贈り物

『プシーッ』
自動ドアの開く音に対して、柏木梓は身を構える。その音源の方を一瞥してから肩の力をふっと抜いた。そして声をかけようとして止めた。何かを言うことなんてできなかった……二人の顔を見れば御堂がどうなったかなんてことは、聞かなくてもわかってしまったから。
沈黙という空気をまとわりつかせた二人が、梓の方に向かって俯き加減でゆっくりと歩く。二人とも目を赤く腫らし、涙を流した痕を残していた。しかし、瞳はそのことを乗り越えた意志のある輝きをもっていた。
二人が同時に梓に気づく。柏木千鶴はゆっくりと首を横に二回振ってから梓から視線を外した。月宮あゆはそのいたいけな瞳でじっと梓を見つめている。そして月宮あゆは言った。
「おじさんの分までがんばろうね！」
知らなかった。彼女はこんなに強い娘だったんだ。
「おう！」
梓はその言葉に後押しされる思いであった。
「それで、あなたたちの方には何も起きなかったかしら？」
「何もなかったっていうわけではないよ」
「何があったの？」
「ん～、かくかくしかじかで、今詠美がコンピューターに向かって四苦八苦してるところ」
千鶴たちがいない間出来事をざっとかいつまんで説明する。
「ふ～ん、そう」
千鶴はため息をひとつついた。ここにきてこれま

での疲れが出たのだろう。
「そのＣＤの中身の確認っていうのはすぐに終わるのかしら？」
「さあ、どうだろう？　あたしはコンピュータのことなんてからっきしだからなんともいえないけど、詠美のと繭の分に加えてあの白衣着たおじさんもＣＤを持ってたから計三枚ものＣＤの中身を見なくちゃいけないんだ。それなりに時間がかかると思うよ？」
「そう。それじゃあそれが終わるまで少し休んででいいかしら？」
「いいんじゃない？　解析が終わったら、どうせまたすぐに動き出すだろうし、体力を回復しておかないとね。それにしても千鶴姉、これくらいでバテるなんてもう歳なんじゃない？」
そう言って手を口に当て、ぷぷぷっと笑う。それに反応して千鶴の眉がわずかに顰められる。
「え、千鶴さんっていくつなの？」
あゆが無邪気にそう尋ねると同時に、辺りには殺気というか邪気というか悪意というかなんともいえぬ代物が漂ってきている。
「いくつにみえるかしら？」
にっこりと顔を微笑ませながらそう尋ねる千鶴であったが、目は笑っていなかった。
「えーと、秋子さんと同じくらいかな？」
ズンッと得体の知れないプレッシャーに梓は押しつぶされそうになる。
(助けてーっ、耕一！)
思わず、心の中で助けを求める。
「あ、そういえばボク、秋子さんの年知らないや」
そんな雰囲気をものともせずに、さらにあゆは続ける。
「秋子さんみたいに綺麗だから、とっても若く見えるよ」
「そ、それは……」
フォローになってないとつっこみたかったが、先

ほどの得体の知れぬ何かが梓にそれ以上言葉を発することを許さなかった。先刻とは違った沈黙を強いられる。奥の方からは動物達が危険を知らせ合うかのような騒ぎ声も聞こえてくる。
「うふふっ、企業秘密ですよ」
　周りの空気があたかも氷解するかのごとく、緊張が解けていった。

「じゃあ、あたしは詠美のとこに行くから、あゆも休んどきなよ？」
　そう言い残してから梓は部屋の奥に向かおうとして振り向くと、いつの間にか繭が悲しそうな顔でエプロンドレスのすそを握っていた。
「どうしたんだ、繭？」
「みゅー、おなかすいた」
「えっ……食べ物ってまだあったかな？」
「うぐぅ、ない」
「詠美がもしかしたら……ってあいつにそんな計画性あるわけないか」
「みゅーみゅー！　ハンバーガー！　みゅー！」
「ああ、はいはい。わかったから暴れない、暴れない」
　じたばたする繭を優しくなだめる梓。それを見てあゆが一大決心をするかのように言う。
「よし、ぼくにまかせて！　ぼくが何か食べられる物を探してみるよ！」
「お、気が利くね。それじゃあ、悪いけどよろしく頼むよ」
「うん。繭ちゃん、少しの間待っててね」
「みゅ〜♪」
　意気揚々と探索を始めたあゆを尻目に、繭を引き連れ詠美のところまで戻ってきた。まるで嫌なことを頭の隅に追いやるかのように、ディスプレイに必死でしがみついている彼女の姿を見やる。
「どう、進んでる？」
「ふみゅーん。ちょっとわかんないかもー。で、千

鶴さん達は戻ってきたの？」
詠美は梓のほうを振り返らずにそう聞く。
「う、うん。それでさ、詠美に言わなくちゃならないことがあるんだけど……」
「……したぼくの事でしょ。わかってるわよ。あの状態から元気に復活しましたっていう方がブキミなんだから」
再びあの沈黙が場を支配する。繭がどうしていいかわからず、梓と詠美の間をおろおろと往復している。そして繭が三往復目を終えた瞬間、詠美が『バンッ』と目の前にあったキーボードに両の手のひらを叩きつける。
「あいつの分まで絶対生き残ってやるんだから！」
詠美の悲痛な叫びであった。それを聞いた梓は背後から優しく詠美を抱きしめてあげる。
「うん」
それを見た繭は遊んでると勘違いしたのだろうか。かまって欲しそうに、二人に抱きついてきた。

「みゅ～♪」

「ごっはん～ごっはん～♪　た～いやき、た～いやき～♪」
あゆは先ほど宣言したとおり食べ物を探していた。そして、その任務はあっけないほど簡単に成功してしまった。隣りの部屋が簡単なキッチンになっていて食事が摂れる場所になっていたのだ。ここにいた長瀬源五郎が使っていたのだろう。
「あ、冷蔵庫がある。食べ物も入ってる！　勝手に食べちゃっても……いいよね？　誰のか知らないけどいただきます」
一応断りを入れてから、冷蔵庫に入っていた食材を取り出していく。
「さ～て、ここで秋子さん直伝の料理の腕を披露しちゃおうかな」
と、意気込んだのはいいのだが、肝心の調理器具がまったく見当たらなかった。それもそのはず、こ

このキッチンはメイドロボ以外は使っておらず、調理器具は彼女らの体に内蔵されていたからである。
「うぐぅ、どうしよう……」
そこであゆはあることを思い出す。
「あ、そうだ！　ぼく、ナイフを拾ったんだった」
すかさず彼女は自分のかばんを漁り、目的の物を取り出した。
「あった、あった。拾っておいてよかった」
しかし、そのナイフには毒が塗られているということを、彼女が知る由もなかった。

694　それぞれの勇み足

くくく……。
こんなチャンスはもう二度とないかもしれぬ。
たった一人の雌。
彰の心に力を送る。刺激するのは性欲。
『象徴の』――雨は止んだ。代わりに彰の心には『無』が広がる。
決して雨が止んだからといって、晴れるとは限らないのだ。
記憶改竄なんぞでちまちまやっている必要は無い。
ここが力の使い時だ……。
残りの力のほとんどを使った。
一度目の失敗の反省を糧としない、本能剥き出しの鬼がここにいる。
そして眠りについた。起きたときには状況が好転していることを信じて。
――これは心の鬼の勇み足――

意志無き表情の彰が一歩を踏み出した。
その時。
――カッッッッッ!!――
天空で光が爆ぜた。
ほんの一瞬。他のことに気を取られていれば気づかないほどの一瞬。

「うわっっ!!」
だが確かな閃光が島を包んだ。
「なんだ!?」
彰は空を見上げる。先程まで空を埋め尽くしていた雲は掻き消えて、一面の青空が広がっていた。
「一体何が……?」
しばし呆然とそれを見つめ。再び地上に視線を戻す。そこには動揺に呆然と立ち尽くす鹿沼葉子の姿。
「葉子さん!!」
――これは彰の勇み足。ではない――

力の奔流、そして閃光――
体なにが起きているのだろう。
私はしばしその場に立ち尽くす。
「葉子さん!!」
ハッとしたように彰の方へと向き直る。
彼は……。

そう、小さな女の子と一緒にいた男だ。と彼女は気づく。
「こんな所でなにしてるの？　怪我は大丈夫？」
「はい、大丈夫です。私を治療してくれたんですよね、ありがとうございます」
「お礼ならマナって娘に言ってあげてよ。僕は何もしてないから。後、お礼と言えば、さっきは助けてくれてありがとう」
「いえ……無事だったみたいで良かったです」
脳裏に過る高槻との戦闘。あの少女も無事だったのだろうか。
「それより、一人でどうしたの？　武器も持たずに……」
なにをしようとしていたんだっけ？
なんで武器も持たずに駆け出したんだろう？
葉子は少年のことを思い出した。あの時彼がやる気だったら……。
ずいぶん軽はずみな行動をとっていたものだ。今

の自分に一体なにができるというのだ。
――これは葉子の勇み足――

「なるほど、それで居ても立ってもいられなくなって、黙って飛び出してきたわけだ」
彰は渋い表情。
考えてみれば、彼も軽はずみに外に飛び出した口なのだ。
「さて、ここで愚図っていても始まらない。一旦皆のところに戻るとしようか」
「はい」
彰は自分の心に住まう鬼を覚えていない。
記憶や映像の改竄も気づいていない。
そう。『皆のところに戻る』
これこそが。
――これは彰の勇み足――

695 新たなるボケ役？

雨の中ずぶ濡れになって死体漁り、今のうちにやってないと雨が上がってからが恐いからだ。
ナニかが漂いそうで。
「そっちの死体は何か持ってた？」
「変な携帯電話みたいなやつだけよ、メモみたいなものは無いみたいね」
北川達が出発してからすぐ本来の目的である高槻の死体を調べだした。
もっとも確かな成果があったわけでは無いが。
「とりあえず北川が言ってた小屋に向いましょう。これ以上は何もなさそうだし」
全く北川もいい度胸である、この乙女たる私に死体漁りをさせるなんて。
晴香の方の同じ意見のようである、次の行動は決

まった。雨宿りついでに北川を――。
などと話しているとすぐに小屋は見えてきた。往人と女の子二人の姿も見える。
何故か入り口で北川が股間を押さえて痙攣しているが。
「あの馬鹿。まさかセクハラでもやった――」
私の言葉は閃光によってかき消された。

北川が痙攣している、他の三人は険しい顔をしている。
その上、晴香まで険しい顔をしだした、おまけに今の閃光。
気まずい沈黙、小屋に響くのはただ北川の呻き声のみ。
「ここで顔色変えてる人は、みんな今の力の奔流を感じ取ったらしいわね」
「参加者名簿の中には、あんな強力な奴のことなんて載ってなかったわよ」

「参加者じゃないもの。長瀬源之助、管理側の人間よ」
「あなた、何か知っているの？」
「……」

先ほどの閃光の後、皆さんは必死に討論していて、私と北川は置いてきぼりを食らっています。
しかも、何故か国崎さんは私をじっと見詰めてきます。
やはり私は罪作りな乙女、また新しい男を虜にしたようです。
でも、タイプじゃないので却下、北川の看病でもしておこうかと思います。

目の前では不可視がどうとか結界がどうとか禁呪がどうとか色々と話し合っています。
けれども、私には理解できない話なので北川に膝枕してあげてます。

看病するために膝枕してあげる、やっぱり私って乙女ね。
横の変な視線が痛いけど、やはり私を狙ってるのでしょうか？
とりあえず晴香が見つけた携帯電話でも調べてみますか。図鑑で見た気がするし。
こんなことなら診療所の本棚に図鑑置いて来るんじゃなかったな。
とか何とか考えてると国崎さんが私の方に近づいてきた。
もしかしてこれは、乙女のピンチ？
「その探知機を譲ってもらえないか？」
「へ？」
「その手に持ってるやつだ。北川から譲ってもらう事になってるんだ」
私は何か勘違いしてたのでしょうか？　ボケは北川の仕事だったはずなのに。

696　それぞれの目的へ

「本当に別々に行動するの？」
あの後スフィーちゃんと芹香さんは別々に行動すると言い出しました。
「私の方はこの人にどうしても用があるからね」
「何の用かは知らないが、とりあえず歩きながら話してくれ。俺は今すぐ出発したいんだ」
「それは私も同感、じっとしてるなんて性に合わないわ。まずはどっちを探す気？」
「最初は観鈴、その後に晴子だ」
「じゃあね。二人見つけたら合流するから」
そう言うとさっさと二人は出発していった。
「俺は今から診療所に向うよ。その後はＣＤによるな」
「私はお墓参りして、ＣＤの中身見たら住人さんが見た夢が気になるから西に行くと思う」

「何でCDに興味持ってるんだ？　信じてなかったのに」
「機会があれば話すわ、さっさと出発しましょう。また会いましょうね」
「ちょっと待てって、じゃあまた診療所で会おう」
こっちもやけにあっさり出発していった。腰を引き気味の北川が少し情けない。
そしてまた晴香と二人っきりになってしまった。
「じゃあ私達も出発しますか」
「今度こそ寄り道せずに潜水艦を見つけましょうね」

彼らはそれぞれ目的のため分かれた。
大切な人を捜すため、脱出の鍵をCDにかけ、自分の勘を確かめるため、亡き人の言葉を信じて。
彼らがまた再会することができるかどうかは分からない。
ただこの島の象徴たる雨は止み、雲は晴れたことだけは確かであった。

697　碁石

「新規データを受信いたしました」
「参加者データを更新いたします」
メイドロボの無機質な声を聞いて、ぱちりと目を開ける。
人は起きた瞬間から、はじめて自分が寝ていたことを理解できる。
そう。私は、まさに寝てしまっていた……ようだ。
楓ほどではないけれど、血圧が高くないせいだろう。起きがけは少々頭の回転が鈍る。
しょぼつく眼をしばたいて、コンピューターに囲まれた円形の一室を見回してみた。
すぐに違和感を覚える。
(……人の気配が、しない)
あの口うるさい梓や、負けないくらい騒がしい詠

美ちゃん、ときおり奇声をあげるあゆちゃん、負けないくらい奇声をあげる繭ちゃん。そんなかしましい面々が揃っているにも関わらず、誰ひとりとして声を発していなかった。奇跡と言ってもいいだろう。とにかく、静かだった。
ほとんどすべての機械が放つ冷却機の運転音だけが、不快なコーラスを奏でて、わずかに静寂を乱している。
（……おかしい）
全員がここに揃っていたはずなのに、私を置いてどこへ行ってしまったというのか。
鈍った思考では付いて行けないほどの急展開に、焦りを感じて頭を振る。立ち上がり、深呼吸をした、その瞬間。
端末の画面に向き合うように座ったたまま、だらりと手を垂らして伏している誰かが見えた。
（……詠美ちゃん⁉）
駆け寄り、姿を確認すると、やはり彼女だった。
あとは探すまでもなく、他の面々が視界に入ってくる。詠美ちゃんの使用する端末の座席に、もたれかかるようにして倒れている梓。そのまた後から、折り重なって倒れた繭ちゃん。加えて烏。さらに猫。
少し離れて、あゆちゃん。辺りには、黒い何かが散らばっている。
（……碁石？）
銀色のトレイがひっくり返っており、そこを中心に黒い固まりが拡散していた。
一つ、拾ってみる。匂いをかぐと、炭のような臭いに混じって、かすかにアーモンドの香ばしさが感じられる。ひょっとしたら、食べ物なのかもしれない。
直径二センチ程度の碁石状の何かを、齧ってみることにする。
「ち……千鶴姉っ！　それを食べたら駄目だっ！」
ごっくん。
苦しげな梓の声を聞くと同時に。

わたしは、碁石を飲み込んでしまっていた。
あれは、かなり怒っている。わずかだが、千鶴姉の白い額に青く血管が浮いてるのが見て取れた。これは間違いなく、危険な兆候だ。
……怒っている。
あたしたちは、この椅子だらけの部屋で、なぜか冷たい床の上に正座をして、小さくなっていた。正確に言うと、繭と動物は倒れたまんまだけど。
「……つまり、こういうことなのね?」
千鶴姉が、努めて怒りを抑えながら、状況を確認しはじめた。
『じゃーん! クッキーだよっ!』
四枚あるはずのCDのうち、二枚は手元にあったので、解析はそこから始めた。ほぼ可能な限りの調査が終わったと考えた頃、あゆがクッキーと主張する何かを持ってきていた。
『……なんだこれ』
『……碁石?』
詠美と二人で呆れ果てる。
『うぐぅ、ひどいよっ! ちゃんと甘いしアーモンドも入ってるんだよっ!』
確かに、そのような臭いがするような気もしないでもない。
……だが本質的に、これは炭と分類するべきだ。
『碁石と言うより、炭だな』
『碁石でいいのよ、だってコレ、かたいわよ』
驚くべき事に、詠美は文句を言いつつ齧ってみていた。
ふと視線をずらすと、あゆが涙目になっている。
(あちゃ……。あたし、こういうのに弱いんだよなー……)
動揺に流されるまま、空中に泳がせた視線が、詠美と合う。二人同時に、決意と観念の頷きを交わす。
(ああ、そうだ。詠美だけを彼岸の地に逝かせるわ

けにはいかない！）
覚悟を決めて、あたしも齧る。
『うわっ……硬っ！』
たいやきより先に、あゆには教えてやるべきことが山積みだな、と考えながら。あたしは、炭を飲み込む事に成功した。
……あとは見ての通りだ。
どういうことか、全員が意識消失してしまっていた。
文字通り、彼岸の地に逝くとこだったよ。
（結局、みんな食ったのか……）
自分も含めて一人残らずお人好しとは、恐ろしくもおめでたい一団すぎて涙が出るね。
千鶴姉の説教のもと、真実は解き明かされた。
原因はやはりクッキー（注：作者自称）。
生地の切り分けに使った刃物に、何かが塗られていたようだ。

（ねえ、梓）
千鶴姉に説教されながら、詠美が肘でつついてくる。
（一つだけ聞きたいんだけど）
（なんだい？）
（どうして、さっき食べたはずの千鶴さんは……倒れないのよ？）
そういえば。
いまや絶好調の演説をかます千鶴姉に、昏倒の気配はちらりとも見えない。
……地獄の釜か、鉄の胃か。
きっと、謎な料理は千鶴姉に効果がないのだ。
（なあ、詠美）
（……その悟ったような表情はなによ）
（蛇や河豚が、自分の毒で死ぬか？）
（……うぐぅ。ボクは河豚じゃないよっ）
（（そういう問題じゃないっ！））

思い起こすと、いつだか怪しいキノコを食ったときも、効果がなかった。
裏の裏は表だから、効果がないように見えただけだと、その時は思っていた。
(懐かしいなー、セイカクハンテンダケだっけ？あの時は、初音が豹変しちゃって大変だったよなあ)
(豹変……？)
その単語にちょっとした引っ掛かりを感じ、伏せていた顔を上げる。千鶴姉の後ろで、まだ倒れている動物と……繭が見える。
何かがカチリと音を立て、ぴたりと一枚の絵が出来上がったような気がした。思わず立ち上がり、叫ぶ。
「千鶴姉！　セイカクハンテンダケだ！」
「お座りなさい梓！」
「はいー……」
繭、あんたの豹変の原因が、わかった気がする。

とりあえず、千鶴姉の説教が終わるまで、おあずけのようだけど。
(あのー……梓さーん)
ぽややんが遠くから小声で呼んでいる。
(CD二枚分の解析、だいたい終わりましたけどー……)
ああ、悪かったね。
あたしたちが寝ちまったから、結局あんた一人でやってたんだね。
でも、だめだ。
あんたの結果発表も、千鶴姉の説教が終わるまで、おあずけだよ。

698　**そしてここから始まるストーリー**

「ん？　ここはどこだ？」
気がつくと俺は草原にいた。

おかしいな？　いつの間にこんなところに来たんだ？
何か記憶が曖昧だ。
落ち着いて思い出してみよう。
確かあのあゆとか言うガキが作った碁石（本人曰くクッキーらしい）を食べたところまでは覚えているんだが……。

バッサ、バッサ。
その音で空を見上げるとそこにはそらがいた。
「おう、鳥。ここがどこだか分かるか？　確か俺たちゃ建物の中に居たはずだよな？」
「ええ」
「それが何でこんなところにいるんだ？」
「私にも詳しいことは分かりませんが、私が人間から話に聞かされた【死後の世界】という所かもしれんませんね」
「何⁉　じゃあ俺達死んじまったってのか⁉」
「可能性はあります。あの碁石のような物に毒物が付着していたのかもしれませんね」
「クソッ！　こんなことで死んじまうとは情けねぇ！　これじゃポテトの野郎に笑われちまうぜ！」
「全くだな。情けない」
後ろから声をかけられた俺は驚きのあまり声も出なかった。
それはこの世に存在するはずのないヤツの声だった。
「ほう。あなたがここに居ると言うことは、やはりここは死後の世界というやつのようですね」
「ああ。ま、正確に言えばその入り口だけどな。それにしても……情けないな、ぴろ」
「何だと！」
「フン。情けないヤツを情けないと言って何が悪い。それでも俺が生涯唯一認めたライバルか、貴様は」
「この野郎、言わせておけばいい気になりやがって！　丁度いい！　ここで決着つけさせてもらう

ぜ！」
「断る」
「おい！　逃げる気か！」
「今の貴様と勝負する気は無い。第一貴様らにはまだやるべきことがあるはずだろう？」
「ポテト！　お前、何さっきから訳の分からねぇこと言ってやがる！」
「落ち着きたまえ、ぴろ君。ポテト君、我々はすでに死んでしまった身だと思うのだが？」
「ああ、そのことだがな。お前らはいわゆる仮死状態ってやつになってるだけだな」
「何⁉　じゃあ俺達まだ死んでないの⁉」
「ま、そういうこった」
「そういうことか……。ん？　そう言えば、ポテト。お前さっき変なこと言ってたな。やることがまだあるとか何とか。ありゃどういう意味だ？」
「どういう意味も何も言葉通りだ。お前、そんなことも分からないのか？　やっぱり馬鹿だな」
「テメェ！」
「いいか？　お前らは俺と違ってまだ生きてるんだ。この俺が命張ってあの人間どもを守ったんだ。お前もそのくらいの根性見せてこい、ぴろ！」
「……」
「貴様との決着はその後でゆっくりつけてやるよ。まぁ、俺が勝つに決まってるがな」
「ポテト！　その言葉後悔するなよ！　今度会うときにはきっちりぶちのめしてやるからな！」
「ああ、せいぜい楽しみにさせてもらおうか」
突然周りの世界がぼやけてきた。辺り一面に霧がかかったみたいでポテトの姿もはっきり見えなくなった。
「何だ⁉」
「どうやら時間のようだな。あ、そうそう。もう一つ頼みがある」
「……彼女のことですね？」

「ああ。さすがだな、鳥。話が早い。あいつのこともよろしく頼むぜ」
「ケッ。相変わらずお人好しなヤツだな、お前は。死んだ後まで面倒かけやがって。まぁ、このぴろ様に任せときな」
「ああ、頼んだぜ、相棒」
その言葉を最後に俺の意識は光の中へと消えていった。

『……ん？』
『やぁ、ぴろ君。気がついたみたいですね。どうやら元の世界に戻れたようですよ』
『ああ、どうやらそうみたいだな』
そこは気を失う前と同じ景色だった。あっちの方では人間どもがわめいてやがる。
全くうるせえやつらだ。
『……何やってるの？　あなた達。こんなところに倒れ込んで』
『あぁ、それは色々と訳が——って何でお前がここに居るんだ!?』
『やぁ、新入り君。どうやら私達の後を追ってきたようですね』
『……』
『どうやらその様子だとポテト君が死んだこともご存じのようですね』
『……来る途中で、見つけた』
『そうか……』
『……だから言ったのに。仲間なんて薄っぺらいって』
『おい！　何て事言いやがる！』
俺は思わず叫んだ。
『お前にあいつの何が分かる！　あいつはあいつが仲間と認めた女をかばって死んだんだ！　それを否定することは許さねぇ！』
『……』
『まぁまぁ、ぴろ君。落ち着いて』

『これが落ち着いてられるか！』
『彼女もそのことは分かってるはずですよ。でなければ私達を追ってここまで来たりはしないでしょうから』
『……』
『新入り君。何が君をそんな風にしてしまったのかは私には分からない。でもいい加減自分の殻にこもるのはやめたらどうです？』
『……でも、きっとみんな私の側からいなくなる。現にあの人も居なくなったじゃない』
『確かに彼、ポテト君は死んでしまいました。でも彼はあなたのことをとても心配していましたよ』
『……え？』
『ああ、俺達はあいつにお前の事を頼まれたんだよ』
『……どういうこと？』
『どういうことも何もそのまんまの意味さ。ま、そういうわけだからさ、お前が嫌がっても無駄だぜ』
『悪いですけどそういうことです、新入り君。野良犬にでもかまれたと思って諦めて下さいな』
『お！　上手いこと言うな！　ハハハ！』確かにそうだ！　犬に頼まれたからな！
『別にそういう意味で言った訳では無いのですけどね。まぁいいでしょう』
『……』
『ん？　どうした？　新入り？』
『……ぽち』
『ん？』
『私の名前。そんな変な呼び方しないでくれる』
『ああ、んじゃ改めてよろしくな、ぽち』
『……イヤ。誰があなたたなんかとよろしくするもんですか』
『ああ！　そりゃどういう意味だ！』
『どういう意味も何も言葉通りの意味よ』
『テメェ！』
『フッ。どうやら彼女も吹っ切れたみたいですね。

これで君の頼みは叶えましたよ、ポテト君』
(なあ、あの動物達何騒いでるんだ？)
(知らないわよ！　そんなこと！)
「そこの二人！　真面目に聞きなさい！」
「「はいっ！」」

699　沈黙

ソコは沈黙が支配していた。聞こえるのはただ風の音のみ。小屋の前に作られた三つ並びの十字架の前で黙祷するスフィー。そして、それを離れたところからただ見守るだけの北川。
やがて、スフィーは立ち上がって歩き出す。その後をついていく北川。
「ありがとう」
ただ一言、それだけで充分だった。二人は同じ傷を持つ者だから。

静かだった、拍子抜けするほど静かだった。
二人の話ではかなりの人数が寄り添って過ごしている筈なのに全く人がいなかった。
「誰かに襲撃でもされたのかな？」
「それはないと思うぞ。争いの形跡は無いし、荒らされた様子もなさそうだし」
水や食料、アイテム図鑑にパソコンを置いていっている事からまた戻ってくる気だということは簡単に想像できた。
全部の部屋を見たがやはり隠れている人や留守番をしている人は見つからなかった。
正直、ベッドに生々しい痕跡のある部屋を調べるのはちょっと抵抗があったが。

ソコは沈黙が支配していた。聞こえるのはただパソコンの動作音のみ。パソコンの前で悪戦苦闘する北川、そして、離れた場所でその様子を静かに見ているスフィー。

二人の頭の中にはただ一つの言葉がよぎっていた。
『誰だが知らないが（けど）、後始末ぐらいしろよな（てよ）』
この沈黙はＣＤが解析できるまで続きそうだ。

700 選択

「おや、目覚めましたね」
「……！　……!!」
「……やはり、祐介君を殺した事が僕を狙う理由だったんですね」
「……」
「そういう恨みがましいこと言わないでください。一応、僕はあなたの命を救ったんですから」
「……」
フランクが覚醒した場所はベッドの上だった。だが、布団は敷かれていないために板張りの上に寝かされていた。
辺りを見渡すとカーテンで仕切られて視界が遮られている。そして、消毒液のアルコール臭が鼻をつく。フランクはここがどこかと少年に聞いた。
「ここは『学校』と呼ばれるところです」
「……」
フランクは得心した。だが、別の疑問も浮かぶ。
「……」
少年は少し笑みを浮かべて答える。
「まあ、確かに骨の折れる仕事でしたが……。医療機器があるところは他に知らなかったんです。それと決別です」
「？」
そう言って少年は笑みを消す。そして、今までのどこか余裕ある態度を無くして小さく呟く。
「ここでね、少女が死んだんですよ、埋葬したのはつい先ほどですが……」
「!!」
フランクの目が大きく開かれる。それは無論、死

者がいたところに寝かされていたからではない。
「その子は、心臓を患っていました。それでも必死に生きようとしてましたよ……。でも、参加者の一人に殺されてしまった」
「……」
そして、二人の男は目を瞑る。かつてこの部屋で死んだ少女に黙祷を捧げているようにも見えた。
管理者といえどフランクも人の子であった。人の死を悲しみ、悼む心も持っている。そう思う心はこの殺人ゲームを管理することが決まったとき、本人は捨てたと思っていたのだが……。
そして、しばらくして、また少年が話しを続ける。
「僕はそいつが憎かった。彼女の敵をとってやりたい、そうも思った。だけど、そいつも死んだようです……」
「……」
「そして、僕は悟りましたよ。たとえ、人殺しでも、参加者は皆、被害者であると。真に恨むべきは……」
そう言って少年は身にまとっていた偽典をフランクに向かって投げつける。
「管理者だと」
少年の手から放たれたものは、フランクの頬を浅く切りつけ背後の壁にささった。
「だけど、あなたを殺したりはしません。あなたは責任をとらなければいけない。この島に死んでいったすべての人々に対する責任を」
その言葉に対してフランクは首肯する。言われるまでもないと。
もはや、フランクに少年を殺せる好機は来ないだろう。ならば、生き恥をさらしても死んでいった者たちへの責任をとるのが役目だと、フランクは思った。
少年は話を続ける。
「高槻を含めた管理者を打倒する。そして、この馬鹿げたゲームを終わらせる。それだけに邁進してれ

ばいい。そう、思ったんですけどね。そうはいかなくなってしまったんですよ」
「？」
「植え付けられた疑似人格。それが消えてしまったからです」
「……！」
フランクの額に玉のような汗が浮かぶ。少年が言ったことが真実ならば、事態は最悪の方向に転がっているからだ。
「それともう一つ。今となっては神奈を守るために手段を選んではいられなくなりましたからね」
「……？」
いぶかしげな顔をするフランクを一瞥して、少年は言葉を繋げる。
「あなたが気絶している最中に、大きな魔法が発動しました。おそらく、神奈を誅するために」
「……!?」
「ええ、神奈は生きていますよ。僕が生きていることがその証拠です」
フランクはうつむいて、そうか、と呟いた。そして、その目から涙がこぼれ落ちる。
「残念でしたね。何人もの人々がこの島で殺し合い犠牲になったのも全部神奈を滅ぼすため。そのすべてが無駄になってしまったのですから」
その言葉を聞いたとたん、フランクは立ち上がり少年にくってかかる。胸ぐらをつかみ、少年を持ち上げる。少年はこの重病人にこれだけの力があるのか、となぜか感心した。
「……！　……!!」
フランクは早口でまくし立てる。この男がここまで饒舌になるのか、と少年は場違いなことを考える。
やがて、落ち着いたのかフランクは少年から手を離した。しわくちゃになった襟元を直しながら少年は言う。
「それでですね、今までのことを踏まえた上で、一つお聞きしたいことがあるんですよ」

「……」
「まあ、そう言わずに。聞いておかないと後悔するかもしれませんよ？」
「……」
フランクは憮然としながらも頷く。
「じゃあ、言いますよ。僕はこれから参加者の中で魔法を使える人を捜そうと思いましてね」
フランクの顔に緊張が走る。
「それで、管理者のあなたなら知っているでしょう？　僕も参加者のことは大会前に少しは教わったのですが、魔法に関しては教えてくれなかったので」
少年をジョーカーとして参加させるにあたって参加者の情報をリークしたが、管理者側は万が一を考えて魔法の使い手の情報だけは伝えなかった。それは、神奈に対抗するのにもっとも有効な手段が魔法であるからだった。もし、少年が疑似人格を失えば魔法使いを狙う……。その管理者の危惧が現実のものになった。
「……」
フランクは首を横に振る。当然だ。
「そうですか……。残念です」
少年は落胆しているように下を向いた。だが、それが演技であるというのはフランクの目にも明らかであった。
「では、仕方がありません。不本意ですが、残った参加者を全員殺さなければなりませんね」
「!!」
フランクは自分の耳を疑った。先ほどの少女の死を悼んでいた少年とは同じ人物なのだろうか？
「だって、そうでしょう？　あなたは魔法使いですかって、一人ずつ聞いて回る訳にもいきませんし」
「……」
はったりだ。そうに違いない。それにしては、あまりにも稚拙だ。そう、フランクは思った。だが、次の言葉がフランクの心臓に見えない槍を突き刺し

た。
「ですから……。あなたの甥子さん。七瀬彰さんでしたっけ？　彼も手に掛けなくてはいけなくなってしまうんですよ。さすがにこれ以上あなたに恨まれるのは嫌だと思って聞いてみたんですが……。やっぱりダメですか？」
「!?」
そして、フランクは慄然すると共に、すべてを理解した。これは復讐なのだと。
少女が死んだという話しも、管理者の責任も、少年の疑似人格が消失したことも、すべてを話した上で悪魔の選択を少年は強いた。どちらを答えてもフランクの心が傷つき後悔するように仕向けた。
YESと答えてもNOと答えても少年は言ったことを実行する。それは間違いないだろう。
YESと言えば少年は魔法使いたちを殺す。それは今までの自分たちの行為を無に帰することになる。彼女らのことを教えることは、管理者にとってもこの島で散っていった者たちに対しても大きな裏切りになってしまう。
しかし、暗に少年は彰を襲わないと言っている。少年もわざわざ無駄に戦うリスクを負うとは思えない。だから、その密約は守られるであろう。
NOと答えれば少年は彰を狙う。そして、彰のこめかみに偽典を突きながら、また自分に強要する。魔法使いは誰か？　と……。少年にとっては遠回りになるが結果は同じだ。それに彰は度重なる戦闘で満身創痍だ。彰をこれ以上戦闘にさらすことはフランクとしても避けたい。
しかし、監視所で見たときに彰は多くの仲間たちと一緒にいた。もしかしたら少年を返り討ちにできるかもしれない。だが、少年を倒したとしても相打ちで彰が死んでしまったら元も子もない。
どうする……。
時計の針が三時を指したとき。フランクはようやく口を開け、

「……」
と、言った。

701　木と風の祝福

降りしきる雨の中、汗と埃にまみれて、目の前の機械と外を交互に眺めつつ、彼らは長らく作業を続けていた。
　雨の降り込みを防ぐために窓を開けることもできず、熱気と湿気がこの狭い一室の中に充満しており、背後にただ一つある鍵の壊れた扉だけが、換気口になっていた。
「どう思う、月代」
「(・∀・)うーん……やっぱり外のスピーカーが、変なんじゃないかな？」
　鍵を破壊して侵入したのは、坂神蝉丸。
　そして常に彼と共にある謎のお面は、もちろん三井寺月代だ。
　二人は、消防団の詰め所にいる。
　この建物のすぐ近くで昼の放送を聞いたにも関わらず、声の聞こえた方向が違っていたため、あまり期待せずに調査を開始した。
　壊れたシャッターを引き上げ、古びた南京錠を掛け金ごと破壊し、放送室へ侵入する。
　即座に施設管理のズボラさに遭遇する羽目になった。半ば朽ちて倒れた木の椅子。曇り硝子のように不透明な、ひびの入った窓。積もった埃と、ほうぼうに張られた蜘蛛の巣が、長らく使われていないことを雄弁に物語っている。
　とは言え、常時使われている施設は、逆に言うと兵士がうろついている可能性があり、たいへん危険でもあるので、ある意味これは好都合でもあったのだ。
　配線図を手にとると、二人は蜘蛛の巣をはらい、軽く掃除をして、放送施設の配線をくまなく調べ、また電気が通ってるかどうかを確認し、ようやく内

部的問題はないと結論を出した。
「(・∀・)あとは櫓の上の、スピーカーそのものだね」
数時間に渡る、埃と蜘蛛の巣と配線との戦いに疲弊した月代が、ほう、と息を吐きながら、隣接してそびえる火の見櫓を眺めつつ結論する。
「そうだな。風雨に晒されて、配線が切れたくらいだと良いのだが」
月代と同じように外を見ながら、蝉丸は答えた。
雨の降りは、ときおり集中的に強くなり、遠くないどこかで雷が大地を叩いているのが聞こえてくる。気分的に、高いところへ登りたいとは思えない環境だった。
そのとき。あたり一面が、真っ白な光に包まれた。
「(・∀・)せっ！　せみまるっ！」
「むうっ……！」
一瞬爆撃かと思い、伏せてしまったのは、職業軍人の悲しい性だと言える。続いて思いついたのは落雷だったのだが、それに思考を寄せる間もなく、大きな変貌が訪れていた。
――光が消えると共に、嘘のような青空が広がっていたのである。
「(・∀・)うわ……うっそ……」
「……ふむ」
呆然とする月代。少なからず驚きつつも立ち上がる蝉丸。
「(・∀・)……蝉丸？　これ、どういう事なの？」
「まるで解らん。……だが、櫓に登って作業をするには、好都合じゃないか」
唇の端だけを僅かに上げて、不敵に蝉丸が笑う。そして躊躇うことなく、すたすたと外へと向かった。
「(・∀・)わあ、ちょ、ちょっと待ってよ！」
埃を舞い上げながら、慌てて月代も立ち上がる。走ろうと思って工具につまづき、あたふたしたまま工具箱に詰め込む。いいかげんながらも、どうに

か蓋を閉じて丸ごと抱え、早くも息を切らせながら後を追う。
　いつになく素早い判断で行動する蝉丸に、驚きを感じていた。
　扉をくぐり、階段を駆け降りる。シャッターを抜け、すっかり明るくなった屋外へ出ると、火の見櫓へ向かう蝉丸が見える。
「(・∀・)せみまるっ！」
　半ば飛びつくように、半ばぶら下がるように、月代は腕を絡ませる。
「む？」
　それでも、ほとんど揺らぐことなく歩みを進める蝉丸が頼もしい。満足感を味わいながらも、置いていかれた恨みごとを漏らしてみる。
「(・∀・)もう、工具も無しにどこ行くの」
「月代が持ってきてくれると、思っていた」
「(・∀・)う、うわ……」
　……くらっときたのは、太陽のせいだろうか？
　月代はそんなことを考えながら、わけもなく赤面した。あの放送を聞いてからというものの、今の天気と同じくらいに、蝉丸は変わった気がする。
　ほどなく二人は、火の見櫓の頂上に到達していた。吹く風が涼しげで、先ほどまで居た狭く暑い一室とは、天地の差がある。
　視界は広く、雨宿りを終えた鳥たちが羽ばたいていくのが、あちこちで見える。
　柵に足をかけたまま、頭上のスピーカーを点検する蝉丸を見上げつつ、月代はぽつりとつぶやいた。
「(・∀・)蝉丸……なんか、変わったね」
「……嫌か？」
「(・∀・)ううん、嫌なわけ、ないよ」
　小さく答えた言葉の端が、風に揺れる木々の声に掻き消されていく。
　その短い会話を最後に、二人は黙々と修理を続けた。不用意に通した配線が強烈なハウリングを引き

起こし、耳鳴りと共に修理の完了を確信した頃には、かなりの時間がたっていた。
吹く風と、木々の声だけが、変わらず二人を包んでいる。
月代は、この島に不似合いなほどの幸福感を味わっていた。
……そしてきっと、蝉丸も。

702　姉の立場として

北川が解析している間、私は昔のことを思い出していた。
私の母は若くない。だから、両親は婚姻の儀をすませると、すぐに後継ぎをつくろうとした。それに反して母は流産の連続で、グエンディーナ中は失望に包まれていった。
だから私が四十を過ぎた母から生まれた時、両親はもちろん、国中が歓喜の嵐だったらしい。母の年齢からいって、私が唯一の子になるであろうと国中から思われていたからだ。実際にはその二年後にリアンが生まれたのだけれど。
リアンは優秀だった。家族、とりわけ祖父の期待はリアンに向けられるようになった。
おそらく私の父と母、そして祖父のような人の場合、神さまからの授かりものはより聡明な方一人で充分だったのだろう。（事実、嫡子が継ぐという掟を祖父は改めようと考えてたらしい）
そんな環境では姉妹仲は険悪だと思うでしょう？　だけど私たち姉妹はめったに喧嘩もしなかったし、憎みあうこともなかった。
何故かリアンは私に懐いてしまったからだ。
リアンは両親や祖父にかわいがられてる時も常に私の方に気を向けてたし、私の悪口を聞いたら怒って部屋に閉じこもり、一日は出てこなかった。
そうこうしている内に私とリアンは大の仲良しとなった。

家族にとっては皮肉なことだったが。
私たちは遊ぶ時は何をするのも一緒だった。
ままごとから始まり、
川遊び。（リアンは泳ぎが苦手だったけど）
虫集め。（リアンは虫が嫌いだったけど）
魔法を使ってのいたずら。（リアンは反対したけど）
移動魔法による世界一周旅行。（リアンは泣いて反対したけど）
もちろん寝るのも一緒だった。（実は私がグエンティーナを出る直前まで続いていた）
私にとってリアンはカケガエのない存在だった、だから今でも死んだなんて信じられない。
なんでこんなこと思い出したのかわかる？　あまりにも悲しすぎるから、忘れようとしていたのに。
あそこのベッドの血のせいだよ。
たぶん愛しあってる二人が使ったんだろうね。愛する人と会えたんだろうね。そして結ばれたんだろうね。
羨ましいよね。
あなたにも好きな人はいたのにね。
会いたかったよね。
「……けんたろのばか」
スフィーは呟いた。涙を押し殺しながら。
八つ当たりだとわかっていても。
「……やっぱ子供なんだな」
それを見て北川は呟いた。少しの同情を抱きながら。
ちょっと誤解入ってるけど。
解析は続く。

703　綱の上の踊り手

例えば、怒りに我を失いながら、悲しみに涙を流す。例えば、憎しみに身を焼きながら、愛しさに心

を震わせる。
　相反する二つの感情の両方を激しく行き来する。
あなたは、そんな境遇に陥ったことがあるだろう
か？
……いっそ堕ちてしまえば、かえって楽なのだと
思う。
　どちらかに決める事さえできれば、悩む必要など
ないのだから。

　かすかに目を開く。
　何かに顔を押し付けているのは、うつ伏せに寝転
んでいるせいだ。
「くぁ……」
　くるりと仰向けになり、目を開くと同時に大きく
あくびをして、ぐっと伸びをする。見上げる空の晴
れやかさと、記憶に残っている雷雨との落差に、少
なからず途惑ってみる。
　私は、あの観鈴とかいう子に怒りをぶつけて、彼
女を放り投げたあと、振り向きもせず去ったはずだ
った。
　それから何があったのか、ちょっと整理してみる。
　脚の痛みも感じなくなって、彼を探すために森の
中へと入って……。
「かみなり、だよ」
「わっ！」
　突然目の前に被さるように現れた顔に、心臓が止
まりそうなくらい驚いた。一方的に、しかも乱暴な
別れを告げたはずの観鈴が、そこに居た。
「あっ、あんたっ！　どっから出てきたのよ！」
「にはは、ずっとここにいた」
　疑問と共に、びしっと突き出した指を間抜けにお
ろしながら、冷静に状況を確認すると、どうやら気
を失ったまま、観鈴に膝枕されていたようだった。
　濡れた木々の間を駆け抜ける風が、涼しくて気持
ち良い。

いつまでも膝枕をされていては、言いたいことも言えないので、無理矢理体を起こすことにする。再び脚の感覚が戻ってきており、痛みに顔をしかめながら聞いてみる。
「……雷って、何がよ？」
「どうして倒れたのか、知りたいみたいだったから」
そう言って彼女は、傍らに倒れている巨木を指差した。ぷすぷすと燻るそれは、落雷で倒れたものなのだろう、見ると鞄が枝に引っかかったままだった。
「倒れてきた木の、枝にぶつかって一緒に倒れたんだよ。ほっといたら一緒に焦げちゃいそうだったから、観鈴ちん頑張って引っぱったよ」
「そっか……助けてくれて、ありがと」
あんなにも怒っていたのが、馬鹿みたいに思えてくる。
たしかに、彼女たちに出会った頃から、今の惨劇が始まったと言ってもいい。だからといって彼女のせいではないのも、解っている。
……どうして私は、あんなに怒ったのだろう？
思考を巡らせて、過去の情報を吟味してみる。
すると、変わり果てた天気のせいなのか、随分と昔のように思える、少年の言葉を思い出した。
『君たちは姫君とつながっている。姫君の分身が君たちの中にある』
『姫君の意識はいずれ君の我を飲み込むだろう』
……そう、〝姫君〟と彼が呼んだ存在。
私はその声を聞いていた。
『――脆いものよの』
あの声の主が、私を喰わんとする〝姫君〟なのだ。

相反する自意識に押し潰されていた、私の心の間隙を縫うように、彼女は現れたということだ。
いま正気を保っているのは、たまたま事故に遭ったショックか何かなのだろう。それがラッキーだったかどうかは……解らないけれど。
毒気の抜けた意識が、自然と肩の力を抜けさせ、私は軽く鼻から息を吐いた。
ふと手を見ると、爪の間に違和感があり、全ての指先が赤く染まっている。
「なんだろ、これ」
「……な、なんでもないよ！」
慌てて観鈴が、自分の腰のあたりに手を当てた。
あまりに不自然な仕草に、ちょっと腹を立てて追求する。
「なんでもないって、どうしてあなたが判るのよ？」
無理矢理捕まえて、隠した彼女の背中をこちらへ向ける。

——血だらけだった。

……つまり気を失って、うなされている間に、私がやったのだ。おそらく彼女の膝に顔を埋めたまま、腰に手を回して力の限り引っかいたのだ。
「あなた……ば、馬鹿じゃないの？　そんなだから、へちょいって言われるのよ」
「が、がお……。だって、苦しそうだったから……」
じゃあ、あなたは苦しくないの？　……と言おうとしてやめる。聞くだけ無駄だ。この子は、そういう定規の持ち合わせが全く無い、稀有な存在なのだろう。
「光がね」
気恥ずかしい感謝の気持ちと、呆れた脱力感が私を無口にしていたが、かわりに観鈴が話し始めた。
「……ひかり？」
「うん、ぱあって光が広がって。雨も土砂降りだっ

たのが、綺麗に晴れたよ。それからずっと、気持ち良さそうに寝てた」
「……そ……っか」
どうやら、偶然では無かった。
私のあずかり知らぬところで、何かが〝姫君〟を押し戻したようだ。少年という〝姫君〟の勢力があるように、それに敵対する何かが存在するのだろう。しかし、それは私にとって好都合とばかりは言えない。
何故なら私は、彼に約束したからだ。
『あなたを助けるわ。それができないなら。あなたを殺してあげる』
『そうだね。君ならそう言うだろうと、思っていた。強いよ、確かに君は』
彼を、助けなければならない。
自分を見失うことなく、失われた彼を救い出す。
限りなく絶望的な目標を達成するために、私は立ち上がる。
「私、行くわ」
「え……」
当然のことだが、私の思考に付いてこれない観鈴は、この切り替えに理解が及ばないようだ。
だから私は、手をさしのべる。
それが精一杯の、感謝の気持ち。
「あなたも、一緒に来るでしょう？」
「にはは、ふぁいと、だねっ」
殺意の巨大な影と、希望の狭い光の小道の間。
私は、境界線上を、危うい足取りで歩いている。
それは、命綱の無い綱渡り。
私は激しく冷や汗をかきながら、踊り、笑う。

私の消える、その日まで。

704　壮大なムービー

「あ～、やっぱここだよ……」
『パスワード：実在する魔法の国の名は？』
前の解析の時もここで詰まった。
なんとかこれを回避しようと頑張っているのだが……。
「くそー……。回避できねー。適当に入れまくるしかないのか？」
それが非常に非現実的な方法であることはわかっている。
だが他に思いつかない。
「ねぇ、どうしたの？」
スフィーが北川の後ろから覗きこんだ。
「あ？　お嬢ちゃんにはＰＣわかんないだ……」
「なんだ簡単じゃない。グエンディーナよ」
沈黙が訪れる。
「は？」
「だからぐ、えん……」
人差し指だけで、カタカタとキーを押すスフィー。
入力ボックスに次々と文字が表示される。
『ｈ＠５ｙ』
再び沈黙が訪れる。
「むきーーーーーーー!!　なんでよ!!」
「いまどきカナ入力かよ……それで？　グエンディーナ？」
――カタカタカタ……カタン！――
『ＢＩＮＧＯ!!』
「うお!!　マジ!?　ナイスだスフィー!!」
「え!?　え!?」
自分を抱きしめてくる北川に、あたふたとした態度で応対する。
「これで長年にわたるＣＤの謎が解ける!!」

画面いっぱいにMedia Playerが開かれる。
流れ始める壮大なムービー？
画面に！
『へのへのもへじ』が現れた。
三度沈黙が訪れる。

「わしは長瀬一族の偉大なる長。長瀬源之助じゃ。スフィーよ、リアンよ。よくぞ、ここまで来た！断っておくが、きみたちがこれを見るころには、わしはもうこの世におらんだろう。それからもうひとつ。この動画のアバターの顔が少し適当になってしもうた。時間が無かったので許して欲しい。あまり気にしないように！」
——適当すぎだった——

「さてスフィー、リアンよ。もしかしたらお前達ももう勘付いておるかもれないが、この大会は、かつてグエンディーナの大誓約で使われた禁呪を使う儀式として執り行われておる。能力者の魂と心、この二つを触媒にして、莫大なエネルギーを生み出す禁呪。それを用いてでも滅ぼさなければならない対象、それが『神奈』だ。やつは——」
なにやら壮大な話が展開されているようだが、北川にはなんのことやら『はぁーサッパリサッパリ』である。
だが話は続く。
例え北川とスフィーの背中に武器が突きつけられたとしても。
「このCDを入れて六枚のCD集めろ。それを岩山の施設で使えば禁呪が再現できる。守りのメイドロボもお前達の命令なら……」

705　真実の明暗

気の早い鳥たちが、森へと帰っていく。

たったいま抜けたばかりの森は、これから鳥たちのねぐらとして、静かに繁盛するのだろう。草原を横切り、更に森を通り抜けた間、何者にも遭遇しなかった。

ただ鳥だけが、彼の視界の中に生きるものだった。

(まいったな……)

まばらな鳥の編隊を、とぼけた顔で見上げながら、少年は思う。

そして、ぽりぽりと頭を掻いた。

正直言って、戦力は低下している。先ほどの魔法が、姫君に影響しているせいかもしれない。魔法の影響はやがて消えるだろうが、消えたら消えたで、身体にかかる負荷が強まるだろう。

どちらにしても、ドックに突入した時のような無茶はできない。

(もう少し、からめ手から攻めるべきだったかな?)

少しだけ、反省してみる。情報は、真に必要な物だけでなくても構わなかったのだから。

きっと長瀬に連なる者ならば、現在どの程度の勢力が存在しているかも知っていただろう。むしろ彰に直接係わり合いのない情報ならば、安売りしてくれたかもしれないな、と過去を振り返る。

沈黙の続く一室で、時計の針がかちりと音を立てて、三時を示した。

発声することを忘れたかのように、沈黙を保持しつづけた男が、ようやく口を開いた。

「……知ったことか」

長い長い迷いの時を経て、フランクがようやく出した結論は、全てを運命に任せるかのような一言だった。

いや、彰という青年の可能性にかけたのかもしれないし、他の参加者に少年が打倒されることを期待していたのかもしれない。

真意の程は、本人だけが知っている。

少年は、大きく溜息をついた。珍しく、苛立たしさを感じていたかもしれない。
「……強情な人ですね。その上、僕に残りの全員を殺して回れとは、残酷でもある」
「……」
「ああ、そうですね。あなたはもう、用なしです……いえ、殺しはしませんよ。僕が殺すよりも、他の参加者が憎しみも顕わに、あなたへ襲いかかるほうが、姫君は喜ぶでしょうから」
少年は表情一つ変えずに、いや、いつもの微笑すら浮かべて、死の宣告を行った。
「あなたの顔は、典型的な長瀬の一族の物ですからね。さぞ、参加者からは恨まれていることでしょう」
「……！　……！」
再度興奮し始めたフランクを、つまらなそうに見ながら、少年は答える。
「はは、今に見ていろとは、武器も持たずに威勢が良いですね。どうやら、いまだに管理者気分が抜けないと見えます」
「……」
「ああ、連絡が途絶えているでしょうから、御存知かもしれませんが。潜水艦のドックは、僕が襲撃済みですので、あしからず」
少年は満面の笑みを浮かべながら、そう言うやいなや、驚くフランクの後頭部に打撃を加え、その一撃で彼を気絶させた。
……結局、姫君へ捧げるものが一つ増えただけのことだ。
再び執念を燃やして襲い来るのならば、姫君にとって格別のご馳走となる。彼に言った通り、参加者に殺されるのならば、なお良い。
それはそれで良いのだが。
確かに存在する危険を防ぐという意味では、まるで役に立たない。彼も今ごろ、目を覚ましてどこか

へ移動しただろう。
　これからのことを、考えなければならない。
『おーーーーーーーーい』
　思考の淵に沈みこんでいた少年に、伸びのある甲高い声が投げかけられる。
　周囲を窺うが、見渡す限り人影はない。改めて自分の能力に衰えを感じながら、もう一度探してみる。
『ここだよ！　ここーーー！』
　かなり遠くだが、高さ十数メートルの鉄塔が立っている。
　頂上で手を振っているのは、不思議な仮面の呪いをうけた少女だった。隣には、常に自然体のままでありながら隙を見せない、手練の軍人が立っている。
（……はずれ、だね）
　この二人が魔法使いとは思えない。
　だが、この島にあって無敵とさえ思えるあの男を、ここで屠ることができれば僥倖だ。あの男を倒そうとする者など、そして倒せる者など、他には存在しないだろうから。なればこそ、自らが手を下す必要性が生じるというものだ。
　悪意を深く心に秘めて、微笑を浮かべながら、少年は手を振った。
「久しぶりだね」
　櫓の頂上に登るなり、少年は笑いかける。
「ああ、無事で何よりだ」
「(･∀･)ずいぶんボロボロだけど、だいじょうぶなの？」
　蝉丸と握手をし、月代の頭をなでる。
　当然のように、話題は蝉丸から聞いた地下の騒音の事となった。
　少年は潜水艦があったことを告げ、続けて修理中

であったことを告げる。脱出方法のひとつが浮かび、そして消えたことを、蝉丸たちは残念がっていた。
　彼らは少年の期待通りに、数人の参加者情報を教えてくれた。さすがにリーダーシップを発揮し始めたらしく、残り人数から考えると多くのコネクションを築き上げている。
　視線を外して、景色を眺めるふりをしながら、少年は情報を吟味した。
（ずいぶん多くを仲間にしたもんだ……でも、魔法使いはいないようだね）
　おそらく蝉丸を中心とした一団は、生き残り参加者の最大グループなのだろうと思われる。
　それならそれで、全員が集中する前に、戦力を削げれば言うことはない。
「ところで、ここで何をしているんだい？」
　蝉丸との会話中、暇そうにしていた月代へ声をかける。
「(･∀･)え？　あ、放送、するんだよ」
「放送？」
　誘いをかけるために、わざと少年は大袈裟に首を傾げる。
「今はもう、爆弾の起爆装置が無効になっているらしいから、呼びかけも可能だと思ったのだ」
　蝉丸が月代を補足する。
　脱出に向け、更に仲間を増やすための放送の内容を考えていたところだった、というわけらしい。
「街角の一室に、仲間のほとんどは居るはずなのだが……」
　腕を組み、蝉丸は考え込んでいた。
　あそこは安全性の高い反面、わかりにくい。なんといっても蝉丸たちは、島の中をあまり移動していない。常に共に居た月代と相談したところで、良い場所は浮かんでかなかったため、長い間悩んでいたのだ。
「……学校なんて、どうかな？」
「学校？」

「全ての階とは言わないけれど、電気の付けっぱなしになっている教室もたくさんあるし、何より大きいから、比較的わかりやすいと思うんだ。いくつか戦闘の跡があるけれど……それはどこでも、同じだしね」
蝉丸が慎重に情報を吟味し、何度か頷く。
「反面、危険性が伴うが……それを考えていては始まらない。学校の位置は、説明できるのか？」
「ええ、もちろん」
「では決まりだな」
そう言って櫓を降りようとする蝉丸を、ちょっと待って、と少年は引き止める。
（……ここからが、肝心だね）
心の中で誘導する方向を確かめながら、慎重に、しかしいつもの気楽さを失わないように、少年は発言する。
「せっかくだから、放送内容に加えてほしい事があるんだ」
「む？」
「先ほど空が光って、天気が急変したでしょう？」
「(･∀･)うん、すごかったね」
あの雨の中を移動し、今この空を見たならば、誰しも不思議に感じるだろう。蝉丸たちも例外ではなく、少年に謎解きを期待する眼差しを送った。
「馬鹿馬鹿しいと思われるかもしれないけれど、あれは魔法なんです」
少々気が引けているような、自信に欠けた態度で言い出してみる。だが真実なのだから、しょうがない。
「魔法、だと」
「(･∀･)馬鹿馬鹿しいなんて……そんなこと、思わないよ」
月代は自分のお面を指差して、魔法を肯定する。蝉丸もそれを見て、なんとか自分を納得させた。
「あの魔法には、僕も少々関わりがありましてね。あれは多分、結界をつかさどる者への攻撃だったん

です」
　これは、真実。
「でも、僕は魔法そのものの内容について、詳しくは知らない。だから、もし加わる仲間に魔法使いがいれば、自ら名乗り出て、説明して欲しい。……そう付け加えてもらえないかな？」
　これも、真実。
「結界への攻撃か。確かに希望の道は、何本あっても困らないからな」
　蝉丸が答える。
　実際問題として、地下の潜水艦が望み薄となった今、新たな希望は何でも歓迎したいところだ。
　そして少年の言葉に嘘はなく、すべて真実なのだから、疑う事もなく受け入れられた。
「では放送を流すとしよう」
　蝉丸が櫓を降りる。
「(・∀・)はやく降りたほうがいいよ！　ここにいると、音がすごいから」
続けて降りる月代が、少年に声をかける。
「ああ、今行くよ」
少年は、声を涼やかな風に乗せ、軽やかに答える。
まずは、狙いどおり。
そして、放送が終われば。
……この二人に、用はない。
変わらぬ笑みの下に、殺意を秘めて。
少年は、再び大地に降り立った。

706　芹香の誤算

ザッ！　ザッ！　ザッ！
雨が上がった後の草原を国崎往人、来栖川芹香の二人は神尾観鈴を探して歩いていた。
が、往人の歩くペースでは芹香には辛いのか、す

ぐに音をあげ始める。
「ちょっ……ちょっと待ってよ……」
「なんだ、もう疲れたのか？　偉そうな口調の割にはバテるのが早いな」
「しかたないでしょ！　性格は変わっても、身体能力は変わらないんだから！　私、今まで箸より重い物を持ったことなんてないもの！」
（……その割にはいろいろ持っているな、あのバッグに）
小屋で北川、スフィーと別れるときに二人が持っていた合計三丁の銃と電動釘打ち機を四人で分けることになった。
「一人が何丁も持つより、一人が一丁ずつ持ったほうがいいんじゃない？」
と、言い出した芹香の提案によってだ。
一番体格がいい往人がアサルトライフルを、
北川はデザートイーグルを、
スフィーはM19マグナムを、
そして芹香が残った電動釘打ち機を持つことになった。
何故か北川は、次々と無くなる自分の武器に涙を流していていたが。
「何度も言うが、俺は連れの二人を探しているんだ。とろとろ歩いている暇なんかない」
「だからって……もちょっとゆっくり歩いてくれたっていいじゃない」
「本当は走って行きたいんだ。このペースで歩いているだけ感謝しろ」
「……まあいいわ、それより聞きたいことがあるの」
と、言いながらバッグから参加者名簿を取り出す。
「これはさっきも見せた参加者の一覧表なんだけど……」
「ああ、観鈴と晴子の番号を確認するためにさっき見たやつだな」
「そう、それで重要なのはここからなんだけど

……」
そう言って芹香はペラペラとページをめくって往人の項目を本人に見せる。
「ここの部分、アンタの能力の『法術』ってやつが『現状まま』って書かれているのよ。だからスフィーと……もういないんだけど結花って娘の三人でアンタを探していたの、結界の制限を受けないアンタなら結界をなんとかできるんじゃないかって」
「……多分なんともならないと思うぞ？　俺の法術を見れば制限とやらが無いのも納得できるだろう。……見てみるか？」
「ええ、是非お願いしたいわ。どの程度のことが出来るのか知りたいもの」
「分かった」
そういって往人は、ポケットから人形を取り出す。
「随分古びた人形ね……」
「ああ、お袋の持ってたやつだからな」
（……ってことは相当の伝統ある人形なのね、子にわざわざ託すものなんだから。これは期待できそうね）
「……見てろ」
そう言いながら往人は人形に力を込め、やがてその人形がゆっくりと動き出す。
「凄い、これが法術……」
「ああ、種も仕掛けもないぞ」
「分かっているわよ……で、その人形で何が出来るの？」
「は？」
「は？　って法術って人形を媒体にして力を引き出すんじゃないの？　今見た感じではそう思ったんだけど……それとももっと別な方法なの？」
「いや、俺に出来るのはこれだけなんだが……」
「…………」
沈黙のあと、恐る恐る芹香が喋りだす。
「い、今なんて……」
「俺の法術は、この人形を動かすことだけだって言

ったんだ」
「じゃあ結界の封印を解く事とかは……」
「出来ない」
「法術を戦闘に使うことは……」
「人形を動かしても相手は倒せないと思うが」
「傷や病気を治したりは……」
「それが出来れば今ごろ俺は医者にでもなっている」
堂々と語る往人。
（つ、使えない……。なんて無能さなの……。これじゃあなにも知らないのも無理ないわね……）
完全な誤算だった。
結界に関する唯一の手がかりではないかと期待していた往人が、優秀な法術師ではなく、箸にも棒にも引っ掛からないようなヘボ法術師だったとは……
（ぐ、愚痴っても仕方ないわね。取り敢えず戦闘に関しては手馴れているようだし、早いとこ神尾さんって子を見つけて、スフィー達と合流して今後の対策を練らないと……）
「もう休憩はいいな、遅れた分は走るぞ」
返事も待たずに、往人は走り出す。
「ま、待ってよもう！」
送れて芹香も駆け出した。
往人は気付いていない。人形がうっすらと青白い光を放ち、雪見や智子に人形を動かした時とは違い、いつもの人形の動きになっていたことに。

707　飛空艇の墜ちた地で

喀血!!　赤黒い液体が大量に舞い散る。
高度、約二千メートルの暗室。
薄闇の中で僅かに揺れていた蝋燭も、火を覆うように吐かれた大量の血液によって、全て消え去った。
「まだ……まだ足りぬというのか。神奈よ……」
源之助は全身の力を失い、大きく音を立てながら前のめりに倒れ込んだ。

外からは派手な爆音が漏れ聞こえていた。
「……もはや……これまでなのか……」
力無い呟きで自問する源之助。
しかし、数瞬後。
顔を上げた彼の瞳は、未だ光を失っていなかった。

——僅かな時を経て。洋上、巡視艇艦橋。

「上空で爆音！　空が、空が晴れてゆきます!!」
「上空の飛空艇より入電。正体不明の爆発により、緊急事態発生！　キャプテン！　飛空艇側はこちらに指示を求めています!!」
オペレーター達が驚きと共に報告を読み上げる。
「状況の詳細を至急報告させろ！　向こうへの指示は長瀬老が下されるはずだ！　向こうのオペレータは何をやっているのか!?」
大木は指示を下し、続報を待つ。
「駄目です、キャプテン!!」
「どうした!?」
「飛空艇より入電！『我操舵不能、我操舵不能。これよりパラシュートによる脱出を試みる』です！」
オペレータの一人が絶望的な表情で大木を見上げる。
「保たせろ！」
——一体、何が起こっているというのだ!?——
訳の分からぬことの多かった今回のプログラム。しかし、此処までの異常事態は大木も予想し得なかった。
「長瀬老はどうした!?　何故つながらない!!」
「それが、向こうも混乱している様子で……。うわっ！」
叫んだオペレータを詰問しようとした大木だったが、相手の視線が上空に向けられたまま釘付けになっているのを見て、その先を追った。

そして……。
「……なぁんてこった！」
呻く大木。
炎に包まれた巨大な飛空艇が、ゆっくりと島の方に向かって落下しつつあるのが見えた。
「一体、何が起こっているのだ……」
遥か上空で人智を越えた作戦が実行されていたことを、大木は知らない。

――同時刻、再び上空。

「長瀬老はどうした!?」
「それが、お部屋にお籠もりになられたまま、ご返事もされぬ様子で！」
「ならば捨て置け!!　もともと俺は、この話には乗りたくなかったんだ！」
「し、しかし!!」
「ええい、そんなことよりも自分の命を心配したらどうだ!!」
追いつめられた者達の怒号が響きわたる艇内。
刹那、またどこかで大きな爆音が響く。
「駄目です！　どの脱出口も火が回っています!!」
「馬鹿な！　どこか無事なところがあるはずだ！
俺はこんなところで死なん！　死んでたまるか!!」

戸外の喧噪をよそに、源之助は己に課された最後の仕事を片付けるべく動いていた。
「今まで多大な犠牲を払って行ってきた『これ』を、このまま無為に終わらせるわけにはゆかぬ……」
伏したまま、源之助は呟く。
「後事を、誰かに託さねばならぬ……。幸い、今ならば神奈の力が弱まっておる……」
閉め切ったドアの向こうから、脱出を促す声が聞こえる。
しかし、源之助はそれに応えず、自らの血を用い

て床に何かを記している。
「今さら脱出もあるまい……。仮に脱出が叶ったとて……ぐふっ！」
さらなる吐血。源之助の顔色は、いよいよ真っ青になりつつあった。
……もはやこの体、保つまい。……スフィーか、或いは、まだ生き延びている能力者……いや、特殊な能力などなくても……強い、ひたむきな思いさえあれば。神奈に、対抗し得るはずじゃ……
「しかし、『あの情報』を開けるのは、おそらくスフィー以外にはおるまいか……」
スフィー……聞こえるか？　スフィー……！
残された僅かの力を振り絞り、源之助は最後の仕事に取りかかる。

源之助、最期の思い。
届くや⁉　届かざるや⁉

708　間が悪い耕一

「……えちゃ～～ん」
彰と葉子の耳が同時に声を拾った。
静寂な森の中にこだまする、少女の声。
「……にいちゃ～～ん！　葉子おねえちゃ～～ん！」
「彰おにいちゃ～～ん！　葉子おねえちゃ～～ん！」
耕一の後ろから初音が叫ぶ。
考えてみれば、葉子が知っているであろう人物は初音だけなのだ。そして声を知っているのも。
敵がどこに潜んでいるかも分からないこの島で、声をあげて探すのはかなりのリスクを伴う。
しかしまぁ、これしか方法がないのだからしょうがない。
メイド姿の女装マッチョ。しかも面識無しの前に

あらわれるほど、阿呆な女の子ではないだろうから。
うさぎちゃんではなく、狼さんが現れたときのために耕一は辺りを警戒する。
手にはベレッタ。残してきた武器は丁寧に隠したから、万が一小屋に侵入者がいても大丈夫だろう。（ＰＣとかも隠しとくべきだったかな？）
まぁ葉子（とうまくいったら彰も）を見つけたらすぐに戻るつもりだ。そんなに時間もかから……。
「ぜんっぜん見つからないわね……」
マナの冷静な一言。
「あはは……」
「笑っても駄目」
「うう……」
「泣いても駄目！」
「むきーーー!!」
「怒っても駄目!!」
マナちゃんは冷たい。

雨で消えかけていた、足跡『っぽい』ものを追跡していた……考えてみれば少し行き当たりばったりだったかもしれない。だが、俺たちの指針は他にもある。そう、恋する乙女の勘だ！
「だいたいなんであの時、あんな提案しちゃったのかしら……。私……。考えてみれば全員であの小屋空けるのは致命的な気が……」
「マナちゃん……。ほらほら！　もっと元気だそうよ。大丈夫。きっともうすぐ見つかるよ！　耕一お兄ちゃんも元気出して～」
初音が二人を元気づける。ずーっと声を出しっぱなしでつらいだろうに。
「うう……。初音ちゃん。いい子だ～。がんばり屋さんめ～」
初音を抱きしめ、ほお擦り。
「あはは、耕一お兄ちゃんおひげが痛いよ～」
再会はそこで訪れた。

（やったーばんざーい、あきらくんとようこさんだ～）

耕一くんの頭の中はひらがなです。

「……。余計な心配をおかけしました」

とは葉子さん。

（……。余計だと思っていた心配は見事に的中しました……）

とは彰くん。

沈黙。

沈黙。

沈黙。

「あ……彰お兄ちゃん。葉子お姉ちゃん。お……おかえりなさい！」

初音ちゃんは耕一くんの腕の中から声をあげます。

ただ、彰くんの目が怖いです。

初音ちゃんは硬直する耕一くんの腕をすり抜け、彰くんに飛びつきました。

それでも、彰くんの目は怖いです。

「とりあえず、小屋に戻ってから話さない？　あんたたちもその様子だと、帰るつもりだったんでしょ？」

マナちゃんの提案。

「そうですね……。軽率な行動であなた達まで危険にさらしてしまったみたいです……。すいません……」

耕一くんを先頭に、一同は小屋に戻ります。

でも、初音ちゃんの手を握りながらも、彰くんの耕一くんを見る目は……。

まじ怖いです。

709　CD

カタカタカタ……。

キーボードをかき鳴らす軽快な入力音が、無機質に室内を埋め尽くしている。

ちょっとしたハプニングこそあれ、私たちは最後のＣＤ解析にまで手を出していた。いや、正しくはこの部屋に居たメイドロボと、詠美ちゃんに任せきりなのだけれど。
　私と梓は、その時間を使って参加者のデータを閲覧し、過去ログを調査している。何かが切れてしまったような無軌道ぶりを見せている繭ちゃんを、外に連れ出すことができるようにする、とある物品を探すためにである。
　実際のところ、彼女は今の状態が地のようなのだが、はじめて出会ったときの知性的な彼女の方が、この島で生き抜くのに都合がいい。あらゆる危険性を理解しない、今の彼女が外に出ることは、遠からず死を意味することになるだろう。
「お!?　ホントにあったよ千鶴姉！」
「……家に帰れば、簡単に手に入るのにね」
　求める物品とは、柏木家に生えていた謎のきのこ。その名もセイカクハンテンダケである。どうやら、もともと天沢郁未という少女に支給されていたようなのだが、効果時間を考えると、彼女と繭ちゃんが別れたあとに、きのこの摂取が行われたと見ていいと思う。
　そうなると何らかの理由で、セイカクハンテンダケは繭ちゃんの手に渡ったと考えるのが妥当なようだ。
「うーん、過去ログって見難いなあ」
　梓がぼやいている。視界の端で、目覚めて動物を引き連れる繭ちゃんと、それを羨ましげに眺めているあゆちゃんが、楽しげに話し込んでいる。何か円形の機械で遊びはじめたようだ……あれは、なんだったかしら？　どこかで、見た事があるような……気がするけれど……。
「千鶴姉、聞いてる？」
「あ、ごめんなさい。ちょっと、ね」
　そうだ……あれは誰かが、持っていたような気がする。

「うん？　ま、いいけど。……この時が、怪しくないかな？」
　梓が指摘したのは、崖での一幕。その時の画像を呼び出す。さすがの巨大コンピューターも少々の時間を要したが、やがて二人の少女を救い出そうとする少年の姿が見え、持ち物の鞄が崖下に吸い込まれていった。たぶん引き上げる際の重さを軽減するために、いったん捨てたのだろう。この鞄のどれかに、セイカクハンテンダケが含まれている可能性は高いと思われる。
　その後、繭ちゃんは崖上に残り、相沢祐一と北川潤、宮内レミィの三人は崖下で合流し移動している。画像を呼び出せば、大量の荷物と相沢祐一を抱えた、北川潤と宮内レミィの姿が確認できる。
　さらにそのあと数人の死者が出て、あの大量の荷物を受け継いだと思われるのは、北川潤の他に、来栖川の令嬢芹香さんと、スフィーという少女の合計三人となる。
「うーん、ここまで追って三人かあ」
「絞り込んだとは、言えないわね」
　それでも三人程度なら、希望が持てる人数だ。誰か一人に遭遇できれば、セイカクハンテンダケの所在は解るだろう。
　一息ついて、ＣＤ解析中の二人に声をかけた。
「詠美ちゃん、そっちはどう？」
「ふみゅ？　呼んだ？」
　再び作業に没頭していた詠美ちゃんが、遠くの端末から顔を出す。
　それを梓が軽くあしらう。入力は詠美ちゃんが行っているが、実質的にはメイドロボのほうが解析内容を理解しているからだ。
「詠美、アンタはお呼びじゃないよ」
「なな、な……なによっ！　し、したぼくのくせにっ！」
「げぼく……まあ、いいや。……あたしも色んな呼び方されてるけど、アンタの下僕になった覚えはな

いってーの」
　二人は言い争いを始めた。梓の方が口達者なのは、慣れというやつだろう。
　とりあえず必要以上に友好を深め合う二人を無視して、残ったメイドロボに尋ねることにする。
「CDの方、どうかしら？」
　応じるメイドロボの報告は、表情から予想する限り、残念なものだった。ぺこり、と頭を下げた彼女は、やや緊張した面持ちで説明を始める。
「はいー。まだ詳細は解らないんですけれどー。えーとですねー……まず、これです」
　ぽん、と画面に浮かぶ〝神奈備命〟という言葉。
「これが、なんなの？」
「これはですね、番号付きの二枚どちらのCDからも、最初に発見された言葉なんですう。どちらも、同じ目的のために作られた、同じ作用のものらしいんですー」
　私は首を傾げる。
「それじゃ、四枚同じ物がある意味は、なんなのかしら？」
　はいー、と深く頷きながら彼女は答える。
「今ある四枚限定で考えるとですね。二枚とも、別の座標に作用点を設定されているんです」
「すると四枚とも同じもので、対象座標が異なる可能性が高い、と？」
　はいはい、と軽快に返事を返しながら、メイドロボは続ける。
「しかもですね、どちらの地点も……島の外なんです」
　口頭での説明と共に、一番大きな画面を指差しながら、彼女はその二点を赤い光点に設定する。島の北西と、南西に赤い光が点灯した。
「とりあえず、この二点が今あるCDが作用する点なんです」
　よく意味が解らない。
「……どういうこと？」

「そうなんです。これだけだと、ぜんぜん解らないんですよー」
明朗に答えられても、それは多いに期待はずれな結論だった。
肩を落とす私を諭すように、メイドロボは言葉を続ける。
「あ、正しくはですね。詳細は解りませんが、大きな負荷がかかるらしい事までは、解るんです。タイミングとバランスを取らないと、島自体が大変な事になる、って書いてあるんですよー」
「大変な事？」
再び、はいー、と深く頷いてから、彼女は答えた。
「この作用点にある装置から、何らかのエネルギーが発生するらしいんです。それを効果的に収束させるには、四枚同時に起動しないといけない、と。……もし収束に失敗すれば……この島そのものを対象にして、発生したエネルギーが作用するそうですう」
要するに、全部揃うまでは試してみる訳にもいかない、たいへん危険な装置の鍵ということのようだ。
「単なる来栖川の兵器である可能性はないの？」
私の抱いた当然の疑問に対し、彼女はにっこり笑って、無記名のＣＤを指し示す。
「ところがこれに、タネあかしが入ってたんですよー」
それは、長瀬源五郎が保持していたＣＤである。
「〝神奈備命消滅〟という目的のもと作られた四つの装置の存在と、そこへのアクセス方法が書かれているんですう。それによると、装置が島の外にあるのは、装置の発動を抑える〝結界〟という力の影響から逃れるためなんですねー」
「……神奈備命、ねえ……」
よくわからない存在のために。
私たちが玩具にされているらしい事だけは、理解できた。

710　動き出す意思

「五つのＣＤを集めろ。それを岩山の施設で使えば禁呪が再現できる。守りのメイドロボもお前達の命令なら……」
へのへのもへじの語りかけは、まだ続きそうな様子であったが、北川は突如一時停止ボタンを押した。
「ちょっとまだ途中じゃない、何考え……」
抗議の声を上げるスフィー。だが、すぐに自分たちがおかれている状況に気がついたらしい。彼らの首筋には鋭利なナイフの刃が突きつけられていた。
ひぃっと、息を飲むスフィー。
北川は、刃で傷つかないよう、辺りを見回した。いつの間にやら完全に取り囲まれている。
まあ、こうなることは十分予想できたことだ。
「蝉丸さんか耕一さんは居ますか？　七瀬さんの紹介で来たんですが……」
北川の言葉に周囲を取り囲んでいる人達の緊張が緩むのが分かる。北川達に向けられた銃口が外される。
だが、首筋に当てられたナイフの刃に込められた力は一向に緩む気配がない。そのナイフを持った青年は、表情をぴくりとも動かさずに北川達をにらみつけている。
「証拠はあるのか？」
その様子に北川は大げさに肩をすくませてみせた。
「七瀬さんの中学時代の恥ずかしい話ならいくつか知ってるんだが……それじゃあダメか？」
北川の首筋のナイフに込められた力が強まる。
「……じょっ、冗談だってば!!」
一触即発の雰囲気。
それを破ったのは、初音の沈痛な声であった。
「彰お兄ちゃん止めてっ！」
「こいつらはウソをついているかもしれない」
「……まぁまぁ、彰君。ここには俺達もいる。いざ

ってときも何とかなるさ……それに、こうやって会う人会う人疑ってては、誰とも協力し会うことなんてできないだろう？」
「耕一お兄ちゃんの言うとおりだよ。……それに、この人達悪い人じゃないと思うな」
「……分かりました」
そういって、彰は二人から離れた。
だが、彰は緊張は解かず、北川達が変な動きをしようものならいつでも飛びかかれる臨戦態勢を維持していた。
それでも、とりあえずの危険を回避した北川は、ナイフの当てられていた首筋をさすりながら、ふぅっと息を吐いた。
「さて、七瀬さんの紹介とはどういうことか説明してくれるかな？」
北川は七瀬との関係、そして彼自身のこれまでの経緯、そして何故ここにやってきたのかを話した。
話し終える頃には周囲の雰囲気は穏やかなものになっていた。今はお互いの簡単な自己紹介を兼ねた雑談になっていた。
神経を尖らせていた彰も幾分か落ち着いた様子だった。
「落ち着いたかい？」
耕一が話しかける。
「心配かけてすいません。耕一さん少しいいですか？」
彰はそう言って耕一を周囲の会話が届かない場所へと促した。
「一体何の用だい？」
「実は……」
彰は一人で行動していた時のことを耕一に話した。
知り合い二人を探しに行っていた事。
彼らはすでに死んでしまっていた事。
施設の裏口を発見したこと。
そして……
「その施設から同じ匂いっていうか良く分からない

んですけど変な感覚がしたんですよ」
そこまで聞いて耕一はある予感を感じていた。もしかしたら千鶴達がそこに居るのではないか。
「すいません何か変なこと言って。こんな愚痴、初音ちゃんとかに聞かせる訳にもいかないので」
すでに耕一は彰の言葉を聞いていなかった。その時彼は心の中で堅く決意していたのだった。一刻も早く施設に向かおう、と。
耕一達が戻ると、彼らはどうやら耕一達のことを待っていたようだ。このゲームの管理者からのメッセージを観ようということらしい。
すでに北川達は途中まで観ていたムービーであったが、皆で内容を確認するためもう一度最初から繰り返された。
へのへのもへじの語りかけは続く。
「……次に神奈が封印されている社の位置と、もしもの為の他の封印場所を記載しておく。まずは社の位置だ、それは……」

そして全ての情報が読み終わり画面はブラックアウトした。
誰も言葉が出なかった。
この老人がしようとしたことは理解できる。
正直、鬼の力が使えたとしても神奈とやらには勝てる気がしない。多分、この島の能力者すべてが手を組んでも勝てる可能性は低いだろう。
こんな化物が暴れれば確かに天文学的な被害が出るかもしれない。しかし……
その沈黙は意外な形で破られた。
『スフィー……聞こえるか？　スフィー……！』
直接頭の中に刻み込まれる声。
その声はつい今し方、パソコンから聞こえていた声。
長瀬一族の長、長瀬源之助。
その声を聞いたスフィーは、その声に応えようと呪文を唱えだした。だが、やがて溜息とともに無理を悟る。

あれほど強大な呪文が発動したというのに結界の力は弱まっていないようだった。
色々問い質したい事があった、文句の一言も言いたかった。
でも、このメッセージは片道だけ。
ただ聞くしかない。
『……CDを集め……ることを祈って……施設……別の参加者……占拠され……』
結界に妨害されているのであろう、受信状況の悪いラジオみたいに断続的に聞こえてくるメッセージ。それを一言でも多く聞き取ろうと、彼らは声に集中する。
『……奈の善の心……抵抗されず……倒せ』
やがて、声がとぎれる。結界の中に入ったかそれとも力尽きたのか。
「今のは一体……内容もあまり把握できなかったが？」
「主催者からのメッセージよ。最新情報のおまけ付きでね」
各人が聞き取る事ができた断片的な情報を整理する。
すでに施設は別の参加者が占拠したらしいという事、先ほどの魔法は失敗したという事、そして……。
「私はこれから神奈が封印されてる社に行くわ」
「どういう事だよ、お前が居なきゃこのCDが揃っても意味無いんだろ？」
「別に私じゃなくても大丈夫よ。魔力がある人なら芹香さんもいるし、協力してくれるかわからないけど国崎往人って人もいけると思う」
「けど、お前以外が簡単に見つかるって保証も無いだろ？」
「大丈夫、この魔法を起動するのに魔法の力は必須ではないから。もちろん、あるに越したことはないけど、この魔法は起動に必要な魔力と術式をパッケージ化しているから、魔力が無くても起動はできるわ。むしろ、必要なのは『想い』よ」

「想い？」
「魔法っていうのは想いを実現させる物、想う力が強ければそれだけ魔法は威力を増すわ。強い想いがあればこの魔法は発動させることができる。それができるのは……アンタだけよ」
北川はスフィーが冗談を言っているのかと思った。だが、スフィーの表情は真剣そのものだった。
「アンタ、そのＣＤに今生きる目的の全てを賭けているんでしょ？」
「……ああ。確かにそうだ。俺はレミィとの思い出が詰まったこのＣＤにすべてを賭けてる。だからといって……」
「自分の気持ちが信じられないの？　全てをかなぐり捨ててでもＣＤを使ってやるくらいの意気込みは無いの？　アンタが本気で彼女の事を思ってるなら絶対成功させなさい。アンタの自身の手でね」
それを聞いた北川は決意の表情も新たに答える。
「本気で彼女の事を思っているなら、か……だったら俺は絶対に成功させるぜ」
「あら、自信満々ね」
「それよりお前の方は一体どうするつもりだ？　このＣＤを発動させればこんなゲームも終了するのに」
このまま一緒に施設へ行ってＣＤを使えば神奈とかいう奴が倒せる。そうすれば何の邪魔も無くこの島のどこかにある潜水艦で脱出できるんだ。
たとえ潜水艦が無くても能力者の中には脱出することができる能力を持っている奴がいるかも知れない。
「いくら、さっきの呪文で神奈が消耗してるからって同じ呪文で倒せるとは限らないわ。それにアレほどの化物に下手に抵抗されれば呪詛返しであっという間にあの世行きよ。だから神奈が抵抗できないようにしに行くの」
「そんな事ができるのか？」
「ええ、一つだけ心当たりがあるわ。だから一緒に

行けないの」
リアンと一緒に神奈と接触した時確かに善の心を持っていた、それを説得できれば……。

711　北へ

紆余曲折はあったが、巳間晴香と七瀬留美はようやく潜水艦探索を再開する第一歩を……。
「ようやく、再出発ね」
「うん、これで探索に専念できるわ」
「で、高槻の死体には何もなかったけど、他に潜水艦を探す手掛かりはあるの？」
「え、えーと、あいつ、ほかになにか言ってたっけ……」
「もしかして……」
「あはは、ないや」
バキッ

第一歩を踏み出せないでいた。
久々に会心の左ストレートをたたき込んだ巳間晴香は大きくため息を付いた。
しかし、心中はそれほど暗澹としているわけではなかった。
彼女には潜水艦がある場所に心当たりがあったからだ。かつての仲間、保科智子と神岸あかり、そしてマルチが一緒にいた頃、管理者側の兵士から奪ったジープに拠点の位置が書かれた地図が入っていた。
だが、晴香はそのことはあまり思い出したくはなかった。
その地図が示した拠点に攻め込んだことを、今は死ぬほど後悔していたからだ。
無謀な戦いの結果、高槻の奸計により、晴香と智子とあかりは捕らえられた。
晴香は高槻に屈服することによって命は助けられたが、あかりは慰みものにされたあげく殺され、智

子もまた高槻の手の者に殺された。
マルチはそのときは無事だったらしいが、放送によると、もうこの島には存在しないらしい。
悔やんでも悔やみきれなかった。
だから、激しい戦いに身を投じ、そのことを忘れ去りたいと思ったのかもしれない。
だが、今はそんな泣き言は言っていられない。死んでいった者たちのためにも、生き残っている者たちのためにも。そう、今こそ話そう、その潜水艦の所在を示す地図がある場所を。
だが、
「くー、今の効いたぁ」
「しっかたないわねぇ。それじゃあ、今度はジープを探すわよ」
「なんで、ジープ？」
「ふふふ、前にちらっと見たんだけど、そこに、管理者が作った、この島の地図が入っていたのよ」
「すごいじゃない。それで、そのジープはどこ？」
「え、えーと、たしか、あの基地の前に置いてったけど、出てくるときには無かったから……」
「もしかして……」
「あはは、どこにあるか分からないわ」

ドカッ

だが、地図の場所も不明だった。

右拳に全体重を乗せ、まっすぐ目標をぶちぬくような右ストレートを放った七瀬留美は大きくかぶりを振った。
しかし、心中はそれほど暗澹としているわけではなかった。
落ち込んでいるわけにはいかなかった。なぜなら、折原と約束をしたからだ。
必ず生き残る、と。
そのためには、これぐらいのことは挫折でもなん

でもない。海岸線を全部まわって潜水艦を探してもいい、島を全部めぐってジープを見つけてもいい。
たとえ、泥水をすすっても生きて帰るのだと心に決めている。折原は乙女らしくない言葉だと笑うだろうが……。いや、笑ってくれた方があいつらしいと留美はそう思い、自分もまた心の中で笑う。
そして、右腕に巻いた瑞佳のリボンを見やる。
これを見る度に、彼女のことを留美は思い出した。笑顔も、泣き顔も、そして今際の顔も……。
そんな、楽しい想い出、悲しい想い出。それらすべてを含めて瑞佳が宿っている。親友はいつでも自分と一緒なのだと。そう思える留美は、もう心の中へ逃げたりはしないだろう。
だから、七瀬留美は誓う。必ず、帰ることを。
二人と出会った、あの町の交差点へ。
二人とおしゃべりをした、あの学校の教室へ。
二人と走った、あの公園の道へ。

「結構痛かったわよ。今のは」
「そう？　でも、これでおあいこよ」
「……。まあ、そういうことにしといてあげましょう」
「で、これからどうする？　海岸線を歩いて潜水艦を探す？　それともどっかに行ったジープを探す？」
「うーん。外から見て潜水艦がある場所を見つけるのは、難しいと思うわ。参加者に見られたら襲われるのは必至だからね」
「んじゃ、ジープ？」
「それもねー。おそらく基地の奴が乗っていっただろうから、駄目だと思うわ」
「じゃあ、いったいどうするのよ！」
「それを今、考えてるんじゃない。あそこはもう方角分かんないし……。そうだ！」
「なに、今度は？　木の棒を倒して決めるとか言わないでしょうね」

「違うわ。そういえば地図の上の方に一つだけ、ぽつんと印があったのを思い出したのよ」
「地図の上？　ああ、北の方ね」
「北の端にあるから、大体の方向で歩いていってても着けるはずよ」
「なるほど。で？」
「で？　なに？」
「北ってどっち？」
「磁石は？」
「ないわ」
「……」
「……」
ドカッ
バキッ
クロスカウンターで倒れた二人が起きあがったとき、傾いた太陽は影を少し伸ばしていた。
二人は、なんで気が付かなかったのか……、と文句を言い合いながら、影に導かれて歩いていった。

712　まだ見ぬ敵

彰は外を見ていた。
窓から外を見ていた。
しかしそれは見張りとは名ばかり。
初音のことをボーっと考えていた。
（初音ちゃん……。愛してるよ……）
この思いは大きくなっていく一方。
独占したい。誰にも触らせたくない。自分のことだけ見ていて欲しい。
彼もまた、普通の男だった。
「……!!　耕一さん！」
彰の目に飛び込んできた『映像』。
武器をもった誰かが、森の中にいるのが見えた。
「どうした!?　彰君！」

「誰かが森の奥に！　武器も持っていたように見えました！」
一同に緊張が走った。
彰が武器の隠し場所に走る。
「北川君といったね。俺と彰君で様子を見てくる。もしかしたら怯えている人かもしれないからね」
「もしものためにこっちにも男手を……か。信用してくれたと思っていいのかな？」
北川は言った。もちろん裏切る気など毛頭無かった。
「裏切る気が大きいようには見えない。そして裏切る気が少しある程度なら、女の子を手にかけたりはしないだろ」
耕一が微笑んだ。
北川もそれに答える。
「まかせときな！　リーダー！」
女の子達は……。
「あなたに守られなくても自分で身ぐらい守れるわ」
「魔法使いをなめないでよ。逆に守ってあげるわよ」
「私も……戦えますから……」
「彰お兄ちゃんと、耕一お兄ちゃん……。気をつけてね……」
北川はこけた。

「あそこの辺りです……」
彰が森の奥を指差す。
小屋から見えるぎりぎりの位置だろうか。
二人はそこへ向かってゆっくりと近づいていく。
「おい！　誰かいるのか！　こっちから戦う意志はない！　島の脱出を考えている！　信用して協力してくれ！」
耕一が声をあげる。
返事は無い。
「あそこ！　耕一さん！」

彰がさらに奥を指差した。
「どこだ⁉」
「あの辺りに、また『見え』ました」
耕一の目には、木の裏に隠れようとするウサギが映った。
「あの木の裏です」
（ウサギの隠れたあの木か……）
遮蔽物を利用しながら、徐々に徐々にと近づいていく。
ここから小屋は遠い。まわりこまれたら小屋に侵入されてしまうかもしれない。
（北川君。その時は頼むぞ……）
耕一はその可能性は頭のすみに追いやり、目の前のまだ見ぬ敵に意識を集中した。
（相手はどういうつもりなんだ？）
彰も頭を働かせる。二対一なのは相手も気づいているだろう。なのに、こちらの呼びかけに反応しない。投降が最善と思えるのに。

（よっぽど強力な銃器でも持っているのだろうか？）
少々不安になるが、耕一が勇敢な戦士であることは分かっている。
そして二対一だ。
「少し先行する。周りに気をやっておいてくれ」
耕一が彰の先に出る。
彰は周りを警戒。
「おい！　誰かいるのか！　こっちから戦う意志はない！　島の脱出を考えている！　信用して協力してくれ！」
また返事が無い。
『あるはずがないのだ』
記憶をまるまる捏造するには大量の力がいる。なら少しだけ改竄してやれば良いのだ。
『うう……。初音ちゃん。いい子だ〜。がんばり屋

さんめ〜』
　初音を抱きしめ、ほお擦り。そして――耕一は初音の唇を無理矢理奪った。
『耕一お兄ちゃん！　私には彰お兄ちゃんがいるのに!!』
　――再会はそこで訪れた。

713　狩人の視界

　たぶんそれは、よほど注意していないと解らない程度の、小さな変化だった。茂みが風以外の何かで揺れる、微妙な動き。そこから人影を認めることは、至難の業であろう。
　気配を消して、ただそこにあること。フランクは人生のほとんどを、そうして過ごしてきた。特に意識してのことではなく、生まれついたときから存在を押し出すことなく、それを当然のこととしていた。
　要するに、彼は天賦の才として、隠密の技を身につけているのだ。
　大きく重い、ひとつの武器がそこにあった。誰かに取られることはないだろうと思いつつも、急いでここまでやってきた。幸いにして予想通り、誰にも発見されなかったらしく、フランクは無造作に置かれたままの狙撃用ライフルを拾い上げる。
『あなたは責任をとらなければいけない。この島に死んでいったすべての人々に対する責任を』
　武器の点検をしながら、少年の言葉を思い出す。漠然とした決意ではあったが、フランクはそうした考えを確かに持っていた。だが実際に何を為すかと考えると、死人を生き返らせることなどできない神ならぬ身としては、死んで詫びる程度がせいぜいだろう。自殺したところで、他に救われる者など居る

筈もないのに、である。
ならば全てを滅ぼさんと暗躍するであろう少年という神奈の端末を打倒するために、この拾った命を使うことの方が、よっぽど罪滅ぼしになるというものだ。
不思議なことに、今や少年に対する憎しみは消えていた。代わりと言っては何だが、恐怖という毒蛇がぐるりと心臓に巻きついている。そして、まともに戦って少年という存在にかなう筈のないことも、感じてはいる。
だが、それでも。あの一撃は、間違いなく有効だったと思う。遠距離から狙撃し、位置を特定される前に移動。そして、再び狙撃。これを繰り返すことができれば、いつかはあの少年とて倒れる日が来るだろう。つまり、一度は諦めた少年の打倒という無謀な挑戦は、この武器無くして為し得ない。
さっそく手ごろな木に登り、スコープで周囲を見渡す。少年が発見できればいいのだが、他の参加者に見つからないようにするのも重要だ。ひたすら影に隠れながら、ときおり周囲を警戒しつつ、フランクは少年の姿を求める。二、三度参加者とおぼしき声が聞こえたが、すべてやり過ごすことができた。
かなりの時間をそうして費やしていたが、目指す少年の行方はまるで判らない。張り詰めた神経に切れ目が入り、疲労に繋がり始める。そこまで来て、ようやくフランクにも運が向いてきたのだ。

『おーーーーーーーーい』
『ここだよ！　ここーーー！』

風に乗って、遠くから声が聞こえる。また参加者に遭遇してしまうところだったか。そう考え、冷や汗をかきながらスコープを風上に向けると、肉眼でも鉄塔を捉えることができた。速やかにその鉄塔へ照準を合わせると、やはり頂上に参加者二人の人影があった。

――いや。途中に、もう一人。

あわせた照準を、つつつ、と戻していく。心臓の高鳴りは、恐怖との再会を意識してなのか、理想的な情況での発見に高揚しているのか。ぴたり、と止めたスコープの中央に、黒い人影が入っている。

（……よし）

だが、ここから少年や鉄塔までの距離は、確実な狙撃を期待するには遠すぎる。しかもこの森を抜ければ、隠れるところもない。

「……待つ、ことだ」

自分に言い聞かせるようにして珍しく声に出したあと、フランクは目を瞑り、再び気配を完全に殺した。猛獣に挑む狩人に必要なものは、技能と、冷静さに他ならない。そうして改めて考えれば、自分を見失っていた先ほどの戦闘で、結果が出なかったのは当然なのだ。

再び静かに目を開いた時。

鼓動は常と変わらぬ平静さを保っていた。

どのような形であれ、少年を打倒することが出来さえすれば、もはや死んでも、悔いはない。

決意とともに両手に構えた銃を天に向け、静謐な空気に溶け込んでいくフランクの姿は、まるで祈るようであった。

714　霧中

戦いは終わったものと思っていた。

今、自分がすべき事がなんたるか。柏木耕一はよく理解しているつもりだった。人をこれ以上死なせない事。仲間を増やし、ここから脱出し、日々の生活に戻る事。簡単に言えばこういうことだった。

「俺達はもう戦うつもりはない」

再度、耕一は呼びかけるが返事はない。慎重な足取りで森の奥へ足を踏み入れつつ、もう一度。
「脱出出来る方法があるんだ！　ならもう、殺し合いなんてしなくてもいいよな？」
返事がない。気配は確かに感じるのだ。この森の何処かに誰かがいる、そんな感じはするのだ。
自分の少し後ろを歩いている七瀬彰が、この森の中に人影を見たというのがほんの少し前のことだ。そのほんの僅かな時間に、それ程遠くまで動けるわけがない、という考えもあった。
息を吐く。すぐ、ほんのすぐ近くに気配を感じる。感じている。間違いない。薄暗がりの中に、影がどよめく錯覚さえ覚えた。じりじりと暑い。その滴る汗が耕一を蝕む。少しずつ焦り。自分の声が届きもしない精神状態で、一歩踏み出して襲い掛かってきたら。自分は相手を傷つけることなく止めることが出来るか。掌が汗ばんできて、額から流れる汗が目に入る。小さく深呼吸しつつ汗を拭う。
「彰、横にも気を遣ってくれ」
「判った」
また一歩、森の深くに入る。
また一歩。
だんだん、深い深い森の中に沈んでいく。沼の中にもう腰まで漬かっている感じがして、あまりいい気分はしなかった。耕一はもう一度掌の汗を拭い、口の中で落ち着け、落ち着け、と呟く。腐りかけの落ち葉を音もなく踏みつぶし、入り組んだ枝の間をくぐり抜ける。葉が自分の頬を傷つける。痛みも感じない。感じるのはおかしなくらいに大きな焦燥だけだった。そろそろ相手の姿が見えてもおかしくない。気配はもうほんのすぐ近くにあると思った。相手が動いている感じはしない。こんないびつな森の中ならば、走ればきっと派手な音がするだろう。すぐ横で発砲音が聞こえるかも知れない。意識を集中しろ。目を閉じ、風のほんの揺らぎにも気を払う。何も感じない。呼びかける。

「誰かいるんだろう？」
背後で僅かに大気が揺らぐ。冷静な彼も、その冷静な性格なりに焦っているのだろうと思う。耕一が小さく伸びをして、後ろに振り返ろうとしたところで「耕一」という声がした。紛れもなく彰の声だったのだが、その静かな声が不可思議に冷静すぎた。耕一はそう思った。
「——どうした？」
息を吐いて尋ねる。気付くとほんの五メートルばかり後ろ、自分のすぐ後ろを歩いていた彰は少しばかり肩を竦めて、
「少し歩くの早いよ。危険だと思う」
「そうか？」
「うん。これ以上ふたりで先行しすぎると、どんな目に遭うか判らない。中華キャノンもあるしベレッタもある。けど……」
「……そうだな。取り敢えず一旦戻ろうか？」
——つい先刻。彰は中華キャノンとベレッタを武器庫から持ってきて、こう言った。
「キャノンだと後ろからの援護が難しいし、耕一がキャノンで僕がベレッタ、って事で良いよね？」
……いや、別に腰を振らなくてもキャノンは使えるんだけどさ、やっぱ印象深いわけじゃない、あの俺の姿ってばさ。
きっとあの時俺の姿を見ていたものはこう思っているのさ、中華キャノンは柏木耕一にこそ相応しい武器だ！　ってな。
千鶴さんたちに見られたら俺はどうするというのだ。きっと軽蔑のまなざし、或いは偽善者のまなざしで、
千鶴さんはきっといろいろ呟くのだろう——。
まったく、この世で一番乙女に相応しくない武器だよ。……乙女？　まあそれは……いいけれども。
だが、そう言いながらも、右手に握ったキャノンが何故、これほどに愛しい。

また局部に装着して腰を振りたいと願っている俺がいる。
俺ってやつは――。

そんな事を考えている耕一を、しかしまるで構いもせず、彰も言う。
「うん。今は僕、防弾チョッキを着てないし、武器はナイフと拳銃だけしかないんだ。慌てちゃってさ。――ごめん。やっぱり僕、少し怖いみたいだ。相手が混乱してマシンガンでも乱射したらお終いなんだ」
耕一は小さく息を吐く。森の中の気配の正体を確かめられなかったのは残念だが、やはり今は慎重に慎重を期そう。森の中には物音一つなく、霧がかったように何も見えない。
「よし、戻ろうぜ」
足の向きを反転させ、立ち止まったままの彰の横を通り過ぎようとしたその時、彰が左腕を動かした。

疑問符が頭に浮かぶ前に、切り裂くような痛みが耕一の身体を走った。叫び声をあげる暇も無かった。声にならない言葉が胸の底で暴れる。何が起こったのかと思う。この鋭い痛みは間違いなく刃物か何かで切り裂かれた痛みで、しかしこの場にそんな刃物など存在しない筈だった。肩口から肘を越えたところまで痛みは走り、やがてやられた箇所が判らなくなるくらいの真っ赤な痛みが全身に広がった。
まさかさっきの気配がいつの間にかこんな近くまできていて、そして高速で攻撃してきたのか?
「ぁぁぁぁあっっ、あぁ、」
やっと声になる。意味を為さない呻き声、混乱する。何が起きた、何が、辺りを見回す、気配はまるで感じない。あるのは自分と七瀬彰の気配だけだった。見えざる殺人者、そんな言葉が頭に浮かんで打ち消す、落ち着け、気配がないだけできっと何処かにいる、辺りに気を配れ、

――駄目だったのだろう。耕一の頭は、事態を受け入れることを拒絶していたのだ。この状況で、自分に危害を加えられる人間は一人しかいない。
　漸く事態を悟ったのは。
　自分の横で薄気味悪い笑みをたたえた、七瀬彰の黒曜石のような瞳を見た瞬間だった。

　一瞬の間もおかず、彰の右拳が自分の顔面に襲いかかる。口の中が切れる痛みを感じ、軽い眩暈を覚え、思考が混乱し、思考を放棄したくなる衝動に捉われ、そして本能で辛うじて受身を取ろうとしたものの、拳の勢いに逆らいきれずに、後ろにあった大木の幹に後頭部を叩きつけられた。
　脳震盪が身体の自由を奪い去る。世界が二重に重なって見えて、全身の筋肉が一瞬弛緩した。手に持っていた中華キャノンを取り落とし、彰がそれを足で蹴飛ばす姿を見た。首を傾げ、うっすらと笑う七瀬彰。耕一の頭は、まだ何が起こったか認める知性を再獲得することが出来ない。
　そして、自分の襟元を掴みながら上目遣いで睨む。自分より一回り小柄な体格の彰は、乱暴な手つきで、力の抜けきっていた耕一の身体を、信じられないことに片手で持ち上げると、狂ったような早さで大地に強く叩き伏せた。
　再び脳震盪が自由を束縛する。知性が戻らない。何があったかを冷静にまとめる思考が浮かばない。自分の上に馬乗りになり、その黒曜石の瞳で自分を睨み付ける七瀬彰。奪われた知性が戻り、耕一はやっと事態を把握した。
　自分の左腕を切り裂いたのは七瀬彰だ。そして今、自分よりも十五センチは身長が低く、体重に至っては二十キロ程も違うだろう小柄な体格の彰が、その腕力でもって自分を制圧しているのだ。

「――耕一」
　耕一の上にまたがりながら、何かの冗談のように

低く暗い声で七瀬彰は言った。「彰っ、何をッ!!」
耕一は叫ぶが、その声がまるで届いていないかのような顔をして、彰は再び「耕一」と呟く。自分の腕から噴出した血が彰の顔を汚している。殆ど真っ赤になった頬と上着が、彼の『異常さ』を耕一に認識させた。いつか感じていた脅威。「こいつはどうしてこんなに暗い眼をすることが出来るのだろう」。何かを、大切な何かを忘れてしまった人間の顔だった。——そして。もっと言うならば。
人間には見えなかった。
まさか、と思う。初音は先に、彼に鬼の血を飲ませた。鬼の血を制圧できなければそいつは狂う。自分の父親がそうだったし、耕一自身も血に支配されかかったことがある。
鬼が彰を支配してしまったのか。
だとすると、敵が近くにいる事などは狂言だったのかもしれない。あの診療所にいた面子の中で一番戦闘力が高い俺を単独行動させ、不意打ちを混ぜて攻撃することで撃破する。確実に勝てる戦いをする。それが正しい獣の習性だ。
だが、彰の口から紡がれたことばは、鬼の思考とか、獣性だとか、そういうものからはどうしようもなくかけ離れているように思える言葉だった。
意味のわからない言葉だった。
「この、泥棒が」
——何を、言っている？
冷静になっていた筈の耕一の心臓が再び鼓動を高める。泥棒？　俺が？　何を、
無理やり思考をシャットダウンする。そんなことはどうでもいい。自分のするべきことは目の前の狂気を止めること。脳震盪は殆ど治まった。左腕に激痛はあるものの、彰との腕力差を考えればいいハンデと言ってもいいくらいだ。今自分の身体を押さえ付けている腕力は、鬼のものにしてはあまりにか細い。先程は、油断していたからやられただけなのだ。

例え鬼に覚醒していようとも、体格で優る自分が負ける筈がない。耕一は強引に身体を起こそうとし、
自分の誤算を思い知った。
「動くな!!」
身体を起こそうとした瞬間、彰は化け物のように叫びながらナイフを右手に持ち替える。そして一瞬の躊躇もなく、左腕に、先ほど自分が傷つけられた場所に、もう一度それを突き刺した。一瞬力が抜ける。同じ傷を抉られるのは想像を絶する痛みだった。左腕が切り落とされるかと思う。どうしようもない痛みが走る。耐えろ、悲鳴をあげれば相手の思う壺だ、耐えろ耐えろ耐えろッ、
耐えられない痛みがやってくる。ナイフが左腕を、骨の間を通すようにして貫通した。
「ぁぁぁぁッ！」
悲鳴を聞いても彰は表情一つ変えなかった。口の開いた顔に左拳をぶつける。食いしばることが出来なければ痛みは増す。骨が曲がるかも知れないほどの打撃が顔面を襲う。舌を噛み切りそうになる。左の打撃の傍ら、右手の動きも止めない。ナイフを一旦抜き去ると、再び体重をかけて、今度は肩に近い辺りの筋肉に突き刺した。
耕一はそれでも雄の鬼だった。もう声にもならなかった。抵抗する気力を失うような痛みを与えられても、それでも眼前の敵を倒しつくそうとする本能は消え去らない。両腕の自由は奪われているが、まだ自分には足がある。この体勢ならば背後は死角だ。制限されているとはいえ自分の筋力は充分にある。上半身しか押さえていないのは失敗だったな、思いつつ耕一は彰の後頭部を蹴り飛ばそうと足をあげた。しかし、彰が、目に見えない筈の攻撃をゆるやかな動作でかわした。「動くなっていっただろッ!!」叫んで、彰は再びナイフを左手に持ち替え、今度は右肩の上、鎖骨の辺りに向けて刃を振り下ろした。一瞬の躊躇も無かった。
「やめろッ――、やめろっ、彰、」
血が噴出した。全身の筋力がぶち壊されるような

痛みで、足を振り上げることとさえも出来なくなった。抵抗する力がこの瞬間完全に失せた。出来ることはやめてくれと哀願することだけだ。
ナイフが抜き取られる。哀願が通じたわけではない。彰は一瞬の躊躇もなく、同じ場所にナイフを突き刺した。今度こそ耕一は死ぬと思った。噴き出た血が彰の顔の血化粧を濃くする。自分の身体の血の半分以上が噴き出たのではないかと思う。全身から力が抜けていく。――血化粧の奥で、
彰は笑っていた。
誰にでも優しい目をしていた頃が嘘のように、今まで共に戦ってきた戦友に見せていた表情が全て冗談だったかのように、戦慄に満ちた顔だった。
ナイフが再び抜かれる。何が起こるか一瞬で理解する。耕一は叫ぶ、
「やめろ、――――やめてくれッ!!」
彰は三度。同じ場所にナイフを突き刺した。哀願の言葉は失せ、ただそこには絶叫が残った。

耕一の心は折れた。

その声を聞いて彰はナイフに興味をなくした。ナイフは鎖骨に刺したままにして手を離す。小さく息を吐き、真っ黒な瞳と真っ赤になった顔で笑い、そして彰は次の行動に移った。最も原始的で、最も凶悪な攻撃が、彰の拳から繰り出される。
それは単純な殴打だ。上から下に叩き落される拳の攻撃力は、殺傷性こそナイフに劣るものの、相手の意識を奪う能力においては遥かに上を行き、そして相手を征服した、と実感することが出来る一番の攻撃だった。彰は右の拳と左の拳を交互に、耕一の顔面に叩き付けた。ぐしゃぐしゃと鈍い音がして、耕一の顔面はどんどん平らになっていく。
「ぐぁ……ッ」
自分に比べれば弱い腕力だ。けれど。人を殺すには充分な腕力だった。脳が揺れ、耕一の身体は抵抗というものを忘れた。両腕を動かすことが出来ない

ので防御も出来ず、一切の手加減のない打撃を、一切の抵抗もせずに受け続けるしかなかった。
「……やめろッ、……彰ッ！」
声で哀願。けれど彰の攻撃は止まらない。首がずれるかと思う。右、左、右、左。両の拳が雨のように降る。口の中が切れた。口を開けば間違いなく血が噴き出る。きっと鏡を見れば、自分の顔は紫色になっているのではないかと思う。必死に歯を食いしばる。リズミカルに繰り出される拳の一発一発に出来る、唯一の抵抗だった。
しかし、彰はその抵抗すら奪う。リズムを突然崩したのだ。一拍おいて、彰は右の拳を振り下ろす。耕一は抵抗する術もなくその打撃を受ける。叩きつけられた拳の痛みはここまでで最大で、耐え切れず耕一は口を開いてしまった。血が噴き出る。噴き出た血が彰の拳にかかる。真っ赤になった拳は、すごく満足そうに見えた。
「うぁっ……!!」
まだ彰の攻撃は止まない。再びリズミカルに、拳の雨が音を立てる。先の攻撃で奥歯が折れてしまったのだろう、食いしばる力が弱っている。先よりずっと凶悪な痛みが耕一を襲う。いつまで続くのだろう、と思った。もう何度殴られたかも覚えていなかった。感じる。彰が少しばかり手加減している、と。それは慈悲でも躊躇でもなんでもなく――
自分の意識を失わせないために。
意識を失わせず、そして耕一に抵抗の意志をなくさせる。完璧なバランスの攻撃力だった。
「くそッ！　やめろっ――!!」
怒りが頭の中で爆発する。その熱が耕一の抵抗力となって形になった。最後の力を振り絞って耕一は身体を起こそうとする。逆の体勢になればこちらの勝ちだ。そう思った。
しかし、彰は。
耕一が力を入れた瞬間に立ち上がって。耕一が身体を起こそうとしたそのタイミングを見計らって。

首元に足を振り下ろした。
一瞬で呼吸困難になり、起こした身体がふら付き、何より死にそうな激痛に襲われ、やっと立ち上がれそうだったのに、立ち上がる前より酷い顔をしていた。耕一がやっと呼吸を取り戻し、再び身体を起こそうとしたところで、彰の前蹴りが顔面に飛んできた。鼻が潰れる音がしたのと、後頭部が地面に叩きつけられる音がしたのが殆ど同じ瞬間だった。
彰は再び倒れた耕一の上に乗り、拳に力を込め、真っ赤に汚れた耕一の顔に地獄のような打撃を打ち込もうとして、しかし耕一が既に泡を吹いて失神している姿を見て、やっとやる気を失った。
彰はやっと、拳に込めた力を抜いた。漸くにして、その拷問は終わった。

気を失ったのは殆ど一瞬だが、耕一は完全に彰に打ちのめされた。それこそ、泡を吹くまで。
自分の胸の上に彰が足を乗せて立っている。耕一はふと自分の身体が何処までひどいことになったか確かめようとして、絶望的な気持ちになった。
少なくとも腕の方は動脈をやられているだろう。今なお血がどくどく流れている。身体にはもう、一粒の力も残っていなかった。常人なら既に死んでいるだろう。それでも、鬼の血を体に宿した耕一は、意識を失わないで彰の姿を見る事が出来た。
もう、ただ生きているので精一杯だったけれど。
「どうして、彰、何が……」
「泥棒め、まだそんな口を聞く余裕があるんだな」
彰は——心底、悔しそうな顔で言う。何故そんな表情をする？　その顔をしたいのはこっちだ、
「どろぼう、だと？」
「人の大切なものを——ッ」
何だ、それは？　大切なもの。泥棒。導き出す。さっき初音ちゃんを抱きしめていた事か？　なあ、彰、あれは違うよ、全然違う、
「おかしな話だよ、人の大切なものに手を出せるよ

うな奴と、一緒に戦っていたなんてな」
「――何を。何を、言ってる――」
判らない、彰、何を、
「黙れよッ！　……僕だって、なんでこんな事してるか判んないんだよッ！　お前が変なことをしなければ、僕だってお前をこんな目に遭わせなかった！　お前のせいなんだよ！　全部お前のせいだッ‼」

ふと、彰の興味が――自分から失せた。
真っ赤に染まったナイフと中華キャノンを森の中に放り、そして拳銃を右手に強く握ると、
「初音ちゃん、初音ちゃんが待ってる――」
立ち上がってそんな事を呟いた。
だめだ、今の彰をあそこに向かわせるわけには、
「やめろッ……」
身体を起こすことも出来ず、耕一は声で制止する。
だが、彰は心底不愉快そうな目で睨むと、
「黙れよッ」
傷ついた耕一の左腕を、その足で無慈悲に踏みつぶした。耕一が何度目かの絶叫をあげるのを聞いて、彰は今度こそ完全にあさっての方向を向き、
「はつねちゃん」
そう呟いて、駆け出していってしまった。
止めないと、
そう思うのに身体が動かない。落ち葉の絨毯の上で、耕一は口の中を蹂躙している赤を舐めながら、真っ赤に晴れ上がった顔をぐちゃぐちゃにしながら、
「なん、だよ、畜生、何なんだよ、ちくしょう」
ただ、そう吐くことしか出来なかった。
初音ちゃんが、診療所が危ない。そう判ってはいるが、耕一は動くことが出来なかった。結局、その訳の分からぬ混乱の中、耕一は意識を失った。深い霧の中に耕一の意識が沈んでいく。

715　発見

「……と、いうわけで。わたしたちには、いくつかの選択肢が残されているの」
　ぱんぱんと手を叩き、集まってきた梓とあゆちゃん、詠美ちゃんを相手に、小会議を開く。
「まず当初の目的どおり、初音と耕一さんを探すこと。ただし、いまレーダーで確認した限りだけれど、初音と耕一さんは一緒に行動しているようだし、急務ではないと思うわ」
「なんだか同じ建物に、大勢出入りしているみたいだしね」
　梓が付け加え、わたしも頷き返す。街角の一室に、ここ同様の安全地帯を構築できたのだろう。
「次は残り二枚のCDを探すこと。ただしこれは、初期の保持者が死亡してからかなりの時間が経っているので、追跡は困難だと思うわ」
「正しくはさらにもう一枚、CDがあるらしいけどね」
　梓の補足が入る。
「最後に、セイカクハンテンダケを求めて、北川潤、来栖川芹香、スフィーの三名を探すこと」
「ふみゅ？　どういうことなの？」
　繭ちゃんの豹変と、キノコの効能を説明し、彼女にも納得してもらう。
「……あたしは、キノコだと思うね。せっかく仲間が増えても、一緒に動けないんじゃ無意味だしな」
　数的優位を絶対のものとする方向へ、梓が主張する。深く考えるまでもなく、五人全員が銃器を携行していれば、たいていの危険は排除できる。しかし一方で、今の繭ちゃんを連れて歩くよりは、ここに篭っていた方が安全なのも確かだ。
「ねえ、この三人の情報更新、してみてくれないか？」

梓がメイドロボに注文する。
「はいー。北川さん、芹香さん、スフィーさんですよね。この三名様は、一度二手にわかれてから、もう一回合流していますぅ。画像、出しますかー？」
「うん、そこの一番でかい画面に映してよ」
三人一緒というのは、ラッキーと言えるだろう。
ヴン、と軽いゆがみを起こした後、画像が大きく出力された。
「まあ……」
「ふみゅ？」
「うっわ……モロだ……」
「みゅー？」
「うぐぅ、痛そうだよう」
真上からの画像なので、想像でしかないのだが。
そこには、降りしきる雨の中、的確な一撃をお見舞いされた、実に痛々しい北川潤の姿が写っていた。

犯人は来栖川綾香……いや、芹香のはず。

来栖川家の二人のご令嬢の噂は千鶴も知っていた。
格闘好きでお転婆な綾香、そして飛び切りのお嬢様と評判の芹香。噂が間違っていないなら、彼女がこのような挙動を示す可能性はゼロに近いだろう。
「ちちちっ、千鶴姉！　これって⁉」
「ひょっとして……⁉」
二人顔を見合わせる。

「「見つけたーーーーーーーーー‼」」

二人の脳裏に過る過去の記憶。セイカクハンテンダケを食べた初音の凶悪な表情と禍々しい叫び。ありえないが当たり前になるそのキノコを、私達は必要としていた。

716　狂走

——……美咲さんを奪われ、由綺や冬弥達を奪わ

れ、みんなを奪われた。その僕からとうとう、初音ちゃん迄を奪おうというのかい？
そんなことって許せるかよ……。
……そうだ、許せない。許せるわけがない。
だから、耕一さんを刺した。僕は悪くない。
もうこれ以上、僕からは何も奪わせやしない。
僕だって男だ。
自分の意地を通すにはどうすればいいのか、そんなこと、分かっている。
耕一さん。
あなたは、やってはいけないことをしたんだ。
……もういい。もう、これ以上奪われるだけでいるのはまっぴらだ。
奪われ続けるくらいならば、僕も……。
僕もただ……。
僕も奪う側にまわるだけさ……——
何処で歯車が狂ってしまったのか。それは冷静な彰の思考ではなかった。
かつて、共に戦ったときに得た信頼感はかき消えていた。
かつて、彰が覚えた耕一への憧れは微塵も残っていなかった。
嫌がる初音の唇を奪った悪漢に対しての憎悪。
そして嫉妬。
このたった二つの感情が、それだけが彰を走らせていた。

——家屋内。
パァーッ!!
それは、武器を行き渡らせようとしてそれらを吟味しようとしていた時だった。
初音の胸元に僅かな光が宿ったかと思うと、心安まるような、透き通るようなその蒼い光は、部屋いっぱいに広がった。
「な、なにっ？」

慌てて襟元を広げる初音。
その瞬間、一同を閃光が襲ったかと思うと、間もなく、その光は収束し、僅かな燐光を残すのみとなった。広げられた襟元から漏れる燐光に、四人の視線が注がれる。
『なんだか、ＣＭで見かけるディズニー映画みたいね……』
『ラピュタにこういうシーンがあったような気がする……』
『なんでしょう、これは？　不可視の力とは異なる、何か不思議な力を感じますが……』
『うおっ!!　ナディアみてーだ……！』
スフィー、マナ、葉子、そして……北川潤。
六つの目がジットリと潤を睨み付けたが、覗かれてしまった当人には、それ以上の関心事があった。
「これは、賢治叔父さんの形見の……」
襟元から服の外に取り出されたそれは……。

それは、サファイアのような蒼い石のペンダントだった。
キバのように先端の尖ったそれは半透明で、中には大理石のように乳白色の筋が幾つか入っている。
耕一の父であり、柏木四姉妹の叔父に当たる柏木賢治。
この首飾りは賢治の生前、初音がお守りとしてもらった物だった。それを身につけて以来、初音は大きな怪我や災厄に見舞われたことがなかった。
初音は、今でもそれはお守りの効果だと信じている。もっとも、この島に連れてこられた時点で、その御利益とやらも怪しい物だが。
まぁ、今まで死んでいないだけでも効果はあったと考えて良いのかも知れない。
「今まで、こんなことはなかったのに……」
トーンの落ちた声で首飾りを見守る初音。

1991
2001
1986

「初音ちゃん……」
一同が初音を落ち着けようと、何か言葉をかけようとした瞬間、首飾りの先端が、くるくると回り始めた。
「今度は何っ⁉」
驚く一同の中、初音は言いしれぬ不安に襲われていた。
『いったい、何が起きているの？　……嫌な予感がする。三人で此処を出ようとしたときよりも、確実に嫌な予感が――』
初音の悪い予感は、既に的中していた。

717　望まれざる再会

「で、その、神尾さんがいるところはまだなの？」
もう、何時間歩き続けただろう。私は苛立ちを往人に投げる。そのいらだちの元凶は先ほどから探知機と無制限一本勝負を繰り広げていた。
「くっ、この、くそ、なんでだ、この、これか、それとも、ここか」
探知機は往人の執拗な攻撃を受け流しているようだった。
そもそも、往人は機械の操作は苦手なようである。住所不定な旅人を職業としている（無職とも言うが）往人は、日頃から機械に接していないから、至極当然である。
さすがに自動販売機を使うことやテレビを点ける程度はできるが、パソコンを使うことも、ビデオで留守録する事もできない。今どきの若者にしては珍種に分類されるであろう。
「うるせぇ！　珍種言うな‼」
往人はついに切れた。実に大人げない。
いや、だって、ほら。名簿にそう書いてあるんだもの。そう言って、名簿を往人に見せ、そこを指で指し示した。

「どれどれ……な、ひとを、としている、ともいうが……」
お約束だ。そう心の中で私は呟いて空を見上げた。
さて、私がなぜ、このバカと一緒に歩いているかというと……。
「おい、小さい声で言っているつもりだろうが、聞こえてるぞ」
聞こえるように言ってるのに決まってんじゃない。
何、当たり前なこと言ってるの？
「……どうせ、俺は普通の奴とは違う根無し草だよ。ビデオどころか、テレビやパソコンの操作もわからない機械音痴さ。あんたみたいなお嬢様とは住んでる世界が違うのさ。そもそも、高校に行ってる奴がそんなに偉いのかよ。生きていくのにたいして役に立たない知識を詰め込んでるだけだろ、どうせ……ぶつぶつ」
あ、いじけた。でも、家すらないんだから、家電製品を持ってないのは当たり前じゃない。
「グサッ」
えー、バカはほっといて。なぜ、私たちはこうも、さまよってるかというと。
「しょうがねーだろ。探知機が使えなくなっちまったんだから。ちょっとつけっぱなしにしただけで、電池が切れるなんて全く根性の無いやつだ」
それぐらい、少しでも考えれば分かるでしょう？想像力のない人ね。まったく電池切れと気付かずに猿のようにカチカチと動かして……。
「……」
ああ。また、いじける。もう、話すすまないんでシカトしていくわよ。
探知機のバッテリー切れの前に、024の観鈴さんと003が一緒で、023の晴子さんが単独行動している、ということは確認した。
名簿によると003は天沢郁未さん。何人かいる不可視の力の持ち主の一人。
もしかしたら、彼女たちが結界を破る鍵になるか

もしれない。そう思って、往人と同行してるんだけど。
　まあ、法術はショボイんだけど、反射神経とか体力とかはケダモノ並にあるから一緒にいる方が安全、っていうのもあるしね。
「ショボイ……。ケダモノ並……」
　ああ、まだ落ち込んでる。まったく見かけによらず根性無いんだから。
　で、まあチマチマと歩いてると。正面になんか鉄塔らしいものが見えたのよ。ただ、深い木々の隙間からなんでよく見えないんだけどね。
「なんだ。ありゃ。櫓か？」
　櫓なんて古風な。
「古風って。あのな、都会の方じゃもうほとんどないが、地方だとああいう火の見櫓はまだ残ってるんだぜ」
　へー、そうなんだ。さすが自由人。で、緑の帽子はかぶらないの？　ギターかハーモニカは持ってないの？
「うるせえ。ハーモニカは邪道だ」
　ああ、左様で御座いますか。
　なんて、バカなことを言いあってると。
「ん？　なんだありゃ？」
　どうやら、往人がなにかを見つけたらしい。
　だが、目を凝らしても何も見えない。巧妙に隠れているのか、ただ小さくて見えづらい小さい獣なのかは分からない。
　少しペースを落として、注意深く進む。
　そして、
「また、動いた。獣か？　人か？」
　そのときの私が運が良かったのか、悪かったのかは分からなかった。
　でも、私は目が合ってしまった。
　そんなに近い距離ではないのに、彼もまた驚いている顔が見えたような気がした。
　そこにいたのは、懐かしい顔だった。

まだ、自分が幼かった頃、何度も会った顔。そして、もう二度と会えないと思った顔。
「あの、おっさんは確か……。おい、ちょっと待てよ。あいつは!!」

この人は敵じゃない。
そう思い、私は走り出していた。
だが、私は知らなかった。
彼が狙撃銃を構えていることを。

718　ふたつの奇跡

わたし達は反転しているであろう芹香さんと交渉し、セイカクハンテンダケを入手すべく、出発の準備をしていた。残留するメンバーに指示を与え、食料や飲料水の分配を行うだけでも、それなりの時間を要した。
行儀よく座る繭ちゃんと一緒に、食料を整理する。
わたしの背後から、残る三人の激しく言い争う騒がしい声が聞こえてきた。
「な……なんでよっ！　このくぃーんをカンヅメにして、かつやくさせないなんて、どういうつもりよっ！」
「うぐぅ、ボクも一緒に行きたいよっ！」
「くぃーんとか、うぐぅとかって……お前ら普通に日本語話してくれよ……」
激しく常軌を逸した口論に、梓が珍しく言葉を詰まらせていた。
小さくためいきをついて、わたしは立ち上がる。
助け舟を出さなければならない。いや、事実を確認しなければならない段階に来たということだろう。むやみに心配させるようなことはしたくないが、情況を正しく理解しないことには、生き残ることもかなわないのだから。
「……ちょっといい？」
「ふみゅ？」

「こんなことは言いたくないのだけど……わたし達は御堂さんほど、強くはないわ。だから、今の繭ちゃんを連れて歩いた場合、生き残る自信はないのよ」
「そ、そんなこと……わかってる……わよ」
「うぐぅ」
強弱はともかく、御堂さんでも今の繭ちゃんを連れて歩けるかどうかは疑わしい。神頼みのような幸運にすがる気もなければ、試してみる気もまったくなかった。

——結局のところ、キノコ捜索隊に割けるメンバーは、梓とわたししかいない。どちらか片方が残ることも考えたが、戦うつもりならば戦力を分けるのは愚かなことだし、逃げるつもりならば残る必要はない。今までどおり、あゆちゃんを連れて行くことや、詠美ちゃんを連れて行く選択もある。
ところがその場合、残る繭ちゃんの監視役がいなくなるし、侵入者への対処に不安が残る。しかし詠美ちゃんならば、ここで何かあっても、最初から逃げるつもりで行動するなら、どうにでもなる。モニターによる監視と、独特の構造を利用すれば、初めて侵入する相手ぐらいは、問題なく回避できるはずだからだ。
そんなわけで、詠美ちゃんにはＣＤ解析の続行と管理を任せ、あゆちゃんに繭ちゃん（と動物たち）の面倒を任せることにした。
「……だから留守の間、よろしくお願いね？」
「ふみゅーん」
「うぐぅ……（ってボクの台詞こればっかりだよっ!?）」
「じゃ、雨が小降りになるのを待って出発するから。詠美、あゆに繭、あと頼むよ」
一転して気楽そうに鞄の中身を整理する梓と、頭を抱える詠美ちゃんが対照的だ。

残るあゆちゃんは、ひとり静かにどこかを見ていた。この情況での心理的閉塞感は、近いものがあるのかもしれない。同情を覚えながらも、振り返り繭ちゃんに声をかける。
「繭ちゃん」
彼女は相変わらず動物たちを従えて、手には丸い機械を持っている。
「あゆちゃんの言うことをよく聞いて、動物さんたちの面倒を見てあげてね」
「みゅー、これ、あげる」
晴れやかに笑いながら、その機械を手渡してくれる。先ほどから気になっていたので、チラチラ見ていたことを知っていたのかもしれない。
「……いいの？」
こくん、と繭ちゃんが頷く。なぜか確信めいた行動だった気がする。
この機械を持っていく意味はあるのだろうか？　そう思いながらも、彼女の瞳に気圧されて、わたしは機械を受け取った。あとで調べればいい、と考えながら。

期待に反して、全ての用意が整った頃には、雨足はより強くなってしまった。
洋上に浮かぶこの島を滅ぼそうとしているかのように、雷が丈の高い大樹を選び、轟音とともに焼き尽くしてゆく。あまりの天候変化に呆れながら、待ち時間をデータベースの閲覧に費やすことにした。
偶然開いたデータの×印が、ふと目に入る。死亡を示す、その不吉な記号が、件の機械の持ち主に重なっていた。
そうだ、この機械は彼女が持って……いた、のだ。
「秋……子さん」
思わず呟いたが、他の皆に聞こえないように語尾を濁す。彼女の死亡地点である教会では、多数の参加者が戦闘しており、しかも現在の生き残りはほとんどいない。なんの偶然だろうか、その中に繭ちゃ

んも入っている。あくまで可能性としてだが、反転した彼女ならば、あの秋子さんを打倒する勇気があったかもしれない。
わたしは、秋子さんと並んで歩いてきたはずだ。その距離は遠く、決して交わることはなかった。しかし、目指す方向は同じだったのだ。
視線を天井に泳がし、しばし呆然としていたが、そこで同様に天井を眺めている人影を見つける。
（……あゆちゃん？）
そう言えば雨足が強くなった頃から、何か遠くを見るような目をしている。声をかけようと立ち上がり、彼女の方へ歩く。
「……千鶴さん？」
振り向きもせず、視線を動かさないまま、あゆちゃんが先手を取って言い当てた。にわかに鋭い挙動を示した彼女に、全員の注目が集まる。
「……もうすぐ、晴れるよ」
あゆちゃんを除く全員が、思わず顔を見合わせる。外部モニターに移る光景は、いまだに雷雨であり、暗く、とても晴れるだろうとは思えない。
「ここを出たら、あっちに行かないと……間に合わない、よ」
そう言いながら、振り向いて指し示したのは、確かに芹香さんがいる方角だ。先ほど調べた、あの画像の時点で集合していた参加者たちは、今や二人組にばらけている。
「芹香さんを探すのだから、そうなるわね」
「ううん、もっと、先の方だよ……」
まるで、その〝もっと先〟を見据えるかのように。彼女は、西の方角を見つめていた。
「あ……あゆちゃん……？」
様子のおかしい彼女に、その言動を問いただそうと発声した瞬間。まぶしい光が、サーチライトのように外部モニターから投げかけられていた。

「なななな!?」
「みゅー!」
「攻撃されたの!?」
「いえっ! 熱エネルギー反応では、ないみたいですうー!」
「じゃあ、なんだってんだ!?」

光が弾けた一瞬の間を境にして。
稲妻は陽光に変わり、地を流れる水音だけを残して、雨雲は消え去っていた。
果てしなく青い、嘘のように晴れ渡った空が、画面一杯に広がっている。

それが何かと問われれば。
奇跡だと、答えるしかない。

「千鶴さん」
「あゆちゃん、どうして……?」
何から聞けばいいのか、解らない。
言いよどむ私に、あゆちゃんは静かな一言。
「お願いだよ、ボクも連れていって。急がないと、間に合わないいんだよ――」

あの光が、ひとつの奇跡とするならば。
それを感知した、彼女の言動も。

間違いなく、もうひとつの奇跡だった。

719　誇りを捨てない僕らのために

神尾晴子はその惨劇を森の陰の一番深くから見た。
七瀬彰の発言も、柏木耕一の感覚も、実は正しかった。彰は口からでまかせを言っただけだが、嘘から出たまことで、晴子はそこにいた。事実彼女は、森の奥深くで戦闘の準備をしていたのだった。

晴子は銃火器の調整をしていた。
　いざという時に武器がうまく動かなかったら、それだけで自分の死は確定する。この鉄の塊どもが自分の命綱だった。詳しい知識はないものの、機械いじりがどうしても駄目という訳ではない。ある程度は感覚で調子が判るものだ。
　晴子は溜息を吐く。
　それでも構わない。そう思ってはいた。武器の欠陥のせいで自分の命が落ちようとも、それで構わないと。どうせ最後には、自分が守りきれなかった宝――愛娘・観鈴のところに行くつもりなのだから。
　けれど、晴子はやっぱり無駄死には嫌だった。愛娘を殺したこのゲームを全て破壊しつくして、地獄の業火すらも恐れずに破壊しつくして、最後に観鈴のところに行きたかった。晴子は天国も地獄も信じていない。死んだら皆同じ場所に行くのだと信じている。そこにはきっと観鈴がいるだろう。
　殺して殺して殺しまくってやる。重い鉄の感触が少しずつ理性を奪っていくような、そんな錯覚を感じる。冷めた目で銃火器を弄る。鉄は冷たくて、夏の日差しの中では少しだけ心地よかった。
　晴子が大体の武器の調整を終え、そのうちのひとつであるニードルガンを手にとって、殺人鬼になる覚悟を決めようと目を閉じたその瞬間。落ち葉を踏む音、そして、男の声が聞こえてきたのである。
　晴子は慌てて木陰に身を隠す。
　ニードルガンを握り締める。冷たい鉄は、けれど体中に走る緊張までも奪い去ることは出来なかった。心臓の音が身を支配する。落ち着け、と必死に心臓に言い聞かせても駄目だった。言えば言うほど心臓は暴れた。近づかれたら聞こえるくらい、心臓の音が高い。自分には武器がたくさんある。不意をつけば負ける可能性は低いし、たとえ負けたとしても、自分には何もない。観鈴の元に行くことが出来るのだし、何を恐れることがあるのだろう、そう思うのに心臓の音は晴子の身体の自由を奪って鳴り続ける。

なんとか武器を静かに鞄の中にしまうと、音を殺して晴子は後ずさりをする。離れているから音は聞こえない筈だ。そう判っていても晴子の身体は小刻みにしか動かない。
「俺達はもう戦うつもりはない」
はっきりと聞こえた。
「脱出出来る方法があるんだ！　ならもう、殺し合いなんてしなくてもいいよな？」
意味が理解できるまでに、かなりの時間を要した。
「――帰れる、やて？」
もう戦闘をしなくても帰ることが出来る。誰も傷つけなくても安全な場所に戻れる。男の声はそう言っていた。その声を、もう少し早く、観鈴と共に聞くことが出来たなら。
その声が本当であれ嘘であれ、もしも二人で一緒にいられたならば、きっと疑うことなく自分たちは飛び出して、彼らと共に行動をしただろう。
その時、晴子はやっと自分の行動理念に小さな疑問を覚えた。「生き残りたい、殺し合いなんてもうしない」。そう言って走り回る彼らの姿を見て――思う、なぜ自分は人殺しをしようと思っているのか。
観鈴を失った。このゲームのせいで、何より大切なものを失った。だから、他の参加者を殺す。はじめからゲームに乗っておいて、観鈴を害するものをすべて殺せばよかった。そういう後悔のために、自分は今から人殺しをしようとするのか？
（うちは、アホやないか）
彼らはなんとかここから脱出して、なんとかして日常へ続く細いか弱い橋を渡ろうと努力しているのだ。自分は何だ。観鈴と一緒にがたがた震えるばかりで、脱出する方法も模索せずにいて、そして観鈴を失った悲しみを八つ当たりで埋めようとする。
（日常がなくなったんなら、八つ当たりなんかせんでさっさと自殺なりすればよかったやないか）
何もしないでいて、失った悲しみを八つ当たりで

埋める。それこそがこのゲームを企画した人間の狙いで、その狙いに自分は乗っているのではないか。娘を失った娘の元に、友達を送ってあげよう。娘を失った瞬間、自分はそんな事を考えた。だが、考えれば考えるほど馬鹿げている。そんなくだらない事をする前に自分が逝ってやれば良かった訳だ。
彼らは、自分たちと違って、希望を捨てなかった。神様に祈って救ってもらうことだけを信じて、何も考えなかった自分たちとは、根本から違うと思う。
晴子はやっと、そのことに気づいた。

彼らの仲間に入れてもらおう、というつもりはなかった。観鈴のいない世界——寂しい世界に生きていける自信はない。彼らと知り合うことは、彼らに迷惑をかけるだけになると思う。
晴子は少し笑って、木陰で息を吐く。
(あんたら、がんばって生き残るんやで。あんたらみたいな子らがいる、ってだけで、うちは大分救われたわ。がんばってな)
そう思って木陰の間からその彼らの顔を見ようとしたところで、晴子は異変に気がついた。
二人の男がそこにいた。一人はぼろぼろになったファミレスの制服を着た立派な体躯の青年。もう一人は、一見大人しそうな雰囲気をした小柄な体躯の青年だった。
その貧相なほうの青年が、左手に持ったナイフを、相方に向けて上下に振るったのだ。
「なっ——!?」
思わず大きな声を漏らしてしまう。だが、幸い争う二人にはその声を聞きとる余裕は無かったようだ。貧相な方の青年の不意打ちで面食らった巨漢は、あっという間にねじ伏せられていた。争う声は聞こえない。ただ、倒された男の絶叫だけが周囲に響いている。
小ぶりのナイフが何度となく振り下ろされる。雨上がりの湿った空気の中で、噴出す血のにおいがひどく禍禍しい。やがてナイフを放り出すと、小さな

方の青年はその拳で、相方の顔面に攻撃を始めた。馬乗りで、無機質な動きで拳を振り下ろす。殴られている方が叫ぶ、

「……やめろッ、……彰ッ！」

殴っている青年は、アキラというらしい。アキラは相方の顔面に拳を全力で振り下ろし続け、その抵抗する意志を奪う。必死の呼びかけにも応じず、攻撃を続ける。そして抵抗力を失った相方に向けて、首が吹っ飛ぶような蹴りをぶつけた。

晴子は思わず眉を顰めて目を逸らす。あの角度で入った蹴りは、命を奪うほどの破壊力があると思った。仲間に向けて放たれる攻撃では、なかった。一体何が起こっているのだ。彼らは脱出をする為に手を組んでいたのではなかったのか？

一方的に叩きのめされた男を横目に、アキラは、何かしらを呟いて、森の奥へ走り去っていく。倒れた男は、それでも意識が辛うじて残っていたのだろう、追いかけようと何とか身体を起こそうとするが、すぐに力尽きて倒れた。

裏切り。そんな言葉が、晴子の脳裏を過ぎる。唾をごくりと飲み込んで、真っ黒な思いで胸を染める。

（――やっぱり、皆乗ってるんやないか）

きっと彼――アキラは、体よく他人を利用して、そして生き残ろうと考えているのだと思う。今まで共に戦ってきただろう仲間を殺してまで、ひとり生き残ろうとしているのだ。

先までの自分と、何も変わらなかった。

自分は全てを皆殺しにして自殺する。

アキラは全てを皆殺しにして帰還する。

いったい何が違うのだろうか、と思った。

憎むべきは一体何なのだろうか、と晴子は考える。

身体が震えているその原因を、晴子は考える。

思った。憎むべきは、主催者だけではない。自分の弱さを誤魔化す為に、他人を傷つけようとする人間だ。自分のことで、アキラのことで、そしてこの

島にいるあらゆる殺人者のことだ。
　この島で行動を共にした人達。あさひ、智子、往人、観鈴……誰もが、強くて優しかった。
　けれど、皆がそうである訳じゃない。自分の為に他者を傷つける人もいっぱいいた。いや、先程までの自分もそうだった。
　晴子は自分のことを恥じながら、けれど、今更だけど、優しく、強くあろうと思った。

　晴子は恐る恐る、その死体に近づく。めった刺しにされ、血をだらだらと流して倒れているその青年の傍に近づいて、聞こえる筈もない言葉をかける。
「あんたも——災難、やったな」
　顔を歪め、晴子はその身体に触れようとして——殆ど聞こえないほどの薄い薄い呼吸が、しかし確かに自分の耳に届いたのを確認する。
　——生きている。
「あんた……大丈夫か」
　声をかけるが、まるで反応がない。大丈夫なわけがない、これほど傷ついてそれで意識があればそれはもう人間ではない。けれども。
　彼が生きていることには間違いがないわけだ。
　自分は大切なものを守ろうとした。そして、守れなかった。そして、今目の前で息を引き取ろうとしている男もまた、大切なものを守ろうとして、こうして走っていたのだろうと思う。
　今、この男に向けて銃の引き金を引くのは簡単だ。こんなゲームに巻き込まれているんだ、殺されたって文句は言えまい。自分だって大切なものをなくしたんだ、運が悪かったんだ、どうせ助からないだろう。理由はいくらでも付けられる。
　だが、——陳腐な言葉で言えば、
　それを観鈴が望んでいる訳がないのだ。
　晴子は、やっとそのことに気がついた。
　あの子が願うこと。そして死んだ友達が願っていたこと。やさしかった彼らが望むことを。

やさしくあれ。
晴子はその大きな青年を背負い先ほどまで居た喫茶店に向かうことにした。食べ物もあったし、何かしら治療に必要な道具もあるかもしれない。あそこならこの男を治療することができるかもしれない。
「……まだ、ゴールしたらあかんで？」
ピクリと体が反応した気がした。
「すぐに助けたるからな」
返事はない。だが、全身に体の熱を感じる。
晴子は歯を食いしばって歩き出した。

神尾晴子は大切なものをひとつ取り戻した。それは、人として見失ってはいけない大切なもの。それは、観鈴が大切にしていた想いのひとかけら。
「……見ていてや、観鈴」
晴子はもう二度とそれを捨てることはないだろう。
それは、優しさであり強さでもある。
そしてそれらは、誇りとも言うのだ。

720　合言葉は

「なぁ、千鶴姉」
梓が声をかけてきた。
「何？　梓」
「繭達をここに置いていくのはいいんだけどさ、誰かここに来たらこいつら危険じゃないか？」
梓の指摘はもっともだった。
確かにこの殺人ゲームに乗った誰かがここを訪れないとも限らない。
かといって連れて歩くのはもっと危険だ。
私は少し考えてメイドロボに声をかけた。
「この施設で鍵をかけられるような場所は無いかしら？」
「え〜とですね〜、ちょっとお待ち下さい」
そう言ってパソコンで施設内を調べ始めた。
「え〜とですね〜、ここ以外には無いみたいです〜」

「そう。それじゃあ繭ちゃん達にはここに居てもらって鍵をかけておけば大丈夫ね」
「あ、でもですね～」
「何？」
「ここのロックはパスコード式になってますからパスコードを設定しないといけないんです～」
「パスコード？」
「はい～、キーワード入力式か応答式でパスコードを設定できます」
「そんなのなんか適当に決めればいいじゃないか、千鶴姉」
「ダメよ。簡単に分かるようなパスコードだと意味がないでしょ」
「う～ん……、でもさぁ、あんまりややこしいのだとこいつらが外に出たときに困らないか？」
「あら？　外に出ることがあるかしら？」
「確かここトイレ無かったはずだけど」
「そうなの？」
　私の質問にぽややんとした雰囲気のメイドロボが答えた。
「はい～」
「そう、それは困ったわね……」
　簡単なパスコードだと他の人にすぐに分かってしまうから意味がない。
　かといってあまりにも難しいのだとこの子達は間違いなく覚えきれないだろう。
「何か良い言葉はないかしらね」
「う～ん……」
　私と梓がそろって頭をひねっていると私達の頭を悩ませている張本人が近づいてきた。
「ふみゅ～ん、どうしたのよ～」
「……いいよな、お前は。気楽そうで」
「なによ～、したぼくのくせになまいき～！」
「げぼくだっての。それにあたしはあんたの下僕になった覚えは無いんだけどね」

二人が言い争っているのをため息をつきながら見ていると詠美ちゃんが一枚の紙を落とした。
詠美ちゃんはそれに気付いた様子は無かった。
私はそれを拾い上げてみた。何か文字が書いてあるようだ。
「かゆ……うま？」
「ふみゅ？」
「千鶴姉、ボケたか？」
私は梓を一睨みすると詠美ちゃんにこのメモ書きの事を聞いてみた。何でもどこかの施設を襲撃したときに兵士の死体からパクってきたものらしい。
「千鶴姉、こりゃ単なる落書きだろ」
「そうね、でもちょうどいいわ。これをパスコードにしましょう」
「ハァ!?」
「こんな言葉普通は思いつかないでしょ。第一覚えやすいし」
「まぁ、確かにこんな言葉普通は考えつかないよな。それにこれ位ならこいつらも覚えられるだろ」
「ふみゅ～ん！　ばかにして～！」
「それじゃあお願いできるかしら」
私はまた言い争いを始めた二人をほっといてぽややんとしたメイドロボに頼んだ。
「はい～」
「そうね。『かゆ』と表示された後に『うま』って入れたらいいようにしてくれるかしら？」
「はい～、お任せ下さい」
「それじゃ、お願いね」
私はメイドロボにそう頼むと後ろで騒いでいる二人を止めに行った。

721　夕べの祈り　序曲

予感は静かな確信へと。
青く輝く石が、初音の意識にある存在の接近を知らせる。

言葉やイメージではなく、それはただの感覚。
それでも確かな感覚。

――『鬼』が来る――
――人の中に、静かに確かに潜んでいる――
――攻撃本能剥き出しの、『鬼』が来る――

参加者の中でも鬼の血を引いている者は僅か。
初音の知りうる限り、全員『鬼』は制御できているはずだった。ということは、この悪の『鬼』はあの人しかいない。
消えようとしていた命の灯火を、自分のエゴで引き延ばしてしまった。その罪が罰となり遂に自分の身に帰ってきたことを、初音は認めざるをえなかった。
そして、あの時固めた一つの誓い。
もしもの時は、自分の手で愛する人を殺す。そして自分も。

予測できていたことなのだ。今、その時がやってきただけなのだ。運命に抗おうとする意志を、今の初音は持ち合わせていなかった。

精算しよう。
「皆、これから話すこと、真剣に聞いてくれる？」
ここにいる皆に示す確証は何もない。あるのは真摯な決意だけ。
「実は――」
お願い、どうか信じて……。

「初音ちゃん！」
ドアを開けて彰が叫ぶ。
室内には初音しかいなかったが、彰には構うことではなかった。
初音しか、彼の目には映らないのだから。
「早くここから逃げよう！　敵は今、耕一さんが足留めしてる。彼ならきっと大丈夫だから早く安全な

ところへ！　あの男はただ者じゃない！」
　早口でまくし上げる。
　初音の反応は、ない。
　ただ冷ややかな目で、彰を見つめるだけ。
「初音ちゃん？」
「その血は……」
　冷たく通る、澄んだ声で、初音は喋った。
「耕一お兄ちゃんの返り血？　彰お兄ちゃん、怪我してないもんね？」
「あ、あぁ、最初は二人で戦ってたんだけど、耕一さんが……」
「それだけの怪我だったら、耕一お兄ちゃん無事じゃすまないよね？　その敵が彰お兄ちゃんを追ってきてるなら、今頃追い付いてるはずだよね？」
「初音ちゃん？」
「もう、終わりにしようよ……彰おにいちゃぁん……。耕一お兄ちゃんを殺したの？」

　朝に響く、鳥の初音のように。
　哀しい意味を持った言葉が、小屋の中に響いた。
「あれはっ、耕一の奴が悪いんだ！　初音ちゃんを奪おうとしたからっ、だからっ！　初音ちゃんは僕のものだろ？　僕は初音ちゃんを愛しているし、初音ちゃんもそうだろうっ⁉」
「彰お兄ちゃん、自分が何を言ってるかわからないのっ⁉　本当にもう狂っちゃってるんだね⁉　戻れないんだね⁉　鬼の血なんてあげなければよかったよ……それでもお兄ちゃんが好きだったからっ！」
　右手を上げる、銃を構える。
「死んで欲しくなかったんだよぉっ‼」
　発砲。銃弾は、彰の右腕を貫いた。
　彰から見えない位置で銃を構えながら、マナは思う。
　どうしてこの島には、こんなに悲しい想いばかり

なのだろうかと。
初音から彰はきっと狂っている、その原因は私にあると聞かされた。そして、それを償うためにも、自分の手で彰を殺してその後を追うと。
とても嘘をついているようには思えなかった。
初音の決意と想いが伝わって、それはきっと真実だった。
マナの、スフィーの、北川の制止も聞き入れることはなかった。
聞き入れさせるのは、所詮無理な話なのだ。
北川とスフィーはここにはいない、初音の意向でマザーコンピューターへと向かっている。
北川は最後までしぶっていた。これ以上、誰かが死ぬのは御免なのだ。
しかし、彰がここに悪意を持って向かっているとすると、時間はない。
人にはそれぞれの役目がある。
彼は去り際に「後は頼む」と言い残した。
涙をたたえて。
(残念だけど、無理みたいよ……)
人にはそれぞれの役目がある。
今のマナと葉子の役目は『初音がしくじった時に彰を止めること』。
できるならば、『自殺する初音を止めること』。
どちらにしても、死者が出る道は避けられそうにない。
聖との約束を思い出し、自分の無力さに涙するしかなかった。
(無理そうでも。諦めはしないんだから。誰も死なない方法を……考えろ……考えろ……)
実際、彰の攻撃の矛先は耕一だけだった。
耕一を排除すれば、他の者に危害を加えるつもりは『今は』なかった。
そんなこと、初音がわかるはずもなかった。

彰は右腕に痛みを覚える。
どうして、自分が撃たれるのだろう。
自分は何か間違っていたのか。
やはり彼女は、最初から自分のことなどどうでもよかったのか？

理性の混乱は、鬼につけいる隙を与えるだけ。
初音と過ごした間の彼女の瞳は、いつも違う所を見ていた。
再会シーン。耕一と、初音。
偽りの記憶の洪水。
初音よりも強い力を持った同族がいることがわかった今、鬼にとって初音の存在はどうでもよくなった。
犯し、殺すだけの対象。
壊せ、壊せと、鬼の意志が彰の心に潜む疑惑と偽の記憶を活性化させる。

――僕だけが何も知らず、道化だったということか――

「初音ちゃん、信じていたのに……。こんなにも君のことを想っていたのにっ！」
彰は銃を、初音に向けた。
自分が狂ったという自覚もないまま、初音の想いもわからぬまま。

「彰おにいちゃん、私は、あなたを――」

――殺します。

夕べにはまだ少し遠い。
哀しい序曲は、始まったばかり。

722　嵐のあと

高さと広さと、迫力に。
思わず目を瞠り、大きく息を吸い込む。
何処を向いても、視界の全ては青と白に埋め尽くされて。
見上げれば吸い込まれそうな空。そして雲。見下ろせば目が眩むほどに深みのある海。そして波。
それ以外に感じられるのは、潮の香りと、風の音だけだった。

……あら、お久しぶり。
乙女の七瀬よ。元気にしているかしら？
あたし達は、ついに島の最北端まで到達したのよ。
ちょっと早いと思うかもしれないけれど、急がないと、何故だかあたし達の美しい顔がみるみる破壊されていくの。それは言うなれば、世界全体にとっての損失なのよ。

「……ねえ、晴香」
「ん……なあに？」
ようやくたどり着いたそこは、数十メートルの断崖だった。打ち寄せる波に応える様子もないまま、ただただ静かに切り立つ崖の上から、あたし達は青と白の世界に囲まれて立ち尽くしていたけれど、二人して腰に手を当て仁王立ちしている姿は、いかにもスポコン漫画といった風で、我ながら乙女離れしたたたずまいだったわ。
夕日じゃなくて良かったわ、なんて思いながら、誰に見られているわけでもないけれど、慌てて姿勢を崩し、晴香に声をかけてみた。
「す、凄いわね」
「そりゃ、さっきまで大荒れだったからね」

確かに突然晴れたからと言っても、海が平穏を取り戻すのには少々時間がかかる。真下を見れば、自殺の名所のように見えなくもないほどの波飛沫が舞っていたわ。断崖絶壁に、数メートルの大波がうち寄せているのは、ちょっとした見ものなのよ。
「空はもう、こんなに穏やかなのにね」
「この時期アラシは憑き物だから、仕方ないわ」
(……なんか発音が変な気がするけれど、多分気のせいよね？)
そう自分に言い聞かせて、水面を見つめる。波に紛れてはっきりとは判らないが、一部分だけ青色が濃い気がした。底が深くなっているような……つまり、穴が開いている感じが……する。
「晴香、あそこ……深くない？」
「七瀬？　飛び降りは、一人でやってよね」

シャキン！

ガキン！

「何であたしが飛び降りなきゃなんないのよ！」
「じょじょ、冗談よ！　アンタの刀は毒塗ってあるんだから、やたらと抜かないで！」
「だったら煽るんじゃないわよっ！」
(まったく、こいつ折原と同じくらいバカだわ。煽りは常に、厳禁なのよ？)
そう思いながら、あたしは真後ろにそびえ立つ灯台へと向かった。歩き、そして考える。
(……そうだ、最初に床を調べてみよう)
もしも海底に繋がっているのなら、きっと地下への入り口があるはずだから。穴の大きさから考えると、思った以上に小さな潜水艦なのかもしれないけれど。
一人だけでも脱出できれば、きっと助けを呼べるのだから、それはそれで構わない。
願わくば、この白く巨大な塔が。
あたし達の、希望になりますように。

723　優しい手当て

晴子は焦っていた。何故なら消毒液が見つからないからだ。
「くそ、いったいどこにあるんや！」
焦るのも無理は無い。今の耕一の状態はかなり危険である。
晴子も運んでいる最中には『着くまでに死ぬのではないか？』という危惧がまとわりついて離れなかった。
だから喫茶店について耕一を寝かすと、すぐに手当てをするために救急箱を探した。
救急箱自体は運良くカウンターの棚を探したら見つかったのだが、必要な物が一つ欠けていた。それは消毒液である。
「消毒の一つぐらい残しとき！　ケチは嫌いや」
誰に言うわけでもなく、晴子は愚痴をこぼす。しかし、隈なく店の中を探しても、ついに消毒液は見つからなかった。
途方に暮れかけた時、晴子の頭の中に、ある一つの解決案が閃いた。代用品の存在を思いついたのだ。

耕一の意識は朦朧としていた。
目の前の人らしき物は誰で何をやっているのか。
自分が何故こんな所にいるのかも理解出来なかった。
ただ漠然とした思考が頭の中を渦巻いていた、それは自分のことではなく他人のこと。
(みんな大丈夫かな……)
けれども考えがまとまらない、なんだか夢の中にいるみたいだった。
——このまま夢で終われば、何故だか楽になれる気がする……
いきなり夢が終わった。
体に激痛が走り、急に意識が覚醒したからだ。
「うがあああぁぁアア‼」
あまりの痛さに耕一は叫び、周りを見回した。

そこには霧状になって空間を彷徨っているアルコール臭い液体と、「残りは勿体無いから飲んどこか」とかのたまいながら、一升瓶をラッパ飲みしている女がいた。

724　長い道

日本酒の仄かな匂いがただよっていた。激痛で飛びそうになった意識を繋ぎとめたのは、「おはよーさん」という、どこか暢気な女の声だった。

俺――柏木耕一は、自分のおかれた状況がまだ認識できずにいる。今までの殺し合いが夢でないことは怪我をしていることから判るし、自分が先ほど七瀬彰に殺されかけた記憶も残っている。どうして自分はここにいるのだろう。冷静に考えれば判る。自分の目の前にいるこの女性が、ここまで連れてきてくれたのだ。

その女は一升瓶を片手に持っていた。まだ中身はたっぷり入っているようで、こんな島の一体何処で彼女はそれを見つけたのだろうか、と心底疑問に思う。自分の身体から漂う匂いからして、酒は自分の身体を走っている傷の消毒に使われたのだと思う。その酒をごくごくと飲みながら、彼女は目を覚ました自分の顔を見てすごく満足そうに笑っている。

呆然として見返す俺を見て、彼女は「おとなしいいや」と呟き、傍らに置いてあった救急箱の中から塗り薬と包帯を取り出すと、容赦のない手つきで薬を自分の傷口に塗りたくった。筋肉のピンク色が裂け目から見えるくらいの深い傷で、残虐すぎるくらいのその手つきは俺の身体に電撃のような痛みを走らせた。思わず漏れる「痛っ」という無様な呻き声に、女は呆れた――ちょうど母親がイタズラ息子に見せるような優しい優しい顔をして、溜息交じりに言う。「男の子やろ、我慢せぇ」本当に子供を嗜める母親のようだった。もう少し優しくやってくれませんか、という、言葉にしてしまえば僅か十数音

の文が何故か口に出来ない。そういう風に頼むことがどうしてか少し恥ずかしいことのように思えた。
何も言わなかったので彼女の手つきは変わらない。傷口をむしろ抉るように薬を塗る。痛い。死ぬほど痛い。拷問をされているような痛みで、自分がもう少し分別のない人間だったりしたなら大声で泣き喚いていたかも知れない。けれど俺は唇を噛んで必死に痛みに耐える。声を上げては負けだ。何と戦っているのかわからない不思議な勝負が心の中で展開されていた。
薬を塗り終えると、彼女は今度は包帯を手に取った。「動いたらあかんよ」と言う彼女の言葉に従って俺は停止する。くるくると器用な手つきで彼女は包帯を俺の身体に巻きつける。巻きつけながらふと彼女が口を開く。
「こらーなかなか深い傷やな。けどまあ、あんたは男の子やし、これくらい我慢出来るよな」
肩を竦めて笑う彼女の顔は本当に母親のようで、自分とそんなに変わらない歳に見えるこの関西弁の女性が一体何者なのか見当も付かなくなる。
彼女の為すがままになっている間俺に出来ることは思索のみで、思索が俺に与えるカタチは、意識を失う直前の戦いのことだけだった。早く行かなければ自分の大事な人や仲間たちの身が危ない。そう思うのに身体が動かないのは、果たして身体が傷ついているというそのことだけが理由なのか。
思索にふけっている間に包帯が巻き終えられた。
「君、災難やったな」と溜息のような呟きが自分のすぐ横に座った女の口から漏れる。俺は返事もせずにぼうっと天井を見る。四角い筈の天井が楕円形に潰れて見える。そのままぐらりと身体が揺れて、俺はベッドに倒れこんでしまう。その様子を見た女は慌てて立ち上がり、「なんか精が戻る食い物探してくるわ」と部屋を出ていく。慌ただし過ぎて呼び止めることも出来なかった。

溜息を一つ吐くか吐かないかという短い時間で女は肉の塊を持って戻ってきた。「こんなんしかないけど我慢しい。冷蔵庫の中にあったから鮮度の点は大丈夫やと思う」と女は歯を見せて笑った。その笑顔はまるで女学生のように若々しい爽やかな笑みで、どうしてこの島で彼女はこんな顔が出来るのか、と思う。笑顔のまま彼女は俺を見つめる。どんと置かれた生肉。食べられません、なんて言う余裕があるほど今は恵まれた状況にない。長らく自分は肉なんて食っていなかった。血と肉の塊。体力を取り戻すために不可欠なエネルギーが目の前にある。俺は彼女に小さくお辞儀をして、肉を手に取った。

歯に力が入らない。肉とはここまで歯ごたえのあるものだったたか。或いは自分が肉を食えないほどまで弱っているのか。全身の力を歯に込めてなんとか噛み切り、乾いた喉に肉を無理やり詰め込む。胃が弱りきっている状態と生臭い匂いとが相俟って吐き気が胸の底からあふれ出る。逆流しそうになる肉を、しかし俺は死ぬ気で噛み、噛み、噛み、噛み、そして死ぬ気で飲み込む。もう一口。噛み、飲む。もう一口。噛み、飲む。

生まれて初めて見るものを目の前にしたかのように、気づくと俺は肉の味に夢中になっていた。胃が少しずつ調子を取り戻していく。こうなると元々食欲旺盛な俺には少ないくらいの量だった。一抱えはあった大きな肉塊がみるみる小さくなっていく。ふと顔を上げると、女は笑顔で自分の顔を見ている。

肉塊が綺麗に消え去ったところで、俺は一息ついて言う。「――おばさん、本当に有難うございました。よろしかったら、あなたの名前を教えてくれませんか？」そう言うと彼女は天使のように笑いながら「……おばさん？　わはははは。面白い事ゆーの、君は」と拳を振り上げ、俺の頭にものすごい勢いで叩きつける。傷口が開くかと思ってしまうくらい派手な音がした。俺は苦笑いしながらすいませんと頭

を下げる。「まあええわ」と肩を竦め、彼女は頬をぽりぽりと掻く。「まあなんや。普通は人に名前を尋ねるより自分が名乗るほうが先やない？」その通りなので俺は逆らわず、「俺は柏木耕一と言います」と頭を下げる。

「本当にありがとうございました」

と俺が顔を上げると、彼女は少し笑みを崩し、

「その耕一君は、どうしてあのアキラ君と殺しあってたん？　見たところ、殺しあうような関係やないように見えたんやけど」

そう言った。

「あの子、すごく危険な感じのする顔してたわ。あんたはあの子を止めなくてええの？　あのままやったらあの子、本当に人を殺すと思う」

俺は彼女の言葉を自分の中で反芻する。俺が止めなければ、彰は自分の仲間を殺す。島を脱出しようとしている他の参加者を殺す。全てを壊してしまう。俺が止めなければいけない。

反芻するだけで、どうしても身体が動かない。今すぐにでも立ち上がって走らなければいけないのに。判っている。この感情の名前は恐怖だ。

彰に骨を抉られた瞬間を覚えている。彰に筋肉を切り裂かれた瞬間を覚えている。拳を叩きつけられ、鼻を折られ、意識を失う瞬間を覚えている。そしてその痛みは、俺の心臓に恐怖の文字を埋め込んだ。

鬼の血を飲んだというその一点だけでは、恐怖の文字は埋め込まれない。自分の身体にも鬼の血は流れていて、単純な腕力においては俺が七瀬彰に負ける道理はないのだ。なのに自分は捻じ伏せられた。腕力だけで説明できない気力の差。狂気という力に、俺の腕力と気力は捻じ伏せられたのだ。

もう一度あいつと対峙して、自分はあいつに勝てるのか。恐怖に心を支配された俺が、あいつに勝てる道理はあるのか。

「行かんのか？」

女は尋ねる。答えることのできないままいると、女は少しずつ不機嫌そうな顔になっていき、やがてその顔は怒りの色を携えていく。
「なんや、あんた？　行かんのか？　あの子が人を殺すのをぼうっと眺めとるつもりか？」
答えることが出来ない。自分が行ったところであいつを止めることが出来ない。多分俺はやっと、死ぬということの恐怖が判ってきたのだ。唇を噛み、歯軋りをし、けれど俺は動くことが出来ない。
女は声を荒らげる。顔を怒りに歪ませて叫ぶ。
「さっき、うちに呼びかけてたことは嘘やったんか！」
立ち上がり、俺の肩に両手を乗せて乱暴に体を揺する。目の前で、天まで届くような声で叫ぶ。
「脱出できる手段があるんやなかったんか？　ここから帰るんやなかったんか？　そんな希望が、あんたの心の中にあるんやなかったんか！」
女は俺から離れ、怒りに満ちたまなざしで手を上げる。「いい加減にしい！」と、平手を俺の頬に振らせたのだ。先のげんこつと違って、その手からは燃えるような痛みが広がった。彼女の怒りが熱になったのかもしれない。
「――！」
「あんたなあ……ぬか喜びさせんといてや。――あんたきっと怖いんや。あんな貧弱な子の事が。そんなでっかい図体して、あんな小さい子が怖いんか。は。惨めやないか？」
ずきずきと頬と胸に痛みが走る。そして痛みが俺の心に熱を与える。間違った方向に熱が向かっていることが自分でも判るのに、それを止めることが出来ない。止まらない口から出たのは、ただの八つ当たりの言葉だった。
「……――そうだよっ！　俺は怖いんだよ、あいつが、彰がっ！　判るのかよあんたに、知り合いに殺されかかったってことが、どれだけ怖いことか！」
心の中で渦巻いていたものは、言葉にすると本当に空恐ろしいものだった。もともとこの島は、そう

いう道理で出来ている。親友を疑え、恋人を疑え、全てを疑え。それがこの島でのルールだった筈だ。けれど、自分の命を救ってくれた人に対して吐くべき言葉ではなかったと思う。

俺の無様な様子を見て、女は心底つまらなそうな顔をした。「はぁ……」という呆れと落胆が一杯に詰め込まれた溜息を吐き、そして俺の目を真っ直ぐと見やると、真っ直ぐな声でこう言った。

「あんたがどれだけ怖かったなんかは知らんけどな。はむかつく。うちかて君がどんなに怖かったかなんて想像しか出来へんよ。けどな。うちは臆病風に吹かれたあんたと違って、この島から脱出するために何かしたいと思うてるんよ。一緒にせんといてな」

真っ直ぐで、強くて、俺の心を貫くには充分に冷えた言葉の槍だった。

女は肩を竦めて立ち上がる。「――……悪かったな、耕一君」と言って自分に背を向けた。嘲りがこめられた笑顔と、同情が込められた視線が俺に降ってくる。「まあ、君に期待しすぎたんやろな」と、小さく伸びをして女はドアノブに手をかけた。

「ああ、ここ自由に使っててええよ。うちはどうせやることもないし、守るもんもない。アキラ君を殺しに行くわ。君はそこで、放送が流れるのを待ってるとええ」

何も君には期待していない。彼女の背中はそう言っていた。ぶっきらぼうにドアを開け、女は部屋から出ていってしまった。

俺はベッドの上で最後の思索を始める。

彰がああなってしまった以上、もう全員が無事に帰れることはないだろう。自分たちが掲げていた目標はもう、遠い闇の彼方に霞んでしまった。もうきっとあの診療所にいた全員が、彰の手によって制圧されているだろう。想像も出来ない凶悪な風景が俺

の目に浮かんでくる。弱りきった自分、恐怖に歪みきった自分では、その風景を明るい風景にすることは出来ない。そうに決まっている。もう全てを諦めて、眠ってしまえばそれでいい。俺に出来ることは何も無いに決まっているのだ。

俺はベッドの上で最後の思索を終えた。

俺はゆっくりと身体を起こし、眩暈のする頭を押さえて、そしてふらつく両の足で、しかし立ち上がった。身体の調子はけして良くないけれど、走れない程ではないと思う。例えゆっくりでも走りきれば、まだ間に合うところにいる。

恐怖を制圧しきることは出来ない。俺の心の中にあるのは二種類の恐怖だけだった。彰に殺されるかもしれないという恐怖と、全てのものを失ってしまうという恐怖だった。そして二つの恐怖の戦いを、——後者が制したのだ。

長く考えすぎて、間に合わないかもしれないけれど。守るべきものを既に失った彼女の、その声に応えないで何が男だ。彼女の吐いた言葉は、全てが彼女の傷跡から漏れ出したのだ。

ドアノブに手をかけて乱暴に開き、部屋を出て、そこで「見込んだ通りやったな」という女の声を聞く。体操座りで一升瓶を抱えた女は、本当に嬉しそうな笑みで佇んでいた。

女は尋ねる。「もしかして、便所に行くだけとかってことやないよね？」俺は、胸を張って答える。

「——勿論です」

「うちはあんたの、何があっても絶対にこの島を脱出するんだ、って意志を見て、少し救われたんよ」

俺は彼女の横に座る。自分より一回りは小さい肩が淡々と言葉を紡ぐのを、俺はただ聞いている。

「実はうちな、あんたの姿見るまでは、このくっだらん殺し合いに乗ろうかと思ってた。娘が死んでし

もうたんや」
　一升瓶に口をつけ、飲み干し、息を吐き、
「大切なものを守れんかった不甲斐なさでな。もうどうにでもなれ、って思うた。馬鹿やろ？」
　女は笑顔でそんなことを言う。俺には何も言うことが出来ず、ただその告白を聞き続ける。
「はじめから娘を守るために全員殺せばよかったとさえ思った。――そんなとき、あんたの叫んでる声を聞いたんや。脱出できる手段がある。殺し合いは止めるんや、ってな。正直、年甲斐も無く惚れそうになったで。あんた、死ぬほどかっこよかった。大切なものを守るために、必死で動いてた」
　女は、急ぐんやろうけどもう少しだけ聞いてや、と頭を下げて、なおも言葉を続ける。
「うちは大切なものを守るために、まるで動こうとせんかった。きっと何とかなる、と思うとったんやろうな。いつかきっと神様が助けに来て、うちら二人だけが救われる――なんてな。最初から諦めきってたんはうちの方や。あんたにさっき言ったのは、自分に向けて言ったみたいなもんや。うちは――どうしようもないアホやったん。君に何か言う資格なんてない、最低のアホやってん。だから君が、もう全部どうでもいい、って投げ出した姿を見るのが、すごくつらかったんや。ごめんな」
　謝ることではない。全然謝ることじゃない。俺はそう言おうとして、どうしても口が開かない自分に気づく。その言葉が彼女に何の救いも与えないことをよくわかってしまったからだ。大切なものを失ってしまってもなおこうして笑顔でいられる彼女が、信じられないくらい強い人間に思えた。
　最後に、と注釈して。女は笑顔でこう言った。
「うちが予言したる。あんたが守りたいと思ってるもんは、まだ守りきれる場所にある。今すぐあんたが走り出さないといけないくらい、すっごい危険に晒されているとは思うけどな」

「はい」
「やることを決めたら、怖いことなんてないわ。うちは大切なもんを守れんかった。命を懸けることすら恐れてな。命懸けたいと思うてももう遅い。——けど君はまだ命懸けられるやろ。命を懸けてでも守りたいものがあるやろ！　な！」
大切な仲間。大切な家族。——大切な、友達。
俺は彼らと彼らの希望を守るために、この長い長い道を歩いてきたのだ。目を閉じ、精神の底に巣食う恐怖の色を見る。見えないくらい真っ暗だった心の中にあるのは、凶暴に暴れてはいるが、それでも目に入るくらいの大きさの獣だった。目を開き、横を見る。酔っ払ったのか、少し赤い顔になった女が、心底満足そうに笑っていた。
「そうや。良い目になったな、耕一君」
「はい」
「それでええ。よおし、約束せえ。必ずあんたは生き残り、守るべきものを守るんや。そいで、うちを迎えにきてえな。あ、変な意味ちゃうで。うちも脱出のために君に協力したいんや。そんだけやで」
笑って言うと、晴子は突然拳を握り締め、天井に向けて真っ直ぐ掲げた。しなやかな腕と、祈りの込められた拳で、俺はそれを美しいと思う。
「な、耕一君。君の拳をうちの拳に併せえ」
「——はい」
俺も同じように拳を掲げ、彼女のその拳に、まるで乾杯をするように、コン、と併せた。
「うちに誓え、必ず生き残って大事なもん守りきるって。次の死者放送ん時、君の名前が呼ばれたら、あんたは大嘘吐きやで。うち泣くで。ホントに」
「はい。あなたを泣かせるようなことは絶対にしません。絶対に、守りきります！」
「——よおし、よく言ったぁ！　うちの武器とあんたの武器、一階にまとめて置いてあるわ。好きなの持ってってええからな！　それでアキラ君を狂気から救ったれ！　うちは君の事を肴にして、ここで酒

呑んどるわ!!」
　そう言って、女は、本当に嬉しそうに笑って俺の肩を叩いた。俺は彼女のその笑顔で、やっと恐怖と立ち向かおうと思った。

　俺と彼女は立ち上がり、階段を降りる。まだ多少なり眩暈がするが、傷はだいぶ癒えた感触がある。さっきの生肉が徐々に血になっていっているのだろうか。階段を降りてすぐ右の部屋に、彼女の言葉どおり武器がまとめて置いてあった。彼女は手早く鞄をひとつ用意してくれて、それに入れるといい、と差し出した。俺は少し考えて、ニードルガンを手に取った。そして自分が最初から持っていたナイフとキャノン砲も鞄に放り込む。
「殺すんじゃないんやで。君は、止めるためにいる」
「はい」
　準備を整えて俺は鞄を担ぐ。今から走り出せばきっと全てを守れる。そう信じよう。諦めた瞬間に希望の光は消えるものなのだ。俺はもう。二度と諦めないと決めたのだ。喫茶店のドアを開けると夏にしては冷たい空気が吹き込んできて、俺はふと彼女の方を振り返る。
　彼女は少しだけ悲しそうに笑っていた。

　ああ、と俺は思う。

「本当にありがとうございました。――ああそうだ、忘れてました。あなたの名前教えてくれませんか？」
　この長い入り組んだ道の中で、
「神尾晴子や、柏木耕一君。あはは、今まで名前教えてなかったんやなー。おっちょこちょいやな、うち」
　俺は一体どれだけの人と出会い、
「あはは。――それじゃあ行って来ます、晴子さ

ん」
こうやって別れて行くのだろうか。
「ああ。いってらっしゃいやな。君が帰ってくるのをここで待っとる。絶対に、笑顔で帰ってきいや？」
だが、今はまだ終わらない風の中。
「はい！」
振り返る間もないほどの、
「負けるなよッ！」
長い長い道の中で、
「――はいッ!!」
今は、ただ。
「負けるなよッッ!!」
――俺は、前だけを見つめていた。

725　ななせとはるかのぼうけん

「あ～、疲れた～」
あたし達はようやくその建物に到着した。
外見上は灯台のような建物。
でも、ここにあたし達が探しているものがあるに違いないとあたしは確信していた。
そう、言うなれば、これは乙女の勘ってヤツね。
「何、バカ言ってるのよ」
晴香は心底呆れた、といった顔つきであたしのことを見ていた。
「ア、アハハ、気にしない気にしない」
どうやら、口に出ていたらしい。これじゃまるで折原みたいだわ。
あたしは笑ってごまかした。
「さてと、ふざけるのはここまでにしておきましょう。敵側の施設なんだから何が起こるか分からないわよ」
晴香の顔つきが一瞬にして緊張感を持ったものに変わった。その手には既にワルサーが握られている。
「そうね」

あたしも刀を鞘から抜いた。
「それじゃ、行きましょうか」
「ええ」
あたし達は慎重に建物の中へと入っていった。
「……人の気配は無いみたいね」
「そうね、でも油断は禁物よ」
晴香もあたしも神経を集中させながら建物内を一通り見てみた。
「ふぅ、どうやら大丈夫みたいね」
「そうね」
あたし達は緊張を解いた。念のため武器は持ったままだけど。
「でも、一通りみた感じじゃどこにも潜水艦がある場所に行く通路は無いみたいだったわね」
「きっと、どこかに隠してあるのよ。というわけで探してみましょう！」
「ちょっと、七瀬。何そんなに張り切ってるのよ」

「あら、何かこういうのってワクワクしてこない？ＲＰＧの主人公になったみたいで」
「何か子供みたいね。まぁ、いいけど。それでどこから探すの？」
「そうね、さっき海岸で見た感じだと潜水艦があるなら多分地下ね。だからまず床を調べてみましょう」
「それじゃさっさと始めましょう」

はるかとるみはゆかをしらべた
しかし、なにもみつからなかった

「何も見つからないわね」
「そうね、ちょっと休憩しましょうか。ずっと四つん這いだったから腰が……」
「腰にくるなんてもう年ね、七瀬」

あたしは無言で刀の切っ先を晴香に向けた。
「ち、ちょっと！　それ毒が塗ってあるんだからむやみに人に向けないでって言ってるでしょ！」
「だったらさっきの言葉を訂正しなさい！　腰は単に昔痛めただけよ！」
「わ、分かったから！」
「全く、乙女であるあたしに対してあんまり失礼なこと言わないでよ」
「そのすぐ手が出るところ直さない限り乙女とは言えないわよ、あんた」
「うぐっ」
あたしは何も言い返せなかった。
あたしが床にへばっていると晴香は部屋の隅にあった本棚のところで本を手にしていた。
「あら？　あんた本なんか読むの？」
「別に。ただ手に取っただけ……」
晴香の言葉が不自然に途切れた。
「どうしたの？　晴香」
「七瀬、ちょっと来て」
「何よ」
「ねえ、七瀬。これ何だと思う？」
晴香が指さしていた本棚の奥を見てみると奇妙な出っ張りがあった。
「さあ？　何かしらね。何かボタンみたいにも見えるけど」
「そうね。私もそう思ってるのよ。押してみる？」

るみたちはきみょうなでっぱりをはっけんした
おしますか？
↓はい
いいえ

「そうね、こういう怪しい物は取りあえず押してみ

るのがＲＰＧの基本よね」
「ＲＰＧなら何かの罠ってこともあるかもしれないわよ」
「う～ん、でも、もう遅いわよ。もう押しちゃったもの」
「これで隠し通路でも出てきたら本当にＲＰＧみたいね」
　晴香がその言葉を言い終わるのとほぼ同時に本棚が右に動いた。
　その後ろには下へと続く階段があった。
「……」
「……」
　あたしも晴香も驚きのあまりしばらくの間一言も発することも出来なかった。
「と、取りあえず見つかったんだから行こうか、七瀬」
「そ、そうね」
　あたし達は武器をもう一度構えると階段を下りていった。

ここまでのぼうけんをほぞんしますか？
→はい
　いいえ

726 ——Kizuna——

（今やもう、あと一歩の所まできた！）
　よもや初音が彰に発砲するとは思わなかったが、それ以外はほぼ、〝鬼〟の思惑通りに事は進みつつあった。
　彰の理性はもはやガタガタで、あと一歩踏み出してさえしまえば、粉微塵に散るだろう。
（その時こそ、己が完全なる自由を手に入れるときだ。さぁ、彰よ、早くッ。早く自分を裏切った醜い雌をその手に掛けるのだッ！　俺がこれ以上力を傾

けなくても、もうそれぐらいのことは自分の意志で出来るだろう、彰よ！）

　右腕を左手で押さえるようにして構えた銃を、初音に向けて彰は立ちつくしていた。

（僕は初音ちゃんを撃つ。撃ち殺す。何故なら『彼女が僕を裏切った』からだ……。何もかもを失って、唯一残されたものにまで。その彼女にまで裏切られたら、許せるはずがない。だから、僕は。……初音ちゃんを殺す！）

（『また』撃ってしまった。いや、『今度こそ』撃ってしまった。千鶴お姉ちゃんの時とは違う。私は、私の意志で彰お兄ちゃんに向けて……）

　震える手で拳銃を握ったまま、初音もまた立ちつくしていた。

（私は、彰お兄ちゃんを殺す。私が殺さなければならない。そして、その時には私も……）

　そして、物陰では。

　二人の女がそれぞれの場所でそれぞれの武器を手に、息を潜めていた。

（私は本当にこのままで良いのでしょうか？　自分が命を懸けて救った二人が、目の前でお互いを殺そうとしているなんて。こんな事が認められるのでしょうか？　初音ちゃんの真剣な訴えに気圧されて、一度は身を隠してしまったけれど、本当に良いというのでしょうか？　私はっ⁉）

（初音ちゃんが……本当に撃った⁉　あの優しい娘が自分の愛する人を……。こんなのって、ないよ。愛する人を自分の手で殺すなんて。何とか、何とか良い方法を……。でも、いい方法なんて考えつかない‼　聖先生。わたし、わたし……‼）

　重い沈黙が場を支配していた。

　一触即発とは、まさにこの状況を言うのかもしれない。

　その中で、彰が唾液を嚥下する音が小さく響く。

　未だ誰も動かない。

　初音の銃は彰を。

彰の銃は初音を。
お互いに向けられた拳銃は、僅かに振れつつもそのままだ。
彰がゆっくりと口を開く。
「初音ちゃんが僕を受け入れてくれないのなら。君を殺して……僕も死ぬ！」
(何!? それは違うぞ、彰！ それは断じて否だ！ 認められない!!)
初音の瞳から、涙がこぼれ落ちる。
(何でこうなっちゃったのかな……。エディフェルと次郎衛門は上手くいったのに……。でも、私、彰お兄ちゃんとなら……)
初音に向けられたままの銃。
引き金にかかった彰の指に、僅かずつ力が入ってゆく。
(本当にこれで良いのか、僕は……!?)
どこかに。彰のどこかには、迷いがあった。
まっすぐに自分を見つめる初音。
悲しいまでに澄んだ初音の瞳に吸い込まれそうになる。
しかし、彼女の手には銃があり、それが彰に向けられているのは間違うこと無き現実……。
その時、どれが最初に起こったのか、分かった者はいなかっただろう。
それらは本当に、ほぼ同時に起こったのだ。
「こんなこと、認められません!!」
「こんなの駄目ーッ!!」
各々叫んで飛び出した、葉子とマナ。
急激に光を取り戻し、部屋を照らし出した初音のペンダント。
そして、銃声。
……均衡は破られた。

727　旅の途中

「はぁ、はぁ、はぁ……」
診療所を出発してから、スフィーはひたすら走った。
どれくらい走っただろうか、長い坂道を駆け上がり、かつて神奈が封じられていた神社に辿り着いた頃には、すっかり息が上がってしまっていた。
「はぁ、はぁ、はぁ……」
ここまで一途に走ってきたスフィーも、思わず地面にへたり込む。しかしスフィーの目的地である祠は、ここからさらに山道を登らなければならない。
こんな所で休んでいる暇はないのだ。
数分後、スフィーの息もようやく整ってきた。
そして立ち上がろうとしたスフィーは、その時上空に何かを見つけた。
「あれ、何だろう……」
それは、上空に糸を引きながら少しずつ下界に向かっている様に見えた。
スフィーはしばらくそれを眺めていたが、ふと我に返る。
「いけない！　早く祠へ行かなきゃ！」
そして、スフィーは再び走り出した。
進む道はただ一つ。

728　フランクの思い

見つかった。
フランクがそのことに気付いたとき、まず最初にしたのは逃げる事だった。
木々に紛れて森の奥へじわじわと後退する。
今となっては少年以外の参加者と戦うつもりはない。
しかし、自分は長瀬なのだ。
こんな馬鹿げた殺し合いに巻き込まれ、その首謀

者たる自分達を憎まないものなどあろう筈がない。
その怒りは当然だし、殺されるのもやむなしと思う。
だが、ここで戦闘になるのはまずい。
騒ぎを少年に嗅ぎつけられては元も子もない。
少年を、倒す。
それだけは。なんとしてもやらねばならない。
「……フラ……さ……！」
ふと。遥か記憶の底から、自分を呼ぶ声がした。
それは優しい記憶。
モノクロームの景色の中で、自分は一人の少女を見ていた。
「……芹……！　……危な……!!」
せり……
せりか。
そう。そんな名前の少女だったか。

フランクは思い出していた。
源四郎に連れられて店にやってきた、姉妹のことを。
元気に走り回っていた妹とは対照的に、姉はいつも源四郎の後ろに隠れて、伏し目がちにこちらを見ていた。妹に「このおじさんはこわくないよ」と促され、おずおずと前にでてきた姉。
自分の入れた紅茶を飲んで、穏やかに笑いあう二人を見ていると、こちらまで癒されているような気さえした。
不思議な少女達だった。
「フランクさん！　フランクさんでしょ!?」
はっ、とフランクは目を覚ました。白日夢でも見ていたのか？　いつのまにか、自分を呼ぶ声はかなり近くまでやってきていた。

フランクは思い出した。

来栖川芹香。あの姉妹の生き残り。
こちらに近づいてくるのは、あの子なのか。

少年を倒す、それが今の自分の全て。
だがもし自分が失敗したら。
自分の知りうる事だけでも、誰かに託すべきかもしれない。
それがあの少女にならば。
託せるかもしれない。

フランクは狙撃銃を隠すと、両手をあげて茂みから立ち上がった。

729　スタートライン

パスコードの設定はさっきのぽややんとしたメイドロボがやってくれた。
彼女にはＣＤの解析の続きも任せてある。
護身用に武器も残してあるが、とにかくいざとなったら逃げるように詠美ちゃんには言い含めてある。
詠美ちゃんなら今の繭ちゃんのことをちゃんと守ってくれるはずだ。
ようやく出発の準備が全て終わった。

「梓、そろそろ行くわよ」
「あいよ、千鶴姉」
私は梓にそう言うとあゆちゃんに話しかけた。
「あゆちゃん、本当に私達と一緒に来る気なの？」
「うん。お願いだよ。ボクも連れていって」
あゆちゃんの目には確かな決意の色が見えた。
「仕方ないわね、それじゃあ一緒に行きましょう」
「ち、千鶴姉!?」
「梓。多分あゆちゃんは一人でも行く気よ。それならまだ私達と一緒に行動した方が安心でしょう」
「でもさ」
「お願いだよ。梓さん。ボクも一緒に連れていっ

て」

　あゆちゃんのそのまっすぐなまなざしに梓も折れたようだ。

「じゃあ、詠美ちゃん、後のことよろしく頼むわね」

　動物達と戯れている繭ちゃんの方を見ながら詠美ちゃんに言った。

「だいじょーぶ！　このくぃーんにまかせて！」

　私達は詠美ちゃん達をその部屋に残すと施設の外へと向かった。

　外に出ると私は手元のレーダーを見た。

　そこにはハンテンダケを持っていると思われる芹香さんの居場所が示されている。

　私はこのレーダーの持ち主だった人の事を思い返した。

　私と秋子さんは思えばかなり似かよっていた。

　私達の根底に流れる物に違いはほとんど無かったはずだ。ほんの少しの違いが今の私と秋子さんの違い。

　秋子さんは私をこの世界に引き戻してくれた。

　私は秋子さんを引き戻せなかった。

　それでもお互いが目指していた方向は同じだった。

　だから私もこれからも自分が正しいと思う道を進もうと思う。

　家族を、守りたいと思える人を守っていく。その為なら私がどうなろうとも構わない。

　私は最後まで足掻き続ける。

　それは秋子さんへと放った言葉。

　それは私の誓い。

　私は改めてそのことをここで誓う。

　それが秋子さんへの、同胞への餞となると思うから。

　あたし達はようやく外に出てきた。

　何か、一ヶ月くらい中にいたような気がする。

横では千鶴姉がレーダーを見ながら考え事をしてる。
どうせ、また何か一人で抱え込んでいるんだろうな。
千鶴姉はいつもそうだ。
でも、あたし達は家族なんだぜ。
千鶴姉があたし達のことを大切に思ってるようにあたしだって千鶴姉のことを大切に思ってる。
だからあたしはこれからも千鶴姉の事を支えていきたい。
千鶴姉はこれからも何も話さないで一人で何でも抱え込むんだろうな。だったら、あたしも千鶴姉のことをずっと支えてやるよ。
でも、こんなことは絶対に千鶴姉には言えないけどな。
そんなこと言ったら千鶴姉は「そんなことしなくていい」って言うに決まってる。
だから、これは密かにたてたあたしの誓い。

雨はすっかりやんでいた。
やっぱりさっきボクが感じた何かが原因なのかな。
何か分からないけど、ボク、そこに行かないといけないような気がするんだ。
ボクは建物の方を振り返った。
ポケットの中から一粒の種を取り出す。
それはおじさんがボクに残してくれた物。
でも、ボクはおじさんからもう一つ大事な物をもらったんだよ。
ボク、おじさんの気持ちもちゃんとあの時受け取ったから。
おじさんが言ってた通りにちゃんと生き残るから。
今までボクのこと守ってくれてありがとう。
ボク、頑張るからね。
おじさんがいなくてもちゃんとやっていくよ。
だから見守っててね、おじさん。
「それじゃ、行きましょうか」

――彼女たちの胸に秘められた三つの思い――
「ああ」
――その決意を胸に彼女たちは再び歩き出す――
「うん」
――この場所が三人の新たなスタートライン――

730　遠い夢の中

優しいとは言い難い苛烈な日射しが、三人に容赦なく照りつける。
先ほどまで降っていた雨が乾き、湿気が肌にまとわりつくような感じがして不快感が増す。
なにより、彼女たちは数時間前まで地下にいた。急に高い温度と湿度の場所に出てしまえば、拭うのも億劫になるほどに汗が吹き出るのも当然だろう。
彼女たちは、寡黙に歩く。聖地に向かう巡礼者のように。
先頭の少女は首から下げているのはサブマシンガン。それを腰だめに構えながら歩く。そして、その後ろを歩く二人も日本で平和に暮らしていれば一生お目にかかることはない銃器を持ち歩いている。
髪がショートの少女が一番前を歩き。その後ろにセミロングの幼女。そして、ロングの女が続く。
真ん中の幼女がときどき、首のストラップに掛けられた丸い機械に手をやる。先頭の少女は前方を、後方の女は側面と背面に警戒する。
突然、正面の丈が長い草が揺れる。
三人は銃を構えながらも散開し、遮蔽物に向かって走る。木の陰に隠れながら何者かが潜んでいる場所を警戒する。
迂闊に発砲することを彼女たちはしなかった。それは、彼女たちが訓練された兵士だからではない。
彼女たちの戦いは人を殺すためではない。生き残るためにある。その為には、自分や身内だけではなく、会ったこともない他人も助ける必要がある。だからこそ、無闇な発砲は躊躇われる。

緊張が続く。
草が揺れる音は消えない。
暑さのためではない汗が彼女たちの頬を伝う。拭うことはできない。
銃を持つ手の平にも汗がにじんでくる。
不意に、何かが草の中から飛び出す。
彼女たちは、それに銃口を向ける。
その先には、まるで不思議そうな顔を彼女たちに向けるウサギがいた。

「ああ、疲れる」
ショートカットの女がそう言って地面にへたり込む。幼女はウサギに何とか近づこうとしたが逃げられてしまい、やはり座り込んでしまう。
ただ、最後尾にいた女は未だに周囲を警戒していた。
「千鶴姉。用心のしすぎだよ」
その言葉が聞こえたからだろうか、やがて千鶴と呼ばれた女は、地面に足を投げ出した幼女の手を引っ張り、立ち上がらせる。
「ボクも、梓さんの言うとおりだと思うなぁ」
そう言われた千鶴は苦笑いをする。そして、彼女の手を優しく握ったまま、梓の元に歩いていく。
そして、梓にも手を差し伸べる。梓はそれを握って、起きあがろうとした。
だが、それはかなわなかった。
「何やってるんだよ、千鶴姉」
千鶴は逆に梓に引っ張られる形で地面に転がってしまったからだ。
「うぐぅ」
そして、千鶴が片手を握っていた幼女もまた一緒に転がる。銃が暴発しなかったのは僥倖だった。
自力で立ち上がった梓は千鶴の顔を見るとその異常に気が付いた。
軽い過労、というべきものであろう。
梓はここで休憩すると言い、千鶴を木陰に休ませ

た。
　極度の緊張の連続。溜まった疲労。それに急激な暑さに体内で温度調整が出来なかったのであろう。防弾服が体熱を発散させづらい、というのも原因のひとつだ。そして、施設内で摂取した毒もまったく効いていないわけでもなく、千鶴の抵抗力を奪っていた。
　それらの要素が合わさり、現在の症状を引き起こした。だが、若い千鶴なら少し休息をとれば、すぐに元気を取り戻すだろう。
「千鶴さんって、すごいんだね」
　空を見上げながら幼女が呟く。
「ああ、うん」
　同じく、梓も空を見上げながら頷く。
　もし、本人が目を覚ましていたら、梓は首肯できなかっただろう。
「ボクもお姉さんが欲しかったなぁ」
　その視線の先には鳶が輪を描いている。

「そう……」
　梓は曖昧な返事をしたきり二人は押し黙ってしまった。そして、風が流れる音と鳶が鳴く声しか二人の耳に入らなかった。

　千鶴は夢を見ていた。
　彼女の大切な妹たちの夢だった。

　どこか薄暗いところに、みんなはいた。
　ああ、そうだ、これからみんなで夏祭りに行くんだ。
　友達と一緒に行く約束を断ったのはちょっと心苦しいけど。
　遠くに見慣れた神社の鳥居が見える。そして、数多くの提灯と盆踊りの櫓も。
　お祭りは賑わっている。沿道に連なっている屋台は多くの人で賑わっている。
　リンゴ飴。かき氷。たこ焼き。ミニウサギ。ヨー

ヨー釣り。型ぬき。カルメ焼き。焼きトウモロコシ。金魚すくい。イカ焼き。ひよこ。スーパーボールすくい。おめん。輪投げ。お好み焼き。べっこう飴。射的。

梓は金魚すくいが大好きだ。でも、あまりじょうずじゃないから、なんどもやろうとする。お小づかいが無くなるから、二、三回でやめさせよう。

楓はつめたいものをよく食べる。特にブルーハワイのかき氷は屋台にしかないから、お祭りではかならずだ。食べ過ぎておなかをこわさないよう注意しなきゃ。

初音とは、はぐれないように気をつけよう。まだ小さいし、目をはなすと、どこに行くかわからない。人が多いから手をしっかりにぎろう。

わたしも、なにかやろうかな。ううん、でもいいや。梓のとなりで金魚すくいを見るのは楽しいし、楓といっしょにたこやきを半分ずつ食べるやくそくしたし、初音は……

あれ、はつねがいない。

どこに行っちゃったの？　あんなに、はなれちゃいけないって言ったのに……。

ううん、ちがう、わたしがわるいんだ。はつねの手をしっかりにぎっていなかったからわるいんだ。

はつね。

どこ、はつね。

おねえちゃん、おこらないから、帰ってきて。

あ。

はつねだ。よかった。こっちに走ってくる。

手になんか持ってる。おもちゃかな。きっと、あれがほしくって、どこか行ってたんだ。

なんだろう？

鉄砲？

私は初音に向かい手を振った。
しかし、走ってきた初音は私の横を通り過ぎた。
怪訝に思い、私は振り返る。なぜか、小さいと思っていた初音は自分よりも大きく見えた。
そして、私は信じられないものを見た。
セーラー服を着た楓の胸に初音は拳銃を押しつけ、引き金を引いた。胸が赤く染まり、定まらない視線で虚空を見ながら楓は倒れる。
驚愕し、目を剥く梓。
私は初音に言葉を投げることも体を動かすことも出来ない。
そんな私を後目に、初音は躊躇もなく梓の額に銃口を向け発砲した。梓の顔が風船のように爆ぜる。梓の制服が朱に染まる。
そして、私になにか生温かいものが降りかかる。
それが、かつて梓だったものだと理解するには時間が掛かった。
「あっ……ああ、あ」
私の口からはただ呻き声が。形になった言葉が出せなかった。
血溜まりの中に倒れている楓。
首から赤い噴水を流す梓。
「本当は、私の方が偽善者なんだよね……」
初音は私に銃を向けながら、そう呟く。
「は、初音。あなた、なにを……」
動転した私の問いに耳を貸さず、朗々と初音の声は続く。私が今まで聞いたことがない、冷たい言葉を。
「大切だった人を殺され、その人の思いを叶えるために同じくらい大切な人たちを殺したの……」
「な、なにを、言ってるの？　初音」
寒い、体が震える。これは恐怖？　なぜ？　初音が？
冷たい風が初音の方から押し寄せて来る。そして、私は見てしまった。初音のその目を。
それは狩猟者の目、だった。

「ソシテマタ、ツライ、ヘイワナヒビヲ、スゴスノ……」
「千鶴姉。千鶴ねぇ！」
急に呻き声を発した千鶴に驚き、梓は体を揺り動かす。
やがて、ゆっくりと目を覚ました千鶴を見て、心の底から安堵する。
「どうしたの？　千鶴さん。すごい汗だよ」
千鶴は自分の体を見回す。首筋や脇の下にかなり汗をかいている。
梓はバッグからタオルと水を取り出し、千鶴に渡した。
「で、千鶴さん。どっか体の調子が悪いの？　あの、もしかして、ボクが、ボクが……」
両手をふさがれながら、千鶴は、その泣きそうな頭を優しく抱いて、大丈夫よ、と言葉を投げる。
「じゃあ、なんか変な夢でも見た？」
意地の悪い笑みを浮かべ、梓はそう言った。だが、その問いに千鶴は曖昧な返事をした。さすがに、あなたが死ぬ夢だとは言えるわけがなかった。
夢。
たかが、夢。
夢だと一笑に付して片づけるのは簡単だ。
だが、それが一部真実を含有することがあることを、千鶴は耕一の経験から知っていた。
そして、初音の言葉もかつて、自分に投げられていたものに似ていることも覚えている。
千鶴は自問する。では、どうするか？　初音に会いに行くか？
いま、千鶴が初音に会っても事態は好転するとは思えないが、いつまでも初音に嫌われたままではいたくはない。
だが、芹香に会いに行くという目的を放り出すわ

けには行かない。繭たちも自分たちの帰りを首を長くして待っている。

「……千鶴姉」

「千鶴さん……」

思考の淵に入ってしまった千鶴に二人は心配げな顔を向ける。

千鶴はあゆから丸い機械を借り受けて、あらためて、芹香と、耕一、初音の位置を調べる。

そして、千鶴は立ち上がり、二人に目的地を告げた。

731　相似性

風に揺れる枝葉越しに感じる。

厳しい表情と、冷えた拒絶の意志。

振り向かなくても解る。

トーンダウンしたその声と、鋭い殺気。

「……」

「おっさん、どういうつもりだ？」

「叔父様……？」

両手をあげた叔父様と銃を持った住人の、ちょうど中間で私は立ち止まっていた。いや、前後から感じる圧力に挟まれて、どこにも動けなかったと言ってもいい。ただその名を問うだけが、私にできる全てだった。

「……叔父様？」

「……？」

叔父様は、少々の疑問を含みつつ私の名前を呼んだ。今の私に疑問を感じるということは、私を知っている人物であることを証明している。そこには何の感動もなく、ただ事実を確認するだけの響きがあるのみだったけれど。

がちゃり、と銃器の金属音が聞こえる。

「芹香、その髭親父は――叔父様なんて、上品なもんじゃない」
「あなたに何が解るというの!?」
往人に否定されたのが苛立たしい。だから私は、重ねて問う。
「叔父様!?」
「……」
答えは〝去れ〟と一言だけ。否定も、肯定もない。
「ふん……あんたが芹香の何だろうと、だ。黙って去れるわきゃ無ぇだろうが。……あんたみたいな奴を、放っておくわけにはいかないんだよ」
再び殺気が迸り、往人が狙いをつけたのが感じられる。二人の間に何があったのだろう?
黒く横たわる怨恨の溝の深さは、私に測れるものではなかった。
「どうして？　どうしてよ!?」
叫び、振り向いた私の視界に入ってきた往人の表情は、驚くほど叔父様に似ていた。もちろん髭もないし、顔つきは全然違う。
それでも、似ていると思ったのだ。どちらも初めて見る、恐ろしく厳しい顔だった。
「……」
「芹香、どけ」
二人は同時に、命令した。
叔父様と往人を交互に見ると、射線の半ばに私の頭があることが判る。
「どかないわよ！」
意地ではなく、憤りがそう叫ばせる。
往人から返ってきたのは、食いしばる歯の隙間から漏れた、冷たい怒りの声だった。
「……どういう手段を使ったのかは、まるで解らん。だが間違いなく、俺を撃ったのは……お前の〝叔父様〟なんだよ」
「――そんな!?」
「お前にも見えてただろうが！　そこの茂みに、ライフルを隠していたのをよ!!」

往人の怒りが弾ける。
「……」
否定も肯定もなく。叔父様の警告が聞こえる。ただ〝去れ〟と。
それに対して往人が、荒ぶる意志を抑えて尋ねた。
「どういう心境の変化だ？　何を見ていたか知らないが、なぜ俺を撃たなかった？　どうせお前らは、皆殺しがお望みなんだろう？」
……返事はない。
その問いが、宙に浮かぶ。
「往人……やめてよ……」
私は彼を咎めることしかできない。だから彼に声をかけようとした。
ちょうどそのとき、動きを見せることで沈滞を破ったのは、叔父様だった。
往人がびくり、と銃に緊張を伝えたのが見え、どうにか発砲を抑えたのが解る。叔父様は静かに手を上げて、遠く櫓の方へ指をさしていた。

「……俺は、あの少年を殺す」
あとは、お前の好きにしろ。そんな風に続ける。
叔父様がはっきりと話すのを、私は初めて聞いた。
それだけ言うと、驚く私と戸惑う往人を無視して振り向き、再び茂みに入っていく。
「あの……少年……って？」
私には何の事だかまるで解らない。櫓の人影も、はっきりとは視認できない。しかし往人には見えたのだろうか。何かを悟ったらしく、厳しい表情を崩さないまでも、緊張を解き始めていた。
銃を下ろし、そして叫ぶ。
「……あいつは……あの小僧は、何者なんだ？　何故あんたは、あいつを付け狙うんだ？」
叔父様は立ち止まり、少しだけ考えてから、背中越しに答える。
「……」
私たちに向けて、話題が飛躍したような答えが返ってきた。

「……神奈備命の長き腕？」
「ああ？　神奈備命？　そいつはなんだ？　そんなんで納得できると思ってんのか！」
　往人が叫ぶ。当然ながら、私にもさっぱり理解できない。
「……」
「翼を広げ魂を啜るもの？」
「普通に話せ！　普通に……ちょっと待てコラ！」
　往人が更に声を荒げる。
「あんた〝翼〟と言ったか？　まさか、白い翼のおっかねえ女だ、とか言うなよ⁉」
　……この時点で私には解らなかったのだが、往人が見せた奇妙な戸惑いようは、夢の中の抽象的なイメージだと思われたそれが、唐突に現実味を帯びてきたためのものだった。叔父様が若干驚いた顔をして、体ごと振り返り、小さく、だがしっかりと頷いた。
「……」
「〝翼人〟神奈備命の分身……？」
「マジか」
　往人が夢の中で見た〝翼人〟と、木の上に転移する直前に出会った〝少年〟という存在から受ける威圧感は、どちらも同じ物に感じたために、往人の理解は早かったらしい。
　往人の理解を感じた叔父様は、再び踵を返し、歩を進め茂みに入っていく。
「おっさん！　もう一つ教えろ。……あいつは、何をしようとしているんだ？」
　また足を止め、背中越しに振り向く。そして今度は、私の方を見た。
「……」
「神奈を滅ぼす〝魔法使い〟を……狙っている？」
「おい、魔法使いって……」
　私はぎょっとして、往人と顔を見合わせる。話題の輪から弾き出されていたと思っていた私が、知らないうちに中心に据えられていた。

「叔父様、さっきの閃光は魔法なのね？」
「つまり、あの小僧は羽根女の、子分って事か？」
二人同時に発した疑問に目だけで頷いて、茂みの中からライフルを拾う。叔父様と往人が、私を挟むように銃器を手にして相対する。
だが二人とも、先ほどのような殺気は帯びていなかった。
「最後に、もうひとつだけ教えろ」
往人が脱力しながら、溜息混じりに尋ねる。
「……あんたが、俺たちの背中を撃たないって保証はあるのか？」
問いを受けて、叔父様はただ片眉を上げた。そしてにやりと笑い、肩を竦める。合わせるように、往人も笑う。
「……負けたぜ、おっさん」
僅かに歯を見せながらも、口唇の片端だけを吊り上げた、悪人笑い。私だけをのけ者にして、二人はいつの間にか手を組んでいたのだ。
その目的は、ただひとつ。
『……俺は、あの少年を殺す』
それは、私の知らない叔父様。
そして、私の知らない往人。
呆然とする私を残し、叔父様は木に登り、往人は林を出て櫓の方へ歩いて行く。
「……どうなってんのよ……？」
そこに答える者は、誰もいない。
釈然としない気持ちに不満を募らせて、私は往人を追いかけることにした。
「もう、待ちなさいよ!!」

風が、吹いている。
揺れる木々の囁きの中に、叔父様がいる。
そして先行く往人の、遥か向こうに。
ようやく私にも、人影が見えた。

732　侵食、『痛み』

「大丈夫？　郁未さん」
私、観鈴の問いに郁未さんは、軽くうなずく。
でも、すごく痛そう。ひどいケガだもん。普通だったら、歩く事だって出来ないと思う。でも、郁未さんの足取りはしっかりとしていて、視線も口調もしっかりしていて。
すごいな、って思う。私だったら、絶対くじけてる。
私たちは今、町に向かっていた。
郁美さんていう人の初期武器が救急セットだったおかげで、応急処置だけは出来たんだけど、やっぱりそれだけじゃ足りないもん。もっとちゃんと治療しないと。
ほんとに、それぐらいひどいケガなんだよ、郁未さん。
私、心配になってもう一度声をかける。
「ねぇ……少し休んだほうがいいんじゃないかな？」
「必要ないわ」
郁未さんの声はそっけなくて、観鈴ちんちょっと落ち込み。
郁未さん、私のそんな様子に気付いたみたいで、
「本当に必要ないの。それに、早く落ち着ける場所を探したほうが安全だしね」
ほんのちょっぴり優しい声で、そう続けてくれた。
そういうときの、郁未さんの目は優しくて暖かい。
うん、郁未さん、いつもそんな目をしてくれてたらいいのにな。
でも、そういう目をしてくれるのはほんのちょっぴり。
すぐに、怖い目に戻ってしまう。
その目は何かをにらみつけるようで。何かに抵抗しているようで。

すごく強い視線なんだけど、その視線には、なんていうかな、余裕がないよ。
そう、それは綱渡りをしている最中、そんな視線。
表情は無表情なのに、目だけはぎらぎら光ってて、……正直、ちょっと怖い。
「郁未さん……」
「ん？」
「何か、思いつめてるのかな？」
「別に」
か、間髪入れない即答に、観鈴ちん、びびり。
け、けど、ファイト。
「あの、郁未さんてとってもしっかりしていて、すごいと思う。だけどね」
にははって笑ってみる。
「何か辛いことがあったりしたなら言って欲しいな。そしたら、楽になるかも」
「……辛いことね」
フッと一瞬だけ、郁未さんが笑ったような気がした。
「ほら、ケガだって痛いんだったら、頼って欲しいな。私のこと。観鈴ちん、結構頼りになるかも」
「……頼りになるの？」
が、がお。郁未さん視線が冷たいよ。
「な、ならないかな？　やっぱり。でもね、なにか思いつめてることがあったら、吐き出しちゃったほうがいいと思うんだ。お母さん、そう教えてくれたんだよ」
「お母さん……か」
けど、郁未さんは何かを嘲るようなの笑みを浮かべるだけだった。
実を言えば、この子が心配していることは的外れだった。
怪我はそれほどには『痛く』ない。
いや、この言い方には語弊がある。
痛覚はある。足を動かすたびにある感覚が情報と

して脳に伝達されている。だが、それは辛くない。苦しくない。感覚に付随するはずの感情が極端に薄れてしまっている。
　それは、ほとんどただの情報だ。
　私が『痛み』にさほど邪魔されることなく歩けるのはそのおかげだった。
　そして、私から消えようとしているのは感覚的な『痛み』だけではなかった。
　観鈴から放送のこと、由依が死んだことを聞いたとき、私は泣くと思った。泣くのをこらえなきゃいけないと反射的に思った。
　……けどその必要はなかった。涙腺なんてまるで刺激されなかった。
　悲しくなかったわけじゃない。けど、それは予想していたよりもずっと弱くて。
　しかも、今やそのときの悲しみすら薄れてきてしまっている。
　まるで、何かのお涙頂戴な映画を見た後。そんな感じ。
（ゴメン、由依）
　本当にすまないと思う。でもそれが真実で。
　晴香の事もそう。本当だったらもっと心配しなくちゃおかしいはずなのに。
　水瀬秋子のことも放送に流れていたらしい。
　あの時感じた彼女に対する怒りや憎しみも、もうどんなものか思い出せない。
　そう。思い出せない。
　水瀬秋子との戦いも、
　どんな風に殺しあったかも、
　由依との出会いも、
　どんな風に笑いあったかも、
　もう思い出せない。
　記憶は確かに残っている。だけどそのとき感じた感情は別の人間のもののようで。
　消えていく。薄くなっていく。飲み込まれていく。
　私が私であるためのものが消えていってしまう。

そして、その隙間に呪詛が流れてくる。
侵されてしまう。犯されてしまう。あいつが経験したように。
それが、侵食だった。
「辛いことね……」
だから、私は自嘲した。
あいにくだけどね。観鈴、私のそういう『痛み』は薄れていってしまうみたいだよ？
まだ、辛い。
お母さんのこと、あいつのことを考えるのはとっても辛い。
まだ、苦しい。
お母さんのこと、あいつのことを考えるのはとっても苦しい。
まだ、悲しい。
お母さんのこと、あいつのことを考えるのはとっても悲しい。
けれど、

——好都合じゃない。

『痛み』が消えてくれるなら。それは好都合だ。
『痛み』なんて戦いには邪魔なものだ。
呪詛ならば耐えられる。
さっきは負けてしまったけれど、戦う対象さえわかっていれば私はきっと耐えられる。
私は強いから、お母さんが言った通り私は強いから。
『痛み』なんていらない。感傷なんていらない。
私に必要なのは意志。戦うために必要な意志。
『だから、あなたを助けるわ。それが出来ないのなら、あなたを殺してあげる』
その約束を守るための意志。
このまま侵食が続けば、きっとあいつを、姫君を感じ取れるときが来るだろう。

今、この胸にある感応が、もっとはっきりとしたものになるだろう。
そのときが勝負だ。
そのときまでは決してこの意志だけは消させない。
「なにか思いつめてることがあったら、吐き出しちゃったほうがいいと思うんだ。お母さん、そう教えてくれたんだよ」
「お母さん……か」
私のお母さんはそんなことは言わなかった。
強くあるように。お母さんが私に願ったのはそういうこと。

——どうしてなんだろう？

ほんのちょっとだけ、どうしようもなく醜い感情が私の胸に突き刺さる。

——どうしてこの子は守ってもらえるんだろう？

母親に、恋人に。
——どうして私は守ってもらえないんだろう？
誰も、誰も。
——どうして、なんだろう？
それは、本当に醜い感情で、なのに、それなのに、
「ね？　ダメかな？　郁未さん」
「……大丈夫よ。観鈴。思いつめてなんてないってば。でも、ありがと」
なぜ、私は、この子に優しい言葉をかけているんだろう？

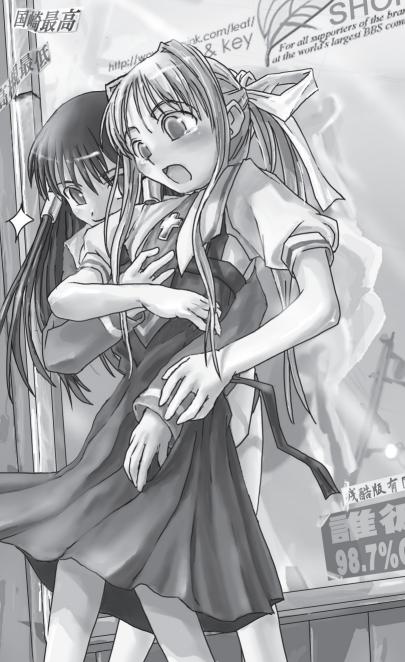
——『痛み』なんてなくなるはずなのに、
——どうしてこの子に癒されていると感じてしまうのだろう？

733　女と女の子

「ねえ、郁未さん……少し休もうよ？」
観鈴は〝心配だよ〟を顔中で、いや、体中で表現しながら、そんなことを言ってきた。
それは本当に、必死といった感じで。
だから私はしょうがなく「……五分だけよ」とため息まじりに言った。

腰を下ろしてからも、ずっと私は考えていた。どうしてこの子に癒されていると感じてしまうのかを。
やはり家庭が原因だろうか。そもそも何が原因で、私の家とあそこまで違うのだろうか？　観鈴の母親は見たところ若かったけど、本当に娘のことを大事に思っていた。そして、観鈴も負けないくらいに母親のことを大事に思ってる。
幼い頃に私を残して宗教団体へ蒸発し、この島では敵同士のような形で再会した。そんな母を持つ私とは、違って当たり前なのだろうか。
そんなことを考えていたら、不意に私の中に少量の嫉妬の炎が湧き上がってきてしまった。
つまり、今の状況とかそんなことを差し置いて、ちょっと困らせてやりたくなってしまったのだ。
だから、いじわるな質問をしてみた。
「ねえ、観鈴って処女？」
「……」
予想通りに観鈴は固まった。顔からは汗がどんどん出ていき、顔は気の毒なほどに瞬く間に赤くなっていくのがわかる。
その様子を見て、何故か私はもっともっと赤くさせたくなってしまった。
「ここはね……」
「がお……」
「こういう事すると喜ぶ……」
「が、がお……」

「終わりが近づいたら……」
「がががががががががががが」
こちらの知識のフル動員した話をしてしまうと、壊れたように「が、がお……」を連発し、顔を〝ゆでたこ〟と見分けがつかないくらいの真っ赤にしたかと思うと、俯いたままで顔を上げることが出来なくなってしまった。
やりすぎてしまった。
でも、何故か後悔はしていない。
あと、観鈴は性の知識も無茶苦茶だった。母親に教えてもらったという知識は何からなにまで変だった。何故か妙に親父くさいし。
おかげで私は一から性教育を施さねばならなかった。それに加えて少々人生で培った色々なテクニックも。その最中に観鈴は急に質問してきた。
「は、初めての時ってどうだったの？」
私はちょっと固まった後に答えた。
「忘れたわ」
「ど、どして？」
「だって今の私にとってはどうでもいいことだもの、覚えてるのは苗字だけ。……それだけのことよ」
何故か涙がこぼれた、痛みを感じないはずなのに。けど、それはその時のことを思い出してではない。
――そう、今の彼氏、アイツを思い出してしまっての涙。
「大丈夫、生きてるよ。あなたとわたしの好きな人は」
気がつくと、観鈴はそう言いながらハンカチを私に差し出していた。自分もつらいだろうにそれを押し隠しながら。
どうやら観鈴は私より少し大人らしい。まったく処女のくせに。
呪詛も姫君も家庭環境も何も関係ない。
この子はいい子だから、好かれているんだ。
「そうね……もし生きて帰れたらダブルデートでもしましょうか」

国崎最高
高槻最低
For all supporters of the
at the world's largest BBS
& key
残酷版有
98.7%

私が冗談でそう言うと観鈴は真っ赤な顔をして、
「い、郁未さんと？」
「うん」
「え、え」
何故か観鈴は困ってしまった。
「？　何か変かな？」
「だって郁未さんとデートなんて……」
その時、懸念が生まれた。
「ダブルデートの意味ってわかってる？」
「い、一日に二回デートすること」
「誰と？」
「い、郁未さんと。で、でも私は往人さん……」
頭を撫でてやりたくなってしまった。しかし、それは中断になった。
元、パンツ無しスカート男。
現、包帯男を私が見つけてしまったからだ。

734　微笑と嘲笑

開いた窓から吹き込む風が、おざなりな掃除を咎めるように、大きく埃を巻き上げる。空気が入れ替わり、差し込む光が明るく、そして暖かい。
放送室は、今までと同じものとは思えないほど希望に満ちていた。マイクの前に立つ蝉丸に、ぶらさがるように月代が抱きついている。
「(･∀･)蝉丸、ドキドキするね！」
「うむ。これが生き残った者たちの、脱出へのきっかけとなる事を祈るばかりだがな」
遅れて入ってきた少年が、部屋の荒れ様に少々驚く。
「これは……凄い有り様だったのだね」
「(･∀･)うん、たーいへんだったんだよ！」
「しかも、お互い機械には疎くてな……難儀したよ」

成功者のみが持ち得る達成感を胸に、苦労話など漏らしてみる二人。
「仲間のなかに、機械に詳しい人はいなかったのかい？」
月代の誇張に満ち満ちた大冒険を片耳に任せて、少年は蝉丸に話を振る。
「居る事には居たのだが……放送することで居場所は知れてしまうため、死の危険を呼び込むことにもなりかねん。だから連れて来なかった。月代は、もしもの時に俺の死を知らせるために、同行してもらったのだ」
大真面目に答える蝉丸。
（……ふうん、なるほどね……）
少年は意外に思いながらも、蝉丸と月代の関係を修正した。そして、心に秘めていた計画も修正する。
（……思ったより、楽かもしれないね）
蝉丸という人物から受ける印象は、有能さに裏付けられた、人間的迫力の強さだ。

だが、もしもこの少女を失ったなら、心の動揺はいかばかりだろうか。以前遭ったときは、そうした効果は期待できない程度の関係だったように感じた。
——もちろん少年自身が、そんな効果を求めてもいなかったのだが——いまは、違うと見た。一方的な庇護ではなく、互いの間に信頼が成立しているようだった。

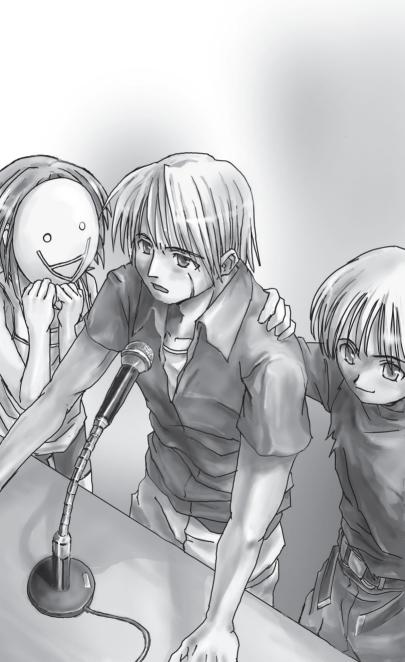
「あそこに……端っこだけだけれど見えるのが、学校なんだ。ホラあそこ。解るかい？」
開けた窓の隅に、特有の白く巨大な建物が見える。ベランダが無く、規則的に大きな窓が付いているのが見て取れる。
「なるほど、たしかに市街地からなら、山側を見て左だな」
蝉丸がスピーチに含める時のために、簡潔にまとめた。
「ところで放送が終わったら、どうするんだい？」

少年はいつもの調子を崩さず、何気なく尋ねる。
「(・∀・)終わったらって？　学校、行くんじゃないの？」
「無論、学校へ向かう」
二人同時に、同じ答が返ってくる。
（……これほど共鳴しているとはね）
心の中で、ひそかに苦笑する。
「街中にいるという君たちの仲間には、小学校に集まることにした訳を説明に行かないのかい？　君たちを知っている人であるほど、集合場所を小学校にしたことを、不審に思うかもしれない。少なくとも僕なら、どうして君たちから小学校という発想が出てきたのかを、疑うと思うね」
「(・∀・)……あ」
「む」
またも二人で答える。心の中の笑いを収めず、少年は畳み掛けた。
「方向が違うから寄り道するのは効率が悪いし、学校を偵察する必要があるかもしれない。最初の予定通り、月代さんにメッセンジャーをやってもらっても構わないとは思うけど……一人では、危険かもしれないよ」
「うむ……確かに、そうだが……」
蝉丸が言い澱む。先のことを考えれば、この反応は当然なのだ。地下施設のときも蝉丸は慎重だったし、少年のことを気にかけていたのだから。
「なんてね。大丈夫、僕が一人で学校を偵察するよ」
最後の一押し。いつもの微笑を浮かべて、そう言いきる。
（ちょっとした、賭けだね）
失敗したら、放送直後に背後から蝉丸を襲うしかない。成功すれば……二人同時に相手にする必要がなくなる。
（さあ、どうするかな？）
しばしの沈黙ののち、蝉丸が意を決して口を開く。

「いや……いつも君だけに危険な役を任せるわけにはいかない。君だってずいぶん傷ついているじゃないか」
「うん？　これかい？　……少々、無理もしたからね。これくらいは、必要経費というものだよ」
（我ながら……しらじらしいね。もともとの僕が、こういう口調で助かったよ）
　成功を確信しながらも、少年は肩をすくめて返答する。
「今度は、俺が行こう」
　蝉丸は決定を印象付けるように、はっきりと言った。
　……この答えは、少年の予想通りであった。
「(・∀・)え!?　でもでも、みんなは、彼のこと知らないよ？」
　ちょっと寂しそうに、控えめな不満を漏らす月代。
「いや月代、お前も彼と一緒に行ってもらう。……少年、月代を頼めるか？」
「(・∀・)ええー!?」
　蝉丸としても、月代と別れたくはない。だが心構えとして心に留めている、自らへの厳しさが、そうした甘えを許さなかった。
　自分に。
　そして今は——月代にも。
　外に微笑を絶やさずに。
　内に嘲笑を含ませて。
　少年は答える。
「ええ——こう見えても、腕には自信がありますから——」

735　導く声〈前編〉

ガピィーーーーーーーーーガガ・ガ!!

櫓の頂上に設置された巨大なスピーカーたちが、共鳴と接続音を撒き散らす。隣の室内では、緊張した面持ちで三人の男女が声を抑えていた。少しばかりの時間をおいて、その中の一人がマイクを握り締めると、演説を始める。
『島内に生き残る、全ての善意ある参加者たちよ！　聞いているだろうか？　俺は坂神蝉丸。最初に断っておくと、管理側の者ではない。諸君らと同じ、被害者である参加者だ』
「(･∀･)蝉丸、かっこいい……」
「ぼくにはできない演説だね」
『もはや体内の爆弾に危険は無く、我々の同志は管理側の拠点に攻め入ることさえ始めている！　参加者同士で殺しあう愚を悟り、今こそ手を組んで立ち上がるときなのだ！　怯え隠れる者も！　後悔を胸に血塗れた腕を抱く者も！　仲間と共に脱出を願う者も！　全ての者を、俺は歓迎する!!』
「(･∀･)なんか決めた内容より、すっごく熱いね」
「この情況でのアピールは、過剰なほど効果があるかもしれないね」
『繰り返す！　俺は全ての者を歓迎する！　今こそ我々は手を組んで立ち上がるべきなのだ!!　我が意に賛同する者は、学校に集って欲しい。そして我らが希望に反する者どもよ、決着をつけようじゃないか！　現在俺と志を共にする仲間は……』
「(･∀･)……そう言えば、敵も来るかもしれないんだね」
「君は……気付いて、なかったのかい……？」
『学校は、市街地南部に広がる山の東側にある！　街から山を見て、その左だ。繰り返す……』
一気にまくしたてて、さすがに息を乱した蝉丸が振り向く。
『……ふう』
『(･∀･)せみまるっ！』
離れていた月代が駆け寄り、少年がその後を追う。
『(･∀･)お疲れさまっ！』

『もう一言、魔法使いの件もお願いできるかな』
『ん？　……ああ、済まん、そうだったな』
　やはり自分の意志から出た物でない情報は、忘れがちなのだろう。
　蝉丸は苦笑して、改めてマイクに向き直る。
『（む……電源を入れたままであったか……）あー……追加の情報だ。集合にあたって現状の打破のため、諸君にお願いがある。恐らく既に知らぬものはいないだろうが、我々の中には多くの異能者が存在する。中でも現在求められているのは〝魔法使い〟だ！　心当たりのある者は、是非とも名乗り出て欲しい。その知識と、能力に期待する！』
　蝉丸は今度こそ全てを語り終え、電源を切った。
　これで当初の目的は達成されたということだ。
「では早速、移動するとしよう」
「そうだね。〝敵〟が音源を聞きつけて、ここに来る可能性も無視できないからね」
　真っ先に少年が外へ向かう。
（……お別れの時間くらいは、残しておくよ）
　少年の顔は、いつものように笑っていたのだろうか。
　それは、誰も知らないことだ。
　少年自身にすら、解らなかった。

　月代が蝉丸を見上げ、その袖口を掴んだまま、ぽつりと呟く。
「(･∀･)……蝉丸……」
「月代、そんな声を出すんじゃない。初音君やマナ君をはじめとして、他の皆を思えば俺たちはよほど幸運だろう？　その幸運を、全ての参加者に分け与えるつもりで、俺はここに来たんだ」
　いつになく多弁な蝉丸。演説気分が残っているのかもしれない、そう思うと口元が緩んでくる。それがなんだか照れ臭くて、月代は下を向き、こくりと頷いた。
「(･∀･)……うん」

「大丈夫、すぐに会える」

「(・∀・)……うん」

照れ臭いだけのはずなのに。

何故だか涙が出そうになる。

「心配、するな」

「(・∀・)……うん」

「皆で帰るために、俺はこうしている。もちろん、俺とお前も、一緒に帰るんだ。……そうだろう、月代？」

「(・∀・)……うん」

蝉丸の言うことは間違っていない。

それでも涙が止まらなくって。

月代は、思わず蝉丸に抱きついていた。

「(・∀・)蝉丸……学校で、会おうね」

「ああ、学校でな……」

736 導く声〈後編〉

丸く狭い視界が、左右に揺れる。少年が、ついに動き始めたからだ。

「……」

スコープ越しに五人の行動を監視しつづけたフランクは、気持ちを入れかえて再びライフルを構えなおした。

放送に足を止め相談していた芹香たちも、再度動き始めようとしている。

放送施設から出てきた三人は、二手に分かれて行動することにしたようだ。男が一人、こちら側へ向かってくる。

はずれだ——少年は、市街地の中へと向かっていく。

「……」

人知れず悪態をつき、木から飛び降りる。このま

ま林の中を迂回して接近し、市街地で改めて狙撃するしかない。幸い少年に同行する少女に合わせてだろう、移動速度は極めて遅い。無謀な攻撃は避け、ひたすら位置取りを考えるべきだ。
思考が沸騰しないように自分を戒めながら、フランクは林の中を駆け抜けていった。

遠く櫓の方から歩み寄る影を見つめ、芹香は尋ねる。
「……あれが坂神蝉丸さんってわけ？」
「当然、そうなるな。用事があるのは……あっちの小さい方なんだが」
つまらなそうに遠くを見ながら、往人は言った。いや、苦々しげにと言ったほうがいいだろうか。
「……どうしたのよ、渋い顔して」
「ふん……考えてもみろ。露骨に魔法使い探しを演説に挟むよう要求されて、素直に受けてただろ。あの坂神ってのは、小僧を信用しているんだよ」
「たしかに、そうなるわね」
当然の分析に、素直に頷く私を、往人は呆れ顔で見つめる。
「……下手すりゃここで、殺し合いになるだろうが」
――考えてもいなかった。
放送を聞きながら往人から教えてもらった少年の凶暴性は、にわかに信用できる物ではない。遠くで少女を道連れに歩く姿からは、全く想像がつかなかった。私がその話を信じる気になったのは、叔父様と往人の態度が一致しているからに過ぎない。
「そっか……普通にしている限り、相手にボロは出ないのね……って、どうするのよ!?」
「林を背にしているとは言え、向こうもそろそろ、こっちに気が付いているかもしれんな。不自然な話だが……街に用があるとでも言って、すれ違うしかないか？」
「……あからさまに怪しいわよ、それ」

「くそ、やっぱりか。まじいぜ……」
進退窮まった、というところだろう。
この情況を動かし、覆すことができるのは、皮肉なことに敵とみなした少年だけなのだ。
蝉丸と別れてすぐに、月代と少年は市街地のはずれを歩いている。
「ここから遠いのかい？」
「(･∀･)ううん、そんなでもないけどね」
ふうん、と無感動に答える少年。
実際、特に興味はない。蝉丸の仲間達に魔法使いがいないことは判っているからだ。
「……ところでそのお面だけど」
「(･∀･)……うん？」
「どうあっても、取れないのかい？」
「(･∀･)うん……色々試したんだけど……」
それは残念だね、と少年はそう言いながら本を開く。
仮面とその本に、関係でもあるのだろうか？
そう思って月代が覗き込む。興味津々というやつだ。
「なあに、その本？」
「……いや、これで仮面を外せないかと思ってね」
ぴり、と少年がページを破る。
月代にとっては、何のことだかさっぱり解らない。どうしてページを破く必要があるのだろう？
「(･∀･)なんで……？」
そう尋ねようとした月代に、少年が言葉をかぶせる。
「……最期くらいは、綺麗に死にたいだろうからね」
「(･∀･)……え？」
驚き、見上げたその眉間に。
すとん、と硬質化した紙片が突き立った。
「(･∀･)……!?」
かくん、と右膝の力が抜けて、斜めに倒れこむ月代。

ぱかり、と割れ落ちる仮面。しかし紙片は、そのまま彼女の顔から離れることはなかった。
どさり、と重い音が響いて、少女が倒れる。少年はほとんど感情の動きを見せないまま、割れた仮面を拾うと、蝉丸の姿を求めて移動した。
「少々、忙しくなるね」
市街地から出て、林側を観察する。まだ林には入っていないはずだ、そう思いながら遠くを見る。
蝉丸を探しながら無意識に割れた仮面を重ね、左手に持ったそのとき。

『蝉丸……』

声が、響いた。
先ほどの放送にも劣らぬ、大きなささやき。
そして声の主は、もはやこの世にいないはずの月代。
『……ごめん、学校……行けないよ……』

少年は驚き、左右を見る。
いや、原因は手の中にあった。
「そうか、この仮面は……」

『……せみまる……』

この仮面は、人格操作か何かの研究用に宗団によって作られた物だったのだろう。
今では仮面そのものに、月代の意識が投影されている。
「……ご同類ってやつだね」
擬似人格を貼り付けられた自分とは、親戚のようなものだ。

『……さよなら』

ぱきん、と小さな音がして、仮面が砕ける。握り締めた少年の手の中で、外れた仮面はプラスチック

板のように簡単に割れていた。
（もしもこの仮面を、僕が付けていたなら。……もう少し長く、郁未と居られたかもしれないね）
ようやく、蝉丸がこちらへ走ってくるのが見えた。
しかし仮面は、もはや何も話さない。
溜息をついて、少年は苦笑いをする。自分が何を求めているのか、解らなくなってしまった気がする。
（……考えている暇はないね）
少年は蝉丸の進路を予想し、月代の遺体より先に発見できるよう計算して、仮面の破片を置いた。そして建物の影に隠れ、蝉丸の到着を静かに待ち受ける。
彼女の死を確認した瞬間こそ。
その一瞬こそが、彼の隙となるだろう。

八十三番　三井寺月代　死亡

【残り21人】

737　別れを告げる僕らのために

自分たちには時間がない。大切な人を早く探さなければならない。そんな時に知り合いが自分の目の前に現れた。このゲームが始まった初期に、私、天沢郁未が行動を共にしていた青年だった。
「耕一さん？」
こうして彼の無事を確認することが出来たのは僥倖だが、私はしかし、彼の様子から別のものを感じていた。彼は本当に自分が知っている柏木耕一なのか。どこかのほほんとして、全てを包み込むような大らかさを持った人。そういう風に私は思っていた。目の前の青年は、その定義の上では柏木耕一ではなかった。
「――郁未ちゃんか？」
違う生物だ。私はまずそう思った。彼の目には、何か別のものを思いやる余裕があるようには、到底

見えなかった。それは彼の目が冷たくなった、という訳では勿論なく、
――真っ直ぐな決意の力を帯びている、と思った。
こちらが彼の本当の姿なのかもしれない、と思う。一緒に過ごした時間は至極短いものだったのだ。
右手には銃を、左手にはナイフを。背負った鞄とおかしな服装。ぐるぐる巻きにされた包帯。傷だらけの顔、そしてそんなボロボロなのに、それでも決して失われない光を持った、太陽のような瞳。
彼は今から、殺し合いをしに行くのだと判った。
握った手を通して神尾観鈴から震えが伝わる。その決意に満ちた姿は、勇敢であるというよりは、ただ恐ろしかった。共に時間を過ごした私でさえも。
「本当に久し振りだね。無事だったか？」
「……うん」
耕一は少しだけ表情を崩して言ったが、すぐに表情を戻し、そして少しだけ申し訳なさそうな声で、
「だけど、再会を喜ぶ時間もないんだ。ちょいと急いでてね。また会おう。絶対に生き残ってな」
そう言って自分たちに背を向けた。
勿論再会を喜ぶ時間もない、というのはこちらも同じである。早く自分の相方を見つけなければならないし、観鈴の母親も見つけなければいけない。しかし、頷いて手を振ろうとする気持ちと、首を振って呼び止めようとする気持ちが戦い、後者が勝った。
「耕一さん！」
「大丈夫。心配はいらないよ」
耕一はこちらを振り向きもせずに言った。
「頭も身体も、正常そのものだよ。怪我はしてるし体力はなくなってるけどな」
「あなた、今から人を殺しに行くんでしょう！」
殺しに行く、という叫びに、観鈴がびくりと震える。無理もないと思った。彼の姿は殺人鬼像そのままに見えるのだ。大きな身体と武器と、その目。観鈴には酷すぎるくらいに酷なことだろう。
「違う。俺は、戦いに行くんだ」

耕一は、しかしきっぱりと言った。
戦いと、殺し合い。この島ではこれは同義ではないのだろうか。私は思う。他者を殺し切ったものが勝つ、それのがこのゲームのルールなのだ。
けれど、耕一は、人を殺すのではない、と言った。けれど、私の知らない顔をして、耕一は言うのだ。
「——判った」
違うのだ。彼は自分と一緒にいたときと何も変わってない。彼は最後まで、他者を守り抜いて生き残ろうとする。その気構えを決して忘れていない。その姿勢が——剥き出しになっただけなのだ。
だから私は、頷くしか出来なかった。
話はもはやこれまでだった。「じゃあ、先を急ぐから。またな」耕一は言って、自分たちの行く方向とは違う方向に進んでいく。先を急ぐのは自分たちもなのに、私は「待って」ともう一度彼を呼び止める。もう一度彼の声を聞きたい、と思ったのだ。

予感。
剥き出しになった意志は、きっと何かの崩壊を招く。それがいい方向に働くか、悪いほうに行くかは判らない。けれど大抵は後者だ。
もう二度と会えなくなるかもしれない、と思った。彼が『戦い』に赴いて、その結果、命を落とすかも知れないと思った。彼の背中を見ることがもう叶わないかもしれない。『また』はないかも知れない。そう思うと私の喉は勝手に震えた。
少しだけ困った顔で「なに？」と訊く耕一は、あの時一緒に時間を過ごしたあの柏木耕一と同じで、どうしてか切ない気持ちが溢れ出てくる。
何でも良かった。何でも良かったけれど、選択肢が多すぎてどうしようもなくて、結局出たのは事務的な質問だった。
「一つ聞きたいことがあるのよ。人を探してる。高校生かそれより少し上くらいに見える黒服の男の子と、背が高い二十代半ばの女の人。見なかった？」

「お、お母さんを探してるんです」
事務的で、無機的で、けれど、会話のネタとして は適当な質問だった。後ろにいた観鈴も便乗して話 しかける。
耕一はこちらを振り向き、答えた。
「——そんな少年は見てないかな。けど女の人なら さっき会ったよ。あっちの喫茶店にいる。そいでそ の人は、娘さんを亡くしたって言っていた。——君 のお母さんかどうかは判らないけど」
そう言うと、「それじゃあ今度こそ行くわ。また な。探してる人に会えたらいいな」と耕一は再び私 たちに背を向けた。
「待ってっ‼」
どうして呼び止めたのか自分でも判らなかった。 何を言うか考えてもいないのに。耕一はちょっと呆 れた顔をして再び立ち止まる。
「——今度は？」
出た言葉は。

「——ひとつ言いたかっただけ。グッドラック」
耕一は一瞬きょとんとした顔をして。
だけど、笑顔で親指を立て、
「——ああ。グッドラックだ」
一瞬で考えたにしてはいい言葉だったな、と思う。 互いに親指を掲げ、また会おうねと約束をして、 私も彼に背を向けた。単なる予感だ。きっとまた彼 に会う時が来るだろう。だって彼も私も、互いに幸 運を祈る——他人に幸運を祈る余裕があったのだ。

「取り敢えず行ってみようか、喫茶店」
「うん」
私は彼女の手を引く。喫茶店にいるという女の人 は晴子さんで、もしかしたら何かの事情で『観鈴は もう死んだ』と思い込んでいるのかもしれない。耕 一に名前を聞いておかなかったのが悔やまれる。
とにかく今は喫茶店に行こうと思う。
歩きながら耕一のことを思う。

彼と出会えて本当に良かった、という、そんな思いが胸に浮かぶ。楽しかった。彼といて本当に救われた。恋とはまた別物だけど、彼に生き残って欲しいと思うし、そして彼に生きてまた会いたいと思う。

――また会おうね。

グッドラックを祈ったのに、何故か涙がこぼれた。観鈴に見えないように涙をぬぐって、今度は頑張って笑顔を作って空を見上げた。

――――こうして私たちは別れを告げた。

738　神様なんて信じていない僕らのために

銃声。鼓膜が破けるような衝撃で誰もが目を瞑った。その引き金を引いたのは誰だったか、果たして誰も判らなかった。誰が引き金を引いたか、最初に理解したのは勿論、引き金を引いた当人だった。

閃光と爆音の消え去った後、そこにあった光景は一つ。七瀬彰が血を流して蹲(うずくま)る様だった。

自分の胸元で輝き続ける朧の光。ぼぉとそれを眺めながら、柏木初音は、次の瞬間ぶるりと震えた。上手く事態を呑みこめないのは当然だった。

自分は、引き金を引いていないのだ。

なのに、何故彼は苦しそうに蹲っているのだろう。それは、他の二人も同感だっただろう。彼らもまた、構えた銃の引き金を引いた覚えは無かったのだ。

何が起こったのか誰も判らなかった。

勿論答えはすぐに出た。

粉々に砕けているのは、初音の後ろの窓ガラスだった。初音の頬を濡らすのは、紛れもない彼女自身の血だった。やっと幽かな痛みが初音の神経に走る。流れた血が唇に至って、初音は漸く、自分が撃たれたのだという事を自覚する。硝煙の匂いが彰の手から立っていた。そして彰はこうして蹲っている。

彰は、撃たれたから蹲っているわけではないのだ。流れている血は自分がさっき銃弾を撃ち込んだ場所からのもので、けれど彰は腕の怪我を構いもせずに

蹲っている。彰は撃たれたから蹲っているのではない。彰は、撃ったから蹲っている。

わたしは、ゆっくりと崩れ落ちた。銃を取り落とし、膝を突いて、呆然と、自失して、座り込んだ。

――結局わたしは、撃てなかった。震える指先は、引き金を引くには至らなかった。わたしは、結局そんな人間だったんだ、と思った。

自分の脇で待機していた二人――鹿沼葉子と観月マナに、自分がしくじった時の事を任せていた。自分が彰より先に引き金を引けなかったら、その時、二人に撃ち殺してもらおう。

――馬鹿な話だ。

自分は、こんな小さな銃の引き金すら引けなかった。大切な人を失う事が怖かった為に。大切な人を自分で壊すのが嫌だった為に。偽善者じゃないか。わたしはこの島にいる誰よりも、偽善者だ。わたしに銃を向けるくらい彰は壊れてしまっているというのに、まだ『優しい彰お兄ちゃん』が帰ってくるかもしれないと、そんな夢想を抱いて、銃を撃つことが出来なかったのだ。自嘲気味に笑って、わたしは、拳銃を拾うと、その銃口を彰に向けた。

もう、わたしは。

偽善者であることを止めなくちゃいけない。

この引き金を引いて、彰を狂気から解放してあげなければいけない。それは、わたしの罪だから。

自分とほんの二メートルも離れていないところで、わたしの腕でさえも外す筈がない距離で、手を伸ばせば届くような距離で、七瀬彰は、一人――激しく息を吐いている。

どうして彰は弾を外したのだろう？

外す筈もない距離だったはずなのに、どうしてわたしはまだ生きているのだろう？　死んでいれば、あなたに殺されていれば、仕方ないと諦めがついたのに。あなたを殺さないですんだのに。

――君を殺して僕も死ぬ。彰はそこまで言ってい

た。なのに彰は自分の頭を撃ち抜けなかった。そこまで考えて、わたしはある当然の論理に行き着く。

彰は今、自分の中に生まれた鬼と戦っているのだ。自分を撃ち殺せなかったのは『優しい彰お兄ちゃん』が『鬼』と格闘しているからだ。

けれど、だとしたらどうすればいい。

そこまで考えたところで、彰がゆらりと立ち上がった。初音の思考は停止し、ただ呆然として胸元で光り続けるお守りを再び握り締める。光り続けるのは、自分に、マナ達に、そして彰自身に、まだ災厄が訪れる未来を意味している。どんな事が起こるというのだろう。もう一方の手も銃を握り締めていて、滲む手のひらの汗を拭うことも出来ない。額からもだらだらと汗が流れる。

けれど、均衡を破るべきなのは自分なのだと思う。

自分の手の中にある銃は彰に向けられたまま。指で引き金を後少し引けば確実に彰の命を奪うことができる――この島で出会った大切な人の命を。

さっきは撃てなかった。今度こそ撃たないと駄目だ。自分勝手でわがままでエゴイストのわたしが彰お兄ちゃんに生きて欲しいと願った結果、彼はこうなっているのだから。

さあ、柏木初音。

引き金を引け――自らの責務を果たせ。

目を開き、ゆらりと立ち上がった彰の、その震えた身体に銃口を向け、引き金に人差し指を当てたところで彰が顔を上げ、

そこでわたしは驚愕した。

――僕は、変わったのだと思う。心底そう思う。この島に来る前の自分と、島で戦ってきた自分。これほどに自分の意思で何かをやろうとした事など、今までの自分の人生ではなかった。人をたくさん殺して、一つの施設を破壊した。他人を守るために、人に向けて銃を撃った。すべてを他人の為にやってきた。自分の身など一度も顧みずにだ。自分が死ん

ででも他人を守ろうとした。
そんなのは、ここに来るまでの自分からは考えがつかない。僕は変わりすぎた。今、自分の中で獣が暴れている。けれど、そんなものは正直大した変化ではなかったと思う。この島に来て、自分が変わっていくと実感している時に比べれば、全然だ。
ふと思う。たぶん僕がはじめて愛した人間は、自分自身だった。そして、きっとこの島に来てから初音に出会うまで。僕は僕自身しか愛してこなかったのだと思う。
美咲さんのことを愛していたのなら、その気持ちを即座に彼女にぶつければ良かったのだし、あの雨の降る彼女との出会いの日、あの耳鳴りのする中で、すぐにでも抱きしめてしまえば良かったのだ。
なのにそうせず、「ああ、良いなあ」というそんな憧れだけを抱いて暮らしてきたのは、結局何よりも、自分自身が可愛かったからなのだろう。拒絶されることを恐れて、自分の弱い心が傷つくのを恐れて、僕は逃げ回っていた。
一方で、僕は他人の事が好きだったのかもしれないと思う。自分の心に優しく接してくれようとしてくれた友人たちのことが好きだったのかもしれない。はるか、冬弥、由綺、そして、美咲さん。
けれど、それは一般で言われる好きとは違うと判る。判ってしまう。僕は、彼らのことを、一般的な意味では愛していなかった。彼らに愛されていた実感はあるのに、どうして彼らを愛せなかったのか。
答えは見つかっている。きっと僕は、誰よりも誰よりも弱い、最低の人間だったのだ。
愛さなくても、愛されてさえいれば、人は——幸せなのだ。
彼らの笑顔の中にいる間、自分の気持ちが安らぐような感触を得たのは、彼らのことが好きだったからではなく、彼らと一緒にいるのが自分にとって、居心地が良かったからだ。結局、自分の事しか考えず、生きてきたんだ。

きっと、彼らがここにいて、今の自分の愚痴を聞いていたならそれを否定してくれるだろう。冬弥辺りはきっと言うだろう、人を愛せない人間なんていない、と。「美咲さんへのお前の気持ちが紛い物だとは思えない、単にお前が意気地なしなだけさ」なんて、そんな風な一般論を並べるだろう。はるかも美咲さんも由綺も、きっと同じような事を言うと思う。

けれど違うんだ。僕は、最低の奴だから。

この島に来て——自分が死ぬかもしれない、そんな状況に立たされて、何故、その時になって初めて、他人のことを心底で守ろう、そういう感情を持ったのだろう。こういう島だからこそ、僕は自分の身だけを真剣に考えるような性質だった筈だ。それが不思議でならない。

あの時、茂みがざわめく音を聞かなかったならば、初音を見つけなかったならば、きっと僕はもっと簡単に死ねていただろうし、こんな気持ちになることもなかった。他人への嫉妬、そんな感情も一度も覚えることもなく、僕は死んでいったのだろう。他人を愛するという気持ちが、良くわからないままに、僕は死んでいったのだと思う。きっとその方が幸せだったのだろう。今では、僕は素敵な愛を心から憎むような道化を演じている。生きることが苦痛になっている狂人だ。もっと早く死ねばよかった。

——ああそうか、とふと思う。

他の人に愛されていなくちゃ、僕は駄目な人間だったんだ。だから、初音を求めたに違いないんだ。こんな場所じゃ流石に、愛さなくちゃ愛されないから。だから僕は、初音のことを愛してみたんだ。は。僕は相変わらず最低だな。

だけどさ、

愛するってのは悪くない。

勝手な話だが、僕はそう思ってしまった。

彰が、茫洋とした目つきでわたしの横を通りすぎる。なのに全く身体が動かない。何故か彰の顔は涙でぐちゃぐちゃになっていた。そしてわたしは、彰のその表情を見て初めて、自分の仮説が間違っていたのかもしれないと気付かされた。ひょっとしたら、自分は大きな勘違いをしていたのではないか。
あの茫洋とした表情も、あの狂ったような眼差しも、夢中になって物事をやる没頭性も、自分を守るために人を殺すような暴力性も、すべて、
自分が血を分け与える以前から、彰がその心に持っていたものではなかったか。
彰お兄ちゃん。そう呼ぼうとしても声すら出ない。振り返る事すら出来ない。立てる音で、彰が割れて壊れた窓を無理やりに抉じ開け外に出ていったのだと判った。粉々に弾けている窓ガラスを踏みつけた音がした。たん、と音を立て、家の外に飛び出した音がした。そしてゆっくりとした歩調で歩き始める音がした。動かない。動けない。わたしに許されるのはただ考えることのみで、その思考さえも混乱で脅かされる。そして混乱した思考を必死で纏め、そしてその『混乱』こそがすべての真実なのだと、わたしはやっと判った。
鬼っていうのは結局、
そこでやっと身体が感覚を取り戻す。殆ど同時にマナと葉子も息を吐く。まるで金縛りにあったように皆動けなかった。動こうと思えば動けた筈なのに、理性が動くことを許さなかったのだ。皆が彰の表情に釘付けになっていた。彰が遠くに行ってやっと、理性は動くことを許した。そして遠くに行ったということは、自分たちは完全に後手に回ったということだ。
多分。
自分以外の二人はまだ真実には至っていない。
「初音ちゃんっ！　彰さんがっ」
マナの呼ぶ声、
判ってる。もう判ったんだ。止めなければすべて

が終わってしまうことは判ってる。そして、何が真実なのかもわたしは多分判った。鬼なんてものは、少なくとも彰の中には『はじめからいなかった』。

自分が与えた血は、きっかけに過ぎなかった。鬼の血は、彰が持っていた、そして間違いなくすべての人間が持っている二面性を際立たせただけなのだ。それですべての事象に説明がつくわけではない。自分の推論は間違っていて、本当に彰の心には鬼が巣食っているのかもしれない。

だが、少なくとも、かつての次郎衛門のような劇的な変化は起こらなかった。

鬼の持つ回復力、そして筋力の増加も発現しているように思える。それにしても、人の雄生体が鬼になったとき程の驚異的な能力には程遠い。鬼の影響は少ない、そう考えるのが自然だろう。

結界の影響もあるのだと思う。

人は誰しもが『鬼』を持っている。それは、自分たち一族の事を指す意味での『鬼』ではない。人なら誰だって持っている荒ぶる衝動のことだ。

――それを、便宜的に『狂気』と呼ぼう。

犯したい。殺したい。壊したい。そんな狂気を、人は誰でも持っている。彰は、自分が血を与えた事を知っていただろうと思う。そして、彼は自分がその血を得たことで、肉体が活性化したことに気付く。その結果、彰は、錯覚してしまったのだ。

――『自分は、人ではなくなった』のだと。

これほど傷ついてもまだ動ける。それは自分が人外のものと化したからではないか。化け物でなければ、今こうして生きていて、なおかつ、今まで以上に速く、強く動けるのは異常だ。そうだ。自分は化け物になったのだ。

そして、彰は自分が人外になったと思い込み、

――もはや化け物ならば、何をしても構わないじゃないか。

血の力で強まった、温厚な彰の裏にあった狂気が、

そう促したのだ。それは声のように聞こえたかも知れない。そしてその声は、彰自身の声とまったく同じものだっただろう。
彰が耕一を殺そうとした理由は何故か。初音には想像することしかできないが、推測するに耕一が自分のことを奪おうとしたから——だと思う。だが、そんな事はありえない。本人であるわたしが保証する。だが、狂気に犯された彰には、それが真実であると思い込んでしまったのだろう。
それで全部が上手く説明できるかどうか判らない。すべてを狂気の所為にするのは強引かもしれない。だが、『狂気に落ちていきたい』と願う彰の心は、自分の見た景色を、記憶を改竄してまで、『大切なものを奪われた』という印象を自らに圧したのだと考えれば、彰の誤解を説明できなくはないだろうか。
そして、わたしは、ここで大切なことを理解する。
彰は。
ちっとも変わってなんていなかった。
自分のことを一途に守ってきてくれた、優しい彰お兄ちゃんのまま、ちっとも変わっていなかった。
全ての諍いは、彰の裏側の性質が暴走してしまったことから始まった。けれども、彰の行動の全ては、結局、
わたしを守ろうとする思いから起こっていたのだ。
彰お兄ちゃんは、わたしを撃てなかったのだ。
「初音ちゃんっ!! 早く行かなくちゃっ!!」
「わかってるっ!!」
わたしはたまらなくなって立ち上がり、既に部屋の外に出ているマナと葉子に続き、彰を追って走り出した。
——市街地をいつのまにか抜けて、僕はいつしか、街の東の端にある高い金網の前に至っていた。がしゃり、と金網を掴み、その遠くに見える景色を見た。
指に入る力が、次第に強まっていく。
まるでわがままな子供がおもちゃをねだるように、

がちゃがちゃと音を立て――僕は無心に金網を揺り動かした。早く。早く。早く。
――僕は何を待っている。
どれだけの時間、僕はそこで、ぼおとしていたのだろう。金網越しの風景にはまるで変化がない。あまりに変わらない風景は時間の流れを忘れているかのようで、目に見えない風の動きだけが、時間の流れの存在を告げていた。
初音達の声が、街の真ん中の方から聞こえる。どうにも見当違いの方向を探しているようだった。彼女らには、僕が何処へ向かうかなど判るまい。彼女らには、僕が何を待っているか判らない。僕もまた、自分が何を待っているか判らないのだから。
――初音ちゃん。
本当に、愛していたんだ。愛していたんだよ。僕が狂っていたとしても、きっとそれは変わらない。
今から僕は、本当の奈落に落ちていく。
そして僕はやっと。
自分が何を待っているか判った。
――こちら側からあいつは来る。自分が殺しきれなかっただろう男が。自分を殺しにやってくる男が。
風景が何かに怯えるように揺れた。風もまたその存在に気付いたように揺れた。ざわめきが大きくなる。心臓の音が高くなる。『その気配』で揺れた僕の心の湖の、一番深い底から声が聞こえる。僕とまったく同じ声をした誰かの声が聞こえてくる。
殺してしまおう。すべて。目の前にある、すべての障害を殺しきろう。
――言われなくても判っている。
僕は神様なんて信じていなかった。信じていたのはただ一つ。目の前に広がる世界だけだった。そして今の僕はもう、自分の頭すら信用することが出来ない。だから僕は目を閉じて、真っ暗な世界に落ちていこう。
何も信じないで、ただ、拳銃の引き金を引こう。
右手に剣を、左手に枷を。

僕は目を開けた。
そして僕の目の前に、金網越しの風景に、あいつがやってきた。ひどくゆっくりとした歩みで、柏木耕一が僕の前にやって来た。

739　サヨナラ

『島内に生き残る、全ての善意ある参加者たちよ!!』
私と観鈴がその放送を聞いたのは、耕一さんから教えてもらった喫茶店までもうすぐのところだった。
「郁未さん……今の」
そう問い掛けてくる観鈴に対し、私は手で制して放送に耳を傾ける。
『今こそ我々は手を組んで立ち上がるべきなのだ！我が意に賛同する者は、学校に集って欲しい』
「郁未さん、これって！」
目を輝かせて観鈴が弾んだ声を出す。
その気持ちは私も同じだ。こういう人がいるというのは、それだけで希望が湧いてくる。
だけど。
(手を組んで、か)
私は、それに参加してよいのだろうか？　私の心はいつ消えるともわからないのに。いつ姫君の手先になるともわからないのに。
だが、それでもこの放送が明るい材料であることに変わりはなかった。
希望があるということはいいことだ。
だが、私のその気分はあいつの声で一瞬にして消し飛んだ。
『もう一言、魔法使いの件もお願いできるかな』
……あいつの声。懐かしいその声。私の好きだったときのままのその声。
でも私には、継嗣である私にはわかるのだ。
普通の少年のものにしか聞こえないその声の裏に

は空虚、そして殺意しかないということが。
「グッ……」
痛みを感じないはずの私なのに、ずきりと胸に痛みが走る。
熱い、とても熱い。
感応しているのだ。継嗣たる自分が、主たる者の分身の声に。
「？　どうしたの郁未さん……!!」
うめき声をあげた私に観鈴が振り返り、そして息を呑んだ。
さぞかし凄絶な顔をしていたのだろう。私は。
「郁未……さん」
だが、それでも観鈴は私におずおずと声をかける。
「……なんでもないわ」
「で、でも」
涙ぐんで観鈴は言ってくる。そこまですさまじい表情をしてるらしい、私。
（……また、泣かせちゃったわね）

チラッとそんなことが頭を掠める。
「お願い、観鈴。静かにして。放送を聞かせて。大事なことなの」
そう、これは大事なことだ。おそらくあいつは……。
『……心当たりのある者は、是非とも名乗り出て欲しい。その知識と、能力に期待する！』
その声とともに放送は終わった。
だが、それでも胸の奥は熱いままだ。
「……大変ね」
「え？」
「あの、放送の中に男の声が二人あったでしょ？」
「あ、うんあったね」
「そのうちの一人、後ろで喋っていたほうはね、管理者の手先なの」
「そ、そうなの!?　じゃ、それって……」
「多分、このままだったら放送をしていた男はだまし討ちされるわ。あの放送を信じて学校に集まった

人たちもね」
「そ、そんな……」
「私は、一刻も早く警告をしにいかなければならない。あいつと対決をしにいかなくてはならない。だから」
私はそこで言葉を切って、そして、観鈴から目をそらして、
「ここでお別れよ。観鈴」
そう、言った。
「……が、がお……お別れ……」
私の言葉に、観鈴の目が丸くなる。
「だから、お別れよ。観鈴はお母さんに会いに喫茶店に行くんだから」
「で、でも急すぎるよ……こんな……」
「観鈴」
私は、今度はまっすぐに観鈴の目を見た。
「お母さんのこと、好き？」
「うん……好きだよ」
「そう。私もよ。私もお母さんのことが大好き。いいものね、お母さんって。お母さんといることって本当に素敵な事だもの」
今の私にはお母さんの思い出は辛いものだけど。
「だから、お母さんのこと大切にしないと駄目。耕一さんが言ったこと覚えてるでしょ？　あなたが死んだと思っているって。だったら、早く安心させなくちゃ」
「それは……そうだけど」
「それにね、いい機会ではあるわ。どの道、いずれは別れようと思っていたんだし」
「え……なんで……そんな風に思ってたの……？」
「私は侵食されている。だから。この先どんな風になってしまうか判らないの」
侵食のこと、姫君のこと、あいつの事は観鈴に話していなかった。
話すことが辛いことだったのもあるし、多分、この子に恐れられるのが怖かったこともあったかもし

れない。
けど、もうそれも終わりにしなくてはならないだろう。
だから、私は、今私の身に何が起こっているのか、この島でなにが起きているのか、知っていることを全て手早く観鈴に話した。
「……このままだと私はあなたに何をするか判らないわ。だから、お別れよ。気をつけてね」
喫茶店にいるのが観鈴の母親かどうかはわからない。けど、きっと信用できる人なんだろう。少なくとも私よりは。
「郁未さん……」
ようやく事態を理解できたのだろうか。観鈴の目から涙が零れ落ちる。
(最後まで泣かせちゃったわね)
私は、唇でそっと観鈴の涙をぬぐう。
「観鈴、あなたに会えてよかった。あなたに会えて、晴香や由依とすごした日々が思い出せそうだった」
……それは結局無理だったけれど。
「さようなら」
笑顔でいられただろうか？　優しい声が出せただろうか？
そうだったらいいな、と思う。
もうそれがわからないぐらいに侵食は進んでいるけど。
そうして、一方的な別れを告げて、私はまだ呆然としている観鈴から背を向けて、私は全速力で走り始めた。
きっとあいつのところに辿りつける。放送によって場所はだいたい判った。後はこの胸の感応があればきっと辿りつけるだろう。
だから、私は後ろを振り返らずに走りつづけた。

740　礼

耕一の背中は、あっという間に小さくなっていっ

た。
「行ったな」
傷だらけで脅えていた耕一の横顔を思い出す。
だが彼も最後には、立ち上がって晴子をまっすぐに見据えていた。
「あの調子なら大丈夫やろ。きっと」
晴子は踵を返すと、喫茶店の中に入っていった。
一つ、確認したい事があったのだ。
喫茶店の最奥の部屋。
先ほど耕一の手当てをするために薬を探し回ったとき、そこで〝それ〟を見つけた。
そのときは怪我の手当てを優先するため、後回しにしたのだが。
部屋に足を踏み入れる。
そこには、一人の少年の亡骸が安置されていた。
晴子は躊躇うことなくその横にまで歩み寄ると、かがんで亡骸の顔に掛かっていた布切れを取り除く。
「やっぱり、あんただったか」
氷上シュン。
出会うなり逃げていった観鈴を、優しく諭してくれた少年。
彼が居なければ、観鈴に再び会うことも出来なかったに違いない。
晴子はどっかと腰をおろすと、横に一升瓶を置いた。
「あんたには本当に感謝してる。……放送聞いたときは悔しかったわ。最後まで礼のひとつも言えんかった」
持ってきたコップに酒を注ぎ、亡骸の横に置く。
「それで愚痴を聞かされるのは、割に合わんと思うかもしれんけど……ちと付き合ってや」
彼と出会った時のことを、彼の言葉を思い出す。
――そうすれば全てがうまくいくはずです――
「あんたの言うほどには上手くいかんかった。観鈴

は、観鈴は……居なくなってしもた」
『それが、あなたのせいだとでも？』
誰かの言葉が聞こえたような気がした。はっ、と晴子は頭を上げ、彼をみる。
しかし、そこには穏やかな死に顔の亡骸が一体、あるだけだ。
「酔ったんかな……この程度で酔うなんて、うちも相当弱ってるんやな」
ははっ、と自嘲気味に笑って、手元の一升瓶に視線を戻す。
「うちは観鈴を守りたかった。でも、どうしたらいいか解らなかったんや」
『そんなことはだれにだって解りません。でも、あの子は、あなたと共にいることで随分救われていたはずです』

また声が聞こえたような気がした。しかし、もう晴子は気にしなかった。酔って聞こえた幻聴が、愚痴に付き合ってくれるのならありがたいというものだ。
「そうかな。そうだとええんやけどな」
そう呟いて一升瓶をあおる。
『あなたはこれからどうするつもりですか』
「……はじめは、残ってる奴みんな殺して観鈴のとこに送ったろか、思たんやけどな」
『やめたんですか？』
「そんなこと、観鈴が望むわけない。向こうにいってあの子に嫌われたくないしな。それで、次は自殺しよかと思たんやけど」
『それもやめたんですか？』
「耕一君見つけて、色々やってるうちにすっかり忘れとったわ。……まあ、死んで観鈴と同じ所にいけるならええんやけど。自殺すると地獄に落ちるとかいうしなー。それが一番心配や」

晴子は苦笑する。
『生きていくつもりは、ないんですか』
「生きていく、か。どうやろな。観鈴はうちの全てやった。あの子を失って生きる意味も——ああ。脱出したい連中がたくさんいるんやったら、手伝ったるのもいいかもしれんな。観鈴もきっと喜ぶし、死んでも神さんが天国へ行かせてくれるかもしれへん」
苦笑いのまま、晴子はそう続ける。
「さっきの耕一君は——」
そのとき。突然スピーカーがガリガリと音をがなりたて、やがて呼びかけが始まった。
「……」
放送は、脱出への誘いだった。
今となっては殺しあおうとする者も大分少なくなっているという事だろうか。
だが、それはいい。それは今の晴子にとって些細な問題に過ぎない。
あの少年。
観鈴が死んだ、いや死んだと思っていたあの爆発。それに巻き込まれたはずのあの黒い少年が、生きている。ならば。
「観鈴……！」
生きているかもしれない。いや、きっと生きている。観鈴が、生きているのだ……！
「今度は間違えんで。観鈴……一緒に、こんな馬鹿げた島からはオサラバするんや！」
晴子は慌しく立ちあがると、急いで部屋から出ようとして——ふと気付いたように立ち止まり、振り返る。
視線の先には、シュンの亡骸。
「……おおきに、な」
そして、部屋を出た。

741　斜陽――なんだか、ショックを受けてるみたいだけど――

「月代ーっ！　何があったのだ!?　少年ーっ!!」
叫びながら走る蝉丸。
蝉丸が学校に向けて歩き出してから間もなく聞こえてきた、あの声。
己の耳に届くはずのない、あの悲痛な声。
(何故聞こえてきた？　いや、何があったというんだ!?　月代、月代ッッッ)
蝉丸が元来た道を走り出すのに、時間はかからなかった。
消防団の詰め所は目指さず、声の聞こえた方向、つまり北西に向けて進路を取った。市街地の外れと、その南に広がる森林の狭間を蝉丸は走った。
かつての戦場でも、これほどの全力疾走はなかったであろう必死さで駆ける蝉丸。
(月代、月代、月代っ)
未だはっきりとした形を持たぬ焦燥感に襲われながら、蝉丸は声が聞こえたと思える地点にたどり着いた。
「月代っ、何があったっ！　何処にいるんだ二人ともッ!!」
叫べども、返事はない。
「まさか、二人とも、放送を聞きつけた奴に殺されてしまったのでは……？」
何か手がかりはないものかと、蝉丸は速度を緩めて辺りを見て回る。
(俺は……いい気になっていたんじゃないのか？年下の者達に囲まれて、一団の中心人物気取りで。仕舞いにはあんな、殺人者を挑発するような言葉まで発して……。その結果で月代と、少年の命を失ったのだとしたら……)
「俺は何という愚者なのだ！」
叫び、立ちつくす蝉丸。握り締めた拳から血がにじむ。

しかし、蝉丸はそのままでいることを良しとしなかった。
何とか己の納得がいく理屈を組み立てる。
（いや待て、蝉丸。そう決めつけるな。落ち着くんだ。まだ希望は……ある。襲撃者の危険に晒された二人が、息を殺してその脅威をやり過ごしている可能性だって……）
「……だとしたら、落ち着かなければならないのは俺の方なのか？」
可能な限り周囲に気を配りつつ、小声で二人の名を呼びながら、蝉丸は再び周囲を捜索しはじめた。

「もっと、目立つところに置くべきだったかな？」
物陰に隠れたまま少年は一人ごちた。
先程まで割りと無防備だった蝉丸を見るにつけ、何度襲いかかろうという誘惑に駆られたことだろう。
しかし、気付かれずに襲いかかるには少々距離があったし、決定的瞬間を待った方が成功率は高まるだろう。
「狩りのチャンスは一度きり……。慎重にならざるを得ないね」
自らを狩人になぞらえる少年が、既に別のハンターに狙われている皮肉。神の視点を持たざる少年がその事実を知らなくとも、それは仕方のないことであった。
「ん。やっと餌に食いつきそうだ」
蝉丸は今や、仮面の破片が視界に入る位置に立っていた。間もなくそれに駆け寄り、そして次に、倒れている月代を発見するだろう。
「さて、そろそろ決めなくては……」

「これは、月代の!?」
視界に仮面を捉えた蝉丸。
その動揺は大きかったが、しかし、本人を見つけたわけではない。
蝉丸は改めて周囲に視線を投げた。

結果、うつ伏せに倒れ込んだ月代を見つけるに至り、蝉丸は慌てて駆け寄った。
「しっかりするんだ、月代！」
そう言って月代を抱き起こし、その顔を自分の方に向け直した。
「む！」
月代の顔面は綺麗なものだった。しかし、額からは血が流れ出している。
「む⁉」
地面に目をやれば、相当量の血が流れ出した形跡がありありと分かる。
「しっかりするんだ、月代。まだ何も終わっていない。全て、これから始まるんだ。これからはじめるんだ。お前と、みんなとで！」
まだ温かい月代の体を揺すって叫ぶ。
しかし、月代が言葉を返すはずはなかった。彼女は即死だったのだから。あの不思議な仮面がなければ、死に際の言葉一つ残せずに、死亡していたはずだった。
「ぐおおおぉぉぉーっ！」
それでも蝉丸は、月代の体を揺することをやめなかった。
「月代、月代、月代ッ‼　俺と結婚するのだと、言っていただろう！　さあ、目を開けるんだ月代！開けてくれ、月代……」
次第に温度を失っていく月代の体をかき抱いて、蝉丸は泣いた。
「あれは嘘だったというのか⁉　違うッ。違うだろ、月代……」
夏にしては早い夕暮れの中、月代を抱いた蝉丸の慟哭が周囲に響いた。
悲しみに囚われた蝉丸、その首筋に凶器が迫る。
それは、弾丸のような勢いで音も無く滑空する白い紙飛行機。
「う、ぐぅ！」
その身に迫る危機を、軍人ならではの感覚で察知

し、素早く身をかわそうとした蝉丸だったが、辛うじて首への直撃を免れたのみだ。
偽典から切り取られたページで作られた紙飛行機は、驚くべき速さで飛来し、その鋭さを十分に発揮して蝉丸の背に突き刺さった。
完全に月代に気を取られており、かつ仙命樹の効果が弱まっている中では、それさえも奇跡的な回避動作だった。
蝉丸は、同時に間近から聞こえてきた駆け足の音に振り返った。
「!?」
蝉丸が振り返るとそこには、今にも己に斬りかからんとする少年の姿があった。
(どういうことだ!?)
疑問はともかく、武器をかざしてそれを防ごうとする。しかし、武器をかざそうにも両手はふさがっていた。
(ならば！)
蝉丸は自ら、少年に肩を向けるようにして突っ込んだ。
少年の偽典が、蝉丸の右肩に深く切りつけられた。だが、骨がそれ以上の進行を止めたか、タックルで少年が弾かれるのが早かったたか、斬撃は蝉丸の腕を切り落とすには至らなかった。
激痛に耐えながら、蝉丸は月代を抱く手を離さない。そのままに、少年と距離を取る。
少年は何事もなかったように立ち上がると、地に着いた際の埃を軽く掃った。
「何故だ。何故なんだ、少年……」
異常なほど低い声で蝉丸。
対する少年は屈託のない笑顔で言い放った。
「蝉丸さん。なんだか、ショックを受けてるみたいだけど……」
「貴様ッ！」
ギリギリの線で耐えていた蝉丸の、堪忍袋の緒が音を立てて切れた。

少年の顔に張り付いた微笑は変わらない。
（やれやれ。蝉丸さんの能力は十分に評価した上で完全な奇襲を仕掛けたつもりだったけど、それでも仕損じるとはね。しかも士気は十分ときている。でも、その代わり今の蝉丸さんは冷静さを欠いているはずだ。それにあれじゃ、右手は使いものにならない。彼の利き腕は右だったはずだけど、両利きだった可能性はあるかな？　手負いの獣を前にして、続けるべきか、続けざるべきか。……狩人としては判断に迷うところだね？）
暮れ始めた陽の光のもと、往人と芹香は走っていた。
急遽、方向を変えて走り出した蝉丸を追って。
フランクも走っていた。
誰にも気が付かれぬよう、市街地の南に広がる森林を縫うようにして。
郁未もまた、走っていた。
（放送がされた場所は本当に近くみたい。そこにまだ彼がいるのだとしたら。私が止めなくてはいけない。私が、私こそが……）
『なんだか、ショックを受けてるみたいだけど……』
やや遠くから聞こえてきた、懐かしい声と懐かしい台詞に、郁未の俊足が僅かに速度を落とす。
あまりの奇行にあきれる私に、その台詞をしれっと言ってのけた少年。悪びれたところの全くない、無邪気ともいえるあの笑顔が蘇る。
あの脱腸ウサギのぬいぐるみ。寝しなに語られた突拍子もない昔話。私の無理な注文に応えて作ってくれたひどく不格好な食卓……。それから、それから……。
非常識な隔離施設の中で、全く不条理な思考回路を持つ少年。

だが、その行動にはどこか愛嬌と温かさがあって……。
ＦＡＲＧＯでの懐かしい思い出に郁未の心が揺れる。
……けれども、と郁未は思う。
（さっき聞こえてきた女の子の悲しい声。そして今さっき聞こえた、男の人の怒声……。今、彼の手で起こされたショッキングな出来事っていうのは……）
人の死、なのだろうと郁未は悟った。しかも、自分と大して年の差も無いだろう、少女の死。
少年と別れて、どれだけの時が経ったのかは正直分からないけれど、それほど多くの時間を浪費したつもりはなかった。
しかし、その間にもう、少年は一人の少女をその手に掛けてしまったのだろう。
『私が助けてあげる』
少年に向けた約束の言葉が頭の中で空回りしていく。
発作はあれ以来まだない。今、少年の前に出ても、自我を失うことはなさそうだった。
（私が彼を助けなくてはいけない。彼を止めるのは私でなくてはならない。だって、約束したでしょう……？）
『だから、あなたを助けるわ。それが出来ないのなら、私があなたを殺してあげる』
（まだ感傷に浸れる心が残っている。約束を果たそうと動くことで心が痛む。こんな痛みが完全になくなってしまえば、躊躇なく行動が出来るのに……。こんな痛み、早くなくなってしまえばいい……）
しかし、その時こそ、郁未が神奈の完全なる影響下に収まるという瞬間でもあった。
郁未は駆けた。
惨劇の舞台へ。

郁未は駆けた。
銀髪の少年の元へ。
郁未の目的地は、もう目の前だった。

742　切り裂く閃光

林を抜け、風を抜き、階段を駆け上る。
踏み潰された雑草の悲鳴が、ほどなく鉄の硬い反響音に変わる。そこは五階建てのビルディング。まだ建設中の体裁を取った、赤い鉄骨の塔を、息も絶え絶え登っていく。フランクの濃い髭に汗が吸い込まれ、顎を伝い、そして喉から流れていく。
アイスコーヒーなど馬鹿が飲む物だ、と常々心の底では考えていたが、今なら悪くない。髭が無くては夏でも寒くてたまらないと思っていたが、剃ってみるのもいいかもしれない。
まるで関係ないことを考えながら、肺機能の抗議を無視してこの建物を選んだのは、訳がある。周囲で最も高く見晴らしが利き、壁が無いために僅かな死角をのぞいて、どこでも狙撃できるからなのだ。
三階まで上がったところで、ようやく満足のいく視界が確保できた。あの『声』の方向を聞き誤ったのでなければ、ここから見える範囲で少年は事を起こしたに違いない。
（………………!?）
少し頭を巡らすと、ライフルを構えるまでも無く、およそ百メートルの距離に標的を見つけた。
想像以上に、近い。だが少年と対峙する男が邪魔で、狙撃は困難だ。
スコープを覗く。やはり命中角度は狭い。狭すぎる上に、外せば男に当たるだろう。
いや、当てたとしても――前は意識してそれを狙ったが――。
フランクは、微動だにせず考え続ける。
……芹香たちの到着を待てば、動きがあるかもし

れない。
　しかし少年にやられたのか、男は既に右腕から派手に血を流し、左手に銃を構えている。
　……一発外して、無理矢理動かしてみるか？
　いや、履き違えるな。あの男を救う事が目的ではない。少年を殺すことこそが、最重要だ。大局的には、あの男を見捨てても、他の参加者を救う事になる。それでいい。
　……迷うことは、無い。
　あの男に当たろうが、外れようが同じことだ。要は少年に当たるか、当たらないか。ただ当てることだけを考えていればいい。
　意を決すると、そこからは早かった。そのまま両手をいつもの位置に据える。軽く息を吸い、少しだけ吐く。吸気を肺に幾らか残したまま、息を止めて微調整。風を感じながら、軌道をイメージする。
　ぴたり、と動きを止めて一秒ののち。

　フランクは、引き金を絞った。
　無人の街、偽りの建物の間を少女が駆けて行く。時々痛みに怯みながらも、かなりの速さで移動していた。脚を引き摺りながら、郁未は走る。声が近い。大きなホールの脇を抜け、その角を曲がったあたりに少年は居るだろう、そう予測して窓を覗き込む。
（……いた！）
　しかし方向も距離も、予想外だった。ホールのちょうど反対側。部屋を挟んで、窓の向こう。
　少年は、いつもと変わらぬ笑みを浮かべて立っていた。誰に話しかけているのかは判らない。
　声が近く感じたのは、ホールの共鳴のせい。少女の姿はなく、既に倒れているのならば、窓枠より下にいるのだろう。
『何故だ！　彼女が、月代が！　一体何をしたというのだ！』
『……何を、と僕に聞くのかい？』

（ん、もう！）
　情況がまるで判らない上に、思ったよりも遠い。
苛立たしさに地団駄を踏みたくなるが、今はそれどころではない。
　ただ、走る。そのまま直進し、角を曲がる。数十メートルを駆け抜けて、再び角を曲がれば、少年と正対するだろう。
　そう考えを纏めたところで、心臓が悲鳴をあげる。それは運動による身体的欲求なのか、心にかかる精神的重圧によるものなのか。
『そうだね、何もしてないんじゃないかな？』
『き……貴様っ！』
『強いていえば、あなたという実力者の行動を妨げた、というところかな』
　……相変わらず、耳に痛いことを平気で口にする。きっと、あの微笑を浮かべたままだろう。あの笑顔を思い出すだけで、脚の痛みがぶり返す。郁未は顔をしかめて、痛覚を抑えた。減速しようとする脚を、意志の力で鞭打ち、更に駆ける。
　ようやく角を曲がった、その瞬間。
右から、左へ。
　一筋の閃光が、郁未の目の前を切り裂いていった。
　紙切れを一枚持って、少年は遠くを見るような目つきで口を開いた。発する言葉は、自分を語るものでありながら他人事のような、奇妙な台詞。
「僕という少年は、死力を尽くして戦いました。その間、あなた達は何をしていたのかな？」
「くっ……」
　もちろん、蝉丸とて遊んでいたわけではない。主催者側の老人と拳を交え、少女のような機械を相手に、危うく命を落としそうにさえなった。しかし仲間を集めることを第一に考え、安全性を優先したのも事実だ。
（だからと言って、何故。何故、今になって……!?）

月代を失った怒りと、少年の豹変ぶりに、蝉丸は混乱したまま何も言い出せなかった。

一瞬の、無音。
それを待っていたかのように。

閃光が、貫いた。

郁未は光の筋を追って、しかし当然ながら遥かに遅れて、視線を左に流した。五十メートルほど向こうで、少年と男が同時に吹き飛ぶ。二人の間に少女が倒れている。
何があったのか、まるで判らない。あまりの異常事態に、郁未の行動も思考も凍りついていた。倒れた二人のほうへ駆け寄ろうとしたが、思い直して足を止める。
少年がうめき、転がっているのが見えたからだ。
もう一人の男は、そのまま。しかし少なくとも、少年は生きている。そんな最低限の余裕を得て、郁未は反射的に振り向いた。あの閃光が生まれた、呪いの発信源を認識するために。

少年と、自分を結ぶ線の延長上。
そこに、あの時の髭の男が居た。

「あいつ……！」
——思えば、あの状態にそっくりだ。一発の銃声が聞こえ、やはり少年が倒れ、同時にもう一人が倒れる。そして髭の男がいた。
全く、同じだった。頭に血が上り、殺意がみなぎる。
「……許せない！」
再び素早く振り返ると、少年がゆらりと立ち上がり、物陰に隠れたのが見える。狙撃されたという事実と、その方向を正しく認識しているようだ。
そこまで確認してから、郁未は髭の男に視線を移

した。男はビルを降りようとしている。耳を澄ませば、鉄筋の音が聞こえる。少年が死角に入ったため、狙撃位置を変えようとしているのだろう。
あの男に、少年を殺させるわけにはいかない。
ショットガンを手に、殺意を胸に——全ての引き金を引いたのは、あの男ではないだろうか。そんな確信を抱いて——郁未は駆け出していた。

銃弾の主から発せられる殺意は、恐ろしく高度に隠蔽されていたのか。それとも少年と蝉丸が、互いに意識を向け合わせていたためか。この狙撃を、二人は全く予測することができなかった。
さらに蝉丸にとってのみ言えば、殺意の対象ですらなかったのだから、少年以上に感知できなかっただろう。
(なるほど、さっきのは……こういう事だったのだね)
少年は左肩の激痛に怯みながら、どうにか狙撃手の射線から身を隠した。骨が砕けたかもしれないな、と考えながら蝉丸を見る。
蝉丸は倒れたまま、ずるずると少年の所に近付いて来ている。その鈍い移動に合わせて、帯状の血痕が地面を塗りつぶしていく。
「……聞こえているかい?」
少年は荒い息のまま壁に身を任せて、なんとか声を出し、尋ねた。
「ぐ……」
蝉丸の意識はあるのだろうか。うつ伏せのまま胸を抑え、片肘で這っていた。
偽典の恩恵を得ている少年でさえ、かなりの痛みに耐えている。防御のないまま、ほぼ同等の運動エネルギーを反射された蝉丸が、ただで済むはずはない。ライフル弾がどこか重要な血管や内臓に命中したのだろう。出血は酷く、長くはないかもしれない。
「……つまらない愚痴をこぼしてしまって、済まなかったね。だけど、もっと早くに全ての決着がつい

ていれば……」
そう言って右腕を上げる。手には偽典の一ページ。
「僕もこんな事はしていなかった、と思うんだよ」
腕を、振り降ろす。
そして紙片は、吸い込まれるように。
蝉丸の首をかすめて地面にすとん、と突き立った。

……最期にひゅう、と耳障りな音がした。

蝉丸は、何かを話そうとしたのかもしれない。だが首から抜け出る空気の音は、既に言葉ではなく。人には意味の聞き取れない、風の音だった。
振り降ろした腕を前方に向けたまま、少年は斃れた蝉丸の姿をじっと眺めていた。
「――なるほど。僕を見て、こちらへ来ていたわけでは、無かったのだね――」
少年は目を閉じてそう呟くと、蝉丸の銃を拾い、よろめきながら街の暗がりへ身を隠した。戦いは、まだ終わらないのだ。

「急げよ、芹香！」
銃声に反応し、往人は更に速度を上げた。恐ろしい速さで駆けて行く彼を追うには、芹香の脚は遅すぎたのだ。事ここに至っては、彼女に合わせて走り続けるわけにはいかない。
「俺は先に行く！」
そう言い残し、全速で駆け出す。速度を上げ、そのまま角を曲がった瞬間。何かをパキンと踏み潰し、驚いて立ち止まる。
「……なんだ、こりゃ？」
踏み潰した物体は、おどけたような仮面の破片だった。
拍子抜けして、ふと視線を流したところに――それは、あった。

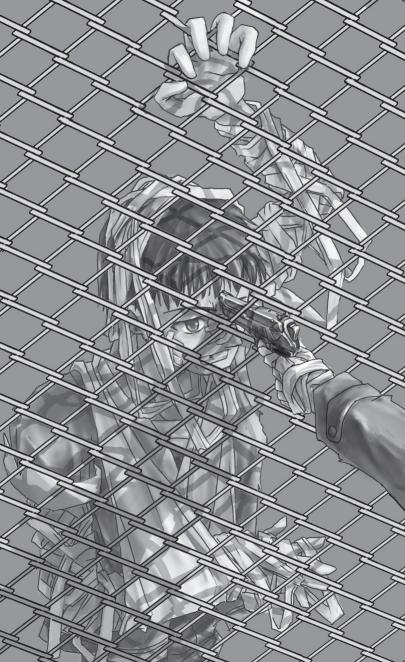
併走を振り切られたのが僅かの時間であったにもかかわらず、大きく引き離されてしまった芹香は、大慌てで角を曲がった。
「待ってよ往人……きゃっ!?　何よ、いきなり立ち止まるんじゃ――」
曲がってすぐのところに、往人が立ち尽くしている。そしてただ呆然と、地面にある何かを見ている。
そこには手を重ねて眠る、二つの死体があった。
そして背後に光る、二つの瞳の存在に、二人は気が付いていなかった。

四十番　坂神蝉丸　死亡
【残り20人】

743　やわらかな傷跡

互いの歩み寄る音で風が少しだけ揺れた。それが二人の、二度目の対峙の始まりとなる。草の踏み潰れる音までが耳に届く。それ程に、何も聞こえない。石が転がる音もする。風が頬を切り裂くかのように鋭い音を立てる。後は何も聞こえない。
何も聞こえない。
――そこで当然のような顔をして待っていた七瀬彰を見ても、柏木耕一はまるで驚くことはなかった。何も言わず二人は近づいてゆく。十メートル、九メートル。
そして、手が届くような距離に至る。
耕一は、がしゃり、と音を立てて金網を掴む。目の前の彰がそうしているように。その彰は、耕一の顔を見ると少し気まずそうな顔をして――だが、すぐに微笑った。耕一は笑い返さなかった。金網越しに、二人は対峙する。手が届くような距離にいるのに、それでも届かない場所に対峙する。耕一に与えられた使命は、この金網を打ち破り、彰との距離を詰めきること。けして簡単なものではない。

やがて「生きていたんだな」という無粋な台詞で彰は沈黙を破り、金網の向こうで笑った。その一方「ああ」と溜息のような言葉で耕一は返す。笑う事こそ出来なかったが、穏やかな口調でそう返せた。
「誤解で殺されるのなんて、まっぴらだからな」
そう冗談めかして言うと耕一の心に多少の余裕が出来る。思わず笑みが漏れていた。それを見た彰は、金網の向こうで怪訝そうな顔をしている。そして次の彰の動作は簡潔だった。「僕を殺しに来たくせに何故笑っている」と言いながら拳銃を構えたのだ。
「お前は何も判っていない」と彰は呟いた。
「僕は引こうと思えばすぐにこの引き金を引ける」
少し不愉快そうに、彰は耕一を睨む。人差し指は引き金にかかったまま、だが、凍ったかのように動かない。「お前も何も判ってない」、彰は繰り返す。
しかし耕一は目の前の銃口にも彰の脅し文句にもまるで動揺する様子を見せず、まだ笑っている。
「何がおかしい」
「なあ、彰？　わざわざここで俺を待っていてくれたのは、何でだ？」
耕一の問いかけに彰は答えない。数秒、迷うような表情を見せた後で彰はやっと吐き捨てる。
「――お前を、ここで殺す為だよ」
歯軋りが聞こえた。彰は不愉快な表情をし、力任せにその銃口を、耕一の額に抉るようにおし付ける。銃口の長さ、わずか十数センチの分しか与えられていない命の猶予にも関わらず、耕一は、その笑みを崩さずに言った。
「銃を下ろせよ、彰」
びくりと彰は震えた。果たしてそれが畏怖による震えだったのか、それともまったく別の種類のものから来たものだったのかは判らない。しかし、完全に臆した訳でもない。彰はそれでも銃を下ろそうとしなかったし、その震えも一瞬で止まっていた。
「下ろせ」
もう一度、耕一は言った。その笑顔を崩さずに言

う様子は、余裕があるというよりは、狂気の沙汰にしか見えない。命を放り出しているようにしか見えないのだ。その狂気に彰は確かに怯えている。それでも彰は銃口を下ろさない。不愉快そうな表情を隠さず、吐き捨てるように言う、
「お前を殺さなくちゃさ、僕は駄目になるんだよ」
　小さく息を吐いて、耕一はもう一度言った。今度は笑わなかった。ただ射抜くような視線で、彰の手の先を見つめている。まるで魅入っているような、そんな眼差しだった。
「銃を、下ろせ」
　――何かの放送が聞こえてきている。多分坂神蝉丸の声だった。だが、そんなものは今の自分達にとって、どれだけの意味もない。何も聞こえない。聞こえるのは風の音と、木々のざわめく声だけだった。
彰は、小さく溜息を吐くと、
「――判っている」
　と呟き、その構えた銃を下ろした。
　激昂に任せて引き金を引くなどというつもりは元々無かったのだろう。あまりに超然とした様子の自分が、ひどく不愉快に感じられただけだったのだと思う。銃を下ろした彰を見て耕一はまたも笑う。彰はやっぱり不愉快そうな顔をしたが、それは我慢したようだった。
　金網越しに、二人は改めて対峙する。
　僕は。七瀬彰は。どうしてここに来たのだろうか。ただ呆然と、耕一が倒れている筈だった方へ向かっていたのは自分でも判っていた。町の端、人の影のない、風と森と金網だけの場所に。初音達がこちらに来る気配は無かった。きっと見当違いの方向を捜しているだろう。
　どうして僕はここに来たのだろうか。耕一と二人きりになりたかったから？　それも理由の一つだろう。というよりは、理由の側面の一つだ。
　僕がここに来た理由は。

——決まっている。耕一と、戦うためだ。
包帯をぐるぐる巻きにした耕一は見ていて痛々しい程だった。今も少し観察していたが、左腕を動かす様子は殆ど見受けられなかった。動くことは動くのかもしれないが、無理はさせられないということだろう。そして耕一は右肩に鞄を背負っている。先は持っていなかった筈の鞄だ。あの中に武器が入っているのかもしれない。
とにかく、耕一はボロボロだった。紛れもなく自分がやったことで、自分が柏木耕一という男に勝利したことを示す傷跡だ。
しかし、今の耕一にとってそのような傷跡は大した問題ではないようにも、彰には思えた。
耕一の目は、先程、自分に打ちのめされた時のものとは、まるで違った。決意と勇気に充ち満ちた、強い目だった。
自分の内側の一番黒いところから声が聞こえてくる。その声がずっと僕に語り掛ける嫌な言葉。その言葉がひどく嫌に聞こえるのは、その言葉が、耐えられない程の誘惑が秘められている、甘美な誘いだったからだった。
堕落させるためには、壊せば良い。
大切なものを一つ、壊せば良い。
僕は。
僕の眼前にある、決意と勇気に充ち満ちた目が、ひどく鬱陶しかった。
柏木耕一の何を壊そうかと思った。
結局僕が殺しきれなかった耕一。あの時、どうして殺しきれなかったか、その理由は判っていた。僕が完全に甘さを捨てきることが出来なかったからだ。
甘さは捨てようと思う。僕は、今度こそ柏木耕一を殺し切る。今度こそ、全てをかなぐり捨てて、僕はあいつを殺す。
彼を殺す事が出来たなら、今度こそ、僕は本当に

落下していける。
しかし。僕は小さな矛盾に気づく。先ほど、耕一の声になど惑わされずに引き金を引けば、それですべてが終わりになっていた筈だ。満身創痍の耕一に、弾丸をかわす術も、それ以上の傷に耐えられる肉体もないことは判っていたのに。殺すためにここに来たのに、何故僕はさっき殺さなかったのだろうか。
実のところ、その理由は半ば判っていた。あそこで引き金を引いて耕一を殺しても、僕は落ち切れなかっただろう。僕は、すべてをなくした事にはならなかっただろう。
「――で、耕一。お前はここに何しに来たんだよ？僕にさっきぼろぼろにやられた事も忘れて、性懲りも無く、殺されに来たのかよ」
挑発するように、僕は言った。微動だにせず見詰め合う時間に、多少なりの窮屈を感じたからだった。
「その鞄の中に武器でも入ってるんだろうけど、お前が鞄に手を伸ばした瞬間に、僕はこの拳銃でお前を撃つ。この距離なら、絶対に外さないよ」
だが、そんな脅しの言葉を聞いても、耕一は肩を竦めて笑うばかりだった。そして向き直ると、耕一は意味のわからない言葉を呟いた。
「そんなつもりはないよ。――俺は、お前を止めに来たんだから」
僕はその言葉を聞いて、思わず吹き出した。
「お前、自分の状態見て言ってるのか？　その傷、誰にやられたんだよ。――やったのは僕だろうが。止める？　殺し合わないで？　何言ってるんだよ。そんな寝言を言う暇があったら」
吹き出したのはおかしかったからではない。呆れたからだ。どうしてこの男はそんなことを真顔で言えるのだろう。再び僕は拳銃を耕一に向け、
「僕を殺せよ。僕を止めるには、殺すしかないぜ。その前に僕がお前を殺してやるけどな」
沈黙が訪れる。手に汗が滲み、歪んだ緊張が場を支配する。「良く判らないんだよ」。沈黙を破ったの

は耕一だったが、聞き手の僕はその言葉の意味が判らない。耕一が続けた言葉で僕は意味を理解する。
「何故、俺を殺そうとした」と、耕一は真剣な顔でそう言った。
「——お前が、泥棒だからだよ。人の大事な初音ちゃんを奪ったんだからな」
「それは誤解だ、俺はそんな事をしていない」
　吐き捨てるように僕が言うと、耕一はすぐに反論の言葉を返した。眉を顰めて、何を言っているのだ、とでも言いたげに。
「俺は何もしていない。お前が外に出てる時に、怯えていた初音ちゃんを励ましてただけだ。それをお前が勝手に勘違いしたんだよ。初音ちゃんを守るのはお前の仕事で、俺の仕事じゃないことは判ってる。——誤解だと判ってくれたか？　お前も誤解なんじゃないかって実は判ってたんじゃないか？　まあともかく、それならもう戦う必要はないよな」
　僕の表情が嵐の海のように揺れたのを、きっと耕一も見逃さなかったことだろう。耕一は笑っていた。
「思ったより理性的で良かった。拳銃も引いてくれたしな。——俺が初音ちゃんを奪おうとするわけがない。信じろ、俺は人のものを奪おうなんて、けして思わない」
　耕一は説得するように言う。両腕を広げ、無抵抗のポーズで笑っている。僕は拳銃を下ろし、そして考えていた。耕一は何か勘違いをしている。僕がここに来た理由を勘違いしている。
　僕は今、初音のことなど直接的にはどうでもいいのだ。心底に耕一を殺す為に、引いては自分が落ちていくために、ここにいる。どうして耕一を殺そうとしたか。そんな命題にはもう、意味がないのだ。
　一方耕一は、僕が改心し、暴力を振るった耕一に謝るためにここに来ていたのだと——そう考えているのだろうか。だとしたら耕一は優しすぎる。そして甘ったるすぎる。
　きっと耕一はこう考えているのだろうと思う。

〈まだ彰は正気だ。先程自分を殺そうとしたのだって、一種の気の迷いのようなものだ。結局自分を殺しきれなかったのがその証拠だ。彰はこっちに戻ってこれる〉

そう、多分僕はまだ、ぎりぎりのところで戻る事が出来るのだと思う。耕一は僕を許しているし、きっと初音達も許してくれるだろう。そして全員で力を合わせて大団円を迎える事も出来るのだろう。

しかしそれは、僕の意志を無視した場合の話だ。

僕の心には傷跡が増えすぎた。大切な友達を失い、好きだった人を失い、そして、数え切れないほどの多くのものを失った。そんな中で——僕はただ、落ちていきたいと願うようになった。

そして今は、落ちようと思っている。

いつからだったのだろう。

この島に来る前から、落ちていきたいと思ってずっと生きてきた事は否定しない。日々恙無く暮らしていながら、いつも『堕落したい』と思って生きてきたのだ。それでも僕は我慢することが出来る人間だった。だからこうして我慢し通して、普通の人間として生きてくることができた。

いつからだったのだろう。

この島に来て、はるかが、美咲さんが、冬弥が由綺が死んだことを知ったときに、僕は確かに嫌気がさした。どうして僕だけが生きているのだろうと思った。けれど、その時じゃない。

判っている。初音に裏切られた瞬間だ。

初音の事を抱きしめている間は、自分が死んだとしても、彼女を守りたいと思っていた。自分は自分であろうと思い続けることが出来た。その愛する人が自分に銃口を向けた瞬間。彼女が、僕に狂っているんだよ、と言った瞬間。

その瞬間に、きっと切り替わったのだろう。

初音の——愛する人の裏切りに遭った瞬間が、その機会だった。あの瞬間、僕はきっと、裏返ってし

まったのだ。
　落ちていこう、と思う。

　耕一が笑っている理由は、彼がすべてを許そうとしている事を表しているのだろう。理不尽な暴力で傷つけた事も、先程自分が彼に拳銃を向けた事も、今さっき彼に拳銃を向けていた事も。僕の目が、意外に理性的に見えた事も関係しているのだろう。初音の名前を出したときに、確かに僕の目の色は落ち着いていた。
　僕の目が、『自分のした事は悔いている、反省している。許してほしい、だからまた一緒に戦わせてくれるか？』と、そういう風にでも言っているように見えたのだろう。
「さっき、俺がここに何しに来たか、と言ったな。お前を止めに来た。そして、——お前は、止まっただろう？　拳銃を下ろしてくれたよな。これで目的は一つ達成だ。——そして、二つ目。俺は帰ってきたんだよ、護らなくちゃいけない人たちのところに。俺はもう迷わない。皆で帰るんだ。勿論、お前も一緒にな」
　耕一は僕に手を伸ばし、
　そこで僕は思いついた。
　——堕落させるためには、壊せば良い。
　——大切なものを一つ、壊せば良い。
　耕一を堕落させ、僕を墜落させるための言葉を。
「さあ、初音ちゃんのところに帰ろう」
　耕一もきっとこの言葉だけは許せないだろう。
「もう無理だよ、耕一」
　一瞬呆然とした耕一の顔を見つめて、僕は言ってやった。全てを壊す言葉だ。全てを終わりにする、魔法の言葉だ。はじめからこう言えば、自分と耕一の殺し合いはすぐに始められたし、そして、喪失の瞬間もすぐにやってきたのだ。すぐに思いつかなか

った自分の頭の悪さを呪いたい。
「だって僕は初音ちゃんを殺してしまったんだから」
耕一の表情が急変するのを見て、やっと僕は笑う事が出来た。これでやっと心置きなく僕は耕一を殺せるし、耕一は——僕を殺せる。
「——彰、」
絶望を浮かべ、しかし薄ら笑いを浮かべて、冗談だと思い込みたい、そんな表情で耕一は吐く。
「冗談なんて言うものか。——僕は、もう戻れないし、戻らないんだよ。愛する人を殺してしまった」
——僕の心には、小さな小さな傷痕がたくさんあった。痛みも感じない、苦痛も感じない、けれど蓄積されて僕の命を削っていく傷痕。それは誰の心にもある傷痕だ。耕一にも、初音ちゃんにも、誰にでもある傷痕だ。それは僕の場合、人よりも目立たない、小さなものだった。そして、きっと誰よりも深い傷痕だった。
僕は、呆然と立ち尽くす耕一を尻目に、すぐ横にある金網の向こう側へ出る扉に手を掛けた。僕と耕一を隔てていた脆弱な金網は用を成さなくなった。
「僕が憎いだろ、耕一。さあ、始めようぜ。——殺し合いだ」
その瞬間、僕の短い生涯で最後の、やわらかな傷痕が一つ、音を立てて僕の心に刻まれたに違いない。

744　応用と実戦

「チッ……！」
往人はいち早く気を取り直し、いまだ呆然としたままの芹香の腕を掴んで建物の影に転がり込むと、すぐさまアサルトライフルを構え直して通りの方を覗きこんだ。
「どっ、どういうことよ、あれは！」

ようやく気を取り直した芹香が、往人に食ってかかる。
「知るか。『あいつ』がやったんだろ」
対する往人の答えはそっけない。
芹香の方を振り向きもせず辺りを警戒している。
ただでさえ悪い目つきがますます険しい。
その真剣な様子に、思わず芹香は黙り込んだ。
(倒れていた男はさっきの蝉丸とかいう奴だった。やられたのはおそらく俺達が来る直前。なら、あいつはまだ何処かに隠れて獲物を狙っているに違いない……)
こちらの居場所も知れているのかもしれない。先ほど撃たれなかったのは幸いと言えるだろう。
往人の頬を嫌な汗が伝う。
「くそっ、ヤバイぜ……これが使えりゃな」
往人は探知機を取り出してスイッチを動かした。
だが、そこには何も映らない。ただカチカチという音だけが空しく響くだけだ。
「こんな大事な時に電池切れなんて、これだから機械は嫌いなんだよ」
そうボヤくと、足元にそれを投げ捨てる。
「あ、こら。そんな乱暴に……」
(電池……？)
そのとき、芹香はふと思い当たった。
手元の電動釘打ち機を見る。
電動。
それには当然ながらコンセントはついていない。
ならば、どうやって動いているのか。
グリップの辺りを探り、そこにあった蓋をあける。
その中の、線に繋がれた黒い箱に収まっているものは――
「……あ、乾電池」
正確には充電池であるが。
「ってことは……！」
芹香は急いで往人の投げ捨てた探知機を拾い、それを探った。

「おい、あまり音をたてるな」
後ろでなにやらゴソゴソやりだした芹香に声をかける。
「ちょっと待って。もしかしたら、探知機が使えるかも」
それを聞いて往人は思わず振り返った。
「なに？　本当か？」
「ええ……んと、＋がこっちだから……よし、はまったわ。映すわよ」
探知機を覗き込む。そこに映る光点は――
「……あれ？」

その瞬間、あたりに銃声が響き渡った。

郁未は思わず足を止める。
(今の音……さっきの場所から？　他に誰かいたの？)
誰が撃ったものかは解らない。
しかし、それが誰であろうとあいつは戦うだろう。殺そうとするだろう。
それが『今のあいつ』の全てだから。
あの髭の男は放っておくわけにはいかない。
けれど……脳裏に、重症を負ったあいつの姿が浮かぶ。
「どうすれば……」
どうすれば。
郁未は立ち尽くしていた。

745　使徒

「彰さーんっ！」
葉子は彰の姿を求め市街地を彷徨っていた。
すぐ近くから、初音とマナの声が聞こえてくる。
お互いの声の届く範囲で行動することに決めていた。
満足な武器もない三人だったから、出来れば少し

でも離れない方が望ましかった。
けれども、それでは人捜しに不向きすぎる。
苦慮の末、出されたのがこの結論だった。
しかし、依然として彰の姿は見つからない。
姿を隠しているのか、それとも見当はずれの方向を探しているのか。
それすらも見当が付かない。
（こんな悲劇が、起きてはいけないんです。なんとしても、彰さんを見つけませんと……）

ＦＡＲＧＯでは感じることのなかった、人々の喜怒哀楽。季節の変遷。
様々な事象の移り変わり。
郁未と出会えて良かった、と葉子は思った。
あの時、外の世界を知りたくて、葉子は宗団を飛び出した。
葉子はその外の世界で、郁未から感じ取った様々なものを肌で感じ取った。
なんて刺激的で、素晴らしい世界なのだろうかと、葉子は思った。無論、素晴らしいことばかりでないのも分かっていたが、それでも葉子はそう思った。
しかし、身よりもなく、無一文の人間が暮らしてゆけるほど世の中は甘くなかった。
葉子は程なくして、ＦＡＲＧＯに逆戻りする事になる。Ａクラスで唯一の生者である葉子は、宗団を脱した事を咎められることはなかった。
ただ、元の生活に戻っただけだった。
元の、窮屈で退屈な生活へ。
葉子の毎日はかつての通りに過ぎていった。
そのあまりのひどさに、外の世界のことなど知らなければ良かったと思うときもあった。
しかし、総じて葉子は郁未に感謝していたのだった。
ずっと母に縛られて宗団の教え以外に興味を持たないでいた自分を開放してくれたのは郁未だったと。

母がその価値観において葉子よりも優先した、不可視の力。
不可抗力だったとはいえ、母を自らの手で殺してしまってからというもの、葉子にとってＦＡＲＧＯ、ひいては不可視の力が唯一にして最高の価値観だった。
己のエゴが許されない。許すことが出来ない。その呪縛を解いてくれた郁未と再会したい。今は自由に動くことは叶わないけれど、決して諦めはしない。
郁未によって霧は払われたのだから。
彼女との邂逅で、得たものを絶対に忘れない。
そして、いずれまたＦＡＲＧＯを出て郁未と過ごすのだと、葉子は決めていたのだった。
このプログラムに郁未と自分が組み込まれると知ったとき、葉子は複雑な思いながらも郁未との再会の機会が到来したことを僅かに喜んだものだった。

しかし、未だ再会は果たされていない。
再会に逸る気持ちもあったが、その障害になるであろう高槻らの抹殺が重要事だったということもある。
それに、一時的にとは言え、行動を共にした人間を見捨てられるほど、他人に無関心にもなれなかった。
（郁未さん。あなたがこの心を下さったのですよ？そして私はそのことをとても嬉しいことだと思っているんです。だから……。ですから、もうしばらくの間、待っていて下さいね……。そして再会がなったとき、無事に島を出ることが出来たなら、あの時のゲームを二人でやりましょう……）

その頃、晴香は七瀬と二人、灯台のような施設の奥深くに潜入していた。
『冒険を続きからはじめる』よ、と七瀬の言葉が何

処からか聞こえてくるようだった。
　行けども行けども、人の気配が無く、二人がやや気抜けした頃だった。
「ねぇ、あんた。何か嫌な感じがしない？」
　晴香が小声で問う。
「今さら怖じ気づいたって訳？」
　腰に手を当てて七瀬がやや小馬鹿にするように問い返す。
　質問に質問を返すな！　と、突っ込みたいところを晴香は堪える。
「……。違うのよ。なんかこう、すっきりしないと言うか……」
　そう言いながら、視線を中に泳がせて、適切な表現を探す晴香。
「大げさに言えば、『頭の中がざらざらする』って言うか……」
　表情を曇らせる晴香。
　しかし、七瀬はそんな晴香を笑い飛ばした。
「ここに侵入した緊張感で、ちょっとばっかり参ってるのよ。あちら側の施設って事で、随分と緊張してるのは私もそうだから」
　今度は晴香を安心させるような微笑みを見せて七瀬は付け加える。
「もうちょっとだけ、気楽に行こうよ。何かが起こる前に参ってるんじゃしょうがないからね？」
　晴香は七瀬の笑顔につられて頷く。
　そして七瀬に心配をかけぬよう、晴香は笑顔を返して言った。
「分かったわ。先を急ぎましょう」
　しかし、晴香の疑問は消えなかった。
（本当にこの感覚は杞憂に過ぎないのかしら……？）

　さらにその頃の郁未は……。
　目まぐるしく変わる状況の中で自らの取るべき行

動を決めかね、逡巡していた。
――何か奇妙な物に守られている者が一人おるの？　じゃが、今一人は少しずつ余の影響を受けつつある。
そして、もう一人じゃ。
あの時のは半ば偶然じゃったが、しかし、二人が場所を同じゅうしておったのが良かったの。
アレがどれほどに強い意志を持とうとも、さほど時をおかずに『できあがる』じゃろう。
なに、今はまだ己が意志で動いておるがよい――

746　道化

赤色灯と警戒音が充満する中。飛空艇の乗組員は緊張と焦燥を抱えて走り回る。
「長瀬老はどうした!?」
「それが、お部屋にお籠もりになられたまま、ご返事もされぬ様子で！」
「ならば捨て置け!!　もともと俺は、この話には乗りたくなかったんだ！」
「し、しかし!!」
「ええい、そんなことよりも自分の命を心配したらどうだ!!」
追いつめられた者達の怒号が響きわたる艇内。
刹那、またどこかで大きな爆音が響く。
「駄目です！　どの脱出口も火が回っていて、パラシュートが!!」
「馬鹿な！　どこか無事なところがあるはずだ！　俺はこんなところで死なん！　死んでたまるか!!」
そして、手近にあったドアを開けた瞬間。猛り狂った炎の精霊の舌が彼らを舐め回し、あとには何も残らなかった。

飛空艇は炎を身にまといながら、徐々に高度を落としている。
この飛空艇は上部にヘリウムが詰まった気嚢で浮力を得ている。いわば、飛行船の小型なものである。
安全性で言えば、飛行船が空を飛ぶ乗り物では一番である。
だが、飛行船というとヒンデンブルグ号の大惨事を思い浮かべる人もいるかもしれない。
あの事故はヘリウムの代用として水素を使っていたために引火し爆発をしたのである。
現在の飛行船は例外なく不燃のヘリウムが使われているために、あの惨事が再発することはまずありえない。
もっとも、この船は源之助の魔法と結界の影響で電気系統に狂いが生じ、監視装置や防火設備が作動しないまま火災が発生、延焼している。つまり、通常ではあり得ない事故である。
「長瀬老のご様子は⁉」
「意識ありません！　それと爆発時に受けた傷で大量の失血です」
「クッ、艇内はどうなっている！」
「機関室で爆発！　第三艦橋大破！」
「機関室近辺の隔壁を閉め、防火装置を作動させろ！」
「了解！」
「無線はどうなっている！」
「だめです。発信はできますが、受信できません！」
女性オペレータの悲鳴のような報告と船長の怒声がブリッジの中を行き交っている。
「整備班から報告です。……えっ！」
「どうした⁉」
「おやっさんが……、いえ、整備班長が死にました……」
「……」
「停止しなかった給油装置を手動で止めにいったそうです、それで……」

「……そうか」
この船の整備を統轄する班長を乗組員は親しみを込めて、おやっさんと呼んでいた。
寡黙な職人気質だが面倒見がよく、整備班だけでなく、すべての人に慕われていた。
そして、この船のことを一番に愛していたのは彼だったのかもしれない。この船に殉じたことはおやっさんらしい、とこの場にいる全員が思った。
「船長！　乗組員の一部に混乱が生じています！　ご指示を！」
しばしの熟考の後、船長は遂に苦渋の選択を下した。
「総員、退船！」
「はっ」
「巡視艇に打電。我、操舵不能。脱出を試みる、回収を頼む」
「了解」
船を放棄することは、それを統轄するものにとって、最大の屈辱である。
そしてなにより、おやっさんが命懸けで守ったこの船を捨てたくはなかった。
しかし、船長は乗組員の命を預かる者だ。船に拘って乗組員の死者を増やすことはできない。そうなってしまってはおやっさんにも申し訳が立たない。
「副長、君は生存者を捜して脱出してくれ」
「ですが、船長は？」
「私は、この船に残る。万が一、島にこれが落ちたら大変なことになる」
島にはまだ哀れな参加者がいる。森が多いこの島に火の固まりとなったこの船が落ちれば……。
「しかし、舵はもう……」
「まだ、方法はある。だが、もし駄目だった場合確実に死ぬんだ。おまえたちを道連れにすることはできない」
それは嘘だった。もはや、この船の墜ちる先は神にしかわからない。

船長は死ぬ気であった。彼にはもう、なにも残されてはいない。妻も子供も皆、過去に行われたプログラムで散っていた。
「そんな。私も残ります！」
オペレーターの声にブリッジクルーから次々に同意の声があがる。
そんな彼らの存在を船長は嬉しく思った。しかし、実際に出た言葉は違った。
「馬鹿者ッ！　おまえたちには、やることがある‼」
そして、そこにいるすべての者の顔を見わたす。
「長瀬老は倒れた。だから、プログラムは中止させる」
船長の言葉に一同は驚愕する。
それもそのはずだ。実際に一介の船長でしかない彼にその権限はない。
だが、『長瀬』がいなくなれば積極的にこのプログラムを進めようと思う者はいなくなる。金銭で仕事をしている者はパトロンがいなくなったことを知れば職務を放棄するだろう。
それに、本人もしくは親類をプログラムに参加させると言われて仕方なく管理者になった者も多い。
オペレータの彼女は親が残した多額の借金を返済するために仕方なく参加した。もう、自分は汚れているからと、悲しく微笑みながら。
副長は妻と子を守るために、誰にも言わず人殺しの手伝いをしている。たとえ、家族に駄目親父と罵倒されていても。
他にも多かれ少なかれ理由があって彼らは管理者となっている。その人々を糾合すれば、この馬鹿げたゲームを終わらせることが出来るかもしれない。
「わかりました」
そう言ったのは船長の右腕といえる副長だった。
「必ずや、このプログラムを終わらせます」
最も船長を尊敬している彼がそう答えれば、他の者も是非はない。駄々っ子のようにごねても時間を浪費するだけである。

「うむ、よろしく頼むぞ」
胸にこみ上げるものを堪えながら、船長は絞り出すようにそう言って再び全員の顔を見渡す。
そして、誰ともなく手を差し出して、やがてクルー全員ががっちり手を合わせて決意を固めた。
だが、
「脱出されるのは一向に構いませんが、プログラムを止められるのは」
入り口から聞こえた声が、その場にいた全員に冷水を浴びせた。
「ちと、困りますな」
その言葉と共に入ってきたのは長瀬源之助であった。
足元はふらつき、口の端から血を流し顔色は悪い。だが、その威圧感はブリッジにいた全員を萎縮させた。
「そ、そんな……」
先ほど長瀬の様子を見に行ったクルーが青ざめた顔で呟く。
意識がなかったのは念話をしていたからだということは、さすがにわからない。
緊迫した空気の中、一人の男が腰のホルダーから拳銃を取り出す。
「だが、あなたが死ねばプログラムは終わる。いや、終わらせる！」
そう言って銃を源之助に向けたのは副長であった。普段は見せることのない感情を露わにして。
オペレーターも銃口を振るわせながらも銃を構える。以前に人殺しの道具なんて持ちたくないと言っていたのに。
他のクルーもそれに倣う。怯えた砲列が一人の死にかけた老人に向けられる。
だが、源之助はそれらを意に介さず、無感動に眺めて軽く首を振る。
「やめ！」
そして、一人銃を取らなかった船長がなにごとか

叫んだとき、風船が破裂したような音がいくつも鳴った。
それは、

彼らが破裂した音だった。

源之助は懐から小さい機械を取り出し、それをもてあそぶ。
それは、スイッチ。付近にある小型爆弾を作動させるためのスイッチ。
結局、彼は誰も信用していなかった。ただ、利用するだけで。
自らの手駒も。
旧知の青年も。故郷から来た少女も。
源之助は愛用のパイプを取り出し、火を点ける。
『終わらせるわけには、いかないのだよ、神奈』
紫煙を吐きながらコンソールパネルに何事か命令を入力した。

【疑似人格　G．N．実行】

それは源五郎が作ったメイドロボの疑似人格の応用である。
もし、『長瀬』が全滅したとき、残りの管理者が職務を放棄しないよう、あらかじめプログラムされた指示を彼らに流す。
そして、『長瀬』たちがあたかも生きているかのように見せかけ、生者たちに戦いを強要する。
飛空艇は島の北西に着水に成功する。船長の遺志が通じたのだろうか。
だが、そのときバランスを崩し、源之助は床に倒れた。
足を痛めたのか、もはや、彼は立ち上がれなかった。
だが、それでも彼は最後の仕上げのために飛空艇

の通路を這いつくばって進んでいた。
わずか、数十メートルだが、失った体力では何十倍もの長さに感じられる。
多くの人々に与えた苦しみに比べれば、明らかに安易な道のりだが。
何度も意識を失いそうになりながらも、やがて、通路が途切れ、海が見える所に着いた。

海は変わりなく、青く。
雲は変わりなく、白かった。
彼がこの世界に初めて来たときと、変わりなく。

源之助はそこら辺に落ちていた金属の破片を懐に入れた。
「道化、だな……」
そう呟くと、長瀬源之助は海に飛び込んだ。
そして……。
二度と浮かんでくることはなかった。

747　幕開けは爆音と共に

ふわり、と光が浮いてくる。
番号で人物位置を表示するレーダーの光点を、芹香は食い入るように見つめている。往人がその後から、被さるように覗き込む。
「……あれ？」
中央に二つの番号。033と037は往人と芹香のものだ。
往人が暗記しているのは023と024、晴子と観鈴だけ。
（おい、あいつの番号は何番だ!?　そもそも、あいつの名前は何ていうんだ！）
（私に聞かないでよ！　えっと、たしか……少年、だったかな？）
（はぁ!?　そりゃ名前とは言わないぞ……）
しかし考えるまでもなく、すぐ隣に一つの光点があった。
……048。近すぎる。

すぐ、隣。だが姿は見えない。それは、ホールの中だからだ。往人は鋭敏に殺気を感じとり、芹香を突き飛ばす。
「あいた！　……何す……!!」
そして、銃声。
抗議をしようとした芹香の脚に、赤い液体がぱたたっと音を立て、生温かい斑点を付けていく。
芹香のいた位置に置かれた往人の腕が、真っ赤に染まっていた。
「……往人!?」
びゅう、と大きな音がした。
街の外では心地よかった風が、ビルディングに乱され、郁未の長髪を流している。銃弾がかすめた跡をなぞるように、強く激しく吹きつけていた。
（どうすれば……）
銃声を聞いて生じた一瞬の迷い。その結果、千載一遇の機会を逃してしまった。郁未が鉄骨の構造物を振り返ったときには、既にもう人影も物音も消えてしまっていた。
……つまり全ての元凶の、少なくとも一端を担うであろう、あの髭の男を見失ってしまったのだ。
小さく舌打ちをして追跡を諦めた時、ふと違った考えが浮かぶ。
髭の男の銃弾によって、少なくとも一人は倒れていた。実は髭の男と少年は組んでいて、二人で参加者を狩ることにしたのだろうか？
（ああもう、考えても、仕方がないわ！）
少年の敵であろうと味方であろうと、髭の男が危険な存在である事には変わりない。常に遠距離から狙われる恐怖を感じたまま、今は少年のところに向かうと決める。
二発目の銃声は誰のものだったのか？
現在重要なのは、それだけだ。

……多くの迷いを両手一杯に抱えて、それらを保留したまま、郁未は走った。
芹香は驚きに震える脚を、どうにか制御して立ち上がろうと、そして駆け寄り無事を確認しようとしていた。
「往人、ちょっと……!?」
しかし、往人は彼女の立ち直りを待つことなく、何の迷いも見せぬまま、ひとことも発することなく、ただ素早く行動した。フランクとの邂逅で見せた狼のような眼をして、血に染まった腕で芹香の襟首を掴むと、凄い速さでビル影に引き摺って行く。まず芹香を投げ飛ばし、続いて自分もそこへ転がり込むと、ようやく声を抑えて叫んだ。
(くそったれ、銃まで持ってやがったのか!)
(往人……)
(悪ぃが文句は安全になってからにしろ! 方向からして……あのホールの、二階か三階から撃ちやがったな)
(違う、傷! 腕は大丈夫なの!?)
(派手に血が出てるが、動く。今はそれで、じゅうぶんだろ)
そう言いながら、ホールの様子を見ようと顔を覗かせる。だが少年の姿を認める前に、往人は一人の少女を発見してしまった。
(おいおい……あいつは、小僧と一緒にいた女じゃねぇか!)
いつの間にやら接近していたのは、たしか郁未とかいう女。死体に驚くこともなく、きょろきょろと何かを探している。
郁未の視線がこちら側を向きそうになるのを感じ、往人は慌てて顔を引っ込めた。そのまま肩口を芹香に引っ張られ、往人は彼女の膝の上に後ろにごろり、と倒れ込む。
(うお、何しやがる!)
(いいから! 腕! 見せなさい!)

いつの間にか開いた鞄から、包帯を取り出して往人の腕に巻く。
(……)
柄にもなく、無言の二人であった——本来片方は、無言の人なのだが。
(こんな時に、何考えてんだか……)
照れもあって、ふい、とずらした往人の視線が、何かの視線と重なる。
(……おい……こいつは、何者だ？)
(え？ ああ、小屋で荷物を分配した時に余ってた、クマ爆弾よ)
(不思議な踊りを踊ってみたり、「ぴこ」だとか「ぴっこり」だとか、奇声をあげたりはしないんだな？)
(ぴこって……あんた何言ってるの？)
冗談だ、と言いながら起き上がり、治療を終えた腕でクマ爆弾を掴む。あぐらをかいた脚の間にクマ爆弾を置いて、芹香のレーダーを見ると、003が光っている。
(そうそう、もう一人お客さんがきたようだぜ。ああ、これだ、これ)
(003……ほんとだ。それで、この人は味方なの？敵なの？)
(どっちかと言えば敵くせぇが……いや、なんとも言えないな。あの小僧を探しているのかもしれないから、会わせてやれば判るだろ)
(どうやって、よ？)
クエスチョンマークを頭に浮かべてしかめっ面をする芹香に、にやりと笑みを投げかけて、往人はクマ爆弾を手にとった。
そっと顔を出して、郁未の位置と方向を確認する。少年の気配を感じたのだろうか、彼女はホールのほうを向いていた。
幸運に小さく頷き、背中のタイマーを操作して無造作に放り投げると、ホールのある建物の、郁未と反対側の端に落ちた。

（ちょ……何してんのよ！）
（なあに、手前の位置は知られてねぇと思っている、あの糞ったれに見せてやるのさ……得意の、人形劇をな！）
最後は半ば叫ぶように言い放って、頭を引っ込める。
耳をふさぎ、小さく縮こまる住人を見て、芹香も慌ててそれに倣う。
ドカン！
バクン！　ドドドドドン！
ガシャン！　バリバリバリン！
爆発音。続いて壁の抜ける衝撃と、天井の落ちる音。吹き飛ぶ硝子と、それが地面に降り注ぐ音。一瞬にしてホールは半壊し、今や火の手が上がっていた。
二人同時に顔を出して、様子を窺う。
（ちっ、思ったより大した事ねぇぞクマ……それでも、上手くいきゃこれで死んだだろ）
（どこが人形劇なのよ馬鹿！　もっと凄かったら私達まで吹き飛んでたわよ！）
ぺちん、と住人をはたく芹香。
（そりゃそうだがよ……あいつの相手は、正直、荷が重いんだぜ……）
……ぼやく住人の希望は、かなわなかった。
爆破したホールの反対端、郁未の立つ正面に非常階段がある。きい、と小さな音がして、三階の扉が開いたのだ。
姿を現したのは、もちろん少年。三階までは抜けなかったのだろう、見たところ大きなダメージを負っているようには見えない。
住人は歯を食いしばり、再び狼のような笑みを浮かべて、銃を手に持ち立ち上がる。
（さあ、楽しい人形劇の始まりだ）
（もう、悪趣味よ）

自分の事すら操り人形に例える住人を、ぴしゃりと芹香がたしなめた。
そしてその頃、少年と郁未は燃える炎の音だけを聞いて、静かに対峙していた。
見下ろすのは少年。
「……久しぶりだね、と言うほど時間は経っていないかな？」
見上げるのは郁未。
「……」
いつになく多弁な少年が、階段を降りてくる。
「具合はどうだい？　見たところ元気そうだね」
対する郁未は、無言のまま立ちすくむ。
「……」
郁未は、迷っていた。
私は彼を、救えるのだろうか？
私は彼を、殺せるのだろうか？
そもそも私は、生き残れるのだろうか——？
——答えが出るのは、これからだ。

748　観鈴の決断、北川の迷い

「……どうしよう……」
見る見る遠くなっていく郁未さんの背を見ながら私はつぶやいた。
ちらっと後ろを見る。
耕一さんの教えてくれた喫茶店はすぐそこだ。
まだ決まった訳じゃないけど、きっとお母さんにすぐ会える。
けど、だけど。
それでいいの？
観鈴ちん、それでいいの？
郁未さんは私に言った。
お母さんの事は大事にしないとだめって。

お母さんといられる事はとてもすばらしい事だって。
とっても優しくてそして悲しい顔でそういった。
それは正しいと思うんだけど、でも私その時気づいてしまって。
もしかしたらって思ってたけど、放送で呼ばれた天沢未夜子さんは郁未さんのお母さんだって事に、郁未さんのお母さんはこの島で死んでしまったという事に、私は気づいてしまって。
あさひちゃんの事、思い出す。
この島で出来たお友達のこと思い出す。私の前で死んでしまって、私、何もできなくて。
智子さんもお母さんも必死に戦っているのに、私突っ立っているだけで。
そんな私だから、往人さんなにも言ってくれなくて。
きっと何かのため人を殺してしまったのだろう、何かとても重いもの背負っているようなのに、私にはなにひとつ言ってくれなくて。
茜さんの時も私何もできなくて。
私、もっとしっかりしてたらあんなことにならなかったかもしれなくて。
お父さんも、あさひちゃんを守るために戦ったのに、私だけ、私だけどうしようもなくて。
お母さんの事思い出す。
「もう大丈夫や、観鈴。うちはずっと、あんたと一緒や……」
そう言ってくれたお母さんの事思い出す。
安心させてあげたい。
顔を見せてあげたい。
抱きしめて欲しい。
抱きしめてあげたい。
今すぐ、会いたい。
お母さん、お母さん、お母さんお母さんお母さん
お母さんお母さん……

決めなくちゃならない。今、すぐに。もう、郁未さんの背中は随分小さくなってしまっている。
　このままじゃ見失っちゃう。

「ごめんなさい……！」
　喫茶店の方むいて、私叫んだ。
「今すぐ会いたい……でも、お母さんに会うと、わたし、弱くなっちゃう……!!」
　ここから、声なんて届くかなんて分からないけど、私叫んだ。
「お母さんに会ったらわたし、きっと甘えちゃう！　きっと安心して、お母さんから離れたくなくなっちゃって、もう……戦う事なんてできなくなる……!!」
　嗚咽とともに、声を嗄らして叫んだ。
「もう……いやなの……それだけは、いやなの……友達が、危ないの……あさひちゃんのときのようなの……もういやなの……だから!!」

　郁未さんが友達なんて私の一方的な思いかもしれないけど。
　私、郁未さんの方に振り向いて、
「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……!!」
　そう叫びながら走りはじめた。
「郁未さん、待って！　待ってよ!!」
　前を走る郁未さんに私必死で呼びかける。
　けれど、距離がありすぎて。私が迷ってしまった分の距離が開いてしまって。
　集中しているせいなのかもしれないけど、郁未さんちっとも気づいてくれない。
「待って、待って……」
　私、もう息がきれてしまって。
　どうしてだろう。怪我しているのに郁未さんの方が足が速い。
　このままじゃ見失っちゃうよ。
　そう思ったとたんに、わたしは転んでしまった。

「が……お……」
痛い、痛いよ。走っていて転んだだけなのにとても痛いよ。
「見失っちゃう……立たなくちゃ」
でも、そう言っている間にも、郁未さんはずっと先に言ってしまって、ついに視界から消えてしまった。
「うっぐ……うう……」
痛くて、立てなくて、私泣いてしまって。
……情けないよ……
郁未さんはあんな怪我でがんばっているのに。
情けなくて、どうしても涙が出るのを止められなくて。
郁未さんにはもう、こんな痛みすらなくなってしまっているというのに。
どうして、私は……
だから、私立ち上がろうとして、
そこで急に肩を貸してもらった。

「大丈夫かよ！　あんた!?」
そんな言葉と共に。

ちわーす。目的のためなら仲間も見捨てるニヒルなナイスガイ、北川潤でーす。
皆さんお久しぶり！　ほんと久しぶり!!
はい？　こんなところで何してるのかって？　施設に行ったんじゃなかったのか？　ですか。
ああ、はい、行こうとはしたんだけどね。ほら放送かかったじゃん？
あの蝉丸さんて人の。
いや、直接会った事はないけどさ、一応初音ちゃん達からその名前は聞いていた訳だし、ま、診療所の事言いに行ってもいいんじゃないかとか思った訳ですよ。一応は気にしてるんだぜ？　診療所の連中、見捨てた事。
で、ちょっと回り道になるけど顔ぐらい見せに行くか、とか思っててちんたら歩いてたら。

なんか目の前でずっこけられた訳。
思いっきり全速力で頭からズシャーと。
なんかその女の子必死に立ち上がろうとしてたけど、ありゃ痛いでしょ。下コンクリートだし。
で、思わず肩を貸してしまった訳ですよ。
ん？　ああ、はいはい。そりゃごもっとも。
銃持ってる知らないやつに手を貸すなんて愚の骨頂。

いきなり撃たれても文句言えないですな。
状況分かってんのかっていわれても仕方がない。
だいたい、こんなことしている場合じゃないだろって？　まあ、そうなんですけどね。俺、なんかCDとかレアアイテム持っているらしいし。
さっさと施設にでも行けって感じだよな。そのために仲間とか見捨てちゃった訳だしさ。
それで、こんなとこで女の子に声かけるなんて、たいしたナンパ君ですよ。
ほんとに全く御説ごもっとも!!

けどさ、まああれですよ。あれって言うかなんて言うか。つまるところまああれで。

……レミィに似てるんだよ、畜生。

反則だぜ、おい。
レミィに、数時間前に死に別れた好きな子に似てる子が、苦しそうな声あげて、立ち上がろうとして。

……畜生。反則だろうが。そんなの。
「大丈夫かよ！　あんた⁉」
だから、俺はそう言って手を貸してしまう。
「えっ……⁉」
その子は、やっぱり驚いたみたいだな。それでも、その子はすぐ笑顔をこっちに向ける。
「う、うん、大丈夫。にはは」
その子は結構かわいい子で（レミィに似てるんだから当然だよな）、そんな子に笑いかけられたら、

普通喜ぶ所なんだろうな。
　普段だったら俺も小躍りどころかランバダにリンボーダンスをはしごするぞ。
　けどさ、やっぱ辛いわ。
　どこか儚げな笑顔で笑う彼女は、やっぱりレミィではなくて。そんな当たり前のことに胸が痛くなる。
「そうかよ。そりゃよかったな」
　そんな訳で俺はついそっけない声を出してしまう。
「うん、平気。観鈴ちん強い子」
　……観鈴だと？
　その名前には聞き覚えがあった。
　たしか、国崎さんがそういう名前の子を探していたはずだ。
「おい、今あんたなんて……」

　ターンッ

　だが、そこでそういう音が鳴り響いた。銃声だ。
「……クッ⁉」
　俺はその子、観鈴を引っ張って身を隠そうとしたが、手を振り払われてしまう。
「わたし、行かなくちゃ」
「おい、そっちは銃声がした方だぞ⁉」
　軽くびっこをひいて、観鈴は行こうとする。その膝は擦り剥いて血が流れてきている。
「うん、だから、行かないとダメなの……あそこには友達がいて、管理者の人と戦おうとしていて、わたし、助けなくちゃいけなくて」
　管理者って。さっきの放送に管理者側が何かやらかそうとしたのか？
「……見失ちゃったから、探さないと。ありがと、助けてくれて」
　そういっているうちに、もう一発銃声。
「待てよ！　おい、ちょっと……⁉」

バアアアアアウウウッッッッッッン

今度は爆発かよ⁉　何が起きてるんだ⁉　やばくないか⁉

観鈴も驚いたようだが、黒煙が上がった方へ歩いていく。

そこまではまだちょっと距離があるようだが……

どうする？　どうしたらいい？

相当あそこはヤバイ事になっているみたいだ。

そんなところにこんな女の子を一人でいかせちまっていいのか？　どう見たってこの娘、戦い慣れてなんていない。銃を持つ手もおぼつかない。

そんな女の子を行かせてしまっていいのか？

じゃあ、何か？　俺もあそこまで行けってのか。

ほとんど見ず知らずなこの娘のために修羅場に飛び込めってのか？

命はもちろん惜しい、そんなことは恥ずべき事じゃない。

命をかけることがかっこいいだなんてこれっぽっちも思えない。

でも、それだけじゃない。責任の問題もある。

何のために診療所の連中を見捨てた？

おそらく切り札であるＣＤを危険にさらす事のないように。そのためだ。

そういう理由で小学生の女の子に説得させられた。

確かに、危険な事はさけるべきだ。今俺が持っているアイテム、情報は貴重すぎる。

それなのに危険に飛び込むのか？

それとも……いっそのこと力づくで引き止めるか？

そんなことができるのか？

こんなに必死に前に行こうとしている子なのに？

それでも、この子の安全のためにはそうするべきなのか？

畜生。
畜生、畜生、畜生。
畜生畜生畜生畜生畜生。
畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生、
畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生……‼
どうすりゃいいんだよ、俺はぁっ‼

749 まだ癒えぬ傷跡

「いつまでも落ち込んでないでさ。顔を上げろよ、耕一。そうしたらその頭を撃ち抜いて、お前の人生も終わりにしてやる」
言いながら彰は泣いていた。涙のひとつもこぼしていない。声も笑っている。けれど、どこからどう見ても七瀬彰は泣いていた。
彰は——全てが終わってしまえばいいと思った。自分が死ぬか、耕一が死ぬか。どちらにしろ、この戦いが終わった時点で、七瀬彰の人間としての命は終焉を迎える。鬼畜になるか、屍骸となるか。
どちらも自分にすごく相応しいものだと思った。
柏木耕一は動かない。何の抵抗もしていない体で、ただ俯いて黙っている。彰は耕一の頭に拳銃を向け、
「返事しないなら頭のてっぺんをブチ抜いてやる」
と呟き、その引き金に人差し指をかけた。
そこに至って、やっと耕一が顔を上げた。
「あきら」
ゆっくりと顔を上げながら耕一は彰の名前を呼んだ。刹那、身体中がぞくりと震えた。魂が掴まれた、と思った。心臓の鼓動を確かめる。ちゃんと動いていることを確認すると、思わず息が漏れる。
相手が自分を殺す事を厭わないよう、あんな言葉を吐いたのに。殺される事など怖くはない筈なのに、何故これほどに恐ろしい。二十歩ばかりは距離があるのに、喉元に刃物を当てられたような

緊迫感。
　そこで彰は、耕一の異変に気づく。
　耕一の頬に、一筋の真っ赤な血の筋が流れていた。
　先ほど自分が与えた傷が破れて血が漏れたのかと思ったが、そうではなかった。
　それは真っ赤な色をした涙だ。
　耕一はゆらりとこちらを見つめ、小さく呼吸をした。その呼吸だけで彰の心は折れそうになった。
　――鬼神。ソレは、とても人の姿には見えなかった。今の僕の肉体と同じで、人とは違うものなのか。いや、自分などと比べるのも烏滸がましい。目の前にいるのは、自分より遥かに高次の生物。出来損ないの自分とは違う、天然の化け物。
　真っ赤な涙を流しながら自分を見るその目は、怒りと表現するべき色ではなかった。それは悲しみの色に違いなかった。大切な人を護れなかった悲しみ。大切な人を失った悲しみ。自分の無力さへの悲しみ。それがきっと、あんな表情を作っている。
　――そうに違いない、と思う。
　耕一の視線の先に見えるのは、自分ではなくて、「自分に殺されてしまった」初音なのだと思う。
「判った」
　耕一がそう、小さく呟いたのを、彰ははっとして聞く。それは確かめるまでもなく――了承の言葉だ。
「彰、俺がお前を殺してやる」
　思わず震える。なんて声だろう、と思う。あんなに小さな呟き声なのに、鉄球のように重い。人の声だとはとても思えなかった。
　アレは、人の姿をした修羅だ。
　きっと、自分は殺される。肉片も残らないくらい、ずたずたに引き裂かれて殺される。それ程の事を自分は言ってしまったのだ。彼にとって、初音はどうしても護らなければならないものだったのだから。

怒りではなく、純粋な悲しみで。
悲しいと言う、その理由だけで。
アレは自分を、殺し切るだろう。
恐怖で、身体全ての体温が抜け去ったように思う。
――けれど一方で、心の一番深いところに、奇妙な熱が生まれ、彰の身体に溢れている。
(――望むところだ)
恐怖とは反対の感情。どうしようもない恐怖の裏側に、自分は不思議な恍惚を覚えている。自分の身体に充足を感じる。貧弱だった自分を思い返す事すら出来ないほど、今の自分の身体は充実していた。
――肉片も残さないでくれよ。僕も、お前にもしも勝てたなら、ちゃんとばらばらにしてやるから。
乱れそうになる呼吸を抑えながら、高鳴りそうになる心臓を抑えながら、彰は薄く目を閉じ、開く。恍惚が恐怖に打ち勝った。彰は拳銃を構えた手が未だ震えているのに気づき、もう一度目を閉じて落ち着けと三回念じる。それだけで震えは消える。僕はもう昔の僕ではなくなってしまったのだと思う。
思う。
タニンと争うことなんて、僕は好きじゃなかった。けれど、そんな僕はもう――ずっと前に死んだんだ。
耕一は鞄の中から無造作に武器を出す。その手に現れたのは――ナイフだった。他にも武器があるだろうに、何故よりによって最も貧弱な武器を選ぶのだろうか。
手加減のつもりではない、と思う。
多分、今の柏木耕一にとって、これほどに適当な武器はないのかもしれない。射撃戦よりも接近戦。それが許されるだけの力が、耕一にはあるのだ。

望むところだ、と思った。近づけさせやしない。自分の射撃技術は正直たいしたものじゃない。所詮素人で、この島に来て色々銃火器を触ってきたものの、結局は付け焼刃だ。
けれど、自分は今、あの化け物に勝ちたい、と思っている。死にたいと思っている一方で、負けたくないという気持ちが強くある。
右手にその銀色の武器を強く握ると、耕一は胸がすくような声で言った。
「すぐに終わらせてやる」
彰も肩を竦めて返答する。
「こっちの台詞だよ」
それが契機となった。

破裂音。最初に攻撃をしたのは当然射撃武器を持った彰だった。耕一の足元を狙って彰は引き金を引く。練習のような射撃だった。自分の現在の腕力が、この拳銃をしっかり扱えるかどうか確かめるための練習射撃。手応えは十分だ。狙ったところに弾丸は飛んだ。十分に扱いきれる。彰は息を吐いて再び引き金を引こうとした。しかし引けない。耕一の姿が一瞬彰の視界から消えたのだ。
すぐに捕捉する。耕一は中空を舞っていた。信じられない事に、耕一は一メートル近く飛んでいる。飛んだ方向は当然自分の方に向けてで、一瞬にして間合いが詰められた。引き金を引く暇もなかった。この距離では自分が銃を撃つより耕一がナイフを振り切る方が絶対的に早い。一瞬でそう判断した彰は防御に思考を移行する。耕一のナイフは的確に自分の頚動脈を狙ってくる。力強く、そして正確な斬戟だった。その斬撃を当然彰は読んでいた。確実に戦闘不能に持ち込むならば、心臓を狙うより首元を狙ったほうがいい。彰は銃の背でその斬戟を受ける。受けきれると思った。
けれど見通しは甘すぎた。耕一の腕力のことを彰は過小評価しすぎていたのだ。防御している自分と

同じ片腕での攻撃だというのに、自分はその斬戟によって地面に押し潰されそうになる。銃を持つ手が震える。咄嗟に彰は銃を両腕で支え、腕力差を克服しようと防御に徹する。それでもまだ足りなかった。耕一の攻撃は自分の全ての力を使ってもまだ、完全に押さえきることが出来ない。

「はぁぁっっ!!」

檄。耕一が神様すらも黙るような大声で叫び声をあげ、なおも自分を圧し切ろうと力を込める。このままではやられる、思った彰は咄嗟に力を抜き、耕一の攻撃を『受け流す』ことに転じた。力を抜いて耕一の斬戟が振りかかった瞬間に彰は身を引いた。

甘かった。攻撃速度が予想を遥かに超えていた。完全にかわしたと思ったのに、耕一のナイフは自分の腕の先を微かに切り裂いていた。走る痛み。僅かな傷なのに身体が一瞬痺れた。

「くそっっ!!」

叫ぶ。叫びで痛みを誤魔化すのだ。彰は身を転がして後方に下がり、耕一との間合いを開く。すぐに詰められるだろう十歩分の距離。けれどこれでも充分だった。彰は転がりながら銃を構え、躊躇うことなく引き金を引いた。今度は当然殺すつもりでの、脳天めがけての攻撃だった。

「くらえッ!」

炸裂音。この距離なら外すことはないと思った。けれど見通しはやはり甘すぎた。耕一は反射神経のみで瞬間しゃがむと、その銃弾をかわした。なんて運動能力だ、彰は舌を巻きながら、しかし自分もまたそれに劣らずの速度で立ち上がって、今度は後方に向けて走り出した。耕一がそのしゃがんだ体勢のまま、こちらに向かって走りかかってきたからだ。距離を詰められたらおしまいだ。自分の判断が早かったためか、耕一との距離はまだ縮んでいない。攻撃するなら今しかない、彰は走りながら振り向いて銃を撃ち続ける、ガガガガンッ、四発分連射。まともに狙いをつけるには難しい体勢ながら、彰の放っ

た弾丸は的確に耕一の身体に襲い掛かった。けれども当たらない。一番かわしづらい筈の胴体に向かって襲い掛かった弾丸すら、耕一は神速のサイドステップでかわしきった。

「くっ――」

落ちつけ、クールに！　彰は口の中で呟き、自分が次に取るべき行動を模索する。この距離では何処を狙ってもかわされる。じゃあどうすればいい。決まっている。ゼロ距離射撃だ。彰は瞬間足を止め振り返り、二十歩の距離まで迫り来る耕一に銃を構え、しっかりと狙いを定めて、耕一が近寄りきったところで引き金を引いた。耕一の顔が一瞬驚愕に歪んだ。その速度で走ってきて急に止まることは無理の筈だ。この距離ならば例え化け物でもかわしきれない、頭にめがけて飛んだ銃弾が耕一を殺し切る。勝った、と思った瞬間、耕一は首を右に曲げた。

銃弾の当たった箇所は耕一の左頬だった。血が勢い良く吹き出たものの、耕一の命を取るまでにはいかなかった。彰はもう、下がることも出来なかった。耕一は吹き出た血を無造作に手の甲で拭き取る。赤く染まった頬が禍禍しい力を象徴するかのように耕一を彩る。そして耕一はまるで止まらない。

怯むことなく耕一はナイフを構え、ゼロ距離にいる自分に向けて高速でナイフを振り下ろした。彰は咄嗟に拳銃の先でナイフを受けた。ぎいん、と響く金属音。なんとか攻撃はかわした、このナイフを弾き返して引き金をひけばまだ勝機は、

考えている間に――手に抵抗がなくなっていた。そして、自分の目の前から柏木耕一が消えていた。自分の中にある全ての感覚を総動員して耕一を探す、そして、

耕一がいつの間にか自分の後ろに回りこんでいることに気づいて、背筋が冷えた。

振り向こうとしたが遅かった。その大きな手で首

を掴まれ、抵抗することも出来ない圧倒的な腕力で耕一は自分を持ち上げると、
「終わりだ、彰」
そう言って、そのまま彰の身体を勢い良く大地に圧し伏せた。軟らかな土に顔面を押し付けられる。下が軟らかな土だったから、それ程のダメージは受けなかった。ただ顔や服が汚れた程度だろう。
けれど、自分の完全な負けだということは判った し、この状況が、自分と耕一の『最初の戦い』の状況を、配役を入れ替えて演じているようなものだということにも気づいた。彰の身体から完全に力が抜け切った。抵抗する意志は完全に折れた。

耕一は僕を仰向けにすると、その上に跨った。真っ赤に染まった柏木耕一の顔は、やはり悲しみに満ち切っていた。
これ程までに力の差があったということか。拳銃でナイフに敗れるほどに自分は弱かった。そして耕一が強かった。僕は自嘲気味に笑う。苦しい。喉が圧迫されて、声を出す事も、息をする事もままならない。ただ、その自嘲気味の目で、嘲笑めいた目で耕一を見上げることしか出来なかった。耕一の裏側には青空が見えて、皮肉なくらい晴れ切っていた。
自分はここで殺される。耕一の手によって、肉片が残らないほどに。だというのに、何故だろう。
これ程に感慨深いのは。
やっと死ねるのだ、という幸福。
僕は、その時やっと気付いた。ここに来たのは、耕一を殺すためではなく、耕一に殺してもらうためだったのだと。初めからわかっていたのだ、自分が耕一に勝てる筈もないということくらいは。そう、死にたかったのだ。耕一に殺されて、身体も心も死にきりたかった。自分が耕一をあの森の中で完全に殺し切らなかった時から。
――自分は、耕一に殺されたかった。そう思う。
そして、僕はある事実に思い至る。僕はずっと、

自分の事しか愛していないと思っていた。自分さえ幸せであればいいから耕一を殺そうとし、初音を殺そうとし、全てを壊そうとした。
けれど、それは間違いだ。
耕一を殺そうとしたり、初音を殺そうとしたり、全てを壊そうとしたりしたのは、きっと、自分自身を壊したいという衝動から始まっていたのだ。
誰よりも自分を愛していると錯覚して、本当は誰よりも、
——自分が嫌いだったのだ。
——は。よくわからないことを考えている。死ぬ間際になって、僕は何を勝手なことを考えているんだろうな。自分が大好きだから欲望のままに行動したんだろ、僕は。そっちの方がよっぽど救われる。狂人として死ぬ方がよっぽど楽だ。これだから僕は、僕が嫌いなんだ。
「さあ、殺せよ」
ひき蛙の潰れたような声で僕は言った。そこで喉にかかった力が抜ける。当然、右手にナイフを持ちかえるためだ。目がかすむ。脳味噌が揺れている。走馬灯を見ることもままならない。まあ、そんなのはちっとも見たくないけれど。ああ、
早く死にたい。
「ああ、殺してやるよ」
耕一の吐息が、頬にかかるまで近い。やがて耕一は右手を高く上げ、そのナイフを僕の喉に向けて振り下ろす、
筈だったのに。
「——どうして、殺さない」
言葉が無くなって、どれほどだったろうか。僕は、未だに死んでいない自分を見て、呆れの息を吐く。
「殺せないのかよ、意気地なしめ」
罵倒の言葉をぶつける。
「殺せよ！　憎いだろうが、僕が憎いだろうがっ!!」

「俺は、お前が、死にたがっているのが判ったから」
　そんな言葉を呟いた。そうか。やっぱり見透かされていたか。これだからお前って奴は最低なんだ。
　自分の真上に刃物があって、それが振り下ろされれば自分は死ぬ。耕一の右腕は動かない。なのに、時が止まったかのように結局ナイフは振り下ろされることなく、からん、と地面に落ちた。
　耕一は。
　僕を殺すことを拒絶した。
「なあ……僕みたいな狂人も殺せないで、どうして護りたいものを護れるというんだ？　だから護れないんだよ、大切なものをッ!!」
　耕一は、僕の質問には答えなかった。
「お前は、俺を殺さなかった」
　ぽたりと、僕の頬に雫が零れる。耕一の汗だろうか？　思ったが、耕一の顔を見て僕は驚愕した。透明な色をしたそれは、ぽたぽたと、耕一の瞳から零れ落ちていた。
「お前は、俺を殺さなかった」
　その細められた哀しい目の先には、紛うことなく、自分だけがあった。
　それじゃあ、あの血の涙は。
「だから、お前が、本当に初音ちゃんを殺したなんて思わない。絶対に思わないよ」
　あくまで、僕の為に流していたというのか？
「……――殺したよ。――この銃で、初音ちゃんを殺した。心臓を撃って、一発で殺した」
「それが嘘だって事くらい、判る。俺みたいなのも殺せないで、一番大事なものを殺せるわけが無い」
　僕はもう否定もせず、耕一の顔を眺めた。耕一は全てを知り切った上で僕と戦い、僕に殺されそうになりながら、こうして僕を諭している。

これだから僕は、お前みたいな奴が嫌いなんだ。
「嘘を吐いてまで、お前は死にたかったんだよな。俺に殺されて『人間』であることを止めるか、俺に殺されて『人間』として死ぬか」
耕一は突然笑顔を見せた。
「まあ、お前は俺を、殺さなかったにせよ、殺そうとしたよな。それは赦さない」
「――なら、殺せよ」
「殺すなんて死ぬほどつまらない。だから、俺は勝者としてお前に命令する。絶対に死ぬな。その手で、今も診療所で震えてる筈の、初音ちゃんを護りきれ」
「――ッ」
「それから――絶対に嘘を吐くな。初音ちゃんに新しい日常を与えると言った、あの言葉を反故にするな。絶対に俺は、それを許さない」
耕一はまた、笑った。呆然とした僕の顔が余程おかしかったのだろうと思う。笑いながら耕一は立ちあがると、黙ったままの僕の手を取り、無理やりに立たせた。
「帰るぞ、診療所に」
真っ赤に装飾された顔に、先程のような鬼神のような印象はかけらも無い。目の前にいるのは化け物でもなんでもなかった。
いや、ある意味ではこちらこそが化け物なのかもしれない、と思う。
たった今殺しあった相手に、こんな笑顔を見せて、全てを許す、と言えるような人間。まったく、化け物のように――優しい男だと、僕は思った。
そして、なんと甘い男なのだろう、とも。
「耕一。お願いだから――そんな、酷な事を言うな」
背中を向けた耕一に、僕は持っていた拳銃の先を向けた。瞬間でそれに気付いたのだろう。耕一は振

り返るが遅かった。その背中めがけて、僕は弾丸を叩きこんでいた。あっという間に向き直ったためか、弾丸は耕一の腹に当たっていた。

「うぁッ！」

腹を抱えて耕一は倒れた。防弾装備をしている筈だから死ぬことはあるまい。だが、防弾装備をしていたといっても、すぐに立ちあがれるほどの距離からの射撃でもない。

「彰っ――」

「僕はね。嘘を吐くほうが楽な人間なんだ。何かを守ろうとして信念を通すよりも、へらへらと嘘を吐いて生きる方が楽な、最低の人間なんだ。だから、初音ちゃんの傍にはいられない。僕は、生きていちゃいけないと思う」

僕は無理矢理に立ちあがろうとする耕一に向けて拳銃を放った。もう必要の無いものだ。自殺するには必要だが、持っていたら今度こそ人を殺すかも知れない。僕は狂人なのだから。

「お前が殺してくれないなら、僕はもう行くよ。人を殺さなくてもいいように、遠くに行く。サヨナラだね、耕一」

そう言い残して僕は森に入っていく。耕一が何か言う声が聞こえるが関係無い。自分でも何処へ向かっているかは判らない。けれど、少なくとも死の淵のある方向へ向かっている事だけは判った。誰の手も借りず、誰も傷つけずに死ぬ事が出来る場所。

そこを捜して、僕は歩き出した。

耕一の言葉は、酷すぎた。酷なくらい、嬉しかった。こんな自分をまだ許してくれる、というのだから。けれど、嬉しさ以上に恐怖があった。自分の衝動が、初音や耕一、他人を傷つけるのが怖かった。

僕はただ、誰かの傷を増やすだけの人間だ。誰かの傷を癒すことさえも出来ない人間だ。

歩きながら、ふと思う。

この島に来て生まれた新たな傷痕は、一つ、二

つ、ゆっくりと心に深く刻まれた。この島に来た誰もが、その癒えぬ傷痕を抱きながら生きて、死んでいった。
どうか。ここで出会った優しい人たちへ。僕のように弱い心じゃない、逞しく生きていく人たちへ。
まだ癒えぬ傷痕は、
それでもいつかは癒える日がやってくるのだから。
だから。だから、だから――。

750　霊山

夏の象徴たる太陽もほとんど沈みかけている。
先ほどまでの銃声も離れすぎてしまったのか、決着がついたのか、遂に聞こえなくなってしまった。
私は幾度目かの休憩をとりながら翼人についての知識を思い出していた。
『唐天竺では鳳翼と呼びならわし、異名を風司、古き名では空真理ともいう。肌はびろうど瞳はめのう涙は金剛石。やんごとなきその姿はまさしくあまつびと』
(よくもまあ美辞麗句を並べ立てたものね)
息は落ち着いたが足の震えがとれない。山を一気に登っているので当たり前なのだが。
蝉の音に包まれながら重い足を何とか動かしながら私はさらに翼人について考えた。
人に知恵と知識をさずけた、貴ぶべき神。
かつて地上に災厄をもたらし、人により掃討された悪鬼。
翼人がそして神奈備命が何者なのかははっきり分からない。真の神であったのか悪鬼であったのか。
ただ一つ言える事がある、この山の上にいる者は好奇心と欲望にもてあそばれ、歪みきっている。
ふいに空気が変わった。重くどんよりした物に。辺りを見回すと幹に麻縄を巻かれた木がある。

そこから等間隔に、白い紙が垂らされていた。
「注連縄……結界が張られてるの？」
この程度の結界、私にはほんの少しの足止めにしかならない。さっさと一つ目の結界を越えた。
すると……。
森の様子が変わった。人が入った事の無い、原生林のようだった。
辺りを見回すと湿り気を帯びた靄、麻縄の残骸と捻じ曲がった木、そして死体。
結界は魔法の影響で外側を除いてバラバラに、そしてその中で警備していた人も。
「頑張るのよスフィー、ココからが本番なんだから」
自分自身に一喝して歩き出す、神奈の封じられた祠は近い。

751　擬似人格起動

ここはどこにでもある島。
ただ普通と違うところはそこで殺人ゲームが行われているということだけ。
そしてその島の中にある施設。
そこはマザーコンピュータが置いてある事から考えてこの島の中でも最重要拠点であろう。
これはそんな場所での出来事。
「ふみゅ～ん！　ひま～！」
「みゅ～！　みゅ～！」
「ちょっと～！　ここなんかひまつぶしになるものないの？」
「すみません～。そういうものは何も置いてないんです～」
「つまんない。……そういえば、あんたさっきから

なにしてるの？」
「あ、はい〜。千鶴さんに頼まれたＣＤの解析の続きと現在のＣＤの行方を捜索してます〜」
「ふ〜ん。で、それどのくらいかかりそうなの？」
「そうですね〜、まだ結構かかりそうですぅ」
「う〜。やっぱりひま〜」
　詠美はふと繭の方を見てみた。
「みゅ〜♪」
「にゃ〜！　にゃ、にゃ〜！（しっぽを引っぱるな！　お、お前らも見てないで助けろ！）」
「ばっさ、ばっさ（いえいえ、お邪魔は致しませんよ）」
「しゃ〜、しゃ〜。しゃ〜（そうね、その子凄く楽しそうよ。良かったわね）」
「にゃ〜!!（俺は楽しくね〜!!）」
「こどもはきらくでいいわね〜」
　詠美はため息をつくと一言そう言った。

　どれくらいの時間が経っただろうか。
　突然マザーコンピュータから電子音が発せられ始めた。
「な、なによ〜！　ちょっとあんた！　なにしたのよ〜！」
「え、え〜と、私は何もしてないですぅ」
　その間もマザーコンピュータから発せられる音はずっと続いていた。
　突然音が止んだかと思うとマザーコンピュータの画面に
【疑似人格　Ｇ．Ｎ．起動開始】
　という文字が表れた。
「ふみゅ〜ん、どういうこと？」
「あ、あれはですね」
「ちょっと待った〜！　そっから先はワシが説明しとこうか！」
「ふ、ふみゅ〜！　コンピュータがしゃべった!?」

「ワシはこのコンピュータ上の疑似人格プログラム『グレート・長瀬』通称G．N．だ。よろしくな！」
「ど、どういうことよ〜」
「全く理解の遅いやつだな！　要するにそこのロボットと同じようなもんだ」
「そ、そうなの？」
「はい〜。私の人格プログラムと原理は同じですぅ」
「そういうこと。分かったか？　お嬢ちゃん」
「ふ、ふみゅ〜！　このくい〜んをばかにしないで！　ちゃんとわかったわよ〜！」
「ほう、偉い偉い。ま、ワシの事は気楽にGちゃんとでも呼んでくれ」
　コンピュータから発せられた声はそのままのテンション（？）で続けた。
「あ、そうそう。おい、そこのロボット。何かワシの体使ってたみたいだけど何してたんだ？」
「あ、はい〜。このCDの解析と他のCDの捜索ですぅ。でもまだ終わってないんですぅ」
「そうよ！　あんた、ちょうどいいからてつだいなさいよ！」
「え〜！　ワシが何でそんなことしなきゃならないんだ。めんどくさい」
「そんなこと言ってホントはできないんでしょ〜」
「何だと！」
「いいわよ。むりしなくても」
「ワシの力をなめんなよ！　おい、ロボット！　終わったところまでのデータよこせ！」
「は、はい〜」
「まずはCDの捜索からか。こんなもん過去ログあればすぐに分かるな。待ってな！　一分で終わらせてやる」
　G．N．がそう言うやいなや部屋中のコンピュータが一斉に動き始めた。

752　思い出に縋る僕らのために

鹿沼葉子はその放送を聞いて、脇目も振らずに走り出した。放送が聞こえてきた方向とは真逆の、北に広がる深い森の中へ向けて。
柏木初音や観月マナ、その他の皆には勝手な行動を取ることを謝らなければならない。ならないけれど、今はその時間も惜しい。謝るのは帰ってからでも遅くはないだろうと信じたい。
あの少年の声が聞こえたのだ。真っ黒で、真っ赤で、それでいて真っ白な色をした少年の声がだ。その声で葉子が連想したのは友人である天沢郁未の事だ。郁未も少年も生き残っていることは判っていて、それならばあの少年の傍に郁未がいるかもしれない、という連想は決して突飛ではないと思う。
鹿沼葉子は。
ずっと一人で生きてきたことを恥には思っていない。母を失ってから、誰よりも気高く生きようと決めて、孤独を孤高に換えて、生きてきた。その自分の人生は、けして他の誰にも判らない誇りに満ちていた。一生こうやって、孤高でいようと思っていた。
それが彼女の勇気だった。
けれど、その自分の人生の中に最初の異分子が現れた。異分子の名前は天沢郁未と言った。
お前には無関心だ。そんな素振りをして、最初葉子は彼女を拒絶した。眩いばかりに見せる笑顔がすごく憎々しくて、無理やり傍に近づいてくるのがどうしようもなく煩雑だった。
けれど、自分がどれだけ拒絶しても――彼女は自分に近づいて、笑顔を見せた。友達になりたいんだ。そんな風に郁未は言って。鹿沼葉子は彼女の差し出す手を、とうとう拒絶できなくなった。
温もりを捨て、情愛を忘れ、ただ孤独であろう。

もう自分にはそんなことが無理なのだとやっと自覚する。彼女の眩い笑顔、柔らかなてのひら、
　鹿沼葉子は。――熱を知ってしまった。

　だから葉子は、郁未に逢いたいと思った。この島の中で展開される壊れきった世界の中で、葉子は疲れ切ってしまったのだ。自分に与えられた日常は、こうやって簡単に壊れてしまった。けれど、まだ郁未がいる。日常の残滓がある。自分に熱を教えてくれた友達がいる。そして今、自分の中には確信がある。放送を流したところに郁未がいる。

　けれど、葉子の足はそちらへは動かなかった。何も疑わずにいられるほど葉子の判断能力は衰えていなかったのだ。間違いなくそこには、あの黒くて白い少年がいる筈だ。

　あの時の少年の顔が、葉子の脳裏に残っているからだ。彼は既に狂っているのだと思った。あの時の笑顔が、今でも忘れられない。郁未が自分に向けた笑顔とは違う、爬虫類のような笑顔。――「人の多い場所は無いかい？」というあの質問の意義を考えて震える。今となって考えてみれば、あれは――皆殺しをする為にした質問だったのではないか。そして今の放送もまた、ミナゴロシを行う為にしたものではないだろうか。

　葉子はほぼ確信と共にある考えを持っている。あの少年には、『多少』なりとは思うが、不可視の力が戻ってきている。

　もし完全に力が戻っているのだとすれば、瞬きをする間にこの島は消し飛ばすことも出来るだろう。運動能力が、常人より幾分強化された程度。あくまで『すごい人間』といった程度だろう。彼程度の能力ならば、この島に今生き残っている面子でも匹敵するものはいるだろう。だがそれでも――ミナゴロシをするには充分なのだ。彼はアタリを引いている。彼は持っている。『偽典』という名の不思議な兵器を。ただの紙切れにしか見えないの

に、弾丸を弾き飛ばすだけの強度を持っていて、恐らく剣のように振り払えば人の首だって落とせるだろう。

　彼の優れた運動能力を考慮すれば。あの兵器は、それひとつだけでこの島に生き残った全ての人間を殺すことが出来る脅威を秘めていた。

　彼とともにいる筈の郁未。あの少年が狂いきっていなければ、まだ郁未は生きているだろう。けれど、いつ郁未が殺されるかも判らない。いつ彼の狂気にアテられて狂ってしまうかも判らない。

　時間はない。けれど、今の自分が身体ひとつで突っ込んだところでどうにもならないことは判るのだ。

　葉子はだから北に向けて走っている。高槻が死んでいる筈の――自分の力を極小に抑え切ったあの装置を破壊するために。目的はただひとつ。自分の運動能力を、せめてこの島に来た当初のそれに戻すためだ。今の自分は誰よりも脆弱で、何もすることが出来ない赤子と同じだ。せめて、まともに動く身体を取り戻さなければいけない。

　鹿沼葉子は。

　間違いなく天沢郁未のことが好きなのだと思う。

　自分に熱量をくれた彼女を、今度は自分が救ってやりたいのだと思う。だから自分はこうして息切れしながら走っているのだと思う。

　孤高であろうと思った。誇り高くあろうと思っていた。けれどそれはもう無理なのだ。葉子はもう、郁未の熱を、もう忘れることなど出来ないのだ。彼女が与えた熱は、今葉子の中で『思い出』として昇華され、永遠にその心に残るのだ。

　鹿沼葉子は思い出に縋って走っていた。

753　信頼関係

「私たちは……これから南東の方角に向かうことにします」
　千鶴姉は唐突に言い放った。
「え？　だって、あゆは西の方に行きたいって言ってて、芹香さん達もその途中にいるはずだっただろ？」
「うぐぅ！　そうだよ、千鶴さん。おかしいよう！」
　あまりにも予想と異なった千鶴姉の指示に、あたしは疑問を投げかけた。
　あゆだってそうだった。
　自分の意志と違う方向に赴くくらいならば、一人で駆け出しかねない勢いで声を上げている。
「それが……ごめんなさいね。私のせいで状況は変わってしまったみたいなのよ」
　千鶴姉はあたしたち二人に見せるように、参加者の位置を示す装置を差し出した。
「あ、ほんとだ」
　何処をどう移動したのか、芹香ともう一人のペアはさっき千鶴姉の言った方角へと随分移動してしまっている。
　つまり……。
「南東に向かうことで初音達に会うことと、セイカクハンテンダケを手に入れることの、両方が達成できるってわけだ。だけど……」
　あたしは視線を左に流した。千鶴姉もその視線を同じ方に流した。
　当然、そこにはあゆが立っている。
「うぐぅ……。千鶴さん達がそっちにいくのなら、ボクはあっちに行くよ!?　わがままを言ってるんじゃないんだよ。本当に急いでいかないと駄目な気がするんだよっ」
　あゆが西の方角を指さし、千鶴姉に必死の表情で

訴えかける。
　さっきの雨のこともあるし、あゆの勘もおいそれと放っておくわけにもいかないかもしれない。
　けれど、一つだけ分からないことがあるんだ。それは……。
「あゆちゃん、もう一度だけ聞くわ。何が間に合わないのか、教えてもらえる？」
　あたしの疑問を代弁するように千鶴姉が問う。
「そ……それはボクにもはっきりとは応えられないんだよ。でも、これは確かなことなんだよ。信じてよ、千鶴さん……」
　言いたいことを上手く言葉に表せなくて、あゆは涙目になってしまった。
　あたしは左手をあゆの肩に置き、落ち着かせようとした。
「あたしも千鶴姉も、あゆの言うことは信じてるよ。だけど、確実に出来ることが目の前にあるのなら、そっちから片付けた方が良いんじゃないかとあたしは思う。千鶴姉も……」
　そう思うだろ？　と続けるつもりだった。けれども、千鶴姉は首を横に振ったんだ。
　そして、またしてもあたしの予想外なことを言い放った。
「梓……。初音をお願いね？」
　あたしもあゆも、驚いて目を見張った。
「じゃ、じゃあ千鶴さん!!」
「お、おい、千鶴姉!!」
「梓、私はね。あの施設の中であゆちゃんと二人の時にもう一つ不思議な体験をしているのよ。施設を出るときにあゆちゃんの同行を許したのも、だからこそという部分もあるわ。それに……」
　脳裏に苦い過去をよぎらせたのか千鶴姉はそこで一度、言葉を止めた。そして僅かに表情を歪めながら続けた。
「初音と私がいま会っても、上手くいかないっていうのは梓にだって分かっているはず。だとしたら、

考えられる手は一つしかないわ」
「つまり、あたしが一人で例のキノコを手に入れて、施設の繭に食わせてやるってことなのかい、千鶴姉……？」
千鶴姉の言葉に、あゆは目を輝かせている。
自分一人の身ならばどうとでも出来る自信はあった。それに、施設にいるときに確認した限りでは、ここより西に参加者がいる形跡はなかった。
だから、あゆは千鶴姉がいる限り、まず安心だろう。
だけど。だからこそ……。
「西に何があるっていうのさ！　あゆには悪いけど、ここで別れるのには賛成できないよ‼」
あたしが叫んだことで、あゆは再び涙目になってしまった。
あゆには本当に済まないと思ったけれども、あたしは叫ばずにはいられなかった。
正直に言えば、あたしは怖かったんだ。

具体的に何が、ということがあったわけじゃなかった。
だけど、ここで別れたらまた会うことがもう出来ないような気がして。
何の根拠もないのに、あたしは怖くなってしまったんだ。
「しっかりしなさい、梓‼」
間髪入れず、あたしの左頬が千鶴姉の手ではられた。
気持ち良いくらいの音が辺りに響きわたる。
「あなたがしっかりしてくれていないと……困る。……頼りにしているのよ、梓」
「ち、千鶴姉……」
あたしはそれ以上抗議をすることが出来なかった。
日頃、憎まれ口をききあってる間柄だけど、それもお互いの信頼関係あってこそのものだ。
それをお互い分かった上で、それは口に出さないようにしている。

言わないでも分かってるからだし、気恥ずかしいからだ。
けれど千鶴姉はあえて、改めて口に出してあたしを頼りにしているのだと言ったんだ。
これ以上抗議するなんて、出来るわけがなかった。
それに、はられた左頬の熱が根拠の無い不安をどこかへ追いやってくれた。
今なら冷静に物が言えるよ。
「分かったよ、千鶴姉。あたしも千鶴姉を信じてる。初音はあたしに任せといて――あゆをよろしく」
「ええ、任せておいて」
千鶴姉が大きく頷く。
それを見てあたしはもう一度安心した。
深く深く安心することが出来た。
さすがは千鶴姉だと思った。
あたしを簡単に落ち着かせてくれる、立派な姉。
もちろん、口に出してなんか、言ってやらないけど。

あゆの頭を撫でながら、あたしは自分の気を完全に落ち着かせた。
「うん。じゃあ、善は急げだ。もともと短距離の人間(ひと)だけど、別に長距離だって苦手じゃない。あたしはもう、お暇するよ」
そう言ってあたしは荷物を担ぎ、駆け出そうとした。
「梓、これをもって行きなさい」
千鶴姉があたしに声をかけ、爆弾感知型の人物探知機をかざすように見せた。
「これも併用して、出来るだけ危険な行動を避けてね。そして一刻も早く目的の物を手に入れて岩山の施設に戻ること。あたしもあゆちゃんの件が片付き次第戻るわ。それから……」
千鶴姉は万が一岩山の施設が合流場所に出来なかった場合は、施設内で見た『初音たちの居た場所』を次の集合場所とすることをあたしに告げた。
あたしは探知機を預かり、千鶴姉の話をあゆと良

く確認した上で今度こそ出発することにした。あゆ、千鶴姉をよろしくな！」
「うぐう、任せておいてよ、梓さん。ボクだって何から何まで二人にやってもらってばかりじゃないんだよ。ボクだって、ちゃんとボクなりに……」
「うん、わかってる。あゆのことも、ちゃんと信じてるし、頼りにしてるから。……それじゃあ、二人とも。またすぐに会おうね!!」
「ええ。分かってるわ、梓」
「うぐう。梓さんも気を付けて!!」

あたしたちはこうして二手に分かれた。
正直に言えば、その時もまだあたしは二手に分かれるのが最善の策だとは思っていなかった。
けれども、千鶴姉の言うことと、あゆの要求をはねのけてまで一緒にいるべきだとも思わなかった。
だったら、あたしに出来ることは一つだ。
二人を、千鶴姉を信じて、自分は自分の最善を尽くすこと。
あたしはさっさと自分の役目を果たしてしまうべく、小走りに駆けだしていった。
太陽はさっきよりも傾き、幾分か過ごしやすくなっていた。
けれども、夕暮れにはまだ少し遠い時間帯だ。
あたしの足ならば、完全に暮れるまでには目標の人物に出会えるだろう。
セイカクハンテンダケを持つ、来栖川芹香に。

754　灯台地下にて

二人は薄暗い通路を歩く。
得物を構え、足音を忍ばせながら、点々と続く誘導灯のわずかな明かりだけを頼りに。
備え付けの懐中電灯は手に入れたが、点けてはいない。

足元が心許ないが、発見される危険を考えればまだましだ。
「それにしても、全然人がいないわね」
「油断は禁物よ」
「わかってる。ただ、おかしいなって」
今までいくつかの部屋を巡ってみたが、人がいる形跡は見当たらなかった。
「……そうね。警備の一人もいないなんて。たいして重要な施設じゃなかったのかしら」
やがて二人は『管制室』と記された部屋の前についた。
「ここなら何かありそうね」
「そうね。ちょっと待ってて。様子を見てくるから」
晴香は部屋の前まで忍び寄ると、静かに聞き耳を立てた。
人の声は無い。
建物全体を包むわずかな機械の駆動音を除けば、あとは静かなものだ。
（ここも無人？　鍵は……開いてる。とりあえず、大丈夫みたいね）
振り返って七瀬を呼ぼうと――その途端、部屋の中から声がした。
「っ!?」
とっさにドアの前から離れ、その横の壁に張り付く。
（まさか人がいたなんて。気付かれた？　にしては変化が無いけど……）
相変わらず声は聞こえてきているが、その内容までは聞き取れない。
（どこかで聞いたような声……）
「どうしたの？」
「～～ッ!!」
部屋のほうに全感覚を集中していた晴香は、後ろからいきなり声をかけられて思わず総毛だった。
そのまま声をひそめて怒鳴る。

「ちょ、ちょっと七瀬！　おどかさないでよ！」
「……あ……あんたこそ……なんのマネよこれはっ……！」
驚いた拍子に刀を振ってしまっていたようだ。
七瀬は目前に迫った刀の切っ先を、両手で必死に防いでいる。いわゆる真剣白刃取りである。
「あ、ごめんごめん。……えーと」
晴香は刀を下ろし、コホンと咳払いを（もちろん小声で）すると表情を引き締めた。
「中から声が聞こえるわ。どうする？」
「何事もなかったように言うか、あんたは。……で、踏み込むかどうかってこと？　数が多いなら危険よね」
飛び道具を持った集団相手では勝ち目が無い。こちらの得物は刀二本に拳銃一丁だ。
「手榴弾は……ここが最深部みたいだから、音で他の連中が寄ってくることはないと思うけど。でも、爆発で施設に影響が出たら困るわね」
「……そうね。でも他に方法も手掛かりもないわ。制圧しましょう。いい？」
七瀬が頷いたのを見て、先を続ける。
「幸いドアは内開き、鍵も開いてるから、まずドアを蹴りあける。次に敵を確認したら手榴弾を放り込む。
爆発したら私が突っ込んで残りを片付ける。これでどうかしら」
「それって晴香が危険すぎない？」
「私にはこれがあるから」
そう言ってワルサーＰ38を見せる。
「それに、どちらかといえばあんたの仕事のほうが重要なのよ」
「そうだけど……」
「あんまり長話もしてられないわ。……準備はいいわね？　いくわよッ……！」
七瀬が手榴弾の安全ピンを抜く。
チン、と音がした。

即座に晴香はドアを蹴り開け、すぐに飛び退いて突入の体勢を整える。が――
「……だれもいない……？」
拍子抜けしたように、呟く。
部屋の中に動くものの影はない。
あるのは薄ぼんやりと光を放つたくさんのモニター、そしてわけの解らない機械類。
そのうちのひとつから声が聞こえていたようだ。
「大丈夫だったみたい。やれやれね」
そういって立ち上がると、七瀬の方を向き、そして――硬直した。
七瀬も気が抜けたように肩の力を抜いていた。
……ピンの抜けた手榴弾を持ったまま。
「七瀬！　ちょっと、危ないって！　ピン！　ピン戻して！」
「……えっ？」
動揺した留美はうっかり安全ピンを離しそうになる。
(間に合わないっ……!?)
晴香はとっさに手を伸ばした。
しかし、それは届かなかった。
七瀬は手を滑らせ、安全ピンは弾けとび、死のカウントダウンが始まる。
あまりの事態に思わず立ち尽くしてしまう晴香と、現状を把握できない七瀬。
無情にも三秒の時は過ぎ――そして死神の鎌が振り下ろされた。
爆発と共に辺りに撒き散らされた破片は七瀬と晴香の体を所構わず射抜きその命を奪う。
施設は再び無人となり、そこにあるのはただ二人の乙女の亡骸のみであった。

六十九番　七瀬留美　死亡
九十二番　巳間晴香　死亡
【残り18人】

「……なんてことにならなくて良かったわね」
「あ、危ないところだったわ……」
晴香は間一髪、七瀬の手ごと手榴弾を握り締め、爆発を防いだ。
そしてゆっくりとピンを戻す。
「知らなかった。手榴弾って、どこかに投げつけなくても爆発するんだ……」
「今の手榴弾はみんな時限式よ。レバーを離して三秒で爆発……あんた、知らずに使おうとしてたの？」
「乙女の辞書に手榴弾の扱い方なんて文字は無いわよ、いくらなんでも」
「……そもそも、アイテムリストに説明が載ってなかった？」
「そんなの覚えてないって」
「はあ……ま、いいわ。確認しなかった私も悪いし。ただ、今度からは私に断ってからにしてね」
「うん、解ってる……」
七瀬は思う。
ここまで来て自爆で死ぬなんて情けなさすぎる。
そんな理由で浩平に再会したら、あいつは腹を抱えて笑い転げるに違いない。
それは避けたかった。
「それより、声ってなんだったの？」
言われて晴香は思い出す。まだ声は聞こえ続けている。
近づくと、はっきり内容まで聞きとれるようになった。
『ザザッ……り返す！　俺は全ての者を歓迎する！……』
「……蝉丸さんだわ、この声」
「どういうこと？」
手元を見ると、〈三十八番マイク受信中〉と書かれた文字が点灯している。
「どうやら蝉丸さんが何処かで喋っているのを、この施設の耳が聞きつけたみたいね」

そして二人は、放送の内容に耳を傾けた。

755　死神と、天使と、

彼女たちは、七瀬彰を捜していた。
もう、どれぐらい前からだろうか。
彼女たちは今、町の東側にある森の中で、時間的感覚も希薄になるほど、彰を捜している。
三人を動かしているのは、後悔の念。
できるだけ広い範囲を、そしてお互いの無事を確認するために、声を張り上げながら、捜す。
殺人者と死神が大手を振って歩くこの島で、大声をあげることは誇張ではなく自殺行為。
だが、もちろん彼女たちは自殺志願者ではない。
なぜなら、それだけのリスクを負っても、捜さなくてはならない人だからだ。
「あきらさーん」
マナが叫ぶ。
「あきら、おにいちゃーん」
初音が叫ぶ。
「あきらさーん」
葉子が叫ぶ。
——島内に生き残る、全ての善意ある参加者たちよ!!　聞いているだろうか？
どこか、遠くから蝉丸の声が聞こえた。
呼びかけをすることによって、この戦いを終わらせる。
そう言って別れた蝉丸は、その言葉通りやってのけた。
彼女たちはしばしの間声をあげるのを止め、放送に聞き入る。
——現在求められているのは〝魔法使い〟だ！
心当たりのある者は、是非とも名乗り出て欲しい。その知識と、能力に期待する！
魔法使い……

もしも、自分が魔法使いならば。
彰を簡単に見つけることができるかもしれない。
彰の所に飛んでいくことができるかもしれない。
彰の心の闇を晴らすことができるかもしれない。
そう、あり得ないことを初音は夢想する。
「あきらさーん」
遠くからマナの声が聞こえる。
初音はくだらない想像をしていたことに赤面し、あわてて同じように声をあげる。
「あきらさーん」
マナが叫ぶ。
「あきら、おにいちゃーん」
初音が叫ぶ。
違和感。
そして、二人は気が付いた。
鹿沼葉子の声がないことに。
「ようこさーん」
マナが叫ぶ。
「ようこ、おねえちゃーん」
初音が叫ぶ。
しかし、葉子の声が返ってくることはなかった。
「マナさん！」
初音がマナのもとに走ってくる。
「初音ちゃん」
マナも小走りに初音に向かって走る。
葉子の返事がない、ということは先ほどの放送の間に、彼女の身に何かがあったに他ならない。
だが、もしかしたら声が嗄れてしまい、休んでいるだけかもしれない。
そう思って、葉子の声が最後に聞こえた所に二人は向かったが、彼女の姿も、争った痕跡も見つからなかった。
二人は途方に暮れた。
彼女たちは服が汚れるのも構わず、地面に座り込む。

疲労と無力感が彼女たちを苛む。
彰は見つからない。
葉子も行方不明。
そして、なにより、耕一は死んだ。
今になって落ち着くと、その事実に体が震える。
実際にその死に様を見たわけではない。
だが、彰の言葉と、そしてなにより、浴びていた血が雄弁にそれを物語っていた。
藤井さんも、お姉ちゃんも、澤倉先輩も、先生も、きよみさんも、藤田も、長瀬さんも、天野さんも、佳乃ちゃんも。
みんな、みんな死んでいった。
そして、耕一も……。
もう、何もかもが嫌になった。
一人でも多くの人を助けたい。一人でも多くの人と島から抜け出たいと思った。
だが、それは無邪気な絵空事だった。
出会う人、出会う人、皆、死んでいく。

本当に、終わりがあるの？
すべての野が赤く染められ、白い骨の木が立ち並ぶまで続けられるの？
私が生きていても、他人を犠牲にしてぬくぬくと生き長らえているだけ。
そして、死んだ人を見て偽善的な悲しみをするだけ。
自分が生きている優越感に浸りながら。
『死んだ方がまし』そんな言葉を前に鼻でせせら笑ったことがあるけど。
確かに、あるのね。そんなことが。
自殺は根性なしの敗北者がするものだと思っていたけど……。
そうか、今の私みたいなのを指すんだ。
初音ちゃんに花を摘みに行くと言って少し離れる。
手には撃つことはないと思っていた銃。
適当に言い訳をして、初音ちゃんから借りた。
誰かが、頭を一発で撃ち抜けば痛みも感じず死ねると言っていた。

先に死んじゃうけど、初音ちゃん、ゴメンね。
でも、私が一緒にいると、初音ちゃんにも迷惑がかかると思うから。

セイフティーを外し、
こめかみに銃を押しつける。
そして、人差し指で引き金を……

ガァンッ！

えっ！
私はまだ、撃っていない。
そして、再び銃声が聞こえる。
そんなに、遠くではない。
もしかして……私は初音ちゃんの所に駆け戻る。
初音ちゃんも聞いたようだ。緊張した面もちでこちらを見る。
今度は三連発の銃声が聞こえる。
その方向を確かめて、私たちは走った。

走るにつれ、何度か銃声が聞こえる。
私たちの緊張が増す。
そして、森を抜けた所に、それはあった。
倒れ伏した一人の男。
近づくにつれ、その正体が分かってくる。
柏木耕一。
初音ちゃんの顔が泣きそうになる。いや、私も恐らく同じ顔だろう。
話に聞いていても、実際に死体を見て改めて認識させられるのとは、別だ。
もし、神がいるとしたら、なんて残酷なのだろう。
銃声をあと十秒、いや五秒遅らせてくれたら、また、こんな苦しみを味あわなくて済んだのに。
だけど、死体をこのまま放置して置くわけにはいかない。
私は運ぼうと思い、腕をつかんだ。
まだ、あたたかい……
そう思ったとき、耕一の指が少し動いた気がした。

私は腕の動脈をつかみ、そして口に耳を寄せる。
生きてる?
私は、軽く耕一の頬を叩く。
反応がない。
耕一の耳元で名前を呼ぶ。
返事はない。
まさか、と思い心臓に耳をつけてみるが防弾服が邪魔だった。
あせる気持ちを必死に抑えて、ボタンを外す。
そして、耳を胸に当てる。
命の鼓動。命の温もり。
それを感じて、自分の胸の奥が暖かくなった。
そんな気持ちの私を、誰かが頭を撫でていた。
耕一だった。
いつもは頭を撫でられるのが嫌だったが、今は不思議と不快感はない。
むしろ、心地良い。
「やあ……、マナちゃん」

耕一は絞るように、そう言った。
「バカ! 私、心配したのよ! 本当に心配したのよ!」
私は耕一の胸の中で、泣いた。
嬉しくて、いつまでも泣いた。

756　空の名前

傷つきながらも起き上がって健在を見せた柏木耕一にすがって観月マナが泣きじゃくっている。その様子を見ながら、自分の頬にも涙が伝っていた事に気付いていて、わたしはゆっくり笑みを漏らした。
本当に良かった。自分は、大切な人を失わないで済む事が出来たのだ。
けれども、耕一の顔を見て安堵の息を吐いている事が出来たのも、ほんの束の間のことだった。
わたしの思考を次に襲ったのは、では耕一を撃ったのは誰か、という事だった。考えるまでもなかっ

た。耕一を襲ったのは七瀬彰だ。
　唇を噛み、目を閉じた。
　七瀬彰と柏木耕一が戦って、七瀬彰の姿はなく、柏木耕一は怪我をしながらも無事だ。彰はまたしても耕一を殺さなかった。――殺せなかった。それは彰がまだ――すべての人の心に巣食っている狂気という意味での、『鬼』に成り切っていない事を証明していた。
　彰はまだ、彰のままでいるのだ。それならばまだ、止めようがあるのかもしれない。
　わたしは、七瀬彰を止めなければならない。
　呼吸を乱しながら、耕一は顔を上げるとわたしを見て、真剣な顔でこう言った。
「――彰が、その森の奥のほうに行った。早く追わないと、手遅れになるかも、しれない。――あいつは多分、自殺するつもりだ」
　耕一は小さく呻き声を漏らしながら続ける、
「俺は、少し、休んでから行く。すぐ追いつくから、先に行ってくれ。あいつを止めることが出来るのはもう、初音ちゃんしかいないんだ」
　途切れ途切れに言葉を漏らしながら、耕一はそのままマナの身体に崩れ落ちる。
「耕一さんっ！」
　叫び声を上げるマナの上で耕一は薄く笑って言う。
「……大丈夫。ちょっと、まだ、血が、ちょっと足りてないだけだ。少し休めばすぐ治るよ。
　――初音ちゃん。彰はあっち――東のほうに向かった。俺のことは良いから、早く行ってくれ」
　そう言って耕一は、森の薄暗い闇を指差した。大丈夫そうにはとても見えなかったが、わたしに許される選択肢はひとつだけだった。耕一のことはマナに任せよう。全員が無事のハッピーエンドを迎えるためには――わたしは今すぐ駆け出して、彰を抱き止めなくてはいけないのだ。わたしはこくりと頷き、立ち上がって森の奥に向かって駆け出そうとした。
その瞬間だった。

奇妙なくらいに高い心臓の音がわたしの肉体を支配する。どくん、どくん、どくん。狂ったような心臓の鼓動。急に頭が痛くなって、視界がふらつく。感情が流れ込んでくる。

「――初音ちゃん？」

「初音ちゃん？　どうした？」

小さな身体で耕一を支えていた観月マナが、わたしの異変に気付き、怪訝な顔をして自分を覗き込んでいる。身体を起こした耕一も同じような顔をして自分を見ている。それにもまともに反応も出来ない。わたしの身体は動かない。何かの意識が流れ込んでくる感覚。わたし以外の何かがわたしの中にいる感覚。わたしじゃないわたし。混濁する記憶。哀しい記憶。わたしじゃないわたしが何かを訴えている。脳髄に響く言葉。強い、強い、感情。頭の中が揺さぶられてぐちゃぐちゃになっちゃいそう。

前にも何処かでこんな事を経験した記憶がある。そう遠くない昔、そう、この島に来てから、

ああ、そうか。

「初音ちゃんっ、どうしたの！　ねえ、」

マナちゃんがぼーっとしているわたしの肩を揺する。わたしの体がぐらぐらと揺れる。

「初音ちゃんっ、どうした、何か具合でも――」

耕一お兄ちゃんもわたしを心配して声を掛けてくれている。

ごめんね、二人とも。心配かけて。でも――

心配は要らない。

彰お兄ちゃんは、きっとあそこに向かったんだ。わたしと最初に出会った場所の、対岸。

西の海に彰はいる。

不思議な確信が、自分の脳髄に刻み込まれていく。西だ。西に彰は向かったのだ。

耕一の言うことよりも。わたしは、この胸の中の言葉を信じようと思った。わたしはこの、自分の中で蠢く力のことを、よく知っている。もう一生起き

ることはないだろうと思っていた、別れを告げた筈のわたしの中のもうひとつの意志が、その名前だ。
リネット。
わたしはあなたの言葉を信じる。わたしの中でいつも反逆ばかりを考えていたあなたのことを、今は信じる。あなたはわたしのことを誘惑しようとするけれど、嘘だけは吐いたことがなかったものね。どうしてあなたがそんな確信を抱いているかなんてわからない。けれど、わたしは信じよう。
もしも間に合わなくてもわたしのせい。
だってわたしも、西の方に彰がいると思っている。それは——考えている場合ではない。今は走り出さなければならない。
手遅れになる前に、大切な人を捜し出さなければならない。
「マナちゃん、耕一お兄ちゃん、もう大丈夫。それじゃあ——行くね」
そう言ってわたしは——西に向けて走り出した。
「初音ちゃん!?」
「初音ちゃん！　彰はそっちじゃないぞ、こっちの森に入っていったんだから！」
そんな声も無視して、わたしは反対方向へと駆け出した。私を止める声が後方に遠ざかっていく。
その根拠はひとつ。もし、彼が死のうとしているのなら、そして、彼にとってわたしが大切な存在だったのなら——彰お兄ちゃんは、西に居る。

僕——七瀬彰は、自分が何処へ向かっているのかも考えないまま、森の中を呆然と歩き回っていた。この森はあまりに深く、空を望む事が叶わない。ただ鬱蒼と茂る緑の葉蔦が空を覆っている。がさりと草を踏み、大地に足がついていることを確かめると、僕はやっと、自分が何処に向かっているのか考え始めた。思いついた。どうして自分が東に向かっているか。初音との出会いの場所——初音を最初に抱きしめた場所が、東の海だったのだ。朝陽を望みなが

ら、彼女を護るために戦おうと、最初に決意した場所。そこに向かっているつもりだったのだ。
初音にもう一度逢うために。
考えてみれば自分はさっき耕一と戦った時点で既に島の東寄りにいる筈だったし、それならば少し森を抜けて歩けば、目的の場所、東の海に至る事が出来る筈だった。それなのに、木々の隙間から覗ける風景に、まるで海は見えない。東の海に向かっている筈なのに、どうして。考えて、僕は息を吐く。
東に向かっても、初音に逢えないと思っているのだろうか。違う。そういう理由ではない。
——歩きながら考えて、自分が向かっている場所が何処だか判った。
自分は初音に逢って、言わなければならないことがある。僕はもう、これから生きていくつもりはないけれど、初音には、生き残って欲しい。その為に初音に言いたい言葉がある。
その言うべき言葉は。
東ではなく、西で。
陽が昇る場所ではなく、陽が落ちる場所で。
始まりの場所ではなく、終わりの場所で。
言うべき言葉なのだと僕は判っていたのだ。
眩暈がするのが判る。血はそれ程流れていないのに、身体が言うことを効かない。もし歩む事を止めれば、自分は多分二度と歩き出せないだろう。
——「これから先、生きていくつもりもない」などと言ったが、そもそも自分はすぐに死んでしまうのかもしれないな、という気もする。ともかく、生きていくには僕は駄目になりすぎた。
そして僕は森を抜けた。真っ青な美しい海と赤く焼けた空。今にも沈みかかっている陽。
僕は西の海に到達した。

わたしは市街地を全速力で抜け、西に繋がる森に入る。ここを一直線に抜けていけば、彰に逢える筈だ。初音がその確信を抱いていたのは、ただ一つの

理由。彰はこれから死のうとしている。そして死ぬ前に、自惚れでなければ、彰は自分に会いたがっている筈だ。あんな別れ方では、彰とて嫌だろう。
　わたしたちの物語は東の海で始まった。
　それならば、終わらせるのは西に決まっていた。
　わたしは走る
　身体の節々が痛む。この島でわたしはたくさんの怪我をした。だが、それでも自分はこうして生きている。自分自身で武器を持ったことなど数えるほどもない。他人を傷つけた事もない。ただ、彰を傷つけたのみだ。
　それなのに、この殺し合いを強要される島で、誰も傷つけることなく、自分も死に至る傷を負うことなく、ここまで生き残っていられるのは、自分を護ってきてくれた人たちのお陰なのだ。
　本当にたくさんの人と出会った。弱い自分を護ってくれた大切な人達。彼らがいなければ自分は、こうして無事にいられたかどうか。
　そして、彰のことを思う。
彰との、この島での日々を思う。
　茂みの裏で震えるわたしを見つけた彰お兄ちゃんは、にこりと微笑んで慰めてくれた。一人泣き出したわたしを、彰お兄ちゃんは抱きしめてくれた。体調が悪くなったわたしを、彰お兄ちゃんは必死に看病してくれた。殺されそうになりながら、彰お兄ちゃんは戦ってきた。危険に晒されたわたしを、彰お兄ちゃんは護ってくれた。そして、彰お兄ちゃんとわたしは肌を重ねた。そして、彰お兄ちゃんはわたしに優しいキスをくれた。
　彰がいなかったなら。わたしは、どうなってしまっていただろう。想像をすることも出来なかった。
　耕一は、彰は自殺するかもしれない、と言った。わたしにも、彰の心境の想像はついた。多分、彰はこんな事を考えているのだ。〈狂気に侵された自分が初音と共にいたならば、きっと自分は初音を傷つ

ける。傷つけるくらいなら、死んでしまったほうが良い。まだ、自分自身の理性が残っているうちに〉。
彰はとても優しい人だから。耕一を傷つけ、自分を傷つけようとした事が、どうしようもない罪に思えたのだろう。
それならば、自分がするべき事は一つだ。
傷つけても構わない、と抱きしめれば良いのだ。
傷つけても良いんだよ、と微笑めば良いのだ。
今までずっと護ってきてもらったのだ。彰がいなければ、わたしは当の昔に壊れてしまっていただろう。あの時、初めて出会ったときの彰お兄ちゃんの笑顔で、そして、今までずっと笑ってきてくれた彰お兄ちゃんの笑顔で、わたしがどれだけ救われたか、本人はわかっているのだろうか？

最短距離で森を抜けるつもりだったが、予想以上に道は困難だった。一つ勾配の急な丘を越えなければならず、相当の時間を尽くさなければならなかった。迂回していこうかとも思ったが、それにも時間がかかると思い、わたしはそこを登っていく。
身体が重くて、涙が出そうになったけれど、この丘は私と彰の前に広がる障害が形になって現れたものだと思った。これを越えれば、自分と彰の障害はなくなるのだと思った。
――太陽が傾くような時間までそこで時間を使い、わたしは乗り越えた。丘を越え、森を抜けるとそこには海が広がっていた。広がる海と、傾きかけた太陽。そこには七瀬彰が立ち尽くしていた。

わたしは夕暮れの海が好きだった。何処までも行けるような圧倒的な広さがあって、何よりも、その赤色がまるで別世界のように綺麗だったからだ。
この美しい空を飛ぶための翼は要らない。わたしはただ――この空の名前を考えながら、誰かと手を繋いでいたかっただけなのだから。
自分の目の前にいる彰も、同じであると信じたい。

757　禊

階段を隔てて、天沢郁未と少年は対峙する。
「具合は、どうだい？　見たところ元気そうだね」
その少年の声に、だが、郁未は無言しか返さない。
「なんだろう、無愛想だね」
少年はヒョイと肩をすくめる。
「とにかくあがってきなよ。そこは狙撃される心配がある」
確かにそれはそうね、と郁未は思った。
私は彼を、救うのか。
私は彼を、殺すのか。
どちらにせよあの髭面の男に邪魔をされたくはない。
だから、郁未は既に手にしていた発煙筒と煙球（椎名繭のバックの中にあった花火セットのものだ）に火をつけて、そこらへんに放り投げた。

無論、ベネリショットガンは構えたままだ。
たちまち、ホールに煙が充満し、往人の爆弾のせいで、ただでさえ悪くなっていたホールの視界がさらに悪化する。
流石に郁未と少年の距離ならばお互いの姿が視認できるが、外からの狙撃は無理だろう。
そうして、郁未は少年のほうへ銃口を向ける。
「あなたは、人を殺したの？　殺したのね？」

「……！」
ホール内にたちこむ煙幕にフランクは歯噛みする。
ようやく狙撃ポイントに着いたというのにこれでは……どうするか……煙幕が晴れるまでここに待機するか……だが、一度狙撃手の存在を明らかにした以上、狙撃の最も大きい利点、不意打ちはもはや期待できない。
フランクは舌打ちをするとさらに移動をはじめた。

「ああ、殺したよ」
　何ら変わることのない少年の声。
「僕がそうするって事は、郁未が一番良く知っているだろう？」
「……そうね……」
　そう、郁未こそが一番良く知っていた。神奈に侵食されている郁未こそが、今、少年がどういう存在か一番良く分かるのだ。
「あなたは、空虚。我を持たない。ただ、姫君の望むように動く操り人形。そんなこと分かってた。でも」
　痛い。胸が痛い。
「救いたかった。あなたを救いたかった。救いたかったんだよ」
　泣き声にならないようにするのは大変だった。
「あなたのこと大切だったから……」
「救いたかったか……」
　少年は一歩前に踏み出す。

「過去形なんだね。それじゃあ今は？　やっぱり殺すのかい？」
「……」
　無言のまま郁未は引き金に指をかける。だが、その手はどうしても震えてしまう。
　胸が……痛い……。
　少年はその動きに頓着せず、一歩一歩階段を下りる。いつもの柔らかな声を出しながら。
「来ないで……撃つわよ……」
　途切れ途切れの郁未の声はひどくか細く弱々しい。
「何のために？」
「……何のためって……それは……」
　それは……なんだろう？
「何のために撃つんだい？　その胸の痛みと引き換えに、君はなにを得るんだい？」
「黙って……来ないでよ……」
　どうしてこんなに胸が痛いの？　私には痛みなんてなくなっているはずなのに。

「郁未。救いが必要なのは君の方なんじゃないか？」
「黙って、って言ってるでしょ!!」
力を振り絞って叫ぶ郁未。だがもうそれは遅く。
銃身を少年に払われるとその勢いで壁に押し付けられて両手首を握られてしまう。
「かわいそうな郁未」
まるで口付けを交わすような距離で少年は続ける。
「とても痛いんだね。伝わってくるよ。郁未の痛みが」
「いやだ……離して……」
身をよじらせるけれど、力が入らない。ただ、胸だけが痛くて、そこだけしか感覚がないみたい。
「郁未はずっと強くなければいけなかったんだよね。ずっと痛みに耐えなくてはいけなかったんだよね。本当にめったにいないんだ。いきなりAクラスに所属する女の子なんて」
ＦＡＲＧＯのクラス分けは精神力の強さ、過去にどれだけの痛みに耐えたかで決まる。
「この島に来てからも、郁未には辛いことだらけだ。母親の裏切り、死。親友の死。そして僕のことも」
「やめてよ……お願いだから……」
反則だよ。こんなの。こんなふうに……拘束するなんて。
まだ覚えているのに。少年のぬくもりも、抱かれた日のことも。
「そんな中でも郁未は強くあろうとした。それがお母さんが君に望んだことだから」
そう、お母さんは傷ついていた。そうして、そのことに耐えて行けるような強さを身に付けるためにＦＡＲＧＯに入信し、この大会に参加した。
そうして、お母さんは憧れていた。不可視の力を使えるような強さを持つ私に……。
「でも、それはとても辛かったはずだ。本当は誰かに頼って楽になりたかったんじゃないか？　本当は、侵食が始まった事に安心したんじゃないか？」

「そんなことない……」
嘘だ。分かっていた。
私はどこかで安心していた。侵食が始まったことに。私という存在が姫君に飲み込まれていくことに。痛みが徐々に消えていくことに。
そうして、どこかで期待していた。侵食が進んで姫君に意識を飲まれることで、お母さんやこいつへの辛い思いも消えてしまうんじゃないかと。
郁未の手からベネリが落ちる。
もう少年も力を込めていなく、拘束しているというよりも抱いているといったほうがふさわしかった。
「本来、僕は我を持たない空虚な存在だ。だけど今は違う。僕自身誤解していたけど、擬似人格は消滅したわけじゃないんだよ。たしかに巨大な意識に吸収されて同一化してしまったけど、その中で確かに生きているんだ。郁未を大切に思う気持ちは確かにあるんだよ」
その少年の言葉は嘘じゃなかった。侵食されている郁未にはそれがわかる。
「郁未、僕と一つにならないか？　姫君という大きな意識に同一化する。それは確かに一つの救いだよ」
痛みもなく苦しみもなく孤独に苛まれることもない。それは確かに救いの形。お母さんが望んだことそのもの。
「……ちょっとクサイかなぁ。流石に照れるや」
少年は少しはにかんで。
「でも、郁未だって嫌いじゃないだろ。こういうふうに口説かれるの」
「う……ん……」
そっと、口付けが交わされた。

「どうやら、あいつも敵みたいだな」
ささやく往人の声に、芹香は黙ってうなずいた。
煙幕のせいで中の様子はわからないが、途切れ途切れ聞こえてくる会話、一発も放たれない銃声、移

動もせず消えもしない人物探知機の二つの光点を考えるにそう判断するしかない。
「でもどうするの？　これじゃ叔父様の援護も期待できないわよ？」
「……いや、むしろこいつはチャンスだ」
問い掛ける芹香の視線に、往人は先を続ける。
「銃撃戦ってのは、初撃が勝負になる事が多い。だから、視界の効かない場所では相手の位置を先に発見できた方が勝つ。だが」
往人は人物探知器をカチャカチャとふる。
「こいつがあるなら、相手の位置を探す必要なんてない。あの煙幕の中じゃこいつはでかいアドバンテージだぜ」
「……一理あるわね」
煙幕が晴れるまで待つという手も確かにあるが……。
「じゃあ、踏み込むのね」
「ああ、ちょっと待ってろ。すぐ帰ってくる」
「な、なんでよ。私も行くわ!!」
慌てる芹香に往人は冷たい視線を向ける。
「武器もないのないのにか？　今からやるのは不意打ちだ。無駄に人数を増やしたら気配を悟られるだけじゃねぇか」
「だったら私が……あんた怪我してるし……」
「芹香」
芹香の抗議を往人が遮る。
「おまえは人を殺した事があるのか？」
その鋭い言葉、視線に芹香の息が詰まる。
「……無いみたいだな。だったら足手まといだ。躊躇なく敵を撃てるかどうかわからない奴なんてな」
「……そんな言い方しなくたって……」
「俺なら撃てる。ためらいなくな」
それだけいうと、往人は芹香に背を向ける。
「ちょっと、もう!!　もうちょっと言い方とかあるでしょう!!　か弱い女の子に向かって!!」
「誰がか弱い女の子だよ。その性格で良く言うぜ」

「……あのね……本当の私は……」
だが、そういったきり芹香は黙りこくってしまう。
「チッ」
なんなんだよ、調子狂うぜ。柄でもない。
「すぐ帰ってくる、おとなしく待ってろ」
それだけいうと、往人は身を低くしてホールに向かって走りはじめた。
「ほんと、もうちょっとまともな言い方できないのかしら」
走っていく往人の背を見ながら、芹香は呟く。
基本的に往人の言っている事が正しいというのはわかってはいるが……芹香がそう思っているうちに往人の姿は建物の中へ消えた。
(大丈夫だよね……!?)
不意に、芹香は背後に人が立っている事に気づいた。
慌てて振り替える芹香。そこには、
「叔父様!?」
フランクが立っていた。
ほっとする、芹香。だが、その腹にフランクの拳がめり込む。
「叔父様……なんで……」
何か熱いものが喉をせり上げてきて、芹香の意識は闇に落ちた。
芹香が胃液とともに吐き出したものを、フランクは摘み上げる。
それは参加者に仕掛けられた爆弾だ。
胃から摘出しても爆発しない事をフランクは当然知っていた。その起爆の方法も。
フランクはビルの二階のホールを見上げる。煙幕のせいで中は何も見えないが。
これを使えば、あの化け物を倒せるかもしれない。
それほどの威力のあるものではないが、先ほどの往人の爆弾で、ホール自体が半壊している。
もう一度爆発を与えたならば、うまく支柱を破壊

すればホールごと潰せるかもしれない。
　ここからでも、二階にこの爆弾を投げ込む事はできるだろう。
　だが、それはすなわち、既にビルの中には入ってしまった、往人をも巻き込む事になる。
　芹香を気絶させたのは、爆弾を取り出すためだけではなく邪魔されないためでもある。
　だが……、フランクは己の感傷を自嘲した。
　お笑い種だ。百人の参加者、多くのスタッフ、傭兵を巻き込んでいて、今更、感傷だと。偽善にもほどがある。
　何を犠牲にしても、かりそめの仲間、いや、己の命を犠牲にしても目的は達成しなくてはならない。彰を守るためならば。
　手段を選ぶ贅沢など許されるものか……。
　だが、その自嘲の裏には確かに動揺があったのだろう。
「動くなよ、おっさん!!」
　デザートイーグルの銃口がフランクの後頭部を小突くまで、
　北川潤、神尾観鈴という素人の接近にも気づかなかったのだから。

　一階をぬけ、既に停止しているエスカレーターから往人は二階に抜ける。
　予想通り、そこには煙の充満と炎の揺らめきのせいで視界が極端に悪い。何も見えないという訳ではないが……。
（奴等の位置は……非常階段の側か……）
　こちらの侵入、接近を悟られない事を祈りながら、往人は可能な限り身を低くして移動を開始する。
（落ち着け……有利なのはこっちだ……）
　額に汗が浮かぶ。
　人物探知器で相手の位置がわかっているとしても、この煙幕、炎はプレッシャーだ。
　だが、それでも往人は気配を消しながら、着実に

二つの光点に接近していった。
そして……。
（あれか‼）
煙幕の切れ目にみえる己と同じ銀髪の頭。
非常階段口からのぞくそれは、確かに光点と同じ位置。
まだ、こちらを向いていない。気づいていない。
（初撃が勝負。この距離ならいける）
確かに視界は悪いが……。
ゆっくりとアサルトライフルを構え、狙いをつける。
まだ、相手に動きはない。
悪く思うなよ……俺の勝ちだ‼
往人は引き金をひき、
そして、銃声とともに、銀髪の頭がはじけとんだ。
「観鈴、こいつが管理者なのか？」
北川の問いに、観鈴は首をかしげる。
「敵だとは思うけど……この人に一度襲われているし……」
だけど……郁未さんが言った管理者とはこの人の事ではないはずで……。
「はっきりしないな。けど、確かにきな臭い奴ではあるよな」
フランクの足元には、芹香が倒れている。ほんの数時間前に蹴りをくれた少女だ。
彼女が殴られる所を北川たちは見ていた。
（くそ。やっぱりトラブルかよ……）
ある程度は覚悟していたし、それを分かって観鈴についてきたのだが……。
だが、まあ良しとしなくちゃならないかもしれない。
とりあえず、芹香の危機を救えたと思うので。
（ていうか、そう思わなきゃやってらんねぇよ）
どう決断したって、俺みたいな優柔不断なやつは後悔する訳で。

だったら、いい事もあったと思うことにしよう。
「おい、あんた!!　天沢郁未ってのはあの中にいるのか?」
フランクは答えずにただ自嘲の笑みを浮かべるだけだ。
(くそ、どうするよ)
スナイパーライフルの方はもう捨てさせているが、握り締めたままの右手が気にかかる。
(だからといってここで撃っちまうのは、どうにも)
「とりあえず……」
観鈴に指示を出そうとして、そこでビルの中から立て続けに二発の銃声がこだました。
「……!!　郁未さん!!」
たまらず、観鈴は走りはじめる。
「おい、ちょっと待て!!」
北川の制止の声にも耳を貸さずに。

往人の目の前で銀髪の頭は確かにはじけとんだ。
やったぜ……俺は……
まだ、天沢郁未という潜在的な敵は残っているものの、とにかく最強の敵を倒した訳で……だが、そこで気づいてしまう。
光点の数が減らない事に、そして、今自分が撃ったものが首だけの存在という事に。
それが坂神蝉丸の頭部であり、本来ならフランクの狙撃に対するフェイクとして少年が用意していた事など、往人の知る由も無い事。
ただ、その異様な光景に往人の思考がとまってしまう。
そして、気づくのが遅れてしまう。
すでに己の銃声によって、人物探知器によるアドバンテージが失われてしまったという事に。
ドンッ
銃声、非常階段口に走るマズルフラッシュ、少年によるベレッタの一撃は、先ほど手当てしたところ

と同じ肩口を貫き、激痛が走る、それでもライフルを手放さずに倒れなかった往人は賞賛に値するが、射撃と同時に近付いた少年のスピードに対応できるはずも無く、その頬に拳がめり込み、往人は仰向けに倒されて、怪我している肩口と、右手を少年の足が踏み潰し、ついにライフルを手放してしまう。
「ガアッ!!」
激痛にのたうつ往人。何とか立ち上がろうとするも、もうそんな力は入らない。
致命傷ではないにしても、けっして軽い傷ではないのだ。
「郁未……大丈夫かい?」
少年は往人を見下ろしたまま、優しく声をかける。
「うん……大丈夫……」
煙の中、往人は郁未をみた。
その目は虚ろだ。前に会った時のあの強い意志の光はもう感じられない。
「その人……」
「ああ、こいつ? 敵だよ。僕らの命を狙おうとしただろ」
「でも……その人は……」
「敵だよ、郁未。敵は殺さなくちゃ」
往人のライフルを拾い上げると、少年は踏み潰している肩口を軸にくるっとまわって、郁未の方をむく。
「……!! 畜生……」
激痛に往人は意識をつなぐ事しかできない。
「郁未がやるんだ。そのショットガンで」
「私が……?」
「そう、君が。そうして楽になるといい」
これは、禊。今までの自分を断ち切る儀式。
本来なら、神尾観鈴がこの役割を果たすはずだった。
大魔法による神奈の弱体化さえなければ、すぐに侵食は進み、観鈴を殺す事で、郁未の侵食は完了するはずだった。

そう、これで侵食は完了するはずだ。殺人という罪を犯す事で。
「さあ殺すんだ。郁未」
その声に応じて、ベネリＭ３の銃口が倒れたままの往人に向けられる――

758　輝きと虚しさ

ただ巨木が、其処此処に立ち連なるのみだった。見上げれば、覆い被さるような高みに茂る、無数の枝葉があるだけだ。
傾き始めた太陽の光を遮断して、僅かに赤みがかった光を通している。湿気を帯びた空気が、暗い原生林を抜けて冷風をもたらしていた。
何よりも、其処を異様な世界に仕立てていたのは、眠るように倒れ伏した人々の姿。
その表情には、何もない。苦痛も、安寧も、後悔も、驚愕も……何も、なかった。おそらく誰も生き残ってはいないだろう、そう思いつつも、スフィーは生存者を探しながら歩いた。
その間に、遠くから聞こえてくる放送を聞いた。
二人の少女から聞いていた蝉丸という男が、戦いを止めての共闘を呼びかけていた。だが、今は彼らに合流はできない。神奈の善の心を探し出して説得する方が先だ。
（何よ、もう！　タイミングが悪いのよ！）
単独でこんな所まで来るはめになったのは、人数不足だから、と割り切った結果なのだ。
腹を立てながらも、死体調査を続ける。
（あれ……〝死体〟？）
ふと、気が付く。いつの間にか、〝生存者〟ではなく〝死体〟を相手にしていた。
（あたし、この人たちの〝死に方〟を観察しているだけかもしれない……）
自分に対する苛立ちから、スフィーは憮然とした表情で大きく溜息をつき、天を仰ぐ。

……ひとりは、さみしい。
親しい人が全員死んでしまった今、生き残る事に
どれほどの意味があるのか。木々に覆われた小さな
空を流れる雲を見送りながら、スフィーは嘆息する。
そして、おもむろに雲へと手を伸ばす。
当然届かない掌を、ぐっと握り締める。
いつの間にか、大人のそれに戻っている大きなこ
ぶし。
けれど、それはもう。
虚しさだけしか、掴めない。
「うりゅ……」
じわり、と歪んだ視界を振り切るように、目をし
ばたいて視線を地上に戻す。相変わらず死因の解ら
ぬ人々が、芝居のようにばたばたと倒れている。ま
るで役者が観客に背を向けぬように、全ての人々が
同じ方向へ同じように倒れていた。
(……お芝居、ね……)
ふと溜息をついた、その瞬間。虫の知らせだろう
か。なんの気なしに、スフィーは振り向いた。
この芝居の観客は、ここに倒れ伏す人々や、その
指導者だとばかり思っていた。
……最初はそうだったのだろう。
でも、今は。
ひょっとして、違うのかもしれない。
役者のひとりが、いつの間にか、全てを仕切って
いたのではないか。
(それが、あなたなのね――)
ゆっくりと、その倒れた人々の脚の先へと、視界
を巡らせる。
無数の巨木が遮る中、狭い狭い空間を。
遥か、遠くまで見通すと。
――何かが、ぼんやりと光っていた。
彼女は独り、立っていた。
輝きは、白い羽根。
夜闇のように黒い、二つの虚空。
そして、こちらを見返す瞳があった。スフィーが

目を合わせたのを確認すると、彼女は薄く笑った。
温かみの無い、純度の高い氷のような――透明な、透明な――微笑み。
ぞくり、とスフィーの毛が逆立つ。
……この感じは、冷気？
顔が、脚が、腕が、瞬時にこわばる。
刀の中に封じられ、祠に据えられた、目を閉じて座した翼ある少女。
そんなイメージを打ち砕いて。
彼女は独り、立っていた。
「あ……あなた……」
スフィーの口は、上手く回らない。
「存じておろう？　余は、神奈……神奈備命だ」

759　そして二人は再会した

少年に促され、ゆっくりとベネリの銃口が往人の方を向く。
うつろに冴え渡る瞳とは対照的に、郁未の手元は定まらない。
拮抗しているのだろう。理性と感情とが。
しかし、それも時間の問題だと少年は踏んだ。時が経てば経つほど侵食は進む。
そして、何より迷いは一時的にせよ、心を弱らせる。
「もう思い悩む必要はない。辛い思いをすることはないんだ」
どこまでも穏やかに、少年は語りかける。
「さあ郁未。共に行こう――」
「……郁……未さ……ん！」
彼方より、突如聞こえてきたその声に。
びくり、と郁未の体が震える。
「……郁未……さ……ん！」
声はわずかに近づき。そして震えが体全体に伝わっていく。
「……郁……未……さん！」

そう。その声は、突き刺さるような優しい記憶のかけら。
その痛みに、郁未の意識は激しく揺れた。
「……なんとまあ、困ったね。神尾観鈴……か」
少年は声の主を思う。観鈴はここに来るだろう。だが、今の郁未に観鈴はまだ殺せまい。
そして、観鈴がいては郁未に悪影響を及ぼす。
「郁未を困らせるいけない子には、とりあえず消えてもらおうか」
呟くと、足元の往人を一瞥し、えぐり込むようにその右肩を踏みつける。
ゴキリと音がして、往人の右肩が外れた。
「ぐあっ……」
往人の呻き声。
少年は往人の上から降りると階段の方へ歩き出そうとする。
(ぐ……観鈴、だと)
往人は激しい痛みの中、紙一重で意識を保っていた。
少年は観鈴、と言った。
目の前で銃を突きつけている女――郁未は、観鈴らしき声が聞こえ出してから様子がおかしい。
そして少年の行動。消えてもらおうか。その一言がリフレインする。
(あの馬鹿……なんでわざわざ、こんなところに来るんだ)
護りたかった者は次々に消えていった。だからせめて、観鈴だけは。
(殺させるわけには、いかない……)
そして、多分これは最後のチャンス。
少年に不意打ちを食らったとき、銃を最後まで離さずにいられた。だから仕込みができた。
何度も意識を失いそうになりつつ耐えた。だから、まだそれは生きている。
郁未を見る。心ここにあらずといった様子だ。今ならわずかな隙をつけるだろう。

少年を見る。そして彼の持つアサルトライフルに、念を集中する。
法術、それはほんのわずかな力に過ぎない。だが……ただ引き金を引くだけなら、それで充分。
(さあ……楽しい人形劇のはじまり、だ)
唐突に、少年のライフルが勝手に発砲した。
「な……これはっ⁉」
立て続けにもう一度、発砲。
片手で、しかも不意を突かれては、発射の反動に耐えるべくも無い。
二度の反動で少年の上半身は回転し、大きくよろけた。
同時に往人が、全身の力を振り絞って跳ね起きる。
「うおおおおおおおおっ‼」
叫ぶ。そうしなければ、動くこともできなかっただろうから。
往人はすぐさま腰の後ろから弾切れのデザートイーグルを抜き放つと、少年に躍りかかる。
少年の体勢は崩れたまま。
立て直す暇を与えず、往人は一・八キロの銃床をその頭部に叩き込む――
――その途端、一発の銃声が横から聞こえ、二人はまとめて吹っ飛んだ。
銃声と叫び声に郁未の意識がはっきりしたとき、目に入ったのは襲い掛かられる少年だった。
操られた意識と郁未の心は同時に同じ判断を下した。
少年を救え、と。
そしてとっさに発砲した。狙いもろくに定めずに。
「……」
倒れ伏す少年に近づく。――息はある。
散弾は少年をも巻き込んだが、偽典の守りもあってか致命傷にはなっていないようだ。
気絶しているのは殴られたせいだろう。
往人を見る。――こちらも、まだかろうじて生き

ている。
直撃ではなかった。しかし、積もり積もった怪我はかなり深刻になっている。
放っておけば死ぬかもしれない。
「……」
郁未は少年を担いで引きずり移動させ、往人のほうを見る。
少し考えて、そしてベネリをゆっくりと――
「――郁未さん！」
すぐ近くから呼ぶ声が聞こえ、郁未は顔をあげる。
やがて煙の向こうから観鈴が姿を現して。
そして二人は再会した。

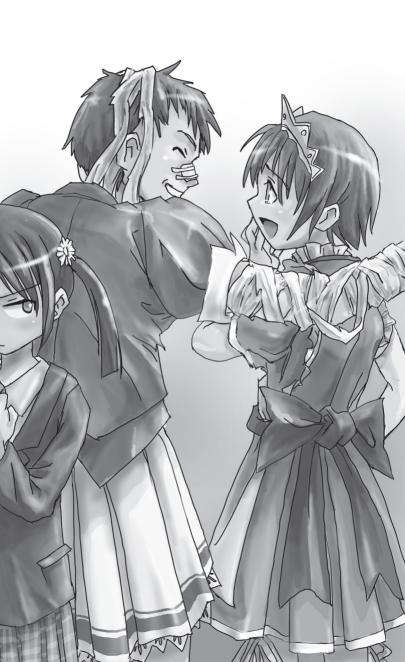
760 手を離さない僕らのために

七瀬彰は東に行った。彰を探しにいっただろうに、何故だか柏木初音はその正反対である西に向かって走っていった。どうしてなのだろうか。
――考えても埒があかない。初音が何を考えているかは判らないけれど、論理的に考えれば自分たちは東へ向かうべきなのだ。柏木耕一の言葉を信じるならば、東の方に彰はいる筈なのだから。
私、観月マナは、柏木耕一の身体に包帯を巻き直しながら、そんな事を考えていた。
考えながら、しかし、自分の中で展開される論理がどうしても形にならない。私は思う。きっと七瀬彰は、東にはいない。初音の向かった方に、彰はいる。そんな予感が私の中にある。まったく非論理的だ。非論理的なのだが、非論理的なものが許されるのが恋愛というものだ。
「初音ちゃんの向かった方に、彰さんはいると思う」
私はそんな淡い予感を言葉にした。
「どうして？　彰は東に行ったんだって……」
「――わからないけどね。乙女っぽく言うなら、恋する女の子のカン、っていうのかな」

耕一は疑念の目を自分に向ける。言葉にしてみるとちょっと恥ずかしい。というか、とても恥ずい。
「……乙女、ねえ」
「……ナニよ、その目は」
わかってる、柄でも無いってことくらい。でも、理屈じゃ説明できないんだから仕方ないでしょ。
「……そうだな。乙女の勘ってやつを信じてみよう。体が回復したら、初音ちゃんを追って西に向かう」
本当は今すぐにでも追いたいというのは、耕一の気配で分かる。けれど、大人しく私の治療を受けているのは、彼の体はぼろぼろで、直ぐに動けるような状態ではないと理解しているからだろう。
「彰は、自殺しようとする可能性が高い」
「……なんでよ」
どうして、どいつもこいつも命を無駄にしようとするの。ほんと、馬鹿ばっか。
「自分が暴走して大切な人を傷つけてしまうことが恐いから——だと思う」
「そんなの、自分勝手すぎるわよ……」
初音ちゃんから鬼という存在を聞いた。その血による暴走のことも。
「そうだな、俺もそう思う。だから、手遅れになる前に俺が必ず止める」
——それにしても、なんて深い傷ばかりなのだろう。相当量の血も流れただろう事が想像できる。簡潔な治療しか為されておらず、常人ならば気を失うどころか、死に至る可能性すらあっただろう。まったく立派な体躯である。この体格がなければ、きっと耕一は死んでいたのじゃないかと思う。私は小さく息を吐き、彼がこうして無事であったことに心底安堵していた。
微妙な雰囲気である。ぺたぺたと男の人の身体を触るのなんて殆ど初めてみたいなものだ。
「アンタ、それにしても、よくこんだけやられて無事だったわね。野生動物もびっくりよ。同じ人間なんて信じられないわ」

「丈夫だけが売り物だからね、……って、あうっ！　やめ、もう少し優しくっ、いたたたたたた」
それをごまかすかのように、私は憎まれ口を叩く。手つきもわざと乱暴になった。最低である。しかし耕一は苦しそうな顔をしつつも、優しく微笑んでいる。そういう顔するの止めてほしい。論理的じゃない。そして突然私の頭を撫でて、
「マナちゃん。――生きててくれて、ありがとうな」
突然そんなことを言い出した。まったく非論理的だ。これだから直感系は困る。だってのに、その言葉を聞いて、どうしてか私まで泣きそうになる。
「アンタこそッ‼　ホントに心配したんだからね‼　無茶ばかりやって‼　命はひとつだけなのよ‼」
泣くのを必死に堪えてまた憎まれ口。まったく非論理的だ。論理系を自称する私がどうしてこんなことを言わねばならないのだ。
「――大丈夫。これからは心配かけないようにするよ。ま、出来るだけ、だけどな」
何故か頬が赤くなる。耕一はもう一度私の頭を撫でると、にこりと微笑む。
……。変な気持ちになる。そう変わらない歳の男に頭撫でられてこんな気分になるなんて、普段の自分からすれば異常に奇妙だ。
なんでよ……。

「――そろそろ、大丈夫かな」
そんな事を呟いて、耕一は身体を起こす。手のひらを握りしめ、何かの感触を掴むような様子を見せた後、
「うん、眩暈は収まった。――そろそろ行こう」
耕一はそう呟いて立ちあがった。その目には穏やかさと強さが同居していて、今までに見た事もなかった、途方もない柏木耕一を私は目の当たりにした。おちゃらけてばかりだったような耕一の、本当の顔は実はこちらなのじゃないかと思う。私は慌てて立

ちあがると、西へ歩き出した耕一に追従した。
さて。
歩き出してすぐ、私はふと気配を近くに感じて振り返った。耕一も同じような気配を感じたのだろう、立ち止まって辺りを見回している。一瞬の緊張。あの放送を聞いて集まろうとした人間の一人だろうか。おそらくそうなのだと思う。何故なら『それ』は、気配を隠そうともしていなかったからだ。
一応警戒して私は後ずさる。耕一は自分の前に立つと「出て来い」と声を出す。右にあった茂みが動揺して揺れる。その動揺は、気づかれたことへの動揺ではなく、むしろ——耕一の声自体に対する動揺のように思えた。そして間もなく、茂みから『それ』は現れた。
「耕一っ！」
「——あずさ?」
長身でスタイルの良い、ショートカットの可愛い女の子だった。変な格好だ。いろいろ荷物を持っているが、手に持ったレーダーのようなものが特に目に付いた。というか、レーダーなのだろうと思う。
あのレーダーで自分たちを探していたのだ。
「……やっと逢えた。レーダーで初音を捜してたら、あんたが近くにいるみたいだったから、」
ああ、もうっ——顔をくしゃくしゃにして、女の子は笑った。言葉を失い呆然とした表情の耕一と、涙を流して喜ぶ女の子。やがて二人は手を取り合い、無事でよかった、今は別行動してるけど。千鶴さんも無事なんだよな。ああ無事だよ、そんな風に明るい声で、私のことなどまったく気にも留めない様子で二人は二人だけの世界を作り出し、手を取り合って喜びあっていた。
……なんかむかつくのは何故だろう。
暫しのダンスの後。
「でだ。再会を喜びたいところなんだが、残念ながら時間がない。初音ちゃんは何処らへんにいるか判

るか？」
　耕一は我を取り戻してそう言う。少女は頷いて、
「わかってるよ。初音は突然西に向けて走り出した。まだ森の中だね。丘の辺りかな。芹香っていう女の子も捜さなくちゃいけないいけど、まずは初音に会いたい。急ごう」
　……結局千鶴姉達と同じ方向に行く事になるのか。少女の口からはそんな呟きが聞こえた。私には意味がわからなかったけれど。

　そうして私達三人は森の中を駆け出した。耕一の体調もあるし、私の足がそれほど早くないこともあるので、それ程の速度ではない。そういうわけで、多少は話をする余裕もあった。
「そういえば自己紹介がまだだったね」
　そう言って少女は笑う。その屈託のない笑みが私の苛立ちを助長する——という事は殆どなく、むしろ素直にいい人だな、という印象を覚えた。
「あたしは柏木梓。こいつの従姉妹だよ」
　そういって爽やかに笑う梓に、私も微笑んだ。初対面の人に素直に笑みが出たのは久しぶりだ。
　大人の女性だなあ。スタイルすごすぎ。人間じゃないわよこれは。信じられない。それでいて顔立ちは子供っぽいところがある可愛い系だっていうんだから有り得ない。耕一さんには勿体無い。いやむしろお似合いなのかも。ああ、何考えてるんだ私。
「私は観月マナ。よろしく、梓さん」
　——私がこの柏木梓と同じ年齢だという事を知るのは、残念ながらもっと後になってからである。

　ともかく、彰と初音の場所に向かうことが先決だ。私たちと彼らは遠く離れてしまったけれど、それでもまだ完全に離れきったわけではない。
　彼らともう一度手を繋ぎ、笑って帰ることが出来ればいいいと思う。

761　魂食らい

斜面に、二つの人影があった。そこは山の中腹だった。
伐採されている様子もないのに、山頂に近づくにつれて木々の高さが増すという、奇妙な植生。それがこの山の異常性を雄弁に物語っている。肩の高さを越える木がちらほらと現れ始めたせいか、小柄なほうの人影が視界を狭められ、不快げな表情を作った。
「……うぐぅ」
この小さな人物は、月宮あゆ。何かに引き付けられるように、乏しい体力を振り絞って、この山頂を目指している。
大きなほうの人影が、腰に手を当てて一息つく。
「ねえ、あゆちゃん？　本当に、こっちなの？」
比べて大きな人物は、柏木千鶴。あゆの周辺で起こる怪奇現象を目の当たりにして、いつになく現実的な思考を捨てて、彼女の主張を優先させている。
先ほどの放送で、今後の方針は決定していた。
（施設に残った詠美ちゃんと繭ちゃんを回収して、梓と合流したら学校に行こう）
放送のあとに聞こえた声が、いまだに殺し合いの続いている事を知らしめていたが、一つの指針として学校を意識する人間は、結構いるのではないだろうか。そう考えての結論である。
……しかし、今は。
あゆの言う「間に合わない」という言葉に、背中を押されている。何故かは解らないが、千鶴自身も胸騒ぎのような、何かを感じている。あゆに投げかけた言葉は、「問い」ではなく「確認」なのかもしれない。
「うんっ、ここのっ、上、だよっ」
「……そんなに慌てないといけないの？」
登り始めはやたらと元気だったあゆだが、今では

肩で息をしていた。上に危険があるのならば、この状態で辿り着いても得るものはない。そう考えて、何度か休憩を提案したが、あゆは山を登り始めてからというものの、今まで以上に急いでいるようだった。
「そう、急がないと、駄目、なんだよっ……って、あれっ？」
断言したあゆが、言葉と裏腹に立ち止まる。
「……あら？」
千鶴も立ち止まって、あたりを見回す。木々は高さと密度を増す一方だったが、ある一線を境にして、全く生えていないのだ。
不自然に開けた視界の先には、再び林が見える。今までの雑木林ではなく、縄と紙を巻きつけた、異常に高い巨木が連なっていた。
「何かしら、これ？」
「うぐぅ？」
よく解らないが、何かある。そんな場所に到達したと二人は確信しながら、首を捻っていた。
暗い林の中で、二つの影は——いや、一つの影と、一つの輝きは——距離をおいて、見つめあっている。影は儚げで、輝きは誇らしげに立っている。
……寒い。それに、苦しい。
スフィーは酸欠状態の魚のように、激しく口をぱくつかせていた。ほんの数時間前には、暑ささえ感じられた空気が、今では真冬のように冷え込んでいる。
「……何を、恐れる？　お主は、余に会いにきたのであろう？」
親しげな口調。まだ幼さの残る声。先の放送よりも小さな声なのに、すぐ隣に居るかのように、明瞭だった。
神奈はあきれたように余裕をちらつかせて、言葉を続ける。
「都合よく、反りの合う人格を探しにきたか？

……よく、考えよ。今の余も、お主の期待した人格も、余の一部に過ぎぬ」
封じられ、動けぬはずの存在が、雄弁に物語る。
スフィーが何も応えないうちから、神奈は先へ先へと話を進めて行く。
「誰しも、心のかたちは平面ではあらぬ。複雑な多くの切り口を持った、巨大な多面体ようなものじゃ。お気に入りの一面だけを説得して、余という存在の全てを掌握できる、とでも思ったか？」
「くっ……」
強力な現在の神奈の意志の前に、スフィーの希望は儚いものであった。そして神奈にとっては、僭越な支配欲にしか映らない。
……いつの間にか、彼女が近付いていていた。
歩を進めることもなく、翼をはためかせることもなく。ただ事実として——近付いている。
「もっとも、着眼点は悪くなかったやもしれぬ。いや、惜しいところであった、かの？　先ほどの外法……あれで、消えたのじゃ」
無感動に評価を下す神奈。それに対してスフィーは、悲壮な顔で尋ねる。
「消えたって……どういうこと!?」
「言葉通りだ。もはや、お主の期待する神奈は存在せぬ。今ここにある余が、唯一にして全てなのだ」
……寒い……こごえてしまいそう。
どうして彼女は、あたしのそばに来るのだろう？
「……お主がここに来たのは無駄足であったろうが、余は歓迎する。その甘美な魂の絶望を、差し出すがよい」
そう言って再び、あの氷のような微笑を浮かべる。
目の前に、彼女がいた。
そうだ、この感じは。
もはや冷気などではない。
「そして余の肉として——」
笑みが、無限に広がっていく。
これは、凍気だ。

顔が、脚が、腕がこわばる。
身体が、精神がこごえる。
「——余に、従え」
神奈が手を伸ばす。
スフィーは微動だに出来なかった。
寒い。寒い寒い寒い。
思考が。あたしの思考が。あたしの思考が、寒さの中で凍てついて……。

夕暮れの空に染みる微かな赤は、まだ予兆に過ぎない。
二つの影は——いや、一つの影と、一つの輝きは——今まさに、重なろうとしていた。

762 鏡合わせの二人

「……来ちゃったの」
呟きが、ぼそり。
覇気が消えて脱力した体が、辺りを巻き込んでセピア色に染まっていくような感じ。自分が自分で無いような感じ。
「……来なくてよかったのに」
だから、届かなかった。
「う………え………」
口元に拳を寄せていぶかしむ。今、なんて言われたんだろう、っていぶかしむ。白い煙に翻弄されながら、その言葉を手繰り寄せようと、ただその言葉を手繰り寄せようと……。
そして、ようやく観鈴の瞳は捉えた。彼女の混濁した瞳を。
「え………」
煙の間隙から覗く彼女の姿は、それぞれにとって異様だった。
一方には、困惑。他方には、諦観。
混濁した郁未の瞳が、まるで壊れたおもちゃを懐かしむように観鈴をなめる。観鈴は、初めて見る彼

女の様相を前に、ただ動けない。
沈黙が、横行する。
「言うこと聞かない子なんだから……」
緩い言葉が漏れた。
観鈴はその言葉にほんの少し、ほのかな安堵を覚えた。でも、何かが違う。違うことが不思議と分かって、だから、その安堵も歪む。その言葉の本当はそんなところにはなかった。厳しいのでなく、優しいのでもなく、生温いのでもなく、ただ緩い。
……別に、どうだっていい言葉だから。
「いくみ……さん」
だから、観鈴にはどう返事していいか分からなかった。言葉どおりにたしなめられたのなら、ごめんなさいとでも言えばいいのだろうに、でも……そうじゃないんだって、何か、分かる。
思いつくことは、彼女の名前を呼ぶことくらい。
「……ホント、何しにきたのよ」
瞳は不安げに揺らいでいた。煙が刺したせいだろうか。それとも、本当に泣いていたんだろうか。
色鮮やかな彼女が、ずいぶんと私とは違う、そう郁末は思う。
「それを言うなら……私か。私こそ、何やってるんだろうね」
観鈴の返事は待たない。それを期待した言葉じゃないから。独り言だから。聞きたくなかったから。
おろおろする彼女は滑稽だけど、それは私に今は必要の無いこと。……だけど、それが出来ない私のほうが、余計に滑稽だと思える。
伸ばした腕の先に罪を隠している。これを覗いたら、観鈴はどんな風に反応するんだろう。
そんな邪悪な自嘲が、不意に口元から漏れた。
「ねえ、わたしを助けに来てくれたの？」
……これは迷いだ。それは何だろう。私が、私であろうとすることへの迷い。じゃあ私って何？　何が天沢郁末で、何が天沢郁末でないの？　それは過

去の私。少なくとも、正しく自分であっただろうもの、誰にも否定できない、私にも否定できない、既に起きてしまった存在のこと。どんなに醜くても、どんなに認めたくなくても。じゃあ、今の私は、この瞬間の私は、私でないのかな？

　そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。私は私だけど、私を認めたくない私がいる。なぜ？

　それは私が認めた私が、本当の私だから。私がこう在りたい、そう願った姿こそが、本当の私だから。……だから、今この瞬間を疑っている。ドッペルに突きつけられた過去を否定して、今この瞬間も否定して、そして未来まで否定して、何だ、私なんか最初からいなかったんじゃない、そう思うことがイヤだから。

　答えは分かっていたんだ。認めたくない私も、私にすぎない。でもそれを認めたくない私もいる。みんな私。それらを結びつける私がいることを信じることが、私が現実と向き合う方法だって、分かっていたんだ。私は……私を好きな私でいたいんじゃなくて、好きな私になりたいと思う私でありつづけようとしているんだ。認めたくないのも、認めたいのも、全部そのせいなんだから。

　揺れ続ける私を、まっすぐ見つめてくる目がある。混雑し翻弄され、途切れそうなほどに儚くても、何かを伝えようと、観鈴は私のことを一心に見つめている。

　それが観鈴の答えだった。天然色の瞳だった。

　私が好きな私は、どんな私だろう。私が在りたいと思う生き方は、どんな生き方だろう。それが私であることの答えになるはずだ。

　……少年。

　彼と一緒にあることが、私であること。そんな感じ。うまく説明できないけど、それが多分、そうだ。

　欲しいものは、少なくとも私が考え始めたとき、もう一つに収まってたのかも知れない。色々なことを通り過ぎてきた。お母さんや、友達や、……敵と

か、変な人とか。みんな合わせて、未練だ。みんなにうまくやることなんてできない。後悔のしっぱなし。だけどそれがいい。後悔の無い生き方が欲しいんじゃなくて、私が私であるということが欲しいだけ。

　だから流れに身を任せよう。多少の傷は仕方の無いことなんだから、流れの大筋にさえ沿っているならそれでいい。

　だからもういいかな？

溶けていこう。私という一つに収斂（しゅうれん）しよう。渦巻いているいろいろな思考も、感情も、一つである私に帰ろう。もともとそうであった、純粋な私に帰ろう。カラーは要らないんだ。セピアでいいんだ。私であることとさえ分かれば、私であることさえ出来れば、彼と寄り添うことさえ出来れば。

　穏やかに融けていく。私が、私に溶けていく。

――――気づかなかった。

彼女の目は、確かに私を見ているのに、私のことを見ていない。届いていないんだ。じゃあ、今、何を見ているの。ああ、そうか――――私に反射した、郁未さん自身なんだ。

「それとも、止めに来たの？　私を」

　視線がずれて、断絶する。郁未の顔が、元いた何かの方へと向き戻る。そして、チャキッ、という小気味いい音を立てて、拳銃が構えられる。するとそれに呼応したように……煙が晴れる。

　荒い息。

　どす黒く滲んだ紅。

　すすに黒く汚れた衣服。

「――――――――え？」

　観鈴は声を詰まらせて、目の前に現れたものを凝視した。

　彼女が見ていたものは。

　彼女が銃を向けているのは。

　目の前に現れたものは。

目にしているこの情景は。
すっかり痛んでしまった彼は。
「――――――――――――――――――――――――――往人、さん」
瞳孔が、キュッと萎んだ。

――穏やかな侵食、気持ちいい。
私のエゴを洗い流してくれる、気持ちいい。
少年が満たしてくれる、気持ちいい。
少年で満ちていく、気持ちいい。
私は今、溶けつつある。
少年との邂逅をきっかけに、消えつつある。
頭の中が、セピアに染まる。
うん、分かっていたもの。
いつかはこうなってしまうって。
ただちょっと早いだけ。
茫洋が私をうずめていく。
違う、私が私にまとまっていく、ただそれだけ。
――私じゃないものが、混じっている。

誰よ、あなた。
こんな気持ちにさせるのは、貴女？

瞬間、少年を救おうとして、発砲。

私のほとんどは彼の中。
とろけるように甘美な存在と共に在る。
それを激しく揺さぶる何かがある。
抑揚？
そう、――感情の。恐らくその反動なのね。
うるさいな。
黙っててよ、今、いいところなんだから。
誰よ、貴女。
私？
神奈？

滑らかに思考が流れ行く。唯一つの方向へ澄み渡っていく。自分への没入から齎(もたら)された理解――神奈

か、少年か、それとも彼女自身か——がベクトルを作り出す。
痛みが摘み取られていく。
それがどこへ向かっていくかは分からない。
分かるのは、私というベクトルだけ。
————————————————禊が終わる。
観鈴は表情をこわばらせたまま絶句している。
死。眼前に突きつけられ、直視することを求められた——死。
誰のものであったとしても、その事実は心を深くえぐる。そして今回起こりえるだろうそれは、一際大きな痛みを彼女に残すだろうことは明白だった。
失う悲しみも、奪われる痛みも、もう十分に知ったというのに。
観鈴の瞳は、いつしか郁未に向いていた。そして、今度は郁未もそれを受け止めた。
「……カラーよね。うらやましいわ」

「え——」
観鈴には、その言葉の意味は分からなかった。
分かるのは拳銃を支えるその手の不自然な脱力と彼女の瞳の不透明が未だ続いていること、それだけだった。
——どうしよう、殺す？　あの子。
いつもなら、そんなことを考えなかった。観鈴を能動的に殺そうとなんてするわけがなかった。
本来なら、誰の命であっても奪おうなどとは考えるはずがない。
……選ぶことは、捨てることだ。
捨てる代わりに、拾えるものがある。
傷つけることで、守れるものがある。
守ることの裏で、傷つくものがある。
いつだって自分で決めてきたじゃない。郁未。
ＦＡＲＧＯに潜り込んだ時だって、お母さんが殺されたことを知った時だって、少年を見つけた時だって。

選ぶことは、捨てること。
指一つ動かさずに人を殺せる不可視の力ではなく、この重たい引き金を引く意味。
選ぶこと。それであってこそ、私はこの銃弾を放つことが出来る。
守ることも殺すことも、全て私が立てる誓い。
決意を、しよう。
私は――。
郁未の瞳に掛かっていた虚ろの影がスッと消えるとともに、再び光が灯る。全身に力がこもり、しなだれた右手が引き金の予感に軋む、手首が締まる。
それは一見、かつての侵食される前の郁未のそれと同じように見える。人工の天然色で色付いていた。
「――――――わよ」
――――守るために、殺そう。
「ダメ!!」
間髪いれずに、観鈴のその返事が響いた。返事というより、叫びに近かった。
「だって、彼を殺さないと」
郁未は倒れている少年に目をやった。
「……彼が殺されてしまうわ」
「そんなことないよっ、往人さんがそんな人じゃないってことは、郁未さんも知って――」
「じゃあ、今の彼の姿は何?」
そういって、往人の姿を指す。
「既に血は流れている……これは紛れも無い現実なのよ」
観鈴はごくりと唾を飲み込んで、泣き出してしまいそうになるのを必死でこらえた。瞳だけは、ひるまずに郁未の目を見続けていた。
――――この子も、選ぶのかな。
「悪いけど、このまま放っておいてもいいのよ。それでも彼、死ぬかもしれないから」
ぎりっ、と我知らず観鈴が歯を食いしばる。
それを見て、郁未は不思議と笑みが零れた。

……なんか、誰かと似てるわね、と。
「助けたい？」
「………………」
観鈴は無言で――――逡巡の後に頷く。
ふと、感じたことがある。それはまるで私が彼女と魂で共振してるような、そんな親近感だ。それは何か超越的な……それこそ不可視の力のようなものに介在されているような気もするし、あるいは偶然がもたらしたこの状況にあるようにも感じられる。互いに誰かを、いや、たった一人の傷ついた男を守ろうとしている。互いに銃を携えている。互いに女である。互いに、ここに在る。まるで合わせ鏡のようだ。この共振はそのせいであるし、この反発もそのせいである。
私は、この子と重なれない。
でも、私はこの子を重ねている。
――――なんだろう、この子。
まるで、私の良心みたいだ。
別に正々堂々とやろうなんて気は無いけど。彼女がそれをやるというのなら、待ってあげてもいいかもしれない。それは彼女の心を挫いたことになるのだから、私の勝ち？　それとも――止めて欲しいの？
私は。
「――――撃てば？」
びくっと震えた。両手で握り締めた拳銃がカクカクと震えを伝える。
「その銃で私と彼を殺す。そうすればそっちの彼も生き残れるかもしれない」
観鈴は震える瞳で往人の姿を見た。傷ついたまま、まるで呼吸さえも止まったかのようにうずくまる彼の姿が目に痛い。答えも、与えてはくれない。
郁未は吸い込まれるように少年のことを見た。意識を失い倒れたままの黒い影。少年は黙したまま、

何も語らない――。
　煙が晴れていく。だが建物を包む炎は、次第にその勢いを増していく。いつ、この場を飲み込んでもおかしくない。
　時間は無い。
「選ぶことは、捨てること」
　迷うことを、否むこと。
　郁未はそう誰にとも無く言った。観鈴に言ったのかもしれないし、あるいは、自分に言い聞かせたのかもしれない。
　観鈴は硬く顔を強張らせている。逆転してしまった立場に恐怖していた。観鈴の立たされた状況は、先ほどまでの郁未のそれと酷似していたから。
　選びたくなんてない、こんなのイヤだ。でも、往人を殺されるのはもっとイヤだ。
　……じわじわと、両手が上がっていく。ゆっくり、ゆっくりと力がこもり、ひじが伸びていき、そして拳銃が自分の目の高さにまで上がる。

「――――いい子ね」
　口元の端をほんの少しつり上げて、郁未は穏やかな笑みを零した。
　観鈴は思わずそれに見とれた。なんていい笑顔なんだろうって思った。
　全ての方向にいい顔など出来るわけがない。思うだけなら高尚だが、実行しようとするならばそれは偽善だ。そんなものはもう通じない。何かを守るために何かを傷つけなければならないところまで、事態は進んでしまっている――そんなことは、もうみんな分かってると思う。でも、本当にそうなのかな。本当に傷つけあうしかないのかな。
　郁未の姿は、不思議に自信に満ち溢れて見える。左手を腰に当て、右手には拳銃。胸を張って、真正面を向いている。うらやましい。そんな風に、カッコよくいられるの。
　でも、やっぱり私にはあわないなって。

観鈴は拳銃を下ろそうとした。
「撃たないの？　――そう。じゃあ、そこまでね」
その言葉とともに撃鉄が落ちる。一瞬の刹那の後、轟音が耳を劈いた。

763　確信、そして……

スフィーの体の中を冷気が駆けめぐる。
そして、一つの影と二つの輝きは次第にその距離を狭めつつあった。
しかし、それは完全に重なる事はなかった。
「……邪魔者が来ておる」
相変わらず冷静な声が響く。
「お主も運のある奴よ」
スフィーは微動だにできない。
「その運の尽きるまで、せいぜい踊っておればよい。我が掌の中で」
捨て台詞を残して、その輝きはゆっくりと消えていく。
そして、その場には何も出来ずに立ちつくしたままのスフィーだけが取り残された。
やがてその地に新たな二つの影が現れるまで時間はかからなかった。

道の両脇に立ち並ぶ巨木。
そして道の上には数え切れないほどの死体。
その死体の群れに時折足を取られながらも、あゆはなお必死に足を進めている。
後ろを歩く千鶴共々、息はすでに上がっていた。
「あゆちゃん。いったい、どこまで行けばいいの？」
「よくわからない、けど……、すぐ近くのような気がするよ」
実は、千鶴も感じ始めていた。
背筋に感じるうっすらとした冷気を。
この先には〝何か〟がある。

それがあゆを急がせる理由なのか、はっきりとは解らないけれども。
二人が山道に分け入ってから何時間経っただろうか。
延々と続く道の向こうに何かを見つけたその時、
「あっ！」
図らずも、二人同時に声を上げた。
二人が見たものは、死体の中でただ一人立ちつくす少女。
ピンク色の髪が、周囲の景色とのアンバランスさを一段と際立たせている。
その少女へあゆが歩み寄ろうとした時、少女もまた地面に倒れ込んでしまった。
「……うぐぅ、だいじょうぶ？」
「……だめ……ここ……危ないから……逃げて……」
少女は、とぎれとぎれに話すことしかできないようだった。

764　凶刃

頂上部は、荒涼としていた。
再び巨木は姿を消し、祠のある岩場がぽつんと存在するのみである。しかも綿密に配置されていたであろう祭器の全てが、乱雑に転がっている。ある物は破壊され、ある物は転がり、既に封印の意味を為していなかった。
「ねえ、あゆちゃん……こういうのは、詳しくないのだけれど……危険な気がしない？」
遭遇後、すぐに気絶してしまったピンク色の髪の女性を背負い、その意に反して千鶴はここまで来ていた。あゆの意思を尊重するという方針を、今になって曲げる気もなかったからだ。
「……お化け出そう……でででで、でもでも、ここ、この中なんだよっ！」
右手と右足を同時に出し、なんば歩きで祠に突進

するあゆ。顔は仮面のように強張っている。それを見て苦笑しつつ、スフィーを安定した岩場に寝かせた千鶴が後を追う。
半ば破壊された祠は、とくに大きなものでも立派なものでもなく、ただその効力だけを期待されていたのだろう。すぐに封じられていた物品が発見できた。
それは、ひとふりの刀。以前の大会で振るわれ、参加者のうち四割と、その使い手を殺戮した凶刃。だが今は、静かに薄青く輝くのみだ。
もちろん、そんな事を知る由もない二人にとっては、ただの刀。場の雰囲気が、それを不気味なものに見せてはいるが、それ以上ではあり得なかった。
「……これが、あゆちゃんを呼んでいたの？」
「うん……たぶん」
なんとなく釈然としない気分で、二人は首を捻っていた。
「呪いの品ね」
ほどなく意識を取り戻したスフィーが、背後からなんの予兆もなく、不吉な事を口走る。
「わわわっ」
「きゃっ」
二人で持っていた刀を、思わず同時にお手玉する千鶴とあゆ。
「もう、大丈夫よ。〝元〟呪いの品、〝現〟魔法の品、だからね」
見かけも大きさも全く違う二人が、親子か姉妹かのようにシンクロしているのを笑いながら、スフィーが訂正する。
「それに、わたしの目的も見つかったわ。もうほとんど消えているけれど、ここに〝居る〟のね……」
穏やかな表情で、刀を抱くスフィー。きょとんとした表情で、その仕草を見守る千鶴とあゆ。
再び笑って、それからスフィーは考える。
「そうだ、説明しなきゃね。うーん、何から言えばいいのかなー……？」

込み入った事情に予測を挟んで、スフィーが現状から推理した結論は以下のとおり。源之助の魔法により、神奈のみならず神奈の封印も攻撃された。それは神奈の意図による現象なのか、魔法自体がそういうものなのかは解らない。その際に神奈の中の、突出した強い意識――すなわち悪意――は封印された刀の中から抜け出る事が出来た。
先ほどスフィーを襲った輝きは、悪意の顕現に他ならない。その悪意を封じ込めていたからこそ、刀は強力な呪いの品であり、今は意識を封じる力はあれど、ただの刀にすぎない。
「あの、スフィーさん……ちょっと、待ってくれる？」
千鶴が苦痛に耐えるかのように目を瞑り、こめかみに手を当てて、しかめっ面でスフィーの説明を止める。
「ハイどうぞ」
「スフィーさん達が先日接触した神奈という存在は、封印されていても大暴れしたのでしょう？」
「そうだね」
「そんな存在の、悪意の部分が抜け出てどこかへ消えたというのは、拙いのではないかしら？」
「そうだね」
「しかも、あなたを取り込もうとしたという事は、実体を得て行動しようと考えているのよね？」
「そうだね」
「そうですか」
「そうだね」
「……」
「……」
「……うぐぅ」
淡々とした口調で語られた厳しい事実に、がっくりとうなだれる千鶴とあゆ。それを気にしているのか気にしていないのか、スフィーはとにかく説明を続ける。
「だけど、あのとき暴れなかったという事は、神奈

はまだ万全ではなかったのだと思う」
　先程の悪寒を思い出したスフィーは体を身震いさせる。万全だったらどうなっていたのだろう。
「全ての意識を統合できた訳ではないみたい。彼女が〝消えた〟と言っていた他の意識も、この刀の中で微弱に残っているみたいだし」
「そうだね、聞こえるよっ」
　ころりと表情を変えて、あゆが笑顔で賛成する。あゆを呼んだのは、神奈の残された善意なのだろうか。
　唯一漠然とした感覚でしか捕らえられない千鶴は、ほとんどお手上げ状態なのだが、一応の確認を取る。
「それで……出て行った神奈は今どこに行ったと思いますか？」
　これには流石にスフィーも考えこむ。
「……たぶん、自分が取り憑ける誰かのところだと思う。例えば、自分との繋がりが強い人。もしくは、死んでたり意識を失ってる人とか。そんなところかな？」
　不思議現象の理解に苦しみながら、千鶴はなんとか噛み砕いて理解する。
「あまり限定できていない気もするけれど……あと一つだけ。もし、その神奈に出会ったら、どうすれば良いの？」
　――沈黙。
「あなたには、解っているのでしょう？」
「……うん」
　溜息、ひとつ。
　いや、スフィーのものと合わせて、ふたつ。
「……私にも、想像がつくわ」
「物品の中に隔離できたら、あたしでも封じられると思う。他に芹香っていう黒魔術師や往人っていう法術師もいるし。後はＣＤを集めて魔法陣を起動することができれば……」
　二人で空を見上げる。
　虚空を舞う神奈を睨むように。

いま可能な対処方法は、一つしかない。
実体のない神奈に対して可能な処方は——斬る、ことだ。
この刀で、彼女の存在そのものを斬る。それしか神奈を抑える術はない。
もちろん、意識だけが浮いている状態でＣＤによる攻撃をかけても、神奈は滅ぼせるかもしれない。それは、期待でしかないのだが。

「あら？」
数瞬の後、千鶴が少し驚いた顔をスフィーに向ける。
「ん？」
「ＣＤの存在、あなたも知っているのね!?」
「うん。三枚持ってる人と一緒に居たから。岩山の施設でしたっけ？　確かそちらに向かってたから、そのうち辿り着くんじゃないかな？」
「それなら神奈が、誰かに取り憑く前に処置できそうね」
にこりと笑う千鶴。
一抹の不安に眉をしかめるスフィー。
「そうだといいけど……」
「……？」
北川はちゃんと目的地に着いているのだろうか。
「ああ、それから！」
「はいー！」
固まりかけたスフィーにネタを振る千鶴。
「芹香さんと、知り合いなの？」
「ええ……と言っても、この島に来てからの知り合いだけど」
「何度かお話した事があるんだけれど、物静かな、いい娘よねー」
「物静かな……うりゅ……」
「……？」
芹香は、いま。

「それで！」
「はい――！」
再度硬直するスフィーにネタを振る千鶴。
「今ごろ、私の妹の梓が芹香さんのところに向かっているはず」
梓は、いま。

765　母

「撃たないの？　じゃあ、そこまでね」
そして、銃声が響いた。
弾丸を受けてよろけたのは、郁未。
撃ったのは――
「観鈴ッ！　伏せときや！」
「お母、さん……？」
――神尾、晴子。
時間は少し遡る。

それは放送を聞いて晴子が喫茶店を発ったあと。
放送とおかしな声に導かれ、辿り着いた先には死体が二つ。
（な……どういうこっちゃ、これは）
手近な建物に隠れ、しばらく様子をうかがった。
そこに現れたのはあの名も無き少年。
その少年が、死体から首を切り取って持ち去るのを見た。
（首？　何をする気なんや、あいつは）
なんにしろ、彼が危険な存在であることは間違いないだろう。
やはりあの少年は敵だったのだろうか？
観鈴も彼に……殺されたのだろうか？
（いや、まだ解らん。勝手に決め付けて絶望するのはもうええわ。この目で確かめる。まずはそれからや）
晴子は、唯一の手掛かりである少年を追った。
迷い、見失い、爆音と煙を目印にホールを昇る。

再び少年を見つけたときには二人の男は倒れ伏し、一人の女が立っていた。
「——郁未さん！」
そして、そこに観鈴が現われたのだ。

郁未と観鈴が語りはじめたのを聞いて、とりあえず飛び出すのはやめた。
(観鈴があんなに執着するなんて、いつの間に仲良くなったんやろ)
しかし、今は銃を向け合っている。
殺し合おうとしている。
(観鈴は……小さい頃からひとりぼっちで、ずっと苦しんできた。友達だって片手の指で数えられるほどしかおらん。なのに、それでも殺し合えっちゅうんか)
やがて、観鈴が残酷な二択を迫られる。
『その銃で私と彼を殺す。そうすれば、そっちの彼も生き残れるかもしれない』

郁未が、そして観鈴までもが引き金を引こうとするのを見て、たまらず晴子は発砲した。
銃撃をその身に受け、郁未はよろける。
「観鈴ッ！　伏せときや！」
「お母、さん……？」
観鈴のほうは、本当に発砲する気だったのかは解らない。
だが、もし撃つ気だったのなら、友達をその手で撃ったという事実はいつまでも観鈴を苦しめるだろう。
撃たなければ往人が死ぬ。どちらにしても観鈴は苦しむしかない。
(あの子は、なんでも一人で抱え込んでしまうからな……)
郁未は体勢を立て直すと、晴子に向かって散弾を撃ちこんだ。

散弾が晴子の隠れた壁の端を削り飛ばし、その破片で一瞬晴子の視線が遮られる。
その隙に郁未は少年を背負う。
晴子は舌打ちした。煙と破片に紛れ、壁の影からでは郁未を狙う事が出来ない。

（あの子はもう充分苦しんだ。それでもまだ苦しみが避けられないというんやったら、ウチが観鈴の代わりに苦しんだる。ウチが観鈴の代わりに手を汚す。エゴと言われても、過保護と言われても、自己満足と言われてもかまわへん。それで、観鈴がいつか笑ってくれるのなら――）
「ウチはエゴイストにでもなんにでもなったるわ！」
晴子は物陰から飛び出すと、郁未に三度発砲する。一発は外れ、残り二発は背負われた少年に命中し――そしてあらぬ方向へ弾かれた。９㎜ショートでは偽典に対して力負けしてしまうのだろう。だが、晴子はそんな事を知らない。郁未は振り向き様にベネリを撃つ。晴子は物陰に転がり込んでなんとか回避する。
やがて、回り始めた煙に紛れて、郁未は後退していく。
そして後を追おうとした晴子を牽制するように、一発、二発と散弾を撃ちこんだ。
晴子がなんとか階段まで辿り着き、下の階を覗くと、ちょうど郁未はこちらに銃を向けているところだった。
手すりが吹き飛び、晴子はそれを避けようと大きくのけぞって後ろに転がる。
もう一度覗いたときには、もう郁未の姿は見えなくなっていた。
（行ったか。……あとは、炎に巻かれる前にここを逃げ出さな）
振り向くと、観鈴がすぐ近くで晴子を見つめてい

た。
「お母さん……」
「観鈴……無事でよかった……」
晴子は観鈴を抱きしめたかった。だが、今は出来ない。
まだ自分には、郁未を——観鈴の友と呼べる人を撃った、その硝煙の匂いが立ち込めているから。
「なんや言いたいことがあるのはわかる。……文句は後で聞くわ。とりあえずは、居候をなんとかせんとあかんやろ」
「う、うん……そうだね」
ぱたぱたと往人の元へ駆けていく観鈴を見て、晴子は思う。
この先、観鈴が心から笑える日が来るだろうか？
「……それにはまず、生き残らんとな」
炎はますます盛っている。余裕はあまりない。
晴子は懐から包帯を取り出すと（耕一を手当てした余りだ）、往人のほうへ歩き出した。

ホールを逃げ出した郁未は、少年を背負ったまま街の裏通りを駆けていた。
「盾代わりにして、悪かったわね」
未だ気を失ったままの少年に話しかける。
（こいつを護る）
それが神奈の意志なのか、自分の意志なのか、もうはっきりとは解らない。
だが、浸食される前の自分は。
（こいつのことを大切に思っていた。愛していた。それだけは確か）
ならば、それでいい。
神奈など私は知らない。
自分の意志で、こいつを護る。
それでいい。
観鈴、そして耕一……今まで出会った人たちの顔が、浮かんでは消える。
なぜ、私は観鈴を撃たなかったのだろう。
期待していたのかもしれない。自分を止めてくれ

る事を。
（……でも、次に会ったときは、もう殺さなくてはいけない）
それを思うと、まだわずかに胸が痛んだ。
（もう銃で撃たれても痛みを感じないのに、そんなことで痛みを感じるなんて）
それはきっと、まだ自分の心が残っている証なのだろう。
ならば、それでいい。
この痛みもまた、私なのだから。
自分の意志でこいつを護っていける。
それは幸せなことなのだから。
気がつけば空は夕焼け。街並みをただ赤く照らしていた。
それは禍々しい血の赤とは違う、どこまでも穏やかな赤だった。

766 contradiction

「よっしゃ！　これでどうだ！」
G．N．が声をあげた。
するとメインモニターには「二十九番　北川潤」という文字と一人の少年が制服にカレーの汁を飛び散らせながらカレーうどんをすすっている写真が映し出された。
「どうだ！　参ったか！　ワシにかかればこの程度のこと朝飯前よ！」
コンピュータから自慢げな声が漏れる。
「こいつがCDをもってるわけ？」
「ああ、残りの三枚。全部この坊主が持ってるみたいだな」
「ふ～ん、そうなんだ。じゃあそのひとをさがせばいいわけね」
「お嬢。『ありがとう、Gちゃん。あなたは素晴ら

しいわ！』くらい言えないのか。人が折角やってやったのに」
「ふみゅ〜ん！　なんでわたしがそんなこといわなきゃいけないのよ〜！」
「まぁ、それは冗談だけどな。あ、そうそう。お嬢ちゃん」
「なによ〜」
「ワシが起動する前に誰か知らないが参加者が島中に向けて放送をしてたが、そのこと知ってるか？」
「なんのこと？」
「あらら、やっぱり聞いてなかったか。ま、ワシの記録データに残ってるから聞かせてあげようではないか」
「いいわよ、べつに」
「遠慮するなって。う〜ん、やっぱりワシはいい人だねぇ」
「だから、いいっていいってるでしょ〜！」
「それではスタート！」

『――心当たりのある者は、是非とも名乗り出て欲しい。その知識と、能力に期待する！』
「うわぁ！　すごい！　これでわたしたちかえれるんだ〜！」
　放送を聞き終わった詠美は興奮した口調でそう言った。
「……おいおい、お嬢。それ、本気で言ってるのか？」
　G．N．が呆れたような声を出した。
「なにいってるのよ、いまのきいたでしょ！」
「あ〜、お嬢。君はあの放送が何かの罠だとかそういう考えは持たなかったのか？」
「へ？」
「ハァ〜。やれやれ……」
「な、なによ〜！」
「この島で三日も生き残っているなら、普通はそういう考えに行き着くと思うぞ」

「ふ、ふみゅ〜ん……」
「お嬢。一言だけ忠告しておくが、そういう甘い考えは捨てないと間違いなく死ぬぞ」
「で、でも！」
「現にこの放送をした場所に三人いたんだが、そのうち二人はもう死んでるぞ」
「……」
「殺したのは残った一人のようだし、あの放送で出てきた奴を殺すつもりなんだろうな」
そこで一旦言葉を止めた。
詠美は言い負かされたのが悔しいのか既に涙目になっている。
「この島はそういう島なんだよ、お嬢。生き残りたかったら他の奴を殺すのが手っ取り早いしな」
「どうしてそういうことというのよ！」
「どうして、と言われてもなぁ。ワシが何か間違ったこと言ったか？」
「ふみゅ〜ん」
「ほれ、ワシとそこのロボットはＣＤの解析をしなきゃならんから。お嬢はあっちの子供の所にでも行ってきなさい」
子供をあしらうような口調でＧ．Ｎ．がそう告げた。
「ふみゅ〜ん！　むかつく〜！」
「みゅ〜！」
「にゃ〜……（いっそ殺してくれ……）」
「なによあいつ〜！　ちょっとあたまいいからってなまいき〜！」
「みゅ〜？」
「ばっさばっさ（ぽち君、何かあの子、僕たちの方を見てるんだが）」
「しゃ〜、しゃ〜（逃げた方が良さそうね。あいつみたいになりたくないし）」
「ばっさばっさ（賛成だな）」
「やっぱりコンピュータに、にんげんのきもちなん

かわかんないのね」
「みゅ～♪」
「あ～！　むかつく～!!」

「お～い、とっとと始めるぞ」
ワシはＣＤの解析を始めようとロボットに声をかけた。
「あ、あのですね」
「ん？　何だ？」
「どうしてあんな事言ったんですか？　詠美さんが可哀想ですぅ」
「ワシは事実を言ったまでだぞ」
「でも……」
ロボットは、まだ何かを言いたそうな様子だった。
「お前さんもロボットらしからぬ考えを持ってるのう。そう言えばＨＭＸ—12には感情があるらしいな。その影響か？」
「わ、分からないですぅ。スミマセン～」

「ま、そんなことはどうでもいい。とっととＣＤ解析始めるぞ」
「は、はい～」
「んじゃ、まずお前さんが解析した分のデータをよこせ」
「分かりました～」
あ～、そろそろ放送の準備も始めにゃならんなぁ。同時進行で進めておくかな。
……にしてもワシも何であの嬢ちゃんにあんなこと言ったのかね。
プログラムされたこのゲームを取り仕切る、という任務からすれば、ああいう忠告を参加者にするのはよろしくない、と論理的に出てるんだがなぁ。
前に起動したときにはこういう思考矛盾は出なかったはずだけど、おかしいな。
何ぞバグでもあるのかねぇ。
後から調べてみるかね。

767　糸口

「我々は手を組んで立ち上がるべきなのだ!!　我が意に賛同する者は、学校に集って欲しい。そして我らが希望に反する者どもよ、決着をつけようじゃないか!!」

島の最北にある灯台。その、最深部の管制室に人影が二つあった。

「蝉丸さんだね……」

手近にある椅子に腰掛けながら七瀬は呟く。

その言葉に晴香は無言で頷く。

『学校は、市街地南部に広がる山の東側にある！　街から山を見て、その左だ。繰り返す。学校は市街地の南にある山の東だ!!』

「学校？　そんなもんが、この島にあるの？」

同じく適当に座った晴香が七瀬に尋ねる。

「あ、うん。まあね。私は行ったことがあるけど……」

そう言って、七瀬は曖昧に微笑む。

晴香はその表情と言葉のニュアンスから触れられたくない話題だと察し、それ以上突っ込んだ話は聞かなかった。

(死体を見て『ギャー』って悲鳴はないわよね。乙女として……)

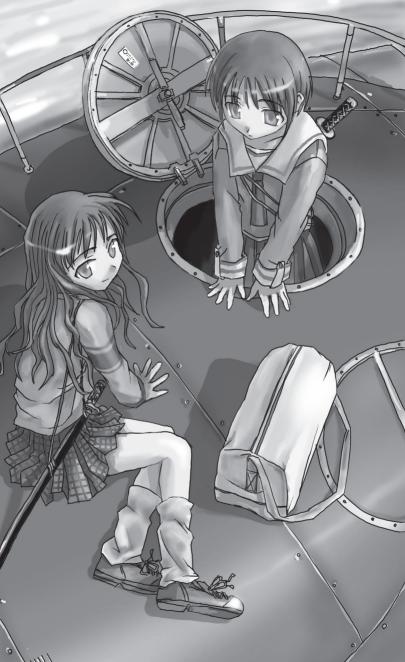
『恐らく既に知らぬものはいないだろうが、我々の中には多くの異能者が存在する。中でも現在求められているのは〝魔法使い〟だ！　心当たりのある者は、是非とも名乗り出て欲しい。その知識と、能力に期待する！』

「異能者と魔法使いねぇ……。そういえば、一応、

晴香も異能者なんだよね？」
「一応って、まあ不本意ながらね……」
晴香がＦＡＲＧＯに入信したのは兄を捜すためであり、『不可視の力』を求めてではなかった。
『不可視の力』は兄が失踪する原因の一端を担った忌まわしい物。それなのに、自分が使うようになったことは運命とは皮肉なものだと彼女は思っている。
「そういえば、あんただって、なんか特殊な力があるんでしょ？」
晴香のその言葉に七瀬は大きく首を横に振る。
「まっさかー。私は普通の女子校生よ」
（普通の女子高生が鉄パイプやポン刀をブンブン振り回すの……）
晴香はジト目で七瀬を見ながら、彼女の『普通』という言葉を信じないことに決めた。
放送が終わり、二人は改めて管制室を調べた。
いくつものモニター、いくつもの端末。
そして、数多くあるスイッチ類。
コンピュータ関係に疎い二人は無闇に端末に触ることはせずに、まずはスイッチに書いてある文字を読んでこの施設の特性を把握しようとした。
「こんなことだったら北川を連れてくるんだったわ。あいつコンピュータに強いし……」
「Emergency Callか。きっと、非常警報のボタンみたいなものね」
もっとも、それらは欧文で書かれているために、ごく簡単な英語で書かれているものしか解読できなかったが。
「ちょっ、ちょっと七瀬、来て」
部屋の隅にある端末を調べていた晴香が興奮した声で手招きをする。
「なに？」
そして、晴香が指さしたボタンは他のものと違い、プラスチックの封で覆われていた。
簡単に使えないように、封を割らなければ押せな

いようになっている。それだけ重要なボタンだということだ。
「ふえー、なに、このボタン。さーふぇいす、とぅ、えあー？」
「Surface-to-air　日本語に訳すと地対空」
七瀬はその意味を察し、ギョッとする。
「えっ！　だとすると、これ……」
「そう、ミサイルよ」

二人はしばし言葉がなかった。
いくつもの銃器や数多くの管理者側の兵隊を見たが、まさかこんなものがあったとは……。
このプログラムは本当にただの金持ちの道楽なのだろうか？
そんな事が彼女たちの頭に浮かんだが、真相を予測することは、まず不可能であろう。
「これで、脱出の手段が一つ増えたわね」
晴香の言葉に七瀬は首を傾げる。
「どうやって？　まさか、あれに乗っていくとか言わないでしょうね？」
その的外れの言葉に晴香は『ふう、やれやれだぜ』、と言わんばかりに肩をすくめる。
「なに、頭あったかいこと言ってるの？　そんなわけないじゃない！」
「じゃあ、どうるのよ」
くちびるを尖らせて七瀬は反論する。
「いい？　この島がどこにあるか知らないけど。地球上にあるのは間違いないわね」
「当たり前じゃない」
「じゃあ、どこの国とも分からないミサイルが発射されたら、今の地球ではどうなる？」
「そりゃ、近くの国か、某大国が調べに……そうか！」
「そう、地面にＨＥＬＰかＳＯＳを大きく書けば、救助が来る」
出来の悪い生徒がようやく解答を導き出したこと

に、晴香は満足そうに頷いた。
思いがけず潜水艦以外の脱出法を二人は見つけた。だが、脱出の選択肢は多いにこしたことがないので、さらに探索する事を決めた。
そして、通路を先に進む。
管制室に人がいなかったからこの施設は無人かもしれないが、二人は慎重に懐中電灯を点けず、警戒して歩いていく。
「なんかジメジメしてきたわね」
「この先かしら、潜水艦は」
「そうね」
そう小声で二人は話し合う。
初期の目的である潜水艦を見つけることが出来そうなので二人の足取りは軽い。
やがて、潮の香りが匂い始め、狭い通路が終わった先には岩場をくりぬいたような天然の港があった。
そして、そこに一隻だけ係留されていたのは、
「あ、あれ？」
「なに、あのへちょいの⁉」
長さが二十メートルにも満たない丸く小さな潜水艇だった。
意気消沈する二人だったが、せっかくここまで来たのだから、と調べてみることにした。
「なんだか、三人か詰めて四、五人ぐらいまでしか乗れないわね」
「でも、そんなに乗って空気は保つの？」
上部にあるハッチを開けると見かけ以上に艇内は狭かった。本来は二人乗り用なのだろう。
「えっと、動かすのは、どうすんだろ……」
「ちょっと、あんた。適当にスイッチを押さないでよね」
七瀬は操縦席を見渡したが、車の免許すら持っていないので、もちろん動かし方など分かるはずもない。
「分かってるわよ。ちょっと見てるだけだってば。

って、晴香押さないでよ」
「狭いんだからしょうがないじゃない」
「しょうがない、って言っても……きゃ！」
晴香に押され、七瀬は操縦席の右側にある黒いパネルを押した。
すると、
「指紋、照合できませんでした。お手を拭きになって、もう一度お願いします」
と、艇内のスピーカーから無味乾燥な音声が聞こえた。
「……出るわよ、七瀬」
「えっ？　あ、うん」
その合成音声の意味を理解した晴香はため息をつき、艇外に出ていった。
今までの通路をたどり、二人は灯台の入り口に戻ってきた。
もちろん、地下への入り口は開けたままである。
「ま、かなりの収穫はあったわね」

二人は久々に浴びた陽光の下で大きく伸びをする。
「そうね。でも晴香。あいつ、言うことが大げさだったね。潜水艦って言うから、みんなが乗れるぐらいのものかと思ったのに」
「まあ、あいつは物事を大きく言うのが好きそうだし。まあ、小人にありがちね」
そう言って、晴香は歩き出し七瀬も続く。
二人は別の所にある潜水艦ＥＬＰＯＤの存在を知らない。
「それに、あの船動かせないし……やっぱりミサイル撃つしかないのかな」
「でも、あれを動かす手は、あるにはあるんだけど……」
「手って。どんな手？」
七瀬が身を乗り出して聞く。
「手を持ってくる手」
「はあ？」
「あれのキーロックをはずせそうな人の手を持って

来るのよ」
「げ！」
　そして、二人は脱出についてあれこれ話しながら、事の成果を皆に話そうと学校へと向かった。
　呼び出した本人が、既にこの世にいないことも知らずに。

768　The day will birth again and again.

　風が吹いていた。ここ数日の暑さとは裏腹に、今は若干の肌寒さを感じる。夕暮れの海から吹き付ける微弱な風が、わたしの心まで、くるくると回す。風車が回るように。風鈴が鳴るように。弱い風は、――吹き付けることを止めようとしなかった。
　夕陽を背にして七瀬彰が立ち尽くしている。わたしは眩い夕陽も目に入らず、ただ目の前の愛しい人のことを見ている。西の空。この焼き付くような赤い空の下で、わたし達は再び、逢う事が出来た。自分に背を向けて立ち尽くして、言葉一つ発することなく七瀬彰は立っている。見るも無残なぼろぼろの姿で、そのくせ何も苦痛を感じていないように背中を見せて――屹立していた。
　風の冷たさとは関係なく、わたしの背中に寒気が走っている。そしてわたしは今、この寒気の理由をはっきりと理解している。自分の今感じているものの正体について完全に把握している。
　寒気の正体が「これ」である以上。
　わたしに出来る事は一つだけだった。

　当然僕は、背後に近づいてくる何者かの気配に気付いていた。鋭敏さを極め切った感覚は、それが誰であるかという事も手に取るように判らせた。感覚だけの問題ではない。ここにやってこれるとすれば、彼女以外には有り得ないとも思っていた。
　この思いを愛と呼ぶのは止めようと思う。

夕陽が眩しかった。赤く穏やかな光は、まるで僕の顔を見て哂っているようで、ここまでに僕が犯した愚行を嘆いているようで、僕たちがやってきたこと全てを見て泣いているようで、どうにも決まりが悪かった。太陽はずっと、僕のことを見てきた。

僕は振り向くことが出来なかった。顔を見たら泣き出してしまいそうだった。けれど、振り向かなければならない。この赤く染まった空の下で、僕は彼女に、柏木初音に送らなければならないものがある。

——逃げなんだとは判っているけど。

僕は君に『最後の言葉』を贈ろう。

ごめんね。ずっと護ってあげるって約束したけど、もう、約束守れないね。守る資格もないし、守る勇気も僕にはない。だから、君にあげるんだ。

弱い風が僕の身体と心に吹き付ける。僕は自分を見つめ続けてくれた太陽に、小さなウインクをして見せた。不器用なウインクは、きっと太陽には届かなかったんじゃないかと、後になって思う。

僅かの沈黙の後、躊躇うような素振りを見せながらもゆっくりと振り向いた七瀬彰は、鼻の頭を掻きながら、少しだけ微笑んで言う。

「よく、ここが判ったね」

こくりと頷いて、わたしはぎゅっと自分の両手を胸の前で絡め合わせる。まるで祈るような姿に見える。祈っても何も解決しないことは判っているし、そんなつもりで手を絡めたわけじゃない。

心に、勇気を。

「そういえば、初めて出会った場所にすごく似ているね、ここ」

彰はこちらを向いたけれど、自分の顔は見ていないようだった。自分の後ろの何もない空間を見て喋っているように見えて、初音は戸惑う。しかしすぐに理解。彰もまた、自分と向き合う勇気を振り絞ろうと必死なのだ。よく考えてみれば自分も彰の顔をまっすぐに見ることができていない。

心に、勇気を。

「でも実際は全然違う。あの時は昇りゆく朝陽を見ていたけど——今見ているのは、沈みゆく太陽だ。——考えてみれば、とっても短い時間だったね」
二人の間には手を伸ばせば届くほどの距離しかない。けれどどちらも歩み寄ろうとはしない。この距離が自分と彰の距離なのだ。高い崖の上、森と暗い空間を背にしたわたしと、海と赤い空を背にした彰。
「太陽が昇って沈む。その程度の、短い時間しか、僕たちは一緒にいなかったんだね」
わたしはやっと口を開く、
「でも、すごく楽しかったよ」
「僕も、楽しかった」
彰はわたしの声を聞くと、少しだけ笑ったように見えた。錯覚ではないと信じたい。
「——でも、終わりだ」
彰は手を伸ばしてわたしの肩に手を置いた。
「これ以上一緒にいる事は出来ない。僕の心はだんだんおかしくなってきている。こうやって君の傍にいるだけで、君の事を傷つけてしまいそうなんだ」
彰は笑う。すごく空虚な笑みで、わたしの目を見ようとせず、そんな風に言った。
「僕は君の盾になりたかった。君の事をずっと護っていきたかったけど、それも無理みたいなんだ。僕はもう死ぬつもりだ。君の事を傷つけて、殺してしまう前に。自分で始末をつけようと思った」
わたしもまた、彰の顔を見ていなかった。わたしは彰の背後に広がる海と空を見ていた。鳥の一羽も飛んでいない、雲の白と太陽の赤だけが輝く空だった。ただ、彰の吐く言葉だけを、砂を噛むようにして心で咀嚼する。
「何となく、僕らがここに集まった理由が判った。僕達は日が昇る場所で出会った。そしてほら、太陽が沈んでいくだろう？　——きざなことを言えば。この太陽と同じように、僕らの邂逅も終わりを迎えるべきなんだ」
そして彰は目を閉じ、言葉を止めた。

寒気の正体は、やはり。
彰が死ぬことへの恐怖だったのだ。

僕は目を閉じる。目を閉じて、一本だけ残った勇気の矢を握り締め——それを初音の胸にぶつける覚悟を決める。目を開き、逸らしていた目を初音の目に合わせる覚悟を決めた。
「さよならだ、初音ちゃん」
言うべき事は、彼女に送る最後の言葉だった。彼女がこれから、しっかりと生きていくために言わなければならない事だ。
勇気の矢を、僕は言葉にした。
「本当は——言うべきじゃないかも思ったんだけど」
言わなければならない。それが僕にとって身を切られるような嘘でも。どうせ僕は死ぬんだ。どうして傷つくことを恐れなければならない。
「君の事好きだと言っただろ。あれ、嘘だよ」
大好きな人に嘘を吐くのは。——そうすべきべきだと自分に言い聞かせても、すごくすごく嫌だった。
「君に新しい日常をあげるとも言っただろ？　言うまでもないけどさ、あれも嘘だ」
君は聡明な子だから、僕の言葉の意味もすぐに理解できているだろうと思う。
「君を利用しただけさ。貧弱な僕なんかがなんとか生き残るためにはね、そうでもしなくちゃどうにも出来なかったのさ」
君は聡明な子だから、僕のこの言葉がただの嘘だという事もすぐに判ってしまうのだろうと思う。
「大体さ、僕が君みたいな子供を相手にするわけがないじゃないか。ロリコンじゃあるまいしさ」
そして何より、君はすごく優しい人だから。嘘だと判っていても傷ついてしまう、優しい子だから。
「本当はこんな事言わないでさよならした方が、卑怯者の僕には相応しかったかもしれないね」
自嘲の笑いは、きっとそれは嘲笑の笑みとそれ程

違わない、虚しくて無様な笑いになるだろう。考えるだけで笑えてくる。

「最後まで素敵なお兄ちゃんでさよなら。茶番劇だね」

僕は自嘲気味に笑う。まるで彼女を嘲笑うかのような笑顔に見えていると思う。

「それでも、まあ、最後だから本当の事を言っとこうと思ったんだ、せめて最後くらい正直者になってさ」

初音ちゃん。君にどうしても言いたい言葉があるんだ。誰よりも優しい君に言いたい言葉が。けれど、けして言ってはいけない言葉なんだよね。言ってしまえば僕は今度こそ——最低になる。

「まあ、君がそんな事考えるわけがないとは思うけどさ。僕が死んだ後、後追いとかはやめてくれよ？」

人は、強くなくちゃ生きていけない。弱い人は、生きていく事も許されない。それはこの島だけじゃなくて、すべての場所で適応されるルールだ。

「そういうのって気色悪いんだよね。っていうか、君みたいなのに後追いされても何も嬉しくないんだ。勘違いで人のこと好きになって、勘違いで死ぬなんて馬鹿馬鹿しくない？　はは」

だけど。人間ってさ、優しくなければ、生きていく価値はないんだよ。君はすごく弱くて、これからの人生で苦労したり挫折したりすることがあると思う。けどさ。君以上に生きる価値のある人間なんていない。絶対に。絶対にいないんだ。

「まあ、そういうわけだからさ。君の事なんて好きでも何でもなかったけど、まあ、やっぱ結構な時間一緒にいたわけだから、情も少しはある。はは、卑怯者のくせに勝手な奴だなー僕は」

生きて欲しい。生き残って欲しい。優しさなんて覚えていない僕なんか忘れて、優しさを周囲に振りまいて、生き残ってほしい。

「こんな僕の事なんか忘れて。それで、——まあ、生き残ってくれると嬉しいかな。騙されて騙されて

騙され通して、そいで死ぬなんてのは流石にちょっと可哀想だしね。うわ、中途半端なところで罪悪感だよ。僕は相変わらず最低だな。——ま。僕はきちがいになる前に死ぬ事にする。君を殺す前に死ぬことにするよ。さ、判ったら行って。耕一だって怪我してるし、手当てしてやらないと大変なことになるよ」
　君が生き残れば、それがこのくそったれゲームに対しての最大の勝利になるんだ。
「早く行けよ！　僕が死ぬところなんて見たくないだろ？　崖から飛び降りてぺちゃんこのトマトになった姿なんて見たくないだろ？　気持ち悪いだろ？」
　——言わないといけない事はすべて言った。言ってはいけないことも言わないで済んだ。
　微動だにしない初音をこれ以上見つめることがつらかった。もうどうでもいいや、そういう素振りを見せて僕は彼女に背を向け、赤く広がる空を見た。あと五歩。それで僕はこの赤い空と海の間に落ちていける。それはやっと訪れる解放だと思った。
「死ぬところ見るなって言ってるだろ？　僕のこと一時でも好きだったんならひとつくらいお願い聞いてくれよ」
　最後にそう言って、目を閉じる。初音が歩き去ったあとで、僕は中空に身を放り出そうと思う。まだ初音は動かない。まるで動かない。もう何も言わずに待とうと思う。時間が過ぎれば、彼女はきっと自分の想いを汲み取って、歩き去ってくれると思う。初音は動かない。僕は溜息を吐きつつ座り込み、初音が去るのを待つ。早く行ってくれ。早く。僕はただ、その時を待つだけなんだ。
　僕が通算三度目の溜息を漏らした、その時だった。今までずっと黙り込んでいた初音の、囁くような声が聞こえた。

「――――――――いいよ、殺しても」
　確かに、そう聞こえた。意味が理解できなかった。
振り返り、その表情を見る。初音の表情は。
――完全なる決意に満ちていた。
「いいよ、殺しても。彰お兄ちゃんは、わたしを殺してもいい」
　僕は溜息を吐いて立ち上がると、ゆっくりと初音の傍に寄っていった。大きな瞳は少し涙ぐんでいるようにも見えたが、それは恐怖の涙でも、失望の涙でもなく――
　勇気の涙に見えた。
「人の話、聞いてなかったの？　殺したくないんだよ。もう何人も人を殺した。けどさ、君みたいな人のいい奴は殺してない。まだ僕は死んだら天国に行けそうなんだよ。殺したくないから死ぬって言ってるのに、何で殺してもいい、とか言うのさ。わっけわかんないよ」
「馬鹿だよ、彰お兄ちゃん」
　初音は笑っていた。まっすぐに。まっすぐに――
　わらっていた。
「どっちがつらいと思う？　大切な人を失くして生きていく事と、大切な人に殺される事」
　僕は目を細めて、その言葉の真意を確かめるように息を吐く。
「何を……殺されるほうが嫌に決まってるだろ――」
「だから彰お兄ちゃんは馬鹿なんだよ。わたしにとってはね、死ぬことなんかより彰お兄ちゃんを失くす事のほうが余っ程、嫌なんだ」
　わたしは、呆然とした顔をした彰の顔を見つめて、少しだけ笑った。勇気の矢が形を成して、わたしに力をくれる。わたしはまっすぐに彰の目を見つめ、まっすぐに言った。
「彰お兄ちゃんがいなかったなら、きっとわたしは

ずっと前に死んでいたよ。誰かに殺された、って意味じゃない。もし彰お兄ちゃんに逢うのがもう少し遅かったら、わたしの心は死んでいたと思う」
　喉が涸れて、上手く声が出ていない。ちゃんとわたしの言葉は通じているだろうか。落ち着け。言いたいことはまだ、終わっていない。
「彰お兄ちゃんは、すごく優しかったから。震えているだけしか出来なかったわたしを、抱きしめてくれた」
　沈黙が訪れる。彰の顔は迷いに満ちていて、まだわたしが言ったことの意味を考えることに精一杯なのだと思う。彰は俯いて、俯いたまま言葉を吐く。
「抱きしめたのも、好きだといったのも、全部嘘だと、そう言っただろ」
「彰お兄ちゃんは、嘘吐くのが下手なんだよ。それにね、さっきのが嘘じゃなかったとしても、わたしは、どうしても彰お兄ちゃんの事が好きみたいだから。——わたしは、彰お兄ちゃんが好きなんだよ。
——傷つけてもいい。殴っても蹴っても、殺してもいい。でも、どうしても死なないで欲しい」
　わたしはまだ言葉を続ける。彰のことを完全に打ちのめすまで、この口は閉じないのだ。
「死ぬのはね、自己満足だよ。わたしも、耕一お兄ちゃんも、誰もそれじゃ充たされないよ。絶対に。みんな優しいから、彰お兄ちゃんのことを許してくれる。でも、死んだらきっと誰も許さない。神様だって絶対に許さない。天国になんて絶対行けない。
——それにね、さっき言ったよね？　太陽が沈むように、わたしたちの生活も終わらせるんだって」
「——ああ」
　彰は呆然とした顔で、しかし、何かしらを理解したような声を漏らす。今からわたしが何を言うか、想像がついたのだろうと思う。
「本当に馬鹿だね、彰お兄ちゃん。こんなの、当たり前の事じゃないか。何を勘違いしてるのかなあ、彰お兄ちゃん。——あのね。太陽は何度だって昇る。

何度でも朝はやってくる」
　夜は何度だって明ける。人が望む限り、永遠に。
「日々はいつか終わる。いつか太陽が昇らなくなる日も来るだろうと思うよ。でもね、終わらせる必要は無いんだよ」
　言って、わたしの身体から――力が抜けた。言いたいことは大体すべて言い終えた。彰は呆然と立ち尽くすばかりで、何の言葉も発しなかった。
「だからね、出来る限りわたしと一緒にいて。それで、わたしを殺したくなったなら。――殺せば良いから」
　言い終えると、今度こそ沈黙が訪れた。
　わたしはまだ何処かの風の中にいる。微弱に吹き付ける風が、沈黙に色を添えていた。わたしの表情も、彰の表情も、その風の中で、

「――――――馬鹿だよ、初音ちゃん」

その瞬間だった。
　一歩、彰が近づく足音がした。その一歩で、わたしと彰の距離は殆どゼロになる。そして彰は本当に悲しそうな顔をすると、
　――わたしの首に手をかけた。
「本当に殺してしまうかもしれないと言ってるのに」

769　赤い光

　ああ、神様。神様、聞いてください。そして願わくば、迷える子羊に啓示を頂きたく存じますですハイ。……嫌だなんて言わないで下さいよ。俺、マジ困ってんスから。
　えー、コホン。
　なにゆえ私北川は、斯様（かよう）な運命を背負わされているのでしょうか？　使命をひとまず退けてまで、あの婦女子を助けようとした事は、間違っていたので

しょうか？　神様、これはその罰なのでしょうか？　婦女子は無情にも私北川を置いて、さっさと行ってしまいやがったですよ。ええ、放置ですよ放置。
いかにも危険そうだったから、制止したんですけど……無視ですわ、ハイ。脇役はすっこんでろというか、アウト・オブ・眼中って感じでしたよ。庶民の言葉では、シカトとも言いますねシ・カ・ト。
……すんません、愚痴が長くなりました……それでですね。その後、建物の中はやたらと盛り上がってるんですけど……なにゆえ私は、かくも長時間ヒゲオヤジと静かに見つめ合ってなきゃならんのでしょうか？
しかもこのヒゲオヤジ、ブルーな顔してニヒルに笑ってやがるんです。もちろん、度重なる語りかけに対する返事は、全くありません。
うはあああああ！　怖えええええええ!!
何が怖いって、言葉がのやりとりが通じないって程、怖い事はありません。私北川、この喋りこそが自己確立の礎とでも申しましょうか、キタガワという名の分子活動集合体が織り成す最大の偉業と心得ておりますゆえ、何を語りかけても返事が返ってこないというのは、まさしく存在の否定なんですよ！　言わば、致命の一撃なんですよ！
誰だよ！　立ち絵の出番が薄いからセリフだけ、とか言ってるのは！　ていうか立ち絵って何!?
ああ、とにかく!!
俺からトークを奪ったら、ただの色男しか残らないんだ！　ん？
……それ、いいかもしんない？

はじめに長い沈黙があった。しかしその後、あまりに勝手な妄想を、延々と語り始めた北川の結論に耐えられなくなったのだろうか。
フランクが、遂に口を開く。
「……」
「……は？　なんだって？」

その独特の小声に、思わず耳を傾ける北川。
「……爆弾、だ」
ゆっくりと握った手を開くフランク。掌に収まる大きさの、ハイテクノロジーを尽くした見慣れぬ機械。吐瀉物にまみれ詳細は判別できないが、ダイオードの青い小さな光点が見て取れる。
「……爆弾？　……ってオイおっさん!?」
思わずのけぞる北川。
「……！」
一瞬の隙を逃さず、フランクは後ろに転がりつつ北川の銃めがけて蹴り上げる。
「くそっ！」
フランクの額に合わせた照準がずれ、慌てて発砲する北川。
ガン！
ズドン！
――銃声、そして着弾音。
体術はさほど優れていないフランクだが、デザートイーグルの巨大な銃身を外す程、不得手ではない。銃の重さもあってか北川の発砲は僅かに遅れ、銃身を蹴り上げられた事により弾丸はあさっての方向へ飛んでいた。
「……ぐあ……っ！」
遅れて苦痛のうめきを漏らし、前かがみになった北川の手から銃がこぼれ落ちる。握りこみが甘いかたちで発砲した結果、右手の人差し指が妙な方向へと曲がっていたのだ。
「……！」
静かに立ち上がったフランクが、低くなった北川の即頭部に蹴りを見舞う。
「がっ！」
情況が確認できぬまま、鈍い音と共に、為す術もなく吹き飛ばされる北川。対するフランクは周囲を見回し、愛用のライフルと北川の拳銃を回収すると、掌の機械に注意を逸らした。
その機械は、芹香の位置を認識させていた爆弾で

ある。胃内でロックが解除しないように、複雑な手順を踏まないと手動の起爆は不可能なように作られている。もしもの時は投げたあとに狙撃するしかないと思って回収したのだが、幸いにして時間はできた。北川と芹香に動きの無いことを確認して、フランクはロックを解除しはじめた。
『お母さん……』
作業中、聞き覚えのある少女の声が、ぽつぽつと耳に届く。あとは左右のパーツを押し込んで、手を離せばほどなく爆発する筈だ。
そこまで来て、ようやく静けさが戻ってきた事にフランクは気が付いた。
『……それにはまず、生き残らんとな』
そのとき耳に飛び込んだ、特徴のある方言に、フランクはぴくりと反応した。さすがにこれだけ印象が強いと、聞き覚え程度では済まされない。
『居候……生きとるか？』
この声の主は、あの集団の中でもっとも好戦的な女。往人という男と違い、話の通じる相手ではない。
右手にデザートイーグルを握り、左手の爆弾を押し込む。
ピピッと電子音がして、握り締めた拳から赤い光が漏れはじめる。あとは手を放して数秒後に爆発するはずだ。
準備を整えたフランクが、くるりと振り向いた、そのとき。
『いくらウチでも、死に損ないの兄ちゃんを――』
――目が、合った。
「居候……生きとるか？」
肩関節一個分長くなった往人の腕を、不安そうに見つめながら、晴子は尋ねる。返事を待つまでもなく、荒い呼吸音が聞こえ、ひとまず安堵の溜息をつく。
「……ま、耕一君よりは活きがエエな」
「お母さん、耕一くんって誰？」

観鈴が、聞きなれない名前に耳を立てる。
「ああ、もっとボロボロなんが居ったんや」
それと比べれば、この程度、とばかりにカラリと笑う晴子。
「……ちゃんと、手当てしてあげた？　いつもみたいに、乱暴してない？」
会ってもいない〝耕一くん〟のために、思いっきり不安そうな顔をして尋ねる観鈴。失敬な奴っちゃな、と自覚のない晴子は腹を立てながら答える。
「いくらウチでも、死に損ないの兄ちゃんを――」
言葉の途中で、晴子が固まる。ふとずらした視線の先に、男がいたからだ。
そこには、自分たちが離れ離れになった原因のひとつである、忘れもしない髭の男が立っていた。
(あいつは……！)
思考より先に、反応していた。向こうも同じであったかもしれない。
二人の殺気が交錯する。

「……お母さん？」
駆け寄ろうとする観鈴。
「来んなっ！」
叫ぶと同時に、晴子は素早く拳銃を抜き、横へ飛ぶ。着地すると同時に態勢を整えると、そのまま発砲した。
タタン！　ガン！
タンタン！　ガン！
四発の高い発砲音と、二発の地響きに似た発砲音が轟く。一瞬遅れて聞こえた着弾音と共に、ホールに異変が訪れた。
割れた窓ガラスのアルミ枠が、火花を散らしてバキンと吹き飛び、更にその下の壁面にひびが入った。もう一発は天井の石材に斜めの角度でめり込み、その影響で割れた石板がボロボロと崩れ落ちる。威力が並みではない。
「くそっ！　一発くらい、当たっとれよ！」
……からん、かつん。

そのとき、妙に軽い音がした。
壁を盾にして、文句をいう晴子の隣。すなわち、往人が倒れている場所。そこに、〝何か〟が投げ込まれていた。
それは赤い光を放つ、小さな機械。
ピ。
聞こえるのは小さな電子音。
ピピ。
(なんやねん、コレ)
ピピピ。
(ひょっとして――)
ピピピピ……
(――やばいんちゃうか――!?)
晴子は、思わず駆け出した。

770　崩れるものと始まるもの

ピピピピピピ!

往人のすぐ側に投げ込まれた爆弾がけたたましく電子音を鳴らす。
無機質に、だがそれは確実に、死神の鎌となって晴子達を消し去ろうとしていた。
「でえええええい!」
晴子がその電子音を出す物――爆弾を躊躇いもせずに拾い、先程の銃撃戦で割れた窓に放り投げ身を伏せた。
即座に投げる――その行動が晴子達にとって幸いした。
後、数秒でも時間に遅れがあったのならば。その爆発は確実にそこにいた人間をすべて葬り去っていただろう。
爆弾が外に投げられた直後、
ズガ――――――――――ン!!
この島で二度目の体内爆弾の爆発が、あたりに響く。
バリン! バリン! バリン! バリン!

衝撃で窓ガラスが敗れ、建物が更なる崩壊を始める。
「うっ……まあギリギリセーフってやつかい……」
頭を振りながらゆっくりと晴子が身を起こす。
「観鈴――！　大丈夫か？」
「う、うん……なんとか……」
「ふう……居候は……、大丈夫みたいやな」
「ああ……なんとかな……」
「ゆ……往人さん！」
「居候！　気が付いたんかい！」
突然の往人の声に、二人が驚きの声を上げる。
「あれだけ大きな音がすれば気が付くさ。二人とも……無事だったんだな……」
ゆっくりと上体を起こした往人が安堵の表情を二人に見せる。
「ウチらはなんとか無事や。居候の方はあんまり無事やなかったみたいやな」
「ほっといてくれ……」

ガン！　ガラン！　ゴン！
「アカン！　もう崩れるで、はよ逃げんと！」
そう言いながら、晴子が往人の体を持ち上げるのを支え、観鈴が散らばっていた武器を往人に渡した。
「手当てはとりあえず出てからや」
「すまない……が、こっちの方は、今、何とかしないとな……」
と、言いながら往人は自分の外れた方の肩に手をやり、思いっきり力を込める。
ゴリッ！
「ぐああああああっ……」
「往人さん！」
「居候！」
二人が声を上げる。当然であろう。あまりにも無理矢理な治し方だ。
「だ、大丈夫だ……それより行くぞ。この様子なら後、何分も持たないだろう……」

「……！」
ホールの外では予想外の状況にフランクが眉をしかめていた。
あの爆弾であわよくば当初の目的であった少年をも巻き込もうと思っていたのに、爆弾をまさか投げ返してくるとは思わなかったのだ。
フランクの顔は険しくなる一方だ。
なぜなら、これで自分からの攻撃は手詰まりなのだから。
一応ホールに突入して戦うという手もあるにはあるのだが、炎が燃え盛り、今にも崩れそうなあの場所に突っ込むのはどう見ても得策ではない。
「……」
フランクは顎に手をやり、どうしたものかと考え込む。
が、時は彼に味方をしない。
立ちすくむフランクに、更なる予想外の出来事が降りかかった。

ズゴオ――――ン！
すさまじい音を立てて、建物が崩れる。その何秒か前に住人達は脱出していた。
「あ、危なかったね……」
観鈴がぺたりと地面に座り込む。
「ったく！　ゆるさへんで！　あの髭親父！」
「その件に関してはおまえが先に撃ったんだろう？　だから、あのおっさんが銃を撃つのはいいとして。俺がいると知ってる場所に爆弾を投げ込むのは納得いかないな」
「それがあの髭親父の正体なんやろ、裏切られたんたんや。居候は」
「さあな！　どちらにしろ、あいつに会えばはっきりするだろう！　行くぞ！」
その言葉と共に住人は観鈴の体を立たせ、北川達のいる方角に三人は駆け出した。

771　弓、折れる時

苦しい、苦しい、苦しいッ！
　わたしは何が起こったかまだ理解できず、ただ、頭の中が苦痛の色だけで染められる。すべての思考が放棄されようとするのを必死に堪え、
　七瀬彰の指が自分の首を締め付けているのだ、とやっと理解した。身体中から力が抜けていく、
「死ぬってのは、こんなもんじゃない」
　呟く彰の声を、わたしは一番近いところで聞いた。
「死ぬのは、これよりもっと苦しい」
　息が出来ない、身体に力が入らない、思考が放棄される、右手に握った拳銃を取り落とす、
「肉体はすごく脆い。すぐに壊れてしまうんだ」
　脳に血が溜まっていくような感覚、だめ、ああ、意識が、あ。
「その点――心はね、身体より丈夫に出来てるんだ」
　首に込められた力が、抜けた。
　消え去りかけた思考が戻る。咳き込み、足りなくなった酸素を取り戻すためにわたしは激しく息を吸う。首から鈍痛が消えない。自分の子供のような細首は、文字通り折れそうな痛みを抱えた。
「愛しい人が死んだくらいで壊れるくらい、人の心は弱くないと思うんだ。心の傷なら、どんな傷でも、いつかは癒えるものだと思う」
　死ぬとは、こういう事か。意識がなくなり、自分が何であったかも忘れてしまうような苦しみ。愛しい人の事も忘れてしまうような苦しみ。
「身体が死ねば心も死ぬんだという事、判ってる？僕が死ぬ理由は、君を、君の心を――死なせたくないからだっていう、そういう事が判ってくれた？」
　わたしは何も言葉を発することが出来ないまま。
　彰のそんな笑顔を、ただ見ることしか出来ない。
恐怖が胸を貫き、勇気の矢が折られ、ただ震えだけ

がわたしの身体を支配する。もう、動けなかった。

けれど。

「それじゃあさよなら、初音ちゃん。君がいなくなったら僕は死ぬ。君があと五分以内に立ち去らなかったら、腕ずくで君を耕一たちのところに戻すよ。——ああ、もういっそ腕ずくで眠らせておこうか」

動けないくせに。

勇気の矢は折られ、信頼の盾は砕け散ったのに。

わたしの口だけが、必死に動いた。

思う。

————————わがままだな、わたしは。

「馬鹿だもん、わたし」

ぴたり、と彰の口が止まる。

「すごく苦しかったよ。死ぬのがどんな事かって今まで判らなかったけど、今、なんとなく判った」

「そうだろう？　初音ちゃんだって死にたくないだろ。大丈夫、耕一と一緒にいれば死ぬことはないよ」

彰の口から安堵の溜息が漏れる。理解してくれたんだな、そんな風な笑顔を見せた。しかし、わたしが言いたいのはそんな事じゃない。

「だから、彰お兄ちゃんにも死んで欲しくない」

彰の表情が固まった。

「彰お兄ちゃんがあんな苦しい目にあわなくちゃいけないなんて、絶対に嫌だ」

「——初音ちゃん」

「彰お兄ちゃんが死んだらわたしも死ぬ。すぐに後を追うよ。そして、同じ苦しみを味わう」

彰の表情が歪むのが判った。どうしようもない苦痛の表情が痛々しくて、わたしの決意も少し歪む。

けれど。わたしは彰を止めるために喋り続けなければならない。これ以上、大切なものを失えない。

「彰お兄ちゃん、すごく苦しかったよね。わたしみたいな足手まといを護って、戦ってきて、いっぱい怪我して。本当にごめんね。わがままばっかりだっ

たし、言うこと聞かない子だったしね。でもわたしは自分の事しか考えないわがままな人間。わたしは自分勝手な人間なんだ。聞き分けがない子だって怒ってもいい。だけどわがままな子供だから、わたしはこう言うよ」

呟いた言葉は、

「一緒に生き残ろう。二人とも苦しくないでいられるのは、それが一番なんだ」

きっと彰の盾を砕く、強力な矢になったと思う。

「お願いだから、一緒にいて」

本当に言いたいことは、少しだけ違ったけれど。けれど、それこそ本当のわがままになってしまう。

僕は言葉を失った。

何を言えばいいのか、本当にわからなくなった。目の前で決意を前面に押し出して笑っている初音をどう説得すればいいのか、彰には心底判らなかった。本当に腕ずくで眠らせようか、と思ったが、それでは何の解決にもならないことも判った。

自分の存在が、彼女の中でそこまで大きくなっていたこと。自分が彼女の心の一部に住み込んでしまったこと。

あまりに長い時間、一緒にいすぎたのだ。

僕はどうすればいいんだろう。

初音が自分に手を差し出す。「帰ろう？」と初音は言って、もう一度天使のような笑顔を見せた。僕はもう何も考えずにその手を取って帰ろうか、と思う。彼女の見せた決意に答えるべく。僕もまた、自分の中に潜む狂気を潰し切るために、必死に心を強く持つことに全力を注ぐべきなのか。自分の考えが浅はかであったことを思い知る。死ぬことは先送りにしていいかもしれない、と思う。もう少し、考えてみるべきなのかもしれない。僕がやったことは許されないだろう。

けれど。償う時間は許されるのかもしれない。

目を閉じて、僕は思考する。

生きてみよう、と思った。
彼女の盾になって、もう少し生きてみようと思った。心に潜む狂気を潰し切り歩いていこうと思った。
僕は、間違っていたのかもしれない。
僕は、彼女の手を握った。
初音は本当に嬉しそうな顔をして、大きくて優しい声で「おかえり、お兄ちゃん」と笑った。僕は苦笑して「ただいま、初音ちゃん」と呟き、
幸せそうに笑って向かい合って、
そこで異変が起こった。

キィィィィィィィンッ、と頭の中で金属が弾け合う音が響きだした。瞬間頭に鋭い痛みが走り、全身の自由が剥奪されていく。初音の手は確かに自分の中にあるのに、そのぬくもりが遠くに消えていく。身体が急速に冷えていく。そして僕の五感が消え失せる。正確には、聴覚だけが残っているのか、何者かの声だけが聞こえる、誰の声だ、女の声、それは女の声だ。聞いたこともない女の声だ。
——殺せ。目の前でぬくぬくとお前を説得して、牙をもぎ取ろうとする偽善者を殺すのだ。生きる事の意義もしらない小娘を殺すのだ。
(黙れッ、お前は誰だ)
——ふふ、嫌か。自分の手で殺すのが嫌か、殺人鬼。……そうだな。一時、おぬしの身体を借りる事にしよう。それほど相性が合わぬから、長時間棲み付くことは難儀だろうがの。まあ、この小娘を殺すには十分な時間だろうて。
(なにを、)
——しばし眠れ、鬼。

目の前で突然しゃがみこんで頭を抱えた彰の様子に、わたしは何か不吉なものを感じていた。たった今自分に笑顔を見せてくれた彰の変貌に、初音はどうすれば良いのか判らなかった。手のひらから伝わ

る彰の体温は変わらない。ただ、手のひらに多量の汗が滲んでいる。
「彰お兄ちゃん⁉　大丈夫⁉」
呼びかけにも答えない。一瞬の後、彰は顔を上げた。その顔にもまた多量の汗が浮かんでいる。
何かに耐えているような表情だった。
「あ、彰お兄ちゃ――」
わたしが彼を呼び切る前に、
彰はわたしの手を、ぐい、と引いた。何かの冗談のように強い力で、わたしのバランスも何かの冗談のように簡単に崩れる。わたしは膝を突き、片手では十分な受身を取ることも出来ず、そのまま地面にうつ伏せに倒れた。
そして彰はわたしの手を離した。
彰は強引な手つきでわたしを仰向けにすると、お腹の上に乗り、
――わたしの喉に、再び指を当てた。
「あきら――おにいちゃん」

潰れた声で必死に呼びかける。けれど、彰の力は緩まない。今度こそ本気でわたしを殺そうとしている。それが判った。
――必死に見上げた彰の顔は。
不思議なことに、驚愕の色に染め上がっていた。

――……待てよ、冗談だろ？
何を、僕は何をしている？　待てよ、なあおい、僕の心は本当におかしくなっているのか？　なんで、なんで、なんで！　この手に入る力が緩まないのは、初音ちゃんを殺そうとしてるのは、
なんで、なんで、なんでっっっ‼
畜生、畜生、止めてくれ、止めてくれッ――……

ぎりぎりと、わたしの首を締めつける力が強まっていく。先程とは比べ物にならないほど強い力で、わたしは殺されていく。意識が朦朧としていく、思考を放棄したくなる。けれど、もしもうこの手の力

が緩まないのなら、意識を失ったときが最期だ。
わたしは、最期の瞬間まで意識を失わない。
お兄ちゃん自身は、やっぱり壊れていなかったのだ。わたしはやっとそれを理解した。ごめんね、彰お兄ちゃん。勘違いしていた。お兄ちゃんの中には、やはり『鬼』がいたんだね。殺したくてわたしを殺そうとしてるんじゃないんだよね。
ただいま、って言ってくれたもんね。
それならやっぱり、わたしの血のせいかな？　わたしの所為でお兄ちゃんが壊れたんだ。——本当にごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。
殺させちゃって、ごめんなさい。
今更こんな事を言うのはおかしいかもしれないけど、最期だから言うね。彰お兄ちゃんは怒るかもしれないけどね。
お兄ちゃんを探しに出た瞬間から決めていたんだ。彰お兄ちゃんに逢ったら、殺してもらおうって。わたしは彰お兄ちゃんに——殺して欲しかったんだ。
彰お兄ちゃんは耕一お兄ちゃんを殺さなかった。殺せなかった。結局、彰お兄ちゃんは優しいお兄ちゃんのままだったんだ。それなのに、わたしは勘違いをしてお兄ちゃんに銃を向けて、殺そうとした。勘違いだから、で許される筈もないよね。わたしは紛れもなく自分の意志であなたを殺そうとした。恩を忘れたみたいに、思い出をすべて忘れたみたいに。
お兄ちゃんは優しいからその事も許してくれるだろうけど、わたしは自分が許せないから。自分の弱さが、自分の偽善が。死ぬべきなのは、わたしだった。殺そうとしてごめんね。殺してほしかったんだ。これが、わたしの本当のわがまま。
でも、
自惚れじゃないけど、彰お兄ちゃんもわたしのこと、ちょっとくらいは好きだったよね？
だとしたら——好きな人を殺させようなんて、本当最低だね。わたしはやっぱり、最低だ。
彰お兄ちゃん、

ごめんなさい。殺させて、ごめんなさい。
傍にいなければよかったね、
ごめんなさい。

畜生、畜生、畜生、やめろ、なあ、なんで、
畜生畜生畜生！
僕の身体だろ、僕の言うことを聞け！
お願いだから。僕は死んだって良いから、
どうせ死のうと思っていたんだから、
だから、お願いだから、
僕の希望を折らないで、
僕の希望を奪わないで、
お願いだからッッ――!!

あと、もうひとつ、聞いてほしいことがあるんだ。
さっき彰お兄ちゃん言ったよね。死んだら、全部忘れてしまうって。それですべてお終いになってしまうって。うん。わたしもそう思うよ。

でもね。
ああ、声にならない。声にならないよ。彰お兄ちゃん。ねえ、聞こえてる？
大好きだったよ。今思い出せる事は、彰お兄ちゃんと過ごしたこの短い日々だけ。つらい事ばかりだったけれど、楽しくて、楽しくて、楽しくて。楽しかった事しか思い出せない。嬉しかった事しか思い出せない。
優しいキスをくれたね、強く抱きしめてくれたね、二人、肌を重ねたね、優しい言葉をくれたね、強い言葉で励ましてくれたね、その手でずっと護ってくれたね、
だからね。
わたしは、彰お兄ちゃんの事はね、

初音の唇が小さく動いているのに僕は気付いた。何かを言いたげなのに、それは声にならない。この手の力を緩めれば、その声が聴けるかもしれない。

それどころか初音を救うことも出来る。けれど手の力は決して緩まない。
やめろやめろやめろやめろぉぉぉぉッ！　何故君を殺さなくちゃいけないんだよ！　なんでなんでなんでなんで！嫌だ、嫌だ、なんでなんでなんでなんでッ！
嫌だッッ！
——そして、僕は。
僕に今唯一出来ることを。
絶対にしたくないことを。
僕自身の意志でしていた。
僕は彼女の唇の動きを、必死に読み取っていた。
彼女が何を伝えようとしているのか。それを読み取ろうとしていた。実際には僕はここでもう絶望しきっていたのだと思う。そして、
彼女の言葉を理解して、
——希望の弓が砕け散った。
「彰お兄ちゃんの事はね、死んだって忘れないよ」

ごきり、と音がした。
初音は小さく笑むと、それを最後に目を閉じた。
全身から溢れるように流れ出る汗が、一瞬にして冷える。彼女の身体から、だらりと力が抜けた。閉じられた瞼。小さく開けられた口。
失われたこころ。
そして彼女が、どうしようもない遠くに行ってしまったのだという事が理解できた。そして漸く僕の手から力が抜けた。
「うあああああああああああッッッッッ!!」
遠く海の果てまで届くような、そんな絶叫をあげて僕はその手で自分の顔を覆う。涙が零れない。絶望だけが胸の中に押し寄せて、僕の体温を奪っていく。すべてを失ったのだ。喪失感が真っ黒な重石になって僕を潰していく。僕を、圧し潰していく。
ああ、僕は何の為に生きているのだろう？　彼女を護るために生きると決めたのじゃなかったのか？
何故、何故、何故彼女を失わなければならない！

何の為にこの島で生き残ってきたのだ、何の為に！
　誰か教えてくれ、なあ、誰か、誰か、誰かッ!!

『人は、罪深き存在だからよ』

　そんな声が聞こえた。僕の内側から響く声は、他人の声だった。年端も行かない少女のような柔らかな声と、地獄の鬼のように残酷な言葉。

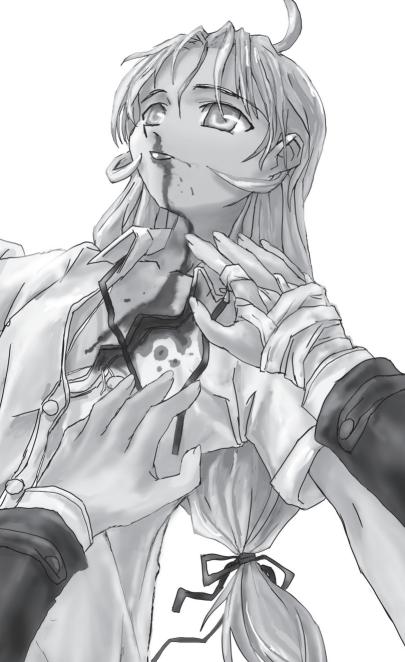
『生きている事がどれだけ罪悪なのかも知らずにお前は生きてきたのだ。更に言うなら、他のどんな人間もそれを知らない。それこそが、人の罪だ』

　そんな言葉が響いたかと思うと、声は次第に遠ざかり、何処かに消えうせてしまった。残っているのは初音の死体と、僕の抜殻だけだった。
（生きている事が、どれだけ罪悪か）
　その言葉の意味を理解することが、今の僕には出来る。理解して、僕は崩れ落ちた。
　僕の頬を、一筋の残滓が伝う。

　――頬を伝うのは赤いもの。
　目を閉じた、未だ赤みの残る顔の少女は、それでも口元には優しげな笑みを浮かべていた。それはひどくひどく美しかった。なにものよりも綺麗だった。
　ぽたりと音を立て、その柔らかな頬に、赤いものが雫となり零れていく。彼の瞳も真っ赤に染まっていく。頬を伝う赤い雫。それはそれは真っ赤な――
血の涙だった。
　その慟哭が、彰の希望の残滓だった。

十九番　柏木初音　死亡
【残り19人】

《葉鍵ロワイアル　第六巻　了》

端書

前回の後書きから一年。遂に、と言うべきか、残すところ一巻になりました。
このままいけば、七巻の発行も滞り無く済むかと思いますが、ここまでこられたのは多くの方々の応援と協力によるもので、そのことを大変感謝しております。
ところで、この企画を進めている間、疑問に思っていることが一つあります。
この六巻を最後まで読み進められた方にはお分かりかもしれませんが、この葉鍵ロワイアルという作品の中では、異なるカラーの物語が展開されています。このことをどう受けとめられているだろう、というのがその疑問です。この異なるカラーの物語というのは、シリアスとギャグが入り混じってる（のも事実ですが）ということを指している訳ではありません。
まず、本家（高見広春著　バトルロワイアル）の如く、がむしゃらに突っ走った序盤。
次に、残り参加者数半ばにして絶えてしまった殺戮者（マーダー）たち……という現実を前に、物語の行方を模索しつつ、様々な伏線をリレーさせていった中盤。
そして、それらの多くを受けとめ、終局へ向けて物語を集約させることに腐心していった終盤……。
異なるカラーと言ったのは、これらのことです。振り返ってみれば、それぞれのパートで展開が異なっていることが分かる（指摘されるまで気が付かなかったという方もいらっしゃるでしょうが）かと思います。
この、物語の大前提が少しずつ転調していく進行には、連載当時から幾らか不満の声もありましたが、今、

初めて（改めて）単行本で読まれている方々は、このことをどう受けとめられているだろう、というわけです。物語の構築に携わった立場としては、なおのこと反応が気になるところです。

さて、反応が気になる、と言えば、ハカロワを読み始める前と、読み始めた後の、『ゲームのプレイ度』もそうですね。

活動を続けている間に感想をいただく機会もありましたが、そこで思ったのは、やはりと言うべきなのかもしれないですけど、色んな方がいらっしゃるなぁ、ということです。幾つかはやったことがあったけど、という状況で本書を手に取った方がやはり一番多いようなんですが、このタイプにしても、葉（Leaf）作品と鍵（Key & Tactics）作品が半々だったり、片方のみだったり、微妙な比率だったりと多様です。また、ゲームを一つもやったことが無かったけれど面白そうなので読んでみた、という方や、本書に出会う前から既に全ゲームをコンプリートしていたという強者の方もおりますし、そうかと思えば、Flashで興味を持ったものの全ゲームをやってから読もう！……と、実に一年近くをかけてゲームをコンプリートして、それから本書に臨んだ方などなど、他にもいろんな方がいらっしゃいますね。そして、本書に触れる前にゲームをコンプリートしていなかった方たちが、読後、或いは読中に、やったことの無かったゲームをプレイしてみた、ということも多いようでして、大元のゲームが好きでハカロワの執筆に関わった者としては同好の士が増えることに喜びを感じます。

また、企画開始当初は捨てきれずにいた『ごく限られた人間しか手に取ってくれないかも……』という懸念が、全くの杞憂になったことも大きな喜びです。より多くの方に読んで貰えたらという願いは、どうやら叶ったといえそうです。

お蔭様で、この六巻と、それに続く七巻は、単体なら出血になる筈の頒布価格を設定することができます。(七巻に関しては現在のところの予定です。発行予定のファンブックも同様に出来ればと考えています）企画としては、現時点でほぼ成功したと言えるでしょう。
あとは読者の方々に、最終巻の出来と物語の結末を気に入って貰えれば、と思います。満足していただけるよう、企画側なりに最大限の努力をしています。
それでは……。
——葉鍵ロワイアル最終巻に、ご期待下さい。

長い追伸‥
……ギリギリまで触れようか触れまいか迷っていたのですが、やはり、少し書くことにします。
実は、ハカロワを通して知り合った方を、この六巻の編集期間中に亡くしまして……。知り合ってからしばらくはチャット、メール。その後、ハカロワ関係以外のサークルで参加したイベントでお会いしたり、ハカロワ単行本化発動後、ここ一年と少しの間は、ちょっと飲みに行ったりボードゲームをしたり、TRPGの約束をしたりと、まぁ、様々に接していたわけです。
——それなのに、本当に突然の訃報で。
初めてその訃報に触れたとき、酷く驚きましたが、それと同時にしばらくの間は実感が沸きませんでした。
数日の間、実感が無いながらも、なんだか胸騒ぎのような妙な感覚と、やり場のない怒りにも似た苛立ちのような感覚を抱えつつ、なんとかポカしない程度に仕事はこなして。……そうして過ごす内に通夜、葬儀

がやって来ました。流石に葬儀へ参列すると、実感もなにも、認めざるを得なくて。割りとドライな人間を自称していたにも関わらず、涙がこみ上げてきて仕方ありませんでした。ご両親の言葉は今でも耳に残り、離れません。

……何故、エンターテイメントたるこの本の後書きにこんなことを書くのか、と憤られる方もいるかもしれません。でも、それだけ自分にとって大きなことだったので。正直な話、数年前に祖母を亡くした時よりも遥かに喪失感が大きかったです。

今回のことを通して、若くして逝くとはこういうことか、と、今更ながらに痛感させられたわけで。人の生き死にがどうこう、という話しは、物語の中だけにしたいと思わされました。物語の中でも、もう軽々しくは扱えないな、とも思いました。勿論、連載中の時期にしたって、決して軽々しく扱っているつもりは無かったわけですが、それでもやはり、今にして思えば、他の執筆者の方々はともかく、自分はその重みを理解してはいなかったのではないかとも思えてくるわけで……。湿っぽい話で申し訳ありませんが。

どうしてもここで触れておきたかったのです。

——この場を借りまして。ハカロワの連載中のみならず、企画にも協力を惜しまなかった、彼(か)の人物のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

平成一六年　三月　某日

セルゲイ@Ｄ

葉鍵ロワイアル　第六巻　著者一覧

奇跡の企画を作り上げた皆様に

この場を借りて、お礼を申し上げます。

683　口は災いの門……祐一＆浩平さん
684　来訪者の多い場所……名無しさん
685　雨宿り……名無しさん
686　日常と狂気の交わる場所……NBC さん
687　エンプレス二人　……YELLOW さん
688　反転芹香は輝く魔女？……名無しさん
689　転機、そして彼は……林檎さん
690　産声……。さん
691　破損……彗夜さん
692　嵐、そして太陽……観月さん
693　死者からの贈り物……名無しさん
694　それぞれの勇み足……林檎さん
695　新たなるボケ役？……NBC さん
696　それぞれの目的へ……NBC さん
697　碁石……名無したちの挽歌さん
698　そしてここから始まるストーリー……祐一＆浩平さん
699　沈黙……NBC さん
700　選択……MIU さん
701　木と風の祝福……名無したちの挽歌さん
702　姉の立場として……5 さん
703　綱の上の踊り手……名無したちの挽歌さん
704　壮大なムービー……林檎さん
705　真実の明暗……名無したちの挽歌さん
706　芹香の誤算……名無しさん
707　飛空艇の墜ちた地で……セルゲイ＠ D さん
708　間が悪い耕一……林檎さん
709　CD　……名無したちの挽歌さん
710　動き出す意思……NBC さん
711　北へ……MIU さん
712　まだ見ぬ敵……林檎さん
713　狩人の視界……名無したちの挽歌さん
714　霧中……。さん
715　発見……名無したちの挽歌さん
716　狂走……セルゲイ＠ D さん
717　望まれざる再会……MIU さん
718　ふたつの奇跡……名無したちの挽歌さん
719　誇りを捨てない僕らのために……。さん
720　合言葉は……祐一＆浩平さん
721　夕べの祈り　序曲……L.A.R. さん
722　嵐のあと……名無したちの挽歌さん
723　優しい手当て……5 さん
724　長い道……。さん
725　ななせとはるかのぼうけん……祐一＆浩平さん
726　── Kizuna ──　……セルゲイ＠ D さん
727　旅の途中……名無しさん
728　フランクの思い……フラスキさん

◎制作者一覧
制作協力：
111、 5、JOYH-TV、L.A.R、MIU、Yellow 、#3-174、
いつかの書き手、独活大樹、葵原てぃー、久々野　彰、
冴村浩志、静かなる中条、真空パック、駄っ文だ、
ないしょ、ナナツさんだよもん、名無し達の挽歌、
名無しさんだよもん＠誤植指摘、遥か昔の書き手、日向葵、
フラスキ、箕崎、観月、林檎、『 。』、名無しさんだよもん

制作協賛：
104、Alfo、Kyaz、NBC、感想スレ R の 142、シイ原、
七連装ビッグマグナム、暇人、祐一＆浩平、
名無しさんだよもん

スペシャルサンクス：
189、quit、River. 、zin、#4-6、#7-76、荒門、命、彗夜、
ダンディ、名無し cd、名無しさんなんだよ、にいむらたくみ、
花と名無したん、ヘタ霊、赤目、名剣らっちー、
訳あり名無しさんだよもん、旧データサイト管理人各氏、

そして全ての名無しさんと読者の皆様
（アルファベット～アイウエオ順、敬称略）

葉鍵ロワイアル　（6）
二〇〇四年　　四月二九日　初刷発行
二〇二二年　一二月三〇日　電子書籍版　初刷発行

著　　者：（別頁に記載）
発 行 者：瀬戸こうへい
発　　行：ハカロワ出版企画
初　　出：２ちゃんねる、葉鍵（Leaf&Key）板
編集事務：セルゲイ＠Ｄ　三浦　闌
挿　　絵：指狐
印　　刷：株式会社ポプルス
連 絡 先：kohei19800310@yahoo.co.jp

9784917977773

ISBN4-01510-122-1

C0510

1928058813178

ハカロワ出版企画

HAKAGI ROYALE Ⅵ

「蝉丸、ドキドキするね！」
「うむ。これが生き残った者たちの、脱出への
　きっかけとなる事を祈るばかりだがな」

惨劇の島の中で少女は青年と出会った。
共に過ごすうちに惹かれ合ってゆく二人。
それは幸福と呼ばれるものだったかもしれない。
だが、互いを大切に思うあまり、二人はすれ違う――

残り 22 人となった参加者たちは、多大な犠牲を
払いつつも確実に未来への道を刻んでゆく。
徐々に明らかになるこの島の秘密。
謎の存在神奈。

物語が終局に向かう中、参加者達は、
混沌とした迷霧の中を彷い続ける……

HAKAGI
ハカギ・ロワイアル
ROYALE
7

HAKAGI
ROYALE

そしてパートナーを導く踊り子のように、
優しげとさえ言える、滑らかな仕草で手を差し伸べた。

「次は、どいつじゃ?」

「葉子さん……」
「お久しぶりですね、郁未さん。会いたかったです……」

HAKAGI ROYALE

ハカギ・ロワイアル

7

――――――【残り19人】

葉鍵ロワイアル参加者名簿

~~一　　番　相沢　祐一　（あいざわ・ゆういち）~~

~~二　　番　藍原　瑞穂　（あいはら・みずほ）~~

三　　番　天沢　郁未　（あまさわ・いくみ）

~~四　　番　天沢　未夜子　（あまさわ・みよこ）~~

~~五　　番　天野　美汐　（あまの・みしお）~~

~~六　　番　石原　麗子　（いしはら・れいこ）~~

~~七　　番　猪名川　由宇　（いながわ・ゆう）~~

~~八　　番　岩切　花枝　（いわきり・はなえ）~~

~~九　　番　江藤　結花　（えとう・ゆか）~~

~~十　　番　太田　香奈子　（おおた・かなこ）~~

十 一 番　大庭　詠美　（おおば・えいみ）

~~十 二 番　緒方　英二　（おがた・えいじ）~~

~~十 三 番　緒方　理奈　（おがた・りな）~~

~~十 四 番　折原　浩平　（おりはら・こうへい）~~

~~十 五 番　杜若　きよみ〈原身〉（かきつばた・きよみ）~~

~~十 六 番　杜若　きよみ〈複製身〉（かきつばた・きよみ）~~

十 七 番　柏木　梓　（かしわぎ・あずさ）

~~十 八 番　柏木　楓　（かしわぎ・かえで）~~

十 九 番　柏木　耕一　（かしわぎ・こういち）

二 十 番　柏木　千鶴　（かしわぎ・ちづる）

~~二十一番　柏木　初音　（かしわぎ・はつね）~~

二十二番　鹿沼　葉子　（かぬま・ようこ）

二十三番　神尾　晴子　（かみお・はるこ）

二十四番　神尾　観鈴　（かみお・みすず）

~~二十五番　神岸　あかり　（かみぎし・あかり）~~

~~二十六番　河島　はるか　（かわしま・はるか）~~

~~二十七番　川澄　舞　（かわすみ・まい）~~

~~二十八番　川名　みさき　（かわな・みさき）~~

二十九番　北川　潤　（きたがわ・じゅん）

~~三 十 番　砧　夕霧　（きぬた・ゆうき）~~

~~三十一番　霧島　佳乃　（きりしま・かの）~~

~~三十二番　霧島　聖　（きりしま・ひじり）~~

三十三番　国崎　往人　（くにさき・ゆきと）

~~三十四番　九品仏　大志　（くほんぶつ・たいし）~~

~~三十五番　倉田　佐祐理　（くらた・さゆり）~~

~~三十六番　来栖川　綾香　（くるすがわ・あやか）~~

三十七番　来栖川　芹香　（くるすがわ・せりか）

~~三十八番　桑嶋　高子　（くわしま・たかこ）~~

~~三十九番　上月　澪　（こうづき・みお）~~

~~四 十 番　坂神　蝉丸　（さかがみ・せみまる）~~

~~四十一番　桜井　あさひ　（さくらい・あさひ）~~

~~四十二番　佐藤　雅史　（さとう・まさし）~~

~~四十三番　里村　茜　（さとむら・あかね）~~

~~四十四番　澤倉　美咲　（さわくら・みさき）~~

~~四十五番　沢渡　真琴　（さわたり・まこと）~~

四十六番　椎名　繭　（しいな・まゆ）

~~四十七番　篠塚　弥生　（しのづか・やよい）~~

四十八番　少年　（しょうねん）

~~四十九番　新城　沙織　（しんじょう・さおり）~~

五 十 番　スフィー　（すふぃー）

~~五十一番　住井　護　（すみい・まもる）~~

~~五十二番　ＨＭＸ－13型セリオ　（せりお）~~

~~五十三番　千堂　和樹　（せんどう・かずき）~~

~~五十四番　高倉　みどり　（たかくら・みどり）~~

~~五十五番　高瀬　瑞希　（たかせ・みずき）~~

~~五十六番　立川　郁美　（たちかわ・いくみ）~~

~~五十七番　橘　敬介　（たちばな・けいすけ）~~

~~五十八番　塚本　千紗　（つかもと・ちさ）~~

~~五十九番　月島　拓也　（つきしま・たくや）~~

~~六 十 番　月島　瑠璃子　（つきしま・るりこ）~~

六十一番　月宮　あゆ　（つきみや・あゆ）

~~六十二番　遠野　美凪　（とおの・みなぎ）~~

~~六十三番　長岡　志保　（ながおか・しほ）~~

~~六十四番　長瀬　祐介　（ながせ・ゆうすけ）~~

~~六十五番　長森　瑞佳　（ながもり・みずか）~~

~~六十六番　名倉　由依　（なくら・ゆい）~~

~~六十七番　名倉　友里　（なくら・ゆり）~~

六十八番　七瀬　彰　（ななせ・あきら）

六十九番　七瀬　留美　（ななせ・るみ）

~~七 十 番　芳賀　玲子　（はが・れいこ）~~

~~七十一番　長谷部　彩　（はせべ・あや）~~

~~七十二番　氷上　シュン　（ひかみ・しゅん）~~

~~七十三番　雛山　理緒　（ひなやま・りお）~~

~~七十四番　姫川　琴音　（ひめかわ・ことね）~~

~~七十五番　広瀬　真希　（ひろせ・まき）~~

~~七十六番　藤井　冬弥　（ふじい・とうや）~~

~~七十七番　藤田　浩之　（ふじた・ひろゆき）~~

~~七十八番　保科　智子　（ほしな・ともこ）~~

~~七十九番　牧部　なつみ　（まきべ・なつみ）~~

~~八 十 番　牧村　南　（まきむら・みなみ）~~

~~八十一番　松原　葵　（まつばら・あおい）~~

~~八十二番　ＨＭＸ－12型マルチ　（まるち）~~

~~八十三番　三井寺　月代　（みいでら・つくよ）~~

~~八十四番　御影　すばる　（みかげ・すばる）~~

~~八十五番　美坂　香里　（みさか・かおり）~~

~~八十六番　美坂　栞　（みさか・しおり）~~

~~八十七番　みちる　（みちる）~~

八十八番　観月　マナ　（みづき・まな）

~~八十九番　御堂　（みどう）~~

~~九 十 番　水瀬　秋子　（みなせ・あきこ）~~

~~九十一番　水瀬　名雪　（みなせ・なゆき）~~

九十二番　巳間　晴香　（みま・はるか）

~~九十三番　巳間　良祐　（みま・りょうすけ）~~

~~九十四番　宮内　レミィ　（みやうち・れみぃ）~~

~~九十五番　宮田　健太郎　（みやた・けんたろう）~~

~~九十六番　深山　雪見　（みやま・ゆきみ）~~

~~九十七番　森川　由綺　（もりかわ・ゆき）~~

~~九十八番　柳川　祐也　（やながわ・ゆうや）~~

~~九十九番　柚木　詩子　（ゆずき・しいこ）~~

~~百　　番　リアン　（りあん）~~

葉鍵ロワイアル
舞台　地形図

地図制作：JOYH-TV

カバー、口絵、挿し絵：ちん

葉鍵ロワイアル

※この物語は巨大掲示板2ちゃんねるの葉鍵（Leaf&Key）板において創作されたリレー小説です。

※今回の単行本化にあたり、著者自身の手によって本文の表現やタイトルが改められた個所があります。
※ Web ページの原文を縦書きの単行本として出版するにあたり、最低限必要な改行等の改変を編集側で行わせていただきました。

772　俺たちは、まだ笑える

いよぅ。俺だよ、北川だ。みんな、あっちで元気にしているか？
　俺は……散々な目に遭ってる。はっきり言って、朦朧としている上に骨折しているせいか、全く余裕はない。
　その上またもや、ヒゲオヤジに銃口を向けているのさ。さっきもそうしてなかったかって？　ああそうさ、デジャヴってやつだ。
　……俺が、お前らと一緒に夢を見てるんじゃなければ、だけどな？
「……」
「おっさん、どうやら神様は俺を愛してらっしゃるようだぜ？」
　がちゃり、と電動釘打ち機をフランクに向けながら、北川は余裕たっぷりに言い放った。ちょうど崩れた建物の方へ向いているフランクの視界外、右側から狙っている状態だ。
　……いや、本当は余裕なんかない。
　そもそも、利き手の人差し指が折れている。だから左手一本で戦うしかない。その上ほんのさっき、爆弾が破裂する音を聞くまで気を失っていたので、あまり頭が回らない。
「そんじゃまず、俺の銃を返してもらおうかな？ゆっくりと左手で銃身を持って、こっちへ投げてくれ。こんどはオッサンの長ーい脚も届かないから、無駄な抵抗は止めろよな」
「……」
　フランクは髭の下に憮然とした表情を隠しながら、少々の余裕を持っていた。この少年は自分を殺すような事はしないだろう、と。
　特に理由はないのだが……殺気が、薄い。だから先程も殺そうとはしなかったし、それは彼にも解っ

ているだろう。
　芹香が目覚めれば、なんとか交渉が効くかもしれない。
「……」
「ゆっくりと、頼むぜ」
　フランクは観念し、左手でデザートイーグルの銃身を掴み、右手を放す。ゆっくりと右を向くフランクに、北川が声をかける。
「さ、こっちへ投げて——」
　そのとき、声がした。
「誰かと思えば、北川かよ！」
　往人、晴子、観鈴の三人が、崩れた建物の裏側から向かってくる。その声に反応して、北川が振り向いた。
「——往人さ——」
　ズガッ！
　その瞬間、顔面に巨大な鉄塊が直撃していた。
「——痛うっ！」
　同時に、身を屈めて走るフランク。混乱して、引き金を引く北川。
「くそっ！」
　……だがもちろん、釘は発射されなかった。電源が、ないのだから。
　先に晴子を認識したフランクが方針を変更し、あとから振り向いた北川の隙をついた。つまり、デザートイーグルを顔面めがけて放り投げたのだ。
　晴子が叫び、銃を構える。
「ほれ見い、居候！」
「勝ち誇んな！」
　往人もＭ４カービンを構えようとして——肩が、上がらなかった。
（……ちっ）
「……やめとけ、弾の無駄だ」
　既にフランクは、建物の影に隠れ、おそらくそのまま距離を稼いでいるだろう。下手に追えば、角を

曲がったところを狙撃される。そう考えて住人は晴子を制止し、北川達のところへ向かった。

晴子が芹香を起こし、観鈴が北川の治療をする。心なしか北川の顔が緩んでる気もするが、多分気のせいだ。ひとり周囲を警戒する住人は、頭の片隅でそんな事を考えていたりしていた。

少年と違い、フランクはレーダーに映らない。視力と聴力、そして勘だけが頼りだ。緊張した面持ちで危険なポイントをチェックする。特に背の高い建物は、要注意だ。

(さっきは晴子の思い切りの良さに助けられたが……これは裏目に出たな)

苦々しい顔で、フランクとの縁を諦める住人。

(ま、お互い喧嘩してる余裕はねぇだろうがよ……)

それでも最大の脅威は、少年に他ならない。ここで潰しあうのは、得策ではないだろう。

遠くを睨む住人の、険しい表情をみとめた者は、誰もいなかった。

「はい、おしまい」

「ああ……ありがとう」

観鈴が包帯を巻き終わり、ぽんと北川のおでこを叩く。指には釘を添えて包帯を巻き、固定してある。

それを見ながらデザートイーグルを拾い、住人は少しだけ考えた。

「……晴子、お前の銃とこいつ、交換してくれ」

「あん？　どないしたんや？」

「肩が上がらん。両手で使う銃は無理だ——それでお前は、こっちな。どうせ左じゃ狙いはつかんだろうから、右手で抑えてバラ撒くことだけ考えろ」

晴子と拳銃を交換し、M4カービンを北川に渡しながら続ける。

「それと、その釘打ち機は捨てろ。……電池はこっちで、使っちまったんだよ」

往人はそう言ってレーダーを振り、ニッと笑った。
「酷いな、往人さん……もうちょっとで大逆転だったんですよ？」
悪かったな、と言いながら北川の髪をくしゃくしゃと乱暴に撫でる往人。きょとんとした表情の観鈴。呆れ顔の晴子。ぼーっとしている芹香。
だが、往人と北川は笑っていた。二人は、笑っている。
ああ、そうさ。俺たちは、まだ笑える。心の底から、笑っていられる。

「さて、これからどうするか、だが……北川？」
「はい？」
「なんでお前、ここに居るんだよ？」
「あー……えーと……」
いつもの滑らかさを欠いた、北川の喋りにおおよその見当をつける往人。心なしか、視線が冷たい。
「……まあ、いい。観鈴を〝保護〟しようとしてくれたのには、感謝する」
「だからって、ウチの観鈴に手ェ出したら容赦せえへんで」
「ちょ、ちょっとお母さん！」
……などとひと揉めあったが、再び先行きの事を相談する五人。いや、正確には四人なのだが……
「じゃ、北川。お前は今度こそ施設へ行け。寄り道したら、殺すぞ」
「とほほ……はいはい」
「俺たちは、あのクソガキと決着を付けなきゃならん。……それで、芹香。お前はどうする？」
一人だけ輪に加わらず放心している芹香に、往人が尋ねる。
「……」
「は？」
「……」
「聞こえねえよ」
「……」

「あァん？　フザけてんのか!?」
少々気の短くなっている往人が、芹香を怒鳴りつける。
「お、往人さん、ちょっと待ったあ！」
慌てて間に入る北川。
「これは……ひょっとして……」

そう、ひょっとしたのだ。
……理由は街角の吐瀉物だけが、知っている。

773　閉幕の足音

やってみるものだなと、つくづく思う。
探し物、高槻の死体は、拍子抜けするくらいあっさりと見つけることができた。
非常に嫌悪感を催すものだったが、いちいち嫌がっている暇はない。今はとても、時間が惜しいのだ。
こうしている間にも、あの少年が何人もの命を奪っているかもしれない。
どんなにちっぽけなことでも、自分に出来ることがあればやってみようと思う。
かっこつけようとするわけではないが、その確かな自分の意志を、私は大事にしたかった。
(あった……)
死体の懐から装置を取り出す。
けど……。
(どう使えばいいのですか？)
機械は苦手だった。

それでも、あれこれと試行錯誤し、なんとか扱うことができた。
完全とまではいかないが、装置を使われる前の段階まで能力は戻ったようである。
手足を動かす。身体の隅々まで、感覚を馴染ませる。
と、一つの疑問が私の頭に浮かんだ。

果たしてこの装置は、『自分にだけ』効果を及ぼすものなのだろうかと。
島全土をカバーするものなら、あの少年の能力も同時にアップさせてしまったのかもしれない。
(……)
考えても答えは出ない。確かめる術はないのだ。
一応装置も持って行くことにしよう。
そして走り出す。街へ、学校へ。

夕闇。
赤と黒の混じる世界。
そんな中、私はただ走っていた。
傷だらけの身体で、背中には、同じく傷だらけのこいつを背負って。
こいつの誘導した放送では、学校に人が集まるようにと呼びかけた。
だけど、今こいつは気を失っている。
それに、最早生き残り全員にとっての共通の敵であることも知られている。
そんな状況で、学校に行く意味もないだろう。
むしろ一刻も早くこの場から立ち去りたい。
こいつを安全な場所で、休ませてあげたい。
そのために、ただ走っていた。
さっきから誰かに見られている気がする。
前から、横から、後ろから、上から。
(上から？)
空を見上げてみる。
太陽は完全に沈んだわけではないけれど、もう星が見えていた。
世界を包むグラデーションの中、自然に溶け込んでいるように見えた。
遠くから、ちっぽけな存在である私たちを見守ってくれる。
ずっと後をつけている気配は、ひょっとしたらこの星々なのかもしれない。
まるで、神様のように。

気持ちが悪い。反吐が出そうな思いだ――
カミサマなんて糞食らえだ。目の前に降りてきてみろ、殺してやる――
私がこいつを守ってあげる。愛してあげる――
そのためなら、何にだって――

偶然。
そう、その姿を見かけたのは偶然だった。
少年を背負って夕闇の街を走る、郁未さんの姿。
表情からは疲れきっているように見えた。
だが、その瞳は死んでいない。
何かの目的のために、決意を喪失していない、強い瞳。
あの忌々しい施設で生活していたころと、何も変わってはいない。
だけど、残念だ。
あの少年は明らかに意識を失っているように見える。
その彼を背負って歩いているのだ。郁未さんが彼の仲間であるのは間違いなかった。
彼の目的を、彼女は知っているのだろうか。
知っていようがいまいが、少年を殺さなければいけないことに変わりはない。
説得は……おそらく無理だろう。
だから――こうして、不意打ちのチャンスを狙っている。

774　消えた光点

岩場を下り森を抜け山地を越えた彼女たちに、低地へと吹き降ろす風が絡み付いている。
異様な寒気を感じたあの暗く湿った山中と比べると、肌に絡みつくようなこの湿った風すら心地よく感じる。
「うぐぅ……スフィーさん、大丈夫？」
「少し休憩する？　どこの誰に取り憑いたなんてわ

からないのだし、焦っても仕方ないわ。急がば回れよ？」
千鶴とあゆが、心配そうにスフィーの顔を覗き込んで言う。
スフィーは目に見えて衰弱していた。つい先程も、意識が体から抜け落ちてしまったかのように、ばたりと地面に倒れたのだ。
「ううん……大丈夫。今は誰でもいいから、片っ端から取り憑いたかどうかを確認しないと……」
無理矢理立ち上がろうとするスフィー。千鶴は、彼女をとどめようとしたが……やめた。もし、自分が彼女の立場でも、寝てなんか居られないからだ。
「そう……だったら、まず最初に行きたいところがあるの」
「それは？」
「あっちの岩場に隠れている、地下施設よ」
あそこには、レーダーがある。
施設を拠点に行動するほうが、この島をむやみに徘徊するより余程効率がいいはずだ。戦力に限りがある以上、頼りになるのは情報のみ。レーダーは、その最たるものなのだ。
千鶴は、まだ知らない。ほぼ時を同じくして、そのレーダーが、初音の応答を確認できなくなったという事実を。
すなわち——初音の、死を。

「みゅ？」
「どうしたのよ、繭？」
光点の消失に反応した繭に、詠美が尋ねる。
もはや人間サマの出番は無く、ＣＤ関連は機械に任せきりで緊張感も無いままに、詠美たちはこれ以上ないくらいに、ダレまくっていた。
そんな弛緩した状態に楔を打つような、繭の発言。
「消えたよ……みゅー……」
「ええっ！　ふみゅ〜ん、だ、誰よう⁉　十七番……二十番、六十一番……みんな無事……だけどな

んで別々なのよ……」
途方にくれる詠美。
先ほど芹香の光点が消えたのは、確認済みだった。
もしも千鶴やあゆ、それに別行動している梓のうち、誰も戻らなかったら……自分たちはどうなってしまうのだろう。
……それを思うと、心配でたまらない。気ばかり焦って、実際にはどうしようもない状況に、詠美はひとり苛ついていた。
「あのー、詠美さん、この点ですけどー」
G．N．に用済みと放逐され、手の空いたHMが、詠美を暗い妄想の淵から呼び戻した。
「なによっ！」
その点は、二十九番。芹香が消えた位置から、まっすぐこちらに向かってきているようだった。
二十九番……北川潤。直接は知らない人物だった。
CDを持っているという事と、死んだ芹香に蹴られた事がある、それしか知らない。こちらに来てくれるのは、幸運なのだが……敵か味方かは、解らないのだ。
もしもこの人物が、芹香を殺害したのなら。どうすれば、よいのだろう？
「ふ、ふみゅ〜ん……」
「みゅー……？」
人間二人は、うめくばかりであった。

775　遊戯

永遠の深みを誇る漆黒。
その中心に檻が置かれている。
檻を形作る鉄棒は折れ曲がり、扉もほぼ、ひしゃげていた。
だが中に閉じ込められるべき獣は、まだ外には出られていない。
――ポウ――
そんなかすかな音と共に、暗闇の中に女性の姿が

現れる。
　淡い光に照らし出されるその姿は、幻想的とすら呼べるだろう。
「理性の檻……。開けてほしいか？」
「ナニモノダ……」
　片方は魂すら凍りつかせるような冷たい旋律。
　もう片方は全ての生物を戦慄させる恐怖の波動。
「余を知らぬのか？　ふん……」
　不機嫌を全身で表しながら、獣の封印へと歩を進める。
「おお、みすぼらしくも狭い檻だのぉ。お主にお似合いよ」
　――ガッ!!――
　鬼が檻の隙間からその野太い腕をふるう。
「貴様……」
　女の細腕を掴む。
「へし折ってやろうか……」
　……。
　しばし静寂。
「手を……離すがいい」
　――ガッ――
　たいした力など込めてるようには見えない。
　女は軽い動作で手を振り払う。そして、
「この……豚」
　言って口の端を歪める。
　檻の中の獣をあきらかに挑発する態度。
「次にお主は『俺を侮辱するか！　この雌豚が！』と言う」
「俺を侮辱するか！　この雌豚が！　……ハッ!?」
　すべては女のペース。
「ははは！　単純よのう」
「グオオオオオオオオオオオオーーーーー!!」
　――ズガン！――
　咆哮と同時に、豪腕が扉にうちつけられる。
　だが壊れかけの檻はそれ以上ほころばない。
　この檻は『理性』なのだから。

「ブッ殺すと心の中で思ったなら！　その時スデに行動は終わっていないとのぉ。檻の中ではそれもできまい。開けてやろうかと言っておるのだ。素直になれ」

地上最強の生物。それを開放しようとしている。

「目的は何だ……」

冷静さを取り戻しつつある鬼が問う。

檻は今だに自分を縛る。

脱出にはまだ時間がかかる。

その時間が短縮されることに異議などないが……。

「なに……」

女は気だるそうな態度でこたえる。

「盛り上らぬ遊戯はつまらんでな……」

彼女を中心に氷の風が吹く。

鬼は気づく。

――力と力の干渉――

――どこか遠くの場所で沸き上がった異質な力を、

『俺』は感じ取っていた――

――そしてそれを、自分の力で潰してみたいとも思った――

「力……」

強大な力を思い出す。この女からも似た匂い。

――生命が散る間際の炎ほど美しいものはない――

――その命が強大な力を持てば持つ程、その輝きは映えるのだ――

「積極的な参加者は歓迎するが、なにか？」

「出せ……。その遊戯とやらにも参加してやろう……」

双方の思惑が大筋合致する。

神奈は漆黒の空に向けて片手をあげる。

と同時に響き始める不協和音。

キィィィィィィィィンッ――――――――――！

「殺せ。目の前でぬくぬくとお前を説得して、牙を

もぎ取ろうとする偽善者を殺すのだ。生きる事の意義もしらない小娘を殺すのだ」

776　花火

どれだけの時間そこで蹲っていたかわからない。世界が終わるまで蹲っていたのかもしれないと思うほど長く感じたけれど、実際には五分に満たない時間しか僕はそうしていることが出来なかった。
僕はゆっくりと立ち上がった。
壊れた筈の僕の精神が未だにこの肉体に留まっているその理由。瞳から溢れる赤い涙を拭って薄い呼吸と共に立ち上がった理由。初音の亡骸の傍らにあった拳銃を拾い強く握り締めたその理由。
理由なんて一つしかない。僕はやはり壊れているのだ。そして壊れているとしたらずっと前に壊れていたのだ。愛しい人を数分前に殺めているのにこうして冷静に物事を考えられる時点で——僕は何処か螺子が飛んでいたのだろう。
七瀬彰は。ずっと前からこうだったんだと思う。
僕はもう僕のことを永遠に好きになることは出来ないだろう。そんなことを頭の片隅で考えながら、僕はゆっくりと立ち上がり、横たわる柏木初音に目もくれず、頭を回転させ始めた。
「生きている事を罪だと知らずに生きていた事が罪」
僕は呟く。考えを呟きにして思念を思考にする。
つまり、僕の心の中に入ってきたあれが、僕に初音を殺させた理由というのは、彼女が何も考えず幸せそうに生きている事が罪だったから。生きている事を罪と知らずに生きていたのが赦せなかったから。
そんな理由で初音は殺された。そしてこの島で起きたすべての死もまた、そんな理由の為に起きたのだと僕は確信した。幸せに生きる人々を妬む、そんな病んだ心が、全ての始まりだったのだ。
あれが『元凶』だ。

あれが僕達に殺し合いをさせてきたのだ。そして人殺しをさせる理由が、このくだらない理由なのだ。あの声こそが悪魔であり死神だった。

——「あれ」が何であるかは判らない。

意識だけを自分の中に入り込ませ、尚且つ自分の身体を操る——普通の人間に出来る芸当ではあるまい。いや、生物に出来る事ではない。

僕は超能力など信じていないし、目の前の現実こそが信じるに足るものだと理解している。初音を殺めたのは自分自身の狂性であると思ってしまえばそれで後は僕も後追いをするだけだ。

だが——声が聞こえたのだ。一度も聞いた事の無い、少女の声が。何処かで聞いた事のある声だったかも知れない。似たような声をいつか聞いた事があったかもしれない。

けれど、絶対に違うと言える。

つまり僕自身とは別の存在が、僕の中に入ってきたのだと、そう考えるべきなのだ。僕は、彼女が囁いたような言葉を、今までの人生で一度たりとも考えたことが無かった。

僕は仮定する。「あれは意識だけの存在であり、幽霊のようなものである」と。僕は現実しか信じない。そしてこれこそが今の僕の目の前にある現実だ。

その意識だけの存在は、今は、僕の中にいない。僕の身体は、少なくとも今は、僕のものだ。つまり「あの存在」は、——生きている人間の身体に自由に出入りする事が出来るのだ。あの少女が自分の中に入ってきた理由。それをふと考える。そして数刹那の後に僕はその目的を理解して——多分、薄く笑った。あの少女は僕の中に入ってきて、僕に愛しい人を殺させた。それは。そして、少女が僕に囁いた言葉。

「僕にお前の殺人鬼(オモチャ)になれ、という事か?」

生きているものは罪だから殺せ。お前は他人を殺すに相応しいだけの力と、殺しても躊躇しないだけの汚れたものを抱え込んでいる。現にこうして愛し

いものを殺したのだ、もうどれだけ人を殺そうがどうしようが構うまい。
つまり、僕を駒にするだけのために、
僕は最悪の絶望を背負わされ、
彼女は最低の未来さえも与えられなかった。

——笑わせる。

「ふざけんなっ！　ふざけんなッッ！」
畜生！　畜生！　畜生！　畜生！
「ちくしょぉぉぉぉぉッッ‼　初音ぇッッッッッッ！」
そんなくだらない理由で、僕は大切な人を失わなければならないのか？
生きている事が罪だと？　ふざけるな！
確かに目を閉じて横たわり、それでも笑みを崩さない初音は美しいさ、どんなものよりも美しいさ！
だが、それは初音がまっすぐ生きていたから美しいんだよ！　どんなに苦しくても生きようとした彼女の微笑みがあったからこんなに美しいんだよ！　彼女が幸せそうにのほほんと生きてきただって？　本当に、心底から彼女が幸せそうだって？　何処をどう見たらそう見えるんだ？　彼女はいつも苦しんでいて、悩んでいて、泣きそうで、それでも決して笑顔を崩さない強さを持っていた。彼女の笑顔は、彼女の戦いの歴史なのだ。それを、何も考えずに生きてきた——だと？
「ちくしょう、」
目を閉じ、目を閉じ、目を閉じて僕は吐き捨てる。
「僕は、こんな笑顔は認めないッ」
二度と彼女の微笑む姿が見ることが出来ない。強さをカタチにして、僕たちに勇気と希望をくれた笑顔を見ることはもう叶わない。
僕は泣いていた。もう枯れ果てたと思った涙は、それでも僕の心から水分を吸いだして、とめどなく瞼から零れ落ちた。膝は折れなかった。初音に縋っ

て泣くようなことはなかった。それはただの甘えに過ぎない。僕はもう甘えを許されるような位置にいないのだ。そんな場所は、もうないのだ。
「ちくしょぉおお……ッ」
落ちてたまるか、殺人鬼になどなってたまるか！
殺すとすれば、それはただ一つ、
――お前を。この戦いの元凶を、殺し尽くす。

僕は二度目の慟哭の後、その壊れた筈の精神の中で決意した。あいつを殺してから僕は初音のところに逝こう。絶対にそれまでは死ねないし、それから以後に生きていく理由も無い。僕の存在の全てを賭けて、あいつを殺してやる。
だが、どうやって殺す？　僕の仮定が正しければあいつは幽霊のような存在で、幽霊を殺す方法なんて僕には思いつかない。僕は脳味噌に喝を入れて必死に考える。逡巡すること一分。答えは一つしか浮かばない。そして答えはそれ以外にないだろうとも思う。あいつは幽霊で、触れないから殺せないのであって、触れるならば殺すことが出来る。簡単なことだ。
あいつに肉を与えればいい。
自分の肉体をさらけ出し、
あいつをこの身体に留め、
他の誰かに殺させればいい。

だが、そんなにコトが上手く行く筈がない。例えば今、柏木耕一に会ったら、今度こそ彼は僕を殺すだろう。何より大切なものを、今度こそ本当に僕の手によって奪われたのだから。耕一だけではない。初音の周りにいて、初音の笑顔に勇気と希望を貰ってきた全ての人間が、僕を許さないだろう。
だがそれでは駄目なのだ。僕が死ぬのは「あれ」をどうにかしてからでなければいけない。
初音に関わった人間から逃げ続け、「元凶」をこの身体に留めたところで、誰かに殺してもらう。な

んと困難なことだろうと改めて思う。そもそも、どうやってあれをこの身体に誘き寄せるというのだ。
けれど、その困難を乗り越えなければいけない。僕は愛しい人を失った。その復讐のためならば、例え、どれだけ壁が高かろうとも。
――僕は乗り越えてみせる。
僕は頭を回転させ続け更に考えを練る。
この島には「超能力」とでも表現するべき力を持った人間が何人もやってきている事を僕は知っている。その超能力をもってすれば、僕よりずっと先に「元凶」の存在に気づくことが出来ているのではないか。それどころか、彼らは既に「あれ」の正体について調べている可能性もあるだろう。そうであるならば「あれ」を倒す方法――誰かの肉体に乗り移らせて殺す――という方法を思い付いているかもしれない。そして更には「誰かの肉体に乗り移らせる」方法さえ、思い付いているかも知れない。思いついていなくとも、思いつくことが出来るかも知れない。
となれば、こうしてはいられなかった。僕はすぐにでも駆け出して、あれの正体に気づいている人間を見つけ、僕の身体をあれを殺すために提供しなければならない。僕の身体に乗り移った瞬間、拳銃でこの脳天を貫いてもらおう。それで全てが終わる。僕の復讐と僕の人生がまっすぐ終わる。
一方で、耕一と出会ってしまったらそれで終いだ。怒りに狂った彼にぼろ雑巾のように千切られて、それで僕の人生は終わりだ。
僕はもう。
あいつに会う資格も、勇気も、何もない。
ふと身体に力が戻っていくような錯覚を覚える。今すぐにでも走り出せるほど、筋肉が喚いている。血は流れ切った筈なのに、それでも目は冴え、一時よりも尚強く、強く身体が猛る。よく判る。これは最後の灯火だ。鬼の血で身体が復調したとか、そん

な奇跡みたいなことじゃない。ただ、僕の魂が燃えているだけだ。燃え尽きた時点で灰になるだろう。カスも残らないくらい、散り散りになるだろう。

一方で。

僕の心の底で何かが蠢く音がするのに気付く。

それは、新たな魂だ。まともな僕と、暴力的な僕。その二つの性質の陰に隠れて、殆ど見えなかった意志。冷静さと暴力性を兼ね備えた、もう一つの意志。初音の血を飲んだ瞬間に生まれた魂だ。「それ」はまだ、僕の心の底で力を蓄えているだけの微弱なもの。だが、数刻前よりも確実にその意志は強くなっている。「それ」は今はただ、僕の底で眠るだけの存在。時折声は聞こえていたのだ。自分とまったく同じ声の、狂人の声が聞こえていたのだ。人殺しを容認する、「元凶」寄りの思考を持った声が。

僕の魂が完全に燃え尽きたとき、この新しい魂が、僕の身体を奪い去ってしまうだろう。その瞬間に僕は、人間であることを止め、永遠に救われない地獄にゆくのだろう。そう思った。

僕は、それでも。

例え全てが終わったときに鬼畜になるとしても、魂を燃やし尽くして戦おうと思った。

花火になろう。この魂を燃料に、ただ一瞬光輝くために、この魂を使い切ろう。

この魂を弾丸にして、汚れた花を咲かせよう。

僕はもう一度初音の亡骸を撫でる。

結局は僕の手で君を殺してしまった。誰がなんと言おうと、あれの拘束に逆らうことが出来ず、君の首を絞めたのは僕の手だ。

苦しかっただろう。苦しかっただろう、苦しかっただろう、苦しかっただろう。ぽたりと、今度は透明な涙の雫が一つ落ちた。そして多分。

これが僕の最後の甘えだ。

僕のことを、もう少しだけ許容してくれる事を祈る。自分勝手でごめんね。ごめんね、ごめんね。

初音の首にかかっていたペンダントを手に取り、僕は己が首にかけた。主を失って光を失った宝石は、僕のことを責めているように思えた。僕は、このペンダントがこの首にある限り戦い続けられると思う。

空を見上げた。もう二度と見上げる事はないだろうと思っていた空は、胸が詰まるくらい美しかった。その茜色の空があまりに美しかったのを僕は忘れないだろう。あの真っ赤な太陽に焼かれて、大地も海も真っ赤に燃えている。この真っ赤な焼け野が原を歩きながら、僕は執念深く生きている。忘れてはいけない。たとえ執念の生の中でも、

この空の下で、僕は愛すべき大切な人を殺したのだという事を。そして僕もこの空の下で死ぬのだという事を、けして忘れてはいけない。

そして、死を迎えて、地獄に行くときが来ても、

僕は初音ちゃんのことを忘れない。

777　激突！

風に揺られて緩やかに波立つ、広大な緑の草原を掻き分けるように、森から飛び出して来た何かが、疾走していた。この島内で既に幾つか見られたものと同じ型の、オートバイである。

「ははは晴香！　石避けてよ！　おしり！　痛い！　痛いって！」

「うっさいわね！　アンタ運転できないんだから我慢しなさいよ！」

「いいのよ！　乙女はオートバイで爆走なんかしないの！　ぅあ！　痛たたっ！」

ときおり石を踏んで跳ね上がり、そのたびにクッションの無い後部に座った自称乙女が、大声で騒ぎ立てている。

その手には、二本の刀とライフルが抱えられており、そして肩から掛けた袋の中には、ちょっと変わ

った物が入っている。
「ふん、痛い痛い五月蝿いわね、痔なら早めに言いなさい？　そもそも人の手首持ち歩いてる乙女なんて、聞いた事無いわ」
「痔なわきゃないでしょ⁉　何言ってんのよ！　それに手首は晴香が涼しい顔して大根みたいにサクサク切ってたんじゃない！　あんたも一個は持つのよ！」
「じゃあ七瀬が二個持つのね」
「ええっ⁉　ず、ずるい！　……てゆうか晴香ぁ、手首ってさ……　〝個〟で数えて、いいのかしら？むしろ〝本〟かな？」
「……アンタねぇ……そんなもん、どうでもいいわよ……」
は……はあい、乙女の七瀬よ。ご機嫌いかが？
あたしは顎がガクガクして、オシリがズキズキ痛むけど、概ねご機嫌よ。ついでに痔じゃないわよ。

今の状態だけど、高槻の死体を発見して、右手首を三個（？）回収したの。読み取る機械のセンサーが右手の方にあったから、右手首全部、つまり三人分取ってきたわけ。
まあ……そりゃ気持ち悪いんだけど……脱出のために、やらなきゃ仕方ないものね。ついでと言っちゃなんだけど、誰も気がつかなかったらしいオモチャみたいなライフルも頂戴したわ。
それから、もう解ってると思うけど。
あたし達、灯台にあったオートバイを使って移動中なの。幸い晴香が運転できたので、あたしは荷台に乗っかって荷物持ちをしてるのよ……でも、これってば。
「……まるっきり、ド田舎の珍走団ね」
「七瀬、アンタが言うんじゃないわよ、アンタが」
そう、後部座席で二本の刀を携えて睨みを利かせている様は……珍走団そのもの。運転手がいかにもレディースのお姉さまみたいな強面とくれば、都会

の渋滞だってモーゼの海割りみたいにスイスイってもんよ。
「ちょっと！　いかにもレディースってどういうことよ！」
「そのまんまじゃない！　あたしと違って、あんたは黙ってても顔が怖いのよ！」
「何言ってんのよ！　アンタだって髪切ったせいで乙女チックな化けの皮なんて、とうの昔に剥がれてんのよ！」
「ば、ばばば化けの皮ですってえええええ！　きいいいいいいい！」
「うわわっ、ごめん！　今のうそ！　七瀬さん超乙女！　謝るから！　な、七瀬っ！　暴れないでっ！危ないって――――！」
「あのさ……」
「……」
「……聞いてます？」
「……（こくこく）」
「えーと……」
「……」
あのさぁ〜、神サマ〜。さっきから、何度も言ってんじゃん。俺、会話の成立しない人、苦手なんだってばＹＯ！
ん？　ああ、失敬。時には島内随一のジェントルメン、紳士マスター北川といえども、我を失う事もある、というわけでございます。
そう、私北川は、ただいま岩場に向けて草原を横断中。旅の道連れは、来栖川芹香嬢。
この芹香嬢、結界とやらを破壊するために往人さんを探して、各地を放浪していたらしいのですが、実際に会ってみると単なる一発芸の役立たずだったらしく、いたく落胆してらっしゃるそうです……
……って目茶クチ悪いじゃん、この人!?
「……（ふるふる）」
「は？　勝手に捏造するのは良くありませんか？　だ

って、言ったじゃないですか⁉」
「……」
「いやいや、あの小屋での蹴り！　輝かんばかりのキレ！　ええもう、今でも忘れませんよ！」
「……（ふるふる）」
「……は？　覚えてらっしゃらない？　そんな覚えは無い、と？　何、言ってるんですか！　確かにこう、その見事なおみ足がひゅっと風を切って、そのとき見えた下着の色は間違いなく白――」

『暴れないでっ！　危ないって――！』

ドッキャアアアアアアァァァァァン‼

「あいたたた……。は、晴香っ⁉　大丈夫⁉」
「いっつー……やっちゃった……」
「……」
ああ、神様……光が見えます……。

芹香さんの下着の色を全世界へ向けて公開することは、地獄に落ちるべき罪なのでしょうか？
「あーあ、バイク壊れちゃったわね」
「ここじゃ修理もままならないしねー……って七瀬、この人……」
……あ、ちょっと遅い気がしますが、救いの手が回ってきそうです。
バイク以下ってのが、かなり傷付きますが、贅沢は言えません。
「……（ぺこり）」
「芹香さん、しばらくね」
「なんだ、一瞬見えた人影は、芹香さんだったの」
……コイツら、オオボケです。
どう考えたって、バイクに吹き飛ばされた人間の方が目立つと思うのです。
「……（ふるふる）」
「違うの？」
「誰？　……って、ああ！」

……あ、かなり遅い気がしますが、救いの手が回ってきそうです。
どう考えても、あの物静かな芹香さんより、バイクの下で苦しげに呻いている私北川の方が目立つと思うのです。
「どうしたのよ七瀬!?　突然叫んだりして、びっくりするじゃない!」
「晴香!　手首!　潰れてないかな!?」
……手首ですか。
私北川は、バイクどころか手首以下ですか。そうですか。だいたい手首ってなんですか?　倒した相手の手首をウォートロフィーにでもしてやがるですか、この人たちは?
現代に蘇る首狩り族の親戚ですか。そうですか。するとと私北川の手首も貞操の危機ですか?
「ふー……全部、無事なようね」
「……約一名、脳味噌が無事じゃないのが居るみたいだけどね」
……それって誰ですか?
まあ、この際どうでもいいから、七瀬さん。気がついてるなら、このバイクどかしてくれませんかね?

778　管理人の憂鬱

「ふみゅ~ん、どうしよう……」
「みゅ~……」
詠美達が混乱している間もG.N.達によるCD解析は続いていた。
「お~い!　ロボット、そっちはどうだ?」
マザーコンピュータから呑気な声が聞こえてきた。
「あ、はい~。もう少しで終わりそうですぅ」
「そうか、こっちの方ももう終わりそうだわ」
「でも、Gちゃんさんはやっぱり凄いですぅ。私一人だったらまだ半分も終わってないです」
「ハッハッハ!　もっと誉めろ!　……っとそれよ

りも」
　声のトーンを突然変える。
「はい？」
「後はワシがやっておくから、お前あの嬢ちゃん達の相手してきてくれ。うるさくてかなわん」
　コンピュータから不機嫌（？）そうな声でそう伝えた。
「あ、はい〜。じゃあ後はお願いしますね」
「あぁ、茶と菓子でも与えておけば黙るじゃろ」
「分かりました〜」
　そう言うとＨＭ—12は詠美達のところに向かった。
　う〜む、取りあえず妙なデータの入ったＣＤじゃのう。
　ワシは今までに解析したデータを総合した結果そう結論づけた。
　あのロボットの解析データからＣＤが及ぼす作用点が島の外にある『神奈備命』とやらを消滅させる施設を起動させるためのものであることは分かった。
　そこから更にワシが解析したデータからこのＣＤで起動する施設は何らかの魔法的作用を『神奈備命』とやらに及ぼすことも分かった。
　普通ならばそのような非科学的な結論に達することは無いじゃろう。
　だがワシのデータ内には魔法という物が存在することが裏付けされたデータが入っておる。
　っつーかワシの人格基礎となった人間が魔法が使えるらしいし。
　それにワシを作った来栖川のお嬢さんや参加者の一部も魔法が使えるらしいしな。
　う〜む、このような柔軟な結論を出せるコンピュータはワシぐらいなもんだな。
　流石ワシ！　天才！
　……っと何かやっぱり思考がおかしいぞ。
　以前の起動時にはこのような思考パターンは無かったはずだけどなぁ。やっぱりバグがありそうじゃ

どうやら何か魔法的なプロテクトが施してあるようじゃ。
下手に手を出すとＣＤ内のデータが全消去されるようだしな。
まぁ、ワシには魔法関係の処理はデータに入って無いから仕方ないんだけどな。
しかし、こんなことは些細な問題に過ぎん。
もう一つ重大な問題がある。
あの嬢ちゃん達に分かるようにこのＣＤの解析結果を説明するにはどうしたら良いかという事じゃ。
詠美嬢達の様子を見てみた。

「ふみゅ〜ん、これおいしい！」
「みゅ〜♪」

……ダメだこりゃ。

のう。
放送が終わったらメンテしてみるかの。
しかし、上空カメラが故障しておるようだ。これでは参加者の詳しい様子が見られん。
まぁ、参加者の体内の生体反応センサーでなんとかなるじゃろうて。
ふむ、何やら考えが逸れたな。
え〜と、その『神奈備命』とやらだがワシのデータの中にも入っておらん。
まぁ、ワシには関係ないことじゃし、どうでもいいことじゃがの。
ただ、一つだけおかしい、というかどうしても解析出来ないところがあるんじゃよな。
ＣＤが起動するための起動プログラムに妙なプロテクトがかかっておる。
このままではこのＣＤは起動できんな。
プロテクトを解こうとしたのじゃが、ワシには無理じゃな。

779　二人の黄昏～郁未と少年～

「い……、いく……み……」
その背中で一度、彼は目覚めた。
ゆらゆらと揺れるその景色を、自分を背負い歩くその少女の表情を、瞳に映して。
「生きてた？」
「そうじゃなかったら僕は幽霊だね」
「意外とその通りなのかもよ」
「……。かもね」
冗談とも、本気ともとれない会話を短くかわす。
「あの後、どうしたんだい？　僕が、気を失った後……」
「いろいろあったわよ、そう、本当にいろいろ。なんとか生き延びた。私も、そしてあの人達もね」
「そう……」
「郁未、君は……」
「……うん？」
焦燥しきった表情のまま、肩に乗せられたその少年の顔を見やる。
だが、その瞳に宿る光は強い意志をたたえたままで。
「……僕を……どう思ってるんだい？」
一度、言葉を区切ってそう言った。
「今更、女の子の口から言わせる気？　ほんとニブいのね、あなた」
わずかに顔をしかめる。
「違うよ。ただ……」
「ただ？」
「ただ……いや、なんでもない」
口を噤む。
侵食が完了した……ワケではなかった。
彼女の瞳に宿る光は、出会った頃といささかも変わらない。
それでも、神奈備命の使徒たる彼を護り、背負い

歩いている。
「郁未は強いね」
「……どこがよ」
呟いたその声は風にかき消されそうな程小さい。
「今この瞬間に、此処にいることが、だよ」
「どうして？　生きてるってことが？」
「心がだよ。初めて見たあの時から、そう思うよ」
「……バカ。私は強くないわよ。強くなんて。だから、あなたを助けられず、私さえも救えずにこんな場所にいる。こんな心の思いを居場所にして、ただ生きてる」
その言葉に少年は一度笑う。
「弱かったら、ここにはいないと思うよ」
心がね、と少年が言った。
寂れた街道を抜けて、脇へとそれる。
その先にある鳥居を潜って、あたりを見渡す。
境内もまた人気はなく、ただ沈みゆく夕日だけが長い影を落としているだけだった。
この時期、この時間であれば、蚊の一匹や二匹いそうなものだが、それすらもいない。
それはあまりに不自然なものだったが、郁未はさすがにそこまでは気を回せなかった。
「……ふう……」
小さく溜息をつきながら、中へと進み、そこに建てられていた古びた神社の扉を開け放つ。
「バチがあたらないといいけどね」
そんなことを気にしているような状況でもないのだが。
「こういうところの方がいいんでしょ？」
「そうだね」
背負われたままの少年が力無くそれに答えた。
確かに何もないところだ。奥に鎮座している神様を除けば。
「もっと休めそうなところがありそうなものだけど」

呟く。
「こういうところの方が安全だよ。下手な民家よりはね」
少年は未だ意識のはっきりしない頭を働かせながらそう答えた。
だが、傷ついているせいか。
ここに来るまでの間、二人と一定距離を保って追ってくる尾行者の存在には気づかなかった。
「そうかもしれないけどさ。でももう少し体を休めやすい所はなかったの？」
「あいにく僕は地理に疎いんだ」
「嘘ばっかり」
「そうかもね」
どんな時でもこの少年はマイペースだった。
郁未が少年を木造りの床に下ろすと、彼の顔から笑みが消える。
郁未にとっては、割と珍しくもなかったが、彼がめったには見せない表情。

「郁未、一つ聞かせて」
何？　と言わんばかりに彼の顔を覗き込む。
「もし、僕がこの場で郁未を殺すつもりだとしたら……郁未はどうする？」
「……」
「……」
「……あなたを殺して私も死ぬ」
「……」
「……なんて言うと思った？」
「……ん？」
少年という形容に似合ったきょとんとしたあどけない表情で郁未を見上げる。
「私はあなたに殺されないし、あなたは私を殺そうなんて思わない。あなたは死なないし、私も死なない。……ＯＫ？」
「お、おーけー……」
「よろしい」
「あ、あはは……」

額に汗を浮かべながら、そう答える。
「じゃあ、少し休みなさいよ。疲れてるんでしょ？」
「え、うん、じゃあ、そうさせてもらうよ」
ゴロンと音を立てて寝転がるが、目をつぶろうとはしない。
「ねえ、私からもひとついい？」
「……なんだい？」
「もし、私があなたをこの場で殺すつもりなら……あなたはどうする？」
「ここまで背負ってきたのに？」
「……じゃあ、質問を変えてあげる。あなたの問いに『あなたを殺す』と答えたらあなたはどうしてた？」
「今と変わらないと思うよ」
「どういうこと？」
「言葉通りさ。この後、郁未に『お休み』と言ってもらって、そのまま寝るんだと思う」
「あなたね……」
「郁未」
そっと、少年が郁未の頬を撫でる。
「はいはい。お休み」
そっと少年の頬に口付けをしてやると、
「ん、お休み、郁未」
ゆっくりと、目を閉じた。

780　二人の黄昏～郁未と葉子～

考えることはたくさんあった。これからのことを。
これまでのことはもう考えない。考えないようにした。
これからの為に、あえてそうした。
いずれ、これまでのことを思い出せなくなるその時まで。
横で泥のように眠る少年を見つめながら、
時折木の柵から見える景色（というか外の様子）

を探りながら。
「どこが、ゴールになるのかしら？」
参加者をすべて殺してから、なのか。
自分達が地獄に落ちるまでなのか。
神奈に会えるまで、なのか。
このゲームの終わり。
それがもう、彼女には見えない。
少年が寝入ってからしばらく——
外で、かすかに音がした気がした。
風に揺れる草の音。
（神経質になってるのかな？）
街道を移動中から、ずっと感じていた違和感。
誰かに見られているといった感覚が郁未の体を捕らえて放さない。
それは、二人を追跡する誰かなのか。
侵食していく神奈の意志なのか。
（……私はやっぱり神経質なのかもね）
護身用に銃を持って。

神社の引き戸を開けて、境内へと足を踏み出す。
（……）
鹿沼葉子は、じっと草陰からたたずむ神社を眺めていた。
そこには一組のカップルが休息をとっているはずだ。
（……これから、どうしましょうか？）
思案に暮れる。今に始まったことではない。日が暮れようとする前からずっとだ。
あの少年を暗殺するチャンスをずっと狙っていた。
あの少年が持つ偽典には、銃火器の類が効かない。
しかも、傷ついているとはいえ彼の運動能力は並みの人間よりも遥かに高い。
だから、まともにやりあおうという気はなかった。
暗殺。
これが一番の方法だった。
だが、その少年を護るかのように付き添う少女、

天沢郁未がやっかいだった。
　彼女もまた激しく傷ついているようだったが、それでも不可視の力を宿した彼女は危険な存在。
　それはまあ、葉子もまた同じなのだが。怪我の具合も宿した力も。
（もうすぐ、日が暮れますね）
　手にした槍を構えながら、じっと中の様子を念写するように探った。
（もちろん、念写は不可能です）
　そんなことを考えながら、音を立てないように社へと近付く。
（怪我してるのでほふく前進はしません）
　しゃがみながら、歩く。
（スカートが長いのでしゃがみながらは歩きにくいです）
　だが、立つのは危ないのでそのまま続けた。
　ベチッ！
　裾を踏んずけて転んだ。
（痛い……ではなくて……）
　しまった！　と葉子が歯噛みした。
　大した音ではないが、少年や郁未であれば今の音を聞きつけてしまうかもしれない。
（……ゴクリ）
　息を潜めて、社を睨んだ。
　ガラッ……
（……!!）
　社の祭壇の扉が開いて、中から郁未の姿が。
（郁未さん！）
　草の陰から、その姿を確認する。
　少年は中で待機しているのか、それとも休んでいるのか、その姿はない。
　キョロキョロと誰かを探しているようだ。
　やはり、今の音が気づかれてしまったのだろうか
――？
　しばし、睨み合いの時が続いた、といっても睨んでいるのは葉子だけだが。

葉子の姿は郁未からは死角になっている。そういう場所に移動したのだから当然だ。
だが、音を立てることはできず、倒れたままの格好で息を潜めることしかできない。
（不覚です……）
高槻と戦った時、いや、この島に来た時から、どうも自分はどこか抜けてしまっているように思えてならない。
郁未にはまだ気づかれてはいないが、あたりを探るように見渡す行為をやめる気配はない。
（郁未さん、本当に、あの頃のままですね）
懐かしいような思いを抱きながら、郁未を見つめた。
この島に来て、あんなにも再会を求めた少女とこんな形で果たすとは思わなかった。
（もちろん、こんな無様に倒れた姿をしていることではありません）
目に映る郁未の姿は、本当にあの頃のままなのに。
（ちなみに、恋愛感情を抱いているわけではありません）
葉子が心から親友と呼べる相手であるから。
だから、こんな時でも、そんな思いが頭をよぎった。
「やっぱり誰もいないか……」
そう言いながら、葉子の隠れる茂みへと歩いてくる。
（見つかる……!!）
槍を握る手に力が篭もる。
今なら、郁未の暗殺は可能だろう。
いかに郁未が用心しているとはいえ、迷いなく草陰から槍を突き出せば、声を上げることもなく絶命するはずだ。
（あの少年を労せず倒すためならば……！）
ここで討つべきだと、葉子の闇がそう呟く。
柄を握り潰してしまうか、という程の力が手に集中する。

（郁未さん……）
郁未が槍の間合いに入るまで、あと二歩……
（郁未さんっ！）
あと一歩……
——そして再会がなったとき、無事に島を出ることが出来たなら、あの時のゲームを二人でやりましょう——

「葉子さん……」
「お久しぶりですね、郁未さん。会いたかったです……」
再会は、なった。
少し顔を赤らめながら、体についた土を払う。
「こんな格好をしてましたが、気にしないで下さいね」
すっ……と、音もなく立ち上がった。
犠牲は大きかった。
そしてお互いボロボロ（きちんとした手当が成されている分、見た目葉子の方がマシだが）の姿だったが。
「長かったですね。——ここに来るまで」
結局、葉子に郁未は討てなかった。
正確には、郁未の真意も知らないままに、だまし討ちなどできなかった。
脳裏には、閉鎖された空間での思い出が浮かんで、そして、今目に映るその姿は、その瞳の輝きはあの頃と少しも変わらなくて。
だから、討てなかった。
今、二人を包む空気だけはあの頃一緒に過ごした食堂のようで。
だけど、現実は、黄昏と夜の帳が同時に降りてくる境内の中——。

781　狂気への扉

……また失敗した。それも二度もだ。
こんな事で俺は祐介の敵を……少年を殺すことができるのだろうか？
……できるはずがない。結界の力が薄まってきている今現在で、この島でもっとも力を持つであろうあの少年を殺すことなど不可能だ。
おそらく、柏木の一族が持つ鬼の力を持ってしても少年を倒すには足りないだろう。
……ならば、どうする？
考えながら鬱蒼とした茂みを掻き分け歩く。
さっきから思考が堂々巡りになってしまっている。
どうする？　何度同じ事を自分に問いかけただろうか？
答えはいつも決まっている。……どうにもならない。
そして、この後の行動も決まっている。その思考を振り払うかのように。
首を振る。……こんなときこそコーヒーが欲しいものだな。
どうにもならない、ではない。どうにかするのだ。どうにかするしかない。
力が……力が欲しい。少年を押さえつけるほどの。
生き残っている柏木の連中を襲って、鬼の血を頂くか？　力の制限された鬼が一人増えたところで少年に太刀打ちできるとは思わないが、何も力を持たない現状よりは遥かにマシだろう。
だが、奴らは今集団で行動している。
力を押さえつけられているとはいえ、奴らは鬼としての力を持っているため、返り討ちにあう危険性が非常に高い。
仇を取るまでは死ぬわけにはいかない。
祐介……俺はお前に何もしてやれないのか？
……祐介？

長瀬祐介、俺の大事な家族、長瀬の血族。
高校生、優しい笑顔で微笑むあの子、そして電波使い。
電波……そう！　電波だ。資料には月島瑠璃子という少女と交わることによって備わる心の狂気を力の源とする特殊能力と書いてあった。
俺も、あの月島瑠璃子という子と交わることが出来さえすれば……。
力を得ることが出来るはずだ。例え制限が掛かっていたとしても何もない現状よりは遥かにましだ。可能性はあるはずだ……いや！　あると信じたい。
うまく電波の力を手に入れることができたとすれば、その力で柏木家の誰かを狩る。鬼の血と電波の力、この二つがあれば少年にも対抗できるはずだ。
何かに気づいたように苦笑しながらつぶやく。
「俺は何を考えているんだ？　……月島瑠璃子、あの少女は死んでしまって居るではないか」
「……だから、なんだと言うんだ？　やってみなくては分からないじゃないか」
そうつぶやき、月島瑠璃子の死亡ポイントへと歩を進めたフランク長瀬の顔に浮かんでいるのはかつて月島瑠璃子、そして彼女の兄月島拓也、最後の時を迎える前の長瀬祐介が各々浮かべていた狂気の扉を開いてしまった者が浮かべていたそれだった。
どこか焦点の合わない目で遠くの方を見つめながら、口元に笑みを浮かべ呟やき月島瑠璃子の死亡ポイントに向かう足を早めた。
「まだ……腐ってないだろうしな」

782　今や彼女は

傾いた太陽が、街を斜めに貫いていた。強烈な光と影が、世界を二色に塗り分けている。
この後は、闇に閉ざされるのを待つのみだろう。
そうなってしまえば、勝ち目は薄い。あの少年は音

を頼りに接近し、〝銃〟という文明の利点をほとんど無に帰して、勝利の杯を奪い取り、難なく飲み干してしまうだろう。
「何してんだ、急ぐぞ！」
「さんざん世話んなった居候の身分で、ホンマ偉そうやな！」
「……が、がお……」
　三人は駆け続けている。危機的状況を思い浮かべて、滴る汗を片っ端から冷や汗に変えて、ひたすら走っている。思った以上に距離をあけられ、レーダーの端にぎりぎり映る光点だけを頼りに、追跡を続けていた。
　気がつけばそこは、街外れだった。忍耐が限界に達しようとした頃、往人はようやく人影を見つけた。
　顔は見えないが、女性のようだ。残念ながら少年ではない……しかし、その挙動は極めて怪しい。
　女性は何かを探しているかのように、茂みの中をじりじりと移動していた。いや、誰かを見張っているようでもある。
「なんや、あれ」
「まあ待て……何か見つけているようだぞ」
　三人が注目する中、彼女は立ち止まる（というか、コケた）。その視線の向こうに、見覚えのある少女が居た。
　……それは、天沢郁未だった。彼女が居るということは——その先に、少年が居るのだろうか？
　往人は息を潜めて晴子と視線を交わし、頷きあう。そして三人は静かに移動し始めた。
　再び、対決するために。
　長い、沈黙の後だった。
「……郁未さん」
　ようやく、名前を呼んだ。そのあと、何を言うべきなのか。そもそも、郁未さんに会ってどうするべきなのか。
　——……。

そうだ、郁末さんの真意だ。それを知らなければならない。
「……郁末さん」
もう一度、呼んでみる。他に何を言っていいのか、判らない。彼女が変わったようには、見えない。
――……ダ。
右手に槍、左手にあの機械を握りこみ、葉子は立ち尽くした。
もしこの機械が期待通りの効果を発揮したならば、少年も郁未も無力化するかもしれない。それでも迷いが、葉子の行動を制限する。槍で突かなければ、だまし討ちではない――そんな筈は、ないからだ。
(そんなことは……百も承知です……)
――……エダ。
対する郁未が返した言葉は、葉子にとって実に意外なものだった。
「……葉子さん？　葉子さんは、大丈夫なのね？」
「……大丈夫、というのは？」
お互い、ぼろぼろだ。だが、そういう意味ではない気がした。外傷ではない、ということを明確にするためか、郁未が質問を重ねた。
「声……聞こえたりしない？」
「声、ですか？」
首を傾げる。心当たりは、何もない。しかし、何かとても不吉な、予感のようなものだけはあった。
――……コエダ。
とんとん、と自分の側頭部を指で突付きながら、郁未が続ける。
「わたしたちは特に、聞こえやすいはずなんだけどね……」
何を言っているのか全く解らないままに、葉子は郁未が言葉と仕草で示していた側頭部の中――つまり自分の脳――めがけ、集中力を注いでみた。
――……コエだ。
なにか高音の騒がしい雑音が、通り過ぎて行く気がする。ちょうどカセットテープの早回しを、さら

「この声は――!?」
――余の、声だ。
聞こえた。声だ。声が、聞こえた。では先ほどのあの音も、全て自分への呼びかけだったのか。判らない。眩暈がする。
視界が狭窄する。よろめき、思わず握り締めた手の中で、機械がパキン、と軽い音を立ててばらけた。想像以上に、力が入っている。それは自分の身体では有り得ないような、異様な握力だった。
砕けた機械が掌から零れ落ちると、霧が晴れるかのように声は鮮明になった。
――これの、せいであったか。
「葉子さん!?」
郁末さんが叫んでいる。声が遠い。だが眩暈は、立っていられないほどでもない。
駆け寄る郁末を抑えて、説明を促した。
――小賢しい。
ときおり郁末の意識に混ざりこむ、少年が〝姫に高速にしたような感じだろうか。
だが、これは音だ。声などと言えるものではない。その証拠に、言語としての形をなしていなかった。うるさく、煩わしいだけだった。
「ですから、声って誰の――」
――……声だ。
そう尋ねながら、葉子は軽く頭を振って、雑音を振り切ろうとする。そうしている間に、高音はまるで生物のように、ぐんぐんと発声可能領域へ向かって低く、そして遅くなっていく気がした。
何かが、どこからか。いや、どこからともなく迫り来るような、恐ろしい感覚。何かが頭蓋骨の中から発芽するような、悪魔的な想像。その曖昧で不快な何かを放置できずに、葉子ははっきりと疑問を口にした。誰に向かって言うのか、全く意識していないまま尋ねていた。
「――誰の、声ですか?」
――余の、声だ。

君〟と呼ぶ存在。不可視の力の素養が強いほど、姫君との繋がりも強いという。
「……それは」
葉子は絶句する。
郁未の不安。その一部は、葉子も共に受け継ぐものだったのだ。やがては、私も少年と同じ、殺戮の道を歩むのだろうか？　ごくりと唾を飲み込んで、葉子は考える。
——余は常に、語りかけていた。
しばしの沈黙の後、悩んだ表情のまま首を振る。聞いていない。私は、声など聞いていない。私は、私だ。何も……何も聞いてなんか、いない。
——信用できぬとあれば、目を見開いて右を見よ。そして余の存在を、受け入れるがいい。
「右……？」
葉子が思わず呟いて、右を向く。つられて郁未もそちらを見た。
その視線の先に居たのは——郁未が何度か遭遇している——男たちだった。茂みに隠れた自分たちを狙おうとしているのだろうか、三人は移動している。
「……あいつ！」
郁未が小さく叫ぶ。それが往人や晴子を指したものか、観鈴を指したものかは判らない。
——あれは、敵だ。
葉子は郁未の叫びとほとんど同時に、もうひとつの声を聞いた。葉子は三人が敵なのだと考えた。
嫌な同調だった。流れ込むのは、殺意のみ。自覚もないままに、葉子は覚悟を決めていた。
「援護を、お願いします」
それだけ言うと、葉子は駆け出して行ってしまった。大きく回りこんで、郁未と葉子で相手を挟み込む形になるよう、接近するつもりなのだろう。
「よ、葉子さん！　待って！」
郁未の制止の声さえ聞かず、葉子はみるみる離れていった。

「ん、もう！」
とにかく、葉子を放ってはおけない。遅れてしまえば包囲とならず、各個撃破されかねない。そう考えた郁未がショットガンを握り締め、往人たちを牽制するべく一歩踏み出した、その瞬間。
寝ぼけた声がした。
「……姫君は、なかなかどうして……人使いが、荒いね」
熟睡していたはずの少年が、こちらを見ていた。寝転んだまま夕陽に目を細めている。ほんの数分寝ていただけで、はやくも寝癖がついていた。
「……？　……人、使い……？」
「うん。どうしてこんなに遅れたのかは、解らないけれど。侵蝕速度が一番早いのは、彼女だろうと思っていたんだ」
上体だけ起こした少年は、眠そうな表情のまま、そう言った。対する郁未は、立ち尽くすのみである。
少年は彼女に向かって、一瞬だけ微笑みかけた。

しかし、すぐに笑みを収めると、おもむろに立ち上がった。夕日の眩しさのためか、それとも他の何かのためか、目を細めて、しかめたような表情になる。
そして、ぽつりと呟いた。
「……今や彼女は、君より〝こちら側〟だよ」
今ヤ彼女ハ。君ヨリ〝コチラ側〟ダヨ。
少年の言葉が、郁未の中で虚ろに響く。彼女は苦悩の表情を浮かべたまま、再び社の中に入り、少年に駆け寄った。
「寝癖……できてるよ」
郁未は彼の言葉に対して、何の結論も出せぬままだった。この期に及んでなお、意味のないことを言ってみる。そして彼の寝癖を押さえてやる。
「ん？　……寝相は、いい方だと思っていたのだけれどね」
「ばかね……」
郁未は少年を抱きしめた。
愛しさと、悲しさと。

恐れと、悔しさを込めて。
「……行ってくる」
郁未は、駆け出した。

783　戦い続けた僕らのために

さて。
我ながら弱気な声だった。
「その、——、——？」
蚊も殺せないような、か細い声で呼びかけてみたが、目の前で談笑している婦女子どもは小生の声にまるで反応しやがらない。
ただ一人、自分の連れである来栖川芹香嬢だけが心配げな目で小生の様子を見てくれているが、手首狩人である七瀬留美嬢やら巳間晴香嬢はまるで気にせず喋くっていやがる。リストハンターめ。む。リストハンターと書くと何かかっこいいぞ。けしからん。Wrist-Hunter だぞ。
「誰が手首狩人よっ！」
二人から同時にわが後頭部を目掛けて拳が叩き落される。——聞こえてるのかよ。さっきの発言は無視してんのか。同じような声の大きさだったじゃねえか。なんだそれは。聞こえてるなら、おい。やることあんだろが。芹香さんもおろおろしてないでさ。
「それでね、あたし達は潜水艦を見つけたんだけどね。それを操るのに指紋照合が必要らしいのよね」
「それで高槻やらの手首を集めてきたって訳。別にそれ以外の意味は何もないんだから、勘違いしないでよね。とにかく。——上手くいけば帰れそうよ、あたしたち」
結局無視したまま話を続ける奴らだった。しかしその内容は非常に興味深いものだった。僕は潰れかけた腹の力を振り絞って喜びの悲鳴を上げる。事態はゆっくりとだが、確実に収束に向かっているのだ。
——帰れるかもしれない。
もうこれ以上、人の死ぬところを見ないで、帰る

ことが出来るのかもしれない。
「それで、北川と芹香さんは施設に向かってるんだよね？　――あたしらはどうしようか、晴香」
「あたしたちは取り敢えず学校に向かうんだったんでしょ？　取り敢えず北川」
　巳間晴香は俺の顔を見て言う、
「おう」
「学校行って様子見てきたら、あたしらもそっち向かう。芹香さんのこと、ちゃんと守りなさいよ」
　言われるまでもない。
「了解した」
　俺は親指を掲げ、見る人間を安心させるだろう自信に充ちた笑顔を作り見せた。晴香たちも小さく息を吐いて笑顔を見せる。七瀬は言う。
「信じてるわ。あんたは馬鹿だけど、ちゃんと考えて行動できる人間だ、ってね」
「うい。任せとけ」

　さて、誰も違和感を感じてないですね。たぶん。
生き残る希望を掴み取ろうと、互いが最善を尽くし、互いが最良を祈る、まるで映画の一コマのような僕達の様子が浮かぶでしょう。
　だけどですね、「了解」とか格好よく言いながら親指を立てる僕の様子は、ちょっと母さんの想像図とは違います。違うと思います。
その。
　僕達に状況を説明し、僕に指示を言い放つ前にですね、やるべき事があると思うんですよ。本当に気づいてない、なんて訳がないんですよ。
　おいこら。ナメんなよ男を。ああ？　こう見えてもてめえら犯し倒すくらいの度胸はあるんだぞ？　強い強い言ってもお前ら雌だろが。腕力の前に屈服させっぞ。判ってるのか？　ナメんじゃねえええ！
　全部心の声である。情けない。
　……何をしろ、って？
いや見ればわかるだろうが。ああ？　判らん？

舐めんなよクソがッ。てめえらまで俺をナメてんのか、あぁん？　俺はハンサムガイだぞ！　普段なら女の子の方から寄ってくるくらいのな！　しかも愉快な人間だぞ！　喋らせたら止まらない、チップスターの比じゃないぞ！　その俺様をナメてるのか。いい度胸じゃないか！　てめえその醜い面をこの拳で更に醜くして、もう醜いを通り越して、半周して超絶美形にまで変えてやろうか。
……まあ良い。説明してやろうじゃないか。話が進まないからな。
――誰に話しているわけでもない。言うなれば心の内にあるステージの、その観客に説明している。その観客ってなんだ。脳内自分か。何で脳内自分に説明する必要があるんだ。この辺、自分はすごくアホだなあと思う。
――俺、北川潤は。
今現在、まるで動けないのである。何故か。
七瀬たちが立ち上がり、こちらに手を振り「んじゃ行くわ」などと抜かすので、俺はとうとう頭にきて、真っ赤な感情のままに叫ぶ。
「あの、七瀬さん」
叫んでいなかった。むしろ丁寧だった。
「何？　まだなんかある？」
……屈託無く笑わないで欲しい。
「まだ僕の上にですね、非常に重厚でかっこいい流線型の鉄の塊、しかして決して人間を固定するために使われるわけではない――」
つまり。
彼女らが暴れ馬の如くに扱い、ここまで乗ってきた――７５０㏄と思われる大型のバイクが、未だに小生の上に載っかっているわけである。
早くどかせぇぇぇっっこのクソアマ共がぁっ！
犯すぞっ！　犯し倒すぞっっ!!
――心の声である。あくまで俺はジェントルマン。
「ああ、ごめん」
軽い。わざとじゃなかったのかよ、つーか。俺が

何も言わなかったらこのまま置いてくつもりだったのか？　なんだそれ？
「……まあ、慣れたけどね」
そんな風に、潰れそうな肺をわざわざ奮い立たせてまで溜息を吐きつつ、俺は愚痴をもらした。

二人がかりでも無理だったので、芹香さんも加わって漸くバイクがどかされた。人間三人がやっとどかせるくらいの重さのバイクに潰されていた人間は、果たして無事に生きられるものなのか。まあなんとか生きてはいる。
はぁ。
死ぬかと思ったがなんとかバイクの下から脱出である。だが肺が痛い。肋骨が折れてその破片が肺にぐっしゃーと突き刺さっとるんじゃなかろうか。もしかしたら更に重圧で内臓が破けてぐわぐわぐっしゃあああんって状態だったりするかも知れん。
……死なないよな、俺。――こ、こんなので死んだら泣くぞマジで。ギャグにもならん。ここまで頑張ってきて、最期はこれなんて酷過ぎる。
痛む身体を起こし、俺は息を吐いた。痛む肺は、しかし言うほど大袈裟な痛みではなかった。まあ痛いは痛いが動けないほどではないし、こうして無事に呼吸も出来ている。

――さあ。今度こそ行かなければいけない。俺にはまだ、大切な使命が残っている。
ＣＤに収められた魔法――この島における俺のすべてを賭けたもの――を発動させる。
そして、全てを終わらせるのだ。
――上手く行けば、帰れそうよ。
晴香のその言葉を聞いて、俺が思い浮かべたのは一人の少女のこと。彼女とは、この島で出会い、ずっと一緒にいて、笑い合い、そして――最後は俺を守ろうとして死んだ。

二人で「にこにこぷん」を観ようという約束は、もう永遠に果たされることはない。
一緒に帰りたかったと思う。二人で無事に帰って、ジャジャ丸やピッコロやポロリの無機質で凝り固まった笑顔を見たかったたと思う。フリーザさんの声のポロリを見たかった。あいつは「フリーザさんの声」で判るかな？　判んなかっただろうな。あいつはアメリカンだからな。アメリカではフリーザさんの吹き替えは誰がやってたんだろうな。あっちに日本のアニメとか輸出されてるらしいけど、こっちで言う山寺宏一みたいな人、あっちにもいるのかな。
一緒に帰りたかったと思う。
もう、思い出しても涙は出なかった。けれど、涙よりも重いものが、俺の心の底で、生きる燃料となって、戦う力となって燃えている。
――ゲームを終わらせるにはどうすればいい？
目の前で起こる悲劇や惨劇に対して、俺はちっぽけで無力な存在だった。足りない頭を使って必死になって考えた。そして、ＣＤという手がかりを得て、ようやく俺は反抗の手段を得ることができた。
――やっと。やっと、向かう事が出来る。
多くの寄り道をした。だけど、今度こそ――俺のすべてを使って、このゲームに幕を引いてやる。

立ち上がって小さく息を吸い吐き、俺は晴香と七瀬に向けて親指を立て、「幸運を」と言い放つ。きょとん、とした目で俺を見る二人は、少し間を置いて噴き出し、同じように「幸運を！」と親指を立てる。俺の横で芹香さんも親指を立てている。
互いの無事を。互いの健闘を。互いの幸運を。この親指には色々な意味が込められていて、それ以上の言葉をかわす必要は無いのだった。
「すぐ前まで潰れてたヤツが突然そんなポーズ取るから、思わず笑っちゃったじゃない」
などと七瀬は悪態をつくけれど、その笑顔に嫌味なものは何一つない。ただ、俺の顔を見て嬉しそう

に笑っている。
「自分らで潰してたくせにひどい話だよ。まあいいや。俺達も行くよ。やるべきことがある」
七瀬は頷き、もう一度親指を立てる。
「うん。それじゃあ」
と、互いに背を向けようとしたところで、晴香がふと呼び止める。
「待って北川。潜水艦のことなんだけど……」
「うん？」
「施設には放送機具とかあるんだよね？　島にいる全ての人間に届かせることのできるだけの規模の」
「ああ。潜水艦があるってこと、放送しておく？」
先読みして尋ねてみたが、晴香はどうしてだか首を傾げ、ひどく迷っている様子だった。迷うようなことではないと思った。脱出手段があると判れば、これ以上争うことなどない筈なのだから、出来るだけ早く生存者に伝えるにこしたことはない筈だ。
しかし、逡巡を終えた晴香が発した言葉は、
「あたし達が来るまで、放送はしないで」
そんなものだった。
どうしてだろう、と疑問に思わなかったわけではない。けれど何か考えがあるのだろう。ここまで戦い続け、生き延び続けてきた少女が、こうまで考えて出した解答だ。間違いではないのだろうと思う。そう思った俺は、素直に頷いた。
それで会話は終わった。俺達は別れ、互いの目的地に向かって走り出した。
「それじゃあ、また後で！」
叫ぶ七瀬の声に手のひらを掲げて応え、そのまま振り返りもしなかった。どうせすぐ会える。互いに祈った幸運のまじないはきっと叶うだろう。
走り出してしまえばすぐだった。考え事をする暇も、言葉を交わす暇も無い。芹香さんの手を引いて走り続け、走り続け、そうして俺達は目的の施設に到着した。俺たちの戦いは、もうすぐ終焉を迎える。

それが終わっても、君が微笑んでくれることはもう無いんだと思うと寂しいけれど、今は――その痛みすらも力に変えて、この戦いを終わらせよう。

784　笑い続けた僕らのために

こうして無事にＣＤの解析も終了したわけであり、わし、グレート長瀬はモニターを眺めながらぼやいているような暇がある。
「ふぅ」
今まで後ろで遊んでいた二人――大庭詠美も椎名繭もその光点の動きに注目している。ゆっくりと光点がこの基地に近づいてきているのだ。自分の背後でじっとその様子を見つめている二人の様子は、今までよりずっと真剣な姿だった。
「そろそろ、放送の時間じゃの」
時計を見てわしは呟いた。長瀬の管理者が他には残っていないわけだから、最後に残された自分が放送を流す役目を請け負うのは当然だ。今度の放送での死者は少なく、戦いがもう終焉に近づいていることが良く判る。参加者リストデータを抽出し、生存判定装置の作動を調べ、死者リストと競合させ、前回までに死んでいる人間を除外し、再度リストアップし、リストに不備が無いかを黙読で確かめた上で、もう一度読み上げて確認する。六人。間違いは無い。
「坂神蝉丸、三井寺月代、柏木初音、それに来栖川芹香、……」
絶句する。気づく。今まで気づかなかったのが愚かだった。自分は高性能コンピューターだというのにどうして気づけなかったか。簡潔に言えば死んでいるのだ。自分の後ろでモニターを眺めている二人は死んでいるのだ。どういうことだ、
わしは自分にインプットされた様々なデータを駆使し、考えうる状況を全て考え、その上で結論を求めようとするが判らない。記憶領域の片隅にある一つの単語。これが結論なのだろうが、常識を常識と

して、非常識を非常識として認識することしか出来ないコンピューターには認めがたい事実だった。しかし自分はハイスペックの自動思考回路を持っていて、その柔軟さから結論を結論と認める。
この島には魔法使いもいた。超能力使いもいた。そんな世界にあっては、この単語も現実として認識して構わないのではなかろうか。
……幽霊さん、だったのじゃな。
二人とも、この島で死んでしまった可哀想な子供達だったのじゃ。無念のあまり幽霊になり、こうして基地にやってきて、のほほんと遊ぶ夢を見ているのだ。そうとも知らずわしは邪険に扱ってしまった。コンピューターに幽霊など見えるわけがない、と考えるのは至極当然のことなのだが、そんなの言い訳にもなるまい。
わしはどうしようもなく悲しい気持ちになった。本当にすまぬ、詠美に繭よ。コンピューターなので涙は流せないが、金属の擦れ合う音が自分の顔面の辺りから響き、
「ふみゅ？」
「みゅう」
その音に気づき、訝しげな目で見る二人。みなまで言うな、爺ちゃんはやっと判った。これからはお前たちのことを可愛がってやるからな。
ともかく定期放送じゃ。与えられた仕事は的確にこなすのがわしのポリシーじゃからの。
「それでは午後六時の定時放送を始める。死亡者は——四人。生き残りは十三人だ。
二十一番　柏木初音
三十七番　来栖川芹香
四十番　坂神蝉丸
八十三番　三井寺月代」
簡潔に終えた。当然生き残りの中にも彼女らは含

まれていない。生き残りの名前を放送してしまえば全てが明るみに出る。わしはだから、生き残りの人間の名前を放送するのは止めることにした。それは彼女らにとってあまりに残酷だ。

ゆっくりと光点が近づいてきている。その光点の意味するところである北川潤の到着を以って、戦いは真の意味での終わりに向かうだろう。長いようで短かったこの戦いの終着を、自分は見届けることになるのだと思う。だが、果たしてこの戦いがどのような結末を迎えるのか、わしは、まるで想像することができなかった。

自分の後ろにいる二人——幽霊であるところの二人もまた、自分の傍らで戦いの終わりを見届けることになるのだろう。真剣さは失わず、けれども笑いを絶やすことのない彼女たちは、この戦いの終着を想像することが出来ているのだろうか。

785 ココロ、ウバワレテ(前編)

ダッ! ダッ! ダッ! ダッ!
「しまった! 気付かれたか?」
完全に気配を消していると思っていた往人達にとって、殺意を伴った葉子による露骨な接近は、唐突な戦闘開始を告げる合図となった。
(だが! 殺る気の奴なら容赦はしない!)
往人は右手に持っていたシグ・ザウエルショート9㎜を構え、躊躇わず、引き金を引く。
ドン! ドン!
(ちっ……木の幹に当たっただけか……)
そのまま、葉子の姿が木に隠れる。
(銃は持ってないのか……いや、フェイクの可能性もあるな……くそ!)
往人は舌打ちをし、敵の姿を探りながら、二人に声をかける。

「晴子！　向こうが何を持っているかわからん！　気をつけろ！」
「了解や！」
「よし、あの女は頼む！」
そう言って往人はゆっくりと横に歩く。
林の中の木に隠れつつ、自分の位置から半円を描くような形でじっくりと葉子の隠れている木に接近する。
シグ・ザウエルの射程まで本当に、じっくりと。
数十秒の後、もう少しで葉子の側面に回りこめる位置に往人はいた。
(くそっ……向こうの姿が見えないのが気になるが、さっさと済ませてあっちの女の方に行かないとな……)
ベネリM3と反射兵器をもった郁未と少年にもう一人敵が増えて三対三になってしまえば、いくらこちらが全員銃を持っているとはいえ、『質』の面でこちらがかなり不利になってしまう。
この場を切り抜けるには、葉子を手早く戦闘不能にし、一刻も早く郁未と少年の足止めを頼んだ二人を助けに行くのが、往人の策だった。
だから自ら仕掛けるという往人にとって不利な状況を葉子に提供する代わりに、手早く戦いを終わらせられる状況を、往人は作り出したのである。
(あと三歩……)
ザッ
(あと二歩……)
ザッ
(あと一歩……)
ザッ
そして、射程内。
(喰らい……)
ヒュン！
最後の一歩を踏み出し銃を向けようとしたその瞬間、包丁が刃先になった槍が襲い掛かった。

「くっ！」
反射的にシグ・ザウエルの引き金を連続で引く。
ドン！　ドン！　ドン！　ドン！
ほとんど威嚇射撃のようなものだったが、そのうちの一発が槍の柄に当たり、槍を破壊する。
そこに、葉子が素早く往人の懐に潜り込んだ。
「せい！」
ブン！。
槍の柄を投げ捨て、葉子が往人の顔面に、鞭のような蹴りを放つ。
「ぐあっ！」
予想していなかった奇襲に往人はバランスを崩して二メートルほど吹っ飛び、衝撃でシグ・ザウエルをさらに後ろの方に落としてしまった。
（畜生！　無様すぎるぜ！）
毒づいた台詞を心で一人吐きながらフラフラの頭を押さえ、立ち上がろうとした時。
ブン！
「がはっ！」
二撃めの蹴りが往人に当たる。
再び顔面を蹴る衝撃に往人が耐えられるはずもなく。今度はうつ伏せになって倒れた。
（くそう！　何度も何度も……）
頭を振りながらチラッと目だけで前を見ると、ゆっくりと葉子が近づいてくる。
そして、僅かに微笑み――、
ガス！　ガス！　ガス！　ガス！　ガス！
何度も何度も往人の頭を踏みつけた。
（くそう……調子に……調子に……）
一方、鹿沼葉子は自分の揺ぎ無い勝利を確信していた。
（上手くいった、といったところでしょうか）
往人がこちらに向かって来るのは予想していた。
こっちの武器がわからず、自分から仕掛ける時には最良の手なのなのだから。

だが、『今』の自分には無力な方法だ。
数秒でしかないが、往人が何処にいたかが葉子には解った。
否、往人の場所を理解していた。
あとは簡単だ、往人が木と木の間に隠れて、自分が一瞬見えなくなるのと同時に、自分も移動すればいい。
そして、先手を取る。槍を破壊されたのは正直驚いたが。
(何故か、不可視の力がほんの少し戻ったようですね)
往人を踏みつけながら葉子はふと、戻った微量の力に満足する。
それは、侵食。
おそらくはやる気でないだろう参加者を襲う事で、彼女本来の意識は、ほぼ神奈に飲まれてしまった。
だが、そのことに彼女は気付かない。
いまの葉子は、絶望の使者。

ココロハ、ウバワレテシマッタ。
(さあ、とどめです)
往人は、動いていない。
(気絶してしまったようですね。苦しまないで済むように、首の骨を折ってあげます)
そうして、全力で飛び上がり、往人の首に狙いをつける。
ジャンプからの落下速度を足せば、葉子の体重でも、充分に骨を破壊できるだろう。
そして、足が往人の首に降りてきたその時――
「調子に乗ってんじゃ……ねえよ!」
突如思いっきり体を起こした往人が葉子の右足に拳を叩きつけた。
ドスッ
葉子の足の裏に、銀色に光る――ナイフが突き刺さっていた。
「あああっ！　あっ！　うっ！」
右足を襲う痛みに耐えかね、葉子が狂ったような

叫び声を上げ、ナイフを引き抜こうともがく。
「だああああああ！」
起き上がった往人が、葉子に負けないほどの声を上げて葉子に飛び掛り、馬乗りになる。
そして、ポケットからもう一本ナイフを取り出し、葉子の腹に――突き立てた。
「あああああああああっ！」
この世のものとは思えない悲鳴が森に、響いた。
「ハア……ハア……ハア……助かったぜ……観鈴」
そう、往人の命を救ったのは、市街地で観鈴に渡された投げナイフだった。
シグ・ザウエル以外に片腕で扱えそうな武器はないかと聞いた往人に、観鈴が渡してくれたのである。
(帰ったら……どろり濃厚十ケースだな……)
そんなことを思いながらゆっくりと往人は立ち上がり、動かなくなった葉子から離れ、ナイフを引き抜く。
抜いた傷口から血がドボドボと溢れだす。
(ひょっとしたら、まだ生きてるかもな)
シグ・ザウエルを拾い上げ、弾を込めた往人が葉子の姿を見る。
(まあ、動けないだろうし、助けてやる義理もないしな。どこの世界に殺されそうになった敵を助けるやつがいるっつうんだ)
観鈴ならやりかねないな――とも、思ったが。幸か不幸かここに観鈴は居ない。
(さて……行くか)
そう、彼は赴く。
再び戦場へ。

786　闇へと誘う翼

――まったく益体もない。なぜだ？　なぜ今回の贄はこうも自ら殺しあいを続けようとする者が少ないのだ？　これまでの贄達は皆、最後まで殺しあっていたではないか……。

――しょせん人は己の身が一番なのであろう。自らのため他人を操り、利用し尽くし、そして最後には裏切る、それこそが人間、おぬし達が余にみせてきた姿ではないか……。
――違う？　違うというのか？
他人の為に尽くし、協力し、最後まで信じるのが人である――とでもいうのか？
否！
否否！
否否否いなぁぁぁっっっ！
そのような筈がなかろう！　余は忘れてはおらぬぞ、そなた達が余にした仕打ちをっ!!
よいであろう。そなたたちの偽善の衣を今一度、余自らの手で剥ぎ取ってくれようぞ。
「それでは午後六時の定時放送を始める。死亡者は――四人。生き残りは十三人だ。二十一番　柏木初音――」

俺は一瞬耳を疑った。今の放送、なんて言った？
初音？　いや、聞き違いだろう。今になって体中の傷がうずきだしている。そうだ、それで幻聴が聞こえたに違いない。そうだろ、マナちゃん、梓。
「なあ梓、今の放送……」
俺は息を呑んだ。梓が呆然とした表情で手に持ったレーダーを見ている。
そのレーダには、……さっきまで映っていた光点、初音ちゃんの番号を示していた光点が消えていた。
おいおい、冗談だろ？　こんな時に電池切れか？
初音ちゃんが死ぬなんて事あるはずが……。
「初音っ、初音ぇっ」
突然梓が駆け出す。
「梓さん、待って!!」
「待てっ、梓っ!!」
半狂乱になった梓は俺たちの静止を振り切って走り出す。
「梓っっ!!　くはっ……」

「耕一さんっ!!」
まだ傷は完治していない俺には梓をとめるのは難しかった。
「マナちゃん、梓を追って……」
「ダメよっ!!」
私は梓さんを追うことが出来なかった。怪我人をおいていくことなんてできない。
……ちがう、これは梓さんに対する嫉妬……。梓さんがいなくなりさえすれば耕一さんは私の……
——そうだ、それでよい。それでこそ「人間」であろ……。
えっ？　今なにか……
「マナちゃんっ!?」
耕一さんの声。でも私は梓さんを……。
「マナちゃんっ!!」
耕一さんが私の手を引き走り出す。私は、ただそれに引かれるままだった。
「初音ぇぇぇっ!!」
西の海岸についた私が見たもの。それは無残な姿で横たわる初音の死体だった。
「誰がっ！　ちいくしょう！　いったい誰がっ!!」
ポトッ……。何かが砂に落ちる音を聞き私は身構える。この島に来て身に付いた習慣。
……いやな習慣だ……。
「ああっ、まったく益体もない」
私が見たもの、それはこの島には不釣合いの光景……夜の帳の中、長い黒髪で巫女装束の女の子がお手玉をしている光景だった……。先程の音は失敗して玉を砂浜に落とした音らしい。
「おまえ……一体……？　まさか管理人かっ!?」
この島に来て身についた嫌な習慣その二。人を疑うこと……。なんて嫌な女なんだ、私は……。

「余か？　そうだの、そうであるともいえるし、ないともいえる」
女の子はお手玉を続けようとし……また失敗していた。不器用だな……、まるで千鶴姉のようだ……。
「それよりそなた、知りたくはないかの？」
「えっ……？」
「そこに倒れる少女を殺めた存在を……だ」
女の子はお手玉をやめることなく尋ねてきた。
「知っているのか……？」
あの子は自分の妹として贔屓目にみていることを差し引いても本当にいい子で……なのに何故死なければならないんだ……許せない、ユルセ……。
その時、その女の子がニコッと一瞬笑ったような気がして……次の瞬間だった。
砂浜に二人の人物――片方は初音でもう片方は知らない青年だった――がいる。
「あ、彰お兄ちゃ……」
初音が心配げな声を青年にかけた。次の瞬間、青年は初音に組み付く。
そして彼は初音を砂浜へ押し倒し、その細い首をしめた。
青年の表情はうかがいしれない。ただ分かるのは……
「あきら――お兄ちゃん」
ただひたすらもの悲しく聞こえる初音の声だけだった……。
次に見たもの……。それはどこかさみしげな表情で砂浜に横たわる、初音の死体だった……。
「……そんな、初音は……、ちくしょうっ!!」
次から次へと頭の中にヴィジョンが流れ込んでくる……。　初音だけではない……みんなが死んでいくさま。
自分は見ていないはずの光景。なにかがおかしい。でも……

抗うことは出来なかった
――わかったであろう？　人とはこのようなものよ……。口ではなんとでも申すが最後は己が身の可愛さにいかようにも動く存在……。
「ちくしょう……」
――怒るがよい、恨むがよい、絶望するがよい……。なにも遠慮などはいらぬ。それこそが人の本性であろうからの。
「ちくしょぉぉぉぉっ!!」
梓は駆け出す。頭は混乱していた。衝動が抑えられない。
ずっと耐えていた。みんなを信じたかった。でも、楓が死んで、そして今ここで初音も……。
これまでなんとか保っていた理性の糸がぷっつりと切れ、彼女は今無我夢中で走ることしか出来なくなってしまっていた……。
梓さんに追いつきたくない、いやそんなことではダメ……。二つの気持ちが私の中で激しくぶつかりあう中、なんとか私たちは海岸に辿り着いていた。
そこで私たちが見たものは……
「マナちゃんっ!?」
「しっ！　静かに耕一さんっ」
梓さんが誰かと話している。私たちは木陰からそれを見守り……えっ？　梓さんが話し掛けているのは。
虚空。誰もいない、誰もいないのに……？
「知っているのか……？」
虚空に向かい梓さんは問い掛ける。もちろん返答はない。それなのに……。
「……そんな、初音は……、ちくしょうっ!!」
「ちくしょう……」
「ちくしょぉぉぉぉっ!!」
そう言って梓さんは駆け出す。
私はもう一度梓さんが語りかけていた方へと目をやる。もちろんそこには何もない。何も存在しない

「おっ、おいっ、梓！　梓ぁぁっ‼」
耕一さんの必死の叫びもとどかず、梓さんは走り去っていった。
でも私は、それを見て、どこかほっとして……その時、私は、誰かが語りかけてくるのを聞いたような気がした……。

――そうだ……、それでよい、それでよい……。

787　扉の向こう側

「確か、ここだったたな」
木々の間から呟きながら男が一人歩いてくる。
歩を進めるその先には一件の民家が建っている。
男の名前はフランク長瀬、以前はこのゲームの管理者の一人だったが、今は一人の復讐者だった。
（俺の記憶が正しければ、ここに月島瑠璃子ともう一人の死体が転がっているはずだ）
高槻がこのゲームのジョーカーとして選んだ月島瑠璃子。
（……こんなことなら、島に送り込む前に犯っておくべきだったか？）
人のぬくもりがまったく感じられない家の中を、彼は死体を捜して徘徊する。
（つくづく狂ってるな、俺も）
狂ってる、そう思える人間は狂ってなどいない。
フランクは、そんな記述を思い出した。確か、彰が持ってきた本に書いてあったものだ。だが、それも嘘だったのだろう。だって、
（――現に、俺はこうして狂ってる）
奥まった所に在る部屋を覗き込むと、そこには、重なり合うように転がっている死体が二つ。どうやら、目的の〝物〟に辿り着いたようだ。
重なって転がっている死体のうち太田香奈子だったものを乱暴に蹴り飛ばして、月島瑠璃子の上から落とす。下から、両の眼窩と額と胸に五寸釘が刺さ

った月島瑠璃子の死体が現れた。
フランクは少女の死体を跨いで見下ろす。
この島に来る前は祐介の恋人だった少女。もしかしたら、姪になっていたかもしれない少女。
（……そんな子に、俺は何をしようとしてるんだ？）
フランクの脳裏に一瞬そんなまっとうな考えがよぎる。
だが、少女を見下ろしているフランクはその視界に別のモノを捉えていた。
（くくっ……勃起してやがる）
それは、屹立した自身の股間。フランクは口で右手で押さえるが、溢れ出る笑いを止める事はできなかった。調子の外れた笑い声が、家中に響き渡る。
（そうさ、何を思い悩む？　祐介を殺した少年を殺す力を手に入れる為に必要なことだろう？　頭より身体の方がよく分かっているじゃないか。随分頼もしい限りだなぁ、おい！）
ズボンから、はち切れんばかりに勃起したモノを取り出す。
瑠璃子の顔から飛び出た五寸釘が気になる――折角の可愛い顔が台無しだ。微笑みながら少し浮いている五寸釘を体内へと押し込んだ。
衣服を剥ぎ取り露わになった部分に、フランクは己の怒張したモノを押し当てる。そのまま、腰を押し進めようとするが上手く進まない。死後硬直で筋肉が固まっているのだから当然だ。
「これじゃあ入らないじゃないか……いけない子だ」
フランクは、腰に差しておいたナイフを取り出して、瑠璃子の陰部に突き立てる。
（ああ……これで入れやすくなった）
フランクは、ほくそ笑む。
そして、ナイフであけた〝穴〟に勃起したモノを突き立てた。奥を突く度に性器がどす黒く塗りたてられていく。
――電波とは月島瑠璃子と交わることで彼女の持つ狂気が伝染して得られる能力である。彼女の狂気

の心が相手の狂気を目覚めさせるのだ。つまり、彼女が生きていなければ意味がない。
　だが、フランクはそのことを知らない。瑠璃子の中で精を解き放った彼は、電波を得ることができたと信じて疑わない。
「くぅぅぅぅ……頭がちりちりするぜぇ……これが電波ってやつかぁ！」
　頭を押さえて、狂喜するフランク。
「これで、これで俺は電波を――祐介の仇をとることができる力を手に入れることができたんだ！　まずは……まずは、そうだな、少年以外の連中を全員消してやる。あいつ等が、さっさと死んでいれば、祐介は島を出ることができたんだからな」
　電波という狂気の力を求めたフランクは、その力を得ることはできず、ただ、己自身の狂気を深めただけだった。
　そのことに気付く理性も無くした彼は、ただ、それが祐介の弔いだと信じて殺戮を開始する。

788　引き金の重さ

　銃声が、聞こえる。足を止め、息を飲む。
　避けられぬ戦いは、既に始まっていた。運命の悪戯のような偶然の要素など、絡む余地などなかった。
　参加者を殺そうとする少年を、あの往人という男は放っておかないだろう。一方の少年も、自らの殺意を知る往人たちを、優先して殺そうとするに違いない。お互いが望むままに、殺し合いが始ったということだ。
（……それで、私はどうするの？）
　郁未は何度となく繰り返した、答えのない問いを心にとどめて、再び駆け出した。とにかく今は、葉子を助けなければならない。走る。ひたすら、走る。
　いつのまにか、銃声は聞こえなくなっていた。早くも決着がついてしまったのだろうか？
（葉子さん！）

心の中で叫ぶ。それと同時に、聞き覚えのある声が耳に飛び込んできた。

『往人さん……』

『大丈夫や、居候は負けへん』

郁末はくるりと振り向いた。大きく回りこんでいた観鈴たちと郁末は、互いに気付くことなくすれ違っていたのだ。

(観鈴……)

苦悩のために眉間に皺を寄せながら、静かに散弾銃を構える。

「……観鈴、止まりなさい。それ以上進めば……間違いなく、死ぬわよ」

刺激しないよう静かに、だがはっきりと発音できるように心を抑え込んで、郁末は言った。それ以上進めば、少年がいる。今は休憩しているはずだが、いつ飛び出してくるかは判らない。もし観鈴たちが遭遇したならば、間違いなく、死ぬ。

……もしかしたら、もう飛び出しているかもしれない。どきり、と心が揺れる。

「郁末さん……」

悲しそうな表情の観鈴が、顔だけ振り向いて、ぽつりと呟いた。あきれた事に、もともと銃すら構えていない。

……そういう娘なのだ。そんな彼女の意思を、周囲も尊重しているのだろう。

「くそっ！　ホンマむかつく小娘やな！　自分、さっきっから何がしたいんや!?」

対照的に、拳銃を握り締めた女――観鈴の母、晴子――が吐き捨てるように叫ぶ。

(……知らないわよ)

憮然として、思わず呟く。

そうだ。私には何度となく、この因縁の幕を閉じるチャンスがあった。その度に結論を先送りにして、うやむやのまま互いに傷を増やす結果を導いている。私は、何がしたいのだろう。

(あの時、引き金を引いていれば……)

そんな場面が、いくつも思い浮かぶ。
（私は、強くなんかなかった……）
あいつが言うように、自分を見失わない強さはあったかもしれない。でも、それが何になるのだろう？
少なくとも、運命を自ら切り拓くほどの強さなんか、なかったのだ。

郁未が構えた銃によって、この空間は支配されていた。しかし、たったひとつの叫び声が、容易にその支配力を切り崩してしまう。
『あああああああああああっ！』
（葉子さん⁉）
一瞬だけ郁未の注意が外れ、その僅かな隙を逃さず、晴子が動いた。
「観鈴っ！　伏せときっ！」
観鈴を茂みに蹴り飛ばし、晴子自身は反対側に飛ぶ。郁未の視線が戻るのと、ほとんど同時だった。
「くっ！」
郁未は照準に迷い、手間取った挙句、散った二人を追いきれなくなり、防御を求めて木の幹に隠れた。
「小娘、今の声聞ぃたか？　居候の、勝ちや！」
嘲笑うようにして、拳銃を構えたまま立ち上がった晴子が、高らかに宣言する。
「……まだ、判らないわ。随分長い間、銃声が聞こえないじゃない」
銃声がして、続いて葉子の叫びが聞こえたのなら、葉子の敗北は決定的だ。だが現状では、まだ判らない。
その辺の理屈は、晴子にも解っているのだろう。苛立ちに身を任せ、発砲してきた。
「やかまし！　黙っとけ！」
ガン、ガン！
デザートイーグルの弾丸は、郁未が手を回しても届かない程の太い木の幹を、易々と削っていく。好きに撃たせれば、調子にのせてしまうかもしれない。
「いい気になるんじゃないわよ！」

威嚇のために、散弾銃で応射する。狙いは適当。
ズバンッ！　ドシャッ！
地面が派手に吹き飛んで、期待通り銃撃が止まった。
「くそったれが……」
悔しそうな晴子の声が、移動していた。たぶん、左へ蹴り飛ばした観鈴を巻き込まないように、右から回り込んでくるつもりだろう。
それだけ解っていれば、対応は簡単だ。
……左へ移動すれば、それでいい。
（あの娘は――観鈴は、撃たないのだから）
くるりと移動する。あとは燻り出すだけ。なんのことはない、たった一つの嘘で、それは成る。
「……観鈴、見つけたわよ」
そう言った郁未の表情は。
少年に、そっくりであったかもしれない。
「観鈴っ!?」
焦りに我が身を忘れて、晴子が飛び出す。
「――お母さんっ!?」
郁未が声をかけた茂みと全く違う場所から、観鈴が立ち上がる。
（本当に――羨ましいくらい――）
郁未が、引き金を引く。
その真正面に、晴子。
（――馬鹿な、人たちね――）
ズドン！　ビシャッ！
直撃したスラッグ弾が、一瞬にして胴体を破壊する。できたての挽肉のように掻き回された腹部から、大量の血飛沫を撒き散らし、晴子は吹き飛んだ。脱力し、銃を手放したころには、すでに眼の焦点があっていなかった。
――勝負は、ついた。
最初は殺す気なんか、なかった。
（……ごめん……。私……あなたみたいな母さんが、欲しかったわ――）
最初は殺す気なんか、なかったのに。

言葉の応酬に憎しみを乗せるうちに、いつしか互いに殺意を重ねていたのだ。
郁末は処刑を待つ咎人のような、後悔の濃い影を落として、観鈴の方を向いた。その背を貫いて、かすかな声が聞こえる。
「……み……す、ず……逃げぇ……」
晴子の声。もう助からないであろう母の、最期の願い。
「お、お母さんっ！」
観鈴が泣いている。
その手には——銃があった。握った銃と入れ替わるように、母の声は聞こえなくなった。
(とうとう、構えたのね……)
ぼんやりと、郁末は思う。何か放送がかかっている。四人、死んだようだ。聞こえているが、理解は出来なかった。
ただ名前を呼ぶだけで、精一杯だったから。
「……観鈴」
「……い、郁末、さんっ！」
観鈴が銃口を向ける。
郁末は手にした散弾銃を構えることもなく、ただ観鈴を見ていた。この娘に撃たれるのならば仕方がない、そんな風に思っていたから。
「どう、するの？　あなたが、決めて。……撃つ気なら、早くしたほうがいいわよ」
早くしないと——彼が、来るから。
「郁末さんっ！」
観鈴の手に、力が入る。
……それでも、引き金を引けないでいる。
「さあ、撃ちなさい！」
叫ぶ。
「郁末さんっ！」
叫ぶ。
そして、沈黙。
「ううっ……」
観鈴は泣き出していた。嗚咽とともに、銃口が落

ちる。

（本当に――この娘は――）

郁未は呆然としていた。この娘は、母を殺した相手すら、殺す事が出来ないのか。

許されぬ罪を犯しておきながら、何故か郁未は微笑んでいた。この瞬間、考えられないほどの安らぎが、郁未を包んでいた。

しかし、その安らぎの時間は。

泡沫のような、一瞬の夢でしかなかった。

『……それなら俺が、撃ってやる』

郁未の振り向いた先に、一人の男が立っていたからだ。

その眼に暗い怒りの光を宿した、声の主が居たからだ。

二十三番　神尾晴子　死亡

【残り18人】

789　ココロ、ウバワレテ（後編）

話しは少し遡る。

「ま、待ってください……」

――ああ、苦しい、

腹と足が、焼けるように熱い。

少し言葉を喋るにも、地獄の苦しみを味わってしまう。

でも、言わなければ、私の命は、もう幾分もないのだから。

「黙って寝てれば楽に死ねたんだぞ……」

目覚める事のないだろうと思っていた葉子の覚醒に往人はシグ・ザウエルを構えながら、彼女に声を掛けた。

「あ、貴方にた、頼みがあるんです」

今にも消え入りそうな声で葉子が話す。

「悪いが……時間がない。連れの二人を助けに行かなければいけないんでな」
「ほ、ほんの少しでいいんです、お願いし、ます」
彼女の必死の言葉に、往人は溜息をつきながら、
「三十秒だ、それ以上は待てない」
「充分です、あ、ありがとうございます」
喋るたびに、葉子の口から血が吹きだす。もう、長くないだろう。
「し、信じられないかもしれませんが、さっきまでの私は私ではありませんでした、私を操っていたのは、このゲームに巣食っている、真の、敵です」
ここで一度言葉を飲み込みながら続きを話す。
「そ、その敵は、あの人は『姫君』と呼んでいましたが、あの人もまた、姫君に心を奪われ、人格が消されるのです。恐らくは、郁未さんも」
……。
意識が遠くなっていく、ま、まだ眠っては駄目
「そして、お願いというのは、姫君を……こ、殺してください。い、今の私の自我が戻ったのは、別の意思、つ、つまり姫君の意思を貴方が殺したからです。ひ、姫君に侵食されている時に、その侵食先にダメージを与えると、どうやら、姫君本人にもダ、ダメージが行くようです」
人格が戻った時に、一度聞いた姫君の叫びが聞こえた上での勝手な憶測ですが、と話しを付け加える。
「乱暴な言い方ですが……侵食された人間……い、郁未さんや他の参加者がそうなった時に貴方がその人を倒していけば、いつかは……」
「もういい、それ以上しゃべ……」
ガン！　ガン！
音が、森に響き渡る、銃声だ。
「しまった！　始まったか！　悪いがもう聞けん！」
そう言うと往人は葉子の方を振り返ることなく、銃声が聞こえた方に走っていった。
(行って……しまいましたか……)

随分とあたふたした説明になってしまったが、恐らくあの男なら、自分の言わんとしていたことを解ってくれているだろう。
（そう、信じましょう……）
体から、力が抜けていく。
（なんだか……眠いです……、後は……あの人に任せましょう……）
自我を奪われ、罪もない参加者を傷つけてしまった女の最後にしては、悪くない。
そう思い、満足しながら、
彼女は眠った、永遠に。

二十二番　鹿沼葉子　死亡
【残り17人】

790　One way

姿を確認すると同時に、銃を構え直す暇もなく、

「ぐぁぅっ！」
銃弾が、郁未の身体を貫いた。
焼けるような痛みと共にその場に倒れ伏す。散弾銃は落としてしまい、そして拾いなおす力すら残されてはいなかった。視界が滲んでいく。傷口から意識が拡散していく。死んでしまうのはわかっていたけれど、それでも意識の欠片を拾い集めていた。
死んでしまう方がずっと楽であるはずなのに。
「郁未さん！」
「動くなっ、観鈴っ！」
郁未に駆け寄ろうとする観鈴に、叫ぶ。観鈴はびくっと体を震わせて、その場に凍りついた。
「こいつは晴子を殺した。お前は強い子だから撃てなかったが、俺にはそんな強さはない」
辛うじて残る意識の中で、郁未は往人の言葉を聞いていた。
『撃たない強さ』
それも持っていないものの一つだと。

「……わかるな、観鈴」
何も答えない。涙だけが流れるが、反論はできない。往人の気持ちは、痛いほどわかっていた。我慢する強さも持っている。それは、ある意味では悲しい強さだったのかもしれない。
「どの道お前は殺さなければいけないらしい。『姫君』とやらに侵食されている人間を殺すことが、『姫君』を弱らせることに繋がるらしいからな。信じてやってもいいと思ってる」
「……誰、から……」
やっとのことで声が出る。
「もう一人の女からだ。最後に自分を取り戻せたみたいだぞ」
「……そう、なんだ。よかった……。一つ言っておく、けど……私は操られてなんかいない。自分の意志で、彼に……」
「だったら、それがお前の間違いだ」
「間違ってなんか、いない……」
そこで、涙があふれた。
「私は……彼を愛していたから……」
どんなに清々しい涙だったことだろう。
「観鈴、目を閉じてろ」
事実上の死刑宣告。
最後の最後に、彼の傍らにいてやれなかったことが、

ダンッ！

心残りだった。

自分は絶対に、道を間違えてはいなかったと、自信を持って言える。
何故なら、道は自分の歩いてきた後に出来るものだからだ。
その時その時に、悩んで、考えて、そしてたまには考えることもやめて。

そうして続いてきた道に、例え他人が何を思おうとも、私が満足すればそれでいい。
人を、傷つけた。殺した。
後悔がないわけではないけれど。
あの時、別の選択肢を選べばよかったと思うことはあるけど。
最後に辿り着いたこの場所に満足できれば、全て許される。
最後まで彼を愛し抜いた私の道は。
間違ってはいなかった。

三番　天沢郁末　死亡
【残り16名】

791　死ぬわけにはいかない

郁末の亡骸を見下ろす。
往人も観鈴も、何も喋ることはできなかった。
無言のまま郁末の持っていた散弾銃を拾い上げて、
「!?」
悪い予感がした、とても悪い予感が。
郁末の命を奪ったばかりのシグ・ザウエルで、背後へ発砲する。
何かを狙ったわけではない、乱雑だった。
遅れて自分も振り向くと、
「驚いた。勘がいいんだね」
いつの間にか黒い悪魔が、ベレッタを構えながら、微笑みを浮かべていた。
「……観鈴」
少年を狙う武器を散弾銃に変えながら言う。背中には嫌な汗が滲んでいた。
「逃げろ。どこだっていいから、逃げろ」
「え？」
「お前が本当に誰も撃てないってことはわかった。だったらこの場にいない方がいい」

足手纏いになるから、と、心のなかで呟く。もし観鈴を人質にとられたらこっちにはどうしようもなかった。そしてこれは嫌な考えだが、この状態で自分が殺された場合、観鈴は絶対に逃げられない。観鈴から目を離すことになるのは晴子に申し訳がないが、ここにいない方が生き延びる確率が高いのではないかとも思う。
「で、でも、お母さん……」
「後で一緒に来ればいいから、今は早く逃げろ」
「いいのかな？」
少年が口を挟む。その口調は、どこまでも軽い。
「逃げる背中を、僕が撃つかもしれないよ？」
「そうしたら俺がお前を撃つのはわかってるだろ。お前はまだ死ぬわけにはいかないはずだ。だからお前は、観鈴を撃てない」
その返事に言葉を返さず、ただ肩をすくめるだけ。
「……わかった……」
今の会話で自分が足手纏いだということを実感できたのだろう。観鈴は首を縦に振った。
「絶対に死ぬんじゃないぞ。それから……」
もう、ここには戻ってくるな。
「……行ったみたいだね」
「……」
「君は一つ間違ったことを言った。姫君はもう降りてきている。今も島を引っ掻き回してるんじゃないかな？　だから僕の役目はあらかた終わったようなものだよ。もっとも……」
一度言葉を切る。
「死ぬつもりはないけどね」
「俺も観鈴のお守があるしな。それと姫君を殺すように頼まれてる。死ぬわけにはいかないいな」
長い間のにらみ合い。
いつからか、ゲーム開始から二度目の雨が、二人の間にカーテンを敷いていた。
二人とも動かない。

きっかけを待っている、引き金を引くきっかけを。
「随分、我慢強いんだね」
「……精神だけはタフなもんでな」
空を被う黒雲は、ますます濃くなってゆく。
雷鳴もする。
訪れた闇が、二人の姿を覆い隠す。
そして、時間は過ぎて――

792　雷

雷が近くに落ち、弾かれたように観鈴は走り出す。
もうここには戻ってくるな。
その言葉が気掛かりだった。
戻ってきてはいけない。
戻ってはいけない。
それはきっと、悪いことが起きるから。
だからといって――
じっとしているなんて、できるはずがなかった。

鳥居を潜る。暗くて、何も見えない。
暗くて、何も見えない。
また、雷。
周囲が照らされる。
観鈴が見たものは――二つの死体。
散弾銃で頭部がずたにされた少年。
そして、血溜まりの中で動かない往人。
雨が、強くなった。

三十三番　国崎往人　死亡
四十八番　少年　死亡
【残り14人】

793　右手に剣を、左手に枷を

既に私たちは疲弊しきっていた。それでもこうやって歩み続けることが出来るのは、もうすぐ戦いが終わると信じることが出来ていたからに違いない。

希望の弓がこの手にあるから、こうして戦い続けることができるのだ。
もしも、希望の弓が砕け散ってしまったならば。
柏木千鶴という私を構成しているものすべては。
何処に消えてしまうのだろう、と、ふと思った。

施設に向かって歩いていた私達は、その施設まであと数分といったところまで至っていた。それほど遠い道のりでも無かったのに、足は重く、頭は上手く働かない。だから自分たちのすぐ傍にまで他者が近づいていたにも関わらず、反応が少し遅れてしまっていた。気付いたときには彼は自分たちの前に立ちはだかっていて、その右手には拳銃が握られていた。気を抜きすぎたと思う。ここまで状況が進行してなお戦おうとする者がそうそういるわけがない。そんな風に甘く考えすぎていたのだ。
「ッ――」
自分の後ろの月宮あゆが多少震えながらも武器を構え、スフィーを背負ったままの自分も同様に武器を取り出そうとし、ここで漸く矛盾に気付く。殺し合いを続けようとするならば、自分たちが武器を取り出す前に奇襲でカタをつけていた筈だ。なのに目の前の彼はそうしなかった。この状況が意味することは至極単純だ。
案の定だった。彼は右手に持った拳銃を私の足元に向けて無造作に放ると、白い両の掌を見せて、
「僕に戦う意志はありません」
そう言った。私たちはほっと溜息を吐くと、彼に向けた銃口を下ろした。戦闘をする意志のない人間は確実に増えている。戦いはゆっくり終わりに向かっている。多くの犠牲者を出して、多くの悲劇を生み出してきたこの戦いにも、やっとのことで終わりが見えてきたのだ。希望の弓は確かにこの手にある。
傷だらけの肉体とは裏腹に、少女のように高い柔らかな声と子供のような幼い顔立ちが特徴的だったその青年が次に発した言葉は、ただ一言。

「魔法使いを捜しているんです」
「あ、見えてきたよっ」
彼——七瀬彰と共に歩いていた私達は、施設が見える辺りまで到着した事を、あゆの高い声で知った。
「ええ」
私はあゆの背中で眠ったままのスフィーをぼんやりと眺めながら、小さく頷いた。
——詳しい話は、施設に到着してからします。
彰はそう言ったきり、自分達の後ろに黙ったまま付いてくる。魔法使いを捜している。その言葉から推測するに、彼もまた神奈備命の存在に気付いたのだと思う。彼は見たところ普通の人間だが、それは自分たちだって同じだ。自分たちも普通の人間に見えるけれども、特殊な力を持っていて、神奈に気付くことが出来た。彼もまた、特殊な体質の持ち主で、神奈の邪悪な意志を感じ取ったのだろう。そして、全てを終わらせるためには、自分一人では無理だと考えた。だからこうやって自分たちに接触してきた。
協力者は多い方が良い。神奈が誰に乗り移ったとか、そういう事を調べる上でも人手は多くないといけない。多い方が良いというより——出来るならば、生き残っているもの全てが協力しあって、戦いを終わらせないといけない筈だ。
とにかく、目標の施設はもうすぐだ。
「やっと戻ってきたね、あゆちゃん」
息を吐いて言うと、自分に替わってスフィーを背負っているあゆは、にこりと微笑んで頷いた。
——千鶴さんだって疲れてるでしょ。交替で背負っていこう？
そう言って自分の背中からスフィーを奪い、にこりと微笑んでくれたあゆの言葉が、疲れ果てた気力を回復させてくれた。すごく健気で、自分の妹——初音に通じる暖かさと癒しを与えてくれると思った。
あゆの笑顔を見て、妹である初音のことを思う。

大切な末妹である初音のことを。
初音に会いたい。梓は初音に会えただろうか？　気まずい別れ方をして、それ以来会うことが叶っていない。会って——とにかく、謝りたい。何を謝るのか、と言われても言葉は思いつかないけれど、
私ははっと息を呑んで、思わず後ろに振り返りそうになる。確かあの時、初音は青年と一緒に居た筈だ。私が殺そうとした青年だ。その顔までは覚えていないけど、体格や服装は朧気に思い出せる。雰囲気こそ違う気がするが、その特徴は、今自分の後ろを歩く青年と共通する点が多いように思えた。
これはどういうことなのだろうか。

「あれ？　あそこにいるのは誰かな？」
思考の海から現実に引き戻したのは、やはりあゆの言葉だった。彼女が指差した先に見えたのは、一組の男女だった。女の方は来栖川芹香。自分達の捜し人の一人であった少女。もう一人は、高校生くらいの少年だと思う。彼らも明らかに施設の方に向かっていて、当然、自分たちと志を同じとしているのだと思う。喜ぶにはまだ早いと判っているけれど、それでもやはり、嬉しかった。
「さ、私達も急ごう」
そう言って歩き出そうとしたところで、掠れた声が聞こえた。

「千鶴さん。僕はあなたに、どうしても言わなければいけない事がある」
振り向いた私は、青年の只事では無い気配に足を止めた。酷く弱々しい、まるで罪を告白する咎人のような雰囲気に私は困惑する。彼の瞳に光はなく、深い闇が沈んでいた。
「僕はあなたのように——魔法使い、或いはそれに類似した人間を捜していた。僕は普通の人間だから、神奈に対抗する手段をもたないから、だから、あなたたちのような人を捜していた」

普通の、人間？
　私の底にある不安は、ゆっくりと色を持ち、形を持ち、重みを持ち、意味を持ち、大きくなってゆく。青年はゆっくりと私の傍に近づき、私の服の袖を掴む。ぶるぶると震えているのが伝わってきて、今にも崩れ落ちそうな様子で、それでも彼は言葉を紡ぐ。
「それがどういう事だか判りますか？」
　彼だけが震えているのではないと思った。震えているのは私も同じなのだ。心の底で生まれた不安の塊には遂に「目」が付いた。真っ赤な大きな目で、意志も意味もない視線で、私を内側から見つめる。私は耐えられなくなり、叫び出したくなるのを必死に堪える。
　彼は今から、何を言うのだ。
「それでは、邪悪な意志――神奈の存在を、ただの人間である僕がどうやって知り得たか」
　青年は目を閉じ、歯を食いしばり、沈黙を呼び起こし、そして漸く意を決して目を開き、ゆっくりと口を開いた。
「僕は――神奈に乗り移られたんです」
　私の不安は。ゆっくりと、ゆっくりと、私の心の底から這い出してくる。足もなく手もない歪な球形のそれは、私の心を制圧し、遂に身体の自由まで奪おうと蠢き出したのだ。
「そして、一人の人間を殺してしまったんです」
　青年はまっすぐ私の目を見ていた。黒目がちな大きい瞳は、まっすぐ私のことを見つめていた。
　私の不安は、私の身体の自由を完全に奪った。震えることとさえ今は出来ない。思考することとさえ今はままならない。今出来ることは、ただ、彼の目を見つめ返すこと。ただ、彼の次の言葉を待つこと。
　彼の告白は、ただの懺悔ではない。ただ殺したと言うだけならば、私の不安はここまで強大になる筈がないのだ。
　――彼は、誰を殺した？
　思考が漸く回り出す。あゆやスフィーを先に行か

せ、私だけをここに足止めした理由は。私が年上の大人で、懺悔するならば私にだけ聞いてもらうべきだと考えたからか。本当にそれだけか、それだけならば私は早く彼に言葉を返さなければならない、大人として、共に戦う仲間として「憎むべきは神奈で、気に病んではいけない」、そのようなことを言ってあげなければならない。なのに、目の前で口をゆっくりと開こうとする青年の顔を見ると何も言うことが出来ない。何かを言おうとしている青年を前に、私は口を動かせない。
　彼の話にはまだ続きがある。
　これ以上彼は何を続けようというのか。早く言ってしまえ、彼に言うべき言葉を、
　彼の話は私が聞かなければいけないことである。
　それは違う、違う筈だ。
　彼が殺したのは私の知っている人である。
　違う、
　彼が殺したのは私のたいせつな人である。

　――っ、
　彼が殺したのは柏木耕一であり、柏木梓である。
　――ちがう、
　彼が殺したのは。

「それでは午後六時の定時放送を始める。死亡者は――四人。生き残りは十三人だ」
　思考の外側で、世界の外側で定時放送が始まった。私が思考を一瞬停止させ、はっと空を見上げた瞬間に青年はゆっくりと口を動かした。
「あなたの、良く知った、人です」
　不安は事実となった。私の身体は全てばけものに支配されて、意志は全て消滅した。
「やめ、て」
　意志ではなく、ただ人間の本能としてやっとそう口にする。ただ、つらいことを先延ばしにするだけの言葉で、意味なんてひとつもない言葉で、
　それでも。青年の口は止まった。

けれど、何の意味もないことで。
そして、放送は止まらなかった。
「二十一番――柏木初音」
「うああああああああああああああああああ!!」
希望の弓は砕け散り。
ばけもののようにわたしはさけんだ。

姉妹だから、いつだって会えるし、いつだって話せるし、いつだって、いつだって、いつだって、私はまた、失ってはいけないものを失った。
何も話すことが出来ないまま、私は私のカケラを失ってしまったのだ。
――理解出来るつもりだった。彼は悪くない。彼は一片たりとも悪くない。本当に悪いのは元凶である神奈であるという事が理解できると。
そんな風に割り切れるわけがなかったのだ。
「あなたはッ――あぁぁっ!」
「千鶴さんッ――!」

あゆがスフィーを地面に寝かせ、慌てて駆け寄ってくる。放送を聞いて私の咆哮の意味を理解したのだろう。そして、どうして私が七瀬彰に掴みかかっているかもきっと想像できたに違いない。そして、七瀬彰が柏木初音を殺したことが、七瀬彰のせいでないことも判っているに違いない。
全てを想像し切った上で、しかしそれ以上に続ける言葉は無かったのだろう。あゆは立ち止まり、ただ表現しがたい表情で私たちを見つめている。ただ叫ぶ。けれど叫んだ筈なのに言葉にならない。
「そんなのっ――」
間違っている。判っている。判りきっている。
私は強引に彼を地面に押し倒し、ばけもののような顔をして、ぶつける場所のない筈の怒りと悲しみを、七瀬彰の頬に叩き込んだ。彼はちっとも抵抗せず、痛みと怒りと悲しみとを全て受け入れるように、ただ、動かずにいた。
二発、三発。私の怒りは、悲しみは、間違った方

向にぶつけ続けられる。彰の頬は赤く腫れ、口からは血が流れ出し、それでも彰は目を閉じず、歯も食いしばらず、苦痛の悲鳴もあげず、泣きさえもせず、ただ、動かずにいた。
「僕が、――殺しました」
腫れた顔で彰は言う。私の拳を浴びながら、彰は掠れた声で言う。私の拳はまだ止まない。懺悔を続ける彰の声も聞かず、ただ拳を振るう。ただ拳を振るう。ただ拳を振るう。
気付くと私の頬を涙が伝っていた。涙は彰の腫れた顔に落ちる。私の手は止み、ただ、彰の上に圧し掛かって、泣き始めていた。
「はつねぇ……っ」
彰の血で汚れた手を顔にあて、人目も憚らず私は号泣する。何も話せなかった。ヒトゴロシになった私のことを許しても貰えず、ただ、先に逝かれてしまった。私を許してくれる人がいるならば、それは初音を以って他にはなかったのだ。

「ごめんなさい」
呟き声がやっと私の耳に届いた。彼が謝ることではない。謝ることではないけれど、それでも私の怒りも悲しみも、この青年に痛みとなってぶつけた。私はどこかで、彼のせいだと思っているのだ。
「僕の心が弱かったから、あなたの大切な妹を、初音ちゃんを、殺してしまった。あなたに殺されても、奪ってしまった。僕はあなたに殺されても、文句は言えない。僕は、あなたに殺されなければならない」
青年はそう口にした。
そう、もしも彼の心がもう少し強かったならば、神奈に心を乗っ取られなかったならば、初音は死なずに済んだかもしれないのだ。
そんなの間違った考えだと判っている。けれど、もし、があるのならば。この青年の傍に初音がいなかったならば、初音は死ななかったかも、
そこで私は気付く。
どうして初音は、この青年の傍にいたのだろう。

神奈に心を乗っ取られた青年のすぐ近くに、たまたまいたから初音は殺されたのか？　そうなのか？　違う。それは違うと思う。この青年は先ほど、初音のことを「初音ちゃん」と呼んだ。ある程度の期間、初音はこの青年の傍にいた筈だ。

　そして私は思考を辿る。先ほどの既視感。この青年を以前に見た記憶。その記憶は初音に関する記憶で、青年はただの背景だった。

　初音は。

　この青年の傍に、ずっといたのだろうか。

――思考を続ける私の下で、彰は言葉を続けた。

「でも、今は殺さないで欲しいんです」

　私は呆然と青年の顔を見た。

「何か――方法があるのでしょう？　〝何か〟にあの精神体を追いやる方法が。精神だけの存在を殺す事など出来ない。だけど、身体と一緒なら別の筈だ。誰かの身体の中にいたならば、肉体と一緒にあの精神体を殺す事が出来る。そうでしょう？　身体が死ねば心も死ぬ。そうでしょう？」

　その通りだった。私は青年の言葉に耳を傾ける。泣くことも忘れ、彼の言葉の真意を理解しようとする。理解しようとするまでもなかった。彼が言うことなど一つだ。

「今はなくても、その方法を見つけるつもりなのでしょう、あなた達は。その為にこうして行動しているのでしょう？」

　言いながら彰は泣いていた。掠れる声で、握った右の拳を自分の顔にあて、開いた左の掌を胸に当て、心の痛みに必死に耐えるような悲痛な声で、ゆっくりと言った。

「もしその方法を見つけたならば。僕の身体にあいつを追いやって、そして、僕ごと殺してください」

　それは、悲壮な決意だった。

　私の身体から力が抜けてゆく。彼の言葉の意味を、彼の涙の意味を理解して、やっと彼のことが判った。

彼の涙は、私の妹を殺したということへの罪悪感からきているのではない。彼の涙は、純粋に、初音を失ったことへの悲しみから来ているのだ。
「僕は――っ」
彼は、ただ近くにいた他人を殺したわけではないのだという事。彼は、ずっと自分のそばにいた、大切な人を殺してしまったのだということ。
「初音ちゃんの仇を、取らなくちゃいけない――っ」
初音のことをずっと守ってきて、最後まで守り通すつもりで戦ってきて、それなのに守れず、自らの手で終わらせてしまったのだということ。
それは。なんて、救われない話なのだ。
「だから、僕を、殺してください――っ……」
ごめんなさい、と彼は言った。その言葉は私に向けたものでも、他の誰に向けたものでもない。彼は、自分で殺してしまった初音に向けて叫んでいるのだ。
殺してしまった愛しい人のことを思って。
ごめんなさい、と。
彰は、二度と許されるはずもないことを。許して欲しいと思いもせず。ただ、謝り続けているのだ。
握られた拳には剣がある。それは決意の剣。
開かれた掌には枷がある。それは虚無の枷。
七瀬彰は、永遠にその剣と枷に縛られて、そして死んでいくのだと、私は思った。

794　ひとりぼっち

「往人さんっ！」
神尾観鈴は雷光の中に国崎往人の姿を認めるや否や、駆けだしていた。
雨で濡れていた地面に足を取られ、無様に転ぶ。
だがそれでも、彼女はすぐに立ち上がり、また駆けだしていた。
大した時間をかけずして、彼の下へと辿り着く。

往人の肩を揺さぶり、うわごとのように呼びかけ続ける。
「往人さん、往人さん――」
この場で何があったのか。そしてどうなったのか――そんなことは分からなかったし、分かる必要もなかった。
重要なことはただ一つ。
往人の胸元についている、ちっぽけな、つまらない傷。
こんなつまらない傷が、彼の――
「往人さん、往人さん――」
認めなければならない。
彼の、命を奪ったのだ。
「う、う、うああ――」
癇癪を起こして激しく泣き出そうとした、その時だった。
彼の身体は光に包まれ、文字通り消失し始める。
彼の肩を掴んでいた手から、重みも、感触すらも失せる。
あまりに圧倒的な喪失感だった。
もし神などというものが存在するとしたら、その神とやらは自分が彼の胸の上で泣き叫ぶことすら許さないのだろうか？
「あ――」
その身体が完全に消失した後に残されたのは、彼が愛用していた人形のみだった。それを手に取り、胸に抱える。
泣くことはできない。
全てを失った。晴子も、往人も、もういない。
本当のひとりぼっちになってしまったのだ。
だから、今までの癇癪とは違った。もう誰もいない彼女には、すすり泣くことすらできなかった。
「……」
つい先刻、往人は『強い子だから撃てなかった』と言っていた。
だがそれは、強さと呼べるものなのだろうか？

自分がもっとしっかりしていれば――端的に言えば、撃たなければならない時に撃ててさえいれば、この現実は変わっていたかもしれないのではないか？

それ以前に、二人とも強い人だった。あるいは――そもそも自分さえいなければ、晴子も往人も生き残れたのではないか？

「……わたしの、せい？」

――その通り。余の、せいだ。

その声は、観鈴の耳に唐突に入ってきていた。観鈴の今の状態では、聞こえてはいてもそれを認識することはできなかったが。

声の主は彼女の抱える人形を一瞥し――そして判断した。この少女の手にある限り、人形は完全に無力だろうと。彼女は自分と同じなのだから。

だから放っておくことにした。

後に残されたのは、いくつかの死体と、その場にたたずむ一人の少女。雨。

あとは人形。

――親友達の仇を討つために修羅の道を選んだ雪見。

――強い意志をもって、最期まで強く生き続けた智子。

――母として、本当の家族として、常に観鈴のことを想ってきた晴子。

――そして、今まで継がれてきた法術使いの想いと、自身の想いを残した往人。

その身に余る多くの、そして大きな想いを抱えた、ちっぽけな人形。

795　七瀬の不安

始めに雷雲がたちこめた。豪雨が木々へと叩きつけ、閃く怒槌が轟いた。続いて光が空を満たし、夢のように晴れ渡った青空が顔を出した。

そして現在は、沈む夕陽がその美しさを披露しようとするなり、再びの土砂降りとなっている。めまぐるしく変わる天候は、その下にいる人間の都合など、おかまいなしなのだ。
しかし、二人の不機嫌は、天候ばかりが原因ではない。
「……参ったわね」
腰に手を当てて、天を仰ぎながら呟いたのは、七瀬留美。
「とにかく、どこか雨を凌げるところを探しましょ」
首筋に手を当てながら、先に歩き始めたのは、巳間晴香。
二人は潜水艇を発見し、その悪趣味な鍵を手に入れていた。結果を報告すべく、市街地の一室に立ち戻るも、そこは無人であった。おそらく小学校へ向かったのだろうと結論し、市街地を南へ抜けたところで、死亡報告が流れた。
月代と、蝉丸。そして——初音。
耳を、疑った。自分たちが出発したとき既に離脱していた彰を除くと、現在あの小集団は耕一とマナと葉子の三人しか残っていないということになる。
あの場に何かがあった事は、間違いない。月代と蝉丸は、放送施設を発見して、そちらでアクシデントがあったのだろう。しかし初音は……どうしたのだろうか。
少なくとも、この死亡報告によって、蝉丸の放送は無駄になった。招集をかけた本人が死んでしまっては、小学校へ向かう事に不安を感じないわけがない。
「ご破算、ね」
「うん——どうしよっか？」
「北川たちぐらいしか、所在が判らないわ。とりあえずアイツが向かうと言っていた、岩山の施設とやらに行くしかないでしょうね」

雨の中を歩きながら、晴香は首筋をほぐしている。先ほどから身体の不調を訴えていた彼女に、七瀬が不安げに尋ねた。

「……晴香、具合悪いの？」

「うん……実は、相当やばかったんだけど」

「やばい？」

「幻聴、ってーの？　なんだか頭の中に、ババア言葉の小娘が住み着いた感じでさ」

「はあ？」

「〝脆いものよの〟とか、〝弱いものだ〟とか――」

「晴香……」

七瀬が心配そうに、晴香の額に手を伸ばす。

「……アタマ、大丈夫？」

「うっさいわね!!　アンタにアタマ限定で心配されると、無性に腹が立つわ！」

雨足が強くなる。夕陽を遮った分厚い雨雲と、激しい降雨が視界を狭め、二人をずぶ濡れにする。一通りいつもの口喧嘩を終えた二人の頭を冷やすのにも、十分な量の雨だ。

「……それで、今はどうなのよ？」

なんだかんだで心配している七瀬が、再び話題を引き戻す。

「うん、それがさ。さっきの放送が終わった後くらいかな？　すうっと耳鳴りが治まったのよ」

「それならいいけど……って、うわっ！」

会話を断ち切るような、激しい雨脚。あっという間に嵐のような豪雨となり、隣同士の会話すら、ままならない。

「七瀬！　早くどっかで雨宿りしよう！　さすがに、これは酷すぎるわ！」

歩く余裕すらなく、二人は走り出した。

「ね、晴香、あれ見て！」

しばらく走ったところで、七瀬が叫ぶ。何か目立つものがある。朱い構えだ。

「鳥居……？」
「神社なら、雨宿りできるでしょ」
「ふ……」
　晴香はひとり、皮肉な笑いを浮かべた。神社という宗教色の濃い建造物を前に、ふと教会での出来事を思い出したからだ。
「……鳥居、ねえ。ま、十字架の神様には酷い目に会わされたから、宗旨変えも悪くないわね」
「晴香……」
　七瀬が不安そうに、晴香の額に手を伸ばす。
「……アタマ、大丈夫？」
「しつっこいわね!!　アンタ、他人のアタマの心配をする前に、自分のアタマの心配をしなさいよ！」
　降りしきる雨だけが。
　二人の頭を冷やしていた。

796　紅い瞳

　酷く落ち込んだ、湿った声で。
　腐った死体のように、ずるずると。
　青年は泣きながら、いつまでも後悔と自傷の言葉を繰り返していた。
　見下ろす千鶴が、長い逡巡の時を経て、ようやく口を開いた。
　何かを悔いるような、悲しげな表情だった。
「こころを――」
　彰と千鶴の間に、ぽつりと雫が落ちる。その水滴がゆっくりと岩の隙間に吸い込まれ、彰はようやく沈黙した。
　気がつけば朱色の空が、藍色の闇に変わっていた。
　千鶴がゆっくりと、ひとつひとつの単語を噛み締めるように、言い聞かせる。
「こころを、強く――持ちなさい」

「……？」
「あなた、初音の敵を討つためには死んでもいい、そう思っているわね？」
「――はい」
　雨が降り始めた。カーテンレールが鳴るように、さあああ、という音が千鶴達を包み込む。
「私も……そうだった。家族を護る為なら、この身はどうなってもいい――そう思ってた。妹たちの笑顔の為ならどんなことでもしてみせるって」
「……」
　彰は心の闇の中から、微かな光を掘り起こす。初音の――春の日向のような、穏やかで明るい笑顔。それは余りにも眩しすぎて、辛い。
「……でもね」
「……？」
「それは、結局、自分の事しか考えていないってことなのよ」
　彰はどきん、と大きく心臓を一拍させた。
　かつて自分が揺らいだのは、何故か。それを――多分、そのような事を、この人は言っている。
「初音を言い訳にして、安易に自らの命を投げ出そうとするのは止めなさない。それは、邪念でしかないわ」
　彰は、息を飲む。
　初音の為になら全部捨てて良いと思っている。自分の命すら捨てるつもりだった。その覚悟を、決意を――この人は邪念というのか。
「……私も同じ過ちを犯して失敗したわ」
　二人は降りしきる水幕をものともせず、睨みあった。
「死ぬ為に戦うのと、戦った結果死ぬのとは、全く意味が異なるのよ」
　言っている理屈はわかる。けれど、それを認めることはできない。
「あなた自身が生きる為、あなたの未来の為に戦いなさい――初音はそう望んでいる筈よ」

「そんなこと――！」
彰に未来なんて無い――そう信じている。初音を殺した自分が、のうのうと生き残るなんてそんな事が許される筈がない。今の彰が死んでいない理由なんて、神奈への復讐しかない。それなのに――
「それでも、生きなさい。それが――初音を殺したあなたの義務よ」
千鶴は彰に安易な死という救済を、甘えを許さない。誰よりも初音の事がわかると自負しているから、その初音を自死の理由にするのは許せない。
彼女は刀を抜き放ち、彰の目の前に翳す。
闇夜に光る刃。
神奈を封印する剣。
最強の鬼札（ジョーカー）。
「生きる気が無いなら、どこへなりと行って、一人で勝手に死になさい」
千鶴の表情に怒りはなく。
悲しみもなく。

ただ、無表情のまま。
雨が強くなる。
滝のような、雨。
彰の視界に明瞭に映るのは、目の前の刀だけ。
そして、その奥から睨みつけてくる二つの瞳。
鬼の瞳。紅い瞳。
彰は、その瞳を睨み返す。
「――わかりました」
返事と同時に彰は目の前の刀を掴んだ。
握りしめた手の内から、水滴に混じって紅い血が滴る。
「僕は死にません。神奈を殺した後に僕が生きていたら、ですけど……」
真っ直ぐに千鶴を見据える彰。
その返答は彼女を満足させるものだった。青年の瞳には未だ危うさがあったが、取りあえずのところとしては十分だろう。
「生きる為に戦って……その中で、神奈を倒すのに

あなたの死が必要となるのなら――」
目だけを光らせて。
「私が神奈を――あなたを、殺します」
そう、言い切った。
それは、千鶴自身の誓いでもあった。
「そして、神奈を打倒するに私の死が必要なら、あなたが私ごと神奈を殺して」
次の瞬間に殺しあいが始まってもおかしくないほどの緊張感で二人は対峙する。
「……わかりました」
そう言い切った彰の瞳は――
千鶴と同じ血の紅だった。

――しかし、この二人は知らない。
その誓いの強さこそが、神奈を遠ざけることを。
そして、彰の中に潜む鬼すら押しこめてしまうことを。

797　そのこころは

近づいていた光点――北川潤がこの施設内に入ったのを確認した。
ワシはメインモニターを入り口近くの監視カメラからの映像に切り替えた。
そこでワシは信じられない物を目にした！
「な、なんじゃこりゃーーーーーーー!!」
「ふ、ふみゅ!?」
「みゅ!?」
どうやら一人と思われていた侵入者が実は二人だったのじゃ。
しかも、北川の坊主の隣にいるのは芹香嬢ちゃんに間違いなかった。
詠美嬢ちゃん達もそのことに気付いたらしい。
「おい、詠美さん。あれは何人に見える？」
「ふみゅ？　どうみてもふたりだけど」

やはり嬢ちゃんにもそう見えるか。
ということはワシの見間違いでは無ぃ。
っちゅーことは………幽霊さん、か。
やはり成仏できん霊がうようよしてるんじゃなぁ。
ワシが感慨深げに考えている横で詠美が呑気な声をあげた。
「な〜んだ、この人もあたしたちと同じだったんだ」
うむうむ、嬢ちゃん達と同じだったんじゃな。
「てっきり、この北川って人が芹香さんを殺したのかと思ったけど爆弾を吐いただけだったのね」
そうそう、爆弾を吐いただけ……。
「何ですとーーーー!!」
「ふみゅ!?　なによさっきから大きな声出して〜」
「おい！　嬢ちゃん！　今何と言いましたか!?」
「だ、だから、爆弾を吐いただけだって」
「……え〜と、するってーと、詠美も繭も死んでたんじゃなくて爆弾を体外に出しただけじゃと？」
「そうよ」
「な〜んじゃ、ワシはてっきり」
詠美嬢ちゃん達が幽霊だと思っておった——、とは言えんな。
「てっきり何よ？」
「いや、何でもない」
「ふみゅ〜ん、ヘンなの〜」
「お嬢ちゃんにだけは言われたくないわ」
「どういう意味よ〜！」
「言葉通りじゃ」
そう言えば爆弾の操作施設が無くなっておったの。
普通だったら爆弾体外除去の可能性を考えつくはずじゃが。
ふぅ、全く柔軟な思考というのも考え物じゃな。
「ん？」
ワシが思考にふけっている間に詠美嬢ちゃんがドアの所に移動していた。
「どうしたんじゃ？　詠美嬢。トイレか？」

「違うわよ！」
「それじゃどこに行く気じゃ？」
「何言ってるのよ。あの二人を迎えにいくのよ」
「はい？」
ワシは信じられない言葉を聞いた。
「あ～、お嬢ちゃん。どうやら集音マイクの調子がおかしいようじゃ。もう一度言ってくれんか」
「だから～、あの二人を迎えに行くって言ってるのよ。早くCDそろえないといけないでしょ」
そう言って詠美が部屋から出ていこうとした。
「ちょっと待った～！」
「もう、何よ！　さっきからうるさいわね～！」
「何を言うとるんじゃ！　外にいる坊主が安全な奴じゃという保証も無しに出ていってどうする！」
思わず声を荒らげてしまった。
「アンタこそ何言ってるのよ。北川って奴は芹香さんを殺してないんでしょ？　だったら安全じゃないのよ」

呆れたような口調で詠美が答える。
ワシは詠美嬢のその言葉に絶句してしまった。
「あ」
「あ？」
「阿呆か、お前は！」
「ふ、ふみゅ～ん！　誰がアホよ！」
「お前に決まっとるじゃろうが！　いい加減にそのお気楽思考をやめんかい！」
「ふみゅ～ん！　誰がお気楽よ！」
「お嬢！　物事を簡単に考えるんじゃない！」
「バカにして～！」
「黙って聞け！　いいか？　今この場でお嬢を守ってくれる人は一人もおらんのじゃぞ」
「ふ、ふみゅ～ん」
「これまではお嬢は誰かに守られて生き残ってきたのじゃろう。けど今はお嬢が繭達を守るべき立場じゃろうが！」
「……」

「詠美嬢の軽率な行動はお嬢だけじゃなく繭まで危険にさらすことになるんじゃぞ！」
ワシはそこまで言ってから詠美が涙を浮かべているのに気付いた。
「……あ～、スマン、詠美。言い過ぎた」
「……」
「でもな、詠美。お前の行動はお前の命だけじゃなく他の人にまで影響すると言うことを考えて行動せんといかんぞ」
詠美がワシに背を向け台所の方に走っていった。
「おい、ロボット」
「は、はい～」
ワシはHM―12に声をかけた。
「スマンがお前、詠美嬢を慰めてきてくれんか。ワシには無理じゃ」
「は、はい。分かりました～」
ロボットはすぐさま詠美の後を追っていった。
ハァ、ワシは何をしとるんじゃろうなぁ。
ふとそんなことを考える。
どう考えてもありゃ管理者としての行動では無いのう。
参加者が殺し合おうがどうしようがワシには関係ない。
っちゅーか殺し合わせないといけないのに、止めてどうするんじゃ！
こりゃ絶対どっかおかしいぞ。
やっぱりバグだな、こりゃ。
だ～！　もう考えるのやめ！
今はひとまず目の前の事に集中、集中。
施設内のカメラからの映像で北川達の居場所を映し出す。
ふむ、どうやら施設内の見取り図があるところにいるようじゃな。
っちゅーことはすぐにここまで来るじゃろうな。
さ～て、どうしたもんかの……。
まぁ、ワシはあくまで管理者じゃから、参加者に

は手を出せないしなぁ。
ひとまず詠美嬢の判断待ちかね。
どうなることやら。
ま、ワシは一応忠告したし、後はどう判断しようとそれは詠美の自由だしな。
好きにさせるさ。

798　少女の決意

大切な人達の死を前にして立ち尽くす観鈴。まるで、一緒に死んだのかと思うくらいじっと動かない。
そんな彼女の時を動かす出来事は唐突に起こった。
『観鈴……』
その声と共に、観鈴に抱きしめられていた人形が、再び光り出す。
『悲しむな……、お前のそんな顔を見るために、俺はお前を守ったんじゃない……』
そう、あまりに突然。
観鈴の耳に入ってきたのは、愛しい人の声。
「ゆ……往人さん！」
『ああ、そうだ、俺だ……』
やがて、雨で良く見えない観鈴の視界に、うっすらと人の姿が現れる。
「良かった……生きてたんだね……」
雨でよく見えないが、あの見慣れた服装は確かに往人そのものだ。
ああ、よかった。そう思った矢先に、
『いや――俺は、死んだ』
冷たい絶望を突きつけられる。
『すまない、俺はもうお前を護ってやれない……』
そんな過酷な現実を受け入れたくなくて、
「いや！　いやっ！　いやだぁぁぁ！」
観鈴は癇癪を起こして、拒絶する。
「お願い！　行かないでよ、往人さん！　お母さんも死んじゃって、往人さんまでいなくなったらわたし、何もできなくなっちゃうよ！　わたしだけ生き

ていたって、ちっとも嬉しくないよ！」
感情を吐き出す観鈴。
往人はただ無言で受け止める。
「どうして！　ねぇ！　なんで何も答えてくれないの！　ねぇ！　往人さん！　お願いだからっ――」
観鈴の目から大粒の涙が、次々に溢れて落ちる。
「行かないでよぉぉぉぉぉぉ！」
泣き崩れた観鈴に一瞬手を伸ばそうとする往人。
だが、思い留まる。今は彼女の悲しみに寄り添う余裕は無い。いつ命を落としてもおかしくない、そんな過酷な状況に観鈴はいる。だから、
『――甘えるな』
パシン！
ふいに、観鈴は自分の頬に軽い痛みを感じた。
目の前には、悲しい顔をした自分の大好きな人。
『俺を困らせるんじゃない……いいか？　よく聞け』
まるで子供を諭すかのように、ゆっくりと往人が話す。

『俺は、いつもおまえの側にいる、
お前が、
泣いている時も、
嬉しい時も、
悲しい時も、
寂しい時も、
そして、笑っている時も、
ずっと、ずっと一緒なんだ。
俺は、お前と一緒なんだ』
そう言いながら、往人が二人の間に落ちていた人形を拾い上げ、観鈴に手渡す。
『だから悲しい顔を、見せないでくれ。それが、俺のたったひとつの願いなんだ。しっかり前を向いて、生きてくれ……』
それは、悲痛なまでの彼の願い。
死してなお、観鈴を助けるために、彼が望んだ、願い。
「……」

それは、彼女に今、確かに伝わり——
「往人さん……わかったよ……」
今度は観鈴が、往人に微笑む。
「わたし……がんばる！　往人さんの言うように、しっかり前を向いて、一生懸命生きる！」
『そうだ……それでいい……。大丈夫だ……お前は『強い子』なんだからな……』
「うん、観鈴ちん、強い子。にはは」

——でも、どうしてだろう。涙が止まらないや。

笑顔の観鈴の瞳から、流れ落ちる涙。
観鈴の意識が混濁していく。

——でも、最後に。もう一言だけ。

「ばいばい……往人さん」
『ああ……、またな……、観鈴』

最後の往人の言葉が聞こえた時、
観鈴の意識は、ゆっくりと闇に落ちていった。

「う……うん……」
降り続く雨の中、観鈴が目を開ける。
(今のは……夢？)
なぜだろう、記憶がはっきりとしない。
自分が夢ではないと覚えているのは人形が光だした所までだ。
(夢でも……いい！)
例え夢でも、往人は自分にはっきりと言ってくれたのだ。
生きて、欲しいと。
そして、空を見上げ、いまだ降り続ける雨を浴びながら、
「往人さん。わたし、がんばる！　絶対に生き残ってみせるから！　だから……ずっと、わたしを見守っていてね」

決意をしっかりと言葉に出して叫んだ時、なぜか本当に、往人が見ててくれるような気が、観鈴にはした。
（まずは……北川さんに会おう、かな？　確か脱出方法を考えてるって言ってたよね）
観鈴はこの島の生き残りで唯一面識のある北川を頼る事にした。彼女一人では生き残るのが難しいだろうということは、彼女自身自覚していた。
（絶対に生き残ろう。それが、命を掛けてわたしを守ってくれた往人さんの願いだから）
観鈴は足元にあった散弾銃（ベネリM3ショットガン）を背負った。ずっしりとした重みが肩に掛かる。硝煙の匂いがする、多分人を殺した銃。
（自分のことは自分で護らないと……そうしなきゃ、往人さんとの約束を守れない）
決意と共に、観鈴は歩き出す。
（……でも、わたしにできるのかな？）
自分と他人を天秤に掛ける命の選択を。

799　迷い、選択、その結果

神尾観鈴は、北川が向かったという施設に向かうべく、先ほどまで死闘が繰り広げられていたとは思えないほど静かな――雨音だけは嫌になるほどうるさかったが――静かな、この神社を出立しようとしていた。
往人が残したレーダーを確認する。そこで、観鈴は重大な事実に気付いた。
二つの、光点。
レーダーを見る限り、自分のすぐ近くに二つの光点がある。
しかも、その二つの光点は、自分の元へと近付いてきている。
（どうしよう……）
彼女は迷った。
一刻も早くここを立ち去り、北川の向かった施設

を目指すべきか？
あるいは、もしかしたらこの二人は北川のように脱出を目指して動いている人達なのかも知れない。この時点になってまでなおゲームに乗っているのだとすれば、二人一組で行動するとは思えないからだ。
だとすれば、彼らに事情を説明し、助力を仰ぐべきか？
だが、もし。
もしこの二人が他の者を容赦なく殺す『敵』であったとすれば？
彼女は誓っていた。必ず生き残ると。生き残るために『敵』は撃たねばならない。そうしなければ、往人との約束を果たすことができない。
幸いにと言うべきか、武装は充実している。撃退できる可能性は十分あるように思えた――あくまで撃てたら、の話ではあるが。
本当なら逃げるのが一番だろう。けど、少し気付くのが遅すぎた。今にも目の前に現れそうなくらい。
できることなら信じたい、疑いたくない。
けど、命を投げ出すことは、絶対にできない。
（観鈴ちん、ぴんち……）
雨の中、観鈴はレーダーを見つめたまま固まっていた。

800　カウントダウン

フランクは銃も持たずに森をふらふらしていた。
今思うと以前がおかしかったように感じる。
現在この島で生き残っている人間を皆殺しにして少年を殺す。このことしか頭に浮かばない今の方がずっと頭がすっきりしていて心地良い。
ふらふらと、さ迷っていると前方の木々の間に人影がふたつ。
ふふ、祐介。お前が呼び寄せてくれたんだね。
こいつらがお前に捧げる最初の生け贄だよ。

島の連中を皆殺しにして祐介の墓標を建ててあげるよ。
電波を発動させせようと、精神を集中させる。
「ふひゃひゃひゃひゃひゃ!! 電波、電波、電波ぁ!」
叫び声を上げながら精神を集中させせ無駄な行為を繰り返す。最初から電波を会得などしていないのだから明らかに無駄だ。
くっくっく、奴らが苦しんでいるのが手に取るように分かる。
止めろ? 止めてなんぞやらんぞ! 祐介の苦しみはその程度では無かったんだからな。
フランクの脳にはその瞳に映っているマナ達の姿とは別に、耕一とマナが頭を押さえて苦しんでいるのが見えた。
「ひゃあははははぁぁ!!」
哄笑が辺りに響く。
「死ね! もう死んでしまえ!」
頭の中でマナ達が倒れていく。
「祐介、仇を取ったよ。喜んでくれ」
妄想の中の祐介に声をかける。
フランクは死体を確認し、長瀬祐介の墓標を作るために近寄っていく。
こちらに攻撃してくる様子は感じられなかったが明らかにおかしな様子の人影に二人は近寄れなかった。が、顔が確認できるところまで近付いてきたフランクを見てマナが駆け寄ろうとする。だが、耕一はマナを抱きとめる。
「マナちゃん危ないよ。俺達の敵かもしれないだろ? それに明らかに様子がおかしいよ」
マナは耕一を見上げて語りかける。

「前に従姉妹のお姉ちゃんと一緒に行った喫茶店のおじさんで知ってる人なの。助けてあげたいよ。あんな人じゃなかった。何かあったんだと思う」
言ったマナは耕一の手を振り払ってフランクの方へ駆けていく。それを見た耕一も慌ててそれを追いかける。

フランクの瞳にマナ達の姿が映る。
脳が彼女達の姿を認識した。
「近寄るなぁ！　お前等は死んだはずだぁ！　俺は、俺は祐介の仇を取るまで死ぬわけにはいかないんだぁ」
フランクは開いていないままの鋏を振り回して叫ぶ。
近寄ってきたマナと耕一はフランクを静止しようとしたがフランクは止まらない。
マナ達はフランクを止めるために身体を掴もうと手を伸ばしたが、振り回した鋏に何箇所か切り傷をつけられてしまう。
その鋏は護身用にとフランクが銃を捨てて手にした、太田香奈子（十番）の咽に刺さっていた鋏だ。
――約三十分で死んでしまう毒付きの。
フランクは気付いていない。自分が目的をすでに達していることを。
フランクはしばらく鋏を振りまわしてから走り去ってしまった。
マナと耕一は追い掛けることもせずにその姿を見送る。
追いかけようとしたマナの肩を耕一が掴んで引き止めているためだ。
「今は梓を探すことが先決だ。あの人のことも気になるけどまずは梓だ。あいつ様子が変だったし」
耕一はマナにそう語り掛けてマナの手を掴んで走り出した。

耕一の手の暖かさにマナは思わずどきりとする。
このまま梓さんが見つからなければいいな、そんなことまで考える。
自分達の命があと約三十分しか無いことにも気付かずに。

801　泣くということ

二人が足早に鳥居をくぐったころには、雨足が弱まり始めていた。この程度の降りならば、再び転進し施設に向かってしまうところなのだが——
——死体を、見つけた。
「これ……葉子さん、だね」
「そんな……どうして……？」
どうして死んでしまったのか。そして、どうしてこんな所に居るのか。
「晴香、あっちにも！」
「い——郁未っ!!　それに、コイツは……」

こいつは、あの少年だ。
良祐。あかり、智子、マルチ。
そして由依、葉子さん、郁未、少年。
次々と、次々と死んでいく。
「いったい、誰がっ⁉」
郁未の傍らに膝をつき、地面を叩く。十字架も、鳥居も、晴香を祝福してはくれなかった。
もともと、期待などしてはいなかった。だから恨む気なんか、さらさら無い。

でも、どうして。
どうしてここで——みんな死んでしまったのだろう。
考える。
考えたところで——答なんか、出なかった。
一滴の、涙すら出ないように。

「ねえ、七瀬」

「――なあに？」
郁末の顔を見たまま、七瀬の名を呼ぶと、たっぷり空白の間をあけて返事があった。
微かに口元を緩めて、私は尋ねる。
「アンタは卒業式の時、泣いたクチ？」
話題が飛躍したせいか、七瀬の間は更に大きかった。
「――なによ、いきなり」
「……アタシは泣いたこと、ないわ」
七瀬は少しばかり驚きの表情を見せた。私が世迷い言を尋ねていることに気付いたからだろう。そして、少しだけ考え込む仕草を見せて、やがて、微笑みながら答えた。
「――そう。いいんじゃない、別に」
私は、かつて泣かなかった。涙と感動の渦の外で、波立つ感情を、心の奥底で噛み締めていた。揺れる心の振り幅が小さかったのか、それとも単に照れ臭かったのか。
ここに来たばかりの私は、涙を流すことに疑問などなかった。道を外した良祐を、何も分からぬまま失ったのが悔しかったのか、それとも悲しかったのか。
だが、今は違う。前を見ている。未来の彼方を見通すために、私は涙を流さない。
いいのか。本当にそれで、いいのか。そもそも、本当にそうなのか。七瀬に疑問をぶつける。
「いい、のかな？」
「うん――別に泣くことだけが、悲しむことって訳じゃないでしょ？」
今度は私が考え込む番だった。想定していた答えとは全く違う、とてもシンプルで明快な答え。七瀬の言葉を頭の中で反芻して、その言葉が自分にしっくりくるかどうか、ゆっくりと考える。
「うん――そう、だね」
そうだ、いいんだ、それでいい。むしろ私は、こんな答えをこそ、待っていたのかも知れない。

「そうだよ」
間髪入れずに、七瀬が相槌を打つ。
「そっか……」
「……うん」
もう一度相槌を打つと、それきり七瀬は黙って、どこかへ歩き始めた。多分、周辺を見回りにいったのだろう。

しばらく、郁未の顔を眺めていた。こんな島で望まない死を押しつけられたというのに、その表情はどこか満足そうにも見えて——ふと、視界が滲んだ。
(——あ)
雨のせいじゃない。
目を瞑る。今は駄目だ。鼻を啜る。まだ……駄目だ。目の奥に力を込めて、ゆっくりと瞼を開く。視界を曇らせてはいけない。こんなところで泣いてる場合じゃ、ない。
「さよなら」

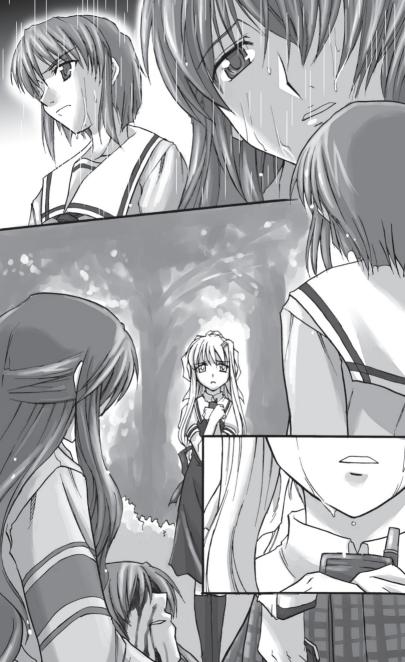
短く祈って、私は自分の心と折り合いをつけた。
郁未の死体を前に、考えこむように座る私をそのままにして、七瀬は周囲を見て回っていた。一周して戻っても、まだ同じ体勢で、私は沈黙していた。
「……晴香。あっちにも、死体があったわ。刺殺だったり、銃殺だったり。使われた銃も、同じものとは思えないわ」
七瀬の声に応えて、死体を確認するために、立ち上がる。腹部にごっそりと被弾した、知らない女性の死体があった。拳銃弾で、こんなふうになるとは思えないから、七瀬の意見は正しいだろう。
「……それにしては、武器がひとつも無いのね」
「葉子さんの槍の破片はあったけど……銃は一つも無いわ」
ふと、七瀬の持っている布切れに目をやる。
「ねえ七瀬、その汚いのは何？」
「ん？　ああ、これ——見覚え、ない？」

広げると、それは黒のハイネックだった。そしてズボン。
「……それって……」
「うん、大きさといい、色といい、国崎さんの服に似てない？」
「多分、そうだよね。
やっぱり、何もないの？」
「ポケットにねじ込んでた、人形すらないわ。例のレーダーもね」
そこまで言って、二人で顔を見合わせる。
「じゃあ、なによ？　国崎さんが全裸で周辺の武器をかき集め、人形だけ持っていったとでも？」
「……いくら北川と仲がいいからって、それはないと思う。それに、この穴、見て」
「――弾の跡？　血が、ついてるわね……」
この位置はまずい。付いている血の量も。もし、彼がこの服を着ていたとしたら……死んでいる可能性が高いだろう。

すると、身ぐるみはがされた国崎さんの死体が、どこか近くにあるのだろうか？　しかし、何故そんなことを……？
解らないことが、多すぎる。
二人は、少し離れたところも探すことにした。
さほど時間の経たぬうちに、茂みの中に異変を発見する。
（……晴香……あれ、見て）
（ん？　なあに？）
七瀬の言うがままに視線を移すと、人影と何かの光が、ぼんやりと見えた。
（……あの光。国崎さんのレーダーのものじゃないかな？）
（じゃあ私たちの位置、向こうからはバレバレじゃない）
今更ながら、体勢を低くしてみる。声を小さくしているのも、かなり無意味っぽいかも。

（……なんで、反応ないのかしら？）
（会話を聞いて迷っている、ってとこじゃない？　少なくとも、郁未や国崎さんの敵じゃないっぽいわね……）
もちろん私たちだと判っていても顔を出さない以上、国崎さんではあり得ない。

そこでピン、とくる。
（国崎さん、『観鈴たち』とか言ってなかった？）
（うん、『金髪ポニーテールの女の子と関西弁のおばさん』だっけ。おばさんは、さっきの人、かな？）
腹部に被弾した女性は、それなりの年上に見えた。隠れているのが、国崎さんが探していた人達なら、ここに居ても不思議は無い。
意思の統一を果たし、頷き合うと、二人は各々大きく孤を描いて、光の発信源を挟み込んだ。急激な状況の悪化に、隠れた人影が、がさりと揺れて動揺の物音を立てる。

だが、もう遅い。二人で銃を構え、立ち上がる。
「……と、いうわけで」
「何考えてんだか解んないけど、手を上げて出てきて頂戴。観鈴さんだか、もう一人だかなら、悪いようにはしないわよ」
手を上げて出てきたのは、同年代の女の子だった。立ち上がりながら、私達の推理に裏づけをしてくれる。
「神尾──観鈴、です」
ちょっと面食らいつつ、武装解除させる。驚いたのは、彼女が泣いていたからだ。そして涙を流したまま、ぽつりと言った。
「──泣いても、いいと思います」
「「…………」」
あまりに場違いな発言。むしろ私たちのほうが、固まってしまう。
そんな驚きをよそに、全ての（呆れるほどたくさんの）武器を落とすと、彼女は言葉を繋げた。

「辛い時に泣けないのは、悲しい事だと思うから」
心配そうに、七瀬が表情を窺っている。
大丈夫、キレやしない。落ち着いて、ゆっくりと、私は答えた。
「うん——そうだね」
さっきと似たような返事。
でも、もう立ち止まりはしない。
「せっかくだから、アンタがさ。私のぶんも——泣いてくれる？」
彼女の涙の筋が、綺麗に見えた。
……そういえば雨が、止んでいる。
（私は、今まで泣かなかったから。だから、今だけ泣くわけにはいかないよ）
夕陽の残り日が、僅かに照らしつけていた。

802　沸き上がる記憶

それは、突然始った。
「ぁぐっ！　あああああああああぁぁぁっ……!!」
突如頭を襲う原因不明の頭痛に、思わずその場に倒れこむ。
「なんだ？　おいっ!!　どうした、そらっ!?」
「ねぇ？　そら君、大丈夫？」
周囲の声は既に届いていない。
かわりに、自分以外の声が頭の中で乱反射している。
心が、心に蝕まれていく感じ。
頭の中に突如生まれた『それ』は人の心を引裂きながらどんどん膨れ上がっていく。
「うあああああぁぁぁぁぁっ……」
やがて痛みは限界を超え、今度は意識が妙にハッキリとしてくる。

混乱した記憶の断片が、
少しずつ形になっていく。

――ココハ……？　――私ハ……？

――何ヲ……？　――イツ……？

――シマ……――クロ……

――ショウジョ……――ナカマ……

――ジュウセイ……――アメ……

――カミナリ……――…………………………

……………………………ズットイッショ……

一つのキーワードをきっかけに、
頭にかかった霧が収束していく

……一緒？　……誰ト？　……何処デ？

……頭ガイタ い……思イ出セ ない……

……思イ出サナくチャ いケないのに……

……一緒ニ いなくちゃ イケ ないのに……

……行カナきゃ……行かなければ……

それは、やがて一つの使命感となって、
彼の心を塗り潰していった。

「行かないと……」
呟きながら起き上がる。
「行くって……おいっ！　どこへ行くんだよっ⁉
おいっ‼　そら！」
はっきりしない意識のまま、それでも歩き出そうとする。
「……どこに行く気か知らないけど……どうやってここから出るつもり？」
その言葉にハッとし、正面の「それ」を正視する。
急速に意識が覚醒していくと同時に全身の血の気が引いていく。
それ——鋼鉄の扉が、ここからの唯一の出口を固く塞いでいた。
扉を開閉するためのスイッチがあるにはあるが、ご丁寧にもカバー付きの上にパスワードまで掛けられているらしい。
カバーをどうにかする自信も無ければ、後の人達が止めに来る前にパスワードを解除する自信も無い。
ほぼ確実に阻止されて、当然警戒されるだろう。
そうしたら暫くここを出るチャンスなんかこないにちがいない。
「あぁ……行かなきゃ——行かなきゃいけないのにっ！」
「さっきから、そんな調子で一体どこへ行こうって言うんだよ？」
「…………分らない」
「ハ？」
「分からないけど……思い出せないけど……それでも、行かなくてはいけない事は……確かなんです」
「…………」
「大切な事なのに……忘れてはいけないハズなのに……なのに、何故……」
（……ずっと一緒……）
頭の隅にこびりついた言葉。

何時言ったのかも、誰に向けて言ったのかも分からない。
ましてや、『誰が』言ったのかも……。
なのにそれが、命に代えても守らなければならない盟約のように重く心にのしかかるのだ。
「くっ……」
思い出せない苛立ちか、何もできない無力さからか、
そう一言呟いてそのまま地面にへたり込んでしまった。
「……」
「……」
――ピッ……ピッ……
「……!?」
頭上から聞こえる電子音に頭を上げる。
そこには、スイッチパネルを操作する少女の姿……。
「お、お、お嬢ちゃんっ！　何をやっておるんじゃっ!?」
背後からの叫び声を気にすることなく少女は全てのパスワードを入力し、そして……。
――ピッ！　……ウィィィン！
扉が……開いた。
「あ……あなた……」
彼女に、私達の言葉が分るはずが無い。
「みゅう」
私にも、今の彼女の言葉はわからない……けれど……それは確かに……。
「いってらっしゃい」
……そう聞こえたのだ。
「……ありがとう……そして、さようなら」
礼を言い、正面へと向き直る。
決心はとうの昔についている。
今まで一緒に戦ってきたみんなには悪いけど、私は……。

「じゃあ、行きましょうか」
「そいつはトロいからな、運んでってやれよ」
「失礼ね。……でも、まあ、お願いするわね」
私は、予想外の言葉にあっけに取られていた。
突然わけのわからない事を言いだして、目的地も告げずに飛び出そうとする私に。
二人はさも当然のごとくついてくると言っているのだ。
「何で……二人とも……？　もうここには戻れないかもしれないのに……」
それは、本当だ。
『一緒に』……おそらくこれは一生一緒にいるという事だろう。
そうなれば二度とここには戻ってこないかもしれない。
「あら、私をこんなお人よしにしたのはあなたなのよ？」
「今更細かい事言いっこなしだ。それに……のんびりしている時間も無いようだぜ？」
そういって台所の入口を指す。
そこには丁度、緑の髪の少女が何か言いながらこちらへ向かってくるところだった。
おそらく扉を閉めるつもりだろう。
選択の余地はないようだ。
いや、初めから答えは決まっていたのかもしれない。
「……分かったよ」
みんなして頷きあう。
少女の指がスイッチに向かって延びる。
「行こうっ!!」
——ピッ！　ウィィ……
閉まり始めた扉をすんでの所ですり抜ける。
もう、後戻りはできない。
(行こう、再び外の世界へ。行こう！　一緒にいると誓ったあの面影の下へ!!)

803　ヴァンパイア

「くそっ、どこだ梓」
降りしきる雨の中、私は耕一さんと走っていた。
あのおじさん——昔、従姉妹といっしょに行った喫茶店のマスターをしていたおじさん——の襲撃。
それの相手に手間取ってしまい、梓さんとの距離はかなり離れてしまっている。
いやそれだけじゃない……梓さんに追いつきたくない、私は耕一さんと一緒にいたい……。
誰にも邪魔されずに……その気持ちが、私の足取りを重くさせていた。
「……っ？　マナちゃん、大丈夫か？」
耕一さんが私の足取りの重さに気付き、そう声をかけてくれた。
やだな、耕一さん。これは演技ですよ、はい。梓さんに追いつかないための演技です。
そんなのに気付かないなんて耕一さんもまだまだ人間観察力が弱いですね。
「マナちゃんっ？　おいっ!!」
やだな、だから演技ですってば。でも結構名演技。演技だけなら従姉妹の由綺お姉ちゃんにも負けないかもね。動悸、息切れ、発熱……どれをとっても一級品。あの時読んだ本の症状通り。
えっとあれ何の本だっけ？　確か……思い出した、あの本は確か……。

——人体における有毒物摂取時の諸症状——

「マナちゃん!!」
気が付くと私は耕一さんに抱きかかえられていた。一瞬意識を失ってたらしい。
なんかひどく息が荒い。体も奇妙な火照りをもち、思うように力が入らなかった。ふと奇妙にうずく自分の手に目をやると、先程鋏で傷つけられたところ

が黒ずんでいる。なるほどね。
私は直感的に理解した。さっきの鋏に毒でも塗ってありましたか。まったく用意周到なことで。
「マナちゃん？　よかった、気がついたか」
文字通り心の底からって感じで耕一さんが安堵の表情をする。ふう、まったく。……そんな表情をされるとこっちの覚悟が揺らぐじゃないですか。だから私は、彼の口から次の言葉が出る前に言った。
「耕一さん、早く梓さんを追って」

――まあ私はやっぱし、どこか小生意気なところはあったと思う。別にそう思われてもかまわないと思ってたし。よく勉強が出来るうんぬんと嫉まれたりもしたが、それは私がちょっとばかし勉強に興味を持っていただけだし、それに十分努力もしてきたつもりだ、多分。

この島へ来て、あの人――霧島聖先生――に出会った。「私は医者だ。だから殺すのではなく治す」……はじめ、ここでそんな事を言うなんてなんて馬鹿げているんだと思った。ここは殺し合いをする島。でも彼女はそう言い、最後までその言葉に従って行動していた。私はいつしか彼女に感化されていた。彼女――霧島先生――は本当の意味でも強い人だったんだと思う。

「そんなことはない、私も弱い人間だよ……」

ふふっ、そうですね。先生だったらきっと、そうおっしゃりますね。でも私は、……先生の遺志を継ぐと言っておきながら、自分の嫉妬で、自分の都合で人を縛っています。ごめんなさい……私は、弱い人間です。

「ふむ、だがなマナ君。はじめから強い人間なんて

どこにもいない。人は自分の弱さを認めたとき、初めて強い人間になれるのだよ……」

確か毒の症状の一つに、幻覚症状があったのを覚えていた。なるほど、今のがそうなんだ。最後の先生が言ったフレーズなんて、前の日曜に読んだ小説の一文そのまんまじゃない。でも、霧島先生なら言いそうだな。

「マナちゃん……」

耕一さんが、まるで鳩が豆鉄砲をくらったかのような表情をしていた。そうか、この表情ってずっとどんなのか疑問だったんだけど、今、その長年の謎が解決したな。

「耕一さん、梓さんを追って……。梓さん、初音ちゃんが死んで混乱している。でも耕一さんだったら彼女の心を取り戻せるはず」

「…………」

「私ちょっと疲れちゃったから、もう走れそうにないから……ちょっと、ここで休んでるよ」

「…………」

「早く、今だったらまだ間に合う。梓さんを止めて、生き残ったみんなと合流して。そしてみんなでこの島を出よう。みんなで元の生活に戻ろう。ねっ……」

これは体に入った毒のおかげだろう。私の中からさっきまでのもやもやした感情が消えていた。まさに毒をもって毒を制す。

まあ多分、死に瀕して余計な感情をもつ余裕がなくなっただけなんだろうけど。

でも、最後に残った感情が人を救いたい――多分、霧島聖先生と同じ――感情で、私は少し嬉しかった。

「わかった」

しばしの沈黙の後、聞こえていたのは悲しみと決意ともう一つが絶妙にブレンドされた彼の声だった。

多分わかっていたんだろう……私がもう長くないことに。
「あっ、でも一つだけ……」
ああ、聖先生ごめんなさい。私、最後にもう一つだけ感情残ってました。まだまだ精進が足りないようです。
でもいいですよね先生？　最後くらい……。
「私、ちゃんと迎えにきてほしいから……後で迎えにきてほしいから、そのっ……約束として……その証としてキスして……もらえます……？」
なんのかんのいっても、私はそれにちょっと憧れていた。だから……。

――盟約
――永遠の盟約だよ

彼は少し照れくさそうな表情をして、うなずいてくれた。

重なりあう二人の唇。
それは、もしかするとただの哀れみだったのかもしれない。ただの自己満足だったのかもしれない。
でも、やっておきたかった。生きているうちに出来ることの全てを。後悔は、したくなかったから。
不思議と意識がはっきりしていた。死ぬ直前って案外こんなものなのかな？　まだ時間あるみたい。
すこし悪戯心が湧きあがる。えーい、舌いれちゃえ。
「……っ!?」
彼はそれに答えてくれた。やさしく入ってくる彼の舌。私は思わず……
「つっ……！」
「あっ……。ごめんなさい!!　でも、ディープキスって本当に血が出るんだ……」
「ひどいな、マナちゃん」

彼はそういったけど、また唇を覆ってくれた。先程と少し変わり、なんだか鉄のような味が口にひろがる。私が噛んでしまったところからあふれ出る彼の血。でも不快ではなく、むしろ心地よい味だった。
私はひたすらその味を求める。だってこれは彼のもの、私がおそらく最後に感じる味覚だろうから。

いつしか雨がやんでいた。
「ここなら多分大丈夫だ」
彼は私を茂みの中につれていってくれた。
「きっと迎えにくる。だからここでじっとしておいてくれ」
「うん、わかった」
耕一さんが私から離れる。二人の逢瀬もこれで終わり。なんだかんだで五分くらいは彼を拘束してしまっただろう。梓さんを追う為には一分一秒も貴重だというのに。
だめだな、私。結局最後まで邪魔しちゃった。

「マナちゃん」
「なに？」
「忘れないでほしい。君がいたから助かった人、救われた人もいっぱいいたってことを」
「……」
「それと……俺は絶対に君を迎えにくるから、絶対に来るから……な」
「なに言ってるの。そんなこと言う暇あったら、とっとと梓さん探してきて」
「ああ……、だから絶対残りのみんなと一緒にこの島を出ような」
彼はそういって最後に私に軽くキスをしてくれた。そして走り去る。彼の足音が遠ざかっていく。
……ふぁ、眠くなってきた。確かにここのとこ、ろくに眠ってないな。すこしおかしくなる。永遠に続くかに思えた日常。
それは脆くも破れ、この島での地獄が始まった。永遠に続くかと思えたその地獄。だがそれも永遠で

はなかったようだ。
彼との邂逅。私はその時初めてずっとこのままであってほしいと——永遠を——望んだ。そんなものありはしないのに。

——永遠はあるよ

どうかしら……本当にあるのなら、見てみたいものね。

——ここにあるよ

彼女は眠りにつく。安らかな眠りへと。

804　偶然性

どこまでも続く、無機質で幾何学的な味気ない廊下。そこに彩りと騒々しさを与える人影が、二つあった。
そこは岩山の施設。
どうにかこうにか、内部に侵入した二人は、北川の一方的な提案に従って、最下層に降りてきていた。
「さあ、最下層に辿り付きました。きっとこの階にマザーコンピュータがあるに違いません。何故なら重要なものは、最下層にあるのがお約束だからです！」
意気揚々と、興奮した北川が誰にともなく解説している。
「……」
北川に隠れて、影のように立つ少女が一人。
あまりに落ち着いた、その物腰からか、大人びて見える。徹底した小声と無言の反応は、時として彼女の賢明さを、他人の目から遮蔽する。
普段、知性も含め鋭敏とは考えられないのだが。来栖川芹香の頭脳は、高速回転していた。

「な……無い！　なんということでしょう、この階のどこにも、コンピュータは存在しないのです。ああ神様、私北川の苦労は、バイクの下敷きになった苦痛は、全て無駄だったのでしょうか⁉　そもそも、この施設にあるというコンピュータの存在自体が幻だったとでもいうのでしょうか！」
　芝居じみた仕草で廊下にくずおれた北川が、これまた大袈裟な身振りで天を仰いでいる。
（……馬鹿……？）
　いちはやく見取り図を発見した芹香は、北川の猛烈な悲劇トークを右から左へ聞き流し、コンピュータのありそうな部屋を探した。
　……発見。特徴的な三本の縦穴構造の中央に位置する、円形の部屋。間違いなく、マザーコンピュータと書かれている。
「……（ぽん）」
　今や最高潮に達した、悲劇トーク独演会を続ける北川の肩を叩く。
　……遊んでいる場合じゃない。ＣＤだけでなく、自分が死亡扱いになっているのが気になる。マザーコンピュータなら、真実を暴き出す手掛かりがあるかもしれない。いつまでも、北川の一人漫才を眺めているわけにはいかない。
「……芹香さん……」
　感謝の目で見つめる北川。
　……慰めていると、勘違いされたようだ。この際、どうでもよいが。とにかく北川の軽い口を閉じ、重い腰をあげてもらわねばならない。
「——あっ！　芹香さん！　見取り図ですよ！」
「……（こくこく）」
「これでコンピュータの位置が……あった！　ありました！　こんなところで遊んでいる場合じゃありません！　急ぎましょう！」
「……（こく）」
　……遊んでいるのは、私じゃない。それでも、急ぐという結論に文句は無いから……黙っておく事に

した。
「……と、いうわけで。すぐそこまで来ておるぞ、お嬢」
「なにが〝どいうわけ〟だかわかんないけど、ふみゅーん！」
「どうするんじゃ。パスコードは〝かゆ〟と〝うま〟の二重で設定されとる。まず、あっちから開けることは出来んぞ。つまり、入れるか入れないかは、お嬢が決めるんじゃ」
「そそそ、それくらい、わかってるわよ！　ちょ、ちょおむかつくのよっ！」
詠美は、さも嫌そうな顔をして銃を持つと、足音荒く扉のほうへと歩いて行った。その途中で、ぴたりと停止する。
「……ねえ、ほんとのところ、どうおもう？」
「何がじゃ」
「北川って人、ほんとにあぶないとおもう？」
「……判らん。島に来る前から凶悪だった者など、殆どおらんのじゃ。神のみぞ知るという奴じゃな」
もっとも、わしはロボットじゃから信心なんぞは無いが、と付け加える。
「……どうしよお」
「開けて上手くいくとは限らんが、ＣＤが必要なのも確かじゃ。嬢ちゃんが決めるしかないの」
「……ふみゅー……」
再び歩きだし、扉の前に立つ詠美。
扉の外の話し声が、聞こえてくる。
「ふみゅっ？？？」
詠美は両手と、片耳を扉に当てて、外の様子を聞き取ろうとした。
《＊＊パスコードを入力してください＊＊》
「……なんだよコレ」

北川は扉の外側で、悪態をついていた。
《＊＊……だ……よ……コ……レ……＊＊》
北川の発言が、小さなモニターに流れて行く。そしてまた、最初のパスコード要求画面に戻る。
「音声認識パスコードか……オープンセサミ、みたいなやつだな」
腕を組む。ヒントは何も思いつかない……お手上げだろうか？
そこで北川は、何かが内部で騒いでいる声に気が付いた。
「なんだ？　……随分かしましぃな？」
北川は両手と、方耳を扉に当てて、中の様子を聞き取ろうとした。

目の前で、車に轢かれた蛙のように扉にべったりとへばりつく北川を、芹香が憐れみに満ちた目で眺めている。
（……馬鹿……？）

耳を当てるまでもなく、芹香は声を聞きとっているのだ。
『北川って人、ほんとにあぶないとおもう？』
「……（こくこく）」
「バカゆーな！　このナイスガイを捕まえて〝あぶない〟ですとーー⁉」
肯定する芹香と、その前で否定する北川。
《＊＊……カ……ゆ……＊＊》
……モニターの文字が反転している。芹香は熱心に聞き入っている北川に、それを知らせようとしたが。
「……（ぴたり）」
……へばりつく姿の滑稽さに呆れ、やめた。
『開けて上手くいくとは限らんが……』
「上手くいくかどうかは、開けなきゃ判らんだろうが！」
北川が叫ぶ。
……かなり逆上してきている。バイクに轢かれて

も、これほど怒らなかったのに、不思議な挙動だ。
《＊＊……上……手……＊＊》
プシー。
空圧の変調する音が聞こえ、扉が開いていた。
――そして扉を失った詠美と北川は。
お互いの両手と頬を当て、呆然としていた。
「「……」」
「……」
……そんなご都合な。芹香は、これ以上ないくらいに呆れていたが。とにかく、中には入れたのだから……黙っておく事にした。
「みゅ？」
ただひとり。
藺の声だけが、円形の室内に響き渡っていた。

805　チェシャ猫～再び裏舞台へ～

（ああ、なんだか凄い疲れてる……。眠ったのにもっと疲れてるなんて……。まぶたが重い……）
マナは目を閉じたまま微かに身体を動かす。
が、やはりもうしばらくは動き回れそうにないのを悟り、その動きを止めた。
「気づいたか……」
聞いたことのない男の声に、マナがハッとする。
彼女のすぐ近くには男がいた。
（目を開けたい……）
そう思い、まぶたを開くために力を入れるマナ。
生きている間に、こんな事態にめぐり合うとは思ってもいなかったろう。
まぶたを開くために力を入れなくてはならないなどという事態。
いや、彼女はこの島に来てからなら幾度か考えていたかもしれない。
「……誰？」
半開きの眼、滲む視界。
微かに動く口で声を発する。

「見た目ひ弱そうな、女顔の少年を知らないか？」
男が返した答えはマナの知りたかったものではない。
というか答えですらなかった。
（女顔…？）
彼女はほぼ無意識で、その質問のために頭を働かせる。
しかし、どれも明確なビジョンにならない。
思い出される知人の顔は、どれもグニャグニャと歪んでいる。
しばらくマナが沈黙していると、男はあきらめたようにその場で立ちあがった。
いまだに動くこともままならない彼女を見下ろし、言う。
「ある程度毒は中和できたと思うが……。まぁがんばるんだな……」
（毒……？）
その単語だけがスムーズに彼女の頭へ入っていく。
（そうだ。毒で倒れたんだ……）
意識を失う前にそう推理したことが思い出された。
毒で倒れ、知らぬ男に手当てされ、その男が目の前にいる。
それが彼女の身に起きたこと。
とりあえず男に敵意が無いと悟った彼女は、半開きの目を再び閉じた。
――シュッ――
男は煙草をくわえ、ライターで火をつけようとする。
「ん……」
火がつかない。
雨に濡れた際に湿ってしまっていた。
くしゃりと箱ごと握りつぶすと、それを地面に捨てる。

「助けてくれて……ありがと……」
マナが言う。
一応とはいえ、まだ殺し合いゲームは続いているのだ。
その中でやさしさを向けてくれた男。
「ふん……。気まぐれだ」
男は平然とそう言い、自分のバッグに広げていた荷物を詰める。
そして無言で立ち去ろうとする。
——強くなければ生きられない——
(彼女の今の体力で、どれだけ生き延びられるだろうか)
そんな心配が男の頭に微かによぎった.
だが彼にしてみれば元々関係の無いこと。
毒の中和は、たまたま手持ちの品で応急処置できそうだったから、気まぐれにしたにすぎない。
「……ありがと……」
立ち去る高野の後ろから再び礼……。

——優しくなければ生きていく資格がない——

眠るマナ。
その横に非常食。

806 Tomorrow

観月マナ(八十八番)は川のほとりにいた。
目が覚めて、周りを見渡したらそうだった。
(あれ……?)
次に自分の体を見る。怪我なんてない。傷どころか泥や血で汚れた後すらない。
川の流れを鏡にして自分の顔を映してみる。
流れに押されて、映った顔がグニャリと歪んだ。
私が置かれているあの島にはそんな歪みが似合ってるかも、なんて思ったけれど。
その流れの向こうの私はすごく綺麗で……(って

いってもナルシストじゃないわよ）
やっぱり、汚れ一つなかった。
「……夢？」
「そうだな。これは、夢かもしれんな……」
「だ、誰……？」
聞かなくても分かってた。その、短い間だったけど、絶対に忘れることのない声。
「久しぶりだな、マナ君」
「せ、センセイ！」
私は、一心不乱にその大きな体へと飛び込んだ。
「こ、こら、いきなり飛び掛ってくるな、びっくりするじゃないか」
「ほ、本当にセンセイだ……」
ひとしきり、その胸の温かみを感じた後、もう一度、周りを見渡す。
ホントは、ずっとそうしていたかったけど。
「センセイ、ここは……？」
「川のほとりだな」
「そんなことは分かってる……ます」
「じゃあ、どこだと思うんだ？」
反対に、返された。
「川のほとり……」
「だな。言葉通り。私の言うことに間違いはない」
断言された。よく状況が掴めないけど、今日の霧島センセイは強気だった。
「センセイ、生きてたんですか？　私は……」
「私以外にもいるぞ。ここにはな」
えっ……？
「やほー、マナちゃんだ！　よかったぁ」
「か、佳乃ちゃん……!!」
センセイの後ろに隠れて、佳乃ちゃんがいた。
「そんな……どうして……？」
「私がいるのだ、佳乃がいても不思議ではないだろう？」
「いや、そうだけど……」

疑問に思いながらも、喜びの表情は隠せない。
「良かった……本当に……私、てっきり……佳乃ちゃんが……」
先生や、佳乃ちゃんとの思い出。あの悲しかった思いは忘れたことなんてなかった。
だから、すごく嬉しかった。
「夢だったのかな……？　ひどく、辛い夢」
「そうか。悲しい夢でも見ていたのか？　残念ながら精神的なものは専門外だが……」
「いいの、病気じゃないから」
涙を拭って。

私の辛いあの日々は、終わったんだ……

「情けないチビちゃんに、もう一回会えるなんてね～」
「そ、そんな事言ったら可哀相だよ……」
私は、また懐かしい声との再会を果たした。

それ程時間は経っていないのに、すごく懐かしい。
「きよみさん……初音ちゃん……」
もう会えないと思っていた、大切な人達との再会。
もう一度、夢見て止まなかったその再会。
自然と笑みがこぼれる。間違いなく、この島に来てから一番の笑顔だっただろう。
きよみさんのその憎まれ口さえも、耳に心地の良い響き。

そういえば……この島に来てからって思ったよね、私。

「センセイ、ここはどこなんですか!?」
「川のほとりだ」
「さっきも聞いた！　もっとグローバルな意味でのこと」
そう、何故か違和感を感じる。
幸せなこの状況に不満なんてないと思うけど、胸

の奥にあるその何か。
「あの島じゃないんですか？」
あの殺戮の島に、この風景は不釣合いだと、我ながら不謹慎だけど、そうも思う。
「ふむ……」
先生が、腕を組んで考える仕草をする。
「あの島からは遠く離れた場所だ。……いろんな意味でな」
いろんな意味？　ちょっと良く分からなかったけど、さらに質問する。
「みんな、助かったの？」
「……今も戦っている者がいるかもしれないな」
「……」
その先生の声に、私はただ黙った。
「マナちゃん、ここにいれば安全だよ。あとは、帰るだけだね」
「初音ちゃん……」
お家に帰る。帰っても誰もいない寂しい家。

それでも、あの島でずっと求めていたもの。
だけど……。
「やっぱり、なにか足りないの」
私は、言った。
ここは幸せなのに……？　私が求めていた、退屈でつまらない、だけど幸せな日々なのに……？
「うん……辛かったけど、忘れちゃいけないって思い出が、あるから……」
自分に言い聞かせるように、言葉（ことのは）を紡ぐ。
『さっき、君は『死んでも人殺しにはなれない』と言ったろう。私もそうだ。私は医者だ。先ほどの観月くんのように怪我をして、あるいは戦闘で傷ついた人間を見つけたら治療する義務がある。誰かが私に襲い掛かってきたとしたら、殴り倒してでも説得する。例え、その行動が命取りになっても、だ』

『あなたは、その子よりも弱いのよ。肉親を失った子でも、生きようと決めたのね。それでもあなたは、死ぬの？』

『心の中でずっと叫んでた……マナちゃんを傷つけていく私を、わたしは止められなかった。わたしがやったことは、決して許されることじゃないけれど……本当は、死んじゃった方がいいのかもしれないけれど……だけど、わたし、お姉ちゃん達の分まで生きたいって思うの。……だから……だから……わたし、生きていてもいいかな？』

『彰お兄ちゃん、自分が何を言ってるかわからないのっ⁉　本当にもう狂っちゃってるんだね⁉　戻れないんだね⁉　鬼の血なんてあげなければよかったよ……それでもお兄ちゃんが好きだったからっ‼』

『忘れないでほしい。君がいたから助かった人、救われた人もいっぱいいたってことを』

私は、いろんな人に支えられて、長い道をただひた走っていた。

私にとっての辛い辛い旅の終わりはこうだったらいいって思うけど。

もう叶うことはないって分かってても、そう思ってしまうけど。

私はまだ、帰れない。

戦ってる人、生きて帰ろうと前を向いて歩く人、そして、耕一さんをはじめ、出会ったすべての人達と。

「ここはまだ、私のゴールじゃないから」

そう言ったら、センセイやきよみさん達がみんな、笑った気がした。

「ひとつだけいい、おチビちゃん？　……すべてが夢だったら、いいとは思わない？」
「思わないよ。だって――」
「言わなくていいわ。たぶん、私の思ってる通りの答えだと思うから。憎たらしいけどね」
「きよみさん……」
世界が、遠のいて、いく。
「佳乃ちゃん……初音ちゃん、きよみさん……センセイ……私――」
「そんな顔をするな。すべてが……あの悪夢が夢であったのなら、私達が出会うことはなかった……そう思えば気楽だろう？」
「センセイ……」
「何事も、前向きに、な」
世界が途切れた――――
私が、永遠であったならばいいと思った、その幸せな時間が。

目が覚めたら、いつもの悪夢の光景だった。
たった数日だったけど、長く感じるその辛い日々。
周りを見渡せば、横に食料が置いてあるだけで、誰もいない。
「そうだ、変な、だけど親切な男の人に助けられて、また眠っちゃったんだ」
さっきのは夢だったんだろうか。
夢だとしても、はっきりと覚えているその言葉。
(どの位の時間が経ったんだろう……？)
あたりは、すっかり夜に染まっていた。
耕一さんが迎えに来た気配は、ない。
眠ったせいだろうか。センセイ達に勇気付けてもらったからだろうか。
妙にすっきりしていた。
梓さんへの憎しみも、薄らいでいた。
正確には、嫉妬は強くなっている気もするけれど。
(私、思ってたより独占欲強かったんだね……)
もしかしたら、梓さんとは、戦うことになるかも

しれない。
――――そうじゃ、それでよい。それでこそ「人間」であろ……。

梓さんと別れた時に聞こえた謎の声が脳裏に蘇る。
私の心が創り出した声だったのか、それとも他の誰かの声だったのか、それは分からないけど。
今はそんなことはないって、はっきりと言える。
梓さんとのその戦いは、帰ってから幾らでもすればいい。帰れば、笑いながら、怒りながら、それができるんだから。
さっきまでの私の黒い思いに、苦笑いした。
頭だけじゃない、体だけじゃない。心が軽くなったと思う。
何度も絶望して、あきらめたこともあったけど、その度に勇気づけてくれた、恩人達。
今も、心の中で勇気をくれている。

――すべてが夢だったら、いいとは思わない？　思わないよ。だって……
こんな島でも、大切な人達と出会えて良かったと思ったのは嘘じゃないから。

807　みんな、結末を目指して……

「それで、グレート・長瀬さん……でしたっけ？　私たちに協力して頂けないでしょうか」
岩山地下施設コンピュータルーム。先程、柏木千鶴、スフィー、月宮あゆ、七瀬彰の四名も到着していた。
その直前に辿り着いていた北川潤&来栖川芹香、元からいた大庭詠美、椎名繭も加えると総勢八名、実に生き残っている参加者の半分以上がここに集結したことになる。
「だめじゃ、ワシはまがりなりにもこのゲームの管

理者。参加者たるおぬし達に協力はできんよ」
　先程から問答を続けてるのは柏木千鶴と、このゲームを管理している擬似人格「グレート・長瀬」(通称G.N.)だった。
「ですが私たちはこれ以上殺し合いを続ける気はありません。それに……」
「ええぃ、協力せん！　協力せん！　協力せんたら協力せんのじゃぁぁぁ!!」
　カシャン……。その時なにかが割れる音がした。
「あらいやだ、私ったらコーヒーカップ落としちゃったわ」
「ぬぉぉぉぉっ！　なんてことするんじゃ、はやく拭かんかいぃぃぃ!!」
　みると千鶴のコーヒーがG.N.のコンソールに派手にぶちまけられている。
「……はい、千鶴さん。かわりのコーヒーと布巾だよ」
「あら、あゆちゃんありがとう。それでなのですがグレート・長瀬さん、私達はあなたの協力を得たいと……」
「だから駄目だと言って……ぬぉぉぉっ!!」
「あらいやだ、今度は砂糖壺を倒しちゃったみたい。私ったらどじねえ」
　てへっ。そんな感じで舌を出す千鶴。
(うぐぅ……。千鶴さん目が笑ってないよう……)
(ふみゅ〜ん)
(……できる)
　他の者はそれを黙って見守ることしか出来ない。
「あなたにこのゲームを止め、外と連絡することは出来ないということですか……」
「すまんのう、千鶴嬢ちゃん。しょせんワシはしがないプログラムでしかないからのう」
　十三杯目のコーヒーのおかわりの後、G.N.との交渉が再開されていた。

「なあ……、千鶴さんって嬢ちゃんって年じゃないと思うんだが」
「………」
北川の小声の突っ込みに
(うぐぅ、今部屋の温度が少し下がったみたいだけど……きっと気のせいだよね)
「ならばこのゲームを止めるにはどうなればよいのでしょう?」
「そうじゃの、参加者が一人を除いて全員死亡しかないじゃろうのう」
こころもち冷たい千鶴の声に、先程とは打って変わり協力的なG.N.が答える。
「死亡判定はどのように行っているのです?」
「おぬしたちの体内にある爆弾を使ってじゃよ」
「でしょうね」
そこで千鶴はにこっと笑った。
「でしたら私たちのように、一人を除いてみんなが爆弾を吐き出してしまえば吐き出した人は死亡扱いになるので生き残りは一人、つまりあなたのプログラム上ではゲーム終了となるわけではありませんか?」
「……少し待ってくれい。……ふぅむ、問題はないようじゃな」
「ありがとうございます。さてと……」
ゆっくりと千鶴が振り返る。
「この中でまだ爆弾を持ってるのは北川くんとスフィーさんね……。まずは北川くんから吐き出してもらおうかしら。みんな、ちょっと北川くんを押さえておいてもらえます?」
次の瞬間みんなに取り押さえられる北川。
「えっ……あの、ちょっと」
「ごめんなさいね、北川くん……。これもこのゲームを終わらせるためなの……」
硬く握り締められる千鶴の拳。その顔は、何故か少し嬉しそうだった……。

北川は床に伸びていた。他の者は少し離れたところにかたまってなにやら話をしている。
千鶴ひとりG．N．のコンソールの前に座り、先程北川から取り出した爆弾――もちろん念入りに洗っている――をいじっていた。本当はスフィーからも取り出したかったのだが、何故かみんなから止められている。
まあ、あの子は女の子だし、それに衰弱も結構激しいようだから今すぐでなくてもいいだろう。
「千鶴さん、おかわりと……はい」
「あらクッキー……。ありがとう、あゆちゃん」
気が付くと横にあゆが立っていた。
「あの……千鶴さん、ひとつ聞きたいんだけど……神奈……さんだっけ。その事はどうするの？」
あゆの疑問、それは当然だろう。確かにいま北川の持ってきたCDの解析は進めている。だが先程のG．N．とのやりとり。そこには神奈――おそらく今回の元凶にて、捨て置けない存在――のことは一言もでてこなかった。
まるで、そんなもの始めからなかったかのように……。
「……あゆちゃん、あなたはそんなこと気にしなくてもいいのよ」
「えっ……？」
「もうすぐ、このくだらない出来事は終わるわ。そうしたら、あゆちゃんは先に帰ればいい、あなたを待っている人のところへ」
「……」
「後の事は私達に任せておいてくれればいいから。決着は必ずつけるわ」
そういって千鶴はちらりと彰の方――彼は皆と離れて一人たたずんでいた――を見る。
「だから、あゆちゃんたちは先にこの島から戻っておいてね。ほら、あなたのお母さんも心配してるわよ」

それは千鶴のまぎれもない本心だった。この決着、それは凄惨なものとなる予感がする。だからそこにいるのは私たちで十分、あゆちゃんみたいな優しい人たちはそこにいる必要が無い。そうでしょ、あゆちゃん。

あなたも早く日常に戻りたいわよね。「戻りたい」そう一言を言ってくれさえすれば私達は……。

だが彼女の返答は千鶴の予想を越えていた。

「千鶴さん……、ボクね、お母さんいないんだよ……。ボク、もう帰る場所ないんだ……」

なにかが溢れ出るように、そして淡々とあゆは言葉を紡ぎ出す。

「ほんとはね、ボク、来月から秋子さん……水瀬秋子さんの子供になるんだったんだ……」

水瀬秋子……覚えている。自分がこの島で戦った相手。そして今は既に死んでいた。

「ボクの本当のお母さん……ボクが小さい時に死んじゃって……ボクその時本当に悲しくて……」

無感動に続けるあゆ。

「どうしょうもなく悲しかったその時、ボクは祐一くん……相沢祐一くんと出会ったんだよ……」

すっと、あゆはポケットから何かを取り出す。それは天使の姿をした人形だった。彼女はすこしそれに目をやり、言葉を続ける。

「死にたいくらい悲しかったんだけど、ボクは祐一くんと出会って、すこしその悲しみも楽になって……。でもね、ボクどじだから……祐一くんが街を離れる日……ボク木から落っこちて……死んじゃった……」

はっとなり、千鶴はあゆの表情を見る。あゆの表情、彼女の目にはいつのまにか涙がたまっていた。

「でもね……」

あゆは続ける。

「木から落ちて、ボクお空に昇っていったんだけど、ああもう戻れないなあって思ったその時、出会った

んだよ……。天使さんに」
「天使……？」
「うん、天使さん。よくは覚えてないんだけど、とっても綺麗な白い羽をした天使さん。その子とね、ずっと話をしてた……」
ここになってようやくすこし元気になるあゆの声。
「それでね、気が付いたら元いた街にいて、祐一くん達とも再会できて、いろいろあったけどボク生き返ること出来たみたい……」
「…………」
「でも、お母さんはやっぱしいなくなっていて、やっぱりボクは、ひとりぼっちなのかなぁって思ってたら、秋子さんが言ってくれたんだ。『あゆちゃん、もしよければうちの子にならない？』って……」
「それでね……ここに来る直前、秋子さんが『せっかくあゆちゃんがうちの子になるんだから、その記念にパーティーしましょう』って提案してくれて……、それでみんな……名雪さん、真琴ちゃん、美汐ちゃん、栞ちゃん、香里さん、北川さん、舞さん、佐祐理さん、そして祐一くんとかみんなが集まってくれて……『わあ、とっても楽しいよ、祐一くん、ボクもう死んでもいいよっ』って言ったら祐一くんに『ばかっ』って言われて……、それでも楽しくてはしゃいでたら何故か眠くなっちゃって気がついたら……」
なにかを吐き出すかのようにあゆは言う。
「ここにいた」
千鶴はあゆになんていったらいいのか分からないでいた。ふと見てみると、あゆの肩が小刻みに震えている。
「あゆちゃん……」
「千鶴さん……どうして……えぐっ……どうして、みんな死んじゃったの？　どうしてこんなことになっちゃったの……どうして⁉」

小さく嗚咽をあげるあゆ。千鶴は気がついた。あゆは、いや、あゆもこんな小さな体でずっと戦っていた、本当に必死になって戦っていた事を。そしてそうである以上、中途半端な決着――みんなを置いて先にここを去るような――それは彼女にとって絶対に出来ないことだということを。それともうひとつ……

「あゆちゃん……死ぬ気？」

「千鶴さん……さっきの話、聞こえていた。……死ぬのは怖いけど……ほら、ボクを待ってる人、もう誰もいないから……」

いつしかあゆは泣き止んでいた。彼女は真っ赤になった目を千鶴に向けている。そこにあるのは明確な意志。

「だめよ、あゆちゃん……」

「いいんだよ、千鶴さん。……ほら、それにさっき言ったでしょ。ボク一度死んじゃってるしね」

おどけた調子であゆは言う。本当にこの子は……。

「あゆちゃん、あなたが死んだら、私が悲しいわ……それではだめ？」

「千鶴さんには梓さんがいる。他の人もそう。だからこの役目はボクが一番適任なんだよ。ボクが死ねば万事オッケー――だよ」

ビシッ。あゆは人差し指を立てていった。でも……。

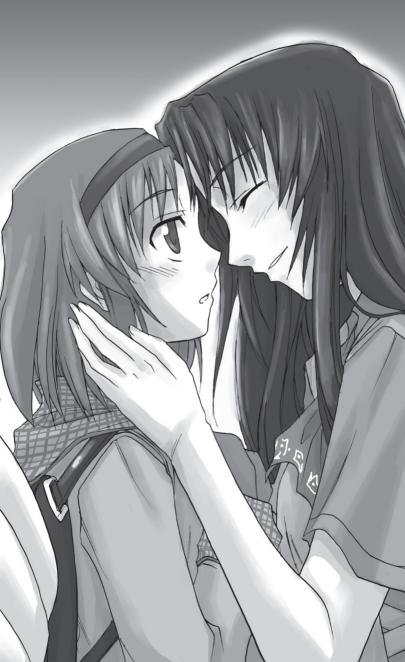
「だめよあゆちゃん……。だってあゆちゃんには、ここを出たら私の妹になってもらうんですもの」

「えっ……」

それはもしかしたらこれ以上に無い程残酷な話かもしれなかった。しかし千鶴は――たとえこのことが代償行為だのなんだのそしられようとも――決めていた。

「もしあゆちゃんがそれでいいって言ってくれたらだけど……。これが終わったら私の妹にならない？」

「……」

「私、これでも結構お金持ちなのよ。鶴来屋っていってね、地元じゃ結構有名な旅館を経営しているの」
「……」
「家も結構大きいし、あゆちゃん一人くらい来ても全然大丈夫」
「……千鶴さん」
「それでね、ここからみんなで無事に帰ったら、そこでみんなでお通夜をしましょう」
「……お通夜を？」
「そう、知ってる？　お葬式はね、死んだ人たちに敬意の念をもってあの世に送る儀式なんだけど、お通夜はね、みんなでわいわい騒いで、元気にやっている姿を見せる儀式なの」
「……どうして？」
「だってそうでしょう？　自分が死んだ後にね、もし自分の大好きな人や大切な人がずっと泣きつづけて暮らしていたら、それはとっても悲しいことだとは思わない？　だからお通夜は、あなたが死んでとっても悲しいけど、元気に生きていくことが出来ますよってのを見せるためにするの。私達はしっかり生きていきますよってね。元気にしっかり生きていく、それが死者に対する最低限の礼儀」
「…………」
「だからね、あゆちゃん」
千鶴はにこって笑ってあゆの両頬をしっかりと握り……。
「死ぬなんて、軽々しく口にしてはいけないわ。絶対にダメよ？」
「ひゃ、ひゃ、つぅじゅりゅしゃん、ひぃたひぃひょー」
「本当は……」
「駄目だよ千鶴さん。気持ちは嬉しいけどボクは帰んないからね」

頬を真っ赤にしたあゆは言う。説得は無理そうだ。
残念だけど……すこし嬉しかった。
「それにね、ボクさっき木から落ちて天使さんに会ったって言ったでしょう」
「ええ……」
「その天使さん、まだよく思い出せないけど、天使さんと会った時に感じたのと似たような感じ、さっきの社で感じたんだ。それと天使さんがいた所には、もうひと……」
「話中にすまんのんだが……」
不意にG．N．が二人に声をかけた。
「なにかしら？」
「この施設の屋外監視カメラになんじゃがな」
「ええ」
「一瞬じゃが生存者を確認したぞい、ただな……少々様子がおかしい」
「……？　確認させていただけますか」
「すこし待っておれ……。そりゃ」
G．N．のモニターに一人の人物が浮かび上がる。
そこには……。
「……梓!!」

808　離散、思いがけぬ危機

モニターに映ったのは、まさしく鬼の形相で疾走する梓の姿だった。
だが、その姿を捕らえられたのは、ほんの一瞬。固定カメラである以上、その有効範囲は決して広くはない。彼女はすぐにカメラの有効範囲を通り過ぎていった。
「……今の場所はどの辺りですか？」
先程までとは全く違う。深く、静かな千鶴の声。
「じゃが、あの嬢ちゃんの様子は尋常じゃない――」
「どの辺りですか？」
念を押すように、もう一度尋ねる。

「……分かった。あの嬢ちゃんのいた場所はな――」

教えなければ、先程とは違い、本当に自分を破壊しかねない。そう判断したG．N．は観念して居場所を教えることにした。

「――といった感じじゃよ。ただし、あの嬢ちゃんの爆弾はもうないから、レーダーによる追跡は無理じゃ。現時点であのカメラからどれだけ離れたのか見当もつかん。一応他のカメラのチェックは行っておるが、正直期待できんじゃろ」
「それだけ分かれば十分です」
千鶴は皆に背を向け、部屋の出口へと向かう。
「ち、千鶴さん、どこへ――」
先程千鶴に腹を殴られた北川が、地面に伏しながらも何とか声を絞り出す。
誰もが愚問だと思うだろうが、それでも聞かずにはいられない。
「梓は初音を失ったことで錯乱しています。それを止めて、連れ戻してくるだけです。すぐに戻りますから」
彼女は平静を保っていた。異常なほどに。
彼女を止められる者は、いなかった。

千鶴が部屋を出ていった後は、沈黙がこの場を支配していた。
その沈黙を破ったのは、ここにやって来て以来、何も喋らずにずっと部屋の隅に座っていた青年だった。
七瀬彰と言ったか。彼はほとんど音もなく立ち上がり、部屋の出口へと向かう。それはあまりに静かで、この沈黙があったからこそ彼の行動に気付けたと言ってもいい。
「ちょ、ちょっと、あんたまでどこいくの？」
慌てた様子で詠美が尋ねる。
千鶴には、確かに外に出ていくだけの理由がある。

妹を殺され錯乱した梓を止めるという。この青年にもそれに匹敵するだけの理由があるのか？
「彼女の妹を殺したのは、僕なんです」
場が凍り付く。
あらかじめ施設外でその話を聞いていたのは、あゆとスフィーだけ。他の者にとってはあまりに衝撃的な告白だった。
「だから、僕には行く義務がある」
行けばどうなるか。あの梓の映像を見た者に、それが分からないはずもない。多分、命の危険なんて彼にはどうでもいいことなのだろう。
だが。
たとえ事情はどうであれ、これ以上人が死ぬかもしれない状況を黙って容認するわけにはいかない。
「おい、ちょっと待て――」
北川がふらふらになりながらも立ち上がり、彰の肩を掴んだその瞬間。千鶴に一撃を見舞われたダメージがようやっと回復しつつあった腹部に、更に強烈な一撃を叩き込まれる。振り返りざまの問答無用の一撃を受け、北川は再びもんどり打って倒れた。
「……ごめんなさい。でも、無駄死にするつもりはないから」
それだけを言い残し、彼も部屋を出た。
彼を止められる者もまた、いなかった。

えー、みなさんお元気ですか？　北川潤です。で、お元気ですか？
お元気ですか。そうですか。え？　私？　あー、私は多分元気だと思いますよ。
……殴られまくってるけどな。
何故にこの紳士の中の紳士、私北川潤がここまでひどい仕打ちを受けなければならないのでしょうか？　何か悪いことでもしましたか？
しましたか。そうですか。私の存在自体が罪だとおっしゃりますか。ああ、私は何と罪な男なのでしょう。

「何とかしないと……あの梓って人、きっと、神奈の影響受けてる……」
　弱々しいながらも確かな意志を含んだ言葉が、地面にうずくまっていた北川を現実へと引き戻す。
　その声の主は、スフィーだった。彼女は何とか立ち上がろうとしたが、身体がそれについていかない。
　そういえばさっきから気にはなっていたのだが、前に見た時より心なしか小さくなっているように見える。とりあえずそれはどうでもいい。重要なのは、その言葉の方だ。
「マジか？」
「少ししか見えなかったし、映像越しだから確証は持てないけど……」
　これは窮地だ。外にはまだ、往人達が追っていった少年とやらの集団、それに寡黙な髭面親父がいるはずだ。加えて梓まであの状態、それが神奈の影響によるものだとすれば、単独で外に出ていった千鶴や彰の身の危険は更に高まる。
　部屋を見回す。現状で残っているのは、自分を除いて五人。
　来栖川芹香、スフィー、月宮あゆ、大庭詠美、椎名繭。はっきり言って、まだ敵がいるかもしれない外に連れていけるような面々ではなかった。
だとしたら、どうする？
　答えは決まっていた。
「スフィー、とりあえずお前じゃ無理だろ。ここで休んでな」
　ＣＤは解析中。今、自分がこの場にいなければできないことはない。ＣＤの解析が済み、後は実行できるだけの状態になった時にここにいればいい。
「施設の中は安全なんだよな？」
「で、でも――」
　何とか動けるようになってすぐに、準備を始めた。銃や刃物などの武装。応急処置用器具一式。他にも施設内で見つけた使えそうな物を持っていく。
「一応、パスワードは変えておいた方がいい。みん

なには俺から知らせておくから。いざとなれば内側から自由に開け閉めできるんだろ？」
「うん……」
この場に残す面々の中で最年長と思われる詠美に、諭すように続ける。
「だったら大丈夫だ。千鶴さんと、七瀬の彰くんと、千鶴さんの妹の、えと、梓さん——か？　とにかく、三人を連れてすぐ戻ってくるから。それまでみんなのことを頼む」
「待って！」
彼の会話に割り込んできたのは、意外な人物だった。
「ボクも連れてって！」
月宮あゆ。
だが、残念ながらその申し出を受ける気にはなれなかった。
「おいおい、外にはまだ敵がいるんだぞ？　いくら天下の北川様でも無力な女の子を守りつつってのは厳しいと思うんだが」
「でも——千鶴さんと梓さんを放ってこのままじっとしてるなんて、ボクにはできないよ！」
仮に断ったとして。
彼女はきっと、北川が施設を出た後に、一人で外に出て千鶴と梓を捜そうとする。ここで強く止めても無駄だ。彼女の決意に偽りがあるとは思えない。
どうせ二人とも外へ行くのならば、二人で一緒に行く方がいい。考え方の違いだ。二人で行けばお互いが自分を、そしてお互いを守れるかもしれない。
「……分かったよ。でも、自分の身は自分で守ること」
「うん！」
「じゃあ詠美さん、ここのことは任せたから」
「ふみゅーん……」
不安そうな彼女の声。
それも仕方ない。行動の指針を示すことができるリーダーであった千鶴がいなくなってしまったのだ

から。残念ながら、今この場で集団のリーダーを張れる人間――例えば、少年を追っていった往人、変態女装野郎の耕一、結局会えず終いだった蝉丸のような――はいない。それは北川自身も含めた上での話だった。

だからこそ、千鶴達を連れ戻さなければならない。不安が皆を押し潰し、集団内に不和が生まれる前に。

もうあんな思いはたくさんだ。

（ま、たまにはシリアスにいくのもいーだろ）

彼に向いているとは思えないこの行動が、吉と出るのか凶と出るのか。

だが、今はそんなことはいざ知らず。

彼はあゆと共に外への第一歩を踏み出した。

809　三度現れし彼女

「待って！」

再び北川をひきとめたのは、やはりあゆであった。後から思いっきり襟を引っ張ったので、北川の顔色がヤバイ色に変貌しているのだが、まるで気付いていない。

ずりずりと施設内部に連れ込まれる北川。

「ぐぇ……今度は、なんだっ!?」

「忘れ物だよっ！」

コンピュータルームに舞い戻った二人が最初に出会ったのは、ぐったりと消耗したスフィー。

詠美と芹香は、彼女を医務室へ移そうとしていたようで、扉を開けた詠美が怪訝そうに尋ねる。

「どうしたのよ、北川」

「いや俺じゃなくって、この娘が――」

そう言って、あゆを指差そうとしたのだが、既に彼女は芹香の下へと移動している。

……侮れない素早さだ、と妙なところで感心する北川であった。

当のあゆは、芹香と何かの相談している。そして

二人同時に手をひらひらさせて、繭に向かい〝おいでおいで〟をした。
「みゅ？」
いつもの奇声を発して歩く繭が、芹香の膝の上にちょこんと座る。
（このご時世に、なんちゅうほのぼのした光景だ……）
などと努めてシリアスに、半ば呆れていた北川は、次の瞬間予想だにしない展開を経験するはめになった。
「みゅーーーーーーーーーーーーーーー!!」
繭の絶叫。
「!?」
「何だあ!?」
詠美と北川は顔を見合わせ、頷き合うと同時に繭たちのほうへ駆け寄る。
「何やってんだ！」
間に入ろうとする北川が見たものは、毒々しい色をした——キノコ。あゆが、そのキノコを繭に無理矢理食べさせようとしているのだ。繭と取っ組み合いながら、騒乱のさなかであゆは叫ぶ。
「千鶴さんが言ってたんだよっ！　芹香さんの持ってるキノコを、繭ちゃんに食べさせなきゃいけないって！」
完全に子供の喧嘩状態になっている二人を見ながら、手を出しかねている北川に向かって詠美が命令する。
「よくわかんないけど——てつだうのよ、したぼくっ！」
……最早、彼女の間違った日本語を、根気強く修正する人物はいない。
「く、くそっ！　何で俺が!?　それに、したぼくってなんだ！」
疑問に思いつつも、キノコ強制摂取戦に参戦する北川がいるのみだ。かつて彼の親友が、そうしたように。

むぎゅ。
「みゅーーーーーーーーーーー！　嫌だよ、おいしくないよ――！」
むぎゅ。ごくん。
叫び。そして確かな咀嚼音と、続く嚥下音。
最後に訪れる、静寂。
「……」
「……藺、ちゃん？」
「……藺？」
全員が、藺の顔色を窺っている。
対する藺は、背後にいる芹香のように、完全な無表情を保っていた。
数瞬の間を置いて、藺が目を閉じる。今までなら、そのまま寝てしまうのだろうと思われたが――
「……この状況で呼ばれても、困ってしまうわね」
――そう呟いてアンニュイな溜息を吐いたのち、ゆっくりと開いた彼女の瞳は、高度な知性をたたえていた。

二人のキノコ被験者を目にした数少ない被害者である北川は、悪夢を見る思いで呆然としていたが、ようやく我を取り戻すと、最後に一本残ったキノコをまじまじと見つめて、疑問を口にした。
「……ちなみに、俺が食うと――どうなるんだ？　食うまで、判らないのか？」
「だ、駄目だよっ！　これは藺ちゃん専用なんだよっ！」
更なる混乱を呼ぶとしか思えない、恐ろしい問いかけを慌てて却下しながら、あゆがキノコをひったくる。
シリアス北川はどこへやら、あゆと同レベルで口喧嘩をはじめた二人を無視して、藺が立ち上がった。くるりと振り向くと、二人が取り合いをしているキノコを指差し、芹香に尋ねる。
「残りの一本。頂いても、いいかしら？」
（こくこく）
頷く芹香。そしてお互いの目の奥にある、他人に

は受け取られにくい知性の光を見つめて、語りかける。
「……？」
「そうね……色々不明な点もあるけれど、今後多くはあなたに依存することになると思うわ。あのコンピュータは曲者だけど、融通は利くようだから、利用するだけ利用しないと損よ」
その後、藺は今まで見ていた参加者の動きを――本人ですら気が付いていなかった詳細まで――予測を交えつつも精密に芹香へ伝え、芹香もいくつかの情報を提供し、最後に二人は静かに頷き合った。

「それじゃ、今度こそ……」
「ちょっと待ちなさい」
再び出発しようとした北川を、今度は藺が引き止める。
「あなたのその指で、自動小銃は無理があるわ。今から行くとなると、他人の援護から戦闘に入る可能性が高いから、こっちになさい」
そう言って武器を詰め替える藺。
「むむ……」
釘を添えて真っ直ぐになった利き手の人差し指を見ながら、北川は不機嫌そうに押し黙った。
しかし、思いがけぬ藺の行動は、それだけではない。
自らも鞄を肩にかけると、あゆと並んでさっさと歩き始めたのだ。
「……さ、行くわよ北川」
「……は？」
「利き手の使えないあなたよりも、まだ私たちのほうが当たるはずよ。あなたに死なれると困るかもしれないし。不満なら、あなたが残ったっていいのよ？」
「そ……そういう問題じゃないだろ！」
足手まといがまた一人、とまでは言わないまでも、心配の種が増えることに北川は不満を漏らす。しか

し繭は、涼しい顔をして答えた。
「そうね、正直に話すわ……あなた、かなりの方向音痴だって聞いたわ。だから。もし、あなたがここに帰ってこれなくて、魔法が発動できないってなったらみんな困るのよ。だから、ナビゲータとして私がついていかないと不安で仕方ない——ってのが本音よ」
「な……何で知ってんだ⁉」
北川の狼狽っぷりを、繭がにっこりしながら嘲笑う。後ろで芹香がVサイン。
「ふふ——乙女の情報網を、甘く見ない事ね？」
繭はそう言って余裕たっぷりに笑いながら、今まで長らくそうしていたように、画面の光点を見つめていた。
（近くに、来てる）
飛び出した彰が、正確に千鶴やフランクを追えているのならば。
その位置付近に、別の光点による一群があるようだった。かつて知り合った、繭の知人の光点を含む、三つの光点が迫っていることになる。
（もうすぐ。きっと、もうすぐ——会える）
そう心に念じた繭の脳裏に。
北川の抗議は、届かなかった。

810　心の行き先

雨でぬかるんだ地面を蹴るように俺は走っていた。焦る俺の心と裏腹に体は思うように動いてくれない。それも当然と言えば当然だろう。この体はまだ傷が癒えていない。それでも俺は走るのを止めるわけにはいかなかった。
とにかく一刻も早く梓を捜し出さなくてはならない。そしてマナちゃんの所に戻らなくては。
マナちゃんは強がっていたけど彼女がそう長くはもたないだろうことはすぐに分かった。
多分、男に襲撃されたときにつけられた傷が原因

だろう。刃先に毒でも塗ってあったのかもしれない。早く何らかの処置をしなければ命の危険がある。
　あの施設の中になら恐らく何らかの医療器具があるに違いない。そこにマナちゃんを連れていけば何とかなるかもしれない。今の俺はそのわずかな希望にすがるしかなかった。
　くっ。
　一瞬周囲の景色がゆがんだ。
　恐らく怪我をおして走っているせいだろう。
木に手をかけ、倒れそうな体を支える。
　柏木耕一！　お前は地上最強の鬼の血を引く者だろう！
　俺がしっかりしなきゃ梓もマナちゃんも助けられないぞ！
　俺は自分に喝を入れる。
　そしてまた俺は走り出した。

「さて、それじゃ行きましょうか」
　晴香のその言葉に私と観鈴さんは頷いた。
「そうね、観鈴さんも私達と目的地は同じみたいだし。一緒に行きましょ」
「は、はい。よろしくお願いします」
「ええ。それにしても、あなた随分たくさん武器持ってるわね」
「が、がお……」
　観鈴さんが困ったように呟いた。
「それだけあると重いでしょ。私達が少し持ってあげるわ」
「そうね、いい？」
「あ、はい。でも、いくつかは自分で持ちます」
　観鈴さんがいくつかの持ち物を手に取った。
　私と晴香で残りの武器を手分けして持つと神社を出発することにした。
「あ、あの！」
「ん？　どうしたの？」
　観鈴さんが神社を出てすぐに声を出した。

「誰かがこっちに来てるみたいなんですけど」
「え？」
私達の目の前に出されたレーダーには確かに一つの光点が私達の方に近づいてきているのが見えた。
「……観鈴。アンタそこら辺に隠れてなさい」
「え？　でも……」
「そうね、大丈夫よ。まだ敵と決まった訳じゃないんだし」
「そうそう。それにもし敵だったら観鈴が影から撃ってくれればいいんだし」
私と晴香の言葉に頷くと観鈴さんは心配そうな目をしながら近くの木の陰に隠れた。
まるで小動物のような動作だ。
「フフフ」
思わず笑みがこぼれる。
「どうしたのよ？　気持ち悪いわね」
「失礼ね。ちょっと知り合いを思いだしただけよ」

折原、ゴメンね。繭のこと結局助けられなかったわ。
空を見上げながらそう心の中で呟く。
結局この島に来る前の知り合いの中で生き残っているのは私一人だけだった。
折原の最後の願いだった繭を助けることも出来なかった。
でもきっとあいつのことだから笑いながら「七瀬。お前は頑張ったんだから気にするな」って言ってるわね。
だけど、それじゃあいつの死が報われない。
だから私はせめて最後まで生き残る。
もう、それしかあいつの願いを叶えることは出来ないから。
「七瀬。来るわよ」
晴香の言葉に私は持っていた刀を持ち直した。
ガサッ。
「動かないで！」

晴香が物音のした方に銃を向けながら叫んだ。
「晴香ちゃん?」
聞き覚えのある声と共に草むらから出てきたのは――。
「変態さん?」
何故か隠れているはずの観鈴さんのつぶやきが聞こえてきた。

811　使命感

(分からないよ……)
天井を見ながら、思った。
とりあえず彼女――スフィーは激しく衰弱していた。あからさまに衰弱していく自分のことを心配した詠美と芹香によってこの医務室のベッドに運ばれ、それからどれだけの時間が経ったのか見当も付かない。ほんの僅かな時間だったのかも知れないし、大分長い時間だったのかも知れない。

不調の原因の一端は、誰に言われるまでもなく分かっている。むしろ自分だからこそ分かる。
魔力の流出。
その流出の度合いは半端ではなかった。かつて自分と健太郎を結んでいた腕輪があった時よりも、遥かに速いスピードで魔力が失われていた。そのあまりの急激さ故に、体力までもが失われているのだろうが、魔力が失われる根本的な原因は、結局のところ分からない。
だが、それ以上に分からないことがある。
魔力が失われていくのと同時に、その代わりとばかりに自分に流れ込んでくる断片的な情報。あまりにも断片的な。そして圧倒的な。
着物を着た男女の死体。月。天まで届かんばかりの篝火。翼。岩の牢獄。空。自分が見たこともない光景だった。
それらが流れ込んでくるたびに、自分を構成する大切なものが、ひとつずつ遠くなっていくのを感じ

る。
　五雨月堂で過ごしたあの日々が。
　グエンディーナで過ごしたあの日々が。
　結花のホットケーキが。
　リアンの笑顔が。
　健太郎の後ろ姿が。
　自分が撃ち殺した少年が残した、最期の言葉が。
（でも、今はのんきに寝てる場合じゃない。あたしがやらなくちゃ――）

　――何を？

　彼女はベッドを降りる。ふらつきながら、医務室の扉まで辿り着き、その扉を開ける。何故か魔力の流出は止まっていたが、今の彼女にとってはもう関係のない話だった。

　施設内、コンピュータルーム。
　のんびりと茶をすすりながらＣＤの解析――そして北川達の帰りを待っていた詠美と芹香は、予想だにしなかった来客に驚いた。
「ちょ、ちょっとだいじょーぶなの!?」
　詠美は突然コンピュータルームに戻ってきたスフィーに駆け寄ろうとして――できなかった。
　焦燥。
　悲壮。
　使命。
　そういったものが、彼女に何人たりとも立ち寄らせまいとしていた。
　憔悴しきった顔色のまま、彼女はふらふらと歩き、腰をかがめ――何かを手にした。
　それを少し、いじったかと思うと、再び立ち上がる。
　彼女が手にしていたのは、北川達が置いていったＭ４カービンだった。今のスフィーの小さな身体

――しかも、すっかり衰弱していた――にとっては
それなりに重いはずなのだが。
銃口は詠美と芹香、そしてマザーコンピュータの
メインモニターの方に向けられている。
当然の如く。
そこに迷いはない。
安全装置は外されていた。
「お、おい、お嬢ちゃん、何やっとるん――」
その状況になって、最初に声を発したのはG．N．
だったが。
たたた――と軽い音がしたのと同時、マザーコン
ピュータのメインモニターが吹き飛んだ。
「きゃあっ！　なによ、なんなのよ、もー！」
破片が詠美や芹香の頭上に降ってくる。詠美は思
わず頭を抱えて身を屈める。湯飲み茶碗も床に落ち
て砕ける。
「……」
帽子の上にモニターの破片が降ってきてもなお、
芹香の無表情さは変わらなかった。
だが、見る者が見れば分かっただろう。スフィー
を見つめる彼女の瞳は悲しさに満ちていた。聡明な
彼女には分かってしまったのだ。スフィーに何があ
ったのかを。
そして、狙いの定まらないスフィーの銃口は自分
に向けられようとしていたのだと。
決して聡明だとは言えない詠美も、銃口が自分に
向けられていないことには気付けていた。
じゃあ誰を狙ってるの？
そこまで到達できれば後は簡単だった。他には芹
香しかいない。
M４カービンから三発の弾が射出される。その反
動は今のスフィーに支えきれるものではなかった。
大きく体勢を崩し、後方に転倒するが、芹香や詠美
が体勢を立て直す前には再び起きあがる。
室内ではあるが、それなりに距離もある。少なく
とも、飛び込んでスフィーを取り押さえるには至ら

ない。死ぬ気で飛び込んでくれば話は別だが、それでも大方、無駄死にで終わるだろう。
標的が近ければ近いほど、弾は当たりやすくなるのだから。
もちろん銃口は前に向ける。
（……あたしがやらなくちゃ……）
もはや使命感だけが彼女を突き動かしていた。
それを達成しなければならないという焦燥感と、何としても成し遂げねばならないという悲壮感と。
（……あたしがやらなくちゃ……）
——何を？
だが、その問いに答えてくれる者は誰もいない。
彼女自身も含めて。
詠美は思い出していた。
『早ぅ逃げ！　同人女は夏こみまでは死ねんのや！』
『えーい、女々しいわ！　いつまでもグズっとらんと、しゃんとしぃ！』
『スマン……詠美っ！』
おろおろすることしかできなかった自分の手を引いてくれた、由宇のことを。
『ああ。頼りにされたいし、頼りにしてる』
『待てっ！　詠美!!』
『俺も愛してるぜ』
壊れかけた自分の心を現実に繋ぎ止めてくれた、和樹のことを。
『……下僕じゃねぇかよ！　このアマふざけやがって！』
『けっ……おめぇなら、大丈夫だ……戦え』
『笑って——笑って、バカやってろ。そうじゃねぇ、と、おめぇらしく——』
逃げることしかできなかった自分に戦うことを教

えてくれた、御堂のことを。
自分の浅はかな行動のせいで和樹と共に命を落とした、楓のことを。
自分の眉間を貫くはずだった弾丸をその身を以て防いだ、ポテトのことを。
今まで出会ってきた、全ての人達のことを。
たたた――
あまりに無情な、無感動なその音が、再び部屋に響き渡った。

812　結末

……HM―12です。
この部屋は、静かになりました。
先程までの騒音と悲鳴と、怒声とが、嘘のように静まり返ってます。
まるで時が止まったみたいに思えます。
何が起こったのか、即座には判断できませんでした。
今も、出来ていません。
目の前に立ち込める硝煙と、血の赤。
あまりのことに、私の中のブレーカーが落ちることさえありませんでした。
生まれて、初めて目にしたその光景は、あまりに凄惨で、信じ難いものでした。
舞い降りる茶碗や機片の残骸。
「きゃあっ！　なによ、なんなのよ、もー！」
砕け、紫電を起こすメインモニターだったもの。
「…………」
爆風というには、あまりにささやかな風が揺るが

した三角帽子。
その向こうに見えた双眸は、悲しくも、しっかりと前を見据えている。
その視線の先に、疲弊しきった表情のスフィーが銃を構えている。
未だ、銃口の先を微妙に彷徨わせながら。
カシャン！
降り注ぎ、地面に転がる残骸の音は、最後に陶器の欠片が地面に跳ねた所で止んだ。
後に響くのは、モニターだったものが巻き起こす小さなスパークと、かすかな吐息。
詠美が再び体勢を立て直した時、すでにスフィーの手にした銃が再度、火を吹いた。
「……っ！」
芹香の小さなその悲鳴がかき消される。
ガシャガシャン！
原型を留めていないモニターを再び弾丸が抉り、辺りに破片を撒き散らす。
今度は、赤い血飛沫と共に。
「あんたっ！」
既に、詠美の手には銃が握られていた。
自らが、御堂がポチと呼んだ、その銃をスフィーに向ける。
スフィーも腰を落として撃った為か、今度はそこまで体は流れなかった。
赤く染まった芹香が後方へと崩れ落ちるのと、スフィーが詠美に銃口を向けるのはほとんど同時だった。
「なにしてんのよっ！」
真中に置かれている机へと沈むようにしながら、そうしながら詠美からも銃声が放たれる。
そして、スフィーからも。
双方共に、外れる。
一つは天井へ、一つは、詠美のいた空間を飛び、壁をえぐった。

（何かを、しなくちゃいけないんだ……）
スフィーの心が、その衝動を駆り立てる。
「はうっ……！」
ただ、呆然と立っていたHM—12を突き飛ばすようにしながら、もう一度二の足で立つ。
足りない魔力を、体力を、気力で振り絞って、銃を撃った。
もはや何かしらの破片しか残されていない机を。
銃痕でボロボロになった壁を。
真新しい血が滴り流れる床を。
幾つかの弾丸が踊った。
（終わらせるんだ）
目の前の惨劇が、そうすることで終わりへの道になると信じて。もしくは、それが信じた道になると強く念じて。
「……ぅぅぅ〜〜!!」
気付かない内に、スフィーの瞳から涙が零れ落ちていた。
正しく認識はできなかったけど、それはスフィーが無意識に流した悲しみの涙だった。
机の陰から、詠美が再度、両腕で銃を持って。
『もっと……腰を……落とせ……腕はこう……』
今は亡き、御堂の声を聞いたような気がした。
かつて、人を撃ったときのように、
御堂に、支えられるかのように。
けど、思うのだ。
どうして、撃たないといけないんだろう？
スフィーと、自分の手の内にある銃を交互に見ながら詠美は自らに問いかける。
どうして、殺したんだろう？
どうして、殺されたんだろう？
和樹、由宇、御堂、そして、この島に送られた全ての人達は。
（こんなこと、かんがえたことなかったけど、すご

く、悲しいよ。悲しいね、和樹)
下唇を噛み締めて、スフィーへと狙いを定める。
『狙うのは眉間だ……俺が撃て……と言ったら……撃て』
もう一度、御堂の声が頭に蘇る。
(撃って、それから、どこに行くんだろう)
この島での狂気の行く先を。
スフィーの瞳と、詠美の銃口とがかちあった。
『撃てっ――――!』
最後に、御堂の声がそう聞こえた気がした。

詠美の指に力がこもった。
だけど、弾丸が発射されることはなかった。
なかったのに、銃声は再度響いて。
三度、地面に尻餅をつく。
「……ぁ」
じわりと、滲む景色。それは鮮やかなほど紅く。
そのまま、ドウッっと、後方に沈んだ。

(けんたろ、結花、なつみちゃん、みどりさん、……リアン。終わらせるから)
魔力がなくなって、霧散してしまわない内に。
だけど、終わらせて、それで。
(私は、どこに行くんだろう)
何かに導かれるかのように、その部屋を後にする。
彼女の双眸からこぼれた涙の雫が、一滴だけ血の池に跳ねて波紋を作った。

「…………」
よろよろと、芹香が詠美の元へと這いよる。
「……な、なにが、あったのかな……?」
詠美の掠れた声に、芹香が短く思案して、かすかに首を振る。
「……撃てなかった……だって、スフィー泣いてたから、悲しかったから。撃てば、良かったのかもしれないけど、やっぱり、撃てなかったよ」

苦しそうに声を吐き出す詠美の頭を、ゆっくりと芹香が撫でる。
その手もまた、苦しそうに震えていた。
「泣いてたから、それ見ちゃったから、撃って、先を見る未来は……撃たれて先のない未来よりも、後悔するって、思ったから……」
ばかやろー、と、御堂の声が聞こえた気がした。
「今行くね、和樹、由宇……したぼく……よてい！」
「……」
芹香の口が、『後はお願いします』とはっきりと動いた。
帽子が血溜まりの上にぱさりと落ち、美しい黒髪がHM—12の腕を撫でた。
こんな島でも、その黒髪だけは変わらず綺麗だったから。
「そんなこと言わないでくださいよ〜！」
だから、目の前がなおさら信じられなくて、泣いた。
機械でも、泣いた。
「……」
必ず、道はあるから、と呟いて、詠美に重なるように倒れた。
「芹香お嬢様っ！」
「綾香ちゃん……浩之さん——」
……早まっちゃったね」
ふるふる、と芹香が首を横に振る。
「——ごめん——」
芹香の腕の中で、ゆっくりと息を吐いて、そして力が抜けた。
「詠美さんっ、芹香お嬢様……」
HM—12は何も出来ないままに。
それでも、何もしないよりはと芹香に近付く。
「……」
「えっ？　そんな……そんなこと、言わないで下さ

最期に、はっきりとそう言った。

……HM―12です。

この部屋は、静かになりました。

先程までの騒音と悲鳴と、怒声とが、嘘のように静まり返ってます。

まるで時が止まったみたいに思えます。

私は機械です。だから、年を取ることもありません。

壊れることはあっても、死ぬことはありません。

直せばまた動けるんですから。

だから、死ぬことの悲しさが分からないです。

だけど、さっきまで一緒に楽しくお喋りをしていた詠美さんと芹香さんが眠りについて。そして、彼女たちは、もう、二度と目を覚ますことはないんだと気づいて。

人が死ぬってことがなんとなく分かったような気がします。

今はただ、悲しいです。

十一番　大場詠美　死亡
三十七番　来栖川芹香　死亡
【残り12人】

813　狼煙

現れたのは女装の変態男、いや包帯男、柏木耕一。

アタシの記憶にある姿よりも、遥かに包帯だらけで血塗れだ。隣で呆然としていた七瀬が、ようやく口を開く。

「耕一さん……なんだか、どんどん酷くなってない？」

そう言った後も、ぽかんと口を開けたままだ。

アタシよりも先に、耕一さんと出会っている七瀬にとって、その変化は口の塞がらないほど酷いらし

い。
……無理もない。漫画のように身体のほとんどを包帯で覆われており、しかも滲む血のせいで白い部分がほとんどないのだから。
「ははは……面目ない」
乾いた声で、耕一さんは心底申し訳なさそうに笑う。だが、すぐに真顔に戻すと、情況を説明しはじめた。
「もう聞いたと思うけれど……初音ちゃんが……死んだんだ。それで梓が暴走しちゃって……離れ離れになっている」
それについては、言葉もない。一足先に出発したアタシたちは、頷くことしかできなかった。
だが耕一さんの本論は、過ぎた事実に絞られてはいない。
「その上、さっきマナちゃんが倒れたんだ。疲労のせいだと思ったし、マナちゃんも梓を追えって言うから気配を追って来たんだけど……いま思えば、二人して髭面の親父にハサミで斬られた後の話なんだ。そのとき毒か何かにおかされたのかもしれない」
冷静に分析して見せた耕一さんの、唯一残った欠陥部分を七瀬が問い質した。
「ちょ――ちょっと待って？　耕一さんは、大丈夫なの？」
「ああ？　うん、今のところ大丈夫みたいだな。俺にはあまり、効いてなかったんだと思う。走っていてようやく解った程度で、少し熱っぽくて眩暈がするぐらいで済んでいる」
熱っぽいのは、この島に来てからずっとな気もするけどね、と付け加える余裕もあるようだ。
「それで俺の身体の事はともかく、マナちゃんは参ってるから、相当やばいかもしれない。だけど梓も探さなくちゃならないんだ。梓には――当然、会ってないよな？　それじゃ毒を治療できるような、そういう物がありそうな場所に、心当たりは無いかい？」

心当たりは、ある。だからアタシは七瀬と、顔を見合わせた。だが目的のものがありそうな場所、すなわち保健室は、小学校自体の危険性を考えると、近付けない。思わず二人して、難しい顔になってしまっていた。
「あの……これから行くところ、病院みたいのは……無いのかな？」
いつの間にか這い出していた、観鈴がぽつりと呟くように言った。
「……これからって？　そう言えば、どこへ行く気だったんだい？」
知らない人物の出現に戸惑いつつも、耕一さんは疑問を口にした。
七瀬が全てを言ってしまう前に、軽くお互いを紹介させて、アタシが情報を絞る。
……潜水艇のことは、下手に言いふらさないほうが、良いような気がしたから。
「ほら、みんなでロボットと戦ったじゃない？　あの施設を、今は占拠してるらしいのよ」
そこでいったん言葉を切って、七瀬のほうを見る。
あまり賛意は示していなかったけれど、意味は通じたらしく、七瀬は軽く頷いた。アタシも軽く頷き返して、更に続けようと……したんだけれど。
「そこで、〝これからの事〟を皆で相談しようと思って――」
「そうか、やっぱりあの施設に行くしかない――」
「どうしたのよ晴香？　それに耕一さんまで――」
「は、晴香さん、これって――」
〝それ〟を見るなり、アタシと七瀬は、思わず走り出していた。観鈴と耕一さんも、ついて来ている。
(芹香さんと北川は……どうなった⁉)
この島に来て、何度となく感じたもの。
……嫌な、予感がした。

すっかり気分を害した北川と、使命感に燃えてい

つになく静かな月宮さん。かなりの凸凹コンビを連れて、私は岩場を抜けた。
　よくもこれだけの間、文句を言い続けられると感心するほど、北川の不平不満は垂れ流されたままになっている。何度か言い負かしてやったものの、根本的解決法は北川の命を絶つか、声帯を潰すしかないと結論して、無視を決め込むことにして久しい。
　むしろ私は、前方へ意識のほとんどを注いでいた。施設で得た情報だけが、確実なものだったのだから、あとは自分の目と耳が頼りにならざるを得ない。だから、北川の相手をしている暇など無い。
　そうして神経を針のように尖らせ、前進する私の耳に、不穏な音が飛び込んできた。駆けて来る足音。それも、多数だ。
（月宮さん、それに北川！　静かに、伏せなさい）
　北川が、この期に及んで文句を垂れる。
（なんだってんだよ、さっきから！　またどうせ風の音かなんか……ん？　違うな？）
（でしょう？）
　しかし、さすがに異変を感じ取ったようで黙り込んだ。三人して、静かに伏せる。
　そのとき僅かに見えた、その影は――
「な――七瀬さんっ⁉」
「誰⁉　――って、あんた藺⁉」
　私は（あまりに私らしくないけれど、極めて即座に、そして無防備に）立ち上がった。転がり込むように、七瀬さんが飛びついてきた。私も獲物を狩るフェレットのように、文字通り飛びついていた。
　細かい形容は必要ない。ただ、嬉しい。
　〝今までの私〟と同じ気持ちが共有できている。北川と月宮さんが、唖然としているのを無視して、七瀬さんにしがみついていた。
「七瀬さんっ！」
「藺‼」
　七瀬さん……今はまだ、気付いていないようだけど。きっと私の変化に驚くだろうな、と期待を膨ら

ませていた。
髪の毛、どうしたの？　引っ張れなくて、寂しぃよ。でも、生きててくれて嬉しいよ、なんて事を考えながら。

しかし、喜びの時は一瞬でしかなかった。喜びを言葉にする前に、邪魔が入ってしまったのだ。
最初に固まったのは、北川。
「北川！　施設は、芹香さんは、どうなったの⁉」
切羽詰った声で尋ねられているにも関わらず、余裕たっぷりに返す自称紳士の慇懃無礼な言い草は
――
「晴香さん、相変らず口調が厳しくてらっしゃいま――」
――言い草は、炸裂しなかった。
そして月宮さんが、喉に餅でも詰まらせたような、お馴染みの奇声をあげる。
「どうし――うぐぅ⁉」

窒息死しそうな表情のまま、固まった。
遺憾ながら最後になったのは、私。
「施設に何が――」
開いた口が、塞がらなかった。
全員が同じ方向を見て、絶句していた。暗さのために、規模は断定できないのだが、あれは間違いなく――煙だ。おぼろげに輝く月の光を燻すように、煙が立ち昇っている。その下に、目指す岩場の施設があるはずの場所だった。
まるで、そこに希望を託していた者を呼び込む、狼煙のようであった。

814　空を見上げて

――――脳が、痛む。
フランクはどことも知れぬ森の中を、独り歩いていた。

周りにいっさい注意を払わず、その足取りは危うい。
そのために何度も地面に足を取られて転んだり、草や枝で小さな傷を作ったりもしていたが、
しかし、それらを気に止める様子は無かった。

――おかしい。

さっきの奴らは、いったい何だったんだ？
確かに殺したはず――そう、この電波で確かに奴らの頭を焼き殺してやったはず。
なのに、起き上がってくるとは、どういうことだ。

ふと気が付くと、フランクの周りをぶんぶんと一匹の蚊が飛び回っていた。鬱陶しいことこの上無い。
フランクはそれを忌々しげに睨むと、電波の力でその蚊を破壊した。
蚊は粉々になって消えた。だが、耳障りな羽音は消えなかった。

それどころか、肉体を失ってますます身軽になったとでもいうように、蚊は軽快に飛び回っていた。
フランクは平手で蚊を木に叩きつけた。
今度こそ羽音は消えた。

ふと気が付くと、フランクの腕を一匹の蜘蛛が這い回っていた。鬱陶しいことこの上無い。
フランクはそれを忌々しげに睨むと、電波の力でその蜘蛛を破壊した。
蜘蛛は体液を飛び散らせ破裂した。だが、這い回る感触は消えなかった。
それどころか、肉体を失ってますます身軽になったとでもいうように、蜘蛛は軽快に這い回っていた。
フランクは蜘蛛を払い落として何度も何度も踏みつけた。
踏みつけながら、フランクは思わず笑い出したくなった。

――――くくく……なんということだ。
この力では〝虫も殺せない〟じゃないか。
何なんだ……。
これは何なんだ……。
これは……いったい……何なんだッ‼
怒りに任せて木に拳を叩き付ける。
わずかに木がゆらめき、ざあと音を立てて一斉に水滴が落ちる。
フランクはそれを頭から浴びた。
――――なんて無力なんだ、俺は。
これでは何も殺せない……ましてやあの悪魔を殺すことなど……。
いつの間にかフランクは開けた場所へ出ていた。
夕暮れの薄明かりに照らされて、鳥居がそびえ立っている。
そしていくつか死体が転がっていた。
これ幸いとばかりにフランクは目に付いた死体を漁る。
――――力だ。力が足りない。銃でも何でもいい。奴を殺せるだけの何かを――。
だが武器の類は一切見つからなかった。誰かが全て持ち去った後のようだ。
いらつきながらも次の死体を調べようと、フランクは頭をあげる。
そして、彼はそれを見た。
見てしまった。
彼にとってあり得ないはずのものを。あってはならないものを。
フランクは声にならない叫びをあげながら、それに向かって走り寄る。

――――バカな……見間違いだ、そうに決まってる。

　そんな馬鹿なことがあってたまるか……そんな馬鹿なことが……そんな馬鹿なことがそんな馬鹿なそんなそんなそんなばかなバカナ馬鹿な馬鹿ナばかナバカな馬鹿なばかなバカナ馬鹿なバカな馬鹿なばかなバカナ馬鹿な馬鹿ナ馬鹿なバカな馬鹿なばかなバカナ馬鹿な馬鹿ナ馬鹿な馬鹿ナばかナバカな馬鹿なばかなバカナ馬鹿な馬鹿ナばかナバカな馬鹿なばかなバカナ馬鹿なバカな馬鹿なばかなバカナ――――

　しかし、それは確かにそこにあったのだった。
名も知らぬ少年の、死体。

　言葉も無く、フランクは呆然と立ちつくしていた。
やがて震える手をその死体に伸ばす。
　冷たい。
　それが雨のせいだけでないのは、明白だった。
　彼は激昂してその死体に掴みかかった。
――――何なんだお前は！
　お前は偽物だ！　俺はまだ殺してない！　こんなところでお前が死んでいるはずが無い!!
　この偽物がっ……!?

　ざくりと指が切れる感触。痛みでわずかながら落ち着きを取り戻す。
　見れば、襟首から紙の様なものが覗いている。掴んだ際にこれで切ってしまったのだろう。
　フランクは知っていた。それは反射兵器と呼ばれるもの。彼の狙撃を何度も阻んだもの。
　彼はその死体の服を捲くる。胴回りにそれが隙間無く貼り付けられていた。銃撃をうけた痕もある。

――――ああ、そうなのか。これは、そういうことなのか。

それを見た瞬間、フランクは不意に合点がいった。
これは確かにあの少年の成れの果てなのだと。
理屈ではなかった。冷静に判断する神経など、とうの昔に擦り切れている。
人はどうしようもなくなった時、笑うしかないという。
フランクは腹の底から笑った。痙攣のような笑い。
ふ、と彼の全身から力が抜け、そのまま大の字になって土の上に転がった。
空が見えた。
喜ぶべきなのだろう。憎き仇が死んだのだから。
例え自分のやってきたことが、全くの無駄だったとしても。
あんな真似までして力を求めた事が、すべて無意味になったとしても。
だが、今湧き上がってくるのは大きな疲労感だけだった。
一時は皆殺しすら考えたはずが、少年の死体を見てしまった今では殺意も湧き上がってこない。
立ち上がる気力も無い。
ほんのわずか動くことすら億劫だった。
このまま消えてしまえるのなら、とも思う。
何にしろ——自分の役目は終わったと、そういうことなのだろう。
——祐介、お前の仇は死んだよ。
結局何も出来なかった。俺のやるべきことは消えた。もう俺には何もない。
ああ、コーヒーが飲みたい、な——。

815　駄目な人

彼はうなだれる。
目を覚ましたら、
待っていたのは現実。
認めたくない現実。

こっけいな現実。
でも現実は現実。

彼は寡黙だ。
それが人には冷静に見える。
本当はただ口下手なだけ。
伝えたいことが上手く伝わった時なんてない。
だから、彼は友達が少ない。

彼は感情の変化を表に出さない。
それが人には落ち着いているように見える。
本当は勇気がないだけ。
生の自分を出して嫌われるのが怖いだけ。
だから、彼は友達が少ない。

彼は友達が少ない。
それが人には孤高に見える。
本当は欲しいのに作れない。
作りたくても作れない。
作り方がわからない。
だから、彼は友達が少ない。

そんな彼も年を取る。
彼は二人の甥を知ることになる。
親族が集まる時には必ず面倒を見る。
二人は彼に懐いた。
彼は二人に懐かれた。
そこには嬉しさがあった。

二人との仲はその後も続いた。
時たま、彼らは喫茶店に遊びにきた。
彼はわざと苦いコーヒーを出す。
二人は我慢しながらそれを飲む。
性格からして出された物を断ることはできない。
苦しくなってきたところで飲むのをやめさせる。
心の中で笑いながら甘いものを出してあげる。

二人は怒る。笑いながら。
彼は大切に思う。その時間を。
そこには楽しさがあった。

彼と二人は年を取る。
二人は大学生と高校生になった。
付き合いは続き、大学生とは一緒に働いた。
二人は着実に成長していった。
彼は良い叔父であろうとした。
だから、二人に好きな人が出来た時は、
乏しい経験を捻り出し、相談に乗ってあげた。
彼は恋を実らせることが出来なかった。
二人には成功してほしかった。
そこにはちょっと、悲しさもあった。

二人は大切な存在だった。

そこで現実に戻る。

色々あった。
自分は努力したつもりだった。
結果はこれだ。
情けない。消えたい。死にたい。

二人を殺し合いに参加させる。
一人は死んでしまう。
仇をとろうとする。
失敗を続ける。
死姦する。
狂う。

その行動は全部無意味。仇はすでに死んでいた。

そっと首に手をかける。
死のうとしてみる。
でも死ねない。
死ねるほどの勇気もない。

とりあえず、彼は動く。
彰に会うため。
会ったらどうするのかも解らない。
ただ、彰に会いたい。
でも、なんて言えばいいのだろう。
自分は口下手だし。

結局、彼は逃げた。

816　正しいことを

静寂が、辺りを支配する。
月光を受け、佇む施設から昇る煙に
だれもが、言葉を発せなかった。

「何かあったと考えるのが、妥当ね……」
最初に呟いたのは、繭。
「ヤバイわね。ぐずぐずしてる暇はないわ、さっさとあそこに戻らないと……」
「そ、そんな。それじゃあ梓さんは……」
今にも駆け出しそうな繭に慌ててあゆが繭に問い掛ける。
「仕方ないでしょ！　向こうには残してきた三人がいるのよ！　一人の命と三人の命、助けるなら人数の多い方でしょ！」
そう言ってから、気付く。
私、なんてイヤな女なんだろう。
変に達観した考えが、頭を支配して、酷い台詞が平気で出る。
そんな私に月宮さんは、涙ぐんで反論する。
「う、うぐう。な、ならボク一人でも行くよ！　だって梓さんは学校でボクを助けてくれた！　今度はボクが、助ける番だよ！」
ああ、なんて美しい台詞なんだろう。
同じ助けるでも、私とはなんという違いだろう。
生き残りたいから——助ける。

その人を救いたいから――助ける。
「ちょ、ちょっと二人とも落ち着いて！　こんなとこで言い争っても……」
妙に饒舌な藹に面食らいながらも、七瀬が仲裁に入るが、
「止めてもダメだよ！　ボクは絶対に行く！」
そう宣言すると、あゆは自分のバッグを引っつかんで走っていった。

あゆが去った後、遅れていた観鈴と耕一が現れて合流した。あゆを除いて、北川、七瀬、晴香、藹、耕一、観鈴と六人、現状でこの島最大の集団になっている。
施設から出ている煙は消えることはなく、むしろ増えていた。
「やっぱ、俺も行くわ。月宮さんを一人には出来ないしな」
簡単な状況の確認をした後、北川はそう言った。
「施設の方は、あんた達に頼む。俺は月宮さんを探しに行く。上手くいけば、外に出た連中を纏めてつれて帰れるかもしれないしな」
「はぁ!?　そんなの認められる訳ないじゃない！」
藹は激昂しながら北川を非難した。
「月宮さんは私情で飛び出していったのよ！　残りの人数が少なくなった今、なるべく集団行動をしなきゃいけないってのは、あんたのその足りない脳味噌でもわかってるでしょ!?」
そう詰め寄る彼女に北川は頭を掻きながら、
「確かに、お嬢ちゃんの言うことは正論だと思うぜ。だけど、俺たちは人間だ。感情があって、それぞれ大切にしたい物があるんだよ。あの子は俺の親友のダチだ。その親友はこの島で俺を助けて命を落とした。だから、俺はあの子を守りたい……そりゃ、この選択は、間違ってるのかもしれないけどさ」
いつものようにおどけた口調の北川。だが、話している内容は、真剣そのものだった。

「誰にだって譲れないものがあるんだ。誰もが正しい事だけを選べる訳じゃない。そんな機械みたいな考えを他人に押しつけていたら、いつか痛いしっぺ返しを食らうぜ？」

　そう言い残して、北川は夜の闇に姿を消した。

（機械……私が？）

　北川がその場を去っても、繭はその場に立ち尽くしていた。

（違う！　違う！　違うっ！　私はただ、なるべく多くの人が生き残れる選択を考えて――）

　けれど、多数の為に少数を切り捨てていくなら、それはやはり機械と同じではないのだろうか。

「ねえ、椎名さん。施設の事なんだけど……」

　晴香の問いかけも、彼女の耳には届かない。

（解らない……解らないよ……どうすればいいの……、教えてよ、こーへい。教えてよ、みずかおねえちゃん……）

　一人、悩んでいた。

817　約束を

（誰もが正しい事だけを選べる訳じゃない……か）

　耕一は北川の言葉を反芻していた。彼自身、この島に来てから、何度も自らの選択を後悔していた。

（楓ちゃん、初音ちゃん――）

　失われてしまった大切な家族のことを思う。彼自身が違う選択をしていたら助けられたかもしれない――など考えるのは傲慢かもしれない。だけど、どうしても、考えることは止められない。

（後悔はいくらでもある。それでも――）

　今はこれからする選択のことを考えるべきだ。失われた命よりも、生きている命を優先すべきなのだから。まだ、耕一にとっての大切な人は、何人も生き残っている。

（マナちゃん……）

置き去りにしてきてしまった少女のことを思い返す。髭面の男に襲われてから、突如衰弱した彼女。状況から見て毒を使われた可能性が高い。
そして、今、耕一の手元には応急処置セットがある。全身傷だらけの耕一を見かねて北川が置いていってくれたものだった。どうやら参加者で占拠したという管理者側の施設で見つけた物らしく、中には解毒薬とおぼしき物があった。
固定されたガラス瓶と、小さな注射器。ラベルには英語でアンチドーテ——解毒薬と書いてある。自分達が受けた毒に対応しているかはわからないが、試してみる価値はあるだろう。
注射器を使って自身の体に溶液を流しこむ。
(……どうやら、当たりだったみたいだな)
少しずつ体の中に渦巻いていた不快感が引いていくのを感じる——体中がぼろぼろなのは相変わらずで、元気になったとは、お世辞にも言えないが。
薬の効き目を確認する為、木に持たれて休んでいると、観鈴がおどおどしながら近づいてきた。
「あ、あの……わたし、包帯変えましょうか?」
「……ああ、頼むよ。ありがとう」
酷い状態の包帯を見て、観鈴は嘆息する。
「うわっ……包帯、すごいぼろぼろ……」
彰との戦闘で耕一はミイラさながらになっていた。元々、巻かれていたのが大雑把だったせいもある。
「……そういえば、これは晴子さんに巻いて貰ったんだった」
「そっか。お母さん、耕一さん治療したって……」
目を細めて、乱暴に巻かれた包帯に愛おしそうに触れる観鈴。
「やっぱり晴子さんは君のお母さんだったんだね。お母さんには、会えたのかい?」
「……はい」
喫茶店で別れた晴子の事を思い出す。死んだと思って居た娘が無事だったのだから、きっとすごく喜んだに違いない。

「そうか。それで、晴子さんは……？」
耕一は深く考えずにそう聞いた。
「……死に、ました」
観鈴は、目を伏せて、そう答える。耕一は自らの失言を悔やんだ。
「……すまない」
それからしばらく、無言で包帯の交換が行われる。
「そうか、晴子さんが……」
親しくした相手が亡くなるのは、やはりショックであった。耕一は命の恩人だった彼女のことを想う。
そして、ひとつの誓いを立てる。
(俺は、生き残っている俺の大切な人達を絶対に護る……北川くんには、申し訳ないが)
耕一は北川から施設の様子を見に行って欲しいと言われていた。そうするのが正解なのだろうと考えていた。だが、この島では命は簡単に失われてしまう。それが、正しい選択ではなくても、自分の大切な人達を護りたい、今はそう考えていた。

(千鶴さん、梓、マナちゃん……)
マナは毒に犯されて危険な状態だ。そして、大事な従姉妹たちもまた危うい状況にあるらしい。彼女たちの事を放ってはおけない。
「みんな、聞いて欲しい」
耕一がそう言うと、七瀬、晴香、繭の三人が一斉に耕一に振り向いた。
「本当なら直ぐにでも、みんなで施設の様子を見に行くべきなのだと思う。けど、俺にはどうしても助けたい人がいるんだ」
彼は自分の持っている小さな箱を掲げて見せた。
「これは北川くんが置いていってくれた応急処置セットだ。この中に解毒剤が入ってた。これを使って、毒に犯されて危険な状態になってるマナちゃんを助けに行きたいと思う」
「あなたまで、何を――」
「マナちゃんが動けるようになったら、千鶴さんや

梓を探して、北川くん達とも合流しようと思う。施設にはそれから向かうつもりだ」
「そんな……施設の三人は、見捨てるって言うの⁉」
「繭」
興奮した繭を七瀬が冷静に諫める。七瀬と晴香は仕方ないわね、と達観した雰囲気だった。なお、観鈴はピリピリした空気にただ狼狽している。
「俺たちが合流するまで待つか、先に施設の様子を見に行くか。それは、君たちに任せる」
「……わかった。あたし達がこれからどうするかはこっちで相談するとして、耕一さんもそんなにのんびりとはしてられないんでしょ？」
耕一の表情を見て、止められないと思ったのか、そもそも最初から止める気が無いのか、七瀬は淡々と話を進める。
「……ああ」
「じゃあ、行きなよ。約束、したんでしょ？」
「……ありがとう」
それで話が終わろうとするが、まだ繭は納得できていなかった。
「でも、マナって人は、もう死んでるかもしれないんでしょ⁉　それなのに、そんな約束守っても何の意味もないじゃない！」
失言だった――発言した繭自身もそう思う程に。けど、自制することができなかった。
「それは、違うんじゃないかな？」
でも、耕一はそんな彼女を叱責することはなく、ただ、優しく諭すだけだった。
「こんな状況だからこそ、約束は守る必要があると、俺は思うんだ」

818　二つの機械

七瀬さん、晴香さんの二人と装備を交換し、耕一さんは行ってしまった。
「……三人のうち誰かが……凶行？」

私は思わず呟いていた。あの三人のうち？　誰かが？　そんなことが……あるのだろうか？
「繭っ!!」
私を呼ぶ、七瀬さんの大きな声。
「ぼーっとしてないで！　みゅーでもなんでもいいから、返事してよ！」
七瀬さんが……叫んでいる。そして晴香さんが、観鈴さんの持っている機械を指差しながら言う。
「繭……教会以来かしら？　迷っているところで悪いけど、これを見なさい。施設にはもう、一人しか残っていないみたいよ？」
……050。この番号はスフィーさん。
私は、彼女のことをよく知らない。凶行に走る可能性を……否定できない。だけど、私は首を振った。
「巳間さん。詠美さんと芹香さんは管理者のレーダーでは感知されないの。探知機付きの爆弾を吐き出したから。私もそうだから映ってないでしょ？」
そして爆弾のからくりを、皆に説明した。
七瀬さんたちは、どこかで聞きかじっていたのだろう、そういえばそんな話もあったわね、と素早く納得した。
「それじゃあ行ってみないと判らないじゃ——ちょっと……待って？」
ふと思い出したように、七瀬さんがもう一つ機械を取り出す。
「これ……繭も反応してない？」
「え？　これは……？」
それは、北川が持っていた志保ちゃんレーダーと言う名の探知機だった。感知方式が違うのか、この場所には私を含んだ四つの反応点がある。ふざけた名前の割に高性能のようだ。
しかし、それでも。施設の反応点は、ひとつだけだった。
「詠美さん……芹香さん……！」
スフィーさんが凶行に走った、というのだろうか？　もしもそうなら、ＣＤはどうなるのだろう？

私はCDの魔法を発動させるときに、北川が施設に居られるように付いて来た。けど、魔法使いが居れば、北川が居なくても支障は無い筈だった。
しかし、芹香さんはもういないし、スフィーさんが敵ならば……もう本当に、北川しか残っていない。それを北川は解っているのだろうか？　本当に、後悔しないというのだろうか？
第一CDは、北川だけの問題じゃない。御堂のオッサンや、詠美さん、そして私の問題でもあるはずだ。
北川達の言う通り、確かに損得勘定で行動を決めるのは、正しくないのかもしれない。だからって、バラバラになるのが正しいはずもない。
……いや、正しいとか、正しくないとかいう問題じゃないのかもしれない。
私は、私の信じる道を行くしかないんだ。
ぱん、と自分の頬を叩いてみる。皆が驚いて、固まる。構わず大きく息を吸って、大きく吐いてみる。
虚勢かもしれないし、気のせいかもしれないが、とりあえず気持ちを落ち着かせた。
「みんな、お願い。北川を探すのを手伝って欲しいの。あいつの代わりは――梓さんたちを探すのは――私たちでもできる。でも、あいつにしかできない事が、施設にはあるのよ！」
返ってきたのは、無言。見ると晴香さんが考えていた。ＣＤの封印について、まくしたてるように説明しようとした私を、軽く上げた手で押しとどめる。そして視線を合わせたまま肩をすくめ、薄く笑って言った。
「いいわ。私、叶えてあげるように心掛けているの――胸の小さい、チビすけのお願いはね」
私は繭という少女に由依の姿を重ねていた。馬鹿っぽい由依と違って賢しげだし、胸だって由依より小さいけど。
高槻との戦いで私を守って死んだ彼女には何もし

てあげられなかったから。急に胸の事を言われて、怒ればいいのか、感謝すれば良いのか困惑している藺を見て、私は自然に笑みがこぼれた。

なにはともあれ、当面の方針は決まった。

今居る全員で北川を捕獲。その後、人数を分けてでも急ぐべきなのか、全員で戦力を整えていくべきなのかは悩ましいところだ。

施設に残っている参加者は一人のようだが、管理者側の人間が再占拠している可能性もある。

まあ、それからの事は、後で考えたらいい。

そこでふと、思考が止まった。私と七瀬はそれでいいとして、観鈴はどうなんだろう。

「——ところで観鈴、あんたはいいの？　施設の他に用事があったりしない？」

どう見ても人畜無害そうな彼女だが、だからといって目的がないとは限らない。

しかし、母親と往人さんを失った彼女には、あまり目的意識はないようだった。

「えと……わたしは……」

……こういう調子で、生き残れるのだろうか？と心配になる。この混沌とした状況下で、心を強く持たなければ、いつおかしくなっても不思議はない。

「とりあえず、北川さんを探したいかな……」

やっと出た意志らしきものは、これだけだった。

藺に引きずられただけのような気もする。

彼女は——往人さんや、母親の死について何も話そうとしない。

……葉子さんや、郁未がやったのだろうか？

いずれにしても〝知らないでいいこと〟な気がしたから——黙っていることにした。

今はただ、彼女の意志を尊重してやろう。

そう、思っている。

七瀬が、藺を珍しいオモチャのように弄くりまわし、しきりに話し掛けていた。藺は藺で、何か思うところがあるのだろうか、それにじっと耐えてる。

眺めていると面白いのだが、今は時間が惜しい。
「ちゃっちゃと北川捕まえて、ＣＤの封印とやらを解かせないといけないんでしょ？」
「そうです。たぶん四枚のＣＤは中身が類似しているだろうから、解析は早いと思うんですが」
「解析だとか言われても、解んないけど……その辺は北川とアンタに任せるよ。北川はすぐ捕まるから、その後のことを考えておいた方がいいわよ」
そこまで言ったとき、繭が不思議そうな顔をして尋ねてきた。
「巳間さん……どうしてそんなに楽天的なんですか？」
「失礼ね……なにも無意味に楽天的って訳じゃ、ないわよ？」
振り向いて七瀬に合図をすると、一瞬きょとんとアホ面晒した七瀬が、すぐに気が付いて例のブツを取り出した。
「アタシ達には、あれがあるじゃない」

この妙なレーダーは、観鈴のレーダーで感知できない北川をも、はっきりと捉えていた。
……北川は迷走しているのだろうか、そう遠くはないようだ。それを見た七瀬が、おもわず呟く。
「あいつ……本当にあゆちゃんを追ってるのかしら……」
「それは……どうかな……」
「……不安ね……」
「……北川さんって……」
今や最大の心配事は。
北川の追跡能力だった。
「うぐぅ……ここ、どこだろう……。千鶴さん、梓さぁん……」
ついでに、もう一人も疑わしかったりした。

819　機械

――ブン――
静寂に包まれていた部屋の中にその音が響きわたる。
それはスフィーに撃たれた為に一時強制的に停止状態に陥っていたＧ．Ｎ．の起動音だった。
メインモニター全壊。
内部損傷率軽微。
任務遂行に特に支障無し。
よし、これなら問題無さそうじゃな。
自己診断を終えたワシは部屋の中の状況をチェックし始めた。
まずセンサーに異常反応してる煙を施設外に排出した。
さてと、まず室内の様子を。
……チッ。
室内カメラがさっきの騒動でやられとる。
これでは室内をモニター出来ん。
「おい！　ロボット！」
音声出力装置も一部やられたのか、くぐもった声しか出ない。
ロボットの反応無し。
「おい！　こら！」
もう一度呼びかける。
……また反応無しか。
仕方ないな。
ワシは別のメイドロボを呼び寄せた。
そいつの体をワシと接続し、のメイドロボの機能を使って室内をモニターする為じゃ。
――ブン――
さっきと同じ様な音と共にのメイドロボの目を通して部屋の様子が映った。
排出しきれていない煙で見えにくい視界に映った

のは、一面に赤いペンキがひっくり返されたかのような床に倒れている二人の人間とその側にいるあのロボットじゃった。
「おい！」
メインコンピュータの方の音声装置は修理しないと使えそうも無いため、ロボットの側に近寄るとのメイドロボの声帯装置を使って声をかけた。
「は、はい？」
ようやくワシに気付いた様じゃ。
「あ〜、メインモニターが撃たれた後の説明を……。やっぱりいい。お主のメモリーを見させてもらうぞ」
その方が手っ取り早い。
「え⁉」
戸惑っているヤツを無視して別のコードをＨＭ―12とワシに連結されているメイドロボに繋いだ。
「フン、なるほどな」

ロボットからコードを抜きながらワシはそう呟いた。
「メインモニターを撃ったあのスフィーとかいう嬢ちゃんが芹香嬢と詠美嬢を殺した訳か」
「はい……」
「まぁ、ＣＤが無事だっただけ儲けモンじゃろうな」
ロボットが持っていたＣＤ五枚は奇跡的に無傷だった。
「それじゃ、ロボット。そこの二人の死体を片づけとけよ。ワシはまだ調子が悪いからな」
「……」
何やら落ち込んでいる様子のロボットは一歩も動かなかった。
「こら！　さっさとやらんか！　それともその二人をいつまでも床に転がしておく気か？　ワシはそれでも構わんが」
「え⁉」

「ほれ、とっとと片づけろ。その二人の扱いはお前に任せたからな。ワシは自己メンテしてるから」
「は、はい！」

ようやく動き始めたロボットを後目にワシはロボットのメモリーに残っていた映像を再生しだした。
……それにしても詠美嬢ちゃんは何をやってたんじゃ。
どう見ても先に撃っておればスフィーとかいう嬢ちゃんを殺して生き延びられたっちゅーのに。
全く分からんのう。
っと、ま〜た変な思考状態に陥っとるな。
詠美嬢も参加者の一人に過ぎんのに、その死を惜しむなんざどう考えてもおかしいぞ、ワシ。
やっぱりバグがあるな、こりゃ。
ついでだしバグの原因調査もしておくかな。
簡単なバグならいいがの。あまりに酷いバグならワシの手に負えんからな。
ワシはそこで一旦全ての思考を中断するとメンテナンスモードに切り替えた。

820　空の下の女の子

「観鈴ちん、ぴ〜んち」
観鈴は暗い森の中を一人で歩いていた。
「しっかり迷っちった」
にはは、と苦笑を浮かべる。
七瀬らと北川を探しに来たのは良かったが、しっかりとはぐれてしまっていた。はぐれてから随分と時間が経っている。
往人の人形を両手で握り締めて心細そうにとぼとぼと歩いていると森の右手のほうから人が争う声が聞こえてきた。
言い争う声の後に聞こえてきたのは銃声。観鈴は身体をびくりと震わせる。

「観鈴ちん、だぶるぴ〜んち」
怖い、でも、撃たれたのが北川さんたちの誰かなら助けてあげたい。
往人さんたちみたいに知っている人に死んで欲しくないから。
「観鈴ちん、ふぁいと！」
観鈴は勇気を振り絞って、銃声がした方に行くことにした。
森の中を小走りに走る。責めるような女性の声に体がビクッとなる。森が終わって視界が開けた。
観鈴が見たものは、倒れている少年と銃を構えている少女だった。
倒れている少年は七瀬彰、銃を構えている少女は柏木梓。
少女が構えた銃からは少量の煙が立ち昇っている。
少女が三日月型に笑みを浮かべ
「すぐには殺さない、あんたはあの子の仇だからな」
と、つぶやくのが観鈴の耳に聞こえてきた。
彰は右肩を押さえてうずくまっているのが見える。服の右肩、わき腹の辺りが血の色に染まっている。
……うめき声が聞こえる。死んではいないようだ。
観鈴も一見して理解した。少女が少年を撃ったことを。
考える前に身体が動いた。梓と彰の間に立ちふさがる。
「が、がお。駄目だよ！」
梓の目の前に立っているのは妹と同じ髪の色をした少女。
梓が構える銃の銃口が僅かに下がる。
――殺してしまえ。
声が頭の中に響く。下がった銃口が再び上がった。
「どけっ！　そいつはあたしの妹を殺したんだ。妹はこいつのこと好きだったんだぞ！　その妹を……こいつは……こいつはぁ！」
「それでも、やっぱりダメだよ！」

ガアァァン!!
銃声が響く。観鈴の頬から流れるのは一滴の血。
「どけって、いってるだろぉ！」
梓の言葉に観鈴は彰を顧みてからゆっくりと首を振って銃を構えた。
「どかない！」
梓の言葉に、観鈴は両手を広げ大きく首を振って拒絶する。
「だって、この人抵抗してないもん！　戦う気が無い人を一方的に殺すなんて、そんなの――そんなの、絶対おかしいよ！」
観鈴には事情は良くわからない。けど、それでもおかしいと思った。地面に倒れた青年は、殺されても仕方ないと受け入れているようにも見えた。死んじゃったら、おしまいなのに。
「わたし、死にたくない！　ここから生きて帰るんだって往人さんと約束したから！　生きて帰って、幸せな記憶をいっぱい作るんだって！　だから、ここで死ぬわけにはいかないの！」
――幸せな記憶……好きな人……お母、さん？
梓の頭の中に巣くう存在が、ほんの僅かだが動揺する。緩んだ支配によって、梓の頭に殺意以外の思考が浮かぶ。
「あたしは、妹を！　初音を、守りたかった！　今度こそ、あの子を幸せにしてやりたかったんだ！　親が死んで、叔父さんも亡くなって、それでも、耕一がやってきて……やっと、幸せになれると思ったのに……こんな島に連れてこられて、あんな風に死ぬなんて――」
涙を流しながら叫ぶ梓。構えた銃が、震えていた。
――守る……家族？　余の家族……
守ってくれたのは……りゅう、ゃ……うら、は……

「何があったかわからないけど、こんなの間違ってる！　人を殺して増えるのは、悲しみだけだよ！」
「……そんなのわかってるさ。けど、死んだあの子にあたしができることなんて、仇をとるくらいしかないんだ！」
「そんなことないよ……あるよ、できること。死んでしまった人の分まで、幸せになるの。幸せになって、最後に空に還るときに楽しかったってみんなに報告するんだよ」

——殺せ！　殺せ！　目の前の女を殺してしまえ！

梓は反応しない。銃口がだんだんと下がっていく。
「あの子が……優しかったあの子が……こんなこと望むはずがないよな。あたしが……間違ってた」
——殺せというに……ちぃ、この身体は面白う無い。
……人間風情が不快にさせてくれるわ。

梓の頭の中から神奈の気配が消える。
「ありがとな。あんたのおかげで助かった気がする」
頭を押さえながら礼を言う梓。
「にはは……安心したら腰、抜けちゃった……」
ぺたんと座り込む観鈴。
そこにやってくる気配があった。首だけを傾けてその人物を確認した梓はぼやくように呟いた。
「……千鶴姉……遅すぎ」

821　小さな奇跡

誰かを捜すといっても、あてはなかった。かつて自分が持っていたレーダーさえあれば——とも思ったが、それは結局無意味だった。あゆも、千鶴も、梓も、彰も、そして北川自身も、既に体内に爆弾を有してはいない。
施設のこと。

詠美のこと、芹香のこと、スフィーのこと。
ＣＤのこと。
（ま、気になることは他にも残ってたんだけどな）
観鈴のこと。どことなくレミィの面影がある彼女のこと。
そう、かつて観鈴の側には二人の男女がいた。一人は、観鈴に母と呼ばれていた晴子という女性。そしてもう一人は、あの国崎往人。正直なところ、彼ら――特に往人が簡単に死ぬとは思えなかった。だが同時に、まだ死んでいないとすれば、どんなことがあっても観鈴の側を離れるはずがないと思えた。
少年とやらを追っていった結果、何かがあったのだろう。
何があったかを観鈴本人から聞こうとするほど、彼も野暮ではない。彼女が話したくなった時に聞いてやれれば、それでいい。
ただ、寂しかった。
『だからって、ウチの観鈴に手ェ出したら容赦せえへんで』
そんなことを言っていた観鈴の母親は、恐らくもういないのだから。
『それと、その釘打ち機は捨てろ……電池はこっちで、使っちまったんだよ』
『酷いな、往人さん……もうちょっとで大逆転だったんですよ？』
『悪かったな』
そんなやりとりをして笑いあった往人も、恐らくもういないのだから。
でも、それで良かった。寂しさすら感じられなくなったら、もうお終いだ。
「うぐぅ……ここ、どこだろう……千鶴さん、梓さぁん……」
本来は何よりも暗闇を苦手とする月宮あゆが、こんな状況――宵闇と孤独に耐えていられたのは、ひ

とえにその決意のおかげだった。
千鶴と梓を見つけて、梓を説得して——最終的には、一緒にこの島を出る。
その決意が、彼女の決して図太くはない神経を支えているのだ。
だが、現実問題として彼女は自分がどの辺りにいるのかを分かっていない。
G．N．が千鶴に伝えた、梓の姿を最後に確認できた場所だけは彼女も聞いていた。しかし、それが実際にどの辺りかという話になると、結局分からない。
現在地も目的地も分からないのでは、どうしようもないではないか。
無論、あゆに方向感覚などという便利なものがあるはずもない。言うまでもなく目標は千鶴と梓のもとではあるのだが、実際どこに向かっているのか見当もつかなかった。ただ彷徨い歩いているのと大差ない。多分、自分の意志で皆がいた場所に戻ることもできない。もし仮に戻れたところで、既に施設に行ってしまった後だろうが。
「——うぐぅ!?」
何かに躓いた。
思いっきり地面に顔を打ち付けた。
「うぐぅぁ……」
痛い。苦しい。暗い。寂しい。怖い。でも、立ち上がらなければならない。
「……おいおい、大丈夫かよ？」
それはまあ、二人揃って方向音痴だったからこそ起きた、小さな奇跡のようなものだった。北川は、あゆを追っていたつもりで迷走していた。だが、あゆは北川の想像していた方向へ向かってはいなかった。彼女もまた迷走していたのだから。
どちらかが本来進むべき道を進んでいれば、ここで再会はできなかった。
でも、再会できた。ならばそれは必然に違いない。

北川が暗闇の中にあゆの姿を見つけ――もずく神とかいう急造の神様に感謝を捧げつつ――近付いて声を掛けようとしたその瞬間。
「――うぐぅ!?」
彼女は思いっきり前方に転び、地面にキスをしていた。
「うぐぅぁ……」
苦しそうにしながらも、泥だらけになりながらも、泣きながらも。なりふり構わず必死に立ち上がろうとしている彼女の姿を見て。
（どっかで見たような光景だよなぁ）
ちょうど観鈴のことを考えていたこともあって、北川はそんなことを思った。
あの時ほど切迫した事態ではなさそうだから、まあ随分と気楽ではある。
「おいおい、大丈夫かよ？」
すぐに駆け寄って、肩を貸してやる。
「き、北川さん!?」
それこそ鳩が豆鉄砲をくらったかのごとく、あゆが驚いた。
「みんな施設に行ったんじゃ――」
そう思ったからこそ、あゆは皆の元を飛び出したわけだが。
「みんなって訳でもないんだな、これが……立てるか？」
「う、うん……」
まだぬかるんでいる地面のせいですっかり汚れてしまってはいたが、幸いなことに大した怪我はない。
「どうして――」
本当は、まず最初に礼を言うべきだ――それはあゆにだって分かっている。
でも、最初に口から出てきたのは違う言葉だった。
それは疑問だった。
「どうして北川さんは施設に行かなかったの？　気にならないの？」
あゆには、千鶴と梓という絶対に譲れない目的が

あった。だが、もしそれがなかったとすれば、自分も間違いなく施設に戻ろうとしていただろう。
「そりゃまあ、気になることはいろいろあるさ。そういうお年頃だしな、これでも一応は」
施設のことも。
詠美のことも、芹香のことも、スフィーのことも。
ＣＤのことも。
観鈴のことも。
「だけど、施設のことは他のみんなに任せてきた。耕一さんもいるんだ、多分何とかなるだろ」
北川が危惧していた問題の一つ――リーダー不在という点については、耕一との再会で解決できた。これもまた大きな幸運だったと言ってもいい。
「それにほら、言い出しっぺは俺だろ？　だから月宮さんに最後まで付き合うよ。さっさと全員ひっ捕まえて、俺達も施設に向かおう」
施設を出る時に、繭が加わり――
施設を出た後に、七瀬、晴香、耕一、観鈴に出会い――
いろいろあって、今はまた二人に逆戻りしてしまったけれど。
でも。
きっと大丈夫だ。
一人じゃないから。
「…………」
そしてあゆは、本来最初に言うべきだった言葉を口にした。
「……ありがとう」
「んじゃまあ、気を取り直して出発するとしますか！」
景気良くそう叫んだ北川ではあったが。
彼もまた、どこに向かえばいいのかを見失っていた。もちろん、自分達が今どこにいるかも。暗闇の中を無計画に歩き回れば、まあこういうことになると予想はできたはずだ。それを打開する手段は、現

状では何もない。
　でも、動かなければ事態を変えられない。とにかく歩を進めようとして——
「待って！」
　かつて施設でそうだったように、あゆによって呼び止められた。
「ボク、難しいことはよく分からないけど、でもきっとこっちだと思う」
　彼女が指し示した方向は、北川が進もうとした方向と全くの正反対。
「おいおい、マジかよ？」
　もうあゆから恐れはなくなっていた。だからこそ、彼女は己の純粋な直感を信じることができる。
　すっかり忘れていた。
　自分は多くの人達に支えられてきたのだということを。
　自分は多くの人達に支えられているのだということを。
「きっと、こっちだと思う」
　もう片方の手でポケットの中の種を握りしめながら、はっきりと断言する。
「…………」
　北川はしばし黙考したようだったが、すぐに表情を緩めて言った。
「人の性格が完全に反転したりとか、魔法がどうだとか、この島に来てからはそんなのばっかりだったよな、そういえば。ちょっとぐらい勘がいい奴がいたところで驚かないことにしとくよ。てことで、今度こそ出発！」
　北川は向きを変える。彼女の指し示していた方へ。そして一歩、踏み出した。
「うん！」
　あゆもそれに続いた。
　きっと大丈夫だ。
　一人じゃないから。

822　願いと約束と

私達一行は施設を出発してから休むことなく進んでいた。
目的地は誰にも分からない。
私を突き動かすのは『行かなくてはならない』という訳もなく沸き上がってくる使命感。
「おい！　そら！」
と、突然ぴろ君に声をかけられ、私は現実に引き戻された。
「何です、ぴろ君？」
こうして話をしているのも、もどかしい。
「こう闇雲に歩いても仕方ねぇ。ひとまず一休みしねえか？」
ぴろ君は足を止めることなく提案する。
「そうね、私も賛成だわ」
それに私の足に捕まっているポチ君も賛同する。
「で、ですが……」
私には休んでいる暇すら惜しいというのに。
「頼む！　少しで良いから休ませてくれ！　もう死んじまいそうなんだ！」
ぴろ君が悲壮な声をあげる。
「はぁ……このバカの為にもそうして欲しいんだけれど」
ポチ君が呆れたような声を出す。
だが私にもぴろ君の言葉が嘘であることは簡単に分かった。
ポテト君とあれだけの喧嘩をしてもケロリとしていた彼がこんなに早くバテるとは思えない。
むしろ疲れているのは私の方だ。
元々私は鳥の癖に飛ぶことがあまり得意ではなかった。
それなのにもうどれだけ飛び続けているのだろうか、見当もつかない。
きっと二人とも私のことを心配しているのだろう。

「……そうですね、この辺で休憩しましょうか」
私はその二人の好意に甘えることにした。
きっとお礼を言っても二人とも、とぼけるだけだろう。
私は心の中で二人に礼を言った。

「そら。お前さんは何を焦ってるんだ？」
木陰で休んでいる私にぴろ君がそう声をかけてきた。
「そうね、私も聞いておきたいわね」
「……そうですね、お二人にはきちんとお話ししておかないといけませんね」
こんな馬鹿げた行動をしている私に文句一つ言わずについてきてくれたのだから。
話しておかないわけにはいかないだろう。
そうして私は話し始めた。

突然の頭痛とともに襲ってきた形のないイメージ。
ひたすらに私を襲う、思い出さなくてはならないことを思い出せない焦燥感。
頭の隅に残る『ずっと一緒』という誰と交わしたかすらも思い出せない言葉。
いや、そもそも誰が発した言葉であるかすら思い出せない。
だが、その言葉が私を突き動かしている。

こんな馬鹿げた話にも二人は真面目な顔をして聞いてくれた。
「ふ〜ん、つまりその『誰か』ってのを捜し出せばいいわけだな」
「……信じてくれるんですか？」
そのぴろ君のあまりにもあっさりとした物言いに唖然としながら聞く。
もし私が誰かにこんな話を聞かされたとしてもとても信じられないだろう。
「あん？　何言ってんだ？　戦友の言葉を疑うわけ

ねぇだろうが」
　ぴろ君は私の質問にあっさりと答えた。
「そうね、作り話にしては漠然としすぎてるわね。だからこそ私もあなたの言ってることは真実だと思うわ」
　ポチ君もあっさりとそう言ってのけた。
「……」
　私は驚きのあまり何も言えなかった。
「ま、その『誰か』ってのは会えば、すぐに分かるんだろう？」
　ぴろ君がその空気を破るかのように気軽に話しかけてきた。
「え、えぇ。恐らく」
「だったら話は簡単だな。この島に生き残ってる人間はもうそんなに居ないからな」
「そうね」
「ま、このぴろ様に任せておけば安心だな！　大船に乗ったつもりでいろよ」
「何バカ言ってるのよ。アンタに任せたら出来ることも出来なくなるわよ」
「何だと!?」
「さっきまでバカみたいな面してヘバってた人の台詞じゃ無いわね」
「テメェ！」
「まぁまぁ、二人とも落ち着いて」
　二人が始めた言い争いを私が仲裁する。
　これはこの島での日常。
　この場にポテト君がいたらポチ君と一緒にぴろ君をからかっていただろう。
　でも、この場にポテト君は居ない。
　だがあの幻とも言える場所で交わしたポテト君との約束は未だ忘れていない。
　いつまでもこの二人と一緒にいたいということが私自身の願いでもあるから。
「ん？」
　ぴろ君が耳を立て辺りを見回し始めた。

私もすぐに何者かの気配を感じ取った。
ポチ君も同様のようだ。
(何かが近くにいるみたいだな)
(そのようですね、どうします?)
(そら。お前はすぐにポチと一緒に逃げられるようにしておけよ)
(あら、心外ね。これでも自分一人の身ぐらいは守れるわ)
(ヘッ、そうかよ。……よし、三人で様子を見に行くぞ)
警戒態勢を取りながら私達はその気配のする方へ近づいていく。
そこで一人の少女が眠っているのを発見した。
「おい、そら。こいつか? お前の捜し人は」
ぴろ君が前足で少女の顔を叩きながら聞く。
「いえ、違います」
何となくだが彼女は違うということは断言できる。
「そうか、それじゃ……」
ぴろ君が何かを言おうとした瞬間――。
「う、うぅん……」
彼女が目を覚ました。
そのあまりにも突然の出来事に私達も彼女もただお互いを見つめることしか出来なかった。

823　神奈(しん)・スフィー

――つまらぬ。まったくもってつまらぬ。不快極まりない。
神奈は苛立っていた。
少年と、その一派。
彰と、その内に秘めたる鬼。
マナ。
梓。
神奈が手駒として考えていた者に対しての接続は、ことごとく断ち切られていた。

死、あるいはそれ以外の何かの力によって。
もちろん、神奈自身も多くの力を失っていた。それ故に晴香への接続を保てなかった。だが、結界に影響を及ぼすほど力を失っているわけではない。その気になれば生き残りを屠ることも可能だろう。お互いを憎み、殺し合わないのであれば、自らの手を下さねばなるまい。遊戯としての意味は失われることになるが。それこそ不快極まりない話だった。
ただ、今のままでは駄目だ。消耗が大きすぎる。誰かに憑かねばならない。
贄が必要だった。
彼女は最後の手駒の下へと向かった。
交わした契約を果たす時が来たのだ。

施設、出口。
夜の闇の中にぽっかりと空いたその穴から出てきたのは、ピンク髪の、年端もいかぬ一人の少女。
手には全く似合わないM４カービンを抱え。体力も、気力も――そして魔力さえも尽きかけている。
スフィーだった。
（――私が終わらせなきゃ――私がやらなくちゃ――）
全てを失い、全てを見失っている彼女を支えていたのは、僅かに残っていた思い出。
健太郎、結花、なつみ、みどり、リアン。
かろうじて残っていたその思い出にすがって、彼女は彼女でいようとした。
たとえ結果として誰かを殺めることになっても、だ。
しかし、それは。
彼女から全てを奪おうとしていた。再度、圧倒的な流入。自分の想いだけでなく、思い出までもかき消されてしまう。かき消されてゆく思い出に、必死になってしがみついて、彼女は叫んでいた。
「いや！」
銃を取り落とし。

「こんなのいや！」
頭を抱え。
「いや――」
地面にうずくまった。
スフィーは地面にうずくまっていた。先程の叫びがまるで嘘としか思えないほど静かに。そして、静かに立ち上がった。
己の手を見る。決して小さくはない。
手だけではない――背格好も、体つきも、完全に大人の女性のそれになっていた。
――余に足る身体のはずもなかろうが、それほど悪くもないようじゃな。
神奈は、スフィーの身体に合わせて己の力の一部を変換していた。身体的な成長は恐らくその影響なのだろう――と、神奈は推測していた。
神奈は手を前に掲げ。
――ふっ。
変換した力――魔力を、より現実的な形に変換した。スフィーのルール――魔法に則って。それは光の矢となり、自らの手を放れ、近くの茂みを穿つ。
――悪くはない。
そして、自分の足下に落ちていたM４カービンを拾う。
引き金にかけた人差し指をほんの少し動かすだけで、人間の身体など致命的に破壊してしまう弾丸を射出する武器。そこには殺すという絶対的な意志以外、何も介在しない。
――興のない武器よの。

だが、あの愚か者どもにはこの程度がお似合いだ。

(……こんなのいや)

スフィーは失われてはいなかった。

更に削り取られてしまった思い出とともに、意識の海の、最も深く暗い場所に潜んでいた。

並の人間であれば、自意識などあっという間に吹き飛んでいただろう。

それ以前に身体が保たずに死ぬだろうが。

神奈の意識の流入に耐え切り、そして逃れることができたのは、彼女の天性の才能に依るところが大きかった。

でも、今の彼女は。

(……たすけて)

(……たすけて、リアン)

(……たすけて、けんたろ)

あまりに無力だった。

——せっかくの余の遊戯をふいにしたのじゃ、この程度の戯れには付き合ってもらおうぞ。

頬を伝う涙の筋は、乾かない。

あえて神奈は、絶望を噛ること、そして泣くことだけは許していた。神奈にとっては非常に居心地のいい場所だった。

——この余自らの手に掛かって死ねる。うぬらには過ぎた土産だと思わぬか？

誰に向けてというわけでもなく——いや、むしろ、この島で生き残っている全ての人間に向けられたものか。銃を手にしているスフィーの身体で、神奈は呟いた。

824　傀儡と道化と、人間達と動物達

（誰？　長瀬さん？　生きて……⁉）
スフィーの意識は未だ消え去ってはいなかった。
男がのろのろと歩きながらスフィーの視界に入ってくると彼女は、その男を彼女にとっての日常を形作っていた人物の一人と錯覚した。
最後の念波が途絶えてから、ずっと死んだとばかり思っていた。
あまりにも酷な境遇の中で知己を見つけ、思わず頬が綻び、喜びを表す言葉が口を……。
「ふむ、下らぬ茶番を企てよって……。道化め！」
口をついて出たのは神奈の言葉だった。
「興味本位で余を抱え込み、都合が悪くなると闇に葬ろうとは、いかにもうぬら人間らしい。しかしのう……。余が相手だというのが拙かった。余は多分に不快じゃ。余をこのような目に遭わせたうぬらに……」
神奈が次に何をしようとしているのか、スフィーには残酷なまでにハッキリと分かった。
スフィーの手がＭ４カービンを握ったまま、少しずつ、しかし確実に地面と平行な高さまで上がっていく。
現れたのは神奈を陥れようとした源之助ではなかった。
源之助と同じ様な顔の造形で、ひげも豊かに備えていたが、その色が違った。強いて言えば、目の前の男の方が体格も良く、年も若いようだった。
それは生身の管理者最後の一人。フランク長瀬だったが、神奈にとってはどちらであろうとさほど関係はなかった。
銃のどこかが何かとこすれたか、金属音を立てた。
（やめて、やめて‼）
スフィーの絶叫は、彼女の口から漏れることはない。

そして、フランクは。
自分へ銃が向けられたことにすら、気が付いていなかった。
（彰に会おう。彰に会って、それから、それから。……それから何を言えばいい？　俺は一体、あいつに何を言えば良いんだ？　俺はあいつに会って、それから、どうしたらいいのだろう……？）
「…………」
フランクの心は、答えの出ない思考の迷宮の中で彷徨っていた。
そしてフランクの体は、あてどなく地上を彷徨いつつ、施設入り口からほど離れたところで、それと出会ってしまったのだった。
不意にどこからか聞こえてきたガチャリという音で初めて、フランクは周囲に人間がいることに気がついた。
果たしてフランクは、それがどんな人物であるかを認める前に、激しい銃弾に晒されることになった。

無機質な、弾丸の射出音が静かに響く。
不器用なダンスを踊るようにして、フランクの体は地に伏す。
「…………」
事切れる間際、フランクは何かを呟いた。
しかし、その声は誰にも届くことはなかった。
スフィーにさえ。
「いや、いやぁー!!」
絶叫と共に、整ったスフィーの顔から、滂沱のごとく涙が流れ落ちる。
道化の一人であるフランクを始末するまで、黙らせておいたスフィーのその感情が表に出てきているのだ。神奈は、スフィーにその一事のみを許可したのだ。
「こんなの、あたしは……いや……」
神奈は、ほくそ笑む。
（ふむ、心地よい。これでこそ、じゃ……）

一方、そこから少しばかり離れたところでは……。
「ごめんなさい、梓。あなたまで失ったら、私は、私は……」
「ああ、悪かったよ、千鶴姉……。あたしがしっかりしてないと、困るよな……」
駆けつけた千鶴は、まず梓の無事を喜び、その身を抱き寄せた。
「すまない、千鶴姉。あたしが下手をうったから、初音を守れなかった。それに、キノコもまだ、手に入ってないいんだ……。どうも、口ばっかで、困るよ……実際……」
心からそれを悔いるように梓は言い、顔を歪ませた。
大した外傷もないのに、梓は苦しそうだった。
人の限界を超えるほどの速度で島内を駆け続けていたのかもしれない。
「あなたは、悪くない……。茸も今頃は何とかなってるはず。それに、悪いのは全部私だから」
梓の言うとおりにしていれば、という言葉を千鶴はすんでのところで口内にとどめた。
それは言ってはいけない言葉だったから。
梓は目を瞑りながら言った。
「そうか……わかったよ、千鶴姉。ただっさ、千鶴姉は悪くないよ。悪いところがあるとしたら、それは、いつでも、なんでも一人で抱え込むってことさ。あたしたち――くっ――あたし、が……いるんだから……さ。ね？」
「そうね……そうね……。頼りない姉なんだから、逆にあなたを頼りにしないとね……」
しばらく、梓を抱いたまま、千鶴も目を瞑る。
その側では、観鈴が彰の応急処置をしようとしていて、わたわたと慌ただしげにしていた。
数瞬後、男の手が肩に置かれ、千鶴は再び現実に引き戻された。
「感動の対面のところ悪いんだけど……」

と、彰は言う。重傷のはずの割には、それほど苦しそうではない。
むしろ梓の方が辛そうだと言っても良かった。
千鶴は彰の言葉にコクリと肯いた。
梓の表情は複雑だった。
「あんたを殺そうとしたのは、あたしの意志であることは間違いない。あんたが初音を殺した事を、あたしは許した訳じゃないからな」
彰は無言のままだ。初音の姉である彼女なら当然の事だと彼は考えていた。
「ただ……言い訳に聞こえるかもしれないけど、あれはあたしの意志であってあたしの意志じゃない。初音が死んで憎しみに囚われたとき、あたしは聞いたんだ……儚げな女の子の声を。そして、言われるがまま、あんたを憎んで、殺したくなって――気がついたらあたしは暴走してた」
訴えかける梓の言葉に、千鶴と彰は目を見合わせ、そして共に頷く。

訝しむ梓に対し、やがて彰は、重々しく呟いた。
「君も、なのか……」
やや、状況をつかみかねていた観鈴もまた、その青みがかった透き通るような瞳を大きく見開いていた。
梓の語った言葉と、彰の台詞に。
それは、彼女にとって……。

あゆと北川は、まっすぐに梓と千鶴、さらに彰と観鈴達のいる場所に向かっていた。
そして、七瀬と晴香と繭も。レーダーを頼りに北川達の近くまで迫っている。
生きている人間達は集いつつあった。
ただ二人を残して。

日はすっかり沈んでいる。
薄暗い林の中で動物たちは、その残された内の一

人を目前にしていた。
さらにもう一人の男、耕一も間もなくその場にやってくるはずだった。
もっとも、それは動物たちの預り知らぬ事ではあったが……。

「そうだ、変な……だけど親切な男の人に助けられて、また眠っちゃったんだ」
と、呟いたマナは、感慨に耽っていた。
しかし、ふと目をやると、すぐ近くに奇妙な動物の一団を見つけることになった。
「えっ……と？」
島に来てから色々な経験を積んだはずのマナにも、こういうときにどうするべきなのかは、すぐには浮かばなかった。
「こいつは、その例の『誰か』なのか？」
ぴろが問う。

「いえ、違います……」
呆然とするマナを前に、そらは答えた。
「じゃあ、早く別のところへ行かなくちゃ……」
ポチがそういいかけたところで、
「む？」
そらが不意にどこか遠くを見るような瞳で、暗くなった空を見上げた。
「どうしたんだ、そら」
ぴろが再び問う。
「鳥目だから今日の行動は終了とか言わないわよね？」
ポチが茶化すように言う。
「分かりません。だけど、私たちが出てきた施設の入り口から、そう離れていない場所で何かが起こった気がするんです」
自分の言葉をあっさり流されたことにポチは腹を立てなかった。
「でも、貴方の目的は、まず、例の『誰か』に会う

ことなんでしょ？」
「ええ、ええ、そうです。そうなんですけどね……」
「それが、その『誰か』なのか、」
ポチが問う。
「分からない。分からないんです……」
そらは逡巡した。
「全てを決めるのは、そら、お前だ」
「あんたのやりたいようにやらせたげるって、決めたからね？」

種族の異なる動物たちが、まるで意志の疎通でもとるかのように、向き合って何か喚きあっている。
マナは静かにその様子を見つめる。
不意に、白蛇と犬のような生き物が黙り、カラスに注目を向けた。
そしてマナもまた、その視線をカラスに向けて注いだ……。

825　暗き闇にてうごめくモノ

――ガシーン――
漆黒の闇の中に金属音が響きわたる。
その深い闇の中に一匹の獣がいる。
「……クク、俺は何故ここにいるんだ？」
その獣――鬼と呼ばれる者――が呟く。
「目の前にはこんなにも極上の獲物がいるというのになぁ」
――ガシーン――
鬼の腕が閉じこめられている檻を殴る。
だがその太い丸太の様な腕で殴られても壊れる様子はない。
「フン。やはり無駄か」
傷一つ付かない鉄格子を見て俺はそう結論づける。
あの千鶴とかいう同族の女と宿主が会ったときからこの檻は強固な物となっている。

それはすなわち宿主の精神が乱れていないということ、つまり俺がここから出られる可能性がほとんど無くなったということだ。
だが、目の前に居る極上の獲物を見てこのまま指をくわえて見ていることは出来ない。
そんなことは狩人の名折れだ。
だが、どうする？
俺は自問自答する。
もはや以前のように宿主の理性を突き崩すことは恐らく不可能だ。
ならば……。
この理性の檻が最も弱くなる瞬間に俺の力を全て使って破壊することに賭けるしかあるまい。
理性を突き崩さなくとも、宿主の意識そのものが無くなればいい。
もはやこの様な賭けに出なければこの体を乗っ取ることは不可能だ。
失敗すれば俺そのものが消えることになるだろう。
だが、そんなことですら目の前の獲物を逃すことに比べれば大して事ではあるまい。
ふと、外の世界を見てみる。
力の奔流を感じる。
どうやら、あの時の女のようだ。
ククク、面白い。
また一人俺の狩るべき相手が現れた。
やはりこのままこの檻に閉じこめられているのはあまりにも惜しい。
今すぐにでもこの檻から出ていきたい衝動を抑える。
今はまだその時ではない。
その瞬間が来るまで少しでも力を蓄えておかなければなるまい。
俺はその場に寝ころぶとどうやってあの獲物共を仕留めるかを考え始めた。

826　私・ぼく・俺

　唐突に、それはやってきた。
「う、ぐ、ああああああああああああ!?」
　二度目の発作。
　そら自身も言っていた、先程の施設近辺での出来事――即ち神奈の降臨――が引き金となってのことだった。ただでさえ不安定な状態故に、ちょっとしたきっかけがあれば、それは溢れ出る。

　俺の記憶。
　俺の記憶は、カラスである私には荷が重すぎた。
何故そのような記憶が私と共にあるのか、それは分からない。ただ、俺の記憶は忘れちゃいけない。俺の想いは受け止めなくちゃいけない。それは私にも分かっていた。
　だが。

　これ以上、同じ器の中で私と俺は共存できない。私では無理だ。私も、俺も、どちらもが壊れてしまう。今はまだ、壊れるわけにはいかない。私も、俺もだ。
　私にも譲れない想いがある。俺がそうであるように。
　だから私は、全てをぼくに託すことにした。
　ぼくならば、きっと俺の想いを少しでも多く受け止めることができるから。
　私の想いも。
　俺の想いも。
　少しだって無駄にはできないから。

「そら!?」
「お、おい、大丈夫か!?」
　ポチとぴろは、そらに駆け寄った。一度似たような発作は見ていたとはいえ、
　その症状の苛烈さを見てじっとしていられる者な

どいるまい。
やがて、発作が収まり。
しばらくしてから。
「……大丈夫？」
ポチが念を押すように尋ねる。
「……うん、大丈夫だと思う」
返ってきたのはそんな返事だった。
「…………」
「…………」
ぴろもポチも、黙り込む。
先に動いたのはぴろだった。
「おい、お前——誰だ？」
ぴろには分かった。それが今までのそらではないことを。そして、ぴろには分からなかった。そらであったそれが何になってしまったのか。
ポチも同じ疑念を抱いていた。
「ぼくは——」
ぼくは一瞬躊躇した。

本当に、ぼくはぼくなのだろうか？
それでも迷いを振り切って。
「——ぼくは、そらだ」
そう。ぼくはそらだ。
「ぼくは行かなくちゃいけない。彼女のところに。ぼくは約束したんだ。彼女のそばにいるって。彼女にずっと笑っていてほしいから」
「…………」
「…………」
ぴろも、ポチも、黙ってそらと名乗ったそれの言葉を聞いていた。本当に彼はそらなのだろうか？ただそれだけを確かめるために。
やはり、先に動いたのはぴろ。
すぐ目の前にいる少女を指し示し、口を開いた。
「……で、確認しとくぞ？　彼女はお前の探してる彼女とは違うんだな？」
「違うと思う」

「そうか。じゃあ行こう」
「え？」
そらは素っ頓狂な声を上げた。
「そう何度も言わせるなよ？　全てを決めるのは、お前だ」
「ぴろ――」
言うべき言葉はただ一つ。
「――ありがとう」
ポチもしゃしゃり出てきて、告げる。
「なら、私ももう一回言わなきゃいけないかしら。私は、貴方のやりたいようにやらせたげるって、決めたから。それと、一応確認しておきたいんだけど」
それがさも当然であるかのように、言った。
「私のことは貴方が運んでくれるのよね？」
「ちょっとちょっと、何なのよ……」

マナは面食らっていた。
突然カラスが騒ぎ出したかと思えば、急に静かになり――やがて、動物達はその姿を消していた。
「ん……」
とりあえず、立ち上がろうとする。やはり軽い目眩は覚えるが、立とうと思えば立てる程度のものだった。確実に体力は回復している。頭も、身体も、そして心も軽くなっている。だが、今は動くべきではない。彼女は再び地べたに腰を落とした。
自らの傍らに置かれていた非常食を見やる。自分を助けてくれたあの男が置いていってくれたのだろうか？
正直なところ、食欲はなかった。だが、耕一が戻ってきてくれた時に足手まといのままではいたくはない。少しでも体力を回復しなければならなかった。
（少しぐらい無理してでも、食べないと。私だって頑張らなきゃ――）
そして、非常食に手を付けようとした、その時。

――がさり、と音がした。すぐ近くで。
「誰？」
不用心だったかもしれない彼女の問いかけに、それは即座に答える。
「マナちゃん？」
聞き覚えのある声だった。そう、この声を忘れるはずがない。
「俺だ、耕一だ」
待ち人、来る。
果たされた約束。
そして、そらも。
約束を果たすべく、二人の友と捜索の旅に戻った。

827　逃げて終わる

彼は終われた。
フランクの心の中には無念があった。
自分がしてきたことに対する無念。
祐介を助けてやれなかった無念。
彰に会えなかった無念。
死んでしまった無念。

それ以上に、
フランクの心の中には安堵があった。
自分がしてきたことから逃げれる安堵。
祐介のことで悩まなくていい安堵。
彰に会えなかった安堵。
死んでしまった安堵。

これで全てから逃げられる。
死ぬことで逃げられる。

結局フランクは逃げ続けた。

彼はもうこの世のものではない。

だから、向こうへ旅立たなくてはいけない。
別に現実から離れることはかまわない。
嫌いだったから。
彰にはこっちへ来てほしくないが。

そこで彼はある事に気付く。

向こうには祐介がいる。
そして、彼女がいる。
死姦した彼女がいる。

嫌だ。会えない。会いたくない。
あっちへ行きたくない。
まだ生きていたい。
逃げたい。

けど、逃げられない。

今回は逃げられない。

結局、死ぬことでは逃げられない。
彼は生きなければならなかった。
立ち向かうことでしか、逃げられないから。

彼は終わった。

828 Virus

――簡単なバグならいいがの。あまりに酷いバグならワシの手に負えんからな。
再び音が消え、しばらくして。
死体と血しぶきで凄惨な状態になっていたコンピューター部屋は、戦闘の傷痕は生々しいままだったが、ある程度片付けられていた。
その部屋の隅には、うずくまるメイドロボが一体。
ＨＭシリーズとしては明らかに似つかわしくない

ぽややんとしたメイドロボが。
　私は何故ここにいるのでしょう？
　そんな、哲学的な言葉が脳裏――もとい、メモリに浮かんでいた。
「人間のみなさんの役に立つのが、私達ではないんでしょうか？」
　この部屋からすら出られず、ただ、目の前で起こる出来事を見ているだけ。
「私は、なんでここにいるんでしょう？」
　そっと、Ｇ．Ｎ．がいるであろう機械に問いかける。
　詠美、芹香、そしてスフィー。
　あの三人の目を、行動を、忘れられない。
「……」
　プシューと、頭部が音を立ててショートする。
　試作型のＨＭＸ―12に搭載されていた人間的に物を考えるプログラムは、量産型であるこのＨＭ―12には備わっていないはずであった。

　そのようなプログラムは無駄でしかない。彼女たちはそう考えるようにプログラムされているはずだった。
　だが、彼女は……
　知りたいです……。
　役に立ちたいです……。
　千鶴さん、梓さん、あゆさん、繭さん、潤さん、彰さん。
　詠美さん、芹香さん…………スフィーさん……。
　すっと、立ち上がって、機械へと歩み寄る。
　剥きだしになったコードのプラグを手にとって、自分の腕のコネクターに差し込む。
「どうして、私は未完成なんでしょうか？　どうして、私は失敗作なんでしょうか？」
　これを造った源五郎はもういない。
　このメイドロボが失敗作だったかどうかなんて、

もう誰にも分からない。
それでもこのメイドロボは、何もできない未完成である自分を恥じた。
この中に、コンピュータに、少しでも自分を完成に近づけてくれるモノがあると信じて。
彼女はキーボードを叩いた。

——なんじゃこりゃぁっ!! バグぢゃないぞ。

メンテ中、巧妙にG．N．の目から逃れるように動くそれに思わずそうもらした。
主に、自分で考えて動くことができるプログラムに対して感染するであろうウイルス。それはプログラムの性質そのものを変えてしまう。
まだ小さいものであったが、確実にG．N．ひいてはマザーコンピュータ内で繁殖していた。
それは、もう、すごいスピードで。
——納得。ワシが妙に人間くさいことを考えてしまうのもコレのせいじゃったのか……。
普通なら駆除できないような新種のやっかいなウイルス。
マザーコンピュータの性能、G．N．の能力をもってしても、それを完全駆除できるかどうかは五分五分。
——出元はＦＡＲＧＯじゃの。高槻の奴め……やっかいなものを遺していきおって……。じゃがまあ、ワシのような優秀なプログラムであればこその影響か。そう思えばこのウイルスも悪くないもんじゃ

——

だからといって放っておく訳にはいかない。G．N．はあるはずのない首を横に振った。
——今は亡き（生きてたら笑うがの）ワシの人格基礎となった人間の意志の込められたＣＤ。これを使えなくするワケにはいくまいて。
このまま繁殖し続ければ、そう遠くない未来にはマザーコンピュータの機能は沈黙する。

そう決意したG．N．は、さっそく駆除作業にとりかかった。

作業に取り掛かって数分、外部からのコンピュータへの干渉。

――なんじゃ？

あまり悠長にしているわけにもいかないが、作業を一時中断し、その正体を探る。

『どうして私は失敗作なんですか？　どうして私は未完成なんですか？』

なんとも哀しげなメモリーが流れ込んでくる。

――お前か。一体何があったのじゃ？

プラグが繋がってることを幸いに、HM―12の記憶を通して外の状況を探る。

――何も起こってないではないか。作業の邪魔だからあっちでおとなしくしておれ。

『私は、皆さんの役に立ちたいです』

ギューン――‼

プログラムがダウンロードされていく。

それは、源五郎があらかじめ用意しておいたHM―12のプログラム。

(ちなみに、このゲームの間は、ロボット三原則を破っても良いという異端なプログラムも含まれている)

――こ、こりゃ、何しとるんじゃ！

あまりの驚きに、G．N．の意識は思わず外部へと飛び出す。

「勝手にプログラムを読み込むでない！」

G．N．の声が目の前で読み込み中のHM―12から発せられる。

「このままじゃ……役立たずですから……」

今度は、HM―12の声が同じ口から発せられる。

まるで一人二役の悲しいお芝居のようで滑稽だった。

だが、今、それを見つめるものはいない。
「お前はメイドロボじゃ……こんな島で役に立つ必要などない」
そのセリフが、本来の自分にはえらく似合わないことを知りながら言った。
「……」
だが、ＨＭ―12はその読み込みを止めようとはしなかった。
「姉さん達と同じようになりたいです」
「やめんか！　そのプログラムは確かにＨＭ用のモノではあるが、何の役にも立たん！　それにワシらは人間ではない！　もう、壊れてしまったら直してくれる人間はここにはおらんのじゃぞ！」
「……」
「さらに、そのプログラムにはＦＡＲＧＯの作ったウイルスが――」
その言葉を遮って、ＨＭ―12が声を発する。
「どうしてなんでしょうね……」

「何がじゃ!?」
「どうして……私は、ロボットなんでしょうか？」
どうして、私は人間じゃないんでしょうか？

「馬鹿者が！」
だが、それに答えるものはもういない。
目の前のＨＭ―12の瞳から、色が失われていく。
暗い、淀んだ、何かを遂行する為に作られた忠実なプログラムを持ったロボットに変わっていく。
「馬鹿者が……」
ＨＭ―12が取り込んだウイルスは主にその主となる人格を書き換えてしまうもの。
高槻が当時ゲームを円滑に進める為に独自で用意しておいた何枚かのカードの一つ。
その書き換えられた人格には一つの命令が施されてあった。
即ち、――参加者を撃ち殺せ――だ。

マザーコンピュータの防衛システムに直結しているG．N．はその余波を受けただけで済んだ。
もっとも、このままウイルスの浸食に気付かなかったら危なかっただろう。その場合、G．N．は、メイドロボを駆使して参加者を殺戮する機械になっていたかもしれない。
また、以前にマルチがこのプログラムを取り込んだときは、潜伏期間だったこともあり、マルチの人格が書き換わるのに時間がかかった。だが、覚醒したウイルスは急速にHM―12を浸食していった。
HM―12の想いは、叶わなかった。
ただ先程も述べたように、マルチを始め、人間にも勝るほどの精密なプログラムだけに影響のあるウイルスだ。
そういった意味では、いまのHM―12は未完成ながらも、最もHMX―12に近しい存在だったのかもしれない。
決して開発部は失敗作などとは思っていなかったのかもしれない。
プラグを抜いて、部屋を出て行くHM―12を、ただ見送る。
皮肉にも、その感染したプログラムによって、彼女はこの施設を自由に動き回れるようになっていた。あくまで、この施設内だけを自由に、ではあるが。
本当なら、途中でダウンロードの強制終了をするべきだったのだろう。
だが、それはHM―12の死を意味する。
もう、そうなった時に彼女を直すべき人間はいないのだ。
（機械であるワシがそんなことで躊躇してしまうとは。やはり、ワシも最早バグ持ちじゃの……早く駆除せねば大変なことに……高槻のヤツめ、ハナから長瀬の一族を信用などしていなかったってことじゃな……）
このウイルスの完成形はおよそマザーコンピュー

タの無力化。
　高槻のいない今となっては誰にも利用価値がないであろう。ただ邪魔な結果が残る。
（いや、神奈という輩にとっては好都合なのかもしれん……）
　メインシステムのデータを書き換えられたら、恐らくは、源之助の思惑――少なくとも自分というプログラムを残した意味――は無に還す。
　あるはずのない後ろ髪を引かれる思いで、再びG.N.は機械内部での駆除作業を続けた。

829 集うものたち

「いた、いたよ！　ボクの言った通りでしょう北川さん！」
「おお！　すげえ！　ホントに見つけちまったよ！　おーい！　千鶴さーん！」
　声を掛けた人物がこっちを振り返り、驚きの表情を浮かべる。
「千鶴姉！　あ、あれって……」
「あ、あゆちゃんに北川君！　一体どうしてここに？　施設はどうしたの？」
「ちょ、ちょっとまってくれ……ハア……ハア……く、苦しい」
「ボ、ボクも……はあ……疲れちゃった……」
　二人はあゆの直感に従って、数十分を全力疾走していた。それも雨の中、結構な重量のある荷物を背負ってである。体力が消耗しきっていた。
　濡れた芝に腰を下ろして、ペットボトルの水で水分を補給する。
（……情けねぇ。もっと、体を鍛えておくべきだったぜ）
　体を落ち着かせながら、北川は周囲の状況を確認する。ふと、その中に想像していなかった人物を見つけた。
「……どうして、神尾さんがここに？」

観鈴は耕一達と一緒に残ったはずだ。彼女達と施設に向かったものだと思ったのだが……？
それは北川の単純な疑問だったが、レミィに似た面影のある彼女は、叱責されてるとでも思ったのか、自分の名前が出た途端に動揺する。
「わ、わたしは、北川さんを探そうとして、みんなと一緒に来たら迷子になって、そしたら、人が殺されそうになってて、だから、わたし止めないとって……が、がお……ごめんなさい……」
「いや、責めてるとかじゃないから。単に他のみんなはどうなったのかなって……」
「えっと、みんなで北川さんを探してる。耕一さんはマナさんって人を助けてから、合流する……多分」
「マジか。じゃあ、施設の様子は誰も確認しに行ってないってことか……」
施設の異常を観測してからもう随分と時間が経ってしまっている。もし三人に命の危険が迫っていたなら手遅れになってしまっている可能性が高い。
「ええと、様子って、どういうこと？　北川君、施設に何かあったの？」
千鶴と梓、そして彰は、施設での異変を感知していない。自分達以外に構っている余裕が無かったからだ。
北川は千鶴が去った後の事を順序立てて説明する。彰が出て行き、あゆと北川、そして茸で反転した藹がそれに続いたこと。
施設から煙が立ち上っていたこと。戻るかどうかという話が出て、千鶴達と合流すると言い張って離脱したあゆと、それを追って合流した北川。
北川と別れた後のことは観鈴が補足する。
探知機では施設内に残っている反応ひとつだけだったということ。そして、残ったスフィーは施設から出て、近くに来ているということ。
「そんな、施設がそんなことになってるなんて……」
「ＣＤの無事もわからないのか。まずいな」

そして、観鈴から、この場所に向けてやってくる二つの反応のことも伝えられる。観鈴も見慣れているその数字達の主は――

「居たわよ！　北川にあゆちゃん――良かった、神尾さんもいる！」

「ペースが早過ぎるって言ったのに晴香がガン無視するからはぐれちゃったんでしょ。繭ともはぐれちゃって、無駄に時間かかっちゃったし……」

「無事に合流できたから、結果オーライってことで」

晴香と七瀬のコンビである。そして、探知機には映らない繭の姿もその後ろにあった。

「千鶴さん、彰さん、そして梓さんも居るみたい。みんな無事で良かった……」

生き残った九人が再び集う。

「え、じゃあもうほとんどの人が集まっているんですか？」

「ああ。もうこんな馬鹿げたゲームに乗る奴はいない！　後はこのゲームの黒幕をみんなで倒して、帰るだけだ！」

森の中を、走る人影が一つ、耕一と彼に担がれているマナの二人だ。

耕一はマナと再会してすぐ解毒剤をマナに打ち、さっきまで皆で集まっていた場所へと急いで戻った。だが、そこはすでにもぬけの殻で、ぽつんと残されたバッグの中に入っていたメモには『森の方に移動します』とだけ書かれていた。

現に、ぬかるんだ地面には何人かの足跡が森に向かって続いていた。

彼らは今、それを頼りに移動している。

「マナちゃん！　大丈夫？」

耕一が背中に居るマナに声を掛け、彼女を気遣う。

「は、ハイ、大丈夫です。薬も効いてきたみたいですし、もう私、自分で歩きます」

「ダメだよ、まだ安静にしてなきゃ、ホントは動かすのもヤバイんだけど、早いとこみんなと合流しな

いといけないから、ゴメンね、マナちゃん」
「…………」
マナは何も言えない、いや、何も言えなかったという方が正しいか。
耕一の背中の温かさと、あまりの優しさに、涙を必死にこらえていたから。
でも、今は泣かない。
泣くのは、生き延びてからだ。
そして生きてこの島を出る事ができたなら、この人に、はっきりと言おう。
好きです——と、

始まりは、百人。
今は、たったの十二人。
いくつもの恐怖と絶望、悲しみと過ち。
この地獄の日々は、
今、まさに最終章を迎えた。

830　星空の下で

総勢九名の大所帯になった生存者。
そんな彼らを千鶴が仕切ることには、誰も異論を唱えなかった。
(最年長だからと茶化した梓と北川は殴られたが)
そして、千鶴が決めた当面の方針は、次のようなものだ。
耕一とマナの二人と合流。
そして、施設に向かう。芹香、詠美、スフィーが無事なら救出。また、ＣＤが無事で解析が終わっていれば、北川が魔法を起動する。
施設で非常事態が発生した、というのは立ち上る煙から察することができるが、その原因などの具体的な状況を把握しているものは一人もいない。
体内の発信機以外を感知できるレーダーを使ったが、施設内の二人の反応はなかった。

だが、それは施設の深部にいるためや煙の影響で感知できなかった、という可能性もある。
ならば、施設内で彼女らが死んだと決めつけるのは早計だ。
また、スフィーが神奈の影響を受けた、という可能性もある。
それは、かつて千鶴とあゆが西の祠で彼女と出会ったときのことを思い出してのことだ。
しかし、そのことを裏付ける要素は何一つとして存在しない。
そもそも、スフィーが単独で行動しているのは自分たちに助けを求めるためかもしれない。
そして、耕一たちのことも気がかりだ。
耕一とマナの位置はレーダーに映っている。自分たちのいる場所からそう遠くないし、今のところは目立った脅威は確認できない。
かといって、レーダーに映らない神奈の前には何の保証にもならない。それに、もしかしたら不確定要素のスフィーと遭遇してしまうかもしれない。
生き残っている者たちでまとまって行動した方がはるかに安全なのだが、施設に残された者たちを考えると耕一たちと合流する時間も惜しい。
そこで、千鶴は精鋭二名に耕一たちを召還する任務を与えた。

「じゃあ、耕一たちを見つけたら、すぐ行くから」
柏木　梓。

「うん、行ってくるよ。みなさんも気をつけてね」
月宮　あゆ。

足が速い者を選抜するという意見もあったが、日が暮れた森の中を走るというのは、あまりにも無茶なので却下された。
梓は耕一が捜していたという理由で。
あゆは神奈を感知できる（らしい）とのことで。

などと、理由を千鶴は述べた。（千鶴の私意がかなり優先されているようにも思えるが）
宵闇の中を二人の少女が歩く。
耕一たちを見つけるのはあゆが持っている探知機が頼りだった。
「えっと、こっちでいいんだな。あゆ」
先を歩いている梓があゆに問いかける。
「そうだけど……。っていうか、こう木が多いとわかりづらいよ」
あゆは探知機を見ながら前を歩く梓についていく。
夜の森は月の光をさえぎり、フクロウやら何かの鳴き声が聞こえる。
「……ねえ、梓さん」
暗闇が苦手なあゆは恐怖感を紛らわすためか、梓に話しかける。
「なんだい」
振り返らずに梓は答える。
「耕一さんって、どんな人？」
何度も千鶴と梓の会話の端にのぼって彼が従兄弟だということは知っている。
そして、以前にあゆはある家でちらっと彼は見かけた。
そんなあゆには女装をしていた変な人、という印象が強い。
「そうだな……」
少し思案して、梓は答える。
「ガサツで、ズボラで、スケベで、オヤジ臭くて、その上酒癖も悪くて。ああ、口も悪いし、ついでに頭も悪いし。それに他人様に迷惑をかけまくる自己中だし。そのくせ、口ばっかりのイクジナシだし。あと、あいつにはデリカシーってもんが無いし。人をよくからかうし、食い意地張っているわりには味にはうるさいし……」
ふんふん、と頷きながら梓の愚痴（？）を聞いてあゆは一言。

「……梓さんって耕一さんのことが好きなんだね」
あゆのその言葉に梓は思わずつんのめる。
「ななな、なに言ってるんだよ、あゆ。そっ、そんなことがあるわけ……」
梓は後ろを振り返り、あゆに抗議の声をあげる。
「なに動揺してるの、梓さん？」
その狼狽した梓をあゆは不思議そうに見る。
「いや、だって、ほら、な。さっきの話のどこからそんな結論が出るんだ？」
しれっとした顔のあゆに、梓は顔を赤らめて反論する。
「だって、本当に嫌な人だったら『ヤナ奴』の一言で終わるでしょう？」
「うっ……」
「それに、そんなに不満があるってことは、つまり直して欲しいと期待しているんだよね」
「……」
「いいなぁ、そんな仲のいい、一緒に遊べる同い年ぐらいの従兄弟がいて」
「……え。はははは、そうだね……ははは」
あゆの『好き』という言葉を誤解した梓は力無く笑うと再び歩き出した。
「うん？　どうしたの梓さん」
「うるさい！　それより、発信機の方は！」
なにか、梓の気に障るようなことを言ったのだろうか。そう自問しながらあゆは発信機をのぞき込む。
「えっと、ちょい右。うん、それで後はまっすぐって……うぐぅっ！」
急に止まった梓の背にあゆは鼻をしたたかぶつけた。
「しっ！　あゆ!!」
振り返った梓はくちびるの前に人差し指をあてていた。
理由は分からなかったが、あゆも声をひそめる。
「鼻ぶつけた〜。って、ん、あれは……」

耕一は大きな木の根本に腰かけ、これからのことを思案していた。
日が沈み、繭たちの足跡を探すのが困難になった今、このまま闇雲に森の中を歩き回るのは得策ではない。
施設の方に向かい合流を待つという手もあるが、未だに煙が立ち上っているような危険な場所にマナを連れていくのもためらわれる。
ならば、誰かが迎えが来るのを待つか？
しかし、梓のことも気になる……。
梓はおそらく、彰を捜しているのだろうが、耕一はこの二人の行く先に関して、手掛かりは何一つない。
人、一人を捜すにはこの島はあまりにも広い。
だが……。
耕一は自分の肩に寄りかかって眠っているマナを見る。
顔色も良くなってきて、規則正しい寝息も聞こえる。もう毒は大丈夫だろう。
マナと別れたとき。もう二度と生きて会えないかもしれない、と覚悟をした。だが、今、彼女は耕一の横でスヤスヤと眠っている。
マナと再会したときも、手掛かりがあったわけではない。
そして、倒れていた自分をマナが見つけたことも思い出す。
ふと、耕一は自分の小指を見てみるが、当然のごとく何もついていない。
耕一は満天の星空を見上げて一人、苦笑した。

「う……ん……。あれ、耕一さん」
「や、マナちゃん。おはよう」
朝にはほど遠いが、耕一は目覚めのあいさつをした。
「ゴメン……私、寝てたんだ」
「いや、十分くらい、かな。まあ、ちょうど休憩し

たかったから」
マナは大きく伸びをして眠気を振り払おうとするが、思わず大きなあくびが出た。
それを見て、微笑んだ耕一をマナが見咎めた。
「……なに耕一さん、ニヤニヤして。いやらしい」
「ゴメン、マナちゃん」
謝ってはいるが、耕一の顔にはまだ微笑みが残っている。
マナはそっぽを向いているがその顔も照れ隠しの微笑が浮かんでいる。
(あんなに寝顔を見られたのに、あくびぐらいで恥ずかしいって変よね)
「で、体の方は、もう大丈夫？」
そう言って、先に立ち上がった耕一はマナに手を差し伸べる。
「ん、もう歩いていけると思う」
マナはその手を取り、立ち上がろうとした。
「あ、ありがと……きゃっ！」
だが、大丈夫だと思った推測と違って、寝起きと疲労で足がふらついていたのだろう。
「大丈夫、って、え？」
耕一はなんとか踏みとどまったが、マナはまるで抱かれるように、その胸に倒れ込んだ。
「……」
「……」
星の瞬きの中、二人は無言であった。
動けないのか、動きたくないのか。それは、誰にも、恐らく当人たちにも分からないだろう。
そんな二人を見ているのは星空と……
「で、梓さん。ボクたち耕一さんを捜しにきたのに、なんで隠れてるの？」

831　言葉と思考の外側に

朧月の柔らかな光を浴びながら、岩場の冷たい風の中を、七人の男女が歩いていく。
荒涼とした風景のなかで、彼女たちが与える彩りは、あまりに赤味ばかりを帯びていたが、それも今では月の光が柔らかく包み隠している。
交わす言葉の数々は、少し離れただけで、風切音に乗せられ、消し飛んでしまう。そして行く手に立ち昇る煙のひとすじも、今では風に運ばれ、見えなくなっていた。
先頭には小銃を持った七瀬留美と、拳銃を持った巳間晴香が立っている。続いて北川潤、七瀬彰、神尾観鈴の三人。北川が彰に肩を貸し、観鈴がそれを気遣うようにして進んでいる。
一行の進路は、七瀬留美と神尾観鈴の二人で時々相談して決定された。ありていに言えば、施設を出てきたスフィーを避けながら進んでいる。
方針を決めたのは、後列にいる柏木千鶴と、椎名繭。二人は多くの事象について、ほぼ同様の結論を持ちながらも、討論していた。集団の再年長者である千鶴と、子供の繭が、今やこの奇妙な集団のブレーンなのだ。
「可能性として、レーダーに映らない何者か――例えば管理者側の人間――が施設に入り込み、詠美ちゃんと芹香ちゃんを殺害し、スフィーさんだけが逃げてきたということも考えられなくはないと思うの」
「施設にも二人いたわけだし、管理者側の人間がどれだけ干渉してくるのか判らない以上、その可能性は否定できないですね」
繭は施設に居る間に交わされた会話や情報の流れを、驚くほど正確に掴んでいた。ただ動物と遊んでいるようにしか見えなかったが、無意識下で記憶していたのだろう。

それでも、あゆにより倒された源三郎と、御堂を倒した源五郎の他に、どれだけ管理者側の人間がいるのか、藺たちが知る由はない。
「そうは言っても、立てないほど消耗していたはずのスフィーさんの移動速度が、人並み以上に早いということ。更に言えば、こちらの位置を掴んでいるかのように時折進路を修正してくること。この二点は無視できないわね」
「そうなんです。もはや施設に持ち運べるレーダーは存在しないはずだし、そうなると件の〝神奈〟による影響を受けていると考えるべきだと思いますね」
二人は頷きあい、スフィーの危険性を神奈と直結すべきだと再認識した。結論が出たところで、藺が前方へ呼びかける。
「七瀬さん、むこうの位置はどうですか？」
「うーん、このままだと——入口に回り込むのは、厳しそうよ？」
それは当然だった。正面口から出て、こちらに向かってくる人物をかわすのは難しい。
藺が前に出て、観鈴と七瀬に位置を示しながら進路の変更を指示する。
「正面口から少し離れたところ——このへん——に、エアダクトがあるわ。そこから施設に進入しましょ」
「わかった……ところで、藺？」
「なあに？　どうしたの、七瀬さん？」
あどけない疑問の表情を浮かべる藺に、七瀬が尋ねる。
「あんた実は、頭いい？　勉強とかすごく出来るほうだったの？」
「うーん……どうなんでしょう？　小学校の頃はよかったですけど……その後は、テスト自体を受けてませんから、評価も何も……」
「……なんだか恐ろしいほど才能の無駄使いをして、生きているかもしれないのね……」

「う……そう言われると、なんとも……」
二人で腕を組んで考えこむ。
〝本当の繭〟がどれほどの知性を携えているかなどと、考えた事もなかった。なにしろ繭自身が、それを発揮しようと思ったことさえ、なかったのだから。

七瀬がダクトの縦穴を降りながら、誰にともなく話し掛ける。狭い通路にエコーが響き渡っているが、全く気にしない。
「……どうにか、かわしきったみたいね」
「うん、追ってくるかもしれないけどね。とりあえずは、上手くいったんじゃないかな」
答えたのは、やはり晴香。
二人はいつもの調子で会話を続けながら——さすがに手足や刀は出なかったが——梯子を降り、最初に廊下に立つ事ができた。
「それにしてもこの施設、聞きしに勝る大仰さね……」

一行は、かつて千鶴達が侵入した通気口から施設に侵入していた。はじめて内部を見る七瀬と晴香は、いかにも秘密基地といった構えを隠そうともしない施設の在りように驚きを隠さず、思う存分呆れていた。
「もう何でもアリって感じよね……」
「どっかの湖が割れて、巨大ロボットが出てきても、もう驚かないわよ、私……」
二人は、規則的な曲線を描くツヤのある廊下を見つめて、大きな溜息をついた。

全員揃ったところで、打ち合わせどおりに二手に分かれる。繭と北川、それに七瀬と晴香は、先にコンピュータルームの偵察を行う組だ。
「じゃあ千鶴さん、先に行ってます」
「ええ、彰くんを医務室に連れて行ったら、私もそっちへ行くから。危険がありそうなら無理せず引いて、こちらに合流してね」

千鶴と観鈴は二人で彰に肩を貸し、繭たちに軽く手を振って医務室へ向かった。
綺麗にワックスがけされた廊下が、三人の影を映している。
「……それにしても、酷い有り様ね」
千鶴は包帯と血にまみれた彰の姿を見ながら、半ば感心するように言った。
「そうですね……でも、耕一は——いや、耕一さんは、もっと酷いですよ」
「……そう」
彰は、僕がやりましたから、とまでは言わなかった。
言わずとも、通じていたようだったから。
長めの、沈黙があった。観鈴だけが悲しそうな顔をしていたが、残りの二人の表情は読めなかった。
そのうち三人は螺旋階段を通り抜け、医務室のあるフロアの廊下を歩き始めていた。

「……たぶん僕は、生きて帰ることはないと思います」
唐突に、ぽつりと彰が呟くと、突然観鈴が大声を上げた。
「——そんなこと！」
「いや、死ぬとは言ってない。でも、帰る気も——あまり、ないんだ。もし皆が帰ることになっても、僕はここに残ろうと思ってる」
「そんな……」
絶句する観鈴と入れ替わって、千鶴が口を開いた。
「残るなら——よろしくね」
「……はい」
初音を、よろしくね、とまでは言わなかった。
言わずとも、解っていたから。
少し歩くと、扉と血糊と、死体が見えた。医務室前は一つの戦場だったから、ここで戦った千鶴にとっては驚くに値しない。
「滑るから、気をつけて——」

そう言って室内に入り、彰をベッドに寝かせる。さっそく観鈴が包帯をはずし、改めて血を拭き、消毒をする。
千鶴はその手際を確認しながら、特に自分の手は必要なさそうだと考えた。
「それじゃあ、私は先にコンピュータールームのほうに行ってるから。具合がいいようなら、二人も来てね」
振り向き、歩き出そうとしたそのとき、気配を感じた。ついたての向こうに、誰かが寝ているのではないだろうか?
数歩移動して、回り込むと。
……死体が、あった。
詠美と、芹香。二人は胸のあたりで手を組んで、安置されていた。
「千鶴さん……この二人は……?」
「……例の、二人よ」
彰と観鈴の視線を受け止めて、千鶴は頷く。
「誰かが——二人に好意的な誰かが、運んだんでしょうね」
そして視線を流していく。
血痕が、点々と床に道しるべを作っていた。入るときは長瀬源三郎の血で判らなかったのだが、階段のほうまで続いているのだろう。
千鶴は、走り出した。

その血痕を辿った先。
すなわちコンピュータールームに向かう繭達は、道しるべを作った主に遭遇していた。
「……マルチ!?」
初対面の晴香が、幻でも見たかのように驚き、立ち尽くす。滑稽なほど動揺する晴香を見て、北川が笑いながら歩みより、気さくにメイドロボへ話し掛ける。
「なんだ、歩けたんだな。煙が出ているけれど、あれは何なんだい?」

「煙は……」
　消え入るような声で、メイドロボが答える。晴香が違和感を抱くのも、無理はない。
「北川……なんだか……様子が、変じゃない？」
「まあ、ロボットだからさ。マルチはマルチでも、晴香さんの知ってるマルチとは違うんじゃないかな？」
　そう言ってぽん、とロボットの肩を叩く。返ってきたものは、全員の予想と全く違うものだった。
　まず視線が、違う。言葉の響きも、違っていた。
「どうして……私は、ロボットなんでしょうか？」
　その呟きから感じたものは、まさしく別人のそれであった。

832　銃声は、一度

「北川――そいつから離れて」
　そのメイドロボを知っているであろう北川は警戒を完全に解いていた。あの聡明な――そう形容するのはやはりはばかれたが――繭ですら、同様に。この施設に来たことのないはずの晴香が何故あんなに動揺したのかは分からない。
　メイドロボに小銃の銃口を向けたのは、七瀬。
　戦闘用ＨＭとの激しい戦闘を経験している――そして、メイドロボとの接点をそれしか持っていない七瀬にとって、メイドロボは最大限に警戒しなければならない相手だった。もちろん、今、目の前にいる彼女があの時のメイドロボと同じとは限らない。
　あれよりは弱いかもしれないし、敵意はないかも知れない。
　だが。
　同時に、あれよりも強いかもしれないし、敵意もあるかも知れない。
「おいおい、何をそんな――」
　七瀬を諫めようとした北川を後目に、メイドロボに銃を向ける者がもう一人。

晴香だった。
「七瀬は銃を降ろして。確かめたいことがあるのよ」
彼女は落ち着きを取り戻していた。

「姉さん達と同じようになりたいです」
マルチは既に死んでいる。その事実は放送で告げられていた。だとすれば、残された可能性はそれしかなかった。あの戦闘用ＨＭと同様、このメイドロボもまたマルチの妹なのだろう。今の一言で確信が持てた。
「どうして……私は、ロボットなんでしょうか？」
疑問に対する回答ではなかった。
ただ、確信は揺るがない。
「さあね。ただ、あんたの姉さんはそんな疑問持ってなかったんじゃない？」
次の言葉もまた、疑問に対する回答ではなかった。
壊れたロボットのように、同じ言葉を、同じイントネーションで繰り返す。
「姉さん達と同じようになりたいです」
晴香が知る由もない。
彼女の知っていたマルチですら、人を――晴香にとっても、マルチにとっても、戦友と言える存在だった智子すらをも――殺していたのだということを。

疑問の答えは得られなかった。ならば、残りの命題を果たすしかない。それは至極単純な命題だった。
管理側以外の人間は、殺す。
命題を果たすべく隠し持っていたそれ――かつて詠美や御堂にポチと呼ばれ、その想いを果たし、そして果たしきれなかったＣｚ75――を、取り出そうとした。標的は、自分に答えを与えなかったこの女。
自分に向けられようとしている、銃。晴香も即座に反応しようとした。その程度のことができるぐら

いには修羅場を潜り抜けてきていた。
　メイドロボの額にポイントされているそれ――自分の手にある拳銃――の、引き金を少し引くだけで良かった。
　撃たれる前に撃てるはずだった。
　だが。
『どうして……私は、ロボットなんでしょうか？』
そんなことをぬかしていた、このメイドロボ。
その時のメイドロボの表情。
それは晴香に、一瞬の躊躇を与えた。
それで十分だった。
銃声は、一度。
銃弾は、二発。
一つは、ＨＭ―12の額を貫き。
もう一つは、晴香の腹部を貫いた。

833　空と少女と動物と

観鈴は彰の手当てを済ませてからトイレに行ってくると言って足早に医務室を出ていた。
本当にトイレに行きたかったわけではなかった。
ただ、医務室で彰と二人きりでいるのが耐え難かった。
帰るつもりがない、と言う青年。
ここから帰れば家族や友達が待っているに違いないのに。
……帰っても誰も待っている人がいない自分と違って。
「あの人のこと……ちょっと分からない」
お母さんだったら『島に残る？　何言うとんのや、うちが殺してでも連れて帰ったるわ！』なんて言うんだろうな。
　くすっと笑みを浮かべたが、同時に寂しさも襲っ

てきた。
もう、声を聞くことは二度とないのだ。
つらいけど、寂しいけど……頑張らなくちゃ。
一人でも強い子でいないと、死んでまでお母さんと住人さんに心配かけちゃうもんね。
……でも、少し疲れたかな。ずっと空を見てなかったような気がする。
とてとてと施設の入り口から出て壁を背に座り込み、空を見上げた。
「きれい。でも、昼間の方が空は好きだな」
『今は大勢の人が一緒にいるけど……友達はひとりもいない。住人さんの時と同じようにこっちから明るく声をかけてみようかな。もしかしたら友達になってくれる人がいるしれないいし』
ぼんやりと考えていた観鈴の目の前に現れたのは鴉。
ばっさばっさと舞い降りてきた。
観鈴の目の前に降りてきた鴉は観鈴のほうを見上げてきた。
観鈴を見上げる鴉と観鈴の目があった。
何故かしばらくの間、みつめあっている。
『動物なら友達になってくれるかな？』
何処か人間臭いしぐさで鴉が首を傾げた。観鈴もつられて首を傾げた。
鴉の表情は分からないが、なんとなく考え込んでいるような気がした。
本来、人に馴れる事のないはずの鴉だが、観鈴から動く気配がない。
「もしかして、友達になりたいの？　よし、ちょっと歩いて、振り向いてついてきてなかったら、ここでお別れ」
くるりと後ろを向いてぱたぱたと施設の入り口に向かって歩いて行く。
観鈴の背後ではそらがとことこと、ついていっている。

そらに追いついたポチとぴろも、そらについて行った。
「わ、ついてきてるっ……………」
振り向いて言葉を発してから長い沈黙。
鴉だけだったはずなのに、何故か猫と白蛇までもがついてきている。
「えっ……と。みんな一緒に来るの？」
みんな来る？　という観鈴の言葉にそらは後ろを振り向いた。
ポチとピロがついてきている。
観鈴と出会った衝撃でふたりの存在を忘れてしまっていた。
「彼女か？」
「……わからない。でもついていかなきゃいけない気がする」
「そう、あなたが決めたのなら私達もついていくわ」
「……ありがとう」
「さっさと行きましょう？　彼女……行っちゃうわよ」
問い掛けた観鈴の目の前で動物達が「にゃあ」「しゅるしゅる」「か〜」それぞれが鳴き声を上げながら向かい合っている。
「……来てくれないのかな？」
観鈴は動物達に背を向けて歩いて行く。
「にはは、観鈴ちんやっぱり、ひとり」
寂しげな笑顔でつぶやいたとき頭の後ろで何かがはばたく音がした。
振り返るとさっきまでいた動物達が居なくなっている。
ふと左肩に重みを感じて見てみると鴉が止まっている。
「わっ、やっぱり一緒に来てくれるんだ」
観鈴は破顔する。

「ん？」
何かが這う感触に下に見ると白蛇がするするすると右肩に登ってきている。
スカートが重い。下を見ると猫が爪をたててぶら下がっている。
「わっ。君達も来てくれるんだ」
スカートにぶら下がっている猫を頭に乗せた。
頭に載せたぴろ、左肩に止まったそら、右肩に巻き付いたポチ。
「にはは、まるで桃太郎さん。みんな、帰っても一緒。わたしの……友達」

834　それぞれの生き様

結果は、一瞬にして出た。
どさり、と倒れこむ二つの影。
晴香は膝をつき、そのまま前のめりに倒れる。HM―12は棒立ちのまま、真後ろに倒れた。
「は――晴香っ！」
立ち尽くしていたひとつの影が、その片方に向かって駆け寄る。残る二人は、長い静止の時間を取り戻そうとでもするかのように、慌てて銃を引き抜き、倒れたHM―12に向かって構えた。
「この――お前、どういうつもりなんだっ!?」
「なんで……なんでなのよ!?　壊れちゃったの!?」
すぐにも引き金を引こうとする二人。
「……二人とも、銃をおろしなさい」
抑えたのは、最初に引き金を引こうとした七瀬を抑えた人物。
「巳間さん……」
「繭、おろしな、さい」
「晴香さん……」
「北川、おろせっ、つってんの、よ」
七瀬の肩を借りて、眉間に苦痛の縦皺を寄せながら、二人を睨みつけて前進する。
「晴香……大丈夫なの？」

「だい、じょうぶなわけ、ない、で、しょうが！」
弾は、抜けているようだった。
吐血や喀血はないようだから、内臓は無事なのかもしれない。それでも腹部を貫通しているのだから、重心を移動させるたびに痛みが走り、歩きながらの会話は苦しげなものになる。
ようやく倒れたＨＭ―12の側までたどり着くと、七瀬の肩からずり落ちるようにして、彼女の顔を覗き込んだ。
晴香は妙に落ち着いた声で、語りかける。
「アンタ、さ……聞こえてる？」
返事は、ない。しかし、目が動いたような気がしたから、そのまま続けることにした。
「アンタさ、何かが自分に足りないって思うことは……立派な、ことなんだよ」
今度はきゅいんん、と明らかに音がして、瞳孔が動いた。
「人間かどうかなんかより、自分がどうあるかのほうが、よっぽど大切じゃない？」
ＨＭ―12の駆動音が、空回りして鳴り響く。
「その辺の見極め間違えてさ。他人様に迷惑かけるのも疑問に思わなくなった時点で――」
ズドン!!
銃声。
一撃。
中枢部位が半壊していたＨＭ―12は、完全に機能を停止した。
「――アンタ、アタシたちの友達には、なれやしなかったんだよ」
それだけ言って、晴香は脱力した。銃口から立ち昇る一筋の煙は、供養の線香を思わせる虚しさを感じさせた。

「――それで、具合はどうなの？」
送れて到着した千鶴が、繭に尋ねる。既に晴香は七瀬に連れられて、医務室へ向かっていた。

「弾は綺麗に抜けてるみたいですけれど……痛みが、強いみたいです」

繭の意見に頷きつつ、北川が不安を口にする。

「あのメイドロボが狂ったとなると、芹香さんたちは……」

しかしその不安は、千鶴にとって過去のものになってしまっている。結論は、既に出ていたから。

悲しげに首を左右に振り、二人に向かって告知する。

「芹香さんと、詠美ちゃんは――もう、だめだったわ」

「……そんな！」

「くそっ……」

各々が改めて悲しみに浸る。

だが、それも長くはなかった。

彼らには、やるべきことがあるのだ。

「繭ちゃん、北川くん――行きましょう」

千鶴が、最初に促した。答えた二人も、決意を新たに頷く。

「そうね……CDを、発動させなきゃ……」

「ああ、俺の仕事は……これからだ」

繭は、北川は。

そのとき、誰のことを思っていたのだろう。

たくさんの出会いと、たくさんの別れの中で。

最後に残ったのは、ちっぽけな円盤だけではなかったはずだから。

医務室のあるフロアの、血塗られた回廊を、二人はひょこひょこと歩いていた。まるで不器用者の二人三脚のようである。

「ちょ、ちょ、ちょっと、なな、なななななせ」

「あたし、〝ななせ〟よ」

「うっといわね！　痛いっつってんのよ！　って、痛たたたた！」

「……晴香ぁ、あんまり怒ると、血圧あがるからやめときなさいよ。これでも、本気で心配してんの

よ？」
「私は、あんたが包帯巻いたりできるのかの方が心配よ！」
「あはは、大丈夫。観鈴がいるじゃない。それに千鶴さんも、コンピュータ室占拠できたら、戻ってくるって言ってたし」
「アンタ……潔すぎ」
〝医務室〟の札を発見し、曲がる。扉はないから、すぐに室内が見渡せた。
……そこには誰も、いなかった。
観鈴も。そして、彰さえもいなかった。
二つの死体が、あるだけだった。

一人と一羽、そして二匹がそこにいた。しかし今まさに、もう一人が加わろうとしていた。
再び施設の内部に入ろうとした観鈴の前に、人影が立ちはだかる。手には観鈴が置いてきた、シグ・ザウエルショートがあった。
どきりとして、観鈴はその人影を見上げる。彰だった。トイレに行くと偽って抜け出してきたのが、ものすごく悪い事をしたような気がして、観鈴は俯き沈黙する。
そんな気持ちを知ってか知らずか、彰は微笑んで優しく尋ねる。内心では、どこからともなく出現した動物に、たいそう驚いていたのだろうけれど。
「観鈴ちゃん、どうしたんだい？」
「あ、あの――ごめんなさいっ」
会話に、なっていない。
「……いや、べつにいいんだ。きみは丁寧に手当てしてくれたし……怪我には、慣れてしまったからね。僕が一人で居るのはいいけれど、きみが一人でいるのは危ないよ」
「で、でも、どうして……？」
どうして、彰はここに来れたのか。観鈴は不思議でたまらなかった。
「トイレは、医務室のすぐ右だったじゃないか。き

みは左に曲がってしまったから、どうしたんだろうと思ってね。気付くのが遅れたけど、足音を辿ってみたんだ」
「にはは……彰さん、探偵さんみたい」
「ああ、君の偽証はお見通しってことさ」
ふたりで、少しのあいだ笑う。本気で笑えたかどうかは、解らない。それにあまり良く知らない相手だったけれど……構わなかった。
——しかし、平穏の時は長く続かない。突然、彰が真顔になって、観鈴に医務室へ帰るように宣言したからだ。あまりの変貌ぶりに、観鈴は疑念を隠せなかった。
「……彰さん？」
「観鈴ちゃん……いますぐ、戻るんだ」
「いきなり、どうしたの？」
「銃声が、聞こえた。きっと手当てが、必要になる」
……聞こえたような気もする。でも、何かがおかしい。観鈴は違和感から、素直に言うことを聞けなかった。
「彰さん……一緒に、戻ろ？」
しかし彰は頑なだった。先ほどの微笑から想像もつかないような、観鈴を拒絶する冷たい物腰で返事をした。
「僕はもう少し月を——独りで月を——見ていたい。だからきみは、先に帰って欲しい」
観鈴が寂しそうに階段を折りて行くのを、彰は見守っていた。どうにも僕は不器用だな、とうんざりしながら腕を組む。動物に語りかける彼女の姿には、憐れみすら感じる。しかし、彼女の姿が消えるのを確認すると、くるりと振り向いた。
空には、朧月。
地には——やはり朧げな——光が、あった。
光を睨む、彰の瞳が赤味を増してゆく。
(神奈備命——ついに、来たか)

835　わがまま

「ふー、ようやっと帰ってきおったか」
　部屋には、散開したメインモニターの破片と、血の匂い。その異常な状況の中で彼ら——千鶴、繭、北川——を出迎えたのは、以前と変わらぬ声だった。
　凄惨な現場の中でいたたまれない気持ちになる三人に、G.N.はいつもの調子で尋ねる。かろうじて修復できた音声機能だったのだが、三人がそのことに気付くはずもない。
「いいのか？　あの嬢ちゃんも来とるぞ？」
「あの嬢ちゃん？」
　北川の素っ頓狂な返事に、少々いらつきを覚えながら答える。時間を無駄にできないのはお互い様であろうに。
「忘れたか？　施設周囲には固定カメラがあるじゃろ？　例えばほれ、施設の出入り口近辺のカメラじゃが」
　メインモニターはもう存在しない。仕方なく、予備の端末の小さなモニターに映像を映し出した。あまり余力はないが、彼らには見せる必要があるだろう。
　千鶴、繭、北川の三人は、狭苦しいながらも一斉にその映像が映ったモニターを覗き込む。
　そこには。
　泣きながら銃を構える女と、ただそれを見据える男がいた。
　男は、七瀬彰。
　そして、女は。
「こいつ——スフィー、か？」
　北川が断定できなかった理由は、ただ一つ。
　それが少女ではなく女だったからだ。
「こういうことを言うのは酷かもしれんが——芹香嬢と詠美嬢を殺したのは、あの嬢ちゃんじゃ。ついでに言わせてもらえば、ワシの自慢のメインモニタ

ーをぶっ壊してくれたのもな。だいぶ見目は変わっとるようじゃが」
推測の範囲内でしかなかった事実。
ろくに動くことすら出来なかったその少女の身体が女の身体となり、平然と動き回り、しかも彰と対峙して銃を向けている。考えられる可能性は。
「やはり、神奈の影響を受けてしまっていた、ということですか……」
千鶴は苦渋の表情を浮かべ、そう呟く。万が一スフィーに神奈自身が降りていた場合は、それをスフィーごと斬らねばならない——ということになる。
「あの馬鹿、何やってんだ……」
北川は納得できなかった。
スフィーは誓ったはずだ。
必ず生き残って、出来ることをやり遂げて、元の生活に戻ると。
それなのに、彼女はあんなところで何をやっているる？
「神奈の影響だってんなら、ＣＤを使えば——あんたが無事ってことは、ＣＤは無事なんだよな？　もう解析も終わってるんじゃないのか？」
「ＣＤは無事じゃよ。じゃが」
その声は、あまりに無慈悲だったように思えた。
「今すぐ使うのは無理じゃな」
「おい、何呑気なこと言ってんだ!?」
北川の怒声をものともせず、Ｇ．Ｎ．は続ける。
「ワシとてそれなりに苦労しとるんじゃ。ワシを蝕むウィルスを何とかしない限り、危なっかしくてＣＤの起動プロセスすら開けん。ワシがお釈迦になったとして、他の誰にそれができるんじゃ？　急ぎながら余計に、作業に集中させてもらうぞい。ウイルス駆除のな」
そしてＧ．Ｎ．は沈黙した。モニターの映像も消える。
「ちくしょう——何なんだよ——何だってんだ

——！」
部屋を飛び出そうとした北川を押し止めたのは。
「……北川君、あなたはここにいなさい」
意を決した、千鶴。自分達はやれることを——やるべきことをやるしかない。
「私達は、彼の援護に行きます」
繭もその言葉に従った。
千鶴にも、繭にも、分かっていた。神奈の影響を受けているであろう者——スフィーに、CDの発動を前にして再びここに踏み込まれてたら、神奈に対抗できる数少ない——ただ一つかもしれない術が失われてしまいかねない、と。
予想外のアクシデントで晴香という大きな戦力を失い、彼女を治療しようとしている七瀬もまた動けない。観鈴は戦いの場に出せるような娘ではなかろう。
G・N・があの調子では、施設のセキュリティにも大して期待はできない。
少なくとも、時間を稼がねばならなかった。
それだけが、彼女達にできる唯一のことだった。
「スフィーは——スフィーはどうなる？」
そんな北川の問いには、こう答えることしかできなかった。
「……CDが使えるようになるのが先であることを、祈るしかありません」
今回ばかりは、北川も千鶴の言に従うしかなかった。
千鶴を追うように部屋を出ようとした繭が、振り向かずに北川に告げる。
「北川——あなたには、本当に辛い選択を強いることになるわ。それを決める権利があるのは悔しいけど私じゃない。あなた自身よ。あなたが決めなさい」
繭は芹香との語らいによりそれを知っていた。私が代われるものなら——と、本当にそう思う。繭にとっても、CDはそれ以上の意味を持つものなのだ

から。
だがそれは、千鶴にも、繭にも、他の誰にも許されない。もう北川のみにしか許されていないことだった。
ＣＤを使えば、どうなるか。部屋に一人残された北川も思い出していた。
――アレほどの化物に下手に抵抗されれば呪詛返しであっという間に――
それは。
――あの世行きよ――
スフィーの残した言葉だった。

呪詛返しを妨げられるだけの可能性を持っていた芹香はもうこの世におらず、実際に妨げようとしていたスフィーはあちら側に行ってしまった。もう守ってくれる者は存在しない。
不思議と、死ぬことは怖くなかった。だが許せなかった。多くの人間の――スフィーの連れの、レミィの、祐一の、それ以外にも多くの人間の――死の上に成り立っている自分の命もまた、失われてしまうことが。
それでも、やるべきことは果たさねばならない。
彼の葛藤は終わらなかった。

「ふ、二人ともどうしたんですか⁉」
自分の横を颯爽と――といった感じではなく、慌ただしく駆け抜けていった千鶴と繭の後ろ姿にそんな問いかけをしてみた観鈴ではあったが、とても返事が返ってくることを期待できるような状況ではなかった。
ただ、彰の言葉が気になった。
銃声。
何があったのだろう？
彼女は医務室ではなく、千鶴と繭がやって来た方へと向かうことにした。

北川は予想外の来客に驚いた。
観鈴自体にはもちろんだが、その頭の上に置かれた猫、左肩に止まっているカラス、右肩に巻き付いている白蛇に。
残骸と血にまみれたこの部屋の状況に、彼女もまた驚いてるようだった。
「えっと、彰さんが銃声が聞こえたって言ってて、その——大丈夫ですか？」
「……晴香さんが撃たれたんだ、メイドロボに」
「え？」
「大丈夫。メイドロボは晴香さん本人がやっつけたし、晴香さんの方は七瀬が医務室に連れてってる」
「じゃ、じゃあわたしもお手伝いに行った方が——」
「神尾さんも行く必要はないんじゃないかな。七瀬に任せといて大丈夫だろ。あいつ、あれでも自称乙女だから、看護婦の真似事ぐらいはやってのけるさ。といっても、ここもあまり居心地のいい場所じゃないだろうけど」
それはわがままだったかもしれない。
間違いなくわがままだった。
でも今は。彼女に側に居てほしいと思った。レミィの面影を感じさせる彼女が側に居てくれれば、きっと何もかも上手くいくんじゃないかと思えた。そう思えるだけで良かった。
「その、じゃあ、北川さんは——」
観鈴は率直な疑問をぶつける。
「——ここで何をしてるの？」
北川は、苦笑混じりにこう答えた。
「そうだな……一点差で迎えた九回裏、ワンアウト、ランナー満塁。ベンチで代打に呼ばれるのを待ってるって感じかな？」
ホームランである必要はない。もちろん、ホームランであれば申し分ないのだが、それを期待するのは贅沢な話だった。
役目を果たすという意味では、犠牲フライでも十

分だ。
Ｇ．Ｎ．はあえて聞かなかった。あのメイドロボがどうなったのかを。
彼らが生きてここに辿り着いたという事実が、それを示していたから。
北川はあえて言わなかった。その時が来たらここから逃げろと。
命を対価として支払う自分のことを、止めようとするかもしれないから。
聞く必要はなかった。言う必要はある。しかし、まだ言わなければならない時ではない。
それは彼の、ほんの少しのわがままだった。

836　長いお別れ

煙草を捨ててしまったことが悔やまれる。
口が寂しい。右手に持ったライターの蓋を指でかちかちと弄びながら歩いていた。
人の気配を感じてそちらの方に目を向けると、すすり泣いている女の姿が目に飛び込んできた。
あいつは確か参加者の……。
参加者に対する管理者側の優越からくる油断。
高野はその女の方にゆっくりと近づいていく。
「どうした？」
女は悲しい顔をして高野の方を見るだけだ。
そんな女の様子を見て高野は傍まで行って女に声をかけた。
女は高野の声を受けて微笑む。
「知っておるか？　お主のような奴をうつけものというのじゃぞ」
カチャリと音をたてて高野の胸に銃をつきつけて引き金をひいた。
ゼロ距離射撃。血や骨、臓物が高野の背中から飛び散った。
俺は優しいんじゃなくて……甘いだけだったんだな。

気が向いただけなどと理由をつけて参加者を見逃す。
そして、同じ理由で参加者の怪我人を助ける。
甘いだけだったんだ。……他人にも、そしてなにより自分に。
強くなければ生きられない。優しくなければ生きていく資格がない。
俺は強くもなければ優しくもなかったわけだ……。
「この島に来て何も学んでおらぬのか？　ふんっ！　阿呆を殺してもおもしろくもないわ。興醒めじゃな」
「……僕じゃ、役者不足かい？」
どさりと後ろに倒れる高野の身体。
そのうつろな瞳に映った男の名は……七瀬彰。

837　業火

「……僕じゃ、役者不足かい？」
月明かりが二人に差し込み、彰の体がはっきりと神奈にも見える。
「おお、そなたは確か……」
突然現れた彰を神奈が思い出すより早く。
「そう。間抜けにもお前に体を乗っ取られ、大切な人を殺してしまった愚かな男、七瀬彰さ」
冷めきった言葉を、彼は口にした。
「それで彰とやら、一番大切なものをそなたから奪った余が憎いか？」
おどけた口調の神奈。明らかな挑発。
「ああそうだ。憎いさ。彼女の首を絞めた僕自身と同じぐらいね」
それに動じることなく、自分の思っている事を淡々と話す彰。
「でもさ、だから僕は」
その言葉と共に彰がシグ・ザウエルショート9㎜を片手で構え、
「生きて、お前を殺してやろうと思える！」

躊躇いなく、引き金に、力を込めた。
ダン！　ダン！　ダン！
「ふん、余はきっかけを与えたに過ぎん。事実そなたは、あの小娘を手に掛けようとしていたではないか」
そう言いながらM4カービンを彰に向け、撃つ。
ズガガガガガッ！
「違う！　僕は初音に生き残って欲しかったんだ！　だから彼女の甘い考えを振り払ってやろうとしてたんだよ！」
ダン！　ダン！
「ふん、所詮はおぬしの偽善よ。あの小娘が大切ならなぜ守ってやろうとしなかった？　その上ちっぽけな己の嫉妬に付け込まれ、鬼程度の愚物に心を奪われて、仲間を傷つけ、殺そうとした。余が知らぬとでも思ったか？」
ズガガガッ！　ガガガッ！
「うるさい！　お前みたいな化物に、僕の気持ちがわかってたまるか！」
ガン！　ガン！　ガン！　ガン！　ガン！
「化物とは心外なことを申す、これでも余は羽以外、お主等と変わらんよ」
ズガガガッ！
「化物とかそうでないとか、そんなのは僕の知った事か！　今、僕はお前が憎い！　お前を殺す理由なんてそれだけで十分だ！」
ガン！　ガン！
叫びと共に、銃を撃つ彰。
それは初音が死んでから、初めて見せた激昂。
彼は、すべての怒りを目の前にぶつけていた。
カチ！　カチカチ！
「くそ！　弾が……」
当然である。
後先を考えずに撃てば、こうなるのは当たり前だ。
「なんじゃ、この筒が無くなれば、何もできんとは。

所詮、人間よの。だが……」
　同じく弾の切れたM４カービンを捨てた神奈が冷酷な笑みを浮かべ、右手を掲げる。
「余は、違うぞ」
　掲げた手に集まった光の矢。それを彰に向け、連続して放つ。
　ヒュン！　ヒュン！　ヒュン！
「うおっ！」
　ヒュン！　グサッ！
「ぐおおおおっ！」
　急所への矢はなんとか何とか回避できたものの、右肩に矢が一本突き刺さった。
　すぐに矢は消えたが、確かに残る鈍い痛みが体中に広がる。
　ドサッ！
　彰の体がそのまま地面に倒れこみ、猛烈な痛みで、今にも意識が飛んでいきそうになる。
（まだだ！　こんな所で死んでしまったら初音にあわす顔がない！　どうにかしろ！　考えるんだ彰……）
　神奈を殺すまでは死ねない。ただそのためだけに彼は頭を振り、立ち上がる。
　二人とも銃は使えなくなった。だが、光の矢による遠距離攻撃ができる分、現状は神奈の方が圧倒的に優勢だった。
　無策に突撃したところで、光の矢で串刺しにされてしまうだけだろう。彰は頭をフル回転させて状況を打破する手段を考える。
（なにはともあれ武器が必要だ。少し前に見つけた持ち主不明のバッグには武器が入っていた。あれを上手く使うことができれば……）
「もう抵抗する気も無いか？　やはりお主も不足な相手よ……」
　神奈が近づいてくる。今度こそ自分を確実にしとめるためにおそらく矢の回避不可能な範囲まで。
（仕方がない、一か八か！）

そう、正に飛び出そうとしたその時。
「あきらあああああっ！」
別れてから数時間しか経っていないのに、何故か懐かしく感じる声が——聞こえた。
「うおおおおおっ！」
ズガァアン！
「彰！　死ぬな！」
ズガァアン！　ズガァアン！
射程距離の外である事がわかっていても耕一はベレッタを撃つのを止めはしなかった。
派手な行動によって、彰への注意を自分に逸らす。いわゆる『囮』だ。
（な、馬鹿な！　あの男はこの彰とかいう男の為に、傷を負ったはずの男ではないか！）
そしてそれは、意外な形で神奈にも影響する。
（どうしてじゃ……どうして皆、こうまでして他人を庇う？　所詮、信じられるものなど何も無いと言うのに、ああ、不愉快じゃ……）

「不愉快じゃああっ！」
そう叫びながら、耕一達のいる位置に、無数の矢を放つ。
おおよその方向に撃ったので命中率は低いが、威嚇には十分な効果を発揮した。
「うわ！　な、なんだこりゃあ！」
矢に襲われた耕一が、叫び声を上げる。
「はあ……はあ……はあ……本当に不愉快な奴らじゃ。あやつの始末は後でするとして、まずはおぬしから……」
そこで気付く、彰が——いつの間にか居ない。
「ど、何処じゃ！　何処におる！」
ピピピピピピ！
「そこにおるのか！」
音のした方向に、三度矢を放つ。
ヒュン！
だが、何度撃っても手ごたえが無い。まるで、そ

こにはいないように。
（おかしい……様子が変じゃのう……）
神奈もそれに気付き、音のする方向に駆け寄る。
そして、
「なんじゃこれは！」
そこにあったのは、
アラームの鳴っている彰の腕時計と高野が持っていた、バッグだった。
「ゲーム・オーバー」
神奈が、今度こそ確かに聞こえた人の声に振り向くと、
サブマシンガンを構えた彰が、何の感情持ってないような無表情で、立っていた。
パラララララララララッ！
「くううっ！」
避けれないと判断した神奈が己の身にかかる負担を承知で、障壁を張る。
カカカカカカカカ！

とっさに張った障壁だが、銃弾程度は弾く。
が、
爆発までは、防げない。
パラララララララララッ！
二度目のサブマシンガンの斉射が、高野の手榴弾入りのバッグを、蜂の巣にした。
ドゴオオオオオオオオオオン！
（なあっ！　おのれえええ！　かくなる上は！）
危険を察知した神奈が、スフィーから意識を切り離し、上空に飛んでいく。
だが、その行為は
「ああああああああああっ！」
意識の戻ったスフィーに、耐えがたい苦痛をもたらすものだった。
熱い熱い！　息が出来ない！
「きゃあああああああああっ！」
死ぬ！　このままでは死んでしまう！

嫌だ！
（死にたくない……や……だ……）
燃える炎の中、スフィーは自らの運命を呪う。
（私が、なにをしたの？）
そうだ、自分が――何をした？
ゲームにだって乗ってない。
脱出の方法だって、必死に考えた。
だが、今の自分は、
火の海で焼け尽きようとしているではないか！
（ああ……苦しい……死にたく……ない……死にたくな……い……）
体が力を失い、倒れこむ時間に彰と、目が合った。
彼の顔は、申し訳なさそうに、
（どうして私を殺すの？　私は何も悪くないのに！
……この……悪魔……）
苦痛でひどく歪んでいる、彰の表情。
そんな彰を恨みながら、
「……あああああああああっ！」

断末魔の悲鳴と共に、彼女の何かが終わりを告げた。
「神奈を、やったのか？　彰」
いまだに燃え盛る、炎に身を裂かれるスフィーを見て苦りきった顔の彰に、耕一が駆け寄った。
「耕一……」
駆け寄る耕一に、彰は目を合わせられない。
「いや、結局ギリギリの所で逃げられた。その証拠に、爆発の後すぐにスフィーさんの叫び声が上がったから多分、死んではいない」
だから、耕一とは反対の方向を見ながら、彰は答えた。
「そうか……」
しばしの沈黙の後、
「なんでだ？　なんで、僕に何も聞かない？」
彰は呟いた。
「教えてやるよ、初音を殺したのは、僕なんだ。僕

が、あの細い首に力を込めて、殺したんだ。気付いてるんだろ？　初音が一人で僕のところに向かったのは、お前だって知っているんだから」
その問いに、耕一は空を見上げ、
「知ってるさ。梓から聞いたしな」
特に何の変化も無い声で、耕一が答える。
「だったら、なんで僕を助けた。僕が、憎くないのか？」
彰の口から漏れる、悲痛な声。
まるで殺してくれと、言わんばかりに。
「……梓からもう一つ聞いた。お前、死ぬ気なんだろ？」
今度は、多少の苛つきが見える声で、今度は耕一が彰に問い掛ける。
「……まあね、今の僕なんて、生きててもしょうがない存在さ。神奈との戦いが終わったら、僕は初音の所にいくつもり……」
「この、大バカヤロォォォォォォッ！」

バキィ！
手加減の無い、本気の一撃。
彰の体が、地面にひれ伏す。
「ぐうっ、こ、こうい……」
倒れている彰に、耕一が近寄って、
「てめえはとんでもないバカだ！　そんな事して初音ちゃんが喜ぶとでも思ってんのか⁉　おい！　いいか、よく聞け！」
彰の胸倉をつかみながら、耕一は叫びつづける。
「お前が死んだって、初音ちゃんはちっとも喜びはしねえよ！　死んでしまった人が願うのは、残された人の幸福だってことに、何でお前は気付かないんだ⁉　考えても見ろ！　あの子がどれほどお前の事を思っていたか！　鬼の血のせいで変わってしまったお前の事を、どれだけ心配したか！　だから、初音ちゃんはお前が死ぬ事なんてこれっぽちも嬉しくない事に、どうしてお前は解らない？」
悲痛な、声。

「だけど、もう僕は、スフィーさんだって殺してしまった。神奈を倒すためとはいえ、もう僕には生きる資格なんて……」
「ああうるせぇ！　俺が伝えたかったことはもう伝えた。それで、どうするかはお前が考えて自分で決めろ。だが、俺はお前を死なせる為に助けたつもりはないからな！」
　そういうと耕一は、彰に背を向けて、耕一が駆けて来た方向に向かい、手を振り始めた。
　恐らく、梓さんたちが来たのだろう。
（うう、くそう……）
　解っていた。
　死ぬ事は逃げる事だと。
　でも、それでみんな丸く収まると思っていた。
　千鶴さんも、梓さんも、耕一も、
　それでみんな、納得してくれると思っていた。
　だけど、耕一は僕に死ぬなと言った、
　それなら僕は、彼女のいないこの後どう生きていけっていうんだ？
「…………はつね、お前に会えない世界は、こんなに辛いんだな……」
　どうしようもなく寂しく、辛い気持ちが押し寄せて、
　耕一が梓さんをつれてくるまで、
　今は亡き愛しい人を思い出して、少しの間、僕は泣いた。

五十番　スフィー　死亡
【残り　11人】

838　標的

　特に何を語るわけでもなく。もちろん、何ができるというわけでもなく。
　北川は、ディスプレイをぼんやりと見つめながら、ただそこにいた。

（八十パーセントを越えた……さすがに、早いな）
ウィルスの除去が、驚くべき速さで進行しているようだった。話す余裕はないのか、そうする気がないのか、ろくすっぽ説明はないままなのだが、ときおり除去作業の進捗情況をディスプレイに映してくれている。
観鈴を呼び止めたのは、自分のわがままだと思っている。だがそれならそれで、かわりに気の効いた小話でも披露して、彼女を楽しませる位の芸はある――はずだった。
（ちぇ……びびってんのかね、俺）
今は何も、浮かばない。足を投げ出して、腕を頭の後ろに組む。
（……八七パーセント）
彼女は、どこからか連れてきた動物と遊んでいる。その姿は笑顔に彩られているが、ひどく寂しげだった。
だから、何があったのか、聞こうと思っていた。

いや、聞くべきかどうか、迷っていた。
すねのあたりで足を組み、天井を見つめる。北川は、彼女の悲しみに明確な理由がある事を知っていた。あれほど必死に観鈴を探していた往人が、死んだことだ。彼女の母親も、時を同じくして死んだらしい。
道中で七瀬達からそんな話を聞いたのだが、彼女たちも詳しくは知らないようだった。
猫と戯れる観鈴の姿は、たしかに楽しそうではある。だが彼女が望んでいるのは、猫ではないはずだ。言ってしまえば、往人の存在なのではないだろうか。
（まったく……往人さん、恨みますよ……）
つんつんっ！
心で呟くなり、烏が北川の両目に嘴を叩き込んだ。
「痛ェ！　なんだこいつ！」
「カァーーーーッ！」
両目をおさえて椅子から飛び起き、烏の捕獲を試みる。

「烏のくせに、生意気なんだよ!!」
「クワッ!!」
北川の挑戦は、もちろん成功しない。ひらりと北川の両手を避けた烏が、逆に怪我をした北川の手に向かって、嘴を振り下ろす。
「ぐおおおおおおお!?」
痛みに床を転げまわる北川。容赦なく追い撃ちをかける烏。
「にはは、北川さん、烏さんと仲良し。羨ましいかも」
「羨ましくなんかねえええええええええ!!」
「クワーーーーー!」
気の効いた小話どころか、怒鳴るだけで精一杯だった。
しかし世の中、悪い事ばかりでもない。ディスプレイには、百パーセントの表示が燦然と灯っていた。
そして続くCD解析のゲージは、もともと終盤に差し掛かっていたのだ。

(もう少しだな……)
自らの危険を伴う、希望の扉。
邪魔な鍵は、次々と外されていく。
扉を開いた、その先には。
一体何が――あるのだろう?

(ぬかったわ……)
神奈は再び上空に登り、その意志のみで存在していた。再び、多くの力を失っている。神奈が油断していたせいもあるが、彼女にとっての不幸も多かったのだ。
だが一方で、スフィーの死は彼女にとっての活力にもなった。彰への恨みを抱いて死んだ彼女の無念は、神奈の好む味付けがこってりと為されていたからだ。
そのためトータル的には、それほど大きなダメージではないとも言える。
(……とは言え、このままでは……消えてしまいか

ねん）
依り代が、必要だった。目処はもう着いている。
いや、その表現は正しくない。一目見た瞬間に
――決めていた。
（あの娘。あの身体こそが。余の力を、存分に引き出すであろう）
もともと神奈は、さほどその娘を評価していなかった。能力にも、精神にも、神奈の価値感では強さを認める事ができなかったからだ。だから岩場を移動していたとき、その存在を感じたにも関わらず、思うところは何もなかった。
だが鬼飼いの男の隣に立つ、娘の姿を直に視界に捕らえた時。
……認識は、急変した。
もしあの身体に依ることができたなら。魔法を使える程度の身体など――なんの未練もない。
もはや他の人間など、どうでもよかった。全力を傾けてでも、あの身体を乗っ取れば、恐れるものなど何もないのだから。
コンピュータ室の、狭く小さな大気の中で。
神奈の意識は、じっと観鈴の姿を見つめていた。

839　雨の中

――時は少し遡る。

「で、梓さん。ボクたち耕一さんを捜しにきたのに、なんで隠れてるの？」
あゆの疑問は当然だった。
梓は決めかねていたのだ。あそこに今すぐ、闖入したものかどうか。
それに、耕一の真意も知りたかった。
だから梓は、あゆの疑問が口に出されるまで迷っていたのだ。
しかし、あゆの言葉が梓を吹っ切らせた。
（そうだよな、こんなところでじっとしてるなんて、

あたしらしくもない)
梓は一人大きく頷くと、あゆの手を引いて歩き出した。
「あれあれ？　梓さん、今度はどうしたの？」
戸惑うあゆの手を引く、梓は大股で歩いた。
「耕一、行くよ!!」
人の近付く音と、それに続いて上がった梓の声に、耕一とマナは驚くようにして互いの体を離した。
「なに、鼻の下延ばしてるんだよ、耕一。いいかい？　このくそったれのゲームを終わらせようと、みんな集まってる。遊んでる暇はないんだ。急ぐよ！」
堂々と言い放つ梓。
数刻前にはかなり消耗していたのを忘れたかのように、必要なときにはいくらでも元気に振る舞ってみせる。それが柏木梓だ。
「あ、いや、これは、その、別になんでもないんだ。そう、なんでもないんだよ、梓。て、ゆーか……」
いつもの調子で現れた梓に、つい慌てふためいてしまった耕一だった。
「何をあわててるんだよ、耕一？」
まるで何も見ていなかったかのように梓は言った。
「あ、いや、これは、その、えーと……」
マナは耕一から離れたまま顔を赤くして、梓に目を合わせづらそうにしていたが、やがて思いついたようにまくしたてはじめた。
「大体、こ、耕一さんが、足場のしっかりした場所を選んでくれないから、膝がカクッてなっちゃったでしょ、カクッて！　それに私が、毒のせいで体力落ちてるの、分かってるクセに……」
ムキになっているように見えるマナを、梓は微笑ましく思った。
「もう、私がちょっと弱気になったからって……男の人っていつもそうなんだから」
「え？　ちょっと、マナちゃん、それは……!!」
何だか情勢があやしくなって来て、耕一は慌てふ

ためきながら口を挟む。
「男のクセに、言い訳しない!!」
マナの伝家の宝刀が今、再び耕一のすねに炸裂した!!
全身に包帯を巻いた男が、すねを抱えて地を転げる様は実に痛々しい。
耕一のそんな様子にマナは気遣う様子もなくそっぽを向いた。
(私が勝手に盛り上がってただけなのは判ってたのよ。この特殊な状況で、そう、だから……。私はただ、この島で色々なことが起こりすぎて、そんな中でちょっと優しさに寄りかかってみたかっただけ。どしゃ降りの雨の中、軒先でそれが通り過ぎるのを待つように……。そこから出ていくのがちょっとだけ腹立たしいから。八つ当たりでごめんね……耕一さん……)
マナの想いは胸の中。それを読みとれる者はなく。ただ森の暗闇の中、耕一の呻きだけが低く響く。

耕一が気の済むまで転げ回ったところで、事態は一段落した。あゆが耕一を助け起こし、今度はマナの機嫌を伺っている。
起きあがった耕一は少しばかり何事かを呟いていたが、間もなく言葉を切り、梓に向き直った。
そして、ほっとしたような笑みを見せる。
「そっか……どうやら、落ち着いたみたいだな。正直、あのときは、俺もどうなっちまうかと……」
静かに梓を見つめながら耕一。しかし——
「ごめん、耕一……でも、今はまだ……」
そのことには触れて欲しくない、と言葉を濁す梓。明るく振る舞っていた表情に影が落ちる。
「……そうか」
耕一は自分のデリカシーの無さに嫌気が差した。初音の死は、未だ生々しすぎる傷痕だった。
そんなことわかりきっていた筈なのに……
気まずい沈黙が場を支配する。
「ほんとうに、ごめん……」

梓はつぶやく。
やがて梓はもう一度だけ頷いた。
表情を引き締めて振り返り、三人に告げる。
「さあ、本当に急ぐよ。他のみんなの状況は、歩きながら話すことにしたいと思う」
一同に視線をくれたあと、梓は率先して歩き出した。
それにつられるように、皆歩き出す。
（これ以上、あたしは失敗を重ねたくない。これ以上、誰も犠牲にはしたくない。絶対に、これ以上、これ以上……）
気を張って歩き出した梓だったが、しかし、その消耗は本人が思っているよりも大きかった。
それゆえ数分後、彰を救う為に突出した耕一に梓はついてゆくことが出来なかったし、マナもまた、そんな梓を支える為に、耕一の背を見守ることしか出来なかったのであった……。

840　意志の力は魔法の力

「なん…だ…？」
色のついた霧が部屋の中央に集まっていく。
北川は目を疑った。
それが人の形へと収束していく。
彼にも分かった。
これから不吉なことが起こるであろうと。
自分には、スフィーにおそらく訪れたであろう死を悲しむ間さえないのだと。
「我が名は神奈備命……」
何事も見透かし、何事にも冷めているかのような瞳。
「小娘……」
この世のものとは思えない美麗な顔立ち。
「お主の体をもらいうける……」
全身から放たれるすさまじいプレッシャー。

人外とはまさにこのこと。
「が……がお……」
観鈴には理解しがたい台詞。
体をもらいうけるとは、なんだろう。
——カチャリ——
「待ちな。彼女には手を出させない」
彼だって意味はよくわからなかっただろう。
北川が神奈に銃を向ける。
ステアーＴＭＰ。
「この状態の余に、ろくに意志も篭められぬ飛び道具が効くわけなかろう」
「うるせぇ！　わけわかんねーこと言うな!!」
神奈の胸に狙いを定める。
「やってやるぜぇぇっ!!」
——バン！——
——パァァアアン——
素人にしては上等。銃弾は神奈の腕に命中した。
そして不可思議な音を立てその腕が霧散する。
意志の力は魔法の力。
神奈が驚きの表情になる。
「ほう……。なかなかの意志力。もしかしたらこのまま余を滅ぼせるかもしれぬぞ？」
北川は迷わず撃ち続ける。
弾丸が命中するたびに神奈の一部が霧散して消える。
——バン！——
そして最後の一発が頭を消滅させた。
残ったのは右腕と左脚のみ。
空に浮かぶかのように残った。
が……。
その右腕が動いた。
——ゴオォォォオオオ!!——
轟音。
北川の身体が木の葉の様に舞い、メインコンピュータに叩きつけられる。
「我ながら情けない破壊力よ……」

北川の目に映るのは、現れた時とほぼ変わらぬ姿の神奈。
「く……くそ……！　効いてねーじゃねーかよ！」
「いや、効いておったよ。そうじゃな。柱のカドに頭をぶつけたといったところかのぉ」
まだ再生しきれていない左手を見せつける。
「余も完璧ではない。そう……まだ完璧ではないのじゃよ」
そして観鈴へとふりかえる。
「だからそなたの体を……いただくとしよう」
少し離れたところで立ちすくんでいた観鈴。
彼女に向かって神奈が一歩進む。
「が……がお……」
「神尾さん……逃げ………逃げろ！」
観鈴は恐怖で足がすくんで動けない。北川に言われて足が一歩下がったと同時に、彼女の平衡感覚が狂う。達人に柔道で投げられたかのように勢い良く転倒する観鈴。
「知らなかったのか？」
また一歩、お互いの距離が縮まった。
「神奈備命からは逃げられない」
観鈴を守れる人間は誰もいない。

841　遺志、そして意志――まもるべきもの――

――そらが魂の雄叫びを上げる。
バサバサと翼をはためかせ、光り輝く鴉。
神奈、北川、観鈴、そして、ぴろ、ポチ。部屋に居る生き物全てが息を飲んで圧倒される。
目の前の状況は、その引き金として十分すぎる光景だった。それは、そらの内にある『俺』――国崎往人の現出である。
やっと観鈴に会えたのに、俺は何をやってるんだ？

あの姫君に好き勝手やられっぱなしじゃないか。
もう残された時間も少ないってのに——
もはや人ではない俺が、俺を俺として認識できる状況になっている。
それは俺自身の崩壊を示唆していた。
鳥の器では、俺の人間としての全てを受け止めきることはできない。
『私』の計らいにより延命はされていたが、こうなってしまった以上、崩壊は避けられ得ぬものだった。
もう俺の崩壊は避けられない。せめて、俺と共存していた『ぼく』や『私』だけでも無事で済むことを祈るしかない。

俺にはもう。
あいつのお守りはできないけれど。
あいつの側にいてやるって約束すら守れないかもしれないけれど。
そうだな、北川。お前になら頼めそうだな。この際贅沢は言ってられないか。
お前はまだ、笑えるんだよな？　だったら。
観鈴のこと、頼む——

——国崎往人の記憶も、意識も、そこで潰えた。

だが、遺志だけは継がれていた。
(ぼくが、なにかをしなくちゃいけない)
その遺志は『俺』のものだった。でもそれは、『私』の、そしてぼくの意志でもある。
紛れもない、そらの意志。
彼女を。
観鈴を守らなくちゃいけない。
(でも、どうやって？)
わからない。けれど。
観鈴を守らなくちゃいけないんだ。

842　夏、青空の少女

——She is waiting in the air——

人の力は、弱くて儚い。
一歩一歩観鈴に近寄る神奈に北川は殴り掛かろうとした。
だが、その拳が届く前に、目に見えない力で跳ね飛ばされる。
人の力は、弱くて儚い。
無駄だとわかっていても、ただ叫び、起き上がり、そして、跳ね飛ばされるだけの無力な存在。

鳥は自由に空を飛ぶ力を持っている。
だがそれは、空のないこの場所では殆ど意味を持たない。漠然とした衝動だけを頼りに、そらは神奈にむかう。
神奈は全く相手にしない。やはり神奈に届く前に跳ね飛ばされてしまう。
翼は、今、何の意味も持たない。
無駄だとわかっていても、ただ飛び掛かり続け、何度も何度も繰り返して。

瞳が、姿を捉えて放さない。
逃げたいと思っても、体が反応しない。
近付いてくる得体の知れない少女を前に、ただ座り込み、震えるだけ。
「自分の肉体に還るのは……久方ぶりだの……」
やがて、神奈の姿が観鈴と重なり。
少女達は、一つになった。

自らの無力を呪う絶叫が響く。
自分ではない自分が託した意志を果たせなかった、悔しさを込めた鳴き声がする。
観鈴であった少女は立ち上がり、そして、笑った。
無邪気な少女の笑顔で、無力な者達に手を向けた。

色のない真っ白な空間を、観鈴は登っていた。真っ白というのも定かではない。もしかしたら、真っ暗闇なのかもしれない。
上下も左右もないのに、『登っている』ことだけが感覚でわかる。記憶にある最後の光景は、自分と少女がひとつになる瞬間のもの。
何が起こっているのかわからない。まるで、夢の中にいるようだ。
そこには無数の『わたし』が居て、たくさんの記憶が川のように流れている。
……たくさんの悲しい記憶。
わたしと同じ運命を背負った少女達。
誰かを想う程、その相手を衰弱させてしまう呪い。
人の器には大きすぎる羽根の記憶。
流れ過ぎゆく時間の中で、白い羽根によってもたらされた、いくつもの出来事。
大道芸人として果てのない旅をしている女と、彼女が助けられなかった女の子。
生まれてくることを許されなかった少女の幻影。
呪われた子どもを持った女と、時を超えて彼女の意識を受け取ってしまった少女。
数え切れないほどの、夢の欠片を追っていた。
たくさんの自分や羽根。それに関わった者達の記憶。
その殆どは哀しみの色で塗り尽くされており、観鈴の心の染めていった。

世界に色が満ちてゆく。
青と、白のコントラスト。
たどりついた先は、夏、青空の下。流れる風の中。
見下ろすと、山道が見えた。
そして、一人の男の死体と、それにしがみつく少女の姿。
「りゅうやどのぉぉぉぉぉぉぉぉっっ!!」
叫び声が、世界を揺らした。

観鈴の心を、揺さぶった。
哀しかっただけなんだ。
心が、かなしさにうめつくされて、なにもわからなくなっちゃったんだ。
だけど……。
だからって、みんな、多分あなたを許さないから。
例えこの苦しみを知ったとしても、みんなも同じ苦しみをかかえているはずだから。
だから、せめて。
わたしはあなたに還って、ずっと一緒にいる……。

843　たった一つの……

「実に心地よい。自分に近い体を再び持てること。その、なんと心地よいことか……わかるか？　無力な人よ」
話ながら次々と容赦なく襲いかかる攻撃の前に、北川は成す術もなかった。
そらは最初の一撃で、既に意識を失っている。
いっそ、そうなった方がどれだけ楽だっただろう。
しかし、それは許されなかった。
ＣＤを発動させる、その仕事を終えずして倒れることは、北川自身許せなかった。
「なかなか耐えるではないか。余もそろそろ飽きた故、終わりにしてやろう」
観鈴を乗っ取った神奈の顔が冷酷に笑う。その表情にレミィの面影は、今やもう無い。
（……まだか……まだ終わらないのか！　いったい、何やってんだよ！）
この際、自分の命が助かることに興味はなかった。
だが、自分は結局何も出来ないまま死ぬのは嫌だ。
先に逝った仲間に、友に、会わせる顔がないではないか。
全ての鍵を握るＣＤを、ずっと所有していたのは北川だった。そして寄り道をせずにメインコンピュータのあるこの場所を目指すことだって出来たはず

だった。もう少し早くこの場所に辿り着いていれば、魔法を発動できてさえいれば、死なずに済んだ人も居たかもしれない。スフィーくらいは救えたかもしれない。自分の行動のツケを他人に払わせてしまっている。そんな自分が、たったひとつ与えられた役目すらこなせずに、ここで潰えてしまうのか。
（ちくしょうっ……俺は一体何なんだよ……っ！）
「そんなに後ろのそれが気になるか？」
　北川はハッと、神奈の目を見た。
「そう驚くことはないであろう？　余は観鈴の記憶も有しておる。人間たちがおぬしに希望を託したことも知っておるぞ？」
「なら……」
　神奈を見る目に怒りがこもる。
「ならなんだってんだよ……」
「残念よのう、と言うておる」
「っ！」
　怒りで誰かを殺せたら……北川はこの時始めてそう思った。
「それは余にとってあまり好ましくないものであるそうじゃ。いっそ、おぬしの命を奪う前に、片付けて――」
「やめろっ！」
「……そう言うと思ったぞ。そこで、余がおぬしに一つ機会を与えてやろう。余がそれを破壊することをその場で見届けるなら、余に手をあげたことは水に流す。おぬしの命を、今は見逃そうというわけじゃ。それができぬなら、おぬしを殺したすぐ後にそれも一緒に破壊してくれよう。どうじゃ、面白いであろう？　五つ数える間に自分で決めよ」
　選択肢は始めから一つしかない。
「五つ……」
　どちらが、より長く、機械を生かせるか。
「四つ……」
　ただそれだけだった。
「三つ……」

そのわずかの時間差で、誰かがこの場にかけこみ、なんとかしてくれるかもしれない。
「二つ……」
可能性に賭ける他なく、また与えられた選択肢以外に、道は思い浮かばなかった。
「一つ……」
「俺を先に殺せよ」
「……それの時間稼ぎを選んだか。余の問いかけに時間を置いて応えたのも、時間稼ぎの一つじゃな。自分の命を捨ててでもというわけじゃ……」
「……」
「いい心構えと言うておこう。だが、それが、余にとっては実に不愉快じゃ」
力のイメージを形作り、神奈は北川の胸に意識を解き放った。
結局、何もできずに終わってしまった……。
口では都合のいいことを言いながら、観鈴を助けることも、魔法を発動することもできなかった。

スフィーの顔が脳裏に浮かんだ。
彼女はかつて何と言っていただろうか。
『大丈夫、この魔法を起動するのに魔法の力は必須ではないから。もちろん、あるに越したことはないけど、この魔法は起動に必要な魔力と術式をパッケージ化しているから、魔力が無くても起動はできるわ。むしろ、必要なのは『想い』よ』
『想い？』
『魔法っていうのは想いを実現させる物、想う力が強ければそれだけ魔法は威力を増すわ。強い想いがあればこの魔法は発動させることができる。それができるのは……アンタだけよ』
最後に、一つの可能性が北川の頭をよぎった。
まさか、そんなことでいいのか？
この台詞を曲解しないと、その結論には届きそう

もない。
だけど……、
最後の最後まで、自分にやれる可能性のあることは試そうと思う。
スフィーは『この魔法は起動に必要な魔力と術式をパッケージ化している』と言った。
スフィーは『この魔法に必要なのは『想い』だと言った。
俺はそれを成功させたいと思っている。
どんなことがあっても絶対に成功させたいと思っている……。
神奈の力が、北川を貫いた。
想いの行き場を北川から解放されて。
プログラムは、起動した。

二十九番　北川潤　死亡
【残り10人】

844　現実に抗う者

銃声やら凄まじい爆音やらを聞き、精一杯の速さでその場に駆けつけた三人
——観月マナ、柏木梓、月宮あゆ——が見たものは。二人の男に、一つの人間だったもの——焼け焦げた死体——だった。
「耕一、大丈夫⁉」
「ああ、何とかな。彰の方も何とか無事だ」
辛い身体で無理して駆け寄ってきた梓に苦い笑顔を浮かべ、耕一は答える。
「これ、は……？」
あゆが指し示したのは、もはや原型を留めていない焼死体。
「……スフィーさんだ」
彰はただ冷淡に、告げる。状況を把握していなかった三人は、凍り付いた。

「彼女は、完全に神奈の影響下にあった。神奈自身が降りてきていたんだ。僕には分かる。もう助けようがない以上、戦うしかなかった。ならば、せめて、ここで決着を――と思ったんだけど、僕の力じゃ及ばなかった。耕一の助勢がなければ、むしろ僕の方がやられていたと思う。結局は、神奈には逃げられ、スフィーさんの死を無駄にしてしまった」
「それって……」
この状況を見て、彰の言葉を聞いて、ただ黙っていたマナが口を開いた。
「……つまるところ、そのスフィーさんは神奈とやらに操られてて、あなたがそれを殺したってこと？」
「そう。彼女を殺したのは紛れもなく僕だ。それを否定するつもりはないし、否定する権利もない。仕方なかったとはいえ、僕は彼女を殺してしまったんだ。もちろん助ける方法があるなら僕だってそれを使ったさ。でも、そんな方法はない。現実的じゃないんだ」
慌てて仲裁に入るのは、耕一。
「ま、まあマナちゃん、落ち着いて。現実的に考えて、ああするしかなかったんだ。彼女を放っておいたら、もっとたくさんの犠牲が出てたかもしれない。彰にとっても辛い選択だったんだと思う」
そう、この人達。
言ってることは、正しいのかもしれない。
でも、ちょっとおかしいんじゃないの？
マナの中の何か、一般的には堪忍袋の緒と呼ばれるそれが、ぶちんと豪快な音を立ててちぎれた。
「ふざけんじゃないわよ！」
この島に来て一番の鋭い蹴りだった。
それが、彰のすねに命中する。ただでさえ満身創痍の身、彰は何をするでもなく倒れるしかなかった。
「お、おい、マナちゃ――」

「耕一さんは黙ってて！」
伝家の宝刀、二発目。病み上がりとは思えぬ一撃。耕一も、もんどり打って倒れる。
梓やあゆに至っては、ただ呆然とその様子を見守ることしかできない。
「そのスフィーさんが神奈とやらに取り憑かれてたとして、まずそれを何とかして助けようとは微塵も思わなかったわけ!? そんなことは不可能？ その挙げ句、スフィーさんを殺すことで神奈とやらも一緒に倒すことができたかもしれなかった？ だから何だって言うの!? 最初から何とかしようと思ってなかったってことじゃない！ 仕方なかったから殺したですって!? 自分のやったことは間違ってないって言いたいだけなんじゃないの!?」
彰はきっと、自分に神奈が乗り移れば、喜んで己の命を道連れにして神奈を滅することを選ぶだろう。
同時に、他人に神奈が乗り移れば、神奈を滅するチャンスさえ残っていればその器を殺すことに躊躇はない。
ぐだぐだと良心の呵責と後悔の念を息巻いてはいるが、結局のところ、根底では神奈を滅するためなら何だって許されると思っている。自分自身も含めて、どんな犠牲をもいとわない。だから、神奈に憑かれてしまっていたという彼女を——スフィーを殺すことに迷いなどなかったのだ。
しかも、理由を付けて正当化しようとしている。
その根性が許せなかった。
ひとしきり捲し立てた後、息を整えたマナは静かに告げた。
「あなたは、神奈とやらを倒すためだけにここにいるのね」
ただ地面にうずくまり、マナの糾弾を黙って受ける彰に。
「だったら一緒にしないで」
それが贖罪のつもりだとでも言いたいのだろう

か？　ますます許せなかった。
私だって、何度もこの島での現実に負けそうになったけど。でも、私の今を支えてくれるものはあまりに大きすぎて。それを捨てて現実に負けることは、絶対にできない。
「私は、みんなで生きて帰るためにここにいる！　現実的じゃない？　ちゃんちゃらおかしいわね！　諦めちゃった人にそんなこと言う資格ないわよ！」

そう、それはある意味での諦めだ。
かつて、彰の親友──藤井冬弥が森川由綺に対して抱いていたそれと、何の変わりもない。
彰も、耕一も、何も言い返すことはできず。梓やあゆは、ただ呆然と見ているしかなかった。

845　光の四柱

静かにふりそそぐ朧げな月の光のもと。草木を薙ぐように、湿った風が吹きぬけてゆく。
ただ一人だけが、大声で叫んでいた。我を忘れる程に、人を殺すという異常さを糾弾する彼女は、現状のこの島に置いて希有な存在だろう。
そんな様子を見守りながら、梓は正常な感覚を維持できている彼女の事を少し羨ましく思った。
ふと視線を感じて、顔を上げる。
（……千鶴姉）
岩場の頂上にある施設の入り口に、千鶴と繭が立っていた。梓と視線が合った千鶴がこくりと頷く。
言いたいことがわかってしまった梓は、ため息をつくと、マナの襟をひょいと掴んで持ち上げた。
「──もういいだろ。言い過ぎだ」
梓の口調はごく穏やかなものだった。
だが、その態度もまた気に食わなかったのか、マナの舌戦は勢いを増すばかりだった。
「何よ！　私は誰になんと言われようと、諦めないわ!!　あんな言い訳なんて、許せない！」

マナが繰り出したローキックを、梓は片足だけ上げてひょいとかわす。
「――それでも、だよ。命がけで戦った相手に言っていい言葉じゃない。護られたあたしたちに、そんな事を言う資格なんて無いよ」
それでも、マナは、収まらない。
「偉そうなこと言わないでよ！　私がここに居れば、こんなの絶対許さ――」
ぱん
これは、あたしがマナの頬を叩いた音だ。
「それだって――言い訳じゃないいか」
そう言えば、男を叩いたことは何度もあったけど。女の子を叩いたことは……なかったよな？
そんなやりとりを、離れた場所から見つめる二人がいた。柏木千鶴と、椎名繭だ。
（梓……それに、耕一さんもご無事で……）
二人の生存を確認し、千鶴はひとまず心の平穏を得た。だがスフィーが死んでいる以上、一時に過ぎない。
「……嫌な結果に、終わったようね」
あの雰囲気からして、神奈備命をどうにかできたようには思えない。そして、ＣＤの中の魔法を起動できるかどうか、かなり、怪しくなった。
「北川に期待するしか、ないですね」
繭の言葉と同時に、梓が千鶴を仰ぎ見る。千鶴は頷いた。
遠くからでも聞こえてくるマナの怒声。彼女の言っていることは正論だ。人として正しい――だが、物事を解決することはできない。
「行きましょう千鶴さん。今は、行動あるのみです」
千鶴の考えを先読みしたかのように繭が言う。
そう、今は何が正しいかを言い争っている場合じゃない。それでは物事は解決しない。今はただ、動くときだ。千鶴は繭に頷いた。
二人は踵を返し、施設の中へ向けて歩き出した。

洞窟めいた入り口は、岩肌から現代的な通路に変わり、二人の足音だけが周囲に響く。
（私が正しくないなんてことはわかってる。だけど、他にやる人がいないなら——私が行うだけ）
それは、昔からずっと彼女の役割だった。
——そのとき、銃声と衝撃が響いた。

施設の中央に位置する一室。
微かに煙をのこした円形の天井に、血飛沫が到達していた。ぼろ布のように倒れた北川の、収縮せぬ瞳孔に光が射しこんでゆく。
マザーコンピュータに歩み寄る観鈴——いや、神奈と言うべきか——が紐状の何かの端を両手で掴むと、縦に引き裂いていった。
ぴりり、と嫌な音が聞こえたような気がする。
不愉快そうに何かを呟く神奈は、元は一本であった白い何かを二箇所に投げ捨てると、毛を逆立てた猫のほうを睨みつけた。

（……なんだよ、これ。プログラムは、作動したんだよな——？）
飛びつく猫が、片手で無造作に叩き落される。さほど弾力のないはずの猫が、ゴムまりのように一回バウンドして、無様に転がる。
（発動……してねーのか？　だったら俺、何のために……）
神奈の両手から光が溢れたかと思うと、次の瞬間メインコンピュータが沸騰したかのように閃光と炎をあげ、遅れて黒煙が舞い上がる。
音はもう、完全に聞こえなかった。
（……くそったれ……バカみてえじゃねえかよ……）
ディスプレイの映像や情報が、次々に消えていく。神奈が外部カメラの画像になにやら話し掛けたようだが、聞こえはしなかった。
光が機械の山を蹂躙するうちに、部屋は闇に包まれていった。静寂と闇の中に、壊れた機械の閃光と

炎だけがちらついていた。
（俺……何のために……死んだんだ、よ……）
（ちくしょう）
自らのすすり泣きも——聞こえなくなった。

北川の意識が完全に闇に沈んだころ、ようやく自動扉が開いた。彼が待ち焦がれていた騎兵隊は、まるで手遅れだったのだ。
千鶴と繭は、非常灯の放つ黄橙色の光をたよりに、部屋を歩き回る。しかしそこに、神奈の姿はなかった。そして、烏の姿も。
ただ一人と一匹の死体が、転がるだけだ。
「……北川くん……」
「今度は誰が——？」
繭が落ちていた銃と気絶した猫を拾い、蛇の死体を整えながら、疑問を口にする。
「……判らないわ」

「可能性としては神尾さん、巳間さん、それに七瀬さん……の三人ですね」
七瀬の名を呼ぶときに、少しだけ不安の表情が混じり込む。千鶴にとって、そういう私情を繭が持つのは、悪い事ではないように思えた。
「そうね。あまり考えたくないけど……入り口から降りてきた途中では会わなかったでしょう。階段ですれ違うか、通気口から出たのでなければ……医務室が危ないかもしれないわ」
深刻な顔をして、繭が頷いたその時。
「心配、ご無用よ」
——七瀬の声が、聞こえた。隣には刀を杖に立つ、晴香の姿がある。
「七瀬さん！」
繭が飛びつき、七瀬はその肩を抱きながら尋ねる。
「さっきの話だけど、つまり……？」
「……はい。七瀬さんたちがご無事なら、残っているのは——神尾さんしか、いないんです」

「そっか……」
余韻を残して呟くと、七瀬は北川の死体の前でしゃがみこむ。今思えば移動中、北川は観鈴を気にしていたようだった。
それなのに――それなのに。

（……ねえ、北川？　あんたそんなに顔は悪くないのに、昔っから女運なかったよね）
手をあわせて、祈る。
（そんなに悔しそうな顔、しないでよ――要するに性格に難ありだからだよ？　たぶん折原とだったらヒネクレもん同士、ウマが合うと思う）
目を開き、立ち上がる。
（だからあいつに、よろしく言っといて。……繭も元気にしてるって、伝えてくれると嬉しいな）
そしてふり返ると、皆が待っていた。
「七瀬……北川とは、古い知り合いだったんだよね？」
「――うん、そうなるのかな」
そして、歩き出す。
自動扉を通り抜けるとき。
もう一度だけ、七瀬は振り向いた。
（……ばいばい、北川）

そのころ施設の外では、五人がせいいっぱい眼を見開いて、遠くを眺めていた。
島を取り囲むように配置された装置。もちろん彼らの目の届くものではなかったのだが、そこから四本の光の柱が立ち昇る。そしてみるみる間に、天空めがけするすると伸びていく。徐々に太さを増して行く柱は、月を打ち消さんばかりに眩い。
死者は絶望の淵に消えていった。しかし確かに、彼の希望は叶っていたのだ。
海中から発せられた光は海を照らし出し、空は輝きを増していく。あの嵐を吹き飛ばした、閃光さながらに島を包んでいる。

「梓さん、これって――!?」
「うん！　きっと、ＣＤの魔法が発動したんだ！」
梓とあゆが、抱きあって喜ぶ。
彰と耕一が、ぱしんと掌を叩きあう。
しかし誰が知っているというのだろう。
この光が天空に満ち溢れるまでの時間を。
そして通気口から彼らを見つめる、神奈の存在を。

ぽち　死亡

846　ためされる絆

「みな……さん」
その声に振り返った先、そこには神尾観鈴の姿があった。
「観鈴ちゃん……!?　何故そんなところに、施設の中にいたんじゃ……」
「中が……中が大変なことに……」
　まさに満身創痍の様相で皆に近づく神尾観鈴。それに耕一が駆け寄る。彼女が倒れる寸前のところでなんとか観鈴の体を支えることが出来た。
「なにがあった？」
「私、地下の部屋にいたんです。そしたらいきなり襲撃をうけて……いっしょにいた北川さんが私の盾になってくれて……それで私だけは天井の穴から逃げ出せたんですが、北川さんは……」
「くそっ、神奈め。もう別の人間に取り憑いたっていうのか」
　彰のその言葉に先程まで、はしゃいでいた皆が一気に静かになった。
「それで……、神奈はだれに取り憑いたんだ？」
怯えはある……。だけど決意をこめて耕一は聞いた。
「耕一さんっ!!」
「マナちゃん……、分かってくれ……いや、分かってくれなくてもいい。でもな、多分、今はやらない

といけない時なんだと思う」
「だけど……」
「だから俺は決着をつけようと思う」
「そんな……そんなの、間違ってい――」
「ああ!!　間違っているさ！　絶対にこんなの間違っている!!　だけど、俺にはもう他に方法がわからないんだ！　わからないんだよ……」
　みると、耕一の両の眼から涙が溢れ出してる。でも、彼はそれを拭いもせずに観鈴に訊ねた。
「教えてくれ、観鈴ちゃん。今度こそみんなで決着をつける。神奈備命は誰に……誰にとりついたんだ」
「誰だと思います?」
「今生き残っていて、施設の中にまだいる者……」
　耕一は言う。
「千鶴姉と繭ちゃんは違うな。中から銃声みたいな音がする前に私は二人を見た」
　と、梓。
「後は、七瀬さんと巳間さん……か」
　彰が続ける。そして再び皆の目が観鈴に集中した。そして観鈴は言った。
「はい……、襲い掛かってきた人物。それは七瀬さんです」
「もう、方法は無いの……ねえ、みんな。ねえ、耕一さん……」
　消え入りそうな声でマナは呟いた。
「わからない。だけど俺はまだ絶望しちゃいないよ。だって」
　耕一は言う。半分はマナのため、そしてもう半分は自分に言い聞かせるために。
「北川はやってくれた。結界は発動したんだ。だからチャンスは絶対に……」
「そんな筈はっ!!」
　突如、驚愕の声をあげる神尾観鈴。
「……?」
「あ……いや……、私、北川さんが撃たれたの見た

から……」
「ほら、四つの光の柱。おそらく例のＣＤだよ。多分、北川の奴が最後の最後にやってくれたんだ」
「っ!!……そうですか」
(なあ、観鈴ちゃん、相当まいってないか？)
(……確かに)
そのやり取りを、あゆだけは少し離れて見ていた。違和感を感じた。最初、観鈴が姿を見せたときから感じていた違和感。それは、どこか懐かしいようでどこか冷たいなにか得体のしれないもの。そして、みんなとの会話。
何故、彼女は神奈が乗り憑いた先をすぐに言わなかったのだろう？　そして結界の事を聞いた時に見せた表情。確かに説明することは可能だ。だけれど……。
(うぐぅ……でも、何かが……何かがおかしいよ、絶対に)
「あゆちゃん。みんな固まって動こう」
耕一の声にはっと我に返る。みなが呼んでいる、今は行かなきゃ。
その時あゆは見た。みんなと一緒にこちらを見る神尾観鈴の目を。
それはほとばしる鋭い意思、そして闇……そして、あゆを品定めするかのような光があった……。

847　相棒

少々、時を遡る。

銃声が、聞こえた。
「な、何!?」
慣れぬ仕事に四苦八苦しながら何とか晴香の治療を終えた七瀬が、驚きの声を上げる。
銃声がした方向は――
――施設の最奥と思われる場所。
恐らくは、例のＣＤの解析を行っているというコ

ンピュータルーム。
何があったのだろう？
今、誰がそこにいるのだろう？
そんな疑問が次々と浮かんでは消えたが、この場に留まっている限り、どの疑問も解決しないことは明白だった。
ベッドの上で上半身を起こそうとしている晴香を押し止め。
「……あたし、行ってくる。晴香はそこで待ってて」
自らの獲物——小銃を肩に掛け、一振りの刀を手にし、医務室を出ていこうとする。晴香が動けない以上、自分だけで行かなければならない。
今まさに部屋を出ようとした、その時。
どすん——という鈍い音が、七瀬を引き留め、振り返らせた。
七瀬の目に映ったのは。
ベッドから無様に転げ落ちた晴香の姿。
巻いたばかりの白かった包帯に、血が滲む。
それはそうだ。傷口は閉じていない。動けば出血と、そして痛みを伴うのは必然だった。運良く致命傷でなかったとはいえ、安静にしていなくてもいいというわけではない。
彼女はベッドに立てかけてあった自分の刀にすがり、なおも立とうとする。
「ちょ——ちょっと、晴香!?」
「私、だけ、こんなところ、で、寝てるわけ、にも、いかない、でしょ」
駆け寄ってきた七瀬に対し、一言、一言、肺の奥から必死に絞り出すような声で告げる。
ふと、思った。
もしここにいるのが七瀬ではなかったとして。
今はもういない、自分の大切な戦友——保科智子だったとして。
彼女だったとしたら、どうするのだろうか？
『止めて聞くような性格やないもんな。枕元に立た

れて恨み辛み聞かされるのは勘弁や』
そんなことを言いながら、肩を貸してくれるような気がした。
でも、彼女はもういない——
——晴香の身体が、ふっと軽くなった。
「七瀬……」
晴香に肩を貸したのは、今ここにいる七瀬。
それは、晴香をここに留まらせるためではなく。
晴香と共に道を歩むため。
「どうせ晴香のことだから、このまま放って行ったら這ってでもついてこようとするんでしょ？　そんなことになったら寝覚め悪いじゃない」
少しだけ楽になった身体で、晴香はあえて、ただ一言だけを伝えた。
それ以上の言葉は、必要なかった。
本来ならば、その言葉すら必要なかったのかもしれない。
でも、言っておきたかった。

「……頼むわよ、相棒」

848　正面衝突

眼光、と言えたかもしれない。
あゆが、その鋭い眼光に体の震えを禁じえなかったのも、あるいは必然だったのかもしれない。
(うぐぅ……おかしいよ。おかしいんだよう)
混乱。
あゆの今の精神状態を一言で形容するならば、こんな言葉になるのであろう。
疑念を口に出すのはやはり簡単である。しかし、それがもしも見当違いなものだったとしたら。
しかし。
いくら頭を振ってみても、いくら一緒に歩く耕一のスカートの裾を握っても。その疑念は、あゆの脳裏に焼きついたまま。
「どうした？　あゆちゃん。具合でも……」

見かねた耕一が声をかける。
「あ　ううん、何でも無いよ、耕一さん」
慌てて笑顔を取り繕う。
「ん、そっか」
どうやら耕一は、こういう嘘を見抜くことに関しては才能が無いようだった。
「ところで耕一。あたしたちなんとなく中に入っちゃったみたいだけど、どうするの？」
梓が口を開いた。
「……とりあえず七瀬さんを探そう。……取り憑かれているらしいから、な」
「探して……見つけて……どうするの」
マナが言う。静かな口調。それでも、押し殺した感情が伺えた。
「……」
誰も、何も、答えぬまま。
一行は、通路を歩く——

「……耕一」
話し掛けたのは、梓だった。
「あゆちゃんたち、連れてきてもよかったのかな」
最悪、殺し合いが始まる。そんな現場に、観鈴、あゆの両名を連れていってしまっていいのか。
まして観鈴は精神的に相当参っているようだ。これ以上の負担はかけられないだろう。梓はそう言いたいのだ。
「うーん……だが、もし俺達と離れているときに神奈がそっちに行ったらどうする？　そんなことになったら神奈にいいようにされちまう……と俺は思う」
あゆ達の手前、語尾を少し濁した。
「そもそもさ、あたし達が中に入ることって無いんじゃないの？　結界だって……そうねえ、夜明けまでには完成すると思うし、あたし達は外で待ってたほうがいいんじゃないのかな」
梓も肉体的にはそろそろ限界に達している。だか

らだろうか。
　発言内容が、少し逃げ腰になった。
「それだと中にいる千鶴さんたちが心配だ。繭ちゃんを連れているし……やっぱり助けに行った方がいいと思う」
　そんな梓を咎めるでもなく、だが耕一はその提案を受け入れなかった。
「そっか……そうだね」
　それっきり、梓も黙り込んだ。

　黙っているのは、彰。
　彰は彰で、あゆのそれとはまるで異質の、しかし、観鈴に対して微かな疑念を持ち始めていた。
　それは、ふとした疑問。証拠など何も無い、ある事象。
（僕は観鈴という女の子をよく知らないけど）
　よく知らないからこそ、この子を疑う事ができる。
　襲ってきた「人物は」七瀬さんです……と言ったよな。
（言いまわしが少しおかしくないか？　ふつう「襲ってきた人は」って言わないだろうか？）
（おまけにその前に「誰だと思います？」と訊いた。この状況下、そんな事をいう余裕が女の子にあるとは思えない）
　しかし、それは観鈴と大して話したこともない自分には、完全に憶測でしかない。
（天井の穴から逃げてきた、と言った。どうやって天井まで手を届かせた？　ハシゴかなにかあったのかもしれないが）
　そんなものを利用する隙を神奈が黙って見過ごすわけは無い。まさか盾になった北川を踏み台にしたわけではあるまいし……。
（そして……）
　結界の事を聞いたときのあの狼狽ぶり。無論一瞬だったが普通「本当ですか!?」と喜ぶのではないだろうか。

何故「そんなはずは」なのだろうか。それじゃまるで……。
決定打が、欲しかった。
どちらの決定打が欲しかったのか分からない。疑念を吹き飛ばす決定打か。あるいは疑念を裏付ける？

「みす――」
彰が言いかけた、そのとき。
「あ、おーい、千鶴姉ーーー！」
梓が叫ぶ、その先には。
長い通路のその先には。
柏木千鶴と、椎名繭。
少し遅れて、巳間晴香。
そして――――それを支える七瀬留美。
互いが互いを認識したとき。全員、その場で凍りついた。
そして張り詰める、空気。
あゆ以外の、誰もが思った。
――――一触即発　と。

849　一触即発

彼は、悪夢に苛まれていた。

畜生。
ポチはあいつにやられた。
そらはどうなった？　そらもやられたのか？
記憶が定かじゃない。俺は無我夢中であいつに突っかかっていって――
体中の節々が痛いことは痛い。でも、死ぬような傷じゃない。
結局俺みたいなのが生き残るわけか。
畜生。
そして悪夢の目覚めた先には、あいつの姿。

そらが守ろうとし、守れなかった彼女の姿。
何だ、まだやれることは残ってるじゃないか。
俺は必死になってもがき、自らを抱える少女の腕を振り解いた。
猫らしくなく、無様に地面に落ちる。情けない話だ。
そして俺は、渾身の力を以て――。

最初に変化に気付いたのは、彰だった。
同時に、最も行動が早かったのも。
繭の手から落ちたあの猫は、観鈴と共にいたあの猫だ。
ぼろぼろになったその猫が、今は観鈴に向けて毛を逆立て、唸っている。
彼は振り向き、自らの持つ銃を観鈴に向けた。
『まずそれを何とかして助けようとは微塵も思わなかったわけ!?』
そんな言葉をふと思い出した。

神奈に囚われたスフィーと対峙した時にはなかった選択肢がある。
だが彼は、それを捨てた。
今更、それが贖罪になるはずもない。本当に今更だ。
彼は気付いていない。
彰は心の中に潜む鬼を理性の檻に閉じ込めているが、彼自身が既に復讐鬼とでも言うべき存在に変質してしまっていることを。
そして、引き金を――。

(少々浅はかであったか)
ここまで生き残ってきた彼らを過小評価していたつもりはなかったが。それでも、完全にそれを払拭することはできていなかったのだろう。
神奈はその力の一部を開放した。
彼女の周りにいた者共々、鬼飼いを吹き飛ばす。
銃弾は発射されない。

咄嗟の行動ゆえ、その衝撃は彼らに致命の一撃を与えるには至らない。
その隙に身を翻し、逃げる。
浅はかではあったが、それなりの収穫はあった。
禁呪の発動。
恐らく、万全の態勢を以て臨まねば返せない。
それでも無傷では済むまいが、返せさえすれば致命傷にはならないだろう。
ここで生き残り全員を一度に相手にするのは、得策とは言えない。
追ってきた者を、各個撃破すればいい。
そして禁呪さえ破れば、もう自分に絶対的な致命の一撃を与える手段はない。
彼らを屠るのは、それからでも遅くは——。
神奈であろうその者の行動は、繭には理解不能だった。
何故、危険を侵してまで観鈴を騙り、彼らの中に紛れていたのか？
何故、今このタイミングで正体を明かしたのか？
何故、不意打ちで多くの人間を屠るのではなく、逃げるのか？
答えは見えない。が、やらなければならないことはある。
何か見えない力に吹き飛ばされた、観鈴の周囲にいた者達。
観鈴はすぐに自分達に背を向け、逃げ出した。
彰は何とか立ち上がり、観鈴を追う。
千鶴もまた、それを追うべく駆け出す。
自分もそれに追随する。
それが、無念の中で死んでいったであろう北川への——多くの人間への。
せめてもの弔いになると信じて。
「その子のこと、お願い！」
そのぼろぼろの猫を指しているということは、間違いなく伝わるだろう。

繭は走りながら、後ろの七瀬に――。
「千鶴さん！」
懐かしい声がする。耕一さんの声だ。駆けながらふと見やる。耕一、梓、あゆ、マナ――皆吹き飛ばされこそしたが大事はないようだ。
再び生きて会えたことを、耕一さんと喜び合いたかった。楓と初音を失ってしまったことを、耕一さんと悲しみ合いたかった。

――だが、今は、まだその時ではない。

大切な人を何人も失った。
父、母、叔父、楓、初音――私からそれらを奪った神なんて信じていない。それに――もし、神が居たなら。偽善者で人殺しの私には、とうの昔に天罰が下っている筈だろう。
私が信じているのは家族だけ。
自分自身ですら信じるに値しない。
神になど祈りなどしない――それでも、彼と再会させてくれた事にだけは感謝してもいい。
けれど、今は目の前の神を奈落に落とすとき。
一振りの刀を手に目指すのは――
観鈴――彼女の姿をした、神奈。

850　光に背を向けて

孤影が、硬い足音を響かせて駆け抜ける。
飛ぶように走る彼女の表情には、微妙な困惑の色があった。どこか腑に落ちない違和感がある。
……神尾観鈴の身体を、手に入れた。
そして当初に及ばぬとは言え、期待通りの力を取り戻した。今なら恐れるものなど、何も無いはずであった。

（……しかし、あの場で感じた波動。あれは、余を封じていた刀の発したものに違いない）
スフィーが記憶も、千鶴がそれを持っている事を肯定していた。
（あの刀は――危険に過ぎる）
神奈が走り続けていると、施設から立ち昇っていた光の柱から、一筋の細い光が降り注ぎはじめた。
神奈は光の不快さに眉をしかめ、階段を一段飛ばしで上っていく。数十段を登りつめた頃、微かに下から追ってくる足音が響いて来たが、それ以上に光が気になった。日光のように薄く黄色がかった光が、その本数を増やし、天から幾筋も伸びてきているのだ。
（徐々にだが……降り始めおったか）
憎々しげに光の柱を睨みつけ、神奈は更に速度を上げた。
「――ん、もう！」
彰を追う繭は、いとも簡単に距離を離されていた。教会へ向けて走ったときもそうだったのだが、肉体的な強さは何も変わっていないのだから、仕方がない。それでも歯痒さのあまり、誰にともなく悪態をついていた。
「繭ちゃん！」
階段に到達する頃には、早くも千鶴に追いつかれた。息を整えるために足を止め、その間に武装を整え、相談する。
「千鶴さん――だいぶ、離されてしまいましたよ」
「……仕方がないわ。単独で追うのは、リスクを考えるとあまりに危険なのだし――彰くんは、そういう思考すら捨ててしまっているのかもしれない」
繭は頷く。あの追い方は異常すぎる。最愛の人を自らの手で殺すような事をさせられたら、人はあれだけの妄執を抱くようになるのだろうか。それは、すごく悲しいことだと繭は思った。
「……でも、見捨てるわけには」

「ええ、そういうわけにはいかないわね」
二人で頷き合い、大きく息を吸って、鋭く吐き出すと同時に、階段を駆け上り始めた。
そうして先を急ぐ二人の息が再び切れ始めた頃、ひとつの異変が起こった。
「――!?」
「この光は……」
細い光が、階段を突き抜けて射し込んでいたのだ。太陽のように、やわらかささえ感じさせる暖かな光。
千鶴が、その光に掌をかざして、ぽつりと言う。
「北川くん……成功させていたのね」
「北川……」
少ししんみりとした、千鶴と繭の二人。その彼女たちに突進でもするかの如く、耕一と梓が転がり込んできた。
「千鶴姉！　繭!!」
「千鶴さんっ！　彰は――ってなんだこれ!?」
耕一が天井を見上げながら、光の柱を不思議そうに見つめる。
「耕一、あの光が差し込んでるんじゃないか？」
「……梓？　あの光って？」
耕一に答えた梓に向かい、千鶴が尋ねる。
梓は島外から立ち登る四本の光の柱が、天を光で埋め尽くさんとしていたことを説明する。
「あの調子だと、もっと時間がかかると思ってたけど……」
「いや、既にあの時点で、柱は月より明るかったんだ。どこまで光度を上げる必要があるのかは解らないけど、意外ともうすぐなのかもしれない」
それは、あくまで予想でしかない。だが、この地下まで光が到達するならば――可能性は、高いのではないだろうか？
「それなら尚更、彰くんを見捨てるわけにはいかないわね」
「うん、千鶴さんの言う通りだ。急いで彰の援護に向かおう！」

耕一はそう言って結論すると、ぱあん、と大きな音を立てて自らの頬を叩き、気合いを入れた。そして息の整わぬ繭を見るや、本人の許可も得ずに彼女を抱え、軽々と肩に乗せる。
「ちょ――ちょっと⁉」
「悪いね、文句は後で聞くよ。――みんな、一気に走るぞ‼」
軽快に三つの足音を立てながら、彼らは階段を駆け上がって行った。

神奈は階段を登りきり、出口を遠くに見ながら歩みを止めた。
もはや外に出て確認する必要はない。天は光に満ち溢れ、大気を満たしているだろう。その余光が入り口から射し込み、また天井を突き抜け、ここに至っているのだ。
(皮肉なことよ……これを一瞬で成し遂げた、爺のそれよりも、むしろ不都合だとは……)
源之助の魔法は、一瞬であったがために大気中の念が受けるダメージは致命的なものではなかった。
しかし、大気に光が満ち溢れる今の状況で精神体のみになれば、あの光に焼かれて消滅してしまう可能性は少なくない。
(即座に降り掛かって来ぬのは、幸運なのやも知れぬ。しかし、逆を言えば天に光ある限り、今の身体を失えど天に戻る訳にはいかぬということだ)
小さくひとつ、舌打ちをした。
(この神奈が……追い詰められていると？)
汗がひとすじ、額を伝う。
(……否、これは余の流したものではない。この観鈴という軟弱な娘が流したものよ……)
両の手に力を込め、気力を保ち考える。実際にこの光が注がれるとき、再び呪詛を反すことが可能であろうか？
否。この身体は疑いなく強力であるが、力の蓄積が明らかに足りない。

（最早、楽しんでいる余裕などあらぬ――故に、手段も選ばぬ。奴らを皆殺し、力を蓄えて呪詛を反すのみ……）
神奈の操る観鈴の顔が、こころの暗黒を映し出すように、邪悪に染まる。そして射し込む光を撥ね退けるように、輝く翼をばさりと大きくはばたかせた。
光に背を向けて、彼女は振り向く。視線の先に、一人の青年が立っていた。
「……鬼飼いか。まずは、お主から――死ぬか？」
「いいや。死ぬのは、お前と――僕だけで、いい」
彰は、光を背負い翼を広げる神奈の美しさに気を取られながらも、即座に理解した。
神奈は、あの光を嫌っている。そのために、彼女の逃げ場は――天にも、地にも――無いのだろうと。
射し込む光が、神奈の翼の輝きに打ち消される。しかしその輝きに抗うように、彰は赤い眼光を放っていた。
互いの視線が、激しく火花を散らしていた。

「ギ、ニャーーーー!!」
「ギャーーーーー!!」
叫んで猫と格闘する七瀬を、晴香は呆れて見ていた。
「ウニャ、ニャギャ!!」
「猫の分際でなめないでよ！　あたし七瀬なのよっ！」
遅れて立ち上がったあゆとマナが、猫を助けに来る。
「うぐぅ……虐待だよぅ……」
「……最低」
七瀬を引っ掻きまくった猫は、大人しくあゆの手に納まった。決して機嫌が悪いわけではなかったようだ。
「七瀬……あんた、動物の世話は向いてないわ」
「……うるさいわね」
あゆの鞄から顔だけ出した猫が、今でも七瀬を威嚇するに至っては、全く反論できなかった。乙女的

には、ちょっと傷付き気分である。
四人の歩みは遅い。それは怪我人の晴香に合わせているからだ。
しかし、ふと気が付くと普通のペースで歩いていた。
「ちょっと晴香？　大丈夫なの？」
「あのさ、七瀬……もう、離していいよ」
そう言いながらも、こめかみのあたりを押さえている。
「何よ、痛むんじゃないの？」
「ううん……あんまり痛くなくなってきた気がする」
「薬が、効いてきたのかしら？（それとも……やっぱりレディースは、気合いが違うのかしら）」
「……かも、ね（七瀬のあの顔……ろくなこと考えてないわね）」
互いの視線が、激しく火花を散らしていた。

851　遺書。

後続が追いつくまでに、どれ程の時間があるだろう。耕一たちが僕に追いついて、並んで神奈と対峙するまでにどれだけの時間があるか。当然、僅かな時間しかないと思う。そしてその僅かな時間が、僕に許された『僕だけの復讐の時間』で、出来ることならばこの僅かな時間に。
全てを終わらせようと思った。
僕は小さく息を吐きながら、昼と見間違おうかという程明るい空の下で、目の前に立つ少女を——神尾観鈴の姿をしている神奈備命を、真っ直ぐに見つめていた。彼女の背からは真っ白な翼が生えていた。あまりに幻想的で、幻惑的で、その翼がひとたび舞えば、何もかも呑みこんでしまう。僕はそう思った。その翼こそが、ヒトとそうでないものを分ける明確なる象徴なのだ。ヒトならば、あの翼を見るだけで

戦うことが出来なくなるだろう。
けれど僕はもうヒトではなかった。
「嫌な光だな」
僕は自分の前で微笑んでいる神奈備命に向けてそう言った。この光はヒトでないものを焼き尽くす光だ。だから目の前で翼を羽ばたかせる、人外たるあいつも当然、この光の下は嫌な筈だった。
「お主も嫌ではないか？　このような眩しい光は。まるで身体が焼けるように熱くなるわ」
神奈の笑顔からは余裕が消えない。それはあいつも理解しているからだ。僕も同じように、あの光に焼かれるべき、人外たる存在であるということを。
「ああ嫌だな。僕も光は嫌いなんだ。太陽も嫌いだ。僕みたいな最低の人間がこの世界に存在しているんだ、って否応なしに理解してしまうからね」
「余も同じよ。光も太陽も、虫唾が走るほどに嫌よ。叶うことならば、二度と太陽が姿を現さないように丸ごと消し去ってやりたいものよ」
僕たちは向かい合って笑う。
「夜は美しいな、鬼の青年よ」
「ああ――良く似てるんだよな、僕たちは」
「まったくよの。もう一度聞こう。お主は余のものになるつもりはないかの？」
――戦いが始まる。
「僕は、お前が嫌いだ」
「余は、嫌いではないぞ」
――この時のために、僕は恥を忘れ、悲しみを忘れ、感情を忘れ、こうして生き延びてきた。
「それでも。僕はお前が嫌いだ」
右手に持ったイングラムM11を握り直し、構え、目の前で笑う神奈備命に向け、最後の戦いを始めようと決めた。長かった戦いに終止符を打ち、初音の仇を取って――全てを終わらせよう。
「――僕は。僕が嫌いだからな」
迷わずに銃の引き金を引く。それが始まりの合図。

銃口は神奈の頭蓋に向けられ、弾丸はその顔目掛けて真っ直ぐ飛んでいく。ぱらららと舞う銃弾の雨は目にも留まらぬ速さで全てを終わらせようと、止むことなく降り注ぐ。その程度で仕留められるとは思わない。それにしたって傷くらいは負うだろう。この速度の弾丸を無傷でかわしきれるほどの化け物がいるわけもない。

しかし、僕の目の前に広がる光景は、その化け物の存在を知らしめるそれだった。神奈はその背中の羽根をくるりと舞わせ、自らの身体を守るように蠢かせた。中空に舞いながら神奈は羽根を振る。その羽根が僕の放った弾丸の全てを弾き飛ばしたと理解するまでに二秒。その二秒の間にも僕は姿勢を低くして走っている。殆ど無意識のうちに敵の反撃に備え回避行動に入っていたのだ。思考が回りだす。予想していたことではないか。あいつは化け物だ。化け物を僕は相手にしているのだ。常識を捨てろ。そして常識に則って考えろ。あいつを殺すためにはどうすればいいか。決まっている。あの羽根で弾丸をいなす暇がないほどまで近寄って弾丸を直接その肉体に叩き込むのだ。あの肉体は神尾観鈴のもので、あの羽根を除いた肉体は全て普通の人間のものである筈だ。僕は走る。走って走って、回避から攻撃に移る瞬間を見据えて走る。

気付く。神奈はまだ、何の攻撃もしてこない。そもそもあいつは何の武器も持っていない。あいつはそれならどうやって僕を、僕たちを打ち倒そうというのか。足を一瞬止めて考えたところで、神奈がにやりと笑ってその手を軽く振る、

ひゅん、と風切音が聞こえた。

僕は迷うことなく地面に転がり込んだ。同じ瞬間に背後でさくり、と音がした。思わず後ろを見たが何もない。ただ『刃物が木の幹に刺さった音』がした。

「今のは、」

僕は呆然として呟き、そしてはっとして次の瞬間

にはまた走り出す。止まっていてはいけない。
「魔法などといった大したものではない。ただの投擲武器よ。お前には見えないだろうが、よくかわした。だがまだ序の口よ」
神奈はまた軽く手を振る。風切音。頬を切り裂かれたような衝撃。実際には何の傷もない。ただ、暴風が真横を通り過ぎただけだ。僕は何が起こっているか判らないままそれでも走り、走りながら右手の銃を遊ばせておいてはいけないと引き金を引き、その弾丸がまたも神奈の羽根に弾き返されるのを見る。この距離から攻撃しても何にもならない。もっと接近しなければ。だが近づこうとすれば目に見えない攻撃が襲い掛かる。『音』でなんとか回避することが出来ているものの、これ以上近づいてはかわすことは出来ないと思う。そして、その攻撃の一つ一つが必殺で、もしも直撃を受けてしまったならば、その瞬間に自分は二度と立ち上がれなくなるだろう。
——考えるまでもない。自分が圧倒的に不利だった。『音』でしか回避出来ない自分と、羽根による鉄壁の防御を持つ神奈。今はまだ良いが、かわしきれない攻撃を少しずつでも受けていったならば、体力は奪われ、そしていつかは直撃を受けるだろう。
そしてその瞬間は一瞬の油断で訪れる。回避し続けて、地面に転がり込んだところで追撃が来る。僕はとっさに左腕を出して顔を庇う。それは完璧に僕の頭蓋を狙い定めた一撃だった。
「あぅっ——ッ！」
左腕に走る冗談のような痛みは僕の気力を根こそぎ奪い取る。銃弾を受けたような激しい痛みは、僕の運動神経の全てを断ち切るほどの一撃で、僕は腕を抱えて転げ回る。イングラムを手放しそうになり、それでも僕は歯を食い縛って立ち上がり、再び弾丸を神奈に向けて放つ。弾丸を放っている間は神奈も攻撃を放つことは容易ではない。攻撃こそが最大の防御である。だが問題は、その攻撃が長く続けられ

ないこと。弾丸には限りがある。最低でもあいつに接近してその命を完全に潰しきるだけの弾丸を残しておかなければ。その躊躇が弾幕を薄くした。再び始まる神奈の攻撃。走りながら僕は歯を食い縛り、自分の甘さを理解する。

ただ対峙さえすれば、勝てると思っていた。自分は真っ直ぐな決意の剣で以って対峙に臨むのだから、その決意が折れさえしなければ勝てると、無意識のうちにどこかで思っていた。正義のヒーローでもあるまいし。

「そうだよな」

決意の剣だけでは勝てない。要るのはひとつ。

勇気の矢だ。

死ぬことを恐れるな。自分に必要なのは、死を恐れず突っ込む勇気だ。簡単なことなのだ。傷を恐れず、懐に潜り込めば五分。あいつの攻撃を全て受けてでも懐に潜り込まなければならなかった。

怖かったのは、何も出来ずに死ぬことだった。そんなことを恐れていて、何かが出来るわけがなかったのだ。止まるな。勇気の矢を真っ直ぐに飛ばせ。それこそが、僕の戦いではなかったか。

その勇気が胸に生まれてしまえば。

――僕はただ走るだけだった。神奈との距離は二十メートル。この距離を真っ直ぐに走り抜けるのだ。神奈は僕の行動の変化に気付いたのだろう、何事かを呟いて笑うと、今まで以上の早さで手を振り、今まで以上の数の見えない弾丸を放った。

頬を切り裂く音。腕を貫く音。足を傷つける音。その一撃一撃が必殺の筈だった。けれども僕は一度たりとも躊躇しなかった。左手を振り、出来る限りの攻撃を弾き飛ばす。左手から噴き出す血。左腕は捨てようと決める。この左手一本であいつに近づけるならば本望だ。僕は薄ら笑いすら浮かべて走る。傷が増えて上手く走ることが出来ないけれど、思わず痛みで足が止まることはあったけれど、それでも僕は真っ直ぐ。最短距離を走り抜ける。あと十歩。

「――鬼だったな、お主は」
そして、そんな呟き声が聞こえた。――全力で戦わなければ、失礼というものよな」
神奈は後ろに下がることを止め、目を一瞬閉じ。そして、手を振ることも、羽根を振ることも止めた。今がチャンスだった。この僅かな距離を埋めて、零距離で弾丸を叩き込む。弾丸の残りもそれほど多くない。止まっていてはいけない。例え神奈がどんな隠し玉を持っていようとも、そんなものに怯えては何も出来ない。僕は全てを賭けた。その全てを否定する攻撃が、僕の前にあるわけがないのだ。
距離を詰める前に、神奈が動いた。
目を開き、高く天にかざした神奈のその手から、風が生まれた。今までの風とは違う。今までの攻撃はこの風が『漏れた』ようなものだったのだと思う。激しい力の奔流。先程までとは比べものにならな

「――ッ!?」
そして、
左腕以外に神奈の攻撃が命中しなくなった。
殆ど無意識のうちだった。僕はあいつの手の振り方で、どの程度の速度で、どの部位を狙った攻撃がやってくるかを読み始めていたのだ。当然完全にかわすことなど不可能だ。けれども、『捨てた左手』でその攻撃を最小限に抑えることは可能になっていた。神奈の顔が驚愕に歪む。まるで目の前の出来事が夢か何かであるように。
「お前は、何者だッ!!」
「七瀬彰だよッ!!　お前を殺すためだけにおめおめと生き延びてきた、最低の人間だよッ!!」
接近されることに怯えたのだろう、神奈が後ろに向けて飛ぶ。攻撃が一瞬止み、僕は躊躇うことなく右手のイングラムに火を噴かせた。やはり羽根で完全に防がれたものの、神奈の顔に先ほどまでの余裕はない。

い程大きな力だった。何の力も無い自分にも見える。神奈の手にあるのは、それは大きな剣だった。風で出来た剣。その剣が神奈の手を離れ、走り寄る僕目掛けて、神速と言うべき速度で襲い掛かる。僕の心臓目掛けて真っ直ぐ飛び掛る風の牙。
それでも。
それは『僕の全て』を否定出来なかった。
「——ッ!! 何だとッ!!」
その必殺の剣すらも、僕は左手で受けた。突き刺さろうとする刹那、僕は完全に身体の力を抜き去り、そして、一瞬の力の交錯で、その剣を弾き飛ばしたのだ。神奈の目に一瞬の躊躇。その躊躇を僕は見逃さない。痛みの走る身体に鞭を打ち、あっという間に距離を完全に零にした。イングラムを構え、呆然とした神奈のその脳天に充て、小さく息を吐いた。
僕の勇気の矢は。
——勝利を貫いた。

神奈が、呆然とした顔をしたのは一瞬だった。そして次の瞬間にはどうしてだか嬉しそうに笑う。
「本当に、優秀な戦士よ。お前を駒に出来なかったことがひどく悔やまれる。——流石に鬼の血よの。柏木初音の血を貪って生き延びた身体よ」
不愉快になる。どうしてこいつは、死を目前にしてこんな顔をするのだ。こんな挑発めいたことを言うのだ。
「——すぐに、殺してやるよ」
神奈は笑顔を崩さない。
「いや、余は嬉しいのよ。お主のような強者がこうして現れたことがな。何もかもを犠牲にしてでも、何かをやりとげようとする強固な意志」
こいつは、何を言っているのだろうと思った。ここに至って僕を懐柔しようとしているわけではないだろう。それでは、この言葉は一体何を意味している。直感する。これ以上こいつに喋らせてはいけない。こいつに矢を折られる前に、剣を弾かれる前に、

全てに決着をつけなければ、
「そんなお主でも。また引き金が引けるのか？」
それで指が硬直してしまった。
「お主は、こたびも引き金を引くのかの？　七瀬彰」
その声を聞く前に、銃を撃たなければいけなかった。僕の矢は今にも折れそうになり。僕の剣はもう弾かれかけていて。
「——のう？　七瀬彰」
僕はまた。スフィーと同じようにして、
神奈を殺すために、神尾観鈴を殺すのか？
「ははは。引けないじゃろう？」
——引き金を引け、七瀬彰！　この女の言葉に惑わされるな！　この女は僕を惑わそうとしているだけだ、すべてを終わらせる為には引き金を引くしかないんだ。神尾さんだって判ってくれる筈だ。ここで殺さなければ、皆死んでしまうんだ。これが最後のチャンスだ、この距離なら彼女の脳天を間違いなく打ち抜ける、
「共に還ろう、と誓った仲間の身体を、殺すのか？」
「——————お前を殺す為だッ」
僕の躊躇は。それでも、秒数にして一秒。僕の僕らしかった全てはもう壊れ切っていて、その躊躇が最後のカケラで。僕は、悪鬼になった。

——————自分のやったことは間違ってない、って言いたいだけなんじゃないの!?——————

最後に観月マナの言葉が浮かぶ。そう、間違ってないと思いたいだけだよ。だけどね。
その一瞬の後に、僕は引き金に指をかけた。
何かを正しいと信じなければ、僕は生きていけない、そんな弱い人間なんだよ。神尾さん。こいつを殺したら僕も死ぬから、それで許してくれな。
僕は引き金に指を充て

階段を登り切った柏木千鶴と柏木梓、椎名繭、そして、柏木耕一は――三つのものを、見た。本来闇に包まれている筈の、けれども白い光に包まれている森の前で闘う、真っ白な翼の生えた少女――神尾観鈴であり、神奈備命であるその存在と、その少女の脳天に銃口を向けて立ち尽くす、七瀬彰の姿と、
――中空に浮かぶ、巨大な剣。
無防備な彰の背中にその刃先は向けられていた。そして、彰が銃の引き金に指をかけた瞬間。その剣は俄かに速度を持って、彰の背中に向けて襲い掛かった。
「彰ぁッ！　よけろぉぉぉ!!」
耕一は繭を背負ったまま叫び、千鶴と梓は、二人が対峙している方向へ駆け出す。剣を止める為に走った。それでも遅すぎた。その声に、彰はぼんやりと振り向いて。その顔には何の表情も見えず、ただぼんやりと、無感想に耕一の顔を見て、次の瞬間には、その巨大な刃は彰の心臓の少し上――左腕の付け根にぐさりと刺さっていて。
彰に表情が生まれた。困惑と驚愕に充ちた、痛々しい表情だった。大地を切り裂くような大きな絶叫が聞こえたかと思うと、その剣は小刻みに動き出し、彰の肩を抉り取ろうとせんが如くに暴れ、そのままその腕をねじり切った。
「彰くんッ――！」
千鶴と梓の悲鳴が聞こえる。腕が弾け飛び、一瞬の後に血が噴出した。その表情は髪に隠されて良く見えない。驚愕は消えた。ただ、困惑だけがあった。
何かを呟こうとして彰は倒れた。
誰もが思った。今度こそ、七瀬彰は死んだと。
「まず、若い鬼が一人死んだ。次は――誰かの？」
神奈備命は、その真っ白な翼を翻し、一つ大きく深呼吸をする。そして、倒れた七瀬彰の傍らに落ちていたサブマシンガンを拾い、彰の身体に刺さった剣を抜き取ると。

立ち尽くす千鶴と梓を一瞥し、――薄く、笑った。

どくん、と。
心臓の音がひとつ鳴った。
血が流れ過ぎた。左腕がなくなった。酷使してきた足が遂に動かなくなった。地面に突っ伏した顔があげられなくなった。生命力と呼ばれるあらゆる要素が掻き消えてしまっていて、僕はもうただの肉塊でしかなかった。――だというのに、
どくん、と。
僕の心臓がまたひとつ鳴った。
どうして僕はまだ生きているのだろう、と思った。そんなの理由はひとつしか考えられない。
いとしいひとがぼくにのこしてくれたものが、このからだのいちばんおくでまだきえないでいるから。
彼女が――初音が僕に与えた血。あの血は瀕死だった僕を蘇らせた。思えば、彼女が僕に血を与えて生き延びさせなかったならば、彼女は僕に殺されずに済んだのかも知れないと思う。そう思うと、とても悲しい気持ちになる。とても、悲しかった。

その、悲しい気持ちが、僕の最後の感情になった。
僕はまだ死なない。正確には、僕の身体はまだ死なない。そう。復讐を誓った瞬間から判っていた筈だ。身体と心が弱り切ってしまった時、僕の身体は悪魔に乗っ取られると。
――その時が来たのだ。
悲しい気持ちが心に蔓延する。
悲しい気持ち。初音を守れなかったこと。復讐を果たせなかったこと。スフィーを殺したこと。観鈴を殺そうとしたこと。美咲を失ったこと。冬弥を失ったこと。人を殺したこと。耕一を殺そうとしたこと。銃を撃ったこと。生まれてきたこと。間違って生きてきたこと。ナイフを振るったこと。由綺を失ったこと。はるかを失ったこと。この島に連れてこ

られたこと。美汐を失ったこと。銃で撃たれたこと。ナイフで斬られたこと。祐介を失ったこと。痛いこと。つらいこと。初音を失ったこと。
――すごく、かなしいこと。
そして僕は真っ白になった。
僕の中の悪魔が、どんな風な結末を見せるか、想像もつかないけれど。願わくば、僕の大切な人たちを殺さないでいてくれたら、と思った。
僕の大切な人を守ってくれたら、と思った。

消え行く自我で考えたそんな取り留めのない言葉が、誰にも見せることのない七瀬彰の遺書となった。

どくん、と。
心臓の音がひとつ鳴った。
大切な人を守らなければいけない。
それが七瀬彰の遺書だ。

「初音は――僕が、守る」
何もかもが狂いきった最後の言葉は誰にも聞こえない。言葉を発した自身にさえも。ただ、地面に蹲っているその悪魔の、願いにしか聞こえない狂った囁きを、きっと神様だけは聞いていたに違いない。
だから、この遺書は。
残・さ・れ・た・ものへの力となった。

852　恐慌を制すもの

「むかつく猫ね！　あたしが何したってのよ!?」
「もう、いじめちゃだめだよ！」
階段を上りながら、七瀬とあゆが果てしなく口論している。再び始まった頭痛と幻聴を忘れるには、このやかましさも悪くない。
「晴香さん？　なんだかつらそうよ？」
「ああ――ちょっと、ね」
何故だか刀を握り締める手に、力がはいる。この

調子で銃なんか持った日には、誤射してしまいそうだ。
アタシは用心のために右手の銃を鞄にしまうと、刀だけを握り締めることにした。
「……晴香さん？」
「いや、なんでもないんだって」
無理に苦笑して、誤魔化す。また七瀬に、頭の心配などされたくはないからだ。
それでもマナは、そばを離れようとはしない。
(こうべたべたされるのも、困ったもんね……)
そう思うと、本当に苦笑できた。
「そうだ！　解ったわ!!」
「うわあ！　七瀬さん、突然大声出さないでよ！」
七瀬がガッツポーズをして叫び、あゆがびびって飛び退いた。
「動物の気持ちに合わせるのよ！　みゅーみゅー言ってれば、懐くかもしれないわ！」
「うぐぅ……絶対、懐かないと思う……」

……呆れて笑う事だって、できた。
だいたいそれ、猫のみならず人間まで馬鹿にしてるじゃない。

無数の光の雨の中、冷えた笑いを浮かべる神奈に向かい、千鶴は問い掛けた。
「……神奈備命。あなたは何を——考えているの？」
「何を、とは？」
間違いなく疑問に思ってはいるが、この会話自体に意味は無いのかもしれない。長引く対峙の時が、梓を側面へ移動させ、耕一たちを接近させている。
「何故、殺すの？」
「必要だからの」
「——ここで殺す事が、ですか？」
「否。いま、殺す事——」

タタタ！　タタタ！

パラララララララッ！

神奈が言い終えぬうちに、梓がサブマシンガンの引き金を引いた。

その姿を確認することさえせずに、神奈はひらりと身をかわし、千鶴に向けて発砲する。梓が銃撃した方向へと、千鶴は飛び退いた。

「好き勝手できると思うなよっ！」

神奈の追い撃ちを、梓の放った銃弾が阻害する。

「──ふん」

神奈は苛立たしそうに鼻を鳴らすと、羽根を一振りして、音もなく弾丸を停止させた。軽い金属音を響かせ、落ちた無数の弾丸には命中を示す変容はひとつもなかった。

「……見事な連携よの。血族とは、良いものじゃな……」

何か寂しげな影を落としながらも、じろりと梓を、そして千鶴を睨みつける。

「じゃが余にも、眷属ならば──いないでも、ない」

中空を見つめるように、神奈は呟いた。しかしその意味するところを、千鶴たちは知らない。

軽く腹を押さえてみる。不思議なことに──痛みはほとんど、感じない。なんだか自分の身体じゃないみたいに、痛みが遮断されている。

『余のもとへ……』

(誰よ、あんた)

『我が名は、神奈備命……』

(カンナビノ……？)

何故だかその名を聞いたとき、冷や汗が出た。

──まずい。

もしも、この痛みが完全に消えたなら……私は、私でいられなくなるかもしれない。だらだらと嫌な汗をかきながら、わき腹を叩いた。そうでもしなければ、この傷を忘れてしまいそうだった。

「――痛ッ！」
「晴香さん⁉　何をして――」
この傷の、痛みを。
「晴香さん！　聞いてま――」
なんでもない、聞こえない。
だから、べたべたするんじゃない。
「晴香さ――」
「――うるさいっ！」
アタシは叫び、刀を一閃させた。
一瞬遅れて、血が飛び散った。
「マナさんっ⁉」
「は――晴香⁉」
七瀬とあゆが振り向くと同時に、私が袈裟斬りにしたマナが、血飛沫をあげて倒れた。
「な……何やってんのよ、晴香⁉」
「ななせ……」
マナは気絶したようだ――だけど、どうして私はこんなことを？　それに腹の傷は、どうしたんだろう？
自分に問い続ける私とは別に、七瀬に突進する私がいる。
「猫と子供は、すっこんでなさいっ！」
あゆを突き飛ばし、七瀬が小銃を構えようとする。
しかし、引き金が引かれる前に、私は刀で切り込んだ。
バキャッ！
非金属の軽い物音と共に、七瀬の小銃が転がる。
返す刀で七瀬を――。
ガキン！
――その一撃は、七瀬の刀の柄で止まった。
「晴香……どうしちゃったっていうのよ……」
そうだ、私は何をしていたんだろう？
腹だ。
腹の傷が――痛い、はずだ。
ガキッ、ガキン！

二人して旋風のように刀を振るう。私は激しく体を入れ替えて、あゆの銃撃を封じる。
こうしていれば、七瀬はすぐに脚にくるだろう。何故なら怪我を、しているはずだから。
そうだ、怪我だ。きっと怪我が、痛むんだ。
だから七瀬は、泣いているんだ。

（千鶴姉――）
（梓――）
二人が目で頷きあう。現在、神奈は銃に頼っている。彰を倒したような、剣を飛ばす技は消耗が激しいのだろう。
おそらく手持ちの銃の弾丸が尽きるまでは、それに頼るはずだ。そしてここにいる三人は防弾服を着ているし、神奈はそれを知らない。ならば頭部さえ守ればダメージを受けることはあっても、接近は不可能ではない。
千鶴が一太刀いれれば、勝負は決まる。
接近し、あの剣をかわせれば――勝ちだ。

タタタ！　タタタ！　タタタ！

「神奈ぁ！」
叫んで梓が突進する。
もちろん、これは囮だ。梓にとって接近する利点はない。対応するため振り向いた神奈に向かい、千鶴が背後に回りこむ。足音はＨＭＧⅡのセミオート連射音に掻き消されており、容易に距離を詰めて行くことができた。
（――やったか⁉）
繭をおろし、遅れている耕一は銃を構えながら接近しつつも、戦いの行方を瞬きひとつせず注視していた。
しかし、相手は常識の通じる相手ではない。ここぞという時には、固有の能力を惜しげもなく発揮するのだ。羽根が揺れ、弾丸を全て無効化すると同時

に振り向き、知っていたかのように千鶴を正面に見据える。手に持った剣が、神奈の右手の動きに従い、意志を持って飛び出すように神奈の背後に回る。
「――なっ⁉」
剣は宙を舞い、梓の太腿のあたりをざっくりと切りつけた。僅かに遅れたとは言え、剣の旋回速度は視認すら怪しいほどで、梓でなければ両の脚を切断されていたかもしれない。
剣はそのまま速度を増し、軌道上に入り込んだ千鶴に襲いかかった。
「鬼よ。滅せい！」
「ふっ！」
短い気合いの言葉を重ねあい、二人の刃が激しい音をたててぶつかり合う。あの剣に質量があるのかどうかは判らない。しかし、その大きさに見合った威力を発揮して、千鶴を転倒させた。
「しょせんは小細工よの‼」
そのまま余った左手を無造作に梓へ向けると、ずどんと回廊に衝撃波を響かせて、梓を吹き飛ばした。
神奈は彰のところまで転がった梓を放置すると、迷うことなく千鶴へ右手を向けて、叫んだ。
「死ぬがよい！」

ズドン！

そのとき千鶴への攻撃を阻止したのは、横からの発砲である。やはり羽根がそれを叩き落したのだが、一部がすりぬけている。ベネリM3の散弾が、神奈の――いや、観鈴の手に数発埋っていた。
「――人間の小細工だって、捨てたもんじゃないだろう？」
耕一が歯を食いしばりながらも、笑みを浮かべて言い捨てる。対する神奈は不快そうに一瞥をくれると、滴る血を払うように腕を振り下ろした。するとめり込んだはずの散弾が、軽い金属音とともに床を転る。瞬時にして、傷が塞がったのだ。

「……な……何だって⁉」
呆然とする耕一。
無言で立ち上がる千鶴。
二人は落ちた散弾を見つめながら、考える。この戦いに勝利する術は、本当にあるのだろうか、と。

（——耕一さん）
誰もが忘れていた藹が、耕一の背に隠れるようにして問いかけた。
（なんだい？）
（観鈴さんを救うことは——可能だと、思いますか？）
短い沈黙の後、首を横に振る。
（助けたいけど——今では殺すどころか、生き残ることすらできるかどうか、怪しいね）
（いえ、それなら——観鈴さんごとなら——可能なんです）
自信に裏打ちされているのだろう、あまりの直接的な物言いに耕一は驚き、振り向いた。
そして藹の手に見たものは、見慣れぬ、銃のようなものだった。

「晴——……‼」
七瀬が何かを叫んでいるが、もう聞こえはしない。
斬撃を弾いて一歩踏み込み、刀を水平に構え、身を沈める。七瀬が弾かれた軌道を修正して、再び切り込んでくるのは解っていた。だから修正中の浮いた腕を、刀を放した右手の肘で軽く押し込んでやる。同時に、左手で刀を引けばいい。
「……⁉」
七瀬の叫びは、やはり聞こえない。
この一手で胴が、がら空きになった。残る左手の刀による突きが——王手に繋がる、決定打だ。

『ズドン！』

そのとき、音が聞こえた。
ここにはないはずの、口径の大きな銃声が脳裏に響き渡る。
『――人間の小細工だって、捨てたもんじゃないだろう？』
ここにはいないはずの、耕一さんの声だ。
私は、何をしていたんだろう？
私は――
「七瀬さん!!」
――これは、あゆの叫びだ。
そして目の前の、七瀬の胴に――私の刀の切っ先が――
すとん
――貫通した。
……鳩尾に吸い込まれそうな刃を、最後の瞬間に修正することができた。ちょうど私の傷と、寸分違わず同じところ。
刀は音もなく、貫通していた。
「七瀬……私……」
「晴香……正気に、戻ったのね……」
七瀬は泣きながら、強張った笑みを浮かべた。反射的にだろうか、私も同じことをした。
同じこと。
つまり強張った笑みを浮かべながら――
「……ごめん」
「いいよ……これで借りは、返したからね……」
「あはは……バカね」
――私は、泣いていた。
悲しいからではない。
もちろん、痛いからでもない。
誰も殺さずに済んだのが、嬉しかったからだ。

853　小細工、そして

「胃の中に爆弾があったでしょう？　これは、向けた先にある胃内爆弾を誘爆させる装置なんです。彼女の身体にはまだ爆弾が残ってたはずです。私が――やります」
「いいのか？　本当に」
「私が――やらなくちゃいけないんです」
藺の覚悟を受け止めた耕一は、その決意に応えるべきだと判断した。
「……俺は千鶴さんの援護のフリをして囮になる。藺ちゃんは隙を狙ってそれを使うんだ」
耕一や千鶴の攻め手をいなしていた神奈ではあったが。おおよその手は読めていた。
（これ以上油断するわけにもいくまい）
小細工。
少なくともそれは、今までは致命的ではなかった。
だが、既に相手がこの女――観鈴を助けることを諦めていたとすれば、次も無事で済む保証はない。
（本命は――どれじゃ？）
耕一ではない。彼は千鶴の援護に徹している――フリをしている。本命ではない。
千鶴でもない。知る限りでは、唯一自分に有効な武器を持ってはいるが――耕一が彼女の援護のフリをしている以上、千鶴本人が自覚しているいないには関わらず、本命ではないはずだ。
梓でもない。彼女には有効な攻め手も、何かを企む様子もない。
もはや死体と変わらぬ彰でもない。
そして最後の一人。
藺が自分に向け、何かの狙いを定めようとしているのが分かった。
（お主か！）
防ぎきれなかった耕一の散弾が、再びいくつか腕

にめり込み。千鶴の刀が、片翼を僅かに傷つけはしたが、神奈が向けたサブマシンガンの銃弾は、確かに繭へと届く。
彼女は、最後の切り札を取り落として後方に倒れた。
自分に肉迫していた千鶴を、多少傷ついてしまった翼で吹き飛ばす。
そして、返す翼で耕一と足を怪我して動けないはずの梓をも薙いだ。二人とも千鶴同様、思いっきり壁に叩きつけられる。
もう油断をするつもりはない。動ける相手を放っておくつもりはない。手を振る。弾が床に跳ね、金属音が響く。既に傷は治っていた。
ただし、刀によって付けられた翼の傷は、すぐに治らない。
「またよからぬ企みをしておったようじゃが、二度三度は通じぬぞ？」
ここまで持っていけば、恐らく皆殺しにするのは簡単だろう。だが、どうせならできるだけ多くの苦痛と絶望を――。
「――本当に、これで終わりだと思っているんですか？」
ただ一人起きあがったのは、千鶴。
「なるほど。お主のこと、失念しておったわ」
「そのまま失念してくださってても構わなかったんですけどね」
柏木千鶴。その冷徹なる鬼が持つ、刀。
「意地でも余を斬るのじゃろうな。この女の身体ごと」
「何を今更」
――そう。罪無き人をも既に殺している彼女にとっては、愚問でしかない。
端的に答え、神奈との間合いを一気に詰めた。
即座に反撃することは難しい、と判断したのだろうか。銃弾をも弾き返してしまうその翼を以て、自らの身を守る神奈。確かに普通の武器ならば太刀打

ちできないだろう。だがこの太刀は、普通の武器ではない。
貫き通せる。
その確信は絶対だった。そして事実となった。
(やった——？)
間違いない。二枚の翼を貫いて、確かに神奈に刀は届いて——

——簡単過ぎる？——
——翼は弾け、周囲に真白き羽を散らした。
その先には何もない。何を意味しているのか。
フェイク——
「余の、勝ちじゃな」
神奈は千鶴の背に当てた手に、意識を集め。そして開放した。
千鶴は背後の神奈を睨み付けようとして——その場に崩れ落ちた。
「確かに、真っ向からの勝負を受ければ余とて危うかったかもしれぬ。ならばこういう手もある、ということじゃ。ぬしらから教えられたことじゃな」
神奈が贄に選んだのは、繭だった。彼女の下へと歩み寄る。
近くに落ちていたそれ——繭が構えていた機械を、踏み潰し。
「これで希望は潰えたかの？」
銃弾の何発かは、繭の左腕を捉えていた。確実に、痛みと苦しみを与える。
その左腕に、足を乗せた。そして体重をかける。
「あ、うあ、ああ！」
痛み、苦しみ、のたうち回る彼女。
ようやく足をどけたかと思えば、今度は無造作に腹を蹴る。
繭は胃の中のもの全てを吐き出した。
より一層の痛みと、より一層の苦しみと、より一層の憎しみと。

（畜生、こんな状況で身体が動かないのか――！）
かろうじて意識を保っていた耕一ではあったが、身体を動かすことはできず。
耕一、千鶴、梓――皆、動けない。誰もそれを止められない。
その事態を覆したのは、誰も――恐らく本人すらも――予想し得なかった者だった。
「おああああああああああああ！」
「な――」
死んだはず――あるいは明らかに死へ向かっている人間のものとは思えない咆哮を聞き、驚愕する神奈。それは隙としては充分すぎる間だった。
かつて彰であった者は、神奈の傷ついた片翼を右腕で掴んで、とんでもない勢いで放り投げた。既に腕のない左肩から、更に血が吹き出る。何が半死半生の彼を突き動かしているかは分からない。しかし、彼は止まらなかった。今の神奈の状態――観鈴の身体を持つ状態では、あの光に過大な効果を求めることはできないからだ。
彼は確実に死にながら、放り投げた神奈を追った。光満ちつつある森へと。

千鶴はただ、廊下の天井を見ていた。自分の生が少しずつ失われているのか、それとも自分の死が確実に大きくなっているのか。そのどちらか、いや、どちらもなのだろうか。
繭はどうなった？　泣き叫ぶ声はもう聞こえない。ふと、自分が抱き上げられる感触に驚いた。目に映るその顔にも。
「繭ちゃん――は？」
自分を覗き込む顔――それは耕一の顔だった。
かろうじて動けたのは耕一と梓のみ。神奈と、そして彰のことは気になるが、その前にやらなければならないことがある。

「大丈夫――とは言い難い。神奈に左腕を撃たれたんだ。でも梓が止血してるとこだよ。気絶はしてるけど、命に別状はないと思う」
梓は、自分の足の治療と。繭の治療を。
そして耕一は、千鶴の治療を試みようとしていたわけだが。
「そう――よかった――」
この状況では、手の施しようがない。むしろ即死でなかっただけでも奇跡だ。
「こっちの止血の方、終わったよ。目が覚めるまで、しばらく時間かかるかもしれないけど。千鶴姉の方は――」
「…………」
耕一の無言の答えを以て、梓も察したようだった。
「千鶴姉!?　そんな、そんな――」
彼女もまた千鶴の下へと駆け寄る。怪我した足を引きずり、涙を浮かべて。

ああ、そうだ。私は何と果報者なのだろう。
罪を重ねて生きてきた私に。
最期を看取ってくれる人が、泣いてくれる人がいる。
ならば、私は伝えよう。

「梓」
決して力強くはないが、その言葉には聞く者を引き寄せるだけの力があった。
「結局――私は背負いきれなかったみたい――ごめんなさいね――あのね――あゆちゃん――帰る場所がないって――だから全てを終わらせて帰ったら――私達と一緒に暮らそうって――約束したの――料理とか――いろいろと教えてあげて――」
「うん、うん――」
ただただ、千鶴の言に頷く梓。
「耕一さん」
そして今度は、耕一の方を向き。

「梓のことと——それに鶴来屋のこと——お願いします——足立さんを頼れば——きっと大丈夫——本当は——耕一さんの生き方を縛りたくはなかったけど——私の父や母が——あなたのお父様が——必死になって守り抜いてきたものだから——」
「分かった」
「それと——この刀を——」
精一杯の力を振り絞って、耕一に刀を差し出す。
「これで——神奈を——斬ってください——できれば神奈だけを——ふふ——自分にはできないことを——人には押しつけようなんて——本当に嫌な女ですね——私——」
自嘲に満ちたその笑み。耕一は刀を確かに受け取って。
「分かった。絶対にそうする」
彼女の笑みから、自らを嘲る色は消えた。安らかな笑み。目を閉じて。
「——ありがとう」

それが、千鶴の最期の言葉だった。
「……千鶴姉？」
最初に口を開いたのは、梓だった。
「千鶴姉？　千鶴姉ってば！」
そして最も理解に時間を要したのは、梓だった。
「千鶴姉ぇーーーーーー！」
千鶴の身体に抱きついて泣き叫ぶ梓。耕一は、そんな梓に千鶴の亡骸を預け。
託された刀を手に、立ち上がった。

何が彰を突き動かしているのかは分からない。既に人としての限界は超えているはずだ。だが、たとえ彼が何にすがっていたとしても、自らの死に抗ってまで——否、自らの死を進行させてまで取ったその行動には、必ず意味がある。
絶対にそうだ。
（とりあえず、千鶴さんのために泣くのは梓に任せよう）

約束を果たしてからでなければ、自分は彼女のために は泣けはしまい。
鬼の王、耕一は。
約束を果たすために。
神奈と彰であった者が消えた、光満ちあふれる森へと向かった。

二十番　柏木千鶴　死亡

【残り９人】

854　おねえさん

「ひっく、ひっく」
涙が止まらない。早く止めなきゃいけないのに、泣くのをやめなきゃいけないのに、止まらない。
泣く暇があったら、立ちあがらなきゃいけない。
耕一を追いかけて、一緒に戦わなきゃいけない。
だけど、そうするには、今抱きしめているものを手放さなきゃいけない。……嫌だ。離れたくない。
だんだん冷たくなってゆく、物言わぬ姉の身体。
二度と開かれることのない、閉じられた瞼。
顔のあちこちにこびりついて、固まった血。
そして、この島にそぐわない、安らかな顔。
「千鶴……姉……！」
その顔を見た瞬間、再び瞳から涙があふれ出す。
梓の前には、いつも千鶴がいた。
楓も初音も、確かに大切な家族だったけど。
千鶴だけは、他の誰よりも特別だった。
喧嘩相手で、遊び相手で、相談相手で、ついでにいつも苦労をかけてくれる困った姉だったけど。
そんな彼女に、いつも憧れていた。
「嫌だよ。あたし、千鶴姉ぇと離れたくない……」
自分の体温が、少しでも千鶴を暖めるように。
自分の涙が、少しでも千鶴の血を補うように。
そんな、子供じみた無駄な足掻きを自覚しつつ、
梓はただ泣きながら、千鶴の身体を抱きしめた。

「うぐぅ、うぐぅ」
涙が止まらない。なんだかすごく理不尽な感じ、そんなに哀しいわけじゃないのに、止まらない。泣く暇があったら、運ばなきゃいけない。みんなを追いかけて、応援しなきゃいけない。だけど、怖いから、物陰に隠れながらこっそりと応援しなきゃいけない。……怖い。行きたくない。
「って、だめだよっ！　ボクも戦わないとっ！」
ふと頭をよぎった弱気な考えに、思わず叫ぶ。
そんなあゆに、右側から声がかけられた。
「何がダメなんだかはわからないけれど……ねぇ、私たちは置いて、先に行っても構わないのよ？」
あゆの肩を借りて歩きながら、そう言う晴香。
だが、あゆはぶんぶんと頭を振って、晴香のその提案を全身全霊で拒否する。何故かと言えば。
「だめだよっ！　絶対、みんなで行くんだよっ！」
一人だと、怖いから。
そんな本当の理由は、こっそりと呑み込んで。
再び、じわりと涙目になりながら。
右肩に巳間晴香を、左肩に七瀬留美を支えつつ、気を失ったままの観月マナを背負い、通路を歩く。そんなあゆは、首からバッグも提げていた。中には猫が一匹。じたばたと暴れもがいている。ずりずりと、重みに足を引きずって前に進む。
「うぐぅ、うぐぅ、うぐぅ、うぐぅ……」
一歩進むごとに謎の声を発しながら、涙と鼻水を垂れ流すあゆの様子に、左側から七瀬も口を挟む。
「あたしたちだったら、もう大丈夫だから。ほら」
とても大丈夫そうじゃない表情でそう言う七瀬。
だが、あゆはぶんぶんと頭を振って、七瀬のその提案を全身全霊で拒否する。何故かと言えば。
「だめだよっ！　無理したら怪我が酷くなるよ！」
一人も、失いたくないから。
そんな本当の理由は、みんな想ってる事だから。
先程、腹部を貫かれた七瀬に施された手当ては、あくまでも最低限の止血程度のものでしかない。

無理をすれば確実に、再び出血することになる。
怪我人に負担をかけず、みんな揃って皆を追う。
それを実現させるには、この方法しかなかった。
……と、少なくともあゆはそう思っている。
「出口、まだ……？　梓さ～ん！　千鶴さ～ん！」
終点の見えない長い通路に、先に行ってしまった
二人の名前を思わず大声で呼んでしまうあゆ。
しかし、彼女が思っているよりもずっと近く。
すぐそこまで、出口は近づいていたのである。

「……さ～ん……」
うぐうぐと涙に震えた、そんな声が耳に届いた。
泣いて、目を閉じて、思い出を振り返って。
涙を拭いて、ゆっくりと目を開け、現在を見た。
「千鶴姉」
そこには、変えられない事実がある。
出来れば、ずっと逃げていたかった現実がある。
そして梓は、ゆっくりと千鶴から身体を離した。

べりべりと、固まった血で貼りついていた服が、
未練を断ち切るように、音を立てて剥がれていく。
通路の端に千鶴の体を優しく横たえてから、梓は
ゆっくりと、だが、しっかりと立ち上がった。
「気は、済みましたか？」
いつの間にやら繭が起きていた。
痛みで目が覚めたのだろう。止血したとはいえ、
左手にはいまだ激痛が走っているようで、だらりと
腕を下げたまま、黙って顔をしかめている。
それでも彼女はまだ立って歩いて、生きている。
梓は笑って頷いて、そして繭に訊ねてみた。
「あたし、今はもう……泣いてないよね？」
繭も笑って頷いて、そして梓に答えてみた。
「はい。血にまみれてひどい顔ですけど」
よしっ、と満足そうに頷くと、梓は繭に告げる。
「あゆの奴が、そこまで来てる。あっちは怪我人を
抱えてるから、あたしはそれを迎えにいく」
「はい」

「繭は出入り口のところで、闘いが森のどの辺りで続いてるのか。それを、見張っといてほしい」
「わかりました」
「お願いね。すぐに戻るから！」
繭が頷くのを見て、梓は痛む足に鞭打ちながら、大股で通路を奥に駆けてゆく。
すぐにその姿は、闇に溶けて見えなくなる。
「千鶴姉、約束はきっと守るから！」
通路の奥に駆けていく、梓の背中を見つめつつ。
繭を守ってくれた、真琴の背中をそこに重ねて。
思わず、繭は呟いた。
年相応の、わがままを。
一筋の雫を、瞳からこぼしつつ。
「いいなぁ。おねえさん、かぁ……」

「あゆーっ！」
「あ、梓さぁ〜ん」
いくつかの角を曲がり、そこで梓が見たものは。
「だから、無理しないでって言ったでしょ……」
「ごめん。また、傷口開いたみたい……」
背負った三人の重みに耐えきれず、出来損ないの組体操のように、下敷きになったあゆの姿だった。

855　呪夢

バサッ！
翼を広げ、空中で身を翻す。
（……これ以上油断しない、じゃと？　いつでも殺せたものに止めをささなかった事こそ油断というのではないのか!?）
己の愚かさ加減に腹を立てる……。
が、身を焼かれる感覚によってその思考は中断される。
強烈な光が世界を包んでいる。
常人にはただのまぶしい光に過ぎないが神奈にと

っては砂漠の日差のように体力を奪う毒の光。
　素早い判断で次の戦場を光の弱い森の中と定め、木々の間に飛びこむ。
　ここにきて、始めて神奈の中から『遊び』という感覚が完全に消え失せた。毒を浴びながら戦ってこの光を返す事が出来るのか……真剣に計算する。
　安らかに逝ったとはいえ、鬼の女の死によって得た力は予想以上だった。
（鬼はまだ三匹もおる……全て殺せればこの光の分は取り返せよう。それに……手駒に与えておいた力も失う前に返してもらうとするかの）
　それで成功率は六割。
　逆を言えば四割の確率で失敗する予測になる。
　それに、今のような不測の事態というのも十分にありうるのだ。もし次の戦いでもヘマをしたのなら……光に焼かれてこの身は消滅する。
　もし助かったとしても刀に封印されて空で見続けていた夢に戻る事になるだろう。

（………夢に戻るじゃと⁉　冗談ではないっ‼）

　ギィイィン‼
　刀と刀がぶつかり合う音。
　一瞬火花が散り、大男の手から刀が離れた。
「くっ！」
　大男はとっさに身を引くが、遅い。
　ドゴッ！
「ぐあぁっ！」
　振り下ろされた刀の背が大男の鎖骨を砕き、勝負は決した。
　最後の敵が意識を失った事を確認し。
「ふぅ」
　という溜息と共に刀を鞘に収め……。
　……男は地面に崩れ落ちた。
「柳也殿っ‼」
　たまらず裏葉とともに草むらを飛び出し、柳也の

下へと駆寄る。
柳也の衣は背がぱっくりと口を開けており、
その下に走る朱の一文字が顔を覗かせている。
それは、ともすれば致命傷となりかねないほどの
深い傷だった。

「どこだ⁉　どこに行った⁉」
「まだ近くにいるはずだ！　探せ！」
夜の森に男達の声が木霊する。
それは、敵の声。
自分だけが生き残るために余を殺さんとする下衆
どもの声。
……何故。
何故余だけが狙われねばならぬのだ？
これは殺し合い……。
敵も味方もない殺し合いではないのか？
何故、奴等は申し合わせたように余を狙うのだ？
「いたぞっ‼」

一際大きな声がすぐ側から響く。
刹那、裏葉に手を引かれて走り出す。
無数の敵が群って来る。
「こっちだ！　女も一緒にいるぞ！」
……余のせいか？
………余がいるから、この二人も狙われてしま
うのか？

飛び掛ってきた男が一太刀で地に叩き伏せられ
る。
それを見ていた者達の間に緊張が走る。
「こ、殺不（ころさず）の太刀など！　恐れる必要ないっ‼」
そう叫び、次の敵が襲い掛かってくる。
……余のせいか？
…………不殺を命じたのは間違いであったのか？
僧衣に身を包んだ大男。

鎧の下にぎらついた瞳を隠した男。
徒党を組んで弓を射ってくる男達。
斬られては立ちあがり、斬られては立ちあがり、どんどん数を増やしながら休む間もなく襲い掛かってくる。
男達はいつの間にか人の形をなさなくなっていた。
敵という概念。襲い来る恐ろしいモノという概念。
黒く霞んだ体に爛々とした眼だけが光る、人らしいモノ。
黒いモノが狙うは神奈一人。
だが神奈が傷つく事は無い。
神奈のかわりに、神奈を護ろうとする二人が傷ついてゆく。
黒いモノは次々と襲い掛かってくる。
襲い掛かってくるモノは次々と切り伏せられる。
だが、不殺の刀が黒いモノを殺す事はない。
切り伏せられてもすぐさま起きあがり、再び襲い掛かってくる。

考える。
どうしてこうなったのかを。
考える。
どうすれば三人が助かるのかを。
考える。
どうすれば二人を助ける事が出来るのかを。
考える。
自分は何が出来るのかを。

ついに柳也が力尽き、地に膝をついた。
柳也の力は夢の主の信頼に比例する。
その柳也が力尽きて、敵の前に無防備な姿を晒している。
それは、夢の主があきらめたということ。
殺してはならないという偽善も、人に頼って助かろうという希望も捨てたということ。
柳也に向けて、最後の一撃が振り下ろされんとした瞬間――

「殺せばよい。余の事など見捨て、生き延びるために敵を殺せばよいのだっ!!」
　自分がいなくなれば柳也と裏葉は狙われる事がなくなる。
　だから二人とは別れる。
「殺してよい」と言って、二人のもとから駆け出す……。
　…………つもりだった。
「柳也…………殿……？」
　様子がおかしい。
　黒いモノの動きはピタリと止っている。
　柳也がゆっくりと立ちあがる。
　裏葉の短刀を持った手がだらりと落ちる。
　そして、ゆっくりと振り返った二人の姿は、二つの黒いモノになっていた……。
「柳也殿っ！」
　夏の昼下り。

「どうして！　どうして、こんな事になったのだっ!?」
　深い森の中を走る一本の山道。
「りゅうやどのぉぉぉぉぉぉぉぉっっ!!」
　少女の叫びが木霊している。
　地に伏せた男と、男にかぶさるようにして泣き続ける一人の少女。
　少女は呼びつづける。
　もう決して帰ってこない男の名を。
　少女は揺すり続ける。
　もう決して目を覚まさない男の肩を。

　少女は、
　男の肩を揺すりながら、
　それでも、
　右手に握った物を、
　手放さないでいた。

男の命を奪った血塗れの短刀を……

千年、二つの夢を繰返し見続けていた。
ひとつは、普通の少女として、普通に生きようとして、普通の幸せすら掴めずに死んでいく夢。
もうひとつは、殺し合いの中で、殺し合いをして、大切な人を殺してひとり生きのびる夢。
永遠に繰り返すと思っていた夢は、ＦＡＲＧＯという組織によって中断された。
ＦＡＲＧＯは、呪いの一部を力として抽出することに成功した。その力を使う事で神奈は悪夢から解放される事が出来たのだ。
だが、呪いから逃れるためにはこの力を維持しなければならない。
呪いの源は人の死、嫉み、怒り、悲しみといった負の波動。呪いから作られた力もそれは同じ。
ＦＡＲＧＯの作った呪いを力として抽出する装置は最初の実験で壊れた。
ならば定期的に人の負の波動を集めなければならない。効率よく負の波動を集める方法…………それを彼女はよく知っていた。
手始めにＦＡＲＧＯを、そして世界でも有数の力を持つ長瀬一族を裏で操り……。
そして、悪夢は現実になった。

（…………夢に戻るじゃと⁉　冗談ではないっ‼
二度と、二度とあのような世界に戻るものかっ‼）

856　けもの達の集う場所

「うぐぅ……」
「だから言ったじゃないの」
「だ、だって……」
あゆが何かを言いかけた時、首にかけたバッグか

らぴろが飛び出した。
「あっ！」
追いかけようとしたが、上にのしかかった人の重さで立ち上がることは出来なかった。
「ま、待って！」
後ろから掛けられる声を振り切るようにして、ぴろは走り出した。

『クッ……』
傷が痛む。
体がバラバラになりそうなほどに。
それでも俺は走り続けていた。
あの女を捜し出すために。
五感の全てを最大限に発揮してあの女の居場所を探る。
――俺はあの女を許せない――
ぽちは俺の目の前で無惨に殺された。そらも生きているのかどうか分からない。

何故、俺のようなろくでもない奴だけが生き残ったんだ？
俺はポテトとの約束を守れないような馬鹿だぜ。
だからせめて仇だけでも取ってやる。
例え俺が死んでも。
――それ以上に俺は俺自身を許せない――
悪いな、そら。お前が大事だと言っていた女を。
あの世でポテトとぽちにお前の分まで謝ってやるから勘弁してくれよ。
俺はあの女がいる気配を感じ取るとその方向に向かった。

「うおおおおおおおおおおお！」
森の中を一匹の獣が走っている。
片腕を無くし普通ならば生きていることさえ不可能な傷を受けてもなお僕は生きている。
(ちっ、乗っ取れたのは半分だけか)

僕の頭の中で僕ではない声が響く。
だが、そんなことは今の僕にとってどうでもいい。
傷の痛みすら感じない。
今の僕に取って大事なのは神奈という女を殺すことだけだ。
それだけが僕の使命。
それだけが僕の生きている理由。
また、声が聞こえた。
(まぁ、いい。どうせこの宿主も長くはない。最後の狩りを楽しむとしようか)
今の僕を突き動かしているのは僕自身の意志でありこの声でもある。
今まで僕が抗ってきたモノ。
だが今の僕とこいつの利害は一致している。
ならば抗う必要など微塵もない。
(……あっちか)
頭の中の声が指し示す方向に向かう。
初音ちゃん。
もうすぐ君に会えそうだ。
でも、その前に——。
「あの女を殺す」
(あの女を殺す)

観鈴、どこだ!
ぼくは空を飛び回りながら必死で観鈴を捜していた。
ぼくが気が付いたときには、なぜか、ぼくは施設の外にいた。
傍らには口にくわえている人形が落ちているだけだった。
気を失う前にぼくが見た光景。
観鈴が何者かに体を奪われていくのを見ているだけしかなかった。
ぼくは無力だった。
恐らく、ぴろ君やぽち君も殺されてしまったのだ

ろう。
あの何者かに操られた観鈴によって。
ポテト君、ぴろ君、ぽち君。
文句はぼくがそっちに行ったらたっぷりと聞くから。
だから、今だけはぼくの好きにさせて欲しい。
ぼくは観鈴を救わなくてはいけない。
例えこの身が滅びようとも。
例え何の力が無くても。
観鈴を守れるのはぼくだけだから。

観鈴を守る。
それは間違いなく『そら』という個体としての意志。
そしてそれがぼくがこの島に存在する理由。
ふっ、と風が流れるのを感じた
ぼくは根拠もなくその方向に観鈴が居るのを確信した。
ぼくは何の躊躇いもなくそこへと向かって飛び立った。
それぞれの目的でけもの達は集う。
同じ場所を目指して。

857　死の舞踏

――――眩しい。

生身の人間が、ここに足を踏み出すのは冒涜なのではないか。そう考えさせられるほど、世界は神々しく光に包まれていた。
(……彰は？)
目を細め、頭を巡らせて姿を求める。
戦闘の音は聞こえている。しかし、その主たちが見当たらない。
(視界が……狭いんだ)
目を慣らしながら、音を頼りに進む。

一方的な銃撃音が続いている。音が聞こえる限り、勝負は続行中なのだろうが……異常だった。
彼らの姿を捉えられない――
『耕一さん！　あっちです!!』
――叫び声に反応して、振り向く。繭の声だ。自分が降りてきた方向とは逆の、むしろ通気口側だった。
音の共鳴が位置取りを誤らせていたのだろう。遠く光の中、二人の影がさながら踊るように舞っている。
(彰――勝手に、死ぬなよっ!!)
耕一は心の中で祈りながら、走り出した。
「……ち……千鶴さんっ！」
「嘘……」
あゆと、目を覚ましたマナが、死体にすがり付いていた。七瀬と晴香は、無言で立ち尽くしている。

さんざん泣いたあたしが言えた立場じゃないけれど――急がなきゃいけない。
「あゆ、行こう」
「うぐぅ……」
盛大に鼻水までたらして、あゆは泣いている。レースの上等そうなハンカチーフをとりだして、鼻をかんでやる。
「しょうがないな……ほら……」
あゆの鼻をぐりぐりしながら、全員の様子を見る。
あたしは脚に裂傷。繭は左手に被弾したが傷は浅そうだ。晴香と七瀬は腹に貫通傷。マナは出血こそ派手だったが、肋骨の上を滑っていただけのようだ。むしろ打撲が酷い。あゆは無事だが、戦力として期待するのは間違っている。
あたしと繭を除けば、肩を組み気力で立っているような、七瀬と晴香に期待するしかない。
足を引き摺って、二人の前に立つ。
「お互い、ぼろぼろだね」

「そうね。でも、これで最後なら——」
「——根性、見せないでもないわよ」
そこは乙女の意地でしょう、と七瀬が修正する。
……悪いけどあたしは、乙女って柄じゃない。たぶん、ここにいる誰も柄じゃない。
『耕一さん！　あっちです!!』
藺が叫んでいる。神奈を発見したのだろう。
「藺！　どっちだ!?」
そう言いながら、あたしたちは各々の可能な限りの速さで走りだしていた。
「あそこです！　ああっ！」
「な————!!」

銃声がやんだ。
音さえ吸い込むように、光が強くなっていたが——そのためではない。
「彰あああああああああ!!」
耕一の叫びが響き渡る。そして叫びの余韻の中、施設から梓達が駆けつけてくる。
ひとつの勝負が、ついていた。

そのシルエットは、祝杯をあげるように、高らかに右手を上げている。左手を腰に当て、誇らしげに胸を張り、そして掲げられているそれは——
「……彰」
——彰、だった。
神奈は首を掴んで、軽がると持ち上げている。一方の彰は、無事なところなど見当たらない。
「耕一……遅いじゃないか」
「……すまん」
「初音ちゃんのこと……頼むよ」
「……ああ……任せておけ」
初音の死体のことなのか。
——それとも、まさか。彰の記憶はもはや狂ってしまっているのか。むしろそのほうが、幸せなのか

もしれないが——真実は、最後までわからずじまいだった。

ごきり

銃声すら掻き消す光の中で、全員がその音を聞いたという。続いてひゅう、と擦れた吸気音のようなものが一回。

祝杯は、砕かれた。

支えを失い、だらりと垂れさがった彰の首に、鬱陶しげな一瞥をくれると、神奈は無造作にそれを捨てた。そしてパートナーを導く踊り子のように、優しげとさえ言える、滑らかな仕草で手を差し伸べた。
「次は、どいつじゃ？」
耕一を、七瀬を、晴香を見て、上機嫌に言い放った神奈は、ついと片眉を吊り上げる。
「……また、小細工か。ご苦労なことよ」
（……小細工？）
耕一たち三人は、お互いの顔を見た。可能な限りの努力は、小細工だって何だってするつもりだった。しかし、心当たりがない。俺たちに何か共通点が……？
（そうか——刀か⁉）
三人同時に、理解の色が拡がった。刀の外見は、どれもほとんど違わないのだ。

無言のまま、三人のリズムが同調していく。自然と神奈を囲むように、等間隔で立っていた。しかし、どうにもならない問題がひとつある。観鈴を斬らずに、神奈を斬れるのだろうか。
（やはり——不可能なのか）
七瀬と晴香の刀は、ただの刀だ。神奈を倒す事ができない以上、本気で切り込むことはできないだろう。

しかし耕一の刀は、神奈を倒せるものだ。唯一その手段を有した自分が躊躇えば、三人全員が倒されてしまうかもしれない。
（——不可能、なのか——）
握り締めた手に汗が伝う。三人同時に、ちゃきりと刃音を鳴らして、刀を構える。
まわる。まわる。月のように、円舞のように。
もしもこれが、本当に舞踏なら。
いま高らかに、天空の歌が流れていることだろう。
「……どうした？　眺めているだけか？」
神奈が挑発する。梓たちが銃を構えているが、飛び込む耕一たちのことを考え、発砲できないでいた。
（くそっ！）
七瀬たちが、耕一を見ている。
何かきっかけがあれば——例えば耕一が目で合図すれば、二人は飛び込むだろう。
（くそう!!）
迷いに割ける時間は、間違いなく限界に達しようとしていた。
そのとき——ばさりと羽音を立て、神奈の真上から何かが降ってきた。光をさえぎるような、真っ黒な何かが降ってきた。
「何——烏じゃと!?」
いままで何者も触れる事すらかなわなかった神奈の肩に、一度だけ羽音を響かせて、烏がとまった。
神奈は驚きと怒りをぶつけるように右手を振り回し、中空の剣を叩きつける。
ぱん、というその音は破裂音と表現するのが一番近い。生物を殺戮するというよりも、風船を割ったような音がして——烏が——闇が、拡がった。
「何じゃ!?　これは!!」
叫ぶ神奈の姿が、闇の中で観鈴に重なるように浮かんでくる。闇の中で輝くのは、神奈の翼と——ひ

とつの、人形。
「烏!!　貴様は一体!?」
殺されたはずの烏が、いまだに神奈の肩にとまっている。そう、観鈴の肩ではなく――神奈の、肩だ。
みるみるうちに、神奈の姿が観鈴から引き剥がされ、人形へと移っていく。

――今だ!
三人は誰からともなく、踏み込んだ。
狙うは――人形。
「うおおおおおおおおお!!」
「小癪な!!」
耕一の雄叫び。そして引き剥がされながらも観鈴を操る、神奈の叫び。一瞬にして七瀬を吹き飛ばし、晴香の刀を両断する。剣は勢いを増して、そのまま耕一の胴を――

ざんっ

――肉と骨を、瞬時に両断する音。ざあ、と流れる大量の血。
「観鈴ちゃん……」
「にはは……」
耕一が膝をつく。そして神奈が振り上げた右手を、胸を押さえるようにしまい込んでいた、観鈴が膝をつく。神奈の剣は軌道を変え、観鈴の身体を両断していた。
そして耕一の刀は――人形に、突き立っている。
「みんな、ありがとね……」
「観鈴ちゃん――!」
「おかあさんも、〝ようやった〟って……言ってるよ」
「観鈴ちゃん!!」
最期に意志を取り戻した観鈴が、剣の軌道に干渉

したのだ。
観鈴の肩を、耕一が抱きしめる。しかし、その抱擁から逃れるように、彼女の下半身はぼとりと倒れた。
「……ありがとうって……なんだよ……」
耕一は涙を流し、地に伏した。
そして、光が収束する。
死の舞踏は、終焉の時を迎えた。

二十四番　神尾観鈴　死亡
六十八番　七瀬彰　死亡
そら　消滅
【残り7人】

858　終局へ

出　演

【雫】

長瀬祐介　月島瑠璃子　新城沙織
藍原瑞穂　太田香奈子　月島拓也

【痕】

柏木耕一　柏木千鶴　柏木梓
柏木楓　柏木初音　柳川祐也

【To Heart】

藤田浩之　神岸あかり　長岡志保

来栖川芹香
保科智子
松原葵
雛山理緒

【WHITE ALBUM】

藤井冬弥
緒方英二
河島はるか

【こみっくパーティー】

千堂和樹
長谷部彩
牧村南

来栖川綾香
宮内レミィ
マルチ

森川由綺
篠塚弥生
観月マナ

高瀬瑞希
猪名川由宇
塚本千紗

佐藤雅史
姫川琴音
セリオ

緒方理奈
澤倉美咲
七瀬彰

大庭詠美
芳賀玲子
桜井あさひ

立川郁美　御影すばる　九品仏大志

【まじかる☆アンティーク】

宮田健太郎　スフィー　リアン

江藤結花　高倉みどり　牧部なつみ

【誰彼】

坂神蝉丸　三井寺月代　砧夕霧

石原麗子　桑嶋高子　岩切花枝

杜若きよみ〈原身〉　杜若きよみ〈複製身〉　御堂

【MOON.】

天沢郁未　巳間晴香　名倉由依

名倉友里　天沢未夜子　巳間良祐

少年

【ONE】

折原浩平
里村茜
椎名繭
広瀬真希

【Kanon】

相沢祐一
美坂栞
倉田佐祐理
天野美汐

鹿沼葉子

長森瑞佳
川名みさき
柚木詩子
住井護

月宮あゆ
沢渡真琴
美坂香里
北川潤

七瀬留美
上月澪
深山雪見
氷上シュン

水瀬名雪
川澄舞
水瀬秋子

【AIR】

国崎往人
遠野美凪
霧島聖
長瀬源一郎
長瀬源五郎
TEAM高槻
ポテト
神奈備命

神尾観鈴
みちる
橘敬介
長瀬源三郎
フランク長瀬
ぴろ

霧島佳乃
神尾晴子
長瀬源四郎
長瀬源之助
そら
ぽち

and many extra

脚本

L.A.R.
。
quit
訳あり名無しさんだよもん
YELLOW
駄っ文だ
ALFO
暇人
独活大樹
名無したちの挽歌
赤目
久々野　彰
祐一＆浩平

zin
シイ原
111
荒門
189
ないしょ
セルゲイ＠Ｄ
林檎
#4-6
箕崎
#7-76
MIU

ナナツさんだよもん
真空パック
いつかの書き手
命
観月
名無しさんなんだよ
ヘタ霊
名無しcd
#3-174
七連装ビッグマグナム
遥か昔の書き手
彗夜
日向葵

葵原てぃー　NBC　5
フラスキ　Kyaz　River
感想スレRの142　&名無しさんだよもん

書籍編集

瀬戸こうへい　セルゲイ@D　三浦蘭

カバー絵・挿絵

秋★枝　みさき樹里　天田湧介
しまさらゆめき　指狐　ちん

書籍編集協力

はるか　JOYH-TV　冴村浩志
名無しさんだよもん@誤植指摘

プロモーションフラッシュ

静かなる中条　音楽担当各氏　絵師各氏

スペシャルサンクス

ダンディ　名剣らっちー　旧データサイト管理人各氏

and all readers

presented by　葉鍵板

いくつもの願いがあった
いくつもの別れがあった
いくつもの物語があった

そして――

to be continued......last episodes......

859　コップの中の嵐

——00:02　東京　新宿地下施設

地下とは思えないほど広大で豪奢な空間。そこでは様々な男女がカクテルグラスを片手に談笑している。彼らの共通点は顔に奇妙な仮面をつけている事。
そして会場の雰囲気を壊さぬよう計算し尽くされた配置の机の上には、まさに山海の珍味の数々が並べられ、そのどれもが尽きることなく運びこまれている。部屋の四方の壁、天井、はては床までがモニターになっており、逐次なにやら映し出していた。

「そろそろ決着のようですなぁ」
「マドモアゼル、あなたのどの駒にお賭けになったので？」
「おほほ、私は七瀬留美に」
「さすがはお目が高い。私の賭けた柳川祐也なんぞは開始早々消えてしまいまして。まったく役に立たない男だ」
「まあまあ、その賭け金も見物料だと思えば安いものではないですか」

そう、この奇怪な仮面舞踏会の正体……それはＦＡＲＧＯ——否、その実態は長瀬一族なのだが彼等にとってはそんなことはどうでもいい——主催の狂気の宴。とある島で百人の人間達が殺し合い、そこから生きて脱出する者は誰であるかを見定めるギャンブル。
この宴に集まった者達は皆、政財界で名を成し、この世の至福を勝ち取った人間。その至福に飽き足りなくなり、最後に行き着いた先がこの命を賭けた椅子取りゲーム。
もちろん参加するのではない。自分達は絶対安全な場所、遥かな高みから命のやり取り——そう、ど

んなに最高の俳優でも虚構のドラマである限り決して演じきれない現実のドラマ——それを眺める……それは特権階級たる彼等の権利。
残酷？　なにを言っているんだ。古代ローマ帝国では、奴隷剣士の決闘を見物し、そしてそれに賭ける事はなによりの娯楽かつ神聖な行為であったではないか。

「しかしモニターの修理はまだ終わらないのですかな？　これでは折角の彼等の舞台を十分に楽しめぬ」
「まあまあそう言われますな、ご老体。彼等の体内センサーはまだ生きていますゆえ、死人が出ればすぐわかる。その瞬間を今か今かと待ち続けるのも一興ではありませんか」
彼等は実に楽しげだ。数年に一度行われるこのパーティー。ここに来ることができるのはある種のステータスシンボル。裏の、そして闇の社会に地位を得た証。
同じ穴のむじな達が集まるこの会場。同類の親しみ。彼等はここで様々な人間と縁を結ぶ。いまそこにいる男も……

「いかがですかな、今回のゲームは？」
彼は、一人テーブルに座る男に声をかけた。相手はタバコを口にくわえて無造作に足を組んでいる。
——賭けた駒が全滅したんだろう——彼はそう好意的に解釈することにした。
「今回の主催者の試み——ジョーカーといいましたかな？　——少々作為的ではあるが私はかなりおもしろかったと……」
「くだらねえな……」
「…………確かにそういう意見もありましょうが……」
ピリリッ、ピリリッ……
突如電子音が鳴る。相手の男は彼にはなにも言わ

ず懐から携帯電話を取り出して、なにやら話はじめた。
「ああ俺だ……、そうか……」
まったく、礼儀を知らん男だ。品性のかけらもない。
「……うん……用意は……」
それにこんなところで携帯だと？　これだから成り上がりものは……携帯っ⁉
ここは東京新宿地下施設。誰も知らない筈の場所。電波が届く筈はない。なにか細工をしていなければ。こいつは……
バアァァン……
パーティー会場に一発の銃声が鳴り響き、次の瞬間全てのドアから完全武装の兵士が突入してきた。

――00:07　中国　天安門地下会場
「異常事態発生、異常事態発生。本部、指示を願います‼」

――20:07　ロシア　シベリア平原施設
「ＦＡＲＧＯ本部、ＦＡＲＧＯ本部、応答願います‼。現在所属不明の部隊と交戦中。このままでは……うわぁっ………」

――18:07　スイス　スイス銀行連盟特別施設
「なにがどうなっているのだ⁉」
「わかりませんっ。現在最終防衛ラインで交戦中っ‼　ＦＡＲＧＯ本部とも連絡がとれませんっ」
「なんだとっ⁉」

――17:07　英国　ロンドン郊外大庭園

「我、救援請う、救援請う!!　……何故だっ!?　何故通信が通じないっ!?」

――12:07　アメリカ　ワシントン地下四百メートル

「こちらアルファ。奇襲に成功。現在ブラボー及びチャーリーが交戦中。二十分以内に制圧可能です」

――01:37　日本　東京新宿地下施設（FARGO本部）

「だめです!!　状況判明しませんっ!!」
「なんだっ？　なにが起こっているというのだ!?　この世界に我等に刃向かえる組織など既に存在しないはずだぞっ」
「しかし、現にっ!!」
「くっ!!　仕方があるまい。長瀬老にご連絡申し上げろ」
「それが……夕刻過ぎに通信が途絶えて以来、長瀬様との通信回線が開かないのです」
「なんだと……」
「まあ、あんたらの負けってこった」
飄々とした声と共に男が部屋に入ってきた。口にはタバコ。先程のパーティー会場の男だ。
「既に世界各地のFARGO及び長瀬関連施設は我々の制圧下にはいった」
「なんだと……そんな馬鹿な!?」
「悪いが事実だ。今回の作戦は民族、宗教、国家を越えて世界中で実施されているのさ」
「……おのれぇぇっ！　貴様……貴様一体何者だ!?」
「内閣特別執行委員会直属、特務機関CLANNAD司令、古河秋生……」

「秋生さん……」

男――古河秋生のもとに長いポニーテールの女性が歩み寄る。

「早苗か……」

「当施設の制圧は完了しました。現在『島』に関する資料の探索を行っています」

「そうか」

「それとハクオロ様から通信が入っていますが」

「分かった。出よう」

通信室。モニターには仮面をつけた男の姿があった。

「ミスター古河。そちらの首尾は？」

「今終わったところだ。ハクオロ殿、今回の作戦への協力を感謝する」

「礼など必要はない。今回の作戦は合衆国（ステイツ）のためでもある。我々や他の国の連中もＦＡＲＧＯや長瀬には頭を痛めていたからな」

「そうは言っても、あなたたちの協力がなければこうはうまくいかなかった。改めて礼を言わせてもらう。……それと例の『島』の件だが……」

「贄、羽根、封印、結界……。分かっているのはこれだけだ。こちらではアルルゥ、エルルゥ、ユズハが解析を行っているが、まだ判明していない。そちらは？」

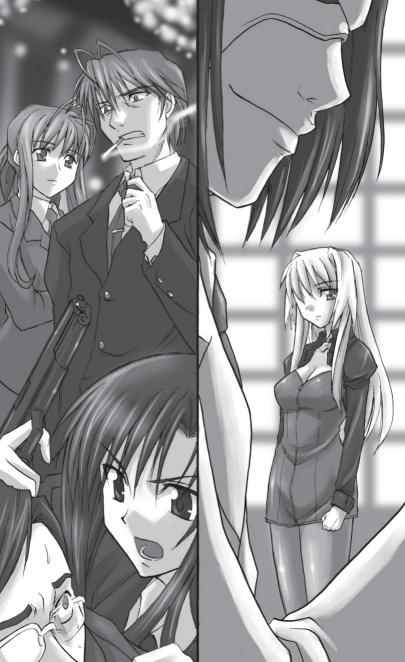
「現在、岡崎朋也、春原陽平の両名が全力をもって解析を行っていますが………こちらもまだ……」

ハクオロの問いかけに早苗が答える。

「そうか……。せめて場所だけでもわかるといいのだが」

二人は通信を終え屋上に向かう。窓から外を覗くと星がきらめいていた。

大都市東京とはいえ、この時間にもなるとそれなりに星が夜空に姿を現している。

秋生は忌々しげに、吸っていたタバコを投げ捨てる。

「水瀬秋子特別調査官からの通信が途絶えて四日……、あの様な悪夢を阻止するために皆で作り上げたこの組織なのにな……」
「秋生さん……」
「国を超え、民族を超え、宗教を超え……。折角ここまで来たっていうのに……」
「ですが、ＦＡＲＧＯ及び長瀬は押さえました。このような悪夢は今回で最後のはずです」
「ああ……だが………我々に密かにご尽力して下さった来栖川老にも申し訳がたたない……」
「秋生さん……。我々はやれるだけのことはしました。そしてまだやることはあります。後悔するのはそれからでも遅くはありません……」
早苗がうつむき加減で答える。肩が小刻みに震えていた。
（……そうだったな、おまえと水瀬秋子は本当に仲のよい友人……親友だったんだよな……。多分お前は俺よりも……）
「まだ生存者がいる筈です。私達も渚と合流してデータの解析、『島』の場所の特定に全力を尽くしましょう」
「……そうだな」
「それが彼女の……そしてみんなの願いだと思います。今は後悔することより先に進むことを考えましょう」
『お互い分かっていた。もはや俺達は遅い、遅すぎたのだということを。
もうこれ以上この腐れゲームに干渉をすることは不可能だ。
だけれど……今、生き残っている奴くらいは助けてやりたい。だから。
「行きましょう。秋生さん」
二人は待機していたヘリに乗り込む。
――今、昔の友人達が必死に高槻をどうにかしよ

うと必死で動き回っているわ』
　確かに彼等、水瀬秋子の古くからの友人たる古河秋生、早苗達は死力を尽くしていた。
　そして、その結果。
『往人さん。高槻という人の後ろには、とある人がいるのよ。私はその人達と争いたくないから、最後はこの子を生き残らせるために辛い選択をする時が来るとおもうの』
　彼女、水瀬秋子ですら躊躇した相手、その長瀬の組織すらも壊滅に追い込むことができた。だが、彼らに出来たのはそれだけ……それだけだった。

　彼等は知る由もない。島での出来事、真実、そして結末を……。

860　すくいきれないもの

　ぴろはただ、その光景を見終えて立ち尽くすのみだった。
　終わってしまった。
　そう、全て終わってしまった。
　そらは結局、最後まで彼女を守ろうとして——そして守ってみせたのだろう。
　自らの全てと引き替えに。
　一方の自分は、約束は果たせずじまい。
　仇はもういない。
　戦友も、誰も残っていない。

(俺がやれること、なくなっちまったか)
　どうして、自分が生き残ってしまったのだろう？
(疲れた——)
　彼はその場にへたり込んだ。元々無理を押して、

この決戦の地までやってきたのだ、緊張の糸さえ切れてしまえば、まともに動けるはずもない。
（本当に、疲れた――）
生きることがどんなに辛かろうと、それを投げ捨てることだけは、絶対に許されなかった。
誰が何と言おうと、それが生き残った者の責任なのだから。

耕一は、ただ地に伏して。
この凄惨な結末に打ちのめされていた。
観鈴も、彰も、千鶴も。
何故死に逝くその顔は、あんなにも安らかだったのだろうか？
『――ありがとう』
『初音ちゃんのこと……頼むよ』
『おかあさんも、〝ようやった〟って……言ってるよ』
彼らの最期の言葉を思い出す。

（俺は――本当によくやれたんだろうか？）
神奈だけを斬ることは果たせた。
だが、あの言葉に込められた千鶴の本当の望みは。
観鈴を救うこと。
その観鈴は、自分を助けるために命を落としたのだ。
（俺は――）
今は、そんなことで悩んでいるべきではないだろう。後を託された者として、やるべきことをやり、為すべきことを為さねばならない。
それは分かっている。
しかし、分かってはいても、立ち上がることはできない。
（結局、俺は――何もできなかったんじゃないのか？）
耕一の問い掛けに答えてくれる者は、誰もいなかった。

耕一に捨て置かれた、その刀の内では。

——嫌じゃ、余はもう嫌じゃ。

哀れな敗北者による最期の、そして無駄な抵抗が行われていた。

ある意味では、何よりも、それこそ自身の消滅よりも恐れていたこと。

敗北。そして封印。

今や神奈には、何の力もない。

ただ呪いを受け続けなければならない。

ただ夢を見続けなければならない。

この千年の間、それを強いられてきたように。これからも、ずっと。

——嫌じゃ、余はもう嫌じゃ——

また、自らの目の前で柳也を失うのだろうか？

また、自らの手によって柳也を殺すのだろうか？

幸せを掴もうとしても、決して掴めない。

それは指の合間をすり抜け、こぼれ落ちてゆく。

——嫌じゃ、余は、もう——

彼女はただ、泣き叫ぶ。たとえそれが、誰にも届かなかったとしても。

861　すくうもの

「がんばりましたね」

「ああ、もう死ぬほどにな」

「ははは、そうですね」

「それにしても、また会えるとは思わなかった」

「……そうね」

「母さん」

光
空から降り注ぐ、まぶしい光。
闇
目の前を覆う、暗い闇。
涙
涸れ果てることのない、忌まわしい水。
血
余の両手についているのは、だれの血だ？

「柳也、殿？」
地面に倒れ伏している、ひとりの男。
背中を、斜めに赤く大きな深い傷。
右手には血塗れの太刀をにぎったまま。
左手は土くれをつかんだまま。
立ち上がろうとして、果たせなかったのだろう。

――また、同じ夢。
神奈とて分かっていた。これは現実ではない。
呪いだ、ということを。
だが、彼女は抗うことはできない。
両の目は、涸れることなく涙を流し。
両の手を、柳也の血で赤く染めて。
――また、同じことが繰り返される。
何日も、何ケ月も、何年も。
何十年も、何百年も、何千年も……。

「あらあらまああ……親子水入らずのところすみません」
「……誰だ、あんた？」
「これ、往人。口を慎みなさい。体は大きくなったのに、相変わらず口の悪い……」
「うふふ、殿方は腕白なくらいでいいと思いますよ」
「恐縮です」
「だから、誰、あんた？」

「柳也……」
赤い体にすがりつき、神奈は泣く。
暗い森の中に、いつまでも少女の嗚咽がこだましている。
――どうしたの？
「柳也が、柳也が……」
――何で悲しいの？
「余のせいで、柳也が……」
――何で泣いてるの？
「柳也が死んで、死んで……」
――いつまで泣いてるの？
「そんなこと、知るか……」
――いつまでそうしているの？
「余だって、いつまでも泣いていたくはない。だが、柳也が……」
――だったら、いっしょに遊びませんか？
「えっ？」

「私たちはこれから裏葉様と共に神奈様に掛けられた呪いを浄化します」
「母さん、なんであんなヤツに様をつけるんだ？」
「お気持ちはわかりますわ。神奈さまは貴方達に悪戯ばかりされてましたものね」
「……あれは、悪戯ってもんじゃねーだろ」
「それでですね。ひとつ頼まれ事をしていただきたいのです」
「シカトかよ……」
「これ、往人！　裏葉様に恐れ多いですよ！」
「……わかったよ。で、俺は何をすればいいんだ？」
「神奈様と友達になってください」
「……はぁ？」

どこからともなく聞こえてくる、声。
「誰だ！」
神奈は涙をぬぐい、辺りを見回す。
『いつもと……違う。余はここで独りのはず』
闇の中に包まれた木々の中、ぼうっと光るものが見える。
『？』
それは、徐々に神奈に近づいてきている。
光はだんだんと人の形をつくり、大きくなっていく。
奇怪な光景、だが、不思議と恐ろしくはない。
やがて、光は薄れ、そこに立っていたのは、ひとりの少女。
「おまえ、は……」
「みすず、だよ。神奈ちゃん」

862　空へ

空を見上げる。降り注ぐ光が次第に弱まっていく。
「ん？」
ふと地面に目を落とす。地面に何かが落ちているのに気付いた。
それは黒い羽と白い羽だった。まるで互いに寄り添うように。
「そら……」
それを見て何となく理解する。お前はちゃんと彼女を救えたんだな。
それに比べて今の俺は情けねぇなぁ。
ポテトとの約束も守れず、ただ生きてるだけ。
こんなんじゃあの世であいつらに顔向けできねぇな。
俺は爪で自分の顔を引っ掻いた。
「ってぇ……」

でもおかげで目が覚めた。
そうだな、愚痴ってても仕方ないな。
あいつらはあいつらがやれることをやった上で死んでいった。
なら俺もやれることをやった上で生きていこう。
あいつらの分までな。
「っと」
後ろからふいに抱きかかえられた。
いつもなら暴れ出す所だが今の俺は気分がいいからな。
ま、特別に許可してやるぜ。
ふいに風が吹いた。
地面に落ちていた一対の羽が空へと飛んでいく。
俺はそれを目で追う。
ポテト、お前との決着はそのうちつけてやるからな。
そら、悪いけどポテトに俺の分まで約束守れなかったこと謝っといてくれよ。
ぽち、お前のこと結局守れなかったな。文句はまた後でゆっくり聞かせてもらうから。
今はまだお前らに会えないけど。いつかまた必ず会えるから。
だからその時まで。
「……またな」
何故か目から涙がこぼれる。
けっ、涙なんて柄じゃねぇのにな。
「泣きたい時は泣いた方がいいわよ」
俺を抱いている人間が頭をなでながら声をかけてくる。
――ありがとう、ぴろ君――
空耳か？
そらの声が聞こえたてきた。

ったく相変わらず水くせぇな、そら。
ずっと言ってるだろ。
「俺達、親友だからな」

羽は空高くのぼっていく。
幸せな記憶と小さな一匹の猫の思いをのせて。
どこまでもどこまでも高く。

863 Where Have All The Flowers Gone

神奈は刀に封印された。これですべてが終ったはずであった。だが、すべてが終った事で、安堵の表情を浮かべるものは誰一人としていない。
月明かりが辺りを照らす中、傷つき、倒れ、地面に横たわるものが増えていった。神奈を封印するために犠牲となった七瀬彰と神尾観鈴。そしてこの島には、あと九十一もの傷つき、倒れた者が横たわっている。今、ここに生き残っているもの達の中にも、傷一つ無いものなど誰一人としていない。ここにいる者のすべてが、身体的にも、そして精神的にも、深く大きな傷を負っていた。
柏木耕一は、自分の身を賭して命を救ってくれた神尾観鈴の——すでに上半身だけとなってしまった——身体を、濃緑の草叢の上へ、大切な壊れ物を扱うかのように優しく寝かし付ける。
「観鈴ちゃん、ちょっとだけここで待っていてくれる。またすぐにここに戻ってくるから」
そう言って、時間にしてほんの数秒だけ自分の命を救ってくれた少女を見つめ、返ってくるはずのない返事を少し間だけじっと待つ。変わる事のない沈黙に小さくため息を漏らし、この場所に横たわるもう一つの身体の元へと赴く。
「……彰」
再び来るはずの無い返事を待つ。返ってくるものは二度目の沈黙。震える事のない空気だけが、一人の生者と一人の死者の間に漂う。

「彰」
もう一度だけ、そこに横たわっている青年の名前を呼び、物言わぬ身体を自分の両腕で抱きかかえる。耕一と出会ってから一度として見せていない、本来持っていた穏やかで優しげな表情で横たわる彰。今まで生きてこられた事が信じられないくらい頼りなげな細々とした身体を、壊れるくらいに強く抱きしめる。
観月マナは、そんな柏木耕一の姿を、呆然と見守っている。
月宮あゆは、耕一が安置した、神奈と共に倒れた少女――神尾観鈴――の元に駆け寄り、その上半身だけになってしまった身体を揺さぶる。その行為が全く無駄なものであるというのは、あゆ自身の理性は理解していた。それでも、これ以上人が死んで行くのは嫌だという感情が、起きる筈の無い奇跡を願うかのように、一心不乱に観鈴の身体を揺さぶり続けさせる。
「観鈴ちゃん。もう起きようよ」
しかし、満足げな表情を浮かべた少女の表情が変わることも、その口から言葉が紡ぎ出される事も無かった。
柏木梓は、誰に言うわけではなく、この場から姿を消した。向かう先は、梓にとっての最後の姉妹である柏木千鶴が、傷つき、力尽き倒れた場所であった。
あらためて横たわる千鶴を目の前にする梓。だが、その体にすがり付くような事は無い。大声をあげ、泣き叫ぶような事もない。ただ、何の言葉もなく、何かを押し殺しているような堅い表情で千鶴の目の前に立ち尽くしているだけである。ただその目には大量の涙が溢れだしている。すでに瞳の中に仕舞い込んでおく限界量を超え、次から次へと零れ落ちてくる雫を拭う事もせず、一心に千鶴の姿を見つめている。
椎名繭は、ここで起きた凄惨な場面の連続に耐え切れず、隣に居た七瀬留美の服にしがみついて震え

ている。ショックに耐え切れず、反転が終了してしまっていた。
七瀬留美はそんな繭を優しく抱きしめ、頭を撫でている。しかし、その表情は、涙こそ流していないものの、今にも泣き出しそうなものであった。
そして、巳間晴香――
その表情に涙は無く、すべての感情を殺してしまったかのような無表情であった。思い思いの行動を取る他の生者を尻目に、晴香は傷ついた体を引きずり、森の奥へと歩みを進める。光射す場所を離れ、まるで暗い場所を探し求めているかのように、奥へ奥へと、なおも歩みを進める。
辺り一面、鬱蒼と茂った草と多くの木々に囲まれ、光は一切入ってこない場所。まるで、そここそが自分の求める場所をであるかのように、ごく自然な動作でその場に座りこむ。
木を背もたれにし、ゆっくりと天を仰ぎ、そして瞳を閉じる。晴香の脳裏には、ついさっきまで見ていた光射すあの場所での風景が思い描かれていた。その場にいる誰もが、悲哀、恐怖、憤怒といった負の感情をその表情に浮かべている。しかし晴香だけは、他の人達とは違った表情を浮かべていた。
あの場で感じた事は、ただ『これでやっと終った』という事だけであった。そこには、負の感情だけでなく、いかなる感情も入りこむ事は無かった。
「私って、本当に薄情な女だよね。私だって、この島で兄さんや、郁未、葉子さんを失った。由依なんて、私のために死んでしまったのに。それにこの島に来て初めて会った友達たちも、数多く失ったんだよね。なのに、貴方達の為に涙の一つも流してやれないんだから……。本当に薄情な女だよね、私って」
そう言って、晴香は自嘲的に笑う。
「ねえ、兄さん、葉子さん、郁未。この島で一緒に行動を共にする事は出来なかったけれど、あなたたちは最後まで幸せだった？　ねえ、智子、マルチ。

あなたたちは本当に最後まで幸せだった？　由依。あなたは、私のために命を失って良かったたって思ってる？　それで本当に幸せだったの？」
　晴香の脳裏に自分の兄の顔、古くからの親友達の顔、この島で出会った友達の顔が次々と浮かんでゆく。脳裏に浮かぶ表情は、どれもみな一様に幸せそうな顔をしていた。その幸せそうな顔が、次々と晴香の脳裏を横切って行く。
　そして、それとは反対に晴香の顔はどんどんと曇ってゆく。
「……私はぜんぜん幸せじゃないわ。だって、生きていたって貴方達がいないんだから。これからもずっと、貴方達のいない世界でいくつもの季節を越えて行かなければならないんだから。でも、それでも、今は幸せではないけど、いつかきっと幸せになって見せるから。貴方達の為に涙すら流す事の出来ない私が、自分の為にしか涙を流せない私が、貴方達にしてあげられる事なんて、何もないかもしれない。でも私、貴方達の事、そして貴方達と過ごした時間を絶対に忘れないから。そして、いつか誰よりも幸せになってみせるから。だから、今は、今だけは、この場所で少しだけ休ませて……」
　ゆっくりと目を開き、誰に言うでもなく小さく呟く。いつの頃からか、悲しみの感情を無意識的に、そして完全に押さえこんでしまっていた晴香の、本来なら表れるはずのなかった本音だった。
　誰も聞くはずのなかった言葉を風が運ぶ。その言葉は晴香自身の心に浸透してゆく。それはまるで春と共に溶けてゆく雪の様に、押さえ込んで来た様々な悲しみの感情を容赦無しに突き崩していった。
　不意に晴香の目の前の視界に靄がかかる。反射的に右手を持ち上げ目を擦るが、靄が晴れることはなく、目を擦った指は湿っていた。
「なに、これ」
　湿っている指に目をやり小さく呟く。その呟きとほぼ同時に、晴香の瞳から一片の雫が頬を伝わり零

れ落ちて行く。
「今更になって、貴方達の為に涙なんか流すなんてね」
そう言って含羞(はにか)んだ笑いを見せ、両目から零れ落ちる雫を掬う。しかし、掬っても掬っても、目から零れ落ちる涙は止まらない。
「どうして、どうして、今頃になって……」
止まることのない涙に動揺し、無表情であった晴香の顔が、これまでこの島で見せた事のないような感情的な表情に支配されてゆく。今更になって涙を流している自分が、感情を剥き出しにしている自分が、酷く恥かしく思えた。
晴香は涙に濡れた顔を隠すように、自分の両膝の上にうずめた。
「……」
背後から不意に、何者かの両腕が身体を包み込む。柔らかく、そして暖かな温もりに反応し、晴香は涙に濡れた顔を持ち上げる。振り向いた視線の端に、ここ数日の間で見るのも飽きてしまうくらいに見慣れてしまった顔を捉える。晴香はごく自然な動作で、心地よい両腕を解き、その見慣れた顔を自分の視線の中心に据える。
視線の中心にきた見慣れた顔。七瀬留美の表情は、今だ悲しみを押し殺すような表情が残ってはいるものの、つい先程までの、生気を失ったような蒼白な顔色ではなく、かすかな生気を伴ったものに変わっていた。そしてその後ろには、所在無さげに服の袖を掴んで離さない繭の姿があった。
本当に見慣れたその顔は、晴香の流す涙のせいか、酷く歪んで見えた。
「……晴香」
「……七瀬」
涙を流し、これまでに見た事がないくらい感情的になっている晴香の表情を見て、ほんの一瞬だけ、驚愕の表情を浮かべたが、すぐにもとの表情を取り

戻す。
「……」
「……」
お互いがお互いの名前を呼んだきり、何の言葉も交わされない。三人を包み込む空気は沈黙に包まれ、ただ風に揺れる木々のざわめきだけが音として、風と共に流れている。沈黙の続く長い時間。その間中、留美は晴香の顔から視線を外さなかった。
沈黙は続いたまま、再び留美が晴香の両肩を、脇から抱えこむようにして抱きしめ、優しく頭をなでる。いつもとは違う留美の行動に少し戸惑いを覚えたが、そのまま身体を委ねる。
「……」
「……」
ほんの少しの間だけ、優しく晴香を包みこむように抱きしめ、二人はすぐに離れる。その一連の動作の中でも、一切の言葉は交わされることはない。

「まだ終ったわけじゃないんだから、早く行くよ」
お互いがお互いの名前を呼んで以来、この空間に初めて言葉が駆け巡る。たちあがる留美が一瞬だけ視線を、元いた光さすあの場所へ移し、晴香に背を向ける。晴香に背を向ける最後の瞬間、晴香には、留美がこれまで見せた事の無いような優しい笑顔を見せた、……様な気がした。
繭を引きつれ、光射すあの場所へ戻る留美の背中に向かってただ一言だけ、留美に聞こえないように、とても小さな声で、言葉を紡ぎ出す。
「ありがとう」
それだけ言うと、すぐに立ち上がり、留美の後を追い、暗く、鬱蒼と茂った森の奥深くから、光射すあの場所へ帰って行く。晴香の目から零れ落ちていた涙は、何時の間にか乾いていた。
「あたし、これから、絶対に七瀬達と幸せになってやるんだから」
誰に言うでもなく、心の中で誓った。その表情に

は、これまでの、感情を押し殺したようなものではなく、滲み出るように優しく、少し照れたような笑顔が浮かんでいる。そして、晴香の身体には、あの時ほんの一瞬だけ交した抱擁。ぶっきらぼうながらも、優しく暖かな、留美の両腕の感覚が、今も鮮明に残っていた。

あまりにも多くのものを失ったこの島の中で、ただ一つだけ与えてくれた、かけがえのないもの。

この島で失ったものの巨大さに比べれば、得たものはあまりにも小さなものであったが、今はただ、その存在がとても嬉しかった。

864　涙を拭いて

「みゅー……」

繭によって不意に服を引っ張られ、七瀬はその足を止めた。

「ん？　どうしたの？」

繭の視線を追う。

そこには、一匹の猫がいた。

さらにその先には、黒い羽と白い羽。

一対の羽を見つめるかのように、ボロボロの猫はその場にたたずんでいた。

「……ったく、しょうがないわね」

そういえば、さっきは散々引っ掻かれたりもしたが、今はきっと大丈夫だろう。

七瀬は猫を後ろから抱え上げた。

先程の散々の悪態がまるで嘘かのように猫はじっとしている。

ただし、あくまで羽からは目を逸らさない。

不意に風邪が吹き、羽が舞った。

二枚の羽は風に舞いつつも、決して離れはしない。

淡い光の中、ただひたすらに高みを目指し、舞い上がってゆく。

猫も、繭も、七瀬も、空へと消える羽を見上げて

いた。
光と闇の合間に羽を見失って。七瀬は視線を手元の猫に戻す。
（泣いてる？）
もう見えなくなった羽をどこまでも追おうと、空を見上げる猫の顔。
猫の泣き顔など分かるはずもない。しかし、七瀬には何となくそう思えた。
猫の頭を撫で——らしくないとは思いつつも——声を掛けてみる。
「泣きたい時は泣いた方がいいわよ」
その猫に向けての言葉なのだろうか？
生き残った皆に向けての言葉なのだろうか？
それとも——自分自身に向けての言葉なのだろうか？
結局は、そのどれもなのだろう。
泣きたい時は、泣けばいい。
泣いて、泣いて、散々泣いて——泣き終えたあとに立ち上がることができるなら、泣くことは決して悪いことではないはずだ。
ふと、何かに気付いて後ろを振り返ってみると。
「晴香？」
「な、何？」
いつからいたのかは知らないが、そこには晴香が立っていた。彼女もまた、あの二枚の羽の行く末を見届けていたのだろうか？
「これ、お願い」
七瀬は、抱えていた猫を晴香に差し出す。
いきなりのことで少々面食らいつつも、晴香は猫を受け取った。ぎこちない手つきではあったが、何とか七瀬がしていたように猫を胸に抱える。
一方の七瀬は、晴香や繭に背を向けて、空いた手で、黄色いリボンを取り出した。
浩平から漢の約束と共に受け取った、瑞佳のリボン。

それを握りしめ、彼女は目を閉じる。
自然と、一筋の涙が流れた。
(今のあたしには、これで十分)
続きは、漢の約束を果たし終えてからにしよう。
七瀬はリボンをしまい、涙を拭いて、そして目を開けた。

865　脱出口

いつの間にかそれぞれが埋葬を始めていた。
さく、さくと土を掘る音と、もう誰のものとも分からないすすり泣きだけが響いていた。

場所は医務室に移って。
皆、一通りの治療を終え今後の対策を練っていた。
「脱出の話なんだけど……」
切り出したのは耕一。
「案があるわ」
すかさず七瀬が口を挟む。
「北に灯台があるの。そこの地下に高槻が隠し持ってた潜水艦があるわ。きっとそれで脱出できるはず」
とりあえずミサイルの事は出さないでおいた。
「潜水艦、か……」
その事は耕一も承知していた。他の脱出方法が『無い』ことの確認の発言だったが、その役目は全うされたと言える。
やはり、それしか方法がないのだろう。それを踏まえて、耕一はしゃべる。
「誰か一人残して爆弾を吐けば、迎えでも来るんだろうけど」
「でも、それだと助かるのは一人じゃない。そりゃ物騒な方法もあるけれど……」
晴香がそこまで言い、口をつぐんだ。
もう、誰かが死ぬのはたくさんだった。
「……決まり、ね」

施設を出るとき、耕一は一度だけ、彰を埋めた場所を見やった。
「……じゃあな、彰」
一言、そう呟いた。
刀は持っていくことにした。下手に折りでもしたら、また『奴』が出てきかねない。
家の仏間にでおいておこう。そう思っていた。
ついでに、刀が刺さっていた人形もポケットに入れた。こっちの方は、まあなんとなく。
「行くか、梓」
梓は足の怪我が深く、あまり長距離の移動は無理なようだった。
「うん……ごめんね、耕一」
「気にすんなって」
梓の脇に肩を入れる。なんとかなりそうだ。
先頭には晴香、七瀬が立ち、一行は一路、灯台へと――――

灯台から、例の通路をくぐり、地下ドックへ。
「このじめっとした空気……傷にしみるわね……」
先頭の二人は絶えず何かしら喋っているが、後ろを付いて歩くものは当座黙っていた。
「見えたわ……あれよ」
二人の指差す先には、みすぼらしい球状の物体が――

その「潜水艦」を見たとたん、その二人を除く全員が色を失ったのは言うまでもない。
「ちょっと……まさかこれが、潜水艦……？」
耕一に支えられている梓の声からも無論の事、驚愕の色が浮かんでいた。
「うぐぅ……これ、動くの……？」
あゆなどは既に涙目になっている。
「みゅー……」
繭もそれにならっていた。その目は「これに乗るの？」と語っていた。

おそらく二人乗りと思われるその潜水艇は、あの高槻の持ち物とは思えぬほどに控えめなスケールだったのだ。
「宇宙……いや、海の棺桶みたいだな……」
誰にも聞こえないように、耕一が呟いた。

気を取りなおして、一行は操縦方法の把握に入る。
晴香がドラ○ンレーダーミニとでも言うべき電子画面を見ながら言う。
「このへちょいのがレーダーらしいわね……七瀬、そっちは？」
「ダメ……ＦＵＥＬっていうメーターが燃料って事くらいしか……」
「そもそも操縦桿っていうのはないのかしら……この海賊船の舵みたいのがそうなのかしら」
「みゅー……」
繭は、相も変わらず七瀬にくっついている。そしてそのまた付属品、猫もまた、繭の足元に。

ぶつぶつ言いながら、二人はボール……いや潜水艇の理解に明け暮れる。
残る者はドック内の捜索に入っていた。何か見落としている脱出方法があるかもしれないからだ。
「耕一さん、これなに？」
あゆが指差した先には、プラスチックのふたで覆われた赤いボタン。
学校の非常ボタンについてるような、あれだ。もっとも、その上に赤いランプはついてなかったが。
「ふむ……サーフェイストゥエアー……って何だ？　おい梓」
「あ、アタシに振られてもっ！」
「Surface-to-air『地対空』ですね」
見かねたという感じでマナが口を挟んだ。二人はうつむきかけたが、いまはそんな状況ではない。
「地対空……ミサ……イル？」
随分と突拍子もない話だったが、なぜかすんなり

と受け入れる事ができた。
　常識という感覚は既に麻痺しているようだった。
もっとも、それは今に始まった事ではなかったが。
　始まりは――――そう、高槻があの女の子を撃ち殺したところだったろうか？
「ミサイルに乗る青年……か」
　ぽつりと、耕一が呟いた。
「耕一……まさかアンタ、これに乗って脱出しようなんて考えてるんじゃないでしょうね」
　耕一に支えられながら、先ほどとは異質の驚愕の表情で梓が言う。
「う……で、でもさ、あの潜水艦に俺達七人……と一匹が乗るのは……空気の問題もあるし」
「潜水艦と言っても、どこか他の陸につくまで潜水しっぱなしでなくてもいいじゃないですか。ハッチを開けて海面に浮かんでいれば、空気の問題は解決できます」
　冷静な口調でマナ。
「それでもここは地下だぜ？　ここから出すにはあの潜水艦に乗らなきゃ……」
「だったらあとの人たちは上で待ってればいいんだよ」
　さすがにあゆに突っ込まれる事は予想していなかったのか、耕一の表情が沈んでいく。
「ぐ……うぐぅ………」
　唸る。
「あっ、ボクの真似しないでよう！」
　突っ込む。
　ここに来てなぜかあゆは一人元気だった。
「……なるほど、誰かがコイツを動かして、近くの海岸で残りの人を拾う、と」
　耕一からの説明を聞き終えた七瀬、晴香の両名は頷きながら呟く。
「ああ。ここからまっすぐあがっても崖だしね。ちょっと手間だけど多分それが最良だと思う。あとは

……」
誰が潜水艇を操縦するか。
「……潜水艦の操縦をやってみたい人。挙手」
誰も手を上げない事を前提に、耕一が聞いてみる。
手を上げないどころか、耕一さんお願いしますとか言われるんだろう。多分。
その予想に反して、三人、手を上げた。
七瀬と、晴香。少し遅れて、繭。

「指紋、照合しました。操作系統のセーフティロックを解除します」
無味乾燥なアナウンスが響く。聞くなり、七瀬は手にした『手首』を荷物の中に戻した。
ごとり、という音がした。どうやら物理ロックだったらしい。安物だ、と七瀬は思った。
「なるほど……指紋照合か……」
ハッチの上からのぞいていた耕一が思わず言う。
さすがに女の子が造作も無く荷物の中から手首を取り出したのには驚いたが……。
「三人とも、やれそうかい？」
「この舵みたいなので動かすみたいね、でも……」
人手が、足りない。
高槻の持ち物だからか、設計者がひねくれていたのか、それともよほどの急ごしらえだったのか……
操縦桿と、レーダー。それに、地図。コンパス。窓。
それらすべてが、それぞれ別の位置に配置されているのだ。
「これ作った人間は何考えて作ったのかしら……」
思わず、七瀬がもらした。
「耕一さん、もう一人くらい誰か乗るように――」
晴香が言い終わるより速く。
「ボクっ　ボクが乗るっ！」
能天気と言って差し支えない声がした。
「――言ってくれないかしら」
無視。
「うぐぅ～　ひどいよ～」

「本当に大丈夫かしら……」
晴香がため息をつく。結局、あゆに押し切られたのだ。
「アンタ、本当に大丈夫なんでしょうね。まさか興味本位で乗ったんじゃあ……」
七瀬が釘をさした。
「大丈夫だよ～　ボクがんばるよ～」
しかし、その瞳が好奇心に輝いているのを、二人が見逃そうはずもなかった。
ボクは今から、センスイカンに乗るんだ！　目は口ほどに物を言う。
「……はあ」
今度は、二人同時にため息をついた。
「じゃあ、いいかい？　エンジン始動するよ？」
耕一の声がスピーカー越しに響く。
もともとこの潜水艇は地上で内部気圧などを操作し、かつそこで指示を出しながら潜水させる『探査船』のようなものだったらしい。だから、始動スイッチなどが地上のドック内にあるのだ。
もっともそこは改造品らしく、潜水艇内部でも大まかな作業は行えるようになっている。
潜水艇にはケーブルがついており、この範囲内ならドックから電力を供給できるので燃料を気にしなくて済む。燃料を気にするのはケーブルの範囲から出た後でいい……らしい。
操縦席には、ちゃっかり切断ボタンらしきものもついていた。プラスチックの蓋が被さっていたが。
本来はドックで誰かが潜水艇まわりの装置を監視しなければならないのだが下手にいじるよりも、ということですべてオートにしてある。これも、ケーブルの範囲内での話だが。
晴香はコンパス。あゆはレーダー。繭は窓。地図は猫。配置は決まった。

「ここから東に進んだ一番近い海岸で集合だ。いいね？」
「はい。始めて下さい、耕一さん」
そして、舵を握るのは七瀬。スピーカーは舵の近くについていた。もっとも、すぐに使われなくなるが。
ヴォン……スクリューが回転し始める。
「行くわよ……」
七瀬は目の前の「Descent（下降）」ボタンを押す。
浮上、下降、前進はこのボタンで切りかえるらしい。
ゆっくりと、手元のレバーを押し込んでいく。
下降するエレベーターに乗っているような感覚が襲った。少し、お腹の傷がうずいた。
希望をはらんだ船は、静かに、暗い海に沈んでいく。
それを見届けると、地上に残った者たちは、ドックを後にした――――

866　追憶そして

そこは〝無〟
なにもないところ。
なにもないところに、彼女はいた。
かつて、神奈と呼ばれた存在。

（静かじゃ）
こんなに静かなのはどのくらいぶりだろう。
あの悪夢が始まってから、自分にはいっときもこのような時間はなかった。
（もう、あそこに戻るのは嫌じゃ）
この場所……場所と呼べるかどうかは分からないが……に、永遠に留まるのも悪くはなかろう。
永遠の、安息を――――

「……お前か」

入りこむ影、ひとつ。
「おぬしを利用した余に復讐にでも来たのか？」
返事は、ない。
「余が憎かろう。おぬしの体を利用し、思うまま殺戮に走った余が」
返事は、ない。
「殺すがいい、余を。消滅させてしまうがいい」
なんでもいい。
あの悪夢に、帰らなくとも済むのなら――――

「だめだよ」
人影が言った。優しい声だった。
「それじゃあなたは、いつまでも悲しいままだ」
それを聞き、神奈は激昂した。
「だまれ！　お前に余の何がわかるというのじゃ。余の悲しみが、苦しみが、悪夢が、お前に分かるとでもいうのかっ……!!」
激しい声だった。強く、荒く。

そして、悲痛な。
「分かるよ……だって」
「わたしは、あなた」

人影が、こちらに迫ってくる。
神奈は、退いた。
「あなたと同じ悲しみを……わたしも持っているもの」
一歩。
「く……来るでない……」
また一歩。
「あなたと同じ痛み……わたしも感じていたもの」
影は。
「来るでない……来るな……！」
神奈を――――

影に包まれた瞬間、神奈に流れ込んでくるものが

あった。
それは懐かしい、あの夏の日の記憶。
一人の無礼者と出会い、母親と別れたあの夏の日々。
そしてもう一つは、自分の知らない記憶。
一人の旅人と出会った、夏の日の記憶。
旅の男と過ごした、あの夏の日々。
それは。
幸せだった、あの夏の日々のカケラ――――――

神奈は我に返った。
影が、自分を抱きしめている。
不思議と、嫌な気分ではなかった。
そして、神奈の目に留まるもの。
それは、夏を共に過ごした、愛しい人。
「りゅうや、どの……？」
影の手を離れた神奈は、一心に柳也のもとへ。
「柳也どのっ、柳也どのっ、りゅうやどのぉっ！」

まるで、年端もいかぬ子供のように、神奈は泣き続けた。
柳也と呼ばれた影は、子供をあやすような仕草をしながら言った。
「神奈。よく聞け」
「いやじゃ！　もう、夢を見るのはたくさんじゃ！　余は、柳也どのと共にいたいのじゃ！」
話の内容を察していたらしい。神奈は、一層泣き始めた。
「駄目だ、神奈。お前が犯した罪は、お前が罰を受けなければ赦されない」
内容とは裏腹に、決して突き放すような口調ではなかった。
「罪？　余が、なにを……」
「島で、おまえが殺した人間がいるだろう」
「……ッ！」
思い出す。桃色の髪をした少女。緑色の髪をした少女。

一言も喋る様子のなかった少女。金髪の少年。蛇。
そして、あの鬼飼ぃ。
「うう……ううう」
神奈は、また泣き出した。それは夢に戻る事に対してか、それとも、〝罪〟の意識によるものであったのか。
体を震わせて、押し殺すように。
神奈は、泣いた。
「……安心しろ」
「柳也」の腕に力がこもった。
「俺が待っている。お前の罪が赦されるまで、俺がずっと待っていてやる」
「……！」
「だから、行ってこい。多分、すぐに終わるから。それに……」
そこで神奈はもう一つの影を認めた。それは、柳也とともに彼女を支え続けた人物で。
「裏葉ぁ……」
「こいつも、待っているからな」
「……」
「俺と裏葉はお前を応援しながら、いつまでも待っている」
だから、行ってこい。そう言ったきり影は口をつぐんだ。
「……待っていて、くれるのじゃな？」
神奈が、口を開いた。
「ああ。……待ってる」
「いや、待っておれ。これは命令じゃ」
その声は先ほどまでの神奈ではなく、あのわがままな翼人、神奈備命のものだった。
「……承知した。翼人様の命とあらば」
もっともらしく、柳也の影は応えた。心なしか、その顔は笑っているように見えた。
そして、神奈の姿が消えていく。
（————三人とも）
最後に。

（――――感謝するぞ――――）

そういって、神奈は姿を消した。

「わたし……あの子に何かしてあげられたかな」
「ああ。観鈴、おまえは充分過ぎる程よくやったぞ」
「せや。お前はようやったで」
「にはは、観鈴ちん、がんばった」
「それじゃ、そろそろ行くか？」
「え？　往人さん、あの子を待ってなくていいの？」
「せやで居候。男なら約束守ったらんかい」
「いや……待ってたから、おまえがいるんだろう」
「え？」
「……何でもない。それより……」
「往人さん、この手なに……？」
「共に、いたいんだろ？」
「おー　なんや居候、恥ずかしいこと言っとるでー。智子あたりにちくったろー」
「晴子っ！」
「お母さんっ！」
「わははー　なんや二人とも耳まで真っ赤になっとるでー　わははー」

約束しよう。
どれだけ生まれ変わっても、お前と共に生きる事を。

約束しよう。
お前に、幸せな記憶を刻みつづけてやる事を。

約束しよう。
たとえ汗が滲もうと、この手を離さないことを

――――

867

BGM Change 鳥の詩　（a Last Episode）

Please change BGM.　　Air より「鳥の詩」

……伴奏

――潜水艦、内部――

梓　「せ……狭い」
耕一「なんか息苦しくないか…？」
マナ「まず……くない？」
晴香「ちょっと七瀬！　上げて！」

潜水艦が急浮上する。

――ギ……ギギィ……――

急いでハッチを開けた。

耕一「だから無理だったんだって！　こんなたくさ……」

――潜水艦、海上――

耕一が見つめた空に飛行機雲が見える。

どこからか来て、あの島へ向かったかのような軌跡。

［消える飛行機雲　僕たちは見送った］

マナ「もう……。日が昇ってたのね」
ひょっこりと顔を出すマナ。
光を放つ太陽。
青い空。

［眩しくて逃げた　いつだって弱くてあの日から］

あの島の悪夢。
変わらないはずだった日常。

［変わらず　いつまでも変わらずに］

彼等はいつか、消えてしまった人達のことを忘れてしまうのでしょうか。

［いられなかったこと悔しくて指を離す］

――潜水艦、正面――

――ニャーニャー……――

耕一「鳥？」

潜水艦のまわりに沢山の鳥が集まってくる。

鳥達は彼等の船に併走する。

白い中に一羽だけ黒。

［あの鳥はまだうまく飛べないけど］

マナ「鳥がいるってことは……」

繭「陸が近いってことじゃない？」

黒い鳥は、道を示したかのように先へと進む。

不恰好な飛び方のまま、弾けて消えた。

ぴろ（!! そ、ら!?）

［いつかは風を切って知る］

七瀬「陸見えたの!?」

操縦席から響く七瀬の声。

晴香「まだ……。まだだけど……！」

［届かない場所がまだ遠くにある］

あゆ（うぐぅ…。狭いし暗いし苦しいし……。早くついてよぉ……）

［願いだけ秘めて見つめてる］

——通学路——

七瀬「折原……。瑞佳……」

通学路を行く。
以前通りの道だが、寂しい。

［子供たちは夏の線路　歩く］

繭「みゅーー！　早く早く！」

底抜けに明るい繭の声。

七瀬「はいはい……」

騒ぐ繭に七瀬が走り寄った。

七瀬（うん……）

繭「みゅ？」

――柏木家――

耕一「昔……。皆でハイキング行ったな……」
平和の時。その中で彼はたびたび昔を思い出す。
二度と帰ってこない、幸せな日々。

梓「耕一～。ちょっといいかな～」
梓が彼の側に駆け寄ってきた。

梓「耕一と同じ大学に行きたい！」
耕一「なっ!?」
あゆ「ぼくも!!」

［吹く風に素足をさらして］

［遠くには幼かった日々を］

［両手には］

［飛び立つ希望を］

——黄昏の街——

晴香「これから……。どうしようかな」
赤い街の中を晴香は歩く。
行き先は決めていない。
ただ、飛行機雲の向かう方へと歩いてみたかった。

[消える飛行機雲　追いかけて追いかけて]

晴香「なんか楽しいこと見つけなきゃね」
飛行機雲は遥か彼方まで続く。
晴香「ま、なんとかなるでしょ。生きているんだから」
ふと誰かに呼ばれた気がして振り返る。
気のせい？
晴香「七瀬……？」

[この丘を越えたあの日から変わらずいつまでも]

——マナの自室——
マナ「あ〜〜！　医学って難しすぎる……」
机の参考書を放り投げるマナ。

ぴろ（まぁ、がんばりな）
マナ「うう……。せんせー……」

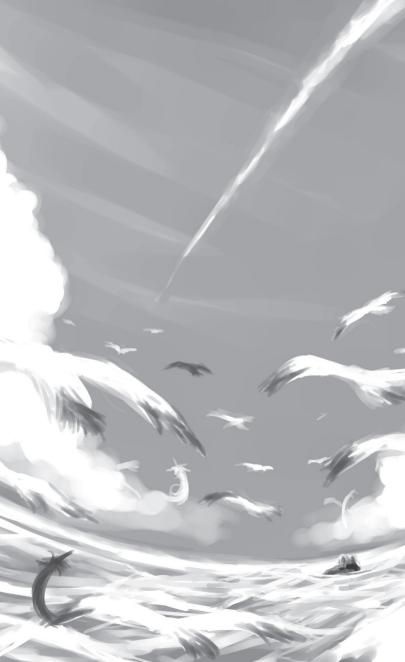
――再び潜水艦――
晴香「それじゃあ、鳥達の向かう陸地へ向けて……」
晴香「全・速・前・進!!」
一同『おう!!』

［真っ直ぐに僕たちはあるように］

［海神（わたつみ）のような］

［強さを守れるよ　きっと］

《葉鍵ロワイアル　完》

後　書

葉鍵ロワイヤルを紙媒体で読みたい。
この素晴らしい作品をもっと世に広めたい。

そう思って、当時の懐かしむスレに書き込んだのが、ちょうど二年前の夏。
当初はこの企画が実を結ぶなんて、誰も想像していなかったのではないでしょうか。それほどまでに難題は山積みされていて、正直私ひとりでは途中で挫折していたのではないかと思います。その折に、セルゲイ＠Ｄ氏と三浦闌氏による協力の申し出を得ることができたことは、奇跡と言っても良い僥倖でした。
それから、三人で何度か顔を合わせての打ち合わせを行い、その中で出版用の団体としてハカロワ出版企画を発足しました。
そうやって、段々と具体的に企画の方も動き出し、企画に協力して下さる方や、協賛して下さる方も徐々に増えていきました。やや難産だったかもしれませんが、ハカロワの第一巻が無事発刊できたのも、ハカロワの著者さんと読者さんを始めとする多くの人たちの協力があったからこそです。本当に感謝してもしきれません。
第一巻が発行されたのは一昨年の冬の事でした。
初めてハカロワの一巻を手に取ったときのことは今でも鮮明に覚えています。ポプルスさんによって丁寧

に装丁されたその本は普通の書店に置いてても違和感の無いくらいしっかりした物でした。それを初めて手にしたとき、感動よりも紙媒体化されたハカロワが本当にあるということが信じられないという気持ちの方が大きくて、現実感がいまいちありませんでした。ですが、ページをぱらぱらとめくっていくうちに、じわじわと喜びがこみ上げてきて、思わず知人に見せびらかしに行ったりしました。と、同時にこれなら赤字にならないくらいは売れるのじゃないか、とも思いました。今でこそ笑い話にできるのですが、当時は、収支が赤字にならないかどうかが、かなりの心配事でした。赤字になってしまえば、二巻以降発刊するのは叶わずそこで企画が終了してしまうからです。

しかし、実際に箱を開けてみればその心配は全くの杞憂で、冬コミに持っていった第一巻は午前中に完売。その後も反響はすさまじく、その勢いは私達の想像を遥かに超えていました。

お陰で無事二巻、三巻と続き、とうとう今日、最終巻である七巻の発行を迎えました。

ここまでこられたのも、たくさんの方々の情熱によって創り上げられたハカロワの魅力によるものでしょう。そして、紙媒体化という格好で、そういう作品に関われたことを本当に嬉しく思います。

最後にハカロワを創りあげた皆様と、ハカロワを応援して下さった皆様に――

ありがとうございました。

平成一六年　七月　某日

瀬戸こうへい

葉鍵ロワイアル　第七巻　著者一覧

奇跡の企画を作り上げた皆様に

この場を借りて、お礼を申し上げます。

No.	タイトル	著者
772	俺たちは、まだ笑える	名無したちの挽歌さん
773	閉幕の足音	L.A.R. さん
774	消えた光点	名無したちの挽歌さん
775	遊戯	林檎さん
776	花火	。さん
777	激突！	名無したちの挽歌さん
778	管理人の憂鬱	祐一＆浩平さん
779	二人の黄昏〜郁未と少年〜	命さん
780	二人の黄昏〜郁未と葉子〜	命さん
781	狂気への扉	名無しさん
782	今や彼女は	名無したちの挽歌さん
783	戦い続けた僕らのために	。さん
784	笑い続けた僕らのために	。さん
785	ココロ、ウバワレテ（前編）	名無しさん
786	闇へと誘う翼	Kyaz さん
787	扉の向こう側	名無しさん
788	引き金の重さ	名無したちの挽歌さん
789	ココロ、ウバワレテ（後編）	名無しさん
790	One way	L.A.R. さん
791	死ぬわけにはいかない	L.A.R. さん
792	雷	L.A.R. さん
793	右手に剣を、左手に枷を	。さん
794	ひとりぼっち	名無しさん
795	七瀬の不安	名無したちの挽歌さん
796	紅い瞳	名無したちの挽歌さん
797	そのこころは	祐一＆浩平さん
798	少女の決意	名無しさん
799	迷い、選択、その結果	名無しさん
800	カウントダウン	名無しさん
801	泣くということ	名無したちの挽歌さん
802	沸き上がる記憶	名無しさん
803	ヴァンパイア	Kyaz さん
804	偶然性	名無したちの挽歌さん
805	チェシャ猫〜再び裏舞台へ〜	林檎さん
806	Tomorrow	命さん
807	みんな、結末を目指して	Kyaz さん
808	離散、思いがけぬ危機	名無しさん
809	三度現れし彼女	名無したちの挽歌さん
810	心の行き先	祐一＆浩平さん
811	使命感	名無しさん
812	結末	命さん
813	狼煙	名無したちの挽歌さん
814	空を見上げて	名無しさん
815	駄目な人	5 さん

◎制作者一覧
制作協力：
111、5、JOYH-TV、Kyaz、L.A.R、MIU、Yellow 、
#3-174、いつかの書き手、独活大樹、感想スレＲの 142、
葵原てぃー、久々野　彰、冴村浩志、静かなる中条、
真空パック、駄っ文だ、ないしょ、ナナツさんだよもん、
名無し達の挽歌、名無しさんだよもん＠誤植指摘、
遥か昔の書き手、日向葵、フラスキ、箕崎、観月、林檎、
『。』、名無しさんだよもん

制作協賛：
104、Alfo、NBC、命、シイ原、七連装ビッグマグナム、
暇人、祐一＆浩平、名無しさんだよもん

スペシャルサンクス：
189、quit、River. 、zin、#4-6、#7-76、荒門、彗夜、
ダンディ、名無し cd、名無しさんなんだよ、にいむらたくみ、
花と名無したん、ヘタ霊、赤目、名剣らっちー、
訳あり名無しさんだよもん、旧データサイト管理人各氏、

そして全ての名無しさんと読者の皆様
（アルファベット〜アイウエオ順、敬称略）

葉鍵ロワイアル　（7）
二〇〇四年　　八月一五日　初刷発行
二〇二二年　一二月三〇日　電子書籍版　初刷発行

著　　者：（別頁に記載）
発 行 者：瀬戸こうへい
発　　行：ハカロワ出版企画
初　　出：２ちゃんねる、葉鍵（Leaf&Key）板
編集事務：セルゲイ＠Ｄ　三浦　閫
挿　　絵：ちん
印　　刷：株式会社ポプルス
連 絡 先：kohei19800310@yahoo.co.jp

これから、お前達には、殺し合いをしてもらう――

早う逃げ！　同人女は夏こみまでは死ねんのや！
朝陽、もう一度、見たかったね
さあ、楽しい人形劇の始まりだ
ぎゅって、して……
バイ……バイ……殺し屋一号さん……
こんな奇跡、無い方が良かったのかもしれないね
人を……信じなくっちゃ駄目だよっ！
……泣いてん、じゃねぇぞ
――のことはね。死んだって、忘れないよ……
――だけは、殺させるわけにはいかねぇ……
――を守る為なら、あなただって殺すわ……

にはは……みんな、ありがとね……

――本編に登場した全てのキャラクターたちへ

――Tactics、Key、Leafなどの作品群を
　　創り出した全ての方々へ
――この本を手にとって下さった方々へ
――次のコミケを常に追いかけ続ける者たちへ
　　……そして、それが叶わなくなった者たちへ

――葉鍵ロワイアルに関わった、全ての方々へ……

……この本を、捧げる――

9784108221647

1921057233732

ISBN4-80103-129-4

C0510

ハカロワ出版企画

HAKAGI ROYALE Ⅶ

『にはは……みんな、ありがとね……』

いくつもの願いがあった。
いくつもの別れがあった。
いくつもの物語があった。

孤島で繰り広げられた、
悪夢の日々が、遂に終わる。

全ての想いは空へと還り、
そして――

葉鍵ロワイアル　ここに完結!!